

～夢見る少女の転生録 ～

樹霜師走

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

DESTINYに登場するステラ・ルーシエが、アスラン・ザラの妹としてSEED時代に逆行し、ヤキン・ドゥーエおよびユニウス戦役を生き抜いてゆく物語。

※アスラン・ザラの妹がステラだったなら、という設定の下で展開していく物語です。

※バタフライエフェクトを題材としているため登場人物の崩壊等、原作への侵食要素が含まれます。

※自己満足で書き始めたものですので、サービスよりエゴを優先して書いています。

目次

序篇

『ザラ』

2

『ベルリン市街』

13

『ステラ』

32

第一篇

『ウエルカムバック』A

38

『ウエルカムバック』B

45

『6機の“G”』A

60

『6機の“G”』B

85

『6機の“G”』C

110

『ルーシエと名乗る少女』

129

『迷えるのち、決意』

153

『“デイフエンド”』

171

『“アルテミス”陥落』A

207

『“アルテミス”陥落』B

233

『ノスタルジア』

260

『エクステンデット』

282

『少女たちの邂逅』A

326

『少女たちの邂逅』B

344

『芽生えた意思』

370

『囚われた意思』A

401

『囚われた意思』B

441

『オーバーラップ』

467

『“アプリリウス・ワン”』A

507

『“アプリリウス・ワン”』 B

542

『“アプリリウス・ワン”』 C

575

『消え失せた過去から』

615

『低軌道会戦』

632

第二篇

『戦場への門出』

675

『さまよう亡霊』

717

『黒鉄の要塞』 A

770

『黒鉄の要塞』 B

812

『ニュー・ゲート』 S

848

『ニュー・ゲート』 A

881

『モラトリウム』 A

『モラトリウム』 B

『イル・コミュニケーション』

『フル・コミュニケーション』

『海上の大天使』

『平和の国』

『姫違い』

『終末の閃光』

『逢魔時の訪れ』

『スピットブレイク』 A

『スピットブレイク』 B

『スピットブレイク』 C

『スピットブレイク』 D

911

952

978

1007

1045

1086

1125

1173

1225

1260

1300

1354

1393

『捨てた者、拾った者』

—————

1437

『守護神生誕』

—————

1487

『平和の歌姫』

—————

1487

第三篇

『深淵の孤独』

—————

1564

『アトミック・クルーガーズ』A

—————

1613

1613

『アトミック・クルーガーズ』B

—————

1652

1652

『決意の萌芽』

—————

1680

『クロス・オーバー』A

—————

1697

『クロス・オーバー』B

—————

1734

『造られた者達』

—————

1778

『ディア・シスター』A

—————

1813

『ディア・シスター』B

—————

1845

『ディア・シスター』C

—————

1887

『鏡像に見る』K

—————

1933

『鏡像に見る』S

—————

1971

『キャッチミー・イフ・ユーキャン』

—————

2009

2009

『ビクトリア・ロンド』

—————

2047

『ミハシラ・ワルツ』

—————

2088

『アプリリウス・ラブソディ』

—————

2126

第四篇

『強さの意味を、知りたくて』A

—————

2169

2169

- 『強さの意味を、知りたくて』 B 2201
- 『ルーシエと呼ばれた少女』 — 2243
- 『壊れゆく心、癒えゆく心』 A 2271
- 『壊れゆく心、癒えゆく心』 B 2300
- 『黒塗られた思い出の画』 — 2348
- 『ベルゴラ』 — 2374
- 『メンデルス・オラトリオ』 A 2405
- 『メンデルス・オラトリオ』 B 2430

終篇

- 『スクラップド・プリンセス』 A 2456
- 『スクラップド・プリンセス』 B 2486
- 『少年達の決別』 — 2517
- 『ワールドエンド・トリガー』 — 2552
- 閑篇
- 『思い出の刻に』 — 2578
- 『幼馴染の分水嶺』 — 2609
- 『影に沈んだ黄金の意志』 — 2649
- 『安息の終わり』 — 2668
- 『零時の鐘が鳴るときに』 — 2702

- 『少女の戦争』 | 2744
- 『プ
ライマリー・ウ
ェーブ』 A 2773
- 『プ
ライマリー・ウ
ェーブ』 B 2800
- 『プ
ライマリー・ウ
ェーブ』 C 2827
- 『過ぎ去りし日々』 | 2864
- 『エンパシー』 | 2885
- 『それぞれの選択』 | 2922
- 『セ
カンダリー・ウ
ェーブ』 A 2973
- 『セ
カンダリー・ウ
ェーブ』 B

- 『セ
カンダリー・ウ
ェーブ』 C 3014
- 『セ
カンダリー・ウ
ェーブ』 D 3057
- 『セ
カンダリー・ウ
ェーブ』 A 3108
- 『シャウト・トウ・ザ・ワールド』 A 3152
- 『シャウト・トウ・ザ・ワールド』 B 3190
- 『ファイナル・ウ
ェーブ』 A |
- 『ファイナル・ウ
ェーブ』 B |
- 『ファイナル・ウ
ェーブ』 C |
- 『星に願いを』 A |

3332329132603229

『星に願いを』 B

『星に願いを』 C

『星に願いを』 D

戦後篇

『ニュー・オーダー』 A

『ニュー・オーダー』 B

『オーブの夜叉』

『ネオ・ロアノーク』

『ロドニア事変』

『黒い地母神』

運命篇

『震える瞳』 A

『震える瞳』 B

36193593

357535483530350534683455

344334263374

『黒い守護神』

『アスカという少女』

36713644

序篇

『ザラ』

C. E. 71年9月27日、プラント最終防衛ライン “ヤキン・ドゥーエ” 宙域で行われた、地球軍とザフトによる大規模な艦隊戦——

地球連合軍の指導者は、ブルーコスモスの盟主にして、事実上の地球連合軍の主導権を握っていたムルタ・アズラエル氏。対するザフトは “プラント” 最高評議会議長パトリック・ザラが、全作戦の指揮を執っていた。

地球軍が導入した核ミサイルと、ザフト軍が誇る巨大ガンマ線レーザー砲—— “ジェネシス” の使用によって、混沌と混乱へと陥る戦場。アスハの後継者である三隻—— “アークエンジェル” “クサナギ” “エターナル”—— 同盟を組んだ者達は、第三勢力として当戦闘に介入。後世において伝説とも呼び習わされるモビルスーツ “フリーダム” と “ジャスティス”—— それを駆るパイロット、キラ・ヤマトとアスラン・ザラが出撃した。

人々が灰になって散る光輝、モビルスーツの爆発が鮮やかに彩る星屑の戦場。 “ヤキ

ン・ドゥーエ」と「ジェネシス」という巨大な二つの軍事要塞を目の前に、多くの砲火が飛び交い、戦士の誰一人として緊張を解けぬ最終決戦は、かつての戦闘のどれよりも異様で邪悪な空気を醸し出していた。

その戦闘に、この長かった戦争の歴史に終局が近づいていた。これまでに数多くの犠牲を払った戦争だった。幼馴染み、初恋相手、戦友、将来を誓い合った者——喪った者のそれは、あまりにも様々だ。

——その中には、実の父親を失った者もいる。

「プラント」最高評議会議長、パトリック・ザラの武断思想は、彼が側近に置いていたザフトの将校レイ・ユウキの反感を買った。その結果、パトリックの命は憎んでいたナチュラルの手ではなく、同じ人種であるコーデインイターの手によって奪われたのだ。

宇宙を飛ぶ鮮血色の機体とベージュの機体。金髪の少女、カガリ・ユラ・アスハが、アスランに訊ねた。

「——どうするつもりだ、おまえ！」

威勢のいい声が回線から聞こえる。

アスランは、思い詰めた表情で答えた。

「内部で『ジャステイス』を——核爆発させる」

その返答に、カガリは、思ってもみない声を上げた。

ニユートロンジャマーキャンセラーを搭載した“ジャステイス”は、エンジンに核動力炉を採用し、その操作次第によつては核弾頭の爆発に匹敵する自爆性能を有しているのだ。

——外部からは難攻不落の要塞とて、内部からの衝撃には弱いはずだ！

それだけが最後の手段だと確信したアスランは、艦艇用の外部ハッチを爆破して“ジエネシス”内部へ侵入を試みた。

へ——アスラン、カガリ！

“ジエネシス”外部宙域、蒼い翼を広げた“フリーダム”と、黒銀色の太陽を背負つたかのようなザフトの機体が死闘を繰り広げている。

アスランの耳に、その声は届かなかつた。

自爆行為で自分がどうなるのか……その時、それを彼自身、考えたのかどうかは定かではない。父に似たのか、アスランも、もともと頑固な性格だ。目的のためなら、自分がどうなつたつて構わない——そう考えていたのかもしれない。

へそんなことをしたら、おまえは！

カガリ・ユラ・アスハのいつもは強気で無鉄砲なその声も、この時ばかりは焦りに溢れていた。

「やらせてくれ、お願いだ」

頼まれて、はいそうですかとも言うと思っているのか！

カガリは怒りにも呆れにも似た感情を交えながら言い返す。

しかし、アスランは揺らがなかった。

「これは、俺の父が犯した、大きな過ちなんだ！ だから、オレがやらなきゃ、いけないんだ！」

父が「勝つために必要なのだ！」と創り出した兵器「ジェネシス」——「新たな時代を築く」と云う意味を持った、その大量殺戮兵器の存在。

これは、その息子であるアスラン・ザラにとって、戦争が産んだ最大の皮肉ではないだろうか？

アスラン！ と大きく叫ぶカガリの声が通信越しに聞こえる。

『パトリック・ザラは戦犯だ——』

そんな言葉を、地球に降りて、何度として耳にしただろう。

今の父は、死してなお、こうして「ジェネシス」を撃とうとしている。

「創造」の名の下に「破壊」と「殺戮」を行わんしている。

——それは果たして矛盾なのか。そこに矛盾は存在するのか？

戦争に勝つために？

ナチュラルを滅ぼすために？

古い時代を壊すことでしか、あるいは、古い人類を滅ぼすことでしか——新たな時代は迎えられない、とでも云いたいのか!?

「そんなことをしたら、また世界は戦争の絶えない、どうしようもない世界になってしまふ！ だからオレが——ザラが！ その責任を果たさなきゃいけないんだ！」

「ザラ」の名は、これから長く歴史に受け継がれていくだろう——それは戦禍の、代名詞として。

では、アスラン・ザラの存在もまた——平和な世界では「火種」になるだけだ。

「ザラ」の名を受け継ぐ者の存在こそが、将来への禍根なのだと言われるのには、耐えられない！

——戦犯だと言われても、たった一人の父親だった。

何も周りと変わらない、プラントを愛していた。

父が変わったのは、家族が死んで、激しい悲しみと憎しみに駆られたからであつて……。

悔しさが溢れ出る。

——父上だつて、人間だった。

母さんを、俺を、家族を愛してくれていた。

それだけのことなのに、道を違えた結果、存在そのものを否定されなければならないのか？

たしかに、多くの犠牲を伴った道かもしれない。

だからといって、自分がその家族の一員であるという証——「ザラ」という名を否定されなければならないのか？

「だったら俺が、父上の過ちを正す。二度と戦争が起きない世界は、父上だつて望んでいたはずだ。だから！」

ザラの名前がある限り、それが火種になるくらいならば。

父親の失敗は、息子である——オレが止める。

〈アスラン！〉

覚悟を決め、アスランは後ろめたい気持ち捨てた。

「キラ達をよろしく頼む。カガリ」

次の瞬間——「ジャステイス」が、背面に装備された「フアントウム——00」を離脱した。

後行していた「ルージュ」はソレと激突し、行き場を塞がれる。

——ズドオオオオン……ッ

「ジャステイス」は咄嗟に、両刀型のビームブレイドを振り回し、狭い通路の外壁を、

手当たり次第に破壊してゆく。

途端、突き崩される外壁が、瓦礫の山となって積み上げられ、狭い通路が——完
全に封鎖された。

「アスラン——!!」

行かせたくない！ 行かないで！

懇願にも似た叫びで彼の名を呼ぶ。しかし、通信は切られたまま。

半強引にカガリは「リフター」を破壊し、さらなる進入を試みたが、その先の瓦礫によつて、完全に進路を絶たれていた。

二段構え、ということなのか。

——『君は俺が守る』

そう言った約束はどうなる？ 私を置いて行くのか？

——まさか、この私に嘘をついたのか、このバカッ！

カガリは焦り、だけど、もう一度、もう一度だけいい……アスランの声が聞きたいと、「ルージュ」のコックピット内で真っ黒のモニターに縋りついた。

何の音も聞こえない通信が、カガリに非常にも現実を突き付ける。

——嘘つき………！

途端に涙が溢れ、カガリは一人、コックピット内で慟哭の声を響かせた。

アスラン・ザラは、父親であるパトリックと母親であるレノアの他に、もう一人の家族がいた。

続柄として、それは妹だった。

名を、ステラ。

C. E. 70年、2月14日〔血のバレンタイン〕――

核ミサイルを搭載した地球連合軍のMA「メビウス」の一機が放った核ミサイルは、当時の農業プラントであった「ユニウスセブン」に直撃し、それによってアスランは母と妹を喪った。

当時、プラント国防委員長だったパトリックはその事実には憤り、反地球連合、反ナチュラルの思想を最高潮に至らせた。

核ミサイルにより「ユニウスセブン」自体が修復不能なまでに崩壊した為、プラントは、犠牲になった死者の遺体を確認することもままならず、アスランはふたりの遺体を確認することも出来ないままに、何も無いところに慰霊碑を建てる他なかった。

以後、同年4月1日〔エイプリル・フル・クライシス〕と呼ばれた日に、ザフトは

【オペレーション・ウロボロス】を始動。

核分裂反応を防ぐ“ニュートロンジャマー”を地球全土へ散布し、地球軍の核兵器開発を完全に封殺した。だが、これはあらゆる電子機器等に影響を及ぼし、地球において一億人以上の餓死者を出した。

これにより地球とプラント、ナチュラルとコーデイネーターは完全対立。これが本格的な武力衝突の発端となり、戦う日々が始まった。

戦うためではなかった——

でも——アスラン・ザラはプラントを守るため、ザフト兵へ志願した。

アスランはひとり“ジェネシス”の最奥部へと辿り着いた。

胸を撫で下ろし、広く広がった“ジェネシス”内部の様子を見渡す。

——ああ、遂にここまでやって来たのか……。

息を呑み、覚悟を決めると——“ジャステイス”の自爆暗号を一つ一つ入力し始めた。

——大丈夫。間違っていない。

これで世界は、平和になるはずだ。

パネルの数字を一つ一つ入力していく刹那、本当に記憶が蘇って来た。大好きだった母、レノア・ザラの記憶。

優秀なのに甘ったれただった、親友の記憶。

有無も言わず発砲して来た、トンチンカンな奴の記憶。

大好きだった、父上の記憶——。

「……………」

最後のパネルを打つその瞬間、記憶の中で本当に幸せそうな笑顔を周りに振り蒔く少女が映った。

くるくると舞いながら、蜂蜜に金粉を塗ったように、美しく輝く金髪を揺らしている。

『——おにいちゃん！』

懐かしい記憶に、アスランはしばらく何も言えなかった。

何も考えられなかった。

やがて「ジャステイス」の自爆タイマーは、いつの間にか十秒を切っていた。どれだけ長い時間を硬直していたのだろう。

——カガリは、キラは、「ジエネシス」から遠ざかってくれただろうか？

それすら深慮する時間は残されていなかった。

「もう一度でも、逢いたかったな」

その瞬間——

核の光が——真紅の機体を包み込んだ。

アスラン・ザラ

C. E. 55年10月29日 生まれ

C. E. 71年9月27日——没。

『ベルリン市街』

アーモリー・ワン事変、通称「セカンドステージ・シリーズ」MS強奪事件により――

C. E. 73年10月2日、ユニウス戦役（仮称）勃発。

この二年前における「ヤキン・ドゥーエ第二次攻防戦」の折、両軍勢の指導者の戦死直後、クライン派の元ザフト最高評議会議員アイリーン・カナーバの申告により、ザラ派は一掃され、連合軍に停戦勧告を申し出ることによって、戦争は終結に終わった。

終戦後。パトリック・ザラは戦禍を広げ、多くの犠牲を生んだ戦犯として、民衆からの強い批判を受け皿となり、対極的に、その息子であるアスラン・ザラは、父の凶行を命を以て阻止した英雄とされた。

――「フリーダム」

――「ジャステイス」

—— “アークエンジェル”

それらの名前は伝説として語られたが、そこに所属していたパイロットやクルー達の名前までは、公になることはなかった。唯一、戦犯として裁かれたパトリック・ザラの息子である英雄、アスラン・ザラだけが—— “ジャステイス” のパイロットとして、世間に公表されたようであるが。

アスラン・ザラが戦死して二年——

それでも世界は——再び過酷な『戦争』の渦中にあつた。

融和による平和と、常に中立を訴え、平和の最後の “砦” として存続して来たオーブ連合首長国は、しかし、大西洋連邦をリーダーとする地球連合軍との「世界安全保障条約」を締結し、宇宙に浮かぶ “プラント” を敵性国家とし、戦乱に加担する道を選ぶ。地球と “プラント” の対立は、強く根深く、とどまることを知らない。

地球軍によってGFAS—X1 “デストロイ” が——ベルリン市街に投入されるほどに。

ザフトが開発した最新鋭MS——

ZGMF—X56S “インパルス” を駆るザフトレッドは、シン・アスカという名の

少年だった。

当の戦場と化しているベルリンの市街は、反連合感情の強いザフト駐留下の地区とされ、地球連合はそこに、民族浄化を意図した大量破壊兵器である超巨大MS「デストロイ」を投入したのだ。

幾重にも炎と黒煙の立ち上がる、狂気の戦場——

「アークエンジェル」より発進した伝説のMS「フリーダム」もまた、戦闘の仲裁のために参戦するが、「デストロイ」から放出される大出力ビームや陽電子リフレクターの全方位展開によって、制圧は難攻を極めていた。無数の火線が飛び交う中、シン・アスカは「ウインダム」を駆る敵軍士官、ネオ・ロアノークより、「デストロイ」のパイロットが、かつて出逢った少女「ステラ・ルーシェ」であるという真実を知らされる。

「なんで……なんで!」

困惑に陥るシン。

ネオが操る紫紺色の「ウインダム」に向けて吼えた。

「——『戦争のない、暖かい世界に返す』って! 約束したじゃないかあ!」

どうして。

なぜ。

なんで?

——なんでステラが“あんなモノ”に乗っている!?

ネオ・ロアノークからの返答を待つよりも前に、シンの視界に“デストロイ”へと急降下していく“フリーダム”の機影が映り込む。瞬間、シンの中に、激しい怒りが湧き上がる。

「——やめろオオツ!!!」

シンは焦りと怒りに駆られた。

“インパルス”は途端にビームサーベルを引き抜き、最大速で“フリーダム”の進路を妨害する。“フリーダム”を駆るパイロットは、コクピットに響いた警告音に身を翻し、その斬撃を回避する。

シンは憤り、名も知らぬ“フリーダム”のパイロットに向けて吠えた。

「何にも知らないくせに! あれは……“アレ”はア——!!」

「くツ、何を!」

次々と“インパルス”から生み出される光の弧に、やがて“フリーダム”が、焦れたように反撃を行った。振り下ろされた斬撃を紙一重で回避し、“フリーダム”が、腰部のクスイファイアスレールガンを、サーベルを握る“インパルス”の右腕に向けて撃ち放った。

被弾した“インパルス”の右腕は、意図もたやすく肩口から吹き飛ばされ——逃れる

ように“フリーダム”は、一応の距離を取った。

“デストロイ”のコックピット内で、ステラ・ルーシエは、狂気に駆られていた。敬慕を越した感情で想うネオの“ウインダム”が、白い悪魔“フリーダム”に撃墜された。

間を置かずして、もう一機の僚機“カオス”も撃墜されて行つた。

そして今——“フリーダム”によつて、右腕を撃ち落とされたモバイルスーツもいた。おそらくザフトの……敵機だろう。

おぞましい爆発が彼女の視界に入るたび、彼女は次第に、理性をなくして行つた。

——誰かが『死』んでいく……

死んでいく……？

“デストロイ”には——わたしが乗っている。

——ステラは、殺す側？

だからわたしも、殺される？

——だから、ステラも『死』ぬ……？

いやだ。

いやだいやだ。

死にたくない。

こわい——！

『ステラも、これに乗って戦わなきゃ——でないと “こわいモノ” が来て、わたし達を殺す』

“怖いモノ” ——？

ネオを殺した…… “フリーダム” ——！！

「おまえ、は……………ツ!!」

黒を基調としたボディに、白の彩色、残酷な青い翼。—— 忘れない！

何度も戦場に舞い降りた、悪魔のモビルスーツ！

「うあああああッ！」

喚きと共に “デストロイ” は、指先からドライチェーンビーム砲を放った。

“フリーダム”は下空へ飛躍し、これを容易く回避する。機体を翻すと同時に全砲門を開き、最大火力のハイマツト・フルバーストを“デストロイ”に撃ち放った。

正面から迫る眩いまでの光渦に、ステラは思わず目を瞑った。

だが——“デストロイ”に搭載された、全方位陽電子リフレクターが、彼女の命と、機体の装甲自体を堅牢に防御した。

「——!?!」

しかし、“フリーダム”続けざまに、信じられぬ速度で追撃を仕掛けて来た。

それは、ステラがメインカメラを覗いた瞬間だった。

青い翼が彼女の眼前に顕現し、“デストロイ”のメインカメラ——頭部は、ラケルタ・ビームサーベルの斬撃を受け、削り取られるように破損した。

陽電子リフレクターの展開すら間に合わない、ほんの一瞬の手際で成された業だった。

「くうッ!」

小さく毒づき、ステラはすぐさま、サブカメラにモニターを移す。

——なんで!　なんで “オマエ” はアアッ——!!!

腕部を分離させ、“デストロイ”は自律させた両手を“フリーダム”へと向かわせる。

——墜ちろ、墜ちろオオツ!!

強い。

墜ちない。

怖い。

ステラは泣き、喚き、怖い怖いと何度も叫んだ。

しかしそんな時、聞き覚えのあるような声が—— “デストロイ” のコックピット内に響いた。

〈——ステラアアアアツ!!〉

その声に注意を引かれ——戦闘中のステラが、わずかな反応を示す。

通信先は、腕を切り裂かれた “インパルス” だった。

〈ステラ、ステラ! ——俺だよ、シンだよ!!〉

「シ、ン……?」

——シン?

どこかで、聞いた名だろうか? いや、聞いたことなど、ないはずだ。

だが、なにか引つかかる。

ううん、やっぱり……聞いたことはある。

被弾した状態で—— “インパルス” はゆっくりと “デストロイ” へと接近し始めた。

ステラは恐怖に怯え、敵機インパルスに向かって、イーゲルシュテルンを連射する。

しかし、弾幕はそれを横切るだけで、なぜだが、トリガーを引く手に力が入らない。照準が定まらない、否、手が定めようとしなかったのだ。

「インパルス」は避けることもせず、「デストロイ」のコックピット前で停止した。そして、シンと名乗る少年は、こちらに向けて呼びかけてきた。

〈君は死なない！ オレが——〉

「インパルス」は失った状態の隻手で、「デストロイ」に語りかけるようにコックピットの部位を手につけた。

↑——オレが守るからあッ!!

そう言われた瞬間、ゆりかごで失ったはずの記憶が蘇った。

シン——。

護る、つて………。

「シン……シン！」

ステラの安堵の眩きが、たしかに——「シン」と言った。

彼の名を、呼んだのだ。

シンはモニター越しに笑顔を見せ、ステラもシンに、それを返した。

暖かな時間が——二機の間、たしかに流れた。
それ、なのに——……。

次の瞬間「蒼翼の悪魔」が——ステラの視界に映り込んだ。
ピシッ、と音を立て、暖かな時間は崩れ去った。

ステラから映り、「インパルス」の機体の影に滞空している「敵」の名は……！
「フリー……ダム……ッ！」

「インパルス」の後ろには——青い翼の、白い悪魔が映り込む。

——それは、ネオを殺した！

じゃあ、やがては「インパルス」も……シンだつて……！

——させないッ!!

無防備な「インパルス」の背後に浮遊する「フリーダム」に向け、ステラは大きく反
応した。

いったい、何が起きている——？

キラ・ヤマトは——その場で、何が起きているのかが把握出来なかつた。

ザフトの“インパルス”は、何かがきつかけで、途端に反応速度が低下し、錯乱したか、突如“フリーダム”へと攻撃を仕掛けて来た。

やむを得ず、キラが反撃に出ようとすれば、今度は“巨大モビルアーマー”の目前まで無防備な状態で迫って行つた。

——驚いたのは、次の瞬間だ。

“インパルス”が接近したことで——それまでは、ただの大量破壊兵器でしかなかつた“ソレ”の挙動が、見違えるまでに落ち着いたのだ。

——それはまるで“インパルス”と呼応するかのよう。

執拗なプラズマ複合砲による攻撃も止まり、何が起きているのかがわからず、キラは一旦、サーベルやビームの武装を構えから降ろした。

キラは“フリーダム”の武装を握る腕を降ろしたまま、“インパルス”の後ろに位置取る。

——和解が出来るような相手ならば、文句はない。

“インパルス”のパイロットが何をしているのかは分からないが、それに、しばし委ねて見ることにした。

——しかし結局、ダメだった。

静止していた「ソレ」が突如、我に返ったように動き出す。

「インパルス」は狼狽した様子だが、たったそれだけで、何かをしようとはしなかった。

——「アレ」が再び、「キミ」に砲門を開こうとしているのに!!

咄嗟にキラは「フリーダム」を加速させていた。

スーパースキュラを収束させている「デストロイ」に向けて急降下を開始する。

「クソツッ! もうやめろオオオツ!!!」

「インパルス」が巻き込まれる!

そうなる前に、「フリーダム」はバーニアの全推進で「デストロイ」へ向かった。

二刀のサーベルを構え、光の剣が——禍々しい巨悪の機体を貫く!

シンの目には、その時何が起きたのかは分からなかった。

今、この瞬間、ただ見えるのは。

サーベルが一閃され、ステラの乗ったそれが崩壊していく姿だけ——

——ステラは、どうして「死」ぬことがこんなにも怖いのか？

どうして皆は、「死」っていう言葉を聞いて、平気でいられるのか？

みんな、それぞれ「死」は怖いのか？

でも、それを聞いても、顔をしかめたりするだけ……その、言葉自体には怯えない。それを間近に、身近に、実際に感じ取らないと、誰も怖がったりはしないのか。

——どうして？

「死ぬ」はいやだけど、「まもる」っていう言葉を聞くと本当に落ち着くの。

ステラ、もう怖くないんだって。

もう何も、ステラを脅かささないんだって。

だから——「まもる」って言葉、すき。

——『なにがあっても、ぼくがまもってやる』

その瞬間、ステラの脳裏に何かが浮かんだ。

まだ小さい男の子が見える。

年齢は………六歳、前後だろうか。

ステラには、幼少の頃の記憶はあまり残されていないかった。

——「施設」で育てられたらしいけれど、そこで具体的に、何をやったのかも知らないし、思い出せない。

その記憶が、ないからだ。

ただ判っているのは——実は私はコーデインイターで、「ステラ・ルーシエ」と云う名前を持っている、ということだけ。

ただ、それだけの記憶・情報しか持っていない。

誰だろう……この男の子は……？

黒い髪に、緑色の瞳——きつと、初めて見る男の子だろう。

でも、見たこともないはずなのに、すごく懐かしい——

ステラは不意に、そう感じた。

でもこの男の子……「守る」って、ステラに言った。

——『おにい、ちゃん……？』

無意識に、ステラの口から言葉がこぼれた。

何かきっかけがあったわけでもない、口が勝手にそう呟いているのだ。

そうだ。

ゆりかごで、彼女は記憶の多くを操作され、そのほとんどを失っていた。

ステラ・ルーシエは、コーディネイターである。

ステラには、パパとママがいた。

おにいちゃんもいた。

一緒に暮らしていた。

兄の名は確か、アスラン・ザラだ――。

ステラはその時、何もかもを思い出した。

経緯はどうであれ、自分がかつて、地球連合の中の軍事結社「ブルーコスモス」に誘拐されたことがある。

そこから――“ステラわたし”の人生は狂った。

自分自身はコーディネイターでありながら、コーディネイターは敵だとして、洗脳に近い教育と訓練を受けさせられたこと。

そして、良いように「使われていた」と言うこと。

アスラン・ザラと云えば、そう、その名前くらいは聞き覚えがある。

前大戦で、何か大きなことを大成した人……英雄だつてことくらいは、知っている。だが、そもそもステラは、前大戦の話などには興味はなかったし、それでも名前を憶えているということは、その人物は、それなりに大きな何かを大成させたということだ。そして、その人が既に亡くなっているということも……知っている。

ねえ。

ねえ……。

そうだよ……。

おにいちゃん………どうして——「ここ」にいないの？

シンもそうだった。

でも、おにいちゃんだつて、昔、ステラを「まもる」つて言つたくれたよね……？

忘れていたお兄ちゃん。

思い出せなかったお兄ちゃん。

どうしていなくなっちゃったの？

どうして死んだの？

どうしてステラを置いていつちやったの？

助けて……!!

ステラは、死にたくない!

ステラを守って! シン、おにいちゃん——アスラン!!

ここにいない兄に向かって、ステラは叫んだ。

私が「まもる」って言葉が好きの意味がわかった。

——それは、あなたがかつて、私に言ってくれた言葉だったから………!!

——守って、わたしを。

——もう一度でも、会いたい。

私があなただけを思い出した頃に、あなたはもう、死んでいた。

そんなの、いやだ……!!

「やり直したい」

——守りたい。

兄が約束してくれた言葉を、思い出したから。

兄がきつと、いつか、私を守ってくれると信じていたから。

——守りたい。

手遅れだったなら、アスランがもう死んでしまったのなら、わたしが助けてあげれば
いいから。

その瞬間から、救い出してあげればいいから。

そう思った時、ステラの周りが、急に輝き始めた。

眩い光はステラの体を包み込む。

そしてステラは——光の中に消えて行った。

『ステラ』

〔ステラ・ルーシエ〕

—— C. E. 57年 4月4日 生まれ。

第一世代コーディネーターであるパトリック・ザラとレノア・ザラの間、ザラ家の長女として生誕し、幼い頃よりふたつ年上の兄、アスラン・ザラを含めた四大家族で「プラント」に暮らしていた。

頭脳明晰、沈着冷静なアスランに比べ、ステラの方は純粹無垢、かつ天真爛漫に育てられた。それもこれも、柔和で寛大な母——レノア・ザラの教育方針が尊重されたためである。

厳肅者のパトリック・ザラは、そんなステラの育ちようにどうしたものかと云った風な表情を浮かべながらも、一家の長男として英才教育を徹底させたアスランとは好対照に、ステラへの教育は穩便であつたとも云われている。

ある日のこと——

自然回帰を訴えたブルーコスモスによるコーディネーター排斥運動、つまり、突発的

なテロ事件に遭遇した。パトリックの意向により、ステラは母と兄と共に、月面都市「コペルニクス」へ移住する。

だが、そのさらなる後、地球と「プラント」間で情勢が悪化すると、パトリックはもう再び、ステラ達を「プラント」へ移住させた。

ステラは母と共に「ユニウスセブン」に移住し、アスランは進学のため別のプラントへと移住したため、アスランとはしばらく会えない日々が続いた。

それから二年。

———C・E・70年 2月14日のバレンタインデー。後に「血のバレンタイン」と呼ばれた悲劇が起きた日、ステラは早朝のシャトルに乗って、当の「ユニウスセブン」を後にしていた。

理由は『その日がちょうどバレンタインデーである』ということにあった。

当時、ステラは齡十二歳を迎え、本気で恋愛をするような年齢でもないが、それにしたって年頃を迎えた少女であることに変わりはない。好意を寄せたり、あるいは恋しく想える男の子くらい現れたのではないか……？ レノアはふと、チョコレートは作らないのかと、この数日前に訊ねていたのだ。

「女の子はね、バレンタインデーに、気になる男の子にチョコレートを渡すの。ステラには、チョコを渡したい男の子はいないの？」

愛娘に、意中の男の子がいると聴けば、母として、嬉しいことのはずだった。

だからこそ、興味本位で訊いて見ただけだったのだが、

「ステラ、アスランに作る」

「……えっ!？」

普段は温和な母が表情を崩壊させた様を、初めて見たステラであった。

——でも、まあ、十二歳ならまだ大丈夫よね……。

決して、深い意味はないのであろうと考えたレノアは、それに微笑んで返した。

だからステラは、別のプラントに留学中のアスランへチヨコレートを届けるため“ユニウスセブン”を離れていたのだ。シャトル発進後、一発の核ミサイルが“ユニウスセブン”に着弾することなど、全くもって考えもせず。

核ミサイルが弾け——発進直後のシャトルは、間一髪で難を逃れた。

しかし、爆発の余波でシャトルは大きく損傷し、制御もままならず、宇宙を放浪することになった。

目的地である“プラント”——アスランの元へ到着することはなかったのだ。

シャトルは宇宙で難破した座礁船となり、その後、近隣に停滞していた地球軍艦に保

護される。

核ミサイルの衝撃で、ステラはシャトル内で気を失っていた。

目が覚めると、乗客の中で自分ひとりだけが、異なる場所に移されていた。

——いや、そんなことは、どうでもよかった。

あの衝撃は何だったのか？

“ユニウスセブン”はどうなったのか？

母は……レノアは無事なのだろうか？

拘束状態にあったステラは、感情を剥き出しにして叫ぶように、目の前の地球軍兵士に問うた。

やがて地球軍の兵士から突きつけられた無情の現実。——“ユニウスセブン”は壊滅したこと、それゆえ母が、宇宙の彼方に消えて行ったこと。

つまり、みな『死』んだこと——

コーディネイターを乗せていたシャトル。しかし、ステラだけは「ザラの娘」であることが発覚し、生け捕りにされた。

ステラを除く、他の乗客は全員、殺された。

コーディネイターだから、という——それだけの理由で。

最愛の母の『死』——

周りにいた多すぎる乗客達の『死』——

ステラは圧倒的にも残酷な現実にも、人格が崩壊したように泣き叫んだ。

何時間も叫び果て、やがて現実を受け入れることしか出来なくなつた彼女は、魂が抜けたように、虚脱状態に陥つた。

その後は地球軍の手によって、秘密結社——ブルーコスモスに身柄を引き渡される。

高い身体能力、高い戦闘能力。

兄の請け負いにも、群を凌ぐポテンシャルを秘めたステラは、ブルーコスモスの洗脳
の末、みずからを地球軍の軍下に置くのだった。

生体CPU、強化人間。

——『拡張された者』エクスステンデットとして。

ブロックワードを、彼女の心に深い「傷」を刻み込んだ言葉——『死』とされて。

それから三年近く。

今までの記憶の一切を失つた彼女は、上官である、ネオ・ロアノークの指示・命令を

従順に受け入れる傀儡となっていた。

二年前の大戦。

戦犯。パトリック・ザラ。

英雄アスラン・ザラ。

ふたりの「死」について、ふと耳にしたことはあったが、当時の彼女にとつては、それは何の価値もない情報でしかなかった。

それゆえに、ゆりかごにて、適応のために記憶から抹消される。

その後、戦略装脚兵装要塞GFAS-X1「デストロイ」のパイロットとなるも、混乱を除する為^レに現れた「フリーダム」によつて撃墜、戦死した。

第一篇

『ウエルカムバック』A

《ハロ、ハロ!》

微睡みの景色、ステラはそこで目を覚ました。

つい先ほどの自分は—— “フリーダム” に “デストロイ” の身ごと貫かれ、今際にあつたはずだ。

そんな記憶と矛盾するかのように、ステラは今、別の全く新しい景色の中にいた。

中立のコロニー、ヘリオポリス。

広がる建造物と、途切れ途切れに実る新緑。

ステラは朦朧から意識を取り戻し、ぴよんぴよんと跳ねながら、せわしなく話しかけて来るそれに目を向けた。

「ハ、ロ……?」

丸い体に、絵に描いたような単純な顔。

どこかのマスコットキャラクターのような電子工作された精密な機械。

静穏を連想させる海色に彩られたそのハロは、目覚めて間もないステラの周りをぐるぐる廻っていた。

ステラが目を覚ましたのは、ヘリオポリス内の公園だった。周りには誰もいず、地に横になる形でステラはそこにいた。

《認めたくないッ!》

球体のハロが跳躍する度に、その効果音がビヨンビヨンと鳴る。

ステラはキョロキョロと周りを見渡す。一般ならパニックに陥るのだろうが、ステラはまだ夢現が区別出来ないのか、いまだに「ぼわわくん」としている。

《オマエ、元気か? ハロ、元気!》

「ステラ……」

ふと自分の名前を呟き、自分の両手を見つめてみた。

しかし、特に負傷もなく、ふと自分の名前を呟き、自分の両手を見つめてみた。何が起きているのが、まったく理解出来ない。

《ステラ、願った! 想い、応えた! 届いた!》

「?」

この時、ステラは失っていた記憶を取り戻していた。

エクステンデットであつた記憶ではない、違えられていた記憶——。

そう、それは自分自身がザラ家の一員であり、自分には、兄も両親もいたのだという、偽りなき真実の記憶。

考えても見れば、この「海色のハロ」は——アスランがステラのために作ってくれたものだった。

無くしたのは、血のバレンタインで地球軍に捕らえられてからだ。

海が好きだと言うステラに対し、当初アスランは「海の象徴」であるジュゴンを模した電子工作を考えていたらしいが、結果的に設計のコンセプトに無理があったためにハロ。それも「海色」で我慢したアスランの電子工作作品。

アスラン自身、電子工作は昔からの特技であり趣味である為、ジュゴンが作れないと理解した時はかなり悔しがっていた。

そんなハロは片言で、チカチカと言葉の先を続けた。

《アスラン助ける、今から！》

その言葉にやっとハツとするステラ。

「フリーダム」に身を貫かれ、際に立ったステラがその時、思ったコト。

『もう一度やり直したい』

ピュアだった。

際に立って初めて全てを思い出すなんて後悔し、今までの全てに謝りたかった。

——記憶を失ったまま生きてきてしまったから。

——兄がもう、この世にいないから。

——シンともう一度、ちゃんとお話がしたかったから。

だからそう思った。

ハロは、その想い願いは「応えられた」と言うのだろうか？

《ステラ、死んでない、生きてる！ だから、アスラン助ける！ やり直す！》

「……ステラが？」

アスラン・ザラは——第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦で戦死したと言われている。

だとしたら、ヤキン・ドゥーエ戦というのは、今から、どのくらい後のことになるの

だろうか？

ステラには記憶がなかったため、ヤキン・ドゥーエ戦役の話はまったく覚えていない。

そのため、兄が生前に、どんなことをして来たのかも全く知らないのだ。

もつとも、かつての彼女は、目の前の敵を倒すだけの機械人形にも似ていたので、携

わったユニウス戦役についても、情勢などについて詳しくは何も知らないのだが。

——おにいちゃんを助けることが出来れば、未来は変わるの？ ステラも、死なな

い？ みんな、護れる？

兄がいれば、ステラを守ってくれるのだろうか？

シンともう一度、今度はきつと、平和な時に会いたい。

そう思えば、ステラの覚悟は決まる。

《ステラ、アスラン救う。守る!》

「まも、る」

その言葉を聞くと、ステラの中からゾクゾクと実感が湧いてきた。

私は今、何かを「守るため」にここにいるのだと。

「うん、まもる……!」

ステラがそう言うのと、コトバが通じたからか、ハロは嬉しそうにピョンピョン跳ね回り始めた。

ステラは動き回るハロを両手で捕まえると、今について訪ねた。

「どこ、どこ? ステラ、何すればいい?」

記憶は戻っても、ステラは長い間、誰かに何かを与えて貰わなければ何も出来なかった。

例えば、ネオに命令を貰わなければ戦えなかったように…。

いきなり自立しろと言われても、それは今の彼女にとつては無理な話である。

《どこ、ヘリオポリス! 今、さっきの二年前!》

ヤキン・ドゥーエ戦役が始まったのはC. E. 70年2月11日。

血のバレンタインは、その3日後の出来事だ。

それから時を経て、新星攻防戦がC・E・71年7月に起きた。

これは資源衛星「ボアズ」を巡る、ザフトと連合軍の戦いだ。

「なんもわかんない……」

《てやんでいッ!》

怒られた。

何もわかんないのは、本当なのに。

こんな事になるのなら、予めヤキン・ドゥーエ戦役で、兄がどんなことをしたのかを知っておくべきだったと今更ながらステラは思った。

イージスを強奪、ストライクを討ち、ジャステイスのパイロットになる。

そんな情報を知っているだけで、この先随分楽になっただろう。

しかし、過去に来てからではもう遅い。

「……ステラ、着替えてる」

服装は、パイロットスーツではなく私服になっている。

アーモリーワンに潜入した時に着用していた、ヒラヒラ舞うスカートが印象的なその服なので、どこへでも動き回る事は出来るだろう。

「……おにいちゃんを探す」

言うど、ちよこんと座り込んでいた体を立ち上がらせる。

何の因果でヘリオポリスなるコロニーにいるのかは知らない。

しかし——きっとこの場所は、なにかしら兄と関係があるはずだと信じて、ステラは人のいる街の方へと駆けていった。

『ウエルカムバック』 B

中立国オーブに属する資源衛星ヘリオポリス。

その工業カレッジで、学生が平和と集り、平和と駄弁っている。

「うひゃあ、ひつどいなあ、こりゃ」

コンピュータを開いて、新しく入って来たニュースを確認している学生がいた。

茶色い髪、黒い瞳、まだ幼さを残す繊細な顔立ちの少年、キラ・ヤマト。

隣でニュースを見る為コンピュータを傍観し、今の言葉を漏らしたのはゼミの同級生であるトール・ケーニツヒと、そのガールフレンドのミリアリア・ハウだ。

「地球軍とザフト、数では圧倒的に地球側に利があるのになあ」

ウィンドウの中で映し出されるニュースの映像は、地球軍の管轄下にある都市地域がまるで黒炭と化した惨禍を伝えている。

ザフトの侵攻によって壊滅してしまった都市だろう。

「やっぱり違うんでしょ？ 連合とザフトじゃあ」

連合とザフト、その間にある違いは、「ナチュラル」か「コーデイネーター」か、であ

る。

長い歴史の中で、遺伝子改変が生み出した新しい人種「コーディネーター」は——学術やスポーツ、その他あらゆる分野において「ナチュラル」のそれを凌駕し、二者……いや、二種族の間に対立を産んだ。

その溝が歴史と共に強く、根深く掘り下げられ、それが現在の「本格的武力による対立」つまり——戦争を勃発させた。

「キラ?」

ミリアリアの質問に答えるよりも前に、心ここにあらずな様子のキラに気付いたトルは、彼の瞳を覗くように近寄った。

目の前で手を振り、おーいと呼びかける。

キラはそれに反応を示し、やっと現に帰って来た。

「あ。ごめん、なに?」

「何考えてたんだ? 意識いつてたぞ」

「ちよつと、昔のことをね。幼馴染の友達がいたんだ」

ミリアリアの言葉を聞いて、キラはプラントへ移住して行った、ひとりの幼なじみを感じ出した。

アスラン・ザラ——

幼年学校で四歳からずっと一緒だった親友だ。

お互いに十三歳の時にプラントへ移住し、離れ離れになってしまつてから、長い間会っていない。

連絡をとろうにも、彼がいま忙しいのはわかつている。なぜなら昨年、彼は血のバレントインでお母さんと妹を亡くしているから……。

この情勢下では、いくらヘリオポリスが中立だと言っても「プラント」へは通信もままならない。それに今、アスランがどこで何をしているのかもわからないのだ。

それを聴いたミリアリアはしかし、面白くなさそうに。

「なあんだ、恋わずらいかと思つたわ」

「え？ ど、どういう意味!？」

ミリアリアがさらっと聞き捨てならない事を言つたので、少なからずキラは動揺した。

ミリアリアはエレカポートの方を顎でしゃくると、そこには女学生の集まりがいた。

その中でも一際目を引き、高貴な雰囲気を漂わせる美少女がいた。

名をフレイ・アルスター。

燃えるような赤色の髪が特徴的な少女だが、ミリアリアがキラに示唆したのは、彼女のことだろう。

「本当は見とれてたんじやないのおく？」

意地の悪い笑みを浮かべるミリアリアに、キラは必死になって反論する。

「なっ、べ、べつに、僕は……！」

そんなつもりはない！ ……はずだ。

たしかにここ最近、彼女を見かけると胸の奥の辺りがひとりでに暴れ出すけれど、だからと言って何か抱いているものがあるわけじやない。

と思う。いや、あえて言うれば、彼女に対して抱いているのは憧憬であつて、そこに恋愛感情などは……！

「苦しいぞ、キラ！」

言い訳をウダウダ並べるキラに、ツールがヘッドロックを仕掛けた。

キラはジタバタと暴れ、ギブアップを申し出ると、ツールはその腕を緩めた。

そんな時、フレイ・アルスターのいる女学生集団から嬌声が聞こえた。

声をあげたのは他でもなく、フレイ・アルスター本人だ。

「わあ、なにあの子！ 可愛い〜!!」

その声に釣られるように、ミリアリアやツールもその方を向いた。

キラは絞められていた首を抑えながら数回咳き込むと、後に続いてその方を向く。

「え……？」

その時、突然、キラの肩に乗っていた愛玩ロボットの『トリイ』が、キラの肩から飛び去った。

あ、と声をあげてトリイの飛び去った方向に目をやると、そこには確かに、キラにとつて、見覚えのある少女が立っていた。

その少女を見つけると、キラはしばらく言葉を失った。

トリイが飛び去ったのは、間違いなくその少女の下であり、少女は肩に止まったトリイに首を傾げさえしたが、今は微笑んでいる。まるで太陽のような笑顔だ。

「なあキラ、今、トリイが——？」

ツールがキラの方を見る。すると、またか。完全に意識がいつちやつてる。惚れっぽいか？と勘違いしそうになるが、キラの受けている衝撃は、一言で説明出来るものはなかった。

少女は見慣れぬ球体のロボットをつれていて、それは珍妙で高価そうなので、アイドルのようにも見えてくる。

トリイが鳴く度に少女は無垢な表情で微笑み、球体のロボットもトリイと共鳴しているように飛び跳ね、まるで喜びを体現しているようだ。

ツールは啞然としてキラの方を向いたが、対するキラは、そんなツールよりも大きく啞然とし、愕然としていた。

「ステ、ラ——!?!」

言葉を発するのと同時に、キラの体は自然と動いていた。トリイの止まった少女に向けて、走るように駆けていく。

いや、でも、そんなはずは——!

何も懸念しなかった訳ではない。

人違いである可能性も重々理解した上で、キラはその方に駆けていた。しかし、いくらトリイと言えど、他人の肩になど滅多には止まらない。

だから確信があった。

あれは、人違いなんかじゃない、と。

「お、おい、キラ!」

キラを呼び止めるツール。

しかし、走り出したキラはその言葉も耳に入らない。その上、キラは足が速いので、同時にスタートダッシュを決めたとしてもツールには勝てる自信がない。

今はもう、視覚以外は機能していない、それほどの衝撃をキラは受けていた。

「ステラ!」
「ステラ・ザラ!!」

鳥型のロボットが、いきなりステラの肩に止まった。

見覚えがあるような気もする……それに、ハロもすごい喜んでる。

鳥さんは、ステラに話しかけて来るように鳴いた。

だからステラも微笑み返した。

鳥さん、可愛い。

そのあと、いきなり名前を呼ばれた気がした。

ううん、現実と呼ばれた——「ステラ」って。

その声が出た方を向いたら、こっちに駆けてくる茶色い髪の男の人がいた。

ステラの名前を呼んでいたのはその子だった。呼び名にステラが反応してこちらを

向いたから、さらに確信を持ったように近づいて来た。

「はあ、はあ……キミ——!?!」

その人は息を切らして、幽霊でも見てるみたいに愕然とした顔を浮かべている。

この人……会ったことあるのかな。記憶を辿ると見つかった。

その人はステラにとつても、とつても身近な人。

「キ、ラ………?」

まるで記憶に準ずるように、無意識にその名前が完成していた。

ステラの記憶の中の、キラ・ヤマト——おにいちちゃんと親しいともだちで、昔、何でも一緒に遊んだことがあった。

キラはそうだよ！ と何度頷き、慌てながらも言葉を続けた。

「生きて、ただだね……良かった！」

「？」

きよとんとすると、きよとんとされた。

「ユニウスセブンに核が落ちて……！ ああ、ほんとに良かった……!!」

キラの思っている事がやっと理解できた。

キラの中では、アスランと別れてから、ステラとお母さんはユニウスセブンに在住している聞いていた。

事実としてはそうだけど、ステラはあの日、シャトルに乗っていた。でもそれを知らないキラの中では、ステラは既に亡くなった事になっていてもおかしくない。

アスランの家に行けば、当たり前のように無邪気に遊び込んできた少女が今、そこにいる。

遺憾にも、亡くなったと聞いていたのに。

「ヘリオポリスに、何かあったの？ もしかして、アスランも一緒なの？」

尋ねるキラの今度の目は輝いている。

プラントにいるはずのザラ一家がヘリオポリスに来たのだとすれば、まして、出会えたのがステラなのだから、アスランに久方に会えるかもしれない。

そんな思いあつての輝きだろう。

しかし、ステラは首を横に振った。

「ううん、いない。ステラ、アスランにまだ会ってない」

言葉の内容に、愕然とするキラ。

昨日今日の話ではないのだ。

ステラは血のバレンタインより、いや、それ以前からアスランやパトリックとは会っていないのだ。

「そんな……！ きつとアスランは、キミのお父さんだつて、必死になつてキミのことを」

僕と同じように「死んだ」と考えているはずだ！ ——きつと。今も。

少し怒鳴り気味になったキラの声に、ステラは少し射竦められたように答えた。

「うん、だから会いたいの。でも、どうすればいいかわかんないから」

「あ……」

しゅんとするステラに、キラは、ああ、そういえば「こういう子」だったなあと懐かしい記憶を手繰り寄せた。

色々と疑問がある。

まず、今までステラがどこで、何をしていたのか？

こうして生きているというこよは、何らかの事情があつて、当時ユニウスセブンから離れていたということになるのだろうか。

しかし、それからは？

無事でいたのなら、この一年間でアスランを探す手立てはなかったのだろうか？

アスランは出来なくても、有名でもあるアスランの父ならば、いくらでもそれはあつたはずだ。

キラはまずそれについて尋ねる。どうして父を探せなかったのか、と。

「ん？」

キラが訪ねると、しばらく沈黙の時間が流れた。

「色々あつた」

上手く説明出来ない。

ステラにとってそれだけのことである。

「あ、そう……」

ズルツと滑りかけたキラだったが、その「色々」には、語りたくない何かが含まれているかもしれないと判断し、それ以上の詮索はやめにした。

さて、二つ目の疑問だ。

それは、ステラが随分と大人びて見え、まるで同年代に見える、ということ。思わず上から下まで凝視してしまったことは認める。

しかし、女の子の体について質問するのは気が引けたので、大きくなったね。色々。

そう思つて、質問こそしなかった。

「キラ？」

その時、後ろから声がかかった。

トールとミリアリア、その後ろでフレイ達も趣深そうにこちらを覗いていた。咄嗟にかかった声に、キラも目が覚めた。

「キラ、知り合いな？」

「ああ、うん。まあね」

「へえ！ 隅に置けないなあ、キラも」

今にも口笛をひゅくと吹きかけたトールだったが、ステラを見るトールの視線が、ミ

リアリアに捕まった。

「なあにトール。目つきやらしい」

「ばかッ！ そんなんじゃないってのお！」

目を細めて、いかにも軽蔑している様子だ。

リアリアのそれはトールをトールとして見ているのではなく、ただのスケベ男として見ている目だ。

「ステラ………っていうんだ。僕の友達の子なんだ」

咄嗟にキラは、ステラの名前を途中で止めた。

ステラの本当の名前はステラ・ザラ——しかしながら『ザラ』と言えば、プラントの国防委員長である事くらいヘリオポリスでも有名だ。

中立の国にザラの名前を持ち込んで、無駄な諍いを起こすのを防ぎたいと、キラは自然とステラの苗を言わなかった。

「へえ、可愛い子だねえ〜」

リアリアが率直に感想を述べる。

悔しくもトールが一瞬寝返りそうになったのも領ける、と。

「あ、いけね！ もうこんな時間だ！ キラ、ミリィ、そろそろエレカ捕まえねーとやばいぜ？」

ちらりと腕時計に目を遣ったトールが慌てたように言った。

「あ、ごめん。二人先行つてて！」

「でもキラ、おまえ教授から指名受けてなかったか？ 手伝いどうすんだよ？」

「後でちゃんと謝っておくから、気にしないで」

トールはそうか、と言うと、ミリアリアの肩をとってエレカポートに戻った。

戻った先で、二人はフレイ達とステラについて話している様子だ。

「キラ、怒られるの？」

「え？」

「ステラも、時間に遅れたら怒られた事がある。だから」

ステラが言いたいのはMSの帰投時間の事であって、軍人と学生の遅刻では随分重さが違うのだが。

キラは無垢な表情で尋ねて来るステラを見て、ああ、やっぱり昔と変わらないな、と思えた。自分を心配してくれているのだろう、そんなステラに微笑んだ。

「大丈夫だよ。ちゃんと謝れば」

多分……。

「そういうものなの？」

「うん。きつとね」

それを聞いて、ステラはパツと晴れた顔になった。

「でも、色々あつてアスランにも会つてない、か……。ステラは会いたいでしょ？ アスランに」

言うのと、ステラはうん、と頷いた。

「わかつた。じゃあ僕も協力するよ、一緒にアスランを探そう！ ステラ、しばらくはヘリオポリスにいるんでしょ？」

「うん、いるよ。どこ行けばいいかわかんないけど」

答えると再び、キラはきよんとしてしまった。

「え、帰るおうちは？」

「ない」

短い言葉に、あつけらかんと答える態度も合わせて、キラの頭に電撃が走つた。

昔からステラは浮いている面があつたけど、今回ばかりは意味がわからないし、浮きすぎだ。

色々あつて家族には会えずヘリオポリスにいるのに、ヘリオポリスには帰る場所がないって、一体この一年間、どこにいたんだ？

結局のところ、色々って何なんだ？

「ま、まがいんじゃないの。それ」

「うん、だから困ってるの」

ダメだ。

この無垢さが憎めない。とキラは思った。

「わ、わかった。ならウチにおいでよ。アスラン探すのにも、ウチなら何かと便利だし」

「いいの？」

聞かれると、キラは頷いた。

「アスランが見つかるのはいつになるかはわかんないけど、アスランの事なら、僕の両親も知っているし。君もね」

元々、キラの両親であるカリダとハルマはコペルニクス時代において、家を留守にしがちなレノアに変わってアスランとステラの面倒を見ていたのだ。

アスランがロールキャベツが好きなのはそれが所以となっている。てつきり亡くなったと思われるいたステラが生きていたと、二人に説明したらきつと家族の事のように喜ぶだろう。

「うん、わかった」

そうして、ステラはしばらく、キラの邸宅に身を預ける事になった。

『6機のG』A

——それから、およそ一ヶ月が経った。

ステラはキラに連れられ、住宅街にあるヤマト家に居候のような形でお邪魔することになっていた。

キラの母、カリダ・ヤマトはステラと再会し、泣き疲れるまで涙を流し、ハルマ・ヤマトはその腕を使い、その存在を抱いて確かめた。なにせ、家族ぐるみでも親しかった家の娘の生存が確認できたのだ、嬉しくないはずがなかった。

けれどその一方で、彼女の生家であるザラ家との接触は難航を極めた。

現在「プラント」は戦時下ということもあり、特定の人物を搜索するのは難しいと云えた。彼女の父、パトリック・ザラは「プラント」でも有名な人物であるのだが、接触を図りたくとも、所詮は中立国のコロニー、それも一般人に過ぎない彼らからの電文が通り着くものではない。

コペルニクスに移住した時より、ザラの家族の身分は隠され、彼の現住所などは公開

されている訳もないからだ。ステラは、一向にプラントに戻る兆しが見れなかった。

キラは普段通り学生生活を続けながら、帰宅後はアスランの捜索に尽力した。

ステラは時折「寂しい」とキラのカレッツジに向きキラに会いに行くのだが、その度に、あの可愛い子は誰、なんて羨望の白眼がキラに向いた。

やがてステラはよそよそしくも、次第にミリアリアやツールとも打ち解けていくようになった。

幼さを残す顔立ち、しかし、幼すぎるといふこともなく、間違いなく美少女と形容できただけの容姿を持っていたとしても、ステラ自身には美少女としての自覚はない。そのため周囲の好奇の目は、彼女にとつて鬱陶しいものでしかなかったりもする。

ある日のこと、一台のエレカがモルゲンレーテの社屋の中に入って止まった。

「あ、キラ、やっと来たか」

「ごめん、講義が長引いてさ」

工業カレッツジのラボの中に入って来たのは、キラであった。

同じゼミに通うサイ・アーガイルが、入室して来た彼らを迎え入れる。

キラの後ろには、同じ講義を取っていたツール、そしてミリアリアの姿があり、そして最後に、

「ああ、ステラも来てたんだ」

「うん。家でじつとしてるの、退屈だったから」

ステラの姿があった。

退屈、というのは決して家にいるヤマト夫妻の性格について言明しているのではなく、彼女は仕事や任務が与えられなければ、自分のしたいことが見つけれられない性なので、家でぼんやりとしていると、いつまでもぼんやりしてしまうのだ。

それを見かねたカリダの意向か、ステラは最近、よくキラについて回っている。

サイの傍らで、座りながらプログラミング作業をしている同級生カズイ・バスカークは、このラボに部外者^{ステラ}が入って来ることに不満を覚えたようで、一度ちらりとステラに目を遣るが、すぐに手元の端末に視線を戻した。

その時、サイがキラへ、一枚のメディアを突きつけるように差し出した。

「はいこれ。追加の品だつてさ。見せればわかるつて言つてた」

「うええ、また？」

差し出されたメディアは、教授がキラに解析を任せたい品物だった。

キラはこのラボの学生の中ではダントツに情報処理が早く、教授はそれに目を光らせ、ことあるごとに、自分の研究に付随するプログラムの解析をキラに押し付けている節がある。

それを見たツールが唸った。

「教授も人が悪いなく、だつてキラ、こないだも別のディスク渡されてただろ？　さらに追加注文とか、もはや好いように使われてるな」

「でもまあ、仕方ないな。やつておくよ」

「ん、今回は随分と物分りがいいじゃんか」

「こないだ手渡されたディスクの解析は終わってるからね。また新しい注文が増えた……つて考えれば、カッカするほどのことじゃないよ。割といつも通りかな」

「はあ？　あのディスク、もう解析済んだの？　キラつて、日に日に情報処理が早くなつていくな……」

言うのと、キラが言った。

「ああ、違うんだ。ステラに少しだけ、手伝ってもらったんだよ」

ひとりだけでやつてたら、とてもじゃないけど追い付かないよ。

その言葉が放たれると、場の空気が固まった。

もつとも大きな反応を示したのは、カズイであつたようだが。

「へ、へえ……ステラつて、そういうの得意だったんだ」

ミリアリアが啞然としながら、ぼーつとしてるステラに訊ねた。

尋ねられたステラは、またぼーつとしながら答えた。

小動物みたいな女の子だな、とミリアリアは一種の憧れのような感情を抱いた。

「ううん、別に得意じゃない。でも、なんか、キラが作業してるところを見てたら、できた」

事実であつた。

キラが宿題のようにして、自宅でノートパソコンに向かっていると、たまたま入つて来たステラがそれを覗き、翻訳の箇所を、キラが言葉を選ぶのに悩んでいた所に、意見を呟いてくれたのだ。

訝しんだキラが「これが読めるの？」と尋ねると、ただ「読めた」と他人事のような返答をした。

——こういう所は、優秀だつた兄アスラン譲りなのかな。

そんなことを考え、苦笑するキラであつた。

すると、すっかり気分を上げたようにツールが発言した。

「なんだよなんだよ、すげー優秀な子だつたんだな、ステラって。あー、今何歳だっけ？

教授が聞いたら絶対喜びそうだよなあ？」

「将来はこのラボに助手として欲しい！ とか言い出しそうだよね」とミリアリア。

「どうせキラみたいなのに、研究の残飯処理を手伝わされるんだよ……」とカズイ。

ステラはアスランのふたつ年下の妹なので、現時点では十三歳だ。

「……あれ？ お客さん？」

ところで、ツールが壁にもたれかかっている見慣れない姿の少年を見つけた。

硬質な金髪をし、帽子を深めにかぶっている……おそらくは少年だ。

サイが答える。

「教授のお客さん。ここで待ってろ、って言われたみたいだ」

「お客さん？　へえ……」

見た感じとても幼い……あんな少年が、サイバネティック研究の第一人者である教授に何の用事があるのだろうか？

キラは少し奇異の念を抱いたが、とりわけ首を突っ込む用事もないので、すぐに自分の作業に取り掛かろうとした。

その時、大きな地震が起こった。

部屋が揺れ、一同が姿勢を崩す。

「——隕石!？」

「いったい、何が!？」

室内は停電を起こし、一同は、パニックに陥った。

「クルーゼ隊長の報告通り……地球軍の新型機動兵器は、あれだな」

軍のトップエースであることを示す赤色のパイロットスーツを着用した少年、イザーク・ジュールが言った。

ザフトの、潜入部隊——。

中立のヘリオポリスコロニー内に、彼らは軍装を着たままやつて来ているのだ。これ以外には考えられない。

傍らのディアツカ・エルスマン、ニコル・アマルファイ、ラスティ・マツケンジー他数名は、イザークと同じように赤のパイロットスーツを着、スコープでモルゲンレーテの工場付近の様子を覗いていた。

その中で、緑服のミゲル・アイマンが懐疑したように言った。

「報告では新型は『6機』あるはず……。だが、あそこには3機しかないようだな」
「あれは搬送中の機体だろう。残りの機体はすべて、まだ、工場の中にある」

黒い髪を覗かせた、端正な顔立ちの少年が、ミゲルに応えた。

「オーケー、なら、イザーク、ディアツカ、ニコルはあの機体を奪取しろ。工場内へは、オレとコイツと——ハイネ——それとラスティが向かう」

「ふん、せいぜいしくじるなよ」

イザークの言葉は、ミゲルに向けられたものではなく、黒い髪の少年に向けて個人的に放つたものだ。イザークはことあるごとにその黒い髪の少年をライバル視して、突っかかって来る傾向があるのだ。

イザーク、ディアツカ、ニコルの三人が、山岳の中から降下し始め、新型モビルスーツの場所へと向かった。彼らの目的は「ヘリオポリス」内で極秘に開発された、地球軍新型機動兵器の『奪取』——

——あるいは『破壊』だ。

ミゲルの隣にいた、赤い服をきたハイネ・ヴェステンフルスが、残った工場側の班員に告げる。

「よっしゃ、息を合わせてバツチリ行こうぜ、なあ?」

「張り切りすぎて、味方を撃つなよ?」

返したのはラストイ・マッケンジー。

ラストイはそういって、少年に告げた。

「行こうぜ、アスラン——」

「——ああ……」

赤いパイロットスーツを来た、黒い髪の少年。

名をアスラン・ザラ——

精鋭と名高いクルーゼ隊の中でも、飛び切り優秀な才覚を持つ、ザフト軍のエースとなつた少年だ。

「——襲撃!? どうして!」

一般市民からその言葉を受けて、ラボにいた一同は、その言葉を疑つた。

「さあ、わからんよ! いきなりザフトの連中が、ここに攻撃を仕掛けて来たんだ!」

ここは中立国——それは、地球軍にもザフト軍にも組みさない——“オーブ”が所有するヘリオポリスの内部だ。

そこへ、ザフトのモビルスーツが突如、襲撃を仕掛けて来た、というのだ。

避難している、一般人の男性が言った。

「考えるのは後でいい! 君たちも早く、近くのシエルターに避難するんだ!」

言われ、トールたちはすぐさま貴重品を身にひそめ、避難の準備を開始する。

女性であるミリアリアは、年上であることもあつて、その場所にぼーつとして立つて

いるステラの腕を掴んだ。

「ステラ、早く逃げよう！　ここは危ないよ！」

「……………ぎふ、と……………」

「え？」

ザフト——プラントの軍？

敵——ステラたちの、敵だった。

その時、ミリアリアが声をあげた。

「え、ちよつとキラ！　どこ行くの!？」

その時、シエルターへと避難しようとするサイヤツールとは反対側の方向に、キラが駆け出していた。

ミリアリアはそれを止めたのだ。

「なんか、さっきのお客さんがこっちに！　大丈夫、すぐに連れ戻して、僕もシエルターに避難するから！」

キラが言うには、先程の「教授のお客さん」がこの震動と共に血相を変えて、シエルターではない方向に駆け出してしまったのだという。

キラはそれを、連れ戻そうと行動しているのだ。

「キラ待つて！　すぐに避難しないと——死んじゃうよ!!」

「え……っ?!」

ミリアリアがその言葉を放った時。キラの姿はすでになかった。しかし、ステラが、その言葉に大きく反応する。

ミリアリアはそれに気付かなかったが、話を聞かずに行ってしまったキラに怒っているようだった。

「もう! ……ステラ、私たちも!」

避難しよう——

ミリアリアがそう、声をかけようとした時——

ステラが両手で、自分の顔を覆っていた。

震えている。

大きく。強かに。

ミリアリアが掴んだ腕を離れ、その場所に崩れるように座り込む。

「え……? ステ、ラ……?」

「死んじゃう……? ……も……みんな、な……」

「す、ステラ!」

「キラも、死ぬ? ……させない……!」

言下、ステラがその場所から駆け出した。

あつ、とミリアリアが声を上げるも、ミリアリアの想像以上にステラが早く疾走していたので、その驚きによって声も発せず、ステラはキラの後を追うように駆けて行つてしまった。

「まもる……!」

駆け出したステラは、しばらく進んだ所で、キラと——さきほどの客人の少年を
発見した。

どうやら、キャットウオークの上から“何か”を見ているようだ。

キラはその場に立ち尽くし、少年は膝を折り、キャットウオークの手すりを強く握りしめている。

ふたりに追い付いたステラは、咄嗟にキラの名を呼んだ。

「キラ!」

「え!? ス、ステラ!?!」

キラはステラがこの場所にいるとは思わなかったようで、その丸い眸をさらに大きく丸くした。

——てつきり、ミリイ達と避難したと思つたのに!

危ないじゃないか、とキラが声をかけようとした時、傍らに崩れていた少年が声を上げた。

「——お父様の……うらぎりものツ……!!」

少年の声は甲高く、高い天井に大きく響き、その中にいた者達の注目を一気に引いた。その時、きら、と輝く物がこちらへ向けられるのに気付いて、キラはすぐさま少年を抱えて後退。ステラもまた、咄嗟にそれに反応して見せ、放たれた「銃撃」を回避した。

——戦ってる？ どうして？

数分前まで平和だったこの場所で、どうして戦いが？

ステラ自身も、少年だと思っていたその金髪の人物は、少女であることに気付いた。同じ金髪をしているのが、彼女の髪は、また随分と自分と違って硬質そうだ。

ステラはふと、キャットウォークから下を覗いた。

「……………ガン、ダム……………？」

ステラが無意識にその言葉を完成させ、え……、とキラが声を漏らした。

ステラの視線の先に在ったものは——異教の神を模したような巨大な「人型」

——キラにとっては、見たこともないような兵器。

視線を向ければ今にも動き出しそうな、角を生やした人型機動兵器。

通称：モビルスーツ——機体の名称は、間違いない。

——ガンダムだ。

このガンダムを巡って、戦いが起こっている、というのか？

「っ……………」

アーモリーワン事変“セカンドシリーズ”MS強奪事件——

この瞬間、ステラの脳裏に、あの時の記憶が蘇った。ステラはその時、ザフト兵のスパイの手引きによってザフト管轄のアーモリーワン格納庫へと潜入し、そこでザフトの新型MS“ガイア”を奪取する任務に携わったことがある。

たくさん殺した。

たくさん壊した。

そう——ガンダムを、得るために。

今度はザフトが——それをやっているのか？

だとしたら——たくさん死ぬ。たくさん壊される。

この場所が！

「させない……………!! まもる……………!!」

その言葉を放つのと、ステラがキャットウォークから身を躍らせたのはほぼ同時のことだった。

キラは悄然としてステラの行く末を目で追ったが、ステラはその柔らかな外見に見合

わかない敏捷さで、すぐに新型MS “ストライク” という名を後で知ることになる機体の陰に消えると、そのままキラからは見えなくなってしまうた。

格納庫では、作業服を来たナチュラルたちが、多くのコーデイネーターであるザフト兵と銃撃戦を行っている。

ナチュラルとコーデイネーターでは、運動能力、視力、判断力のすべてにおいて後者が前者を凌駕している。まともにやりあつたのでは、ナチュラルに勝ち目はない。

ステラは銃撃を受け、既に動かなくなつた作業服の男から銃を取り上げ、周りに見えた緑色のパイロットスーツの兵士を撃つた。

——緑服は大したことはない。

ここまでの知識であれば、ステラは軍人として覚えている節があつた。

ザフトは——敵——!!

それから少しの時間が経ち、ステラは緑服のザフト兵を数人、撃ち取つていた。

その時、赤い服のザフト兵をひとり、発見した。

「おいおいどーなつてんだこりや、ナチュラルを相手に、潜入部隊がこのザマかよ……!?”

ステラが見つけた赤いパイロットスーツの中身は、ハイネ・ヴェステンフルスであつた。

潜入部隊の緑服の多くは、ハイネと同じくクルーゼ隊の出身ではないものの、これほどまでに大がかりな作戦だ——緑服の中でも選抜された、優秀な能力を持った兵士達が多いはずだった。

それが揃いも揃って、何者かによつて撃破されてしまっている。——相当腕のキレる用心棒が、警護にでも当たってんのか……？

——いや、どちらにしろ、ザフトレッドのオレがこんな所でやられるわけには……！
ハイネがそう思った時、彼の視界に、ひらりと踊る何かが映った。ハイネの反応は早かった。

すぐさま動きのあつたその場所に発砲したが、その影はMSの陰に隠れ、ハイネの放った銃弾をやり過ぎした。

「おまえかあ！」

——相手は早い！ オレの銃撃をよけるとは！

ハイネはすぐさま距離を詰め、隠れた影へと迫った。
銃を構え、一気にその場所へ躍りかかる。

「逃がすかよ、そこまでだ！」

人影の隠れた場所へ銃を突きつけ、勝ちを確信するハイネ。

しかし、銃口を向けたその先に——既に人影はなかった。

「な!？」

ハイネが一驚すると、そのすぐ直上から跳躍する人影が見えた。

——まさか、コレを登ったのか!？」

MSの装甲は厚い。

——敵はまさか、ここに隠れた後、この装甲を登った?」

周囲には梯子になるようなものはない。コーディネーターですら出来るかどうかわからない荒業だぞ!？」

直上から降って来る人影に、ハイネはすぐさま上方を向いて、銃を構えた。

——こんのお!

声を荒げようとしたハイネの視界に、映ったものは——

「!？」

白——。

白い——。

「がふっ!？」

急速に落下して来た敵影に、ハイネは対応しきれず、顔面を踏み付けられて悲鳴を上

げた。

驚くべきことに、ハイネの追っていた敵は、女……いや、女の子だった。

それも、作業服を着ている工場の従業員などではなく、ひらひらのワンピースを着て、肩紐が片方、はだけているような柔らかい衣服を着ている。

なにより、その娘に踏み付けられた時………白かつた………ことは鮮明に憶えている。

上空を見て銃を構えた時、眼前に迫った“それ”に動揺しなかつたといえ、それはきつと嘘になる。

——オレとしたことがあ………!

そんなものに気を取られて、判断を一瞬だけ鈍らせるとは!

ハイネは顔を蹴られたことが因果して、その場所に崩れてしまった。

「とつた、赤いの」

ステラは敵兵の頭を踏みつけたのち跳躍し、MSの装甲の上に、華麗にも着地を決めた。

見れば、そこには見たこともないガンダムが横たわっている。

——今の赤服の兵士は、このガンダムを奪おうとしたのか………?

ステラの眼の前に横たわるガンダムは、他のガンダムとは少し異なり、大きな装甲

……いや、盾だろうか？ それを持っているような機体だった。

その時、ザフト兵の声が響いた。

「ラストイ！——くそオ！」

赤いパイロットスーツを来たザフト兵だ。

——また来た。

そのザフト兵は、仲間の命を奪った男に銃を向け、容赦なくこれを射殺した。

鮮やかな手際だ。さつき、急に反応が鈍った「赤」とは違う……！

女性兵士が、撃たれた男の名を叫んだ。

赤いザフト兵はそれに気づき、振り向きざまに彼女を銃撃した。

「あうっ………！」

正確無比な銃弾は彼女の肩に命中し、女性が短い悲鳴を上げた。

ステラは即座に、その女性へと、器用にもMSを難なく飛び越えるようにして、駆け寄っていた。

——守る。

そのことだけを、一心に考えていた。

その時、さきほど別れたキラが、女性の元へ駆け寄っていた。

金髪の少女は同伴していない。おそらく、彼女だけでもシエルターに預けて来たのだ

ろう。

「キラ！」

ステラは咄嗟に、女性をいたわるように抱えるキラの名を呼んだ。

一方で、ザフト兵は弾詰まりを起こしたのか、手にしていた銃を捨て、ナイフを抜き放つて女性、そしてキラへと迫って来ている！

これを確認したキラは、咄嗟に……

「ステラ！ 来るな!!」

と、声高に叫んでいた。

容赦なく、キラ達に死の匂いを運んでいたザフト兵の足が止まったのは——その時だった。

「——ステ、ラ……………?」

ザフト兵が、まるで硬直したように動きを止め、バイザー越しに、呼びかけられた少女の方へ視線を移した。

優しく円らかな双眸。蜂蜜に金粉を振りまいたように輝く、その柔らかい金髪に——

ザフト兵は、返り血を付けたヘルメットのバイザー越しに、愕然とした表情を浮かべた。

「……………アスラン?」

その名を呼んでいたのは、キラだった。

キラの口から、無意識にその名前が完成していた。ザフト兵の翡翠色の瞳はステラを映し、次にキラを映し、そしてまたステラへと戻った。

「キラ……?」

「アスラン……!」

「あすらん……?」

三人の少年少女の、なんとも確信できずにいる、曖昧な声が交錯する。

その時、キラが抱える女性が——ザフト兵“アスラン・ザラ”に向けて——虚を衝くように銃撃を放った。アスランは間一髪のところまでこれに反応し、後方へ大きく飛び退く。

が、銃弾はアスランの肩を掠めるように空間をなぎ、小さく毒づいたアスランは、すぐさま女性士官からの距離を取った。

「アスラン」

ステラはこの瞬間に来て、ようやく現実を把握した。

——今の、アスラン?

後退して遠ざかっていく、あの後姿が……?

「うわっ」

その時、キラの情けない声が響いた。

ステラはハツとしてキラのいた場所を振り返ったが、そこにはキラの姿は既になく、代わりに、閉鎖したコックピットが映っていた。

女性士官が——「ガンダム」のコックピットの中にキラを連れ込んだのだ。

「シートの後ろに！」

「ま、待っててください！ 外には、まだ友達の話が！」

「え!？」

どうやら、女性「マリユール・ラミアス」は——ステラの存在に気付かぬまま、キラをコックピットに引きずり込んでしまったようだ。

ステラはふたりから離れた地点にいたため、それも無理のないことであったが。

遠方から——「ジン」が一機、迫って来ている。

これを確認したマリユールは、やむを得ず、音声を外へ拡張させた。

「早く逃げなさい！ どこでもいい！ シェルターへ！」

それは、ステラに対する呼びかけであった。

計器類に光が入り、モビルスーツ「ストライク」から駆動音が鳴り始める。地響きにも似た震動は、ステラが上に立っている「ガンダム」の装甲さえ強かに揺らしている。

GAT-X105 “ストライク” が立ち上がり——ぎこちない、覚束ない足取りで、ジンへと交戦しに向かつてしまった。

工場内は “ストライク” が抜けた空間に一気に酸素が流れ込み、火災が激しく、爆炎があたりを包み込み始めている。

激しい熱波に煽られるように、ステラは金色の髪を揺らし、ゆつくりと後方の “あるモノ” を振り返った。

残された “ガンダム” ——

ヘリオポリスで開発された、最後の機体だろう。

先程、ステラが顔を蹴倒した赤服が奪取しようとしていた機体。

その赤い眸をステラが見つめると——どこかその機体は寂しそうで——自分を呼んでいるかのように見えた。

——置いてきぼり……？

——ステラを、呼んでる……。

直感だった。

ステラはすぐさま不用心に開かれたその “ガンダム” に乗り込んで——起動スイッチを押した。

つい先日まで、戦ってたはずなのに——ステラにはこの瞬間が、ひどく懐かしいもの

に思えた。

——また、ガンダムに乗るんだ。

でも、それは壊すためじゃない。

それは、きつと……………

《——ハロ！ ハロ！》

その時、まだ封鎖する前のコックピットから、ステラのハロが飛び込んで来た。

そういえば、ラボには持って来ていた。

ハロは狭いコックピット内で跳ねまわりながら、ステラに問う。

《また、戦うのか？ ステラ、これでいいの、か？》

ハロの問いかけに、ステラはうつすらと微笑みを返した。

戦う——。

それはきつと。

「守るために、戦う——」

フェイスシフト装甲が展開し、ステラの乗るガンダムが、黄金色にカラーリングされ

ていく。

——。

——。

[G]eneral

[U]nilateral

[N]euralink

[D]ispersive

[A]utonomic

[M]aneuver

。

。

爆炎の中、最後の“G”が立ち上がる。

《ハロー！ ハロー！》

そして、戦場へ――

「ステラ・ルーシエ、
“デイフェンド”――出る」

『6機の“G”』 B

アスラン・ザラは見事——G A T—X 3 0 3 “イーゼス”の奪取に成功した。

眼の前で射殺された親友ラストイ・マツケンジーが奪取するはずだった“ストライク”と、今なお連絡の取れない兄貴分のようなハイネ・ヴェステンフルスが奪取に当たっていた“デイフェンド”から離れた場所で“イーゼス”は目撃され、これを強奪したのだ。

へよくやった、アスラン！

ミゲル・アイマンからの通信が入る。アスランの駆る“イーゼス”の所へ一機のジンが寄つて来たが、そのパイロットがミゲルなのだろう。

アスランはひとまず、自分の任務は完遂できたことに安堵するように胸を撫で下ろし、モニターに映るミゲルに目を遣り、

「——ハイネ？ 何やってんだ、そんなところで」

凍りついた。

状況が理解できていない、アスランである。

ミゲルの「ジン」のコックピットの中に、ハイネの姿が映っているのだ。

あの狭い空間に、色々と似ている男同士が、ぎゅうぎゅうになって詰め込まれている。もちろん「ジン」を操作しているのは、機体の持ち主であるミゲルであったが——赤服の兵士が、緑服の兵士の膝の上でお姫様抱っこされたように詰め込まれているその光景は、アスランから見て、とても滑稽に見えた。

「オレとしたことが、しくじったぜ。出し抜かれた」

よもや、民間人らしい女の子に申し抜かれたとは告白できず、ハイネはそれ以上を言わなかった。

——ラステイに続いて、ハイネまでも失敗か……。

報告に、アスランは悔いるように下唇を噛み締めたが、ハイネの結果の場合、ラステイより、何倍も「マシ」だろう。

——アイツのように死んでしまっただけはもう、どうしようもない……。

だが、悔やんだ所でアイツは返ってこない。

鮮やかにチャンネルを切り替えるようにして、アスランは戦死したラステイのことは考えないようにした。

そこで、なにか違和感を感じたアスランは、モニターに映るハイネへと訊ねた。

「ハイネ、鼻血が出ているじゃないか！——どこか、撃たれたのか?!」

「……………」

ハイネからの返答はなかった。

しばしの沈黙。

一秒一刻が勿体ない、と言われる軍事作戦の時間の中で、この沈黙はつきり言つて、かなり無駄なものである。

だからこそ、

「——答えろよっ?!?」

普段は沈着冷静なアスランが、柄にもなく突っ込んだ瞬間であつた。

——でも、心配になるじゃないか!

このツツコミは仲間を思う優しさゆえのものであつたが、ハイネにとっては出来るだけ触れてほしくない問題でもあつた。

——顔を蹴られて、鼻血が出たわけじゃない……ただ、不覚にも見てしまったから……。

特別、命に別状はないようで、アスランはそれ以上は追及しなかつたが、それが何による鼻血なのか、疑つたのは確かだ。

その時、焼け跡となったモルゲンレーテの工場から、一機の“G”が飛び出して来た。取り逃したラスティの機体——“ストライク”

これを確認して、アスランがミゲル達に言った。

「……ラスティは失敗だ！ あの機体には、地球軍の士官が乗っている！」

〈なに!?〉

「ラスティは死んだ。撃たれてな……」

〈なんだと!?〉

ミゲルとハイネが、似たような声で叫んだ。

それを理解したミゲルが、ばあつと激昂するような表情を浮かべた。

〈なら、あの機体はオレが捕獲する！ ハイネ、アスランの機体に移れ！ おまえ達は先に離脱しろ！〉

言うのと、ミゲルの“ジン”はすぐさま“イージス”に機体を寄せ、ハイネは軽快な跳躍で“イージス”へと飛び移った。

ミゲルの“ジン”は——そのまま、かなりぎこちない動きをしている“ストライク”へと躍りかかっている。

(キラ……? いや、まさか——だってあいつが、こんな所にいるはずがない……)

アスランは——“ジン”が“ストライク”に迫っているのを見て、後ろ髪を引かれる

思いに駆られた。

思いかえるのは、数分前の記憶——邂逅？

——何だったんだ、さっきのは——ッ!!?

目の前には、幼馴染のキラ……キラ・ヤマトがいて——離れた場所には、金髪の女の子——？

あれは……？

あれはいつたい、誰だった——!?

妹か——？

——違う。

妹は死んだ。

一年前の、血のバレンタインで——。

愚かなナチュラルの、核攻撃に巻き込まれて。

それがまさか——生きていたとでもいうのか？

「……………そんなはずがないッ」

「どうした、アスラン」

ひとりでにこぼした呟きに、ハイネが問いかける。

アスランは、何でもないと短く答えると——その場所からの離脱を図った。

ラウ・ル・クルーゼ——ザフトの艦船「ヴェサリウス」に搭乗するクルーゼ隊の隊長の元に行くつかの連絡があつたのは、それから数分後のことであつた。

敵にも味方にも容赦がないと言われている仮面の男ラウ・ル・クルーゼは、この時——既に指揮官用の機体「シグー」に乗り込み、「ヴェサリウス」をあとにした。た。

「そうか、ラスティとハイネが失敗したか。おまけに、ミゲルが機体を失つたというのかね」

奇襲を仕掛けられたナチュラル達は、抵抗という抵抗もままならぬまま、この作戦は——ザフト軍による圧勝に終わる。

そう考えていたことは、クルーゼにとつて事実であり、よもやここまで杜撰な結果報告を受けたことに、彼は動揺していた。いや、その表情は仮面によつて包み隠されてゐるため、本当にそうなのかは図れ知れないが、すくなくとも、悪い意味で「予想を裏切られた」というのは事実であつた。

ラスティ・マッケンジーは——地球軍士官に射殺され戦死。

ハイネ・ヴェステンフルスは——後に報告書に記載させる必要があるが、何らかの邪魔者に出し抜かれ機体の奪取に失敗。

赤服達のしんがり役を務めていたミゲル・アイマンは——突如、高機動を發揮した“ストライク”によって“ジン”を撃破され、脱出を図ったとのことだ。

「なかなか面白くない結末だな、これは」

“シグ”を駆りながら、クルーゼは後方から追撃してくる“ゼロ”による、執拗なまでの射撃を回避していた。

やがて二機は追撃戦の末——ヘリオポリス内部へと侵入。

ところどころに黒煙が立ち上がり、これが平和の国が抱える中立のヘリオポリスの景色であることに、一抹の嘲笑さえ覚えた。

——中立のコロニーを、ここまで破壊することを「悪行」というのだろうか？

いや、違うな……。

それは大いなる見当違いだ。

「地球軍の兵器を造っているこのコロニーの——どこか中立だというのだ」

口元に不敵な笑みを浮かべ、クルーゼは遠方に、一気に“ガンダム”を発見した——
“ストライク”だ。

どうやら、ミゲルの「ジン」を撃退したことですっかり安堵しているのか、機体の中には誰も搭乗していない、機体の足元に数人の学生と、負傷した女性士官の姿がある。

——いい機会だ。私なら「アレ」を奪取できよう。

量産できる「シグー」と、このまま逃がせば地球軍に技術が渡る「ストライク」——その価値は、天秤に掛けるまでもない。

クルーゼはすぐさま「ストライク」の元へと駆けようとした。

「だが、そうなる——貴様の存在はいよいよ邪魔だな！ ムウ・ラ・フラガー！」

「その瞬間、「シグー」は華麗に身を翻し、これを追撃していた「ゼロ」へとライフを撃ち放った。

「ゼロ」の有線式ガンバレルが、次々と撃墜されていく。

「ちィッ！ ラウ・ル・クルーゼ！」

「そんなオモチャのようなモビルアーマーで、私に勝てる気かね?！」

ムウ・ラ・フラガー——地球軍第七機動艦隊に所属する大尉にして、『エンデュミオンの鷹』の異名を持つ地球軍のエースパイロット——は、特別な能力がなければ扱いこなすこと自体が至難とされているモビルアーマー「メビウス・ゼロ」に搭乗していた。

コーディネーターは、開発力や生産力においてもナチュラルの能力を凌駕しており、

ナチュラルは現段階で、二足歩行ができるような高度な「モビルスーツ」を開発する術を持つていなかった。

いや、仮に持つていたとしても、それを操縦できる人間はナチュラルの中にはいなかった。

地球軍は「モビルアーマー」を量産し、これらを戦力のメインとしたが、やはり二足歩行ができ、人間に近い動きができるザフトの「モビルスーツ」には操縦技量、あるいは、敏捷性などから叶うはずもなかった。

「これで終わりかな？ ムウー」

「シグー」が一発のライフルを放つ。

ムウが駆る「ゼロ」はこれを間一髪で回避するが、最後の武装であるメインバレルを光線に持つていかれ、一切の戦闘能力を失った。

——武装を失うと何もできない。

これもまた、モビルアーマーの欠点のひとつだ。

「——さあ、その一機も頂くとしよう」

「ゼロ」を撒いた「シグー」が——「ストライク」へと向かった。

「戻って！」

上空に“シグ”の機影を捉えたマリューは、血相を変えてキラに叫んだ。

「モルゲンレーテへ戻って！ 今の“ストライク”の武装では、“シグ”の相手なんて——！」

マリューは懸命に訴えたが、行動するのがいささか遅すぎた。

モビルアーマーを撒いた“シグ”が、既に直上へと迫って来ていたのだ。

——全員を殺し、この“G”を奪うつもりか……………!!?!

マリューがそう予見したのは、この時だった。

唯一“ストライク”を動かせる少年、キラ・ヤマトは——まだ“ストライク”に乗っていない！
無防備なのだ！

全員を殺した後でなら——“シグ”のパイロットはその機体を放棄して、この“ストライク”を奪取することができる！

そして、そのマリューの予見は的中し——“シグ”が、地上のキラやマリュー、同伴していたトールやミリアリア、工業カレッジの学生たちにライフルを突きつけた。

一同が悄然とし、息をのんだ。

「——善戦したようだが、これで!!」

クルーゼが言う——その瞬間。

“シグー”の機体は、突然にして襲った衝撃に、大きく吹っ飛ばされていた。

「ぐッ!」

体当たり——!?

それは、何かを投げつけられたような衝撃ではなく、“シグー”の機体すべてに衝撃が行き渡るほどの質量を持ったもの。

生きた心地がしなかったマリューはハツとして、“シグー”を押しつけた「モノ」に視線を移した。

「あれは——!」

地上のマリューと、“シグー”のコックピット内のクルーゼの声が重なる。

膝について待機する“ストライク”の傍らに————巨大な「盾」のような装甲を持った——黄金の“ガンダム”が立っていた。

クルーゼが訝しみ、マリューは確信した。

「最後の一機だと? やはり地球軍の手に渡ったか」

だが、クルーゼの中に、この時、わずかに慢心があった。それは、

——操縦しているのはナチュラルだろう。

という、クルーゼにしては浅慮な慢心だ。

最後のガンダム——黄色のカラリングをしたその機体は、突如“シグー”に対して「体当たり」を仕掛けて来た。

「操縦の仕方わからぬナチュラルが、無我夢中で特攻を仕掛けた、といったところか」
そもそも“シグー”の行動を牽制したいなら、バルカン砲でもなんでも、遠距離から撃てば良い。

わざわざ接近して、体当たりを仕掛ける必要など、どこにもない。

この判断が、クルーゼを錯覚に陥れた。

「真鍮色のガンダムに乗っているのが、コーディネーターである」——
そんな可能性を考えもせず、闇雲に放棄したのだから。
クルーゼは迷わず、真鍮色の機体にライフルを向けた。

——奪取できぬなら、破壊する。

それで少なくとも、地球軍に、無駄なデータは渡らない！

“シグー”が、敵機にライフルを撃ち放った。

真鍮色の「G」はこれを——その体躯よりも大きな「盾」で、完全に防いだ。「ちイツ、フェイズシフトより厄介な代物を」

新型の「G」の装備・性能等、詳細なデータまでは、クルーゼには渡っていないかった。というより、それはザフトが地球軍から奪取した後に、じつくりと明らかにするものであるはずだった。

数発として、クルーゼはライフルを連射するも、真鍮色の「G」が誇る漆黒の「盾」は——聳え立つ鉄塊のように、ビクともしない。

やがて弾切れを起こし、クルーゼが、弾を装填しようとした一瞬の隙を衝いて——「G」はいつの間にか「シグ」の側面へと回り込んでいた。

「!？」

クルーゼが目を見張る速度。

「G」の性能だけじゃない——？

「これは?！」

そして再び、体当たり——。

重厚な衝撃——！

軽量な「シグ」の装甲では、あと一発でも喰らえばバラバラに砕かれてしまいそうなほどの衝撃が、クルーゼを襲う。

通常の機体は、パイロットの肉体保護のため、機体に衝撃を受けても、コックピットへは直接的な衝撃は行き渡らず、衝撃が緩和されて伝わるようになっていいる。

だが、それがどうした。

そう言わんばかりの敵の突進は、その保護機能をまるで無視するように、コックピットを強かに揺るがした。

「ぬうッ……馬鹿か、こいつはー！」

揺らされたクルーゼから、口をついで出た言葉だった。

二度も体当たり？ いったい何を考えている？

だが、クルーゼとて判断が鈍いわけではなく………。

その瞬間——「シグー」後方の「ストライク」が、アーマーシユナイダーを空中の「シグー」へと投擲した。

「シグー」はこれに反応して見せ、回避する。

機体を翻すと、さすがにこれ以上は部が悪いと判断したのか、バーニアを全推進させ、その場から飛び去った。

「逃げた………？」

トールやミリアリア、サイにカズイ、学生たち全員が、安堵したように膝を折り、その場に崩れ落ちた。

いまだに自分が生きていることへの実感がわいていないマリユール・ラミアスであったが、彼女はいち軍人としての対応を取るのが早かった。

「黄色の“G”のパイロット！ 地球軍の者か？ 姿を見せろ！」

銃撃を受けた肩を庇いながら、マリユールが声高に叫ぶ。

真鍮色の“G”パイロットは、そこで何の抵抗もなく、言葉に従うようにしてコックピットを開いた。

そこから出て来た幼さを残した少女の姿に——それを覗いていた、全員が絶句した。

「ステラ——!？」

現れたその姿に、もつとも驚いたのは言うまでもなく、急いで“ストライク”に乗り込んだキラであり、キラはすぐに機体のハッチを開くと、“ストライク”と向かい合うようにして立つ“ガンダム”から現れた、ステラへと叫んだ。

「どうしてキミが!? い、今の……もしかしてキミが？」

ステラが——あの“シグラー”を撃退した、というのか？
にわかには信じられないキラはそのまま、続ける言葉を失った。

それから数十分して、ヘリオポリス内部の山岳から、突如巨大な戦艦“アークエンジェル”が姿を現した。

ザフトによる襲撃は終わった。

この時点で、ザフトが何を目的にヘリオポリスを襲ったのかは——頭を振じらなくても、地球軍所属の誰もが、明瞭に判断が付いた。

新型機動兵器“ガンダム”6機の——強奪。

その内の2機である“ストライク”“デュフエンド”の強奪にはザフトは失敗。

この2機は既に、地球軍指揮下にあることも、ヘリオポリス外にある地球軍艦隊にもあまねく報告されていた。

「軍の最高機密事項に触れてしまった——あなた達を、ここで解散させるわけには行かないわ」

それが、無情にも地球軍士官であるマリュー・ラミアスから、民間の少年たちに突き付けられた現実だった。

トールやミリアリア、サイたちは「ストライク」と「デیفエンド」の部品を乗せたトレイラーを、肩を負傷したマリューの代わりに運転させられた

キラは「ストライク」を、ステラは「デیفエンド」をそれぞれ操縦し——地球軍が開発した強襲機動特装艦「アークエンジェル」への、2機の「ガンダム」の移送を任された。

ザフトの襲撃によって、甚大な被害を被ったのは、ヘリオポリスそれだけではなかった。

「アークエンジェル」の艦長を始め——この戦艦を動かすはずであった主だった士官はほとんどの死亡が確認されたのだ。

「今は、ラミアス大尉が——この艦の責任者となる立場にあると思いますが」言葉を発したのは、先程まで、臨時で「アークエンジェル」を起動させた地球軍士官、ナタル・バジルールである。

彼女の迎えには損傷した「ゼロ」をこの戦艦に帰投させたムウ・ラ・フラガの姿があり、「アークエンジェル」に到着したマリューが、ふたりの間に入るような形になっている。

責任者——それはつまり、戦艦で最大の責任をもつことになる、艦長を務めるべき立場にある、とうことだ。

驚いたことに、マリュー・ラミアスはその作業服を着ている姿こそ、ナタルやフラガより格下に見受けられるが、実はこの中で一番階級が高い、という立場にある。

そんな時、フラガがマリューに訊ねた。

「ザフトが奪取に失敗したっていう、二機は？」

「ああ、今はまだ地上です。この船をどこかに停泊させなければ、今の二機の残量エネルギーでは、空を飛ぶことは困難ですから」

そもそも、新型のガンダムは今日が試験運用の予定日であり、残量バッテリーなどそこまで備えられていないのだ。

ムウ・ラ・フラガは、本来あのガンダムに乗るはずであった新米パイロット達の護衛のためにヘリオポリス近隣に待機していたくらいであり——先の実戦で、ストライクも、デュフェンドも、フェイズシフト装甲まで展開し、それぞれ一機ずつ、ジンと“シグ”を撃破している。

残量エネルギーなど、既に空に等しいのだから。

そんな時、緊急を要する放送が、船内に響き渡った。

キラやツール達は、マリユーに命じられたように、焼け跡となったモルゲンレーテの工場へ向かい、電力パックや追加武装など…… “ストライク” と “デイフェンド” に必要な部品を回収しに向かった。

パーツの積み込みは、キラの動かす “ストライク” が行い、移送はツール達が、トレーラーにて行う役割である。

“シグー” との戦闘の後、念のために安息の場所を移動させた “デイフェンド” であったが、その安息の場所には、ステラとミリアリア、そしてカズイの三人が残されていた。

ステラも、マリユーに言われた当初は “デイフェンド” を動かし、モルゲンレーテの工場に赴いて部品回収作業の手伝いをすると言ったのだが、キラから「あぶないから、ね？」と子どもをあやすように説得されると、それ以上は何も言えなくなり、この場所に残されることになってしまった。キラはむしろ、ステラは一般の女の子であり、モビルスーツの操縦など、できるわけがないと思っており、それゆえのその指示であったの

だろうが。

ツールはトレーラーの運転。サイは、そんなツールとキラのサポートとして工場へ向かった。

その場に残されたステラの保護者としてのミリアリア。そして、特に役割が見つけれなかったカズイの三人が、その場に残っている。

「ひゃあ……このでつかいの、ほんとにステラが動かしてたの?」

当然の反応ながら、ミリアリアは片膝を立てて屈む。『ディフェンド』を見上げ、その事実を信じられずにいた。

真鍮色のボディに、漆黒の「大盾」——体躯よりも大きな盾がその身を覆えば、まるで黒い鉄塊のような凶面になる。どうみても防御力に重きを置いた、極地防衛型のMSである。

「はじめて動かした」

「それは、そうでしょうね……あはは……」

ミリアリアにとって、ステラは本当に何者? と疑うような少女であることに、疑いようはないだろう。

突然、前触れもなく現れた金髪の美少女は、キラの幼馴染の妹だということ、しかし彼女には帰る家がなくキラの家でお世話になっているとのこと。

ふたつ年下の割に、キラが取り組むような高度な情報処理を理解し、あげくの果てには、この巨大な人型兵器を操縦し、*「ジン」*とは違うザフトの指揮官機を撃退した？

——なによ、それ……。

その時、体育座りで顔を膝の間に埋めていたカズイが言った。

「ろくなもんじゃないよ……」

「え？ なにかズイ？」

「ろくなもんじゃない、って言ったんだ。何なんだよ、いきなり現れて、優秀なところばかり見せつけてさ」

カズイは睨むようにステラを流し目で見たが、見られた本人は首を傾げ、頭に疑問符を浮かべているようだ。

その様を見て、カズイはステラから目をそらしてしまった。

互いに険悪になってしまった（というより、カズイの一方的な嫌悪による）雰囲気。正そうとミリアリアが言葉を探したが、その時、コロニー内に大きな爆撃音が響いた。

「——敵？ ザフト！」

「そんな！ またなの!？」

「あああもう、最悪だよお！」

三人はそれぞれに顔を上げ、コロニー内に侵入して来たザフトの機体を見つけた。

「キラ達はまだ戻って来てないのに！」

ミリアリアが恨めしそうに叫び、ステラへ、どうしようか、と訊ねようとした。

だが、ミリアリアがそこへ視線を向けると、ステラの姿は既にそこにはなく——
どうやって乗り込んだのか、既に遥か頭上の「デイフェンド」のハッチへと移動して
いた。

通信が入っていたのだ。

「——敵襲？」

その知らせを、機体通信から流れたマリユーの音声によって受け取る。

「『アークエンジェル』はすぐに迎撃に向かいます！ あなた達は後で、自力でこの艦
に合流して！ くれぐれも、ザフトの機体には気を付けるように！」

ザフト軍は、再び攻撃を仕掛けて来た。

目的は不明だが——いや、よほど、この「新型」が欲しいのだろうか？

ステラが思慮していると、ミリアリアが声を上げた。

「ステラ！ キラ達が戻って来た！」

その言葉を受けて外を見ると——さまざまな部品を乗せたトレーラーと、それを護衛
するように「ストライク」がこちらへと向かってきていた。

キラ達と合流したミリアリアは、再びヘリオポリスがザフトの襲撃を受けていること

を伝える。

「このコロニーにはまだ、逃げ遅れた人もいるかもしれないのに！」

どの道、この場所に“二機”のガンダムを放置しておくのは得策ではなかった。

「僕が“ジン”を止めて来る！ 君たちは急いで、離れた場所に避難して！」

キラが“ストライク”で出撃——“ストライク”はモルゲンレーテから回収した電力パックから、エネルギーを補給し、ソードストライカーを装備すると、そのまま戦場へと向かって行ってしまった。

ミリアリアとカズイが、トールとサイの乗るトレーラーに乗り込んだ。

「ステラ！ 行くよ！」

ミリアリアが呼びかける。

“デイフェンド”を、この場所に放置しておくことはできない——。

トール達にはにわかに信じられた話ではなかったが、ステラがその“ガンダム”を操縦できると信じて、ステラをトレーラーではなく“デイフェンド”にて移動させようとした。

再び“デイフェンド”に乗り込んだステラであったが——

「あの機体……」

上空を仰ぎ見、ザフトの機体を発見する。

大型ミサイルや長砲身ライフルを担ぐようにして展開している。`ジン`が数機——
——そしてそれに後続するように、きらりと赤く輝く機影を見つける。

奪われた`G`の一機——GAT-X303 `イージス`！

「アスラン……？」

咄嗟に`デイフェンド`は後退し、トレーラーに積み込まれた電力パックに手を伸ばした。

その巨大な掌で電力パックが抜き取られた衝撃で、トレーラーが大きく揺れる。

「うわわ!? ステラ、何してるんだ!? 早く逃げないと！」

ツールが抗議にも似た声をあげる。

運転席から身を乗り出し、ツールがステラへと呼びかけると、その瞬間、上半身を乗り出したツールの顔を、暴風が薙いだ。

エネルギーを供給した`デイフェンド`が——スラスターを展開し、トレーラーから飛び去ったのだ。

「えー！ 何やってんだよあの子!!！」

サイが叫ぶ。

まさか、キラを助けに——？

だからって、自分から戦場に向かうなんて!!

——
死ぬぞ
!!?

“デیفエンド”は真っ直ぐに——
——“イージス”へと向かった。

『6機のG』C

拠点攻撃用の重爆撃装備を搭載した「ジン」が、クルーゼ隊の指示によって「ヘリオポリス」内部へと再突入した。

目的はふたつだ。

ひとつ目は地球軍艦『足つき』と呼称される戦艦を逃がすことなく撃墜すること。

ふたつ目は隠密下での強奪に失敗した二機の「G」の強奪を、再度として試みることだ。

ザフトがなぜ、ここまで新型を狙うのか。

それは、地球軍がモビルスーツを開発するだけの知識や技術を編み出せていないこの段階で、コーディネーターの手が及んだ新型の「G」が地球軍に渡れば、その詳細なデータ等は、あまねく地球軍に流用される可能性が危惧されたからだ。

『適応能力の低いナチュラルには、モビルスーツを乗りこなすことなど出来ないよ』

これはザフトに所属しているいつかの軍人が驕るように発言した言葉であり、もつと

もだと賛同する者もいるだろうが、それは未来を見据えることのできない愚か者の発言だと、クルーゼは非難するだろう。

念には念を入れるべきだ。いざれやって来る明日さえ約束されていない軍人にとつて、敵軍に重要な機密データを明け渡さないことは、その明日のために戦うザフト兵の多くの命が掛かっている大問題なのだ。

たしかに、モビルスーツの操縦にはそれなりの訓練期間を要するだろうが、ひとたびマニユアルが完成してしまえば、ナチュラルも人間であり、高めの知能が見込めない馬鹿ではない。その内、安易にモビルスーツを扱えるようになる「セミオート」機能さえ、造ろうと思えば無理な代物ではないだろう。

「ここで阻止せねばその代価、いずれ我が軍の命で支払うことになる——か」

「ヴェサリウス」に帰還したクルーゼは、言い聞かせるようにそう呟き、その時、艦長であるアデスからの報告が上がった。

「隊長、*“ヘリオポリス”*で*“イージス”*の奪取に成功したはずのアスラン・ザラが戻りません。いかがなさいますか？」

その報告に、鉄の表情を誇るであろうクルーゼが、わずかにその眉をあげた。彼にとつてその報告は、それほどまでに意外なものだったのだろうか？

「アスランが命令違反とは珍しい。——ふむ、別に構わんさ。好きに行動させてやると

いい……。

——彼なら戻って来るだろうしな……。

信頼という言葉は、自分にとって似合わない言葉のひとつであろう、そう自負しているクルーゼであったが、アスラン・ザラに対しては、どこか信任をおいているようであった。

アスラン・ザラは、気持ちの中に芽生え出した希望や願望に近い感情を否定しつつ、拭えない確信を持ち始めていた。

キラ・ヤマト——月の幼年学校で一緒だった、アスランの幼馴染である存在だ。

キラは、地球とプラントの情勢が悪化して、アスランが父パトリックの意向によってプラントへの移住を余儀なくされた時に別れた、アスランにとって、親友と呼ぶべき存在だった。

——あいつが、あんなところにいるはずがない……。

信じられない。

そう頭を抱えるアスランだが、そこへ、トドメを刺すような記憶が蘇る。

『キラ！』

『ステラ！ 来るな！』

あの時の声が、今でも、何度も頭の中にこだましている。

——ステラ？

うそだ。

ステラは——妹の名だ。

妹は——無邪気で、甘えん坊で、どこか危なっかしくて、ひとりにして放っておけないような妹で。

僕の知っている妹は、あんな物騒な所に立っていられるような、そんな妹じゃない。

——生きていたのか。

違う。そもそも、妹は死んだ。

——遺体を確認したわけじゃないだろう？

助かるはずがない。核攻撃を受けたんだぞ。

理性と感情の間で自問自答しながら、それでも煮え切らず——

「ええいッ……………！」

“ヴェサリウス”へ即座に持ち帰るべき“イージス”を駆って——

制圧部隊である“ジン”の部隊に後続した。

へ気イ付けな——“ストライク”は急に機敏な動きに変わりやがる。調子に乗って慢心していると、首元かつ切られるぜ

それを体験して来た、ミゲル・アイマンが部隊を先行し、後続のパイロット達に告げた。後方に続くオレンジ色の“ジン”が返す。

へハ——“ストライク”なんてどうでもいいさ。オレは“オレの機体”を見つけて、必ず奪い取る

オレンジ色の“ジン”——パイロットはハイネ・ヴェステンフルスであり、装備は拠点強襲用の長砲身ライフルを装備している。

オレの機体というのは——間違いなく、ハイネが奪取する目標であった“デイフェンド”であるのだろう。

へ“デイフェンド”ねえ……その機体は隊長が乗る“シグー”を凶らずも撃退している。くれぐれも油断はするなよ

“ストライク”には——キラが、乗っているのか？

アスランは煮え切らない想いを胸に、“イージス”を駆り、ヘリオポリスのメインシャフトへと侵入していった。

戦闘が始まっている――。

アスラン達がヘリオポリス内に再度侵入した時、地球軍艦“アークエンジェル”撃墜を目的としたザフトの別働隊が――この時、既に“ストライク”と交戦していた。

「――見つけたぜ、“ストライク”だ！」

ミゲルが先刻の悔しさを胸にギリ、と歯を鳴らすと、大型ミサイルを直下の“ストライク”に向けて撃ち放った。

――雪辱戦と行こうか！

“ストライク”は、まだ多少のぎこちなさの残った動きではあるが、とてもナチュラルが操縦しているとは思えない速度の反応を見せ、はるか遠くから放たれた、そのミサイルを予知したように回避した。

「ザフトの追撃部隊！ まだ来るのか!？」

コックピットの中で、キラが毒づくように叫んだ。

キラはここまで――“アークエンジェル”を襲った二機の“ジン”を撃墜していた。キラとしては“アークエンジェル”に対し何の思い入れもないが、“ヘリオポリス”を破壊しようとした“ジン”を撃墜したところ、結果的にそれが“アークエンジェル”を護ることに繋がったのだ。

キラはモニターで、迫りくる新たな敵影を確認した。

現れた敵機は数にして四——その内の一機であるオレンジ色の“ジン”は、まるで自分には興味がないかのように、単独で別の方向へと向かって行く。

「“ヘリオポリス”を！」

これ以上、壊すんじゃない！

ソードパックを構えているキラは、単独で離脱を図ろうとしているオレンジ色の“ジン”を追撃しようとした。

だが、

「落ちろおっ！」

ミゲルの放つミサイルが“ストライク”の進路を阻んだ。

後続の“ジン”もまた長砲口のライフルを撃ち放ち、“ストライク”を牽制する。

やむを得ず“ストライク”は身を翻し、真っ直ぐこちらへと向かってくる、三機のザフトの増援に対して迎撃姿勢を取った。

「——回り込め、アスラン！」

ミゲルの指示が飛び、“イービス”が——“ストライク”の側面から肉迫する！

「あの機体……!?!」

奪われた“G”の一機——“イービス”！

そんなものを、もう実戦に投入してくるのか!?

——それに、あの機体のパイロットは!

迫り来る赤い機体に、キラは一瞬気圧されたが、すぐに回避行動を取り、繰り出された「イージス」のサーベルを回避した。

（「ストライク」——乗っているのは、誰だ……キラ、なのか）

アスランが頭の中で反芻しても、答えは出ない。一向に、出るはずがない。

——どうなんだ!

アスランは理性を咬み殺すよう、唸るようにして、通信回線を開いた。

「キラ……キラ・ヤマト!」

「アスラン……!?!」

「やはりキラ? キラなのか!」

通信先から聞こえた声に、嘘であって欲しいと、願ったが。

幼馴染の、忘れるはずもない声が聞こえた時、胸を締め付けられたような気分になった。

ふたりは、茫然とした。

しかし、やがて驚きが冷めると、同時に、名状しがたい怒りの感情が胸の底から溢れて来た。

「なぜ……なぜ君がザフトになんかつ……！　　〃ヘリオポリス〃に——なんてひどいことを！」

「君こそ！　　どうして〃そんなもの〃に乗っている!?　　コーデイナーターの君が、どうして地球軍の味方をするんだ!？」

言い果てぬ怒りを覚え、ふたりの少年が、嘆くように叫び合う。これが、アスランの懸念が確信へと変わった瞬間だった。

——あのとき出逢った少年は、やっぱりキラだったのか……。
でも、分からない。

(なぜキラが、こんな所にいる?)

なぜキラが——〃足つき〃を護っている?

なぜキラは——僕に銃を向けている?

なぜ——僕たちが対峙している?

アスランが——かける言葉を探した。

そのよきだった。

「——ぼーつとするな、アスランツ！」

ミゲルの怒号が回線から飛び、不意にドキツとしたアスラン。

ミゲルの駆る〃ジン〃から、数発のミサイルが放たれた。これらは茫然としていた〃

ストライク”を掠めて終わつたが、急な対応をした“ストライク”が——思わず、空中で体勢を崩す。

そこへすかさず、もう一機の“ジン”が、ライフルを構えて窮迫する!

長砲身ライフル——戦艦の装甲ですら突き破りかねない、強襲用武装の砲口を——
ストライク”へ固定しながら。

「しまった——!?!」

「キラ——!?!」

ザフト兵の駆る“ジン”が——“ストライク”へと一気に躍りかかる。

——アレに乗っているのは、友達なのに!

絶望に駆られる。

あるいは……。

これが——「戦争」だというのか……??

(戦争の中では——個人の想いなど、押しつぶされてしまうのか!?)

“ジン”がライフルを構え、長砲身のそれが火を噴いた。

光線が迫り——“ストライク”へと直撃する!!

——まもる……!!

その瞬間——。

キラの通信に——その「言葉」が響いた。

大火力を誇る「ジン」の放ったビームが弾けると——辺りが一瞬、真っ白に閃いた。「やったか!?!」

爆炎と共に黒煙を上げ、もくもくと炎上する、ビームの直撃箇所には視線を遣ったミゲルだが。

そこには——真鍮色に漆黒の盾を構えた「G」が現れ、その強大な「盾」で——「ストライク」を庇っている姿が映し出された。

「なに!?!」

「え……!?!」

キラが唾然とし、ミゲルとアスランは愕然とした。

それも束の間、巨大な鉄塊のようだった「G」は、すぐに巨大な「盾」を広げ、ビームを放った「ジン」へと——そのバーニアを全開にして接近していく。

「はあああああつ!!」

体当たり——!?!

重厚な鎧を身に纏った「ディフェンド」が——!?!

“ジン”を駆るザフト兵は、身の危険を感じ、すぐさまバーニアを反転させて後退した。

接近する“ガンダム”から距離を取ろうと、もう一度、その“ジン”は長砲身のライフルを撃ち放つ。

しかしその砲撃は——黒い鋼のような装甲に消し飛ばされ、完全に無効化された。

「ええええいッ!!」

次の瞬間、“デیفエンド”による突進が“ジン”の胴を捉え——後退するその機体が、バラバラに砕け散った。

「っ……………!」

それは——傍から見ればただの「体当たり」でしかなかった。

しかし、機体の持つそのあまりの重量と硬度によって——その直撃を受けた“ジン”の四肢体が、バラバラに砕き飛ばされたのだ。

黄色を基調としたカラーリングに、黒い鎧のような重厚な装備を身に纏っている。これが報告にあつた——ザフトが取り逃した機体？

もう一機の“G”の力……？

「デیفエンド」——!?!

アスランが、コックピットごと粉碎された仲間の死を想い、怒れるような口調で、そ

の名を呼んだ。

この一端を見ていたキラは、この時茫然として、しかし、すぐにハツとして声を上げた。

「ど、どうしてここに！　もしかして……ステラか？　ステラが乗ってるのか!？」

キラが慌てて通信回線に呼び掛けると、モニターには「デイフェンド」のコックピットに座る、ワンピース姿のステラが映った。

その姿を視認すると、うああ、と悲鳴を上げるようにして、キラが右手で、自分の前髪をぐしゃつとかき上げた。

「どうして！　危ないからミリイ達と逃げて、って言ったのに!？」

この時ばかりは、キラもまるでステラが自分の妹であるかのように、少しキツめに怒ろうとした。

しかし、ステラからは小憎らしい返答が返り、

「危ないの、キラも同じ。今、ステラが来なかったら、キラも、たいへんだった」

「うッ」

ごもつともだね、とキラは返す言葉を失った。

事実、キラはステラによって助かったのだから。

「……………ステラ、だって?」

“イージス”を駆るアスランは——通信回線のその先から、幼馴染である親友の声と、その親友と応答する——アスランの中のあり得ない存在の声を聴いていた。

忘れるはずもない声だ。何年たつても忘れない……そんな、透き通った女の子の声。

「キラ………今、なんて言ったんだ？ ステラ……？ どうして君が、その名前を——

!!?」

敵であることも忘れていたかのように、アスランはキラに、せがむようにして訊ねた。

「アスラン！ 君はやっぱり、知らなかったのか!？」

「何の、話を………!？」

「ステラは！——君の妹は！ 生きてるんだよ!!」

アスランの身体が、凍り付いた。

モニター越しに見えるアスランのその反応に、キラはたしかな感触を経て、確信と共に呼びかける。

「やっぱり知らなかったんだ……！ 僕も驚いた！ でも、ひどいじゃないか！ 妹のいるヘリオポリスに、君が！ 攻撃を仕掛けるなんて!」

「嘘だ……嘘だ！ 嘘をつくなキラ！ ふざけるのも、いい加減にしろッ!」

“イージス”が失調したように、“ストライク”へとライフルの銃口を向けた。

“ストライク”はそれに対して、特に抵抗する様子は見せなかった。

しかし、次の瞬間、*“イージス”*と*“ストライク”*の間を——*“デイフェンド”*が割るように入り込み、*“ストライク”*を庇うように据えた。

「ステテラ！」

「アスラン、そこ？」

「は……!？」

アスランは——モニターに映る、忘れるはずもないその姿を目に入れた。

金髪の少女が——見覚えのある双眸で、こちらを見ている。

その面影は——アスランの記憶を正確に再現したようなもので、彼女は無表情でありながら、好奇心に溢れているような眸を浮かばせている。

やがてその表情は——太陽のような、柔らかな表情へと変わった。

「——おにいちゃん！」

清流のように、細いようで芯のある透き通った声。

蜂蜜に金粉を振りまいたかのような輝きを放つ金髪。

円らな眸のその奥にある翠色は——母レノアによく似た、妹の特徴だった。

「そん、なッ………」

疑いようはなかった。

目の前に映る少女——その傍らには、飛び跳ねている球体型ロボット……の姿もある。

それはいまだ、女の子にしか送ったことのない——ハロという、自作のロボット。海色のそれは、自分が過去に、妹のためだけに作ったものだ——！

愕然とし、言葉を失う、アスランの下へ——。

「——逃がすかよおっ！ 黄色いヤツ！」

オレンジ色の「ジン」を駆るハイネ・ヴェステンフルスが——長砲身の重粒子砲を、手当たり次第にぶっ放しながら戻つて来た。

「それは、オレの機体だあ！」

何の根拠もない割に威勢だけは凄まじい台詞と共に、「デイフェンド」を射程距離に捉えたハイネが、それに照準を固定し、野太い重粒子砲——これを乱射射した。

大火力の砲撃が、繋がるように長い巨大な光条となり——ステラの乗る機体へと直進する！

「イーリス」は、咄嗟の仲間の行動に対応できなかつたが、その瞬間、生き別れた兄を目の前に無防備な姿を晒す「デイフェンド」を——「ストライク」が腕を取り、強引に引つ張り上げた。

腕を取つた「ストライク」に引かれ、「デイフェンド」はかろうじて、ハイネの放つた重粒子砲から逃れる。

だが、それがヘリオポリスの「とどめ」となった。

標的を外し、空を切った超火力のビームは、そのまま直進した先のヘリオポリスの外壁に着弾する。

その衝撃がトリガーとなり、連戦によつて荒廃し、既にコロニー自体に相当な無理がかかっていたのであろう、ヘリオポリスの地盤が、激しい音と共に大きな亀裂を広げ始めたのだ。

気流が乱れ、生まれた亀裂の間から除く宇宙へと——コロニーの中の、あらゆるモノ、何もかもが、吸い出されるように呑み込まれていく。

「うわっ!」

キラが悲鳴のような声をあげた。だが、"ストライク"の手は——決して"ディフェンド"の腕を離そうとはしなかった。

見慣れた街並みが、一気に崩れ去っていく。エレカや建物のすべてが"残骸"となつて——宇宙空間へと放り出されてゆく。

——押し出される!?

コロニーに限界が訪れた!

悔いるように、ハイネは舌を打ち、すぐさまミゲルと合流する。

「キラ! すて——ッ!!!」

いまだ信じられた話ではなく、アスランは、不意に出掛つた「その名」を呼ぶことを

躊躇ってしまったが——乱れた気流は容赦なく「イーゼス」と「ストライク」——
 —そして「デイフェンド」の間を分かち、躊躇いの名前を言い切る前に、二者を引き離した。

「ストライク」と「デイフェンド」では、その重量では圧倒的に後者が前者を上回っていたが、コロニー崩壊の折に発生する気流は、堅牢な盾と鎧を装備する「デイフェンド」の質量さえも軽々しくかつさらい、宇宙空間へと押し出していく。

激しい気流に吹き飛ばされ、二機のガンダムが飛ばされていく。

「うわあああああああッ!!?」

「おにい、ちゃん……………」

「ストライク」に腕を惹かれ——共に宇宙空間へと投げ出されていく「デイフェンド」——。

キラは叫び声をあげ——。

ステラは「デイフェンド」のコックピットの中——

一度も。

一度たりとも、手を差し伸べてくれなかった「イーゼス」が離れていくその姿を——

——茫然と見つめていた。

『ルーシエと名乗る少女』

“ヘリオポリス”は跡形もなく崩壊した——。

そこで暮らしていた学生らにとって、当たり前だと思われていた日常は崩れ去り、彼らが生活していたコロニーはデブリとなって、宇宙の彼方に散ったのだ。

宙域へと投げ出された“ストライク”と“デイフェンド”であったが、キラの方がステラを決して手放さなかったことではぐれることはなかったらしい。そこから信号を発信し、やがて“アークエンジェル”へと帰還することができた。

宇宙空間など人生で初めて体感するキラとしては、文字通り、右も左もわからない状況に動揺していたが、対するステラは、まるで慣れているかのように冷静に対処し、まず身を寄せるべき「母艦」——“アークエンジェル”へ戻ることが賢明だと判断したのだろう——その位置を把握して、キラと共に帰還した。

その途中で——おそらくヘリオポリスの崩壊によって投げ出されたのだろう——一隻の救難ボートが宙域に難破していた。

“ストライク”はこれを回収し、“アークエンジェル”へ持ち去った。

無事、ツールやサイ達も回収されていたようで、キラは同級生達の安全を確認すると、ひとまずは、ほっと胸を撫で下ろした。

「ステラ、だいじょうぶ？」

「……うん？」

「アークエンジェル」へと帰投し、キラが「ストライク」の中から、通信回線を開いて訊ねた。

大丈夫。

というのは他でもない——アスランのことだ。

ヘリオポリスの崩壊に際して発生した乱気流によつて——兄妹は、再び引き離されてしまった。

「ストライク」は「デیفエンド」を離さなかった。

咄嗟の危機に、キラがステラの機体を必死に繋ぎ止めていた。それが、アスランとステラを引き離した要因の「ひとつ」ではあるだろう。

アスランへ引き渡せば良かったかもしれないという考えさえ浮かんだが、しかし——
——だからといって、あそこで「デیفエンド」から手を離していたら、キラはまた、別の形で後悔していたのではないだろうか？

こうして、ふたりとも無事でいられているのだから、それはそれでいいような気もし

ている。恨めしくもあるが、後悔はない現実だ。

——アスランはどうなっただろう？

いや。久々に再会したアスランはもう、ザフトの「軍人」になっていた。きつと今頃は自分の判断で、無事にザフトの船に戻っているだろう。

——ステラは、ぼくを恨んでいるだろうか。

せつかく兄に会えたのに——僕が、その手を離さなかったばかりに——兄から引き離され、よりによって地球軍の戦艦に連れて来られてしまったのだから。

ステラに訊ねたキラは、いくばかりの罪悪感を感じ、また、動揺からとても暗い顔をしていた。

しかし、ステラは——

「だいじょうぶ。ステラ、うれしかったよ」

「……え？」

「アスランに会えたのも。キラが守ってくれたのも、うれしかった」

オレンジ色の「ジン」が放った重粒子砲から、キラはステラを守ってくれた。

ステラはそのことを言っているのだろう。

無邪気な微笑みを含んだ穏やかな表情でそう言われ、言葉を受けたキラは、心の中のもやもやが、少しずつ晴れていくような気がした。

「その、恨んでない？ アスランとまた、離れ離れになったこと」

「うん。生きてるなら、また会えるから」

「生きている」ならまた会える——

ステラは自分の言葉を疑わなかった。

お互いの「それ」を潰し合うのが——今起きている「戦争」だというのに。

“アークエンジェル”のクルーの多くが、MSの格納庫へとゾロゾロとやって来ていた。その中にはマリユールやナタルの姿もあり、キラの同級生達もいる。

キラが回収した救難ボードを開くと——中からは多くの民間人——そして、偶然そこに乗っていたフレイ・アルスターの姿があった。

フレイが救難ボードの中にいたことに驚いたキラであったが、“ストライク”のハッチを開き、ひよっこりとそこから顔を出した途端、格納庫にいるクルー達からざわめきが上がった。

「おいおい、なんだってんだあ？ 子供じゃねえか！ あんな坊主が“アレ”に乗ってたてえのか!？」

首にタオル、不精髭を蓄え、ぼさぼさの髪をした、世辞にも爽やかとは言えない中年の男、整備士のコジロー・マードックが、あからさまに皆の意見を代弁する。

ヘリオポリスの襲撃によって、正規の搭乗員の大半を喪失した“アークエンジェル”

は——ここまで間に合わせの人員で動かされ、ザフトを退けた。

それは間違ひなく、「ストライク」が奮闘し——襲い掛かつて来た「ジン」を数機として撃墜した成果があつてのことだろう。

臨時に編成された「アークエンジェル」のクルー全員が、命を預けたような機体ストライクを操つていたパイロットが、仮にも精悍とは言い難い、柔らかな物腰の年端もいかなない少年だと知つた時、彼らの受けた衝撃は大きかつた。

なによりそれは、軍服でも作業服でもない私服を身に纏つた少年であることからして——それは明らかに軍とは関係のない、民間人の少年なのだから。

キラの無事を確認したツール達が、ぱあつと表情を晴らせ、クルー達を人だかり押しつけて、格納庫へと降り立つたキラへと駆けよつていく。

「よかつた、無事だつたか！」 サイがキラの肩を叩き、

「心配したぜー！」 ツールが勢いよくキラに抱き付いた。

心配したのはこつちも同じだよ、と答えようとしたキラであつたが、その時、傍らから、パイロットスーツに身を包んだ男が口を挟んだ。

「へえ、こいつは驚いた」

突然脇から声をかけられて、キラはそちらへと顔を向ける。長身の男だ。

整つた顔立ちに、やや軽薄に見えるほどの笑みを浮かべながら、ムウ・ラ・フラガが、

キラへと歩み寄っていく。

「な、なんですか？」

「きみ、コーディネーターだろ」

ムウは短く、だが、その場にいる全員にしつかりと届くような声で、あつさりと言いつ捨てた。

それは事実確認をするための言い方ではなかった。そのセリフは既に、ムウの中にある「確信」に準じていたのだから。

ムウから放たれた言葉を受け、場の空気が一瞬にして凍り付く。そして条件反射か、ムウの背後にいた地球軍兵士がキラに銃を突きつけ始めた。

「……………」

「これ」が———今の世界の有様か？

ナチュラルにとって、コーディネーターは敵。

———コーディネーターを造ったのは、ナチュラルだというのに。

その時、ツールがキラの前へ進み出て、キラを庇うようにしてムウに言いかえした。「だからどうしたんだよ！ キラは敵じゃない、あんた達だって、キラがザフトと戦って、俺達を守ってくれたの見てただろ!？」

「…………銃を下ろしなさい」

ツールが主張すると、遠くから現れたマリューが、銃を構えた兵士たちを制した。

クルー達によるどよめきは、なお続いていたが——このどよめきを起こした張本人は、まるで悪びれた様子もなく答えた。

「いや、すまんね。騒ぎを起こす気はなかったんだ。ただオレは、これまでに『ストライク』の正規パイロットになるはずだった新米連中のシユミレーションを見て来てるからなあ。——やつら、機体をノロクサ動かすのにも四苦八苦してたんだぜ？」

その『ストライク』が、なんたることか。

先に見たヘリオポリスの中では、コーディネーターの操る『ジン』を何機も撃破していたではないか。

——そんなにも簡単に、ほいほいと動かせる代物じゃないはずだ。

それを推理すると、ムウにはキラの正体が、確認する必要性もなく判断できたのだろう。

「勿論それは——向こうの一機も、同じだが」

ムウはキラから視線を移し——『ストライク』と並んで動きを止めた、聳え立つ真鍮色の『G』を見仰いだ。

「——『アレ』のパイロットは？」

アレに乗っているのも、おそらく、というか、ほとんどの確率でコーディネーターだ

ろうが……。

ところで、ナチュラルの中にも、飛び抜けてパイロットセンスのある人間は、たしかに存在する。

たとえば、その言葉を放った——ムウ・ラ・フラガ大尉などは、見事に、その例の中のひとりだろう。

彼はナチュラルにして、高度な空間認識能力spatial awarenessの所有が搭乗前提となるモビルアーマー“ゼロ”を駆り、数機の“ジン”に包囲されても、そのすべてを撃墜し返す、というナチュラル離れた操縦技量を持っている。

空間認識能力とは、物体の位置・方向・姿勢・大きさ・形状・間隔など——物体が三次元空間に占めている状態や関係を、すばやく正確に把握、認識する能力のことである。

上下左右のない、また、目測での距離感覚が掴みにくい宇宙空間での戦闘において、この能力の高さは、非常に有利に働くことがあるのだ。

ムウはどこか興味ありげに“ディフェンド”を見上げ——そのハッチが開いた途端、格納庫にいる一同が、ぐつと息をのんだ。

その一瞬は——どのようなパイロットが“アレ”を操っていたのだろうか？ という好奇や期待、不安——様々な感情が入り乱れた瞬間でもあった。

しかし、

「……………」

「デイフェンド」のコックピットから姿を見せたのは——キラよりも幼いように見える——首をかしげた、物柔らかそうな少女であった。

「はあああッ?!」

マードックの悲鳴のような割声が響いた。

キラの時よりもオーバーな反応を見せたマードックだが、そのリアクションは、またも皆の心境の的確な代弁者となっていた。

ハッチから出て来たステラは——見下ろす限り、ぼかんと口を開けてこちらを見てい——言う悪いが——とてつもなく間抜けな表情に凝視され、訳が分かっていない様子で首をかしげている。

滅多なことでは動じない、という自信のあったフラガであったが、この時ばかりは、いくぶんそのハッキリとした声が震え出していた。

「おいおい、マジかよ……。今度のはなんていうか、言葉も出てこねえな……」

あの黄色い「ガンダム」を操っていたのが少年なら——百歩譲って、まだ理解できよう。

おおよそそれはコーデイネーターの少年で、計器類や、情報処理の扱いに長けた、勤

勉な学生であったのだらうと考察がつく。

——しかし、今度はなんだ？

可憐な姿はどこかの芸能事務所にでも所属していそうな、儂げで、それでいてあどけないワンピース姿の女の子が——呆然と出て来た？！

(え？ クルーゼの野郎、あんな女の子に追っ払われたってことかよ……)

必然的に指し示される、ひとつの真実。

フラガの乗る“ゼロ”を撒いたクルーゼの“シグ”が、あの女の子が乗っていたであろう“デイフェンド”に、二度も体当たりされ、撤退した光景をフラガは見ていた。

——マジか。

色々と困惑したが、まずは宿敵であるはずのクルーゼをみじめに思うと同時に、そんなクルーゼに、一矢報いることさえ出来なかった自分の力量を情けなく思い、表情を引きつらせるフラガであった。

キラも含めた学生たちが、一齐にステラの元へと駆けよっていく。

「無事で良かった！」

「ステラすごいじゃない！ほんと何者?！」

サイ達の安堵の声と、ミリアリアの嬌声が飛んだ。

この後の“アークエンジェル”は——ザフトからの奪取を免れた“ストライク

“と『デイフエンド』を大西洋連邦司令部へと無事に持ち帰らなければならない。そのために——まずは補給が必要だ。

ユーラシアの軍事衛星『アルテミス』——

北大西洋連邦と同じ軍事同盟下にあるそこであれば、現在『アークエンジェル』のいる位置から近い宙域にあり、寄港できる可能性が高い。

艦の補給は勿論のこと、突然の事態で、ヘリオポリスまで崩壊させてしまった——学生たちのように、本意ではなく、『アークエンジェル』に乗り込んでしまい、いまだ混乱しているクルーも多いだろう。

彼らにも——休養できる場所が必要だ。

マリューはそう考え——軍事衛星『アルテミス』への軌道に付いた。

「——アスラン・ザラです。通告を受け、出頭いたしました！」

クルーゼのいる隊長室に入り、鯨張つて敬礼するアスランに、クルーゼはゆつたりと応対した。

「君と話すのが遅れてしまったな、呼ばれた理由はわかっているのだろうか？」

命令違反。

アスランが即座に持ち帰るべき「イージス」を駆り、データの抽出も終わっていないその機体を、何の指示もなく実戦へと投入したことだ。

「懲罰を課すつもりはないが、話は聞いておきたい。あまりに君らしからぬ行動だからね」

アスランはその言葉を受け、しばらく強ばった表情を浮かべていたが、彼は軍人だ。いち兵隊として、戦場で起きた委細を指揮官に報告する義務もある。

月の幼年学校で古くから友人であったキラ・ヤマト——コーディネーターであるその者が「ストライク」に乗り、地球軍を、ナチュラルを守ろうとしていた、ということ。

報告を受けたクルーゼは、

「——なるほど、戦争とは皮肉なものだな」

告げられた事実を評するような言葉で答えた。

しかし、それを言い終えたアスランは——まだどこか釈然としない表情を浮かべていた。頭の中でひとり考え込んでいるような——そんなことを延々としていても答えは出ないだろうに——重苦しい表情だ。

「他にも何かあるのかね？」

「あつ、いえ……………」

「ふむ」

アスランは混乱している。クルーゼの目から見てそれは明白だった。

クルーゼ隊に加入してからのアスランは、クルーゼとも妙に長い付き合いになる。長い間傍にあれば、行動パターンなどはある程度理解できてくる。

——アスラン・ザラは軍人としての能力は非常に優秀だが、クルーゼ隊の中では、それこそ一番軍人に向いていない性格をしている。

咄嗟のことに動揺すると、一見冷酷そうにも見受けられるその端正な表ポーカーフェイス情は、途端に崩れ去る。ひとり思い詰めている時も同様だ。

悩んでも解決しないことをひとり孤独に思い詰めがちで、訓練の時はそんな素振りも周囲に微塵も見せずとも、オフを与えると途端に体調を崩すような少年だ——ここまでアスランを理解しているクルーゼにとって、目の前にあるアスランの様子は、まだ何か言い足りないという、子供のように素直な部分の現れだろうと判然と推測できた。

「『ストライク』——それに『デイフェンド』と云つたか。我々が奪い損ねた、もう一機の機体は」

機体の名に、大きな反応を示すアスラン。

「私も『シグ』で出撃したのだが——きみも報告くらいは聞いているだろう？——

あの『デイフェンド』に思わぬ反撃をもらい、被弾した次第だよ」

我ながら愚かだな、と嘲笑するようにクルーゼは述べ、アスランはいえ、とそんなクルーゼを庇うように言葉を漏らした。

「最初はそれを動かすナチュラルが、闇雲に私に突進を仕掛けて来たのだと錯覚してしまった。あの機体には——突進以外の攻撃手段が無かったのだと判断するのが遅れてね——聞けばあの機体の装甲は、ひと突きで“ジン”の機体をバラバラに砕いたという」

堅牢で重厚な「盾」——これは装甲としても使えるが、その重量ゆえ、攻撃に用いられ、衝撃を加えれば軽装な“ジン”のボディなど粉々に砕かれてしまう。

その分、敵機への零距离接近が攻撃の前提条件となるが、あの機体はそもそも、どう見ても本来攻撃用の機体ではないだろう。

むろん、ヘリオポリスでは、調整中でしかなかった機体だ。

次回から実戦に投入してくるとなれば、臨時でもビームライフル程度の武装は持たせてくるだろうが。

「とてもナチュラルが操縦していた、とは思えないのだがね」

「……………隊長！」

その時、アスランが声を上げた。

「勝手を承知でお願いがあります。この私を、次の戦闘——“イージス”で出撃させて

頂けませんか」

命令違反をし、クルーゼの配慮で懲罰をまぬがれたこと自体が僥倖なのだ。

その上でアスランは、改めてクルーゼに伝えた。

「確かめたいことがあります」

キラのことは、なんとかして説得し、ザフトへ来るように伝える。

デیفエンドが出てくれば——その時は………。

「——なんだこりゃ」

整備士のマードックに同伴して、ムウは、キラとステラの乗っていた二機の“G”の整備、点検、そして、データの抽出作業に立ち会っていた。

コジロー・マードックは——その風貌こそ、がさつで粗暴そうに見えるが、メカニックとしての知識と技術は、職人の中でも相当なものだ。

そのマードックが、今にも両手を上げそうな顔をして、「ストライク」のOSデータを見ていた。

どれどれ、とムウがマードックの代わりに「ストライク」の中に潜り込むと、「なんだこれ」

と、似たような言葉を放った。

「ストライク」のOSデータが、普通の人間には理解できないような、複雑で極めて高度なデータへと書き換えられていたのだ。

「こんなもん、あの坊主以外の、誰が扱えるってんだ」

地球軍のエリートである高官を親に持つナタル・バジルール中尉は、育てられて来た厳しい環境からか、凜としたその佇まいとハキハキとした態度に相応しい、完全なる軍人素質に育て上げられた女性士官であった。

ナタルは「ストライク」「デیفエンド」という軍の最高機密が、民間人の少年と少女に操縦されていた事実には納得が行かず、地球軍の正規パイロットであるムウに機体に乗るように指示を出した。

しかし、

「『ストライク』ほど難解ではないのですが……『デیفエンド』のOSもまた、独自に書き換えられていますね」

あの少女が機体を動かす際に独自に調整したのでしよう、と整備員のひとりが言った。

「いずれにしろ、我々ナチュラルに解説できるような仕様じゃあないつすよ」

「ツたく！ あのぼんやりした嬢ちゃんの頭のどこに、こんな高度で複雑なOSを完成させるようなスペースがあんだよ」

理不尽な怒りを覚えているとムウは自覚こそするが、これではナタルに理不尽に怒られるのはムウの方だ。

コーディネーターという人種が、ますますよく理解できなくなるムウであった。

艦橋で、ステラは、“アークエンジェル”の外に広がる宇宙の様子を、ひとり呆然と眺めていた。

——宇宙なんて、久しぶり……………。

星々の輝きがまるで宝石の海原のように煌めいて、燦々と虚空を照らしている。魂ごと、吸い込まれて行きそうな深い世界だ。物思いに耽ながら、ステラはぼんやりと、考えごととしていた。

心の隅に、どこか引つかかる違和感がある。それは、この戦艦に搭乗してから抱き始め、いまだに拭えない、得体のしれない感情。

ステラが今乗っている——この「戦艦」の名称。

“アークエンジェル”——どこかで、聞いたことのあるような名前だ。

艦船の内部構造にも、どこか見覚えがある。これが地球軍の戦艦だというなら、それとも不思議なことではないのだろうか……以前、似たような戦艦に乗っていたことがあるのだろうか？

——“ガーディ・ルー”………？

いや、あれはミラージユ・コロイドを搭載した特殊戦闘艦であり、戦略型のこの船と、細部こそ違っている。しかしどこかそれに似た強い既視感を覚え、不思議と船の構造が、頭の中に残っているステラであった。

「——ステラ？ ちょっといい？」

窓から宇宙を眺めていると、その背後からキラが現れ、ステラへと話し掛けた。ステラは体重を壁に預けたまま、くるりと身体をキラの方へと向けた。

「ドタバタしてて、ちゃんと話せなかったけど……その、色々と話したり、聞きたいことがあるんだ」

キラはそう言って、ステラを与えられた部屋へと誘った。

“アークエンジェル”の中には、重力を有する居住区画があり、収容した民間人の多くが、この居住区の部屋にその身を預けられる。

むろん、多人数の収容も想定し、ひと部屋は複数人での相部屋構造となつてゐるが——特殊部隊要員として地球軍に配属されていたステラは、このような区画が備えられた戦艦があることをこの時初めて知り、きよろきよろと辺りをよく見回し、好奇心に溢れた眸を浮かべていた。

キラ達ヘリオポリスの工業カレッジの学生達も、軍の最重要機密を知つたとはいえ扱いは民間人であり——居住区部屋の一角を与えられていた。

キラに誘われ、ステラはキラに与えられた部屋へと入つていく。

その部屋には誰の姿もなく、ふたりきりの空間だった。

「なに?」

「ああ、うん。とりあえず、座つてよ」

周りには誰もいない——よほど、ふたりで話したいことなのだろうか?

ステラは言われたとおりに、キラのベッドに腰掛ける。キラはデスク用のイスに腰掛け、その口を開いた。

「さつき、整備士の人から聞いたんだ。ステラ、あの黄色いモバイルスーツに乗つた時、OSを書き換えたんだって?」

「うん」

「……………どうして」

悪びれた様子もなく答えたステラに、キラはため息をついた。

「だって、あのままじゃあれ、うまく動かなかった。これまでの調整がヘタだった」

四苦八苦して調整したのであろう、ナチュラルの正規パイロットの努力を「ヘタ」の一言で片付けるステラ。

ステラは以前まで——乗り慣らしていたMSの性能——低火力だが高機動の機体を与えられており、そちらに慣れている節があつたため、機動力を最大限に上げるように調整したのだという。

「ステラさ——本当にこれまで、どこで何をしてたんだ？」

「？」

「だって、とても信じられないんだ……僕がアスランの家に遊びに行けば、いつも一緒に遊ぼうって、無邪気に飛び込んで来た君が——まさか、そんな難しいことを……」

キラとて人のことを言えた立場ではないが、あの時、ヘリオポリスは既に戦場と化し、混沌としていた。あんな状況下でひとりの女の子が、見たこともないようなMSに乗る決心をして、僅かな時間の間にOSを書き換えてしまうなんて——信じられないのだから。

むろん、わずか数秒でOSをまるごと書き換えたキラほどの処理能力はステラにはなく、ステラは「デイフェンド」を起動するのに多少の時間を要したが、いずれにしろ、混乱した状況下で冷静に対処できたステラの神経に、疑う余地があることに変わりはない。

キラは、己の言いたいことを上手く表現できていないが、ステラは「シグー」を撃退して、最後には「ジン」を撃墜している。

そう——既に彼女は、ザフトの人間をひとり殺してしまっているのだ。

キラには——それが認められないのだろう。

「僕の知ってるあのステラが——モビルスーツなんて、動かせるはずがない……」

——少なくとも、僕の知っているステラとは、少し違う気がするんだ。

キラは、その抱いた違和感を解決できずに話をしに来た、というのだろう。

血のバレンタインが起きたのが、一年前の話だ。

ステラはその時に亡くなったとされていたが、現実にはこうして生きている。

アスランもその事実を知っていなかった。だからあんなにも動揺していた。

そして、キラがステラと最後にあつたのは、三年前。

この三年の間に——ステラにいつたい、何があつたというのだろう。

「……………」

尋ねられたステラは、沈黙を保った。

言いたくないわけではなく、ステラの場合、単純に説得の仕方がわからなかったのだ。なかなか答えないステラに、その時キラは諦めたように、また、思い出したように言った。

「あ、そうだ。ステラに言っておきたいことがあるんだけど」

俯きから顔をあげるステラ。

「ザラ」 って名前は——この船の中の人達には、明かさない方がいいと思うんだ」

「どうして？」

「ほら、君のお父さん、プラントの偉い人だからさ。それを嫌うっていうか、僕達みたいなコーデイネーターを嫌ってる人は、この艦にも多い、みたいだから」

キラとステラは今、この艦に乗っている唯二のコーデイネーターだ。

キラがふたりたけの空間にステラを呼んだのも、コーデイネーターであるという同じ境遇に、言い知れぬ共感を覚えてのことだろう。

——「ザラ」なんて名前が明らかになったら、ステラがこの先何に利用されるのか……

わかったもんじゃない。

これは、彼女のことを心配したキラなりの配慮であった。

「ルーシェ」

その時、ステラが呟いた。
え？ とキラが訊ね返す。

「ステラ・ルーシエ」

思い返せば、ステラは「デیفエンド」に乗り込んだ時、自分のことをそちらの名前で呼んでいた。

軍艦からMSで出撃する時に、認識番号等をブリッジに伝達するために必要な過程——それが自分の名前と、発進する機体名の唱和だ。

長く染み付いた慣習——「ルーシエ」の名前が、「ザラ」よりも先に立って口をついで出していたのだろう。

「ステラ、そういう名前」

「は、早いね、偽名を考えるの……そして何の抵抗もないんだ……」

啞然とするキラ。

しかし、どことなく傍げで可愛らしいその名前は——不思議と目の前にいる「ステラ」に——ぴったりの名前であるように感じれた。

その時、「アークエンジェル」内にけたたましい警報が響いた。

ザフトの追撃艦の一隻が——「アルテミス」への航路をとった「アークエンジェル」の前に先回りし、その後方にはまた別のザフト艦が追撃して来ている。

つまり、完全に挟まれた——というのだ。

「また、戦うのか……………」

ザフトはどうして——こうまでして、この船を狙うんだ。

「アスラン……………」

キラにはそれが、分からなかった。

『迷えるのち、決意』

状況は芳しくなかった。

“アークエンジェル”のブリッジでは、戦慄にも似た絶望的な沈黙が流れていた。

ローラシア級のザフト艦が“アークエンジェル”の後方より迫っている。戦艦よりも当然として足の早い“ジン”が出て来ていないということは、こちらの存在はまだ特定されてはいないだろうが、このままでは見つかるのも時間の問題だった。

そして、“アークエンジェル”と並走するように近隣の宙域を推進しているナスカ級の熱源も特定されている。こちらの動きを完全に観察し、攻撃のタイミングを虎視眈々と狙っているかのように見受けられる。

戦闘は避けられない――。

誰もが判断し導き出した、ひとつの答えだった。

「僕がまた、あのモビルスーツに乗らなくちゃ、僕達は全員殺される。——そう言いたいんですか」

ムウによつて事務的に伝えられた言葉に、キラが喧嘩腰になつて構えている。

「そうだ。今、ザフトの襲撃からこの艦を守るのは——俺とおまえと、そして、あのお嬢ちゃんだけなんだぜ」

キラ・ヤマトはブリッジへと呼び出され、そこにいたクルー達の注目を浴びていた。

ムウ達は、民間人であつたはずのキラ達を——自分達が生き残る——都合のために、再びモビルスーツに乗れと命令したので。

「君らみたいなコーデイネイターでもなきや、あんなモビルスーツは動かせない」

この時、ブリッジに呼び出されていたのはキラだけであつた。

ステラは呼び出されていなかった。

どういふ相談があつたのかは知らないが、おおよそステラは、一般的な会話の応酬にさえ妙に時間と手間がかかる節があり、即座に話を通じるのは、キラだけであると判断されたのだろう。

——たしかに、僕が“ストライク”に乗らなきや、この艦は守れないのかもしれない。

だが、キラから見たこの時の“アークエンジェル”など、はつきり言つて何の未練も思い入れも、分ける情も持ち合わせていない、地球軍の戦艦でしかないのだ。

“ヘリオポリス”で暮らしていた時は、どこか遠い世界で起きているモノとして信じていた戦争の——産物。

人を殺すために戦う、地球軍の戦艦。

でも、今はそれを守らなければ、多くの友達が、そして自分と同じようにヘリオポリスで無用の戦争に巻き込まれた民間人の多くが——ザフトによって殺されてしまう？

(また、アスランと戦うかもしれないのに……………)

そんなの不公平で、理不尽じゃないか。

どうして「コーデイネイターである」という事実だけで——戦争の、戦闘の一端を担わなければならない？ 人を殺すかもしれないという、重荷を背負わねばならない？

——どうして僕だけが、この手を汚さなくちゃいけない？

その時——ブリッジのドアが開き、ゾロゾロと地球軍の制服を着た者達が入ってきた。キラはそれに一度目を遣ったが、思い詰めた状態ではそんなことに気に留めている余裕はなく、すぐに視線をムウへと戻す。

しかし、すぐに二度見るように、キラは、今入って来た軍服の者達を凝視した。

「トール、サイ、カズイ……………？ ミリアリアまで……………!？」

キラが名を上げた彼らは、紺色の、地球軍の軍服を着用していた。ミリアリアだけは女性用の、赤色の制服だったが。

「ブリッジに入るなら、これを着ろって言われんだ」とカズイ。

「俺達もできることをやるよ。この船、沈めるわけにもいかないしな」とサイ。

「でも、制服はザフトのがカッコイイよな」とトール。

「生意気言うな！」とチャンドラ伍長が叱咤が飛んだ。

「機械の扱いなら、私達、普通の人より慣れてるからね」

ミリアリアが言う。

トール達は率先して、この「アークエンジェル」の仕事を手伝おうというのだ。

自分だけが被害者のように思っていたキラであったが、この時、親友達の真つ直ぐな心意気と言葉を受けて、それが暖かく、痛いほど胸に染み込んだ。

——「ストライク」には……僕が乗るしかないんだ。

乗って、出撃する。

「ストライク」に乗って出て行ったところで「アークエンジェル」を守れる確証が生まれるわけではないが、キラが出撃しなければ、生存の可能性は限りなく「ゼロ」へと近づくのだ。

ならば——と、仲間たちの後押しもあり、キラはムウの言葉を受け入れた。

しかし、いまだ厳然とした顔を浮かべて、ムウへと訊ねた。

「ステラは？ あの子のことも——また「アレ」に乗せるつもりですか」

ムウは不意に、返答に詰まった。

——こんな時、性別の話を持ち出せば、この少年は怒るだろうか。

ステラ・ルーシェと名乗る女の子の存在は——正直な話、性格がぼんやりと儂げで、かなり危なかくしく見て取れる点も含めて、ムウは再び「デイフエンド」に乗せる気になれずにいた。

——それは、彼女が「女の子」だからだろうか？

たしかに、軍人としてよりも、人間として男として、ムウの中ではその想いが先に立つとうとしている。キラに戦闘を無理強いをしている段階で、人道的、という表現には語弊があるが——まだ十四歳だというステラに、軍の最重要機密を任せて戦場に送り出すということには、人道的な観点からも、軍略的な観点からしても、究極の判断が必要となるだろう。

「……かなり苦しい状況にあることは確かだ。戦力は一機でも多い方がいいっていうのも、たしかだろうな」

歯切れが悪く述べるムウに、しかし、キラは言った。

「僕が、あの子の分まで働きます。だから……もうこれ以上、あの子を、軍人の都合に巻き込まないで下さい！」

主張するキラの瞳には、強い決意の光が宿っていた。

——ステラは、普通の女の子だ。

親友の、大切な妹。コーデイナーターだからという理由で、運命をもてあそばされてはいけない。そうでなくとも彼女は、戦争が産んだ核兵器とやらのせいで、その命を危うく奪われかけ、母親を取り上げられてしまっているのだから。

「これ以上、あの子を苦しめるような真似はしないでください！」

ナタル・バジール中尉は、キラのこの主張に反論を唱えた。

それは軍人として、ある側面からすれば、当然の判断だった。

「パイロットと機体、その両方が万全な状態で揃っていて——その上で、動かせる機体を出撃させるな、と言いたいのか」

「ナタル……」

「事実です——艦長。……今この艦には、戦力を出し惜しみしている余裕などありません。それは、どのクルーの目から見ても明らかでしょう」

敵を退けることも可能なのか分からぬこの状況下で、温情に耽込み、悠長に事を構えている暇など、どこにもない。

ナタルは、マリューに早急な決断を迫った。

数刻の沈黙の後、マリューは硬く結んだ唇からようやく搾り出したような声を返す。

「——『デイフエンド』を操縦できるパイロットには、精神的に未熟な面が数多く

観察されています。まして彼女は民間人であり、コーディネイターでもありません。闇雲に出撃させて、機体が敵機に鹵獲されたり、パイロットに造反でも起こされてしまつては、結果的、我が軍への不利益を招くことになります」

それだけは避けなければなりません。

“アークエンジェル”が撃墜されることよりも大局を見据えれば、それは賢明な判断にも聞こえる。地球軍全体の利益を遠謀した時のことだ。

だが、マリユートのそれは所詮、ただのこじつけでしかなかった。

「よつて——今回は、キラ君の意見を尊重することになります」

建前を並べ、マリユートがステラの出撃待機を正当化させた。

「艦長——」

「これは艦長命令です！」

「ッ……………」

ナタルの言い分を遮るマリユートも、今は、戦力を出し惜しんでいる余裕などないことは、重々承知していた。

それでも彼女は——これこそが、今の彼女にできる最大限の「罪滅ぼし」だと思えたのだらう。

(アスランとは……………僕が話を付ける)

アスランとて、大切な妹が乗ったこの船をよもや撃沈する気などないはずだ。

——そんなこと、できないはずだ。

キラはそう考えていたが——たとえその予想が当たったとしても、それは何の意味も成さなかった。

“ストライク”が出撃した先——“イーゼス”を含めて“デュエル” “バスター” “ブリッツ”の四機が、一気に押しかけてきたのだから。

コンデーションレット
第一戦闘配備が発令されると、キラは艦橋へ呼び出されてしまった。

しばらくの間、ステラはキラの部屋にひとり残されていたのだが、ステラにも、今の“アークエンジェル”がどのような状況にあるのか——仮に伝えられずとも、ある程度の把握は出来てしまっていた。

——ザフトがまた、この艦を攻撃しに来た。

頭の中に、疑問が続く。

——どうして？

どうしてザフトは——いつも、意味の分からないことばかりするの？

どうして、みんなをいじめるの？

大切なものを取り上げるみたいに、奪うみたいにステラ達のしたいことの邪魔ばかりして、攻撃して来るの？

——どうしてアスランは、そんな軍の下で、戦ってるの？

ザフトは——いつもそうだ。

地球軍を虐めて、奪って、壊して、殺して……………。

そんなことして、喜んでるの？

それが、ザフトの戦いだから？

「まも、らなぎや……………」

「アスランに会いたい」——

不思議な光に包まれ、まるで時間を超えたようにヘリオポリスで目を覚ました時のステラは——たしかに、そう願った。

ベルリンで戦っていた時、あの時はもう、既に死んでしまっていたアスランを守り、幼い頃に約束を交わしたアスランに、守られたいと思った。

そうなることを望み、願っていた。

でも——そんな願いを今叶えようとすれば、この艦は、守れない。

今のアスランは、この艦を虐めに来る立場にある。虐める軍に着いている。キラも、

トールも、サイも、ミリアリアも、みんなを殺そうとしている。

殺されて、死んだ人は、もう帰って来ないのに。

「死んじやうはだめ……………まもる……………」

——「ライフエンド」に乗らなくちや——！

この時、ステラは急くようにして、格納庫へと続く廊下を渡っていた。無重力の影響を受け、今は、歩かなくても身体が勝手に進んでいる。

「？」

すると、ステラの進路の向こう側で——赤色の地球軍の制服を着た地球軍兵が、廊下の壁に体重を預け、もたれかかっているのに気が付いた。

いや、違う。

地球軍の女性用の制服を着た、あの女性は——

「ミリアリア」

「あは、ステラミーっけ」

ミリアリアがステラを見つけると、壁から離れ、浮遊しながらこちらへと向かって来る。まるで鬼が子を捕まえるかのような言い草だ。

ステラはその場に止まり、こちらへと向かって来るミリアリアを待った。

だが、次の瞬間——

静止したステラへと——ミリアリアが、激しめの体当たりを仕掛けた。

ふたりの身体が衝突する。

ぶつかつた反動で、動いていたミリアリアがその場に止まり、その勢いの分だけ、ステラが飛んでいく。

「いたい」

「あわわ、ごめんごめん」

その勢いのあまり、ステラは、渡つて来た方向へと押し戻されてゆく。

どうやらミリアリアは、決してステラに体当たりを仕掛けようとしたのではなく、単純に、慣れない無重力下で、勝手に推進していく身体を止める方法が分からなかつたようだ。

宇宙空間を初めて経験する者であれば、それはある意味、誰もが必ず通過する道。ステラにも分かるが、初心者にはよくあることだ。まだ両足を下を向かせていられてるだけ、彼女はマシだろう。

あちやー、と声をあげたミリアリアが、咄嗟にステラへ手を伸ばす。

その柔らかな身体を引き寄せようとしたが——ステラは既に、小慣れたように壁を使つて浮遊する身体をその場に留め、すぐに何事もなかつたかのように、ミリアリアの下へと、小動物のように戻つて来る。

いつものことながら呆気にとられるミリアリアの服装を、ステラが訝しんだ。

「それ——ミリアリア、地球軍で働くの？」

「働く、かー。うーん、まあ、そんなところだね」

ミリアリアは腰に手を当て、窓から見える宇宙へと視線を移した。

「私達も、この艦のためにできることをしよう、って、みんなで決めたの。——キラにばつかり、辛い思いさせられない、ってツールが最初に言い出して。……あつ、もちろん私も、ちゃんんと賛成してから決意したことよ？　キラにだけ重荷を背負わせるなんて、キラの友達として、不公平なもの」

「キラ——また、戦うの？」

この時、それを訊ねたステラには、ステラなりに、思っていることがあった。

キラ・ヤマトは、兄であるアスランの友達で、幼い頃はステラもよくキラと遊んだ。三人で遊ぶことも多く、だから、キラ・ヤマトという人間は、ステラにとっても友達だ。でも、それ以上のことはない。

キラがコーディネーターであることは、ステラも知っている。いや、人種など昔は気にしたことがないので知らなかったのだが、つい先刻、その事実を改めて知ったのだ。でも、だからどうした。

——コーディネーターだから？

——それと「^{ストライク}戦争」を無理強いされることと、何の関係がある？

キラは昔から大人しくて、無邪気で、それでいて危なっかしいところが妹とそっくりだな、なんてアスランによくからかわれていた。

——モビルスーツに乗るのは、ステラだけでいい。

——キラが戦う必要なんて、ない。

だってキラは——普通の少年なのだから。

「……………だめ」

その言葉が、ステラから口をついで出た。

え？ と、ミリアリアが訊ね返す。

「させない……キラは、戦争なんてしちやだめ」

戦争をするということは、何かを守る以前に、誰かを殺すかもしれない、ということだ。

キラは、そうやって人を殺しちやだめ。

キラに誰かを、殺させちやだめ。

それはステラなりの、キラを想う強い言葉——。

言葉を聞いたミリアリアが、ステラ、となだめるように名前を呼ぶ。

しかし、ステラは聞かなかつた。

「ステラが戦う！　『デیفエンド』で出る！　——もう、キラが戦わなくていいように！」

そう——『ステラ』は違う——

もうここに来るまでに、たくさん殺した。いつぱい、奪って来た！

——だから戦える。

——『デیفエンド』にも乗れる。

奪うことも殺すことも、今のキラより何倍も何倍も、上手に出来るのだから——！！

「ステラ！」

その瞬間、ミリアリアの声が飛び、それによつて柄にもなく興奮していた、ステラが我に返った。

気がつけばミリアリアは、ステラの肩へ、両手を置いていた。そしてゆつくりと、諭すような口調で、言葉を放つてゆく。

「……………ステラは、ほんとに優しい子だなあ。それだけ真剣に、キラのこと、考えてくれているんだね」

顔を伏せていたミリアリアが、そこで、顔をあげた。強い瞳だ。

でもね？

そう言いながら——ステラの眸を、真っ直ぐに見つめている。

「キラも、ステラと同じことを言ってた。——ステラがもう戦わなくて良いように
 “つて——だからキラが出て、ザフトを追い払って、私達を守ってくれるつて”

キラは今、パイロットスーツを着て“ストライク”に乗っている。

これから、出撃だからだ。

ミリアリアは言い聞かせるように、ステラへと伝えた。

「ステラは女の子だもん。それも、あたし達よりふたつも年下。——だからもう、
 モビルスーツには乗らなくていいの。誰もステラを責めたりしない。みんなももう、わ
 かってくれるから、ね？」

ミリアリアは——ステラが再び“デイフェンド”に乗ることをやめさせたいのだ。

いや——あるいはステラが“デイフェンド”に乗ろうとしていると予期して、だ
 から個人的にこうして、ステラに会いに来た？ 心の優しいステラが、その優しさゆえ
 に、危険なことをしないように、と。

(似てる……のかもしれない。——この子と、キラは。………なんとなく、だけど)
 そう思つて、そう危惧して艦橋ブリッジを離れたら、やっぱりステラは格納庫へと向かつてい
 た。

当然、ミリアリアはまだ艦内の構造なんて覚えてはいるはずもないが——別に、ステラ
 を探す必要などなかった。

格納庫前で待っていれば——ステラが自分からやって来ると思ったからだ……。

「ちがう」

——もう、君みたいな女の子が戦わなくていいんだよ。

その言葉を、ミリアリアの言葉を、それでもステラは、聞こうとしなかった。聞き入れることが、どうしても出来なかった。

「ちがうの、ちがう」

「ステラ」

「ちがうの！ ステラ、ちゃんと戦える。ミリアリアのことも、みんなのことも、ちゃんと守れる」

「ステラ」

「ザフトの機体、敵、何度も倒して来た！ ステラは、ちゃんと戦えるのに！」

「うん。＼ヘリオポリス＼で……ステラ、頑張ってくれたよね」

「ちがう!!」

違う。そんなことを伝えているんじゃない——。

そんな、数時間前の話じゃない——。

伝えたい。

でも、伝わらない——。

「どうやれば伝えられるのか、分からない……。」

ミリアリアが、混乱するステラの肩を抱き、その胸にそつと、引き寄せた。

「もういい、もういいんだよ。——ステラはもう、十分、頑張ったんだから」

ステラの眸に、大きめの雫が浮かんだ。

ミリアリアは、胸に抱いた少女の体温を感じるように微笑みながら、ゆつくりと言った。

「だからあとは、私達に任せて——」

何も言えなかった——。

何も返せなかった。

気が付くとミリアリアは既に遠くまで離れていて、艦橋へと向かい、自分に与えられた役割の場へと戻って行っていた。

ステラの身体は虚脱したようにその場に崩れ、

訪れたのは、静寂。

そして——

「アスラン・ザラ——『イージス』出る！」

赤き閃光が『ヴェサリウス』から飛び立ってゆく。

さまよえる大天使は——これを迎え撃つかのように大きく羽ばたき、

「キラ・ヤマト——『ストライク』行きます！」

白き戦士が、戦場へと飛び立つ。

——訪れたのは、開戦の合図。

『“デイフエンド”』

「“ヴェサリウス”は先行し“網”を張る。——足つきが現れ次第、これを迎え撃つ。あの艦は、どうあっても逃がすわけにはいかぬからな」

クルーゼのその読みは的中した。

ザフトの追撃を免れた“アークエンジェル”は月本部へと直行はせず、まずは“アルテミス”で補給を受けようとこの航路を取るだろう、と。

“ヴェサリウス”艦長であるアデスが、クルーゼに訊ねた。

「しかし、先の戦闘で、こちらのモビルスーツはほとんど撃破されています。今はもう、ハイネとミゲルが乗る“ジン”が二機しか」

「ああ分かっているさ。たしかに“ジン”では、足つきを追撃するには心許ないだろうな」

「隊長。——お言葉ですが、地球軍の艦一隻なんて、俺達だけでも追い詰めてみせますよ」

ブリーフィングには、クルーゼ隊のメンバーも同伴しており、ミゲル・アイマンが、強

くそう主張した。

クルーゼは彼を見返し、強い意志を宿したその眸を見据えた。——ミゲルと、そしてハイネには、それだけの覚悟と自信があるのだろうか。

しかし、

「覚悟のほどは頼もしいが、それだけで勝てるなら、なぜ我々はヘリオポリスであの艦を逃がしてしまつたのだろうね」

思い知らせるような口調で言われ、ミゲルが悔しくも、返す言葉を無くす。

——そうだ。

どうして精鋭と名高い「クルーゼ」隊が、ナチュラルの艦たつた一隻などを、みすみすと逃してしまつたのだろうか？ 覚悟と自信、そしてナチュラルと雲泥ほどに掛け離れた高いMSの操縦技量——それらだけでは、あの艦を落とすには足りないというのか？

「だから、あの四機を使うことにしよう」

「は？ 地球軍から奪つたモビルスーツを、もう実戦に投入されると？」

アデスが訊ね、そのときイザークやディアツカが目を見合わせ、不敵な笑みを浮かべた。新型で戦場に出れることが、それだけ嬉しいのだろうか。

対照的に、旧式を使うハイネは不服そうだ。

「データの抽出さえ終わってれば、構わんさ。——それに、アスランが既に使えることを証明してくれているしな」

命令違反の皮肉を突きつけているのか、根拠を述べたいだけなのか分からぬまま、顔を向けて言われたアスランはただ、はい……と消沈したような生返事を返した。

フリーフィングが終了すると、イザークとディアツカが、我先にと更衣室へと駆け抜けて入った。まるで、新しいオモチャで遊ぶ機会を与えられた子供のように。

対照的に、アスランとハイネの足取りは重たかった。

ふたりともまったく異なる苦悩や後悔をその胸に抱えていながら、似たような鎮痛な面持ちをしている。そんなふたりは、自然とクルーゼ隊員の中で、艦橋から出ていく順番が最後の方となった。

「——ハイネ」

その時、それまで宙域の見取り図を描いたパネルを観察していたクルーゼが、突如、ハイネのことを呼び止めた。

ハイネはそちらに振り返るが、その時ふと、訝しんだアスランもまた振り返り、その足を止めていた。クルーゼは、自分の放った言葉がアスランまでもを止めたことに小さな驚きを覚え、おや、と漏らした。

「アスランは構わない。パイロットスーツに着替えて、出撃準備をしたまえ」

「あつ、すいません……」

言われ、恐縮したようにアスランが再び足を動かした。

ハイネは、クルーゼは自分に用があるのだと思い、その場で踵を返すと、クルーゼの下へと寄っていく。

戻つて来たハイネに、クルーゼは言った。

「後でみなにも改めて挨拶せねばならんが、どうにも今は忙しくてね」

「はあ」

「ラストイのことは、私としても、非常に残念だよ」

—— いったい、何の話だろう？

アスランはふと、それが気になった。

艦橋から退室した後も、彼は閉じたドアから離れず、その会話に聞き耳を立てた。

ラストイの話を、なぜハイネにだけ持ち掛けるのだろう……？

「ラストイと——それにキミは、地球軍の機体の奪取に失敗してしまった。——だが、こう考えれば、君はまだ幸いな立場にあると思わないかな」

「は？」

「君にはまだ……それと決着をつける機会が——残されているのだからね」

言葉に、ハイネの目が見開かれる。その言葉の真意をくみ取った様子だ。

ラストイは任務に失敗し、死んだ。

だから「ストライク」は地球軍の手に渡った。

だが——ハイネはまだ生きている。

クルーゼは小さく微笑み、ハイネへと問いかけた。

「この意味が——わかるかね」

「……………はっ」

答えるとハイネは鯨張って敬礼をし、クルーゼに背を向けた。

そして背を向けたまま、力強く言い放った。

「最後の機体『ディフェンド』は——この俺が必ず、パイロットもろとも、撃墜して

みせますよ」

責任を果たせ——

暗にそう言われているような気がして、ハイネは、そう答えていた。

「では、期待しているよ」

「はっ、失礼します」

ハイネのその声が聞こえ、アスランは足早にドアから立ち退いた。

駆けるように廊下を走り、胸の奥から湧き上がる不安を、必死で押し殺す。

「……………ディフェンド、か……………」

あれに。

あれに、乗っていたのは――。

それから、数十分後のことになる。

戦場では激しい砲火が飛び交い、閃光が、忽ちに何度も交錯している。

ザフトに強奪された“G”は4機――“デュエル”“バスター”“ブリッツ”そして“イービス”――そのすべてが、よもやこの早急なタイミングで、実戦に投入された。

“アークエンジェル”がこの宙域から離脱するためには、襲い掛かって来る敵機を迎え撃つだけでは、効率が悪い。

艦を防衛しつつ、敵の母艦を、奇襲で叩く必要がある。

「出撃した“ストライク”が敵機を迎撃し、注意を引く。その間にフラガ大尉の“ゼロ”が――ザフトの母艦を叩く」

艦長席で、マリユールが今回の作戦を再確認するようにひとりごとを呟く。

“ゼロ”の武装の殆どは先の戦闘で破壊されているため、あくまで、ナスカ級の機関

部だけでも被弾させることができれば、結果は上々。

それだけで、状況は変わる。

ムウ・ラ・フラガは正規の地球軍の軍人で、エースパイロットしても名高い。マリューはまだ、彼のことをよく知らないが、軍人としては信頼のおける人間だと判断している。むしろマリューが心配が向いているのは——明らかに戦いに慣れていない民間人であるキラが、この迎撃戦の、戦局のそのすべてを握らされていることに対してだろう。

“アークエンジェル”はこの時、月本部に駐屯する地球軍の技術者から、GATシリーズの性能等の情報を、レーザー通信によって入手していた。

GAT-X102 “デュエル”——

Xナンバーの中で最初に開発された機体で、他の機体のベースとなっているため、基本的に忠実なスタンダードな構造となっている。突出した性能は持たないが、それだけ汎用性が高い。

GAT-X103 “バスター”——

数多の大火力武器を装備し、狙撃、後方支援、対艦・対要塞戦に特化した性能を持つ

機体。近接戦兵器は装備していないが、その分、中遠距離からの攻撃を得意としている。

G A T—X 2 0 7 “ブリッツ”——

光学迷彩技術などを応用した特殊兵装を多く装備し、隠密・奇襲用に開発された機体。その特殊な武装性能ゆえ、偵察・近接戦闘を得意としている。

G A T—X 3 0 3 “イージス”——

他のG A Tシリーズとは基本フレームが異なっており、M A形態への変形が可能となつている機体。高い機動力と高い火力を有し、強襲・攪乱においてその真価を発揮する。

そして、

G A T—X 1 0 5 “ストライク”——

X ナンバーの中で、最も汎用性の高く、エール、ソード、ランチャーの三種類に及ぶ武装パックを換装することで、あらゆる局面に対応できるよう機体となつている。

以上の五機はすべて、地球軍に所属する大西洋連邦が、中立国オーブの国営軍需産業社“モルゲンレーテ”の技術協力を経て開発された機体である。

無論、もう一機の“ディフェンド”もまた、開発の大元の出資者は“モルゲンレーテ

“であることに大きな変わりはない。

しかし“デیفエンド”は——他のGATシリーズの中で、最も遅くに開発された機体である。

データベースにして試作機である“デュエル”が完成した後、残りの四機の開発は、ほぼ並行して執り行われている。唯一“デیفエンド”だけは、開発の着工そのものが、かなり遅いタイミングで行われたそうさ。

“ヘリオポリス”に派遣されていた“モルゲンレーテ”の技術者はかつて、こんなことを云っていた。

『元々GATシリーズは、五機だけが開発される予定だったんだ。——“デیفエンド”なんて機体の開発案は、当初の計画にはなかったんだよ』

“デیفエンド”だけは、開発に使われた技術・性能が、他のXナンバーと少しだけ異なっているそうさ。

“ストライク”は今、そんな四機のGATシリーズからの集中攻撃を浴びているわけ

ではなかった。

「ブリッツ」と「バスター」はそのまま「アークエンジェル」を狙って攻撃を仕掛けていている。「ストライク」が戦闘しているのは、苛烈ともいうべ獯猛さで何度も距離を詰めて来る「デュエル」と、まるで対照的に「ストライク」を追いながら、迷うように攻めあぐねている「イービス」の二機だけだ。

キラは、訓練も受けずに実戦へと放り込まれた民間人に過ぎない。そんな少年が、いきなりザフトのエースパイロットから標的にされている。

精神的にも追い詰められてはいないだろうか——マリユーがそれを心配するのは、当然のことであつた。

その時、チャンドラの声が上がつた。

「前方ナスカ級より、新たなモビルスーツの発進を確認！ 機種特定——「ジン」です

！ 数は二！」

「くっ……！」

マリユーが、ぐつと息を呑んだ。

今の「アークエンジェル」も「ストライク」も、既に手一杯の状態だ。

あの「ストライク」に、これ以上の奮戦を期待するのは無理だ。だからといって「アークエンジェル」は二機の「G」に狙われており、「ジン」などに注意を向けている

余裕はない。

——ムウの作戦実行時間までは、まだ、時間がかかる……！

ギリツ、と歯を食いしばりながら、マリューはその拳を強く握りしめる。

その時、ナタルが声を上げた。

「艦長！　『デイフェンド』の出撃許可を求めます！　このままでは！」

「くっ……！」

いくら相手が『ジン』だとしても、人手不足もあつて正常に機能しているかも怪しい
『アークエンジェル』を撃墜するには、充分なほど危険な存在だ。

決断に迷うマリュー。

その時——チャンドラの焦りに満ちた声が艦橋に響いた。

「——『右舷ハッチの解放警告』……？　なんで、そんなものが」

「どうしたの？」

ふとしたようにマリューが訊ねると、チャンドラは答えた。

「だつ、誰かが！　艦の右舷ハッチを勝手に開けてます！　——命令も無しに、機体を出

撃させるつもりか!？」

「ええっ!？」

まさか——

マリユールの中に、嫌な予感が押し寄せた。

「おいおいおいおい、どこだよ！ どこに行つたんだよ、あの黄色いヤツはあッ！」

オレンジ色の「ジン」を駆りながら、ハイネは、胸の奥で沸々と湧き上がる苛立ちを膨らませていた。

——クルーゼ隊長に、失望された！

言われずとも、態度でわかるクルーゼの真意。

クルーゼは決して饒舌ではないが、無感情に見えて、怒りや失望、憎悪などマイナスの感情は、にじみ出すように顕す皮肉屋のような人間だ。

部下として、それは、屈辱の限りであった。よもやその原因が、得体の知れない女の子（美少女ではあったが）の下着に動揺したことだとは、死んでも明かしたくないが、だからこそ、自分の尻は自分で拭かねばならない。

「ディフェンド」を地球軍に渡しちまったのは、俺の失態だ！ ——だから、あの機体は俺が撃つ！ なのにな！

「出撃してない……だと？　この野郎オ、母艦もろとも撃墜されてえか！」

「ストライク」が足つきから出て来たということは、あの機体も、足つきに帰投しているはずなのだ。

——所詮地球軍など、腰抜けの集まりか！

よもやこの時のハイネは、デイフェンドのパイロットなる者が、あの時の女の子だとは想像もしていなかった。スロットルへ手をかけたハイネは、激昂するように叫んだ。「いいぜ、だったらお望み通り、叩き落としてやるよー！」

オレンジ色の「ジン」が、どの機体よりも気迫立って「アークエンジェル」へ向かう。

これに対して「アークエンジェル」は、イーゲルシュテルンを弾幕として放つ。

「——「ジン」接近！」

「振り切つて！」

マリューは慌てて操舵士のアーノルド・ノイマン曹長へと指示を飛ばしたが、この時のマリューは別用で、格納庫へ緊急通信を飛ばしていた。

通信先のコジロー・マードックは、柄にもなく青ざめて、汗をかきながら慌てていた。艦橋へ入って来るコジローの声のほかに、格納庫からの物音——いや、轟音までもが響いている。

「へ——だからあ！ 言われた通り、誰も近寄らせてないっすよ！ ありやあ勝手に動き出したんだ！」

「誰も乗ってない機体が、勝手に動くはずがないでしょう！」

通信先のマードックの報告では——突如、格納庫の「ディフェンド」が動き出した、というのだ。

いつもの通りマードックは、格納庫にある戦闘中の「アークエンジェル」の格機器の調整と、それが無事に機能しているのかをチェック作業を行っていた。

その作業中、ふと耳を澄ませば、格納庫に妙なエンジン音が響いていることに気付いたというのだ。

整備士であるマードックはすぐに、その駆動音の正体を訝しみ、その発生源を突き止めた。

——おかしい。

「ディフェンド」の目に——灯が入っている。

「な、なんだ!?!」

マードックが素つ頓狂な声を上げたその時には、既に「デイフエンド」は動き出して、機体を覆うように構えられた可動式のキャットウオークを乱暴に跳ね除け、大きな一歩を踏み出した。

「オイなんだつてえんだ！ 止まれエー！」

さいわい上には誰も乗っていなかったが、乱暴に飛ばされたキャットウオークは、そのまま壁に激突し、崩れ落ちた。

金属が絡み合う轟音が、「デイフエンド」に静止を訴えるマードックの声を遮った。後でその修理に追われるであろう整備士としてマードックは一気にその表情を青ざめさせたが、事態は、それだけでは終わらなかった。

「デイフエンド」から、拡張された声が響いたのだ。

「ハッチを開ける！ 開けないと、この場所ごと吹き飛ばすー」

「デイフエンド」から音声が流れる。「ストライク」のスペアに用意された「ビームライフル」を拾い上げると、その銃口を閉鎖されている「アークエンジェル」のハッチへと突き付けた。それは、マードックにとって、聞き慣れない声であった。

「いったい、どこのどいつが乗っているのだ？」

そう訝しんだが——よく考えると、それは確かに、どこかで聞いたことのあるような声ではあったのだ。

——まさか、あの金髪の嬢ちゃんか？

いや——その辛辣な口調と、強引極まりない行動、そして放たれた言葉は、まるで、前を見た「おっとりとした少女」から出て来るとは、思えないほど凶暴ではないか。

舌足らずで、ぼんやりと幼子のように喋るあの少女が——モビルスーツに乗った途端、凶暴な人格に豹変したとでもいうのか？　しかし「ディフェンド」を動かせる人間といえば、出撃しているキラを除けば、あの少女でしかあり得ない。

——こういうのが、コーディネイターってやつなのか!?

ビームライフルをハッチに突き付けている「ディフェンド」のその姿勢が訴えているものは、明らかに脅しの気配などではなかった。今にもライフルのトリガーを引き、整備士ごと吹っ飛ばして発進口^{ハッチ}を作り出しかねないような——放たれた少女の剣呑な声には、それだけの覚悟と、気迫が含まれていた。

——コーディネイターってのは、ホントによくわかんねえ！

心の中で嘆きながら、マードックはすぐに、言われるまま、ハッチの開閉を操作する緊急ボタンまで走った。

——よもや、造反なんて気はねーんだろう!?

初めから裏切るつもりであれば、この船を中から破壊しているはずだ。あの少女はこの船の為に戦うと決めた上で、発進してくれようとしているのだ。

(オレたちややつぱり、このお嬢ちゃんに頼るしかねえのかよ！)

マードックがハッチが開くと——「デイフェンド」はスラスターを噴射して、カタパルトを無視するように、自力で宇宙へと飛び立って行ってしまった。

「ステラ——!?!」

「アークエンジェル」から飛び立った「デイフェンド」を見て——ミリアリアは不意に、その名をこぼしていた。

間違いない——今出て行った「デイフェンド」には、あの子が乗っている。

だが、命令もなしに——?

あのステラが、こんなにも大胆なことをするなんて!

モバイルスーツおよびモバイルアーマーの戦闘管制を担当しているミリアリアはすぐに

——離れた場所で「デュエル」と交戦する「ストライク」へと呼びかけた。

「キラ!」 「デイフェンド」が出た! —— 援護してあげて!」

無茶な頼みだとは思ったが、ミリアリアはキラに、そう呼びかける。

通信を受け取ったキラは、その事実に一瞬だけ啞然としたが、ビームサーベルを抜き打ちに繰り出して来る「デュエル」に迫られ、すぐに我に返った。

振り下ろされたビームサーベルを回避し、逃れるようにスタスターを噴射する。キラは「デュエル」からの離脱を図り、いつの間にか引き離されていた「アークエンジェル

“へと戻って行く。

「どうして……？ どうしてあの子を乗せたんだ！」

「止めたのに、自分から乗っちゃったの！」

約束と違うじゃないか——。

“ディフェンド”が出撃している時点で、そのパイロットは、ひとりに絞られる。キラはパイロットを改めて確認する必要性も感じず、ただ、怒りだけを露わにした。

キラと管制官のその通信を——“イージス”に乗るアスランは、通信越しに聞いていた。

先程からアスランは、キラと通信を試み、キラに投降を呼びかけていたため、“ストライク”との通信回線が開いたままになっていたのだ。

「ステラ………が………？」

——やはり、ステラなのか？ 妹なのか？

あの機体——“ディフェンド”に乗っているのは？

信じられない、といった気持ちだが、アスランの頭を支配した。

ステラが、あのステラが、生きている？ いや、生きていたとしても、モビルスーツなんて動かせるはずがないのに！

「——ハッ！ やつと出て来たか！」

大天使から出撃した「黄色いガンダム」——これを見つけたハイネのジンが、バズーカランチャーを構え、そのマズルを、標的へと固定した。

口元に不敵な笑みを浮かべ、獲物を見つけた猛禽のように、そいつへと迫っていく。

「アイツを追い込むぜ！——ミゲル、手伝え！」

〈はいよ！〉

悔しくも「ジン」と「ガンダム」の間には、埋められない機体性能の差が明然と存在している。武装のほとんどが実体弾の「ジン」が挑む白兵戦では、フェイスシフト P S 装甲の搭載された向こうに利があることは疑いようがない。

だから連携で突き崩してやる。だが——最終的に「オマエ」を討ち取るのは、この俺だ！

ハイネが意気込み、通信越しでも交わされるオレンジ達の見事な連携が、「デイフェンド」へ向かった。

「——ステラ！」

アスランが叫ぶと同時に「イージス」の機体は、自然と「ストライク」を離れ——
「デイフェンド」の元へと向かった。

「ザフト………!!」 ザフトは、敵！ 倒す——!!」

「ディフェンド」のレバーとスロットルに手をかけながら、唸るように、ステラがこれを復唱した。まるで、自分自身に命令を与えるように。

ストライク用のビームライフルを構え、これを「アークエンジェル」を襲う「ブリッツ」と「バスター」へと撃ち放つ。

照準先の二機は、すばやくこれに反応し、散開した。

「あれは？」

「へえ、最後の二機ってヤツかよー」

これによりニコルとディアツカが、発進した「ディフェンド」の存在に気付いた。

散開した両者は、互いに声での指示を仰ぐこともなく「ディフェンド」を挟み込むように回り込み、暗黙の内に、この機体を挟撃した。「ブリッツ」からランサーダートが撃ち放たれ、「バスター」が6連装ミサイルポットを射出する。

「ディフェンド」の背後には「アークエンジェル」——退くことは許されない。

「あまいー！」

ステラが、コックピット内で叫んだ。

咄嗟に機体を制御し、後退した「ディフェンド」は——「アークエンジェル」を庇う

ようにその前に立ちほだかり、巨大な「盾」を展開した。

「デイフェンド」が同シリーズ二機による集中砲火を受け、鮮烈な爆光と閃光が、宇宙の景色を真っ白に染めた。

すべての攻撃を受け止めた「デイフェンド」は——なおも無傷の様相で、その場所に健在した。

「なるほど、防御に特化しているのでしょうか」

「あれを防ぐとはねえ」

だが、だからどうしたと言わんばかりに、ディアツカは、「バスター」の持つ二丁の大型ライフルを連結させた。

超長砲身となったガンランチャーを構え、大火力を誇る砲口を、「デイフェンド」目掛けて振り翳す！

ロックされた「デイフェンド」はスラスターを全開に推進させ、「バスター」へと真っ直ぐに突っ込んでゆく。

GATシリーズ最強の槍？ これを迎えるのは、GATシリーズ最強の盾か。

ディアツカがトリガーを引く——その瞬間、「バスター」のコックピット内に警報音が響いた。

背後から「イージス」と「デュエル」に攪乱されていたはずの「ストライク」が——

—急速にこちらへと迫って来ているのだ。

ディアツカが舌を打つ。

「ええい、イザークとアスランは何やってんの！」

やむを得ず「バスター」はその場で振り返り、ビームサーベルを構えながら迫る「ストライク」に向けて砲撃を放った。

咄嗟に「ストライク」は転進し、この砲撃を回避する。

だが、その間に「バスター」の背後へ、「ディフェンド」が迫る。

「ディアツカ、さがって！」

ニコルの指示が飛び、「バスター」の背後へと進み出た「ブリッツ」が、レーザーライフルを連射した。

「ディフェンド」の盾は、これにビクともすることなく、レーザーを打ち消しながら、「ブリッツ」へと突進している。

—あまつさえ加工されて出来ている「ジン」の機体を粉碎したという、悪魔のような突進が来る！

だが、

「—いくら重量があろうとも！」

その重量の分だけ、推進には必要なエネルギーが必要となり、そして、出せるスピー

ドには限界がある！

突進中は、曲折という行為が不可能となる。単一方向への加速を決め込んでしまつては、もう、その進路の変更を取することは容易ではない。

「ブリッツ」は「デیفエンド」から離れ、難なくその突進を回避した。

「なんだが、随分と反撃力に乏しい機体のようですね」

ニコルは不意に、不審に思った。

鎧のような装甲に、巨大にして堅牢な盾——「デیفエンド」が防御力に重きを置いた機体であることは、その体軀を見るだけでも明瞭に理解出来る。あの機体を落とすのは、骨が折れそうだ。

だが、だからといって、攻撃手段が少なすぎる。

クルーゼの乗る「シグ」を退けたのは、「デیفエンド」の突進。「ジン」を粉砕したのも突進。そして、今も突進。

突進が唯一の攻撃方法だというなら、なんと滑稽だ。

「攻撃力がなければ、負けはなくても、勝ちもないんですよ！」

「ブリッツ」がアンカーを伸ばし、その重量ゆえ機動力がわずかに劣る「デیفエンド」の盾を捕まえた。アンカーを縮めれば、本来は相手が「ブリッツ」に引き寄せられるものだが、今回はむしろ「ブリッツ」の方が「デیفエンド」へと引き寄せられた。

だが、どちらでもいい。——「ブリッツ」が得意としているのは、近接戦だ。ノロマな機体を前にして、「ブリッツ」は負けはしない！

「はあああつー！」

トリケロスから放出するビームサーベルが、「ディフェンド」の大盾と接触した。アーカーで引き寄せられた勢いを乗せたその斬撃に、わずかに「ディフェンド」が揺れる。

「くっ………！」

ステラが小さく舌を鳴らした。

だが、機体は揺れはしたが——なおも堅牢な盾は、敵の斬撃の侵入を許さない。

「舐めるなあーっ！」

その瞬間——「ディフェンド」が、両手の甲に装備した武装から、大型のビームクローを発生させた。鉤爪のような鋭利なビームクローが、「ブリッツ」へと襲い掛かる。初めて見る武装に虚を突かれたニコルは、咄嗟に後退してこれを回避した。

「——「ディフェンド」を援護して！ あの子を守るのよ！」

マリユの指示が飛び、距離を取った「ブリッツ」に——すかさず「アークエンジェル」からの援護射撃が飛来する。これに牽制され、またも「バスター」と「ブリッツ」は「アークエンジェル」から距離を引き剥がされてゆく。

「くそっ！」

「『デアフエンド』を落とさねえと、足つきまでは辿り着けねえってことかよ！」
機体そのものが、鉄壁の盾だともいえるのか？

その時、ハイネ達からの通信が入った。

「ハイネか!?」

「ハイネか!？」

「ナチュラルが動かしてるにしては上出来だが、俺達『オレンジシヨルダー』の敵じゃねえな!」

二機のジンの機影が、真っ直ぐに『デアフエンド』に向かうのが見えた。

「『ジン』なんかで、あの機体を討とうというのか？」

「は、やれるもんなら、やってみなつてんだよ」

「ディアツカは独り言のように、『デアフエンド』へ向かったハイネとミゲルを、完全に侮っていた。」

「だが、『デイクチュラ』の目くらましには丁度いい。」

「『ジン』が『デアフエンド』を惹き付けている間に、自分とニコルで、足つきを落とせば良いのだから。」

「ステラ——!」

二機の「ジン」に猛追され、段々と「アークエンジェル」から距離を開かれてゆく。「ディフェンド」に、キラが呼び掛けた。キラは「ストライク」を駆って、彼女の援護に回ろうとしたが、

「逃がすかああ!」

接近する「デュエル」の苛烈さが、これを許さない。

キラは完全に、「デュエル」によって足を止められていた。

「なんだ、おまえは——!」

人格が一変したように、コックピット内のステラは叫んだ。

パイロットスーツに着替えている余裕もなかったため、なおもワンピースの生身であつたが、大盾に守られた機体は無事だ。

執拗に攻撃を仕掛けてくる相手——オレンジ色の「ジン」!

あれはたくさん壊した! ヘリオポリスを、崩壊させた!

「そおら墜ちろお!」

「ディフェンド」らGATシリーズの持つフェイズシフト装甲は、実体弾兵器による

損傷を受け付けず、《ジン》の唯一の近接兵器である重斬刀を無効化する。

ならば、ビーム兵器で撃破するしかない。

ハイネが咄嗟に大型ビームライフルを発射するが、これはまたも防がれた。

「ノロマなんだよ！ ナチュラルのモビルスーツが！」

その機体を強奪しようとしていた割に、敵に回れば、ハイネのこれは随分な言い様である。

「回り込め、ミゲル！」

〈言われなくても！〉

——しつこい！

守らなきゃいけないのに、アークエンジェルを！

挟撃する《ジン》が——その瞬間、《デイフェンド》の両方向から大型ビームライフルを撃ち放った。ビームに挟まれた機体は、両脇から押し潰すかのように着弾した光線を受け止めたが、

その瞬間——《デイフェンド》のいた地点が、大爆発を起こした。

マリユエが唖然と目を見開き、ミリアリアが悲鳴にも似た声をあげる。

挟まれていた——戦艦さえ貫く《ジン》の強襲型ビーム兵器を同時に浴びたのだ。

単一方向からの防御にはいくら堅牢な《デイフェンド》だろうと——

「ステ、ラ……………!!?」

まるで帰るべき母艦を失ったかのようにM A形態のまま、“イージス”は茫然自失として、宙域を流れるような物体と化していた。

「やったぜ!」

着弾した手応えは得た! ——ハイネの確かな勘がそう告げており、その予想は確かに当たっていた。

ビーム兵器は、たしかに着弾していた。

ただし——。

それは“ディフェンド”の装甲に、ではなく……

その機体を覆う、球状に展開されている——“光波シールド”に。

“ディフェンド”の双腕、双脚、そして背部に取り付けられた二基のウイングバイザー、大型ビームシールドに、無数の「光波発生器」が装着されている。

そこから発生したエネルギーが球状に覆うように結び付き、全方位光波バリアを発生させているのだ。

「な……!」

——全方位に対応した、エネルギーシールド……!?

それが実現不可能な技術ではないことは、ミゲルも知っていたが、それをよもや、単一のMSに搭載させるとは!

ミゲルは焦って発砲していた。しかし大型のビームランチャーは、光波シールドに弾き飛ばされ、*“デیفエンド”*は真つ直ぐに、ミゲルの*“ジン”*へと急速に突進していく。

「おおおおおおおっ!?!」

予定外の反応が、ミゲルの冷静さを完全に欠いていた。

何度、ビームを連射しても、無駄だ。

冷静に考えればその思いに至るはずなのに、ビームを*“デیفエンド”*に撃ち放つだけ——ミゲルはろくに、回避行動も取らなかつたのだ。

「はあああつ!」

光波シールドを加えた*“デیفエンド”*の突進が——ミゲルの乗る*“ジン”*を物理的に弾き飛ばした。

その衝撃で*“ジン”*の機体はバラバラに碎かれ、爆散した。

啞然としていたハイネが、ハッと我に帰る。

「生意気なア!」

——よくも、オレの仲間を！

どこまでも因縁の機体となるのか——「ディフェンド」！

ハイネがビームランチャーを装填し、大火力で撃ち放つ。光波シールドと接触すると、シールドはかき消され、「ディフェンド」の実体が露になった。

——やはり、電力の限界は早い！

全方位バリアなんてのは——寿命が短いと相場が決まっているものだ。

いくら鉄壁の守りを誇っていても、砲撃を打ち消す度に「ディフェンド」のエネルギーは確実に削られている。あるいは、既にエネルギーは底を尽き始めているのではないだろうか？

ハイネは好機を見た。すかさずビームランチャーを乱射し、エネルギーの限界が近いと思われる「ディフェンド」に、無造作に放たれたこれを、あえて防御させた。

「フェイズシフトが落ちたら、重斬刀で切り刻んでやる！」

乱射された多くのビームランチャーを、「ディフェンド」が防いだ。

その瞬間、通常は「ディフェンド」のシールドに打ち消されるはずのビームが、着弾と同時に爆発を起こした。おそらく「ディフェンド」の大盾が、エネルギー不足が影響して、ビームを無効化できなくなったのかもしれない。

——しめた！

抜き打ちに重斬刀を構え、煙の上がった空間へと踊りかかるハイネ。

「——ハイネ、やめろ！」

「はあ!？」

突然、アスランが通信に割り込んで来た。

見れば、呆然と自分の立ち位置を見失ったかのように佇む「イージス」が、微妙な距離でこちらを見ている。

咄嗟の事に、ハイネは獲物を横取りされるのではないかと思え、野心に溢れる、露骨に嫌な顔を作った。

「何言ってるんだアスラン！ この機体は、オレが必ず討ち取るんだよ！」

「ハイネ！ その機体には——!!」

その機体には。

その機体の、パイロットは——!

だが次の瞬間、アスランは見た。

「デイフェンド」のいた空間に発生した大爆発——その煙幕の中から、ビームを浴びたであろう「デイフェンド」が——見たこともない速度で飛び出して来る光景を。

「!？」

「イージス」に目を遣っていたハイネも、すぐにそれに気づいた。

「ディフェンド」が——その両肩に装備した自身最大の特徴である大型ビーム装甲を離脱し、鎧と盾を乱暴に投げ捨てた。

刹那、スラスターを全噴射し、一気に「ジン」へと踊りかかる！

「のわ!？」

「ハイネツ!」

——「ディフェンド」のフェイズシフトは、まだ落ちてなどいなかった！

これでは重斬刀は通用しない！

だが——それはいい。

——なんだ、この機動性スピードは!?

盾を捨てた途端——「ディフェンド」は、見違えるようなスピードを發揮した。

ハイネの「ジン」は慌てて重斬刀から武装を持ち替えようとしたが、行動した時には既に、最高速に達した「ディフェンド」の接近を許していた。

「ディフェンド」の光波発生器から放たれるエネルギーが、一点に収束され、「ディフェンド」の体躯に、無数のビームクロウが発生する。

「これで終わりね、黄色いの!!」

ステラが叫び——

「ディフェンド」は————全身が光波刃ビームナイフのような高機動力の機体となって——

—高速のすれ違いざま、ハイネの「ジン」を、バラバラに切り刻んだ。
「うおおおおおーっ!?」

へハイネ——ツ!?

アスランの声が聞こえ、ハイネはその時、自分の体が爆発、激しい熱に飲み込まれていくのがわかった。

オレンジ色の「ジン」が——爆散した。

「あ……………っ」

「アークエンジェル」のクルー達は、まるで信じられない幽霊でも見るかのように、オレンジ色の「ジン」が続けざまに撃墜された光景を目にしていた。

——あの少女^{ステラ}が、二機もの「ジン」を、一瞬で？

毎度、あの少女には驚かされることばかりだ。

慣れたように啞然としている一同であったが、だからといって戦況が好転したわけではなく、ミリアリアから叫び声が上がった。

「ストライク、パワー限界です！ フェイズシフトが落ちました！」

その報告に、つい忘れそうになっていたが、あの少年と少女が、元はただの民間人であることを思い出す。

そうだ。

誰もが初陣から、あの少女のように、上手くいくはずがない。

ましてキラが乗る“ストライク”は、それと同等の性能を誇る“デュエル”達と交戦しているのだから。

「フラガ大尉より入電！ 『作戦成功、ただちに帰投する！』——」

それを聴いて、一同が一瞬、安堵の表情を浮かべた。

それも束の間、すぐに緊迫した面持ちを作ったマリユーが、即座に指示を飛ばす。

「“ストライク”ヘランチャーストライカーを射出！——エネルギーを補給させるのよ！ それと“ディフェンド”を戻して、キラ君の援護をさせて！」

“ディフェンド”のコックピット内にレーザー通信でメッセージが届き、そこには『直ちに“アークエンジェル”に駆け付け、“ストライク”を援護せよ』との文面が記載

されていた。

——キラがまだ、戦っている。

“デیفエンド”の残量エネルギーは、まだ、かろうじて残っている。

全方位光波シールドの展開は——もちろんのこと、エネルギーを大量に消費する。そのため連続使用は不可能な他、継続使用にも五分間も使えるか、そうでないか程度の仕様となっている。

誰もいなくなつた真空の暗闇で、ステラは機体を翻し、すぐさま“アークエンジェル”へと帰還しようとした。

しかし、

その瞬間、コックピット内に警報音が響いた。

——照準ロックされた……………？

いったい、誰に？

ステラは周囲を見回し、その音突き付ける彼女の“敵”を見つけた。

「！」
ビームライフルを、こちらへと突き付けている。

刺々しく、その鮮烈な色合いも含め攻撃的な印象を受けるフレーム。

真鍮色の“デیفエンド”を——脅すような姿勢を取った紅蓮色の“ガンダム

“
——
ステラはそいつに、見覚えがあった。

「アスラン——！」

「……………ッ」

“
——
「イージス」が——
——
“ディフェンド”と対峙した。

『“アルテミス” 陥落』A

「——ステラ」

その名前を発するまで、息を巻いていたアスランは、あえて訊ねるような口調ではなく、確信し確認するように、目の前の機体 “デイフェンド” のパイロットへと呼びかけた。

アスランが搭乗する “イージス” の機体データの中には——もとより “デイフェンド” への通信回線コードが記載されてあった。今となつては敵対した立場にあるが、GATシリーズとは、元より戦略的に連携運用される想定であつたのではないか？ だから他の機種への通信コードが前もってインプットされていた……？

勿論それは、他のGATシリーズに対しても同様に云えたことかどうかは分からない。しかし “イージス” は六機をまとめる指令役としての機能を併せ持つており、だからこそヘッドパーツが特殊な形状をしているのだ。多目的センサーユニットを内蔵したアンテナは通信・分析能力に長け、そのような経緯があるからこそ、アスランやキラ——そして今のステラ達のように、二者が対立する立場に身を置きながら、容易に通信

が取り合えている。

「ステラ……本当に、君なのか」

まさか。だって、そんな……。

アスランが焦りに突き動かされ、震えた声で呟く。と——「イービス」の通信モニタに金髪の少女——ステラの姿がはつきりと映し出された。パイロット・スーツも着用していない無垢なる少女は、最後にコロニーの中で見たときのままのワンピース姿であった。

アスランのエメラルドグリーン瞳に映る「彼女」は——どこか浮世離れしていた。

決して美しいというわけでもないが、あどけなさを残し過ぎていない。

——そう、可憐だ。

実の兄でありながら、どこかの芸能事務所にでも所属しているアイドル？ あるいは素人でありながら雑誌等の媒体で人気を博す読者モデル？ いずれにせよ、アスランの知らない世界で生きている人種を目の当たりにしたような、なんとも奇妙な感覚だ。

——あれが、本当にオレの妹なのか……？

体つきはたしかに大人び始めているが、その表情はまだ少女というに相応しく、金色の花弁のような柔らかな面持ちをしている。

「——アスラン」

死んだと思っていた妹の声が、スピーカーから流れている。

再会の涙すら出ず——アスランは思わず、怒っていた。

「——パイロットスーツも着ないで、危ないじゃないか！」

「あ……ごめんなさい」

決してこんなことを最初に言いたかったわけではないと思うが。不在の期間、アスランの第一声は、そんな兄としての叱咤だった。

条件反射に兄の怒声を聴き、しよんぼりと肩を落とすステラ。

銃を突きつけながら心配する声をかけたアスランの行動は、明らかに矛盾していた。

アスランはモニターに映り込むワンピース姿のステラの捉えているが、そのワンピースは異様にひらひらして、無防備にも胸元が空いている。シートベルトを装着し、女性の出る所ばかりは強調されているその容貌に、兄でありながら、アスランは不覚にも目の置き場に困った。

——いったい、いつの間にこんなに育ったんだ……。

ていうか上半身は少なくとも、下着すらつけてないじゃないか。

——そんな格好、変な男が寄って来るかもしれないじゃないか！

咄嗟のことで、兄バカなアスランであった。

言いたいことが多すぎる。

聞きたいことがありすぎる。

困惑するアスランは、質問を絞れずにいた。

「生きていたのは嬉しい。でも、なぜきみが『そんなモノ』に乗っている!? ——母上も、きみのように無事なのか?」

母の安否を訊ねると、ステラは沈黙を持って、かぶりを横に振った。

それを見て、アスランの表情が泣きそうなまでに強張ったが、それは一瞬のことだった。

妹の手前、強がったように固く口を結ぶ。すると事務的に、アスランは無感情そうな言葉を突きつけた。

「——どうして『ジン』を撃墜した? きみはコーディネーターだ! なぜ地球軍の味方をするんだ!」

キラも、ステラも——どうしてコーディネーターでありながら、地球軍の側に着いている? —

どうしてキラは僕の親友でありながら、一方は、親の血を分けた兄妹でありながら——どうして、僕達が戦い合わねばならない!?

へステラが、まもるから

「なに……?」

「あの艦には、キラの友達に乗ってる。キラとステラは友達、だからキラの友達は、ステラの友達なの」

「ステラ……!」

「アスランも、キラの友達……そうでしょ?」

「なのはどうして戦うの? アスランはそれを聴いて、ふと、こう思った。」

「——ステラはむしろ、なぜぼくが『ザフト』にいるのかを理解していないのではないか?」

ステラはおそらく、アスランが地球軍に来れば、すべて解決だと思ってる。

「——人為的に生み出された新人種『コーディネイター』は、その存在を差別し、迫害した旧来の『ナチュラル』によって地球を追放され、その安住の地を宇宙——『プラント』へと移した。」

「コーディネイターを追放しているながら、地球側の人種は常に『プラント』を支配しようとした。」

「資源不足に悩んでいる地球とは対照的に、『プラント』には豊富な宇宙資源が約束されていたのだ。地球は『プラント』に武器と食料の生産を禁止させ、優位にあるのが地球だと誇示し、云われない支配と搾取にコーディネイターは反発し、その対立がやがて

戦争へと発展した。

——コーディネイターを生み出しておきながら、先に忌み嫌ったのはナチュラルの方だ！

人類の『夢』と手前勝手な理想を掲げておきながら、格差が生まれれば気味悪がって、迫害した。

コーディネイターを嫌う。それがナチュラルだ。その集まりが、地球軍だ！

「おまえはそんな所にいるべき人間じゃない！ 僕と来るんだ、父上にも——」

へでもアスランは、これから、ステラの友達を奪っていく。殺していく。……ザフトだから」

「違う！ 僕がザフトにいるのは——」

母と妹が殺されたと聞いて——力のない自分を、あの時、それだけ思い知ったからだ。

愕然とした——“ユニウスセブン”が崩壊したと聞いた瞬間は。

あの頃の自分は——何も知らなかった。

いや、知ろうともしていなかった。

「戦争なんて起きるはずがない」とたかをくくって、父に、月から避難するように言われたことさえ、大袈裟だと軽く捉えていた。

何も知ろうとしなかったあの頃の自分に、怒りがわいた。

父のように権力を持っているわけでもなく、アスランには、何かを変えることは出来なかったが、それでも、信頼できる議員や、父の下の「剣」になることで、何かを護れると信じたからであって……。

でも、そんな動機はたしかに——ステラの友達を殺すこととは、関係がなくて。

そんな苦悩があつたからつて、“アーケエンジェル”に乗る、ステラが「友達」だという者達を殺していい理由には、ならなくて。

自分はそういえば、何のために戦っている？

守るなんて大層なことを言いながら、進んで地球軍を殺そうとしている自分は、やはり可笑しいのだろうか。

アスランは、返す言葉を失った。

その時 “デイフェンド” が—— “イージス” へとライフルを突き付け返した。

アスランの表情が愕然とし、驚きに目が見開かれる。

へステラはまもる。ザフトは意地悪……だからアスランも意地悪。ステラの前にあるもの、どんな小さな命でも、守れるのなら、ステラは戦う。

そのために——この “ガンダム” に乗ったのだ。

守護を司る——この “ガンダム” に呼ばれた気がしたのだから。

ステラは既に、構えられた “イージス” のライフルには、戦意や殺意が無いことを見

抜いていたのだろう。

“デیفエンド”はビームライフルを握る腕を下ろすと、すぐに“イージス”から転進して、“アークエンジェル”へと離脱した。

予先を見失った“イージス”はそのまま、しばらく茫然としていた。

ザフトは“ヴェサリウス”が航行不能になったことで、全機として撤退していった。

“ゼロ”

“ストライク”

“デیفエンド”

この順番で“アークエンジェル”に帰投し、ステラは、今回も無事に戦闘が終了したことに、やはり安堵していた。

死ななかつたことに、安心したのだ。

いくら戦場を経験して来ているからといって、この安心感を忘れるようになってしまつては、戦場で生き残ることもできないのだろう。この瞬間は、何よりも幸福なもの

だ。

「アークエンジェル」艦内は依然として事後処理等に慌ただしかったが、ステラが「デイフェンド」のハッチから出ると、「ストライク」のハッチの辺りで、何やら数人の声が上がっていた。

ステラより早く帰投したはずの「ストライク」のハッチは、まだ、閉まったままだった。

その前で、ムウとマードックが何やら話している。ステラも懷疑しながら、そちらへと向かった。

「あの坊主が、なかなか中から出てこねえんですよ」

「おやおや」

新兵の教育係さえ仰せつかったこともあるムウは、大体の事情を察していた。

外部ロックから「ストライク」を開けると、中ではキラが、まるで呼吸することも忘れていたかのように、縮こまって硬直していた。

——新兵にはよくある、実戦後のことだ。

恐怖で身体が委縮している。レバーを握るキラの指が、なかなか外れない。

戦慄に飲み込まれているキラは、ムウの気遣わしげな言葉を受けて、やっと我に返った。

「もう終わったんだ。おれも、おまえも——みんな無事だ。いいな？」

「あ……、はい……」

それでもキラは、胸の辺りを両手でぎゅうと力強く握りしめている。まだ先程の戦闘の恐怖が、心から抜けきっていないのだ。

その時、"ストライク"の前へ、ステラがやって来た。

それを認めたマードックはびっくりしたように跳ね上がり、素つ頓狂な声を上げながら彼女から距離を取った。両手を開き、ストライクにべつたりと背中を張り付けている。まるで鬼でも目の当たりになっているように。

対して、ムウはそれに気づくと、おや、と声を漏らし、「こちらの新兵さん」は、いたって精神が正常なことに、一抹の驚きを覚えていたようだった。

ステラは"ストライク"の中に入ると、小刻みに震えているキラの胸に、そつと手を当てた。

「ステ、ラ………?」

「痛いところには手を当てるといいの。——ネオが教えてくれた」

語尾の人物は誰のことだか分からないキラであったが、胸を握りしめるキラは、その言葉でゆつくりと手を開き、自分の胸を温めるように撫で下ろした。

そこで、キラが弱い笑顔を作る。いまだ緊張は抜けきっていない様子ではある

が、さつきと比べれば、随分とリラックスできたようだ。

それを見たムウが、ひゆう、と口笛を鳴らした。その表情には軽薄な笑みが浮かんでいる。

「やるねえ、お嬢ちゃん。そのネオっていう人もいいこと云うじゃねーの」

「うん。ネオ、やさしい人だから」

誰のことはムウも分からなかったが、この子の先生かな、と考えた。

ふむ、と声を鳴らしたムウは腕を組み、笑い飛ばすように微笑んだ。

「しっかしお嬢ちゃん、無断で出撃して『ジン』を二機も墜としたんだってなあ。見かけより大胆っていうか、見なおしたよ」

「でも、勝手なことしたから……きつと怒られる」

「はは、オレの方から言っておいてやるよ。なんたってこの艦が助かったのは、きみのおかげでもあるんだからな」

云いながら、ムウはステラの頭に手を乗せ、ぽんぽん、と頭を優しく叩いた。するとすぐに飛び去って、更衣室の方へと向かって行く。

「……………」

ステラはムウに触られた箇所を、もう一度確かめるように、手を頭に寄せた。

「……………」
「ネオ？」

飛び去っていく、見覚えのあるような、精悍な後姿を目で追った。

ステラとて、他人に不用意に接触されるのは嫌いだが、その感触は不思議と、嫌じゃなかった。

一方で。

マードックは相変わらず、おっとりとしたステラに怯えていた。——ハッチを開けねば整備士ごと吹き飛ばす！ 凶暴と化した少女のその言葉が、頭の中でリフレインするマードックであつた。

(この嬢ちゃん——マジでよくわかんねえ！)

結果的に、無断で「デイフェンド」を出撃させたステラの過失は、ムウの配慮によって「お咎めなし」となつた。

というより、副艦長を務めるナタル・バジルー自身「デイフェンド」の出撃を要求していたこともあって、彼女が賛成しているのであれば、他には誰もステラを咎めようとする者はいなかつた、というのが真相だ。

そういった意味では、ナタルもまた、ステラ・ルーシエと名乗る少女には、内心で感謝こそしているのだろう。

この艦を守り抜けたのは、キラと、ステラの奮闘のおかげなのだから。
しかし――

だからといって、許せないこともあった。

ナタルは今、乗務員からの報告を受け、ステラに与えられた部屋へと赴いていた。部屋の中にはワンピース姿のステラがいて、ナタルが怒鳴った。

「――ステラ・ルーシエ！ 制服を改造するな!!」

全身が布できっちりと覆われた、窮屈なデザインが生理的に気に入らなかつたのだろう。ステラはミリアリア同様に与えられた地球軍の赤色の制服を、部屋の中で加工していた。

手に持つ布切りバサミは「アークエンジェル」に乗り合わせている民間人の誰かにでも借りたのだろうが、ナタルが怒鳴る傍らで、ステラはぼーっとしながら、チヨキチヨキと制服の肩の部分のカッティングしていた。

まるでナタルの言葉を聞き取っていない様子だ。

偶然ナタルの声を耳に入れたのか、制服に着替えたムウが、その部屋の前へとやって来た。

「なんだなんだ？ どうした？」

ドアに手をかけ、ナタルが振り返り、その姿を確認した。

「フラガ大尉！ ……いえ、この少女が、勝手に我が軍の制服を加工していると、報告が上がったので」

「へえ、そいつはまた大胆というか、型破りというか」

そんな軍規破りなバカ、ほんとにいたんだ。

ムウは一種の感心さえ覚えた。

「感心している場合ではありません。このような公私混同を許していると、軍全体の風紀が乱れます」

「まあ良いんじゃないの？ あくまで機能性の部分で加工する分には、個人の自由にしとやっても。 ……ほら、この子の立場だと、いざって時に走りやすい服の方がいいだろう？」

短いスカートとかは特に目の療養にもなりそうだ、なんて馬鹿なことを抜かすムウのことを、キツと鋭い目で睥睨するナタルであった。

冗談だよ、冗談、とムウは気圧されたように軽薄に答えると、中にいるステラに声をかけた。

「お嬢ちゃん、ちよつといいか」

「?」

ナタルの声は耳にも入らなかつたステラであつたが、ムウの言葉はすんなりと聞き止め、彼を見上げる。

ナタルは一瞬驚いた表情を見せたが、同時にムウに不信感を抱いた。——どうやって、この少女を手なづけた……。

ムウによつて呼び出されたのは、キラとステラのふたりであつた。

格納庫へと呼ばれ、ふたりは、何かと目を見合わせるようにして懷疑していた。

「ストライク」と「デイフェンド」を目の前にして、ムウはその足を止め、振り返つた。

「もう少しで『アルテミス』に入港にする。——けどその前に、ふたりにやつておいて欲しいことがあるんだ」

こうしてふたりは、「ストライク」と「デイフェンド」それぞれの起動プログラムをロックしておいた。

どういう意図があつて、ムウが自分たちにこんなことをさせるのか分からなかつたが、ふたりはすぐに、その意味を知ることになつた。

GAT-X401 “デیفエンド”——パイロットはステラ・ルーシェ。

両肩に巨大なビームシールドを装備した、極地防衛戦に特化した機体。武装には光波技術が用いられ、堅牢なバリアを展開する他、装甲を離脱することで強襲機としても活用可能な、まさに攻防一体の性能を持つ。

かのGATシリーズは、モビルスーツの技術を欲した大西洋連邦が、中立国 “オーブ” の軍需産業社 “モルゲンレーテ” の技術援助を得て開発したことは、以前記述した通りだが—— “デیفエンド” に用いられた光波技術は、地球連合の同盟下にあるユーラシア連邦が、最も得意としている技術であった。

光波技術を用いたユーラシア連邦建造の代表物にして、自信作の具体例を挙げれば、それは “アークエンジェル” が現在そこへの航路を取っている軍事衛星 “アルテミス”——それを覆う絶対防壁、通称 “アルテミスの傘” だろう。

光波シールドは、あらゆる実体弾もビームも通さない。またこれは、内側からの攻撃さえも弾いてしまうため、シールドを展開したまま攻撃に転じることは不可能だが、軍事衛星 “アルテミス” を「難攻不落の要塞」と呼称させるには充分な性能、強度を発揮する盾となっている。

『ディフェンド』は、その『アルテミス』の「傘」を模した技術を縮小し、単一のモビルスーツに搭載させた機体なのだ。

ところで、地球連合と言えど、一枚岩ではない。

連合と聞けば仰々しいが、それが形づくられているのは、地球外である宇宙に、ナチユラルからとつてした相互共通の『敵』を控えているからであつて、それゆえに多国家が結集し、ひとつの「地球連合」と相成っているに過ぎない。

地球もまた、広大な惑星のひとつだ。

そこには多くの人が住み、国家が形成され、勢力が存在している。そしてそのひとつひとつは、文化も異なり、当然、考え方も一概とは言えるはずがない。利権や思惑が交錯し、連合内では決して足並みが揃っているとは言えないのも、また事実だ。

中でも大西洋連邦とユーラシア連邦の関係は、冷え切っている。

対立している、とはおおっぴらには言われまいだろうが、互いに干渉していないのは確かだった。

『アークエンジェル』は無事『アルテミス』へと入港したが、入港した途端、艦は武

装した兵士やモビルアーマーに包囲され、艦内には銃を持った兵士がなだれ込み、完全にして完璧に、コントロールを制圧されてしまった。

「アークエンジェル」は、ヘリオポリスで極秘裏に開発された艦船である。

いまだその存在は地球軍全体への公式発表も済んでおらず、マリユーは、これを警戒した「一応の措置」だと——禿頭の「アルテミス」司令官、ジェラード・ガルシアに説明された。

艦は軟禁状態に置かれ、銃を持った兵士たちが点在し、艦内を警備している。

「こうなつちまうことを想像するのは楽だったが、やっぱ現実になつちまうと、相当まずいよなあ」

キラは隣に立ち、そう呟いたムウの顔を覗くようにして見上げた。ムウの表情は、柄にもなく焦っているように見えた。

——想像するのは楽だった？

「アルテミス」が「アークエンジェル」を軟禁状態におくことが、ムウにはあらかじめ、予期できていた、とでもいうのだろうか？

いや、考えても見れば、そうかもしれない。

なにせムウは、キラとステラに、二機の「G」の起動プログラムをロックさせることを指示していたのだから。

「あの、何がまずいんですか……?」

思わずキラは訊ねていた。

ムウは罰が悪そうに答える。

「艦は細かいところまで舐めるように調べ回されて、人質に取られるかもしれねえ……つてことかな」

キラにはその言葉の意味が、分からなかった。

軍事衛星「アルテミス」は——ユーラシア連邦が誇る難攻不落の要塞である。

対して「アークエンジェル」は大西洋連邦が所有し、開発した戦艦であり——そこに搭載されていた「ストライク」「デイフェンド」もまた、大西洋連邦が誇るモビルスーツだ。

GATシリーズは、大西洋連邦が総力をあげて作り上げた至高の機体といっても過言ではない。だが、いかんせん中立のコロニーで極秘裏に開発されたため、今、この存在を知ったユーラシア連邦出身のジェラードが、これを見逃すはずがなかった。

「大西洋連邦は六機ものモビルスーツを開発した」——

この事実に対して、ユーラシア連邦が誇れるモノは、軍略的に重要でもない場所に造られたアルテミスの“傘”しかないとなれば——その利権や発言力は、連合内で落ちる。

ジェラードは即座に“ストライク”と“デイフエンド”のデータ解析を行おうとした。

だが、二機の起動プログラムは凍結されており、そのパイロットしか分からない暗号で鍵がされていた。つまりジェラード達には、手の出しようがなかったのだ。

「——“ストライク”と“デイフエンド”のパイロットはどこだね」

マリユー、ナタル、ムウを除いたクルーは全員一か所に集められ、ジェラードによるこの質問の解答者とさせられていた。

ステラもこの時は、既に、改造した制服に身を包んでいた。

思わずキラは、素直にハイと手を上げようとしたが、これはマードックの太い腕で、ぐいと押し付けられるように阻まれた。わけがわからずキラはきよとんとしたが、ステラもまた、ノイマンに同じように指示されて手を上げることを禁止され、きよとんととしていた。

キラとステラが手を上げなければ、ふたりの他に、手を上げる者など、いるはずもなかった。

長い沈黙に痺れを切らしたように、その瞬間、ジェラードが下卑た笑みを浮かべて、近くにいたミリアリアの腕を強引に持ち上げた。

ミリアリアの短い悲鳴が上がり、その瞬間、ステラがその表情に激しい怒りを浮かべた。だが、その怒りもまた、再びノイマンによって抑えられてしまう。

「まさか女性がパイロットだとは思えないが、この艦は、艦長も女性ということだしな……」

——あんまりだ。

その時既に、キラは咄嗟に、名乗り出てしまっていた。

「随分と若いが、きみは『ストライク』の方かね。……もうひとりとは？」

ジェラードが知りたがっているのは、むしろ『デیفエンド』の構造の方であった。

ジェラードは再びミリアリアの腕を掴み、強引に立ち上がらせた。

「連れていけ」

そう指示を出すと、ミリアリアの身体を、兵士たちが掴んだ。

——どこへ連れていく！

その瞬間、ステラが、名乗り上げるように立ち上がった。

マードック達がその瞬間、キラが名乗った時よりも痛恨の表情を浮かべ、ジェラードは慇懃な笑みを浮かべた。

「きみか。いいだろう、来たまえ」

「ステラ、キラ！」

ミリアリアが叫んだが、キラとステラが、共に格納庫へと連行されてしまった。

その場に取り残された全員は唾然としていたが、サイ・アーガイルが、その沈黙を破るように、技術者であるマードックに訊ねた。

「……………あの」

「なんだ」

「どうしてあの人達は、こんな強引なことをしてまで、二機のデータを採取したがるんです？」

おおよそジェラード・ガルシアは……いや、ユーラシア連邦は、連合内における自身の発言力を高めるために、大西洋連邦と同じように、画期的にして革新的なモバイルスーツを作りたい。

しかし、あまりにデータが足りない。

そんな状況で「ストライク」と「デイフエンド」が己が領域テリトリーに転がり込んで来れば、無関心では居られないだろう。

「でも、ステラが連れてかれた時、どうしてマードックさん達は」

——どうして、キラの時よりも悲痛な顔になったんですか？

賢知なサイは、マードックやノイマンの表情が変わったその瞬間を、見逃していなかったのだろう。

——それは、ステラが「女の子」だからか……？

軍という組織は、遥かに女性の人口の方が少ない。

こんな軍事拠点などは、とりわけ連合内でも難攻不落の鉄壁を誇るだけに、外部からの接触も少なく、まさに孤立している現状。——こんな拠点で働く兵士達はそれこそ、そういうものに触れる機会も少ないだろう。

あるいは、戦争など、その程度のものなのかもしれない。

——だから……？

訊ねるサイもまた、痛恨の表情を浮かべていた。

「……………それもある。けどな——」

マードックが、重苦しげに答えた。

整備士であるマードックには、わかるのだ。

「デイフエンド」が解析されることで、どんなことが起こるのか。

「デイフエンド」は——アルテムスの管轄であるユーラシア連邦しか持ち合わせ
てねえはずの『光波技術』が——完全に応用されてる機体なんだよ。共同体が誇る
最高の技術が、他に渡ってたつてことなんだぜ？ そんなもん解析されてみる、連中は

黙ってねえよ。……そんな報復が、そのパイロットである、あのお嬢ちゃんに向か
ねえとも限らねえけどなあ」

縁起でもない話。——それを聴いて、一同が啞然とした。

そこへ、ノイマンが補足するように続ける。

「大西洋連邦か “モルゲンレーテ” のどちらかが、ユーラシア連邦自慢の光波技術を盗
用したんだろうな。急を経て入手した技術を搭載したのが “デイフエンド” で——
——だから “デイフエンド” は、Xナンバーの中でも最後に造られた」

当初のXナンバーの開発プランに—— “デイフエンド” なんて機体の存在は含まれ
ていなかった。

おおよそ、五機の “G” の開発途中に、大西洋連邦か “モルゲンレーテ” のどちらか
が、ユーラシア連邦から、光波技術の詳細データを手に入れたのだろう。

既に五機の “G” は、開発のコンセプトも決定して、着工にも取り掛かっていたため
に、光波技術を機体に用いるには、新たな一機を増設する他なかった。

そうして開発されたのが、最後の “G” である—— “デイフエンド” なのだ。

その場所に残された、一同が青ざめた。

ムウの指示も虚しく、人質を取られかけたキラ達は、大人しく機体のデータを開示する他なかった。

データを開示した後、クルー達がいる場所へと廊下を渡っていた。

その道中——突然ステラの腕を、ジェラードが掴み止めた。

「いたッ……」

「えっ……」

瞬間、キラが表情に露骨な敵意を現し、ジェラードを睨むように見た。

それに反応した兵士達が、一気にキラを取り囲む。

「——おっと、勘違いしないでくれたまえ。解析を終えた結果『デイフェンド』には少々、うちの技術者でも納得のいかない部分があつてね？ その部分について、パイロットであるこの少女に、別室で詳しく話を聞きたいだけだよ」

「嘘だー」

キラが叫ぶが、ジェラードの微笑みはこの上なく下卑っていて、とてもそれだけが目的だとは思えなかった。

しかし、周囲には多くの武装兵。キラは抵抗することもままならず、ステラは強引に、その腕を引かれた。

ステラの悲鳴にも似た短い声が響く。

「いや！ キラ！」

「ステラ！ ステラアツ!!」

キラの懸命な呼びかけも虚しく——そのままステラだけが、地球軍によって連行されてしまった。

『“アルテミス” 陥落』 B

“ストライク”と“デイフェンド”両機は、ユーラシア連邦に所属する軍兵達の指示の許、即座に“アークエンジェル”から降ろされて“アルテミス”のドッグへ係留された。

「まったく、けしからん」

その“アルテミス”の総司令官、ジェラード・ガルシアは、自分の中に怒りや苛立ちが膨らみ始めているのに気が付いた。

実際のところ、ユーラシア連邦のメカニック達に“デイフェンド”の機体データを解析させた結果、納得の行かない部分など、何ひとつとして存在していなかったというのが真相である。不可解な点などなく、機体の全貌が明らかになった——むしろ、そうであるからこそ、ジェラードは今こうして苛立っているのだ。

何故ならGAT-X401^{デイフェンド}には、ユーラシア連邦がその技術を独占していた『光波技術』が搭載されていたのだから。

光波発生器たるリフレクターを利用した全方位防御帯、通称“アリュミューレ・リュ

ミエール”——

接收した“ディフェンド”の主武装はこの光波発生器を用いたビーム・ウェイブによる斬撃であり、全てのリフレクターを出力することで、一方では全周囲に対応したビーム・バリアーを展開することが可能になる。後者はつまり、これまで『難攻不落』と称されて来た“アルテミス”の“傘”——その「縮小版」を完成させる、というわけだ。

技術たるものは——「それ」を搭載した品を大型化させることよりも、細分化したり、縮小化させることの方が、遥かに難しい。

ここから先はジェラードが絶対に認めない話であるが、かたや“アルテミス”は云つてしまえばそれしか取り柄のない軍事衛星であり、かたや“ディフェンド”は前線でも活躍できる最新鋭MSだ。双方に全く同じ技術が用いられているとなれば、そのどちらに、より精巧で、より高度な技術的価値が偏在しているのかは、火を見るよりも明らかだ。

（——我々の誇りが、よもや盗まれていたというのか？ 大西洋連邦、それに、オーブ連合首長国に……）

ユーラシア連邦において、唯一無二と云つてもいい——

これまで共同体全体で育てて来た最大の強み、最重要な技術は水面下に盗用され、大西洋連邦のMSに搭載されていた、という事実が明るみに出たのだ。

これに腹を立てずに、何とするか。

「けしからん。まったくもって、けしからんよ」

果たしてジェラードのその言葉は、卑劣なことをする大西洋連邦に対して放たれたのか。あるいは、目の前にいる少女に対して放たれているのか——？

ジェラードは取り繕ったような慇懃な笑みを浮かべている。ステラは怯えている、というよりも、不用意に近づいてくるジェラードをあからさまに警戒していた。

ステラを見据え、下から上へ舐めるように視線を移し、ジェラードが訊ねた。

「なんだね、その軍服は？　我が軍の女性士官の軍服は、そんなにも挑発的だったかね？」

両肩から、肘先まで切り開かれた袖。フリルのついたスカートに、太腿まであるストッキング。ベルトは骨盤よりも高めの箇所まで止められ、女性らしい双丘をさながら強調するかのよう^{ほほえ}に留められている。ジェラードは口元に歪みを浮かべながら、壁へ張り付くようにしながら、こちらを睨むステラへと近寄ってゆく。

このときステラが放り込まれていたのは、何の変哲もない、殺風景な部屋だった。乗機の事情聴取と聞かされておきながら、格納庫にも、工場局にも連行されないのは不自然ではないか。

——そもそもMSについて知りたいなら、その搭乗者ではなく、メカニックに話を聴

くべきだ。

ステラは当然のように糾弾したが、ジェラードは悪びれた様子もなく答えた。

「残念だが、キミを解放するつもりはないよ。この機体のパイロットであるキミはコーディネーターであり、あの機体のデータを全て記憶している可能性もあるからなあ」

言っていることはもつともらしくも聞こえるが、矛盾している。光波技術のデータは既に、仔細モルゲンレーテへと渡っている。今さらステラを拘束した所で、データの漏洩を防げる筈もなく、既に手遅れであることは明らかだ。

ステラもこの時、既にジェラード達には不審感を抱いていた。

地球軍の軍服を着ているなら、誰しもが味方か？ 冗談じゃない。——目の前に迫る男たちの目はまるで何かに飢えたような、蓮つ葉な色を滲ませている。

「寄るな……ッ！」

「おやおや、立場を間違っちゃあいかんよ。キミはただの捕虜で、私はこの司令官だ。命令するのは私の方だろう？ それにキミはコーディネーターで、私達ナチユラルに造られた立場にある」

だからなんだ、と言わんばかりの鋭い眼光を覗かせ、ステラはジェラードほか、彼を取り巻く武装兵達を睨む。

「造られし者は、創造主に齒向かつてはならない。そうは思わんかね」

君達は「子」であり「作品」であり、我々はその「親」だ。

超然としていて、みずからが神だとしても主張するかのようなその言葉を聞いた瞬間、ステラの表情が、激しい憎悪に満ちた。

——みんな、同じことを云う……。

ナチュラルだから。

コーデイナーだから。

——みんなそういえば、意見が通ると思ってる。

自分とは違うものを憎めば、それでいいと思ってる。

コーデイナーを否定するということは、キラや、アスランを否定するということだ。

彼らだって、人間なのに。

その瞬間、怯える、というような気色は消え失せ、ステラは激しい怒りの色を覗かせていた。

隙が無いようにも見える構えを取り、恐怖を、まるで感じてすらいらない様子だ。

しかし、ジェラードは安心しきっていた。——こちらには六人も武装兵がいる。抵抗なんて、出来やしないさ、と。

「いいだろう？ そんな軍服をわざわざ着ているんだ、実はまんざらでもな——」

ジェラードがステラへと手を伸ばす。

瞬間。

ジェラードの隣にいた武装兵が、その場に卒倒した。

「——え？」

ジェラードは、絞んだ目を丸くして疑った。

倒れた兵士は、真つ青な顔を浮かべて、全身で痙攣を起こしている。

ひとり。

見れば、倒れた兵士の頸椎には、鋭利な刃物が突き刺さっていた。彼の腰のナイフが抜かれているが、おそらく「それ」だろう。

——容赦なんて、知らない。

——わたしはこうやって、育てられてきた!!

ステラが、武装兵の首筋に抜かったナイフを引き抜き、それを構えた。

悲鳴をあげて、他の武装兵達が、一瞬にして戦慄に呑み込まれる。武装兵たちは焦つたように少女のいた空間へ銃を構えたが、既にそこには、誰の人影もなかった。

——速い!?

奪われた短刀によって、次の瞬間、また別の武装兵が身体を切り裂かれていた。

ふたり。

「ひっ」

金髪の少女は、まるでふつと全身で脱力したような柔らかな姿勢を取ると、次の瞬間、芯のない動きで、武装兵達の足元へ身を翻すように潜り込み、

さんにん。

神速で、ケブラーベストを着用している武装兵を、難なく、そして容赦なく斬り殺した。

少女の姿をようやく視界に捉えた武装兵のひとりだが、焦ったように発砲する。だが、無造作なこれは容易に回避され、射線上の味方を誤射し、撃ち殺した。

よにん。

ごにん。

ろくにん——！

目にも止まらぬ速度で疾駆する「影」に——次々と武装兵達が斬殺されていく。

「ひっ、ひっ、ひっ」

殺風景な白い部屋は鮮血で彩られ、ジェラードは腰を抜かした。女神から一転した死神を見るかのような目で、金髪の少女を見上げている。

この時、ジェラードは武器を持っていなかったため、危険度が最も低いと判断されたのだらう。

——「危険度」の高い順番に兵を、正確に狙ったというのか？

なんだ、それは……なんなのだ。

「まるで感情や慈悲のない、冷酷な殺戮兵器^{ロボット}のようではないか!」

無防備なジェラードは必然的に、無慈悲なる少女の、ターゲットの最後のひとりとなつた。

「……………」

「こ、こんなことをしてただで済むと思つているのか! こんな暴挙が、許されていいはずが——!」

次の瞬間、難攻不落の要塞であるはずの「アルテミス」内部に、鈍い爆撃音が響いた。

「ミラーージュコロイド」は——「ブリッツ」が所有する、光学迷彩技術を活かした特殊なステルスシステムの名称である。

この世界には、可視光線を歪めレーザー波を完全に吸収する「物質」が存在することが判明した。

「ブリッツ」は、気体状のそれを機体周辺へと散布すると同時に、磁力で引き付ける

ことで装甲を気体で纏い、透明なモビルスーツと化すことが可能なのだ。

“アルテミス”は、四六時中“傘”を展開しているわけではなかった。

“デイフェンド”の持つ「A, L」とて、使用可能な稼働時間は五分間を切るほどで、それを稼働することで消費するエネルギー量は膨大だ。対して“アルテミス”は巨大な動力源を所有しているが、だからといって、平時にバリアを展開し続けることは、エネルギーの無駄使いに他ならない。

友軍と認められない熱源が迫れば、その射程圏内に入る前に“傘”を展開すればよい。——それが、長年「不落」を称号として来た“アルテミス”軍事上の通例であった。

だが、そんな警備体制では——完全にステルスとなった“ブリッツ”の侵入を防ぐことまでは出来なかった。姿を隠せるその性能に虚を衝かれ、敵モビルスーツの、“アルテミス”の傘”内部への侵入を許した。

“リフレクター”
“隠密潜航に成功した“ブリッツ”は手当たり次第、かつ正確に“傘”を作り出す装置を破壊し、光波シールドを撃ち破った。

不落を誇る“アルテミス”が、陥落した瞬間だった。

食堂に拘束されていた「アークエンジェル」のクルー達は、その爆撃音を聞いた途端に目の色を変え、周囲の警戒に当たっていた武装兵たちを全員で蹴倒し、即座に艦橋へと向かった。

各員が持ち場に着き、ノイマンが操舵席へ着席すると、時を同じくして、マリユーナタル、ムウの三人も艦橋へと合流した。

「艦長！」

「アークエンジェル」緊急発進します！　ここはもう持たないわ！」

——何なんだ、この衛星は。

それは、クルーの誰もが思ったことだろう。

——何が鉄壁だ、何が難攻不落だ。どうしてこんなにも、簡単に……。

——何が難攻不落だ、何が難攻不落だ。どうしてこんなにも、簡単に……。

キラは既に「ストライク」へと駆けつけ、そのコックピット内に潜り込んでいたようだ。通信越しに、懸命にミリアリアや、その先にいるマリユーナタルへと訴えている。

「しかし、このままでは本艦は、ただの的になります！」

その言葉を受け、キラは周囲を見渡した。

「ストライク」の隣には、いまだパイロットが戻らない「デイフェンド」が——静か

に、空々しく立ち聳えている。

だが、遙か遠方には潜入した「ブリッツ」に後続するように、襲撃に加わる「デュエル」や「バスター」の機影も捉えられている。

「傘」の消え失せた「アルテミス」など——彼らにとってはひとたまりもない、ということか。

このまま停泊しては——「アークエンジェル」も彼らの餌食になる。でも、だからといって、このまま出航を選んでしまえば……。

「あの子を、見殺しにするんですか!？」

キラから放たれたにべもない質問に、マリューは痛恨するように下唇を噛み締めた。

何度もこの艦を守って来たステラを、今度は、この艦の方から見殺しにするのか？

「くっ……」

人命か、退避か、マリューは悩んでいた。

——どうしろっていうの。

このまま出て来る保証もないあの少女を待ち、いつ爆発するかもわからないここで、いつ襲われるかも分からない無防備な状態で待機して、こここの碌でもない地球軍士官達と共に、心中を凶れというのか。

そんなことは出来るはずがない。この艦にはまだ、多くの避難民間人が乗っているの

だ。

——ステラだって、民間人のひとりでしょう！

マリユ一の感情がそう訴えたが、理性は言った。——これは、戦争だ。

彼女が民間人であるからこそ、その命ひとつとこの艦と、天秤に掛けるわけにはいかないのだ。

マリユ一はしばらく沈黙したが、顔を上げると、決断したように指示を飛ばした。

「＼アークエンジェル＼は——発進します」

クルー達は戸惑った様子を見せたが、ぐつと息をのみ、艦長の指示通りの責務を果たし始める。

その瞬間、キラからの通信が、一方的に遮断された。

「あんまりだー！」

キラは「ストライク」のコックピット内で苛立っていた。

だが、「ストライク」に乗ったこの状態で、ステラひとりなど搜索できるはずもない。そもそもキラは、彼女がどこに連れていかれたのかすら、分からないのだ。

焦っていたキラは、次々と「アルテミス」を爆撃していく——「ブリッツ」を発見し、目の色を変えた。

「やめろおおおっ！」

ソードストライカーを装備した「ストライク」が、対艦刀シユベルトゲベルを振りかざして、「ブリッツ」へと急迫していく。

「ストライク」のコックピット内に、再び「アークエンジェル」から通信が入った。通信主は、ミリアリアだ。

「キラ！ もうダメよ、逃げて！——「アルテミス」はもう、すぐに墜ちるわー」

「アルテミス」のあらゆる開口部から、爆炎が噴き出している。

次々と誘爆の連鎖が巻き起こり、花開くように鮮烈な豪炎がその表面を覆ってゆく。ミリアリアは、ステラに助けられた立場にある。

そんな彼女が、ステラを残して逃げるしかない、と指示しているのだ。——そこにどれだけの苦渋があつたのか、キラにもわかる。ミリアリアが、その決断をするのに、どれだけ悩んだのかも……。

「ちくしょう……っ！」

キラは機体を翻し、やむを得ず「ストライク」が「アークエンジェル」の甲板へ着艦する。

振り返った先には——

何もかもが、激しい業火に飲み込まれてゆく。「アルテミス」が広がっている。

「月の女神」は——真つ赤な炎に彩られ、それ自体が、赫々と輝く太陽のように

燃え盛る。

「『ダイフェンド』が……………」

一帯を吹き荒ぶ熱波に煽られ、覆うような灼熱に取り込まれていながら、キラが遠目に見た金色の機体は——ぴくりとも動かない。

寂しく、虚しく、パイロットを待ち続けるように、ひとりその場に立っている。

——ステラは『あそこ』に、戻って来れなかったのか……………。

ザフトの『ガンダム』達も撤退し始めている。

衛星に限界が訪れたのだ。

ザフトの機体が離脱したその瞬間、真空の暗闇に——大きな爆炎の花が咲いた。

アルテミス月の女神は、完全に陥落したのだ。

「そんな……………」

『アルテミス』が、爆発した。

キラは愕然として、それが宇宙に散ってゆく光景を目の当たりをしていた。

あの爆発で、何人が焼け死んだだろう。

ザフトの襲撃によって、何百人の人間が殺されただろう。

だが、そんな人数など——この時、キラには気にならなかった。

——手を伸ばそうとしたのは、たったひとりの命だけだったのだから。

「ストライク」のコックピット内と同様に、「アークエンジェル」の艦橋でも、同じような重い沈黙が流れていた。

——あの状況では、仕方がなかった。

こうして「アークエンジェル」は無事で、乗っていた民間人も救われた。もつとも少ない犠牲で済んだのだから。

だが、そう割り切ってしまう「自分」を認めてしまつたら、ひどく恐ろしい気がした。

ひとりの少女を見殺しにして、平穩無事を獲得した。

こんな結果を招いて——良かった、とは誰ひとりとして口からこぼさなかったが

——間違っていた、とも、誰ひとり発言しなかったのは事実だった。

その時、チャンドラが、む、とレーダーを覗き込んだ。

「……………？」

艦のレーダーに、見覚えのある熱源反応が感知されている。

彼はすぐに重い沈黙を破り、その声を張り上げるようにして叫んだ。

「報告！——アルテミス」爆心地より——モビルスーツの熱源を確認!!」

アルテミスだったモノの残骸が、四方へと飛散し、そこから発生されている磁場が、「アークエンジェル」のレーダーを幾分狂わせていた。

数は、一機だ。

顕現したモビルスーツの機種までは即座に特定できないようが、チャンドラが必死になつて解析を始めている。

キラは、その報告にハッと顔を上げ、爆心地となつた虚空を見据えた。

「あつ……………」

目を細め、キラは遠方に、必死で焦点を合わせた。

「アルテミス」爆心地に——ちっほけな「傘」が出現している。

「これは……………!?!」

艦橋にいた一同が茫然と顔を見合わせ、やがて、最高の笑みを作り出す。

もはや、機種の特定など必要ない。

あれは。

あんなことが、出来るのは——。

「機種特定!」 「デイフェンド」の生存を確認! —— 「アルテミス」の爆発に巻

き込まれたようですが、機体は無事です!!」

驚くべき現実には、艦橋の一同が目を見張っている。

巨大軍事衛星の、陥落と崩壊—— 凄絶なまでの爆発に、「デイフェンド」はその

中核で巻き込まれていながら、生き延びていた、という報告が上がったのだ。

にわかには信じられた話ではなかったが、モニターに映し出された『デイフェンド』は大の字の姿勢を取り、機体の周囲に“A, L”——つまり、光波防御帯を発生させている。

全方位光波バリアが——『アルテミス』の爆発から、あの機体と、その搭乗者パイロットを守護まもつたのだ。

——良かった。

そこで初めて、その言葉が吐き出された。艦橋が、一斉に安堵の賑わいを起こす。歓声が上がリ、ツール達が思わず顔を見合わせ、ほっと胸を撫で下ろした。

へおわった。……………かえる

通信先から流れて来たステラの声に、ミリアリアは、思わずその目に大粒の涙を溜めていた。

——無事で、良かった……。

——本当に……………。

だが、次の瞬間。

少女を守った『デイフェンド』の光波防御帯が、弾け飛ぶようにして消滅した。

途端、『デイフェンド』のフェイズシフトが落ち、その機体の四肢は、まるで搭乗者が気を失ったかのように脱力し、ぶらんと投げ出される。

「ステラ!?」

甲板から飛び立った「ストライク」が——すぐに「デイフェンド」の救助に向かった。

機体は無事に見える。

ステラもまた、肉体的に、そして精神的に無事で良ければいいが……。
陥落した「アルテミス」から逃れた一同は——それを切に願った。

ラウとアスラン、ふたりには本国の評議会からの出頭命令が下され、
「ヴェサリウス」にて「プラント」本国へと帰還していた。

ふたりは軍事ステーションから離れるシャトルに乗り込んだのだが、そこには既に、
ひとりの先客がいた。

ラウは空々しいまでの笑みを浮かべて、その男性に敬礼する。

「ご同行させていただきます。ザラ国防委員長閣下」

スーツ姿の男性は、四十代半ばの鋭い目をしている。

名をパトリック・ザラ——アスランの父親だ。

三人を乗せたシャトルが出発する。ラウはパトリックへと一枚のレポートを手渡し、
憚るようにして言葉を続けた。

「こちらが、我が隊がヘリオポリスで掴んだ地球軍の新型艦“アークエンジェル”および
新型MS“ストライク”“デイフェンド”の調査報告書であります。ご多忙の所、お
手を煩わせませんが、ぜひ閣下にも目を通していただきたい」

クルーゼの声は、何かをたくらんでいるような声調をしている。

パトリックは流し目でそれを見ながらも、強引にレポートを受け取ると、それに一応
の目を通し始めていく。

このレポートは、ラウが手掛けたものであるが、そこに記載されている情報のほとん
どは、アスランから得ているものでもあった。

その内容は、大まかにはこうだ。

第一に、ヘリオポリス内部で新型艦“アークエンジェル”が開発され、この艦は恐る
べき戦闘能力を持っている、との情報。

第二に、新型“G”のうち、二機の奪取に失敗し“ストライク”“デイフェンド”が
現在、地球軍の手に渡っていること。

第三に、“ストライク”を操縦するパイロットはコーデイネーターであり、かつての

アスランと親睦があった人物である、ということ。

これに目を通したパトリックは、何やら思念顔を浮かべた後、胸ポケットからペンを取り出した。

するとおもむろに、第三報告の部分だけを、黒インクで乱雑に塗りつぶし始めた。

これを見たアスランが目を見開き、啞然とする。

「問題は、地球軍がそれほど高性能な機体を開発した、ということにある。それに乗るパイロットのことなど、どうでもいい」

言いながら、パトリックはアスランを冷たい目で一瞥した。

とても血の繋がった父子とは思えないほど、よそよそしい会話だった。

「主観的な報告を提出するなアスラン。かつてのおまえの友が、"ストライク"のパイロットだろうと、評議会には全く関係がない」

「はっ………申し訳ありません」

「敵モビルスーツを操るパイロットのことなど、私にとってはどうでもいいことだ」

——どうでもいい？

アスランは返す言葉を失った。

アスランが父への報告に挙げたのは「ストライク」のことだけだが……

——「デیفエンド」のパイロットの正体を知った時、父上はまた、同じ台詞を言え

ますか……？

アスランは父に真実を言い出せず、シャトルの窓から、離れていく地上の景色を眺めていた。

“アークエンジェル”は——当初“アルテミス”に寄港することで、艦に補給を受けようとしていた。

そういう経緯があつて、あの軍事衛星に寄港したには、寄港したのだが、補給不足の問題は、まったくと言っていいほど解決しなかった。

なにしろ“アークエンジェル”は入港と同時に拘束されてしまったため、食料も物資も、なにひとつ、補給が終わっていない。むしろあのままザフトが攻めて来なければ、再出港することさえままならなかったかもしれないほど、艦は追い詰められていたのだ。

“アルテミス”に寄港したことで得たものと言えば、唯一、ものというより結果となるが、“アルテミス”崩壊の余波が、今現在ザフト艦の索敵機器を狂わせている、とい

う事実だけだろう。

あの宙域は、それまで稼働していたアルテミス残骸の磁場が飛び交い、電波など、ほとんど通らないほど荒れているはずだ。

だが、得るものの代わりに、損失してしまった結果もある。

ステラ・ルーシエが——昏睡状態から、目を覚まさないのだ。

“アルテミス”崩壊を乗り越えた“ディフェンド”から降ろされた時、ステラは既に気を失っていて、即座にその身を案じたムウの冷静な指示によって、医務室へ運ばれた。やはり、あの衛星の爆発が、彼女の乗っていた機体に相当の衝撃を与えていたのだから。

たしかに“ディフェンド”でなければ、あの状況からの生還など不可能であっただろうが、もともと対MS・対艦用のスペックで設計されていたであろう“ディフェンド”の光波防御帯では、軍事衛星の爆発を凌ぐには、やはり無理が祟った。

ステラが運ばれた医務室には、キラや他の学生達が同伴しており、ステラを置いての出航を決断した、マリユールの姿もあった。

「ん……………」

診察している中、医務官が眉をよせ、やがて、その表情を青ざめさせた。

「ど、どうしたんです?」

心配そうに、キラが思わず訊ねていた。

医務官が答えた。

「この子、ステラ・ルーシエって言ったかい？ ……おかしいなあ、照合してみたけど、そんな女の子、ヘリオポリスの住民データでは見当たらないよ……。それに、この子の身体……いったいどうなってるんだよ……」

それを明らかにするのが医者の仕事なんじゃないんですか、と不意にツールは訊ねようとしていたが、露骨に睨みかえされそうだったので、喉まで出かかったその言葉を咄嗟に飲み込んだ。

「どうなってる、って………どういうことですか？」

ミリアリアが訊ねると、医務官は厳しい表情を浮かべ、険しい顔で言った。

「……………この子の経歴は!? 誰か、この中に知ってる人はいないの?」

ガラツと変わった医務官の剣幕に気圧されるとように、一同の視線が、キラへと向いた。

当然の反応だったが、キラは慌てたように尋ね返す。

「経歴って………どうしてそんなことを聞くんです? 今はステラが無事なのかどうか、それをまず確かめてください!」

ステラは少なからず、身体に火傷を負っている。それだけでなく、一向に意識も回復

しない。

兄貴分のようなキラが、心配するのは当然のことだった。

「それも山々なんだが、この子の身体から、得体の知れない薬物反応が検出されてるんだよ」

「え……………!!?」

キラは返す言葉を失った。

それはミリリアアたちも同じようで、唐突に突き付けられた言葉に、絶句している。

「……………まあ、人間の身体ってのは不思議なもので、ある程度の有害物質には抗体が働くようになっている。でも、この子の身体から検出された薬物の量は、普通じゃない！ さいわい、禁断症状を起こすほどの量は既に残ってないみたいだけど、いつ、こんなものを投与した？ もしくは、投与されていたんだ？」

「わ……………わかりません。わかりませんよ、そんなの」

「おまけに身元確認も取れないんじゃないじゃあ、正体も疑っちゃうよ」

ステラが、薬物を？

キラには、その言葉の意味が分からなかった。

その事実には驚いたのだろう、それまでずっと壁に体重を預けていたマリユーも、前に進み出て、ステラの顔を覗ける位置へとやって来た。

はあ、と医務官が呆れるような溜息をもらした後、こんなことを訊ねた。

「ステラ・ルーシエ、つていうのも偽名だろう？　この子の本当の名前は何か？　——きみ、この子のお兄さんの、昔からの友達つて言つてたよね。その友達の名前は」

矢継ぎ早に吐き出される質問の数々に、キラは困惑した。

友達の名は「ザラ」だ。でも、その名前は……………。

キラが言葉に詰まっていると、さらに医務官が伝えた。

「あのねえ、医者としては、この手の患者は既往歴きおうれきが分からないと困るんだよ。まして薬物投与の経験のある患者が相手じゃ、下手な治療は、副作用とかで命に関わることだってあるんだ」

「え……………」

「怪我を負つたらコーディネーターもナチュラルも、医者にとっては一概に患者なんだ。そのための処置が必要だ」

真摯な医務官の目が、キラの瞳を見据える。

このまま治療の方法が分からなければ、ステラは危ないというのだ。

「改めて訊くよ。——この子の、本当の名前は？」

キラは、しばし俯いて沈黙を保った。

——どうすればいい。

ステラはアスランの妹で——「ザラ」という名はプラントで有名だが、地球においても、悪い意味で有名だ。

ましてこの「アークエンジェル」は地球軍の戦艦であり、「ザラ」という名は、政治的に重要な名前であることは間違いない。

——利用されは、しないだろうか………？

本名を明かすことで、ステラに危害が及ぶかもしれない。

でもこのままでは——ステラは治療すら受けることができなくて………？

「ッ………！」

やがてキラは意を固めたように、顔を上げた。

この子の、名前は——

「——「ザラ」」

それが、彼女の本名。

そういう、名前です。

キラが言いきり——

それを聞いた医務官と、マリユーの背筋が凍り付いた。

『ノスタルジア』

結局、寄航先の「アルテミス」で補給を受けられなかった「アークエンジェル」は、深刻な水不足に直面していた。

月本部へと赴く前に、艦内で餓死者を出すわけにもいかない。この問題は早急に解決しなければならぬ案件であるが、「アルテミス」が崩壊した今となつては、月本部への航路近隣に当てになる補給口などありはしない。

補給が受けられないのであれば、迅速に月本部へと向かう他ないが、デブリベルトに入ったことで、ムウが提案したことがあつた。

宇宙に漂う「廃棄物」の漂着場——「塵の墓場」たる、デブリベルト。

そこで、セルフサービスのように「補給」を受けよう、という妙案である。

と云うのも、当のデブリベルトに漂う廃棄物の中には、宙域での戦闘によつて駆逐された戦艦の残骸なども存在し、それらがすべて、地球の引力に惹かれてこの宙域に集まっているのだ。つまり、ムウはここから、今の「アークエンジェル」に必要なものだ

けを、失敬しようと言うのだ。

みずからが、ゴミを漁る盗掘者^{カラス}となつて――。

だが、補給とは詭弁であり、やっていることは略奪に近しかった。

このデブリベルトには……三年前、血のバレンタインで崩壊した「ユニウスセブン」の残骸が、多く流れ着いているのだ。

「プラント」は天秤^{ヨウケク}棒型と呼ばれる、植民衛星の形状を取っている。――宇宙に浮かんだ、砂時計といつてもいい。

その砂時計が、支点から真つ二つに叩き折られ、崩壊した残骸^{だいち}が、このデブリには流れ着いている。

遺体すら残らない殺され方をされた、死者たちの墓標。何百万人もの人々^{コーデイナー}が永眠する、悲劇の大地。ナチュラルにもコーデイナーにとつても、この場所は、自戒のための遺跡であり続けるだろう。

だが、そこでは唯一、凍り付いた何万トンもの水が発見されていた。

それは今の自分たちが、喉から手が出るほど必要としているものだ。荒廃した「ユニウスセブン」に立ち入ることに、キラの抱いた心理的な抵抗は甚だしいものであったが――これも「生きるため」に必要なことである。

キラは「ストライク」を駆つて、ユニウスセブンの残骸へと、足を踏み入れた。

まるで不可侵の聖域を侵しているような罪悪感を憶えながら、暗んだ顔を浮かべている。

同時に、こんなことを思った。

「ステラは眠っていて、良かった」

我ながら、不謹慎な発言をしている。

“ユニウスセブン”は——ステラの母が、地球軍によって殺された場所だ。

そしてそのステラは今、無事ではないからこそ、医務室で眠っているというのに……。

キラの心境はこの時、とても複雑だった。

——ステラには、いつも元気で、そして「健康」であり続けてほしいと思っていた。

昔から純粹で、無垢で、無邪気な女の子だった。

だから本当は、モビルスーツになんて乗ってほしくない、戦争になんて巻き込まれて

欲しくない、というのがキラの本音だ。

でも今の現実には、そのような切な願いは、簡単には受け入れてもらえないようだ。

だから最低限、ステラのことは——「守ってあげたい」と思っていた。怪我をす

るようなことだけは防いであげたいと、決めていたのだ。

“アルテミス”では、そうしてやれなかった自分を悔いたこともある。

——でも。

今だけは、怪我でもなんでもいい、眠っていて欲しい。

「それでも今だけは、起きないでいて欲しい」

目の前に広がる光景を、突きつけるようにして見せたくないから。

彼女の母が殺された、この忌まわしき凄惨な景色だけは、絶対に……。

——今は大人しく眠っているのが、正解だよ。

キラがそう考えていると、*「ストライク」*のコックピット内に、電子音が響いた。
敵影か？

キラが慌てて周囲を見渡せば、メインカメラには、曳航している救難ボードが捉えられていた——。

「ザラ」——。

その名を聞いてまず浮かび上がったのは、プラントの初代評議会国防委員長である——
「パトリック・ザラなる人物であった。」

すくなくとも、ステラの本名を知ったマリユートの頭の中では、その人物が浮かんだの

だ。

パトリック・ザラは——かつてより、ザフトの設立を主導した中心人物で、つまり、極めて軍事に深い関わりを持つ「ブランド」側の人間だ。

実際に、ザフトと戦う自分のような地球軍の者であれば、その名を知らぬ者はいないのではないだろうか？

また、パトリックの「ナチュラル嫌い」も相当有名であり、コーディネーターこそが新たな種とする「選民意識」の高い人物像として、地球軍から持たれている印象はきわめて悪いことも確かだ。

——そのような人物に、よもや「娘」がいたというのか？

この事實は、マリユーの口から、あくまで内密にムウと、ナタルにだけ報告された。

「アークエンジェル」のクルーの中には、おおよそ、コーディネーターに対する激しい敵愾心を抱いている者はいない。みなが平和を目指している、などと形容すれば、それは陳腐な言い草でしかないが、すくなくとも「コーディネーターを滅ぼせば戦争は終わる」などという野蛮な考え方を持っている人間はいないだろう。

キラの存在も認められている。——それは彼が「戦ってくれているから」という理由があつてのことかもしれないが、そんな恐ろしいことは考えたくない。

だが、だからといって「ザラ」という名を全員の前で公表するのは、あまりに危険す

ぎる。

民間人もいまだ乗り合わせている今、その名前に恨みのある人間とて、いるかもしれない……。

マリューはひとまずこの件を保留にし、ヘリオポリスの学生達にも、この一件についての口外を憚るように伝えていた。

医務官もまた、ステラの名前が「サラ」だろうと「ザラ」だろうと、ひとりの患者として、彼女を手当てすることは心に決めていたようで、懸命な治療の結果、なんとかステラは、一命をとりとめたのであった。

「——つくづく君は、落し物を拾うのが好きなようだな」
ステラ・ルーシエのことですら大問題だというのに、これ以上、厄介ごとを持ち込まないでくれ。

恨めしそうな目でキラを斜めに見るナタルの口調には、苦々しさと、ほんの少しのあきらめが混じっていた。

“ストライク”は————“ユニウスセブン”付近の宙域で曳航していた救難ボートを拾って、帰投していた。

——また、だ。

キラは、ヘリオポリス崩壊の折、フレイ・アルスターの乗っていた救難ボートもまた、このようにして平然と戦闘艦であるこの“アークエンジェル”に拾って来た。

道徳的には決して非難できるような行為ではないのだが、ナタルが指摘したいのはその件についてだろう。

「しようがないでしよう、あのまま放っておけていうんですか」

以前聞いたことがあるような返事をそのまま返されると、呆れたようにため息をついて、ナタルはそれ以上を言及しなかった。

「開けますぜ」

マードックが言うと、救難ボードのドアロックが、音を立てて解除された。

念のため、周囲に構えた兵士たちが銃を構える。

中から出て来たのは、キラにはどこか見覚えのあるような、ピンク色の球体だった。

〈ハロ・ハロ〉

それは間抜けな音、いや、声を発しながら、ぱたぱたと耳ではばたくように漂っている。

その後方から、波打つようなピンク色の長髪が特徴的な——優艶で、それでいて、またどこか幽艶な、浮世離れた少女が姿を現した。

キラと同世代くらいの少女だ。その姿、佇まいはとてもふんわりとされていて、不思議と質量に欠けている。白く透明な肌が、シャボン玉のように儚く見えた。

「おつかれさまです」と周囲のみなに声をかけた少女は、しかし、そこで自分が銃を向けられていることに気付いたのだろう。いや、少女の信じられないほど可憐な姿に見とれているのか、兵士たちもぼつかりと口を開けて、既に銃など構えてはいなかったが、すくなくともその手に握られた機銃が、自分に向けられていたものであることを理解したように、「あら？　あらあら？」と声を漏らした。

「まあ、ここはザフトの船ではありませんの？」

容姿に見合ったおっとりとした口調で、少女はキラの制服を見据えながら言った。

銃を構えられていると理解した上でこの柔らかな応対は、ある意味で畏敬できるものがあつた。

「え、あの……きみは？」

彼女を救助した張本人である、キラが訊ねていた。

怯えることもなく、その少女はなおも、おっとりとした声で答えた。

「わたくしは——ラクス・クラインですわ」

解答に、一同の沈黙が流れる。

一泊おいて、ナタルがため息をついたのがわかった。

その隣にいたムウは、

「なんだ？ この艦は『プラント』側の大物を引き寄せる、特殊なマグネットでも搭載してんのか？」

と、冗談っぽく、どこか皮肉ったようにこぼした。

ラクス・クライン——

キラが拾ったその少女は——現『プラント』最高意思決定機関である、最高評議会
の議長を務める男の、その娘であった。

さて、ここに来て『アークエンジェル』は——政治的な意味で、世界の均衡さえ崩しかねないほどの大物の娘を、ふたりも乗艦させていることに気付いた。

ひとり、中立コロニー『ヘリオポリス』で偶然保護し、モビルスーツに乗せて戦わせてしまった少女——名をステラという、最高評議会国防委員長パトリック・ザラの娘。もうひとは、『ユニウスセブン』の追悼慰霊の事前調査にやって来た民間船に乗って

いたが、地球軍の船に臨検され、危機を感じて救助ボートで脱出させられたところを、偶然保護された少女——名をラクスという、最高評議会議長シーゲル・クラインの娘だ。不思議なもので、この娘たちには「ぼんやりしている」という、意外な共通点があげられた。政治的に重要な責任を持つ議員達の娘だ、凜然とした佇まい程度は装えるよう、普通であれば教育されていそうだが……。

だが、ステラの方は負傷の度合いが激しく、今もまだ、医務室で眠っている。

——どうすればいいのだろうか……。

マリューは最近、この言葉に悩まされることが多いのではないかと思えていた。

こんなことを考える時点で、自分は決断が遅い。艦長には向いていないのではないかともしえるのだが、彼女が悩んでいるのは、

「彼女たちをこれからどうしていくか」

の、問題についてだ。

「アークエンジェル」はこの先、日本部以外への寄港予定はない。そのため、彼女達をどこか途中で、匿うように脱出させることはできない。

だからといって日本部へと連れていけば、悪い意味で大歓迎されることは明らかだ。

あのふたりの身柄が地球軍へと渡れば、プラントと地球の外交上の——
これ以上ないほど強力なカードとして利用されることは、疑いようがない。

「つらいわね……」

それが戦争で、それが軍人がやるべき行動だと割り切れればそれまでだが、そんな大義より、人間としての苦悩が先に立つ、マリユ・ラミアスであった。

ラクス・クラインを保護したキラは、展望デッキへとやって来ていた。そこは「アークエンジェル」艦内から、宇宙の様子を一望できる空間だった。

静かな青色のライトと、暗闇の外から差し込む月の穏やかな光が——その空間を、神秘的に彩っている。宇宙に散らばる星のひとつひとつが照明のように輝いて、キラの立つ場所を映えさせている。

ガラスに手を当てて、キラはひとり、茫然と外の様子を眺めていた。

——ひどい景色だ。

綺麗な景色のはずなのに、キラの視線の先には、核ミサイルによつて壊滅した「ユニウスセブン」の大地が広がっている。

三年前までは、ここに何百万人という人間が、平穏に暮らしていたはずなのだ。

緑が豊かな、平和な農業プラントのはずだったのだ。

「……………」

キラが物思いに耽っていると、背後の廊下から、こつ、こつ、と小さく近づいてくる物音が聞こえた。

訝しんだようにキラが背後を振り返ると、そこには、

「ステ、ラ……………!?!」

松葉杖をついて歩く、痛々しいまでに包帯を巻いた、ステラの姿があった。

キラはぎよつと目をむいて、慌てて彼女の元へと駆け寄った。

「ちよ、何やってんの！ ダメじゃないか、医務室で寝てなきゃー!」

アスランならこう言っただろうな、なんてことを考え、咄嗟に兄の代わりに怒鳴りながら、ステラが松葉杖を握る手とは逆の方の肩に、キラは自分の肩を貸した。

肩を貸した瞬間、ステラがその場に崩れるように倒れ込むのがわかった。キラはその場に踏ん張り、二人分の体重を支えた。

——ほら、言わんこっちゃない……………!

ゴトン、という音を立てて、ステラの腕から離れた松葉杖が、床に横たわった。

「ダメだよステラ、医務室に戻ろう、ね?」

「やだ」

即答され、わがままな妹分に、キラは思わず額を抑えた。

「あの医務室のひと、おおげさなだけ。ステラ、大丈夫だから」

「大丈夫なもんか、ほら、早く」

たしかに、コーディネーターはナチュラルに比べれば、身体づくりは頑健だ。病気にもかかり難いし、自然治癒力も高い。

どうやら、あの医務官は心配性の過ぎる部分があるらしい。松葉杖が必要なのは、あくまで身体が疲労しているからであって、特段彼女が足をどうにかしているわけではない。そこまでは配慮の言葉で済むのだが、いくぶん包帯を巻き過ぎだ、というのはキラもパツとステラを見た時に同意した。

だが、この時のキラは焦っていた。

まさかステラが——「ここ」に来るとは予想もしていなかったのだろう。

色々な思惑があつて、キラはステラを医務室に返そうと必死になった。

その時、

「……………見せて」

ステラから放たれた言葉に、キラは——ハッと息をのんだ。

「“ユニウスセブン”を——ステラに、見せて」

沈黙が流れ、キラは言葉を失った。

すると、ステラはキラの肩を鬱陶しがらう強引に離れると、弱々しい足取りで、自

力でデツキへと跛行はこしていく。

ステラ……

キラは呆然と、弱々しいその背中を目で追った。

ステラがデツキへと辿り着き、外の様子を見ている。

キラは思い出したように、床に落ちた松葉杖を拾い上げると、恐る恐る、彼女の隣に位置どった。

「……………」

何も言えなかったわけではない。キラは、何も言わなかった。

第三者の言葉とは——時に軽率だ。時に当事者の機微や感情を切り裂くようにして飛び去ってゆくこともある。

被害などに出会って、その本人にしか理解できない、他人には、むしろ同調なんてして欲しくないことだって存在する。

だからキラは、何も言わなかった。

外を、母の消えていった場所を眺め、涙すら出て来ないステラの横顔を見て、言葉をかける気にはなれなかった。

「知らなかったの」

突然、ステラが告白した。

キラは驚いて、彼女の横顔を見据えた。

「え？」

「ステラ、お母さんのこと……………忘れてたの」

キラはその言葉に、耳を疑った。

ステラは外を眺めながら、切れ切れにしかうまく話せない自分のその言葉を、必死で、キラに伝えているようだった。

「知らなかった。ステラに、お母さんがいること……………ステラはずっと、無駄なこととはぜんぶ忘れるようにされてたから……………」

涙など、出ないのではない。——出せないのだ。

「ユニウスセブン」に「母」がいた実感が沸かないから。——ステラに「母」という存在がいたことを、これまで忘れてしまっていたから。

キラは愕然として、ステラの方を向いた。

「無駄なことって、なんだよ……………お母さんのことが、無駄だつていうのか!？」

そんな悲しいこと——。

「ステラに必要なだったこと。戦うために必要だったこと。必要でないものは、全部、いらぬもの」

ステラの頭には、ひとりの少年の姿が、いまでも鮮明に残っている。

それは偶然の出会いで、でも、たしかに自分を「守る」と言ってくれた少年だった。でも、気が付いた時には、自分は、その少年の存在を忘れていた。

だからわかった。

忘れるはずのない暖かな記憶を、これまでの自分は——他人によって、勝手に奪われていたのだ、と。

戦うために必要のない記憶はすべて、頭から消去されていたのだと……………。

少年のこともそう。

母のこともそう。

自分に家族がいたなんて、気づかなかった。

「だから涙も、出て来ない——」

幼いころは、レノアはたしかに——触れ合ってくれた存在のはずなのだ。

彼女は農学の研究者だった。ロールキャベツが好きで、性格は控えめな、でも、まぎれもない愛情を彼女にふりそいでくれた。

「ユニウスセブン」で暮らしていたステラは、ずっとレノアと共にいて、パトリックよりも、アスランよりも、家族の中の誰よりも、レノアと共にいた時間が長かった。

——なのに、その死を想った時、涙すら出て来ないなんて。

あんまりじゃないか……………。

キラは、沈痛な顔を浮かべている。その拳は、固く握られていた。

「だが。……なんで、そんなこと……」

無駄なことは全部、忘れるようにされてたから。

キラの脳裏に、ステラの言葉が蘇る。

——されてた？

誰かに、頭をコントロールされていた、とでもいうのか？ 「薬」のこともある。

分からない、理解してあげられないことが多すぎる。

——キラにとっては、この空白の三年間に、この子にいったい、何があったんだろう

………？

キラにはそれが、わからなかった。

「怖い……」

ステラの横顔が途端にひずみはじめ、肩が震え出す。

「怖いの………」

母なんて、いないと思っていた。

ステラ・ルーシエは—— “ガイア” ならびに “DESTROY” を操るための—— “パー

ツ” に過ぎない人の形をした消耗品だ。

いくらでも替えが効くはずの——地球軍の適合パイロット、エクテンデット。

それが、ステラ。

それが、当たり前だと思っていたのに、ステラには母がいた。ザラという名前もあった。

ステラの知らない「わたし」が——そこに在る。

「ユニウスセブンを」見ていると——ステラが、ステラの知らない「わたし」に染められていくようで、怖くなる。

『まるで感情や慈悲のない、冷酷な殺戮兵器のようではないか！』

男の言葉が蘇る。

ステラが怯え出した。

その胸に、自身の両手を当てた。

——痛いところには、手を当てるといいの。

ステラが以前、自分に、そう言ってくれたことを思い出すキラであった。

いま痛むのは、心だろうか。

「ひとを殺した。たくさん殺して来た……！」

「ステラ……！」

「容赦なんてできないって、そんな風に育てられて来たから……たくさん殺した……」
アルテミス「の……」

ジェラードに捕まった時、気が付けば自分は、それを取り囲む六人もの武装兵を手にかけていた。何も考えず、何も躊躇わず、本当に、標的を与えられたロボットのように殺していた。

——そう育てられて来たからか？

違う。

自分を育てて来たのは、優しい母、レノアなのに。

交錯する、矛盾する記憶が、ステラを困惑させた。

ステラは——あの時の、残酷な自分が認められないのだ。

怒りに支配されて、眠っている「わたし」^{ステラ}が抑えられなかった。

ステラの知らない「ステラ」が現れて、アルテミスで——「ステラ」^{ソイツ}は大勢の人間を、まるで躊躇いもなく殺したのだから——。

キラは唾然として、しかし、震える少女の肩に、優しくその手を乗せた。

——誰がこの子を、こんな風にした？

——昔から無邪気で健気で、どこか危なっかしくて。

でも、そんなこの子を、誰が、何が、こんな風に怯えさせているというのだ。

「ステ、ラ……………」

“ユニウスセブン”を前にして、身体も衰弱して、きつと彼女は、弱気になっている

の
だ
ら
う。

見たこともない、今にも崩れそうな少女の姿に、キラは戸惑っていた。

「さわって」

キラが顔を伏せていると、正面からそんな声が聞こえ、はっと顔を上げた。

目の前に、崩れそうなまでに震えている、ステラの顔があった。虚を衝かれたように驚いたキラに、ステラは、自身の胸を示唆していた。

「ハハ」

「え……!?!」

ステラに他意はないことはわかっているつもりもりのキラであったが、唐突な依頼に、キラは赤面して戸惑った。

“そこが痛いから”——だから彼女は、そう言っているのだろう。

「う、うん……」

キラは内心困惑していたが、動揺している場ではないことは理性が訴えていたので、ゆつくりと、ステラの胸に手を当てた。

鼓動は激しく、怯えるように早く鳴っていた。

だが——しばらく時間が経つと、その小さな震動がゆつくりと、暖かくて、小鳥のように動いているのがわかった。

「……………あつたかい」

ステラが安堵したように、そこで、弱々しくも笑顔を見せた。

その笑顔を見て、キラも微笑みを返す。

「恩返し、だね」

「おんがえし？」

「うん、ステラ、前に——僕にこうしてくれたから」

それはキラが戦場から帰還した時、恐怖で身体が動かなくなっていた時のことだ。

「……………ネオが教えてくれた」

「うん、だからこれで、恩返し」

キラが言うと、ステラは小さく微笑んだ。

すると、身体の力を抜き、ゆっくりとその体重を、キラへと預けた。

突然のことに、驚きに目を見開くキラであったが、寄りかかって来たその身体は思ったよりも軽くて、そして、想像以上に柔らかかった。

「コーディネイター」だから——。

そんな理由で、ひどい目にもあつて来たのしれない。

彼女を傷つける結果を招くのなら、古傷を掘り返すような真似になるのなら、彼女が言い出したくない過去は、無理に聞かない方がいいのかもしれない。

キラにはステラを理解してあげることが出来なかつたが、それでも、彼女が抱いた苦しみや寂しさを受け止めることはできる。

ゆっくりと――

その小さな背中に手をまわし、キラはステラを――抱き止めていた。

『エクステンデット』

『最適化』とは――

生まれながらにして、ナチュラルとは比肩できない卓抜した反射神経や身体能力を持つコーディネイター達。彼らが操る高度なモビルスーツの操縦に対抗するため、地球軍で極秘裏に研究が進められた強化人間――『エクステンデット』に対して施される、特別な強化措置である。

エクステンデットと呼ばれるパイロット達には、人間が本能的に持っている恐怖心に対して、あらゆる制御が掛けられている。云うなれば、恐怖感覚が人為的に封印されているのだ。

こうすることで、彼らは冷酷な戦闘兵器へと化けることができ、この他にも、精神的ストレスによる反応の鈍化など防ぐこともできる。

――エクステンデットは、戦闘用パイロットとしての「調整」の限りが尽くされている、ということ。

戦闘に必要な記憶は障害としてしか判断されず、常に『最適化』によって精神は安定され、ある種のヒーリング効果のあるベッドで仮眠を取り、無用のストレスなどを

脳内から除去することで、常に新鮮で、常に鋭敏な感覚を持った兵士として、活躍が見込めるようになっていたのだった。

展望デッキで「ユニウスセブン」を眺めていたキラとステラであるが、一間を置いて、キラがステラの体調を気遣い医務室へ戻るよう呈した。

ステラが「ザラの娘」である以上、血のバレンタインデーが起きてから「ヘリオポリス」に現れるまでの彼女の一切の経緯は、マリユーやナタルに殊詳しく説明を求められることにはなるだろう。しかし、今は少なくとも月本部へ帰還することの方が先決であるらしい。

事情聴取は、生還すればいつでもできる、という判断だろう。

ステラに肩を貸し、医務室へと送り届けたキラは、当然として軍医の先生に「病人を連れ出しちゃダメじゃないか」といわれのない叱責を喰らった。彼女をベッドに座らせ、キラが云う。

「もう、ほんとに無理はしないでいいんだからね。モバイルスーツに乗るのだって、やつぱり、怖いことなんだしさ」

「こわい？」

と、ステラはそこで訊ね返した。

——そう。怖い。

戦争は、怖ろしいことだ。

やはり、モビルスーツでの戦闘なんて慣れないものだし、だからといって、慣れたいと思うようなものでもない。

出撃してしまつたら、それが最後だ。敵は無条件に、自分を撃墜しにかかつて来る——キラ・ヤマトという、ひとりの個人を理解しようともせず。

そのために、自分はそれを迎え撃ち、相手を墜とす……つまり、殺すことでしか、自分が生き延びる術はない。

「……………」

「キラ?」

何かを深く考え込むようなキラに、ステラが首をかしげる。

キラは改めて迷っていた。

——このままで、本当にいいのか……?」

キラは、トールら同級の友人達を守るために「ストライク」に乗り、今はザフトを迎え撃つように戦っている。コーディネイターという同胞へ、同じコーディネイターであるキラが立ち向かつて行ける理由は——今はその大義こそが、自分の正義だと信じられ

ているからだ。

——でも、ステラはどうだろう……？

確かに彼女も、トール達を友人として慕ってくれているのかも知れない。だから、彼らを守るために“デイフェンド”に乗っているのかも知れない。

だが——ステラはかつて、あの“ユニウスセブン”で暮らし、そして、核攻撃を受けた立場にあるコーデイネイターなのだ。

“アークエンジェル”は地球軍の軍艦で、この先、敵対していくザフトの兵士の中には、あの悲劇が原因になって、軍に仕官した者も少なくはないはずだ。

——例えばそれはそう……きっと、アスランのような。

恐らくはアスランも、あの血のバレンタインがきっかけでザフトに志願したのでろう。

確かな記憶の中で、戦争なんて嫌だね、と互いに話し合っていた。それでもアスランは今、前線で戦っている——核攻撃で母を亡くし、妹を奪われ、そこから軍人になる決意を固めるまでは、余人には計り知れない苦悩があったのではないか。

そしてそれは当然として——アスランの妹である、ステラにも当てはまる事例なのだ。

今のステラが味方しているのは、彼女の母親を奪った地球軍で——

敵対しているのは、彼女の故郷である「プラント」を守ろうとしているザフト軍だ。彼女の内にどのような正義があったとしても、この事実を踏まえた時、彼女が地球軍に身を寄せるのは、決して「正しい」とは云えないような気がする。「アークエンジェル」艦内にいるコーディネイターは、キラとステラのふたりだけだが——キラとステラでは、その出自や境遇が、あまりに違い過ぎている。

猶予は残されていない。地球軍か、ザフトか。

彼女の身柄はどちらにあるにしろ、本人に意思はなくとも、その存在が政治的に極めて大きいことは、覆しようのない事実なのだ。

——戦争なんて無縁の、暖かい世界に帰してあげられればいいのに……。

どうして、昔みたいにはいかないのだろう。

どうして、こんなことになってしまったのだろう。

キラの頭では、その言葉ばかりが逡巡した。

「——パパが？」

サイからの報告を受けて、フレイ・アルスターが声を上げた。

「うん、先遣隊の船に乗ってるって。こっちの乗員名簿も送ったから、フレイがこの艦に

いるってことも、もうわかっているはずだよ」

先刻、第八先遣隊護衛艦「モントゴメリ」が——「アークエンジェル」へのコンタクトを取って来た。

ヘリオポリス崩壊の折より孤立無援だった「アークエンジェル」が、ようやく友軍艦と合流できるということだ。

「まあ色々あったけど、ようやく孤立無援だったこの艦が、友軍艦隊に組することができるようになるんだ」

「アークエンジェル」はこれより先遣隊とのランデブーポイントへと向かい、月本隊と合流する。

護衛艦「モントゴメリ」の艦内には、地球軍事務次官であるジョージ・アルスター——フレイの父もいる、という連絡を、フレイは受け取ったのだ。

その言葉を聞き、フレイは、花が綻ぶような安堵の表情を見せた。

「アークエンジェル」は現れた三隻の護衛艦「モントゴメリ」「ロー」「バーナー」ド」へと乗員名簿を送信した。

その中には当然、ステラと、ラクスの名前もあった。

その名簿を見ながら「モントゴメリ」艦長のコープマンが、感心したように呟く。

「——クラインにザラの娘とは。今の「アークエンジェル」は、まるで文字通りの宝船だ」

その隣に座すスーツ姿の男、ジョージ・アルスターが訊ねる。

「クラインの娘の方は有名だが、もう一方は聞いたこともないな。よもや、パトリック・ザラの娘、などと………本当に信頼できる情報なのかね？」

「さあ、分からんよ。ただ、あの艦がそう言っているだけなのだ。この状況で虚偽報告をする必要など、どこにもない」

「なるほど。……とにかく、合流すれば色々詳しい話を聞けそうだな」

——まあ今は、なんだっていいさ。

ジョージの頭は今、それどころではなかった。心配で心配でしかたがなかった……崩壊した「ヘリオポリス」のカレツジに通う愛嬢——フレイ・アルスターのことしか、頭の中にはなかったのだから。

その時——「モントゴメリ」のレーダーに異変が発生した。

ノイズが入ったのか、画面が歪んでいく。異変を感じた管制官が計器類を調整しても、歪みは増えていくばかり。

やがて、そのオペレーターが、悲鳴にも似た声をあげた。

「これは……ジャマーか!? エリアー帯、干渉を受けています!」
「なんだと!」

先遣隊は、ザフトに発見されていた。

プラント本国より戻つて来た「ヴェサリウス」は、近隣の宙域に地球軍の艦隊「モン
トゴメリ」の熱源を探知していた。

今、この船に乗っているクルーゼ隊の隊員は、出頭命令の下されたアスランだけだ。
しかし、

「何の偶然なのだかな、これは」

クルーゼは仮面の下に、小さな冷笑を浮かべている。

宙域図を描いたパネルを見据えながら、即座に指示を出した。

「すぐに出向いて、あの艦隊を撃墜する。合流予定のラコーニとボルト隊をこちらへと
急がせろ」

「まさか、戦闘されるおつもりですか?」

アデスはその指示に難色を示した。

一度本国へと帰還した「ヴェサリウス」は、本国からの通達により「ユニウスセブン

“の事前調査に向かった民間船——それと共に、消息を絶つたとされるラクス・クラインの身柄の搜索任務に当てられている。当該任務中に別件で戦闘を仕掛ければ、本来の任務を後手に回すこととなる。

——本国の重要な通達を蔑ろにしたとして、後で責任問題になるのではなからうか？

あまつさえ、搜索の対象となっている人物は——格式高き、最高評議会議長の令嬢なのだから。

アデスが訊ねると、しかし、クルーゼはまるで恐れることもなく、あくまでビジネスライクに返した。

「ここは『アルテミス』から月本部への航路にある、つまり、やがて『足つき』が現れる可能性の高い場所だ。ポイントとすれば、あの艦隊はそれに補給を届けに来たものと判断するのが妥当だろう」

「ですが、我々は……」

「我々は軍人だよ、アデス。いくらラクス嬢搜索の任務を任されたとは云え、敵の強襲艦を迎えに出ている艦隊を、みすみす見逃すことはできはしないさ」

「は、はあ……」

アデスが曖昧な返答を返すと、クルーゼはそれを是と取り、即座に声を飛ばした。

「アスランを出撃させろ。強襲機『イージス』と——それを操るアスランの手に掛かれば、今回のステージ、いささかお遊戯が過ぎるかな……?」

私が出る幕など、どこにもありはしないかな。

クルーゼの指示の下、そうして『ヴェサリウス』が再び、戦場へと出向いた。

『アークエンジェル』艦内にも「先遣隊がザフト軍に見つかった」という報告は知れ渡っていた。

ただ、状況から見ると、発見されてしまったのは、先遣隊である第八艦隊だけのようだ。

合流地点に向かっていている『アークエンジェル』までは特定されていないため、これを幸運と見た『モントゴメリ』は「『アークエンジェル』は急速転回せよ」との通達を送りつけて来た。

だが、遙々迎えに上がって来てくれた艦隊を見捨て、ここでむぎむぎと踵を返すわけにもいかないだろう。

第八先遣隊を見捨てれば、フレイ・アルスターの父、ジョージ・アルスター事務次官

の身を危険に晒すこととなり、なにより、*“アークエンジェル”*は再び孤立無援へと逆戻りとなるのだから。

「第一戦闘配備！ *“アークエンジェル”*はこれより、先遣隊掩護へと向かいます！」艦内に警報が鳴り響くのを、キラはステラを送り届けた医務室の中で聴き止めた。目の色を変え、すぐに医務室から飛び出そうとした所を、後ろから腕を掴まれた。

「え……!?!」

それは、華奢にして、キラを力強く掴み止めるように伸ばされた、ステラの腕だった。「ステラも、いく」

「そんな、ダメだよ！ まだそんな身体なのに！」

いつものように、キラはステラを庇うようにして制す。

だが、ステラは聞かなかった。

「だいじょうぶ。だからおねがい、つれて行って」

ステラの双眸は、強い意志に満ちていた。

キラはしばし逡巡したが、意を決したように答えた。

「……わかった、一緒に行こう」

覚悟のほどを受け取ったか、キラがステラの手を取って、医務室を出る。

——だいじょうぶ。うごける……。

廊下を駆け走りながら、ステラは自分に言い聞かせるように、心の中で呟く。

——さっきは弱気になったけど、もう、立ち直れたはず。キラのおかげ……。

ひとりの娘、「ザラ」としての記憶。

戦闘用兵器、「ルーシェ」としての記憶。

ふたつの「過去」の記憶は、今もたしかに混然としている。

——でも、関係ない。

それと、モビルスーツが操縦できるかどうかは、全くの別問題。

操縦するだけなら、身体が憶えていることだ。頭では何も考えなくていい。

いつもと同じように戦場に出て、いつもと同じように敵を倒す。

ただ、それだけでいいのだ。

“アルテミス”で負った怪我は少し痛むが、さして操縦に支障の出るレベルではな

い。

このときのステラには「自分はだいじょうぶ」という漫然とした自信を持っていたのだが——結論から云えば、それは単なる彼女の思い上がりでしかなかった。

後で泣きたいほど恐ろしい目に逢うことを、このときの彼女はまだ知らないのだから。

パイロット・スーツに着替えるため、いつものように更衣室へ向かおうとしたとき、ひとつの問題にぶつかった。

女性パイロットの存在など初めから想定していなかったのか、今の「アークエンジン」には更衣室がひとつしかなかった。その時点で、おおよその見当は付くのだが、

——女性用のパイロットスーツなんて、準備されているのか？

ステラが着用できるパイロットスーツがあるかどうか、先導するキラには分からなかったのだ。

パイロット・スーツは、機体を操縦する過程において、加速度重力やあらゆる衝撃から身体を保護している。また、宇宙空間では生身では呼吸ができないため、万が一の場合には生命線となる必需品だ。たとえ着心地が悪くても、絶対に着用しなければならぬ代物である。

色々と窮屈になるかもしれないが、男性用スーツで我慢してもらうしかないのかもしれない。

採寸もあるため、キラはステラを連れて更衣室へと入って行く。

すると、中にいた——たった今パイロットスーツに着替え終わったようである——ムウがぎよつと目を向いた。

「びつくりした、心臓に悪いよ、坊主」

「すいません。あの、フラガ少佐、女の人用のパイロットスーツってありますか？」

「あー。いや、どうだろうなあ」

ムウも経験上、女性でありながらモビル・アーマーのパイロット、という人材は見たことがないわけではない。

が、やはり比率でいえば圧倒的に少ないことは確かであろう。

「坊主でさえ規格外やせっぽちだからなあ、お嬢ちゃんに合ったスーツがあるとは思えないが」

ムウがロツカーを漁っていると、白を基調とし、桃色がサブカラーになった柔和なパイロット・スーツがこぼれ出て来た。

見れば規格も通常のそれよりも華奢で、小柄な男性を対象としている、というよりは、明らかに女性を対象としているもののように見えた。

「これかな」

「え、あるんですか」

「いや、見つけたおれも驚いてる」

まさか本当に備えられてあるとは。

言いながら、ムウが苦笑した。

手にしたそれを、キラに放り投げると、受け取ったキラがムウを見たとき、その表情

から軽薄な笑みは消えていた。

「——すぐに出撃だ、出撃するからには、早く出て来るんだぜ」

「はい！」

「わかった」

ふたりの返答を受け取ると、その表情に小さく笑みを浮かべ、ムウは二人の横を通り過ぎた。

ムウが退室すると、キラはスーツをステラへと手渡した。すると、きよろきよろと辺りを見回す。

「えっ、と……なにか仕切りになるようなものは」

この更衣室には個室など存在しない上、キラが周りを一見しても、カーテンのようなものも見当たらない。

だが、隅に死角になりそうな場所を見つけたキラは、背後のステラへと指示を出そうと振り返り、嘔き出した。

「ちょっ——!?!」

幼さを残すその顔を、真っ赤に紅潮させた。

背後を振り向けば、ステラがおもむろに、着ている衣服を取っ払い始めていたのだ。

ほとんど下着姿のあわれも無い姿が視界に飛び込んで来て、思わずキラは嘔き出して

いた。

「な、なんで——！」

「？」

——急いで着替える心意気は認めるが、だからって何の恥じらいもなく……！

キラに咎められたステラはしかし、首を傾げ、キラが何を焦っているのか微塵も理解していない様子だ。

結局、ステラは何も気にしない様子でパイロットスーツに着替えてしまった。キラは自分ひとりだけが焦っている光景が馬鹿馬鹿しくさえ思えてきて、げんなりしながら着替え始める。

——僕はこんなに恥ずかしいのに……。

特段凝視されているわけでもないのだが、ひとりの女の子と、ひとつの更衣室で更衣を共にしているのだ。

そういうの慣れてないのに、緊張すると言われても、無理な話だった。

おずおずとしているキラとは対照的に、ステラはまるで平然としていて、キラが着替え終わるまで、こちらに背中を向けているキラを見つめていた。

着替えを終えたふたりは、更衣室から出、格納庫へと走った。

「キラー！」

その道中、不安げな顔をして、蒼白な顔色をしたフレイ・アルスターと遭遇し、キラの方が目が合った。

ずっと憧れていた少女に詰め寄られ、キラは思わずどきりとした。フレイは

「戦闘配備って、どういうこと？　ねえっ、パパの船は？」

パパの船？

事情を分かっているキラはきよとんとし、その後ろに続いているステラもまた、その言葉の意味が分からなかった。

「大丈夫よね？　パパの船、やられたりしないわよね？」

「えっと……だ、だいじょうぶだよ、僕達も行くから……」

事情を理解していないキラは、フレイの求めている返答を返すことはできず、曖昧に答えた。

とにかく発進しなければ、どうにもならない。キラはステラを連れ、格納庫へと走った。

走り去るふたりの背中を、フレイは見落とすことはなく、心配な面持ちで見つめ続けていた。

戦闘宙域は——「ヴェサリウス」から発進した「イーゼス」に加え、クルーゼ隊に合流した別働隊から「ジン」が数機出撃し、第八先遣隊から迎撃のために発進したモビルアーマー「メビウス」との交戦状態にあった。

既にムウの乗る「ゼロ」は出撃しているようだ。

キラとステラが格納庫へと飛び出すと、今かと待ちわびていたマードックが声を荒げた。

「遅いぞ、坊主！ て、なんでえ、嬢ちゃんも一緒かあ!？」

マードックは相変わらず、ステラを苦手としている節があった。彼女がドッグに入ってきたのを認めたとき、一瞬びくりと身構えたほどだ。

だが、彼女もまた出撃するつもりなのだろうと即座に判断し、マードックはステラの様態を心配こそすれ、特別、彼女を止めようとはしなかった。

「『コデイフイェンド』の整備はまだ不完全でな！ いくつかの光波発生器が馬鹿になってやがるから、それだけは頭に入れておけよ！」

コックピットへと向かうステラへ向け、マードックが声を張り上げる。

無理もない、「アルテミス」の爆発から機体を守ったのだ、早々すぐに完全な状態で

出撃できるとはステラも考えていない。

ふたりは即座にシートにつき、システムを立ち上げる。

その間、ミリアリアが状況を説明した。

「敵はナスカ級一隻に『ジン』が三機。それに『イージス』もいるわ！ 気を付けて！」

「イージス」——その固有名詞に、ふたりの手がぴたりと止まる。

間髪入れず、次の瞬間『ストライク』にだけ、サイからの音声通信が入った。

「先遣隊の艦にはフレイのお父さんが乗ってるんだ！ キラ、頼む！ 守ってやってくれ！」

公私混同も甚だしいが、その事実には、思わずキラは舌を巻く。

それは、欲しくない情報だと思ったからだ。

思わぬ重^{プレッシャー}圧が肩にのしかかる。今回の戦闘では『アークエンジェル』と並行して、他の友軍艦までもを守り抜かなければならない、というのか？

不安に駆られたように——『ストライク』の目が、遅れてゆっくりと動き出した『デیفエンド』の方を向いた。

すると、向こうもその視線に気づいたのだろう、『デیفエンド』が立ち止まり、『ストライク』を見据え返す。

——いや、弱気になるな………!!

ぼくは、ひとりじゃない。

女の子を当てにするなんて、情けない話かもしれないけど……今のぼくには、ステラがいる。

それがいつまで続くかは分からないけど、少なくとも、今は肩を並べて戦ってくれる、たしかな仲間がいるのだ。

つかみ所のよく分からない親友の妹だが、護り、護られ、そんな関係で居られればいいと思っっている。

このときのキラが憶えたのは、柔らかな安心感であった。

一方で、ステラが“デイフェンド”のシートに着いた時、彼女はふと、妙な違和感を憶えた。

コックピットに辿り着き、シート・ベルトを締めたら、まずはOSのプログラムを手順よく起動させてゆく必要がある。だからこそ、まるで機体の正当な持ち主であるかのように、ステラは小慣れた手つきで“デイフェンド”の各プログラムへと電源を灯そうとした。

「……………なに……………」

スイッチへ伸びる自分の指が、震えている。ぶるぶると、小さく——しかし、確かに。

「……………」

止まらない身震いが、彼女の手先を狂わせる。

強かに震えた指先は見当違いのスイッチに伸びてばかりで、目的のボタンまでは届かない。

（——あわてている？ ステラが？）

そんな、まさか。

異変を感じ、ステラは右手を掴み、腕ごとゆっくりと擦った。

だが、震えは一向に止まる気配がない。

身体は何かに対し、確実に狼狽しているのだ。それからややあって、なんとか「ディフエンド」は起動していったが。

このときのステラが憶えたのは、拭えない不審感であった。

既に戦場に出ていた「ゼロ」は、先遣隊に展開する「ジン」複数機と交戦し、より正確にいえば、敵機を完全に足止めしていた。

この戦闘の目的は、あくまで「先遣隊の援護」に過ぎない。

そのために、敵機を牽制する必要があつたのだ、「ゼロ」は広くガンバレルを展開し、散開する「ジン」を一機ずつ狙撃してゆく。

三機の「ジン」は行動を制限され、鮮やかに「ゼロ」から放たれる幾多の火線が、三機を「モンドゴメリ」「ロー」「バーナード」へ寄せ付けさせない。

だが、それがどうした。

三機の「ジン」を見事に牽制している「ゼロ」であつたが——地球軍の艦船など、「イージス」の前では、ひとたまりもなかった。

「ゼロ」から距離をおき、MA形態をとつた「イージス」から——大出力のエネルギー砲「スキュラ」が放たれた。

真空を薙いで突き進む眩いまでのエネルギー砲は、射線上の艦船「ロー」の船体を容易に貫き、撃沈させた。

爆散した「ロー」を見届け、華麗に「イージス」は転回する。次に「バーナード」に目標を定めたように飛び去って行く。

——見逃すわけにはいかない！

“ゼロ”のガンバレルが、再び展開された。

「こんなこと云いたかねえけど、いい腕してるじゃないの！」

最大の皮肉を込めて、“ゼロ”が四基のガンバレル内、その半数を、急速離脱を図る“イービス”へと差し向けた。

加速を決める“イービス”であつたが、飛来してきたガンバレルには即座に追いつかれ、一瞬にして包囲される。

「ええいッ」

アスランは咄嗟にM A形態を解除し、ビーム・ライフルで応戦する。だが、照準先の“ゼロ”は鋭敏な動きで、この光線を掻い潜るようにして回避していく。

苛立ったように、アスランは僚機の“ジン”へと声をあげた。

「——何をやっている！ 相手は、たかがモビル・アーマー一機だー！」
 へす、すまない！ だが、そいつは」

“ジン”から響いて来た弁明の声を、アスランは一方的に遮断した。

——言い訳など聞か。

“ゼロ”から繰り出される全方位からの執拗な追撃を忍ぎつつ、忙しくアスランが機体を転がしていると、多方向からの攻撃に追い詰められた“ジン”が一機、敵の狙い通りに攪乱され、撃ち落とされた。爆発と同時に世界が閃き、“ジン”の機体は、跡形

もなく宇宙の藻屑と化す。

「——ちい！」

——“ジン”では、時間稼ぎにもならない！

“イーリス”は痺れを切らしたように、その瞬間、攻撃対象を“ゼロ”へと移した。

MA形態を取り、機動力を上げると、巧みな動きで反転する“ゼロ”を背後から追撃する。

“スキュラ”を放ち、エネルギー砲が“ゼロ”の機体を掠める。

煙が巻き起こり、ムウが歯噛みした。

「くそッ——これじゃ立つ瀬ないでしょ、おれは！」

即座に“ゼロ”は、ガンバレルを展開し、“イーリス”の行動を牽制しながら、機体を翻し、宙域からの離脱を図った。

「今のが『エンデュミオンの鷹』ってやつか？——てことは、足つきが近くまで来てるな」

憶測が通信回線から響き、アスランは不快そうな顔を作った。

また、足つき？

また、キラか！

ザフト兵の憶測は的中し、アスランは次の瞬間、レーダー上に“ストライク”と“

「デیفエンド」の機影を捉えた。

「くそ……ッ」

アスランは煮え切らない思いを抱いていた。

一刻も早く、ラクスの行方を知りたい。生死を確かめたい。だとすれば、この戦闘を早く終わらせなければならぬ。

それでも、キラを撃ちたくない。

なにより、ステラとなんて戦いたくない——！

——こんな戦闘で、得られるものなど何もないのに……！

願望や使命、責務の中で、板挟みになるアスランであった。

「——アスラン！」

見覚えのある真紅の機体を捉え、キラが声を上げた。

「ストライク」と「デیفエンド」の二機が、交戦する「イーゼス」を射程距離に入れた。その瞬間「イーゼス」はスラスターを全開にして、「バーナード」へと向かった。

——僕達とは「戦いたくない」と……そういうことなのか、アスラン!

“ストライク” “イーゼス” “デイフェンド” ——三機は機体の持つ特性こそ異なるが、同じ性能を誇る兄弟機である。

それだけに“ストライク”がビームライフルの射程圏内に“イーゼス”を捉えた、ということは、つまり——アスランもまた、キラ達を射程範囲に捉えていたはずなのだ。攻撃の機会を放棄してまで、“イーゼス”は機体を翻して“バーナード”へと向かった。

まるで、キラやステラから逃げるように——。

「でも、撃たせるわけにはいかないんだ!」

そう、撃たせてはいけない。

——先遣隊の船には、フレイのお父さんが乗っているんだ!

もうこれ以上、撃たせない!

——アスランを止めるのは、僕だ!

“ストライク”はエールストライカーのスラスターを噴射して、“イーゼス”を追いかけた。

離脱する“イーゼス”の代わりに“ジン”が二機“ストライク”の前に立ちはだかった。キラの進路を阻もうと“ジン”は“ストライク”にミサイルを構えたが、横か

ら割り込んできた、数条のビールライフルに牽制された。

“デیفエンド”だ。

割り込むようにして現れた黒金の機体が——“ストライク”の道を切り開く。

“ストライク”が“イージス”の追撃に向かい——“ジン”を牽制するのは、ステラの役目となった。

「——アスラン！」

〈邪魔をするな、キラ！〉

親友の声が通信先から響くたび、キラはぎゅつと胸が締め付けられ、思わず泣きそうになる。

——でも！

噛み締めるような寂しさを必死に抑え、キラは真紅の機体を追撃した。

エールストライカーは“ストライク”の推進力を飛躍的に上昇させる装備だが、宇宙空間での速度に関しては、MA形態の“イージス”に軍配が上がっている。

一向に縮まらない二機の距離は——“イージス”の“バーナード”への接近を許してしまった。

“バーナード”と“イージス”が交差する。

すれ違いざま、“イージス”は先端の鉤爪で艦の装甲を引き裂き、これを爆散させた。

「もうやめろおツ！」

やりきれない怒りを憶えたキラが、*“ストライク”* からビームサーベルを引き抜く。

追い付かれた *“イービス”* は、モビルスーツ形態へと変形し、サーベルを抜くと、二機が激突した。

「もうやめるんだ、アスラン！ どうしてたくさんの人を殺すんだ！ どうしてこんな残酷なことを、平然とできる!？」

〈キラ！〉

——平然と？

白と赤の *“ガンダム”* がスタスターを噴射し、激しく拮抗する。

通信先のアスランが、抗議の声を上げた。

〈オレだって、へらへら笑って戦争をしているわけじゃない！ でも、オレはザフトのパ

イロットなんだ！〉

「だからって、相手がナチュラルだからって、そんな理由で殺すのか！ よく知りもしない、相手のことを！」

〈撃たなければ、守れないものだってある！〉

それが、アスランの戦争なのかも知れないと——咄嗟にキラは思った。

思ったのだが……

「殺された側の人達にも、家族がいるんだぞ！ 遺された方の悲しみは、キミだってよく分かってるはずじゃないか！」

〈キラッ………！〉

怒りを含んだ言葉を交わす度、ふたりの距離は、縮まらないほどに遠ざかっていく気がした。

——あんなに一緒だったのに、言葉ひとつ、通らない！

現実とはしかに非情で、悲しかったが、それでも今は、相手に対する怒りがその感情を凌駕していた。

拮抗していた、二機のサーベルが弾け飛ぶ。

“ストライク”と“イービス”は反動で引き離され、キラは再度、“イービス”へと躍りかかろうとした。

だが突如その時、ミリアリアの声がかツクピット内に響いた。

悲鳴にも似た、それは悲痛を訴える声だ。

〈キラ！ “ダイフエンド”が——ッ！！〉

「え………？」

再度、激突しようとしていた“ストライク”と“イービス”が——その声に、同時に動きを止めた。

“ストライク”が突き進む“イージス”への道を開き、二機の“ジン”を相手にしていた“デイフェンド”であつたが――

――この時、完全に追い詰められていた。

二機の“ジン”からミサイルが放たれ、見違えるほど鈍足な“デイフェンド”は、これを回避することもままならず、ミサイルの、機体への着弾を許した。

「うう――ッ!？」

爆発が機体を揺らし、光波発生器の一基が破損する。

衝撃に吹き飛ばされた“デイフェンド”は、なおも鈍い動きでビーム・ライフルを发射した。

その照準は――ひどく愚鈍だ。

放たれた光線は、明後日の方向を狙っていたのか？　そう思うほどに容易に回避され、その手に重斬刀を握る“ジン”の接近を許す。

重斬刀を構えた“ジン”が、その刀身で機体のボディを殴るように“デイフェンド”を吹き飛ばす。

フェイスソフト

P Sが重斬刀を無効化したが、受けた衝撃までは吸収できず、叩き潰されるような重

厚な衝撃がコックピットを激震させる。

“ジン”は「斬る」ためではなく——「叩き潰す」ために重斬刀で攻撃して来たのだろうか。

へ“デیفエンド”——応答しろ！ 何をやっている!?」

通信先から、ナタルの声が飛び込んで来た。

おおよそ、心外な様子な表情をしている。——ナタルもまさか、ステラが“ジン”二機を相手に、ここまで遅れを取るとは予想もしていなかったのだろう。

なにせ先日の戦闘では——ステラは“ジン”二機を圧倒して撃墜したのだから。

「くうツ……!」

——うるさい、耳障りだ!

飛び込んで来たナタルからの通信を、ステラは一方的に遮断した。

「ええええいッ!」

我を忘れたように、“デیفエンド”がビーム・ライフルを乱射する。

だが、無造作に放たれた砲火はまるで脅威とはならず、コーディネイターの操る“ジン”を前に、空を切るばかり。

彼女の中で、苛立ちばかりが膨らんで行く。

——集中できない。

——気持ちが変わるい……。

この時、ステラの頭の中には——何かが大量に流れ込んで来ていた。それが障害となつて、彼女の頭を乱している。

エクステンデットとして——誰よりも鋭敏なはずの彼女の集中力を——拡散させている。

「いやつ、気持ちわるい……！」

——意識あたまの中に、関係ないものがいっぱい流れ込んで来る……！

戦闘とは、まったく関係のないこと。

戦場には、まったく必要のないこと。

雑多な記憶が——彼女の意識を支配している。

再度、ミサイルの直撃を受けた「デイフェンド」の中で、ステラの身体が大きく揺さぶられた。

肥大化していく焦燥に駆られ、ステラは再度、ビームライフルの砲口を「ジン」へと向けた。

銃を構えた——その瞬間だ。

突如、潰えた「アルテミス」司令官、ジェラード・ガルシアの言葉が脳裏に再生された。

『——まるで感情や慈悲のない、冷酷な殺戮兵器のようではないか』

「あうっ」

嫌な記憶。嫌な体験。嫌な言葉。

——不愉快な「それ」がたくさん、頭の中に、勝手に入り込んで来る！

まるで、ダムが取り払われたみたい。

戦闘中、いつもなら思い返すはずもなかった「記憶」が、雑多な「情報」になって、彼女の鋭敏であつたはずの集中力を削いでゆく！

——ぜんぶ飛んでけ……ぜんぶいらぬ！

——ぜんぶ、戦闘には必要ないのに！

「*ディフェンド*」の機体が、大きく吹き飛ばされる。

また、抵抗もままならぬまま、さらなるミサイルの直撃を受けたのだ。

光波発生器は数基として壊れている今、アリユミューレ・リュミエールは展開しない。防御になるのは大型のビームシールドだけで、キラも今は、遠方で「*イーゼス*」と戦っている……。

何も。

何者も。

崩れそうなほど儂げな、今の彼女を——守ってくれはしないのだ。

エクステンデットである「ステラ・ルーシエ」には、かつて、地球連合軍のパイロットとして再出撃の度に『最適化』の措置を受けることが義務付けられていた。

その処置には、彼女の意識中の、あらゆる恐怖心を抑圧する、という目的の他にも——無関係な記憶を脳内から除去することで、雑多なストレスの一切を排除、また、感覚を常に鋭敏に研ぎ澄ますことで、極限まで高められた集中力の維持を可能にする、という目的もあった。

これは後日になって、ステラ自身が思ったことだが——『最適化』は、決して苦行ではなかった。

むしろその逆で、『最適化』を受けることは、彼女にとって、一種の安らぎであったのだ。

何故なら、処置が終わった後、精神は自然と安息や落ち着きを取り戻し、頭はひどく

鮮明クリアになっていったから。

最適化を受ければ「嫌なこと」をすべて忘れられる——それが彼女にとって、嬉しい方向に機能することは多々あった。

しかし、それは正常な観点から見れば、一種の「依存」に他ならない。

強化人間としての彼女は、戦場へと赴く回数だけ、何度も何度も『最適化』を受けてきた。

——だからだろう。

だから彼女は今、どうしようもない「焦燥」に駆られているのだ。

最適化の処置が途切れれば、かつての彼女の身体は、その反動で禁断症状が発症し、命すら危ぶまれる状態に陥った。

それと同じように侵された、彼女の精神は——最適化が必要なくなった今、まさに「自律」できなくなっているのだ。

普通の人間は、悩み、苦しみ、悲しみ——もちろん、喜びといったプラスの経験もそこには含まれるが、それぞれに多様な葛藤の上に生きている。

それぞれに過去を持ち、それを乗り越えたり、向き合ったり、決別したり、過去に起

きた出来事を昇華することで、今に繋いで生きている。

だが、彼女は特別——「それ」を知らない。

どんなに嬉しくても、どんなに悲しくても、どれだけ心が傷ついても——その葛藤の一切を除去してしまう『最適化』——

そんなものを処方され続けて来た彼女には、自分の抱える「ストレス」に対処する能力が欠けている。

普通の人間が——普通に持っているはずの機能が、すっかり衰えてしまっている？

嫌なことが、忘れられない。

嫌なことを思い出すと、途端に何も手に着かなくなってしまう。

ステラ本人は気づいていなかったようだが、彼女が考えている以上に、彼女の意識は多くのストレスを抱え込み、それによって、精神はひどく疲れていたのだ。

集中力が持続していたのは、最適化のおかげ。

どんな過酷な状況でも、冷静な判断が下せたのも、最適化のおかげ。

厳しい戦況でも、恐怖心を抱かずいられるのも、最適化のおかげ。

だから彼女はここに来て——おかしくなってしまったのだ。

いらいらする。

どうでもいい記憶が、こんな時に限って蘇る。

戦う時は戦わせて欲しい。——他のことなんて考えたくないのに、不愉快な記憶が流れ込んで、頭を支配する。

出て行け、飛んで行け。

そう願うように、ステラが叫んだ。

「邪魔、だあ！」

集中できない自分自身に、腹が立つ。

ステラは身を襲う不快感を薙ぎ払うように叫びつつ、接近してくる「ジン」にビームライフルを放ったが、苛立てば苛立つほど、撃ち放つビームの弾道は滅茶苦茶になっていく。

光線は明日の方向へ飛散し、奇異な行動に「ジン」もいささか困惑したような動きを見せる。

「アークエンジェル」のクルーも、いったい誰がこんな状況を予想しただろうか。

ステラの駆る「デイフェンド」が——「ジン」を相手に、完全に追い込まれているのだ。

繰り出す攻撃が、掠りもしない？

観念した『デیفエンド』はそこで、一切の抵抗をやめ、戦闘宙域からの離脱を図ろうとした。

しかし、絶好の獲物を見つけたかのように——二機の『ジン』は、遙かに『ジン』より速度性能を上回っているはずの『デیفエンド』の退路を阻み、これを挟撃していく。

逃がさねえ！——そう宣告せんばかりの、凄まじい気迫と共に。

「ッ……………」

被弾の衝撃に『デیفエンド』の機体が揺れる。

ステラはその双眸に大粒の涙を溜めながら、恨めしそうに、目の前の『ジン』を睨み上げた。

——どうして、勝てない!?

灰色のトサカ頭——ZGMF—1017『ジン』

ソイツはたかたかガザフトの量産機であり、その薄い装甲は、ミサイルの一撃でも浴びせれば、全壊するほど軽量に仕上がっている機体だというのに。

——こんなヤツらに、負けるはずがないのに!

『ジン』と『デیفエンド』の間にある、圧倒的な性能の差。

強力なコーデイネイターと、しかし、それを上回るための訓練を積んだ自分との間に
ある、絶対的な技量の差。

どちらにしても、遅れを取るはずがないのに！

失調したように「デイフェンド」のコックピット内で、ステラが絶叫した。

「わたしはあああああー……ッ!!」

その瞬間、「デイフェンド」が両肩のシールドと装甲を離脱^{パージ}した。

機動力を飛躍させ、両腕に備えられた光波発生器から、ビームブレイドを展開する。

——射撃が当たらないなら、斬り刻んでやる……!!

一瞬、激しい殺意が、彼女の頭を支配した。

狂気に駆られ——「ジン」へと突進していく「デイフェンド」は、ステラが狙っていない、もう一機の「ジン」がミサイルを構えているのに気づかなかった。

大型ミサイルが発射され、突進する「デイフェンド」のコックピット内に——背後からの警報音が響いた。

「えっ……っ？」

装甲を離脱した「デイフェンド」は、防御力が低下している。

ミサイルは、背後から急速に接近している。

直撃を受ければ——……。

「——ステラッ！」

その瞬間、脇から突如現れた「ストライク」が——「デイフェンド」の機体をかっさらった。

ミサイルは標的を見失い、虚空にて爆発した。

「キ、ラ……？」

「ごめん、ステラ……僕は僕のことばかり考えて、君を護ってあげられなかった……！」

「まも、る……」

通信先から伝わってくる、悔恨したような声と表情に、ステラは弱々しい笑みを浮かべた。

助けに来てくれた。

その事実にあ堵しながらも、次の瞬間、ステラの眼に入り込んで来たのは、無情なる光景だった。

遠方で——「イービス」のスキュラが、火を噴いた。

「ストライク」を振り切った「イービス」が——その際に「モントゴメリ」を

撃墜したのだ。

高エネルギー収束砲が、巨大な艦船を貫く。

火炎が巻き起こり、たちまちに船体を呑み込んで行く。

アスランが、殺した。

だからみんな——「死」んでいく。

「あ……ああ………っ」

炎に吞まれ、次の瞬間「モントゴメリ」が爆散した。

ジョージ・アルスターを乗せた「モントゴメリ」は、その人ごと撃墜されたのだ。

「死んじや………った………？ ステラ………まもれ、なか………！」

頭を両手で抑え、わなわなと震え出す彼女を、計り知れない絶望感が襲う。

ヘリオポリスで「ライフエンド」を見た時、そしてそれに乗り込んだ時、考えたはず

だった。

——守る、つて………誓ったのに………！！

奪われた。

護れなかった。

——「ライフエンド」に乗っていないながら、何も出来なかった………！！

無力感が絶望となって、重い金属で頭を殴られたような感覚に陥る。

途端に動かなくなった。『デیفエンド』に異変を感じたか、キラが通信越しに呼びかける。

「ステラ、しつかり！ ステラ！」

「いやあ……！」

モニターに写ったステラは、恐怖に支配されていた。

歯噛みしたキラは、『デیفエンド』を抱え、その場から離脱しようとする。

(……)のままじゃ全滅だ、急いでここから離れないと)

先遣隊三隻が墜ちた今、ザフトが狙うのは、『アークエンジェル』だけだ。

『デیفエンド』は、パイロットがこの状態では戦力にはならない上、それを庇いながら戦えるほどキラも器用ではない。

——たしかに、僕たちは何もできなかった。

でも、もうどうしようもない以上、吹っ切って逃げるしかない。

ここで全員死んでしまったら、本当に意味がない。

二機の『ジン』が——『ストライク』を追いかける。

『デیفエンド』を抱えているせい、バーニアの出力が思うように上がって行かない。
キラはたしかな焦りを覚えながら、背後の『ジン』から繰り出される銃撃を回避して

いくが、目に見えてジリ貧に追い込まれていく。

その時、通信先の全チャンネルで——ナタルの声が響いた。

〈交戦中のザフト軍に告ぐ！——こちらは「アークエンジェル」——本艦は現在、シーゲル・クラインの令嬢、ラクス・クラインを保護している！——これ以上戦闘を継続するのであれば、その身柄の安全は保障しかねる！〉

それは——明らかに「人質」による交渉だった。

保護したラクス・クラインを盾にして、この場をやり抜けようとしているのだ。

それは、いつかはやって来ると思っていた現実だ。

ラクス・クラインの存在が——外交上、地球軍とザフト軍の対立における、極めて重要なカードとして扱われる日は、いつか来ると分かりきっていた。

だが、そのカードを使うには、あまりに遅すぎた。

先遣隊は全滅し、残っているのは「アークエンジェル」だけ——。

己が保身のために、「アークエンジェル」は彼女の存在を盾としたのだ。

「くそ……………」

ザフト軍が、おもむろに撤退して行く。

ラクス・クラインの存在を人質に持ち出されては、手の出しようがないのだろう。

戦闘は終息したが、キラの頭に残されたのは、後味の悪い———複雑な感情だけだった。

『少女たちの邂逅』 A

ラクス・クラインが人質にされたのは、艦内におけるフレイの行動が切欠だった。

艦橋にいるわけでもない、いち民間人に過ぎない彼女が、先の自分達の劣勢を冷静に判断できたとも思わないし、本人としても「ただ怖かったから行動した」程度でしかなかったろうが——父の艦が沈められるその前に、彼女は「それ」を実行に移した。

けれども結局、誰も「イージス」を止められなかった。

劣勢だったのは元よりの話だ。あの状況では誰しもが手一杯だったのであり、あのとき最も「モンドゴメリ」の近くにおいて、誰よりも「イージス」を止められそうだったキラだって、やはり何ら批難を云われる筋合いはない。

——少なくとも、理屈の上ではそうだった。

けれども人の感情というのは、それほどに単純なゼロサムで成り立っているわけでは
ないらしい——

キラに連れられる形で“アークエンジェル”へと帰投したステラは、その肩を強かに震わせていた。

ステラが駆られていたのは、彼女の中から現れた、無力感から来る絶望だ。

「ラクス・クラインを人質に取った」——この事実によつて“アークエンジェル”は難を逃れることが出来た。しかし、覆しようのない事実として——補給に來た先遣隊は全滅し、彼らは再び、孤立無援の状態へと逆戻りだ。

ナタルの勧告通りにザフト軍は撤退したが、そんなものは所詮、見せかけだ。

敵は後退したに過ぎず、このまま何事もなく、ラクスを乗せたこの艦を、地球軍本部のある月へ、穩便に見送つてくれるはずがない。——そんな真似をしようものなら、結果的に“プラント”にこの上ない不利益をもたらし、今より遙かに悪化した情勢を招きかねない。

——状況に変化が生まれれば、すぐさま攻撃は再開されるだろう。

それを見越してか、戦闘が終わつた“アークエンジェル”艦内は、今も依然として慌ただしかつた。

——この状況下では、態勢を立て直すことくらいしか、今の“アークエンジェル”に

出来ることはないのだろう。

キラはステラを支えるようにして、医務室まで向かっていった。

医務室へと繋がる居住区の廊下を渡っていると、少しずつではあるのだが、ステラが落ち着きを取り戻し始めているのに気が付いた。

身体の震えが、次第に止まり始めている。精神が、自力で立ち直り始めているようだ。いまだ気が抜けたように茫然として、目は虚ろだが、キラは少しだけ安心した。

その時、ふたりの前方、食堂の中から——引き裂くような悲鳴が響き渡っているのが耳に入ってきた。

何事かと考えるよりも前に、その悲鳴がフレイ・アルスターの上げたものであることを理解したキラは、それを看過することも出来ず、「ちよつと待ってて」とステラに声をかけ、ひとり先に食堂へ向かった。

「——返して！。パパを、返して！」

キラが駆け付けた食堂で、フレイ・アルスターは慟哭の声を上げていた。

衣服は乱れ、燃えるような赤い髪は、くしゃくしゃに荒れている。凜とした花のような普段の彼女からは想像もつかないほど狂った様子だ。

だが、それも無理はない。彼女は先の戦闘で、唯一の家族であった父——ジョージ・アルスターの命を失った。

いや——奪われた、というべきか。

食堂へやって来たキラの存在を認めたフレイは、サイの胸に必死で縋りながら、その奥に激しい憤懣さえ窺えるほど鋭利な眼光を浮かべ、ギツとキラを睨み上げた。

「——嘘つきッ！」

キラの姿を捉えたフレイが、失調したように叫ぶ。

状況が理解できていなかったキラは、唐突に激しい剣幕の視線を向けられ、わずかに怯んだ。

「私、見てたのよ……!?」
 “アークエンジェル”の艦橋^{ブリッジ}で！ あなたの乗るロボットが……。パパの船の傍で、戦ってるところを！」

事実である。

ジョージ・アルスター

父 親の身を案じ、辛抱の効かなくなった彼女は、目は赤く、顔面は蒼白の、只ならぬ形相で艦橋へと飛び出していった。

不幸にも、そこで戦場の様子をモニターしていたのだ。——父が、砕かれた艦船と共に爆散していく瞬間さえも。

「フレイ……」

——ロボット……？

——ああ。フレイには「モバイルスーツ」みたいな、その手の言葉が通用しないんだ

……。

無知な子が放つような稚拙な表現を聞いた途端——キラは、目の前で泣き崩れる少女が、本当にこれまで戦争など知らず、ただ一方的に家族を殺された非力な女の子であることを改めて、思い知られるように痛感した。

「どうしてパパの船を守ってくれなかったの!? あの時あなた、『大丈夫』って言ったのにー!」

「フレイ、キラだって必死に……!」

サイはキラを気遣い、彼女を諫めようとしたが、彼女は興奮している。

当たり前の擁護など、今の彼女には通用しなかった。

顔を真っ赤にして、フレイが叫ぶ。

「どうして……! どうしてあの娘を優先つたのよおッ!!」

びしっ——。

場の空気が、音を立てて——凍り付いた。

唾然とする一同は、夢中になって叫んだ、フレイの言葉の意味を疑った。

「フレ、イ……?」

「ステラって名前の、あの娘——キラとは違う、もう一機に乗ってた……! あなたはパ

パの乗ってる船より、あの娘を取ったんでしょう!? どうして!」

「え……あ……っ」

キラは愕然とし、返す言葉を失った。

切り返せる言葉を、この時のキラは、持ち合わせていなかったのだから。

あの時——“イーゼス”と交戦状態にあった“ストライク”は、ミリアリアの通信から響いた一言で、冷静な判断力を失った。

へ——“デイフエンド”が、危ないの！

ミリアリアの呼びかけに反応し、咄嗟にキラが視線を戻せば——汎用型の“ジン”を相手に追い詰められている“デイフエンド”の機体が映った。

まさか。

どうして。

ステラの乗る“デイフエンド”には、先日の秀逸な戦果があるだけに、キラはその時、余計に困惑した。

——失いたくない。

今思えば「それ」は——なんて自儘で、なんて蒙昧な発想だっただろう。

気が付けば“ストライク”は、“モンドゴメリ”から機体を翻し——“デイフエンド”へと向かっていた。

キラはあの瞬間——友軍艦よりも、一機のモバイルスーツと、ひとりの少女を優先して

選んだのだ。

結果、追撃を免れた“イージス”は“モンドゴメリ”に取り付き、意図も簡単にこれを撃墜した。

そんな光景を見たフレイが、何を思い、何を考えたのか――。

キラが絶命の危機に瀕する父を眼前で切り捨て、ひとりの少女を助けに上がった光景を見て――フレイはいったい、何を考えただろう？

キラを睨むその眼光の奥底に、どんな感情を抱いているのか、計り知れない。

――父を、助けられたかもしれないのに！

キラはその可能性を、検証する以前に放棄したのだ！

自分の発言も顧みず、ただ、ひとりの少女のために？

咀嚼するほど、ふっふつと湧き上がる怒りに、フレイが叫びをあげる。

「パパを返せ……………」

怒りに震える瞳の先に、苦しみに震える少年の姿が映る。

「戻してよ……………ぜんぶ元に戻してよお……………ッ！」

「フレイツ……………」

サイがかばうように、フレイの身体を抱きしめた。

フレイの怒りは――彼女の父を救えなかったキラに、向けられているモノではない。

彼女の父を救おうとしなかつた嘘つきに向けられている。

戦闘に駆り出されたキラの必死さが、最終的に——今のフレイに、微塵も伝わらなかつたのだ。

キラが息を呑み、その背後で、食堂へと歩いて来たステラが、ゆつくりと室内に顔を覗かせた。

「……………？」

ステラは呆然とし、首を傾げている。

会話の中に、自分の名前が上がっていることを理解しているようだ。

「ステラ……!?!」

ゆつくりと顔を覗かせた彼女の存在に気付いたミリアリアが、不意に、その名を呼んだ。

「あ……………」

同時に——名を呼んだことを、後悔した。

ミリアリアの声に反応して、食堂に居合わせた一同の視線が、一斉にステラの方へと向いたからだ。

みなの視線を一同に浴びたステラは、射竦められたように、委縮したようにキラの腕に縋った。その腕にぎゅうと抱き付くように身を竦め、そこを抛り所とするように、

弱々しく周りの者達の顔を伺う。

それを見たフレイは、ステラの顔を、貫くような鋭い視線で睨んだ。

「ゆる、せない……………」

真つ赤に充血した眸でステラを睨むフレイの声は、強かに震えていた。

——なによ……………それ……………？

「キラの傍なら安心」と言わんばかりの、その表情、その動向——。

——そういう関係ってわけ……………？

だから？

——だからパパより、その娘が大事だったってわけ……………!!?

フレイの中で、怒りだけが沸々と湧き上がっていく。急速に沸騰するような怒りに身を委ね、

「あんたさえ……………いなければッ……………!!」

それが——フレイの口をついで出た言葉だった。

そうよ——。

——コーデイナーなんて、初めからいなければ——ッ!!

「——フレイ！」

フレイの腕には自然と力が籠り、隅々まで手入れが行き届き、綺麗に整えられた彼女

の爪が、縫っているサイの腕に深く食い込んだ。

まるで女の子の力とは思えないほど強く締め付けられ、サイの表情が、苦痛に歪む。

——狂乱、している……？

父親を亡くしたショックから、フレイがパニックを起こすのは予想できたことだが、今の彼女の精神状態は、既に動揺の域を超えていた。

このままでは彼女は——キラやステラに対して、取り返しがつかないほどの暴言さえ吐き捨ててしまいうので、サイは思わず、キラに叫んでいた。

「——キラ、その子を連れて、ここから出ていけ！」

「サイ……!?!」

「いいから、早く——」

サイの怒号は、キラ達を思うからこそのもものだったが——それは明らかな「拒絶」として受け止められ、キラの心を深く抉った。

だが、今のフレイは確かに荒れている。キラはすぐにステラの腕を取り、食堂から駆け出て行った。

「……まもれなかったから？」

廊下を駆け、食堂から離れた場所で脚を止めた時、ステラがひとりで、そう訊ねた。キラは振り向き、その問いに耳を傾ける。

「あの人……泣いてた。泣くのは、悲しいから……ステラが、味方を守れなかった、から……？」

——だから、あの人^{フレイ}は泣いてたの………？

「……ステラひとりのせいじゃ、ないよ……。フレイのお父さんを守れなかったのは……僕達みんなが、弱いからだ……」

だから、ラクスを人質に立てるより他に、生き残る術はなかった。——キラとて、はじめは民間人を盾に取る地球軍^{このふね}のやり方に怒りこそ憶えたが、情けない方法でしか生き延びることが出来ないのは、自分たちに、それだけの力がなかったからだ。

避難民を乗せたこの艦を沈めさせる訳にはいかない。そこには、あの艦長の苦悩とてあつたはずだと——冷静になれば、キラにも理解できる。

「ラクス・クライン——もし彼女がこの艦に居なかつたら、僕達は全員、もしかしたら、あそこで——」

「らくす？」

キラが語っていると、ステラが、その名前に反応を示した。

円らな眸を、さらに丸くしているステラの様子に、キラは怪訝な顔を浮かべた。

「らくす・くらいん？ その人………」

記憶を失っていたと述懐している彼女が、誰かの名前に反応を示すのは珍しいこと

だった。

いくら相手が「プラントの歌姫」で著名人とはいえ、キラはすぐに目の色を変え、「知っているの？」と訊ねようとした。

その時、

《ハロ、ハロ！》

《ハロハロっ！》

二匹……いや、二機のハロが——キラ達の前に飛び出して来た。

ピンク色をした一機のそれは、突如としてキラの顔面をめぐり勢いよく跳躍し、咄嗟に構えられたキラの右掌に受け止められた。

海色をしたもう一機は、キラの回りをぐるぐると周回している。

「な、なに、これ？」

「ハロ」

「ハロ……？」

キラが頭に疑問符を浮かべていると、遠くから物柔らかかで、透き通った声が聞こえて来た。

声は、この二機のハロを探しているようだ。

——よくできたロボットだけど、こんなもの、この艦に備えてあったかな……。

そんなことを言えば自分の持つ「トリイ」として精巧なロボットだが、キラはそのまま、ハ口を抱え、その声のする方まで歩いて行った。

廊下のT字路を曲がると、そこには、ひとり悠然と艦内を歩き回るラクス・クラインの姿があり——ふたりの目が、ばったりと会合した。

「まあ、ピンクちゃん！ そんな所にいましたのね」

ラクスが、キラの持つピンク色のハ口を見、感嘆の声をあげる。

対するキラは、ぎよつと目をむいて、驚愕の声をあげた。

「まあ、あなたが捕まえてくださったんですね、ありがとうございます」

「な、なんでこんなところに」

ラクス・クラインは今、部屋の中で軟禁状態にあるはずだ。

彼女は決して、ザフトの息が掛かった敵性存在ではないだろうが、偶発的に救助した「プラント」側のコーディネイターであり、今となっては「アークエンジェル」が生き延びるための「切り札」でもある。

そんな彼女が、監視もつけずにひとりで艦内を出歩いているなど、おかしな話だった。「ピンクちゃんは、本当にお散歩が好きでして……だからお部屋の施錠など、あまり意味がありませんの」

——いったい誰だ、そんなデリカシーのないロボットを作ったのは。

キラは思わず、額を抑えた。

「そしたら！ この艦にも、ハロがいますのね？」

「え？」

「そのマリリンちゃんですわ」

あなたのものではありませんの？ と訊ねられる。

彼女はキラの足をばたばたと耳を立てて回る、海色マリニフルーのハロを見やりながら、ゆつたりと続けた。——マリリンちゃん、というのは、その色からとつた名前だろう。

「わたくし、ハロはてつきり、わたくしだけのものと思っていましたので、驚いてしまいましたのよ」

「は、はあ……」

キラは、いまいち彼女が放つ、話のテンポについていけなかった。

——っていうか、そもそも「ハロ」って何なんだよ……。

不思議とキラは、彼女と同じようにゆつたりと話すステラと会話しているような気分になり、この会話がうまく成り立っていないことを理解した。

「ですが、ぜひともマリリンちゃんの持ち主の方にお会いしてみたいなと思ひまして。——それで、この艦を回っていたところですよ」

そんな理由で、敵艦を偵察まがいな観光しようとは。

大した度胸だとキラは少し、彼女を畏敬した。

文字通り、彼女はまぎれもない大物ではあるのだが。

「えつと……」

キラが対応に困っていると、足元の「マリンちゃん」が突然、キラから離れ、遠くへと跳び去った。

ぴよんと間抜けな音を立てながら離れて行くそれは——まるで「そこ」が正当な帰り家であるかのように、後からやって来たステラの掌に、すつぽりと収まった。

ステラは手に乗ったそれを見つめ、言った。

「部屋から出ないように言つてたのに、わるい子」

キラはきよとんととして、訊ねる。

「それ、ステラの？ ……えーつと、ハロ、だっけ」

「うん。部屋の鍵、勝手に開けて出て来たみたい」

「うわ、それにもそういう機能あるんだ」

短く答え、まるで叱るようにステラは人差し指で、ハロの頭を小さく叩いた。

ハロは、きゆうとダメージを負ったような音声を発し、目が罰点に変化した。それを見たステラが小さく微笑む。

まるで、戯れているようだ。——微笑ましい光景に、それを見たキラは不覚にも、表

情が緩んだ。

——それにしても、ふたりが色違いの同型ロボットを持つているなんて、単なる偶然だろうか？

よもや「部屋の鍵を勝手に開ける」機能を持った、間抜けな顔してあげつない「これが市販されているわけでもないだろう。

それ自体、奇跡にも等しいような確率であるかのように思え、キラはそこで思い出したようにして、背後に立つラクス・クラインの方を振り向いた。

「えーっと、あの子だったみたいです、あのハ口の持ち主。——名前は、ステラって云うんですけど……………」

紹介しようとラクスに声をかけ、キラはその言葉の先を——噤んだ。

ラクス・クラインが——そのきめ細やかな手で口を抑え、絶句していたからだ。

いったい、どれほどの大口を開け、上品にもそれを隠しているのだろうか。

整った双眸は大きく見開かれ、普段のゆったりとした彼女からは想像もつかないほど、驚愕している。

彼女のことをよく知る者であれば、これは、その者達が一樣に返すであろう解答だが、

あのラクス・クラインが言葉に詰まること自体——考えられないほど、きわめて稀なことではないだろうか？

だが、事実——それほどまでに、今の彼女は嘖然としていた。

キラには訳が分からなかったが、再びステラに視線を戻す。

すると、ステラの方もまた、小さく口を開けたまま、硬直していた。

そこだけ時間が止まったように硬直しているふたりの少女に挟まれ、キラはこの時、何をどう対応していいのか、分からなかった。

「ステラ、さん——!？」

沈黙を破り——

愕然とするラクス・クラインが——最初に、その名を呼んだ。

『少女たちの邂逅』 B

C, E, 69——11月の初め。

十四歳の誕生日を迎えたばかりのアスランに、父パトリックから、突然の報告が告げられた。

『——おまえの婚約が決まった。相手はラクス・クラインだ』

アスランの脳天に、か細い電撃が落ちた。

厳格な性格で、評議員として多忙な毎日を送るパトリックは家を空けることが多く、そんな父をアスランは決して恨めしく思っていたわけではなかったが、心のどこかでは苦手としていた。そんな父に「大事な話がある」——と、唐突に書斎まで呼び出されるや否や、それを短く言い渡されたのだ。

話が数段、飛躍してはいないだろうか？

婚約？ 何の話をしているの？ ……まだ僕は、お見合いすら経験したことがないのですよ？

前触れもなく切り出された議題の理解に苦しんだアスランは、目をぐるぐるさせた。

「プラント」における婚姻統制制度——

高度な遺伝子操作によって生み出されたコーディネイターには、遺伝子レベルでの「生殖異常」が存在していた。

端的にいえば、彼らには子どもが生まれにくいという欠点があったのだ。将来的な第三世代コーディネイターの減少は確約され、子孫繁栄の点において、彼らが辿るであろう未来は絶望的であることが判明したのである。

だがある日——そんな問題に頭を抱える「プラント」に、わずかにして、唯一の希望が見えた。

遺伝子配列の相性こそが受精の可否を左右するのなら——「対の遺伝子を持つ者」同士であれば、高い確率で子を産むことが出来る。

この説論は、当時はまだ一般的ではなかったが、加速する出生率の低下を打破するためには、コーディネイターは「あらかじめ決められた相手」と子を成してゆくしかなかった。

つまり、アスランの「それ」に選ばれたのが——ラクス・クラインだったのだ。

遺伝子の配列の合わない者同士の結婚は法律で禁止され、人々を、困惑と戸惑いが襲う。

当然、本人の意志を鑑みずに男女の籍を強要するこの法律は、公布された当初こそ、大きな波紋を呼んだ。

だから「プランド」は——目に見える形で、大衆を納得させる必要があった。

同年のクリスマス・イヴ。

最高の遺伝子の相性を持つ、アスランとラクスの「婚約発表」が執り行われた。

会場には多くの議員やその関係者が招待され、余興としてダンスパーティーが催された。広い屋敷に招待されたアスランとラクスのふたりは、それぞれにドレスコードとして夜会服に身を包んでいる。

ラクス・クラインは上品なレース細工のドレスに身を包んでいた。波打つように伸びている長髪をふたつに束ね、薔薇のコサージュを付けたその容貌は淡い桃色を帯び、まるで絵画の中から抜け出して現れた姫君のように、幻想的な雰囲気纏っていた。

一方のアスランはタキシード姿であったが、本人が普段から窮屈な格好を好まなかったせいもあって、ラクスと比べると、多少としてぎこちないように見える。だが、スラッと伸びた体躯に端正な顔立ち。母親譲りの温和で中性的な美貌。紺色の蝶ネクタイと、ポケットチーフを飾っている。誠実そうな印象を受ける物腰は、上流階級の御曹司としてとても板についているように見える。

パーティーの会場へ揃って足を踏み入れたふたりに訪れたのは、視界を奪うほど眩く

たかれた無数のシャッターと——「プラントの歌姫の婚約者」としてのアスランを品定めするかのような、喧騒なまでのどよめき——

『あれが、ラクス嬢の婚約者の少年かね?』

『ラクス嬢の人氣は厚い。あの少年も大変だな』

『でも、とてもよくお似合いのふたりですこと』

『ああ、生まれ出でた時から定められた者同士のようだ』

——それはすぐに、感嘆と感動の賛辞へと変わった。

「プラント」のメディアにあまねく登場するラクスとは対照的に、アスランはこれまでの人生で、公の舞台に姿を表したことがなかった。「ラクス・クラインの婚約者」などと聞けば、彼女のファンはアスランを恨むか運命を嘆くかするだろうが、いざアスランの容姿を見た途端に物分りがよくなってしまふようだった。

やがて、会場の演奏家たちによってバックミュージックが奏でられ、みなぎ男女で連れ添い合い、ダンスの準備を始めていく。

その波につられ、アスランとラクスのふたりも、また手を取り合つてホール中央へと移動した。本日の主役の登場によって、自然と彼らの周囲には、ふたりが踊れるだけの広いスペースが浮かび上がった。

アスランがラクスの手を取り、ふたりが見つめ合うと、クラシックの音楽が流れ始め

た。優雅な音調に合わせ、ふたりがステップを踏んでいく。子供のころに、アスランはレノアにダンスを教わった。その頃は、自分より遥かに背の高かった母を相手にしながら、自分より出来なかつたが、自分の肩に手を回したラクスの身体は自分よりも何回りも小さく、華奢であるように感じれた。

躰かぬよう、相手の瞳を真つ直ぐに見据える。さすが、ラクスはこのような社交界に慣れていいのか、その表情に緊張しているような色は伺えない。対照的にアスランは、彼女をエスコートすることに必死で、すこしだけ表情が強張っていた。お互いに顔を見つめ合っていると、そんなアスランの不意を打つように、突如、ラクスが、にこり、と微笑んだ。花が綻ぶような、吸い寄せられる美しい笑顔に、アスランが顔を真つ赤に染める。それを見て、ラクスの表情がさらに綻ぶ。

穏やかな、そして柔らかな時間が過ぎた。

そんな時——会場の入り口の方で、どよめきが起こった。

舞っていた者達は、一連の騒ぎにその足を止め、一様に目を丸くして、そちらへと目を向けた。パーティーの主催者であるパトリックやシーゲルが、足早にどよめきの上がった方へと駆け寄っていく。

何か、問題でも起こったのか？

アスランもまた、騒ぎの正体を突き止めに爪先をそちらへと向けたが、数いる議員に

制された。ラクスは目をぱちくりとさせながら、声のあがった方を訝しんでいる。

なにやら、会場の入り口にひとり——「可憐な少女」が現れた……………

いや——到着した。

それが騒ぎの原因になって、多くの者達の喧騒を呼んだ。そのどよめきは何も、テロリストが現れた等の手のモノではなく、ただ単純に、その容姿に感嘆の声を漏らした結果だった。

「現れた少女」の可憐な容貌が、男性のみならず、その場にいた女性さえも釘付けにしたのだ。

パトリックの娘が、会場に遅れて到着した。

レノア・ザラと共に、リムジンから連れ出されるように降り立ったその存在に、一同の注目が集まる。

蜂蜜に金粉を振りまいたかのような、独特の輝きを放つ金髪はまばゆく——ふんわりとした柔らかさを強調しつつ、肩の上のあたりで切り揃えられている。前髪は少しだけ目にかかり、身を纏うホルターネックのドレスは、なめらかな曲線を描いて垂れるヴェールのついたデザインで、こちらもまた、物柔らかな印象を受ける。童話に出てくる少女のような容姿には、スカイブルーに彩られたリボンで飾られたカチューシャがアクセントとして付け加えられ——あどけないまでのその服飾は、まだ幼い顔つきの

少女によく似合っている。

まだ、年端もいかぬ——齢にして、十二の少女だ。

『ステラ……!?!』

一連の騒ぎを引き起こしたのが、自分の妹であることを理解したアスランは、『も、申し訳ありません、ラクス! ……あれは、ぼくの妹なんです』

伏し目がちに、彼女を見遣った。

よりによつて——遅刻したステラが、たとえ一瞬でもみなもの注目を引き、ラクスよりも目立ってしまった。この行為は、今日の主役であるラクスに対して、大変な失礼を働いたも同然だろう。

だが、深々と頭を下げるアスランに、ラクスはにつこりと微笑んで「お顔をあげてくださいいな」と、返した。相変わらず罰が悪そうに顔を上げた少年に、彼女はほんわりとした笑顔を浮かべると、鷹揚と訊ねた。

『可愛らしい妹御様ですわね。お名前は、なんと申されますの?』

きよとんとするアスラン。

アスランは今日に至るまで、数回としてクライイン邸を訪問する機会を設けて来たが、いかんせん出逢つてからの期間もまだ短く、妹のことを紹介したことがなかった。

しかし、初めて見る婚約者アスランの兄妹に、ラクスは興味津々だった。

アスランは慌てたように、お名前？ と口内で反芻した後、紹介の席はこんな形でいいのかと逡巡しながらも、やむを得ず、切れ切れに答えた。

『ス……ステラ、と』

『まあ、素敵なお名前ですわ』

言うのと、ラクスはゆったりと歩を進めて行ってしまった。

悠然と歩いてゆくラクスの進路には、自然と人の掻き目が浮かび上がり、ステラへと続く、真つ直ぐなスペースが空いた。

ステラの前へと辿り着くと、率先してラクスが辞儀を行い、ステラに腕を掴まれていくレノアが優しく微笑んだ。レノアへと会釈を交わすと、ラクスは次に、俯くステラに顔を向けた。

『こんにちは』

『こ、こんにちは、は……』

優しく話しかけるラクスに対して、ステラは緊張しているのか、レノアの腕に離れまいと抱き付き、警戒しているような上目遣いでラクスを見上げた。

それを見て、ラクスはすこしだけ苦笑した。

この時のラクスは、アスランやその家族に対して、ある負い目を感じていた。

「ラクス・クラインが婚約者になったから」——この既成事実が大事になって、ア

スランを筆頭に、ザラの家族は「ブランド」中の注目を浴びるようになった。

つまり、世間の目に晒されるようになったのだ。

だからそういった意味では、ラクスはアスランやステラに対して、ひどく申し訳ない気分になるのだ。

平穩に暮らしていたはずのアスランやステラを、公的な世界に連れ出してしまった。

ステラの容姿にどよめきが起こるくらいなのだから、もしかすると、ステラの方は今回が表舞台への初登場^{デビュー}だったのかもしれない。

ラクスはすっかり慣れてしまったが——無数の好奇の視線に晒されれば、誰だつて、いい気分はしないだろう。——ステラがこうして周囲を警戒しているのも、無理のないことだ。隣にレノアさえいなければ、途端に踵を返して、会場から出て行ってしまふような気がする。悩ましい機微を察したラクスは、やんわりと言葉を続けた。

『そうお固くならないでくださいいな？ わたくしはラクス・クラインです。アスランがいつも、お世話になっております』

年が近いこともあつて、まずはお友達になりたい、というニュアンスを含め、ラクスが小さく頭を下げる。

——その挨拶は、すこし間違っているんじゃないのか……。

そう思いながら、アスランがラクスの背後から、続くようにしてやって来た。アスラ

ンの姿を視界に捉えたステラの表情が、すこしだけ緩む。

ラクスの隣に、アスランが位置どる。その時、ホールを通行していた男性の議員が数人、ラクスの真横を横切るように、足早に歩いて来た。それを察知したアスランは、突発的にラクスの肩を抱き、自分の身体へと引き寄せた。急に引き寄せられたラクスののはドキツとして、ほんのりと頬を赤く染めていた。アスランの方は、ほとんど無自覚の行動だったらしく、彼女の身体を受け止めてから数秒後になって、自分の姿勢を顧みて顔を真っ赤に染め上げた。——あのラクス嬢の華奢な身体を、これほどまで身近に引き寄せたのだから。

すいません、つい……と顔を真っ赤にして弁明の声を漏らすアスランに対して、ラクスは胸奥で高鳴る心拍を掌で抑えつつ、できるだけ平然を装い、ありがとう、と柔和に微笑み返す。

なんて、初々しいのでしょうか。

ふたりの様子を見つつ、レノアが幸せそうに微笑んでいると、一連の流れを垣間見えたステラは首を傾げ、アスランに問い詰めた。

『……アスランのお嫁さん？』

『はいはい』

せめて名前ラクストで呼んであげてくれ。

アスランが思わず嘖き出した。

『あらあら』

『?』

『ス、ステラ違う。ステラ、それは違うぞ……』

『違いますせんわ、アスラン。私はいずれ、アスランのお嫁さんになるんですもの』

『ラ、ラクスマで……!』

——そういう話まだ、気が早いんじゃないか!?

アスランは顔を青くしたり、赤くしたり、せわしなく表情を転げた。

それを見たラクスが、口に手を当ててくすぐすと微笑む。

桃色の花が揺れるようなラクスの笑顔を見、ステラの強張っていた表情が綻んだ。

『ステラって、いいます……あの、その………よろしく、おねがいます……!』

『はいっ、こちらこそ、よろしくお願いしますわ』

普段は心を許し、打ち解けた者にしか滅多に応答しないステラが、ラクスの言葉に応じるのを見て、アスランはふと、小さな驚きを憶えた。

初対面の相手には、相変わらずぎこちなく、舌足らずなステラだが、口下手なりに、懸命に挨拶をしている。

——だがいったい、何をよろしくやっていくというんだ……。

ふたりとやり取りをアスランが怪訝に思っていると、間のレノアがアスランに微笑みかけ、言った。

『両手に花ね、アスラン』

『……………は？』

肝心のアスランは、母に云われた言葉の意味が理解できなかった。

『ヴェサリウス』に帰投したアスランは、艦の窓から宇宙の様子を眺めていた。

足つきにラクス・クラインが乗っている可能性が示されている以上、ザフトは『プラント』の正規軍として下手に攻撃を仕掛けることはできない。そのため、艦内の戦闘員には待機が言い渡されていた。

だが、待機命令にも関わらず、アスランはパイロットスーツを着たまま、それを一向に脱ごうとはしなかった。いつでも出撃できるようにしていたという、それはこと誠実なアスランらしい心境の現れだろう。

——ラクスの安否が気になる……。

不吉な話、人質とは生きているからこそ、その意味と価値を成すものだ。

ならば、ラクスの「生存」は確実だとしても、だからといって、それは「安全」と同義ではない。生きてさえいければよい彼女それが人質として十分な役割を果たすなら——アスランが懸念する可能性は、考えただけでも身の毛がよだつ危険性でしかない。地球軍が、敵国の捕虜に危害を加えないとは限らない、ということだ。

「ええいッ」

あれやこれやと心配になって考える内に、アスランの中にとつともない不安が押し寄せ、堪らなくなる。

途端に、ナチュラルが蛮族のように考えられてしまう。

コーディネイターである彼女ラクスが、地球軍ナチュラルに不本意に責め立てられてはいないだろうか？

アスランは普段から冷静で、悪く言えば関する所以外には無頓着な部分もあつて——取り乱すなど滅多にない、と彼の同僚は口を揃えて答えるだろうが、この時のアスランはたしかに、状況に狼狽うろたえていた。

——足つきにはステラアークエンジェルが乗っている……ラクスが捕虜として、邪険にされていることはないと思うが……。

昔からステラは人見知りが激しかったが、ラクスの前では、素直に自分をさらけ出していた。というより、ふたりは昔から、広い意味で同調していたような気がする。

ステラはラクスを慕い、ラクスもステラを愛でていた。——そういう意味では、ラクスの理解者が足つきに居合わせているのだから、アスランの不安もいくばかりか軽減される。

だが——予想もしなかったステラの生存に、ラクスもきつと、驚くことだろう……。宇宙の景色を眺めながら、アスランはすこし、胸が痛くなった。

“アークエンジェル” 居住区の一部。

ドアロツクが比較的嚴重な一室が、捕虜であるラクス・クラインに貸し与えられていた。もつとも「ハロ」と呼ばれるボール型のロボットを前にしては、その嚴重なドアロツクも意味などなさないが、ステラとラクス、そして仲介人としてキラの三人の姿が、その部屋の中にはあった。

「——そう、でしたの」

キラからの説明を受け、ラクスが小さく声を漏らす。ステラの過去と境遇を代弁^{かた}したのは、ほとんどがキラの口であった。

ラクスはできるだけ冷静に腰を据え、キラの口から紡がれる真実を、真摯に聞き止めた。

「すみません、わたくし……ステラさんを見た時、とても取り乱してしまつて」

「仕方ないですよ、僕も、初めて見た時は本当に」

——同じような対応を取つてしまいましたし。

話すキラの口元に、わずかな苦笑が浮かぶ。

ラクスは安堵のようなため息を小さく漏らすと、ふいと顔をあげ、目前に座すステラの姿を見据えた。

「っ……………」

あどけなさを残す、少女の顔をまつすぐに見据えれば——ふんわりとした金色の前髪の合間に、翡翠色の眸が映し出される。ラクスの表情から困惑の色がすぐに消えることはなかったが、ステラを映す水色の双眸には、たしかに、懐古の優しい色が浮かんでい

る。
離れ離れだったことを考えると、ちくり、と胸が痛くなる。何もしてやれなかったことを思ふと、後悔が湧き上がってくる。

儂げな少女は——ラクスが知っている頃の彼女よりも背が伸びて、顔つきも端正になっっている。

……お胸は、いつの間にかわたくしよりも大きくなっているのではないでしょうか？
最後にすこしだけ微妙な感情を抱いたラクスであったが、それだけ、もう二度とは取り戻せない空白の時間が過ぎてしまったことを痛感する。

ラクスがふわりと立ち上がり、ゆつくりとステラへの距離を詰めた。そしてゆつくりと、その存在を確かめるように、ラクスはステラの身体を抱き寄せた。

「本当に、良かったですわ……」

柔らかな感触に包み込まれたステラは不意に、鼻先を掠る髪匂いに、妙な懐かしさを憶えた。

——どこか懐かしくて、どこか優しい、安心できる匂いだ……………。

ステラは自然と安堵して、ラクスの背中に腕を回していた。これまで散々、他人に操作されて来た記憶を呼び起こすことは容易ではなかったが、ラクスという人物に、頼れるだけの安心感を覚えたのは確かだった。

数秒の抱擁の後、ふたりの身体が離れる。

不意に、キラが尋ねた。

「じゃあ、この『ハロ』っていうロボットは、ふたりともアスランに造ってもらったもの

なんですか?」

「ええ、アスランは、いずれ私が結婚する方ですから」

「け、結婚……?」

キラはぎよつとして、その目をむいた。

——アスランに、婚約者フィアンセが……?

キラの中で、それは、いまいち実感のわかない話であった。

——でも、そうか……。

幼年学校時代、キラとアスランは親しい友人関係にあった。アスランはキラにとって、いつでも隣に立っていたような、身近でかけがえのない親友だった。だがそれは、アスランが身分を隠していたから起こった「偶然」でしかなく、著名な政治家を父に持つアスランとキラは、本来ならば、住んでいる世界が違っていたはずなのだ。

そう考えるとキラはすこしだけ、暗い気分になった。

思い出はどんなに身近でも、現実を思い知れば、アスランと自分ではこんなにも距離があったのかと。——卑下に似た想いが、かつての親友との隔絶した距離を作り出すようで。

——ずっと隣にいたつもりで、見ていた景色は、全然、違っていたのかもしれない……。

キラが思慮していると、その時——ふと、キラ達のいる部屋のドアが開いた。

ドアの開放音にハッと顔を上げたキラは、咄嗟に身構え、ラクスの前に躍り出た。だが、目の前に立っていた人物は、両手の空いたサイ・アーガイルであった。

「サイ?」

目の前にいる彼は今は、恐慌していたフレイを看取っているはずだ。——サイは、フレイの婚約者なのだ。

サイの表情にはすこし陰が落ち、伏し目がちに浮かない顔をしている。——どうやら、ラクスに危害を加えようとしているわけではないらしい。

警戒を解いたキラが、ゆっくりと訊ねる。

「どうしたの?」

「キラ、その……ちよつと、話があるんだ」

「えっ?」

どうやらサイは、キラに個人的な用事があるらしい。

「——あなたはこれから、どうなさいますの？」

サイに呼び出されるようにして、キラが部屋を後にした後——部屋に残されたラクスが、ステラに訊ねていた。

それは、当然の質問だった。

そもそも、ラクスにとつては、ステラが地球軍の戦艦に乗り合わせている理由が、いまだに計り知れていないのだ。コーディネイターである彼女は、ラクスと同じように捕虜として囚われているならまだ合点が行くが、よりによって地球軍の軍服を着ている。

つまり、ステラはキラと同じように、コーディネイターでありながら、その存在をこの艦の乗務員には（一応は）認められているのである。

ゆつたりと尋ねるラクスは「自分がこれからどうなるのか——という質問はして来なかった。

地球軍に捕まった捕虜として、彼女の方が、よほど行き先が不透明で心許ない想いをしているだろうに……。

敢然と佇む振る舞いや表情に、不安の色は見えない。「それ」を必死で隠しているのか、はたは、本当に気にしていないのか——政治家が見せるような強さが、そこに垣間見えるようだ。

「これから……」

訊ねられたステラは、言葉に詰まった。

——これから、自分はもうどうしていくのだろうか？

キラヤ、ミリアリア達を「まもり」たいという自分で掲げた自分の信念は、信じて行っても良いものだと思っている。——だから、ザフトは敵。

敵は、倒すもの。

なら——アスランも、倒すのか？ 倒さねばならぬのか？

——ただ命令を待っているだけの「ステラ・ルーシェ」は——もう、存在しない。

“わたし”はもう「兵器」エクステンデットじゃない……以前がどうであれ、今の“わたし”は——

——ひとりの「人間」だ。

これからどうしていくのか——ラクスの尋ねる通りに、自分で、自力で、決めていかねばならない。

どうしていききたいかを、これからは見つめて行かなければならない。

生き様を指示してくれる人も既にいなければ——それを指示する他人に従う必然も、彼女の中には既にあるのだから。

だが、急に「やりたいことを見つけろ」と言われても、それはステラにとって無理な相談でしかなかった。

彼女は今まで、すべて「命令」によって行動してきたのだ。そこに突然「意志」を求

められても、咄嗟には決断できそうにない。

だからこそステラは、参考にはならないかと、ラクスに尋ねていた。

「ラクスは、これから、何をしていきたいの？」

「わたくしですか？」

囚われの彼女に、その質問は無意味であったが、ラクスは小さく微笑み、曖昧に答えた。

『平和を祈り、平和を歌っていければ』と——

遙か遠くを見据えたような言葉に、ステラは——首を傾げた。

キラはサイに連れ出され、サイに貸し出された居住区の一室へとやって来ていた。

この時、キラの心境は決して穏やかではなかった。

先刻、食堂で、サイはキラに対して——荒々しく「出ていけ」と叫んでいる。それは精神が恐慌していたフレイを庇うための言葉だったとしても、自分とは違^コい^デな^イ者^ネに^イ対^タする敵意や悪意が含まれていたと捉えても、不自然ではないほど荒つぽい言い草だっ

た。

現実には、その言葉のせいで、キラはサイに拒絶されたと思っていた。だからこうしてサイに連れ出されるのが、不安で仕方がなかったのだ。

「さつきは、ごめん……」

サイから告げられ、キラはその目を丸くした。

「サイ……？」

「さつきのことだよ、俺、あんなこと声高に叫んじゃっただろ？　今考えたら、ひどい言い方だったなって、気になってさ……」

サイはゆつくりとベツトに腰かけ、キラは呆然として、その場に立ち尽くした。

それを見て、サイが苦笑したように「まあ、座れよ」と一言、言葉を挟んだ。一応、サイはキラ達よりひとつ年上で、こういった気遣いに気が付ける人物なのだ。

キラが言われるまま、ゆつくりと向かいのベツトに腰かける。サイは両肘を膝の上に乗せながら、続けた。

「あのまま、お前たちが食堂あそこにいたら、フレイがもつと取り返しがつかないことを言うんじゃないかって思ったんだ。だから、出て行け、なんて言っちゃって」

「あ、えと。……そう、だったんだ……」

サイが沈鬱な表情をしているのに気付き、キラはそこで、自分の中の警戒心が払拭さ

れて行くような気がした。

どうやら、拒絶されたわけではないと確認でき、キラはすこしホツとした。同時に、サイは元々、かくも人柄が良い自分たちのまとめ役と知っていたながら、不安になった自分がすこし情けなく思えた。

「そ、れで……フレイの調子は……？」

キラは畏まるようにして、サイに訊ねる。

サイの敵意は単なる思い過ぎだったと判ったが——父親を亡くしたフレイが、自分に向けて来た感情は、たとえば精神が不安定な状態で放たれたものだとしても、疑いようがなく——。

「その話、なんだけどさ」

それまで顔を伏せていたサイが、不意にキラを見据えた。唐突に目が合い、サイらしい真摯な眼差しに、キラはすこし狼狽えた。

キラの視線が数秒、天井を泳いだ後、すぐにサイへと戻される。

「キラも聞いてたろ？ フレイの言った言葉……あれ、どこまでが本気だと思う

……？」

「えっ？」

「ほら……『おまえさえいなければ』って——ステラに対して、言いかけたことだよ」

キラの身体が、凍りついた。

思えばキラはあの時、苦戦した戦場から帰投したばかりで、とても落ち着いているような状態ではなかった。狂乱したフレイに敵意を向けられたことは理解していたが、何を言われたのかまでは、しっかりと咀嚼していなかった。まさか、そんなことを言われていたなんて。

——おまえさえ、いなければ？

その言葉を反芻して、キラが茫然と視線を落とす。歯切れが悪そうに、サイがその先を続けた。

「お前を責めるつもりはないさ。ていうか、この艦の誰にも、責めることは出来ないと思う。さっきの戦闘だって、俺達のために頑張ってくれただろ？ ……でも、フレイのお父さんが殺されたのは、もう、どうしようもなくつてさ」

キラがあの時、「モンドゴメリ」をしっかりと護衛していれば——状況は自然と、違っていかかもしれないが。

「フレイは、キラがステラを助けに行つたせいで、お父さんが殺されたと思ってるみたいなんだ」

「そんなつ……！」

「もちろん俺は、フレイを悪く言いたいわけじゃない！ でも、帰つて来たステラを睨ん

だ、あの時のフレイの顔が……どうにも頭から離れなくって」

狂乱していたとはいえ、フレイがステラに見せたあの時の敵意は——冗談では済まされぬような気がすると、サイはキラに打ち明けた。

「なんだか、怖くってさ。そんなの結局、フレイの逆恨みにしかならないけど、まして、ステラとは女の子同士なんだし」

もともと、フレイはコーデイネイターに対して、過剰ではないにしろ、一定までの偏見を持っている節がある。

それが今回の出来事で、跳ね上がらないとも限らない。

父を守れなかったキラとステラは、地球軍で戦うコーデイネイターで、そもそも根源を辿れば、戦争をしている相手は「プラント」で、父を殺したのもコーデイネイターなのだから。

「でも………そんなの、どうしようも、ないだろ……う？」

キラにとて、一切の非がなかったわけではない。

キラは先遣隊の掩護のために「ストライク」で出撃し、最終的には先遣隊ではなく、僚機ディフェンドを援護していたのだから。

だがそれも——あまりに無謀な戦況であったことを考慮すれば、キラの行動は的確な判断であった可能性の方が高い。たかだが「アークエンジェル」一隻で、護衛目標おにも

を抱えつつ、ザフトの艦隊を相手に立ち回れるわけがないのだから。

キラの言うことは、たしかに的を射ている。

サイの心境は複雑だろうが、フレイの幸福を選んでいたら、ステラはあの場所でやられていたのかもしれない。

そう、

こんな議題は過ぎてしまった今——どうしようもないのだ。

「落ち着いたら、フレイもその内、きつとわかってくれるよ……。あの時は、フレイもパニクってただろうしさ……」

一方的に父親を殺されたショックを知らないキラのその言葉は——とても無責任で。

それでもキラは——そうであって欲しいだけだと、ただ願った。

『芽生えた意思』

正規の搭乗員（クルー）の欠員が目立つ「アークエンジェル」で、もともとは地球軍中尉であるナタル・バジルールは、臨時の副艦長を務めている。

門出より、軍人氣質な性格に育てられた彼女には、現段階において、今後のためにもうしても確認しておきたい要件があった。

そもそも、「ステラ・ルーシエ」と名乗る少女が、地球軍が開発した人型機動兵器「ディフェンド」に搭乗することになったのは——「ヘリオポリス」崩壊の悲劇によって、偶発的に招かれた経緯がきっかけとなっている。

その際、機体のOSがまるまる書き換えられ、極めて難解にスペックアップされた「ディフェンド」が並の操縦士には取り扱えなくなったからこそ、彼女は今も「ディフェンド」の専任パイロットとして登用され、もともとはいち工業カレッジの平学生であったキラ・ヤマトのケースと同様に、彼女がコーディネイターであり、その中でも突出した高度な操縦技量を持っていたことは、「アークエンジェル」の乗務員にとって勿怪の幸であっただろう。

モビルスーツ
人型機動兵器を与えられたステラは、戦場で、鬼神の如き活躍を見せ続けた。——ナチュラルのパイロットでは、たった一機でさえ撃墜できれば僥倖な、コーディネイターの駆る“ジン”を、この数日間で何十機と撃墜したのだ。まして彼女はキラとは違い、敵機を撃墜し、人を殺めてなお、精神に動揺の色を浮かべなかつた。

見方によつては恐ろしいほどの、その“力”は———いつたいどこで、どのように養われたというのか？

ステラ・ルーシエの動向を監視していれば、さらに不可解な点も浮かび上がつて来た。上記のように、勇壮なまでの好戦績を残し続けて来たステラは、しかし、今回の出撃で汎用機である二機の“ジン”に圧倒され、撃墜までも危ぶまれる窮地まで追い詰められていた。

だが、先日の戦場で、ステラは二機のオレンジ色の“ジン”を圧倒し、これらを連続で撃墜している。

仮にも同じ条件の中で生まれた、その『差』の原因は何なのか？

彼女が先日撃墜した“ジン”は、搭乗者のパーソナルカラーへの塗装が施された機体である。その多くはエースパイロットの専用機として両軍では扱われ———塗装された“色”そのものが、敏腕のパイロットの代名詞となることもある。

機体の色が違えば、戦場では特別な威光を放ち、目立つことにも繋がる。それはパイ

ロットの操縦技量に自信があることの顕れでもあり、友軍の士気を上げたり、敵軍を動揺させる効果もある。

つまり、彼女が撃破したオレンジ色の「ジン」とは——かねてより地球軍で畏れられていた敵軍のエース——「黄昏の魔弾」の異名を持つパイロットが操る機体だったのだ。彼らを撃墜していながら、汎用型の「ジン」に敗北しかけるなど、奇妙と形容せざるを得ないではないか？

「彼女には、不思議なことがありすぎるわ」

艦橋のマリユー・ラミアスが、ため息混じりに、どうしたものかと言わんばかりの声を漏らした。

第一、彼女は本当に、パトリック・ザラの娘なのか。「プラント」最高評議会議員のご令嬢ともあろう高貴な身分の少女が、どうしてモビルスーツなど操れるのだろうか？ ましてステラの本名など、キラの口から聴取しただけで、揺るがない証拠があるわけではない。常識的に考えて、マリユーの中で、いよいよ彼女の正体も疑わしくなってきたようだ。

艦内放送で呼び出されたステラは、艦橋へ抜ける廊下を歩いていた。

殺伐とした平坦な廊下を進んでいると、ふと、通りすがった食堂の中から、何者かの談話の音が耳に入った。

「しかし……ラクス・クラインとはねえ」

ぴくり、とステラの肩が揺れた。同時に、こつ、という音を立て、彼女の履くニーハイブーツが歩を止めた。

ステラは首を傾げ、不意に、そつと食堂の中の様子を覗き込んでいた。ラクスの名前が拳がったことが、気にかかったのだ。

会話の主は、地球軍の士官であった。二名で会話をしているが、そのどちららも、ステラとの面識のある人物ではなかった。

「ザフト側のお姫様を拾っちゃまうなんて、地球軍からとってしたら、相当な儲けモンだよなあ？」

——ザフト側のお姫様？

形容された言葉を聴き、ステラの脳裏にラクス・クラインの姿が浮かぶまで、その時間は掛からない。「もうけもん」の意味は理解出来なかったが、ステラは息を詰め、そつと入口に背を寄せ、室内の会話に聞き耳を立てた。

同時に、不思議と気配を消すことが上手な自分に、わずかな嫌悪を憶えた。

「ラクス・クラインといえば、現 プラント」最高評議会議長シーゲル・クラインのご令

嬢だ。身柄が地球軍に渡った暁には、まず捕虜の身から解放されることはないだろう」地球軍本部に引き渡されて、人質にされるか……まあ、当然のなりゆきではあるな」

たしかに、半脅迫的外交の手段としては、これ以上ないカードだ。

士官が言うのと、それを盗聴するステラが息を呑み、凍り付いた。

「アルテミス」での一件が、ステラの脳裏に蘇る。

慇懃な歪^えみを顔に浮かべた者達に取り囲まれた、あの時の恐怖と絶望——アレが今度は、ラクスに降りかかる、というのか？

——どうして。

ラクスがなにか、わるいことをしたわけじゃないのに。

前にキラが、「ザラ」という名を隠しておいた方がいい、と言っていた意味が、すこしだけ分かって来たような気がする。

——名が持つ家系の「しがらみ」が……どこへいつても、付きまとう。

——ラクスが、あぶない……？

そんなの、考えても見ればおかしな話ではないか。座礁船の危機から助け出されて乗り込んだ、この艦に乗っていることが——ラクスにとって、危ないことだというのだから。

ステラは即座に、その場から踵を返し、走り出していた。

ドアが開き、性急な様子のステラが、ラクスの下へ駆け込んで来た。

さきほど、会話の途中で艦橋へ呼び出され、ゆつたりと「またね」と言い交わしたステラの姿を見、ラクスがいつものように、あらあら？と声をこぼす。

「ラクス、へんなこと、されなかつた!？」

「へんなこと……?？」

突然の質問に、身に覚えのないラクスは首を傾げる。

ラクスが答えられず、ふたりの間にわずかな沈黙が流れると、ラクスは、かすかに乱れた息を整えているステラの身なりを整え始め、彼女が着ている地球軍の軍服の、襟元を直した。

「……なにか、お聞きになりましたの?？」

訊ね返したラクスの表情は、いつになく、強張っているようにも見えた。

間を置かず、ステラが、うん、と頷く。

「艦の人が話してたの。ラクスがこのままこの艦にいと、危ないんじゃないか、つて」

「……」

「それって、ほんとなの? だったらラクスは、この艦にいちやだめ……。アスランの傍

に、いた方がいいよ……!」

慌てたように、ステラがラクスに促す。

ステラとて、自分がラクスのことを「守って」あげる、だから大丈夫だよ、と言ってあげたかったが——生憎、今のステラには、ラクスがどう、どのように危ないのかが理解できないのだ。

何をどうしてやれば、ラクスを守れるのか。——モビルスーツに乗って出撃するだけで彼女が守れるのなら、簡単なのに。

だから、それがわかるアスランの所に帰するのが最善だと判断したのだろう。

「——ありがとう……」

ラクスは、鷹揚と答える。

しかし次に、俯いていた、その小さな顔を上げた。

「ですが、そういうわけにもいきませんわ」

「え……っ?」

「わたくしが今、この艦を離れば……ザフトによる攻撃は再開され、この艦に乗るみなさまが危険に晒されるでしょう」

それは、ラクスひとり、自分だけが助かるために、自分を助け出してくれた、この艦を見捨てることと同義だ。

ステラは気付いていないのだろうか、先ほどの戦闘で、苦況にあった「アークエンジェル」がザフトから逃れることが出来たのは、この艦にラクスが乗っていたからだ。彼女が人質にさえなっていないければ、この艦はあそこで撃墜されていたかもしれない。

「みんなが助かって……それじゃあ、ラクスは？」

「殊に、とって食べられるわけではありませんわ？」

ほら、とラクスは言いながら、ステラの身なりを、もう一度整え始めた。

「女の子がそのように乱れていては、みっともないですわ」

にっこりと微笑み、ラクスは話を茶化すように笑う。

しかし、ステラはその瞬間、ラクスの手を、すこし痛いくらいの力で握った。

「……ステラ？」

「やっぱり、だめ………ついて来て」

真摯な瞳で訴えられ、ラクスは思わず、頷いていた。

艦橋へやって来たのは、ステラではなく、キラであった。

その足音は大きく、表情にも険しさが伺える。後方に同じカレッジの同級生達——サイヤミリアア、トール——も引き続きしているが、彼らは彼らで、特別何か直訴したいことがあるわけではないようで、ただ、キラについて来ただけのようだ。

「民間人の女の子を人質にとつて生き延びるなんて！——そんなのが、地球軍つて軍隊のやり方なんですか!？」

キラは激しい剣幕をまくし立てて、マリユーチたちに問う。今回のことで痺れも切れたか、そうでなくても彼女たちには戦闘を強要されて来たキラの口調は、自然と刺々しくなっていた。

トール達もすくなくならず、先のナタルの判断が「正しかった」とは思っていないのだろう。キラの主張に賛同するように、唇を噛み締めながら、首を縦に振っている。

言われたマリユーチは反論することもなく、キラから放たれた言葉を痛恨したように受け止める。だが、その痛みを分かち合つてやるように、ムウが即座にフォローに入った。「そういう情けねえことしか出来ないのは、おれたちが弱いからだろ？ それとも、あそこで全員やられていればよかつたと……きみそう云いたいのか？」

ぴしやり、と指摘され、場の空気が一層引き締まる。にべもない返答だ。

ああするしか、状況を打破することが出来なかつたという——ムウの意見も正しい。間違つてはいない。むろん、避難民の多くを乗せたこの艦が、むぎむぎ撃沈してやれるはずもない。

——だが、どうして彼女が、戦争に利用されなければならぬ？

キラの目の前の「軍人」たちは、民間人を守るため、などと大仰な大義を翳しながら、事実「プラント」の民間人の身柄を盾に取つた。

その命の重さは等価であるにも関わらず、彼らは避難民とラクス間に隔絶した「差」を作り出している。ナチュラルとコーデイネイターという、決定的な差を。

その時のキラの中に一瞬でも、「ラクスを逃がしてやりたい」という思いが芽生えたのもまた、事実であつた。

「政治家の娘だから……？」

キラの口から、その言葉はついで出ていた。

「プラント」評議会高官の娘という事実だけで、彼らは少女を人質として、自分たちが危機に陥れば、その存在を盾とした！

——だが、それは決して……ラクスに限つた話ではないはずだ！

頭では理解できても、納得できないことはある。

「政治家の娘だからって、あなたたちが『それ』を利用しようとするのなら、ぼくは——

—!!

「……、何を言い出す——!?

キラの言葉を受けるムウやナタルの表情が、引き攣つたように強張つた。キラの表情に、自分達軍人に対する、激しい猜疑心を覗けたからだ。

だが——その先は、続かなかつた。

その瞬間、艦橋に大きな警報が響いた。警報音はキラの言葉を遮り、場にいた一同が、突然の混乱に飲み込まれた。

「なに——とだ!」

ナタルが声を張り上げ、チャンドラに警報の正体の確認を求める。

管制席のチャンドラが声を放つた。

「『ディフェンド』がまた、勝手に動き出しています! 映像、出します!」

チャンドラの声と共に、艦橋の巨大なモニターに格納庫の様子が映し出された。そこには、ばらばらと床を逃げ惑う数人の整備士たちの姿と、不思議なことになんだか見慣れてしまった、慌てふためくマードックの精悍な後姿。そして、一步、また一步と、ゆっくりと着実に歩を進め、ハツチまで向かつていく真鍮色の機体が映っている。その安定した機体の足取りは、機体に誰が搭乗しているのか、艦橋に居た全員に一瞬で理解させた。

機体を操れるキラは今、ここにいます。ならばあと、あんな機体を動かせるのは——

「ルーシエ少尉か！ ええい、機体デیفエンドはあの者の玩具ではないのだぞ!」

ステラは以前も無断で機体に搭乗し、出撃した節がある。その時はザフトとの交戦中で——“アークエンジェル”自身も窮地に陥っていたこともあり、誰も彼女を咎めたことはなかった。

だが、今回はいったい、何のためにこんなことを——？

その答えは、次の瞬間、艦橋に飛び込んできたロメオ伍長から知ることになった。

「た、大変です！ 部屋に軟禁しているはずの、クライン嬢の姿が見当たりません!!」

「なッ、なんだとお!」

「ちいっ！ そういうことかよ!」

ナタルが素つ頓狂な声を上げ、同時にムウが小さく毒づく。

そもそも、ステラには事情聴取のため、艦橋へ上がるように指示を出してあったはずだ。それがどうして、こんな事態を招いたというのだ。

罰が悪そうな表情を浮かべ、ムウは即座に、艦橋から飛び出して行ってしまった。

「ステラがあれに……？ あのお姫さんを、逃がそうとしてるのか………?」

状況判断は、流石に軍人であるナタルの方が早かったようだが、すこし遅れて、サ

イがそう声を漏らした。

「ステラ……………」

キラの怒りはいつの間にか収まり、キラは呆然として、モニターの中に映し出される
“デیفエンド”の姿を見遣っていた。

漆黒の大盾と重装甲を取り外し、機動力と攻撃力に特化した——ネイキッド装備
だ。

“ストライク”のスペアに用意されたビームライフルの武装を手にとると、徐にエア
ロックを外し、船外へと飛び出して行く。その後はスラスターを噴射し、音速で“ア
クエンジェル”から離脱してゆく。

雷のように飛び去って行くその機影は——たった今、艦橋から飛び出して行った
ムウの“ゼロ”が追いつくまでは、相当な時間がかかるだろう。

——ステラには、いつも驚かされる。

だが、ステラもステラなりに、ラクスの置かれた立場を理解してしまったのだろう。
だから行動した。——たとえこれが、向こう見ずで無鉄砲な暴挙であったとしても、

彼女はきつと、自分に素直に動いたのだ。詰まらない軍規や大人の事情に縛られていた
キラにとつて、それは憧れるほど羨ましくもあり、いつそのこと快哉であった。

なにより、慌てふためいた軍人たちの姿を覗れたことが、キラにとつては痛快で仕方

がなかった。

「ス、ステラさん……！　　いったい、どこで操縦を……!?!」

『デیفエンド』のコックピット内には、ステラとラクスの、二人の姿があった。ステラは常用のパイロットスーツに身を包み、ラクスは船外作業服を着用している。

ラクスは「モビルスーツ」なるモノに搭乗するのが、これが初めての経験であった。見たこともない景色、構造——何が何のためのスイツチなのかも分からない無数の機材の中で、目が回りそうなのに対して、ステラはこれらを小慣れたように扱っている。ラクスの円らな双眸はその様子を見、さらに丸く、大きくなった。

ラクスはステラに問いかけるが、ステラは返答を返さなかった。そればかりか——
「ステラ………さん？」

真つ直ぐに宇宙空間を捉え、キリツした端正な表情でモビルスーツを操縦するステラの横顔を視界に入れ、ラクスは愕然とした。

その横顔は——ラクスの知っている「ステラ」のそれとは、まるで別人のようなものだった。

それは、立派なひとりの女戦士然とした鋭い目、顔つき。触れるだけ、近づくだけでこちらが切り刻まれてしまいそうだ。その面持ちは異国神話の戦闘^{アマソネス}女族を連想させ——

——幼子のような、彼女特有の柔らかな面影を、遙か彼方に忘れて置いて来たような——
——別人の顔が、そこにはあつた。

ステラは通信スイツチに手を伸ばし、全周波数のチャンネルを開くと、声を上げた。

「こちらは地球連合軍 “アークエンジェル” 所属のモビルスーツ、 “デイフェンド” ！
ザフト軍戦闘艦、ナスカ級、聞こえるか！」

その張りつめた乱暴な声もまた——ラクスの知っている、妹のような、少女のものとは別人のそれだった。

ステラはそこで——アスランが乗り合わせているであろう “ヴェサリウス” へ——
——接触を試みたのだった。

「——どういふつもりだ、足つきめ！」

通信を拾った「ヴェサリウス」艦長、アデスが眉を顰め、敵の動向の真意を疑う。

突如、通信による接触を試みて来た地球軍のMS——何度もこちらの戦力を減らしてくれた「デイフェンド」が、よもや無防備に単騎でやって来たというのだ。

「おいおい、女の声だぜ?」

艦橋にはイザークやディアツカの姿もあり、イザークを筆頭に、聞こえて来た声の正体を疑った。

ニコルが眉をひそめながら、声を漏らした。

「どういうことでしょうか? まさか「アレ」を操っていたのは、女性パイロットだったということでしょうか?」

「聞いたカンジ、ずいぶんと若い感じもするなア。もしかして案外、可愛い女の子だったりして?」

お調子者のディアツカが、口を歪ませたような冷笑を浮かべる。

ユーモアの過ぎる発言を、イザークが制した。

「馬鹿者が! おれたちが何度ヤツに邪魔され、『足つき』を仕留め損ねたと思っているのだ! 女ごときに、ザフトレッドであるおれたちが退けられたわけないだろ!」

「んじゃ、今の「アレ」を動かしてるのは……「アレ」の正規のパイロットじゃないって?」

「当然だー！」

イザークが激昂したように言い張る。

彼のプライドは「女性に後れを取っていたかもしれない」という可能性を、鏝一文でも認めたくないのだろう。

「とにかく、こんなチャンスはない！ すぐに出撃して、全員で“アレ”を落とすぞ！」
「待つんだー！」

イザークが指示を飛ばすと、それを——顔色の悪いアスランが大きな声で制した。

己のライバルに制され、イザークは露骨に嫌な顔を作る。また貴様か、といわんばかりの表情だ。だが、心なしかアスランの顔色が悪く、すこしだけ疑問に思った。

「どうしたんですかアスラン？ 顔色が悪いですよ」

「……今は、そんなことはない。敵が単騎でやって来るなど、なにか思惑があるに違いない。もう少し、様子を見るべきだ」

「はあ?！」

なにを悠長なことを抜かしている、とイザークがアスランに反論する。

こんな絶好の機会、ほかに有りはしないだろう——そう続けようとした時、艦橋に、仮面をつけたクルーゼがやって来た。

(どういいうつもりだ、ステラ……！ 何をしに来た、いったいなぜ………!?)

イザークは否定していたが——あの「デイフェンド」に乗っているのは、間違いなく、ミゲルやハイネを仕留めたパイロット。

——アスラン自身の、妹だ。

だが、その正体をアスランはまだ、誰にも言うわけにはいかない。最愛の妹を迎えに行きたい気持ちを押し殺して、アスランはあくまで、「デイフェンド」が地球軍の敵機であることを装った。

やがて、通信から再び、少女の声が入る。

『繰り返し返す！ こちらは地球連合軍「アークエンジェル」所属モビルスーツ、「デイフェンド」！ ザフト軍ナスカ級、聞こえるか！』

いったい、どこでこのような口調を憶えたのだろう。

アスランの中で、この声はしたたかに聞き覚えはあっても、彼の知っている、幼き日の妹の話し方ではなかった。

ステラの呼びかけは繰り返し返され、

『——ラクスを連れている！』

その一言で、「ヴェサリウス」艦橋の一同は凍り付いた。

——ラクス、を………？

アスランが心の中で、声を漏らす。

同時に、まさか——と、彼の中で、ひとつの予想が浮上した。

『ナスカ級は艦を止め、"イージス"のパイロットを単騎で寄越せ！ そうすれば、ラクスの身柄を引き渡す！』

ステラが、ラクスの名前を呼び捨てにした瞬間、クルーゼの眉が、ぴくりと動いた。その言葉を聞き、アスランの中の予想は、確信に変わった。

ステラは——ラクスを自分に、引き渡そうとしているのだ。

だからこそ、単騎で此処までやって来た。こうと決めたら譲らない性格は——いったい誰に似たのか考えた時、アスランの中に、パトリックの顔が浮かんだ。

アスランが視線をそらすと、隣のイザークがなにやら激昂していた。

「何を偉そうに！ ラクス嬢を、呼び捨てにするとはあ！」

「つて、怒りの先はそこか？ ていうかおまえ、ラクス嬢のファンだったんかい」
「う、うるさいわ！ 馬鹿者！」

「ヴェサリウス」の若い一同はムツとした表情を作っている。

なんだかんだ、イザークやディアツカ、ニコルもまた、ラクスのひとりのファンであるようだ。

やがて、一同の視線が「イージス」のパイロットである、アスランに集中する。

とりわけイザークの視線が痛々しく、「どうしていつも貴様なのだ」と言わんばかりの表情だ。

クルーゼは腕を組みながら、どういうわけか、少しだけ愉快そうに声を漏らした。

「アスランを超越せば、彼女を解放するとは——これはこれは、なかなか面白い条件を提示してくれる女の子だな」

クルーゼが滅多に見せない、愉悦というプラスの感情を滲ませたことに、多少の不気味さを覚えながら、アスランは彼を見る。

仮面の下に、おそらくは不敵な笑みを浮かべながら、クルーゼは通信先の少女が言った言葉を反芻している。

アスランは目の色を変え、クルーゼに訴えた。

「行かせてください、隊長！」

言われたクルーゼは、アスランの端正な顔を見遣る。

心なしか、彼の顔色がすこし良くなっている。

「きみが予見した通り——『アレ』が言っていることは、単なる罠かもしれぬぞ」

立派な軍人ならば、たしかにこの状況を傍から見た時、そのように判断するのが賢明であろう。

『ダイフエンド』の中に、ラクス嬢が乗っている証拠は、依然なにひとつとして提示

されていないのだ。それなのに、みすみすアスランというエースパイロットを送り出す必要性は、クルーゼにとつては皆無なはず。

そんな時、クルーゼは……

「それとも君には——これが畏ではないとわかる確証でもあるのかね？」

と、底知れぬ寒気を言葉に宿して、アスランに問うた。

「そ、それ、は……………」

途端に動揺する、アスランの焦りや恐怖を味わうように、少し間を置いたクルーゼは、やがてアスランから視線をそらし、言った。

「……まあいい、私が許可しよう。アスランは『イージス』に乗り、あの機体……『ディフエンド』の指示に従いたまえ」

「…………… 了解！」

アスランが艦橋から走り去る。納得が行かないイザークが、クルーゼに食いついた。

「隊長！ よろしいのですか」

「そう急くものではないよ、イザーク。これはチャンスであることも確かさ。——
むろん、このままでは終わらぬよ」

その言葉を聞き、その意味を悟ったイザークやディアッカが、にやりと笑う。

「わたしの『シグ』を用意しろ。各員、戦闘配備だ」

まったく、よく云うではないか。
果報は、寝て待て——と。

“ヴェサリウス”から発進した“イーゼス”が、“デイフェンド”の機影を捉えるまで、その時間はかからなかった。

真鍮色の機体を目の前に、スラストターを逆噴射して停止する“イーゼス”に——
次の瞬間、“デイフェンド”はビームライフルを突き付けた。

「ステラ……………！」

一瞬、戸惑いと驚きがアスランを襲う。実の妹に銃を向けられた事実に対して、小さな嫌悪感に苛まれる。

が、それもステラの警戒の証であると理解したアスランは、すぐにその感情を飲み込んだ。

『……………コックピットを開いて』

通信先から聞こえてくる声はひどく無機質で、これではまるで、お互いが赤の他人同士の会話だ——。

強い寂寞感を憶えながら、アスランはステラの指示通り、大人しくコックピットを開き、生身を晒した。アスランの姿を確認したか、今度は「デイフェンド」のコックピットが開き、その中に、華奢な体格のふたりの姿が見て取れた。両名とも、どう見ても女性だ。

たとえ会話が無機質でも——お互いに無防備な姿を曝け出せたのは、お互いの間に、たしかな「信頼」があつたからに他ならないからだろう。

「……アスラン」

敵対し、対峙し、無防備な姿をさらし合い、そこで初めて——ステラが、兄の名を呼んだ。

「ラクスを渡す。今度は、ちゃんと……もっと、ラクスの傍に、いてあげて欲しい」

「ステラさん………」

「アスランは、ラクスのお婿さん。ラクスは、アスランのお嫁さん。だからアスランは、ラクスをもっと守ってあげなきゃ、ダメ」

「……………」

「ステラじゃ、ラクスは……守れないから」

そう言うのと、ステラはラクスの背を、優しく押した。

「ステラさん……？ 共に、来られないのですか………？」

アスランと、ラクスト、ステラ——。

幼き日に会い、三人兄妹のように付き合っていた者達だ。それが今、ふたつに分裂しようとしている。

ラクスには、どうして、なぜこのような構図になろうとしているのか、それが理解できなかった。

——どうして、実の兄と妹が、歩み寄ろうとしないのか……………？

「……………行つて。ステラには、まだ、あの艦に守っていたいものがあるから」

ステラにも、今は「意思」がある。ツールや、サイヤ、ミリアリア——そして、親友のキラ。

——彼らを守っていたい。守ってあげたい。

歴史をやり直すきっかけにもなった——それはステラの切なる意思、願望、希望だ。

ステラにとっては悔しいが——“アークエンジェル”にラクスが乗せたままでいれば、ラクスはきつと、恐ろしい目に逢うのだろう。

そこからラクスを助け出すには——ラクスを、アスランの元に送るしか考え付かなかった。

だからこうして、彼女を渡しに来た。

自分では彼女を守れないから、誰かに守ってもらわせようとした。

ラクスの背を押し、彼女の身体が宙域に投げ出されると、やがて——身体は慣性に従い、真つ直ぐに“イービス”のコックピットへ、アスランの腕の中に納まった。

紅の騎士の腕に納まった、純白の姫の姿を送り届けると——ステラは小さく、にこりと微笑んだ。

そしてそれ以上は何も言わず、黙って“デイフェンド”のコックピットを閉じようとする。

その瞬間——

「——ダメだ！」

「ステラさん！」

アスランとラクスが——共に声を上げた。

心から慕う者達の声に呼び掛けられ、コックピットの開閉ボタンに伸びたステラの手が、ぴたりと止まった。

「ステラ、おまえもこっちに来い！ どうして……おれたちが対峙しなければならない！」

同じ時間の思い出を築いて来た三人なのだ。

なのに、こんなところで、道を違える必要はないじゃないか。

アスランの懇願するような声は続く。

「今なら……今なら帰れるんだ！ 三人で『プラント』へ——！ 誰も邪魔はしない！！」

アスランが強く、主張する。

一方のラクスは押し黙りながら、傍らの恋人の、その声を聞き届けている。

「おまえはまだ、自分の立場がわかってない！ 無理をしても、こうしてラクスを引き渡してくれたことは嬉しい……だが、そんな真似をすれば、次に危険なのはおまえなんだ！」

「え？」

アスランが、コックピットから身を乗り出して話し、ステラがその言葉を疑う。

「おまえだって、ラクスと同じだ！ 野蛮な地球軍に、いつか利用される！ いつか後悔する！ ——そんな思いを、オレはおまえに味わって欲しくない！」

「アスラン……なにを、云ってるの……？」

ラクスを人質に取った時点で、地球軍はコーデインイターを盾にすることに、何の迷いも、躊躇もないのだ。すくなくとも、アスランにはそう見えて当然だ。

なら、それと近しい立場にあるステラとて、いつかは……。

その瞬間——『イージス』の機体が動いた。

「イージス」が両手を伸ばし、「デイフェンド」の肩に両手を置いた。——まるで、説得を呼びかけるように。

両腕に掴まれた「デイフェンド」の機体が揺れ、ステラはわずかに態勢を崩す。

「ツ……………アスラン!？」

「おまえがやろうとしていることは間違っているんだ、ステラ！ コーディネイターであるおまえが、ナチュラルに味方する意味がどこにある!!」

——アスランも……………あいつらと同じことを言ってしまうの……………?？」

ナチュラルだから。

コーディネイターだから。

そうやって自分と違うものを肯定せず、見限つて。

同じ「人間」であることを見ようともせず……………!

その瞬間、「デイフェンド」が——

「イージス」の腕を——振りほどいた。

「ステ、ラ……………!？」

「かんけい、ない……………!」

アスランが絶句する。

ステラは頭を抑えながら、言い放った。

「関係ない……！　関係ない……！　つまらない話はいらない、必要ない……！　人を『守る』のに、そんなのは関係ない……！！」

——シンは……

——シンは違った——！

アスランが言っている言葉の意味がわからない、いや、わかりたくもない。

コーデインイーターだから、ナチュラルだから？

ザフトだから、地球軍だから？

そんな肩書きが、アスランにとっては、そんなに重要なことなのか？

シンはたしかに、ザフトの軍人だったかもしれない。シンはモビルスーツにも乗っていた。

——でも、ステラを守ろうとしてくれた！

そう——身を置く軍が違ってても、約束を交わすことが出来た。分かり合うことはできた！

「——だれかを『守ってあげたい』と思う気持ちに、間違いなんて、ない！！」

シンはそれを、ステラに教えてくれたから。

間違っているのは——アスランの方だ！！

「ステラ……！！」

“デیفエンド”のコックピットが閉じてゆく。

今のアスランは、それを止める言葉さえも思いつかない。

——ステラは、大切な妹だ……。

一度は手放し、離れた妹とは、もう会えないときえ思っていた。

できるなら、二度と手放したくない。昔と同じように傍にいて、無邪気に笑っていて欲しい。それは胸が焦がれるような、切ないまでの欲求だったが——アスランの言葉は、もはや「彼女」には届かなかった——。

紅蓮の機体から、真鍮色の機体は小さく、遠ざかっていく。

残されたのは、虚しさ、寂しさだけであった。

“イージス”から遠ざかる中で、ステラはラクスを解放できた安心感と、アスランと別れてしまった寂寞感の入り混じった、複雑な気持ちを抱いていた。

——これが、葛藤……？

それは、最適化を受けていた頃の自分には、決して存在しなかったモノだ。

「シ、ン……………」

記憶の中にもぼつかりと空いた穴が、その名前が出て来ることで、一気に埋もれたような感覚になる。

そうだ——。

自分にすべての“きつかけ”を与えてくれた人の名は——シン。

シン・アスカ。

アスランに懸命に訴える中で、不意に、記憶が蘇るように思い出すことが出来た。

——シンは今、どこで、何をしているだろう……………？

それがわずかに、気になってしまうステラであった。

しかし、そんな時——

“ディフェンド”のコックピット内に、警報音が響いた。

ステラの反応は早かった。

突如として頭上から降り注いだ、四条の光線を瞬時に回避し、機体を大きく翻すと、即座に全身にビームブレイドを展開させた。

(敵襲……………!?)

反応は——三つ。

遙か遠方から気配を消し、レーダーにかからぬように、隠れていたとでもいうのか？

おそらくそれは、アスランをも騙した作戦だ。

“デュエル” “バスター” “ブリッツ” の機影を捉える。

「ッ……………！」

大人しく、とはいかないようだ。

ステラは “アークエンジェル” への帰還を断念し、ひとまずは、迎撃の姿勢を取った。

『囚われた意思』 A

「どうすんの、イザーク？ 奇襲の一撃、見事に避けられちまったぜ？」

「……………」

「これでもまだ、今まで “アレ” に乗ってたの、さっきの女の子じゃないって言うのかよ？」

「あ、当たり前だ！ あんなものは、偶然に決まっている！ 機体の性能に助けられただけだ！」

小惑星に隠れつつ、イザークたちは間抜けにも単機でやって来た “デイフエンド” を討ち取るため、奇襲の準備をしていた。

“デイフエンド” がやって来た航路から逆算して、その帰路を導き出し、待ち伏せしていたのだ。

格好の奇襲のつもりで、遠方から “デイフエンド” の虚を突いて、三機は一斉に攻撃を仕掛けたが——これは見事なことに、くるりと回避されてしまった。

アスランを出し抜いて戦果を挙げられる！ と、かつてないほどに意気込んでいたイザークであったが、彼の赤としての自信やプライドは、今の回避行動によって色々と打ち砕かれてしまった。

——よもやおれたちザフトレッドは、女なんぞに後れを取っていたというのか!?

事実として、現時点で“デイフェンド”は、クルーゼ隊にとつて確実に“ストライク”よりも厄介な存在として認知されていた。後者はまだ、素人らしい動きの鈍さが残っているのに対して、前者はミゲルを撃墜し、続けざまにハイネを撃っている。その動きも、どういいうわけか卓越した戦士のように洗練され、隙が見えない。

敵の戦績……つまり、ザフト（こち）が受けた被害の程度から判断しても、明らかに警戒すべき対象だ。

——そのパイロットの正体が、気にならない、といえ……それは少しだけ、嘘になるのだろうか。

様々な戦闘訓練を積んで来たザフト軍のエース——その代名詞が「赤」であり、赤服で構成されたクルーゼ隊が苦汁を舐めるなど、本来、あつてはならないことなのだ。

そういえば、ハイネが機体の奪取に失敗した原因のひとつに、ひとりの少女の影があつたらしい。

よもや、そいつが今も“デイフェンド”を——？

「——とにかく、今日こそヤツを仕留める！ 妙な増援が来る前に、散開して囲い込め！」

イザークが指示を飛ばし、ディアツカが高らかに口笛を鳴らした。

照準した先のモビルスーツは、真鍮色をした、以前見た時とまったく異なる姿形をしていた。

黒い重鎧を取り外し、防御から一転、攻撃に特化した黄金の騎士のような風貌の、GATシリーズの中で、最後に開発された機体——

これを目にしたディアツカが、興味ありげに声を上げた。

「おっと、自慢の装甲は、今回は忘れて来てるみたいだなあ」

「であれば、ジリ貧に追い込めば勝てる、というわけですね」

「デブリをつかえ！ 死角から攻められる」

接近してくる三機の機影——同じXナンバーである「デュエル」「バスター」「ブリッツ」を捉え、ステラは小さく毒づいた。

「一対三では、どう考えてもこちらが不利だ。」

こうなる可能性も懸念して、ビームライフルを保険に持つては来たが——それでも、頭数にして圧倒的な不利なことには変わりはない。

まして相手は、こちらと同等の性能を持つ機体なのだから。

「ええいッ」

ステラが、威嚇するような唸り声を上げる。

「デイフェンド」の全身に仕込まれた数多の光波発生器より、無数の光波刃が展開する。真鍮色の体軀は全光色の刃に揺らめき、「デイフェンド」という名の機体自身が、ひとつの「刃」に化けた。

そこから抜き打ちに加速し、まずは近接戦闘を苦手とする「バスター」へと躍り掛かった。

「ハッ、オレに来ると思つたぜ！」

「デュエル」がビームライフルを放ち、加速する「デイフェンド」を牽制する。

だが、無数の光条の間を縫うように、なおも加速した「デイフェンド」が——一目散に「バスター」へと肉迫する。

ディアツカは瞬時に、二丁のライフルを連結させた。

Xナンバーの機動力においては、おそらくMA形態の「イージス」がトップをゆく。次に、エールストライカーを装備した「ストライク」が続くのだろう。一方の「デイフェンド」は一見、大した推進装置を搭載していないように見えるが、その軽量ゆえか、スピードはトップレベルを誇っている。

連結された「バスター」のライフルから、巨大な光線が放たれる。

「デイフェンド」は轉身し、一重にこれを回避。避けたそこへ、ビームランサーを構えた「ブリッツ」が躍り掛かる。

「はあああつー！」

機影を捉え、後退しようとして「デイフェンド」が逆推進のスラスターを吹かす。

だが、イザークが駆る「デュエル」によつて、宙域にはビームが散りばめられ、回避行動自体が制限されてしまう。

「デイフェンド」は進退もままならず、正面から迫る「ブリッツ」に追い詰められた。

「ツー！」

やはり、数には勝てない——！

「デイフェンド」に迫る「ブリッツ」が——その瞬間、わきから飛び出して来た何かに蹴り飛ばされた。

漆黒の機体は吹き飛ばされ、ステラの視野から大きく遠のいてゆく。

『——ステラ！』

「デイフェンド」のコックピット内に、通信越しのキラの声が響いた。

隕石が無数に散らばった戦場に、「ストライク」が飛び出して来たのだ。

「キラ！」

幼馴染の増援が駆けつけて来てくれた。

思わずステラは弾けるような声を上げ、柔らかな表情を浮かべた。

心温まるようなキラの声を聴き、一気に安心感が、ステラの胸を支配する。

束の間、様々な方位・角度からレールガンが飛び、砲火は“デュエル”と“バスター”を牽制し始めた。——ムウが駆る“メビウス・ゼロ”もまた、この宙域に駆け付けたのだ。

——まさか、本当に助けに来てくれるなんて。

ラクスを逃がすという勝手なことをして、後悔こそ抱いていないが——多少の罪悪感を、ステラとて感じていないわけではなかった。あれは明らかに、軍規としては違反行為だったからだ。

通信から聞こえて来たムウの声に、ステラは耳を傾けた。

「やってくれたなあ、お嬢ちゃん！ あとでみっちり叱ってやるから、今はとにかく、この場を切り抜けて生還するぞ！」

ムウが放った言葉は、どこか軽率な雰囲気を含んでいた。本音と冗談が入り混じったような表現ではあったが、ムウが放ったその言葉には「必ず帰ろう」という強いメッセージが組み込まれていた。

味方というものが、こんなにも心強く思えるとは——こんな感覚を憶えるのはス

テラ自身、初めてのことであった。

味方の存在が傍にすることが、無性に嬉しく思える。

ステラは思わずムウの太い「声」に呼応し、嬉々として叫んだ。

「うん、ネオ！」

「はあっ!?!」

——誰がネオだ！ 誰だそいつは！

ムウが眉をしかめながら、素っ頓狂な声を上げた。

『こんな状況じゃ、僕達が圧倒的に不利です！ なんとかして、この場を振り切らないと！』

キラが冷静に、戦況を判断した。

この宙域は隕石が多く、上手く立ち回れば、敵機から離脱することも、隠れることも可能かもしれない。だが反対に言えば——この宙域には障害物が多すぎて、迂闊にアークエンジェル”のような大型艦は接近できない。

つまりステラ達は——デブリを上手くカモフラージュに利用しながら敵機を撒き、迅速にこの宙域を離脱する必要があるのだ。

そのためにはまず——あの三機の連携を、突き崩さなければならない。

「離脱の作戦を伝える！ いいか、よおく聞けよ！」

“ゼロ”を操りながら、ムウが少年と少女に告げる。

「やっこさん方は三機出撃してるが、幸いなことに、頭数でいえばこつちと同数だ。三機一じゃあ敵を撒くことは不可能だが、一対一なら、無理な相談でもないだろう」

つまりムウは、三機の敵を分散させ——“ゼロ” “ストライク” “ダイフェンド”で、それぞれに相手をしようというのだ。

「ひとりに一機ずつ、敵を惹き付けるんだ。敵が分散すれば、あとはソイツを振り切れればいい！ 敵を撒いたあとは、指定した合流地点に集まり、そのまま“アークエンジェル”に帰投する」

『担当した一機を誘き出して、あとは上手く逃げればいい、つてことですね？』

「そういうことだ。相手の数が減れば、こつちのモンさ。なんなら俺が二機、まとめて相手してやってもいい。……できるか？ 坊主、嬢ちゃん！」

ムウが確認を求め、

「……やります！」

「できる」

と、若いふたりが、意気揚々と声を返した。

作戦が、始まった。

“ストライク”に蹴り飛ばされ、態勢を立て直した“ブリッツ”は、目の色を変えた

ように「ストライク」への攻撃を始める。

放たれたビームを、キラは巧みに回避した。

「どうやら、キラの担当は——「ブリッツ」のようだ。」

（「ブリッツ」を誘き出して、あとは、上手い具合に撒いてしまおう。離脱に成功したら、合流ポイントに向かい、「アークエンジェル」を待つ、か）

たしかに、いい作戦だ。敵戦力を分散させることで、離脱できる可能性は、飛躍的に上昇する。

仮に、こちらの三人の内、誰かが敵機を撒ききれず、合流地点に敵機を引き連れて来たとしても、その時点では、機体数ではこちらが上回り、利はこちらにある。

逆に、三人が三人とも離脱に失敗すれば、合流地点で同じことの繰り返しとなってしまうが、この宙域でギリ貧に追い詰められるよりは、何倍もマシだ。

——でも、さいわい、ここは小惑星帯。

——これは、目くらましにはちようどいい……！

迫り来る「ブリッツ」と、サーベルを引き抜いた「ストライク」が激突する。

（アスランは出撃していい……アスランはこの戦闘のことを、知ってるんだろうか？）
蹴り飛ばされた報復に、執拗に迫る「ブリッツ」と交錯しながら、キラは不意に、そんなことを懷疑した。

一方で、作戦通りに「ブリッツ」が「ストライク」に喰らいついたことを確認したムウは、ステラに通信を繋げた。

『黒いのは坊主が相手をする！ アイツはオレが引き受けるから、あとの機体は任せませ、お嬢ちゃん！』

「わかった」

ムウが指定した敵機の名は「バスター」だ。——つまり、ステラが担当するのは、残された「デュエル」ということになる。

「バスター」は「ゼロ」によって牽制され、「ゼロ」にビームランチャーを放った。しかし、「デブリの影に隠れてゆく」「ゼロ」を捉えられず、無駄弾に終わる。

そうして誘き出された「バスター」は、遠方に消えていく。「ゼロ」の追撃を開始した。

「——女風情があああああっ！」

「デュエル」のコックピッド内で雄叫びながら、イザークはビームサーベルを引き抜き、雷のような機体——「デیفエンド」へと一気に躍り掛かった。

ステラはこれに、ビームライフルを放って迎撃するが、放たれた光線は猛烈な勢いで迫る。「デュエル」の動きを捉えきれず、接近を許した。「デュエル」が大きく振り落ろしたサーベルを、「デیفエンド」は身を翻すことで回避した。

「チイツー！」

イザークが、小さく毒づく。

——機体の「性能」だけじゃない——この「敵」には、たしかな「腕」がある！
でなければ、今の一撃を、回避されるものか。

悔しいが、イザークはここに来て、敵パイロットの力量を認め始めていた。

だが、相手がどんな敵であろうと——そんなものは、功名心の塊のようなイザークにとっては、些細な「条件」でしかない。

結局の所、勝利を手にするのは自分だ。そうして功を立てるのも自分——すべてのライバルに勝るために、そいつらとの差を、もつと大きく広げていくために！

——誰にも、邪魔なぞ、させない！

「デیفエンド」が「デュエル」から距離を取ろうと、バーニアを噴射する。だが、

イザークはライフルを構え、そこからサブウェポンである実弾グレネードランチャーを放ち、追撃に出た。

追尾性能のあるランチャーは、離脱を図る「デیفエンド」を執拗に追いかけて回す。

「アハハハ」

後退する「デیفエンド」が、次の瞬間——全身に展開するすべての光波刃ビームウェーブを消滅させた。

弾けるように、すべての光が掻き消されると、代わりに——「デیفエンド」の

右掌に備えた光波発生器から、長距離射程に対応する光波刀が顕現した。

「なにー！」

——他の発生器からの光波刃を、あえて封印することで、一箇所の発生器の出力を上げているのか？

“デイフェンド”の腕に生まれた光の大剣が宙を薙ぎ、“デュエル”の放ったグレネードランチャーが、むなしく爆散する。

これに機を見たか、“デイフェンド”はさらに“デュエル”からの距離を開いてゆく。

一瞬、驚きに目を奪われ、反応が鈍ったイザークは、なおも“デイフェンド”を追撃したが——“デイフェンド”はデブリを遮蔽物として、その合間を縫うように飛び交い、“デュエル”が構えるライフルの照準が定まらない。

イザークの中で、苛立ちと焦りばかりが膨らんでゆく。

そんな時——イザークの視界、“デュエル”のコックピット内に、ひとつの入電が飛び込んで来た。

ラクス嬢をコックピットに収容したアスランは、妹に拒絶されたという事実にも、小さく打ちひしがれながらも——無事「ヴェサリウス」へと帰投した。

ラクス・クラインは軍人ではない。——軍艦に乗り合わせたままで良い身分の少女でもないため、この後はラコーニ隊と合流し、彼らが責任を持って本国へと連れて行つてくれるはずだ。

「イージス」が格納庫に着艦し、アスランがラクスの手を取り、エスコートしながら、ゆつくりと床に降りてゆく。

床に降りた先で——しかし、アスランは一抹の疑問を抱いた。

「デュエル」 「バスター」 「ブリッツ」の機体の姿が——見当たらない。

ラクスを送り届けることばかりに気が向いて、帰投した時、アスランはおそらくこの事実気が付かなかつたのだろう。

アスランは慌てたように辺りを見回すも、強奪したGATシリーズは、全機として出払っているようだ。

加えて、今回無事にラクス嬢が生還したというのに、それを迎えに上がるザフト兵が、異様に少ない点にも気が付いた。この艦の長であるアデスや、任務の責任を負っているクルーゼは、ラクスに辞令を交わさねばならない立場にもあるはずだ。その他にも、ラクスという国民的歌姫をひと目見ようと集つて来る、野次馬さえ、数えるほどに

しか見当たらない。

通常なら、キャットウォークに行列が出来るほど騒がれても可笑しくないというのに。

——おかしい。

いったい、何が起きている——？

アスランは不意にそう思い、ラクスを部屋に送り届けたのち、艦橋へと駆け出した。

「——隊長！」

艦橋へとアスランが飛び出し、クルーゼの名を呼ぶ。

だが、彼が常に坐している座席には誰もおらず、その声に反応して、振り向くようにこちらを一瞥したアデスと視線が合った。

「アスラン。ラクス嬢の救出、ご苦労だったな」

「アデス艦長！ これはいったい、どういうことですか!？」

アスランは拭えない不審感を胸に募らせながら、一応、艦橋を見回した。

だが、やはり、自身の同僚たちや、クルーゼの姿は見当たらない。

不審感は次第に小さな怒りへと化け始め、アスランは剣呑な氣を立てて、アデスに問うた。

「なぜ機体の多くが出払っているのです！ これはいったい、何の作戦ですか!？」

アスランは、ここであえて、出払っている、という表現を用いたが——これは正確には、出撃している、という表現の方が正しいだろう。その事実には、アスランは疾うに気づいていた。

アデスから視線を移し、戦略パネルを見れば、そこには小惑星帯の構図が照らし出されている。

おそらく、戦場になっているのが、その宙域なのだろう。

——きつと、単機のアステラを狙って、イザーク達が——!!

強烈な不安が、途端にアスランを襲う。

クルーゼの姿が艦内に見えないということは、この作戦は、隊長が直々に指揮している可能性が高い。

彼の任務は変幻自在で、成功率も極めて高い。指揮官としては最高に頭のキレる男だ。時に冷酷な作戦を考案するが、それでは、ステラの身が危ないのは事実だ!

顔色を失いながら、居ても立ってもいられなくなったアスランは、パイロットスーツのチャックを襟元まで引き上げると、即座に艦橋から出て行こうとする。

——戦略パネルに照らし出された座標まで向かえば、すくなくとも、状況を自分の目で把握することは可能はずだ!

「私もすぐに出ます!」
「イージス」の再出撃許可を!」

「待て！」

しかし、それを制したのは、アデスの割れんばかりの喝声であった。

「隊長からおまえに、言伝ことづてを預かっている」

「……？ わたしに、で、ありますか？」

「ああ——」

アデス自身、クルーゼから預かった伝言の意味はよく理解していないようだ。だが、
 惘然とした表情で、事務的にそれをアスランに告げた。

『きみが望んでいることを、してやろう——』

アスランには——その伝言の意味が、わからなかった。

戦闘宙域では時間が経過し、経過と共に幸運なことに、
 “ゼロ”——地球軍側の軍勢が優勢にあつた。
 “ストライク” “ディフェンド”

それもこれも、その宙域が小惑星帯であることに原因があり、クルーゼ隊は戦闘を繰り広げようとするのに対し、地球軍側は一方的に逃げに徹している。

小惑星帯の中で逃げ回られてしまつては、いくらザフト希望のエースパイロット達

も、目標を見失わぬよう、それに喰らいついて行くのでやっとなつたのだ。

小惑星帯を抜けた「ストライク」が、辺りを見回し、ムウへと通信を試みた。

「ムウさん！ こちらは上手く撒けたようですよ！ 「ストライク」はこれより合流地点に向かいます！」

キラが、通信先のムウに告げる。

「ストライク」は「ブリッツ」による追撃を受けていた。だが、デブリを障害物に使って逃げ回るうち、「ブリッツ」の反応が、レーダーから消失した。

——「ブリッツ」もまた、僕を見失つたのだろう。

キラはそう確信し、離脱に成功したと考えた。

通信越しに、ムウからの返答が来た。

『こつちも上手く撒いたぜ、問題はなきそうだ。あとは、お嬢ちゃんだが』

どうやら、ムウの「ゼロ」もまた、デアツカの乗る「バスター」から逃れられたようだ。

ムウは即座に通信回線を開き、ステラに応答を求めた。しかし、返つて来たのは、耳障りなノイズだけであつた。

『通信を試しても、ジャミングがひどいな……デブリの影響か？ お嬢ちゃんは、まだ小

惑星帯から抜け出せてないみたいだな』

「え、そんなッ」

『信じて待つてやるんだ。——俺達だけでも、先に合流地点に向かうぞ』

間をおいて、ステラがやって来るかもしれない。いざという時のために——“ゼロ”と“ストライク”だけでも、合流しておいた方がいいだろう。

だが、キラの表情には、やはり隠し切れない不安の色が滲み出ていた。相手を分散させるこの作戦は、たしかに見事だが——味方もまた散開してしまうため、ステラの安否が、キラにはいまだに確認できないのだから。

まるで、妹を心配する実の兄のような、キラの面持ち。——あまりに切ないその表情に、それを見てしまったムウは、なんだかやるせない気分になり、

『そんな顔してやるな。あの娘は強い。………きつと、今のおまえよりも、ずつとな』
そんな、激励なのかさえ曖昧な言葉を、口走るように告げていた。

それは、これまでGATシリーズに乗る予定だった、正規の新兵達の面倒を見て来たムウだからこそ言えた言葉なのか——それとも、ムウ自身の願望から出た言葉なのか、それを放った本人にも、よくわからなかった。

——いつたい、どれだけの時間を逃げ回っただろう？

「デュエル」の執拗な攻撃は、「バスター」や「ブリッツ」の追撃とは、比にならないほど猛猛に繰り広げられ、ステラはなかなか、離脱のための隙を見出せずにいた。

パイロットの執念に近いものが垣間見えるほど、猛烈な攻撃。こちらの離脱の余裕さえ与えない、苛烈を極める突撃の連続だ。

——小惑星帯を出なければ、キラ達とも通信も図れない……。

あれこれと、ステラがひとりでに悩んでいる内に、手が動いていなかったのかもしれない。突然「デイフェンド」の機体が衝撃に揺れ、コックピットが揺さぶられる。

気が付けば、「デュエル」の放ったグレネードランチャーの着弾を許していたようだ。フェイズシフト装甲により守られたため、損傷は少ないが。

——頭と体、両方同時に働かせることが、こんなにも難しいなんて……。

エクステンデットとして、殺戮兵器として生きていた過去から、弥々に決別し始めているステラであったが——やはり、頭が何かに支配されると、途端に操縦が鈍り出す。

悩むより、動くしかないようだ。

「いっつツ……いっツ……」

『逃がすか、女あーっ！』

敵パイロットの正体が、イザークの怒りを駆り立てる。それほどまでに、女性に後れを取っている事実が、彼にとつては屈辱なようだ。

「デュエル」がサーベルを引き抜き、バーニアを噴射して「デイフェンド」へと飛び掛かつて行く。

——こいつから逃げるのは、無理だ。

瞬間、後ろ背を見せていた「デイフェンド」が反転し、掌にビームウェーブを発生させた。「デュエル」の方を向き直し、戦闘態勢を取る。

ただで逃がしてくれぬのであれば、怯ませる他ない。

そこで「デイフェンド」が初めて——攻勢に打って出た。

「一騎打ちならー」

ステラが叫び、「デュエル」を迎え撃つため、バーニアを噴射する！

だが——そんな「デイフェンド」の行く手を、右手、遥か遠方から放たれた、一条のビームランチャーが阻んでしまった。

「なに!？」

ステラが目を見開き、右手を確認しようとした、次の瞬間、コックピット内に、さらなる警報音が響いた。

——今度は、左からだ。

ビームランサーを振り翳した漆黒の機体が、猛烈な勢いに乗って、こちらへと接近して来ている。

「そんなっ……どうして!?!」

ステラは愕然とした。何かが、おかしい。

——おまえたちが……どうして、ここにいます？

「デュエル」はともかく。

——両脇に現れた二機は、だって今、キラと、ネオを……!

左手に漆黒。

右手に黄檗。

正面に紫紺。

完全に——囲まれた。

どうということだ。

これは明らかに——最初の構図だ。

絶望に駆られたステラを——「デュエル」——そして、突如として現れた”

バスター”と「ブリッツ」が、完全に包囲した。

小惑星帯を抜け——上手いことそれぞれの敵機を巻いた“ストライク”と“ゼロ”が、指定されたポイントで合流を果たした。

しかし、合流地点に“デیفエンド”の機影は見当たらず、音信も途絶えたままだ。一向に、来る気配すら感じられない。

「ステラ、ステラ……！」

キラが通信機に、すぎるようにして呼びかけ続ける。

だがやはり、返答として返って来るのは、耳障りなノイズだけ。

「なんだ、この感じ……！」

傍らの“ゼロ”の中で、ムウは、名状しがたい寒気のようなものを感じ取っていた。

——何かが、おかしい。

寒気——それは悪寒だ。

歪んだ「何か」が、遙か遠くより、戦場を俯瞰しているかのような。

——気味が悪い。

ムウにはわかる。この感じは、まさか……。

「嫌な予感がする。あのお嬢ちゃん、迎えに行つた方がいいかもしれない……！」

「フラガ大尉！」

キラが声を上げ、どうした、とムウが訊ね返した。

「ノイズがすこし、回復してます！ ステラの声が！」

「なに……………」

言われ、瞬時にムウも『デイフェンド』との通信を繋げた。

「お嬢ちゃん、応答しろ！ 何が起きてる!？」

『……………で……………き……………い……………!』

相変わらず、ノイズがひどい。——それはまだ、彼女が小惑星帯から抜け出せていないという、揺るがない事実の証拠だ。

しかしその時、雑音しか響かなかったノイズの中に、わずかに、切れ切れない声が聞こえ始めた。

『……………ちら……………ド……………! ……てる……………れ……………い……………!!』

「ステラ!？」

わずかに開いた回線の声——しかし、ステラが何を喋っているのかまでは、判然と理解できない。

キラは、どうしようもないもどかしさを憶えた。

——『バスター』と『ブリッツ』は、自分とムウで、確実に撒いたのだ。

あとは、ステラさえ合流できれば、全員で帰還できる。「頑張れ」と月並みの激励ではあったが、キラはそう、ステラに告げようとした。

だが、その瞬間――

『……………ちら…………… “ディフェ……………ド” ……！ 囲まれ……………てる……………振り切れない……………！』

その言葉を聴いて――キラの身体が、凍りついた。

――囲まれてるって……………いつたい、どういう意味だ？

ステラの放った、その言葉の意味を――キラは思わず疑ってしまった。

「ム、ムウさん!？」

「まさか、な……………」

ムウの頭に、嫌な予感が、いや……………それは確信、そのほとんどが、確信となって押し寄せる。

――俺たちは決して……………“ブリッツ”と“バスター”を、それぞれに撒いたわけではない……………？

ステラだけが“デュエル”からの離脱が遅れたために、敵機の合流を許したわけでもない。

敵は初めから、合流する予定だった？

あの二機は——追撃の中で目標を見失ったように装いながら、ひそかに撤退し………「デュエル」と合流していた？

「——なんでだ！」

叫び、ムウがコックピットの内壁に拳を叩き付けた。

なぜ。

どうして。

なぜ狙ったように——「デイフエンド」だけをつけ狙う！

なぜ、ムウとキラを、捨て置くような真似をする!?

「この作戦は、アイツか………!」

ムウの中に、激しい悪寒が走る。——近づく気配、全てを嘲笑うような存在の、不気味な感覚。

この時になって、ムウは——初めて「自分が乗せられた」という事実には、気が付いた。

「デュエル」との決闘を一瞬でも実行しようと考えたステラであったが、いつの間

に、そして、何を目的にか、集結した三機を前にしては、勝ち目などありはしない。

「デイフエンド」は再び反転し、彼らから逃れるようにして離脱を図っていた。

「バスター」と「ブリッツ」は——キラとムウが担当していた。

いつの間にか、三機の合流を許し、挙句、その三機に揃いも揃って狙われる意図が、ステラには分からなかった。

「そおら落ちろお！」

「いい加減にイッ！」

「そこまでですよ！」

三人の掛け声が飛び、三機の「G」から、それぞれの光条が飛んだ。

彼らに背を向けつつ後退する「デイフエンド」は、散らばる小惑星を盾に、縦横無尽に逃げ回るが、迂闊に動き回って、挟み撃ちにされてしまつては——この装備では、勝ち目はない。

特攻装備は、ネイキッドアーム接近戦を得意とした、装甲のパーズ状態のことだ。

射撃攻撃であれば、相手からの距離を取り、相手の牽制に使えるだろうが、接近戦は、包囲された段階で逃げ道が封鎖され、一对多数の戦況において多用するべきではない戦術だ。

ゆえに、ステラはただ、逃げ回ることしか出来ない。

「なんで、なんで、わたしを……ッ」
頭が痛い……。

——鋼鉄のように冷たい何か、遠くから、私を視ている……!?
この宇宙は気味が悪い。

——気持ちが悪い……!

「キラッ……」

とても振り切れない——助けて……!

段々と赤く染まり始めたステラの双眸が、
“デイフエンド”の残りのエネルギーゲージを捉えた。

ゲージは既に減り始め、エネルギーは半分にも満ちていない。

「これ以上、遊んでなんていられない……!」

ステラが覚悟を決めると、次の瞬間——
“デイフエンド”を追撃する、イザークの視界から、その存在が、ふっと消えた。

なに、とイザークが蒼然として、声を上げる。

違う——正確には、消えた、のではない。消えたように見えた、のだ。

次の瞬間——“デュエル”の足元に潜り込んでいた
“デイフエンド”が——鮮烈な袈裟切りを繰り出した。

「んなッ」

イザークの反応も早かった。

すぐに回避行動を取った結果、間一髪、直撃は免れ——『デュエル』のサーベルの柄だけが叩き斬られてしまった。

『どうしたイザーク、今のは、生きた心地がしなかったんじゃないか？』

「黙っている、ディアツカ！」

通信越しに聞こえてくる冷やかしの声に、イザークは、みるみる顔が熱くなっていくのを感じた。

——悔られた！ それも、同僚にだ！

たしかに、今のは生きた心地はしなかった。だが、それを認めてしまつては、立つ瀬がないというものだ。

「仕留めきれない……」

——やっぱり、強い。

ステラが小さく毒づく。

無駄なエネルギーは使えない今、短時間でなんとか、活路を見出したい。

——いつたい、どうすればいい……？

悩んでいるステラの眼前に、次の瞬間——突如、『ブリツツ』が顕現した。

「えっ」

「ブリッツ」固有の特殊武装——「ミラージュコロイド」だ。完全にステルスと化する機能を使って、ニコルは、ステラの目を欺いたのだ。

突如としてステラの眼前に現れた、漆黒の機体のビームランサーが——その瞬間、急制動をかける。「デイフェンド」の頭部を、根こそぎもぎ取った。

光の剣に貫かれた「デイフェンド」の頭部が爆発し、誘爆の被害を受けた「デイフェンド」の機体が、大きく揺れる。

だが、一瞬だけ怯んだのち「デイフェンド」は瞬時にバーニアを吹かし、一瞬にして「ブリッツ」からの距離を開いた。

奇襲に成功したと確信していたニコルが、啞然とする。

「外した!? いや、外されたのか! それでも、メインカメラは奪った!」

だが、よもや、ミラージュコロイドによる完璧な奇襲までもを、回避されるなんて。

——本当に、アレに乗っているのは、何者なんだ?

——仮にもあの機体は、自分たちの機体と、同等の性能しか持ち合わせていなはずなの……!

メインカメラが落ち、ステラは瞬時に、モニターを別カメラへと移行する。

「ブリッツ」を避けて逃げた先に、先程軽度の損傷を与えた「デュエル」が待ち構え

ていた。

回避は、間に合わない――。

「デュエル」から発射されたグレネードランチャーの直撃を受け、機体が強かに揺れる。フェイズシフトが削られ、ステラの体も大きく揺さぶられた。

「い、のツ……」

目に大粒の涙を溜め、悔しそうに顔を上げたステラの視界に、二丁のライフルを連結させた「バスター」の姿が映る。――銃口をこちらに向けている。

――いけない……！

屈辱に飲まれ、我を忘れたら、相手の思うツボだ。

ステラは途端に冷静になり、「バスター」の遠距離砲撃には勝ち目がないことを悟ると、すぐに転進し、回避行動を取った。

「バスター」のビームランチャーが発射され、射線上の小惑星の多くは、一瞬で撃ち碎かれ、蒸発した。

かろうじて回避した「デイフェンド」は――やはり、すぎるように小惑星を盾にしつつ、さらに逃げ回った。

「だめ……死ぬのは、いや…………！」

恐怖に駆られたステラが、バーニアを一気に吹かした。

だが次の瞬間、バーニアが抜けるような音を立て、機体が失速した。——エネルギーが、もうあまり残っていないのだ。

失速した機体は浮遊する隕石に接近し、《デイフェンド》はその隕石に、足を着いて着地した。

「今だー！」

——《デイフェンド》の動きが止まった！

イザークは好機を見、敵機が停まった隕石に向け、ビームライフルを放った。

だが、次の瞬間 《デイフェンド》が、足元の隕石を「足場」として——高く跳躍した。「なんだと!?!」

跳躍した 《デイフェンド》はやがて、器用にも、また別の隕石に着地を決めた。まるで、飛び移るかのよう。

そして再び、着地した隕石から即座に跳躍し、イザークの視界から遠ざかっていく。

——隕石を、次の標的へと向かうための踏み蹴り場として利用している……!?!

これは、きわめて高度かつ、トリッキーな操縦技量が必要になるのだが、かつては四足歩行形態の機体を操っていたステラにとって、宙域での隕石など、足場として利用しようと思えば、造作もないことであつた。

どんな場所でも、どんあデブリも、足場として利用する。

——使えるものは、使うしかない。

バーニアの噴射による、モビルスーツの推進力に加え、跳躍による勢いを乗せた“デیفエンド”は——イザーク達からすれば、まるで信じられない速度で宙域を離脱していく。

単一方向への加速力では、彼らがステラに追いつけるはずもない。跳躍という操縦技術を持ち合わせていない、三機からの距離を、あつという間に開いていく。

機体の性能に頼るだけでは——ステラには、追いつけないようだ。

「やった………」

デブリを味方につけたステラは、三機の“G”が遠ざかっていくのを見て、ほっと、安

堵に駆られた。

隕石あしぼから、隕石あしぼへ。

軽快な身のこなしで、宙域からの離脱を決め込んで行くステラではあったが——隕石を利用する彼女だからこそ、気づくことが出来なかったのかもしれない。

デブリの陰に——“敵”が潜んでいたことに。

敵機を撒いて、完全に油断していた。

ステラが次に足場にしようとした、大きめのデブリの陰に——次の瞬間、シルバークレーの機体を発見する。

指揮官用の——“シグー”だ。

「!?!」

ステラは目を見開き、慌てて「ソイツ」から距離を開こうとする。

だが——既に、遅かった。

“デイフェンド”が跳躍するよりも先、彼女が気づいた時には——“デイフェンド”の脚は“シグー”に右手に掴み取られ、機体はその態勢を崩していた。

“シグー”の腕を起点に、そのまま振り回された“デイフェンド”は——強い遠心力と共に、傍らの小惑星に叩き付けられた。

「あうッ」

ステラの背中を、重たい衝撃が襲う。

意識が飛びそうなほど、重たい痛みだ。

——指揮官機……!?!

——まさか、こんなところに!?!

朦朧とする視界を、すぐに取り戻そうとしたステラは、すぐに機体の姿勢制御を取り戻し、慌てて逃げ出そうとしたが——

次の瞬間、*「デイフェンド」*のモニターカメラが——「真っ黒」に染まった。

バーニアの全加速、強い推進力を乗せた*「シグー」*の強烈な飛び蹴りが——
*「デイフェンド」*のコックピットを、貫くように蹴り飛ばした。

痛恨の打撃により、*「デイフェンド」*は再び小惑星に背中から叩き付けられ、その衝撃で、機体がうねる。

小惑星の岩面は衝突によって陥没し、*「デイフェンド」*の機体は、まるで、礫にされたように岩盤に捻じ込まれた。

そして、今の一撃で——パイロットがなにか、致命的な痛手を負ったか。それ以降——*「デイフェンド」*の動きは、ピタリと止まってしまった。

見違えるほど落ち着いてしまった*「デイフェンド」*の前に、やがて*「シグー」*の脇から、他のGATシリーズが集まって来る。

『クルーゼ隊長！』

「サーベルを貸してはくれないかね、イザーク」

*「シグー」*には、*「デイフェンド」*のフェイスソフト装甲を貫くことのできる武装は搭載されていない。

だからといって*「シグー」*が「勝てない」というわけでもなく、現実には*「シグー」*を操ったクルーゼは、*「デイフェンド」*のパイロットを仕留めることで、完全にソイツを

無力化してしまった。

「デュエル」から渡されたビームサーベルを手にしたクルーゼは、小惑星に礫の形になった「デイフェンド」を抑え——光波発生器を、ひとつずつ、確実に破損させ始めた。腕、肩、掌、脚、脚先——武器として扱えそうな部位の発生器を損傷させ、無力化する。

「シグー」の中で、クルーゼは、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「作戦は成功だ、イザーク、デイアツカ、ニコル——入電した通り、この機体は、パイロットともども「ヴェサリウス」へ連行する」

つまりコレは——すべて、クルーゼが考えた作戦だった。

最初からクルーゼは、おそらく加勢に向かつて来るであろう「ゼロ」と「ストライク」のことなど眼中にはなかった。

そして——。

あの男であれば、おそらくは「デイフェンド」を逃がすために、散開する作戦を立てると見越した。

やがてそれが、見事にも的中した。

（わたしの勝ちだな……）

それはいったい、誰に向けられた言葉か。

そうしてラウが、勝ち誇った笑みを浮かべた時——彼の頭に、小さな衝撃が走った。心配が、ふたつ、こちらに迫って来ている。

(……来たか、ムウ！)

遠方を見れば、状況を理解し、罠にはまっていたのだと把握した“ゼロ”と“ストライク”が、一目散にこちらへと向かって来ている。

ラウは口元に小さな冷笑を浮かべ、イザークら三人に言い伝えた。

「みな、しんがりは任せたぞ」

『はっ！』

短く言い残し、“シグ”は完全に停止した“デイフェンド”を抱えた。

そして、そのまま転進し、明日の方向へと飛び去って行く。

その光景を捉えたムウが、失調したように、声高に叫んだ。

「クルーゼエエエエエツ!!」

——やはり……やはり貴様かッ!

ラウ・ル・クルーゼ——どこまで人を嘲た男なのだ。

自分達が“デイフェンド”の救出に上がり、散開する作戦を練ると見越した上で——
あえて“デイフェンド”一機だけを狙った!

なぜステラだけを狙ったのか、その理由までは、ムウには分からない。

——だが、このままクルーゼの描いたシナリオ通りに、ことが進むのだけは、絶対に阻止しなければならない！

意気込んだ「ゼロ」と「ストライク」が——猛烈な勢いで「シグー」を追う。

「ステラアローツ！」

「デイフェンド」が抱えられ——ステラが、連れ去られて行く？

キラは、今、現実として目の前に広がる光景を疑った。

「デイフェンド」の四肢はぶらりと投げ出され、気絶しているのか、パイロットにまるで生気が感じられない……。

あそこには「デュエル」「バスター」「ブリッツ」——そして「シグー」がいる。

女の子ひとり、とても相手にできる敵じゃないのに……！

——きつと、ひどい目に遭ったんだ……！

ごめん、ごめんと口の中で反芻しながら、同時にキラの中で、どうしようもない怒りが、ふつふつと湧き上がって行く。

「返せ……その子を、返してくれーっ！」

叫びながら、突撃を仕掛ける「ストライク」の行く手を——しかし、数条の光線が阻んだ。

脇から「デュエル」「バスター」「ブリッツ」が現れ、ムウとキラを牽制する。

——邪魔をしないでくれ!

苛立ちに苛まれるキラであったが、その間にも「デイフェンド」を抱えた「シグ」は、高速で離脱して行く。

「くそッ!」

——誰が、こんな結末になると予想した!

応戦する「ゼロ」と「ストライク」であったが——完全に三機の敵機に丸め込まれ、活路が見出せない。

痺れを切らし、ムウが叫んだ。

「——撤退だ、坊主!」

その言葉に、キラが息を詰まらせ、絶句した。

ムウの言葉は続いた。

「これ以上追って俺達までやられたら、元も子もねえ!」

「そんな……! ステラが、ステラが連れ去られたっていうのに!」

「聞き分ける、坊主! これ以上は無駄だ! ヤツはもう、とつくのとうに離脱しちまった!」

ムウの怒号が飛び、キラが強く、唇を噛み締める。

——嫌だ。

——認めたくない。

ステラが……鹵獲されてしまうなど。

“ゼロ”が転進し、宙域から離脱していく。

ザフトの目的はおそらく——“デイフェンド”の鹵獲。その目的を達した今、追撃に出ることは考えにくい。

現実——“ゼロ”を追撃する者はいなかった。敵機はすでに、戦意という戦意を喪失しているに等しい。

ただ、こちらが“シグ”を追撃しようとするれば、徹底的に妨害して来るだろうが……。

——どうして。

——こんなことに……？

「ステ、ラ………ッ」

やがて——“ストライク”は否応なく、“アークエンジェル”への帰路に着いた。

ステラ・ルーシエは、機体のコックピットの中で、完全に気を失っていた。

頭部からは、一筋の血の河が流れ、その表情は、弱り切ったようにやつれ、眠りについている。

「『デイフェンド』 および、そのパイロットであるステラ・ルーシエは、ザフト軍艦“ヴェサリウス”所属、クルーゼ隊による奇襲作戦によって鹵獲され——

その後——『ヴェサリウス』へと連行された」

これがのちに——ナタルによって書き下された、戦闘記録の内容だ。

『囚われた意思』 B

『ザフトには戦力で叶わぬということを、足つきは先の一戦で思い知っている。ラクス嬢を人質にさえ取らなければ、支援する機動兵器ら共々、あの艦はあの宙域で沈んでいたはずだ』

先の戦闘とは——地球軍本艦隊からの先遣隊援護のため、足つきがわざわざ戦場へ介入して来た時のことだ。

先遣隊の数隻を味方につけていながら、足つきはクルーゼ隊を前に、完全に追い詰められた。——それがザフトと地球連合軍の“差”だと云ってしまえばそれまでだが、やがてザフト軍、延いてはクルーゼ隊に完全なる勝利が迫った、その瞬間、足つきは最後の手段として、ラクス・クラインの身柄を人質に取った。

ゆえに、クルーゼ達は戦場からの撤退を余儀なくされたのだ。

しかし、そう長くない間を置いて、足つきは、その大切な「カード」をみずから放棄した。

それがいったい、何を意味するのか……ラクス嬢を連れ出した「デイフェンド」のパイロットは、本当に把握していたのだろうか？

『ラクス嬢を欠いた状態では、我々と再戦すれば、ヤツらは必ず撤退することを選ぶ』クルーゼの作戦は的中し、やはり、ムウはザフト軍を前に、撤退することを選んだ。散開し、イザーク達を分散させた上で、あとは小惑星帯に運を委ねて各機の離脱の成功を祈るという、まるで博打のような作戦に出たのだ。——だがまあ、賭けに出るだけ、ムウも必死だったということであろう。

——現状では私には勝てないと知っているからこそ、賢明な判断だった。だからクルーゼはあえて、デイアツカやニコルにこう命じたのだ。

『ふたりには誘いに乗ったように「ゼロ」と「ストライク」を追撃してもらおう。……だが、途中で見失ったように装いつつ、どうぞ今回は彼らを見逃してくれたまえ。すぐにイザークと合流し、あわよくば「デイフェンド」を戦闘不能の状態まで追い込め』

その指令を聞き、デイアツカとニコルは、怪訝な顔を作った。
不審に思ったニコルがすぐに、

『——あの機体の鹵獲を、視野に入れておいでですか？』

と尋ね、クルーゼは口元に笑みを浮かべ、それを返答として返した。

上官の命令だ。ニコルはその指令に対して、とりわけた意見も反論もなく、ひとつの

指示として従順に承った。

たしかに、撃墜してしまうくらいなら、危険性は大きいですが、敵機は鹵獲した方が、後々こちらの役に立つかもしれない。

——でも、どうして「ディフェンド」なのだ……？

クルーゼの指示には、たとえ納得はできても、理解できない点があった。

「ヴェサリウス」艦内に「シグー」が帰投し、その腕の中に頭部を失った「ディフェンド」の機体を見た時は、ザフト軍の整備士達も息を飲み、言葉を失った。

着艦した「シグー」のコックピットから、パイロットスーツも着用していない白服の男が降りて来る。

整備士のひとり慌てたように彼に近寄り、言葉をかけた。

「クルーゼ隊長！ 鹵獲されたのですか、この機体……!?!」

「ああ」

クルーゼは呆気なく答えた。

「しかし……」

整備士の男が、まるで膝が砕けたように崩れた姿勢を取る。『デイフェンド』の機体を仰ぎ見た。

もともと『デイフェンド』という機体は『ヘリオポリス』でクルーゼ隊の作戦が成功していれば、今も『ヴェサリウス』に配備されていて然るべき機体だ。

だが、ハイネ・ヴェステンフルスが機体の奪取に失敗し、これまで機体は足つきを支援する敵機として、幾度となく君臨して来た経緯からか。それが今目の前にあることに、不思議な当惑を憶える。

——危険では、ないだろうか？

GATシリーズの中でも『デイフェンド』は、『イージス』と並んで、武装があらかじめ内蔵されている機体だ。——中にいるパイロットが目覚めれば、予備動作なしで光波を展開し、艦を破壊することも可能なのだから。

「あらゆる武装はあらかじめ無効化してある。あの状態では、暴れ回るくらいの抵抗しかできないよ」

クルーゼがどこか愉快そうに論ず。やがて『シグー』に続いて、『デュエル』『バスター』『ブリッツ』の三機が帰投し、格納庫に着艦した。

その各々のパイロット達が、鹵獲した敵機の様子を見にコックピットから降りて来る。隊長、というイザークの声が聞こえ、クルーゼは彼らを目で訴えるように、無言の

うちに指示を出した。——それは「コックピットを開放して来い」という、暗の命令だ。いくら行動不能に陥った敵機であっても、そのコックピット内を確認するのは、危険が伴う仕事でもある。中で目を覚ましていた敵パイロットが突然、襲い掛かって来る可能性だつて考えられる。そんな仕事を、クルーゼに任せるわけにはいかない。——イザークは「デイフエンド」の鹵獲自体、色々と納得がいついていない様子だったが、率先してその任を承った。

イザークを先頭にディアツカ、ニコルが続き、その後方に銃を構えた武装兵が立ち並んだ。

「……開けるぞ」

エアロックの解除が寸前まで行き届き、イザークのその声で、後方に展開する武装兵たちが銃を構えた。

（「デイフエンド」のパイロット——そのツラ……拝ませてもらうか）

無然とした表情のまま、イザークは思慮していた。

パイロットは、本当に何者なのだろう。——この機体は、とてもナチュラルが操縦していたとは思えない。

イザークの中に芽生えていたのは、敵対心や対抗心から生まれた、小さな関心である。一方でイザークの後方に続くディアツカの胸中には、すこしだけ邪な気持ちがあつ

た。軍人としての責務を全うするため、彼もまた無然とした表情を作り、いざという時のために身体は銃を構えているが、頭の中は浮ついたことを考えている。——いったい、どんな女の子が中にいるのか。

ディアツカの中に芽生えていたのは、色魔な一面から来る、軽率な興味であった。イザークの操作により、「デーフエンド」のコックピットが開く。その瞬間、

「——イザーク！」

慌てたようなアスランの声が——格納庫に響き渡った。

振り返れば、格納庫のキャットウォークへ飛び出したアスランの姿が視認できる。——「デーフエンド」を鹵獲した」という報告を受け、目の色を変えて飛んで来たのだろう。

突然の声に、イザークは不本意にもぎよつと背筋が伸びるような反応を示す。其れがすぐにアスランの声であると理解した彼は、今度は何用だ、と気に掛かったのだが、時を同じくして、眼前のコックピットが開放された。

——話など、後で聞いてやる。

この時のイザークには、静止を求める背後のアスランに注意を向けている余裕はなかった。同僚の声を無視するように、目の前に開かれた空間に注意を集中させた。

先頭を切り、「デーフエンド」のコックピットへと潜り込み、中の様子を確認する。

「……どうです、イザーク？」

コックピットの狭い入口は、イザークのような少年がひとり、身を屈めてやっと入るほどの大きさしかなく、背後に続いたディアツカやニコル達は、イザークの背に遮られ、中の様子を確認することはできなかつた。

心配そうに尋ねるニコルに対して、イザークはわずかに間を置いたあと、答えた。

「パイロットはまだ、気を失っているままだ。だが……」

だが、という含みのある接続語に、ニコルが眉をひそめる。

耳の良いニコルであつたからか、イザークの声は心なしか、震えているように聴こえて取れた。

「ウソ、だろ………ッ」

そして、それはニコルの単なる勘違いなどではなく。敵パイロットの正体を確認したイザークの声は、明らかに愕然としていた。

どうしたんだよ、と焦れたようなディアツカの言葉が飛ぶ。その声に我を取り戻したイザークは、すぐにコックピットから出、驚きのあまり口を抑えながらディアツカと交代した。

次に中に潜り込んでいくディアツカもまた、中の様子を見、数秒として啞然とした。しかしすぐに、感心したように口笛を鳴らした。

「グウレイト、こりや、たまげた」

「……とにかく、隊長に報告せねばならん。行くぞ、ディアツカ」

「はいよ」

「ニコル、ここを任せる。パイロットを中から引きずり降ろしておけ」

「あ、はい、わかりました」

イザークの指示が飛び、中の様子を眇めていたディアツカが出て来た。

ニコルはクルーゼ隊の中でも最年少に当たる。年齢は十五歳だ。そのため、階級や権限は同じであるにも関わらず、イザーク達に指示を出されることも多く、ニコルの従順な性格も相まって、彼はよく後始末に追われる節があつた。

イザークとディアツカのふたりが、そのまま機体から跳び降り、下に待つクルーゼへ、パイロットの生存を報告しに向かつてしまった。

あとに残されたニコルが、最後にコックピットへと潜り込んで行く。

——あのふたりは、いったい、何をそんなに驚いていたんだろう？

とにかく、中の安全は確認できた。ニコルは尻込みすることもなく、コックピットの中へと入って行く。

「え……………!?!」

そして、愕然とした。

ニコルの視界に映ったのは、華奢すぎるほどの体格の人物である。肩幅は小さい。固定されたシートベルトが、膨らみのあるその者の胸元を、窮屈そうに圧迫している。

桃色を基調としたパイロットスーツは、一見するとすこし華やかで、戦場には持ち込むには、拍子抜けしているように見える。

その人はヘルメットの間から、わずかに鮮血が滲んだ、輝くような金髪を覗かせている。

「女の子？ そんな……それにッ」

ニコルは慌てたように、彼女のヘルメットを取り払い、その顔を覗いた。衝撃で頭を打ったか、頭部から一筋の血が流れている。それも時間が経ち、血液も凝固し、黒く変色し始めている。

ヘルメットを被り、密閉された汗に乱れているはずの金髪は、なおも眩いほどの輝きを宿す。

金色の糸を紡いだような髪の間から覗く、うなだれた少女の横顔は、ひどく端正で。ニコル達の想像を絶するほどに、可憐、としか表現のしようがない。

——僕と、同じくらいの年齢……いや、あるいは、年下にも見える……!?

本能的に、ニコルはひとつの可能性を確認していた。

「この子、コーデイネイターだったのか!？」

コーディネイターであれば、そう珍しい話でもないが。

顔の形が、どうしてだろう……誰かに——似ているような……？
そんな既視感を、ニコルは不意に憶えていた。

“アークエンジェル”の更衣室に——張りつめた重たい空気と、ロッカーを叩く音が繰り返して響いていた。

ガン、ガン、と——ロッカーを叩く、いや、殴りつけるような喧しい音を立てているのは、キラであった。

“アークエンジェル”艦内のロッカーもまた、軍備のひとつである。元はいち民間人で、野戦任官で今は少尉と名乗る権利を持っているキラといえど、たやすく破損させて良いものではない。温厚な性格をした普段のキラであれば、その程度の節制や良識を利かせることは出来ただろうが、この時のキラは焦り、また、無力感に打ちひしがれたまま、自棄になっていた。

言葉にならないほどの怒り。キラが拳をロッカーに叩き付けるたび口に出す言葉は、冷静ではなかった。

呪うような叫び。もう一度、拳を壁に叩き付けようとした瞬間——キラの右腕はロツカーに届くよりも前に、痛いほどの力で抑え込まれた。

キラはハツとして、力の正体を見る。ムウが傍らに立ち、自分を制していた。

「気持ちわかるが、ヤケになったって、今の俺達に出来ることはねえよ……」

指摘され、あまりの無力感に、キラが唇を噛みしめた。

「なんで……どうして、ステラが……!」

ステラは、ザフトに捕まってしまった。

——作戦は、上手く行っていたはずなのに……。

キラの中に、どうしようもない、名状しがたい感情が湧き上がる。腸が煮え返るような憤りが、頭を支配した。

「一緒に帰って来るはずだったんです、この場所に! 今頃は隣で、今日も無事で良かったね、って言い合えてるはずだったんだ……!」

それなのに今、キラの隣には、ムウの姿しか映らない。

ムウの表情は、自分を制するために剣呑で、難^{かた}くて、何かに憤っているような色を浮かべている。——それはきつと、軍人らしい後悔の表情だ。

——そう、僕たちは今、軍として戦っている。

戦争をしているから、人が笑っている様子なんて滅多に見れたものじゃない。

幸せを分け与えてくれるような、他者の柔らかな笑みなんて、普段は見れるわけがない。

それでもステラは、いつも、そんな険しい時間に「光」を差ししてくれた。

『痛いところには、手を当てるといいの』

あの子だけは、まるで、住んでる世界が違うようで。残酷な現実や思惑から、自分を切り離してくれるような存在だった。

それがキラにとつて、どれだけ大きな存在だったのだろう。

どれだけの不安や負担を、その存在が、打ち消してくれていたのだろう。

柔らかな彼女の笑顔が、頭の中に、強く残っている。

敵に捕まってしまった、ということとは——ステラはいつたい、これからどうなつてしまふのだろう？ ——軍人ではないキラには、詳しいことはわからないが。

「危害を加えられることはないはずだ。あの子は、いろいろと特別だ。下手に動かなければ、きつと大丈夫さ」

大人の都合で、少女を戦場に送り込み——そして、最後にこのような事態を招いてしまったことに、ムウとて悔恨していかないわけではない。

いつもの飄々とした軽率な振る舞いは既にそこにはなく、ムウもまた、自身の無力さに下唇を噛みしめた。

「『デイフエンド』が鹵獲された」という報告は、艦橋を始めとして、クルーからクルーへと既に伝わり始めていた。

孤立無援の『アークエンジェル』において、艦を支援できる機動兵器モビルスーツの数が減る、というのは死活問題ではない。

そのパイロットの行方がどうであれ——「戦力が減った」という揺るぎない事実には、艦に乗り合わせる多くの者達の心を突き、これを弱気にさせた。

「少尉の連れていた球状のロボット。——学生達の話では、名称を『ハロ』と云うようですが、どうやら『ソレ』が、非常に高度な開錠機能を搭載していたようです」

——おそらく『ソレ』が、ラクス嬢の部屋に掛けられた敵重ロツクを外したのでしょう。

通路を歩きながら、前を行くマリューに向け、ナタルが冷静な口調で述べる。

ナタルの云う「少尉」というのは、野戦任官でパイロットを任されたステラのことだ。今はその彼女が、ザフトに連れ去られた直後だというのに、動揺という感情の一切を排除し、あくまで事務的に紡がれるナタルの糾弾を、内心、マリューはうんざりしたよう

に聞き止めていた。

——よくもまあ、この状況で流暢に説教文句が並べられるものだ……。

「少尉が本当にザラの姓を持つていたのであれば、クラインの令嬢とは、かねてより親交があつても不思議ではありません。少尉の動向を監視していなければ、あのようなことが起こり得るといふことも認識しておくべきでした」

ナタルの指摘の通り、マリユード達は、軍人としては致命的なほど迂闊であつた。

ステラが「ザラ」という名前を持つている時点で——これは完全な偏見ではあるが——彼女が本当にナチュラルの味方であるかどうかを、強く疑つて掛かる余地があつたのだ。まして「ハロ」といふ、トール・ケーニツヒ二等兵曰く「どこでも開錠ロボ」を彼女が引き連れていることも、あらかじめ把握していれば、あの独断行為も未然に防げたかもしれない。

然ればその結果——「『ディフエンド』の拿捕」といふ、これ以上ない大失態を——
——犯さずに済んだかもしれない。

「踏んだり蹴つたりなことは、わかっているわ……」

マリユードが、気が沈んだようなトーンで返答を返す。

ラクス・クラインという人質がいなくなった今、艦の自衛のための手段は、徹底抗戦の他なくなつた。

そこでさらに僚機の一機を失い、こちらの戦力は、ただでさえ大幅に低下した。

艦内にも現状、それによる不安の波が押し寄せている。今回のことがきっかけで、クルー全員の精神状態に悪い影響が出て来ないとも限らない。

——中でも「ストライク」に乗って出撃してもらわねばならない、キラ・ヤマトには顕著に、今回の影響が出て来るはずだ。

今回のことで唯一、プラスに働いたこと云えば、ラクスを解放できたことによって、マリューの気持ちやすこし晴れたことくらいであろう。——まあそれも、同時にステラを失ったことで、差し引きという差し引きは、結局のところ、ゼロに等しいのであるが。「でも、それでも今はみんなに……少しでも休む時間が必要だと、私は思うの」

ナタルが個人的に自分を糾弾するのならば、それは構わない。——迂闊だったのはマリュー自身だと、彼女も認めている。

時に、そのように冷静に状況を俯瞰し、判断できる人間も必要だ。

だがそれを——今の状態のクルー達に押し付けるのは、間違っているのではないか。

「ヘリオポリス」の崩壊に始まり——「アークエンジェル」に乗る者達は、いつだって、望まない状況を度々として強いられてきた。

ザフトと交戦したり、「ユニウスセブン」の墓暴きをしたり、ラクス・クラインを人質に取ったり——過酷な道を歩み、みすぼらしくても、必死になって生き長らえて来た。

そんな毎日に、そこまでしなければ生き残って行けない日々には、鬱屈した気分を抱えている者もいただろう。

そこに今回、味方機の一機が拿捕されたと報告も上げれば、この艦の行く末を按じて、誰だつて気が滅入つてしまう。

「誰もがあなたのように、すぐに状況を受け入れられるわけではないのよ」

「艦長、私は……」

ナタルとて、ステラを失つたことに一切の動揺を感じていないわけではないのだろう。彼女は心外だと言わんばかりに目を丸くし、それを見たマリユーがその瞬間、すこしだけナタルを見直した。

——ナタルは決して、何も感じていないのではなくて……何も感じていないように、振る舞っているだけなのではないだろうか？

そんなことに消耗している余裕がないことを、理解しているから……。

マリユーはその時、ナタルに対して、彼女は自分とは決して同じ生き方は出来ない女性であると理解しながら、それでもどこか、関心のような小さな興味を憶えた。

マリユーとナタルのふたりが、そうして通路を歩き去る。

T字路になっているその廊下の陰に——燃えるような紅い髪をした、ひとりの少女の姿があつた。

「そう、なんだ……………」

その口元には、切り裂かれたような冷ややかな歪ほほえみが浮かんでいる。

「へええ……………あの子、いなくなっちゃったんだ……………」

鬱屈として険悪な、歪んだ何かを瞳の奥にしまい込むようにして、少女は数秒、目を瞑った。

やがて目を開け、意を決したように——その廊下から立ち去った。

——声が聞こえる。

聞いたことのない、変わった声が…………。

いつたい、誰だ…………。

「——とにかく、この娘は地球軍の捕虜ですからね。正体はどうであれ、コーデイネイターである可能性も否定できません。素性が知れない以上、暴れ出す可能性もあるので、すぐに拘束しておくべきですよ」

「だが……………」

朦朧とした視界が、ゆっくりと開けていく。

ステラの視界に最初に映ったのは——見知らぬ天井であった。

己の腹部に、見知らぬ者の、野太い二の腕が回されている。防弾用のケブラーベストを着用した武装兵が、自分を、機デイフェンド体から運び出しているのだ。

——いつたい、何が……？

途端、ステラの頭に、ズキリとした激しい痛みが迸った。頭でも打ったのだろうか、頭部が痛い。

——ステラは、頭を打ったの？ いつ？ どうして？

呆然とそれを咀嚼した時、ステラの記憶が瞬時に、鮮明に蘇った。

——そうだ。

ステラは、負けたのだ。小惑星帯で、敵の指揮官機に仕留められ、そのまま。

——ロドニアの時みたいに、捕まった？

なら、今、ステラを抱えているこの男は——

「ぎいふ、と……………？」

ステラの口から言葉がこぼれた。

その声を耳に入れたか“デイフェンド”のコックピットからステラを抱えて降りている武装兵が、え、と声を漏らした。

彼女は目覚め、それに気づいた他の武装兵が、

「ほ、捕虜が目を覚ましたぞ！ おい——ッ」

彼女を抱える武装兵へ、即座に呼びかけたが——その時にはもう、忠告は手遅れだった。

ステラが覚醒と同時に、ほとんど同時に、彼女を羽交い絞めにして抱え出していた武装兵の顔面に——強烈な肘打ちを喰らわせたのだ。大きく怯んだ武装兵を足蹴に、彼女は大きく跳躍する。勢いを受けて空中へと踊り出た彼女の身体は、俄には信じられない高度まで飛び跳ね、やがて格納庫の地床へ、しなやかに着地した。

着地と同時に、衝撃でズキリ、と頭が痛んだ。しかし、そんな些細な痛みにも気を取られていない余地はない。

周囲一帯が騒ぎ始め、捕虜の覚醒をひろく広報し始める。鋭く視線を移し、全方位の状況を把握すれば、警戒態勢を取ったザフトの武装兵たちが、ステラを捕えんと、方々から集まり始めている。

「——ステラ、やめろッ！」

武装兵たちの足音がバタバタと鳴り響き、その隙間からどこからともなく、ステラの耳に、静止を求める声が聞こえた。だが、ステラはその声の正体を確認するまでもなく、その声が促した指示を拒絶した。

ここは、ザフトの船。

——ザフトは、敵だ……………!!

武装兵のひとり、ステラに向けて銃を構えた。そいつの視線は、動くなど言わんばかりの剣気立った気迫に満ち、トリガーには確かに、力の入った指が掛けられている。今すぐに発砲してきそうなその剣幕は、とても脅しには見えない。

ソイツの眼は、下手な動きをすれば、確実に射止めてやる、と言わんばかりに訴えているようで……………

——下手な動き……………?

そんなものは——とうの昔に、昇華した。

今の「わたし」に……………出来るのは——!!

「なッ」

格納庫へと現れ、すぐに「デیفエンド」へと駆け寄ったアスランは——今、目の前に広がる光景を疑った。

その場に一発の発砲音が響くのと、目にした金髪の少女が動き出したのは同時のことだった。放たれた凶弾を、少女は、ふっとその場に沈み込むことで回避する。たとえ一瞬でも動揺の隙を見せた発砲の主は、次の瞬間、強烈な少女の膝を顔面に喰らっていた。周囲の武装兵が、青ざめたように一斉に銃を構える。だが、兵士のひとりを蹴倒した少女は、まるで猫を連想させるようなしなやかな動きで伏せ、あるいは跳ね、コーデイネ

イターのザフト兵たちを攪乱していく。

武装兵達も、ここが艦内であることから、不用意に発砲することは出来ず、攻めあぐねていた。闇雲に発砲し、流れ玉が味方に向かうことを恐れているのだ。

しかしそれは——彼らにとつて、大きな命取りだ。

少女によつて、武装兵達が次々と容赦なく蹴倒されていく。——丸腰のひとりを相手に、コーデイネイターの兵士がなんたるザマだ。イザークがこの現場を見たら、それこそ顔から火を噴いて嚇怒するだろう。

地面に転がる武装兵の頭数が、ふた桁に迫り着いたか、そうでないかのその時、それまでしばし唾然としていたアスランは、現実には引き戻された。同僚であるニコルが、少女の鎮圧のために拳銃を構えたからだ。

ニコルは赤服で、その腕は確かだ。一般の兵士とは格が違う實力を持っている。彼を相手に、今の錯乱したステラでは……

——殺されてしまう……!!

アスランは咄嗟に不安に駆られた。

経緯はどうあれ「鹵獲」という形で、ステラはザフト艦に連行され、結果的に生き長らえたのだ。だが、ここで暴れたまま野放しにすれば、射殺されてしまう。

——そんなこと、させるものか！

アスランはニコルの代わりに拳銃を手にし、彼を制した。ここは任せてくれと、そう強く短く言い残して。

——殺されてしまうくらいなら、俺の手で鎮圧する。ステラは今、すこし錯乱している！

アスランがそんなことを思慮していた時——武装兵のひとりが、アスランの足元まで吹き飛び、倒れた。

目を丸くして、ハッと息を飲んだその瞬間——空中で身を翻す、まるで猫のように小さな少女が、アスランの眼前に飛び掛つて来た。

「赤いの。おまえもザフトか……！」

「ステラ……!?!」

鋭い眼、敵意に満ちた表情——

「そこ」にあつたのは、アスランの知っている妹の顔。——では、なかつた。

次の瞬間、少女の手が、ちかりと煌めいた。アスランが咄嗟にその正体を探れば、たった今、緑服兵から奪い取つたであろう短刀が握られていた。

アスランが握っていた拳銃は、まるで役に立たなかつた。期せずして敵の接近を許してしまい、すぐに拳銃を投げ捨てると、組み合いの構えを取つた。少女は芯のない動きで身を翻しながら、アスランに向けて短刀による攻撃を繰り返した。胸の前で何度も翻

される刃に、アスランは持ち前の反射神経で反応して見せるが、一方的に攻め込まれ、後退する形になってしまっていた。

やめろ、と声に出す余裕もない。——妹と、目が合わない。

ステラはこの時、アスランを「兄」としては認識していないのだろう。彼女の注意は、アスランが今「赤服」を着ていることだけに向けられ、その正体が、自身の兄であることなど想像していないのだ。

「ステラ、やめろ！」

「うああああっ！」

アスランはさすがのように叫び、静止を求めたが、ステラの記憶の内の「赤服」とは——敵——を象徴する以外、何者でもなかった。

赤服が殊にザフト兵の中で危険度が高く、戦闘力が比類なきエースである情報が仕込まれていたからこそ——怯えるように、果敢に、苛烈に、そして獯猛に、こうして攻撃を仕掛けて来ているのだ。

——こんなに凶暴な姿の妹を見るのは……初めてだ！

不思議なことに、繰り出される短刀の正確さに、アスランは短刀を避けながら、煮え湯を飲まされるような思いを抱いていた。

ここまでアスランが無傷で短刀を回避し続けられたのは、アスランが誇る高い身体能

力と、反射神経があったからに他ならない。これが仮に並のコーディネイターであったなら、この少女の体術や戦技を前に、完全に屠られているはずだ。

——いったい、どこでこんな“力”を……………!?

見たことのない「妹」を前に、アスランも攻勢に転じられずにいた。そんな時、脇からひとつの声が飛ぶ。

「アスラン、下がって!」

隙を見てアスランが声が響いた方を見れば、少女めいた柔らかな面持ちのニコル・アマルファイが表情を固め、拳銃を構えている姿が映った。翳された銃口は確実に、アスランの眼前の少女へと固定されている。

アスランが息を呑むと同時に——意を決したのは、その瞬間だった。

繰り出される短刀をよけ、回避運動として、アスランがその瞬間、華麗に後方転回を決めた。両手を地床に着けた瞬間、自由になった脚を繰り出し、少女が握る短刀を一瞬にして蹴り飛ばした。腕が叩かれ僅かに怯む少女に対し、瞬時に態勢を整えたアスランが、腹部へと強めの拳を叩きつけた。

それが、決定打であった。少女は意識を失い、アスランの体に倒れかかった。

拍子抜けしたような、安堵したような表情で、ニコルが近寄って来る。

「流石ですね、アスラン。なかなか手こずっているように見えたのですが」

「え？ あ、ああ……」

「しかしどうやら、あまり褒められた状況でもないようですな」

ニコルが言いながら、周囲を見回す。

イザークが見れば、阿鼻叫喚の絵図となる。何名ものコーディネイターが、その場に野垂れている。敵が丸腰であったことが幸いして、命に別状はないように見えるが、自分の再起は望めず、少なくとも医務官の手を大きく煩わせることにはなるだろう。

「驚きました。……まさか、僕らが今まで苦汁を舐めさせられていた『デイフェンド』のパイロットが、まさか、こんな女の子だったなんて」

「……そうだな」

アスランは生返事を返す。

その時、『ヴェサリウス』艦内に、放送が流れた。

『アスラン・ザラ。クルーゼ隊長が呼びだ。——すぐに隊長室へ』

アデスの声で、放送が入る。

それを聞いたニコルがアスランへ視線を移し、アスランは怪訝に思いつつも、どうか、自分がなぜ隊長に呼ばれたのかが、理解できているような気がした。

「……この子を頼む。行ってくる」

「あ、はい」

アスランはそうして、クルーゼの控える隊長室へと向かった。

『オーバーラップ』

ラウの執務室に呼び出しを受けたアスランは、廊下を進みながら、ひとり複雑な面持ちで逡巡していた。

考えているのは、クルーゼが自分に伝えようとした言葉の、その真意である。

帰投したアスランに、クルーゼが伝えたかったこと。

『きみが望んでいることを、してやろう——』

アスランは、その言葉をクルーゼ本人から聴いたわけではなかった。アスランが「イージス」に乗り、ラクス・クラインを迎えに行っている間に、彼がアデスに伝言を頼んだものである。

——望んでいること？

アスランの望みとは、正直なところ、迷いの多い現時点では彼自身にもよく分からなかった。

大局を捉えて見れば、戦争のない世界、とでも云っておくべきだろうか？ 軍人とし

てモビルスーツを操り、人を殺して戦場を回っている自分が、そんなことを願うとは烏澁がましいことであろう。そんなことを思うと、嗜虐的な気持ちが入み上げて来たが、しかし実際、それもひとつのアスランの願いであることに嘘偽りは無い。仮にも平和を願わぬ人類がいるのなら、そんな人間の考えとやらは、アスランには到底理解できなかったのではないだろう。

——あるいは、最近で言えば……やはり、妹のことだろうか。

妹ともう一度、手を取り合つて、共に暮らせれば良い。共に「プラント」へと戻れば良い。——再会を果たした当初は、そう思っていた。そう思つて、何度もステラに、腕を伸ばした。

しかし何度も——ステラ自身に、その腕を振り払われた。

ステラにも、今は「守りたいもの」があるからと——。

決して撃つ気はなかったのだろうが、妹に銃を突き付けられ、言葉を拒絶され、アスランは最近、ザフトで戦っている自分自身に迷うことが多くなった。呆然と愁いに耽ることが多くなった。

『——だれかを「守ってあげたい」と思う気持ちに、間違いなんて、ない!!』

妹に叫ばれた言葉に——その時、アスランは返す言葉を見つけれなかった。そして今も、それを説き伏せられるだけの力強い答えを、見つけられずにいた。

——正論だ。

誰を守ろうと、誰を大切に思おうと。それは個人に約束された自由である。

兄として、言い返せないことが情けない。

あそこまで決定的に、妹に主張を返されたのはアスランも初めてのことであった。幼き日までの妹は、ぼんやりとしていて、どこか危なっかしくて——それでも、兄の云うことは何でも素直に聞き入れてくれるような従順な娘だった。今が反抗していると捉えているわけではないが、しばらく見ぬ間に彼女は成長し、放たれたその言葉には——彼女自身の、確かな意志が感じられた。

——オレだって……「プラント」を守るために戦ってるんだ……。

互いに守りたいものを守るために戦っている。その上で、ステラと対峙してしまったのだから、もはや、これはどうにもならないのではないか？　とも考えられ、途方に暮れていた。

だからと云って、ステラを撃つことなど考えられるはずもなく。なんとかして、彼女を説得させなくてはならなかった。そのためには、口下手で定評のある自分には、彼女と話すだけのまとまった時間と、それ相応の豊富な言葉が必要だと考えた。

「オレが、望んだこと……」

クルーゼの執務室のドアの前に辿り着き、すうと息を吸う。

そして、一步を踏み出した。

「失礼します」

熱を感知した自動ドアが開く。視界の先に、必要最低限の家具だけを備えただけの、殺風景な部屋が拡がった。

クルーゼはゆったりと椅子に坐し、腰かけていた。

相変わらず、風変わりな銀色の仮面によつて男の表情は窺い知れないが、醸している雰囲気は、いつもと比べてるとどこか柔らかいように感じた。

——ひよつとすると、機嫌が良いのかもしれない。

『*デイフエンド*』を鹵獲できたことで、そんなに態度が変わるものだろうか？

すくなくとも、アスランがそう判断できるほどには、クルーゼが浮かべている微笑みは、いつもよりも邪気のないものであった。

「急に呼び出してすまないな」

「いえ」

クルーゼはアスランに視線を向け、鷹揚と話を切り出した。

「きみの方も、わたしに色々と言いたいことがあるのだろうかね」

「は………？」

「おや、無かったかね？」

「あつ……いい、いえ」

ないのか、と訊かれれば、あります、と声に出したくなるほどの疑念が、アスランの胸中には溢れていた。

——なぜ『デیفエンド』だけを、突如として鹵獲などしたのか。

——なぜそんな作戦を、自分にだけ黙って、隊長達で済ませてしまうのか。

訊きたいことは多くあつたが、クルーゼの方も、それを解決するために、こうしてアスランを呼びつけたであろうことは既に察しが着いていた。

アスランが尻込みしていると、そんな時、クルーゼがふ、と不意に晒った。晒われた方が、怪訝な貌を浮かべる。

「アスラン。きみは軍人としては非常に優秀だが、驚くほど軍人に向いていないな」
褒められたのか、貶されたのか。それすらも分からない唐突な言葉に、アスランは目を丸くした。

——自分ひとりで解決しがたい心理的な問題にぶち当たると、動揺の色が露骨に表情や挙動に現れる。

そう云つた意味で、クルーゼはアスランを、軍人には向いていないと形容した。
イザークから聴いたよ、とクルーゼが云う。

「『デیفエンド』のパイロットを務めていた金髪の少女。——彼女は、きみの妹かな

？」

アスランの眼が、驚きに見開かれる。

——どうして。

なぜそれを、知っているというのだろうか……！

アスランの表情に、またも激しい動揺の色が浮かぶのを認めたクルーゼが、確かな手応えを得たように、不敵に晒う。

「“ヘリオポリス”での一件を経てからのきみの動向は、どこか不自然だ。隊長のわたしとしては、普段は真摯な隊員の面持ちに蔭が潜むようになれば、心配のほどはするさ」上官の鑑のようなしごく聴き心地のよい台詞ではあるが、これがクルーゼの手練手管だと、云うやつは云うだろう。巧みな話術で詐欺のように人を操ることがあり、思わずそれだけで納得してしまいそうになる発言が、人間の感情をすべて把握した上でわざと放たれているのかと探ると、時にその存在が、恐ろしくさえ思えてしまう。

クルーゼが言及しているのは、アスランによる、突然の命令違反に強奪機イージスによる出撃要請から始まっている。

普段より、欲と云った図々しさを表に出さぬアスランの自己主張が、突如として強くなったのは——クルーゼが、彼を“ヘリオポリス”に遣わせてからだだった。

以前の報告では、かつて、月の幼年学校での幼馴染が“ストライク”に乗っていると

いう事実には困惑しただけだ、と述べていた。しかし、どうにもクルーゼは、その限りではないと踏んでいた。

そして今回、突然の、ラクス嬢の身柄の返還が起こった。

道徳的な観点から。という理由だけで、彼女の身柄を渡してくれる地球軍兵士が居たのなら、未熟な愚か者だとクルーゼは嗤っただろう。しかし「ヴェサリウス」に通信を寄越した敵機のパイロットは女性で、ひいては女の子で、ラクス嬢のことを呼び捨てにしていた。

多くの者が——まして、婚約者であるアスランまでもが敬称を用いるラクス・クラインのことを——地球軍所属とはいえフルネームでもなく——敵パイロットは無意識に「ラクス」と呼んでいたのだ。

——まるで、遙か昔から、彼女と親睦があつたかのように……。

複数の事実から判断して、クルーゼは自力で、その結論に至った。

「ステラ・ザラ。——わたしもザラ国防委員長には、色々と懇意にして頂いているからね。名くらいは聴いているよ」

「隊長……！」

——やはり、底の知れぬ男だ……。

アスランは切れすぎるクルーゼに、畏を成すばかりであつた。

「彼女が生きていて、よもや『あんなモノ』に乗っていようとは……思いもしなかったがね」

「……………はい」

アスランはそこで、大人しく事実を認めた。

クルーゼの言葉が、滔々と紡がれる。

「いや、わたしとしても、事実を事実として確かめたかっただけなのだよ。心配せずとも、彼女はきみの妹で、政府高官の御令嬢だ。ミゲルやハイネを討ち取った仇敵だとは云え……………危害を加えたりはしないさ」

——すくなくとも、わたしはね。

強調されるように付け足されたその言葉にはどこか、アスランの心を痛める、皮肉にも似た響きを持つていた。

「この件は、第一に、きみのお父上に報告させて頂く。そうなれば、彼女の存在を隠しても無駄になる。この艦のクルーが真実を知るのも、時間の問題かな」

「……………」

「報道で伝わるか、己の口で打ち明けるか——それはアスラン、きみが選ぶといい」

それが『プラント』の情勢にどのような影響をもたらすかどうかは分からないが、ステラの存在は、すくなくとも公表されることになるだろう。

そんな彼女にミゲルやハイネを撃たれ、ザフト兵の中には、少なからず個人的に「デイフェンド」のパイロット」に怨みを持つているものと居るはずだろう。ステラの素性を明かしておいた方が、艦内はひよつとすると、広い意味で安全になるかもしれない。

その時、隊長室に構えられた通信が鳴った。

クルーゼが応答すると、医務室からの連絡が上がった。

「――捕虜かのじよが意識を取り戻したそうだ。きみも、行くかね？」

捕虜、それはつまり、ステラのことだ。

アスランは、それに頷く。

そうしてふたりは、医務室へと向かった。

医務室に向かい、入室した先で、アスランは目を逸らしたくなるような光景を目の当たりにした。

医療用ベッドの上に横たわる金髪の少女が――拘束具によって、胴、腰、両腕、両脚と、完全に自由を奪われていたのだ。

一度、ザフト兵の拘束を振り払って暴れ出した経緯も考慮されれば、当然の処置では

あるのだが、実の妹がそのような仕打ちを受けていることに、アスランとしては苦渋の表情を隠せない。

入室して来たふたりの姿を確認した医務官の男が、声を発す。

「鎮静剤を投与して、意識レベルを意図的に落としています。意識はありますが、だからといって、暴れ出すほどの気力はない状態です」

暴れ出しては手が付けられなくなりますから、という説明が耳に入ったかどうかも怪しいほどに、アスランが悄然として、一步一步、医療用ベッドへと歩み寄って行く。

まるで吸い込まれているかのように、我を忘れてベッドへと向かうアスラン。その間、クルーゼは後方で、医務官から少女のカルテの説明・解説を受け始めた。

一步一步と近づいていく度に、もう二度と手が届かないと思っていた少女の姿が、大きく、はつきりと目に映る。

バイザー越しでもなく、モニター越しでもなく、肉眼で。眼の前に姿が見える。

うなされるように、ステラは首だけを動かしていた。医務官の云う通り、意識はあるようだが、呼吸は弱々しく、瞳は半分しか開いていない。顔色も悪くどこか疲弊しきつた印象を受けるのは、おそらく鎮静剤の影響で、意識さえもが朦朧としているからだろう。

「ステラ……！」

顔を覗かせたアスランは、これまで必死に包み隠していた、妹への感情を爆発させた。これまで、誰にも見せず、悟られるわけにも行かなかつた「歓喜」という感情を、ここにきて、ようやく吐露することが出来たのだ。——この場に居合わせる医務官にも、クルーゼにも、既にこの少女の正体を憚る必要はないのだから。

感情を包み隠さず、したたかに震えた声で、彼女の名を呼んだ。

「アス……ラン………?」

「ああ、ああ。そうだ………」

弱々しい声に、涙が出そうなほど表情が強張った。

これまで、何度も何度も伸ばして来た腕が——今なら届く。小さな手を取れる。もう二度と離すまいと、華奢な肩を抱き留めることだつて出来る。

朦朧とした意識の中で、ステラも弱気になつてきているのだろう。アスランが目の前にいることで、安心したような笑顔を浮かべている。まるで昔の日々に戻つたかのようだ。「……………」

感動が言葉にならず、ステラの掌を取り、ぎゅつと握りしめる。

機体を拿捕する形でしか彼女を連れて来る方法は無かつたのには遺憾の念を感じざるを得ない。だがこの瞬間のためだけに、アスランはクルーゼに強い感謝の念を抱いた。

「命に別状は……ないんですよね？」

心配になり、暫時の邂逅の時間を味わった後、アスランはステラから視線を外し、後方でクルーゼと話す医務官の男に訊ねていた。

なにしろ、コクピットの中で気絶するだけの衝撃を受けたのだ。

「ああ。今のところはな」

男の言葉に、アスランは懷疑した。

意味を訊ねようとしたが、その時、クルーゼが会話に割って入った。

「華奢な娘だ。とても、我々を何度も苦しめた存在とは思えぬな」

医務官に笑われたそれは、泣く子も黙るラウ・ル・クルーゼにしては珍しい冗談めいた発言であった。

前に歩み出たクルーゼが、アスランの隣を位置取る。

医務官から受けたカルテの説明を受けて、心に余裕が生まれるほどにクルーゼは上機嫌になっていた。その声にはどこか、抑えきれぬ興奮を含まれているように聴こえて取れた。運や運命がみずからに味方した、と確信しているような男のそれが。

その時、今まで半分まで開いていなかったステラの眸が——大きく、見開かれた。

「ステラ？」

アスランが怪訝そうに訊ねる。

ステラは弱々しい声で、しかし、明らかに声に驚きを含めて、クルーゼの貌を見据えている。

「ネ……………オ……………？」

「？」

クルーゼの頭に、疑問符が浮かんだ。

間違いなく、ステラはクルーゼを見据え——そう呟いたのだ。

——誰かと、人違いを起こしているのだろうか。

ネオ、という名を呼んだ途端、ステラの様子が豹変した。

「ネオ……………ネオ……………っ！」

波打った金色の長髪。精悍な体格。そして、目を覆った仮面……………。

声か、匂いか、気配か。——いや、判然と分からずとも、どこかが、あまりにも似通っ

ている。

ステラの中で、面影が重なる。

目の前の人物と、思い出の中の人物が——。

呆気に駆られたアスランが、クルーゼに振り返る。仮面の男は、嗤っていた。

「隊長……………？」

「……………ふっ」

そして、これまでアスランが見たこともないような、優しい色を口元に浮かべていた。全身を強固に拘束されながら、ステラはまるで、縋るように目の前の「仮面の男」に腕を伸ばし始めた。助けを求めているかのようだ。

クルーゼは微笑みを返し、やがて、ゆっくりとその顔を近づけた。そして、ステラの耳元まで口を寄せると、

「そう慌てることはない。今は気をしずめ、ゆっくりと休むといい。私はどこにも行かないよ」

まるで赤子を癒すかのような声で、言葉を掛けた。

その言葉を聴き、ややあつて、ステラの表情に安心しきったような緩い色が浮かぶ。やがて力尽きるように瞳を閉じ、すうすうと、規則正しい寝息を立て始めた。

これまでは際限なく暴れていたというのに、クルーゼの指示には、驚くほどに従順だ。医務官がぎよつと目をむいた。

「驚きました。お知り合いましたか？」

「いや、初対面だ。おおかた、私に誰かを重ねて見ているのだろうか」

先程の赤子を癒すかのような声から一転して、クルーゼの声は、淡白ないつものそれに戻っていた。態度というチャンネルが、鮮やかに切り替わっていたのだ。

それが少しに気に入らず、アスランは呆気にとられる。しかしクルーゼにも、あのよ

うに暖かで柔らかな声が出せるのだ、と思い、新たな発見をしたような気分になったのは確かだった。

「——よほど、慕われていた人物と重ねて……な」

その声には、どこか不気味な含みがあった。

「この娘には、私にも、分らないことが多いんです」

事務的に、アスランがそこで言葉を続けた。

「私の知っている彼女は、モビルスーツなどを操縦できるような人物ではありませんでした。それに……」

先刻、格納庫での一連の記憶が蘇る。

あの時のステラは——まるで、前線に身を置く戦士のように見えた。感覚は鋭敏に研ぎ澄まされ、触れば切れる、抜き身の刀のような雰囲気をつけていた。

コーディネイターは、先天的に高い身体能力を確約されている。しかし、ステラが発揮していたものは、とても素人が才覚や潜在能力ポテンシャルに頼っただけで繰り出せるようなものではなく。戦闘訓練を受けているザフト兵の知覚を超越する、文字通り、彼らを蹴散らすほど圧倒的な動きだった。

彼女が繰り出した攻撃の、ひとつひとつの正確さは——アスラン自身が、身を以て思い知っている。赤服である彼さえもが、煮え湯を飲まされた思いを抱いたのだ。

アスランが、視線を落とす。

「本当は……血のバレンタインで」

——死んだはずだったんです。

アスランが思わず、そんなことを口走ろうとした。

しかしその先は、クルーゼによって制された。

「そんな君には非情なようだが。この娘の抱える問題は、どうやら、それだけではないようだよ」

「え？」

「この娘には——これまで、多くの薬物を投与された経歴があるようだ」

アスランの身体が——凍りついた。

クルーゼの言葉に、医務官が頷いた。

カルテの説明の中で、クルーゼは先んじて、その報告を受けていたのだ。

医務官から紡がれた説明を受け、アスランの頭は、かつてないほどに混乱していた。

——薬物投与の経歴あり。

それが示唆する事実が、どれだけ凄惨なものであろう。

正常なる普通の人間であれば、そもそもその前提として、薬物など、生きていく上で必要なものである。それが絶対に必要なものでない以上、道に腐った無法者や、道を外した外法者達だけが、そういった存在に手を伸ばすのだと——すくなくとも今日、この時まで、アスランはそう考えて生きて来た。

——しかし、ステラが……？

最後に薬を投与したのが、いつ頃の話になるのか、正確に割り出すことは出来なかつたようだが、体内から検出された物質の量から逆算して、おおよそ数年前のことだと云う。

人間の肉体に、本来は存在しない物質等が、ステラの体内から検出されたわけだが、医務官によれば、そう云った物質のほとんどは、既に体内から抜け落ち「肉体が持つ自然免疫力によって死滅して行っている」らしい。

これを言い換えれば、ステラは確実に——薬物を投与していた過去から立ち直り、健全な人間に近づいて来ている、という理解もできるだろうが、薬物を投与していた事実たるものは変わらない。

——まさか、地球軍に……？

長期間の失踪。常人の反応速度を超えた白兵戦技。薬物投与の経験。高度なモビル

スーツの操縦技量。

どれをとつても、貌を顰めたくなくなるような特徴である。もしかするとステラは、これまで地球軍に操られて来たのかもしれない——その想像に至るまで、そう時間は必要とされなかった。

茫としながらアスランが休憩室へと足を運ぶと、中では、イザーク、ディアツカ、ニコルの三人の姿があった。どうやら、話題性あふれる「デイフェンド」のパイロットについて、面白おかしく議論を行っているようだ。

「だから俺が云いたいのは、あのパイロットが俺達の敵で、今まで散々地球軍で暴れ回ってたつてのと、顔が可愛いつてのは、また全然、別問題つてことであつてだなア」

お調子者で、軟派なディアツカ・エルスマンが議題の渦中に腰を据えており、イザークが反論する。

「愚か者！ 俺達がヤツひとりのために、どれだけの損失を払つて来たと思つている！

そのような浮ついた考えを敵に抱くこと自体、間違つている！」

「だからさ、別にあのパイロットの経歴を許そうつてわけじゃないつての。ただ事実として、可愛かつただろつてことよ」

「たしかに、僕はもうすこし、経験の深い精悍な人物が「アレ」を動かしているのだと思つてました。正直、あんな華奢な女の子だなんて、想像が及ばないというか……」

「もう少し心に余裕を持つとせうぜ？　ラクス嬢にも引けを取らなかつたつつか、もう一回、顔だけでも覗いて来ようかねえ」

「俺達は軍人だぞ!!?　なんだこの浮ついた談話は!？」

「緊急会議みたいなもんっしょ」

「なんのだ!？」

やれやれ、と嘆息ついたニコルが、アスランの姿に気づいた。

「デイアツカもまたその姿を認め、言葉を投げかける。」

「よおアスラン。おまえはどう思う？　あの『デイフェンド』のパイロット」

どう、と訊かれても、今まさにそのことに悩んで、頭がパンクしそうなのだが……。

「……あそこまで高度な戦闘技術をどこで身に付けたのか、気になる次第だな」

間違ったことは、云っていない。

「かーっ、イザークといいオマエといい、もの分かりの悪い野郎ばっかだな。おまえら

バカかよ」

「バカは貴様だ」

「女に興味あるやつはいねえのかよ」

軍人をやっているから。女性に触れる機会が少ないから。

また、男しかないこんな環境だからこそ、性をテーマに時には下な話題も交え、無

礼講に盛り上がりたいたいというものだ。

そんなディアツカの機微に理解を示してくれたのは、ミゲルやハイネ、ラスティくらいのものであった。しかし運悪く、すでに彼らは全員としてこの艦に乗り合わせていない。艦に残っているのは、

「女など、軍紀を乱すだけだ」

——これである。

あいつらの代わりにおまえら一回死んで来い、と思ったディアツカであった。

「でも、コーディネイターでしたよね。それがどうして、地球軍の味方などしていたのでしょうか?」

「さあな。というか、いきなりラクス嬢を返してくれたり、たまにわけ分からねえことするよな」

「ふん。どちらにせよ機ディアフエンド体がザフトに渡った以上、あの者には用はない。今は捕虜の扱いを受けているが、今まで散々暴れ回ったのだ。裁判を待つ間もなく、処断されるだろうさ」

「ええ、勿体ねえ」

「ディアツカ」

「……いや、それはない」

アスランが最後に、ぼそり、と言葉を発した。

それを聴いた一同の視線が、アスランへと集まる。イザークが気に入らなそうな顔をする。

「……へえ。なんだって？ あいつが罰せられないとでも云いたいのか？」

イザークがせせら笑う。

その疑念は当然のものだ。現実的に考えて、*「デیفエンド」*はザフトが誇るモビルスーツ *「ジン」* を何十機として撃墜し、エースパイロットを数機として沈めて来た。

真正正銘の敵、ザフトにとつての弊害として立ちはだかった。

それだけの被害を出した敵パイロットの実力には、目を見張るものがあるにしろ、たとえコーデイナーであつたとしても、宥赦されるとは考え難い。いや、むしろコーデイナーであるからこそ、祖国にブランド反逆していた咎は重いはず。

アスランはあくまで、感情を交えぬ淡白な声調で返す。

「罰せられないとは云つていない。ただ、無下に首を刎ねられるようなことはない、と云つたんだ。すくなくとも、裁判を待つ身にはなるだろうし、情状酌量の余地もある」

「アスラン？」

「これはまた、随分と肩入れするじゃんか。惚れたか？」

「そんなんじゃない。……ただ」

「ディアツカがあまりにも相変わらずで、わざとらしくアスランがため息を吐いた。

「あれは、おれの妹だから……………」
ぴしり。

——と、その場が凍てついた。

「……………はあ？」

「……………なに？」

「……………アスラン？」

あまりにもアスランらしからぬ冗談に、一同が呆気に駆られる。

前々から気に喰わないヤツではあったが、ここまでユーモアのセンスのない野郎だとは思わなかった、と胸中で吐き出したイザークである。

「妹……………？」

唯一、その中ではニコルだけが、その言葉に動揺こそすれ、発言を肯定的に捉えていた。

——少女が誰かに似ていると思ったのは……………確かだったからだ。

「……………マジで？」

ディアツカが声を上げる。

アスラン自身も、中性的と形容するよりかは、完全に女性的な顔立ちをしている。初

対面の人物が遠目からアスランを見れば、多くの余人が、彼を女性として認識するのではないだろうか？

それだけ、母親譲りの秀麗な外見をしている。反対に、妙に融通の利かない性格は父親に似ているそうなのだが、金髪の少女の顔も、どこかアスランと似ているように……見えなくもない。

——コーデイナーであれば、たとえ親と子が似ていなくても、誰も強い違和感を覚えない。

人為的な遺伝子操作・改変が可能となった時代から、コーデイナーの第一世代は、生まれ出で来る「我が子」の顔立ち、瞳の色、髪色と——外見的な特徴から、身体的な潜在能力までもを、まるでカタログショップで購入するかのように自由に選択できるようになった。子息の外見や能力を、ある程度の範囲、もしくは支払った金額によって相応に自在となるのが、第二世代以降のコーデイナーの出生の特徴である。むしろ、後天的な要因が大きい人格形成まで支配できるわけではないが、娘が両親から大きくかけ離れた外見を持っていたり、髪の色が大きく異なっていたとしても、そこに大きな不義は働いていないのが、彼らコーデイナーの世界なのだ。

驚異的な身体能力。そして、優秀すぎるモビルスーツの操縦技量。

アスランの妹である、というその言葉は、冗談と捉えるには妙な現実味を帯び過ぎて

いた。

「血のバレンタインで、生き別れたんだ。それから行方が分からなくて……やつとのとどで再会したと思ったら、既に「アレ」に乗っていた」

今まで可愛い、可愛いと連呼してただけに、妙な気まずさが、ディアツカの中に押し寄せた。

アスランの説明は続く。

「何度も投降を呼びかけて、でも聴かなくて。ずっと行方がわからなかったと思ったが、まさか、あんな——」

「——ふざけるな！」

その瞬間、イザークが、アスランに喰ってかかった。

言葉の先を遮るように襟元を掴み、背中を壁に叩き付ける。

ニコルの静止の声が飛んだが、それは熱を帯びた彼を止めるだけの冷水とはならず、イザークの感情は高ぶっていた。

「何度も投降を呼びかけて来た……?! そのヤツに、俺達がどれだけ殺されて来た!」

イザークの糾弾は、第一に「ステラがアスランの妹である」という事実を差し置いた内容から始まった。

それはそもそも、にわかには信じられた話でもないが……。

「今までの戦闘の中で、キサマはヤツに対して！ 手を抜いていたということかあ!？」
「……………」

手を抜いた、という表現には語弊があつても、すくなくとも、心理的に大きなブレーキが働いていた、迷っていたことに変わりはなかった。

そしてそれは——足つきの「ストライク」に対しても……。

「ミゲルも、ハイネも！ 多くの同胞を、ヤツによつて撃墜されて来たんだぞ！ 仮に血縁関係があつたことが事実だとしてもなあ！ 行方が分からなくてとしらばつくれたところで、今になっては、それも貴様の咎だ！」

監督不届き。——とでも、云うのだろうか。

妹を手放した「ツケ」によつて、アスランは戦友ハイネやミゲルを失つた。

あるいはアスランは「ディフェンド」に乗っていたパイロットの正体を知つたその時から、敵機に対して温情を抱き、本気で戦おうとしていなかったのかもしれない。そこに生まれた甘さが、ミゲル達を屠つた原因になつていたとしたら。

「血を分けた兄妹だからと云つて……許された話ではないのだぞ！」

「わかつてるさ……………」

——だがイザークとて、まだ、知らないことの方が多いんだ。

幼き日に地球軍に拉致された彼女は、地球軍による誤つた教育を受け、ザフトに敵対

するように仕込まれていたかもしれない。自制が効かず、ザフトを撃つように制御されていたのかもしれない。——不可抗力に従軍させられていたとして、彼女に国家反逆罪を充てつけるには荷が重すぎる。

——そうだ。

きつと——そうなのだ。

地球軍に操られていた。——それでもなければ、あのステラが、自分と対峙しようなんて、思うはずがない……！

アスランの中で、情緒が乱れ、思いを巡らす内、そうであつて欲しいという願いが強くなつていった。

「ふんっ」

そこでイザークが、アスランから手を離れた。

——血のバレンタインで生き別れた妹と、再会できたというなら、同僚として、すこしでも祝つてやるべきなのだろう。

あんなにも忌々しい出来事は、イザーク自身も心から嫌悪しているからだ。

崩壊した「ユニウスセブン」からの生存者が、たつたひとりでも増えたことがわかつた時点で、「プラント」の行方を憂う者として、嬉しくないはずが無い。

——だが、喜べないのは……その者によつて、多くの同僚を殺された事実があるから

だ。

アスランが、苦し紛れに弁明する。

「……敵パイロットの身体から、本来、人体が持たないはずの物質が多く検出された。地球軍に拉致されたその日から、なにか、歪んだ教育を受けさせられて来たのかもしれない……」

それを聴き、全員が驚愕に目を見開く。

アスランがあえて「敵パイロット」という表現を用いたのは、そこにアスラン自身の血縁者としての温情を排除して、イザーク達にあくまで、客観的に見た同情の余地が、情状酌量の余地があることを示すためだ。

「それが、本当なら……」

ニコルが云う。

「地球軍が用いた非人道的な行為を見せつける……これ以上ない広告塔になりますよね……」

広告塔と云つても、表現を変えれば、それはただの見世物だ。・

そう云つた意味では、アスランが云つた通り、ステラがそのまま処断される可能性は極めて低い。ましてその人物は、現^バ「プロト^{リッ}」国防委員^ザ長の娘である可能性も示唆されているのだから。

この時のアスランは、なにか得体の知れない、大きな危機感を憶えていた。ステラが戻って来てくれたことは嬉しい。

しかし、それがどこか、世界に不吉な匂いを運び出したような気がする。ステラが「プラント」に戻って来たことで——その事実が大いなる戦争と、憎しみの呼び水になってゆく気がして——。

アスランは、強い不安に駆られた。

「……キラ、まだ部屋から出て来てないの？」

「アークエンジェル」の食堂で、ミリアリアが心配そうな面持ちで云った。

会話の主は、同じテーブルを囲んで話す、カレッジの同級生一同だ。

キラはステラの機体「ディフェンド」が鹵獲され、敵機からの奪還に失敗し、帰投してから、ずっと部屋に籠ってしまっているのだと云う。むろん、ステラが敵艦に連れ去られてしまった事実を認められた時、ツールやサイ、とくにミリアリアは、強い憤りや悲しみを感じたことには変わりないが、中でもやはり、キラは心が打ち砕かれるほどの後悔を抱いたのだろう。

出撃しておいて、彼女が目の前で連れ去られて往く姿しか、見られなかったのだから。一同が重たい顔を浮かべていると、そんな時、食堂の入口に、フレイ・アルスターが現れた。その姿を認めたサイが、その場に立ち上がる。

「フレイ」

「あ、サイ……みんなも」

「食事、まだだったんだ。一緒に食べようか？」

「ううん、お腹すいてないから」

ではどうして、食堂に顔を出したのか、サイはふと疑念に感じた。

「それより、キラは……？」

「え？」

まさか、フレイの第一声に、キラの名が呼ばれるとは思わなかったサイである。

怪訝がる彼に、フレイはしおらしい声で続けた。

「さつきまでの私、パニックになっちゃって。その拍子に、キラには、ひどいこと云っちゃったし。……それと、もうひとりの女の子にも、ちゃんと謝りたくて」

「フレイ……」

もうひとりの女の子。——その言葉に、食堂の面々の顔が沈む。

フレイは、父親であるジョージ・グレンをザフトに殺されてから、帰投したキラとス

テラに、暴言にも近い、心ない言葉を充てつけようとした。彼女を鎮めようとしたサイによって未遂には終わったが、態度として、ふたりには強く当たってしまったことは確かだった。

そんなフレイも、今は落ち着きを取り戻している。冷静になった彼女は、途端に申し訳ない気分になり、こうしてキラ達を探しに来ているのだろう。

親愛なる父を殺されていながら、それでもキラ達を労わってくれる……。

——やっぱり、いい子だな……。

サイは改めて、親同士が決めた婚約者とは云え、目の前にいる彼女が、十分に魅力的であるということを改めて思い知った。

——でも、そうか。

部屋に籠っていたのは、キラだけではなく——父親を殺されたフレイもまた、部屋で休息を取っていたのだ。

そして、だからこそフレイは知らないのだろう。

その後起きた戦闘で、ステラがザフト軍に連れ去られたこと。だからもう——
“アークエンジェル”には乗っていないことを。

サイは沈んだ声色で、フレイに一連の旨を説き明かした。

「——連れ去られたって、そんな……！」

フレイは信じられない、という風に口を塞いだ。

サイは苦しそうな面持ちで、先を続ける。

「ザフトの目的は分からない。でも、なぜかステラだけが……敵機に捕まったらしくて」
「わたし、まだ、あの子にちゃんと謝れてないのに……」

しおらしい態度で、その事実には悲しんだフレイは――

そうして――事実を詳細に確かめ終えた。

「キラなら今、きつと自分の部屋だと思うよ。キラも、そのことで責任感じて、すぐく落ち込んでるみたいだから……」

「……そう、なんだ」

フレイは沈んでいた顔を上げ、云った。

「なら、私、キラにちゃんと謝って来る。ステラって子には、ほんとに取り返しのつかないことしちゃったけど、今はそのことも含めて、しっかりと、キラに私の気持ちを伝えたいの」

その言葉に感服したサイが、

「わかった。なら、俺もついていくよ」

進言したのだが。

「ううん、ひとりで行かせて」

と、短く断られてしまった。

そうしてフレイは、キラの部屋へと向かった。

「……キラ？」

フレイがキラの部屋の前まで辿り着くと、フレイも気を利かせるようにドアは開かず、その場で、声だけを発した。

部屋の中で、キラは———どうやら、眠っているわけではないらしい。

眠るに眠れなかったのだろうが、ややあつて、ドア越しに声が返つて来た。

『……フレイ？』

ドア越しに、その前に立つ人物を誰何する、キラの声。

その声は、ひどく枯れたように掠れて———もしかしたら、この部屋でひとり、苦痛と後悔に涙していたのかもしれない。

———それだけキラにとって、あの女の子が、大切だったってこと……？

フレイが複雑な心境を抱きながら、声を続けた。

たった一言、フレイが声を発しただけで。

「私って、分かってくれたの？ ……嬉しい」

『え、いや……』

しかしまた、ドア越しに放った声でも、キラはすぐに声の主が自分だと理解してくれ

たことに、わずかな感動を憶えた。

フレイ自身は気付いていなかったようだが、キラがまだ“ヘリオポリス”の工業カレッジの学生で居た頃、彼女は、キラの憧れの少女だった。それは今でもそうかは分からないが、当時のキラは、フレイにろくに口も効けないことにしどろもどろとしていたし、間違いなく、異性を対しての好意の視線を向けていた。

フレイの声が届くまで響けば、キラの心臓は高鳴り、身体もおのずとそちらを向いた。それだけキラにとって、フレイの声は、強く頭に残っているのだ。

対するフレイは、キラのことなど、ここ数日の一件を経て、認めるようになっただけで、その対応に驚いた。

『……嬉しい?』

呆気に駆られたキラの声が——ドア越しに響いた。

フレイはその言葉には返答せず、言葉を続けた。

「キラ。身構えないで聴いて欲しいの。わたし、あなたに謝りたくて来たの。……さつきは、ひどいこと云っちゃったし、その、ごめんなさい」

中からの返答が、途絶えた。

「あなたは必死で戦ってくれたのに、あの時はあたし、それを、わかってあげられなくて

……」

それでもフレイは、懸命に言葉を訴えかけた。

「ステラって子の話も、サイに聞いたわ。キラはそれで責任を感じてるって。……私も、あの子にはちゃんと謝れてなくて……」

『フレイ……』

「そのことも全部含めて、反省してるの」

——反省、だなんて。

キラは、そんなことないとはかりに首を振った。

キラがフレイの父を守れず、優先してステラを助けに上がってしまったのは、哀しいことに、キラも認める事実なのだ。

フレイだって、今は辛いはずなのに……。

そんな立場に置かれて、人を思いやることなんて、難しいはずなのに……。

「あなたに会って、ちゃんと謝らせて欲しいの。……あなたさえ良かったら、このドアを、開けて欲しいなって……」

フレイはこう云ったが、特別、居住区に構えられたキラの部屋には、旋鍵機能などついていない。艦内では滅多なことでは鍵など付ける必要もないため、という理由の構造ではあるが、それでも、捕虜を閉じ込めておくために必要な部屋等、数か所には鍵があるようだ。

フレイから飛び込むように部屋に入り込むのでは、キラに悪いと思ったのだろうか。キラがみずからドアを開けるまで、フレイは、ドアの前からの距離を置いた。

ややあつて———ドアが開いた。

フレイは、その場から動いていない。キラが立ち上がり、ドアを開けたのだ。——まるでフレイの気持ちに、応えるかのように。

ドアが開き、そこに立つ、キラの姿が目映る。フレイは目に涙を溜め———

「キラ———っ！」

駆け出すと、キラの胸に、大きく飛び込んだ。

キラが驚いたように目を見開くが、突然、恋焦がれるほどの思いを寄せていた、憧れの少女に抱き着かれ、その勢いを、受け止めるように彼女の身体を支える。

そして同時に———錯覚に陥った。

キラ、と名を呼んだその「声」が———あまりにも、ステラの放つ「それ」に似ていたから……………。

(ステ、ラ……………!?)

どうして。

その瞬間から、キラの頭に幻覚が見え———幻聴が聞こえ出す。

「ごめんなさい。私、どうしてもキラに謝りたくて……………」

——違う。

キラが逡巡する。

——謝るのは………僕の方だ。

少女の身体を抱き留める掌に、自然と力が籠った。

ステラ。——“デイフエンド”に乗っていた。

——僕は君を、助け出してやれなかった……！

必死で助けを求めた彼女を、自分は救い出してやれなかった！

キラがその時、腕に抱いた少女の身体は、儂いほどに小さくて、柔らかくて、触れて来たためくもりは、以前、少女を抱いた時のそれと、まるで近しくて。

放たれた声は——ステラの声と、あまりにも似ていた。

激しい後悔に苛まれるキラが、茫然と、その腕に抱き留めた少女を見下ろす。

目の前に、映ったのは。

蜂蜜に金粉を振りまいたように耀く金色——ではなく、花が燃えるように輝く紅

色——。

——違う。

ステラじゃ、ない。

キラが「視」ていたのは、ただの幻だったのだから——。

「フレ、イ……」

——そうだよな……ステラがここに、いるはずがないもんな……。

震えた息を吐き、キラの顔が沈んだ。

「……僕、は」

震えた声を出すキラの顔を、胸元から、フレイが涙を溜めた上目で見上げた。

「僕は、誰も守れなかった……」

そのことを、キラはひとり、この部屋ですつと悩み、抱え込んでいた。

——力がなかった。

何かを守るだけの力。敵を黙らせるだけの、それだけの力が——。

フレイのお父さんも、ステラのことでも守れずに、無情にも訪れた現在^{いま}、この時——。

キラは怖いのだろう。

そんな力不足が重なれば……きつと、いつかはこの艦^{ふね}だつて守れないと、そう考えるのが。

いつかは、友達も、フレイも、全員を、そして、自分さえも守れない気がして……。

「そんなことないわ……。あなたは一生懸命に戦ってくれている、それを責められる人なんて、誰もいないのよ……」

「でも、僕は……」

キラはこの時、自然と心音をフレイに吐露していた。

これまでの「ヘリオポリス」の生活の中で、フレイ・アルスターは決して、キラと卑近な距離にいた存在ではなかった。それなのに、そんな彼女にキラは今、不思議と弱音を吐けていた。

抱いた想いは、かつてまで、完全なキラの一方的なものでしかなかった。一方通行でしかなかった想いが、今この瞬間には、繋がり合えていると思えたのだろう。

フレイが真つ直ぐにキラを見上げ、キラもまた、彼女の存在をを素直に見据えられている。

あるいはキラは、ステラの声とフレイのそれを重ねることで——無意識下に、救済を求めているのかもしれない。

フレイの口から放たれる「慰め」が、あまりにも心地良くて——酔わされる。

彼女の激励は、キラにとっての強い錯覚を誘って、まるでステラに励まされたような——壊れかけたキラの心を繋ぎ止める、大きな働きをもたらしたのだ。

「自信を持つて。あなたなら、きつと大丈夫……」

その時、第一戦闘配備を知らせる警報が、艦内に響き渡った。

——守らなきや……。

キラの目が見開かれ、すぐに出動しようとする。

そんな彼を、フレイは呼び止めた。

「フレイ？」

「あなたばかりに、こんな重荷を背負わせてごめんなさい……。私だって、戦争なんて嫌よ。早く終わらせたいたい……。あなたに私が、代わってあげればいいのに……」

「そんな……フレイ。君には無理だよ！」

「こんなにも華奢で、壊れやすそうな優しい少女が、モビルスーツなんて——。」

「フレイの言葉、すごく嬉しかった。——それでも僕は、行かなきゃ」

ステラのことは、立ち直り切れていない。

しかし、それに悔やんで出撃が遅ければ、今度のキラは、この艦すら守れない。

だから、出撃しなくてはならないのだ。

「フレイの思いの分も、僕は戦うから、さ——」

「キラ……」

今にも崩れそうな、キラの言葉を癒すのは——。

「必ず、帰って来てね」

「……！ うん……！」

いったい、何なのだろうか——。

キラ自身にさえ——「なに」に縋っているのかが分からずに。

そうして、キラは“ストライク”へと向かった。

『アブリリウス・ワン』 A

イザーク・ジュールは功名心の化身であり、つとめて上昇志向の強い少年である。アラートにて出撃待機している間、これからの始まる実戦に対して緊張することも、尻込むこともなく、むしろ、誰よりも素晴らしい戦功を勝ち取らんと意気込んでいるのが、端的に云えば彼の性格なのである。そうして戦果に飢えている少年はしかし、このときに限っては、出撃待機時に不服そうな表情を浮かべていた。

「——気に入らん」

イザークには、目の敵にしている「好敵手《ライバル》」と呼べる存在がいる。同じクルーゼ隊に属する同期にして同僚、アスラン・ザラである。野心家であると共に努力家でもあるイザークであるが、そんな彼も士官学校は次席での卒業であり、彼がアスランを目の敵にしているのは、何を隠そうアスランこそが彼を越える主席での卒業者であったからだ。

無論、アスランはそうした成績を鼻にかけたり、それでイザークに対しマウントを取ってくるような真似はしない性格なのだが、当たり前のように自分を出し抜いていく

その態度は、それはそれでイザークの対抗心を煽っていた。

——ヤツにだけは、絶対に負けてたまるか！

今回イザークが不機嫌であるのは、そんなライバルが今回に限って出撃しないからだ。アスランはクルーゼと共にラクス・クラインを送り届けるため任務に就き、数刻前に前線を離脱した。そういう経緯で、愛機と共に「ガモフ」へと移動したイザーク、ディアツカ、ニコルの三名は、今回、再び足つきへの追撃を仕掛けることになっている。

——アスランを抜きにして任務に当たれるというのに、どうして、あのイザークが浮かない顔をしているのでしょうか？

気になったニコルが不意に、どうしたんです、と訊ねていた。

「さつきの戦闘だ」

〈はあ？〉

「バスター」に乗り込んでいるディアツカが訊ね返す。

イザークは慥然とした面持ちで続けた。

「オレ達は三機がかりで「デイフェンド」を追い込むよう命令されていた。だが結局、隊長がいなければ、ヤツを取り逃していたかも分かん」

〈まあ、な〉

「だが、それはいい。結局のところ、オレ達は足つきのモビルアーマーと「ストライク」

を見逃してゐるんだぞ」

泣く子も黙る、冷徹にして変幻自在、それでいて、容赦も完膚もない作戦を遂行することで定評あるラウ・ル・クルーゼにしては、あれは些からしくない作戦であつたような気がする。

クルーゼと云えば、戦場で敵と出逢えば、軍人として最高の作戦の下にすべてを撃沈する、残忍さと冷酷さを伏せ持った人物——しかし先の作戦で、彼は「ストライク」と「メビウス・ゼロ」——そして、その延長戦にある「足つき」の追撃を、初めから諦めていた。隊の戦力を「デイフェンド」一機に集中させ、その他「ストライク」などは云つてしまえば「どーでもいい」と云わんばかりに無視し、「デイフェンド」を鹵獲するためのより確実な手段を用いたのだ。

「——それだけ「デイフェンド」を警戒していたつてことなのだろうが、いったい、何をそこまで必死になる必要があつた？」

あの時、イザーク達は他の敵機ストライク・ゼロを追撃することも出来た。いや。イザークやディアツカの性格を考慮すると、彼らは敵機を追撃したかつたはずだ。しかしクルーゼはそうさせず、他の敵機をあえて泳がせた。

その後、すぐに「デイフェンド」への追撃。鹵獲を目的に機体を翻すよう指示を飛ばした。

「その結果が、これだぞ」

イザークが云う。今にも“足つき”が、月本部からの艦隊と合流しようとしているのだ。

——あのととき、沈めておけば。

イザークの不満の理由は、そこにあるようだ。

「鹵獲など考えず、全戦力で足つきを墜としに向かっていたら、こんなことには」

ここで艦隊との合流を許すものなら、こんなにも、滑稽な話があるだろうか？

たった一機のために、みすみすと一隻を見逃した。今回の戦闘は、そのツゲが廻つて来たと捉えるべきだ。少数精鋭で名高きクルーゼ隊が、たったひとつの任務のために、これだけ手こずらされている。運もまた実力の内、という言葉が正解にして正論なのであれば、敵艦は悪運ジラクスというものを、確実に味方に付けている予感がしている。

「足つきが月艦隊と合流すれば、この先、どれだけの猛威を奮うかも分らん」

“ストライク”もまた、この数日間の間に、確実に成長している。

あの艦と機体を取り逃がせば、その事実是将来的に、ザフト軍に確実な不利益を招く。それでもクルーゼは、一隻よりも、一機を優先した。

——鹵獲した“デイフェンド”には、本当に、それだけの価値があったのか？

いや、クルーゼにとって重要だったのは機体ではなく、パイロットの方か。

銀色の仮面の下に一切の感情を殺して隠し、その先にあくまでも事務的で、冷静で、どこか残酷な思考を張り巡らせたような指揮官だ。今回の件も、何か思惑あつての作戦であつたことは間違いはないではないのだろうか……

(足つきを撃墜するよりも絶大な利益が——あの娘に見込まれているつていうのかよ?)

どちらにせよ、あの少女の存在は——滅多なことには興味を示さぬ隊長が目をつけるほどに——大きなものとなつてゆくのだろう。

生き別れたその少女と再会したアスランが、今、何を思っているのか。

それは、イザークの想像の及ぶところではなかつたが。

アスランやクルーゼ、ラクス、そして、ステラを乗せた「ヴェサリウス」は転進し、この後、「プラント」へと帰国するラコーニ隊と合流する予定になつていた。遭難していったラクス・クラインと、地球連合軍の捕虜として捉えた「デイフェンド」のパイロットをラコーニ隊へと引き渡し、彼らに本国へと送り届けさせるためだ。

もうじき、合流予定のポイントまで到着する。廊下を歩いているアスランは、そのと

きふいに傍らから現れたクルーゼに声を掛けられた。

「アスラン、きみも一度、共に『プラント』へと戻りたまえ」

突拍子もなく掛けられた言葉に、アスランは驚く。それはつまり、隊を離れてラコーニ隊に同行しろ、という命令か。なんにせよ、前線に身を置く一端の兵士であるアスランに、前線から退けと云っているのだ。

あまりに端的で、突然の指示に、アスランも目を丸くした。

「隊長、それはっ」

「思わぬことばかりで、色々と混乱しているとは思うがね。だが、状況が状況だ——きみは一度頭を冷やすという意味でも、改めて御父上に会って来た方がいい。閣下には、わたしから既に話を通してある」

クルーゼの云う「話」とは、他ならぬステラのことだろう。

しかし、アスランの表情は曇ったままだ。

「心配はないよ、アスラン。きみは任務の一環としてラクス嬢と彼女を本国に送り届けることになっている。そうでなくても、世間的に見た今のきみは『地球軍から命を賭けて平和の歌姫を救い出した英雄』だ。それで前線を離れようと、やつかむものはいない

——」
誇らしげにクルーゼが続け、

「——歌姫を独り占めできる君の立場を僻んでいる彼女のファン以外には……な」
「隊長……!? そんな!」

いったい、どこまで本気で、どこまで冗談なのかと、アスランはたじろぐ。

同時に反論しようとしたが、クルーゼはその隙すら与えず、

「親子水入らずで——話したいこともあるだろう? 閣下も、それをお望みのはずだ」

口元に笑みを浮かべ、云った。

——ステラのことは、既に隊長を通して、父上に知れ渡っている……?」

もしもそれが事実なら、アスランには父の反応が気にかかる。ステラについて、どこまで詳しい情報が伝わっているのかは分からないが、パトリックとアスラン。父と息子の間柄として、妹のことで話す機会を設けるべきであるという指示には、納得できる一理がある。

しかし、

「同僚達が出向く戦場に、背を向けろと?」

そしてそれは、アスランの幼馴染が戦う戦場でもある。

そうして自分が戦線から抜けている間に “ストライク” が……

——キラが、やられてしまうかもしれないのに……?」

キラには、生き残って欲しい。

だからと云って、地球軍に勝って欲しいわけではない。

だからと云って、イザーク達に敗北して欲しいわけではない。

しかし、自分が今ここで戦場から抜け出せば「ストライク」は、どうなってしまうだろうか？

——容赦のない攻撃の、標的となるだけだ。

まだ、キラとは和解の余地がある。

キラのことは、まだ救い出せる。

——そう、信じていたいの……。

そんなアスランの逡巡を見破るかのように、クルーゼが付け足す。

「「ストライク」もまた狙えるのであれば、「ディフェンド」と、同様の処置を施したいとは考えてはいるよ」

そう云えば、アスランは既に、クルーゼに「ストライク」に乗るパイロットの正体を明かしている。

アスランがハツとして、その言葉に耳を傾ける。

クルーゼは遠くを見据えながら、

「善処しよう」

今のアスランには、クルーゼが言い残したその言葉を、信用することしか出来なかった。

「もうじき合流だ。移動の準備に取り掛かりたまえ」

やがて何事もなかったかのようにクルーゼはアスランから視線を外すと、ひとり歩を進め、アスランに背中を向けてしまった。

その場に取り残されたアスランが、小さく息を吐く。

「——アスラン」

クルーゼが立ち去った後、ふと、背後から声を掛けられた。

聞き覚えのある声だった。

振り返ると、そこには、ラクス・クラインの姿が映った。

「ラクス……!?!」

ラクスは胸に手を当て、アスランを上目で見遣っている。

——彼女の部屋には、軍艦を出歩かぬよう、施錠していたはずだが？

よく見れば、ラクスの傍らで、見覚えのある桃色の球体が、ぴよんぴよんと飛び跳ねている。

——ああ、そういうことか。

我ながら、なんてロボットを造ってしまったのだとアスランはほんの一瞬、自分を糾

弾した。

ラクスは桃色の花のような面持ちに、いつも柔らかな笑顔を振り撒く、国民的歌姫として見映える彼女。——らしからぬ、深い憂いの色を浮かべていた。

「アスラン、御存知でしたの？ ステラさんのこと」

「……いえ、わたしも、つい先日知ったことで……」

アスランが、ステラの生存を知ったのは最近のことで、*「ヘリオポリス」*に侵入したことで——「彼女」に出会った。

その言葉に、ラクスが、かける言葉に詰まった。——それだけ彼女にとっても、現状を把握することは難しいことなのだろう。

そんな彼女の混乱を、ひとつひとつ、丁寧に解きほぐしてゆくように、アスランが言葉、説明を続ける。

「あなたも、既に理解していらつしやると思いますが……ステラは *「モビルスーツ」* に乗って……*ザフト* 僕達と、交戦しています」

「やはり、そうなのでしょう……」

ラクス自身も、素人目にはどれが何のための機材・装置なのかも分からない空間の中で、ステラが、手慣れたように機体を操縦している様を目撃している。

「アークエンジェル」 で身柄を軟禁されていた時、地球軍の軍服を着用していたステ

ラに、ラクストとて、違和感を憶えなかつたわけではなかつた。しかし、ステラと共に居たキラ・ヤマトの話では、回収された“ヘリオポリス”の学生たちは、野戦任官で、是非もなくそれを着ていたのだと述べていた。だからステラも“ヘリオポリス”の悲劇に巻き込まれただけの、一般の存在だと認識していたのだ。

しかしその認識はどうやら、間違っていたようだ。

「……詳しい話は、時間がある時にでも。お迎えが上がったようです」

彼らの乗る“ヴェサリウス”はこの後、ラコーニ隊と合流した。

アスランはラクスト、そして拘束されたステラと共に“ヴェサリウス”を後に——
彼女達と共に“プラント”のひとつ“アプリリウス・ワン”への帰路に就いた。

放たれた砲火。飛び交う火線。

交錯するモビルスーツ。

宙域で、戦闘が繰り広げられている——。

“デュエル” “バスター” “ブリッツ”の三機が、“アークエンジェル”に攻撃を仕掛けたのだ。

出撃した“ゼロ”と“ストライク”が、懸命に応戦している。

月艦隊と“アークエンジェル”が合流するまでの猶予は、おおよそ一〇分前後と云つたところだ。そうなると、必然的にザフト軍が“アークエンジェル”攻め込むことができるのは、その一〇分間だけに限られる。

作戦の遂行時間に当てはめてみれば、あまりにもそれは、短すぎる時間に思われる。——しかし、それでも。

そう考えるのが通常なのであれば、それこそ、不意打ちの絶好の機会となる。

本艦隊と合流できると信じ込み、足つきは、勝手に安堵していたはずだ。それはつまり、警戒の糸が緩んでいるということ……

「安心と油断は、紙一重だ！」

ディアツカが、せせら笑う。

どれだけの苦戦を免れて来ても、どんな悪運を味方につけていても。

——最後の最後で油断すれば、その瞬間こそが、最大の狙い目になる！

——緊張の色が緩み切った瞬間は、どんな敵も、脆い！

“デュエル”を駆るイザークが“アークエンジェル”に急迫し、弾幕を一気に掻い潜ると、白亜の船体に取りついた。

ビームを連射し、甲板を損傷させてゆく。

危機を察知したミリアリアが、遠方で「ブリッツ」と交戦する。「ストライク」へと指しを飛ばした。

「キラ、お願い戻って！ 敵デュエルに取りつかれてる！」

遠方で「ゼロ」は「バスター」と交戦し、「ストライク」は「ブリッツ」と交戦していた。

先の戦闘までは、「アークエンジェル」と、この編成で、機動兵器の頭数は同じだった。

しかし、今の「デュエル」を抑え込める僚機は——もういない。

完全に、自由ノーマークだ。

「ステラはもう、いない……！」

ミリアリアからの通信を受けたキラは、まるで自分に言い聞かせながら、「アークエンジェル」を流し目で確認する。——船体に取りついた「デュエル」が、艦を襲っている。

強い焦りが、キラの頭に流れ込む。

「ブリッツ」から繰り出されるビームランサーを回避すると、バーニアを吹かし、「ストライク」は一気に転進した。そのまま一気に「アークエンジェル」へと帰投しようとする。

「ステラはもう、いないんだ……!」

——自分のせいで。

彼女はもう、ここにはいない。

ステラを救えなかった。

自分に力がなかったから、彼女を助け出してやれなかった。

——だから今“デュエル”を、自由にさせている。

だから“アークエンジェル”が、襲われている。

あの艦には、友達が……フレイが乗っているのに。

——僕が彼女達を、危険な目に遭わせている……?」

「ぜんぶ、僕のせいだ! 畜生おっ!」

呪うように叫び、“ストライク”は至急、“アークエンジェル”へと向かおうとした。

しかし当然のこと、背後からこれを追う“ブリッツ”が、その進路を阻んだ。

戦闘宙域にビームが散りばめられ、“ストライク”の動きを牽制する。

速度を落とした“ストライク”へ、すかさず“ブリッツ”がビームランサーを振りかざす。

一瞬で振り抜かれた斬撃を、機体を屈めて回避したキラは、抜き打ちにサーベルを引き抜くことで応戦したが、シールドによって受け止められてしまった。

——足りない……！

敵機を倒す、決定打になるものが……！

元々、互いは出自が同じ機体だ。『ストライク』の運動性スピードも出力パワーも、『ブリッツ』とおおむね同等のレベルにあり、機体の特性には差異こそあれ、性能自体に大きな違いがあるわけではない。このままの調子で戦闘を継続しても、『ストライク』と『ブリッツ』の戦闘は、平行線にしかなくなって行かない……！

「僕が守るしかないんだ……！ 僕が……」

キラの命は、『ヘリオポリス』の段階で、『ステラ』に守ってもらわなければ、とうに散っていた

——だから今度は、僕が彼女を守らなきゃいけなかった……！

——でも彼女は、もう僕の傍らには、『アークエンジェル』には、乗っていない……

！

後悔に苛まれ、キラがそう思った瞬間、

『——必ず、帰って来てね』

ひとつの言葉こえが、脳裏に響いた。

キラがハツとして、顔を上げる。

——そうだ。

僕は、帰らなきやいけない。

彼女が待つ—— “アークエンジェル” へ……！
艦を、守らねば。

——もう、誰にも邪魔はさせない……！！

その瞬間。

キラの頭の中で—— 何かが弾けた。

幼さを残した双眸が、輝きを失う。

虚ろな色が、瞳を覆う。

頭が途端に、冴え渡った。

身体の奥底から、沸き上がるような強い怒りが込み上げる。

まるで沸騰するかのようになり、全身をめぐる血が熱り立ち、滾っている。

「おまえ達から……！ 僕が彼女を護るんだ……！！」

もう二度と、同じ過ちは繰り返さない。

もう二度と、後悔はしたくない。

キラはスロットルに手を掛け、一気にスラスタを噴射した。

競り合っていたはずの二機の形勢が、一気に “ストライク” の側に突き崩されて行く。

「性能が同じっていうんなら、頼れるのはパイロットの手並みだろッ……!」

——自信を持って。

頭の中に、さらなる言葉こえが響く。

——あなたなら、大丈夫。

まるで、残響のように。

頭に再生される言葉こえが、自分に力を与えてくれるかのように。

自分に——自信を持ってと。

自己暗示する。

——僕には、できる……!」

次の瞬間、衝突し合う「ブリツツ」の頭部に、「ストライク」が強烈な頭突きヘッドバットを繰り出した。

不意を突いた衝撃に「ブリツツ」のメインカメラが強かに揺れ、機体全体が大きく怯んだ。次にニコルの知覚を大きく上回る速度で、「ストライク」は「ブリツツ」を蹴り上げる。

蹴飛ばされ、大きく弾かれた漆黒の機体を尻目に、「ストライク」は即座に、その場から離脱した。

——速い……!」

牽制出来ていたはずの「ストライク」から、途端に引き剥がされたニコルが、愕然とした。

——機体ストライクの運動性能に、特別な変化が現れたわけじゃない！

元々より持っていた性能を発揮している——それだけだ。

それなのに、敵機の動きは、いつものそれよりも数倍として速く見える……いや、現実には速いのだ。

まるで宙域を駆ける、流星のように見て取れる。

過敏なまでの動作のキレ。一片もの隙の無さが、「ストライク」の加速力を数倍以上に、増幅させているかのように。

突如としてコクピットに響いた、背後からの警報音に、イザークはぎよつと目をむいた。——「ストライク」が目の前まで迫って来ていたのだ。

「コイツ、いつの間にッ!？」

イザークは咄嗟に、ビームライフルを構えた。

——当たるものか！

「デュエル」が構えた銃口の角度から、その時のキラは咄嗟に、そこから放たれるビームの軌道を完全に読み切った。

構えられた銃口が、火を噴いた。

“ストライク”は首だけを曲げ、必要最低限の動作だけで、一重にこれを回避する。
——この至近距離で!?

イザークが、驚きに目を見開く。

射撃は見事に回避され、痺れを切らしたように叫ぶ。

「なんなんだ、おまえ等はあ?!」

咄嗟にビームサーベルを引き抜かんとする。

しかし鬼気迫る“ストライク”には、その動作さえ許されず。

大きく蹴り飛ばされた“デュエル”は、“アークエンジン”から大きく引き剥がされた。

『——ここまでか!』

ディアツカからの通信が響く。

日本部からの地球軍艦隊の熱源が、レーダーに反応している。
アウトレンジ超遠方に、その機影も視認できる。

あと数秒で、艦隊の射程距離に入るような距離にあるようだ。

——艦隊の、集中砲火を浴びる前に。

ディアツカは賢明だった。

「ちィッ!」

吹き飛ばされたイザークが、舌を打つ。

——— いったい、どういふことだ……。

——— また、作戦は失敗に終わるのか？

「デイフェンド」を失って、地球軍の連中は今、動揺しているはずだった。

合流前の安心し切った最大の隙を突かれることで、抵抗という抵抗もできないまま、この戦闘は、いつかのようにザフト軍の一方的な形勢で終わるはずだった。

クルーゼ隊の力を見せつけられ、敵の精神はすっかり、疎んでいるはずだった。

しかし、現実はず違った。敵は獅子奮迅の活躍を見せた。

「なぜだ……！　　」 「デイフェンド」を失ってなお、今なぜ、平然としていられる!？」

「デイフェンド」が抜けることで出来上がった空白感、足つきにとつて、戦力面でも、クルーゼ達への精神面でも、非常に大きな悪影響を及ぼせたはずだ。

その大穴を埋めるだけの代わりとなるものを——— この短時間で、見つけたというのか？

「よりどころ 拠点を——— ？」

心細さに、無意識に気圧されていてもおかしくはないような戦況下で、それでも「ストライク」は、これまでに見せたこともない運動性と反応速度を発揮した。

——— そのまでの気力が、どこにあったのか。

あるいは、何から生み出されたのか。

なにか、執念にも似たものを——「ストライク」は醸し出していた。

「デイフェンド」は、とうに彼らの手の、届かぬ場所まで消えているのに。

「ストライク」は、「デイフェンド」を守れなかったというのに。

まるで——「まだ守り抜くことが出来る」と嘆くように、そう訴えんとしている。

現実を頑なに受け入れようとしないう「拒絶」の意志が——「ストライク」を突き動かしているのような——。

「くそッ！」

そうしてやむなく、イザーク達は撤退していった。

「バスター」が飛び去り、「ゼロ」を駆っていたムウは、啞然として状況を確認していた。

すぐに「ストライク」へと通信を試み、キラの様子を確認する。

『大丈夫か、坊主！ えらい活躍してくれたな！』

賛辞を贈るムウではあったが、心の中では懷疑していた。

——あの嬢ちゃんを失った後で、すっかり精神をすり減らしていると思ってた！

それでも「ストライク」は、鬼気迫る雰囲気醸し出していた。

——ただ、俺の杞憂だったのか……？

ムウが深慮していると、キラの様子、モニターに映し出された。

その瞳は虚ろで、輝きを失っている。

『……おい、大丈夫か?』

再度として応答を求めると、キラは我に返ったように、顔を上げた。

双眸には、光が戻っている。

「あ、はい……なんとか、守り切れました……」

どうやって守り切ったのかまでは、キラ自身にすら、分からなかった。

戦闘の様子を、すっかり憶えていなかったのである。まるで、何かに憑りつかれたよう……。

そうしてキラ達は、*“アークエンジェル”*へと帰投して行った。

“アブリリウス・ワン”――

それは、*“プラント”*最高評議会の首座が開かれる場所の名称である。

首座が開かれる都市、というだけあって、現在そこには *“プラント”* 最高評議会議長であるシーゲル・クラインや、同じく *“プラント”* 国防委員長であるパトリック・ザラ

が、会議のために滞在していた。

警備の厳重な会議場は、夜通しで会議が長引くことも考慮され、議員達が宿泊できるような高級な待遇の個室さえ構えられている。また、彼らが体調を崩した時のために、医療室も常設されている。前線からパトリックへ事態の詳細報告のために出戻ったアスラン・ザラや、解放から第一にシーゲルとの面会を希望しているラクス・クライン。――そして、曰く付きの敵モビルスーツパイロットの少女を運び出すには、まるで妥当な施設となっていた。

エレカに乗り、アスランとラクスは共に、施設の入口に降り立つ。

そこでは、愛嬢の生還を心より心配していたシーゲル・クラインが待ち構えていた。彼は降り立ったラクスの姿を認めると同時に、一目散に駆け出すと、その華奢な身体を強く抱き締めた。

暫時の抱擁を交わした後、シーゲルは改めて、ラクスの隣に立つアスランに顔を向けた。

「恩に着るよ、アスラン。よく、娘を連れて帰って来てくれた」

「……いえ」

アスランは掛けられた言葉に、謙遜した、というよりかは、確実にどこか躊躇した面持ちで応答する。

——実際に助けたのは、僕ではありません。

その時のアスランが浮かべた表情には、きつと、そう書いてあったのだろう。

アスランの表情を伺ったシーゲルは、次に洩った表情を浮かべ、低い声調で先を続けた。

「……すまない。気の利かぬことを云ってしまった」

「い、いえ……」

「私も、例の話は耳にしたよ。色々と込み入った事情もあるようだが……まずはアスラン。君やパトリックを、私達としては祝福すべきかな」

シーゲルが、ラクスと目を合わせる。

その言葉を受け、アスランが軽く頭を下げ、ふたりに会釈した。

「——！」

その時、一台のトラックが、アスラン達の横を通り過ぎた。

彼らが目で追ったそのトラックは、施設へと入り、貨物用の搬入口へと進入して行く。

——大きな荷物を、丸ごと搬出しているようだ。

その車両を見届けながら、しばし沈黙し、やがてシーゲルが口を開く。

「……あれに？」

「……ええ」

シーゲルの問いかけに、アスランが小さく頷いた。

捕虜としてのステラは、抵抗されることを警戒して、いまだに医療用ベッドの上に拘束されていた。真つ当な精神状態を保てないと判断された彼女（ほりよ）は、アスランやラクスとは別の—— たった今通り過ぎた、その貨物トラックに乗せられて、ここまで運ばれたのだ。

過ぎ去ったトラックから視線を外し、シーゲルはアスランに視線を戻した。

「悪いが、パトリックは急用で席を外していてね。じきに戻つて来ると思うのだが」

そして、気を取り直したように云った。

「立ち話も何だ。上がっていつてくれ」

「……はい」

云われたアスランはそのまま、ラクスと共にシーゲルのため、いや、評議会議長のために用意された部屋まで案内された。

そこは、立派な書齋となっており、アスランもラクスも、初めて足を踏み入れる空間だった。決してシーゲルの私有地ではないにしろ、彼が評議会議長として就任している間は、ほとんど彼の私室に近い空間となつているようだ。大物の政治家や、公的に許可された事情でも持ち合わせてなければ、余人では立ち入ることさえ出来ない部屋であろう。

「——よもや彼女が生きていたなんて、僥倖だ。私には、まだ現実が信じられない……この目で、確かめて来てでもいいかな」

シーゲルはそう云つて、搬入されたステラの姿を確認しに、部屋から出て行くとうする。

アスランも即座に、同行しようとして立ち上がったのだが、「疲れているだろう」と云われ、その場で制されてしまった。

シーゲルが書斎から立ち去り、部屋に残されたアスランの許へ、ミントティーを入れたラクスがやって来た。清々しい香りが鼻先を抜け、アスランが匂いに誘われ、ハッと我に返る。

華奢な手に差し出されたカップを、恐縮しながら受け取った。

「あつ、申し訳ありません、ラクス」

「いいえ。お父様の仰る通り、アスランもきつと、お疲れのことでしょう」

体力的にも精神的にも、相当なものが溜まっているはずだ。——ラクスはそう思い、アスランの身を按じた。

アスランは鷹揚とミントティーに口をつけ、ゆつくりと口に含んでゆく。

しばし、ふたりの間に沈黙が流れ、独白のように、アスランが呟きを漏らした。

「現実が信じられない、か」

「えっ?」

「いえ。まったく、クライン議長の仰る通りだな、と思ひまして……」

逡巡するアスランにとつて——数年前まで、この世界は平穩だった。

それはたとえ、地球と「プランド」——ナチュラルとコーディネイターが、実は水面下では睨み合っているような「仮初の平和」と揶揄される状態であつたとしても。

少なくとも——アスラン達が見ていた世界は、平和だった。

「どうして、こんなことになつてしまつたのだろう、つて……」

兄妹で健全に育ち、父は忙しくとも、母と共に、家族で平穩に暮らしていた。

その過程でラクスと出会い、ザラ家はクライン家と、家族ぐるみで親睦を深めていた。

しかし——数年後の現在。

世界は激しい戦争の渦中にあり、無邪気だったステラは、文字通りに豹変していた。

『——赤いの。おまえもザフトか!』

そう云われ、刃のような視線で睨まれた記憶が、アスランの脳裏に蘇る。

鋭い眼光の奥底に——敵意を超えた、殺意さえ覗かれた。

あの時のステラは短刀を構え、確実に、アスランを殺しに襲い掛かつて来ていた。

家族なのに。

——なぜ。どうして?

こんなことになったのか。

アスランの頭では、その言葉ばかりが駆け巡った。

それは、血のバレンタインが起き、アスランが母と妹を殺されてから——数日後のことだった。アスランが正式にザフトに入隊し、士官学校の軍門を叩いたというのだ。その報告をすぐにラクスは父親から聞きつけ、彼と直接話したのだ。

世の中は、かつてないほどの衝撃と混乱に飲み込まれていた。『ユニウスセブン』で暮らしていた二十四万人もの人々が一瞬で消し飛んだ直後だ。核攻撃を免れた他の『プラント』内は慌ただしく、アスランとラクスの身边もまた、落ち着いたとは言い難い頃、ふたりはそれでも、会う約束を取り付けた。

『——ザフトに?』

クライン邸を訪れたアスランが、真摯な眼差しで、軍に志願したことを告げた。それを聞いたラク스가、啞然として

——考え直して欲しい。

そんな言葉が、ラクスの頭に浮かばないわけではなかった。しかし、たとえ思いについても、実際にそれを口にするにはあり得なかった。アスランとふたりで未来を添

い遂げる婚約者として、彼と彼の家族と親睦を深めて来たラクスの本心は、やはり、アスラン自身が軍に志願することを望みはしなかった。そこには、アスランの恋人としての、いじらしく健気な愛想も含まれていたことだろう。

だが、それでもラクスは、アスランがそうした選択と決断を行うことを、まるで予期していなかったわけではなかった。

『戦争がしたいわけじゃない……。母上やステラが殺され、それに復讐したいだなんて、浅はかな考えで云っているわけでもないのです。実際のところ何が正しくて、何が正しいことなのかさえ、今の僕には、まだ判っていないのかも知れない……。』

崩れそうな少女の前に、アスランは決意を鈍らせることもなく、真摯に続けていく。『でも、ぼくは“プラント”を守る力が欲しい。こんなことになるまで、ぼくは何もして来なかった。何もしようとしなかった』

だから、軍に志願したのだと——アスランに告げられた。
視線を落としたアスランは、自嘲気味に嗤う。

『愚かでした。母と妹を失って、初めて、僕は現実に気づかされたんです』

——行かないで……。

本心を云えば、ラクスはその時にその言葉を通じたかったのかもしれない。
しかし、その言葉は伝えられなかった。

『もう二度と、同じ過ちは繰り返したくありません。大切な人を失う、こんなにも悲しくて、悔しい思いは』

それが、アスラン・ザラの、軍人としての動機である。

母と妹を失い、世界の情勢と現実を思い知らされたアスランは「プラント」を守る盾に、そして、剣になろうとした。

大切な人を、もう二度と失わないようにと――。

そして、現在。

その動機の半分を――アスランは現在いまになって、見失った。

不謹慎なことに、ステラの墓標は、既に「プラント」の中に建ててあるのだ。核攻撃を受けた「ユニウスセブン」には、誰の遺体らしい遺体はほとんど残されていなかった。それだけ惨い殺され方をされたということだが、アスランはだからこそ、遺体も何も埋められていない場所に、母と妹の墓を建てるしかなかった。そしてそのふたりの墓標に、みずから、軍人としての決意を誓った日があった。

「ステラを見つけた時は、まるで自分の中の常識や、世界が、一斉に崩壊ひっくりかえったような衝撃おもしに駆られました」

視線を落としながら、ソファに腰かけたアスランは、深いため息をついた。

話を聞き止めながら、ラクスはひとつのテーブルを挟み、彼の向かいに腰を下ろす。

「アスラン……」

ラクスは、伏し目がちなアスランの表情を上目遣いで伺った。

——ひどく………寝れていらっしやいますのね………。

誰が見ても、アスランは失調したような顔色を浮かべていた。

前線を離れ、平穏な「プラント」に帰国したことで、これまで張り詰めていた緊張の糸が一気に緩んだのだろう。心労が祟ったかのように、酷く疲弊している。

ストレスのせいか、睡眠も十分ではないのだろう。その瞳からは、普段のひたむきな活気が消え失せていた。

——アスランの、悪い癖です……。

普段は気丈に振る舞い、何をしてでも平装を崩さないのに、オフになって糸が緩むと、途端に体調を崩すことがある。——それだけ人に弱みを見せようとしないう、強情な一面を持つている。

「私で良ければ、今にでも、御膝をお貸しいたしますのよ？」

「エッ」

唐突な物言いに、アスランがぎよつと目を見開く。

アスランもここに来て、弱気になっている。

しかしそれでも、彼はなけなしの理性を振り絞って、その言葉に返答した。

「いい、いえ！ 結構です！ 私は、大丈夫ですから……！」

「本当に？」

「――」

他人への甘え方を知らないアスランは、唇を固く結びながら、その問いかけに頷いた。しよんぼり、と肩を落とすラクスを見て、アスランは急に彼女の膝で眠りたくなつたが、それでも、彼女の膝の上で眠る自分の姿を想像すると情けなくて、言い返すことも出来なかつた。

「……でも、すいません。すこし、眠ります……」

この所、アスランにも連戦が続いていた。幼馴染と出逢い、妹と再会する衝撃に駆られ、肉体もそうだが、精神の方も堪えて来ているようだ。

アスランはそうして、束の間、横になり、意識を失つた。

起床を求められたのは――それから、どれだけの時間が経つてからだろう。

頭が覚醒した時、辺りはすっかり、夕暮れ時になっていた。夕日が室内に差し込み、景

色全体が朱色がかって見映える。

蒼穹から一転して、空は一面、赤色に染まっていた。

「はっ」

慌てて、アスランはその場に飛び跳ねるように起床した。

——まさか、議長の書齋で寝てしまうなんて！

軍人でありながら、気が抜けていたらしい。ラクスとふたりきりになり、すっかり緊張が緩んでしまったらしい。

場所も弁えず、横になったその瞬間に、意識が途絶えた記憶がある。

——相当な疲労が蓄積されていたことを自覚はしていたが、まさか、クライン議長の執務室で……！

とんだ失態だ。

見上げれば、ラクスの姿が映った。——自分を起こしてくれたのだろうか、ひよつとすると、寝ている間、ずっと付き添わせてしまったのかもしれない。

見下ろせば、自分の身体に毛布がかけられている。——そしてこれは間違いなく、彼女がかけてくれたものだろう。

「す、すいません……！」

「とても心地良さそうなお寝顔でしたわ。よく眠れました？」

「あ、あの。普段はここまで寝過ぎることなどないのですが……！」

軍人たる者として、警戒心は常に持っている自負があるんですが。と付け足す。

「まあ、では私は、アスランに警戒される対象ではないのですかね？」

「えっ、いえ！ ……あつ、はい。……きつと、その通りです……」

ここに来て、口説き文句のような発言をしている自分を呪った。

——ひどい台詞だ。

ラクスはふふ、と微笑み、アスランに云った。

「——パトリック様がお呼びです」

その言葉に、アスランの背が、凍りついた。

——戻られたのか……。

どうやら、自分が寝ている間に帰って来たらしい。

「アスランに、お話があるそうですわ」

「……はい」

「執務室まで」

ラクスが云い、アスランはその場に、ゆっくりと立ち上がった。

国防長官の執務室の場所を訊ねると、アスランはゆっくりと、その方向へと歩を進めた。

「父上……」

すべての事情は、おそらく、父に伝わっているのだろう。

父との再会を前に、アスランは、どうしようもない緊張感に駆られた。

『 `アプリリウス・ワン、』 B

モビルスーツとは、人型機動兵器のことを指した言葉である。

戦争が激化している今の情勢下でこそ、それには当然のように武装が施され、一般的には「兵器」として扱われている。しかし元来、それは宇宙空間での人間の活動域を広げるために造られたものである。何も、初めから人を殺すため、敵を撃墜するために存在していたわけではないことが、時を遡れば、はっきりと断言できるものだ。

これを言い換えてしまえば、モビルスーツの起源とは——宇宙空間での人間の船外活動を可能とする、ただの「大型の宇宙服」のようなものでしかなかった、ということである。

モビルスーツ開発の黎明期ともなったC. E. 65年。人型機動兵器の第一号にして、宇宙探査を行うための「試作用MS `ザフト、」が開発された時、その機体に込められた人々の願いは、間違つても人を殺めるといふ悪意の許に掲げられなかったものではなかったはずだ。コーディネイターがコーディネイターのために造り出した人型機動兵

器。それこそが本来、モビルスーツと呼ぶべきものなのだ、ザフト軍創設の第一人者として立ち上がった、パトリックは自負している。

「モビルスーツは、かねてより、ナチュラルには必要のないものだった。だからこそ必定、奴等には扱えぬし、奴等には縁のない代物でしかなかった」

許可されたアスランが執務室に入室すると、そこには、父パトリック・ザラの他に先約がいた。それは、父の秘書らしき人物だった。

パトリックはその人物と会話をしている。いや、見方によっては独白を語っているようにも聴いて取れた。

「ナチュラル共がモビルスーツを開発できたとしても、所詮は実用性に及ばぬ、猿真似にしかならぬと踏んでいたが——」

元々、モビルスーツは、コーデインイターによる宇宙探査のために造り出されたもの。地球に残ったナチュラルには、それは無用の存在だったと——パトリックは主張する。

「オーブ連合首長国め、中立を齎しながら、地球軍に軍事力を貸しおつて」
「所詮、あの国も地球に属する国家のひとつ、ということでしょう」

秘書が、ぴしやりと付け足す。

パトリックが鼻を鳴らした。

「ナチュラルは、どこまで行こうとナチュラルか」

「オーブ」は「ヘリオポリス」にて、極秘裏に地球軍と共謀し、地球軍の最新鋭機動兵器を開発していた。地球と「プラント」双方に良い顔を浮かべて来た「オーブ」の裏腹の部分が露呈した。この問題を糾弾され、「オーブ」連合首長国の代表は辞任に追いやられたそうだが。

「かつて、史上初の新人類デザイナーヒューマンとなったジョージ・グレンは、我々に云った。——『ヒトとヒト、ヒトと宇宙を繋ぐ調停者コーディネーターであれ』とな」

それは、この戦争が起こるよりも前、世界が二分化されるよりも以前の話になる。

コーディネーターの多くが地球を離れ——「プラント」という宇宙空間に生活の拠点を移したのは、より「宇宙」に近い場所にて「それ」を研究するためだ。

あらゆる学会における、博識なコーディネーターの台頭が進み、それにより時代は大きく移ろい、世界全体の文明は瞬く間に開化する。

躍進的に、人類の宇宙進出が実現した。

そうして、多くのコーディネーターが地球の外側に進出し、益々として、地球外世界への関心を高めて行つた。

木星探査という革新を果たしたジョージ・グレンの跡を継ぎ——ヒトと、未知なる闇に包まれた広大な宇宙とを繋ぐ架け橋になるため。または、人類の現在と未来を紡ぐ者

——「調停者コーディネーター」となるために。

「我々は調停者として進化することを選び、革新を勝ち取らんとした。だが」

だが——その結果、旧来のナチュラルだけが、地球に取り残される事態を招いてしまった。

時代の波に乗り遅れたナチュラルは、先進した研究を進め、地上に縛り付けられた自分達とのあらゆる「差」を隔絶的に開きつつある、天上のコーデイネイターを妬んだ。

その感情はやがて、宇宙に上がらず、地球に残った少数派のコーデイネイター達へ、矛盾のような形を象つて向けられるようになった。

「古い時代に縛られたナチュラルが、それを阻害した。地上に残ったコーデイネイターを弾圧し始めたのだ」

行き場を失い、居場所を求めて流浪した彼らは、やがて、地球圏における唯一の逃げ場……いや、あえて可笑しな表現を用いるのなら、理想郷ユートピアというべき、ひとつの投げ処を

発見する。

それこそが、ナチュラルとコーデイネイターの共存を訴えた中立国家——「オーブ」連合首長国である。

パトリックもまた「地球に残った同胞達を匿つてくれている」という意味に限っては、その国に肯定的な一目を置いている節があったのだが、今回、見事に裏切られた。

「コーデイネイターを匿う唯一の国家であるからこそ、そこは地球圏で唯一、コーデイネ

イターを合法的に利用できる国へと化ける」

姑息なやり口だ。

だからこそ「モルゲンレーテ」は、高性能なモビルスーツを開発できていた。

その兵器を開発できるだけの技術を、たかが中立国が持ち合わせていた。それもおそらく中立国だからこそ、コーディネイターの力を借りたのだ。

「ザラ委員長、所詮はオーブも、ナチュラルが主導する国家です」

「国への安住を交換条件に、コーディネイター達にモビルスーツの開発を促したか。脅しのような形をとれば、彼らに拒否権はない」

開発力や技術力、生産力。

あらゆる点でナチュラルでは大成し得ない分野の事業を、保護した恩賞にコーディネイターに担当させ、成し遂げた。その結果、ナチュラルだけで構成される地球軍よりも、優位な力を身に付けていた。

まるで——狸ではないか。

「地球軍も地球軍だな。コーディネイターの存在を否定していながら、奴等は結局、コーディネイターの力に頼っている。——なんという、愚かな矛盾か」

その意見に、アスランも妙に納得してしまった。

——「足つき」もそうだった。

結局、あの艦もコーデイネイターであるキラの力を借りている。それだけでなく、ステラを前線に送り出し、拳句にはラクスの身柄を盾に取った。

彼らが生き延びているのは、他ならぬコーデイネイターの活躍があつてこそだ。

「これは我々に対する重大な裏切りだ。『オーブ』は軍事力を隠し持っている……やはり、ナチュラルを信用すべきではなかつた」

怒りに握られたパトリックの拳が、デスクに叩き下ろされた。

「若者を葉漬けにして、戦場に送り出したことを考慮すれば……！　いかに奴等が愚かな種であるのかが、よく分かる」

「……ッ！」

アスランの肌を、悪寒がなぞった。

——そうか。

——父はもう、その事実を知っておられるのだ……。

父の怒りは、それから生まれたものであるう。

アスランが暗い面持ちで視線を落とした時、パトリックと話す秘書が、彼の存在に気付いた。おや、と漏らすと、パトリックもアスランの存在を認めた。

ややあつて、秘書が退室しようとして踵を返す。親子ふたりで会話する機会を、設けるためだ。

秘書の男が退室し、パトリックとの距離が開いたまま、アスランは唇を噛みしめ、
「……ザラ国防委員長」

意を決したように、呼びかけた。

父上、と呼ぶことは、普段からアスランには許されていない。国防委員長と一兵卒、という肩書きの許に、にべもない応答を交わすのが、二人の中で通例となっているのだから。

「遠いな。もつと寄れ」

かけられた言葉には、不思議と冷たさが感じられなかった。

それどころか——どこか、暖かい。

アスランは胸中で驚いていた。——いつもなら父は、自分を鑑定するねぶみような目で見ては、失望した顔ばかり浮かべるのに。そんな目で見られる度、どこか腹立たしくて、どこか申し訳ないような気分になるのに。

今回はどうしてか、それがなかった。

——ひとりの血を分けた息子として、純然と見てもらえている……気がする。

不思議な感覚だ。

パトリックは常に、アスランの教育を徹底していた。厳しく接し、家族であろうと甘えることを許さなかった。碩学であるべき「プラント」最高評議員の子息が、あまりに

蒙昧では立つ瀬がないという観点からだろうが、常に突き放すような視線を向けられたことしかなかったのだ。

「……クルーゼからの報告書は受け取ったぞ」

アスランを見据え、パトリックは、あくまで事務的な口調で続けた。

「世間から見た公の関係は、今は棄て置いても良い。おまえと私は、今はただの人間で、血の繋がった親子だ」

掛けられた言葉に、アスランが啞然とする。

——父の視線が、いつもより遥かに柔らかい。

忙殺されるような日々を送るパトリックが、今は、感情を滲ませた、良い意味で人間らしい顔をこちらへ向けている。

「では、父上と、お呼びしても?」

「今だけは、好きにしろ」

思い切つてアスランが訊ねると、意外にも、それはあつさり承諾されてしまった。
——父上と呼ぶ。呼べるのなんて、きつと久しぶりだ……。

遠い昔の呼び名を使った時、胸の内が、不思議とくすぐつたくなった。父上だなんて、久しいを通り越して、懐かしい。

「おまえと、家族としての話をする。まさか、こんな日が来ようとは思わなかったがな」

「……オレもです」

アスランは自然と、砕けた一人称を用いた。

パトリックと、家族として会談できる席など設けたことがない。いや、より正確に云えば、互いに設けようとしたことがなかった。

「家族についての話だ」

パトリックが、そこで顎でしやくり、執務室の窓側を示唆した。

夕日が照らした、朱色がかつた室内。懐疑しながらアスランがその方向を顔を向けると、ホイールのついた可動式の医療用ベッドが、この執務室に運び込まれているのが目に入った。

「——結論から云う」

その上には、衰弱して眠るひとりの少女の姿もある。

アスランの目が、ぎよつと驚きに見開かれた。

「わたしはステラが選つて来たことに対して、感嘆はしたが、感動はしていない」
短く、言い切った。

場に沈黙が流れる……いや、応答するべきアスランがしばし、身動きを取ることを忘れたのだ。呆然と立ち尽くし、その言葉の意味を把握するまで、多少の時間を要す。

硬直した彼に、パトリックは言葉通り、一切として感動した様子を浮かべない。

「よくぞあの娘を連れ帰った。そのことに關しては、おまえやクルーゼにわたしから他に送れる言葉がない。ただ家族として、父親として、感謝するだけだ」

「連れ、帰った……?」

強かに震えた声で、アスランは、その言葉を反芻する。

——おかしい。

アスランは即座に、自分達の話が噛み合っていないことを理解した。お互いの認識が、明らかに食い違っていることに気付いた。パトリックは、あくまでも彼の調子で話を進めている。アスランの動揺を、まるで気に留めていないと云わんばかりに。

——ステラは、殺されたのでは、なかったのか……?

パトリックの今の言い方では、初めからステラは生き延びていたかのような——
困惑するアスランが叫んだ。

「ど、どういうことですか? ステラが生きていたことを、父上は、初めからご存知だった?!」

愕然として、血の気の失せた表情を浮かべ、食いつくような姿勢で訴える。

——アスランの認識だけが、食い違っていた?

ステラの生存を、平然として受け入れているパトリックを前にして、アスランだけが、ステラが死んだと誤解していたかのような錯覚に囚われる。

——いや、そんなはずがないっ!

ステラの慰霊碑は、既に立ててあるのだ。レノアの隣に。

「ユニウスセブン」事態が無残な散り方をしたため、そこに彼女達の遺体が埋められているわけではない。だが、それにしても慰霊碑が立っている時点で、誰もが彼女が殺されたものとして認識しているということだ。アスラン個人の勘繰りで済むような問題ではないのだ。それなのに、この対応は何だ……!?

「——おまえには言わなかったが」

云いながら、パトリックはデスクの引き出しから、束になった一冊の書類を取り出した。

それを差し出し、アスランにぐいと突きつける。受け取ったアスランは、目を丸くした。

「これは……?」

「港から預かった、シャトルの出航記録だ。一年前のな」

目を通せば、着港先の「プラント」の名に見覚えがあった。

それは、アスランがザフトに志願するよりも前、留学のため親元を離れ、ひとり生活を送っていた「プラント」の名だった。

書類の日付と時刻を見れば——「C. E. 70年 2/14 8:00」と記載され

ている。

パトリックから指定された頁を開く。一面に、シャトルに乗り合わせていたであろう搭乗員ないし、乗客全員の名が一覧に列挙されていた。

「え……っ」

次の瞬間、アスランの目が、ぐわりと見開かれる。

記載されている名の中に——「Stella Zara」という、文字を見つけ
たからだ。

おそらくこの出航記録は、着港先の「プラント」からパトリックが取り寄せ、後生大
事に保管していたのだろう。

この書類が示している、照らし出している事実は、ひとつだ。

血のバレンタインの日。偶然にもステラは午前の便で——「ユニウスセブン」を出
航していたということ。

——しかしいつたい、なぜ……!?

出航時間から判断するに、出航はおそらく、核ミサイルの着弾を許すよりも前だ。

膝が震え、頭から、血の気がさあと一斉に引き返ってゆく。

慄然とする彼に、パトリックは滔々と続けた。

「核ミサイルが「ユニウスセブン」に着弾するよりも先に、ステラは港を発っている——

—その事実を記録付けた、揺るぎない証拠がそれだ。生存が絶望的だったレノアと違
い、実はあの娘には、強い生存の可能性が残されていた」

—父はこの事実を、前もって知っていた……？

震撼した様子で、アスランはパトリックを見据える。激しく動揺する視線は、出航記
録を記した書類と、パトリックと、交互に向けられた。

「世間はこの日、バレンタインだ。私が関与したことはないが、大方、あの娘には、着
港先に気になる男子おのこでも居たのかもしれない」

まさか、あの父の口から、女子の恋愛談を聞くことになるうとは。

不慣れを通り越して、いつそ不気味に思えたアスランであったが、しかし、今はそれ
どころではなかった。

過度の驚きの感情が、気味の悪さを大きく凌駕していた。

—つまりは、なんたる皮肉か。

ステラは、あの忌々しい血のバレンタインデーにおいて、バレンタインに救われた、と
いうことになるのだ。

「幸か不幸か、それで難を逃れたとも——」

「なぜ、こんなものを……」

「……なに？」

「なぜ、こんな大事なものを！ オレに黙って、隠していたんです——ッ!」

湧き上がる——いや、噴き出して来た感情を、アスランは爆発させた。強い怒り——激情だ。アスランが軍人になる決意、志願の動機づけになったものが、レノアとステラの死だった。もつとも、それはあくまで切欠であり——現実を思い知った自分への自戒こそが原因であるが——ふたりの死がなければ、自分はきつと、いまだに世間に蒙昧な愚か者であり続けていたかもしれない。

しかしパトリックは、ステラが生きているかもしれないという可能性を知っていないがら、それを手の内で握りつぶしていたのだ。

なぜ黙っていたのか——？ アスランは語気を強め、剣呑な表情を浮かべる。

「生きているかもしれない者の慰霊碑を立てる——なぜ、そのような不謹慎なことを父上は承認したのです!」

「ステラと同じシャトルに乗り合わせていた者全員が、未帰還者となっていたからだ」
「……ッ!」

パトリックから跳ね返って来るものは、正論ばかりだった。

事実として、出航記録に記載されていた搭乗員全員が生還せず、行方不明となつてい
るそうだ。

生存者は愚か、遺体のひとつさえ発見できていない。また、シャトルの残骸すら発見

できず——その機体と機体の搭乗員は、完全に消失、いや「焼失」したものと処理された。——核の光は、それほどまでに周辺宙域の広範囲を焼き尽くしたと。

「むろん、ステラも例に及び、死亡者扱いを受けた」

慰霊碑の下に、彼らは彼女の遺体を埋めたわけではない。まして、遺体を確認したわけでもない。今から慰霊碑を、事実誤認だったと撤去することも可能だ。

——しかしそうなると、レノアの慰霊碑だけを、そこに残すことになる……。

やるせない思いが、アスランの頭を支配した。

「事件後、ブルーコスモスのひとりが『金の髪の少女を抱えていた』という情報も得たが、確認は取れなかった。おまえに伝えなかったのは……」

确实。というわけではないが、それでもやはり、パトリックは娘の生存を信じられるだけの材料と証拠を、手元に揃えていたことになる。

——オレにだけは、黙って？

そう考えた時——怒り。疑い。悲しみ。様々な感情が入り混じり、アスランの頭を、複雑に駆け巡った。

「すべては、おまえに自覚を持たせるためだ」

その言葉に、アスランはハツとして顔を上げた。

パトリックと目が合えば、父の目は——彼がいつも自分に向ける——冷たいそれに

戻っていた。

「自覚って……父上ッ！」

ただ、動揺した。

己の無知と、無力を呪い——これを自覚したのは、母と妹の死が切欠となっていた。それまでの自分は、戦争なんて起こる筈がないと高を括る愚か者だった。

ふたりの死を、無情にも受け止めることで軍に志願する決意に至った。

——それは、父の思惑の通りだった？

つまりは、パトリックは齡十三のアスランを、ふたりの「死」を突きつけることで大きく成長させようと考えた。あえて真実を隠し、耐え難い「苦難」を与えることで、彼を鍛えようとしたのだ。

——しかしそれは、あまりに乱暴なやり方ではないのか？

なんと、狂言か。

いくら親の都合と云え、それが、倫理的に許されるだろうか？

アスランが糾弾したい点は——そこにある。

軍人、その中でも、優秀なエースの代名詞としての「赤服」に身を包む「アスラン・ザラ」は——初めからパトリック・ザラによって、そうあるように仕組まれていたというのか。

——茶番だ！

みずからの意志で軍人になった。しかしそれは父にとって、筋書き通りの展開でしか無かったというのか。

「わたしを恨むか、アスラン？　だが、それも筋違いだということに気付け！　そもそも我々の家族を、このような立場に追い込んだのは誰だ!？」

「……!」

——誰。

本当に、悪いのは？

——この事実を黙っていた、父。

自分を騙していたから。

——本当に……？

そもそもの原因は……？

「ナチュラルさ！　怨むなら、奴等を怨め！　核を用いてレノアを殺し！　薬を用いてステラをあのように陥れた野蛮な者共を憎み！　滅ぼすべきだ!」

地鳴りにも似た重厚な言葉に気圧され、アスランが、父への怒りの言葉を見失う。

「今のオマエには、それだけの力があるのだろうか……!」

——たしかに……。

——間違つては、いない……？

ザラの家庭を、彼らの未来を狂わせたのは——野蛮な地球軍、ナチュラルだ。核を放ち、レノアを惨殺したのも。劇薬を投与して、生き延びてくれた妹の人格を壊し、彼女の尊厳を踏みにじったのも——。

今の自分には、敵を斃すだけの力がある？ ——父のおかげで？

「ナチュラルを滅ぼす？ ——そんなッ」

軍人になったのは、敵を滅ぼさんと思つたから——では、決してない。

ただ。血のバレンタイン——

あの時のように、取り返しが付かなくなる前に、大切な人達ラスを護りたいと強く願つたからだ。

でも。今になって——

「守っているだけ、では……この戦争は、終結しない……のでしようか……？」

その決意自体が、浅はかなものであつたのではないかと、疑えてしまう。

——守る、なんて詭弁だ。

自分は結局 “ヘリオポリス” に攻め込み、それからも、多くの人を殺した。撃墜して来た。

「ナチュラル共が、この世界に我が物顔で存在する限りはな」

懲らしめなくてはならないと、パトリックが言い渡す。
なぜ、と問う。

野蠻だから、と返る。

だからだ、と言葉は続く。

奪う他に道はない、と。

ナチュラルを滅ぼす他に、戦争に幕を引く手段は、残されていないと。

それでもアスランは、必死で返す言葉を探した。

でも、見つからない。

その時——傍らで、微かに音がした。

それは小さな音であつたが、ふたりの耳には充分に届いた。揃つて、音の聴こえた方向を向く。

「ステラ……?」

ふたりは口論を辞め、すぐに、というより、自然と彼女の方へと足を運んでいた。

ステラが、意識を取り戻していた。鎮静剤も切れ始めているのか、以前よりも、意識がはっきりとしているように見受けられる。

意識のあるステラと対面するのは、パトリックも初めてのことだ。感嘆の声を漏らし、パトリックは彼女の頬へ、手を伸ばした。

「おお、ステラ……っ！」

「……？」

ベッドに横たわるステラは、特に抵抗するわけでもなく——と云つても、拘束具によつて抵抗はできないが——伸ばされたパトリックの手に、ただただ疑問符を浮かべていた。

しかし、次にアスランの姿を認め、口が勝手に動く。

「パ、パ……？」

「——！」

「父、さま……？」

「ああ、そうだ。ステラ。私はおまえの父だ」

——遠い記憶を、自力で呼び起こしている……？

そのことが、アスランには、すぐに理解できた。

ステラが呟いたのは、幼き日の父への呼び方と、物心がつき、レノアに教育された後の父への呼び方だった。

「安心しなさい、ステラ。もう、おまえを縛り付けるものは何もない」

「縛るもの……？ 安心……？ でもステラ、守らなきゃ……」

「ああ、そうだ。——我々に守らねばならぬものは、多くある……だがな」

父と娘のやり取りを、アスランは傍らで、ただ聴き入っていることしかできなかつた。「おまえはこれから、多くのものを守ってくれる。正しく云えば、おまえがいることで、私達は多くのものを守れるのだ。だから、おまえを襲う恐ろしいものを、滅ぼすこともできる」

そして、父の云っている言葉の意味が——まったく分からなかつた。

ステラが、そんなパトリックに訊ねる。

「怖いものから。パパが、みんなを守れる……？」

「ああ。——おまえのおかげでな」

「……よかつた」

弱々しく、ぼそりと呟いたステラは、しばらくして、再び眸を閉じてしまった。規則正しい寝息が聴こえる。

眠りに就いたその表情は、あどけなく、柔らかい。強制的に眠りに就かれされた時のように強張った、険しかったそれではなかつた。

——それだけ、安心していうことだろう……。

パトリックの眼差しもまた、ステラに対しては、暖かなそれだった。しかし、アスランの表情だけは、いまだに険しかった。パトリックがステラに言い聞かせた言葉の意味が、どうしても理解できなかつたのだ。

「……『ステラのおかげで、多くのものを守れる』と仰いました——あれは、どういう？」
 晴れない疑念を胸に、背を向けるパトリックにアスランが訊ねる。

パトリックはアスランに背を向け、安らかに眠るステラに視線を落としながら——それでも、眉ひとつ動かさず、次にこんなことを言い放った。

「おまえ達兄妹には——ひと役、買ってもらうぞ」

「は？」

アスランが啞然とし、訊ね返す。

パトリックが振り返る。

真摯なまなざしで、アスランを見据えた。

「——『プラント』のために……」

放たれた声の響きに——アスランは、底知れぬ不気味さを覚えた。

同時に、気付く。

父の眼が——政治家のそれに戻っていたことに……。

「なあ、さっきの戦闘——いつたい、何があつた？」

更衣室でパイロットスーツを脱いでいた時、ムウによって唐突に投げかけられた質問に、キラは目を丸くした。

「え？」

「いや、ちよつと興味が沸いて、だな」

「デイフェンド」が抜けた後の第一戦で——「ストライク」は、同等の性能を持つ敵機を蹴散らす活躍を見せた。

不安定な精神を除けば、パイロットは完成した操縦技量を持ち、孤立無援の「アークエンジンエル」が保有する最大戦力と呼ぶべきであつた。「デイフェンド」ですら攪乱された「デュエル」「バスター」「ブリッツ」を相手にして、キラが、これを上回つたのである。

キラ・ヤマトには、それだけの潜在能力ポテンシャルが秘められていたのだろう。

気楽なヤツは、きつとそう感嘆してひとり納得するのだろう。結果的に助かつたからいいじゃないかと。おおよそムウも、慎重とは掛け離れた楽天的な性格をしていると自覚するが、それにしても、違和感を憶える。

何か良くないものを、肌で感じ取っていたのだ。

もしも、キラが本当に「何か」に覚醒していたとしても——タイミングというも

のがある。

ステラ・ルーシエという、キラにとつての大きな支えを失つたこの直後に、それは起こつた。

通常なら、キラは無力感に打ちひしがれ、塞ぎ込んでいても可笑しくない状態にあるはずだ。数日前にはステラが拿捕され、暴れていた。それよりも前には、敵を撃墜しただけで、激しい呵責と後悔に飲まれていた。それほどまでに、心の脆い少年だった。

ある意味では——健全で平穩な精神しか、持ち合わせていなかった。

それがしかし、今はどういふわけか独力で立ち直っている。その原因がなんなのか、気にかかるのだ。

「あんなだけの力、坊主のどこにあつたのかなあ、とな」

禍福は糾あひなえる繩の如し、という言葉がある。

成功も失敗も、幸運も災禍も、繩のように表裏をなして、めまぐるしく変化する。幸福だと思つていたことが、突如として不幸に転じることもある。

キラの力が幸を招いたなら、それがいずれ、不幸に転じることもある。あるいは、キラの力の源泉ともなったものに、そもそも不幸が働いているのかもしれない？

幸運というものは——連続すると、返つて不気味なこともある。

“アークエンジェル”には最近、奇妙なまでの幸運が連続している。

——その恩恵で生き延びている当人がこう云うと悪いが、こうして無事でいられることが、むしろ不思議ふきみなくらいだ。

ここまでの窮地に立たされ、こうもしぶとく生き長られた戦艦を、ムウは見たことがない。

それも、間に合わせの搭乗員と、野戦任官の民間人で運営している戦艦だ。それが数々の幸運を味方につけ、とうとう月艦隊との合流まで無事に漕ぎ着けたというのだから、驚嘆ものだ。

しかし、そんなムウであるからこそその、戦士の勘が告げている。ここまでの幸運が続すると、次には大きな不幸があるいは、不幸の連続が待ち受けているような、そんな不吉な予感がしてならないと——。

不幸の種になりそうな要因は、ここで取り除いて置いたほうがいい。そのために、キラに訊ねていた。

「えつと……」

先に軍服に着替えたキラは、困惑した表情を浮かべた。特別、責めているわけではないにしろ、犬の拗ねたような顔で見返され、ムウは一瞬、不覚にもたじろいってしまった。

キラは一連の出来事について、端的に語った。

「——で？ 気付いたら戦闘は終わってて、我に帰ると、撤退してく敵機の背中だけが目

に映ったと？」

「無我夢中で戦ってたんでしょか……？ すいません、本当によく憶えてないんです」

かすかに、記憶の鱗片だけは頭に残っているそうだが。

ムウが、釈然としない顔をする。

「それにしても、すげえ活躍してたけどな」

「そうなんですか？ あ、ありがとうございます」

——この様子では、本当に記憶が飛んでいるみたいだな……。

不審に思いつつも、ムウは、それ以上の詮索をやめにした。

ムウが飛び去り、ひとり格納庫に残されたキラは、自分の掌を見つめた。

(本当に、ほとんど憶えてない)

ただ、守るために一心になっただけだ。

そこから記憶は飛んで、気が付けば時間が経ち、敵は撤退して行った。

憶えていることとすれば、守りたい、と強く願ったその思いだけだ。

キラはそうして、唯一、心当たりのある人物の許へと向かった。

「——すごいんだ」

居住区の一角。

虚無感に苛まれたように、フレイが自室の机に突っ伏していると、突如としてドアが

開き、室外から、キラが顔を覗かせた。間もなく唐突にそんなことを云われ、円な瞳をさらに丸くした。

「キラ? どうしたの?」

まさか、キラの方から近寄って来るとは。

フレイにとつても、これは予想外の出来事だ。彼女との約束通りに、無事に生還したキラは、どこか嬉々として、まるで新しい玩具を手に入れた幼児のようにはしゃいでいるように見えた。

いや、事実として喜んでいるのだ。

「僕にもよく分からないけど……でも、なんだかさっきの戦闘、フレイのことを考えたら、不思議と力が沸いて来たんだ!」

—— いったい、何の話をしているの? この子は?

フレイは眉を蹙めたい衝動を必死で抑え、笑顔を作った。

「そう……。ありがとう、キラ。頑張ってくれてるのね」

今まで、キラひとりの力で、状況を何とか切り抜けて来たことはなかった。

キラだけの力では——不可能だったからだ。

しかし今回は、キラひとりの活躍によって、この艦を守るに至った。

彼にとつて、それが嬉しくてたまらないのだろう。

「……あつ」

しかしそこで、キラは我に返った。

歓喜の色はふつと消え失せ、落ち込んだような、暗い色が浮かぶ。

「ご、ごめん……。今さら、きみにこんなこと云いに来るなんて……。どうかしてるよね」

キラが、気苦しさに視線を落とした。

——ジョージ・アルスターを助け出してやれなかったのに、力が湧いて来たなんて、今さらだ……！

それを、他でもない、フレイに自慢しに来るなんて。

——ただ、この喜びを誰かに分かちあつて欲しかっただけだ。

なのに、なんて不躰な、なんて不謹慎なことを抜かしてしまったのだろう。

激しい後悔が、キラの頭に流れ込む。

目の前の少女に対して、途端に申し訳なくなり、キラはフレイに背を向けた。踵を返し、彼女の部屋から出て行こうとする。

次の瞬間——キラの背中に、重たくて、暖かい感触が触れた。

「え……っ?」

啞然とするキラは、フレイが、みずからの背中に寄り掛かって……。いや、抱き着いていることを理解した。

——どうして。

学生時代、かねてより憧れていた少女が、どうして？

——僕、なんかに……。

だってフレイには、婚約者が……。

親友の顔が頭にちらつき、キラは衝動を必死で抑え込み、なけなしの理性を振り絞った。途端に振り返り、華奢なフレイの肩を掴み、その身を引き剥がす。

「だ、駄目だよ……こんなの」

「どうして？」

上目遣いで、率直に理由を訊ねられ、キラはたじろいだ。

キラ・ヤマトは——学生だった頃、フレイ・アルスターに強い憧れを抱いていた。

だから云って、話しかけて行けるほど積極的ではなかったし、そんな度胸も持ち合わせていなかった。それが小さな恋慕の念であることを自覚していたが、周囲には、からかわれたくないがために隠し、全然隠し切れていなくても、口では否定し続けていた。

そんな密かな想いが、叶うかもしれない瞬間が来た。——今だ。

しかしそれでも、サイという親友の顔が、キラの頭を過ぎる。罪悪感のようなものが、欲を湧かしたその胸に、ちくりと釘を指す。

それでもフレイは、残されたキラの理性に、追い討ちを掛けるようなことを云う。

「サイとは、まだ話だけだったよ。パパが勝手に決めただけ——」
そして、そのパパは——もういない。

紡がれた言葉を受け、キラの中の後悔は、ますます大きく膨れ上がる。

「——だ、だったら、なおさらだよ！ ぼくなんか、きみを——」

そのパパを守れなかった自分に——フレイを受け入れる資格など、ないのだ。

それでも、フレイは訊ねた。

「——あの娘がいるから？」

「えっ」

「ステラって娘。……キラは、その娘の方が大切？」

その質問の意図が、キラには理解できなかった。

「ステラって……？ あの子とは、そんなんじゃない」

啞然として、キラが答える。

ステラはあくまで——親友の妹だ。

昔から長く交流があつたが、そういう風に、そういう対象として、ステラのことを見たことはない。——気がする。

その時は、まだ互いに幼かつた。お互い、その手の感情が芽生えていなかっただけかもしれない。

それでも、きつと自分は、彼女に色目を遣ったことはないはずだ。

偶然にも「ヘリオポリス」で再会した時、しばらく見ぬ間に成長して、すっかり「女の子」になっていた彼女の姿に、動揺はした。異性として、突拍子もない言動にとぎまぎしたことも、確かにあった。鼻屑目でもなければ、客観的に見て、ステラはフレイにも並ぶ、粗の無い美少女であることは判っている。それでも、キラが彼女を大切にしようとしていたのは、あくまで、それが友情の延長上にある関係だからだ。

「なら、何も問題ないじゃない」

なまめかしく微笑み、フレイは再び、キラの胸に身を寄せた。

キラは今度は、抵抗できなかつた。

『わたしのことを考えて、力が湧いた』つて云つてくれた——なら、わたし達を阻むものなんて、もう何も無いでしょ……?」

「フレイ……! えっ、だって——」

「気付いたの。わたし、あなたにひどいこと云つたけど……それでも、あなたがわたし達のために戦ってくれていると思うと、パパみたいになるんじゃないかって、心配で。胸が痛むの……」

それだけ強く、想ってくれている、ということ……?」

キラは呆然として、腕のやり所を探した。このまま、少女を抱き留めて良いものか。

それとも、引き剥がすべきか。

腕が、頭に問いている。

その時、フレイが顔を上げた。潤んだ眸で、真っ直ぐにキラを見つめ、

「——好き」

掛けられたのは、唐突な——告白。

どくん。

キラの心臓が、高鳴った。

その時、キラの視界に——ステラの姿がちらついた。フレイの姿が、彼女と重なったのだ。

(ステラ……!?)

慌てたように、キラがかぶりを振ると、幻影は消え、フレイの姿が目前に映った。

——また、幻影?
まほろし

——いったい、どういう風の吹き回しなのだろう。

フレイとは、関わって間もないのに、脈略もない、雰囲気もない、唐突な告白だ。

それなのにキラの胸に、その告白は、深く突き刺さった。大きく胸を抉られたように、心臓の鼓動が暴れ出した。

(今、僕は……誰の言葉を……)

好き。

その声で、そう云われた時——キラの眼には、不思議とステラが映った。それを云ったのは、フレイなのに……！

——ステラの言葉で、心臓こころが高鳴った……？
なぜ。

——僕はいつたい、誰の言葉ことばを聴いている……!?
頭が混乱する。

どういう経緯で、フレイが僕のことを好きだと云う？ 以前まで、コーディネイターを嫌っていた彼女が、本当に？

「わたしの想いが、あなたを守るから——……」
ただひとつ、分かることは。

その声を聴くことが——あまりにも、心地よいということだ。
「フレ、イ……」

ひとりでは、何も出来なかった。

でも今は——この子がいる……。

キラはゆつくり、少女の背中に腕を回した。
歪いびつな関係の、始まりだった。

『“アブリリウス・ワン”』C

“アークエンジェル”はザフトとの臨戦を経て、ようやく月本部から来航した艦隊と合流することが出来た。

第八艦隊を指揮する司令官は、マリュー・ラミアスのかつての上司であり、地球軍内でも「智将」と名高き、デュエイン・ハルバートン准将である。

提督という階級にある名高き軍人と呼ばれるにしては、人間としての暖かみと良識を併せ持った人格者——それでいて、名高き軍人と呼ばれるほどに柔軟な思考と果敢な行動力を兼ね備えている。訊けば“G”計画を提唱し、“ストライク”らGATシリーズのMSを開発させたのは、彼であるという話だ。

非常に、先見性のある人物だ。

“アークエンジェル”は、歓迎される形で第八艦隊の輪に入った。

本艦隊との合流を果たした。

それは同時に、今まで“アークエンジェル”に乗り合わせていた“ヘリオポリス”の民間人が解放される日を迎えた、という事実を指し示していた。

もともと “ヘリオポリス” は、中立国 “オーブ” が所有するコロニーである。収容された民間人の故郷は地球^{オーブ}にあり、この後、降下するためのシャトルへ乗船することになるだろう。

トール・ケーニヒ。

サイ・アーガイル。

カズイ・バスカーク。

ミリアリア・ハウ。

これまで有志で “アークエンジェル” に協力していた彼らもまた、その責務から解放されることになる。

(こんな毎日も、やっと終わりを迎えたって考えてもいいんだよな……?)

カズイ・バスカークは、艦橋で通信士を務めて来たキラの同級生である。

彼は自室でひとり、思いを巡らせていた。

マリュー、ムウ、ナタルの三名が、ハルバートンとの対面のために “メネラオス” へ、一時的に移乗しており、他の艦員には艦内待機が命じられていた。詰まるところの自由時間を与えられた彼らであったが、特にすることも見つけられなかったカズイは自室でひとり、ぼーっとしている。

(あとはもう、解放されるのを待つだけかあ)

そう思うと、引き攀ったように口元が緩み出す。

——この「アークエンジェル」からは、何度も逃げ出したいと思つてた。

こんな過酷な環境から抜け出して、早く自由になりたいと願つていた。そんな長い辛抱がようやく報われ、あと数時間で、ようやく下船することが出来る。

だがどうしてか、今になって、それに素直に喜べていない自分がいる。

「……………」

胸の奥に、もやもやとした、何か引つかかるものがある。

——本当に、このままでいいのだろうか。

幼い頃から、カズイは内向的な性格だった。

友達と集まって外で遊ぶより、室内でひとり機械をいじるのが好きだった。

そんな内気な彼にとつて、「地球軍の最新鋭艦の通信士席に数日間と座つていた」とい

う事實は、今度の人生で、大きな自慢話になつてゆくのだろう。

(通信士席……)

あと数時間で、それも他人に明け渡さねばならない。

正規の通信士がやって来れば、自分はもう、あの座に就く必要がないと思うと、嬉しくもあるが、不思議と居場所を横取りされるような感覚も憶える。

——どうせ暇なんだ。もう一回くらい見納めて……いや、座り納めて来よう……。

そう思つて、艦橋へやつて来た。

特に仕事があるわけではなかったが、カズイは自分の持ち場である通信士の座席に座り込む。そして、今の自分は軍人なのだという充実感と、わずかな優越感に浸った。

「ん？ どした、そんなトコに座り込んで」

艦橋の下から、男の声が響いた。——チャンドラ伍長の声だった。

びくり、と肩を上げたカズイが、恐々と応える。

「いやあ……この座席とも、もうすぐお別れなのかなって思うと、すこしだけ愛着みたいなものが」

「ははん。いざ降りるとなると、名残惜しくなつたか？ そんなに気に入つたんなら、これから先も座つてられるように手配してやつてもいいんだぜ？」

「じよ、冗談じゃないですよ」

おののくほどの黒い冗談に、けたけたとチャンドラは晒った。

そこで、あ、と何かに閃いたように声を漏らす。

嫌な予感がした。

「そうだ。暇してるんだろ？ ちょっと手伝え」

「……はい？」

——来なけりや良かった。

後悔が遅い、カズイであった。

カズイが依頼された作業は、『一枚の書類を指定された者に配達する』という簡素なものであった。

その書類には——『除隊許可証』と書かれている。

たとえ非常事態であっても、民間人が戦闘行為を行えば、それは越権を超した犯罪行為となる。それを回避するために、学生達が日付を遡つて志願兵として入隊していたことを示す——亡羊補牢ぼうようほらうの偽造書である。

野戦任官で、臨時的にでも階位を付けられているカズイ達、学生達に対する下船処理に、必要なものだ。これをカズイの他にトール、ミリアリア、サイ——そして、キラの四人に配らなければならぬのだ。

——なに、ただ一枚の紙つきれを手渡すだけだぜ？

チャンドラは薄っぺらい人の悪い笑みを浮かべながらそう云つたが。艦内待機を告げられた今、皆がどこにいるのかは、おおよそ検討が付かない。

——要するに、面倒な作業だ……。

広い艦内は、カズイとて、まだ完全に構造を理解したわけではなく、道に迷いながらの作業は、思ったよりも難航した。

「あつ」

カズイが最初に見つけたのは、ツールだった。

格納庫を訪れると、ツールが戦闘機によるシミュレーションゲームに熱中していた。正確には、彼がプレイしているのはゲームではなく、戦闘機の本格的なシミュレーターである。まあ、そこに座り込んでいるツール自身ゲーム気分ではプレイしているため、今はゲームという表現の方がより正しいのかもしれない。ゲームと違ってコンテンツに料金が発生しない分、熱中度合は何倍にも跳ね上がっているようにも見える。

ツールが操縦する戦闘機が敵機に撃墜される度、彼は「ちつくしよ〜」と唸り、闘志を再燃させてはコンティニューボタンを押す。まるで子供のように、まったく終わりの見えない遊びをしている。——そんなに操縦技量を鍛え上げて何がしたいのか、カズイの思慮の及ぶところではなかったが。

その傍らには「まだやるの?」と云わんばかりの呆れ顔をした、ツールのガールフレンド、ミリアリアの姿もあった。

ゲームに熱中しているツールを余所に、カズイはふたり分の書類を、ミリアリアに手渡した。

すぐにキラと、サイの分の書類配りを再開する。

しばらく歩き回った後、食堂で、運よくサイの姿を見かけた。

「大変そうだな、手伝うよ」

元々、サイは人柄が良く、面倒見の良い性格をしている。難儀しているカズイを見て、放っておけなかったのだろう。

ふたりはそうして、最後に残された、キラを探し始めた。つかつかと廊下を歩いていくとき、

「キラ、どうするのかな」

唐突に、サイがそう言葉を漏らした。

え、と訊ね返すカズイに、彼は深刻な面持ちで続けた。

「いや、あいつ……いくら艦隊と合流できたからって、簡単に艦を降りたりするのか
なって、心配になってさ」

「簡単に艦を降りるって？ だって僕らは元々、民間人だろ？」

「でも、キラはコーディネイターだし、『ストライク』操れんのなんて、あいつくらいな
もんだろ？」

サイのそれは、的を射た言葉だった。今の状況下でキラの下船を許可すれば、地球軍
にとって、どれだけ大きな損失になるか、計り知れない。

それを考えた時。カズイが返す言葉を失う。

しかし、しばし顔を落とした後、こんなことを云い放った。

「正直、僕もこのまんまでいいのかな、っていう気は……してたんだよな」

思ってもみなかった言葉に、これを聞いたサイが、大きく目を見開く。

啞然として、カズイに視線を遣る。

カズイは、至って真剣に言葉を探していた。

「このまま、艦を降りちゃっていいのかなあ」

「どうした？ カズイ」

——まさか、カズイの口からそんな言葉を聞くなんて。

サイは一驚する。これまで、誰よりもカズイは下船を望んでるものだと思っていた……というより、そういった言動を覗かせていたことを、現実知っているのだ。

何か、大きな心境の変化があつたのだろうか。いや、仮にそうだとしても、何がきっかけで……。

「俺だって、戦争をしていたいわけじゃないよ。でも、その……ここに来るまでにさ？」

色々あつて——俺達はそれを、見て来ちやつたじゃないか」

「いろいろ？」

歯切れの悪いカズイに、サイはなおも訊ね返す。

「——あのステラって子が……連れ去られたり、さ」

「ああつ——」

「なんだか俺達って、キラとかステラにばっかり、辛い役を押し付けてる気がしてさ」
サイとて、そのことを失念していたわけではない。

ステラ——「ヘリオポリス」で出逢った、キラの妹分で、キラの親友の妹だそうだ。

サイ達もまた、まるで正当な後輩生のように接して来た彼女は——数日前にザフトに連れ去られてしまった。

——ステラだって女の子だ。

きつと怖い思いをしたに違いない、あるいは、今も怖い思いをしているのかもしれない。それなのに、その原因を作り出した自分だけが、のうのうと平和な世界に抜け出そうとしている。

——そんなんで、本当にいいのかよ？

心に残った良心が、まるで情けない自分を咎めるように、何度もそう呟くのだ。

「カズイ、おまえ……う？」

何か思うところがあるようで、サイはまるで、珍獣を見るかのような目でカズイを見据えている。

——失礼な目だな。

思ったカズイだが、声には出さなかった。不満げな顔は作ったが。

「なっ、なんだよ」

「……いや、ごめん」

サイは言及せず、前を向き直す。

カズイも深くは追求せず、前を向いた。

「……キラ、見つからないね」

艦内を歩き回って、一〇分近く経とうとしている。

誰に聞いても、キラに関しての目撃情報は掴めなかった。

つまりキラは、決して艦内を彷徨っているのではなく、ひとつの場所に留まっている可能性が高いということになる。

「居住区に戻ってみるか？」

「うん」

ふと、居住区に戻り、再度キラの自室を訪問しようとしたふたり。ようやくそこで、キラを発見した。

キラは、フレイの部屋から出て来ていた。道理でいくら各所を探し回っても、見つからなかったわけである。

ひとり合点するサイであったが、

(——どうして、フレイの部屋に……?)

ふと、眉を顰めた。

しかしすぐに気を取り直して、見かけた姿を呼び止める。

「キラー！」

「ツ!? サ、サイ……ツ！」

ドアが開いた直後の姿を認め、サイとカズイのふたりが、キラへと近寄って行く。

キラはどこか不自然に、視線を泳がせていた。サイと目を合わせようとしめない。

「フレイの部屋にいたのか。探したんだぞ？」

「え。そつ、そうなの……？」

「……? どうした、そわそわしてるように見えるけど」

「う、ううん。そんなことないよ」

否定するキラであったが、事実、キラは誰がどう見ても落ち着きがなかった。浮き足立っている、という表現が妥当なほどに、足元が定まっていな。目も泳ぎ、動作もいちいち忙しい。

——何か、後ろめたいことでもあるのだろうか？

言葉を掛けようとしたサイであったが、まるで、この場所に居づらくなつたかのよう
に、キラは慌てて口を開いた。

「ごつ、ごめん。ちよつとやらなきやいけないことあるから、
“ストライク”のここに行かなきゃ……つ」

フレイの部屋にいた割に、そう云つて足早に立ち去ろうとする。

サイは慌てて、背を向けるキラを呼び止めた。

「ちよつと待った。——除隊許可証、チャンドラ伍長からキラに渡せつて云われたんだ。

俺達全員に、一応持つてろつてさ」

「除隊、許可証？」

「ああ。一応俺達、元は民間人だからな」

その書類に目を通して、キラが足を止める。

身体を半分だけ反転させ、サイ達の方を振り向いた。

「でも、こんなもの……僕には」

キラは消沈した様子で答えるが、

「^{おとな}軍人の圧力なんかには負けるな。おまえがやりたい道を選べばいいんだ——俺は、応援

してるからな」

キラの裏切りを知らないサイが——純真な激励の言葉を掛ける。

——今、一番会いたくない親友からの、聴きたくない励ました。

途端、激しい罪悪感がキラを襲う。後ろめたさに耐えられなくなり、キラは足早に、書

類を握ってふたりの許を走り去る。

「なんだ？　なんか、様子がおかしいな」

「——香水の匂いがした」

サイは不審そうな顔を浮かべて、去っていくキラの背中が見なくなるまで、その場に硬直していた。

その傍ら、サイよりも不審そうな……いや、猜疑した様子のカズイが、ぼそりと呟く。サイの目が、呆気に開かれる。

「えっ……？」

「高そうなやつ。ブランド品じゃないかな……キラから香ったよ」

「お、おい、やめろよカズイ。何だって云うんだ……。それじゃ、まるで——」

愕然とするサイが、咄嗟に背後を振り向く。視線の先に、フレイの部屋が構えられている。無機質にもドアが閉ざされたフレイの自室——そこから、キラは出て来た。

——それだけ長い時間を、キラは、この室内で過ごしていたというのか？

女性の匂いが、身体に移るほどの時間を……？

そう思った時、サイの身体が震撼した。

「何なんだよ」

その言葉を吐き捨てたのは、サイではなく——カズイだった。

表情は、強い不満に満ちている。

「ステラのことなんて、キラは、どうでも良かったっていうのかよ……」

その言葉を受け、サイが懐疑する。

——どうして、今、ステラの名前が出て来るんだ？

訝しげな顔を作り、不意に、こんなことを訊ねていた。

「な、なあ。気を悪くしないで聞いて欲しいんだ。——ひよつとしてカズイ、ステラのこと……?」

「えッ!？」

カズイは、まるで凶星を突かれたかのように慌て出す。たちまちに耳が紅くなつていくのが分かった。

「い、いやっ、俺の勘違いならそれでいいんだ！
戯言たわごとだと思つて、聞き流してくれても

いい!？」

しかし、そう云つて弁明したサイには——そう推理してしまうほどの懸念材料があつた。

もともと、カズイは不器用な性格をしている。——妙なところで強情で、いまいち、素直になれないヤツだ。

羨ましいと思つている相手に、羨ましいと正直に云えない。自分の想いを、相手に素

直に伝えられない。他人に対して羨望を抱くこと自体が格好の悪いことだと思つていいのか、憧れる相手にほど冷たく、無関心に装つて接してしまふ。

要するに——「反動形成な性格」をしている。

学生だった頃、カズイは同級生である、キラの能力の高さを羨んでいた。

しかし、その感情を素直に昇華することが出来ず、ひとりで悩んで、嫉妬という形でしか表せなかった——そのことを振り返れば、それは射た表現である気がしている。

ステラが「ヘリオポリス」に現れた時も、そうだった。

ある日突然、どこかの芸能事務所にでも所属しているのではないかと思えるほどの美少女が——キラに付いてカレツジに転がり込んで来た。

正直者のツールは、思考と言動が見事に合致した裏表のない性格をしているため、あの意味でカズイと対照的だ。ステラを見た時は、可憐な容姿に黄色い嬌声を上げ、ミリアリアに半目で睨まれていた。

サイは婚約者がいる手前、邪念を抱いたことはなかったが、綺麗な子だな、と率直に思つたことがある。しかし、どちらかと云えば彼女が秘めた——キラに負けじとも劣らぬ——情報処理能力の高さを評価していた節が強い。

ミリアリアは同姓として、彼女を妹のように思つて親密に接していた。もともと揮発

な性格で、ステラと打ち解けるのが最も早かった。

しかし、カズイだけは一向にステラのことを認めようとはしなかった。彼女が「ディフェンド」に乗った際にも、彼女を敵視する発言をしていたとミリアリアから聴いている。

(対抗心が、あえて真逆の、関心から生まれたものだとするれば——)

誰よりも下船を望んでいたカズイが今になって踏ん切りを付けられず、迷っていることも考えられる。

——なんだか、キラとかステラにばっかり、辛い役を押し付けてた気がしてさ……。

カズイは、ひとり誘拐されたステラのことを偲んだ時——「自分だけは助かりたい」なんて考えている自分に、嫌気が差したのではないだろうか？

サイが思い切って訊ねると、カズイは、正直に答えた。

「——可愛い子だと、素直に思ったよ。でもさ、あんな子に、俺なんか話しかけるなんてさあ、やつぱり」

卑屈になってカズイが洩るのを、サイは咎めるようにして諫めた。

「そういうの、ほんとに悪い癖だよ、おまえの。——でも、やつぱりか」

「うん、だからかな」

「え？」

自分の気持ちをも、素直に認めたカズイであったが、その先を続けた。

「キラとステラつてき、なんだか——俺達じやあ理解できない世界にいるんじゃないか、つて思つてたんだ」

実際、両者の間には、ナチュラルとコーディネイターという人種の壁があるのだから、本来、暮らすべき世界は違つていて当然なのかもしれないが。

「だから余計に、あの二人の間には、オレなんかが入つてく余地なんてないつて思つたし」

だからこそ、身を引く決意をしていた。

ふたりには、ふたりにしか理解できない世界があるから、ナチュラルである自分が首を突つ込んでいく余地はない。ふたりが苦難の先にそういう関係に行き着くのなら——決して釈然とはしないが——異論はなかった。そんな諦めも、とつくのとうに着いていたというのに。

「でも……でも、さ」

カズイが、珍しく憤りを憶える。

——今のキラからは、確かに、フレイの香水の匂いがしたんだ……。

キラは、ステラを大切にしていたのでは——ないのか？

キラから、フレイの香りが鼻先を掠めた——この事実が、どうしても認められない

……認める以前に、許してはいけない気がする。

——そもそも、フレイはサイの婚約者だろう？

キラは、フレイと同じ部屋で過ごしていた。

カズイ達がキラを探している間——あるいは、それよりも、ずっと前から？

キラが今やっていることは、親友すら失うほどの裏切り——没義道もぎじょうの行いだ。

(ステラがいなくなつたからって、こんなの、あんまりじゃないか……！)

それは常に、陰ながらステラに想いを寄せていたカズイだからこそ、思い至り、云えた言葉なのかもしれない。

カズイは、去つて行くキラの背中を睨んだ。

(綺麗な女の子なら、誰でもいいのかよ……！ フレイは、ステラの代わりかよ……！? キラ、おまえ本当は、何を求めてるんだよ……ツ!?)

優秀ではあつたけど、そんなヤツじゃ無かつたはずなのに。

カズイの胸の問いかけは、きつと今のキラですら、答えられないものであろう。

“ヴェサリウス”艦内で、“足つき”の第八艦隊との合流を許してしまつたイザーク

達であったが、彼らはそれを気に病んだ様子もなく、ブリーフィングを行っていた。作戦を立案しているのは、クルーゼである。

そこでは、第八艦隊ごと——“足つき”を撃墜しようという作戦が提示されていた。

一見、それは無謀にして、無策な突撃案にも聴いて取れる。しかし“ヴェサリウス”が搭載するGATシリーズのMSの性能が、それを可能とする。——“足つき”を相手に、これまで目立った戦果を挙げられていないイザーク達であるが、第八艦隊が保有する機体のほとんどはMAであり、赤服である彼らの敵ではないのだ。

加えて、この作戦には“ガモフ”と“ツイーグラ”も参加するため、大幅な戦力の底上げが見込まれている。

「“イージス”は出撃できないが、君達と“ジン”だけでやれるかね？」
「はっ」

イザーク、ディアツカ、ニコルの声が重なる。

威勢の良い返事を聞き届けたクルーゼは、不敵に晒った。

「解析に修復、その他もろもろの作業がために、鹵獲した“デイフェンド”は本国に送られた。アスランも、今は共に本国だ。——事情は聴いているだろう？」

その問いかけに、一同は目を見合わせた。

三人には珍しく、三人全員が、困惑した様子だ。

そこで、イザークが口を開く。

「クルーゼ隊長、本当なのですか？ あの『デイフェンド』を操っていた少女が、その

……アスランの妹君、というのはい

「ディアツカとニコルも、そのことには珍しく、こぞって関心がある。

しっかりと耳を立て、クルーゼの返答を待つ。

「——事実だ」

当のクルーゼは、特に気に留めた様子もなく平然と答えた。

三人の表情に、動揺や、驚愕や、困惑の色が奔る。

「私が直々に、パトリック・ザラ委員長閣下にステラ嬢発見の連絡を入れた。——閣下も

また、相当な衝撃を受けていらしたよ」

その呼び名を聞き、イザーク達は、妙な違和感を憶えた。

今まで地球軍として、敵として立ちはだかつて来たその少女は、よもや『プラント』

に戻れば、敬称が使われて然るべき、上流の存在であったという事実に対してだ。

「そんなっ……」

——なんて、悲哀な巡り合わせなのだろう……。

戦場で、生き別れた兄と妹が、敵として再会を果たすなど。

そう考えた時、あまりの残酷な現実には、イザークの背筋を激しい悪寒がなぞった。

「あの少女たったひとりの存在を巡って——この先の『プラント』は、大きく動くことになるだろうな」

「ザラ国防委員長は……自身の息女むすめでさえ、政治に取り込まれるおつもりなのでしょうか？」

ニコルの声に、クルーゼが平然と晒う。

「彼女は犠牲者さ。崩壊した『ユニウスセブン』の生き残りにして、ブルーコスモスに攫われ、体を弄られ、連合の駒とされていた可哀想な少女。——その存在は、あまねく『プラント』へと発信される」

「つ……………」

仮にそれが事実なら、彼女はまるで見世物のように、世間からの注目を一心に浴びることとなるだろう。

しかし、少女の父親たるパトリック・ザラの立場に立てば、それは変わり果てた娘の素性を世間に曝すという——苦渋に塗れた行為ではないだろうか？

それをもろともせず、平気でやってのけるとクルーゼは云う。

政治家として、恐るべき人物だ。

「やがては閣下の娘、アスランの妹であることが公表されるだろう」

悲劇の家族の——シナリオの完成だ。

平穏な一家を襲った、突然の惨劇。

地球軍に母を殺され、娘を攫われた父子は——無情にして残酷なまでの苦難を乗り越え、現在は「プラント」を統率す執政者として、一方は「プラント」のために戦う戦士として、遺憾なく活躍していることが明かされる。

祖国を守るために為政する父と、祖国がために戦う息子。そして、悲しき運命に弄ばれ、奇しくも唯一、祖国への生還を果たした悲劇ハレントインの姫君。

やがては「ザラ」という名前そのものが「プラント」の未来に希望を齎もたらす、栄光の代名詞として崇められるようになる。

「引き裂かれた兄妹の感動の再会物語は、連合の腐敗と愚かさを見せつける、これ以上ない広告塔になる——」

それが、ラウ・ル・クルーゼが予想する——パトリックの企図する計画の全貌だ。

その計画を想像するのは、在る側面からすれば、容易なことである。

低軌道を航行する「メネラオス」の中で——

「公表された事実により、《ブランド》国民の同情を一心に受けるであろうパトリック・ザラが、国防委員長の座に留まらず——さらなる政界の高みへと申し上がって行くのは、おそらく、時間の問題かと」

ムウ・ラ・フラガもまた、その想像に及ぶのは早かった。

ザフト軍に鹵獲された《デイフェンド》のパイロットを務めて来た少女の正体が、パトリック・ザラの娘であるという事実をハルバートンに告げ、言葉を続けたのだ。当然、その少女の体内から、得体の知れない薬物反応が検出されたこと。その少女が長らく、地球軍に関係した者の傍にあつたこともまた明かしている。

「地上の連中は、まさか、そんな野蛮なことをやっているのか……!?!」

長らく宇宙で活動しているハルバートンには、地球で今、何が起きているかを把握することは難しい。ただ、地上の連中が何か「ろくでもないこと」に予算を注ぎ込んでいることだけは、薄々と勘づいていた。

利権がらみで、役にも立たないことばかり資金を投じている。それよりも先に、やるべきことがあるにも関わらずに。よもやそれが、人体を用いた人体実験、人体強化とは……。

「コーデインイターには地力じりきで叶わぬと悟り……人間ナチュラルそのものを改造する愚挙に出たか

！ 地上は！」

言葉の前半までは賢明なことである。しかし、なぜ他に方法が思い及ばなかったのだろうか？

対照的な話である。

デュエイン・ハルバートン准将は、コーディネイターには現状^{モビル}戦術^{アー}の維持^マでは叶わぬと悟ったからこそ、せめて彼らに対抗せんと“G”計画を提唱し、モビルスーツの開発を推し進めた。彼がこうして“アークエンジェル”の存在を重要視しているのも、この艦と“ストライク”の存在こそが、地球軍の将来の絶大な利となることを見越しているからだ。

しかし一方で、地上の地球軍は機体ではなく、人間そのものを改良している？

遺伝子操作を忌み嫌った結果、遺伝子以外ならば、人体のどこにどう手を加えても許されるという発想は、おろかな本末転倒ではないだろうか。

憤るハルバートンの脇で、副官のホフマン大佐が口を開く。

「そう云えば地上で……“ソキウス”と呼ばれる、ナチュラルのためだけに生み出された戦闘用のコーディネイターが造られている——」

「なにっ!？」

「という、あくまで噂であれば、耳にしたことがありますな」

ホフマン大佐は、ハルバートンに鋭い視線で睨まれた後、曖昧な言葉で弁明した。――

「自分は関与していませんと、云わんばかりの態度だった。訝しんだ様子で、ナタルが訊ねる。

「では、ステラ・ルーシエもまた、それに似た処置を受けていたと？」

「あくまで事実無根の噂だ、信憑性は薄いかな」

応答を聞き、ハルバートンは失望したような眼で副官を睨んだ。しかし、お門違いであることを理解すると、改めて咳払いを挟んだ。

「姑息な手を使うから墓穴を掘る。そのような不徳義が明るみに出れば、いずれ地球のナチュラルさえもが連合を猜うたがい始めるぞ。——内憂外患とは、このことだな」

事実、その真実を知ったハルバートンは、地上の連合軍に対して、激しい猜疑心を抱いてしまった。普通の人間であれば、そう考えるのが正常だ。

同族に恨まれてしまつては、それこそ地球連合軍は、おしまいではないか。

「その少女の存在は『プラント』の団結を高めるものとして、遺憾なく利用されるだろうな……」

「パトリック・ザラは……実の娘さえ、政治に売ると？」

「それすら厭わぬ——そういう男だ」

ハルバートンのその言葉が、マリユーの胸に深く突き刺さる。

——地球軍がやっていることは、本当に正しいのか……？

ハルバートンのように、この世界の行く末を本当に憂いでいる者は信用に値する。

しかし、*「アルテミス」*でもそうだったが、今の話を聞く限り、地球軍の多くは、ザフトを前にして、地球軍同士で争っているようにも見える。

まして、罪もない少女に薬物を投与するほどの行いをしているとなれば、地球軍の正義はいったい、どこにあるのだろうか？

「アブリリウス・ワン」 ——

辺りはすっかり夜になり、青い光が、窓から差し込んでいる。それに照らされ、安らかに眠るステラの寝顔、横顔は、ひどく美しく、可憐に見映えた。

アスランは、そんなステラの傍を離れようとはしなかった。

パトリックから次の指示が出るまで、彼は前線に復帰することは認められていない。当分は前線を離れ、ここで時間を潰すことになるのだろう。

ステラの臥す医療用ベッドが運び込まれた一角の部屋で、アスランは、茫と立ち尽くしている。

——おまえたち兄妹には、ひと役買ってもらおうぞ…… *「プラント」* のためにな……。

父の言葉が、脳裏に蘇る。

パトリックが行うことは、たったひとつ。

——愛娘ステラ・ザラの生存を「プラント」全土へ公表すること。

テロ被害対策として身分を隠し、平穩な「ユニウスセブン」で育った無邪気な少女。

幸か不幸か、彼女は血のバレンタインの日の早朝に「ユニウスセブン」を発ち、核攻撃の難を逃れた。

しかし、核爆発の余波でシャトルごと宙域で難破し、地球軍に拿捕される。

彼女には記憶の改竄が施され、その後の経緯は不透明だが、結果的に彼女は地球軍による洗脳教育を受け、連合軍の駒となるように支配されていた。

そしてその先の戦場で、実の兄、アスラン・ザラとの再会を果たした。

人々の関心を誘発する、大掛かりなシナリオだ。

都合よく脚色された部分は点在するかもしれないが、大した捏造があるわけでもない。

つまりは、真実なのだ。

この事実を公開すれば、全「プラント」国民の意志は、軍事的手段による戦争の早期終結法案を掲げるパトリックへと結集することになるだろう。

ナチュラルの非道を嘆きつつ訴えかけることで、国民の反連合思想を煽り、民意は総

意となつて軍備の強化へと乗り出す。——すべてはナチュラル殲滅を謳う、パトリックの思いのままに。

——しかし、それに利用される、ステラの立場は？

何十万という人口を誇る全「プラント」のコーディネイター達の注目に、彼女はまるで見世物のように曝されることになるのだ。その後も、彼女の存在を巡って情勢は動き、動乱する。

しばらくは、注目を浴び続ける存在となるだろう。

しかし、身も心も支配されて来た彼女にだからこそ、今後は平穏な生活を取り戻してやるべきではないのか？

家族としての思いを優先するのであれば、彼女の存在は秘匿した方が良い。政治家としての利を優先するのであれば、彼女の存在を公開した方が良い。

この取捨選択を迫られた時、父は迷わず、後者を選び取ったというのか。

「……どうして、戦おうと思つた？」

アスランが不意に、言葉を漏らす。

言葉をかけた先は——その時、ゆっくりと目を醒ましたステラである。

すつかり、意識を取り戻している。ただ、拘束されていることを気付いた彼女は、暴れた所で無駄であるということを理解したようで、今回は大人しくアスランへと顔を向

けた。それを見たアスランが一瞬、驚いた顔をする。

判断力は、あるようだ。

「おまえが、オレ達の襲った『ヘリオポリス』に居合わせたのは偶然だったのかもしれない……。でも、おまえがああの時『ディフェンド』に乗ろうと思ったのは、決して偶然なんかじゃないはずだ」

アスランは、真剣な面持ちで問いかける。

「どうして『プラント』に牙をむくような真似をした？ 地球軍に味方するように、教え込まれているからか？」

「……ちがう」

アスランの問いかけに、ステラは暴れることもなく、低い声調で小さく答える。

アスランの耳には、十分に届いている。

「ザフトがああ場所を攻めた、いろんなものが壊された、たくさんの人が殺された……」言葉を受け、それを行った本人として、アスランが押し黙る。

「キラにミリアリアに……ザフトは、わるくない人達のことまで巻き込んだ。だからザフトから、キラたちを守らなきゃいけないって思った」

「そこからか——ステラの守る対象は、地球軍になったのは。なら、おまえがザフトと戦っていたのは、君自身の意志だった、ということか」

誰かに、命令されていたわけじゃないんだな？

問いかけに、ステラが小さく頷く。

それを認めたアスランは、数秒間と押し黙り、

「……ふ」

次に、小さく嗤った。

——ならば良い。

口内で呟き、無意識に小さく嗤う。

端正な口元に奔った歪ほほえみが——ひどく不気味な表情を形作っていることを、アス

ランは自覚していなかった。

それを見たステラが、疑ったよう眉を顰める。——ステラの知っている兄アスラン・ザラ上は、こんな

な表情をする人だったろうか。

怪訝な貌を作るステラに、アスランは弁明するように続けた。

「いや、安心したよ。今のステラは、地球軍に操られているわけじゃないってことが分

かったんだ」

アスランは、安堵したように晒う。

今のステラは操られているわけではない。彼女には意志があり、理解力もあるように見える。

——ならば……更生させることは簡単だ。

ステラの中の常識を、真実と正論を以て、すべて書き換えてしまえば良い。気を取り直し、毅然として話す。

「ステラ、オレはステラの味方だ。だからよく聴いてくれ」

身を乗り出すようにして、眼前に臥す妹へ訴えかける。

“ヴェサリウス”の医務官も、云っていたことである。

今のステラの肉体や脳は、決して薬物による強い影響を受けて狂っているわけではなく、むしろ云えば、あらゆる身体データは正常値に戻りつつある。ヒトが持つ極自然な免疫力によって、肉体は薬物依存から立ち直り始め、一方の知能や精神は、年齢相応の領域まで遅ればせながらも発達しているとのこと。

喜ばしいことだ。

しかし、尚も性質が悪いのは、ステラが——充分な理解力と冷静な判断力を兼ね備えていながら——「地球軍に味方する自己に、何の疑念も抱いていない」ということだ。コーデインイターでありながら、地球軍に味方して、同胞達を殺している——そんな矛盾に、微塵もの自覚がない。

おおよそ、これまで根本的に受けてきた教育自体が間違っていて、誤った知識ばかりが、まるで常識であるかのように刷り込まれているだろう。

だから、矛盾した行動ばかり、平然と起こしてしまう。

「おまえは『プラント』に帰って来たんだ。だからもう、地球軍に味方する必要はない。

——『アークエンジェル』を守ろうなんて、もう二度と考えるんじゃない」

ステラは、アスランの言葉を疑った。

——守ろうなんて、考えるな？

アスランは、ステラの意志を否定しようとしているのか？

「でも、あの艦には、『友達が』

「その友達も、もう降りるさ。——ステラは知らなくて当然だが、今、宇宙では『アーク

エンジェル』が地球軍艦隊と合流している。これを機に『ヘリオポリス』崩壊の折、足

つきに收容された民間人は地球への降下を開始する……安全な場所に、解き放たれるん

だ」

「『アークエンジェル』が第八艦隊との合流を果たした」という報告は、アスランには

決して喜ばしいものではなかったが、しかし、ステラを納得す^だま^まには、かえって好都合な

ものとなった。

アスランの言葉を聞き、ステラは、大きく目を開く。

「じゃあ、みんなはもう、安全なの……？」

「ああ。ステラの友達は全員、あの艦から降りる。彼らに危険が降りかかることは、もう

ないんだ」

友達というのが、誰のことかはまったく分からないが、アスランは根拠もなく断言してゆく。話の調子を、ステラに合わせているのだ。

「……キラも？」

放たれた問いに、沈黙が流れる。アスランが、返答に詰まった。

地球軍が、キラという貴重な人材をみすみす手放すとは考え難いが、ステラをここで不安がらせるのは得策ではない。

その思いが頭を過った時、あえて答えた。

「……………ああ。あいつも……………降りるさ」

ステラの友達は、全員“アークエンジェル”から下船する。

——だからもう、あの艦を守る必要はない。

アスランのその誘導に——そこで、ステラは反論する。

「でも、だからって」

友達が下船した？

だからと云って、沈んでも構わない艦では、ないのだ。

ステラは、あの艦に乗る搭乗員の多くを友好的に思っている。

何度もステラを看病してくれた医務官や——いつも浮かない顔ばかりしていたラミ

アス艦長。小言に煩いバジルール中尉に、不思議と好感が持てたフラガ少佐——新たに出会った慕わしく思える者達が、あの艦に乗っている。

今までの繋がりをすべて放棄して、水に流すことなど、今のステラには出来ないのだから。

「やつらは地球軍だ。ナチュラルなんだぞ」

「関係ないって云った……！ ステラは、あの人たちが好きだから、だから守りたいだけなの」

「仮にそいつらが、おまえの……いや、オレ達の母上を奪った連中だったとしてもか？」

その瞬間、ステラの表情が、硬直した。それつきり絶句して、啞然とする。

アスランは、深くため息を吐いた。

——やはり、都合の悪い記憶は消されているのか。

その事実には強い怒りを覚え、淡々と、言い聞かせるように先を続ける。

「母上は、地球軍の核攻撃によって殺された。——ステラが今まで守って来た、地球軍によつてな」

「え……………っ?」

「記憶を弄られていたステラには、分からないだろう。こんな戦争を始めたのは……先に攻撃を仕掛けたのは、地球軍なんだ」

そもそも、地球軍が核攻撃さえ仕掛けなければ、武力で争い合う事態など起きなかったかもしれない。

二種族が歪み合う情勢は残っていたかもしれないが、戦争による犠牲者がここまで増えることはなかったはずだ。

核攻撃でコーディネイターが死に、その予防策としてのニュートロンジャマーでナチュラルが死に、互いに抱いた憎しみが沸騰し、戦争を引き起こした。

すべての引き金を引いたのは、ナチュラルの方なのだから。

「地球軍は……わるもの、なの………？」

震えた声で訊ねるステラ。

動揺するのも、無理もない。ステラが今まで信じて来た軍が、信念が、アスランの言葉によって一気に突き崩されたのだから。

問いを受けたアスランは、答える――

「――ああ」

あえて云うならば――「是」と。

その瞬間、ステラの表情が、絶望に彩られる。

頭が、ひどく混乱する。

――今まで信じて戦って来たものは、なんだったの………？

戦争——人と人が憎み合い、殺し合うこと。

互いが互いに「死」を与え合う現実のこと。

——死……死ぬは……だめ……。

ずっと、そう思つて来た。

守れば、死なない。

だから、多くの者を守りたい、つて……。

「キラのことを守りたいなら、守ればいい。あいつは悪くないし、俺はその想いを尊重する。ただ、それでも……“アークエンジェル”はダメなんだ」

「でも、パパは『ステラがいるからたくさんものを守れる』つて云つてた……！——
コーディネイター
 ステラ達のこと、アーステラが守りたいモノエンのことも、クパパは守れるつて」

「父上はナチュラルのことなど考えてはいないさ。——ステラがいるから“……プラント”
 は一丸になる——結果的に『おプラント”お全体』を守れると、父上はただ、そう云いた
 かっただけだ」

戦争を始めたのは、地球軍。

殺しを始めたのも、世界に多くの「死」を齎したのも地球軍。

だつたら。

——「こわいもの」は……地球軍じゃないか……。

次の瞬間、アスランが、震えるステラの拘束具を取っ払い始めた。

許可された行為ではなかったが、ステラが暴れ出さないことを悟り、また、暴れた所で自分なら取り押さえることもできると、理解していたのだろう。

茫然自失として、それでもゆつくりと起き上がるステラに、アスランは云った。

「地球軍を守る必要も、戦う必要もない。ステラはただ——戦争のない、優しく暖かな世界に帰ればただ、それでいいはずなんだ……！」

アスランが起き上がったステラの肩を持ち、言い聞かせるように、また、噛み締めたように云う。

ステラが、その言葉を反芻する。

『戦争のない、優しく暖かな世界』……？』

それは、シンが云っていた言葉だ。

シンが自分を地球軍に返す時——「そんな世界」へ自分を送り届けて欲しいと、彼は云った。

——約束してくれ！ 戦争とかモビルスーツとか……そんな、死ぬようなこととは絶対遠い……優しくあつたかい世界へ、彼女を帰すつて！

今なら、わかる。

あの時のシンが犯した行為は、ステラがラクスにしたことと一緒だ。

必要な薬物を失い、当時、ステラは瀕死の状態に陥っていた。ザフトはステラの体が求めるものを持ち合わせていなかった。だからシンは、ステラを地球軍へと帰すことを決意した。

——死なせたくないから帰すんだ！

——ステラじゃ、ラクスは守れないから……。

悔しくも、自分の力では、守れないことを理解したから。

それが出来る者に委ね、自分の代わりに守ってもらおうとした。

きつとそれは、ステラがラクスを帰した時と同じように、軍規に背いた行為だったの
だろう。きつと後で怒られたのだろう。

それだけシンは、必死になってステラを守ろうとしてくれていた。

けれど、その先はどうなった……？

シンはネオにそれを任せて、結局——ステラは「そんな世界」へ帰れただろうか？
帰れてはいない。

その後、再びステラは記憶を失い、シンの暖かみさえ忘却し、流れのままに「デスト
ロイ」に搭乗した。

でも、それを命じたのは誰だ。

地球軍。

——ネオ………？

ひよつとして。

あの人こそが、わるいもの——「こわいもの」？

「あつ………」

嘘だ。

認めたくも、信じたくもない。

何の罪もない、ベルリンの人を殺せと命じたのも。

懸命に生きた、シンの思いを平気で踏みにじったのも。

全部、地球軍だったなんて！

「そん、なっ」

膝が折れ、その場に崩れ落ちる。

悲痛な面持ちで、アスランは少女の身体を抱き止めた。

絶望に苛まれる妹の姿を見て、アスランは改めて思い知る。

考えに至ってしまう。

——父上の、仰る通りだ……。

今なら、彼の意見に賛同することが出来る。

そんな気がしている——。

いもうと
ステラをこんな目に遭わせた地球軍を、絶対に許すことは出来ないと――。
アスランの瞳から光が消え、
入れ替わるように、激しい憎悪が浮かんだ。

『消え失せた過去から』

『悲しみを教えて』――

――と。

ステラがまだネオの傍にいた頃、地球軍所属の強化人間エクステンデッドだった頃、そう望んだことがある。

――その頃のステラわたしは……“時”が来れば全てを忘れてしまう傀儡あやつり人形だった。定時的に訪れる揺籃ゆりかごでの睡眠の時。

記憶には、大切な人との思い出も。

手元には、たったひとつの貝殻さえ。

何ひとつ残らない、残すことは許されない頃の自分がいた。

――よろこびも。

――かなしみも。

不要と判断された記憶や感情を、まとめて抹消されていた自分。

ステラが強化された人間だったから、必要だった措置。

——でも、最適化ゆりかごも、いま思えば完全じゃなかった。

——何かの拍子に、ふっとむかしの記憶を思い出すことがあったから。

刻まれたように心に残る記憶、印象の強い記憶。

それだけは、ひよんなことから蘇ることがあった。

例えば——シンとの思い出。

彼のことを思い出すことが出来たのは、きつと、最適化を受ける前のステラが、それだけ彼との思い出を大切にしていたから。

——自力で蘇った数少ない記憶は、ステラが、それだけその記憶を大切にしていたという「あかし」——。

でも。

——シンとの思い出だけが、ステラわたしのすべてではなかった。

消え失せた過去から、誰かが呼んでいたの。

——それはシンじゃない。だれ……………？

浮かびかかった記憶の破片を、手繰るように求めた。

思い出せない、やさしい声。

懐かしくて、あたたかな声。

消されかかった記憶の海原で——何故、知らないはずの暖ぬくかな記憶もを捜して惑った。

「ステラ・ルーシエ」は強化人間として——ぬくもりを与えられたことなんて、なかったはずなのに。

『ステラはきつとやさしくて、ヒトを大切にする——そんな女の子になるのよ』

頭に浮かんだのは、黒色の髪に、翡翠色の瞳をした女性^{ひと}。

——うつくしくて、やさしそうで、きれいなひと……。

母様……おかあ、さん……？

ああ、と嘆いて、思い出す。

これは、はるか昔の記憶。

消されたはずで、消え切れなかった、大切に遺された思い出の記憶。

C・E・70，2／14 —— “ユニウスセブン” の宇宙港。

アスランの滞在先の “プラント” ヘシャトルが出航する——直前の記憶だ。

ステラは十二歳だった。

でも、これから “ユニウスセブン” を出発しようという時、ステラはひどく怯えていた。

ステラはそれまで、たったひとりで宇宙へ飛び出した経験がなかった。ひとりでシャトルに乗ったことはなかったし、もっと云えば、母様の許を離れたこともなかったからだ。

——いつだって傍にいてくれたお母様。

底無しに拵がった深淵うちゆうは——ただそれを眺めているだけで、暗闇の奥深くまで吸い込まれていくようで……こわかった。

ひとりでシャトルに乗り、その宇宙を飛び越えなくてはならない。——そんな、不安心だの初めてのひとり旅だった。

ひとりでちゃんと辿り着けるだろうか。

途中で事故になんて遭わないだろうか。

不安に強張るステラわたしを見て、母様は笑いながら仰った。

『だいじょうぶよ、ステラ。たとえどんな場所に行ったって、きっと父様が見つけ出してくれるから』

頭に疑問符を浮かべて、なぜ父様なのかと問う。

“コペルニクス”でも“ユニウスセブン”でも、父様は、ずっと家を空けていた。そればかりか、幼い頃から、一緒にいた記憶すらあまり残ってない。

——家族わたしたちのことが、嫌いなのだろうか。

父様は忙しいと云っていた。

“プラント”のために働いているから、仕方がない。

父様は“プラント”のことが大切で、家族のことなんて、考えていないのだと思って

た。

『それはちがうわ、ステラ』

母様は云った。

あなたがもし行方不明にでもなれば、父様は持てる権力を出し尽くしてでも、あなたを探し出すでしょうと。

なぜ、と問えば。

あなたたち兄妹は、あの人にとっても愛されているからよと返された。

『知らないでしょう？ あなた達の名前には——パトリックと私の、切な願いや祈りが込められているの』

わたしはその話に、興味を持った。

——ステラに付けられた……名前の意味？

そんなの、考えたこともなかったから。

旅立ちの不安を忘れたように、ステラは目を輝かせる。

母様はステラの不安がすこしでも紛れるように、余談としての、その先を続けてくれた。

『アスラン。——あなたの兄様に、暁の名を与えたのは、父様』

ナチュラルとコーデイネイターが歪み合う世界に、いつしか太陽が昇る瞬間を願っ

て。

闇よるを照らす大いなる光が昇る・暁の名を、父様はアスランに与えたと。

『ステラ。——あなたに、星の名を与えたのは、母様わたし』

ナチュラルとコーデイネイターが等しく、誰もが無数の星の様に輝ける時代を祈つて。

闇よるに燦然たる無数の光が輝く・星の名を、母様はステラに与えたと。

混沌とした今に太陽が昇り、その世界で、誰もが等しく輝ける時代が来ることを待ち望んで。

父様と母様、ふたりの想いが——息子と娘に、名前として与えられたのだと教えられた。

忘れないでと、母は云う。

何も不安がることはない。

ステラ達の存在そのものが、父様の願いであり、母様の祈りだから。ステラ達の名前そのものが、ふたりの深い愛情の顕れなのだからと。

——知らなかった。

父様のあのしかめっ面からは、想像も付かないほどの愛情を思い知った。

『夜明けの太陽を、星辰は支えるように耀くでしょう。——だからステラはきつと、アス

ランを支えて生きていくの。ステラは女の子で、私の自慢の娘だもの。きつと、それが出来るわ』

ステラは首を傾げた。

『できる、のかな……。母様は、父様を支えられてる？』

『ええ、そうよ。あなたの父様は、私が居ないとすつかりダメな人だから』

『ほんとう?!』

ええ、とレノアは答えながら、悪戯っぽく笑う。

あのしかめっ面が——だめなひと？

『あの人に訊いても駄目よ？ 訊いたところで《何を馬鹿な！ レノアは私が支えてるんだ！》なんて、あの仏頂面がふんぞり返って云うでしょうから』

頬に手を当て悩ましげに話すレノアは、パトリックの真似でもしているのか、科白の箇所まで声を太め、仏頂面を作る。

割と冗談で云っているみたいだ。

その物真似があまりにも可笑しくて、自然と笑いがこぼれた。

笑ったことが父の耳に入れば、確実に拳骨のひとつでも貰うけど。

でも、ステラが笑えば、母様も朗らかに笑われた。

むしろ、今は笑ってあげようという気分でもあった。

『男なんて、みんな同じで鈍いんだから……。女の助けがあるから、男はしつかりやっていけるのよ』

なのに、男にはその自覚がないの。

——要するに、男はみんなバカだということだろうか？

次の瞬間、母様はずいとステラに顔を寄せ、怒ったような顔を作った。

『だからステラ、これだけは覚えてなさいね……。！ パトリックを支えているのは、いつだって私なのよっ』

『わ……。わかった』

念に念を押す母様の背後に、激しく盛る黒い炎が映って見える。

優しい母様が、珍しく鬼に見えた。——よほど、父様に我慢していることでもあるんだらうか。

黒い炎は、すぐに消えた。

『——でも、あの人ったら筋金入りの頑固者だから、それだけ苦労も多いの。大変な人だけど、本気で支えてるつもりよ、私は』

その時、乗船を促すコールが鳴り響いた。

いけない、と声を漏らすと、母様は改めてステラの身なりを整え始めた。

『……。向こうでアスランに会ったら、ひとり暮らしで、きつと寂しがってるでしょうか

ら、いっぱい遊んであげるのよ』

あなたは星——。

夜明けの太陽が——ひとり寂しくないように。

そのように輝けと云われ、ハッと気付く。

母様は「ステラ」の名に——そんな想いも込めたのかと。

兄を、しっかりと支えてあげられる妹であるように——そう望んで？

小さく微笑んで、母は云った。

『もし……もし、アスランが間違った方向に進んだら。ステラ……あなたが、それを正してあげるのよ……？』

それが、あなたの役目でもあると。

母は笑って、ステラを見送った。

そして。

それから、数分後——核ミサイルが弾けた。

“ユニウスセブン”は——無惨に散った。

それによって——母様は、亡くなられた。

まさか、夢にも思わなかった。

その言葉が——母様から聴いた、最後の言葉になるなんて……。

それから、いろんなことがあった。

気が付いたら、友達と云えるような仲じゃなかったけど、アウルやステイキングに出逢って。

ネオが現れて、ステラ達の世話をするように……ううん、いま思えば、ネオはただ、ステラ達を監督していただけかもしれないけど。

——いろんなことって、誤魔化した言い方かもしれない。

でも、それをひとつひとつ丁寧に説き明かしていくのには、今はちよつと耐えられない。

思い出したくないくらい、ひどいことをして来たから。

どうして、これまで何も疑わなかったのかな。

——過酷な戦闘訓練で「おなかま」を何人も屠って来たことに。

——ベルリンで逃げ惑う、何の力も持つはずない人々を虐殺することに。

ああ。

疑うより前に、それが「わるいこと」だと考えたことさえ、あの頃のステラは無かったのかもしれない。

——だって、最適化があつたから。

記憶は、地球軍に都合がいいように操られていたから。

苦しいことは、何も覚えていなかったから。

悲しむことも、必要のないことだったから。

地球軍で戦つて来たステラは、間違つてる——。

アスランは、そう云つた。

——でも、なんだか、それも間違いじゃないような気がしてる……。

記憶を蓄積できるようになって。

最適化の影響を受けなくなって。

ステラの見ていた世界は、なんだか、大きく変わった。

迷うことができるようになった。

疑うこともできるようになった。

——今まで信じて疑わなかったものが、急に「へん」に見え始めた。

地球軍が、本当に「いいこと」をしているのか。

本当は「わるいこと」ばかりしているんじゃないか。

そんなことで、悩むようになった。

悩んだけど、答えはうまく出なかった。

なら、ステラはどうすればいい？

今まで信じて来たものを、いつそ憎んでみればいい？

ステラを操って来た、地球軍に敵対すればいい？

でも、それって、ザフトの味方をするってことになる。

地球軍が「わるいもの」だって云うなら。

じゃあザフトは、実は「いいこと」をしてたの？

——ほんとうに………？

信じられない。

分からない。

戦争が、こんなに難しいものだなんて知らなかった。

モビルスーツに——^ズデストロイ^ズに乗って、ぜんぶ壊せば、ぜんぶ撃ち落とせば。

そうすれば戦争は終わるなんて、そんな言葉を、昔は信じられていたのに。

殺す方にも、殺される方にも、同じ悲しみがあるって知った。

当たり前だ。だって、ナチュラルもコーディネイターも、人間なんだもの。

殺す側はいつだって、殺される側にも回るんだ。

いつ殺されるかも分からない不安に怯えながら、相手を殺して回ってるんだ。

ならステラは、誰のために——戦えばいい？

また、闇雲に何かを盲信^{しん}して——後悔はしたくない。

——これから、何を信じればいい？

そう思った時、ステラはふと考え付き、その場に起き上がった。

拘束具は、既に取り払われている。

「アプリリウス・ワン」に構えられた部屋で、ステラはそこから抜け出すこともなく、

ひとり考えていたのだ。

——今はもう、地球軍に戻ろうなんて気にはなれない。

それを見越したアスランの進言とパトリックの措置によって、今は解放されている。

(そつ、か)

与えられるのを待っているだけじゃ、今はもう、だめなんだ。

与えられたままに、地球軍に従っていた頃のステラは間違っていた。

アスランの言葉に応じたわけじゃなく、自身で思う。——あんな行い^{デストロイ}が「正しかった」

なんて、今は口が裂けても云える気がしない。

——何を信じていくのかは、すべて自分に賭かっている。

何が正しくて、何が間違っているのか、答えを見つけないといけない。

でもその答えは、きつと簡単には見つからない。

ならせめて、後悔がないように、自分が「最善」だと思ふことをしよう。

「ステラは——ステラが今、信じられる“もの”を信じる……………」

そう考えた時、

今のステラには疑えないもの。

今のステラにも迷えないもの。

そんな——ステラの中にある、たったひとつの「屹然と確立したもの」を見つけた。

それはどんな時も、どんな事態になっても——ひとつだけ、ステラの中で

揺らがなかったものだ。

確固として、わたしの中に聳え立っていたものを見つけた。

——「ステラ」という、名前だ。

ひとつだけ、揺らがなかったもの——真心が込められた、その名前。

ステラが「ザラ」として生きていた時代も、「ルーシエ」として操られていた時代も、この名前だけは、絶対に揺れ動くことはなかった。

ひとつだけ定まっていた——今も昔も変わらない——この名前だけは、ステラは今も信じられる気がする。

「ステラ」という名と、その名に込められた願いや祈りには——信じるだけの価値がある。

いや……ちがう。

この名を与えてくれたヒトの想いには——応えなきやいけない気がする。

ナチュラルとコーディネイターが等しく、誰もが輝ける時代が来るように。

たとえ小さな光でも、みんなが輝いていられる世界が来るように。

わたしは「ステラ」という名に込められた母の愛に、応えて生きて行くべきなんだ。

(だからステラは……この名前みちを信じる)

みずからの名に込められた意味。

亡き母に掲げた、祈りの形がこの名前だ。

だからステラは、この名に込められた想いを信じて生きる。

——そうだ。

——ステラわたしが戻って来たのだから……初めから「これ」が目的だ。

「アスランをまもる」

それこそが、ステラが今ここに……にいる理由。

そして、母が望んだこと。

——アスランを守る、支えるように生きていく。

——アスランが、もしも間違つた道に進んだ時、それを正してあげられるように生きていく。

それがこれから、ステラが行つていくべきこと。

——本来のアスランは、この戦争で死んだんだ。

それを正してあげるため、わたしは戻つて来た。

だとすれば、母の祈りが——今になって叶つたのではないか？

あるいは、母の想いが「デストロイ」の爆発から——ステラを守ってくれた……？

ステラはふと、そんなことを思った。

「云わなきや」

この意志を、父様に伝えなきや。

わたしは「母様と、母様の想いのために戦いたい」と。

——だって、お墓詣りにさえ、まだ行けてないんだ。

誰もが輝く平和な世界に貢献することが、今は亡き、母に報いる唯一の償いだと思つ

たから。

そうしてステラは、パトリックの執務室へ向かった。

『低軌道会戦』

『ステラ・ルーシエさえ居なければ、ジョージ・アルスターは助かっていた』

それは、ザフト軍に肉親を殺されたフレイ・アルスターが信じて疑わない主張である。彼女にとって、父ジョージ・アルスターは世界そのものだった。彼女の生きる世界は、いつだって父に与えられたものだけで成り立っていたからだ。

父が咎めぬから——気まま勝手に振る舞い、

父が勧めたから——中立のコロニーへ進学し、

父が招いたから——サイ・アーガイルとの婚約を了承した。

そして、

父が嫌ったから——彼女もまた、コーデイネイターを嫌った。

他ならぬ世界そのものである父が、コーデイネイターに殺された。

フレイは「『デイフェンド』がちゃんと役割を果たさなかったから、先遣隊は全滅した」と主張し、この意見に誰かしらの賛同を求めた。が、無論そんなものは言い掛かりだ。あの状況にあつては戦況を覆すのは難しく、それをたかだか最新のモビルスーツ

と、みずから前線に出て戦った少女ひとりの責任として問うのはナンセンスな話だ。

それでもフレイは、この主張を決して曲げようとはしなかった……曲げることを絶対に認めなかった。過去を検証することなどできないが、フレイは父を失ったショックから心を守るため、ステラという少女ひとりにすべての責任を擦り付けているようにも見える。

『“デイフエンド” さえ居なければ！ パパの船は無事だったかもしれないじゃない！』

割り切れない感情は、ここぞとばかりに泣き喚く。

まるで、駄々をこねた稚児のように。

『なのはどうして！ 私のパパより、あんな女が優先えらされたのよお！』

それはあまりに幼く、無知な者の甘ったるい言い掛かりなのかもしれない。論理ではない激情は——理不尽に対する、理不尽でしかないのかもしれない。

誰かを激情の捌け口に当てることでしか、今の彼女には、砕け散ってしまいそうな自分の心を繋ぎ止める方法が無かったのかもしれないが……。

——たしかに、パパを殺したのはザフト軍かもしれない……でも、そもその要因を作り出したのは“デイフデアエンド”でしょう……?!

あいつが足を引っ張ったから。

あいつがキラを惑乱させたから。

——だから、パパは殺されたんだ！

それはあまりにも、手頃な責任転嫁でしかなく。

訊けば、キラがコーディネイターであるように、ステラもまたコーディネイターであつたと云う。

——『コーディネイター敵』が、憎い。

父を殺したのは『敵』

父を守れなかったのも『敵』

ステラは、ザフト軍のコーディネイターに連れ去られたと聞いた。

行き場を失った理不尽な怒りや憎しみは——ステラの『同類』にして、フレイの目の前に在った——コーディネイターのキラ・ヤマトへと辿り着いた。

彼もまたステラと同類だ……同罪だ。

あんなやつのために、父を見殺しにしたから——！

「このままでは終わらせない」と、心に誓った。

コーディネイター達に、安穩なんて与えない。

私が受けた同じほどの苦しみを、悲しみを、心の底まで植え付けてやるのだ。

「私、軍に志願しようと思うの」

彼女は、その一步を踏み出した。キラを戦場へと引きずり出すために。

フレイの自室。

そこには、部屋の主であるフレイトと、キラの姿があつた。唇を重ね、互いの傷を舐め合うように抱き合った後、フレイは小さくキラに告げた。

「パパが殺された時はショックで、もうこんな所にはいたくないと思つた……。でも、もうこれで安心なのか、本当に私はこれから、平和に暮らして行けるのかつて思つた時——やつぱり、逃げ出すのは違うなと思つたの」

世界は依然として戦争をしている。中立国に逃げ込んだからと云つて、その事實は変わらない。

「パパは戦争を終わらせるために働いてたのよね……？　だつたら私も、戦争を終わらせるために働きたい。わたし気付いたの、このままじゃ、戦争は終わらないってこと」
そう……。

その瞬間。フレイの口が、切り裂けたように嗤つた。

——「あ「コーなデイたネイたターを滅ぼすまでは、戦争は終わらない」ということに気付いたから……。

フレイは口内でそう続け、キラを見据えた。

「本当の平和と安心が、戦うことでしか手に入らないのなら、私もパパの遺志を継いで戦

いたい。後でラミアス艦長達に伝えるつもり……私の力なんて、何の役にも立たないかもしれないけど」

キラは、愕然とした表情を浮かべる。

——そうやって、迷えばいい……。

——このまま下船するなんて、許さないんだから……。

キラはコーデイネイターで、地球軍で戦う存在であればいい。

コーデイネイターとコーデイネイターが戦い合い、滅び合えばいい。それこそが、父の敵を取るためにフレイが選んだ、復讐の方法なのだから。

フレイの部屋を退室すると、偶然にも、目の前に居合わせたサイとカズイに「除隊許可証」を手渡され、キラは書類を眺めながら、気が付けば格納庫に足を運んでいた。

「ストライク」の眼前までやって来、それと、まるで意思疎通でも交わすかのように見つめ合う。キラの心には、躊躇いが生まれていた。

——本当に、このまま艦を降りていいのか……？

フレイが、軍に志願するほどの決意を下した。

彼女の父が殺されたことには、キラ自身も「負うべき一端の責任がある」と考えている。そんな自分が、このまま民間船のシャトルに乗って「オーブ」へ？

この迷いは、同情から来る哀れみでしかないのだろうか？
そんなもののために決意を下して、いいものなのか。

茫然として「ストライク」と顔を見合わせるように滞空していた時、ふと、背後から声を掛けられた。

「——キラ・ヤマトくんかな？」

キラはハツとして、背後を振り向く。

人気がない格納庫は、声がよく響いた。掛けられた声元を辿れば、キラの優れた視力は、遠方に据える精悍な男性を捉えた。年齢を感じさせない引き締まった身体つきに、黄褐色の口髭を蓄えている。将校らしき人物だ。

男性はキラがこちらに気付いたのを認めると、地を蹴り、慣性でキラの許まで寄つて来た。口元には、敵意のない微笑みが浮かんでいる。

「思い詰めた顔をしているな。何か、悩んでいるのかね」

「えっ……」

キラが怪訝な貌をして、現れた男性を見据える。

「報告書を見ているんでね。——わたしはデュエイン・ハルバートン。この第八艦隊の司令官を務めている者だよ」

キラは慌てたようにぎよつと目を張った。

その名に、キラも聞き覚えがあったのだ。

「じゃあ、あなたが“ストライク”を造ったという——？」

「ああ。——直接開発したわけではないが……“G”計画を提唱したのは、私だよ」

慌てて身なりを整え始めるキラに、ハルバートンは笑みを見せた。

「いわば“ストライク”を含めた——五機の“G”の生みの親、という立場になるのかね。だがまあ、そのせいで“ヘリオポリス”を巻き込んでしまったことを考えれば……あそこに住んでいた君達には、憎まれても仕方がない男でもある」

「……？」

「そのことについては、本当に申し訳なく思っているよ」

「あつ。い、いえ……」

訊ねてもいないことを率先して解き明かし、謝罪の言葉を述べるあたり、提督と呼ばれる割には、非常に潔い人物であるように感じた。

だが、キラは眉をひそめ、言葉を反芻した。

「あの……五機、つて……？」

違和感を覚えたキラが、ハルバートンに訊ねる。

記憶の中では、開発された“G”は、六機のはずだ。

指摘され、ハルバートンは思わず、提督らしからぬ虚を突かれた表情を作った。

「あ。ああつ、そうか、完成したのは六機だったね。なにしろ『デイフエンド』は、急遽、一機だけ遅れて開発されることが決まっていたので……すっかり忘れてしまっていたよ」
私が確認した時は、まだ五機だけしかが開発されていなかったんだよ、と付け足す。
それを聞いて、キラは一気に警戒心が解けた。提督という肩書を聞けば、バジル中尉よりも数倍として堅苦しい人物なのではないかと思っていた。だが、うっかり物忘れをするという一面、人間味が垣間見えてしまつては、そんなイメージも一気に崩れ去ってしまった。

マードックやノイマンも云っていた。

『デイフエンド』に使われている技術は、本来『G』を造り出した大西洋連邦は、持ち合わせていないはずの技術だと。

その技術をどこかですに入れた大西洋連邦が、『オーブ』の『モルゲンレーテ』社と共同して、最も遅くに開発着手に掛かったのが、あの機体なのだと。

思い返しているキラに、ハルバートンは訊ねた。

「きみの悩みは——『ストライク』かな」

核心を突くよう唐突に訪ねられ、キラは動揺を隠せなかった。

だが、目の前の男性には虚言もすべて見透かされてしまうような気がして、自然と本音を吐露していた。

「その……このまま “アークエンジェル” を降りてもいいのか、正直、よく分からなくて」

キラがここで下船すれば、この艦はどうなって行くのだろうか？ 想像が及ばない。

アラスカへ降りた後は、この艦はまた戦場へ赴くのだ。戦艦なのだから当然のことだが、そうなれば自分以外に “ストライク” のパイロットが見つかる……見つかるのだろうか？

一方でキラ自身もまた、何もかも途中で放り出して、そうして平和に生きていけるのか。ハルバートンは、そんな逡巡を見透かすように云う。

「たしかに、きみの力は魅力的だよ——あくまで軍にとってはな。今のきみが何を悩むかはわかる……が、きみがいるからといって明日にはこの戦争が終わるわけでもない。戦争とは、そんな甘いものではないからな」

キラが思い悩む先に、ハルバートンは誘導するのではなく、ヒントを与えるようにして話す。

ハルバートンはどうやら、キラに “ストライク” を強要するほど底の浅い人物ではなく、非常に潔い人物のようだ。キラを見据える視線にも、一切の敵意や悪意は覗かれな

い。
「でも、出来るだけの力があるなら、できることをしろと……」

「きみに、その意志があるなら——な」

キラはその言葉に、ハツとする。

ハルバートンは真摯にキラを見据え、続ける。

「きみが何を望み、何を為さんとしてゆくのかは誰でもない——きみ自身が決めることだ」

フレイに対する負い目からでも、友達を守らねばならないという義務感からでもない。ハルバートンは、そんなものはいっしか重荷になるだけだと付け足す。

「意志は人を突き動かす——善き方悪しき方、どちらに向かおうがその力は強靱だ。意志なき者には、何もやり遂げることは出来んよ」

キラ・ヤマトが持つ「コーディネイターとしての力」は、非常に魅力的だ。

それは、キラのこれからの人生の中でも、決して逃れることのできない軛くびきにして、その重みが、肩から降りることはないだろう。

しかし、キラは改めて啓蒙されるような感覚を憶えた。

（『嫌だから』と云って、嫌なものから目を背けたって……そうして逃げた先では——また、嫌なものに出逢うんだ）

戦争なんてしたくない。

モビルスーツを操れてしまう自分の能力が嫌だ。

そう嘆いて逃げ出したところで、世界は依然として戦争をしているのだ。
なら、見方を変えてみればいい。

こんな戦争が嫌だと思おうなら。戦争をやめさせるだけの一端の力が、自分にあるのなら……！

（コーデインイターの僕にしか、今、出来ないことがあるなら……）

キラが決意を新たに、息を吐く。

あかぬけたその表情を見て、ハルバートンは勝気に笑う。

「——答えは、出たかね？」

「——はいっ」

それは、義務感や責任感に追い詰められた者の声ではなく、確信と意志に満ちた、若々しい少年の声だった。

自分には、力がある。モビルスーツを動かすだけの力が。

——守ってみせる……：僕が“アークエンジェル”を……！

それが、キラの決意であった。

それから数十分。民間人を「メネラオス」へと移送した「アークエンジェル」は、後に「低軌道会戦」と呼称される戦闘に突入していた。

「アークエンジェル」のアラスカへの降下を阻止せんとするクルーゼ隊を主とするザフト軍が、戦闘を仕掛けて来たのだ。ハルバートン率いる第八艦隊は、これを迎え撃つ。

「『G』の開発を軌道に乗せなければ、地球軍われわれに未来はない！ なんとしても『アークエンジェル』をアラスカまで守り抜く！ —— 正念場だぞ、地球軍の底力を見せてやれ！」

第八艦隊はみずからが盾と構え、艦隊の中心に「アークエンジェル」をしまい込む。地球へ降下させることを先決に、戦闘への参加は認めていない。

——かの『大天使』は、ハルバートンの情熱の結晶だ。

地球軍の未来を担う、いつかは勝利の代名詞となるように——そのためになんとか守り抜くと、力説には、言葉以上の意志の強さが込められていた。

密集陣形を展開し、徹底抗戦の戦闘態勢を取る。

対するザフト軍、この作戦の指揮官を務めるクルーゼは、

「こちらの庭にいる内に沈めた方が賢明だな。第八艦隊が誇る智将デュエイン・ハルバートン共々、足つきにはここいらで御退場を願おうか」

冷徹にして冷酷な指示が飛び、
“ガモフ” “ツイーグラー” “ヴェサリウス” の三隻が、第八艦隊への攻撃を仕掛けた。

出撃した “ジン” は六機。ならびに “ヴェサリウス” から “デュエル” “バスター” “ブリッツ” が出撃している。

形勢は、まるで一方的なものとなっていた。強奪されたGATシリーズの圧倒的な火力、鮮やかに見えるまでの機動性を前にしては、第八艦隊はあまりに役不足だった。

防衛のため出撃した地球軍のモビルアーマーはたちどころに撃墜され、数多き僚機を失って素晒しにされた戦艦が続けざまに撃沈されてゆく。

モビルアーマー “メビウス” の火線を、掻い潜るように急速に接近した “デュエル” は、新型の装甲を装備していた。元々、開発の経緯でベース機として生まれたため、突出した性能を持たないそれはGATシリーズの中では良い意味で汎用性が高く、悪い意味で貧弱——そしてこの数日間の戦闘を経て、後者の難点が露呈し始めていた。これを補うために、ザフト軍が独自の追加武装「アサルト・シユラウド」を搭載させたのだ。

イザークの駆る “デュエル” が、一隻の戦艦に向けてグレネードを放つ。被弾と同時に着弾口から火炎が巻き起こり、続けざま、放たれたビームライフルに穿たれた戦艦は、半ばから折れるように割れた後、大きく爆散した。 “バスター” は二丁の銃をドッキングさせ、連結された砲口から強力な散弾砲を放つ。砲火は回避行動が遅れた数機のモビ

ルアーマーと戦艦を巻き込み、圧倒的な火力で深淵に炎の華を咲かす。『ブリッツ』は抜き打ちにミラーージュコロイドを展開し、目標をロストした戦艦に動揺の色が浮かぶのを捉えた直後、零距离まで接近した後、艦首から先を攻守複合盾に備えられたビームサーベルで斬り裂いた。

「『セレコウス』被弾、戦闘不能！」

「『カサンドロス』沈黙……！」

「『アンティゴノス』、『プトレマイオス』撃沈……!?!」

オペレーターの上ずった声は、地球軍の圧倒的な劣勢を指し示していた。

戦況は呆気なく、それでいて滞りなく、ザフト軍の優勢に傾きつつあると思われた。

しかし、戦況を俯瞰するクルーゼの貌は一向に晴れることはなかった。

「『イージス』がいない分、作戦に遅れが出ているか？」

クルーゼの問いに、アデスが答える。

「そのようで。しかし『足つき』から『ストライク』が出て来ない限りは、こちらも楽ですな。このまま艦隊を全滅させるのは、時間の問題かと思われます」

「あまり長引かせてもいられないのが今回の作戦だよ。奴等の狙いはあくまで『足つき』を降ろすこと。功を焦って追撃し、我々まで地球の重力に曳かれてしまつては、ひとたまりもないからな」

宇宙艦である「ヴェサリウス」は、大気圏へと突入する際の高温に耐えるだけのスペースを持たず、それ以前に、大気圏内での運用に対応していない。

低軌道で起きているこの戦闘は——ひとたび判断を誤れば、地球の重力に足を掴み捕られ、地上へと引きずり込まれかねない。そのような事態は、宇宙艦にとっては大惨事に等しい。

大気圏との摩擦に耐えられる装甲を持った機体ならばまだしも、宇宙艦に乗りながら限界点以上に地球に接近するということは、己の死刑執行書にサインを施すようなものだ。

「とはいえ、ここで手をこまねいていても奴等の思うつぼか」

クルーゼは、どこか攻めあぐねていた。中央艦隊へと部隊を突入させて良いものか、迷っているのだ。

「アークエンジェル」からは、いまだに「ストライク」も「ゼロ」も出撃せず、中央付近の艦隊に囲まれたまま、依然として安全な航行を続けている。周囲でどれだけ戦艦が駆逐されて行っても、その動きは変わらない。ハルバートンの指示によって、大切にしまい込まれているのだ。

——アラスカへ降ろしたいがゆえの、必死の策というわけか。

これに誘われるように応じて、中央艦隊まで無鉄砲に突っ込んでいくことも出来る。

不可能ではない。

だが、その途中で『制限時間』が訪れ、MS部隊が重力に曳かれ始めようものなら、指揮官としては立つ瀬がない。カタログスペック上は“デュエル”“バスター”“ブリッツ”の三機も、単独での大気圏突入を可能としているが、所詮はそれも、あらゆるデータ値から割り出した机上の空論に過ぎず、機体自身に成功実績があるわけでもなければ、これを操るパイロット達にさえ大気圏突入の経験はない。機体は無事でも、コクピットの内側は想像を絶するほどの高熱に晒され、地球に落ちてからもまた、着陸地点が悪ければ叩きつけられる危険性もある。

かくも不幸が見越される誤審を犯すのは、指揮官としては賢明ではない。重力を前にしては、宇宙での戦闘を準備範囲とする彼らはいささか分が悪いのだ。

こんな場所で焼け死ぬのは、まっぴら御免だ。

——攻めあぐねている。重力を前にして……？

あわよくばクルーゼは、重力を気にせず突貫する勇者——自殺志望者——でも現れてくれることを期待した。

——そう云えば……“ガモフ”の艦長は、かなり生真面目な性格をしていたか……。

ふつと考えが通り、クルーゼは黙り込む。逡巡しながら友軍艦のローラシモア級へと視線を遣わし——口元に冷ややかな笑みを浮かべた。

すぐに、アデスへと指示を飛ばす。

「『デュエル』 『バスター』 『ブリッツ』 に打電。——『あまり深追いするな』と、伝えるだけは伝えておけ。大人しく助言を聞き入れるかどうかは、また別だがね」

その声には、いささか部下達に対する諦めのようなものが混じっていた。

帰って来るとすれば、ニコルくらいのもだろう。残りの二名は血の気に溺れ、引き際を見失って落ちる。

薄情にも聞こえるが、聞き分けがないのであれば仕方がない。

それ以前に、仮面を付けて表情を張り付けたように振る舞う男に温情を求めること自体が間違っているのかもしれないとアデスは思うのだが、なんとなく、そんな予見がついていたクルーゼであった。しかし、アデスはその時、彼の言い草に疑念を抱いた。

「他の『ジン』には、打電しなくてよいので？」

「云つても無駄さ」

「は？」

アデスは、上官の云つた言葉の意味が、分からなかった。

眉を顰め、唾然として振り向けば、クルーゼの眼は既に別の方向に向けられており、突
出気味である『ガモフ』を、一心に見据えていた。

へすごいじゃないの。結局、坊主らの同級生、誰も退艦しなかったんだって？ それよか、後輩のお嬢ちゃんかひとり仕官したとも聞いたしな

格納庫にて発進命令を待つ “ゼロ” と “ストライク” の中で、キラとムウは通信を取っていた。

ムウはいつものように軽薄な笑みを浮かべて、いつものように薄っぺらい言葉を吐いているが、その表情はどこか、強い責任と寂寞感を帯びているようにも見えた。

——あんまり若い子^{もん}を戦場に縛り付けるのつてのは、大人としては、いい気がしないが。

ムウ自身も、初めて敵を撃墜して、人を殺したのは早かった。そんな彼だからこそ、云えた言葉であるのか。

よもや “ヘリオポリス” で回収し、野戦任官になっていた少年少女が、軍の志願兵になるとは……。

トール・ケーニヒ。

ミリアリア・ハウ。

サイ・アーガイル。

カズイ・バスカーク。

そしてフレイ・アルスター。

志願自体が、彼らなりに思うことがあつての決意だつたと思うのだが、それはあまりにも幼く、甘いものだ。

戦争という現実を前にして——この決断を、いつか彼ら自身が後悔する日が来ないよう、ムウはひそかに祈つた。

「——で、おまえはいいのね？」

話が自分の方に向き、キラは苦笑する。

この男が云いたいことは、なんとなく分かつている。キラは元は「ヘリオポリス」の学生だが、コーディネイターという意味では、他の学生達とは、まったく置かれた立場が違っている。

艦橋で席に座り、与えられた役割をただこなす彼らとは決して違う——モビルスーツに乗って、いつ撃たれるかも分からぬ最前線で戦うという決断を、キラは下した。だから今——こうして「ストライク」にも乗り込んでいる。

そこに、本当に後悔がないかを、訊ねているのだろう。

「自分で、決めたことです」

ミリアリアの声が響き、「ストライク」の両脚が、発進用のカタパルトに装着される。

マリユールやハルバートンにも、この決断を、この意志を表明してある。そんなキラの選択を、彼女達は決して喜んでいないように見えた。

無論、彼らにとってそれは都合の良いことであつたために、感謝はされたが、浮かばぬ面持ちで云われる感謝の言葉ありがとほど聞いていて心地悪いものはないと思つた。

「出来るだけの力があるなら、出来ることをしろ——ですよね？」

「あつちやあ……生意気なんだよつ、この若造が」

映像に映つたムウが、罰が悪そうにみずからの髪をかき上げた。

「へなら、もうこれ以上云うことはねえけどな……浮き足立つたり、自惚れたり禁物だ。

ま、こりやあ軍人パイロットとしての大先輩からのアドバイスと思つて受け取つとけ」

やれやれと嘆息つきながら、ムウが冗談めかして云う。

次の瞬間、ハッチが開いた。

「発進、どうぞ」と声が響く。

「へともあれ、俺達が出なきやあ艦隊も長くは持たない。ギリギリの戦いになるが、絶対に帰つて来るぞ」

「はいっ」

「エールストライカーを装備した『ストライク』と『ゼロ』が——この瞬間、宇宙空間へと飛び出した。」

クルーゼ隊、ならびにザフト軍の狙いは“アークエンジェル”だ。

当艦が現宙域にいる限り、彼らは必ず攻撃を続行する。ならば“アークエンジェル”だけでも、先に地球へと降下してしまつた方が、全体の損害は少なく済むのではないだろうか？

その判断の下、“アークエンジェル”は第八艦隊よりも先に、戦線を離脱し、地球への降下準備に入つた。無論、そうなれば降下予定が大きく早まつてしまうため、北米大陸の西端に位置する地球軍本部^{アララカ}への降下軌道を確保することは出来なくなるが、直接的に降下することが不能になつたとしても、地球軍の領空内域に降下することができる。

“アークエンジェル”クルーも、第八艦隊に包まれたこの状況に安心してゐる者は少ないはずだ。先遣隊がやって来た時、三隻の友軍艦は“イージス”と三機の“ジン”によつて、容易く全滅させられてしまつたのだ。そして今回は“デュエル”“バスター”“ブリッツ”が敵として現れ、いくら艦隊と云えども、ムウやキラが出なければ、このままでは“アークエンジェル”すら危ういと判断されたのだ。

そうしてキラが発進した先、即座にナタルとムウからの通信が入る。

へフェイズスリーまでには戻れるよう、本艦との距離と自機の高度には常に気を配れ。

スペック上は問題ないが、やった人間はいないんだ。中がどうなるかまでは分からんぞ」

「へそいうことだ、坊主。『ストライク』を失えば、アラスカへ降りても何の意味もないんだ、気を引き締めろ！」

通信を受けたキラが頷いた後、一気に高度を上げて『デュエル』達へと向かおうとバーニアを噴かした。

しかし、思うように高度が上がらない。

機体の動きが、いつものそれに比べて、明らかに鈍重なのだ。

「重力に曳かれてるのか……！」

人工的に重力が造られていた『ヘリオポリス』とは、比べ物にならないほどの重力——本物の、地球のそれ。

機体の推進力さえも奪われてしまうほどに、何か得体の知れない腕に、機体の足が掴まれているのではないかと思えてしまうほどに、それは体感として、鈍重に感じる。

帰還のタイミングを逃せば————本当に『アークエンジェル』から引きはがされてしまうかもしれない。

肝に銘じながら、キラはスロットルに手を掛けた。

その瞬間——「ガモフ」が動いた。

突出気味というより、「ガモフ」は完全に「ヴェサリウス」や「ツイーグラ」から突出して、単独で第八艦隊の輪の中心部——中央艦隊へ特攻を開始していたのだ。当然、単独で突出した宇宙母艦は、艦隊からの無数の砲火を一心に浴びることになる。それすら厭わず、突撃を仕掛ける……？

——まさか、刺し違えるつもりか……!?

「ガモフ」に配属されている数機の「ジン」は、母艦の思わぬ動向に一瞬、戸惑ったように動きを止めたが、次に意を決したように、敢然と後に続いて中央部へと突っ込んでいく。

これを見たアデスは啞然として、顔を真っ青に染めた。

「ガモフ」！ 出過ぎだぞ、何をしている!？」

「ここまで追い詰め……! 足つきを逃がすことは……元はと云えば、我らの不明……!」

電波状況の悪い中で、「ガモフ」からの通信が切れ切れに響く。

モニターに映る艦長の顔は、いつものように生真面目なそれだった。

「足つきは……必ず我らが——! ……!」

距離が開き過ぎたせいか、それきり通信は遮断され、モニターにはノイズの嵐だけが映った。

打電を受けた「ブリッツ」が、大人しく「ヴェサリウス」へと退き始める。

それと入れ替わるように「ガモフ」と「ジン」が低軌道へと突っ込み始め、ニコルは虚を突かれたような表情になった。

「突撃するつもりか!? まさか、この状況で!」

ローラシア級「ガモフ」の、背水の突撃。

彼らによる——玉砕覚悟の突貫だった。

地球を目の前にして——

凄まじい『破滅』を伴う、一大の激戦が繰り広げられた。

「ストライク」が「デュエル」と交戦し、ムウが駆る「ゼロ」が精一杯「バスター」の動きを牽制する。

「ようやく出て来たなあ!」 「ストライク」!

先日の敗北がよほど気に喰わなかったのか、「デュエル」は執念とも取れるほどの苛

烈さで“ストライク”へと攻撃を仕掛けて来た。

応戦するキラもまた、思わず戦闘に熱が入って、状況判断が疎かになる。数分が経過したか。

いや、まだ経過していないか、それほどまでのわずかな時間の後、戦場はすぐに、真っ赤な灼熱に彩られた。

「——しまった！」

紅く染まった景色が、キラを我に帰らせる。敵をやり過ぎることばかりに気が向いて、ナタルからの指示を失念しかけていたようだ。

キラはすぐに頭を廻し、周囲の状況を確認する。

下方には、思わぬほどに距離が離れていた“アークエンジェル”と、まるで“アークエンジェル”を庇うかのような位置に据える“メネラオス”の姿が映る。

——まずい、急いで戻らないと……!!

キラはすぐに機体を翻し、高熱を帯び始めた“ストライク”は即座に、重力に曳かれるままに転進した。

“アークエンジェル”のブリッジで、ノイマンが声を発す。

「フェイズスリー、突入限界点まで二分を切ります！——融除剤ジェル、展開用意！」

「“ストライク”と“ゼロ”は?!」

「フラガ大尉の着艦を確認！ あとは……キラ!?」

ミリアリアの悲鳴にも似た声が響く。

それと同時に、マリユーも大きく声を上げた。目の前のモニターに映る、切れ切れの映像には、マリユー自身のかつての上司の精悍な面持ちが映っている。

「ハルバートン提督！ これ以上の護衛は無用です！ これ以上高度を落としては——
“メネラオス”では！」

「君達は、なんとしても無事にアラスカまで送り届ける……！ それが我々の任務だ！
「しかしっ……！」

いくらアガメム^メノン^ネ級^スと云えど、宇宙母艦であることに変わりはない。大気圏に突入できる仕様ではなく、万が一、重力の井戸に吸い込まれてしまつては……！」

だが、ハルバートンの意志は揺らがない。強い決意があるように伺え、大抵の人間に出来たことではない。その証拠に、その傍らにあるホフマンが焦りに満ちた声を上げた。

「彼女の云う通りだ、艦長！ これ以上高度を落とせば……この艦の推力では、軌道上まで戻れなくなる！」

ハルバートンは冷静に、それでいて激しく返す。

「戻った所で、アレの餌食になるだけだ！」

ハルバートンが怒鳴りを上げ、我に帰ったホフマンが、頭上を見上げる。

艦長に示唆されたもの——それは一隻として、突出して中央艦隊まで攻め込んで来たザフト軍のローラシア級艦——「ガモフ」だ。

「なッ……」

これを見たホフマンが言葉を失い、絶望に表情が染まる。

黄緑色の巨大な宇宙母艦は一斉射撃を仕掛けながら、がむしやらに高度を落としてつつある。

我が身を顧みず、「アークエンジェル」を追撃しに来ているのだ。

砲門という砲門をすべて開き、まさに背水の陣——「メネラオス」を庇うように進み出た駆逐艦「リンカーン」に対して、無数の光条を撃ち放っている。

「なんと……」

「リンカーン」と「ガモフ」が、互いに激しく撃ち合いを始めた。

激しい応射を交わした後、その勝敗は——「ガモフ」によって制された。

ドレイク級の戦艦が半ばから真つ二つに叩き折れ、中から散らばった「モノ」が、悲鳴を上げて、瞬時に業火に飲み込まれていく。

だが！ と、ホフマンは生に縋るように願った。

——敵のローラシア級の方も、限界が迫っているはずだ。

数多の被弾部が朱の炎を上げ始め、耐え難い灼熱を前に、船体自体が崩壊し始めていく。これでは戦闘継続すら危うい！ 諦めろ！

切に願うホフマンであつたが――。

それが、どうした。

その瞬間。傍らのオペレーターが、なかば裏返つたような声をあげる。

「敵ローラシア級！　『アークエンジェル』を照準ロックしました！」

「まだやるのか……!?」

「前へ出る！　射線上に出て、なんとしてもあの艦を守れ！」

ハルバートンが、すかさず指示を出す。

――莫迦な……ッ！

その指示がいったい、何を示すのか、本当に分かっているのか……!?

ホフマンは一带を見回す。クルーのみな、ハルバートンの指示に従つてはいるが、そのほとんどが激しい不安の色を顔に浮かべ、中には今にも泣き出しそうな者の姿も認められた。

「かの艦は明日の戦局のために、決して失つてはならぬ艦である！　前線で戦う生身の兵士たちの旗頭となるべきものだ！　――身を挺してでも、守らねばならん！」

ローラシア級はどうあつても、『大天使』が地球へ降りるのを阻止するつもりだ……

放っておくわけには行かない！

既に「アークエンジェル」は降下準備に入っている。上方から狙撃されれば、反撃の余地はない。

「避難民のシャトルを脱出させるろ！」

ハルバートンの声に、ホフマンは悄然とする。

拳一杯に力を加え、これをぎゅうと握りしめた。

覚悟を決めた面持ちで、部下達全員に、決死の指示を飛ばす。

「突入限界点を突破させるわけにはいかんのだ！　「メネラオス」は盾となつて、敵の砲火から「アークエンジェル」を守るぞ！」

ハルバートンの呼び声と共に、次の瞬間——「メネラオス」の砲門が火を噴いた。

——ここで「アレ」に落とされて……………たまるかッ！」

満身創痍の「ガモフ」へ向け、無慈悲にして、無容赦の砲線を放つ。

だが、負けじと「ガモフ」からも、無数の砲火が飛来する。

勝敗を決するは——武装の威力か？　それとも、残された装甲の強度か？

あるいは——互いに譲らぬ、人の想いの強さか？

互いに被弾し合いながら、地力の勝負が繰り広げられた。互いに激しい被弾を受けると、双方の船体は大きく傾き始め、業火に包まれた装甲は、いつ内側から爆発を起

こしてもおかしくはないほどに膨れ上がる。

大気との摩擦で赤く灼かれながらも、ふたつの艦は互いに撃ち合うのをやめない。

急降下し、*「アークエンジェル」*への帰路軌道に付いた*「ストライク」*から、キラは目の前で繰り広げられる惨禍を覗いていた。

「無茶だ！ ハルバートンさん！」

キラは懸命に声を上げる。

——こんなことは無意味だ……！

あれではローラシア級をやり過ぎたとしても、推力が持たない！ 軌道上に戻れなくなれば、どんなに頑張ったって……！

これだけの絶望を、人の想いが作り出したと思うと、ゾツとする。

*「アークエンジェル」*の中でも、マリユールは眸に大きな涙を溜めていた。

「ハルバートン提督ッ……！」

みずからの命を擲ってまで、獲物を追撃する者達と、

みずからの命を払ってでも、友軍を護り抜かんとする者達。

目の前に映った破壊の光景は、戦争が生んだ一大の惨劇として、彼女や、少年たちの胸に深く刻み込まれた。

次の瞬間——*「メネラオス」* *「ガモフ」* 両艦が、内部から爆散した。

戦艦だったモノの破片が無数に散り、炎の尾を引いた放射線の弧を描き、地球へと落下して行く。

しかし、墜落することさえ叶わず、大気圏との摩擦熱で燃え尽きては——何もかもが、塵ひとつ残さずに消し飛んでゆく。

消失の景色を目の当たりにして、キラは啞然とした。しかし、すぐにハツとして、新たなものを発見する。

「民間人のシャトル……!?!」

“メネラオス”が爆散した地点より、わずか下方に、民間船の機影を捉える。画像を拡大すれば、そこには、数時間まで“アークエンジェル”に乗り合わせていた民間人が映った。

もしかしたら、自分もあそこに乗っていたかもしれないシャトルだ。

ハルバートン提督は、最期まで、民間人のことを考えていた。最早、自身の母艦が持たないことを予期して、先んじて、シャトルの脱出を急がせていたのだろう。

無事、艦が爆散する前に宇宙へ逃げ出したシャトルであったが、それにしても、脱出のタイミングがギリギリすぎたのかもしれない。“メネラオス”の爆発の余波に巻き込まれたシャトルは、大きく姿勢制御を崩し、妙な方向に旋回しながら地球へと落下し始めていた。——どこかのパーツが、動作不良でも起こしたのだろうか。

瞬間、キラを強い焦りが襲う。

「くそっ、あれじゃあ……！」

不規則に旋回しながら落ちて行くシャトル。

あれでは地球に降りることはできても、着陸なんて出来るはずがない……いや、それよりも前に、重力の加わる遠心力に、乗客の身体が耐えられるかどうか怪しい。

キラは咄嗟に機体を翻し、旋回しながら落ちて行く、民間シャトルへと一心にバーニアを吹かした。

その動作を認めた「アークエンジェル」から、疑惑の声が飛び込んで来る。

「ヤマト少尉！ 何を!?」

「シャトルを助けます！ あのままじゃ、降りたつて誰も助からない！」

「勝手なことは許しません！ “ストライク” は——」

静止を求める、マリユーの必死の声が響く。

もしここで「ストライク」との接触が途絶えるようなことになれば……！

「ストライク」を、アラスカへ送り届けることが出来なくなれば……！

ここまで戦い抜き、散って行ったハルバートン提督らの思いが——すべて無駄になる

！

キラとて、その意見が分からないわけではない。

彼女の言葉も、間違つてはいないのだ。

——でも……。

それでも、だからって……！

「民間人を見殺しにすることだつて、あの人は望んだりしませんよ！」

何のためにシャトルは“メネラオス”から放たれた？

誰の想いが、あのシャトルを間一髪で護り抜いた？

残酷なまでの、この真紅の宇宙で散つて行つた——提督がそうさせたことだ。

ならばそこに、優先順位なんてある筈がない！

『——きみが何を望み、何を為さんとしてゆくのかは誰でもない……きみ自身が決めることだ』

キラの頭に、その言葉が蘇る。

ああ。

命令違反でもいい。なんだつていい。今はこれが正しいと思うから、やれるだけのことをやるだけだ！

“ストライク”がバーニアを吹かし、がむしやらにシャトルへと向かつた。

次の瞬間、コクピッド内に、警報音が響いた。

「“ストライク” ウウ——ッ！」

はっとしてキラが背後を振り向けば、いつ接近したのか——「ストライク」は、後方から飛び掛かる「デュエル」によって、大きく蹴り飛ばされていた。

「ぐうウ……ッ！」

衝撃に揺れた機体を、キラは慌てて立て直した。

同時に、眼前に現れた機体に目を見張る。

——「デュエル」!?

どうして。まさか、こんな高度とこしろにまで……!?

慌ててキラがリーダーに目を落とせば、「デュエル」の他に、「バスター」の熱源も捉えられている。

↑——おいおい、イザーク！ こりゃあやべえんじやねえか!?!

「デュエル」のkokopitt内には、激しく焦り、普段の皮肉屋らしく装うことをすっかり忘れたディアツカの声が響いた。——このままでは、地球に落っこちちゃう!

その声になだめられたイザークは、しかし、なおも頑として「ストライク」を見据えている。

——灼熱? それはどうした!

Xナンバーは、大気圏に単機で飛び込んでも、性能上は問題ないと云う。

——僥倖だ。

後先考える必要もなく、ここで「ストライク」を追撃できるのだから。

この時のイザークは、かつてないほどに熱り立ち、血の気に滾っていた。

「ガモフ」の勇姿を……奴らの思いを無駄にしてたまるか！　ここで「ストライク」を逃がせば、俺達はいいい笑いだぞ！　それも、相当な腰抜けのな！」

〈……！〉

「帰りたいならひとりで帰れ！　勝手にしろ！」

心配して声を掛けただけに、返って来たのはにべもない怒声で。

〈あああつ。もうツ、くそつ！〉

一瞬として悩んだ末、なかば自暴自棄に「メンドクサイ同僚を持ったなあもう！」と胸中で嘆いたディアツカが、スロットルに手を掛けた。

「ストライク」より遙か上方に構えていた「バスター」が、意を決したように高度を落とす、「デュエル」の横に据えた。

——後のことなんて、今はどうでもいい。

——機体が持つのであれば、なんとかなる！

イザークは漠然と、そう確信していた。

突貫を仕掛け、華麗に散って行った「ガモフ」の戦士達には、感化されるものがあった。「ジン」に乗って灼け死んで逝った彼らより、遥かに好待遇な機体を預かっておき

ながら、自分たちはこれまで、何の戦果も挙げられていない！

彼らに報いるためにも、ここで“ストライク”を仕留めなくては……！

「こいつら、こんなところにまで——！」

キラは悄然として、真紅の世界に舞い込んできた二機の“G”を見据えた。

——こんなヤツらと、戦ってる場合じゃないんだ……！

シャトルを守り、そして“アークエンジェル”に戻らなければならぬ。

——“ストライク”さえ無事なら、地上に降りてから、いくらでも手立てはあるはずだ。

それはただの、漠然とした予想でしかない。

でも、ここで民間人を見殺しにしたら、僕は何のために“ストライク”に乗ったのか、分からなくなる。

自己満足でも、自己欺瞞でもない。自分には誰かを守る、それだけの力があると信じ

——守れるだけの者達の命を守りたいと願ったから、この機体に乗った。

その答えまで導いてくれたのは——ハルバートン提督だ。

「今こそ仕留める！」

へここまで体張ってんだ！ いい加減墜ちろお！

“デュエル”が肩部ミサイルポッドから無数の誘導弾を、“バスター”が二丁のビー

ムライフルをそれぞれに撃ち放ち、キラはこれを、あえてシールドで防いだ。

対ビームコーディングが施されたシールドによって、ビームは弾かれたが、純粋な物理攻撃であるミサイルはシールドに着弾し、爆発の余波までは防ぎ切れることは出来ず、機体は強かに揺さぶられた。

——回避できるはずの攻撃を、なぜ？

イザークが逡巡すると、途端、〃ストライク〃は彼らに背を見せ、すぐに後退し始めた。

「逃げるつもりか!？」

へけどよ、足つきは逆方向あっちだぜ……?>

ディアツカの言葉の通りに、既に〃アークエンジェル〃は〃ストライク〃の進行方向とは真逆の方角に居て、降下準備に入っている。

〃ストライク〃が何がしたいのかが分からない。

ただひとつ、分かるのは……

「俺達と戦え! 〃ストライク〃 ツ！」

ヤツは、自分達と戦うつもりがない、ということだ。

ここまで降りて来ているのに。

なのにヤツは! 見向きもせずに進退する!

「逃がすかアッー！」

盾を構えつつ後退する「ストライク」を、「デュエル」が猛追した。

「バスター」はしかし、その地点からは動かなかつた。元々、遠距離砲撃を得意としている機体ではあるが、もし仮に「ストライク」の目的が地球への降下なら、必ず「アークエンジェル」へと戻って来るはずだと踏んだからだ。

——まるで「ストライク」は、何かを庇つてゐたみたいだ。

バッテリーで稼働するモビルスーツ同士の戦闘において、回避できた攻撃をあえて防ぐことに、利点はない。着弾と同時に被る衝撃は、すくなくならず機体を揺さぶり、あるいは、電力を消費させるからだ。

——何か、他に優先すべきことでもあるのか？

母艦への帰還より。

自分達との戦闘より。

何か「優先したいこと」が？

ディアツカには、それが気に入らなかつた。

わざわざ自分達が、帰還できる領域から降りて来てまで、重力に曳かれてまで、追撃に來ているというのに。

「『アレ』か……！」

その瞬間、ディアツカは「それ」を見つけた。

「ストライク」が、第一に駆けつけようとしているもの——遠方にある、脱出邸のシャトル。

妙な軌道で旋回しながら落下して……いや、墜落している小型船。

「ストライク」は、あれを庇うために動いている。

「あんなモンのために——！」

その瞬間——「バスター」が狙撃型のライフルを構えた。

イザークの言う通りだ。「ジン」や「ガモフ」で戦った者達は、ディアツカとしても認めたくはないが、見事な戦いをした。それに対して「デュエル」や「バスター」と云う機体を預かる自分達が、大した仕事も成し遂げられていないのは、嫌気が差すほど情けない話だ。

だからこそ、俺達がこの場所で「ストライク」を撃たねばならない。

なのに「ヤツ」は——「あんなもの」にかまけ、戦おうとすらしらない！

「連中は、決死の思いで戦ってたんだよ！」

なのに。

ディアツカが唇を噛みしめる。

——地球軍だけ、みすみすと見逃してたまるか……！！

構えられた「バスター」のライフルが、火を噴いた。

「ガモフ」の戦士達は、運命を艦と共にした！

なのに、地球軍はなんだ!?

「逃げ出した——腰抜け兵がッ!」

「やめろおおおっ!!」

キラは声の限りを上げ、絶叫した。

「バスター」より放たれた一陣の光条。これに「ストライク」のシールドが追いつく——その寸前になって、サーベルを振りかざした「デュエル」が「ストライク」進路を阻んだ。

光の刃を振り翳し、咄嗟に危険を感じ取ったキラは、反射的に機体を翻した。

翻してしまった。

それが、キラとシャトル——双方の生死を分けた。

「バスター」のビームが、シャトルの船体を買いた。たちまちに船は炎に飲まれ、噴出する気流に飲まれ、船体は中から膨張したかと思えば、崩れた姿勢を立て直し——次に蒸発したように瞬と虚空へと消えた。

一瞬にして、大気との摩擦に焼き尽くされた。多くの命が、一瞬にして滅んだのだ。

「守れた」と思っ——それが、大きな思い上がりであったことを知る。

「守る」ことの意味を、キラはわかっていなかった。

何かを守り抜こうと思ったら、徹底的に、何かから奪わねばならない。ただ守っているだけでは、何も解決なんてしないということに。

こんなことになる前に、おまえたち一二機を撃たなければいけないかった——
!!!!

なおもサーベルを振り翳す「デュエル」を、「ストライク」はシールドで受け流し、次の瞬間、膂力に任せてはじき飛ばした。

衝撃に吹き飛ばされ、「デュエル」は大きく後退した。

怒りの瞳を浮かべ、反撃に出ようとする「ストライク」に、ぎりぎりの通信回線で、声が届いた。

「キラ………それ以上……ダメ………戻って………」

ミリアリアの声に、ハツとする。

見れば、「ストライク」のエネルギー底を尽きかけ、警報音が鳴り響いている。下方には、降下軌道をずらし、こちらに艦を寄せている「アークエンジェル」の姿もある。

——降下地点をズラした？ 「ストライク」のために——？

込み上げる憎しみを押さえ込み、キラはぎゅつと唇を噛み、轉身した。

エネルギーダウンを起こせば、何もかも終わりだ。『アークエンジェル』に辿り着くことも出来なくなり、フェイズシフトが落ちれば、まず無事ではられない。

「畜生っ……………!! 畜生っ……………!!」

『デュエル』と『バスター』もまた、エネルギーに余裕がなくなったか。

それ以降の追撃はやみ、それどころか、パイロット達はようやく現実を冷静に思い知ったようで、初めての大気圏突入を前にして、慌てふためいて対応という対応も取れていないようだった。

『アークエンジェル』は、降下予定のアラスカからの航路から大きく離れた軌道に付いてしまった。

すべては『ストライク』を回収するためだ。

「もつと艦を寄せて! 『アークエンジェル』のスラスターなら、それができる!」

「しかし! これ以上ポイントからズレれば、艦の降下位置が……………」

「『ストライク』を見失って、本艦だけアラスカへ降りても意味がない! 急いで!」

ノイマンは危ぶむような顔で、スラスターを操った。

強い重力に曳かれながら、大天使はゆっくりと『ストライク』へと船体を近づけてい

く。

「——ただちに降下予定地点、算出して！」

「予測される、本艦の降下予定位置は………つ」

ロメオ・パルが叫ぶ。

「アフリカ北部です！ 北緯29度、東経18度！」

「えっ……!?!」

明かされた座標が示す——ひとつの事実。

アフリカ北部——そこは、

「——完全に！ ザフトの勢力圏内です!!」

「アークエンジェル」は、そのまま重力の井戸へと吸い込まれていった。

第二篇

『戦場への門出』

第八艦隊が総力を以て地球へと送り出した“アーケエンジェル”は、当初の降下予定地点から大きくかけ離れたアフリカ北部——夜空には満天の星、地表には頽れる広大な流砂の拡がる、辺境の地へと辿り着いていた。

ザフトの勢力圏、リビア砂漠である。

C・E・71年、2月13日現在——

アフリカ大陸は北アフリカ・西アフリカ地域の国家が形成する「アフリカ共同体」が管轄下にある。

その共同体は、地球に属する「親“プラント”国」という立場を取っており、ザフト軍——『砂漠の虎』と名高きアンドロリュー・バルトフェルド率いる地上部隊の駐留を許可していた。したがって“アーケエンジェル”は、端的に云えば敵地のど真ん中に降り立ったのだ。

ところで、アフリカ大陸は——土地としてはひとつの大陸として成り立っているが、

現在の情勢では、ヒトによって二分化された状態にある。

前述した通り、大陸の北部から西部にかけてはアフリカ共同体の管轄に在るザフトの勢力圏だ。

一方、大陸の南部から東部にかけては、南アフリカ・東アフリカ地域の国家が「南アフリカ統一機構」たる統一国家を形成しており、こちらはアフリカ共同体とは対立している関係上、地球軍の管轄に当たる。

つまり、異なる意見を掲げ、異なる勢力に身を寄せたふたつの共同体が、ひとつの大陸の二分化されて共存している状態なのだ。

当然、アフリカ共同体と南アフリカ統一機構との間、その「境界」では常に、小競り合いが続いている。

アフリカの南北を分かっライン——すなわち国境を巡って、ザフトの地上部隊と駐留する地球軍との間で、衝突が起きているのだ。

しかし、陣容はザフト軍に軍配が上がっていた。

地図で見た、アフリカ大陸の頭上——北緯を上げた場所に位置するジブラルタル海峡には、ザフト軍のジブラルタル基地が構えられている。欧州地域ヨーロッパならびにアフリカ侵攻のための足掛かりとなるべく建設された、大型の軍事基地である。そこから無尽蔵に増援や補給が送り込まれてくることを懸念すれば、戦力的な面で見ても、地球軍、ならば

南アフリカ統一機構が保有する戦力の方が、圧倒的に劣勢と云えた。

実際、すでにアフリカ大陸の七割はザフト軍の占領下に置かれ、アフリカ南部まで後退せざるを得ない状況を強いられた地球軍は、云わば風前の灯火の状態にある。

「こりゃあ、またえらくひどい場所に降りちまったもんだねえ」

相も変わらず、放たれたムウの声調には、言葉ほどの緊張感の欠片もない。

マリューはそんなことを思いながら、言葉を発したムウに目を遣った。

地球を描いた地図を見ながら、ナタルがため息をつく。

「まさか、アフリカ大陸の七割が、すでにザフト軍の占領下になつているとは……。ザフト軍の侵攻により、ラインは日に日に変わつていつてい、ということですか」

「地球軍は押され気味つてことか。まったく、ザフトも頑張るねえ」

「アフリカ南東部のビクトリア湖には、地球軍のマスドライバー施設がありますからね。ザフト軍の地上部隊はおそらく、そこを制圧したいのでしょうか」

そのために、ザフトはこうして、アフリカにまで侵攻している。

南アフリカ統一機構は、アフリカ南東部に存在するビクトリア湖に、大型のマスドライバー施設「ハビリス」を所有している。

地球軍の宇宙港——宇宙への玄関口として機能しているその施設を、ザフトとしては、先んじて潰して置きたいのだ。

「ザフトは、赤道付近にあるマストドライバー施設をすべて掌握するつもりだろう？ あー……、なんだっけ？　〃オペレーション・なんとか〃とやらの作戦の一環でさ」

「〃オペレーション・ウロボロス〃——古代神話に登場する、尾を啜え輪を描いた大蛇の名になぞらえて——私達ナチュラルを地球に閉じ込める作戦、ですね？」

ムウの曖昧な声に、マリユールが補足する。

それだ、と声を漏らして合点したムウは、その先を続けた。

「地球軍を宇宙に飛ばせなくして、宇宙から一方的に攻撃を仕掛けようって魂胆なんだろうが……この勢力図を見させて頂いた限りじゃ、ビクトリアが陥落するのも時間の問題かねえ？」

ムウは、悪びれた様子もなく——目の前に据え、コーヒーカップを握った物騒な身なりをした男に訊ねた。

男の名は、サイーブ・アシユマン。

〃アークエンジェル〃が降下した地点、その付近を拠点として活動するレジスタンス集団『明けの砂漠』のリーダー格の男だ。

恰幅が良く、口まわりに生やした鬚は厚い。よく日に焼けた肌の下には、いくつもの傷跡が伺える。

見た目は物騒だが、期待を裏切らず、性格もまた荒つぽい一面も持っているようだ。

サイーブはムウの砕けた風な問いには答えなかった。

一歩前に進み出て、マリューが頭を下げる。

「本当に好くして頂いて……感謝しています」

心外そうに、サイーブは口を開いた。

「礼なんざあいらねえよ。俺達『明けの砂漠』^{さばく}は、別にあんた達を助けたわけじゃあねえんだからな」

「助けたわけじゃない？ ザフトの攻撃から、おれたちを守ってくれたのに——か？」

ムウは、嘘は云っていない。

サイーブ・アシユマンを首魁とするレジスタンスは、二日前、この砂漠へと降下した
“アークエンジェル”を味方のように援護し、そして匿ってくれていた。

第八艦隊との別れを告げた“アークエンジェル”は、援軍も見込めず、土地勘すら働かない土地に降りてしまった。そのことよって浮足立っていた彼らに襲い掛かったのは、リビア砂漠に駐留したザフト軍による攻撃だった。

“アークエンジェル”ほどの巨大な凶体を持った戦艦が宇宙から降りてくれば、まず敵軍に特定されるであろうことは想定範囲内だ——が、ザフト軍の動きは、それよりもやはり迅速なものであった。四足獣型のMS “バクウ”を主力とするザフト地上部隊の襲来——迎撃のため “ストライク”が出撃したが、慣れない重力下の戦闘や、着地

する度に崩れ落ちていく流砂が足場なこともあつて、ひどく苦戦を強いられた。

そんな苦境に、現地のレジスタンス——サイーブ率いる『明けの砂漠』が、地中深くに埋められた地雷トラップによってザフトを撃退したのだ。

「オレ達は、オレ達の『敵』を討つために手段を選んじやいねえ。——あんたらを助けたのは、あんたらの存在こそが、手段それになると思ったからさ」

含みのある口調にマリューは怪訝な顔をしたが、ナタルは冷淡として、サイーブの発言の意味をくみ取る。

「——例のザフト部隊を退けるために、我々の力が利用できると考えたど？」

「察しが良いな、さすがは軍人さん、というべきか」

彼らも彼らで抵抗軍レジスタンスなんて銘打った集団を組織しているのだから、地球連合軍という大きな組織のことも生理的には嫌いであるらしい。

だが、ザフト軍よりはマシである、というにべもないポリシーがあるのだろう。敵の敵は味方——むつとりとした肉体派な見目に反して合理的な論を呈され、マリュー達はこうして、レジスタンス『明けの砂漠』の拠点に、戦艦ごと収納されるという状況に至っている。

「おれたちの目的は『砂漠の虎』——アンドリュー・バルトフェルド率いる地上部隊の壊滅だ」

「だから、レジスタンスね?」

「そして、あんた達にも、何としてもアラスカにたどり着かなきゃならねえっていう使命があるんだろう?」

——砂漠の虎は、そのためには決定的な障害だ。

付け加えられたサイープの言葉どおり、おそらく「アークエンジェル」にとつてもザフトとの交戦は避けて通れない道だ。あくまで「共通の敵を退けたい」という利害が一致したことにより、二者はこうして、臨時的な協力関係にある。

サイープは口角の片端を釣り上げて云う。

「こつちとしちゃ、とんだ災いの種に降って来られてびっくりしてんだ。——まっ、あんたらにとつちや、こんな辺境の砂漠、それも敵地のど真ん中に降りちまったこと自体が災難なんだろうが——第八艦隊を犠牲にしてまでも生き延びたその悪運の強さとやらを、こつちのために利用させてもらえらるってんなら、悪い話じゃあねえ」

その言葉を受け、マリューがむっとした表情を作る。——どうやら粗雑な見目に合つて、踏み込んではいけなない人の心域を氣遣う頭はないようだ……寛容ではあるが、繊細ではないらしい。

しかし、マリューも反論することは出来ない。

事実として「アークエンジェル」の降下は、畏敬すべき第八艦隊の全滅の上に完遂さ

れたものであり、サイーブの云っていることは間違つてはいない。まして「アークエンジェル」の莫迦でかい船体を匿えるほどの土地を提供し、乗務員達の安全を確保してもらっている以上、こちらは下手に出て当然なのだ。多少の無礼は、耐え忍んで然るべきなのかもしれない。

その時、サイーブの隣に据えたレジスタンスの少年、アフメドが口を挟んだ。

「降つて来たと云やあ、二か月くらい前にも、このアフリカ南東部に『黒鉄の巨人』が降つて来たとかなんとか、そんな噂も上がったよなあ？」

「クロガネの巨人？」

聞き慣れない言葉に、ムウが怪訝な顔を作った。

「巨人って……なんだい。今更？ モビルスーツのことか？」

「さあな」

アフメドは欧米人のように肩を竦め、手のひらを返した。実際、人種を見れば欧米人なのかもしれないが。

「俺もよく知らねえんだ。なんせ、最近になって南の方で流行り出した、ちよつとした都市伝説みたいなもんだからよ」

「あいにく、南にやあレジスタンスの諜報員はいねえからな。何を思つてそんな名の噂が上がったのか、こつちとしちや、知つた所じやあねえのさ」

南と云えば、地球軍の——ビクトリア基地がある方角だ。

曖昧に切り返され、ムウは釈然としない顔をした。

巨人、と形容されるモノと云えば、モビルスーツ程度のものだろう。だが、いまさら——？

モビルスーツなど、今やザフトの息が掛かった地域、そのどこでも目にするできるといふのに。

「——とにかく！ 無駄話は終わりです。私達がこれから考えねばならないのは、アフリカの情勢ではなく、どの経路を辿ってアラスカへ向かうかです！」

話の軌道を、マリユーが押し戻す。

——そうだ。

今は、余計なことを考えている時間はない。

孤立無援の「アークエンジェル」が、この厄介な土地に降りてしまった以上は、なんとしても、自力でアラスカまでたどり着かねばならないのだから……。

「アプリリリウス・ワン」の会議場施設では、事態が今にも動き出そうとしていた。

かつて、パトリック・ザラとシーゲル・クラインは盟友だった。

ふたりはかつて、共に「プラント」の住民、すなわち、コーデイネイター達の「諸権利の獲得」を目的とした政治結社『黄道同盟』を結党し、それ以降は、互いに「プラント」の政務官として同じ夢を掲げ、同じ道を歩んで来た。

しかし開戦——いや、血のバレンタインを期に、そんなふたりの間柄にも決定的な溝が生まれ始めた。

生死を問わぬ表現をすれば、その事件によつて、パトリックは地球軍に愛する妻子を奪われた。それからというもの、彼は反ナチュラル精神に餓えるようになり、武装蜂起を訴え、戦争を推進する強硬派の頂点に据え立った。

対するシーゲルは、元々、コーデイネイターとナチュラルは相互に歩み寄るべき存在としての考えを主張し、穏健派として立ち上がり——否応なく——パトリックの前に「政敵」として、立ちはだかる他なかった。

埋まらないふたりの思想の違いは——時を重ねるごとに、露骨に表面化して行った。

「プラント」が抱える、コーデイネイター同士の自然出生率の低下——これを打破するための「婚姻統制制度」を巡っても、両者の意見・考え方は対極的だった。

遺伝子配列により、あらかじめ選定された男女の婚姻しか認めない制令を実施しても、第三世代のコーデイネイターの出生率は、低下の一途を辿るばかりだった。

この現実を目の当たりにして、シーゲルはコーデイネイター達の「ナチュラルへの回帰」を訴え、ナチュラルとの雑交を解決案として掲げた。どこまでも和平に歩み寄る、それは彼らしい意見でもあつた。だが、対するパトリックはそれを一蹴し、ナチュラルへの回帰を否定した。コーデイネイターの英知を以てすれば、その問題すらもコーデイネイター達の独力で、いつかは必ず乗り越えられると断じて譲らなかつた。

—— 始まりは同じだつた……。

—— なのにどうして、こんなにも離れてしまつたのだろうか……。

シーゲルは自身の執務室のデスクに坐しながら、頭を抱えていた。

彼は、現時点で最高評議会議長を務め——「プラント」の総意の上に立つ人物である。

しかし、そんな役職にも任期は存在する。最高評議会議長の任期は三年間とされており、C・E・68年に議長に選出されたシーゲルには、もうじき任期の終了が迫つていた。

執務室を見渡しながら、シーゲルは、どうしようもない不安に駆られる。

—— 別に、ここまで来て、この議長室を離れるのが名残惜しいわけではない……。

だが、シーゲルはこのまま、後任となつて然るべき人物に「ここ」を明け渡すことに、強い躊躇を憶えてしまうのだ。

後任、それすなわち——次期最高評議会議長となつて然るべき人物……
パトリック・ザラに。

「プラント」は共和制でありながら、非選挙制を執っている。

政治体制にも、コーデイネイター独自のシステムが取り込まれ、政治に関して遺伝子上の高い「適性」が認められた者達のみが評議会を構成するという、互選制が適用されている。

総勢十二名で構成される、当刻の最高評議会議員。その過半——エザリア・ジュール、ダッド・エルスマン他——の議員は既に、戦争を推進する強硬派に腰を据えているのが現状だ。

評議会自体が、戦争を推進する強硬派の勢いを喰い止められずにいる。——穏健派のシーゲルとしては口惜しいが——それが、今の評議会の実情なのだ。

穏健派が、強硬派に妥協し始めていることは、実際に「プラント」が行つたことを考慮すれば、誰の目から見ても明らかなことだ。

発端は血のバレンタイン——C. E. 70年2月14日。これにより「プラント」全体が、戦争を肯定する思想を基盤に付けた。

同月の2月18日——「プラント」による「黒衣（喪服）の宣言」が発表され、「プラント」は地球連合軍に対して、徹底抗戦する姿勢を宣言。これを発表したのが、穏健

派であるはずのシーゲル自身だった。

——核を放った野蛮なナチュラルに、我々は屈しない。

それはシーゲルの口から放たれた言葉ではあつたが、シーゲルの心から放たれた言葉ではなかつた。

あくまで代表として“プラント”の総意を表明するために、議長であつたシーゲル自身がやらなければならなかつたこと。

同年の4月1日。

可決された“オペレーション・ウロボロス”が施行され、核分裂反応を防ぐニュートロンジャマーが地球全土に散布され、地球にて、多くの犠牲者を出した。

もはや穏健派では、強硬派は止められない。

強硬派の頂点に立つのは、パトリック・ザラだ。

（私の任期が終われば、まず間違いなく、パトリックが議長の座に就くことになるのだらう……）

シーゲルにも、その予想は付いていた。

だが、そうなれば、これからの“プラント”の行く末はどうなる？

戦争を推進するパトリックが、ワンマン体制で政治を取り仕切ろうものなら……

和平より武威。

友好より脅迫。

言葉は通じず、武力が物を云う政治・世界になってしまふのでは……？

最高意思決定機関の長を務める男の下に——「プラント」全体が、パトリックが掲げた武断思想の下に、戦争へと乗り出すことになるかもしれない。

(本当に、それでいいのか……)

何か、打つべき手はないのだろうか？

シーゲルが思い悩んでいると、その時、執務室のテレビのチャンネルが、自動で切り替わった。緊急番組でも開かれるらしい。番組は勝手に切り替わり、テレビの中には、盟友パトリック・ザラの姿が映し出された。

「なんだ……？」

映像の中のパトリックは、決然とした面持ちでマイクの前に立っている。

何か、宣言を行うつもりか？

シーゲルは、そんな情報を聞いていない。——つまりこの放送は、パトリックの独断によるものである。

「この放送は『プラント』全域および、後に地球圏全域に向けて発信が予定されるものであり、この私——パトリック・ザラが『プラント』に住まうコーデイネイター達に隠されて来た真実を告げると同時に——地球連合軍に対して、抗戦意志の存続を表明す

るものである」

シーゲルは思わず立ち上がり、その放送に目を見張る。

放送は——パトリック自身が、この緊急宣言を見る「プラント」国民すべての戦意を煽らんとするものであった。

へ二年前の今日。——地球軍は食料「プラント」であった「ユニウスセブン」に核を放ち、24万にも及ぶ我らの同胞は、無残にも殺された。我々はこの日付を、あの日に受けた野蛮な仕打ちを、決して忘れることはできない」

ハツとして——シーゲルは時計を見遣った。

決して、失念していたわけではない。

映像の中の、パトリックの云う通りだ。

今日という日は——

「2月14日。——血のバレンタインの、一周忌……」

時計に示された日付を見て、シーゲルは悄然とする。

今日の日付は、C. E. 71年2月14日——戦争の引き金ともなった、最大の事件の一年後である。あの忌々しい事件から、もう一年という月日が流れたのか。

へ二年前、「ユニウスセブン」で無残に散って行った者達の嘆きを、我々は決して忘れてはなりません。

皆に改めて問いたい。地球軍が行った核攻撃に——果たして正義があったのか。

何の罪もない者達、平穩に暮らしていた子ども達の未来を奪う——遺された我々の人生を狂わせる権利が、彼らにあったのか。

……いいえ、あるはずがないのです。地球軍が行ったのは、制裁などではない——
——虐殺だ！

煽情的な言葉に、シーゲルは啞然とする。

へ「ユニウスセブン」を破壊したのは、コーディネイターの食料源を絶ち、我々の抗戦の意志を削ぐことが目的でした。——ええ、ここで我々が戦意を失えば、我々は彼らの手の上で踊ることになるのです。

彼らは、我々の足元をすくったのです！ 農業用「プラント」という、軍事には最も無縁な世界を破壊したのも、そのため。

戦わねばなりません。散って行った者達の無数の無念の上に立ち、立ち上がらねばなりません！ 地球軍には決して屈さない——真の自由を求め、彼らに正義の鉄槌を下すために！

我らコーディネイターにとって——揺籃の時代を勝ち取るために！

シーゲルは、額をつうと汗が流れるのを感じた。

「揺籃、だと……？」

こぼれた声が、強かに震えている。

「ようらん揺籃」——それは、物事の「先駆け」を意味する言葉だ。

物事の発展の先駆けとなった、黎明となった時期や場所を指示した言葉。

ヒトで言い換えれば——「ゆりかご揺籃」だ。生まれたばかりの何も知らない赤子が、これから大きく成長していくために、必要となる場所。何か物事が、これから大きく発展して行かんとする黎明段階のこと。

(ナチュラルから独立してからこそが、コーデイナー達の揺籃の時代の始まりと、そう云いたいのか、パトリック……!)

映像の中で、男はさらに先を続ける。

〈私の妻は、〃ユニウスセブン〃の農業研究者でした。そして娘は〃ユニウスセブン〃で暮らす、平穏な女学生だった。

しかし、一年前のあの日、あの核攻撃によって、ふたりは共に殺されました。ですから私の掲げたこの宣言には、地球軍に対して抱いた個人的な恨み辛みもあるのでしょうか

——それを否定はいたしません。

ですが、娘は生きていることが分かったのです。

パトリックは、放送にて宣言を続けた。

隠されて来た真実を——〃プラント〃全土に向けて発信した。

みずからが愛嬢、ステラは去年のこの日、早朝にシャトルに乗り、核攻撃の難を逃れていたということ。それだけなら、わざわざ宣言にて発表する必要もないが——その後、彼女の身柄は、地球軍のブルーコスモスに引き取られたということを明かした。

へ久しく再会した時、その娘は変わり果て！ 薬によって洗脳され！ 地球軍で戦う、無機質な駒とされてきました！ ——私はいち「プラント」国民として、そして彼女の父親として、地球軍のこの蛮行を許すことはできません。

偽りの正義に捕らわれた彼女を救い出したのは——戦場で彼女と再会した、私の息子、アスラン・ザラでした。引き裂かれた兄妹が戦場で殺し合う——こんな状況を作り出したのは誰か。私はその者達を、激しく非難したい！

一家を襲った悲劇を、赤裸々に語る。

あくまでも、絶大な煽情効果を持つプロパガンダとして。

映像は一転して、様々な記録画像、として映像を映し出す。

まず最初に映し出されたのは、パトリックが娘と紹介したステラが、本当に彼の娘であるのかを示した証拠の映像。

そして次に——金の髪を揺らした少女の、ぼんやりと振る舞う姿の映像。これが私の娘だと、云わんばかりの映像だ。

やがては、交戦する真紅の「イージス」と真鍮の「デイフェンド」の機体が戦闘して

いる映像が映し出された。

「この決断を許していただきたい……。ですが私は、我々が抱げた地球軍への反撃作戦——『オペレーション・ウロボロス』を必ずや成功させねばなりません」

ウロボロスの輪廻の輪を閉じ、ナチュラル達を地球の輪へと抑え込むために。

「昨日より、地球では第二次ビクトリア攻防戦が開始されました」

数日前、評議会では『オペレーション・ウロボロス』が見直され、アフリカ戦線が強化されていた。

地球にある地球軍が管轄するマスドライバー施設をすべて制圧するために、地球の各地にある前線基地を増強し、まさに昨日、ジブラルタル基地からアフリカ南部にあるビクトリア宇宙港への侵攻が始まったのだ。狙いはただひとつ、ビクトリア基地が保有する大型のマスドライバー施設『ハビリス』を掌握すること。

「今日という日に花を添えるため——ビクトリア前線では、勇敢なる兵士達が懸命に戦っています。」

難航しているようですが、必ずや我々は、かの基地を制圧してみせます
アフリカ大陸は、既に七割がザフトの手中にある。

残された地球軍の戦力では、とても抗戦できる状態ではないはずだった。

「だが……こうして、戦火は広まっていってしまうのか」

無力な自分を呪い、シーゲルが思い悩んでいると、入口から、彼の秘書が入室した。何用かと思ひ、「どうした？」と訊ねる。

放送は、変わらずに続いている。

「シーゲル様、お客様がお見えです」

思わぬ言葉に、顔を顰めた。

客人？

面会の予定など、なかったはずだが……。

唾然としていながら、それでも急用でも入ったのだろうか、秘書に「通せ」と告げる。畏まりましたと秘書は申し、下がって行った。

「！」

ひと間おいて、現れた客人——その姿に、シーゲルは目をむいた。

「ステラ……ッ!?!」

思わず立ち上がり、その場に唾然と立ち尽くす。

シーゲルは、金の髪の少女——旧友の娘、ステラの姿を認めた。

そして、愕然としている。

ザフト軍の制服ぐんぶくを着ている——その少女の姿に。

赤色を基調とし、黒色で縁取られたザフト軍の敏腕パイロットであることの証明服——改造が施され、肩から先の袖口は切り拓かれており、膝まであるブーツと、桃色のスカートの間から、生身の素足が覗いている。

肩上で揃えられた滑らかな金の髪を揺らした少女に、シーゲルはすぐに血相を変えて駆け寄った。

「どういうことだね！　なぜキミが、そんな軍服もを」

「戦うことが、ゆるされた」

「なにっ……!?!」

「それで、シーゲル様に会いに……『おわかれを云いに行け』って。父様が」
ステラは、平然として言い放つ。

シーゲルは激しく動揺しているが、ステラが平然と云うのは、何も彼を動揺させたいがゆえではなく、もともと、のんびりとしたそういう性格をしていたからだろう。どちらかと云えば、突拍子もないことを云って、もしくははやらかして、周囲を驚かせる性格は、娘のラクスに、まるで似ているとかつてのシーゲルも思ったことがある。

「戦うって……な、なぜそんなことになる？ キミは今まで、散々戦わされて来たのだから？ パトリックに強制されたのか!？」

「ううん。今度は、ステラの意志。——戦いたって、父様に云ったの。そしたら」

ステラは淡々と話す。

当然、そこには、大きな決断と、長い時間を要した。

それは昨日——2月13日のこと。

午前ごろ、ステラはパトリックの執務室を訪れた。そこで「プラント」の——アスラののために戦いたいと、ステラ自身が意志表明を行ったのだ。

だが、戦闘の意志を表した所で、パトリックは父親として、政治家として、彼女の意志を突っぱねるであろうことは、誰が考えても明らかなことである。

そもそも、操られていたとは云え、これまで地球軍に与していた者に、ザフトの赤服が渡せるはずもない。

まして、それは己の娘なのだ。

仮にザフト軍のエースパイロットと渡り合い、これを撃墜して来た実績が認められ、

赤服を着るに相応しい能力を持っていたとしても、ステラはこれまで、薬によつて操られていただけの兵士。軍に対しての忠誠心というものを、これまでで持つていたかどうか怪しまれるような存在でもある。

地球軍、正確には「アークエンジェル」には、みずからの意志で協力していたようだが、アスランの言葉を受けて、その意志は一気に衰弱してしまった。

己の大義をしつかりと抱けぬ者には、なかなかどうして、赤服など与えられるはずもないだろう。そうしてパトリックは、ステラの意志を拒んだ。

「オマエが活躍する場所は、何も前線でなくていいのだ。オマエには多くの者を守る力がある……オマエは私の娘だ。そのことだけに誇りを持ってば良い」

事実としてパトリックは、彼女の存在を軍事ではなく、政治に利用したのだ。

言い聞かせるような口調で返され、ステラも、返す言葉を失う。

「デイフェンド」に乗つて、ザフトと敵対して来た彼女が、今さらザフトとして地球軍と戦うことなど、簡単には許されるはずがない。第一、「プラント」のために戦いたい」という、その言葉が信用されているかどうかすら、この時点では怪しいのだから。だが、ステラはそれでも、と思う。

——「プラント」のために戦いたい」っていう想いは、うそじゃない。

今の彼女には、その確信と自信がある。

——亡レくなつた母ア様が、ステラにアスランを任せてくれたんだ。

だからアスランが「プラント」のために戦うのなら、ステラも「プラント」のために戦いたい。

戦うだけの力は既にある。後はその意志と能力を、国防委員長である父が認めるだけなのだが。

「聞き分けを覚えろ、ステラ。オマエを軍に入れることなど、到底、認められたことではない」

頑固な父は、それを一蹴した。正論でもあるのが、ステラには歯がゆかった。

——戦うだけの力があるのに。

——守りたいと祈る想いが持てるようになったのに。

——今は、戦うことすらできない……。

ステラは昔と違って、成長した。

自分の意志を表せるようになったし、自分の意志で行動できるようにもなった。でも、そうなった時にはもう、自分には戦う自由は与えられていないのだ。

父から放たれる言葉は、いちいち親心の欠片もない。

「分かったなら、次の指示があるまで待機だ。私は今、忙しい」

そう云い捨てて、パトリックはステラを退室させた。

パトリックは、この時“オペレーション・スピッドブレイク”の準備に取り掛かっており、多忙だった。

この日、既にアフリカ南部では第二次ビクトリア攻防戦が開始されていた。既にアフリカに滞在する地球軍の戦力は、風前の灯の状態にあつたため——攻防戦は、今日中には片が付き、あつという間に勝利で終わると踏んでいた。

しかし、その予想は、見事に裏切られた。

日が暮れ、夜になった。

執務室にて——パトリックは、信じがたい現実を突き付けられていた。

執務室に慌てて飛び込んで来た、彼の側近を務めるレイ・ユウキにより、思わぬ報告を受けたのだ。

「——壊滅?! 壊滅とは、どういうことだ!？」

思わず憤り、パトリックはダンとその場に立ちあがる。

汗を流したユウキは、乾いた声で報告を続けた。

「詳細は現在確認中です。しかし、ビクトリアへ侵攻したモビルスーツ部隊の内——『半

数以上は撃墜された』との報告が」

それはパトリックにとって、心外も甚だしいような事後報告だった。

「莫迦な……ッ、相手はナチュラルだぞ!? アフリカ南部の地球軍の戦力は既に矮小し、消し飛んだも同じではないのか!」

「はい……そのように報告を受けています。どうやら、連合の戦力がすっかり疲弊していったというのも、間違いではないようですが……」

では、なぜ——「壊滅」などという二文字が、報告として飛び込んで来る?

レイは先を続けた。

「さいわい、ビクトリアへ侵攻したのは、偵察と戦力調査を兼ねた先遣隊だったそうですので、ジブラルタルに構えた本隊は無事だとの報告も上がっています」

パトリックの眉間に寄ったしわが、なかなか戻らない。

それほどまでに、意外な結果に憤っているのか。

「ですがこうなってしまうては……侵攻作戦の見直しも、視野に入れるべきではないかと」

「ビクトリア基地の陥落、そしてビクトリア湖に存在するマスドライバー、ハビリスの接収は、オペレーション・ウロボロスを完遂させる上で前提となるべき任務だ、あの地から退くことは許されん!」

「しかしっ……」

アフリカ南部を制する南アフリカ統一機構は、その領土の殆んどをザフト軍の地上部隊に奪われ、ビクトリア陥落は目前まで迫っている状態にある。

数日前にパトリックがみずからアフリカ戦線の強化案を発議し、ジブラルタル基地に戦力を送り込んだのも、ビクトリア基地のマスドライバーの掌握が、オペレーション・ウロボロスを実行する上で必定となっていたからだ。

しかし、報告では、ビクトリアへ侵攻した先遣隊——全体率で見て、ジブラルタルが誇るザフト軍の戦力のおよそ三割が、振り返ちにあつたと云う。

——あり得ない話だ！

パトリックが、怒りに任せて叫んだ。

「生き残った先遣部隊の報告では、ビクトリア基地の中枢部に、謎の円盤型の要塞が建造されていたとのこと……！ 詳細は不明ですが、これにより部隊は壊滅し、先遣部隊は激しい損傷をこうむつたと……！」

「な、に……ッ！」

「以前までは、そんな要塞は確認されていなかったそうなのですが……」

ニュートロンジャマーがもたらした弊害は、ザフト軍にとつても大きなものとなつた。

宇宙からの衛星による通信ができなくなり、地上の様子を覗くことさえもが難しくなったのだ。副産物として電波妨害は長距離通信を不可能に貶め、レーダーを攪乱させる。これによりザフト軍は、ビクトリア基地が誇る戦力を現地に赴いて確認せざるを得なくなった。——よって先遣部隊が先陣を切り、謎の円盤型の要塞がビクトリア基地に新設されていることを知る。しかしその後、要塞によって部隊は謎の壊滅を遂げたとされている。

「このまま無策にジブラルタルから攻撃隊を送つても、結果は——」

ナチュラルの造り出した謎の要塞を前に、コーディネイターであるザフト軍が、またも敗北するというのか？

そんな……そんな馬鹿な話が、本当にあり得るのだろうか？

「かの要塞を突破し、ビクトリアを制圧するためには、要塞から放たれる砲火を防ぐだけの強力な盾と、要塞を破壊しうる強力な武装が必要です」

「……………ッ！」

パトリックは、焦っていた。

第一次ビクトリア侵攻戦が敗北に終わっている以上、同じ過ちを、二度と繰り返すわけにはいかない。議長に就任する前に、自身が担うこの計画——オペレーション・ウロボロスが頓挫・破綻するようなことになれば、為政者としての多くの信用を失う。そう

なれば、議長へ選任されることさえもが危ぶまれる。

——なんとしても、ビクトリア基地は落とさねばならない……！

まして明日は、血のバレンタインの一周忌なのだ。

各所ではその追悼式典が催され、パトリックは多忙につき、そこに参列することは出来ない。亡くなっていった同胞たちの弔いに、花を添えねばならないのだ。

——犠牲者達に献花する意味を込めても、この攻防戦は勝利して終わらねば意味がない！

黙り込み、深く逡巡する。

ジブラルタルの部隊と云えども、其処に配備されているのは“シグー” “ティン” “バクウ” “ザウート” “グリーン” と云った量産機ばかり。だが、現地の兵が求めたモノは、新設された要塞を突破するために必要な『盾』そして『矛』——。

その瞬間、考えが、パトリックの頭をよぎった。

「アスランと——ステラをこの部屋に呼べ………！！」

その言葉に、レイ・ユウキはぎよつと目をむいた。

「えっ。まさか、閣下！」

「状況は変わったのだ！ 今の我らには——手段を選んでいる余裕などないッ」

「——！！」

ユウキは唾然として、その指示に従った。

数分後、アスランとステラは、パトリックの執務室へと招集された。

レイ・ユウキはそこで席を外し——部外者のいない、家族だけの空間を造り出した。父と兄妹——親子水入らずの会合の瞬間だというのに、こんな席を設けた当のパトリックの表情は巖と慥然として、強い怒気に満ちているように見える。

アスランは軍服で、ステラは私服で入室している。

何用で呼び出されたのかも分からないアスランと、昼に訪れ、即刻に退室するよう促されたステラは、分けが分からぬ顔を浮かべていた。突拍子がないことを言い出すのは、アスランにとってはいつものことであつたが——パトリックはそこで、慥然として言い放った。

「オマエたちに——新しい任務を与える」

その言葉を聞き、アスランは、優れているはずの自分の耳を疑つてしまった。

——おまえ、たち？

複数系で呼ばれたことに、違和感を隠せなかつたのだ。

「明日の正午、私が全世界へと向けて宣戦放送を行う。同刻、オマエ達は『アプリリウス』を離れ、軌道上で待機するクルーゼ……『ヴェサリウス』と合流しろ」

それはアスランにとっては、父からの復帰命令でもあった。

だが、後に続けられた言葉に、凍り付く。

「その後、直ちに地球のジブラルタル基地へ降下し、今現在、難航しているビクトリア制圧戦に助力するのだ」

しばし時間を忘れ、硬直する。

—— いったい、何の話をしておられるのだろうか……？

アスランは目を丸くして、その一方的な言葉に、疑念を抱くばかりだ。

ジブラルタル地上部隊の、助力？ 軍服に身を包むアスランにその指示を煽るならば、それはなんとか、了承できる。

—— だが、ならばどうして、この席にステラを呼んだんだ……？

父の言い分が、どうしてもアスランには正確に読み取れない。

次の言葉で——その意味を知ることになった。

「ステラ。オマエには専用の機体を与える」

唐突に云われ、ステラの目が開く。

ハッと息を呑み、紡がれた言葉を待つ。

「そうだ。——ザフトへの入隊を許可する」

云いながら、パトリックは立ち上がり、女性用のザフト軍の赤服をデスクから取り出した。これを差し出し、ステラへと突きつける。

有無も云わせぬ会話展開……いや、会話にすらなっていない、パトリックの一方的な軍事通達に、ステラは哑然としながら「それ」を受け取った。受け取らざるを得なかった。傍らのアスランもまた、開いた口を閉じれずにいる。

「『プラント』のために戦いたいと云っていたな。……私はオマエの父として、その言葉信じてやる」

「えっ……」

「オマエはこれより、その軍服に袖を通し、ザフト軍の一員となれ。工廠でG A T—X 4 01『ディフェンド』を受領した後、アスランと共にビクトリア制圧戦に参加するのだ」

「ま、待つてください！ 父上！」

矢継ぎ早に話される内容に、アスランも頭がついて行っていないのだろう。

激しく困惑しながら、息子は父を問い詰めた。

「機体を与えるとは？ それにザフト軍の赤服を、捕虜にこんな形で授与するなど……！」

よりにもよつて——機体と軍服、両方を与える相手が、ステラなのだ。

彼女はこれまで、地球軍で戦い、ザフト兵を傷つけて来た経緯がある。兄としてのアスランはその事実を咎めたいわけではないが、そのような人物に、軍の最重要機密である「デیفエンド」と——数多の兵士がそこに袖を通すことを夢見る赤服を手渡すことに、疑惑を感じざるを得ない。ましてザフト軍の赤服は、きちんと手続きを経過した上で、アカデミーでも優秀な成績を残した者だけが着用することを許されたもの。

(たしかに今のステラの能力を鑑みれば、——それがどんな過程で養われたものだとしても——赤を着るのに相応しい技量と、身体能力を持つているかもしれない……！)

だが、能力だけで世間が渡つていけるわけではない。

人格的にも相応の資格と資質が求められ、その点で云えば、ステラは洗脳された過去があり、精神的に未熟な点も多いのだ。

動揺するアスランに、パトリックからの返答は厳しい。

「地球軍が開発したと思われる、ビクトリア基地に構えられた、素性すら分からぬ謎の巨大要塞——これを突破するためには、其処から放たれる砲火を防ぎうる最^{アリユミユレリユミユール}強^スの盾を持つ「デیفエンド」と、一瞬で要塞を破壊しうる俊敏性と最強^スの槍を持つ「イージス」の参戦が、必要不可欠なのだ」

「えっ——」

「オマエたち兄妹で協力し——ジブラルタルの兵達の道を切り開け」

最強の盾として——GATシリーズの中で最硬の防御力を誇る“デیفエンド”と、最強の槍として——GATシリーズの中で最強の突破力を誇る“イージス”の協力が、不可欠なのだ。パトリックは云う。

どちらの機体も、“ジブラルタル”に配備された、従来のザフト軍モビルスーツの性能を凌駕するものだ。

——しかし。

アスランの疑念は、なおも消えない。

「だからといって、なぜ、ステラなのですか……」

政治に利用し、そのあとは、戦争のために妹を利用しようというのか？

たとえステラ自身が、戦うことを望んでいたとしても。

今まで過酷を強いられてきた彼女に、さらなる過酷を与えようというのか？

「ビクトリア基地の制圧は、何としても近日中に執り行わねばならない。現時点でデیفエンドあの機体を、ステラ以上に扱える者はいないのだ！」

ステラによって、独自に書き換えられた“デیفエンド”のOSのことも懸念すれば、その説は間違つてはいないが……。

パトリックは、力強い言葉をさらに続ける。

「かのアフリカ大陸は、既に七割がザフト軍の支配下にあり、マスドライバーの掌握は目
前だった……！　だが、それを押し返すほどの兵器を、あのナチュラル共が開発したと
いうのだぞ！　急ぎビクトリアを制圧し、その兵器の解析を進めなければ、今後のザフ
ト——「プラント」にとって、いかなる脅威になるか分からん！」

「……………」

パトリックはデスクを離れ、動揺するアスランの傍ら、ステラの許へと近寄った。

「——わかるな？　ステラ」

「ステラ。戦っても……いいの？」

ステラは首を傾げ、パトリックに問う。

なにしろ、昼に訪れた時、他でもない父にその意志を却下されたばかりなのだ。それ
が夜になって、急に許容されるということは、ステラにとっては容易く理解できたもの
ではなかった。

そんなステラの逡巡を、見透かすようにしてパトリックは云う。

「明日が、何の日か知っているか」

アスランはハツとして、ステラは再び、首を傾げた。

「2月14日、オマエが地球軍に連れ去られた日。そして——」

そこまで聞いて、ステラは思い出す。

パトリックは、告げるようにして彼女に言い聞かせる。

「——レノアの命日だ」

一年前の明日。

核ミサイルは弾け、レノアは死に、爆発に巻き込まれたステラは、地球軍に連れ去られた。

ステラはそれから、三年間の戦闘訓練と洗脳教育を受け——「ガイア」そして「デストロイ」のパイロットとなった。

そして、命散ったと思つた時——二年の歳月をさかのぼつて、この時代に帰つて来た。帰つて来た意味——それはステラが、アスランを守るため。

「アスランを支えてあげて欲しい」と願つた、レノアの想いに——答えるためだ。「ビクトリア周辺に跋扈する地（ぼっこ）球軍を滅ぼし——血のバレン（レノアを殺した者共）タイン（ア）の追悼式典に、花を添えてやるのだ」

「……！」

「ステラとアスラン。——他ならぬオマエたちが、レノアの墓前に凱旋（勝利）の花束（報告）を手向けろ。いいな」

ステラは、その言葉に大きく頷いた。

それが——レノアの想いならば、ステラはそれに応えるだけだ。

「うんっ、わかった！」

差し出された軍服を掲げ、

ステラは己をザフトの身に置くことに、何の疑念も抱かなかった。

そうして、現在に至る。

ステラはザフトの軍服に身を包み、これより“アプリリウス”を発つ。

「なんとこの横暴を……パトリック！」

「？」

プロパガンダに利用するだけでは飽き足らず——みずからの娘を、むぎむぎ戦場へ送り出すというのか？

ザフト軍に入隊させるためにも、様々な手続きが必要だ。彼はそれを権力の下に一切として省略し、勝手にことを進めている——越権行為に他ならない。

よもやそれを、最高評議会議長である自分にも黙って……？

——まさか……。

シーゲルはそこで、考えが過った。

ステラは——「シーゲル様に、お別れを云つて来い」と、パトリックに指示されたと云つていた。

——おわかれ……？

その言葉に、パトリックが込めた意味を伺う。

自分へとあてつけるような、離別の言葉は、

——「それ」はもしかして、パトリックによるメッセージなのではないだろうか？

次期最高評議会議長に選ばれること見越して、パトリックは確信に満ちている。

こうして「ステラが会いに来たこと自体」が、パトリック・ザラによる、シーゲル・クラインへのメッセージ——。

ステラはこうして軍服を着た姿をシーゲルに見せに来た。これより彼女はザフト軍に入り——これから「デیفエンド」で出撃し、おそらく、ビクトリア基地は陥落するだろう。そうなれば、パトリックは権威を失墜させることもなく、まず間違いなく、任期の切れたシーゲルに代わって、議長の座に就く。

まるで、かつての盟友を頂点から蹴落とすかのように。

最高評議会議長としてのシーゲル・クラインに——パトリックは「おわかれ」を告げに来たのだ。

ステラという、最大の皮肉たる使者を寄越して——。

ステラを入隊させ、今のパトリックには多少の越権行為を働いたとしても——そんな権限は、もうじきパトリックの手に入る。

最高の権力を持つ、最高評議会議長に選任される日を見越して——。

取らぬ狸の皮算用とは云うもの——ここまで悪意と確信に満ちた皮算用は、初めてだ！

「はっ。おわかれ、か……！」

シーゲルは、嗜虐に笑みがこぼれた。

——どうやら私は、パトリックには本気で疎まれていたようだ……！

かつての盟友として築き上げた信頼関係は、いったい何処にいつてしまったのだろう。今のパトリックの目からすれば、中立を訴えるシーゲルは、それほどまでに邪魔なのだろうか……。

「そうだな、ステラ……。きっと私はもう、滅多に君と出会うこともなくなってしまうのだろう……」

——評議会とは、もう付き合ってはおれぬようだ……。

強硬世論を抑えるだけの力も、既に持ち合わせてはいない。

戦争ばかりを推進する評議会を止める言葉も、もはや存在しない。

袂を分かっしか、ほかに道はないようだ。

云いながら、シーゲルは首を傾げたステラの肩を掴んだ。

「だが忘れないでくれ、ステラ。武力だけが、平和への道ではない——戦うことだけが、正義ではないのだよ……！ 君には、それだけは分かっていて欲しい」

「シーゲル……？」

「今の君には、過酷なことに、戦うだけの力があるようだ……。力はたしかに、守るためには必要だ……。だが忘れるな。その力は、決して奪うために使われるべきものではないということ——」

地球軍によって、不幸にも養われた力を——ステラは己の意志で「プラント」のために振るおうと決意した。

その決意に、シーゲルが水を差す筋合いはない。——それがたとえ、パトリックの筋書き通りのストーリーであったとしても。

だが、

「勝手な理屈と正義で力を振るえば、それはただの暴力でしかないんだ……！ 滅ぼし合うだけでは、決して平和は訪れない。そのことを——君には覚えていて欲しい」

「……わかった」

ステラが返事を返したところで、時刻は正午の刻限を差した。

それに反応したステラが「行かなきゃ」と短く云い、シーゲルは、彼女を外まで送り

出した。

それから数十分。

シーゲルひとり空しく残された執務室では——相変わらず、放映されたままのパトリックの宣言が続いている。

「我々は、必ずビクトリアを制圧します！——これこそが、我々の未来を切り開く第一歩だと信じて！」

映像は一転し——「イージス」と「デイフェンド」の機体が映り込む。

「その先陣を切るのは、私の息子達だ！——彼らの健闘を祈って、私はこれを送り出します」

ザラという名そのものを……英雄の代名詞にでもするつもりだろうか、パトリックは。とんだ役者だと、シーゲルは嗤った。

もはや、彼と和解することは出来ない……。

——そして、誰もパトリックを止めることは出来ない……。

映像の中——「イージス」と「デイフェンド」が飛び立った。父の号令の下——息子と娘が、機体を駆って飛翔したのだ。

窓の外に音を聞き、シーゲルは外を見遣る。

遠方に、飛び立っていく二機の機影を捉える——真紅と真鍮——片方はたった今、

シーゲルが送り出した少女が乗っている。

——行ってしまった……………。

シーゲルは、深く顔を落とした。

ステラ。

止まらない戦火の中で——どうしてだか、いつだって彼女は、戦争の中心にいる。

……いや、逆だろうか。

彼女を中軸に——戦争が動き始めている？

彼女が向かう先——これから、きつと多くの血が流れていくのだろうか。

それを経験して、彼女がこれから何を想い、どう動いていくのか。

拡大するばかりの悲惨な戦争の中で、それでも彼女が、その純真な心を持ち続けていけるのか。

シーゲルは、そればかりを憂いだ。

『さまよう上』霊』

「認識番号二八五〇〇二、アスラン・ザラ。国防委員長の命により帰投しました」

アスランが「ヴェサリウス」へと帰投した時、これを迎え入れたのはクルーゼとニコルだった。出迎えたクルーゼが滔々として話す。

「よく戻った——と云いたい所だが、そう長い時間をゆったりすることは叶わんようだな。議長閣下から顛末は聞いているよ」

評議会から下された命によって、アスラン達はこれより地球へ降下し、ジブタルタル基地の勢力支援に赴く。

そんな彼らに劳いの言葉を掛けるラウであるが、その背後に続いていたニコルは、ひどく驚いた顔を作っていた。一方でラウは驚くこともなく、訳知り顔を浮かべ、アスランの背後に構える「少女」へと声を掛けた。

「閣下がキミを特例としてザフトに迎え入れたことも耳にした。——いろいろな難しい情勢ではあるが、アスランのため、そして議長閣下のため、気張ってくれると良い」

クルーゼが声を掛けた相手は、アスランの背後に隠れるように縮こまっているステラであった。

ニコルは少女の姿を認めて驚いた。敵として拿捕した彼女が、まさか赤色の軍服に身を纏って帰って来るなどと想像にも及ばなかったのだろう。

声を掛けられたステラは、妙に落ち着きがなかった。

アスランは自身の袖を掴んだまま、離そうとしない彼女を見て、懷疑する。

——隊長に対して、物怖じしている？

ステラは、ラウに対して困惑したような表情を浮かべている。決して人と打ち解けるのが早い彼女ではないが、それにしても、なにか身構えているようにも見えた。

「…………どうしたね？」

ラウは拍子抜けしたように訊ねる。

ステラは「警戒している」というよりも、クルーゼという人物に「どう対応して良いのか分かっていない」様子だった。怯えているわけではないが、だからと云って近寄ろうともしなければ、視線を外すこともしない。一定の距離は保ったまま、アスランの背後から恐々とした上目遣いで彼を見据えている。

ステラは彼を、じいと観察していた。

——ネオに…………似てる……………。

男の姿が、ステラの中で、どうしても別の人物の姿が重なってしまふ。肩まで伸びた波打つ金色の長髪。悠然と構えられた精悍な体格。顔を覆った奇妙な仮面——何から何まで、特徴が似通っている。それは外見的な話に限らず、内面的なものまでも酷似しているような気がする。声や匂いや、雰囲気だ。

論理ではない感覚、直感が眼前の仮面の男を、ステラの中の仮面の男ネオ・ロブリークと重ねて視てしまふ。

以前までなら、きつとその懐に喜んで飛び込んでいただろう。

ネオのことはすぎだった。平和な世界では、生きている価値すら認められない強化人間達に生きる世界、戦争を与えていた男だったからだ。

だが——それだけが彼女が彼を好いていた理由である以上、今の彼女には、そんな男を慕う理由はない。ましてや、慕えそうにもない。

——目の前にいる男も、ネオに似てる……。

だから、なんだか怖い。

でもこの人は、ネオじゃない。

この人は、ステラを利用したりはしないかな……？

「……なまえっ……」

ステラが竦みながら、やつとのことまで声を絞り出した。

クルーゼは小首を傾げ、すぐに「ああ」と声を漏らす。

「ラウ・ル・クルーゼだ。アスランのいる、クルーゼ隊の隊長さ」

「ラ、ウ……？」

名前を聞いて、納得する。

似ているが、やっぱり違う。

——やっぱり、ネオではないんだ……。

そう思えた時、ステラの中の警戒心は、いくらか払拭された気がした。

「ラウ……。ネオに、似てる」

云うと、ラウは意表を突かれたような表情を浮かべた。

彼女の横に据えるアスランが声を発す。

「ステラ。隊長を呼び捨てにするのは……」

「なに、構わんよ。アスラン」

途端に制され、アスランが「しかし……っ」と慌て出す。

言いくるめるような言葉が紡がれた。

「元々、このザフトには階級は存在しない」

アカデミーで習わなかったかな？ と付け足される。

「何色の軍服に身を包もうと、一端のモビルスーツ乗りである以上、指揮官はいれど、原

則ザフト兵はみな対等の立場にあるのだよ」

釈然としない顔を浮かべるアスランは、理解はしていたが、その教えにうまく納得できていない。

たしかに、ザフトのほとんどは志願兵で構成されている。ザフトといえど、名義上は義勇軍なのだ。

軍組織としては珍しく階級制度を採用せず、縦の繋がりを重視するより均一な横並びの体系を取っている。それは一兵卒にとつても、上官からの命令を待つより、各自の判断で行動する権限があるということでもあり——兵士ひとりひとりの、士気の高さが伺える。同時に、それは兵士達の判断力や戦闘力の高さがあつて初めて実践できるものがあり、コーディネイターだからこそ実現できている組織体制でもあるのだ。

「いい機会だ、アスラン。キミも私を名で呼んでみないか？」

「えっ!？」

「むろん、キミが良ければ、の話だがね」

云われ、アスランはたじろぐ。

まさか、隊長を呼び捨てにするなんて図々しい度胸は持ち合わせていない。彼が許可しているのだから、別に構わないのだろうが、要はアスランの心持の問題だった。

「い、いえ……今はまだ、ちよつと………」

云いながら、アスランは顔を伏せた。ラウは何事もなかったかのように、そうか、とだけ答えた。

ふたりのやり取りを聞きながら、ステラはまた、強い錯覚を覚える。

——なだめるようなやさしい声調も、はなしかたネオにそっくりだ……。

でも、そのやさしさが——本当は「ひどく残酷なものを隠すためにある」という事実も、ステラは知っている。

——なつかせるために、やさしい声を出す人もいる。

ラウは、ネオとは違うひと。

だから、悪いひとつで決めつけるのは、本当は良くないことだ。もしかしたら、本当に悪いひとつではないのかもしれないから。

——でも、なんだか好きにはなれない。

どこか冷たい印象があつて、鋼鉄を背筋にあてこすられたような寒気がする。

仮面のせいかもしれないが、表情や言動の裏には何か人間らしくない……鬼気迫ったモノを潜めているような……。

ステラは思う。——もしかしたら、この人も何かを隠しているのかもしれない。

その仮面自体が、周囲と分かり合うことを拒絶した——心の鎧のようだ。仮面を通して世界を見て、周囲に対して——何か大きな嘘を吐いているような感じがす

る。

心の底からは、決してステラ達を信用していないかのような既視感を憶えてしまつて、嫌悪はないが、決して好感を抱こうとは思わなかった。

「あの、イザークとディアツカは？」

アスランがそこで、この場にいない同僚達について尋ねた。

イザーク達がもしもこの場所に居合わせるなら、おおよそステラが赤服を着ていることに激しく抗議の声を上げるだろう。いちいち釈明するのは正直云つて面倒だが、なんとなく気にかかったのだ。

その問いには、ニコルが答えた。

「イザークとディアツカなら、今は地球ですよ」

「えっ?」

「前の戦闘でちよつとばかりやんちゃして、地球に落っこちちゃったんです。さいわい機体ともども海面に墜落したらしく、ふたりとも無事だそうです」

「降下地点から見て、ジブラルタル基地に身を寄せている可能性もある。君達があそこに降りたら、もしかしたら出会う機会もあるかもしれないよ」

それはまた面倒な話だと、率直に思ったアスランである。

話を戻して、ラウは続けた。

「キミ達がザラ委員長直々の特務を帯びている以上、残念ながら私達は、軌道上から降下を見送ることしかできないが……閣下は君達の戦功に非常に期待しておられる。——ジブタルタルの地上部隊を、ぜひとも勝利に導いてくれたまえ」

睦言のような言葉を紡ぎながら、クルーゼは訳知り顔でステラの方を一瞥した。

「キミに関しては、ザフト兵としての初陣——ということだから……」

皮肉な言葉に、ステラは返す言葉を失う。

アスランもまた、フオローでできるだけの言葉を、探し出せずにいた。

「降下準備が整うまでは僅かに余裕がある——地上に降りれば直に戦闘になるのだろうか？ すこしでも身体を休めて置きたまえ」

その言葉に、ふたりは頷いた。

「——じゃ、四時間後だな」

『砂漠の虎』の駐屯地、バナティーヤ。

栄えて見える、人々の往来が活気を表すこの街に、キラ達は物資の補給のためにやって来ていた。不足した食料、飲料水、生活用品、その他もろもろの調達のため、明けの砂

漠と「アークエンジェル」の双方が補給を求めたために、キラはその「お遣い」に任せられたのだ。だがキラはモビルスーツパイロットであり、野戦任官といえ少尉の階級を与えられている。お遣いという雑務は、もつとキラ以外の、手の空いた者に任せられた方が良いのではないかと余人は思うだろう。

だが、キラがこうして外に足を踏み出したことには、しっかりとした理由があった。マリユートと、そしてムウの計らいである。

少し前に、マリユートとムウの間では貴重な「ストライク」のパイロットに関する——ちよつと眉を顰めたくなるような——ある話題が持ち上がった。淀みのない露骨な云い方をすれば——キラがサイの恋人を寝取った、という話である。

フレイ・アルスター。サイの婚約者である。

その事実がサイ本人の耳にも入り、どうやらフレイのことを巡って、彼自身もキラとひと悶着あつたらしい。

あの平穩なキラが——まさか、そんなことをするなんて。

「自分しかこの艦を守れない、つてひとりで思い詰めて——おかしくなつてフレイさんとそうなつてしまったのか。そうなつてしまったから、おかしくなつてしまったのか……」

「ステラが居なくなつて……けどあいつ、ひとりで急に立ち直つてさ。——なんだか、嫌

な感じはしてたんだよなあ」

ムウ・ラ・フラガという男が、類まれなる直感力を持つていることは、過言でも、彼自身の自惚れでもない。——彼の予想は当たるのだ、良い時も、悪い時も等しく。そんな彼自身が、かねてより薄々と抱いていた「やな感じ」が、現実のものとなった。

ステラが抜けたことで、恐らくは、キラの心にぽっかりと大きな穴が空いたのだろう。もしかしたらキラは、その穴をフレイ・アルスターという少女の存在で埋め合わせているのかもしれない。

それはつまり——フレイ・アルスターをただの「ステラの代わり」にしていると
いうことだ。

考えながら、渋った顔をする。

そんな儂い感情が親友の婚約者を寝取る、という結果に繋がったのなら——それは明らかに好くない傾向だ。フレイって嬢ちゃんも嬢ちゃん、サイっていう婚約者がいながら、どうして「それ」を許してしまうのかと思うのが——若い子達の考えることは正直、よくわからん。

「ともあれ、うまくないな。今の坊主の状態は」

若気の至りの一言で済むのであれば、こんな話にオトナが首を突っ込んでいく必要もないだろう。だが、キラの精神状態は、少なくとも艦の今後の安全に大きな影響を及ぼ

すものであるだけに、こればかりは看過することもできない。

キラはおそらく、自分の苦痛を分け合える、理解してくれる少女の存在に依存しているのだ。

——思えば、ふたりの『声』は、どこか似ていたかもしれない。

そう思うと——ますますキラが、フレイの『存在』を、ステラに重ねている気がしてならない。

——ああ、なんて厄介なんだ。

崩れかけたキラのメンタルは、下手をすると『砂漠の虎』より、よっぽど手強い存在かもしれない。

「何か、ストレスの解消法に心当たりはありますか？　パイロットとして、先輩でしよう？」

「解消法……。解消法ねえ……」

云いながら、ムウは視線を泳がせる。悩みつつ周囲に目を配り、その視線はやがて、ムウを見つめるマリューで止まった。

——よく見れば、この艦長つて女は、意外といいスタイルをしている。

ふくよかな曲線が描かれ、その中にも締まった部分が肢体に多い。女性らしい体つき
の彼女だと、軍服を着ているだけだというのに、妙になまめかしく見える。思い探れば

自分の好みタイプかもしれない……と、そんな邪心が頭をよぎった所で、当の彼女の冷ややかな目が、自分を注視していることに気付く。下心を見透かしたような目だ。

「あー……」と誤魔化すように唸り、「あんま参考にはならないかも」とムウが云う。「の、ようですわね」ひどく冷めた声で返された。

半分しか開いていないその目には、「男ってやつは」という軽蔑の色が滲んでいる。ムウは余裕のない心境で、ようやくまともな進言を呈した。

「ま、外の空気でも吸わせて、別角度から刺激を与えてやるしかないんじゃない？ 戦闘張りの青少年がずつとこんな艦内じゃ、陰気臭いつしよ？」

「そう、ですね……」

そうして、キラはバナデューヤの町へとやって来たのだ。

その街は、砂漠の強い日差しの下、人々の往来が出来、活気で満ちていた。物売りの声が響き、とても平和そうに見える——『虎』の本拠地の割には。

私服に着替えたキラが、そんなことを考えていると、少し離れた場所から、芯のあるぶつきらばうな声が響いた。

「おい、何ボサツとしてんだよ！ 早く行くぞ！」

「あつ。ごめん」

声を発したのは『明けの砂漠』の一員である、カガリ・ユラと名乗る少女だ。

彼女は、キラと面識がある人物だった。『ヘリオポリス』にてカトウ教授を訪ねて来た客人にして、キラが無理やりシエルターに押し込み、それきり別れてしまったしまった硬質な金髪を揺らした少女である。少女といつても、性格は非常に粗削りで、男勝りだ。レジスタンスの戦闘員の一人であることから、それは自明だが。

もう両腕に持てないよ、とキラが抗議の声を上げるほど、大量の買い物物を済ませたところで、ふたりは街の一角にあつた雰囲気の良いカフェに腰を下ろした。

買い物が終わわり、合流予定時刻まではまだ余裕がある。

キラはこの時、もうちよつとだけ外を出歩いていたい、という意欲に駆られていた。

——気分転換がしたい、

すこしでも、自分の腹の底に溜まり込んだ鬱屈とした暗い感情を、外の空気を取り入れる吸うことで、すこしでも払拭したいという気持ちだったのだ。

「大方の買い物は済んだな。けど、このフレイツてヤツの注文は無茶だぞ? ——」

「リザベス」だのなんだの、こんな香水や化粧品、この街にあるもんか」

「(ズィ)めん」

「はあ? なんでおまえが謝るんだよ?」

「……あつ、そうだよね。(ズィ)めん」

また謝るのか、とカガリは深くため息をついた。

——こいつはなんだか、根本的に暗い気がする。

“ヘリオポリス”で私をシエルターに押し込んだ時は、もつと活き活きとした目をしていた——いや、というよりも、少なくともこんなに表情が死んではいなかった。

キラは座椅子に腰かけ、昨夜のことを思い出す。

昨夜——キラは、フレイを抱いた。

キラは降下前、仲間達を守る決意をした。したには、したが——キラが選んだその「仲間」達は、結局はナチュラルで、やはりキラの「同胞」にはなり得ないことに気付いてしまった。友達である以上、キラは彼らを守らなくてはいけない。だが、自分ひとりだけがコーディネイターであるという事実によって、どうにもその友情が、一方通行であるかのように感じてしまう時がある。

どうしようもない寂寞感に駆られ、そこに追い打ちをかけるように、戦場でもキラは孤独に戦わねばならない。

度重なる孤独感に苛まれ、苦しくなった、

そんな時、フレイだけが、キラの心に触れて来てくれたのだ。暖かい言葉をかけ、労わってくれた。身体を捧げることも、彼女は厭わなかった。

だからキラは、そのぬくもりに身を任せた。

——そんな過去の事実は今、死にたいほど後悔してる。

昨夜のキラの部屋では、電気の消えた暗い室内に、女性の官能的な『声』が響いていた。彼女の『声』と体温に呼応して——キラは行為を経ることで、これまで溜めこんでいた苦惱ストレスを一気に放出でき、彼女と繋がることで孤独感から解放されるとさえ信じていた。

だが——現実はず違った。

行為をしている時、キラは気付いた。その最中に、なぜだか死にたくなつた。

フレイから放たれる『声』を聞く度に————キラの目には、なぜかまったく別の女の子が映つたのだ。

「……………」

室内に響いた『声』は——フレイものとは決して違う——まったく違う女の子の『声』にししか聞こえなかった。

目の前の彼女に集中することなどできず、意識だけは、ザフトに連れ去られた後の遙か遠い方角へ飛んでいた。——肉体と精神を遠く引き剥がされたような気分になつて、事後になつて、ひどい疲労感と虚無感に包まれた。

終始、キラはその『声』に金髪の少女の幻覚を視————たったの一度も、フレイをフレイとして視ることが出来なかつたのだ。

その事実が、却つてキラの中に激しい罪悪感を植え付ける。

——前々から……フレイにステラの幻影が『重なる』ことは、度々あった。

だが昨夜は、それが露骨に現れた。

だからこそ、思ってしまうのだ。

——僕は本当は、フレイを求めているわけじゃ、ないのかもしれない……。

結局、彼女もナチュラルで、キラの苦しみを分かってくれる存在ではないからだ。

今さらである。

彼女と行き着く所まで行ってにおいて、サイのことまで裏切っておいて、そんなことを考えるのは最低かもしれないが、最近のキラの中では、そんな疑惑ばかりが増している。

そう思い悩みながら、暗澹な顔をしていたのだろう、カフエのメニュー表に目を通していたカガリが、そんな時、声を発した。

「——オマエさあ、友達すくないだろ？」

なんて急に失礼なことを言い出すんだろう、この女の子は。

まったく脈略がない。

キラは呆気に駆られた顔をした。

「な、なに、急に？」

「いや、なあんか浮かない顔してるからさ。辛気臭いつていうか、陰気臭いつていうか……そんな顔してるヤツの所になんか、誰も寄って行こうとは思わないだろうな、と思っ

てさ」

キラは、意表を突かれたような気分になる。——いつたい、どんな顔をしていたんだろう、僕は。

「何か食うか？」とカガリはメニュー表を手渡した。受け取ったキラがメニューの一覽に目を通す。さすが食文化も違うせいか、見たこともないような料理ばかりが並べられていて、何が美味しそうなものか検討が付かない。

妥協して「きみは何にしたの？」と尋ねたキラに、カガリは「これだ」とメニュー表の中の一品を指差した。ドネル・ケバブと書かれている。——よし、じゃあそれにしよう。

「おつ、来た来た」

店も空いていたからか、ドネル・ケバブはすぐに運ばれて来た。

「さ、おまえも食えよっ！　まずはこのチリソースをかけてだなあ——」

「————あいや待ったっ！」

カガリが嬉々として云いながら、チリソースに手を掛けた瞬間——突然、脇から妙な男の声割り込んで来た。

声を上げたのは、見慣れぬ上に目も慣れない異装に身を包んだ男だった。どこの国の意匠や文化を凝らした服なのか、派手な柄のアロハシャツに加えて、大きなサングラス、

カンカン帽を身に着けている。きわめて独特な威光を放ったその姿は、喧噪な街の景観に溶け込むより以前に、明らかに目立っていた。むろん、悪い意味で。

「ケバブにチリソースなんて何を云つてるんだ、キミは！　ここはヨーグルトソースをかけるのが常識だろう！」

「いや……なんなんだよ、おまえはっ」

カガリでなくとも、こういう反応になっただろう。

「いや常識というよりも、もつとこう——そうっ！　ヨーグルトソースをかけないなんて、この料理に対する冒瀆に等しい！」

顔を顰めたカガリの云うなどつゆ知らず、胡散臭い雰囲気を放つ男は力説している。

無視されたことが、よほど気に喰わなかったのか、カガリは不機嫌そうに、今度は男の力説を無視してケバブにチリソースをぶっかけた。力説する男の「ああッ！」という悲鳴が響く。

「ほら、キラ。あんなヤツの云うことなんて放つといて——やるよ、チリソースだ」

「待て待てキミ、彼まで邪道に落とす気か!?」

「何が邪道だ!?!」

カガリがカツとして云う。

目の前で繰り広げられる漫才的な会話が、あまりにも息が合っていて、キラは半分唾

然とし、半分笑いながらふたりを見ていた。

「ケバブにはチリソースが当たり前だろうが！」

「いいや、ヨーグルトだ！ ヨーグルトソース以外、考えられない！」

思わずお金を払ってでも続きが見たくなるような会話に、キラは思わず吹き出す。――

――こんな楽しい会話が聞けただけでも、外に出て来た価値はあったかもしれない……。

――でも、この男性ひとはいつたい誰だろう？

初対面でカガリと食らい合う当たり、よほど度胸があるというかなんというか、とても気風きかぜのよさそうな人物ではあるが……。

キラが思いを巡らせていると、次の瞬間――妙な『風』が、キラの肌に触れた。

――

一瞬にして大きな危機感を感じ取る。キラは咄嗟にカガリの腕を掴んで、なかば強引に引き下げると、彼女の体を己の身に寄せた。同席の男はテーブルを蹴り上げ、その陰に身を潜める。キラもすかさずその物陰に飛び込んだ。慌ててキラがカガリの無事を確認しよう目を向けると、彼女は先ほどみずからがぶっかけたチリソースの餌食になって、それを頭から見事に被っていた。一瞬誰だか理解に苦しむような姿になっていた。

「テロですか!？」

――ここは、平穩な街ではなかったのだろうか？

キラが考えていると、現実を思い知らせるような声が響いて帰って来た。

「ザフト駐留下の土地は、いっだって『ブルーコスモス』の襲撃の的だよ、少年」

足首のホルスターから拳銃を取り出していた男が叫ぶ。武装した襲撃者達が現れるのを確認して、そのひとりひとりを正確な射撃で撃ち殺していく。

だが、次の瞬間——キラは男の死角となる地点から、機銃を構えたふたりのテロリスト達が現れるのを見つけてしまった。

「死ね、コーデイネイター——宇宙の化け物め！」

「蒼き清浄なる世界のために！」

口々に怒号を叫ぶ襲撃者達であつたが——彼らはやがて、一般人に偽装して周囲にちらばっていた、彼らとは違う武装兵達の手によつて蹴散らされていく。

そうして騒ぎが収まると——さっきまでカガリと言いつ争っていた男は、先ほどの軽薄さが嘘に思えるような、冷静な声で、キラ達に語り掛けた。

「……………無事かな？」

「あ、あなたは…………？」

キラは男を見上げ、誰何したが——その必要はなかったのかもしれない。

『ブルーコスモス』はコーデイネイターを排除しようとする勢力だ。彼らがザフト…………いや、コーデイネイターの駐留を許可しているバナディーヤを快く思っていないこ

とは自明だろうが、こうして物騒な暴動を起こしてまで、命を狙った人物がいるとすれば——テロリスト達が躍起になって、一心に銃口を向けたこの男は？

男が、サングラスを取る。その姿を見て、カガリがハッと息を呑んだ。

「アンドリユー・バルトフェルド——」

男の名はアンドリユー・バルトフェルド。

又の名を——『砂漠の虎』と畏怖される男である。

軌道上の「ヴェサリウス」は、低軌道会戦の直後にアスラン達を迎え入れた。これにより、ジブラルタルへの降下ポイントに辿りつくことは容易かったのだが……。

この時、アスランは「ヴェサリウス」のデッキにて、ひとり窓を眺め、深淵の奥に浮かんだ地球を見下ろしていた。

——父は、ステラまで戦争に巻き込んで、いったい何を考えているのだろうか？

彼女の存在を、連合の非道を訴えるプロパガンダとして政治に利用した後、出来るからという理由だけで「デイフェンド」のパイロットへ選出した。それも、かなり無理のある強引な手を用いてだ。

——そんな理由で彼女を戦場に送り込むのなら、やっていることは地球軍と一緒にではないのか……？

父が考えていることが分からない……いや、正確には分かっているのだ。父はただ、この戦争を早く終わらせたいという願いの下に行動しているのだから。

戦争を終わらせる。——だが、どうやって？

アスランがひとり茫としていると、そんな時、デッキにラウが現れた。

彼は慌てて姿勢を正す。どうやら自分に会いに来たらしい。

「地上から連絡があつてな。あいにく、ジブラルタル基地が、季節的な南下気流で悪天候に見舞われているらしい。——発着に悪影響が出ないよう、地上の天候が落ち着くまでしばしの間、君達は艦内で待機してもらおうことになった」

「あつ……はい、了解しました」

「地球の天候は——『プラント』のようにあらかじめプログラミングされているものではないからな。このような不測の事態も、そう珍しいことではないさ」

云われ、アスランはハツとする。

——そうか。

地球の天気は、人間の思うようにはいかなのだ。

地球は、人智が一切として及ばない領域が存在する世界。——天候から何から、すべ

てが人の手で管理されている「プラント」とは真逆。これまでアスランが見たこともない広大な砂漠や、大量の水溜まり——「海」——が存在している惑星。

ラウは唐突に、こんなことを云い出した。

「こうして見ると——地球とは美しい惑星だな」

仮面の下にある目は、アスランではなく、下方に拡がる地球を見据えていた。

仮面をつけた冷徹な男にそぐわぬ感傷的な発言を受け、アスランは不意に驚いた顔を浮かべてしまう。

「地球には何があると思う？ アスラン」

訊ねられ、動揺する。

「キミは第二世代のコーディネイターだったね。地球に降りた経験は、ないのだろうか？」

「あ。は、はいっ……」

「ならば想像するといい。あの蒼く美しい惑星には、いったい何があり、何が拡がっていると思う？」

唐突に、つかみどころのない質問をされ、アスランは返答に困る。

——なに、とは？

砂漠や海、密林だろうか。あるいは、見たこともない動物達だ。——昆虫や、魚や、鳥類などの。

こんな時、詩的な返事や夢のある返答を返せない自分は、人間として本当に面白くないかと軽く嫌気が差す。

「——人だよ」

思い悩むアスランに、ラウは短く云い告げる。

云われた方の顔が、呆気に駆られた。

「あの美しい惑星にも、結局、人が生き、環境は人に支配されているのだよ」

「隊長……?」

「いったい、何の話を?」

そう云おうとして、その続きは遮られた。

「どれだけ外観が美しかろうと、どれだけ多くの生物が自然の中で生きていようと……結局あの惑星を支配しているのは、人だ。そう云った意味では、地球も『プラント』と本質的には何も変わらない——ということになる」

真逆のはずのふたつが、同じ?

感慨深いような、そうでないような、なんとなく不思議な感覚に囚われるアスラン。

「宇宙に上がったコーディネイターも、地球に取り残されたナチュラルも、所詮は人の領域カクチに収まったモノでしかない」

互いに異質でありながら、似た者同士であるという矛盾が、そこにある。

「そうして競い、己と異なる者を妬み、憎んで、末には争いが起きた。その醜い争いの幕を、人類はいつまでも引くことが出来ず——そうしてあの美しい惑星は、人の手自身に汚されるわけだ」

「えっ……」

「非常に勿体ないことだと思ふのだよ、私は」

それはどこか、ラウ自身の本心のようにも聞こえた。

だからこそアスランは、彼が付けているその仮面が鬱陶しい。彼が今、どんな顔をしているのかを——珍しく覗いて見たかった。

ここまでラウの素顔を覗いて見たいと思つたことは、これまでになかつたらう。

「——『蒼き清浄なる世界のために』と云うのが、ブルーコスモスの口癖さ。彼らはコーディネイターを排除すべく武力を掲げ、銃を用いる——だがそれは矛盾ではないのかと、私は思う」

すくなくとも、銃を用いれば硝煙が生まれる。それは地球にとって僅かながらも『害』をもたらすものであり、その延長戦にある——規模が大きくばれば大きくなるほど——重火器や艦砲は、地球に対する甚大な熱汚染被害を生む。

汚染を生み出す『害悪』兵器を平気で振り回しておいて、何が「蒼き清浄なる世界のために」であろうか。

「本当に蒼き清浄なる世界のことを憂うなら、いつそ彼らを含めた人間そのものが宇宙からいなくなつてしまつた方が、手つ取り早いのではないかね？」

アスランはひゅつと息を呑み、その言葉に身震いを覚えた。

——それは………あまりにも、別角度からの意見だ。

だからこそ新鮮に聞こえるのだろうか、放たれた言葉は、それを放つた彼自身の存在さえも否定している。まるで、自分の死も他人の死もどうでもいいことのようなように語られた。

(身も蓋もない意見だ………)

だが、考え方によつてはその意見も正しい。

間違つていない、ということが——不思議なくらいだ。

地球は美しい。

海があり、砂漠があり、森林が広がっている。

だがそれは原始において『ヒトが造り出したモノ』ではなく——人類が人類として確立する揺籃期よりも遙か太古の時代から、ヒト以外のモノによつて形を成したものだ。

「そう——たとえば人が居なくても、地球という惑星は、蒼く清浄に美しいのだよ」

それを、破壊しているのは誰だ？ 人ではないのか？

今の地球は——たとえば外観が美しくとも——中を覗けば、戦争ばかり起き、熱に汚染された醜い世界。

なんて救いのない話だろうか。

初めから人類など存在しなければ——地球は蒼く清浄な、こうして見下ろすだけでも、美しい星のままであったかもしれないのに。

「そこに人がいるから、醜い世界になってしまったのではないのかね？」

戦争なんて愚かなことをしている人間こそが、地球にとつては『害』でしかないのではないだろうか。

クルーゼの言葉を聞いていると、なんだか、そんな風にも思えて来てしまう。

そう思うと、なんだか脱力してしまった。

——自分は、人間は……いったい何のために存在しているのだろうか？

急に自己否定されたような気分になり、そんなアスランを見て、クルーゼはひどく楽しそうに微笑む。

「キミはどう思う、アスラン……？ この戦争を終わらせるために、キミは、どうすればいいと思う」

「戦争を、終わらせるためには……？」

訊ねられ、アスランの脳裏に、パトリックとの会話が蘇る。

父からの借り物な言葉だが、彼はこう答えた。

「……『ナチュラルを滅ぼす』——でしようか？」

「ああ……それも、間違つてはいないな」

クルーゼはしかし、それを正解とは云わなかった。

まるで獲物をいたぶるかのようにささやきかける。

「だが、コーディネイターも『人』だよ。仮にキミの云う通り『コーディネイターのみが生き残つた世界』が実現した時……その世界は、果たして本当に平和かね？」

アスランは、心外そうな顔を浮かべる。

平和以外に、何があるというのだろうか？

少なくとも、ナチュラルが滅べば、戦争は終わるはずだ。

コーディネイターだけの世界になれば、すくなくとも、争いが起きることはないはずではないのか？

迷えるアスランを打ちのめすように、ラウは小さく訊ねた。

「では訊くが——なぜ君は『^{ストライク}きみの友人』と戦っているんだね」

「……………あッ」

問いかけに、アスランは絶句した。

一段と、肩の震えが激しくなる。脈拍が上がり、呼吸は荒く、顔面の血の気がさあと

引いてゆく。

——そうだ……。

アスランは、ここに来て思い出す。

酷薄な笑みを浮かべたラウに指摘され、思い返す。

——おれは、キラと戦っていた……！

コーディネイターでありながら、コーディネイターと戦っていたのだ。

アスランのその説は、クルーゼのその質問によって、見事に打ち砕かれた。

親友と殺し合っていたという事実には、喘ぐ。

「コーディネイター同士ならば憎しみ合うことはない、といった誰が云える。互いの人である以上、そこには意見の相違も能力の差異もあるだろう。——それを悲観した過去の者達の負の感情が、こんな世界を後世に残したのだよ」

分かり合うことも、歩み寄ることもできなくなった時、人は長い歴史の中で、武器を取った。

言葉が通じなくなった時、暴力に訴えるようになった。

互いに後戻りできない事情を抱えながら、意識改革することもせず、ただ自分と異なるものを一方的に憎むことで戦争を起こした。

ナチュラルとコーディネイターがそうであったように、コーディネイターとコーディ

ネイターであつても、それは適用される話だ。

アスランが、呼吸に詰まる。

——否定したい。なのに、否定できない……。

分かり合うことが出来なかつたから、アスランとキラは敵対しているのだ。

だが、ならばどうすれば良いという？

やはり人間そのものが、戦争を生み出す根源なのだろうか？

こんな戦争に喘ぎ、嘆いてなお、人類は意識改革を行おうとしなかつた、ならば——

人間そのものが滅びることではか、戦争を忌避する方法はないというのか？

みずからが破滅の一途を辿ることではか救われないというのなら——人はなん

て哀しい生き物なのだろうか？

だが一瞬、それさえも真理のようにさえ思えてしまう。

大地より産み落とされた人間が、より高みを目指し、そこに生み出された対立が、母なる大地を汚すなら。

いつそ滅んでしまえば、と……。

「……………」

アスランが、虚ろな目で黙り込む。

彼の恐怖を味わうように、残忍な笑みを口元に浮かべ、ラウはひっそりと嗤っていた

「あ、あの……僕は本当に、いいですから……!」

バナディーヤの一角に構える……というより、聳え立つ豪勢なホテルのような建造物の前に、キラとカガリは立っていた。キラ達の前方には、何かを盛大に間違えた洋装に扮装していた『砂漠の虎』その人と、背後には彼の護衛であろう、武装を施したザフト兵の姿がある。恐れるように視線を逸らせば、そこら中には警備兵——そして、中庭には『ジン・オーカー』が立っている。四面楚歌の状態で、キラは必死に謙虚を装う。

——こんなところに連れ込まれたら、一環の終わりだ……!

だが、そんな思いもむなしく、砂漠の虎は飄々と言いつける。

「ダメダメ! 特に彼女なんて、服べとべとじゃないの! 悲惨だよ? ——そのまま帰したんじや、ボクの気が済まないよ」

キラとカガリが彼にとつての『敵』であることはまだ察知されていないようだが、ここまで云われて断るのでは、かえって不自然だろう。

しぶしぶとキラ達が誘致されるまま進んでいると、そこへ、謎の女性が現れた。艶つ

ぼい雰囲気を放つ、神秘的な女性だ。

「おかえりなさい、アンデイ」

「ただいま、アイシヤ。帰って早々わるいが、この子なんだ。見たまえ、この哀れもないまでにくちやぐちやな彼女———どうにかしてやってくれ」

「悪かったなっ！」

カツとなつてカガリが云うのを、アイシヤと呼ばれた女性はくすくすと微笑んだ。どうやら、バルトフェルドの厚意でカガリの着替えを行うらしい。

だが、ここは敵陣のど真ん中だ。正体がばれていないとはいえ、彼女と離れ離れになるのは、非常に心許ない。カガリがアイシヤに手を引かれて別室へ向かうのを、キラは思わず追いかけていた。

「ダメよ？ レデイの着替えに男の子がついて着ちや。すぐ済むからアンデイと待つて？ 男の子は男の子同士、女の子は女の子同士」

「そうだぞ？ キミはこっちだ」

後ろ髪引かれる思いで、キラはバルトフェルドの応接室へと招待された。いや、あまりに広大で、絢爛な室内の景観に圧倒されてそう認識しただけで、実はここは彼自身の執務室なのではないだろうか？ アンティークな書き物机に、使い込まれたシルクの絨毯、優雅なことに暖炉まで構えられている。ごく標準な宇宙移民の家庭で育ったキラに

は、目に入るものが、いちいち眩し過ぎるように思えた。

だが、大理石のマントルピースには、唯一、キラにも見慣れたものが置いてあった。

その名は——

「Evidence 01」……？」

宇宙の奥から持ち帰られた地球外生命体の実在を示す化石——そのレプリカだ。

胴の半ばから翼の骨格を突き出した、奇妙な形をした生物である。これが発見された時、世は大きく沸き上がったという。誰もが一度は目にしたことのある『希望の証』——それが、この生物の化石なのである。

バルトフェルドはそれを見つめながら、しみじみと云う。

「ああ、俗称『くじら石』——地球とはまったく異なる生命の証^{エヴィデンス}だ。……だが、人は

なぜこれを鯨と呼ぶかね？ 鯨に羽はないだろう？」

「ええ、でもまあ……地球外の生き物ですから……」

「ふむ。……まあそうだな。外宇宙から齎されたものである以上、何だとしても、人には不思議なものに見えるかもしれん——が、楽しくもまた厄介な代物ではあるよねえ。これも……」

「えっ？」

キラはその言葉に反応して、振り向きざま、男を見据えた。

その表情はいたって真剣で、まるでキラに、語り掛けるように云う。

「だって、こんなモノを見つけちゃってから、希望——ていうか、可能性を見出すようになつちやつたわけでしょう、人は？ ——『我々はまだ、もつと先へ行ける』ってね

……」

“Evidence 01” を持ち帰ったのは、かの有名な人類最初のデザイナーヒューマン、ジョージ・グレンである。

彼がこの化石を持ち帰ったことにより、人類は大きな夢を見るようになった。地球の外に、生物が存在する。生命が実在する——人間にはもつと、発見という名の可能性があり、進化という名の希望があると謳うようになった。

そうして人は、これまで禁忌とされていた遺伝子操作に乗り出すようになり、コイデイナーを生み出した。

だが、人はいつしかそんな夢すら忘れ、コイデイナーとそうでない者との格差が広がる、コイデイナー自体を「宇宙の化け物」と揶揄して、憎むようになった。

「テロリスト——『ブルーコスモス』のひとりも云っていただろう？ それがこの戦争の、根底にある思想さ」

ナチュラル達が「宇宙の化け者」なんて罵声をコイデイナーに向ける。だが——

——それは“Evidence 01” とて『同じ』ではないか……？

自分達の夢と散々持ち上げて、騒ぎ立て——不都合になれば「化け物」と切り捨てる——なんて貪欲で、愚かなのだろう。

結局、コーデイネイターも人類の夢だったにも関わらず、人はこうして対立し、戦争を起こした。

「……でも『Evidence^こ01』って——希望じゃありませんか？ 人類にとつては」

「希望？」

「だって、この広い宇宙に存在する生命が人類だけなら、それはきつと、とても寂しいことだと思いません」

生命を拒否した宇宙世界の向こう側に——「彼ら」は存在している。

人類は決して——孤独ではないと。

だが、云つてからキラは、急に気恥ずかしくなった。戦争を語つたこの男性の前では、なんて能天気で、なんて子供じみた発想だと笑われてしまうかもしれない。

「……キミは、さみしいのかね？」

男は、不意にキラに訊ねた。

云われたキラは、ハッと息を呑む。

——そうか。

と、キラは思う。なんだか、啓発されたような気分になる。

——僕はきつと、寂しいんだ……。

フレイやツール達の傍に立っていても、キラは決して、彼らと同じ場所に立つことはできない。

ナチュラル達と共にいることを決断したが、決してナチュラルと混じり合うことは出ない「異質」^{こしやく}を、ずっと抱えて……。

——ステラが、居なくなつてからだ……。

彼女がザフトに連れ去られ——共に分かり合える、戦い合える唯一の存在を、キラは失つてしまった。

孤独を誤魔化すために、寄つて来たフレイの温もりを求めたのは——もしかして、彼女をステラの代わりにしているだけなんじゃないか……？

——だって、そうだろう……!?

フレイの姿が、ステラに重なることは度々あったんだ。何度も彼女の『声』を耳にする度に、キラの頭には、金髪の少女の姿がちらついた!

宇宙にいた時も。そして、昨夜だつて——!

どうしようもない寂しさに苛まれ——フレイを求めた。でもそれは、決してフレイ自身を求めていたわけじゃない。

——彼女の『声』に重なる存在フレイに、酔いしれようとしていただけだ……!!

ステラが“アークエンジェル”に居ないことを、認められなくて、どうしても受け入れることが出来なくて。受け入れてしまったら、自分は孤独になってしまふから。

拒絶の意志が——無意識に彼女の『声』に似る、フレイを求めた。

前々から、フレイ自身に憧れを抱いていたこともあつて、キラは彼女が好きなのだ、思い込んでいた。

だが、実際は違つた。

フレイへの恋情あこがれは——ステラが現れてからの二か月間で、とつくに薄れていたの

かもしれない。

親友アスランの妹で、三年前に別れてから、びつくりするほど成長して、綺麗に——そして可憐になつていた彼女の存在が、恋しくなつていた。

失つてからこそ、その距離に気付いた。

あまりに身近な存在で、彼女が現れてから、キラは自分の家で、両親と彼女と一か月もの間を共に生活して来たのだ。それから紆余曲折を経て“ストライク”と“ディフェンド”のパイロットとなり、共に苦難を乗り越えて来た……!

ステラがいたから、キラは立っていられた。

自分で云うのも烏滸がましいが、ステラが苦悩している時も、キラはその支えになつ

てやる事が出来た。

キラはただ寂しかっただけで——そんな「充実感」を、今の生活に求めていただけだ。

——僕は、間違えたよね……。

——僕と、フレイは……。

僕は決して、フレイが好きじゃなわけじゃない。だから何をしても、彼女とどんな時間を過ごしても、安らぎを得ることはなかった。

僕は、間違っていたんだ……。

キラが吹っ切れたように、思いつく。

そんな時、バルトフェルドが話を切り出した。

「まあ、キミが云うように、この宇宙にはもつと沢山の希望の生命体が存在する——
——というの、あながち間違えてはいない、のかもしれないねえ」

「えっ?」

「人類にとつて、未知からの来訪者とは……『Evidence^そonly^れ』
——だけでは^いない、^ということだよ」

バルトフェルドは、悪びれた様子もなく云い紡ぐ。

キラは彼が何を云っているのか、よくわからなかった。

「聞いたことはないのかな？——二か月前、このアフリカ南東部に『宇宙から未確認物体』が落ちて来た』という噂を」

「えッ……!?!」

「いい機会だ、アイシヤが来るまで……ついでに話してやろう。『Evidence 01』とはまったく異なる……未知なる技術が使われた、墜落した未確認物体の話だね……」

キラはハツとして、息を呑んだ。

ジブラルタルの天候は雨。

嵐はいったん落ち着きを見せ、『ヴェサリウス』から耐熱ポッドがパージされ、『イージス』と『ディフェンド』の二機は、地球へと落ち立った。

誘導員に誘われるままにハンガーへと機体を進めっていると、そこには、損傷の甚だしい『デュエル』と『バスター』の機体が収容されていた。——大気圏に単独で突入したことで熱によって表面が焼かれている。

アスランは目を見開く。あの二機が此処にある、ということは、ラウの云ったように

イザーク達が此処にいるということだ。機体に致命傷が見えない以上、彼らもおそらくは無事なのだろう。

「降下後はセルハン隊の指示を仰ぐように云われている。機体を降りたら、すぐに挨拶に行くぞ」

アスランの指示に、ステラはこくりと頷いて後に続く。

セルハン隊とは、ジブラルタル基地に駐屯する“デイン”や“シグー”を主力とした空戦部隊だ。ビクトリア基地制圧戦自体が、かなり大掛かりな作戦であるため、侵攻するザフト軍は多くの隊で成り立っているのだが、アスランとステラは、主に彼らの隊の指揮下で戦闘に参加することになっている。ビクトリアへ侵攻した先遣部隊の半数が返り討ちにあつたという事実からも、今回の出撃は、きわめて大掛かりなものとなるだろう。

と、アスランが意気込んでハンガーを出る。

外で待ち受けていたのは、イザークとディアツカであつた。

「え？」

アスランが目丸くする。

突然姿を現したイザークは、有無も言わず次の瞬間、アスランに掴みかかった。

「貴い様アアアツ！」

「え、ちょよ! なんなんだイザーク!」

「なんなんだ、はこつちの台詞だ! いったいこれは、どういうことだ!」

何の話だ? アスランが懷疑する。

イザークの後方のディアッカまでもが、不満げな面持ちをしている。

「へええ、マジで入隊を許されたってワケ?」

その視線は、アスランの後方のステラを見据えている。

敵意の覗ける視線で睨まれ、ステラも警戒したように身構える。

「いくら貴様の妹とは云え! ザフトへの入隊を許すとは!」

そんなことは、父上に云ってくれ……。

アスランとしても、そのことについては、いまだに納得できていない部分が多いのだ。

「百歩譲ってそれが認められたとしても! なぜ貴様らだけがビクトリアで、俺達は」

「足つき」を追いかけ回して地をはいずり回らねばならん!」

「ええ……?」

「隊長の指示だよ。さつき通信があつて、俺達はこの後『砂漠の虎』と合流して、リビアに降りた『足つき』を追えつてさ」

「先遣部隊が壊滅したというのに、増援に寄越されるのが、貴様らだけとはな……!」

イザークとしては、そのことが気に入らないのだろう。

敵の戦力や、建設された謎の要塞の素性も分かっていない段階で、圧倒的な性能を持つXシリーズの作戦参加は行って然るべきだ。だが、肝心の「デュエル」と「バスター」は、明らかに向いていない地上戦、それも砂漠への出航を命じられ、ビクトリア攻防戦に派遣されるのが、ライバルの「イージス」と裏切り者の「デイフェンド」だけとは……。

空戦部隊であるセルマン隊の傘下に付くアスラン達には、飛行用の装備「グウル」が貸し与えられることになるだろう。だが、一方でイザーク達の赴くバルトフェルド隊は「バクウ」を主力とした地上部隊だ。空を飛ぶことさえままならなければ機動力も大きく低下し、そうなれば、はつきり言つて「デュエル」や「バスター」の真価は半分も発揮できないと考えていい……つまり、イザーク達も歯がゆい思いをするだけだ。

この差について、彼は納得することが出来ない。

「敵の要塞の素性が分からないからこそ、下手に過剰な戦力を向かわせるわけではないと踏まれたのかもしれない。そのことについては隊長の意向だろうか？ 俺に云つたつて、しようがない」

「なにイ？」

「俺達がビクトリアに行った所で、やられて帰つて来るのがオチだとも云いたいのかよっ」

「そうじゃない。要塞からの攻撃を防ぐためには、『デイフェンド』が必要で、要塞を突破するために、『イージス』が必要になったんだ。——前線に求められているのは機体であつて、それを操るパイロットの腕じゃない」

アスランは言い聞かせるように、イザーク達へと謙遜を装つて訴えかける。こうでも謙つて云わないと、自分に対抗心を燃やすイザークあたりは、特に引きそうにもない。

だが実際、本当に機体の性能だけで、この作戦にアスランとステラが選ばれたとは考え難い。もしその説が正しいのであれば、パイロットに登用するのにリスクが伴うステラを、パトリックは選出するはずがないからだ。要塞を突破するのに、『デイフェンド』の性能自体が必要になるのなら、パイロットは、もつと別のザフト兵でも構わないはずだ。そうしなかつた時点で、パトリックは何か別の目的のために彼女を、『デイフェンド』に乗せたような気がしてならない。

「命令の是非を問うのは、オレたち兵士の仕事じゃない。俺達は、隊長や『プラント』の指示に従つて、敵を斃す『剣』ツルギになつていればいい——ただ、それだけだ」

「——ふんッ」

イザークは、アスランのこういった性格が非常に嫌いだ。誰よりも優秀なくせに、それを鼻に掛けたりはしない。ちゃっかりとして、要領がいい所も……。

そうして彼らは分かれ、アスランとステラのふたりは、基地の中へと向かつていった。

パイロット・スーツを脱ぎ、制服に着替えたふたりであったが、アスランは更衣室を出た時、現れたステラの姿にぎよつとした。

——制服が、改造されてる……!?!?

肩口から袖にかけては大きく切り開かれ、女性はスカートに着用が義務付けられているのだが、彼女が着用しているのはどうしてか華々しい桃色のスカートにして、ひらひらとしたフリルがついている。ブーツも膝まで伸びた一品を画したもので、スカートとソックスの間から覗く生身の太腿が目眩しい。

なんとというか、型破りすぎて声も出なかった。

地球軍でも、こうして改造された制服に身を包んでいたのだろうか？　へんな目で見られたりはしなかっただろうか？　男に言い寄られたことは？　男といっても、キラなはまだ許せるかもしれない……いや、やっぱキラでも許さん！

兄馬鹿な一面がここぞばかりに再発するアスランであったが、制服について言及すると「パパは良いって云ってたよ」と返答が返って来たため、アスランはますます父のことがよくわからなくなった。

黒を基調とした真っ赤な制服に、肩上で切り揃えられた金髪を揺らす少女の存在は、

基地内でも非常に目立っていた。

もともと、特務戦闘員として派遣された彼らは、作戦侵攻のための「鍵」として地上に降りて来た。

謎の円盤型の要塞を制圧するために、必要不可欠なふたり。

いや、数刻前にパトリックが、全世界に向けて行つた宣言を考えれば——ふたりは国防委員長パトリック・ザラがみずから遣わせた勝利の希望だ。互いにザラの血を受け継いだ戦士にして、英雄視されていても不思議ではないほどの存在だ。

その存在が、かたや女性的な顔立ちをした端正な美男子と——花のような柔らかな表情を持った可憐な美少女ともなれば、基地の中は緊張感の欠片もないゆるんだ話題で持ちきりにもなる。基地で働く女性士官たちはアスランの美貌に釘付けになり、片や男性士官達は、攻撃色に身を包む儂げな少女のやんわりとした雰囲気放つ絶大なギャップに、心を奪われている。

しかし——基地の中には、彼らを快く受け入れない者達も陰には存在していた。「はっ、何が国防委員会直属の特務戦闘員だよ。かえって邪魔になりそうな気がするぜ。ヤツら、どうせ地上戦の経験はないに決まってる」

「ああ、宇宙生まれのエリート部隊だからな」

セルマン隊の、主力パイロット達である。

よく焼けた肌に、赤色の短髪をした片方の男、デリオ・マーベラスは、緑服に身を包む「デイン」のパイロットである。

一方の男は、ベルクト・メイン——こちらも緑服に身を包み、緑色の髪を後ろで束ねた「デイン」のパイロット、デリオの同期である。

「緑だろうが赤だろうが、そんなもんは士官学校アカデミーを出た時の成績でしかないんだ。そいつは今の実力を示したものでもなけりやあ、地上戦の経験もないあんなヤツに、俺達が劣るわけがねえ」

ザフト兵の多くは志願兵であり、卓抜した反射神経を必要とするモビルスーツパイロットには、おおよそ三十代に突入する前までの若者が適している、と云われている。

そのため、やはりこうした前線基地には、若者の人口が多く——逆に、若い内にか目に見えた功績を上げられない彼らにとっては、功を焦り、同僚を蹴落とすようなことも厭わぬ、歪んだ性格している者も少なくはない。

——宇宙と地上じゃ、全然勝手が違うんだ……！！

いい機体を預かっているらしいが、あんな連中に、遅れをとるわけにはいかない……！

それが、デリオ・マーベラスの思いである。

「——要件は既に聞いてるよ。では、キミ達は『グウル』が与られた後、侵攻部隊の最前線に配備してもらうことになる。この作戦の鍵は、なんといつてもキミ達だという話で、今のジブラルタルも活気に溢れていてね」

「いえ、そんなことは……」

「先遣部隊は敵の要塞の砲火を受け、壊滅してしまった。これ以上の失態を繰り返し、我が軍に被害が出るような状態になれば……ザフトはアフリカからの撤退さえ考慮せねばならん。なんとしてもここで、ビクトリアを抑えねばならない」

アスランとステラのふたりは、今回の作戦の司令官であるトレイン・セルマンの執務室へと足を運んでいた。

初対面ではあったが、黒服に身を包んだ彼は、非常に温厚そうな人物であった。壊滅した先遣部隊の中に、かつての教え子達が数多く配属していたらしく、彼らを失ったことで、彼は今、非常に心を痛めていた。

また、散って行った彼らのためにも——という想いの下、今回の侵攻に掛けた熱情も、他の指揮官の比にはならないと思える。

「あの、地球軍が建設したと思われる、その謎の要塞については……詳しい情報は入っていないのでしょうか？」

アスランはセルマンを信用して、核心を突いて尋ねる。

今回の作戦が非常に大掛かりなものである以上、絶対に失敗は許されない。また、アスランやステラは、その要塞の制圧を第一の命に受けて地球に降りて来たのだ。要塞について尋ねておくのは、非常に賢明なことである。

セルマンはデスクの中から、一枚のメモリーを取り出した。

「……先遣隊の生き残りが、かろうじて記録した映像がある」

セルマンはこれを端末に差し込み、ハードに映し出された映像に、アスランとステラが目をつけた。

映像には、巨大なマストライバー施設を構えたビクトリア基地が映し出されている。

「バクウ」や「デイン」——「シグ」らの先遣部隊が、先んじて乗り込んだ先——そこに、巨大な要塞の姿が映し出された。

黒い、鋼鉄のような重厚な装甲に覆われている、謎の建造物だ。

高所に構えられたそれにより、周囲一帯には、要塞からの死角はない。何か、カブトガニのような円盤の形を成したそれは、稚拙な云い方をすれば「UFO」のようにも見える。

だがそれは、要塞というよりも——何か、巨大な質量を持った兵器のようにも見えた。

次の瞬間——

円盤型の要塞が——火を噴いた。

円盤から突き出した二対の砲身が展開し、忽ちに迫り来るモビルスーツ群に向けられる。

それ自体が三〇メートルに達しようという巨大な砲身が、地獄の業炎を吐き出した。強烈なビームが撫でるように地上を薙ぎ払い、光の奔流に飲み込まれた大量のモビルスーツが、一瞬にして炎の塊に転じる。この惨状に心を折られた空中の「デイン」群が鈍い動きで空からの攻撃を仕掛けるが、円盤の各所に搭載された無数のビーム砲、あるいは、放たれた無数のホーミングミサイルによって、次々に駆逐されていく。

息を呑むほどの破壊と破滅は、虐殺の限りを尽くす。

戦意を失つて後退する先遣部隊に、カブトガニの甲羅のような円盤型の要塞は、容赦なく追尾の雨を放ち、トドメを刺していく……………。

アスランはその映像に啞然とし、

ステラは——愕然とした。

「二か月ほど前——地球軍が取り仕切るビクトリア基地周辺に『未確認の巨大物体』が墜落したという噂が広まった」

その噂は、間もなくボクの耳にも入ってね。

バルトフェルドはキラに言葉を紡ぎながら、語り掛ける。

「円盤のような形をしたそれは、一説によると『宇宙外飛行物体』ではないかと噂され……『Evidence 01』に続く外宇宙からの訪問物ではないかと、アフリカの人々は根も葉もない噂に熱狂した」

「えっ………」

「だが、ボクが軍事上で知り得た情報によると……それはただの『円盤』ではなく——

『円盤を背負った黒鉄の巨人』だったそうだ」

キラが、啞然として目を向いた。

「ビクトリアに構える地球軍はそれを回収し、解析した」

コーヒーを飲みながら、言葉を続ける。

宇宙から現れた、謎の『巨人』の正体を——

「その結果、墜落した『黒鉄の巨人』が、モビルスーツに酷似した装甲を持つていることが判明する。だが、そこに使われていた技術そのものは、現時点じゃあナチュラルが思いつきもしない先進したものだったそうだ。——まるで数年先の未来から産み落とさ

れた巨人のようであつたと、噂には聞く」

「数年先の、未来から……?」

「ま、ザフトのボクからしちや、興味深くも厄介な話だよねえ。ビクトリアの連中がそれを回収したつてことは、そこに使われている近未来のごとき先進技術は、既に地球軍の手に渡つてる——つてことだろう?」

未来から来たモビルスーツ?

円盤を背負つた、クロガネの巨人の墜落………?」

キラにはその言葉を、うまく理解し、飲み込むことは出来なかつた。

「う、そ………ッ」

我を失つたかのように、ステラが愕然とした。

映像に映し出された惨禍——その光景に、見覚えがある。

いやなほど——見覚えがある。

——あれは。

——それは………!

アスランが、強かに震え出すステラに声をかける。

「ステラ……どうした？」

「ちがう……」

「え？」

「ちがう………！」

突き出した砲門が、地上を凧いで、何もかも破滅に葬る。

放たれた無数のビームとミサイルが、何もかもを灰燼に消し去って行く。

反撃を行っても、構えられた電磁障壁によつて、砲火は一切届かない。

——ちがう。

あれは、要塞なんかじゃない。

それは、兵器などでもない。

あれはただの—— //破壊者//のかけら一部………！

なんで？

なぜ。

どうして……。

どうして“あんなモノ”が、ビクトリアにある——!?

「デストロイ——ッ!？」

建設された、謎の円盤型の要塞。

その正体に——ステラは肩を震わせた。
かつて、

他ならぬ己が操っていた、大量殺戮兵器の存在に——。

『黒鉄の要塞』A

G F A S — X I “デストロイ” ——

それは、大西洋連邦が今よりおよそ三年後に開発する、通常のMSの数倍の全長と重量を誇る超大型のモビルスーツである。

強固なVPS装甲と陽電子リフレクターを全身に配備し、あらゆる砲火を等しく跳ね返す絶対の堅牢性。無数の重火器を全身に構え、艦隊やMS大隊をも一瞬で殲滅してしまふほどの破滅的攻撃力。完成されたひとつの戦術兵器であり、それ自体がひとつの移動要塞とした外観と特性を併せ持つ。

運用実績を例として挙げれば、じつに数時間で三つの都市を壊滅させ、億単位の人間を焼き払い、数多のザフト軍モビルスーツを返り討ちにししている。

その実績を挙げたのは他でもない —— ステラ自身だ。

—— いったい、どうして。

映像を目の当たりにステラは絶句していた。驚愕し、強かに震えた瞳でもうふたたびモニターに目を遣う。黒銀色に鈍り輝く、“円盤” —— 大きく張り出した砲塔が洪水の

ような光を放ち、多数のモビルスーツを爆散させていく。凄絶なるビーム砲が薙ぎ払われたその跡には芥子粒ひとつも残らない。

決して見間違いではない。人と物を無差別に焼き払い、それでも尚「足らぬ」とばかりに踵在している。それは、時代を超えて尚『敵』として定められたコーディネイターを殲滅する狂気。ステラ自身が彼女の「未来」に置き忘れた、エクステンデットとしての「過去」を象徴する亡霊だ。

——あんなものが、どうして。

ステラと共に偶然的にこの時代に流れ着いたのか、あるいは表現を変え、ステラ自身がこの時代に持ち込んだしまったのか？

パイロットという「宿主」を見失った抜け殻が、何の因果かアフリカ南西部へと墜落、そして独り歩きを始めてしまった。その果て別の人間達によって回収され、新たにビクトリア基地に兵器として併合された……？ 発想としては突飛であるが、それをあり得ないと切り捨てるには、このときのステラは慎重だった。なぜなら目の前の映像こそが現実であり、そこに疑いをかけた所で何の意味もないのだから。

さりとて「デストロイ」は、尋常の人間には扱えないモビルスーツのはずだ。

かの大型MSは、火器の充実と構造の複雑化を裏目としてナチュラルは疎かコーディネイターでさえ簡単には操縦できない仕様になっている。それをかつての地球軍が運

用できたのは、パイロットが生体強化を施された強化人間だったからであり、言葉を遣わずに云えば、それがステラ・ルーシエであったからだ。

だからこそ、この時代において地球軍が「デストロイ」を運用する能力を持つはずがなく、それは実際に事実であったようで、さりとて「デストロイ」に使われている技術そのものには非常に大きな価値がある。

『——機動兵器として扱い切れぬなら、固定砲台として運用すれば良い』
結果として、今の形となってビクトリアに配備されているのだろう。

映像の中では「円盤」型のフライトユニットだけが砲台として聳え立っている光景が、その証左である。しかし、そうであるならば——？

(……「本体」は、どこ……？)

映像の中で確認できるのは、カブトガニのような形状をした円盤状のバックパックだけだ。——だけと云っても、それ単体でさえ無数の砲門を搭載した危険物ではあることは間違いないのだが。

——四肢を持った、人型の部分は？

少なくとも、映像の中では確認できない。この時代に流れ着かなかったのか、あるいはバックパックと分離され、既に別の場所に持ち出されてしまっているのか。後者でないことをステラは願ったが、いずれにせよ、

(あんなもの、あそこにあつていいものじゃない……!)

そのことだけは、ステラにもハッキリと理解できる。

ロゴスが起こした三年後のユーラシア政変——ベルリンでの悲劇をはじめとする——のように、アレが巻き起こす破壊と破壊は、まさしく惨劇的だ。それが再び繰り返されるようとしている今、あれは絶対に駆除しなければならぬものだ。

(ステラが持ち出した——あれをこわすのは、ステラのしごと……?)

いち早い段階で「デストロイ」の存在に気付けたことは、不幸中の幸いであつたのかも知れない。ステラは「デストロイ」の機体特性を……その運用上の弱みを、この時代の誰よりも詳しく知っているのだから。

「ステラ、大丈夫か?」

アスランが怪訝とした顔で訊ね、ステラは気を持ち直し頷いて返した。

セルマンが状況説明を続ける。

「ナチュラル共が急場で拵えた——あの『要塞』さえ存在しなければ、全ては予定通りに事が運んでいた筈だ。ビクトリア基地は過たず我らの手により陥落し、宇宙育ちの君達の手を、わざわざ煩わせるまでもなかつた」

男の発言は決して高言ではなく、戦況を判ずる指揮官としての断言であつた。

「——我々としては、勝報を以て今日という日に花を手向けるつもりでもいたのだがね

……」

云われ、ステラとアスランはそれぞれにハツとした。

2月14日——バレンタインデー。彼らにとって無関係ではない、むしろ当事者とも云える忌日の名を持ち出され、兄妹はそれぞれに表情を変えた。

「しかし、これが現実だ。野蛮なナチュラル共が、あんな得体の知れないモノを土壇場で造るから」

「しかし、俄かには信じられません……！ モビルスーツすら満足に開発できなかった地球軍が、これほどの要塞を、たったの数か月間で造り上げることなど……！」

真つ当に考えれば、そう判じたアスランの感覚は間違っていない。

——記録に映る敵の要塞は、いささか反則が過ぎていように見える。

固定砲台である以上、活躍の場は局地防衛戦に限られる。それをコンセプトとして設計されたにしては、いささか過剰な程に殲滅的に特化した火力を有している。

——そして防衛の面に関しても、その性能には非の打ち所がない。

要塞は先遣部隊の当然の反撃を受けているが、それでも尚掠り傷さえついていない。というより、一発の弾丸さえ着弾していなかったようにも見えたのは気のせいだろうか？ 全ての砲火は装甲に当たる寸前、得体の知れない光の障壁のようなものに弾き飛ばされていたように見えた。

「これほどの技術が、地球軍には存在していた……?」

「やはり、ナチュラルを過小評価するのは禁物——ということなのかねえ」

セルマンの言葉に、アスランは息を詰める。

「いずれにせよ、あんなものをこれ以上ビクトリアに野放しにしておくわけにはいかん。ただちに制圧すべきであるし、作戦に当たつては、君達にも十分に働いてもらう必要がありそうだ」

いずれは「プラント」——しいてはザフトの脅威となる兵器だ。

セルマンが深く息を溜めた。

「問題はその方法だが——ううむ、何せ得体のしれない要塞でな……。現時点では、判明していることの方が少ない。どう攻略すれば良いものか、こちらとしても甚だ検討もついていなくてな」

「そんな……」

「火力は見ての通り。なんとか砲撃をやり過ごして反攻に転じても、先遣隊の遠距離攻撃は得体の知れない障壁に全て弾かれて終わっている。あの障壁は一体何で、どうすれば突破できるのか——」

そこで口を挟んだのは、それまで一言も言葉を発そうとしなかった少女であった。

「『デストロイ』の陽電子リフレクターには、ビームサーベルが有効的よ」

突如脇から柔らかな声が上がって、アスランとセルマンはぎよつとした。

——「デストロイ」？

初めて耳にする……おそらくは宣伝されたこともないであろう単語にふたりは疑問符を浮かべ、しかし少女は自分のペースで言葉を続けた。いつも通りに。

「どれだけ遠くから攻撃しても無駄。あのリフレクターを突破するには、同じ性質のサーベルを使って接近するしかない」

その言葉を受けたアスランは呆然とした。ステラの声音は彼女らしく柔らかなものだが、それは内容が優柔であるということの意味しない。つまり、出任せを云っているようには聞こえなかったのだ。

——なぜ、彼女がそんな情報を？

そう疑念に感じたのは、セルマンも同じであったのだろう。

「キミの方は、たしか『ディフェンド』のパイロットだったね。——『それ』は、キミ自身のモビルスーツの運用経験に基づいた発言なのか？」

訪ねられ、何故かステラの方がきよつとした。元々彼女は人見知りであり、慣れない相手と会話をするのが得意ではないのだ。

「いや、作戦の考案には確証を得なければならぬ。こちら軍として兵の命を預かる以上、根拠のないことを信用するわけにはいかんのだよ」

言葉を放ったセルマンは、悩むように両腕を組んでいる。言葉は彼女を疑っているが、実際、その言葉を信用すべきか悩んでいる様子だ。

アスランはそのときになって理解する。

(だが、そうか……！　「グディフェンド」も)

ステラの「グディフェンド」が光波防御帯を装備するように、映像の中にあつた地球軍の要塞は、おそらくそれと似通つた——あるいは同等の——ビーム性のバリアを装備しているのだろう。

だからこそステラには敵要塞の弱点が分かかつていて、対する自分達には分からなかつた。アスラン達は結局、ステラ程にその兵装について詳細な知識を持ち合わせていなかったからだ。

それは真実とは決定的に違つていた理解、少なくとも誤解であつたのだが、少なくともアスランはそう考えた。

「信用に足る意見だと思われます。地球軍が開発した光波技術は、ザフトにとつてまだ未開の技術。——現時点で「グディフェンド」に乗る彼女以上に、その実践的な知識くわいはくを知る者はいません」

「ううむ……。もつともな意見だ」

無敵と思われた「グデストロイ」にも、決定的な弱点がある。強固な装甲——そして陽

電子リフレクターにより「デストロイ」はありとあらゆる砲撃を無効化する防御力を有しているが、しかし、ビームを一定の長さで発心し続けられる熱量兵器に対して、後者はまるで無力と云つてもいい。

早い話が敵の懐に潜り込み、ビームサーベルを振るつてしまえば——少なくとも理論上は陽電子リフレクターを突破することが可能なのだ。ステラはそれとなくアスランに向けて説明を続けたが、セルマンの方が唸つて返した。

「逆に云えば、ビームサーベルを持つ「イージス」と「デیفエンド」でなければ、あの要塞が放つビームの障壁を突破することは不可能ということか」

実体兵器の重斬刀で立ち及ぶものではなく、セルマンの表現は正鵠を得ていた。

「突破した後も同じだよ。その下に張られたフェイズシフトに、実体弾は通じない——
「ジン」や「バクウ」じゃ太刀打ちできない」

「本当に経験があるかのように云えるのだな、キミは」

「……」

ステラの発言は一応の筋が通っており、映像の中で反撃の砲火がまるで通用していないことを踏まえれば、信用するだけの価値はあつた。

（説得力はある。彼女以外に信用する情報源がない、というのも勿論あるが）

あらゆる射撃が無効化されるなら、接近して攻撃を謀るしかない。だとしても、やは

リフェイズシフトの存在は念頭に置いておくべきだろう。提言どおり「ジン」や「シグ」の重斬刀が有効的とは考え難く、作戦遂行に必要なのは、やはり「イーリス」と「ディフェンド」の二機以外ではあり得ない。

そうして悩んでいたセルマンに、ステラは言葉を続けた。

「でもそれも、それだけの出力が足りれば、の話だと思う。今の二機の出力で、あのリフレクターに通じるかは分からない……」

言葉を受けたふたりは、意表を突かれたような顔をした。

「そうは云っても……」

今に始まったことではないにせよ、ステラは奇妙な発言をしていた。当世において「イーリス」と「ディフェンド」は「破格」とも云える高性能を秘めたモバイルスーツであり、それが「力不足」であるかのように評定した彼女の発言は、どことなく時代錯誤的で、不明瞭すぎるものであったのだ。

しかし、一方のステラから見れば「ディフェンド」は旧式であり、それは「デストロイ」の性能から見ても明らかかな事実であろう。前時代的なモバイルスーツの性能で立ち及ぶかどうかはやはり不明であり、懸念しておくに越したことはないのだ。

「機体の詳細なデータを見たが、キミたちの機体はまるで全身が刃物だろう？ それで敵わぬと認めてしまつては、いよいよアフリカからの撤退も考えねばならない……」

敵わぬ戦に無駄な戦力を投じ、貴重なパイロット達を犬死にさせるわけにはいかな
い。

「——あきらめるのは……だめ」

そんなセルマンの逡巡を、ステラが短く断ち切った。

そう——『デストロイ』は、何としても破壊しなければならぬ。あれはこの世界
に、この時代に本来あつていいものじゃない。

——たとえば『敵』が未来の兵器でも……あれを未来に残せば、たいへんなことになる
……！

だからこそ、このビクトリアで発見された残骸^{バツクバツク}だけでも、直ちに制圧し、破壊して置
かなければならないのだ。

「ステラ……？」

アスランは、彼女が想像以上に戦意に溢れているを怪訝に思った。

これから作戦の立役者になろうとしているのに、のしかかる責任やプレッシャーに、
まったく緊張の色を浮かべていない。

——本当に、戦場に慣れている……。

そう思うと、安心できるような、逆に心配してしまうような、複雑な感情を憶える。
軍籍を変えた彼女のメンタルを、できる限りフォローしてやろうと思っていたが、ど

うやらそれも杞憂であつたらしい。特に先遣部隊の壊滅映像を見てからの彼女は、目の色が変わつた。

「いや、心を打たれたよ。たしかに、彼女の云う通りだ」

セルマンはそこで、ゆつくりと座席から立ち上がった。

表情には、敵意のない笑みが浮かんでいる。

「『デイフェンド』と云うと、宇宙での不審な噂を聞いたもので——すこし心配にしていたんだ。だが彼女の云う通り、あの要塞は必ず破壊せねばならんものだ。今は固定砲台の形を成しているが、あれがやがて発展するとなると、こちらとしても舌を巻いてしまふ」

セルマンは、ステラを見据えた。

「本気で、仲間として——信用してもいいのかな、キミを」

ステラは沈黙し、しかし、強い双眸を浮かべ、その問いかけに答えた。

目は口ほどに物を云うというが、視線を合わせたセルマンが不敵に笑う。

「では、そのようにこちらで作戦を立案する。ビクトリアに到着するまでしばしある

……良ければ我が隊員たちとも、交流でも図つておいてくれ」

「はっ」

そうして、ふたりは執務室を後にした。

「ビクトリア基地が、ザフトの攻撃を？」

バルトフェルドの執務室で、キラは聞いたこともないような内容に驚いている。

リビア砂漠直下の地域で起こるであろう、第二次ビクトリア攻防戦について。

墜落した、未知の巨大モビルスーツについて。

それはキラでなくても、怪訝に思ったり、興味が湧くのは当然の反応だ。

「でも、ビクトリアって……その未知のモビルスーツが配備された基地なんですよね？」

それを襲うとなると、相当のリスクがあるんじゃない」

キラもコーディネイターとして、あくまで同胞——ザフトのコーディネイターを心配

する気持ちはある。

配備された要塞は、それひとつで——それまでアフリカ南西部まで追いやられた地球軍の息を噴き返す——圧倒的な劣勢を覆したのだ。まさにビクトリア戦線の捲土重来の立役者。今や期せずして難攻不落と化した基地を襲うとなれば、ザフトとしても、骨が折れるはず。

キラが思慮していると、バルトフェルドが云った。

「——見るかね」

不敵に笑いながら、バルトフェルドはデスクの上にあるリモコンに手を伸ばした。

天井から釣り下がる形で設置されたテレビに、つい先日の、パトリック・ザラの宣戦放送が映し出された。

「昨日のとき。パトリック・ザラが、ビクトリア侵攻について『プラント』中に大きく喧伝した」

（アスランのお父さん……）

そしてそれは、ステラの父でもある——戦争推進派の、厳格な人物。演説台の前に立ち、すべてのコーデイネイターへ、戦争を煽る言葉を放っている。

その言葉を聞きながら、やがてキラは、目を大きく見開いた。

「——私の娘は、生きていることが分かったのです」

パトリックがそう告白すると同時に、テレビの画面に、ステラの姿が映し出された。彼女が、パトリックの娘であることを証明する映像——家族写真や、幼き頃の彼女が映った録画映像。

彼女の幼き頃の姿を、キラもまた知っていた。

あどけない、それでいて、儂い——金色の花が開いたような笑顔を持つ、可憐な少女。

キラが息を呑み、改めて、自覚する。

——あまりに身近すぎて、気付かなかつた。

映像を見て、かつて腕に抱いた華奢な感触を思い出して、キラは悟る。

——僕が欲しかったものは……フレイでは、決して満たせないもの……。

それだけは云える……云えてしまうから、今までの自分は間違っていたことを知る。

——なんてことを僕はしてしまつたんだろうと。

ステラが居なくなつて、その暖かみや有り難みが失われたことに耐えられなくて——

ステラの『声』に似たフレイに「それ」を求め、結果、親友^{サイ}まで傷つけた。

——親友の妹だから、だから守つてやりたい……ずっと思つてた。

彼女が目の前に現れたあの二か月前から、知らず知らずのうち。いつしか、そんな保護欲のようなものが……。

思い悩むキラを現実に取り戻したのは、執務室のドアが開く音だった。

顔を上げて音のした方を向けば——エメラルドのドレスに身を包む金髪の、見たこともない少女が立っていた、いや、実際には見たことのある少女だった。

「カ、カガリ……!?!」

髪を結び、ナチュラルな薄めの化粧をしている。

エメラルドグリーンドレスに身を包み、少し日に焼けた肌が勿体ないとさえ思える

ほどの清廉さ、可憐さに、思わずキラは言葉を失った。

これが、今までの野性味あふれる少女と同一人物とは。

そう思うと、自然に声が漏れていた。

「おんなの、子……」

それを聞いた例の清廉な美少女は、まるでその上品な容姿にそぐわぬ乱暴な物腰でわめき出した。

「てつめえー!」

声を上げたカガリは、今にもキラに殴り掛かる勢いでにじり寄ろうとしたが、どうやら、長い裾が邪魔で走り出せないらしい。

キラはホツとして、しかしすぐに弁明の言葉を探す。

「いや! だつただね、つて今云おうとしたよ!」

「おんなじだろうが、それじゃあ!」

「あれ?」

……たしかに。

ややあつて、キラは納得した。

やり取りを見たバルトフェルドは、まるで芸術品でも品定めのような目で、愛人アイシャがコーデイネイトした少女の姿を見据えた。

「いいねえ——なんていうか、そういう姿も実に板についてるカンジだ」

「勝手に云つてろ」

「喋らなきやカンペキ」

肩を透かして、バルトフェルドはわざとらしく嘆息ついで見せた。

アフリカ大陸は、最果てまで拡がる自然が雄大な大陸である。北部は広大な砂漠で形成されており、これを抜けてすこし南下すれば、ステップと呼ばれる平坦な草原が広がる土地に出ることが出来る。視線を遮る目障りな人工物、建造物の見当たらない、オアシスや広大な草緑に包まれた土地である。

自然な生態系を作る動物たちが、弱肉強食の理の下で生きている。

本来であれば、思わず魅入ってしまうほど壮観な景色が広がっているのだろう。

暇を与えられたステラが、甲板に出た時、残念なことに空には厚い雲に覆われていた。曇天の下、いつ雨が降ってもおかしくないような天気だ。まるで水分だけが抜かれような乾いた風が髪を撫でる。その感触が、すこしだけ不快だった。

彼女たちは現在——“コンプトン”級の陸上戦艦にて移動していた。

野球ができるのではないかと思えるほどの広さを持った甲板に出たステラは、そこに膝を抱えて座り込んでいた。

乾いた風が吹き荒ぶ。——決して居心地は良いとは云い難かったが、そこに座り込み、過ぎ去っていく自然の景色を茫洋と眺めることにした。

たくさんの、野生の動物たちを見つけたからだ。

——動物さんたちが、びっくりして逃げてく……かわいいそう。

どの動物も、驚いた顔をして、巨大戦艦を目にする度にこちらに背を向け、駆け去っていく。こんなにも野蛮な戦艦で彼らのテリトリーを縦断することに、思わず「ごめんなさい」と胸中で呟いた。

そんな時、背後からガヤガヤと騒がしい声が出た。

「？」

風になびいた柔らかな金髪をすき、ステラがぼんやりと首だけを後ろへ回す。

振り向けば、そこには緑色の軍服を着用した若いザフト兵の集団が出来ていた。無意識に眉を顰め、身構えてしまいそうになる、だが、よくよく思えば今の自分も同じ軍服に身を包んでいることに気が付いた。

——あつ、そうだった……。

ぼーっとして、鈍い反応をする。

——なんだか、へんな感じ。

あれだけ敵、ワルモノと教えられて来たザフトに、今は身を置いている。

(今は、ザフト……)

時折、昔の自分が今の自分を追ってきて、その影に脅かされる——強化人間としての自分が怖くなる時がある、ふとした時に、そいつは無意識に顕現する。

普通の人、コーディネイターにさえ出来ないことが、当たり前前にできた時、奇異な目で見られることがある——そのたびに彼女は、嫌な過去の存在に己を思い知らされる。

怯える度に、地球軍という組織に対する強い疑念を憶えるようになった。そんな経験が積もりに積もって、今の彼女は、なんだか地球軍という組織そのものを信用できなくなつて来ていた。

事実関係を見返してても、それは自然な判断だった。進んで敵対したいわけでも、ナチュラルが嫌いなわけでもない——だが、

彼女を操つて来た地球軍、

“デストロイ”を造り出した地球軍、

そして今、性懲りもなく“デストロイ”の力に現を抜かした地球軍。

——彼らは本当に、信用できるの？

彼女の中の、答えは否だった。

今の彼女はそいつらを、信用する道理が見当たらなかった。だからといって、ザフトに身を置くことが最善なのかは、まだ彼女にも分からないが……。

とめどなく思いを巡らせていると、ステラの許にひとりの緑服の青年がやって来た。柔らかな顔をした、どこか人の良さそうな——作り物の笑顔を張り付けたような青年だった。

「——ね、きみ、何してんの？」

青年が声を発し、少女へと話しかける。それと同時に、彼女の背後で「うおお」という歓声が上がった。

群衆は「あいつ切り込んだぞ」だの「振り向いた姿も可愛いなあ」だの、なんだか嬉しい声を放つが、そのすべてが彼女の優れた聴覚に筒抜けた。何の歓声なのかは彼女には分からなかったが。

「動物、見てた」

「動物？」

「うん。いろんな動物がいるの」

云いながら、ステラの視線は、再び目の前の大自然へと向けられる。

どんな動物も平穩に暮らしている様子を見て、自然と心がほかほかする感じがしている。

たとえば、象。

象は象でも、大きいのがいる、小さいのがいる。お父さんがいれば、お母さんがいて、そして子どもがいる。

——みんな違って、みてて楽しい。

目の前に拡がるのは——平穩に開けた土地、心休まる光景だ。

人間同士の戦争など起こらず、動物だけが伸び伸びと生きる優しい世界。人に便利な建造物も、人工物も存在しない大自然。ただ平坦な草原が広がり、緑が生い茂っているだけ。その中にいくつかの水場が点在し、その上に動物たちが生息している。見方によつては何もない土地だ、と云う者は云うのかもしれない。

しかし、そんな何もない土地というのが、実はとつてもしあわせな土地なのかもしれない、とステラは思う。

彼女もかつて、何もない土地を見たことがある——いや、正確には、何も残されなかった土地だ。『デストロイ』の襲撃により、壊滅した北歐の三都市。荒れ果て、燃え尽き、灰色に塗れた何もない光景と比べれば——深緑の拡がる何も無い光景の方が、圧倒的にしあわせだ。

「……………」

ステラは、まるで今、青年と会話していることさえも忘れたかのように、再び茫然と

黙り込んでしまった。

膝を抱げ、相も変わらず茫然と座り込む少女の横顔を見て、兵士は戸惑う。

(……変わった娘だなあ)

——赤服を着ている割に、ぼんやりとしている。

本当にその色に見合った能力があるのか、あるいは、失語症でも患っているのではないかと疑わしく思ってしまうほどに。

制服も改造されているようだし、なんだか、一風、変わった少女である。

宇宙から派遣されて来る特務戦闘員という連中が、前々からどんな人物なのか、基地では噂されていた。おごり高ぶった仏頂面の、いかにも「エリート」な連中が来られても迷惑な話であったが、現れた内のひとりののは、驚くほど可憐な少女だった。一目見ても強い感心を憶えたが、どう会話を続けていいかも分からない。まず、心を開いてくれる様子が微塵にもない。こちらを受け入れる気はあるが、かといって溶け込む気はない——そんな様子だ。

——どうしたもんか。

兵士がそんなことを考えていると、彼によつて「突破口」を開かれた他の大勢の兵士たちが、ずらずらとステラの許に押し寄せて来た。

「ね、キミ、名前は？」

野次馬達である。

彼女の感心を引こうと、我先にと押し合いながらやって来る。

ステラは舌足らずに答えた。

「……ステラ」

「キミ、どこから来たんだっけ！」

「宇宙」

「具体的に！」

「……………」
「ヘリオポリス」

寄って集った野次馬の集団に、ステラはひどく興味なさげな顔を作ると、首を前方に戻す。

——うるさい……。

鬱陶しい、という率直な意志表示に、目の前の大自然に視線を移す、だが、なおもそんな心情を無視した質問の数々が背後から飛び掛かった。

「もうひとりの特務隊員って、兄貴なんだよな!？」

「うん……」

「今、何歳なの!？」

「じゅう……ろく?？」

「あれ、兄貴と双子なの？ 兄貴と云うより弟じゃないか？」

「まちがった、じゆうさん」

「なんで間違えんの？」

「あのさ！ ラクス嬢と知り合いって聞いたけど、ほんと!?」

「うん……」

なんでキミはアイドルにならなかったの、という意味不明な質問が続いた。

無視した。

「地上戦の経験はあるのかい!？」

「あるよ、たくさん……」

あまりに矢継ぎ早に質問が飛び交う。

暇なの？ ステラが彼らに云おうとした時だった。

「あつ、そうだ。これから作戦を一緒にするわけだけどさ。どうしようか、悩んでたことがあるんだ」

最初に声をかけて来た青年の兵士が声を発した。

「ほら、ザフトって階級がないだろう？」

ステラは、そうなの？ と云わんばかりの顔をする。

青年は、えっ、と驚かれ、知らなかった？ と尋ねれば、うん、と当たり前のように

返事が飛んで来た。

「それで、階級がないわけだから、これから名前を呼んでかなきやいけないワケだけど」
 すくなくともステラは、地球軍ではパイロットとして、少尉の階級を与えられていた。
 だからこそ、咄嗟の時に「少尉」と呼ばれば、その階級に当たるために反応して
 た。

しかし、ザフトにはその階級がない。階級で呼ぶことがない以上、多くの者は、名前
 を用いてその者呼び止めるのである。親しい者同士であれば、ファーストネームで呼
 び合うようになるのが通例だが、所詮、宇宙からやって来た「よそ者」のふたりは、い
 まだ地上部隊との信頼関係は築かれていない。

これによりファミリーネームを用いるのが必然なのだが、ここで、ひとつの問題が発
 生した。

「^{ザラっていう名}ラストネームで呼んだ時、兄妹そろって反応されてもさ？ ほら、色々と困るんだよ
 ね」

たとえば作戦中など、迅速な指示が必要になった時、ザラの名を呼んだ際、兄妹ふた
 りがそろって反応してしまつては効率が悪い。

「だからさ——これからステラって呼んでもいいかなア？」

下心に容易く剥がれるメツキのような理屈を付けて、ザフト兵達は訊ねた。

（おおつ、軟派だぜ）

（さすが、ナチュラルなジゴロトーク！）

その問いかけを構成したのは、作戦効率を高めんとする向上心——ではなく、少女とお近づきになりたい、という六割以上の下心であったようである。

訊ねられたステラが、次に、じつとザフト兵達を睥睨した。円らな目をじいと細めて、相手を観察する。

彼らはすべてが思い通りに行くと、屁理屈の上の都合の良い返答を期待している。

若々しい、それでいて慇懃な表情を観察していると、自分を見る視線の中に、なんだか生理的な「やなもの」を感じた。その時点で、彼女の答えは決まった。

「やだ」

素っ気のない一言に、ぴしりと音を立て、青年達の心が砕かれる。

一言の許に拒絶され、焦ったように彼らは反論の言葉を探した。

「で、でもなあ……っ！」

「ほらっ、名前で呼ばせてくれないと、作戦効率がさあツ」

「ファミリーネームが不便なら、コードネームを使えばいいもの……」

「えっ？」

虚を突かれたような顔をするザフト兵。

コードネームは、ある一定の条件や任務内でのみ用いられる、暗号のようなモノだ。彼女はそれを、アスランと彼女を区別するために用いれば良いという、妙に理に叶った返答を返して来たのだ。的を射ていて、反論のしようがない。

「じゃ、じゃあ……なんて呼べば？」

「ザラには、まだなれない——だから」

ステラはじつとそこに据え、小さく云った。

「ルーシエ——……」

そうして「それ」が——彼女の、軍内でのコードネームとなった。

それは彼女がいまだに切り捨てられない、昔の名前だ。

彼女がエクステンデットであつた時代の名を表す——灰色の呼び名。コードネーム

「ステラ・ルーシエ……？」

今の彼女は、灰色の過去と決別し、ザフトに身を寄せた。だがそれは、地球軍に居た頃の過去をすべて忘れて良い、ということと同義ではなかつた。

多くの者を奪つて来た過去があるからこそ、今度はそれに向き合うことで、多くの者を未来に守つていかなければならない。

彼女はこの表裏一体の名を、あえてザフトでも用い続けることを思いついた。ルーシエという名前自体が、自戒の意味を込めたものとなる——そう考えて。

——せめて、あの兵器デストロイをこわすまでは……。
だからこそ、そんな日がやって来るまでは、ルーシエという名で呼ばれ続けようとした。

瞬間、艦内に指令がかかった。

すべての兵を集める——作戦会議の報せであつた。

広い会議室に集められたすべての兵士達に、この作戦の司令官であるセルマンからの通達があつた。

内容は、他ならぬビクトリア攻防戦についてだ。

「知つての通り、あの基地は大型のマスドライバー施設“ハビリス”をビクトリア湖に建設し、保有している。このマスドライバーを制圧することが、今回の侵攻戦の最終目標である」

前方のスクリーンに映し出された地図をタクトで示唆しながら、セルマンの言葉は続く。

兵士達の最前列に、アスランとステラも並んで構えていた。

「なお、この湖は、大陸にある東西の大地溝に沿う隆起帯に挟まれた凹地に出来たものだ。間もなく本艦が通過するであろうグレート・リフト・バレーを越えれば、その先に広がっているのは、平地だけ」

平坦な土地柄、そして、降水量が多い気候も相まって、かつて基地周辺の土地は、大規模な農業で栄えていたという。

「つまり基地周辺に、要塞から放たれる攻撃を凌げるような地形的障害物は存在しない。まあ仮に、敵要塞からの死角に回り込み、敵のビーム砲をやり過ぎたとしても、敵は高い誘導性能を持つミサイルを多数搭載している。あちらが不審な敵影を少しでも察知すれば、こちらがすぐにマトにされるだろう」

「かの要塞により、小回りの利かない輸送機を用いた突入策はリスクが大きすぎる。ニュートロンジャマーの影響により長距離射程の電波式誘導弾は用を成さないが、レーダーに熱源が捉えられる範囲であれば、敵の誘導ミサイルの餌食になる可能性は高いからな」

「——よって、モビルスーツでの単体での侵攻が最善と考えた」

そこで、セルマンと、その副官がかわりがわりに言葉を紡ぎ、作戦を説明した。

アスラン達の地球への降下を遅らせた、ジブラルタル基地を襲った大嵐——これを生

み出した大型の乱雲が、南下しつつあるという情報を得た。

「南下気流によつて、おそらく、第二次ビクトリア攻防戦は悪天候の中での戦となる」
「それに加えて、赤道直下の湖は水温が高く、そのために嵐が発生しやすい、という特徴的な土地柄を持つ」

「嵐の中での攻防戦となれば、視界は風雨に遮られ、狭まることになるだろう。……が、それは地球軍も同じこと。むしろ視界が遮られ、目視での照準が付けずらくなれば、地球軍の旧来の迎撃システムは機能を損ない、防衛力は一気に減衰する。この点、縦横無尽に地上と空中を駆けずり回れるモビルスーツを有したザフトの方が、圧倒的に有利だ」

——これに、賭けるしかない。

突風や豪雨によつて、目視での遠方確認が行いにくくなるということは、接近手段を持ったモビルスーツに利がある。無論、その風雨による弊害はザフトもこうむるようになるが、地球軍と比べれば、圧倒的に軽い。

考えられる悪天候を利用する——地球の自然を、味方につけるといふ奇策である。

地球軍の迎撃システムのほとんどは、旧来の備え付けの高射砲、または戦車や対地空砲が多い。

熱源を探知して追尾ミサイルを放つ要塞には、そのような小細工は通用しないだろう

が、

「勝機はある。地球軍の戦力は、完全なる要塞のワンマンだ。アレさえ落とせば、我々の勝利は決まったも同然」

「肝心の、その方法だが……」

セルマンはそこで、アスランに目を遣った。

「敵の要塞が、フェイズシフトに似た実体弾を無効化する装甲を持っていることが考えられる。よって、これを突破できるのは——『イージス』と『デイフェンド』に限られる」

「なに……ッ！」

「特務隊のふたりに、アレを突破してもらおう他ない。——我々、地上部隊に出来ることは、ふたりの要塞までの道を切り拓くことだ」

「実戦に投入されるのは、『ディーン』『シグー』『バクウ』のような大気圏内で運用されるモビルスーツだ。」

「そのほとんどがビーム兵器を持たず、急を要して用意できるような兵器でもなかったために、要塞の装甲とリフレクターを突破できるのは、『G』兵器に限られる。」

「後方に据え、その指示を受けたディオ・マーベラスが、響めた顔をする。」

「つまり地上部隊の仕事は、このふたりのおもりつてことですかッ！」

「デイオ……。敵の要塞が、いかなる遠距離攻撃も無効化する映像はオマエも見ているだろう？　ならば接近して、直接手を下すしかない」

「ちツ……！」

「グイージス」と「デイフェンド」には飛行用の「グウル」を与える。空戦部隊の先導の許、要塞までなんとしても辿り着いてくれ」

指示が飛び、兵士達は敬礼をする。

「……？」

見様見真似で、ステラもその姿勢をマネて見た。

びしっ

条件反射にアスランの姿勢をマネて見たが、かざした手の角度が、全然違っていた。

——地球軍にいた時は、こんなに腕を傾けなくて良かったのに……。

そして今、鈍色の厚い雲が、空を覆った。いつ、雨が降り出してもおかしくはない天候が訪れる。

渓谷状になった隆起帯グレート・リフト・バレーを通過した「コンプトン」は平野へと出、開けた土地に

よって、遠方にビクトリア基地および、マスドライバーの姿を確認できる地点まで辿り着いた。

作戦開始時刻は——しごく気まぐれな、この地の天気が荒み出した時。つまり、強い

風雨が生み出された時だった。

「——風になるな」

“コンプトン”の艦橋で、セルマンがひとり、呟いた。

——風。

その表現は、天候に対して用いられたものか。それとも、戦況を示すものになるのか……。

次の瞬間、大雨が降り出した。突風が発生し、平野の木々が薙ぐ。一瞬、世界が真白色に閃き、瞬く間に雷鳴が轟き出す。

地球が誇る大自然が——牙を剥いた。

「作戦開始だ！ モビルスーツ隊、展開！」

モビルスーツ群が、次々と展開していく。

第一に、四足獣型の“バクウ”部隊が出撃して行く。“バクウ”の主たる武装はミサイルポッドに、レールガンである。機動性においては不整地でも群を抜いた性能を誇り、前線へと突入する部隊としての役割を果たす。

次に出撃したのは“ザウート”であるが、こちらはタンク型のMSという外観からも機動性が低く、その代わり、長距離射程が可能な狙撃銃器を多く搭載している。主に、艦上からの後方支援射撃に務める。

やがてイカのような姿形をした「グリーン」が、続いて「ジン」が出撃。最後に——
「デイン」の空戦部隊が出撃許可が出された。アスラン達が配属された、主力部隊だ。
「グウル」の扱い方は大丈夫か？」

「マニュアルはみた。……問題ない」

アスランからの通信が開き、ステラはそれに応じた。

「グウル」とは——ザフト軍が開発したモビルスーツの飛行支援体サブフライトシステムのことである。

地球の重力は、いささか「イージス」や「デیفエンド」には重すぎた。二機のスラストは、自機の重量に勝るほどの滞空性能ホバリングを有していないため、空中での推進力不足を補うために、このサブユニットが必要となる。大気圏内では「イージス」もM A形態で飛行することは出来ないし、M A形態に変形する機会があると云えば、大型のエネルギー砲を放つ時くらいのものになるだろう。一方の「デیفエンド」もまた、今は防衛に徹底した大型のビームシールドを装備している。これにより要塞からの砲火を耐え凌ぐ防衛力、光波防帯の展開が可能となるが、その分だけ重量も跳ね上がり、奇襲機としては致命的な、機動性を欠いた状態での出撃を余儀なくされていた。

——まさか、ステラと肩を並べて出撃する時が来るなんて……。

作戦の概要も、初めて扱う「グウル」のスペックも、頭に入ってる。——その言葉を聞き届けたアスランは、頼もしいような、しかし、素直にそれを喜ぶことは出来ない複

雑な心境に陥った。

「さつき、セルマン隊の隊員から聞いたぞ——任務上の便宜名を付けたって？」

「呼ぶときに、必要になったから」

「……そうか……。ルーシエ、だったか？」

「うん」

ステラ・ルーシエ。

アスランは顔を伏せ、までも考えに囚われる。

——だが、それは……おまえが地球軍に居た頃の名前なんじゃないのか……？

——そいつはおまえを……苦しめて来た名前じゃ、ないのか？

喉元まで出かかった問いを、アスランは寸での所で飲み込んだ。

その名をあえて用いることにも、きつと、彼女なりの覚悟があつてのことなのだろう

と判断したからだ。

——母上がこの光景を見たら、いったい……どう思われるだろうか……。

母上は、女の子としてのステラを大事にしていた。

厳しく教育することはあつても、平凡な、心の優しい女の子に育てていた。息子として、自分の教育は父が厳しく、娘として、彼女の教育は母が優しく行っていた。そうなることをアスランも望んでいたし、間違つても「出来るから」という理由だけで、戦場

に送り込むような真似は……。

オペレーターの発進許可が、アスランを現実に取り戻す。

次の瞬間、空中に二基の「グウル」が打ち出され、ハツとして、その機影を捉える。考えていてもしようがない——作戦は、始まったのだ。

「アスラン・ザラ、『イーゼス』——出る！」

アスランの声と共に、真紅の機体が、空中へと踊り出す。

「ステラ・ルーシエ、『デイフェンド』——出る」

漆黒の鎧を纏った機体が、続いて「グウル」へと飛び移った。

二機の前方に、「デイン」の空戦部隊が展開する。二機を取り囲むようにして集まって来た僚機より、通信回線が開く。

〈要塞までの道はオレ達が切り開いてやる！　しっかりついて来いよ！〉

「『デイン』部隊が、そのままビクトリア基地へと向かう。

「……基地の戦力を奪った後は、基地内にいる地球軍共は、皆殺しにしてもいいんだよなあ？」

その「デイン」の通信回線の中で、デイオ・マーベラスが不穏な言葉を発した。

それに賛同したベルクトが、その言葉を助長する。

〈制圧した後、苦し紛れに自爆装置でも使われようもんなら、味気がないからな〉

「それは早計だぞ、ふたりとも。まずは敵の要塞を突破することが先決だろう。——下手をすれば、こちらが返り討ちに合う可能性だって十分にあり得るんだ」

隊員の諫めの声が響くが、

「ダイジョウブですって……。なんせ、そこにいる特務のふたりが頑張ってくれてるんでしよう？　これで突破できなかつたら、責任は全部、そいつらにあるってこつた」

〈ディオ！〉

「委員会直属の特務隊員だとか何だとか、偉そうなこと云う前にちゃんと仕事しろよ！　作戦が失敗したら、この作戦で散つてつた兵の命の分だけ自分の首を差し出す覚悟くらい、してもらわねえとな！」

一連のやり取りを聞いて、ステラは小首を傾げた。

——何をイライラしてるんだろう、あの男は。

きっと、自分とアスランのことを言ってるのだろうが、まったくもって云っていることの意味が分からない。

——失敗？

こいつは初めから失敗を視野に入れて、戦場に出ているのか？　任務の中で、失敗すれば、死ぬだけだ。

——“フアントムペイン”にも、失敗は許されなかつた……。

失敗を重ねれば、無能^{用無し}と判断されて、処分の対象にもなった。

そう——失敗は、死に直結した言葉。

それが、彼には分からないのだろうか？ 死ぬことが怖くないのだろうか？

——最初に死んでいくのは、あいつらのような、命を大切にしない者達だ。

傍らのベルクトが、通信にて声を続けた。

へま、頑張ってください、おふたりとも。けど、忘れないで欲しいですねえ。いい機体さえ預かってればなあ、オレ達にだって、あの要塞を落とすことは——

刹那、一同のコクピット内にアラートが鳴り響いた。

↑——回避いッ！——↓

ベルクトの言葉を遮って、表情を真っ青にした隊員の怒鳴りが響く。

アスラン達の反応は早かった。隊員の声が放たれるよりも前に、いち早く危機を察知していた「イーゼス」と「デイフェンド」は大きく回避行動を取っていた。

一刻置いて、数機の「デイン」が回避行動を取る。

だが、わずかに反応が遅れた三機の「デイン」は、はるか遠方より去来した強大なエネルギー砲に飲み込まれた。

豪雨すら吹き飛ばし、空間を風いだ赤色の巨大エネルギー砲が、光の奔流となって彼らの横を通り過ぎて行く。ベルクト機は一瞬にしてのみ込まれ、跡形もなく爆散した。

エネルギー砲の矛先は過ぎ去った後に平地に着弾し、大地を抉り、広大な土地を穿つ。巨大な砲火ははるか遠方、基地の方角から放たれたものと認識する。

「……………!?!」

一同が、絶句した。

——なんだ、今のは……………!?!

圧倒的な破壊力を目の前にして、アスランは愕然として、目を大きく見張った。映像では、既に敵要塞の誇る火力を見たことがあった。

——だが……………まさか、これほどの威力とは。

炎の塊と化した何かが、前方の地表に転がっている。数刻前まで、意気揚々と出撃して行った、同胞達の変わり果てた姿だ。

今の一撃で、どれだけの兵が死んだだろう。

どれだけの兵の命が、戦場に炎の華を咲かせただろう。

瞬時、戦場がピリツとした空気に吞まれる。

——油断は許されない。

この事実を自覚させられたザフト兵達が、無条件に、気を引き締めたのだ。ステラが、小さく言葉をこぼした。

「……………ひさしぶりだね……………」

動揺と緊張、不安と焦燥——

戦場の誰もが、破滅を導く要塞の一矢に慄いた状況下で、ステラだけは唯ひとり、確信を持つて対象を捉えていた。

おおよそ、二ヶ月の再会となるのか。

やはり、この目で見えて、その目で威力を確かめて思い知る、初めからアレは、この世界にはあつてはならぬモノであることを。

カプトガニのような型をした巨大な装甲、背部フライトユニットに、それ自体が三十分メートルを超えるであろう巨大な二つの砲門を構えている。

円盤型の外観から、それは一見「UFO」のようにも見える。地球外宇宙からやって来た、未知からの来訪者のように。

だが、違う——。

あれは、来訪者などではない——純然たる、破壊者だ。敵に回せば、なんて理不尽な火力だろう。

円盤形態から覗かれる、鋭く輝く紅眼が、寂しげにステラを睨んでいた。その眼はまるで、どうして己を見捨てたのだ、と彼女に嘆きを訴えかけているようで、どこか哀しい眼をしていた。

相手は機動兵器だ、しかし不思議とそれ自体が意思を持ち、生きていくかのように思

えてしまう。

なぜだかステラは、そいつと会話をしているような気分になった。

知らない土地の、知らない時代の、知らない人間に改良の手を加えられ——あの子は、今、ここにいます。

「ごめんね」

ステラはもう…… “あなた” に乗ることは出来ない。

わたしの還るべき場所はもう—— “あなた” じゃない。

自身の過去に、別れを告げる。

今のステラには “あなた” を連れ出してしまった——そんな責任がある。たったひとりだけで、こんな場所までやって来て、大変だったよね……？

だったら………。

せめてステラの手で、

この日、この晩、この場所で、

「ステラが完全に——破壊してあげる………！」

強い瞳を浮かべながら、スロットルに手を掛ける。

“デストロイ” を——絶対に沈めるのだ。

へ行くぞ、ステラ！

「わかった……！」

大嵐の中、黒鉄の『デیفエンド』が——黒鉄の『デストロイ』へと向かった。

『黒鉄の要塞』 B

鈍色の空が、彼らの頭上で暴れている。

一面に立ち込める暗雲が一切の月光を遮り、降り頻る豪雨は、夜嵐によつて機体の表面に横殴りに重吹き付けられている。

閃光が奔り、視界が瞬と閃けば、はるか遠方に、雷鳴が轟然と響き渡った。

——なんだか、恐ろしくさえ思えてしまう天気だ……。

モニター越しに、アスランは思わず目に拡がる景色に気圧されてしまう。——これが大自然の猛威か、と。

——宇宙の向こう側の「プラント」では、すべての天候を人間が管理している。

だが「プラント」は、決してこのような暴風雨を予報することはない……というより、このような悪天をあえて造り出すことをしない。

嵐は、人間の利益にならないからだ。

降水量が減り、生活に悪影響が出るような日が続けば、意図的に雨を降らせることもあるだろう。だが——殴りつけるような雨、轟く雷鳴、大地を穿つ雷の矢、巻き上がる

旋風——こうして、ひとりの人間に畏怖の念すら与えるような大嵐を、進んで発生させたりはしないのだ。

それに対して、赤道に近いビクトリアでは、一月に一度は当然のようにこの規模の暴風雨が発生すると聞く。その弊害によって近隣の地域では度々に死者が出るというのだから、それこそ宇宙育ちのアスランにとって、確実に見たことのない暴風雨であることは疑いようがなかった。

『地球の天候は、*「プラント」*のようにはあらかじめプログラミングされているものではないからな。このような不測の事態も、そう珍しいことではないさ』

頭の中に、クルーゼ隊長の言葉が蘇る。

——たしかに、その通りだ。

人間が管理できないほどに、今、天は暴れ出している。

荒れ果てた空を見て——初めて大自然の驚異を目の当たりにして、アスランは不意にこんなことを考える。

この嵐はまるで、人間同士の争いに呆れた地球が、天気を通じて激しい怒りを顕しているかのようだ。

ザフトにとって、第二次ビクトリア侵攻戦がかくも凄まじい夜嵐に見舞われたことは、早い話が幸運なことであった。

これは“コンプトン”での作戦会議の折にも説明されたことではあるが、モビルスーツを持たない地球軍は（“デストロイ”の存在を抜けば、）基地の防衛のために、地上に備え付けられたの高射砲や対空砲・戦闘機や戦車など、旧式の兵器に頼るしかなかった。すべての火器はナチュラルが操縦することが必須であり、目視での照準合わせが必要だ。搭乗者が正確な照準を付けなければ、いくら相手がモビルスーツといえど放った砲弾は当たらないし、敵に致命的なダメージを与えることは出来ない。

この点、凄まじい夜嵐は——地球軍のそこまで高くない視力と、そこまで広い視界を、大きく遮ってくれると云えよう。

一方のザフトモビルスーツも大嵐により視界は狭まるだろうが、視力で云えば明らかに基礎身体能力の高いコーディネイターが剋している、その上モビルスーツは自在に動き回ることもでき、これらの優位性が奪える時点で、吹き荒ぶ夜嵐は、ザフト軍にとって非常に有利に働くだらう。

だが、実はこの夜嵐は——地球軍にとっても、非常に幸運に働いていた。そのことをステラ達ザフトの侵攻部隊は、まだ、知る由もなかったが。

ビクトリア基地に聳え立つ“円盤型の要塞”に迫り着くには、その進路にある数多の

地对空砲から繰り出される、激しい砲火を突破しなければならない。

防衛線を張るために、戦車や戦闘機も出動している。いずれも従来古い兵器だが、看過できた戦力ではなかった。ビクトリアまで追いやられた地球軍がアフリカの戦力をこの地に集結させているのだ、ザフト軍が「質」で攻めるなら、地球軍は「量」という、大規模な戦となる。

地对空砲や戦闘機といっても、撃ち出されるのは実体弾に限られ、PS装甲を持つ「イージス」と「デイフェンド」には何のダメージも与えられない。よって、アスラン達は要塞以外の戦力を無視することも可能だが、被弾すれば被弾するだけ、消費電力が高み、エネルギーダウン死期が近づく。現時点で、この二機がバッテリー切れを起こして撤退すること、ザフト全軍が撤退を余儀なくされるということと同義だ。

これらの砲火を掻い潜り、あるいは砲台を殲滅した後、なんとしても「デストロイ」に接近し、ビームサーベルを突き立てなければならぬ。

作戦会議の折、セルマンは云っていた。

『地球軍の戦力は、完全なる要塞のワンマンだ。あれさえ落とせば、我々の勝利は、決まったも同然』

セルマンは嘘は云っていないかった、だが地球軍も、それを重々に承知している。

肝心の要塞が陥落すれば、基地の防衛力は一気になし崩しとなる——これを理解して

いる地球軍は、要塞の足元、および、これを中心とした同心円を描くように守備隊を配置していた。

この戦場は、もともと採草地として扱われていた平坦な原野であるがゆえに、どの方角から要塞へと攻め込もうと、それを囲う地表からの激しい砲火がモビルスーツ隊を襲う。

〈周辺の砲台を片っ端から潰していかないと、とてもじゃないが、あのデカブツまでは辿り着けないな……〉

僚機の「 Dein 」の一機から賢い言葉が飛び、アスランもそれに同意する。

ハッキリ云って、今回、地上のモビルスーツは当てにならない。空中にて三次元に対応した回避行動が取れる空戦用モビルスーツでなければ、艦砲にも匹敵する要塞からの殲滅砲を回避するのは至難の業だ。かの要塞が屹然と顕在している以上、地上部隊は迂闊には基地へは近寄れない。——というより、近寄ればどうなるかは、彼らも賢い……おのずと分かっているはずだ。

〈要塞のフェイズシフトは「 Dein 」じゃどうにもならん！ 空戦部隊が周辺の砲台を潰して回るから、オマエ達は砲火を避けつつ、あのデカブツに接近しろ！〉

「分かりました！」

隊員からの指示が飛び、「 Dein 」の編隊が、羽虫のように一斉に散らばった。戦闘

区全域に備え付けられた、地球軍の砲台を制圧しにかかったのだ。

飛来するモビルスーツを相手に、地球軍の戦車や対地空砲はあまりに役者不足だった。砲弾は空中のモビルスーツを狙い撃つが、視界も悪く、風雨によつて弾道はそれる。モビルスーツの火力と機動力、そしてそれを操るコーディネイターの優れた視力を前に、砲台は接近を許す。地球軍の守備隊は、まるで太刀打ちできずにいた。繰り広げられたのは戦闘というよりも、あまりに形勢が一方的すぎて、虐殺とも見て取れた。

だが、形勢は一気に打つて変わった。

守備隊の中央に構えられた「デストロイ」の円フライトユニット盤より、熱ネフェルテムプラズマ複合砲503が火を噴かす。

まるで「傘」が開くように、円盤から——数多の光条が、全方位に向け、飛び散った。

無数の光条が戦場に迸り、周辺一帯を大きく穿つ。

ザフト兵一同は面喰らい、青褪めながら機体を駆つた。藁にも縋る思いで回避行動を取る。が——ステラの眼前を飛行し、ビーム砲を二重に回避した「デイン」の一機が、それによつて油断したのか、空中に掉立さおたつように停滞する動きを見せた。

迂闊、無防備としか云い表しようのない挙動を犯した僚機を見、ステラは思わず声を上げていた。

「——よく見てッ！」

咄嗟に叫んだが、次の瞬間、停滞した「デイン」の機体を、野太いビーム砲が斬り裂いた。半ばから真つ二つに分断された機体は炎の花を咲かせ、そのまま墜落すると、機体ごと地に拉^{ひしゃ}げて爆散する。

——とまったらだめ……敵のビームは、通り過ぎ^{……}やしない！

「デストロイ」フライトユニットの円周上に構えられた、計20基もの砲門。悪神の名を持った熱プラズマ複合砲——「ネフェルテム503」——は、従来のMSの性能を凌ぐ、強力な出力を持っている。

照射時間は極めて長く、ビーム砲を発射しつつ、自在に照射角度を変えることも可能だ。

——たった一回かわしたからといって、安全なわけじゃない……！

圧倒的な殲滅力を持った、無慈悲の光線兵器……いや、光線という表現は、今回はあまり適切ではない。

——「光の線」は、避^かわせば通り過ぎて行くけれど……円盤^{デストロイ}から放たれる「それは、周囲一带に張り巡らされる「光の糸」だ。

操縦を誤つて「糸」に接触すれば、機体は容赦なく両断され、命は炎に包まれる。——まさに、人の死を左右する「操り糸」だ。

——従来いままの常識など、一切として通用しない!

なおも「ネフェルテム」熱プラズマ複合砲の長時間・長距離照射は続いた。

巨大ビーム砲に、多くのモビルスーツが圧倒され、次々に撃墜されていく。地上には炎の花が咲き誇り、空中で生まれた花は虚空に爆炎の糸を引き、朱色を帯びた流星のように散り、そして逝く。

「デイフェンド」は「グウル」を駆り、周囲一帯に張り巡らされた「糸」の狭間を縫うように、巧妙に回避していく。忙しく機体を翻していると、圧倒的な火力を前にすっかり上がってしまったザフト兵の、上ずった声が響いた。

「おいおいおいおい、何だよアレは! なんつう長い時間ビーム出してんだ! あれじゃ接近もままならないだろうが!」

「死角はないのか!? ——「傘」の真下に、潜り込むってのはどうだ!」

「それじゃあ地上の砲台の餌食になるだけだ! くそ、どうすりゃいいんだよ!」

通信から、ただ狼狽える、ただ鬱陶しいだけの声々が響き、

「ちよつと黙って!」

思わず彼女は、感情のままに叫んでいた。

——「ここまで僚機が「なさけない」のは、はじめでだ。

アウルにステイング。——かつての彼女の僚機であったエクステンデット達は、あら

ゆる恐怖心を抑え込まれていた。滅多なことでは取り乱すことはなかったのだ。一般のザフト兵達に、そんな彼らと同じステージに立てとは云わないが、少しくらい黙っていて欲しい。心折られた者達の泣言ほど、聴いていて鬱陶しいものもない——こっちは今、真剣に命のやり取りをしてるんだ。

——喚くだけなら邪魔だ！

齒に衣を着せぬ大胆な物言いに、それまで消魂けたましかつた通信回線に、しんと静寂が訪れた。

彼女にとってのこの作戦は——絶対に退くことは許されない——彼女がみずからに課した『使命』でもある。これを阻害するのなら、たとえ友軍であっても邪魔なだけなのだ。

まさか『ディフェンド』の通信先から、かくも乱暴な言葉が飛び出して来るとは思わなかったのだろう。常よりぼんやりとした印象しか持たれていない少女に怒鳴られ、一同は唾然とした。しばし押し黙り、そしてすぐに状況を理解すると、コーディネイターとしての明晰さを取り戻す。

へす、すまん、取り乱した……！

へわるかった！ 嬢ちゃん！

隊員たちが、一気に統率力を取り戻していく。

アスランは唾然として、一連のやり取りに面喰らっている。

——あのステラが、怒鳴りをあげた……!?

妹らしからぬ一面に、アスランも一瞬、当惑してしまったのは、紛れもない事実だった。

後方に構えた “コンプトン” や “ザウト” ——さらには前線へ進み出た “ジン” や “バクウ” から、無数の砲火が放たれ、一目散に要塞へ迫る。

だが、これは円盤前面部の巨大な陽電子リフレクターによって無効化され、一瞬にして弾かれた。

陽電子リフレクターが弾けると同時に、円盤の前面部に構えられた巨大な高エネルギー砲門 “アフプラー・ドライツェーン” が光を充填し始める。

大風が、ザフト兵達の視界を遮る。—— “コンプトン” からの指示が飛んだ。
 〈膨大な熱源を確認！ 全機、機体正面の射線上から離れる！ 緊急回避ッ！〉

間を置かず、悪魔の吐息とも比喻すべき—— 巨大な熱光線が去来する。ザフト兵達は、大袈裟に思えるほどの距離を開け、射線上から退避する。

高エネルギー収束砲の照射と同時に、円盤の上部より無数の大型ミサイルが放たれた。熱源を探知した後、獲物を駆逐するまで追い続ける誘導ミサイルは——まるで一斉

に解き放たれた、餓えた猛禽のようだ。散開した獲物モビルスーツを啄むつばように、大型のミサイルが天上より降り注ぐ。ミサイルの被弾を受けたモビルスーツは、機種を問わず一斉に炎の塊に転じ、降り注ぐ雷雨によって鎮められ、鉄の塊へと転じて逝った。

地獄絵図——これでは、何が「大嵐」を形成しているのかが分からない！

「ええいッ」

大量の僚機が、駆逐されて逝く。

焦り、そして頭に血が上ったようにアスランは「グウル」から飛び跳ね、上空にて「イージス」をMA形態に変形させた。砲撃形態へと移行した後、怪物の名を冠する大口径エネルギー砲キュを撃ち放つ。

しかし、その砲撃もまた敵要塞に届く前に、アスランにとっては得体の知れない電磁障壁によって消し飛ばされてしまった。

「なッ……いッ……」

「イージス」が誇る「スキュラ」は、MS用の武装の中でも最大級の破壊力を有していた。

——「スキュラ」さえも、あの要塞には通用しないのか……!?

目を見張り、無効に終わった砲撃を見届けた後、すぐにMS形態に戻り、アスランは機体を単独で飛ぶ「グウル」へと寄せる、だが着地するための一瞬の隙を狙って、要塞

から勢いよくミサイルが飛来した。

「イージス」本体にはフェイズシフトがあるとは云え、要塞から放たれたミサイルは、モビルスーツ一機を爆発で包み込むに充分なほど巨大だった。膨大な質量を持つミサイルの着弾を許せば、確実に「グウル」の方が破損する。飛行支援体^{サブフライトシステム}を失って機体が地に落とされれば、もはや最新鋭機^{最新鋭機}と云えど、為す術はない。

——やられる!?

アスランが、ハツとして息を呑む。

次の瞬間、盾を構えた「イージス」の前に、漆黒の影が躍り出た。鈍重な外観をした漆黒の機体は瞬時に光波防御帯を展開させ、「イージス」の盾となった。

「『ダイフェンド』——ステラ!？」

ミサイルは弾け、無傷の「ダイフェンド」が滞空を続ける。

稼働時間に大きな制限のある光波^{アリユミューレ・リユミエール}防御帯は、電力を多大に消費する。

そのため、ステラはすぐに機体を覆うビームシールドを取り払った。

〈アスランはやらせない……まもる!〉

「ツ………すまない」

通信先から響いた声に感謝すると同時に、後悔がアスランを襲った。

——迂闊だった……!

原理は知らないが、あの要塞には、どんな遠距離砲も通用しないということは、既に分かっていたはずなのに。

仲間達を撃墜され、頭に血が上っていた。気を持ち直し、引き締めて、アスランは再びスロットルに手を掛けた。

〈目標まで、距離二〇〇〇!〉

僚機からの声が飛ぶ。

二機の“G”は、再度、互いに顔を見合わせた。

「行こう、アスラン……! あの子には、近づかなきゃだめ」

「……わかった、行こう!」

目標までの距離は、次第に縮みつつある――。

二機の“G”は再び、円盤型の要塞に向けて前進を開始した。

↑―― “ティン”部隊、怯まず二機に続け! ↓

〈あれ! 一つの間にか、オレ達があのふたりに先導されてねえか!〉

〈あ、ホントだ! 何してんだよ!〉

〈いや、おめーの責任でもあるっての!〉

“デストロイ”からの猛攻は続いた。

再度、円周上から“ネフェルテム”が放射され、ザフト兵達は必死になって機体を駆

る。——大地に根を張るように巡られたビーム砲は、いつ見ても心臓に悪い。

今の「デストロイ」は、まるで「傘」のような外観をしていた。本体部分^人と背部^円フライトユニット^盤を分離したがために、円盤を支えるための「脚」を、代わりに柱で代用しているのだ。

棒に支えられるような形を取った円盤は、まるで「傘」のようなシルエットをしている。もつとも、嵐によって、鮮明にはその姿も映し出されないが。

〈地球軍の奴ら——正気じゃないな〉

「ネフェルテム」は、地上のモビルスーツへと甚大な被害を生んでいる。——が、それと同様に、地上に構えられた地球軍の守備隊をも、容赦なく業火に包んでいた。

たしかに、無理もない。

身動きの取れない高射砲や対地空砲では、要塞から放たれる無限照射攻撃を回避する術がないからだ。

そもその「デストロイ」は、殲滅用に開発された機体。

地上のモビルスーツを焼き払うために、地上の守備隊をも犠牲にしている。つまり地球軍は、仲間を平気で切り捨てているのだ。——敵を斃すために、戦に勝つために。

「……………」

「イージス」を空中で泳がせながら、アスランは目を見張る。

——ナチュラルが、ナチュラルを……!!

守備隊の者達は、あの要塞の性能を、前もって知っていたのだろうか？ いや、知っていたら、すすんで砲台に乗り込もうなんて思わないだろう。乗り込もうと思う者がいたとすれば、それはおそらく、自殺志願者に限られる。

司令部の人間が、前線の兵士達を、一方的な都合によつて切り捨てているのだ。

「これが、戦争か……!!」

「——ミサイル、来るぞ！」

再び、円盤上部から無数のミサイルが飛来する。

誘導弾による弾幕、凄まじい追尾性能を持つ大型ミサイルは——「グウル」での飛行を余儀なくされる二機の「G」と、その後続く「デイン」の部隊を、徹底的に追い詰めていく。

もはや戦況は一転し——戦場に生存するザフトの僚機の数も、すっかり減少していった。

だが、依然として要塞から放たれる大型ミサイルは、怒濤の数を誇り、一機に対して飛来するミサイルの数が、圧倒的に増え始めている。

「へくそおツ、振り切れねエ！」

「正念場だ！ 頑張れエ！」

一機に対して、平均、五基以上のミサイルが飛来する。

次の瞬間、悲鳴が通信越しに響き渡った。

〈ぐわッ!〉

〈デイオ!〉

デイオ機の「デイン」が、翼部に被弾を受け、そのまま地表へ、基地方面へと墜落して行く。

歯がゆい思いをする部隊であったが、墜落して行く味方に集中する猶予はなかった。怒涛のミサイルの追撃を振り切ることで、みなが精いっぱいだったのだ。

——どう足掻いても地球軍は、ザフトを「要塞」デストロイに近寄せたくないらしい……!

「イージス」も「デイフェンド」も、互いに健在だ、慣れない「グウル」を駆りながら、ふたりの卓抜した操縦センスにより、撃墜を免れている。

だがそれでも、アスランとステラのどちらかが要塞に近寄れなければ、ザフトに勝利はない。

——これ以上、長引かせてなどいられるか……!

ミサイルの追撃を免れながら、次の瞬間——「イージス」が一気に要塞へと接近した。

そこで初めて、手首の先から二刀のビームサーベルを構え、一気に要塞へと直接攻撃

を仕掛ける！

「アスラン！」

陽電子リフレクターが展開され、*“イービス”*のビームサーベルを迎え撃つ！

光の剣が、光の障壁と激突した。

ビームサーベルは、わずかに障壁に穴を開けた後、すぐに弾き返されてしまった。

「!?!」

アスランは直ちに機転し、バーニアを逆推進させた。

要塞からの距離を開くと、*“グウル”*へと飛び移り、引き続き、背後から迫るミサイルを牽制し始める。

啞然として、戦況を整理した。——ビームサーベルが、弾き返された！

「出力が足りない……!?!」

たしかに、予定通りにビームサーベルを用いれば、あの陽電子リフレクターを突き抜けることは出来た、だが、広大な表面積を誇るそれを弾き返すほどの出力が、*“イービス”*にあるかと云われれば——それはまた、別問題であった。

ステラもまた、一連の*“イービス”*の決死の攻撃を目の当たりにしていた。

ぐるりと機体を翻し、頭部イーゲルシユテルンにて弾幕を張り、みずからを追尾する大型ミサイルを爆破して行く。

——リフレクターが破れないんじや、装甲なんて削れない！

機体を駆りながら、考える。——思えば、出撃中に対処法を自分で考えるなんて、初めてかもしれない。

ビームサーベルが、「デストロイ」に通用しない？ いや、正確には通用はするのだが、突破するにはこんな旧型では、あまりに出力が足りない！

——これ以上、長引かせてなんていられない……！

僚機の総数は、確実に減っている。ザフトの地力が、確実に削がれて来ている。

最大限に気を配るべきは、「イージス」と「ディフェンド」の残りのエネルギーだ。それぞれに「スキュラ」と「アリユミューレ・リユミエール」を使用し、まして「ディフェンド」に関して云えば、光波防帯帯は万全な状態で使用しても、五分以上の継続使用が不可能なほど多大な電力を消費する代物だ。

これ以上、二機のバッテリーを減らすわけには行かない。

「？」

——バッテリー？

その言葉に、ステラは小首を傾げた。

ハツとして、懷疑する。

(じゃあ、今の「あの子」は……何でうごいてるの?)

その瞬間に思い至ったのは、要塞の、動力源についてだった。

「デストロイ」は、かつて一端のモビルスーツとして、巨大なバッテリーで稼働していた。性能についての「こまかいこと」は、搭乗者にも詳しく知らされていなかった、だが、すくなくとも機体は母艦と連結していなかったし、どんなものであれ、機体内部に独立した電力源が内臓されていた。

だが、今の「デストロイ」は機動兵器ではなく——固定砲台だ。

——なら、その動力は、どこか……？

基地の司令部が、パワープラントが、すぐ傍にある。ならば仮にも動力源は、バッテリーでなくても良いはずだ。

「……もしかして」

ステラの頭に、考えが閃いた。

放たれたミサイル群に追われたアスランは、機体を翻した瞬間、その群に向けて「スキュラ」を牽制として放った。

これにより、大きく爆散したミサイルの追撃を免れ、機体の態勢を立て直す。

だが——次の瞬間、アスランは目をむいてしまうような光景を目にした。

要塞から放たれた、大型ミサイルの一発……いや、数発が、地球軍の戦闘機を数機と

して追撃し、これらを容赦なく叩き落としたのだ。

「は？」

思わず、呆気に駆られた声が出る。

——ミサイルの……追尾システムの誤認か？

地球軍の要塞が放ったミサイルは、どういうわけか“イージス”を追尾する途中、別の熱源——地球軍の戦闘機——を探知した途端、これを追い、撃墜したのだ。

「……まさか」

アスランの頭に、考えが過った。

戦場で散って行った、勇敢なザフトの兵士達。

司令部の都合で一方的に切り捨てられ、散って行った地球軍の兵士達。

戦死者たちを弔うように——雨足が弱まり始めた。

視界が開け、闇に包まれた戦場に、一陣の月光が差す。

アスランとステラは、それと同時に、大きく目を見張った。

ビクトリア基地に構える地球軍にとって、幸運だったことは、この日がちょうど「大嵐である」ということだ。

実際の所——〃円盤型デスの要塞トロイ〃は現在、機動兵器から打って変わって、固定砲台として運用されているが、改造に際して、やはりたったの二か月では、様々な無理が崇つていた。

その証拠として、円盤型のフライトユニット自体は——非常に、奇妙な形で基地に連結されているのだ。

月光に照らされ、視界が開ける。

初めて要塞の全貌が見えるようになり、ステラ達は目を見張った。

——あまりに………杜撰だ。

へなんだ、ありや……

僚機のひとりが、呆気にかえった声を漏らした。

だが、それも無理もない。

要塞は、思わず拍子抜けしてしまう全貌をしていたのだから。

「はりぼて……う？」

ステラが、小さく言葉を漏らす。

彼女が想像していた〃デストロイ〃とは——目の前に聳え立つ〃それ〃は、あまりに

違い過ぎている外観と、性能をしていた。

第一に、違和感が隠せない、要塞を支える柱の話をする。

嵐に隠されていたが、円盤とそれを支える柱の部分で、外観の統一感がまるでない。円盤が長砲身を構えた姿は実に脅迫的で、自然と畏怖の念さえ抱かされる。だが、これに突き刺さるようにして立つ支柱の部分は、いかにも「間に合わせ」で建造した雰囲気漂わせ、畏怖どころか、違和感しか覚ええない、おそらくフェイズシフトに覆われてすらいらないのだ。先には「傘」と形容したが、云つてしまえば円盤に取っ手が生えた「キノコ」のような形状に収まっており、石灰色が剥き出しになっている支柱は、まるで本体とアンバランスな外観をしている。

原型を知るステラから云わせれば、「とつてもかっこわるい」。

第二に、友軍であるはずの守備隊の戦闘機を、ミサイルが敵と誤認して叩き落した話をする。

嵐に隠されていたが、おそらく、アスランがリアルタイムに見たケース以外にも、周りで多く、その誤認は発生していたのではないだろうか？ たった二か月間で、使い慣れない火器管制システムに手を伸ばした結果、敵味方の識別が曖昧な設定になっていた。地上の砲台を平気で破壊するビクトリアの連中なら、中途半端な設定のまま、運用

している可能性は十分にあり得る。

軍人としてのアスランから見れば、ひどく「杜撰」だ。

第三に、円盤の後背部から地中へと伸びた野太いケーブルが、無造作かつ、露骨に剥き出している話をする。

嵐に隠されていたが、ステラが思うに「デストロイ」の円盤状のフライトユニットは、あそこまで電力ケーブルを剥き出しにした、無様なフォルムをしていなかった。おそらく固定砲台として運用する際に、要塞の動力源をバッテリーから基地のパワープラントへ移すため、ビクトリアの技術者が、無理に電力ケーブルを延長させたのだろう。

原型を知るステラから云わせれば、「やっぱりかつこわるい」。

嵐が鎮まり、接近を許せば、なんて哀れもないデザインが露呈するだろう。

「……」

一同は、唾然としてしまった。

たった二か月の間に——未知なる「デストロイ」を固定砲台に改修した、地球軍の必死の努力は充分に伺えた、だが、フェイズシフトに包まれた円盤に対して、これを支えるのが不格好な支柱とケーブルでは、あまりにも……。

こちらが弱点です、と大っぴらに暴露しているようなものだ。

たとえ無様でも、せめて全体を塗装して円盤と支柱の色を統一し、弱点の露呈を防ぐ

とか、電力ケーブルを最低限の装甲で覆うとか……他にできる処置はなかったのだろうか？ それとも、単純に時間と資金が足らなかつたのだろうか？

——いずれにしろ、強烈な違和感を残したまま建設するあたり、ナチュラルらしい、という解釈もできる。

あるいは大局的に見て、要塞本体の火力に過信するあまり、運用することばかりを優先させ、外観や防御力それら周辺の問題点を後回しにした結果でもありそうだ。

「こんなもののために……！」

アスランが叫び、円盤を支える石灰色の柱の根元に向けて「スキュラ」を放った。支柱部分は、期待通りに大口径エネルギー砲の貫通を許し、爆散する。さらには砲撃によつて地盤が歪み、柱は一気に崩落した。

堅牢な円盤自体は無傷のまま、まるで、だるま落としのように地上へと落下していく。

——最後の足掻きだ。

支柱が崩壊し、高度を失つた時点で「アウフプラー・ドライツェーン」と「ネフェルテム」の存在意義は、完全に消失した。残る最後の武装——「マーク62」6連装多目的ミサイルランチャーの砲門がすべて開かれ、しやにむに撃ち放たれる。怒濤の大型ミサイルが、砲撃形態をとる「イージス」へと肉迫する。

次の瞬間——空中に躍り出た「イージス」の機体を、かつさらうように「デイフェン

ド”が掴み留めた。

漆黒の鎧を纏った機体は、抜き打ちにアリユミユーレ・リユミエールを展開し、すべてのミサイルの着弾を許すと同時に、そのすべてを無効化する。

連続する大型のミサイル大爆発が“イージス”と、それを抱えた“デイフェンド”を襲ったが、堅牢な全方位防衛帯は、二機へ対する一切のダメージを通さない。

二機分の重量を背負ったステラの“グウル”は、当然、推力が足らずに高度を落として行く。だが、“イージス”が態勢を立て直した瞬間、“デイフェンド”はみずからの“グウル”をアスランへと明け渡し、一気に“グウル”から飛び降りてしまった。

「ステラ!？」

期せずして“イージス”は“デイフェンド”の“グウル”を借用した形になる。

——悪あがきを……ッ!

なおも“デストロイ”からは、無数のミサイルが発射される。すべてのミサイルが“デイフェンド”へと集中するが、光波防衛帯を前にして、これは何の痛痒も齎さない。

“デイフェンド”を中心に——大爆発が巻き起こる。空中に巨大な炎の花が咲き、噴煙が巻き上がる。遠雷のように煙の奥が光り、次の瞬間、青い光が煙幕を突き抜けて、顕現した。

噴煙の中から現れたのは、漆黒の機体、ではなく——それ自体が、雷光のように

全身を青白く発光させたモビルスーツだ。

その機動は、まさに電光石火——いや、疾風迅雷。

漆黒の重鎧をパージした「デیفエンド」が一気に、地上に墮ちた要塞へと飛び掛かったのだ。

「——！」

——取り着くつもりか！

全身に備えられた光波発生器より、青白く発光した機体は、無数のビームウェーブを発生させる。抜き打ちに「デストロイ」へと迫り——隠されるように広背部から伸びた、電力ケーブルへと差し迫る！

「もう終わりだよ——『デストロイ』……！」

——決着は、ステラわたしが着ける！

重力を得た機体は、驚くほど一瞬にして地上へと墜落し、両腕のビームウェーブが、要塞から突き出したケーブルを真っ二つに両断した。

回線がショートを起こし、次の瞬間、気の抜ける音を立てて、要塞が静まって行く。

「『デストロイ』の紅眼から——灯が消えた。」

難攻不落の要塞が、陥落した瞬間だった。

〈お、終わったのか……？〉

生き延びた“デイン”から、震えた声が響く。

——ああ、終わった……。

地球軍の抵抗は、一切として止んだ。

要塞は、頼りの動力源と回路を切断され、もはや、あれを操る手段はない。残された対地空砲も、皮肉なことに、この要塞の砲火に吞まれ、ほとんど全滅している。

アスランは脱力しながら、のろのろと振り向き、自分たちがこれまで突き抜けて来た後の道を目に遣った。

“グウル”に乗りつつ、高い地点から、背後を振り返る。

どこまでも悲惨な——ひどく空虚な景色が広がっていた。

あれだけのモビルスーツと、地球軍の守備隊が構えられていた激戦の地だというのに——振り返れば、生気を宿したモノは、何ひとつとして見当たらない。

ただ、優しい雨に打たれ、月光に照らされた鉄の塊が、広がっているだけだ。

なんだか、名状しがたい感情に囚われる。

「……ああ、終わった……」

後は、基地の中で唾然としているであろうナチュラル達を、全員拘束すればいい。――要塞をいい気に、ふんぞり返っていたはずだ。

モビルスーツを前にすれば、多くの者が抵抗は無意味と悟り、投降して来るだろう。アスランは、決して無抵抗の者を撃とうとは思わない。

――だが、死んで逝った者達を想えば、彼らも殺しておいて然るべきではないだろうか……？

司令部のナチュラルが、守備隊のナチュラルを裏切り、切り捨て――殺した。

なのに、そんな作戦を立案する司令部の者達が、死を免れるなど、そんな暴挙を、許していいのだろうか。

（――悩んでも、しょうがない）

アスランは、はあと息をつく。

そのまま、ぐったりとシートにへたり込んだ。

（それにしても……）

流し目でちらりと、地上に降り立った“デイフェンド”の後ろ姿を見遣る。

（ステラ……、あんな技量うでを持ってゐるなんて）

作戦は終わったが、アスランは、浮かない顔をしていた。

ステラが持つ戦闘能力や身体能力には、アスランも冷や汗をかいた覚えがある。 //

ヴェサリウス”の格納庫で暴れ出した彼女を止めようとして割り行った時、そこには既に、アスランの知らない彼女がいた。重ねて云うが、アスランの知る彼女は、そもそもモビルスーツが操縦できるはずもなかった。

不本意とは云え、地球軍の手によつて彼女の中に養われたモビルスーツの操縦技能——それが今、アスランの現時点でのそれと、並ぶまでの高さを誇っていることに気付かされる。

そこに、ひとりの兄としての、純粹な焦燥が流れ込んで来る。

——俺は妹に、並ばれているのか？

認めたくはなかったが、戦場においてのステラは賢く、そして、なによりも強かった。大気圏内での戦闘では、モビルスーツの性能よりも、それを操るパイロットの腕の方が顕著に現われる。

先の一戦での“イージス”と“ディフェンド”は、ほとんど性能は互角で——所有する武装も“スキュラ”を除けば、ほぼ同等と云つて良い。

二人の置かれた条件たちばは同じ。そんな二機が同等の活躍をしているということは、すくなくとも、それを操るパイロットの技量もまた同等のレベルにあると捉えることも、出来なくはない。むしろ直前になって“グウル”のマニユアルに目を通した分だけ、ステラの方が卓抜した適応力を持っていた、とも考えられる。

そして彼女は、たった一言の許に、まだよく知らぬはずのザフト兵達の焦りを沈め、彼らの動揺を吹き飛ばした。モビルスーツの操縦だけでなく、いち軍人として、非常に賢い判断と言動を施したのだ、自覚があつたかどうかは怪しいが。

第一、アスランは何度も、ステラに助けられているのだ。

——抜かれていた……？ ステラに？

昔からほんやりしていて、甘えん坊で、泣き虫で……キラみたいで、いつも俺が面倒を見て来た妹に、俺が……？

戦闘は、たしかに終わった。

ステラに守られたこともあり、機体は無傷だ、だが、それによつて赤を着るエースパイロットとしての矜持、兄として彼女に接して来た者の面目に、大きな傷がついた。

——こんなにも、情けない話があるか。

妹に、抜かれるなんて……。

劣等感のようなものが、アスランを苛む。

初めて肩を並べて戦場で出——自分達の身長差に驚く。

敵対していた頃は、ここまでハッキリ知覚する機会はなかったが、それが実は、ひどく僅差であることを思い知らされる。

——だが、昔から厳しく育てられて来た俺と、甘やかされて育てて来た妹が、どうし

て並ばなければならぬ？

ましてステラは女の子で、自分よりも二歳も年下の、妹なのに！

——たったの一年、見なかっただけで……こんなに「差」が縮まっているなんて……

！

俺はいつたい、何をしているんだ？

どうすれば俺は、兄として、ひとりの人間として、前進できるんだ？

迷うことばかりで——父にはいつも落胆され、期待通りの戦績も収められない俺は

……。

アスランがそんなことを考えていると、次の瞬間、下方に据えた「デイフェンド」が動いた。

単独でその場から駆け出し、一気に、司令部の建物へと向かっていく。

「——ステラ!？」

いつたい、何を考えてる？

アスランは慌てて、彼女の後を追った。

“コンプトン”では作戦終了に伴い、戦況の整理を行っていた。

第二次ビクトリア攻防戦は、予定と違って、ザフトにとって想像を絶する甚大な被害を生んだが——まだ、動ける機体は多くある。

これを投入すれば、ビクトリア基地に隠れたナチュラル達をすべて炙り出すことは可能だ。

——ナチュラルの捕虜など、いらぬがな……。

元々、セルマンには、ナチュラルを許す気はなかった。

彼は、元ザフトの士官学校の教官を務めていた。彼の教え子の多くは、ジブラルタルの先遣部隊に配属されていた。——あの要塞によって葬られた、先遣部隊だ。

そして今、本隊からも甚大な犠牲者を出した。

——どれだけの若い命が、ここで散って行ったのか……。

特務隊のふたりの活躍がなければ、ザフト軍はおそらく、ここで壊滅していただろう。失われた命の数は多い、この基地のナチュラル達には、その責任を取ってもらわねばならない。

——そうでなくては、報われない！

一見、人徳のある男に見えたセルマンは、驚くほど冷たい声を放った。

「生き延びたモビルスーツで基地を包囲し、投降兵を炙り出せ。現場が落ち着き次第、全

員を整列させ——銃殺する」

その声に、艦橋にピリツとした空気が生まれた。

だが、彼らは戦争をしている。

相手を滅ぼすことは、ある意味で当然の判断であり、その場にいる誰ひとりとして、セルマンに異議を呈さなかった。

「えーつと……」

その時、オペレーターのひとつりが戸惑ったような声を上げた。

セルマンは訊ねる。

「なんだ？ モビルスーツは、まだ残っているだろうか？」

「それが、その……たった今、通信が入ったんです」

「んん？」

セルマンは小首を傾げた。

戸惑ったように、オペレーターは先を続けた。

「——現場の方で『ステラ・ルーシエが機体を放棄し、なにやら、単身で基地内部へと潜入して行った』と……『デイン』部隊からの報告が」

その報告に、一同は凍り付いた。

最初にリアクションを起こしたのは、セルマンだった。

「なにイツ?!」

「その後、彼女を引き留めるために『デイン』部隊の数名が突入し——そのさらに後に、アスラン・ザラが続いて基地内部へと突入したそうですが」

「なん………だつて!?!」

「命令違反………ですか」

これは、命令違反なのだろうか。

命令を出す前に、その行動を起こしたのであれば、まだ、命令違反ではない気がする。モビルスーツを放棄した時点で、彼らが通信を受ける手段はない。そのうえ「基地を制圧する」という、この一点だけを鑑みれば、彼らのその行動は何の罪にも当たらない。

——だが、なぜ………?」

なぜ、わざわざモビルスーツを放棄して、生身で基地に攻め込む必要があるのか。少女の後に——ザフト兵が数名——そしてその後に、アスランが続いたという。

——あの少女は、いったい、何を考えている………?」

基地の中には、まだ、地球軍兵士がうようよと構えているというのに!

セルマンは舌を鳴らし、ひとまず、指示を出す。

「この作戦は、あの少女が居てこそ成し得たものだ………! すこし、様子を見よう」

「はっ」

「地球軍が妙な動きをしないよう、他の部隊には、引き続き基地を包囲するよう、伝えておくんだ」

ザフトに包囲され、要塞を失った状態では、よもや地球軍も、大つぴらな抵抗運動は起こさないだろう。

だが、地球軍の抵抗の意志が一気に奪われるのは——あくまで「外」に出てからである。

内部では、まだ、想像もしていなかった「敗北」の二文字を突きつけられ、発狂したり、悪あがきをしている者達も、大勢いるはずだ。

そこに単身で突入するということは、尋常ではない危険性が伴う。

(生身での戦闘ともなれば、頼れるのは、自身の能力だけだぞ……！)

セルマンは、ステラ・ルーシェのことが妙に気に入っていた。——たしかに見目は可憐だが、そつちの意味ではない。

「ディフェンド」という機体を駆り、その特性を重々理解し、この作戦を立案してくれたのは、他ならぬ彼女だ。まるで、敵要塞の素性を知っているかのようだったが、事実、彼女がいなければ、この戦闘はどういった結末を迎えていたかもわからない。オペレーション・ウロボロスにも支障が出ていただろう——その点は、さすが、ザラの娘である。

だが、みずからをルーシエと名乗るあの少女は、どうやら、モビルスーツの操縦技術に関して、年齢以上の高い実力を持っているようだ。

では、果たして——銃撃戦はどうなのだろう？

不思議とセルマンは、それが気に掛かってしまった……そして、気に掛かってしまうからこそ、彼女には、無駄死にをして欲しくないのだ。

——若い子、優秀な子に惚れっぽいのは、教官時代からの悪い癖だが……。

基地内部へ突入して行った者達が、無事に生還できるかどうかは分からない。

だが、ミイラ取りがミイラになることだけは、絶対にあつてはならない。

「こんなところで、これ以上の若い命が散る。——それだけは、避けなければならないんだ……！」

セルマンは、激戦を生き残った優秀なパイロット達の生還——ただ、それだけを祈った。

『ニュー・ゲート』S

第二次ビクトリア攻防戦は、予定されていた攻略日より遅れながらも、ザフトの勝利に終わった。

結果だけを見れば、難攻不落のビクトリア基地を制圧するにあたって、ザフトは作戦へ投入した戦力のじつに六割以上もの損失を出した。地球上での戦闘において、こうも甚大な被害を出したことは、ザフトにとっては前例のないものである。

今回の作戦におけるザフトの勝因は、難攻不落の“円盤型要塞”——の、本体以外の部分に運用上の欠陥を発見したこと。強固な陽電子リフレクターとVPS装甲に覆われた“円盤”に対してはついに損壊を与えること叶わなかったザフトであるが、一方で要塞の動力源を断ち切ることで、この無力化に成功していた。

ビクトリア基地が、基地としての機能を損ない、照明が落ちた。

そのとき、深い闇に囚われた内部の往路、この空間に溶け込んで疾駆する——ひ
とつの影があった。

「——止まれッ」

要塞が陥落し、突きつけられた敗北——それでも中には、諦めきれない者も基地にはいた。

白い軍服に身を包んだ地球軍の兵士が、叫びながら、機銃を構えた。

男が怒鳴っている間にも、得体の知れない影は、凄まじい速度でこちらへと接近して来ている。迅速なあまりのスピードに、ナチュラルの目は動き捉えきれず、頭は冷静に対処しきれず、そして身体は反応しきれず——ダメ押しだらけの愚鈍な応射によって、あつという間に敵兵の接近を許した。

即座に懐に潜り込まれ、短刀が鬩される。瞬と頸椎を斬り込まれ、男はそれ以上の言葉を発することも叶わず、その場に卒倒した。

不穏な悲鳴と物音を聞き付けた他の兵士が「何事だ」と声を発し、引き続き機銃を構え、前方へと躍り出る、しかし騒然とした往路は痲癩パニックを起こした他の士官達でこつた返し、彼らは事態を把握することさえままならない。

電気の消えた狭い廊下の奥に、きらり、と何かが光る。——武装した二名の兵士が、その正体を探った時、

「ぐはッ」

「うあッ」

気が付けば、傍らを通り過ぎていた影に切り付けられていた、彼らは何が通り過ぎたのか知覚することさえできなかつた。

——この雑踏の中では……拳銃ハンドガンよりも、短刀サブパバルナイフの方が役に立つ。

利き手に短刀、反利き手に拳銃を構え——持ち慣れた重量に確かな手応えを感じながら、ステラは暗闇に忍び込んでいた。

まるで猫のようになやかに、それでいて女豹のように猛々しく、パニックになった雑踏の中を潜り抜けていく。

——無抵抗の者はいい、どうせザフトが勝つたんだ。

ステラが歯牙に掛けているのは、己の敗北も分からぬ愚か者だけだ。戦意や敵意が浮かばない者は素通りし、邪魔と判断した者には容赦なく、妨害された時点で切り捨てる。我を忘れて——身体が憶えているままに動いていた。

人身を切り付けている意識などない、ただ進路を邪魔する障害、突き進むに脅威と判断したした「モノ」だけを切り裂いてるだけだ。——傷つけた対象が人間であることなど、このときの彼女は疾うに忘れていた。

——そうまでしても、辿り着かねばならない『場所』がある……！

薄暗い闇に包まれ、痲癩に苛まれた基地内部であつたが、要所要所に案内用の矢印が描かれており、ステラは一目散に基地の司令部・要塞の管制室コントロールルームを目指した。

「ザフト兵だ！ 侵入されているぞ、銃を取れ！」

「なにをいまさら、抵抗したところで無駄だ！」

「ああ、我々はもう終わりだ！」

「貴様らあ！」

地球軍兵士達は、ここに来て、もはや統率力の欠片もない様子だ。

基地内はおおよそ二分化され、既に希望に打ちひしがれ絶望する者、いまだ現実が受け入れられず抵抗する者に分割されている。しかし後者と云えど、人混みの中でたったひとりの侵入者のために銃を乱射するわけにもいかない。潔く近接戦で応戦する他ないのであるが、凶器を翳した「侵入者」の動きは、精密な「抹殺者」のように敏捷にして緻密——要するに、ナチュラルにとって反則的に速かった。

——あんなの、敵うわけがない……！

冷徹な女の動きを見るだけで、戦意を根こそぎ刈り取られたような気分になった。

こうして、ステラは妙に容易く、管制室へと駆け抜けて行くことができた。

通路を飛び出せば、すこし開けた空間に出た。

彼女が立っているのは、無機質な大広間^{ホール}へと繋がった階段の階上だ。管制室へと続く昇り階段が、彼女の立つ位置の対岸にある。一気に階下へと駆け降りようとしたが、その瞬間、遠方でちかりと何かが光に反射した。

咄嗟に姿勢をかがめ、物陰に潜り込む。

——ドドドドドツ

激しい連射音が鳴り響く——頭上の壁に、多数の跳弾の火花が散った。

隠れながら、外の様子を窺う——

と、管制室へと続く進行方向に二名……いや、三名の武装兵を視認した。防弾加工のベストとヘルメットを装備した地球軍の武装兵だ。ステラが隠れた物陰に向けて銃撃を放っているが、それは侵入者を狙い撃つというよりは、ただその方面に向かつて銃弾をばら撒いているだけに映る。

——まるで素人、隙だらけだ。

飛散する無駄弾の嵐を前に、ほんの一瞬の隙を突いて、ステラが階上から身を乗り出した。階下へと鮮やかに飛び降り、焦りに焦って発砲された銃撃を避けつつ、倏忽と駆け抜け、敵兵士への距離を縮めた。

驚くほど簡単に距離を狭められ、敵はすっかり腰が引けている。最前の男の顔面に勢いよく膝を打ち付け、仰向けにのし倒す。それと同時に、ふたり目に短刀を擲け、これが男の胸に突き刺さる。恐怖に駆られた最後の男が銃を乱射したが、即座に身を竦め、手許に残る拳銃で応射、銃弾は吸い寄せられるように敵の頭を撃ち抜いた。

静寂が訪れる。

ステラは二番目に屠った男の胸に抜かる短刀を引き抜き、利き手に収め直した。——
『赤』いのがべつとり——ああ、いやな色だ……。

次の瞬間、背後から、ウイン、という物音がした——ドアが開いた音だ。

中からドツと敵兵の増援が現れ、応じるように拳銃を構える——が、それよりも早く敵の銃弾が飛んで来た。拳銃を弾き飛ばされ、電撃にも似た痛痒な衝撃が左手に迸る。

「ちっ」

条件反射だった。ステラは目の前に転がる防弾ベストをまとった盾を掲げ、次々に飛来する弾丸の雨を凌いだ。防御力など見込めるはずもなかったが、いつときの盾としては充分なものだ。

銃撃が弱まった一瞬の隙を突き、一気に広間へと躍り出る。

——得物は短刀しかないが、縮められない距離じゃない……！

地をせわしなく転げ回り、粗末な敵の照準を牽制。いざ突つ切ろうと思つたとき、また別の方向から銃声が鳴り響き、遠方の敵兵すべてがその場に撃ち殺された。

四足を地に張つた猫のような姿勢のステラは、目を丸くして、音の響いた方向に目を遣つた。そこに、遅れて現れた“デイン”部隊のパイロット達の姿が認められた。

「間に合つた！」

「大丈夫か、嬢ちゃん！」

「危なかつたなあ!」

なんで、ここに——それがステラの本音だった。

彼らは安堵したようにステラの許へとにじり寄り、快哉な笑みを浮かべている。

「大胆なことするぜ、管制室を潰すんだろ?」

「マスドライバーやあの要塞のデータ、破棄されちまう可能性があるからな! そうな

る前に司令部を制圧しようとは、さすが特務隊、思慮深いぜ」

「けど、事前の打ち合わせくらい欲しかったよな」

——別にそんなのが目的じゃない……でも、彼らなりに納得しているのなら、それでもいいや。

三名のザフト兵達を連れ立ち、対岸の昇り階段を一気に駆け上がったとき、そこはやはり、ビクトリア基地の司令部となっていた。

揃って壁に身を寄せ、

「よし、突入するぞ。いち、にの……さつ——」

物陰に身を潜めた緑色の声など聴かず、赤服の少女は一気に司令部へと飛び出した。

「てえオイ! 団体行動できねーなあの子!」

——さすが特務隊、とは云ったが、あれは撤回だ! あの子はただの、無鉄砲なばかだ!

三名の緑兵達もそれに引き続き、一気に司令部を制圧する。中にいた高官達は武装しておらず、顔面を蒼白にして、突きつけられた拳銃に怯えるばかりだ。

だが、最高司令官らしき人物の姿が、いまだ見当たらない。

そのときステラは、遠方に慌ててコンピュータを操作しているひとりの男を発見した。彼女の位置からは背格好しか窺えないが、充分だ。——身に着けた肩章の数から見て、基地の責任者だろう。

——あいつツ！

管制室の複雑な構造・障害物をもろともせず、ステラは一瞬にしてそれらを軽々と飛び越え、不用心な男の背中へ飛び掛かる。

気配に気づいた男が慌てて振り返る、抵抗しようとしたが、対応が遅すぎた。ドン、と激しい衝撃に突き飛ばされ、その場に腰を抜かす。男は何が起こったのかすら理解できず、視線を巡らさず。

そのとき麗容な顔立ちをした金髪の少女が目の前に映り込んだ。可愛らしい柔らかな顔立ちをしている——が、決して窮地に瀕した我を助けに来た、救いの女神とは思えない——それどころか、頸許に血の付いた短刀を突きつけているあたり、我を殺しにした死神のようにしか見えない。

「云え！　『デストロイ』の本体はどこだ!？」

幼い少女に怒鳴りつけられ、司令官の男が、年齢不相応にひいと声を漏らす。

——ステラがこの時代にやってきたとき、道連れみたいに“デストロイ”まで連れてきちやった！

ベルリンにおける“光”に包まれたとき、彼女は“デストロイ”に乗っていた。そんな機体の半（フライトユニット）身がビクトリアにあるということとは、人型の本体部分も同様に流れ着いている可能性が高いのである。

その真相を突き止めるため、ステラは基地内部への突入を敢行したのである。あるいはザフト兵たちが云ったように、ただちに司令部を制圧しなくては“デストロイ”についての証拠隠滅を図られたかもしれない。事実、この司令官（おとこ）が今コンソールを必死で叩いていたのは、基地内の全データの抹消そのためだ。

ステラは凶器をちらつかせ、男を詰問した。

「わ、私は“アレ”を回収しただけだ！ ヒト型の部分なら——既に大西洋連邦に持ち出されたよ！」

ただ大西洋連邦（そ）の手に渡っただけで、わたしは、本体の行き先までは知らないんだつ、と懸命になって叫び、訴える声があがる。

だがその事実は、あまりにも衝撃的だ。

「……………」

歯を食いしばり、ステラは男に対する一切の興味を失って、初老の身体を突き放した。恐怖に駆られた司令官が、気絶する。

そのとき既に司令部を制圧した他のザフト兵二名が、彼女の背後からやって来た。――その目には、動揺の色が浮かんでいる。

「今の話、本当か……!?!」

「本体って? 何の話だよ……まさか要塞あんなのが、まだ別の場所にあるっていうのかよ!」
その話を耳にしたザフト兵は、血相を変えている。

ステラは沈黙を保ち、それを肯定と取ったザフト兵のひとりだが、直ぐに目の前のコンピュータに手を伸ばした。

「……良かった! まだこのデータは残ってるぞ、消されてねえ!」

ザフト兵が、次々と要塞についてのデータを検出していく。さすがはコーディネイターと云ったところか、初めて扱はずの機器であっても、早々に扱い熟している。

コンソール画面には要塞についての詳細なデータ、ならびに要塞の解析結果が映し出され、蓄積された膨大な量の情報が、流れる滝のように幾千の文字となって書き出されて行く。

G F A S | X I 「 D e s t r o y 」 T a l l : 5 6 . 3 0 m W h e
i t : 4 0 4 . 9 3 t

ありとあらゆる火器管制システム、機体構造、動力、兵装のデータ——それらのすべての情報が、現時点での地球軍が、解析できている範囲でコンソールの画面に綴り下ろされていく。

一同は唾然として、その画面を覗き込むように注視し、ステラもまた、連綿と綴られていく膨大な情報を目を追い、頭では簡素に処理していた。

そのとき、一瞬にして流れ去ったデータの中に、眉をひそめた。戻して、と慌てて叫び、ザフト兵の手を掴み止める。ステラが代わりに機器を操作し、あまりに一瞬にして流れ去り、読むことはおろか気付くことさえ難儀だったであろう、ほんの僅かな記述に目を留める。——要塞を持つ、兵装のデータについて綴っている部分だ。

ステラは唾然として、画面を見つめた。

——From positron reflecter 「Shneid Sch
uze SX1021」

そこには——“デストロイ”が搭載する、陽電子リフレクターについての詳細なデータが記載されていた。

——To the technology 「Armure Lumiere」

次の記述を見た途端、ステラは大きく目を見張り、驚きに駆られた。

——Project G : GAT-X401「Defend」——
 ……

そこには、ひとつの経緯と、とある事実が綴られていた。

大西洋連邦が「モルゲンレーテ」と共同で開発した「G」計画の六機目——
 GAT-X401「デイフェンド」とは、ユーラシア連邦が「至高の技術」として共
 同体内で独占していた光波技術が——完全に応用されている機体である。

光波技術は本来、大西洋連邦は、原理すら知り得ない未知の産物であり、手許にも詳
 細なサンプルがあつたわけでもなければ、これを独占するユーラシア連邦から譲渡され
 た経緯もない。

この時点で、大西洋連邦には光波技術を応用したMS——「デイフェンド」を完成さ
 せられるはずもなかった。

しかし事実、彼らは光波技術を完成させ、その機体を開発してしまった。——いった
 い、どのようにして。それを検討した者の中には「大西洋連邦か「モルゲンレーテ」の
 どちらかが、ユーラシア連邦から光波技術を盗用した」という説を流した者も多く存在
 したが、所詮は明確な根拠に欠けた、あくまでも推論に過ぎなかった。

ところで、今より三年後に開発されるであろう——G F A S—X1 “デストロイ”

ここに配備された陽電子リフレクターシユナイドシユツツS X 1 0 2 1のはしりは、光波防御帯アリユミューレリユミエールと見ていいだろう。

C. E. 71年、現在において“アルテミス”でも運用されていた光波防御帯を、より手頃に、より強力に発展させたもの——“シユナイドシユツツ”——それは、云わば“アリユミューレ・リユミエール”の発展形、上位互換たるものだ。

光波技術が生み出した実績は輝かしく、連合内でも、高く評価されていた。この技術を満載した軍事衛星“アルテミス”が、これまで“傘”の活躍によつて難攻不落を誇つていたからだ。

光波技術を用いたシールドには絶大な利用価値があると見込まれ、大西洋連邦はユーラシア連邦からの技術の盗用——ではなく、ビクトリアにて押収した“デストロイ”より入手した“シユナイドシユツツ”の解析データを基に、光波技術の独自開発を押し進めた。

それでも当段階で、未知の要素の多過ぎる“シユナイドシユツツ”開発は、時間的・技術的な問題が多岐に渡つて発生し、陽電子リフレクターの開発は“G”計画に間に合わず、途中で頓挫することとなる。

その結果、入手した光波技術を用いたモバイルスーツに搭載されたのは“シユナイドシユツツ”の前身である“アリユミューレ・リユミエール”に留まり——結果として、

こちらが新型の「G」の兵装として搭載されることが決定する。

大西洋連邦が独力で造り出した光波技術が完成した時点で、しかし、既に五機の「G」の基本構造とコンセプトは七割がた完成しており、手にした新技術をMSに搭載させるには、新たな一機を増設する他なかった。

これにより——「ヘリオポリス」において「G」計画は急遽として予定が変更され、ひとつの実験機の開発が遅れて追加された。

浮き彫りになった新たな真実が、コンソール上に書き出されていく。ステラは啞然として、ザフト兵の手を止めた。

その箇所のデータについて、詳細に確認する。

「『デイフェンド』は——『デストロイ』から生まれたの?」

震えた声で、コンソールから導き出された事実を、反芻する。

『デイフェンド』という「守護」の名を冠するモビルスーツが——『デストロイ』という「破壊」の名を司るモビルスーツから誕生した、というのか?

仮にそれが真実であるのなら、なんと——皮肉だろう。

つまり、ステラ自身もまた、新たな世界に辿り着いたつもりで、いまだに『デストロ

イ”の呪縛から逃れられず——破壊者の分身たる機体に搭乗していた、というのである。

“デストロイ”の影は——転生してなお、まるで亡霊のように彼女の背に憑いていたのか。ステラは“デイフェンド”のコクピッドの中で戦い続け——それが“デストロイ”の流れを汲んだ機体と気付かず、ずっと亡霊の腕に抱かれていた中で、力を奮っていたというのか。

(……それでも、ステラが“デイフェンド”に乗ったのは、みんなをまもりたいって思ったからだ……)

初めて“ヘリオポリス”で“デイフェンド”を目にしたとき——ステラは目の前に横たわる黒鉄の機体に、不思議と、呼び止められたような感覚に陥った。

おかしな云い方をすれば、そのときステラを呼んでいたのは“デイフェンド”でありながら、ひよつとすると“デストロイ”であったのかもしれない。——眼そこ前まへにあつた黒鉄の機体は、黒鉄の要塞に宿る靈魂の片鱗を受け継いだ、派生機なのだから。

(じゃあ——“デストロイ”の力が、みんなをまもる、力になった?)

疑念に思う。——破壊者の力が、守護の役に立つなんて。

でも、考えても見れば、機体の名称など、所詮は何の意味も成さないのかもしれない、結局は、人間の都合で勝手に名付けられたものだ。

重要なのは、その機体をいかに操ろうとする、中のパイロットの意志や立ち振る舞いであつて、ことと次第によってMSは、破壊者にも、守護者にも成り変わるということを知る。

(それなら「デストロイ」は……『わるもの』じゃない)

人としての意思を奪われていたステラには、今まで理解できなかったことであるが、力を奮うのは機体モビルスーツではなく——いつ何時も、それを駆る人間自身の意思なのだ。

この攻防戦で、ステラが円盤型デストロイ・フライトユニットの要塞を破壊しようと思つたのは、大勢の人間を無差別に殺戮した要塞が「わるい」と思つたからである、しかし大元を辿れば、要塞をそんな風に運用した地球軍が「わるい」だけで、要塞自体には何の罪もない。

「いけない……」

ステラは無意識に、言葉を漏らしていた。

そう——いけないのだ。

このままにしておいては、いけない。

(あの子が、利用され始めてる……！)

「デストロイ」という極上の兵器エサを与えられた地球連合軍は、その狂気の産物に嬉々として、世界に影響を及ぼし始めている……？

機体に配備されたあらゆる先進技術は、既に独自に解析され、現在に応用され始めて

いる。

アスランの戦死を忌避する

歴史を改変させることがステラの目的だったとはいえ、彼女が今操る『デイツェンド』という機体そのものの存在が、歴史が悪しき方向に改変され始めた「何よりの証拠」でもあるのだ。

——もう、あの子を終わらせてあげたいのに……！

人型の本体の所在は、いまだに掴めていない。——すくなくとも、大西洋連邦のどこかの拠点に搬送されていることは判かるのだが。

これ以上の期間の解析を許せば、地球連合軍は、かつてのように——そうして起こる未来のように——……またも平気で、あれを戦争に投入するのだろう。——戦争に勝つために、コーディネイターを滅ぼすために。

「そんなこと——絶対にさせない！」

これのデータはきつと——彼女に新たな入口を指し示しているのだ。

彼女自身がやらねばならぬことを示す、大きな機転のきっかけとして。

『——あなたはこれから、どうなさいますの？』

以前ラクスに尋ねられたとき、その質問に、ステラは答えることができなかつた。——命令してくれる人が突然いなくなつて、ただ成り行きに身を任せていたステラには、その質問はとつても難しいものだったからだ。

——でも、今ならわかる……そんな気がする。

戦争を始めたのは、人間の意志——それが、兵器を生み出している。だが、今はむしろ逆だ。兵器デストロイの存在が、地球軍の意思戦意を煽っているようにも見える。

——“デストロイ”のパイロットは、わたしだ。

——あの子を託された、あの子のことを任されたのはステラだ、なら、今のあの子を破壊する責任がステラにはある。

これ以上“デストロイ”によって——戦争が拡がらないように。多くの『死』が、造り出されないようにするために。

“デストロイ”は、破壊者の名を持っている。

だが、それがどうした。

たとえ破壊者の力でも、ステラは今、その力を受け継いだ機体に乗って、誰かをまもるために戦っている。

だから“デストロイ”だって、使いようによつては、たくさんの人を助けることだってできるはずだ。

破壊者なんて名前を付けた地球軍がわるい。その名の通りに運用した地球軍がわるい。

——ステラは“デストロイ”を「わるい子」にしようとする、地球軍を止めなきやい

けないんだ……!」

かつての「デストロイ」のパイロットとしての矜持を以て——ステラはそれを、胸に誓った。

「その要塞の本体、ってシロモノの……搬送先のデータとかは、もうここには残ってねえのか?」

そのとき、傍らのザフト兵が声を上げる。

云われた者はすぐに検索を始めたが、エラーが発生し、バンと拳を叩き付けた。

「……ダメだッ、秘匿情報になってやがる。この司令官の男の云う通り、そこから先は、このビクトリアは関与してないんだろ……!」

「おいおい、勘弁してくれよ……っ」

彼らとて——「プラント」を守るために志願したのだ。

ここにきて最悪のデータが地球軍の手に渡ったとなれば、居ても立ってもいられない気持ちはわかる。

ザフト兵ははあと息をつき、状況を再確認した。——今ここで狼狽えた所で、何も出来ないのは確かだ。

「とにかく、このデータを消去させるわけにはいかねえ。今すぐにもコンプトンに連絡を取って、応援を寄越してもら——」

次の瞬間——

管制室の入口の方で、発砲音が響いた。

怒濤の乱射音が弾けるように室内に響き渡り、一同はぎよつ反応した。

入口側の警護に当たっていたザフト兵のひとりが、無残にも射殺されていた。

「なッ、なんだ——!?!」

尋常ではないものを感じ取り、ステラは咄嗟に物陰へと飛び込む。近い方のザフト兵ひとりの身体を強引に引きずり寄せ、味方を庇った。

間を置かず、さらなる銃声が室内に響き渡る。入口の方に拘束されていた現場の管制官達は忽ちに射殺され、反応が遅れ、その場に茫洋と立つザフト兵もまた——『敵』の凶弾の餌食になつて斃れた。

——『敵』？

敵とは誰のことだ。

少なくとも、地球軍もザフトも構わず射殺する、そんな敵は知らない。

「だ、誰だッ!？」

ステラによって生き延びたザフト兵が、顔を真っ青にして声を上げた。

そして、その問いかけに、解答する声が返つて来る――

「ハッ、そこに隠れてるのかッ! 特務隊のお嬢さんよお!」

それは――先に撃墜されたはずの、ディオ・マーベラスの声だった。

――どういふことだ……!？」

ザフト兵は啞然として、怒鳴りあげる。

「ディオ! オマエ生きて――いや、それよりも俺達を裏切るつもりか!」

「裏切り? 違うな、俺はザフトの兵士はやめねえし、これからも続々と戦功を立てて、

ザフトの中で上り詰めてくつもりだぜ?」

「ふざけるな! ならばなぜ――ソイツを撃つた!」

ザフト兵は、反応が遅れて撃ち殺された、既に物言わぬ塊となつた同僚を示唆しながら怒鳴る。

一向に事態を飲み込めないザフト兵に変わつて、ステラがひっそりを顔を物陰から顔を覗かせた。

どうやら彼――ディオ・マーベラス――は、乗機の「ディン」こそ撃墜されたが、機体ごと基地周辺に墜落しただけで、一命を取り留めたいらしい。覗ける肌には火傷の痕

と、頭部からは一筋の血液が流れ出している。爆散寸前の乗機から、決死の脱出劇を演じたようだ。

「なぜ？ なぜつてのは愚問だなあ……。敵基地のど真ん中によ、オレ達みてえな少数だけが突入してんだぜ？」

「オマエはもう、仲間でもなんでもない！」

「怖い声だすなよ、要するにだ。こんな状況じゃあ、内部なかでどんなことが起おこころうと、外部そとからは知ったことじゃねえってことだ」

その言葉の真意を、ふたりは同時に悟った。

つまり彼は、ステラ達の功績の横取りを狙っているのだ。

ここでステラと、それに付き添うザフト兵という存在を亡き者にした後、奇跡的な生還を果たした兵士——英雄として振る舞い、母艦へ戻る。基地内部を制圧したのはみずからだと豪語した後、相応の勲章を受け取るつもりだ。

そもそも、ステラ達がこんな少人数で基地内部へと突入したこと自体、賢明ではあるが、大きな間違いだ。

内部で彼らが（ディオオの手によって）全滅してしようと、誰もが地球軍の仕業だと信じてしまうのだから。

「最初は、撃墜されたのにムカついてなあ……。せめて、ナチュラル共を皆殺しにしてやろ

うとか考えて、基地に突入したのさ——その途中で暴れるお嬢さんを見かけたもんでな！ いやア、俺は運が良いというか、ようやくツキが回って来たというか——」

その瞬間、物陰に隠れていたザフト兵が飛び出した。——よして、というステラの静止の声も聞かずに……。

男は一気に物陰から飛び出し、裏切り者に向けて、殺意を以て機銃を構えた。

「この、ゲス野郎が！」

「はっ！」

瞬間。

二発の銃声が響き——そして、デイオでない方の、ザフト兵が斃れた。

男の身体は駆け出した勢いのまま、物言わぬ肉塊となつて遠方に斃れ、管制室のはるか下方へ転げ落ちていった。

おいおい、人のハナシは最後まで聴けよ。

勝ち誇つたような男の声が響く。

「これで護衛は居なくなつたなア……知ってるぜ？ もう銃は、手許に無いんだろ？」

「……………」

「最後の銃は、いま死んだヤツが持つてつちまつたからなア」

デイオは嘘は云っていない。

ステラの武器は、もはやサバイバルナイフしか残されていないのだ。——だから今死んだ男に、飛び出してなんて欲しくなかった。少なくとも死んで逝ったザフト兵より、ステラの方が射撃の腕は高いのだから……。

「ずっと気に入らなかつたんだよなあ……親の七光りで、偉そうな位置にふんぞり返りやがってさア。挙句に最新鋭機^{ディフェンド}まで与えられやがって。——オマエが死んだあとは、あの機体、もしかしたら俺に回ってくるかもしれないねえな！」

「——！」

「『ディフェンド』の力さえありやあ、俺はもつと活ナチユラルを殺すことが躍躍できるからな！」

愛機にまつわる事実を知った直後なだけに、ステラは軽々しくその言葉を放たれ、憤怒を憶えた。——『ディフェンド』は決して、殺戮のために存在してはならない兵器だ。

(こんなところで、あんなヤツに殺されるわけにはいかない……)

ステラが此処に、この時代にいることにも、きつと意味があることだ。少なくとも彼女自身、今はそう思っている。

漂流した『デストロイ』より派生した『ディフェンド』に、他ならぬステラが搭乗していることにも、何らかの意味と、きつとそれだけの強い由縁がある。

鹵獲され、一度は引き離されてなお、『ディフェンド』はステラの許に戻って来た——

—あの機体が訴えかけようとしているものの意味すらも掴めぬまま、こんな場所で果てるわけには行かない！

出来るだけ気配を隠し、ディオに最も接近できるであろうポイントまで移動する。

もはや『敵』と化した者の足音が、だんだんと近づいて来ている。あちらもすでに、決着を着ける気であるのだろう。

「隠れてんのか？ やめとけよ、短刀だけじゃいくらやつても、オレには叶いつこ——」
男の意識が台詞に集中している間に、ステラは一気に物陰から飛び出した。

言葉を中断して、拳銃が向けられる。凶弾が空を切る。

ステラはディオ本人へと飛び出したのではなく、別の物陰に飛び込み、弾丸は壁に当たって弾き飛ばされた。

「——フェイント!? くそッ！」

飛び出した拍子に、ステラは状況を把握していた。

第一に、敵に近づくため、飛び越えなきやいけない障害物が『三つ』あったこと。男の凶弾を回避しつつ、これらの障害物を乗り越えなくては接近できない。

第二に、敵の機銃は弾切れ、あるいは故障を起こしていたということ。屍となった地球軍兵士から機銃を奪い取ったのだろうが、今は拳銃に持ち構えていた。単発しか放てぬ小型銃である以上、すこしだけ希望は見えた。

迷っている暇はない——待っていても、死ぬだけだ。

次の瞬間、ステラは一気に身を乗り出し、ひとつ目の障害物を瞬発的に飛び越えた。

(ひとつめ……)

飛び跳ねる影を本人曰く「持ち前の動体視力」で追いかけて、発砲するディオ・マーベラス。

一発。

だが、放たれた弾丸は対象を捉えることができず、空を切ると、彼女の背後のコンソールへと着弾し、小さな爆発を引き起こした。

まだ焦っていない——と云えば、それは嘘だ。ステラ自身もここまで不利な状況は初めてであり、それと同様にディオも焦っていた。

二発。

三発。

四発。

撃ち放ったすべての弾丸は、気が付けば外れ、空を切っていた。

(ふたつめ……！)

ハツとした瞬間、既に目標の少女が、ふたつ目の障害物を飛び越えていた。

ますます焦りが膨れ上がり、ディオは必死に拳銃を構えた。

「くそがあー！」

五発——

撃ち放った弾丸が、少女の左頬を掠めた。その反動で、少女の動きが一瞬だけ鈍る。

——しめた！

すかさず放った六発目は、しかし、すぐに態勢を立て直され、外れて空を切る。その間にデイオは、少女の跳躍を許していた。

(三つ目——っ！)

すべての障害物を乗り越え、少女は豹のように姿勢を低く屈めた。

次の瞬間——凄絶な勢いで疾駆した。血液の付着した鋭利な短刀を翳しつつ、不貞者へと一気に接近を仕掛ける！

「オマエなんか——！」

「この女ア！」

慌てて放つ、七発目！

最後に放った、一発の凶弾。これが空中へ躍り出た、少女の右肩を撃ち抜いた。

「あッ」

勝負は決まった、決まってしまった。

衝撃に、華奢な身体が後方へ吹き飛ばされる。

勝った——男は緊張から解き放たれ、一気に勝ち誇った顔を作る。

「ふはー」

ドサリ、と——仰向けに倒れた獲物に向けて、デイオは餓えた獣のように、ギラついた目を浮かべる。

目の前には儚げな少女。

——いや？ 撃ち飛ばされて、地に転げ落ちた「子猫ちゃん」ってヤツか。

これまで虐げ続けて来た窮鼠ねずみに、圧倒され返された「猫」——少女の表情は、まさにそういうった動物のそれだ。まさか自分が敗北するとは思ってもいなかっただような、驚き、悔しさ、悲しみ、無念の色が無数に混じり合つて浮かんでいる。

大きく潤んだ円らな双眸が、男の嗜虐心を一気に駆り立てた。

目の前に瀕死の獲物を見据え、もう終わりだな！ と——そう叫ぼうとした。

次の瞬間、世界が回った。

次に気が付いた時、デイオは何故か、自分の胴体を見上げていた。

それきり——男の意識は深い闇に沈み込み、もう二度と浮かび上がって来ることはなかった。

負けた——と思った。

あと一步まで迫った時、敵の銃弾が、自分の肩を貫いた。

重い衝撃が身体を駆け抜け、地に倒れてから、灼けるような痛みが襲って来た。

——こんな奴に……負けた……！

撃たれた肩から、溢れ出す『赤』

『赤』はいやだ……きらいだ。

『海』と反対の色をした、きらいな色だ。

でも、その色は、ステラの肩から止まらずに溢れ出した。

手に付いた赤。

頬を流れる赤。

肩から溢れる赤。

『赤』は、こわい——！

それは、ステラの『きらいなもの』を連想させるから——！

そしてステラは今まさに『それ』に直面していた。

男が嘲った顔で、自分を見下ろしている、その手には銃が握られている。

——こんな所で、終わりたくない……っ！

現実が受け入れられず、臉が、それを拒むようにきゅつと閉ざされた。

次の瞬間、ドンという音が鳴り響った。撃たれたと思つたが、ちがった。——何かが蹴破られた音だ。

『死』がいつまでもやって来ないから、瞳を開けた。

目の前には、あの男ではなく——アスランが立っていた。

あの男は、見当たらなかつた。代わりに、首から先のない人形が、そこに立っていてるだけだ。でも、それもやがて、力なくその場に倒れてしまった。

そこから——『赤』が溢れ出す。

凍り付いたステラを覆うように、駆け付けたアスランが、すぐにステラの身体を抱き締めた。

——守ってくれたんだ……アスランが。

ステラはすぐに、それを理解した。

アスランに抱き締められる——でも、その時のアスランの身体は、なんだかひどく冷たかつた。

一度離れて、兄を見上げる。

ステラの好きな色——兄の『碧』の瞳は、一切の輝きを失っていた。まるで闇に呑まれたみたい、虚ろな目をしていた。

こんなの、アスランらしくない。こんなアスランの表情を、ステラは見たことがない。ザフト軍の「戦士」の目——いや。

まるで彼は、何かに吹っ切れた——「狂戦士」のような眼をしていた。

アスランがその場に立ち上がる。

ステラは悄然としながら——胸の奥に激しい違和感を覚えながら——兄の姿を見上げた。

肩を撃たれた痛みさえ、いつとき忘れてしまうほどの違和感——これを憶えさせるのは、アスランの口元に走る、切り裂かれたような不気味な笑みだ。

口唇が震え、アスランは言葉を紡いだ。

「——そうか、これか……」

——これ？

ステラには、アスランの放ったその言葉の意味が分からない。

だが、出撃前と今とで、明らかに、目の色が違っていることだけは分かった。

——目に、まるで生気がない。

家族でありながら、恐ろしくさえ思えるほど、冷え切っている。どんな言葉も通用しないような冷酷な雰囲気は、厳しく、硬く——そして、冷たい。

どうしてか、パトリックを見ている時のような——そんな既視感を憶える。

憎しみが宿った目、己の『敵』に対する一切の情を捨てた目だ。

人としての呆れ、怒り、悔り、憎しみ、これすべてを大きく超越した——あきらめ。

それが忽然と、アスランの眼に浮かんでいる。

その眼は己が手に掛けた屍を見下ろし、不気味に嗤っている。ひどく恐ろしいのに、本人であるアスランはそれに気づいて様子もなく、むしろ、どこか満ち足りた表情をしていた。

「アス……ラン………？」

殺されると諦めた時、アスランはステラを守ってくれた。

——うれしいはず、なのに……。

アスランがあまりにも「別人」になっていて、素直に受け入れることができない。

——ステラの知ってるアスランは、こんな表情をしない……！

敵を斃して、嗤っている。

そんなのは——ちがう。

いったい——何があつたと云うのだろう。
輝きの消え失せた、狂戦士たるアスラン・ザラの双眸に。
ステラは、震えた。

『ニュー・ゲート』A

「地球軍が強い薬によって、ステラは戦闘能力を人為的に強化されているんだ」

これまでのアスランは、今までのステラにまつわる様々な「不可解」な点——モビルスーツの操縦、ザフト兵を凌ぐ卓越した戦闘力、これまで「アークエンジェル」に有志で組んでいた経緯などの奇妙な経歴——を、この一言で片づけていた節がある。

「能力だけを見れば、今のステラはひよつとすると、自分よりも優秀かもしれない……」
だから、この疑念も、その一言で片づけられる。納得することができる。この疑念は、友軍となったステラを視て、アスランが薄々と胸に感じていたことだ。

兄たる自分自身が、今にも、妹に抜かれようとしている事実が突きつけられた。しかし、アスランはこれまで、その事実特別な焦りを抱いたことはなかった。

——たとえ抜かされたとしても、決して『それ』は、妹の力ではないのだから。

ステラの能力は、いわば不正な手段ドープピングで手に入れたものだ。それは真つ当な手段で養われたアスランのそれと、天秤にかけるべきものではない。

——だからステラの方が優れている、仕方がない。

そう自分に云い聞かせることさえ怠らなければ、アスランは今の現実に納得ができていた。しかしそれは、ある意味で言い訳でしかないのかもしれない。己の劣等感に対して、合理化を図っていただけなのかもしれない。

アスランは今回のことを機に、今までのそんな言い訳が、とうに通用しないことを思い知らされた。

ステラは第二次ビクトリア攻防戦において、精神面でも秀でた能力を垣間見せたのである。初めて訪れたはずの地球で、アスランが重力や天候に当惑したにも関わらず、彼女の方は小慣れたように立ち振る舞っていた。敵要塞の弱点を一瞬かつ正確に見抜き、これを突破するための作戦を呈した。戦場に出てからもまた、敵火力を前に動揺した兵達を諫め、みずからも最前線に立ち、突破口を切り開いた。

これらの功績は、薬物が云々と言い訳できたものではなく、間違いなく、ステラ本人の健全な采配によって成し得たものだった。アスランの中に、ようやく焦りが滲み出た。

第二次ビクトリア攻防戦を成功に導いたのは紛れもなく、妹の活躍があつてこそだった。たった一年の間に妹に抜かされ、戦場においても後塵を喫してばかりだなどと、兄妹としては認めがたい事実であろう。

——こんなものが、オレの限界なのか？

あのとき力があつたなら、妹を守れたはずなのに——墓標を前に誓いを立て、強くなると軍に志願した。

そうして軍人になってから、肝心の妹に守られてばかりでは、今^こまで^のや^つて^一来^年た^間ことは、いつたい、何だつたのだろう？

このままでは、だめだ。

もつと『力』を付けなければ、ステラを守つていけない。

アスランは、必死になって力を求めた。

秀でた妹を超えられるだけの、超然とした力を——。

アスラン・ザラは、コーデイネイターの中でも非常に優秀な人物である。その経歴を調べても、とりわけ士官学校^{アカデミー}を総合成績一位の首席で卒業したことは、誰に話しても恥ずかしくない経歴であるだろう。

しかし彼の父親であるパトリックは、息子のそんな功績を甘んじて褒めたりはせず、むしろ、当然と云わんばかりに冷たくあしらつた。

アスランとしては、仮に父には褒められずとも、すこしでも自分を認めてもらえるの

ではないか、と期待していたのだが、それは単なる思い過ぎだった。

——いつだって、そうだ。

父上はいつも、オレを認めることはない。期待こそしてくるはずが、かと云つて許容してくれるわけでもない。常々、値踏みするような眼でオレを見て、その都度「まだ足りない」と訴えるような顔をする。そこに浮かんでいるのは、確かな失望——父上の思い描く『理想の息子像』とやりに、オレがまだ到達してないと、そう突きつけるようなような。

しかし、オレだって軍人としての努力は怠っていない。父上にとつて恥ずかしい息子とならないよう、必死に頑張っているつもりなのだ。

——だが、それでも足りない。

何が足りないのかも、わからない。だからこそ、この数年は顔を合わせる度に失望の目で見られるのが、申し訳なくて、どこか腹立たしくて——努力の報われない、居た堪れない思いをして来た。

それがアスランの、個人的な悩みでもあった。

——オレにはいつたい、何が『足りない』っていうんだ……。

同時に、同じだ、ということに気付く。

父が「足りない」と主張するもの——それが不足しているから、俺はまだ父に認めら

れない。

父が「足りない」と主張するもの——それが不足しているから、俺はまた妹を超えられない。

その答えを見つけ出すことでしか、己は強くなれない、前に進めない。

今のステラが持っていて、今のアスランが持ち合わせていないもの。それは、パトリックが理想の息子に求めているものでもある。

——それはいつたい、なんなんだ……？

アスランは必死で、答えを探した。

基地内部へと突入したみずからの妹と、その後に続いた数名のザフト兵——彼らをまとめて連れ戻すために、アスランはその後に続いた。

結果的にアスランは三番目に突入する形となり、地球軍兵士達は、既に二度の敵——ステラと「デイン」部隊——の侵入を経験していたがために、アスランが突入した頃には、とうに落ち着きを取り戻し始めていた。ステラが通り過ぎたとき、弱卒でゴった返していた通路には武装兵の集団が仁王立ち、これ以上の侵入者を食い止めんと完全防備

で待機しているような状態だった。それによりアスランは、

「基地内部にザフト兵が侵入している！」

この事実を冷静に把握していた地球軍の迎撃を、一身に受けるハメになった。

——なんて貧乏くじだ！

嘆きたい気持ちも山々であつたが、一斉に銃を構えられた以上、不平を云っている余裕もない。

（ひとりで突入しておいて大人しく殺されてやるほど、オレも間の抜けたことはしない！）

意気込むアスランであつたが、さすがに多勢に無勢では敵の銃撃を掠め、冷や汗をかいた場面が多々あつた。

正直なところ、単独で敵基地に潜入するなど、なんて無謀なことをしてしまったんだろうと今は後悔していた。我ながら冷静じゃない、軍人としては失格の選択だった。士官学校時代の教官であつたレイ・ユウキがこの状況を見たら、泣くか怒るか呆れるか……。

しかし、これだけは云える。

（死にやしないさ……！ ミイラ取りがミイラになるようなことだけは、絶対にあつてはならないんだ）

そう覚悟したアスラン。

しかし、すぐに「いや……」と思ひ直す。もつと他に言葉があつたはずだ。

（——て、そもそもミイラなんて、存在しちやだめか！）

敵から放たれる無数の銃撃をかわしつつ、ひとりでボケて、ひとりでツッコむ。

凶弾の雨を物陰からやり過ごし、一気に身を乗り出し、銃撃で応戦する。

「なぜ撃つて来る、キミ達の負けだ！」

元来、平和主義な優しい性格をしているアスランである。彼の放った銃撃は、吸い寄せられるように敵の銃を撃ち落とし、あるいは、敵の足や腿を撃ち抜いていく。できる限りの範囲で、戦闘力が移動力だけを奪っているのだ。

——抵抗しなければ、殺したくないのに！

むろん、常に手加減していられるの余裕もなく、必要であれば即座に標的を撃ち殺すこともあり、どちらかといえば射殺してしまつた敵兵の数の方が多いかもしれない。

快進撃を進めるアスランとナチュラルの間には、やはり、圧倒的な能力差が決然と存在していた。地球軍兵士は集団で立ち向かつておいて、敵兵ひとり撃ち殺すこともできないどころか、逆にこちらが突き崩され始めたのだ。

——敵うはずがない……！

圧倒的な力を前にして、兵士達も諦め始めた。

アスランは戦意を喪失した者達を追撃してまで撃とうとは思えず——逃げ惑い始めた兵士達を尻目に、通路を駆けて行つた。

廊下を駆け抜けていると、アスランは不意に足を止め、その場に立ち止まった。嘩然として、立ち位置を見失つたかのように漂い、あたりを見回した。

そこには——多くの兵士の屍が転がっていた。

アスランがやったモノではない。此処を通り過ぎた、別者による所業だ。死因を窺えば、その多くが刺殺されているようだ。

頭の中に、ひとりの少女の姿が浮かんだ。

(——ステラ?)

——彼女が、これをやつたのか?

アスランは、目の前に拡がる光景に嘩然とした。

散らばつた死屍の中には、刺殺ではなく、銃殺されているものも存在する。——ともなれば、敵を殺めるために銃を用いたのが「デイン」部隊のザフト兵で、一方で短刀を用いたのがステラである、という判断ができる。だが、切り付けられて殺された敵兵の数が、アスランの想像を軽く超えていた。

視界に拡がるのは、死屍累々の——地獄絵図だ。

目の前に残る痕跡からは、これまでにアスランが施して来たような殺人やに対する迷いさが伺えない。何の躊躇もなく——人を斬殺した痕跡だけが残っている。

「——これ、か……？」

アスランが息を呑み、自然と言葉を漏らす。

背筋を悪寒がなぞり、ゾツとする——

「オレに、足りないものは」

幸運なことに、ステラがどの道を辿ったのかが、アスランにはよく分かった。そこには赤色の軌跡が浮かび上がり、まるで道標のように、積み重なった物言わぬ肉塊が連続しているからだ。

茫然と歩き出し、道突き進む度、妹のして来た所業の数々を突きつけられるような気分になる——殊に、敵兵を屠ることは悪行ではない、戦争なのだからと云われればそれまでのことであって、ステラは決して間違ったことはしていない。

——だが、これでは、あまりにも……。

アスラン・ザラには、殺意たるものが、軍人として致命的に欠如していた。

優しい性格がゆえに、相手に容赦をかけてしまうことがあり、その都度に己の首を絞めることもある。しかし、この場を通り過ぎたであろうステラはまるで殺戮のための正

確なマシンのように、冷酷に、冷徹に——殺人を殺人とさえ思っていないかのような痕跡を残して、ここを突破している。

己の敵を、容赦なく殺めるだけの『覚悟』——これが今のステラにあって、アスランが持ち合わせないものだとしたら……？

その覚悟を持たねば、アスランは決して、これ以上は強くなれないということになる。
——ひどい話だ。

広間を進めば、すぐに管制室へと続く昇り階段を発見した。

次の瞬間、管制室からわずかな銃声と、怒鳴りを上げる男の声が聴こえた。アスランの優れた聴覚は、それが撃墜されたはずのディオ・マーベラスの声であるとすぐに理解した。

(生きていたのか?)

僚機の生還に安堵しながら、アスランは管制室へと続く階段を昇った。

そしてすぐに——異変に気付いた。

ディオ・マーベラスが銃を掲げ、ステラを狙っていたのだ。

(なッ)

アスランが物陰に身を寄せる。そして、激しく動揺した。

——なぜ、コー^スデイ^テネイターとコー^スデイ^テネイターが敵対しているんだ……!?

その疑念が直ぐに、アスランの中で直結した。

——同じだ……。

デイオとステラは——キラと対峙した今の己と。そして前線で戦う兵士を切り捨てた、ビクトリアの者達と同じだ。ナチュラルとナチュラル、コーデインイターとコーデインイター、たとえ同族同士であつても、意見の相違が争いの発端になることもある。結局はナチュラルもコーデインイターも、本質的には何も変わらない欲深な人間で——愚かしい者は、どこまで行つても愚かしいのだ。

ならば、アスランが敵と見なすべき者は、いったい誰なのだろう？

戦争に勝ち、パトリックの理想のようにナチュラルを滅ぼしたとしても、コーデインイターもナチュラルと本質的に変わらないのであれば、アスランはいつたい、これから何と戦つていけばいい？ 互いに人間である以上、ナチュラルがいなくなつた世界で、コーデインイター同士が戦争を起こすかもしれないのに。

今、目の前に拮がる世界のように——。

——『敵』つて、誰だよ。

物陰に身を寄せたアスランが茫然として、考え込んだ。司令部の状況は、明らかにデイオの方に非があるように見えた。

ステラの功績を横取るために、デイオは彼女を殺そうとしている。——あんなやつ、

ここの地球軍と何も変わらない。

(ステラを撃たせるわけにはいかない……)

アスランは物陰から身を潜め、ひそかにディオに向けて拳銃を向けた。

だが、銃を構えた手が、わずかに震えている。

本当に、この引き金を引いていいのだろうか？ ナチュラルと敵対するために養った力を、どうして、コーディネイターを撃つために使わなければならない？

キラと対峙した時と同様の、同胞を傷つけることへ対する、激しい抵抗感がアスランの中に湧き出て来る。同時に思う——地球軍でひとり戦っているキラは、常にこんな葛藤に苛まれているのかと。

引き金を引けずに悩んでいるアスランを現実に戻したのは、一発の銃声と、少女の短い悲鳴だった。

(ステラ——!?)

右肩を撃ち抜かれた少女が、地に倒れた。

アスランは目を張って、その光景を見ていた。

——俺は今、何も……できなかつた……。

その瞬間、アスランの中に、激しい憤怒と後悔が宿る。

ステラが撃たれるのを、阻止してやれなかつた。

——またオレは、彼女を守れない……。

何を迷っていたのだろうか？ このままでは、彼女は殺されてしまうのに。

血のバレンタインのように、ふたたび彼女を失ってしまうのに。軍に志願して、それでもなお、彼女を失ってしまうのか？

——いや、そうじゃない！

いまのオレには、敵を斃すだけの力がある！ もう昔とは違うのだ！

『今のオマエには、それだけの力があるのだろうか！』

するりと過去から、その声が浮かび上がって来る。

そうか——父上は、オレの力を認めてくれていた。

父上が求めているのは、武力であって——思想ではない。

——オレは力を奮うことで、初めて父上に認められることができる……！

父上に認められるだけの、敵を滅ぼす力が自分にはある。

その力を、いま使わずに、いつ使えというのだ——！？

「あんな者のために、何を迷ってやる必要がある——！？」

軍人である俺に求められているのは「殺意」であって——「温情」ではない。思考など必要ない、容赦など、知らずに戦えばいい。

デイオ・マーベラスは、ステラに害を為す敵なのだ。ステラに誓って養ったこの力を、

ステラを守るために奮うだけだ。

敵に対する殺意を抱いたその瞬間——アスランの中で、何かが弾けた。

(ステラを——やらせはしない………ッ!!)

途端に頭が冴え渡り、魂が思考が、靈障に当たられたように澄み渡る。急激に視界がクリアになり、今までの自分が嘘のように、身体が機敏に動いた。

殺意こそが、オレに足りないものであるのなら。

——オレはまだ、刃を研げられる——!

銃撃では、確実に息の根は止められない。咄嗟に飛び出し、無防備な男に背後から飛び掛かった。

自分でも驚くほど身体が軽く、凄まじい跳躍を成功させる。鮮やかな一閃が空間を風ぎ、短刀が愚か者の首元を——その愚かな欲望ごと——何の躊躇いもなく刈り取ってやる。彼はきつと、自分の死にすら気付かなかつたろう。それほどまでに手際のよい、鮮やかな一閃だった。

ぼとん、という音が地に転がった後、手に入れた新たな能力に、アスランは快感にも似た高揚を憶えた。

「そうか………これか——」

このときのアスランは、ひどく満足していた。

人を殺めて、こんな心境は初めてだった。今まで鬱陶しくさえあつた殺人に対する迷いや後悔を、今はまったく感じていない——人を殺めておいて、今感じているのは、たしかな興奮それひとつだ。

——オレに欠けていたもの……それは、殺意か……。

敵を滅ぼすことに、戸惑いを憶えていた。

これまでの問題が、すべて解決したような気分だ。

だから、ナチュラル殲滅を訴える父に認められることが出来なかつた。だから、敵を冷酷に切り付けて回つた妹を越えることが出来なかつた。

「くっ……はは……！」

迷いさえ断ち切ることが出来るなら、

——オレはまだ、こんなにも『上』にいけるのか……！

これだけの力を、なぜ、今まで發揮できていなかったのだろう。

今ならステラを超えられる気がする、父にも褒めてもらえる気がする。妹の上を行く優秀な兄、そして父に認められる優れた息子でいられる。ならばこの感覚は、決して手放すわけには行かない。

——最高に気分が良い。

アスランはようやくステラを——彼女を守ることが出来たのだ。

遠き過去の日の願いが誓いが、この瞬間、残酷な形で実を結んだ。

——彼女を守るだけの『超越^Sした感^E覚^D』を、ようやく手に入れることが出来たんだ……！

アスランの眼が、戦士の眼差しから、狂戦士の眼光へと豹変する。

くつと嗜虐的な微笑みが、口元に浮かんでいる。

「気が変わった」

どうして、この基地のナチュラルを生かして置いたのだろうか、彼らはステラに銃を向けたのに。要塞を使い、仲間を奪い、妹を殺そうとした彼らには、施せる慈悲なんてあるはずがないのに。

どのみち、負傷したステラを連れ出すには安全を確保しなくてはならない。そのため
の障害は、すべて取り払う必要がある——。

「滅ぼさなければ、戦争は終わらないんだろう」

父の言葉が、今ならわかる。——俺達のような家族は、絶対に、平和な世界に辿り着
かなければならないんだ。

ステラは右肩を負傷していたが、さいわい、傷の具合はそう深刻ではなく、後に怯え
ながら、アスランに左肩を貸してもらったことで“コンプトン”まで帰還した。

彼女を基地から連れ出す前に、アスランは手負いの彼女が生還できるよう、基地内の

敵を掃除して回った。

結果的にビクトリア基地の地球軍兵士は、ほとんどザフト兵ひとりの手によって——無抵抗の者も構わず——全滅した。

第二次ビクトリア攻防戦は、より完全にして完璧な、ザフト軍の勝利に終わった。

カーテンが引かれ、すべての光を遮断するよう閉ざされた一室。

汗の臭いがむっと立ち込める。乱れたベッドの中で、何者かが獣のようなうめき声を上げ、悶え苦しんでいた。

「ぐ……うう………ッ！」

布団にくるまった男は痙攣を起こしている。まるで老人のように強かに震える腕を伸ばし、ひとつの薬瓶に手を伸ばす。

開けられた薬瓶の蓋。しかし次の瞬間、無数の錠剤が床に散らばった。震えた手が落としてしまったのだ。

男は慌てて手を伸ばすが、苦痛にもんどり返って身体ごとベッドから転げ落ちた。なおも男はさすがに錠剤をかき集め、飲水も持たずに飲み込んでしまった。

漏れる声、そこから覗いた金髪は——ラウ・ル・クルーゼのものであった。

ここは、彼の自宅である。低軌道会戦で“足つき”を地球へと逃がしてしまった彼とニコルには、しばしの休暇が与えられていたのだ。

荒い息遣いがやむ前に、ラウの携帯電話が鳴った。

「——くそっ……」

獣のようなうめき声を完全に抑圧し、彼は平常時そのものの冷淡な声で応じた。

「クルーゼです」

通信先からは、渋い声で「私だ」という音声が届いた。

「これは、ザラ委員長閣下。この時間では、まだ評議会の最中では？」

「こちらの案件は通った。まだ二、三とあるが、そう時間はかかるまい。終わったらまた、キミと細かい話をしたいが、ひとまずそれだけは伝えておこうと思つてな。——真の“オペレーション・スピッドブレイク”を任せることになる……キミには、な」

パトリックの声には、たしかな高揚が含まれていた。すべてが自分の思い通りに進んでいると、確信している男のそれだ。

その声を聴き、ラウはふつと口元に笑みを浮かべる——冷笑、いや、嘲笑を。口角の片端だけが吊り上る、通信先の主を嘲るような笑み。むろん携帯電話越しの会話では、これが相手に伝わることはない。

「でしたら、次は議長選ですな。——先の演説には、私も感服いたしました」
〈気の利かぬヨイシヨなどいらぬ。私はただ、ナチュラルの行つた蠢行を世に知らしめただけだ〉

「そのお心……いえ、お覚悟に對してですな。世論を突き動かすために、みずからのご令嬢さえも利用なされるとは」

そのときパトリックからの返答に、動揺したような間が空いた——そう感じたのは、ラウの思い過ぎしであつたらうか。

まあいい——ラウはあえて話題を切り替えた。

「ステラ嬢が拉致されていたという事実に国民はひどく憤り、戦争へ向けて動き始めております——民意は、すでにザラ委員長閣下へと集まりつつあるでしょう。クラインの後任は、まずザラ委員長閣下で決まりですな」

現議長であるシーゲル・クラインをあえて呼び捨てに、秘密めかして言つてやると、パトリック「はは」とさらに上機嫌に笑つた。

〈宣言通り、ビクトリアの制圧も完了した——ここまで来れば、もう私が失墜することはない〉

「では、御息たちも、地上ではさぞご活躍されたのでしような」

〈ああ。ステラがそれだけの力を持っていた、というのには驚いたがな〉

その言葉に、ラウはひそかに嗤う。

ステラの持つ「それだけの力」とは——地球軍が意図して彼女の中に培養した力である。それによつて今や地球軍が撃たれているとは、なんて愚かな構図だろうか。

——これだから戦争は面白い。人間の醜悪な部分が、露骨に現われる。

ビクトリアを制圧したのが、みずからの息子達ともなれば、パトリックが上機嫌になつていても不思議はないだろう。「そのことについてだが」と、パトリックからの声が続いた。

〈アスランについても、キミにはひとつ、云わねばならんことがあつてな〉

「何でしょう」

不審に思うラウに対して、パトリックは上機嫌がちに云う。

〈ななに、殊にキミを咎めようというわけではない。身構えずに聞いてくれ。——むしろ私は、キミに感謝しているのだ〉

——感謝？

ラウは通話越しに、意表を突かれた顔を浮かべた。

〈——やはり、あれをキミの隊に置いたのは正しかった〉

ラウはそこで、ああ、と言葉の真意を汲み取った。

〈地上で進展があつたようだな。——あの莫迦息子め、ようやく自分の置かれた立場に

気付きおった」

聞けば、ビクトリア基地に侵攻するに当たり、モビルスーツ戦で凄まじい戦果を挙げたのは、ステラだったということだ。

機動兵器での要塞の制圧が完了した時点で、基地内部への制圧へと作戦は切り替わり、こちらの際には、アスランがまるで何かに目覚めたかのように著しい戦果を挙げたのだという。

つまり、敵兵器を制圧したのはステラだが——この直後にアスランが基地内部の敵兵を、躊躇なく殺めて、あるいは拘束して回ったのだという。

「アスランの活躍もあって——ビクトリアのナチュラルどもは全滅したそうだ」

「それはそれは、血のバレンタインの一周忌に相応しい戦果ですな。亡き母上のため、彼も頑張っているでしょう」

レノア様も、さぞお喜びのことでしょう。

ラウはあえて、人の心をつくような言葉をかけた。

「……………」。「戦争は、ナチュラルを滅ぼして勝たねば意味がない」という私の考えを、ようやく理解できるようになったのかもしれんな。これも、キミのおかげだ」

ラウは笑い、この言葉にいえ、と謙遜して答えた。

「あれはたしかに優れているが、優しすぎる。軟弱な精神が、あれが本来持っている力を

殺していた。——キミの許で戦争を学べば、いずれ変わつてくれると信じていたが、どうやらな〜

優秀な力——パトリックは、自身の息子に「それ」が秘められていることを知っていた。

それも、ある意味では当然のことだ。

第二世代コーデイネイターであるアスラン・ザラを、パトリックはコーデイネイトした生みの「親」なのだから。

アスラン・ザラの教育は、彼の父親であるパトリック・ザラがすべてを取り仕切っていた。これは、そんなパトリックの持論だが、

「あらかじめプログラミングされたロボットと同様に、親の望みに添って成長していくのが、子が務めるべき責務であらう」

それは生まれるより以前の段階で、子が持つ様々な要素を調整できるコーデイネイターらしい考え方である。そんな思想を押し付けられた経験のあるラウから云わせれば——それは典型的な愚者の、思いついた考え方であると云わざるを得ないが。

パトリックにとつても、子は常に、親が思い描くままに成長しなければならないもの

である。

云い方によつては、しごく傲慢にも聴こえるが、優秀な遺伝子を持つた子を優秀に育て上げたいと願うのは、親として、ある意味で当然の性たではないだろうか？

パトリックにとつての第二子であるステラは、優秀というよりも、茫洋とした無邪気な性格に育っている。しかし、それはレノアの教育方針を尊重した結果であり、パトリック自身、彼女が娘であることから英才教育を容赦していた節がある。しかし、一家の長男アスランだけは、パトリックの社会的な立場を鑑みても、決して甘やかすわけには行かなかつた。生まれながらの天才として産み落とされた息子を、パトリックはみずからの思想を受け継がせ、厳しく育てることを徹底して来た。

しかしアスランは、父が望んだように成長しなかつた。

父の思い描いた屈強な息子像とかけ離れた、あまりに平凡な子に成長したのである。平凡にして軟弱、父が込めたアスランという名の意味や由来も知らないほどの無知——物心がつき、賢知な頭脳を持つていながら——「プラント」の未来のために勉学に励むどころか、「戦争など起きるはずがない」と高を括る莫迦息子になつていた。

取り柄と云えば、母譲りの優しい性格であろうが、優しすぎて、ひっくりかえつて優柔不断だつた。

まるでプログラミングのエラーに直面したような、しごく不審な気分気分に駆られた。

コーディネイターといえど、後天的な要因が大きい人格形成までもを調整できるわけではないが、アスランは母と妹が取り上げられるまで、まるで無知蒙昧な少年でしかなかった。父にはそれが、ひどく嘆かわしかった。

『自覚を持ってアスラン、オマエの母と妹を殺したのは、ナチュラルなのだ！ これから戦争がはじまるのだ、オマエにできることをしろ！』

それは「ユニウスセブン」への核攻撃の直後のこと。

『オマエに秘められた力、持てあますことなく戦争のために奮うのだぞ……！ それを殺されたふたりに報いる、唯一の方法だ！』

パトリックにとって、血のバレンタインはたしかに忌まわしい——が、不出来な息子を鍛え上げる、絶好の契機でもあった。ステラの生存の可能性を告げれば、せっかくのアスランの成長が止まってしまうかもしれない。——ならば隠そう。そうすることでこの莫迦息子が遅しく、理想の息子に近づいてくれるのであれば——。

それからパトリックの意図通りに、アスランはザフトに志願し、一年が経った。

レイ・ユウキはパトリックの側近を務めていながら、かつては士官学校の教官として、アスランに教鞭を取っていたことがある男だ。

『御息すごいじゃないですか、士官学校を首席で卒業なされたそうですよ。ザフトレッドです！ 褒めておやりになりました？』

嬉々として語るレイに、パトリックは純粋な不審顔を返した。

『褒める？ なぜだ、あれが優秀なのは当然のことだ』

今さら、それは殊に褒めることはではなかった。

才能があることは既に知っていたし、今までが宝の持ち腐れであっただけである。

順当に成長していれば、アスランがその方面で抜きん出た才能を開花させるのは、当然のことであると言り返した。

『今まで散々コースを外れて暴走していたのが、敷かれたレールの上に戻って来ただけのことだ』

定められた進路を辿る列車と同様に、アスランは父が描いた道を辿って成長すれば良いのだ。

アスランには敵を滅ぼす「戦士」としての、素晴らしい素質がある。その資質は戦争のために使われてこそ、はじめて意味を成すものだ。だから軍人にした。

列車が出せる最高速度を、開発者は知っている。だからこそ列車が本来持つべき性能を、最大限に発揮させてやりたいと思うのは、生みの親として当然のことだろう。

『御子息の性格は、軍人には向いていませんな』

アスランの優しすぎる性格を、議員のひとりに揶揄されるように指摘されたことがある。

——たしかに、その通りだった。

アスラン自身母親に似て、とても平和主義な性格をしていた。戦士となるには、あまりにも優し過ぎる。そんな人格が、幼少期の親友との交流を通じて、また、無邪気な妹の面倒を見ていたことで、既に完成していたらしい。

アスランの長所は、パトリックにとって短所でしかなかった。

——親として、息子の短所は克服させてやらねばならない。

アスランは他者を傷つけることを恐れている。——「敵を滅ぼさねば意味がない」という戦争の本質が、まるで分かっていない。

その軟弱な精神を是正せんと、パトリックはアスランを、クルーゼ隊に宛がったのだ。冷酷で、信任も厚いラウの許で戦争を学べば、アスランもいつかは、戦争の本質がわかるようになるかと望みを賭けて。

いったい、どのように息子を教育してくれたのか。

上機嫌になりながら、パトリックはラウへと電話を掛けた。

「今までにない報告だったが、私としても嬉しい報告だな。あれを私好みに変えてくれたキミには、感謝せねばならんな」

「さしたる言葉も説いていませんが……ただ、地球へと見送る際に、すこしだけ説を説いたまでで」

〈それならそれでいい。あれにはまだまだ活躍してもらわねばならん。娘共々、くれぐれも頼むぞ〉

パトリックは上機嫌に笑った。

〈我らの手に掛かれば、地球など……だな。真の“オペレーション・スピッドブレイク”については、おつて連絡する〉

通話が終わると、ラウはその場にぐったりとうなだれた。緊張の糸が緩んだ様子だ。しばし茫と考え込み、まだ弱った声で小さく漏らす。

「そうか、アスランが堕ちたか」

そろそろだったな、と思う。

アスラン・ザラ。

彼はラウにとって、実にいい『駒』に過ぎない。

アスラン自身が非常に有能で、パトリック・ザラの息子であるという出自を持っている。そして、そんな父にいつしか己を認めてもらいたいという願望を持っていた。

——パトリック・ザラは、既に他人の意見を聞き入れる度量など持っていない……。

生粋の頑固者だ。

そんな父に認められるためには、アスラン自身が彼と同じ思想を抱くことでしかあり得ない。——ラウはその手伝いをしたまでだ。

歪んでいくアスランを見ているのは愉しかった。

壊れていくアスランを眺めているのは愉しかった。

「ストライク」に乗る彼の友人と戦い、死別したと信じ切っていた妹とは、敵対する形で衝撃の再会を果たした。それでも二者とは分かり合えず、親しき者らと戦場で刃を交え、拳銃には婚約者を盾に取られ、鹵獲する形で妹と和解できたと思えば、彼女は地球軍によって薬漬けにされていた事実を突きつけられる——。

困惑、動揺、憤怒、怨嗟——負の感情に苛まれ、身も心もぼろぼろになっていく姿を堪能するのが、実に愉快だった。

地球に降下する前にも、いたぶりの声をかけた。

地球に降下してからも、何か、歪んだ感情を抱いたのだろう。

それがアスランの精神を蝕み、パトリックと同じ思想を抱かせた。

「しよせん、親が親なら、子も子ということか」

子が親に似る、という真実には、ラウ自身、気付きたくないものではあるが。

ザラ。

なんて利用し甲斐のある——おろかな一家であろう。

ラウを信じ切り、思い通りに己を操っているのが誰かも知らずに、甘い夢を見続け、戦争を拡大させる父。

そんな父に認められたいがために迷走し、妹を理解するために悩み苦しみ、敵を滅ぼさんと動き出した息子。

地球軍に操られ、*「プラント」*を戦争に向けて煽つた後、みずからも銃を取り、地球軍に反旗を翻した娘。

「最高の家族だな……」

ただでさえ、崩れやすいあの好青年が悪意に蝕まれていく様を見届けるのは、それもまた、残り僅かな人生の一興ともなるだろう。

そんな姿は、ラウに再確認させてくれる——憎しみや争いこそが、人の本性であるということに。

アスラン。

とても気に入った『駒』だ。

あれにはもつと、沢山働いてもらわねばならない。

この醜い世界を、かき乱すために——。

彼は、あの愚か者——パトリックと、まったく同じ道を歩み始めたのだろう。

己にあだなす『敵』を殺して、屠つて、滅ぼすまで『約束の地』に辿り着けないと信

じている、愚か者の息子として……。

——キミは、そのスタート地点に立ったのだ。

戦争の果てに、やがて必ず訪れる終焉。

敵を滅ぼした所で、戦争は終わらない。

ナチユラルもコーディネイターも、本質は変わらない。

人間が存在する限り、この世界が変わることはあり得ない。

そんな真相真理に気付くときが、やがて必ず——彼にもやって来る。

その暁に、人類そのものに絶望すればいい。

救いようのないこの世界で、嘆き、苦しむと良い。

この私と、同じように……。

ラウは冷たく弱く、小さく——ひとりほくそ笑んだ。

『モラトリアム』A

ビクトリア基地が陥落し、数日が経った。

明けの砂漠の司令部では、マリューやムウ、ナタルの三名と、サイーブ・アシユマンをはじめとする明けの砂漠の構成員の数名が会議を開いていた。サイーブから齎された情報によれば、ほんの数日前に、地球連合軍が所有していたビクトリア宇宙港が陥落したようだ。これを機にアフリカは完全にザフトの勢力下となり、日に日にザフトの勢力圏は拡大している。つまり、これ以上アフリカからの出発が遅れるようなことになれば、"アークエンジェル"への追撃は激しさを増すだろう。

そうした判断の下、彼らは今、アラスカへ向かうための航路を再検討していた。

「あの艦は、大気圏内じゃあそう高度は取れねえんだろう？　山脈を越えられねえとすると、あとはジブラルタルを突破するつきやないか」

「この戦力で？　無茶云うなよ」

ムウは掌を返して、肩を竦めた。いくらジブラルタル基地の戦力がビクトリアへ出払っていると云っても、戦艦一隻で突破できるほど、かの前線基地の設備は甘くはないだ

ろう。

彼はそうして、すかさず代替案を口にする。

「紅海へ抜けて、インド洋から一気に太平洋へ出る航路を選べば、比較的、ザフトの勢力圏を迂回して回れるだろ？」

「ですが、紅海へ抜ける途中で、ジブラルタルへ引き上げているザフトの地上艦隊に鉢合わせするという可能性も、捨て切れたわけではありません」

マリユールの言葉に、ムウは引きつった表情を浮かべた。

——たしかに……。

ビクトリア基地が陥落し日が経った今、艦隊がジブラルタルへ引き上げている可能性は充分に考慮される。万が一にも時が重なり、道中で艦隊と遭遇するようなことになれば、たかだか一隻の“アークエンジェル”など一瞬にして撃沈させられてしまうだろう。

だが、あくまで可能性だ。ジブラルタル基地を正面突破するよりは、はるかに安全に見込みのある航路であることに違いはないではないか。

「遭遇しないことを祈るしかないんじゃない？　そこはさ」

ムウが曖昧に答えると、そこでサイーブはにやりと笑った。——人の悪い笑みだ、よほど嬉しいことでもあったのだろう。

「そんなアンタらに、救いの吉報だぜ。ビクトリアに攻め込んだザフトの艦隊の——七割は壊滅したそうだ」

「ええっ!?!」

あつさりとした言葉に、マリユータちの驚愕の声がかぶさる。

——それほどの打撃を、ザフト軍に与えておいて……!?!

ビクトリアの地球軍——南アフリカ統一機構に、それほどの戦力が残されていたとは聞いたことないのだ。

「オレも現地の人間じゃないんでな、詳しいことは知らねえ。だが、たしかな筋で得た情報だ」

「いったい、ビクトリアで何が起こったのだろう?」

思い悩んだムウであったが、こんな砂漠のど真ん中で考えたところで答えなど出るはずもない。事実は事実として、すんなりと受け入れて見せた。

「要するに、ヤツらは疲弊してることだった。もし紅海へ抜ける途中で艦隊に遭遇したとしても、あるいはアンタらなら突破できる可能性もある。——『砂漠の虎』を退けたアンタらならな」

そう、それがサイーブの上機嫌の理由である。

彼の云う通り、数日前に“アークエンジェル”と“ストライク”は、このリビア砂漠

に駐屯する『砂漠の虎』の率いる地上部隊と交戦し、これを打ち破った。アラスカへ向かうための障害も消えた今まさに、アラスカへ向けての航路を再検討している最中のだから。

話を傍聴していたマリューが、嘆息まじりに声を漏らす。

「一難去つてまた一難、ですか。今に始まったことではないけれど、さすがにこうも連続しちゃうと、こつちも参つちゃうわね……」

文字どおり、泥臭い思いまでして『砂漠の虎』を突破したと思えば、今度は、ビクトリアから引き上げているザフト軍の地上艦隊と遭遇する可能性がある？ この艦は、いったい、どこまでついてないのだろう。

だが、今まで幾重にも窮地を経て撃沈していないことを考えれば、あるいは、かなり幸運なのかもしれない。

何が云いたいのかと云うと、幸運というものは、それが幸運であることに気付いて初めて実感できるものであり、普段通りの生活の中では、なかなかその感覚にはあり着けないということである。

そんな脇、ナタルからの鋭い指摘が飛んだ。

『戦闘を極力回避する』という判断に異論はありませんが、艦隊に怯え、ザフトが完全に過ぎ去るのを待っているわけにも行きません。こちらには燃料の問題もありますし、

なにより「ストライク」を、いち早くアラスカに届けなくては」

南アフリカ統一機構が壊滅した今、アフリカは完全にザフトの勢力圏となった。

ナタルの指摘も正しい。敵陣のど真ん中に滞在しておいて、安全な時間を期待する方が間違っているのだ。

だが、ムウはまた別の問題で曇った顔をした。

「燃料の問題なら、仮に今出発したとしても不安だな。こっちから太平洋は、寄港なしで一気に突っ切れるような距離じゃないだろう？ 途中でどっかの中立国に匿ってもらうとか、そういうことは出来ないもんかね」

何気なく言葉を発するムウ。

司令部の傍らにいたカガリ・ユラが、その言葉に反応したように見えたのは、ムウの勘違いであつたらうか。

「……賭けるしかないわね」

マリューはげんなりと、しかし、決意を以て答えた。

こうして「アークエンジェル」はアフリカを抜け、紅海へ出る航路を取つたのであつた。

明けの砂漠との別れを告げた「アークエンジェル」は熱砂の大地を離れ、紅海へと出立した。

浮かんだ艦の上、キラはひとり、甲板の上に膝を抱え、座り込んでいた。

直射日光が強く、乾いた風も勢いが強い——リビア砂漠の天候は、決して生身の人間にとつては心地よいものではなかったが、キラは艦内に籠る気分にもなれず、こうして、外の空気を吸いに来ていた。

「……………」

思い出すのは『砂漠の虎』——アンドリユー・バルトフェルドという、とある男の記憶。

彼は突然、キラ達の前に現れ——そして、去って行った。

キラが戦場で戦い、そして殺したからである。

——キミは、寂しいのかね？

バルトフェルドがキラに話した問いかけは、おそらく、キラにとつては凶星に他ならないものであつたらう。

実際のところ、キラの心をひどく蝕んでいたのは寂寞感だ。『守りたいものを守るために戦う』——そのためにみずからが手を汚し、同胞を撃たねばならないという状況が

生み出す孤独感に他ならない。

(でも、以前までは僕だつて、孤独ひとりなんかじゃなかったんだ……)

キラの傍らには、いつも同胞の少女がいた。

ステラ・ルーシエ。不必要な戦災に巻き込まれ、それからはただ「できるから」という理由だけで戦うことを強いられたキラに対し、空虚な激励でも、憐みの同情でもない、確かな共感を分かつことのできる——少年にとつて親友と云えるほどの少女がいてくれた。

そんな少女の存在が、彼にとつては——何よりの慰めであつたのだ。

だが、そんな少女を目の前で奪われてから、キラは次第に心の均衡を崩していった。たつたひとりで戦うことを強いられるうちに、彼はやはりおかしくなつていった。おかしくなつていったから、キラはすぐ傍らにすり寄つて来た別人の少女——フレイ・アルスターの「声」に彼女の「それ」を思い出し、懐かしむようにして、偶像への偽りと肉体的な慰めを求めてしまった。

言葉を選ばずに云えば、それはフレイの婚約者であるサイ・アーガイルから彼女を寝取るという行為でもあり、ひどく歪な盲動のようにも見えるが、それは、一種の心の防衛機制と云えた。

崩れかけた心の均衡を取り戻すため、そして、何よりも孤独感から自分を守るために、

キラはおのずとフレイにステラを重ねたのだ。それから後は後ろめたい恋人関係になった二人であったが、破局のときは、意外に早くやって来た。

別れ話の発端は、些細なことである。

キラがバルトフェルドの屋敷に案内されたとき、キラに恋人を奪われたと自虐的になったサイが、不在のキラの代わりに「ストライク」を操ろうと、半ば自暴自棄に機体に乗りに込んだのである。当然、キラでしか操縦することの能わぬ「ストライク」は、ナチュラルである彼に制御できるような代物ではなく、彼は機体を一步として前進させることも叶わず、機体はその場に頽れ、地に這いつくばるような姿勢になって停止した。

四肢を着いた「ストライク」の姿は、まるで——人が天に許しを請うかのような姿勢だったと云う。

——本当に許しを請うべきは、サイではないというのに……。

いつも理知的で、冷静なサイ——彼をそこまで暴走させた原因を造り出したのはキラなのだ。

フレイがキラを挑発したから——

キラがフレイにステラを重ねたから——

そんなことから彼らの友情は歪んでいったのだ。

無断で機体を動かした咎により、サイは独房での一週間の禁固を言い渡された。

『サイ……バカよね。あなたに叶うはずなんてないのに……ほんとに、バカなんだから……』

苛立たしげに放たれるその言葉は、語尾にかけて、切なさや、悲しみの情が濃くなっていた。

震えた声の本心の顫れであると理解したキラは、不意に身体を強張らせた。

——きつとフレイは、今でも、サイを想っているんだ。

だから、彼女が云う『惨めなこと』をしてしまったサイ。しかしそれも、フレイに振り向いて欲しかったがゆえの行動に違いないのに——彼のそんなの行動が苛立ちを覚え、同時に、彼を労わってやりたいと思っている。しかし、当の裏切り者のフレイにはそれすら許されず、その事実にもた苛立っているのだ。

『やめよう……』

それは、キラの口をついで出た言葉だった。

『えっ?』

『もうやめよう、フレイ、こんな関係。こんなの不毛だよ……身勝手なことだっただけでわかっている、でも——』

キラが、フレイに破局話を持ち掛けたのだ。

その選択が、どれだけ彼女を傷つけることになるのかは、覚悟の上だった。

『間違つた、間違つたんだよ……僕たち』

フレイは今も、サイを愛している。

自分と寝たのは、きつと同情からだ。——当然だ。自分はコーデイネイターで、フレイの大嫌いな、バケモノじみた存在なのだから。

キラも今は、フレイを愛せないでいる。

彼女と寝たのは、現実逃避をするためだ。——同胞とはなり得ない彼女に、かつて、ひとりの少女が与えてくれた安らぎを求めていただけなのだから。

こんな関係はもうやめよう、僕たちの関係は相思相愛なんかじゃない——。はつきり云つて、一方通行にさえなつてなかつたんだよ——。

キラはフレイにステラを見て、孤独な自分の心を繋ぎ止めようとした。

フレイはキラに憎しみを抱き、碎けてしまいそうな自分の心を復讐心で保つた。

可哀想なキラ。

可哀想なフレイ。

同胞を失い、戦場でひとり戦う孤独に苛まれた少年と、父親を殺され、他に身を寄せざるものを失つた孤独な少女。

互いに傷を舐め合うだけの、互いを尊重する気持ちを欠いた、疑似的な恋愛関係に過ぎない。

——こんな関係、続けていいはずがないんだ……!!

偽りの感情の上に成り立った関係は、どこへ向かうことも、どこにも行き着くことは出来ないのだから。

『なによ……それじゃあなた、わたしにあの娘を重ねてた、ってこと……?』

キラから打ち明けられた真実に、フレイは失調したように叫んだ。

キラは決してフレイを求めていたのではなく——ただ、ステラの暖かみ、やさしい言葉を求めていただけだったということ。

『屈辱だわ……! なによ、それ!』

キラの言葉は彼女にとって、屈辱に他ならなかった。

——あの女と、わたしが……!?

パパを殺した、最大限の原因を造り出したあの金髪の女と、自分が、そんなにも似て見えた?

不気味な腕に、全身を抱かれたような感覚——激しい悪寒が、フレイの全身を迸った。
『なによつ、そんなの!』

過ちに気付いたから、だから別れようって云うの!?

身勝手だ——! そう叫びたかったが、身勝手なのはフレイも同じだった。サイとの婚約を一方的に打ち切って、勝手な都合でキラとの関係を迫ったのだから。

これは、そのツケが回つて来たのだろうか……。

——どうして、こんなことになってしまったんだろう……。

ふたりはそうして、破局して終わった。

キラが艦内を動き回る気になれないのは、誰かと、すれ違うこと自体が嫌だったからだ。何をしていても、どこにいても、なんだか罪うしろめたさの意識に追いかけて回される。いつでも誰かに後ろ指を差されているような感じがして、心が落ち着かないのだ。

だがそれも、仕方のないこと——ひとつの「報い」として、キラも受け入れていた。それだけの非道い裏切りを、自分は働いてしまったのだから。

——今の僕には……すこしこの艦は、狭すぎる……。

フレイと破局した話は、当然、同じカレッジの同級生の耳にも入ることになった。彼らは彼らなりにキラのことを気遣つてくれているが、それでも、キラにも非があつたことは確かなのだ。

キラがひとりで考え込んでいると、脇から、ひとつの声がかけられた。

「——四六時中死んだ顔しているな、おまえ」

ハツとして顔を上げると、そこにはカガリ・ユラの姿が認められた。

ぎよつとして立ち上がり、慌てたように声を出す。

「あ、れ……？ キミ、なんでこの艦に？」

これから砂漠を出ようというのに、どうしてこの娘は、この艦に乗ってるのだろうか。キラは唖然とした顔を見ると、カガリは心外そうに返した。

「そつちの艦長に頼んで乗せてもらったんだよ。——その……わたしも色々あつてさ」
呆れたように、キラはカガリを見ている。呆れられているのは、キラの方だと云うのに。

カガリはいつもの調子で、ぶっきらぼうに訊ねた。

「気分が浮かないのか？」

「……うん」

「そつか。実は、わたしもだ」

それは、キラが初めて見るであろう、どこか憂いを帯びたカガリの横顔であった。どうやらカガリもまた、外の空気が吸いたくて甲板に出て来たらしい。

キラは意外そうに尋ねた。

「カガリは嬉しいんじゃないの？ だってほら、砂漠の虎を撃てたんだし」

「それは嬉しいさ、それが私の当初の目的だったんだからな。——でも、ああして生身の……というか、等身大の敵ってヤツを突きつけられたのは、なんだか初めてみたいないな気

がして……その、色々と堪えるものがあるんだよ」

こういうとき、キラはカガリが羨ましく思える。

彼女は、とても素直である。

どんな相手にも、真つ向からぶつかって行こうとする。こうして本心を打ち明けることも、厭わずに打ち明けてくれる。こうして本音で語れる相手がいるだけ、自分は随分と彼女に救われているのかもしれないと思った。

今まで、カガリは自己満足の正義で戦っていた。守りたいものを守るために戦う、だから、奪おうとするヤツらには遠慮はしない。しかし、カガリがそうして敵対して来た『砂漠の虎』もまた、ひとりの人間なのだ。

砂漠の虎は、以前、屋敷に彼女たちを招いたとき、こんなことを云っていた。

——戦争には制限時間や得点のようなものはない、スポーツやゲームとは違うんだ。

——ならば何で勝ち負けを決めればいい？ どこで終わりにすればいい？

——敵であるものを、すべて滅ぼして……かね？

アンドリユー・バルトフェルドもまた、どこかこの戦争という現実に対して、迷っているひとりの人間のように見えた。擁護するような云い方をすれば、暖かみのある人間であった。あのときの彼は、キラとカガリを屋敷に閉じ込め、撃ち殺すことも出来たが、あえてそうせず、モビルスーツに乗って現れ、敗れ、死んで逝った。

——あの男はいつたい、何が訴えたかったのだろう……？

敵を倒したというのに、いつものような達成感が味わえない——カガリにとって、不思議な感覚だった。

あれだけ戦うことに自信と誇りを持っていたカガリがそんなことを云うもので、キラはからかうように声を漏らした。

「キミもヘンな子だよね——突拍子もなく『ヘリオポリス』にやって来て、それからこんな砂漠でレジスタンスやつてる、なんてさ」

「『ヘリオポリス』から地球軍やつて、おまけに『ストライク』あんなもの動かしてるおまえにだけは云われたくない」

返されたのは、にべもない返答で。

「そういえば、あのとキ——『ヘリオポリス』にはもうひとりいただろ？」

云われ、キラはドキリとした。

言いよどむことなく、カガリは先を続ける。

「ほら、金髪の女の子だよ。あのとキキャットウオークから飛び出して、わたしの目からは、それつきりだったけど」

「あの娘なら、今は『プラント』だよ」

カガリが指しているのは、きつと、ステラのことだろう。どうやら、カガリも彼女の

ことはいまだに憶えているらしい。

ステラが今、何をしているのかは、キラには分からない。——だが、パトリックが行った放送の内容を考え見れば、おそらく、政治上のプロパガンダに利用され、
“プラント”に移送されているのではないだろうか。

だとすれば、戦場に赴くキラからは、ひどく遠い世界に移されたことになる。

——もう会えることも、きつとないんだろうな……。

しかしそれは、かつて、一度はキラが望んだ結末でもあった。

戦争なんてない、暖かい世界に返してやればいい。

その願いが叶ったと云えば、きつと喜ぶべきなのだろうが、彼女が身近にいないことで、こんなにも寂しさを憶えるとは、正直、考えもしなかった。

——またいつか、会えるといいけど……。

戦って、戦い続ける自分に、果たして、そんな日はやって来るのだろうか——？

そのとき、艦内に警報が響き渡った。

第二次戦闘配備を知らせる警報だ。

「敵——!?!」

また、戦わねばならない。

キラは目の色を変えて、格納庫——“ストライク”の許へと向かった。

砂漠を航行する「コンプトン」艦橋の中でも、同じように戦闘配備を知らせる警報が響き渡った。

オペレーターの声が上がる。

「これは……！　飛行する未確認の熱源を確認！　この速度、大きさ……おそらく、戦艦クラスのものと思われます！」

「なに？　こんな場所ですか？」

セルマンは眉を顰め、その報告を聞き届ける。その顔には、わずかに汗がにじんでいた。

無理もない——今の「コンプトン」において、出撃できる機動兵器モビルスーツは限られているのだ。

数日前のビクトリア攻防戦において、セルマン隊を始めとするザフト地上艦隊は甚大な被害を出しながらも、ビクトリア基地を制圧することに成功した。しかし、作戦は制圧した時点で終了したわけではなく、生き残った少数の人員を総動員させ、ビクトリア基地のマスドライバー、ならびに要塞の解析作業に遣わされている。——隊員のみなが、

連日の疲労を蓄積させた状態にあるのだ。

むろん、ジブラルタルからの人員の応援を要請し、今頃は別艦隊がビクトリアへと向かっているはずだが、疲弊したセルマン隊には帰投命令が出ており、そのため彼らは今、応援と入れ替わるような形でジブラルタルへ戻っている最中だった。

その道中に、まさか未確認——地球軍の戦艦と遭遇するとは、想像にも及ばない。

アフリカは既に、ザフトの手中にある。帰りこそは安全な航行になると、セルマンも高を括っていたのは事実だった。

「——地球軍と、判断されますか？」

オペレータの声に、セルマンはああ、と声を返した。

「未確認の熱源ともなれば、そう判断するのが妥当だろう。……しかし、こんなザフトの勢力圏内で、いったい誰が？」

モビルスーツもパイロットも、共に満身創痕の状態だというのに、ついていない話だとセルマンは嘆いた。

「出撃可能なモビルスーツは、どれほど残されているか？」

「先日の戦闘で、我々もひどく消耗しています。出撃可能な機体はあるのですが、その数にパイロットが足りていません」

要塞攻略戦において、数少ない生き残りであったはずの“デイン”部隊は、しかし、パ

イロツト達が基地内部で全滅している。それに加え——「ジン」や「シグー」ならびに「ゾノ」や「バクウ」と云ったモビルスーツ部隊は、ほとんど壊滅した状態にある。

現在、出動できるモビルスーツと云えば、それこそ「コンプトン」艦上で支援助射撃に専念していた「ザウート」部隊と、そして——

「——セルマン艦長！」

そのとき、アスランが、艦橋へと飛び出して来ていた。

放たれた声に、セルマンは振り返り、

「アスラン・ザラ」

どこか以前と目の色の変わった——ように思える——少年の姿を認めた。

アスランはきびきびとした声調で、セルマンへと訊ねる。

「この警報は？ 戦闘配備ですか？」

「ああ、前方に未確認の熱紋が探知されてな。それも、大型の戦艦クラスのものだ」

「……………」

「まだ分からんが、地球軍所属の戦艦かも知れん。我々がビクトリア基地を陥としたことで、晴れてアフリカ大陸はザフトの勢力圏となったという矢先に、これとはな……」

とんだ世間知らずもいたものだ、とセルマンが皮肉を溢す傍らで、アスランは顎に手を当て思案する。

——イザークとディアツカは、たしか“足つき”の追撃の任を負って、この近傍の砂漠地帯に派遣されたはずだ……。

そのような場所で、ザフトにとつて見慣れない熱紋があるとすれば、おそらく、それは。

「このまま予定通りのコースを進めば、おそらく、戦闘となるだろう」

「分かりました。では、自分は“イージス”で待機します」

アスランは即座に状況を判断したのか、敬礼して云うと、踵を返そうとする。

その様子を見て、セルマンは不意に疑ってしまった。

——なにか、変わったな、この少年は？

抑揚のない声音や、声初めて会ったときとまるで異なる目の色が、自分にそう思わせるのか？

大袈裟な言い方かもしれないが、セルマンから見ても、今のアスランは初めて挨拶を交わしたときと別人のようだ。そもそも生来の彼は、ビクトリア基地の地球軍兵を殺して回るような者には見えなかったというのに——。

——戸惑いが消えた、とでもいうのだろうか？

先のビクトリア攻防戦にて何があったのか？ だが、確かに何かに吹つきれた様子を見れば、軍人として非常に従順になった。だがそれは悪く言えば、軍人として生き急い

でいるようにも見える。

セルマンはどこことなく不審感を漂わせたその様子を心配に想い、次の瞬間には、口を開いていた。

「待ちたまえ」

呼び止められ、アスランが立ち止まってセルマンを振り返る。

「深追いはするな。これは命令だぞ、アスラン・ザラ……」

釘をさすような命令に、アスランは純粹な不審を湛えたような顔つきになる。

セルマンは一度嘆息つき、状況の説明を追って続けた。

「今現在、我が艦隊はビクトリア攻防戦での消耗が著しく、云わば満身創痍の状態にある。とても地球軍の戦艦と真つ向から交戦できるような状態ではないし——それに、我々はビクトリアで手に入れた『データ』を、無事にジブラルタルに持ち帰る任務があるんだ」

セルマンは、感情から云っているわけではない。

現在「コンプトン」から出撃可能なモビルスーツなどは、指を折って数えても片手の中で収まってしまう程度のもなのだ。そのような状態で地球軍の戦艦に真つ向勝負などを仕掛けても、勝算は低く——むしろ返り討ちに遭う可能性の方が高い。

であるなら、彼らは彼らで、当初の任務であるビクトリア要塞の『データ』を、确实

にジブラルタルへ持ち帰ることの方が優先的だ。

「せっかく難攻不落の要塞を墜とした後なんだ。こんな詰まらんとところで、我々は沈むわけにはいかない。——きみもきみの妹を、いたずらに危険な目に遭わせたくはないだろう?」

付け加えられた念押しは、明らかに感情論で発された言葉であったが。

「いま、我が隊でマトモに動けるのはキミくらいものだ。——だからこそ、絶対に深追いはするんじゃないぞ」

「……わかりました」

アスランはそう云って、艦橋から出て行った。

命令を煽ったアスランが、パイロットスーツに着替え、更衣室を出る。

更衣室から足を一步踏み出したところで、艦内にさらなる放送が響き渡った。

〈敵艦を特定! 確認された熱紋は、例の“足つき”と呼ばれる新型の地球軍の新型特装艦のものと断定される!〉

アスランの眉が、ぴくりと動いた。

——やはり……！

そのアナウンスは、イザークやディアツカ、ならびアンドリユー・バルトフェルドという名將の敗北を暗に意味している。また、そんなことを平然とやつてのける地球軍が、只者であるはずがないということも。

——そんなことが、できるのは……！

思索するアスランであつたが、そのとき、彼の背後から共に出撃する『ザウート』部隊のパイロット達の声が上がつた。

「なんだよ、その『足つき』ってのは？」

「クルーゼ隊が仕留め損ねて、地球に降下して来た、地球軍の新型艦だよ。何でか知らんが、アフリカ砂漠のど真ん中に落つこちて来たからって、あの『砂漠の虎』が追撃の任に当たっていたらしいが？」

「こんな場所で俺達と鉢合わせるってことは、その虎までもが破られたってことになるな……！」

意外がる兵士達の談議をよそに、放送の声は続いた。

〈現在、当艦はまともに交戦できる状況ではない。敵艦の動きを見つつ、臨機応変に対応されたし〉

「——つまり今回の戦闘は、あくまで『敵艦を撃墜すること』が目的ではなく……『生き

延びること』が最優先事項ってことか？」

「逃げ腰の戦ってことか？ まっ、今回は仕方ねえか」

決して誤った判断ではないだろう。ザフトにおいて屈指の「精鋭」と名高いクルーゼ隊の包囲網をすり抜け、地球への降下後も、名将『砂漠の虎』を破ったと推定される敵の新型特装艦を、数機の「ザウート」と「イージス」だけで仕留めきれるとは思えない。

勿論、アスランの「イージス」は当てにするべき強力な戦力だが、そもそも、それはクルーゼ隊からの出向だ。逃げ腰の戦、という単語に不満げな顔を浮かべるアスランであったが、二十代らしい隊員のひとりだが、そんな彼の肩に、とんと大きな手を置いた。「オレたち「ザウート」部隊は後方で、キミの機体の支援に徹する。援護は任せると云いたい——今回の作戦は、あくまでも「コンプトン」が離脱するまでの時間を稼ぐだけいいんだ。砂漠の熱を帯びすぎるなよ？」

「砂漠のお土地柄は、色々と気難しいからな。キミもあんま無茶すんじゃないぞ、ビクトリアアみたいにな！」

忠告の意味を掴みかねるアスランであったが、そうして兵士達がアラートへ向かおうとしたので、アスランもまた続くように、場を駆け出そうとした。

「まっつて」

そのとき背後から静止を求め声上がり、アスランは足を止めた。

男性から発されたものではない、柔らかなで高い声。足を止め、アスランがゆっくりと振り返ると、そこには、右肩から腕先までを石膏帯で固められた金髪の少女の姿があった。

ステラだ。彼女はどこかおどおどとした様子で、アスランを上目がちに見つめている。

「足つき」って……「アークエンジェル」のこと？」

「ああ、そうだ」

抑揚のない声で、アスランはステラの問いに答える。

震えた声で、ステラは先を続けた。

「アスランは、あの艦を討つの？」

「なぜ？」

「だって、あの艦は……」

ステラはしよんぼりとした様子で肩を落とし、段々とその視線を落としている。

——だって……「アークエンジェル」には……。

このとき、ステラもまた「アークエンジェル」と、よもやこんな所で、こんなにもすぐに鉢合わせするなんて想定していなかったのだろう。無論、彼女がザフトの旗の下で

戦うことになった以上、いずれ、いつかは必ず、割り切らなければならぬ問題ではあったのだが――

――ステラはザフトになって、地球軍と戦うって決めた……！

――だって地球軍は、あんな「デストロイ」なんかを悪用しようとする、悪いヤツらばかりがいる軍隊だから……！

でも、だったら。

――なら、お世話になったマリユーさんや、ムウって人も、悪い人なの……？

微妙でもなければ些細でもない、明らかな違和感が、ステラの中に芽生え出す。

――あの人は地球軍でも、ステラを、道具のように使おうとはしなかった……！

ときに過酷な判断も求められては下していたようだが、少なくとも、軍人として以前に、人としての厚意や良心が見え隠れしている人物が多かった。彼女達が悪者であるだ、という言葉を信じるのは、今のステラには、すこし難しい要求だったのだ。

そんな彼らと、家族であるアスランが敵対して戦う姿を見ていることしか出来ない――というの、やはり、ステラにとって心の休まるものではない。

「残酷な云いように聞こえるかも知れないが、ステラ――それが戦争だ。軍人である以上、誰もが覚悟していることだ」

アスランは、あくまで毅然として答える。

彼にとっては名前も知らない「マリユール」や「ムウ」——彼女達は地球軍の軍人であり、ザフトの敵なのだ。そうである以上、兵士であるアスランと銃を向け合うこと——それは仕方のないことなのかも知れない。

——でも、それでも……！

ステラは顔を上げ、最後の希望に縋りつくように訊ねた。

「じゃ、じゃあ、キラは……っ!？」

友の名を呼ばれ、アスランの目が一瞬だけ見開かれる。

「軍人じゃない……！……！ そのつ、民間人のみんなは、もう『アークエンジェル』には乗ってない……んだよね？」

ステラの友人であったツール、ミリアリア、サイ、カズイ——そしてキラは、元を辿れば決して軍人ではない、あくまでも民間人だ。

問われたアスランは、咄嗟に思い出す。

(そう云えば、そんなことを以前……)

あれは、ステラを説得するためだったか？

アスランは一度、全く根拠のないことをステラにさも事実であるかのように話したことがあった。例の『アークエンジェル』が第八艦隊との合流を果たした際、人道的立場から「全ての民間人は解放された」という、それらしい作り話を——。

——ああ、あれは嘘だ。

——いや違う、嘘になつたんだ……！

アスランには分かる。ステラの云う民間人達は、今も「アークエンジェル」に乗っている。全員が、とまでは云わないが、少なからず、キラは確実に違いない。

——でなければ、いったい、誰に『砂漠の虎』が破れたというんだ……！

ザフトの名将を討った者が、そこらへんのナチュラルであるはずがないのだ。そして、キラが艦に残っているのであれば、ステラの云うツール達とやらも、おそらくは……？

——だが、仕方がない。それも自己責任だろう。

地球軍の第八艦隊は、民間人に対しては少なからず下船する機会を与えるだろうという、アスランは観測的な発言をしたつもりでいたのだが、それでも、その「彼ら」というのが地球軍の戦艦に、地球軍士官として居残る決断をしたというのなら、アスランにはこれを討つ意味が充分にある。

アスランは真実を喉奥まで呑み込むと、不安がるステラに向かって優しく微笑みかけた。

「何の心配もないよ。その……民間人達は、もう全て解放されたって話は前にしただろう？」

「でも……っ」

「きみが不安がる必要はどこにもない。あの艦にはもう、きみを苦しめて来た地球軍士官しか乗っていないのだから」

赤子をあやすかのように鷹揚と語り掛け、アスランは微笑む。

——それがひどく薄っぺらい微笑みであることに、彼は気付いているのだろうか。

言葉を受けたステラは、なおも困惑した顔で、上目遣いで訊ねる。

「……ほんとに？」

「……ああ」

疑るような、ステラの言葉と目——これらから目を逸らし、話を打ち切るように、アスランは背を向けてしまった。

そうしてアスランは背を向け——「イージス」へと乗り込んでいった。

「……………」

ひとりその場に取り残されたステラは、まるで立ち位置を見失ったかのように、その場に漂っていた。

——これは、単なる勘違いだろうか。

ここ数日間で、アスランは、ステラの知らない顔をするようになった。

冷たくて、硬くて、恐ろしくて——パトリックにも似た表情をするようになった。

言葉のひとつひとつに、暖かみがない。

作戦中ともなれば、それは顕著に現われる。

——最近のアスランは、なんだか不穩だ……。

以前までは、もっと優しかったのに——。

ステラはひとり、不審な気持ちに囚われた。

〈過ぎつた予想は外さないもんだな、この艦は！〉

ムウが皮肉まじりに「スカイグラスパー」のコクピッドの中で叫んだ。——その機体は「ストライク」の支援を目的として運用される、大気圏内用の戦闘機である。

『不可能を可能にする男』を自称するムウであったが、なかなかどうして——かたや「アークエンジェル」は想定される可能性——いや、危険性という名の地雷をいちいち踏みしめ、起爆させていく戦艦であるらしい。

まさか、明けの砂漠と物議を醸した懸念が、こうして間もなく現実のものとなるとは。〈どんだけタイミングがいいのよ、この艦は！〉

「リーダーに探知されたのは、ビクトリアから引き上げているザフトの部隊なんですよ？」

同じく「ストライク」へと乗り込んだキラが、通信越しにムウに訊ねる。

「ああ、噂じゃあかなり疲弊してることだったが、それでも、どう出て来るかは分からん。オレ達も、いつでも出撃できるようにしとかないとな」

実際、ビクトリアへ向かったのはザフトの艦隊と訊いているが、今現在、確認されている敵は、たったの一隻だ。

「どうやら、ザフトが「壊滅的被害を受けた」という情報は、嘘ではないらしい。

しかし、過酷な戦闘を経て、疲弊しているのは「アークエンジェル」として同様である。できれば、ここでの戦闘は回避したいところだ。

「あのオツサンサイブの云つてた情報が確かなら、やつこさん方の戦力は、ビクトリアでほとんど壊滅してる。連中もこんな場所で、俺達となんか戦いたくはないだろうさ」

「少なくとも「アークエンジェル」の名は、名将『砂漠の虎』を破つたことであまねく売れているはずだ。

それは決して、孤立無援の艦としては良い意味ではなかったが、今回ばかりは、良い方向に働いてくれることを願った。

「俺達に発進命令が出ないのも、牽制のためだろ？ 藪蛇は、お互いに勘弁してことか

な

「なんにせよ、あちらの出方を見るしかなさそうですね」

一縷の望みに掛けて——「ストライク」や「スカイグラスパー」が出撃せず、「アーケンジェル」に戦闘の意志がないことを表明すれば、疲弊した「コンプトン」とて、無暗に状況を交戦へと持ち込まないかもしれない。

——今はお互いに、目の前の敵艦を相手にしている余裕などないはずだ。
下手にモビルスーツを出撃させて、相手を刺激するのは賢明な判断ではなかった。

「射程圏内に入っているはずだが、撃つて来ないな？」

「コンプトン」の艦橋では、肉眼でも噂の『大天使』の姿が確認できるようになっていた。

進行方向に「足つき」の姿はあるが、まだ、迂回できるだけの距離は開いている。互いに射程距離には入っているが、このまま大人しく進路を変更し、あの艦から逃げるという方法も残されていた。

しかし、やはりセルマンにも、コーデイネイターとしてのプライドというものがある。

ナチュラルの戦艦を前に、進路を変更するということは、己の劣勢を認めるといふことだ。そうすることで、多くの命が救われるのであれば是非そうしたいが、畏を成したように逃げ出すというのは、何か腑に落ちない。

「もしかして、あちらも疲弊しているのでは？ 交戦の意志はない、ということではないでしょうか……？」

オペレーターの考察が飛ぶ。

もしそれが本当なら、好都合な話だ。

セルマンは戦闘を回避できる可能性が示唆され、安堵したような、それでいて真つ向勝負を仕掛けられないことが悔しいような、複雑な気分を駆られた。

そんなとき、ドッグから通信が開かれた。

発進許可を求め、アスラン・ザラからの通信だった。

「もうすこしだけ時間をくれないか。敵の出口を見たい」
へこのまま、何もせずに敵前逃亡すると？」

アスランの言葉には、痛い所を突く棘があつた。

敵前逃亡？

云い方は気に喰わないが、たしかに、見方によつてはそういう捉え方も出来る。

今現在の「コンプトン」は、要塞についての重要な『データ』を抱えているとは云え、

要塞自体がザフトの手に渡った以上、それはいつでも持ち去ることが出来るものである。唯一の品物ではないのだ。それを口実に敵艦の前から退くと云うことは、見方によつては「臆した」と揶揄されても、おかしくはないのだ。

セルマンはしかし、むうと難色を示した。

「……しかし、今の我々に勝ち目があるのかね。例の艦は、かの『砂漠の虎』を討つたと
思しき強敵だ。軍人としては、利益の見込めぬ戦闘を行うのには、賛同しかねる」

△『勝算がないから』と——強敵に立ち向かうのを臆すれば、我々は実際に難攻不落の要塞へと勇猛果敢に飛び込み、散つて行つた英霊達に合わせる顔を失います△

うっ、とセルマンは返す言葉を失った。

やはり、痛い所を突いて来る言葉だ。

アスランの指示は、決して「最善」とは云い難いものである。

有力なモビルスーツが、イージスしか見込めない以上、噂の『大天使』を撃沈させることは難しいと、普通は考える。ここで戦闘を回避するか、戦闘に持ち込むか——この取捨選択を迫られたとき、軍人としては、まず前者を選択すべきだろう。そうすることで、無用の損害を抑え込めるかもしれないのだから。

だからこそ、アスランはセルマンの情に訴えているのだ。

セルマンが兵士想いの男であることを知っているからか、あえて、第二次ビクトリア

攻防戦で散つて行つた者達のことを話を持ち出した。圧倒的な力を持った要塞に勇猛に立ち向かい、若い命を散らして行つた兵士達に對して——“アークエンジェル”ごとき、彼らの長たるセルマンが退けば、英靈^{戦死者}達に對する礼を損なうことになるのではないかと。

(まつたく……痛い所をついてくれる)

ここまで云われては、セルマンも黙つて引くわけにもいかない。

「——たしかに、ここで臆しては、彼らに合わす顔がないな……」
たしかに、相手は強敵だ。

この戦力では撃墜することは叶わずとも、こんな辺境——ザフトの勢力圏内——をうろうろしている時点で、“アークエンジェル”は今後もおそらく、地球軍の制空権に向けて航行を続けるのだろう。

——追撃^{トドメ}は、他の隊に任せればいい。

撃沈は無理でも、すこしでも損害を与えることが出来れば僥倖——そう考えれば、リターンのない戦闘ではない。結果的、ザフト全体の利益につながるのなら、ここで大人しく退くことは、正解ではないのかもしれない。

この発想に至らしめることこそが、アスランの狙いであつたのかもしれない——だとすれば、これは彼の思惑通りだなとセルマンは自嘲するが、死んで逝つた若者たちを想

えば、もはや退くことは許されないうら。

まったく、誰に似たのか——頭のキレる少年になったものだ。

「先攻できるのは『イー^キジス』^{ひとり}一機だぞ。わかつているな？」

自信があつての提言だろうか？ と訊ねれば、はい、ときつぱりとした声が返つて来た。

ならば、良い。

セルマンはモニター越しのアスランに剥けてに、ひと差し指を天に突き立てた。

「——十分だ。それ以上の戦闘継続は許可できない」

〈わかりました〉

セルマンは顔を上げ、遠方に据える『大天使』を見据えた。

「——モビルスーツ隊、出撃！ 『足つき』に、せめてもの一矢を報いれやれ！」

失われた、ザフト兵達のために。

「コンプトン」から一基の『グウル』がうち放たれ、これをめがけて——真紅の機体が飛び出した。

「敵モビルスーツ部隊、展開を確認しました！」

ミリアリアからの声が飛び、ムウは小さく毒づいた。

「やっぱり、大人しく見逃してなんてくれないってことかよ」

「いいかんじ……だとは思ったんですけどね」

“コンプトン”は、先んじて攻撃を仕掛けて来なかった。

特定されてから、攻撃が始まるまでは、明らかに時間差があった。

——彼らは、なにか迷っていたんじゃないか……？

本当は、彼らも戦いたくなんてないんじゃないのか、というのがキラの抱いた疑念である。心から戦意があるのなら、熱源を確認した途端、攻撃を仕掛けて来るはずだ。

——いったい、何を思って、戦闘を始めようとしたのだろう……。

“アークエンジェル”のハッチが開放され、そこから“スカイグラスパー”が発進して行く。

キラもまたカタパルトへと“ストライク”を進め、展開される“エールストライカー”の装着を待つ。

砂漠の大地において、もつとも有効な装備は“エール”である。

三基あるストライカーパックの中でも、最も高い推進力を持ち、高い機動力が発揮できる。決め手となる武装に欠けるが、汎用性が最も高いのだ。

ランチャー装備は、主砲によるエネルギーの消費が早すぎる。

ソード装備は、大振りの剣を重力下で振り回すには、いささか重すぎる。

よって、砂漠の虎を討ち破ったときと同じように——“エアラストライカー”が最も有用だ。

〈これは……!?!〉

キラの許へ、そのときチャンドラの声が上がった。

〈敵艦から出撃した機体を特定！ この反応は——X303 “イージス”です!〉

放たれた言葉に、キラの心臓はドクンと跳ね上がった。

——まさか。

どうして、なぜ？

(アスラン………!?!)

その事実には、キラが驚きに目を見開く。

——彼が、どうしてここに……？

(僕はまた、キミと戦わなくちゃいけないのか——アスラン………!?!)

撃たねばならないのは同胞——。

ちがう。

もつと大切な、もつと親密な——親友だ。

——アスランと、対峙しなければならぬのか？
まだ、いっぱい話したいことがあるんだ——。

昔みたいなのに、いろんなことを打ち明けて、アスランに解決してもらいたい。
もつといろいろな、話を聞いて欲しい。

それでも今は、彼と——大事な友達と？

「戦うしか、ないのか……………」

トールや、ミリアリア——彼らを、守るために。
発進、どうぞというミリアリアからの声が響く。

「キラ・ヤマト——『ストライク』行きますー！」

白き戦士が、再び戦場に飛び出していく。

赤い閃光と、再び相見えるために。

「——ストライ……………」

『コンプトン』の中で、ステラは白い機体の姿を認め、啞然としている。

赤色の四基の翼。青と赤と白、単純色のトリコロールに、角のあるVアンテナ。

GAT-X105 “ストライク”——。

ステラにもまた、とても見覚えの、そして思い入れのある機体が、敵として現れている。

あの機体には、キラが乗っていた。

(でもアスラン……キラはもう、船から降りたって)

ステラは震えた瞳で、真紅の“イーゼス”を目で追った。

キラはもう、軍から解放されたって云ってた。

だから別人。

敵となった“ストライク”は出撃して来たけれど。

——今はもう、別の人が“ストライク”を動かしているんだよね……？

胸がきゅつと締め付けられたように、苦しくなる。もどかしくなる。

動かそうとすれば、痛みの走る右腕を見つめる。——この腕が動かせないせいで、自分分は、その事実すら確認しにくいことが出来ないのだ。

襲ってくるのは、とてつもない不安——。

どうして、こんなに胸が痛むのか、ステラには分からない。いつそ最適化を受けて、忘れてしまいたいと思えてしまうほどの息苦しき、もどかしさを憶える。

顔を上げて、もう一度、白亜の機体——“ストライク”を見据えた。

敵となったあの機体には、もう、キラは乗ってないんだよね……？

——そうだよね……アスラン………？

不安に駆られた今のステラには、状況を見守ることしか出来なかった。

『モラトリアム』B

——どうして、こんなことになったの……？

フレイは「アークエンジェル」の居住区の一角で、ひとり簡素なベッドの上にへたり込むように座っていた。

まるで無気力に、茫然としている。

数日前まで、彼女はキラの自室で生活し、このつまり、キラと同棲していた状態にあった。

しかし彼との破局を期に、部屋にも居れなくなり、なかば出ていくような形で自分の部屋へと居住部屋を移すことになった。

正直なところ、キラの部屋はフレイにとつて、使い勝手が良かった。

軍という組織に組している以上、階級が高くなればなるほど、待遇が良くなるのは当然の仕組みである。

キラは「ストライク」のパイロットとして少尉の階級が与えられており、普段から士官室が宛てがわれているのだ。勿論、士官室といえど、フレイが望むようなインター

ネットでファッションのショッピンが楽しめるような場所ではないし、電波が悪ければ、満足にテレビも見れやしない。環境の良いお嬢様家庭で育ったフレイには、決して快適と云えるような場所ではなかったが、それでも、シャワー室は備えられてあるし、階級による権限があるかどうかすら分からない下^{フレイ}端の部屋よりは、はるかに住み心地がよいことに変わりはなかった。

『エースパイロットの恋人』という肩書に酔いしれることにも、いくらかの優越感があつたし、彼女はそれで満足していた。——なにより、キラを戦場に引きずり込むことが出来たのだから。

しかし——キラと破局した今、彼女はその部屋にも居れなくなってしまった。

生活のレベルを底辺まで落とすというのは、凡人が考えているより、お嬢様には難しいものである。

これは、ひとつの報い？

愛する男を裏切つて、好きでもない男と、唇を身体を重ねた罰なのだろうか？

——わたしが罰せられる……？ どうして？

フレイは、純粹に不審だった。

——真に罰せられるべきは、いったい誰だ？

——わたしの人生を、運命の齒車を狂わせたのは誰だ？

ひとつの決定的な「原因」がなければ、そもそも、誰がコーデネイターとなんか関係を持つとうとするだろう。フレイにとって大切な婚約者、あのサイでさえ叶わなかった——バケモノみたいな存在と——。

——本当に罰せられるべきは、パパを殺したコーデネイターじゃない……。

フレイ・アルスターは、艦内では主に、洗濯や掃除などの雑務を任されていた。彼女はミリアリアたちと違って、工学の知識や、他にこれと云った技術も持っていなかったからだ。

軍に志願したはいいが、当てつけられるのは雑用ばかり。この状況に、はつきり云つてフレイは不満だった。と云つても、軍に志願したのは初めからキラを巻き込むことが目的だったし、短絡的な動機から志願したため、入隊してからの明確なビジョンを持っていたわけでもない。

実際のところ、彼女は地球軍の軍服を着ているが、彼女の中に軍人らしい要素や能力など何処にもない——というのが真相だ。

非力にして、か弱い。それが裏に出て、艦内では雑用の仕事ばかりを当て付けられるだけ。もつとも戦闘が始まれば部屋に飛び込み、ベッドの中で震えていることしか出来ない彼女に、他に相応しい職務が当たるはずもなかったが。

それでも、フレイは現状に不満だった。——ひとりだけシンデレラのように、メイド

の仕事をやらされているなんて。

伝説に出て来る、ガラスの靴の彼女のようには、この苦行からいつしか救われる日が訪れるというのなら、すこしは我慢してやろうとも思えるが、そんな日は果たして、本当にやって来るのだろうか？　そもそも、自分を見つけ出してくれる王子様が自分にはいるのか？　キラとは別れ、王子様となり得るサイのことは、他ならぬ自分が裏切つてしまったじゃないか。

キラと別れ、だからと云つて、サイに近づくことは許されない。一期先輩だが、ゼミで同僚だったミリアリアとも、キラのことで疎遠となり、こうして彼女は、接触できる人物を失つていつていることに気が付いた。

思えば、ますます自分は孤独になつていた。

——なんで、こんなことになつたの……？

“アークエンジェル”は、再び戦闘を始めた。——懲りない船だとフレイは思う。いつもいつも、自分を脅かしてくれる。

ほら、こんな危ない船に乗っている時点で、自分はシンデレラになどなれないのだ。パパに認められる娘になりたくて、人一倍オシャレに気を遣つたり、可愛らしくなるよう努力して来たけれど、どこから、そんな無垢な人生は狂つたのだろうか。

——どうして、私がこんな目に……？

こんな状況を造り出したのは誰だ。

キラを恨むことが筋違いだとすれば、やはり、憎むべきは、たったひとりの存在だ。
ステラ・ルーシエ。——金髪の、コーデイネイターの少女だ。

初めて「ヘリオポリス」で彼女を見たときは、素直に綺麗な子だと思った。

信じてもらえないかもしれないが、自分は彼女の容姿を、同性として純粋に感心していた。もしも同じカレッツジであつたなら、いつかは話しかけてみたい……友達になつてみたいとさえ思つていた。

彼女が身に纏うホルターネックのドレスは、パールを垂らした、とても凝つたデザインをしていた。それを纏つた彼女は、本当におとぎの国のお姫様のように見え、純然と目を惹かれた。ドレスはどこのお店で手に入れたのか、お気に入りのブランドとか、さらさらな金の髪をケアするシャンプーは何を使つているのかとか、女の子として、いろんなことを訊いてみたかつた。途中で彼女がコーデイネイターだと知つたとしても、オシャレを頑張ろうとする心は、女の子ならみんな同じなもの。先天的にいくら「素」が良かったつて、それを飾ることを後から勉強しなければ、宝の持ち腐れでしかないんだから、きつとコーデイネイターだなんて、そんなことは気にしなかつたはずだ。

——なのに……。

けれど、彼女には戦う力があつて——それでも彼女のせいで、父は殺された。

彼女がいたから——キラはパパを救えなかった。

彼女がいたから——キラとの関係は終わった。

彼女がいたから——わたしは孤独になった。

そう、何もかも。

彼女がいたから——わたしの人生はおかしくなった。

——どうして……？

あのととき抱いた憧れが、いつの間にか、憎しみにすり替わっている。

あのととき抱いた関心を、もう二度と抱くことが出来ない。

昔の己に戻るには、彼女のことを認めるには、許すには——自分自身のプライドと、父の死があまりにも邪魔をしている。

私はひとり、メイドをこなすシンデレラ——。

こんな惨めな毎日が、いつしか救われる、報われる日が訪れることを願うだけ。

コーデインエターに、復讐できる日を待ち望むだけ。

己の『本来いるべき居場所』を探して惑う——そんな健気な女の子。

——この子の身体から、得体の知れない薬物反応が検出されてるんだよ。

そのときフレイの脳裏に、医務官の言葉が過ぎった。

キラの話では、ステラはもともと無邪気で、モビルスーツなど操れなかった——そう

彼女もまた、ひとりの「か弱い女の子」だったと聞いている。

——今のわたしと……同じ……？

矛盾した過去。得体の知れない薬物の反応。

フレイは思い立ったように、ゆっくりとその場に立ち上がる。

そうして彼女は——戦闘に揺れる艦内を進み、医務室へと向かった。

“スカイグラスパー”にて先行発進したムウより、レーザー通信が入る。偵察した限り、どうやらザフト艦“コンプトン”が展開させているモビルスーツは“ザウート”が三機と、“イージス”のみのようだ。

雑な紹介の仕方かも知れないが、ムウに云わせれば“ザウート”というのは「陸戦車」と表現して相違ない機体であり、少しばかり移動手段を持っただけの砲台である。その鈍い機動力を考えれば“コンプトン”艦上から降りてまで接近して来るとは考えられず、であるなら“アークエンジェル”は、迂闊に艦を接近させなければ、直接的なモビルスーツの脅威には曝されない。

唯一にして最大の問題は、どういう経緯かは不透明だが、単騎で襲来した“イージス

“である。

その機影を見たとき、しかし、ムウの中に特に驚きはなかった。何故なら『砂漠の虎』との決戦の際、彼らは既に“デュエル”と“バスター”の機影を認めていたから。

わざわざ宇宙から地上に降りて来てまで、自分達を追撃しに来たというのか——？

「しつこい奴等だな、こいつらも……」

ところで、二足歩行型のモビルスーツを砂漠の上に降り立たせるためには、機体足底面の設置圧調整が必要不可欠である。着底した途端に液体のように流動する砂漠の上では、モビルスーツは、通常の運動プログラムでは対応し切れないのだ。

すでに“ストライク”はキラの瞬時の切り替えによつて設置圧調整を終えていて、言葉にすると簡単だが、事実としては煩雑を極めることだ。実際、碌な調整をせずに砂漠の上で戦闘を強行しようとした“デュエル”と“バスター”が、先日は砂の上で溺れ、ろくな攻撃もできずに撤退していった。

今回、敵艦から出撃した“イーゼス”は、飛行支援体に乗っている。

これでは、運動プログラムの調整など関係ない——上空からの猛威に振るわれることとなり、中でも“イーゼス”は“スキュラ”という、武装の名に恥じぬ怪物級の破壊力を搭載している。“デュエル”や“バスター”とは比較しようもないが、いずれにしても、絶対に振り切らなければならない——マリユアの指令が飛んだ。

「砲火を『イージス』へと集中させて！　『アレ』に取りつかれるわけには行かないわ！」

戦艦の方は、ムウが「スカイグラスパー」で牽制してくれている。艦砲や「ザウート」の注意が散漫している内に、最たる脅威である「イージス」を撃退しなくては、「アークエンジェル」に勝算はない。

ザフトもそれを判っている。

この作戦の可否を左右するのは、結局のところ、たった一機の「イージス」の存在だ。「イージス」が撤退すれば、「アークエンジェル」の勝利に終わる。もしそれが出来なければ、ザフトの勝利に終わる。

——でも、負けてやるわけにはいかないのよ……！

マリユートとて、ここまで来て、諦めるような女性ではないのだから。

へ「グウル」を狙え！ ヤツを地上に叩き落せば、もしかしたら——

「ストライク」を操るキラの耳に、チャンドラの声が響いた。

——もしかしたら、「デュエル」や「バスター」と、同じ轍を踏んでくれるかも知れない……！

砂漠の流砂に叩き落とせば、運動プログラムを瞬時に書き換えることは難しい。あるいはアスランなら不可能ではないが、時間稼ぎを行うには最上の作戦だ。

（アスランと戦いたくなんかない……。なら、それを狙うしかない——）

「アークエンジェル」から、数多の砲火が放たれる。

上空の「イーゼス」は、機敏にも見える動きで「グウル」を駆り、これらの砲火の合間を縫っていく。

アスランは目を張り、敵艦の甲板上でビームライフルを応射する、一機のモビルスーツの姿を認めた。

幾度となく、敵として立ちはだかった白亜の機体——あれは！

「ストライク」——やはり、キラか！

一瞬、躊躇がアスランの中に流れ込む。とうに確信していたことであつたが、現実として思い知ると、また煮え切らない思いを抱く。

アスランは小さく首を振り、余計な邪念を振り払おうとした。

——やっぱりあいつはまだ、地球軍に……！

「ストライク」の放つて来るビームは、そのすべてが「イーゼス」の足許——つまり、飛行支援体である「グウル」を付け狙っている。

瞬間、アスランの中にカッと怒りが湧いた。

「手加減をして——俺をやれると思うな、キラ！」

アスランは失調したように、吠えるように叫んだ。

——俺はもう、昔とは違うんだ……!!

大切なものを守る力を手に入れた——その絶大な力を殺してしまう「迷い」など、とうに捨てたのだ。

“ストライク”は“グウル”ばかりを狙い撃ち、アスランへと直接的な射撃を撃つて来ない。——“イーゼス”を地に叩き落して、艦と共に離脱しようとしている。つまり、キラに戦意は——殺意はないということだ。

——同じだ……。

こうして“ストライク”を見ていると、苛立ちが募つて来る。敵に対して手加減を施していた、以前の自分を思い返すようで——腹が立つ。

一方の“ストライク”のcockピットの中では、キラは焦りを募らせていた。

放つ砲火が、ことごとく“イーゼス”に回避されていくのだ。ここまで手応えの感じ取れない戦闘は、キラも初めてのこともかもしれない。

「動きが……!!」

“イーゼス”の動きが機敏すぎる——ビームが当たらない!

——以前とは、まるで違う……!!?

鬼気迫った様相も含めて、今の“イーゼス”は、かつての機体の運動性を遥かに凌駕していた。機体の性能が上昇したわけではない。ただ、動きに一切の無駄が無く、遥か

に機動性が向上したように見て取れるのだ。

——そう……昔からアスランは、すごく優秀だった。

その事実が今、脅威となつて目の前に降りかかると、キラの中の焦りも、次第に膨らんで行つた。

「……で仕留める！」

そこで初めて、「イージス」がビームライフルを構えた。

トリガーを引き、銃口から光が迸る。

次の瞬間、アスランの放つた光条は目標から不自然に逸れ、敵艦を捉えるどころか、遙か虚空へと飛んで行つた。

「!?!」

ビームが曲がつた——？

アスランは唾然として、続いて二射目を放つ。それもまた、同じように虚空へと消えて行つた。

一拍置いて、彼はすぐにその原因を突き止めた。

「そうか、砂漠の熱対流で……!」

日照によつて極端に温度が高まっている砂の高原は、大気との激しい対流が影響して、ビームの軌道が曲げられてしまう。

卓抜した判断力で、アスランは瞬時にその事実を突き止めて見せる、しかし同時に、そのような環境下で、離れた敵へと正確な照準を付けることが、いかに難しいことであるかも理解してしまった。

——砂漠のお土地柄は、色々と気難しいからな……？

ザフト兵の忠告は、こういう意味だったのか。

いちいち、熱対流が及ぼす影響を、武装パラメータに書き加える必要がある。

啞然とするアスランに、一発のビームが肉迫する。——「ストライク」から放たれた、正確無比の射撃である。

(キラ……!?)

なぜだ。どうしてキラの攻撃は、オレに届く——!?

アスランは目を見開き、小さく舌を打った。

キラは、捻じ曲げられるビームの弾道さえも修正した上で、「グウル」へと射撃を行っている。飛び回る「イージス」を相手に、ひとつひとつ弾道の「ズレ」を算出して

……？

——それだけの高い能力を持っていながら、どうして……!

アスランの中に、さらなる不信感が宿った。

コーデインイターなのに、どうしてあいつは……。

どうして、あいつは俺と、共に歩んでくれないのだろう。

——ふたりならきつと、終わらせることも出来るのに……！

ビクトリアと同様の大気圏内の戦闘とはいえ、アスランは砂漠の大地が戦闘に及ぼす影響を、かなり軽視していたのかもしれない。宇宙育ちのアスランには、それは仕方のないことであつたが。

ビームの減衰率が高すぎて、武装が、本来の威力を充分に發揮できていない。それ以前に、ビームの軌道が不自然にねじ曲がり、目標物を捉えることすら出来ない。敵艦の武装を狙い撃てば逸れ、ビームコーディングされた艦の装甲に着弾するだけだ。これでは敵艦にさえ、充分な損害を与えることすらままならない。

いったい、この土地で、キラはどれほどの窮地を乗り越えて来たのだろうか？

考えられる誤差を計算し、アスランもビームを応射したが、大気との気流によつて不自然に逸れていくビームは、まるで“ストライク”を捉えることが出来ない。一方で、この環境下に慣れている“ストライク”は、確実に“イージス”の足元に向けてビームを放っていく。

侮られているという事実が、余計に焦りを募らせる。

——それだけの差が、俺とオマエにはあるつていうのか……！

まだ、足りない——？

俺にはまだ、キラという『敵』を倒すだけの力が——？

↑—アスラン！

通信機から、キラの叫びが入って来る。

へもう下がれ、僕たちを大人しく行かせてくれ！ キミだって分かっているはずだ、こんなじゃ、勝負にはならないって！

キラが云う通り、アスランはまるで、攻撃という攻撃を行えていない。

アスランに与えられた制限時間タイムリミットは、たったの十分間——そしてその「十分」という時間は、この気まぐれな環境にアスランが適応して見せるには、あまりにも短すぎる。

キラもまた、それを理解しているから、彼に撤退を促しているのだ。

——本当は、戦う必要なんてないんじゃないのか……？

キラはひたすらに、そのことを不審に考えていた。

敵艦に「アークエンジェル」の艦影が特定されてから、実際に、攻撃が開始されるま
では、明らかな時間差があった。——まるで、ザフトが何かに迷っていたかのようだ。

今はお互いに、目の前の敵艦と戦っている余裕なんてない。

——ビクトリアからの戦いを経て、キミ達も疲弊しているんじゃないのか……？

それなのに、どうして進んで戦おうとする？

こちらに戦闘の意志はないのに、どうしてキミ達は、無暗に仕掛けて来ようとするん

だ！

へどうしてキミは、そうまでして、戦おうとするんだ！

いまさら、訊ねる必要もないであろう糾弾に、アスランはカツとなって叫び返す。

「そこに地球軍がいるからさ——！」

キラは絶句し、言葉を噤んだ。

アスランの悲痛な訴えを、キラもまた、悲痛な面持ちで受け止めた。

——俺の母は妹は、ヤツらによつて、真つ当な人生を徹底的に奪われた！

俺達の人生を狂わせたのは、ナチュラルだ。

だから——！

アスランはビームを無造作に応射しながら、怒れるように叫んだ。数発の光条が

トライク”のシールドへ着弾し、機体背後の”アークエンジェル”に損傷を与えた。

「オマエこそ、どうしてそんなヤツらのために、それだけの力を奮っている!？」

へ僕にだって、守りたいものがあるんだ……僕はただ、それを守りたいだけだ！

「いい加減にしろ、キラ！ オマエは視野が狭すぎるんだ！」

咄嗟には理解しがたい糾弾を受け、キラは眉を顰め、唸り返す。

アスラン昂つたように、その先を続けた。

「ステラだって、最初はオマエと同じことを云っていたさ！ だが、今は——！」

〈今は——？〉

言葉を反芻され、アスランはそこで、ハツとして口ごもる。

彼女は今は、ザフトとして戦っている。

その事実を、アスランはすんでの所で呑み込んだのだ。

〈ステラが、今はなんだって云うの……!?〉

キラは、食って掛かるようにアスランを質した。

——ずっと、心配だったんだ……！

鹵獲されてからの、彼女のことを。

アスランがいるから、彼女が一方的な険悪な扱いを受けることはないだろうと信じていた。それでも彼女は、ザフトのモビルスーツを多く撃墜して来た。その咎を攻め立てられ、彼女がこの後どうなったのか、心配で堪らなかつたのだから。

その糾弾に、アスランは返答に詰まった。

「……アイツはっ、オマエと同じさ……っ！」

アスランは云い淀み、濁した口調で返した。

——今までのステラは、地球軍に守りたいものがあると主張していた。

しかし、それが妄言で、妄信であることをすこし説いてやれば、掌を返して、ザフトに就くことを決意してくれたのだ。

「おまえたちの決意なんて、風が吹けば些細なことで翻る——しよせんはその程度のものだろう!」

■ そもそも『覚悟』が、アスランとキラでは違うんだ——!

キラは啞然として、その言葉を聞き留めていた。

「軍人でもないくせに戦おうとするから、連中^{ナチユラル}にいいように利用されるんだ!」
ステラと同じように、キラもまた、地球軍に騙されているんだ。

——なぜ、それが分からない?

おまえたちは、まるで「同じ」なんだ。

ふたりとも、昔から泣き虫で甘ったれで、お人好し——何かあれば、いつだって俺に泣きついて来たじゃないか。

——俺が面倒を見てやらなければ、おまえたちは昔から、何にもできなかつたじゃないか!
いか!

アスランは無造作にビームライフルを放つが、弾道は逸れ、正確に「ストライク」を狙い撃つことが出来ない。

その後方にある「アークエンジェル」にはいくら届いているようだが、それも弾幕が張られ、致命的なダメージとはなっていないように思える。

エネルギーの無駄——アスランは掲げた銃を下ろし、回避に専念し始めた。

——そうだ……。

アスランは悄然と、コクピット内に視線を落とす。

——おまえたちは、俺が傍にいないとダメなんだ……。

“イージス”の攻撃が止まり、キラは訝しむように、親友の名を呼んだ。

「アス、ラン？」

キラは呆然として、銃を下ろした“イージス”の姿を見据えていた。

——諦めて、くれたのだろうか……？

思慮していると、通信機から、今にも消え入りそうな、弱々しいアスランの声が響いた。

「友達だから、な……。キラ、最後にひとつだけ、訊かせて欲しい」

それは、アスランの中にわずかに残った——いや、彼がわずかに残していた、ほんの少しの迷いから、小さく放たれた声だった。

その声は、何かを必死でこらえるように、強かに震えていた。

親友のそんな声を聞くだけで、キラの胸はぎゅうと締め付けられるような感覚に陥った。

「『オレ達と一緒に来い』——そう俺が今伝えたら……オマエは、どう答える」

「えっ……」

それはキラにとって、思いもよらぬ問いかけであった。

——昔と同じように、そばにいて、互いに笑い合っていたい。キラには、笑っていて欲しい。

親友を撃ちたくないのは、アスランとて同じだ。

——だからこれが、最後の質問だ。

その思いだけは、今のアスランも、容易く捨て切れたものではなかったのだろう。アスランとて、親友であるキラとは、決して本心から対峙したくはないのだ——それが、震えた声から痛いほど伝わって来て、キラは堪らなくなる。

表情はたちまちに強張り、涙が出そうになる。

「——僕は……行けない……」

キラの辛そうな声が響いた。

そう、キラは——ザフトへは行けないのだ。

たとえ同胞を撃つことになっても、キラには、守らねばならない友達がいるのだから。

一拍置いて、アスランからの声が返って来る。

「……それが、オマエの答えか？」

アスランの確認の声が入る。キラは静かに、それに頷いて見せた。

二者の間に、悲痛な沈黙が流れ——ややあつて、アスランの辛そうな声が響いた。

↑——ならば、仕方ない……↓

次の瞬間——“イージス”はモビルアーマー形態へと変形した。

突然のアクシヨンに、キラがドキリとして、目を見張る。

そう、やさしくて——かなしい時間は、あつという間に過ぎ去つた。

モビルアーマー形態となつた“イージス”は、中心の砲門——“スキュラ”にエネルギーを充填し始めた。

——まさか……!?!?

最悪の想像が頭を過ぎり、キラは“ストライク”のスロットルに手を掛ける。

衝動的に甲板を蹴り、機体は一気に空中へと踊り出す。

最後の希望と迷いを捨てた——親友からの無慈悲な叫び声が耳に響き渡る。

↑ならばここで沈むんだ！ せめて俺の手で、撃ち墜としてやる——!?!

想像の翼は、最悪の事態へと降り立った。

キラはいたたまれなくなつて、咄嗟にビームサーベルを抜き打ち、一気に“イージス”へと飛翔した。

「アスラン、キミは——!」

——キミは、分からず屋だ!

しかし、*“イービス”*の行動の方が早かった。巨大な砲門から、赤色の*“スキュラ”*が放たれる。

——高^スエネルギー^{キュ}収束^ラ砲ならば、対流は関係ないだろう！

咄嗟に逆推進を掛けた*“ストライク”*は、咄嗟に機体を翻し、この熱光線を間一髪の所で回避する。青褪めながら、キラは咄嗟に背後を振り返った。

——*“アークエンジェル”*は……!?

突然の攻撃に、青褪めていたのはマリユーもまた同じだった。

「回避っ！ 面舵っっ！」

ノイマンの賢明な操舵により、*“アークエンジェル”*は紙一重でこの砲撃を回避。僅かに右翼を掠めたが、損害は軽微だった。

「ちっ……!」

〈アスラン！〉

即座にモビルスーツ形態へと移行するアスランであつたが、眼前にバーニアを吹かした*“ストライク”*が迫つて来ていた。

キラは咄嗟に*“イービス”*と*“グウル”*の接触——着地の瞬間を狙つて、アスランの飛行支援体にビームサーベルを投げつけた。

光の剣が*“グウル”*を貫き、推力を失つて、黒煙を上げて墜落して行く。

「ええいッ」

それでも、アスランは攻撃を止めなかった。空中へ躍り出た“ストライク”へ向けて、さらなるビームライフルを応射する。

不自然に曲折する光条のひとつが、“エールストライカー”の翼を数基、まとめて吹き飛ばした。

推進力を落とす“ストライク”であったが、残ったバーニアを吹かし、かろうじて“アークエンジェル”の甲板上に降り立った。

“イービス”はなおも“アークエンジェル”にビームを撃ち続けたが、アスランの想像よりも遥かに早く、地球の大地は目の前に迫って来ていた。咄嗟に逆推進を掛け、機体を地につける——次の瞬間、足場の流砂が流れ出し、“イービス”は大きく態勢を崩した。

「——!?!」

焦ったように機体を立て直すが、さらに地面が流れ出し、機体はバランスを失って場に崩れ、膝を突いた。

「アスラン……」

回頭する“アークエンジェル”の甲板上から、キラは“イービス”を見下ろしていた。“イービス”は崩れ行く足場に苦しめられ、立ち上がることをさえまならない。

今のアスランは——キラが初めて砂漠に降り立ったときと、まったく一緒だ。

初めて見る砂漠の大地に当惑し、態勢を立て直せずにいる。——きつとアスランなら、すぐにでも「イージス」の運動プログラムを書き換え、接地圧を調整し、バランスを取り戻すこともそう時間を掛けずにやり遂げてしまうだろう。——きつと僕と同じように、いや、本当はアスランは、僕なんかよりもずっと優秀なはずだから。

——でも今は、そうさせるわけにはいかないんだ。

次の瞬間、「ストライク」は甲板上からビームライフルを構え、「イージス」の周囲——地表へと向けて、数発の光条を撃ち放つ。

砂漠の大地が衝撃に穿たれ、激しい衝撃が、身動きの取れない「イージス」を襲った。衝撃に挟り出された大量の流砂が宙を舞い、爆発の渦中に崩れる「イージス」を覆う。巻き上がる砂埃により視界を遮られ、アスランは反撃が行えない。

衝撃に揺れたコクピッド内では、アスランはキーボードを叩くことさえ叶わず、ギリッと激しく歯噛みした。

〈約束の時間だ、アスラン・ザラ！ 撤退しろ！〉

通信機から、セルマンの声が飛ぶ。

「くそッ……！」

アスランは毒づいて、スラストターを噴射させた。

重力下では飛び続けることも叶わないが、転進し、跳躍しながら戦線を離脱していく。負けた——？ 俺が——？ 泣き虫のキラ……いつもいつも、面倒を見てやっていたキラに、俺が？

——悔られた……！

戦いを挑んで置きながら、キラは手を抜いていた。

——俺は「スキュラ」を撃つたのに、あいつは……！

アスランは背後を振り返り、怒りに溢れた面持ちで、敵艦に乗る一機のモビルスーツを睥睨した。

「後悔するぞ……キラ……！」

俺は、力をつけたはずだ。

俺はもっと、強くなって行かなければならないんだ。

——そのために、今の俺を侮ったオマエを、俺は許すことはできない……！

オマエは、俺と決別する道を選んだんだ。

——ならばもう、二度と容赦はしない……！

舞台^{ステージ}を変えて、次は必ず俺が勝つ。

今日ここで俺を撃たなかったこと、必ず後悔することになる……！

「次に会った時は、俺が必ず、オマエを撃つ………ッ！」

撤退して行く紅蓮の機体を、キラは寂しげな瞳で見届けていた。

——アスランは、容赦しなかった……。

僕が「敵」だと判断された途端、躊躇もなく——「スキュラ」を放つて来た。

「僕は、キミの敵……？」

キラはひとり、茫然と眩く。

戦争だから。

ふたりが道を違え、身を置く軍を違えたのだから。

それも、当然こと——

「そうだね……アスラン………」

次に会う時は、きつと、僕もアスランを撃つ気でないとダメなのだろう。

これが、戦争なのだから——。

いち個人の思いなど、押しつぶされてしまうのだから。

・
そうして「アークエンジェル」は戦場を切り抜け、紅海へと向かった。
・

『イル・コミュニケーション』

時が経ち、三月に入った。

これまでの間に、パトリック・ザラの政治家としての勢いは益々として増長していた。すべての権威は彼の手許へと結集しつつ、もはや、誰ひとりとしてその勢いを減衰させることが出来ずにいた。

例によって先日——議会にて“オペレーション・スピッドブレイク”が可決された。

それは、地球に駐屯するザフト軍の全体的な戦力の増強、ならびに地球軍が所有する最後のマスドライバー“ポルタパナマ”の制圧するための作戦である。すべての宇宙港を制圧することにより、地球軍と宇宙と地上の戦力を完全に分断することを目的としており、成功すれば、戦争を終わらせるための最後の一押しを達成したことになる。

こうしてザフトは、地球へと多くの戦力の多くを送り込んだ。

和平への道は、もはや残されていないのだろうか？ かつての盟友であるシーゲル・クラインが懇願しても、パトリックからの返答は否定的だ。

「中立を訴えていた“オーブ”の裏切り、“ユニウスセブン”追悼慰霊に赴いた平和の

歌姫人質事件、民間コーデイネーターの拉致と、薬物による洗脳と人体改造——このような事実をずかずかと暴露されては、和平交渉を続けるべきと主張したところで、国民が彼らを信じられるはずがありません」

悠然と場に構えたパトリックは、すでに己がシーゲルよりも強い立場にいることを自覚しているのか、たしなめるような口調で放つ。

「彼らを猜うたがい敵対するのは、我々の総意なのです、シーゲル」
「情報操作を行い、国民の危機感を煽っているのは君だろう」

相手の隙、失言を狙った緊張感のある、政治家同士の言葉の応酬が交わされている。かつての盟友同士が睨み合い、声を荒げていた。

「恐怖は恐怖を呼び、憎しみは憎しみを呼ぶ——争えば争うほど、我々は取り返しのつかない世界へと歩を進めているのだ。その事実が、なぜ君には分からない!？」

「何も分かっているのは、あなたではなりませんか」
うそぶくパトリックの声が続いた。

「そうならないためにも、早期戦争の終結が必要不可欠なのです!」
「互いに武力で滅ぼし合い、その先に何が開けるといえるのだね!」

シーゲルは悲痛な面持ちで訴えかけた。

「戦火は一方的に拡大するばかりだ、この果てない連鎖——どこで終わらせる? どこ

まで行けば、君の気は済むのかね!？」

「無論、ナチュラルを滅ぼすまでです！　これはそのための戦争ですぞ！　それすらもお忘れか——!？」

シーゲルは絶望する。

「いったい、何がパトリックを、ここまで修羅に落としてしまったというのだ——。」

「進化に犠牲はつきものです。新たな世界と秩序を打ち立てるのは、旧来に存続していた古の体制を打ち壊すことでしかあり得ないのだから」

パトリックは説く。——創造と破壊は、表裏一体だと。

何かを創造するときは、同時に何かを破壊するときである。

破壊による変化——進化だろうが退行だろうが、世界の在り様が変わっていく姿をいちいちを畏れていては、人類に変革などありえないのだと。

「我々コーディネイターは、生まれたばかりの赤子のような存在だった——。しかし今の我々は、ひとつの『種』として、超越した英知と武威を手に入れたのです！　もはや我々は、ナチュラルが定めたゆりかごの中に、満足に閉じ込められているわけにはいかないのです！」

「きみの掲げるその理想のために、いったい、地球上のどれだけの犠牲が払われることになる？　独立のため、親殺しの禁忌に触れようというのかね！」

パトリックの眉が、ぴくりと動いた。

「コーディネイターの自由を勝ち取り、ナチュラルに正義の鉄槌を下す——そこからが、我々の真の揺籃の時代の幕開けとなるのです！ だからこそ我々は進む、より良き明日を求めてな！」

それが人類の真理を描いたひとつの物語であるのなら、なんて救いようのない脚本だろう。

「進化だけが、人類の幸福ではないぞ、パトリック……！」

すでに、この男に言葉は通じない——。そして、彼は言葉を持たない——。

人類が残す最古の書物。その冒頭に——「始めに言葉ありき」という記述がある。

すべての世は、言葉なくして成り立たない。

最古の人類が、最古の書物の冒頭に説いたその教えに背けば、彼の統治する世界は、いつたい、どうなってしまうのだろう。

——レノアを失ったおまえの怒りは、世界を壊してしまうほどに強いのか……！

誰の言葉も、もはや、この男を前にしては……。

シーゲルの握られた拳は、強かに震えていた。

地上に構えられたパナマ基地に最も近いザフトの前線基地は、ジブラルタルである。ザフト軍の増強戦力はそのほとんどがジブラルタルへと降下し、宇宙から降下して来た部隊の名簿の中には、アスランの上官であるクルーゼや、同僚であるニコルの名前も記されていた。

「なんだか、お久しぶりですね、アスラン」

「ニコル」

多くの兵が結集し、多くの隊が一同に会す——いつそうの活気にあふれるジブラルタル基地の中で、ニコルはアスランの許を訪れていた。

「久しぶりと云っても、最後に会ってから二十日くらいしか経ってませんけどね。ビクトリアでのアスランの活躍は、宇宙にも上がって来てますよ」

「え？ あっ、ああ、そうなんだ」

ニコルの話では、地上での戦闘の詳細が、宇宙にもあまねく伝わっているらしい。しかし、そんなことは普段ならありえないことだ。

だれかが——意図的に情報を広報しているのかもしれない。

アスランの脳裏に、ふと父の顔が浮かび上がったが、ニコルは微笑みながら先を続けた。

「勿論、そちらのお嬢さんの戦果も——ですけどね」

少女めいた柔らかな微笑みが、アスランの背後に同席する少女へと向けられた。

唐突に話を振られ、ステラはおどおどと場に漂った。

会話をしたこともない相手に突然話しかけられ、困惑してるのだろう。恥ずかしいとき、困ったとき、いつも助けを求めてアスランの傍に寄る彼女だが、その動きが今回ばかりは伺えなかった。——兄妹の間に、不自然に思えるほどの距離が空いていると思うのは、ニコルの単なる勘繰りであろうか。

——まあ、女の子には、調子が悪い日もあるもんな……。

不謹慎な想像が頭を過ぎり、ハツとして、ニコルはすぐに自分を戒めた。彼女に申し訳ないなと思いつつ、彼はひとり、勝手に慌てていた。

「いつ、いよいよ準備が始まりますね。『オペレーション・スピッドブレイク』」

「ああいよいよだな」

アスランが返したそのとき、部屋のドアが開いた。

イザークとディアツカが入って来て、無然とした面持ちで——彼らはアスラン、ニコル、ステラの三名へと呼びかけた。

「各員、ブリーフィングルームに集合」

「クルーゼ隊長が呼び、だそうだけ？」

そうして、クルーゼ隊が招集された。

ブリーフィンングルームに入室し、イザークはみずからの上官と仮面を挟んで目を合わせやいなや、早速食って掛かるように懇願した。

「お願いします、隊長！ あいつを追わせてください！」

イザークとディアツカは、リビアにおいて——はつきり、ろくな活躍が出来なかった。慣れない重力下での戦闘において、ふたりは終始として砂漠の流砂に足をとられ、機体もたついている間に部隊は壊滅し、敵艦には逃亡されたのである。

蚊帳の外に放り出され、戦況が負け戦になっていくのを、ただ指を咥えて眺めていることしか出来なかつたという事実にして現実。これは彼らにとつて、相当な打撃だつたと思われる。

「意気込みは立派だが、“足つき”の追撃は、既にカーペンタリアのモラシム隊の任務となつている」

「我々の仕事です！ あいつは最後まで、我々の手で！」

精鋭と名高いクルーゼ隊だからこそ、その隊員としてのプライドというものがある。

敵艦のたつた一隻ごときに、こうも連敗を喫することなど、あり得ない。

いや、あつてはならないのだ。

「ふむ」

仮面を付けた上官は唸つた後、顔色ひとつ変えずに、話のある人物へと投げた。視線の先には、無表情を貫くアスランの姿があつた。

「……きみはどう考えているかな、アスラン？」

クルーゼは、まるでアスランの反応を楽しむかのように質問を投げかけた。

イザークやディアツカの目が——一同の視線が、アスランへと集まる。

「……。私も、イザークと同じ気持ちです。出来ることなら『足つき』は、我々の手で——

」

このときのアスランは、イザークやディアツカの悔しさが共感できていた。彼もまた、気まぐれな砂漠の環境に苦しめられたひとりなのだ。

——舞台さえ整えば、あんな醜態は曝さなかつたはず……。

だからイザークが隊長に食つて掛かる理由もわかるし、逃がしてしまつた『足つき』を自分たちの手で仕留めたいという気持ちも汲める。

迷いのない声に、イザークとディアツカが、一瞬呆気に取られた。こいつ、こんなにハッキリ意思表示できるヤツだつたか——？ という怪訝な文字がまじまじと浮かん

でいる。

ラウはふっと笑みを浮かべた。

「私は「スピッドブレイク」の準備もあるため動けんが、そこまで云うなら、きみたちだけでやってみるかね？」

イザークの表情がぱつと晴れ、「はいっ！」と威勢のいい声が室内に響いた。

「ではアスラン、イザーク、ディアツカ、ニコル、あとは——」

隊員の名を呼んでいくラウは、最後に据える、一人の少女に目を遣った。

「——きみにもやってもらおうか。『足つき』の追撃任務」

「えっ——」

だしぬけな言葉に、場にいた一同が驚きに目を見開いた。

一同の視線が、啞然とするステラへと集まる。

「隊長、それはっ……」

然しものアスランも、その判断には慌てた。

つまりラウは、ステラにとってのかつての母艦——「アークエンジェル」を、他ならぬ彼女自身に「討て」と命令しているのである。

指示を受けたステラは、激しく戸惑っていた。しゅんとして、その場に目を伏せる。

——みんなを撃て——それが、今度の命令……？

特務を終え、今はステラも通常の指揮系統——つまり、上官であるパトリックの息がかかったクルーゼの指示に従う義務がある。

でも——。

それが、ザフトの「仕事」だから？

それが、「アスランを助けること」になるから？

だから、マリューやムウの乗るあの艦を、撃たなくてはならないのか——？

何事もなかったかのように、ラウは淡々と続ける。

「きみたち五人で隊を結成し、カーペンタリアへ向かうといい。あちらで母艦を手に入られるよう、手配する。ただちに移動準備にかかれ」

「私は反対です、隊長！」

何にも動じない上官の態度がよほど気に入らないのか、イザークが食って掛かった。

先ほどまで爽やかに晴れ上がっていたその表情は、再び剣呑な雲りを帯びていた。

「こいつは元々『足つき』にいたんですよ!? 任務に参加させたところで、邪魔なだけです! アスランの親類だからといって、妙な鼻根をなさるのはやめてください!」

イザークにとってしてみれば、ライバルが増えることに愉快な点など存在しない。あるいは、そもそも根本的に、ステラの存在を認めていないのかも知れないが。

たしかに、父親が国防委員長という点から見ても、彼女が何らかの依怙鼻根の対象と

なっていると、言い掛かりに結びつけるのは容易なことかもしれない。

しかし、ラウは淡白に「失言だな、イザーク」と、あざけるように返した。

「彼女の力は、きみもその身を以て知っているだろう？　彼女は実際にビクトリアで多

大な功績を残し、——という見方もできるのだが」

「なッ——」

「我々のような軍人に必要なのは実績だよ。——なのにきみの方が優秀と認めてやろうとすれば、それこそ鼻屑になるのではないのかな？」

露骨な意見だが、間違つたことは云っていない。

反論することもできない皮肉に、イザークは顔を真っ赤にして引き下がった。

「ビクトリアでのことも、彼女なりの信念おもいあつてのことだろう。それがなければ、いくらザラ委員長閣下とて、彼女を私の隊に組み込んだりするものか」

しかし、そんな正論と彼女を「アークエンジェル」の追撃任務に当てることは、まったくの別問題ではないだろうか。

「デストロイ」を相手にしていたからこそ、ステラは迷いもなく集中することが出来たのだ。それなのに——「アークエンジェル」が相手にするととなると、彼女がそう簡単に割り切れると保障できるだろうか？

しかし、

「見せてもらおうじゃないか、キミの力をね」

ラウはどこか、そして——ひどく愉しそうに云いつけた。

言葉を受け取ったステラは何の言葉も返せず、誰かに助けを求めようとした、しかし、

——唯一の拠^ラ所^ンは、最近になって、益々よそよそしい……。

話しかけられる人も、いなかった。

「隊の指揮は、アスラン。——きみに任せる」

そうして——『ザラ隊』は結成された。

最近のアスランは、時折——自身が妙な流れに背を押し出されている、と感ずることが多くなった。

隊長に抜擢された今回は勿論、ビクトリア攻防戦の折もそうだった。リビアへ赴くイザーク達を差し置いて、自分だけは重要な役割に就いている。——ニコルの話では、挙げた戦果も広報されているようだし——云い換えれば、自分がなにか意図的な眷顧の対象となつているような気がしていた。

鼻根を単純に好都合と捉えられるほど、アスランは凶々しい神経をしていなかった。

期待されるのは大いに結構だが、前線において背中を預ける後方からの視線が痛いのは、なんとも救われない感覚である。

「隊長。——その、お話があるのですが」

一同が解散した後、アスランは納得がいかない様子で、クルーゼへと個人的に話を持ち掛けた。

なんだね、と淡々と返すラウは、一切の思い当たりもない表情を浮かべている。

「少数構成の隊とは云え、どうして、私などを隊長に——？」

順当に判断をするのなら、言い出しつぺであるイザークあたりを隊長に起用するのが、妥当な線ではないだろうか。

「それに、やはり考え直してはいただけませんか……。ステラを『足つき』に差し向けるのは、隊の中に無用な不和を招くだけで——」

人間ひとりひとりに、温度差、というものがある。

軍人としての功を求めずイザークや今のアスラン、それとステラの間には、明らかに敵艦を仕留めることに対する熱意、考え方の相違がある。

澁みのない云い方をすれば——迷いの断ち切れていない者が隊にひとりでもいれば、全体の指揮が低迷し、連携が乱れる危険性として浮かぶのだ。——云いながら、かつての自分に聞かせてやりたくって来るアスランであった。

「随分と軍人らしくなったな、きみは」

突然、思いもよらぬことを云われ、アスランは目を丸くした。

「残念だが、それは出来ない相談だ、アスラン。彼女がまだ肩に負傷を抱えているのであれば考慮しただろうが、今はそうではないのだろうか？」

「しかし……っ！」

「個人の機微にいちいち上官を配慮させていては、どのみち彼女に、兵士は務まらんよ」
正論を云われるが、そもそも彼女をザフト兵に仕上げることで自体、アスランは反対していたのだ——その事実を、ラウは知っているのだろうか。

アスランがステラを戦場から引き離そうとすれば、クルーゼが、そして彼の背後に立つパトリックが、権限をもってアスランの邪魔をする。彼らはまるで、ステラを戦場に縛り付けるように命令を送り込んで来る。——いったい、ステラに何を望んでいるというのだろうか。

「それに、きみにとっては酷な云い方かもしれんが、今回のことで私を責めるのは筋違いだ」

「え——っ？」

「きみは彼女の兄上だろう。兄上として、そろそろ彼女にけじめを付けさせるべきではないかな？」

云い付けるクルーゼの表情は、ひどく愉しそうである。

——この男は本当は、自分たち兄妹を面白がっているだけなんじゃないだろうか？
クルーゼは次に冗談めいて、「それに」と言葉をつけ足した。

「この任から解いたところで、彼女の面倒を見るのは、私の手には余るしな。どうやら私は、彼女に嫌われているようでね、警戒されている」

私は何もしていないのだがな、と自嘲気味に話しているが、それを放つクルーゼは、まったくシヨックを受けている様子はない。

「会って間もないと云うのに、先入観と偏見で人に接するは失礼というものだ。親の顔が見てみたいものだよ」

正論だが、そういう台詞は気味の悪い仮面を外してから云って貰わないと、まったく信憑性がないものである。

「すみません」と頭を下げる彼に、白々しい言葉がかぶさる。

「ああ、私はなにも、ザラ委員長閣下を咎めているわけではないさ。そもそも、彼女をあそこまで改造したのは地球軍だろう？ であれば彼女の親とは、地球軍のことを云っているまでのことさ」

まるで妹を道具のように言い表したラウの言葉に、アスランは絶句した。

「第二の彼女を出さないために——キミは父上が望む戦争終結のため、もつと力を尽

くしてくれたまえよ」

クルーゼはそう云って、歩き去ってしまった。

（戦争終結のため——）

アスランはひとり、その言葉を反芻する。

そうだ、改めて云われるまでもない。

ナチュラルに勝つてこの戦争を終わらせるため、俺はもつと、力を尽くさねばならぬ。
い。

そのために邪魔となるものは、すべて——撃つべき敵だ。まずは最大の脅威となる
“アークエンジェル”——“ストライク”を、この手で撃たねばならないのだ。

そうして——ザラ隊はカーペンタリア基地へと向かうこととなった。

荷物をまとめるように言い渡され、ステラは数週間として滞在していた部屋を出たあと、輸送機の発着準備が整うまで、ゲートにて膝を抱えて座り込んでいた。

周囲を見回せば、見知らぬ整備士たちが、彼女の存在など気付く様子もなく忙しく動き回っている。“スピッドブレイク”の準備が始まって、いつになく慌ただしい基地内

では、彼女の存在を気に留める者はいない。

(ひとりぼっち……)

身の回りに、心を置ける場所がない。

いったい、頼れる誰がいるだろう。

仮面を付け、ステラにとって不穏な既視感を抱かせる上官。対抗心からか、敵意を剥き出しにしている同僚や、彼女をまったく意に介さないように斜に構え、皮肉ばかりを告げて来る同僚。

——アスランだつて……最近は——。

嫌われたわけではない、けれど、埋められないだけの距離が、最近になって浮かび上がって来ていた。

家族だというのに、近寄りがたい雰囲気がある。

鋼鉄のように冷ややかな眼は、アスランが持つ本来のやさしさ——懐の深さ、もしくは、人間らしい暖かみを殺している。

——いつから、こんなことになったんだろう？

いつから、アスランは変わってしまったんだろう？

目に輝きを失った、最近のアスランが怖くなつて、ステラは自分から距離を開けている。だから鏡のように、アスランにも距離を空け返されているだけなのかもしれない。

遠慮に対して、遠慮で返されているだけなのかもしれない。

しかし、結果的にアスランに頼ることができなくなった今、彼女は身を寄せる場所が見つけられずにいた。

視線を伏せ、膝の間に顔を伏せていると、そこに、ひとつの声がかげられた。

「ステラさん、輸送機、準備できたそうですよ」

それは、緑色の髪をした、少女めいた面持ちをした——ニコル・アマルフィであった。人の良さそう笑みを浮かべ、表裏のない、屈託のない表情をしている。

膝を抱える彼女に手を差し伸べ、にこりと微笑んだ。

「乗りましようか」

純粋な言葉に、ステラはこくりと頷き、差し伸べられた手を取った。

——この人からは、悪意を感じない……。

その感覚が、今の彼女にとっては、何よりの救いであった。

彼女たちは今、カーペンタリアへと移動するためのゲートにいた。

ザラ隊の面々が搭乗する予定になっていた輸送機は、最大で三機までモビルスーツを収容できるようになっている。それにより“イージス”“デュエル”“バスター”の

三機——ならびにアスラン、イザーク、ディアツカの三名が、ひとつ目の輸送機に乗り込み、カーペンタリアへと既に出航している。

二機目の輸送機には、航法機材によるトラブルが発生し、出航が遅れることになっていった。

『——で？ 輸送機には、どういう振り分けで乗り込むの？』

数十分前、大した問題でもないことを、ディアツカは茶化すようにザラ隊の面々に問いかけた。

この会話が為されたとき、既に輸送機のうち、一方がエンジントラブルを起こしていることが明らかになっていた。つまり、二機目に搭乗する者は、自動的に発着と到着の予定時刻から大きく遅れるということになっていたので。

『他人エンジントラブルの過失で待たされるなど、ありえん。俺は一機目さきに行かせてもらおうぞ』
気の短い話だが、イザークはそう云って譲らなかつた。

ラウとの会話で、よほど機嫌を損ねたのだろう。そそくさと去ってしまった。
『行くぞ、ディアツカ』

『はいよ』

当然のように、イザークの後ろに、ディアツカが続いていく。

その場に残された三人であつたが、そこで、アスランが口を開いた。

『……すまないが、俺も先に乗らせてもらおうよ』

ニコルが驚いた表情を浮かべる。

アスランとステラは兄妹なのだから、ふたり揃って乗るのだと当然のように思っていたからだ。

『カーペンタリアについたら、母艦を受け取ったり、色々やらなきゃいけないことがあるんだ。進んで遅刻はできない』

そう云われ、納得する。——アスランは今、正規の隊長なのだ。

ステラは恋しげに、アスランを見つめていた。——つまりまた、アスランと離れなくてはならないのだ。

アスランはその視線に気づき、ハツとする。しかし何も云わずに、ふいと視線を逸らせてしまった。それによりステラは、落ち込むように視線を落とした。

ニコルは呆然として、ふたりの間に流れる微妙な空気感を訝しむ。しかし、すぐに笑顔を浮かべた。

『わかりました、大丈夫ですよ。輸送機が直ったら、すぐに僕らも向かいますから！』

『すまない、ニコル』

謝られる筋合いも、ニコルにはなかった。

特別、腫れ物の処理を当てつけられたわけでもないのだ。そもそも、エンジントラブル

ルによる発着の遅れが、今生の別れになるわけでもない。

——いったいなぜ、輸送機の振り分け程度のこと、ここまで気を遣わなければならぬのだろうか？

ニコルは不審に思いながら、アスランを見送った。

紅海を航空する“アークエンジェル”は、カーペンタリアからの追撃——マルコ・モラシム隊による攻撃を受けていた。

彼らを襲って来たのは“デイン”や“グリーン”と云ったモビルスーツ部隊であったが、紅海はひろく、モビルスーツにもバツテリーという限界がある以上、カーペンタリア基地からザフトが直接攻撃を仕掛けて来ているとは考え難い。

周囲に母艦が待機していると見て、まず間違いはないだろう。

「ボクが水中のモビルスーツを迎え撃ちます、その間にフラガ少佐は、母艦を叩いてください！」

“ソードストライカー”を装備した“ストライク”が、水中の“グリーン”を迎撃する。

近海に潜む母艦——“ボズゴロフ”級の潜水艦を“スカイグラスパー”が叩きに向かった。

激しい戦闘に苛まれる中——“アークエンジェル”に搭乗するカガリが、しびれを切らしたように格納庫へと向かった。

「使える機体を遊ばせていられる状況か！ 私が二号機^{コイツ}で出る！」

「待った待った、出るって云ったってな、嬢ちゃんに機体なんて預けられるわけないだろお!？」

機体の足許で喚くカガリを、当然のようにマードックは叱り付けた。

たとえ、この無鉄砲少女に高い戦闘機の操縦技量が認められたとしても、彼女が民間人である以上、軍の機体を無償で貸し与えられるはずがないのだ。それにもしも、出て行つて撃墜されるようなことになれば……。

カガリは、それでも退かなかった。

「“アークエンジェル”が沈んだらみんな終わりだろ!？ なのに何もさせないで、それでやられちゃったら、恨んでバケて出てやるからな！」

その言葉は、マードックの得心を求めているものではなかった。云いながら、カガリは既に機体をよじ登り、コクピットへと身を乗り出していたからだ。

もはや、呼びかけたところで手遅れなことをマードックは知っていた。

機体の駆動系の音が鳴り響き、マードックは頭を掻きむしりながら、嘆くように唸った。

「ああッ、もうッ！ これだから金髪のお嬢ちゃんは嫌いだー！」

——どうしてこう、彼女達は人の話をロクに聞かないんだ!?

トラウマを抱えたマードックの発言は、カガリにとっては、完全にとばっちりでしかなく。

かつての日々を思い出し、マードックは例によって、金髪のお嬢ちゃんのために発進口を開放してやった。

“スカイグラスパー” 一号機と二号機が空にて合流し、モビルスーツ部隊を差し向けて来た母艦の位置を探す。

索敵しつつ空を巡航していると、そのときレーダーに、ひとつの反応が示された。目を凝らして位置を確認すれば、青色の海面に一か所、色の違う影が認められた。

「あれか!」

ムウもまた反応を特定し、カガリはすかさず機体下部のポッドからミサイルを数発、

目標へ向けて撃ち放つ。

水中へと潜り込んでいく対艦ミサイルだが、一射目は水中で減勢し、目標を逸れて通り過ぎて行く。しかし、続いて放った二射目は正確に目標へと向かい、水中で小さな被弾の花を咲かせた。

「さあ、出て来るぞ、いいか!？」

「あつ、ああ、わかってる!」

被弾した潜水艦は、浸水を防ぐために浮上して来る。

艦が浮上して来た瞬間、艦上部から「デイン」が数機として飛び立った。敵戦闘機を迎撃するために出撃した、予備の戦力であろう。

「墜ちるなよ、お嬢ちゃん!」

「カガリだつ!」

カガリの操縦技術には、ナチュラルにしては卓抜したものがあつた。

彼女もまた、ツールと同様にシミュレーターによる訓練を何度か繰り返して受講していたが、単純なゲームのセンスという一言で片づけるには、その技術はことに優れている。

しかし、いくら個人の働きが良くても、戦場ではイレギュラーも発生する。

スタンドプレーで立ち回るカガリの二号機が一機の「デイン」を仕留めたのち、一気に敵母艦へと接近していく。そのとき、上空よりムウの一号機が母艦に向けて砲火を

放った。

「うわッ」

息を飲む音が聞こえ、これが二号機の脇のぎりぎりを通り過ぎ、ムウも当然、カガリも二度とかきたくない冷や汗をかいた。

「へちよろちよろするなよ、俺が撃つちゃうじゃないか！」

「な、なにをつ」

動揺する二号機に、さらなる追撃が迫った。後方からミサイルが接近し、この一発が、機体を掠めて爆発した。

被弾した二号機は、黒い煙の尾を引いて航行する。

「帰投できるか？　すぐに離脱するんだ」

「ナビゲーションモジュールをやられただけだッ、まだ——」

「フラフラ動き回られても邪魔なだけなんだよ、それくらいわからんか！」

怒鳴りあげられ、カガリはぐつと云い換えたい気持ちを抑え込んだ。

「たしかに、これじゃ足手まといだ……！」

敵の母艦を叩けただけでも、出撃した価値はあった。欲張り過ぎは、元も子も失ってしまう。

「——わかったよ！」

そうしてカガリは、航行に支障がない機体を翻し、転進した。

「——おい？」

「ああ、しかし、こんなところで誰が」

航空機材のトラブルで発着が遅れていた輸送機は、*“ブリツツ”*と*“デイフェンド”*を乗せながら、中立国の近隣を飛行していた。

パイロット達の会話を不審に思っ「どうしたんです？」とニコルが身を乗り出して答えると「前方に戦闘らしき反応が確認されている」というのだ。

「巻き込まれたら厄介だな……中型の輸送機だったって、*“グウル”*は積んでないんだ。あんたらの機体、落っこちちまう」

操縦室での不穏なやり取りを不審に思い、ステラもまた、ニコルの後ろへとやって来た。

「でも、ここは中立国の近隣ですし、連合と小競り合うような地点でもないでしょう？」
「ザフトは領土拡大戦をやってるわけじゃないからな。こんなところで戦闘なんて、完全に想定外さ」

そのとき、前方の雲海が、急に開けた。

——ちがう。

何かが、前方の雲海を突っ切って現れたのだ。

「地球軍機——!？」

「くそっ、なんでこんなところに!」

パイロットが即座に、火器管制システムに灯を入れた。すぐに機銃のトリガーを引き、散弾が空中んにちりばめられた。

敵の戦闘機は即座に傾いて雲の中へと逃れてゆく——すかさず操縦者のひとりが叫んだ。

「君達は機体のコクピットへ! いざとなったら機体はパーズする!」

「で、ですがっ……!」

「積み荷ごと墜ちたら、運び屋の恥なんだよ!」

ニコルは唇をかみ、即座に振り向いた。動揺するステラの肩をとんと叩いた。

「行きましよう、急いで!」

「わ、わかった——」

ふたりは狭い機内を掛け、一気に格納庫へと向かう。軽快な身のこなしで自機のコクピットへと潜り込んでいく。その瞬間、ガクンという胃の中がひっくり返りそうな衝撃

が輸送機を襲った。

〈くそ、被弾した！ 制空権内だと思って油断したよ！〉

〈——高度を下げてパージする！ 準備はいいか、ふたりとも!〉

輸送機が、みるみる傾いていくのが分かった。

被弾の程度が、著しい。

ふたりは咄嗟にコクピットのハッチをしめ、急遽ではあるが、万全の発進準備を行った。

〈周囲には孤島が多く確認されている！ こんなこと云えた義理じゃないが、それだけが幸いかな!〉

〈離れるんじゃないぞ、ふたりとも!〉

ニコルは慌てて返した。

「あなたたちは!」

〈隙を見て脱出するさ！ ——気遣いはいらぬ!〉

輸送機が、みるみる降下して行く。

格納庫のハッチが開かれ、ふたりは揺れる艦内で、機体を進ませた。

〈行きますよ、大丈夫ですわね!〉

ニコルからの通信が響き、すかさず彼は輸送機から飛び出して行った。

「……………ッ」

輸送機が、激しい衝撃に襲われる。

それはけつして——ステラにとつては心地の良い感触ではなかった。

——このあと、どうなっちゃうんだろう……？

それだけを心配に思いながら、ステラもまた、機体を輸送機から躍らせた。

『フル・コミュニケーション』

ニコル・アマルフイは、心の優しい少年である。

年齢は十五歳、クルーゼ隊の中では最年少に当たる。それゆえに経験も浅く、軍人としては未熟な部分も多いが、裏を返せば、それは最も若くしてクルーゼ隊に抜擢されたということ。

ナチュラルやコーディネイターを問わず、後天的に養われてるのが、個人の人格である。

ぎくしゃくしがちな同僚間を取り持ったり、他人の身を気遣ったりできるその少年は、人に対してある種の差別的な目を向けることもなく、純粹に接し打ち解けることができる。

ステラは見知らぬ相手と会話するのは苦手だが、相手と会話をするとき、まずは相手の目を見るようにしている。それは目を見れば、その人物が何を考えているのか彼女なりに判断ができるからだ。目は口ほどに物を語り、美麗に取り繕われた表面的な言葉よ

りも雄弁なものは往々に存在する。

——それが、舌足らずなために話すことが苦手な、彼女なりの相手への理解の示し方。
——そして、今までネオ・ロアノークという仮面の存在に操られてきた、彼女なりの心懸けだった。

最初に相手の目を伺うことで、相手がどのような人物であるのかを推し図る。

だからこそ“アルテミス”や“コンプトン”で向けられた下劣な目には拒否感と嫌悪感を抱いたし、そもそも目自体を覗かせない仮面の者はいまいち信用する気になれない。

その意味で言えば、ニコルの目はとても穏やかな色をしていた。彼のことは、なんだか信用できるような気がする。ステラが前にそう感じたことがあるのは、たしかだった。

ステラとニコルを乗せた“デیفエンド”と“ブリッツ”両機は、小さな孤島のひとつに漂着していた。といっても、島に降り立った、というよりは座礁した、という表現の方が正しいが。コクピッド内に備え付けられた通信機をいじりながら、ニコルは小さ

く嘆息つく。

「Nジャマーのせいか、電波状況が悪い。救難信号を送つても、何の返答もなしか」

彼らが着陸したのは、インド洋海上に浮かぶ無人島のひとつらしい。ここから最寄のザフト支援基地はおそらくカーペンタリアだろうが、それと云つても飛行支援体のない「ブリッツ」や「デイフェンド」では到達できる距離ではなさそうだ。今の彼らに取れる行動は、救難信号を送り、友軍からの救援を待つことだけ。Nジャマーの環境下では、信号すら受信してもらえないか怪しいが。

（運が良ければ数日、そうでなかったら数週間……？　この無人島に居着かなければいけないかも知れないな）

最悪の場合、近隣の赤道連合に救援を求める事態になるかもしれない——そのような懸念をする程度には不安は残されているが、それでもニコルは慌ててはいなかった。アカデミーにて厳しい訓練過程をクリアしている彼は、無人島にも対応できるひと通りの生存術として身に着けているからだ。

（小さな島のようにですけど、なんとかなると思う）

コクピッドを潜り抜け、外へと身を躍らせる。ラダーにつかまり、海岸の砂地に足を下ろす。そのときニコルは、もうひとりの漂流者に、柔らかな声をかけた。

「電波状況が悪く、無線が使えませんでした。もしかしたら、数日に渡つてこの島にいる

ことになるかもしれませんが」

声をかけた先にいたのは、ニコルと同じ輸送機に乗り合わせ、彼と同様に無人島に座礁したステラだった。

彼女のことは、アスランの妹として認識していたが、これまで敵対していた経緯もあって、ニコルも詳しいことは知らないままだ。どう接すればいいかも、まだよく分かっていない。

そう、ニコルの中の最大の不安要素と云えば——期せずして漂着したこの同居人と、このさき上手く折り合いを付けていけるかどうかということだろう。これまで敵対していただけに、話し掛けづらい。

ニコルとしては仲良くやって行きたいのが、かつての経緯を鑑みれば、あちらに毛嫌いされているかもしれないとおのずと慎重になってしまふ。つまり、ニコルには以前に彼女を追い詰めたことがあるという引け目があったのだ。

声を掛けられた金髪の少女は膝を抱え、目の前に広がる海を、ただ茫洋と見つめていた。

「僕、すこし廻って、あたりに何か役に立つものがないか探してきますね」

無人島ともなれば、浜辺になにか漂流物が流れ着いている可能性がある。

その中から、何か役に立つものを探し出してくると云う。

「……………」

このとき、ステラは無言で、ただ海を見つめていた。

さざなみが押し寄せては、引き返していく音だけが世界に拡がる。

ステラは、決してニコルを無視しているわけではなかった、しかしそれでも、彼の言葉にはひとつの反応も示さなかった。

—— やっぱり、嫌われてるのかな……？

返答すら返って来ず、ニコルは「はあ」と息を吐いて、その場から踵を返した。

インド洋の海は、青く澄み渡っており、綺麗な色をしていた。地球においては低緯度に位置する土地柄から月に何度もスコルが訪れるそうだが、さいわい、今日明日にかけて、その心配はなさそうだ。むしろ今は、肌を撫でるようにそよ風が吹き抜け、さざ波が白浜に押し寄せては引いていく。

青い空が、地平線の果てまで晴れ渡り、とても穏やかな天候だ。休暇か何かでこの南国島を訪れているのなら、絶好のバカンス日和、とても云えたのだろうが。

—— やがて、ニコルが周囲の探索から戻って来た。相変わらずステラは、浜辺に

膝を抱えて座り込んでいる。肩を竦めてこれを見たニコルは、茫然として考えた。

——海、好きなのかな。

端正な横顔に浮かぶ少女の円らかな双眸は、まるで吸い込まれるように、蒼海を一心に見つめていた。

その視線につられるように、ニコルも海に視線を向ける。

「綺麗ですね」

「うん……」

それは、ニコルの耳に聞こえるか、聞こえないか——それほどまでに小さな返答だった。

ニコルはそのとき、そつと、ステラの隣に腰を下ろした。

呆然として、ステラは隣に視線を移す。彼女への気遣いからか、ニコルは彼女から、一応の距離を開いた場所に座っていた。

「僕、ずつと地球に来てみたかったんです——」

ステラはその言葉に反応して、きよろり、と目を円らにする。

ニコルは目の前の海を見つめながら、嬉しそうに先を続けた。

「僕、宇宙生まれの宇宙育ちなものですから、地球に降りて来るのって実は初めてなんですよ。だから、正直なことを云えば、今こうやって海が広がっているのを目の当たりに

しているだけで、なんていうか……こう、飛び跳ねたいくらい嬉しいんです」

そう云つて笑うニコルの横顔は、とても嬉々としていて、本当にステラという同居人さえなければ、ひとりで飛び跳ねてしまいそうな勢いを感じさせる。

無邪気な笑顔に、ステラはしばし魅入ってしまった。彼に対する警戒の心を、緩めてもよいような笑顔を見たのだ。

「ステラも……。うみは、好き」

そのために、自分のことを話す気になった。

そう、彼女も海が好きだ。

「あお色だったり、みどり色だったり、たまに黒かったりするの。お日様が強いときには、きらきら光つて、ますます綺麗になるんだ」

「あつ、それは僕も思いました！ あと、夕日が沈むときには、朱色く染まるんですよ！」
ふたりは、雲の形がどうの、とか、海の色がどう変化する、とか、そんなちっぽけなことに関心があつた。

それをいちいちアスランに打ち明けては、それぞれにうんざりとした顔を返されるけど、それほどまでに、ふたりは自然が映し出す景色に感嘆していた。

「……。本当は、もっと別の形で訪れてみたかったですけどね、地球……」

ニコルが地球へ降りて来ることになったのは、ザフトによる軍事作戦——『地上部隊

の更なる兵力増強』を目的とした「オペレーション・スピッドブレイク」のためだ。

これにより「地球を訪れてみたかった」というかねてよりのニコルの願いは成就したことになったが、かと云つて、旅行がてらに各地を自由に動き回ることなど出来るはずもない。今は不幸にも無人島に遭難し、落ち着いていられる余裕など本来はない——にも関わらず、果たしてそれは本当に不幸だったのか？ 慌てたり、焦ったりするには、目の前に広がる大自然があまりにも壮大で、美しい。

目の当たりにしていると、何もかもちっぽけで、どうでもいいことのように思えてしまう。

これはニコルの素直な意見——本音だ。

そんなニコルの言葉に、不思議とステラは惹かれ始めていた。今まではずっと寡黙を貫いていた彼女であったが、だんだんとニコルの言葉に真摯に耳を傾け始めていた。

「地球は『プラント』よりも、何倍も歴史がありますから、もつと各地を旅行して回つて、勉強したかったですけど」

「べんききょう？」

「そうです。僕、一流の演奏家ピアニストになるのが、子どもの頃からの夢なんですよ」

ザフトという組織は、あくまで正規軍ではなく、名義上は「義勇軍」である。組織に属する兵士のひとりひとりが、平時には本職に就いており、軍人稼業を生業とする「職

業軍人」が存在しない。

戦時である今でこそ、ニコルはザフト兵として勤めて生きているが、彼の本職はピアニストであり、その「夢」を追うために、楽聖たちの生まれのままに残されている、地球の古い都市へと訪れてみたかった。

「ゆめ」——?」

それは——ステラにとつて、あまり聞き慣れない言葉だった。

戸惑うようにステラは「えつと……」と口籠る。

おどおどとした挙動を訝しみ、ニコルはああ、と声を漏らし、「ニコルでいいですよ」と笑った。

「ニコルは——ピアノが弾けるの?」

「ええ、まあ。つたない唯一の取り柄です」

これまで反応を示さなかったステラだが、次第に、ニコルの話に食いつき始めた。

——小動物みたいな子だな……。

なんて思いながら、ニコルは興味を持って訊ね、

「もしかして、音楽に興味がおありだったりします?」

「ううん、あんまり」

その興味はざっぱりと、切って捨てられた。

「でも、ピアノは知ってるよ。——ラクスがよく歌ってくれた歌、ピアノが多いの。ラクスの声、すごく綺麗なの。ピアノの音も、すごく綺麗……」

おそらく、ピアノ伴奏のことを云っているのだろう。白黒の二色に彩られた、よく分からない物体から、あんなにも綺麗な音が出てくるとは、ステラも最初は信じられなかった。

鍵盤から放たれる旋律が、音色として心を安らかにさせてくれる——そんなピアノが、ニコルには弾けるといふのだ。

「——すごいねっ」

ステラはそこで、くすりと微笑んだ。強い日差しに照らされて、金髪の少女の笑顔が、ひどく輝かしく見映えた。金色の花弁が満開に咲くような、柔らかで、眩しいほどの微笑み。

時間を忘れたかのように、ニコルはしばし、その表情に魅入っていた。他意があったわけではない、が、ステラはもともと可憐な少女であるとは思っていたが——

——笑ったら、こんなにも……!」

彼女の笑顔は、初めて見た気がしたニコルである。

そうして間の抜けた顔をしていたので、ステラは小首を傾げた。

「……なに?」

「えつ、あ、いえ……!」

ニコルはすぐにハツとして、我に帰った。

ただちに己を戒め、謙遜して返す。

「ピ、ピアノは、練習すれば、誰にでも弾けますよ!」

「ほんと?」

「勿論ですよ、ステラさんも、練習すればきつと——」

「でも、ニコルはすごい。ステラにはできないことが、できるひとは、すごい」

「そんなことは……」

言葉を放つステラは、心からニコルのことを称賛していた。そこまで褒めるようなものでもない、とニコルは思うのだが。

謙遜するニコルに、ふるふると、彼女は首を振った。

「ううん。だってね、ステラは——ステラは戦うことしかできないから」

けろり、と放たれた言葉を聞き、ニコルが凍り付いた。それまで柔らかだった空気が、一瞬にして凍てついて砕けたような気がした。

ニコルはただ啞然として、恬として、海を眺める少女を見遣る。今の発言の意味を、彼女は本気で理解しているのか? いや、当然、ステラは自分の言葉の意味をしっかりと理解していた、理解した上で、それを平然と放ったのだ。

ステラはすこしだけ萎れた面持ちをして、その先を続ける。

「だから、ステラにできないことができる人は。——ピアノが弾けるニコルは、すごいひと」と

それが、ステラの心音だ。

ステラは、戦うことしかできない。逆に問いたとしても——

——ステラから『戦争』を取ったら、後には何が残るだろう？

これまでの日々を振り返り、ステラが感じたこと。

“ヘリオポリス”でも“アプリリウス”でも、彼女は固持して“デイフェンド”に乗り込んでいる——「もう戦う必要がないんだ」とキラやパトリックに指示を受けたときにも、彼女はその言葉押し伏せるように、みずからの意志で戦って来た。

結局——ステラは戦っていただけなんじゃないだろうか。

戦うことでしか——自分には価値が望めないから。

誰かに——認めてもらえないから。

「そんなことないですよ！」

ニコルは愛想のよい微笑みを浮かべ、その言葉を切り捨てる。

「戦うことしかできない」なんて——そんな悲しいこと、云わない方がいいですよ」

「でも……」

「過去には色々なことを経験されて来たんでしようけど——だったらこれから、見つけていけばいいんです、増やしていけばいいんです。あなたに出来ること」

洗脳されて来たことを、アスランからは聞いている。

殺戮兵器として育てられ、戦闘能力を身に付けた——。

しかし、それが彼女のすべてではないはずだ、とニコルは思う。

「あなたの『夢』は——あなたがこれから、探していけばいいんです」

夢も自由も奪われていた過去から決別して、生きて行けばいいんです。

ニコルは励ますように、そう云った。

その一言に、ステラは救われたような気分になった。

「あなたには、なにか夢があります?」

「……………分からない。——でも、昔みたいにな、みんな平和に暮らしていけばいいなっ

て……………そう思うの」

キラやアスラン。ラクスや、こうして素直に会話できるニコルが、みんなで笑って話し合えるようなときが来ればいいなどは、切実に思う。

みんなで仲良く暮らしていければ、きつとそれ以上の幸せはないはずなのに——。

「平和は、きつと好き……………海と同じくらい」

「それは、僕もですよ」

「……なのはどうして、ニコルは戦うの？ どうして、戦争をするの？」

ステラは純粹に、不審がって訊ねた。

戦争と平和は、ほんたいの言葉。平和がいいなって云いながら、どうしてみんな、戦争をしているの？

のぞき込むように、ニコルへと身を寄せた。

「どうして、ザフトで戦うの……？」

やさしげなニコルは、ステラの中では、どこかキラ・ヤマトに似ていた。

自分とは違って、彼らは決して、心根から戦争に向いているとは思えない。それを見れば、なんとなくわかることだった。穏やかな目つきをしたこの少年に、軍人はあまり似つかわしくないステータスのように思える。

そんな純朴な問いかけに、ニコルは苦笑して、答えた。

「僕も、きっかけは『ユニウスセブン』の一件です」

アスランが軍に志願したのも、ステラの人生が狂ったのも、その一件が引き金となっており、ニコルもまた、それと同様だと打ち明けた。

『何かしなきゃいけないな、僕も』って思ったんです——『プラント』を守るために」

「まもる……？」

「そのためにザフトに志願して、守るために戦っているつもりでした。でも、今はなんだ

か、何のために戦っているのか、分からなくなってきましたね……」

云いながら、段々とニコルはしよげ返つて答えた。

ニコルとて、決して、地球が憎いわけではないのだ。たしかに彼自身、地球軍が行つた核攻撃には憤りも憶えるが、地球の都市を訪れることが夢であつたニコルにとって、地球を壊滅させることは、決して目標ではないのだから。

しかし彼は、それでも義務感から銃を取り、地球と敵対する道を選んだ。みずからの属する故郷を守るため、その一心を掲げて。

「ザフト兵の多くは『プラント』を守るために戦つてるんだと思います。進んで戦争をしたい人なんて、いないんじゃないですかね……」

苦笑して放たれたニコルのその言葉は、厳密には間違つていた。

戦争を産業にしている人間も、たしかに存在する。戦争があるから食べていける者が存在するというのは、それはそれで、ひどい話だとは思うが。

「こんなにも綺麗な地球を汚すことが、正義だなんて信じたくはないんですけど」

ニコルはおもむろに、海へと視線を移した。

そのとき、視線の先で、なにかが飛び跳ねた。

「——あつ」

小さく驚嘆する声に、ステラは不審がつて海へと目を向けた。

——なに……？

警戒して、ステラがニコルの視線を目で追うと、そしてまたひとつ、海の方で何かが跳ねた。

「トビウオがいますよっ！ うわあ、すごいや」

そしてそれは、すぐくちつぽけなことだった。

肩透かしを食らったように、ステラはホツとする。しかし、よく見れば本当だ。——トビウオが、あつちでいっぱい跳ねてる……。

おおよそ、宇宙生まれの彼には、本当に鳥や魚が珍しく見えるのだろう。

純朴で夢見がちな少年だが、本当に地球が好きなのだろう、見ていると、なんだかステラまで幸せな気分になって来る。

——海……。

思い立ったように、ステラはそこで、ゆっくりと立ち上がった。

これまで一切、そこから動こうとしなかった彼女が突然、立ち上がり、ニコルはぎよつとした顔つきになった。

きよんとした顔つきは、やがて、目の玉が飛び出るような顔つきに豹変した。

ステラがおもむろに、パイロットスーツのチャックを下げ始めたのである。

パイロットスーツの下に着用した、無地の白いTシャツ姿が現れる。元々ザフトに備

えてあつた男性用のシャツなのか、彼女の華奢な身体には、それはいささか規格外すぎている。

タボダボにあまつたシャツは、太腿の方まで彼女の姿を隠しているが、その布地の下がどうなつていふのかは考えたくない。考えたら無事に生還しても、アスランに殺されそうな気がした。

「いったい、なにを? ニコルは怪訝な顔を見ると、ステラはこともなげに云い抜かした。

「うみ、はいろっ」

「エツ!」

「ちやぶちやぶしてて、気持ちいいよ」

——ちやぶちやぶ?

百聞は一見如かず、というが、海はただ一見して終わるよりも、その身で味わつた方が、何倍も素晴らしいものだ。

ニコルならきつと、海の感動を分かってくれる——。

だつたら、せつかくだし、海水浴した方が良いとステラは考えたのだ。彼女はしゃあしゃあと微笑んで続ける。

「いい機会」

「だつ、ダメですよ、服濡れちゃうじゃないですか！ 替えは持つてきてないんですから

——」
「？ 乾かし方、ステラ知ってるよ？」

いや、それは勿論僕も知ってるんですけど、とニコルがツツコもうと思つたとき、ぐいと腕を掴まれた。

ザフトではいつも肩身が狭そうにしているが、こういうときは、ひどく強引だ。

そのまま連れられ、海の方へと駆けて行く。——あああ、まだパイロットスーツすら脱げてないのに！

「あの、一応聞きますけど、泳げますよね!？」

アスランの妹で、あれだけうまくモビルスーツを操る能力があるのだ。

愚問と思つてニコルは訊ねたが、

「泳げない。だから浅いところまで！」

意外過ぎる弱点に、ニコルはうわつと額を抱えた。

やはり引き返した方が……と、ニコルは思つたが、手を引つ張つて走つていく彼女は、とても嬉しそうな顔をしていた。それほどまでに海が好きなのだろうが、それを見たら、なんだか引き返す気にもなれなくなった。

「ばしやん！ とふたりが海へと入つたとき——彼女の云う通り、海は「ちやぶちやぶ」

していた。見るだけの海と、身体で味わう海はまったく違っていることに気付かされる。足元までしか海水のない地点だが、冷たくて、それでも綺麗で、自分の足が見えるほど澄み渡っていた。

ニコルから手を放したステラが、掌で水をすくって飛ばして来る。——うわ、何するんだこの子!?

「しよっほ……!?!」

顔に浴び去った海水が、予想外の味覚を運んで来た。

思わず苦い顔をして舌を出すニコルに対して、容赦なく水しぶきが飛んで来る。舌を出せば出すほど、海水がどうしようもない味覚を運んでくる。

そもそもの原因は、どう見ても嬉しそうにはしやぎ回る彼女だ。

「この……!?! やりましたねえ!?!」

「うわっ」

衣服の心配など、もはや考えてはいなかった。

ニコルは同様に手で水を救い上げ、ステラへと向けて勢いよく飛ばし返した。

ふたりの衣類がびしょぬれになるまで——ふたりは海の感動を共有していた。

無事にカーペンタリアへと到着したイザーク、ディアツカ、アスランの三名。

到着するやいなや、管制からの報告を受けていた。航空機材の故障によつて発着の遅れていた二機目の輸送機が、どうやら、インド洋上空にて消息を絶つたらしい。元々エンジントラブルを起こしていた輸送機であるだけに、何かの事故に遭つたのか。——それとも、何か戦闘に巻き込まれたのか……。

様々な原因が考慮されたが、いずれにせよ、その不吉なニュースのおかげで、彼ら三人が身動きを取れずにいることは確かだった。

「やれやれ、舌の根も乾かないうちにこのザマかよ」

夕焼けに照らされた部屋の一角で、

「だから俺は云つたんだ、足手まといだ、つてな」

先の主張の正当性を強めるために、イザークは不満な面持ちで重ね重ね云う。

先ほどから落ち着かない様子で立ち往生していたアスランは、その言葉に冷ややかに返した。

「不平を云つて状況が変わるならいくらでも云えばいい。そうじゃないなら、いい加減にしたらどうだ」

模範的な回答だが、イザークからしてみれば、アスランのこういった「優等生」など

ところが、最も気に喰わない部分でもある。

だいたい、不満をだらだらと漏らすことに、何の利得があるというのだろうか。

生産性のない同僚の振る舞いに付き合わされて、アスランの機嫌も傾き始めていた。

——何をいまさら。駄々を捏ねまわる稚児こどもでもあるまいし……。

「仲間としてやってくよう云われた以上、拒絶したって何にもならないだろう」

「ふん、現に足を引つ張られている隊長殿の台詞かよ、それが？　それは貴様は肩も入る

よな、なにしろ相手は、大事な大事な妹君なんだから」

「……なんだと？」

嫌味を当て擦られるような口調で挑発され、アスランの表情が豹変する。イザークの露骨な悪意に対して、鏡のように悪意の籠った視線を返したのだ。

一触即発の雰囲気場面に漂い、斜に構えたディアツカが仲裁に入る。厄介ごとに巻き込まれるのは勘弁、とでも云いたげな面持ちだ。

「やめろつての、ふたりとも。大体、輸送機が落っこちまったってんなら、しようがないだろ？　つうか、ニコルも機ディフェンド体も一緒なんだ、そう心配することはないさ」

大気圏、落ちたわけでもないし——大気圏に落ちて、文字どおり死にそんな思いをしたディアツカが云う。

ニコルだって、伊達に赤を着ているわけではないんだ。

脇から言葉が入り、にらみ合うふたりが視線を逸らす。——やれやれ、とディアツカは嘆息ついた。

「——で？ 俺達はこれからどうすんの、ザラ隊長？ 三人だけで予定通り“足つき”を追うか、それとも、消えちまった二人を探すのか」

「本部も色々忙しいらしく、隊員の搜索は、俺達で請け負うことになっている。俺だつて、すぐにでも“足つき”の追撃に出たいが、こんなところであの二人を——あの二機を失うのは、得策じゃない」

イザークは芝居つけたつぷりに答えた。

「それはそれは、ご聡明な意見ありがとうございます、ザラ隊長。——んじゃ、もう日が暮れますんで、搜索は明日からですね」

既に、日はすっかりと暮れている。云い方は気に喰わなかったが、アスランはしぶしぶと、その言葉に頷いた。

相も変わらず不機嫌そうに、イザークは踵を返し、部屋から出て行く。ディアツカは肩を竦め、手のひらを返すと、それに続いて出て行ってしまった。

ひとりその場に残されたアスランは、しばらく落ち着きなく部屋の中を歩き回る。やがて痺れを切らしたように、

「だから、参加などさせたくなかった……」

眩き、小突くように拳を壁に叩き付けた。

「ステラ……………」

彼女のことを、引き離したげに漏らす言葉とは裏腹に、アスランは、所在なげに歩き回っている。

忙しい、落ち着きのないそんな動きは、狼狽えた彼の心境の代弁者となっていた。

そう——心配しているのだ。

信頼のおけるニコルも一緒に、ディアツカの云う通り、機デイフエント体も共にある——そう心配することは無いと思うが、万が一のことを想定すると——。

居た堪れなくなつて、アスランは窓の外——日が暮れ始めた朱色がかつた世界を見つめていた。

夜が更け、ふたりは小さな洞窟の中で、焚火を挟んで座っていた。

海水にまみれた衣服は、火の傍に吊るされて干されている。

場には携帯用の食料と、ふたつのカップ、そして用意された毛布の中に、ステラは身を包んで座っていた。

焚火を眺めながら、ステラは、ぼそりと云った。

「何日、ここにしていることになるのかな」

「恋しいですか、アスランのこと？」

「……うん、まあ……」

ニコルは上半身だけ衣類を脱いで、毛布を彼女に与えている。

衣類ももうじき乾くはずだが、本当、自分たちは何をしているんだろう。休暇でもないのに、まして遭難しているのに、海に入って遊んで、服をびしょ濡れにしているなんて。後悔しているかと云われれば、絶対にしていないと答えるが……。

ぱちぱち、と音を立てて燃え盛る焚火に暖を取りながら、何気なく、ニコルはこんなことを訊ねていた。

「最近、アスランと何かありました？」

「！」

勘違いだったら謝ろうと思うのだが、それは彼が地球に降下してから、ずっと気になつていたことだった。

降下前、ステラはラウと対面したとき、アスランに助けを求めて、彼の服の袖を掴んでいた。それなのに降下後、ふたりの間にはよそよそしいまでの距離が開いていた。単純に開いているわけではなく、なにか、意図的に空けられているような感覚。ステラも

アスランも、互いに近寄ろうとしない硬いものを感じたのだった。
「……………」

何かあったのか。——それは、ステラの方が訊きたい質問だ。

ビクトリアからこつち、アスランの態度が急激によそよそしくなったことに、ステラは何の心当たりもなかった。確証があるわけではない——ただ、最近のアスランは変わった。

「ヘリオポリス」からビクトリア基地へ潜入する前までは、かつての兄と同じように、懐かしくて、暖かい振る舞いをしていた。敵対しても、何度も声を呼びかけて来てくれた。なのに、そのあと基地内で再会したときには、アスランはすでにおかしくなっていた。

例の大地、ビクトリアに——柔らかさとか、暖かさとか、大切なものを色々と忘れて来てしまったかのように。

(ニコルは、気づかないんだ……)

こんな質問を投げかけて来る時点で、ニコルは、アスランが変わったことに気付いていないのだろう。

——アスランは変わったと思っているのは、もしかしたら、自分だけなのかもしれない。

上手く言葉で表現することが出来ず、結果的にステラは口籠る。

「……」

場に沈黙が流れたそのとき、彼女達の前にある焚火がパチ、という音を立てて、火力の衰えを報せた。

いけない、と思いつつニコルが薪を足そうしたところ、先んじてステラが薪を取り、それを火の中に投じた。

「あつ、ありがとうございませす」

「うん……」

余談だが、ステラは、最初に薪に火を付ける作業を手伝ってくれていた。

それだけでなく、ニコルがモビルスーツまで携帯パックや毛布を取りに行っているとき、ステラは先んじて漂流で物干し竿を作ってくれていた。それはニコルにも作成できず、当然の代物であったが、ステラにもそれだけの適応力があつたことに、そのときニコルが驚いたのは事実だった。

「(こう)いう……キャンプとか、慣れてるんですか?」

宇宙の「プラント」にも海がないわけではないが、所詮は造られた水のたまり場——湖のようなものであり、レジャーにキャンプと云った催しは実際の地球ほど盛んには行われていない。そんな中でもニコルがこうした状況に慣れているのは、彼が兵士だから

であり、サバイバルの訓練を受けたためでもあるのだ。

訊ねられたステラは、しかし、ふるふると首を小さく横に振った。

そうして、これまでに見たことがないほど優しく、柔らかな表情を浮かべ、

「前にね。こうやって——助けてくれた人がいたの」

遠い目を浮かべ、答えた。

短い言葉だったが——それを放った彼女の表情は、ここ最近で一番の輝きを宿していた。

いつもの表情の、それはどれよりも安らかな笑顔で。

「大切な人、なんですね」

「うん、たいせつ」

ニコルは鷹揚と微笑み、そしてまた、場に沈黙が訪れた。

洞窟の中に、静寂が訪れる。

ステラは、ぱちぱちと盛る焚火をしばし見入っていると、ややあつて、ニコルの頭がこくりと揺れた。小さく驚き、そちらを注視すると、洞窟の壁に背を寄せるニコルは、今にも臉と臉がくっつきそうな、眠たげな顔をしていた。休暇明けとはいえ、降下からすぐに移動命令が出て、疲れが出て来ているのだろう。

ステラはしばらく面白がつて、黙ってニコルの姿を見守った。睡魔と戦い、こくん、こ

くんと漂っていた頭が、やがて、がくと沈んで、それきり浮かんでこなくなつた。

それがなんとなくおかしくて、ステラはふつと笑いをこらえた。規則正しい寝息が聞こえ始めるのを確認すると、労わるように、ゆっくりと立ち上がる。

「……………」

自分の衣類が乾いていることを手で確認すると、身を包んでいた毛布を、ニコルへと掛けてやる。

時計はないため、時間は確認できないが、もうじき日付が変わるはずだ。

洞窟の中から、茫然と外を見つめ、ステラはひとり、思いに耽る。

そうして、夜は更けていった。

ニコルが目を覚ましたのは、それから数時間後のことだった。

元々、ステラより先に眠るつもりはなかった。それだけに、自分があつさりと眠りに就いてしまったことが申し訳なくて、その場に飛び起きるように目を覚ました。

気がつけば、毛布が自分に掛けられているし、年下の彼女に、妙な気遣いをさせてしまったのかもしれない。毛布がなくなれば、彼女はほとんど半裸みたいなものだった。

自分が寝たとき彼女の衣類が乾いていれば良かったが、もし仮にまだ乾いてないなら、湿った衣類を強要したことになる。

申し訳なく思いながら、臆な視界で、洞窟の外を見遣った。霞んだ視界や、この場所からではよく分からないが、夜が明け始めているのか、外はすこしだけ明るくなっていた。

時間にして、明朝の四時前後だろうか。

「ステラさん……？」

洞窟の中を見回すが、ステラの姿はどこにもなかった。

寝起きで視界がぼやけているからではない。彼女はたしかに、洞窟の中にいないのだ。

心配になって、ニコルはその場に立ち上がる。

寝起きのために血が回り切っていないような覚束ない足取りで外に出ると、洞窟の外に、ひとり座すステラの姿を見つけた。

「……？ なにしてるんですか？」

時間が時間だけに、彼女はひよつとして、一晩中起きていたのだろうか。いや、寝不足のような雰囲気ではない。おそらく洞窟の中で、なんとなく目を覚ましてしまったのだろうか。

単純に野宿が落ち着かなかったのか。自分が毛布を奪うような真似をしてしまったからか。いや、そもそも寝込んでいたとは云え、まだよく知りもしない異性と同じ空間で寝られるはずなかったのかもしれない。最後の原因を懸念したときは、かなり申し訳なくなつて、ニコルは恐る々る訊ねていた。

ステラは茫として、空を見上げている。

「星——……」

彼女に示唆された方角は、彼らよりも、はるか上空だった。

ニコルは不審に思つて、空を見上げる。

そして、絶句した。

「わあ…………」

夜明けの空——そこには、ニコルがこれまで、見たこともないような景色が拡がっていた。

夜空に浮かんでいるのは——無数の光輝だった。

無人島ゆえ、あたりに人工物がないだけ、星の輝きが、燦々と地上に降り注いでいる。

薄宵の星は何万もの光になって、空を覆っている。

視線を移せば、わずかに地平線の向こう側から、太陽が昇り始めていた。

日の出の景色だ。

深緑の丘の向こう側から、ひよっこりと顔を出した灼熱の光に照らされて、あたりはいつそう明るくなっていく。

「暁ですね!? ——すごい……すごいや。……信じられない……」

不謹慎なことだが、遭難して良かったとさえ思えてしまうほどに、それは美しく見映えた光景だった。

感嘆の言葉すら出て来ないほどに、その景色は、ニコルにとつて衝撃的だった。

夜明けの太陽が悠然と昇り出し、その周囲に、今から姿を暗ましてゆくであろう星辰が、無数に燦然と輝いている。

まるで——星という小さな光が、太陽という大きな光を支えているかのように。

ステラはそこで、ぼそりと呟いた。

「『暁』はね——『アスラン』って意味を持つてるんだって」

咄嗟に言葉を放たれ、ニコルはぎよつととして、ステラの方を振り向いた。

ステラは太陽を見つめながら、寂しそうな目を浮かべていた。

「『ステラ』って名前には——『星』って意味があるんだって、お母さんが云ってた」

ニコルは「え……」と言葉を失った。

それは、まるで今、夜明けの空に浮かんでいる光景を象徴しているかのようにだった。

そんなにも輝かしい、綺麗な名前が他にあるだろうか。

「暁」と「星」——この壮麗な光景を造り出す、ふたりの主役達の名だ。

ふたりはきつと、幸せな名前をもらったんですねと云いたかった。云いたかったが、それを口にするには、目の前に居る少女の面持ちがあまりにも暗澹だった。

「前にね、夜明けの太陽を支えて輝くのが星って、そう云われたことがあるの」

震えた声が、わずかに泣いているように思えたのは、ニコルの勘繰りであつたらうか。「でも、どうアスランを支えればいいのか、今のステラには、全然わからなくて……」

目の前に拡がる景色は、ニコルにとっては雄大だ、しかし、ステラにとっては残酷だ。たしかに。目の前の光景は、星辰が太陽を支えるように展開している——だからこそ、それは今のステラにとって無遠慮に『皮肉』を突き付ける。

——ステラは、アスランを支えられてないから。

たた傍にいて支えていただけなのに——むしろ最近は、傍にいて鬱陶しがられているような気さえしている。

夜空の星は、夜明けの太陽を支えるべきなのに、ステラは全然、アスランの支えになれている気がしないのだ。

「アークエンジェル」を撃たなきや……アスランの役には立てないのかな……」

「えっ……？」

「人を殺さなきや、ステラはやっぱり、誰かの役に立てないのかな……？」

そんなのは——昔のステラと、まったくいつしよなのにな？

そんなのは——いやだ。

星々の輝きに目を見張る。

ニコルは小さく訊ねた。

「あなたは……アスランを支えたいんですか？」

「それがステラの名前だもの、お母さんがくれた——。でも、今のアスランはね。なんだからおかし——」

「おかし……？」

「昔みたいじゃないの。なんだか、怖くなってるの……そのうち、わかる」

降下してから、あまりアスランと会話をする機会もなかったニコルには、よく分からない言葉であったが。

ニコルはハツと気づかされる。

——この子は、アスランの役に立ちたくて……それでも、どう役に立てばいいかが分からないんだ。

アスランは隊長に任命されて、これより「アークエンジェル」——ステラにとって、かつての母艦——を沈めに向かう。

己を卑下して「戦うことしか出来ない」と云っていた彼女にとっては、戦うことさえ

昏迷してしまうような作戦だ。

本当にクルーゼ隊長は、なぜ彼女をこの作戦に参加させたのだろうか？　これでは、まるで彼女をいたぶっているだけではないか。

ニコルはそんな彼女を氣遣って云った。

「一緒に戦うってことだけが、アスランの支えになるとは限らない——んじやないですかね？」

「え……？」

「本人からすれば迷惑なことでも、その人の役に立ちたいと思って為されたことには、きつと必ず、意味があると思います。——だから、無理をしてアスランと同じ道を歩む必要はない、と僕は思うんですけどねえ……」

ニコルは何気なく話しているのだろうが、その言葉はなんだか、ステラの胸に染みていく。

結果的に、アスランを想って起こした行動であれば、たとえアスラン本人には迷惑がられても、何らかの形でアスランの役に立つと思うのだ。ありがた迷惑もまた、愛情の形なのだから。

アスランの傍で戦うことだけが、アスランの支えになるとは限らない——戦うことでステラが精神をすり減らしていくのなら、もっと他に、別の方法があると思うのだ。

——無理をして、同じ道を歩む必要はない？

ステラにとってそれは……その言葉は——

「アスランが変な風に変わったなら、あなたが導いてあげればいいんですよ。——あなたの知ってる、優しいアスランに」

その言葉は、聞き間違いではなく——

母レノアの——最期の言葉によく似ていた。

ニコルはほのかに笑った。

「僕は『プラント』を守るために戦うんです、そう信じているから戦えるんです。あなたが何のために戦うのかは、あなたが決めないといけませんよ」

「ステラは、アスランをまもるために戦いたい」

本当の歴史は、アスランを殺した——。

ステラの新たな物語は、その言葉が根底にあるのだから。

「だったら、あなたが思う、あなたなりの方法でやればいいんですよ」

「……………『夢』のために、戦う？」

云われ、ニコルはハッとした。

そしてすぐに、はい、と微笑んでうなづいた。

しばしステラはその場に視線を落とし、ややあつて、再び星空を見上げた。

「——ステラの『夢』……見つけたよ」

ニコルが眠りに就いてから、今に至るまで——ステラはひとりで考えていた。自身の理想、夢の終着点について。

ピアノリストになりたいという彼とは違って、彼女それは、決して具体的ではなかったが。

「ステラやアスラン、ラクスやニコル、みんなが平和に暮らせる世界が欲しい」
平和な世界——。

誰もが無数の星のように、同じ方向を向いて、等しく輝ける時代——。

「ステラ、踊るのが好きなの」

自分なりの感性で、音がなくても、それでも気分のままに踊ることができる。

それが、ステラの好きなもの。

体全体を使って、自分の気持ちが表現できるから——。

嬉しい時は軽やかに、音がなくても踊れることができる。

でも、音があつたら、もっと幸せ。

「だから昔、ラクスの歌でよく踊ってた——だから今度は、ニコルのピアノも聴いてみたい」

純真な言葉に、ニコルは小さく微笑んだ。

「ニコルがピアノを弾いて、ラクスが歌う——そして、ステラが踊るの」

それを聞いたニコルは一瞬、青褪めた。つまり、彼女は将来、ニコルにラクス・クラインの伴奏者になれと云っているのだ。

それが如何にピアノリストとして名誉なことか、反対に、どれだけの苦勞——実力と実績——を必要とするのか、おおよそ彼女は分かっていない。

——でも、いい目標が出来ました……！

ピアノリストとして、俄然やる気が湧いてきたニコルであった。

「平和になったら、聴かせて欲しいな」

「分かりました。いつかそんな日が、来るといいですね」

誰もが手を取り合える、平和な世界。

それが、ステラの『夢』だ。

夢見る少女は、己の名を持つ夜空の光輝に誓った。

絶対にアスランを助けること。——たとえ、どんな方法を用いても。

そして、

みんなが平和に暮らせる——そんな幸せな世界のために、頑張ること。

夜が明け、朝になると、無線が回復した。
ザフトからの救援がやって来る。

そうしてふたりは無事に、カーペンタリアへと向かった。

『海上の大天使』

カーペンタリアにて発令された“足つき”追撃の任を受け、潜水母艦ボズゴロフ級“クストー”を受領したザラ隊の面々は、やがてオーブ近海において航行する“アークエンジェル”の艦影を捉えることになる。

光学モニターに敵艦の映像が映し出され、ニコルは驚き、イザークやアスラン達は口元を歪ませた。

「視認した。“足つき”だ」

冷徹な声で艦名を呼ぶアスランだが、ディアツカは胡乱げな面持ちで云う。

「ようやく見つけたぜ——つていいいたいとこだが、ありやあオーブの領海ギリギリだぜ？ あんなどころにこれから行かなきゃならねえのかあ？」

——オーブ連合首長国。

それは、異邦に暮らす彼らにとつては文字通りに“得体の知れない国”だった。底知れぬ軍事力を背景として、中立という独自の立場を確立させた国家。

領海を侵せば当然に攻撃を受けるのは自分達であり、要するに、オーブという国はザフトにとって味方ではないのだ。もつとも、その立場は地球軍も同様であるはずなのが……。

「どうして『足つき』は、あそこまで艦をオーブ領海に寄せているのでしょうか？ あのような航路では、オーブの領海に侵犯するのも時間の問題ですよ？」

地球軍所属の戦艦である以上、オーブに接近すべきではない——

真つ当なニコルの疑念に対して、イザークが鼻を鳴らした。

「おおかた、その中立とかつて謳ってゐる国に、補給やれ救援を求める腹積もりなんだろう？ 考えてもみろ、あの艦造つたの誰だよ」

「はっ！ ニ云えてる」

ディアツカが続いて唇に嫌な微笑みを走らせる。

確信めいて馬鹿みたいに笑い合う彼らの中では、既にオーブが中立国であるという前提は崩壊していた。が、それも道理な話ではある。何よりも彼ら自身が、オーブの開發した「地球軍のモビルスーツ」の乗り手であるのだから。

「下手をすれば、その御立派な自称中立国が、連中を庇うためにオレたちを撃つて来るかも分からんぞ？」

「はっ、そいつは傑作だね！ オーブの艦隊が相手ってんじゃ、このステージ、オレたち

に勝ち目ないぜ？」

何かの冗談みたいに話す彼らのそれは、あくまでも極論で。

それでも、例の敵艦が開発された場所と経緯を鑑みれば、決して考えられないわけではない。

「どうすんの、隊長？ のこのこ出て行って、艦隊に叩き落されて来る？」

みんなで深海ツアーといく？ という不躰な付け足しに、アスランは鼻白むこともなく答えた。

「表向きは中立を名乗っている以上、領海を侵犯さえしなければ、こちらが撃たれることはないさ……」

だがそれは、決して「安心しろ」という意味の呼びかけではなく。

アスランは「ただ……」と抜かりなく言葉を付け足した。

「オーブからどんな援護があるか分からない。用心して掛かろう」

そう。決して油断はできない。

アスランの不審感は、このときも抜けなかった。

——今回も、ひよつとしたらステージが悪いかもしれない……。

思うに、しよせんはオーブも地球の国家のひとつだろう。中立国の立場を取っていると云え、結局は、地球軍寄りではないのか？ だからこそ“イージス”は造られた。

領海付近で戦闘行為を行えば、ザフトが——自分達が——目の敵にされる可能性が、非常に高いことが予想される。

(少なくとも、『足つき』よりは……)

アスランは拳を握った。

——ややこしいことに、なる前に……!

意を固めるアスランを脇目に、ニコルはふと、その場に同席していたステラへと声をかけた。

「あなたは、どうします?」

それがあくまで小声なのは、ステラの心情を察してのことだろう。

声を掛けられたステラは、『アークエンジェル』が映し出された光学モニターを、一心に見つめていた。

(……なんだろう……)

モニター上には、強い陽光に照らされ、きらきらと光を反射させている蒼海がとつても綺麗に映えている。宝石が散りばめられたように光輝に照り返る海原の上を、白亜の戦艦が、ふわふわと浮いて進んでいる。

ステラは茫然と、そんな映像に見入っていた。

——あれが、『アークエンジェル』

そうだ。

これまで何度も母艦として、守るために戦って来た艦。キラやミリアリア——友達が多く乗っていたから、ステラが「守らなきゃいけない」と思い続けた地球軍の戦闘軍艦。でも、アスランたちはあの艦のことが嫌い、嫌っているみたい。

だって、それは敵だから。

そして、今のステラも、あの艦の敵。

だって、ステラはザフトだから。

——ステラは、あの艦を知ってる……？

ステラの胸中に流れ込む、名状しがたい違和感のようなもの。

あの艦を知っている——？　だが、それはどうしてか、少し前まで乗っていた艦だから、という理由ひととで片づけられるものではない気がする。

ひよつとすると、自分もつとつと以前から、あの艦を見たことがあつて——かつてもまた、アスラン達ではない『誰か』が、あの艦のことを嫌っていたような気がする。忌々しがっていた、そんな気がする……？

(——ステラは前にも、あの艦と敵だった……？)

海峡の上に浮かんだ“アークエンジェル”を、前に見た気がしたのだ。

「……………」

しかし、考えたところでうまく答えは出なかった。消化不良を起こすステラであったが、いまさらこの戦闘は止められない。

拭えない不審感。

そして——“アークエンジェル”に対する、どこからともなく溢れ出す不信任を胸に抱き、ステラは格納庫へと動き出した。

併走するニコルが、声を漏らす。

「……いいんですか？」

「——うん」

ステラはあの艦と、一度は戦わなきゃいけない気がした。

この違和感が何なのかを——確かめるためにも。

そうしてステラも同様に、格納庫へと向かった。

地球軍は敵——「わるいひと」——そう何度も反芻しながら。

あの戦艦にはもう、キラもミリアリアも乗っていない——何度も自分に、そう言い聞かせながら。

アフリカのレジスタンス——『明けの砂漠』に所属していたカガリ・ユラという人物は、キラ達が想像するよりもずっと「ストライク」と「アークエンジェル」に関わりを持つていた。だからこそ、レジスタンスであつたはずの彼女は、リビアからこつち、無理を通して「アークエンジェル」に乗り込んでゐる。

彼女の真名はカガリ・ユラ・アスハ。オーブ連合主張国が、五大氏族による政治体制を取つてゐる中、中でも代表首長を務めるウズミ・ナラ・アスハの娘に当たる。

カガリの父、ウズミは、いち国家の代表として数年前に「オーブの中立宣言」を行つたオーブの代表だ。この宣言により、オーブは「如何なる状況に対しても独立、中立を貫く」という理念を掲げる国家となつた。地球軍にも、ザフトにも決して組せず——『他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の戦闘に介入しない』——貫徹された理念を謳い続けた平和の主張国。赤道付近、南太平洋ソロモン諸島に存続し、小国ながら非常に豊かな経済力を持つ海洋国。それほどの経済力が軍事力へと直結し、幸か不幸か、この世界の発言力の高さにも一役として買つて出ている。

オーブとは、——その独自の理念も含め——底知れぬ軍事力を持つ、小国ながらも目を置かれた……いや、目を張られた国家なのだ。

正義感の強いカガリは、そんな母国の在り方と父ウズミの方針に、わずかなから不満を抱いてゐた。

——中立の体制を、断固として貫く。

そう云えば聞こえはいいが、それは結局のところ、理想論ではないのか？

ウズミ・ナラ・アスハの行った中立宣言の陽報として、オーブはコーディネイターを受け入れる地球上の数少ない国家となったが、語弊による跳ねつかえりを恐れない彼女にとって、その国家の在り方は「ずるい」の一言に限っていた。結局、オーブはコーディネイターを受け入れ、彼らを働かせることで、国家の……それも主に軍事力発展の一部分とした。

それに加えて、カガリはある日“ヘリオポリス”にまつわる不穏な噂話——オーブが地球軍の新型機動兵器開発に軍事提供しているという話——を耳にし、父への不信感を募らせた。その結果、単独でその調査へと向かう。そうして真実を突き止めた後、偶然にもコロニーの崩壊に巻き込まれ、キラによって命を拾われた。しかし、その後は既知のとおり、地球へと降り、どっち就かずの父とは正反対に、地球に住まうひとりの戦士として銃を取る道を選んでいた。

一連の出来事が、年頃の娘の「父親へのかわいい反抗」の一言で済めばいいのだが、事情が事情だけに、密かに護衛を務めるレドニル・キサカはいつも額を抱えるのだった。

正義感が強い分だけ、カガリは情に厚い。よしんば、情にめつきり脆く——情に流されやすい。

カガリは「アークエンジェル」に対して、ここに來て愛着のようなものを抱き始めていた。

悩むところではあつたが——疲弊した「アークエンジェル」を、このままオーブへと向かわせることをマリューに進言したのは彼女だつた。どれだけの援助が出来てやるのかは分からないが、燃料不足や整備といった連続する問題にぶち当たる今の『大天使』が、その大きすぎる羽根を休めるには、このままオーブへ向かうことが最善だ、と判断したのである。

同時にそれは、中立国の理念に背任する決断でもあつた。

これは、みずからの父へ対する当てつけであるのかもしれない——そもそも「アークエンジェル」を造らせたのは誰であるのか、ということを実際として父に知らしめるための。子供っぽい親への反抗心のようなものも、確実にその決断の中には含まれていたはずだ。

海上を航行する「アークエンジェル」に、第二次戦闘配備を知らせる警報が鳴り響く。

それがザフトによる攻撃を意味するものと、クルー全員が咄嗟に理解した。

「——オーブまで、あと少しだったのに！」

格納庫にて、整備員のひとりが毒づいて叫んだ。

『ひよつとすると、近隣のオーブが“アークエンジェル”に補給を出してくれるかもしれない——』

という情報は、あまねく彼らにも伝達されていた。

それが希薄な望みであることを彼らは悟っていたが、一縷の望みも信じていないわけではなかった。目の前に差し出されたうまい話にも、藁にも縋りたい、というのが彼らの実状なのだ。

ここでザフトと戦闘になれば、オーブとの交渉どころではなくなってしまう。

不運に毒づいた整備員の横を突っ切って、キラはすぐさま“ストライク”へと乗り込んでいく。シートに勢いよく飛び移り、腰のベルトで身体を固定させると、ミリアリアへの通信を接続した。

「ミリアリア、今度の敵は？」

砂漠からこつち“デイン”や“グリーン”に“ゾノ”と云った駐屯部隊ばかりを相手にして来たキラは、今回もまた、ザフトの量産機が相手になると踏んでいた。有効な戦闘をするためにも、“ストライク”は敵機の性能に対応した装備に換装しなければならぬ。空を飛び回る相手ならエールを、海中に潜む相手ならソードをと——キラは直ち

にに装備の判断をしなければならない。

ミリアリアからの通信が入る。

〈気を付けて、キラ。今度の相手は、Xナンバーみたい!〉

(——アスラン……!?)

キラはその報告に歯噛みした。

砂漠で撒いた親友が、今再び、戦いを仕掛けて来たというのだ。その場で一層、強く
気を引き締めた。

〈——えっ……?〉

そのとき、ミリアリアから、不意に漏れたような声が聴こえた。

「……どうしたの?」

〈この反応——そんなっ……〉

返したミリアリアの声は、震えていた。

艦橋では、既に全搭乗員が警報を聞きつけ、各々の持ち場についていた。

——あと、もう少しだったのに……!

みな、その思いで齒噛みしつつ、逆に考え、ここが正念場だと意を固めていた。

——ここさえ乗り切れば、なんとかなる……! !

平時ならまだしも、オーブは友好国ではない以上、すぐにも戦闘を終わらせなければならぬ。

「敵機特定! 前方より “イージス” “デュエル” “バスター” “ブリッツ” ——

……」

チャンドラの報告に、サイヤカズイ達の表情に動揺の色が奔った。

「クルーゼ隊! !」

「こんな所にまでつ! !」

そう、今度の相手は、量産機ではなかった。

宇宙にて、何度も煮え湯を飲まされてきた因縁の敵。本来ならば、この “アークエンジェル” に配属されていたはずの最新鋭機。ザフトの手に渡り、最大の脅威となったモビルスーツ達。

その反応が、ふたたび特定されたと云う。

「宇宙まえと同じように、総勢で掛かって来たのか! !」

トノムラが声を上げる。

しかし、その賢明な言葉は、すぐに否定された。

「宇宙と同じ？ 違うな、この反応は——！」

詰まった声に、一同は眉を擡める。場に沈黙が立ち込め、全員がチャンドラの報告を求めた。

肝心の彼は震えた声で、大きくその場に叫んだ。

「敵部隊後方に——『ディフエンド』を確認ッ!？」

慌ただしかった空気が、一瞬にして凍り付いた。

「……えっ?」

思わず、ミリアリアは首だけで席を振り返り、チャンドラに訊ね返してしまった。

誰もが絶句する空気が流れる。

場の全員が、重たい衝撃に駆られた。

「——映像、出ます」

光学モニターに、大きく前方の景色が浮かび上がる。

敵部隊の先頭に、刺々しい攻撃的なフォルムをした真紅の機体が映り込み、それに後続する三機を突き抜けた先——そこに、みな視線が集まった。両肩に体躯ほどの大盾を備え、堅牢な鎧に身を包んだ、黒鉄の機体——。

クルーゼ隊とは、何度も砲火を交わして来た。

厄介以外の何者でもない敵機として、今や見慣れてしまったGATシリーズであった

が、不思議なことに——最後方に映った“そいつ”は、他のどの機体よりも見慣れた姿形をしていた。

いっそのこと、愛着さえ抱いているような機体だ。

「そんなッ」

咄嗟に抱いたのは、黒鉄の機体に対する既視感？ 違う、絶望的に確実な親近感だ。

敵でありながら、その機体がこちらに銃口を向けていることに、不思議と当惑すら憶えてしまう。

GAT-X401 “デیفエンド”——そいつは機体が持つ名の通り、かつて“アーケンジェル”を守護して来た機体だ。しかし今、“それ”は妙に禍々しい機体のように目に映った。

映像を確認したマリユーの頭に一瞬、頭部を殴られたような鈍い重みが奔る。

「あの機体が、敵に回ったって言うの……！」

なんて皮肉な巡り合わせだろう。

しかし偶然ではなく、必然の邂逅だ。

ナタルもわずかに動揺した様子を浮かべたが、すぐに気を持ち直して、冷徹に放つ。

「ザフトに回収されたのです！ もはや“アレ”は僚機ではない——我々の『敵』です！」

「えっ……!!」

信じられない、と云った様子で——青褪めた表情のミリアリアが、抗議の声を挙げる。

「だって、あの機体は……っ!」

「パイロットは違うんだ! そう割り切らなければ——今度は “アレ” に墜とされますよ、艦長!」

ナタルの云っていることは正しい。

今度の相手は、これまでの量産機とは違う。曲がりなりにも “ストライク” と同等の、驚異的な性能を持ったGATシリーズなのだ。

油断すれば、こちらが敗北する。

——ここで気を持ち直さなくては、やられる……!!

禍々しくさえ見て取れる、黒鉄の機体の背後に、連れ去られたひとりの少女の影が付きまとう。

だが、迷ってはられない。

ナタルの云う通り——今の “アレ” は『敵』なのだから。

苦渋の決断を強いられた後、マリユーは毅然として、唸るように声を絞り出した。

「—— “デイフェンド” を、敵性存在として判断します! 以後、敵機として確認するよ
うに!」

その指令に、搭乗員達は激しい動揺に駆られた。

——なんで、こんなことに……！

あの機体は今まで、何度もこの艦を助けて来てくれたのに。

その機体がどれだけの性能を秘めているのかを知っているだけ、彼らの受けた衝撃も大きかった。

心強かつただけに、敵に回るとなれば、厄介に思えるだけだ。

勿論それは——彼女ほどに機体をうまく使いこなせるパイロットが乗っていれば、の話であつたが。

「そんなつ……」

冷酷にも思えるほどの報告が、キラの耳にも入って来ていた。

キラの脳裏に、かつて共に戦った少女の姿が浮かぶ。

——“デイフェンド”は、ステラの機体なのに！

厳密に云うとそれは間違つた発言だが、キラはその報告に、じくじ忸怩たる思いを抱く。

鹵獲され、修理され、そうして“アークエンジェル”の前に立ちはだかつたのが、か

つての僚機なのだから。

“スカイグラスパー”の中で、ムウは軽く舌を打った。

「クルーゼの野郎——」

彼は持ち前の鋭い勘で、因縁の相手の意図を悟っていた。

——アイツは俺達を動揺させるために、わざと“デイフェンド”を送り込んで来た……！

パイロットの技量など関係ない。——ただ“デイフェンド”は、敵としてそこにいるだけで“アークエンジェル”に激しい動揺を及ぼすのだ。その動揺が、これまでの愛着が親近感が、こちらの油断の引き金になるとも分からない。——冷酷にして残酷、容赦のないことで有名な、ヤツらしい手口だ。

ミリアリアから、キラへの声は続いた。

「こんなの、気休めにはならないけど……でも、“デイフェンド”はもう、ザフトの手に渡ってるの！ 乗っているのは別人よ、キラ！」

「わかっている……。わかっているよ……！」

「オーブは目の前だから、お願い！」

発進許可が下り——“エールストライカー”を装備した“ストライク”が、一気に空中へと飛び出していく。

キラは束の間、目を閉じて集中した。

——わかつてる……! ——

ステラは、ザフトの連れ去られたのだ。

——今日の前に映る、あの黒鉄の機体には、もう、別のパイロットが乗っているんだ!

たしかに——“デیفエンド”に銃を向けるたび、少女の幻影がその向こう側に浮かんで邪魔をする。しかし、それが敵の意図なのだ。こんなところで、みんな沈められるわけには行かない。

キラが思い悩んでいると、共に出撃したムウからの通信が響いた。

へ“デیفエンド”はオレがやる! ——坊主は他を当たれ! ——

「ムウさん!？」

へオマエには荷が重い! わかったな! ——

“スカイグラスパー”が、一目散に“デیفエンド”へと突っ込んで行く。

それは、ムウの軍人らしい叱咤であった。キラはやむを得ず、その指示に従った。

“ストライク”がビームライフルを構え、“アークエンジェル”の甲板上から応射する。忽然と接近して来る“デュエル”を狙撃し、例によって機体の足許——飛行支援体である“グウル”を付け狙う。これはキラが相手に容赦を掛けているからではなく、敵

機を地上に叩き落すためだ。敵機は、推力を失えば飛行能力を失って落下して行く——
“ストライク”と同じように。

正確な火線が一基の“グウル”を貫き、飛行支援体を失った“デュエル”は、咄嗟にサーベルを抜き放って、艦へと突進を仕掛けて来た。

「——取り着くつもりか!?!」

キラは目を見開き、バーニアを噴射させる。

推進力で大きく勝る“ストライク”が、同じようにサーベルを抜き放って、空中へと踊り出す。瞬時に“デュエル”と激突し、鮮やかな動きが“デュエル”のサーベルの柄を切り捨てた。勝負を制した“ストライク”が、咄嗟に“デュエル”の背後まで回り込み、機体の背を蹴り着けるような形で、大きく上空へと飛び跳ねた。

思いもしない、二段ジャンプだ。

まともとは云い難い動きに、虚を突かれた上空の“ブリッツ”は、すかさずビームを応射するが、ことごとく回避され、飛び蹴りを喰らって“グウル”から叩き落とされた。
「ストライク——!!」

目の色を失い、感覚を研ぎ澄ませたアスランが、そこへすかさず躍り込む。

機敏すぎる動きでモビルアーマー形態へと変化した後、機体の中心部に光を収束させ始めた。

次の瞬間、高エネルギー収束砲——「スキュラ」が放たれる。赤色の光線が一直線に「ストライク」へ肉迫し、キラは思わずシールドを構えた。熱光線スキュラを受け止めると同時に、瞬時にスラスターを噴射させ、後方へと機体を流す。衝撃を緩和させたのだ。それが、どうした。

亜熱光線を受け止めた「ストライク」シールドが、衝撃に耐えきれずに爆散した。残骸となつて散らばつて行く無数の欠片。しかし、キラが咄嗟に後方に飛び退いていなければ、シールドだけでは済まなかつたはずだ。身を守る盾を初めて失つた「ストライク」に、容赦なくビームライフルが襲い掛かる。機敏な動きでこれを回避する「ストライク」であつたが、数発のライフルが機体の肩部と腰部を掠め、装甲がわずかに焼かれた。「ストライク」、被弾しています！」

「キラくん!？」

「イージス」を相手に、ギリ貧にされている——それは、誰の目から見ても明らかだった。

これまで、どんな窮地も、手に付けられないほどの戦闘能力で乗り切つて来たキラが、押され始めている？

一同は唖然として、目の前のモバイルスーツの攻防に見入っていた。

「アスラン——!」

キラは恨めしそうに「イージス」の向こう側——親友のことを睨んだ。

盾を失った「ストライク」へと、執念を抱いたように接近する「イージス」であったが、すかさず「アークエンジェル」からの援護射撃が飛来した。アスランの鮮烈な感覚は、敵艦から放たれる砲火の弾道を読み切ったが、一瞬にして迫った「ウォンバット」に進路を阻まれ、後退を余儀なくされた。

控えていく真紅の機体と入れ替わるように、今度は後方から「バスター」が現れた。

キラは歯を食いしばり、「バスター」より放たれた長距離射撃を回避し、隙を見て「アークエンジェル」の甲板へと着艦した。

「有効打が見込めない!? なんだってんだよ!」

「焦るなディアツカ! まだ余裕はある!」

続けざまに「バスター」がガンランチャーを構える。それが放たれる直前になって、そのとき、まったく予期せぬ明日の方向から一陣のビームライフルが迫った。「バスター」のкокピッド内に警報が鳴り響き、ディアツカがハツとしてそちらを向いたとき、「スカイグラスパー」の機影を捉えた。

——もう一機……!?!

最初に出撃してた一機目は、すでに「デیفエンド」と交戦している。現れたのは「スカイグラスパー」二号機だ。

そのパイロットは……

「——キラ〜」

「トール!？」

トール・ケーニヒ二等兵。——かねてより、軍用機のシユミレーターに居座り、その腕を磨いて来た「ヘリオポリス」の少年である。

先日のカガリに打って変わって、今度はトールが二号機を操縦していた。

ランチャーストライカーを装備したムウの一号機と異なり、二号機は丸裸で、武装はビームライフル程度しか保持していないが、どのみち、新人パイロットであるトールに出来ることと云えば、せいぜい敵機を牽制するくらいだ。そのためにも、過剰な装備は配備せず、むしろ軽装にすることで機体の重心を安定させ、機動力を挙げることに徹しているのである。

「ちいつ、うるさいハエが!」

連結状態を解除し、ディアツカの注意が完全に「スカイグラスパー」二号機へと向けられる。ビームライフルを放ち、まだ稚拙な動きで飛行する戦闘機を叩き落しにかか

る。

「うわあ!」

トールは思ってもみない声を上げたが、身体は訓練通りに、レバーを一気に引き上げ

ていた。船首を上げ、かろうじてこれを回避。すぐさま雲の奥へと隠れて行き、機体を隠した。

脇目を振った「バスター」へと、「アークエンジェル」からの迎撃が飛来する。デイアツカは即座に距離を開き、またも後退していった。

G A T - X 1 0 5 “ストライク” というMSが、戦況に応じて装備を換装することで、高い順応性と汎用性を発揮できる機種であることは、ステラもとうに承知している。ましてや、ステラはかつて “インパルス” —— “ストライク” とよく似たシルエツトを換装する機種と何度も交戦した経験があり、換装機の持つ順応性と汎用性、何よりも敵にした際の厄介さは熟知しているつもりであった。

(でも……！)

このとき、ステラにとって誤算に感じられたのは、その “ストライク” と呼ばれるMSが、“インパルス” よりも明らかなる旧式——前時代の性能しか持たぬはずの機体であるにも関わらず、その限界的な性能を駆使して彼女達を翻弄しかけていることであった。

(あんな機体で……! あんな機体なのに……!?)

無論、そいつを相手取るステラ達もまた同系統、同性能の機種に乗っていることから、このような考え方はナンセンスであるのかも知れないが、重要なのは、寄って集って「ストライク」を襲つてゐる今もなお、そいつは沈められることのない上手な立ち回りを演じて見せているということだ。

たしかに、滞空性能に圧倒的な優位性のあるエールストライクを相手に、常に「グウル」を使用しなければならぬのでは、形勢的にはこちらに不利があるだろう。しかし、目の前の「ストライク」は、「デュエル」「ブリッツ」を退けた後、「イーゼス」と「バスター」を相手に、奮迅の活躍を見せているのだ。パイロットの腕がずば抜けていなければ、不可能な話ではないか。

(キラじゃない。……なら、だれが……!?)

アスランは云つた、キラは月艦隊との合流の際に、解放されたのだと。

正規の地球軍士官が「アークエンジェル」に補充されて、今の「ストライク」を操縦しているのは、ステラと面識のあるはずもない地球軍のエース・パイロットであるのだと。でも――

――オレは、これまでに「ストライク」の正規パイロットになるはずだった新米連中のシミュレーションを見て来てるからな。

——ヤツら、機体をノロクサ動かすのにも四苦八苦してたんだぜ？ あんなモンが、普通の人間な動かせるかよ！

過去からするりと、ムウ・ラ・フラガのその発言が浮かび上がる。

そう、その発言が指摘したことは、きつと正しい。ステラが初めて「デイフェンド」に乗り込んだとき、機体を取り仕切るオペレーション・システムはひどく稚拙で、蒙昧で、MSが宿していた本来の性能を半分も発揮できていない状態になっていた。

だから知った。

ナチュラルには、高性能なモビルスーツはとも扱い切れないのだと。

だからこそ、彼女の『お仲間』は造られていたのだと。

「ヘルダート、撃て！ 目標、敵モビルスーツ！」

「アークエンジェル」から、対空ミサイルが放たれる。怒涛の数を誇るそれは、一目散に「デイフェンド」へと放たれた。

容赦ない砲火がこちらに迫り、ステラも意を固めた。

応射するようにライフルを構えると、そのとき、ちかりと何かが上空に光った。

「！」

上空からランチャー・ストライカーを装備した「スカイグラスパー」が「アグニ」を放ったのだ。

垂直に降りて来る亜熱光線をすかさず回避する。

空を切ったそれが海面を穿ち、大量の海水を一瞬にして蒸発させた。

「いっつー」

白いボディに、スカイブルーのカラーリング——見たこともない戦闘機だ。

ステラは小さく毒づき、照準を変えた。

下方へと流れた敵の戦闘機に向け、すかさずビームライフルを放つ。しかし、敵機は巧妙な動きでこれを牽制し、海面すれすれで機首を上げると、放たれる光条を緻密にやり過ごしていく。

ステラはすこし目を大きくして、軽く舌を巻いた。

——すごい……あんな旧式で……！

たかだか戦闘機モビルアーマーを、ああまで巧みに操れる人物を、ステラはふたりほどしか知らない。名乗る名前は違ったが、そっくりな声をしたふたりだ。

「いい腕してるじゃないのっ、新人さんよお！」

「スカイグラスパー」を旋回させ、ムウは「デイフェンド」の牽制に徹底していた。なにしろ、初めて敵となつて現れた存在だ。中のパイロットもかなり優秀と見たが、下手をすれば、敵に渡つたGATシリーズの中で、最も厄介な存在かもしれない。

性能が云々という以前に、「デイフェンド」はかつて、仲間だったのだから。

再度接近した「スカイグラスパー」より、超高インパルス砲が放たれる。「グウル」上の「デイフェンド」は光波防御帯を展開し、これを容易く弾き飛ばす。

そもそもの「デイフェンド」は、攻撃型の機体ではない。鎧を離脱すれば、幾分、反撃能力は上昇するが、それも接近戦に限った話だ。鈍重な敵機や、巨大な標的を相手にすれば「デイフェンド」に利はあるが、他ならぬムウが操る、すばしっこい戦闘機を叩き落すには、いささか能力に欠けていた。

なにより、彼女の頭の中が——かつてのように——鮮明ではなかった。

『——御覧いただいている映像は、今、まさにこの瞬間、我が国の領海からわずか二十キロほどの海域で行われている戦闘の様相です』

興奮気味の女性キャスターの声が、テレビモニターを通じてオーブ国内に放送されていた。

画面右上には『LIVE』という文字が翳されており、この映像は、いち民家や都内——そして、行政府へとあまねく伝達されていた。

オーブ国内の首脳——首長たちの集まった閣議部屋にもまた、同様にこれは放送され

ていた。

「ウズミさま……」

「テレビ中継はあまり嬉しくない——ですな」

「では……？」

妙に影を潜めた会話をする長老の大人たちは、狼狽えた様子で互いに顔を見合わせ、事態を把握して行く。

「許可なく領海に接近する武装艦に対する我が国の措置に例外はありませんまい。——しかし……」

オーブにとっては——逃れられない責任が、そこにある。

「……頼みましたぞ」

そう云って場を立ち去った、髭を蓄えた男——。

彼こそが『オーブの獅子』と謳われる、ウズミ・ナラ・アスハである。

激戦が繰り広げられる海域に、オーブ艦隊が遣われた。

中立の主義を翳し、砲門を構えた海上艦は、その照準を一心に、敵武装部隊へと向け
ている。

「接近中の地球軍艦艇、およびザフト軍に通告する。——貴艦らはオーブ連合主張国の領海、領域に接近中である。ただちに変針されよ！」

形式上、立場上、それはオーブからの当然の通告だが、八方をモビルスーツに包围された今の「アークエンジェル」に変針そが出来ないということは、素人の目から見ても分かることだ。

なおも非情に、オーブからの入電は続いた。

「我が国は武装した艦艇、モビルスーツおよび戦闘機の領空、領海への侵犯を一切として許さない！ この警告が無視された場合、我が艦隊は自衛権を行使し、貴艦らを攻撃する！」

「ちっ……！」

通告を受けたのは、ザフトと同様だ。

咄嗟にアスランが毒づき、焦ったようにビームライフルを連射した。むろん、相手は喧しいオーブ艦隊ではなく——盾を失った「ストライク」だ。

放たれる無数の光条が、確実に「ストライク」を追い詰めていく。

——面倒なことにはなるか！

ここで終わらせれば、いいだけのことだ。

アスランは焦っていた。

「こんなつ……い！」

絶え間なく放たれるビームを避けつつ、コクピッド内のキラは、すっかりと腰が引けていた。

オーブからの通告を、まるで聞き入れる器量がないように、「イージス」は執拗に、甲板上の「ストライク」を付け狙っているのだ。

——このままじゃ、まずい……！

下唇を噛みしめ、状況を確認する。再度、「アークエンジェル」上空より「バスター」が接近していた。

キラはすかさず機体を上昇させ、母艦から飛び上がる。目の前で「スカイグラスパー」二号機が「バスター」を牽制している隙を突き、すかさず「バスター」を「グウル」から叩き落し、敵の飛行支援体を完全に乗っ取った。

——あと二機……！

戦力的にも、ザフトを追い込んだはず——キラはそう確信し、通信機に手を伸ばした。「アスラン、もうやめてくれ！ 聞こえないのかッ!？」

懸命に呼びかけたも、通信回線からは、何の応答はなかった。

周波数を変えられたのか——？ いったい、何の目的で——!？」

敵の「グウル」に足を乗せた「ストライク」であったが、次の瞬間、「イージス」の

放った一発のビームライフルが、的確に「ストライク」が握るビームライフルを射抜いた。

キラは咄嗟に武装を手放し、爆発から遠ざかる。手に嫌な汗を握った。

遠距離手段を失った「ストライク」へと、なおも真紅の機体は接近して来ていたからだ。

「アス、ランツ……！」

——やられるかもしれない……。

キラの中に、たしかな絶望感が流れ込んだ。

——いったい、自分は誰と戦っているんだろう？

相手は——本当に、アスランなのか？

声も聴こえず、姿も見えず——目の前の「イージス」からは、容赦のない鬼気だけが感じ取れる。まるで、別人を相手にしているかのようだ。

いや、すくなくとも、今戦っているそいつは、キラの知っている——「アスラン・ザラ」ではなかった。

何故。

どうして。

どうしてキミは、いつも僕たちの邪魔をする——!?

「キラ——！」

窮地に追いやられている「ストライク」の許へ、ムウの「スカイグラスパー」が駆け付けた。

すかさず「アグニ」を放ち、「イージス」を「ストライク」より引きはがす。

「ええいッ！」

鬱陶しがるように、アスランは去来した「スカイグラスパー」にライフルを放つ。

しかし、戦闘機は巧みにこれを掻い潜り、回避した。キラはハツとして、ムウの「スカイグラスパー」——それより後方から現れた敵機に目を遣った。

その目に映ったのは、懐かしい機体だった。

「『ダイフエンド』——！」

そいつは、おそらくムウを追ってやって来たのだろう。

黒鉄の機体を前にして——「ストライク」は、確実に動揺する動きを見せた。空中に漂った一瞬の隙を突いて、「イージス」がビームを放った。防ぐことも、回避することもままならず、これは「ストライク」の左腕を大きくもぎ取った。

今までで初めて——常勝の「ストライク」が、その体の一部を失った。

そのとき、オーブ艦隊からの通告が、アスランの耳に響く。

「——警告に従わない貴艦らに対し、我が国はこれより、自衛権を行使するものとする

！
↓

振り向けば、進路を変更することも出来ない。『アークエンジェル』が、いつの間にかオーブの領海を侵犯していた。

宣言通り、オーブから無数の砲火が撃ち込まれ、これはどういう幸運か、見事に『アークエンジェル』を逸れて、戦艦の周囲に着水、着弾して行く。

「キラ、戻るぞ！」

「で、でもっ……！」

「へいから、着艦しろ。あとはあっちが、巧くやつてくれるようだ」

どのみち、今の満身創痕の『ストライク』では、『イージス』と『ディフェンド』両機と渡り合うのは不可能だ。

キラは云われるがまま、懸命にスラストを噴射させ、無数の砲火の餌食になっていくように見える。『アークエンジェル』へと向かった。離脱していく『ストライク』と『スカイグラスパー』を、それぞれ『イージス』と『ディフェンド』は付け狙う。しかし、領空に接近したのは彼らもまた同様のようで、オーブ艦隊からの攻撃が飛来した。

慌てて機体を翻すふたりであったが、実弾のひとつが、完全に不意を突かれていた。『ディフェンド』へと直撃した。

「あうッ」

爆発に揺るがされ、脇から邪魔をされ、ステラの頭が真っ白になった。

小鼻にわずかに皺を寄せ、怒りの表情が現れる。

「——よくも……ッ！」

〈待て、ステラっ！〉

咄嗟に、艦隊に向けてビームライフルを構えた「デイフェンド」を、隣から「イージス」が制した。

〈攻撃するな——〉

そう、オーブの領海、領海を侵犯したのは、あくまでザフトなのだ。

ここでオーブ艦隊に攻撃を仕掛けることは、事実上「プラント」が、何の通達もなしにオーブに戦争を吹っ掛けたことと同じだ。

「でも、あいつッ……あいつッ！」

〈聞き分ける！〉

その名を持ち出され、ステラは否応なくその指示に従った。

妹の機体が落ち着いたことを見越して、アスランは目を遣り、遠方に着水した「アーケンジェル」を見遣った。

相も変わらず、敵艦はオーブ艦隊からの激しい砲火に曝されているようだが、いつこうに爆発が起きないところを見ると、ただ単に、こちらの目を誤魔化しているだけなの

かもしれない。——まあそれも、激しい飛沫によつて正確には把握できないが。

——また、仕留められなかった……。

バッテリーも残り少ない、これ以上はどうしようもないだろう。

アスランは機体を翻し、これ以上の被害を受ける前に、オーブの領海線から撤退して行つた。

(それにしても……)

くだんの艦は、最後に見たとき、オーブからの激しい砲火を浴びていた。それこそ、無事では済まないほどの攻撃に——。

それでもまだ、大規模な海上爆発は確認できていない——。

(オーブ、か……)

彼の中で——

オーブに対する不信感は、さらに根深く強まって行つた。

——心配ない、このまま領海を突つ切れ。

——第二護衛艦群の砲手は優秀だ……巧くやるさ。

『明けの砂漠』のキサカを改め、オーブ陸軍第二十一特殊空挺部隊、レドニル・キサカ

一佐が不敵な笑みを浮かべ、マリユールにそう告げた。

その微笑みを意味を、彼女は咄嗟に心得たような表情を作り、指示に従って「アークエンジェル」をオーブ領海内へと進ませたのだった。

当然、通告のとおり、領海へ侵入した当艦には艦隊からの激しい砲火が浴びせられたが、そのいずれもが艦艇の周囲に着弾し、被弾という被弾は、一発も存在しなかったのだ。高く上がった水飛沫や、艦隊から出撃した空挺部隊に進路を阻まれ、ザフトのモビルスーツは全機として撤退して行ったようで、ひとまず、難を逃れたと云つてもいい。しかし、状況をよく理解できていないのは、マリユールを含めた、クルーの全員なのである。

「アークエンジェル」は、オーブの護衛艦に左右を固められた状態で、オーブ群島のひとつへ接近していた。この絵面では、護衛艦に守られてるより、監視されているという意味合いの方が正しいが。

正直、彼女の胸中は穏やかではなかった。友好国でもない国に、監視される形で連行されているのだ。どこに連れていかれるかも分からない今、かつてと同じ懸念をどうしても抱いてしまうのだ。

——「アルテミス」の、二の舞は勘弁ね……。

げんなりとする、マリユールであった。

連行された先、艦前方には、切り立った岸壁が拵がついていた。どんな場所に連行されるかとそわそわしていたところ、途端、その岸壁が切り開かれ、内部から大型のハッチが出現した。そこに大量の海水が流れ込み、目前に「アークエンジェル」ほどの大型戦艦でさえ収容できるような、巨大な開口部が出来上がる。

なるほど、カモフラージュというわけだ。

指示のままに艦を進め、落ちついた所で、マリユーはようやく、傍らのキサカに口を開いた。

「——我々はこの措置を、どう受け取ったらよろしいのでしょうか？」

キサカは、あえてひと間おいて、話を持ち出した。

「知つての通り、この「アークエンジェル」はオーブ製だ。——今さら云い訳にしかないが、実際は大西洋連邦の圧力に負けた、一部の高官が勝手に実施したことだな」

まあ、信じられないというのならそれもいい。

キサカは妙に潔い言葉を付け足した。

「だが、そう主張したところで、我が国がこんなモノを造り出したという事実は変わらない。——結論から云うと、『それだけの責任がこのオーブにはある』ということさ」

「協力して下さると、判断していいのですね？」

「詳しいことは、あとで聞くといい」

キサカは不敵な笑みを浮かべ、

『オーブの獅子』——ウズミ・ナラ・アスハ様にな……………」

これからの彼女たちの動きを、指示した。

それは、彼女達への会談の申し入れであった。

“クストー”のブリーフィングルームにて、ザラ隊の面々は集合していた。

「こんな発表、素直に信じろって言うのか!？」

イザークが興奮気味に、一枚のプリントアウトを壁に叩き付けた。

そこに書き込まれているのは、“アークエンジェル”の行方に関するオーブからの公式発表だ。書き出された字面に目を通したとき、彼らは言葉を失ったのだ。

『足つきはすでにオーブから離脱しました』——なあって、本気で云ってんの？ 俺達は馬鹿にされてんのかね?」

「こんな発表、嘘に決まっている!」

「だが、これがオーブからの正式回答だという以上、ここで俺達がいくら『嘘だ』と喚いたところで、どうにもならないことはたしかだろ」

「なにイ…………!？」

「押し切つて通れば、本国も巻き込む外交問題だ。迂闊に動くわけにはいかない」

「だから？ はいそうですか、つて尻尾まいて帰るわけ？ ここまでコケにされたまま？」

「押し切つて通りや、足つきがいるさ！ それで何の問題がある？」

「〃ヘリオポリス〃とは違うんだ。——軍の規模もな」

今にも火花が散りそうな緊張感あるやり取りを脇から眺め、ステラはそこで、何も云えずにいた。

正直なところ、目の前の彼らが、何の話をしているのかがまったく分からないだけなのだが……。

——オーブ……？

聞いたことが、あるような、ないような——あつたとしても、すぐくどうでもよかつたような——そんな国の名前らしい。

その国のへの対応を巡つて、彼らは議論していた。

ステラには、よくわからない内容だ。——「せーしきかいとー」とか「がいこーもんだい」とか、彼女にはすこしむつかしい言葉ばかりが飛び交っているのだ。

「じゃあ、どうするつての？」

「カーペンタリアからも圧力を掛けてもらうが……それで駄目なら——潜入する」

思い切った提案に、ステラを除いた一同は目を丸くする。

「なるほど……足つきの動向を探るんですね？」

ニコルが訊ね返し、アスランは静かに頷いた。

「せんにゆう……」

その言葉は、ステラも知っていた。——彼女自身、行ったことがある。

じゃあ、そのオーブに「せんにゆう」するってことになる。

——他ならない…… “アークエンジェル” を見つけ出すために。

イザーク達も、その提案には乗っかっていった。

「はっ、貴様にしては上出来な提案だ。やってやろうじゃないか」

「まっ、案外、潜入つてのも面白そうだし？」

「でも、オーブは群島から成る国家ですよ。ある程度、敵の潜伏場所の目星は、付けておかないと」

「目星なら付いている」

ニコルの懸念に、アスランは間髪いれずに答えた。

「向かうのは——オノゴロだ」

そこは、オーブの中でも、軍と軍需産業の島である。

“アークエンジェル” が匿われているとすれば、十中八九、その島と見て間違いはな

いだろう。

そうは云つても、島のほとんどを軍閥連の施設で占領しているわけではなく、そこはあくまで民間人——国民の住居が大半を占めた、活気に満ちた島と聞く。おそらく民間の繁華街を抜けることになるだろうが、目的はあくまで、“アークエンジェル”がその島にいるという決定的な証拠をつかむことだ。

「じゃあ——彼女も連れて行くんですか？」

ニコルの問いかけに、アスランはステラを見遣り、そして頷いた。

「誰よりも、あの艦のクルーに詳しいからな」

「そう、ですか……」

ステラは、アスランに差し出された手を、恐々と取った。

こうして彼女は、オーブへと向かうことになった。

『平和の国』

明朝、朝またぎ——

水平線から太陽が顔を出し、濃い霧があたりを覆った明朝、オーブに潜んだザフトの連絡員の許に、アスラン達——『ザラ隊』の面々は集まっていた。工作員の手引きによって、オーブ国内に潜入したのである。

「——ようこそ、平和の国へ」

にやりと人の悪い笑みを浮かべた男。彼は手際よく、ザラ隊の面々のひとりひとりに「モルゲンレーテ」のものらしい作業服を手渡して行く。

「アンタら目当ての探し物を捜すには、工場区を歩き回るのが一番と見た。そいつは十中八九、この島にある！」

そう、オーブ国内を徘徊して回るには、この作業着がカモフラージュの役割を果たしてくれる。オノゴロは軍事産業の島でもあるため、誰も違和感を抱かないだろう。

手渡されたのは、簡素な造りをした上下肢を繋ぐ作業服だ。オールインワン無地に近い灰色に着色されたそれを、サイズ上、ニコルに続いて最後に手渡されたステラであったが、連絡員の

男は彼女にだけ、念を押したように説明をつけ加えた。

「ザラ隊、紅一点のお嬢ちゃんだな？ 悪いが、あんたも作業着こいで我慢してくれ」

そう云つて手渡された制服は灰色で、そっくりそのまま、アスラン達に支給されたものと同じものであった。隣のニコルが声を漏らす。

「つまり、男装しろつてことですか？」

『四人と紅一点』より、『五人の野郎共』の方が怪しまれねえだろう？ 極力、騒ぎを起こすのは御免だからな」

つまりステラは他のメンバーと全く同じ服を着用し、さながら男の子であるように振る舞えと云うのだ。不満がないわけではなかったが、抗議する意味もあまりなかったので、ステラは指示に渋々と従つた。

ややあつて彼らは物陰に分かれ、手渡された衣類に着替え始める。男性であるアスランたちは、すぐに連絡員の許に帰つて来た。

「完璧だ」

制服というものは、異邦の者達をも平気でその国の景觀に溶け込まわせるものである。

長くオーブに滞在するその男が、どこからどう見ても違和感なく、その作業着に身を包んだアスラン達は、オーブの作業員にしか見えない。

——扮装は完璧だ。

しかし遅れて、ステラがその場に現れた。

「あっちゃあ……」

その姿を確認した連絡員の男が、思わず額を手で包み込んだ。——華奢な彼女の体格には、手渡した作業服は、いささか大き過ぎたのかもしれない。

ステラが身を包んだ作業服は、手足の丈が、すっかり余っていたのだ。皺が寄って、布地が余りに余り——いわば「萌え袖」の状態だ、非常に歩きにくそうである。

ぶかぶかで、だぼだぼの作業着でおろおろとしている少女の姿に、イザーク達は不意にも赤面してしまった。咄嗟に、各々の方角へと目を背ける。

——なんだ、これは……!?

いったいどうやったら、作業着の女が萌えて見えるのだ……!?

イザークは己の理性に訴えかける。

保護欲が掻き立てられる容姿だが——これはこれで、別の意味では何かと「アリ」ではないだろうか、と思えてしまう絵面であった。

「ほっ、他にサイズはないんですか？　これじゃ、いくらなんでもちよつと怪しいですよ」

ニコルが震えた声で云い放つ。

——やっぱり、女の子が作業員に扮装するのには無理があったのだろうか……？
連絡員は首を横に振った。

「急ごしらえだからな、替えはねえよ。……身に余った部分は、ピンかなんかで誤魔化すしかない」

そうでもしなければ、いくらなんでも、女の子であるとばれてしまう……いや、性別を問うよりも以前に、ひとりの人間として明らかに違和感がある。

結局、ステラの扮装を「より完璧な男の子」に近づけるために、微妙に時間を喰ってしまうザラ隊の面々であった。

——遊びに来てるんじゃないんだから……。

アスランやイザーク、ディアツカの全員でステラを取り囲み、安全ピンであそこを削ろう！ いやこつちが先だ！ と騒ぐのが、妙に愉快な思い出になったニコルであった。

やがて場が落ち着いたところで、連絡員はアスランにオノゴロの地図と、工場区の大まかな見取り図——そして、彼ら自身の偽装IDを手渡した。

「そのIDで、工場の第一区画までは入れる。だが、その先は完全に個人情報管理システムでね。……急にはどうしようもない」

連絡員は弁解し、アスラン達の服装をチェックするように目を走らせたあと、やっぱり

り、ステラに目を留めた。はあ、とため息をついて、肩を竦めた後、ステラの前に立つ。
——眩いばかりの金髪が駄目だ、目立ちすぎる。

やれやれ、と嘆息ついた作業員は、彼らが着替えている間に取って来たであろう、作業服とセットのブルムキャップを差し出した。これを突きつけられたステラは小首を傾げたが、彼は、ステラのさらさらな金髪を眺めながら云った。

「ミディアムヘアが幸運さいわいしたな。その髪結つて、中に隠しな——ブルムを被りや、今よりずつと男の子に見えるだろ」

手際の良いことで、男はキャップと一緒に、数本のヘアゴムを差し出した。

なるほど、金髪を帽子で隠そうという魂胆か——。これを眺めたアスランは、男の機転に感心した。

そうして、云われるままにステラはヘアゴムを受け取った。

肩上で切り揃えられた後ろ髪を、うなじの先で一本に束ね始める。ガリーボブの金髪は、滅多に結うことはないのだが、久々に髪型を変えた気がしたステラである。

ヘアゴムを口に咥え、馬の尻尾ポニーテールを作り出す姿を見て、またも異性達は不自然に視線を逸らす。さすがは女の子だ、手際よく髪を束ね終わると、作業服と同色のキャップを深めにかぶり、アジャスターの隙間から尻尾の部分の金髪を解き放った。

「できた」

その声に、一同の視線がステラへと戻っていく。そしてすぐに、ひゅう、と横目のデイアツカが口を鳴らした。見方によって、彼女は「髪を結った金髪の美少年」に生まれ変わったのだ。

我ながら完璧だ、とどこかのプロデューサーのように感嘆する連絡員の男であった。——これなら、誰も怪しまれることはないだろう。

「まつ、無茶はしてくるなよ。——獅子は眠らせておきたいんでね、くれぐれも目立ったことはしないように」

「わかりました」

他でもない、アスランが誓う。

そうして、アスラン達はオーブ国内へと潜入した。

「まさか、こんな形でオーブに来ることになるとはなあ」

“アークエンジェル”の食堂の中で、ツールがさすがに感慨深げに云った。無理もない。 “ヘリオポリス”出身の彼らにとって、このオーブは故郷も同然の場所なのだ。――

――宇宙の庶民階級で生まれ育ったキラやカズイには、厳密には正しくはない表現だが、

それも彼らは今、地球軍の士官として故郷を訪れているわけであり。

生まれ故郷と云えど、勝手に降り立つことは許されない。

艦はドッグ内に繋留され、彼らには、艦内待機が言い渡されていた。暇を持て余したクルー達はなにとなく、食堂に集まる傾向にあつた。

「上陸許可、出ると思いますか？」

ミリアリアが、おもむろにそんなことを言い出す。

トールは彼女の発言の意図を察し、「家族？」と訊ねた。ミリアリアは「うん……」と弱々しく頷いて見せた。

カレッジに通つて不慮の事態に巻き込まれた彼ら学生達と違つて、彼らの家族は崩壊した。『ヘリオポリス』より、このオーブへと無事に送られたとハルバートンは云つていた。

つまり、会えるかもしれないのだ。こんなにも身近な場所に——同じ国内に居合わせているのだから、十代の少年少女なら、誰だつて顔くらい合わせてみたいと思うだろう。しかし、トノムラからの返答は曖昧だ。

「今のところは上陸どころか、面会すら出来るかどうか……。こうやってオーブが俺達を入国させてくれただけでも、けっこう驚きもんだからな。この国から取つてすりや、俺達は敵ではないにしろ、味方でもないんだぜ？」

「やっぱり……この艦造ったのが、やっこさんだからかな」
「さあ」

トノムラとロメオが食堂に居合わせ、少年たちの質問に答えている。

その会話を、キラもまた同席して聞き入っていた。家族——といえば、きつとキラの家族も、このオーブに今は移住しているはずだ。

以前まで、両親とは当たり前の存在だった。

あの朝、母カリダはいつものように寝坊したキラを叱り付け、それでもキラは、暖かな布団の中で垂涎して眠っていた。それを叩き起こすため、カリダはキラの自室にステラを遣わせた。きつと彼女は早起きしたのだろう。すつかり朝食を済ませ、ホルターネットクのドレス——私服——に着替え終えていた彼女は、パジャマ姿で惰眠を貪るキラの布団を勢いよくひっぺ返し、枕を奪い取ると同時に、抜き取ったその枕で彼の顔を思い切り殴りつけた。突然の寒さと柔らかな痛覚が引き起こした最悪の寝覚めだった。どうしてもっと早く起こしてくれなかったんだと、寝坊した自分を棚に上げたキラの文句に対し、カリダはステラがいなかったら完全に遅刻ね、とにべもない正論を当てつけた。

いつもと同じ朝——あのとき、あの日のうちに何が起きるかなど、誰も予想などしていなかっただろうに……。

平時では鬱陶しいとさえ思えた親であったが、今こうして離れてみると、懐かしく、恋しくさえ思える。けれど今——両親に出会ったら、キラは再会を喜ぶよりも前に、ひどい言葉を彼らに掛けてしまうような気がする。

——どうして、僕をコーディネイターなんかにしたんだ。

その事実のせいで、どれだけ自分が苦しむことになったか、わかつてるのか？ ——
分かつていても、この言葉を両親に投げ掛けてしまう気がしている。

そう思うと、心から家族と再会したがっているミリアリアやツール、同席する彼らとの間に心理的な温度差を痛感した。なんとなく彼らとの会話が面白くなくなつて、キラは立ち上がり、食堂を出ていく。すると、曲がり角で誰かと鉢合わせになり、ぶつかつてしまった。

「あつ」

「いたつ」

食堂を出た途端、その曲がり角で、キラは柔らかなで華奢な人影とぶつかった。

燃えるような赤い髪——フレイ・アルスターだ。

互いが互いを確認した途端、葬儀所のような重い空気がふたりに流れた。

「——フレイ、ッはん？」

これを目撃したミリアリアが、気を利かせたのかフレイへと呼びかける。

フレイは恐る恐る頷き、キラと彼女は、言葉も交わさずに離れた。フレイはそのまま、気まずそうにミリアリアの隣へと着席して行った。

「そう云えば、この艦の医務官もオーブの出身だったような気がするな」

トノムラがそんなことを言い出し、傍らのサイは小首を傾げた。

「医務官って、あの人ですか？」

くだんの人物は、以前、ステラの看病をしてくれた人物である。——記憶には、なかなかの饒舌家だった覚えがあるが。

「ああ、たしかな。最近は医務室に籠りっぱなしで、何かの研究に没頭しているみたいだけど、妻子持ちって聞いたからなあ。家族にくらいは会いたいんじゃないか？」

「へえ……」

その会話を、フレイは大人しげな目で、しっかりと聞き入っていた。

オーブが、地球軍の戦闘艦である“アークエンジェル”を匿うことを受諾した最大の理由は——当艦が持ち得る『“ストライク”のこれまでの戦闘データの譲渡』、そして、『キラ・ヤマトというコーディネイターの“モルゲンレーテ”への軍事協力』を要請する

ためである。

当然、得体のしれない国として定評のあるこの国に、軍の最高機密であるそのようなデータの類を悠々と手渡せるはずもなく、例によってナタルは激しく抗議したが、結局のところ、オーブ国内に繋留され、軽度の監禁状態に置かれた今、彼らに実質的な拒否権はなかった。オーブからの要請を拒み続けなければならないのかは——ナタルとて“アルテミス”にて充分に味わっているはずだ。

公式発表では、既に“アークエンジェル”はオーブを出航したと、ザフトに虚言を吐いているとも説明されている。

そこまでの便宜を図ってくれているのに対して、何も差し出さないわけにも行かない。代わりと云っては何だが、莫大な代価を払おうにも、そのような資金の余裕も今の艦内にはないのだ。まったくもって増援や補給部隊を寄越してくれる気配のないアラスカに助けを求めても、望み薄であることは明白だ。

「“モルゲンレーテ”への軍事協力か——坊主には、また悪いけどな……」

「彼、疲れてました……?」

「ああ。例の——ほら、あの機体。あれが相当、堪えたみたいだな」

口籠って云ったムウの発言の意味を、マリユーはしっかりと汲み取っていた。

これまで驚異的な戦闘力を発揮し続けて来た常勝の“ストライク”であったが、先の

戦闘では、完全に追い詰められていた。敵の数に、というわけではなく——マリューの分析が正しければ、X-301の「イージス」たった一機に対してだ。対ビームコーティングシールドを失い、各部にも損傷を受け、しまいには左腕を持つていかれたそう
だ。

大破した「ストライク」を見るのは初めてのことであつたが、運が良かったのか悪かつたのか、オーブは、その部分の修理までも受け持つてくれるという。

戦闘から夜が更けた翌朝、オーブは早急に「アークエンジン」と「ストライク」の修理に取り掛かつていた。

キラはエリカ・シモンズという女性技術者と共にエレカに乗り、特殊エレベータにて地下の巨大な工場区へとやって来ていた。そうして目の前に拡がる光景に、キラはしばし、言葉を失つた。並べられたモビルスーツ群、まるでコレクションであるかのように陳列されているそれらは、ほとんど「ストライク」と見まがつてしまうほどの形状をしていた。

おびただしいほど大量に並んだモビルスーツたちに、キラは息を呑んだ。

「これが中立国オーブの——本当の姿だ」

並べられた数多のモビルスーツ、莫大な軍事力を裏に潜めた国——。

これが本当に、平和の国と呼ばれる国の正体なのか——？

——この国はいつたい、これを何に使う気なんだろう……？

背後から聞き覚えのある声が聴こえ、振り向いた先には、ラフな格好をしたカガリ・ユラ——改め、オーブのお姫様であると先日露見した、カガリ・ユラ・アスハの姿があった。

お姫様という身分が分かっただけ、深く頭を下げた方がいいのかと困惑するキラであつたが、どこの世界に、タンクトップとカーゴパンツを履いて工場をうろつき回る上流階級のお嬢様がいるのだろう。身の置き場を失つたように困惑するキラに、エリカは飄々と声を掛けた。

「そう驚くこともないでしょう？ —— “ストライク” だって “ヘリオポリス” にあつたんだから。あそこだってオーブだもの」

「これはM1 “アストレイ” —— “モルゲンレーテ” 社製のモバイルスーツ。——オーブの護りだ」

そう説明され、困惑しつつも、キラはさらに工場区の先へと案内された。

“アストレイ” は「はぐれ者」といった意味を含んだ言葉であり、オーブが自国の理念を曲げ、大西洋連邦軍との共同開発から技術を盗用して開発されたという点から、その名が名付けられた。あるいは、当世では人を殺す兵器としてでしか定義されないモバイルスーツを、人を救うために運用することから、運用目的が「王道ではない」という、皮

肉な願いを込めて命名された節がある。

結局、オーブが中立国という立場を貫くためにも、武力が必要であるということ。

非武装では理念すら掲げられず、独自の理念を貫き通すために、他国からの圧力に屈さぬほどの意志を通すために、やはり武力が必要なのだ。

エリカがキラを連れて行ったのは、視察用のブースであった。強化ガラスの向こう側に、先に見た「アストレイ」——今度はパイロットが乗っているようだ——が、三機並んでいた。

「アサギ、ジユリ、マユラー！」

エリカがインカムに向けて声を放つと、ブースの中——正確には「アストレイ」の中——から「はあーい！」という甲高い声が響き、キラはぎよつとした。

——い、今のが、操縦者の……!?!

それは、あまりにもかましい、黄色めいた声だった。おそらく、キラと年端も変わらぬ少女達が乗っているのだろう。

「あつ、カガリさま!?!」

「あら、ほんとだ!」

「なあにー? 帰って来たの?」

「——悪かったな」

ブースの中にカガリの姿を見つけた少女たちが、モビルスーツの外見とはあまりにもそぐわない華やかな声を放つ。キラは思わず目眩を起こしそうになった。

アサギ・コードウエル、ジュリ・ウー・ニエン、マユラ・ラバツツ——この三人は、オーブ陸軍に所属する兵士であり、現在、このM1「アストレイ」のテストパイロットとして出向している人物達である。

彼女たちは、たしかにカガリという良家の令嬢——まあ、とてもそうは見えない——に向けて「さま」を付けているが、勝手にひとりで家出して、ひよっこり返つて来た彼女をいじっているようだ。相当、気の置けない間柄なのだろう。

〈隣のコ、なに？　ちよつとカワイイじゃない！〉

自分のことらしい、ということに気が付くと、キラはぎくつと身を引いた。

〈やあだ、カガリさま！　家出とか云つて、実は駆け落ちかい？　水臭いんだから〉

〈いいなーいいなー、あたしもそんな素敵なカレシ欲しいなーっ〉

〈がさつで乱暴でとんちんかんカガリ様ですが、どうぞ末長くよろしくお願ひします
〜

随分な云われようだ。

しかし案外、的を外してもいない発言だけに、キラは思わず吹き出しそうになった。

「はいはい、再会の挨拶はそこまでにして——今日はお客様がいらしてるんだから」

「へえー！ そのコ、お客様だったのお？」

「へなんだあなんだあ、あたしてつきり、物好きにもカガリ様をもらつてくれる人がいるんだとばかり！」

「へでも、それもあり得ないかあ。あははへ」

「相も変わらず、散々な云いようを暴露した。」

「……おまえら、あとで憶えてろよ……」

「地鳴りにも似た声調で、カガリが唸った。」

「やれやれ、と嘆息ついたエリカであったが、次に端正な面持ちになると、インカムに向けて声を放った。」

「——始めて」

「号令に従つて、何かのデモンストラーションが始まった。」

「ブースの中で、三機の“アストレイ”が起動し……」

「……えつと……」

「キラは言葉を失った。」

「目の前の“アストレイ”達は、ギシギシと腕を伸ばしたり、足を踏み込んだりしている。——恐るべきのろさで。おそらく中国拳法のフォームを取っているのだろうが、あまりに鈍重な動きのためか、太極拳のようにしか見えない。そのうち少女達がへあ

ちよーとかい出しそうである。

とてもうら若き乙女たちが操っているとは思えない、老人のような動きだ。

これがデモンストレーションであると、判断して良いのか恐悅微妙である。「遅くね？」と誰か痛快なツツコミ役がいるとしか考えられない、新喜劇の間違いではないだろうか。

「ひどいな」

突っ込んだのは、例によって竹を割ったように真っ直ぐなカガリであった。

「これでも倍近くは速くなったんです。新しいOSを入れましたから」
「でもこれじゃ、何の役にも立ちやしない、ただの的だぞ」

辛辣な言葉に、マユラからの抗議の声が上がる。

へひっどくい、ひとの苦勞も知らないで！

「ほんとのことだろうが！ 敵だつて知ってくれないさ、そんなもん！」

手厳しい意見は、なおも続いた。

「もつとこう、機敏に動けないのかよ。せめてハエが留まらなくらいに……」
へハエなんて留まってないもんっ！

「訓練場にハエがないからだろ、それは」

へあーっ、云つたなあ!? もう怒つた！ こうなつたらカガリさまより先にカレシ作つ

てやる！」

「それとこれがどういふ関係があるんだよ！」

「はいはいはい、やめやめ」

しかし、これがオーブと云う国の、軍事力の実状である。……いや、正確には「ナチュラルの限界」と評した方がいいのかもしれない。

大西洋連邦と「モルゲンレーテ」の共同開発による「G」計画においても、大西洋連邦は機体自体を完成させても、肝心のパイロットについては完璧に門外漢だったのだ。

操作系——およびオペレーション・システムに関しては、当段階では完全にナチュラルに可能な領域を超越した操縦技量を前提としており、大西洋連邦ですら、人員不足の問題を先送りしていた。だからこそザフトに強奪なんて不甲斐ない結果を招いたのではないかとも思えるのだが、いまさら、それは云つてもしょうがないことだ。

結局、「モルゲンレーテ」社内においても、操作系の問題は一向に解決の目処が立たなかった。

モビルスーツはコレクションではないのだ。機体はあつても、それを充分に操る者がいなければ、どこまで行っても宝の持ち腐れでしかない。

だからこそ、

「技術協力をお願いしたいのは、あれのサポートシステムのOS開発」

あらゆる分野で一流と呼ばれるだけの素養を手に、生まれ出でるコーディネイター達。彼らでしか操れないとされるモバイルスーツを、ナチュラルが操ろうと云うのだ。彼らと対等の立場に立つには、人工AIに情報処理の大半を任せるしかない。

今のところ、オーブはそれがうまくいっていないのだ。だからこそ、コーディネイターであるキラに、その技術協力を申し出たのである。

「……オーブはあの機体を完成させて、どうするつもりなんです？」

どう？ と聞かれ、エリカは意表を突かれた表情を浮かべた。彼女は技術者だ。機体を開発することが役割であって、その運用目的にはあまり深い関心はない。

その問いには、カガリが答えた。

「おまえも知ってるだろ？ オーブは他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない——これは、そのために必要な力さ」

そう、オーブはこの巨大な軍事力を、決して他国に見せびらかすようなことはしない。この軍事力が、もし仮にも必要になったとき——そんなときが来ないことが最善なのだ。だが——国を守るために、秘密裏に持つておかねばならない力なのだ。

「オーブはそういう国だ。……いや、そういう国のはずだった、お父様が裏切るまではない。」

「あーら、まだおっしやつてるんですか？ “ヘリオポリス” が地球軍のモバイルスーツ

開発に手を貸していた——などと、そんなことはウズミさまはご存知なかったと、前に何度も……」

「そんな言い訳が通ると思うのか、国の最高責任者が」

「いちいち厳しい言葉だが、正しい言葉でもある。」

エリカは呆れた様子で答えた。

「だから、責任はお取りになつたじゃありませんか」

「叔父上に職を譲つたところで、結局はあれやこれやと口出ししているんだ、けつきよく、何にも変わつてないじゃないか」

「呆れた……。あれほど可愛がつていたお嬢様がこれでは、ウズミさまも報われませんか。それでは、ほっぺのひとつも叩かれます」

云われ、カガリは罰が悪そうな顔を浮かべた。

会話がやみ、エリカは改めてキラの方を振り返つた。

「戦時である今でこそ、中立を貫くこのオーブは、難しい立場にあるの。だから私達はこの『アストレイ』を——あなたの『ストライク』のように強くしたいの」

「はあ……、と頷くキラに、エリカは不敵な笑みを浮かべた。

「あとで、キミには他に見せたいものがあるの。よろしくね」

云われたキラは、その言葉の意味が分からなかった。

「——見事に平和ですね、街中は」

繁華街を抜けながら、ニコルが不意に声を漏らした。アスランも静かに頷く。

その背後にはイザーク、デイアツカと並び、ステラが最後に続いていた。

「昨日領海で、あれだけの騒ぎがあつたつてのに……呑気なもんだぜ」

「中立国、だからですかね……?」

「どいつもこいつもどかな顔しやがつて!　ここは桃源郷か何かなのか!」

「イザーク、声が大きいぞ」

イザークが八つ当たりのように騒ぎ散らす。

しかし立场上、彼らは目立ってはならない——そつと釘を刺すアスランであつた。

「ここだけでも平和なら、それはいいことじゃないですかね」

「どこが?　あんなモン造つといて、自分たちだけのうのうとしてるつて、卑怯つてんじやねーの?」

「でも、政府が犯した過失の責任を、国民に当てつけるのは、すこしお門違いな気もしますよ」

彼らの会話をよそに、作業服のステラは、ぼんやりと繁華街を見回しながら歩いていた。

行き交う人の往来が、とつても喧噪な街だ。すれ違う民間人は、スーツを来た男性や、制服に身を包んだ女子学生など様々で、見ていて、そして歩いていて飽きが来ない。

——残念なのは……。

街を散策し始めてから、ステラは当初こそ目を輝かせていたが、今ではすっかりしゅん肩とを疎め、俯きがちに歩いていた。

オーブの街中は、小国ながら非常に栄えていた。

高層ビルが建ち並び、至るところに透明なガラスが巡らさっている。そう、街を歩いていると、嫌でも多くのショーウィンドウに、自分の姿が度々とまる映しになるのである。

「……………」

深く被った灰色の帽子に、みすぼらしい灰色のオールインワン——全身が灰色に彩られ、

(コンクリート人形だ……)

と、ステラはみずからを意味の分からない表現で喻えた。

何が云いたいのかという、殺伐とした男の子みたいな格好なのだ。いや、実際に

男の子に見えなければ困るのだから、そう見えて当然なのだが……。

こんなにも賑やかな街では、もっと解放的になつていたくなる。でも、こんな格好ではしやいでしまうと、きつとアスランに怒られるような気がするから、それもできない。ステラの横を、綺麗なドレスに身を包んだ女の人や、オシヤレな格好をした女の子が通り過ぎた。思わず二度見したくなって、振り返りながら歩いていく。

(いいいなー)

沈んだため息を漏らしたステラは、茫然として歩を進めていた。

そのとき——ちゃんと前方を確認していなかったのだろう、曲がり角から突如現れた人影がいることに、彼女はまったく気が付かなかつた。

どんっ

交差点の角でぶつかり、ステラは大きくよろめいた。鍛えているのか、大柄ではないが、たくましい人影にぶつかったようだ。

衝撃に尻もちをつくかと思われたその瞬間、ぐいと腕を引つ張り上げられた。そうして、抱きかかえられるような形で、彼女は背後の人物に抱き留められた。

一連の物音を聞き取つたアスラン達が、咄嗟に振り向く。工作員に云われたとおり、彼らは決して「目立つたことはできない」のだ。——その分だけ、神経質にもなつてい

「いったた……、ちゃんと前見て歩けよな」

アスランの眼に映ったのは、妹を背後から抱える——黒髪の少年であった。

年齢にして、彼よりも二歳ほど年下だろうか？ 切れ長の前髪から覗く赤い瞳には——

——なにか強い意志を感じる。

歩み寄り、アスランは少年へと話しかけた。

「すみません。うちの弟が——」

アスランはあくまで作業員を装い——そしてステラを妹ではなく、弟と名乗らせ——、謙って答える。

イザークは興味なさげに視線を外し、デイアツカも飄々と振る舞い、ニコルは人の良い笑みを浮かべた。彼らは内心——その黒髪の少年が当たり屋でないことを心から願っていた。ここで騒ぎを起こされたら、一貫の終わりだ。

少年はカットソーの上にメッシュニットという、流行りの若者らしい格好をしている。平和な国と謳われる国の住民らしい、健全な少年らしい格好である。

黒髪の少年は、遠方に作業着姿のアスランの姿を認めたらしい、不満げに云った。

「工場区の人？ 弟さん？ ちゃんと注意して歩かせてくださいよ」

「ええ、本当にすみません……」

よく見れば、少年はバースデーケーキの入った袋を手引に引つ提げていた。

どうやら、神経質になっていたのは向こうも同じらしい。

「……それは？」

「ああ、これ。今日、母の誕生日なんです。だから誕生日ケーキ、崩れちゃったら大変で」「そうですか……それは大変な失礼を」

云いながら、アスランは少年の許へと寄って行く。

少年は抱きかかえたステラの身体を離すと、そつとアスランの許へと送り出してあげた。

手放した少女の表情が、愕然としていられることにも気づかず——。

ステラの身を戻したアスランは、礼儀正しく頭を下げた。

「では、俺達はこれで——」

アスランがステラの手を取り、踵を返す。

少年に背を向け、別れを告げようとした、その瞬間——背後から「おせっかいだと思ふんすけど」と、少年のひとつ多い爆弾発言が投げ掛けられた。

「弟さん、工場で働いてるなら、もつと体鍛えさせた方がいいですよ！——抱えたとき、胸板ぶにぶにしてみましたから！」

時が止まった。

びきつ——と音を立てて、場の空気が一瞬にして凍り付いて行く。

何気ない言葉の爆弾が投下され、アスランの——妹の……いや、少年からすれば「弟」の身体をまさぐられたらしい兄貴の心の中で、大爆発が巻き起こる。

地獄の業火は彼の心を焼き尽くした。

アスランが——凍てついたように表情を失う。

——ぶにぶに………？

あいつ今、なんて云った………？

爆発の余波か——口元から、湯気のような高熱の煙を吐き出し始めたアスランである。鬼の形相に豹変し始める同僚——もとい、誇り高き隊長の姿に、隊員たちはぎよつと目をむいた。

アスランはギギギ、と音が鳴りそうにぎこちない動作で、ゆつくりと少年に振り返り

「もう一度云ってみろこの野郎——ッ?!」

口から大量の煙を吐き出しながら、今にも少年に飛び掛かろうとした。

——くれぐれも、目立ったことはしないように。

——わかりました。

そう誓ったのは、アスランだろうに！

「ああッアスラン、ダメですよ！ 隠密行動中なんですから騒ぎを起こしたらッ！」

「離せッ、離してくれニコルッ！」

「おい、俺に『声がデカイ』って注意したのはこいつだよな」

「こいつ妹のことになると取り乱すよな」

飛び跳ねようとするアスランを、ニコル、イザーク、ディアツカの男三人がかりが制し始めた。——これはこれで、珍妙な絵面である。

突然、温厚だと思っていた年上の人物がキレ出し、少年はわけが分からなかった。

「なっ、なんだよ、おれは親切で云つたのに！　そもそも男同士でぶつかったんだから、非はそつちにあるはずだろ！」

少年は懸命に弁解した。たしかに、一連の流れで汲めば、その主張は正しい。

もしも本当に——金髪の子がアスランの弟であつたなら、という話だが——。

制されてなお、アスランは呪うように叫んだ。

「ぶにぶに……。ぶにぶに……なんだあー!?!」

「事故ですよアスラン！　ただぶつかった拍子に、きつとステラさんの——」

きつと彼女の、ある部分にぶつかったんだらう——。

そう云おうとしたニコルであったが、次の瞬間。

そのニコルが、顔からポツと火を噴かした。

話に上がったある部分のことを、記憶の中から思い出したのかもしれない。ポツとい

う音を立てて、赤面するニコルである。

「——えっ？」

アスランはきよとんととして、不審な視線を、少年からニコルへと移した。

真つ赤に顔を紅潮させた、絶大な信頼を寄せていた後輩が——恥ずかしそうにアスランから目を背けている。

——ニコル？　なんだ、今の「ボツ」って……!?

アスランは混乱し始める。

そういえば——……。

ニコルは以前、ステラとふたりで『南国の無人島に遭難した』と云っていた。

俺の知っているニコル・アマルフィは純粋なヤツだ。まさか、そういうことはなかったと信じていたが……南の孤島か？　何があつた？　あの遭難で、何があつたあッ!?

「ニコル？　ニコルう!？」

「ななな何でもないです……アスラン……」

「嘘をつけえ！」

——まさか、身内からも『裏切り者』が出て来るとは！

さらに暴れ出すアスランをよそに「こいつは馬鹿か」と顔に書いてあるイザークとデイアツカは、冷ややかに状況を解説した。

「デイアツカ、アスランはあんなヤツだったか」

「今までステラを遠ざけてた分、実は近づきたくてしようがなかったんじゃないのか」
優秀でありたい兄ゆえの、プライドが邪魔をして。

「ほら、ビクトリアから様子が変だったし」

「ふはは、なるほど」

簡単に納得したふたりである。

「おまえらなんなんだ！ おれだって、おれだってまだなあ!!」

「ダメツ！ それ以上云っちゃダメですアスラン！ あなたのフアンの女の子は プラントにも多いんですから！」

「ていうか——『まだ』って発言は色々ダメだろ」

「兄妹だからって許されたことじゃなくね？」

すっかり蚊帳の外となった少年は、目を丸くして目の前の会話を聞き入っていた。

「どうやら、仲間割れを始めたらしい。」

「工場で働くより、どこかで漫才師をやった方がいいんじゃないだろうか。」

（とツ、とにかく——！ 今は潜入中なんですから、多少のことには目を瞑らないと！）
ややあって、アスランを落ち着かせることに成功したニコルである。

（あつ、ああ、すまない——冷静じゃなかった……！）

心を落ち着かせるアスランであつたが——
次の瞬間、話の傍らにいたステラが、突然、その場から駆け出した。

——どういふ、こと……？

ステラは状況が呑み込めなかつた。

ぼーっとして繁華街を歩いていたら、誰かとぶつかつた。そして、ぐいつて腕を引つ張られて、だれかに抱きとめられた。

大柄なひとじゃなかつた。

でも、その腕はすぐく力強くつて、ステラの身体を受け止めても、しつかりとその場に構えていた。

——聞き慣れた声だつた。

ぶつきらぼうで、ちよつとだけ乱雑なようにも聞こえて。

でも、その奥にはたしかに——あつたかいやさしさが、たくさん込められていて——。抱きとめられて、振り向いて、そうして震えた。

切れ長の前髪、目に映つたのは怖いはずの『赤』い瞳——でも、その色は怖くない。

燃えるみたいに、強い心を宿した『赤』——それだけは、残酷な色じゃない。

——まもる。

そう教えてくれたひと。

その想いを、最後まで貫こうとしてくれたひと。

強い心が、宿った色だったから——。

気が付けば、ステラはその場から駆け出していた。

「シン——！」

そうして———どういふことか、オーブに現れた少年に抱き着いた。

突然、作業着の「弟さん」に抱き着かれ、黒髪の少年はその場に卒倒した。

歓喜のあまり、勢いよく突進され、少年は体重を支えることができずに、その場に倒れてしまったのだ。

床に仰向けにのし倒され、少年はひたすら喚いた。

「うわあ、なんだっ!?!」

——やめてくれ、俺には大切な妹がつ！俺には衆道の趣味はないんだ——!

訳が分からずじたばたし出す少年に、まるで猫のように抱き着き始める妹——。

アスランは目線を落とし、ふっ……と笑った。

「すまない、俺はやっぱり冷静じゃなかった……」

目の前の光景
絨毯爆撃が、アスランの心を焼き尽くす。

そうして再び、口から大量の煙を吐き出した。

ぐいつ、と服の袖を肩口まで捲し上げ、叫ぶ。

「なあアイツ殺^やつていいか——ッ?!」

「アスラン——ッ?!」

「冷静に考えたらここで殺^やつておいた方が——ッ!!」

「おいまたかッ?!」

最近のアスランらしい発言を持ち出され、ふたたび男三人がかりでアスランを取り押さえ始めた。

肝心の少年は、ひたすら頭の上に疑問符を連続させている。

「ちよ、あんた、どういう——?!」

「?」

ステラは呆然として、少年——「シン・アスカ」の顔を見上げた。

まるつきり間の抜けた顔。そして慌てふためいた顔。懐かしい。海岸で服を乾かし合っているときに浮かべていたそれと、まるで一緒だ。

間違はなく——シンなのに。

肝心のその少年は、ステラをステラとして理解してはいなかった――。

鍛えているであろう二の腕で、少年は少女の身体を引きはがした。

「誰だか知らないけど、ちよつと待つてくれよ！」

「シン――？」

「えつ、なんで俺の名前――？」

ぎよつとして驚いたそのとき、傍らから、幼い少女の声が響いた。

「お兄ちゃん見つけ！――て！ 何してるのっ!？」

それは、少年と同じように黒い髪をした――まだ年端もいかない、幼い女の子だった。

「ま、マユっ！ 助けてくれっ！」

少年は喚き、ちツ、とイザークは舌を打った。

――まずい、騒ぎ過ぎた……！

辺りを見れば、奇異がった周囲の民間人たちが、自分達を見つめていた。

「お兄ちゃんから離れてください！」

咄嗟に「マユ」と呼ばれた少女は、駆け寄って少年の許に走る。

それと同様に、アスランもステラへとにじり寄った。――勿論、目の前の少年に「こ

の、莫迦野郎ッ！」と怒鳴りつけたい気持ちを必死で堪えて。

「ステラ、ずらかるぞ。これ以上はまずい」

云いなながら、アスランはステラの衣類の襟をつかんだ。

「あんっ」

「変な虫にくつつくな」

「やーだー」

そうしてステラは、ずるずると引つ張られて行つてしまった。

「……なんだったんだ……あの人たち……う？」

訪れた静寂の中、少年はひたすら、頭に疑問符を浮かべていた。

まるで、嵐のような人達だった。

金髪の少年に関しては、初めから俺のことを知っているようだったし――。

(でも……………)

見上げられた円らかな瞳は少年のものというより、まるで、女の子みtainな目をしていてたけどな――。

——— いったい、何だったんだ……？

消化不良を起こしながら、そつとその場に立ち上がる少年。傍らの妹が激昂するように叫んだ。

「何やってるのお兄ちゃん！ ケーキ！ ケーキがつ！」

「ああッ!？」

少年は慌てて手許に視線を落とす。

卒倒された影響で、ケーキの包装された箱が、べこべこに凹んでいた。中身を確認せずとも、中がどうなっているのかは想像がついた。

——父さんからケーキ代もらったのに！ これじゃ、俺の自腹で買い直さなきゃいけないじゃないか！

黒髪に赤い瞳の少年——

シン・アスカは、既に見えなくなつた者達に向けて——、

「憶えてろよ、こんちくしよお——っ！」

呪うように、声の限り叫んだ。

繁華街を抜け、これよりアスラン達は港へと向かうことになる。——勿論、軍港に堂々と「足つき」が置いてあるとは思えないが、それでも、何らかの確証を得るためには、足を棒にして動き回るしかないのだ。

ステラはそれでも、このときいまだに茫然としていた。引き返したい気持ちを抑えて、かろうじてアスラン達について着ている状態だ。

——シン……どうしてここに？

二年前の今——シンはこの国にいた。

その傍らには、シンのことを「お兄ちゃん」と呼ぶ、見知らぬ女の子。

アスランを「お兄ちゃん」と呼ぶことのある自分のように——それなら、あのマユと
いう少女は、シンの——？

シンには、妹がいたんだ……………。

——でも、シンはステラのことがわかってなかった。

男装をしていたから？　ちがう。

もっと根本的に、シンはまだ、ステラに出会ったことがないからだ。

するりと、記憶が蘇る。

——誰だか知らないけど！

それは、たしかに理解はできて、すくなくとも、彼女にとってショックなひとこと
であったことには変わりはない。

ステラは俯きがちに考える。

——うーん……………。

せつかく出会えたのに、こんな形だなんて。

——また、オーブに来る機会はあるだろうか？

——また、彼に出会う機会はあるだろうか？

それに——シンは、ステラを完全に「男の子」だと思つていた。
できるなら、もつと違う形で……………。

「……………」

繁華街を抜けていると、彼女はふと、高層ビルの巨大テレビモニターに目を留めた。

最新モデルのエレカ——そのコマーションが放映されているようだが、ステラが目を留めたのは車ではなく、その宣伝役を務める、ラクス・クラインの姿の方であった。ステラにとっては、慣れ親しんだ姉のような存在だが——ラクスは世間一般から見れば、女優として、こういった仕事も受け持っているのだろう。

すると、ステラの傍に居た男女を交えた高校生のグループが、同じようにそのコマーションに目を留めた。そしてすぐに、女の子がかしましい嬌声を挙げ始めた。

「きゃーっ、ラクス・クラインよ！ わたし大ファンなの！」

「お姫様みたいで、素敵よね！ わたしも好きーっ！」

「俺も好きだぜ！ なんていうかこう、理想の女の子だよな！」

「ああいう優しく可愛い女の子、カノジョだったらいいなー！」

これを盗み聞きした傍らのディアツカが、人の悪い笑みを浮かべる。

「——だとさ？」

「何故、俺に聞くんだ……………」

当のラクス嬢の婚約者である、アスランはげんなりとして答えた。

モニターに映るのは、たしかに、平和の歌姫と呼ばれる、ピンクの波打つ長髪が特徴的な女の子。

過ぎ去っていく女子高生たちを振り返り、ステラは、

(髪、伸ばそうかな……)

ふと、そんなことを考えた。

そうすれば、きつと——。

ドアが開き、その奥から両親の顔が見えた途端、少年たちは一目散に駆け出していた。先日、ミリアリアが口にした希望が、一部でも叶ったのである。「両親に会いたい」という切実な願い。上陸し、家族が暮らす家に帰ることは立場上の問題で叶わなかったが、それでも、両親がこちらのドッグに足を運ぶことで、彼らは両親と再会することが出来たのだ。ツールやミリアリア、その両親たちが再会し、歓喜の抱擁を交わす。

そして、その中には——先日、話に上がった“アークエンジェル”の医務官の姿もあった。

彼の妻と、そしてその子供——まだ年端もいかない、六歳くらいの女の子だ——と涙ぐんだ再会を果たしている。

ということは——彼は久々に、*“アークエンジェル”*の医務室を開けている、ということでもある。

医務室が、すっかり留守になっていたのである。

誰もいないはずの医務室のドアが、こつそりと開いた。

忍び足で入室する人影。

そこに現れたのは、フレイ・アルスターであつた。

彼女には、迎えに来てくれる家族がない。——いや、より正確には、いなくなった。

両親と再会する者達の輪に、彼女は入ることが出来ない。

だが——この医務室が留守になる瞬間は、彼女は付け狙っていたのだ。

その掌の中に——医務室のデータを回収するための、メディアを抱えて——

『姫違い』

ナチュラルの家庭——アルスター家に生を受けたフレイは、生誕前よりある程度の容姿を選定できるコーデイナーにも引けを取らない可憐な容姿をしている。

それは世俗めいた表現をすれば——「美少女」と形容しても差し支えない美貌だ。月並みに陳腐な表現に聞こえるだろうが、燃えるような赤い長髪、大きく円らな双眸、そして抜群のスタイルには、老若男女が振り返つても見とれていたい。——ナチュラルだからこそその自然な美しさを、彼女は磨き、そして有しているのである。

以前、フレイは「アークエンジェル」の医務官の許を訪れていた。

医務室には一脚のパイプ椅子が間に合わせで設置され、彼女はそこに浅く腰かけていた。

「——『ディフェンド』のパイロットについて訊きたい？」

「ヘリオポリス」崩壊から今に至るまで、この「アークエンジェル」の船医を務める男。

名を、ハリー・ルイ・マーカットと云う。

白衣に身を包む男は、赤茶けた色の短髪を綺麗にまとめた容姿に、太縁の眼鏡をかけている。年齢にして、三十代後半と云ったところだろうか。

ハリーは唐突な訪問者——フレイから突然「ステラについて色々教えて欲しい」との旨の要求を提示され、片眉を顰め、疑ったような顔をした。当然ながら「いや、でもな……」とハリーは返答に渋った。過去の受診者の情報を不必要に吹聴することは、医者として患者へのプライバシーの侵害に当たるのだ。

——いったい、どういう風の吹き回しだろう？ 今さらになって、彼女のことを聞きたがるなんて……。

怪しんだハリーは「いちおう、理由を訊いておこうかな」とフレイを疑い、警戒の念を押す。問われたフレイは肩を狭め、「私と彼女、ずっと友達だったんです」と事実無根の供述を返した。

うら若い乙女の、円らな双眸はきよきよと泳ぎ、一見すると儂げな印象さえ受ける。それはおそらく、平時の彼女からは想像にも付かぬ姿で、男としての保護欲が掻き立てられるような姿だ。——こちらをやや上目がちに見つめてたり、両腕を内側に狭め、豊かな双丘を強調しているように見えるのは、心なしの勘違いであろうか。

寂しげな雰囲気は、魔の手となって男の警戒心を紐解いていく。

(ここで突っぱね返すのは可哀想だな……)

不覚にも、そう思わされてしまった。

これが傾国の手練手管だと、云う奴は云うのだろう。

「まあ——別に、構わないけどさ」

ハリーは渋々と頷き、それによりぱつと晴れた少女の笑顔が、彼の冷静な判断力を彼方へと吹き飛ばした。

——単純な男……。

フレイは胸底でふつと嘲った。

「でも、医者としてはそこまで掘り下げたことは云えないよ。守秘義務つてもものがある」
「それならそれで良いんです。わたし、あの娘とは『ヘリオポリス』では仲が良かったので、心配になって訊いてみたただけなんです。——あの娘が今まで、どんな目に遭って来たのかを」

そんな話は聞いたことがない、と思うハリーであつたが、この際だ、気にしないことにした。

彼は一度、咳払いをして、空気を正した。

「——たしかに、あの娘を診療したのは僕だよ」

そう。この男は、かつて『アルテミス』陥落の折——負傷したステラを治療し、その

診察段階において、彼女に薬物使用の既往歴があったことを見抜いた第一発見者でもある。おそらく、医学的な観点だけを云えば「ステラ・ルーシェ」という人物について、この時代の誰よりも、理解のある人物ではないだろうか？

座椅子の背もたれに体重を預け、ゆったりとした姿勢で、ハリーは口を開いた。

「彼女の身体から『奇妙な薬物反応が検出された』という話は、もう聞いてるかな」

「ええ、まあ……それはキラ君から聞きました」

事実である。

元々、彼女はキラと何度も起床と就寝を共にして来た仲だ、かつて、それくらいの情報には訊き出したことがある。

ハリーは「そうか」と眩き、その先を続けた。

「ザラという上流階級の名を持つていることから、これは自明だが——キラくんの話では、生来の彼女は、^{ステラ}幸福で暖かな家庭環境で生まれ育つたらしい。三年前までの彼女は、無邪気で平凡な女の子で、とても薬物なんかに溺れるような荒んだ家庭環境にはなかつたそうだよ」

フレイはやや前のめりに、ハリーの話に聞き入った。

「三ヶ月前、キラくんが『ヘリオポリス』で再会したときには、彼女はすでに、何者かの手によって薬物の投与を受けていた——てことだ」

淡々と、その先を続ける。

——そう……。

生来のステラ・ルーシエは、機械工学に詳しいわけでもなければ、まして、モビルスーツなんて操れるはずもない、純真で平凡な女の子だったのだ。

「彼女の体内から検出された微量の薬物には、ベルセルク効果を著しく促す物質が多く含まれていた。これは人間が持つ能力や人格——中でも攻撃性を体現するにあたって必要な感覚を、極限まで研ぎ澄ます効能が見込まれている」

より端的な云い方をすれば、ある種の「覚醒」と「洗脳」作用をもたらす物質が、その薬物には多く含まれていたということ。

身体面では——身体機能、耐久力、反射速度と、ありとあらゆる身体能力を飛躍的に向上させ、

精神面では——ありとあらゆる恐怖を抑え込み、好戦的かつ、冷静で効率的な判断力を培養させる。

そのような物質が、ステラには投与されていたのだ。

そうして微分ではあったが、ハリーはステラから、そのサンプルを採取することができた。

「そんな薬物のために——ステラという少女は、かつての生い立ちより……似ても似つ

かぬ変貌を遂げていた」

か弱いはずの存在が、強大な狂気の力を、その身に宿すようになっていた。ごく平穩から一転して、薬物によって、狂気の道へと突き墮とされた悲運の少女。

フレイは真実を聞き受け、啞然とした。

「そんな薬が、本当にあるんですね……？」

「効力が強い反面、依存性のある薬物さ。定期的な投与がなければ、禁断症状を起こしても不思議ではないレベルの……危険な代物だ。医者としては、ステラ君が薬物依存から立ち直れていたことに、素直に驚いたくらいだ」

こんなことを思うのは、不謹慎だけど。と付け足された。

場に、いつときの沈黙が流れる。

明かされた内容を咀嚼した後、フレイは確信めいてハリーに訊ねた。

「その薬があつたから？　——だから、彼女はモビルスーツに乗って、戦つて来れたんでしようか？」

フレイは純真に、真つ直ぐに医務官に問うた。

やがて目を逸らし、俯きがちに語りかける。

「だって、それまでの彼女は————とてもモビルあんなスーツモが操縦できるような女の子じゃあ、なかつたんですよね……？」

元々のステラはコーデイネイターと云えど、非力な——いや、戦争という現実を前にしては、まるで無力な——女の子だったはずだ。

それはまさに、今のフレイ自身のような——。

医務官はしばし考え込んだあと、ややあつて、ゆつくりと頷いた。

「そう捉えるのが、妥当かもしれないね……。ただの一般の民間人に、あそこまでの活躍ができるものか」

まして、まだ年端もいかぬ——あれだけの少女に。

「つまり彼女の正体は、人為的に戦闘能力を強化され、戦闘のためだけに改造された強化人間——用いられていたコードネームは、『^{エクステンデット}拡張された者達』——」

「エクス、テンデット……?」

彼女が当初から高い戦闘能力を持っていたのは、見方を変えれば「正常」なことなんだ。逆を云えば、それだけの戦闘能力に今、ポテンシャルだけで並ぼうとしているキラ・ヤマトの方がむしろ「異常」なくらいだよ、とハリーは笑えない冗談を付け加えた。

「そういう意味では、彼女の戦闘力は、当時の誰よりもズバ抜けて強大だったはずだ……。かつて彼女は『^{キック}ディフェンド』に乗って戦っていたが——その力は、当時の『^{ストライク}』をも軽く凌駕していたはずさ」

(でも、あの娘はパパを守ってくれなかったわ……)

その言葉に、フレイは複雑な面持ちを浮かべた。

百歩譲って、この男の云うことが正しかったとしても——結果的にステラはキラの足を引つ張り、その結果としてフレイの父は殺された。

ザフトのコーディネイターに。

——いや、真紅の機体——“イージス”に……。

「いったいあのとき——何がステラの動きを鈍らせていたのか。何が彼女の——その「強大な力」とやらを殺していたのか。

それはフレイには分からない。

——いいえ、分かかってあげる必要がないのよ……。

父が守られなかったことだけが、彼女にとつては真実なのだ。——「そこ」にあった原因など、突き止める必要性はないのだから……。

ハリーは飄々と語った。

「エクステンデットに投与される薬物は、投与を受けた人間に狂気の力を与える。これを授かれば、コーディネイターだろうがナチュラルだろうが、モビルスーツくらい簡単に操縦できるようになるだろう」

「ナチュラルでも、モビルスーツを簡単に……う？」

フレイは、その言葉を確かめるように反芻した。

そう、ハリー・レイ・マーカットは、現時点でステラの身体データ——もとい、薬物による強化兵士についてのデータを、独占している人物でもある。

彼はエクステンデットに用いられていた薬物の配合について、独自の方法で、医学的な考察を進めていた。やがて研究の結果——「この技術があれば、たとえナチュラルでも、モビルスーツを操るだけの適応力と判断力を手にすること出来る」という結果を導き出すまでに至った。

「モビルスーツは、コーディネイターほどの優れた能力がないと操縦するのは不可能とされていて、一般的に、彼らに劣るナチュラルに運用できた代物じゃないんだ。卓抜した反射神経、瞬発力、運動能力、認識力を必要とし——その点、くだんの薬は、ナチュラルに足りないそれを補う役割を果たしてくれる」

それだけを聞けば、ただ単純に『画期的な新薬』として聞こえるのだろうか——。

だが——。

その言葉の先を考え、ハリーは自嘲気味に笑った。

「まあこれも、恩恵だけを見た場合の話であって、実は……副作用の方が効果は酷くてね——」

「じゃあ——その薬があればわたしでも、モビルスーツを動かせるようになるってことですよね——？」

ハリーにとって最も肝心の部分を聞かず、フレイは彼の言葉を遮って訊ね始めた。

フレイの知るころでは、モビルスーツとは、あのサイでさえ歩かせることも出来なかった代物である。彼女が誰よりもよく知っている、あの賢知なサイでさえ——だ。その事例は、モビルスーツの操縦が如何にナチュラルの手に余るものなのかを、暗に教えてくれていた。

唐突な質問に、ハリーはぎよつとして目をむいた。引き攣ったような苦笑を浮かべ、誤魔化すように返す。

「はっ——はは……不吉なことを云うなあ、きみは」

「……。あなたが云ったんですよ」

「あれ、そうだっけ」

「そうです」

「……………」

——いかん、おしゃべりが過ぎた。

ハリーは罰が悪くなり、はぐらかすように眼鏡を取り外すと、視線を落とし、レンズを磨き始めた。

フレイは目を細め、冷ややかな眼で男を見つめる。俯いている彼は、その視線に気づかなかつたようだが。

目を眼鏡に落としながら、彼はぼそりと呟く。

「勿論、冗談の範囲で答えるとするなら——キミみたいな女の子でも、モビルスーツを操縦できるようになるだろう」

エクステンデットになれば、の話である。

我ながら、医者として危険なことを云っているな。

胸中で嘲ながら、ハリーは続けた。

「でもね……僕はそのうち、彼女の『データ』は破棄しようと考えてるんだ」

「え……？」

フレイは虚を突かれた表情になった。

——破棄？ いったい、なぜ？

ハリーは、やや暗い面持ちで答えた。

「いったい、誰がそんな薬を——何の目的で造り出したのかは分からない。でも、たしかにそいつは、人の一生を狂わせる代物なんだ。そんなもの、私が持つていても……何の役にも、誰の役にも立たない気がしてる」

——何の役にも立たない？

フレイはその言葉に、心外な表情を浮かべた。

——この男はいったい、何を云っているのだろう。

「例の薬を開発するには、相当な資金力が必要になる。でも、軍ならば、あるいは開発できないことはないだろう。——だからもし、このデータが地球軍の手に渡れば、一部の上層部の人間は、喜んでこのデータを利用しようとするはずだ」

「それは……。でもそれは、コーディネイターと戦っていくためには、必要なことなんじゃ……。ないでしょうか……？」

「きみの意見も分かる。たしかに軍人として……。いや、軍医としての僕は、このデータをアラスカへ送り届けるべきなのかもしれない——」

それまで俯いていた顔を上げ、しかし、とハリーは力強く答えた。

「でもね——医者としての僕は、こんな物騒なものを世に出すわけには行かないんだよ」

それは、医者としての、彼自身の矜持ほこりであろうか。

ステラの身体データ、ひいては『エクステンデット』に関するデータをアラスカへ送り届けることで、地球軍兵士ナチュラの何人——いや、何十人……下手をすれば何百人とが、この「狂気の薬物」の被験者となり、被害者となるのなら——？

それは医者として、他人の健康を害し、人生を狂わせたことと同義になる。たとえそれが、戦争に勝つために絶対に必要で、軍医としては賢明な判断だったとしても、医者としては、最低の行いでしかないのだから……。

躊躇うこともない確固とした意志が、その言葉には宿っていた。

「僕は後世、マッドサイエンティストなんて呼ばれたくない。……僕には妻と子供がいるんだ——子々孫々に恥じ入る真似は出来ない」

返す言葉を失ったフレイにそう云って、ハリーは深いため息をついた。

「だいたい、遺伝子^{コルディネイター}改変を嫌った結果、脳とか神経とか、遺伝子以外のどこにどう手を加えても構わないっていう発想は、医者^{ほく}でなくても野蛮に思えるというか……すっかり本末転倒な気がしないか？」

「それは………たしかに、そんな気もしますけど」

彼は——軍人として、あるいは、ひとりの人間として——良心の呵責に悩んでいたのだ。

だから、なかなかステラ・ルーシエに関するデータ——より正確には、彼女が体内に宿していた薬物のデータを、破棄できずにいた。

そして、今もまだ——。

「いちおう、僕はこのデータについて、もうすこし研究は進めるつもりでいるよ。……改善さえすれば、万が一にも副作用なしでナチュラルにモビルスーツが乗れるようになるかもしれない。すこしでもこの薬に改良の余地が見出せないか、僕なりに研究して見たんだ」

「……なら、すぐにも破棄することはないんですね……？」

「アラスカに辿り着く前に、研究に進展がなければ——そのときは絶対に、このデータは破棄するさ」

それは、彼なりの覚悟である。

ナチュラルである妻と子を守るためにも、この戦争に……コーデイネイター達に負けるわけには行かない。しかしそれでも、他人の人生を、平気で狂わせることは彼には出来ないのだ。だからこそ、彼なりに薬物を解析し、エクステンデットといものが何なのか——あるいは、すこしでも薬物の副作用を軽減させる方法がないのかを、独自に研究していた。

——最近は医務室に籠りっぱなしで、何かの研究に没頭しているみたいだけど……。

トノムラはそう云っていたが、その発言の理由が、なんとなくフレイには分かった気がした。

彼はアラスカに辿り着くまでに、薬物の改善の余地を導き出すことが出来なければ、データを破棄する心積もりでいるのだろう。——心無い者達に、未完成かつ、あまりにも大きな危険性を孕むその資料が、悪用される前に……。

さいわい、このデータを持つているのは、この世界で彼——ただひとりなのだから。

「ステラという患者おんなのこを診察した——そんな僕の責任だからこそ、第二エクステンデットの彼女は、これ以上生み出すわけには行かないんだよ」

そうして、話はそこで終わった。

どいつもこいつも、家族だなんだと、とぼけたことを云っている。

“アークエンジェル”がオーブのドッグに繋留され、艦内待機を言い渡された彼女達——“アークエンジェル”のクルー。

フレイは廊下に顔を出し、久々にミリアリア達と交流を持つようと、食堂にやって来ていた。

食堂を訪れると、彼女たち同カレッジの学生たちの輪に入れて貰えた。そこまでは良かったのだが、結論から云って、彼らとの会話は楽しくなかった。いや……楽しくなかったというより、むしろ、彼らの輪に入ったことですっかり気が滅入ってしまった。キラと破局し、ひとりでいることに耐えられなくなつて、学生たち——正確には一期先輩だが——と接することで孤独を紛らわせようとしたのに、完璧なる逆効果となつてしまった。

——だってみんな、家族の話ばかりするんだもの……。

話の内容が内容だけに、嬉々として騒ぐ学生たちの取り囲まれ——彼女の孤独感は、増す一方だった。

オーブに寄れたのだから。家に帰れるとか？ 両親と面会が出来るとか？ 会いたいか？ ——どんなに両親に会いたくても、もう二度と会うことは許されない苦しみを抱えた者の目の前で、よくも抜け々と……。

彼女がどんな気持ちでいるのか、理解してくれる人は誰もいない。

だから彼らと一緒にいても楽しくなかったし、ただ単純に、彼らとの隔絶した温度差を突き付けられるだけの形となってしまった。

やがて日が変わり、夜が明けると、クルー全員に「面会許可が下りた」という話を小耳に挟んだ。オーブに家族がいる者は、すっかりそっちに向かつてしまった。ツールにミリアリア、サイにカズイ——どういうわけかキラは行かなかったようだけれど、まあ、彼のことは今さらどうでもいいことだ。

当然、フレイも行かなかった。

——なんとなく面白くない。パパはもう、会いに来てはくれない。一生、この先もずっと……。

暇潰しを兼ねて、彼女は艦内で、当てつけられた雑用の任務をこなしていた。意気

揚々と出掛けて行つた仲間達に取り残された、さながらシンデレラのように——。
そんなときだった。

洗濯物を干していたとき、彼女の頭にふと、ある考えがよぎつた。先日のハリー・ルイ・マーカット——医務官との密度のある会話を思い出したのだ。

——そういえば、あの人の家族は、オーブに……。

昨日、食堂でトノムラはそのような旨の発言をしていた。

そして同時に、彼はこんなことも明かしていた。

——最近では医務室に籠りっぱなしで、何かの研究に没頭してゐただけ……。

彼が云う通り、ハリーはここ最近——というより、おそらくずっと前から——医務室に籠りっぱなしの生活を送っていた。ほかでもない、エクステンデットにまつわる薬物について、医者なりの研究を行うためだ。

専門分野に精通したひとりの医者として、解析できない難問を目の前に、試行錯誤を繰り返して、失敗と成功を積み重ね、気がついたら日付が変わっている——そのような調子で毎日を繰り返して、ハリーは連日、居住区に構えられた自室も戻らずに、四六時中、医務室で寝泊まりする生活を送っていた。

技術者という人種は、はつきり云つて、温室育ちのフレイには理解しがたいもので満ち溢れていると云わざるを得ない。

——いつもいつまでも解けない問題に向かつて……何がそんなに楽しいの……？

しかし現実として、ハリーは常に医務室に居座り、その席を他の誰かに譲ることをしなかった。そもそも「ヘリオポリス」の襲撃によって間に合わせの人員で運営されている「アークエンジェル」には、彼の代わりに医務室を担える人手はいなかったこともあつて——フレイが医務室に忍び込む隙など、まったくなかったのだつた。

そんなハリーが、今日このとき、ようやく医務室から席を外すことになつてはいるはずだ。他でもない、オーブに住まうという、彼の家族と面会のために。

——僕には妻と子供がいる、子々孫々に恥じ入る真似は出来ない……。

フレイから云わせれば、それはキバつた台詞だ。

——何よ偉そうに……誰もかしこも、家族、家族つて……。

しかしそれは、ハリーという人物が、どれだけ家族を大切にしているのかを窺うに、十分過ぎたひとことである。

案の定、彼はようやく研究を二の次に回し、彼の家族へと面会しに席を外している。医務室を空けている。

この事実を思い返したフレイは、

——今しかない……！

そう確信して、洗濯されたばかりの洗濯物を床に投げ捨て、医務室へと向かつた。後

でみっちりバジルー中尉から叱責を喰らった。

珍しく、無人となった医務室——そこへ、フレイが忍び込む。面会許可が下りて
いるためか、廊下は寒蘭としていて、途中で誰かとすれ違うこともなかった。

ハリーが座っていた座椅子の目の前に、軍医用の、立派なコンピュータが構えられて
いる。

フレイは呆然とそれを眺め、つかつかと歩み寄っていく。

——この中に、例のデータが……？

フレイはそつと腕を伸ばし、コンピュータの中に、自分用のメディアディスクを挿入
した。

慣れない手つきでコンソールを叩き、操作を進め——試行錯誤の末に、あるひと
つのデータを見つけ出した。——「Extended」と英記された名の、嚴重な秘匿
フォルダを。

「これ、ね……………」

——良かった、まだ破棄されていない……………!

フォルダの存在を確認し、クリック作業を進めるたび、なんだか、禁断の領域に手を
伸ばしているような感覚に陥った。

——これが、あの娘の秘密……………。

女のコなら、誰しも、世間に対して秘密のひとつやふたつ、隠しごとをして生きているものである。男のコに都合がいい、カワイイ女を振る舞うために。

しかし今、彼女はいわく「死んでも他人には明かしたくない女のコのヒミツ」に手を伸ばそうとしていた。他人の女の子がに關する、秘め事だ。——我ながら、ひどいことをしていると思ひ知る。自分はその秘密を盗み取るだけでなく、みずからが地獄から這い上がるために利用しようと考えているのだから。

自分はいつの間にか、相当な性悪女に墮ちていたらしい。現実を思ひ知り、フレイはふつと自嘲気味に嗤った。

きつとこが学校カレッジなら、私は信用を失つて、段々と友達を失つていくタイプに違ひない。私だつて女のコだ、他人には口が裂けても云いたくない秘密のひとつやふたつ抱えて生きている。それをわざわざ暴露するような女とは、絶対に友達になりたいとは思われない。人にされて嫌なことをやろうとしている自分は、きつと息をするのも烏滸がましいような、最低の人間なのかもしれない。

——でも、それでもいい……。

フレイはきつと顔を上げ、目の前のコンピュータ画面を見据えた。

——今の私には、どうしても「これ」が必要な……！

コーデイネイターに復讐するために、それは必要なものなのだから——。

キラに復讐することに失敗した彼女の、それは残された唯一の選択肢希望だったのかもしれないが――。

そう。フレイは――医務室にある「エクステンデット」にまつわる全データを、みずからが差し込んだメディアへと盗み取ろうとしているのだ。

強かに震えた少女の手は、彼女の中に残った良心が、懸命に彼女を引き留めている証拠か。フレイの中で――『理性』と『感情』が、まるで天使と悪魔のように、頭の中で応酬を始めた。

――今ここでデータを盗らないと、もう二度とチャンスは巡って来ない……！　今しかない……！　アイツが医務室じくに居ない、今しかっ！

（もう二度と、後戻りはできないのに……？　あの人に戻って来れば、きつとまた、彼は研究のために医務室じくに居座ることになるでしょ……？）

――だからこそ、データを盗むには、今しかないの！

（それはもう、取り返しがつかないってことなのよ！　もう二度と、資料を返せなくなる……！　後悔したところで遅いのよ！）

――後悔？　どうして……!?!?

ひしめくふたりの『自分』が、頭の中で激しい言葉を交わした。

――私はこの日を待ち望んでた！　戦いが始まれば、ベッドの中で震えていることし

か出来なかつた私に……！ コーディネイターに怯えていることしか出来なかつた私にっ！ ようやく、復讐のチャンスが回つて来たんだ！

みすばらしい毎日を送り——、

非力で無力で、ただ救われる日が来ることを夢見るだけのシンデレラが、いつか魔女の手を借りて、運命の王子様と出会うように。

か弱い私に希望を与えてくれる——これは、そのための魔法の力——。

おとぎの力がいっぱい詰まつた、さながら夢の国の寶石箱のような——。

（それは、開いちゃいけない禁断の箱！ あの人が云つてたじゃない！ 中に入つてるのは、人の一生を、狂わせる代物だつて——）

——私の人生、とつくのとうに狂つてるじゃないツ!!

その言葉に—— 『理性』は返す言葉を失つた。

ふたりの舌戦が制され、感情が、理性を軽く凌駕した。理性は、感情に説き伏せられたのだ。

次の瞬間、フレイの瞳に陰りが落ちた。

柔らかなその口元に、切り裂かれたような歪ほほえみが走る——。

「そうよ……私は、この薬に壊されたりはしないわ……」
そう。

そんなヘマ、私は絶対にしない——。

副作用だとか、なんだとか——あの男は説明しようとしていた。

だが、それはもう関係のないことだ。

「だって私は……もう、とつくの昔に壊れてるんだもの——」

既に破壊されたものを、破壊することは、何者にもできないのだから——。

復讐を夢見る少女は、目の前に現れた『魔女』に——『魔法』の外法に、そつと手を伸ばした。

しかし——。

そいつは『ガラスの靴』を作り出してくれるような——心の優しい魔女ではなかった。

そいつはただ、『毒』の入った林檎を手渡すだけの——心の悪しき魔女だったのだから。

フレイは決して——おとぎの国のシンデレラにはなれなかった。

彼女はただ、目の前に差し出された『毒』を幸福と食べ、その生涯を狂わせた、おとぎの国の雪白姫ゆきしろひめに過ぎないのだから——。

そうして彼女は、医務室のデータを抜き取り、己の部屋に持ち去った。

いつか、このデータが自分のものとなる日が来ることを、希望と疑わず、切に願った

まま——。

非力な人間を狂気へと墮とすほどに、ナチュラルがモバイルスーツを操るのには、相当の能力を要している。

生来より、ハイスペックな能力を持つて生まれるコーデイナーでなければ真価を發揮できないモバイルスーツを、ナチュラルが操縦できるまで安易な設定に順応させようというのだ。適応には、それ相応の機転と専門知識——そして情報処理能力が必要になることは自明だ。

やはりモバイルスーツの操縦に必要な、莫大な情報量をナチュラルに処理させるのは、抜本的な無理がある。だから人工AIをOSに搭載し、情報処理の大半を演算コンピュータに任せようという発想が湧いたわけであるが、なかなかどうして、これも難航していた。オーブの技術部では、それだけ高性能な演算装置開発の目処が立っていないかったのだ。

どこをどう改善しても、一向にモバイルスーツ——“アストレイ”の機動力が向上することはない。

大西洋連邦との共同開発ですら解決しなかった問題だ、"モルゲンレーテ"単独で解決できる日が来るかどうか、定かではないが……。

——逆に云えば、大西洋連邦は、どうやってGATシリーズを運用するつもりだったのだろうか……？

いつたい、どこの国に、あれだけ高性能な——OSが極めて複雑な——モバイルスーツを操れるナチュラルが存在するというのは。

——それこそ、脳か何かを根本的に強化した人間でも量産しなければ、そもそも……。
なんだか嫌な話だ。

エリカは不審に思ったが、所詮は他国の事情、そして考えたくもない不吉なことなので、それ以上を無為な想像をやめにした。

そんな中、先日技術協力を依頼したキラ・ヤマトが彼女の許を訪れ、云われた仕事を、他の技術者があつと驚くような速度で推し進めて来たことを知らされる。

「新しい量子サブルーチンを構築して、シナプス融合の代謝速度を四〇パーセント向上させて、一般的なナチュラルの神経接合に適応するようイオンポンプ部の分子構造を書き換えました」

先日の視察ブースの中で、再度"アストレイ"によるデモンストレーションが行われていた。

目の前では先日と打って変わって、見違えるように機動力を挙げた「アストレイ」が模擬戦を行っている。——訓練用の棒状ユニットを構え、二機はこれを、しっかりと剣道のように打ち合っている。動きの鈍い老人が、必死になってひっかかり合っているだけのような、先日の醜い模擬戦とはまるで別の光景だ。

「すごいわね……。それだけの作業を、たったこれだけの合間に！」

「でも、本当に簡素なOSに仕上げただけですから……。『アストレイ』以外のモバイルスーツには、あんまり向いてない設定だと思えます」

「とんでもない！ これだけの基盤が出来上がれば、あとは私たちの努力次第でなんとかなるわよ！」

オーブが量産しているM1「アストレイ」は、75m対空自動バルカン砲塔システム「イーゲルシユテルン」および、71式ビームライフル、70式ビームサーベル、対ビームシールドと、武装に関しては基本的に、いわゆる「歩兵」らしいオーソドックスな装備となっている。ナチュラルが操縦することを前提とした軽火力、簡素な構造および、装甲に用いられる素材もあまって非常に軽量の機体に仕上がっているのだ。

キラが造り上げたOSは、基本的にこの軽量の「アストレイ」専用で造り出したものであり、量産機であるがゆえの安定性を追求した結果である。一方で、やはり高性能なエース機を動かすには、それ相応に複雑化した設定が必要となって来るということだ

が。

「オーブは島国ですから、地上戦アーストレイの機体を量産するより、海中戦や空中戦を視野に入れたモビルスーツを開発した方が建設的なんじゃないか——とも思うんですけど」

「そっちの方は、このデータを基に技術部わたしたちでなんとかするわ。まずは基本形となる『アストレイ』運用に、あなたの発想を頂けただけで、私達としては大収穫」

大丈夫なんですか……？ と、なかばうさんくさい目でエリカをたしなめたキラである。

不審な目で見つめられ、エリカは弁解するように「私達の技術力はこれでも高い方なのよ」と技術屋らしい自負を口にした。

「最近『モルゲンレーテ』は、画期的な新エンジンの開発に成功してね。——と云つても、まあ、大西洋連邦から盗用したデータを参考に独自開発を進めたまでだけど」

「はあ……」

「あつ、そうそう。私達に協力してくれた『ご褒美』——とは云つては何なのだけれど……」

そう云つて、エリカはキラについて来るように指示した。

一連の話によると、キラにエリカからの「褒美」があるらしい。慣れない格納施設を抜け、見知らぬ扉の前までキラは案内された。

隔壁が開き、鈍重そうなドアが開放される。

案内されるままキラが歩を進めると、そこには——先日の戦闘から見違えるように補修された“ストライク”の姿があつた。エールストライカーが修理され、“アストレイ”のものと同型の、対ビームコーディングシールドが新たに開発されている。あるいは、スペアに開発されていたものをそのまま持ち込んだのかもしれないが。被弾した箇所も補修され、“イービス”にもぎ取られた左腕もしっかりと蘇生している。

「“ストライク”——ですか？」

一見すると、ただ修理されただけの“ストライク”だ。

たしかに、修理してくれただけ、それは「褒美」とも云えるのだろうか——けち臭く不満がつてキラが訊ねようとしたところ、思わず彼は“ストライク”の背部に目を留めた。

よく見れば、見慣れない玄色のストライカーパックが、みずからの愛機に装備されていたのだ。

エリカは満悦そうに笑つた。

「X—105の——新しい“ストライカーパック”よ」

その言葉に、キラはぎよつとして目を見開いた。

——では、あれが………？

キラは顔を見上げ、改めて新たらに用意された玄色のストライカーパックを見遣る。系列としては、ランチャーストライカーに近い、砲撃戦に特化したバックパックだろうか？ “ストライク”の広背部に、初見曰く「ごつい」フライトユニットを取り付けたようなストライカーパックで、左右に大きく伸びたマスターアームからは、おそらく超砲身の“アグニ”に匹敵するインパルス砲が放射できるようになっているのだろう。ランチャーストライカーと大きく変わっているのは、あちらは固定砲台として運用することが目的のため、大きな推進力を持ったスラスターがないことに対し、こちらは背部ユニットにも、巨大な出力を持つバーニアが増設されていることだ。

キラはその様相を見て、まず歓喜するのではなく、彼らしく、そのストライカーパックの信用性を疑った。

「砲撃戦特化の装備……ですよね？　なのに推力が必要なんですか？」

その形状から、性能を憶測すれば——「エールストライカーとランチャーストライカーの長所を統合したようなバックパック」と形容するのが妥当であろうか。

多機能性を持ち合わせる装備だ。見方によっては画期的にも見えるだろうが、逆を云えば「器用貧乏」を招きやすいという欠点も併せ持つ。それに加えて、玄色の色彩のせいか見た感じとつても『重たい』。多機能ゆえの使い勝手の悪さ、そしてデッドウェイトによる機動性低下の問題は、根本的にキラの戦闘スタイルを阻害する仕様である気がし

た。

問われ、エリカは不敵に返した。

「云ったでしょう？ 最近『モルゲンレーテ』は、従来のものを凌ぐ画期的な新エンジンの開発に成功したの。これは、早速それを搭載させた、新世代の装備よ」

聞こえはいいが、それはつまり実験^{モルモット}装備ということじゃ……。

なおも疑り深いキラであった。

最近、人間不信になっているんじゃないだろうかと軽く自分に嫌気が差した瞬間でもあった。

「あれは『フオートレス・ストライカー』——大西洋連邦と『モルゲンレーテ』が、G計画を共同で推し進める途中で開発された……『ストライク』専用のバックパックよ」

つまり、開発への着手自体は、今よりずっと以前に行われていたもの。よって実験機とは云い難い、安定した性能が立証されているということだ。

エリカはキラに視線を戻し、こんなことを訊ねた。

「『ヘリオポリス』で開発されていた六機の『G』の中で——『X-401』だけが一機遅れて開発された』っていう話は、あなたは聞いてる？」

キラはその問いかけに頷いた。ハルバートン提督が云っていたことだからだ。

なら話は速いわね、とエリカは小さく微笑んだ。

「このバックパックは、そんなX-401の開発と並行して、本来の計画よりも大きく遅れて開発されたもの。エール、ソード、ランチャーと既に三つの装備が完成した後、この四つ目の装備が、急遽として増設されることになった」

「でも——“ヘリオポリス”にはなかったんですよね？」

トレーラーでストライカーパック等の必要物資を運搬するとき、キラはこの四つ目の新装備を見ることはなかった。

それはつまり、初めからこれは“ヘリオポリス”にはなかったということだ。

「開発の途中で、色んな不備が発覚してね——それらの問題を解決するために、一時的に“モルゲンレーテ”に持ち込まれていたの。だから“ヘリオポリス”が崩壊したときは、あの事態から喪失を免れることになった」

「不備ってどういうのは？」

「もちろん解決したわよ。——まあ、詳しいことは、実際に乗って見て、手に取って実感したらどうかしら？」

たしかに、百聞は一見に如かずである。

そうしてキラは“ストライク”に乗り込み、再び視察ブースへと機体を進ませた。

「エネルギー総容量——なんだこれ……エール装備の1、5倍………っ!」

キラはコンソールに映し出された、新装備の概要に舌を巻いた。

黒鉄色の見た目から、すっかり重量があると思いきや、新エンジンはよほど小型化されたものなのか、思うほど機体の総重量に悪影響を及ぼしてはいない。下手をすれば、ソードストライカーとよりも軽いかもしれない。エールストライカーにも引けを取らない推進装置がスラストには備えられており、総バッテリー容量もエール、ランチャー、ソードストライカー装備時に比べて、おおよそ五〇パーセントも向上している。高火力を誇る機体には、まず第一に加熱しがちな武装のリキャストに必要な冷却装置が懸念されるが、そこにも大きな問題はないようだ。

多機能ゆえの使い勝手の悪さ——デッドウェイトに器用貧乏——様々な不具合を懸念していたキラであったが、機動力と火力、そして防御力ともに問題はなく、接近戦闘も、エール装備と同様にビームサーベルで補うことができる。

なにより驚いたのは、大柄なバックパックには分不相応にも見える、籠手型の小さな対ビームシールドだ。小さな盾では、また盾ごと撃ち落とされてのではないかと不安が頭を過ぎったが、どうやら、この籠手型シールドにはX-401「デイフェンド」に搭載された装備と同じように、光波技術を用いたエネルギーシールドを展開させる能力があるらしい。

「出力の調整次第で、防御面を自由に拡張、縮小させられるってことか……」

光波防御帯と云えば、キラはその性能を、目の前で堪能して来ている。——それは、

アルテミス”の爆発からさえ、ひとつの機体を守るほどの強固さを誇るのだ。

籠手型のシールド自体は小型だが、この上に展開する光波防御帯を拡張させれば、見かけ以上に強固なビームシールドを展開させる。その分、エネルギーの消費も激しいのだろうが、根本的にバッテリー総容量の大幅な向上が、この装備を実用可能としていた。よって——高エネルギー長射程インパルス砲“マガツ”、105mm単装砲レールガン、8連装ミサイルポッド、ビームサーベル、アンチビームシールドと——非常に多様な装備を満載していることになる。

——これが、オーブの技術力……!?

強化ガラスの向こう側で、シモンズ技術主任が不敵にウインクしたように見えたキラであった。

「——改めて見ると、なんだか『ディフェンド』みたいな外觀をしていますね」

機体のテストを終え、もう一度キラが改めて『フォートレスストライク』を眺めていると、不意に、そんなことが言葉として漏れ出していた。

黒鉄色の、なんだか妙に禍々しいデザイン。武装に用いられている『マガツ』という名称も、どうやらオーブに伝わる悪神の名を冠しているようで——なんにせよ不穏で、不吉な感覚をにじにじと悪寒に訴えかけて来る気がしてならない。

エリカはそれまで嬉々としていた様相から一転して、デザインに関しては、ひどく興

味なさげだ。——彼女は外見より、中身にこだわる性格らしい。もちろん、現在の旦那選びもその結実だったらしいが、すごくどうでもいい解説だった。

「『デイフェンド』も、このフォートレスストライカーもご先祖様が一緒なのよ」
「ご先祖様？」

キラが訳が分からずに訊ね返すと、エリカは欧米人のように掌を返し、肩を竦めた。

「大西洋連邦からの受け売りよ。まあ私も、詳しいことは分からないけどね」

まるでどうでもいいことのように、彼女は笑いながら歩き始めてしまった。——腐つても技術者、専門外の分野には関心はないということなのだろう。

「『どうせナチュラルには扱い切れないだろうから』からって——そのうち廃棄される予定だったんだけど、あなたなら、きつと使いこなせないことはないでしょう？」

たしかに、その発言は的を射ていた。

にこり、と微笑み、彼女は首だけをこちらへ向けて一言、
「あげるわ」

簡単に云い放って、飄々とその場から立ち去って行ってしまった。

その場にひとり取り残されたキラは、しばし、そこから動くことが出来なかった。

——また、これに乗って戦わなきゃいけないのか……。

新たな力——。

それこそシモンズ技術主任の云う通り、従来のものを凌駕した、画期的な性能を持った装備だ。

いったい、どうやってこんなものを開発したのかは甚だ疑問だが、しかし現実として、それだけの兵器が今、キラの目の前にある。

「……………」

迫り来る真紅の機体には、恐怖すら感じた。

——アスランは、本気で、僕を……………」

わかっていたはずなのに——。

砂漠で対峙し、そうして彼を追い払ってから、次は油断すれば負けると知っていたはずなのに。

甘えが、あるのかもしれない。あの優しいアスランが、僕を殺すことなんてないという。そして自分も、アスランを殺すことなんてないって、根拠のない甘えが。

こうしてオーブに逃げ込むことが出来なければ、きつと自分はあの海域で「イージス」に撃たれていただろう。

それだけの覚悟を、今度は、自分が持たなければならぬ。

——大切な親友を、手に掛けるだけの勇気を？

そもそも、そんなものを勇気と表現していいのだろうか？

キラが茫然と立ち尽くしていると、そのとき、ガチャンと入口の方で重たい音が鳴り響いた。

——誰だろう？

キラは不審がって扉の方を見る。シモンズ技術主任が居なくなつた今、この格納庫は、嚴重なロックで閉ざされているはずだ。それこそ、軍事機密並みの警戒レベルで——

扉は、キーがなければ内側からしか開けられず、キラとて、エリカという随伴が居なければ立ち入ることさえ許されていない嚴重な部屋だ。

今のは間違ひなく、そのロックがこじ開けられた音だつた。

不審がってキラがドアの方を見遣る。しかし、誰の姿も見当たらなかつた。

その代わり——コロコロと転がって入って来る、水色の球体を見つけた。

「うわあああ!？」

キラはその正体を理解して、咄嗟に叫んだ。

——なんてこつた!

そこに現れたのは、海色をした「ハロ」だつた。どうにも、この嚴重なロックをこじ開けて単独でやって来たらしい。

キラの顔面は真っ青だ。

——この鍵すら平気で開けるのか！　なんてものステラに作ったんだアスランツ!?

だが、思い返せばそれは、ステラが「アークエンジェル」に残して行つた、唯一のものだ。

いつたい、今の今まで、艦内のどこに身を潜めていたのか——。

考えるのは二の次にして、こんなものがオーブの関係者に発見されたら、色々とまず気がしたキラは、慌ててハロを抱き留めようと駆け出した。彼が持つ優れた運動力でぐいっと手を伸ばせば、ぴよんと跳ねられ、するりと逃げられた。ひよいと二の腕を掻い潜り、ころころと転がって「ストライク」の足許へと近寄つて行く。

へてやんでいッ！

「てやんでいッ！——じゃない！　何やってんだよ、こんな所で!」

ハロをとつ捕まえるのを後にして、キラは気が気でない精神状態で、こじ開けられたドアを閉めに向かった。

鈍重なドアを閉め、ロックを掛けると、もう一度ハロの方を振り返る。

「……迷つたの?」

あくまでキラは、ハロには話を通じるとは思つていなかった。

ほとんど独り言のように、そう口走つていたので。

キラは駆け寄ることもせず、ゆっくりとハロの許へと歩み寄って行った。

そうしてハロと同じように「ストライク」を見上げ、こんなことをぼやく。

「新しい装備だつてき。ステラの機体と、なんだか似てるだろ？」

キラがハロへと近寄り、その隣に、ゆっくりと膝を抱えて座り込んだ。

ハロに話しかけるなんて、とうとう自分も寂しいヤツだ、と自嘲気味に嗤ったが、次の瞬間、思わぬ言葉が隣から吹っ掛けられて来た。

「——オマエ、コレで戦うのか？」

「えっ……………!?!」

——ハロに、言葉が通じた……………!?!

キラは内心仰天しながら、啞然として隣の球体を見据えた。

それは、確認の問いかけだ。

キラは渋々と、また前を向いて頷いた。

「……………そう、だね。僕はこれに乗って戦わなきゃいけない——アスランと……………」

「オマエ、コレに乗る。——ステラ、オマエの敵にナル」

——ステラ？

思いもしない名前を持ち出され、キラはその言葉に、ぎよつとして目をむいた。どういふことだろう。

——僕が「ストライク」に乗る……ステラが僕の敵になる——？

(だって、ステラはそもそも、もう「ブランド」に——)

キラが逡巡していると、その瞬間、ハロが再び動き出した。

軽快な動きで、魔の抜けた音を連続させながら、再びドアの方へと向かっていく。

「あッ、こらハロ！ どこの行くんだよっ！」

キラは呼び止めたが、ハロはそのまま、云いたい勝手キラに云い捨てると、ひとりで飛び去って行ってしまった。

「……なんなんだよ……」

ハロの云った言葉の意味が、キラには分からなかった。

もうじき、日が暮れようとしている——。

一日中足を棒にして歩き回っても、アスラン達は一向に「アークエンジェル」がオーブ国内に滞在しているという証拠を掴めずにいた。とうとう痺れを切らして癩癩を起しかけたイザークが、八つ当たりのようにステラに云い寄ったが、実際ステラは、「アークエンジェル」のクルーの誰ひとりとも遭遇していないのだから、ハッキリ云って責めら

れる筋合いはなかった。

仮に「アークエンジェル」の乗組員の誰かを見つけたとして、それを素直にアスラン達に報告する気が、彼女にあるのかと云うと——…。

しかしそれはまた、完全に別問題であろう。

「まーさーかー？　ほんとに出航したとかいう話はないよねー？」

ディアツカがふざけたように声を挙げる。ふざけてでもいなければ、くたびれ過ぎてやつてられないのだろう。

アスランは疲れを表にも出さず、冷淡に云う。

「欲しいのは確証だ。足つきがオーブ国内にいる、いないならい——という」

「わっかるけどさア……」

「やはり、第一区画まで潜入できたところで、肝心の中を覗くことが出来なければ、意味はないですよね……」

「内部まで通れる奴とっ捕まえて、中に居れてもらえばいいんじゃないの？」

「つて、誰がそうだってわかるんですか」

まったくもって話が進まない。

実際、ここに来てアスランも苛々していた。どう判断しても——被弾の著しかった「アークエンジェル」が、オーブ艦隊からの激しい攻撃の中を掻い潜って、公式発表の通

り「オーブから既に離脱した」なんてことにはならないはずだ。

確実に、この国内にいるはずなのだ。

それは当然、イザークやニコル、ディアツカに関しては弱気にはなっているが——彼らとて確信しているはず。だが、確証を得られなければ、軍人として迂闊に行動が取れるわけでもない。

——いったん搜索を取りやめて、気を取り直して足つきを捜すことから再開するか……。

——それとも、ずっとここに張っているか……。

悩むアスラン達は、それからしばらく、海沿いのフェンスを添って歩いた。

——むしむしする。

焦りに苛立っているアスランの傍らで、それがステラが抱いた、そのときの本音だった。

一日中キャップの着用を強制されていたせいで、いい加減に、深めの帽子が鬱陶しくなつて来ている。帰ってシャワーがあげたい。きもちわるい。やだ。

ステラも相当疲労しているのだろう、幼い少女らしい駄々が出始めていた。

——このまま“アークエンジェル”が見つからなかったら、アスランも考え直してくれるかな……？

必死になって探し回る彼らの中で、実はこの潜入に、ステラは協力的ではなかった。

——ステラ達が本当に『戦うべき敵』は、もつと他に居るのに………。

同じ地球軍でも、もつとちがう。

もつと、わるいひとたちがいる。

そんなひとたちと、ステラ達は戦わなきゃいけないのに——。

(“デストロイ”を利用してしようと、悪いひとたちと——……)

戦争のために、破壊の限りを尽くすあの兵器を、喜んで造り出す者達。

それこそがステラ達が、本当に戦うべき相手ではないのか？

そんな考え方が、頭の根底にある彼女にとって——“アークエンジェル”などは、倒すべき二の次の相手でしかないのだ。たしかに、そこには「かつての母艦だった」という事実から来る温情も含まれているかもしれないが、戦争を食べ物にしている地球軍の人間達と“アークエンジェル”のクルー達を比べれば、どちらを滅ぼすべきなのかは、誰にでもわかることではないだろうか？

だからこそ——ステラは“デストロイ”にまつわるデータ、そのすべてを排除しなければならぬのだ。

庇護するような言い方だが——“アークエンジェル”のクルーは、ステラから見て、いい人ばかりだった。

マリユーにムウ、ナタル——そして、とりわけステラには、医務官の男性が印象的だった。

コーデイネイターである自分を拒絶することもなく、必死で看病してくれた。話していることもまともで、ちよつと過保護でおしやべりなところはあつたけれど——……。
(だから。もつと他に、戦わなきやいけない人がいる……………)

ステラは祈り、このまま何事もなく夜になることを願った。

——そうすればきつと、アスランも諦めてくれる。

だが——。

そのとき、間の抜けた音が、フェンスの向こう側から響き始めた。

ぴよん、ぴよんと音を立てて——それは着実に、こちらへと近づいて来ている。

その音を耳に入れた瞬間、ステラの心臓はどきりと跳ね動いた。

ハツとして、すぐにその場から駆け出す。突然の動作に、イザークはぎよつとして驚いた。

「おいッ、どこ行くんだよー！」

苛々しているイザークが、棘のある言葉を放つ。

——気まぐれな女だ、何を起こしても、今更不思議じゃあないが……。

ステラはザラ隊の面々から距離を置くと、フェンスの方まで駆け寄って云ってしまった。

これを見届けたディアツカが片眉を顰める。

「何やってんだ、あれ？」

「さあ、ほっとけ」

イザークは興味を失ったように、ふいと目を背ける。

しかし、

「いや————待て」

アスランは、彼女の奇行を決して見逃したりはしなかった。

フェンスの向こう側から聞こえ出す、間の抜けた音——。

間違いない。

自分が、ある場所に置き忘れて来た“モノ”の音——。

ステラは絶望しながらフェンスへと掛け寄った。

格子状になったその壁の向こう側に、水色の球体を発見する。

「ハロ………っ!？」

ステラは声を上げ、その声に反応して、球体のロボット——海色のハロはステラの方を向いた。

コロコロと独自に転がり回るそれは、今ここで正当な持ち主との再会を果たし、これを喜ぶように、ピコピコと音を立て始めた。

ステラは慌ててフェンスに駆け寄る。

「しっ………だめ、ハロ………あっち行ってっ！」

冷や汗をかきながら、ステラは掌で追い払うような仕草を見せる。

しかし、ハロは喜ぶように音を立てるばかりで、その指示には従わない。——無理もない、持ち主ステラと長い間、離れていたのだから。

「音を立てないで、あっち行って！ おねがいっ！」

ステラは出来るだけ小声で、それでも、必死になって叫び、呼びかけた。

——ここに居たら、アスランが、あなたを………!

そのとき、ステラのすぐ背後へと、駆け寄る足音が聞こえた。

ステラは絶望した。

「………あれはっ！」

寄って来たのは、アスランだった。

確実にハロを目に留めて、確認するようにステラへと訊ねる。——いや、確認する必要などない。海色のハロを造り出し、ステラへとプレゼントしたのは、他でもない……。

「そういうことか……………」

アスランが、確信めいてほくそ笑む。

——見つけたぞ、決定的な『証拠』を……………！

その場に膝を折り、俯いたステラの傍らで——アスランは屈み込み、フェンスの向こうへ、ぱんと手を鳴らした。

「来い、ハロ。俺がわかるだろ？」

云われるがまま、海色のハロは、アスランの差し出した手の中へと転がって来た。

フェンスの合間を器用に潜り抜け、アスランの掌の中にすっぽりと収まって行く。――

まるで、正当な持ち主の家に帰るかのよう……………。

ハロを抱き留めたアスランが立ち上がり、その後ろに、ニコル達が寄って来る。

「それは…………？」ニコルが訊ね、

「ハロか？ ラクス嬢が持っているのと同じ…………」イザークが確信する。

「おまえほんとにラクス嬢のファンなんだな」デイアツカが冷やかしを入れた。

「うるさいわ馬鹿者ッ」イザークは顔から火を噴いて怒った。

アスランは次の瞬間——

その場に崩れるステラの帽子を、ゆっくりと脱がし、取ってやった。——もう、この帽子は必要ないという意味を込めて。

「よくやった、ステラ」

その一言が、どれだけ彼女を打ちのめしたことか——。

海色のハロを抱きかかえたアスランは、想像にもしなかつた。

「撤収だ。——『確証』は得た」

「はあ!？」

イザークは訳が分からん、と云った表情で抗議の声を挙げる。

しかし、アスランは譲らない。

それどころか、確信に満ちたアスランの表情を目の前にしては、抗議ですら無意味のように思え、すっかり圧倒されてしまった。

アスランは決断を以て宣言する。

「オーブ領海に包囲網を張って、足つきが出て来るのを待つ——!」

アスランの眼の色は——とうに失われていた。

『終末の閃光』

C. E. 71日、4月1日。

アプリリウス市に構えられた議長用の執務室、その座椅子に腰掛け、男は深い深いため息をついた。これまでの修羅の道のり、様々な苦悩と屈辱を耐え忍んで来た昔日の日に報いるだけの、大きなため息だ。

「長かった——」

評議会議長に就任した、パトリック・ザラである。この日の「プラント」では総裁選が執り行われ、評議会議長にパトリック・ザラが選出された。

彼は「オペレーション・ウロボロス」の強化案となる「オペレーション・スピッドブレイク」を、つい先ほど議会に提出し、これを即日可決させていた。

——本当に長かった……これで、ようやく戦争が終わる。

提出した原案では、攻撃目標をパナマと指定しておいたが「真のオペレーション・スピッドブレイク」の攻撃目標はまた別の地点である。これに関する情報は、まだ信用の

おける人物にしか打ち明けていなかった。

打ち明けたのは、側近であるレイ・ユウキ、軍事関係者その他少数、そして腹心の部下であるラウ・ル・クルーゼくらいのものであり——そのときパトリックの脳裏に、息子の姿が浮かんだ。——どうやら、まだ打ち明けて良い者がいたようだ。

執務室のドアが開き、そこから現れたレイ・ユウキの姿を認める。彼は書類の入ったファイルを脇に抱えながら書齋に遣つて来ると、デスクを挟んでパトリックに告げた。

「見事な当選、おめでとうございます。ザラ議長閣下」

「今さらだ、白々しい挨拶はよせ」

パトリックにとって、己が議長に選ばれたことはかねてより分かっていた確定事項に過ぎない。しかしいざ現実となると、やはり歓喜にも似た感情が込み上げて来るのだ。う、「議長閣下」と改めて云われ、彼の表情に自然と笑みがこぼれた。

自分については、この座まで登り詰めたのだ。

だが、気を抜いてはいけない。議長となった今からが、本当の勝負なのだから。

正面に立つレイは、ファイルに目を通しながら「スピッドブレイク」の発動予定日は来月、5月5日で変わりなく……」と、いくつかの要件を伝えた後、パトリック新議長に続けた。

「それと、統合3局より、例の最新鋭機の話が持ち上がっています」

「おお、ついに完成したか？ あの三機が」

思い出したようにパトリックが云い、レイはすこし嬉しそうに語った。

「去年の『ウロボロス』可決の際は、『シグー』や『バクウ』と云った新型のモビルスーツがロールアウトされましたからね。此度もそれに肖つて、工廠が『スピッドブレイク』可決に合わせ、例の新型のロールアウトに尽力したようです」

「ユーリ・アマルファイが、粋なことをする」

それを聞き、パトリックは声を上げて笑った。

「機体の命名はザラ議長にお任せするそうです。問題は、例の新型に搭乗させる三名のパイロット選出ですが……？」

云われ、パトリックは再び背もたれに身を預けた。

三名のパイロットの選出——そのうちのひとりには、既に彼の中では決まっていた。自身の正義をしっかりと見出し始めた、みずからの息子だ。あえて明言はしなかったが。

「パイロットについては、追々に検討を重ねるとしよう。なに、急ぐ必要はない、我らにはまだ時間があるのだから」

「承知しました」

そう云つて、レイは執務室から退室して行く。

訪れた静寂——ややあつて、パトリックはひとりほくそ笑む。

—— 見ているといい、レノア……。

開発された新型のモビルスーツが、将来この「プラント」に、輝かしい栄光をもたらす旗印となる。

混沌とした時代はすぐに終わる。

暗闇に包まれた世界にも、太陽が昇る瞬間——「暁」はいずれ訪れる。

パトリックはただひとり、今は亡きみずからの妻に、寂しげな思いを馳せた。

「アークエンジェル」がオーブに滞在して五日——艦はすべての整備を終え、ついに
出航の時を迎えていた。

オーブより出航し、北回帰線さえ乗り越えてしまえば、残りはアラスカへの防空圏——
完全に安全地帯へと入ることが出来る。懸念される唯一の問題は、宇宙と同じように
追撃を仕掛けて来たGATシリーズによる襲撃だ。

ラウ・ル・クルーゼという奇妙な感覚で繋がられた宿敵を持つムウにとって、今回、攻
撃を仕掛けて来ている者達の隊長がクルーゼでないことは、奇妙なことに判別出来てい
た。

「敵はクルーゼ隊じゃない。あいつが裏で引いていることには変わりはないが、指揮し

てるのは、また別の人間だろう」

何を根拠にそんなことを云っているのか、マリユートの腑には落ちなかつたが、それでも苛烈な追撃を仕掛けて来る敵の指揮官を侮つてはいけない——それだけは、充分にわかるのだった。

そんなときだ、ムウにマリユートから唐突な質問が投げ掛けられたのは。

「少佐は、どう思われているんですか？」

「どうって、何を？」

「例の『ディフェンド』についてです」

云われ、ムウは虚を突かれたような顔になる。そしてすぐにその言葉の真意を汲み取り、厳めしい顔を作った。

そう、前回の戦闘で『アークエンジェル』は皮肉にも、あの機体の襲撃を受ける結果となつた。敵として現れたそれを、ムウが終始牽制し、足止めしていた。それにより当艦と敵機が直接砲火を交えることはなかつたが、それでも、有能なパイロットが機体を操っていたのは紛うことない事実だつた。特機を任せられるだけのパイロットにしてコーディネイターなのだから、それはある意味で当然なのかもしれないが。

マリユートはか細い声で不安を打ち明けていた。

「パイロットは、まさかとは思うのですけれど……」

落ち込んだように俯きながら、弱々しい声で漏らす。

以前「*ディフェンド*」を操っていたのは、ステラという少女だった。キラの話では幼馴染だったということだが、その素性や経歴は謎に包まれ——それでいて、パトリック・ザラの娘であることが判明していた。

もしかしたら、彼女が——？ と、信じられないと思いつつ、どうしても不安が頭を過ぎつてしまう。あの少女がザフトに就かないという保証を、マリューは見つけられないのだ。

ムウは一瞬として険しい顔をしたが、すぐに綻ばせて、目の前の女性の額を指で弾いた。ぱしんと弾かれ、マリューはくるんと目を丸くした。

「なあに辛気臭い顔してんの、艦長さんが」

「ですが……」

「大丈夫さ。きつと、あの娘じゃない」

その発言には、何の根拠もない。

「いくらパトリック・ザラだつて、生きて戻った大切な娘を戦場に送り帰したりするかよ。そんな真似、普通の親にできるとは思えない」

それをして平気なのがパトリック・ザラであるということ——

くだんの男が既に普通の親ではないということ——彼らは知る由もないのだろう。

「なんにせよ、あとすこしでアラスカの防空圏だ。このまま、何事もなく行つてくれりやあいいが」

長い道のりだったが、ここに来てようやく実感が湧いてくる。もう少しで安全圏だ。宇宙でも地上でも、安全と云える場所に辿り着くことは出来なかつたその日々が、ようやく報われようとしている。

それにしても——とムウは思う。

なぜアラスカの連中は、肝心の「アークエンジェル」に、何の補給も増援も寄越してはくれないのだろうか？ 亡きハルバートン提督は、当艦が持つ「ストライク」にこそ、これからの戦況を打開するだけの力があると仰っていた。そしておそらく、その予想は正しい。なのに地上本部は、その唯一の貴重なデータを持っているこの艦に、まるで興味がないようだ。

——なぜだ……？

目下の「ストライク」より、はるかに重要な代物を、彼らは既に持っているというのか？ それこそ以前、明けの砂漠が飄々と語っていた——ビクトリアの形勢を押し返したという——南アフリカの新兵器のような……。

「骨折り損のくたびれ儲けは、勘弁なのよね」

下手をすれば、儲けることすら出来ないかもしれない——。

ムウは不吉な予感を胸に、この先を祈った。

オーブへの潜入から五日が経った。

アスランは「クストー」艦内において「足つきはオーブにいる」という主張を固持し、オーブより北上した接続水域に網を張るように艦長に打診した。その作戦の根拠を、後になって艦長や隊員たちに明かした。

以前「アークエンジェル」に乗艦していたステラが、件の艦船に残してきた代物——それが他でもなく、先日回収した「ハロ」だということだ。それがオーブ国内で確認された以上、目的の船舶も間違いなくオーブの中に潜んでいる。

それだけ云われれば、イザークたちも否応なく納得せざるを得なかったが、やはりそれでも、腑に落ちない部分があったらしい。

「そもそも、ハロってなんなんだよ」

イザークは真つ当な質問を投げかけた。

アスランは答えなかった。

潜水艦^{クスト}の艦内、パイロットに与えられる部屋はしごく簡素な造りとなっており、向かい合うふたつの二段ベッド以外には、これといった設備もない。そもそも軍艦とは、各々のプライベートに配慮がなされた構造で造られてはいない。

たとえ相手が女性であろうと、女の子であろうと——彼女のプライベート、具体例としては、寢床を仕切るのは、薄い布《カーテン》そのたった一枚に過ぎないのだ。

そのカーテンを閉めきり、ステラは、与えられたベッドの上に茫然と座り込んでいた。自分のせいで、「アークエンジェル」の存在をアスランに知られてしまった。自分さえ迂闊な行動を取らなければ、こんなことにはならなかった、戦闘は避けられたのかもしれない。世話になった者達に、再び銃を向けなくても済んだかもしれない。

——もやもやが、とれない……。

胸の奥が混然として、気分がわるい。すつきりしない。

これが普通の人間が持っている、感情、迷い……葛藤？

一向に慣れない、不快な感覚だった。やがて心が、押しつぶされてしまいそうだ。

「……………」

同室のニコル・アマルフィは、落ち込んでいる彼女をただ、見守ることしか出来なかった。

「——おかしいですよ、アスラン」

痺れを切らしたように、彼は発令所にて敵艦の反応を待つアスランに、背後から話し掛けた。にじり寄るようにして訴えかけた。

当の本人は「なにが？」——とあっけらかんとしている。するとすぐに、「ああ」と思いつたように言葉を続けた。

「心配ないよニコル。足つきがオーブを出た後は、北回帰線を越えようと北上する。今にでも、この海域に現れると思うんだが——」

「そういうことを云ってるんじゃないやありません」

「……なんだ？」

「ステラさんがずっとあんな状態なのに、どうしてあなたは、励ましのひとつも掛けてあげないんですか」

隊員のメンタルを曲がりなりにもケアするのが、隊長の務めではないだろうか？ いや、隊長になったばかりのアスランに、そんなことを云うのは理不尽だ。それでも、こう云ってはなんだが、アスランは兄としてのキャリアは長いのかから、もつと兄として、他の振る舞いが取れるはずではないだろうか？

隊員ではなく——妹に対する配慮。

隊長ではなく——兄としてしてやれることが、もつと他にもあるはずだ。

ニコルはそれを追及した。

「励ますもなにも、落ち込む理由がないだろ」

しよせん、今のアスランにとつては「落ち込む理由がわからないヤツに、的確な励ましが云えると思うのか？」ということなのだろう。正論だ。だからニコルも、何も言い返すことが出来ない。

今のアスランは「兄」ではなく——「軍人」なのだ。

なかば諦めてしまうように、ニコルはダメだ——と引き下がってしまった。——この人は、こんなにも人間味のない人物になってしまったのか。

たしかに、ニコルの知る彼は常に冷静で、ときに理知的——客観的に物事を見、必要があれば正論や模範的な回答を発言することのできる、良い意味での優等生だった。しかし今の彼は、その正論を武器にして振りかざしているようにも見える。論を巧妙にずらし、理路整然と理屈を当てつける。どこか取っ付きにくく、畏怖にも近い感情を抱かされる。いつたい、いつから——？

——そのうち、わかる……。

前にステラが云っていた言葉の意味が、段々と分かつて来たような気がしたニコルであった。

そのとき、

「——敵艦の反応あり！」

オペレーターの声が、発令所にこだました。艦長ならびに一同が目を見張り、レーダーを確認する。反応は大型だ、まだ年若き隊長の勘が当たったことを、全員が期待していた。

当のアスランは確信して、艦長に促す。

「出撃準備に掛かります、艦の特定急いでください！」

いちおう言葉に出すが、艦の特定など、すでに必要ない。

——あれは「アークエンジェル」だ……！

奥歯を噛みしめ、ニコルもまたアスランに続いて発令所を出る。

しかし、途中でアスランと進路を違え、いったん、自分に貸し与えられた部屋へと足を運んだ。何をしてあげられるわけでもないが、どうにも気に掛かる少女の姿を確認しに行つたのだ。そうして、いざ部屋に辿り着いてみると——すべてのベッドカーテンは開かれ、少女の姿は、既にそこになかった。

意外に思い、すぐに格納庫への道に着く。すると彼女は、茫洋とした足取りで格納庫へ向けて歩く……いや、跛行していた。

「大丈夫なんですか……？」

ニコルは心配に思つて声を掛けるが、少女の方は、すっかり気の抜けた表情をしてい

た。ニコルの今の声すら耳に届いているか怪しいほど、茫然としている。死神に魂を吸い取られた後のようだ。

——まるで抜け殻だ……。

警報の発令を受けて、無意識に身体が「デイフエンド」に向かっているのかもしれない。

そこで、彼女はようやく声を絞り出した。

「もう終わらせる——もういやだ……」

「え……？」

ニコルの目の前にあったのは、

「気持ちわるいのはイヤつ、ここでたおす……！」

ストレスに耐え切れず、なかば自棄を起こす少女の姿だった。

警報が鳴り響く。

どうやら——『敵』が発見されたらしい。倒さなきゃいけない、そんな『敵』が。

——今の自分と昔の自分、本当はどっちが『しあわせ』だっただろう……つて、ふと

考えたりする。思い返してみたりする。今までの自分にできなかったことだから。

薬剤が切れたら苦しむだけの昔は、立場だけを見れば不憫で——そして何より、不自由な生活を強いられているようにも見える。

でも、そのときだって、そのときなりの「幸福」は存在していた。面倒なことを考える必要はなくて、指示された敵を撃つだけで良い。働くだけで誰かが自分を褒めてくれる、敵を墜とすだけで自分の存在意義を見出すことが出来る——そんな、単純明快な世界の中で生きていられたからだ。

その点、今はどうだろう。

色んなこと——複雑なことを知るようになった。嬉しいこと、楽しいこと、優しいこと。そして——哀しいことや、辛いことを。

ずっと昔から、アスランはやさしい人なんだと思っていた。でもそれは、きつと違った。

昔の話だったんだ。ひよつとしたら、自分が幼くて無知だったから、そう思っていただけなのかもしれない。そう信じていられただけなのかもしれない。

気付きたくない——そんなことにまで、気が付くようになった。

知りたくもなかった——いろんな現実を知ることがようになった。

記憶がある——思い出が残るといことが、それこそはじめは嬉しかったかもしれない

い。でもそれが、如何に過酷なことであるのかを、ここに来て突きつけられるよう形になつた。

——どつちがしあわせ……？

単純な右上がりの成長の一途を辿る者が、ある折に挫折するのは、ある日に当然のよ
うに訪れることで。

まだまだ未熟な——彼女の心は、ここで挫折することを選んだ。

「こんな耐えられない……苦しいだけが今つていうなら、昔に戻りたい、ぜんぶ忘れたい！」

重圧に負けたのは、まだ——人間として未完成な心。

「知りたくもないことで傷つくくらいなら、こんな生活もういらさない！」

疑心、不満、当惑、そして絶望——こんなものいらさない。

持つていても、つらいだけ。

——そうだ……忘れてしまおう……。

最適化を受けることは出来ない。

いらぬ記憶を、除去してもらふことは出来ない。

だから「アークエンジェル」のことを想うと、勝手に胸が苦しくなる。胸の奥がもやもやする。

撃たなきやならない、世話になった者達の顔が頭に浮かぶからだ。

——だったらもう、自分の手で忘れちゃおう。

ぜんぶ、なかったことにしちゃえ。

かれらを倒して。

かれらを葬って。

げんじつを先に潰せば、きおくは自然と消えていく。

いらぬ記憶を、ずっと昔のことにしちゃえばいいんだ。

目の前に佇む、黒鉄色の機体を見上げる。

コクピッドに潜り込み、シートに着いた彼女は、茫然としながら云った。

「一緒にこわそう……『デイフェンド』——」

まもることを忘れて、こわすことを思い出す。

できる——『デイフェンド』は、『デストロイ』の力を持って継いだ機体ガンダムなんだか

ら。

巨悪の力を受け継ぎし黒鉄色の機体の眼に、紅い灯が浮かんだ。

禍々しい装甲を持った機体デイフェンドが動き出す——。

ステラはそうして、破壊者の分身デイフェンドへ乗り込んでいった。

「例の追撃部隊!？」

オーブを出航し、すぐに北方に向かった「アークエンジェル」であつたが、その進路上にGATシリーズが配備された敵艦の反応を探知していた。

まさか、一週間近くもここで網を張っていたのか？

驚きにマリューは目を見開く。オーブは完全に「アークエンジェル」の存在を秘匿してしてくれたのではないのか？ いったい、どこから情報が漏れたというのだろうか？

それとも、確証もなしにずっとこの海域で——？

「ストライク」と「スカイグラスパー」出撃！　ここさえ乗り切れば、アラスカの防空圏は目の前よ！」

必死の叫びに、一同は頷く。

「逃げ切れればいい！　各自健闘を！」

「ECM最大強度！　スモーク・デイスチャージャー投射！　両舷煙幕放出！」

飛来する敵機の接近を許すよりも前に、各クルーによる迅速な行動が行われた。アークエンジェルは煙幕弾を射出し、上空にて炸裂した弾丸の内部から、濃い噴煙が

放出される。

もくもくと質量を増やしていく濃煙は、やがて巨大な「アークエンジェル」の船体そのものを包み隠した。

その隙に、艦前方のカタパルトが開放され、続けざまに戦闘機が二機、飛び去って行く——「スカイグラスパー」一号機と二号機である。

一号機にはランチャーストライカー装備が備えられ、こちらにはムウが搭乗している。

二号機には、先の戦闘でなかなかの活躍を見せたツールが搭乗し、こちらにはエールストライカーが配備されていた。より機動力を底上げし、被弾率を下げ、生存率を上げているのだ。

(ソードで来るつもりか……?)

発進した「スカイグラスパー」の機影を認めたアスランが、胸の中で呟く。

現時点で「ストライク」に残された装備は、ソードストライカーのみかと思われた。しかし実際には、キラはオーブにて預かった新型の装備に換装していた。

フォートレス・ストライカー。

他の三機の装備よりも圧倒的な火力、機動力を誇るエンジンを搭載した、画期的な新装備だ。

殲滅力に重きを置いていいのか、一对多数のこのような戦況において、四装備の中でもつとも向いた装備と云える。

「システムオールクリア、パワーフロー良好——……」

キラは新装備を装着した「ストライク」のチェック作業を進めつつ、機体をカタパルトデッキへと進めていく。

すると発進前になって、キラはコンソールに映し出された、奇妙な文字に目を取られた。

「フォートレスストライカー……原案もとになったものは、GFAS—X—「デストロイ」——？」

聞いたことのない名称にキラは眉を顰める。どうやらこの新装備は、そこからインスピレーションを発展させた産物であるらしい。

発進許可が下り、キラがカタパルトから飛び立つ。彼自身驚くような推力を搭載した機体は、重力に逆らって軽々しく空中を浮上し、母艦の甲板上へと降り立った。すぐに母艦から繋がれた電力ケーブルを接続させ、母艦からのエネルギー供給を受ける。

「こちら「スカイグラスパー」トール、敵の座標と射撃データを送る！」

キラは正確に、指定されたポイントに向けて銃口を絞った。

黒鉄色の背部ストライカーから大きく伸びたサイドアーム、マスターユニットと連結

された長射程インパルス砲 “マガツ” が火を噴いた。砲撃戦用の “アグニ” をも凌ぐ威力を持った砲火は、文字どおり厄神の吐息となつて、噴煙を突き破つて飛来する敵機へと向かつていった。

見えない敵からの突然の砲火にさらされ、ザラ隊の面々は散開し、声を張つた。

「なんだ、今の砲撃は！」

「へ “ストライク” か！」

向けられたのは、二対の砲撃——おそらく戦艦の主砲クラスの質量を持つていた——しかし “ストライク” が持つランチャー砲は一門しかなかつたはずだ。それに、威力を思えば “スキュラ” ほど、下手をすれば、それ以上の力があつたような気がする。

敵艦がまるごと噴煙に包まれた中では、これを放つた敵の姿を視認することは出来ないが、しかし、

「痛っ……」

そのとき “デイフェンド” の中で、ステラを奇妙な頭痛が襲つた。

「なんだ……？」

濃煙に包み隠された “アークエンジェル” から、なにか禍々しいものを感じる。強かな悪意、巨悪の力——？ いずれにしろ、こんな感覚は初めてだ。

——今度の敵は、なんだ……!?

不審感を抱き、それでも、彼女が怯むことはなかった。——ここで終わらせる。あの艦さえいなくなつちやえば、ステラはもう、思い悩むことなんてないんだから！

「くそッ……！」

キラは最新鋭の装備——その圧倒的な性能に舌を巻きつつも、思うように敵機に直撃させられずに歯噛みした。やはり人の「目」を借りての砲撃は、有効とは云えないらしい。

フオートレスストライカーは、従来の装備を遥かに凌ぐ性能を有していた。

エネルギー総容量にして、他のバックパックの150%まで底上げされている事実からは勿論、その火力に殲滅力、共に次元が違う。こんなにも画期的な兵器を開発するのは、相当な時間がかかるはずなのに……。

——オマエ、コレに乗る。ステラ、オマエの敵にナル……。

ハ口に云われた言葉が蘇る。あれはいったい、どういう意味だったのだろう……？

「僕が『ストライク』に乗るのは、今に始まったことじゃないのに！」

ステラとはなんだ？ どこで、なぜそんな言葉が出て来る……ステラがまた戦場にいるのか!?

疑心に駆られながら、キラは再びトリガーを引いた。『ストライク』背部ポッドより8連装誘導ミサイルが解き放たれ、ミサイルは猛禽のように空へ飛翔し、敵機へと降り

注いでゆく。

誘導性能に優れ過ぎたミサイルが、反応に遅れた「デュエル」と「バスター」に着弾した。空中に火の花が咲き、フェイズシフトに守れた二機は一瞬として後退。仕返しと云わんばかりに、彼らは無造作にビームライフルを構えた。だが、すぐに脇から撃つて来た「スカイグラスパー」に牽制された。

一方のアスランは眉を顰め、奇妙な既視感を憶えていた。

(高エネルギー砲に、高性能追尾ミサイル……!?)

出鱈目な威力と追尾性、これじゃあまるで、あのときの要塞じゃないか……!

ビクトリアに構えられていた大型の要塞が持つ武装、とまでは云わないが——すくなくとも規模を縮小させたような、そんな攻撃が今、目の前に繰り出されている……?!

いったい、なぜ——!?

既に小慣れた「グウル」を巧みに操りながら、アスランは一心に「足つき」を目指した。

「こんな一本調子じゃ、いつまでやって……!」

思うような決定打が見込めず、その瞬間、キラは「ストライク」に繋がる外部ケーブルの接続を切り、フェイズシフトをオンにした。機体装甲が白、青、赤に彩られ、背部フォートレスストライカーが玄色に染まっていく。送られた敵座標を元に、機体を上昇

させ、濃煙を突き抜けると、一気に上空へと躍り出た。

突如として現出した白亜の機体に、アスラン達は目をむいた。煙を突き抜けた敵機は、これまでに見たこともない装備に換装して、それを重たげに背負っていたのだ。

イザークの狼狽する声が響く。

〈新装備だつて？ どういうんだ!〉

「オーブの産土品かよー!」

黒色に彩られ、左右に大きく伸びた砲門は、突き出すように前方へ折れ曲がり、機体自身がカブトガニ……とは云わないが、ウミガメの甲羅のようなバツクパツクを背負っている。

かつての要塞を彷彿とさせるそのフォルムを見た瞬間、ステラとアスランは衝撃に駆られた。

途端、目の前の「ストライク」は驚くべき速度で飛翔し、装填された肩部単装レールガンを撃ち放った。遠雷のように迸る光線は瞬時に「デュエル」の右肩に着弾し、重厚な衝撃によって、期せずして「デュエル」は「グウル」から叩き落された。

「おまええーっ!」

咄嗟に「デイフェンド」は加速し、甲羅——いや、円盤を背負った「ストライク」へ挑みかかる。

——その装備……！ やっぱりオマエも地球軍だツ！！

怒りが頭を支配する。間違はなく目前の“それ”は、“デストロイ”のデータを基にして開発された装備ではないか。

寄つて集つて“デストロイ”の力を利用しようとする、地球軍の軟弱者達が生み出した！

ステラはスロットルを思い切り吹かした。凄まじい勢いで“ストライク”へと向かう。迫り来る黒鉄の機体を捉えた瞬間、キラは一瞬気圧され、はっとして息を詰めた。

「“デイフエンド”……!?」

仲間だったはずの機体が、牙を剥けてこちらへと向かつて来ている——！

キラの頭に、いつとき躊躇が流れ込む。

しかしそれでも、指は冷静にトリガーを引いていた。

単装レールガンが発射され、これは迅雷の如く“デイフエンド”へ飛来したが、咄嗟に構えた大盾によって弾かれる。やがて“デイフエンド”による『突進』体当たりが繰り出され、キラは不覚にも、すでに何度も見て来たはずのその攻撃を受けてしまった。

衝突によって機体が大きく揺れ、“ストライク”は後方へ弾き飛ばされる。そのまま姿勢を崩し、旋回しながら落ちて行く。

「武器があるのに、突進するのか……!? こいつ、正気かッ?」

見覚えのある戦い方だ——と過ぎたが、考える間もなく、すぐにバーニアを吹かし、空中で姿勢を立て直す。

今の「ストライク」は飛行支援体も無く、単機で空中に滞空していた。独特の風采をした甲羅自体に大型の推進装置が組み込まれており、キラの乗る「ストライク」だけが、強力な浮遊能力を手にしているのだ。

「ストライク」が、応射するようにビームライフルを構える。なおも躍りかかって来る「デیفエンド」に照準を突きつけた。

(なんだ、なんなんだよ、ハロー！)

唐突にハロの言葉が頭にちらつき、そんなはずはない！ とキラはかぶりを振った。あれきり、ハロの姿は見当たらなくなった。これまで身を潜めていたのだから、きつとどこかに隠れているのだろう——と艦内を探して回ったのだが、結局、ハロの姿はどこにも見つけられなかった。

——「デیفエンド」……キミはいったいなんなんだ!?

確信もなければ、確証もない。発言の意味も分からない——そのせいで、キラは気がではなかった。

「デストロイ」を使うやつは敵……！ 「デストロイ」は敵——!!

自分自身に言い聞かせながら、ステラは「ストライク」へと仕掛けた。

機体に乗っている者を誰何することはしない、いや、今さら誰何など必要ない。

乗っているのはキラじゃない。乗っているのは敵、わるいひと。戦争を食べ物にして、たくさんの『死』を造り出す——『デストロイ』なんかを生み出しては、利用しようとする悪党たち！

「オマエなんかがいるから！ だから私はあつ!!」

込み上げる怒りに錯乱したように、少女は吼え訴えた。

手爪の先にビームクロウを発心させ、黒鉄の機体が、黒鉄の装備を背負う『ストライク』へと躍りかかる。

迫り来るこれを、キラはビームシールドを展開させて防ぎ止めた。

やがて『アークエンジェル』は、群島の多い海域へと差し掛かっていた。

船体への被害状況には、歯を噛むものがあった。プラズマダンプラー損傷、レビテーターダウン、『イーゲルシユテルン』『バリアント』と云った各兵装が被弾し、艦内のあちこちでは火災が発生、非常隔壁が自動的に閉鎖されている場所もあるようだ。

ここで沈む？ ——そんな莫迦な。

ようやく、アラスカの目の前まで辿り着いたのに——!?

「アラスカへのコンタクトはッ!?」

「ダメですつ、何の応答もありません!」

息を呑む間もなく、目の前に「バスター」が接近していた。二丁の銃を連結させ、大火力の砲撃を今にも打ち込まんとしている。

「やらせるかあーッ!」

雄たけびを上げながら強襲を掛ける「スカイグラスパー」一号機から、「アグニ」が放たれた。砲火はまっすぐに「バスター」の「グウル」を貫き、機体はそのまま推力を失って、海中へと沈んでいく。

さなか、ディアツカは歯噛みして唸り声を上げた。

——してやられた? あんな前時代の戦闘機ごときに!

堪らなくなり、悔し紛れに飛び去って行く戦闘機に向けてビームランチャーを放つ。砲撃は「スカイグラスパー」の船尾を掠め、軽度の爆発を起こすと、船体は煙の尾を引いて墜落していく。

「フラガ機、被弾!」

「帰投させて! 敵に隙ができ次第、戦線を突破! アラスカへ突っ切らなければ——!」

マリューが叫んだその瞬間、はるか上空からの攻撃を知らせる警報が鳴り響いた。

天空より奇襲を行った「イージス」によつて、「スキュラ」が放たれたのである。「面舵一っ！」マリューが叫び、ノイマンは必至の形相で舵を切る。放たれた魔物の砲撃は右舷を掠め、艦全体を大きな衝撃が襲つた。下手をすれば、クルーが座席から投げ出されてしまうほどの衝撃。シートベルトを着用していなければ、それこそ誰かが艦橋を転げ落ちる勢いの産物だ。

被弾した大天使は煙の尾を引いて——やがて、ひとつの島に差し掛かった。

深緑が生い茂り、白い砂浜が穏やかな孤島。空は段々と悪天候に見舞われてきている、天気さえ良ければ、とても穏やかな島であろうに——。

「右舷スラスター被弾、姿勢制御不能！」

耳に入つて来たものは、絶望的な報せだった。

「高度が保てません艦長、このままでは！」

「ツ……着底する！ 総員衝撃に備えよ！」

のどかな島に、白亜の巨大戦艦が突つ込んで行く。

島の地表は大きくえぐり取られ、木々はなぎ倒され、クルー達を凄まじい衝撃が襲つた。

一同は持ち場にしがみつくようにその場で踏ん張りを利かせ、過酷な衝撃が収まると同時に、自分達がまだ生きていることに気付くと、わずかな希望を表情に滲ませた。し

かし、安堵の時間はそう長くは続かないようで——

「二時の方向より、ブリッツ」！ 六時の方向から「イージス」——!？」

漆黒と真紅の機体が、羽を失った大天使に襲い掛かって来たのだ。

背後より迫る「イージス」がビームライフルを放ち、着実に艦のラミネート装甲を熱していく。排熱処理が間に合わなくなれば、やがて艦は装甲を失って、敵の砲火の直撃を受けることになる。

すかさずナタルが声を荒げる。

「取り付かれたらおしまいだ！ 対空防御展開、弾幕を張れ！ ヤツらにサーベルを抜かせるな！」

いくらラミネート装甲に覆われた「アークエンジェル」といえど、常に一定の長さでビームを発心し続けられるビームサーベルに対しては、その装甲はまるで無防備と云っていい。

「『スカイグラスパー』 二号機接近！」

ミリアリアははらはらしながら状況を報告する。孤島のひとつに墜落した「アークエンジェル」をめぐって、エール装備を搭載した「スカイグラスパー」が戻って来ているのだ。

トールはシユミレータ通りに機体を操縦し、目の前に映る漆黒の機体——「ブリッツ

“に向けてビームライフルを放ち、声を上げた。

「こんのおー！」

——なんなんだよ、いつもいつも、おまえたちは！

その機体は本当は、この“アークエンジェル”に配備されるはずだったものなのに！
なのに、おまえたちのせいぞろい！

放たれた砲火を“ブリッツ”は難なく回避し、しかし、これにより進路を阻まれてしまった。

「安直な攻撃につー！」

すかさず“ブリッツ”のトリケロスから攻撃を放つが、慌てて舵を引いた“スカイダラスパー”はこれをかろうじて回避していく。

そうして二機は、牽制し合いながら戦った。

一方でアスランは障害もなく“アークエンジェル”へと向かう。放たれる弾幕の前を回避しつつ、一気に片を付けようとした。

「キラ、キラ応答してっ！ “イージス”が来るー！」

「くそっ……！」

ミリアリアから悲鳴のような声が聴こえ、キラは咄嗟に歯噛みした。

“ストライク”と“デイフェンド”は、今は“アークエンジェル”と同じように島に

降り立って、地上で戦闘を繰り広げていた。

目の前の「デイフェンド」に牽制され、なかなかキラも思うように身動きが取れないのだ。

——強いパイロットだ、どうしてこんなつ……！

右腕を輝かせた「デイフェンド」が、腕自体を凶器に変化させて突っ込んで来る。キラは籠手型のシールドに光波防御帯を発心させ、抜き打ちにこれを防ぎ止めた。

ぶつかり合う二機の光波エネルギーが、孤島に暴風を吹かした。

「ストライク」はすかさず後退して距離を開いたが、間髪いれず「デイフェンド」は左腕のビームライフルを放ち、襲いかかって来る。機体の全身が、まるで怒りと気迫に満ちている。

でも——負けるわけには行かない！

「その機体でもう、僕の邪魔をしないでくれえッ！」

キラが叫ぶ。

次の瞬間、

キラの身体の奥底で——何かが弾けた。

頭が急激に冴え渡って行く。腸が冷め切ったように、喉奥がひんやりとする。

目の前のモバイルスーツの呼吸そのものが、手に取るように判断できるようになった。

構えられた「デイフェンド」のライフル——その発射角から、あらゆる弾道を見切り、最低限の動きで回避して見せた。なおも斬りかかって来る黒鉄の機体に、痺れを切らしたように「ストライク」は打って出た。

「ウアアツ！」

一気に縮む間合い。

サーベルを引き抜き、地を強く蹴って懐まで躍り込む。

攻撃ではない——突撃だ。

正面からの突きを往なし、さすがの「デイフェンド」もこれを回避して見せた。だが、そのままサーベルは横薙ぎに一閃され、光刃が「デイフェンド」の頭部メインカメラを刎ね飛ばした。

知覚することも出来なかった、鮮やかな一撃。

衝撃に怯んだ「デイフェンド」は、怒りに任せたように爪部の光刃で斬りかかって来た。キラは咄嗟に舌を打ち、無造作な攻撃を左腕のビームシールドで受け止める。干渉された光波同士が、燃え立つような輝きを散らして煌めき合う。

「いま下がってれば、こうはならなかったんだぞ！」

次の瞬間——「ストライク」のシールドに展開されたエネルギーシールドが、一気に膨張し始めた。表面積を広げた光波シールドは、それ自体が刃のように煌めき、籠手型

のビームランサーと化した。

同時に、右腕ではくるりとサーベルの柄を翻し、鮮やかにサーベルを逆手に握り替えていた。

出し抜けにスラスターを噴射し、キラは突進を仕掛けた。『デイフェンド』は罅迫り合いの状態から突き飛ばされ、衝撃に怯んだ。敵機を大きく弾き飛ばし、『ストライク』は両腕に出力した光刃——二刀流の光の剣で、前面空間に鮮やかな半月状の弧を描いた。

輝く双閃、光の弧が——『デイフェンド』の両シールドを肩先から削ぎ落す。続けざま、零距离でレールガンを腹部に直撃させ、大きく後方へ弾き飛ばす。

仰向けに転げそうになった機体を、慌てて立て直したステラは、咄嗟に、駄肉と化した全身の鎧をパージした。しかし、パージが完了したときには、

「——!?!」

スラスターを吹かしながら急接近する、ぐるりと旋回している『ストライク』の——凄絶な『回し蹴り』を喰らっていた。

飛び込むと同時に繰り出された鮮やかな旋脚が、正確に『デイフェンド』の脇腹を蹴り飛ばす。複雑な操作を必要とするモバイルスーツでは、まさに信じられないような動きだ。

そのまま鈍重な衝撃に駆られ、*“デイフェンド”*は島の壁面に叩き付けられた。そのあまりの勢いに、機体は崖に大きく減り込んだ。この隙を逃さず、*“ストライク”*は転進していく。*“デイフェンド”*を振り切つて、*“アークエンジェル”*の援護へと向かった。

「なに……あいつ——!?!」

コクピッド内に頭を打ち付けて、ステラはしばし、目眩を起こした。頭を打ち付けたのがシートだったからその程度で済んだものの、打ち所が悪ければ、いつかのようにそのまま気絶していたかもしれない。

頭を押さえ、くらくらする視界で、彼女は離脱する敵機を見遣つた。

——なんなんだあいつ、急に、動きが変わつた……!?!

敵の『力』の正体が分からず、ややあつて、ステラはふるふると頭を振つて、*“ストライク”*を追つた。

アスランが、*“アークエンジェル”*をめがけて、*“スキュラ”*を放つ寸前になって、コクピッド内に警報が鳴り響いた。即座に機体を翻し、遠方より放たれた、*“スキュラ”*に匹敵する砲撃を回避する。

今の「ストライク」が持つ——殲滅砲である「マガツ」による砲撃だ。

巧みにこれを回避すると、すぐに「スキュラ」を「ストライク」に向けて撃ち放った。「ストライク」は容易くビームシールドで防いで見せた。

「「ストライク」——！前に云ったな。後悔させるぞ、ここで！」

アスランが親友の名を呼ぶことはない。それは、既に対象を「標的」として捉えている心理の顕れだろうか。

母艦を撃つことよりも、ひよつとすると彼は、このときを待ち望んでいたのかもしれない——。

「イージス」は転進し、目の前の「アークエンジェル」をほっぽいて「ストライク」へと向かった。これを見たキラが疑心に駆られる。

——僕から逃げていた昔からは、やっぱり君は違ってしまったのか……！

そう……あれは、先遣隊が全滅したときだった。あのときのアスランは、キラ達から逃げるようにして、標的だけを狙っていた。その結果「モンドゴメリ」は撃墜された。

なのに今は、まるで当時と対照的な構図になっている。アスランは標的よりも、キラを狙っているのだ。

それは、やはりキラの知っているアスランが、変わってしまった証拠だろうか。

アスランの身体の奥底で——何かが弾けた。

そう、この感覚だ。

アスランが鮮明に思い出す——ビクトリアでの、圧倒的に鋭敏な感覚を。冴え渡った視界、澄み渡った脳内——この感覚が、敵を倒すだけの力だ。

(ここで「ストライク」さえ落とせば、「アークエンジェル」がアラスカに辿り着いたところで意味がない！)

大局を見据えれば、ここで地球軍の手にGATシリーズのデータが渡ることを阻止するのは急務である。

地球連合軍は既に、底の知れない要塞を造り出す技術を持っている。そしてそれは、既にビクトリアから大西洋連邦——おそらくは、アラスカへと伝達されている。

ならば、モビルスーツのデータだけはここで、必ず破壊しなければならぬ。

それだけの技術を用いた、強力なモビルスーツが開発される前に！

——「ストライク」は絶対に破壊する！ オレが撃つツ！！
中にパイロットのことなど、二の次だ。

その「見覚えのあるバックパック」もろともに、「ストライク」はここで撃墜しなければならぬのだから！

アスランの感覚が極限まで冴え渡り、白と赤の機体は、閃光となって何度も空に交錯した。

機体の性能差をまるで感じさせないほどの勢い——“イージス”は抜き打ちに、四肢それぞれの先から黄色の光刃を展開し、怒濤の接近戦を仕掛けた。

対する“ストライク”はバックパックの性能上、距離を開くことに徹底したが、やがてそれが不毛であることに気が付いた。いくらパワーパックの容量が増しているとはいえ、これ以上、無駄にエネルギー消費のかさむ“マガツ”は連射出来ないのだ。キラは単純に、フォートレスストライカーを推進用ユニットとして判断、再び接近する“イージス”にサーベルで応戦した。

目の色を失った者同士が、激しく曇天の空の下で交錯する。

そのとき——“イージス”に加勢する者が現れた。遠方よりビームライフルを放つ、隻腕の“デイフェンド”だ。

脇から放たれた砲撃にキラは舌を打ったが、しかしそれは、アスランも同様だった。

「男^{オレたち}同士の間に入るな、ステラー！」

そう、今の“ストライク”は、ビクトリアでの感覚を思い出しているアスランと拮抗している。

機体の性能だけに頼っているのではない、明らかにパイロットとしての技量が——“ストライク”の中で完成し始めているのだ。

——そう、今の“ストライク”はきつと、ステラーの手にも負えないほどの成長を遂げ

ている。

今の“コイツ”を抑え込めるのは自分だけだ。

脇から善かれと思つて放つ援護射撃であつても、肝心のアスランにすら迷惑になるのなら、いつそ援護はない方がやりやすい。

「独擅場だツ!!」
どくせんじょう

訳の分からぬことを口走るアスランに、ステラは純粹な不審顔を作つた。

——おれ、たち……?」

ステラはその言葉に、我を取り戻したように疑念を抱いた。その言い草では、まるでアスランは“ストライク”のパイロットを知っているかのような……?」

へなんで——“ストライク”に誰が乗つての……!?!」

「ツ……!?! 誰であろうと問題があるのか!?!」

アスランはそこで、勢いで失言を放つたことに気が付いた。今まで隠し通して来た嘘を、よもや自分の口から綻ばせることになるうとは、冷静じゃなかった。

意識が背けた一瞬の隙を見逃さず——“ストライク”のサーベルが“イージス”の左胸を斬り付けた。アスランは咄嗟にうめき声を上げ、それでも、反撃として“ストライク”のバックパックを半壊するまで切り刻んだ。

目の前で繰り広げられるのは——衝動に突き動かされているとしか思えない、醜い刃

の応酬だ。

あまりの苛烈さに、自分がそこに飛び込もうとは思えない。戦うことしか才能のない自分ですら、あそこに割って入ることは許されない……いや、入って行けば、きつとやられるだけだ。

ビリビリと、二機が激突する度に、肌に伝わって来る気迫。

おおよそ余人には、見ているだけで精神をすり減らしていくような激闘だ。

その場に立ち尽くす「デイフェンド」の足許に、一発のビームライフルが撃ち込まれた。

大地が光に輝き、ステラをはつと現実引き戻される。

その一撃は「イージス」から放たれたものだった。ステラは啞然として通信機に映るアスランの顔を見上げた。

「大人しく帰投するんだ！ その状態では、どのみち何もできないだろう!」
精神状態も危うい。

機体自体も半壊している。

それは、アスランの冷徹な判断だった。

しかし、それでもステラは戸惑ったように、

「でも……」

と返す。

アスランは唸り、彼女にとつて、云つてはならない言葉を口にした。

「ここで『死』ぬつもりか——!?!」

そう。今の彼女が“ストライク”相手に立ち向かったところで、やられるだけだ。

キラの方も、まさか“デュフェンド”にステラが乗っているとは思わないはずだ、ならばキラとして手加減はせず、最悪、ステラが殺されてしまう可能性だつて十分に考えられる。

——これは戦争なんだ！ 初めから温情など必要とされない！

云われたステラが、衝撃に駆られた。

——しぬ……? ここ……? それは、いやだ……! !

守ればしない。……それは知ってる。

——でも、じゃあ、だれがステラをまもってくれるの……? !

今の自分を守ってくれる人が、いつたい、どこにいるというのだろう。

「死ぬの……? ステラ、ここで……!?!」

「それが嫌なら退くんだ、いいな!?!」

そういう眼前で、アスランの乗る“イージス”の左腕が“ストライク”によつて斬り飛ばされた。隻腕となった真紅の機体は、なおも引き下がらず、逆突撃を仕掛けて“マ

ガツ”の砲門と単装レールガンを切り捨てる。

目の前で繰り広げられるのは——まさに死闘だ。

殺し合いというものの愚かさや怖さが、切に伝わって来るおぞましい光景だった。

恐怖に駆られた“デیفエンド”が転進して、その場から飛び去った。それを安堵した表情で見送ったアスランであつたが、次の瞬間、気が付いたときには“ストライク”に頭部メインカメラを殴り飛ばされていた。

へ——キミはいつたい何やってるんだ、アスラン!?!>

「キラ!?!」

キラは自力で無線通信の周波数を合わせたのだろう、通信越しに、アスランに怒りの言葉を訴えた。

これまで黙々と斬り合っていただけのふたりの間に、怒号が響き合う。

へ妹まで戦場に駆り出して戦わせるなんて……! 一歩間違えば、僕がやっているところだ!>

「キラ……!?! わかつてたのか!?!」

へほら見ろ、やっぱりそうなんだな!?!>

「——!?!」

——俺は、鎌にかけられたのか……。

アスランは愕然とした。

少なからずキラは、かねてより「デیفエンド」のパイロットの正体には不審感を抱いていたのである。突進の攻撃を受けた際には、その予想は確信へと移り変わった。

なおも切り結び合いながら、キラは通信越しに怒鳴りを上げた。

「ステラが今までどんな目に遭つて来たのかを、キミは分かつてあげられないのか！
アスラン！」

「おまえにそれを云う資格があるのか！」

怒鳴りながら、アスランは右腕のサーベルを出力し、一気に「ストライク」へ躍りかかる。キラはこれを、シールドを構えて受け止めた。

閃光が迸り、雷鳴が轟く。弾け合う輝きの中、アスランはうめくように叫び返した。

「俺だつて納得しておもりをしてるわけじゃない！ でなければ、誰があいつを軍人になんかするか！ 力があつても、想いがついていかなきゃ出来損ないだろうが！」

「そんなの理屈だ！」

舌戦と共に、激戦は、次第に苛烈さを増して行つた。

圧倒的な推力で加速した「ストライク」が、一瞬の隙を突いて「イーゼス」の片足を斬り飛ばす。アスランは巧みに姿勢を整え、複雑な重心を見事に操つて見せた。咄嗟に「イーゲルシュテルン」を発砲し、これは「ストライク」のフェイズシフトへと無数に

着弾して行く。

「自分の感情が表に出せないから、きみはそうやって理屈に逃げるんだろう！　優等生

だから！」

「僻みなら、もつと前なら聞いてもやったさ……！」

「嫌なヤツ、アスラン！」

「どこがッ！」

斬りかかる二機が損傷し合い、曇天の空からは、雷鳴が轟き始めた。

島の一角から飛び立ったステラは、強かに震えた肩を抑えながら、移動——撤退を始めていた。

対岸では、なおも「イージス」と「ストライク」が斬り合っているようだ。そして、ステラの進行方向には、被弾して着底した「アークエンジェル」の姿も認められる。

「デュエル」と「バスター」の機影は既に捉えられない。前半にて海に叩き落され、行つたこの二機は既に補給を受けるために「クストー」に撤退したと見た。残っている戦力は「ブリッツ」と「イージス」だが——ニコルは、いったいどうなっているだろうか？

曇天の空——豪雨の中で、雷電が轟き光っている。

「し、ぬ……しんじやうは、だめ……!」

死ぬ——。

あの“ストライク”に殺される——？ 戦争だから——？

—— “ストライク”には……キラが乗ってるんじゃないのか……？

アスランはきつと、今までステラに嘘を吐いていた。そもそも、キラでなければ、いたい誰が自分の操る“デイフェンド”を撃退できたというのだろう。

コーデイネイターに引けを取らない実力を持つ自分を、いったい、どここの誰が退けられた？

—— “ストライク”に乗っていたのは、キラなんだ……。

そう確信したとき、ステラの脳裏に不安がよぎった。

キラが“ストライク”に乗っていた。キラが“テストロイ”の力を使っていた。キラがステラを殺そうとしていた——優しくて、穏やかだったキラが？ 自分を？

「だめよ……死ぬのは、いや……こわい……っ!」

そう唸ったとき、移動を開始する“デイフェンド”のコクピッド内に警報が鳴り響いた。—— 照準された!?

すかさずその場から飛び跳ね、窮迫して来た一発のミサイルを回避する。空中に逃げ

た先、頭上を一機の戦闘機が飛んで行った。——「スカイグラスパー」二号機だ。

図らずも「アークエンジェル」に接近した「デイフェンド」の迎撃に出ているのである。

〈こいつツ！〉

高速飛行する「スカイグラスパー」を追うように「ブリッツ」の姿が現れる。

トリケロスからビームが放たれ、ぎこちない動きだが、正確に「スカイグラスパー」はその砲火を回避して、はるか上空の射程外へと逃げて行った。

「二、コル……?」

〈良かった、ご無事でしたかツ!〉

損傷の甚だしい「デイフェンド」の姿を認め、ニコルが慌てたように声を放った。

「デイフェンド」と「ブリッツ」の二機が合流する。それも束の間、彼らの許に「アークエンジェル」から「ウォンバッド」が飛来した。上空より降り注ぐミサイルの雨に、既に盾を失っているステラは回避することしか出来なかった。だが、そうして「デイフェンド」が空中へ飛び出したところを狙うように、再度「スカイグラスパー」が迫って来ていた。

蒼と白のツートンカラーの戦闘機。背部には「エールストライカー」を装備して、機動力を上げている。

先に「デイフェンド」の頭上を飛び去った後に、大きく転回したのだろうか。機首をこちらに向け、今度はビームライフルを照準している。——あの敵は、撃つ気だ！

「いやだつ……!!」

殺されたくない——その一心で、ステラは接近する「スカイグラスパー」にビームライフルを構え返した。

そのとき——透明な敵戦闘機のコックピットに、若い兵士の顔が映り込んだような気がした。

コーディネイターの優れた視力は、敵戦闘機を駆る者の——少年の——、緊張に強張った表情までを鮮明に捉えていた。

「トー、ル……?」

刹那。ステラの記憶の中の少年と、その敵の面影が一致した。

ハツとして、彼女は我に帰った。

きさくなツール、やさしいツール、あかるいツール、民間人のツール——そんな彼が、どうしてあんな戦闘機に。

——やっぱりツールも、「アークエンジェル」にいるんだ……!! どうして……!!

戦争なんて無縁の世界に暮らしていた、穏やかな少年だったのだ。——だからきつと、今もひどく怖いだろうに、ひどく逃げ出したいだろうに、それでも彼はあんなモノ

に乗って戦っている。

——「アークエンジェル」を、ステラ達から守るために……？

唇をかみしめて、慣れない戦闘のさなか、必死で戦っている表情だ。

トールだって、きつとミリアリア達を守るために戦っている。そんな彼を撃つことは、そのときのステラにはできなかつた——

「あつ——」

そのときの彼女は、引き金を引けなかつた。

しかし、一方の「スカイグラスパー」からは、確実にビームライフルが放たれていた。一筋の光条は大気をイオンに変えながら、真つ直ぐにその場に漂う「デイフェンド」へ飛んで行く。

↑——下がってッ!!↓

瞬間——「ブリッツ」がステラの脇から現れた。

強引な形で、空中に漂つた「デイフェンド」の機体を吹き飛ばしたのだ。

一気に落下コースを辿る「デイフェンド」を他所に、「ブリッツ」はシールドを構え、放たれた敵のビームライフルを防ぎ止めた。

——ステラは、守られたんだ……。

ニコルが来なければ、きつと、今ごろは……。

想像すると、身が震えたステラであった。

しかしすぐに顔を上げ、ニコルの機体が「スカイグラスパー」に銃を突きつけているのを認めた。

「——これで終わりですッ！」

光条を弾き飛ばした「ブリッツ」は、すかさず突進して来る「スカイグラスパー」にトリケロスを翳した。

漆黒の盾内部から、抜き打ちにランサーダートを放とうというとき——

「——だめえっ!!」

通信越しに——少女の悲鳴が鳴り響いた。

勝利を確信していたニコルは、ハツとして顔を上げた。遠方に据える「アークエンジェル」の援護射撃——主砲である「ゴッドフリート」が、己をめぐけて飛来していたのだ。すっかり射程外からの射撃に、警報が鳴らなかつたようだ。

ニコルはすっかり青褪め、咄嗟にランサーダートを引つ込めた。何事もなかつたかのように「スカイグラスパー」は「ブリッツ」の脇をすり抜け、ニコルはすぐに右腕トリケロスに備えられた盾を翳した。

だが、流石の艦砲射撃を受け止めるだけの強度は「ブリッツ」にはなかった。

放たれた「ゴッドフリート」が——盾を構えようとした「ブリッツ」の右腕を一瞬して蒸発させ、吹き飛ばす。激しい衝撃がニコルを襲い、「ブリッツ」はそのまま墜落して、地上に叩き付けられた。

すぐに機体を立て直そうと操作系をいじったが、機体は、ぎくしゃくと身を起こしかけたところで動きを止めた。そのまま気の抜けた音が機体の中を駆け巡り——「ブリッツ」の眼から、紅い灯が消えていく。

「動力系をやられた……?! そんなッ——」

照準された警報音がニコルの耳に鳴り響く。主砲である「ゴッドフリート」が、なおもニコルを狙っていたのだ。

〈ニコル——!〉

「ッ……! あなたは逃げて、急いで!」

ニコルはすぐに、こちらへ駆け寄ろうとする「デイフェンド」を制した。

通信越しに躊躇った声が聴こえて来る。

〈でもッ……!〉

ステラは継るように、ぴたりと動きを止めてしまった「ブリッツ」に訴えた。

——いやだっ、ニコルがいなくなったら、ステラは、ザフトでやっていく自信がない

……!

それは、感情を憶え始めた彼女の、少女らしい駄々——わがままだった。

「僕なら大丈夫ですから!」

このまま沈黙を保てば、二機とも「ゴッドフリート」の餌食になるだろう。

自分たちは、まだ死ぬわけには行かない——遭難した孤島で、互いが互いに語り合った——自分達の「夢」を叶えるまでは。

「だから、早くッ!!」

柄にもなくニコルに怒鳴られ、ステラは後ろ髪引かれる思いで、その場から離脱していく。

その様子を、トールは上空より見つめ、そして撤退して行く黒鉄の機体を見送っていた。

「あの機体……なんで——?」

トールは怪訝な顔をしていた。

真正面から「デイフェンド」とビームライフルを構えあつたとき、あるとき「デイフェンド」が本気で引き金を引いていれば、きつと自分の命はなかつただろう。

——なのに「アイツ」は、引き金を引かなかつた……。

いつたい、どうして——?

トールは「デイフェンド」を深追いはせず、その場にしばらく滞空した。ややあつて「ブリッツ」のcockピッドが開き、中から赤色のパイロットスーツを着用した者が両手を上げて投降している姿を認めた。

アラスカまでは、もうすぐだ。

今回の戦闘も生き延びれた安堵感に駆られながら、トールは大きく息を吐いた。

その瞬間——世界が真白く閃いた。

すこし遅れて、轟音が鳴り響く。

遠方で、巨大な爆発が起こったのだ。

対岸の方角だ。凄まじい爆発は周囲の木々を薙ぎ、遠方に、天まで昇る巨大なキノコ雲を造り出していた。

「な、なんだ——!?!」

あまりの爆風に吹き飛ばされかける「スカイグラスパー」の機体制御を取りながら、トールは愕然として叫んだ。

咄嗟に、恋人であるミリアリアに状況確認を急かす。

猛火はまるで空を赤く染め、大気を赤く彩った。豪雨の勢いですら消せない炎は、なおも遠方に燃え盛っていた。

——あれはいったい、なんの爆発だ……!?!

ミリアリアの目の前で——“ストライク”に関するモニターがざっと乱れた。彼女はきよとんととして、再びモニターに視線を落とす。状況確認を求めるトールの声も耳に入って来ないほど、ミリアリアは愕然とした。

——まさか……。

モニターには——『SIGNALLOST』という文字が浮かんでいる。

キラの乗る——常勝の“ストライク”が、この瞬間に撃墜された。報告を受けた、トールの表情が凍り付いた。

『逢魔時の訪れ』

これまでの“ストライク”は、獅子奮迅の活躍を見せ、今回もまた“アークエンジン”に取り付こうとしていた“イージス”を退け、艦を護り抜いた。

——そして、まるでこれまでの因縁に決着を付けようとするみたいに、一騎討ちを望むかのように“イージス”と共に対岸まで飛び離れて行ってしまった。

ミリアリアは、ここまでを見ていた。把握していた。

「キラ……！ キラ！ 応答して、キラ……っ！」

ミリアリアは、懸命に声を荒げる。

世界が閃き、遠方に巨大な爆発が発生したその直後のことだ。“ストライク”との通信を繋いでいた映像は激しい砂嵐サンドストームに歪み、直後『SIGNAL LOST』という文字が据え置かれたのは。

——あのキラが、負けた……？

戦い——その終息を意味する静寂と沈黙が訪れた。“デイフエンド”を始めとする敵モビルスーツ隊は撤退し、鼻先の“ブリッツ”はパイロットが機体を放棄し、投降していた。再起が懸念される“イージス”もまた、再び襲い掛かって来ないところを判ず

るに、何らかの深手を負ったとみて良いだろう。

しかし、そんな安堵すべき現実とは裏腹に、ミリアリアの表情は、みるみる確信的な不安と焦燥に支配されてゆく。

まさか、思いもしなかったのだ。キラが——「ストライク」が撃破されるなんて。

こんなことになるのなら、キラともっと、色んな話をし合えば良かった。フレイとの一件があつてから、妙に疎遠だったのだ。ひよつとするとキラから距離を空けていたのかも知れないが、それでも、キラは自分達を守るためにずっと孤独に戦い続けて来てくれているのに——

「——『MIA』と認定されますか？」

頭のチャンネルを切り替えたように、ナタルから冷徹に言葉が発せられ、マリューは心外と云わんばかりの表情を浮かべる。

「MIA」とは、Missing in Action戦中行動不明の略称である。実質的には、軍内では「戦死」と形容するために用いられる言葉。単語の意味を察し、一同がしばし重たい沈黙に駆られる。しかし、そこに追い打ちをかけるような声が上がった。

「——「デイン」接近！ 会敵は15分後！」

マリューは我に帰った後、顔を上げ、唾棄するように云い捨てた。

「艦の修理を急がせて。離陸でき次第、この場から速やかに離脱します——」

それは疑いようもなく、キラ・ヤマト、および「ストライク」を見捨てるという決断だ。

「ヘリオポリス」の学生達から、猜疑の視線が一斉にマリューへと向けられた。温情に訴えかけるような視線が、突き刺さるように心に痛い。マリュー自身、その指示がどれだけ非人間的なものであるのか重々に承知していたが、

——譲れない……譲ってはならない！

そんな決意が、立場、彼女は背負わねばならないのだ。

「——こちらツール！ 爆発地点の確認に向かいます！」

納得できない少年からの通信に、マリューはぎよつと目を見開いた。

「ダメよツ、許可は出せません！」

「何の許可ですか!? シグナルが消えたからって……まだ、キラがやられたって確証はないんですよ！」

「それは「イージス」にも云えることだわ！ もし「アレ」がまだ動いているのなら、あなたに何ができるの!?!」

鋭い指摘だが、それは正しい物の見方だった。——常勝の「ストライク」を討つたとされる真紅の機体に、新米パイロット風情が太刀打ちできるのか？

そう云われたツールが、ぐつと堪えた面持ちになる。彼にもわかるのだろう。コー

「デインイターとコーデインイターの激闘を制した者に、ナチュラルの自分が叶うはずがないことくらいは。」

「当艦にはもう、これ以上のリスクを背負う余裕などありません」

「すくなくとも、十五分後には『デイン』との会敵も予想されている。ここで戦力を余計に失えば、その迎撃すら十分に行えないのだ。」

「云われたトールは、しかし、理解できても、納得できないこともあるようだ。」

「へキラを……見殺しにするんですか!?!」

「それは、いつか聞いたやりとりのように思えた。」

「これにはナタルが反論する。」

「指示に従え、ケーニヒ二等兵！ 文句なら後で聞きます！」

「殺生ですよ!?!」

「文句のひとつも云えない身体になりたいのか!」

「ナタルは徹底していた。」

「トールくん、今さらなのよ、なにもかも……!」

「語気を強めるトールの意見が、分からないマリューではない。彼女達が現実には天秤はかりに掛けているのは、艦の命運と、いちパイロットの生命だ。」

「勿論、出来ることなら、マリューとてキラの救助に向かってやりたい。しかし『どち

ら』を優先するべきかなど——トールを含めて——彼女達は既に『アルテミス』で決定づけているはずなのだ。答えなど、とうの過去に決まっています、たとえ命を賭して戦った者を見捨てても、この艦は生き延びなければならぬ。

——ずっと、そうしてやって来たのだ、自分たちの……この旅は。

民間人の少女を、軍事衛星に置き去りにしてでも、

敵国の民間人を、人質に取ってでも、

第八艦隊を、生き延びるための盾に使ってでも——。

どれだけ見苦しくても、絶対に生き延びなければならなかったから、そうして来たのだ。

「トール。おねがい……今は、艦長のいうことを聞いて……」

〈ミ、ミリイ……〉

剣幕に押され、ミリアリアが諦めたようにトールに促す。

彼女の中にも、トールは死んでほしくない、という思いが強かった。生死の分からぬキラのために、恋人である、トールまで失うわけには……。

——こんなにも、身勝手だなんて……俗物よね……。

友達のために、自分の恋人を危険には……やっぱり、曝せない。

そんな自分が、ひどく最低な女だと思ひ知るようだ。悔やみながら、それでも、今の

ミリアリアにはそう伝えることしか出来なかった。——仕方がない、ツールが出撃している間、彼女はずつとはらはらしていたのだ。

「オーブに連絡を入れます。——人命救助なら、あの国は引き受けてくれるわ」

今は、一縷の望みに賭けるしかないのだ。

この決断が、こののち「アークエンジェル」を平穩にアラスカまで送り届けることになる。

「クストー」に戻ったイザークは、状況が落ち着き次第、艦長であるモンローに食って掛かっていた。「イージス」に「ブリッツ」——二機がいつまでも帰還しないのである。

発令所に出戻つて原因を訊ねれば、二機共に、交戦途中に通信が途絶したとの報告を受けた。アスランの乗る「イージス」に至っては、シグナルが消失したとの報告も上がっている。

「——そんな莫迦な話があるか!」

イザークのがなり声を聞き付け、帰投した「バスター」と「デイフエンド」からも、

ディアツカとステラが、それぞれ発令所の前で足を止めた。

「奴等が……？ 奴等が、やられたっていうのか?!」

「だが、ふたりは不明で、これが今の現実なのだ」

冷静にたしなめられ、イザークはカツと頭に血が上るのを感じた。

そんな彼に比べると、ディアツカは冷静に状況判断が出来ているようである。血の気に滾った友の肩を背後から掴み止めると、諫めるようにその名を呼ぶ。しかし、すぐに「放せっ!」と乱暴に跳ねのけられてしまった。

なおもイザークは、艦長に喰い継るように吼えた。

「すぐにでも足つきの追撃に出る!」

「許可できない。キミ達には、ジブラルタルより帰投命令が出ている」

発せられた言葉に、ザラ隊の面々は虚を突かれた顔を浮かべた。——帰投命令? まだ、与えられた任務も完遂できていない、こんな中途半端な段階で?

それがラウ・ル・クルーゼの指令だと云うのだから、直属の部下である彼らに拒否権はなかった。

「ニコルがやられ、アスランも戻らない……! こんな状態で引き下がれと云うのか?!」
「そうして闇雲に出て行かせ、キミたちまで帰って来なければ、部隊を預かった我々の立つ瀬がないんだ、わかってくれ」

「なんだと!？」

「勝算はない——そうだろう! 赤ならば、そのくらい分からんか」

冷淡に放たれた言葉には、イザーク達に対する失望が混じっていた。

そもそも、五人がかりで沈められなかった艦を相手に、今さらイザークが出て行つたところで何になる？

たしなめられ、イザークは顔を真つ赤にしたが、それ以上の反論は出来なかつた。その代償として、発令所を出た後、すぐの廊下で痲癩を起こした。

「どうして奴等がここでやられなきゃならない!!? 伊達に赤を着ているんじゃないんだぞ、ええっ!？」

怒りの矛先は——完全に八つ当たりである——彼の背後の人物に飛んでいた。

いつも当たれるアスランもいず、ニコルもない——それでも、ステラが、彼らの後に距離を置いて続いていたのだ。

鋭い目に睥睨され、ステラはびくりと肩を竦めた。

「ニコルと共にいたんだろう……!!? なんてあいつを守つてやらなかつたあ!？」

「……!？」

「イザーク、よせよ!？」

ディアックも、このときばかりは仲裁に入った。いつも斜に構えている彼らしからぬ

対応である。

「ステラを咎めたって、何にもならないだろう!? こいつだけが悪いわけじゃない!」
「落ち着かんさ! こいつ、よもや手を抜いてたんじやないだろうな、足つきに——」

「——ッ!」

ディアツカの声が響くよりも先に、少女の小さな掌が、イザークの左頬を叩き飛ばしていた。

いい音が、響いた。

「——自分だって、何にもできなかつたくせに!!」

少女の中で抑えられていた感情が、そのとき、たちまちに噴き出していった。

ステラが、イザークを叩き飛ばしたのである。あまりにも不躰な言葉を放った、その責任を取らせる形として。

——陸にすら辿り着けなかつた者が、偉そうに!

仮にも「アークエンジェル」に容赦をかけて、その結果、アスランとニコルを失った?
——八つ当たりにしても、おかしな論理だ。誰が好きこのんで、敵軍のために家族を犠牲にするだろう。

少なからず、ステラは自分の感情を爆発させていた。まるで見たこともない様子だと、ディアツカも驚いて目を遣った。彼女の瞳には大粒の涙がたまっていった。それを見

て、「そうか」と改めて考えさせられる。

——こいつも、悔しいんだ……。

それはそうだろう——。彼女は、アスランに続いて、ニコルまで失った。

元々、クルーゼ隊の補充要員として加入したステラに対して、イザークやディアツカからの風当たりは辛辣なものだった。特に、彼女の経歴そのものが気に入らないイザークから見れば、それでも兵としての優秀さを見せつける彼女は余計に腹立たしい存在であつたのだ。

そのようなクルーゼ隊の中で、ステラが頼ることのできた人物と云えば、アスランとニコルくらいのものだ。それらが同時に失われたとなれば、彼女だつて激情のひとつやふたつ、憶えていても道理なのだ。

というより、今まで、彼女をそんな立場に追いやることしかしていなかった自分が、なんだか情けなくさえ思えてしまう——まるで大人げなかった、そのうえ、それが女の子に対しての振る舞いだったろうか？

——どうして、もっと早くに気付いてやろうとしなかった……!?

経緯はどうあれ、彼女もまた、肩を並べて出撃する仲間であつたということ。

このときにディアツカは改心していた。

「……なに、するんだッ」

叩かれた箇所を抑えながら、イザークが悔しそうにキツと顔を上げる。

ステラはハツとして、彼をぶった左の掌に目線を落とした。それきり、ばつが悪くなつたように俯き込んでしまう。

他人を殴つたことに、ステラ本人が、誰より驚いているのである。

見かねたディアツカが、皮肉屋らしく振る舞うことも忘れて仲裁に入る。

「問題ない、今のは、イザークの失言だ。——でもな、イザークだって悔しいんだ、わかってくれ」

「あ……うん……」

「ディアツカ……!?!」

得心を誘い、次に彼はイザークの方を振り返る。

「オレ達が今ここで云い争つたつて、何にもならない。そうだろ、イザーク」
「……くっ」

エリート育ちで殴られた経験があまりないのだろう、イザークは心外な頬の痛みを必死で堪え、それでも、目は正直で、真つ赤に涙を溜めていた。乱雑な動きで振り返り、すぐにその場から立ち去ってしまう。

ディアツカもまた、フォローを入れるような形で彼の後に続いた。

取り残されたステラは茫然として、自身の手を見下ろしていた。イザークをはたいた

掌が、ジンジンと痛む。

「……………」

叩かれた方は、たしかに痛かっただろう。

でも、叩いた方も痛かったのだ——色々と。

「なく、った……」

無意識に、手が出ていた。

ステラは、戦闘時以外のシーンにおいて、こうも激しく感情に火を灯した経験はなかった。エクステンデットにとって、感情はひどく機械的で、義務的なものでしかない。一個の生命体・被験体としては、付属品のようなものと云ってもいい。

彼女にとってかつての毎日は、無機質なものでしかない。情緒はあまり必要とされなかった。

強化人間としての機械的な訓練漬けの日々は、確実に、彼女から人間らしさを取り上げ、完成された戦闘兵としての研ぎ澄まされた感覚を養って行った。ロドニアのラボは遊園地みたいな場所だった、いろんな機械や施設があったからだ。モビルスーツ操縦のシミュレーターや、対G訓練のための装置。身体のどこかには、いつだってセンサーが付けられていた。

そんな自分が、いま、自分の意志で手を奮った。

正当防衛でもなんでも無い、自分の、単なるわがままで。

——ステラは、悔しい、の……だろうか……？

きつとそうだ。

でなければ、たつた今手が出るはずがないのだから——。

感情に身を任せて、行動を起こす。

それが、ひどく懐かしいようで、それでいて、とても新鮮に思えた。

オーブの飛行艇——

現場を離脱した“アークエンジェル”より人命救助の信号を受け、オーブは中立国として、遭難者救出のための救援隊を太平洋の島々に遣わせた。その中には、カガリ・ユラ・アスハの姿も、レドニル・キサカの姿もあった。

彼らは激闘から翌日、その島で起こった戦闘の後片付けをする形で島に上陸。島の沿岸部に、大破した——正確には、装甲部がおおきく灼けて爛れた——“ストライク”と“イージス”を発見した。両機とも、何らかの爆発に巻き込まれたのだと思われる。

「キラがない……？」

“ストライク”のコクピットを調べても、中は無人だった。

そこに、キサカが声を上げる。

「『ストライク』は——背中の損傷が著しいな。いつたい、何があつた……う？」

大破した『ストライク』は、さまざまな部位が飛散している状態で発見された。それでも、そこらに散らばっている、何がどのパーツであるのかの判断はつく。粉々に爆散した、というわけでもなかった。

キサカが気になったのは、換装を取り柄とするその機体が、何のバックパックも背負っていないこと。

ストライカーパックの機体が、どこにも見当たらないということだ。破片すら散らばっていないことを見ると、それだけが跡形もなく爆散したか、初めから背負っていないのか——。

「まさか、丸腰で『ゴイツ』ゴイツスと戦ったわけでもあるまい」

相討ち？ ——この言葉が、状況を察したキサカの頭に、真つ先に浮かんだ。

一方の『イージス』は、『ストライク』よりも大破を免れていた。人型としての原型は留めていたのである。それでも、装甲部は大きく灼き尽くされ、とても動くような状態ではない。

考察するようなキサカの独白を、傍らのカガリも聞いていた。カガリもまた、不審がるように状況を推理していた。

キラには先日、新装備であるフォートレスストラライカーを与えてある。

——あいつ、まさか使わなかったのか……？

あれこれと考えつつ、周辺を搜索した彼らは、やがて——海岸に倒れるひとりの少年を発見する。

赤いパイロットスーツ、ザフト兵だ。

大きなヘルメットの合間から、黒髪を覗かせる——端正な少年だった。生存していたアスラン・ザラは、そのうち、オーブの飛行艇に収容された。

アスランが目を覚ましたのは、その日の夕方になってからだだった。

周囲に気配を感じ、身を起こしたアスランは、傍らに、金髪の少年が立ち据えていることを把握した。

「——誰だ？」

目を覚ますなり、アスランは不躰な質問を口にしていた。自覚はなかった。

意識がまだ朦朧としているのか、記憶が定かではない。——自分は、なぜこんなところにいるんだろう？

どうやら、見知らぬ艦艇の中のようなのだ。

——俺は、生きているのか……。

段々と意識が回復してくるに連れ、状況が判断できるようになってくる。

部屋には監視カメラが仕掛けられ、レンズの先は自分に固定されていた。自分は今、監視下にあるようだ。ただし、拘束されていないので、捕まった先は地球軍ではないようだ。僥倖だった。

カガリは歩み寄り、見知らぬ少年に向けて言葉を放つ。

「ここはオーブの飛行艇の中だ、我々は浜に倒れていたおまえを收容し、保護した」

「……オーブ？」

その手には、拳銃が握られていた。

カガリとて、捕虜に向かって、いきなり拳銃を突きつけるような真似はしなかった。それでも、銃の安全弁はしっかりと外していた。目の前の捕虜がおかしな行動を走った暁には、撃つ気は十分にあるということだ。

一方のアスランは、騒ぎを起こすのも勘弁願いたく、それ以前に、起き上がる気力すら湧かない気怠さに苛まれていた。茫然と、それでいてゆったりと、アスランはその場の上に体を起こした。

「中立のオーブが、何の用だ？ ……それとも、オーブは地球軍の味方だったか……」

侮るような口調で吐き捨て、カガリが一瞬、堪えたような表情を作る。

「おまえに、訊きたいことがある」

「尋問……?」

「おまえは…… “イージス” のパイロットだな?」

断定は出来ているだろうに、カガリは丁寧に事実を確認している。

なにせ、彼らは初対面なのだ。お互いが互いに、どんな人物であるのかを推し量るところは出来ない。

「—— “ストライク” はどうした?」

カガリは、訴えるようにアスランを質した。

「地球軍所属の艦艇から、人命救助の信号が発されていたんだ。近隣のオーブはこれを探知し、要救助者の捜索に向かった。わたし達は、その先で大破し、灼け爛れた “イージス” と “ストライク” を発見した」

報せられる言葉に対し、こいつは何を云っているんだろう? と、ふとアスランは疑念に思った。

「大破した “ストライク” と言う、揺るぎない証拠をその眼で見ているのなら、現実の事実は、それが示した通りではないのか? ナチュラルの頭には、それすらも理解できないのだろうか——?」

「質問に答えろ! “ストライク” のパイロットはどうした!」

パイロット、その言葉に一瞬だけ、アスランの肩がぶるりと震えた。それをカガリは見逃さなかった。

「見つからないんだっ、キラが……！ オマエのように、脱出したのか!? それとも……」

「あいつは……オレが墜とした」

口籠るカガリの言葉を遮るように、短い言葉があつさりと放たれた。

カガリは目をむいた。愕然として立ち尽くし、やつとのもことで、口から震えた声を絞り出す。

「どういう、ことだ……?」

「“ストライク”は、オーブで手配された新装備ごと、破壊した……」

ちやつかりオーブのことを皮肉りつつ、アスランは俯きがちに、その先を続けた。

アスランの云う通り、当時、アスランが操縦していた“イージス”は、“ストライク”を相手に尋常を超越した速度でビーム・サーベルを振り抜いた。

「機体の背後に回り込んで、バックパックごと、あいつを切り裂こうとしたんだ——」

雷鳴が轟く曇天の下——

アスランは完全に敵を制した動きで“ストライク”の死角まで回り込ると、無防備な背後より、ビーム・サーベルを出力して掛かった。

そしてそれは、完全にキラの虚を突いた一撃であるはずだった。

アスランの振り抜こうとした光刃は、すでに半壊し、所々で回線がショートしていた例の“フォートレス・ストライカー”を、何よりも真つ先に切り裂いた。

その瞬間——巨大な爆発が起こった。

おそらく、ビーム・サーベルの炎熱が“フォートレス・ストライカー”内部の断線に触れ、干渉し、思いがけない誘爆を引き起こしたのだろう。

今のアスランに思い出せるのは、そこまでだ。凄まじい衝撃と爆発から機体を守るために“イージス”のフェイズシフトは全開され、機体はやがてすぐにエネルギーが落ちた。為す術がなくなったアスランはコクピッドから離れたが、不覚にも気を失い、その場に行き倒れたのだから。

反芻する内に記憶が少しずつ鮮明に蘇って来て、アスランは無意識にひとりごちる。

「そう———いつたい、どういう動力が用いられていたんだ？ “ストライク”のあの新装備———あれの爆発にオレまで巻き込まれたんだぞ！」

「そんなことはどうでもいい！ おまえが、キラを殺したっていうのか……!?!」

「おまえ、あいつを知ってるのか……?」

キラを殺した——

ようやくその実感が湧いて来たのか、アスランの表情が、やや悲痛な面持ちになって

いく。

「爆発に巻き込まれたのは、あいつも同じさ。だが、あいつは“それ”をすぐ背中に背負っていたんだ、助かったとは、到底思えない……」

アスランの見舞った一撃が、誘爆を引き起こし、キラを葬ったのだ。

確かめるようにアスランがそれを反芻していると、カガリの方が、しびれを切らしたように彼を怒鳴りつけていた。

「そんなのつ、まだ分からないじゃないか！」

「……!?!」

「キラはおまえと同じように、爆発に巻き込まただけだ！ だったら、まだ……!」

「だが、発見されていないんだらう？ ……オレは“ストライク”を破壊するつもりだった。願ったり叶ったりさ……!」

「きさまー!」

カガリはにじり寄り、勢いに身を任せ、拳銃を突きつけた。

「遠因のひとつは、おまえたちにもあるんだ……!」

「なに……?」

「おまえ達だって、あんな危険な装備を造って、あいつに使わせたじゃないか……! 咄嗟のことで誘爆するバツクバツクなんて、危なっかしくてオレは見たことがないぞ」

咄

「あれは、ムチャクチャ複雑な構造をしていたんだ！ 今のオーブには色々と手に余る技術を搭載していたから、安全性はたしかに、他の装備よりもずっと低くなつてたかも知れない……」

と、エリカ・シモンズは云つていた。

しかしその分、大容量のバッテリーが搭載され、その分だけ豊富な火力を有していたのである。

「——でも！ それもこれも、あいつがこの先、死なずに戦つていけるようになって……！」

たしかに、フォートレスストライカーは、まだまだ未知の要素が多く含まれた装備である。おおよそ数年先の未来からやって来たとしか思えない『祖先』——『黒鉄の巨人』は、当世の技術力では実現しようのない、複雑で画期的な構造を持つていた。

フォートレスストライカーは、そこに搭載されたエンジンやバッテリーのアイデアを流用して、あくまで間に合わせで急造したバックパックに過ぎないのだ。

いまだ解析できていない部分の多い武装だけに、一定の安全性は保障されていたが、それでも、どこでどう誤作動を起こすかは技術部でも解析できていなかったのである。カガリは云うが、アスランはびしゃりと「あれは導線の長さの分からない火のついた爆弾だった」と返した。

「ナチュラル風情が、小手先だけであんなものに手を出すから！ オレはその杜撰な結果を、この目で見て来ているんだぞ！ 今回だつてそうさ！」

ビクトリアでこのことを、アスランは持ち出した。

あのときもまた、ナチュラルは本来ならば無敵であるはずの『黒鉄の要塞』を、完全無欠に運用できていなかったのだ。

「そんなの知るかよ！ そもそもは——っ」

カガリは我を忘れたように、アスランに掴みかかった。

アスランの云う通り、このように未練がましい結末は、フォートレス・ストライカーの不備が招いてしまった技術的な事故——という表現も出来る。

しかし——

「そもそもは、おまえささいなければ——！」

失調したように、カガリは涙ぐんだ瞳で、アスランに掴みかかる。

間近で見れば、その少年は、ひどく端正な顔立ちをしていた。麗しいほどの黒髪は、夕日に照らされ、蒼くさえ見える。澄んだ翡翠色の瞳が、わずかに悲しげな色を含んでいた。中性的で、隅々まで整った十全の顔立ちには、感情による後悔と使命による達成感の中で、板挟みになっているようにも見えて映った。

「キラは……危なっかしくて、わけわかんなくて、でも優しい！ いいヤツだったんだぞ

！」

「知ってるよ……！」

カガリは唾然として、アスランに視線を遣った。

「友達だったんだ……キラは……」

「ともだち……？ おまえが、キラと——？」

「一緒に来いと、前にも呼びかけた……！ あいつはコーデイネイターだ！ オレ達の仲間なんだ、地球軍に居る方がおかしい！」

「……！ そのおまえが、なんでキラを殺すんだよッ!？」

「オレだって撃ちたくはなかったさ！ 幼い頃からの、掛け替えのない親友だったんだ……！」

しかし、アスランとキラの道が変わることはなかった。

「おまえの云う通り、昔から危なっかしいヤツだった……！ オレがついてやらないと、頼りなくて、優秀なのに甘ったれで——オレの云うことは何でも『ためになる』って、聞き入れてくれるヤツだったんだ……！」

なのにつ、とアスランは悲嘆した。

「あいつは変わった！ オレが何度も呼びかけてやったのに、あいつはオレの所に来なかった！ だから現実には、あいつのためにならなかった！」

(こいつは、自分が正しいと信じて疑っていないんだ……!?)

カガリは対話する中で、段々この少年が見えて来た気がしていた。

この少年は、自分が正しいと妄信しているから、それ以外が判らないのだ。だから、キラがザフトに来なかった理由が判らないのだ。

「現実を招いたのはおまえなのに、逃げるような言い方をして……!」

「あいつはオレの家族を傷つけ、仲間も殺した! 敵なんだ、今のあいつはもう!」

「キラだって、守りたいもののために戦ってたさ! なのに、なんで殺されなきゃならない!? それも、友達のおまえに……!」

カガリは居直り、再びアスランに訴えかけた。

「殺されたから殺して……殺したから殺されて——それでホントに、最後は平和になるのかよ!」

「なるさ……ッ! みつともないナチュラル共が滅びれば!!」

「……ッ! バカヤロウツ!!」

たまらなくなり、カガリはアスランをベッドに叩き付けた。

アスランの端正な顎先に拳銃を突きつけ、悲鳴のような声で訴える。

「なんでそういうことになる……!?! どうしてそう暗いんだ!?!」

「暗い!?! 何がッ! 軍人は誰だってそのために、そう信じて戦っているんだぞ! ——

——中立国風情の、それも……おんな？ あつ、きみには分からないさ！」

目の前にある胸の膨らみを眇めた後の言葉が、突然、丁寧になった。

一緒にくたに侮られ、カガリは血が湧くような怒りを覚えた。

「私だつて戦つていたさ！ ザフトから自由を取り戻そうと、誓い合つたやつらと一緒に——命賭けでな！」

「自己満足のひとつ憶えだ！」

アスランは、目の前の少女を否定した。

「生身の感情に訴えるだけで、きみは何もわかつてない……感情論に突き動かされるのは俗人だけだ！ オレは軍人だ！」

侮られ、カガリは自分の血が沸き立つのを感じていた。かつて、ここまで他人が憎いと感じたことはなかったのだ。カガリ自身が長らく疎み、直接対話する機会にも恵まれたアンドリユー・バルトフェルド——彼に出会ったときでさえ、ここまでの怒りが沸かなかったというのに。

この少年の、どこまでも正しさに溺れた口数を減らしてやりたい。今すぐにトリガーを引き、キラの仇を討つてやりたい——！

「撃ちたければ撃てばいい！ そうすれば、きみにも少しは実感できる——！」

カガリの心のうちを見透かすような口調で、アスランは叫ぶ。

「その銃は飾りじゃないんだろう……!? そこにあるトリガーは、憎むべき相手を討つために存在しているんだ!」

正当防衛のため——

あるいは、守りたいものを守るために銃が存在すると唱える者がいる——しかし、戦時においては所詮、空虚な理想論だ。

「『敵である者は撃たねば何ひとつ守れない』——それが今、オレ達がやっている戦争なんだ! ——何か違うか? おかしなことを云っていると思うか!？」

違わない、そうさ——とカガリがまた、胸の中で彼の言葉を認めてしまう。

だからカガリも、リビアでは銃を取ったのだ。敵を滅ぼすためではなく、守りたいものを守るために——

拳銃を鼻先に突きつけられてなお、アスランは物怖じすることもなく言葉を続けた。

「だが、その敵が友達であると分かった途端に、きみだって最初はこう云うんだ——『話が違う』と!」

みずからがその立場に置かれたとき、果たして自分はどうかだろう——

云われるままに想像してしまい、カガリがくつと少年の言葉に怯む。それを是と取ったアスランは、さらに確信して云い募った。

「いいや、何も違わなかった……! オレにとって、今のキラは地球軍に味方した敵でし

かなかった……！ なら撃つしかないじゃないか！」

カガリが声を荒げているのは、単純な義憤からでしかない。

しかし、親友が親友を殺す——その事実当事者でもない彼女が口を挟む権利があるのか？ アスランを糾弾する資格があるのか？ アスランとキラ、既に彼らの中で割り切れている問題に、アスランにとつて——どこの馬の骨ともしれない、初めて出会う、こんな女に……？

(こいつ、気安くないか……！)

そもそも、目の前の少女が誰で、どんな経歴を持つているのか、アスランにとっては知ったことではないのだ。

そしておそらく、この先、この少女と出会うこともないのだろう。

たったそれだけの人間に、なぜ、自分が信じてやって来たことを真つ向から否定されなければならぬ？ キラはコーデイネイターだ。なのにキラは、ナチュラルの味方をする道を選んだ。その選択がそもそも間違っていたのに、この少女は、さながら今のアスランが間違っているかのような言葉をぶつけて来る——

——オレは間違っていない、きつと……！

アスランはそう信じて、疑わなかった。

カガリはすんでのところだと思いとどまり、アスランの襟元から手を離すと、振り向い

て壁を大きく殴りつけた。喚くように悲嘆し、その場で叫び捨てる。

「ちがう……ッ！」

親しき者の死を悼むこと、仇を討つことは、まったくの同義ではない。

少年との査問を終え、カガリは事態の全てを理解して、それでも気を鎮め、掌の銃を手放すことしか出来ない。

憎しみや怒りに身を任せ、この場でこの少年に意趣を返しては——それは、カガリ自身で彼の言葉を肯定することになるからだ。

——殺されたから殺して、殺したから殺されて、それで平和は絶対に訪れない……！
——わたしは、こいつのようにはならない……！

必死でそう言い聞かせ、カガリは銃をすんでの所で撃たずに堪えた。

やがて、飛行艇がオーブに入国するよりも前に、ジブタラルタルからザフトの飛行艇が一隻、アスランを迎えに上がった。

軍人のたかがひとりを相手に、飛行艇を用意してくれるとは何事だ、と思ったが、どうやら、先日の戦闘で“ストライク”を撃破したアスランには、ネビュラ勲章が与えら

れるそうである。

——ではこれは、その待遇の結果か……？

ネビユラ勲章のことを、飛行艇のコパイロットから聞かされたアスランは、妙に複雑な気持ちになった。

「しゃんと胸を張れ、良い働きをしたんだぜ、きみは」

コパイロットの中年の男は勝ち誇って笑い飛ばす。が、正直なところ、親友を討つたことが功績と云われても、素直に喜べない自分が、アスランの中には確かに存在していた。

アスランはジブラルタル基地に帰還し、クルーゼ隊の面々と再会を果たすことになった。

驚いたことに、イザークにディアツカが迎えに上がり、その奥にステラが据え、再奥には久しく思えるラウ・ル・クルーゼの姿も認められた。

イザークとディアツカと会釈を交わし、アスランは歩を進める。今まで嘘を吐いていたことから、ステラからはすこし目線を逸らしてしまっただが、それでも、アスランが生きていたことに彼女はすこし喜んでいようだった。心から喜べていない様子は、目に見えて明らかであったが。

彼女の横を通り過ぎ、銀色の仮面を着用した上司の許に足を運ぶ。

「——ご苦労だった、アスラン」

「……いえ」

アスランは謙遜して答えた。

隊長の責務を、真つ当出来たとは思えないのだ。

結果的にアスランは、ラウから預かった隊員のひとりである、ニコルを失ってしまったのだから。

「いや、キミは十分によくやってくれた。どうやら、女神の盾イージスがきみを護ってくれたようだな」

詩的な冗談だが、無機質な仮面の男が放つから、まったくの感銘が受けられない——
そう思うのは失礼だろうか。

「出戻って早速わるいが、お父上が『ブランド』の評議会議長に就任なされたことは知っているかな？ 議長閣下から、早急に『ブランド』に戻って来るようご命令だ」

「えっ」

「私としては残念だが、今日付けで、キミは私の隊から離脱し、評議会直属の特務隊パイロットとなる——トップガンだな、アスラン」

「特務隊、私が……？」

その報告に驚いたのは、アスランだけではないようだ。

背後のイザークやディアッカもまた、面食らってその報告を聞き留めている。——だが仕方ない、無敵とまで云われた「ストライク」を、たったひとりで撃墜したのだから。「新鋭のモビルスーツが完成している。キミは、そのパイロットに選ばれたのさ。上官として、誇りに思うよ」

クルーゼはそう云って、早速移動の準備に取り掛かりたまえ、と云い伝えた。それきり踵を返して、基地の中へと戻って行く。

イザークとディアッカも、アスランの横を通り過ぎながら、思い思いに言葉を発する。「ふんっ、貴様が特務隊とはな」

「大抜擢ってやつ？　こころも差が開くと、こつちもいくらか落ち込むぜ」

「今度は俺が貴様を部下にしてやる、それまで、死ぬんじゃないぞ」

彼らの態度が、丸くなったように思えたアスランであった。

自分が留守の間に、なにか心境の変化でもあったのだろうか？

素直に認めてくれるなんて、珍しい。

「……アスラン」

掛けられた声に、アスランは振り返った。

ステラが、上目遣いでこちらを見上げていた。

「……キラ、は……？」

掛けられたのは、悪夢の質問だった。

それは、アスラン自身が、彼女にずっと吐き続けて来た虚構の話――。

――「ストライク」には、別のパイロットが乗っている。

ステラはそれが作り話であることを、このときすでに、知っていたのだ。

「……………」

「こたえて……………」

「あいつは……………」

アスランは喉奥に力を入れたが、やがて、飲み込んで視線をそらしてしまった。

弱々しい声で、告白する。

「あいつは……………っ、もういない――……………」

その場に、沈黙が流れた。

目を背けたまま、アスランにとって、どれだけの長く感じられる時間が流れただろう？ 数秒か、数十秒か、果てしない後ろめたさに苛まれながら、アスランは歯噛みした。重たい沈黙を破ったのは、ステラだった。

彼女が、つかつかと、怒ったように忙しい歩調で歩き出したのだ。

そうして、アスランの眼の前を通り過ぎるとき、

「――うそつきッ」

云い捨てて、背を向けて基地に戻って行く。

小さな背中を見送りながら、アスランはひとり、その場にごちる。

「どうして、わかってくれないんだ……」

寂しい風が吹き抜け、アスランはつぶやいた。

その嘘は、彼女のために吐いたものだったはずなのに――。

彼女が、これから戦いやすいようにと――最大限の配慮だったはずなのに。

――どうして、こうなってしまうんだろう……？

今のアスランには、分からなかった。

この瞬間から、アスランとステラ――ふたりが会えることは、しばらくなかった。

ふたりは、知らなかった。

太平洋最北部の海域――アラスカ半島の先、ベーリング海――。

雄大な飛瀑に包み隠された巨大ゲートの先に、地球連合軍統合司令部――『JOS

H―A』は構えられていた。

内部には空洞が広がり、人工地盤によって建てられた地球軍の本拠地は、核攻撃にも耐えうる堅牢さを持つ、と技術者のひとりは語るが、核が封じられた今のご時世では、何

の利にもならない情報である。

大きく損傷した「アークエンジェル」は、ようやく、この基地に辿り着いていた。「——まさか、辿り着くとは……」

噂に聞く大天使が、入港する模様を、将校のひとりがモニターで眺めていた。

「宇宙から遙々、ですか？ ハルバートンの執念が守ってでもいるのでしょうか」

「守って来たのは、コーディネイターの子供たちですよ。片割れは大物と来た」

「そうはつきりと仰られるな、サザーランド大佐」

皮肉がちな苦笑が、場に蔓延する。

彼らには、歓喜の情はない。あるのはただ——珍妙がつて見る好奇の視線だけだ。

「しかしまあ……『ディフェンド』や『ストライク』共々、アラスカに辿り着けなかつたとは。なんと云うか、さいわい——でしたな」

「何を云われる？ 『ストライク』はそうであれ、『ディフェンド』のパイロットを手放したことは、実に口惜しい……」

「仰る通り。よもや『ザラの娘』などと……その存在に、どれだけの利用価値があったのか。手放した時点で奴等は無能です」

そう、結局「アークエンジェル」がアラスカに送り届けたのは、コーディネイターの捕虜と、「ブリッツ」のたった一機だけなのだ。

「GATシリーズは、今後我々の旗頭になるべき代物です。それがコーディネイターの子供に操られていたとあつては、話にならない」

「たしかにな……しよせんはヤツらに敵わぬものと、喧伝しているようなものだ」

ウイリアム・サザーランドは、深げな言葉を発した。

「昨日未完成の技術も、明日にはより良く改善される——我々には、それだけ力があるのです。あらゆる技術は受け継がれ、さらに発展していきます。今度こそ、我等のために」

その言葉に、頷きが返される。

「例の兵器は、使えそうですか？」

「使い手が幾分、不足してはいますが……なに、時間稼ぎには十分でしょう」

「すべては、青き清浄なる世界の為に」

暗澹な笑みが、場に交錯した。

『スピットブレイク』A

アラスカに辿り着いた“アークエンジェル”だったが、彼らに対する軍上層部からの待遇は冷ややかなものだった。

基地司令部に入港し、すでに数時間が経とうとしているが、全クルーには依然として艦内での待機が命じられていた。基地内に降り立つことすら許されず、友軍だというのに、まるで捕虜のような扱いではないか——と、クルー達の心情はしごく正当な不平と不満に溢れた。

捕虜と云えば、“アークエンジェル”に投降したニコル・アマルフィもまた、今も独房の中に閉ざされたままだ。

捕縛された当初、ニコルは散々この艦を苦しめて来た“ブリッツ”のパイロットというところでクルー達から険悪な目で睨まれたり、ニコル自身がまだ幼さを残した容姿だったこともあり、妙な好奇の視線に晒されたりもした。ある意味ではクルー達のひろい興味の対象であったニコルだが、今ではその興味もすっかり鳴りを響め、独房は静まり返っていた。

以前はトールやミリアリア、サイと名乗る——軍人らしからぬ物腰をした少年が、ときたまにニコルへと話しかけて来ることがあった。

ニコルは聴かった。従順にして柔軟な彼は、驚いたことに「独房の中の捕虜」という立場に順応して見せていた。敵軍の独房に放り込まれたからと云つて、抵抗することも、周囲に当たり散らすこともない。それどころか、もともと彼の中にはナチュラルに對する偏見や敵愾心の要素はなく、トールたちにも平穩に会話して見せた。それが好印象に映つたのか、それからは数度に渡つてトール達と話す機会に恵まれた。

「ナチュラルだつて、同じ人間だもんな」

これまでニコルが、武器のスコープ越し以外には見ようとしなかつた敵艦——
“アークエンジェル”の搭乗員たち。

しかし、対面し、言葉を交わし、そこで初めて『敵』という存在もまた「人間」であることに気付く。ナチュラルもコーデイネイターも、互いに会話することはできるのに、人種というたつたそれだけの差が、なぜ戦争になんて発展してしまつたのか？ ニコルは今になって、もつとも根源的な問題に突き付けられた気分になつていた。

今日は、独房に誰も来なかつた。

進んで独房を訪れる物好きもないが、今朝早くから、食事を運ぶ係すら来やしない。贅沢を云える立場ではなかつたが、ニコルはそれが不審だつた。

もしかすると、忙しいのかもしれない。——艦の振動も収まったようだし、どこかに辿り着いたんだろうか？

そのとき、かすかな布擦れ音が耳に入った。

ニコルはくいつと顔を鉄格子の方に向けると、格子の向こう側に立つ、ピンク色の制服を着た少女の姿が認めた。それは、ニコルの見たことのない人だった。年齢はきつと、ツールやミリアリアとそう違わない。

「――」

その少女は、ナチュラルと思うにはあまりにも可憐だった。艶やかな長髪は、燃えるような赤色に染まっていた。

高貴さを漂わせる整った顔立ちに、育ちの良さから形成された上品な物腰をしている。ハーファアップの髪型が似合った絶妙の佳人は、おそらく、何人が見ても良家の令嬢であると判断できる。

フレイ・アルスターが、ニコルの独房に顔を覗かせたのだ。

「ねえ」

フレイが声を発し、幼少より音楽に培ったニコルの優れた聴覚が、その声に反応して見せた。

（今の声は？）

ニコルにとって、彼女の声は、いささか「聞き覚え」がありすぎた……いや、正確には「聞き間違ひ」でしかないのだが、その声はニコルの知る少女のそれに、あまりにも酷似していた。

フレイは格子越しに、淡々と言葉を発する。

「あなたは格子越しに、淡々と言葉を発する。『あなた ブリッツ』のパイロットなんですよ？　『ヘリオポリス』を襲ったのも、あなた？」

この少女は、自分を咎めようとしているのか？

初対面であるだけに、気まずい空気に駆られる。しかし、言い訳も言い逃れも、この状況では何の意味も成さない。素直なニコルは、澁々とその質問に答えていた。

「そうです……。あなたは？」

「『ヘリオポリス』で暮らしていたの」

ニコルが、見惚れていたほどの少女の面から目を背けた。気まずい沈黙がややとして流れ、フレイは持ち出すように本題を放った。

「艦の揺れが収まったでしょう？　『アークエンジェル』ね、アラスカに辿り着いたのよ」

それは、独房に食事係すらやって来なかった原因だった。艦内は慌ただしく、捕虜の身に構っている余裕などなかったのだろう。

「それであなたの処遇を伝えるようにって、上官のひとつから云われて来たんだけど」
アラスカと云えば、地球軍の本拠地の構えられている場所だ。

そのような地点に連行されたザフト兵が如何な処罰を受けるのか、ニコル自身は想像するに容易く——フレイは、それと同様の内容を口にした。

「——銃殺刑」

囚われのニコルを待ち受けるのは、処遇ではなく——処断でしかなかった。つまり、彼は事実上、この瞬間に死刑を言い渡されたのだ。

目に映る視界が、真つ暗に霞んでいく。抵抗する術のない少年は、その場に震え上が、絶望に面を青褪めさせた。

フレイは悪びれた様子もなく、やがて膝を抱え、格子の前に屈み込んだ。

「——つて、そう伝えに来るのが、わたしの本来のシゴトなんだけど」

「えっ?」

フレイは、妖艶と微笑んだ。

ニコルは怪訝に思つて、吸い寄せられるように、その少女を見遣る。

「——ねえ、ここから逃げたい?」

秘密めかした提案に、衝撃に駆られた。

「いいんですか……!?!」

「しーっ」

独房の中、大声を出して目立つのは、誰が考えてもまず怪しい。

フレイは唇の前に指を立て、いらざらっぽく微笑んで見せる。それが立場上のニコルには、女神の微笑みのようにも見て取れた。

「銃殺刑なんてあんまりだもの。わたしはね……『こんな戦争が早く終わればいいな』と思つて、軍に志願したのよ。わたしのように哀しい想いをする人が、これ以上増えないように、つて……」

少女の口から語られたのは、紛れもない事実。

その姿勢に共感できるものがあつたのか、ニコルは感嘆していた。

「それは、僕もですよ……」

「だから、私が脱走の手引きをしてあげる」

「でも、大丈夫なんですか？」

「このままであなた、殺されるだけなのよ？」

処断を免れ、ここより脱走出来るのであれば、ニコルにとってそれ以上に越した話はないだろう。しかし、こんなに華奢で綺麗な女の子に、脱走の手引きという危険な役回りが務まるのだろうか？

ニコルは不審に思ったが、彼女なりに自分を想つてそう云つてくれているのだと思う

と、それは失礼にも当たった。

「もちろん、条件はあるわ」

つまり、これはニコルとフレイの取引——というわけである。

ニコルは身構えて、提示されるであろう付帯条件が吐き出されるのを待った。しかし、少女が要求して来たものは、ひどく簡素なもので、

「あなたと一緒に戦っていた『イーゼス』のパイロット。——それがいつたい誰なのか……名前を教えて欲しいの」

「えっ……」

「お安い御用、でしょ？」

破格の取引となった。

常軌を逸して不釣り合いな取引だ。フレイの方に、まるで利得が見えない。

当然ニコルは慎重になったが、予感した少女は、彼の目の前で、独房の鍵であろうモノをちらつかせて見せた。鍵であれば、ここにあるわよと云わんばかりに——。

フレイは、父親殺しの犯人を捜していた。

父の乗る『モンドゴメリ』を撃墜した、真紅の『イーゼス』のパイロットの素性を——。

捕まっただけの存在でしかないニコルには、それを知る由もなかったが。

「……『イージス』のパイロット、ですよね……」

「ええ、そうよ」

「名はアスラン・ザラ……僕よりも、ひとつ年上の方です」

「ザラ——？」

思い当たったように、フレイは眉を顰めた。

「パトリック・ザラの息子……？ それに……っ」

ザラ——。

その名はたしかに、フレイがいつか聞いたことのあるものである。いくらかの人間が、ステラのことを云い及ぶときにも使っていた——？

そういえば——ステラも、その名を持っていた……？

「類縁……!？」

「え、ええ。アスランは、ステラさんのお兄さんですよ……？」

お兄さん——そう聞いて、フレイに電撃が流れた。

(そう、だったんだ……)

フレイの中で、辻褄が妙な方向思い込みにばかり合致してゆく。

(パパを撃墜した『イージス』……それを操っていたのが、あの子のお兄さんなんて

……!)

では、当時のステラは、敵と——ザフトと誼よしみを結んでいたのか？ それとも、最初からスパイとして地球軍に潜入していたのか？

初めから彼女は、兄が乗る“イージス”と戦う気なんてはなかった……？

つまり、パパを守る気なんてさらさらになかったのだ……。

だってそれは、彼女が“プラント”を祖国に持ったバケモノだから……。

「そういうこと……！ みんなっ、みんなグルだったってわけね……!?!」

あのとき、キラはステラにかまけて“モンドゴメリ”の救援を後回しにした。そしてステラは、初めから“モンドゴメリ”を助ける気はなかった。

だから隙を見て、あの“イージス”がパパを殺した——。

流石はコーディネイターだ、彼らの仕組んだ明晰な『罫』に、自分はまんまと嵌っていたのだ。

(ラクスって子と逃げたのは……!?)

ステラがザフトに捕まったのは、ラクス・クラインをザフトへと返還してからだった。

ならば、ステラは決してザフトに捕まったのではない——捕縛された振りをして、ラクス嬢共々“プラント”に帰還したただけだ！

——裏切られた……。

医務官ハの話の聞けば、誰よりも強大な力を——それこそ、当時のキラよりも優れた戦

闘力を——持っていたはずのステラ。

それだけの凄まじい力を、自分達のためだけに使ってくれているのだと思っていた。
なのに。

それは違った——彼女は、自分達ナチュラルを見下すように、巧妙に騙していたのだ。

——頭が良い、コーデイネイターだから……！

彼女はおそらく、ザフトから送り込まれた間諜だったのではないだろうか？ だから
ラクス嬢を送り返し、みずからもザフトに連れ去られた。

フレイは、確信めいて訊ねた。

「だったら今……『ディフェンド』に乗ってるのは、ステラなんでしょう……？」
「えっ、どうしてわかるんですか」

「……わかるわ！」

怒鳴りを上げ、フレイは沸き上がる怒りを咀嚼する。——そうだ、あの娘はやっぱり、
私達を裏切ったんだ！ 散々、私達に期待をさせておいて、挙句の果てには、ザフトに
寝返った——最初からそのつもりだったんだ！

フレイの態度の変調に、ニコルは目を見張っていた。

気品に満ちた少女らしき華やいだ気配は消え失せ、彼女は、どす黒い瘴気のようなも

のを周囲に漂わせているように見えたのだ。

——云つてはいけないことを、僕は云つてしまったのだろうか……？

ひどいき漏らしたフレイは、そのまま立ち上がり、ニコルに背を向けた。

啞然として、ニコルは子犬のように、彼女の挙動を疑った。次いで「約束は……っ？」と恐々として訊ねたが、彼女からの返答はあっけなく。

「あれは嘘よ」

言い残し、そのまま独房から出て行ってしまった。

ニコルの目の前にちらつかせた鍵は、まったく別の部屋のもの。低階級の彼女に、部屋の鍵が手渡されるはずがないだろう。

——コーデイネイターなんて、やっぱり、助け出す価値はないわ……。

このときフレイの精神はひどく荒れ、それでいて、どこか平穩だった。

すべては「イージス」のパイロットの素性を探るための、作り話でしかなかったのだから。

ときを同じくして、待機を命じられた「アークエンジェル」乗組員の中で、マリューにムウ、そしてナタルの三人は将校たちを同席させた報告会を開いていた。

報告会と云つても、そのじつ、査問会のようなものである。

数々の糾弾が飛び交い、ことあるごとに皮肉を告げられる始末——アラスカの者達は、ハツキリ云つて“アークエンジェル”を歓迎していなかった。

事実確認の内容は複数あつた——

“ストライク”なる新型機動兵器に、民間人を乗せたこと。その正体がなおかつ、コーデイナーの少年であつたこと。

“デイフェンド”もまた同様で、マリューたちは、コーデイナーである彼らの力に頼り切るあまり、彼らを完全にコントロールできなかつたこと。

“ヘリオポリス”を崩壊させたのはザフト軍の“ジン”による攻撃だ、しかし、なぜその場所で戦闘になったのかと問われたとき、原因は、すぐにコロニーより離脱しなかつたマリュー達にあつたこと。

引き続きいて糾弾は続く。

彼らは航路の途中、ユーラシア連邦が所有する“アルテミス”を壊滅させ、先遣隊を全滅させ、やがて第八艦隊を消滅させたこと。

しかし、それらすべてを追い詰めるように呵責することが、必死の思いで辿り着いた者達に相応しい対応だろうか……？

(彼らは、数字でしか物事を推量してないんだわ……)

査問会の最中にも、マリューはげんなりとして思った。

たしかに、数の上のみで見れば——「ヘリオポリス」、*「アルテミス」*、そして先遣隊を含めた第八艦隊の全滅は、たった一隻の*「アークエンジェル」*に賄えるものではない。しかし、これでは本当にハルバートン提督の思想と真逆だ。新型の*「G」*をアラスカに送り届けるために、彼女たちがどれだけの覚悟をして来たのか、彼らは毛先ほどの理解も示してはくれないのだ。

淡々と見れば、明らかに数に引き合わない犠牲の対価であるからこそ、彼らはマリューたちを糾弾することができるのだろう。

査問会が終われば、面倒な事務作業をひとつ終えた、と云わんばかりの面持ちで、サザーランドはマリュー達に云い付ける。

「ムウ・ラ・フラガ少佐、ナタル・バジルール中尉、フレイ・アルスター二等兵には転属命令が出ている——明朝〇八：〇〇、人事局に出頭するように」

云われ、当該者に当たるふたりは目を丸くした。

「異動命令……？」

「アルスター二等兵も転属というのは……？」

「彼女はアルスター事務次官の娘、政府官僚家の令嬢だぞ？ その存在には、非常に強い影響力と求心力がある」

せんじ詰めれば、彼らは、あの少女にはそれだけの「利用価値」があると云いたいのだ。

「彼女が軍に志願した際に放った言葉——それに心を突き動かされる者がどれほどいるのか」

軍人とは、これである。

ムウは「あらまあ」と声を漏らしたい気分を抑えつつ、その言葉を聞き留めていた。——この大人男たちは、おおよそ「少女」という存在を、かなり大きく誤解してはいないだろうか？

査問会でもそうだった。

たとえば、ラクス・クライン。偶発的に身柄を保護した彼女が、シーゲル・クラインの娘であることに価値を見出し、その存在を手放した自分達を無能扱いした。

たとえば、ステラ・ルーシエ。パトリック・ザラの娘であることから、彼女をパイロットではなく、捕虜として扱うべきだったと主張した。彼女の前線での活躍がなければ、おそらく「アークエンジェル」自体ここまで生き延びてはいないだろうと返しても、根拠がないと一蹴された。

たとえば、フレイ・アルスター。彼女が語った言葉を、美談として、プロパガンダとして利用せんとしている。民衆を動かすために。

初老に近い年齢ばかりの将校たちだからこそ、生きて来た時代がそうだったのか、彼らは女性に対する扱い方が妙に希薄ではないだろうか。

云いたいことだけ云い付けると、サザーランドはその部屋より退室した。そこで、補佐官であろう若い士官が彼の耳元に寄り、こんなことを言い出した。

「話に上がったアルスター事務次官の娘さんですが……大佐に少々、面白い話があると云っています」

「面白い話？ なにを、一介の小娘風情がっ」

「いえ、それが」

「……なんだ？」

「——」
補佐官の男が、サザーランドの耳元にて告げ口する。

「——」
「わかった。すぐに案内してさしあげろ」
血相を変え、彼はすぐに己の執務室へと向かった。

依然として艦内待機を命じられた“アークエンジェル”艦内。

その医務室に、ミリアリアとトールの姿があった。船医であるハリーによって、トール

が治療を受けていたのだ。

「部屋のドアに指挟んだんだって？ 人が寄ったら自動で開閉するドアに、どうやったら指挟むなんて芸当ができるの？」

しごく不審げに云いながら、ハリーはトールの人差し指にガーゼを巻いていく。

さいわい、トールの人差し指にできた傷は、僅かな出血程度で済んだ軽傷のようだ。

「いやホント、大した怪我じゃないんですって！ 俺は絆創膏ばんそうこうで良いって云ったのに、ミリーが大袈裟に騒ぐから……」

「なによお、心配してあげてるんじゃない！」

「まあまあ、それくらいにしてあげなよ」

ハリーはふたりを諫め、ふたりは「そうだね」と向かい合って笑った。

幸せなのだろうが、見ているとこつちが恥ずかしくなってくるようなやり取りである。

「——それにしても、いつまで僕ら、こうやって待機させられたままなんだろうねえ」

診療を終えたハリーが、ため息と同時にこんなことを言い出した。

共感したように、ミリアリアが同調する。

「アラスカに着いたんでしょう？ なのに、どうして誰も降りさせてさえ貰えないのかな……」

「今のところ、基地に降ろして貰えたのは艦長に副長、それにフラガ少佐の三人だけかな？ まあ三人とも、上層部からの査問会に呼び出されただけ——のようだけど」

「いや……降りたのは、どうやら四人みたいですよ」

「え？」

ハリーが云つたのを、トールはそこで否定した。

「さつき、フレイが地球軍の偉そうな人に連れられて、艦を降りて行つてましたよ？ おれ、その現場を見たんですよ」

「なんでフレイなんだろう？ ってぼーつとしてたら、指ドアに挟んじやって。とんだうっかりさんである。」

「フレイが……？」

「ミリアリアが、腕を組んで考え込んだような仕草を見せる。同じサークルの一期先輩として、思うところがあったのだろう。」

——しかし、なぜフレイが……？」

「そう推理したとき、彼女が、大西洋連邦の官僚家の出身であることを思い出した。どうやら、その線で何か特別な待遇でもあるのだろう。」

「ふうん、あの子がね……」

ハリーもまた、考え込むように呟いた。

すると、フレイという少女の存在で思い出したように、ハリーはぼんと手を打った。

「そういえば君たち。僕が留守にしている間、医務室^{いむしつ}に出入りとかしてなかった？」

「なんですか、急に」

「なんだかね……医務室^{いむしつ}のパソコンを、誰かがいじったような形跡があるんだよ」

ハリーは云うが、ツールとミリアリアには、それはまったく身に覚えのない尋問だった。

「誰かが、僕の端末から『何らかのデータを抜き取ったんじゃないか』——って疑っちゃってさあ」

「それ……本当なんですか？」

もしそれが事実なら、物騒な話である。『アークエンジェル』は危険な旅を続けて来たが、艦内は絶対的に安心できるといふ認識が、彼らの中にはある。

しかし、そのように疑わしい事件が発生しているのだと聞けば、その認識を改めざるを得ないのだ。——この艦のどこかに、信用の置けない人物がいるというだけで。

「まだ分からないし、ひよっとすると、僕のただの勘違いかもしれないし」

ハリーはそう云って、笑って見せた。

(だが、いじられた形跡があつたのは、ステラ・ルーシエの身体データだ……。あそこには、先日破棄したエクステンデットにまつわる薬のデータ、そのすべてがこと細かく記

載されてあった……)

そう、万が一にも『データ』が抜き取られていたなら、大惨事になりかねない……。ステラ・ルーシエが持っていた「エクステンデット」についてのデータは、ここアラスカに到着する寸前に、ハリーは完全に破棄している。

もしも、そのデータが流出するようなことになれば、多くの者が、危険性の高い薬物の被験者となるからだ。

(……僕の勘違いだろうか……? 誰も、あのデータを盗み取ってなんかいやしない……?)

ハリーは自分に言い聞かせ、そう信じ込むことしか出来なかった。

人事局へ顔を出すよりも前に、フレイは補佐官の男に案内され、基地内部へと足を運んでいた。

辿り着いた先は、ここの責任者であるウィリアム・サザーランドの執務室となっていた。

「長旅お疲れさまでした。アルスター嬢。ジョージ・アルスター事務次官が亡くなられ

たことは、我々としても本当に……」

「前置きは結構です」

気の利かない挨拶を遮って、フレイはすぐさま、サザーランドの許へとにじり寄る。あまりの性急な動作に、補佐官の男が警戒し、物騒にも懐に手を忍び込ませた。しかし、その動作も杞憂だったようで、フレイは自身の制服のポケットから一枚のメディアを取り出し、それを徐にサザーランドへと突きつけた。

見覚えのないメディアを目の当たりにしたサザーランドは顔に浮かんだ皺を増やし、怪訝な面持ちをした。

「これは？」

「鍵よ」

「かぎ——？」

サザーランド
初老の男は、うら若い少女の云っていることが分からなかった。

年齢でも回ったか、と思ったが、この場合、フレイの発した言葉が言語として破綻していただけだ。まるで脈略がなかったのである。

「そうですね。——『戦争に勝つための鍵』……とても云っておきます」

「ほう？　それはまた随分な飛躍ですな」

抽象的な表現を用いながらも、フレイは妖艶に微笑んで見せる。——他に、形容の仕

方が見当たらなかつたのだろう。

その自信に満ちた表情に、サザーランドは呆気に駆られる。半信半疑に駆られつつ、所詮は小娘の戯言だろう、と流すつもりで、差し出されたメディアを半信半疑でハードへと挿入する。やがて席に座り、端末に目を遣る。

そして、中に記されていたデータ——そのすべてに、ぎよつと目を見開いた。

「これは……………!?!」

萎みかけた目を大きくして、愕然としてサザーランドは、傍らに立ち、不敵な笑みを浮かべたフレイを見上げた。

フレイは毅然として、鷹揚と答える。

「強化人間についての研究——つまり、薬物を使った人体実験のデータよ」

「それも……………これは、かなり完成されているデータですな……………っ」

ウィリアム・サザーランドという人物は、人体実験に精通したブルーコスモスの盟主とは、軍部の中でも懇意の仲にある男だ。

彼自身、ナチュラルの強化人間の存在については、多少なりとも、軍部の人間としてかじっている節がある。しかし、そんな彼でも強化兵士について知っていることと云えば、せいぜい『ロドニアの研究所にて“ブーステッドマン”と称される存在が製造されている』という情報までであって……………。

（「エクステンデット」……聞いたことがない？ なんなんだ、このデータは……）
それについては、まるで初耳、初見のデータに過ぎなかった。

（薬物の配合比率ほか、ブーステッドマンとは大きく異なっているが——あまりに、
画期的ではないか……）

フレイによつて持ち出されたデータには、ブーステッドマンの短所——それを改良させたエクステンデットと呼称される人体実験のデータが記載されていた。

いまだ未知の成分が多く記されたデータだが、これを用いれば、従来の強化兵士よりもはるかに実用性の増す強化人間を造り出すことも可能になるだろう。

（いったい、どこでこのようなデータを……。どこに、このようなサンプルが……？）
驚愕に駆られるサザーランドに、フレイはさらに続けた。

「この研究の第一人者の所へ——わたしを連れて行きなさい」

「ムルタ・アズラエル理事……ブルーコスモスの、盟主たる御方です。ですがつ……」
口籠るサザーランドに、

「わたしが——この新薬クスリの被験者ヒキケンになるわ」

フレイは、驚愕の言葉を発して見せた。

サザーランドが、驚愕に駆られる。

「今……なんと?」

「この薬があれば、わたしでもモビルスーツに乗れるようになる……エクステンデットになれば、わたしにも、それだけの力が宿るのよ……!?!」

薬の恩恵が強化人間に与えてくれるのは、ナチュラルを大きく凌駕した絶大な戦闘力と、そして――。

「しかし、あなたの活躍の場は、何も前線でなくとも」

「ママはいない、パパもコーディネーターに殺された……!」

「……!」

「わたしにはもう、身寄りがいないのよ……!」

期せずして、天涯孤独の身に陥ったフレイ。

母は幼少にて病死し、父は殺戮された。挙句の果てにはサイという婚約者を失い、キラへの復讐には失敗した――。

何が切欠だったのか――そう考えたとき、何もかも、原因はステラにあった。

――彼女が、憎い……。

フレイには、そう決めつけることしか出来なかつたのだ。

行き場を失った少女が見出した――その先にあつたのは、修羅の道だった。

「だから、わたしがどうなろうと――もう誰も悲しまない、誰も苦しめない……。だつたらわたしは、わたしがやりたいことをやるだけよ……」

本当に恐ろしいものは、守るモノのない——そんな、孤独な人間なのだ。

「力が欲しいの……！　パパを殺したコーディネイターをみいんなやつつけて、そして……あの女に復讐するだけの力が——っ!!」

憎しみの結果に、生まれた狂気。

フレイはステラへの復讐に滾るあまり、皮肉にも、第二のステラに——強化人間になるうとしていた。

そこに矛盾があることに——このときの彼女は、気付けなかったのだろうか。

だから、彼女は「アークエンジェル」の医務室より、ステラのデータを持ち出したのだ。

ハリーに黙って。

このアラスカへと、彼女の「夢」を送り届けるために——。

「『ザラ』の名を持つ者達^{ヤツら}を滅ぼして、この戦争を終わらせる……。だからこのデータは、戦争に勝つための『鍵』なのよ……！」

サザードランドは、彼女の放つ狂気に呑まれた。

云い切った彼女の綺麗な表情は、怒りや憎しみに歪んでいた。

「だからわたしに、モビルスーツを寄越しなさい——」

「……お連れします。ムルタ・アズラエル理事の許へ——」

それが、フレイの人生の転機となった。

無敵と云われ、畏れられていた伝説の存在——「ストライク」を単独で撃破したアスラン・ザラには、ネビユラ勲章が授与され、正式な「プラント」への出向命令が出されていた。

パトリック・ザラ——彼の父親から、直々に「呼び戻し」を受けたのである。

イザークやディアツカ——このままジブラルタル基地に留まり、もうじき発令するであらう「スピットブレイク」のために英気や闘志を養う彼らと別れを告げ、クルーゼ隊からも離脱することが決まっていた。

実妹・ステラとの不和は、まったく解消してはいないままだった。

オーブの連絡艇から降り立ったアスランを迎え入れたきり、ステラが彼と親類らしい言葉を交わすことはなかった。

いや、正確には一度だけ——ジブラルタルの廊下ですれ違ったとき、言葉も会釈も交わさずに通り過ぎようとしたステラの腕を、アスランが強引に掴み止めたことがある。

「いつまでそうしているんだ、ステラ……!」

年頃になりつつあるステラには、最近、どこか拗ねたような態度が続いていた。その原因は、他ならぬアスランが、キラの乗る「ストライク」を撃破したことだろう。

なぜ、かつての親友同士が本気で殺し合わなければならなかったのか——? いや、それよりも以前に、アスランは「キラはもう「ストライク」には乗っていない」と云っていたにも関わらず、事後になつて、それが嘘であると悪びれもなく改めたのが許せない。戦っていたのはキラだけではなく、ツールもまた「スカイグラスパー」に乗っていたようで、自分は危うく、ツールを撃ち殺すところだった。

そう、何も知らないままに。

「おまえはもう十三だ、いつまでも駄々を捏ねていいいような年齢とじゃないだろう……!?!」

「駄々なんて、こねてない……」

「なら! どうしてそう俺を遠ざける!?!」

首を振るステラだったが、ぐいっとその腕を掴むアスランの手に、いつその力が籠った。

「い、たい……! 離してっ!」

ステラは叫び、強引に腕を取っ払って見せた。

強引に距離を開き、斜に構えた様相で、ステラはアスランを睨むように云った。

「こわいよ、アスランは……!」

「なんだって……!?!」

「ステラはね、ひとの気持ちを平気で裏切つて、嘘をついて、ひとを騙していられるような——そういう人が本当にきらいなの……!」

そういう非道なことをする人間が、どれだけ多くの人間を傷つけるのかを、彼女は知っていた。

「アスランもそれとおんなじことをした……! ステラを騙して、ステラをキラと戦わせた……!」

今のアスランはまるで、昔の自分を操っていたネオ・ロアノークのようだ。

命令の中に嘘を交えて、自分を騙して、利用し続けて来たあの男と——。

しかし、アスランは嘘を吐いていたことを謝りもせず、自分が正しかったと云わんばかりに主張を返す。

「『ストライク』に乗っているのがキラだと知れば、おまえは戦えなかつただろう!」

俺はそれを——!

「わたしは、戦いの道具なんかじゃない!」

「なッ——」

アスランは絶句する。

戦いの道具？ 自分は、ステラをそんな風に扱っていたというのか？

……いや、そんなはずはない。

自分はただ、彼女を守るために嘘を吐いていたのだ。だから彼女を騙すことにしたのだ。

「お、俺は……！ きみを傷つきたくなかったから……！」

「そんなの、自分が傷つきたくないだけじゃない……！」

咄嗟にその言葉に、胸が詰まるようだった。

——ステラが今までどんな目に遭って来たのかを、キミは分かってあげられないのか……。

思えば、キラはそんなことを云っていた。

自分が？ ステラを、地球軍と同じように、戦うための道具として扱っていたというのか……？

だとすれば、いつから自分は、そんな最低の人間になっていたんだ……？

「今のアスランがどうして怖いのか、わかった……。アスランは、ネオといっしょ。今のアスランには、自分がないんだ……！」

ネオ・ロアノークは、たしかに、ステラに優しくしてくれた。

けれど彼は、一度たりとも、ステラに「本音」を告げてくれることはなかった男。いつだって、ステラには嘘ばかり吐いていた。

——あの男は、他人に本心を打ち明けることが出来ない人だった。

それが、立場から来るものなのか、そのひとの性分だったのかは、ステラには分からない。

しかし、ネオが他人に本音を告げるには、あの黒い仮面が、あまりにも邪魔をしていた。きつとアスランも、それと一緒に。

「自分の言葉で話さないから、自分の想いを伝えてくれないから……！ だから傍にいても、心の置けない人になるんだよ……！」

「ステラ、きみはいつたい、何の話をしているんだ……！」

熱意も感情も付帯しない利口天な言葉に、いつたい、誰が共感を憶えると云うのだろう。

仮の表情——「仮面」によって本心を隠しているたネオと同じように、アスランは仮の言葉——「理屈」を用いることによって、本音を隠している。

理屈を捏ね回し、正論を振り翳し、模範的な回答ばかりを返す優等生——。

今わかった。

そうして振る舞うことが、アスランの人間性を殺しているのだ。

「それでもステラに優しくしようとしてくれるのは、ネオといっしょで、迷ってるからでしよう……!?!」

(ネオって、誰だよ……!?!)

ロード・ジブリールという存在に首根つこを掴まれ、人生の一切を支配されていたネオ・ロアノークと同じように。

今のアスランは、父親であるパトリックの言葉を借りて、彼の意のままに染まっただけの器、生きた傀儡に過ぎない。

軍人として「其処に在る」ことだけを、強要されている者。

アスランの目が輝きを失っていることが多くなつたのは、彼自身の「意志」が、そこから失われているからではないのか？ 心の中に本当の自分を飼ひ殺して、意志^{本心}や主張^{本音}を、闇の奥深くに閉じ込めて生きているからではないのか？

「本当のアスランはやさしかった……!?! そのアスランを、今のアスランは殺してるんだ、理屈で覆って隠してるんだっ!」

「理屈じゃない、それが俺の正義だ!」

「その正しさが、キラを殺したんだよ……!?! 戦争だったら、何をやっても許されるの、正しいの!?! もうステラたちは、みんなと一緒に遊べないんだよ!」

取り返しがつかないことをした自覚が、今のアスランには、まるでない。

「キラはちがった……い！」

いつだって、キラはアスランと戦うことに戸惑い、苦しみ、迷っていた。

そんなキラを、アスランが一方的に——殺した。

「今のアスランに、話したいことなんて何も無い……い！」

ひとりの人間としてあることを放棄して、軍人に染まりあがった男に、どんな話か通用するというのだろう。

彼は父親に認められたいと願っただけの、純粋なお父さん子だ。

その結果、自分を棄てて、父のためだけに存在しようとしている。

——もう、何をいつてもだめなのかな……。

父上が正しいと思いつくアスラン。

その父を崇拜する自分が、絶対的に正しいと信じているアスラン。

もはや彼には、今のステラの言葉は届かないのだろうか。

諦めるように、ステラは背を向けて去ってゆく。

その場に取り残されたアスランは、傍らにあったゴミ箱を無造作に蹴り飛ばした。

それから数日ほどして、アスランは地球を離れ、シャトルにて「プラント」の「アップリウス」へと到着していた。

以前はシーゲル・クラインの執務室だった部屋に足を踏み入れる。——以前、何をどう間違えたのか、すっかり居眠りしてしまった部屋である。

——そう云えば、ラクスは何をされているだろう……？

あのとき、自分を起こしてくれたのはラクスだった。

彼女が今の自分を見てくれれば、何を思うだろうか。父と同じように立派になったと仰ってくれるか？

それとも、ステラやオーブの少女のように、真っ向から自分を否定するのか……？

それは、アスランの想像が及ぶところではなかったが。

今はパトリック・ザラの執務室となった部屋を訪れ、そこに座す父上と、久々の再会を果たした。

「噂は聞いているぞ、よくやっているようだな」

「……はっ」

それは、アスランが初めて、父親に掛けられた肯定の言葉だった。

はじめて、父に認められた——その事実が、この時のアスランに安心と自信を与えてくれる。

これまでの努力の日々が、ようやく報われた気がした。

「クルーゼから報告があつてな——私が出向を命じたビクトリアでは、ナチュラルを殲滅したそうじゃないか」

「いえ……その、なんとというか」

アスランは口籠る。

それが気に入らないパトリックは、息子を急かした。

「なんだ」

「気が、変わりました」

あつさりとした心変わりに、パトリックは満足そうにかすかに笑った。

「そうさ。レノアを殺し、ステラを貶めたのはナチュラル達だ——おまえはその事実に関付くのが、遅すぎたほどだ」

だが、パトリックにとって、今のアスランは自慢の息子になった。

ザフトでも名高いエースパイロットとして戻つて来たのだ。親としては、鼻が高いに違いないだろう。

「すでに耳にしていると思うが——『ストライク』を討つたオマエにはネビュラ勲章が授与され、本日付で議会直属の特務隊への配属が決まっている」

しかし、このときのアスランは愛機——『イージス』を失っていた。

モビルスーツを持たないモビルスーツパイロットなど、如何ほどの存在価値があるのだろうか？ それは、かねがねアスランが抱いていたことだった。

「おまえには、新鋭のモビルスーツの授与も決まっている」

それは、パトリックからの機密情報だった。

アスランはぎよつと目を見開いた。

「新鋭のモビルスーツ……!? 私が、でありますか？」

「不服か？」

「あつ、いえ………！ そんなことは………！」

不服なはずがなかった。最新鋭機と云うことは、連合より強奪したモビルスーツの技術さえ応用した、画期的な性能を持つ機体だということ。

「イージス」をも超える力を持った機体——それがこの度、自分の手に渡るといふのだ。他ならない、父上に託される形で——。

「工廠でX-09A “ジャステイス” を受領し、五日後に控えた “スピッドブレイク” に参戦するのだ」

「“ジャステイス” ……？」

それは——「正義」を冠する機体であった。

真の正義を見出した息子へ対する、父親からの送りものである。

「では私は『ジャステイス』を受領した後——パナマへ侵攻すれば良いのでしょうか？」

「違うな。攻撃目標は——地球軍地上本部……『JOSH—A』だ」

そのあつさりと吐き出された言葉に、アスランは驚いた。

しかし、ザフト兵全員に告げられた『スピッドブレイク』の攻撃目標は、地球軍が所有する最後のマスドライバー『ポルタパナマ』であつたはずだからだ。

「これは極秘事項で、私を含め、数人の関係者しか知らんことだが——頭を潰した方が、戦争は早く終わるのでな」

「では——『スピッドブレイク』によって、戦争は終わる……!?!」

「ああそうだ。おまえは『ジャステイス』に乗り、『スピッドブレイク』の作戦の旗印となれ」

「……! 光栄です、父上……!」

「よい」

そう、ついに父上は——このステージまで進出されたのだ。

戦争終結——『JOSH—A』と云えば、地球連合の本部が構えられている場所。パナマ基地を抑え、宇宙と地上の戦力を分断するより、大元を叩いて、この戦争を終わらせるつもりなのだ。

ようやく終わる——この戦争が。

自分がその作戦の先頭に立ち、託された最新鋭機を以てナチュラルを押さえつける——ならば「ジヤステイス」という機体は、今の自分に相応しい機体ではないだろうか？

「地球に戻ったら、クルーゼとコンタクトを取るといい。——ヤツもまた、真の攻撃目標が『JOSH—A』であることを伝えてある男だからな」

「は……！」

「頼むぞ、アスラン」

終わる……この戦争が……！

アスランはその胸に、たしかな高揚を憶えていた。

——何度も、早く終えたいと思った戦争だ。

母を奪った戦争。

純粋な妹を奪った戦争。

そして、

自分に、親友を殺させた戦争。

(こんな悪夢は、早く終わらせなければならぬ……！)

そのために、アスランは再び剣を取る。

ナチュラルを滅ぼして、コーディネイターたちの安寧の時代を勝ち取るために。

それから五日が経ち、日付が、5月5日となった。

工廠へ赴いたアスランは、パトリックに託された機体——X—09A “ジャステイス” を見上げていた。

スペックは既に頭に入っていた。真紅に彩られた機体は——頭部にGAU5フォルクリス機関砲、胸部にはMMI—GAU1サジットウス20mm近接防衛機関砲を装備し、両肩のパーツはRQM51バツセルビームブーメランとしても運用が可能である。常備のMA—M01ラケルタ・ビームサーベルに、MA—M20ルプス・ビームライフル。ラミネートアンチビームシールドには “ディフェンド” から採取した光波発生装置が備えられ、ビームシールドを展開することが出来るようになっていた。

数多の近接武器を体躯に付けたその機体は、暗器として、両脚の爪先の部分に “アリコミュニー・リユミエール” すらも切り裂く、ラミネート装甲性の実体剣 “タクティカルブレード” を忍ばせている。これは、ビクトリアの要塞が持っていた光波防衛帯シユナイドシユツツに對抗するために開発された、唯一の武装だ。要塞を抑えたことにより、開発を急がせたのだらう。

背部には分離可能な「ファトウムー00」を装着し、そこにM9M9ケル فس 砲塔機関砲、MA-4Bフォルティス ビーム砲を構えている。

「ニュートロンジャマー・キャンセラー……！」

アスランはその機体が搭載するエネルギーの正体に、目を見張った。

その機体は、封印されたはずの核エネルギーを積んでいたのだ。

「勝つために必要になったのか、これは……！」

母の生命を断った核。

妹の運命を狂わせた核。

その力を使って戦争を終わらせることに、このときのアスランは、何の疑念を感じなかった。

そうしてアスランは、そのまま「ジャスティス」へ乗り込んでゆく。

「——この作戦により、戦争が早期終結に向かわんこと切に願う。真の自由と正義が示されんことを……」

5月5日——

予定されていた「スピッドブレイク」の発動日になって、パトリックがずっとその場に立ち上がる。

パトリックが、地球に構えたザフト軍全軍に向けて、通信を試みたのである。

「オペレーション・スピッドブレイク」——開始せよ！」

その宣言は、待ち受けていた各基地、各艦へと伝達された。

無数の無線機より、数多のオペレーターの声が奔流のように溢れ出す。

へ「オペレーション・スピットブレイク」、発動」

へ「四：〇〇時——スピットブレイク」作戦、発動」

へ事務局発、第六号作戦、開封承認……コールサイン、オペレーション・スピットブレイク」

へ攻撃目標——……」

攻撃目標は——『JOSH—A』——。

発令と時を同じくして、アプリリウス」より一機のモビルスーツが飛び立った。

「アスラン・ザラ——ジャステイス」、出る！」

真紅に彩られた機体が宇宙へと踊り出し、圧倒的な推力で、そのまま地球へと降りて

ゆく。

青い惑星

地球へと、そいつは吸い込まれて行った。

『スピットブレイク』 B

目に映ったのは、真冬の景色。

ユーラシアの西側は高緯度に位置する、地球において北端の地域——ベルリンの街を、鈍い色、厚い雲の天が覆っていた。

そこには、ひとつの都市があつた。過去形を用いているのは、それが既に失われかけているからだ——雪に覆われていた街全体は灼け焦げた黒色に包まれ、燃え盛る赤い炎に包まれている。美しい街並みは跡形もなく破壊され、立派な建物は哀れもなく崩れ落ちていく。至る所から黒煙が上がり、雪を穿つた熱の軌跡きずあとが、方々の地面に迸っていた。そこは、身を切るような寒冷な気候に見舞われた地域のはずだった、だといふのに、今そこで生身に一步外に踏み出せば、街を覆う業炎と熱風がその者の肌を焼き付けることだろう。

悪魔そのものを顕現させたかのような——禍々しい巨悪の機体が、その街の中心にいた。

G F A S — X I “デストロイ” ——曇天の空の下、それが圧倒的な火力を奮い、街を

破壊していたのである。暴走する禍々しい巨人は、街を蹂躪しながら前進し、虐殺の限りを尽くしてゆく。街は滅び、人は焼け死んでゆく。

そんな黒煙の戦場へと、一機のモビルスーツが舞い降りた。白く輝く四肢を持った『伝説』——ボディはグレーとブルーのツートン、背部には蒼い十枚の翼を広げ、頭部には突き出した四本のVアンテナが見える——。

ZGMF—X10A “フリーダム”である。

巨人から見れば、そいつは赤子のような大きさでしかなかった。にも関わらず、縦横無尽に空を駆け巡り、やがて単機で “デストロイ” を圧倒し始める。翻弄される “デストロイ” はネフェルテムや大型誘導ミサイル、アウフプラー——すべての武装を惜しむことなく展開したが、そのいずれも驚異的な瞬発力の前に回避されてゆく。

空中で忙しくなく機体を翻した “フリーダム” は、次の瞬間、抜き打ちに光の刃を抜剣した。

——来ないで！

“デストロイ” が敵機に向け、高エネルギー収束砲を撃ち放った。無造作に放たれた砲火はまたも容易く回避され、 “デストロイ” は敵の接近を許した。

光刃が、鮮烈に迫る。

“フリーダム” のビームサーベルが凄絶な勢いと共に、巨悪の機体を貫いた。高熱を

帯びた光の双剣が「デストロイ」のコクピットへ、ぎゅつと柄まで押し込まれた。

——殺シテヤル……！

——オマエナンカ、死ンデシマエ……！

貫かれたその瞬間、蒼い十枚の翼を広げた機体が、そう喋ったように聞こえた。

——わたし、死ぬの？

コクピットの中で、少女が哭いた。

突きつけられた現実——。

云われるがまま「デストロイ」に乗り、破壊の限りを尽くしたわたし——。

死これこそがオマエに相応しい『報い』であると、そいつに云われた気分だった。

寒いひと、こわいヤツ——。

——そいつの名は、「フリーダム」——

あいつが、ステラわたしを殺した。

光の剣で、焼き殺した。

——いやあああああ——………！

「デストロイ」が、たちまちに爆散してゆく。

逃げることも、身を護ることもできずに、コクピッドの中でひとり焼き尽くされて行く少女——。

彼女はそのまま断末魔の悲鳴を上げ、儂く、そして醜く朽ちて行った――。

「……――ハッ」

ステラは、輸送艦の中の一室で目を醒ました。ザフトの軍艦――ジブラルタルから出航した航空機の中だ。

見慣れない天井を見上げ、がばつと勢いよく起き上がった彼女は、それまで見ていたものが「夢」――それも、掛け値なしの「悪夢」であることに気が付いた。

「はあ、はあ……！」

乾いた呼吸が繰り返される。

ステラはは夢の中で、最も恐れるものを体験したのだ。寒い、怖い……ステラは何度もそう眩きながら、震える自身の肩を強く抱いた。

「いやな、夢……ッ」

自分が殺される夢。悪魔のような「アイツ」に、殺されてしまう夢――

がくがくと小刻みに震える肩を抱きながら、ステラは自分の身体の感触を確かめた。
――だいたいどうぶ、どこも怪我してない……あれは、ただの夢、まぼろし……。

「フリーダム、だれ……！ わたしを……!？」

まどろみの中で見ていたものは、夢のようで、正確には夢ではない。彼女自身の過去の記憶を映像化したものであって、恐怖フラッシュバックの喚起と表現するのが正しいもの。

——どうして、今になって思い出すんだろう……!?

ここで「フリーダム」を思い出しても、何の意味もない。そんなことは承知していた。しかし考えてもみれば、「フリーダム」はいつたい、何者だったのだろうか？

地球軍？ それともザフト？ ……いいや、ヤツはそのどちらでもなかった。だってヤツらは地球軍ともザフトとも、どちらとも交戦していたのだから……。

(ヤツらって。……だれ、だっけ……)

ステラは茫洋と己の記憶を探るが、その仔細は既に霞んで断片的にしか思い出すことが出来なかった。

だが彼女にとって、しよせん「フリーダム」は残酷な天使。

身に迫る『死』を連想させる——無限の恐怖の象徴でしかないのだ。いつかまた、自分を殺しにいつがやって来るんじゃないか？

たくさんの人を殺めた自分に、再び剣を突き立てて来るんじゃないか？ そう思うと、怖気が全身の隅々まで駆け巡り、たまらなくなつた。

「——あついいッ」

ステラは小さく毒づき、兵士用の安っぽい布団をベッドから放り投げた。

そのまま床に足を下ろし、サイドテーブルの蛍光灯に手を伸ばす。まだ薄暗い室内に小さな明かりを灯ると、白いタンクトップとショーツに身を包んだ彼女の下着姿が照らされた。

時計を見れば、日付は5月6日——朝の四時を指している。

そろそろ兵達に、起床が求められる時間だ。

「起きなきゃ……」

ステラは口を尖らせ、すこしだけ嫌な顔を作った。

軍艦の中とはいえ、自分の部屋から出るときは、多少の強迫観念を憶えるものである。

自室とは、外部から遮断され、自己完結された空間。絶対に安全という認識が先行している。

他人に干渉されることもなく、現実を遮断できる自分だけの空間——だからこそ其処から飛び出して行くにはそれなりの勇気があるし、いつそのことずつと室内に籠つていたいという、内気な意識さえ憶えてしまう。

ステラは、間違つても外向的ではなかった。

たとえば、キラやアスランという気の知れた者達が数人、常に傍にいてくれるだけで、すくなくならず満足できてしまうところがあるからだ。

時刻を差したデジタル時計を見、そして廊下の方が多少騒がしくなっていることに気

が付くと、現実に対応しなければならぬという気持ちにさせられる。だから嫌な顔をしたのだった。

まだ茫然と覚醒しきっていない頭を起こして、ステラはその場に立ち上がった。

皺や汚れが目立たない赤黒色のザフトの制服に袖を通し、さつと寝癖を整え始める。化粧をする手間がないだけ、彼女はきつと幸運な女の子だろう。……いや、そもそも彼女は化粧という女の子特有の慣習を知っているかどうかさえ怪しいが。

制服に着替えて廊下に出ると、雑然とした音声がわつと大きくなって耳に入ってきた。

廊下はひどく騒がしく、ザフト兵たちが右往左往しているような状態だった。ひよっこりと部屋から顔を出し、ステラは怪訝な顔をした。

「その顔は知らんのか!？」

「……?」

お節介な兵士がひとり、怪訝な顔をして首をかしげているステラに話しかけて来た。

ステラから訊ねたわけではないのに、そいつは廊下の騒ぎの正体について語り出した。

「『スピッドブレイク』の攻撃目標が変更になったらしいんだよ! 今この艦が向かってんのは、どうやらパナマなんかじゃない! ——アラスカだ!」

兵士が大仰に叫び、ステラはその言葉に耳を疑った。

云うだけ云って去ってつた兵士を尻目に、ステラは部屋から出て、兵士たちの集まるブリーフィングルームへと向かった。

「地球軍本部……？」

廊下を歩きながら、ステラは確かめるようにそう反芻していた。

そのとき脇から、ひとつの声が掛けられた。

「そういうことだ、我々が攻撃を仕掛ける先はパナマなどではない——地球連合軍……ナチュラルたちの本拠地とも云える、アラスカ基地さ」

ラウ・ル・クルーゼである。

ステラは瞬時にハツとして、目の前に現れた仮面の男を警戒した。

すぐに道を引き返そうとしたが、それよりも早くラウの方から腕が伸びて来た。ぐいとにじり寄られ、二の腕を掴み引つ張りあげられる。ステラは怯え、助けを求めるように短く悲鳴を上げた。辺りには誰もいなかった。

ラウは仮面の及ばない口元に、切り裂かれたような冷笑を浮かべる。

「また、キミにも兵士として、働いてもらわねばならん……」

「いや、離してッ……！」

ラウは彼女の恐怖を味わうように、ゆつたりと構え、その腕を離そうとしない。

ステラは尻込みしながら、目前に迫った男を睥睨した。

——こわい……！　この人は、すごく恐ろしい……！

この男は、仮面の下にいったい何を隠しているのだろうか？　誰かを憎む気持ち？　他者と分かり合う心？　ただ云えるのは、この人の傍にみると、ステラまで黒い感情に呑み込まれてしまいそうだとということ。

ステラは思わず叫んでいた。

「仮面は、きらい……！」

「そうさ、好きな者はいないだろう」

ラウはあつさりとは肯定してみせる。

やがてその口元が、つりあがるような自虐的な笑みに変わった。

「わたしとてこんなモノ、付けたくて付けているわけではないのだから……」

その声は、すこしだけ寂しそうだつた。

「じゃあ……どうして」

ステラは途端、唾然として立ち尽くす。

ラウはふつと笑うだけで、その問いには答えない。そのまま白い軍服のポケットに手を伸ばし、中から一枚の写真を取り出した。それをそのままステラに手渡すと、ゆつたりと彼女の腕を離してくれた。

「——?」

ステラは怪訝そうに、写真を見下ろした。

精悍な体格をした大人の男性——そして、そんな男性と手を繋ぐ、ひとりの少年が映っていた。背は小さく、表情はあどけない。逞しい男性と同じように、自然に波打った天然の金髪をしていた。

写真の中の二人は、まるで親子のようにも見て取れた。見れば見るほど、そっくりなのだ。少年が大人になった時には、男性と瓜二つの人間に出来上がっていきそうなほどに……。

もしかして、これは幼い頃のこの^{ラウ・ル・クルーゼ}人だろうか……?」

戸惑いながら、ステラは直感的にそう感じた。写真の中の少年は仮面をつけておらず、今のラウの姿からは、まるで想像もつかないほど無邪気に見えたのだ。

「隣にいるのは、おとうさん……?」

「アル・ダ・フラガと云ってね。——私にとってはそう、父にも等しい男だった」

その言葉は、なぜか過去形だった。

ラウはおそらく遠い目をして続けた。

「こんなわたしにも、平穏な時代はあったのだよ。……しかしまあ、しよせん個人の安寧などは、意図もたやすく時代の波に蹂躪^{じゆうりん}されるものだ」

云いながら、ラウは一心に、目前のステラを見据えている。

見つめられたステラは、ラウの面を窺っていた。仮面に隠され、表情こそ計り知れなかったが、放たれる声色はとも真剣そうで、ステラにはそれが珍しく思えた。

「……きみになら、分かつてでももらえるはずだ」

意表を突かれたような言葉に、ステラは驚き、目を開く。

そうだ——。

血のバレンタインがなければ……“ユニウスセブン”が破壊されなければ……地球軍が核攻撃さえしなければ、ステラは今、もつと穏やかな世界に暮らしていたはずだった。万が一にも、みずからモビルスーツに乗って戦うような環境に身を置いていないはずだ。

そう、地球軍に肉体を弄られることもなかった。薬に苦しむようなこともなかった。

彼女は、他人によって平穏な日々を奪われた被害者だった。——もしかしたら、この人も……？

「この仮面の意味がわかるかな。わたしは過去を捨てた身、己にとって、忌々しいとさえ思える過去を捨てたのさ」

ラウは淡々と語る。

仮面をつけることで、過去を捨てて生きていくことを望んだのか？

その発想が湧かず、ステラはひたすら困惑した。
ややあつて、ラウは、唐突にこんなことを言い出した。

「その写真を、きみに託したい」

「え……っ?」

『餞別代わり』——そう思ってくれたまえ」

急な物言いに、ステラはしばし啞然とする。

「餞別って」

餞別とは、遠くへ旅立つ者に対し、別れのしるしに送る何かのこと。

作戦が始まる直前——このようなタイミングで贈り物をする際に、間違っても用いるような言葉ではなかった。なぜならそれは、とつても縁起が悪いから。

「死ぬ気、なの?」

問いかけに、ラウは短く笑った。

「私には、その写真は既に必要ない。今まで丁寧にデスクに保有していたことが、自分でも本当に不思議なくらいでね……きみが要らぬというのであれば、アラスカにでも投げ捨ててくれて構わない。あそこの飛瀑は雄大で美しいということだしな……」

ラウは、その写真をステラに「託す」と云った。写真を保管するのも、破棄するのもステラ次第。

その選択について、ラウは既に、彼女にとやかく言うつもりはない。

——でも、どうしてステラなんかに、そんな大切な写真を渡すんだろう……？

死を覚悟した兵が——戦地へ赴く前に、親族にみずからの写真を納めたり、肖像画を描かせたりする例は、そう珍しくはない。生前の写真を他者に託すあたり、このときのラウからは異様に不穏な雰囲気を感じ取れ、まるで自分が生きた証を、他人に託そうとしているようにも思えた。

どうして、ステラが選ばれたのかは当人にはまるきり分からない。

しかし一方のラウからしてみれば、彼はステラのことが入っていた。

(運命に弄ばれ、時を逸した出来損ない^{悪者}——きみはわたしによく似ている)

望まない体に生まれ、一方は改造され、葉がなければ生命を維持していくことにも困難な者であったこと。

そのような境遇——歩んで来た彼女の『不幸』に、ラウは不思議と共感を憶えていたのかもしれない。

だから、その写真を彼女に託す。

みずからの影を重ねることのできる彼女に——ラウにとって父とも呼べる存在、アル・ダ・フラガと手を取って歩く、幼少の頃の己の写真を。

「その写真が、わたしがこの世に残した唯一の未練だ。私自身、いまだ断ち切れずにいる

鎖——是非ともきみに、それを断ち切ってもらいたい」

ラウは云うと、そのまま踵を返し、ステラに背を向けてしまった。

——なにを、云いたかつたの……？

ステラは言葉の意味を汲み取り切ることは出来なかつたが、立ち去って行く男の背中が、なんだか寂しそうに思えたのは事実だつた。

思わず、「あの……！」と呼び止める。ラウはゆつくりとこちらを振り向いた。

「死ぬはだめ………だから」

死——それは、こわいもの。

ステラは、目の前にたたずむ男を無視することができなかつた。

彼はなんだか、みずからの死を予感しているように見えた……いや、直感的に感じた。まるで近々、自分が死ぬことを予知しているかのように、その寂しそうな背中を、どうしても黙って見送ることができなかつた。

「死なない、でね……」

云われたラウは、一瞬、虚を突かれたような表情を浮かべた。——自分のような者に、そんな言葉を掛けてくれる者がいたなんて。

しかしすぐに、その表情は豹変した。

くつと嘲ったような笑みが口元に奔り、嗜虐心を堪えたような表情に変わった。

(それが、これから死に逝く者の云うことか……ッ)

ラウは不気味にうすら笑つて、ステラの許から去つて行つた。

写真を託されたステラには、そのすぐあと、アラスカへの侵攻が命じられた。

『祈りの庭』——ある者達がそう呼称する、平穩で長閑な空間のどかが広がっていた。

小高い丘の上に建てられた雅な屋敷は、深い山林の緑に囲まれている。穏やかな風景の中、青い鳥達が歓呼する——幸福の象徴達の美しい合唱だ。峰の先には海にも似た大きな水岸が一望できるようになっていたが、目前にある広大な水溜まりは、決して「海」ではなかった。

なぜならそれは「プラント」に存在しているから——。

シーゲル・クラインは、ガラス張りになったサンルームの中、通信回線を開いていた。「謀つたな、パトリック……!」

「オペレーション・スピッドブレイク」——パトリックが提出し、そして可決されたこのプランは、パナマ基地を制圧するという内容で可決されていた。

その契約を、かの男は独断で破り捨て、攻撃目標をひとりでにアラスカへと変更したのである。その事実をシーゲルはアイリーン・カナバ現評議会議員から通信で聞き受けていた。彼女はシーゲルを慕う、いわゆる「クライン派」だ。その声にはたしかな焦燥と、そして煮え切り始めた嚇怒が含まれていた。これは明らかな越権行為、国民への欺瞞だと嘆くように話すカナバに、シーゲルは冷徹に返す。

「大衆は彼らに都合の良い結果さえ残るなら、過程などは目もくれない——それが正しいと思ひ込むものだ……ッ」

パトリックの腹積もりはシーゲルには読めていた。——たとえ議会から未承認の作戦であっても、地球軍本部を一気に制圧し、圧倒的勝利という結果を手に入れることができるなら結果論だ。一部の議員が違約だ何だと云おうと、世論からの支持を盾に黙殺できる——そういう目算だろう。

大衆は、間違つた過程よりも都合の良い結果を選ぶ。

もとより戦争に勝つためにパトリックを議長に選んだ大衆ならば、誰もそれを追窮したりはしないだろう。あくまでもそれは、博打にも近い打算にも見えるが……。

「地球軍本部を制圧し、この戦争を一気に終わらせるつもりか……」

本部さえ制圧してしまえば、残るザフトの仕事は、本丸を失つて失速する各地方の連合軍の掃討戦だけとなる。

このままでは、本当にナチュラルとコーディネイターが分かり合えない世界が生まれてしまう。なんとしても止めなければ——そうは思うが、今のシーゲル・クラインに出来ることなど何もなかった。今や現職の議員を退いた彼には、まるで発言力がないのである。

——作戦はもう、始まってしまったのだ……。

険悪な話を取り扱うふたりの背後——シーゲル・クラインの娘、ラクス・クラインの姿がある。彼女もまた、期せずしてその報告の聞き届け人となっていた。

みなでテーブルを囲んだ、ティータイムの途中だった。

桃色の髪を波打させた彼女は、彼女から見て円卓の向かいに坐し、そして強かに震えた——同居人へと問いかける。

「いかがなされました……？」

ラクスの声には、労わりが含まれていた。

震えた少年は、か弱く微笑み、そして答えた。

「行かなきゃ……」

アラスカ——地球軍地上本部は、少年にとつて、守りたい者達の目指した場所だった。奇跡にも近い状況で拾った命、そしてこの「プラント」に流れ着いた彼——。

カナバからの通信を聞き、自分の行かねばならぬ場所がわかった。

「このまま、何もせずにはいられない……」
雨が、降り出した。

少年——キラ・ヤマトは、生きていた。

大西洋上での死闘——フォートレスストライカーを背負った“ストライク”と“イージス”の激突に際して、両機は持てる死力を尽くして戦い合った。欺瞞、疑心、怒り、悲しみ——かつての親友同士が、感情のすべてをぶつけ合った結果、勝負を制したのはアスランの乗る“イージス”だった。

咄嗟に背後を突かれ、フォートレスストライカーを切り裂かれた瞬間、バックパックは誘爆を起こして大爆発を引き起こした。“ストライク”は爆発を間近に受け、大破したが、パイロットの彼自身は一命を取り留めたのである。

その後、孤島を訪れていた組合の者達に救助され、その伝手もあつて、今は“プラント”——ラクス・クラインの許に運び出されていた。

穏やかな世界、平和な空間で時を過ごしていたキラであつたが、ある日になって、“オペレーション・スピッドブレイク”のことを知る。

その攻撃目標がアラスカ——地球軍地上本部であることを知らされると、彼の身体は

強かに震え出した。

——アラスカ。これまで“アークエンジェル”が目指して来た場所。彼らのいる場所が、再び戦場になる。

仲間達が——トールや、ミリアリア達が、また危険に曝される……？

シーゲルと会話をするカナーバはさらに先を続けた。

『ザフト全軍は、パナマから進路を変え、既にアラスカへと発進した！』

咄嗟に、黒鉄色のモビルスーツが脳裏に浮かぶ。

蒼い眼、鈍重な装甲鎧、両肩の巨大な盾を持つ機体——。

——その中には、あの子もいるのだろうか……？

キラはふと、そんなことを思った。

「いつまでも、こんなところで安穩となんてしてられない」

キラがその旨をラクスに伝えると、ラクスは確認するようにキラに問うた。

「あなたが戦地に向かったところで、変わるものなどないかもしれない……救える命も」

「守りたい子が……守ってあげたい子がいるんだ」

ラクスの肩が、ぴくりと震えた。

ラクスには、心当たりでもあるのだろうか。

「力があるのに、何もしないで。救える命があるのに、救おうともしない。——そんなこと、やっぱり駄目だと思つたんだ」

悔しいことに、キラ・ヤマトには「力」があつた。

これまで、何度としてその力に悩まされて来ただろう。力があるから戦わされて、大人たちの都合のために自分を犠牲にして来た。友達と戦うことさえも義務付けられてきた。

——でも、割り切つた。

自分には、それだけ「力」がある。

大切なものを守つて来られただけの力——その真実を知つてなお、何もせずにいることは出来ないと感じた。

キラは目に光を宿して語つた。

「僕にできること、やれること。——戦わなくちゃ守れないものがあるのなら、僕は戦つてでもそれを守つていたい」

決意を胸にそう告げると、ラクスは鷹揚と天使のように微笑んだ。

そのまま彼女は、父親であるシーゲルの方を見遣る。

「お父様」

問いかけられ、シーゲルは一瞬渋つた表情を浮かべる。

しかしすぐに意を決し、やむを得ないと云った表情で声を発した。

「仕方あるまい……キラ君、ついて着なさい」

そう云つて、キラはシーゲルの執務室まで連れて来られた。

ラクスを同伴した状態で案内された先、シーゲルは引き出しの中から赤黒色の制服を取り出す。ザフトの赤服だ。それをそのままキラに差し出し、渋つたような表情で云う。

「この制服を、キミに預ける」

「え……っ」

シーゲルは云いながら、自分がパトリックと同じことをしていることに気付き、それを皮肉に思った。戦争に慣れない、軍人でもない少女少女に、軍人の証である制服を手渡しているのだ。

「ラクス、彼を案内して差し上げなさい」

「……………では、キラに授けましょう……自由の翼^{……}を——」

そうしてキラは、ラクスに連れられ——「プラント」の中で、アプリリウス市まで案内されて行つた。

地球軍地上本部、"JOSH—A"——

"アークエンジェル"がアラスカ基地に繋留されてから、おおよそ五日間が経過していた。

クルーたちは依然として艦内待機を命じられたまま、これと云った動きを取ることも許されずにいた。変化といえば、宇宙艦であるこの艦が、どういうわけかアラスカの守備隊に配属されたということだろうか。

一方で、ごく一部の搭乗員には転属命令も下されていた。

指名されたのは『エンデュミオンの鷹』で異名を馳せるムウ・ラ・フラガと、副長のナタル・バジルール——優秀であった彼らには、それぞれ別の活躍の場が与えられたと云うことだろう。そして、フレイ・アルスターに関しては、ジョージ・アルスター大西洋連邦事務次官の娘であることから異動が決まっていた。

異動を指示されたのは、以上の三名の他にもいた。

(気に掛かるわね……)

査問会の後、サザーランド准将がマリューに対し、追って連絡をして来たことがある。『船医であるハリー・ルイ・マーカット氏に伝えよ。明朝、人事局に出頭するように』

異動命令は、船医であるハリーにも下されたのである。

転属指示を受けたのは合計で四名になったわけだが、医務官であるハリーに異動の指示が下された理由を、彼女は掴めずにいた。

(いつまで、残された私たちはこうしていればいいのか……?)

そのとき、突然の警報が鳴り出した。

当直の者達はたちまちに混乱し、マリユもまた同様に啞然とし、すぐさまCICへと状況確認を求めた。

「この警報は……!?!」

通信先はウイリアム・サザーランド——彼は表情ひとつ変えず、白々しく答えた。

〈敵襲のようだな〉

「敵襲……!?!」

へしてやられたよ、奴等は直前で目標を変更し——この“JOSEA”へと攻め入って来たのだ〉

その冷淡な物言い草に、マリユはしばし硬直した。「してやられた」と云う割に、その言葉は妙に白々しく、感情が籠っていないかった。仰々しいより冷静な対応だが、マリユはふと、こんなことを思ってしまう。

——それではまるで、『敵襲が来る』とあらかじめ分かっていたような言い方ではない

か……？

しかし、唾然としてばかりもいられない。

仮にその言葉が真実であるのなら、ザフトは予定していた「スピッドブレイク」の攻撃目標を、咄嗟にパナマから「JOSH—A」に変更したということになる。それはつまり、もうじきこの場所が戦場になるということ——ようやくの思いで辿り着いた、この地球軍地上本部が。

↑——守備隊はただちに発進せよ↓

唐突に出された出撃命令に、マリューは硬直する。——モビルスーツも持たない機動戦艦に、いったい何ができるといふのだろう？

しかし、上官からの命令が下されれば、軍人は黙ってそれに従うしかない。如何なる無理難題を突き付けられてなお、その内容の通りに励まねばならない、それが彼女たちの仕事だ。

たとえば、敵を引き付け「徒死^しね」と云われても——黙って従い、自決するのが軍人の務めだ。

そうして「アークエンジェル」は発進した。

海岸線に、ザフト兵が多く群がって襲来している。マリューは焦りに塗れた心を必死で抑えつつ、敢然と命じる。

「ゴッドフリート」照準、てーっ！」

転属命令を受け、既にこの艦を離れた者達——ムウ・ラ・フラガ、ナタル・バジルー。

ふたりの損失は、マリューにとって非常に大きいものでもあった。——彼らが、そしてキラ・ヤマトもない今、果たして自分達は生き残れるだろうか……？

「さあ、出撃するぞ、用意はいいか!？」

イザークが声高に叫び、輸送艦から勢いよく三機の「グウル」が射出された。

X-102 「デュエル」がそれに飛び乗った後、両隣に「バスター」 「デイフェンド」と並んで、編隊したまま飛行してゆく。

「……………」

「デイフェンド」のkokopiddの中で、ステラはアスカ基地の大まかな見取り図のデータを眺めていた。

メインゲートは巨大な飛瀑の下にカモフラージュされているようで——ラウの云っていた「雄大な飛瀑」とは、おそらくその場所のことだろう。

ステラはこのとき、託されたラウの写真を、アラスカに投げることを選んでいた。——彼は「わたしの未練を断ち切つて欲しい」と云つていたからだ。この任務が終わつて、無事に生きて帰れて、自由になつたら、その写真をアラスカの大滝に投げ捨てて来よう。親子の写真をポケットの中に仕舞い、祈るように目を瞑つた。

——今回もどうか、生きて帰つてくれますように……。

アラスカ上空に、数しれぬモビルスーツの大群が押し寄せた。

蒼穹の向こう側から「デイン」や「シグー」が羽虫のように空中に群がり、青空を覆う。海中の潜水艦より「グリーン」や「ゾノ」と云つたモビルスーツが泳ぎ出し、アラスカの陸地へと上陸を開始。宇宙からは無数の耐熱カプセルが降り注ぎ、卵が還るかの如く、カプセルの中から「ジン」などのモビルスーツが現出してゆく。

アラスカは、あつという間にザフトのモビルスーツ侵攻部隊に包囲された。

地球連合軍の本拠点でもあるアラスカ基地は、いつかのマストドライブバー施設のように、ワンマン頼りの張りぼての防衛力とは程遠い堅牢な防衛線を張つていた。しかし、やはりナチュラルにモビルスーツを扱うことは叶わず、迎撃手段といえは旧来の高射砲や戦闘機でしかない。だがそれにしろ、守備隊の堅牢な配置・物量において、ザフトの侵攻はやや食い止められつつあつた。

アラスカは巨大な飛瀑の下にメインゲートをカモフラージュしており、その内部に街

として開拓されたグラウンドホローが広がっている。

大空洞の最奥部に連合軍の本当の拠点があることから、ザフト軍は、まずゲートを突破しなければならぬ。

内部へ繋がる入口はメインゲートの他にも複数として構えられ、当然、各ゲートには強固な守備隊が配置されている。その守備隊に打ち勝ち、ゲートを突破することが、ザフトの勝利への第一歩となるのだ。

空中を侵攻するモビルスーツ群。空戦部隊の先導を切るのは、カーペンタリアから派遣された「デイン」部隊だが、その後続として「グウル」に乗った「バスター」「デューエル」「デイフェンド」の姿があった。

「おれたちの任務内容を確認する。頭には入っているな？」

イザークが声を上げ、通信先から「当然」と「はいよ」という声が返って来た。

「おれたちは各ゲートを制圧して回るよう指示を受けている。このまま散開し、各々が担当するゲートを防衛する守備隊を無力化する」

イザークは四番ゲート、ディアツカは五番、そしてステラは六番ゲートというように、彼らはこの後、担当するゲートへ向かい、そこで交戦する一般兵達の支援を行う手筈になっている。守備隊を無力化し、ゲート内部への道を切り拓いた後は、量産機部隊をグラウンドホロー内へと送り出す役割である。

したがって、彼らの行動が許された範囲は、あくまでもアラスカ基地の「外側」であり、内部で暴れ回るのは、「バクウ」や「ディン」といった量産機部隊の仕事なのだ。

それについて、ディアツカには思うところがあるようだ。

〈ゲートさえ確保しまえば、内部の防衛力は手薄だからなあ？ 侵入して暴れまわるのは雑兵にも出来る——そういうことだろう？〉

その指摘は正しい。

イザークは同意して「そうだ」と短く答えた。

〈皆さん足つきを取り逃がしておいて、おれたちってまだ一応、エース扱いされてんな？〉

「……うるさいわ！ しばらく口を閉じていろ！」

ディアツカからの軽率な冗談を一蹴して、イザークはさらに続けた。

「おれは四番ゲートを制圧する。ディアツカは右、五番ゲートだ」

オーライツ、と軽快な返答が聴こえると、「バスター」は転進し、幾つかの僚機を連れ、北方へ離脱してゆく。

すぐさまイザークは「デイフェンド」へ通信した。

「オマエは左だ！ 三番ゲートを任せるぞ！」

〈わかった〉

答えながら、「デイフェンド」は「グウル」を転進させる。

ステラの後方に数機の「デイン」が後続し、彼女は小隊を率いる立場となつて、三番ゲートへと向かつて行つた。

「――」

飛び去つて行く「デイフェンド」の後ろ姿を見送りながら、イザークはしかし、齒に物が挟まつたような気分に駆られた。

（思えば、おれはいつだってあいつにきつく当たつていたな……）

イザーク自身、以前彼女に殴られてから、すこしずつ考えを改めていた。

――ステラも、おれたちの仲間だ……。

ステラの身に何かあれば、アスランに顔向けができなくなるのではないかと、いや、それ以前に、あいつに何かを云われるのはかなり面倒な気がした。

そう思うと、イザークはぶつきらぼうに、一度は閉じたはずの「デイフェンド」への通信回線を開き直した。

「貴様に云い忘れていたことがある！」

ステラは事務的に「なに」と答えた、抑揚のない声だった、また嫌味でも云われると思つたのだろう。

イザークは声がひっくり返っていた。

「ふえ、フェイズシフトも無限じゃないんだ！ 補給は怠るな！ 残りのエネルギーには常に気を配れよ！」

〈……えっ？〉

ステラは間の抜けた表情を浮かべた。

まさか——と思うが、今のは、ステラへの忠告？ もしかして、心配してくれているのだろうか？

あんぐりとして通信回線に沈黙を流すと、たまらずにイザークの顔は真っ赤になった。

「べつ、別に貴様のために云っているのではないぞ!? 貴様に怪我でもさせて、後でアスランにとにかく云われるのが、おれには癪なだけだ！」

〈そ……そう、わかった〉

その会話を期に、ステラとの通信は切れた。どうやら距離を開きすぎたようだ。

「デイフェンド」に搭載されている光波アリウムエネルギー防御帯は、絶対的な防衛力と引き換えに莫大なエネルギーを消費する。

連続で使用すれば、すぐにでもバッテリーが底を尽きる代物だ。

バッテリーが切れ、フェイズシフトダウンを起こせば、それはつまり、彼女の身の危険へと直結する。装甲が薄くなれば、いくら鉄壁の「デイフェンド」といえど、かすか

な砲火が致命傷になるからだ。

(おそらくアラスカ攻略は長期戦になる。補給を怠れば、勝てるものも勝てんだろうか
んなら……)

自身もまた、常にエネルギーには気を付けよう。

イザークはそれを肝に銘じながら、「デیفエンド」を見送った。

「——だが、面白くないマトばかりだな……う？」

イザークは「デュエル」を操りながら、眼下に構える戦車が、みるみる内に「ザウー
ト」や「バクウ」を相手に蹂躪されて行くのを見届けた。

形勢は、ザフト軍による一方的なもので、まるで面白くなかった。

戦争に面白さを求めるのも不謹慎な発想だが、これまで「ストライク」や「アークエ
ンジェル」という強敵と対峙して来たイザークの目に、それはあまりにも無味乾燥な光
景に映った。

「……杞憂だったか」

相手がこのレベルでは、よもや、ステラが光波防御帯を使うような場面はないだろう。

彼女の腕は、アスラン譲りだ。

何も心配はない——そう思いつつ、イザークは四番ゲートへの加勢に向かった。

ステラの向かった三番ゲートは、立て続けに聳え立つ岩盤の頂き——高所に構えられた場所に厳存していた。そこは機動力のない「ザウート」では攻略できず、陸戦力に長けた「バクウ」ですら、ゲートまで昇るのに守備隊が邪魔をしている。最も有効なのは「デイン」部隊による空中からの襲撃だが、それもまた対空砲にせいで捗っていない様子だ。

性能上、遠距離への攻撃手段に乏しい「デیفエンド」は、今回の出撃で脚部にミサイルポッドを装備していた。これは「デュエル」の追加装甲アサルトシユラウドと同系統の武装であり、ザフト軍が「ジン」等のモビルスーツに用いているものと同じものだ。

ステラは制圧地点をもう一度確認すると、その周囲に展開する守備隊に向け、ビームライフルを応射し、ミサイルポッドを撃ち放つ。

彼女が放ったほとんどの砲火が、正確に高射砲や戦車に着弾しては、見る見るうちに守備隊を壊滅させてゆく。

あつという間に、地球軍の迎撃力が減衰して行った。

「こんな力で、戦争をしているのか……？」

イザークがそうであつたように、ステラもこのとき、妙に空疎な感覚に陥つた。

——こんなにも一方的な戦いは、かえって卑怯だ……。

ナチュラルとコーディネイターの間能力差がありすぎるのだろう。形勢が傾き過ぎて、まるでザフトが一方的な「弱い者いじめ」をしているようにも見える。

ステラは疑念に思った。

——やっぱり地球軍は……「デストロイ」がなかったら——。

結局のところ、ナチュラルはあのような狂気の産物に頼らなければ、コーディネイターには対抗できないのだろうか？

仮にそうであるならば、一方のモビルスーツパイロットも同様に——かつての自分のような——あらゆる調整を施した、強化人間の量産が不可欠となって来る。

それが、力無き者達ナチュラルの必然——？

渴望の先、ようやくの思いで辿り着いた果てに、その程度の発想にしか至らなかったのか？ コーディネイターを生み出したほどのナチュラルの聡明さは、今やそこまで堕ちて行ってしまったのか？

「——これで終わり？」

ステラの担当した三番ゲートは、あつという間に守備隊が壊滅し、ゲートがむき出しの状態になった。

「グウル」を空中に待機させ、三番ゲートへと着地を決める。視界の先には真つ直ぐに伸びた侵入口が拡がり、駐機中の戦闘機がいくつか確認できた。出撃を防ぐため、戦

闘機を手当たり次第に蹴り飛ばし、再起不能にさせていく。ひと段落つくと、ゲート内
部はすっかり静まり返り、無力化に成功した。

「なんだ、この程度なのか」

後続部隊の侵入路を確保すれば、ステラの仕事はここまでである。

みずからも奥に攻め込みみたい気持ちを抑えて、すぐさま後続部隊へ侵入を促す。

「三番ゲート確保……いいよ」

〈突入する、支援ありがとう！〉

「デイン」からの通信が聴こえ、翼を広げた機体達が、ステラの横を通って内部へと
突入して行く。

彼女はその後ろ姿を、グラウンドホローへと突入していく部隊の背中を見送った。

ステラは一息ついて、機体を翻した。そのまま「グウル」に飛び乗り、次なる目標地

点——難航している七番ゲートへの支援に向かおうと一気に上昇した。

「……なに？」

大空へ舞い上がった「デイフェンド」は、それよりも上空を見上げた。

何かが、大気圏上から一陣の光となって、このアラスカに降りて来ていたのだ。

——流れ星？

いや、違う……それは、見慣れないモバイルスーツだった。

背部に大型のフライトユニットらしきリフターを背負い、全身は真紅色に彩られている。通常のモビルスーツをはるかに凌いだ機動性を持ち、単機で大気圏を突入するだけの性能を持っている。最新鋭機？ どこか「イージス」にも似た印象を受けるのは、外観上、攻撃的に見えるからか。

上空から降下してくるそのモビルスーツは、打ち合わせたように、滑空した先でザフト軍の空戦部隊と合流を果たした。そのまま北方の方向——八番ゲート——へと侵攻し、「スピットブレイク」に助力し始めた。

怪訝に思いながらも、ステラは頭を切り換えて、そのまま指示された七番ゲートの攻略へと向かった。

アラスカ近海を航行する、潜水艦の一隻にて——

潜水艦内部という場所柄、少々手狭ではあるが、すつきりとした平穩に包まれた室内。そこに、ウイリアム・サザーランドほか、多くの地球軍将校の姿があった。本来ならばザフトによる奇襲に驚き、慌てて本部にて対策を練っているであろう顔ぶれである。彼らはテーブルの上に何かの起動装置であろうアタッシュケースと——そして、

大型のモニターを構えていた。

「第三ゲートが突破されたようです、内部への侵攻が始まりましたよ」

あらかじめわかつていた段取りを語るように、ひとりの将校が淡々とサザールランドへ告げる。

「他のゲートも、時間の問題かと」

「もうすこし粘るかと思つたが。ユーラシアの連中も、弛んでいるな」

この作戦において、アラスカ内部で戦闘しているのはユーラシアの部隊と、そして、彼らの都合によって配属を決められた“アークエンジェル”のような一部の大西洋連邦の軍艦だけだった。

他の多くは、今の彼らのように——とつくのとうに“JOSH—A”を離れていた。

そのとき部屋のドアが開き、サザールランドはそちらへと顔を向ける。

視線の先に立っていたのは、フレイ・アルスターだった。彼女は怪訝そうにサザールランドへ詰め寄る。

「どういふこと？ どうしてアラスカから離れているの、わたしたちは……？」

純粋な質問に、あたりの将校たちは人の悪い笑みを浮かべた。彼らは事情を知っているのだろう——何も知らない無知な者を侮るような空気が場に流れ、フレイは咄嗟に不愉快になった。

サザーランドはフレイを見上げ、淡々と告げた。

「作戦ですよ」

「作戦？」

「我々はザフトがアラスカへ攻め込んで来ることを、前もって知っていたのです」

その言葉に、フレイは一驚する。

それはつまり、ザフト軍の方から、何者かの手によって情報がリークしていたということである。

「ザフトは戦力の大半を、この『JOSH-A』へと遣わせて来る。——これを、一網打尽にするための策です」

「どういうこと？ だったら、どうして『アークエンジェル』をあそこに置いてきたの……!？」

上官であるこの者達だけが潜水艦で逃げて、彼らだけは置き去りにされるように戦っている……？

そんな愚挙が、許されているのだろうか……？

フレイの糾弾は、しかし、あっさりとは跳ねのけられる。

『噂の不沈艦』が盾となってメインゲートを守っているのです、その奥にある宝物への期待は高まるでしょう」

「我々はザフト軍を基地へ誘い込み、アラスカをそれごと爆破するのが目的ですよ。——この……「サイクロプス」を用いてね」

明かされたのは、冷たい、それでいて狂った計画。

フレイは驚きの言葉を放つことも忘れて、その場に絶句した。

「アラスカ基地は既にもぬけの殻です。あそこに残されたのは、我々が不要と判断した者達だけ」

——不要？

人間を人間とも思わぬその表現に、フレイは啞然とする。ならば、この潜水艇に乗って退避している者達は、彼らにとって「必要」と判断された者達になるのだろうか。

そう、司令部は「アークエンジェル」の乗員の中でも、ムウ・ラ・フラガ、ナタル・バジール、そしてフレイ・アルスターと云った、様々な局面において使い道のある人間だけを「転属」と託^{かたづ}けて「避難」させていたのだ。

無差別破壊兵器たる——「サイクロプス」の魔の手が及ばぬ世界へと……。

「同時に——デモンストレーションを行います」

フレイには知らぬ言葉が放たれ、「ご覧ください」とサザーランドが室内のモニターに電源を入れた。

スクリーンには、アラスカの大飛瀑が映し出された。

戦闘中の光景だった。

無数の砲火が飛び交う中に、浮遊する「アークエンジェル」の姿もある。友軍艦「オレーグ」「コロ」「リユーリック」というユーラシアの艦船が多く奮戦する中で、白亜の宇宙艦もまた懸命に生き延びているように見える。

「アークエンジェル」……！」

空中に展開する数多のモビルスーツを相手に、機動兵器も持たない戦艦が野晒しにされている。

あまりに絶望的な状況だ。

フレイは思わず声を上げたが、サザーランドはひどく冷ややかに言葉を発した。

「今から投入するものは、我々が極秘裏に開発していたものの試作品でしてね」

サザーランドが、デスクの上に構えられたアタッシュケースのボタンを押した。

それが何のスイッチだったのかはフレイには分からなかったが、それにより、スクリーンに映る光景に変化が起きた。

その瞬間、巨大な飛瀑が——割れた。

流水の奔流が、切り裂かれたようにまつぶたつに分断されてゆく。その内部より、何か得体のしれない巨大な物体が現れた。

不吉に黒光りに、巨大すぎて全貌を窺うのも困難な長方形——これは機動要塞、

だろうか？

「なっ、に」

フレイは唾然として、“アークエンジェル”の後方に現れた、その機動要塞を見届けた。

そいつはたちまちに変形し、重々しくも滑らかに人型の姿へと変貌を遂げた。

角のようなVアンテナが頭部に伸びた、滅紫色の巨人——全長はゆうに四十メートルを超え、天を突くかのような勢いでメインゲート入り口に屹立している。見方によつては、進入路をその巨体で塞いでいるようにも見えた。

通常のモビルスーツのサイズを大きく超越し、戦艦である“アークエンジェル”の全長——その半分にも及ぶ質量を誇っている。モビルスーツですら巨人に見えるフレイからすれば、おおよそ想像も付かないような大きさだった。

破壊の巨人そのものを顕現させたかのような機体だ——サザーランドは誇つたように語つた。

「GFAS—YFOI”エクソリア”——大西洋連邦わねわねが独自の研究で開発させた、モビルフォートレスの一機です」

それは、大西洋連邦が開発した、最新鋭の機動兵器だった。

フレイは釈然としなかった。

「最新鋭機をどうして、これから爆破するっていうアラスカに配備しているの？」

当然の疑念を聞いてみたが、サザランドは鼻白んで答えた。

「あれはしよせん試作機ですよ、まだまだ改善の余地がある。……『アレ』の性能がザフトを相手に実戦でどこまで通用するのか、もしくは、何をどう改善して行かねばならぬのか——今回、我々はここで観察せねばなりません」

一回の実戦で採取できるデータとは、連日として続ける試験のデータよりも、はるかに価値があるものである。

彼らは『エクソリア』を、あえて試作機のまま実戦に投入することで、実地運用における——訓練では思いつかない——欠点を発見しようとしているのだ。

出撃した機体はあくまでも試作機であり、使い捨ての駒。

彼らはもつと実用的な本体を、他の場所に隠し持っているということになる。

フレイは釈然とせずに質問を続けた。

「でも、パイロットは？　にんげん中身ごと使い捨てにするつもり!?」

「乗っているのは強化人間のひとりです」
ブーステッドマン

「同じナチュラルでしょう!?　同胞を切り捨ててるなんて……!」

「彼はもともと死刑囚です。見殺しにしても感謝こそされ、恨み嘆く者はいやしません」
彼もまた、この作戦の内容を知っていますしね。

付け足したサザーランドは淡々と語り、画面に映るモニターを見遣りながら、通信機をオンにした。

G F A S — Y F O 1 “エクソリア”とは、通常のモビルスーツの全長の三倍、重量にして四倍の質量を誇る巨大なモビルアーマーである。

ビクトリア上空より突如として降って来た『黒鉄の巨人』——そのデータを基に、大西洋連邦が独自に開発した機動兵器。

“デストロイ”の半身とも云える円盤型の部分はビクトリア基地に配備されたが、もう半身である人型の部分は、既にステラ達がビクトリアを制圧した時点で、大西洋連邦に持ち出されていた。

地球軍はそれを解析し、独自の研究において“デストロイ”の後継機である“エクソリア”を完成させた。

今回、出撃したのは試作型の“それ”である。

パイロットは、強化人間としての改造を施された成人の男性——名をジェイク・リーパーという。大量殺人の罪で死刑宣告を言い渡されていた、異常人格者である。

〈聞こえているかね、ジェイク・リーパー〉

サザーランドが通信越しに、「エクソリア」のкокピッド内に座すジェイクへと話しかけた。

〈気分はどうだ？〉

「ああ……最高だぜ……薬のせいかな、興奮が止まらねえ……！」

生体CPU用のパイロットスーツに身を包んだジェイクは、かなりえげつない声を出しながら、高揚気味に啜う。

その笑い方は常軌を逸していて、薬に精神を蝕まれたのか、まるで健全ではなかった。

「感謝してるぜエ、サザーランド大佐よお……！」

通信越しのフレイは、彼が何を云っているのか分からなかった。

サザーランドは捕捉するように彼女に説く。

「彼はもともと死刑囚で、死を待っただけの身柄だった。しかし、命は大切にしているものでしてね？ どうせ死ぬのであれば『命の最期までコーデイネイターを殺し暴れ回ってみたいか？』——そう提案したのですよ」

コーデイネイターであれば、どれだけ殺して貰っても困りませんからね。

付け足された言葉に、フレイは啞然とする。

尤もらしく聞こえるが、矛盾している。その提案のどこが、命を大切にしているとい

うのだろうか？

ブーステッドマン

「云えば、彼は強化人間となることをあつさり承諾してくれた。みずからが『サイクロプス』の餌食になることを知ったうえで、彼は今、あそこにいる」

持ち掛けたのは、悪魔の契約。

「我々は『エクソリア』のデータを採取できる。彼は合理的に人が殺せる。——利害の一致した、揺るがない関係ですよ」

「こんな機会が巡つて来るなんて思わなかったぜ！ 目の前に浮かんだ連モビルスーツども中、全員ぶつ殺してもいいんだよなア!?」

ジェイクは、殺人快楽主義者だった。モビルスーツの装甲越しとはいえ、こんなにも多くの人間を殺す機会は無多にないだろう。

彼にとつて、戦争はいいものだ。

サザーランドは嫌に笑った。

「ああ……構わないさ。思う存分、暴れてくれていい」

「そうだよなあ！ ここにいる奴等、みんな平等にすぐに死ぬんだもんなあ!」

もはやジェイクには、敵と味方を識別する必要はなかった。

目の前にいるザフト軍はもちろん——彼と同じ場所にいる地球連合軍でされ、みずからが『サイクロプス』の生贄になることも知らずに戦い続ける、残念な者達でしかな

い。もはや、明日が約束されていない者達なのだ。

当然、アラスカ基地に残っている以上、ジェイク自身も『時』が来れば「サイクロプス」に巻き込まれることになるだろう。

しかし、もとより死刑宣告を受け、死を待つだけだった身の彼にとつては、そんなものは問題ではないのだ。むしろ彼は、この時間を愉しんでいる。孤独に死刑で逝くよりも、最期の最期まで多くの人間を殺して回れる機会を恵んでもらったことに感謝していた。要するに彼は変態だった。

へさあ、キミの戦いを見せてくれ、ジェイク！——「エクソリア」の力で、コーディネイター共を追放しろッ！」

「オラアアッ!!」

その瞬間——「エクソリア」の顔面、口の部分から巨大な熱光線が放たれた。

悪魔の吐息だ。噴かされた砲撃は圧倒的な質量と熱量をもつて空間を大きく薙ぎ払い、上空に展開する「デイン」や「ジン」などのモビルスーツを一掃してゆく。

青空に爆発の華が無数に咲き誇り、ジェイクは満悦に、さらに快感を募らせた。

「はっはー！」

殺虫剤をかけられた羽虫のように、モビルスーツが次々と被弾しては、海に墜落してゆく。

その中に人間がいる——自分が、彼らを一齐に屠っている。人殺しに慣れたジェイクの異常人格は、その快感に刺激されるばかりだった。

胸部より“スーパースキュラ”を放ち、各部位からも巨大な砲門を開き、数多のビーム兵器を放出する。

アラスカ基地は、たった一機のモビルアーマーの登場によつて地獄絵図と化した。

三番ゲートから七番ゲートを制圧しにかかったステラは、程なくして、淡々と作業をこなすように七番ゲートの制圧を完了させた。ザフト軍は圧倒的な物量で、完全にアラスカを制圧して回っている——残りのエネルギーを確認すれば、まだ半分以上も残っている……やはり、敵が弱すぎて話にならない。

——次はどこへ行こう……？

サブゲートのほとんどは制圧されたようである。“デュエル”や“バスター”もしつかりと働いているようだ。

先ほど見た、真紅の機体が気に掛かったステラであったが、ザフト軍から流された情報を共有すると、メインゲートがいまだに制圧できていないようだった。——なにか、

障害があるのだろうか？

ゴウンツ

その瞬間、遠方で轟音が鳴り響いたように——聴こえた。

不吉な感覚が、全身を駆け巡る。

戦闘の最中、わずかな音が判然と聞こえるなどあり得ない。しかしステラには、その音が明瞭に響いた。

「なに……？」

鳥肌が立つ。悪寒が背筋をなじるように駆け抜ける。

音が聞こえたのは、メインゲートの方角だ。

——何か、いる……!?

メインゲートの方角で、鳴り響くのは爆発音だった。

やけに大きい？　ちがう、たくさん——？

音が轟然と続くのは南方の方角——メインゲートのある方面からだ。

サブゲートの多くが制圧できた現状、メインゲートの制圧に固執する必然もなかったが、なにか不穏なものを感じたステラは、性急に「デイフェンド」を転進させた。

そして、訪れた湾上の光景に——目を見張った。

湾の入り口にはザフトの潜水母艦が列を作り、海上封鎖ラインを形成している。

それらが一齐にミサイルを放つ先、見たこともない巨人——機動要塞——が立ちほだかつていた。その横には、懐かしい白亜アークエンジェルの戦艦の姿もある。

放たれたミサイルは、すべて巨大な機動兵器へと向かったが、そのいずれも、虹色の光——陽電子リフレクタ——の展開によって無効と化す。反撃と云わんばかりに、巨人からは凄まじい砲撃が放たれ、一齐に潜水母艦を横薙ぎに穿つ。ザフトの編隊はあつという間に瓦解し、湾上には連綿と続く巨大な火炎の華が散った。

「なに、あれは——！」

ステラは思わず、眉を顰めた。

目の前に拡がったのは——今朝見た夢を彷彿とさせる光景だった。

世界の中心に君臨する鋼鉄の巨人が、破壊の限りを尽くしている。周囲のものすべてを薙ぎ払い、焼き焦がし、滅ぼしてゆく——。

応戦する「デイン」等のモビルスーツが、果敢にも「エクソリア」へ攻撃を仕掛けたが、あつという間に瞬殺されてゆく。

彼女は無意識にスロットルに手を掛けていた。

「地球軍、またッ！」

あの巨人——あのモビルスーツは——。

「アレ」は、昔わたくしのステラだ——。

ステラは沸き上がる後悔とたしかな忌々しさを憶えながら、急速に機体を降下させた。

「デイフエンド」が——「エクソリア」の前に立ちはだかった。

全長は、「デイフエンド」の三倍近くはあるだろうか？　なんていう大きさだ——それに積み込まれた力も計り知れない……。

——よくも、こんなものを……！

乗っているのは、かつての自分と同じような、強化人間……？

確信が胸に立ちこめる。

激しい嫌気が、ステラを襲った。

「——よろしいですか？　こうですからね、ザフトの軍人さんのご挨拶は」

ラクスにはにこりと微笑みながら、唐突に白い手をぱつと上げて見せる。キラは託されたザフトの赤い制服に身を包んで、その動作を真似て見せる——地球軍の敬礼とは、微妙に手の角度やれが違うようだ。

キラがラクスに連れられて案内された先は、軍事用の工廠だった。正規のものか、偽造して用意したものか、ラクスの進む先には複数のザフト兵達が待機しており、ID

カードを照らし合わせ、彼女の道を淡々と切り開いてゆく。

やがて最終的に、キラはだたつぷろい無機質な空間へと辿り着いた。ライトが落とされておろ、周囲の様子を判然と把握することは出来ないが、響く足音の反響によつてそうと判断できる。暗くてよく分からないが、何か巨大な構造物が目の前にあるようだ。

「……？」

そのとき急にライトが点灯し、キラは目の前に照らし出されたものに、ハッと息を呑んだ。

四本のアンテナが突き出した、異教の神を思わせる巨大なモビルスーツ——。

「これは……！」

「自由の翼——ZGMF-X10A “フリーダム”です」

ラクスは目の前の機体を見上げ、キラへ視線を移すと、無邪気に微笑んで見せた。

「奪取した地球軍のモビルスーツの性能を統合して取り込み、ザラ新議長のもと開発されたザフトの最新鋭機——だ、そうですわ」

「これをぼくに、なぜ……？」

「今のあなたには、必要な力だと思いましたが」

ラクスはどこか深い眼差しで、キラを真摯に見据えた。

「キラの願いに……行きたいと望む場所に、そして彼女を守るための力に、これは不要で

すか？」

彼女——その言葉を聞いて、キラは息を呑む。

そうか——この少女は、キラの心情を既に察しているのだ。

ラクスは、ステラがザフトとして戦っていることを知っている。そして、キラとステラとが交流をあったことも、捕虜として「アークエンジェル」に收容されたときに知っていた。

「守るための、力……」

「わたしも歌いますわ、平和の歌を……」

キラは理解した、彼女もまた、歩み出すのだということ。

そう——ザフトの最新鋭機、国の重要機密を他国の人間を売り渡すことなど、客観的には反逆に他ならない。キラにこの機体を預けた後、ラクスはおそらく「プラント」から追われる身となるだろう——しかし、彼女はその未来に怯む様子もなく、力強く続けている。

「ラクス・クラインは、平和の歌を歌います——あなたと、共に」

「……ありがとう」

やがて、キラは託された機体のコクピッドに飛び行った。

電源を入れ、コンソールに照らし出された機体データに、啞然とする。

機体のエネルギーは、ほとんど無尽蔵と云つてもいい。

スペックを即座に頭に入れてゆく。蒼い翼を持った機体は——頭部にMMI—GAU2ピクウス・72ミリ近接防機関砲、腰部側面に二対のMA—MO1ラケルタ・ビームサーベルをマウントし、MMI—M15クスイファイアス・レール砲とレーザーサイトとしても運用可能なエネルギー収束砲、“デイン”のそれを思わせる翼の内部にMO0バラエーナ・プラズマ収束ビームを内蔵し、手にはMA—M2ルプス・ビームライフルを握る。

ラミネートアンチビームシールドには“デイフェンド”から採取した光波発生装置が備えられ、ビームシールドを展開することが出来るようになってゐる。盾の先端部には暗器として使用可能な“タクティカルナイフ”を忍ばせており、射出することも可能。な上、展開したまま武装として揮うことも出来るようになってゐる。

そのどれをとつても、出力は“ストライク”の四倍以上だ——。

キラはとりわけ、盾に装備された光波発生装置に注目していた。

そう、これはあの娘の……“デイフェンド”が得意とした武装のひとつ。あらゆる射撃を無効化し、あまつさえ“アルテミス”の爆発からも彼女の守つた、絶対的な守護の力——。

「守るための、力か……」

たとえば、ニュートロンジヤマーキャンセラーという矛盾の産物を搭載した機体でも。

“フリーダム”の展開できる防御力は、バッテリーやビーム出力もろもろの点で見ても“デイフェンド”の四倍にはなるだろう。

「思いだけでも、力だけでも……！」

そうして、工廠のゲートが開いてゆく。

ラクス・クラインの手引き、そしてキラ・ヤマトの意志に呼応するかのように、宇宙への道が切り開かれていく。事態を知らぬ正規のザフト兵達は狼狽えた声を出す、既に“フリーダム”に接続されたケーブルは次々と切断され、バーニアには火が灯って行く。

エアロツクが開き、星空が見えた——キラは同時に、意志を固めた。

「キラ・ヤマト——“フリーダム”行きますすー！」

地球へと飛び立って行く“フリーダム”——。

白く輝く四肢を持つ。ボディはグレーとブルーのツートン、背部には蒼い十枚の翼を広げ、頭部には突き出した四本のVアンテナが見える。

その機体は、あたかも、人類を次の時代へと導いてゆく“天使”のように見えた。すくなくとも、このときのキラはきつと、そう信じて疑わなかった。

自由の翼——この機体は力だ。

守るべきものを、守り抜くための力。

悩ましい戦争の火によって、人々が誤った方向に進まないよう、時代を導いてゆく”
天使”——。

しかし——そう。

この機体を”悪魔”と喚ぶ者がいることを——キラはまだ、このときは知らなかった。

『“スピットブレイク”』C

「艦長！ なんなんですか、アレは!?!」

“アークエンジェル” 操舵士のアーノルド・ノイマンが、目の前の現実を呪うような叫びをあげた。

——突如、滝の中から現れた巨大なモビルスーツ！

——あんなもの、見たことがない！

不吉に黒光りした長大な機体。鈍重な印象を受けるその巨大モビルスーツは、挙動のひとつひとつが地響きに似た重みを宿し、見ているだけでも圧倒される。屈強な体躯には壊滅的な火力を有し、広大な戦場にいなながら、それ単機で凄まじい存在感を放っていた。

「ほ、ほんとに、友軍機ですかっ!?!」

震えた声で、同じく艦橋の最前席に座すトールが嘆く。

その疑念は尤もだ。例の巨大モビルスーツはアラスカ基地から発進し、今はアラスカのメインゲートを封鎖するように仁王立つ。それは確実に地球軍の機体であって、間違

いなく、「アークエンジェル」にとつては味方のはずだった。……はずだったのだが、そこから放たれる砲撃は、ほとんどが無茶苦茶だ。

「舵切つてなきや、とうにオレたちが撃墜^やれてますよー！」

それは、ノイマンの実感だった。敵も味方も、まるで関係のないように暴れ回る大量破壊兵器——「アレ」のパイロットは、いったい何を考えている？ いや、そもそもは本当に人間が操っているのか？

「これが、友軍に対する仕打ちですか！」

「わっ、わからないわ……！ わからないのよ、私にも……っ！」

答えるマリューもまた愕然としていた。

戦況を見れば、たしかにザフトの勢いは削がれていた。今まで一方的、ほとんど一方的に侵攻を許していたことが嘘のように、たった一機の巨大兵器の投入により、戦場が硬直したのだ。

——これが、あのモビルスーツの力……！

地球軍にようやく、反撃の瞬間がやって来た。

それだけを聞けば、きつと喜ぶべき場面なのだろう。しかし、マリューにはこのとき、喜びの感情を素直に表現するほどの余裕はなかった。目の前に現れた大量殺戮兵器の登場を正直に歓喜できるほど、彼女の神経は凶太くなかった。

（あの「巨人」はなんで、司令部はいつたい何を考えているの……！）

マリユーの心が焦燥と不安に苛まれ、彼女は不意に——癖ではないはずだが——爪を噛んでいた。

「友軍機接近！ 被弾している模様……こちらに向かつて来ます！」

ミリアリアが声をあげ、ハツとしてマリユーが顔を上げる。友軍の戦闘機が一機、アークエンジェル”に向けて突っ込んで来ていたのである。

一同はぎよつとした。

「着艦するつもりか!？」

「整備班！ どうかのバカが着艦しようとしているわ、退避！」

戦闘機はそのまま「アークエンジェル」の開口部へと着艦した。程なくして艦橋のドアが開き、その奥から見覚えのある体格の人物が飛び込んで来る。

異動を命じられたはずのムウ・ラ・フラガだ。マリユーは振り向きざま、その姿を認め愕然とする。

「少佐!?! 貴方いったい——転属は!?!」

「そんなことどうだっていい！」

ムウは怒鳴りながら、本当にそう思った。

そう、そんなことはどうでもいいのだ、この茶番劇の渦中においては。

「こいつあとんだ作戦だぜ！ 守備隊はいつたい、どういふ命令を受けてんだ？」
唾然とするマリユーの表情を伺って、ムウは毒づく。——やはりこの人たちは、何も知らされていなかったのだ！

「——とにかく撤退だ、アラスカ基地は放棄される！ あのデカブツから、一刻も早く離れるんだ！」

マリユーがそこから問い質せば、ムウから真実が告げられた。

本部の地下に“サイクロプス”——巨大なマイクロ波発生装置——が準備され、ソレが発動すれば、アラスカは疎か、発信源地点から半径十キロが一瞬で溶鉱炉と化すこと。司令部はザフトの大半をアラスカへと誘き寄せ、攻め込んできた部隊もろとも“サイクロプス”で吹き飛ばす目算だったのだ。

要するに“アークエンジェル”は、ザフトを誘き出すための擬餌^{エサ}——

ムウは忸怩たる思いで、マリユーに訴えかけた。今、この戦場に守るべきものなど何ひとつとして存在しないこと。この戦闘の中で散る命、それらに対し責任を負うべき者達は、とうに司令部を離れ、ただ一心にすべてが片付く瞬間を待ち望んでいるだけなのだということを。

「今ここで戦つてんのは、ユーラシアの部隊と、お偉いさんの都合で切り捨てられた者達ばかりさ！」

「そんな……っ」

「ここに残った連中は、やつこさん達にとつちや生贄だ！ どのみち全員焼け死ぬ算段だからこそ、あのデカブツは、それを割り切つて暴れ回るだけなんだ！」

機体の名は「エクソリア」――

大西洋連邦が、極秘裏に開発していたモビルスーツ。

ムウは「サイクロプス」に並び「エクソリア」のデータについて、基地内部にて詳細を知つた。だからこそ、強引にでもこの艦に戻つて来た、マリューたちに真実を知らせるために。

「それが今回の作戦だ！ ここの将校からすりゃあ、前線の兵士は死ねと云われたら、云われた通りに死ななきやいけない存在でしかないんだよ！」

一同の表情が、絶望に彩られた。

マリューはくつと堪えたように歯を食いしばり、やがて、既に折られた心の中から、なけなしの気力を総動員した。そのまま毅然と命じる。

「ザ、ザフト軍を誘い込むことが目的なら、本艦は既に、その任を完遂したものと判断します……！」

誰にも文句は云わせない、文句を云つた者から死ぬだけだ。

マリューは矢継ぎ早に、キバつたように言葉を続けた。

「撤退します！ 後方の巨大モビルスーツを、以後『エクソリア』と呼称します！ 機関全速！ ただちに『エクソリア』から距離を取って！」

ノイマンは意を決したように舵を取った。

たしかに——ムウの報告に上がった『エクソリア』は、僚機と判断するには危険すぎるし、かと云つて、敵と判断するには部が悪すぎる。

何が云いたいのかというと、あれは喻えるなら、天災だ。存在自体が、嵐のような災厄だ。人間風情に抵抗する術はなく、じつと堪えて通り過ぎるのを待つか、すぐにでも離れなければならない。

——今の『アークエンジェル』に残された道は、ふたつにひとつだ。

逃げなければ——やられる！

状況はひどく絶望的だ。『アークエンジェル』後方には『エクソリア』が構え、前方にはザフト軍艦隊が展開している。

「後方の嵐から逃がれつつ、前方の包囲網を突破するなんて……！」

弱音を吐いたカズイだが、しかし、やらねばならないのだ。

たとえ生存が絶望的でも、諦めるわけには行かない。可能性を投げ捨てれば、待つているのは破滅だけなのだから——。

アラスカ・メインゲートから、ザフトが誇る多くのモビルスーツ部隊が離れて行く。いや……正確には後退しているのだ、メインゲートに構える、未知なる巨大モビルスーツに畏を成すあまりに。

蜘蛛の子を散らすように巨大モビルスーツから四散する機動部隊の中で、それでも、たった一機のモビルスーツだけが挑むように降下を開始し、アラスカ・メインゲート、ないし巨大モビルスーツへの接近を仕掛けた。

GAT-X401 “デイフェンド”である。

パイロットであるステラ・ルーシエは気疎い感情を憶えながらメインゲートへ接近し、巨大モビルスーツの面相を眇めた。火が灯り、鈍く輝く紅眼、滅紫色に彩られた装甲——見憶えのある不吉さを漂わせるその巨大機動兵器を見かねた彼女は、たまらずに自問していた。

(カタチを変えて出て来たの…… “デストロイ”——!?)

名前など知らない——しかし、たしかに見憶えのある禍々しき放つ巨大MSの目の前に立ちはだかった。距離が開いているため、その全長を正確に把握することは出来ないが、おおよそ “デイフェンド” の三倍ほどあるだろうか……?)

だが、不思議と驚きはない。彼女は既に、大西洋連邦が “デストロイ” の人型部分を

持ち出していたことを知っていたから。この巨大モビルスーツは、きつと『デストロイ』の人型部分を解析して完成させたシロモノに違いない——つまり『アレ』は、一種の『デストロイ』の模造品だ。

「量産を、許しちゃった……！」

小さく唸り、ステラはライフルと誘導ミサイルを『エクソリア』へ斉射する。だが、あらゆる砲火は敵機に届くよりも前に虹色の障壁によって遮られた。陽電子リフレクターだ。

射撃は一切として通用しない？ 確信するステラが無意識に格闘戦に移行しようとして、はっと我に帰る。

——『イージス』の刃は、あの障壁を破れなかった……！

ビクトリアでの戦闘である。『イージス』が仕掛けたビームサーベルによる斬撃は、しかし、要塞の陽電子リフレクターを突破することが出来なかった。

であるなら、それとスペックを同じくする『デイフェンド』の刃も、おそらく陽電子リフレクターに無効化されてしまうのではないか。

方法は他にないか？ 辺りにヒントを探すステラであったが、周囲に展開しているザフトの機種は『ジン』や『ディン』程度のものだ。強力なビームサーベルを搭載した機種など、それこそステラの乗る『デイフェンド』くらいのものである。

(何もできない……！……あの機体は、今は無敵だ……！……)

攻略は不可能だ。いささか諦めが早いようにも思えるが、事実だったため、ステラは次の瞬間には多くの僚機に退くよう叫んでいた。

——“こいつ”がいる限り、メインゲートを落とすのは不可能だ！

しかし次の瞬間、メインゲートに聳え立つ“エクソリア”が口部から火を噴いていた。光の渦が真つ直ぐに“デیفエンド”へと伸びて来る——ステラは“グウル”ごとバツと急上昇し、その砲撃をかわす。

だが、空まで伸びた熱光線は、そのさらなる後方に構えたザフト軍モビルスーツを大量に丸呑みにした。

ステラは慄然とした。全くもって必要のない、いや、必要以上の大量殺戮——これを、昔は自分が……！？

へくそおー！

咲き誇る爆発の華——その中から、先の一撃に多くの仲間を撃たれたザフト兵らが、突き動かされたように“エクソリア”へと突撃を仕掛けた。

一気に中空へ滑空し、量産機部隊は巨大モビルスーツへと立ち向かってゆく。

へうわア!!

勝負は一瞬だった。

“ジン”や“デイン”の放つ射撃攻撃は、すべて陽電子リフレクターに跳ね返され、彼らは敵機に傷ひとつ付けるところか、まともに対峙することも叶わず、ビーム砲に切り裂かれて死んで逝った。

その行為には何の意味もない、死人が増えただけだ！

「ヘンに抵抗とかするからー！」

“エクソリア”には敵わない。

それを悟ったザフト軍は、傍らにある地球軍艦“オレーグ”“ロロ”“リユーリユク”、そして“アークエンジェル”に向けて攻撃を仕掛け始めた。

勝てない相手には戦いを挑まないというのか。一斉に目標を切り替えたように“アークエンジェル”を包囲し始めたのである。

「ここで背を向ければ、次は足つきに撃たれるぞ！せめて奴等だけでも……！」

旗艦“ハンニバル”の艦長が、抗議の声を上げた。

——この空域にいる限り、あの巨軀デカブツの射程範囲にいるということが分からないのか……!?

訴えかけても、叫んでも、ザフト軍の侵攻は止まらなかった。これでは、この海域にいるザフト全軍が巨人にとっての「いいマト」ではないか。

「どっつして……！」

ステラはすかさず「グウル」を中低空まで滑らせ、メイン・ゲートへ接近を試みる。
 「エクソリア」へと牽制射撃を仕掛け、禍々しい巨躯の注意を引く。彼女の放ったビーム射撃は、ことごとく陽電子リフレクターに阻まれた。が、その砲火は、みずからを囿にするだけの効果は十分に発揮した。

「エクソリア」の頭部メインカメラが、一心に「デイフェンド」へと固定される。コクピッドの中、ステラの耳に警報音アラートが鳴り響く——照準ロックされた！

「なんだア、コイツあ!？」 「エクソリア」みてえな黒いヤツ!」

断続的にビームライフルを撃ち掛けられたジエイクは、目の前を飛び回る機体に向けて、強かに毒づいた。

胸部「スーパースキュラ」を、羽虫のように周囲を飛び回る黒鉄デイレフェンドの機体へと向け、放射する。しかし、そいつは凄まじいリアクションを見せ、ジエイクの放つ砲火をいちいち回避した。

「ミニチュア風情がア!」

鬱陶しさに駆られたジエイクが、「エクソリア」のすべての砲門を開いた。全身に備え付けられたビーム砲より多量の放射型ビームを射出し、範囲型の殲滅攻撃を仕掛けたのである。

「デイフェンド」は、かい潜るようにこれを回避。放たれたビーム砲は無差別に拡散

し、やがて“アークエンジェル”を包囲していた数隻のザフト艦を切り裂いた。

マリューはそれを見逃さなかった。

「包囲網が切れたわ！ 抜け穴あそこから脱出を！」

「無茶です！」

ノイマンは声を上げる。

包囲網が切れたと云つても、たかだか数隻の潜水母艦が“エクソリア”に破壊されただけだ、敵陣に突っ込んで行くことに変わりはない。

「他に逃げ場がある!？」

そう云われ、彼も得心する。

そうだ。この空域に、初めから安全地帯など存在しないのだ——“エクソリア”が存在する限りは。

「“デイフェンド”、なおも“エクソリア”と交戦中!？」

ミリアリアが叫び、チャンドラはその報告を咎めるように云った。

「敵機の報告なんかしてどうする!？」

「すみません！ くせでした！」

「そうか！ 次はするなよ！」

チャンドラは親指を立てた。

「機関全速！ ザフト艦隊の包囲網を突破します！」

“アークエンジェル”はスラストを全開にして、ガラ空きとなった海域へと前進し始めた。

ステラは横目で、それを見遣り、すこしだけ安堵する。同時に自分ひとり、あの艦に置いて行かれたような——複雑な気分になる。

——行っちゃおうの……？

寂寞感に駆られながら、それでも意を決し、頭を振った。

いや、これでいい。

——ここでステラが囷にならなきゃ、みんな殺される……！

ステラは再びメインゲートに構える“エクソリア”を睨んだ。

彼女の目は据わっていた。

アラスカ・メインゲートにて起こる戦闘を、テレビゲームの感覚で愉しんでいたザーランドら将校たちは、開発した“エクソリア”の力にひどく満足そうだ。

劣勢をもとめせず、単体にて戦況を覆してしまうほどの攻撃力。

ザフトに強奪された“デイフエンド”が果敢に挑むが、その攻撃さえも一切として受

け付けない防衛力。

双方を兼ね備えた、巨大なモビルスーツ。

無双とは、まさに現状の“エクソリア”のために用いる言葉ではないだろうか？

サザールランド達は、モニターに映る光景に酔っていた。

もともと、彼らは“エクソリア”の欠点や弱点を発見するため、アラスカ・メインゲートでの戦闘の様様をモニタリングしていた。——にも関わらず、あまりに“エクソリア”が想像以上の働きを見せるもので、彼らは当初の目的を忘れていくようにも見える。

そう、彼らがスクリーンを眺める目的は、もはや『監視』ではなく『鑑賞』だ。

まるで痛快な映画を観ているかのようだ。彼らがバケモノと罵るコーディネイターたちが、一斉に焼き払われて行く至高の物語^{リベンジストーリー}。

彼らはこれを俯瞰しながら、堪能していた。

——もしかしたら……“エクソリア”に弱点なんてないのでは？

これは映画を鑑賞していた、将校のひとりの頭を過ぎったことである。

そう——“エクソリア”は、これまで新鋭機として畏れられ、ザフトが利用して来たGATシリーズの一端である“デイフェンド”さえも、スクリーンの中で軽くあしらっているのだ。

新鋭機すらも圧倒する、それだけの戦闘力を持った最新鋭機——それが“エクソリア”

“だ。

そんな機体に、何が、誰が敵うという？ 何を恐れる必要があるだろう？

「いやはや、素晴らしい機体ですな、“エクソリア”は……！ あの機動兵器こそ、最強にして無敵のモビルスーツではありませんか！」

将校のひとりが、勝ち誇ったように笑う。

その鼻息は興奮に荒かった。

スクリーンに映る傍若無人な戦果に、感嘆したように他の将校たちも言葉を続ける。

「我々の造った“デیفエンド”が手も足も出ていない……！ この戦争、地球軍の勝利もいよいよ見え始めましたな！」

「ええ。試作機とはいえ、存外に凄まじいものですね、“エクソリア”の力は」

「具体的には、どこが試作段階だったのです？」

完全無欠にも思える強さ。それがまだ試作段階だということに驚きを憶えた将校のひとりが、サザラランドに問うた。

彼は冷静に答えた。

「OSをコントロールするために、パイロットへの負担が大き過ぎていましてね。いつでも替えの利く強化人間こそパイロットに適任なのですが、貴重なブーステッドマンをほいほいと交換できるほど、我々にはいま余裕がない」

それは、使い捨てと割り切られたジェイク・リーパーにとっては、関係のない話であった。

「それに、武装の方がまだまだ単調でしてね。体躯の至るところにビーム砲を満載したというだけで、適応力に欠けています」

「なるほど……。たしかにそれでは、敵に接近されたとき、対処のしようがありませんな」

「何を云います、あの陽電子リフレクターが破られるものですか！」

事実、映像の中の「デイフェンド」のビームサーベルは、出力不足にて陽電子リフレクターを破れずにいる。

「ご覧くださいな、『デイフェンド』ですら切り裂けない代物ですぞ？ 接近されたところで、傷などつけられるはずもない」

「ああ……それもそうですな、はは」

虫のいい余談ばかりをする中で、スクリーンの中に変化が起きた。

サザーランドはもともと羨みがちな目をさらに細めて、スクリーンに目を遣る。すると映像の中、なにやら「アークエンジェル」が進路を変更し、転進し始めていた。

「『アークエンジェル』に動きが」

不穏な声がひとつ上がると、一同が吸い込まれるようにスクリーンに向き直した。

それまで愚かにも守備隊と共に奮戦していた“アークエンジェル”が突然、何かに気付いたようにアラスカからの離脱を図っていたのである。

スクリーン上では、その挙動が筒抜けに伝わっていた。

将校たちは物議を醸した。

「戦線を離脱するつもりか!？」

「よもや“サイクロプス”の存在を察知されたのではっ！」

「馬鹿な! どうやって!」

映像の中の大天使は、明らかにメインゲートの防衛という与えられた任務を放棄していた。みずからの身を護るためだけに弾幕を張り、転進した後は、アラスカ基地から離れてゆくように全速力で離脱している。

その光景を目の当たりにして、サザーランドは憤慨する。

どういう経緯で彼らが“サイクロプス”の存在を知ったのかは分からない——が、そんなこと、もはや追及すべきことではない。“アークエンジェル”がアラスカから離脱することで、ザフト軍にまで“サイクロプス”存在が察知されるようなことになれば、この大掛かりな作戦自体が破綻する。なにより敵前逃亡など、一端の士官に許された行いではない。

憤りながら、サザーランドは再び“エクソリア”への通信回線をオンにした。

「聞こえるか、ジェイク」

〈ああん!〉

ジェイクは、なかなか狙った獲物（ディフェンド）を仕留め切れず、立腹していた。

「敵前逃亡艦だ!」 “アークエンジェル” がアラスカから離脱しようとしている! —
—ヤツらを逃がすな、沈めてしまえ!—

そう、この作戦はザフト軍戦力の大半をアラスカにおびき寄せることが目的なのだ。
今ここで “アークエンジェル” を現場から離脱させるわけには行かない。

云われたジェイクは、目を凝らしながら、遠方を見据えた。

サザーランドの云う通りだった。白亜の『大天使』が、ザフト軍の包囲網をかい潜つて戦場から離脱し始めている——オレに、背を向けている……!?

「ちつこいのに気を取られて、気が付かなかったぜ……!」

鬱陶しそうに、ジェイクは “ディフェンド” を「ちつこいの」と表現した。

〈敵前逃亡は重罪だ、ヤツらに生きている価値はない〉

サザーランドに云われるがまま、ジェイクは “エクソリア” の照準を “アークエンジェル” へと切り替えて見せた。

背後を見せて飛ぶ宇宙艦は、ジェイクから見て、ひどく無防備に見えた……いいや、本当に無防備なのだ。

ここからエネルギー収束砲をひとたび放てば、あっさりと撃沈させることは可能だろう。

サザーランドは指示した。

「裏切り者どもを肅清せよ! —— エクソリア 追放者」の名の許に!」

愛機の名を持ち出され、ジェイクはにやり、と悪しき笑みを浮かべた。

「おいおいおいおい、ダメだろオ逃げちゃあ! どうせ全員死ぬんだ、みんなで逝った方が愉快だろう!」

目に浮かべたのは、餓えた眼光。

殺戮を望むジェイクの目は、背中を見せて航行する「アークエンジェル」をたしかに捉えた。

一心に囿となっていた「デیفエンド」のcockpitの中で、ステラは不意に声を漏らした。

それまで頻りに鳴り響いていた警報音が、ある折を期に、ぴたりと止んだのである。

「なんだ……!?!」

「エクソリア」の照準が切り替わった——? ステラは疑心に駆られた。

それまで彼女の思惑通り「ディフェンド」だけを執拗に狙い回していた「エクソリア」が、途端に彼女に見向きもせず、別の方角を見据え出したのである。

ステラは目を細め、敵の巨大モビルスーツを見遣る。

巨人の頭部——いや視線は、それに背を向けて離脱する「アークエンジェル」に偏ひとへに
向けられていた。

「——まさかッ」

慌てて彼女は、巨大モビルスーツに向け、ビームライフルを連射した。

巨体を包み込む「シユナイドシユツ」に絶え間なくビームを浴びせかけ、ミサイルを撃ち込んで——すべての射撃が無効果と知りながら——これをあえて弾けさせた。爆発の余波が敵機を襲い、もくもくと巻き上がる煙幕が、敵の視界を阻む。

ただの嫌がらせだ。判つていても、ステラは「エクソリア」の注意を自分に向けさせようとしたのだ。

しかし、ミサイルの爆発に見舞われた「エクソリア」は、それでも一筋に「アークエンジェル」を見据えていた。すべての射撃が無効果であるからこそ、彼女はもう、敵に相手にされなかつたのである。

「だめっ」

これ以上は、注意を引けない！

ステラは即座に応射をやめ、機体を転進させた。

「ロ、ロツクされた……!?!」

「アークエンジェル」の艦橋の中で、トノムラが恐怖にまみれた声を上げた。

今や、遠く離れて小さくなつた「エクソリア」が、胸部に構えた巨大な三つの砲門を、すべて「アークエンジェル」に向けていたのである。

まさか、予想だにしなかつただろう——積極的に狙われて友軍機にロツクされることなど。

たしかに、今の「アークエンジェル」は防衛線戦を離脱し、敵前逃亡をしている状態にある。軍人としては銃殺刑も免れない、時効さえない違反行為。だからこそ、友軍に撃たれても文句は言えない立場にあつた。

しかし、よりにもよつてこのタイミングで狙い撃たれるとは思つてもいなかった。

「ケツから撃たれる!! 無防備だ!」

「あれには有効射程距離なのか!?!」

友軍に撃たれて、死ぬ——?」

チャンドラとロメオがそれぞれに声を上げ、艦橋は恐怖に溢れかえつた。

「そおら墜ちろオ!!」

“エクソリア”胸部砲口に、光の粒子が収束してゆく。

一拍置いて臨界した光は、炎の矢となつて空間に迸り、対消滅を起こしながら無防備な“アークエンジェル”へと真つ直ぐに伸びていく。後方から突き抜ける巨大光の奔流が、青空の下を大きく風いで『大天使』を呑み込む! ——かと、思われた。

次の瞬間、漆黒の機体が“アークエンジェル”と“エクソリア”の間に割つて入つた。

球状の光波防御帯を展開した“デイフェンド”が、悪魔の吐息を受け止めたのである。凄まじい一射を小さな身体で受け止める機体に護られて、“アークエンジェル”の一同は唾然とした。

「“デイフェンド”!?!」

「どうして?!?!」

“エクソリア”からのビーム放射は、いまだ断続的に続いていた。

途切れることのない圧倒的な光条を、“デイフェンド”は小さなその身体で懸命に受け止めていた。

——なぜ……!?!

マリューは息を呑むが、虹色の光を散らす“デイフェンド”は、受け止め続ける衝撃

の重みに、いよいよ後方へと押し出され始めた。

機体正面から敵の大出力砲撃を受け止め、「アークエンジェル」に背中から近づいてゆく「デイフェンド」は、さすがに最新鋭機の、その圧倒的な火力の前に苦しんでいるように見えた。

いや、実際に「デイフェンド」の中で、ステラは唇を噛みしめ、明らかな出力の劣等に苦しんでいた。

「!?!」

機体の出力が、おおよそ違ひ過ぎるのだ。

「エクソリア」の砲撃を受け止めた「デイフェンド」は、砲撃の熱量と質量に負けて、光の奔流に吞まれ、みるみる後方へと押し出されてゆく。

ステラは歯噛みしながら、一瞬、なんでこんなことをしてしまったんだろう——？と、一瞬だけ後悔した。衝動的、ほとんど衝動的に「アークエンジェル」を庇ったのだが、よく考えたら今現在の「アークエンジェル」は立場上の敵軍ではないか。それどころか、その敵艦を庇った今、敵機の驚愕的な出力に押し負け、やられそうになっている自分がある。

ひどく間抜けなことをした気分だ。

衝撃に揺れるコクピッド内が、一面として危険を知らせる鮮烈な赤色に染まってい

る。各機器からは悲鳴が上がるようにビリビリと漏電が巻き起こり、計器類は無茶苦茶な方向を指針している。

さすがは最新鋭機エクソリアの力だ。いよいよ時勢上の旧式かたおちとなった「デイフェンド」が単独で、抑えきれぬ性能ではなかったのかもしれない。

——いや。

両機の間には、力や性能の差など、はじめから存在していないのかもしれない。

「その槍ちからが、「デストロイ」から生まれたって……！」

彼女は退ちからかなかった。

「だったら盾ちからを貸して、「デイフェンド」——！」

鉄壁の守護者たる——乗機が秘めた「可能性」を、最後まで信じ続けた。

——性能の差なんて存在しない！ だって元々「デイフェンド」も「エクソリア」も、「同じところ」から造り出されたモノなのだから！

「デストロイ」が持つ破壊力を全面的に強調して造り出されたのが「エクソリア」であるのなら。

「デストロイ」が持つ防御力を積極的に活用しているのが「デイフェンド」なのだ。祖先が同じであるからこそ、いまさら……

「性能差なんて、云わせないんだからあ！」

しやにむに少女^{ステラ}が叫び返した次の瞬間、虹色の光が拡散した。

大爆発——

世界が真白い閃きに呑み込まれ、衝撃の余波に爆風、そしてあたりの湾に大波が巻き起こる。ザフトの母艦は多く波に呑み込まれ、メインゲートも津波に呑み込まれた。

“デイフェンド”の光波防御帯が、“エクソリア”の“スーパースキュラ”を跳ね返したのである。

奇跡の立役者は、流石に飛行支援体^{トル}ごと後方に弾き飛ばされ、複雑に旋回しながら上空に打ち飛ばされて行った。

“アークエンジェル”は、護り抜かれたのだ。

啞然とするクルー達は、いまだに自分達が生き残っていることに実感が湧いていないようだった。無理もない。惨劇としか言いようのない砲撃から生き延び、そして、守ってくれたのは本来ならば敵であるはずの“デイフェンド”だったのだ。

「ステラ……?」

トールが、わずかに声を漏らした。

え? と一同がその声に耳を疑う。

「もしかして、あれステラが乗ってるんじゃない?」

「な、何を云うのトール。だって、ステラは」

「おれ、前に『スカイグラスパー』で出たとき、たぶん、あの機体のおかげで命拾いしているから……!」

トールは云うが、実際に救われたわけではなく、表現通りに命拾いしていた。

両者が正面から対峙したとき、どういうわけか『デイフェンド』はビームライフルを撃たなかった。撃たれていたら、きっと自分の技量では回避できなかっただろう。

「あの娘が、ザフトに……?」

マリューは啞然とし、その可能性を思索したが、すぐに頭を切り替えた。

今は、それどころではない。

「ぼ、ぼーっとしないで! 機関全速、引き続きメインゲートから距離を取って! すぐにも『エクソリア』の射程から離れなければ、第二射が来るわ!」

一番ぼーっとしていたのが自分であったことを自覚しながら、マリューは慌ててクルーたちに命じ直した。

そうして各々に気を持ち直し始めるクルー達であったが、そのとき、ミリアリアだけは違った方向に行動を起こした。通信回線を開き、必死になって声を上げたのである。

「ステラ……! ステラなの!」

そう、彼女は以前使用していた『デイフェンド』への通信コードから、割り出すようにして『デイフェンド』への通信を試みたのである。

それを訊いたマリユの表情に、動揺が走る。

だが意外にも、誰もミリアリアの行動を咎めようとはしなかった。

ミリアリアは応答があるまで、懸命に呼びかけ続けた。

(パイロットがステラなら、知らせなきや……！)

知らせたいのは、真実だ。

アラスカ基地には、もはやザフトが欲するものなど、何ひとつとして残されていない。それどころか、すぐにでも基地から離れなければ、みんな死んでしまう。

せめても、ステラには真実を伝えなくてはならない。

誰よりも『死』と云う言葉に過敏な反応を示す、あの少女にだけは――。

ミリアリアは、義務感に駆られた。

戦場に、しばしの静寂が訪れた。

誰もが唾然として、その場に凍り付いていたのだ。

巨大モビルスーツ“エクソリア”の放ったスーパースキュラは、翡翠色の防御膜に阻まれて消滅した。叩き付けられた凄まじい衝撃と爆風が、戦場一帯に吹き荒び、ザフト艦は転覆するまで吹き飛ばされ、メインゲートも巨大な津波に飲み込まれた。

そんな津波がゲートから引いて行き、ジェイク・リーパーは愕然と口を開けていた。

——跳ね返された……!? オレの力が……あんなミニチュア如きに!?

咀嚼する内、ジェイクはどうしようもない憤りを憶える。

破壊を愉しむ彼にとつて、守護者たる者は不要の存在であり、鬱陶しい存在でもある。宇宙艦“アークエンジェル”を撃墜させることに欲びを見出そうとしていた彼は、たった一機のモビルスーツにそれを阻まれ、どうしようもないほどに怒り狂った。

「ふざけんよ……… なんなんだ、テメエはア!？」

理性を失った子どもの用に喚き散らしながら、獣のように吼える。

——あいつはいつたい、なんなんだ!

黒いミニチュア! どこか“エクソリア”と同じような外観をしたモビルスーツ!

うろちよると飛び回るだけでは飽きたらず、オレの快樂まで阻むのか!

「いくら盾が強かろうが! もう一度だア!!」

ジェイクは衝動的にトリガーに手を伸ばした。

再びスーパースキュラの砲門を開き、数多の光を胸部砲門へと収束させた。

“エクソリア”のバッテリーは、まるで無尽蔵だった。

へ……ステラ……聞こえる………ステラ……!?」

衝撃に弾き飛ばされた「デイフェンド」の中で、ステラは、通信越しにその声を聴いた。

彼女は「エクソリア」の砲撃を跳ね返した瞬間、気を失ってしまいかと思えるほどの衝撃を受けていた。霞んだ意識の中で、その声が、彼女を現実に取り戻してくれた。

「……」

声を耳に入れ、ステラはパツと目を開き、頭を覚醒させ、慌てて機体制御を行った。旋回しながら墜落して行く「デイフェンド」と「グウル」を立て直し、空中に踊り出す。

それからも懸命な呼び掛けの声は続いていた。

——だれ……? 「アークエンジェル」からの通信……?」

それはひどく懐かしく、聞き覚えのある声のようだった。

ステラの脳裏に、ミリアリア・ハウの姿が浮かぶのに、そう時間は掛からなかった。

「ミリア、アリア……」

通信モニターに、馴染み深いひとつ年上の少女が映し出され、ステラは苦い顔をした。

——やっぱり、彼女も「アークエンジェル」に乗ってんだ……。

みずからの兄がどうしようもない嘘つきであることを再確認させられたステラであつたが、モニターの中のミリアリアは、思わず歓喜の声を上げていた——これまで少

なくとも二度、『ディフェンド』に襲撃されたことすらも忘れて。

〈ステラ！ やっぱりステラなのねっ!?〉

「あ……えと、その……」

敵対していた経緯から、ミリアリアに恨まれているのではないかと不安になり、ステラは罰が悪そうに、歯切れ悪く答えた。

一方のミリアリアは、そんなことは今はどうでもいいと云わんばかりに、懸命に声を荒げた。実際、そんなことをよくよく説明している余裕など何処にもなかったのだが。

「守ってくれてありがとう！ でも、よく聞いて……アラスカから、すぐに離れよう！」
〈えっ?〉

「本部の地下に『サイクロプス』が仕掛けてあるの！ このままじゃ、みんな巻き込まれるの！」

ステラには、ミリアリアが何を言っているのか分からなかった。

——『さいくろぷす』って……なに？

幼子のように無邪気な表情で啞然とするステラの顔を見て、ミリアリアは通じてないことがすぐに理解できた。すぐに説明しようとした。

「『サイクロプス』ってというのは……!」

〈!? 待ってッ!〉

言葉を遮って、ステラが明後日の方向に何かを気付いたように叫んだ。

その声と、艦橋のチャンドラの報告が響いたのは同時だった。

「エクソリア」から膨大な熱量を感知！ 第二射、すぐに来ます！」

「ま、またッ!? やられる!？」

相変わらず「アークエンジェル」はメインゲートに背を見せて航行するだけで、まともに回避運動など取れる状態にはなかった。いや、仮に回避行動に取ったとしても、「エクソリア」の火力を前には、まるで無意味だろう。

報告どおり「エクソリア」は、再度、エネルギーを収束させていた。

それを認めたマリュー達は一斉に青ざめたが、通信回線に、聞き慣れた少女の音が響いた。

「逃げてッ！ ステラがまもるー!」

その声が響き、再び「ディフェンド」が「アークエンジェル」を庇うように、船体の背に着いた。大盾を正面に構え、再度、光波防御帯の展開姿勢を取っている。

マリューはそれを見て、思わず通信先の少女の名を叫んだ。

ステラからは意志の籠もった声が返って来た。

「アイツはステラが運んだの！ ステラには！ アイツからみんなを守る責任がある!」

マリユールにとっては聞きなれないほど、ステラがみずからの意思を表面する力強い声だ。しかし肝心の発言の意味が、このときのマリユールには理解できなかった。

「無茶よ、やめなさい！　いくら『ディフェンド』でも、連続であれの攻撃を受け止めるのは——！」

しかし、ふたりの会話は続かなかつた。

「エクソリア」から、ふたたび「スーパースキュラ」が放たれたためだ。

ハツとして息を呑み、ステラは再来する野太い光条を目の当たりにする。彼女はまたしても同じ行動を取り、もう一度、光波防帯のスイッチに手を伸ばした。

瞬時にビームシールドが出力され、翡翠色の防帯が「ディフェンド」を覆い包むように展開された。そして、その帯は——すぐに消滅した。

「——えッ」

慌てて再度防帯を出力するも、光の膜は展開した後すぐに途切れ、ぷつりと音を立って遮断されてしまう。

ステラはすっかり蒼褪めて、原因を一瞬にして悟った。焦りにまみれた息を吐き、震撼しながらエネルギーゲージを見遣った。文字色は赤かった。

（そんなっ、どうして——ッ！）

バッテリーの残量が、限界に達していたのである。

先の一撃を凌いだ際に、大量に電力を消費してしまったのだろう。そうでなくともアラスカ第三、第七サブゲートを立て続けに陥落させた「デイフェンド」は、当初からエネルギーを減らした状態にあったのだ。

そのような状態で光波防御帯を展開すれば、長期戦など見込めるはずもない。補給は怠るなよ——するりと過去から、イザークの忠告が蘇る。

——こんなことになるのなら、その言葉、もつと守っておけばよかった……！

出力が足らず、光波防御帯は展開されぬまま——「デイフェンド」は大盾を翳したまま、野晒しの状態に据え置かれた。

ほんのひと呼吸の内に「エクソリア」から放たれた光の奔流は、ステラの目前に迫っていた。——無防備な「デイフェンド」に直撃する！

「あッ」

その瞬間、何もかも悟ったような気分だった。——これから、自分がどうなってしまうのか。

回避も、防御も出来はしない。いまさら何をしたところで、間に合いつこない。

光の奔流に飲み込まれ、そして後方の「アークエンジェル」さえも、まとめて……。

——やられる!!

ステラの表情が恐怖に曳きつった。

ここに辿り着くまでの道のりが、一瞬にして彼女の頭を通り過ぎた。はじめて、すべてを諦めたような気分になった。

自分には、守りたいものを守り通す力などなかったのだ。

ステラは、弱いんだ……。

——これで、終わりなの……。

破壊の光条がすべてを焼き尽くさんというその瞬間——何かが、ステラの前に矢のように飛び込んだ。

自分達を溶かすはずだった収束砲は、目の前に舞い降りた何かによって遮られた。

それは、盾を翳したモビルスーツだった。

ステラたちに背を見せ、正面に構えたアンチビームシールドにて、一心にスーパーステラを真つ向から受け止めている。

ステラの視界を、蒼い翼が覆った。

白い四肢、ボディは黒と青のツートーン。

背部には蒼い十枚の翼を広げた「天使」——それは下がるのではなくビームを撃ち放つ敵機に向かって突進した。スーパースキュラをもろともせず、鉄壁の「ディフェンド」ですら押し飛ばされた敵の砲火を、そいつはバターを潰すほど簡単に押し返してゆく。いったい、どんな力で……!?

閃光が迸り、ふたたびスーパースキュラが跳ね返された。

「えっ——!?!」

無傷で滞空する未知のモビルスーツは、瞬きすら許されないほどの飛翔力で上空へと駆け上がった。そのまま急降下し、疾風のように“エクソリア”へと駆け抜けて行く。

「なんだ、てめエはア——!?!」

当然、またも砲火を遮られた“エクソリア”から、狂ったようにビーム砲が乱射される。照準は一心に白いモビルスーツを付け狙い、嵐のような光渦がメインゲート周辺を覆った。

だが、蒼い翼を広げた機体は重力や空気抵抗すら感じさせない、鮮烈な動作で“エクソリア”まで肉迫し、抜き打ちに両腰ラッチの光刃を引き抜いている。

「な、なにイツ!?!」

まさに疾風迅雷——

鮮やか過ぎて、ジエイクの目には敵の軌跡を追うことも叶わなかった。ビーム砲を偏に乱射して見せたが、この乱雑な射撃は敵機が翳した盾の防衛帯に受け止められ、簡単に無効化された。

ひと呼吸置かぬ間に接近を許す——

瞬きすら許せれない刹那の間、巨大な“エクソリア”のコクピットへとビーム・サー

ベルが突き立てられた。圧倒的な出力をした光の剣は、巨軀を保護する“シユナイドシユツツ”をバターののように切り裂いたのだ。

「グアツ——」

抜く手を見せた後、そいつはもう一本のビームサーベルを腰から引き抜き、追撃するように、容赦なくコクピッドへと押し込んだ。

ジェイクは突如、自分の身体が凄まじい爆熱に包まれて行くのを感じた。彼はみずからの死に気付くこともできなかった。

爆発——巨大な機体が胸から炎を上げながら、地響きを立てて膝から崩れ落ちる。

頭部の方向から、まるで叫びのようにビームが吐き出され、吸い込まれるように蒼穹に果てて行つた。

無敵であるように見受けられた地球軍の巨大モビルスーツであったが、その機体は突如として天空より舞い降りた一機のモビルスーツに誅殺された。

それにより、アラスカ・メインゲートが陥落。

切り札のように思われた“巨人”が滅んだことで、地球軍はザフトへと報いる一矢を

折られたのである。

そして「巨人」を破壊した「蒼い翼」のモビルスーツは、一気にバーニアを吹かせると、重力を感じないような浮遊感で上空へ飛翔し、やがて「アークエンジェル」の方を向き直る。そして、パイロットと共に愕然とする「デイフェンド」の方へと視線を向けた。

「あ——ッ」

その機体を認め、ステラはひつ、と喉をひきつらせる。

蒼い翼、白い四肢、四本のVアンテナ——

——そして何より、たった一撃で「巨人」を屠る、その強さ……！

ステラにとって目の前に現れたモビル・スーツは、彼女が見た夢を見事なまでに再現させてみせていた。誰もが叶わぬ破壊の巨人を、殺戮を繰り返す魔人を、意図も簡単に破滅させて——。

——殺シテヤル……！

——オマエナンカ、死ンデシマエ……！

夢の中で。

その言葉を、ステラに突きつけた張本人。

血の気がさあと引いていく。

そいつが圧倒的な力で「デیفエンド」を守り、そして「エクソリア」を殺した。恩義なんて感じなかった。

こいつは、仕留め損ねたステラを追って、この時代に現れたのだ！

「あ……ああ……ッ！」

巨人を光の剣で穿ったその様は、ステラにとって、嫌なほど見覚えがあった。

そうだ——「コイツ」はステラを、今と同じように殺したんだ……！

幼子がいよいよやをするように、ステラはひとり、ふるふると首を振った。

死の天使。

無限の恐怖の象徴。

自由の翼。

ZGMF—X10A「フリーダム」——

そいつは鷹揚と「デیفエンド」へ近づき、その手を優しく伸ばして来た。

「ひ………っ！」

差し出された鋼鉄の手を見て、ステラは絶望する。

その手が、みずからを地獄へ曳き連れんとする「悪魔」のそれに見えたから——

「いい、いいやああああああっ!!!」

絶叫と云う名の、悲鳴が挙がる!!!」

「フリーダム——！ ステラにとって、死を告げる天使

こいつが、来た。

ステラを、殺しに来た！

「わたしに——っ」

コクピッドの中で、少女は叫んだ。

「近寄るなああああああああああああああああ!!!」

『“スピットブレイク”』D

キラ・ヤマトの“フリーダム”は、天使のようにアラスカの大地へ舞い降りた。そこで彼は、まさに絶望の淵に置かれていた仲間達を目の当たりにする。

——見たこともない、大型のモビルスーツ！

暴虐と破壊の限りを尽くす、圧倒的巨躯を持つ“G”タイプ。ソレがなりふり構わず吐き散らす砲火に“アークエンジェル”は襲われていた。やがて“デイフェンド”が——このときキラは、そのパイロットがステラであることを既に知っていたのだが——“アークエンジェル”を庇い、エネルギーダウンに陥っているのを認めた。

——やらせない！ ステラと、“アークエンジェル”のみんなを守るんだ！

キラは矢のように“スーパースキュラ”の射線へ割り込むと、地球軍機から放たれた凄絶なビーム砲をシールドで受け止めた。そのとき“フリーダム”のシールド表面に展開されたのは、“デイフェンド”の光波防御帯にも匹敵する防御性能を有する光のアンチ・ビームシールドだった。出力の調整次第で防御面を自在に変化させることができ、それは実際に“スーパースキュラ”を跳ね返すほどの堅牢を発揮する。もとより“

フリーダム”の総合スペックは“デイフェンド”と比べ四倍以上あるのだから、それも道理な話であろう。

しかし、そのような事実を知らないのが、大型の地球軍機である。己の一射を弾き返されたことに怒り、そいつはさらなる破壊衝動に突き動かされたように暴走を続けた。パイロットは殺したくない——が、キラとしては、これ以上大切なものを奪われるわけにはいかない。彼はすぐに“フリーダム”を駆り、その巨大モビルスーツのコクピッドを光刃で貫いた。

「——こちらキラ・ヤマト！ 援護します、今のうちに退艦を！」

滅紫色の“巨人”を誅殺したキラは、すかさずマリユータちへの通信回線を開く。

マリユータ達は、既に亡き者と思われたキラの介入に目を疑い、その生還を手放しで歓喜する。そうしてキラは、改めてゆっくりと振り返り、同じように彼が護り抜いた“デイフェンド”に目を遣った。

——ステラ！ よく頑張ってくれた！

まるで、世話焼きの兄貴分になったような心持ちであった。

ステラは“デイフェンド”の力で“アークエンジェル”を守ってくれていた。“フリーダム”ですら間に合わなかった窮地に、ツールやミリアリア、みんなのことを捨て身になって護り抜いてくれたのだ。

キラは機体を滑らせるように「デイフェンド」に寄らせてゆく。

——戦争を止める。無駄な殺生を、もう繰り返させたりはしない……！

そんな願いの許に飛び立ったキラ・ヤマト。

そんな彼が目指していた理想を、彼女は既に、この地で行っていた。

であるならば、ステラと自分達は、きつと、これからも分かり合っていける。

(だから今度は、ぼく達と一緒にいこう！)

柔和で温厚な面持ち。少女のことを労うような——

そうしてキラは「デイフェンド」へと手を差し伸べた。……そしてその手は、激しい憎悪をもって拒絶された。

最初は何が起きたのか分からなかった。キラが驚きに目を開くと同時に、突如として「デイフェンド」が前腕部に纏わせたビームウェイブ躊躇もなく振り抜いてきたのである。

——それは、キラの登場を拒絶したかよう。

——それは、まるで「フリーダム」を追い払う動作のよう。

冗談では済まされない明確な敵意、どういうわけか害意の籠った一撃を、紙一重でキ

ラはよけていた。だが間を置かず、彼の機体は「デイフェンド」の頭突きヘッドバッドを受け、手の届かない距離まで弾き返されていた。

「ステラ!？」

このときのキラには、反撃なんて言葉が思いつくはずもない。距離が開いたその瞬間より「デイフェンド」はビームライフルを撃ち放ってきた。しやにむに放たれる光条を、焦りながらも冷静に捌いてゆくキラであるが、その頭には懐疑心が沸くばかりである。

「やめろ！ やめてくれ！ 僕は敵じゃない、ステラ——！」

通信回線を開き、キラは「デイフェンド」への接触を試みた。

やがて回線がつながり、モニターに馴染み深い少女の姿が映し出される。いま自分が着用しているものと同じ——多くの曲線で造られたザフトのパイロット・スーツ。その赤色のバイザーの奥に、見紛うはずもない柔らかな金髪。

それは、確かにステラ・ルーシエであり、キラにとっては親友の少女であった。

しかし——

「いやあ！ だめっ！ あっち行けっ——わたしに近寄るなあああッ！」
ほとんど感情……いや恐怖に身を任せるように絶叫しているステラは、狂乱していた。

まるで、害虫にでも取りつかれたようないやいやをして、悪霊でも追い払うかのよう
に身体を暴れさせている。

その中で弾幕を張り、ビームライフルを目標に向けて撃ち放ち、放たれた光条が確実に
に「フリーダム」を追う。

——悪魔……ッ！ オマエは、悪魔だッ!!

ステラの中で、忘れるはずもない恐怖感覚が蘇る。

突如として、自分の前に舞い降りた「蒼き翼」——

——「フリーダム」を操っているのは、間違いなくアイツだった！

ステラからすれば、名前も知らない凄腕のパイロット。所属も、性別も、年齢も……
ひいては目的でさえ、ステラはそいつの何もかもを知らない。知っているのは、そいつ
は多くの戦場を攪乱して回り、圧倒的超然とした強さを示威したということ。文字通り
「二騎当千」の力を以てネオを殺し、あのシンでさえも軽くあしらってしまった。

——ステラ自身、何度ヤツに苦しめられて来たことだろう!?

ステラには確信があった。——この「フリーダム」を操っているのは、ベルリンに舞

い降りたアイツと同じ人間だという。

そう。アイツでなければ、いったい誰が“エクソリア”を破壊できたというだろう！
巨大モビルスーツが放つ光渦をかい潜り、疾風のように空を駆け、一瞬のうちにこれを
を圧倒し、殺してしまった……！

——あのときと、同じみたい……！

どうして、ヤツがここにいる？ ステラを殺すためにやって来たのか——？

仕留め損ねた獲物を殺すため、時間を越えて現れたとでもいうのか？ まるで
未来^{タイム・ネイチャー}の断絶者だ、自由を掲げた十枚のその蒼翼は、いったい何のために存在していると
いうんだ！

「だめ、だめなのっ！ みんな殺されるっ！ おまえ、おまえに——！」

錯乱するステラであつたが、そのとき“フリーダム”から通信が繋がつて来た。

ステラはハツと顔を上げ、そこに映し出された少年の姿を確認する。

ザフトのパイロット・スーツを着ている少年だ。なにかを必死にステラへと呼びかけ
ていて、その声は「ぼくは敵じゃない」だとか「ぼくが分からないのか」などと悲痛そ
うに叫んでいて、どのような弁明も、冷静な判断力を失い、激するステラの耳には届か
なかつた。

なぜならステラの心は、既に恐怖に瓦解していた。無限の恐怖の象徴によつて、跡形

もなく踏みじられていたのだ。

「ステラ、ぼくが……！　ぼくが分からないのか……!?」

「——知らない……ッ！」

ステラの顔が、無限の恐怖——と、底知れぬ憎悪に歪む。

憎悪の籠った視線に射貫かれ、キラは頭を鈍器で横殴りされたような衝撃を受けた。

「アンタなんか知らないっ！」

そう——少なくとも、ステラは「フリーダム」のパイロット」なんて、知らない。知っていることなど、何も無い。

ただ分かっているのは、そいつは未来にステラを殺すこと。ステラから、大切なものをたくさん奪って行ったということ。

だから、知らないのだ……。

——「フリーダム」に乗っている、オマエのことなんてッ!!

しかし不思議なことに、そのときステラの脳裏には、たしかにひとりの少年の顔が浮かんでいた。幼い頃はよく自分と一緒に遊んでくれた、アスランのお友達。柔和で、繊細そうな面持ちで、屈託なく笑う顔が印象的な茶髪の少年。

——キラ・ヤマト……?」

しかし次の瞬間には、その記憶でさえ、無価値で無意味なものになってゆく。

恐怖と絶望が、ステラのすべてを支配したのだ。彼女の脳内で、その少年との思い出は、ドス黒い墨汁のようなものでぐちゃぐちゃに塗り潰されてゆく。

次第に何も見えなくなって、懐かしくて、あたたかな思い出が——記憶の中の思い出のキャンパスが、暗闇にかき消されてゆく。

——それでも、暗闇の向こうに、あなたのことしか見えない……。

「くそつ、どうしてこんな……！」

身に覚えのない抵抗を繰り返され、キラは苦い顔を浮かべた。

事態を把握できていないのは、“アークエンジェル”のクルー達も同様である。

——ステラ、どうして憑りつかれたみたいに関キラを攻撃するのっ!?

キラとステラ——彼らはミリアリア達の想像が及ばぬほどに、睦ましい過去を持った幼馴染みであるはずだった。

ミリアリアは、ステラが喚き狂う様子を慄然して見届けていた。

キラが乗っているのは、見たこともないモビル・スーツだ。GATシリーズと同じような面相をしているが、そこに用いられたフレームは異なり、背部には“デイン”のそ

れを思わせる翼が広げられている。キラ自身がザフトのパイロット・スーツを身に付けていることから、おおよそザフトが開発した新型といたったところであろう。

しかしステラは、そんな新型のことを、まるで以前から知っていたかのような言動を見せた。

傍から見れば「天使」のようなキラの機体を「悪魔」と罵り、そして泣いている。恐怖に崩れた心を秘めたまま、必死になって抵抗し、暴れている——？

「ザフト軍モビル・スーツ部隊、再度接近してきますー！」
チャンドラが声を上げる。

キラはハツとして、慌てて「デイフェンド」から機体の方向を変えた。ステラへの説得を中断し、ひとまず「アークエンジェル」の護衛に向かったのである。

「くそっ！」

ザフトにとって最大の脅威であった「エクソリア」がただの鉄塊と化した今、ザフト軍はそれまでの勢いを取り戻したように「アークエンジェル」への——地球軍への猛撃を再開する。

「フリーダム」は蒼翼を広げ、戦場を狂奔する。フルマツト・ハイバーストによる無数の砲火をザフト軍機へ撃ち放ち、その火線のほとんどが、ザフト軍機の武装やメインカメラを奪い取る。その隙を見て、キラはしやにむに叫んだ。

「マリユーンさん、早く退艦をー」

「ご、ごめんなさい、ここでは退艦できないわ！ 本部の地下に“サイクロプス”が仕掛けてあるの、私たちは……囿にされていたのよ！」

「えっ……!?」

「作戦は、知らされていなかったのよ！ ここから離れなくては、全員が“サイクロプス”に巻き込まれるわ！」

キラは真実を知り、愕然とした。それはつまり、地球軍の上層部は、マリユーン達のことを切り捨てたということである。

トカゲは手足を切り裂かれても、おのずと自己再生する能力を持っているが、それと同様に、上層部にとって“アークエンジェル”はいくらでも賄^{てあし}える戦力だったというのだ。

キラはやや考え込むような沈黙の後、意を決したように、すべての通信回線へと呼びかけた。

「ザフト・連合、両軍に伝えます！ アラスカ基地は、間もなく“サイクロプス”を起動させ、自爆します！ 両軍とも、ただちに軍を引いてください！」

キラ・ヤマトのその明瞭な声は、おそらくアラスカ全土へと響き渡った。

さあと戦場に、動揺の沈黙が流れる。その沈黙を打ち破ったのは、遠方より去来する

一機のモビルスーツだった。

「後方より『デュエル』接近！」

「こ、こんなときにつ……！」

アラスカ・メインゲートで起こる事態に気付いた『デュエル』は、サブゲートの制圧を終え、このメインゲートへとやって来ていた。

「——ステラ、退け！」

『デュエル』の通信回線に、イザークの声が響き渡った。

ステラは思わず安堵して、イザークの名を叫んだ。

『デュエル』は『デュエル』を庇うようにステラの前へと割って入り、イザークは『フリーダム』——彼にとっては初見の機体——と対峙した。

イザークの表情に、困惑にも似た動揺の色が浮かぶ。

「何なんだ、あのモビルスーツは!?」

「ふ、ふりーだむ……！」

「『フリーダム』……!?」

イザークは即座に、その機体を敵と判断した。見たこともない機種だが、地球軍の最新鋭機だろうか？ いや、そいつは『アークエンジェル』を守っているのだ、当然そうに違いない。

敵愾心を露わにしたイザークの耳に、動揺したステラの声が紡がれる。

「イザーク、〃サイクロプス〃ってなに——？　ここ、ぼくはっ自爆するの……!?」

「騙されるんじゃない、そんなのはでまかせ妄言だ！」

そう、〃フリーダム〃のパイロットが放送したことはイザークの耳にも入っていた——が、そいつが叫んだことはただの虚仮威しに過ぎないと、すくなくともイザークはそう断定していた。

——〃サイクロプス〃が起動する？

そんなことをすれば、ザフトも連合も問わず、何もかも呑み込まれて一斉に滅ぼされてしまう。よしんばそれが事実であったとしても、そんなことを大つびらに公表する馬鹿がどこにいる？　とち狂ってザフトがここで撤退すれば、その大型兵器の存在意義は消失するだろう。

「下手な脅しをつ、ナチュラルめがあー！」

そんなことも分からないほどに、ナチュラルの知能は苦しいものなのか！

〃デュエル〃が背部よりビームサーベルを引き抜き、未知なる機体へと〃グウル〃を駆って突撃を仕掛けた。しかし斬撃はあっさりとかわされ、すぐに距離を開かれてしま

う。
へやめろ、これ以上ぼくの邪魔をしないでくれ、死にたいのか！

「なにをおつ?!」

スピーカーから聞こえた声に、イザークはカッとなる。

——おれがいつ、貴様の邪魔をしたというのだ、貴様はいったい誰だ!

発狂、というほどではないが、そのくらいに頭に血が上り、イザークは憤りに任せて斬りかかった。しかし斬撃はひらりと回避され、未知のモビルスーツは空中で鮮やかに翻ったのち、凄まじい速度で光刃を抜き放った。——光の刃は、そのまま“デュエル”のкокピットを偏に目指した。

——やられる……!?!

イザークは啞然として、迫り来る光の剣を見つめた。見つめることしか出来なかった。

殺される! そう思ったとき、光刃の軌道が不自然に逸れた。“デュエル”のкокピットは貫かれず、機体は両足を切り裂かれるだけに終わった。衝撃が機体を襲い、イザークは悲鳴をあげた。

自分の悲鳴が聞こえただけ、彼はその瞬間に僥倖を憶えた。

〈早く脱出しろ! もう……やめるんだ……!〉

未知の機体はバランスを失った“デュエル”を背後から蹴り飛ばし、イザークはその後、飛行していた“デイン”に空中で受け止められた。

ステラが悲鳴にも似た声を上げる。

「イザーク!」

へく、くそお……! 撤退する!」

「デュエル」はそのまま「デイン」に抱えられながら、メインゲートから離脱して行つた。

同じだ——と、ステラは慄然する。

やはり「フリーダム」を前にしては、誰ひとりとして敵わないのだ。

超然とした操縦技術。ナチュラルを凌駕し、コーデインネイターさえも超越する戦力。その力に撃たれた者は数知れない。——「カオス」「アビス」「ウインダム」——

「グフ」「インパルス」——「エクソリア」「デュエル」と並び、ステラの「ガイア

「および「デストロイ」——。

数多の名エースパイロット将たちが、ひとえに敗北を喫するほどの「力」——。

そう、きつと誰も敵わない。

誰にも、ヤツは倒せない。

遙か高みより、地を這つて逃げ回る者たちを見下すように睥睨し、一方的に狩り尽くす。

ダーダネルスの死の天使。

だから死ぬ——？

だからみんな、殺される——アイツに？

「どうしてっ………?!」

ステラはその場で、涙声のままに唸った。

どうしてわたしは、アイツに敵わないのだろう。

どうしてわたしは、いつまでも、アイツに敵わないままなのだろう？

どうしてわたしは、アイツに大切なものを奪われて行くさまを、黙って見ていることしかできないんだろう……?!

ステラは再び顔を上げ、爆発の残照を背負い、黒陰を帯びた蒼翼の悪魔を見据えた。ヤツは障害を払いのけたと云わんばかりに、もう一度「デイフェンド」へと接近して来ている。

十枚の蒼翼はためかせながら、凄まじい加速を見せ、ステラへと肉迫する！
憎たらしい面相をした——「フリーダム」！

——どうしてわたしは、オマエを越えられないんだろう……?!

自問しながら、彼女は答えを捜した。

ステラは「越えられない」のではない——今度こそ「越えなくてはならない」のだ。
遙か高みより下々の者達を見下す、超然とした——この恐怖の天使を。

今度こそ負けたくない。

こんなヤツに、やられてばかりはいられない。

地を這う者は、非力だからといって、いつまでも怯えながら大空に焦がれてはならないのだ。

ステラは涙をぬぐい、憎しみのこもった眼で“フリーダム”を睨み返した。

瞬きすら許されない刹那の間に、“フリーダム”から掴むような手が伸びて来る。

この期に及んで、ヤツは何かをステラに訴え掛けていた。

まるで自分が正しいと信じて疑わぬように。

自己にはならない他者たる存在は、すべて是正しようと云わんばかりに！

「いつもいつも、そうやってやられて………っ！」

ステラは力を望んだ。

みずからを貶めに現れた蒼翼ターミネイターの天使——これを越えてゆけるだけの、超然とした力を

——今のステラわたしには、大切なものを守り抜く覚悟がある！

ステラはもう、昔とは違うのだ。

与えられた世界の中でしか生きられないような、おろかな傀儡人形ではない——わたしは、ひとりの人間だ！

今度こそ、自分の意志で。

コイツから、ステラがみんなを守るんだ——！

「たまるもんかあーっ!!」

決意に叫んだその瞬間、ステラの身体の奥底で、何か弾けた音がした。

その瞬間から思考が冴え、魂が思考が、霊障に当たられたように澄み渡る。

——なに、これ……!?!?

彼女の潜在意識が、知らず識らずにそう呟いた。

すみれ色の瞳は輝きを失って、光は虚空へと消えてゆく。

複雑にしてに雑多な情報の一切は脳内から抹消され、それこそ『最適化』^{ヒーリング}を受けてい

た当時のように——いいや、不思議なことに、当時の何倍にも鋭敏に研ぎ澄まされた集中力が、彼女の意識に結集してゆく。

ふっ、と少女が短く息を吐き出した次の瞬間に「デイフェンド」は動いた。

フライトユニットである「グウル」に乗ったまま鮮やかなバレルロールを決め、抜き打ちに上下姿勢を反転させた。

伸ばした手を、またも有り得ない状態で回避され、キラは戦慄さえ憶えた——ここは無重力空間ではないのだ！

なぜ、そんな常識外れの芸当が出来たのかはステラにも分からなかった。

ただ危機感に駆られたとき、心が激しい拒絶反応を起こし、手と足が勝手に機体をコントロールしていたのだ。

「――！」

少女は途端に人間らしさを失って、言葉を発する方法さえも忘却して、反転した状態にある。『フリーダム』に向けて銃口を絞った。その突拍子もない、それでいてあり得ない姿勢からの射撃に、キラは愕然と目を開き、慌てて距離を取って見せる。

瞳孔がきゅつと狭まった少女の眼は、鬼子のように据わっていた。

「くあッ!？」

即座に飛び退いた『フリーダム』は、やがて『デイフェンド』から差し入る火線を凌ぐように、縦横無尽に空を駆け巡った。

ステラの眼光は、その鮮やか過ぎる軌跡を確実に捉えていた。

冴え渡る指先でトリガーを引く。ビームを連射し、一帯に迸る光条をばらまく。空域的に確に散らされたビームによって、加速していた『フリーダム』は退路を阻まれた。急制動を掛けたキラの視界に、不意に、一筋の光条がぐんと伸びる。光条はそのまま『フリーダム』の胴体を捉えようとしていた。

「――!？」

キラの背筋が凍り付く。

驚異的な瞬発力を誇る「フリーダム」が、そこで咄嗟に楯を翳した。かろうじてシルドでビームを受け止め、ひゆうと息を呑む。

——今のはどうということだ、生きた心地がしなかった……！

慢心していたわけではない。

油断していたわけでもない。

ただひとつ、ステラに撃たれるなんて想像もしていなかったただけだ。

従来の「ストライク」の四倍以上の性能を持つ「フリーダム」に迫り来る勢いで、目の前の「ディフェンド」は躍りかかって来ていた。——歴とした性能差が存在していなければ、今のは本当に危なかった！

知らなかった——ステラが、こんな力を持っていたなんて……！

「でも……！」

キラは焦っていた。

アラスカの地下には「サイクロプス」が仕掛けてあるという。強力なマイクロウェーブを高出力で発振することで、周囲一帯を一概に、そして一斉に焼き尽くす悪魔の兵器。

すぐにもアラスカから距離を取らなければ、キラだって危ない。そしてそれは、ステラもまた同様だ。

「……でキミを見逃せば、キミはそれに灼かれてしまっただろう!」

——だからキミは、なんとしてもぼくが連れて帰らなきゃいけないんだ!

キラはそう判読し、意を決した。

いつ爆発するかも分からない地盤の上で、長つたらしい説得などはやっていられる余裕もない——そう判断したキラは咄嗟に、強硬手段に出ていた。

即座にビーム・サーベルを抜き放つたのである。

「ごめん、でもぼくは——力づくでも、キミを連れて行く!」

絶対に助けたい。

ステラには、決して死んで欲しくなんかない——!

その瞬間——キラの身体の奥底で、何か弾けた。

正確には、彼は意図的に、みずからを覚醒させたのだ。

意識がずっと冷めていく。彼もまた「デイフェンド」が放つビームの軌道を瞬時に見切り始めた。

やがて「フリーダム」は急降下し、「デイフェンド」の遥か下方へと潜り込んだ。海面をすれすれに飛行する「フリーダム」は、仰向けのまま、海面と平行に滑空し始めた。あり得ない。機体の制御をすこいでも誤れば、海面に叩き付けられてもおかしくないような態勢だ。しかし「フリーダム」は墜落することなく、海面すれすれを高速飛行

し、ステラの放つビームを次々と、それでいて淡々と回避してゆく。

ステラの逆転は、長くは続かなかった。

彼女の連射するビームライフルが、すぐにビームを吐き出さなくなったのである。赤文字に照らされたバッテリーがゼロを指し、フェイズシフトが陥落する。

「……!?!」

声を失うまで冷徹としていたステラは、愕然と口を開いた。

機体の性能が、彼女の意志に即応しなかったのだ。——そして、それが「デイフェンド」の限界でもあった。

次の瞬間、海面すれすれを滑空する「フリーダム」が大きく飛翔した。

そのまま高度を上げ、蒼い翼が、須臾しゆゆにして空中を駆け抜ける。

両腰にマウントされた二丁のビームサーベルを一瞬にして抜き放つ。二刀流から繰り出された斬撃が「デイフェンド」の頭部と両肩のシールドを同時に切り落とし、破片が四方に飛び散った。衝撃に揺れたステラはくつと堪えたような表情をしたが、間髪入れず、天空まで駆け抜けた「フリーダム」が腰部クスイファイアス・レールガンを「デイフェンド」へと撃ち込んだ。

フェイズシフトが落ち、脆くなった両脚が狙撃され、一瞬にして破壊される。

足をもぎ取られた「デイフェンド」は「グウル」から叩き落された。そのまま逆落

としに遭い、落下速度を上げながら海面へ墮落してゆく。

「ステラっ！」

キラは即座に滑降し、墜落する「デイフェンド」の左腕を空中で掴み止めた。

捕獲された「デイフェンド」は、このとき完全なるパワーダウンを起こしており、ぴくりとも動かなくなっていた。いくら機動兵器モビルスーツといえど、電力が尽きれば物言わぬ鉄塊だ。

気が付けば、ステラの瞳には光が戻っていた。

光が戻ると同時に、大粒の涙がそこに浮かぶ。

人間らしい喜怒哀楽が人格に戻り、彼女は幼子のように泣きじやくり、震える肩を抱いていた。

——やっぱりステラ、勝てなかった……！

やがて打ちひしがれたようにうなだれ、コンソールの上に突っ伏した。

もはや、武装は残されてない……電力も底を尽き、抵抗する術もない。

「フリーダム」と「デイフェンド」では、まるで勝負にはならなかった。

性能の差だった、なんて見苦しいことは云わない。——たとえそれが、おそらくは真実であつたとしても……。

自分の力では、やはり、この天使には敵わない。

ステラは何ひとつ、この「フリーダム」からは護り抜けないのだ。おのれの命さえも

「い……いや………っ」

「フリーダム」はうなだれた「デイフェンド」の左腕を掴み止め、そのまま「アーク
エンジェル」へ向かい始めた。

——どうして、殺さないの……？

——どうしてステラだけ、生かしたまま、どこかに連れて行こうとするの……？

ステラには、それが分からなかった。

ステラと「フリーダム」の間にどのような誤解があったのかは、このときのキラに
とって、到底、計り知れないことである。

それは、ステラを震え上がらせ、狂乱させ、そして秘めたる力に覚醒させるほどの『何
か』——

おそらくは、絶望的な『恐怖』の一種だろう。

おおよそ、それは多少の言葉や説得で解けてゆくほど、簡単な誤解ではなかったのだ
ろう。

(だから、ぼくはこの子を「アークエンジェル」に連れて帰らなきゃならないんだ……)
その独白は、まるで言い訳のように、償いのようにしてキラの口内で紡がれた。

キラがステラと接触できる機会は——互いの軍属が異なった今となつては当然だが——ひどく限られている。そんな彼女とすべてを対話しようとすれば、なんでもかんでも一緒にくたになる。

だから、誤解が生まれるのだ。

必要なのは、時間——。

アラスカを離脱すれば、自分たちには、いくぶん「猶予」ができる。

彼女の誤解は、ゆつくりと時間を掛けて、豊富な言葉と説明を用いて、ひとつずつ、やさしく紐解いてゆけばいい——キラはそう考えていた。

そのときである。

「フリーダム」のкокピッド内に、突如として警報音アラートが鳴り響いたのは。

(急速接近する機影——?! ちがう、これはっ!?)

そのとき太陽光にきらり、と反射する「なにか」が——キラの視界に映り込んだ。

それは、ひと呼吸のうちに「フリーダム」へ肉迫し、キラは反射的にシールドを掲げ、みずからの機体を防御した。

が、それと同時に、彼の感覚はあることに勘付いていた。

飛来するなにか——それは妙に、不自然な軌道を描いており、
(直撃コースじゃない! ——まさかっ!?)

明らかに——“フリーダム”自身を狙って放たれたものではなかったのである。

キラはくつと喉を鳴らし、咄嗟に腰を浮かせた。飛来物の正体は、一本のビーム・ブー
メランだった。

チャクラムのように回転する光の輪刃が、次の瞬間“フリーダム”から釣り下げられ
た“デイフェンド”の左腕を切り裂き、これを叩き落した。

「しまった!」

腕先を千切り落とされ、支えを失くした“デイフェンド”はふたたび海面へ墜落して
ゆく。

同時に少女の悲鳴が聞こえた。キラは一瞬にして後悔した。慌てて追い継ったが、伸
ばしたその手は、もう一度とは“デイフェンド”に及ばなかった。

猛追したキラの目の前で、ふつと“デイフェンド”の姿が消えた。

正確には、颯爽と現れた黄檗色のモビルスーツが“デイフェンド”の機体を空中で受
け止め、キラよりも早く、その機体をかっさらって行ったのである。

——“バスター”!?

現れたのは、“デュエル”に続くGATシリーズの機体だった。

その姿を認め、キラは驚愕する。

「ひゆう、あつぶねえ!」

飛行する「バスター」が、墜落した「デイフェンド」が海中に没するよりも前に、間一髪でその機体を受け止めてみせた。

コクピッドの中で、今のは我ながら見事なキャッチだった、とデイアツカが自賛する。やがて顔を上げ、モニターに映る——自分にこの役割を担うよう指示を出して来た——かつての同僚の名を呼んだ。

「これでいいんだよな、アスラン?」

↑——ああ……↓

混沌とした戦場。

ひっきりなしに、転々とする戦況。

そんな折、

「フリーダム」の眼前に——『真紅の騎士』が舞い降りた。

キラは、絶句した。

重々しく、それでいて棘々しい攻撃的なフォルム——「イージス」のそれを思わせる真紅色と縦長の頭部を持ち、背部には足場のように巨大なフライトユニットを装着している。腕先や足先に数多の刃を忍び込ませ、現に「デイフェンド」の腕を斬り落とした

のはバツセルブーメランは、鮮やかな弧を空中に描きながら、やがてその機体の肩部へと納められた。

キラは一瞬、心臓を止めた。

手許のコンピュータは、自動的に目の前の機体の機種を特定していた。

舞い降りたのは、ZGMF-Xの型番を持つ——“フリーダム”の兄弟機……？

——“ジャステイス”……!?

突き刺すように戦場に降りて来た、正義の剣——

そのパイロット、アスラン・ザラは——かつての同僚たるディアッカ・エルスマンに向けて言葉を発した。

「ありがとう、ディアッカ。きみはそのまま帰投してくれ」

アスランは淡々と告げる。——彼の云う「そのまま」というのは、もちろん「大破した“デイフェンド”を抱えたまま」という意味であろう。

それは、命令というより、個人的に依頼しているような云い方だった。

御高く止まらぬ物言い草に、ディアッカは悪い気がしなかった。後生を聞き受け、しようがないと云わんばかりに返す。

“バスター”の補給ついでじゃなかったら、きっぱり断ってたところだけ？ 今度、な

んかおごつてくれよ？

「もちろんさ、ありがとう」

同僚というよしみもある、依頼を請け負ったディアツカは、大破した「デイフェンド」を抱えたまま「グウル」を転進させた。

すぐに母艦である「グストー」の方角を目指す。

すると、そんなディアツカの後方から、蒼翼を広げた見慣れないモビルスーツが、凄まじい速度で迫って来ていた。

ディアツカは疑心に駆られた。

なんだこいつは？ 自分を追いかけて来た？ いや違う、そいつが腕を伸ばしているのは「バスター」ではなく「デイフェンド」である。

「ああん……っ!？」

二機分の重量を支えるディアツカの「グウル」は思うような速度が出ず、のろのろと航行するばかりだ。

その背後より、凄まじい速度で「フリーダム」が追い継った。

追いつかれる——!？ ディアツカがそう毒づいたとき、一条の光が、二機の間を割るよう撃ち込まれた。——「ジャステイス」が放つビームライフルである。

——あぶねえ、助かった！

ディアツカは圧倒的な心強さを憶えた。「ジャステイス」から正確無比に撃ち込ま

れた光条に“フリーダム”が進路を阻害され、みるみる“バスター”から距離を引き剥がされてゆく。

やがて二機の間が大きく距離が開き、キラの目から——“バスター”と“デイフェンド”は見えなくなった。

キラは、目標を見失った。

慣れ親しんだ“アークエンジェル”を目の前にして、“デイフェンド”は“バスター”に連れ去られた。

追いつくことは可能だった。

二機分の重量を抱えた“バスター”は明らかに動きが鈍っており、“フリーダム”の性能で追いつけないわけがなかった。

それでもキラが“デイフェンド”を奪還できなかつたのは、目の前に現れた真紅の機体が、徹底的にその邪魔をして来たからだ。

ZGMF—X09A “ジャスティス”——

搭載された武装は“フリーダム”のそれと同じようなものを持っている。

異なっているのは、制圧戦を得意とする「フリーダム」に対して、そいつは白兵戦を得意としていることである。本来ならば、連携運用が想定されているのだろうが、パイロットもまた相当の技量を持っていた。

——少なくとも、はるか遠方から「ディフェンド」の左腕だけを正確に切り落とし、「バスター」を追う自分の行く手を、徹底的に妨害して見せるほどには……！

遅かれ早かれ、結果的にステラはアラスカから離脱して行った。

機体が大破した状態では再出撃もままならず、彼女が「サイクロプス」に巻き込まれるようなことはなくなっただろう。

しかし、それは「バスター」ではなく、自分がやろうとしていたことである。

キラは歯噛みしながら、真紅の敵機を見据えた。

——そう。コイツさえ、いなければ……！

この機体さえ現れなければ。

この機体さえ邪魔をして来なければ。

今ごろ彼女は、無事に「アークエンジェル」に収容されていたはずなのだ。

キラは彼女を、絶望的な恐怖から解放してあげられるはずだった。

——コイツが、邪魔さえしなければ……！

堪えたようにキラは「ジャステイス」の方を向き直す。

天空の下、蒼き翼と紅き剣が対峙した。
そのときである。

突如として通信回線が開かれ——真紅の騎士——“ジャステイス”から、あまりにも聞き慣れた声が聴こえて来た。

“こちらザフト軍国防本部直属特務隊——アスラン・ザラだ”

キラの中で、時間が止まった。

——アスラン……!?

その真紅の機体に乗っているのが、アスラン……?。

モニターに映る親友は、険阻な顔をしていた。

生きていたのかと、キラは自分をすっかり柵に上げて、ことを思慮した。

“聞こえるか” “フリーダム” ……! キラ・ヤマトだな……!?”

アスランは訊ねながらも、頭の片隅では、それを確信していた。

突然、アラスカ全域にとある放送が響き渡った。

それは“サイクロプス”の实在を報せる通信だった。

“ディアツカは「どうせ嘘だろう?」と聞き流していたが、その真偽など、アスランにとつてはいつでも良いことだった。ただひとつ、

(その声は、間違いなくキラ・ヤマトの声だった……!)

自分が抹殺したはずの存在が、健全と声を上げていた。

キラは、自分が撃破したはずだった。それが、生きていたというのか——？

アスランは血相を変えてメインゲートへと向かった。

驚いたのは、キラの生存だけではなかった。

キラが乗っているのが「ジャステイス」の兄弟機である「フリーダム」であるという二重……いや、さらには「フリーダム」によって「ディフェンド」が連行されているという、三重の驚きを抱かされたのである。

「アスラン……！ アスラン・ザラ！」

へなせ……オマエが「フリーダム」に乗っている！ その機体、いったいどこで手に入れたツ！

云ってから、彼はそれが愚問であることに気が付いた。

問題なのは「どこで手に入れたか」ではなく——それを「どうやって手に入れたか」である。

アスランが「ジャステイス」を受領したように、キラもまたアプリリウスで——「フリーダム」を受領したのか？

いや——受領はないがあるか、あの父上が、キラごときに「翼」を渡すはずがない！
誰の手引きか、キラは「フリーダム」を強奪したのだ、かつて自分が「ヘリオポリス

“で行ったように！”

——そうでなければ……！　なぜ“アークエンジェル”に味方し、挙句、性懲りもなくおれの妹を苦しめた!?

アスランは憤然と、ふたたび対峙した親友へと訴えかけた。

ZGMF-X10A “フリーダム”には“ニュートロンジャマーキャンセラー”が搭載されている。だからそれは、地球軍には決して譲渡してはならない代物なのだ。

“コーディネイター達の「自由」のために奮われるべき“力”——なのにキラは、その力をあまつさえ、地球軍のために奮っている！　ねついやつ！

へオマエがふたたび、ザフトの敵になるというのなら……っ！

次の瞬間——“ジャステイス”がラケルタ・ビームサーベルを抜き放った。

二丁の光刃を柄同士で連結させたアスランは、両刀型の“アンビデクストラス・ハルバード”を完成させた。

それを見て、キラはぎゅつと唇を噛む。

——感覚として伝わって来る、痛いほどの敵意……！

——すでに一度は敗北した相手。アスランとまた、戦わなきゃいけないのか……!?

対抗するように、“フリーダム”は二丁のラケルタ・ビームサーベルを抜き放った。

構えられた両刀に対して、キラは双剣を逆手に構えた。

「オマエを討ち切れなかった——おれの甘さに誓って、おれがオマエをここで討つ！
今度こそ！」

「アスラン……！ 僕の声は、キミにすら届かないのか！」

次の瞬間——

蒼と紅の閃光が、交錯した。

「ディアツ……カ……？」

「フリーダム」を撒いたディアツカの耳に、通信越しのステラから、震えた声が聴こえた。

画面に映る少女は、大きな瞳に涙を溜めていた。

泣いてる顔も可愛いな、なんて不謹慎なことを考えたディアツカは、直ちにそんな自分を激しく戒めた。

「つたく！ まさかオマエともあろう者が、こ^{モン}うも派手にやられるとは」

ディアツカは、手許に抱えた「デイフェンド」の機体の状態を舐めるように見回した。

機体は、まるで無残な姿と化していた。

頭部や両脚は完全に破壊され、左腕は、救出のためとはいえアスランによって切り落とされている。

ディアツカはフォローのひとつでも告げてやろうと、まるで似合わない優しさを見せ、こんなことを云った。

「けど、もう安心しな。おまえを墜としたあのMSは、おまえを追っちや来ないさ」

その一言で、彼女がどれだけ救われたような気分になったのか、ディアツカは知る由もなかった。

「あいつは、アスランが喰い止める」

「アス、ラン……?」

「あの真紅の機体に乗ってたの、おまえの兄貴だぜ?」

そう——ディアツカは思い惚んだ。

ステラを撃破した蒼い翼のモビルスーツは、従来の機動兵器をはるかに圧倒する性能を有していた。

パイロットもまた、凄まじい技量を持っているようだ。

イザークは撃墜され、続けざまステラさえも完敗を喫した。誉れ高きクルーゼ隊、ザフトレッドである彼らが赤子のようにあしらわれるような相手だ、おそらく自分が立ち向かったところで同じ轍を踏むだけだろう。これはあくまで余談に過ぎないが、勝算の

ない戦に堂々と挑むほど、ディアツカという男は要領が悪くないのである。

だが、アスランなら——？

あるいは彼ならば——“そいつ”を圧倒できるかもしれない。ディアツカがそう打算していたのは確かだ。そう、まさに無敵と畏れられていた“ストライク”でさえ、単騎で撃破したアイツなら……。

彼は回想するように説いた。

「おれが単機でサブゲートを潰して回ってたら、偶然“ジャステイス”と合流したんだ。おまえやイザークとは連絡が取れねえし……いつそのこと、アイツの後についてってりやあ楽なモンだと思ってるな」

要するに、サボリたかったのであろう。けらけらと、ディアツカは軽薄そうな笑みを浮かべながら続けた。

「すぐにゲートも潰し終わつたし、アイツと一緒に内部なかで暴れて来ようと思つたら、妙な放送が響いてね」

放送は「アラスカ基地は自爆する」だの、なんだの、苦しい脅しを告げていた。下手な脅しだと、ディアツカは聞き流そうとした。

だが——アスランはそこで、目の色を変えた。

妄言ならば、捨て置いていればいい——そう思うのに。

「アスランのやつ、その放送に血相を変えてな。おれらと変わらないくらいヤロの少年の声……あの声に、なにか思うところでもあったのかね？」

結果として、アスランとディアツカは内部へと侵攻は仕掛けず、メインゲートへと転進したのである。

アスランの直感は、見事なものだった。

訪れたメイン・ゲートでは、ザフト部隊がたった一機のモビルスーツを相手に、破滅的なダメージを負っていたのだ。あんなバケモノみたいな戦闘力を持ったモビルスーツを、野放しにはしておけない。

ディアツカは薄く笑い、アラスカの大地を振り向いた。

（目には目を。最新鋭機バケモンの相手には、最新鋭機バケモンを——ってね……）

そうして、彼はステラと共に「グストー」を指し、アラスカを離脱した。

——アスランなら、きっとヤツを倒せる。

そう信じて、戦場を後にした。

自由の翼と正義の剣が空中で激突し、激しい応酬の末、両機共に凄まじい速度で距離を開いた。

余人には、おおよそ知覚することも困難な激突だった。

キラは憤然と叫んだ。

「——『サイクロプス』が仕掛けてあると云つたらう！」

その瞬間、上昇した『フリーダム』が翼の内部からバラエーナ・プラスマビーム砲を撃ち放った。『ジャステイス』はシールドを構え、表面部でこれを弾き飛ばして見せる。

キラは責めるようにアスランを質した。

「こんなところで、いったいきみは何やってんだ！」

迷惑である。

こんなところで自分に構っている暇があるのなら、基地内部に攻め込んだザフト兵のひとりやふたり、殴り飛ばしてでも連れて帰ればいいだろう！

云われたアスランは、カッとなって返す。

「それは、おれの台詞だろう!？」

『ストライク』という剣が破壊された今、キラは戦場を離れ、安穩と暮らしていれば良かったのだ。

自分と練り広げた死闘は、無残なものだった。あの一件で、キラも戦争には懲りたはずだ。恐怖に心折れて静かに生き延びていくくれるなら、親友として、それに越したこ

とはなかった。なのにキラは性懲りもなく「フリーダム」という危険分子を手に入れて、再び戦場に戻って来た。

そして再び、自分の邪魔をしている。

アスランには、その理由がどうしても分からぬ。

〈強奪犯の分際で、賢しらに云うんじゃない！〉

「よく云うよ……!? きみだって、強奪犯どろぶいのくせに！」

離れた両機はビームライフルを構え直し、激しく撃ち合った。

展開したシールドの防御帯で敵の攻撃を防ぎ止めながら、隙を見て反撃する。

勝負はまるで平行線だった。

「ぼくはステラを苦しめるつもりなんてなかった……! サイクロプス」から逃がすためにやってたんだ、それを……きみはっ!」

〈あいつをまやかすな! おれがあいつを、おまえに譲ると思うのか!〉

「きみはあの子を、戦争に利用することしか出来ないだろう! あの子は道具じゃないんだぞ!」

〈……! おれが譲ると思うのか!〉

言葉を繰り返すことしかできなかったアスランに、キラはすかさず腰部レールガンを撃ち込んだ。

“ジャステイス”の装甲はフェイズシフトで受け止めるものの、衝撃に揺らぎ、強かに後方へ弾き飛ばされる。

「くそっ……!!？」

押されている——？ アスランの中で、焦りが滲んだ。

キラ——以前より強くなっている？

しかし“イージス”では、確実に一度は打ち勝っている相手なのだ。

こんなところで、負けるわけには行かない。地球軍の手に“フリーダム”ニュートロンジャーマーキャンセラーの技

術が渡る——それだけは、絶対に阻止しなくてはならないのだ。

（“プラント”がふたたび核で焼かれる——！ そうならないように、おれは戦ってい

るんだぞ！）

鼓舞するように、自分自身を叱りつけた。

そうだ——初めから自分は“プラント”のために剣になるだけだ。母やステラのよ

うな悲愴な結末を辿る者達が、もうこれ以上生まれないように戦うだけだ！

その瞬間——アスランの中で、何か弾けた。

覚醒しつつ、最大加速で“フリーダム”へと肉迫した。

同時に、アスランは自問していた。——何を大人しく、対等の立場で戦っていたのだ

ろう……？

制圧戦に特化した“フリーダム”が射撃を得意とするのは当然だ、ならば性能上“ジャステイス”が本領を發揮できるのは、あくまでも接近戦である。

——格闘だ！
インファイト

驚異的なリーチを誇る両刀を翳し、アスランは抜き打ちにハルバートを振り抜いた。

刃の長さで劣る“フリーダム”はひらりと後方に翻つてこれを回避するが、“ジャス

ティス”は立て続けに背部から“フアントウム—00”ダブルオーを射出した。

後退した“フリーダム”は、思わぬ二段攻撃リフターに強襲され、後方に飛ばされる。

——やる……！

背筋が凍り付くような、余裕の無さ。——どこまで行っても、この兄妹はそっくりに

優秀だ……！

キラは当然、優位性のある遠距離からの攻撃に徹しようとしたが、アスランもそれを

見越して、どんどんと距離を詰めた。

しかし、ふたりの勝負は、そう長くは続かなかつた。

アスランの耳に、ひとつの通信が飛び込んで来たのである。ラウ・ル・クルーゼ。仮

面を付けた“シグー”に乗った男の声だ。

——アスラン、撤退しろ

「隊長……!？」

突如わきから掛けられた声に、目に輝きを失ったアスランは露骨に嫌そうな顔を作った。

しかしラウは、何か熟知った口調で、淡々と続けた。

「へフリーダム」の云ったことは、どうやら真実のようだ。きみも「サイクロプス」に巻き込まれたいくちかな？」

「いったい、ラウはどこでそのような情報を手に入れたというのだろうか？」

アスランは疑心に駆られた。

「へキミにはまだ、やらねばならぬことが多くあるだろう？　こんなところで、容易く朽ちてよい身分ではないはずだ」

「しかしっ……！」

反論しようとして、アスランは口を噤んだ。

——「サイクロプス」が実在する……？

仮にそうであるならば、アラスカに攻め込んだザフト軍の大半が、直ちに滅亡してしまおう。

それは作戦が——「スピットブレイク」が失敗に終わることを意味する。父上が練りに練って考慮された、この作戦が……。

アスランが個人的に幸いと思ったのは、既にイザークも、ディアッカも、ステラも、そ

れぞれに理由を掲げてこの戦場から遠ざかっているということだろうか。

しかし、真実を知ったアスランに出来ることは何もなかった。ただ戦場から退いて、生き延びること以外には――。

「くっ……」

ラウの指示どおり、アスランはそこで機体を翻した。『フリーダム』に背を向け、ただちに転進し、撤退して行く。

アスランは『フリーダム』の姿をしかと目に焼き付けた。

――今度は必ず、オレがおまえを仕留める……！！

おれは、あの『ストライク』を『イージス』で破ったのだ。

ならば、『フリーダム』とて『ジャスティス』の力で破ることはできるだろう。

アスラン・ザラは、まるで成長していなかった。

「アスラン……！！」

帰投する『ジャスティス』を見送りながら、キラはひとりで友の名をこぼす。

しかし、茫然としてばかりもいられない。彼と同じように、自分達もすぐに離脱してなくては――。

「……マリューさん、行きましょう！」

キラは叫び、『フリーダム』と『アークエンジェル』は、すぐにアラスカから離脱し

た。

その直後——“サイクロプス”は起動した。

基地中央部から同心円状の衝撃波が拡がり、呑まれた者は、跡形もなく消し飛ばされてゆく。

爆発のあとには、半径一〇キロに及ぶ巨大なクレーターが出来上がった。

ザフト軍は、投入した戦力の八割を失った。

連合軍は、守備隊として配備していた数多のユーラシアの部隊を失った。

されど作戦は、地球軍の勝利に終わった。

狂気の果て、数多の戦死者を出した悲劇の記録を、歴史に残して。

『捨てた者、拾った者』

“オペレーション・スピッドブレイク”——ザフトが発動した“JOSH—A”へ大規模な奇襲戦は、失敗に終わった。

近年における大気圏内の戦闘は、そのほとんどがザフトの勝利に終わっており、モビルスーツを運用するザフト軍が苦戦した、あるいは数多の損失を招いた作戦といえば、新型要塞の配備により壊滅的な被害を受けた第二次ビクトリア攻防戦くらいのものであった。

結果だけを見れば、たしかにザフトの最終制圧目標であるアラスカ基地は陥落した。そこに駐屯する地球軍も根こそぎ壊滅している。ただしそれは、数多のザフト軍モビル・スーツ部隊——それに乗る大勢の義勇兵達——を道連れにして生み出された結果に過ぎないのだ。

「なんなんだ、これは……！」

被弾を受け、帰投していたイザークは、かろうじてその命を拾っていた。

彼は、アラスカの大地を映した映像？ ……いや、正確には今までアラスカの大地を

映していたモニターを見上げながら、愕然と声を漏らした。

青白い電磁波の裂光が王冠を象るように湾岸先の大地に浮かび上がり、巨大な波紋のように地を伝い拡がってゆく。衝撃に呑み込まれた人は建物は、モビルスーツは等しくすべて粉碎し、砂塵のように儚く散ってゆく。

イザークの頭に、戦場で叫びを挙げた少年の声が、鮮烈に蘇った。

——アラスカ基地は、間もなく“サイクロプス”を起動させ……

そう。彼の叫んでいたことは、真実だったのだ。

先の呼応どおり、破壊の名を冠する“サイクロプス”は、基地最奥部に実在した。その恐ろしさを、この大地に証明して見せた。

数多の命を一斉に呑み込み、焼き尽くしたのである。

数時間後——

ザフト軍には、本国からすぐに撤退命令が下され、至急アラスカからの離脱が命じられた。

カーペンタリアへ引き上げる艦内で、イザークは深慮に耽っていた。

「生き残ったのは、たったのこれだけか……」

窓から平航する潜水母艦を眺め、声を漏らす。

出撃前は、空と海を覆うほど多くの戦艦と共に進軍していたのに対し、その数も今となつては指を折つて数えるほどしか残されていない。寂しい帰り道である。

（ディアツカは？ 他の奴等は、どうなつた……!?!）

気が気でない心境でイザークが廊下を歩いていると、他の隊員らがその場に往生して物議を醸していた。

「まさか『サイクロプス』を使うとはな……」

「月基地で使用されたつて噂、本当だったんだな。グリマルデイの悪夢だぜ……」

「そんなことはどうでもいい!」

「そうだ! ザフトの戦力の大半は、さっきのアレに呑み込まれちまつたんだぜ? オレたちはこれからどうなるんだ……!?!」

——どうなる?

イザークはその会話を傍受し、ひとりでに思慮した。

実際、今回の被害により、ザフトは地球に降下させた戦力の大半を喪失した。おそらく地上に戦線を張ることすら難しくなつただろう。反対に、今回の作戦を期に勢いづいた地球軍は、地球圏を支配した後、宇宙へと上がつて来る可能性も考慮される。

であるなら、自分達はひよつとすると宇宙へ後退する選択を余儀なくされるかもしれない——？ 戦況は結果的に、以前より遥かに泥沼の状態に陥ったのだ。

「イザーク！」

そのとき自失として歩を進めるイザークを、遠方から駆け寄って来る者が呼び止めた。

ディアツカの声だった。

「これを認め、イザークはぱつと目を見開く。

「ディアツカ、生きていたか！」

「ああ、おまえもよく生き残ってたな……。それより来てくれよ！ なんかへんなんだ」

「へん……？」

性急な様子の子のディアツカに案内されるまま、イザークは格納庫へと連れて行かれた。そうして目的地までやって来ると、格納庫では、目の前に見慣れない鉄塊が転がっていた。

剥き出しの鉄灰色に彩られ、ところどころが乱雑に千切れている「それ」——得体の知れない巨大な物体は、見るからに一応は金属の塊のようだ。

イザークのこんがらがった頭は、その正体を瞬時に把握できず、思わず声を上げた。

「なんだ、これは。まるでガラクタダ……」

次にディアツカがまじまじと「『デイフエンド』だよ」と、目の前の物体の正体を明かした。イザークは「これがか……!?」と唾然として返す。よく見れば、その巨大な鉄塊は唯一、右腕だけを残していた。その腕は、何かを天に訴えるように伸びている。しかし頭部も両脚も、とどめには左腕さえ切り落とされている。

四肢すら持たず、物言わぬ鉄塊となったこれを、人型機動兵器モビルスーツと呼称するのはナンセンスである。

「ステラも、あの蒼い翼の最新鋭機にやられたのか……?」

「そのステラが、一向にコクピッドから出て来ねえんだよ」

「なに?」

イザークが確認するようにディアツカを見る。

彼は曖昧に肩を竦めるだけだった。

「なに呼びかけても、反応がなくなつてな。——つたくもう、何がどうなつてんだか」

そのとき天井に構えられたハッチが、急にオープンになった。

急激に吹き込んで来る暴風に、イザークとディアツカは腕を掲げ、数歩として後退する。吹き荒ぶ風に固く閉ざした目を、ややおいて開けたとき、彼らの目前にホワイトカラーの『デイン』と、真紅に彩られた見慣れぬモビルスーツが着艦していた。事態を呑み込めていないふたりが目を凝らす——と、すぐに二機のコクピッドが開き、そこから、

ラウとアスランがラダーに捕まるのを認めた。イザークは「隊長、アスラン!？」と驚いたように詰め寄った。アスランも同様に「良かった、きみも無事だったのか」とイザークに話した。

再会を喜ぶ暇もなく、ディアツカはラウへと詰め寄る。

「隊長、こりやあどういことですか!」

「してやられたよ、ナチュラル共に。ヤツらはあらかじめ用意していた。サイクロプスを起動させ、既に中枢部へと攻め込んでいたザフト部隊を道連れにしたのさ」

それは、妙に白々しい声だった。

傍らのアスランへ、イザークは食って掛かるようににじり寄る。

「アスラン、いったい何がどうなっているんだ!」

イザークには、いまだに理解できていないことが多くあった。

「アラスカに舞い降りた蒼翼のモビルスーツ、あれはいつたい……」

「あれはZGMF-X10A。フリーダム……。父上が……いや、ザラ議長閣下が極秘裏に開発なされた、ザフトの最新鋭モビルスーツのひとつだ」

その言葉に、イザークとディアツカは声を詰める。

「どういう経緯があったのかは分からないが——どうやら“それ”が、何者かによって地球軍の手に渡ったらしい。あの機体は今……“アークエンジェル”と共にいる」

「ザフトの最新鋭機……!? それが、強奪されたというのか……!」

「おれが受領したのも、その最新鋭モビルスーツのうちの一機だ。ZGMF-X09A

「ジャステイス」——こちらは「フリーダム」の兄弟機に当たる」

云いながら、ふとアスランは思った。

（——いや、そんなことは今はどうでもいいのかもしれない……）

一連の会話を打ち切るように、彼はなにか強引に話を急いだ。

「ともかく。準備を整え次第、俺は「フリーダム」を追わせてもらう」

「ディアツカは首を傾げた。

アスランが何故、そうも必死に「フリーダム」に固執するのか分からなかったからだ。当の彼はディアツカの疑念など受け取る様子もなく、ひとりで視線を落とし、思索する。

アスランがこうして「フリーダム」を目の仇にするのは、立場上、親友からライバルへと生まれ変わったキラと、「決着をつけたい」という個人的な執着も含まれているだろう。しかし彼は今、それよりも遥かに重大な問題と直面していた。

（「フリーダム」にはNジャマーキャンセラーが搭載されている。その技術が地球軍の手に渡るようなことだけは、絶対に阻止しなければならない）

「Nジャマーキャンセラー」

これは、地球にとって極上のひと品である。

核分裂反応を封印するニュートロンジャマーを無効化する技術。これは地球のエネルギー危機を大きく緩和させ、電波式誘導ミサイルや核ミサイルを解禁させる。大量殺戮が容易に可能な歴史——機動兵器の存在意義の薄まった戦争へと、時代を回帰させることが可能となるからである。

そう。コーディネイター達の破滅を近づける、極めてゆゆしき事態でもあるのだ。

(離脱した「フリーダム」の足跡を辿り、Nジャマーキャンセラーのデータが流出した可能性のある施設や人物、そのすべてを闇に葬る——)

核動力で起動する「ジャステイス」は、理論上の稼働時間に制限はない。

厳密に云えば、武装弾数や酸素、生身のパイロットの衛生面の問題において完全なスタンダードアローンではないのだが、当面の期間は独立運用ができる性能を持っているのである。

だからこそ準備を整え次第、すぐにでも「フリーダム」を追撃に出るつもりだった。

あくまでも単独で——同僚達にすら真実を告げぬまま、内密に。そして、その判断は評議会直属のいち特務隊員として、しごく賢明と云わざるを得ない。

「——ところで、きみたちは格納庫ごんかくで何をしてたんだ？」

アスランが思いついたように声を上げると、イザークが返した。

「大破した『デイフェンド』から、パイロットが出て来ないんだそうだが？」
「えっ？」

アスランはきよとんととして、傍らに崩れるように摺座かくざした『デイフェンド』を見上げた。イザークの云う通り、機体はほとんど原型を留めずに大破しており、人型機動兵器として認識することも難しいような状態にあった。

ひどい有り様だと、左腕を切り落としたのが自分であることをすっかり棚に上げて、アスランはそんなことを思う。

これでは修復など、到底先のことになるだろう。

それも実質、本当に直すのであれば——の話ではあるが。

ディアツカが背後から言葉を続ける。

「アスランが出て来なきや、ステラはあの蒼い羽根のモビルスーツに連れ去られるところだったぜ？　まるでオマエとアイツで取り合いっこでもしてるみてえだったな」

茶化すようにディアツカが云ったを、アスランは内心、認めていた。

実際、取り合っていたのかもしれない……と小声で漏らすが、それはディアツカに聞こえなかった。

ややおいて、彼らは摺座した「デイフェンド」の胴体まで駆け上った。

外部ロックを淡々と解除し、中からは一向に開く様子のないコクピッドを、なかば強引に開放させた。

それを行ったのはイザークだった。

「おい。だいじょうぶか、何があつたんだ」

イザークが顔を覗かせる——と、コクピッドの中のステラは、強かに震えていた。

両腕で身体を覆い、縮こまるように肩を抱いていた。蒸したヘルメットを乱雑に殴り捨てており、頭は生身の状態だった。目尻に儂い涙を溜め、円らな双眸は真つ赤に充血していた。イザークが掛けた声も、まるで届いていないようだ。

彼が続けて声を掛けようとすると、その背後からアスランがその肩を止め、「おれがやるよ」とイザークを制した。イザークはあっさりと譲った。

アスランはそのままコクピッドへと潜り込み、少女へと手を伸ばした。

「あす、らん……?」

「ああ、そうだ。もう大丈夫だ、安心していい」

とんとん、と背中に伸ばした手で少女を慰めながら、アスランはゆつたりと訊ねた。

「いったい、何があつたんだ……」

「アイツが来た……! アイツが、ステラ……殺しに来た……っ」

どこか飛躍した論を訴えられ、アスランは頭に疑問符を浮かべた。彼女の発言の意味が、まったく分からなかったのだ。

ともあれ、それも今に始まったことではなかったので、これと云って動揺はしなかったし、あえて言及しようとも思わなかった。

アスランはしごく怪訝そうに問う。

「アイツって……「フリーダム」？」

「そうっ！ アイツ……「フリーダム」！ ステラ、アイツに殺されそうになって——」

アスランには、彼女の体験を紐解くように把握することは出来ない。

論理にすらなっていない主張だが、ステラの頭はこのとき、ひどく錯乱していた。

——殺されそうになった……？ それとも、実際に殺された……？

どちらが正しいのかが、ステラには分からない。

今の彼女は、みずからの置かれた立場や境遇——味わって来た末苦い経験を、言葉で伝達するだけの舌を持っていなかった。

理性は失われ、恐怖から立ち直ることに必死だった。

ステラの精神状態はひどく混然としていたが、アスランはそれでも、ゆつくりと肩を抱いてくれた。

「あいつが、怖いのか？」

アスランは、ステラに言い聞かせるよう告げる。

彼女に思い知らせるように、その先を続けた。

「あいつは、嫌いか？」

「嫌い……！ あいつ……あいつはっ、ステラを………殺すから……っ」

くつと口元に笑みを浮かべたアスランは、恐怖感覚に付けこむようにして彼女をそそのかした。

「そうだな……あいつはオマエを、傷つけにやって来たんだ」

今まで嘘ばかり吐いて来たアスランの発言は、しかし、このときだけは、不思議と真実味を帯びていた。

いや、実際——真実なのだ。

アスランの云う「あいつ」というのが、誰のことなのかステラには分からなかったが、結局は「フリーダム」のパイロット」を指示する代名詞であろう。だからこそ、ステラはアスランの発言に納得してしまう。

——やっぱり「フリーダム」は、ステラを傷つけるために現れたんだ……！

——以前のよう、アスランの言葉を疑うことはない。かつての経験や、味わった恐怖が彼女の心を彼の論理に落ち着かせてしまった。

きつと、今度こそ。

アスランの云っていることは正しい。あの「フリーダム」は、間違いなくステラを殺した「死の天使」なのだから……！

「フリーダム」は、おれたちの敵だ。絶対に倒さなきゃならない敵なんだ」
決して、嘘は云っていない。

地球軍に渡った「フリーダム」は、明らかに「プラント」に不利益をもたらす彼らの敵なのだから。

「アイツを野放しにすれば、また多くの犠牲が生まれるかもしれない。——核の力が地球軍の手に渡り、多くの人間が『死』ぬことになるかもしれない」

それこそ、血のバレンタインの悲劇が再来しても、何不思議はない。

彼女達の運命を狂わせたあの出来事が再発しても、何もおかしくはないのだ。

ステラはそれを聞き、アスランに訊ねた。

「フリーダム」は……わるもの……？」

返答として返って来たのは、力強い言葉。

「そうさ——「アイツ」は敵だ……！ 俺達が撃たなきゃいけない敵なんだ……！」

アスランは、揺らがなかった。

その言葉に、ステラはゆっくりと頷いてしまう。

そう——そうだよね。

いつだって“フリーダム”は、ステラの敵だったよね……!

「そう、だね………アスラン……」

アスランは、妹の得心を誘った。

——“フリーダム”は、敵……。

倒すべき、最悪の敵なのだ。

大破した“デイフェンド”を降り、アスランはすぐに“ジャスティス”に乗り込み、強奪された“フリーダム”の追討任務に就こうとした。

そんなとき、格納庫にラウ・ル・クルーゼが戻って来る。彼は格納庫に響くほどの声を上げ、今にも出撃しようとしていたアスランを呼び止めた。

「待ちたまえ、アスラン」

呼び止められたアスランは、啞然として振り返る。

クルーゼに制された意味が、分からなかったのだ。

「“フリーダム”を追うつもりかね?」

「そのつもりです。例の機体、決して野放しにはしてられません」

「そうか……だが残念だ、それは許可できない」

アスランは、露骨な表情を浮かべた。今にでもはあ？ と声が漏れそうな面相だ。――

――この男は、いったい何を云っているのだろうか？

特務隊所属の立場となったアスランは、今現在、ラウの指示を仰ぐ必要はない。つまり、ラウが何を云おうと、アスランはそれに従う必然がないのである。

ラウは悪びれた様子もなく、「なに、これは私個人の判断ではないさ」と淡々と先を続けた。

「これは君の……いや、君達のお父上からの――正式な通達だ」

それを云われた途端、アスランの表情がぱつと緊張する。

傍らのステラは、いまだに茫洋としたままである。

「アスラン、君はこのままカーペンタリアへと出航し、後に発動される。……パナマへの侵攻戦に参加しろ」

「えっ？」

『戦線に最新鋭機を投入し、地球軍が所有する最後のマストライバー施設 // ポルタ・パナマ』を制圧せよ』――とのザラ議長直々の御命令だ』

云われた内容に、アスランは愕然とした。

――パナマ侵攻戦の援助……!?!

てつきり、アスランは強奪された“フリーダム”の追討任務に就かされるものと思っていた。経緯はどうあれ、核動力を持つ例のモビルスーツは、決して閑却視して良い存在ではないからだ。

当然、アスランは承服できずに反論する。

「まつ、待つてください！ わたしがその任に就けば、逃亡した“フリーダム”の追討任務には、いったい誰が就くというのです！」

「それは議長閣下の判断の許、また別の人間に依頼するそうだ」

あつさり云われ、アスランは信じられない、といった風な表情になる。

そんな彼の心情を無視するように、ラウは事務的な言葉を紡いだ。

「アラスカ侵攻戦が失敗に終わった今、ザラ議長には、失点を回復するための勝利が必要なのさ。そういう意味でも、パナマ侵攻戦は、今度こそ失敗は許されない」

戦略的意味合いもあるが、それはパトリックによる、自らの地位を守るための作戦でもあった。

「だからこそ、きみの父上は、きみをパナマへと派遣なされた。——この意味が、きみになら分かるだろう？」

そう。パトリックは、アスランに期待しているのだ。——最新鋭機“ジャスティス”の力を以て、今度こそ、ザフト軍を勝利に導けと……。

その意図を思い知らされ、アスランはついにラウから食い下がった。

そう云われ……いや、そこまで云われて——なおも「フリーダム」を追うなどと、口が裂けても云えなかったのである。

「……………了解、しました」

アスランは掌を握り絞めながら、つぶやいた。

本心を言えば、今すぐにでも「フリーダム」を——キラ・ヤマトを追って行きたかったのだ。かつての親友が、核の力を地球軍に明け渡すような愚挙を、阻止してやらねばならなかった——他ならぬ、自分の手で……！

待機指示を受けたアスランは、そこでヘルメットを脱いだ。そのままステラを連れ、格納庫から出て行くこうとする。

「——話はまだ終わっていないよ」

ラウとすれ違った先、そんな言葉を掛けられた。

アスランは再び啞然として、かつての上官を振り返る。ステラもまた同様に、茫然とラウの方を振り向いた。

「ステラ、君にもザラ議長閣下から正式な通達がある」

「えっ……？」

話の中に持ち出され、ステラはきよとんと反応を示す。

ラウはすかさず、先を続けた。

「きみはこの後、すぐに本国へ出向しろ。シャトルはあちらで用意するそうだ」
「本国へ……!?!」

その言葉に喰いついたのは、ステラ本人ではなく、傍らのアスランであった。

「君のお父上から、君に託したいモノがあるそうだ——」

アスランはばつと前に踊り出て、その言葉の真意を疑う。

「まさか、隊長——!?!」

「ああ、アスラン。先に云った“フリーダム”の追討任務だが——きみの他に、適任の人間が見つかったそうだよ」

「なッ……!?!」

芝居がかった会話展開に、アスランは胸の奥から熱い感情すら沸き上がるのを感じた。

ラウは口元に切り裂かれたような笑みを浮かべ、アスランの後方に据える、ステラへと告げた。

「きみは、最新鋭機のモビルスーツパイロットとして選ばれた」

「——!?!」

「工廠にて新たな力を受領された後、例の“フリーダム”の追討任務に就いてもらうこ

ととなる」

アスランは、みずからの乗機であるZGMF-X08A「ジャスティス」に、兄弟機が存在することを知っていた。

それはZGMF-X10A「フリーダム」の他に、じつは、もう一機が存在しているそうさ。どういうわけか、実際に目の当たりにする機会はなかったが、既にアプリリウスに完成しているらしい。

——三機目の、最新鋭機……!?!

アスランは驚き、慌てたように背後のステラを振り返る。

そして、絶句した。

「『フリーダム』——たおす……!?!」

ステラはその場に視線を落とし、考え込むような仕草を見せた。

託されるのは、新たな力——

課せられるのは、「フリーダム」の破壊任務——

そう、まさにラウの云う通りだと、ステラはそのとき確信した。

ステラが適任——?

——ステラが、アイツを討つ?

残酷な蒼天使——『フリーダム』を?

忌々しい青い羽根。

憎たらしい面相。

眩いほどに残酷な、白亜のモビルスーツ。

その四肢すべてを切り裂いて、遙かその高みより、蒼翼を引きずり下ろすための任務。墮天の任務に——ステラが、選ばれた？

そのとき、ステラの胸の奥から、晴れたように曇りが消えてゆく。

彼女は、パツつと明るく表情を綻ばせた。

——“新しい力”——！

いったい、どのようなモノだろう。

しかし、それはたしかに“フリーダム”に匹敵する性能を持った機体だ。これまでの“ガイア”でも“デストロイ”でも——旧式の“デイフェンド”でも及ばないような

！

——うれしい……！

今度こそ……！

ステラが——あの“フリーダム”を墮とすのだ！

「——うんっ！」

彼女は溢れる希望を胸に、その指示を心から喜んだ。

話は、数時間前まで遡る。

アスランとステラのふたりに正式な通達が発令される前、*「プラント」*のアプリリウスではパトリックが声を荒げていた。

彼の許に*「スピッドブレイク」* 失敗の報告が入るのは、*「サイクロプス」* が起動してすぐであった。彼の主導のもと、あくまで極秘裏に進められていた*「スピッドブレイク」*

「——それはしかし、あらかじめ「JOSEPH-A」に仕掛けられていた「サイクロプス」の発動によって失敗した。地球軍の周到な迎撃策により、ザフト軍は投入した戦力の8割——これは地球へと配備された全ザフト軍総力の6割以上に及ぶ——を消失し、作戦は失敗……大失敗に終わったのだ。

——「真のオペレーション・スピッドブレイク」の攻撃目標が、あらかじめ地球軍側に漏洩していた……!?

これと時を同じくして、ZGMF-X10A *「フリーダム」*の強奪事件が重なった。ザフトが持つ技術を総結集させて開発した最新鋭機モビルスーツを、何者かが奪取したというのだ。

強奪の手引きをしたのは、平和の歌姫、ラクス・クライン。工廠のカメラがこれを証

抛として捉え、誰もが震撼した。パトリックは、怒りに任せてデスクに掌を叩き付けた。「——漏洩していた「スピッドブレイク」の攻撃目標！ それと時を同じくして重なった「フリーダム」の奪取と、その手引きをしたクライン父娘どもの逃亡！」

これを、偶然と捉える愚か者がどこによう！ パトリックは、激するままに叫ぶ。

平和の歌姫・絶対のアイドルだったラクス・クラインが、国の最重要国家機密を何者かに売り渡した。その事実と、今回の「スピッドブレイク」の失敗とを結びつけるのは、今のパトリックにとつては容易なことであつた。

「そうだ、クラインが裏切り者なのだ！ 奴等はおろかな地球軍ナチュラ共に、我らの希望を……未来を！ そして自由を売り払つた！」

ラクス・クラインが「フリーダム」を敵国に横流しした犯罪者であるのなら、その父であるシーゲル・クラインこそが、地球軍に「スピッドブレイク」の攻撃目標を闇流ししていたのではないだろうか？ 憤るパトリックの許へ、側近であるレイ・ユウキが駆けて来る。その表情には汗が滲み、やはり彼も、今回の報告に動揺を隠しきれていなかった。

「アイリーン・カナーバ以下数名の評議員が、事態の説明を求めて議場に詰めかけて来ています」

「カナーバ……!?!」

「おそらくは、緊急集会を招集を要請するものと思われませんが……」

「クラインが裏切り者だと云ったはずだ！　なのに、この私を追窮しようというのか、ヤツらは!?」

逆境に立たされたパトリックは、理不尽な怒りを露わにする。

「ヤツらの方が——いいや、ヤツらの方こそ！　クラインに加担し、匿っているのだ……！　そうとしか考えられん！」

今回の失敗をいいことに、シーゲルは政敵である自分を蹴落とし、最高評議会議長へと返り咲こうとしているのではないのか？　そのために、カナーバ達——クライン派は、ザラを追及するために議場へ詰めかけた？　本当に有能なのは自分ではなく、シーゲル・クラインであると、世論を垂らしこむために？

パトリックはぎゅつと歯を噛みしめ、激しい剣幕のまま命じた。

「司法局を動かせ！　カナーバ以下、クラインと親交の深かった議員をすべて拘束しろ！」

それを聞いた土官達が、おびえたように、どつと室内から飛び出してゆく。指示通り、クライン派の議員をすべて拘束しに向かったのである。

部屋に残されたレイ・ユウキは、パトリックに言葉を発した。

「強奪された『フリーダム』にはNジャマーキャンセラーが搭載されています。もし

も、あの技術が地球軍に渡るようなことになれば！」

「おろかなナチュラルのことだ……あの技術を手放しで歓ぶことだろう。そうなれば、戦局は大きく変わる」

「やはり……！」

ならばなおこと、とレイは思った。

「そうなる前に『フリーダム』は、完全に破壊しなければなりません……！」

「当然だ！ もはや我々には、一刻の猶予もなくなつた」

パトリックは、自分の失敗を一方的にクライン父娘に押し付け、また過失を追窮するカナーバらの口さえ封じ込めてしまった。

それが、苦し紛れの対策であることは、彼自身も疾うに承知していた。

しかし、

（今はなんととしても、議長の席を譲るわけにはいかぬのだ……！）

誰にも、何人にも。

自分の邪魔はさせない、させるわけには行かなかつた。

（今の『プラント』に必要なのは、わたしだ——パトリック・ザラだ）

他の誰でもない、自分の思想が世界を治めると、彼は信じているからだ。

平和的な解決ばかりを理想とし、結局は何もできぬまま、二年もの年月を無為に逸し

たシーゲルとは違うことを。まず証明しなければならない。

戦争の終結に必要なのは、美麗で空虚な理想論などではない——敵を討つだけの“力”なのだ。

だからこそ、クラインに毒された保守派の人間なぞに、議長の座を脅かされるわけには行かない！

「今の『プラント』に必要なのはザラだ！ クラインではない！ 我々こそが『プラント』に平和と安寧を創建する、導き手であることを忘れるなッ！」

武断派・強硬派の人間がパトリック・ザラの側に就いている今、反対に、穏健派・保守派の人間がシーゲル・クラインを支持しているのが実状である。

しかし、保守派の議員すべてがクラインと同様の嫌疑で拘束された今、評議会に残っているのは、パトリックを支持する者達のみとなった。こうして独占体制を敷いたとしても、それは無論、世論までをも抑え込めるものではない。むしろこの措置に疑問を抱き、クラインに同情する者も増えるだろう。

いくら議会が全面的にザラを持ち上げ、信仰しても、世間にはパトリックの政治的手腕を疑問視する者は多く存在するということ。

そのような輩に、此度の『フリーダム』強奪と『スピッドブレイク』失敗の確報は、彼の庭に投げる火薬を与えたようなものだ。

「議會を一色に染め上げて、世論はこれを批判するでしょう。これでは諸刃の劍もろはですよ……」

「民衆の記憶など簡単に移ろうものさ。手酷い失態を晒した後は、輝かしい勝利で挽回する他に道はあるまい！」

奇襲戦 “スピッドブレイク” の失敗——

最新鋭機 “フリーダム” の強奪——

この失態を相殺できるだけの実績を、パトリックは今、成し遂げなければならぬ。
「パナマ基地へと侵攻する！ 地上に残された部隊をカーペンタリアへ結集させ、すぐ
にでも “最後のマストライパーボルタ・パナマ” を制圧させるのだ」

レイは、その指令の意味を悟った。

本来の “スピッドブレイク” の制圧目標であったパナマを落とせば、まだ挽回の余地はある、と——そういう目算なのだろう。

つまりこれは、アラスカの雪辱戦である。

「パナマへは、アスランを向かわせる！ “ジャステイス” という旗印がいれば、残された兵達の指揮も上がることだろう」

この発案が後に、ザフト地上部隊を総動員した、パナマ侵攻戦の引き金となった。

レイはなおも引き下ならず、もう一方の懸念を口にする。

「しかし、強奪されたZGMFフリーダム^{フリーダム}の追討および、破壊任務はどうされるおつもりですか……?」

レイの疑念はもつともである。

先に奪取されたZGMF—X10A“フリーダム”は、生産性を無視した極度のオーバースペックを理想として開発されている。

端的に云えば——『究極の性能を持ったモビルスーツ』として完成しているのだ。核動力という従来の機動兵器とは一線を画した動力炉を搭載していることから自明だが、大火力を詰め込んだ件のモビルスーツは、敵対勢力に渡った今、並大抵の部隊で撃破できるような相手ではないだろう。

「“フリーダム”に対抗できる存在は限られています。現時点では、それこそ“フリーダム”と同等のスペックを持つ“ジャスティス”くらいのモノでしょう」

レイは叫ぶが、パトリックは、みずからの息子であるアスランをその任務に就かせようとはしなかった。

その理由にも、ある程度の察しはつく。

「地上の戦力が疲弊している今、パナマを落とすのは容易なことではありません。だからこそ“ジャスティス”の投入は、地上^{パナマ}には必要な要素であることは分かります。しかし……」

——しかし、それでは問題を先送りにするだけではないだろうか？

強奪された“フリーダム”を野放しにすれば、この先、地球軍は核の火を手に入れるかもしれない。そうなってしまつては、何もかも遅いだろう。

しかし、パトリックは判断を違えてはいなかった。

「——違うな、我々にはまだ……残された『切り札』がある」

レイは、その言葉にハツとした。まさか、と思い慄然する。

パトリックはやむを得ん、とした顔を浮かべる。レイの表情を察すると、その表情の原因に応えるように言い放つ。

「そうだ——。凍結されていた、ZGMF—X08Aを投入する」

その言葉は——予定にして確定、そして決定だった。

それから、どれだけ沈黙が場に流れただろう？ レイすっかり絶句して、返すだけの言葉を喉奥から必死で探す。

「ZGMF—X08A——……？」

パトリックが主導の許で開発された、最新鋭モビルスーツ——。

“フリーダム” “ジャステイス” と並ぶ、凍結されていた忘却の機動兵器——。

——まさか…… “アレ” を実戦に投入するのか!?

ZGMF—X08A——

それは、型式番号から判るように核動力を搭載したモビルスーツである。

兄弟機である「ジャステイス」や「フリーダム」と同時期に開発される。実際には、上記の二機より早い段階で完成した「長男」のようなモビルスーツだが——完成段階において生じた諸事情によって、ロールアウトが先送りされたまま、機体は長らく凍結されることになっていた。

混み入ったそのような事情から、これまでレイはすっかりその存在を失念していたし、機体自体も、まだ命名が行われていないのである。

（たしかに——今現在、議長には名誉挽回のために余念がない。猫の手も借りたいほどに……凍結されていた最新鋭機の力すら、利用したいところだろう）

それを知っているからこそ、彼もパトリックの考えが理解できないわけではない。

しかし、

「例のモビルスーツは、適合者がいないために、これまで凍結されていたのです！——でなければ、とうに御子息が受領していたはずでしょう。お忘れですか！」

レイがそう訴えるのには、理由があつた。

量産化される「ジン」や「ディン」等のモビルスーツは——あくまで汎用機として——オールラウンドな性能を有しているため、これを操るパイロットの適性を、逐一調査する必要はない。

これは、士官学校時代の教官であったレイ・ユウキの同僚——もとい、とあるザフトの将校のひとりが放った言葉である。

「量産機程度なら、パイロットを選出するのに、いちいち上官が頭を悩ませる必要はないだろう？」

歩兵には歩兵としての活躍の場が用意されているように、量産機には量産機なりの役割がある。

それらには目立った活躍こそ必要ない。

しかしオールラウンドに戦線を維持するという、控えめで且つ、きわめて戦略的重要な役割がある。

「だが、エース機を任せるパイロットを選ぶとなると、話は違う。上官は『おれたちそれが特化モビルスーツのパイロットとして、本当に適任なのかどうか』——これを厳正に見抜いた上で、パイロットを選定しなければならぬ」

量産化に適さないオーバースペック・オーバーコストを実現した特化モビルスーツ——いわゆる「エース・モビルスーツ」は、単一のコンセプトに特化した装備や機構を有

し、能力特化が進んでいるケースが多い。

格闘戦に特化し、白兵戦を得意とする機体。

砲撃戦に特化し、制圧戦に真価を発揮する機体。

それらの運用には、特殊化した戦術展開が必要不可欠となる。量産機とは、根本的に運用方法が異なっているのだ。

「適性のないパイロットをエース機に搭乗させると、機体が本来持っているはずの性能を、十二分に発揮できない」

それは、運用上の余白となる。

たとえば、射撃能力がずば抜けて高い者に、格闘戦に特化した機体を宛がっても、要するに宝の持ち腐れである。

以上の通り、それぞれの「エース・モビルスーツ」を任されるパイロットには、一応の「適性判断」が義務づけられている。

「エース・モビルスーツを任せられるパイロットを選考するには、そいつの人格的資質、適性や潜在能力、戦い方の癖、これまでの実績といった——かなり個人を深くまで掘り下げた部分の判断が必要なんだ」

ところで、前線で活躍するザフト兵たちの能力——射撃や格闘など、あらゆる戦闘分野における才覚と技能は、すでに士官学校アカデミーにおいて、一概にリストアップされた状態に

ある。

極稀にラウ・ル・クルーゼのような、士官学校に通わず、素性もよく分からぬまま民間からの志願をきっかけに、実績だけで昇格する兵も帰属しているが、大抵のザフト兵は士官学校を通過しているため、彼らは一定の「適性」を見抜かれた状態、成績を付けられた状態で、戦場へと送り出される仕組みとなっている。

無論、ZGMF-Xシリーズ（フアー・スト）の機体は、当然ながらエース・パイロット専用のモビルスーツとして開発されている。

当然、それを操ることになるであろうエース・パイロットも、そうしてリストアップされた適性リストを基に、選考されるようになっていく。

話が上がったアスラン・ザラは、たしかに他の兵士達と比べても、比べ物にならないほど、ずば抜けて高い戦闘能力を持っていた。

データベースから「適性」（パーソナルデータ）を照合されたアスランには、これまでの乗機である「イーグス」の性能を、最も色濃く受け継いだ「ジャステイス」が授与されることが決定した。

格闘戦、および高い機動力を活かした実績を残すアスランだからこそ、砲撃戦に特化した「フリーダム」よりも、攪乱戦に向いている「ジャステイス」のパイロットの方が、適任だと判断されたのである。

そう。いつだってエースパイロットは、上の者たちに能力を観察されている。今ある現実、評議会から見込まれた結果なのだ。

アスラン・ザラは、たしかにZGMF^{ジャ}—X09Aを受領している。

それは勿論、評議会から「彼こそ『ジャステイス』の性能を十分に発揮できる」と期待された結果なのだが、それ以前に、アスランはZGMF—X08Aのパイロットとしては「適性がなかった」ことが明らかとなっていた。

優秀なアスランでさえ、みずからの操り手とすることを拒む、傲慢なモビルスーツだ。

(いや、アスランだけじゃない——)

レイはひとり、思索した。

(凍結中のZGMF—X08Aは、ザフト兵の誰ひとりとして、いまだパイロット適性のある人間が発見されなかったモビルスーツなんだ……だから、これまで封印されていた！)

表現を変えれば、乗り手を厳選^{えら}ぶ、まるで暴れ馬のようなモビルスーツだ。

「核動力モビルスーツ開発黎明期における、過剰な機体です」

レイは続けて叫んだ。

「あのモビルスーツを乗りこなせる兵士は、前線には存在しません！」

「たとえばパイロットが、適合者でなくとも良い！ 完成している機体を遊ばせておきな
ど——かくも忍びないこともあるまい！」

「パーソナルデータを基に、厳正な適性試験を行い、適合者パイロットを選出しなければ、乗り手の人間が機体性能に振り回されるだけです！ —— “アレ” は殊に、そういうモビルスーツ
なんです！」

人間が機械を操るのではない——機械が人間を操るようなモビルスーツだと、彼は云
う。

しかしパトリックは、その言葉に聞く耳を持たない。

「パイロットには私の娘ステラを使う！ これは決定事項なのだ！ アレを “プラント” に呼
び戻せ！」

レイは愕然として、話が一方的に展開されるさまに身じろぎした。

「彼女はおそらく、適任ではありません……」

「昏迷する “プラント” には今、ザラの権威が必要なのだ！ その名を受け継いだアレ
にも働いてもらわねばならん！」

パトリック・ザラの権威が失墜した今、それを回復させるには、ザラによる新たな活

躍と勝利が必要だった。

アスラン・ザラは、最新鋭機であるZFMF-X09A「ジャステイス」を受領し、戦士として活躍している。ならば——それに続いて、娘のステラ・ザラも活躍して貰わねばならない。

そうでなければ、パトリックが困るからだ。

レイは、察した。

（父親の失態のツケを、その息子と娘に背負わせるつもりなのか……）

かねてより、パトリックはみずからの家庭事情をプロパガンダとして利用することを厭わなかった。みずからの立場が危うくなった今、アスランとステラ、ふたりに活躍してもらおうことで、世論からザラの評価を回復させ、みずからも便乗しようと考えているのだ。

パトリックはその場に立ち上がり、レイに云い付けた。

「アラスカから引き上げた残存部隊は、すべてパナマ基地へ侵攻させろ！ パナマ侵攻戦には、アスランを先導させる」

戦士となったアスランと「ジャステイス」の力があれば、パナマ基地は簡単に陥落するだろう。

パトリックは、そう信じて疑わなかった。

間を入れず、パトリックはさらに続けた。

「ステラには『ブランド』に戻り次第、ZGMF-X08Aを委託。強奪された『フリーダム』の追討任務に就かせる！」

「……！」

「知らしめねばならん。今の『ブランド』には、我々が必要であるということな！」

怒号が、議長室に響き渡った。

これが——ステラとアスラン、ふたりへの正式な辞令の許となった会話であった。

地球軍の地上本部は、『JOSH-A』の自爆を期にアラスカからグリーンランド新司令部へと移されていた。

アラスカから逃げさせた無数の潜水艇が、グリーンランドの大型繫留場まで辿り着いた。基地内は忙しく、アラスカからこっち、人事の異動も相まって雑踏にごった返すような状態にあった。

軍医であるハリー・ルイ・マーカットもまた、その雑踏の中にいた。

彼はアラスカに取り残された『アークエンジェル』において、船医として乗船してい

た男性医師である。今回の奇妙な人事異動によって、アラスカから転属を命じられていた。

結局、アラスカにて異動命令が下されたのは、ナタル・バジル中尉にムウ・ラ・フラガ少佐、フレイ・アルスター二等兵に、遅れてひとり、彼ことハリーが追加された。潜水艇の振動が止むと、すぐに下船を促す指示が響いた。

ハリーはすぐに、自分の荷物をまとめ、船を降りる。

（荷物つたて、大したものは持つてないけどね……）

人の波に従って、繫留場へと足を踏み入れる。

ハリーが背負ったリュックの中身といえば、勤務用の白衣や眼鏡ケースと——これと云つて目立ったものは入っていなかった。最大積載量に限界のある潜水艇だからこそ、個人の荷物は極力軽減するようあらかじめ指示が出されていたのである。

——そう、荷物は大したものじゃない……。

ハリーはつい先日、勤務先だった「アークエンジェル」の医務室のデータを、すべて抹消していた。

あの船に配備された端末のデータを、外部に持ち出すようなことはしなかったのである。勿論、それに付随して——「拡張された者達」についてのデータも、すべて消去していた。

強化人間についてのデータは闇に葬り、ハリーは今、実に清々しい気分で新天地へと赴こうとしていたのだった。

(ステラ・ルーシエエクステンデットに関するデータは、すべて削除してある。これからは、新たに気持ちを切り替えて働くだけさ)

強化人間についてのデータが、地球軍の上層部にでも知れ渡ろうものなら、いったいどれだけの人間が犠牲になってゆくのか。

想像するだけでおぞましく、ハリーは結局、ステラのデータを破棄することを選んだ。

(そう——『人体実験』なんてものは、これからは僕の専門外だ……)

独白は、まるで自分に言い聞かせるように胸の中で紡がれた。

そのままハリーは、彼と同じように異動を命じられた人の波に吞まれるように、次々と手続きを済ませて基地の中を通ってゆく。

何事もなく、基地の審査を通過して行く——そう思った矢先、ある地点にて、武装した地球軍の士官達、二人組に声をかけられた。彼らは不躰な面持ちで云う。

「敵前逃亡艦「アークエンジェル」から異動となった、ハリー・ルイ・マーカット氏ですね？」

敵前逃亡艦？ ハリーは突如、目の前に現れた者達から、かつての母艦を侮辱したような言葉を掛けられ、眉を顰める。

男達は二人がかりで、まるで自分を包围するように立ちはだかっている。背には銃剣を抱えており、間違つても穏やかではなかつた。

しかし、武装した兵に詰問されている時点で、ハリーは弱い立場にあつた。

恐る恐る「そうですが……」と肯定の言葉を返すと、次の瞬間、武装兵達はおもむろにハリーの両腕を固め、彼から自由を奪つた。背負っていたリュックが地面に落下し、ハリーは状況を把握することもままならず、苦悶の声を挙げた。

「なつ、なにを——！」

「連行する。あなたに会いたいと仰っている人物がいるのだ」

ハリーはそのまま、両腕を固められる形で引つ立てられ、武装兵達に連れ出されて行つた。

やがて身に覚えのない手錠を掛けられ、とある無機質な一室へと連行される。

———どういふことだ……これじゃあまるで、囚人に対する扱いじゃないか……!?

一切として納得がいかず、釈然としないまま、ハリーが数分として室内に拘留されていると、やがて一室のドアが開き、ドアの向こう側から瘦躯の人物が現れた。

それはほつそりとした優男で、若い。

金髪で色白の肌をしている。軍事基地にはまるで見合わぬ、こざつぱりとした端正なシアンカラーのスーツに身を包む男だつた。

「あー、ご苦労サンです。彼がその、ハリーっていう軍スーパードクター 医さんですかネ？」

ねっとりとした口調で話す男の姿を認め、ハリーは目を丸くする。——いつたい、誰だ……？

先方は、あらかじめハリーのことを知っているようだったが、ハリーの方は、こんな男は知らない。初対面である。

だが、ハリーは次の瞬間、愕然と目を見開いた。

金髪の優男の背後——彼に続くようにして、ドアの向こうから、見慣れた少女が顔を覗かせたのである。

燃えるような赤い髪、端正できめ細やかな表情——

「フレイ・アルスター……!？」

信じられない、と云った風にハリーは目を白黒させる。

だが、やがて堪らなくなって声を挙げた。

「ど、どういふことだ、きみ……! 僕にこんなことをして、いつたい何の目的で——!？」

「……………」

桃色の制服に身を包むフレイは、そこでハリーの目と鼻の先に、束になった書類ブリックを突きつけた。

錠で塞がれたハリーの手は、その書類を取ることも叶わなかったが、ハリーの目は頭

は、確実にその書類の書面に目を通していた。

「——」
そして、絶句する。

頭が、真つ白になった。

時が止まった。

「な、んで……」

詳細なまでに記された、分子の成分表——

薬剤同士の、厳密な調合比率——

それが人体にもたらす効能を割り出した数式——

科学反応を顕す図面——

医者には分からないような、専門的難解な内容が記載された、無数の紙切れ——

だが、だからこそハリーには分かる。

その書類が、いったい何を示すものなのか。

優れた医者である、彼になら。

フレイは絶望に駆られるハリーに対して、よどみなく言葉を続けた。

「これが何のデータなのか、おわかりですよね？」

ハリーは震え、霞んだ声で、ようやく言葉を絞り出す。

「僕の端末から、データを抜き取ったのか……。きみがコンピュータに、侵入したのかっ！」

「あなたがご家族と面会している間。医務室は、とても無防備になっていましたよ」

「そんなッ、どうしてだ——！」

突きつけられたのは——強化人間に関するデータ。

ハリー・ルイ・マーカットがすべて抹消した、エクステンデットにまつわるデータだった。

彼がデータを破棄する前に、フレイは彼の端末から、そのデータを抜き取っていた。そしてそれを、彼女は地球軍へと売り渡した——。

「きみには、僕が説明したじゃないか！ そのデータは、危険なものだどー！」

「このデータには、わたしを救う力があるんです」

「救う……!?!」

ハリーは、フレイが何を云っているのかが分からなかった。

彼女には以前、強化人間についての恐ろしさをしっかりと説明しているはずだ。

——定期的な投与がなければ、禁断症状を起こしても不思議ではない……。

——それは、人の一生を狂わせる代物なんだ……。

それなのに彼女は、例のデータを外部へと持ち出した。

あのとき、説明などしなければよかったのか？

「何が救うだ……?!?」云つただろう、待つているのは救済とは真逆の結末だよ……!」
 強化人間なんてのは、人間として破滅した結果だ！ それなのに、きみはツ——?!?」
 激怒しながらハリーが云う。

そのとき、

「あーもう、ダメダメです。そーゆー御高説を聞きに来るために、僕たちはここまで足を運んだワケじゃあ、ないんですから」

くつくつと嫌な笑みを浮かべながら、傍らに据える金髪の男は、一方的に遮断した。
 ハリーは愕然として、その男の方を見る。

「お話は耳にしましたよ、ハリー・ルイ・マーカットサン？ なんでも、僕らブルークスモスですら発想の及ばなかった『画期的な強化人間』について、考案なされた天才科学者だとカ？」

「ブルー、コスモス……?」

「失礼。こちらはブルークスモスの盟主——ムルタ・アズラエル理事だ」

同伴していた地球軍将校のひとり、サザーランドが告げ、ハリーは驚く。

ブルーコスモス——各地で反コーデイネイター運動を広げ、ロビイ活動やテロ活動を平気で行う思想的結成組織——その実質的な盟主が、彼であり、ムルタ・アズラエルな

のだ。

彼は愉快そうに言葉が続けた。

「いやあ実際のところ、我々も今はブーステッドマンっていう強化人間を開発していたんですけどね？ ヤツら、利用価値も大きいんですが、欠点もまだまだあるもんで」

「——！」

「あなたが開発された『エクステンデット』——でしたっけ？ さつきデータに目を通してみたんですが、いやいや、あれは良いモノだ……」

そう——アズラエルに「エクステンデット」についてのデータを売り渡したのは、フレイだ。

アルスターの苗は、ジョージ・アルスター事務次官というブルークコスモスでの発言力のある人物の影響もあって、アズラエルの耳には入っていた。彼としても無碍むげには出来なかつたジョージ・アルスターの愛嬢——それが突然、強化人間についてのデータを手渡して来たのである。

——いったい、こんな画期的なデータ、どこで手に入れたんだ……？

データを受け取つたアズラエルは、当然の疑念に駆られたが、しかし現実には、そのデータは手許に渡つたのだ。

フレイは「みずからがその新薬の被験者になると」云つて聞かなかつたし、データの

出所を聴取したところ、フレイは「アークエンジェル」にいたハリーこそが、データのすべてを把握していると明かした。だから彼は動いた。

「空前絶後の天才ドクターに、アラスカでひよいいと死なれちゃあ、こつちも困るもんですからネ？ あなたにも異動命令を出した次第ですよ」

「アラスカ、だって……!?!」

「さて、お話は簡単です。僕らこれから、本格的にエクステンデットを開発する研究を開始しようと思つて居ましてネ？ その研究チームのリーダーとして、是非ともあなたを迎え入れたい」

ムルタ・アズラエルの興味は、ソキウスからブーステッドマンへ、そして今になって、完全にエクステンデットへ移っていた。

服従遺伝子の操作により、心理コントロールが掛けられたソキウスたち。その正体は、意図的に地球軍によって作り出された戦闘用コーデイネイターなのだが、彼らはブーステッドマンの登場によって、その存在価値を失くしていった。

代わりに現れたブーステッドマンは、体内にインプラントを埋め込み、定期的に「γーグリフエプタン」を服用することで、コーデイネイターをも凌駕するほどの力を発揮する。しかし、使用する薬品は依存性が強力過ぎて中毒症状を起こし、また、効能が切れると死に至るほどの苦しみが襲い掛かり、最悪の場合には廃人になることもある。

エクステンデットは、それらと比べれば精神的にかなり安定しており、長期間の「利用価値」が見込める。無論、様々な弱点は考慮されるが、そのいずれも、短期間で廃人へ変貌してしまうブーステッドマンのそれと比べれば、軽度のものだろうか。アズラエルが目輝かせるのは、そういった理由からだ。

「今の時代、あなたほどエクステンデットを研究した者はいない——」

もちろん、こちらにも相応の報酬と待遇をお約束しますヨと、アズラエルは付け足した。フレイ・アルスターは、みずからがエクステンデットとなることを望んだ。その手伝いを、ハリーに任せようとしているのだ。

論理が一方的に展開されるのを、ハリーは愕然として聞き入っていた。そして彼からの返答を待つこともなく、アズラエルは狡猾な笑みを浮かべる。

「ああ、嫌なら別に断つてもらっても構いませんヨ？ ただ……地球軍に帰属していながら、これほど貴重なデータを軍に秘匿したまま破棄しようとした罪は大きいと思いませんけどねエ……」

その瞬間。

要求が、脅迫に代わった。

すべてはフレイ・アルスターから、アズラエルへと伝わっていたのである。

「聞けば、ご家族はオーブにいるんだとカ？ 大変ですねえ、娘さんをこれから養って行

かなきやならない身分でしように」

「つ……」

「こちらもブーステッドマンの存在をお話しした以上、アナタをみすみす野放しにする気はない——お分かりですか？」

ねつとりと絡めるような言い方をされ、ハリーはそこで、ゆつくりと頷いた。

仕方が、なかった。

ここで要求を断れば、彼はおそらく、データを処分しようとした咎を断罪されることだろう。フレイによってそれは未遂に終わったが、エクステンデットのデータは、見方によっては世紀の新開発なのだ。実際には二年先に大成する研究であったとしても、この時代にとつては、画期的な研究であることに変わりはないのだから——。

——家族が、人質なんだ……。

罪を追われ、医者としての職を失うだけならまだしも、軍事機密であるブーステッドマンが実在することを、アズラエルはハリーに明かした。

この時点で、ハリーには逃げ道などないのだ。

アズラエルの要求を断れば、おそらく口封じのために自分は殺されることになる。

その程度の判断がつかないほど、ハリーは鈍くなかった。

アズラエルは、満悦そうに笑った。

「賢明な判断でした。それでは今日から、くれぐれもよろしくお願いしますヨ——」

そう言つて、アズラエルは部屋から出て行く。

サザーランドが最後に云い残した。

「ここにおられるフレイ・アルスター嬢がエクステンデットの第一被験者となる。あなたには、彼女の専属オペレーター医師として、これから同伴してもらふことになる」

エクステンデットの研究は、始まつた。

責任者をハリー・ルイ・マーカット。

そして、第一被験者——実験体をフレイ・アルスターとして。

サザーランドが退室すると、部屋にはハリーとフレイのふたりだけとなり、重い沈黙が流れた。

「よくも君は、データを抜き取つてくれた……」

「あなたも戦争をしてるんですよ。コーデイナーを滅ぼすために」

「その言い草。きみも、まるでブルーコスモスだ」

ハリーは、問うた。

「エクステンデットになつて、コーデイナー達と戦いたいのか……?」

「そうよ。——圧倒的な力を手に入れて、あいつらを、全員滅ぼしたいの。パパを殺した、汚らわしいアイツらを——」

フレイの脳裏に、金髪の少女の姿が浮かぶ。
しかしハリーは、よどみなく云い付けた。

「君は本当に、ステラ・ルーシエになりたかったのか？」

その言葉の意味を、フレイは理解できなかった。

「何を云っているの？ あんな女になりたい？ 私が？ ——そんなわけないじゃない」

コーデインイターはバケモノだ。

フレイにとって、それは人間などではない——人のカタチを取った、別の何かだった。
最初こそ、可憐な少女だと思ったステラも、結局はバケモノのような力を持っていて、
フレイ達を裏切った。

ナチュラルルに害を為すような存在だ。

「そんな女に、どうして私がなりたいと思うのよ？」

フレイは見下すように問いたが、ハリーからは、にべもない言葉が返って来た。

「だが、君も彼女と同じだろう？ ——エクステンデットになるのだから」

「……………」

それが核心を突いているからこそ、フレイは意表を突かれた。

続けざまにハリーは云う。

「きみは、矛盾しているよ」

フレイはいつたい、何を目指しているのだろうか？

何を願っているのだろうか？

ステラ・ルーシエを憎んでいるながら、

ステラ・ルーシエと、同じ立場に立とうとしている。同じ強化人間になろうとしている。

そんな彼女は、まるで矛盾の塊だ——。

云われたフレイは、返す言葉を失った。

『守護神生誕』

鮮やかな蒼天と、木々の生い茂る深緑の大地。どこまでも蒼と緑に挟まれた戦場に、いくつもの火球の華が咲いている。

——パナマ侵攻作戦が、勃発した。

ザフトのモビルスーツが展開し、これを迎え撃つ地球軍は、従来の戦争兵器である高射砲や対空砲を用いてるのみ。それとて、やはりモビルスーツが見せつける機動力に対抗することは能わず、守備隊は苦戦を強いられる一方だった。加えて、このときザフトが足掛かりとしている最前線には“デュエル”や“バスター”などの新鋭機も投入され、形勢は決定的にザフトの優勢へと傾きつつあった。

そんな戦場に変化が訪れたのは、パナマ基地を覆う密林——それに隠されていたゲートの内部から、一群のMS部隊が出動したときである。

ザフト所属のモノアイでもなければ、かの“G”兵器を思わせる角付きのツインアイでもない。より簡素な頭部は、それ自体がヘルメットのようなゴーグルアイ。地球軍の新型人型機動兵器、G A T—O I “ストライクダガー”である。

「地球軍が、量産式のモビルスーツを開発したのか!？」

イザーク・ジュールは新たな敵機の群れに目を張りながら、その部隊と交戦状態に入した。それらは携行武装として簡略化されたビームライフルとビームサーベルを標準装備し——新型ならば当然か——武装の水準では「ジン」の遥か上を往っていた。そんな機体が群となつて押し寄せ、ザフトは各個に逆撃を受けるようになっていった。数で勝る地球軍が、人海戦術の名の下にこの戦闘を押し切り始めたのである。

「調子に乗るな!」

勢いづいて躍りかかつて来る「ストライクダガー」を、イザークはしかし、あしらうように斬り捨てた。通信先のディアッカもまた、それらと交戦状態にあつた。

「ヘコイツら、パナマに戦力を結集させてやがったのかよ!？」

「戦線を死守しろ! このまま陣容が崩壊すれば、要の「グングニール」は投入できんぞー!」

イザークが戦友達を叱咤した、そのときである。彼の耳元でけたたましい警音が鳴り響き、慌てて機体を後退させる——と、それまで「デュエル」が立っていた地点に一陣のビームの光条が撃ち込まれた。

爆発の残光が、イザークの視界を白く覆う。その正確な一撃に、彼はそれまでとは一線を画す確かな危機感を憶えた。正体を確かめに中空を見上げると、そこには単独で浮

遊する“ストライクダガー”の機影がある――

――いや、違う……!?

中空を滞空している“そいつ”は、背部に独自のフライトユニット“ノービリス・トロス”を装備した特機だった。

GAT-01E “ネメシスダガー”だ。

これは量産式の“ストライクダガー”の上位機に相当し、全体的なスペックが底上げされたもの。地球軍の中でもとりわけ高い身体能力を持つソキウスシリーズや『煌めく凶星“J”』の異名で知られるジャン・キャリーをはじめとする、一部のエースパイロット達に与えられた専用機だ。

量産式“ストライクダガー”の包囲網――

主力隊として先陣を切る“ネメシスダガー”の活躍――

これらの要素によって、ザフトはそれまでと打って変わって苦境に陥り始めた。トドメのようにイザークは、そのとき山岳の向こう側に禍々しい“巨人”のシルエットを目撃した。その表情からさあと血の気が引いてゆく――

戦意が折られかけたザフトの虫の息、その息の根を止めんとして現れたのは、マスドライバー“ホルタ・パナマ”が敷設された瓦山こぶさんの向こう側からゴウとして現れた巨悪の機体。

G F A S — Y F O 1 “エクソリア”——それ自体がひとつの要塞のような超大型モビルスーツが、戦線へ投入されたのだ。

ゴウン！ 轟然と響く足音を立て、巨大モビルスーツは兀山からすべてを見下ろすように、その大きな一步を踏みしめた。口から吐息のように野太いビーム砲を放射させ、空中に展開するモビルスーツ群を次々と撃墜してゆく。ザフト兵はいっせいに引き撃った。

「なんだ、あのバケモノは！」

「“グングニール”どころの騒ぎじゃねえぞ!？」

「燃えるぞ！ 逃げろッ！」

ザフト軍機種の放つことごとくの機銃弾は、すべて陽電子リフレクターとVPS装甲に無効化される。

そして、目立ち過ぎる“エクソリア”に気を取られた者から、直掩機である“ネメシスダガー”に狙撃されていた。

「地球軍は、成長しているのさ——」

パナマ基地の戦闘を取り仕切る、地球軍将校の男が誇らしげに鼻を鳴らした。

ビクトリアに配備された“デストロイ”および、アラスカで試験投入された“エクソリア”から露見した共通の弱点とは、つまり「懐に潜り込まれると無力」だということ。

大型にして鈍重であるがゆえに、小回りが利くモビルスーツに接近を許すと対処法を失うこと。

その解決策として、彼らは直掩機“ネメシスダガー”を“エクソリア”周辺に配備し、これに不用意に近づかんとする敵モビルスーツを牽制させていた。このほか“エクソリア”自体の「強すぎる火力が友軍を巻き込みがち」という運用上の過失も見受けられたが、これは展開するモビルスーツの配置を工夫、事故防止を図っている。このとき“エクソリア”は上空に展開する敵機に対して砲門を開き、この凄絶な射撃を恐れた敵部隊だけを低空に引きずり下ろしていたのだ。そうして地上に落ちてきた蚊蜻蛉達、これを地上で待ち構えていた量産機部隊ストライクダガーに強襲させる――

今回の戦闘、地球軍は拠点防衛戦を繰り広げることから、あらかじめ地の利を活かした戦術を組み立てていたのだ。ザフトから見れば、見事な役割分担と云えるだろう。

「ちィッ！」

交戦中の『煌めく凶星“J”』による追撃をなんとか振り切ったイザークは、急ぎ“エクソリア”を鎮圧しようと転進する。

——ヤツを放置しては、被害の拡大は免れない！

当作戦の要である“グングニール”は、安全地帯を確保しなければ降下させることは不可能だ。しかし今、安全地帯がどこにあるという？ この一帯は全域が危険地帯であ

り、少なくとも、山頂に仁王立ちした件の“巨人”を排除しない限り、彼らの作戦は実行に移すことすらがままならない!

イザークはしかし、目標の“エクソリア”まで辿り着くことは叶わなかった。ビームサーベルを抜き放ち、敵機へと詰め寄るも前に、他の“ネメシスダガー”が徹底的に足止めを行ってくるのだから。

「くっそおおー!」

いよいよ手詰まりを感じ始めていたイザークだが、その瞬間、目の前に立ちはだかった“ネメシスダガー”が、いきなり爆発した。

何事だ!? 目を張ると、続けざま、上空に展開する他の“ネメシスダガー”も次々と撃破されてゆく。地上に展開する“ストライクダガー”も同様に撃破され、彼は何が起きているのかを把握することも出来ない。

そのときだった、戦場に、深紅の閃光が駆け抜けたのは。

それ自体がフライトユニットとしての働きも持つリフターを背負い、全身に強力な武装を満載したそれは、絶対正義の名を冠す、鮮血色の裁判官――

「――アスラン!?!」

イザークは、参入する“ジャステイス”の機影を認めた。

彼の目の前で、アスランは肩部“バツセルブルーメラン”を投げ放ち、地表の“ストラ

イクダガー”を連続で切り裂いた。その傍ら、猛禽のように高空よりビームライフルを放てば、その光条はピンポイントに“ネメシスダガー”のкокピッドを撃ち抜いている。通信越しにアスランの声飛び込んでくる。

「イザーク！ あの巨体はオレが討つ！」

「可能か!？」

「キミたちは“グングニール”降下予定点の確保を！ 任せるぞー！」

云い捨てた“ジャステイス”は、在来機ではまるで考えられないような機動性をもつて山岳方向へ飛び去ってゆく。須臾にして中空を駆け抜けるその様は、まるで一陣の矢のようであった。

迷いもなく、躊躇もなく――

このときアスランが放ったビームライフルは、突き立てたビームサーベルは、地球軍機の武装やメインカメラには目もくれず、正確にコックピットだけを射貫いていた。乗り手を失ったモビルスーツなどは、所詮は糸の切れた傀儡のようだ。

物言わぬ鉄塊は地に臥せ、そして墜ちてゆく。

――あいつはもう、手の付けようがない……！

本当に一機、たったの一機でありながら、アスランはその目的意識と噛み合い過ぎた強力な“力”で、戦況を切り拓きつつある。

イザークは、戦慄した。

あれほどの男が味方であることが、どれほどに心強いのか。そして、あれを“敵”として迎え撃たなければならない者らが、どれほどに不憫であるのか——

「アスラン……！」

それは特別な感覚などではなく、生物的本能ゆえの恐怖だった。

コーディネイターが組織するザフトは“天才の集団”でもあるが、さりとてアスラン・ザラは別格だ。イザークにとつて、彼は今まで自分にとつて好敵手だと思えていたが、いつの間、ここまで差が開いてしまったのか？ 既に彼の“力”は自分のいる次元とはレベルを違え、彼は自分が到底到達しえない遥か『高み』に辿り着いていたのだ、彼の中にあつた、大切な何かを犠牲にして——。

——今までのアイツは、ああも恐ろしい戦い方はしなかった……！

だが、やはり縦横無尽に上空を駆け抜ける“ジャステイス”は、無慈悲にも“ダガー”隊を次々に撃滅していった。

「この程度が直掩になると思つたのか……？」

直掩をことごとく撃滅し、目標の巨大機動兵器の周辺が開けた。アスランは抜き打ちにスロツトルに手を掛け、一気に山頂に君臨する“エクソリア”へ突撃を仕掛けた。その際、反撃として放たれた“光の糸”たるビーム砲を真っ向からシールドで受け返す。

受け返しながらも彼は退かずに距離を詰め、ビームハルバードを振るって陽電子リフレクターに奥まで突っ込んでみせた。灼熱の両剣が一太刀の下に「エクソリア」の左腕を斬り落とす。そのまま敵機の背後まで駆け抜け、機体を翻すと同時に「バツセルブローメラン」を投擲、チャクラムのように高速回転する刃は、敵機に残された右腕までも削ぎ落とした。

ドスン！ 両腕を落下させた「エクソリア」は、目に見えてエネルギーを失っている。重量ゆえに振り返ることもできない敵機の愚鈍さを見つめながら、アスランは会心の笑みを浮かべた。

「一方的に虐げられる、悔しさと痛みを思い知るんだ！」

父。パトリックの世代——まだ「ブランド」というコーディネイター達の『自治領』が確立していない頃、彼らはコーディネイターであることが露見すると、忽ち怪物のように弾圧され、差別的な迫害を受けたという。彼らは機会主義者達の手によって、非合法に誕生させられた第一世代コーディネイターであつたからだ。

だからこそ、パトリックはシーゲル・クラインをはじめとする同胞達と結託し、共にコーディネイターの諸権利獲得を目的とした黄道同盟——これが後の「Z, A, F, T」となる——を結成した。浅ましいナチュラル達は、決してコーディネイターの存在を認めめることはない——

これでは、世界が平和になることは決してあり得ない。敵を——ナチュラルを滅ぼさなければ、コーディネイターに決して安寧の時代は訪れない！ アスランは、そう信じているから戦い抜く！

「トウ！ ヘアアツ！」

渾身の叫びと共に、アスランは“エクソリア”を斬り刻んだ。

頭部を——左足を——右膝を——次々に裂傷させ、最後にコクピッドをビームハルバードで貫いた。黒き禍々しい巨大モビルスーツは、そうして原型すら留めない燃え盛る鉄塊と化した。圧巻の大爆発、閃光が戦場を駆け抜け、地球軍は壊滅的な痛手を負い、圧倒的不利に立たされた。

間を置かずして、大気圏上より複数のカプセルがパナマへと降り立った。話に上がったいた“グングニール”である。

降下予定地点に待機していたモビルスーツが装置を点火し、カウンターがゼロを刻んだその瞬間、電磁パルスがパナマの広域に迸った。全ての地球軍機はその衝撃波に機体制御を失い、人形のように倒れ伏していく。

パナマ攻略戦は、ザフト軍の勝利に終わった。

シャトルを降りたステラは、眩い光を遮るように手を翳した。それまでシャトル等の搭乗機に長らく閉じ込められていた彼女に、外の空気は新鮮に思えた。

彼女は再び、「プラント」のアプリリウス市へと戻ってきた。

現在、ステラはひとりではない。入港した「プラント」で彼女の案内を仰せつかったという警護人が随伴していたのだが、物腰から見ると軍人であり、監視役を兼任しているのだろう。

案内されたのは、国防委員会議場だ。「プラント」の政治家達——ステラの知る中ではシーゲル・クラインやパトリック・ザラ——が滞在し、国家の未来のために、議論を交わす厳粛な場。そこから隣り合うようにモビルスーツの工場局が構えられ、議場から直接そちらに移動することも可能になっている。

この場所がそのような構造になっているのだと、このときステラに分かるのは、ここが以前、彼女が「デイフェンド」を受領した場所だったからだ。

——「デイフェンド」……。

ステラは俯きがちに、別れを告げた愛機の名をこぼす。

——あの機体は、まもるための「力」だったのに。

大切なひとが、親切に教えてくれた言葉。

まもる、とは、あたたかいこと。

——「死なない」ということ。

だからステラは「デیفエンド」というモバイルスーツと、その今の在り方を好ましく思っていた。命名者の「堅牢な守り手であれ」という願いに準えた、今の自分に相応しい機体と思えることが、誇らしかったから。

——しかしその「誇り」は、やはり、アイツによつて踏み躪られた。

蒼い翼を広げる、死の天使「フリーダム」——

ヤツは、ステラの誇りを踏み躪った。彼女の中の「まもりたい」その願いを、機体を、跡形もなくぶち壊した。

ステラの力が及ばず、結果としてヤツに敵わなかったことは、たしかにステラの落度ではある。しかしその結果として、彼女は愛機を失った——まもるための力を奪われたのだ。

だからやつぱり許せない——「フリーダム」が。

考えを巡らせていると、そのときステラの輝く金髪を目に留めた男性がいた。その人物はロビー中央に構えられた階段を下りてきて、随伴員と会釈したあと、後退するようステラへ声をかけた。

全く面識のない男性に声をかけられ、ステラは当然に戸惑った。

「初めまして、になるな。ザラ議長の娘さんだね、話は聞いているよ」

「……？」

「私は、ユーリ・アマルファイだ」

——アマルファイ？

その名に気を留め、ステラは目を開いた。それは、戦場で生き別れたニコルと同じ
ファミリーネームだったから。いや、そうではない……

「ニコルの……」

「ああ、ニコルの父親だよ。君には、あの子がよく世話になったと——そう聞いている」
ステラはそこで改めて、ユーリ・アマルファイという人物の目を観察した。それはニコ
ルと同じように、優しそうな緑色をしていた。

目を伏せた彼女に、ユーリは苦笑する。

「顔をあげてくれ。どうしたんだい？」

「ステラがお世話したんじゃない……ステラの方が、ニコルにお世話になった——」

話に拳がつているニコルは、既に本国において『M I A』と断定されている。明確な
死が確認されたわけではないにしろ、戦場で未帰還者となった兵士は「戦死」として扱
われる決まりなのだ。

心残りではあった。決して失念していたわけでもなかった。だが、実の父親に会った途端、自分のせいで彼は死んでしまったのではないか——ステラには、そう思えて仕方がなかった。

「いいんだ。きみは、悪くない……」

「ニコルは、ステラにやさしくしてくれた……！　なのにステラは……」

「——その気持ちだけでも、私は嬉しいさ」

そうだ、私はこんなことを云いたかったわけじゃない——。

ユーリは口の中でそう呟き、持ち直すようにして話を切り替えた。

「パトリックから招集の指令があったのだろうか？　キミが来たら迎えに出ると、君の父

上には云われていたんだ——あいつは今、この議場から席を外しているよ」

詳しい話はパトリックが戻って来たら、聞くといい。

そう云われ、ステラはこくりと頷く。

ユーリは、続けて声を発した。

「立ち話もなんだ。ついて来たまえ」

そう云って、ロビーを後にした。

ステラは純粹に、その後に続いた。

ユーリ・アマルフィは、最高評議会議員のうち、モビルスーツの設計局や工場が集中するマイウス市の代表である。

工学エンジニアでもある彼は、Nジャマーキャンセラーの完成に大きく貢献した技術者の一人であり、事実上“フリーダム”および“ジャスティス”を開発した直接の開発主査でもある。

その立場や功績上、パトリックとは友好関係にあり、彼もまたザラ派を支持している者のひとりだ。以前まではそうではなかったらしいが——息子の失踪を切欠として、戦争の早期終結のためなら武力行使も已むを得ないと判断した急進派の一人であったのだ。

そんな彼らの努力の結果として造り出されたのが、最新鋭の「ZGMF-X」シリーズ——通称「ファーストステージシリーズ」——である。このときステラはユーリに先導され、明らかな軍事工廠へと足を踏み入れていた。てつきり彼女は、書齋にでも招かれるものと思っていたが……？ 従うように後続しているステラへ、ユーリは淡々と云った。

「早速だが、キミに見てもらいたいものがある」

見てもらいたいもの——？

怪訝がるステラを後目に、二人は工場区に構えられた重厚な扉の前までやって来た。警備をしていた当直の兵士が慥然として「許可証は？」と告げ、ユーリもまた慥然として対応、一枚のカードキーを差し出してみせた。

これを受領した警備は、確認したのち憚るようにゲートを開けた。

「——？」

ステラは、そのとき真横を通り過ぎた警備員達の目が、やたらと「物騒」だと感じた。ここまで案内してくれた案内員とは比にならないレベルで尖った目をこちらに向け、猜疑心に塗れたような、悪意の視線を向けてきていたのだ。

舐められるような、慥慥な視線ではない。突き刺さるような、尖鋭な視線。まるでステラが内通者であるかと思つたのだ。最初から疑つていような——それによつてステラが不快感と拒否感を憶えたのは、ある意味で自然な反応だった。

最初はステラだけかと思つたのだ。しかし、そうではないらしい。警備の尖つた目は、随伴するユーリ——評議員である彼にさえ向けられており、職業意識が高いのだな、という認識で済ませるにはあまりに無礼、あまりに感情的すぎる目をしていた。

「視線が気になるかい」

頬を膨らませたステラの当然の憤懣を察したらしい。頷くステラに、ユーリは冷静に

——というよりどこか諦念したように——事情を明かしてくれた。

「数日前、彼らはここで軍の最重要機密を奪取されている。それで、多くの警備のクビが飛んでね——今は特に神経質なんだ、勘弁してやってくれ」

——クビが飛んだ？

あくまで比喩であり、本当にそうだったわけではないと信じたステラであったが、これについてはユーリは詳しく言及しようとしなかった。

「最重要機密って」

訊ねたステラだが、この話題に特別な興味があったわけではない。

あくまで場を持たせる繋ぎのような質問であり、しかし、返ってきた答えは彼女にとって想像を絶するものだった。

「『フリーダム』だよ——」

「……えっ!？」

「キミもアラスカの生き残りなら、もう知っている——あるいは出会っているのではないのかな? アレはここから持ち出されたモビルスーツであり、私が開発主査を務めた、元はザフトの機体だったんだよ」

ステラにとって、その情報は初耳だ。彼女が知っている『蒼翼の死天使』などは、所属も目的も不明瞭な——根無し草の無法者だ。

——それが、まさか、ザフトが開発した機種だったなんて。

ようやく理解した彼女の面輪に、驚きが奔る。誇れるような話でもないが、彼女もまたザフトの新型を奪取した過去があったから、微妙であるが、ある種の親近感が湧いたのも事実だった。

(ステラを殺しに来たわけじゃ——なかったんだ)

何というわけでもない。この時代においてZGMF^{フリー}—X09^{ダム}Aとは、当然のように完成していた一介のモビルスーツに過ぎない。

それまでステラは、件のMSが時空を超え、未来から現れた“抹殺者”だとばかり認識していたのだが、どうやらそれは違っていたらしい。

——アイツがまた、ステラを殺すためだけにやって来たんだと、思ってた。

おそらくそれは、なかなか奇天烈で、余人には理解できないような発想であろう。しかし、ステラにとっては少なからず真理であったのだ。

仮に誰かに打ち明けたとしても、おそらく、誰ひとりとして本質的には理解してくれないだろう御伽話だ——「未来から来た」なんて馬鹿げた話は。

だからステラは、誰にも云わない。誰にもしやべらない——そして、上手く伝える自信もない。キラにも、アスランにも、ラクスにも、誰にも打ち明けなくても別にいい。彼女の中で合点がいけば、それで構わないのだった。

「数日前、何者かに奪取されるまでは『プラント』を守る戦士になるはずだったんだ——」
候補パイロットには、イザークの名も持ち上がっていたらしく、それを聞き取ったステラは、ぽけつとした。

——イザークが、あの『フリーダム』のパイロットだったかもしれない？

では、もしもイザークがあの機体に乗っていたなら、自分は彼を撃つだろうか？ 嫌うだろうか？ ——『フリーダム』に乗っているから、という理由だけで？

いや、そんなことはない。誰よりも照れ屋なイザークだが、今となっては、たしかにステラを心配してくれる大切な仲間だ、そんな彼を「『フリーダム』に乗っているから」という理由で撃ってしまうほどに、自分は愚かではないはずだ。

——でも、それなら『フリーダム』を奪ったパイロットは、いったい何を考えてるの？

ヤツは以前、無為に暴走するステラの『デストロイ』を破壊した。

そして現在、無為に殺戮を繰り返す『エクソリア』を誅裁した。

そういう意味で考えれば——『フリーダム』は今も未来も、無駄な殺戮を止めようと狂奔している。

少なくともザフトの味方をするつもりもないのだろうが、結果的には、『プラント』

のためになることをしようとしている？

(よく、わかんない)

いったい、あいつは何者なのだ。

いったい、何を考えているのだ。

ステラは、迷った。

(みんな、なにを信じて、たたかう——)

地球
連合か——

プラント
ザフトか——

世界は今、二色で彩られているものではないのか？

どちらかの色が、もう一方の色に完全に塗り潰されたとき、戦争は終わるのだろうか——
—すくなくとも、アスランはそう信じて戦っている気がする。

それとも、二色の他に——もっと「別の色」が存在するのだろうか？

彼らはきつと「その色」を知っていて、ステラがまだ、知らない世界を見出そうとしているのかもしれない。数年先の惨状を知るステラでさえ知らない未来を探ろうとしているのかもしれない？

分からないことが、多すぎる。

もっと、知りたい——

もつと、たくさんのことを知って行きたい——
せつかく最適化を離れ、募らせるだけの記憶を持ち、人生を歩いて行けるのだから。
そのときステラは、これまで天敵と思っていた「フリーダム」について、単純な敵愾心だけではない——ある種の関心と興味を憶えたという。

アラスカを離れた「アークエンジェル」は、傷ついた羽根を休めるために、オーブへと向かっていた。

まるで、とんぼ返りだ。

数日前、オーブで抱いた決意——「なんとかしてもアラスカに辿り着かなくてはならない」——これは跡形もなく、当のアラスカにて踏みにじられた。

あのときの決意を思い出すこと自体が、今のマリユード達には難儀なことのようにだ。

——なぜ、自分達は戦っていたのだろうか？

——何を信じ、何のための身をやつし戦って来たのだろうか？

今の彼女たちには、それすらも分からなくなっていた。

生還したキラ・ヤマトは、そんな彼らに、オーブへ帰化することを勧めた。すぐさまアラスカを離れるよう指示したのは、下手をすれば「ジャスタススティスン」が自分を追いかけて来るかもしれない」という不安が脳裏に過ぎったこともあつたが、沈鬱な痛手を負った彼女達に、安息の場所が必要だと思つたからだ。

どのみち、敵前逃亡艦である「アークエンジェル」は、地球軍に戻ることは出来ない。原隊に復帰することなど、到底無理な相談で——道を外した無法者となつた今、彼らが身を寄せられるのは、オーブでしかなかつた。

「異端者つていうのかね。——今のおれ達みたいなのは、法を無視した連中つてのはさ」
 オーブは「アークエンジェル」の入国を柔らかに受け入れてくれ、入港の際、ブリッジにてムウがそんなことを云つた。

「皮肉なもんだよ。異端じゃない正規の道を辿つた連中は、今頃はサンズノカワの向こう側だぜ？」

「サンズノカワ？」

マリューは言葉の意味がわからず、ぼうつとして訊ね返す。

ムウはいつも通り、軽薄そうに答えた。だが、その表情にはやはり気落ちが見える——彼もまた、アラスカでの出来事には相応のショックを受けたらしい。

『死んだ奴等だけが渡る川』——オーブには、そういう言葉もあるんだそうだ」

「そう、ですか」

マリューはそれを聞いて、妙に納得してしまふ。

そう——自分達は異端者だ。独断で戦線を離れ、敵に背を向けた違反艦——。

しかし正義を貫き、最後まで指令を信じて戦い続けた者達は、揃って「サイクロプスの餌食になったのだ。そう考えると、自分達は本当に間違いを行ったのかすら分からなくなる。

本当は何が正しかったのか、既にマリューの中で、善悪は崩壊していた。

本当に、何のために戦い続けて来たのだろうか——？

「ま、その説だけを通すなら、このオーブも、完全に異端者の集まりってことになるが」
「平和を訴えた中立国が、異端？ それだけを聞けば、救いようのない世界になってしま
いますわ……」

「戦争をしたいヤツなんていないだろうに。どうして、こんな世界になっちゃうんだら
うねえ」

オーブは、ナチユラルとコーデイネイターの共存を認めた、数少ない国家のうちのひ
とつだ。

ある意味では、理想的な社会の完成系と云え——世界すべてがオーブのように平和に
なれば、二度と戦争など起きないだろう。

「どうしまししょう……。軍を離れた私達は……。これから？」

疲れ切った声で、マリユールが漏らすと、

「なるようになるさ。たとえ軍旗を下ろしても、軍規を無視したっていい——」

励ますように、ムウが云った。

「だが、秩序まで無くしちゃあ、人間てのは終わりだぜ？」

そうならないように、これからを生きて行けばいいさ。

付け足されたその一言に、マリユールはひどく救われた気分になった。

やがて「アークエンジェル」はオノゴロの秘密ハッチへと艦を進め、以前と同じように繫留場にその羽根を下ろした。

ドッグに繫留されると同時に、そわそわした様子のカガリ・ユラ・アスハはタラップへと駆け上った。そのままハッチが開くのも待ち切れない様子で艦内へと飛び込み、くるくると艦内を捜し回るように走る。

そして彼女は、探し物を見つけた。

「——キラッ！」

カガリは、見かけた少年に、いきなり飛びついた。

キラはその反動を受け止め切れず、思い切りその場に尻もちをつくように倒れてしまった。カガリはキラへのダメージなど気に留めた様子もなく、ひらすらに泣き喚いた。

「この、バカあ……っ！」

「カガリ……」

「死んだと思ってたんだぞ！　ほんとに……ほんとに生きてるんだなっ!」

それは、見れば確認できることだったが、カガリはいまだに現実には驚いていた。

たしかに、カガリほどキラの生存を信じ続けた者は他にはいないだろう。しかし、いざそれが目の前の現実となると、一番慌てふためいたのはカガリと云う矛盾だった。

「戻って、来たんだ……」

ふたりは再会を喜び、その後、会話を交わしながら廊下を歩いた。カガリの方は特に胸がいっぱいで、とにかく思いつくことからすべてを語り明かそうとしていた。だが、そのとき不意に、ひとりの少年の顔が脳裏にちらついた。

それは、新装備を搭載した“ストライク”が爆散した、太平洋上の孤島でのことだ。

カガリは人命救助のために、率先して孤島を訪れ、そのとき、行方不明になっていキラの安否を必死になって探った。そして彼女は、キラの代わりに浜辺に打ち上げられた

黒髪の端正な少年——名を、アスランと云つたろうか？ 親しくなれる気がしなかったため苗字までは聞いてない——を発見した。

彼は、キラは友達だと云っていた。ならばキラも、彼のことは友達として認識しているのだろう。——でもあいつは、ちよつとヘンなヤツだった……。

殺したから殺されて。

殺されたから殺して。

それで最後は平和になるのかとなじつたとき、彼はきつぱり、なる、と答えた。

それは、今のカガリや、そしてキラには、決して思いつかない発想の結論だ。

カガリから見て、アスランは見ていて危なっかしい少年でもあり、言動も色々と危なっかしい少年だった。

そんな彼のことを、キラはどう思っているのだろうか？ 話を持ち出していいのだろうか？

「……？ カガリ？」

それまで熱たつぷりに語り掛けていたカガリから、唐突に言葉が途切れ、キラはさすがに不振がって彼女の表情を窺った。

カガリは慌てて、云い直す。

「あつ、ああ、何でもないんだ」

カガリは、アスランのことを云わなかった。

彼はキラにとつて、殺し合った相手なのだ。話を持ち出して、雰囲気沈鬱にするのは好ましくないと判断した。

「それよりおまえ…… プラント」に行つてたのかよ」

やがてふたりは「アークエンジェル」の格納庫へと辿り着き、新型の「フリーダム」を見上げていた。

「……あれは？」

「ザフトが開発した最新鋭機。——「フリーダム」っていうんだ」

カガリは見上げながら、思い出したようにキラに云つた。

「……悪かつたな。オーブが用意した新装備、大した役にも立たなかつたんだろ？」

そのとき、キラの肩がびくりと動いた。

彼は慌てて言い返す。

「えっ、いや、そんなことないけど」

「嘘が下手なんだよ、おまえはっ」

「……………」

「実際、どうだったんだよ？」

「実際、あれのおかげで死にかけた」

「だろ。すまん、わるかった」

キラはそこで、思わず嘖き出してしまった。

カガリのまるで謝っているようには見えない態度も笑いを誘ったが、実際、キラの云い方も悪かったのだ。

感情に込み上げる笑いを抑えたあと、彼は独白するように呟いた。

「でも——フォートレス・ストライカーがあそこで爆散してくれなかつたら、僕はきつと、あのとき背中から貫かれていた」

それほどまでに親友は、本気になって自分を殺しにかかって来ていた。

キラが新装備のために死にかけた、というのは事実だったが、見方を変えれば、一方で新装備に助けられた、という解釈も出来るのだ。

カガリはポジティブなのか、そうでないのかもよく分からない理解の仕方に首をもたげたが、すぐに居直り、キラに問うた。

「おまえは、^{フリーダム}“アレ”を、これからどうしていくつもりなんだよ？」

話の中で、キラが託された“フリーダム”が、禁忌の技術たる核動力で動いていることを、カガリは知らされた。

そんなモビルスーツを、これからどうしようというのか？　ザフトから強奪している時点で、ザフトはキラにとっての「敵」となった。

あるいは、核の技術を地球軍に売り渡すのだろうか？

「僕はもう、地球軍でもザフトでもないよ——」

「オーブと共に来るのか？」

「分からない。でも……核の力を、戦争のために使おうなんて思わない——それは、あの機体を託された、僕の責任だ」

キラはそのとき穏やかな目の奥底に、底冷えするような強い光を宿していた。

カガリは一瞬その光に気圧されるが、すぐに気を持ち直し、改めて少年に訊ねた。

「もし『アレ』を——破壊しようとするヤツが現れたら？」

天使のような姿を取った『フリーダム』は、その象形どおり、時代を導いて行かねばならない存在なのだ。

決して、まだ失つてはいけない光——それが今、彼の前にある『フリーダム』なのだ。

キラは迷わず、こう答えた。

「そのひとを——僕は撃つ」

嚴重な、扉が開いた。アプリリウス市の工廠、解錠された隔壁の向こう側には、広大な空間が広がっていた。

そこは無機質な格納庫だった。その奥まで歩を進めたとき、ステラは見上げた先に巨大な影を見つけ、ハツとした。

そこには、見慣れない新型機らしいモビルスーツが一機、さながら正当な操り手を待つているかのように立ち構えていたのだ。

すごい——！ 思わず息を漏らしたステラだが、次の瞬間には我に帰っていた。

見慣れない新型モビルスーツ——と表現したが、ステラにとっては違った。その新型機には、確かな既視感と、確かな見覚えがあったのだから。

「『ガイア』——!?!」

思わず呟かれたその呼び名を、傍らにいるユーリが聞き咎める。

しかし、改めて見直したとき、そのモビルスーツは『ガイア』と風采が「似ている」というだけで、決してその機体ではなかった。

——ああ。

いま目の前にある『新型』も、かつてステラが搭乗していた『ガイア』も、元を辿れば同じザフトの機種であり、操作系よろしく、機体デザインが似ていても不思議な話ではない。つまりは何が云いたいのか——ステラにとって『ガイア』と『新型』が似て

見えたのはただの偶然であり、それ以上に深い意味はないらしい。合点するステラに、ユーリが戸惑いの目を向ける。

「なんだね？ その……『ガイア』というのは？ この機体には、まだ名前はついていないはずなのだが」

「ごめんなさい。なんでもない」

話を区切り、ステラは改めて『新型』の全容を見上げた。

機体の装甲部は、やはり電位相転移が用いられているのだろうか？ デイアクティブモードを思わせるメタリックグレーに彩られた全身、その背面には『ガイア』には見られなかった推力を生み出す複合可変翼が装備され、『デイン』や『フリーダム』のものと酷似した湾曲半月状のウイングが畳まれていた。頭部には異教の神獣を模したような四本角が伸び、両腰部の側面ラッチには、驚くべきことにビームライフルとビームサーベルがそれぞれに一挺ずつマウントされていた。

——このモビルスーツには、力がある。

一目見ただけなのに、ステラにはそれが実に分かった。

制圧力の『フリーダム』や迫撃力の『ジャスティス』とも異なる——その新型機にはまた違った系統の強さがある。ビームライフルとビームサーベルに留まらず、その機体はなんとシールドさえも一基ずつ両前腕部に装備していたのだ。コズミック・イラの

MS開発史において、防御用の対ビームコーティングシールドを複数装備しているのは前例のない試みであろう。

(また、まもれる機体——っ?)

そう確信したとき、ステラはぱつとして笑顔になっていた。おそらくこの新型は、地球軍から奪取した“G”兵器のあらゆるデータを統合し、そこにザフトの新技術をついでバックさせて開発が為されたものなのだろう。中でも、この機体は殊に“ディフェンド”の特性を色濃く受け継いでいるようにも見える。

—— いったい、どんな機動兵器なんだろう!?

ステラは目を輝かせ、そんな少女の輝く目を見て取って、傍らのユーリは複雑すぎる表情を浮かべたという。

(父親からプレゼントを貰った娘、そのものだな……)

形容するユーリとて、一児の父親だ。彼の場合はピアノであったが、我が子に贈り物を賜ったそのときの、輝かしい子ども笑顔が重なって映ってしまう。

だが、目の前の少女が贈られたものは何だ? パトリックという男が娘に与えたものは? そんな可愛いものではなく、戦場に舞い戻るためのモビルスーツ——

—— 旋律を奏でるのではなく、戦慄を誘うもの。

—— 人を癒やすものではなく、人を傷つけるもの。

ニコルとそう年の変わらないであろう少女が、そんなものを父に賜れて喜ぶ姿など、このときのユーリにとつては毒でしかなかったのかも知れない。

「……。この新型は、今まで諸事情あつて工ごう廠じやうに凍結こくけつされていた機体でね。これをキミに授けること…… “コイツ” の開発責任者として、とてつもなく不安に思う」

形式番号はZGMF-X08A——

既にロールアウトされた “フリーダム” や “ジャスティス” より先に開発された機種でありながら、その機体にはまだ命名式さえ行われていない。そればかりか、充分なテスト運用も終えていないという——

「この機体にはNジャマーキャンセラーが搭載されている。火力・機動力・防御力——あらゆるスペックにおいて、キミがこれまで乗っていた “デیفエンド” を凌駕する次世代機と云えるだろう。また、アラスカでキミ達が敗れたという “フリーダム” ——あの機体と同等……いや、環境や条件次第ではそれ以上の力を発揮すること、開発者としての私が保証する」

「Nジャマー、キャンセラー？」

「そうだ——核の力を、封印から解き放つための技術だ」

そのとき二人の横合いからから、厳めしい声が聴こえた。その声は段々と近づいて来て、硬質な足音と共に照明下までやって来る。

ふたりは、そちらへと目を遣った。声と共に現れたのは、パトリック・ザラだった。無機質なキヤットウオークの上、ライトに照らされる地点までパトリックは進み、一心にみずからの娘を見据えた。

「核が生み出す莫大なエネルギーが、戦争に勝つために必要となったのだ」

父は、娘の目を真っ直ぐに見据えた。ステラは威圧にも似た鋭い視線に、わずかに後ずさる。怯えたように、言葉を返す。

「核は、ステラからお母さんを奪った——」

「そうだ。そのNジャマーキャンセラーの技術を “フリーダム” は敵国に持ち去った。——ここまで云えば、お前の役目は分かるな？」

云われ、ステラはハツと顔を上げる。

——核の力が、もういちど、地球軍に……？

その瞬間、ステラの記憶を、過去の恐怖が支配する。

—— “ユニウスセブン” への核攻撃みたいなことが、また繰り返されるかも知れない……!?

ステラは、その閃光を間近に見た当事者であり、被害者でもある。

——人はより強い力を求める。

現実に地球軍は、核を封じられてなお “サイクロプス” “エクソリア” “デストロイ

“といった、より多くの敵を殺せる兵器を生み出した。だが、そんな彼らの手に再び核の力が戻れば、彼らは喜び勇んでその“力”——その火を使おうとするだろう。

そんなことは、絶対に許してはならない。少なくとも、このときのステラはそう感じた。

「お前は何者かによつて奪取された“フリーダム”を破壊しろ！——徹底的にな！
この機体は、そのためにお前に託すのだ」

接触したと思われる人物および施設、すべての排除に当たれ。

パトリックから投げられた指示に、ステラは息を呑んだ。

「レノアのような犠牲者が増える前に、ヤツを見つけ出し、破壊しろ！ 世界の運命は、オマエに掛かっているのだ、分かるな!」

「——!」

母を奪った、最悪の核の火——

——それを“フリーダム”は、地球軍に渡そうとしている……??

——ステラたちの“プラント”を、滅ぼそうとしている……??

ステラは困惑するが、それと同時に、強く思う。

もしもそれが本当なら——絶対に止めなくてはならない、と。

そしてステラは、授与された新型機のコクピッドに坐す。

モビルスーツの命名式は、たつたいま終了した。生命を吹き込まれるかのように、パトリックによってステラの新しい搭乗機に名が付けられたのだ。傍らのユーリはその名を訊ね、パトリックは目の前の巨神を見上げながらに謳い上げた。

「長きに渡る人類史を思えば、我々のような新人類は、コージェイネイターまだ生まれたばかりの……赤子のような存在でしかない」

自由のため、正義のため、コージェイネイター達は戦っている。

全ては自分達の生活をよりよくするため——その願いは決して「悪」ではなく、この世に生まれた者として、最低限の権利であるから。

「生まれたばかり。そうだな……」

それは決して、コージェイネイターだけではない——世界にも云えることだ、とユーリは思った。

世界には大きな変革が起き、今はまだ世界の何もかもが、成長するより、もつとずつと前の段階にある。人々はまだ、隣人を愛し共に生きていく方法さえ知らず、そもそも自立する方法さえ知らないような、未熟にして未発達達の段階にある。

だから、戦争なんて愚かしい現実が拡がっている——

パトリックとユーリは、そんな世界を共に嘆くように、その機体を見上げた。

「世界の揺籃ようらんと、人々の揺籃ゆりかごを見守る『護人もりびと』であれ——」

その言葉を聞き受け、ステラは思った。

ステラはもう一度——「まもる」ための機体を託されたのだ。

新しい時代と、人々の成長を——見守ってゆくためのモビルスーツを。

「機体名称は、ZGMF—X08A『クレイドル』——」

鋼鉄の巨人は——フェイズシフトがオンとなり、白銀色に色づいた。

コクピッドの中で、パイロットスーツに身を包んだステラは、ひとりでに思慮する。

漆黒の『ガイア』——

鋼鉄の『デストロイ』——

黒鉄の『デイフェンド』——

総じて、これまで暗黒色のモビルスーツを乗り継いでいた彼女にとって、白銀しろぎん色は、か

つての乗機と決別したようなカラーリングをしていた。

同時に思う——ステラは、今までのように、進むべき道を誤ってはいけないのだ。

黒から白へ——

悪から善へ——

過去からの決別だ。

背部の両翼が大きく拡がり、その機体は、さながら人々の守り神のように羽ばたき出す。

(——“ゆりかご”……)

独語したステラは、その言葉に切っても切れない因縁めいたものを感じていた。かつてのステラの上官であり、地球連合軍将校だったイアン・リーは、このように述べていた——

——出撃するたび“ゆりかご”に戻さねば戦えないパイロットなど、本当に使い物になるんですか？

それは、生体CPUであつたステラ達を明確に揶揄する言葉。

しかし、全くその通りだと、今ならステラも共感できる。かつての彼女達は、何を隠そう“揺籃”と名付けられた最適化装置リラクゼーションに戻らなければ、まるで使い物にならない欠陥的な兵士であつたからだ。

何の因果か、ステラはこうして再び、同じ名前を冠される兵器の中にいて、あの頃と全く同じように戦場に赴こうとしている。

ZGMF-X08A「クレイドル」——今のステラが乗り込む機種として、それはあまりに皮肉な名だ。

しかし、だからと云って、ステラがこれを拒むことはない。

——失敗した過去があるから、正しく歩ける今がある。

成功ではなく、失敗にこそ価値がある。反省と検証、かつての過失は恥じるだけ恥じ、強く戒めた上で未来への糧にすればいい。

ステラの過去の生き方も、現在の生き様も、同時に象徴しているモビルスーツ。

——これは今の私に、きつと相応しい搭乗機のりものになる……！

少女はゆっくりと瞼を開き、上空を見上げた。ハッチが次々とオープンになって行き、星々が煌めく宇宙空間が見える。

「ステラ・ルーシエ、『クレイドル』出る！」

白く輝く守護神が、深淵の宇宙へと美しく羽ばたいた。

『平和の歌姫』

「最後通告、だど？」

オーブ行政府会議室にて、ウズミ・ナラ・アスハは声を荒げた。オーブの現代表であるホムラを中心に多くの閣僚陣が集い、大西洋連邦から送電された通達書類に目を通していたのだ。

大西洋連邦が書類を通して要求してきた要項は主に二点。

——ひとつは、オーブ連合首長国現政権の即時退陣。

——ふたつは、オーブ国軍の武装解除ならびに即時解体。

これらの要求に回答しなかった場合、あるいは拒否した場合、彼らはオーブ連合首長国を「ザフト支援国」——とどのつまり敵性国家と看做し、武力を以て制圧に掛かると攻め云つてきたのだ。それは既に国家間における対等の取引とは云えず、地球連合による無条件の降伏勧告であり、一方的な宣戦布告。ウズミは最大限の強い言葉をもってこれを非難した。

「パナマを落とされ、体裁を取り繕う余裕すら失くしたか、大西洋連邦は!？」

しかし、首脳のひとりには悩ましげに言葉を返した。

「理不尽であることは百も承知。ですが、これが如何に不当な要求であらうと、大西洋連邦に逆らえる国は……もはや存在しない」

「左様。ユーラシアは疲弊し、赤道連合、スカンジナビア王国など、最後まで中立を貫いた国々も、今や従容と彼らの言い分を聞き分けるだけの属国となった」

「大西洋連邦が欲しているのは我が国が保有する軍勢力。そして、地上に残された数少ないマスドライバー「カグヤ」でしょう」

彼らの見立ては間違っていない。パナマ基地を陥とされた大西洋連邦は、いよいよ全ての宇宙への玄関口を失った。敵軍に接収されたのであれば取り返す算段もあるだろうが、直近の「ポルタ・パナマ」に関しては完全に破壊され、奪還すら不可能になった。

華南、ビクトリア、パナマ——今や地上に残されたあらゆるマスドライバー施設は封鎖され、大西洋連邦はここに至って新たな動きを見せた。独自の軍備施設を保有するオーブ連合主張国、これが所有するマスドライバー「カグヤ」の接収である。

「——既に大西洋連邦の部隊が、太平洋を南下しているとの報告も」
剣を飾っておけるだけの平和は、今ここに破られたのだ。

白銀の翼 “クレイドル” を受領したステラは、正式な手続きを経て “アプリリウス・ワン” から出立していた。解放ハッチから宇宙に飛び立ったあと、彼女はそのまま、真つ直ぐに地球へ——

——ではなく、隣接していた別の “プラント” へ入港していた。

それも道理で、このときの彼女はパトリックから別の密命もまた受け取っていたのである。最新鋭機 “クレイドル” を譲渡されたステラは、その代価として評議会直属の密命を受けた。

——何者かによつて奪取された最重要軍事機密^{ダム}の破壊、およびパイロットの抹殺。

最優先事項がそれであることに間違いはない。陰謀により奪取された “フリーダム” がどれほど危険な機体であるのか——ステラとパトリックでは認識に微妙な差異こそあれ、程度で見れば同等だ——二人とも重々に承知していた。だからこそ、それに比肩する “クレイドル” を使ってこれを征伐せよという指令——

しかしこのとき、ステラにはもうひとつの特務が与えられていたのだ。

——そもそも “フリーダム” 横領を手引きした、国際指定犯罪者^{ライオン}の搜索と検挙。

工廠に来てからラクスについて話を聞かされ、ステラは自分の耳を疑い、真実を打ち明けられてなお受け止められなかった。

——あのラクスが、みんなを裏切つて“フリーダム”を敵国に売り渡した？

説明役も兼ねていたユーリは、憎々しげに語つていた。

「まだ非公式だが、ラクス・クラインは国家反逆罪に問われ、指名手配中の逃亡犯となつている。——彼女はもう、きみの義姉^{あねうえ}上ではないんだよ」

平和の歌姫、ラクス・クライン。将来的にアスランと婚姻を結び、ステラにとつても義姉となるはずだった年上の少女。あたかも巫女のように清純で、潔白な国民的アイドル——

花が咲くように柔らかな笑顔を見てみると、自然と心が潤つていくような、神秘的な雰囲気^{きんぎ}に身を包む少女だった。それこそ“プラント”で暮らしている女の子であれば、誰もが一度は憧れたであろう大輪の花。そんな彼女が、数日前に“プラント”を内側から引き裂くような大掛かりな叛逆を働いたというのだ。

「いまだに信じられないよ……ニコルも、彼女の歌は好きだったというのに！」

嘆き悲しむユーリの言葉を受け、この人も自分と同じなんだ、とステラが考えたのは事実だった。

ニコルの影響もあつてだろうか、ユーリもまた評議員という肩書を除いてラクスのファンであつたらしく、人が目の前で取り乱すのを見ればかえつて自分が落ち着くというのは本当らしい。ステラはたしかに衝撃を受けていたが、目の前で憤るユーリほどで

はなかった。

「ラクスの、歌……」

太平洋上の孤島で、ステラとニコルが交わした約束。それは世界が平和になったとき、みんなで一緒に小さな音楽を奏でようというものだった。ニコルが演奏するピアノに合わせ、ラクスが歌う。ラクスが唱えた歌に合わせて、ステラが踊るのだと。

——もう、叶わないの……？

ニコルは居なくなった。そして今度はラクスマでも——？

今、この「プラント」に残っているのはステラだけだ。世界は、人々は平和を目指しているはずなのに、現実人は人と人を引き裂き、状況はどんどん悪い方向に進んでいく——その理由が、ステラには分からなかった。

「ニコルやキミや、他の多くの若人達が今も戦場で、その身を粉にして戦っている！　なのに、なぜ彼女達はそれを裏切るような真似をするんだ？　私には、それが悔しくて——腹立たしくて堪らんよ……！」

「ラクス……は、なにを考えてるのかな……？」

「さあ分からんよ！　会って訊ねてみたいくらいだ！　だが、逃亡した彼女達の足跡は、それからまったく掴めていないらしい」

それはつまり、ラクスは恐るべき周到さで逃走ルートを練っていたということにな

る。そんなふたりの会話をよそに、パトリックが口を挟んだ。

「狸の子は、やはり狸だったということだ。……いや、あれの場合は女狐と云った方が正しいか」

発言の意味がてんで分からず、ステラは首をもたげる。

——タヌキ？ キツネ？

それはもしかして、シーゲル・クラインとラクス・クラインのことを云っているのだろうか？ 傍らのユーリはしかし、その奇怪な表現に納得したように、パトリックへと言葉を返す。

「それもまた、血が為せる業なのだろうな——施政家の娘としての……。子が親に似るとはよく云ったもの。彼女もまた、父親の食えない部分がよく似たものだ」

「あるいは、遺伝子か——」

「それでこそコーディネイターか？ これは取られた。お前にはやはり勝てる気がしないよ、パトリック」

「フン」

政治家同士の節の利いた会話は、その場にきよとんとするステラだけを置き去りにしていた。

「でも、ラクスがそんなことするなんてっ」

やはり、何度考えてもステラは信じられなかった。

ラクスが見せる柔らかな笑顔は、本物だった。あれが悪意の企みの上に張り付けられた仮面であつたなどと、ステラは信じたくなかつた。あの優しかったラクスが、ステラの「悪魔」を——あの「フリーダム」を解き放つたなんて事実を、信じたくはなかつたのだ。

「信じられない……」

「……」

必死になつて言葉を探しているようだったステラを見るパトリック。そうして彼は無然とした面持ちで、即座に云つて返してみせた。

「——ならば直接、彼女を捜すことだ」

その発言は期せずして、パトリックからステラに課せられた次なる任務となつた。ユーリは怪訝そうにパトリックを見る。彼はあくまで淡淡々として、感情のひとつも悟らせない政治家的な顔をして先を続けた。

「工廠の監視カメラの映像に、ラクス嬢の姿はしつかりと映つていた——そういう確たる証拠が無ければ、いったい誰が彼女に嫌疑など掛ける？」

指摘はもつともであり、ここに疑つてかかる余地はない。

だが、このときのパトリックは——非常に彼らしからぬように思えるのだが——意外

にも親切であり、ステラに対して親身であった。

「お前が映像だけでは納得できない、というのなら、お前自身で彼女の行方を探り、本人に会ってくれば良い。会えるものならな」

語尾は少しだけ皮肉めいていたが、悪意をもって云っているわけではないことは口調からして明らかだった。

「我らは当然、今は捜索隊を派遣してクライン一派の行方を追っているが——そこにお前が加わりたいと云うのなら、私は別に止めはせん。心当たりでもあるのなら、それを使って彼女に会い、気が済むまで事情でも何でも聴取すればいいだろう」

(パトリック、何を……?)

茫然とパトリックの言葉を聞き留めていたユーリは、盟友の意図が理解できなかった。

ステラがひとりでラクスを探し出す——? そんなことは現実的に不可能だろう。パトリックの云う通り、現在は評議会が極秘に派遣した捜索隊——正確には暗殺部隊——がクライン親子の足跡を追っているが、プロフェツショナルの彼らでさえ一派の行方を掴めていないのが現状だ。そのような任務を、ただの一兵卒に過ぎないステラが個人で遂行できるはずはない。

ましてや今のザフトには、そんなことのために“クレイドル”という一大戦力を割り

当てている余力はない。ステラには早急に地球へ発つてもらい、火急に「フリーダム」を破壊して貰わねばならないはずだ。だが、パトリックはそう考えていならぬ……？

(なんだかんだ「娘」には甘いということなのか、パトリック)

盟友たる彼をして、パトリック・ザラという男は普段ここまで聞き分けのよい男ではないはずだが、彼もやはり自分と同じ、政治家や国防委員である前に、ひとりの父親と
いうことか——

(——いや……)

心当たり——？ 先程パトリックが口にしたその単語が、ユーリをハツとさせた。

そもそのステラは、一兵卒であるよりも前にラクス・クラインにとつては義妹分だ。他の誰より親しい間柄であるはずだ——公的な話ではなく、私的なプライベートにおいてだ。

(実際は親しいからこそ、分かることもあるのか——)

派遣した捜索隊は、偶像としてのラクス・クラインしか知らない。

——だがステラは、生身の女の子としてラクス・クラインを知っている。

派遣した捜索隊は、記録でしか行方を探れない。

——だがステラは、記憶から彼女を追うことができる。

(——まさか……！)

ユーリは咄嗟にパトリックの意図を悟り、慌てて言葉を挟もうとした。

「パトリック、お前は!？」

「ユーリ、今は黙っている!」

「パトリック……」

一方のステラはパトリックの目を真つすぐに見つめ、信じ、自分のわがままな物言いに付き合ってくれた彼に父に、どこか感謝すらしているようでもある。

「ステラが、ラクスを捜し出せばいいんだね」

「そうだ。逃亡中のラクス・クラインから、今回の“フリーダム”横領の動機を訊き出してみせる——我々が納得できるだけの動機をな。お前のその働きをもって、全ては誤解だったとして彼女らへの嫌疑は取り払ってやってもいい」

そのときパトリックの瞳の奥には——駆け引きを得手とする——政治家らしい光が宿っている。けれどステラは、その光の意味など知らない。

「わかった、ステラがんばるから! 約束だよ!」

「ああ、約束だ……」

ステラは強くうなづき、パトリックは会心の笑みを浮かべた。

ラクス・クラインの捜索のために、彼女に与えられた時間は「48時間」——この二日に相当する時間の中でラクスを発見できなければ、彼女はすぐに任務を切り替え、第

一目標である「フリーダム」追討のために地球へ向かうことを約束した。

ステラはそれから、ラクスを捜した。

地球から一緒に連れて来た海色のハ口は、ステラに向けてこう連呼している。

〈認メタクナイツ！〉

ステラも、その言葉には同感だ。

認めたくなんて、ないのだ。

（やさしかった……あのラクスが、アスランやステラを裏切るはず、ない……）

父はいま、彼女のせいで苦しめられている。焦っている。仮にも婚約相手の父親を窮地に追いやるようなことを、彼女が率先して行うはずがない。

きつと、ラクスは誰かに騙されているのだ。

（そうに、ちがいないよ……）

以前、ステラがラクスに、これから何をしていきたいのか訊ねたとき、ラクスははっきり「平和のために歌っていききたい」と答えた。

その願いが、きつと誰かに悪用されているんだ。

気が付くと、ステラはとある「プラント」を訪れていた。軍事機密でもある「グレイドル」を人目に付かない場所に降り立たせ、ラダーを降りる。

街並みに溶け込めるよう私服に着替えた彼女は、重たい足取りのまま、とある地点を目指す。

訪れた先は——クラインのお屋敷だった。

「……………」

目の前に広がったのは、悲惨な光景。

踏み破られ、荒れ散らかされた箱庭——

弾痕に砕かれた、ガラス張りのテラス——

ぶちまけられた、屋敷内の調度品——

既にクライン邸は、官憲の手によって荒らされた後である。無残な邸宅の内を見て、ステラはこの場を荒らした者達の凄まじい敵意に直面したような思いになり、恐ろしくなった。

多くの人は、民は、ラクスを愛していたのではないのか？——そんな彼女が暮らしていた邸宅を、怒りや憎しみや悲しみは、こうも簡単に踏み散らかしてしまうのだろうか？ ラクスによってもたらされた現実に嘆く者達が、無慈悲にも、この邸宅を破壊し

たのだ。

ステラ自身も、この屋敷なら何度か訪れたことがある。

そのときの記憶が、このとき、鮮明に蘇った。

それは、アスランとラクスの婚約発表が執り行われてから、数か月後の話だった。

ふたりはまだ、共に十四歳の頃――

本人を交えた両親の挨拶も終わり、アスランは、ラクスが住まう屋敷へと幾度と足を運ぶようになっていた。

正確には、「あんなに可愛らしい女の子は滅多にいないわ？ 足しげく通ってでも、ラクスさんのハートを繋ぎ止めてなきやだめよ、あなたは男のコなんだから！」とレノアに叱られた結果だった。

アスランはそれに反論した。――「男のコっていう、ひと括りになさらないでください。男のコだって、皆が皆、動物みたいに積極的なわけじゃないんです！ 父上なんて、その良い例ではありませんでしたか？」

レノアはあっさり暴露した。――「パトリックだって、わたしへのアプローチは凄かったんですからね。初めて出会った時なんて、あのしかめっ面を真っ赤にして……」

「ぶふつ」——アスランは、そんな父を想像して堪らずに嘔き出した。後日、そのことでパトリックに拳骨を喰らった。

結婚のきつかけは、パトリックの一目惚れだったらしい……聞かなければ良かったと切に思った。

ラクスの屋敷を訪れるのは、待ち遠しくさえ思える、生活の中の楽しみでもあった。勿論、当時からラクスはアイドルとしての活動もあり、日がな年中、平凡な生活を送っているわけではない。しかしラクスの方も、予定が空いた日は、できるだけアスランと会えるようスケジュールを立ててくれていた。

だからその日は、アスランがラクスの屋敷を訪れることになっていたのだった。

まだ少年だったアスランは、クライン邸に向かっていた。その日は何故か、ステラと一緒に歩いて来た。

「お屋敷に連れて行くのはいいいんだが、失礼のないようにするんだぞ？」
「わかった」

どうやらステラは、クリスマス・イヴにラクスと出会ってから、彼女のことが気に入ったらしい。

しかし、だからと云って決して無礼は働いてはいけない。なんせ相手は、国民的アイドルなのだから。

そのとき、アスランの携帯電話に着信が鳴った。

通話主は母、レノアだった。

「母上？」

「へもしもし、アスラン？　もうすぐ、お屋敷に着く予定の時間になるのだけれど、大丈夫？」

「ええ、今向かっていますよ。ステラも一緒です、もうすぐ到着しますけど……なにか？」

「ああなたのことだから、いちおう心配して訊いておくわね。お土産は、何か買って？」

「えっ？　いえ、何も……」

レノアは、怒った。

「女の子のお屋敷に何うのに、手ぶらだなんてとんでもない！　小さなものでもなんでも、買って行ってプレゼントして差し上げなさいな」

「ええっ？　でも今日は、僕もステラも、学校の帰りですし……」

本当にこの鈍感息子は、乙女心が分からないのねと、母は嘆いた。

「母様の云うことは聞きなさい、悪いことは云わないだからっ」

「は、はい……っ。でも、いったい何を？　今日は、ハ口も持ってきてないんです」

「女の子は、好きな人からもらったものなら、なんだって喜ぶわ」

「丸投げされると困ります……」

アスランは唸り声を上げ、やがて母の提案を承諾したように、電話を切った。

「悪いんだけどステラ、僕はすこし街に寄ってからお屋敷を伺うよ。花束でもなんでも、買って行けて母様が仰られるんだ」

「プレゼント？ あった方がいいって、じつはステラも思ってた」

「そういうもののなか……」

「アスランはにぶいね」

「うるさい」

そう云って、アスランはひとり、屋敷に着く前に花屋を捜して街の方に出て行ってしまった。

その後、ステラはひとり、先に屋敷に到着することとなる――。

――それから、三〇分ほどが経つだろうか。

アスランは近隣の花屋から白色の花束を調達し、クライン邸の道へと着いた。荘厳な門扉の前で屋敷のインターカムを慣らすと、立派な門が開き、慣れ親しんだアスランの中に通してくれた。

玄関まで訪れた彼は、出迎えに上がった執事のひとりに声をかけた。

「遅れて申し訳ありませんでした……あの、妹が先にお屋敷を伺っているはずなのです

が……どちらに？」

「ステラ様なら、ラクス様と共に、裏庭の方へ行かれましたよ」

「裏庭……？　そうですか、ありがとうございます」

「どうやら、執事は彼女達が何をして遊んでいるのかまでは把握していないらしい。

それは、彼女達が女のコ……だからだろうか。

アスランは玄関から踵を返し、裏庭へと続く道に沿って辿った。

「ラクス？　ステラ？」

アスランが裏庭に着くと、しかし、そこには誰も居なかった。

付き添い人のメイドもいなければ、執事の云うように、お目付役もない。

またどこかに移動したのだろうか？　アスランが肩を竦めると、そのとき、すぐ近く

から声が掛かった。

「こつちだよ、アスラン」

それは、自分を呼ぶ声だった。

透き通った幼い声は、妹のものだとすぐに判断ができた。

「こつち？」

アスランは慌てて、テラスの方を振り向く。

「そちらではありませんわ、アスラン。こちらです」

「こちらつて云われても……」

今度は、ラクスの声がした。

アスランは慌てて、屋敷の方を振り返る。

しかしやはり、誰もいない。

「そつちじゃないよ、こつちつ」

「どつちだ!？」

そこでアスランは、初めて視界を平面から縦方向へ移した。

二人の声はたしかに、アスランの頭上から聞こえたものだった。

……………見つけた。

アスランは捜していたふたりの姿を見つけ、そして、凍り付いた。

「……ナニ、シテルンデス?」

ぎこちない挙動でアスランが問う先、お目当ての少女達は、裏庭に立派に聳え立つ大樹の野太い枝の上に座り込んでいた。

アスランの中で、時が止まった。——いったい彼女達は、何をやっているんだ……。

「木登り」

「木登りですわ」

悪びれもなく云われ、アスランがつくり項垂れた。

「な、なんでそんなところに!? 危ないですからっ!?」

「この樹の上に、可愛い小鳥さんを見つけましたの! 今までずっと、小鳥さんとお話してましたのよ?」

「ちいさくて、綺麗な小鳥さんがいたの。もう飛んでっちゃったけど……」

ひたすらに狼狽えたアスランは、立ち位置を見れば、少女たちの真下に据えている。

そこから少女達のことを見上げれば、ふたりのスカートやワンピースの中が丸見えとなり、アスランはたじろぎ、素直にふたりを見上げることすら出来ずにいた。

………なんかもう、色々駄目だ——。

アスランは何から突っ込んでいいのか分からず、同じ周波数で会話を続ける妹と婚約者に、額を抱えた。——目付役も就けないで!

「と、とにかく危ないですから! すぐに降りて来てください!」

いったい誰だ、ラクスに木登りなんて教えたのは。

いや、ステラだ。

そうに違いない。帰ったら叱ってやろう。

アスランが怒ったように云うと、ステラはしゅんとして、「はあい……」と云って枝の上から立ち上がった。すると枝の重心が移ろい、枝葉が揺れ、彼女の立つ場所が強かに上下した。その振動に適應できず、彼女はいつとき、態勢を崩しそうになる。

「うわあっ」

悲鳴を挙げたのは当のステラではなく、直下に構えるアスランだった。

だが、ステラの動きはどこか危なっかしいように見えて、違った。彼女はすぐに枝葉しなりの振動に体幹を合わせ、細々とした枝葉の上を器用にも渡り歩き始めたのである。それは歩く、というより、ステップを踏んでいるかのように軽やかだ。

やがて地面から近い位置まで高さを落とすと、ひよいと飛び降り、易々と着地を決めてしまった。

これを見届けたアスランは唾然とした——いったい、どこでそんな技術を身に着けた……。

——この妹は、自分より大物になるな……。

なんてことを咄嗟に思ったアスランだったが、次に、ラクスが下りる番となった。

樹の上にひとり取り残されたラクスは、ステラがやったのを真似するように、ゆつたりと枝の上に立ち上がる。ステラの時と同じように枝葉はしなり、大きく揺れる。

そして……。

「あーっ」

ラクスは、声を漏らした。

アスランとステラは、地表から彼女を見上げる。特にアスランの方は、気が気でない

ほど心配な様子で。

「あらあらっ？」

ラクスはきよきよと辺りを見回した。

そして一拍置いて、声を挙げた。

「まあ、大変ですわ、アスラン」

「どうかしました……っ？」

「降りれなくなつてしまいました……」

アスランは、その場に崩れた。

「そうだ——誰もが妹みたいに、羽が生えたように軽快な動きができるはずがないのだ……」

ラクスは強かにしなる枝葉の上で、怯えたように、太い枝にしがみ付くことがやつとだった。木や山は、登つた後の降りる方に難儀するのだ。

アスランはこの世の終わりかと思われるほど青褪めた表情を浮かべ、辺りに何か、はしごのようなものがないかを捜す。

「きゃっ」

そのとき、短い悲鳴が聞こえた。見上げた枝の上、ラクスがそのか細い足を滑らせたのである。態勢を崩した彼女は、お尻から地面へ落下していく。

アスランは呆然とする。同時に絶望したが、彼の身体はぴくりと動かなかつた。そのときだ。

どんっ！ アスランは、背後から何かによつて、強く突き飛ばされたような感覚を憶えた。

うわっ、と叫びながら、彼は前のめりに押し出された。

しかし、飛び出した前足は止めなかつた。彼は突き飛ばされた勢いのまま、無我夢中でラクスの落下地点へと滑り込むように駆け抜けたのである。

そして間一髪、上から落ちて来たラクスの身体を受け止めた。彼女は無事だった。

「まあっ、ありがとうございます、アスラン。助かりましたわ……」

「えっ？ いえ、いや……っ」

受け止められたラクスは、アスランを見上げるように熱い目で見た。

円らな瞳に真つ直ぐに見られ、アスランはたじろぐ。

——今まで、ラクスの手も握つたことのないんだ……！

アスランはそんな彼女を今、お姫様抱っこしていた。

気恥ずかしさもあつたが、アスランは正直、礼を云う相手が違ふと思つた。

アスランは背後を振り返り見た——立ち尽くす自分を、突き飛ばした人物を。

視線の先に立つまだ幼い妹は、妙に満足そうな面持ちをしていた。童話の中の王子様

とお姫様を見るような、きらきら輝く目でこちらを見ている——自分達が「そのように」でも見えるのだろうか？ たしかにお姫様抱っこはしているけれど……。

いらぬない心配りだと思つたが、妹の意図を察したアスランは、はあ、と深く息を吐いた。そのあと、すぐに視線をラクスへと移した。

「とにかくラクス、もう木登りなんて危険ですから、二度とやらないでくださいね」

「でも、小鳥さんがいましたのよ？」

「小鳥のロボットであれば、僕にも造れますから。お願いですから、それで勘弁してください……」

それは、アスランの優しさに聞こえた。

いつか、彼女が退屈しないように小鳥のロボットを造つてくれるのだろうか？ ハロ以外に、プレゼントを下さるのだろうか？ ラクスはきらきらした目で彼を見た。

アスランは熱の籠った目で見られ、頬を赤く染める。やがて誤魔化すように、そそくさと遠くまで歩いて行つてしまった。

ラクスは気恥ずかしそうな背中をくすくす笑つて見送りながら、傍らのステラへと近寄つて行つた。

「ほんとうに、素敵なお兄さんですわね。アスランは」

ステラは、こう答えた。

「でもやつぱり、アスランはにぶいね」

ラクスは微笑み、そうですわね、と答えた。

そのとき二人の「にぶい」の解釈は、微妙に違っていた気がした。

—— 思い出の木は、朽ち果てていた。巨大な蟻虫アリにでも喰い散らかされたかのよう
うに、立派な大木には、流れ弾であろう銃弾が撃ち込まれ、枝葉はバキバキに折れて焦
げている。

荒れ果てた庭園を進んでいるときだった。かさり、と葉の揺れる不自然な音を耳にし
たのは。

「……………」

何らかの気配をすぐそばに察知し、ステラは、それまでの無邪気さを忘れた。

瞬時に腰を落とし、身構えるステラ。ヴェールのように伸びた白いフレアスカートの下、太腿のホルスターに忍ばせた短刀へと、いつでも手を伸ばせるように。小慣れたように体重を落とした彼女は、今度はみずからの気配を消して周囲を警戒、索敵行動に移った。移ったのだが、そんな彼女の思いなど斟酌しない傍らのハ口は、びよんびよん

と気の抜けた音を立てながら、喧しく跳ね回り続けている。

「——ハロ?」

静止を求めたステラであるが、ハロはそんな声など聞こえない風に、庭の奥へ奥へと勝手に進んでいく。

そのときである。奥に構えられていた温室——ガーデン・プラントの中から、ピンク色の球体が飛び出して来たのは。

〈マイド!・マイド!〉

——ハロ!?

いきなりのことで、さすがに刃を抜き走らせたステラであるが、理解と対応は早い。見紛うはずもなく、その球体はハロだった。桃のようなピンク色をしている——アスラがラクスに与えた第一号。

——だとすれば、さっきの気配の正体は……?」

奔らせた刃を引つ込め、ステラは己の警戒が杞憂であったことを理解すると、そのままゆつくりと短刀をしまった。

目下のハロ達は、やはりマイペースであった。それまで一体だったのが二体が増えたことで、ハロはみずからの分身の登場を愉快がるような戯れ合いを始めたのだ。警戒を解いたステラの周囲をびよんぴよんと跳ね回りながら、ふたつの球体が、挨拶を交わす。

ラクス
ステラ
桃色のハロが云う。——「ハジメマシテッ！ ハジメマシテッ！
海色のハロが返す。——「ナンデヤネンツ！ ドツイタロカツ！」

まさかとは思うが、会話らしいものをしてしているハロ達の言葉を聞き、ステラは不審を
湛えた顔になる。

——「ハジメマシテ」……？

ラクスが最も大事にしていたピンク色のハロ——そいつとステラ達は決して「ハジメ
マシテ」の間柄ではない。少なくとも、戦争が始まってからも「アークエンジェル」の
艦内で彼女達は再会を果たしているし、さらに昔まで記憶を辿れば、本当に「はじめま
して」の挨拶を行った場所は——たしか。

「——はじめまして……？」

ステラはそのとき、ハロに託された、ラクスのメッセージを受け取った気がした。

ほかの誰でもない。そのメッセージを理解することができるのは、ステラだけ……。

指定された地点に向かうためには「プラント」を越えなければならぬ。彼女は即
座に踵を返すと、すぐに「クレイドル」のコクピッドを指摘した。

オーブに入港した「アークエンジェル」のデッキに、全搭乗員が集められていた。

彼らは中立コロニー「ヘリオポリス」の崩壊に始まり、ここまで『大天使』に乗って戦い続けて来た者達である。アラスカにて異動命令が下された者——ナタル、フレイ、ハリーの三名——を除いて、かつてないほどの激闘を潜り抜けて来た者達は、どこか氣負つたような表情で前に立つマリューの言葉を聞き留めていた。

「現在、このオーブへ向け、地球連合軍艦隊が進行中です」

一同の表情に、動揺が奔つた。

「『オーブが地球軍に与し、共に「プラント」を討つ道を取らぬと云うのなら、ザフト支援国と見なす』——それが理由です」

地球軍——かつてアラスカで自分達を捨て駒として扱つた組織——が、なりふり構わぬ強引さを持つていることは、この場にいる者なら誰もが周知だろう。

だからこそ、おのずと「無茶な」との声が上がる。強い動揺こそ士官達の間には流れはするが、決して「嘘だ！」と反論する者などいない。

「これに対し、オーブ政府はあくまで『中立の立場を貫く』と宣言し、現在も涉外・外交の努力を継続していますが、残念ながら戦闘は回避不可能なものと思われます」

戦いに明け暮れ、犠牲を払い、目的地に辿り着いた先、待つていたのは譴責と裏切り。一方的に課せられた「敵と共に死ぬ」という酷薄な命令——ここから逃れ、必死の思いで救援を求めた平和の国にさえ、またも彼らの不埒な魔の手が及ぼうとしている。

この報告を受けて、大西洋連邦のやり方に義憤と疑念を憶える者は数多くいた。怒りに立ち上がる者達がいるのに対して、しかし、それとは真逆の感情を抱く者も大勢いた——これ以上の戦いに恐怖し、怯える者達である。

「現在『アークエンジェル』は脱走艦であり、私達は、自身の立場すら定かではない状況にあります。我々はこれからどうするべきなのか——これを命ずるものではなく、今の私もまた、貴方達に命ずる権限を持ちません。これより先は、オーブを護るために戦うべきなのか、そうではないのか——自分自身で判断せねばなりません」

形式的に云えば、それは地球連合軍、第8機動艦隊所属アークエンジェル艦長からの、正式な解散の通達だった。その式が終わり、士官達が思い思いに場を離れてゆく。彼らはみな、地球軍から造反することを願った身だった。アラスカで野垂れ死ぬことを拒み、拒んだことで更に裁かれることに嫌気が差した者達。

だからこそ大西洋連邦に真つ向から抗議の衝突をしようとする者もいれば、せつかく拾った命をこれ以上の危険には曝すまいと、退艦を心に決める者もいる。

そんな中で、キラ・ヤマトの覚悟も決まっていた。

彼は、オーブと共に歩むことを決めたのである。

融和による平和を訴えた中立国——戦うために戦うのではなく、守るために戦う理念に同調し、彼は『アークエンジェル』と共に、これから始まるであろうオーブ解放戦の

防衛任務に就くことを選んだ。そんな彼に導かれるようにして、*“ヘリオポリス”* 出身の学生達もまた、それぞれの心を決めていた。トール・ケーニヒ、ミリアリア・ハウ、サイ・アーガイル——だが、その中で唯一カズイ・バスカークの胸にだけは、曇りと陰りが差していた。

「カズイ、船——降りるのか？」

戦争の恐怖にすり減つた彼の心には、限界が来ていた。

もともと彼は——キラヤステラにだけ苦しい想いはさせていられないという——意地にも似た「思いやり」だけで戦うことを決めていた少年である。その決意の中には、今も行方も知れない少女を見守つてやりたいという思い、もしくは彼女への淡い憧れなども混じっていたようだが、カズイが当時に抱いた決意の程は、今回マリューからもたらされた無償の退艦許可に勝るものではなかった。以前、彼らの中ではフレイだけが艦を降りた経緯もあつて——それもまた、彼の決意に水を差した要素のひとつとも云えるのだろうか。

懐かしい私服に着替え、荷物をまとめたカズイを見送るように、サイ・アーガイルは迎えに上がつて来た。カズイはまるで、昔に戻つたように臆病で卑屈な面持ちで、サイの顔色を窺っている。

「そうだ。サイは、サイは降りないの？ だって、フレイだつてもう、この船にはいない

んだぜ……!？」

カズイと同じく、サイも元々は仲間——いや、彼の場合は婚約者ファイアンセに同伴する形で地球軍に志願した身でしかない。だが、そんな婚約者も、最早「アークエンジェル」には残っていない。

であるなら、本当に今もサイがこの艦に居残り続ける意味はあるのか？ カズイには分からないし、サイに対して失礼な話であるのだが、このときカズイがサイにだけ退艦を呼び掛けたのは、少なからず、彼に対する同族意識を心のどこかに持っていたからだ。しかし、サイはそれすら分かっていて、はつきりと答えを返した。

「フレイはきつと、もう俺なんかの手の届かないところにいっちゃったんだ。あの子、臆病な割に真つすぐだから……自分に出来ることをやり遂げよう、って、とつくのとうに一人で歩き始めてたんだ——俺の知らない間に……」

多分それは、彼女が軍に志願したあのときから。

「俺はそんな彼女を、ファイアンセだから『守つてやらなきゃ』なんて、烏滸がましいにもほどがある義務感？ 正義感？ に酔いながら軍に志願してさ……彼女ほどの覚悟なんて、これっぽっちも持っていないなかったのに」

「サイ……」

「だから、彼女との婚約は破棄されて道理なんだ」

「じゃあ……！」

「だからこれからの俺は、俺のやりたいようにやる。だから今は『アークエンジェル』のためになることをまっとうするんだ。それが、いま俺がやりたいことだから」

サイもまた、これまでの日々の中、思い改めることがあつたらしい。これから攻撃されるのはオーブ——彼の故郷だ。だから彼もまた、残つて戦うことを選んだのだ。

「でも、おまえには向かないよな、そういうの。おまえ、やさしいからさ」

サイはそうして、去っていく友の背中を見送つた。

がしやりっ！

突然、牢屋の施錠が解除され、きいと音を立てて出口が開放された。

部屋の中に閉じ込められていた捕虜——ニコル・アマルフィは目をぱちくりさせて、その措置の意味を訝しんだ。

いよいよ以前、赤髪の少女が云つていた——「約束の時間」がやって来たのだろうか。自分は、ここで死ぬのだろうか——。

不安に駆られるニコルを迎えに上がったのは、トール・ケーニヒと、そのガールフレンドであるミリアリア・ハウだった。彼らは満面の笑みを浮かべていた。

「釈放だつてさ」

「えっ？」

ニコルは、きよとんとした。

フレイとかいう少女は、いずれニコルが銃殺刑に処されるであろうと述べていた。

その言葉を真つ向から信じていたニコルにとって、トールの発言は、おおよそ推量で
きるものではなかった。

——尋問でも、移送でもなく、果ては処断でもなく、釈放……？

ミリアリアが捕捉するように云う。

「この艦、また戦闘に出るの、オーブに地球軍が攻めて来るみたいだから」

云われたニコルは、さらに戸惑った。

「地球軍……？ あなた達は、地球軍所属の士官だったんじゃないんですか？」

地球軍が、地球軍と戦う？

オーブに攻めて来るから？

いつから「アークエンジェル」は、オーブ軍に所属する戦艦になった？

「アラスカで色々あつて、今は、地球軍に追われる身になつちまつたんだ」

そう。本来であればニコルの命は、銃殺される必要もなく、アラスカで散っていたはずだった。

しかしそんな真実を、彼らはあえて言及することはなかった。

「オーブが地球軍に味方しないから、地球軍は怒って攻撃を仕掛けてくるの。……笑っちゃうよね」

「わ、笑えませんが……！　どんな道理で、そんなこと！」

「オーブは俺達の故郷なんだ、だから、俺たちは故郷を守るために戦いに出る」

ニコルの脳裏に、以前、オーブへと潜入した時の記憶が蘇る。

賑わった街並み――

平和に暮らす人々――

母親のバースデーケーキゆえに神経質になっていた、ごく普通の少年が暮らす中立国
――
それが、これから戦場になるというのだ。

（故郷を護るために、戦う？）

トールやミリアリアの動機は、ニコルのそれと、一緒だった。

そう思ったとき、彼は不意に、胸を打たれた。

白銀に彩られた守護神が、荒廃した大地に降り立った。機体のコクピットから、軽やかなワンピースに身を包んだステラが、ゆつくりとラダーに捕まって降りてくる。

特別、モビルスーツを隠す必要はなかった。

この一帯は以前、上流階級の邸宅が立ち並ぶ高級住宅街だった。中にはいち屋敷を別邸として利用する名士やセレブもいたそうだが、今や街の景観は見る影もなく、すべての公邸が没落したようになり捨てられていた。極端な云い方をすれば、並んだ屋敷がなまじ豪華なだけに、今となってはホラーハウスが立ち並んでいるようにしか見えない。人っ子ひとり、住み着くことをしなければ、近寄ることもしない忘却の場所——「クレイドル」を隠す必要は、めつきりないように思えた。

いったい、昔ここに何があつたんだろう？ ステラは訝しみながら、地に足を下ろした。以前、この付近にはステラの勝手知つたる居宅があつた。より正確に云えば、パトリックが個人的に所有していた別邸が。

そしてそこは、ステラとラクスが初めて出会つた場所——「ハジメマシテ」を云い合つた場所でもある。

クリスマス・イブの夜——

ザラの別邸でアスランとラクスの婚約発表が執り行われ、余興として催されたダンスパーティーに、ステラは招待された。そこで彼女は、生まれて初めて、生身のラクス・ク

ラインと出会った。それまで、テレビの向こう側でしか見たことのなかった歌姫が、目の前に現れて、彼女のお友達になってくれたのである。

それから平和の歌姫は、少女にとってかけがえない親友となり、同時に、将来のお姉さんとなった。歌姫が残したハロが伝えたかったメッセージは、おそらく、この別邸を指しているのだろう――。

ステラはそう思い、この土地を訪れていた。深い霧に霞んだ夜、激しい雨が、荒れた土地を打ち付けている。

(傘、忘れた)

近郊に着陸した“クレイドル”を降りたステラは、その身に雷雨を浴びながら、かつて父が所有していた別邸――パーティホールが建設された屋敷の玄関へと、歩を進めた。ふんわりとした金髪は多量の水分を含み、すっかり輝きを失って萎れていく。肩上で切り揃えられたはずの後ろ髪は不規則に乱れ、ごわごわにきしむ。薄手のドレスには雨が滴り、身体にべつとりと張り付いて気持ちが悪く思った。

玄関に近づいていくたび、透き通ったような声が聴こえた。

それは歌だった。広大なホールへと近づいていくたび、ステラは、どうしようもない確信を胸に抱く。

「……………」

扉を開けて屋敷の中へ踏み入れれば、内装はまるで恐怖の館といった風だ。割られた窓のガラス片が四散し、数年として手入れされていない名家の旧居は、ゲームの世界で見るとようなホラーハウスと化していた。

だが、無理もないことだ——とステラはひとりごちる。ここで幼少期を過ごした彼女であるが、血のバレンタインをきつかけとして、彼女の家庭は崩壊したのだろう。母が死に、自分は行方不明となり——これに憤った父は家を空けることとなり、残された息子は軍門を叩き、寮に入った。家族の誰にも必要とされなくなった屋敷は、もはや管理する者のいない、荒れ果てた廃墟と化して当然だ。

恐怖感と郷愁感が同時にやって来て、しばし思いを馳せていたステラを、パーティホールへと繋がる大きな扉が出迎える。両手を使って扉を開けると、波打つように伸びた桃色の髪。透き通るように儂く繊細でありながら、同時に圧倒されるような力強さを持つた声の持ち主が、ホールの檀上にいた。

「ラクス」

ステラがそう呼び止めたとき、歌声は、ぴたりと止まる。

ラクス・クラインは、その声を聞き留めたように、ステラの姿を認める。ふたりの距離は、まだ遠かった。しかしラクスは、現れた来客人の姿を認め、鷹揚と微笑み云う。

「いらつしやい、ステラさん。いいえ——おかえりなさい、と……そう云うべきでしょうか」

ラクスはまるでいつものように、おっとり柔らかに微笑む。

しかし、ステラはその笑顔に、拭えない違和感を憶えた。ステラの知っているラクスの笑顔と、まるで違うように見えたからである。

儂いまでに繊細な、か弱い乙女の笑顔ではない。圧倒されるほどに力強い、静謐なる歌姫の微笑みだ。

憶えたのは畏怖の念か、それとも畏敬の念か——

今のラクスは、彼女の中の何かが化けたような雰囲気を感じ放っている。言葉を交わさずに向かい合っているだけでも、思わず圧倒されてしまいそうなほどに。

だがステラの知るラクスは、どこまでも清楚で、慈愛に満ちた柔らかな少女であるはずだった。すくなくとも、みずからの「姉」のことをステラはそう認識していた。だが目の前にいる彼女は、そもそも「少女」ですらない——

——「聖女」だ。

美しく残酷で、ときに無慈悲な裁きの女神。鄙びたパーティホールの壇上に君臨し、まるで感情のない歌を歌う——今のラクスの笑顔は、まるで以前と、別人の笑顔のよう

に見え、ステラの口から、その言葉は自然と漏れていた。

「あなたは、だれ——？」

問われた方は、決まっつてこう答える。

「——わたくしは、ラクス・クラインですわ」

ふたりの大切な思い出の場所。

それはふたたび、彼女達が初めて出会う瞬間でもあった。

第三篇

『深淵の孤独』

昨今において、人型機動兵器と呼称されるモビルスーツ。

しかしそれは、本来の定義で云えば「地球外探査用宇宙機器」——つまりは一種の宇宙服だった。

時代を遡ること5年——

コズミック・イラ史上、初めて設計されたモビルスーツ「ザフト」は、パワーローダーの役割を担う船外用作業服として活用された。しかし、地球と宇宙間で戦争の機運が高まると、モビルスーツはその汎用性ゆえに軍事転用される。そしてこれが、後の戦闘用人型機動兵器「プロトジン」の開発経緯である。

今でこそ戦略機動兵器——言葉を選ばずに云えば戦争の道具——として認知されるモビルスーツは、しかし、原点を辿れば宇宙への冒険——木星探査という歴史的偉業を成し遂げたジョージ・グレンの成功に肖ろうとした、その結晶だった。

「ジェネシスα」もまた、そうした宇宙への冒険と開拓のために建造された、ザフト

管轄の大型実験施設のひとつである。

ソーラーセイル。そう呼ばれる科学技術は、太陽などの恒星から発せられる微粒子——たとえば光やイオン——を推力に変換するものである。

エヴィデンス01の発見以降、ザフトはこのソーラーセイル技術を応用して、戦前から外宇宙探索、および恒星間探査計画のための宇宙船加速装置として、推進用レーザー発射場である「ジエネシス」の基礎開発を行った。そしてこれは、元が宇宙船を送り出すための施設であったことから、現在は軍事工廠として利用される運びになっていた。工廠の内部にはザフトの重要機密に相当する最新鋭のMS等が整備され、警備には「プラント」本国から派遣された特殊部隊が着任していた。

そしてその部隊は、ザフトの中でも飛び抜けた実力を持つトップエリートで構成された、軍事作戦のプロフェッショナル集団でもあった。

「隊長、本国から通信です」

「ラクス・クラインが見つかったのか？」

「そのように」

声を発したのは、顔面から全身にかけて強烈なタトウを施した男。豹を思わせる縞模様が顔を横断し、独特というより、奇天烈な存在感を発している人物だ。

男の名はアッシュ・グレイ。この「ジエネシス α 」の警備部隊の長にして、ラクス・ク

ラインの抹殺指令を本国から仰せ付かる暗殺部隊の長でもある。そんな彼の部下であろう黒服の副官は、慇懃な口調で報告を続けた。

「現場に急行するよう、ザラ議長から直々に指令が出ています」

「今からか？ そりや無理な相談だ」

指定されたポイントを確認するが、そこは「ジエネシス α 」から相当の距離がある場所だ。宇宙を跨ぐために足自慢のナスカ級を使ったとしても、最低数一〇分は掛かる計算だろう。

——その間に、目標に逃げられてしまうのではないか？

そんな懸念を、しかし、彼の副官は誇らしげに否定した。

「問題ありませんよ。この「ジエネシス α 」と隊長のモビルスーツがあれば、ものの数分で到着できることでしょう」

「ああ。ライトクラフトを使うか——」

「我々は後に続きます。国家反逆罪の女を、締め上げる時です」

その言葉に、男はえげつない笑顔を浮かべた。

「また、柵のコレクションが増えちまうなア」

アツシユは変態である。彼の自室には実に多くの人形が蒐集されているのだが、そうして並べられた人形の頭数は、彼がこれまで手に掛けて来た人間と同数——つまり彼に

は、みずからが戦争によつて殺してきた人間と同じ数だけを、そこに並べる性向があつたのだ。

そんな彼の目の前、工廠区画には戦艦と思しき巨大な機動兵器が横たわつていた。全長にして、おおよそ通常規格のモビルスーツの二、三倍近くある大型の艦艇らしきものだが、それを戦艦と云い切つてしまふには奇抜すぎるデザインをしている。機体前面に向かつて折り畳まれた鋭利な四本の鉤爪は、大西洋連邦から奪取した「イージス」と大変酷似している機種は、ザフトが開発した最新鋭モビルスーツであり、ほんの数日前にロールアウトされたばかりのアツシユ専用機だった。

超大型の、漆黒の機生獣——その名を「再生」と冠される。

「このオレと『リジエネレイト』が、全てを殺戮してやるよ」

ラクス・クラインの暗殺部隊が、行動を開始した。

かつて、パトリック・ザラが別邸として所有していた貴族的な屋敷は、艶やかな造りだ。パーティホールは一〇メートル近い高さの天井を構え、豪華な銀のシャンデリア、ステージの最奥には中世絵のタペストリーが描かれている。床一面に敷かれたレッド

カーペットと、ステージの下手側は採光ガラス越しにファウンテンが飾られた大きな庭園を望むことができる。

外界と隔絶された幻想的な雰囲気は、多くの者が映画や歴史書の中でしか目の当たりにすることがないようなものであるが、それもこれも、今となつては伽藍堂だ。この屋敷の近隣には多くの名士が居を構えていたはずだが、いったい何が起きたのか——打ち捨てられ、再興されることもなく緩やかに滅んでいったこの土地は、人つ子ひとり近寄らない閑散地帯となつていて……いや、だからこそラクスがその目立ち過ぎる身を隠すには最適だったのかも知れない。

歩を進めるたび、じやり、とガラスの破片が割れた音が鳴る。一瞬そちらに気を取られたが、ステラは気持ちを改め、そのまま真っ直ぐにラクスの方へ向かつて歩いた。桃色のハ口がラクスの許まで飛んでゆく。軽快に飛び跳ねるハ口を受け止めたラクスは、にっこりと笑つて云つた。

「やはり、あなたが来てくださいましたのね」

ステラが来ることを予知していたような口調で、ラクスは声を発した。このときの彼女は、たとえ悠然としたダンスホールの中央に在つても決して浮いたりすることのない、幻想的なドレスにその身を装つていた。

滑らかな桃色の長髪は二つ結いにされ、純白とまでは云わないにせよ、白と桃色を基

調としたドレスに身を包むその姿は、たとえ彼女の存在を知らない者であっても、これを歌姫と形容させてしまう程の説得力ある風貌だ。

「どういうこと、ラクス」

ステラはゆつくりと歩を進め、ステージの壇上まで跳躍する。もの柔らかそうなその小さな掌には、しかし、セーフティを外した拳銃が握られていた。

「ラクスが軍の機密を地球軍に流したつて、みんな云つてた！ どうして……どうして『フリーダム』^{／＼}を解き放つたりしたの？」

問いかけに対して、ラクスは答えなかった。彼女は優しく微笑み返しながら、ステラを見据えて動かない。

心の中では、その言葉を否定して欲しかったのだろう、ステラは思うような回答が得られずに、これをもどかしく思った。

「あのモビルスーツがどんなものなのか、ラクスは知ってるの」

「知っていますわ。あれが持つ、大いなる力も——」

「……うそだ。ラクスは、何にも知らないんだ……」

「そんな風に決めつけられては、何も話せませんわ？」

「だってっ！」

感情的に、ステラは云い募った。

——ラクスは、*“フリーダム”*がどれだけステラに怖い思いをさせたか知らないんだ……！

それは事実になると本当に当たり前のことで、それ以上に、ステラ個人の都合でしかなかったが、このときのステラを怒らせるには十分な理由ではあった。

「あんなものが出てくるから、みんな混乱するんだ……ステラも！」

「地球軍か、それともザフトか。世界が二色に塗り分けられようとしている今、ザラ議長閣下の下で戦う貴方の目に、あの*“フリーダム”*はたしかに異端であるように映るのでしょうか……！」

「わかつてるなら、どうして……！」

「理由をお求めなら答えましょう。従うままに戦い続けるだけでは、守れないものもあるからですわ」

——守れないもの？

ステラは、その言葉に口内で反芻した。

「コーディネイターが勝てばナチュラルは滅び、ナチュラルが勝てばコーディネイターが滅びる。敵を倒すまで終わらないこの戦争を、わたくしは一日でも早く終わらせたいと考えています」

「……！」

「命を守るために命を散らす矛盾。相手の明日を叩き潰すことでしか、みずからの未来を勝ち取れない現実。このようなことを続けた先に、本当に平和が訪れるでしょうか？」

少女から一転した聖女のように淑やかな声音で、ラクスは淀みない言葉を紡ぐ。

それをこのとき耳にしたステラには、そんなラクスの声音や言葉が、人を導き惹き付ける何らかの不思議な力を宿しているようにも感じられた。あるいはそれは、平和の歌姫という神秘の偶像だけが持つことを天に許された、遺伝子上の特権であるかのようにも。

「みずからと異なる者を傷つけ、その者の命を奪い合う。そうしなければ、守りたいものすら守れない現実——これが幸福と？」

ステラは、何も答えなかった。答えられなかった、というべきか。

——そんなことをステラに訊いて、どうしようっていう？

何が最善で、何が幸福なのか？ そんなことは、そもそも戦場の兵士達の考えるところではない。戦時に生きる軍人は、ただ命令に従って動くだけの歯車でしかないのだから。

とはいえ、今のステラにも分かっていることがある。ただ敵と撃ち合うだけの世界が幸福であるはずがない。しかし、すべてを一緒くたに考えているのは、誤解を孕むこと

だつてあるはずだ。

——敵を撃つても幸福しあわせにはなれない。

——でも、そうでもしなきゃ、守りたいものは守れない。

結局、戦場の兵士達は繰り出される砲火から己を生かすために、そういう生き方を選ぶしかないのだ。

ステラがその手に銃を取り、モビルスーツに乗つて戦う動機は、ごく個人的なものだ。命を賭けて戦うのだからこそ、彼女自身が偽善とは理解していても譲つてはいけない。最低限の良心は持ち合わせていたい。強化人間や大量殺戮兵器を平然と造り出す地球連合は戦争を悪しき方向に進めたがっているのだと、自己陶醉のように思い込んでいただけなのである。

だからこそ、今は父を信じて「ブランド」のために戦うより道はない。清く正しい軍勢などない、ならばなおのこと、善悪の判断に意味などない。結局、敵を倒すことだし生き延びれない時点で、地球連合もザフトも同じ穴の貉なのだ。

「駄々を捏ねても、何も出来なきゃ一緒だよ」

そういう意味で、ステラの目にラクスは勝手に映る。目の前に広がる現実を斜に構え、そんなものは間違っていると言い張るだけで——

「だから、これから発つのでしょうか？ 手遅れに、なる前に」

「……やめてよ……」

ステラはかぶりを振る。これ以上の大切な何かが、変わっていくことを彼女は恐れた。懇願にも似た悲痛な声を上げる。

「いかないで……。ラクスは、ステラの傍にいて！」

激したように、ステラは叫ぶ。

戦乱に身を投じてからというものの、ステラの間人間関係はことごとく断絶していった。優しかったアスランは豹変し、ニコルは行方不明になってしまった。

——大切な親友だった、キラだって殺されてしまった！

非情な現実には、ステラが信頼していた者を次々に取り上げ、彼女の中に寂寥感と孤独感だけを植え付けては募らせた。

(だからもう、変化なんていらぬ！ ずっとこのままでいい……！)

ただでさえ心細い今、ラクスマで遠くに行ってしまうこと——
これを、ステラはひどく恐れたのだ。

「これ以上、何も起きなくていい。何も変わらなくていいの！ ラクスだけはそのまま——ずっとステラと一緒にいてよ……」

「そういうお考え方は、人のためになりませんわ」

「どうしてそんなこと云うの！ いつもみたいに、ステラに優しくしてよ……っ！」

アスランも、ニコルも、キラも。

そして、ラクスも——？

「どうしてみんな、ステラから離れていこうとするの……!?」

現状を繋ぎ止めていたい、その一心でステラは云った。

これまでに起こった悲劇、その全てを諦めたような思いで、ステラはラクスに訴えかける。ラクスさえ傍に残ってくれたら、ステラはもう何も望まない。友達も、家族も、ぜんぶ諦めるから——せめてラクスは。彼女だけは。

「ラクスが反省してくれたら、もう怒られたりしないから……！ ぜんぶ許してくれるって、お父さんはそう約束してくれたから！」

それが、父と交わした約束だ。ステラがラクスと接触することができれば、その働きによって彼女への嫌疑を取り払う。ラクスに掛けられた一切の疑惑を、誤解だったと認めてくれるのだと。

——だからステラはここに来た。その言葉を信じて、ラクスを連れ戻すために！

だがラクスはそれを聞いて、なぜか憐れみの目をステラに向けて来るばかりだ。なぜ？ ステラは本気で云っているのに！

「ステラにはわかるの！ 秘密のモバイルスーツを勝手に盗むってことが、どんなにいけないことなのか！」

それは彼女自身が、過去に犯した罪だから。

「その手引きをしたラクスが、どれだけ悪いことをしちゃったのか！ でも——」

「——わたくしは、手引きなどしておりません」

ステラの言葉を遮る非礼を犯してでも、ラクスは返答する。

まだ言い訳をするのか——！ 尚も現実を受け入れないようとしないうラクスへの怒

り、ステラは感情のままに云い募ろうとした。

けれども次の瞬間、ラクスは被せるように続けたのだ。

「キラにお渡ししただけですわ。新しい『剣』を」

「……………えっ……………？」

「今のキラには必要で、キラが持つのに相応しい『力』だから」

脈略のない、理解できない言葉の中身に、ステラは凍り付くしかない。

——キラ……………？

なぜ今、その名前が出てくる？ だってキラは——ステラにとって大切な親友は、太

平洋上の戦闘で、アスランに。

「いいえ、キラは生きていらつしゃいますわ」

数歩として後ずさり、戦慄に体を震わせ始めたステラは、ラクスの背後に亡霊でも見ているかのようにだったという。

——いったい、何を云ってる……!?

説き明かすような口調で、ラクスは続ける。鷹揚と、ゆったりとして——
「アスランと戦い敗れた後、ひどく傷ついた彼はやがて、わたくしの許に運ばれて参りましたの」

告げられた事實は、ステラにとっては重すぎる現実。

つまり、キラは今もまだ生きている? しかし、そうであるなら、先の言葉は——?
待つて欲しい。それでは「フリーダム」は——あの「悪魔」を、渡されたのは……!?
「思っただけでも、力だけでも駄目なのです」

彼女はその先を、畳みかけるように続けたのだ。

「だからわたくしは、キラに「フリーダム」を与えたのですわ」

血の気を失くしたステラの顔が、その瞬間、窓外に奔った遠雷の光で真っ白に染まった。一拍遅れて雷鳴が轟き、その凄まじい大音響は、ステラの中で大切な何かが崩れ去った音とよく似ていた。

——キラが……

——キラが「フリーダム」……?

途端に沸き上がる悪寒。吐き気を催すほどの不快感が込み上げ、恐怖が少女の全身を触手のように絡め取る。悪魔の腕は触れるところから彼女の身体を凍てつかせ、か弱い心を絶望で彩った。

「思いだけでは何も変えられず——力だけでは変えるべきものに気付くこともできません。だからわたたくしは、キラに新たな剣を——」

「う、うるさい!!」

ステラは怒鳴りを上げ、彼女の言葉を遮断した。妄言——そう彼女の妄言を振り払うにして、彼女に拳銃を突き付けていた。

「そんなの——！ そんなの、信じるもんか！」

「ステラ……?」

「『フリーダム』——！ やっぱり……やっぱりあいつは、ラクスが生んだんだ！ やつちやいけないことだったのに！」

ラクスの想定以上に、思いのほかステラが取り乱し始めたからか、このときばかりはラクスも僅かに困惑を露にしたという。語られた内容以上の衝撃を、このときのステラは受けているように見えたとも。

「『フリーダム』はキラじゃない——『フリーダム』は『フリーダム』なんだよ！ そもそも、おかしいから……っ」

ステラにとって「フリーダム」は、ある意味で絶対的な存在だ。誰彼構わず損害を与えて回り、己以外のすべてを見下すかの如く超然として振る舞う傲慢なる死の天使。繊細で、温厚で、今のキラにはとても似つかわしくない――。

混乱、もはや論理にすらなっていない反論だが、ステラはそれでも必死になつて抗いつつ続けた。たとえ見苦しくとも、そうしなければならぬ理由が、彼女にはあった。

「無用な犠牲を少しでも減らしたい、果てなき憎しみの連鎖を終わらせたい――そうしてキラは、今は「フリーダム」を手にして戦っています」

「でも「フリーダム」は、ステラを傷つけた！」

「貴方のことを知らなかった――あるいは、そうしなければならぬ事情が、何かおありになったからではないのですか？」

ラクスの発言は、若干の公平性を欠いてはいたが、思い返せば真実味を帯びているような感覚もあった。

それでもやはり、ステラはそれを認められない。認めるわけにはいかない。認めてしまったら――では、ステラをあつたとき殺したのは……？

「貴方は優しく、善良で、強い力もお持ちです。ですが真に大切なものは、その力を振るう、貴方自身の心の方なのです」

ラクスはそう云つて、ドレスの裾を持ち上げて立ち上がる。

それを見たステラは思わず身を引いた。ほんのすこしの、たったそれだけの動作にも関わらず、ラクスの気配に圧倒されたからだ。

「真に正しい道を、貴方自身で見極めなければなりません。ひとりの人間として、そして、ひとりの戦士として」

「ラクスは、自分が正しいって思えるの……?」

「貴方自身が、わたくしの言葉に共感することができるなら。——きつと、そういうことなのでしよう?」

逆に問いかけられ、ステラは目を伏せる。

「ナチュラルだから、コーディネイターだから。——そのような色分けなど、互いをよく知り合えば、はじめから無意味なことなのです」

その言葉が、ステラにとっては実感に思える。

少なくとも、ナチュラルを滅ぼせば戦争は終わると豪語する父や兄、家族達の言葉よりは。

「それなのに、相手を滅ぼすことしか考えられなくなっている世界。これに、わたくし達と同調することはできません」

「ラクス……!」

「戦争だから、敵だからと滅ぼし合うことは仕方がないことですか? たったそれだけ

の理由で人々が争うことしかできないならば、そのような理由の方が間違っているとは思えませんか」

無慈悲な聖女は、無垢な少女に問いかける。

「貴方は何を守りたいと願うのですか？ 家族であるアスランを？ それとも、貴方自身を？」

ラクスの目には、慰めも、叱責も、希望も見えない。

さながら、本当に聖職者のように変わり果てた、慈悲のなさだけが垣間見えるだけだ。

「……むずかしいこと、云われても……！」

ステラは、震える手を強く握りしめた。

「ステラには、分からないよ！」

「ですが——」

「——ちがうの！ ステラにはそういうの向いてないの……！ 何のために戦うとか、そういうのはどうだつて良かった……！ 今までずっと命令で動いてたんだ！ どんなに頑張つても、命令がなきゃ動けなかったんだ、働けなかったんだ！」

泣き叫ぶような声には、弱々しさが消える代わりに、異常な程の感情の昂ぶりがあつた。

「ステラはね、地球軍の強化人間なんだよ——」

「……ああ……っ」

「悪い人達に捕まって、体や頭、好き勝手に弄られた！ だから、もうすっかり頭わるいの！ 人間じゃないみたい！」

ステラは、自分が何を云っているのか分からなかった。パンクしかけた感情が、あまりに強くて論理の先に立っていた。叫んだ先に、果たしてラクスへ何を訴えたかったのか、このとき当人ですら理解できていなかった。

「正常に成長できてないんだよ！ あのとときから、ステラの時間は止まってるの！ 何が正しくて、何が悪いとか……そういうこと、もう考えるのイヤ……疲れちゃったんだ……」

平和を望みながら、それでも戦争の中で敵を排除する程度にしか能力のない自分。せいぜい人殺し程度にしか役立たないという自己嫌悪。

——結局、与えられた命令どおりに敵をなぶる歯車でいることが、ステラにはお似合いなんだ……！

少女は強化人間たる存在が、人間として破滅した結果であることを知っていた。それでもラクスは、そんな少女に同情はしない。ただ真実を差し出すようにして、諭すだけだ。

「怖いのは、閉ざされてしまうこと。こうなのだ……ここまでだと、終えてしまうことで

す

「――」

「貴方はまだ、みずからを閉ざすには早すぎます。貴方は前に進んでいらつしやいますわ？　――だって、そうまでして悩んでいらつしやるのですから」

救いの言葉に、ステラが呻いた。

「変わることを望むのなら、私達と共に道を捜しましょう？　貴方自身が、正しいと思える道を――」

「でもステラは、アスランから離れちゃいけない――。だから、ザフトを出ちゃいけない……気がする……」

――アスランを、守らなくては。

最初は何となく、漠然とそう感じていただけだった。しかし、今になってその思いは彼女の中で強迫観念となりつつあり、今の彼女をザフトという組織に縛り付け、支配する呪いのようにもなっていた。

「ステラは、アスランを守らなきゃいけないんだ」

ステラにとって「まもる」ということは、一緒にいるということだった。かつて自分にその言葉を投げかけてくれた少年が、ずっと――そして最期の瞬間にも――自分の傍に寄り添っていてくれたから。

だからステラは、アスランの傍に居なければならぬのだ。彼がザフトとしてある限り、ステラもまたザフトとして戦い続けなければならない——たとえ彼らの理想とする世界や未来に、彼女自身が全く賛同できなくとも。

「今のアスランは、ステラよりずっと考えることをやめてる気がするけど……！ 何考えてるのか全然わかんないけど……！ それでも——」

「——貴方のお兄さん、ですか？」

「そ、そう……家族、だから……」

「……それは」

ステラが口にした答えは、もはや理屈でも論理でもなかったが、家族としての情愛に起因するものであることは確かだった。

適切に言葉に表すことができず、しかしながら、言葉が不要というケースとて往々にあるのだろう。それは家庭内において兄弟や姉妹を持ったことのないラクスには残念ながら理解できない類の情操だったが、だからといって、このとき彼女の目の前で壊れてしまいそうな「妹分」を見捨てられる程に、ラクスという少女は無慈悲ではなかった。

「同調と心中は違います」

「——！」

「貴方自身、心が壊れるまで無理をして、アスランと同じ道を歩む必要があるのですか？」

そこまで云われ、ステラは口を噤んだ。

それは、かつてニコルに云われた言葉とよく似ていた。

「他ならぬ家族である貴方が、今のアスランは間違っていると感じているのなら——それを正すこともまた、正しい行いとは云えませんか」

はつきりと宣告され、ステラは思わず息を呑む。

「家族には、家族にしかできないことがあるでしょう？ 現にパトリック様は、レノア様がお亡くなりになられてから、すっかり人が変わってしまった。きっと、アスランもそんな御父上の姿につられ、戦争という非常な環境もまた、彼をそう変化させたのでしよう——」

それでも——とラクスは続けた。

暴走するパトリックを止めるのできた人物——レノアは既にこの世にいない。

けれども、アスランは違う。暴走するアスランを止められる人物はまだ、ここにいます。今、ラクスの目の前に。

「貴方までそれにつられる必要がありますか。今のアスランの志に、心中する必要がありますか？」

「……！」

「生前のレノア様は、貴方に何をお望みになりましたか。貴方の心は本当に、ナチュラルの滅んだ世界をお望みですか？」

パトリックが、アスランに望んだ理想像がある。

——戦場における、揺るぎなき最強の戦士であること。

かたや、レノアがステラに望んだ理想像もある。

——家族を支え、聖く清らかに生きる賢女であること。

『夜明けの空に、太陽がひとつじゃ寂しいでしょう？ だから、それを支える無数の星があればいい』

ステラがかつて、レノアに教えられた言葉——兄妹の名前の由来になった一説。

ほの暗い宵明け、夜明けの太陽はいつだつて深淵なる闇と隣り合わせだ。暗夜の中に浮かんだ光明は、不確かで、そして危なっかしい孤独な光。

だからこそアスランは闇に呑まれた。深くて昏い時代の闇から彼を守ってくれる存在が、あのときは彼の近くにいなかった。

「アスランの闇を討ち祓つてでも、光り輝く貴方であつてくださいな」

祈るような声を掛けられ、ステラはハツとする。

——誰もが宇宙の星のように、等しく輝ける時代がくることを願っていた。

ステラという名は母親の、レノアの祈りの結晶だった。

「わたし、は」

ラクスの言葉を受けて、ステラの身体は震えていた。

——本当はステラだって、こんなことばかり続けていたくはなかった……！

ステラの脳裏に、ひとりの少年の面輪が浮かぶ。

その少年は、ザフトの軍人でありながら、地球軍に所属していたステラのことを必死になつて助けようとしてくれた。たとえ友人に睨まれようと、上官に罵られようと、彼は本気で自分を守ろうとしてくれた。

——軍属なんて関係ない、人種だって関係ない……！

真つすぐに優しい——そういう温かな思いやりをステラは「彼」から教わつたから、決めつけるみたいに『敵』を作り続ける、今のアスランの考え方が嫌いだった。——そう、大嫌いだつたんだ……！

「ステラは……そつちに行つても、いいのかな」

今になって、ようやく思い知らされる。

互いに分かり合おうともせず、一方的に蓋をしてしまう彼らのやり方は間違つていゝる。自分にとつて都合の悪いものをこうと決めた生贄に被せ、消し去つてしまおうとするやり方に、ステラは賛同できない。どんなに家族が大事でも、その家族が無暗矢鱈と『敵』を作り続ける現実の方が、ステラには耐えられない！ だから——

「ラクス達と一緒に行って、いいのかな……!?」
所在なげに。

儂げに訊ねくる少女に、そのときラクスは、笑顔を以て答えようとした。

そのときだった。ダンスホールの扉が蹴破られ、そこから不躡な足音がホール中に響き渡ったのは。

ラクスはさつと音の目を向け、ステラは驚きに跳ね上がる。

そこから洗練された動きで一氣に駆け寄ってきたのは、武装した数名の男達だった。見慣れない黒色のノーマルスーツを着用し、暗視ゴーグルまで着用した大仰な装備。男達はステージまで一氣ににじり寄ると、ステラ達を包囲するようにしてその動きを止めた。

「……………えっ……………」

頭の熱が冷めてゆく。唐突に現実引き戻され、そのときになり、ステラはようやく反応することができたという。慌てて身構えたステラだったが、それは彼女にしては遅すぎだった。

——なんだ、こいつらは……?」

ラクスを庇うように前へ出る。ステージ目下の男達が構えている銃口は、ステラを通り越し、ラクスへと向けられていることが判ったからだ。

暗殺用に仕向けられた迷彩装備、訓練が徹底されたであろう無駄のない動き——それらから判断するに、現れた者共は明確に素人ではない。だからこそ警戒を色濃くするステラに向かつて、男のひとりが慇懃な口調で口を開いた。

「いやはや、見事でした。流石はラクス嬢の将来の義妹君——と云ったところですか。こちらの手間を省いてくださり、助かりましたよ……」

どこか愉しげに、しかし侮るように紡がれる男の言葉を受け、ステラはやはり困惑するしかない。まったくもって状況が飲み込めない彼女だが、それでもラクスへ釈明することはできた。彼女にだけは、誤解と不信を与えたくはなかったから。

「ら、ラクス、ちがうの……。ステラ、こんなやつら知らない——」
「——ええ、そうでしょうとも……」

あつさりと云い切られ、ステラはやはり困惑の声を漏らすしかない。

どういうわけか、このときのラクスはステラ以上に、ステラが置かれている状況を把握している様子だった。

「こいつアはまた、随分とニブいお嬢ちゃんだなア」

そのとき武装した男達の背後から、ひと際異彩を放つ面妖な男が姿を現した。

「その男と面識があるのか、ラクスはその面妖を認めた途端——彼女にしては極めて珍しく——たしかな嫌悪をその表情に滲ませていた。

それは時間にしてほんの一瞬、瞬きする程の時間も無かった。ラクスの方もすぐに取り繕って表情を隠してしまつたが、そのときステラが見たものは、極めて少女らしい人間的で生理的な拒否感に違いなかつた。後にも先にも、そのような生身の感情をラクスが浮かべた瞬間を目撃したのは、ステラにとつては初めてのことだ。

アツシユグレーの短い髪、顔には宗教的にも思える動物模様のタトゥーが彫られ、野太い眉毛はコブラのような蜷局を巻いている。少年向けの漫画作品に登場する陳腐な悪役そのままと云つた風な風貌は、ステラから見ても、率直に云つて気味が悪いと云えた。

「ザフト軍特務隊 “F A I T H”^{フェイス} 所属、アツシユ・グレイさんですね」
「憶えてらっしゃるとは、光栄ですなあ。国家反逆罪の凶悪犯、ラクス・クラインさんよう」

ラクスは心中、この男にだけは凶悪犯と呼ばれたくないと思つた。

目の前にいる男は、そういう男だつたのだ。誰何するステラに、ラクスが密かに耳を打つ。

「ザフト特殊部隊の長。『合法的に殺人ができる』——たったそれだけの理由からパイロットに志願した危険人物です。生粋の殺人快楽主義者……とでも云うのでしょうか」
酷い云われようだが、大方事実である。

噂にされている当の男は、嘲るように下品な笑い声を挙げた。

「しっかし、まさかこんな閑散地ところにクラインの隠れ家があるなんてな。なかなかどうして、俺様好みの良い趣味をした屋敷だ——後で買い取って、個人的に住んでみたいくらいだぜ」

審美眼があれば、それは違った見方ができるのだろうか。このときのステラをして不気味にしか見えない周辺の汚らわしい壺や絵画、人形等の高級調度品の数々をアツシユは熱心に眺めながら、大手を叩いて云ってみせていた。

——いや、違う……! !

ステラはやはり困惑しながら、アツシユの発言を聞き咎める。

この屋敷は、そもそもクラインの隠れ家ではない。もともとは、パトリックが個人的に所有していた別邸なのだ。貴族という人種は客人をもてなし友好の示すのと同時に、招いた相手を往々に委縮させたがるものであり、云われてみれば薄気味の悪い黒々しい美術品の数々は、正しくそういった目的のために装飾されたものでもある。

それもこれも、長らく放置されて今では埃を被っているが、それほどまでに等閑視さ

れたこの屋敷を、ここで過ごしたことのあるステラ以外の人間が——どうして彼らのような部外者が突き止めることができたのか……？

「ははあ、まだ分からねえかなあ？」

アツシユは嘲り、一方でラクスは目を伏せる。一拍置いて、アツシユは彼女に真実を告げる。ステラにとって、信じがたい事実を。

「何もかもテメエの親父の指示だよ！ アンタを尾行^{つけ}りやあラクス・クラインの潜伏先まで勝手に案内してくれるって、パトリック・ザラから指示を受けてたんだよオ！」

パトリックは、間違いないくステラのことを信用していたのだろう。けれども、あくまでそれは『案内役』としてであって、そこから先の——パトリックが最も企図する——部分については、彼女は全くといっていいほどに期待されていなかったのだ。

愕然とするステラに対し、ラクスは最初から気付いていたようだったが、こればかりは思うところがあつたらしい。ひどく労るような視線をステラに向けていたという。

「オレたちは元々、そのラクス・クラインの暗殺任務を請け負ってな。だが、まあ……なかなか女狐が尻尾を出さねエもんで、とある重要施設の防衛に回されちまつてね」

ステラは、我に帰ったように顔を上げた。

「あつ、暗殺……？ ふざけるな！ ラクスはまだ、何にも伝えてないのに！」

「国家反逆罪の逃亡犯だぜエ!? 情状酌量の余地が、どこにあるってんだ!」

「お父さんは、そんなこと云ってなかった!」

「それも嘘だよ! 分かれや小娘エツ!!」

云われ、ステラは鈍器で頭を殴られたような衝撃を受ける。当事者への尋問もなく、時間をかけて検証したわけでもない。それなのに男達は、こうして一方的に襲撃を仕掛け、ラクスに銃を向けている!

父親による、明確な裏切り。絶望に囚われそうになる少女に向け、野獣のように餓えた眼をした男は拳銃を構えながら、虎のようににじり寄る。

「オラ、どけよ! なんならテメエも、オレのコレクションに加えてやってもいいんだぜ!」

コレクション? その意味までは掴みかねたステラであったが、にじり寄るアツシユの目には、自分達に対する明確な害意と殺意があった。

だから、ステラはその場を退かない。

少なくとも、ラクスはこんな場所で殺されている人間ではないと思つたからだ。少なくとも、こんな——馬鹿みたいな男達に。

「いやだ!」

「ようし、死ねやア!」

決然として、ステラとアッシュユが敵対した次の瞬間、ホール全体に銃声が鳴り響いた。だが、それを発砲したのは、このときのステラでもアッシュユでもなかった。銃弾はホールの二階、優雅なテラスから放たれたものだ。撃ち出された凶弾により、ふたりの襲撃者がどうと斃れる。ステラは敵対する襲撃者達の間、緊張と動揺が奔ったの感じた。

けれども反対に、ラクスがまるでビクつかなかったところを考えると——成程、銃弾を放ったのはラクスの護衛であり、伏兵らしい。然し者のステラでさえ、今になるまで気付けなかったほどの。

「ああん!」

そこから火蓋が切つて落とされ、無遠慮な銃声がパーティホールを激震させた。ザラの配下とクラインの配下、二分化された「プラント」の派閥が激しく対立し銃撃戦を交わす。

ステラもまたラクスの護衛達の援護に回るが、彼女が援護するまでもなく、地理的不利を被っていたアッシュユの部下達はほとんど一方的に打ち斃られていった。

しばらくすると、ホールは静寂に包み込まれた。パトリックの配下で、その場に立っている者はいなくなっていたのだ。クライン派の兵士達は安堵し、構えた銃をおもむろに取り下げ始める。その中のひとり、赤髪の青年マーチン・ダコスタが、安堵のため息

を漏らした。

「よし、終わったな」

ダコスタは銃を下ろし、舞台袖に退避していたラクスの許まで向かい始める。

「……!?」

けれどステラは、そのとき、やけに妙——というより、嫌な胸騒ぎを感じていた。

——なんだ……?

電撃のような刺激が頭の中を駆ける。ステラ自身の立っている、あるいは見ている場所ではない。どこか——別の空間を空から俯瞰しているような、気配を通じて把握したような感覚に囚われたのだ。

ステージの下手側、銃撃によつて叩き割られた採光硝子——その向こうに広がる広大な緑の庭園——覆い囲む外塀の更に向こう側に、物騒な気配を察知する。空間を正しく認識できるその力はまるで、遠くに目がついたような感覚であつたという。

「アイツ、は——?」

不可思議な感覚に裏付けるように、ステラはパーティホールを見回した。そして、射殺された敵兵の数があまりに少ないことを理解したとき、彼女は先の感覚が、紛いものの類ではないと確信する。

「ラクス!」

舞台袖のラクスは、状況が終わったと信じ、安堵の表情を浮かべていた。そして、ステラはそれを許さなかった。

——まだ、終わってない！

ステラはラクスの腕を掴むと、ほとんど彼女の意志を無視してその身を強引に連れ出していった。パーティホールを突っ切り、ドアを蹴破るようにして突破した二人の少女は、照明のない屋敷の薄暗闇の中へ消えていった。

そうして広間を後にしてしまった二人を、今まさにラクスの許へ駆けつけようとしていたダコスタはしつかり目撃していた。そしてすぐに、素つ頓狂な声を上げる。

「はあ!? 何やってんだよ、あの娘は!」

ダコスタの任務は、ステラと会見することを望んだラクスの身辺警護である。

彼らは当然に、この会見場所を突き止めることのできるステラの個人的な来訪を——そして彼女が期せずして連れてくる厄介な野次馬達の迎撃を——想定していた。だからこそホールの二階に身を潜め、会見が終わるまでは静観を決め込んでいたのだ。ラクスの身に危害が及ぶ寸前になって作戦を開始した彼らは、目論見通りに暗殺部隊は蹴散らしてみせた——これをもって、この件は解決したはずだった。

「段取りと違うぞ! 敵はもう、すべて片づけたじゃないか!」

ダコスタをはじめ、護衛達の覚悟は生半可なものではなかった。ラクスに危害を加え

んとする者が現れた場合、それが誰であつても構わず「対応」してみせる——それほど
の気概を持つて、彼らはこの会見に臨んでいた。

けれども、会見の内容から察するステラは、ラクスを敵に回す気はなかつたようだ。
だからこそダコスタは彼女の動向を監視するだけに留め、だが、そうして監視した先の
ステラは、混乱に乗じて最後にはラクスを連れ出してしまった。自分達の隙を見て、自
分達の監視の目が届かない場所へ——まさか。

「まさか、あの娘——！」

「クソツ、ラクス様を連れ戻すぞ！ やはりザラの名を持つ娘、信用するべきじゃな——
」

すべてを云い切る前だった。

次の瞬間、ダコスタは凄まじい爆風に吹き飛ばされた。

パーティホールを後にしたステラは、ラクスを連れ、エントランスの雅な階段を勢い
よく駆け上がった。よく

窓外から景色を見れば、雷がごうごうと轟き鳴っている。強引に連れ出される形に

なったこのときのラクスは、雅なドレスの裾で転ばないよう細心に注意を払い、元から円らな瞳を、さらに丸くしているようだった。ふたりは共に走っていた——とはいうものの、このときのラクスの姿勢はまるで、常人を越えた足の速さで駆けているステラにしがみ付いている、といった風でもあった。

「ステラ?! いったい、どこへ……っ?!」

銅細工の厳かな像の立ち並ぶ、またも不気味な廊下を突っ切っていたふたりだったが、そこでラクスが荒い息をこぼした。彼女は流石に事態が呑み込めていなかったのか、混乱のあまりステラに停止を求めていたのだが、ステラの方は決して足を止めようとはしなかった。まるで何かに焦っているかのように。

(——これでは、予定と違いますわ……!)

予定どおり、ステラとの会見を果たすことはできた。彼女に伝えたかったことも、すべて伝えることができた。そして、彼女を尾行する不埒な輩が存在することも想定していた。

だから本当に、ここまでは彼女の計画どおりだったのだ。

ラクスは後方からステラを追いかけるような位置のため、彼女の表情や感情までは読み取れなかったが、ステラのこの突飛な行動こそが、唯一の計画外だ。無理を云って護衛を頼んだダコスタあたりは、今頃その顔を真っ青に引き攣らせているかも知れない。

「わたくしなら大丈夫ですわ……！　お屋敷には、護衛の方々が控えていてくれたのですから！」

用意は周到だった、とても云いたげなラクスがはつきりと口にした次の瞬間、彼女はみずからで発したその言葉を、身をもって後悔することになる。

「!?」

次の瞬間、凄まじい爆発音がふたりの耳に轟き渡った。

間近で起こった大爆発と大振動が、その先の言葉を封じた。爆撃によつて発生した衝撃波が、野晒しの少女達へと肉迫する。反応が遅れたラクスに、ステラが咄嗟に覆いかぶさつて爆風を背に受ける——が、少女達の軽やかな体重はあまりに強い衝撃波に持ち上げられ、空中まで吹っ飛ばされた後、一拍おいて床に叩き付けられた。

「な、なにが?」

台無しにも乱れた髪をすきながら、ラクスが上体を起こす。

顔を上げ、来た道を振り返ると、さつきまで彼女達が居合わせていたパーティホールの方角が地獄の業炎に包み込まれていた。外壁は破られ、亀裂から身を灼くような熱風が吹き荒ぶ。天井は崩落し、がらんごろんと瓦礫や重量物、シャンデリアまでもが落下する音が絶え間なく連続していた。

「っ……………!」

大量の火薬が詰め込まれた噴進弾が、屋敷に撃ち込まれたのだろう。不幸中の幸いは、悪天候の雷雨が爆発の威力と爆炎の氣勢を大きく削いでくれたことだろうが、いずれにせよ、そうした事実は彼女達の慰めにはならなかった。

「次はモビルスーツがくるよ、きつと」

けろつとして、聞き捨てならない予見を呟いたステラの言葉に、ラクスは愕然とするしかない。では、彼女にはこうなることが判っていたのか？ 撃ち倒したホール内の男達はあれで全員ではなく、外にも別動隊がいることを——？

——そう云えば、アツシユの姿を見なかった……。

今になって、ラクスは思い知る。歯噛みしながら、悔いたような表情を浮かべる彼女に、しかし、ステラはそつと手を差し伸べた。この場にあつては何よりも頼もしいその手に気付いて、ラクスはハツと顔を上げる。

「だいじょうぶ。ラクスは、ステラがまもるから」

「ステラっ……！」

「ぜつたい、死なせないから」

ラクスの部下達は、確かに相応の覚悟をもってラクスの身辺警護に当たっていた。下手を打てば、ステラとて構わず「撃つ」——敵ではないが、まだ味方でもない——そうした明確な線引きを、彼らは実際に行っていた。

——その覚悟の程は、立派である。

——しかし、覚悟だけではどこにもならないことだつてある。

護衛のために機銃しか用意していなかった彼らが、たとえば先の無反動砲のように、形振り構わず重火器をぶちかましてくる特殊部隊に対し、どれほどに有力であるのか——いや問題はそれ以前であり、モビルスーツを前にして、生身の人間に何ができるといふのか……？

「……!？」

口惜しく考えていたステラの思考を遮らせたのは、気が付くと屋敷全体に立ち込めはじめた煙幕だった。だが火気を含んだ黒煙とは違う。視覚や嗅覚、強烈なまでに五感を刺激してくるその煙は——催涙ガスだ。

ガスが充満するよりも先に、ステラは近場にあつた書齋までラクスを引き連れた。その室内では大きな書窓が彼女達を歓迎し、それはおおよそ、女子ふたりが通り抜けるには十分すぎる程の規格があつた。

「えっ」

短く抗議の声を挙げたラクスの声を無視して、ステラは窓を開けた後、外に向かつて駆け出した。ラクスを抱き上げたまま、土砂降りの外界へと飛び降りたのである。

それは明らかに二階ほどの高さからの落下であつたが、ステラは難なく中庭への着地

を決めた。ラクスを芝生に降ろし、屋外に飛び出した彼女達を待ち受けるように、激しい暴風雨が少女達の身体をばちばちと叩きつける。

「……走ろう」

「は、はいっ」

何事もなかったかのようにあつさりと云い捨てたステラに、ラクスは戸惑いながらも、手を引かれて激しい雨の中を走り出した。

アツシユ・グレイは銃撃戦には参戦せず、思わぬ伏兵がいると判った時点で屋内の部下達を見捨て、そそくさと屋敷から退散していた。彼は賢明にして狡猾な男でもあり、あらかじめ外で待機させていた軍用ジープに乗り込んでいたのだ。

補助席には彼の身長ほどある無反動砲が準備され、彼はにやりと笑ったのち、その大きく重い砲身を肩に抱え上げた。

圧倒的な砲撃を、まずはダンスホールへと撃ち込んでみせる。ピユウと高い音を鳴らした後、豪快な爆発が巻き起こり、屋敷は一気に火の海と化した。ラクスが用意した伏兵達を、これにて一網打尽にすることができただろう。

「うつひやー！ たまんねエなア、オイイ！」

破壊衝動を満たしたことで満悦するアツシユは、ついで部下達に指示を出す。

「催涙弾を投げ込め！ 生意気な小娘共を、屋敷の中から炙り出せ！」

確実に目標を仕留めることができるなら、手段は問わない。

催涙弾を屋敷の中に投げ込んだ後、アツシユはやがて、屋敷の裏手に待機させていた部隊からの報告を耳にする。ガスに耐えかねた二名の少女が、裏庭に脱出を図ったというのだ。

「裏庭の方か！ 車を回せ！」

ジープの運転手に命じ、アツシユは砲を担いだまま裏庭の方へ回り込んだ。

そこには、こちらに背を向け、必死に逃走を図っている二人の少女。金の髪の少女の足は速いが、桃の髪の歌姫の方はそうではない。むしろ場違いなほど御大層なドレスに身を包んでいるため、余計に足が遅いように見て取れる。

「ボディーガードが小娘ひとりとは、堕ちたモンだなあ、平和の歌姫も！」

えげつない歪みを口元に奔らせる。

アツシユはふたたび無反動砲を構え、その照準先はただひとり——ラクス・クラインだ！

「ようしお嬢ちゃん共、腰抜かすなよお？」

無反動砲が火を噴く寸前のことだった。得体の知れない球体がジープの背後から回り込み、飛び跳ねながらアツシユに体当たりを仕掛けてきた。

如何なる豪傑でさえ、痛がつて泣いてしまふとも云われる人体の向こう脛。ここに直球の体当たりを受け、アツシユの照準が狂った。

「ぬおわッ!？」

狂ったままで発射した弾頭。その弾道は大きく右に逸れ、砲撃はラクスとステラではなく、既に炎上中の屋敷へと着弾した。

またも凄絶な大爆発が巻き起こり、吹き飛ばされた無数のガラス片が、階下を駆ける少女達に容赦なく飛び掛かる——!

「!?! 伏せてッ!」

ステラが叫び、少女達は頭を抱え、芝生に飛び込んだ。

一方のアツシユは、ぶつけられた向こう脛を抑えながら激怒している。いったい、何が自分の邪魔をした? 苛立ちながら目を向けた先、そこにはびよんぴよんと跳ねながら、ステラ達の方へ逃げていく海色のロボットがいた。

「なんだ、あの不細工なロボットは!?!」

「——ハロ!?!」

思わぬ応援を見つけ、ステラはただ驚いた。

——今、ハロがいなかったら……!!

おいで! と叫ぶ必要もなく、海色のハロは真つすぐにステラの方に向かってきている。だが、

「チイツ!」

——アイツのせいで、砲弾を外しちゃった!

怒りに震えるアツシユの目は血走り、ギラギラとした憎悪を雨の中に光らせている。彼は即座に拳銃を引き抜き、撃鉄を起こして身構えた。その照準を過たず、自発的にパウンドを繰り返して退散してゆく海色の球体に固定する。

二発の銃声が、連続して轟いた。そして、ステラの手にすつぽりと収まるよりも前に、海色のハロはその凶弾の直撃を受けていた。球体のボディはあろうことかステラ目の前で粉碎され、ボディごとにはじけ飛んで四散してしまった。

「——」
対するアツシユは無反動砲を路面へ打ち捨て、今度は銃の照準をステラ達に向けようとして——できなかつた。

次の瞬間、アツシユの乗るジープがスリップし、コントロールを失つて暴れ出したのだ。どうやらジープの車輪——それも奇妙なことに、前輪がふたつとも破損したらしい。暴れ出す車にしがみつくようにして、アツシユは愕然とする。彼が狙っていたはず

金髪の少女が、激しい怒りを表情に浮かべ、こちらに拳銃を向けていた。

(あの小娘、あの距離から狙いやがった——!?)

そして、車輪を狙ったものとは違う、最後の銃声が鳴り響く。

怒りを——ともすれば憎しみさえ宿したステラが放った最後の銃弾は、たった今ハ口を撃ち碎いたアツシユの右頬を喰い破らんとばかりに、その頬のすれすれを通り過ぎて外れていった。

「な」

逡巡する間も動揺する暇もなく、まともにハンドルを切ることもままならず、アツシユとその部下の乗るジープは、トップギアのまま屋敷の外壁に激突した。

ステラは後ろ髪を惹かれる思いであったが、この場に残ったところで、できることは何もなかった。拳銃をその場に投げ、ふたたび彼女はラクスの手を取る。

自分をここまで導いてくれた、海色のハ口に別れを告げ——少女達は、みるみるとアツシユから遠ざかっていく。

「クツソオオオッ！」

瓦礫に突っ込み、むち打ちになつた体を煙の中から甦るように強引に引き立たせ、アツシユは発狂した。

「モビルスーツ隊を前に出せ！ 外に待機中の奴らにも打電しろ！」

——もう容赦はしない！ 絶対に抹殺してやる！

「ラクス・クラインは後回しでもいい！」

「へっ!!? しかし、我々の目標は——」

「いいんだヨ！ まずはおの忌々しい金髪の小娘からだ！ “リジエネレイト”でひねり潰してやる……！」

そのときのアツシユの眼は、まるで、餓えた野獣のようだった。

——いったい、これからどうすればいい？

逃げ惑いながら、ラクスはそんなことばかりを考えていた。

無理をいって護衛任務に借り出した、ダコスタ達は無事だろうか？ この時点でラクスは、ステラがいるから——そして、目の前で先に散った海色のハロがいてくれたから——命を繋ぎ止めていられるようなものだった。

けれど、それもこれも限界が近づいていることを、ラクスは嫌でも実感していた。暗殺に特化したコーデイネイターの特務部隊が、これまでに加えてモビルスーツまで持ち出してくれば、いよいよ自分達には対抗する術がない。

「ス、ステラ……。これから、どこへ……。？」
「……………」

不思議なことに、このときの少女達の様相は、じつに対照的であったという。

不安と焦燥に震えているラクスの傍らで、ステラはこのとき一切として取り乱していなかった。先程のダンスホールの中では、全くもって立場が逆だったというのに。

今のステラの面輪に浮かんでいたのは、困難を乗り越えようとする強かさや逞しさだった。円らだった双眸は戦士然とした鋭さを湛え、濡れそぼった金髪の間髪に覗くすみれ色の瞳には、絶対に歌姫を守り通さんという、騎士の如き強い光が見える。

豪雨の中を走り抜けながら、そうして二人は、やがてある地点まで辿り着いた。白銀のモビルスーツの隠し場所——ラクスの目の前に、片膝を折った鋼鉄の巨神が待ち構えていた。

「これは……!？」

ラクスは目を見開き、その巨神を見上げた。鋼鉄の四肢と、背部には一対の大振な銀翼。これを飾る羽毛のように、半月状の六枚羽根が折り畳まれている。

ザラ政権主導の許、アプリリウス市で開発されたザフトのモビルスーツのひとつ——「フリーダム」でも「ジャスティス」でもないその最新鋭機のことを、やはり、ラクスは事前に知っていた。すっかり濡れて重たくなった前髪を片側に寄せ、彼女は驚きを目

を凝らす。

「ZGMF-X08A……!? なぜ……!?」

流石のラクスも機体名までは知らなかったようだが、考えてもみれば、この機体が命名されたのは本当について先日のことだった。ステラは改めてラクスの横に立ち、その名を明かす。ラクスはやはり、心底意外そうな驚きの表情を浮かべていた。

「グレイドル——これを、あなたが？」

ラクスは鋼鉄の巨神を見上げ——まさか、と思った。

しかし、何かを考えている暇もなく、またも彼女はぐいと抱き上げられ、そのまま開放されていた。グレイドルのコクピットの中に連れ込まれた。ステラに率いられ、モビルスーツの中にぎゅうと押し込まれたのはラクスにとって二度目である。その強引さに妙な懐古感を憶えてしまった彼女の傍ら、機体の操縦者であるステラは、どこか熟練者のような手つきで機体を立ち上げ始めていた。

「……えっ……?」

さりとて「グレイドル」の操縦系はザフトのものであり、当然に「グレイドル」自体が新型であることから、ステラには扱い慣れないものであるはずだ。けれど、目の前のステラは一切気にした風ではなく、そのあまりに実践的で円滑な起動シークエンスは、ラクスをして若干の疑念を抱かせるものであった。

不思議がつている彼女をよそに、ステラはやはり小慣れたようにシート後方の収納スペースからパイロットスーツを掴み取る。ぐいとそれとラクスに手渡し、受け取った方はきよとんとした。

「動くから……！ 戦うことになる」

それはつまり、パイロットスーツを着ろ、ということか。

「シートの後ろに」

「……！ わかりました」

円滑に機体を立ち上げていくステラとて——まさかこんな形で、初陣に出ることになるとは思ってもいなかった。しかしこのとき、不思議と後悔はなかった。

——ステラ達の初陣は、敵を斃すためのものじゃない。

明確にそう思えるのは、今ステラの背後に立つ歌姫を——ラクス・クラインを『まもる』ためだという確信があるからだ。

スペックは既に入っていた。アプリリウスを出立する前に完了はしているが、再確認の意味を込め、ステラは機体を構成する全オペレーションシステムの確認作業を行ってゆく。

滑らかにキーを叩き、モニタを眺めていた彼女の視界に、濡れそぼった金髪が垂れ下がって邪魔になる。無意識のうちか、手で透き上げ、小さな額を出したその敢然とし

た少女の表情を見て取って、ラクスは時の流れというものを実感したという。

——この娘は、どんどん大人になっていく……！

今は儚い少女でも、みるみる大きくなっていく存在に思える。ラクスはこのとき、ただ純粹に、そのことを微笑ましく思った。

全チエック作業を終え、機体の電源が灯る。手許のモニタが命を吹き込まれたように明るくなり、フェイズシフトが展開。鋼鉄のモバイルスーツは、そうして一斉に白銀色に彩られた。

——。

[G]eneration

[U]nsubdued

[N]uclear

[D]rive

[A]ssault

[M]odule

——。

OSに浮かび上がる文字列を見て、ああ、とラクスは声を漏らした。

「——ガンダム……！」

豪雨の中、新たな「G」が立ち上がる。

薄暗い嵐の中——白銀の威容は、闇を照らす空の銀盤のように輝いて見えた。ステラは背後を振り返り、ラクスの覚悟を問うていた。それはまるで、出撃許可を求める戦場の兵士のようにすらあった。

「——ステラが、剣になる」

「——なら、わたくしが貴方に命じます」

それは、ふたりで決めた道でもあった。

ラクスは嵐の空を決然と見上げ、凜として声を放つ。

「「グレイドル」、発進してください！」

号を受けて、白銀の巨神は立ち上がり、大空へと高く飛翔した。

眩いまでの、鮮烈な輝きを放つ白銀色は、それ自体が曇天を照らす満月のように見える。飛翔する白銀の機影を捉えた者達——ザフトのモビルスーツ部隊が一斉に銃を構え、地表から少女達を狙撃した。ザフトの新型モビルスーツ、ZGMF-600「ゲイツ」である。

——今度こそ、まもるために戦う！

ステラはこの瞬間から、新たな剣を何のために奮うのか、強く心に誓った。

「一緒に行こう、グレイドル！」

仄暗い宵闇の中――

白銀の“グレイドル”が、藍色の空へ駆け上がった。

『アトミック・クルーガーズ』A

白銀の巨人、ZGMF-X08A “クレイドル” ——

吹きつける雷雨に打たれながら、ラクスはこれを見上げ「まさか」と心中に云った。そもその話のはじめ、彼女は “プラント” において情報収集などを行っている “ターミナル” と通じており、ザフトが極秘に進めていた『新型 “G” の開発計画』について、詳細なデータを掴んでいた。

Nジャマー・キャンセラーが解禁された昨今、モビルスーツの動力に核エンジンを採用するのは、技術的にそう難しいことではない。核分裂反応により生み出されるエネルギーは無尽蔵なものであり、これをバッテリーとして利用すれば、その恩恵を受け取った機種は補給不要のスタンドアロンへと化けるだろう。

『これからの戦局は、こうした核動力機こそが支配する』

パトリック・ザラはそう断じ、ZGMF-Xナンバーズ——通称『ファーストステージシリーズ』——の開発計画を始動させた。

そしてC・E・71年、6月上旬現在、このシリーズ目を構成するモビルスーツは合

計で七機とされている。ここより先は、少なからずラクスがその情報を掴んでいる機体群の紹介である。

YMF—X000A “ドレッドノート”——

Nジヤマーキヤンセラーと核ジェネレーターを実験的に搭載した、史上初の核動力モビルスーツ。核エンジンの具合をテストするアグレッサー機のため、試験が終わった現在は分解され、表向き廃棄処分されたことになっている。

ZGMF—X08A “クレイドル”——

ドレッドノートで得た運用記録を基に開発された、正式なシリーズの第一機。地球軍から奪取したG兵器の技術や特性を統合し、何よりも信頼性を重視して開発された機体。シリーズ機で構成された混合部隊の指揮、統率を行うべく最初に完成した機体だったが、諸事情により工廠内に凍結されていた。

ZGMF—X09A “ジャステイス”——

格闘・実弾・ビーム兵器をバランス良く備え、対迫撃戦において真価を発揮する機体。多彩かつ強力な武装を全身に満載した、中・近距離の白兵戦に特化した性能を持つ。アスラン・ザラが受領した後は獅子奮迅の活躍を見せ、ザラ政権の尖兵にして剣、ザフト軍の勝利の導き手として畏怖されている。

ZGMF—X10A “フリーダム”——

多数の火器を用いた制圧戦、ハイマツトモードによる驚異的な高機動戦を得手とする機体。多重砲撃による単機での制圧能力に秀で、主に遊撃戦において本領を発揮する。戦争を止めようと立ち上がったキラ・ヤマトの翼として、アラスカに降下した後はアーケンジェルと共にオーブ連合首長国に渡ったと聞く。

アプリリウス市で製造された機種はこの四つに限られるが、この他にも「どこか」——秘密裏の場所において、さらなる核動力機が開発されたとの情報もある。

ZGMF—X11A “リジエネレイト”——

ZGMF—X12A “テストメント”——

ZGMF—X13A “プロヴィデンス”——

それらがどのような特性を持った機種であるのか、それはラクスにもまだ分からない。しかし、彼女自身がザフトのモビルスーツについて、ここまで精通した情報を持ち合わせていることは事実だった。

今からおよそ半月前、太平洋上での死闘の傷を癒すキラ・ヤマトが、まだラクスの屋敷に匿われている頃の話——

新たに立ち上がることを決めたキラは、ラクスにこう伝えた。

『何と戦わなきゃいけないのか、わかった気がする。だから、僕は行かなきゃ』

少年の顔には云い知れぬ覚悟があり、故にラクスは「フリーダム」を彼に託した。

とはいえ、単な思いつきで「フリーダム」を手渡したわけではない。当時アプリリウスの工場にはロールアウトを待望された新型が三機——「フリーダム」「ジャスティス」「クレイドル」——秘匿されており、彼女はそれらの中から彼に渡す機体を選び出す必要があつたのだ。

——どのモビルスーツが、キラに相応しい「力」となるでしょうか？

結論から云えば、ラクスは「フリーダム」を選び、他の機種よりも、それこそが最もキラにとつて相応しいモビルスーツになると考えた。

勿論、それら三機の中に、明確な性能差など存在しない。ザフトが粹を尽くして開発したモビルスーツ群に、規格上の優劣や貴賤などあるはずもない。しかしながら、それにしたつて機体各個の得意分野、相性のようなものはあるだろう。

より多数の敵を相手取る必要のある「遊撃」および「制圧」——これらを目的とした戦闘において、それは間違いなく最強のモビルスーツだったのだ。

実際、アラスカでの戦闘に介入した「フリーダム」は、その多重砲撃形態フルバーストモードを駆使して多くのモビルスーツを無力化してみせた。無力化に留めたのはパイロット独自の自戒と戦法の結果だが、戦場にあつた多くの命を殺さず、生かし、撤退だけを促すという前

代未聞の——そう、前代未聞のだ——偉業を成し遂げたのだ。

それは迫撃に重きを置く「ジャステイス」では難しい話で、あるいは「クレイドル」であつても同様——いや、後者はそれ以前の問題か。

そもそも「クレイドル」をキラに託したとして、それが彼に扱えるのか。ラクスはつくづく懐疑的だつた。

(ZGMF-X08Aには、ドラグーン・システムが搭載されています)

ドラグーン・システム——

量子通信を用いた武装端末を自在に制御し、モビルスーツ本体から切り離して運用する誘導砲塔機構。大西洋連邦の「メビウス・ゼロ」が搭載していたガンバレルを起源とするもので、それと違って無線化されたドラグーンは、より高次元的な空間機動に対応した多重的・多角的な狙撃を可能にしている。

ただし代償として、この機構はガンバレル同様に使用者に傑出した空間認識能力と、卓抜した情報処理能力を要求する。

(この機構が、あるから)

工場局に「クレイドル」が凍結されていた理由のひとつ——

それはドラグーン・システムを自在に扱える人間が、ザフトの中に見つからなかったから。否、ザフトの名誉のために釈明すると、正しくは見つけきれなかっただけであり、

本当に見つからなかったのではない。

さりとて、はつきり異質な能力が求められていることに変わりはなく、ザフトにおける緑色や、士官学校でちよつとばかり優秀だった程度の赤色に扱えるものではなかったのだ。

(おそらくは、今のキラでも扱えはしないでしょう——まだ)

調べたわけではないし、これはあくまでラクス個人の勝手な予見でしかない。

しかし後日になって、あのアスランさえもが“クレイドル”から遠ざけられたことを見るに、当時の判断は間違つたものではなかったという確信もある。

結局のところ、ラクスはザフトの人間と同じように“クレイドル”を見限り、見捨て、見放したのだ。しかし今、そのモビルスーツは厳然と彼女の目の前に聳え立つ。妹のように触れ合い、可愛がって来た少女の搭乗機となつて、ラクスを見返すように彼女の前に現れたのだ。

「——まさか」

ステラが、乗り手として選ばれたというのか……？

ラクスは驚きに見開いた瞳のまま、ステラを見つめた。

闇色の空へ飛翔した“グレイドル”は、地上に展開するザフトの新型モビルスーツ部隊と対峙した。

ZGMF-600 “ゲイツ”――

ビームライフルとビームサーベルを携行する“ジン”の後継主力機だ。地球軍から奪取した技術をフィードバックした高性能汎用機。

これに乗り込むのはザフトの特殊部隊だが、彼らは仄暗い闇色の空に白く眩いモビルスーツが舞い上がるのを認めていた。

“ラクス・クラインは間違いなく、あそこ”にいる！ 仕留めるぞー！

通信にて心を通わせた特殊部隊員は、そこからビームライフルの照準を、白銀色のモビルスーツへ固定した。

しかし、そんな兵達の中にも、相手の機種 of 圧倒的な威容を前に、云い知れぬプレッシャーを憶える者もいた。

「――何なんだ、あの機体は!?!」

眩いほどの輝きを放つ白銀の装甲を、シアングリンの彫刻が飾っている。

淡い碧色がフレームを縁取った神々しいまでの威容。これを拝見する者を生理的に拒まない毒の無いデザインだ。全“プラント”国民の希望の旗頭となるべく、大衆受けを狙ったデザインに仕上げられた神聖然とした機体は、さながら“時代の守護神”たら

んばかりの美しくも力強い外貌をしていた。

〈友軍機の反応が出ている？　しかし……！〉

〈ああ、俺達で沈めるぞ！〉

そこから間を置かず「ゲイツ」部隊はスラストを噴かせると同時に、上空の「クレイドル」にビームライフルを斉射した。

白銀色の新型は、圧倒的なスピードでこれを回避し、すべてを捌いた。

そのスピードは、超越的である。吹き荒ぶ豪雷雨の中、視力に優れたコーデイネイターでさえ、敵機を雷と見まがうほどの機動性——電光石火とは、あのような動きのためにある言葉であった。

「『プラント』の中で、よくもビームを撃てる」

ザフトの量産機は、これまでは実銃と実剣しか持つてこなかったはずだが、目下の「ゲイツ」という機種はまるで新しい玩具でも手に入れたかのようにビームライフルを嬉々として連射していた。

少なくとも、ステラにはそう見えた。

いくら等閑地とはいえ、民間の屋敷を爆撃したあるときから懸念はしていた。しかしそれは確信となりつつあり、やはり彼らはラクスを仕留めることが出来るなら、その過程で何が起こっても、何を巻き込んで構わないというのだ。

「わたしはそんなに優しくないので、覚悟しろ！」

みずからをそう形容しながら、少女は機体を前進させた。両腕で抱えるほどの大型ビームライフルを突き立て、照準を「ゲイツ」に固定させたのだ。

と、高出力のロングライフルが、アウトレンジから「ゲイツ」一機の胴体を正確に撃ち抜いた。撃ち抜かれた機体は拉げ、忽ちに爆散する。鉄の破片が炎の糸を引き地上へと墜落、やがて火山弾のようにして住宅街の建物へと突っ込んだ。

「……………」 宇宙へ出ましよう。やはり、このような場所での戦闘は望ましくありませんわ」

ノーマルスーツに身を包み、シートに傍らに身を折っていたラクスが助言する。

ステラは頷き、そこから機体を反転させた。抜き打ちにフットペダルを強く踏み込み、展開する敵部隊を振り切るように「プラント」の天頂——はるか高々度へ飛び去って行く。

「——疾い！」

「目標を逃がすな、撃ち落とせ！」

機動性でも強化された「ゲイツ」も、慌てて「クレイドル」の後を追った。だがやはり新型に追いつけるはずもなく、ザフト兵達は連携しつつ三機分のビームライフルを苦し紛れに斉射し続けた。

空中を通り過ぎたビームは、これを避けた“クレイドル”を横切つて最果てにある“プラント”の内壁、分厚い自己修復ガラスへ着弾する。そのガラスは、ある程度の熱量にも耐久できるような設計されているが、ビームの連射を受け切るほどのものではない。溶け落ちてしまえば空気が漏れ、そこは大きな宇宙空間への入り口になるだろう。それを見たステラの顔色が変わった。

——“プラント”の全てを壊す気か、こいつらは!?

ステラの体を、純粋な怒りが支配する。退避を求めるラックスの指示も正しいが、看過できないこともある。ステラは歯噛みし、素早く機体を反転AMBACさせていた。

——黙らせる!

急に回頭し、こちらに向かつて来る“クレイドル”を認め、男達は会心の笑みを浮かべる。狙い通りだ、と云わんばかりの下衆な笑みを。

「両脇から挟み込む! 散開しろ!」
 〈了解!〉

——隙だらけだ!

確信と共に、二機の“ゲイツ”が“クレイドル”を挟撃してかかる。

挟み込まれた“クレイドル”であるが、白銀の機体はそこで、それまで両腕で抱えていた大型のロングビームライフルをふたつに割つた——

「なに!？」

——いや、分離させたのである。

MA—SBOリンクス・ビームライフル。小型化された二挺の拳銃を握りながら、ステラは左右の“ジン”に鮮やかな同時射撃を行った。二挺のライフルから放たれるビームが、これを挟んで展開する二機の“ゲイツ”を同時に射貫いた。

「ビームライフルがふたつ!？」

「沈め!」

“クレイドル”に専用搭載されたリンクス・ビームライフルは、地球軍から奪取した“バスター”のロングライフルを参考に設計されたものだ。二挺のライフルを連結させたり、分離させたりすることで、攻撃の選択肢を広げ、戦況や目標との距離に応じた確かな射撃戦を展開できるようになっている。加えて、連結時にはビームの出力も当然に増大し、ある種のスナイパーライフルのような運用方法、先程に見せたアウトレンジからの狙撃も可能になっている。

「贅沢なっ!」

撃墜を免れた最後の“ゲイツ”は、なおもビームライフルを連射して“クレイドル”を牽制した。

がむしやらに放たれる火線を、またも捌いてゆく“クレイドル”は、次の瞬間、両腕

に埋め込まれた二基の防盾——その先端部に備え付けられた光波発生装置からビームスパイクを発心させた。構造としては「デイフェンド」の四肢と連動していたビームウェイブに近いものだが、そのような武装も、結局はビームサーベルにしか見えないのが、これを遠目に見ているザフト兵達である。

「ビームサーベルまで、ふたつ……！ 何だっというんだ、その機体は!」

工場局に「クレイドル」が凍結されていた理由のふたつ——

それは、本機の武装面での異質さに由来する。「クレイドル」はビームライフル、ビームサーベル、対ビームシールド——あらゆる基本装備を二挺ずつ携行しており、戦況に応じて常にそれらを入れ替えながら駆使する必要を迫られる。全ての武装を順当に取り回すために、それまでの常識から外れた立ち回りを求められる、と云ってもいい。言葉にすると簡単だが、現実にするとは難儀なことだ。おおよそ古来より、二刀剣術や二丁拳銃のような流派が実戦で普及しなかった例に近いかも知れない。フィクションの世界では華麗であるように扱われる二天一流の兵法は、煎じ詰めれば防衛面の一切を放棄したスタイルであり、生まれながらに特殊なセンスを秘めた者、あるいは特殊な鍛錬を重ね続けた者でなければ、その異質さを会得することなど不可能だ。

——では、ステラにはそれだけの適性があったのか？

——仮に適性があったとして、それをモビルスーツで再現するほどの技術が彼女に

あつたのか？

定かではないし、この場でラクスがいくら考察したところで、明確な答えなど出るはずもない。

しかし、生体CPUとして文字通り異質な訓練を受けさせられていたステラなら——
あるいは、とつくにZGMF—X88Sというザフトの操縦系に慣れていたステラなら——

いきなり「クレイドル」の異質さを戦術的に使いこなすことも、無理難題ではなかったのかも知れない。

「——墜とすー！」

白銀色の雷光が駆け抜け、これの接近を許した最後の「ゲイツ」は、次の瞬間に二挺のビームジャベリンに切り裂かれていた。豪快な爆発音と共に、中空に炎の華が咲く。

——これで、終わりではない……！

安心している暇はなかった。屋敷を襲った連中は、もつと大勢いた。何かしらの増援が来ることを予感したステラは、そのまま機体ごと宇宙への脱出を図った。

燦然と輝く星屑の「海」が、彼女達を歓迎する。

だが、殆ど同時にその瞬間、遠方にきらりと何かが反射したように映った。ステラは反射的に対応し、機体を半身にして急速上昇させた。すると案の定、下方より迫ってい

た「何か」が、それまで「クレイドル」が浮かんでいた空間をひと凧ぎにした。

「なんだ!？」

「あれは……!？」

黒く、そして禍々しい機体——

地球軍から奪取した「イージス」とそっくりの形状をしたモビルアーマーが、突き抜けるような高速で宇宙を駆け巡っている。ダークブラックに塗装された四本の鋭利な鉤爪——それらを自在に操り、巧みな重心移動によつて方向転換を繰り返しながら、それは瞬く間にまたも「クレイドル」を強襲する。

その見慣れない風貌を認めた途端、ステラは歯噛みする。

「新型か——!」

敵に回すにあたって、それほど警戒心を煽る響きを持った言葉はないだろう。

ステラは小さく舌打ち、機体の腰部から二挺のビームジャベリンを抜き放った。グリップを両手に握ると同時に、両前腕のシールドからもそれぞれにビームスパイクを発心させる。全て合わせて四本の光刃を抜き放ったその戦闘形態は、東洋において「四刀流」とでも名目されそうなスタイルだった。

対する漆黒色の正体不明機は宙域中を高速で駆けずり回りながら、その軌道で何度か変則的な屈曲を繰り返すと、もうふたたび「クレイドル」に突貫を仕掛けて来た。ステ

ラでさえ捉え切るのがやっとに思えるような疾風迅雷——すれ違いざまに迎え撃つように刃を置いてやろうと考えた彼女だったが、その敵影は「グレイドル」の目前に迫ったところで、唐突に変形を始める。

——変形？ いや、変態である。

鋭利な四本脚を押し開き、一對の目と二本のVアンテナを頭部に突き立てたMSが現れる。ラクスは目を開き、思わずその呼称を口にした。

「あれも、ガンダムですか——」

「ガンダム……？」

形状は「イージス」とそっくりと云った。

だが違う。少なくとも、その全長は「イージス」の三倍近くある……！

「大きい……!?!」

「偉そうな……っ!」

ダークブラックとバイオレットのツートーン。

純粹なる闇から醸成されたような暗澹たるカラーリングは、それ自体が宇宙空間では迷彩のように機能して、深淵的な黒い背景に溶け込んで輪郭や全貌を捉え切ることすら難しく感じさせる。その大きすぎる、規格のサイズ感も相まって。

「いいな、いいな！ 見苦しくあがいてみせろ、お嬢ちゃんどもオー！」

ZGMF-X11A “リジエネライト”――

パイロットはアッシュ・グレイ。パトリック・ザラが開発を命じたファーストステージシリーズのうち、四機目に相当する機体であり、大西洋連邦から奪取した“イージス”の形状を参考に開発が進められた。様々な特殊機構を実験的に搭載したことにより、機体の規格が己むを得ず大型化した経緯を持つ。

「こんなところで兄弟機に出逢えるなんて、光栄だねえッ！」

「……！」

「乗っているのは、お嬢ちゃんだなア！」

見ると、巨大な“リジエネイト”の後方、増援であろう複数の“ジン・ハイマニューバ”や“ゲイツ”の混成部隊が確認できた。おおかた屋敷から退避した後、そそくさとモビルスーツに乗り込んだMS小隊と見える。

敵部隊は“クレイドル”を一斉包囲し、ひとえにビームライフルを構え出した。多勢に無勢とはこのことであり、ステラは瞬時に身構えたが、そんな部下達をアッシュは高らかに手で制した。

「こいつあオレが殺戮する！ お前達は手エ出さな！」

増長にまみれた言葉に、ステラはカッと血が沸くのを憶えた。

しかし、最新鋭の核動力機を任されたということは、アッシュは相当な実力を持ち、同

時にそれを本国にも認められているということ。彼はそれだけの自負と、自信を持って発言をしていた。

「オレはただ、みずからの心の声に従うのだ——より速く！ 多くを殺せとな！」
「おまえが……おまえの方が、死んでしまえばいいんだっ！」

激したように「クレイドル」はビームサーベルを抜き放ち、「リジエネレイト」へ突撃した。これを認めて「はっ！」と笑い飛ばしたアツシユは、自機の長大な両腕と両脚の先端からロングビームサーベルを出力し、迎撃の構えを取ってみせた。

そうして宇宙空間に同時に描かれる、四本の鋭利な「光の弧」——

その想定以上の雄大さ、迅速さに、ステラは直感的な戦慄を憶えた。突撃していたにも関わらず、彼女は咄嗟に機体に制動を掛けさせ、結果的にその判断……いや直感も賢明なものと言えた。そうしていなければ、今頃は鋭利な斬撃の餌食となっていたからだ。目の前の敵は、ただ図体が巨大なだけなのではない——

「疾い……!?!? そんなっ、あんなにも大きいのに!」

全長にして「デストロイ」や「エクソリア」ほどはあろうという巨体を持つ「リジエネレイト」——しかし、その機動性は先述の二機の比ではないらしい。

元より宇宙空間、無重力下での運用を想定している「リジエネレイト」は、その巨体と重量を補って余りある機動性を獲得していたのだ。一挙手一投足が重力に向背し、そ

れゆえに愚鈍極まりなかった地球軍製の大型機種と異なり、全身各所に配備されたスタターは高度な姿勢制御を可能にしているのだ。

機体の特性自体も、砲撃戦よりは白兵戦に主軸を置いているのだろうか？　なんにせよ、機体の運動性だけをみれば、そいつはそいつと比べて二回りも小柄な“クレイドル”にも劣らない——いや、変形機構を有する分、あるいは“クレイドル”以上に高い機動性を有しているかも知れない。

「大きい機種の方が、素早いなどと——？　そんな話があるのですか!」

ラクスは驚くが、なるほど、互いに核エンジンを搭載するモビルスーツであり、在来機種よりも遥かに画期的な機体性能を持っているということか。

この時点で、今までにステラが握っていた機体性能の優位性は、完全に帳消しとなった。アッシュの云った通り、同シリーズ機の衝突という構図には、疑いようがなくなつたのだ。

（性能の差は、ゼロに等しい）

ラクスが口内に云った。

ステラはふたたびリンクス・ビームライフルを連結させ、敵機からの距離を開いた。そのままロングレンジライフルをポイントし、“リジエネレイト”にビームを掃射する。対する“リジエネレイト”もまた、咄嗟に掲げたロングビームライフルで反撃す

る。

宙域で衝突した光条同士が、真空中に真白い閃光を走らせた。

ステラは容赦のない射撃を“リジエネレイト”に浴びせかけながら、どうにかして距離を詰めて来ようとする大型敵機の巨大な影をいなし続けた。

その判断は、正しかった。圧倒的巨体に裏付けられた“リジエネレイト”の長大な四肢——“デイフェンド”のように四肢そのものを“刃”として叩きつけに来るロングビームサーベルは、じつに広範囲をカバーしていた。そのリーチは攻勢に転じたときには当然の猛威を振るうが、どちらかと云えば守勢にも応用でき、同じ大型機である“デストロイ”とは好対照に、格闘戦および対近接防御を完璧にこなしてしまうほどだ。

(——“アレ”に近づくのは、自殺行為だ)

モバイルスーツパイロットとして、ステラはどちらかと云えば射撃よりも格闘を得手とする者だと区分することができるのだが、さりとて相性の悪い相手と認識していながら、意地でも格闘戦を持ちかけるほど迂闊ではない。

見る限り、敵の“リジエネレイト”は格闘戦を得意とする一方、腰部備え付けのロン

グ・ビームライフル以上に射撃系の武装を持っていない。つまり、中・遠距離からの反撃能力に圧倒的に乏しいと云えた。どのみち格闘戦で勝てる相手ではないのだから、こゝは距離を開いて、射撃に徹するだけでいいのではないか。

(劣る分野が分かっているなら、勝てる分野を見つければいい)

ところで、ステラは新たな搭乗機、"クレイドル"の基礎スペックについて、既に詳細なデータを頭の中に叩き込んでいた。

武装面から明かしてゆくと、二挺のMA—SB0リンクス・ビームライフルを両腰側部に、"フリーダム"や"ジャステイス"と同型のラケルタ・ビームサーベルを二挺背面翼部にマウントしている。頭部にはMMI—GAU2ピクウス・72ミリ近接防機関砲、"デイン"や"フリーダム"の羽根に酷似した背面部、半月状のフレキシブルバインダーには、左右に一門ずつMMI—M12リノセロス・リニアキャノンを内蔵している。この電磁砲は通常は両脇に抱える形で使用するが、切り離しリジエクトを行うことで手持ち武器としても使用可能で、通常の質量弾頭の他にも、徹甲弾や粘着榴弾など、用途に応じた各種特殊弾頭も射出可能な多機能性を秘めている。

そして、本機の最大の特徴とも云える——両前腕部にマウントされた二挺の複合兵装防盾システム。光の鎧を意味する"エンドラム・アルマドローラ"と名付けられた防盾は、シールド表面部に光波防御帯を展開する他、先端の光波発生装置からはビームスパ

イクの刃を発心させたり、砲門としてビームキャノンを放射したりすることが可能だ。まさしく攻守一体の性能を体現した防盾システムであるが、この両シールドは前腕に固定されたものではなく、先述したドラグーン・システムを搭載していることで、それぞれ機体から切り離して独自に操作することも可能な設計になっている。

ここから先は余談になるが、そのような設計であるために、本機は前腕部分にシールドを装着したままでは手持ち武装を使用する際、射角に一部制限が生じるといふ欠陥的な一面も持つている。それは本機を設計した工場局技術部の食い違いや行き違いなどが詳しい背景にあるのだが、詳しくは言及しない。いずれにせよ、それは機動兵器としての汚点であることは確かだ。

（――ドラグーン・システム……）

二挺の盾はシールドとしての防御用途に加え、誘導砲塔としての攻撃性能も併せ持つている。このことは、ステラの中に“デストロイ”の大型ドラグーン兵装――“シユトゥルム・ファウスト”を彷彿とさせた。

――名前くらいなら、聞いたことがある。

ムウの“メビウス・ゼロ”やネオの“エグザス”――ステイングが乗っていた“カオス”も、それと同じシステムを用いた武装を持つていた。

ステラの脳裏に、ベルリン出撃前の会話の記憶が呼び起こされる。それは、ステラを

蚊帳の外にするようにして行われた、ネオとステイングの会話の記憶だ。

『——なアんで俺には「アレ」くれねエんだよ』

身を切り裂くような、吹き荒ぶ雪交じりの寒風の下。ステイングがふてくされるようにネオに訴えた一説だ。彼のいう「アレ」とは、すなわちステラに優先的に与えられた「デストロイ」のこと。

『——適性なんだ』

『ああ?』

『ステラの方が、効率がいいと——データ上でな!』

そのときネオは裏付けていた——エクステンデット達のまとめ役だったステイングよりも、実はステラの方がパイロット適性が高かったということ。

そのことで今さら増長するつもりはないが、だからこそ、なおのこと今のステラにはドラグーン・システムを制御する自信と自負がある。ステイングにできたこと、ステラにできないはずはない——という。

「使ってみせる……!」

短く独白し、ステラはドラグーン・システムに灯を入れた。傍らのラクスが驚いたように声を挙げる。

「使うのですか……!?!」

「いま、目の前の『リジエネレイト』をやつつけるには、ただ距離を取って射撃するだけじゃ足りない」

その見立ては間違つてはいないだろう。『リジエネレイト』が——『クレイドル』と同等の性能を持つザフトの最新鋭機が——持てるスペックを総動員して襲い掛かつて来ているのだ。そうであるなら、こちらも持てるスペックを総動員しなくては、そうそうに打ち勝てるものではない。

——ドラグーンは、より多重的・多角的な射撃を可能にする武装。

この機構さえ自在に操ることが出来るなら、どんな強敵を前にしても、ステラ達が敗れる理由はないはずだ。

「ドラグーン！ 敵を倒して！」

号を発した搭乗者——

少女の意志を受けて、『クレイドル』の前腕にマウントされていた防盾『エンドラム・アルマドロー』が勢いよく宇宙に飛び出した。便宜上、ドラグーンシールドとも呼ばれる特殊な兵装は、後端部のスラスターを全開にして、巨悪の機体を迎撃しに向かう

「？」

——はずだった。

勢いよく射出された“エンドラム・アルマドロー”は、しかし、そのままのろりのろりと同じ場所に停頓して、慣性に従って無重力空間を漂った。その動きは、とても分離型誘導兵器とは思えないほどに鈍く——そのあまりの無動作っぷりは、それを視界に捉えたアツシユ・グレイの口から、次のような言葉を吐き出させるほどだった。

「なんだア嬢ちゃん？ 機雷でも出したのか？ いや、盾だな？ ありや、盾だ」
ステラもまた凝然として、ふわふわと漂うだけのドラグーンシールドを見遣っていた。

「な、なにっ……っ？」

何かがおかしい。

——何かが、違う……っ？

そのときのステラはまだ、違和感の正体に気が付かなかった。

『ステイング・オークレーよりも適性ある自分が、ドラグーン・システムを使えない筈がない——』

そのように考えたステラの推論は、ある意味で正しい。ステイングが“カオス”搭載のドラグーンを自在に制御できたように、実際にステラもまた“デストロイ”のドラ

グリーンを自在に制御してみせるだけの能力を有したことは事実なのだから。

——しかし、それがどうした？

将来的に開発される「カオス」や「デストロイ」——そこに搭載されていたドラグリーンなどは、量子インターフェースの改良によつて使用者の特別な空間認識能力に依存しない良心的な設計になっている。それはつまり、パイロットが特別に優れた才覚や能力を持たずとも、OS側が誘導操作の大半をサポートしてくれる、ということ。

——あえて云えば、その時代のドラグリーンは誰にだつて扱える。

この事実を知らないまま「クレイドル」を受領したことは、ステラにとつて不幸だった。彼女は「カオス」や「デストロイ」までを含めた全てのドラグリーンが、いずれも同じ構造で形成されているものと誤解しており、そうした誤解のために「クレイドル」搭載のドラグリーンを戦闘中に使いこなせないという、パイロットとしては最悪の事態に直面させられたのだ。

勿論、本人の名誉のためにひとつだけ断つておくが、それでもステラ・ルーシエは相應の空間認識能力の持ち主であるのだ。

しかし、彼女の中に秘められているそのような「力」も、所詮は大西洋連邦によつて植え付けられただけの「デッドコピー紛い物」——

少女の中に人為的に培われた空間認識能力は、しかし、結局は生体強化によつて養殖

された諸刃の剣。それは前時代のドラグーンを制御しきる程に高次元的なものではなく、たとえばムウ・ラ・フラガが発揮していたような、純然たる「本物」の領域には遠く及ばない能力でしかなかったのだ。

結局のところ、彼らのようにズバ抜けて高度な空間認識能力を保有していなければ、この「クレイドル」の攻撃性能を十全に引き出すことなど不可能であり、それは何度も指摘され、本機のロールアウト以前から充分に糾弾されていたことでもあった。

『厳正な適性試験を行い、パイロットを選出しなければ、乗り手の人間が機体性能に振り回されるだけです！ あれは殊に、そういうモビルスーツなんです！』

レイ・ユウキの忠言は正しく、戦闘が始まる前、ラクス・クラインが危惧した事態は、束の間に現実となったのだ。

ステラがこれまで目にしてきたドラグーンは、もっと鋭敏で、それ自体が意志を持つ生物のように縦横無尽に機動する武装だった。パイロットの熟達によつて大なり小なり練度に差があるとはいえ、少なくとも、彼女の中では一概にそうだったのだ。

——なのに、なんて遅い……？　なんで、鈍い……!?

愕然としながら、ステラは慌ててキーを叩き、砲塔へ送信する情報量を増やしてみた。すると、その一瞬だけシールドは見違えたように鋭敏な機動を始める。無重力空間を素早く錯綜しながら、標的である「リジエネレイト」にビームキャノンを撃ちかけたのだ。そこでようやく、彼女は今回の異変の全容を悟った。

——このドラグーンは、ぜんぶマニュアル操作なんだ!?

AIが情報操作の肩代わりをしてくれた「テストロイ」のドラグーンとは違う。誘導操作の大半を制御している量子インターフェースの構造が、前時代的のそれ。機体本体と誘導端末、その両方をパイロット個人に委ねる、人間離れた機構だった。

「なっ、なんでこんなに難しいの……!?!」

困惑を隠せないくらいに動揺するステラであつたが、傍らのラクスは冷静であり、口内に云っていた。

(やはり「グレイドル」のドラグーン・システムなどは、ステラにも)

荷が、重いのだろう。

——そもそも、キラやアスランですら制御できるか怪しい武装を、どうして彼女が?

口内でそれを言葉にしたラクスの中には、微かな憐憫——と僅かな失望があつた。

「ふあつは!、なんだそりゃあ、それで新兵器かい!?!」

分離した特殊兵装に、最初こそ警戒して身構えたアツシュであるが、実際の端末があ

まりにも粗末な動きをするもので、このときすでに警戒心は解かれていたらしい。彼はステラに思慮の間を与えず、愚鈍にも浮遊している“エンドラム・アルマドール”へビームライフルを掃射する。

「止まってみえるぜ！ 違うな、実際止まってんじゃねえか！」

それを見たステラは慌ててキーボードを叩き、ビットへの指令を増やし、その射線から盾を回避させた。だが、すっかり端末の制御に気を取られていたらしく、彼女はいつの間にか“リジエネレイト”の巨大すぎる影の接近を許していた。

グワツ！ 眼前に悪魔のような巨大な黒影が顕現し、ステラはその瞬間、幽霊を見た少女のようにびくりと肩を震わせた。虚を突かれるとは、まさにこういう時に用いるような言葉だった。

「!?」

「キーボードでお遊びかい？」

まずい、と云う暇もなく、次の瞬間にコクピットに激震が走る。モビルアーマー形態へ変形した“リジエネレイト”が、がっちり“クレイドル”を四本爪で捕縛したのだ。

アツシユはそのままバーニアを点火させ、全速力で加速を掛けた。ホールドされた“クレイドル”を、凄まじいGが襲う――

「おうちでやってな！」

「う、ぐッ」

「このまま食い千切つてやろうか、ああん？ 二人そろつてよオオ！」

勝利を確信し、通信先の男は勝ち誇つたような声を上げた。フェイズシフト同士の装甲が食い込み合い、激しい不快音を挙げていく。

——食い潰される……!?

四本脚によつて完全に捕縛された今のステラに、取れる抵抗はひとつしかなかった。それは既に手許を離れているドラグーンによる別の射線を使い、捕縛主である「リジエネレイト」を正確に叩き落とすこと。

けれど、やはり彼女の能力だけでは不可能だ。モビルアーマー形態の「リジエネレイト」はただでさえ高速を誇る移動物体であり、それを外部から——自機を誤射することなく——正確に狙い撃つなど。

このまま何もできず、ただ破壊されるのを待つしかない——

(ここで敗ける……!?!? こんなヤツにつ——!?!?)

ステラは、ぎゅつと歯噛みした。

守りたいものも守れず——

何のために戦っているのか、意味すらも見いだせないままに——?!

こんなところで、殺されるのか——!

——いやだ……!!

まだ、死ぬわけにはいかない。

——こんなところでは終われない!

死ねない、死なせない!

——死にたくない!

まだ、わたしは。

「わたしはあ——っ!」

その瞬間、ステラの身体の奥底で、何かが弾けた。

それまでの自意識は、熱にでも麗されていたのか? 視界が忽ちに嘘のように全方位に開けると同時に、感覚が研ぎ澄まされ、次に自分が何をどう操作すれば良いのか、冗談みたいに直感できるようになる。少女の双眸は途端に光を失い、輝きを損ねて虚に沈む。魂が霊障にでも当てられたように少女が感情の一切を失うと、目の前で起こった突発的な異変に気付き、傍らのラクスは愕然としたという。

「まさか、貴方も——」

言葉は最後まで続かなかった。その先に彼女が何を云おうとしたのか、ステラには分からなかった。

だが、そのときのステラは傍らのラクスと言葉さえも「雑音」に紛うほどに、感覚が研ぎ澄まされていたという。だから彼女はラクスに構わず機体を急速に前進させ、それと同時に見違えた速度でキーを叩き、眉ひとつ然として動かさず「クレイドル」が誇る全方位光波防御帯——「アリユミューレ・リユミエール」を展開させた。

「——どゆあつ!?!」

展開されたビームの膜によって「リジエネネイト」の四本脚が切り飛ばされる。

アツシユはぎよつとして瞬時に逆推進をかけ、制圧していたはずの「クレイドル」から距離を取った。同時にMS形態へ変形して損傷を確認するが、このとき彼の機体は四肢を全て半ばから断ち落とされてしまっていた。

「おわあ!?! やらかした——ツ!?!」

〈——隊長!〉

四肢を失った「リジエネネイト」の、あまりに無防備な姿——

トドメを刺そうと四刀を構えて突撃する「クレイドル」に、しかし、それまで傍観を決め込んでいた筈のMS部隊が横槍を入れた。彼らは彼らの隊長を援護せんと、それぞれにビームライフルやバルルス重粒子砲を「クレイドル」目掛けて集中砲火させたのだ。

〈隊長をお守りしろ! 前に出る——!〉

しかし、あらゆる弾体は光波防御帯の絶対性を前に全て弾き返され、それでも“クレイドル”を足止めする程度にはなつたらしい。唐突な介入行為に苛立ちを隠さなかつたステラは、躊躇いなく“繭”の内側からリンクス・ビームライフルを応射した。光波防御帯の内側から発射されたビームは、驚くべきことに光波防御帯を素通りし、これに虚を突かれた“ジン”の胴体を正確に貫いた。

〈なつ、なんだと!?!〉

被弾した者ではない、別の隊員が驚愕の声を挙げた。なぜ、敵の攻撃は当たつたのか――？

彼はもう一度、訝しむように敵機に向かってビームを撃ちかける。だが光の“繭”の外側から放たれた射線は、悉くが威力不足で弾き飛ばされた。

〈内側からのビームは通しつ、外側からの攻撃だけを遮断しているのか!?!〉

〈そんなのは!〉

〈反則だ……ッ!?!〉

絶対的な堅牢性を誇る代償として、膨大な電力使用のために発動時間が大幅に制限されていた“デیفエンド”の光波防御帯――

これは核動力炉を搭載する“クレイドル”に移植されるに当たつて、画期的なアップデートが加えられた。防御面には内側も外側もなく、あらゆる物理干渉を遮るバリアー

を形成していた前身に比して、改造された“クレイドル”の光波防御帯は単一指向性を有し、要するに外部からの攻撃は遮断しつつ、自機による内部からの攻撃のみを透過させるモノフェーズ化を成功させていたのだ。

そして——これは最早言及する必要もないだろうが——“クレイドル”自体が核エンジンを採用したことで、そこから生み出される莫大なエネルギーを受け取った光波防御帯は、これまでのように多大な電力消費に悩まされることもなく、ほぼ無制限に防御膜を形成可能になっている。

——ここからは、ほとんど一方的な戦闘だ。

どれだけのMS部隊が一斉に“クレイドル”への波状攻撃を仕掛けたところで、全ての砲火は光波防御帯を突き破ることはない。これに対して、ステラが放つ反撃の砲火は、鉄壁のビームフィールドを透過して、次々とMS部隊を撃滅してゆく。暗闇に明るい光が連続し、兵士達は慄然とした。

果たして勝算でもあるのか、それとも苦し紛れに抵抗を続けているだけなのか——
重粒子砲を構えた“ジン”は、それでも“クレイドル”への砲撃を連続させた。だが

“ジン”の放った光の矢は、次の瞬間“クレイドル”に到達するよりも前に、虹色の光によって遮られた。

燦然としたビームの光が散ったとき、“クレイドル”はまるで何事もなかったかのようにならぬ場に顕在していた。兵士達は息呑んで、事態の把握に努める。

“——なんだ？ なにが起きたのか報告しろ！”

四肢を失い、後退した“リジエネレイト”から催促の通信が聴こえる。兵士達は必死に言葉を捜しながら、絞り出すように返事を発した。

「た、盾です！」

「わかるように云うんだヨ！」

「盾が！ 盾が飛んでます！ 盾が“ジン”の砲撃を——うわあ！」

盾が飛ぶかよ？ アツシユはそう返そうと思つたが、通信先からは悲鳴が響き、それはすぐに、耳障りなノイズに変わった。

——友軍機の熱源が、次々と消失していく？

アツシユは釈然とせず、ふたたび“クレイドル”を視界に捉えた。そいつは未だに“ジン”や“ゲイツ”との交戦が続けている。僚機の“ジン”がビームカービンを浴びせかけるが、照準先の“クレイドル”は微動だにしない。

そして次の瞬間、二機の間ドラグーン・シールドが割って入った。

表面部に防御帯を展開したドラグーンは、先刻までと見違えるように機敏に動き、自律した防盾となつて「クレイドル」を守護していた。まるでビット自体に命が吹き込まれたかのよう——それ単体が独立した意志を持ったかのように、滑らかに宇宙空間を飛び回り、焦りに塗れた「ジン」の射撃をシールド単体で次々と弾き飛ばしているのだ。

すっかりビットに気を取られた「ジン」の背後から、もう一機のドラグーンシールドが迫り、ビームジャベリンを出力したこれが「ジン」を背後から貫いた。何が起きたのかすら、撃墜された兵士には理解することも不可能だった。

「遠隔制御武装だ?! さっきまでノロクサしてた、あれが?」

まるでパイロットが入れ替わったかのように、「クレイドル」の動きが変貌した。

ドラグーンシステムを、完全に制御している——? そんな莫迦な……!?

アツシユは、唾然とした。

一帯の「ジン」を撃墜したところで、ステラはふたたび「リジエネレイト」へと視線を送った。

なかば、コクピットにしがみ付くような態勢になっていたラクスは、ステラの方を見遣る。

——いったい、この少女は何者なのだろう?

ラクスが見守っていた先で、ある折からステラはまるで別人のように豹変し、そのドラグーン・システムを完全に掌握してしまった。二基の“エンドラム・アルマドラー”を砲塔として攻撃させるだけに留まらず、防盾としても防御のために運用してみせた。ステラの中に、あらかじめその種の“力”が養われていたとでも云うのか？ 仮にそうであるのなら――

(もともと彼女の中にあつた“力”が、『SEED』の発現をきっかけに化けた……!?)
ラクスはただ啞然として、傍らの少女を見守るしかない。

ステラは虚ろな瞳で、遠方の“リジエネレイト”を視認している。敵機の位置や姿勢、敵機までの距離が、まるで手に取るように正確に識別できる――これが、ムウやネオが持っていた力なのだろうか……? ?

「次は、絶対に逃がさない!」

キーを叩いて指令を送り、ステラは二基の“エンドラム・アルマドラー”をふたたび射出する。生物のように目まぐるしく宇宙空間を錯綜するドラグーンは、瞬く間に四肢を失った“リジエネレイト”の退路を塞ぎ、これを包囲してみせた。

「な、なんだとオ!?!」

二挺のリンクス・ビームライフルを同時に放ち、左右からは“エンドラム・アルマドラー”はビームキャノンを発射する。単機での包囲攻撃に見舞われた“リジエネレイト

“は為す術もなく、全ての砲火の直撃を受けた。

「ぐうおあああつ!？」

断末魔と共に、次の瞬間——“リジエネレイト”が爆散した。奇妙——そう奇妙な、背部のバックパックだけを残して。

ステラはそのとき、勝利を確信したが——

「——なんて、なア!？」

アツシユからの通信は、そこで途切れたりはしなかった。

驚きに目を開くステラの頭上、通信機には男の哄笑が響き続け、それは、かの男がまだ生きている証拠だ。しかし、なぜ——？

——“リジエネレイト”は、跡形もなく爆散したはずなのに！

訝しむステラ達の前に、そのとき“ジン”の増援部隊が現れる。そのMSは数機がかりで見慣れない“卵”を——いや、正確にはMS格納用のカプセルを運んでいた。大気圏突入の際に用いられる、MS用の降下ポッドに酷似しているが……？

その瞬間、宇宙に放り投げられたカプセルが押し開き、その内部から“四本脚の黒獣”が産み落とされた。それはさながら獣の孵化の瞬間だった。見届けたステラとラクスがそれぞれ露骨に微妙な顔になったが、よく見れば、卵の中から現れたのは全く新しい“リジエネレイト”の本体パーツだ。

「ハッハーッ！ 何度でも再生してみせろ！ 『リジエネレイト』 オーーツ！！」

アツシユは爆散した『リジエネレイト』の背部バックパックを操縦し、これをたつた今『卵』から孵った新たなボディにドッキングさせた。

つまり『リジエネレイト』のкокピットは、一見すると本体のように思える『リジエネレイト』の本体にはない。所在しているのは、あくまでもそのバックパック——コア・ユニット内に秘匿されているのだ。

ステラがやつとの思いで爆散させたボディだが、これは何度でも交換可能なパーツのひとつに過ぎない。増援部隊が運んできた『卵』から産み落とされる予備パーツが残っている限り、本体をどれほど破壊しようが、アツシユ本人には文字通り痛くも痒くもないのである。

（シンの機体に、似てる）

思わず見比べてしまうステラであったが、鮮やかに予備パーツとドッキングした『リジエネレイト』内部で、アツシユは愉悦の笑みを浮かべていた。

「シア、第二ラウンドと行こうか！ お嬢ちゃんどもおッ！」

——こいつは、一筋縄ではいかない……！

ステラはこのとき、そう確信したのであった。

アツシユ・グレイ直属の部下であり、二機の激闘を観衆であるかのように望んでいたザフト兵のひとりが、不意にこんな言葉を漏らしていた。

「これが、核モビルスーツ同士の激闘か……！」

本来ならば連携運用されて然るべき最高性能のモビルスーツ二機が今、対峙して激闘を繰り広げている。

「オレは、幻でも見ているのか……!?」

光波防御帯によってあらゆる砲火を無条件で跳ね返し、あまつさえ誘導式の無線砲塔さえも変幻自在に制御してみせている「クレイドル」――

圧倒的巨軀でありながら凄まじい機動性を発揮し、戦闘中にも関わらず破損したパーツを即時交換することで無制限の再生を繰り返す「リジエネイト」――

これが、既存のモビルスーツ同士の戦闘であり得た光景だろうか……？
「次元が、違い過ぎるのだ……！」

幻でも夢でもない。

目の前で繰り広げられる圧倒的な現実には、彼はひたすら慄然とした。

『アトミック・クルーガーズ』B

ZGMF-X11A “リジエネレイト”——

大西洋連邦から奪取した“イージス”と、ほぼ同一の構造をしたモビルスーツ。実用化された可変機構をザフトにおいて初めて搭載した機種であり、独自のフレームをして、実に三つ——高速巡航形態、強襲形態、人型機動形態——もの形態へと変態を遂げることが可能。

また、パイロットが搭乗するコクピッドは“G”の本体ではなく、単独航行能力を有するコア・ユニットの内部に存在している。実際にステラが騙されたように、他に例を見ないこの画期的な機体構造は、初見の人間に対しまず間違いなく急所——すなわちコクピッド——の所在を誤魔化す効果を持っているのだ。

あらゆる常識やコストを度外視した機体——“リジエネレイト”に関しては、四肢を持つた人型部分などは交換可能なパーツに過ぎず、この機体は、そうして予備パーツの在庫がある限りは、何度だって再生を繰り返すことができる。

「まさか、アリユミューレ・リユミューレ光波防帯で逃げ出すとはな」

四本の鉤爪に捕縛されていた「グレイドル」は、逆撃として「アリユミユール・リュミエール」を展開し、そのビームの膜を使って「リジエネレイト」の四肢を斬り飛ばした。

それは、思いもしない反撃の方法だ。四肢を切断されたアツシユは、しかし、すぐに僚機達に命じて「リジエネレイト」の予備パーツを召喚させた。大型カプセルから解き放たれた人型の四肢、アツシユはすかさずコア・ユニットを操縦してドッキングしてみせる。

（光波防御帯、別名「アリユミユール・リュミエール」）

名前くらいは聞いている。ユーラシア連邦の「アルテミスの傘」を小型化しモビルスーツに採用したもので、翡翠色をした守性ビームフィールドは、実体弾はおろかビーム兵器すら易々と跳ね返す。だからこそ、それは多くのザフト兵らにこのように謳われて来た――

「――無敵の盾？　だがそれも、過去の遺物だ！」

アツシユは叫びながら、次の瞬間「リジエネレイト」の長大な四本脚から、漆黒の実体剣を発現させた。

「実剣……？」

「そうでもあるなあ！」

声高に叫ぶアツシユに対し、相対するステラは懐疑的だ。あらゆる物理攻撃を無効化するフェイズシフト装甲が“G”兵器に普及している昨今、もはや実剣や実銃などは前時代的な兵装となりつつあるからだ。

ましてや“クレイドル”を先頭とするファーストステージシリーズは、核動力炉の搭載によってフェイズシフト装甲の問題点だったバッテリーの制限を克服している。フェイズシフトが恒常化された機体の実剣や実銃などが立ち及ぶ隙はなく、だからこそステラは、目の前の敵がそんなものを構え出した意味が分からなかった。

「なんだ……?!」

いったい何故、とステラが懷疑した次の瞬間だった。四肢に連動した四丁の実剣を構えた“リジエネレイト”が、その巨腕を振るうようにして、実体剣による斬撃を繰り出したのは。

あくまでも純粋な物理攻撃、しかし連続した斬撃は、これに接触した刃渡りの部分から“クレイドル”の光波防御帯を簡単に引き裂いた。

「――！ 斬られた!?!」

「コイツはただの実体剣じゃない！ ちょいと特殊な加工が加えられた代物でな、ラミネート製のさー！」

ラミネート製、より正確に云えば対ビームコーティングが施された実体剣といったと

ころか。特殊な鋼材が埋め込まれたラミネートの刃は、あらゆる熱量兵器を無効化する性質を宿す。つまり、それによって繰り出された斬撃は、所詮はビームの膜に過ぎない光波防御帯をバターののように引き裂くことが可能になるのである。

そしてそれは、かねてより『無敵の盾』として象徴されて来た光波防御帯が、科学的、戦略的に攻略された瞬間だ。アツシユに云わせれば、それこそ前時代的な遺物へと陥落した瞬間でもあったのだ。

「——でもー」

しかし、斬られたままでは終わらせたくないステラが、次に反撃のビームライフルを掃射した。そうして放たれた幾重の光条は、しかし、アツシユが構えた実刃によって全て斬り払われて霧散してしまった。

「……!?!」

ステラは、その異常な光景を目の当たりにし愕然とした。

「まあ、使い道は限られてるし、ラミネートつてのは如何せん高騰品らしくてな。——」
 モビルスーツに搭載するにはコスパが悪すぎる。だとか云われていたらしいが、地球軍お得意のビーム兵器を無効化するには、これ以上にねえ逸品だろう？」

たしかに地球連合軍は、これまでエネルギー兵器の開発に傾倒して来た印象がある。
 ビームライフル、ビームサーベル、陽電子リフレクター、光波防御帯——

だからこそ、パトリック・ザラはエネルギー兵器に対抗するカウンター兵装として、対ビームコーティングが施された漆黒の暗器——通称「タクティカル・ウエポン」——をファーストステージシリーズに追加増設した。

にも関わらず、ステラがこの暗器の存在を知らなかったのは、光波防御帯を搭載する「クレイドル」にのみ採用が見送られたからである。次第によつては自機の最大の特性を傷つけかねない性質の刃であることから、それも特別おかしな話ではなかったのかも知れない。

「では「フリーダム」や「ジャステイス」にも、同様の装備が……？」

「おうよ、その光波防御帯は、もはや無敵の兵装なんかじゃねえ……！　まさか「クレイドル」を相手に使うことになるとは想定してなかったが——なるほど？　こいつあひよつとしなくても、お嬢ちゃんには相性最悪の武装かもなあ!？」

そもそも、アツシユは先程ビームを「斬り払う」という離れ業をやってみせたが、さりとてそれは、斬り損じた場合を考えれば明らかに賢明な選択ではない。彼がリスクを冒してまでそうしたのは、一種の顕示であり、ラミネートを前にビームは無力であると、ステラに思い知らせるためでもあった。

自機に向けて放たれたビーム。数ある対処法の中で最善なのは、やはり事前に察知し「避ける」ことであり、シールドで「防ぐ」までが限度というものだ。不可能ではない

が、そこには本来タクティカル・ウエポンの出番はない。

であるなら、やはり件の暗器の使い道などは「防御」ではなく「攻撃」——それこそ光波防御帯を展開可能なモビルスーツの守備に対し、特攻的に用いるのみだとも云える。そして、そうであるからこそ、

(一)と「グレイドル」相手には、いささか利き過ぎてしまう……！)

ラクスは戸惑いながらも、確信するのは早かった。

「さあ、死闘の続きを始めようぜエー！」

ロングブレードに連動させるように、やがて「リジエネレイト」の四肢先端から高出力のロングビームサーベルが出力される。

実刃と光刃。折り重なり、同時に連動する二つの異質の剣は——PS装甲も光波防御帯も問わず——全てを切り裂かんとする敵の男の意志表示に思えた。

コズミック・イラにおけるビームサーベルは、ミラージュコロイドを媒体とする磁場形成理論の応用によって形作られる。そして、これはあくまでエネルギー粒子を単純な刀剣状に固定したものに過ぎず、対抗した光刃同士が相互に干渉することはない。つま

り、ビームサーベル同士での切り結びや鏝迫り合いは成立しない。

このことから、ステラは「リジエネレイト」が振るってくるビームブレードを、耐性のある対ビームシールドで防御するか、あるいは全てを回避するしかなかった。

どうやら「リジエネレイト」は、その長大な四肢を活かした迫撃戦、四丁のビームサーベルを用いた格闘戦を得意としている。

しかし「クレイドル」は対ビームシールドを両腕に二基しか装備しておらず、単純な数において四丁の刃を防御するのは不可能だ。ましてや相手の全長は自機に比して三倍近くある——リーチの点で圧倒されるのは必至と云えた。

勿論、それが単純なビームサーベルであれば問題ではなかったろう。光波防御帯を展開することができれば、どれほどの数の刃だろうと難なく凌ぐことも出来たはずだが、敵がタクティカルウエポンを同時に振るって来る以上、これは既に「繭」としての役割を果たさない。

——サーベル同士で切り結ぶことも出来ない以上、シールドの数が、絶対的に足りない！

したがって、ステラは執拗なまでに格闘戦を仕掛けて来る「リジエネレイト」に対し、距離を取ることを先決とした。フットペダルを強く踏み込み、懸命に敵機から距離を開こうと後退する。

だが「リジエネレイト」は鮮やかに高速巡航形態——「イージス」的なMA形態——に機体を変形させ、この爆発的な初期加速を利用して忽ちに「クレイドル」への距離を詰めていく。逃げる獲物へ追いつくと同時にもう一度変形し、節足動物のような六本脚に人間の上半身が生えたような強襲戦闘形態への変貌を遂げた。あるいは『半人半虫』とも比喩すべき気味の悪いその形態は、まるで、

「『ゲルズゲー』!？」

「『リジエネレイト』だって云ってるだろオ!!」

激高と共にアツシユから繰り出される、斬撃の波状攻撃。ステラは必死にこれを捌いてゆくが、形勢は明らかに彼女の方にジリ貧となりつつあった。

密着を許せば敵機の規格と手数に圧され、距離を開こうにも相手は変形機構を有し、その厄介さはステラもよく知っている。たとえば四足獣形態に変形した「ガイア」に対し、二足歩行型が徒競走を挑んでも勝ち目はないのと同じだ。そもそもMA形態への可変機構とは、特定環境下での戦闘力や機動力を飛躍的に向上させるために存在している。

——逃げてダメ、近づき過ぎてもダメ……!

だとすれば、今のステラに状況を打破する方法はひとつしかない——少なくとも、ステラが思いつける限りでは。強引で、殆どが力押しのようなものであるが、それゆえに

正攻法となり得る手段。

——ただ純粹に、コイツの反応速度を超える……! !

ステラの決断は早かった。意を決し、それまで防戦一方だった筈の“クレイドル”がそこで初めて反撃に出る。迫撃してくる“リジエネレイト”が繰り出す斬撃の嵐。これをステラは恐れず、果敢にも敵の懐まで逆に突つ込んでみせた。それは反撃というより、逆突撃とでも云うべき果敢な勇氣と強引さが成せる業だった。

思いがけない特攻を喰らい、僅かに調子を外した“リジエネレイト”が突き崩される。その隙をステラは見逃さない——そうして彼女が振るつたビームサーベルは、突き上げるように“リジエネレイト”の両腕を削ぎ落としていた。

「んなあッ! !」

(仕留められなかった……! !?)

当然、両腕などはステラの狙いではない。あわよくば一撃で決着をつけてしまおうとも考えていたのだが、流石というべきか、相手の反応が早すぎた。

「チイツ! ! おまえら! ! 時間を稼げ! !」

苦しげにアツシユが指令を発し、それと同時にそれまで静観を決め込んでいた筈の“ジン”や“ゲイツ”が一斉に“クレイドル”に射撃を浴びせかける。

その隙に両腕を喪失した“リジエネレイト”は反転し、またもカプセルの中から取り

出した予備パーツとドッキング、完全なる再生を遂げてみせた。

「あれらの予備パーツが残っている限り、あの男を撃退するのは難しそうですね……」

「——ゾンビめ！」

今のステラには、そう吐き捨てるのが精いっぱいだった。

再度——「リジエネレイト」が「クレイドル」と対峙する。

相対した中で、アツシユは唸った。

「なかなかしぶといッ」

本当にその言葉を云いたいのにはステラであろうに、アツシユはさらに言葉を続けた。

「——ラクス・クラインは戦況を攪乱させ、戦争を長引かせた！ その女は死人を増やしているのだ！ それをなぜ守ろうとする!?!」

通信機から、呪うような叫びが聞こえる。

ステラは力強く返答しようとした——しかし、それよりも先にラクス当人が、彼女の中の信念を持つて応答していた。

「死人を増やそうなどとは思っていません。わたくしは——わたくし達は、この戦争を一日でも早く終わらせようと志しているのです！」

「だったらザフトに就けば良い！ アンタもコーディネイターなら、コーディネイターのためになることをやれや！ それも「プラント」の歌姫なら、なおのこと「プラント」のために活動するのが当然だろうがあ！」

ナチュラルを殺戮すれば、それで戦争は終わる。

確信を叫びながら、アッシュはロングビームライフルを放つ。「クレイドル」は、右腕のビームシールドでこれを弾き飛ばした。衝撃にわずかに揺れたコクピッド内で、それでもラクスは、凜とした真つ直ぐな声色を貫いた。

「国の間にも、人の間にも制約というものが存在します。それは各々の平和を維持する上で必要なことです。ですが、それはときに人を銘々の都合に縛り付け、人の内なる自由な意志と行動を阻害します」

人類が人類として辿り着くべき未来のためにやるべきことは、決して、ナチュラルの殲滅などではない。彼女は力強く説いた。

「本来ならば阻止できることも、人は弱く、己の立場ゆえに見過ごしてしまうことだってある……ですからどこにも属さぬわたくし達が必要となってくるのです。わたくし達ならば、世界が間違った方向に進むことを止めることもできます！」

すかさず「クレイドル」が反撃に出る。流星のように「リジエネライト」へと飛び込み、駆け抜けざま、尖鋭な肩先の装甲を切りつけた。アッシュは慌てて機体を振り返

らせ、反転させた。

「——結構！　だが、自分で自分を崇高だと勘違いした無法者共が、連中の信念とやらのために政治に武力を持ち込む！　世間じゃそれを、テロイズムっていうんだぜ！」

「今の『プラント』のためにも、必要なことなのです！」

「立場を弁えなさいよ！　アンタが放った『フリーダム』のせいで奪われた命に泣く連中が『プラント』にあるのに、共に嘆きもしない、癒しを与えもしないアンタが『プラント』の歌姫ぶるんじゃないの!?　そんな自己陶醉で戦争が終わるなら世話ないわ！」

鮮やかにMA形態へ移行後、鉤爪で『グレイドル』へと襲い掛かる。巧みな重心移動、そして目を見張る高速飛行による突貫を、『グレイドル』はすれすれのところで回避した。

「あなた自身の快樂のため、戦争や軍隊を手段にしているあなたには、理解してはもらえないのでしょう……!?!」

「オレの殺しの趣味は、あくまで個人的なものだ。手前らの利益のため戦争を引き起こす連中に比べれば、なまぬるいもんさ」

アッシュ・グレイが戦争に求めるものはひとつだ。それは「より多くを殺戮する」とこと——戦時下において、ザフトは『プラント』の技術が結集する場所であり、次々と強力な武器が開発される組織でもある。

だからこそ、彼は「プラント」でパイロットをやっているのだ。より強力な兵器を以て、より大勢の殺戮を行う——ただそれだけのために。

モニター越しに映るアツシユは、ラクスから視線を外した。餓えたような視線は、彼女の傍らに坐す対戦者当人、金の髪のステラへと向けられた。

「そんな女を『まもる』価値が本当にあるのか？　いたずらに武力をかざし、お前達の戦争を引つ掻き回した、そんな女を？」

問われ、ステラは言葉を嚙む。

——もしかしたら、ラクスだって間違っているのかもしれない。

——いや、間違うことだってあるのだろう。

どれだけ聖女のように思えても、ラクスだってひとりの人間だ。どこまでいっても、どれだけ高度な遺伝子調整を重ねても、人間が神になることはあり得ない。

だからステラは、自分で正しいと思えたことをするだけだ。誰かに心中するのではなく、共感を憶えた者の志に自分の力を貸す。今のステラは兵士であり、今はそれしかできなくても——きつと、いつかは。

「ナチュラル共を滅ぼせば、とりあえず戦争は終わったんだぜ？」

「ナチュラルもコーディネイターも同じ人間だ……！　みんな泣いて、みんな笑う——違いなんてないから、きつと分かり合える」

「他に道があるか、ええ？ その他に道があるって思う考え方——そんな無責任な理想論が戦争を長引かす元凶なんだって、わかるんだよ！」

それでも地球軍とザフト、期せずして相對する二つの陣營を渡り歩いて来たステラには分かる。地球軍でもザフトでも、そこに居るのは同じ人間だった。地球でも宇宙でも、そこで暮らしているのはみんな同じ人間だったのだ。

しかし、アツシユはこれを高らかに笑い飛ばす。——ナチュラルもコーデイネイターも同じ……？

「違うな——！ 違うから、戦争ドンパチやってんだ！」

ナチュラルとコーデイネイター。かつて異なる人種との融和の道を模索する中で、いつか生まれた軋轢こそが戦争に発展した。

思想、宗教、人種——異なる立場に置かれた者同士が相容れることは、人の世において絶対にあり得ない。

「パトリック・ザラの云う通り、コーデイネイターは進化した種なのだ！ 俺達のような選ばれた人間には、過去の繁榮と地球上に取り残されたナチュラル共を間引く権利がある！」

「権利？ 何が！ お前がコーデイネイターなのは、お前が偉いからじゃない！」

「うッ……!!？」

それは本当に当たり前のことで、それゆえにアツシユは反論することができなかつたという。

心の動きが、機体の動きにも反映されたい。アツシユが言葉を失うと同時に、僅かに“リジエネライト”の動きが鈍った。その一瞬を見逃さず、ステラはビームライフルで敵機の右脚を腿口から吹き飛ばした。

「ただ恵まれただけでも気付かずに、つけ上がった男は！」

「うるせえええつ!!」

激高した“リジエネライト”がロングビームライフルを応射する。

“クレイドル”は機体を回頭させ、光条を掻い潜った。

「あの男は知らないのです。真のコーディネイターとは、人と人、そして地球と宇宙を紡ぐ“調停者”であることを」

真のコーディネイター。それは調整された者ではなく、調停する者。

——現在と未来を紡ぐ、時代の紡ぎ手のことを指す。

遺伝子操作による様々な希望を見込まれ、実際に宇宙へと上がって来たコーディネイターたる先駆者達には、本来は人類の“祈り”や“願い”が託されていた。……託されていた筈だった。

（『時代の最先端に立ち、より良き未来を先導する先駆者であれ』——かのジョージ・グ

レンの崇高な理想と祈りは、いつしかコーデイネイターこそが新たな始祖とする、強烈な選民思想にすり替わってしまった……)

だからこそ、パトリック・ザラが掲げる選民思想を、ラクスは肯定することが出来ない。ナチュラルとコーデイネイターを区分する必要など存在しない。

だからこそ、ふたりは怯まなかった。

「ドラグーン！ 敵を倒して！」

もう一度、同じ号を飛ばす。ステラが叫んだ次の瞬間、翼を広げた「クレイドル」は両シールドを勢いよく宇宙へと投げ放った。

解き放たれた白銀のシールドはそれぞれにスラストを点火させ、それ自体が生き物のように空間中を錯綜を始める。そして、先端に構えられたビーム砲を大型の「リジエネリート」へ――

――ではなく、それまで観衆のようにステラ達を俯瞰し、その撃墜を待っていたであろう「ジン」や「ゲイツ」――ザフトのモビルスーツ部隊へと浴びせかけ始めた。これを目撃したアツシユの顔色が変わる。

「て、てめえ!？」

「さっきから、邪魔……!？」

恨み言を呟いてみせたステラは、彼らさえいなければ、という確信を持っていたらし

い。これまで幾度か、ステラが決定的に“リジエネレイト”を追い詰めた瞬間は確かにあった。なのにそれが完遂できなかったのは、結局のところ、肝心な場面で観衆達——アツシユの下僕の妨害があつたからなのだ。

「お、おい待て！ 卑怯だぞ、オレと勝負しろオ！」

アツシユの嘆願は、しかし、厳密にはおかしな発言だった。何故ならステラは——“クレイドル” 本体は、今もまだ“リジエネレイト”と戦い、彼の云う通りに勝負をしているから。

けれども“クレイドル”の両腕から解き放たれたドラグーン・シールドは、彼の嘆願など知ったことではない。誘導式の自律砲塔は、まるでステラの手駒のように、アツシユの下僕である量産機部隊を次々に相手取つては一方的に排除していく。

強かな逆撃を被つた彼らとて、コーディネイターの中の特殊精鋭部隊である。しかし、そのような肩書も、所詮はドラグーンが演出する光の格子を前にしては何の価値もない。彼らは為す術もなく、変幻自在、縦横無尽に繰り出されるオールレンジ攻撃を前に潰走していった。

「おだつかあああああ！」

自身の部下達はおろか、彼らが大切そうに保管していた“リジエネレイト”の予備パーツすら破壊し尽くしてゆくドラグーン・シールドを、アツシユは激怒と共に何とか

食い止めようとした。

アツシユは「クレイドル」本体への攻撃を取りやめ、そこでようやく、ロング・ビールライフルをドラグーンに向けて応射した。しかし、そのビームが空間を風いだときには、目標地点にシールドの機影は既がない。当てずっぽうにビームを乱射し、数発の光条が辛うじてシールドを捉えたときは、しかし、航行するドラグーンはやはり「盾」としての機能を発揮し、表面にエネルギーシールドを展開、それ単体の出力をもつてアツシユの砲火を弾き返した。

「!？」

——新兵器を、ここまで巧く利用するなんてありえねえ!？」

アツシユは愕然としながら、胸の内に恨み言を叫んだ。まるで敵は、以前から似たような武装の操作経験でもあるようではないか。

激しく動揺する彼であつたが、その間に彼の注意から逸れていた「クレイドル」本体の急接近を許していた。白銀の機体は両手に光刃を抜き放ちながら、視界の外からアツシユへと突撃する!

「——ちいっ!」

斬撃をかわし、大きく後退した「リジエネレイト」の機体は次の瞬間、ふいに陽炎のように揺らいで宇宙へ消えた。

——ミラー・ジュコロイドステルス……!?

その迷彩効果は、ニコルの「ブリッツ」でも確認された現象だ。なるほど、ザフトはやはり地球軍から奪取した「ブリッツ」の特性を、ファーストステージシリーズの中では「リジエネイト」に反映させたということか。

——正攻法では勝てない。そういう判断か。

視覚的にも、リーダー等の観測機器を以てしても、対象は補足できない。

懸念したステラの背筋に、次の瞬間、ゾクリと冷たい悪寒が駆け抜ける。一見すると何もない空間からビームが放たれ、ステラは慌ててこれを回避した。

「ハッハー！ 無尽蔵に再生するだけが、この機体の取り柄だと思ったかよ!？」

一方的に部下達がやられている。

——ならば、こちらもまた一方的に攻撃してみせるまでだ!

アツシュは意図どおり、自身の姿を完全に闇に溶け込ませながら、ほとんど一方的にステラへ射撃を浴びせ続けた。

「……!」

しかし、半ば一方的に掃射される火線に対し、その発射角から敵の予測空間を割り出すのはステラにとっては難しいことではなかった。

MMI—MI2リノセロス・リニアキャノン。両翼に内蔵された質量弾頭砲であり、

散弾による複数目標への攻撃など「面」破壊に特化した火器だ。発射と同時に散逸する砲弾の雨は、現在の「リジエネレイト」では防ぐことは不可能だ。なぜならフェイズシフトとミラージュコロイドステルスは性質上、同時併用することが叶わず、実弾を防ぎたい場合には必ずステルス機能をオフにしなければならない。

「——何ッ?!」

ステラの撃ち放った一射は、アツシユのことを狙撃した、というより、予測空間に向けて弾丸をばら撒いた、と形容した方が正しい。それはある意味、とても適当な攻撃——しかし、無色透明の「リジエネレイト」の位置を炙り出すには、充分すぎる砲撃。

思ったとおり、散弾の射線上にいたであろう「リジエネレイト」は即座にステルスを解除してフェイズシフトを展開、その巨大すぎる黒い機影を現わした。両腕で全身を抱え、放たれた質量弾頭を全て弾き飛ばすことに専念した。ステラは先に云われた言葉を、返すように云つてのけた。

「その迷彩だつて、別に無敵なわけじゃない」
「クッ……!」

もう一度だけミラージュコロイドステルスを展開しようとするアツシユを、ステラは散弾を連射して許さなかった。

アツシユの手によって、光波防御帯が攻略されたように、ミラージュコロイドステル

ストと完全無欠というわけではないのだ。どんな兵装にも必ず突くべき弱点が存在し、これを正確に潰し合う彼らの戦いは、最高の性能を持ち合わせるモビルスーツ同士の手札の潰し合いであると云えた。

「なぜだ。なぜ、あんな小娘ごときが……!」

そして、手札を潰し合う上で先に不利になったのは、このときは「リジエネレイト」の方だった。予備パーツが撃滅され、再生力という最大のカードを封じられたアツシュには、もう二度と迂闊な被弾や損傷は許されない。

巨大すぎる規格の機体。たしかにそれは素早さでカバーされ、巨大ゆえに敵に圧迫感を与えもするが、体積の広さから云えば、被弾率とて在来機の比ではないのだ。

「戦う理由も不明瞭な小娘に……! このオレがア!?」

無限に思えた機体の予備パーツが、既に底を尽きている。アツシュはなかば自棄に、一気に決着をつけようと「クレイドル」への突貫を仕掛けていた。

「ステラはただ、みんながしあわせになれる世界が欲しいだけ! それがきつと、みんなが安心して暮らしていける世界だから……!」

それが、彼女なりに見つけた答えだ。

だからこそ、ステラは戦う。ナチュラルもコーデイネイターも関係ない。

「みんなにとつて安らかな——ゆりかご揺籃が欲しいだけだ！」

はっ！ と笑い飛ばしたアツシュ・グレイは、再び「リジエネライト」を駆り、突撃を仕掛けようとした。

だが、次の瞬間だった——。

アツシュの耳に、突然の通信が届いた。彼が所属する「ジエネシスα」からの、緊急の軍用回線である。

（——帰還命令だど！ このタイミングでか？）

それは、施設の防衛隊長たるアツシュに、帰還を促す通信だ。通信先の男は血相を変え、焦燥に塗れた声を張り上げていた。

「大至急「ジエネシスα」へ帰投してください！ 問題が発生しました！」
「後にしろ！ ラクス・クラインの追討任務はどうなる!?」

「いいんですよ！ そんなことより、はるかに一大事なのです！」

通信士の声は、ひどく焦りに満ちていて、強かに震えていた。アツシュは、ぐうと喉を鳴らした。

「チイ、今日のところは、これくらいで勘弁してやるか……ッ！」

そう唾棄したアツシュは、機体をすぐに転進させた。高速巡航形態へ移行した後、全

推進力を以て、明後日の方向へと飛び去って行く。

状況が呑み込めない、ラクスとステラは、茫然と互いの顔を見合わせた。

「……退いた……？」

「どうして……？」

撤退の理由が分からず、腑に落ちぬまま目を見張っていたステラは、周辺を改めて見渡した。

自分達を包囲していた“ゲイツ”は殆んど撃滅し、隊長格の“リジエネレイト”もまた、どこかへと撤退して行った。戦闘は、その瞬間に終息したのだった。

ほっ——と息を吐いたその瞬間より、空虚だった少女の瞳に、輝きが戻って行く。

ラクスもまたヘルメットを脱ぎ、髪を振ってほどこいた後、改めてステラの方を向いた。

「……ありがとう」

「……うん」

ザフトからの刺客——父パトリック・ザラが直々に、ラクスの暗殺に派遣したアツシユ・グレイを退けた今、ステラは、正式に父親に対して反抗を行ったことになる。

これは大局的に見て、ザフトへの反逆を意味するのだろう。

——ただ、平和を捜したいだけなのに……。

結果的に、ステラはラクスと同じ道に共感し、共感した結果が反逆者として扱われる

ことなのだ。

(パトリック・ザラ——。あの人は……間違ってるの……)

ステラはそこで初めて、みずからの父に疑問を抱いた。

そして、その父に心服する、みずからの兄に対しても——。

(アスラン………)

ひよっとしたら、彼もまた間違っているのではないだろうか——と。

高速巡航形態で飛行する『リジエネレイト』は、真つ直ぐに彼が防衛任務に当たる『ジエネシスα』へと向かっていた。

アツシユ・グレイは、苛立っていた。

ラクス・クラインの暗殺任務において、よもや、自分達がこうも辛酸を舐めさせられるとは予想だにしていなかったからだ。

「小娘ひとりを相手に、このザマってのは……なかなかどうして」

『リジエネレイト』に後続する僚機の姿はない。すべての『ゲイツ』が、どういうわ

けか「クレイドル」に撃滅されてしまったのだ。

——そもそも、どういうことなのだろう……？

ZGMF-X08A「クレイドル」とは、アプリアリウスにて、ザフトが開発したファーストステージの第一機であったはずではないか。

諸事情あって、長らく凍結されていたと聞いていたが——そのような極秘のモビルスーツが、何故、自分に敵対する少女の乗機となつているのだろうか？ 本来ならば味方であるべき機体が、どうして敵に回っているのだろうか？

(クライインに味方した「フリーダム」に「クレイドル」——どつちも、ニュートロンジャマー・キャンセラーが積んであるモビルスーツじゃねえか……)

それが、まとめてザフト以外の勢力に渡つたとなれば——「プラント」にとって、いかなる脅威となるのか。

アッシュ個人としては、世界の行く末などに興味はない。

彼はサデイスティックに人を殺すのが趣味であつて、殺されるかもしれない恐怖にマゾヒストめいた特別な悦楽を憶えるわけではない。彼自身が常に上に立ち、敵を屠る圧倒的有利な戦闘を繰り広げていたい以上、敵勢力にファーストステージのような危険戦力を接収されることは、結果的、彼にとつても「損」としか言いようがないのである。

ましてニュートロンジャマー・キャンセラーが、地球軍の手に渡るようなことになれ

ば、戦況は一気に変わるだろう——。

(次に戦場で会うときには……容赦はしねえぞ、金髪の小娘………ッ！)

ひとりごちるアツシユの耳に、再び、軍用回線からの通信が飛び込んで来た。

「——俺だ。それで、何があつたんだ？」

ラクス・クラインの追討任務よりも優先すべきことが、緊急に飛び込んで来たということだろう。

でなければ、彼に帰投命令が下されるはずがない。

通信先の男は、申し訳なさそうに俯いていた。その声は震えている。

〈申し訳ありません、隊長〉

「ああ？」

〈我々が防衛していた「ジェネシスα」が、地球軍に発見され、襲撃を受けました！〉

「なんだと!？」

——ダンッ！

アツシユは、立ち上がった。

〈隊長や、その他多くの戦闘員が留守になった隙を突かれました——。施設に残った戦力では、ヤツらに抗戦することもままならず、まんまと地球軍の奇襲を許してしまいました……!〉

ラクス・クライン追討のために、彼が防衛していた施設 “ジエネシスα” からは、多くの戦力が出払っていた。

その隙を突いて、地球軍が攻め込んで来たというのだ。

「地球連合の、どこの部隊だ！ 事と次第によつては、始末書じゃ済まねーぞ！」

〈お、恐らくは、大西洋連邦の部隊かと〉

「被害状況は!？」

〈施設自体は無事です。ですが、警備に当たっていた当直の兵士数名が重症。一そして

↓

アツシユは息を呑んで、その続きを待ち遠しく思った。

「施設内部に保管していた新型モビルスーツ、ZGMF-X12Aが……奪取されました……」

一拍おいて事態を把握したアツシユの表情から、血の気が引いていく。

神と人の契約—— “テストメント” ——。

話が上がったモビルスーツは、彼が操るZGMF-X11A “リジエネレイト” と同様に、 “ジエネシスα” 内部でロールアウトされた新型機。型式番号から自明だが、それは “クレイドル” “フリーダム” “ジャステイス” の兄弟機に当たり、核ジエネレータを動力源としている。

「おいおい。それは、つまり？」

それが、大西洋連邦の特殊部隊によって強奪されたと云うことは。

「Nジャマー・キャンセラーが、地球軍の手に渡りました！」

報告を聞いた、アツシユの顔が凍り付いた。

『決意の萌芽』

大西洋連邦が、中立国家であつたオーブ連合首長国への侵攻を開始した。このような戦端が開かれた原因は、大西洋連邦が出した以下の声明にある。

——オーブ連合首長国は、地球の国家のひとつでありながら、地球連合に組する姿勢を見せない。

たつたこれだけの言葉を、言いがかりと糾弾した者は多いだろう。オーブは確かにコーデイネイターを受け入れる数少ない国であり、それゆえに「プラント」とも一定の協定関係を保っていたが、かと云つてすっかり肩入れをしていたわけでもない。

そもそも、オーブの本質は中立である。

平和主義だが、非武装ではない。孤立主義だが、だからこそ自助努力を忘れない。地球連合とも「プラント」とも一定の誼を結んでいたのは、その理念の特異性のためと云つていい。

だがいずれにせよ、大西洋連邦は、そういつたオーブの在り方が気に入らなかつたらしい。

火種は以前からあった。ハウメア山の地熱発電を軸に工業化を推し進めてきたオーブは、コーディネーターの移住——それに伴う彼らによる国内労働——を認めることによつて、結果的に高い技術力を得た。そこから生み出される経済力を背景として、小国ながらも無視できない強大な軍事力を保有する国家ともなつていったのだ。

このことが、地球連合にとつて愉快ではないのは明らかだった。だからこそマスドライバーの接收は、いわば侵略の口火としては絶好の口実でもあつたのだらう。

そうして、実際に侵攻を開始した連合軍戦力の基盤は、おおむねGAT-01ストライクダガーだった。オーブは島国であることから上陸戦が繰り広げられ、侵攻するに差し当たつて機動力のなさすぎる「エクソリア」等の大型モビルスーツは、今回ばかりは実戦投入が見送られていた。

しかし、だからと云つて、絶対的な脅威が減つたわけではない。

地球連合は多くの「ダガー」の他、前期GATシリーズの開発・運用データを基に様々な性能を特化させた新型モビルスーツ部隊——通称「後期GATシリーズ」——を、オーブ解放戦線へと投入したのである。

GAT-X131「カラミティ」——

遠距離砲撃に特化したバスターの後継機。大火力砲を多数装備し、後方支援役として活躍。豊富な武装量に対し、徹底した機体の軽量化が図られている。

G A T—X 2 3 5 “フオビドウン”

特殊兵装を搭載したブリッツの発展機。位相転移装甲とビーム偏屈装置を併用し、実弾・エネルギー兵器を問わない鉄壁の防御力を誇る。

G A T—X 3 7 0 “レイダー”

可変機構を実装したイージスの踏襲機。対M S戦を想定して開発され、変形による高機動を活かした強襲戦闘を得意とする。

これら新型のモビルスーツには、大西洋連邦が独自の研究で生み出した生体C P U、ブーステッドマンの少年が搭乗した。彼らの活躍は、いつとき防衛に徹したオーブ軍を徹底的に苦しめることとなる。

オーブが誇っていた悠久の平和は、ついに破られた。地球連合とオーブ——地上国家同士が争い合う、血みどろの解放戦線が始まったのであった。

漆黒の機生獣“リジエネレイト”を撃退することに成功したステラとラクスは、ラクスが控えさせていたクライン派の友人ら、マーチン・ダコスタらの無事を確認するため、機体ごと“プラント”まで戻っていた。

荒廢した土地、爆撃で灼け崩れた大屋敷。

変わり果てた邸宅の前まで戻ると、ステラ達はそこで、ダコスタと合流することができた。彼らの中では殆どの人員が無事だったようだが、特殊部隊に用いられた催涙ガスや重火器等の手痛い逆撃を被り、重症の者も中にはいた。ダコスタもまた負傷者のひとりであり、バズーカの衝撃に吹き飛ばされたのち、右腕を大きく火傷しているようだった。

「ラクス様!? 本当に良かった!」

だが、みずから怪我などどこ吹く風と云った様子で、赤髪の彼はラクスへと真つ先に駆け寄ってきた。頭を地に付けるような勢いで、その頭をラクスに下げる。

「申し訳ありませんでした! 我々がついていながら、このようなことに……!」

深々と謝られたラクスであるが、彼女もまた迂闊だったと反省を口にし、彼らには労いと相応の感謝を述べて返していた。元より、無理を承知で彼らを連れ出したのは彼女の方だったようでもある。

そうしてラクスとひと通りの会釈を済ませた後、ダコスタはその足をステラに向けた。先にラクスに見せたものと同様、心からの謝意を以て深々と頭を下げてくる。

「本当に面目次第もなかった。きみには、感謝の念でいっぱいだ」

「ん」

謝られたステラの方は困惑を露わにしたが、彼女はラクスと違って、こういうときに優しくなかった。悲しいことに、彼女の感覚はどこまでも兵士的だった。

「……護衛なら、護衛の仕事くらいちゃんとして。だって護衛でしょ……？」

可愛げのない物言いであったが、ステラとしては云わずにはいられなかった。自分がいなければ、今ごろラクスは間違いなく殺されていた——それを恩着せがましい物言いだと云わせない程度には、護衛を務めたダコスタ達は役に立たなかったからだ。

今、ステラの目の前で臨時の応急キャンプを作って、思い思いに傷を癒しているラクスの護衛達。俗に云うクライン派とやらが全体でどれほどの規模なのか、ステラは知らない。知らないが、仮にも正規軍を敵に回すのにモバイルスーツ程度も用意できないのなら——ラクスにどれだけ可愛い顔で“無茶なお願い”をせがまれたとしても——そもそも彼女を外出させるべきではなかったし、それでラクスが止まらないなら羽交い締めにしても止めさせるのが、本来の護衛の役割であるはずなのだ。

「耳が痛いな」

「わかったなら、きつと次はだいいじょうぶ」

「次なんて、ない方がいいさ」

「それは、そうだね」

不器用なりに、ステラは会話を終えてやる。

ダコスタから視線を外し、今度は真つ直ぐに、ラクスの方を見据えた。

「……これから、どうするの?」

委ねるように、ステラはラクスへと訊ねた。

ステラはザフトより「クレイドル」を授かった身でありながら、刺客として派遣されたザフトの特殊部隊を撃退した。全滅させていればともかく、アツシユという隊長格を取り逃したこともあって、今回のステラの独断は明確な背信行為としてザフトに一報されることになるだろう。

けれど、このときのステラの中には反省や後悔はなかったし、それどころか今、彼女にしては珍しく少女っぽい——子供っぽい——反抗心が芽生えていたのは事実である。

ラクスを無罪にしてくれる——確かに父はそう云った。いま考えれば虫が良すぎる話だし、当のラクスは最初から気付いていた風であったが、少なくともステラは信じていたのだ。それを先に裏切るような真似をして、自分への背信を先に働いたのは父の方だ。まさかステラを騙し、特殊部隊を人知れず尾行させていたなんて——。

いずれにせよ、父を裏切った立場にある以上、ステラは自分が何をどうして行けば良いのか、それを把握することができなかつたのである。

「わたくし達はふたたび地下に潜って、多くの人に呼びかけます。この無益な戦争を止める術は、他にないのかと——」

云われ、ステラはハツとする。

そうなのだ——ラクス・クラインは結局、直接的に戦う力など持たない。平和の歌姫として、彼女がやることはいつだって種を撒くことだ。思考の種——と云つてもいい。

——戦争において、何が善で、何が悪なのか？

これを考えることを放棄した人間は、妄信に憑りつかれるままに、己と異なる信念を持つ者を滅ぼす道を選ぶだろう。それは実に一方的で、排他的な武断思想。今のパトリックやアスランを見てきたステラによく分かるものでもある。

「今の『プラント』は最早、完全に貴方の御父上の手の内にあります。——政策も、思想も」

保守派のトップであつたクラインが『プラント』から失脚した今、ザラ派のトップであるパトリックは必然的に『プラント』の独裁者となつた。

そうして彼の叫んだ『ナチュラル殲滅』の煽り文句のまま、アスランを筆頭とするザフトの義勇兵達——ひいては『プラント』国民すべてが思考放棄に陥れば、このさき『プラント』は破滅の道突き進むことになるだろう。

「貴方の御父上の言葉には、多大なる影響力があります。求心力があります。多くの兵は民は、盲目的に彼を信じ——彼の思想こそが己の思想と同じなのだ……楽な在り方を望みます。ですが、それではいけません。ひとりひとりが正義を考え、迷い、そうし

て歩んでゆかねばなりません」

ラクスは、彼らに疑問を投げかける気である。本当にナチュラルを滅ぼすことだけが正義なのか——人々が考えることを止めてしまう前に、世の中に訴えかけて行くとうしているのだ。しかし——

「でも。それを伝えるだけで、みんなは本当に変わるのかな」

ステラは純粹な顔で問うていた。ラクスがこれからやろうとしていることは、確かに良いことなのかもしれない。正しいことなのかも知れない。

——でも、それはあんまりにも遠すぎるお話にも思える。

不思議とステラは、そう感じた。

「何が間違つてて、何が正しいかなんて、みんな分からないだよ。それはステラも同じ……だから、人の言葉を聞くの。人に頼ろうとするの」

だからこそ民衆は、パトリック・ザラの言葉を信じる。あるいは穩健派のトップであった、シーゲル・クラインの言葉を信じた。そして、その中にはラクス・クラインの言葉を借りる者も現われるはずだ。

「みんながあの人を信じ切っているから、他の誰かが『他に道がある』ってことを、みんなに伝えなきゃいけないんだ——アスランにも……」

ただ批判するだけの虚しさを、人は知らなければならぬ。間違いを指摘するだけの

愚かさを。

——間違いを喚き立てるのではなく、間違いに答えを示すこと。

たとえそれが、正解でなくても良い。しかし、それを行うには、曲がりなりにも資格が必要だ。確固たる発言力を持った人間が発信しなければ、たとえどんなに正しい意見も意味を持たない。

「ラクスになら、きつとそれができると思うの」

「わたくしがシーゲル・クラインの娘である以上、わたくしの答えを口にすれば、それが正解だとおっしゃる方も現れます。それではきつと、意味がないのです」

ラクスは、渋ったように続けた。

「ですからわたくしは、誘導はいたしません。ただ種を蒔くだけです、後はひとりひとりが芽吹き、葉を育て、花を開かせる」

「きつと、リーダーになれるのに」

「それは人身御供です。そういうものではありませんか？」

ラクスは渋面で返す。

彼女は、たとえ自分が居なくても人々が自発的に立ち上がる世界を見据えている。それは先を見据えたものであることは確かだが、しかし、同時にいささか遠すぎる話のように、このときのステラには思えた。

「でも、種が蒔かれた後にはね、水が。光が。栄養が必要だよ。何も与えず花開けなんて云ったって」

「——残酷、と？」

「成長するのに必要なものを与えることも、種を蒔いた人の責任だから」

「……」

「みんなを迷子にさせるくらいなら、ちゃんと導いてあげようよ」

傍らのダコスタは、唾然としたという。あのラクス・クラインが、このときばかりは返す言葉を失っていたというのだから。

——彼女は、いったい何者なんだ……？

兵士としての能力は——ザフトの特殊部隊をたったひとりで退けたのだ、もはや言及するまでもないだろうが——勿論、傍から見ても無垢にしか見えない少女。おおよそ論理的な人間とは程遠いはずなのに、その目は無垢で純朴であるがゆえに、本質を決して見逃さない目を光らせていた。

「随分と、お変わりになりましたのね……」

ラクスは改めて、目の前の少女の変貌に舌を巻いた。精神性において、一回り、二回りも飛躍的な成長を遂げた彼女を前にして、けれどステラの方こそ、ラクスにだけはそれを云われたくないと思ってしまう。

「ではすこしだけ、貴方に指示を出すことにしましょう」

ラクスは、決して誘導はしない。他者に対して求めることをしない。

だがステラに云われ、初めて彼女は、みずからの意志を口に出すのだった。

「——フリーダム」

ラクスが云い、唐突な言葉に、ステラはびくりと震える。

「……いえ、キラは地球へ向かいました。今は、オーブにいらつしやいます」

ステラは虚を突かれていた。命を懸けたアッシュとの死闘を挟んで、今までのすつかり忘れてしまっていた——あの「フリーダム」のパイロットが、キラ・ヤマトだという話を。もつともステラはいまだに信じられないし、どちらかと云えば思い出したい話題でもなかったが。

「貴方と同じく、新たな剣を携えたキラ・ヤマト——彼ともお話されてきたらいかがですか？ おともだちとして」

おともだち——？

云われ、ステラは混乱する。いや、違う。確かにそうだ——確かにキラ・ヤマトは、ステラにとって友人だ。大切な幼馴染だ。

——でも「フリーダム」のパイロットは、そうじゃない……。

——だってステラは、そのつことなんて知らない……。

反射的に否定しようとしたステラであるが、そんな彼女とて、キラ・ヤマトという人物がモビルスーツを操縦できてしまうことを知っている。ただ操縦できるだけでなく、その上で人よりも上手く戦えてしまうことさえも。イザークやディアツカを圧倒し、太平洋上で交戦したステラでさえ、一方的に蹴散らすような桁違いの強さを示威してみせたことも――。

「……」

ステラには分からないことが多すぎる。

——どうしてキラは、あんなにも強かったの？

——どうしてキラは、あの「フリーダム」なんかに乗ってるの？

——どうしてキラは、戦争なんか嫌だつて云いながら、また戦場に戻ってきたの？

結局のところ、ステラは友人であるはずのキラ・ヤマトについて、このときは何ひとつ真意を知らないままだったのだ。

「識しることも、大切なことです」

「……オーブへ？」

「はい。そこがきつと、貴方がいま向かうべき場所だから」

オーブ。名前は以前も聞いたことがある——それは国の名であり、以前アスラン達と一緒に潜入したことがあつたはずだ。ステラにとって最も印象的だったのは、そのオー

ブという国が、シン・アスカの暮らしている故郷だったということだったが。

それからステラはラクスと別れ、今は「クレイドル」のкокピッドに坐していた。

闇に輝く星の海を抜け、真つ直ぐに地球への航路に立つ。たしか、オーブは赤道付近に位置してはずだ、ステラは機体を大気圏の降下ポイントまで転進させた後、独自に突入準備をはじめていた。

驚くべきことに「クレイドル」は、モビルスーツでありながら、それ単機で大気圏突入が可能なほどのスペックを持っていた。在来機では考えられなかったことであるが、さして意外に思えなかったのは何故だろうと考えたとき、アラスカで「フリーダム」と「ジャステイス」が、それぞれに宇宙から現れたのを見たことがあったからだ。

宇宙から見たオーブは、火山性の列島がさながら王冠のような環状円を描いて見えた。あそこに、今はキラがいる。

——おともだちに会いに行く。

ステラの目的は、言葉にすると簡単だった。けれど、現実的には問題がいくつもあつた。それは当然に「フリーダム」という障害がキラ個人との間に存在していることも

あるが、当面の問題はオーブへの入国審査だろうか。

ステラがザフト軍籍のモビルスーツを携えている以上、今のステラがすんなりとオーブに入国できるとは思えない。ラクスの話では、すでに「フリーダム」と「アークエンジェル」はオーブ国内に避難しているとのことだったが、これを愚直に追いかけたのは、オーブ国軍という無用の『敵』を作ることになりかねない。いや——

なにより今のキラ・ヤマトは、ステラにとって『味方』とは限らない——。

精神的に無理もないことであるが、ステラにとって「フリーダム」は『敵』でしかないのだ。目的も明かさぬまま戦場に舞い降りて、誰彼構わず一方的に被害を加えて回った超然とした「死の天使」——ステラにとって、混沌とした恐怖の象徴だ。挑んでは蹴り飛ばされた記憶、仲間を奪われた記憶。そして——

——アイツの刃に、その身を灼かれた記憶……。

あれらはすべて、ステラがよく知るキラの行動だったのか？ 仮に今のキラにそのことを訊ねたとしても、ステラの求める答えなど絶対に返って来ないだろう。しかし、それでもいい。

（キラがいま、何を思ってるのか）

他ならぬステラには、それを確かめる権利と意味があった。少なくとも、過去の因果に決着を付ける切欠になるかも知れないのは事実だった。

そうして大気圏を突入した「グレイドル」は、白色の美しい雲霞を突き破り、赤道直下に位置する南海洋上に舞い降りた。オーブ連合首長国の領海に隣接する接続水域である。

「——!?!」

接続水域に舞い降りたステラは、そこで想定外の——想像を絶する光景を目の当たりにした。見慣れた海、彼女が好きだった海が、どういうわけか黒色に染まっていたのだ。いや、正確には海が黒いのではない。海を覆うほどの何か、オーブの接続水域という海洋上全体を覆い尽くしていたのだ。

(地球連合軍艦隊!?! どうして……!?)

海上を覆っていたのは、地球連合が所有する水上艦艇だ。ステラはその艦影に見憶えがあった——彼女自身も乗艦したことのあるタラワ級強襲揚陸艦。モビルスーツを運搬する機能を持った、れっきとした軍用戦艦だ。

——何故こんなものが、オーブの海を埋め尽くしている？

疑念に駆られたステラは次に、オーブ領海内の方角へ視線を投げかける。するとやはり、そちらにはオーブ国軍の艦隊が広く展開していた。それはまるで両陣営の艦隊が、相互に睨み合っているという風だった。

そのときである。時刻が九時を指し、地球軍艦隊から無数の巡航ミサイルが打ち上げ

られた。高々と空へ舞い上がったミサイルは、空を駆ける猛禽のようにオーブ領土へと向かう。オーブ護衛艦は、これを狙い撃つようにして迎撃を開始し、対空砲火の火線が上空を切り刻んだ。一拍置いて、地球軍揚陸艇から無数の戦闘機やモビルアーマーが進、対するオーブは地上に配備したM1“アストレイ”による防衛部隊を出動させた。

啞然とするステラの目下で、国家同士による開戦の火蓋が切って披かれたのだ。

「戦争をしてるのか……!?!」

凝然とするステラの脳裏に、オーブ国内の平和な景色が蘇る。豊かな街並み、笑いながら自分の脇を通り過ぎてゆく人々の活気に溢れる笑顔。戦争など無縁の、何の憂いもない穏やかな人々の表情――

あれだけの平和を維持していたオーブで、どうして戦争が……?!

啞然とするステラの耳に、やがてアラートが鳴り響く。地球軍艦隊が彼女の存在に気付いたらしく、巡航ミサイルを“クレイドル”に撃ち放ってきたのだ。我を取り戻したステラは即座に迎撃を行い、迫り来るミサイル群を全て叩き落とす。ホツとする間もなく、それによって完全にこちらを敵性存在と看做した地球軍艦隊から激しい火線が飛んできた。

(オーブには、シンがいるのに……!)

地球軍とオーブが戦争する。ナチュラルとナチュラルが殺し合う。そういつたこの

状況が、どうした経緯から生まれたものなのかはステラには分からない。分からないが、現実にはオーブが戦場になっているということとは、その国で暮らしている国民は——？

『そこがきつと、貴方がいま向かうべき場所だから』

ラクスの言葉が脳裏に蘇る。彼女は、この現実さえ見越していたのか——だとすれば、ステラが今やるべきことは……。

そうしてステラは、機体のスロットルに手を掛けた。いま優先すべきことは、決して“フリーダム”と決着をつけることではない——何よりも先に、オーブの人民を『まもる』ことだ。

——どうして忘れていたのだろうか？

元よりステラが戦う理由は、初めから変わっていない。ステラにとって、大切な人達を『まもる』ため——それこそが、今の彼女が戦う目的だ。

「まだ、消えちゃいけない命だつてある！」

そうして“グレイドル”は、オーブ解放戦線に参入していった。

『クロス・オーバー』A

オーブ本島、オノゴロ。

飛来するミサイルが空を切る甲高い音、遠くから腹底を轟かすような爆撃音、鳴り止まないサイレン——民間人には避難勧告が云い渡され、多くの民が海港に横付けた国外への脱出艇へ避難を開始していた。

木々の焦げた匂いが、鼻先をつんと掠める。方々から立ち込める噴煙が、目を刺激しては瞬きを繰り返させた。

ひとりの少年が、父と母、そして妹と共に本島の林間を駆けていた。

深めに被ったニット帽。その下に覗く、切れ長の黒髪。

きかん気そうな子供っぽさを残した顔立ちに浮かぶ双眸は、血の色を透かしたような深紅色をしていた。

少年の名はシン・アスカ——

戦災に巻き込まれた、オーブ連合首長国の民間人である。

コーデイネイターである彼をはじめとして、オーブ連合首長国は、地上に残された数

少ない理想郷だった。かつて、ブルーコスモスによるコーディネイター排斥運動が地球圏全体を巻き込む形で盛り上がったときも、オーブはコーディネイターの国内住居と、その真つ当なる人としての生活権を保障し続けた。

——オーブは、いつだって平和だった！

——なのに、なんで戦争なんか起きるんだ!?

咄嗟に抱いたシンのそれは、あまりにも無知で子供っぽい感傷だ。しかし、だからこそ率直であり、本質的な疑念でもある。

シン・アスカは、戦争を知らない。平和の中で生まれ、平和の中で当然のように育て来た彼には、平和という環境が如何にスケールの大きな幸福であるのかを咀嚼する力は培われていなかった。目の前で起きている現実のすべてが、単なる理不尽に思えてならなかった。

「急げ、シン！」

「マユ、頑張つて！」

息を切らせた父の声と、上ずった母の声。

両親からの激励を受けながら、恐怖の中でシンとマユは、懸命に走った。マユは今にも泣き出しそうな表情で、母に手を引かれる形で。

シンはそんな妹の背を見守るように、家族の中で最後尾に位置づいて走っていた。彼

らは、避難のために軍港を目指していたのだ。

——花が……。花が、吹き飛ばされていく……！

穏やかに流れていた時間は、今ここに破られた。

周辺に咲き誇る色とりどりの花々を、戦いの砲火は、無残にも覆って包み込んで行く。閃光が弾ければ爆音が鳴り響き、己の声すらかき消すほどの激震に揺れれば、巨神の如きモビルスーツ同士の攻防が、その激しさを増す。

避難が遅れたゆえに、戦争の中に取り残されたアスカ一家は、完全に野晒しの状態にあった。

——なんで、こんなことになるんだよ……!?

駆け抜けながら、シンは多くの花が吹き飛ばされて行く光景を、そのとき然と目に焼き付けていた。

オーブ本島にあつて、いまだ生身でありながら軍港に足を運べていなかったのは、ニコル・アマルファイも同様だった。『アークエンジェル』から保釈された彼は、このオーブ解放戦が始まるより前に、オノゴロの地に立っていた。

ニコルがこれから向かう先に、これという宛てはなかった。今の彼に残された選択と云えば、それこそオーブ国内の軍港に向かつて、避難の混乱に乗じてオーブ国外へ退去する程度であつたらう。

（「ブリッツ」はモルゲンレーテが持つていった、という話だつたし……）

この情勢下、仮にオーブから脱出できたところで、その先にどうなるかななどの保証などない。

賢明なるオーブ連合首長国政府は、当然ながら国外へ逃亡させた避難民のその後の手配も十全に行つていふことだろうと信じているが、さりとてニコルのような人間を宇宙を跨いで「プラント」に帰してくれるとは限らないし、そんなことはニコルも端から期待していない。

人のいい両親のことだから、自分は生きているのだと告げてあげれば涙ながらに喜んでくれるだろうが、その先はどうする？ もう一度、ザフトとして義勇兵をやり直し、与えられた『敵』——地球上に住まう人々を弾圧するための歯車になるのか？

——果たしてそんなことが、今の自分にできるのだろうか？

国営の大公園から国道の大きな路面へ繋がる長い階段に立ち尽くすニコルは、海岸線から出撃してゆく「アークエンジェル」の艦影を遠目に見ていた。敵艦だつたはずの宇宙艦『大天使』は、今はもう、地球軍の所属艦ではない。

——なら……！ もう、戦う理由なんてないじゃないか！

軍人が、軍人として戦場に駆り出されるのは責務である。大義のため、名誉のため、民のために戦うことこそ兵士の本分であり、任務であり、矜持なのだ。

しかし「アークエンジェル」——今の彼らは違うし、戦う理由など持ち合わせていない筈だ。地球軍から離反した彼らに帰属すべき軍はなく、従うべき命令もない。当然、あのようにオーブ連合首長国に義理立てする必要だつてない。

——だつたらどうして、彼らは戦う？

——いや違う、戦える？

トールやミリアリアは、オーブが故郷だと云っていた。

彼らは、故郷を守るために戦いに行つたのだ。

(祖国を守るために、戦う)

戦う動機は、ニコルのそれとよく似ていた。

「——！」

そのとき、彼の立っていた地上を暴風が突き抜けた。吹き曝しに遭つたニコルは、反射的に顔の前に腕を翳す。どうやら、地球軍のMS部隊が付近まで上陸してきているらしい。

身の危険を感じ、慌てて彼はその場から退いた。距離を置いてから空を見上げれば、

そこには空戦用モビルスーツ“ネメシスダガー”が視認できた。これまで独房に入っていたニコルでは識別することのできない新型機だが、明らかに見慣れないゴングルアイからは、おおよそ地球軍の正式な採用機だろうという予測くらいは付く。

「——こんな場所にまで!？」

ここは海岸から離れた内陸だ。オーブは島国であり、その島自体の規模もそこまで大きなわけではないが、さりとしてオーブの防衛部隊は海岸を重点的に守るはずだ。

——にも関わらず、彼らは敵の侵入を内陸まで許している……?？」

それが意味する形勢など、明らかだった。考えていた矢先、案の定というべきか、事態に勘付いたオーブ軍の“M1”小隊が足音を立てて駆けつけてきた。朱色いボディに彩られた“M1アストレイ”は、量産式ビームライフルを構え、複数体で一機の“ネメシスダガー”と相対する。

しかし、大空を制す“ネメシスダガー”は三次元に対応した反応をみせ、放たれた火線を次々に回避する。逆撃として放つ“ネメシスダガー”の砲撃は、対して“M1”を捉え、これらを易々と撃破した。地に立つニコルの目前に、打ち砕かれたモビルスーツの破片が転がる。

(強いっ……! あれが、地球軍の正式採用機なのか!)

パイロットとしての性なのか、彼らしくもないはずだが、このときのニコルは思わず

感心していた。あの「ネメシスダガー」にはおそらく——いや間違はなくエースパイロットが搭乗しているのだろう。量産型の「ストライクダガー」とは決定的に異なる運動性、空戦用のフライトユニットを自在に操る上位機種は、大空の支配者であるかのように地上の「M1」を狩ってゆく。

——あれでは、オーブの防衛線は総崩れだ！

そう確信したときだった。彼が眺めるはるか上空より、白銀の「雷」が駆け抜けて来たのは。

勿論それは比喻であり、しかし、それを単なる大袈裟だと云わせない程度には、その速度は雷速じみて尋常なものではなかった。そのとき現れた白銀色のモビルスーツは凄まじい機動力を持ち、両腕にビームサーベルを抜き放ちながら「ネメシスダガー」を背後から強襲したのだ。

「白銀の——!?!」

対する「ネメシスダガー」も、流石にこれに気付いたらしい。いや、気付いただけでもやはり上等だ。圧倒的な機動をもって突っ込んでくる「白銀」を、その機体は、やはり事前に察知して回避運動をとってみせた。

ニコルは目を見張り、その初めて目にする新型のモビルスーツに驚く。

白銀に輝く装甲。鏡を磨き上げたように美しく、装甲表面のフレームを縁取るように

シアンブルーの装飾がエングレーブのように描かれている。両腕に「ブリッツ」のトリケロス」を思わせるような防盾を装備し、背中には一対の砲身と、これを飾る羽毛のように三対の大振りな翹翼が輝いている。その眩さは、さながらオーブという国に降誕せしめた月の女神アルテミスを連想させた。

「どこの所属機だ……っ!？」

鮮やかな青色の灯が燈るツインアイ、神獣の角を思わせる黄金のクアドラブルアンテナ。間違いなく、それは「ブリッツ」と同じ「G」タイプだった。

そしてそうである以上、その「銀色」は見かけ倒しではない——そいつは凄まじいスピードで大空を駆け抜け、滑るように「ネメシスダガー」へと突貫する。

迎え撃つ「ネメシスダガー」は牽制のバルカンを乱射し、続けざま、ビームライフルをマシンガンのようにバラ撒いた。しかし「銀色」は砲火の合間を縫うように超低空飛行を行い、地をすれすれに飛んだ後、双腕に装着された防盾からビームジャベリンを発心させた。

次の瞬間、灼熱が装甲を削ぎ落す高音が鳴り響き、「銀色」のビームジャベリンが、過たず「ネメシスダガー」の頭部をもぎ取っていった。

しかし、それだけである。ビームジャベリンの直撃を予感した「ネメシスダガー」は、ぎりぎりの所で後退し、損害を頭部メインカメラのみに留めたのだ。仮にニコルが

“ブリッツ”に乗っていたとしても、とれたかどうか判らない反応速度で。

そうして頭部を刎ね飛ばされた“ネメシスダガー”は、すぐに背後を振り返って応戦をした。フライトユニット“ノービリス・トロス”より無数の追尾ミサイルを、背後方向の“銀色”めがけて発射したのである。

だが、やはりその攻撃に大した意味はなかった。疾風のように空中を駆け抜ける“銀色”は、抜き打ちに両脇から抱え込んだ散弾砲を応射し、一発につき数基のミサイルをまとめて撃墜する。

——鮮やかな空中戦！　これが、エースパイロット同士の戦い……!?!
だが結論を云えば、二機のモビルスーツは基礎性能が違い過ぎている。

その事実を見抜いて——やはり見抜けただけでも上等であり——“ネメシスダガー”のパイロットは、咄嗟に機体を転進させて戦場から逃げた。相手の方が明かな“格上”であることを悟って、撤退、あるいは味方との合流を図ろうとしたのである。

だが“銀色”はこれを許さない、獲物を追いかけるようにして“ネメシスダガー”の追撃に飛んでゆく。その場に取り残されたニコルは、不意に思った。

(あの“銀色”、オーブのモビルスーツなのか？　それにしては……)

薄い翹翼の形状は、まるで“デイン”の翼を連想させた。機体フレームも全体的に曲面が主体で、やや彎曲的な機体デザインはザフトで開発されたものであるような印象を

受けた。

(……何を、馬鹿なことを)

自嘲しながら、ニコルはかぶりを振って、そのような妄想——そう、妄想だ——を払拭していた。

明らかに従来のMSが発揮できる機動性ではなく、であれば「アレ」は、間違いなく最新鋭の機種だった。所属がザフトだとすれば、そんなものが、どうしてオーブにあって、オーブに加勢するというのか——静寂が訪れ、それまで恍惚と戦闘に魅入っていた彼は、ハツとして現実に引き戻される。

——こんなところで、僕は何をやっている。

得体の知れない「銀色」のモビルスーツが地球軍機と戦っている。それはオーブにとっては心強いことだ。けれど、たった一機の活躍によって戦況が覆るほどに戦場は簡単ではない。

——戦力は、すこしでも多い方が良い!

ニコルはそのとき、妙な義務感に突き動かされたように「モルゲンレーテ」の工場区へと足を向けた。

『——他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない』

オーブの理念は崇高だ。他所の国家との諍いを起こさず、かといって、鎖国しているわけではない。援助が必要なきは他国への人材を派遣し、自他との協力関係を怠らない。中立と云いながら、たしかに屈強な軍備を整えてはいる——しかし、それらは専ら国土を守るための力、あるいは災害救助等を理由に国外へ派遣する支援要員としての役割に留まっていた。

国際社会において独自の立場を堅持するにも、背景に他国の口出しを許さない武力と経済力を必要とする。つまりオーブの軍備とは、オーブそのものの中立国としての権威を代弁するものである。

幼いながらも、シン・アスカはそうした母国の在り方に誇りを持っていた。

『オーブがこれを理念とし、様々に移り変わる時代の中で、我々がそれを頑なに護り抜いて来たのは、それこそが“国”という集団を形成していくにあたって、もつとも基本的で大切なことと考えるからです』

避難命令が出されるよりも前、オーブの代表ウズミ・ナラ・アスハがテレビ中継を介して、国民に訴えかけていたことだ。初老がかつた男の声色は、真つ直ぐだった。

『今この状況にあつても、私はそれを正しいと考えます。いま陣営を定めねば、撃つという地球軍——しかし、我々はやはり従うことはできません。今従つてしまえば、やがて

来るいつの日か、我々はただ彼らの示すものを「敵」として定め、命じられるままに戦うを繰り広げる蛮国と成るでしょう」

地球軍のやり方は、たしかに強引だ。地球圏のいち国家として、連合に協力する姿勢を見せないオーブは「プラント」支援国とされ、攻撃を受けることになった。

シンの友人達の中には「こんなことになるくらいなら、いつそのこと連合に同調してしまえばよかつたんだ」と叫ぶ者もいた。

果たして、本当にそうだったのだろうか？ この国はいつたい、どうすれば良かった？ まだ幼かつたシン・アスカには、その答えなんて分からない——ましてや、正解なんてものは。

「急げ、港はもうすぐだー！」

本島各所で戦乱の黒煙が噴き上がり、戦闘が激化する中で、しかしながらシンとその家族達はいまだに荒れた林道を走っていた。それは政府から下された避難指示が、明確に遅れてから発令されたためでもあった。

「オーブが戦場になるなんて。これでは、話と違うぞ……！ 私達が暮らし始めた頃は、そんな説明——」

「あなた、今そんなことを云ったって！」

「わかっているさ！ しかし、収まらんよっ！」

「父さん……母さん……」

オーブの理念を第一とし、ウズミ・ナラ・アスハは大西洋連邦の要求を頑なに突っぱねた。このときシンの父は、その選択と決断に誤りがあったのだと、民の目線から次のように不平をこぼした。

「ウズミ代表は、国の理念よりも国民の安全を優先すべきだったんじゃないのか!？」

彼はこのとき、己を家長とするアスカ家が——自分達が置かれた状況を冷徹に、客観的な目線でもって評定する。自分達はもはや、オーブの国民ではない。オーブに見捨てられた、棄民^{きみん}であるのだと。

「——あぶないっ!？」

そのとき叫ぶような声で、母の声が響く。ハツとして上空に目を巡らせたそのとき林道を駆けるシンたち一同を、凄まじい激震と暴風が襲った。

彼らの目の前に、見たこともない巨大モビルスーツの機影がふたつ、迫ってきていた。

「はいっ……!？」

オーブ解放戦線に介入した “クレイドル” ——

その中で、ステラは齒噛みしていた。現在、彼女は尻尾をまいて自分の前から逃げようとしている。“ネメシスダガー”を追撃していた。

——たかが一機に、どれだけ時間をかける!?

ステラはそのとき、自分自身を叱咤していた。なかなか敵機を鎮圧できない自分に、苛立っていた。それは確かな自嘲であった。

「こんな一方的な戦争、許していいもんか!」

目下にはオノゴロの軍港が見える。その湾岸に隣接する林間部で、ステラは“ネメシスダガー”に追いついた。リンクス・ビームライフルを連結させ、下空を飛ぶ“ネメシスダガー”を狙撃する——が、やはり回避された。ステラの放った光条は、林道の中に着弾し、地上を抉るような爆発を起こした。

ステラはそれで、すっかりと顔色を変えた。迂闊な射撃は控えるべきであり、地上への被害は最低限に収めなくてはならないのだ。

すると、標的の“ネメシスダガー”は山岳の麓に着陸していた。ステラが目を眇めれば、敵機の足許には、人が走れるほどの林道が拡がっていた。

(い)なら……(い)

——多少手荒にやっても、民間への被害は少ない。

改めて“クレイドル”はビームジャベリンを抜き放ち、一気に“ネメシスダガー”へ

斬りかかる。着地と同時に光刃を振り下ろし、灼熱の刃が周囲の木々を一瞬で蒸発させる。

“ネメシスダガー”は後退しながら空中へ飛びずさり、すかさずビームライフルを放つ。ステラは左腕のシールドでこれを弾き飛ばすと、間髪入れず胸部バルカンを応射した。無数の実弾が“ネメシスダガー”のビームライフルを捉え、これを爆散させる。それらは無数の炎の塊となつて、炎の糸を引きながら地上に墜落していく。

ステラは、その隕石めいた炎の残骸が墜落して行く先を見届けた。ばらばらに砕け散つた鉄塊と炎塊が、山の中に墜落し、木々をへし折り、叩き潰してゆく光景だ。

「……!?!」

それは、彼女が瓦礫を見送るために、山中に視線を落とした瞬間のことだった。そこに林道を駆けている、数人の民間人を目撃したのである。

——逃げ遅れ……?」

そう率直に思つた矢先、彼女は自分の目を疑つた。彼女の優れた視力は、視線の先の少年が——そして少女が、誰であるのかをすぐに理解した。切れ長の黒髪に、きかん気そうな赤い目をした少年——そして彼の前を走る、ふわりと重みに欠ける柔らかな黒髪をした少女。

「シン——!?!」

その瞬間、^{ビーム}メインウエイポンを喪失した上空の“ネメシスダガー”が、再び追尾ミサイルを撃ち放った。

地表へと差し迫る炎弾は、複雑な軌道を取りながら“グレイドル”へ——ひいては、その退路を塞ぐべく周辺の林間部へと肉迫した。

ぎよつと目を開き、慄然にステラは呑まれた。

彼女は、解き放たれた敵のミサイルが“どこ”に着弾するのかを、彼女は不思議と正確に読み取っていた。それゆえに、ゾワリ、と嫌な感覚が背筋を迸った。

——このままじゃ、みんなが……!?

ステラはそのとき、無我夢中に、みずからの機体を駆っていた。

ミサイルが上空から降り注ぐ。銀色のモビルスーツをつけ狙ったミサイルが、軌道を外れ、シン達を目掛けて落ちてきたのだ。

——モビルスーツ同士の戦闘に、巻き込まれた!?

シンは悄然として、頭上から迫り来るミサイルの群れに絶望した。

(あんなものが落ちてくれば、オレは、マユは……!?)

人型機動兵器が放つ、無慈悲なる砲火。戦争の火線を前にして、まだ十四歳に過ぎな

かったシン・アスカは、あまりに無力だった。

「——マユツ！」

気が付くとシンは、妹を抱きしめていた。みずからの背中を着弾地点側に向け、小さな少女を庇うように抱き留め、みずからを盾にした。それがどれほど無意味な行動であるかを知りながらも、そうせずにはいられなかったのだ。

そうして彼は、怒れる瞳で上空のモビルスーツ「ネメシスダガー」を睥睨した。

——連合のモビルスーツ！ あいつさえ、出て来なければ……！

木々を透かして、港が見える。あと、もう少しだったのだ。港はもう、目と鼻の先だった——この林道を抜ければ、もうじき避難民と合流できたはずだったのに……！

「くっそおおッ！」

ミサイルの直撃を受ければ、生身の人身など、ひと溜まりもない。いや、仮に直撃でなくとも同じことだろう。

噴炎弾は、その着弾と同時に周辺に凄まじい爆風と熱波を巻き散らす——それに比べて、自分達の身体はあまりにも軽すぎる、脆すぎる。こんな場所にいれば、爆発の余波に吹き飛ばされ、業火に身を焼き尽くされることになるだろう！ それこそ周りの木々と何も変わらず——同じように、あまりにも呆気なく！

逃げられない——!?

そのときシンは、みずからの命の最期を悟った。

——なんで、こんなことになったんだ……!?

理不尽な現実を閉ざすように、シンはそのとき、ぎゅつと瞼を瞑った。

——。

——。

——。

「……?」

爆発は、起こらなかった。

そうして訪れたのは、奇妙な静穏。

これを不思議に、そして不審に思ったシンは、マユは、そして彼らの両親はゆっくりと、その震えた瞼を開けた。

——意識がある……自分達は無事、なのか……!?

暗闇に閉ざされていた視界が開け、光を取り入れたシンの深紅の瞳は、咄嗟に、みずから周辺の光景を見渡していた。

「なッ……!?!」

シンは唾然としてその場に立ち尽くした。あたりは一瞬にして様相が変わっていた。木々の深緑に覆われていたはずの景色は既にそこになく、焼き尽くされて赤茶けた土がポロポロと見えるだけだ。あるものは炭化して、ぷすぷすと音を立てながら黒煙を吐き出している。

まるでミサイルが着弾したような光景だ——と、シンは臆気にそう思った。

そう考え終えてから、馬鹿なことを、と自嘲する。

実際、ミサイルは着弾しているのだ——自分達の周辺に、見事に。でなければ、背景がすげ替えられた舞台のように、こんなにも一瞬で景色が豹変するはずがないのだから。

——どうして、おれ達は無事なんだ……?!

そう思って、シンが背後を振り返ろうとしたとき、彼が庇っていたマユが驚愕の声を挙げた。

「白い、巨人…………!」

えっ——?!

シンは凝然と、マユが示唆した方向を振り返る。

するとそこには“白銀の巨神”ともいうべき——片膝を地に付けた巨大なモビル

スーツが目の前に厳存していた。

金色の角。蒼い一對の眼に、カメラ守護神のような外観で造られた、鋼鉄の巨人――。

「モビルスーツ!？」

シンは、怒鳴った。

その白銀のモビルスーツは、異教の守護神まもりがみを連想させた。

大きな両掌を空に翳し、片膝について屈んでいる。背中から張り出した四対の翼を孔雀のように天に拡げ、八枚の翼の内部から繊細な碧色の粒子が広域に散布させていた。

放出された光波の粒子は膜状に連結し、滑らかなビーム状の球体を形成していた。

――そう、翼状スラスタ―に内蔵された光波発生器から、アリユミユール・リユミエール“光波防御帯”が出

力され、防御帯がシン達を……厳密にはシン達だけを、的確に爆炎と爆風から護り抜いたのだ。

光波防御帯の内側は、いわば母の腕に包まれたように――ゆりかごのように、絶対安全圏内だった。

「護つて、くれたの……!？」

シンの母親が、腰から崩れ落ちる。

しかし、驚くにも無理はない。彼等はこれまで、実物のモビルスーツなど間近で見たことがないのだ。鋼鉄に覆われた巨神――その巨躯が突然目の前に在って、さらには

得体の知れないビームフィールドを展開して、自分達だけを正確に護り抜いていければ、誰だって——。

ようやく事態を把握したシンが、震撼しながら周囲を見渡した。

焼き尽くされた周辺の木々を見ると、ゾツとする。——もしかしたら、自分達はこうなっていたかもしれないのだ。

「た、立つんだ！」

シンの父親は、急いたように母に云った。

その腕を引き、強引に彼女を起立させた。

「なんでもいい！ 走るんだ、がんばれ！」

続けて彼は、シンとマユに命じる。

シンは一瞬、さすがにそれは恩知らずだと思った。両親が走り出すのを認めたのか、次の瞬間にビーム状の球状膜は弾け、彼等の退路が確保された。

光波防御帯をかき消した後、白銀の巨神がゴウと立ち上がる。

シンは、それに向かって吼えるように叫んでいた。

「……ありがとう！」

「……港につい！」

云えば、スピーカーから大音響の声が返って来た。

柔らかなだが、芯の通った声だった。

↑——走って！↓

この人は、見送………てくれるのだ——。

シンはパツと晴れた笑顔になって、茫然とするマユの腕を取る。そうして彼らは、移動を再開した両親の後に続いて走り出した。

「……………」

ステラは、彼らの背中を見送った。

——いや。見送ることしか………出来なかつた。

今この状況、他にかげられる言葉もなく。ましてや、会えるはずがないのだから。

「急げ、シン！」

父に急かされ、シンは部分的に焼け焦げた焦土を踏み越え、ふたたび林道を駆け出した。

バシユン！ 背後で、空気が圧縮された音が聞こえる。シンは走りながら首を後方に向け、「白銀」のモビルスーツが上空へ飛翔して行くのを見た。そうして再び、そのモビルスーツは遙か上空で「ネメシスダガー」と対峙し、翻弄されるような目まぐるしい戦闘を再開した。

シンは、そこまでの景色をたしかに見届けた。

(あのモビルスーツ、女の子が乗ってるのか)

スピーカーから聞こえた声は高く、透き通ったように儂くて。女性というより、むしろ女の子のような声をしてた。それこそ、自分と年齢が変わらないくらいのこと……？

——女の子が、こんな戦場に出て来るなんて……！

あの「銀色」は、オーブのモビルスーツなのだろうか？ にしては、アストレイ量産機と明らかに異なった仕様のようだが——。

なんにせよ、殊勝なのだ、と潜在的にシンは考える。

短い会話をしただけだったが、どこかで聞いたことがあるような声だったような気もしている。

(……助かった)

名も、顔も分からない少女に救われた事実を、シンは何度も咀嚼した。

自分達は、きつと救われた——。

これ以上ないほどの幸福感を噛みしめながら、シンは妹と、そして両親と共に、ふたたび軍港を目指して走る。

——あの白銀の守護神^{モビルスーツ}、絶対に忘れない！

包まれたように暖かく。

慈愛に満ちたモビルスーツの風貌と記憶を、そのときシンは、たしかに自分の胸に刻

み込んだ。

自由の翼が、空へ飛翔した。

オーブ軍守備隊の中で、大気圏内で単独での浮遊能力を持つモビルスーツは“フリーダム”だけだった。

オーブが島国である以上、地球連合軍艦隊は国家の領海線に展開するのが当然の流れだ。そのまま領海内に侵入して来る艦艇も数隻あるが、ならば連合軍の旗艦を制圧することで、この戦闘を中断させることだって、出来るかもしれない。

キラ・ヤマトはそう予測して、オーブの海域に“フリーダム”を出撃させた。
だが――。

結果的に、“フリーダム”が連合軍旗艦“bauer”のところまでやって来ることはなかった。キラが目指した海域の向こう側から――三機の“G”が顕現したのである。

「新型――？」

黒い一機“レイダー”は赤い縁取りのある翼を広げ、人面鳥ハービィを想起させるモビルアーマー形態への変形機構を持った新型だ。機体の上に、一機のモビルスーツを搭乗させて

いる。『カラミティ』のカラーは毒々しさを憶えるような青緑とオレンジのツートンで、背中から頭上まで大きく突き出した巨大な砲塔を背負っている。三機目の『フォビドゥン』はカーキ色を基調とし、甲羅のようなリフターを背負ったモビルスーツだ。両腕で抱える巨大な鎌を持ち、単独での大気圏での浮遊能力を持つ。

いずれも、前期GATシリーズの面影を残してはいたが、それぞれ機能を著しく特化させたものらしく、どこか不吉なまでに過剰な装備を搭載していた。

殊に印象的だったのは、それらはすべて、機体フレームの中に強力な砲門を内蔵しているということだ。『レイダー』は頭部に、『カラミティ』は腹部に、『フォビドゥン』は胸部に、それぞれ強力なビーム砲を内蔵しており、全身に砲門を内蔵させた『エクソリア』を彷彿とさせる。

——あんな連中に上陸されたら、オーブは……!!

迫り来る『G』に向け、キラはビームライフルを放つ。

悪の三兵器と『フリーダム』が、交戦状態に入った。

林道を抜け、シン達はオノゴロの工場区へと差し掛かっていた。

軍港までの距離は、おおよそ残り二千メートルと云ったところか？ 港には多くの避難民が押し掛け、長蛇の列が出来ている。

——辿り着いたには良いが、あの列に並ばなければならないのか……!?

呪うように思ったシンの父親は、こんな言葉を吐き出していた。

「やはり、政府の避難指示が遅かったんだよ！ 港さえ混雑しているなんてッ」

「そんなッ……」

それを聞いて、後続するシン達は絶望する。

——おれ達はいつたい、何のために走って来た……!?

港と云つても、絶対に安全な場所ではないのだ。たとえ辿り着いても、乗船できなければ何の意味もない。

「あなた！ こんなことなら港じゃなくて、民間のシェルターに走った方が良かったわ……!？」

「今さらだよ！」

(アスハって……)

シンは、手酷い裏切りにあつた気分だった。

誰が悪いわけではないのかもしれない。連合の攻撃が、突然すぎたのかもしれない。

——それでも最低限、オーブは国民を逃がす準備くらい、もうすこし整えていてもよ

かったんじゃないのか……!?

シンは、咄嗟に忸怩たる念を抱いた。

そうして、どうやらぼんやりしていたらしい。

——ドンッ!

茫然と走っていたシンは、工廠の曲がり角に差し掛かったところで、急に物陰から現れた、ひとりの少年と正面から衝突していた。

「いてッ」

「うわッ」

衝突したふたりは、あまりの衝撃に、お互い尻餅をつく。

その場に崩れたシンは、不意に、カッとなった。

「いてて……あんた、どこ見て走ってんだよお!」

それは、自分に云うべき台詞だったということもシンは分かっていた。しかし今の彼は、苛立ちが理性を凌駕していた。

顔を紅くして、シンが怒鳴る。

目線を上げると、そこには緑色の髪をした、少女めいた柔らかな顔立ちをした少年の姿があった。

「——えっ?」

それは、シンにとって見覚えのある顔だった。

「あんたは……?」

「きみは……!」

シンがぶつかったのは、ニコル・アマルフィだった。

衝突したその黒髪の少年に、ニコルは見覚えがあった。そしてどうやら、それは向こうも同じらしく、一瞬だけ、探り合うような沈黙がふたりの間に流れた。

ニコルは、こぼすように云った。

「たしか……前にオーブで、アスランと」

喧嘩になりかけた少年だ——?

咄嗟のことで、ひどい表現しか出て来なかったニコルであったが、彼が続けようとしたとき、脇からまた、別の声が上がった。

「シン! 何してる、急ぐんだ!」

「お兄ちゃん! 立って!」

シンとニコルの衝突に気付いた、家族達だ。

息子だけが遅れていることに、ようやく父親が気付いたらしい——場に頰くずおれるシンから、彼等は数十メートル離れた地点で立ち止まっていた。

(この少年の家族? あれが)

ニコルは、三人で固まって立つ彼らを見、心の声で云った。

黒髪の一家だ。彼等は、少年の両親に、妹だろうか——妹の名は、たしか「マユ」と云つたはずだが……？

そのマユに大声で呼びかけられ、シンは我に帰つたように、慌ててその場に立ち上がった。

「わるかつたよ。急いでるから、また」

云いながらも、シンは尻餅ついたニコルに向けて、ゆつくりと腕を伸ばして来た。ニコルは一瞬唾然としたが、すぐにその手を取つて、ぐいと立ち上がる。

互いに反省の会釈を交わし、

(本質的には……優しい少年なんだな)

ニコルは、不思議とそう感じていた。それぞれに向かうべき場所があつて、ふたりが「それじゃあ」と口を開こうとした。

そのときである。

いきなり、彼等のすぐ頭上を一機の「ネメシスダガー」が飛び過ぎ、一拍遅れて、凄まじい暴風が突き抜けた。押し寄せる風圧に、シンの被っていたニット帽が天高く飛んでゆく。

シンは慌てて、帽子が飛んだ方向を仰ぎ見た。しかし見上げた先に帽子ではなく、巨

大なモビルスーツの機影を認めてしまった。連合の“ネメシスダガー”——しかも、それは頭部あたまが無かった。

(さっきのヤツだ——!?)

シンは決して忘れていなかった——ヘルメットのようないくつかの頭部のない“ネメシスダガー”は、自分達を救ってくれた“白銀の守護神”と交戦中の機体であったことを。

「あいつ、まだ生きてるのかよ!?’

そいつは、シン達の頭上で交戦し始めた。シンの立ち位置からは見えない標的に向かって、あらゆる火器を撃ち返し始めたのである。

ニコルは、傍らで茫洋と立ち尽くすシンを引きずるようにして、バツと物陰に跳び下がった。しかし、シンには状況が掴めていない。民間人に過ぎない彼は、今にも家族の下に駆け付けようと、物陰から飛び出していこうとして、ニコルは慌てて彼を後ろから引き止めた。

「とつ父さん! 母さん、マユツ!?’

「きみ! 何やってるの、死にたいのか!?’

軍人であるニコルは、今という瞬間が、どれだけ危険な状況であるのかを冷静に把握していた。すぐ至近距離で——いや頭上で、モビルスーツが交戦しているのだ。

衝撃の余波ですら、生身の人間の命を奪いかねない以上、物陰から迂闊に出て行くべ

きではない!

しかし一方で、シンの家族は動揺のあまり、その場に立ち尽くしているだけだ。

——助けないとっ!

義務感に駆られたシンは、吹き曝しにあっている家族の許へ駆け寄ろうと、無鉄砲にも物陰から飛び出そうとする。だが、やはりニコルがそれを許さない。「迂闊だ!」と叫ぶも、「離してくれよッ!」と暴れ回るシンの脅力は、すごい力だった。

——ズギャン!!

次の瞬間、頭上にあつた「ネメシスダガー」が、遠方より去来した一筋のビーム砲に射抜かれた。装甲が貫かれる音が響いた後、機体は物云わぬスチールグレイの塊となつて、地上へと墜落して行く。

シンとニコルは泡喰つて、撃墜された「ネメシスダガー」の墜落地点を見据えた。無残にも貫かれ、散つた鋼鉄が落ちる先——するとそこに、三人の人影が見えた。

——え……??

それは、恐怖に怯えて立ち竦む、シンの家族の人影だった。

その瞬間、シンは、すべてを悟つた。

「ああッ——!?!」

野獣のように、天に轟く声でニコルに吼える。

それでもニコルは、彼を離さなかつた。

「離せッ！ 離せよオツ！」

「いけない！ キミまで——ッ！」

その言葉の先が、吐き出されることは無かつた。

断末魔の声も、助けを求める声上がる猶予もなかつた。被弾したモビルスーツは、それ自体が巨大にして幾重にも重なつた火山弾のように、炎を噴き上げながら地表へと墜落してゆく。

それは、本当に一瞬の出来事で——。

「お母さん……？」

マユは、撃墜された「ネメシスダガー」が、どんどん頭上で大きくなって来るのを、ただ茫然と見つめていた。

——怖い……。

ふと、母の袖を引っ張って見たが、反応はなかつた。

ただ、母の身体もまた、強かに震えていることだけは分かつた。きつと母は、恐くて言葉も出ないのだ——。

巨大な影が、空から迫つて来る。

陽光は遮られ、少女の身体は黒い影に覆われた。

「空が、黒いよ——」

少なくとも、マユの眼には、そう見えた。

——空が。

——黒い空が、降って来る……？

——空にわたし、潰される……？

次の瞬間。

黒く染まった鋼鉄の「空」が——小さな身体を、容赦なく押し潰した。

墜落の衝撃——。

破片と瓦礫、装甲の山が、逃げ惑っていた家族達の姿を、包み隠した。

ガシャン、ガシャンと。コンクリートや鉄塊が絡まり合う轟音と共に、噴煙が大きく巻き上がり、SF映画の実演のような、壮観にしてはあまりに残酷な景色が現実として突き付けられた。立ちあがる噴煙が、一帯の景色を灰色に染めてゆく。

付近を飛ぶモビルスーツが消え去った今、少年達の周りを、穏やかな風だけが過ぎ去っていく。

風が煙を運び、灰色の噴煙が晴れたとき、シンが求める者達の姿は、既にそこから消えてなくなっていた。

「あ……ッ」

ニコルは、くつと堪えた。堪えたまま、少年が現場に駆け寄るのを必死で制した。

少年は——急激に体温が下がっているようだった。

全身から血の気が引いたように、顔を真っ青にして、暴れ出す。ニコルはほとんど殴り飛ばされるような形で、少年の暴力に振り払われた。

何も考えてなどいない——シンはほとんど反射的、無我夢中になってニコルの捕縛を解き、物陰から飛び出していた。

「父さん、母さん……!? ……マユ……?」

眼前に乱雑に積み重ねられた鋼鉄の塊は、少年の視界を遮って、彼が求める者達の姿を包み隠していた。

凝然と立ち尽くし、ややあって、シンはその場に崩れた。

周囲に、動く気配のものはない。

喉元に、何かが込み上げる——悲しみ、恨み、憤り——言葉では名状できない、とてつもなく激しく、深い激情。

喪失の痛みが、彼の心を内側から食い破るように膨れ上がる。とめどない涙が、深紅

の瞳から溢れ出した。

——助かったって、思ったのに……!!

震撼が、止まらない。

どうして、自分だけ生きているのか。

どうして、こんなことになってしまったのか。

「あ……………あぁッ……………」

自分の声とは思えないほど、枯れた声で。

おかしくなった声で、シンは咽び震えていた。

誰が、やった？

誰が、奪った——？

誰が、俺の家族を——!?

いや、問題はそれ以前だった。

——なんで、俺の家族が——ッ!!?

バシユン！ 空気が圧縮される、聞き覚えのある音が耳に飛び込む。

シンは、わなわなと顔を上げた。

そのとき、己の記憶に刻んだ“白銀の守護神”が——遠方で上空へ舞い上がったのを見つけた。そいつは海岸線の方角に地球軍の新手を見つけたのか、まるでこちらのこと

を気に留める様子もなく——そして、まったく気付いた様子もなく大空へ飛び上がると、疾風のように飛び去って行ってしまった。

シンは、ひとりその場に取り残された。たったひとり、生き残った状態で……。

「うツ、あツ」

そのとき彼の中で結びついた、可能性と確信。飛び去って行った「白銀」は、ずっと「目の前」に積み重なった鉄塊と戦っていた……！

——きつとそう、そういうことなのだ……。

アイツが。

——あの人が、奪った。

アイツが……！

——あの娘に、奪われた……！

きつと、アイツが……！

「う……ううツ……！」

——俺の家族を、殺した……!?

「——う“わ”あ“あ”あああああああ“ツ
!!!!!!?”

思いは覆され、自国への誇りは跡形もなく踏み躪られた。他ならぬ——理念を押し立て、国民を贄とした蛮国の手によって。

守っては、くれなかつたのだ。

——この国と同じように……！

守ろうとしても、守れなかつたのだ。

——白銀の翼を広げた、あのモビルスーツは……！

守りきれは、しなかつたのだ。

——ヤツらが、俺の家族を殺した！！

これ以上ないほどの絶望感に襲われながら、シンはひたすら、獣のように叫んだ。理念を押し立て、国民を生贄にしたオーブ。そして、

——あの白銀の「破壊神」……絶対に忘れないツ！！

鋼鉄のように冷たく。

無慈悲なる残酷なモビルスーツの風貌と記憶を、そのときシンは、たしかに自分の胸に刻み込んだ。

『クロス・オーバー』B

自由の翼、ZGMF-X10A “フリーダム”——

それは本来、宇宙に上がったコーディネイター達の希望の象徴として、ザフトの急先鋒となるべく開発された最強のモビルスーツ。だがクライン派の手引きより、戦争を止めようと立ち上がったキラ・ヤマトの手に渡されたことで、その機体はコーディネイターのみならず、全人類を等しく次なるステージへ導くための“天使”として生まれ変わった。人類が人類として、真の“自由”を勝ち取った暁に、今度こそ訪れるであろう平和な世界——これを照らし出すため希望。平和を実現させるための武力。

——しかしこれを、矛盾と呼ぶ者は呼ぶだろう。

ただ、少なくともラクス・クラインは矛盾だとは考えなかったようだ。ステラが地球に向かうとき、ラクスは“フリーダム”のことをさながら人智を越えた使徒であるかのように喻えていたから。

『キラに“フリーダム”を託せば、戦場で、より多くの命を救う“天使”へと成るのではないか——』

たしかに「フリーダム」は単機での状況制圧能力に秀で、複数の攻撃目標へ向けたフルバースト同時砲撃等、その総合火力は他の追隨を許さない。

キラ・ヤマトはこの特性を最大限に利用し、多くのモビルスーツを一齐に行動不能に陥れる戦法を編み出していた。放つ砲撃の照準を数尺ズラし、敵モビルスーツの武装やメインカメラのみを優先的に破壊する。被弾した者はおのずと機動力か戦闘力を奪われるのみで、撤退することを余儀なくされる。

それは憎しみの連鎖を断ち、戦いの中でも相手を生かす『不殺』をモットーとした戦法。云われてみればで考えれば、たしかに超然とした「天使」のような戦い方かも知れない。でも――

――人は、全能にはなれない。

不殺と云えば聞こえはいいが、人間の行うそれは偽善であり、欺瞞である。武装を奪ったから、メインカメラを奪ったから――

――だから何だというのだ？

戦場で武装を失った者が、何事もなく生還できるはずがない。自衛手段も援護もなく、退却することを求められながら、抵抗もままならずに翻られる人間のことは考えたのか――いや、考えられるはずはない。人の目はそこまで届かない。人の手は二本しかない。

——その振る舞いは、生かしているつもりで、どれだけ命を殺しただろう？

それがステラの実感だった。かつて不殺を貫いていた筈の“フリーダム”が、結局は自分の都合で振る舞い方を使い分け、暴れ回る“デストロイ”のパイロットを殺したことを——残念ながら、ステラはよく知っていた。

それが善であったか悪であったかはともかく——それはまた別の話であつて——だからこそステラは、今は“フリーダム”を捜していた。天使でもなければ、悪魔でもないはずの人間——キラ・ヤマトという、たったひとりの少年を確かめるためだけに。

「キラ・ヤマト」

件のモビルスーツを託された人物が、かつての幼馴染みであると知ったときのステラの衝撃は計り知れるものではない。だが結果的に云えば、その事実を彼と対峙する前に知っておくことができ、良かったのではないかとも思っている。

——おともだちでしょう……？

ラクスが云ったとおり、キラ・ヤマトは、ステラの友人だ。

(キラとなら、話せる……はず)

胸に不安を抱えながら、ステラは“クレイドル”を湾岸の方角へ進ませた。

——人は、全能にはなれない。

非力どころか、ときには無力。何もかも最良を引き寄せて突き進むことは不可能で、

善かれと思つて施したその選択の結果が、当人の意図とは無関係なところに強く影響を及ぼすこともある。

それはさながら、バタフライエフェクトだ。

風が吹けば桶屋が儲かるように、たった一羽の蝶の羽ばたきが、地球の裏側で大竜巻を引き起こすのだと信じられているように――

人の手の届く範囲は限られている。ならば、ちつぽけな自分達にできることは、せいぜい目の前で零れ落ちてしまひそうな命を救いあげ、これを守ることだけだったのだ。

(だからきつと、だいじょうぶ……)

オーブ解放戦の最中、シン・アスカとその家族は『まもる』ことができた。彼はきつと、あのまま家族と共に港へ走ってゆけたはずだ。

そうして標的を変え、上空に飛び立った彼女はこのとき、何も知らなかった。気付くことさえできなかった。後世において多くの人々に“守護神”として伝承された“クレイドル”を、

『――“破壊神”』

そう嘆いた哀れな少年を、すぐ足許に置き去りにして来たことを。

彼女は、何も知らなかった。

オノゴロ島内陸部でも、激しい戦闘が巻き起こっていた。

地球軍艦隊が展開する接続水域の方角から、何機もの大型輸送機がオーブ領空に迫る。船体ハッチが開くと同時に、次々と降下を開始する“ストライクダガー”が大群となつて上陸をはじめめる。オーブ迎撃システムやM1隊による対空砲火を潜り抜けながら領土内へと着地する地球軍機の頭数は、オーブ軍の物量を徐々に凌駕し始めていた。

しかし、それはオーブ軍を退かせる理由にはならなかった。

「おのれ……！　オーブの底力をみせてやれ！」

「応っ！」

オノゴロをホームとする“M1”隊と、侵攻する“ダガー”隊が交錯する。

そうした戦いの最中、そこへ白亜のモビルスーツが一機として舞い降りた。赤、白、青のトリコロールに彩られ、背部には大きく張り出した大きなカナードと、頭部には鋭いツインアイと張り出したVアンテナが見える。

——GAT-X105“ストライク”である。

機動戦用のエールストライカーを装備し、再び戦場に君臨する“常勝の鬼神”——しかしこのときの“ストライク”は、妙に覚束ない足取りであり、云つてしまえばかなり

頼りない動きをしていた。戦場の渦中にあるにしては、一挙手一投足が慌てているように性急であり、まるで素人が操縦しているかのようである。

〈GAT-X105——修復されたというのか!?〉

〈だが、動きが妙に鈍いぞ！パイロットは変わっている！〉

地球軍兵達の指摘どおり、このときの「ストライク」はじりじりと覇気もなく後ずさるだけで、あつという間に敵の包囲網を完成させてしまっていた。機体正面の「ダガー」がビームサーベルを抜き放ち、及び腰の「ストライク」へ斬りかかる。

と、そこへ、中空から一条のビームライフルが撃ち放たれた。その光条は真つ直ぐに「ストライク」へ迫る。「ダガー」の右腕を肩口から奪い取る。続けて連射されたビームライフルが、周辺の「ダガー」をも次々に被弾させていく。

〈新手か!?〉

地球軍パイロットが驚きの声が上がると、彼とは違う兵士のひとり、東の方角から急速に接近して来る反応を捉えていた。

突き出した鋭利な両肩、頭部には「ストライク」同様のツインアイとVアンテナが見える。落ち着きのある赤紫色に染まったそのモビルスーツは、スラスターを点火させて地を蹴るように大きく飛び上がると、中空で鮮やかな変形を試みさせた。四本の鉤爪が機体前方に収束した、その奇抜すぎるデザインは、

「——『イージス』だど!？」

困惑の声が上がると同時に、モビルアーマー形態へと変形した赤紫色の『イージス』は、中枢の砲口から高エネルギー収束砲『スキュラ』を放つ。

一筋の烈光が、三機もの『ダガー』を呑み込んだ。

すかさず高速巡航形態からの変形を解き、人型となった途端、『イージス』は両腕からビームサーベルを抜き放った。間髪入れず、初陣とは思えない思い切りのよさで、残る『ダガー』の懐まで蹴立つと、あつという間にすべての敵機を斬り倒してしまった。

「おーおー、カッコいいねえ! モビルアーマー乗りには体のいい機体つてわけだ」

GAT-X303『ヴィオライージス』——パイロットはムウ・ラ・フラガ。

太平洋上で中破した『イージス』をモルゲンレーテが回収し、独自の技術で修復・改修した可変式モビルスーツ。フォートレスストライカーに試験搭載された新エンジンを採用し、総バッテリー容量が格段に上昇している。全身のカラーリングはムウ・ラ・フラガをイメージした赤紫色^{マゼンダ}へと変更されている。

パイロットを務めるムウ・ラ・フラガは、モビルスーツパイロットとしては新米であるが、モビルアーマーの操縦にかけては天才的だ。

——『ダガー』“なんかに、遅れちゃいけないってね……!”

以前キラ・ヤマトがオーブへと提供した、ナチュラル用OSのサポートシステムが実

装されたのだ。おそらくは「ストライクダガー」として似たようなものがシステムに反映されているのだろうが、これによって、ムウのようなナチュラルであつてもモビルスーツは操縦できるまでになつていた。

周囲を制圧したムウは、通信回線を開き、傍らでけろりと竿立っている「ストライク」に向けて怒鳴つた。

「ほら！ ボーつとしてるとただのマトだぞ！ やる気あんのか！」

「あ、ありますよっ！ 俺だつて、戦えますっ！」

通信先でがなつたのは、トール・ケーニヒである。彼がいま乗っている「ストライク」もまた、太平洋上の孤島で回収され、モルゲンレーテによつて修復されたものだった。「やれやれ、鬼神とも呼ばれた「ストライク」つたつて、パイロットが変わるとひよっこも同然だな？」

「云つて下さいよ、好きに！ これから取り返すんです！」

云うと「ストライク」は意気込んだように、さらなる敵陣へと機体を走らせた。ムウはかすかな笑みを口元に浮かべ、できのわるい後輩を見守るようにして後に続く。

二機が走り込んだその先で、彼らは少女達がパイロットを務める「M1」隊——アサギ・コードウエル、マユラ・ラバツツ、ジュリ・ウー・ニエン——の小隊と合流を果たす。そのまま侵攻してくる「ダガー」隊を撃滅してゆく彼らであつたが、快進撃もそこ

までだ。

次々に撃破される友軍機を見かねた主力隊「ネメシスダガー」が二機、中空を飛行しながら「ストライク」一行に駆けつけてきたのだ。

「うそ、飛んでるーっ!？」

「当たらないよおっ!」

「ストライク」が、「イージス」が、三機の「M1」が射撃するビームライフルは、しかし、中空を制する「ネメシスダガー」を捉えることができない。反撃として「ネメシスダガー」は高みより追尾ミサイルを放ち、彼らは飛び退くことのでかろうじて攻撃を回避する。

ムウは咄嗟に判断し、みずからの機体をモビルアーマー形態へ変形させた。レストアに伴ってアツプデートが加えられた「イージス」は、各スラスターの増強により、高速巡航形態であれば大気圏内での飛行特性を獲得したのだ。空を制す者には、同じく空を制して戦いを挑む方が有効であり——ムウは「ネメシスダガー」の片割れ、その一機に向けて突撃を仕掛けた。

「でえいっ!」

とはいえ、対モビルスーツ戦に際してモビルアーマーが形勢上不利なのは今さらの話である。変形後の「イージス」は空中を飛行することができて、浮遊することはでき

ない。中空を直進することはできても、曲折することはできない。

つまり「イージス」にとつて、大気圏内での空戦能力はあつてないようなものであり、さりとてムウは、これまでに培つて来たモビルアーマー乗りとしての経験を総動員し、驚くべきことに中空の「ネメシスダガー」とも真つ当に渡り合つてみせた。

「性能差じゃないつてこと、教えてやるよ！ ひよっこ！」

元々、ムウ「スカイグラスパー」によつて「バスター」とも渡り合つてきた程の男だ。センスと経験則によつて磨かれた操縦技量とは、単なる機体性能に埋め尽くされてしまう程に、曖昧で理不尽なものではなかつたらしい。

「片割れは俺がやる！ 残りの一機、なんとかやれるか!?!」

「……！ やつてみます！」

そうして地上に取り残されたトールは、アサギ、マユラ、ジュリと連携して「ネメシスダガー」を相手取つた。所詮はルーキーであり、突けば崩れてしまいそうな彼らに対し、連合の「ネメシスダガー」は相当な腕利きが乗っているのだろう——トール達が慌てて放つビームライフルを、敵は鮮やかにかわしていった。

力量差が目に見える——まるで理不尽な動き。「ネメシスダガー」は上空へと飛翔した後、ビームサーベルを抜き放ち、一気に高度を落として「ストライク」へと迫る。トールはぎよつとして、ビームライフルを応射した。

「く、来るなあっー！」

トールを掩護するように、他のM1隊も続けてビームを撃ち掛けたが、抵抗も空しく、敵機は易々と砲火をかわしていく。一刻のうちに距離を詰められ、凄まじい突進と斬撃が、シールドを翳した“ストライク”の機体を撥ね飛ばす。仰向けになつて地に頽れた“ストライク”は、思うように機体を起き上がらせることができなかった。

そこへ、容赦なく追撃が降りかかる。上空から飛来する“ネメシスダガー”が、ビームサーベルを突き立ててきた。

「うわあ!？」

殺^やられる——!?

トールが絶望に淵に立ったとき、目の前に肉迫していた“ネメシスダガー”が、ぎりぎりの所でその動きを止めた。灼熱の光刃は、トールまで振り下ろされなかった。

「なっ、なに……う?」

驚きに目を開き、アサギが声を上げる。

次の瞬間、少女達の目の前に陽炎のように揺らめく漆黒のモビルスーツが顕現した。それまでは何も無かった地点に、いきなり出現するような形で。

——ミラージュコロイドステルス!?

初めて目の当たりにする特殊兵装に、少女達が愕然と目を見開き、慌ててそのモビル

スーツから距離を取る。しかし、よく見るとそのモビルスーツは、左腕に装着された口ケツトアンカー「グレイプニール」を射出し、地上に降りた「ネメシスダガー」を背後から捕獲、固定していた。事態が呑み込めないトールの耳に、いきなり通信が割り込む。〈動きは止めました！ 今です！〉

「えっ……!?!」

トールは訳が分からず、しかし、身体はその声の促す通りに動いていた。

瞬間、「ストライク」は腰部両脇ホルダーに内蔵されたアーマーシユナイダーを、目の前の無防備な「ネメシスダガー」へと突き立てていた。鋼鉄の短刃は、そのまま吸い込まれるように敵機のコクピットを穿ち、これによつて、敵機は操り手を喪つた糸人形のように、完全に行動を停止する。

トールは、命拾ひした幸運を嘯みしめながら、急ぎ「ストライク」を立ち上げさせる。立ち上がるのとは対照的に、目の前の「ネメシスダガー」は地に伏せて倒れた。そうしてトールは、視界に映つた漆黒のモビルスーツに目を見張る。

「「ブリッツ」だつて……!?! それに、その声……!」

通信先から聞こえた声。そして、まるで機体の特性を十全に理解しているような一連の滑らかな動作——まるで熟達のパイロットであるように「ブリッツ」を操ってみせた人物の正体を誰何して、トールは驚いた。

「ニコル、なのか——！」

参入したG A T—X 2 0 2 “ブリッツ”に乗っていたのは、ニコル・アマルフィだった。

オーブの工廠区を抜け、ニコルはこれまでの愛機、“ブリッツ”がどこかにないかと、モルゲンレーテへと向かっていた。

その道中——彼はひとりの避難民の少年と衝突してしまふ。切れ長の黒髪。いや、それよりも見憶えのある血を薄めたような真紅の瞳。強い意志を宿しそうな力強い相好は、以前オーブへ潜入した際、街角でステラと衝突してしまった少年だった。子供っぽく、丸みを残した顔立ちは、きつとニコルよりもまだ年下で、それこそステラと殆ど同じ年齢くらいではなからうか。

——ステラさんの、ご友人だったはずだ？

友人という表現が適切なのかどうか、詳しくはニコルには分からない。なんせ少年を慕っていたのはステラの方だけであり、対して少年の方には、ステラに対する面識は何もなかったように見えたから。

だが、ことの詳細はともかくとして、普段から人見知りがちな彼女が、あれほどの熱意と感動をみせた人物だ。それは滅多な人物ではないことくらい、ニコルにもよく分かるのだった。

——前にね……こうやって、助けてくれた人がいたの。

太平洋上の孤島で——

そう呟いたときのステラの柔らかな面持ちが、花が開くように綻んだのをニコルは知っている。ステラという少女が、たった一度でも心を開いたことのある人物に対し、いつだって一生懸命なのをニコルは理解しているつもりだ。誠実な人間に対しては——舌足らずで不器用で——それでも彼女なりに真摯に向き合う姿勢を知っている。

だからおそらく、その黒髪の少年——「シン」という名の少年も、かつてステラの心を開くだけの神聖なことをやってのけた人物なのだろうと、そのときのニコルには、なんとなくでも理解することができたのだ。

『いけない、キミまで——っ！』

何者かの手によつて撃墜された“ネメシスダガー”——

瓦礫となつて降りかかる巨大兵器の下に、シンは迂闊にも飛び込もうとした。家族のために。

——死なせてはいけない！ この少年は……！

義務感に突き動かされたニコルは、善かれと思つて少年を羽交い絞めにして離さなかつた。

その結果、遠方で立ち竦む三人の人物を——シンの家族を——“見限つた”と云えば、その通りである。今になって言い訳はしないし、それを認める程度の潔さなら持つているつもりだが、あのタイミングで飛び出して行つたところで、あの三人を助けられる保証などなかつた。

——そう、あるはずがなかつた！

だからニコルは、せめてもの選択としてシンをその場に制止させたのだ。

だが、その選択は、かえつて彼を苦しめたかも知れない。目の前で家族を喪い、自分だけが生き残り、悲憤慷慨ひぶんこうがいを絶叫する少年に、ニコルは競々とするしかなかつた。

そんなときに、彼らの存在に気付いたオーブの軍人が駆け寄つて来た。名をトダカと名乗る、オーブの軍服に身を包む中年の男性だつた。

『きみたち、大丈夫か!? 早く港へ行くんだ!』

トダカは、全身が脱力したシン・アスカの身体を抱きかかえるように持ち上げた。なにかば強引に立ち上がる形になつたシンは、魂が虚脱したような状態だつた——体の中にあるすべてのものを、先の叫びで果たしてしまつたかのように……。

ニコルは、すっかり気力が阻喪してしまつているそんな少年の姿を見かね、ぎりつと

齒噛みする。

すぐに、少年を抱えるトダカに向けて『僕なら大丈夫です』と返した。

『僕には、行かなきゃいけない場所があるんです……！ この少年を連れて、港へ急いでください！』

『何を云っている！ きみのような子供を放っておくことなどできんよ！』

『——シン君と云ったね?!』

トダカの怒号など、まるで聞こえていなかった。

ニコルは専心して、シンに怒鳴っていた。

『いいかい!? 僕の名はニコル・アマルファイ！ プラント』の——ザフトの、元軍人だ
 ！』

その言葉を受け、シンの肩を抱いていたトダカはハツとした表情を見せる。こんなにも幼い少年が、自分と同じ軍人であったとは。

『きみも僕と同じ、コーディネイターだろう？ この地球の向こう側—— プラント』
 は今のきみをきつと受け入れてくれる！ だから、きみは絶対に生き延びなきゃなら
 ない！ 生き延びて……そして向こうに渡るんだ！』

『えっ……?』

魂が虚脱しているような状態のから、かすかに疑問の声が漏れる。しかしニコルは、

言葉を止めなかった。

——この戦況を許しては、オーブはそう長くは持たない……！

だからこそ、ニコルはシンに「プラント」への移住を奨めた。いつになるかは分からないが、このような戦争さえなければ、少なくとも「プラント」は行く宛てのないコーデイネイター達の安寧の地——少なくとも、各地でブルーコスモスが目を光らせている地上よりは、はるかに同胞愛に溢れた安全な地だと云えるからだ。

『命を無駄にしてはいけない！ 僕もまた戦うから——いいね!』

ニコルは踵を返し、シンをトダカに預け、走って行ってしまった。トダカは、慌ててニコルへの静止を求める——が、彼はまったく応じなかった。

シンは、走り去って小さくなっていく背中を、ぼうつとした意識で見届けていた。

(あれが——軍人……?)

名を、ニコル・アマルフィと云った。

冷静な見方をすれば、あの人がいなければ、自分はきつと、今こうして生きてはいない。五体満足でなど、生存していられない。

自分は、あの人に助けられたのだから。

——命を無駄にしちやだめだ……！

真剣にして純朴な、その叱責は、全身の細胞ひとつひとつに染み入るようにシンの中

に広がって行った。

——俺は、生き延びなきゃならないのか……？

きつと、そういうことなのだ。

シンは釈然としない後悔に苛まれつつも、自分は生き残らなくてはならないという決意と、そして義務感が芽生えるのを感じた。

一方——

ニコルはモルゲンレーテに駆け込んだ先で、みずからの愛機である『ブリッツ』を発見した。

『こんなこと、いつまでも続けていていいはずがないんだ……！』

この戦争がいつまで続くのか、ニコルには分からない。しかし今になって、はっきりと分かったこともある。戦争はただ続いているだけではなく、戦火は生き物のようにその規模を増大させながら、もはや世界全体を巻き込みつつある——

オーブ連合首長国。この地球上に残された、おそらく最後の平和までもが破られた。戦火は多くの人々の人生を狂わせながら——あの少年のような——痛ましい戦争被害者と犠牲者遺族をこれからも増やし続けるだろう。

——もう本当に、終わらせなくては……！

想いを新たに、ニコルは既に手足のように馴染んだ『ブリッツ』の cockpit へ飛び

込んだ。

慣れた手つきでOSを立ち上げてゆくと、不思議と奇妙な郷愁感が全身を押し包む。初めて「ブリッツ」に乗ったのは「ヘリオポリス」でのことだった。当時の自分は、世間など知らず、自分の故郷さえ守ることができればそれで良かった。余所の国のことなど、云つてしまえばどうでもよくて、オーブなんて国のことなど、知ったことではなかったのだ。両親の反対を押し切って士官学校に入校したのも、全ては「プラント」を——「プラント」だけを守るためだった。

——けれど、もう違う。

あの少年のように、戦争によつて悲しむ者は「プラント」の他に多くいる。大切なものを奪われた悲しみに打ち拉がれるのは、コーディネイターもナチュラルも同じ。それほどばかりは「プラント」も地球も関係ないのだ。

——この戦争、今度こそ終わらせなきや、誰ひとり報われない……！

自分が元軍人であるとシンに告げたときから、ニコルの中で決心はついていた。

自分は今もう、ザフトに戻りたいわけではない。「プラント」で暮らすコーディネイター達の利潤のためだけに、地球を汚し、潰すような作戦にだつて賛同することはできない。上からの非人道的な命令に、黙つて付き従うことも……！

——それが戦争だと云うのなら、それこそ僕等を苦しめる『敵』なんだ……！

そして軍人という職業は、戦争というシステムの一部の歯車でしかない。だからこそ、自分ももうザフトには戻れない、戻りたいとも思わない。ザフトで手にした「力」は戦争のために費やすのでなく——少しでも戦争を終わらせるためのものとして役立つ。

そうしてニコルは、戦争による無用の犠牲を減らすべく、このときオーブ守備隊の味方として出撃したのだった。このとき単機で「ネメシスダガー」を撃破した後のムウは、そうして正面に立つ「ブリッツ」に向けて通信回線を開く。

「一緒に戦うんなら、アテにしたい。……いいんだな？」

ニコルはその質疑に対して、力強く答えた。

「——はいっ」

「……！ いい返事だ」

そうして——「ストライク」「イージス」「ブリッツ」が——オーブ守備隊として合流を果たした。

そして、はるか遠方のオーブ領海上で——

ステラは“クレイドル”に空中を泳がせる内、彼女自身がずっと捜していた—“標的”を見つけていた。

蒼海と蒼空の狭間で繰り広げられる、モビルスーツ同士の激闘。交錯する機影、錯綜する砲撃——そんな戦闘の渦中に、見憶えのある……いや、もはやステラにとっては忘れることなど絶対にできないフォルムの機影を発見する。

ZGMF-X10A “フリーダム”——

機種を判別した“クレイドル”のOSもまた、記号としての機体名称を手許のモニターに映し出す。その文字の羅列を認め、ステラはひくり、と息を呑んだ。

(みつ、けた……っ！)

今、目下にいるあれが。

——あれこそが、ステラにとっての、死の天使……！

そう思った途端、身体が震え始める。喉元にまで逆流する不快感。気道がきゅつと狭まったように、喉奥が痒くなる。加速するように荒くなる吐息に、やがて苦しくなり、ステラはパイロットスーツの襟元を苛立たしげにこじ開けていた。

「……！」

背に十枚の翼を持つ鋼鉄の巨神。超然とした力は不敗を誇り、人の死を司る、残酷な守護天使。

——ステラを、殺そうとした……!

頭では理解していても、身体や記憶が割り切れないこともあるということなのか。実際に“フリーダム”を目の当たりにすると、ステラの全身は猛烈な拒否反応を示しはじめていた。

あれが再び灼熱の刃を自分に突き立てて来るのではないかと——今は目下にあつて、自分のことなど気付いていないであろうその機体が、こちらに気付いた途端に、血相を変えて襲い掛かってくるのではないかと——

「……?」

だが目下の“フリーダム”は、ステラも知らない——“クレイドル”のデータベースにも照合のない——三機のモビルスーツ部隊と交戦していた。

海上をホバリング移動している砲戦型らしき青紫色、変形機構を有する猛禽のような黒色と、甲羅のような装甲を背負った枯草色。おそらくは前期GATシリーズの性能を著しく特化させた“G”タイプだろう。

開き直つて悪の軍勢を自認しているかのような悪人相。サーベルやライフルといった武装オプションを駆使するよりも、砲門そのものを機体頭部や胸部に内蔵させてしまえという荒々しい設計コンセプト。それらは数年先に開発される、ロゴスの“デストロイ”の先駆け的であるようにも思える。

(どつちが出す不快感だ……?)

高い機体性能も然ることながら、そのモビルスーツ部隊はパイロット達の高度な操縦技量によって、度々としてナチュラルの反射速度を凌駕したりアクションを見せ続けている。

だがそれは、どこか挑発的——挑戦的な機体捌きであり、どこか堅実さを欠いた独特のアンバランスだ。石橋を叩こうともしないその好戦的な姿勢は、ともすれば闘争を愉しんでいるかのように映って、それはステラがよく知る者達の特徴だった。

(——強化人間)

目下の戦闘から伝わって来る、鬱然とした感触。そして、肌を灼くような死闘による緊張感。ステラは観察するようにして、下空で激しく交錯するモビルスーツ達を俯瞰しつづけた。

「自分を殺そうとした『フリーダム』——

——たしかに、アイツはこわい……。

近づくだけで、バラバラに斬り裂かれてしまいそうで。

しかし不気味な気配を放っている、地球軍の新型三機——

——コイツらも、なんだかこわい……。

文字通り正常ではない、歪な何かを、その内に抱えているようで。

(何を、そんなに畏れているの……怖い? 嫌い……?)

——しかし、どちらが……? 悩んでいる、次の瞬間だった。

海面から“フリーダム”を付け狙っていた青紫色の新型が、背負うように装備した長射程ビーム砲を撃ち放った。直下から肉迫する狙撃に虚を突かれた“フリーダム”はそれによつて態勢を崩し、その隙を突いて猛禽然とした黒色のモビルスーツが強襲を掛ける。左腕に装備された巨大な物理球を射出し、この直撃を受けた“フリーダム”は大きく吹き飛ばされた。

それを見たステラはハツとして息を呑む。

——あの“フリーダム”が、押されている……!?

常勝。不敗。超然。無敵。最強——

形容の仕方はいくらでもあり、ステラの中では——好悪はどうあれ——“フリーダム”はそれほどに最上位の修飾が相応しい存在であるはずなのだ。これはステラとて例外ではないし、三機の敵から包囲された状況とは、漏れず絶体絶命であるべきだ。しかし、それを一瞬で秒殺し、制圧できるような存在が“フリーダム”であり、彼女のよく知る“悪魔”でもある。

——それがまさか、苦戦している?

——今にも、やられそうになっている……？

そこまで考え、彼女は改めて思い知った。やはり「フリーダム」は全能ではないこと。ひとりで何でも完璧にこなせるわけではなく、ひとりで全てを捌くことなどできないのだ。

乗っているのは、ステラと同じ人間で——

——乗っているのは、きつとキラ・ヤマトで……！

ステラの知っているキラは、昔から何でも率なくこなせるような少年だったろうか？ いや違う、小さい頃から泣き虫で、甘えん坊で、しつかり者のアスランに自分と一緒に助けてもらっていたことの方が多かったはずだ！

誰かが助けてあげなければ、きつと危なかしくつて——云ってしまえば頼りない——そんな彼が今、命を賭して、たったひとりで戦っている……？

——乗っているのが「フリーダム」だからって、そんな理由で、友達を見殺しにしていいはずがない……！

そう思ったとき、少女の身体は、おのずと動いていた。

大切な友達を、いま一度『まもる』ために——

「キラッ——！！」

咄嗟に呼びかけた先は“フリーダム”ではなく、キラ・ヤマト。

死の天使ではなく、大切な親友だった。

その瞬間——

少女は、偏見と先入観を越えて。

みずからのトラウマを乗り越えて、少女は少年の許に駆けつけていた。

カーキ色の三機目が、そのとき態勢を崩していた“フリーダム”に向けて、胸部誘導プラズマ砲を撃ちかけた。大出力のそれが火を噴き、キラは愕然とした。その射線は確実に、吹き飛んだ先の“フリーダム”を捉えていたのだ。

「——しまったッ!?!」

避けられない射線、屈折する赤色の光条が“フリーダム”へ直撃する!

次の瞬間、キラの視界に月輪のような輝きがう込んだ。白銀色の機体が自分と敵機の間を割り込み、機体前面に展開した月の輪のようなビームフィールドで、敵機が放ったプラズマ砲を弾き飛ばしたのである。

「!？」

見覚えのある光景だ、とキラの意識は呟いていた。それは始まりの“ヘリオポリス”での戦闘のとき、空中で態勢を崩した“ストライク”を巨大な盾で護り抜いてくれた人物がいたから――

キラは呆然として、モニターが照らし出した目の前のモビルスーツに目を張った。手許のOSが機種を特定し、突如として舞い降りた白銀色の機体が、ZGMF-X08A――すなわち“フリーダム”の兄弟機であることを示していた。

しかし、所詮は言葉の綾に過ぎないとはいえ、それは兄というよりは姉。力強くもどこか女性的な美しさと気高さのようなものを伺わせる外観をしたモビルスーツだった。

「……………えっ……………」

いったい、誰が…………？ 少なくとも“フリーダム”と同じシリーズであるのなら、それはザフトに帰属する者のはず。

――でも、だったらどうして、いま僕を助けた？

そう考えたとき、まさかと、キラはひとりで予感していた。余計な期待感のようなものが、ぞくりと彼の胸を強く打つ。

白銀のモビルスーツは、四対の翼を広げ、その内部から光の粒子を大きく放出させている。

翡翠色の光波粒子は大気中で結び付き、大きな球状のビームフィールドを造り出す。キラも何度も見たことがある。『光波防御帯』アリコミュニケーショリエル——光の繭が『フリーダム』と『クレイドル』を包み込み、この堅牢な結界を前に、後期GATシリーズは無力だった。枯葉色が、青紫色が、黒色のモビルスーツが、自慢の大出力ビーム砲を浴びせかけるが、光波の膜は全ての砲火を弾き飛ばす。打って変わって鎌や破碎球が繰り出されるが、そのいずれも光波の球体を突き破ることはできない。

と、諦めたのだろうか、地球軍の三機は途端に調子を外したような挙動をした後、どういうわけか転進し、母艦へと帰投していつてしまった。

そして三機が帰投すると、たちまちに連合軍の艦艇から信号弾が打ち上げられた。それは確かに、戦闘の終息を意味した光輝であった。

素性の分からない白銀のモビルスーツの介入に、キラはしばし、沈黙を保った。

連合の信号弾が上がった今、すべてのモビルスーツはオーブの領土から引きあげ、専守防衛の理念を貫くオーブ軍も追撃を行うことなく、大人しく休息の時間を迎えた。

まるで夢から覚めたように、キラはハツとして、目の前の機体に視線を遣った。

謎の正体不明機は、自分に攻撃して来ない——。

その時点で、キラ・ヤマトは固まった確信を胸に、*“フリーダム”*を*“クレイドル”*と相対させた。

武器は翳さず、威嚇もせず、ただ一旦、真摯に通信回線に呼びかけていた。余談だが、ふたつの機体は兄弟機であつたために、相互の通信コードは簡単に入手することができていた。

「——ステラ、だろ……?」

キラは恐々と訊ね、その声が届いたのか、相対する*“クレイドル”*が、戸惑うように動きを止めた。それを確認したキラは、続けざまにコンソールを叩くと、通信回線をさらに深くまで接続させた。

機体のモニターに通信相手の姿が映し出され、キラはぐつと息を呑み込んだ。

——ああ……。

映し出された、曲線的な紅蓮色のパイロットスーツ。ザフトレッドが着用するものだ。

しかし、丸みを帯びたヘルメットの下に、輝くような柔らかな金髪が覗いている。密閉されてなお、金色に輝くそれは、蜂蜜に金粉を振りまいたかのように可憐だ。ふんわりと癖のかかった前髪の下から覗く、すみれ色の円らな双眸は、茫洋として、鏡のよう

にこちらを見返していた。

——やっぱり、きみだ……。

袖を通した軍服が変わっても、よく分かる。

対してキラの方は、以前「ストライク」に搭乗していた時から、使用するパイロットスーツを変えていなかった。同じ規格、同じカラーデザインのものを着用していた。

モニター越しのステラは、その白いヘルメットの下に覗く茶髪と、昔からあまり変わっていない幼い顔立ちの少年の顔を眇めていた。

次の——瞬間だった。

眼前の「クレイドル」が突如、右手に握ったリンクス・ビームライフルを、キラが乗る「フリーダム」に突きつけた。キラはドキツとして、しかし、それが威嚇行動に過ぎないのだと判断すると、きゅつと唇を結び、真つ直ぐにステラを見据えた。

通信先から、警戒するような声が聴こえた。

へ……キラ、キラ・ヤマト……？

「……うん、僕だ……」

モニター越しの少女の肩が、がたと震えたように見えたのは、気のせいであつたらうか……？

ステラの唇は、震えていた。

どういいうわけか、今にも泣き出しそうなほど、儂い顔をしていた。

一呼吸おいて、彼女は滞空する機体から見える下方に目をむけ、破壊の跡も痛々しいオーブの海岸付近を示唆する。少なくともキラの目には、そのように映った。

——降りて、会いたい……。

なんとなく——。

あくまでもなんとなく、彼女がそう云いたがつているような気がして、キラは鷹揚と、彼女の要望に応じていた。

低く遠雷が轟き、湿った風がざつと吹き抜ける。燦々とした太陽がいつの間にか積乱雲に隠れ、晴天から一転した雨雲が厚く上空を覆っていた。

大粒の雨が、戦火で鄙びたオーブの大地を癒してゆく。傷ついた島国をまるごと洗い流すかの如く、その様子はオーブという国全体が禊の儀を受けているかのようであった。

水平線の向こうから——もうじき『闇』がやって来る。

昼と夜の狭間にある、半端の刻限。翼を広げた“フリーダム”と“クレイドル”は、

それぞれに相對する形でオーブの海岸付近に降り立つた。傷ついた海岸には痛々しい焦土の凹凸が浮かび上がり、雨足の強まった今、そこら中に掘られたような水溜りができていた。

キラ・ヤマトは、着地した「フリーダム」のコックピットから顔を出し、その高みから向き合つた形で屹立する「クレイドル」の全体像を改めて見渡した。——白銀に彩られたあの新型……アスランが手にした真紅の新型と同じように、おそるべき戦闘力を身に秘めているのだろうか……？

そこまで考え、キラはかぶりを振つた。——きつといま、詮索は無用だ。

——それよりも先に、やらなければならぬことがある……。

キラが辺りを見回すと、海岸線には何やら多くの人影が近づいて来ていた。オーブ軍が、戦闘区域に突如として介入した「クレイドル」の存在に気付いたらしい。警戒したカガリ・ユラ・アスハを筆頭に、オーブの武装兵が「クレイドル」を遠巻きに監視していた。その人だかりの中には、マリユウやムウ、トール達の姿も確認できた。

キラはふうと息を吐き、一度、心を落ち着かせた。

一拍置いて、彼は「フリーダム」のラダーを使って地上に降りてゆく。すると、「クレイドル」のラダーの方も同様に降りて、相手方も同じように地上に降りて来ていた。

「おいおい、ザフト兵だぜ」

「何者？」

ヘルメットを着用したままのステラは、遠方で待機する者達による、好奇と警戒の視線に晒された。

全身がパイロットスーツで覆われ、真つ赤な状態では、遠目から性別も判断できないのだろう。雨も降っており、視界も決して開けているわけではない。

ステラは、そこでゆっくりとヘルメットを脱いだ。ゆるやかな金髪がふわりと浮かび、うす暗い天候の中で、その明瞭な輝きは嫌でも際立って見えた。

途端、人だかりの中に巻き起こるざわめきと、どよめき――。

「女……？」

「あの娘……っ」

おそらく、その中で最も驚いたのはミアリア・ハウであっただろう。

彼女は、驚きに開いた口を両手で抑え、傍らのツールが心配そうにその肩を抱き寄せ、ツールの方は真摯な眼差しで、見届けるように少女のことを見遣っていた。

ステラは、真正面に降り立った「フリーダム」を、しばし見つめていた。

いや――見入っていた、と云っても良い……。

薄闇の中で見る「フリーダム」は、やはり、ステラの中の忌々しい記憶と結びついて、天使を象徴したそのシルエットを、残照を背負った悪魔のように連想させた。

——こんな近くで……「フリーダム」を見ることになるなんて……。

正直を云えば、もう二度と目にしたくないときえ思っていたモビルスーツだ。

事情はともかく、どれだけの恐怖を「コイツ」に植え付けられたことだろうか？ だからこそ、そんな機体が目の前で大人しく聳立していることに、不思議な当惑を憶える。

まるでそのモビルスーツがいきなり起動し、もう一度、こちらに襲い掛かって来るような——。

無論、そんなことはあり得ない。パイロットの少年は、既にラダーを使って地上に降りているのだから。

「ッ………」

ステラが、振り払うように「フリーダム」から視線を外す。

そのまま水平方向まで視線を下げれば、改めて、機体と同様にみずからと相對した少年の姿が目映った。見覚えのある、そんなパイロットスーツだった。

毒気の無い白色と水色を基調とした、すこし痩せつぽちな規格の服。そのメットの下に覗くのは、茶色がかかった黒い髪と、優しさを宿した丸い瞳——。

穏やかで、繊細そうな少年の顔立ちには、見紛うことなく親友として慕って来たキラ・ヤマトのそれであった。ステラは、しゅんと肩を落とした。

——やっぱり、キラなんだ……。

月面都市「コペルニクス」にある幼年学校で、ふたりはかたや実兄を、かたや親友を通じて知り合った。

四歳の時から、ずっと一緒だった。三人で遊び、笑い、ときには怒られ——。記憶を奪い取られていたステラとは異なつて、健全なキラには、それらの出来事をつい先日のことのように思い出すことができる。

当時の彼等は、所詮はこどもで、社会の情勢や親の意向に従うしかなかった。

十三歳の春——父親が出した避難指示に従つて、ステラは「プラント」へ移住し、それから数年として連絡が途絶えると、キラの許に初めて入った一報は、彼女が核攻撃で亡くなつたとの旨を報せる訃報であつた。

しかし、実際にはその情報は誤りで、彼女は生きていた。——その過程は決して穏やかな道ではなかつたが——かつてキラにとつて、こんなにも嬉しいことはなかつた。

そしてまた——ふたりはこうして、同じ大地の上でめぐり逢うのだろう。いま、自分達ふたりを隔てるものは何も無い。

向き合つたキラは、そう確信していた。互いに成長し、大きくなつた。あの頃のように、互いに互いが、無知な子供ではない。

自分の意志で、行動する自由を手に入れたのだ。

——だから僕は此処にいて、だから彼女も此処にいる。

そうしてキラは、意を固めたように、少女に向かつてその一步を踏み出した。
——びくりっ。

キラが起こした行動に、最も驚いたのはステラだった。いまだ彼女を警戒している力
ガリでも、いちザフト兵を睥睨するオーブ兵でもなかった。

まだ、現実を受け入れる覚悟ができてない——。

そのときステラは、自分の身体が、強かに震えてることに気が付いた。

「ひっ……………」

キラ・ヤマトを受け入れる覚悟なら、とつくのとうにできていた……。

でも——キラの背後には……………っ！

ステラは、思い出すようにして、頭上に見える“フリーダム”を見上げていた。

途端、そのモビルスーツの精悍な頭部（かおつき）が、ひどく恐ろしく見え、脳裏が勝手にベルリ

ンでのフラッシュバックを引き起こす。

頭が閃と真つ白になったあと、荒れ果てたベルリン街の雪景色が脳裏に浮かぶ。

舞い降りる蒼い翼、目前へ迫り来る光の双剣——柄まで押し込まれた光刃が、コク

ピッドごと己の身を灼き尽くす悪夢——。

「——ッ!!」

ステラの表情が、絶望に彩られる。

彼女はハツとして、咄嗟に、ホルスターの拳銃に手を伸ばしていた。それは、本当に無意識の衝動……いや盲動だった。

(いやっ——！)

——アイツが、わたしを殺した……!!

彼女はそのまま、振り上げた拳銃をキラ・ヤマトへ突きつけていた——フリーダム“のパイロットへ、その銃口を当てつけていた。

それは、迂闊としか言いようのない軽挙だった。

遠巻きのオーブの武装兵達は、素性の知れないザフト兵がキラ・ヤマトへ銃を構えたことを確認すると、肩から下げていた機銃を一齐に構え出す。無数の銃口がステラへと集中し、キラは慌てたように手を上げた。

「彼女は、敵じゃない！」

拳銃を突きつけられてなお、キラは怯まずに云い叫ぶ。しかし、その声はしとと降る雨音に遮られ、彼等まで届くことはなかった。

武装したオーブ兵のひとり、トリガーを引く指に力を籠めようとする——次の瞬間だった。

——バツ！

彼等の鼻先に、長く華奢な腕が翳された。

「——待つて」

マリユー・ラミアスである。彼女が両腕を伸ばし、他の兵士を制していたのだ。傍らのカガリが、胡乱げな表情になる。

「艦長、なにを？」

一拍置いて、ツールやミリアリアがまるでマリユーに同調したように彼女達の前に立ちただかった。

そして、訴えるような口調で、彼等もまた他の武装兵達を諫め始めた。

「銃を降ろせよ、あの子は敵じゃない……！」

「おねがい、見守つてあげてっ……！」

事態を呑み込めないオーブ兵達が、そしてカガリが、次々と動揺に吞まれていく。

その場に居合わせたムウもまた、やれやれと嘆息ついて、同じように前へ出た。

「——まっ、そういうことね」

軽い調子で云われ、つまり、どういうことだ？ とカガリは困惑した。

——あの少女はいつたい、何者なのだろう……？

カガリはひらすらに懷疑する——“アークエンジェル”のこの者達に、これだけの信用を置かれているなんて……？

キラとステラ——ふたりの距離が段々と縮まって行く。

ふたりのことを見届けるカガリは、その状況に釈然としなかったが、ザフト兵の少女は、確かにキラに向けて銃を撃ってはいるが、一向に撃つことはなかった。遠目であっても、少女の身体が強く震えていることはわかる。いったい、何が彼女を突き動かしているのだろうか？

やがてふたりは——手の届く距離まで近づいた。

正確に云えば、キラの方から、それだけの距離に近寄って行ったのだ。

「や、あ……………」

キラが発した第一声は、ひどく頼りなくて。

それがステラには、とても印象的で。

「……………キ、ラ…………？」

絞り出すように、彼女は訊ね返していた。

間近で見て、本人であることなど疑いようはない。それなのに、ステラはいまだに現実が信じられずいる。

問われたキラは、かすかに微笑み——「うん……っ」とだけ、短く肯定して見せる。

しかし、いつまでも拳銃を突きつけられたままのキラは今、心底、いつ撃たれるかも分からない恐怖を感じていたはずだ。不器用な作り笑いの下に、硬く結ばれた唇が震えているのを見て、ステラは怪訝な面持ちになる。そうして彼女は、自分が彼に拳銃を突

きついているのだと、そのときになって初めて気が付いた。

「えっ……!? あッ」

みずからを無意識に突き動かした狂気——ステラは愕然として、自分の腕を振り下ろした。自分は今、誰を撃とうとしていたのだろう……!?

——そんなつもりじゃ、なかったのに……!

自戒して拳銃を下ろせば、柔らかいキラの表情に笑顔が戻った。

ステラは、必死で弁明しようとした。

「ち、ちがうの！　これは……」

「——よかった」

「えっ……?」

ステラは、きよとんとした。

キラはたどたとしく、しかし、どこか照れたように云った。

「僕は君の敵じゃないから……。だから君が銃を下ろしてくれて、良かった……」

——僕は、君の敵じゃない。

その言葉を聞いて、ステラの細い肩が、ぴくんと揺れた気がした。

キラは、ずっと探していた少女の顔を真っ直ぐに見つめた。

金髪の下に覗くすみれ色の眸が、懐かしく、あどけない。その目は宝石のようにきら

きらを散りばめていて、壊れやすそうなまでの美しさに言葉を失う。何者にも汚させてはいけないような、それほどまで無垢な瞳に魅入っていると、段々と身体が吸い込まれていきそうだった。

大きく円らな、すみれ色の瞳が——はじめてキラの顔を映した。

キラは慌てて、ようやく次にかける言葉を搜した。

しかし、捜せど捜せど上手いのが見つからず、戸惑っている——不意に「ふえっ……」と、何かが漏れるような声が聴こえた気がした。雨音だろうか……？

「ステラ……？」

キラは改めて、ステラの顔を覗き込んだ。大きな眸には、みるみる涙があふれていた。——きつと、これまで色んなことを我慢して来たんだろう……。

目の前の今にも砕け散ってしまいそうな少女は、まるで栓が外れたように、そこから幼子のように泣きじやくり始めた。

降り注ぎ、肌を流れ落ちてゆく雨の雫と分別の付かない涙の滴は、とめどなく、それでいて優しく、少女の眸からぼろぼろとこぼれ落ちていく。

どうしてか、キラもまたつられて泣き出したような気持ちになって、胸いっぱいになつて、耐えるように息を詰める。

「っ……………」

けれど彼は、その感情を誤魔化すようにして、ステラの頭の上に優しく手を置いた。ぼんという音がしたか、していないか——それほどの力加減で手を置けば、その感触を認めたステラの方から、おずおずと顔を上げて来てくれた。

すこしは、落ち着いたのだろうか？ どこまでも純真で、まだしつかりと潤んでいる目に見つめ返され、キラは不思議と、神聖な気持ちになる。

そのあどけない顔に、自然と訊ねていた。

「何に、泣いてるの……？」

けれど、ステラはふるふるとかぶりを振るだけで、その質問には答えてくれなかった。——答える必要など、なかったのだ……。

ステラは、自分の胸がいつぱいになるのを感じ、同時に、それが何故なのか分からなかった。

キラは——“フリーダム”のパイロットだった……。

改めて現実を突きつけられてなお、彼を拒絶しないこと自体が、彼女には不思議だった。

それでも、キラは「僕は君の敵じゃない」と云ってくれた——。

こうやって、やさしく頭も撫でてくれた——。

やっぱりキラは、キラなんだってこと。

天使でも、悪魔でもない。

大切な、大切な幼馴染み——おともだち……。

——ベルリンで「フリーダム」^カと戦った……。

あのとき、ステラが『悪いこと』をしてたから、だからこの人は駆け付けた。

そのとき、ステラがキラを知らなかったように、キラもまた、ステラのことを知らなかったのだ。

お互いが、お互いを殺し合おうとしていることなんて——。

——きつと、誰も知らなかった。

だからこそ自分達は、こんなにもすれ違って来てしまったのだ……。

(でも、もういい……………つ)

ステラは胸がいつぱいになるのを感じて、小さく、優しく微笑んだ。

涙が溢れ出し、そうして彼女は、身を委ねるようにしてキラの胸に、その小さな頭を沈めた。

キラはドキリとして、一瞬だけ飛び跳ねた。

しかし、ややあつてからゆつくりと肩に腕を回して、ステラのことを受け止めてくれた。安心感が、ステラをやさしく包み込むような気がした。

(もう、わかったから——)

人間は、神ではない。天使でも、悪魔でもない。

そして「フリーダム」もまた、操っているのは、たつたひとりの人間なのだ。

ステラにとって大切な幼馴染みは、どこまで行っても、大切な友達だ。

どんな事情があっても、どんなすれ違いがあっても——。

——キラは、やさしいね……。

——ずっと昔から、変わらない……。

ステラは暖かさに包まれる中で、うっとり目を閉じた。

——やっぱりキラは、キラなんだ……。

すれ違いの果て——。

それは少年と少女が、本当の意味でめぐり合った瞬間だった。

『造られた者達』

生体CPU、通称：ブーステッドマン——

それは、こと戦闘に特化した生体調整と能力強化が施された、所謂『強化人間』の一種である。

数か月前に放棄されたアラスカ基地にて、人事部からの異動を命じられたハリー・ルイ・マーカットは、連合の新たなる本拠地への赴任後、ムルタ・アズラエルが経営する軍事コングロマリットの医務官としての業務に従事するようになっていた。

医者という職業は、それでいて同時に研究者でもあるのだろう。強化人間を次々に製造”するための画期的な新薬の開発、それが今の彼に与えられた仕事だった。

——きっかけは、私の小さなミスからだった。

半年程前、新造戦艦”アークエンジェル”の船医として着任した彼は、予期せぬ事態であった”ヘリオポリス”崩壊の後も、当艦における唯一の医者として乗船を続けた。軍医として、崩壊したコロニーからの避難民の治療や手当て、ときにはメンタルケアなども請け負っていたのだが、ある日のこと、損傷したモビルスーツ”デイフェンド”の

パイロットの身体治療を担当することとなったのだ。

そのときの彼の表情というのは見物であり、彼は少女の身体から採取したデータの値のことごとくをみて、大いに驚愕した表情を見せた。

健康な人間であれば、決して示すはずのない——決して示してはいけない——滅茶苦茶に入り乱れた数値の数々。医療機器の故障、あるいは誤作動であれとすら願った狂ったデータを、ステラの身体は叩き出していたのだ。

依存性が高く、即効性のある劇物を体中に仕込んだ薬物中毒者——細胞や神経の働きを異常なまでに活性化させ、身体機能を飛躍的に向上させる効能……いや毒素を持つ、決して手を出してはならない禁断の果実を食したものの。

しかし、とある側面だけを見れば、ナチュラルがモビルスーツを操るために不足している——反射神経、瞬発力、運動能力、認識力といった——あらゆる能力を底上げする効能も認められ、この一面こそが、結果的に「薬物を用いた戦闘用の強化人間の製造」という、狂気の発想を生み落とす原点となった。

第八艦隊との合流後、ハリーは自己流の研究をもって薬物の解析を行い、やがて「そこに改良の余地がなかった」ことを断ずると、すべてのデータを破棄してみせた。

しかし、捨てたはずのデータは、どういうわけかフレイ・アルスターによって復旧させられ、それを告発された彼は、転属先で強化人間の製造事業に半ば脅される形で協力

することとなる。

ハリーが出向した大西洋連邦の研究機関では、自然環境保護を提唱するブルーコスモスの資金援助を元に、既に強化人間——いわく「生体CPU」の研究が推し進められていた。

——遺伝子をもって拮抗できない怪物相手には、肉体を強化して対抗しようというのか？

ハリーにとって不可思議だったのは、ステラ・ルーシエという強化人間の実物——ある意味では完成系——が確かに実在していたにも関わらず、施設で働く研究者のほとんどが、自分の持つエクステンデットのデータに目を輝かせたことだったろうか。実際、エクステンデットの研究はどの部署を覗いても未だに執り行われておらず、その代わり、ブーステッドマンと称される強化人間の開発が進められていた。

人体実験の分野において、主力の研究機関はロドニアにあるらしく、ハリーはそこで、詳しい強化人間の説明を先達に受けた。

（ブーステッドマンは、こと戦闘能力においては、エクステンデットのそれを遥かに凌駕している——）

そもそもエクステンデットとは、潜行工作といったデリケートな作戦を遂行することのできるよう、兵士としての用途を拡張された者達のことを指し、その精神状態は平時

において安定している。

対してブーステッドマンは、それと比べて強烈な投薬と心理操作が施されており、激しい神経麻痺の反動として人格の凶暴性が高いことが伺えた。そのため繊細な作戦行動には不向きで、彼等の活躍の場は戦場に限定されていた。

ブーステッドマン用の覚醒剤は極めて依存性が高く、効果が強烈な分、摂取後の覚醒レベルも高くなり、発揮できる戦闘力はエクステンデットの遙か上をいく。

（ブーステッドマン達の命運を握る薬物——『γ-グリフェブタン』……ドーパミンやノルアドレナリンに似た神経伝達物質ストレスホルモンに由来する神経麻薬の一種か）

ハリーは自分のデスクに向かいながら、医者としての考察を進めていた。

その眩きを理解するには、医者としての専門知識を必要とした。

（確かにこの薬物は、投与後の著しい戦意高揚と覚醒を促す——）

だが——と、彼はその先を続けた。

（効果はあくまで一時的なものだ。効能が切れると同時に、激痛を伴う禁断症状を引き起こす。こんな成分を体の内に取り込み続けければ、人は、いずれ廃人に——）

そこまで考察し、ハリーの中に怒りが湧き出してくる。彼はそれまで読んでいた手許の資料を握り潰すと、苛立たしげに嘆息を吐いた。

——やはり、こんな研究は正気じゃない……！

少なくとも、医術を以て人命を救う医療従事者の行うべき仕事ではない。

オルガ・サブナック、クロト・ブエル、シャニ・アンドラス——ソロモンの悪神の名を付けられた、まだ年端もいかない少年達。それぞれ強化インプラント：stage「2」「3」「4」と段階的に表記され、その項目は、間接的に薬物中毒の進行度合いを示していた。

「少年と云えど、施設に来るまで経歴は一切として不明。——いや、抹消されているのか？ あの娘と同じだな……」

頭の中に、金髪の少女のことが思い浮かばれる。誰も、彼女がどこから来たのかを知らない。訊ねても、本人ですら上手く話すことができない。気が付けば、ヘリオポリスに立っていたと云い、それ以前のこととは本人が話さないのか、それとも話せないのか、誰ひとりとして知らないのだから——。

そのとき、部屋のドアが開いた。

ハリーはハツとして現実を引き戻される。誰何して振り返れば、自分専用に与えられた研究室の入り口に、スーツ姿の痩躯な男の姿を認めた。色の抜けたような金髪に、素肌の白い人種の男だった。その姿を認めた途端、彼はおおっぴらに失望していた。

「アズラエル理事……。なにか御用ですか」

入室して来たのは、ムルタ・アズラエルである。ハリーがヘッドハンティングを受け

た、軍事コングロマリットの経営者を務める男だ。

明らかに厭うような口調で云われた彼は、飄々と云う。

「そうそう露骨に嫌な顔されると、僕だって傷つくんですけどネ」

「医師者として、大いに胸糞の悪くなる資料に目を通したばかりなのです、誰だってこうなりません」

「それにしても熱心に読んでいたような気もしますが……まあ、職業意識が高いことはありがたいことですヨ」

——この男とくれば、この調子である。

ハリーは深く嘆息ついて、「……要件は？」と訊ねた。アズラエルは、相も変わらずねっとりとした口調で返す。

「あなたをお呼びのようですよ。お嬢サンが」

「……そうですか」

ふたりは研究室を出て、殺風景な廊下を並んで歩き出した。

そこは、オーブ領海外に撤退した連合軍艦隊——その旗艦である強襲揚陸艦「パウエル」の艦内である。

並行する二者の間には、気鬱な沈黙が流れたが、これと違ってアズラエルにはそれを気に留めている様子はない。ハリーは彼への当てつけの意味も込めて、こんなことを云

い出していた。

「——ご自慢の新型、思うほど働いてはくれなかったようですね」

それは、今の彼に云える最大限の皮肉であった。アズラエルの細やかに整えられた眉が、ぴくりと動いた。

オーブ解放戦線——

連合が圧倒的物量を誇っていた先の戦いは、しかし、オーブ軍の底知れぬ軍事力と謎のモビルスーツによる徹底抗戦によって、地球軍の撤退に終わっていた。考慮される遠因は多くあるが、間違いなく最大の要因となったのが、アズラエルが満を持して前線に投入した新型機動兵器——後期GATシリーズの不可解な帰投によるものであった。

医者であるハリーには、そのパイロットであるブーステッドマンの少年達が、なぜ唐突に、そして命令に背いて勝手に帰投したのかが、手に取るように分かっていった。

「先の戦闘、敗因はブーステッドマン特有の欠陥にあるのでしよう。薬グリフエブタン剤の効果継続時間が切れることを恐れた彼等は、先もって母艦パウエルへ戻り、禁断症状にみずからが行動不能になる事態を防ごうとした」

そう、戦闘時におけるブーステッドマンの致命的な弱点は、薬物依存のために「長期戦に向いていない」ということでもある。

彼等が、強化人間としての恐るべき戦闘力を発揮するには、高度な覚醒レベルと脳神

経活動に起因する集中力を、薬剤の補助によって常に維持しつづける必要があった。無論、その反動や副作用も存在し、薬の効果が切れれば精神は途端に錯乱し、肉体はあらゆる不調を来たす。その弊害として戦闘不能の状態まで陥ることがあり、それは、兵士としては致命的な弱点であった。

大体、催眠療法と酸素を含めた薬物投与と、生体改造によって人為的に身体能力を拡大させられた生体が、薬物という杖をなくして、いつまでも尋常でいられるはずがないのだ――。

ハリーは、隣を歩く男を冷めた目で流し見た。

そう、この男――ムルタ・アズラエルこそが、ブーステッドマンの処遇にすべての責を負うべき人間なのだ……。

「オルガ・サブナック、クロト・ブエル、シャニ・アンドラス――投薬が切れるたび、廃人のように堕ちてゆく少年達。そんな彼らが、本当にパイロットとして、これから役に立つと思っておられるのですか」

アズラエルはしかし、ただ鼻白んで答えるだけだ。

「一般のナチュラルに、後期GATシリーズのような専用機を扱うのは不可能だ。ナチュラル用の支援OSが完成しても、あんなに複雑な機体、それだけで扱えるはずもない」

前期GATシリーズのモビルスーツが完成しても、かつて大西洋連邦は、それらを操るパイロット選出において、完全に門外漢だった。それゆえに新型“G”兵器の実戦配備は遅れ、コロニー内で手をこまねている間に、敵軍に機体を強奪される不祥事を巻き起こす。

強奪を免れた“ストライク”と“デیفエンド”が、当初の予定どおり“アークエンジェル”に配備されても、これに乗って来たのは「コーディネイターの少年と少女だった」との確たる事実報告もある。これを云い換えれば——「コーディネイターでなければ、結局はモビルスーツは扱えなかった」ということでもあった。

したがって、以上の様々の経緯を鑑みると、現実はいよいよナチュラルにモビルスーツが不適合であると立証しているようなものだった。

——やはりモビルスーツは、コーディネイターにしか扱えない代物なのか？

多くの者の中で、当時、この疑問への確信が強まり始めていた。

そのときアズラエルは、発想を転換させた。

——通常のナチュラルに扱えないなら、それ専用のナチュラルを造つちやえばいいじゃないですか。

この道を外れた提案が、遺伝子以外の肉体を徹底的に強化・調整したブーステッドマンを生み出すきっかけとなった。

コーディネイターそのものを否定している。『ブルーコスモス』や連合軍上層部の意向としては、いくらモビルスーツの操縦にコーディネイターの高い身体能力が必要と云えど、あの怪物の力を借りるわけには行かない。ならば、と、彼等はどこから連れて来たかもわからない少年や、ジェイク・リーパーのような死刑囚の肉体を改造し、薬漬けにして、コーディネイター並みの力を持たせよう暗躍した。

したがって、ブーステッドマンは確かにナチュラルだが、それはあくまでも「モビルスーツを操るためだけのナチュラル」として、二度目の生を受けたに過ぎないのである。「『フオビドウン』」「レイダー』」「カラミティ』——どれも前期GATシリーズの性能を凌駕する、素晴らしい次世代機だ」

しかし、これを操れる人間がいなければ意味がない。

「徹底的に強化された生体CPUでければ、あの三兵器は扱えない。そういう意味でも、ヤツらの存在は我々にとって貴重なんですよ」

「しかし、かといって重宝すべき人員でもないでしょう?」

云えば泡喰ったように、アズラエルはけろっとした。

「医者として云わせてもらえば、ブーステッドマンは決して長く持たない」

「まあねエ……」

「なぜソキウスシリーズから撤退したのです? 強力なモビルスーツを操るだけなら、

ソキウスにだって可能なことだ。先見的な判断を下せば、将来が約束されないブーステッドマンよりソキウスを量産した方が、遙かに——」

「賞味期限の問題ですかねえ」

ソキウスシリーズとは——地球連合軍が産み出した、戦闘用のコーデイネイターである。

人が生まれながらに備える服従遺伝子を利用した精神制御を施し、この心理操作により、ナチュラルに逆らうことなく、命令に絶対的に従うようにプログラムされた大西洋連邦の強化人間の一種。

前時代では、彼等の存在こそが、大戦において常に劣勢だったナチュラルにとつての主要戦力と目論まれていた。しかし、これはブーステッドマンが一定の成功を見せたことによつて水泡に帰した。ブーステッドマンが台頭し、存在価値が見つけられないと断じられた彼等の多くは、上層部の決定によつて『廃棄処分』とされた。

効率化を図つたアズラエルの手によつて数人の生き残りが出ていたが、そのいずれも「ネメシスダガー」のパイロットとして、捨て駒として、先の戦闘でほとんどが戦死してしまつたのが実状である。

アズラエルは、ハリーに問われ、先を続けた。

「そりゃあ、戦争の構図つてやつが、時の流れの中で『ナチュラルとコーデイネイターの

対立』に変遷したのが問題じゃないですか。ソキウス共がいくら使いようのある兵士だと言ひ張つた所で、コーディネイターは所詮コーディネイターだ……。頭のお堅い軍部のお偉いさんなんかは、こういうの、特にこだわつたようで」

「不毛なことです。だからといつてナチュラルからブーステッドマンを生み出し、同族の寿命を削り取るような真似をする……それで最善つてんですか」

それは、哀しいことだとハリーは思つた。

地球に取り残されたナチュラルの才能と意志は、コーディネイターという異種を容認せず、それどころか彼等の異能に対抗したがるあまり、持てるインテリジェンスを同族を加害することに躊躇なく利用してしまつたのだ。その中でも最も悲しいことは、そのことに何の痛痒も抱かなかつた自分達ナチュラルに、それだけの背徳心がすっかり定着してしまつてゐるという事実気付いてしまうことだつた。

ブーステッドマンは、戦場に出撃させても、薬剤が切れれば勝手に帰投する。そうでなくとも、度重なる薬剤の投与は健全な身体機能を蝕み、破壊し、出撃を重ねるたび、彼らは確実に廃人へと近づいて行く。これでは、前線に出しても、将来的な意味を込めても、ハリーの云う通り、彼らはおそらく長くは使えない——そんな兵士でしかないのだ。

アズラエルは、思い直したように云つた。

「なんだっていいんですヨ。歴史がそんなだから僕らがいま、もつと実用的で、画期的な新しい強化人間を作ってるんじゃないですか」

「っ……………」

「まだ、試作段階ですけどね？」

会話を続けながら、ふたりは艦船「バウエル」の廊下を歩き、ある部屋へと入室した。そこは医務室であり、様々な機材が体よく並べられている部屋だった。空間の片隅には、まるでゲームセンターにあるような大型のコンピューターも設置されている——新人パイロットの養成などによく用いられる、モビルスーツのシミュレータであろう。

疑似的なコックピット。密閉された部屋に、暑苦しそうなメットをかぶり——シミュレータには、ひとりの若い人物が座り込んでいる。

その人物は、シミュレータにて模擬戦を行っていた。

モニターに映る敵機——コーディネイターの操るであろうシミュレーション上の「ジン」を、鮮やかな手つきで次々と撃墜して行く。

やがて映像の中で戦闘区域^{ステーション}が切り替わると、それまで量産機のみであった敵機の項目には、続々と「ストライク」や「イーゼス」と云った高性能のモビルスーツが台頭しはじめた。勿論、対戦しているのは単なる映像データに過ぎない——おそらく、アラスカに帰還した「アークエンジェル」が軍にもたらした戦闘データを基に構築されたもの

だろうが——その人物は、淡々と被弾をまぬがれ、まるで作業のように舞台を攻略してゆく。

その戦闘力には、目を張る者があつた。

——すくなくとも、ナチュラルとは思えない反射神経だ。

アズラエルは、ご機嫌な顔になつた。

「おやおや、素晴らしいもんじゃないですか。シュミレーターの最高記録、日に日に塗り替えておられる——」

凄まじい戦果は、凡百の一般兵士に叩き出せるような記録ではなかつた。

やがて模擬戦が終わつたところで、アズラエルは芝居がかつたように、そして、どこか白々しい口調で褒めたたえながら、まずは傍らのハリーへと拍手を送つた。

「何もかも、あなたが造つた試験薬の効果のおかげ——ですか?」

「——エクステンデット専用の試験薬の投与を開始して、もうじき、二週間近くになるか……」

ハリーは、アズラエルのいうことなど聞かず、そのままそっくり目の前のシュミレータに座る人物へと話しかけた。

ヘルメットの間からは、赤く長い髪が流れ落ちるように見える。

億劫そうに、ヘルメットが取り払われる。粗末な一般兵用のスーツ——その下から覗

いたのは、赤く、燃えるような色をした長髪——。

そこに座っていたのは、シユミレータに記録された凄まじい撃墜数にはおおよそ似合わない、華奢にして可憐な容姿をした少女であつた

「体調の方はどうか、フレイ・アルスター」

——顔つきが、少し変わったろうか……？

以前より攻撃的に、切れ長に尖りを利かせた桃色の双眸が、アズラエルの小さな顔を映す。やがて彼女は視線を滑らせ、ハリーを見ると、以前とは人が変わったように不敵な笑みを口元に走らせた。

ハリーはしばし、その表情に魅入ってしまった。

可憐なだけではない。情欲的で、不穏さと不気味さが混じりつた面妖な微笑みだ。うら若き十六歳の少女には相応しくないように——とてつもない色艶に溢れている。生来の色つぼさだけでは説明がつかない、たったの数週間で完成された色香——。

改めて目の当たりにして、後悔がハリーの胸を駆け巡る。——この娘は、すっかり変わってしまった。自分が変えてしまった。

「堅調と云つたら、先生は喜ぶのかしら？」

「……微妙だな……」

「あら、残念。堅調よ、とっても気分が良いわ」

そう云いながら、少女はふわりとして立ち上がる。ハリーは、そんな彼女を沈鬱な面持ちで見据えた。

フレイ・アルスターは——『強化人間』として、既に生まれ変わっていたのだ。

「アークエンジェル」内に保管されていた「エクステンデットスの生体サンプルラ・ルー」のデータを基に、これを再構築したハリーの試験薬が、彼女に投与されていたのである。

狂人ブーステッドマンよりも、エクステンデットは、幅広い実用性が見込めていた。

まだ臨床試験の前段階にあつたエクステンデットの第一号——ともすれば実験台モルモットとも云うべき実証役に、フレイ自身が立候補したのである。

試験薬が投薬された彼女は、いわゆる「プロト・エクステンデット」としての転生を遂げていた。

二週間近くの投薬を受け続け、すっかり特殊体質となつた彼女には——（ブーステッドマンほど過剰な例ではないが）——今や定期的な薬物投与が必須となつているのである。幽艶と立ち上がったフレイは、妙にご機嫌な様子であつた。

「すくなくとも、コーディネイターをたあくさん撃墜することができくらいには、ね……」

妖艶に微笑みながら、フレイは、視線をシュミレータの方へと戻す。

目線の先には、先の模擬戦の戦績リザルトが表示されていた。

手始めに量産型の「ジン」を数十機として撃墜している彼女は、その後、難易度を上げ、前期GATシリーズとの対戦を果たしていた。

シュミレータ上で『最強』に設定されているのは、数々の不敗神話を残した「ストライク」であったが、他の「イージス」にしろ「デイフェンド」にしろ、これに勝るとも劣らないエース機として設定されている。

無論、そのレベルにもなれば個々に差が現れるに違いないが、それまで非戦闘員でしかなかったフレイからすれば、そのような連中は総じて『強いやつら』という括りできとめられていた。

その『強いやつら』の片影を、フレイはたった今、まとめてあしらってやったのだが――。

モニターを見たアズラエルが、すっかり鳩に豆鉄砲食らったような顔つきになる。「もしかして、あの「ストライク」まで撃破しちゃったんですか？」となかば呆れたように問えば、「わたしには、必要なことですから」と彼女は云った。

まさか、最強の映像データを打破されるとは予想だにしていなかったのだろう。「シュミレータのデータ、更新しなきゃいけませんね」と冗談がてらに付け足したアズラ

エルに、フレイは淡々と返す。

「上々ぐらいは、褒めてあげましょうか？」

「褒める？ いやア、褒められるべきはあなたでしよう？」

「たしかに、先生の仰る通りでした。今のわたしになら、どんなモバイルスーツだって扱えます。どんな敵とだって戦えます」

「おやおや、随分と頼もしいことですね」

アズラエルは、感嘆した。

ハリーは俯きがちに、気鬱な口調で云った。

「それでも、無理はしないことだ。——いいね？」

大体、本来のエクステンデットというのは、何らかのリラクセーションルームに入れることによって、精神を安定させる調整を施す必要があるのだ。

しかし、あいにく『それ』がどのような装置であるのか、現時点では詳しく特定することができていない。研究主任であるハリーは頭を抱えたが、装置の得体が分からないからと云って、被験者をそのままの状態で扱置いてしまうと、経過観察に支障をきたす恐れがあった。

ゆえに——ハリーはその『装置』とやらの代用品として、ひとつの『薬剤』を開発していた。ハリーは白衣のポケットから、錠剤の詰まったガラス瓶を取り出し、徐にフレ

イへと差し出した。

フレイの目が、ハリーの顔を映す。

「今の君の脳は、薬の効能によって、ある種の覚醒状態にあるんだ。薬物が人為的に全身の細胞を活性化させ、身体が著しく興奮している状態さ……。だが、そんな状態を長いこと維持しようとするれば、脳や全身に大きな負荷がかかってしまう——だから定期的には、その都度、頭と体の両方を休めなきゃならないんだよ」

ハリーが手渡したのは、一種の睡眠薬である。

薬物によって、一時的・人為的に覚醒した頭を休息させるためには、人間の脳と身体に休眠を促す錠剤が必要だった。

そして——。

この錠剤こそが、ハリーが独自に開発した『最適化装置』イミテーションの代用品——「ゆりかご」の代わりに、エクステンデットの精神を安定させる調整装置としての働きを代行する薬剤である。

「人間の脳も、コンピュータと同じだよ。フル稼働しつづければ熱暴走を引き起こし、そうならないためにも、事前の冷却が必要不可欠なんだ。一日に一度のサイクルで、必ずその薬を飲むこと。そして、摂取した後は必ず眠ること」

「何度も聞きましたし、わかってますよ。心配性なんですわね」

ハリーは、携行した書類に詳しいデータを書き込んだ。被験者、フレイ・アルスターの状態は、極めて「良好」——と。

アズラエルとハリーは、部屋から退室した後、ふたたび廊下を歩き出していた。

アズラエルは、まるで新しい玩具でも手に入れたあとの子供のように、うずうずとしている様子であった。

「被験者の状態も安定しているようですし……？ ホントのホントに、トンデモナイ葉を開発してしまっただすねえ、先生は」

天才とは、正にあなたのような者のことを云う。

アズラエルは、ハリーのことをべた褒めしはじめた。だが、それも仕方のないことかもしれない。

今のフレイは、ブーステッドマン達のように致命的な弱点が確認されておらず、彼等にも引けを取らない戦闘力を発揮していたのだ。思うにそれは、強化人間の監視役を務めるアズラエルにとっては、非の打ちどころのない上々の結果報告であろう。

しかし——奇妙ではある。

エクステンデットは、純粋な戦闘力であればブーステッドマンに叶わないはずなの

だ。

本来ならば、在って然るべき「性能」の差を、被験者であるフレイ自身の才覚や意思が埋めているのだろうか？ 彼女には、元々そういうった才能と性質があったということだろうか？

「まだ経過観察の段階です、褒められる筋合いはないですよ……」

ハリーは、尻込みして答えた。

人体実験のために、若い少女の健全な身体を破壊してしまった——その事実が、彼をいまだ良心の呵責に苦しめる。

しかし、その機微になどまるで斟酌せず、アズラエルは能々と云った。

「——なんであれ、あの調子なら戦力として十分だ。彼女には、実際にモビルスーツで出撃してもらっても良さそうですね」

ハリーは、目を開いた。

「まだ、経過観察の段階と云ったでしょう？ 彼女を実戦に送り出すなんて、主治医として、とても許可できない」

気を捲し立てて、ハリーがアズラエルへと食って掛かる。

しかし、アズラエルは淡白に返すばかりだ。

「何を悠長なこと云ってるんです？ 許可なんて、すぐに取りますヨ」

「これは医療の問題だ。新薬つてのは、どこでどう……どんな副作用が出て来るものかわかったもんじゃないんだ。まだ経過観察が終わっていない以上、何が起るかわからない」

「経過観察つてねエ——それ、いつになったら終わるんデス？」

「いつ終わる、と訊かれれば、順当に残り一月は必要になるだろうと、ハリーは答えなかった。

しかしアズラエルは、それだけの長い期間を待つつもりは毛頭ないだろう。それは、うんざりとした口調から明瞭に判断できることだった。

「しかし……！　彼女が危険だ、時期尚早だよ」

「僕らはこれから、戦場に行くんです、命を賭けてね……。常に危険と隣合わせなのは、誰だって同じですよ」

云われ、ハリーはぐつと息を呑んだ。

やれやれ、と云わんばかりに、説教めいた口調でアズラエルは言葉を紡ぐ。

「いいですか、世の中にはね……当たり前すぎて、誰も気に留めないような『さだめ』つてものがある」

子供に聞かせるような口調で云われ、ハリーは奥歯を噛みしめた。

「刀剣は人を斬り殺し、拳銃は人を射殺するためにそこにある——道具や兵器つてのは、た

だ飾っていれば嬉しいコレクションじゃあない……それぞれひとつ目的があつて造られたモノなんです。人間だつて同じだ……だったら『兵士』なんてのは、初めから戦うために存在しているもんでしょう？ ——でなきや何のために生きてるんです、やつらは？」

兵士は戦つてこそ、兵士としての価値がある。

そしてフレイは、みずから兵士——それも強化人間の兵士と相成ることを願つた。

それだけの当たり前の真理を、たかだか医者都合で妨害される筋合いは、アズラエルにはなかつた。

「彼女はみずから前線で戦うために、危険を承知でエクステンデットに生まれ変わろうとしたんです——そこんところ、ちゃあんとわかつてますよネ？」

「え、ええ」

「大体、先生もご存知の通り、生来のフレイ・アルスターはいち民間人だつたはずだ……？ そんな彼女がいま、どうしてこんな軍艦なんかに乗つてんデス？」

「……………」

答えは単純で——フレイ・アルスター自身が、地球軍士官に志願したからだ。

元の階級は「二等兵」で、艦内掃除や洗濯といった雑用業務ばかり押し付けられていた彼女であるが、ゆえあつて今は「少尉」の位を与えられるに至つた。

『コーディネイターを滅ぼすために働こう』——そう思ったから彼女は地球軍に志願したんでしょ？　そして今の彼女には、コーディネイターを撃ち、ダイレクトにヤツらを滅ぼすだけ有能な素質と能力がある……。だったら、彼女の気持ちにすこしは報いてやらなきゃ……」

「アズラエル理事……！」

「使えるものを据え置く必要がどこにあるんですか、ってことですヨ。経過観察なんて、実戦に出してからだってできるでしょう？」

フレイ・アルスターを籠の鳥にしているのは、治験と同様の形式を通じた探索的な臨床試験を行っているからである。それゆえ模擬戦においても、負担のかけられないシミュレータで行っているのであって、本来であれば、無用の負荷を掛けるべきではないのだ。まして実戦経験など論外だろう。実戦が生み出す肉体への衝撃やストレス、あるいは快感といった様々な弊害は、薬物のデータを観察するにあたって、様々な不確定要素を生み出してしまふのだから。

アズラエルには、それが分からないのだろうか？　……いや、理解してはいるのだろう。しかし彼の態度は、今にも「待ちきれない」と云った風であった。

「しかし、そうは云つても、彼女に与える機モビルスーツ体なんて——」

「いいえ、あります」

云われ、ハリーは虚を突かれた表情になる。

アズラエルは、得意げに云った。

「ちようど先日、本部の方に面白い機体が届いたみたいですからネ……」

翌日——。

早朝になって、旗艦「パウエル」に搬入された新型機の周囲には、多くの人集りが来ていた。本部の方から、ちようどこの「パウエル」に向けて、新開発された新型のモビルスーツが移送されて来たのである。

「四機目……?」

「誰が乗んの、アレ?」

「はっ……」

キャットウォークから、オルガやクロト、シャニの三名が顔を出し、搬入されて来たモビルスーツに目を遣った。三人とも地球軍士官の青い制服を着用しているが、誰もが袖を切ったり、無造作に羽織ったりと、風紀のかけらもない風采をしていた。

彼等は物珍しげな表情で、その「新型」を見遣っていた。普段、互いの存在にすら注

意を払わない彼等が、何かに興味を示すことは珍しいことだと云えた。

運び込まれて来た新型は、格納庫に「カラミティ」「レイダー」「フォビドゥン」と並んだ順、その後方に陳列するように配備された。

それは、さながら後期GATシリーズに兄弟が増えた、と云った風であった。

後期GATシリーズは、フェイズシフトP S 装甲を発展させたトランスフェイズT P 装甲を全身に採用している。これは通常装甲の内側にP S 装甲を備えた二重構造で、通常の装甲が外殻を覆っているために、ディアクティブモードにおいても、機体のカラーリングが脱落することはない。

なおも鮮やかに色づいている「カラミティ」「フォビドゥン」「レイダー」の中で、しかし、運び込まれた「新型」だけは鉄塊色に彩られ、それは誰が見ても、フェイズシフトがオフになっている状態であると判断することができた。クロト・ブエルには、それが不思議に思えた。

「兄弟機っていうわりには、色落ちてね？」

「トランスフェイズじゃねーのかよ、どーなんてんだ、ありや？」

そこへ、彼等の親玉を務めるムルタ・アズラエルが顔を出した。

「フェイズシフトでも、トランスフェイズでもない——ヴァリアブルフェイズシフト装甲甲という、まったく新しい位相転移システムが使われてるんでねエ……「アレ」には——

「ああん？」

少年達はアズラエルの顔を認めた途端に、すこしだけ怨めしそうな、鬱陶しそうな顔になる。

彼等は、決められた役割を果たせなかった先日の戦闘の『お仕置き』として、アズラエルに苦しい目に遭わされているのだ、無理もない。

「V P S 装甲——ビクトリアで回収されたG F A S—X I “デストロイ”が搭載ヴリアブルフェイスソフトしていた、我々にとって未開の技術が使われていた装甲のことですヨ。大西洋連邦が独自にそこから転用して、今は“アレ”に実装されてますがね……」

アズラエルは、キャットウオークから搬入された鉄塊色の新顔——新型のモビルスーツを、満悦そうな面持ちで、改めて眺めた。

従来の“G”兵器を思わせるツインアイに、頭部のアンテナはV字というより、それ自体が刃剣のようなブレードアンテナとしての形状をしている。

前方に大きく伸びるように突き出した角は、それだけで異彩を放っていた。

巨大な熊手状のクローは“ブリッツ”の“トリケロス”を発展させたものらしく、掌底部にビーム砲を内蔵し、手の甲には出し入れ可能な実体剣と、もうひとつ、ビームフィールドを貫くための“タクティカルランサーダート”を暗器として備えていた。

背部にかけて、これと云った装備モジュールが見えない風体はもの寂しい印象を受けるが、恐らく「ストライク」と同様に、バックパックを換装することで様々な戦況に対応する仕様となつてゐるのだろう。

ブーステッドマンの少年達は、そこで「新型」から興味を失つたのか、興冷めした様子でその場から離れはじめる。オルガ・サブナツクの胸中に、奇妙な寂寥感が流れ込んだ。

——それつて要するに、俺達の玩具モビルスーツより凄惨な機体ヤツつてことじゃねえか……。

それがなんとなく、なぜだか面白くない——。

蜘蛛の子を散らすようにばらけていった彼等を襲つたものは、たしかに、子供っぽい嫉妬ジエラシーであつた。

彼等が退散すると、そこへ、入れ替わるようにしてフレイ・アルスターがやつて来た。アズラエルは、不敵に笑う。

「ああ、ちょうどいい所に」

「艦内が何だか騒がしかったので、噂に聞いて」

どうやらフレイは、搬入された新型をひと目見に来たらしい。

「どうです？　一応、表面上じゃあ後期GATシリーズの内の一機、ということになつてゐるモビルスーツなんですが」

「『アレ』が——わたしの機体ですか？」

「そのとおり……」

アズラエルは、ひどく誇らしげに説明した。

「従来のモビルスーツの性能を遥かに上回った、最新鋭の機体ですヨ。詳細はのちほど見てもらいますが……だからこそ、今のあなたに相応しい」

——少なくとも、実質的な稼働時間の短いブーステッドマンよりは、はるかに

嘲るように胸の中で付け足したアズラエルに向かって、フレイは満足そうに返した。

「乗りこなしてみせます。すべて、コーデイネイターをやつつけるために」

アズラエルは、楽しそうに頷いた。

そうして彼女は、今、型式番号をGAT-X444と制定された鉄塊色の『新型』の
コクピッドに座る。

GAT-X400番代——

それは、ビクトリアに墜落した『黒鉄の巨人』のデータを基に開発されたモビルスー
ツに付けられる型番である。たとえばGAT-X401『デイフェンド』のように——
ステラ・ルーシェが操って来た、あの漆黒のモビルスーツのように——。

(あの娘と、同じ……)

何かにつけて彼女に対抗意識を燃やしてしまうのは、父を殺された憎しみからであろうか？ それとも、彼女に裏切られたと感じる怒りや悲しみからであろうか？

——君は彼女と同じだろう？ エクステンデットになるのだから……。

かつて、ハリーに云われた言葉を思い出す。

確かに、これはおかしなことだ。

自分はエクステンデットの投薬を受け、彼女と同じ強化人間の一種となった。遺伝子操作を受けて誕生するコーデイネイターの対比として、ナチュラルが自然に生まれ出た者を定義する言葉なら、肉体を人為的に増強した自分は、最早コーデイネイターでも、ナチュラルですらもないのだろう。

自分はステラ・ルーシエと同じ立場に立ち、彼女が見ていた景色が、自分にだって見えるようになったはずだ。

そう、自分は彼女になれたはずだ——。

それなのに、彼女の存在に憎しみを抱くということは、自分自身を嫌悪していることと同じではないだろうか……？ この苛立ちは、一体何なのだろう……？

〈それでは、オーブ解放戦——そうそうに再開と行きましようか〉

アズラエルの声が通信機から聞こえ、それを合図に、オペレーターの指令が木霊する。

全艦に発進準備が言い渡され、間もなくしてすべての連合軍艦隊が動き出した。

無数の戦闘機が飛び立ち、量産モビルスーツ部隊が次々と発信してゆく。

例に漏れず、旗艦「パウエル」の中でも動きがあった。ブーステッドマンの少年達は、以前より強力な投薬を受け、それぞれに愛機を駆ってハッチから飛び出してゆく。フレイもまたそれに続こうと思ったとき、モニターに、アズラエルの小さな顔が映り込んだ。

「あー、いいですか？ マスドライバーと「モルゲンレーテ」の工場は壊してはいけません。早々に軍本部を叩いてくれるだけでいいんです」
フレイ・アルスターは、今回が初めての实战である。

もとは民間人で、深い軍事教育も受けていない彼女に対し、次々と指令を出した所で即座に適応などできない——アズラエルは、あくまでもそう考えており、ゆえに手短かに指示を出したあとは放任するつもりなのだ。フレイは、逆にそれが好都合に思える。ああだ、こうだ、と細かく命令されるより、彼女は自由に、気の向くままに敵を倒していただけたのだから。

そもそも、ただ「暴れ回る」ことこそが、彼女のような強化人間にとっては最適な役割なのだ。

発進準備を整えた彼女は、強化人間に与えられる専用のパイロットスーツに身を包ん

でいた。無骨なデザインに、角ばったヘルメット。ブーステッドマンの少年達が青色を基調とした服を着用していたのに対し、彼女には、薄い赤色を基調としたものが宛がわれていた。

ヘルメットの気密^{シールド}を行った彼女の耳に、オペレーターの声が響く。

〈モジュールは “テンペスト” を選択——〉

“エールストライカー”の発展形を思わせる四基の羽根を付けたバックパックが、機体の背部に接合された。モジュールが装着された途端、鉄塊色だった機体がペールを剥ぐように鮮やかに色づく。

全身の装甲が通電し、ヴァリアブルフェイズシフトがオンになったのである。他の “G”兵器と同じように、機体は禍々しいツートーン——純黒色とモスグリーン——に彩られ、揺らめくように色づく。ブレードアンテナを装着した頭部ツインアイには、怒り狂うような紅蓮色の火が灯った。

——。

[G]eneration

[U]nsubdued

[N]uclear

「D」 r i v e

「A」 a s s a l u t

「M」 o d u l e

。。

不可解な羅列が手許のコンソールに映し出されるが、フレイは特に気には留めなかった。

細かな英単語には、興味はない。

ただ、あえて子供っぽく呼んでみるとすれば――

「ガンダム……?」

フレイは淡々と、機体を前進させてゆく。

そのとき彼女の頭の中に、かつての婚約相手の顔が浮かんだ。たったこれだけの簡単な動作ですら、ナチュラルであった自分の元婚約者はできなかったという。

それは、とてつもなく惨めなことだ、と心の中で嗤う。

いまの自分は、そうじゃない。

――今のわたしは、こうやってモバイルスーツを操ることだってできる……。

それは、彼女が手にした力だ。

彼女自身が、自分の手で勝ち取った力——たとえそれが、厭世家と研究者の狂気に裏付けられた不正と外法ドールピソグの産物だったとしても、彼女は決して、この力を恥じ入ったりはしない。

戦争の中では、力がすべてだ。

力がなければ何ひとつ、成し遂げられはしないのだから。

それをフレイは、身を以て経験した覚えがある。

かつての自分に力があれば、最愛の父を救い出してやることもできたかもしれない。

かつての自分に力があれば、敵をすべてやっつけることもできたかもしれない。

惨めで、苦い思いに身を浸していたフレイは、スピーカーから入って来た声で我に帰った。

〈G A T—X 4 4 4——発進、どうぞ〉

フレイは素早く気持ちを切り替え、機体をハッチの前まで躍らせた。

まるで体の一部であるかのように、思いのままに動く機体に、彼女はわずかな満足を感じる。同時に、思いのままに動かしてしまう自分に、とてつもない充足感を抱いた。

——わたしは力を手に入れた。

目の前で家族を殺されるまま、何もできずに泣き喚くだけの幼い子供。

あれから時は流れた——自分は今もう、あの無力な子供ではない。

「フレイ・アルスター——“レムレース” 発進します」

声に出したのは——“亡霊”の名を冠する機体の名。
澄みわたる蒼海の上——

暗黒のモビルスーツが、晴天の空に駆け上がった。

『ディア・シスター』A

それは、大西洋連邦による攻撃が再開されるより前のこと。

ステラは「アークエンジェル」のデッキにて、キラと久々に談話の時間を持つていた。彼女達のすぐ脇ではマードックを初めとするメカニックが、急ピッチでモビルスーツの補修や整備を行っている。

ステラはこれまでに自分が辿ってきた経緯について、キラに打ち明けていた。ザフトに連行された後、第二次ビクトリア攻防戦に参加したこと。アラスカへの侵攻戦に参加したこと、やがて「クレイドル」を与えられたこと——その中で、アスランのことについて。

「——アスランが？」

具体的には、第二次ビクトリア侵攻戦を期にアスランの人となり豹変してしまったことだろうか。アスラン本人は気が変わった、と述べていたが、それでも以前を知るステラから云わせれば、それは気が触れたような変わりようにも思える。

けれどもステラには、そんなアスランをなんと表現すればいいのか、よく分からない

かった。その変化というものが、以前の彼と見比べたときに、果たして善いものであるのか、悪しきものであるのかも含めて。

「『ストライク』にキラは乗ってないって嘘ついたり、ビクトリアで暴れ回ったり——なんだか、ヘンになっちゃったんだ」

眩くステラに対し、キラもまた——なんとなくだが——その変化は感じ取っていたらしい。

「アスランは昔から頭が良くて、頼りになったよね。そんなアスランに、何があったんだろう……?」

キラは伏し目がちに考えた。

——ステラの云う通り、確かにアスランが変わったと感じるのは地球に降りてからだ。

切欠はビクトリア侵攻戦にあつたとステラは云う。だとすれば、果たしてそこで何があつたというのだろう——何が、彼をあそこまで変えたのだろうか?

「それからのアスランは、『ストライク』に乗ったキラのことを絶対に『キラ』って呼び方はしなかった。ずっと兵器の名前で——『ストライク』って呼び名を使って」

「——そうやって、きみを騙してた?」

「ううん、自分を。——アスランは『ストライク』って呼び方を使って、自分で自分を騙

してた」

あれはキラじゃない——「敵」だ。

あれは親友なんかじゃなく——倒すべき「敵」だ。

そうして自分に言い聞かせる心理が、そのときのアスランには働いていた。

「だから今のアスランは、理屈で自分を隠してるんだとおもう」

偉大な父の存在に重圧を感じ、寄せられる全幅の期待に応えようとするあまり、人間的な感情を隠した。

だとすれば、今のアスランはただ父が望むままに命令をこなす「戦士」だろうか。戦いの中では私心を捨て、大義の前では倫理さえ意味を果たさない。

けれど、そうなってしまったのは、むしろ彼が優しすぎる性格をしていたから、なのかもしれない——？

（地球軍……ナチュラルに母親を殺されて、妹を辱められたと知れば——平穏ではいられない）

キラが思うに、アスランは共感力の高い人間だった。たった一度でも受け入れてしまったものを、どこまでも許してしまう寛容さがあった。

それは生来、損をする性格ということでもある。親愛なる者に対しては、その者の立場に寄り添い過ぎるのだ。友のためなら自分の首を絞めることも厭わない——そんな

優しさを、たしかに持っている人だった。

(だから余計に、地球軍が許せなかった)

母と妹、アスランの家族を傷つけた心ない者達が、彼には許せなかったのか。

勿論、元の性格を考えれば戦争などを平気でできる人間でもなかった彼は、実際に戦争の中では傷つき、焦り、そして疲弊していった。そうして確実に弱っていた彼の心を解放したのは、不幸にも「ナチュラルを滅ぼせば戦争は終わる」という、パトリックの強引な論理だった。

ナチュラル殲滅を目論むパトリック・ザラと、そんな父に従う自分こそが「正義」と信じて疑わない。今の彼が「ジャステイス」というモビルスーツを駆っているのは、今となつては偶然には思えない。

「アラスカで『ジャステイス』と対峙したとき。あのときも、アスランは僕を許してはくれなかった」

太平洋上で「ストライク」と「イージス」が対峙して、戦った。互いに傷つき、傷つけ合いながら、互いに機体を乗り換えてなお、アスランはアラスカで、キラと再び対峙しようとした。

それは、まるで成長していないというべきか。

しかしそんなことを繰り返すのは、キラにとつては嫌なのだ。

「あんなに一緒だったのに、言葉のひとつも通らないんだ」

「……………」

それから、ふたりの会話は続いた。

キラは、目の前に聳立する「クレイドルを」見上げて云った。

「——「アレ」も、「ジャステイス」や「フリーダム」と同系統のモバイルスーツ？」

「うん、お姉さん」

つまり姉妹機であると云いたいのだろうが、どちらかと云えば兄弟機ではないだろうか？

攻性に富んだ「フリーダム」も「ジャステイス」も、仮に擬人化させたとして、とても女性には見えない剛胆な印象を受ける。「クレイドル」は元々守性のモバイルスーツであるためか、全体的に柔和な印象を受け、女性と考へても違和感はないが……。

キラは聞き咎めて、小さく訊き返す。

「お兄さん、じゃなくて？」

「お姉さん」

「そ、そっか」

この際、どちらでも良かった。

——僕らからすればステラは妹なのに、モバイルスーツはお姉さんなんだ……？

それが、なんだか奇妙に思えて、キラは少しおかしそうに笑った。

「ラクスに会ったの。キラが——『フリーダム』がオーブにいるって、聞いて」

「そっか。ステラも、あのお姫様に会ったんだね……？」

キラは、遠い目をした。

「僕の『フリーダム』も、彼女がくれた。びつくりしたけど、強い人なんだって知ったよ……」

戦争とは無縁の世界で、穏やかに活動している国民的アイドル。キラにとって、ラクス・クラインの第一印象など、せいぜいそう云った所だ。

だが、現実はそのようではなかった。歌姫という立場上、表向き愛らしい偶像を演じていても、彼女は戦争について終結する方法がないか、ずっと考えていたのだ。平和への祈りや願いは人一倍強く、しかし、自分では戦えない。だからそれを託せる人間を、彼女はずっと昔から捜していた。

そして見つけたのだ、キラ・ヤマトという人間を——。

みずからの意志を持ち、何と戦わなければならぬのかを明確化できる『自由の戦士』を——。

ラクス自身の想いと信念を託せる人間に、彼女はみずからを重ねようとした。

だからこそキラに『フリーダム』に明け渡し、みずから叛逆者となつてまで、平和を

実現させようとした。以前、「アークエンジェル」艦内でラクスを保護したとき、ステラもまた、彼女に訊ねられたことがある。

——あなたはこれから、どうなさいますの？

あのときから、ラクスはきつとステラを試していて、そのときステラはすぐに答えることができなかった。できなかったから、ラクスはその時点ではステラを頼ろうとしなかった。ステラがまだ、自分の意志で動くことができないから——。

けれど、それ以降のステラは、帰属する軍を替え、彼女自身の見識をさらに広げていった。地球軍兵として、ザフト兵として、さまざまな角度から世界を見た。

そうして両軍を渡り歩いたからこそ、本当に戦うべきモノがなんなのかを見出し始めていたステラが、自分を捕らえに来ることも承知の上で、ラクスはあるの屋敷で待っていた。それだけステラに伝えたかったことがあるのだろうが、同時に、彼女自身は既に死を覚悟していたのかもしれない。

「ラクスもそうだし——中立を訴え続けているオーブの立場だって、正直、かなり難しいよ」

「……………うん……………」

「地球軍の側につけば、ザフトは敵。逆にザフトの側についても、同じことだ。立場を変え、敵を変えるだけで。——でも、それじゃあしょうがない」

ステラは、あらためて思い知る。

ラクスが見込んで、平和のために使役した者——

それがキラ・ヤマトであり、「フリーダム」なのだということを。

「そんなのはもう嫌だから。……だから、僕は戦うんだ」

その主張は、ラクスのそれとよく似ていた。

ステラは直感的になって、人ひとり分空けて座るキラの顔を覗き込む。じいと思つめられ、キラはきよとんとして、そのまま二人の間に沈黙が流れる。

「なっ、なに？」

「ラクスのこと、すき？」

「えっ……!？」

キラは、その脈略もへちまもない発言にぎよつとした。

「なっ、なんでっ」

「……なんとなく」

キラは口籠って、返事を出さなかった。

沈黙が流れる。ステラは、ちがうの、とアテレコを当てても良いような顔を浮かべたのち、ふいっと視線を外してしまった。まるで訳の分からないキラは、まさか彼女がそんな言葉を投下して来るとは思わず、硬直していた。

——すき？ 今のは一体、どういう意図の質問だ？

ひと言で「好き」といつても、その意味はまちまちである。

そこには、友情Likeと恋情Loveの紛らわしい差があるわけで。

勘違いすると、死ぬほど恥ずかしい雲泥の差があるわけで……。

いや、ステラのことだから、きつと前者の意味で訊ねたのだろう。そもそも、彼女が後者の概念自体を持つているか分からない。

——ステラって、そういう感情、あるのかな……？

淡い恋愛感情を、持つことはあるんだろうか？

そう考えてから、馬鹿なことをと思う。勿論、当たり前にあるはずだ、彼女だって女の子なのだから。

しかし、以前は恥じらいもなく自分の前で衣類を着替え始めたことがあったりと、あまりに性に無関心なことしかかすものだから、ついそのことを失念してしまう。幼馴染みというのは心が触れすぎているのだろう。もつと遠慮を持つべきだとキラは自分達を戒めた。

「ん」

が、段々と、ステラの行動に理不尽なものを感じ始めた。

ステラはいま、すっかり気を逸らして明日の方向を見ている。——人に尋ねるだけ尋

ねておいて、期待から外れたら失望まじりに顔を背けるのもどうかと思うのだ……。

良くいえば切り替えが早く、悪くいえば無頓着な一面である。

(そういうところあるんだよな……)

しかし。

——そういうステラは、どうなんだろう？

——誰が好きとか、誰が恋しいとか……。

無論、興味はあつた。

そのときキラを、いつそ訊ね返してやろうかなと、えげつない感情が支配する。

キラはステラの方を向き直し、彼女が見せる横顔に目を遣つた。

「そういう君は」

が、次の瞬間には、掛けようとしていた言葉を忘れていた。

彼女の見せる横顔が、あまりにも、切なげだったからだ。

「……………」

目に映つたのは、様々な感情の入り混じつた複雑な表情——。

彼女はじつと、証人のように目前に聳え立つ「フリーダム」を見上げていた。キラは

彼女への不満も忘れ、しばしその横顔に見入っていた。

ステラの目は、ひどく憂いを帯びて、どこか気色ばんだ表情に、揺れる目元が印象的

だった。

東洋の血が入っているキラの中で、その儂げな面持ちは「粹いき」という感覚的な嗜好たしなみと相まって、彼の中に感動を与えた。

謙虚で静淑。哀愁の漂うその憂いを帯びた横顔は、まるで虚飾のない人情絵——絵葉書を思わせ、白い肌に金髪という異邦の人間が溶け込むには、あまりにも難しい一幅の肖像画を連想させた。

すみれ色に揺れる眸は、まるで、以前からその機体を知っていたかのように「フリーダム」を映している。

「——フリーダム？」

思わず沈黙を破り、そう訊ねていた。

問いかけに、ステラはこくりと頷いた。

「うん……」

「……乗ってみたいの？」

「!？」

途端、ステラは信じられない、と云った風な顔をした。ぶんぶんと激しめにかぶりを振り、キラの顔をぎよつと見返して来る。とてつもなく愕然としている。

——えつ、そんなにまずいこと云ったのかな……？

全く身に覚えのないキラは、ステラから見て、すこし無神経に映った。仕方がないこととはいえ。

「——。キラは、戦争をやめさせたいの?」

間を置いてから、ステラは、あらためてキラの真意を問うように訊ねた。

「そうだね……。戦いのない世界があればいい——そう思っても、戦いは広がるばかりで。今の僕には、戦うことしかできないけど」

「戦わなきゃ、守れないものもある……。?」

「うん……。結局、その場しのぎの考え方にしかならないとは思うけどさ」

ステラは、ベルリンで犯した自分の罪が消えるとは思っていなかった。

何万という逃げ惑う人間を灼き殺し、破壊の限りを尽くした自分を。——そうしなければ自分自身を守れなかったとしても、たとえ、それが他人を傷つけていい免罪符になどならないのだ。

そんな彼女を、止めるために「フリーダム」は舞い降りた。

戦つてでも、これ以上の犠牲を止めるために。もしくは多くの人の命を守るために。そう思うと、ステラの中にひとつの感情が湧き出して来た。

——生きていて、良かった……。

あのとき、自分は死ななくて良かった、と。

彼女に命を奪われた何万の者達からすれば、なんて傲慢な考えだろう。けれど、奪ったからこそ、今度は救っていかねければならない。生きているから、こうして昔の自分を見つめ直すことができる。生きているから、こうして彼とも歩み寄ることができた。そう思うだけでも、ステラは今ここに生きていく意味があるのではないかと、暖かい気持ちになるのだ。

自分の中が満たされていくような想いに駆られ、ステラは、自然と頭を傾けていた。すとな、と音を立てて、その小さな頭がキラの右肩に乗る。

かすかに甘い金髪の香りが鼻先を掠め、キラはぎよつとした。

「えッ!?!」

真意を探るような目で、キラが慌てて右肩の感触へと視線を落とす——と、委ねるような、あどけない眸がきよろりと見つめ返してくるだけだ。

しかし、それも束の間、ステラはうつとりと両目を閉じてしまった。その顔がゆつくりと安らいでいき、キラは、なんだか遠まわしに「あなたは無害」と宣告されたような気分になった。

(この子、これ素でやつちやうんだよなあ)

なんとなく居た堪れなくなつて、キラは指先で自分の頬をかく。

先にも云つたが、彼女はやはり、幼馴染みというのをすこしばかり舐めてないだろう

か？ ひとりの幼馴染みである前に、自分はひとりの男なのだ——何が「無害」であるものか。

——お互い良い年齢としごろなんだし……いや、それだけ信頼されている証拠なんだろうけど……。

彼女の場合、この行動に他意の「た」の字もあるはずがない。

舌足らずゆえのスキンシップ。これは彼女なりの意思コミュニケーション伝達手段のひとつだ。彼女は無知や無垢を通り越して、いつそ神聖なのだから。

そういうところは、出会った頃とまったく変わってない。

キラが身体を硬直させていると、そのとき、遠方にチエックボードを抱えるムウの姿が見えた。どうやら「イージス」の整備ログのチエックをしに来たらしい。

キラはムウ・ラ・フラガという人物がどういふ男か、なまじ把握できていたがために、今の状況を見られたら起こるであろう厄災をすぐに直感することができた。慌ててムウから視線を逸らそうとしたが、時すでに遅かった。

何を思ったか、次の瞬間、ばったりムウと目が合ったのである。

ムウは、ぽかんと口を開けて硬直した。

ムウの目が、キラに体重を委ね安息するステラに留まる。次にすっかり赤面したキラに留まり、ふたりはしばしば見つめ合う。沈黙が流れ、やがてムウの口元がにやにやりと

緩み始めた。——ほら見ろ、やっぱり誤解された！

——バツ！

耳を真つ赤にしたキラが、弁明しようと条件反射に立ち上がる。

——ゴンツ！

支えを失くしたステラが、ベンチのアームレストに横頭から突っ込んだ。

「ああッ!？」

キラは、悲鳴を挙げた。

慌てて振り返る——と、ステラが思い切りぶつけたであろう左頭を押さえながら、「? ? ?」と顔に疑問符を浮かべまくっていた。

キラは顔面を紅潮させたり、蒼白にさせたり、表情を二転三転とさせる。その絵面があまりにも可笑しくて、ムウはぶつと嘔き出して笑うと、けらけら抱腹しながら彼等の前を通り過ぎて行つた。

——何しに来たんだ、あの人……!？」

キラは、あの調子がいい上官を初めて殴りたいと思つた。

コーディネイターでも、痛いものは痛いのだ。

「いた、かつた……っつ」

「そりゃあ、そうさっつ!」

突っ込み、そういうつもりではなかったと弁明しようとする。

そのときキラの視界に、ドリリンクを持って来たマリユ一の姿が映った。両手にグラスを持ち、それを差し出すようにやって来ていたのである。

「? マリユ一さん」

キラは、ごく普通に会釈を交わした。

後でトール達に聞いたのだが、ステラに銃口を構えたオーブ兵達を、彼女が率先して制してくれたらしい。キラはそのことを今になって思い出して、すこし嬉しくなる。――彼女もまた、ステラのことを認めている、ということなのだから。

「お邪魔だったかしら?」

「茶化さないでください……」

どうやら、マリユ一は話しかけるタイミングを伺っていたらしい。今の彼女の表情は、普段の彼女が絶対に見せない意地の悪さに溢れ返っていた。

くすりと微笑むと、マリユ一は改めてステラの方を向きなおした。両手のグラスをふたりへ手渡すと、口を開いた。

「この子には、わたし達も色々とお世話になったから。お礼をね」

「?」

ステラは、三つ浮かべていた疑問符をひとつまで減らした。それでも、何のことを云

われているのか自覚がないようだ。

「あなたがいなければ、アラスカで『アークエンジェル』はとつくに撃墜られてた——だから、ありがとうって云いたくて」

「……。ちがうよ……」

ステラは、そこで目を伏せた。

——ありがとうって云われる資格なんて、ない。

確かに『アークエンジェル』は助けた。そのとき対峙した『エクソリア』が、あまりにもかつての自分と似ていたからだ。けれどそれ以前に、ステラは状況に流されて『アークエンジェル』に襲撃をかけたことだつてある。

「昔から、ステラは流されてばかりだから……」

「……。それでも、そういう何かが『おかしい』と思つたから、あなたは今ここに——ちがう？」

「……うん……」

「それは、私たちも同じなのよ」

ただ、上から発令される命令に従つて「敵」と戦うこと。それが、かつての彼女たちの仕事だった。

しかし、従うべき命令そのものに疑念を覚えて、彼女達は今、此処にいる。そういう

意味では、彼女達が出会うのは必然だったのかもしれない。

「――ぼうずーッ!」

そのとき、遠方からマードックの声が響いた。

「ぼうず」というのはキラのことで、呼ばれたキラは「はい?」と反応し、マードックは手で招くジェスチャーを見せた。どうやら「フリーダム」の整備について、機体の所有者であるキラに確認したいことがあるらしい。

キラは「ちよつと手伝つて来ますね」と、その場をマリューに預け、マードックの許へ駆け足で向かつて行つた。その過程でマードックがステラの姿を認め、軽く掌を挙げ、会釈してくれた。ステラはにこりと笑つて、そんな彼に小さく手を振り返した。その笑顔がやけに眩しくて、マードックは年甲斐もなくでれつとした後、気恥ずかしさに襟足をかき始めた。

そんなステラを見て、マリューは不思議と、微笑ましい気持ちになつた。

(もうすつかり、此処のみんなとも顔なじみね……)

かつて、この艦の一員として乗艦していた彼女だ。クルーゼ隊に鹵獲されてからは、対峙したこともある。けれど今、相互がザフトでも地球軍でもない、個人として此処にいる。

今のマードックが、ステラに気軽に手を振つた意味が、マリューにはすこし共感でき

る。人間は、一度でも分かり合ってしまえば、互いを「敵」として認識することに必要性を感じない生き物なのだ。

——そうさせる必要を、彼女もまた、感じさせない人だから……。

ステラは、敵を作るために戦争をしているわけではない——不思議とマリューは、そんな風に直感した。むしろ彼女は、戦争という過酷の中で、味方を増やしているのではないだろうか？ あくまで本人には、その自覚はなかったとしても——。

「それで」

マリューは、本題を切り出した。

ステラの円らかな瞳が、マリューを見上げた。

「あなたには難しい質問かもしれないけれど……これから、どうするつもりなの？」

これから「アークエンジェル」がやることに、変わりはない。こうして整備や補給を必死で執り行っているのも、いつ再開されるかも分からない大西洋連邦の攻撃に備えるためだ。

マリュー達は、オーブを守るために戦う。しかし、ステラは……？

——この子となら、この先も一緒に戦っていける気がするけれど……。

そう思う感情を押し殺して、マリューは第三者として訪ねていた。

彼女をオーブに引き入れることは簡単かもしれない、しかし、この防衛戦は圧倒的に

自分達が不利であり、まして彼女は出自が自分やキラとは大きく違うのだ。彼女の父親は、今や「プラント」を背負って立つパトリック・ザラであり、彼女が迂闊な行動を取れば、それは「プラント」すらも揺るがす大事になりかねない。

しかし、割り切れない感情が、マリユーに告げ口を漏らさせた。

「あなたのお部屋なら——まだ、そのまま残っているわ」

云つてから、ステラの顔を窺つたマリユーは、きよとんとした。

ステラが口を小さく開けたまま、言葉も出ないといった風にこちらを覗き込んでいたからだ。

「えっ……」

ステラは、啞然としていた。

部屋がある——それは居場所がある、ということと同義だった。

かつて、パイロットとして「少尉」の階級が与えられていた彼女には専用の部屋が与えられており、そこに飾られたプライベート——（といっても僅かなものだが）——の物品は、何ひとつ処分されることなく、整理整頓されるだけで終えられていた。だからオーブへ潜入したとき、海色のハ口は健在で、コロコロとステラの許にやって来たのだろう。

これは皮肉だが、地球軍本部^{アラスカ}に到着した時ですら、追加の人員は補充されず、終日と

して人手不足の艦内には、常に空き部屋が存在していた。そのため、わざわざステラの部屋を撤去する必要もなかったのである。

——あなたが、いつ帰って来てでもいいように……。

そう訴えんばかりに、マリューは、人の好い笑みで続けた。

「あの可愛らしい制服もね——。あんなにフリフリなの、他に似合う人がいると思つて？」

「……………」

どこの世界に、改造した軍服を推奨する軍人がいるのだろうか？　と思つたが、今のマリューは軍人ではなかった。

そもそも彼女達は、着ている軍服にこだわる気は毛頭ないのだろう。人間を制服で区別したり、人種で差別したりすることの無意味さと、そうすることの虚しさを知っているからだ。

「あなたはとても曖昧な立場にあると思うのだけれど——私達で良ければ、いつでも歓迎するってこと……それだけは、覚えておいて」

その暖かな気持ちだが、ステラには、痛いほど伝わった。

マリューは鷹揚と微笑むと、表情を切り替えて行つた。

「さつ。それじゃあ、私も作業に戻るわね。あんまりあなたを独り占めしていると、みんな……」

なに煙たがられちやいそう」

発言の意味を図りかねる——と、物陰から、ツールやミリアリア達がこちらを覗いているのが目に入った。

どうやら、彼女達もまた、話したいことがあるようだ。

マリューは彼等に気を配るようにして、その場から立ち去って行く。交代するかのようには、ツールやミリアリアが場にやって来た。

「ミリアリア……っ！」

そうしてステラは、黄色い声でミリアリア達との再会を歓喜した。

「——おっ。相変わらず、あのお嬢ちゃんは人気モンだなア」

ステラの様子を遠巻きに見ていたマードックが、そのとき、感嘆するような声を漏らした。

——アイドルの握手会とか列作って並んで、確かあんなだよな……、と臍気に思う。

「フリーダム」の整備ログのチェックを手伝っていたキラは、その無骨な声に指を止め、もう一度、自分が走って来た方向にいるステラへと目を配った。見れば、マードックの云う通り、ステラと会話している人が次々と変わっていた。キラに始まり、マ

リユー、ツールやミリアリア——サイやその他の艦内のクルー達と、さながら順々に交代するかのよう——。

その誰もが、ステラという来客を単純に物珍しがっているわけではない。あの様子では、本当に人気者と形容されても不思議ではなかった。それはまるで、芸能事務所に所属するアイドルと交流会でも催しているかの様相で、一輪の花、というのはいかようなときに用いるべき言葉なのであろうと、不覚にもキラはそう合点してしまった。

ステラは次々と入れ替わってゆく彼等と、素直に談笑しているようだった。時折ステラが垣間みせる純真な笑顔が——その何よりの証拠だ。

キラはその眩いような笑顔を見て、ちくりと、内心複雑な気持ちになる。

（昔はもつと人見知りが激しくて……アスランと僕以外の人とは、あんまり話せなかったのに……）

けれど、今の彼女は違った。

誰とでも、辟易することなく談話している。

それが、さながら太陽のようで。

「……………」

それがキラには、なんだか寂しい感じがした。

——これはきつと、兄貴分としての寂しさだ……。

キラは、そう自分に言い聞かせることにしていた。

「キラ……」

そのとき、脇からムウの声がした。キラははつと我に帰って、そちらを振り返る。

ムウは、何やら訳知り顔で立ち、キラのことを真つ直ぐに見つめていた。

その男は、いつになく真面目な顔をしていた。訳知り顔で、ぽん、と肩に手を置いて来た優しさが、はつきり云つて気持ちが悪い。

「あー。その、なんていうかだなあ……」

「はい？」

ムウは、まるでキラの父親にでもなったかのように真面目な面持ちで云つた——

「……責任はとれよ？ 彼女は大物だぞう、色々どう？」

——ここに、まだ勘違いをしている馬鹿ひとがいた……。

にやにやしているムウに、キラはなかば痲癩を起こした。声を荒げ、抗議する。

「ムウさんツ!!」

「ははっ。いやでもさ、家柄とかいろいろ——」

「どつきますよ、いいんですか!」

キラがマードックの工具をおもむろに取り出すと、ムウは軽薄に「冗談だよ、冗談っ」

と告げ、足早に去って行った。

——ほんと、何しに来たんだ、あの人……!?

キラは、ふぎけても偉く格好のいいあの上官をもう一度殴りたいと思った。

色んな人が、作業の合間を縫っては、話しかけに来てくれた。

それが、ステラには幸せなことに思えた。

マリューさんやツール、ミリアリアと会話して、カズイだけが「アークエンジェル」から降りて行ったことも、サイの口から聞いた。カズイは、ステラに憧れていたんだって、好きだったんだって、サイが云つてた。ステラもカズイのことはきらいじゃなかったから、ステラも好きだったよとサイに伝えたら、きつとそういう意味じゃないんだよな……って困った顔をされた。じゃあ他にどういう意味があるんだろう。よく分からない。

ステラがそうして首をかしげていると、そのとき、交代するように次の人が現れた。

その人は、今のステラと同じ服装をしていた——。

「えっ……?」

ザフトの、赤いパイロットスーツだ。ステラは愕然として、目線を上げる。

そこには少女めいた顔立ちの、見慣れた人物が立っていた。

「ニコル……っ!？」

「——お久しぶりです、ステラさん」

ステラは、口の前に手を当てた。——信じられない、と云わんばかりに驚いたのである。

ニコルはその反応に苦笑して、すこし照れくさそうに頬をかいた。

「どうして……!？」

「ずっと、この艦の中に捕まってたんです。それでその、色々あって——この艦のこと、手伝う立場になっちゃいました」

ザフト兵としての職務を放棄したことに、気まずさを憶えているのだろう。ニコルは釈然としない様子で弁解を続けるも、だからと云って、その決断と決心を後悔している様子は微塵にも感じなかった。

ニコルもまた、歩き始めたのだ。自分の信じる道を——。

「さっきの戦闘では、ずっと生身で『ブリッツ』を捜し回ってたんですよ」

「そうっ、だったの……」

ステラはいまだ、目の前にニコルがいることを受け入れられないのだろう。ずっと腰かけていたベンチから、彼女は驚きのあまり、立ち上がっていた。

ニコルはゆっくりと振り返り、視線の先に聳立する白銀の「クレイドル」を仰ぎ見た。

「でも、僕も驚きました。あの新型——まさか、あなたが乗っていたなんて……」

上空から舞い降りた、白銀の正体不明機アンノウンが繰り広げる戦闘に、ニコルは一瞬でも恍惚として、時間を忘れた。

その鮮やかな操縦に、魅入っていたのだ。

——彼女は「デイフェンド」から機体を乗り換え、新型を授かったことだ……！
 さすがは、あの優秀なアスランの妹ということなのだろう。

しばらく見えない間に、彼女は、凄まじい力を身に着けていたようだ。

——いや、でも……？

初めてニコルが「デイフェンド」と対峙したときから、彼女はずっと、自分より遙かに強かった気がしている。——であれば、絶大なまでの彼女の能力に、この「クレイドル」は見合ったモビルスーツなのだろう。

ニコルは、妙に複雑な面持ちで「クレイドル」を見つめていた。

すると、彼はステラへと視線を戻し、口を開く。

「いきなりかもしれません——それでひとつ、あなたの耳に入れて置きたいことがあるんです」

「うん……?」

ニコルは、ステラに報告があるようだった。

知らせなければならぬ、ひとつの報告が――。

「――以前、僕等はザフトの任務で、オーブに来たことがあったでしょう?」

ステラは、食い入るようにニコルの目を見つめた。

ニコルは渋々とした、なんだか重たい口調で口を開く。

そこから紡ぎ出される声は、それまでの大らかで陽気な挨拶と比べると、不自然なまでに暗く、不穏なまでに潜められていた。

「そのとき、あなたのお知り合いだった――シン・アスカ君について――なのですが

……」

「……………えっ……………?」

ニコルの口から、打ち明けられた真実――。

作業を行うキラの耳に、何か割れた音が聞こえたのは、それからすぐ直後のことだった。

――バリインツ!

それは、ガラスが炸裂した音だった。

そのあまりの轟音に、マードックが「作業事故か!」と声を荒げる。物凄い炸裂音の

した方へ、多くの人がのろのろと集まり、もしくは、多くの視線が集中した。

数多の視線の先に立っていたのは、先ほどマリユに手渡されたグラスを床に落とした、ステラ・ルーシエの姿だった。

「ステラ……?」

キラは、そこに映る少女の表情を、思わず見紛えた。

先ほどまで、純真に微笑みを浮かべていた少女の面影など、既に消え失せていた。そこに映るのは、硬く強張り、青褪め、強く震え出している少女の姿だけ――。

――何が、あつたんだ……!?

硝子の炸裂する音――その正体は、握られていた水瓶が、落ちて割れる音だった。それほどまでの、何らかのショックを、彼女はそのとき受けたのだろうか……?!

大西洋連邦も何らかの準備が整わないのか、地球連合軍による攻撃は、正午になつても開始されなかった。

日没からの戦闘は、基本的に、戦略的にあり得ないことである。

オーブ政府は、再三に渡つて会談の要請を申請しているが、大西洋連邦からの返事

はない。この調子では、またいつ、問答無用の攻撃が始まるかは分からない、というのが実状であった。

いつ何時、攻撃が再開されてもおかしくない——そんな折、ステラはオノゴロ島内部にある、とある医療施設を訪れていた。

ニコルに連れられて、彼女が赴いた先は、オーブの医療技術が結集した病院であった。見るからに大型の医療施設だが、先の戦闘で、オーブ軍人の負傷者が大いに出たのだろう——今やエントランスの先で治療を受けている患者がいるほど、施設内は雑踏でごった返していた。

それは最先端医療施設とは程遠い、野戦病院と云つても良い風であった。

「——こちらです」

ステラは足早な様子で、ニコルに案内されるまま、彼の後に続く。

連れて来られた場所は、一角の病室であった。

ドアをノックし、入室する。透明のビニールカーテンに仕切られた中、ステラは、ベッドの上で誰かが仰向けに横たわっているを見つけた。治療によって呼吸器をつけ、痛ましい包帯が額の部分を覆っている。

ステラは息の詰め、ゆっくりと、茫洋と足を進めた。

「……………」

ステラは、その少女に、確かな見覚えがあつた。すぐにベッドまで駆け寄り、そのふつくらとした幼い顔を見下ろす。

——え……？

ふんわりとした黒髪。噴煙をかぶつたか、全身にすこし赤茶けた埃をまわりつけ、その少女は痛ましくベッドの上に眠つていた。

意識が回復していないのだろう——白い布団をかぶせられ、安らかに眠っているその様は、ひどく嘆かわしい姿でもあつた。

ステラがすべてを察した後、背後のニコルが、諭すように説明した。

「彼女の名は、マユ・アスカさん——」

それは、まだ年端もいかない——健気な女の子の変わり果てた姿であつた。

——アスカ。

その名前に聞き覚えと、そして、その顔立ちを実際に見たことがあるステラは、愕然とした。

ニコルは、震えるステラに憶えていますか、と訊ねた。

「オーブで出会った——シン・アスカ君の、いもつと実妹さんです」

目に映ったのは、痛ましい少女の姿。
ステラは血の気が引いたように、顔面を青褪めさせた。

『ディア・シスター』 B

ステラ・ルーシエは、彼女のことを知っていた。

一度目は、オーブに潜入したときに。

二度目は、オーブ戦に介入したときに。

ステラよりもずっと年下で——彼女が云っても説得力に欠けるが——とてつもないあどけなさに身を纏う少女だった。

兄のシン・アスカと違って、すこしだけ茶色がかつた黒髪は、どちらかと云えばキラの髪色とよく似ているように思えた。ふんわりと手入れの行き届いた長髪は、年端も行かない少女らしく愛くるしいスタイルに結ばれている。

その髪型は、ひとりで結うにはすこしだけ複雑だ。きつとお母さんに丁寧に結つてもらったのだろう——と、同じ女の子であるステラには実に分かるが、同時に、ずきりと胸が痛くなる。それが戦争など無縁の、平穏な世界に暮らしていた少女であったことを赤裸々に物語るようであったからだ。

「憶えてますか？ オーブの街中で、僕達と出会った——あの少年の実妹いもうとさんです……」

「……………うん……………」

ステラは、その少女を見下ろしながら、がっくりとベッドの側に膝を突いた。

——どうして……………!?

虚無感にも似た絶望感が、彼女の中に流れ込む。

この子のことは、守ったはずだった——“ネメシスダガー”の放ったミサイルから光波防御帯で……………！ そのまま港に走るよう促し、しんがり殿だつて務めたのだ。

——なのになぜ、どうして……………!?

どうしてこの子が、こんなところに……………!?

「彼らが港へ走っている最中のことでした。被弾した“ネメシスダガー”の墜落に巻き込まれて、彼女はその下敷きに——。“ブリッツ”に乗り込んだあと、すぐに僕が瓦礫をどけたのですが……………」

それでも、こうして彼女がベッドの上で眠っていること、それ自体が奇跡だとニコルは云った。

偶然にも、被弾を受けて墜落した“ネメシスダガー”は空中で瓦解していた。瓦礫となつた破片のひとつひとは質量が大きく、地表に積み重なつた段階で、内部に多くの空間スペースが生まれていたらしい。その結果として、下敷きになつた彼女は一命を取り留められたらしい。

「ただ、足が……」

額に巻かれた包帯。

装着された呼吸器。

痛ましいそれらだが、そんなものは足の状態に比べれば、大したことはないのだそうだ。

安静にしていれば、そちらは外傷も後遺症も残らず、自然に完治するようだが——足ばかりはそうはいかないらしい。

皆までは聞かないし、聞けなかったが、ステラはその意味を悟って、目を伏せた。「急ごしらえの医療設備では、とても治療なんてできるはずがなく……」

情勢が情勢だけに、いま、たったひとりの少女を優先して治療するだけの余裕は、この国にはないのだ。

「それにオーブと云ったって、今はこんな状況です。地球連合軍の侵攻は、またいつ再開されるか分からない」

そう、マユ・アスカの容態は、酷く深刻なのだ。

そして彼女が置かれた立場もまた。

「このままこの娘をこの場所に繋いでおくのは、決して賢明じゃないとも思っています」

もしも——もしもオーブが、今後の戦闘に敗北し、領土のすべてが地球連合軍に占領

されてしまったとき。コーディネイネイターの少女がいつまでも病院のベッドの上で臥せっていたのでは、その将来は暗澹あんたんたるものだろう。

おそらくは、すでに暗澹といえる今以上に、遥かに――。

――けれど、かと云つてすぐに移送ができるわけでもない。

彼女の意識は、いまだ回復していないのだ。

治療を続けてゆくにも、それなりの設備も必要になる。何より、せめて意識が回復するまでの時間ほどは必要だ。オーブは既に沈みかけた舟――この場合、中立のスカンジンピア王国か、あるいは赤道連合に彼女の身柄を預けるのが最良なのだろう。が、地球連合軍の艦隊がオーブの領海と領空の双方を封鎖している以上、それは話にならない。

下を向いてうなだれたまま、ステラは口を開く。

「……シンは……?」

ニコルはうまく聞き取れず、え? と聞き返す。

「シンは……!?! このこと、シンは知ってるの?!」

懸命に訴えかける、その目は涙をいっぱいに湛えていて、今すぐにも崩れてしまいそうだった。

ニコルは、小さくかぶりを振った。

「いえ……彼のことは、僕がすぐにトダカというオーブの軍人に身柄を預けたので……」

そこまで云つて、彼は言葉を切った。

「知らない、の……………」

「彼は無事ですよ……………」 けれど彼は、このオーブには、もういません」

「……………」

あのとときのニコルは、あまりに必死でろくに記憶も残つてないが、彼自身、シンには心の底から「プラント」を奨めた印象がある。

云われた通りに動いたなら、おそらくは彼は機を見て「プラント」へ移住するはずだ——妹の生存など、何も知らないままに——。

「そんなの……………っ！」

ステラは、愕然とする。

それでは、シンとマユは——。

まるで——アスランとステラの二の舞ではないか……………。

「彼の二両親……………この娘の両親も、瓦礫の下敷きになつたのですが……………そちらは」
瓦礫を取り払つても、それらしいものは見当たらなかつたそうだ。

それが指し示す意味は、すぐにわかつた。わかつてしまった。

「僕も、力不足でした。……………僕は、彼のことしか助け出すことができなかつた——」

ニコルは現場に居た当事者としての後悔から、拳をぎゅつと握り絞めた。

自分の無力を、まるで呪ったかのように――。

ステラはそんなニコルから視線を外し、マユの顔を覗き込んだ。そしてふるふると、首を振る。

「……………でも……………」

ニコルがいなければ、マユだって、助からなかったはずだ。

重たく、人の子の力ではビクともしない瓦礫の下で、彼女は孤独に怯えていたはずだ。だから今は、マユがこうして生きていること。――たったそれだけのことを、この上のない幸運だったと思うしかない。

「……………ニコルがそこにいてくれて、よかったと思う……………」

ステラが云い、しかし、わかっているもそう云い切ってしまうことは、とてつもなく軽率な行為なのではないか。

マユやシンからすれば、ニコルと道中で衝突してしまったことが、港へ走る足を止めてしまった原因でもある。それが真理かどうかは別問題だとしても――少なくとも、そういう見方をする事だってできる。

そうなのだ。

自分とぶつかりさえしなければ、彼等は決して、こんな目には遭わなかったかもしれない――

——けれど、現実「もしも」は存在しない。
わかつている。

ステラは、そうして責任を一身に感じているニコルを氣遣つてくれているのだ——瓦礫の墜落先からシンを救い出したのも、またニコルだと啓発することで。

無限に存在する「可能性」など露ほども視野に入れず——ただ「ニコルがシンとマユを救い出した」——現実として残されたこの結果だけを、自分達は受け止めることしかない。あのとき成し遂げられた最善をやり尽くした——そう信じることしか出来ないのだから、と……。

そのとき——時刻が、十三時を指した。

一日が午後へ突入したその瞬間、オノゴ口島内に、けたたましい警報が鳴り響く。

病院内にも、その喧しい音はあまねく鳴り響き、ニコルとステラは、一瞬で目の色を変えた。方々の迎撃施設が一齐に稼働を始め、島内部へのミサイルの着弾が、地響きとして周囲一帯を激震させた。攻撃という名の地響きに襲われた病室の中で、ステラ達は壁に身を寄せ、激しい振動をやり過ごした。

病室に手向けられたお見舞いの花——部屋の中に備えられていた白い花瓶が、激しい揺れに床に落下する。バリイン！ と炸裂音を上げて粉々に砕け散った。

「地球軍の攻撃——！ 再開されたのか……!?」

ステラはぐつと息を呑み、もう一度、目前の医療ベッドに横たわる少女の姿を見下ろした。

——ここでオーブが負けたら、この子はどうなってしまうんだろう……。

ステラは鳴り響く警報の中、ひとり逡巡した。

——マユはきつと、純粋な犠牲者だった。穏やかな世界に暮らしていた女の子——。

それが突然、火の粉の下に曝され、こうも悲惨な目に遭ってしまった——それがステラには、酷く悔しいことに思える。

——あなたはこれから、どうするつもりなの……？

頭の中に、マリユーの声が蘇る。いま、自分が何をすべきなのか——それくらい、今の彼女には分かっていた。

マユ・アスカという幼気な少女と同じように、オーブだって犠牲者なのだ。このまま地球軍に接收されれば、この国は中立国としての未来も、矜持も、自由も、安寧もなく、ただ大西洋連邦の権能を前に屈服することだけを強いられることとなるだろう。まるで、奴隷のように。

いまオーブが敗北を喫すれば、この国に残ったコーディネイターは——マユはどうなる？ ステラは、みずからを叱咤するように云った。

(この娘のために、今やれること——！)

逡巡するステラの傍らで。

そのとき、既に決意を固めていたニコルが、荒げるような声で云った。

「僕は行きます——ブリッツ」に……！」

静かな口調だが、そこに滲んだ覚悟のほどは、揺らがなほほど強靱だ。病室から飛び出して行こうとするニコルの背中には、それだけの決意が見えた。

ニコルは、このオーブを守りに向かうのだ。軍属という垣根を超え、人種という境界を越えて——自分が信じるもののために。

「もうこの国の上で、銃を撃ってしまった僕だから……！」

「——待ってっ！」

ステラは思わず、叫んでいた。

呼び止められ、ニコルは怪訝そうにステラを見返す。彼女はすうと息を整え、伏せていた顔を上げた。放たれたのは、とても真っ直ぐな声色で——

「ステラも、行く——！」

そのつづらな双眸には、静かな決意が宿っていた。

彼女の意図を察し、ニコルは、にっと表情を綻ばせる。それは彼にとつても、心強い

選択と決断であつた。

——今は戦うことでしか、守れないものがあると知っている……！

大西洋連邦とオーブでは、物量が違い過ぎる。

この圧倒的不利な戦況に変わりはない。それでも、見苦しく抵抗することはできる。何もできないまま、ただ一方的に滅ぼされるわけには行かない。

ステラは今、自分にすべきこと——やれること——できること——最善をやり尽くすだけだ。

力を操るのは心——何のために力を奮うのかは、他ならない、自分自身が決めることだ！

(せめて……、今度こそ『まもる』——つ)

戦いに敗れば、待つてゐるのは身の破滅だろう。

だからこそ、この戦いだけは、絶対に負けるわけには行かない。

敗北すれば——この島でひとり家族シムに置いて行かれてしまったマユもまた、明るい未来を奪われることになるのだから——。

(そんなこと、絶対に許さない……!!)

まもる——それは、死なないこと。シンが教えてくれたこと。

いまのマユは、たったひとりでオーブに取り残されて——孤独だ。

目覚めてからも、きつと寒くて、痛くて、寂しい思いをするはずだ——でも、まもるといふことは、同時に、あたたかいことでもある。やさしいことでもある。

——ステラには、分かる……。

お兄ちゃんにとつて、妹とは、大切なものなのだ。

だからシンにとつて、マユもきつとかけがえのない存在。今のシンは、ステラのことをまったく知らないみたいだけれど——それでもいい、それでも構わない。

シンはいない。もう、オーブにはいない。それでも、

(シンの代わりに、ステラがあの子を『まもる』から——つ)

抗つてでも、護り抜く——。

決意と昂揚に突き動かされるようにして、彼女もまた、その小さな身体で戦場へと駆け出した。

オーブ解放戦——戦闘が再開された。

病院へ向かったというニコルやステラの合流を待たずして、既に「アークエンジェル」艦内で待機していたキラ達は、警報が響くと同時に、乗機のコクピッドへ飛び込んで

いた。

上空へ舞い上がった「フリーダム」の後続に、MA形態で飛行する「イージス」の機影がある。

地上には「ストライク」が展開し、率先して、M1隊の先導を行っていた。そんな地上部隊を置き去りにするように、飛行する「フリーダム」の中で、

「トール。地上の迎撃部隊と一緒に、ほんとに大丈夫でしょうか？」

流星のキラも、心配そうに声を漏らした。

呼びかけた先は、後続した「イージス」のムウ・ラ・フラガである。

ムウは相変わらず剽悍に、しかし、今度ばかりはしっかりと軸の籠った声色で返した。

「きつと大丈夫さ。連合の「ダガー」程度にやられるほど、半端な育て方はしてないつもりだ」

かくいうムウは、トールに実戦教養を叩き込んだ張本人なのだ。

昨日に続く、今回の防衛戦——「ストライク」が担うのも、引き続き地球軍の迎撃だ。

領土を防衛するM1「アストレイ」の小隊と共に、上陸して押し寄せる「ストライクダガー」の各個撃破に向かう役割を請け負っている。その際、不幸にも地球軍所属の「Gタイプ」を見かけたら、絶対に交戦するなどまで念を押しであるのだ。

「おれ達はおれ達で、あの厄介な「三兄弟」——なんとしても喰い止めなきゃならない

んだぜ？」

「ええ……っ」

昨晚、レドニル・キサカをはじめとする諜報部は、例の地球軍所属の“G”タイプデータを集集、これの解析を行い、ブリーフィングにて明らかにした。

簡潔には、青緑色の“カラミテイ”は“バスター”を、黒色の“レイダー”は“イージス”を、カーキ色の“フォビドゥン”は“ブリッツ”の特性を踏襲・発展させて開発された次世代の地球軍主力機らしい。その基礎的性能は非常に高く、いくら“フリーダム”とキラともいえず、簡単に圧倒されてしまうレベルの精鋭部隊だ。決して脅しではないし、実際にその推測は正しい。昨日の戦闘において、たしかにキラは三機を前に撃破されかけ——いや、厳密には撃破されているのだ。土壇場での“クレイドル”の介入がなければ。

事実として、それほどまでに厄介な部隊であるからこそ、空中戦が可能な“イージス”が、今回はキラと共に遊撃部隊として出撃したのである。

キラはこのとき、僅かに心もとなさを感じていたのだろうか。ムウに向けてこんなことを云っていた。

「ステラはオーブの医療施設に向かったらしいんです。知り合いが戦災に巻き込まれたとかで——後で、合流できるでしょうか？」

「……………」

ムウからの返事がなく、キラはこれを不審に思った。

「……………ムウさん？」

「あのな、キラ——こんなこと、できるなら云いたくねえが」

ムウは、やけに真剣な面持ちでその先を続けた。

「あの娘のことは……………もう忘れろ。考えないようにするんだ」

それが、ムウからの忠告であつた。

突然の注意にすっかり意表を突かれ、キラは啞然とする。

「えっ……………？」

ムウは最初に、ついさつきキラを茶化したことを詫びた。

「さつきはからかったが……………。今のあの子は、もうザフトなんだぜ？　まして、あの子の

父親はさ——わかつてるだろ？」

「……………！」

「ああして会いに来てくれた、ってだけで、おまえらが喜ぶ気持ちは分かる……………。でも、だからって宛てにしているもんじゃないんだよ」

鋭い指摘だが、間違いではない。

じつは、今度の国土防衛戦——部隊配置図の中に“グレイドル”と“ブリッツ”は含

まれていない。ステラにニコル——彼らは元より戦列に記載されていないのだ。

勿論、戦力で云えば確実に充てにしたい者達だ。が、今回はムウの云う通り、オーブとしては、彼らを充てにしたいくない心理が働いているのだ。——彼らは結局 プラント から来たザフト兵であり、正式に友軍と認められる存在ではないから。

「そんなッ……！」

云われたキラは、そうする軍の判断が、あまりに薄情だと感じた。

確かに、このオーブ解放戦線は地球連合軍とオーブによる小さな諍いさかいが発端にある。そこに「プラント」やザフトが絡む意味などないし、もつと云えば、軍人としてステラがこれに首を突っ込む必要などあるはずもない。

——それでも彼女は、この戦闘に介入した……！

事實は事実として、決して揺らぐことはない。ならば、それは「ザフト」という組織の一員として——ではなく、彼女が彼女の自由意志で、いち個人として動いたという何よりの証拠になるのではないのか？

「ムウさん、ステラは……！」

何よりキラは、彼女がラクスに啓発されてオーブにやって来たことを知っている。

——さつき、ステラがそう云っていたからだ。

ムウの云いたいこともわかる。

彼の云う通り、ステラ・ルーシエは経歴だけを見ればザフトからやって来た人物だ。それを疑ってかかるのは仕方ないことかもしれない。が、だからと云って彼女を「ザフト」という括りでまとめて良いはずがない。曲がりなりにも、かつては共に戦った仲間なのだから！

キラはさらに云い募ろうとするが、ムウからの返事は、にべもない。

「グレイドル」なんて、ザフトの最新鋭機をあの娘は与えられてんだ。お姫様に「フリーダム」を手引きしてもらったオマエとじゃ、まるでワケが違う！」

家柄も、立場もな、と付け足され、キラは怯む。

「それでも彼女は、ぼくたちを守るために戦ってくれました……！」

「それは油断だ！ いいか、パイロットが専用の新型機を預かるってことはな、普通じゃない……！」 それだけの貢献と実績が、上に認められたってことなんだぜ？ それが、

あの娘がザフトに重宝されてるってことの証拠なんだよ」

それは、軍人ではないキラにはピンと来ない話だった。

「あの娘が今、どれだけ「プラント」本国に信用されているのか——どれだけ評議会の息がかかっている存在なのか、想像しなきゃ駄目なんだ……おまえも！」

「……………」

「まして機体が「フリーダム」の姉貴ってんじや、本気で暴れられたら抑えようがない

……！」

キラは、ぐつと息を呑むことで精いっぱいだった。

ステラは、それだけザフトのためになることをして来たということなのか？ ならば、この不毛とも云えるオーブ防衛戦に介入した目的も、すべては、ザフトのため……？

自分と再会して、泣きじやくつて——あの無垢で無邪気な少女が、そのような二心があつて行動しているとは、とても思えないが——。

——と、そこまで考えて、キラはハツとする。

もしもそれが、そう思わせるための作戦だったら……？

誰もが彼女を信用している——それは午前の様子を眺めていれば明らかが——人望とも人徳とも云うべき「それ」を逆手に取れば、内部から自分達のことを突き崩すことだつて可能なのだ。みな油断を誘えば、ザフトにとつて最重要な「フリーダム」という軍事機密を、密かに破壊することだつて。

(ステラのことは、信用しちゃ、いけないのか……？)

キラは、ぎゅつと歯噛みする。

ぴしやりと続くムウの指摘には、一切の隙が無い。

「妙な期待をして、舞い上がった拳句、裏切られる——！ それがどんだけ辛いことか、

オマエだってわかるだろ？ ——女の子ってのは、そういう魔力だって持ってんだぜ？」

ひゅつとして、キラは息を詰まらせた。

その言葉は、不思議と今のキラの心を抉るような衝撃を与えた。

へだつたらそんな期待、初めから持たない方が良いんだ。 ——わかるな？

キラは消沈しつつも、妙に納得してしまう。

——すこし、云い過ぎただろうか……。

ムウもまた、悄然としたキラの姿を見、すこしだけ反省したよう続けた。

「おれだって、出来ることなら信じてやりてえよ」

「ムウさん」

そう——ムウもムウとて、頭からステラのことを疑っているわけではない。

しかし昨日のキラは、彼女に命を救われている。だからこそ、このままキラを戦場に出すことを「危うい」と考えてしまうのである。

『——あとで、合流できるでしょうか』

キラがそんな言葉を漏らした時点で、ムウは直感していた。

——ああキラは、あの子に甘えるつもりなんだ……。

——危険になったら、ステラが助けに来てくれると信じてんだ……。

軍という組織に帰属せず、ましてや士官学校すら経験していないキラは、そういった「甘え」を抱いても不思議ではない。

だが戦場において、それがどれだけの命取りになるのかを、ムウはよく知っている。だから、パイロットの間ではよく使うのだ——「心配事は、戦場に出る前にすべて決めておくこと」と。平静でなければ戦いには勝てないという、それはひとつの教訓であり、パイロットの使命だ。思春期特有の淡い期待と希望——とでもいうのか——そんな邪念は、先もって祓っておいた方が聡明だ。

だからムウは、気を引き締めさせるよう努めたのだ。たとえ打ちのめすような云い方でも構わない、憎まれたって構わない——それでキラの危険がひとつでも減るのなら、安いものだ。

(男の糸が緩むのは、やっぱり女の子なんだよ……)

そう誰に言い聞かせるわけでもなく、ムウはひとり、毒づいた。云わずにはいられなかったのだ。

彼女を信用すべきかどうかは、これからに掛かっている。まだ、こんな短時間で結論を出して良い問題ではないのだから——。

そのとき、リーダーに反応が示された。空戦型の「ダガー」ではない——太陽を背に去来する、危険な反応だ。

——熱紋は、三機……！！

キラは、ハッと顔を上げる。

ムウに云われた通り、緩み切った緊張の糸をいつそう引き締めた。

「昨日の三機か！」

「はいッ！」

ムウの視界に、噂に上がった連合の新型が、三機として映り込む。

それぞれ、妙に禍々しいシルエットをしたモビルスーツ部隊だ。

——気を抜けば、やられる……！！

それだけは、今のムウにもよく分かった。

そうして、海に向こうより襲来する “カラミティ” “レイダー” “フオビドウン” —

——
オーブより出撃した “フリーダム” と “ヴィオライージス” が——交戦状態に入
った。

そのときキラはききと、心に思った。

ステラはききと、助けに来てはくれないのだと。

一方、オーブの内陸部では――

ステラとニコルの搭乗機は、あらかじめ「アークエンジェル」から降ろしてあった。敵密には、彼女達は病院の界限までモビルスーツでひとつ飛びして来たため、両機は、医療施設から最寄りの迎撃施設に横付けされていたのである。

駆け出した病院のエントランスを抜け、ステラとニコルは、病院の屋外へ飛び出した。晴天の下に出れば、甲高いミサイルの音がより鮮明に耳に届き、轟くような爆撃音が、山の向こう側から地鳴りのように伝達されて来た。風に交じって火薬の匂いがする――
「どうやら、戦闘は既に始まっているらしい。」

「出遅れましたか……いそぎましようっ」

「ん……っ！」

ふたりは駆け出し、突っ切るようにそれぞれの搭乗機へと向かう。

コクピットで飛び込み、すかさずOSを立ち上げゆく。二機の目に火が灯り、それぞれの機体が鉄塊色のパールを剥ぐように、黒と白に鮮やかに色づいた。

ニコルは通信で呼びかけた。

「僕は「ストライク」の援護に向かいます！ オーブの地上部隊だって、まだ心許ない

ですし——あなたはっ!？」

ニコルは、ステラに指示や命令を与えることはしない。

これからの行動は、すべて、彼女自身の判断に委ねていた。頼っている、と云つても良い。

「——たしかめたいことがある……連合の新型のところへ！」

「キラさんのところ……！ わかりました！」

新型。

それは、妙に落ち着かない響きだ。

どことなく不穏で——敵だと云えば、なお脅威の代名詞でもある。

ステラが示唆したのは、連合軍の“G”兵器のことだろう。彼女は以前から、妙にあの三機を気にかけていた。

(たしかに“グレイドル”は、そちらの掩護に向かった方が良いかもしれない……！)

誰に云うわけでもなく、ニコルはごちる。

おそらく、例の新型部隊とは、今日も“フリーダム”が引き続き交戦しているはずだ。しかし、昨日はキラですら追い込まれたと聞いている。ここは“グレイドル”と“フリーダム”——こちらにも新型の力を以て、例の部隊の足を喰い止める他にないだろう。

「では、また後で。必ず！」

「わかった」

云い切ると、漆黒の「ブリッツ」は地を蹴立つように防衛線へ駆けて行つた。ステラはその背を見送り、一気に上空へ翔び立がる。

——高度を上げれば、戦況がよく見えた。

海上ではオーブ艦隊と連合軍艦隊が激しい砲火の応酬を繰り広げ、見ている内に、爆撃に曝されたオーブ艦が撃沈してしまつた——さすがに物量差がありすぎるのだろう。しかし、諦めるわけには行かない。

ステラは素早く気持ちを切り替え、例の新型モビルスーツ部隊を捜した。

が、どうやらまだ上陸していないらしい。おそらく、領海の方で「フリーダム」が足止めしているのだろう。

昨日の自分は——正直、勢いでキラを助けただけだつた。

けれど、今はちがう。今は、このオーブと共に——キラと一緒に戦うことが、自分にやれる最善だと信じている。

「——キラはっ……っ！」

ステラは、不安と衝動に突き動かされたように機体を駆つた。目指すのは、国土西側の領海方面だ。

「クレイドル」はスラストターを展開し、抜き打ちにバーニアを噴射させる。青色の燐光を散らしながら、白銀のモビルスーツは、それ自体が矢のように空を駆けた。その道中、無数の「ダガー」隊による照準と斉射を浴びたが、すべてをかわして両盾のビーム砲で反撃する。

地上を歩行するしかない「ダガー」隊に対して、はるか高々度から浴びせかける、なかば一方的な砲撃。自分でも卑怯な戦い方だとは思ったが、そもそも話の初め、それを云うなら出て来る方が——撃って来る方が悪いのだ。

(土地を、無茶苦茶にして……っ！)

ステラが「クレイドル」に放たせる砲火は、手心の込められた「フリーダム」の戦いぶりとは対照的である。

彼女自身が脅威だと判断した者を、片端から撃滅する無慈悲さ。両脇に抱えた「リノセロス・リニアキャノン」が「面」破壊の音速弾頭を射出し、一帯の「ダガー」を木っ端微塵に吹き飛ばす。その戦い方には、手加減の「て」の字もない——彼女の「て」は、「抵抗すれば殺す」という威嚇心理のそれである。

実力差に物分かりのよい「ダガー」から、あるいは、鬼気迫る恐怖に心折られた「ダガー」から、上空を駆ける「クレイドル」への砲撃を止めて行った。

「——!? なんだ……っ!」

そのときである。

彼女の勤が、閃くように働いた。

背筋になぞるような悪寒を憶え、不意に彼女は、機体に急制動を掛けていた。その空に止まった「クレイドル」は、まるで、何かを捜すかのように蒼色のツインアイを発光させた。

(何かいる。——別動隊?)

ステラは、口の中でそう云った。

理屈ではない。もっと冥々めいめいとした何か——生理的には分からないが、危険な感触がする。

——淀んで、歪んで、尋常ではない何かを、内に秘めたような……?。

働いたのは、放っておくわけにはいかないという、なまじ鋭敏な直感。

その曖昧な感受性が、彼女の進路を変更させていた。

咄嗟に「クレイドル」は転進し、当初の目的としていた「フリーダム」の救援任務を、ステラはその時点で放棄してしまった。

オーブ軍の防衛線に『巨大な穴』が空いたのは、戦闘が開始されてから——間もなく経った頃であった。

大西洋連邦において、空戦用の“ネメシスダガー”部隊が壊滅した今、地上に防衛線を張るオーブM1部隊は、ひたすら地上から差し迫る“ストライク・ダガー”の迎撃に当たっていた。

そのため彼等は、すっかり上空への警戒を怠っていた。

数で勝る“ダガー”と、M1部隊が交戦する戦闘領域に——そのとき“純黒の戦闘機”が舞い込んだ。

大型の戦闘機、突然の来訪者——形容の仕方はいくらでもある。

地上から測って、はるか高々度を飛行する“暗黒”の大型戦闘機モビルアーミーは、次の瞬間、マルチロツクオンシステムを起動させた。

M1部隊は正確に捕捉され、無数の砲門から、凄まじいエネルギー砲が照射される。禍々しい裂光が地上へ迸り、高空より狙撃されたM1部隊は、一瞬にして炎の塊に転じてゆく。

「——新手かッ!？」

声を荒げた生き残りオーブ兵が、すかさず銃口を振り上げる。飛行する“正体不明機”を肉眼で確認すると、抜き打ちにビームライフルを放った。

爆炎と爆風にはためく黒い翼カナードを持った「暗黒」は、そうして放たれたビーム砲を易々とかわして見せ——その直後に、鮮やかな変身を始めた。

それ自体が戦闘機モビルアーマーほどに巨大な「翼」が変形をはじめ、その大型ウイング・バインダーの内部から、紅色のツインアイを覗かせた「G」の機影が現れる。変形した「翼」は機体の後背面まで滑るように移り、コネクタを介して「G」本体と接続ジョイントする。やがて「翼」は、それ自体が黒とモスグリーンに彩られたフライト・ユニットへの変貌を遂げた。

独特を極めたその変貌の仕方は——「変形」というより、むしろ「変態」と呼ぶべき風であった。

「モビルスーツだと!?!」

気付いた時にはもう遅い。鮮やかな変態を決めた「暗黒」が、上空より赤い裂光を撃ち放った。

熱プラズマ砲「ネフェルテム303」サンマルサン——その高出力の砲撃が、声を荒げた者の駆るM1「アストレイ」をひと呑みにした。

しかし、それだけでは終わらない——。

出力装置フライトユニットに励起れいきされた高出力プラズマ砲は、地上に展開するM1「アストレイ」を、続けざま、数機として呑み込んでゆく。赤く染まった野太い光条は、大気や対熱流によ

る減衰の影響をまったく意に介さず、まるで受け付けていないのようだ。高々度から地上の標的を狙撃する恐るべき収束率——そして砲門は、長時間の放射にも耐えうる脅威的な照射力を誇る。それは「光の線」^{ビームライフル}というより、薙ぎ払うために伸張^{しんちよう}された「光の鞭」^{ビームウイップ}といった風であった。

突如として舞い降りた「暗黒色の機体」により、現地のM1部隊は一瞬で壊滅。その壊滅区域こそが、オーブ国防本部への『抜け穴』となった。

機体の名は「レムレース」——

その名に違わず「死霊」を思わせる、暗黒に彩られたモビルスーツである。

搭乗者である赤髪^{アカカミ}のフレイ・アルスターは、すっかり拍子抜けした様子で云った。

「なんだ。思っていたより、脆いものね？」

彼女にとつて、これは初めての实战だ。よもや「苦戦したかった」とは思うまいが、こ^こうも手応えがないと、逆に肩透かしを食らった気分である。

「これが戦争？　こんなおじや練習にすらならない……」

ところで、「レムレース」が今、背部に装備しているのは「テンペスト・ストライカー」と呼ばれるバックパックである。

これは大型の推進装置で、装備することで「レムレース」は大気圏内でも単独で飛行することが可能になる。また、大型ゆえに機体を覆うようなオプション・パーツを

バック・ウエポン・システム
『BWS』

として変態させることも可能になっており、これを使えば「レムレース」本体が変形機構を持たずとも、これをモビル・アーマーのように高速巡航させることが出来るようになってきているのだ。オーブの兵士が当機をモビルアーマーと誤認したのは、そのBWSの大きさのためである。

——疾風のように空を駆け、暴風の如く、凄まじい火力を内蔵した装備。

ゆえに『嵐』^{テンベスト}の号を持つ——。

ここから先は余談だが、この装備は「テストロイ」の兵装データから着想を得ており、元々は「ストライク」用の支援装備として完成していた。しかし、肝心の「ストライク」は太平洋上で大破してしまったため、大西洋連邦は既に完成していたこのバックパックを、いつとき持て余すことになった。

けれど、ザフトから強奪した「テストメント」の背部アタッチメントと規格と適合したため、実際には「レムレース」用のバックパックとして流用された経緯がある。

それから間もなくして、フレイは機体前面のモニターに、他の量産機とは異なる強力なMSを発見した。

白銀のフレームに、四対の翹翼、蒼い眼——

ザフト製のコンピュータが、自動的にその機種を特定した。フレイはそれを見て、思わず声を挙げる。

「ZGMF—X08A “クレイドル” ……?」

フレイは、小さく舌なめずりをした。

ZGMF—Xの型番を持つ “G” 兵器——

俗にファーストステージと呼ばれるそれは、それまで対峙して来たモビルスーツと、もとい雑兵共とは明らかに異彩を放っていた。

一方のステラもまた、目の前に見慣れぬ機種を認め、悄然としていた。

(こいつが、この防衛網を破ったの……!?)

困惑するステラとは裏腹に、一方で “クレイドル” のコンピュータは相対した “暗黒” のシグナルを特定し始めていた。手許のコンピュータは、見紛うことなく “レムレース” を “テストメント” として特定していたのである。

それは “クレイドル” と “レムレース” が姉妹機であるから、できることだった。

しかし、ステラは “テストメント” —— 『契約』の名を冠する機体を認め、ますます状況が呑み込めない。

—— ZGMF—X12A ……聞いたこともないファーストステージシリーズ!

——それがどうして、こんなところに……?

型番からして、あの機体はさきに見た「リジエネレイト」——その妹機に当たるのだから。

ステラが放った光条を、先方は鮮やかにかわし、あちらもまた熊手のような「トリケロス」の改造型からレーザーライフルを撃つて来る。

これ避け、鮮やかにマニュアルを決めたステラを、嫌な感触がなぞる。

「あいつ、なんだ……!?!」

「——はっ、お姉さんってわけ?」

「気味が悪い……!?!」

——正規兵ではない、その一瞬を以てステラは直感していた。

そいつの動きが、そう思わせるほどには愚直だったのである。

まだ実戦慣れしていない様子だ。今は強靱な機体性能に助けられているのか、それとも、腕前だけは一人前なのか? 能力だけは完成していて、活きた実戦経験が不足している——強力な敵機の動きには、そういった気分があった。

なにせよ、バランスの悪さがあるその感覚は、ステラの中に、ひとつの可能性を呼び起こさせた。

「強化人間が乗ってるのか……!?!」

パイロットは機体性能に助けられている、と云ったが、そもそもそれは、機体を操る

だけの素質だけは充分に持ち合わせているということでもある。

薬物によって人為的に能力を覚醒させられ、コーデイネイターに匹敵する能力を手に入れた強化人間。

——だから、ステラには分かったんだ。

あれは淀んで、歪んで、普通ではない。力だ——その身に「闇」に抱えた者の末路なのだ。

禍々しいのは機体の外観だけではない、中身の人間までも——！

「——踊ってみなさい！」

「レムレース」が背部「テンペスト・ストライカー」から、殲滅用の砲塔である「ネフェルテム303」を照準した。

間を置かず、激しく照射された赤き裂光——「光の糸」が「クレイドル」へ肉迫する。

ビクトリアで対峙した「DESTROY」のそれと酷似した砲撃は——しかし、咄嗟に展開させた翡翠色の防御膜が弾き飛ばした。

虹色の輝きと共に、炎の矢は「クレイドル」の目前で拡散した。白銀の機体の全方位を、球状に展開した「アリユミューレ・リュミエール」が覆い隠す。

「は……ッ」

が——“レムレース”は怯まなかった。

途端、“レムレース”は右腕に忍ばせた暗器——ランサーダートに酷似した長槍を握った。

抜き打ちに投擲された長槍は、バリバリと盛大な音を立てて光波発生器を突き破り、ユーラシアの“無敵の盾”——光波防御帯をバターののように切り裂いた。

「!?」

不覚ながら、ステラは思い出す。対抗策が施されたファーストステージシリーズには、すでに光波防御帯は通用しないのだ。

フレイは目の前の敵に向け、光刃を抜き放つ。その掌に握られたビームサーベルは、“クレイドル”のそれと同機種のものだ。

「いい反応してくれる!——あんたがここのボスってわけね!」

その勢いの鋭さ、戦いを愉しむかのような思い切りのよさに、“クレイドル”が一瞬たじろぐように揺れた。

フレイは構わず、フルスピードで躍りかかった。応戦するように“クレイドル”がシールドを翳し、先端からビームジャベリンを発心させた。

“白銀”と“暗黒”の激突——

二つの姉妹機が衝突し、空に閃光が迸る。シールドに干渉された光刃同士が、対消滅

を起こして弾け合った。

フレイの血が、みるみると温度を上げて行く。——ああ、戦うことが、こんなにも楽しいなんて！

暗黒の「レムレース」——これは私の、最高の搭乗機のりものだ！

「こいつッ——!!」

ステラの中で、確信だけが積み重なってゆく。

目の前の敵——それはまるで、ステラ自身の影のようだ。

黒く、禍々しい悪魔のような外観を見てみると、かつての自分を背に見るようで。

もう、今のステラが捨てたはずのもの——。

強化人間としての忌まわしい過去を昇華したいま、しかし、今度は別の強化人間が自分の前に立ちはだかる。

——大西洋連邦は、いつまで人を道具にするんだ……!!

何の罪も、何の穢れもない者を拾い上げて、棄漬けにして、使えなくなったら勝手に処分する——！

そんな道理が、許されるはずがない。

たとえそれが、戦争に勝つための必然であったとしても——！

(こいつは、ステラが——ッ！)

ステラは両腰にマウントされた二挺のビーム・サーベルを抜き放つ。

そうして、もう一度「レムレース」に真つ向から踊りかかろうとした。

そのときだった。視界の片隅、蒼穹の中にキラリと何かが光ったのは――。

ステラは無意識のうちに「それ」に対して反応していた。咄嗟にシールドを構え、勢いよく飛来する物体を間一髪のところまで弾き飛ばす。ぎりぎりで跳ね飛ばした「それは、何者かが放ったビーム・ブーメランだ。目まぐるしく、凄まじい軌道で迫つて来たブーメランは、合計で二挺あった。もう一方は「レムレース」の方が、やはりぎりぎりのところで払いのけたらしい。

――援護のための攻撃じゃない……!?!

飛来したビーム・ブーメランは、確実に「クレイドル」と「レムレース」の双方を狙っていた。しかし、だとすれば誰の攻撃だ？

この戦場にあつて、オーブでも地球軍でもない存在など――？

「なに……!?!」

そのとき彼女達の上空に、赤く重い影が過ぎるのだ。

重量感のあるリフターを背負い、放たれた光刃――「バツセル・ブーメラン」は、やがてその鮮紅色の機体の両肩に、初めからその一部であつたかのように滑らかに装着されて行つた。

ステラはその機影を認め、こぼれそうなほど目を大きく見開いた。

「あ……………っ!？」

邪魔をした第三者——真紅の闖入者の登場に、すっかり気を悪くしたらしい。そのとき「レムレース」が「トリケロス」「レーザー・ライフルを上空に向けて撃ち放つが、真紅の機体はまさしく「レムレース」と「クレイドル」と同等のビーム・シールドを出力し、この砲火を簡単に弾き飛ばした。

同時に、これもまた同じ規格の「ラケルタ・ビームサーベル」を抜き放ち、一刻の内アンビテクストラス・フオームに柄の部分で連結させると、稲妻のようなスピードで「レムレース」へと襲い掛かった。

圧倒的なリーチを誇り、振り下ろされた両刀をすんでのところ回避する——と、フレイはようやく敵機の実力を把握して、戦慄に吞まれた。今の一撃には、背が凍るほどの殺意があつたのだ。

「なに、こいつ……………！ 速い……………！」

すると、またも「レムレース」のコンピュータが、自動的に目の前のモビルスーツを特定し始めた。

「ZGMF—X09A “ジャステイス”——!？」

舞い降りたのは、正義の“剣”——

これを掲げた、真紅色の騎士であった。

——アスラン・ザラは、オーブ連合首長国、オノゴロ本島で繰り広げられている地球連合軍とオーブ守備軍の戦闘を、はるか上空から俯瞰していた。

（大西洋連邦による、オーブへ対する一方的な戦争行為など——）

国家間戦争と云って相違のないこの事態は、道理ではあるが今や民間メディアでも報道されるほどの大きなニュースになっていた。アスランはつい先日の「パナマ侵攻戦」に参加してこれを勝利に導いたばかりであるが、その後は急務として「フリーダム」の追討の任に就いていたのだ。

だが結論から云えば、なかなか「フリーダム」の行方が知れず、彼は手をこまねいていたのだ。

そんな折、この報道を見たアスランは、そうして流れる何気ない中継映像の中に、見覚えのある足つきなる戦艦の姿を認めてしまった。「アークエンジェル」——「フリーダム」と共にアラスカ「JOSHUA」から逃亡を図った、彼にとっては因縁の戦艦。

——どういう経緯で、あの艦がオーブに……？

いや、そんなことはどうでもよかった。アスランにとって何より重要だったのは、その艦と共にキラが——“フリーダム”が逃げた、という事実である。

——足つきはオーブにある……。

——“アレ”を襲えば、必ず“フリーダム”も現れる！

アスランの任務は“フリーダム”を追うこと——。

が、宛てもなく探し回るよりは、いつそのこと自分の前にあちらから出て来てもらった方が、手間が省けるに違いない。だからこそアスランは“アークエンジェル”のいるオーブまで、こうして足を運んだのだ。

「——オレにはそれが、目的だったというのに……ッ」

アスランはぎゅつと歯を噛みしめる。

目の前で滞空する、二機のモビルスーツを目に遣った。

「何だと云うんだ！ どうして父上の造られたMSが、二機も……!?!」

このとき“ジャスティス”の量子コンピュータは、自動的に目の前に滞空する二機のMSデータを照合し始めていた。アスランはそのデータを見、愕然とするしかない。

白銀の天使を連想させる、オーブ軍のモビルスーツは“クレイドル”——

暗黒の亡霊を想起させる、地球軍のモビルスーツは“テストメント”——

そのどちらも、彼が目当てとしていた“フリーダム”と、全く同等の危険性、同等の

核エンジンを搭載したMSであったのだ。

(そんなMSが、なぜ、ザフト以外の勢力のため戦っている……!?)

どちらもザフトが開発し、ザフトのために戦う戦士であつたはず。それがどうして、ザフトとは異なる二勢力の手に渡っており、いがみ合うように衝突を繰り返していると言ふ?

なぜ地球軍の手に、もう既に核の力が渡っているというのだ!?

「キラツ……!　やはりオマエが……!?!」

そのときのアスランは、まるで見当違いな発言をしていた。

「いや、今はもう、それもどうでもいいことだ……!?!」

アスランは、ゆっくりと目を伏せた。しばしの沈黙の後、すつとして顔を上げる。

彼の中に溢れた義憤が、彼に『SEED』を覚醒させた。

アスランの中で——何かが弾けた。

眸は虚ろに変わり、光は、闇に吸い込まれるように消え失せた。

表情を失つたアスランが、すかさず機体に手を伸ばす。

深紅の「ジャステイス」は両剣を構え、これに反応した「レムレース」が同じように光刃を構え出す。どういふわけか、「クレイドル」の方はいまだに行動を停止したままである。

「ああ——。今ここで、まとめて破壊してしまえばいい」

そう、彼の目的は、初めから「フリーダム」という核ジェネレーター搭載機の『破壊』と、搭乗者の『抹殺』だ。

肝心の獲物——「フリーダム」の機影は見当たらない。

しかし、決して無駄足ではなかったとアスランは会心の笑みを浮かべた。そう——ただ標的が変わったと認識すればいいのである。

（たった、それだけの話じゃないか）

何を、迷う必要があるというのだろうか。

迷いなど、自分の力を殺すだけだ。——俺はビクトリアで、それを知った。

妹を守るために、俺は力を手に入れた。

愚かなナチュラル共を殲滅し、コーディネイターが支配する、秩序ある世界——。

それこそが——来るべき世界の様相なのだ。

そのためには、ナチュラルに、これ以上の「力」を与えるわけには行かない。

まして、ニュートロンジャマーキャンセラーの技術データなど——

自分から親愛なる母と妹を奪った、核の力など！ 絶対に明け渡すわけには行かない

のだから——！

「見逃すものか……！　いま、ここで破壊する！！」

“ジャステイス”がビームハルバードを構え、黒と白、相対した二機へと襲い掛かる。刃が迫る“クレイドル”の中で、ステラは、ぎゅつと唇を噛みしめた。

アラスカで見た、鮮紅色の機体。

正義の“審官”——ZGMF-X09A “ジャステイス”——！

あれは。

あれに、乗っているのは………！

(アスラン——!?)

そうして歯噛みするステラの一方で、フレイは、くつと妖艶な微笑みを堪えた。

目の前に、二機のモビルスーツが現れた。——が、細かいことなどいい。ザフトなど、

いくらでも新型を造っていればいい。——わたしが、片端から墜としてあげるから……

！

兄弟機だろうが、姉妹機だろうが、そんなものは関係ない。

乗っているのはコーディネイターで——だとすれば、それが自分が殺すべき『敵』な

のだ——！

「いいわ……い！ 二機ふたりとも、まとめて地獄に送ってあげる……ッ！」

レムレース”——

ジャステイス”——

グレイドル”——

地球軍、ザフト、オーブ。

それぞれの勢力に点在するファーストステージシリーズが、その空域で激突した。

『ディア・シスター』C

「どーしたんだよお、昨日の白いヤツはあッ!?」

オルガ・サブナツクは激昂していた。オルガが交戦しているのは、オーブを守る凡庸なMS群とは明らかに次元を逸する強さを持った蒼翼のモビルスーツだ。

海上で繰り広げられる戦闘は苛烈を極め、支援機として中空を制するかのような機動を繰り返す紅紫色のモビルアーマーも、彼にとっては厄介を極めていた。

彼には、これしかない――。

ブーステッドマン。彼らのような『強化人間』は、戦うことしかないのだ。その命が尽きるまで戦い続けることでしか、彼らに生き残る道はない。

だからこそ、彼らにとつて強敵との攻防と応酬は、ある種の生き甲斐に近いでもあった。一瞬で制圧できる雑魚には価値がない、こちらを苦しめる好敵手こそ、完膚なきまでに撃砕する甲斐があるというものだ。

(ああ、そうさー。この蒼い羽野郎だけじゃあ足りない――！)

昨日、戦場にしゃしゃり出て、コイツを守った白い羽野郎は、まだ戦場に出てきてい

ない。

——全部だ！ 全員、おれがぶっ潰してやる……！

大火力を誇る「カラミティ」からの激しい砲火を、飛行する「イージス」は持ち前の勘によって捌き切っていた。単一方向への加速しか決められない前時代の機動兵器形態だというのに、その動きはパイロットの奇跡的な直感力と相まって、「カラミティ」ら後期GATシリーズの猛攻を凌いでいた。

——と、すつかり「イージス」に気を取られていたオルガの耳に警報が鳴り響き、彼は慌てて機体を後退させた。上空より襲い掛かる「フリーダム」が、猛禽の如きスピードで迫っていたのだ。振り抜かれた光刃をいなし、反撃として高エネルギー収束砲を放つも、鮮やかにやり過ぎされ、舌を打つ。

大鎌を翳したフォビドウンが「フリーダム」まで肉迫し、追撃と云わんばかりに大振りな斬撃を繰り出す。「フリーダム」はシールドでこれを受け止め、腰部のレール砲を応射。だが「フォビドウン」のシールドは弾丸を阻み、さらにそこに割って入った「イージス」が「スキュラ」を射かけたが、赤い光が臨界寸前に達した所で、脇の方から飛来した大型の鉄球に阻まれた。「イージス」と同じく変形機構を持った「レイダー」である。

砲撃力、機動力、防御力——それぞれの機体の特色とも、特性とも云える性能は、こ

の戦場において遺憾なく發揮され、それらが一樣に交錯する光景は、最新鋭モビルスーツ達のきらめきに満ちていた。

しかし、それは従来のもビルスーツ戦闘から見比べて、あまりに次元のかけ離れた高度なる戦いであつたとは、戦闘区域近海の揚陸艇に据える、連合軍士官が後日になつて語つたことである。

大西洋連邦が「ジエネシス α 」より強奪したモビルスーツ——

ZGMF-X12A「テストメント」は現在、全身の装甲を新たにすることによつて、アドゥカーフ・メカノインダストリー社をはじめとする大西洋連邦^ポお抱え^ンの軍需産業社^サが開発した後期GATシリーズの一機——
GAT-X444——として喧伝^サされ、その素性を偽装されていた。

『——どうして大西洋連邦は、敵国^ザから奪つた機体を、わざわざ自国が開発したつてことにしてるんです?』

これは改修に携わつた現場のメカニックが漏らした一節であるが、このような偽装工作が謀られたのは、端的に云えば大西洋連邦が利権拡大を目論んだからである。昨今の

情勢において、強力なモビルスーツを開発・所持していることはそれ自体が国家としての武力を示威するものとなりつつあるが、彼らは他の共同体を牽制することを目的として、自国に「力」が誇示したかったのである。

『動力に使つてゐるニュートロンジャマー・キャンセラーを自分達が開発した、つてことにしておけば、当面はデカイ顔ができるだろ?』

あるいは——ここから先はMSの性能の話になるのだが——そもそも「テストメント」は戦闘を主目的として造られたモビルスーツではないということか。

兄弟機である「リジエネレイト」を例に持ち出せば、かの機体もまた、戦闘に特化された機体ではないということが分かる。あれは可変・合体・分離——さらには特殊な光学迷彩といった複雑な機能を試験するための試作機。あくまでもアグレッシブサーとして設計されたに過ぎない機種なのだから。

つまり、同じファーストステージシリーズといえども、「ジエネシス α 」で開発された「テストメント」は、純粋な戦闘用モビルスーツとして開発された08A、09A、10Aに比して、実戦向きではないと云える。

だからこそ、もしも「テストメント」が「テストメント」そのままであつたなら、今こうして繰り広げられている「三つ巴」の戦闘——先輩機に当たる「クレイドル」や「ジャステイス」との正面衝突を行つたとして、勝てる道理はない。「リジエネレイ

ト”と同様に、その機体はこと実戦においては、明らかに不利だった。

——不利である……はずだった。

けれど、大西洋連邦の手に渡り、その技術力による強化を受けた本機は、元が実験機とは思えないほど強力なアーマーとパワーを手に入れた。

『もともと”テストタメント”は、ザフトが大西洋連邦から奪い損ねた GAT-X105A を模造して造られた機体らしい。最初に検分したときはユニバーサル・デザインを疑うほど、何から何まで”ストライク”の規格を忠実に再現する念の入れようだ』

背部コネクターの規格までもが忠実に再現された接收機体は、つまり、地球軍が予め”ストライク”用に開発していた”テンペスト・ストライカー”をそのまま無改修で着用できることを意味していた。

ザフトが機体の設計開発を行い、バックパックは地球軍が製造する——

そうして完成した”テストタメント”は、ザフトと地球軍の技術が融合した結晶体と云え、開発部は同機の名を改め、GAT-X444”レムレース”とした。

『改名は……まあ、ある種のゲン担ぎみたいなものだ。実験用機種”テストタメント”は——試作機だからな——端から戦闘に勝つためには造られてないが、それでも戦闘用機種”レムレース”ならば違う結末を勝ち取れるはずだ、という』

G A T—X 4 0 0 番代は“デストロイ”から派生した機体であることを示す型番だ。したがってG A T—X 4 0 1と同じように、この“レムレース”にも、また最新鋭の技術が満載された仕様となっている。それは、誰の目に見ても明らかなことであった。

苛烈を極めた戦闘は、オーブの領海上のみで繰り広げられているわけではない。領土内、つまりオーブ市街地の上空でも凄まじい戦闘が繰り広げられている。

曇りのない蒼天の下、繰り広げられる戦闘——

これを目撃する数多の余人の目に飛び込む色は、まず“紅”だ。次に“黒”が見え、最後に“白”が映り込む。何が云いたいのかと云うと、第一に挙げた“紅”こそが縦横無尽に空を駆け巡り、他の“黒”と“白”を翻弄しているように見えるのだ。いや、氣迫という点においては「圧倒」という表現を用いてもいいかも知れない。

鮮紅の“ジャステイス”、暗黒の“レムレース”、白銀の“クレイドル”が一様に交錯していた。

三陣営に所属するモビルスーツの三つ巴の攻防は、しかし、そのじつ“レムレース”と“ジャステイス”の二機同士の衝突だ。

というのも、その場に居合わせる「クレイドル」は取り違えたように動きに鋭さを失つていて、ほとんど戦闘に對する積極性を失つていたのである。

深紅の「ジャステイス」——敵意と隔意の下に繰り出される両劍アンビテクトラス・ハルバードの斬撃には隙が無く、冷徹な劍捌きが、ザフトのエース機としての容赦と遺憾のなさを思わせる。

暗黒の「レムレース」——肉迫する「ジャステイス」の斬撃をやり過ごし、距離を開いては中距離砲撃に徹している。しかし無造作に放たれる砲火は直線的で、ルーキーらしいパイロット経験の乏しさを露呈させている。

白銀の「クレイドル」——挙動に一切の鋭さを失い、完全に防戦態勢に入っている。二機から繰り出される攻撃を回避、あるいは防御に専念し、茫洋としたその様は、まるで教室の中で立ち位置を見失った幼子のもようであった。

熊手のような「トリケロス改」で応戦する「黒」は、抜き打ちに背部バックパックより「ネフェルテム」を放射する。この光の鞭を前に後退した「紅」は獲物を変え、次に「白」を目指してバツセル・ブーメランを投げ放った。目まぐるしい軌道を辿る光の光輪——「白」は慌てたようにビーム・ジャベリンを出力し、飛来する光刃を叩き落とす。

その余暇を突くように、急加速をかけた「黒」がビーム・サーヴァーを出力し、一気に「白」へ襲い掛かる。「黒」と「白」の劍戟が弾け飛び、打ち合ったシールドが鮮烈な火花を散らした。

——「白」と「黒」の速さは互角。太刀筋の鋭さでは「白」き刃が上回るも、破壊力では「黒」き刃が圧倒的だ。

「出力が負けている？ どうしてっ——」

唾棄しながら、ステラはしかし、いつの間に背後まで回り込んでいた「ジャステイス」からの砲火を回避した。リフターより伸長している「フォルティス・ビーム砲」をかわしたのだ。目標を捕らえられなかった光条は、そのまま「クレイドル」と接触していた「レムレース」への追撃を敢行。しかし「タクティカル・ランサーダート」を取り出した「レムレース」は、次の瞬間には、その光線を切り払って見せる。

誰が誰を狙ってもおかしくはなく、云い換えれば、誰が最初に撃破されても不思議ではないハイレベルの戦闘。

しかし——「クレイドル」が「ジャステイス」に攻撃を仕掛けたことは、一度もなかった。

「——「フリーダム」も「クレイドル」も「テストAMENT」も、ザフトの誇りを、つくづくおまえ達は！」

これはアスランの持論だが、モビルスーツの性能や操縦者の技量が同等でも、勝敗を決するのはそれぞれの「相性」である。

徹底した中距離射撃を行う「レムレース」に対し、「ジャステイス」も砲撃戦は可能

だが、近接戦ほど得意なわけではない。根本的な話、*「ジャステイス」*はリフターやビームブーメラン等の多彩なサブウェポンによる牽制を以て敵機の退路を断ち、懐に飛び込んだところを一気に叩く、という格闘戦に特化した決闘機である。つまり、一対一の白兵戦において、機体の真価は発揮されるということだ。

ならば、とアスランは初めから近接戦に持ち込む好機を虎視眈々と狙っていた。以前*「フリーダム」*を取り逃がした際の教訓から、わざわざ自機が不得手とする砲撃戦という名の土俵に立つ必要はないと断じていたのである。

対する*「レムレース」*は、*「ストライク」*で云ったところの*「エールストライカー」*を装備しているのが現状だ。いや、比較すれば明らかにそれと性能差があるが、主に*「テンペスト・ストライカー」*は*「レムレース」*の運動性を底上げすることをコンセプトに装着されており、これはリフターを背負った*「ジャステイス」*と同等か、それ以上の機動力を発揮させる。

「紅」と「黒」——二機の間には差があるとすれば、*「黒」*の方が中距離砲撃に特化していると言ふことであろうか？

「Nジャマーキャンセラーは『プラント』が造り出したものだ……！」

そんなものに頼って、嬉しいか!?

アスランの叫びは声にならず、憤りは剣戟となって*「クレイドル」*の頭上へと降りか

かる。

——今、ここでコイツらを破壊しなければならぬ！ オープにも地球軍にも、どちらにも核の力は渡さない！

だが、振り下ろした両剣は“クレイドル”を切り裂くことはなかった。

咄嗟に両腕の“エンドラム・アルマドロー”が突き立てられ、刃を受け止められたのである。

↑——アスランツ!!↓

通信回線から、聞き覚えのある声が飛び込む。ハツとして息を呑み、その声に、彼は珍しく慄然とした。

回線は深く接続され、巡らせた視線の先に、モニター越しにこちらを覗き込む少女の姿が見えた。

その声——その顔——……。

既視感が駆け巡り、彼は、今まで己がして来たことを一瞬で後悔した。

「なツ、ステラ……!?!」

へなんで、なんでこんなところにいるの!~

間違いではない——通信先の主は、アスランの妹で。

そうして“クレイドル”を操っているのは、間違いなくステラだった。

アスランを、戦慄が襲う。

「ひっ……！」

そうして彼は、声を荒げた。

「人が悪いな、ステラ……！ なぜもつと早く云わなかった!？」

叫びは、「クレイドル」に乗っているのがステラだと知っていれば、もつと対応が違っていたと云わんばかりのものだった。

アスランは慌ててビームハルバードを離し、ビームの出力を解除した。彼女とは、戦闘の意思がないことをアピールしたのである。

「……………」

なぜ早く云わなかった？ とは、ずいぶんと酷い質問であると彼は自覚しているのだろうか？

対応が遅れたのは、勿論、ステラが通信回線を接続するのに時間が要したからだろう。——が、そもその原因はアスランが彼女に怒濤の連撃を仕掛け、彼女はそれをいちいち裁く必要があつたからである。

ステラはあえて言及はしなかったが、戦闘態勢を崩したことを認めると、シールドを降ろし、こちららも戦闘態勢を解いてやった。その光景を訝しがる者がいることなど、当のふたりの頭にはなかつたようだが……。

虚ろだったアスランの眼に、光が戻ってゆく。それは、彼の中の義憤がいくばかりか滅殺された証拠であった。

「ZGMF-X08A、てつきりナチュラルに奪われたものと……！」

オーブのために戦っているものだって思ったじゃないかッ」

「……!?!」

云われ、ステラはなんとも表現しがたい微妙な顔になった。

前者はともかく、後者はまったくその通りだというのに、アスランは何を云ってるんだらう？

(……………?)

一拍おいて、ステラは得心する。

(アスランは、「クレイドル」がステラの搭乗機のりものだって、まだ知らなかった……?)

無理もない話ではあろう。ふたりが最後に会ったのは「スピッドブレイク」の直後だ。それ以降は宇宙に上がったステラの動向は、地球でくすぶっていた彼の知るところではない。

知っていたことがあるとすれば、彼女が「フリーダム」の追討任務に就いている、という程度だろうか？

要するにアスランは——「ステラが自分と同じ境遇にある」といまだに信じているの

だろう。

おおよそ彼女は、父の指令で「フリーダム」を追っていた最中、このオーブで「テストメント」の反応を特定した。同じ核ジェネレーター搭載機であったことから「テストメント」を見逃すわけには行かず、やむを得ず交戦していたのだ——と。

——そこに問答無用で割り込むなんて、おれはなんて間の悪い男なんだろう……?!? 極秘任務と云えばそれまでのことだが、アスランは軽い自己嫌悪に囚われた。

彼がアプリリウスで「ジャステイス」を受領したとき、同じ工廠には「フリーダム」と、当時、まだ命名すら行われていなかった白銀のモビルスーツが現存していた。詳細はアスランも知らないが、なんでもそいつは「ドラグーン」という未知のシステムを搭載していたがために、パイロットの選出が遅れ、長らく凍結されていたらしい。

(あの機体——「クレイドル」を、まさかステラが受領していたなんて……)

高度なる空間認識能力と、卓抜した情報処理能力を同時に求められる——ファーストステージ開発黎明期における、過剰な機体。

レイ・ユウキはそう語り、あれが並のコーデイネイターに扱える代物ではないことを明言していた。無論、「フリーダム」や「ジャステイス」も傑出した才覚を持つ者のみ操縦することの能うモビルスーツだったが、「クレイドル」に至っては奇跡的な才覚がなければ扱えないと、暗にそう語られていたのもまた事実であった。

通信越しに、アスランは反省の色を浮かべた。

「いきなり斬りかかって済まなかった……。まさかきみが乗っているなんて、知らなかったんだ……。っ」

〈アスラン……〉

当人は気付かなかつたが、返答として発された少女の声は、明らかにアスランに呆れていた。

——このひと、ステラが味方だつてまだ信じてるんだ……。

まあ、それも無理はない。彼等は、血のつながつた家族なのだから。

しかし、アスランは事態を把握するのが早かつた。すぐにキツと顔を上げると、威勢よく声をあげた。

「話はあとにしよう。おれ達であの敵を挟み込む！ きみは左から回り込んでくれ！」
 〈アスラン！〉

制止を求めた声など、いざ知らず「ジャステイス」は動き出した。何食わぬ様子で「クレイドル」と共同戦線を張ろうとするアスランに、ステラは呆然とする。どうしてこの人は、こんなに人の話を聞かないのだろう……。いや、聞かなくなつてしまったのだろう？

しかし、そのときだつた。

アスランと、ステラ——ふたりが交わっていた通信回線に、割り込む者が現れた。音の発信源はZGMF—X12A——それは間違いない。テストタメント”からの音声通信であった。

〈なるほどね……〉

アスランの耳に聞こえたそれは、ステラのそれと、よく似た”声”であった。

音声通信の先、その声は妖艶に嗤っているのが分かった。

〈連携なんて、兄妹愛きょうだいいとやらがなせる業かしら？ それとも家族愛!? 美しいものねえ

……!〉

回線に割り込んで来た”声”に、ふたりは愕然とする。特にステラの方は、以前から、その声を聞いたことがあったのだ。

〈えっ……?〉

三機のファーストステージは、姉妹機であるため、互いの通信コードを容易に入手できるようになっていた。おそらく”テストタメント”は、そのコードを応用して、ステラとアスランの通信を盗聴していたのだろう。

割り込んで来た声に、ステラは聞き覚えがある。”アークエンジェル”の艦内で、そのときは目を真っ赤に腫らし、自分に泣き叫んで来た少女だった——あるいは、その人の声? まさか……!?

「ジャステイス」と「クレイドル」は、揃って行動を停止してしまった。

「まさかこんな所で、あなたたちと巡り逢えるだなんて、思ってた……」

くすりと微笑む音声は、通信先の「暗黒」のパイロットが少女であると、彼女達にすぐ理解させた。

いや、その淑やかな微笑み方は、どちらかといえば高貴な印象を受ける。豊かな良家に生まれ、何不自由なく育って来た少女を思わせる、それ。

ステラは、確かめるように声をあげた。

「フレイ……、フレイ・アルスター……!? キラの、おともだちの……」

確認したが、このとき、ステラは既に確信していた。

この声は民間人として「ヘリオポリス」で保護した、燃えるように赤く染まった長髪が印象的な、可憐な女の子のものではないか。フレイ・アルスター、キラ達よりもひとつ年下で、ミリアリアの後輩だったという。第八艦隊の先遣隊「モンドゴメリ」の艦内に父を持ち、ステラは、これを助けることが出来なかった。

戦火によって父を奪われ、無力ではないにしろ、己の非力に嘆いていたあの少女が、まさか、あんなモビルスーツに乗っているなんて！

「なんで……? どうしてあなたが、そんなモビルスーツに……!」

「レムレース」の動きは、凡百のナチュラルを大きく超越していた。

OSのサポートシステムを介せば、M1や「ダガー」のように一般のナチュラルでもモビルスーツは操縦可能となるが、操縦がセミオートな分、それだけイレギュラーな動きには弱いし、反応速度にも限界が生じる。だが、フレイが操る「レムレース」には、そのOSが持つ癖のようなものがない。すべて、マニュアル操作で行っているかのような――。

まして「レムレース」は、ザフトが開発したファーストステージの一機であるはずだ。それを自在に制御して見せるなど――軍人ですらなかった彼女に、そんなことが本当に可能なのだろうか……？

へわたしのパパを殺した、あなたたち兄妹……！　ずっと許せなかったの……ッ！　〜

ステラは、背筋を冷たい指でなじられたような悪寒を憶え、ぶるり、と震えた。

そうだ――この人に、憎しみの籠った目で睨まれたとき、

『――あんたさえ、いなければッ……!!』

ステラは、そう云われたことがあった。

――それだけのことを、ステラは、した……？

全力を尽くしたつもりで、守れなくて、そうして彼女に恨まれた。

あのときのステラは、自身の非力に打ちひしがれたこともある――けれど、それではあまりにも……。

「決めたのよ。コーディネイターを倒して、この手で戦争を終わらせようって……」

「フレイの言動は、まるで不穏なものに代わっていた。」

「そもそも——と、ステラは確信めいて考える。」

「フレイ・アルスターはやはり、純粋なナチュラルだ。平穩な“ヘリオポリス”の女生で、燃えるような赤い髪は同性であるステラから見ても艶っぽく、間違いなく美少女として形容して良い容貌をした、カレッツジのアイドルだった。そんな彼女が、暫く見なかったこの数ヶ月間でモビルスーツを操れるはずがないのだ、それだけは間違いない。」

「——そんなの、あり得ないんだ……！」

「そこまで考え、彼女はハッと顔を上げた。彼女の中の最悪の可能性が、頭の中に浮かんだからだ。」

「↑——あなた……!?!」

「ステラには、目の前で起きている現実には納得する方法が、ひとつしかなかった。」

「震える声を聞き留めて、フレイは、口元に切り裂かれたような笑みを浮かべた。」

「へそう……わたしはあなたと一緒……わたしは生まれ変わったのよ……あなたがそうだったように、エクステンデットに——ッ！」

「どれほどの衝撃が、ステラの中を駆け巡っただろう。」

「ナチュラルがナチュラルを越えた能力を手に入れる、そのために必要な必然——人体

の改造だ。

それは、愚かとししか云いようのない邪な施術をその身に孕み、刻み込む狂気。

〈そん、なつ〉

人為的な遺伝子調整を受けたコーデイネイターでも、天然の中に生き長らうナチュラルでもない。

今のフレイは、双方の定義から解脱した外道者だ。

強力な薬物に肉体を浸し、削られたその命が尽きるまで、永遠に戦うことを強いられる傀儡人形。

そうなった者の悲惨な末路を——ステラはよく知っていた。

初めて“レムレース”の存在を察知したときの奇妙な感覚、そして、出会った時に感じた既視感。それは、本質を同じとする同族のみが抱く嫌悪感だったのかも知れない。

連合軍の研究者に肉体を強化され、エクステンデットとなりて、ドス黒い暗澹色のモビルスーツを、まるで玩具のように楽しんで乗りこなす……。

かつてのステラと、現在のフレイは同質であり、同一の存在だった。強化人間として始まった第二の人生——その出生も、行動も、考え方も……。

「なんだ、何が起きているんだ……？ 通信からステラの声がする——」

通信を傍受するアスランは、ひとえに錯乱していた。

「ステラの声がふたつ？ ステラがふたり……？ ステラが、たくさん——!?」
 場違いなほど間の抜けた考察を、通信先のステラは完全に無視した。

〈だめ……！ それは、だめだよ……！〉

〈わたしはあなたから生まれた……！ あなたはわたしの先輩であり、お姉さんでもあるのでしょうね……！〉

フレイの云いようは、厳密には間違っていたが、云われてみれば、それに近いものがある。

云われた方は、激しく戸惑っていた。

あまりの動揺に、その声は強かに震えていた。

〈そんなの、普通じゃない！ その黒いモビルスーツから降りてッ!!〉

次の瞬間、"クレイドル"が動いた。真つ直ぐ"レムレース"へと接近したが、フレイの方は接近を許さず、伸ばされた腕をよけた。

拒絶的なその動作は、何人にも"レムレース"は触らせないと訴えた風であった。

〈これはわたしの搭乗機……！ "レムレース"——わたしの新しい力……！〉

〈わかる、わかるよ……でも、だから云えるの！ それは危険な感覚だつてこと……！〉

地球連合軍の悪意と、恐ろしい力をその身に秘めた——不吉に黒光りする機動兵器。

かつての自分もまた、それに嬉々として乗り込んで行ったことがある。巨大にして兇

悪な力に訴え、敵を滅ぼすことでしか自分自身を守れないのだと、当時は本気で考えていた。

この時代に悪魔を顕現させたものが「デストロイ」であるのなら、破壊し尽くされた破壊者——そこから派生した「レムレース」は、まさに悪魔の亡霊、そのものではないだろうか？ 守り手として派生した「ディフェンド」とは程遠い——「デストロイ」の負の面だけを満載したのが「レムレース」であるのなら……！

かつての自分が『そこ』に見え——ステラは、激しく声を荒げた。

「そのマシーンは、みんなの怒りとか、悲しみとか……暗くて、黒くて……『デストロイ』なんてものを造り出した奴等の悪意が、いっぱい溶けてるんだ……！ それは悪霊だよ！」

しかし結論から云って、ステラの訴えは、フレイの心に届くことはなかった。

何故なら、フレイがいまこの道を選んだ原因が、そもそもステラにあったからだ。

「へわたしのパパを殺した——あなたたちコーディネイターに何が云えるのツ!?」

暗黒の「レムレース」が、その瞬間より動き出した。

熊手状の「トリケロス」より小型のビームガンを装填し、滞空する白銀の「クレイドル」に光弾を連射したのである。

虚を突かれたステラであるが、対応は早い。両腕のビームシールドを機体前面に展開

させ、繰り出された弾丸の雨を防御した。

「——ステラツ!？」

傍観し、傍聴することしか出来なかつたアスランが、そこで声をあげた。どうやら、その光景がビクトリアの出来事と被つたらしい。

アスランは茫然とするばかりで行動が起こせず、ただ、場に漂つていただけの自分をすぐに戒めた。

——おれはまた、見ていることしか出来なかつた……!

すぐに「レムレース」へとビームハルバードを出力し、勢いよく躍りかかる。両剣を振り下ろし、「レムレース」は後転して斬撃をかわす。

ビームガンによる連射を遮断すると、通信装置から、憎々しげにフレイが舌を打つ音が聞こえた。それが妹に舌を打たれたように聞こえ、兄貴心に凄まじいショックを与えた。が、アスランはすぐに気を持ちなおし、引き締めた。

おそらく「レムレース」が装備しているバックパックは、ビクトリアに配備されていた円盤型の要塞の武装を小型化・高性能化したものである。例の要塞は動力を絶つこととで攻略したが、「レムレース」は核動力だ。それを遮断する方法はないし、無尽蔵に吐き出される大出力砲撃は圧倒的な脅威であることに変わりはない。

なおも「ジャステイス」が両剣による突撃を敢行すると、逃げられないと判断した。

レムレース”は、挑むようにビームサーヴァーを抜き放つて応戦した。一方の“クレイドル”の動きは、まだ、止まったままだった。

“赤”と“黒”が激突し、一帯に激しい衝撃波を巻き散らす。

二機は戦いながら、気付かぬ内にオノゴロ領海の方まで移動していた。海の上で繰り広げられる戦闘の余波に、鮮烈な大波が発生してゆく。

へアスラン・ザラ……！ わたしのパパを殺した張本人……！へ

「なんなんだ、君は！ なぜおれの名前を……!?!」

捕虜となっていたニコル・アマルファイから訊き出したことであつたが、あえて発することでもなく、フレイは何も云わなかつた。

代わりに、恨みを返すだけだ。

へそうね、知らないでしょう……? 自分がいちいち殺した相手の名前なんて、憶えていないでしょう!?! ——だって、わたしも同じだものっ!へ

仮に、先ほど“レムレース”で墜としたM1パイロットの名前を挙げると云われても、フレイにだって不可能だ。

それこそが、フレイを救えない何よりの現実なのだ。

へわたしは、あなたに撃たれた大西洋連邦事務次官の娘——！ コーデインイターなんて、滅んじやえばいいのよ!へ

「この子の声、どうしてこんなにツ——」

「——妹に似ている？　そうね、よく云われたもの……。どいつもこいつも、口を開けばステラ、ステラってき——可愛らしい生娘って、本当に正義よねえツ!?」

妹に似た声質でも、口調はまるで違っている、とアスランは感じた。

片方は舌足らずだが、こちらは結構よく喋る。それもまあ、口を開けば不躰ではないにしろ、不穏当な発言ばかりしているが。

「ビームハルバードを構える『ジャステイス』に対し、『レムレース』はビームサーヴァーを以て突撃していた。それが如何に無謀な挑戦であるのかは、実質的にルーキーであるフレイには分からなかったようだ。強化人間として生まれ変わった彼女を、戦士として無能と呼ぶ者はほとんどいないだろう。確かに彼女は無能ではなかった。しかし、このときは……どこまでも無謀だった。

結論から云って、フレイはこれまで通り、中距離砲撃に徹するべきであった。アスランが接近戦を優先するのは、乗機の特性を十分に理解しているからであり、怒りに任せて斬りかかっているから、ではない。

フレイは、目前の「赤」から繰り出される斬撃をいなし、両刀のきらめきを「トリケロス改」で受け止めた。すかさず防盾の内側よりビームライフルを放つ——が、「ジャステイス」はそのすべてを鮮やかにかわして行く。焦りが一瞬、フレイの攻撃をはやら

せ、サーヴァーの軌道が浮ついた。その一瞬を突き、*「ジャステイス」*の光刃がビームサーヴァーのグリップを握る。*「レムレース」*の左腕をなから斬り飛ばしていた。

何が起こったのかも分からない、一瞬の早業だった。気付いたときには既に絶ち切られていた腕先を見、フレイはくつと息を詰まらせた。

「不慣れなパイロットめ！」

アスランは、勝利を確信したように叫んだ。

左腕を失い、近接兵器を喪失したフレイは、あまりにも率直に……いや愚直に、ビームシールドを展開してしまっていた。攻勢を破られれば、守勢に回るのがシミュレータでは常識だが、いかんせん、相手が悪すぎた。

瞬時に脚部の*「タクティカルブレード」*を伸縮させた*「ジャステイス」*が、凄絶な勢いで躍りかかる。エネルギー兵器を切り裂く爪先の刃は、ビームシールドを構えた*「レムレース」*を、翳した盾ごと蹴り飛ばした。光波発生器は切り裂かれ、機体は大きく吹き飛ばされる。

それは、フレイの悲鳴を呼び起こすには十分すぎる衝撃だった。

右腕の*「トリケロス」*が弾き飛ばされ、海中に没する。盾を失った*「レムレース」*もまた、そのまま海中に墜落するかと思われた。しかし、フレイは慌てて機体制御を取り戻し、ほとんど海面すれすれを滑空する姿勢を保った――

〈このっ——!?!〉

——しかし、その選択が命取りになった。

フレイはこのとき、あるいは、素直に海に飛び込むべきだったのかもしれない。ほとんど無理矢理な形で姿勢制御を取り戻したフレイであったが、その反動として、機体は即座に次の行動を起こすことができなかつた。

そう、狙つたように直上から「ジャステイス」がハルバードを突き立てて来ていても、盾を失つていた挙句、彼女は何の回避行動も取れなかつたのだから——。

——殺つたッ!

会心の笑みを浮かべるアスランの耳に、叫び声が響いたのは、次の瞬間だった。

〈アスラン、じゃまーっ!!〉

渾身の叫び声が上がると同時に、アスランの視界に、陽光に反射した白銀のきらめき
が差し込んで来た。その眩さに一瞬でも怯むと、次の瞬間、彼は身に覚えのない、凄ま
じい衝撃に襲われていた。

——ドゴオツ!

猛烈に接近して来た「クレイドル」の飛び蹴りが、いま敵機にトドメを刺そうとして

いた「ジャステイス」の顔面に直撃したのである。
「うおおおおつ!」

横合いから蹴り飛ばされ、飛沫を上げて海に没したのは、最終的に「ジャステイス」であつた。

バシヤアン! 盛大に水没して行つた「ジャステイス」を横目に、状況を掴みかねたフレイは、慌ててペダルに足をかけ、海面から飛び離れた。今の一撃——「クレイドル」に助けられたとは思わなかつた。助けられる筋合いがなかつたからである。

見れば、「クレイドル」はどんな武装も構えることなく、竿立つように浮遊していた。馬鹿にしているのだろうか? と思つたが、それは、明らかに戦意がないことを示す姿であつた。と云つても、格好を云えばフレイとて似たようなものだ。手持ちが可能な武装はすべて喪失し、残つた武装などバルカンや背部の「ネフェルテム」に限られてゐる。初陣にしてはすこし物足りない戦果——フレイは決まりの悪さを憶えながら、それでも「クレイドル」の方を向き直し、機体を相対させた。

「白」と「黒」——対照的な輝きを宿した二機が向き合つた。対話を望む「白」に比べて、「黒」はあらゆる対話を拒んだような外観をしていた。

(潮時、かしらね……)

左腕は断ち切られ、右腕の「トリケロス」は喪失した。「トリケロス」は盾と銃が一

体化された複合兵装防盾であり、使いようによつてはサーベルも出力できるが、かといつて、あらゆる武装を其処に詰め込み過ぎではないだろうか？　こうして喪失してしまつたら、「レムレース」の戦闘力は半減してしまふ。こういった弱点は「ブリッツ」の運用データを参考にすれば、明らかに事前に克服できたはずだ。あとで整備士に文句のひとつでも云つてやろう。

フレイは深く嘆息ついて、改めて「クレイドル」を見据える。

「へずつと何考えてるのか分からないような子だったけど……お礼のひとつでも云うべき？」

目の前の「白」は、不躰な「赤」と違つて、まるで戦意が感じられなかつた。

通信先からは、諭すような声が聴こえた。

「あなたは帰つちやだめだよ……！　地球軍の船に……っ」

それが猫を撫でるような声のようにも聞こえ、フレイは一抹の不快感を憶えた。

「へどうしてよ……？　そろそろブーステッドマンの薬も切れる頃合い——わたしも「この子」も補給を受けなきゃ……。こんな成りじや、あなたを撃ち殺すことなんてできない」

「戦えば戦うほど、あなたは自分で自分を苦しめる——強化人間つて、そういうものだから……」

ステラ・ルーシエは、目の前の「レムレース」とフレイ・アルスターを否定することが出来なかった。……だからだろうか？ 彼女の心は、無意識に彼女との融和を求め、しかし、方法が分からずに彷徨っていた。

彼女を否定してしまうことは、つまり、自分自身を否定してしまうことだと潜在的に感じていたからだ。

「その黒いマシーンは、あなたを戦いに引き込むだけだよ……っ！」

へたとえそうでも、構わないわ。そのために、わたしは此処にいるのだから——！ あなたたち兄妹と、コーデイネイターを引き裂くことを夢見ながら、わたしはこうして戦っているの……っ！」

狂気に満ちたその信念は、曲がらない。

〈望んでなかったわけじゃない、そうするしか他に道がなかったのよ……！ 強化人間なんかになり果てた、わたしのこの気持ち、あなたに分かって!!〉

「……………」

分かるのだ——。

分かるからこそ、痛むのだ——。

それが、フレイには伝わらないのだろうか？

ステラの声は、彼女に届かないのだろうか？

そのとき、*“レムレース”* が機体を翻した。通信先から、フレイの一転した物静かな声が響く。

「また、戦場で会いましょう……。エクステンデットの、お姉さん……。？」
そうして、ひとえに遠ざかってゆく黒い背中を、ステラは追わなかった……。いや、追う気になれなかった。屈辱も怒りも感じることはできず、彼女はただ魂が抜けたように、遠のいてゆく暗黒の機体を見送る。

茫洋と滞空し、これと時を同じくして、連合軍の艦隊が信号弾を射出した。鮮やかな光輝が打ち上げられ、またも、地球軍のモビルスーツ部隊が撤退してゆく。———どうやら、新型の *“G”* 兵器のパイロット、ブーステッドマンらの葉能時間も切れたようでもある。———キラたちの方も、無事なんだろうか……。？

そのとき、海を割って *“ジャステイス”* が海中から飛び出して来た。蹴り飛ばしておいて、その存在をすっかり失念していたステラは、ハツとして背後を振り返る。*“ジャステイス”* は *“クレイドル”* に高度を合わせ、正面から相対した。深紅の機体は、なにか、憤怒や恥辱から生まれる険しい気を全身から放っているように見えた。

「どういふことだ、ステラ……。!?」

通信機から響いたアスランの声には、激しい怒気が混じっていた。

以前までのステラが聞けばすっかり竦み上がっていたであろう、地鳴りにも似た響き

を持つ、兄の怒声。しかし不思議なことに、今のステラはまるで物怖じしなかった。堂々とアスランと対峙し、これまでなら抱いていたであろう恐怖心のようなものを、まるで抱かなかつたのである。

それは妹としてではなく、ひとりの人間としてアスランと対峙する覚悟が、彼女の中に生まれていたからだろうか……？

アスランは、説教するような口調で云い募った。

へなぜあんな、馬鹿な真似をした……!? おれに任せていれば、仕留められた相手だというのにツ！

そう——「クレイドル」が邪魔をして来なければ、アスランは間違いなく「レムレス」を撃破することが出来ていた。

「レムレス」のパイロットはまだ実戦慣れしていないようで、実際、戦いの中でそう感じ取って見せたアスランの直感は敏く、正しい。しかし逆を云えば、その手の敵は、実戦慣れる前に倒しておかねば、これからさらに厄介になって行く可能性と危険性を孕んでいる。

どんな仮想の中で、どれだけの研鑽を重ねても、それは実際の命の応酬の中で培った能力には、到底、及ぶものではない。そういう意味では、数多の死線をかくぐつて来たステラやアスランに、フレイ程度のルーキーが敵うはずもないのだが……あくまでも

それは、現時点での話ではないか。

ましてサーベルの出力差があったように、不可解なことに機体性能だけを云えば、あちらの方が優れていたような気がする。ここで見逃したことは、凶悪な禍根を未来に残したことに同義ではないかと、アスランは直感的にそう感じていた。

〈結果、みすみす取り逃がして……！ あれは「テストメント」だ……きつとナチュラルに強奪された、核を積んだ機体なんだ！ なら、破壊するしかないじゃないか!?!〉

ステラは、云った。

「理屈じゃ、ないの……」

〈なに……!?!〉

「あの人、ステラによく似てた……。ステラとおんなじだったんだよ……。だから——」

説得こそすれ、撃破などできるはずもない。

変わり果てた彼女に、ステラ自身が最も厭っていた言葉——『死』を与えることなど、到底、できないと感じたのだ。

「強化人間で……黒いモビルスーツを、おもちゃみたいに乗りこなして……。あれはステラだったのっ、だから！」

そんな自分が、いま、こうして祝福されて生きていると云うのに。

どうして、彼女には死を与えることができるだろう？

どうして、自分の身に起こり得た悲劇を、誰かの身に繰り返させなければならない？
同じことを繰り返すだけでは、何も変わらない——そういうものではないだろうか？
アスランはしかし、怒鳴った。

〈それは感傷だ！ 正しいものを見方をしろ！〉

「——アスランの云う正しきって、ステラが思ってるのと違うもんっ！」

アスランは、絶句した。

〈な、なに云ってるんだ……！ おれ達はザフトだ……！ ザフトの正義に従うのが務めだろう！〉

それは、アスランの本心から放たれた言葉であつただろう。

ザフトの正義——それは今や「プラント」の総意であり、そのすべてを背負い立つパトリック・ザラの、かねてよりの意志でもある。

すべてのナチュラルを滅ぼし、コーディネイターたちの、よりよき未来を創世する——。

ならば、そんな父の願いを叶えるために戦う——それが自分たち、血肉を分け与えられた者達が成すべき使命ではないか。

〈そのために、君は「フリーダム」の追討任務に就いたはずだ！ 「テストAMENT」も

同類だ！ 誰が乗ってしようと、おれ達はそれを破壊する義務がある」

「アスランはまた、そうやって『フリーダム』を破壊しに来たんでしょ……」

「それが、おれの任務だからだ！ こうしてオーブへ来たのだから、もともとは『フリー

ダム』を捜しに——」

「そうやってまた、アスランはキラを殺すんだ！」

「へっ……!?」

放たれた言葉に、茫然とするアスラン。

彼はすっかり返す言葉を失い、ふたりの間には、重たい沈黙が流れた。

沈黙を破ったのは、ステラだった。

「知ってるんだよ、ステラ。あの『フリーダム』に乗ってるのが、キラだってこと……！」

キラがなんのために戦っているのかだって、聞いたんだ……！」

「へなッ……」

アスランは唾然とし、同時に、ステラが供述を訊ね返したい気持ちを、必死で堪えた。

キラが何のために戦っているのかを聞いた？ それは、ステラがキラ本人と直接的に

接触したということではないか。

——なら、キラは今、どこにいるんだ……!？」

アスランは喉から言葉が出掛けるほどに詰問したかったが、キラという存在を肯定し

てしまつては、またも妹の反感を買うことになりそうで、云えなかつた。情けない話である。連合軍なら誰もが畏れる「ジャステイス」のパイロットたるものが、たつた一人の少女を前に口籠っているのだから。

まあそれも、無理もないことなのかもしれない。彼が以前、常勝の「ストライク」を単機撃破して見せたとき、周囲のザフト兵が褒めそやす一方で、ステラだけは精神的にひどく荒れ、抗議したことがあつたからだ。

——うそつきッ

薄情者と顔に書いてあつたそのときの彼女の眼には、強い軽蔑が混じつていようように見えた。

——あんな目で見られるために、おれは力を付けて来たわけじゃないというのに……。

過去にひたつたアスランは、かぶりを振り、それらの日々の記憶を振り払う。

——そうだ……もう、彼女にあんな目で睨み返されるのは、御免だ。

昔はもつと純真であどけなかつたというのに、いつから彼女は、あんなに険悪で鋭い目つきを浮かべるような女の子になつてしまつたのだろう？ ……いや、それもまた、彼女を野蛮な強化人間になど貶めたナチュラルのせいだ。やはり、何もかもナチュラルの仕業なのだ。けつきよく、父や自分がやっていることは何も間違つてはいない。ナ

チユラルを倒さなければ、すべての過ちは終わらない。そのために「フリーダム」は、絶対に野放しになどしてはならない。

だというのに、ステラには、どうしてそれが伝わらない？

「前にアラスカで、アスランは「フリーダム」を墜とそうとしてた……！ あのとときから、アスランは「フリーダム」に乗ってるのがキラだってわかってたんだ——わかってて、またキラを殺そうとしてたんだっ！」

そう、アスランはすべてわかっていて、それをステラには黙っていた。当時はまだ無知だったステラが「フリーダム」に植え付けられたトラウマに震えていたときも、アスランは彼女の恐怖感覚に付けこむように彼女をそそのかし、刷り込むように「フリーダム」を悪者と——敵と認識させようとした。

つまりアスランは、もう一度、ステラを騙してキラと戦わせようとした。——以前「デイフェンド」を「ストライク」を交戦させたときと、まるで同じように。

さすがのアスランも、事実を肯定することができなかった。認めてしまうと、すべての逃げ道を塞がれてしまうと考えたからだ。

弁明のしようもなく、しかし、なんとかして弁明しなければならぬ。険悪なステラを落ち着かせ、彼女を、どうにか納得させるだけの言い訳はないのか。

アスランは慌てて反論しようとして、

へブリーダム」に乗っているのは……キラじゃ、ないぞ……

——と、後で口に出したことを死にたくなるほど後悔する言葉を、そのとき……吐き出していた。

吐き出してから、アスランは全力で後悔した。

もっと他にマシな嘘はなかったのだろうか。彼女を説得させるだけの言い訳は——
?

しかし、時間は待つてくれなかった。

云い切ってしまった以上、後の祭りである。慌てて口を塞いでも、出て行った言葉が戻って来るわけではない。言葉は真つ直ぐに通信機に伸び、回線を通してステラの耳に、そして頭に飛び込んで行った。

「くっツ!？」

声を受け、ステラは頬を紅潮させ、モニター越しのアスランを睨んだ。

その目に浮かんでいるのは、呆れと、怒りと——反発の情であった。軽蔑の目に既視感を憶え、アスランは、自分が吐き出してしまった言葉の愚かさを再確認した。大体、キラに会ったという少女に対し、キラはいない、などという妄言がどうして通じるだろう

? おれは馬鹿か。どうしてこういうときに限って、おれは口が下手なんだ!

「また、そうやって——ッ!」

頬を真つ赤に紅潮させたステラは、気が付けば背部 “リノセロス・リニアキャノン” を翼から切り離し、両の手に構えていた。唐突な動作に、アスランはどきりと背筋を伸張させた。

——まさか!?

次の瞬間、そのトリガーは躊躇なく引かれていた。いくつかの音速弾が問答無用に放たれ、アスランは真つ青になって、慌てて攻撃を回避した。

へなっ! 何をするんだ! ステラ!?

当然、抗議の声を荒げたアスランであるが、ステラは本気で当てる気よりも、すこしでも思い知ってほしいという念の方が強かった。“ジャステイス”の装甲はフェイズシフトが用いられており、実体弾を跳ね返す強度を持っているのだ、レールガンなど直撃しても致命傷とはなり得ないが、反抗という態度を表すには十分だった。

アスランとしては、以前にもステラと対峙したことはある。ラクス・クラインの身柄を譲渡してもらう際、“デイフェンド”は銃を構えて“イージス”を牽制した。が、実際にトリガーが引かれることはなかった。しかし、今は違う。今のステラは、なんの躊躇いもなく——。

そうしてまだリニアキャノンの射撃は続いた。アスランはただ、それらをかわしてゆくだけだ。

へやめろ！ もうやめるんだッ！ 反抗期か!？」

「そうかも！ ステラは成長したよ！ でもね、成長してないのはアスランの方だ……！ また性懲りもなくっ——」

『「ストライク」に乗っているのは、キラじゃない』——結局、真つ赤な嘘でしかなかった、あのときと同じ方法が、ステラに通じると思ったのだろうか？ そう云つておけば、ステラは騙されてくれるとでも思ったのだろうか？

——アスランはいつたい、ステラを何だと思つてるの……？

結局、アスランとパトリックも、彼等は彼等の中で、時間が止まっているのかもしれない。

パトリックは母を亡くしたあの日から、アスランはビクトリアで自分を亡くしたあの日から、まるで同じことを繰り返そうとしている。過去に囚われたまま、それぞれ母と妹の仇を取ることしか考えず、見えず——時間が流れていることを完全に忘れてしまっている。だから、成長していかないという表現がしっくり似合ってしまうのか。

へよせっ!？」

「それだけのことをしたからっ！」

地球軍との戦闘が収束したオーブ本島において——“赤”と“白”——彼等の操る二機が、激しく上空を飛び回る光景は、いささか目立ち過ぎた。

なにかしらの騒動が起きていることに気付き、いくつかのM1部隊が海岸線の方までやって来た。

駆け付けた兵士のひとりが「赤いモビルスーツ、あれも連合軍機か!」と声を荒げ、「いや、さつきまで“クレイドル”を掩護してたぜ?」と否定の聲が上がる。だが「じゃあなんで、“クレイドル”がドンパチやってんだよ?」と当たり前の疑問が上がった。

オーブ兵は、先日の一件で“クレイドル”を「協力者」として認定していたため、その“クレイドル”が激しくレール砲を撃ち放っている“赤色の正体不明機”を、さしずめ「執拗に撤退しない連合軍機」と断じた。ステラがリニアキャノンを放てば、それに加勢するように地上のM1部隊が“ジャステイス”に砲火を放った。

多勢に無勢とは、まさにこのことだった。

へくそっ! ステラ、なぜ——

地上から放たれる砲火を、アスランはぎりぎりの所で回避してゆく。

まるでステラが、M1部隊を味方につけているかのような状況に、アスランは懷疑した。——どうしてオーブの連中は、おれだけを狙撃して来る!?

「アスランとステラが信じてるものはちがう……! いま分かった、ステラはアスラン

と一緒にいるべきじゃないってこと……!」

〈!〉

『無理をしてアスランと同じ道を歩む必要はない』——ニコルはかつて、ステラにそう云ってくれた。

きつと、アスランが変わってしまったのは、自分が傍にいた結果なのだろう。それが分かった以上、アスランの側においても、彼を正してあげることなど出来ない。

『アスランが変な風になら、あなたが戻してあげればいい』——そのためには、敵対してでも怒らなさいいけないときがある。フレイも、アスランも、自分のせいで豹変してしまったというのなら、その責任は自分が果たすまでだろう。そのためにステラは、アスランと同じ道に心中することはできない。さっきのように蹴り飛ばしても、彼の目を醒ます必要があると感じたから——。

〈や、やめろ! まさかオーブと共に……!〉

慌てて手を伸ばしたアスランであるが、気付くのが、あまりにも遅かった。

よく見れば、海岸線には大量のM1部隊が集結して来ていたのだ。騒ぎを聞きつけたモビルスーツ部隊が、一斉に“ジャステイス”へ砲火を浴びせかける。察し物のアスランも、迫り来るビームの驟雨に対しては慄然とするばかりだった。ほとんど面のように収束して襲い掛かるビームライフルを、アスランは機体前面にビームシールドを展開し

て受け止めるのが精いっぱいだ。

重要な会話を邪魔してくれる！ さすがに腹が立ったのか、アスランは咄嗟にM1部隊にビームライフルを撃った。が、射線上に「クレイドル」が盾のように割り込んで来たため、撃った銃は降ろす他になかった。

「——ええいッ」

それでも、引き際を判断できるだけ、彼は賢明だったのかもしれない。

アスランは即座に「ジャスティス」を転進させると、オーブの領空から飛び去って行った。

「……………」

ステラは、茫洋とその背中を見送った。

——アスランは、やましいよ……。

ステラはこの瞬間から、決定的にザフトと袂を分かったことになる。

いつかアスランを、昔みたいな優しい彼に戻してあげられることは、できるのだろうか？

そこまで考え、ふるふると、かぶりを振った。

(できるか、じゃない——やる……)

やらなければならぬ。

それが、ステラの責任なのだから——。

オノゴロから離脱したアスランは、オーブ軍の有効射程距離から離れたことを確認すると、機体の速度を落とし、一旦、オノゴロの方を振り返った。まるで、やり残した未練でもあるかのように。

いや、実際、未練はあるのだろう。

彼は横合いから砲火を放って来たオーブ軍のせいだ、ステラを説得することが出来なかったのだから。

「まさか、オーブと共に戦うつもりなのか……？」

許された行為ではない——わかっている、アスランの頭には迷いが生じていた。

きつと、相手がステラでなければ、理路整然と理論武装を完璧なものとして、そいつを裏切り者と断じて斬り捨てていたはずだ。しかし、相手がステラとなってしまうえば……。

——この力、なぜアイツを傷つけるために奮わなければならない……!?

どうしてステラは、わかってくれない？

いつから彼女は、あんな風になってしまった？ 昔からずっと、おれの云うことは聞いてくれたはずなのに……。

「——くッ」

憎々しげに吐き捨てる、そのとき、*“ジャスティス”*のレーダーに見覚えのある熱源が接近していた。

オーブの領海にて、後期GATシリーズと交戦していた——*“フリーダム”*であった。

「*“フリーダム”*——キラ……!?!」

アスランは、愕然とした。

後期GATシリーズ *“カラミティ”* *“レイダー”* *“フォビドゥン”* を退けたキラ達は、オーブ本島に向けて機体を返していた。

その帰路において、キラは見覚えのある深紅のモビルスーツを発見する。

以前、アラスカで対峙した兄弟機——ZGMF—X09A *“ジャスティス”* である。

「アスラン……!?!」

どうして、ここに。

キラが唾然とすると、傍らの *“イージス”* もまた反応を特定したのだろう、ムウの聲が上がった。

〈あれは？　また連合の新型か……？〉

「いえつ……」

すると、間を置かず「フリーダム」の通信機に音声が入って来た。

云うまでもなく、それはアスラン・ザラの声だった。

〈やはり、おまえか……キラ！〉

〈アスラン……！　どうしてここにッ〉

言葉は交わすが、キラはいつでも刃を抜けるよう、グリップに手を掛けていた。

しかし、一方のアスランはすっかり興ざめしているようで、戦闘態勢を取ろうとはしていないかった。

〈やはりお前が、アイツをまやかしたのか……！〉

「えつ……？」

〈アイツは取り戻す——！　必ずなっ！〉

云うと、「ジャステイス」は機体を返し、さらにオーブから離れて飛び去って行ってしまった。

なんだったんだ？　とムウの疑念の声が上がり、取り残されたキラはただ、茫然とした。

（ステラの……ことか……？）

今のキラには、アスランの言い残した言葉の意味が、よく分からなかった。

『鏡像に見る』 K

じつに、二度にも渡る大西洋連邦の猛攻を喰い止めたオーブ守備軍——

その中でも多大なる戦功を挙げていた「アークエンジェル」のクルーはオーブ行政府へと招集され、艦長であるマリユー・ラミアスを筆頭にウズミからの報告と指示を受けていた。

「オーブを離脱……!?!」

心外そうに声を荒げたのは、やはりマリユー・ラミアスであった。

会話の主は、オーブの獅子——実質的なオーブの首長を務める、ウズミ・ナラ・アスハである。

「あなた方にも、もうお判りであろう。オーブが失われるのも、もはや時間の問題だ……」

確認するように放たれたその言葉は、予想などではない確信。

強固な防衛線を張っていたオーブ守備軍も、やはり大西洋連邦が動員する圧倒的な物量の前に瓦解し始め、なおかつ増援も見込めぬ以上、このさきの展望などはジリ貧でし

かない。

そう、そんなことはわかり切っていたことだった。どれだけの抵抗を続けたところで、いずれオーブが陥落するという事実は変わらない。もつとも、二日間も戦線を維持できただけでも、十分に上々と呼べる戦果ではあるのだが。

オーブは「意地のために戦った」と揶揄する者もいる。が、結局ものはいいようであった。それを単なる意地と取るか、崇高な理念と取るか——それは、現実を受け取った者達、それぞれの感性に拠る。

現在、オーブ守備軍はオノゴロ島を放棄し、戦線をカグヤ島——“マスドライバー”を所有する島まで後退させていた。

ウズミはそうして自国の陥落を前にして、せめて“アークエンジェル”と、自国の理念を託せる者達だけを“マスドライバー”を以て空へ上げようと考えたのだ。

「たとえオーブが減ぶとも、失ってはならぬものもあるう」

ウズミの言葉に重みを感じるのには、マリユールやここにいる者達が、すべてオーブの理念に同調しているからだろう。

それは、希望の種だとウズミは云った。

「オーブの理念それは、融和による平和だ。——かような状況にあつては、単なる理想論に聞こえるかも知れんが……」

自嘲が含まれたその言葉には——結果だけを見れば——国を焼き、国を滅ぼしてしまつたという首長としての重い責任が混じつていた。

だが、融和による平和——人種という垣根を超えた安寧を真に願う者達は、こんなところで、みすみす滅ぼされるわけには行かない。

そう願う者達が一樣に滅びれば、世界はまた、ナチユラルとコーデイネイターが際限なく争い合う世界となる——ウズミはそう続けた。

「地球軍の背後には、ブルーコスモスの盟主、ムルタ・アズラエルの姿がある」

コーデイネイターをバケモノと罵り、人としてすら認識しようともしない、嫉妬と憎悪に吞まれた者達。

地球軍の上層部は、とうにブルーコスモスに支配され、彼等の思想に染まつていてこののだ。

「そして『プラント』も、今やコーデイネイターこそが新たなる始祖とする、パトリック・ザラの手の内だ」

迫害と弾圧の日々を理由に、復讐と報復に燃え、ナチユラルを排斥した新世界の創世を望む者達。

その言葉を聞いて、会合の場に居合わせるツールがキラに視線を遣つた。なにというわけでもない、ただ、そちらに視線が向いていたので。

「……………」

キラは何も云わず、俯きがちに、その人物の名を胸中で咀嚼しているようであった。パトリック・ザラ——

それがどういふ人物か、ここ「アークエンジェル」のクルーたちは知る機会に少し恵まれていた。勿論、直接その人物と面識を持ったわけではないが、その人物の娘に当たる人物と強い交流があるのだ。だが、キラにとつては少どころの話ではないのだろう。だからこそ、マリューは気づかわしげな視線をキラへ向ける。ムウは、何も云わずに黙っていた。

そう。当のステラ・ルーシエは、この会合の場に居なかつた。

動揺の波が一同に走るのを見、「いかがなされた？」とウズミが問う。が、すぐにマリューが「いえ」と返答したため、彼はさらにその先を続けた。

「または過酷な道なれど、わかってくれるな？」

そうして、彼らは大気圏外へ飛び立つ準備を始めたのだった。

移動準備に取り掛かり初め、廊下が騒がしくなった頃、キラは「アークエンジェル」

の格納庫へと向かつていた。

先ほど、ウズミとの会談の時もそうだったが、ステラは一緒ではない。なんでも、先んじて「アークエンジェル」と「グサナギ」がオーブを離脱するとの報せを受け取った彼女は、ニコルと共に再び病院の方へ向かつたらしい。あの緑髪の少年、ザフトからやって来たという、ニコル・アマルフィと共に。

——仲、いいんだな？

というのが、キラが率直に抱いた感想だった。

思い返せば、ステラとニコルは格納庫でもよく話をしていた。ステラがザフトに行っている間に、親しくなったのだろうか？ いや、きつとそうなのだろう。

今のステラは、昔と違って、誰とでも親しくなる——相手が心を閉ざしている場合はその限りではないが、少なくとも彼女はナチュラルもコーディネイターも隔たり無く、個人を尊重できる娘なのだ。そうでなければ、そもそもオーブに來たりはしないだろう……と、そこまで考えて、思い直す。

——いや……。

あるいはムウの云った通り、彼女がオーブにやって來たのは「プラント」からの特命を受けているからではなかったか？ ウズミの話にも上がった通り、彼女の父は現在の「プラント」を武断思想に纏め上げる強硬派のリーダーなのだ。そのような人物の娘

であれば、当然ザフトからの信任も厚く、まして彼女のパイロットとしての能力は、今のキラとも引けを取らないほどだ。

——その『力』が認められて…… “クレイドル” なんて新型を託されたのだとしたら……。

はじめから、ステラは自分達を騙して接近して来ているのかも知れない。しかし、そうなる——

『あいつは取り戻す——必ずな！』

まるで捨て台詞のように、すれ違ったアスランの言葉の説明がつかない。彼とは別に戦っていないのに、彼は何故か自分に対する圧倒的な敗北感を言葉に滲ませていた。そしてそれは、ステラが本心でこちらに就いたと思わせるような発言でもあった。

——ステラがオーブに来たのは……任務なのか、本心なのか……。

——どっちを信じればいいんだ……。

たしかに、このときのキラを混乱させるほどに、ステラの行動には一貫性がなかったと云えるだろう。

これはキラが知るところではないのだが、当来の彼女は、その予想どおり “フリーダム” 追討のたけに行動していた。そもそも “クレイドル” は追討任務のために父親から譲り受けたMSであり、仮にもラクスとの個人的接触がなければ、キラ本人との個人

的和解がなければ——今頃の彼女は「フリーダム」を『宿敵』として認知し、躊躇なく牙を剥いていたはずなのだから。

「はあ……」

気が付けば、キラは深く溜息をついていた。

——なんで、こんなにも動揺してらんだらう？

宇宙で離れ離れになったステラを取り戻そうと、キラは必死で手を伸ばした。それほど大切に思える存在がみずからの意思で自分の隣に帰って来てくれたと云うのに、なぜか素直に喜べていない自分がある。

(原因は……)

原因はきつと——ステラが戻って来たときに感じた、彼女自身の驚くべき『変化』であつたらう。

以前の彼女は、他人との交流を好まず、意図的に人を避けている印象があつた。その内向的な性格は、彼女の対人関係における臆病さに由来していた。

だからこそ、ステラは既に気を許していた特定の数人としか接触を持つとはしなかつたし、実際にその評価は正しい。ミリアリア達とは打ち解けるのが早かつた彼女だが、そんな彼女から自分から話しかけることができた人物など、キラやアスランを除けば、それこそ片指で数えられる程度しか存在しなかつた。

それでも、彼女は拿捕された先——ザフトというアウェイの中で、少しずつ変わって行つた。

慣れない環境に、見知らぬコーデイネイター達の集団——

ザフトは、さぞ人見知りで臆病な彼女には居心地が悪い場所であつたらう。けれど「アスランと一緒に居れば何とかなる」——漠然とそう考え、これまでどおりアスランに甘え、アスランに頼り切り、精神的に自閉していた彼女はしかし、その唯一のよすがをビクトリアで失つた。アスランがそれまでの人格を捨て、彼女にとつて近寄りがたい空気を醸し出し始めたためだ。

その結果、次第に彼女は——ニコルやイザーク、ディアッカやラウと云つた——これまでからすれば外野でしかなかつた人物達とも何となく接触を持つようになった。それはあくまで、社会の中で身を護つてゆくための自衛手段でしかなかつたかも知れないが——閉じ籠つていた殻の外に踏み出したという意味では、成長と云つて差し支えのない変化だ。

そういう経験が、彼女の中で自信になつていったのかも知れない……? こうして「アークエンジェル」に帰還した彼女は、より健全で、それでいて誰とでも臆面無く会話ができる無邪気さを体現したような存在になつていた。トールやミリアリアは「いい娘になつたよね」と、彼女の成長めいた変化をひとえに歡喜していたが、キラだけが、そ

うではなかった。なまじ彼女と親交が深かっただけ、ステラという人物像が頭の中に確立されている彼だからこそ、彼女のそうした変化に順応できず、今の彼女に激しいギャップを感じざるを得なかったのである。

——だからだろうか……？

キラは、ステラが誰かと睦まじげに会話をしていると、それだけで動揺するようになった。左胸の辺りが妙に苦しくなり、その感情は、彼女が男性と会話している時に、より顕著にキラの中に渦巻いた。

——たとえば、単純な云い方をすると、ステラは可愛い。

誰が見ても可愛いと思うのはキラの中で身内最良なフィルターが掛かっているからなのかも知れないが、少なくとも、どこかの芸能事務所に所属していても不思議ではない容姿をしている。それに加えて、今の彼女はかつて着用していた地球軍の薄紅色の制服に身を改め、肌の露出が先日よりも目立つようになった。露出と云っても下品なものではない、あくまでも控えめで、年齢に見合った可愛らしいの範疇に留まる加減のものだ。

骨盤より高めの位置で留められたベルトが双丘の膨らみを強調し、肩口から肘先まで切り開かれた両袖。そこから覗く、丸く小さな艶やかな肩。フリルスカートとニーハイブーツの隙間から覗くか細い腿が、異性達の目に眩しい。もうすっかり女の子としての

色香を纏ったその姿は、軍服だというのに、妙になまめかしく見える——いや、ここは男らしく、曲がりくどい云い方を避けよう。

——あの恰好は、絶妙にエロいのである。

ここ数日は過酷な状況を強いられ、精神的に疲弊しているであろう男性達がオアシスを求めるようにステラに近寄ってゆくと、ステラはそんな彼らが慇懃に浮かべる笑顔の下に隠した邪心など毛ほども察さず会話を返そうとするため、それを見かける度にキラは非常に心配な気分になる。ここでの心配というのは、保護者——そう、あくまで保護者としての心配だ。別にやましい意味ではない。多分、きつと、恐らく——

まあ、容姿は勿論だが、性格も同様だ。

ステラは、父性の裏付けであろう男の保護欲を駆り立てる幼子のような愛らしさを持っており、それはあざといなどという同性から嫌われる性質のものではなく、小動物のように神聖で純真なものである。ムウがだいぶ前に「あれは猫属性だな」と本人に失礼な表現で諷していたが、そのニュアンスが、今ならキラにも理解できる。確かに彼女は猫みたいだ。懐いた者に愛嬌があるのだが、心を許すまでまったく素っ気のないところとか、そっくりな気がする。

どうでもいいが、女の子の属性を一瞬で見抜いたムウさんは、やはり男としても先輩だと思った。女性に苦勞して来たタチなのだろう、尊敬する。あとでマリユーさんにチ

クってやろう。

今のステラは、例によって「懐いた対象」というのが、昔に比べ、圧倒的に増えただけ。

だとすれば、今の自分が抱いている、このもやもやとした感覚は——飼う猫が周囲にちやほやされて、なかなか猫に振り向いて貰えなくなつた飼い主のそれに、近いものがあるのではないだろうか？ ——考え付いて、キラはそう思つた自分がえげつなく失礼な発想をしていると思つた。が、それは自身が抱懐している感情を名状するには、最も有力な表現である気がした。

そうなのだ——キラは他のみんなが知らない、幼少期、七年間にも及ぶステラのことを知っている。

みんなが知らない彼女のことを、彼は知っていた。——しかし今、そのキラでさえ知らない彼女が『そこ』に現れたもので、イメージと異なつて当惑してしまうのだ。

——大体、ステラには、すこしくらい腹を立てても構わない気がする。

彼女の方から抱き着いて来たり、胸に手を当てさせたり、肩に頭を乗せて来たりと——冷静に考えれば、女の子としての自覚が完全に欠けているステラの行動に、これまでキラは大人しく付き合つて来た。

というか、よくよく考えれば、そういうのは常識的に恋人同士でしかやらないような

行為じゃないのか？ 彼女に一般常識を求めても仕方がないのかもしれないが、一連の行為に「その気はなかった」と云われても、納得できようものか？

女の子にとっては悪気がなくても、そういうのは男にとって大問題なのだ。絶対におかしい、理不尽だ。彼女のことを恋愛対象として見れないと自分が断言したことがあるなら構わないが、そんなこと一度でも云ったか？ いや云ってない。確かにアスランの兄妹である手前、いろいろと躊躇して温かい目で見守つて来たが、限度つてものはある。これでは、生殺しに耐えているただのお人好しだ。思春期つて言葉あまり舐めないで欲しい。

いささか情緒不安定になっているキラの中では、悶々とした感情が蓄積されて行つた。

そんな思春期の少年の葛藤など、露ほども理解できていないらしいステラは、いま、病院にいた。

そこにはニコルの姿もあり、彼は口を開いた。

「クサナギ」には、逃げ遅れたオーブの避難民が百数名、搭乗するようです」
戦災を逃れたオーブの避難民が、僅かながら「クサナギ」に搭乗予定だった。

その中には、子供——マユのような年少の者も少くはない。自分達の行く末を考えると、決して「クサナギ」は安全な場所ではない——が、このままオーブ本土に残ったところで、さして状況は変わらないということだろう。

宇宙へ発つ「クサナギ」は、中央の基部艦船と四つのサイドパーツのドッキングによつて形成され、菱形を取つたX字に近い構造をしている。中央部のみを往来させることで、移動の手間を省く効率的な造りをしており、親元が同じ「モルゲンレーテ」であることから、「アークエンジェル」と類似した内部構造を持つ、元々は「G」兵器開発支援のため「ヘリオポリス」への連絡用艦艇として運用されていたらしく——純粹な戦闘艦である「アークエンジェル」ほど豊富ではないが——多数の武装やモビルスーツ・デツキを持ち合わせ、避難民を収容できる広大な居住区と設備も搭載しているらしい。

「それで——彼女も宇宙へ？」

ニコルは、医療ベッドを挟んで向かい側に立つ、ステラへと問いかけた。

ステラは視線を落とし、ベッドの上で眠っている少女を見遣りながら返した。

「この娘も、コーディネイターだから。ここに残すわけには、行かないと思うから……」
宇宙へと出立する「クサナギ」艦内に、マユ・アスカを乗船させることをステラは強く求めていた。

先刻、ステラがウズミとの会合の場に居合わせなかつたのは、そのためである。彼女は「クサナギ」の責任者であるレドニル・キサカという男を捜し、マユを船に乗せて欲しいと直訴していたのだ。戦時においては否応なく、傷病者というものは優先順位が低く設定されがちなのだ。場合によっては同席する避難民の不安や恐怖を煽ったり、治療やリハビリのために余分な人員と経費を使うから。

それらのコストを鑑みれば、マユがオーブ本土に取り残され、置いて行かれる——という最悪の事態は視野に入れておくべきだった。考えたくもないことだが。

だからこそ、そうさせないために、ステラは狂奔した。

自分でも驚くくらいに、彼女はレドニル・キサカという男に対し、必死になってマユの乗船許可を懇願した。さいわい、キサカにその想いが通じたのか、単純に都合がついたのか——詳しいことまでは分からないが、眉ひとつ動かない石像然としたキサカは、彼女の希求に応じてくれた。

「ウズミ代表みずからオーブの陥落を断言された以上、この国は遠からず大西洋連邦に占拠されるでしょう。そうなれば、国に残されたコーデイネイターは真つ先に危険視されますもんね」

「でも、不本意なんだ。この子は、宇宙そらになんて上がりたくないかも知れないから」
そう。これはマユ・アスカ本人の意志を無視した——ステラの勝手だ。

ステラが連れて行かなければならないと思うから、そうしているだけで、マユ本人の意向を汲み取ったわけではない。もつとも、今現在は昏睡状態にある彼女から直接の訴えを貰うことなど不可能なのだが。

大西洋連邦の攻撃は、また、いつ再開されるとも分からず、自分達は宇宙へ発つ準備に追われている。その中で出来る最善と云えば、こうして彼女を「クサナギ」に乗船させることくらいだった。

「それでも、この子は幸せだと思います。あなたがいなければ、こうして「クサナギ」に乗船することさえ、難しかったかも知れないんですから」

根拠はない。ゆえに正しい意見ではなかったが、それは、ステラにとってありがたい言葉ではあった。

そうして、マユが眠るベッドの搬出作業をオーブの人間に任せたステラ達は、病院から出、*「アークエンジェル」*へと向かった。

ふたりはマユの今後を相談をしながら、話題は治療についての話まで発展し、歩調を揃えて廊下を歩いていった。

「医療技術は、地球よりも*「プラント」*の方が進んでいるのでしようね。ディアツカのお父上が治めるフェブラリウス市では、基礎医学や臨床医学、生化学、応用生体工学が著しく発展していますし——」

ステラは、怪訝な顔でニコルを見た。

「タッド・エルスマン。医学権威で、コーディネイターという種族の根幹を担う人材のひとりです」

コーディネイターは遺伝子操作の段階で、それまで「先天的な要素でしかない」と云われていた人間の容姿などを、自由に設定することができる。

一連の工程には発展した整形技術が必要とされ、間違いなく「プラント」の医学が進んでいる証拠だった。

「「プラント」の整形技術・再生技術は、きつとマユさんの足の治療にも役立つと思うのですが——この情勢ではとても……」

それこそ地球と「プラント」の対立が激化している今、「プラント」の入国管理も厳に行われているはずだ。いくらマユがコーディネイターであろうと、「プラント」にとっては素性も分からぬ少女であることに変わりはない。たとえ治療という名目があるれど、そんな人物を容易に入国させるなどあり得ないはずだ。

「医療つて云つても、薬の研究だったら、地球の方が進んでたりするんだよ」

「え、そうなんですか？」

「ステラもあんまり詳しくないけど、コーディネイターは身体が頑丈で、病弱な人が少ないから、わざわざ薬に頼る人は多くないんだって」

ステラは、嘘は云っていない。

コーディネイターは基礎免疫力が高く、大半が、生まれつき頑健な肉体を持って生まれて来るのである。

「それにザフトのひと、ステラを助けてくれなかったし」

「……はい？」

隴気だが、最新鋭の医療設備を整えていたであろうザフトの最新鋭艦 “ミネルバ” の中で、しかし、コーディネイターの医務官はステラの体を蝕んでいた薬物の解毒方法を何ひとつとして知り得なかった。例句「薬学ノウハウの研究に関しちや、我々よりナチュラルの方が遥かに進んでいる」と言い訳されたこともあり、当時の苦しい経験と相まって、ステラはあまりコーディネイターの薬学事情に優れた印象を持っていないのだ。

そもそも、病弱な人口が少ないという時点で “プラント” は薬物医療の利益不振が進んでいるのだろう。需要がなければ投資する人間も減少する——それは経済界において当然の傾向であり、研究資金が減れば、その分野の発展も比例して遅くなる。一方の地球では、薬物医療の需要は高く、“プラント” と比較すると薬学研究が進んでいる節がある。もつと云えば、そういった薬学医療の発達の畦道あぜみちとして、覚醒剤を用いた強化人間の研究が存在しているのだろう。

「地球連合軍が強化人間にこだわるのも、薬の研究が進んでるって、そういう背景があるからなんだろうね……」

「あなたが云うと、どう反応していいか分からないのですが……」

ニコルは、感心した。

ステラの云うとおり、地球軍が推し進める強化人間の精製というのも、見方によつては「薬物医学の発展」——その結実だ。

「……………」

気が付けば話題が強化人間に移り変わっており、ステラはそこで、そんな強化人間に変わり果てたひとりの少女のことを思い出した。

先の戦闘で戦った、黒き亡霊「レムレース」——そのパイロットを務めていた、フレイ・アルスターである。

——わたしは生まれ変わったのよ……あなたがそうだったように、エクステンデットに……………」

経緯は、どうであつたか分からない。しかし、一般のナチュラルでしかなかった彼女が「レムレース」を操縦するには、本当に強化人間に変わり果てるしか他に方法がない。

彼女は嘘は云っていないのだろう。みずからの体内に薬物を投与し、大切なものと引

き換えに、彼女は力を手に入れたのだ。

(でも……)

ステラには、わかることがひとつだけあった。

一度でも薬物を投与され、強化人間になつてしまつた者は、来た道を引き返すことも、突き進む道に迷うことも許されなくなる。ただひたすら、破滅という名の最終地点^{ゴール}へ走ることしか出来なくなり、また、許されなくなるといふこと。地球連合軍は、人間を強化人間を貶める方法を知つていても、強化人間を健康に戻す手段は知らない。いや、そもそも知る必要がないと感じているのではないか？ ——彼らにとつて強化人間などは、所詮は使い捨ての鉄砲玉でしかないのだから。

しかし、云い換えればそれは、研究してしまえばまだ可能性がある——ということではないだろうか？

(みんながその気になれば、治療法つて、何とかならないのかな)

医者ではないが、まして、自分は決して頭のよい人間だとは思つていない彼女に云えたことではないが、コーディネイターは知能が高く、ナチュラルは薬物ノウハウに対する知識が広い。ふたつの種族が協力し、互いに不足しているものを補い合い、強化人間を治療する研究を推し進めることが出来たなら——あるいは、すべての強化人間の未来を救うことだつて、不可能ではないはずだ。

まるで夢のような話だが、そんな研究が大成すれば、もう二度と、自分のように苦しい思いをする者はいなくなる。自分が味わったのと同じだけの苦しみを、フレイ——彼女に味合わせることもなくなるはずだ。

（エクステンデットの、治療——）

そう呟いたステラの頭に浮かんだのは、ひとりの男性の顔だった。

赤茶けた短髪に、太縁の眼鏡をかけた男性の名は、ハリー・ルイ・マーカット——以前ステラのことを治療してくれた、“アークエンジェル”の医務官だ。

（あのひと、どこにいるかなっ）

あの人ならば、エクステンデットをよく識る者として——これを治療する方法も分かるかもしれない。何より大西洋連邦の傲慢な研究者達と違って、彼には、いち医学者としての良心と矜持があったように思える。

——あの人に頼めば、エクステンデットを治療する研究だって、進めてくれるかもしれない……！

ステラはそう思い、ひとえに“アークエンジェル”を目指した。

数十分後——“アークエンジェル”艦内を捜し回ったステラだが、目当ての人物と再会することは出来なかった。医務室を訪れても、男の姿は見当たらない。誰もが宇宙へ飛び立つ準備をしている今、彼もまた、その作業に追われているのだろうか……？

そうして艦内を歩いて回る内、なにとなく格納庫を訪れたステラは、そこで、キラの姿を見つけた。

いや、キラだけではない……ステラを除いて、それぞれのパイロットが搭乗機の調整を行っているようで、“イージス”にはムウが、“ストライク”にはトールの姿が見えた。唯一チェックボードを抱え、すぐ鼻先に居たのがキラだったため、ステラは彼に声をかけていた。

「キラっ」

「……なに？」

が、ステラの姿を認めたキラの返事は、とても素っ気ないように感じた。返事というよりは、生返事のように——声に棘があったように思えたのは気のせいだろうか。

——きっとキラも忙しくって、ステラに構っている余裕、ないんだね……。

ステラはそう思って、いつも温和な親友の、妙に尖った態度に納得した。

「あのね。お医者さんの先生、どこにいるかな」

「ハリーさん……？ ハリーさんなら、もうこの艦ふねには居ないよ」

「えっ」

云われ、ステラはきよとんと目を丸くする。

「アラスカで転属になったらしいんだ——だから探しても、もういないよ」

「そう……なんだ」

「……何かあつたの？」

何か力になれるなら、なつてあげたい——それは、キラの良心から訊ね返された質問だった。

しかしステラは、首を横に振つた。

強化人間の治療方法をキラに相談しても、今は困らせるだけだ、と考えたのである。

実際、そこまではステラの良心なのだ——が、彼女はその後の伝え方が悪かつたらしい。

「なんでもない。他の人に相談するから」

その言葉を聞いて、キラは唐突に女の子に振られたような気分になる。もつとも、ステラとしては、

——この件は、他の医務官を頼るしかない。

そういう意図で答えたつもりなのだが、どうやら配慮が足らなかつたようだ。キラは少し驚いた顔を浮かべたのち、俯き、冠を曲げるように深い嘆息を吐いた。その口が小さく動き、低く、漏れるような声を紡ぐ。

「そう……。他の人、ね——」

云うと、キラはふいつとステラから視線をそらし、再びチェックボードに視線を落としてしまった。

（——あれ？）

ステラは、あまりに素っ気ないキラの態度に、流石に首を傾げた。

善意で云ったつもりが、ますますキラの不機嫌を買ってしまったらしい。その横顔はすこし膨れており、キラは昔から、こういうところが分かりやすいと思う。

しかしこのときばかりは、何が彼の不機嫌を買ったのかが分からなかった。——忙しくつて、気が立ってるのだろうか？

（出直そうかな……）

一度はそう思ったステラであったが、しかし、そこで大切なことを云い忘れていたことに気付く。

連合軍に就いたフレイ・アルスターは、たしか、キラにとつても面識のあった人物のはずだ。そんな彼女が、今は地球連合軍で戦っていること——キラにはあらかじめ知ってもらった方が良いだろう。

「あのね。ステラ、キラに云わなきゃいけないことがあるんだけど——」

「悪いけど……いま作業してるから、後にしてくれないかな」

「……………」

突き放すような云い方に、ただ、戸惑った。

キラはステラの方を見ようとせず、黙々と作業を続けている。その横暴な態度は、流石の彼女の気にも障った。

——キラのために、云ってるのに……。

なのに乱暴な云い方で遮られ、流石のステラも虫の居所が悪くなったのか、気色ばむ。声に不機嫌が混じり、つんとした横顔に云い返していた。

「…………ステラ、何かした…………!?!」

キラは、黙った。ボードを叩くその指が、ぴたりと止まる。そうして一拍置いてから、キラはステラの方を向き直し、口籠った。

そのときだ——ふたりの頭上、聳立する「ストライク」のハッチから、作業中のトールが姿を覗かせた。

「キラくつ、ちよつと助けてくれ〜」

緊迫感の欠片もない声が上がると、キラは数秒として、ステラに何か云いたげな顔を浮かべ、しかし結局、何も云わずに背後のトールへ振り返ってしまった。それがあまりに中途半端で投げやりな動作であったため、ステラの疑心を触発した。

——云いたいことがあるのに、有耶無耶にしてはぐらかすなんて、カツコ悪い…………!!

そのままキラが踵を返して立ち去ろうとするもので、ステラは思わず、その腕を掴み止めていた。

「まっつてっ」

だが――

「――！」

ステラが伸ばした手は、力任せに、振り払われた。

――ぱちん………！

いい音が、響いた。

キラは無意識――ほとんど無意識に、ステラの手を振り払っていた。思いのほか力の籠った動作には、ステラが目を瞑って怯んでしまう。

「……………」

呆然と立ち尽くすステラを見て、キラは、後悔していないと云えば嘘だった。空気が一瞬にして凍りつき、砕け散る。直上で見ていたツールも硬直し、なんだ……？ と眉を顰める。

ややあつてから。ステラは自分がキラに拒絶されたのだということ、そのときになつてようやく気付いた。唇を震わせ、そこから漏れた声も震え始める。

「な、んで」

——ステラが、何したの……。

眩きは声にはならず、親友から明確な“拒絶”を示された彼女は、腰を引き、数歩としてキラから退く。

「ご、ごめんっ」

流星のキラも、合わせる顔がない様子だ。

故意に手を振り払った、というより、身体が反射的に動いてしまった節が強かったが、そんなことは重要ではない。反省したところで、やって良いことと悪いことがあるのだから。

「そんなつもりじゃなかったんだ……ただ」

「……」

「ただ今のきみ……ちよつと信用できなくて……。まだ、ザフトの息がかかってるんじゃないか、とか——」

「……なんで……」

それは、やつとの思いで絞り出されたような声だった。

「ステラ……キラに云つたよねっ……！ ラクスと会つて、此処に来たつて……！」

それは任務などではない、本心から為したことだ。

「なのに——なんで疑われなきやいけないの……!?!」

その荒い声は、無骨な格納庫によく響いた。整備作業を行っていたムウやニコルがその声を耳に入れ、不審がつて、コクピットの外に顔を出す。ツールに至っては、もしかしてあの喧嘩、おれのせいか？ と云わんばかりに顔に疑問符を浮かべている。

彼等は、それぞれに地上にいるふたりの少年少女のことを見遣った。

キラは、大人げないことを云つちや駄目だと自覚していながら、一度でも爆発した感情を抑圧することができなかった。

「き、きみはザフトから来たんだろ……？ あの『グレイドル』だって、きつとお父さんにもでも預かったんだろ……？ それできみはオーブに来てさ！ ——確かに一度は僕を助けてくれた——でも……っ」

何を云つても、彼女を傷つけるだけだとわかっていながら、喉奥から沸騰して来る言葉を押し留めることができなかった。

「そんなことのために、あんな新型が、きみに手配されるわけないだろ……!？」
会話を聞いていたたムウは、ひとりでに「あつちやあ……」と額に手を当てた。忠告のつもりで放った自分の言葉が、どうやらキラの中では随分と悪い方向に受け止められたらしい。

その証拠に、キラの糾弾はほとんどムウからの受け売りであった。

「ッ……!」

ステラは、何も言い返せなかった。

しかし、何か云わなければならぬと思った。

云わなければ、キラの言葉が痛すぎて、壊れてしまうと思ったからだ。

「で、でもステラは……、オーブと一緒に戦おうっておもった……！」

「じゃあ云わせてもらおうけど——なんでさっきの戦闘、きみは出て来なかったの？

んで一緒に戦ってくれなかった……!？」

「で、出てったっ！ ステラ、戦ったよっ！」

感情のままに吐き出されたその言葉は、あまりにも冷静ではなかった。少年と少女らしい、あまりにも低次元すぎる主張の張り合いのように思えた。

ステラにとって、キラの糾弾はあまりに理不尽なものだ。

常に戦況が変化する戦場において、ひとつの戦線に固執する意義はない。だからステラが、常にキラの隣にいる理由はない。ましてや先のような防衛戦となれば、陣容が瓦解する前にいち早く疲弊した守備隊の掩護に向かうのは必要な行動なのだ——「クレイドル」のように強力なモビルスーツに乗っているのであれば、なおさらに。

——だからこそ、そんな言葉でステラを責めてはいけない。

——そして、責められる筋合いも、ステラにはないのだ。

その程度のこと、このときのキラもはつきりと自覚していた。自覚していたが、今の

それを黙っていられるほど冷静ではなかった。

(最低、だ)

その程度のことですテラを責めている自分は、なんて器の小さな人間なのだろう、とキラは嫌気が差した。

——どうして、こうなってしまう？

ステラを責めたかったわけではない。

ただ、自分の中で、ステラに理解して欲しいことが、すこしばかり増えていただけ。

すこしでも自分の気持ちを察して欲しいだけに、すこしでも彼女の役に立ちたかっただけに、たったそれだけの気持ちを、素直に伝えることができなくて——空回る。

——僕の気持ち……？　なんだっていうんだ……。

はぐらかすように口内に云うが、そんな自分に、キラは流石に往生際が悪いと感じた。これまで散々はぐらかして来たが——いい加減に自分の中に芽生え、再会したのを切片に、抑えられないほど溢れ出したその感情を自覚していた。

(好きなんだ——)

だからこそ、分かってもらいたいことばかりが増えて、悶々とした。

そんな不器用さが、相手への押しつけがましい糾弾になって、相手の気持ちを汲み取

るよりも先に、自分の都合で、自分の価値観や感情ばかりをぶつけるような形になってしまった。盲目になって、周りが見えなくなつて、自分ひとりで舞い上がつて、空回つて——却つて分かり合うことができなくて、焦つた挙句、気持ちばかりが沸騰してしまつた。

好きだから——？ そんな大層な理由をつけたところで、結局、相手を思いやることのできないのなら、それは最低な人間でしかないというのに。

「なんで、わかつてくれないの……っ」

それは、キラではなく、ステラが放つた言葉であつた。

それは、ふたりの間に長い沈黙が流れたために、痺れを切らして放たれた言葉であつた。

「……………キラのばかつ!!」

泣き出し、ステラはキラに背を向けると、格納庫を飛び出して行つてしまつた。

キラはくつと堪えた顔をして、しかし、追いかけることも出来ずに、ツールが待つ“ストライク”へと登つてゆく。

じりじりと自分の所に登つて来るキラを、まるでゾンビを見るように青ざめた目で見降ろしていたツールは、流石になんて声を掛ければ良いか分からなかつた。ガールフレンドのいるツールですら、フォローのひとつも云えないらしい。彼はまるで助けを求めるときのように、隣接する“ブリッツ”のニコルや、反対側の“イーグス”のムウへと顔

を交互させた。

が、ニコルは激しく困惑しており、どうやら充てにならない。彼はこの手の沙汰の問題に弱いのだろう。そんなニコルとは対照的にムウの方は大人だった。ツールに助けを求められ、彼は両肩を竦めて見せる。

(いいねえ、ワカモノは。ああいう喧嘩ができるつてのは、青春の醍醐味のひとつよ？
ちと甘酸っぱいけどな)

(なに悠長なこと云つてんです！ 年長者なんですから、あいつらの仲、取り持つてくださいよ——？ 年長者でしょう！)

(年長者とは!?)

ムウとツールは、アイコンタクトで会話していた。

Toolの云うこともわかる。流石のムウも、ふたりの仲違いの『原因』を作ったまま、彼等を放置するほど無神経でも無責任でもなかった。

——ていうかアイツ、いま「年長者」つて二回云つて強調しやがった。

微妙に腹立ったが、ムウは欧米人のように肩を竦め、*「イージス」*の調整を一旦取り辞めた。おもむろにラダーを使って地上へ降り、そうして彼は、格納庫から飛び出して行ったステラの足跡を追う。モビルスーツの整備は、確かに機体の搭乗者として当然の義務であろう——が、今はモビルスーツより、後輩っ子のメンタルの方がひどく傷つい

ているらしい。

「はあ」

嘆息つきながら、ムウは、自分が随分と甘いことをやろうとしていると自覚した。軍人だった頃——というのも奇妙な言い方だが、第七機動艦隊に帰属していた頃の自分なら、この程度の痴話喧嘩で精神的に立ち直れない後輩など、使い物にならないと切り捨てていたに違いない。

自分が甘くなっているのは、軍人ではなくなったせいだろうか？

それとも、この「アークエンジェル」が持つ、独特で柔らかな空気のせい？

(まあいつか、ひと肌脱いでやっても)

生憎「イーリス」などは、後から好きなかだけ自分好みにOSを調整できる。

正直、MS形態とMA形態を自在に選定できる「アイツ」は、自分にとって最高の機体だと自負している。

が、ついさつき飛び出して行った乙女の「心」は、それほど簡単ではないと見た。

あつちには鋼鉄で出来た「イーリス」と違って、硝子細工のワレモノだ。ひどくデリケートである以上、整備がしたいなら今しかない。破損する原因を作ったのは遠からず自分でもあるのだし、いい大人なら、責任くらい取ってやらねばなるまい。

「やれやれ、カウンセラーはガラじゃねえってのに」

——こんな無神経なお兄さんに、繊細な乙女の心が癒せると思うなよ？

ムウはツールへ不満げな目を返し、彼はムウを見下ろしながら「おっさんでしょう？」と目で口ほどに物を云った。

生意気な後輩め、後で一発殴ってやろう。

「こういう役どころは、マリユーの方が向いてるだろうに」

そんなことを思いながら、ムウは飄々と格納庫を出、姿の見えない少女の行方を追った。

“ストライク”のкокピッドの中は、葬儀場だった。

いや、正確に云えば、空気が葬儀場に流れる沈鬱なそれであったのである。まるで誰かがお亡くなりになった直後のように――。

キラは、淡々と“ストライク”のOS調整の作業を手伝ってくれた。

が、あまりにも無理をしていると親友のツールにはすぐわかったため、彼は髪の毛をむしやくしや掻き筆った。

「んああー！ もうツ、やめやめ！ キラもういいヤッ！」

キラはきよとんとし、トールはそんな彼に、怒るようにびしい！ と指を突きつける。「間が悪いのところに声かけて悪かったよっ！ でもさ、どうするんの、さっきのあれ——っ」

「——わからない……」

狭いが、防音性も高いコクピッドは、格好の相談所になると、トールはそこで思った。今度はミリイを連れ込もうかなと少年らしい邪心が頭をよぎったところで、今はそれどころではない、と慌てて自分を戒める。

「なんだよ？ ステラが変わったのが、そんなに気に入らないのか？ ——明るくなつて、いい変化だと思っただけど」

再会してから、キラのステラへの対応がぎこちない——

それは、トールとミリアリアの間ではよく交わされていた会話だった。

キラは俯きがちに話した。

「うん、分かる。トールの云う通りだつてことくらい、僕も分かっている。僕も喜ぶべきだと思ふんだ。みんなと同じように——けど、なんだか、それだけじゃなくなつて」

「……ははーん」

「……？」

「当てるやろうか。その分だけ、寂しいんだろ」

茶化すように云われ、キラはハツと顔を上げる。

虚を突かれた表情を浮かべるが、やはり、トールには敵わないと思つた。よく考えれば、トールにはミリアリアというガールフレンドがいて、そういう意味では、こういう場面に心強い何よりの存在だ。

それでこそ、彼等は親友であつた。

「で、でもつ、そんなこと云えないよ！ ……めんどくさいだろ、そういうやつ……」

「別に、それはやましい感情ではないと思うなあオレは。オレだつてミリイがサークルの男連中と仲良くしてるの見たら、ちよつと妬いたり複雑になつたりするぞ」

「や、トールたちは公認のカップルなんだから……その」

「まあねえ」

そこはフォローのひとつでも返してくれればいいのに、と思うが、こういう素直なところがトールらしくて、キラはむしろ肩の力が抜ける感じがした。

「それに僕は、フレイのこともあつたから……」

「……ああ」

「もう二度と、あんな風に女の子を傷つけないと思つてるんだ。……けどさ、やつぱり僕はああやつて自分勝手に、今度はステラまで傷つけた。……狭いやつなんだ」

キラにとって、ステラはある意味特別な存在である。幼少の頃は気が付けば傍にい

て、ふたりとも幼かったこともあって、無邪気に接することができていた。

——それがぎこちなくなってしまうのは、彼女を異性として見てしまうようになったから、なのか？

変わってしまったのは実は自分の方なのか？　そういう目でしか彼女を見れなくなっている自分は、やはり、やましい存在なのではないか？

本音を吐き出すようにして打ち明けたが、トールの答えは、バッサリしていた。

「——仕方なくね？　男だもん」

キラは、その俗物的な物言いに啞然とした。

しかし、それは悪い言葉ではなかった。所詮は俗物でしかない、彼らにとつては。

「ぶつけようがないもんだよ、そういうのって——誰も悪くないんだし。まあ、たまつてから爆発させようとする、ああいうことになつちやうけど」

「そういう、ものかな……」

「あの子にだって悪気はない。でも、悪気がない子に腹立てるとき、自分が小さくなつちやうもんなア」

云われ、キラはしばし考え込む。

「——とりあえず膝折つて謝る。それが男が非を自覚したときにやることだぜ？」

——そう、謝らなきゃいけない……。

それは分かっている。あれは自分が悪かった。ひとりで勝手に苛立つて、その悶々とした憤り彼女に押し付けてしまった。自分は未熟だ。すっかり甘えている。彼女は母親でもなければ、すべてを受け入れてくれるわけではないのだ。なのに甘えて、自分勝手に傷つけて……。

「最低なことをした、僕は」

「はい、そう思うなら男の方から謝ること。ほら行ってこい！」

バシツ、と背中を叩いてやったツールは、朗らかに笑った。

キラは気持ちに整理をつけ、わかった、と頷くように弱く笑った。

——が、そのときだ。

大西洋連邦の艦隊に、動きがあった。

ふたたび、戦闘が始まろうとしている。警報が鳴り響き、キラとツールは表情を一瞬で引き締めた。

「——ツ!?!」

宇宙へ発たねば、何も成し遂げることはできない。

そのためにも、この戦闘をなんとしても生き延びなければならぬ。

「こんな時に……ツ！」

そうして——
第三波となる大西洋連邦の攻撃が、再開された。

『鏡像に見る』 S

「どーですか、もろもろの準備は？」

オーブ領海、大西洋連邦旗艦、強襲揚陸艇 “パウエル” ——

陽気な口調で声を発したムルタ・アズラエルは、艦長のダーレスに問うていた。ダーレスは、如何にも堅物といった風な雰囲気を纏う軍人だ。彼は低く唸り、とても軍艦の——それも旗艦たる “パウエル” の管制室には馴染めない風采をしているアズラエルを見返した。その目には、すこしばかりの不平が滲んでいる。

「こちらの準備は間もなく整う。問題なのはそちらではないのかね？」

「おやア？ これは失礼、こっちも連中のお仕置きが終わったところでした。では、そうそうに攻撃再開と行きませうか」

ダーレスは、その『お仕置き』と称される強化人間達への “懲罰” がどういったものか知らないし、知りたいとも思わなかった。知ったところで、おそらく嫌悪巻を抱く質のものであろう、と予感という名の確信があったから。

彼はアズラエルから視線を外し、正面に目を向けた。ガラス越しに映る南国の島々——宝冠状に広がるオーブ連合首長国を見つめ、「しかし……」と続ける。

「二度の攻撃に渡つて陥^おとせなかつた国。この調子で、性懲りもなく第三波攻撃を続けるおつもりですか、あなたは？」

「二度の攻撃に渡つて陥とせなかつた国、だからですよ。これだけの戦力で攻め込んで制圧できなかった国なんて、アブナイたらありやしない。いつそのこと、消えて貰つた方が今後のためでしょう？」

とても一国の命運を語っているとは思えない軽々しい口調だが、すらすらと言葉が出て来るあたり、この男は本気でそう思っているのだろう。

結局のところ、アズラエルがそう云えば、ダーレスは従うしかないのである。本来であれば部外者であるアズラエルだが、彼の意向を全面的に仰ぐようダーレスには事前の上層部からの内示があった。艦隊総司令である自分の権限を差し置いて——それに命令できる立場の者など……いったいどういうものなのだ？

——地球連合軍の上層部は、こうもブルーコスモスとやらに呑み込まれているのか？それが、ダーレスの本音であった。このムルタ・アズラエルという男は、例の結社の盟主を務める男。そういう意味では、実質的に現在の地球連合軍を意のままにコントロールできる、頂点に立つ人物でもあるのだろう。

はあと嘆息つき、まあいい——と、ダーレスは憤る自分を嘔み殺した。結論から云つて、艦隊の総司令令であろうと、部隊の指揮官であろうと、一介の兵卒であろうと——上からの指示に従つて戦うのが自分達、軍人の責務なのだ。たとえ軟派で軽薄そうな部外者の男に生理的な嫌悪感を隠せずとも、その者の指示に従えと上に云われたのなら、従う他に道はない。

それきり、アズラエルは管制室を後にして、ロドニア研究所から支給されて来た秘蔵つ子達の許へ向かった。上々の素体でありながら、思い描いていた功績が挙げられない彼等に対し「キミたちには時間と金がかかつてるんですから、もつと頑張ってくださいヨ」——そういう文句のひとつでも云いに行こうと思つたのだが、道中で、白衣の軍医とばつたり遭遇する。

赤茶けた短髪に、太縁の眼鏡——ハリーだ。アズラエルはその男の姿を認め、ねつとりした口調で話す。

「もうじき攻撃が再開されますヨ。お嬢サンの調子はいかがですか?」
その指示語は、無論、フレイ・アルスターのことである。

ロドニアの研究所で解析し尽くされ、完成された「実用品」として届いたブーステツドマンの三名は、アズラエルと、そんな彼に付き従う研究員の管轄下にある。

だが、いまだ未解明な部分が多い臨床試験の強化人間——現在は『プロト・エクステ

ンデット』と仮称されるフレイ・アルスターに関しては、彼女の主治医メインドクターと監視官オブザーバーを兼任するハリー・ルイ・マーカットに一任されていた。ねっとりとした口調で返して見せた。ハリーはむっとりとした口調で返して見せた。

「調子も何も、今はぐっすり」と眠っているはずだ」

云われ、アズレルは虚を突かれた表情を浮かべる。

だが、それはすぐに「眠っている？ 何を馬鹿な」とでも言いたげに、呆けた表情に変わった。

「あら？ 間もなく戦闘が始まるというのに、それはいけませんね。早く叩き起こして下さい、モビルスーツ・デツキに向かってもらわないと——」

「それは、無理だよ」

「……はい？」

アズラエルの中で、時が止まった。

ハリーはため息をつき、むっとりとして言葉を……いや説明を続けた。

「出撃前には覚醒剤の投与。そして、帰投後には睡眠薬の摂取——彼女には、この習慣を絶対づけているんだ」

そう、それはフレイ・アルスターに見つかった最初の疾患の話である。

以前、ハリーは人間の脳はコンピュータと同じような仕組みであると説明していた。

フル稼働し続けなければいずれば熱暴走を引き起こすし、それをさせないためには、都度の冷却が必要であると。

プロト・エクステンデットであるフレイは、出撃前に特殊覚醒剤の投与を受けることで、ブーステッドマンよりも——理論的には——長時間の戦闘継続が可能になっている。それだけであれば強化人間としての汎用性の向上なのだが、その代償として、帰投後には出撃前の覚醒剤と対照にある、特殊睡眠薬の投与が不可欠とされた。

「先の戦闘から帰投して、睡眠薬を摂取させたばかりの彼女は、叩いても起きないよ——もつとも、無理に起こすものでもないしな」

帰投後のブーステッドマンが、薬効切れによって激痛に悶え回ると同じだろう。薬物によって肉体を強化するのは悪魔と取引すると殆ど同義であり、それについては必ず「代償」が存在する。

ここからは先は彼らの知るところではないが、正規のエクステンデットが出撃の度に「最適化装置」で催眠調整を前提としているため、そこから鑑みてもプロトタイプが催眠を必要としているのも正当な流れなのである。

「これらの要件は、以前にも説明したと思うのですが——その調子では、どうやら鵜呑みにされていたようですね」

ハリーは、嘘は云っていない。

実際、ハリーは「最適化装置」の代用品として開発された特殊な睡眠薬の錠瓶をフレイに手渡ししており、その場には、間違いなくアズラエルも同席していたのだから。

「つまり彼女は、連続での出撃は不可能という風に理解すれば宜しいので？」

「目覚めるまで再出撃を促せないだけだ、厳密には」

「ナルホド、東の間の眠り姫というわけだ」

アズラエルは、指手を顎に当てた。

それは何かを考え込む風な動作であつた。

「まあいいですよ、今回は見逃してさしあげます。今のところ「カラミティ」「レイダー」「フォビドゥン」の三機があれば不足ではありませんし」

「だから云つたのです。彼女を実戦に参入させるにはまだ早い——例の新薬が未解明である以上、まだ経過観察の段階であるのだと」

医者判断を後手に回したのは、確かにアズラエルの過失であつたかも知れない。

それが面白くないのか、アズラエルの目が一瞬、冷ややかなものになつた。ハリーのことを一瞥し、彼に責任をあてこするような淡白な言葉をぶつけた。

「なんにせよ、いつまでもぐーすか眠つていられたんじやこつちだつて困るんデス。叩き起こすのが無理だというのなら、せめて——その休眠時間とやらを短縮する改善策でも何でも、考えておいてください」

ぐーすかは、女の子の眠りに用いる表現ではないとハリーは思ったが。

「は……」

しぶしぶとして、その要求を承った。

そうして、フレイの再出撃は見送られた。見送られることに、なるはずだった。

時刻を改め、いま、第三波攻撃が再開されようとしている。アズラエルはふたたび管制室に戻り、ダーレスの指示の許、全部隊の進軍を開始された。どうやらオーブ軍は既にオノゴロ島を放棄し、前線をカグヤ島まで後退させているらしい。

カグヤ島——アズラエルがお目当ての「マストライバー」が建設された島の名だ。

「もう一息です、そろそろ決着と行きましょう。ボクも久々に、陸の上でお茶が飲みたいですしね」

誇らしげに云い、アズラエルは満悦に笑む。

オペレータが全戦闘員に発進を促し、この「パウエル」の中でも、ブーステッドマンの少年達が動き出した。ハッチが開くと同時に、勢いよく「フォビドゥン」が飛び出し、飛翔した「カラミティ」がMA形態となった「レイダー」の翼の上に飛び乗った。

と、出撃した三機がすべて出払ったとき、そこにオペレータの声が響いた。

「ブルームレース」——!? 発進許可は出ていないぞ、誰が乗っている!」

それは、焦りを含んだ声であった。

アズラエルは眉を顰め、どうしたんです? と事態の説明を求める。モニターの中には、紅眼が灯る「ブルームレース」の機影が映り、ダーレスが訝しげに云った。

「ブルームレース」が発進しようとしているようすな——。はて、今回あのモビルスーツの出撃は、パイロットの不調のため見送られたのではなかったのかね?」

「あららア? どういうことでしょうか、ボクにもさっぱり」

「——発進をやめさせろっ!」

そのとき管制室へ、ハリーが血相を変えて飛び出して来た。

廊下を走って来たのだろう。すっかり息切れを起こしている彼は、日頃の理知的な姿からは程遠い印象を受ける。アズラエルは片眉を顰め、そんな彼に問う。

「どういうことでしょうか?」

「発進待機中の「ブルームレース」にはフレイ・アルスターが乗っている——! あの子め、あれだけ云い聞かせておいた睡眠錠を飲んでいなかったようだ……。彼女は、先の戦闘から寝ていない!」

ハリーが彼女の部屋を訪れたとき、ベッドの上に、既に彼女の姿はなかったという。微睡みの中から目を覚めたのか? いや、違う——彼女はそもそも、睡眠薬を飲んで

いなかっただのだ。元より仮眠を摂らず、先の戦闘終了時から何の措置も取らず、そのまま「レムレース」へ乗り込んでいるらしい。

ハリーは血を吐くように荒い声を続けた。

「無理はするなど、あれだけ云っておいたのだが……!」

「おやおや。まあ、本人がやる気ならいいんじゃないですか？ 戦力が増えるならこつ

ちとしては大助かりですよ」

すると、通信機からフレイ自身の声が聞こえ、

「レムレース」で出ます……。いいですね？」

ハリーは、しゃにむに叫び返した。

「だめだフレイ！ きみには帰投後、必ず眠るように云っておいただろう？ きみは先

の戦闘から休眠していない——肉体が壊れてしまうぞ！」

そうでなくとも、彼女に投与した新薬は、いまだ未解明の部分が多い。

何が起こるか保証できない以上、経過観察の段階で、被験者が医師に指示された絶対習慣を破るなど、言語道断なのだ。

しかし、

「大丈夫です、何の不調もありませんから」

フレイは、譲ろうとはしなかった。

このときの彼女は、薬物の作用で攻撃性が増幅され、恣意的な興奮状態にあるのか、普段に比べすこし物分かりが悪くなっている印象があった。

——薬が彼女の冷静な判断力を飛ばしているのだ……！　これもまた、新薬の新たな改善点のひとつか……!?

ハリーは焦りながらも、そのとき瞬間的に、その要件を頭の中のレポートに冷静に書き留めた。

へ倒さなきゃいけない相手を見つけたの——あの白いモビルスーツだけは、絶対にわたしの手で引き裂いてやらなきゃ……ッ

フレイの目に浮かぶのは、白銀の翼を持ったモビルスーツだ。

そう——「クレイドル」とは、自分が決着をつけなくてはならない。パイロットがステラ・ルーシエであるとは分かった以上、それだけは絶対に、フレイの中で譲れない。

そんな焦りが——結果的に、こうして彼女を突き動かした。戦闘前の覚醒剤と、帰投後の睡眠薬の投与——ハリーに徹底された絶対習慣はフレイも確かに了承していたが、一度でも睡眠薬を飲んでしまえば、それから数時間の彼女は再起不能となっていただろう。

彼女はそれを理解していたからこそ、睡眠薬を飲まなかったのだ。眠ってしまったら、再攻撃ができなくなる——すなわち「クレイドル」と戦える絶好の機会を、自分から手

放すことになってしまおうと危惧して。

「ヘルメット軍団なんかよりも役に立ちます。だから行かせてください」

フレイの中では、ストライクダガー部隊はヘルメット軍団に見えるらしい。

「相当な自信があるようで……いいでしょう、ボクが許可します」

「アズラエル理事！」

「意識が高いのはいいことじゃないですか。彼女の方が、あなたよりも状況をよく理解していらつしやる——」

再出撃があるかも分からないのにみすみすパイロットを勝手に眠らせる医者よりも、再出撃に備え鋭気を研いでいた兵士の方が、アズラエルの目には遥かに賢く映った。

発進許可の下りた「レムレース」は、次の行動が早かった。

「レムレース」出ます——

通信が響き、ハッチから「テンペスト・ストライカー」を装備した暗黒の亡霊が飛び出して行ってしまった。

そうして——大西洋連邦の四機の「G」が、オーブへの第三波攻撃を開始したのだ。た。

警報が鳴り響くよりも前、格納庫から飛び出したステラは、展望室の床に蹲っていた。勿論、それはステラの本意であるはずがない。様々な不満と動揺を隠しきれていない彼女は、室内の隅に蹲り、自閉することではかみずからのストレスに対処する方法を知らなかったとも云えた。彼女がいま抱えるストレスというのは——他でもない。親友に「拒絶された」という、計り知れぬ喪失感。

掴んだ手を、乱暴に振り払われた。

いったい、何が原因だったのか、ステラには分からない。分からないからこそ、彼女は困惑し、動揺した。拳句の果てに、キラはステラのことを「信用できない」とまで放ったのだ——いや、ある意味ではそれも正しいのかも知れない。たしかにステラはザフトから赴いた立場にあつて、それが信用できないというのなら、仕方がないと割り切ることもできただろう。

——でも、それにしたつて、戦闘前に話したキラはやさしかった。

身を寄せたつて許してくれたし、表情も豊かで、顔だつてなぜか真つ赤にしていた。それがどうして一転して、ああも突つ慥慥にされなければならなかったのだろうか？ 孤独を感じ、ステラがぎゅつと肩を抱くと、そのとき、ひとつのおどけた声が降り注いで来た。

「見つけたぜ、子猫ちゃん？」

びくり。響いて来た声に、ステラの肩は震えた。精悍な声質、飄逸な口調、軽薄そうな台詞――

そのすべてが、奇妙なほど記憶に残っているように感じたから。

「ネオ……?」

ステラがおおずと顔を上げる――と、そこには男性がひとり立っていたのだが、ステラが予期した人物とは違っていた。見上げた先の男は、またか、と云わんばかりの呆れ顔をしていた。

「まーたその名前で呼ぶ……。オレはムウ・ラ・フラガだつて云つてるでしょうが」

「……フラガ?」

「そんなに似てんの? オレと、そのネオつて人は」

呆れを越し、いつそ感心した風な口調で云うムウであるが、ステラの方はふと、彼のファミリーネームを以前にも聞いたことがある気がした。

だが、ステラから見て最も気になることは、

(このひと、ネオじゃないんだ……?)

これほどまでに似ていると思えるのに、ムウがネオとは別の男性ということ。

たしかに、彼ことムウ・ラ・フラガは、ずっと「アークエンジェル」に乗艦している男性パイロットだ。元は大西洋連邦に所属していた軍人で、階級は大尉だったという。

ステラがザフトに行く前は「エグザス」に似たMA——「メビウス・ゼロ」を乗りこなし、ナチュラルでありながら、イザークやディアツカらとも渡り合ってみせた。

これは今の彼女になら共感できることであるが、件の「メビウス・ゼロ」のガンバレルは、彼女が乗る「クレイドル」に搭載されたドラグーンの先駆的な武装である。それをかつて、当たり前のように使いこなしていたムウは、ネオと一緒に、とても才気に溢れる人物なのだと思う。

経歴も、容姿も、能力も、声も雰囲気も物腰も——見れば見るほど、感じれば感じるほどに、ネオにそっくりではないか。

——ネオと思つたつて、仕方ないよね……？

どうでもいい話、あるいは因果関係が逆なのではないか？ ムウの方がネオに似ている——のではなく、ネオの方がムウに似ているのではないか？ 何しろ、ムウは地球軍の中でも『なんとかの鷹』と広報されている程の英雄で、そうであるなら、たとえばネオがムウのことを尊敬していて、ムウの真似事をしていたのではないか——

ネオのあの男らしくない長髪をばつさり切つて、紛らわしい黒の『仮面』を外させたら、その中からは手品みたいにムウが出て来そうな気がする——と、真実とは無縁の方向にばかり、このときは想像力を働かせたステラであった。

「……？」

そこまで考えたとき、ステラはさらに混乱することになる。

——波打った金色の長髪に、奇妙な仮面……？

それだけを云えば、ネオはムウではなくて、ラウにだつて似ている気がする。ムウにネオにラウ、あまりにも雰囲気の似た人が記憶中のそこらに浮かび上がり、ステラは困惑するばかりだ。

「——隣、いいか？」

訊ねられ、なんとなく断ることもできなかったので、ステラは小さく頷いた。

ムウはステラの隣に来て、同じように壁に身を寄せてしやがみ込んだ。

「こんなところで蹲つて、何してたんか？ みんな、きみのこと心配してたぜ？」

「……………」

ステラは、黙つた。

返事が返つて来ず、ムウは疲れたような顔になる。

(やつぱオレ、こういう役どころ向いてねえんだよな……)

判り切つていたことだが、純朴にして敏感でもある少女の心を慰めるのに、自分のような粗忽な男が遣わされるのは間違いだったのではないか。

少なからずムウはそう感じていたのだが、だいたい、花の青春時代を男臭い士官学校で過ごした自分に、青春っぽい少年少女の痴話喧嘩の仲裁ができるはずがないだろう。

どだい、ムウ・ラ・フラガの生い立ちには、ステラのそれと似て遠くない共通点がいくつか存在していた。

それは決して、幸福とは云い難い人生だ。

ムウはこう見えて資産家の御曹司であり、生まれたときは何不自由なく、裕福な家庭のお坊ちゃん、世間を知らない箱入り息子として育っていた。彼の場合は突然の『不幸』に見舞われて——それが如何なる内容の不幸なのか、ここでの言及は避けるが——結果的に敏腕パイロットとして、戦場に身を置く現在に至っている。

ステラもまた評議会議員を父に持ち、それこそ良家の令嬢と云つて相違ない身分に本来ならばあるはずだ。そして『不幸』に見舞われて、現在は戦場に身を置いている——そのことは、やはりムウの人生とも通ずるものがあるのだ。

だからこそ、ムウはステラという少女に対して、心から同調や同情を寄せることができる。

しかし、幼馴染みとの喧嘩に至っては、その限りではない。

幼少時代は母親の過保護の下で育てられてたムウには、親友と呼べるほどの友人はならず、その後は人間関係に殺伐とした軍事組織に入隊したこともあって、飄々とした性格とは裏腹に孤独な過去を持つ。であるから、ムウははつきり、この手の相談ごとを得手だとは云えない人物なのかも知れなかった。

まあ、誰にでも不得手というものはある——彼女との自然な会話ができないそうだと判断したムウは、いきなり本題に突っ込むのをやめ、あえて遠回りをしているこうと考えた。「……。きみは、よくオレのことをネオと呼ぶが」

「？」

「そのネオって人は——きみにとって、どんな人だったんだ？」

角の立たない、身の辺りの話題である。切り出せば、今度のステラは、その質問にしばし考え込む様子を見せてくれた。

——ステラにとっての……ネオ？

考えたこともなかった——というのが、ステラの本音だ。

地球軍によって日常的に記憶を調整されていた彼女は、気が付けばネオと一緒に居た。彼女にとってネオという存在は——他に頼るところがなかったと云う意味で——身近すぎる存在だった。しかし改めて間柄を訊かれると、適当な表現が見つからない。

「ネオは——お父さん、みたいで。友達、みたいで。ムウに、そっくりなひと」

「へえ」

「でも、心の底で何考えてるのか——分かんないひとだった」

プラスの評価が、唐突にマイナスへ変わり、ムウは怪訝な顔を浮かべた。一方でステ

ラは、表現を適切に選ぼうと思い、口を噤んでしまった。

「……………」

ステイングやアウル——みんなが、ネオの黒い仮面を「変だ」って喋っていた理由が、今なら分かる気がする。あんなものを普通に付けている人間は、普通ではないのだ。

——私とてこんな仮面、付けたくて付けているわけではないのだから……

同じく仮面を付けていたラウが、以前そのように云っていたように、ネオもまた、何らかの理由があつて仮面をつけていなければならなかった——とすれば。

(ラウも、ネオも、似てるのかな……)

ステラはみずからの胸に手をあてが、ポケットに仕舞われていている一枚のとある写真——その感触を確かめた。

そこには、アラスカでの出撃の際にラウから預かった写真が仕舞われていた。だが外には取り出さず、その感触だけを確かめたあと、俯きながら遠い目を浮かべる。

「ネオはね。ステラに優しくかったけど、仮面をつけて、自分を誤魔化してた人だよ」

ムウは、意表を突かれた顔になった。彼としては、てつきりネオと呼ばれる人物がステラの学校の先生か何かだと認識していたのである。それが違っているとすれば、彼女が地球連合軍に帰属していた頃、その当時の上官か何かなのだろうか……？

「仮面をつけて、自分を誤魔化してたっていうのは？」

「そのまんまの意味だよ。本当の自分とは違う——違う誰かになつていた」

その言葉に思う所があるようで、ムウは気づかされたように真剣な顔になる。

「ステラね、この艦に来て、ザフトにも行つて、いろんなことを知つて——思つたの。いま、みんな戦争をして、戦争の中じゃ、みんな自分に正直じゃいられないんだ、つてこと」

ステラはそのとき、これまで、彼女が出会つて来た人々の印象をそれぞれに手繰り寄せた。

——たとえば、アスラン。

彼は自分の中に正義を見つけ、生来の優しい人格を殺した。いや、殺したのか、それとも封じたのか——正確には分からないが、今の彼は父親の意向を汲み取り、それに付き従う優等生だ。本来の彼は、自分を騙してまで親友と戦いたくなかつたはずなのに——戦争の中で、彼は自分の中にあつた大切な気持ちを諦めてしまった。迷うことをやめ、自分がやりたかつたことを黙殺してしまった。

——たとえば、ラウ。

彼が仮面をつけているのは、みずからの忌々しい過去を捨てるためだと云つていた。でも、だつたら何故、過去の写真を大切に残していたのか？ 拳句それを自分では捨てられず、餞別としてステラに託したのは、忌々しいとされる過去に、彼自身、どこか未

練が残っているからではないか？ 大切な思い出を捨てたくても捨てきれない——そんな切ない気持ちがあるのではないのか？

——たとえば、ニコル。

彼は「プラント」を守るためにザフトに志願した。が、評議会によって決定される任務は、むしろ攻撃的なものばかり。野心のない彼は矛盾に悩み、自分なりに悩んだ結果、オーブと共に戦うことを決めた。

自分の想いを正直に貫くことは、ひよつとしたら意外と……そして、とても難しいことなのかも知れないのだ。

「誰もが自分が欲するものを手にすることができるなら、この世に戦争なんて起きないだろうからな」

「ネオもきつとね、自分に正直じゃいられなかつた人、だつたんだと思う。仮面をつけて、仮面の中に本当の自分がやりたいこと、思っていることを閉じ込めて——そうやって、自分を諦めちやつた人だつたんじゃないかな」

でなければ、もつと他人の目を見て——本音と本心で、本気の行動ができていたはずだと、ステラは今になって思う。

ネオ・ロアノークは、他人を信用するよりも前に、自分で自分を信用できていなかった。

だからこそ、仮面を着用しなければならなかったのではないか？ ネオは結局、ステラたちを使い捨ての鉄砲玉として使つてやる術しか知らず、また、そうすることしか許されていなかった。頭の中では割り切つていたにせよ、それでもステラたちに優しくしてくれたのは、彼の中で、何もできない自分に迷いがあつたのではないか？

本当の自分がやりたかつたことを嘔み殺してまで、ステラ達を戦わせることしか出来なかつた人物なのだとしたら、それは——とても悲しい人だつたと思う。

「仮面をつけて、自分を自分として生かすことを諦めちまつた人間——か」

このときムウは、そういつたステラの表現が、仮面をつけた人間を形容するに当たつて、自分の中でひどくしつくり来るような気がしてならなかつた。何故だろうか——ムウの感覚は、不思議とその表現に納得してしまつていた。

——納得？ なぜ？ いったい誰に……？

いや、日常的に仮面を装着している者など、そうそう居るものではない。であるならムウがこのとき納得したのは、みずからの宿敵であるラウ・ル・クルーゼに対し、ステラの表現が適切だと考えたからだろう。

(この子は、変わったな——)

率直な話、ムウがステラのことを信用してはならない——と考えていたのは、結局のところ、ムウ自身が彼女に対して、以前までのひどく未成熟な印象を持つていたからに

他ならない。未成熟、あるいは、未発達——と云つていい。

その吹けば飛んで行つてしまふような心が、悪意ある者に利用されている可能性もあつたから、それゆえに、ムウは彼女を信じるのは危険だとキラに告げた。

(だが、それは違つた。——いや、変わった?)

今の彼女は“アークエンジェル”に居た頃の自分も、ザフトに行つていた頃の自分も、経験として自分の糧としている。双方の軍勢に就いていた頃の自分を見つめ直し、その結果として、今の自分を形づくつていなのだ。

いつときの迷いでオーブへ来たわけではなく、自分にできること、やれること——自分を自分として生かす方法を諦めずに悩んだ結果、彼女は、このオーブの理念に同調することを望んだ。先の会合で云つていたように、融和による平和を望んだウズミなら、オーブの理念に同調することが出来る者は、誰だつてオーブの民と見なすだろう。

——そういう意味じゃ、この子は、とつくにオーブの戦士だった。

なのに自分は、彼女がザフトから来たという理由だけで、彼女を疑つてかかった。彼女を信用するのは軽率だと、説教までしてキラにまで不信感を伝播させ、彼を悩ませ、こうしてステラを傷つけた。

そんな自分が——情けない。

詰まらないしがらみに捕らわれて、オーブの理念を損なつていたのは、むしろ自分の

方だったのだ。これからオーブの未来を託されようとしていた者のひとりとして、恥じ入るはかりである。

「——きみは、強くなったな」

その呟きは、自然と口からこぼれていた。

ステラは驚いたように目を開いて、ムウの顔を覗き込んで来る。ムウは彼女と視線を合わせず、真つ直ぐ前を向いて言葉が続けた。

もはや、回り道をする必要はないと感じた。

ムウはこのときから本音を語り、自分の内を、彼女へと曝け出していった。

「すまんな……。正直おれも、まだ、きみのことを信用し切れてないところがあった。勿論それは、もうひとりの彼もだが……」

だが、今の彼女の話を聞けば、彼等を疑う必要など、どこにもないように感じた。

彼女ともうひとりの彼は、自分に正直に——いや、自分なりの決意を持って、このオーブと共に戦っているということが、自然と分かるような気がしたからだ。

「だが今はもう、とてもそうは思えない。悪かった——」

すると、ステラは俯いて、屈んだまま、膝の間に顔をうずめてしまった。

やや置いて、その奥からすすり泣くような音が聞こえ、ムウはぎよつとする。

「お、おい……。どうしたんだっ」

流石のムウも、対応の仕方が分からず、しどろもどろとするばかりだ。

——こういうときは、なんだ？ 肩のひとつでも抱いてやればいいのか？ って、それじゃ完全にセクハラか。

男の子ならばそうしてやろうとも思ったのだが、相手は女の子である。自分はやはり、こういうデリカシーに欠けているのだろうか？

——ていうか、なんで泣いてんだ？ おれなんか悪いこと云ったのか？

ムウは困惑して、声を発した。

「そ、そのだな——キラに余計なこと吹き込んだのは、おれなんだぜ？ こう云っちゃなんだが、あいつは悪くないというか……恨むならおれを恨んでくれていいというか……」

現状、恨まれても困るのが正直なところなのだが、ムウはそれを口に出せるほど凶々しくもなかった。

云うと、ステラはすこし落ち着きを取り戻したのか、おずおずと顔を上げる。

「ちがうの」

「えっ？」

彼女は目尻に流れた滴を拭って、柔らかに、遠い目を浮かべた。

「キラを恨んでるわけじゃない。でもね、怒って欲しかったわけでもない……」

ザフトから来た人間を、そう簡単に信用できないのは、きつと仕方がないことなのだろう。

キラだけではない、ムウでさえ今まで少し疑っていたというのだから、ステラもニコルも、まだ信用に足るだけのことは出来ていなかったなら——それはきつと、疑われても認めなければならぬことだ。

しかし、ステラはキラに対して、決してそういうことを求めていたわけではなかった。なぜなら、彼女が求めていたものは——

「ただ——『がんばったね』って。そう云って欲しかった、だけなのに」

あつ——。

——と、ムウの口から、自然に声が、こぼれた。

震えた声で伝えられ、ムウはなぜか、いい年して自分まで泣きそうになった。すつかり錆び付いていただろうと思っていた涙腺が、このときばかりはぎゅると緩んだ気がした。

そう、そうなのだ——この娘が親友キヲに求めていたのは、そんな彼から疑われることでも、怒られることでもない。もつと云えば、彼と表面的に慣れ合うことでもなかった。

彼女が求めていたのは、そういった行為や対応より、もつとずっと前にある、本当に小さなこと——。

『——頑張ったね』

『——今まで、辛かったね』

たったそれだけの——小さく、暖かな言葉。

彼女を認めてくれる——『肯定』^{ねがひ}の一言だったのだから。

(そう、か)

求めたものは、確かに、子供っぽいものかもしれない。

——だが、その分だけ純粹だ。

彼女はこれまで、自分と正しいと思ったことを、自分なりに行って来た。時には迷走し、苦悩し、葛藤したこともあったろう。だが、そのすべては純真で真摯な彼女なりに、悩んだ結果だった。

しかし何時^{いつ}だって——結末は、彼女に残酷だった。

彼女が独自に行動した結果、変えてしまった未来が、確かにある。

アスラン・ザラを豹変させ——、

フレイ・アルスターを強化人間に貶め——、

シン・アスカから両親を奪い、彼の大切な妹を傷つけた——。

まあ結論から云えば、それらはアスラン達がそれぞれに行動した結果であつて、淡白に云えばステラの知つたことではないし、要するに星と運と巡り合わせのに過ぎない。それゆえ、たとえ結果にどれだけの無念が残ろうと、それは一概にステラひとりを非難できる性質のものでもなければ、誰にも彼女を非難する資格などないのだ。

しかし、それでも、

——それは、ステラが引き起こしたんじゃないか……？

そう思う彼女の良心が、か弱い精神を逼迫した。

彼女の小さな心に、緊々^{ひしひし}と圧を掛けたのは、自分の行動が親愛なる者達を傷つけたと感じる後悔と、少女の身体に大きすぎる、圧倒的な責任感。

その激甚な『重さ』が——悪夢のように彼女を唸らせた。

華奢な背に負える重量ではないと知りながら、彼女はそれでも、たったひとりで重圧と戦つていた。

アスランに目を覚ますよう促し、フレイに説得を呼びかけ、マユの保護に尽力している——そうした一連の彼女の行動は、彼女自身が、すべてを「自分のせい」だと思ひ込んでいる証拠だ。

自分で蒔いた『種』ならば、自分の手で刈り取つていかなきゃ、みんなに迷惑がかかるからと。

挙句に彼女は、所属する軍勢を転々としており、意地の悪い者には「曖昧な裏切者」と揶揄されても言い返せない立場にあった。事実「リジエネレイト」と交戦した際、彼女はそのことを痛烈に批判されており、そうして向けられた後ろ指の数だけ、彼女は自分に自信をなくして行つた。

——また、ステラは間違つちやうんじやないか……？

——どんなに頑張つても、また、誰かを傷つけちやうんじやないか……？

余人には計り知れない過酷の中、何が正しいのか、自分のやっていることは本当に正しいのかどうかも分からない——そんな状態で、だからこそ彼女は、小さくとも自分を肯定してくれる誰かを探していた。

(それが、キラだったのか——)

ムウは、この純真な少女の性格が、改めてよく分かつた気がした。

好きだとか——

嫌いだとか——

そんな低俗的な表現では、云い表せないほどの『信賴』を——彼女はキラ・ヤマトに寄せていたのだ。

共に育ち、遊び、戦つた——そう、ステラにとつてキラ・ヤマトは『親友』だ。言葉にすると簡単だが、事実としては重すぎる。

だからこそ彼女は、無意識にキラに助けを求めた。

頼つた先がアスランでもシンでもなかったのは、キラだけが、必要なとき常に彼女の傍にいてくれた仲間であつたからだろう。幼少の頃も現在も、そして願わくばこれから——。

(それでもキラは、この子に労いの一言も、かけてやれなかつた)

直接の原因が誰にあるのかと思うと、間違ひなくムウ自身だろう。だからこそ、彼はこのとき深く反省した。

——ステラは、これからの未来に不安を憶えている……。

不確定で、不透明な未来。

それゆえに共に歩んでくれる存在を探し求め、その先にキラを見つけた。これまで通り、傍にいて欲しいという感情から——。

——その感情には、きつと名前を付けることは出来ないんだろう。不思議とムウは、そう思った。

自分のような俗物には、ステラがキラに寄せている高尚な感情はスケールが想像できないし、また畏れ多いとでもいうべきか、名状するのも憚られる。信頼や好意を大きく超越した『何か』——それが具体的に何なのかは分からないが、そもそも、具体的に云い表せるものでもない気がした。

「『今まで、辛かったんだな』——」

どこか飾ったように、ムウがそう云った。

ステラは、驚いたように顔を上げた。

そのままムウの顔まで視線を遣ったのだが——かけてくれた言葉とは裏腹に、その精悍な表情はコロツと一転して、すこしだけ朗らかな笑顔に変わった。

「——て、そう云ってやりたいのは山々だが」

ムウは、歯を見せて笑う。

顔を上げたステラの頭に、彼は優しく、ぽんと手を載せた。

「最初に『それ』を云うのは、俺じゃないよな」

そのまま小さく笑って、わしゃわしゃと頭を撫でてやる。

「ん……」

ステラは目を瞑り、手の感触を心地よさそうに受け入れた。生来、撫でられるのが嫌いではないのか、子猫のようにあどけない表情は、ごろごろと喉が鳴つても不思議ではないほど幸せそうだ。

ああ、やつぱこの娘は子猫ちゃんだなと、ムウは失礼ながら、不意にそう思った。

だが、その失礼はお互い様のものではあった。

なぜなら、ステラもまた（撫で方まで、ネオと一緒にだ）と、反射的にそう思っていた

のだから。

(でも、この人はムウ……)

ネオ・ロアノークとは違う、ムウ・ラ・フラガ。

——ステラに本音で話し、本気で向き合ってくれた人……。

——だからもう、ネオとは間違えたりはしない……。

ムウはそつと立ち上がり、云った。

「伝えてやればいいさ——その気持ち、キラに云やあ、きつと伝わる」

一概には、友情だ、恋情だ、と名状できない性質の感情。切り裂いては通り過ぎてゆく第三者の言葉で表すなんて、あまりに軽率な行為と思えるほどの。

だが、それらを大きく超越した信頼であることに変わりはないのだろう。

そこまで慕われておいて、キラがそれでも幼馴染みに納得できないというなら、同じ男として一発ぶん殴ってやりたいと思った。

「……………でも……………」

そこでステラは、自分の手を見下ろした。

それは先ほど振りほどかれた、右手だった。

「ステラ、ばかだし、ずれてるし、めんどくさいと思うから……また、キラに嫌われちゃうんじゃないかな」

ステラは、周りと比べてすこし……いや、かなりズレているのだろう——と、最近そう自覚するようになっていた。

何がどうズレているのか、そこまでは分からないが、

——ニブい、とでもいうんだろうか……？

そう。兎角、ステラは鈍いから。

だからステラは、キラが何に怒ったのかもよく分からないし、キラが度々に顔を真っ赤にする理由も分からない。そこまで面倒くさい女の子に、どうしてもう一度、手を出して来てくれるだろう？

ムウはげんなりと肩を落とした後、教えてやる。

「男なんて大概バカばつかなんだから。女の子のそーゆうのもひつくるめて、可愛いと思ってるもんなんだぜ？」

それは、いい男専用の台詞だった。

「かわ、いい……？ ステラ、可愛い……？」

「えっ」

心底意外そうに、すみれ色の円らな瞳が、訴えかけるようにきよろりとしてムウの顔を映した。その双眸は、自分が可愛いなどと生まれて此の方、一度も思ったことがない純粋な色を宿していた。

同時にムウは、その奇跡的に優れた直感力で、とあることを悟る。

——ああ、なるほど。これはジゴロだ……。

ステラはじいとムウを見つめ、問いかけた「可愛い？」の質問に対する返答を、尻尾を振って待っているようでもあった。

恐らく、この「子猫ちゃん」が餓えているのは、食べ物のお餌ではない——自分を褒めてくれる人だ。

自分を褒めてくれる人ならば、誰にだって懐いて行きそうなまでの危うさを感じる。まあ、流石にそこまでは杞憂だと思っただが——もの欲しそうな「子猫」に見つめられ、見上げられ、ムウは年甲斐もなく、たじたじだ。

「……まあ……。可愛いだろうか？ どう見ても」

最後の一言は自分でも余計だと思っただが、云うと、ステラはぱつと晴れた笑顔になり、ようやく立ち直ってくれたのだと思うと、ムウはほつと安堵する。

——なんとか、この場を切り抜けたようだ……。

だが、ムウが吐き出したその言葉に、返事をしたのは——ステラではなかった。

「ふーん？ やっぱ若い娘がいいわよねー？」

びしり。脇から響いて来た声に、ムウは背筋を硬直させた。

ぎりぎりと言を立て、ロボットのようになぎこちなくそちらに顔を向ければ、そこに、両腕を胸の前で組んだマリューが立っていた。その目はきつく半目になっており、顔全体に「男ってやつは」という手酷い軽蔑が滲んでいる。

——この場を切り抜け……次は、修羅場か……？

心の中で自嘲しながら、ムウは、全身の血がさあと引いて行く絶望感と悲壮感を憶えた。どうやら自分という男は、不可能は可能にできても、自分の星回りの悪さはどうにもできないらしい。

「あー……ちよつと、艦長さん……？ まさか、何か誤解していらつしやる……？」

「格納庫で、何かお角が立ったと聞いて——。状況が状況ですし、艦長として心配になって見に来てみれば……ふーん？ そうですか？ そういうことでしたか」

お角が立ってるのは、むしろあなたのご機嫌の方じゃないかな、というツツコミがムウの中に浮かんだが、口に出したら首を絞められそうなので云い出せなかった。

おおかた格納庫へ、心配したマリューが当時の様子を訊ねに来たとき、ツールあたりが告げ口したのだろう——キラたちが意思の疎通を上手く出来なかったこと。飛び出

して行つたステラを、ムウが捜しに行つたこと。
だが、

——こんな剽軽者オトコに、繊細で、うら若き乙女の相談役が務まるのか……？

トールの向こう見ず過ぎる人選に甚だ疑問を憶えたマリユは、彼女なりに心配して彼等を探しに来た。随分と探して回り、ムウの声が展望室から聞こえたもので、身を寄せて様子を窺つてみれば——アレである。

「随分と打ち解けているご様子なこと——少佐はいつたい、どのような魔法を使われたのでしょうか？ わたくしの機嫌を直す魔法も、是非とも使つていただきたいものですわ」

「や、ちよつと待つ——話をだな、聞いて——」

ムウは、恋人に浮気がばれた瞬間の男のように慌てた。

……いや、見方によつてはそれは完全に正しいのだが。

「艦長として あなたのような 頼もしい 乗組員がいて」

「ま、マリユーさん……？」

「わたくしは 誇りに 思いますわ それでは」

妙にぶつ切りな言葉を吐き出すと、つんとして背中を向けた彼女は、そのまま展望室から出て行つてしまった。

ムウの指は尾を引くようにマリユートの背を茫然と追う——が、出した手はすぐに引つ込め、両肩を竦めて見せる。その顔には大人の余裕（？）が浮かんでいた。

「——な……？ まあ、ああいうのも、可愛いとこじゃん？」

その可愛いと評した女性に後日どやされることを知る由もないムウは、朗らかに笑って云って見せる。

ステラは呆け、小首を傾げる。

——マリユートは、なんであんなにツンとしてたんだらう……？

相変わらず、その理由が、彼女には分からない。

（今度、いろいろ教えてもらおうかな……）

この艦には、マリユートもミアリアも、頼れる女のひと達がいる。

——ステラが周囲と、何がどう、ズレているのか……。

それは直さなきゃいけないものなのか、そうでないのかも含めて、教わる機会には恵まれているはずだから。

「——それじゃ、格納庫に戻るかい？」

「うんっ……」

ステラが云うと、ムウは手を差し出してくれた。ステラはその手を取り、ぐいっと引つ張り上げられるような形で立ち上がる。

——その拍子に、はらり、と何かが床に落ちた。

ステラがポケットにしまっていた、一枚の写真である。

ムウは「何か落ちたぞ?」と云つて、床に落ちたそれを、屈んで拾い上げようとした。

「——」

ムウの中で、時間が止まった。

屈んだその姿勢のまま、伸ばした指は、写真に触れることはなかった。

目の前に落ちた写真には、精悍な体格をした大人の男性と——そして、そんな男性と手を繋ぐ、ひとりの少年の鏡像が映っている。背は小さく、表情はあどけない。

逞しい男性の容姿は、天然の金髪——ムウと同じように……。

「おや、じ……っ?」

写真の中の大人の男性は、アル・ダ・フラガ——ムウの、実父に当たる男だ。

——なぜ?

なぜ彼女が、こんな写真を彼女が持っている……!?

——写真の中で親父と手を繋いでいる、この金髪の少年は……!?

ムウは愕然として、キツとステラの方を勢いよく振り向いた。

ステラはムウの機微などまるで斟酌できておらず、顔に疑問符を浮かべている。

「この写真」

どこで——？

そう訊こうとした質問は、吐き出されることはなかった。

時を同じくして、こちらもまた、艦内に警報が鳴り響いたからだ。

「——大西洋連邦かつ」

現在、彼等はオーブから宇宙へ飛び立つ用意をしていた。

MS形態での空中戦のできない「ストライク」「イージス」「ブリッツ」などは、この「アークエンジェル」の中で発進待機をするしかない。が——「クレイドル」と「フリーダム」は発進の掩護をすることができる。

ステラは血相を変え、すぐに格納庫へ向かおうとしている。

ムウは質問を諦め、拾い上げた気がかりな写真を、そのままステラへと返却してやった。

「……気を付けてな」

「うんっ……」

そうして、大西洋連邦の第三波攻撃が始まった。

『キャッチミー・イフ・ユーキャン』

慌ただしく時間が過ぎて行く。

大西洋連邦の動きを察知したオーブ軍は、速やかに最終行動を開始した。カグヤ宇宙港に最も近い仮設ドッグの中に首長達が集結し、彼等の希望——次世代の若者達を宇宙へと逃がすべく、一同が狂奔していた。

“アークエンジェル”の中でも、宇宙へ出発する準備が急ピッチで進められていた。両舷側部に大気圏離脱用の外部パーツがドッキングされ、キサカが説明的に声を発する。

“クサナギ”の予備ブースターを流用したのだが、パワーは充分だ。ローエングリオン斉射と同時に、ポジロトロニック・インターファイアランスを引き起こし、それでさらに加速する——

一方の“クサナギ”の船体はマストライバーに搭載され、こちらもまた同様に、大気圏離脱の手筈を整え始めていた。

「準備を急がせい、時間はそうないぞ！」

「アークエンジェル」は、予備ブースターの最終チェック作業中です！」

「クサナギ」の方はどうか？」

オーブの獅子、ウズミ・ナラ・アスハの怒号が響き、その傍らには、カガリ・ユラ・アスハの姿もあった。

「お父さま、脱出するならみなで！ 残してなどいけません！」

キサカやM1パイロットたち、首長や重役らを除いた他すべての者が「クサナギ」へと乗船している中で、カガリだけは此処に残ると云って聞かなかつた。無理もない——陥落するオーブの今後を考えれば、自国が滅ぶ責任と共に国土に残ると意を固めた彼女の父、ウズミがどのような仕打ちを受けることとなるのか、想像するに忍びないのである。

大西洋連邦もよもや、一国の代表を見つけ次第すぐに処断するようなことにはなるまいが、処罰が下されることは確実だろう。連合軍はオーブ国防軍の奮戦により二度の攻撃を防がれ、その中で失った兵士の数も多い。それだけの犠牲、ツケをオーブ政府に払わせようとするのは、想像するに容易い。

しよせん、勝てば官軍だ。

いくら理に叶わないと嘆こうが反論しようが、敗者の言葉は黙殺されるのが結末だ。

この状況では大西洋連邦が——勝者こそが歴史の中で正義として語られる。それが分

かっているからこそ、カガリは、この場に父を置いて行くことなどできない。

——たとえ故郷が異邦の者に踏みにじられようと、焼かれようと……。

ウズミ・ナラ・アスハは、これからのオーブの未来に必要な。そしてカガリにとつても不可欠な、愛する存在なのだから——。

大気圏内で空戦能力を持たない「ストライク」「イージス」「ブリッツ」の三機は、最終調整中の「アークエンジェル」の中に収容されている。

パイロット達にはこれと云つて出来る仕事がない、というのが実状だが、それでも万が一の事態に備え、ムウ、トール、ニコルの三名はそれぞれ搭乗機の中で待機していた。パイロットスーツに身を包み、いつでも機体を立ち上げられるように待ち構えている。狭い空間の中、たったひとりで鋭気を凝らすのにも限度があり、通信機の電源だけはオンになっていた。

三機のモビルスーツが相互に通信回線を接続し、三名の間では、ひとつの話題が持ち上がっていた。ムウが低い声色で云う。

『発進を掩護する』——か。あいつ、この土壇場で思い切ったことをする』

それは数刻前に、キラが残した言葉であった。

モニター越しのトールが、わずかに苦笑した。

「地球軍の新型 “G” 部隊を牽制しつつ、隙を見て発進する “クサナギ” と、マスドライバー上で合流しようだなんて……無茶ですよ」

「だが、誰かが人柱になってでもやらなきゃならないことだ。直援機のいない状態じゃ、艦は狙撃されるだけの——いいのだ」

そしてそれが出来るのは、大気圏内で単独での浮遊能力を持つ “フリーダム” と “クレイドル” に限られていた。

オーブに残った残存戦力がすべて “アークエンジェル” と “クサナギ” に搭載された今、最も懸念すべきなのは宇宙へ離脱するタイミングだ。ムウの云う通り、直掩機のない状態では、両艦は発進中途に敵部隊の集中砲火を浴び、狙撃され、進路を妨害される危険性がある。

そこでキラは、第一に発進する “アークエンジェル” を援護した後、第二にマスドライバーから射出される “クサナギ” と合流することで、ギリギリまで敵軍——例の新型 “G” 部隊の動きを牽制しようと云ったのだ。

「乾坤一擲——大勝負だな」

大気圏外に飛び立つためには。 “クサナギ” も凄まじい速度で発進する必要がある。

いくら機動力に優れた “フリーダム” と “クレイドル” といえど、その速度に追い縋

るの難しい。いや、追い縋る以前に、二機は平航してして船体に取りつかなければならぬのだから——余計に困難を極めるであろう、万が一にも、ふたりが敵部隊に誘い込まれ、逆に行動を牽制されてしまった場合、彼等は「クサナギ」との合流の機会を、たとえ一瞬でも、完全に失うことになる。

——そしてその一瞬が、あいつ等にとつて永遠の命取りになる……。

弾丸のように射出される「クサナギ」とはぐれた場合、彼等の運命は闇に葬られる。本土に残ると云つて聞かなかつた首長達と同様に、暗澹たる未来を迎え入れることになるだろう。

それを理解しているからこそ、トールは言葉を返した。

「特にステラは、そんな危険な作戦に参加させるべきじゃなかつたような」

トールが云い、ムウが「確かにな……」と返した。

あのふたり——キラとステラでは、置かれた立場が違い過ぎる。

連合に囚われた先、引き裂かれるように待ち受ける未来も——。

それは想像するに容易く、残酷だ。

そこまで考えてムウは、これではまるで、彼女の素性が初めて発覚したときの会話の再現だと思つた。

「これじゃ俺たちが、月基地に向かつていた頃に逆戻りですよ」

どうやら、ツールも同じことを考えていたらしい。

当時から、状況はまるで変わっていない。自分達は孤独な旅を続け始め、その中で、不思議な彼女と出会った。違っているのは、彼女の父——パトリック・ザラが議長の間で登り詰め、今の地球軍にとって、最も忌むべきコーデイネーターの指導者となったということ。

パトリックの娘を捕らえた大西洋連邦が、彼女をどのように利用しようと画策するのか——それは考えるまでもなかった。現在の大西洋連邦を牛耳っているのは、アラスカの査問会で「ステラを人質にするべきだった」と豪語し、前線で奮う兵士達を置き去りに「サイクロプス」を起爆させた不遜な輩だ。そんな連中にステラが拘束されるようなことになれば、まず間違いなく「ブランド」に対する脅迫手段——その極上の切り札として利用されることになるだろう。彼女が女性であることを考えれば、それ以上に何が起こっても不思議ではないが。

「それでも、この作戦には、彼女の方から志願したと聞きました」

「そうらしいな。キラは『駄目だ』と云って拒んだらしいが——」

「キラもさ、自分達が失敗したときの危険を分かっているし、だからあの子を作戦から遠ざけようと思わないかな」

「だろーうな……」

状況が、状況だ。

戦闘の最中に発進する「クサナギ」のボディに取り付くなど——はつきり云って博打に等しいこの作戦の成功率は、決して高いとは云え難い。

だからこそ彼女を駆り出すわけには行かないと、キラは自分なりに判断したのだから。

「——だが、どうにも、ステラの方が譲らなかつたらしい」

作戦の成功率が低いなら、なおのこと、キラをひとりで出撃させるわけには行かない——あの子なら、きっとそう考えるだろう。ムウには不思議と、それが分かる。

そのとき、トールの不満そうな顔がモニターに映った。

「なんです。あのふたり、まだぶつかり合ってますか」

「お互いを大事に思ってるからさ。だから余計にどうにもできなくて、苛立つんだよ」

トールの目に、不信の色が浮かんだ。

「ムウさん、ちゃんとステラをフォローしてやれたんですか？ 仲悪いままじゃ、ふたり揃って「クサナギ」に取り付くなんて難しいですよ」

「やったさ、こう見えてな」

「怪しいなあ……」

「相手を尊重する気持ちが却って裏目に出るのは、そう珍しいことじゃない。要は若い

んだよ」

そこへ、ニコルが俯きがちに云った。

「ステラさんは、まだ、自分が『キラ君に信用されてない』と考えているんだと思います——さつき、あんなことがあったばかりですし。だから余計に、肩に力が入るんじゃないですか?」

それは、彼女と同じ立場にあるニコルだからこそ理解してやれることなのだろう。

その言葉に、ムウとトールは真摯に聞き入った。

「僕らはけつきよく、ザフトから出向して来た身分です。皆さんにそう簡単に受け入れられるとは思ってませんし、オーブの方々からの信用を得るためには、オーブのためになることをやっていかなければならない——と、一方でそう感じているのは事実です」
それは、ひとつの意気込みでもあったが、ある種の強迫観念でもあった。

謙虚な物言いに對し、トールが朗らかに返す。

「でも、ニコルはよくやってくれてるよ! 実際、おれも助けられたしさつき」

「……それなんですよ、きつと。僕とステラさんの違いって」

「んっ?」

ムウは、ニコルが何を云おうとしているのかを察した。

「僕には、僕を歓迎してくれたあなたのような人がいる——だから『これからもっと頑張

ろう』と前向きに考えることができるんです」

「だが、あの子は違う。あいつはキラに手を伸ばして、その手を払われたんだ。今回の作戦だって、キラに一度、参加を拒まれてるんだぜ？」

「ええ……自分を受け入れてくれる人がいなかったら、僕だって『まだ足りないんだ、もつと頑張らなきゃ自分は全然ダメなんだ』って……後ろ向きになっちゃうものですよ」

友人に受け入れてもらったニコルと違い、ステラは親友に拒絶されている。どうにもそれは、キラの方に悪意があつてのことではなく、単に意思疎通が出来なかったから、らしいが……。

——自分を信用してもらつたためには、まだ足りない。

——もつと、頑張らなきゃいけない……。

間違つても器用とは云えない——そんな彼女が、心のどこかで、そう思っているとしたら？

「そういうのって、彼女の焦りにならないでしょうか……？」

「……………」

トールは、黙った。

ムウが、低く唸るように云った。

「あの子は確かに、生き急ぐ癖があるからな——」
彼がそう云うのには、理由があつた。

それは、ムウがステラと個人的に会話したときのこと——。

ムウは会話の中で、奇妙な直感に従うままに、ステラの癖を見抜いていた。

（あの子は、すべてを自分のせいだと思い込む癖がある——）

具体的に何をどう、とは云えないが、何もかも自分が悪い。

すべての責任が自分にあると思ひ込む癖、とても云うだろうか？ それこそが、ムウ

が彼女を「生き急いでいる」と形容した理由だった。

先刻、ステラと話した際の記憶が蘇る。そのとき彼女は、こんなことを云つた。

——かわ、いい？ ステラ、可愛い……？

——えっ

そのときムウは、ひどく驚き、彼女を顔を見下ろした。きよろりと見上げて来たその
双眸は、生まれて此の方、自分のことを可愛いなどと思つたことがない——そんな純粋
な色をしていた。

確かにムウは、そのとき純真な上目遣いで見つめられた照れ臭さから、彼女の姿に狼

狙えた。が、同時にそのとき彼女の深層心理の中に隠された、ある『ひとつの真実』を見抜いていた。それは彼自身の奇跡的な直感力が為せる業であったのかもしれないが……。

（自分の容姿に無頓着なのは、自分自身に無関心だから、じゃないのか……？）

そう。

ステラ・ルーシエは、あまりにも自分に無関心だ。常識的に考えて、度が過ぎるほどに。

（あの子が見ている世界には、そもそも『自分』が存在しない……）

自分自身への関心も、興味も、執着もない。だからどれだけ優れた容姿をしていても、自覚が持てない——普通の人間が当たり前に備えている感覚が、麻痺しているのだから。

そのくせ、人の役には立ちたい。人に迷惑をかけたくないという優しさは持っている。

あるいは、人の役に立つことでしか、自分の存在意義を見い出せていないのかもしれない。

（自分を可愛いと思ってもらいたい、自分を認めてもらいたいと願うのも——結局、自分が人の役に立っているかどうかを確認したいだけだ……自分のためじゃない）

——結局、他人が喜んでくれることをしたい。

可愛くなれば、どういうわけか主に男の人たちは喜んでくれるし、人の役に立てば、みんなが嬉しい顔をする。そういうことに一生懸命になる他に、自分を見つけないことのできないのだろう。

——その不安定な感覚が、他人のために自己犠牲を厭わない、痛ましい人格を形成してしまっている。

他人の幸せが、自分の幸せだというのなら、それは、あまりに不憫だ。しかし現実、彼女の中には、そもそも自分のために行動するという発想自体が生まれて来ない。

——それを「純真じゆんしん」と云えば間違つてはいないが、それにしても、度が過ぎていないだろうか？

要するに彼女は自尊感情が明らかに欠落しているのだが、それもこれも彼女が過去に持つ体験や境遇から来るものであつて、一概に彼女を糾弾できるものではなかった。彼女は「デストロイ」を以て北欧の三都市を壊滅させ、万単位の罪もない人間を灼き殺した過去を持つ。自分で自分を許していない原因はそこにあつて、なまじ素直な感性であつたがために、当時のことに計り知れぬ悔いと痛みを抱えているのだ。

まるで贖罪のように優先的に他者に尽くすのは、そう云つた遠因があるからであり、同時にそれは未来の出来事で、いまこのとき、何人にも同情してやれることではなかつ

た。

正確なことは、ムウにさえ分らない。分かるはずもない。

だが、自己犠牲なんてことを延々と続けていたら、いくら命があつても足りないし、それより前に、小さな心が持たないだろう。

彼女は、ロボットではない。

人間、もっと言えば、か弱い女の子でしかないのだから——。

ムウには、何が彼女をそんな風に変えたのかは分からない。

普通の人間なら持つていて当然の、人として大切な感覚が欠落している。

——自分の容姿に愚鈍なのは、そもそも自分に興味がないから……。

云い換えれば、著しく自己評価が低いのだろう。もともと、自分を価値ある人間だと思つていない傾向があるのではないか。

他ならぬ、大量破壊の戦犯として——数百万の無辜^{むこ}を地獄に葬つた残虐な殺戮者とし

て——

余人には底知れぬ自己否定が心の根底にあつて、それが彼女の人格——そのものを形作っている以上は、

「直せと云つて、簡単に直るものじゃないからな、それは……」

すべてをひとり背負い込もうとする癖——無辜のために、みずから犠牲にすることも厭わない覚悟。

これを正してやるためには、彼女に同情するだけでは足りない。

所詮、罪も穢れも、理屈では消えないのだ。彼女が抱えている責任のひとつひとつを、周りの人間が共有して行かねばならない。共有した上で、乗り越えて行かなければならない。

「……………」

後にして思えば、このときのムウは、無意識に何かを感じていたのかも知れない。何か、ステラの中にある不吉な予兆を肌を感じ取っていたのかも知れない。

と云つても、具体的に何が不吉なのかと問われても、嫌な感じがする、程度の答えしか出来なかつたであろうが、ムウが何か彼女の未来に懸念を抱いていたのは確かだ。そしてその奇妙な先見力こそ、フラガの血統に備わり、親から子へ継承された能力だと云われている。彼の父——アル・ダ・フラガはこの能力によつて莫大な資産を手に入れたのだ、と、かつて暮らしていた大屋敷の使用人の誰かが嘯いていた。

それでもムウは、そのように迷信的な発言を真に受けたことはなかつた。結局のところ、彼は遺伝的な特殊能力、という胡散臭い響きには好感が持てないし、そこに絶対的

な信頼と自信を置くわけにも行かなかつた。オカルトチックで、それでいて曖昧に過ぎないこの感覚に絶大な自信を持たれば、それは結局、人としての傲慢や自己陶醉に繋がるのではないか？ みずからを過信して破滅した父のように成り果てるのではないか？——と、ムウ自身、そうなってしまうことを幼少期の体験から無意識に忌避する傾向があつたからだ。

その点、確かにムウは父と違つて慎重しかつた。

しかし結論から云つて、この時は、この時ばかりは……ムウもこの奇妙な直感を信じるべきだと思つた。

「周りの人間が支えてやらなきゃ、いつか、あの子は壊れてしまう——心も、体も、な……」

ステラの中にある不吉な予兆を、もっと念を押して皆の者に共有するべきだと感じた。

ことが起こつた後になつて、どれだけの後悔を抱いても、結局は手遅れでしかないのだから——。

一方の屋外には、鋼鉄色のディアクティブモードで“フリーダム”と“クレイドル”

が隣接していた。

仮設ドッグの前で、搭乗者の二名は既にコックピットへ乗り込んでおり、ステラはザフトの曲面的なパイロットスーツから身を改め、連合軍のそれを着用していた。女性用の規格をしたそれは、桃色を基調とした、連合らしい角面的なデザインだ。色彩や形状が、以前「デストロイ」に搭乗していた時のパイロットスーツと似ているような気がしたが、あちらは特殊な肉体強化を施された強化人間専用の仕様であった。

久しいパイロットスーツの感覚に馴染もうと、ステラはひとり掌をグーパーと開閉していた。

そこへ、隣接する「フリーダム」から通信が入った。ステラは顔を上げ、モニターに映る、繊細そうな茶髪 of 少年を見遣る。

↑——その、ステラ……。本当に、無理はしないように〜
「……………」

ステラは、黙った。

キラは沈鬱そうな表情で、何から云い出せばいいか分からず、上っ面なことを云った。が、その内心は「どうやってステラに謝ればいいのかだろう」と、きつかけを見つけ出す手探りの状態にあった。そしてそれを搜しているから、おのずとつらつらと並べた言葉には中身が失われた。よそよそしく、それでいて事務的な言葉になってしまったのであ

る。

へきみは絶対に、連合の人達に捕まっちゃいけない立場にあるんだ……無理をして、
「ク
サナギ」とはぐれたりしたら、それこそ……」

キラは、通信越しに不安を隠せていなかった。

おどおどとした自信の無さは、ステラを信用してないのだと、彼女にそう思わせるには十分だった。逆に云えば、確かにキラはステラが作戦に失敗するかもしれないと疑っているから、こうして不安がっているのだろう。

それが、ステラには気に入らない。——大丈夫だって、何度も云ってるのに……。
「……ふんっ」

ステラは、そっぽを向いた。

へえっ

キラから漏れるような声が聞こえ、ステラはふーんとそっぽ向き、本人いわく最大限の不機嫌を装ったまま、云った。

「ステラを信用してないから、そういうこと云うんだ。ステラなんか、大して役に立たないって思ってるんだ」

キラは、見当違いと云わんばかりの顔をする。

へい、いや僕は、ただ君が心配で——

「——いいよ、ベツに。口で云ってだめなら、態度で示すだけだもん。ステラだつてキラの役に立つんだつてこと、戦つて見せてあげるだけだもん」

〈だ、だからっ……〉

キラは、その拗ねたような云い方に狼狽えた。

そしてやがて、怒り出した。

〈話の流れ聞いてた……!? 僕なんかのために、きみが無理する必要なんてどこにもないんだぞつ。僕はむしろ、きみが無事でいてくれればさ——!〉

このときキラは、本人も驚くほど思い切つたことを吐き出そうとしていた。にも関わらず、ステラはまるで聞かなかつた。

「——発進する。準備して」

そう云つて、*「クレイドル」*を飛び立たせた。

白銀のモビルスーツが勝手に空に上がつて行くのを認め、キラは毒づく。

〈ああもうツ！ 大丈夫かなあ〉

まるで自分の心配など、していないかのような云い方。

——ステラは、自分の危険を顧みない癖があるのかな……?

キラは不思議と、そう感じた。会話の流れで、先のことを謝ろうと思つていたキラであつたが、なんだかステラが妙に不機嫌なので、なかなか言い出せなかつた。いや、不

機嫌なのは仕方のないことなのかも知れないが……。

妙にツンとした態度を取られたような気がするが——

実際、自分がしたことはステラを怒らせるには十分だったろう。誰だつて乱雑に手を払われたら、いわれのない暴力を示されたら、不愉快にしかならない。

——だからステラは、怒っているんだ……。

キラは改めて、ひどく反省した。

“アークエンジェル”が、発進した。

空へ向かつて航行する白亜の大使が、加速と同時にローエン格林を照射する。虚空を切り裂くように広がった虹色の光が船体を包み込み、キサカの云っていたポジットロニックインターフェイス現象により、翼を得た天使は一気に宇宙へと飛び立ってゆく。

——と、そこへ地球連合軍の“G”部隊が姿を現した。

キラにとつては、見覚えのないモビルスーツが一機として参入していた。ダークブラックにモスグリーン——外観はおおよそ、先日交戦した“G”シリーズと遜色のないツートーンだ。よもや、後期GATシリーズの四機目だろうか？　しかしあんなモビル

スーツは、先日の戦闘では確認できなかったが……。

そのときキラは、ハツとした。

(もしかして先日は…… “アレ” だけが別行動を取っていた?)

そして、その予想は当たっていた。

発進した “フリーダム” と “クレイドル” の機影を認めると、キラにとつての “新型” はひとえに “クレイドル” を目指して攻撃を仕掛けて来た。まるで以前から “クレイドル” と面識があつたかのように。彼女に固執するように。

敵機に覗く紅蓮色のツインアイが、怒り狂う悪魔のように視覚させた。

(ステラは “アレ” と戦っていたのか——)

確信し、そうして、二機の “G” と四機の “G” が交戦状態に入る。

その隙をついて、完全に “アークエンジェル” は射程圏外へ加速し、軌道速度に達して宇宙へと離脱して行った。

——あとは、 “クサナギ” だけ……!

キラはビームライフルを撃ち掛け、敵部隊を牽制しつつ、即座に後退できるよう支度していた。ちらちらと不安げに “カグヤ” の発進口を確認するが、まだ “クサナギ” は射出されてはいない。——最終作業に手間どっているのだろうか?

気が付けば、自分達がマスドライバーから少し離れた位置に映っていることを自覚す

る。

(このまま誘い込まれるわけには行かない……)

キラの中の冷静な判断力が、通信機に声を発させていた。

「ステラ、準備するよ、深追いはいらぬ！」

通信機の電源は、相互にオンになっていた。

が、ステラからの返答は帰ってこなかった。

「……………!?!」

何ひとつ、声が返って来ない。キラは、悄然とした。

——ステラ……!?!

ハツとして顔を上げれば、視界に映った「クレイドル」は、まるで切り込むように敵部隊の中核へと飛び込んで行っていた。両盾のビーム砲を浴びせかけ、複数のモビルスーツを大きく牽制する。この突撃により、敵部隊の陣容が瓦解し、確かに「クレイドル」は、牽制役としての大きな役割を果たしていた。

——でも、無鉄砲すぎる……!

敵陣に切り込むということは、その分だけ敵の包囲を喰らうということでもある。

キラが「深追いはいらぬ」と叫んだ理由は、引き際を正しく判断するためだ。敵の包囲網に捕まれば、牽制するつもりが、逆にこちらが牽制されてしまう。そうして行動

を阻害されれば、自分達は完全に「クサナギ」との合流の機会を失う——「クサナギ」は待つてくれないのに！

刻一刻と流れゆく時間——。

その中で、いつ何時になつて「クサナギ」が発進されるかは分からない。分からない以上、いつでも準備を整えておかねばならないのに！

「ステラ！ お願いだ、返事をしてくれ！」

それは、じりじりと焦がれるキラの焦燥心が云わせた言葉であつた。

もたつているらしい「クサナギ」の発進が遅れたのは、カガリが、ウズミの許から離れようとしなかつたのが原因であつた。そんなカガリに業を煮やし、ついにウズミが動いた。

娘の腕を引き、なかば引きずるような形で連れ出したのである。

「お父様ツ！ 嫌ですツ、お父様が残るなら……！」

引つ張られたカガリは、なおも抵抗した。

が、父の力は、娘のそれよりも強かつた。

「我らには我らの役目、オマエにはオマエの役目があるツ！ 想いを継ぐ者なくば、す

べて終わりぞ！ なぜそれが判らんツ!?」

娘の無定見に業を煮やしながらも、発進口まで辿り着いたウズミは、場に待機していたキサカへとカガリの身を投げつけるように預けた。

「行けキサカ！ この馬鹿娘を頼むぞ！」

「……！ はっ……！」

キサカも万感の思いで、敬礼を返す。

カガリもここに来て観念したように、抵抗をやめた。両肩を背後からキサカに支えられ、涙ぐもった目でウズミを見上げる。すると一転して、ウズミの表情にも優しさが灯った。

「そんな顔をするな……『オーブの獅子』の娘が」

「で、でも……っ」

「父とは別れるが、お前は、決してひとりではない——」

ウズミは懐に手を入れ、そう云って、一枚の写真を取り出して見せた。小さな写真だった。

片手に納まるほどの大きさのそれには、ひとりの女性と、その腕に抱かれるふたりの赤子の姿が映っていた。見るからに、女性は二児の母と云った風であり——小さな写真に納まりきれない幸福、腕一杯に幸せを包むような表情をしていた。赤子たちの未来に

希望を馳せるような——暖かで、柔らかな笑みだ。

だが、カガリには差し出された写真の意味が分からなかった。分からなかったこそ、ウズミは言葉ことばを続けた。

「——きょうだいも、おる」

ふたりの赤子——茶色と金色の髪をしたそれぞれの顔立ちは、どことなく似ていた。カガリは疑うように、ひらりと写真を返す。

そこには——「K i r a C a g a l i」——と、確かにそう書かれていた。

えつ、という驚きは言葉にならず、カガリは目を見開いてウズミへと問う。が、父は何も云わずに、優しく微笑んだ。

彼は決して、多くは語らなかつた。

「そなたの父で————幸せであつたよ」

十六年、その月日に渡る想いを一言に宿して、ウズミはそう云つてカガリを見送つた。扉が——閉まる。

タラップが動き出すと同時に、「クサナギ」のハッチが親子を分かつ。

「お父様っ！」

遠ざかつていくキャットウォーク上で、愛しい父の姿が、どんどんと小さくなつてゆく。

全ての悲しみと、決意を乗せて戦艦クサナギは動き出す。

「——デビジョンC以外の全要員退去を確認。オールシステム・ゴー」

「ファイナル・ローンチ・シークエンス、スタート。ハウメアの祈りがあらんことを——」
 ささやかな祈りと共に、

「^{クサナギ}暁の車」が——動き出した。

カグヤ島を目の前にして、フレイ・アルスターは「レムレース」を駆り、蒼と白の翼を広げたモビルスーツ部隊と交戦していた。

見慣れたかつての乗艦——「アークエンジェル」の離脱を許し、辛酸を呑む。
 が、まあいいと、切り捨てるように彼女は気持ちを切り替えた。

——どうせ宇宙に上がったところで、何も出来やしないわ……。
 フレイの中では、その想いが強かったのである。

(そもそも何故、宇宙に上がったというの)

今の「アークエンジェル」は敵前逃亡艦として、地球連合軍に追われる身だ。その背景があつてオーブへと逃れていたはずなのに、その国からも離脱しようとは。

——いったい彼等はどこへ行き、そこで何をしようというの？

遠からず、オーブは陥落する。そこから旅立った根無し草の無法者に、何ができるといっただろう。大体——とフレイは思う。このオーブとかいう国そのものに、彼女は疑念を感じざるを得なかったのである。

——どうして地球圏のいち国家でありながら、コーディネイターを積極的に受け入れ
ている……？

コーディネイターの居住を許可し、その代償として、奴等の高度な能力を見返りに求める卑劣な国——

フレイがオーブに抱いている認識の程度など、所詮、そんな所である。

事実、オーブは軍事産業にコーディネイターの技術者を多く徴用し、技術開発では彼等が大きくリードしているのが実情だ。それゆえ地球圏において技術大国たり得ているが、その分だけ軍備を必要とする大西洋連邦との経済的な繋がりが強いのは、疑いようのない事実ではないか。『ヘリオポリス』において、共同体同士が連携して『G』を開発していた経緯からも自明だが、オーブは、経済の大部分を大西洋連邦への輸出で賄っていた節がある。

そんなオーブが、この大西洋連邦との関係を悪化させるということとは——同時に、彼等自身で国家の経済を破綻させたのと同義だ。市場を捨てた、と云い換えてもいいほどに。

——国民や経済を放棄して、何を最良の選択肢と呼ぶのか。

なんにせよ、オーブは「ブランド」と提携していない以上、制圧のためにアズラエルのような部外者の派兵だけで済んでいるのも、また事実だ。オーブが本格的に「ブランド」と手を組むような動きを見せれば、それこそ大西洋連邦は、総力を以てオーブを「敵」として判断して叩き潰しに来るだろう。

そうなれば、侵攻には容赦も慈悲もなく、戦後の対処も変わって来る。

結論から云うと、オーブはその積極的な中立の姿勢ゆえに、後日になって大西洋連邦の監視下に置かれるだけで済んだのだが、その点を云えば、確かにウズミ・ナラ・アスハたる人物の手腕には、政治家として長けたものがあるのかもしれない。まあ所詮、結果論だと云う者は云うのだろうが。

(まあ、いいわ——)

フレイは考えるのをやめ、先を急いだ。

目の前に展開する「クレイドル」に向けて、銃口を振り絞る。

「早く終わらせたいのよ……！」

フレイがそう云うのには、理由があつた。

(頭が、割れるように痛い……ッ)

それが薬の副作用による激痛だと、このときのフレイは、既に悟っていた。

ハリリーの云う通り、休眠措置もなく、戦場に出撃するには無理が祟ったようだった。出撃時の彼女は何の体調不良も感じなかったのだが、いざ戦場に出て、OSを制御しようとして頭を働かせた途端、いわれのない頭痛——それも激痛が、体中を駆け巡った。

それは肉体が休息を求め、全身の細胞が悲鳴を挙げたかのような激痛だった。彼女は今、頭痛に耐えながら戦っていた。

(この不安定さが、エクステンデッドだっというの……ッ！)

何かを考えようと頭を働かせるたび、薬理効果によつて活性化した脳が、悲鳴を上げるように痛みを生じさせる。

限界駆動を起こした全身の細胞が、疲弊の代償として、痛みを訴えているのだ。

「えええいッ！」

発狂、というほどでもないが、思い通りに身体を動かすことができず、フレイは暴れた。

目の前の白銀——「グレイドル」へと執拗に攻撃を仕掛ける。もう一機の蒼い翼の「フリーダム」——こちらも「レムレース」の兄弟機らしい——は、先ほどからビームライフルで牽制射撃ばかり仕掛けて来る。が、大した脅威でもなかったため、彼女は完全に無視していた。

そのとき——マスドライバーの発進口から、何かの勢いよく飛び出して来た。

それは弾丸のような速さで、轟音を上げながら、美しい放物線を描くマスドライバーの上を加速して滑走して来る。——「クサナギ」だ。

——二隻目……!?!?

フレイは目を見張り、その一瞬の動揺を突いて、目の前の「フリーダム」が転進した。そこから一拍置いて、「クレイドル」も何かを思い出したように転進して「フリーダム」の後に続く。

揃って背を見せられ、フレイはカッとなった。

「取り付く気……!?!」

ブーステッドマンの連中も、敵機に意図に気付いたらしい。

三機の「G」が、しやにむに砲門を開く。その照準先は——完全に行動の遅れていた「クレイドル」——ただ一機だ。

「行かせないッ!」

「レムレース」もまた砲門を開き、照準を「クレイドル」に固定した。

ステラ・ルーシエが我に帰ったのは、モニター越しのキラから、三度目の勧告があったときだった。気が付けば、マスドライバーから轟音が響いて来ており、モニターを拡

大すれば、すでに発進口から勢いよく「クサナギ」が飛び出して来ていた。

何故今まで気付かなかった？ ——と訊かれても、明確な答えなど出せなかつたであろうが、彼女の中に、この戦闘に対する焦りが滲んでいたのは確かだった。

——もつとみんなの役に立つことをしなきゃ、認めてもらえない……！

そのためにステラは、せめて「キラよりもいっぱい働いて見せる」という、見当違いな意気込みを抱いてしまっていた。それはある種の強迫観念となつて、彼女の心をはやませた。

いつでも転進できるよう「フリーダム」が牽制射撃に徹底していたのに対し、「クレイドル」は斬り込むように敵モバイルスーツ部隊の攪乱に回っていた。突撃も、追撃も、確かに今作戦においては重要な要素ではなかつた。だが彼女は、自分が活躍することではなく、キラに認めてもらう方法がないと思つていたのかも知れない。

そのためには、敵モバイルスーツ部隊と戦つて見せる他に方法がないと思つた。

——認めて、受け入れて欲しかつた。

切ない一念から、それは彼女が無意識に行つてしまった行動であつた。

キラから三度目の勧告があつたとき、既に「クサナギ」は加速をかけ、猛烈なスピードで線路上を滑走していた。

ステラが慌てて機体を転進させると、同じように「フリーダム」も転進した。だが、

そのとき彼女は、自機と「フリーダム」の間に明確なまでの距離が開いていることを自覚した。先行する「フリーダム」に対し、後続する「クレイドル」が、かなりの遅れを取っていたのである。

無理もない——これまでの戦闘においても、キラは射撃に専念し、ステラは無鉄砲にも切り込んでいたのだから。

通信先から、キラの必死の声が響く。

「ステラ！ 急いでくれッ！」

「……………」

激励され、ステラも急いで「クサナギ」に追い縋ろうとする。

が、そのとき、彼女の耳にけたたましい警報音が鳴り響いた。

——^{ロック}照準されている……!?

後方から追撃を仕掛けて来る「G」が、こちらに狙いを定めて来ているのである。

「くッ……」

「レムレース」からの砲火が、執拗に「クレイドル」を付け狙う。射線上のマストライバーを傷つけることを恐れてか、砲火は次々と曖昧な方向に逸れていくが、かと云つて、決して看過できるものでもなかった。

砲火をかわした「フリーダム」が、相対速度を合わせて「クサナギ」に取り付いた。

キラはしやにむに叫ぶ。

↑——手をツ!!↓

船体から張り出した箇所に機体を留めた“フリーダム”は、すぐに振り向いて“クレイドル”に腕を伸ばして来た。

鋼鉄の腕が伸び、遅れている“クレイドル”に手を差し伸べる。

次の、瞬間だった——。

「……………!?!」

その“手”を見——ステラが、ひくつと喉をならした。

呼応するかのように、次の瞬間には“クレイドル”が、ぎゅつと手を引っ込めていた。

白銀の巨軀は、それまで“クサナギ”に対して懸命に手を伸ばしていた——が、伸ばした先に“フリーダム”の掌が映り、少女の心を、強烈な既視感と恐怖が支配した。

「……………」

伸ばされた手、差し出された掌——!

——それは“フリーダム”の手……………!

——あれは、キラの手……………!?!

振りほどかれ、乱雑に払われた——ステラはそこで、先刻の恐怖を思い出した。

信じていたはずの親友に暴力を貰い、怯えた——。彼の手に触れて、拒絶されたのは、

たったさっきのことだというのに！

そんな彼女の機微に、まるで斟酌できなかつたキラは、純粹に不審な顔をした。

〈何してる!?! ほら、手を掴んで!!〉

「いやッ!!」

ステラは、拒絶するように叫ぶ。

一拍置いてから、キラはようやく、ハツとして自覚した。——自分が、酷く残酷な発言をしていたことを。

(あ……ッ)

次の瞬間には、自責していた。

大切な時に彼女の手を払っておいて、今更どんな顔をして、その手を差し出すと云うのだろう。

(あの子の手を振り払った僕に、手を差し伸べる資格なんて、ない……!?!)

「クレイドル」が手を引つ込めたのは、あのとときの体験が思い起こされるからだろう。ステラが伸ばして来た手を、キラは勝手に振り払った。拒否して、突っぱね返した。だから「フリーダム」の手も、信用できないのだ。

(また、振り払われるんじゃないかって、不安になって……!!)

しかし、それでも——

轟音を上げて滑走する「クサナギ」は、目に見えて加速をかけ、今や「クレイドル」すらも振り切ろうとしている。自分はいい——しかし、ステラは絶対に連合に捕まっちゃいけないというのに。

——今ここで、この瞬間ワンチャンスを逃せば……「クレイドル」は、絶対に取り付くことが出来ない！

「ギリギリと後れを取って行く」「クレイドル」は、なおも頑なに手を伸ばそうとはしない。

今は、なりふり構っていられる場合ではない——噴悶とし、彼はしゃにむに叫んでいた。

↑——受け止めるからッ!!↓

怒鳴り声は、通信先の少女を、恐怖から立ち返らせた。

「さっきのことは、謝るよ——でも、それでも！今は僕を信じて、手を伸ばして！」

「キラ……？」

「きみが辛いのも、哀しいのも……僕はぜんぶ受け止めるから！僕は……僕は君を信じてるからッ！」

「……………」

キラは、さらに続けた。

「君を、助けたいんだ——だから、手を伸ばせ!!」

そう、初めからそうだった——。

ずっと、この少女を守って行かなければならないと思った。

どちらかと云えば、守ってもらおう機会の方が多かったかも知れないが——ずっと前から、助けになりたいと思っていたのだ。

戦闘が始まる前——ムウには、彼女が打ち明けた話を聞いていた。ステラは自分に、彼女がして来たことをすこしでも認めて欲しかったのだと。すこしでも労って欲しかったのだと——。

それは親友だからこそ、彼女が自分に求めてくれたこと——。

ならば今は、それで十分だ。彼女はそれだけ自分のことを特別な目で見てくれていて、それなのに自分は、自分ではない「他の人に頼る」なんて云った彼女に嫉妬して、当たってしまった。すこしでも頼って欲しいという兄貴心に嫉妬が生まれ、彼女が本当に頼って来た時に、何ひとつとして応えてやれなかった。

自分は、情けなくて、狭量だった。

——後でちゃんと謝るんだ……! そのためにも、こんな所で、引き裂かれてたまる

かッ!!

全神経を指先に集中させ、キラは必死で手を伸ばす。

ステラもようやくやく、言葉に反応したのだろう—— “クレイドル” が、謙虚に腕を伸ばして来た。

息が詰まるような間の後、二機の指が、ふたりの手が、がちりと結ばれた。

それは “フリーダム” が、“クレイドル” を掴み止めた瞬間だった。

そうして “クレイドル” は、なかば抱き留めるような形で “フリーダム” に受け止められた。“クサナギ” に取り付き、ファーストステージの姉弟が至近距離で向き合った様は、微笑ましい光景でもあった。

「もう離さない……あのときみたいには——」

「キラっ……い——」

ステラはぱつと晴れた笑顔になって、“フリーダム” の面相を見据える。

—— やっぱりどこか憎たらしい顔だけど、パイロットがキラだって分かると、こんなに心強いものはない……!

ステラを、受け止めてくれた。

ステラを、受け入れてくれた——!

今の彼女には——その感覚が、このときは何よりも幸福だった。

“クレイドル”を抱きかかえた“フリーダム”は、次の瞬間“バラエーナ・プラズマ収束砲”を射撃し、これを追撃して来る四機の“G”の目前に着水させた。激しい水飛沫と水蒸気が上がり、四機の視界を数十秒として覆う。そして、その数十秒があれば十分だった。

“クサナギ”はなおも加速して、宇宙へ飛び立つて行く――。

成層圏から、宝冠状に広がるオーブ連合主張国を見護つて、ステラは小さく、機体を動かした。“クレイドル”が、身を任せるように“フリーダム”に寄りかかる。

「ありがとう――」

通信越しのキラは、頬をかいいた。

「う、うんっ……」

そうして“クサナギ”は、成層圏から離脱して行った。

その後、本土に取り残されたウズミ・ナラ・アスハの自決により、本土に巨大な爆発が起こった。

軍事産業社“モルゲンレーテ”や、マスドライバー“カグヤ”が自爆し、すべての責を負い、ウズミを筆頭とする首長達が決然とその命を絶つたとされる。

この後のオーブは大西洋連邦の監視下に置かれ、その中でオーブ五大氏族の一、セイラン家が力を増長させていくのだが、それはまた、後日の話——。

『ビクトリア・ロンド』

オーブ連合主張国は、大西洋連邦の占領下に入った。

結果だけで云えば、それは地球連合が求めていた現実。しかしそれは、彼らの本来の制圧目標であったマストドライブ“カグヤ”と、本来掌握できたであろうモルゲンレーテのファクトリーを自爆を伴った最悪の結末だ。

一報はすぐさま地球軍新司令部に入電された。司令部では直ちに計画の練り直しが必要で、大西洋連邦の首脳や将校達が議論を交わす。

「おのれウズミ・ナラ・アスハ！ よもや“カグヤ”と共に自決するとは、我々を虚仮にしておつて！」

「アズラエルの小僧もしてやられましたな。三度に渡つて侵攻を繰り返した挙句、この有様では……」

その声には、今この場にはいない人物に対する嘲りがいくつか混じっていた。

「悠長なことを云っておられますな！ “カグヤ”の自爆、これが如何に深刻な事態とであるのか、皆も既にお分かりのはずであらう！」

「ひとりの閣僚が立ち上がりながら発した怒声に、場の空気がいつそうとして引き締まる。

ザフトによる“オペレーション・ウロボロス”——それにより地球軍は地上のマスドライバー施設を次々に接収され、地上から宇宙へ進出するための足掛かりを失っていた。

マスドライバーは、平たく云えば宇宙へ発つための港である同時に、軍需物資の補給口、生命線でもある。これらがザフトによって断絶させられた状態が続けば、月面のプトレマイオス基地は早々に干上がることになるだろう。

だからこそ地球軍は早急にマスドライバーを奪い返す必要がある、オーブが保有していた“カグヤ”に目を付けたのだ。しかし、

「“カグヤ”が自爆した今、我々に残された道は——ひとつか？」
首脳のひとりが良い、将校が返す。

「“ギガフロート”はどうだ？ ジヤンク屋ギルドが我が物顔で占領しているあの施設——襲撃すれば、マスドライバーを強奪できぬこともないだろう」

「だが連合もザフトも、これまであの人工島の接収には失敗している。連中はあの施設を、どうあつても軍事利用させなんだ」

「ましてや監視衛星が使えぬ戦時下では、あの島はそう簡単に見つかるものではないぞ」

「……では次の制圧目標は、ビクトリアで決まりかね？」

物議を収束させるように、首脳のひとつりが重苦しい口調で完結させた。

それは確認事項というより、確定事項であった。決まりというより、他に選べる道が残されていないから。

「……ビクトリアか」

数ヶ月前、ビクトリア基地、ならびにマスドライバー「ハピリス」はジブラルタル基地から派兵されたザフト地上部隊によって占拠された。

その当時、ザフトは宇宙にて接收した「イージス」と「デイフェンド」を実戦投入し、守備軍はこれらの進撃を許したことで無力化され、国際法とは裏腹に、ビクトリア基地に駐留していた南アフリカ統一機構の兵士は塵殺されたとの報告もある。

そうした意味で、ビクトリアは彼らにとつて、紛れもなく悲劇の地である。もつとも、この場において一同が浚面を浮かべた理由はそれだけというわけではないが……

「あれに攻め入るとなれば、黒鉄クロガネの要塞——『デストロイ』との交戦は避けられぬぞ？」
最大にして最悪の懸念材料が、そこにはあった。

「ザフトに接收された『黒鉄の要塞』——今度は我らが攻め入る番というわけか？」
「損害を考えるだけで、頭が痛いな」

第二次ビクトリア攻防戦に導入された『デストロイ』——その円盤型のフライトユ

ニット——を、当時のザフトは破壊しなかった。いや、破壊できなかったというのが正確なのだが、だからこそ“イーゼス”と“デイフェンド”は、要塞を無力化させるだけに留め、これを攻略してみせたのである。

「今となつては破壊してくれていた方が、どれほど都合が良かったか——」

将校のひとりが呪うように考えるが、考えたところで仕方がない話だ。

結果的に“デストロイ”はほとんど無傷の状態でザフトに接收される破目になり、ザフトは“デストロイ”の軍需兵器としての希少性と、ビクトリア基地そのものの戦略的利用価値の高さから“砲台”を再利用しはじめたのだ。

「“デストロイ”が誇る力は、天災と同等です。正面から立ち向かったのでは、我々に壊滅的な被害が出る」

それは自分達が造り出した兵器に対する自画自賛であり、今となつては自嘲である。

「目には目を、天災と云うのなら、同じ“エクソリア”を對抗させれば良い。アレも元々は“デストロイ”から生まれたのだ、衝突させて、打ち負けることはあるまい？」

「それでは負けはなくとも、勝ちもないでしょう」

「破壊者と追放者——二機の特性上、互いに砲撃に徹し、陽電子リフレクターで弾き合うだけ。むしろバッテリー駆動の“エクソリア”の方が、いずれは不利になる」

この場で云う“デストロイ”は、火力プラントから動力を確保しているため、無尽蔵

にエネルギーを吐き出すことが可能だ。

「VPS装甲も陽電子リフレクターも、ビームサーベルに対しては致命的に脆弱だ。肝心の『エクソリア』は接近戦に対する自衛手段を持たぬから、アラスカで『蒼の天使』に、パナマで『赤の騎士』に破られたのです。お忘れか？」

会議は、なおも続いた。

「では、どう太刀打ちしようというのだね？ ザフトが行ったように『デストロイ』は破壊するのではなく、無力化すると？」

「ザフトはアラスカ以降の地上戦力の大半を失っている。残された兵力も、かなり疲弊していると聞く——強弩より射た矢が薄絹も破れぬ状態では、そうそう要塞の改修などに手は回らんよ」

「だが、パナマを陥とし、残された宇宙港がビクトリアに絞られた今、残存の防衛戦力を彼の基地に集結させている可能性は十分にあるだろう。攻略に当たって『ダガー』だけでは心許ないのではないかね？」

「ユーラシアに協力を求め、アズラエルの部隊を向かわせれば良い。どのみち、アズラエルは例の新型部隊——良いデモンストレーションもオーブではできなかつたと見える」

その言葉を聞いて、ひとりが思い出したように云った。

「そうだ、例の『デストロイ』から派生したモビルスーツは、何も『デイフェンド』と『

エクソリア”のみではないぞ——」

「ああ、RGX—00——いや、GAT—X444か……」

「蹂躪された破壊者の化身。ザフトから奪われた機体が、我々の力と融合し復讐のためにザフトを討つか。まさに“レムレース”——地獄の亡者そのものよ」

「——決まりだな」

一同の意見が、合致した。

「では、ビクトリアへ派兵する。第三次ビクトリア攻防戦を始めよう」

「マスドライバー“ハビリス”を、なんとしても奪還するのだ」

この発言が、後6月18日——

ビクトリアで始まる、闘争の輪舞の切欠となった。

オーブに対する三度の侵攻を以てしても、望んだ結末が得られなかったアズラエルは、そうしてビクトリアへと向かうことになった。向かうことになった、と云っても、それは上層部に命令されるまま嫌々で赴いているわけではなく、提示された作戦にアズラエル本人が興味を示したために、彼は部隊を連れてビクトリアへの指針を取ったのである

る。

アフリカへの到着には四日程の移動時間を要し、その間に、ユーラシア連邦を筆頭に第三次ビクトリア攻防戦の火蓋は切られた。ユーラシア連邦は「黒鉄の要塞」から放たれる砲火を警戒しつつ、侵攻を開始。広大なビクトリア湖を背景に、陽電子リフレクターを展開する要塞には疵ひとつ付けることが出来なかつたようだが、その一点を除けば、アラスカ以降のザフトは地上軍の弱体化が著しく、戦局は全体的に見て連合軍側に優位があつた。

ムルタ・アズラエルがアフリカ大陸を移動するのに搭乗したのは、ハンニバル級・地上戦艦「エドヴァルド」――

ザフトのレセツプス級の大型艦に相当し、艦内搭載のみならず、艦外にも多数のモビルスーツを露天係留させることが可能な地上艦である。中央部のドームには超広大な格納スペースを有し、実際に南アフリカにて回収された「黒鉄の巨人^{デストロイ}」は、この地上艦によつて移送された曰く付きだ。「エドヴァルド」には大西洋連邦のモビルスーツ――多数の「ストライクダガー」ほか「カラムィティ」「レイダー」「フォビドゥン」「レムレース」等――が係留され、パイロットと共にビクトリアへの移動を開始した。

世界最大の面積を誇るビクトリア湖を目前に、艦がグレート・リフト・バレーに差し掛かつた頃、アズラエルは格納庫にブーステッドマンの三人と、フレイ・アルスターを

ブリーフィングと称して招集していた。

「既に、ユーラシア所属のMS部隊がビクトリアで戦端を開いています。大西洋連邦のオシゴトはそこに合流して、彼らにご助力すること」

三名の少年達は、相も変わらず鬱陶しそうにアズラエルの話を聞いている——いや、果たしてそれは本当に聞いているのだろうか。彼等は思い々の方向に目を泳がせながら、ブリーフィングに参加しているというより、その場所にただ呼びつけられの居合わせている、といった風だ。

オルガ達の振る舞いは、誠実さとは対極に位置するものであったが、アズラエルはいまさら、そんなことで機嫌を損ねたりするような器ではないらしい。傍から見ればとても上司と部下には見えない彼らの関係は、その場に新たに加わることになったフレイカら見て、非常に度し難いものであったという。

「元々は大西洋連邦が保有していた『デストロイ』が、数ヶ月前にザフトの手に落ち、コーディネイター共に占拠されてしまいました。ヤツらがそうやって、要塞を我が物顔で運用しちゃうもんですから、ユーラシアのミナサマは、この三日間ひどく苦戦されているようでネ」

長々と説明を続けるアズラエルに痺れを切らしたのか、「御託はいいから、さつさと要件だけ云ってくれていいんだぜ、おっさん」「ですね?」「ウザイ」と、オルガ、クロト、

シヤニの少年達は、にべもない。

「おっさんって……おいくつなんですか？」すかさずフレイが問い、「お気になさらずに……」と、アズラエルは困惑気味に返した。みずから年齢を公言しなかつたあたり、意外とイイ歳いつてるのかも知れないと、フレイは思った。

「——まあ手短に云やあ、キミたちの『オシゴト』は馬鹿みたいに硬くって強力な要塞——
「デストロイ」を破壊すること」

改めて、地球連合軍はビクトリアに建設されている デストロイ を破壊を決定した。デストロイ に搭載されていた兵装データが解析され、すべての技術が ディフェンド エクソリア レムレース 以上の派生機に独自転用された今、固定砲台としてしか運用できない デストロイ などは、とうに不必要と判断されたのだ。

その決定に伴って、ブーステッドマン達とフレイには、その デストロイ の破壊任務が宛がわれた。

「ビクトリアに配備された デストロイ は、並の兵装じゃあ敵いません。陽電子リフレクターが射撃を跳ね返し、VPS装甲が物理攻撃も跳ね返します。攻略するには、より強力な熱量兵器——それも、ビームサーベルの類が必要デス」

ブーステッドマンの三人が、そこで顔を顰めた。

アズラエルはそれを察し、口早に続ける。

「知つての通り、＼フオビドウン＼」
 「レイダー」
 「カラミティ」には、そう云つた武装は搭載されていませんネ？」

アズラエルの云う通り、後期GATシリーズにはビームサーベルが搭載されていない。武装としては勿論強力なのだが、あれは電力消耗の観点から見れば最悪であり、そのエネルギーの無駄遣いっぷりから採用を見送られたのだ。

オルガが面白くなさそうに問う。

「おいおい、どーすんだよ」

「キミたちの三機は置いとくとしても、一方で＼レムレース＼にはラケルタ・ビームサーベルが搭載されてますからねネ。あの出力なら、陽電子リフレクターも破れるでしょう」

フレイが、目を開いて驚いた。

アズラエルは不敵に続ける。

「つまりキミたちのオシゴトは、アルスター嬢の乗っている＼レムレース＼を要塞まで送り届けること」

「なッ……!」

「オレたちが、こいつの御守りかよ!?!」

オルガが激昂し、そのまま、傍らのフレイを指さした。

続けざま、クロトが駄々を捏ねるように云う。

「フンツ、お断りだね！ ボクはボクで、やりたいようにやらせてもらおうよ！」

アズラエルは、少年達がこうした反応をすることを予期していたらしい、あまり困った様子を浮かべることがはなかった。むしろすんなりと受け入れ、やれやれと云わんばかりに両肩を竦めた。

「あー、まあ？ 前線には『ソードカラミティ』といった地球軍の新型が次々に投入されているワケなので、なにも『レムレース』が持つてるサーベル一本に拘る必要なんて、実はドコにもないんですヨ」

「アアン……？？」

「だからって、ユーラシアの連中を頼るんですかねエ、キミたちは？ 他力本願も構いませんが、オーブでの戦からこつち——正直ケチばっかついたまんまじゃあ、キミたちはまるでお話にならない」

それはオルガ達にとつて、突かれて痛い、これまでの失態であった。

アズラエルは残酷なまでの冷淡な口調で続ける。

「イイですか？ 強化人間キミたちひとりを作るのに我々こつちは多大な時間と金を賭けてるんだ。なのに碌な戦果があげられないようじゃ、こつちだって相応のお仕置きお仕置きを考えなきゃいけない——そこんところ、ちゃあんとわかつてますよネ？」

命令が脅迫に代わった瞬間、アズラエルの要求は鋭利な刃物のようにして少年達の喉元に突き付けられた。

「ちッ……！」

オルガは鬱陶しげに舌を打ち、一瞬、フレイのことを睨んだ。フレイはまるで動じなかったが。憎々しげな舌打ちが、作戦を承服した合図と受け取ったアズラエルは、さらに説明を続けた。

「なお、この戦闘には“ストライクダガー”の他に“ロングダガー”や“デュエルダガー”等、いくつかのバリエーション機が投入されています。どれもこれも実戦評価を行っていませんので、見慣れないからと云って、ドカドカ攻撃したりしないように」

「——“アレ”も、仲間？」

普段から底抜けに消極的ダウナーなシャニが、珍しく声を発した。前髪に隻眼が隠された——その顔は真っ直ぐに、格納庫の一角にある黒色のモビルスーツを注視していた。

関節部分を金色に光らせたMSだ。中世の騎士を思わせる甲冑が装甲を覆い、漆黒色の右腕に“レムレース”のものと酷似した複合兵装防盾トリケラスを装填している。角付きのモノアイは“G”兵器と酷似した意匠で、ディアクティブモードにも関わらずカラーリングが脱落していないのは、装甲がフェイズシフトではないからか。

背部に伸びた巨大な翼状の装備が特徴的で、全体的に禍々しさを持った外観は“レム

レース”を「亡霊」と喩えるなら、こちらは「邪神」と諷するところか。
「そうですねエ、そのようによく頼みますヨ」

そうしてアズラエルは、少年達に対する作戦の説明を終えた。

それぞれが蜘蛛の子を散らすようにアズラエルの許から去って行った頃になって、背後から、コツン、という高貴な靴音が響いた。

「あれが、噂の強化人間とやらか？」

声を発したのは、黒い長髪をした人物だ。身長は……190センチメートルを悠に越しているだろうか？ すらっとした長身はアズラエルから見て遥かに高く、彼はおのずと、その人物を見上げる形になってしまう。

その男は、アズラエルの協力者であった。男は高貴な、それでいて残忍そうな微笑を口元に浮かべている。

「ソキウスシリーズが撤廃された理由——ブーステッドマン。その戦闘力、如何様なるモノか、見物だな」

アズラエルは、斜に構えたように返す。

「関心するのも構いませんがネ——そもそも、ボクらが遙々こんなところまで足を延ばすハメになったのは、元はと云えば貴方の祖国おくにのせいでしょう」

「下賤なウズミのやりそうなことだ、勝手にマス・ドライバーと共に果てようとは……」

その声には、ウズミ・ナラ・アスハに対する、確かな嘲笑が混じっていた。アズラエルは返す。

「そんな時代錯誤の自己犠牲とやらのために、ボくらにとつちやビクトリアの制圧が必要不可欠になってしまった」

「いつ何時も、失敗したときのための保険は必要だ。オーブが、常にそう在り続けて来たようにな」

含みのある口調で、云う。

男の名は、ロンド・ギナ・サハク――

オーブに生まれ、オーブで育った男。コトー・サハクを義父に持つオーブ五大氏族の一、サハク家の現族長である。

「ほんとに厄介な国だねエ、オーブってのは。いったい何考えてんだカ？」

嘆息交じりにアズラエルが云い、ギナは、心外と云わんばかりにぴしやりと返した。

「勘繰られては困るな。厄介なのはオーブではなく、アスハなのだよ！ これまでのオーブは結局、ヤツの個人的な玩具に過ぎなかったのだ！」

ギナは、ウズミの姿勢を痛烈に批判した。それは死人の墓を突く云い方であったが、ギナにはまるで、躊躇がなかった。

話を持ち上がった彼を貶めること、蔑むことに、ギナは一切の抵抗を憶えなかった。

これまで執り行われて来たアスハ家の専横の日に辟易していたのか、放たれる言葉には、かなりの毒が含まれているようにアズラエルは感じた。もつとも、気付いたからと云つてそれを注意するような彼ではなかったが。故人ウズミ・ナラ・アスハを死ぬまで恨んでいるのは、アズラエルとて同じなのだから。

「なにせよ、ビクトリアを制圧するに当たつて協力を申し出て来たのはそちらからなん德斯。きちんと仕事はしていただかないと——ホントのホントに、ボクはオーブが嫌いになつちやいそうだ」

「対価に見合う働きはする」

ふん、と笑い、ギナは目前に据える漆黒のモビルスーツを見上げた。

彼の乗機——サハク家が開発した「アストレイ・ゴールドフレーム天^{アマツ}」を。

「賽は既に、投げられたのだよ」

“エドヴァルド”の艦体中心部にある大仰なドームには、巨大な——巨大すぎて、その全貌を捉えることも難しい大型MSが格納されていた。その名はGFAS—YF01 “エクソリア”——ブルーコスモスが掲げた『蒼き清浄なる世界のため』に、宇宙の

コーディネイターを“追放”するべく造り出された戦略的機動要塞である。大西洋連邦が戦争のために“これ”を導入するのは三度目だが、こうして“エドヴァルド”に係留されているのは、その三号機らしい。

キャットウォークの上、余りにも巨大なる巨悪の要塞の前に立ち、フレイは、このときひとりだけで考え込んでいた。

フレイをはじめ、多くの地球軍士官はこの三号機に誰が乗り込むのか知らされていない。知らされていないというのは、知らせる必要がない、と上層部が判断した結果だろうが、仮に誰が乗り込むのかわからずとも、どういった人物が乗り込むのかは想像するに難しくない。

(少なくとも、連合軍の正規兵でないことぐらいは、分かる——)

従来の量産型MSより、遙かに強力なパワーを発揮するMS群。後期GATシリーズもそうであるが、それよりもさらにOSや火器管制システムが複雑と化した“エクソリア”は、とても一般のナチュラルに制御できる代物ではない。

そして、そういう場面でこそ、大西洋連邦は都合のよい鉄砲玉として、強化人間を登用する。今回はオルガでもクロトでもシャニでも、ましてや自分でもない——まったく別の強化人間が、この“エクソリア”に搭乗するようであるが。

「……………」

フレイはふと、アラスカでの会話を思い出した。『JOSH—A』から避難する船舶の中で、サザーランドと言葉を交わしたときの記憶だ。

あのとき、一号機たる『エクソリア』に搭乗していた強化人間——名をジェイク・リーパーと云つたらうか？——は、あらかじめ『サイクロプス』と共に滅びることを上層部に確約されていた。そのときサザーランドが云い放つた言葉には、フレイもひどく驚かされた。

『乗っているのは死刑囚です。見殺しにしても感謝こそされ、恨み嘆く者はいやしません』

そこから判ずる「強化人間」なんてものは、所詮は軍人や研究者の一方的な理想を表す造語でしかない。彼らが受けている実際の扱いを鑑みれば、ブーステッドマンもエクステンデッドも、使い捨ての鉄砲玉も同然だ。不足した分は補充が利くし、使う側に都合が悪くなれば、遠慮なく切り捨てることができるような——

『碌な戦果が挙げられないようじゃ、こつちだつて相応のお仕置きを考えなきやいけな。そこんとこ、ちやあんとわかつてますよネ？』

アズラエル達が理想する「上々の戦果」を挙げられない強化兵士などは、はつきり登用する価値も存在する意味さえも認めては貰えない。

それはある意味、行き過ぎた成果主義と云える。自分達に比して明らかなる異能を持

つコーディネイター達への嫉妬が生んだ、ナチュラルたちの無意識の悪習だろうか。

(より完璧で完全な戦士として認められなければ、私達に人権はない——)

——その意味で考えたとき、果たして、自分という戦士はどのようなのだろうか？

たしかに、フレイはハリーが独自開発した新薬によって『プロト・エクステンデット』として製作された新型の生体CPUであるが、その実態は戦闘後に不可避の睡眠を摂取せざるを得ない条件下にある。先日オーブ侵攻戦の作戦終了後などは、睡眠によって半日ほどを無為に過ごしてしまったほどだ。それはつまり、たかだか数時間の作戦行動のために、おおよそ半日以上以上の休眠を避けられない体質——勿論、正常なパイロットであつてもひとつの作戦に対しては数時間の休養は必要だが、それにしたつて彼女の場合には制約が多く、ブーステッドマン達と比べた際には、やはり不自由な部分もある。

(ここにきて、私が『不足品』だ、なんて判断が下されたら——)

改めて考えてみれば、フレイは、ひどく微妙な位置に立っているのだ。

たとえばブーステッドマンの三人の少年達であるが、彼らは人格的に問題がないわけではなく、もとが繊細さを欠いているがゆえに隠密行動などには不向きといった「戦士としての欠点」は散見されるが、だからといって、問題点ばかりを残した欠陥品というわけでもない。インプラント手術を受けたことにより彼らが戦闘中に発揮する能力はじつに強大で、代償としての後遺症があつたとしても、それは戦闘直後の僅か数十分間

を激痛に悶え回る程度の話だ。勿論、長期運用的な観点から見れば不安は残るだろうが、少なくとも、実戦には十分に耐えうるレベルで完成はしているのである。

そんな彼らと比したとき——『プロト・エクステンデット』なるフレイは、いまだ試験段階にある未完成品だ。

薬物強化により、たしかに彼女は“レムレース”を操縦できるまでに至っている。だが代償として、彼女は戦闘を重ねる度に眠り姫となり、深い昏睡状態に陥る必要がある。その弊害で作戦終了後の身体検査や経過観察にもまともに参加できないこともあって、大西洋連邦の研究者は、自室に戻って死んだように眠る彼女を面白がって、

——『リビングゲデッド』

生きながらにして、死んだように眠る女と皮肉を込めて、このように陰口を叩いているらしいのだ。

(どうせ『プロト・エクステンデット』なんてコードネームをいちいち呼ぶのが面倒臭くなって、そう名付けに過ぎないんだろうけど)

生きた屍のような表現で後ろ指を差され、フレイが愉快に感じるはずもないというのに。

「……………」

感傷に浸っていたフレイであったが、ふと、キャットウォークの背後の方に人の気配

を感じ、思慮をやめた。ゆっくりと振り返ると、そこには、先ほどブリーフィングで別れたばかりのオルガ・サブナツクの姿があった。彼はフレイを睨むような、もしくは値踏みでもするかのような、伺えない目の色をしていた。

だが、確実に自分に対して何か思うところがあるのだろう。それだけは空気感から分かったので、フレイは「……なにか用？」と、相手の方に会話のボールを投げてやった。「オマエ、随分とアズラエルのおっさんに気に入られているようだが——」

「気に入られている？ どこをどう見たら、そういう判断ができるのかしら？」

「オレたち三人が、揃いも揃って、オマエなんかの御守りに遣わされる時点で、だ」

「あんだ、目が節穴ね」

それとも頭が弱いのかしら、とフレイはなおも挑発的に言葉を紡ぐ。

彼女よりも年上であろうオルガの肩間に血管が浮いても、彼女は躊躇しなかった。

「アズラエルが期待しているのは私じゃないわ。——『レムレース』の方よ」

フレイは、自分が嘘は云っていないと思った。

アズラエルは『レムレース』の性能を評価することは多々あるが、かと云ってフレイ本人を評価したことはまだまだ多くない。たしかにシミュレーションの頃はおべつかを遣われた記憶もあるが、実際のオーブの戦場で目ぼしい戦果を挙げられなかったフレイに、今まで、アズラエルは一言も呈さなかったのだ。賞賛も、激励も、苦言も、何ひと

つとして。それがフレイにとって、圧力になったのは云うまでもないが。

——あの男は結局、まだ、わたしのことを試している段階にある……。

他ならぬフレイ自身が、冷静にそう考えているのに対して、オルガの認識は違っていたらしい。

「どんな手法であのおっさんに近づいたのか知らねエけどな——オレ達には、オマエが目障りなんだよ」

「……」

このときのオルガは、なぜ自分が、ここのも不機嫌になっているのか理由が分からなかった。

そもそもの話、ブーステッドマンの少年達は他人の存在に注意を払っているほど繊細な性格をしていない。たとえば世間一般の尺度ものさしで云えば、オルガにとってクロトとシヤニは『仲間』と呼ぶべき隣人だ。が、オルガはソイツらがどーなろうと知ったことではないし、仮に隣人が戦場で死んだとして、特別に胸を痛めたりはしないだろう。オルガが唯一、他人の存在に注意を払うとき——それは、そいつの存在が彼にとっての不都合を生むときだけだ。

（——この女は、オレにとって不都合だというのか？）

自問し、いや、その通りだろう……と自覚する。アズラエルの興味と関心、そして観

察の目は、すでに自分達ブリストッドマンからこの女に移り始めている。そうではないか？ どういう経緯があったのかは知らないが、この女には「カラミティ」をも上回る高性能MSが与えられ、あつという間に戦闘作戦の中核が任された。一方で自分達には護衛役が指示され、率直に云って「引き立て役」を演じろと云う。

役割がそうである以上、次回の作戦は、どれだけ自分達が戦功を挙げようと、手柄はすべてこの女に取られるのだろう。そしてそれは「新型の強化人間の実績」として喧伝され、旧式であるブリストッドマンの価値を下げる判断材料にもなってしまう。需要のなくなった自分達は、段々と「用済み」のレッテルを張られてゆく——つまりフレイの存在は、オルガにとって損を招く、疫病神以外の何者でもないのである。

「わたしがアズラエルに、色仕掛けで取り入ったとでも？」

「それは重要じゃねえ。オマエは環境と搭乗機のりものに恵まれたってだけだ、あんま調子に乗るんじゃないねエ」

「つれないのね。こんな美人のエスコート役に抜擢されたってどういうのに」「ぶっ壊されてえか、てめえ？」

確かに女の容姿は、美しいと自画自賛するだけのことはある。だが、それがこの場にあつて何だというのだ？ 確かにオルガも異質な経歴と体調を除けば齢十七の健全な青少年であり、女の容姿や美しさ、体つきなどにも幾分の関心はあるが、彼にとっての

生き甲斐は戦場にのみ存在するものであるし、彼にとつて最上級の嗜好と快楽は激闘の果てにある「破壊行為」に限られるのだ。だから彼がわざわざ「壊す」という表現を用いたのは、云つてしまえば口癖のようなものであり、人間に対してもMSと同様の表現を用いたに過ぎない。

憤怒の形相を浮かべながら、女に向かつてゆつくりとにじり寄つていくオルガであるが、視線の先の女が、それでも奇妙な自身に溢れた表情を崩さないことに、内心では戸惑いと苛立ちを憶えていた。動じず、怯えず——眼前で停止した男を泰然と見上げていくフレイは、やはり微動だにしない。その形の良い唇は、あくまで挑むようにして声を発し、目の前の男を煽り立てた。

「女でも壊せる?！」

「容赦はしねえ、今まで通りだ」

自嘲気味な笑みを浮かべながら、「馬鹿な男……」と、女はオルガを嘲う。

「だったらやつてみればいい。モビルスーツとは違うわ、あなたに私は壊せない——」

云い終わる前に、フレイはオルガに殴り飛ばされていた。脳天がぐらりと揺れ、凄まじい勢いで宙に浮かんだ女は、キャットウォークへ背中から叩きつけられた。そのまま崩れるように天を仰いだ女に、オルガは間を置かず馬乗りになり、片方の腕でそのか細い首を絞め上げた。眼下に伏せた獲物を睨みながら、オルガ激しい不快感を露にした形

相を差し向ける。

「おれに壊せねえ、だと？」

「……ツ、ええそうよ。わたしが女で、あんたが男であろうと、ね……」

「よくも抜けぬけど、そんなこと」

「ツ……」

さらなる力を強め、ギリギリと音を立てながら握力を絞めてゆくオルガであったが、そうして喉を狭めても女は女らしく怯懦したりはせず、人形のように無抵抗のまままだ、酸素が足らず、瞳孔が絞られているものの、しかし、整った女の双眸はじつとオルガを直上に見据え、そこから挑むような色が消えることはない。

そのことに奇妙な違和感を憶え、オルガは僅かに腕の力を弱めてしまう。みずからを美人であると豪語していた女の綺麗な顔は、このような状況にあつてもなお、崩れ去ることがなかったのだ。

「――」

しかし、であるのなら、いつそのこと派手に散らしてしまうのも良いかも知れない――と、このときオルガが潜在的にそう知覚したのは事実だった。この女の豊かな肢体を白濁に塗れた汚物のように扱うことが出来たなら、何をしても満たされない欲求のひとつでも解消できるのではないか？

獣のような欲望に身を任せた瞬間、オルガはもう一方の腕で女の上衣を引き裂いていた。ほとんど力任せ、薬物に漬けられた男の膂力と握力は、分厚く頑丈であるはずの軍服の布地を、薄絹のように容易く引き裂いた。

「なっ、なにやってるんだ、きみたち?！」

丁度そこへ、先ほどの衝撃音を聴きつけたハリーが駆け寄って来た。

現場の状況から、これから眼前で凌辱劇が行われるのだと悟った彼は、背後からオルガを制止に掛かる。が、オルガはハリーを一瞥することもなく、左手一本でハリーの身体を吹き飛ばした。空中を浮遊した錯覚に捕われ、気が付いたとき、ハリーは自分が左手一本で数メートルもの距離を吹き飛ばされたことを知覚していた。医学者として診ても、それは尋常な人間が発揮できるパワーではない……! !

意識を目下に戻し、オルガは再び獣のような眼光で組み伏せた女を睥睨した。今まで通り、あらゆる意味でこの女を壊してやろうとして――

「ああ、お望み通り、ぶっ壊してやるよ……! !」

「だから、無理だつて云ってる……! !」

「組み伏せられてる女に、云えるのかよ! !」

オルガの拳が、またも勢いよく振り抜かれた。振り抜かれた拳が女の眉目を殴打しようというとき、寸前になって、その拳はフレイ自身が翳した右手に受け止められた。そ

れはフレイが初めて抵抗を行った瞬間であった。

ガシツ、と己の拳を止められたことに驚くオルガであるが、次の瞬間、それどころではなくなっていた。オルガは、振り抜いたその拳が拉げ、潰されるかのような激痛を憶えたのだ。

「ウツ！　ぐあツ……!?!」

「だって、私は元から、壊れているんだもの……ツ！」

自嘲という名の嘲笑を上げる女が、そこからオルガを力で飲み込んだ。掴み止めた拳骨が割れそうになるほどの力を掛け、激痛に悶える男を突き飛ばす。が、掴み止めた拳だけは離さなかったため、男は痛みに怯んで距離を取ることすら許されない。

なんだ、こいつ——!?!　唐突に本性を現した女を、オルガは不気味に思った。それこそ、大人の男性を片手で突き飛ばした彼の暴力——それを片手で受け止め、逆に潰しにかかるほどの怪力を宿した女。

しかし、それでもフレイの方には手心があつたらしい。次の瞬間には、苦悶の悲鳴を挙げていたオルガの拳を離してやっていた。解放されたオルガは、気味悪がるようにしてフレイから距離を開く。

「おまえ……ツ!?!」

オルガの味わったこの怪力こそが、フレイがみずからを「壊れている」と評した証拠。

怪力に限った話ではないが、人間としての彼女は、とつくのとうに壊れ切った存在だった。

であるなら、やはりフレイが云ったことは正しい。いくら戦場において、破壊と暴虐の限りを尽くして来たオルガであっても、既に壊れているものをもう一度壊すことなど不可能だ。元から壊れ切っているものを、どうすれば再度壊すことができるという？

そのことを理解したとき、オルガからは自然と、乾いた笑いが漏れていた。

「——フハツ」

この笑い声に動揺したのは、吹き飛ばされ、彼方にいるハリーであった。

「なんだよ……オマエも結局、オレたちと同類なんじゃねエか」

くつと嗜虐的な笑みを浮かべ、オルガはひとりでに呟く。

「おもしろー女……」

何を以て面白いとするのか、それは常識的な尺度しか持たぬハリーの理解が及ぶところではない。だが、オルガにはオルガの、強化人間なりの『美点』というものがあるらしい。少なくとも彼は今、フレイの中にそれを見出したのか、それとも彼女の危うさに共感を憶えたのか、年齢相応の——初めて見る——笑みを浮かべていた。

——この女は、自分がいつ破滅してもおかしくないと自覚している……。

自分達と同じだ。新薬を投与され、ブーステッドマンより優れた能力と機体を授かつ

たから調子に乗っているのだと、これまで彼は認識していた。だが、それは違った。この女もまた、自分がいつ廃棄処分になってもおかしくはない不安と恐怖の中に身を置いているのだ。物哀しい強化人間達の内情であるが、それはオルガにシンパシーを抱かせるには十分すぎる共通点だった。

「認めるよ——オレじやオマエは壊せねえ。悪かったな……」

云いながら、オルガは自らの上衣を脱ぎ、それを女へと投げ渡した。

「次の作戦だが——。まあ、せいぜい気張るんだな。オマエのことは、オレ達が最後まで送り届けてやる」

このときのオルガは、自分でもワケの分からないことを云っていると自覚していた。新型の彼女に手柄を奨めるということは、同時に、自分達のような旧式の破壊を手繰り寄せる自傷行為でもある。その矛盾を知っていながら、彼は自然と叱咤の言葉を発してしまっていたのだから。

そう云って、キャットウオークの上にはハリーが尻もちをついたまま取り残されることになる。

ハリーには、彼等強化人間の間で交わされた『理解』が、まるで把握できなかつた。——
— いったい彼等は、どう惹かれ合っているというんだ……!!?

——それから時が経ち、第三次ビクトリア攻防戦に突入した。

アズラエルの報告通り、すでに最前線ではユーラシア連邦がザフト守備軍との火蓋を切っており、当作战には多くの“ストライクダガー”他、いくつかの“ダガー”のバリエーション機が実戦投入された。

兵器の開発力、物資の豊富さでは決して劣らない地球軍は、ナチュラル用のサポートOSが完成した事実が後押しになり、本来ならばコーデインイターにしか扱えぬような高性能MSをエース・パイロットに支給するほどの余力を持ち始めている。

その高性能MSというのが、“ストライクダガー”の上位機種——“ロングダガー”や“デュエルダガー”——ならびに、空戦能力を持った“ネメシスダガー”である。

この他にも“G”兵器の意匠を継いだ“ソードカラミティ”等が実戦に投入され、一種の切り裂き魔として比類なき活躍を見せてゆく。陥落したオーブより出向した“ゴールドフレーム”も地球軍の協力者として出撃し、戦局は、圧倒的に連合軍の有利に進んでいた。ただ一点——“デストロイ”の要塞周辺を除いて、だが。

「“アウフプラール・ドライツエーン”発射用意！ 連合のモビルスーツ部隊を薙ぎ払う！」

声を挙げたのは、ビクトリア基地の司令官として新任したセルマンである。

かつて、地上部隊に派遣されたザラ兄妹の部隊長として、第二次ビクトリア侵攻戦をザフトの勝利に導いた男。

第二次ビクトリア攻防戦から、数ヶ月の月日が流れても、現在「デストロイ」は健在だった。連合軍がそうして来たように、円盤部分には支柱を突き刺すことよって高度を確保し、依然と違うのは、その支柱が旋回機能を持つということだった。これにより、要塞の砲塔は扇型に射程を拡張することが出来、単一方向へしか砲撃できなかった以前の欠点を克服させていた。

「ビクトリア基地はザフトの要所！^{かなめ} 各員、奮戦せよ！」

円盤から突き出した二対の砲身——「アフププラー・ドライツェーン」が展開し、忽ちに、迫り来る「ダガー」隊に向けられる。

それ自体が三〇メートルに達しようという巨大な砲塔が、次の瞬間、地獄の業炎を吐き出した。強烈なビームが撫でるように地上を薙ぎ払い、光の奔流に飲み込まれた大量のモビルスーツが、一瞬にして炎の塊に転じる。被弾を免れた他の機体が方々から接近を試みるが、円盤の各所に搭載された無数のビーム砲「ネフェルテム」や、無数の誘導ミサイルによって、次々に駆逐されていく。

これに勢いづいたかのように、周辺に展開する「ジン」や「デイン」部隊が「ダガー」隊を押し返し、「デストロイ」周辺は、難攻不落を誇っていた。

だが、それも東の間の栄華に過ぎない。

ユーラシアの部隊が要塞攻略に苦戦している頃、遠方より、大西洋連邦の大型艦が接近して来ていることに気付く。ビクトリア司令部の中で、オペレータが声を挙げる。

「ハンニバル級の熱紋を確認！　『デストロイ』の有効射程距離に入ります！」

「焼き裂いてしまえ！」

「いえっ、これは——!?」

光学映像が映し出され、照らし出されたハンニバル級の大型艦——『エドヴァルド』は、頭上のドームを開放した。

開口部から顕現する『エクソリア』が、重々しい一步を踏み出し、これを認めたザフトの士官達は騒然とした。

「アラスカで導入された、例の大型モビルスーツか！」

「いくら巨大だろうが……！　『アウフプラール』照準！　背後の戦艦ごと、吹き飛ばしてしまえ！」

再び、最大火力の砲撃——『アウフプラール』が繰り出される。

砲塔に光が収束し、臨界した光は炎の矢となって空間に迸り、対消滅を起こしながら『エクソリア』へ直進してゆく。突き抜ける巨大光の奔流が、その巨体を呑み込もうとした寸前のこと。前面に展開された『エクソリア』の陽電子リフレクターが、『デスト

「ロイ」の砲撃を跳ね返した。

一拍置いて、「エクソリア」は胸部「スーパースキュラ」を臨界させ、反撃と云わんばかりの大火力砲撃を放つ。が、これもまた「デストロイ」が展開する陽電子リフレクターに弾き飛ばされた。この光景は、まるで颯ごっこであった。

「くっ、地球軍め……」

「ハンニバル級より、モビルスーツ部隊の展開を確認。数——四！ 例の新型の“G”部隊です」

「ザラ達が乗っていた“G”兵器、その後継機か!？」

出撃したのは——「レムレース」を筆頭とした「カラミティ」「フォビドゥン」「レイダー」であった。

「さあ、夕食の時間までには終わらせてしまいましょう。今度こそ期待していますよ、ミナサン？」

陽気な声を耳に受け、フレイ達は発進した。

今作戦で「レムレース」が装備しているのは、「ソードストライカー」に匹敵する接近戦仕様のバックパックだ。名称を「フエゴ・ストライカー」——カマキリの鋭鎌を彷彿

佛とさせる、異形のシルエットをした追加装備。

本体が所有しているラケルタ・ビームサーベルとは別に、背部に備えられた熊手状の長腕は、超振動腕部“フェブリス・フォルフェクス”——大型のクローを高速で振動させ、掌に捕獲したMSを破断する特性を持った破壊兵器だ。接触した部位から直接振動を送り込み、共震破砕を起こすことにより、フェイズシフトなどの特殊装甲が有する敵機の防御力を無視した攻撃が可能となり、その点は“レイダー”の鉄球ミコルニョルの発展形と云つてもいい。振動中は高熱化するため、使用時のクローは赤く発光し、VPS装甲を内部フレームごと粉碎する威力を持つている。

凄まじい熱量と振動で、敵機を捕縛し粉碎する。

ゆえに——『炎熱』フエゴの号を持つ。

亡霊たる“レムレース”は新たな外套を纏い、マゼラタとガーネットのツートンカラーへ色づいた。その後方に三機の“G”が並び、一気に“デストロイ”への接近を仕掛ける。モビルスーツ戦においては一日の長があるザフト軍であるが、相手が悪ければ、そんな事実は大したアドバンテージにはなり得ない。

“エドヴァルド”から出撃した四機の“G”——その道筋に当たったモビルスーツ部隊は、ほとんど反撃することも出来ずに撃滅されてゆく。

「おら、おら、おらアア！」

「撃滅！」

「ハアアアア」

それぞれのパイロット達が興奮して叫ぶ。

艦橋から、彼等が暴れ回る様子を眺めながら、アズラエルは上機嫌だった。

「ウーン、いいねえ」

胸の「スキュラ」の一撃で、一気に二機もの「ジン」を撃墜した「カラミティ」——
鉄球を直撃させ、羽虫のように不快に飛び回る「デイン」を粉碎する「レイダー」——

要塞からのビーム砲をシールドで屈曲させ、地を這う「バクウ」に直撃させた「フォ
ビドウン」——

指揮官機「シグー」を、長大なクロードで捕縛し、跡形もなく圧碎させた「レムレース」
——
「初陣からケチの付きつばなしだったケド、なんか強いじゃないの、アイツらもサ」
傍らに立つサザランダが、得意そうに返す。

「いえ、あの四機は好い出来ですよ。技術部の者が傑作と誇示するだけはある——オー
ブでアズラエル様が苦戦なされたのは、お伺いした、予期せぬ新型のせいでしょう？」

「まだまだ課題が多くつてねエ、こっちも」

今しがた「エドヴァルド」前面の「エクソリア」が、地上に跋扈するザフトのモビルスーツを次々と屠つてゆく。

それを認め、アズラエルはさらに愉快そうな顔つきになる。

「戦闘は間もなく終わるでしょう。捕虜の扱いは、いかがが為されますか」

「オイオイ、愚問だね、それは。このビクトリアで、僕たちナチュラルが奴等に受けた仕打ちは、大佐だつて聞いているだろう？ パナマだつて同様サ——」

パナマでは、ザフト軍の捕虜条約違反となる組織的な虐殺行為により、生存したはずの連合兵士は銃殺されている。

捕虜条約は——黙殺されたも同然だ。

それ以前に第二次ビクトリア侵攻戦において、ビクトリア基地の連合軍兵士は、鬼畜なザフト兵が暴れ回った末に皆殺しにされた経緯があるそうだ。そこまで残酷なことをされておいて、アズラエルも黙つていられるはずもない。

「降伏は一切認めません、生き残ったザフト兵——コーディネイターには、それなりの報復を与えちゃつてくださいヨ」

「はは……そうですな。蒼き清浄なる世界のために」

笑い合い、アズラエルは朗らかに前方に視線を映した。

光学映像に目を遣ると、急速に“デストロイ”に接近した四機が、すかさず要塞を包囲して攻略し始めていた。ラケルタ・ビームサーベルを翳した“レムレース”は、“デストロイ”が展開した陽電子リフレクターを、まるでバターののように斬り裂いて見せる。

その光景を見、アズラエルは片眉を擡めた。

(あれは?)

今しがた“白の亡霊”が“デストロイ”を切り裂いた様子は、“エクソリア”の一号機が“青の天使”に、パナマで二号機が“赤の騎士”に破られた時の記録映像と酷似していた。

軍事産業に携わるアズラエルだからこそ、彼はそのとき、ひとつの直感を憶えた。

(オーブで出会った、あの機体……)

オノゴロ付近で対峙した、蒼の天使と白の守り神——

(もしかして“レムレース”と同じように——核エネルギー、使ってたってことかな?)
だとすれば、オーブで遭遇したあの二機は、ザフトから渡った機体ということになる。
アズラエルの観察眼は、敏かった。

とは云え、再びアズラエルが顔を上げてモニターを見れば、陽電子リフレクターを失った“デストロイ”は、今すぐに蹂躪されていた。“レムレース”が続けざま、赤く

発光した「フェブリス・フォルフェクス」を展開し、大型のクローが、容赦なく「デストロイ」のVPS装甲を引き裂いてゆく。

猛禽が銜えた獲物を喰い散らかすような荒さと残忍さが、そこには浮かんでいた。滑らかな光沢を放つ円盤は、跡形もなく粗雑に削り取られ——不壊を誇った要塞は、みるみると凌辱されてゆく。

難攻不落の「デストロイ」が——陥落した瞬間であった。

黒鉄の要塞という——最大にして、最強の拠点を失ったザフト軍は、その後、地球連合軍にとって壊滅させられた。セルマン以下数千人に及ぶザフト兵は、掃討部隊によって容赦なく銃殺されることになる。が——その不条理な死について、誰ひとり同情した者はいないという。

それはビクトリアでパナマで、セルマン等自身の同胞が、捕虜条約を破棄したことによる自業自得の結末であったからだ——。

「いやいや、お見事でした。これで「ハベリス」の奪還は完了です」

第三次ビクトリア攻防戦は、かくして、地球連合軍の勝利に終わった。

戦闘を終え、母艦に機体を降りたさせたフレイは、ラダーを使って地上に降りた。

着艦した「レムレース」の隣には、既に「カラミティ」や「レイダー」の機影があり、フレイは、四人の中で最後の帰投となっていた。

ヘルメットを脱ぎ、彼女は妙に覚束ない足取りで歩を進める。その進行方向には、オルガ・サブナックが立っていた。オルガは接近して来るフレイの姿に気づき、声を発する。

「——よお、終わったな」

お気楽な調子で発された声。

だが、投げかけた会話は——続かなかった。

ふらふらと跛行していたフレイが、次の瞬間、ぐったりと脱力して、その場に倒れ込んだのである。

「!？」

咄嗟のことに、オルガは無意識に、倒れ込む彼女の体重を支えていた。

出撃前は、自分の拳を握り潰すことも出来るほど強力な女だというのに、まるでそうは思えない華奢な身体を抱き留め、オルガはひらすら頭に疑問符を浮かべる。傍らにいたクロトもシャニも、さすがに不測の事態であったのか、すこしだけ怪訝そうにフレイのことを見遣っている。

「おい、どうしたっ!？」

——急に倒れるなんて、どこか怪我でもしたっつての……?」

いや、しかし、戦闘中の「レムレース」は、最後まで被弾のひとつも受けていない。機体が無傷である以上、そのパイロットが怪我を負うはずがなかった。

荒げた声は、しかし、彼女に届くことはなかった。

フレイ・アルスターは、すやすやと寢息を立てて——まるで死んでいるかのように——眠っていたのである。

負傷したのではない、ただ、睡眠していたのだ。それも、突発的なタイミングで。

「眠って、る……?？」

「なんだよ、人騒がせだな」

「は……」

他の二名が興味を失ったのに対し、オルガの対応は違った。

『生きているのに、死んだように眠ってしまうこと——』

それは、彼女がリビングデッドと呼ばれるようになった所以だ。

自分達ブーステッドマンで云ったところの禁断症状に匹敵するものであるが、こうも突発的に睡魔が襲い掛かって来るなんて、尋常ではなかった。

オルガはすぐさま意識を失った彼女の身体を抱きかかえ、格納庫から飛び出して行っ

た。

向かった先は、医務室——

彼女の主治医、ハリー・ルイ・マーカットが居座った部屋である。

フレイの容態を診察し、ハリーは、ひとつの結論を導き出していた。

兆候はあつた。以前、オーブへの第三波攻撃に無断で彼女が出撃したとき、彼女は、凄まじい頭痛と睡魔に襲われたと云っていた。

「戦闘が終わって、緊張の糸が切れた。だから彼女は眠ってしまった」

ハリーは、続けた。

「——と、云うには、あまりにも無理があるな」

普通の人間が、斃れるまで、突発的に昏睡してしまうことなどあり得ないのだから。

医療ベッドの上に横たわり、すやすやと寝息を立てているフレイは、肩をさすすつても、名前を呼びかけても、一向に目を覚ます気配がなかった。

「おっさん、こいつ、どうなんだよ」

先ほど、遠慮なく突き飛ばしてくれたことに若干の不満を憶えながら、ハリーはオルガに対して淡々と返す。

「エクステンデットの被検体を診察するのは、僕もこれで二回目だがね。だが、詳しいことは分からないな——ただ云えるのは」

ベッドの上で眠る少女に、視線を落とした。

「ここまで突発的な睡眠発作が起こるとなると、新薬の副作用……その弊害である可能性が非常に高い」

よくよく思えば、戦闘中、フレイは一言も言葉を発していなかった気がする。

あれは集中していたからではなく、ひよつとして、襲ってくる睡魔と戦っていたからだったのだろうか？

ハリーには、思い当たる病名がひとつあった。

『ナルコレプシー』——通称：眠り病」

それは、睡眠障害を引き起こす病の一種。

ハリーは眼鏡をかけ直し、苦しそうに吐き出した。

「彼女はおそらく、薬物の投与と引き換えに、脳疾患を患ったんだ」

それが、未完成の新薬が生んだ、弊害だ。

云われたオルガ・サブナックは口を開き、ただ、啞然とした。

『ミハシラ・ワルツ』

C・E・58年——今からおよそ十三年前。

ウズミ・ナラ・アスハがオーブ連合首長国代表を務め、オーブにおけるあらゆる実権を握っていた頃、彼はオーブが所有するひとつの「宇宙ステーション」建造計画を発足させた。

軌道エレベーター——“アメノミハシラ”——建造計画である。

便宜上「宇宙エレベーター」とも通称される「それ」は、宇宙空間への進出手段として、近代において構想されていた未来的施設のひとつだ。現在、地上と宇宙で豊富な物資および人材の交流を図るためには、ロケットやシャトルなど“箱舟”の打ち上げを行うのが主流となつているが、この宇宙エレベーターは文字どおり宇宙空間まで伸長した自動昇降機として、より少ないコスト、より抑えられたリスクでの宇宙交易を可能とする。ウズミが開発を命じた“アメノミハシラ”は、このような利点を得るために製造された宇宙拠点だったのだ。

“アメノミハシラ”の建設計画が本当に実現した暁には、地上と宇宙との貿易量は爆発的に増大する。これによる利益も極めて莫大なものなるうとは、オーブ在住の誰しもが予想したところである。当時、国家的事業としてこの宇宙ステーション建造計画を推し進めたウズミは、宇宙貿易がもたらす莫大な経済効果をオーブ国益とし、これを他国家から独占しようと考えていたのかも知れない。

だが結論から云えば——“アメノミハシラ”が軌道エレベータとして完成することはなかった。

拠点の建設中、血のバレンタインを切片とする地球と“プラント”間の——後年“ヤキン・ドゥーエ”戦役と呼称される——大規模な国家戦争が勃発したためだ。

オーブは非加戦国であり、勃発した地球連合と“プラント”間の戦争に対しては直接的な関わりを避けて来たが、何が起きるのかが分からないのが戦乱の世である。戦争が始まると同時に、その奇異なる立場ゆえにオーブは中立国としての立場を貫く独自の軍事力——他の主権国家から脅迫を退けるほどの国家防衛力を必要とし、このためオーブにとって唯一の宇宙拠点であった“アメノミハシラ”は、これらの軍事力を早急に養うための格好のファクトリーとなった。

こういった経緯から、本来は軌道エレベータとして建造されていた“アメノミハシラ”は、オーブの軍事ステーション、又の名を、宇宙ファクトリーとして転用されること

になる。

オーブが誇る軍需産業社モルゲンレーテが、国土よりも「アメノミハシラ」に事業のウエイトを置いたのは、地上の戦災を嫌つてのことでもあるが、第一にMSの製造に必要な物資——たとえばPS装甲材や発泡金属——が無重力空間でしかその品質を維持できない材質であつたのが理由であり、実際に「ヘリオポリス」という宇宙拠点で「G」が開発された経緯を鑑みれば、それは自明である。

そして「アメノミハシラ」の統括役には、オーブ五大氏族の中でも、軍事を司るサハク家が抜擢された。

サハク家族長、コトー・サハクは宇宙空間アメノミハシラにおけるMS開発をウズミに委任され、独自のやり方で軍備増強を進める中、これに目を付けたデュエイン・ハルバートンを筆頭とする大西洋連邦の将校達から『G計画』たるモビルスーツ共同開発案を提唱された。大西洋連邦からの強い圧力に妥協ないし同調したオーブは、管轄下にあつたオーブの中立コロニー「ヘリオポリス」にて、大西洋連邦と共同でモビルスーツ開発を行うことになつた。

が、このとき、オーブ側の主責任者にもまたコトー・サハクが抜擢され、云い換えれば、サハクはアスハにとって体のいい「汚れ役」を担わされていたのだ。

以上の理由から、他の氏族達が洗脳でもされたかのようにアスハに心酔する中、サハ

クだけが、アスハに対して強烈に否定的・批判的な姿勢を貫くようになる。間違いなく、コトーとウズミの間に猛烈な温度差があつただろうとは、オーブ閣議に出席したことのある数多の要人が口を揃えて云うところである。

ウズミとの——壊滅的を通り越して絶望的な——確執があつたとすれば、それはコトー自身の『後継者』も同様だつた。

サハク家の正当なる後継者、ロンド・サハクは、オーブ発足当初より汚れ仕事をサハク家に押し付けるウズミの横暴な態度や、それに不満を抱きながらも言いなりにしかない父の不甲斐なさ、そして、綺麗事ばかりを掲げ中立国を気取る現在のオーブの在り方そのものに、それぞれ強い不満を抱いていた。

今回、オーブが地球連合軍との提携を拒絶し、その果てに国土と国民を焼いたことにも、ロンドは同様の見解を示した。

『未来に対して大志があれば、どんなに卑怯に振る舞おうと問題ではない』

だが、ウズミはその志向を認めなかった。彼は恥を忍ぶこともなく、オーブの産土うぶすなで果てることを選んだ。オーブ解放作戦において五大氏族の族長が揃って自決し、ロンドの父、コトー・サハクも死亡した。このために、オーブに残された「アメノミハシラ」は、サハク家の当主を継いだ——ロンド・サハクの管轄とされた。

それが新たな円舞曲ワルツの序篇となろうとは、このとき、誰が予想したであろうか？

オーブの政治体系は、アスハ代表首長を中心としたサハク家・トキノ家・マシマ家・キオウ家の五大氏族による合議政治だ。この体制の下に執政が行われ、これが行き過ぎた専横に走った場合の対抗機関として、国民の一般選挙より選出される立法機関——すなわち「議会」が存在している。存在しているが、なにしろ議会側はアスハ家の政策を妄信していることから、実質的にオーブの国家としての分権体制は形骸化しているも同然だった。

また五大氏族は——サハク家を除いて——必要以上に首長家アスハを崇め立てる傾向にあり、それは、優秀な血族を優先するオーブらしい超現実主義による悪習だった。ウズミ、ホムラ、カガリ——国家元首が国民審査も通さず、半自動的にアスハの縁者に世襲されていることから、それは自明であろう。

そして、アスハを心酔していたのは五大氏族だけではない。

オーブ国民もまた、ウズミ・ナラ・アスハを崇拜していた。依拠、あるいは、依存という表現も適切なのかも知れない？ オーブ国民はアスハが統治する中立国独自の在り方に疑問を抱いたことはなかったし、生活にこれと云う不満もなかったことから、五大氏族による合議政治がどのような方策を取ろうと、これに批判を浴びせることは滅多

なことではなかった。

数時間前、オーブの国土が焼かれるまでは。

オーブ解放戦が勃発し、国民にとつて心の拠り所であった五大氏族を失い、そればかりか、暮らしていた住処を焼かれ、故郷を追われた人民は数多くいる。

シン・アスカ——彼もまた、その内のひとりである。

オーブからの避難民——いや、オーブに見捨てられた棄民と云つた方が、今の彼には優しい——でごつた返す避難船の中、船倉の片隅に、シンは蹲っていた。

彼は孤独だった。荷物も、同行者もない。オーブにて殺された家族——その形見のひとつさえ、今の彼は持ち合わせていなかったのだから……。

周囲には、ひそひそと囁き交わす声やすすり泣きが満ち、時折、それらをついて無遠慮な子供の声が響く。魂が虚脱したように座り込むシンは、自分がいま、涙を流しているということに気付くことも出来なかった。

目から流れ出し、滴り落ちる重たい雫。それはまるで傷口から溢れ出る血のように、ひりひりと痛んで彼の力を奪っていく——

「父さん……母さん……」

口にごぼしたのは、目の前で失われた——命の名。

「マユ……」

ぎゅつと肩を抱き、シンは圧倒的な孤独感と絶望感に、心を潰されそうになっていた。オーブは、中立のはずだった。なのに、

——どうして、こんなことに？

自分達が住んでいるのは、他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない国なのだから、どこで戦争が在ろうと関係がないのだと、これまでシンは漠然と考えていた。自分の目の前で、大切な者達が見えなくなった——その瞬間まで。

「う……うう……ッ」

どれほどの間、そうしていただろう——？ シンが自閉するように蹲っていると、そのとき、ひとつの声が頭上から注がれた。

シンは、茫然とするあまり、その声に気付けなかった。だが、ついで肩を優しく叩かれたため、涙で膨れた顔を上げた。

そこには、ひとりの女性が立っていた。その女性は、形の良い唇を動かし、シンに訊ねた。

「——少年。隣、良いか？」

麗しい黒の長髪の女性。身長は……190センチメートルを悠に越しているだろうか？ すらつとした長身は蹲踞するシンから見て遥かに高く、彼はおのずと、垂直方向に顔を上げる形になってしまう。

物柔らかな表情に、気品のある物腰が印象的な女性だ。どこか、上流階級の生まれの人物なのだろうか？ 身に纏う外套は滑らかな材質で出来ており、門出の良さが伺える。平凡な庶民の家庭に生まれたシンは、かねてよりこういう高貴な人物に憧れを抱いていたが、今は大して感動することもできず、茫洋とするばかりだった。

女性は、苦笑しながら続けた。

「どここの場所も空いてなんだ。行き場に困っていな——」

たしかに、避難民でごった返す船倉の中などは、そうそう広いスペースが確保されているものではない。

シンは、ハツとした。女性の体格について言及するのも失礼だと思ったが、確かに女性ほどの高身長があつてしまえば、身を置く場所を探すのにも苦労するだろう。実際に周囲を見渡してみても、それほどに開けたスペースは見当たらない——ただ一箇所、自分の隣を除いては。

シンは腫れた目を隠すように涙を拭い、できるだけ、平静を装って云った。
「いい、いいですよ。どうぞ……」

このときシンは、泣いている姿を女性に見られたのが、格好悪くはないにせよ、恥ずかしいと思つてしまった。

……なぜだろう？

状況が状況だけに、彼が悲しみに涙を流したところで誰も冷やか

したりはしない。冷やかす資格だつてないのだが、不思議とシンは、女性に泣いている姿を見られたことに羞恥心を感じていた。それは十四歳の少年らしい見栄が、そうさせた感覚なのか。

腰を浮かせ、シンはさらに船倉の片隅に寄り、小さくなる。「すまん」と優しく云つた女性は、そんな彼の隣に膝を折り、壁に身を寄せて座り込んだ。

——が、それからは、これと云つて女性と会話を交わすわけでもなかった。

当然と云えば当然だが、このような船倉に追いやられている以上、その女性もオーブの国土から亡命ないし避難して来た立場にあるのだろう。見たところ随伴者はいないようだが——ひよつとすると、自分と同じような境遇なのかも知れない？ だとしたら、今は精神的に自分のことで手一杯だろうし、他人に構っている余裕などないはずだ。

シンは、それでも妙に気にかかり、恐る々る、女性の横顔を盗み見た。

女性は、しかし、悲哀に打ちひしがれているわけでも、将来に絶望しているわけでもなく、どこか硬くどこか強い表情で、周囲の傷ついた避難民達を見据えていた。観察していた、と云つていい。

「……………」

直感的にシンは、強い女性なのだ、と感覚し、強く息を呑んだ。

同時に、ああ、きつとこれなんだ……と自覚する。女性に対して羞恥心を感じたのは、

おそらく、この女性が何より強い気圏を纏っていたからだ。

困難に直面してなお、歪まない精神を持ったカリスマ性——とでも云うのだろうか？
気品を放つ女性の仕草や物腰には、芯の通った安定感、いや心強さを感じる。何が云
いたいのかと云えば、一目見たときから、シンはこの女性の魅力に惹かれていたのだ。

「あ……」

シンは、緊張していた。

何というわけでもない、だが彼は、まるで無意識に母親を求めめる感覚で女性に声を掛
けようとした。それは平凡な十四歳の少年の逃れられない性、死んだ母親を精神的に埋
め合わせようと欲してしまうマザー・コンプレックスだった。

しかし、そのときだ。

同じ船倉の中で、大人の男達が痺れを切らしたように無遠慮な大声を上げ始めた。

「この船は、いったい、どこへ向かっているんだ……！ 我々に、行くアテがあるのか！」
とめどない不安が、男のキャパシティを越えたのだろう。痲癩を起して騒ぎ出す大人
につられ、周囲の人々も、張り詰めていた糸が切れたように騒ぎ出した。

中には赤子の姿もあって、遠慮を知らない泣き声が上がる。

「ウズミ様は今回の事態の責任を取って、自決なされたそうではないか！ 残された
我々は、これからどうして行けば良い！」

「カガリ様は？ カガリ様は、どうなされたのだ……？？」

「そうだ！ ウズミ様が亡くなられた今、我らの希望は、カガリ様しかおらぬ！ オープの復興は、カガリ様と共に——」

良い大人が、アスハ家に依存している会話だった。

しかし、

「宇宙へ上がられた……？ カガリ様が!？」

「そんな莫迦な！ 残された我々を置き去りにして、自分達だけが生き残ろうと云うのか!？」

「逃げたのではない？ 戦いに行った？ ——それがどうした！ それがオーブの国民に対して、何の免罪符になる!？」

酷い裏切りだ、と声を荒げる大人達の傍らで、シンもまた、そこで突きつけられた事実に愕然としていた。

ウズミ亡き今、本来であれば遺されたオーブの棄民達の支柱となるべきアスハの後継者——カガリ・ユラ・アスハが宇宙へと飛び出し、新天地での戦場に身を置いていることが発覚したのだ。受け皿も、心の拠り所すら無くした彼らは、完全にオーブの指導者に見放されたことを自覚してしまった。

(オレたちは、指導者に見捨てられたのか——!?)

シンの胸に、苦く、熱いものが込み上げる。それは、とめない母国の指導者への激情だった。

無責任に叫ぶ周囲の大人達に感化された影響もあるのだろう、だが、シンは自分の耳で聞いて、頭で理解して、アスハに裏切られたことに気付いた。その裏切りのために父が母が、妹が、殺されたことを頭の中で結び付けてしまった。

「……………ッ！」

シンが、くつと喉を鳴らす。

そのときだった。

「オーブの民はみな、アスハに頼り切っていたからな——」

シンの隣の女性が、声を発した。

彼女もまた、大人達が騒いでいる会話を聞いていたのだろう。

女性は独白のようにぼそりと云った後、急に、シンの方に顔を向けた。シンは緊張した。

「少年。そなたはどう思う？ ——いまのオーブに何を思い、何を抱く？」

突然、見透かされるような口調で云われ、シンは絶句する。

え、と声を漏らす、今の彼には、云いたいことはひとつしかなかった。

「…………。理念のために、国民を犠牲にする国なんて間違ってるって——そう思います

……ッ」

犠牲になった者達の無念を想う。

その度に、舌を噛み切りたくなるような激情が、シンの中に込み上げる。

彼はまるで、そんな英霊達の総意の代弁者になったかのように言葉を紡いだ。

「国って、そこで暮らす人がいて、初めて成り立つもんだって——。理念が国を作るわけじゃない。土地が国を築くわけでもない——国は、そこに暮らす人が作るもんなんだから、人のために国があるんじゃないかって、そう思うんですよ……ッ」

国家が掲げた正義を守るために、無辜の国民を犠牲にし、苦しめるのでは本末転倒ではないか。

挙句、施政の側に立つ者だけが安穏と生き残り、宇宙に逃げたとされる。まるで、何事もなかったかのように。だからシンは、アスハを許せないと感じているのだ。

女性は反芻して訊ね返し、シンの顔を覗き込む。

「学生の意見だな……。国とは民のことであり、場所のことではない——と？」

「おれの家族は、オノゴロで殺されたんです！ 避難に遅れて、落ちて来たモビルスーツの下敷きになって——なのにおれだけッ、こうやって生き残って……！」

「少年…………」

「父さんと母さんは、最後までオーブのことを信じてた！ なのに裏切られて、卵みたい

に潰されて死んだんですよ——ッ!？」

はあッ!

と、当時の記憶を思い出し、吐き捨てるような嘆息を飛ばす。

「あんなの……あんなの、人の死に方じゃないですよッ! 偉い人達の軽率な一言で、一体、誰が死ぬことになるのか、アスハは本当に考えたんですか!？」

叫びは、八つ当たりになって、目の前の女性へと向けられた。

だが女性は、何を云うわけでもなく、シンの言葉に真摯に耳を傾けてくれた。それが安心感となって、シン自身に、云いたいことを云わせてくれたのかも知れない。

一拍置いて、シンはハツとして、顔を真っ赤にする。

今まで、まるで相手のことを考えず、一方的に激情を吐露していたことに気付いたのだ。それが、ひどく申し訳なく思えたのだろう。背負った悲劇は、この場のいる誰しもが同格だというのに——あるいは、この女性もまた戦争に巻き込まれたはずなのに——まるで自分だけが被害に遭ったように語ってしまった。シンはそんな自分の幼さが恥ずかしくなり、赤面した。

「——す、すいませんッ……おれ、勝手に八つ当たりして……」

「良い。云い得て妙な、生身の意見だった——」

女性は、云った。

「——氣に入つたぞ、少年」

短く、優しく笑つた。

え？ という声は言葉にならじ、シンは呆然と目を開く。だが、女性は既にシンから視線を外し、ぼつと立ち上がっていた。

「そうだな——国とは民が築くものであり、民こそが国となるのだ。国は、人の理想を實現させるために存在するのだから——」

女性が放つた言葉は、ウズミが行つた政策とは、まるで対極的な思想をしていた。

シンは、女性が纏う外套の背に、ひとつの紋章——いや『家紋』が描かれていることに氣付いた。背姿を初めて見たために、これまで氣付かなかつたのだろう。それは、サハクの家紋であつた。

「誰ぞ、この艦の操舵士に言伝を頼めぬか」

女性は急に立ち上がったかと思うと、周囲の者達すべてに向けて、大きな声を發していった。

一切の臆面のない、威風堂々とした声色と立姿だ。シンはその背姿を眺め、茫然とするばかりである。痲癩を起していた大人達が、その一声によつて静まり返し、身長の高

い彼女は高貴な雰囲気と相まって、一同の注目を瞬間的に浴びることとなった。誰もが女性から目を離さない中で、彼女は、これらの視線に怯むことなく整然と言葉を紡いだ。「今より南へ転進するよう伝えてくれ。これらオーブの避難船が向かう先は、民営のマスドライバー “ギガフロート” だ」

それは、地球上に残された、ジャンク屋ギルドが所有する民間のマスドライバー施設。現在、ビクトリアの “ハピリス” 以外に現存しているマスドライバー施設は “ギガフロート” のみである。

「な、なんです、あなたは……?」

誰何する避難民が、声を発する。

だがそれは、すぐにかき消された。女性が身を纏う外套の中に、彼女の身分を証明するものがあつたからだ。

「その家紋は、サハク家の!」

「まさか、ロンド・サハク様!?!」

ロンド・サハク——

それが、女性の名前であった。

彼女は優艶に、云った。

「オーブの棄民達よ。そなたらのことは、我が救ってみせよう。オーブが大西洋連邦の

属国となつた今、賽は既に投げられた。取り残された我々には、前進あるのみ——」
行き場を失つたオーブの民にとつて、その提案は、地獄に仏であつた。

「宇宙へ上がり、アメノミハシラへ帰還する。時が満ちたら立ち上がり、真のオーブの力を、世界に示すのだ……！」

そうして、オーブを出奔した避難船の多くは南へ向かい、民営のギガフロートに繋留されることとなつた。

これまで会話していた女性が、五大氏族の族長、その一であつたとは夢にも思わなかつたシンは、慌てふためき、それ以上に啞然とした。そんなシンに対して、女性はほつそりと美しい手を差し伸べて来た。

「我が名はロンド・ミナ・サハク——。オーブの棄民の少年よ、名は……？」

「あつ、おれ……シンです、シン・アスカ……」

「そう……共に来てくれるか？ シン・アスカ」

サハク家といえば、アスハと対立関係にあつたオーブの五大氏族であると有名だ。

それは当然、シンの耳にも入つて来たことがあり、だからこそ彼は不意に、こう思つた。

（この女性ひとなら、おれたちを救つてくれる——！）

地獄に仏が存在するなら、この女性はまさに、地獄に女神であつた。

「未来はまだ定まってははいない。その足で、みずからの意志で踏み出すのだ」
「は、はい……っ！」

そうして、シン・アスカはオーブの宇宙拠点——「アメノミハシラ」に移住することとなった。

それから、数週間の月日が流れた。地上のオーブ本土は、既に大西洋連邦に降伏した。これにより、今は亡きウズミが理想していた中立国としてのオーブ連合首長国は滅んだ。

しかし、ミナの率いる「アメノミハシラ」はそんな地上との方針を違え、宇宙空間においてMS「アストレイ」シリーズの製造事業を継続した。それは、サハク家によるアスハ政権に対する造反の行いであった。かくして、ロンド・サハクが越権政策を継続したことにより、現在のオーブは事実上、オノゴロ本島と「アメノミハシラ」——二つの政権が同時に存在する様相となった。

——地上アスハのオーブと、宇宙サハクのオーブである。

サハクが統治するオーブ——「アメノミハシラ」は、本来の宇宙ファクトリーとして

の機能を十全に果たし、着々と自国の軍事力と防衛力を増強。豊富なる人脈と金脈、指導者であるミナの世界的なコネクションを駆使しながら、民間組織からの協力も得てマストライバー“ギガフロート”より、移住民と移住民に必要な物資を“アメノミハシラ”に移送し続けた。

一方で、そんなミナの双子の弟、ロンド・ギナが持つ大西洋連邦との深いコネクションからは、地球連合の占領下に置かれたオーブ本土から、とある物資を調達することに成功していた。

ロンド・サハクは、抜かりがなかった。

オーブが滅び、行き場を失った棄民達を——“アメノミハシラ”に暖かく迎え入れたのだ。

自分達を守るための兵器を作る“アメノミハシラ”——その運営を手助けすることにより、代価として棄民達、シン達は安息を得ることができた。

アスハ政権に見捨てられた国民達にとって、生きる気力を再び養える“アメノミハシラ”は、オーブ本土とは形を違えたひとつの理想郷だった。命に関わるほどの災難に遭い、彼ら自身が崇拜していた五大氏族に裏切られたショックは並大抵ではない。そんなときに自分達を受け入れ、守ってくれたサハク家は、彼らにとって救世主であり、彼らの心に大きな影響を与えた存在になっていった。

安寧の日々の中、シン・アスカもまた「アメノミハシラ」——その軍事ファクトリーの中で、労働するようになっていた。

彼が携わっているのは、MS製造関連の仕事だ——「アストレイ」という名のオーブ防衛用の機種、その製造に関わる。

とは云え、今はまだ子どもに過ぎないシンにできることなど知れており、結局は下つ端の下つ端——せいぜい資材の運搬係ほど——だが、彼にはそれで充分だった。働くことで安息を得ることができれば、戦災で傷ついた少年の心には、それだけでも満足だったのだ。

「ぼうずー、その資材は、第八ブロックの方に運んでくれー」

「わかりましたーっ」

ファクトリーの中、フォークリフトの運転作業を行っていたシンは、現場監督に指名され、慌てて声を返した。フォークリフトは、シンがここ数日の間に、大人達に運転の仕方を教わったものであった。

オーブの難民を受け入れた「アメノミハシラ」は、一層の忙しさに巻き込まれていた。その中では、おのずと人手も不足し、有志の者には労働の職が宛がわれるようになった。生きる指針を与えてくれる「アメノミハシラ」に協力しようと、難民の多くが方々の部署に参画し、ステーション内は、稀に見る活気に満ち溢れていた。

そして今、シンに声をかけた現場監督もまた、数週間前、船倉の中で騒いでいた大人のひとりだ。そのときは絶望感から癩癩を起していたが、今は活き々きと労働している態様を見るに、根は善い人であるらしい。たったひとりの指導者に頼り切っていた過去とは違う、自分達の国は、自分達で支えるのだ——という新たなモチベーションの高さは、彼等に生きる活力を与えていた。

ミナに啓蒙され、心を入れ替えた民は「アメノミハシラ」に多かつたのだ。
「第八ブロック。こっつちか？」

まだ不慣れなステーション内を、ハンドルを切り、シンは活気に溢れるファクトリーをゆつくりと横切っていく。

角を曲がり、第八ブロックへと進み出たシンは、次の瞬間、目を疑った。彼の目の前に、金色に光り輝く巨大な影が聳え立っていたからだ。

「なんだ、これ……!?!」

ぎよつとして彼は、驚嘆の声を挙げる。

「モビルスーツ!?!」

その「黄金」のモビルスーツは——少年の目に、華やかだった。MSを成型している装甲がほとんど金箔、その眩いばかりの輝きを照り返し、目を奪われない方がどうかしている。

純粋な金の輝きは、どちらかと云うと渋く、柔らかなものだが、それよりは硬質で、華やかなものだ。磨き上げた鏡のような「黄金」は、シンの眼光に今も焼き付いている。「白銀」のMSと対照的な光輝を放っている。自分からすべてを奪って行つたであろう「白銀」の破壊神——それと酷似した双眼を持つ頭部に、角のようなアンテナが突き出している。

天井から降り注ぐライトを浴びて、神々しい金色に光り輝くそのモビルスーツは、さながら、太陽神がこの世に顕現したようであった。少年っぽい感動に心を刺激されながら、シンは、傍らで整備作業を行っていた男性に声をかけた。

「なんなんです、あれ?」

「ん? ああ」

技術者の男性は、改めて「黄金」の方を向き直した。

「ありやあ、オーブから持ち出されて来たモンだよ。アカツキ島の地下に隠されてあつたそうだ」

「嘘でしょう?」

「ミナ様が、大西洋連邦の目を欺いて「ミハシラ」に持ち込ませたんだ。おおかた、アスハの忘れ形見つてところじゃないか?」

「マジですか……」

「抜かりがないのさ、あの方は」

はつはと笑い、男性は歩き出す。

シンは、感動した。

「けど、いくら何でも、金ぴかは目立ち過ぎやしませんか？」

「オーブにおいて『黄金』ってのは、特別な意味を持つてるんだぜ？ 若造は知らないか」

「だからって……」

「まあ、まだOSが未完成だがな。誰宛てに開発されていたMSなのかは知らんが、OSが完成してない現状じゃあ、とても尋常な人間に扱える代物じゃない——」

男性は、冗談ほく続けた。

「——今『これ』を操れるとすれば、一種のバケモノさ」

おそらくは、そのOSの傲岸さのために、この機体はアカツキ島の地下に凍結され、オーブが戦火に包まれたときも眠ったままだったのだろう。

と、男は推察して云った。

「基本の装備はもう完成してるんだよ。専用のバックパックの調整の方が、あと少しで終わりそうなんだが——どうにも。なにしろ、こっちも人手不足でね……」

「おれも、何か手伝います！」

「なんだい、藪から棒に？ さては坊主、あの金色に惚れたな？」

「カツコいいから」

にへらと笑う。

このときのシンは、誰よりも少年らしかった。

「やれやれ。少年つてこれだ」

男性が苦笑する。

と、そのとき——ステーション内部に警報が鳴り響いた。

「——!？」

それは、敵軍の——モビルスーツの侵攻を知らせる警鐘だった。

ここ数日間で、宇宙ステーション“アメノミハシラ”の活動が異様に活発になっていくことは、L4宙域に浮かぶ“プラント”本国からも容易に探知できていた。

第三次ビクトリア攻防戦に敗北したザフトは、これ以上地上に戦線を維持することが不可能となり、前政権から続いていた“オペレーション・ウロボロス”を中断し、地上からの撤退を余儀なくされた。

その代わり、パトリック・ザラは宇宙軍の戦力増強に乗り出した。そのために、オーブの軍事フアクトリ―「アメノミハシラ」に目を付けたのだ。

『オーブ宇宙軍の軍事力―接収すれば、我々の豊かな予備戦力となるだろう』

その任を負って、実際に「アメノミハシラ」へのアプローチを仕掛けるは、「ジェネシスα」の管理を請け負い、パトリック・ザラの手駒として評議会に実力を認可された特務隊所属のアッシュ・グレイである。

中立ステーションである「アメノミハシラ」に対し、一方的な降伏勧告を言い渡すことは、実際には条約違反である。だが、そもそも「ヘリオポリス」の一件以来、「プラント」はオーブを完全なる連合寄りとして認知しており、オーブへ対する容赦？――そのような言葉は、彼等の中にはすでに存在しないも同然なのだ。

「裏切り者には、手加減は無用ってねエ」

アッシュは、相変わらずえげつない笑みを浮かべながら進軍していた。

ダークブラックと、バイオレットのツートンカラーに彩られた「リジエネイト」――そして、その後方に「ゲイツ」の小隊が並んでいる。

「こつそり軍備なんて整えちゃつてまあ……。そういう不埒な連中には、思い知らせてやらなくつちやなあ？」「リジエネイト」よお」

微笑み、続けた。

「——死だッ!!」

ザフトの特殊部隊が接近しているとの報せは、すぐにステーション内に響き渡った。オーブの民は、この警報にトラウマを刺激され、ひどく怯え始めた。やつと手に入れたと思つた安住の地——「アメノミハシラ」にも再び、残酷な戦争の火が及ぼうとしているのだ。

居住区は混乱し、ファクトリー内部でもまた、騒乱が起きていた。

「おれたちの国は、おれたちで守るんだ!」

元より「アメノミハシラ」に務めていたM1パイロットの数名が——正確にはまだ訓練兵だが——拠点防衛のために出撃しようとしていたのだ。メカニック達は「命令を待つんだよ!」と、彼等を自慢の太い腕で抑えていたが、それにしたつて、時間の問題だった。血気盛んな青年パイロット達の勢いを止めることなど、とうてい不可能なのだから。

だが、そのとき格納庫にロンド・ミナ・サハクが姿を現した。

ファクトリーに居合わせたシンもまた、ハツとして、鷹揚として歩いて来る彼女の姿に魅入る。

「——やめておけ」

ミナは短く、血の滾ったパイロット達を制した。その一言は、地響きにも似た重みを持ち、これまで技術者らに何を云われても聞かなかった青年達が、気圧されるように怯んだ。

「ミナ様……！　しかし！」

「あれはザフトの精鋭、コーディネイターの特殊部隊だぞ。そなたらのような未熟な訓練兵が出て行つたところで、無用に犠牲者が増えるだけだ」

察し物のミナは、すべてを見通しているかのように言葉を紡いだ。

青年のひとり、しゃにむに叫ぶ。

「でも、もう嫌なんです！　大切な故郷が奪われるのは！　それを、黙って見ていることしかできないのはっ！」

言葉を真摯に受け止めたミナは、しかし、心底怪訝そうな顔をした。
心外だ、と云わんばかりの。

「——奪われる？　誰がそう決めたのだ？」

「えっ……？」

青年は、啞然とした。

一拍おいてミナは優しく微笑み、ついで、青年の肩にぽんと手を置いた。

「云つたであろう。犠牲者が増えるだけだ——と」

含みのある口調で云うと、ミナは、第八ブロックまで歩を進めて行つたしまった。青年達は不安げにその背を追い、シンもまた、何となく彼等の背後を追つた。

そこは、第八ブロック——

ミナは目の前に聳立する「黄金」を見上げ、何かを立ち悩むように顎に手を当てた。

「——『アレ』はもう出せるのか？」

担当の技術者は、びしやりと返した。

「無理ですよ。専用の追加装備が、まだ」

「ライフルとサーベルを持つのなら、兵は兵として事足りる——人型機動兵器とは、そういうものではなかつたか？」

「……無茶ですよ」

曖昧な返答では、ミナを説き伏せることなど不可能なのだろう。

結局のところ技術者の男性は、無理というほどではないが、無茶を云い出したミナを止めることができなかつた。

「『ピャクライ』は銃剣にもなつたな。ならば、武器はひとつで充分だろう」

ミナは、金色のモバイルスーツ用のビームライフルを見遣りながら、そんなことを云つた。

シンは何のことか分からなかったが、彼女の目線の先にあるビームライフルは、フォアグリップの代わりに、ビームサーベルのマウントラッチが設けられていた。

「——獣の牙を折って来る」

後を頼むぞ、とだけ云い残す。すると、ミナはひとりでリフトに乗って「黄金」のクピッドへもぐりこんで行ってしまった。

シンは、ぎよつとした。前に進み出て、叫ぶ。

「なつ、何やってんだよ！ あのひとつ、モビルスーツに乗れるの!?!」

「ミナ様はな、よくできた御方だよ。なんだって、オーブの『影の軍神』って呼ばれてるんだぜ?」

「パイロットスーツも着ないで!」

だが、シンの心配とは裏腹に、それまで必死だった青年達や技術者の者達は、不安そうな顔色を一切として浮かべていない。

それは、信頼の証拠だった。

これと云った追加装備を装着していない「黄金」は、よく云えばスタイリッシュで、悪く云えば物足りない外観をしていた。

だが、そんなことはまるで気にならないのか、起動した金色のモビルスーツは、瞬間的にミナ用にOSを書き換えられ、72D5式ビームライフル「ビャクライ」だけを携

行して、その一步を踏み出した。

〈ORB—01：「アカツキ」——出るぞ〉

黄金の太陽神が、深淵の宇宙空間に飛び出して行った。

「リジエネライト」のモニターが、^{アンノウン}正体不明機を捉えた。肉眼ではつきり視認できるほどの光輝。アツシユは目を疑ったが、実際にそれは、目立ち過ぎる黄金色を放ちながら、目標の「アメノミハシラ」から飛び出して来た。

——馬鹿にしてやがるのか？

そう感じざるを得なかったのは、目立ち過ぎる金色の装甲の上に、相手が単機でやって来たからだ。武装らしい武装はビームライフルしか携行しておらず、それもまた、アツシユの不快感を刺激した。

「ああんツ!？」

その「黄金」は、よほど腕に自信があると見える。

が、その「黄金」は、彼の中で忌まわしい記憶の中の「白銀」と対照的な輝きを放ち、彼は失調したように叫んだ。

「ムカつく野郎だぜ、速攻で殺してやる!」

「ザフトの手の者か、我が相手をしてやろう——」

「女とはなア！」

その瞬間、後方の「ゲイツ」小隊が動いた。

一斉にビームライフルを撃し、多勢に無勢の中、黄金の正体不明機に向けて銃口を絞つたのだ。光の驟雨が黄金の機体に降りかかるが、照準先の「アカツキ」は円舞曲を踊るような滑らかな動作で、すべてのビームを捌き切つてみせた。

そのあまりの鮮やかさに、一機の「ゲイツ」の動きが止まった。

（「ヤタノカガミ」を使うまでもないわ）

反撃として、ミナは72D5式ビームライフル「ヒヤクライ」を放つ。真つ直ぐに伸びた光条は、シールドを翳しコクピットを守ろうとした「ゲイツ」のメインカメラを正確に吹き飛ばす。

——ひとつ。

と、別方向から接近をかけた「ゲイツ」が両腰部の「エクステンシヨナル・アレスター」を射出する。アンカー状に迫る刺突武装だが、ミナは、くるりと踊つてこの攻撃を回避した。

そうして無防備に伸張したワイヤー部分を手掴みし、振り回すと、遠心力に振り回された二機目の「ゲイツ」が、また別方向を飛行していた三機目の「ゲイツ」に激突し

た。機体と機体が重なり合ったその地点にビームを撃ち込み、二枚抜きとばかりに、その二機の戦闘力をまとめて奪い取る。

——ふたつ。

——みつつ。

口内で数えながら、ミナは背後から四機目の「ゲイツ」が勢いよく迫撃して来るのを認めた。おそらく「アカツキ」がビーム・ライフルしか携行していないと判断し、距離を詰めた格闘戦に挑んで来たのだらう。

「良い判断だ。我はライフルしか持っていない——」

二連装ビームクローが出力され、鉤爪状の刃が「アカツキ」に振り抜かれる。

振り抜かれた鋭爪が「黄金」を切り裂かんとする直前、しかし「ゲイツ」の右腕は肩口から大きく断ち切られ、吹き飛ばされていた。ビームライフル「ヒャクライ」の銃口——そのフォアグリップの代わりに設けられたビームサーベルによって。

——よつつ。

72D5式ビームライフル「ヒャクライ」は、銃剣としても使用できるのだ。

「——浅薄だったな、出直せ」

云いながら、ミナは最後の「ゲイツ」に照準を絞る。

——いつつ。

とは、行かなかった。

圧倒的な技量差を目の当たりにして、五機目の「ゲイツ」は畏れを為し、未来を視たかのように「アカツキ」への攻撃を辞めたからだ。いや実際、そのパイロットにはある種の未来が視えていたのだろう。どのような奇襲も奇策も、目の前の相手には通じない。どのように攻撃を仕掛けようと、結局は返り討ちにされる——そんな、確約された『敗北』の未来が。

〈そこまでだあああッ！〉

が、未来が見えない、とんだ分からず屋もいるらしい。

次の瞬間——「アカツキ」の体躯より二倍以上の大きさを誇る「リジエネレイト」が、四本の鉤爪を展開し、一気に「アカツキ」へと突撃を仕掛けた。「ミラージユコロイド」を展開した虚空からの攻撃に、ミナも流石に意表を突かれる。

だが反応は早かった。軽やかに宙返りを決め、下方から空間を風いだロング・ビームサーベルの斬撃を回避して見せた。

アツシュは失調して叫ぶ。

〈卑劣なオーブの軍事ファクトリー！ ここを接収できりやあ、ザフトは手っ取り早く宇宙軍の戦力を増強できる！ パトリック・ザラが望んでるんだよオ！〉

「オーブに導いた棄民達のため、我は彼らの願いに応えねばならぬ——信賴の証として

な。ザフト風情に“アメノミハシラ”は渡さぬよ！」

〈抱きしめたいんだよお！〉

云いながら、巨大な“リジエネレイト”は全ての鉤爪を広げ、そいつと比べて二回りも小柄な“アカツキ”を捕縛せんと、急速に肉迫して来た。

が、ミナはまるで怯まなかった。その表情にはありあまる余裕が浮かんでいる。

「貴公は大きく、太く、長いが——下手だな」

無論それは、アツシユのモビルスーツに対する評価である。

それ以外で、あるはずがない。

アツシユが襲い掛かった、次の瞬間——“アカツキ”の目立ち過ぎる黄金の機体が、ぱっと彼の視界から消え失せた。いや、彼にはそう見えた。

「虚しいな」

刹那——“リジエネレイト”がマウントするロングビームライフルが切り裂かれ、続けざま、複雑な光刃の円舞が繰り出された。

“ヒャクライ”より繰り出された鮮烈な斬撃の舞が、純黒の機生獣——そのすべての腕を、鮮やかに斬り落とす。アツシユは抵抗しようとしたが、抵抗するための腕は、既に断ち切られて存在しなかった。彼がすべてのマニユピレーターを切り落とされたのに気付けたのは、それから一呼吸おいた後だった。

へな、なにいいっ!?!」

「それで言い訳はつくだろう。獣は檻に戻るのだよ」

アツシユは、苦しんだ。

へり、^{リジエネレイト}は予備パーツがありや、何度だつて再生できる！ こんな損傷、何ともねエんだよおツ!」

云いながら、四肢を切り離した^{リジエネレイト}は、コアユニットに分解され、アツシユは機体を転進させた。

急速に^{アメノミハシラ}から離脱し、それに続いて、すべての^{ゲイツ}もまた撤退して行つた。

「——無様なダンスよ」

「す、す……い……ツ」

戦闘の様子を、ステーションから光学映像で見届けていたシンは、一連の戦闘——いや、鮮やか過ぎて円舞^{ワルツ}とも見て取れる、ミナ自身の黄金の舞に感動していた。

——ほんの数分で、あれだけの部隊を……!

まして彼女の機体は、追加装備も持たず、大して機動力が底上げされていない状態だ。武装も最低限の銃剣しか持たず、その上、一度も被弾していない。

自由奔放に踊り、見る者を魅了するそれは、まさに華麗なダンスであつた。

(オレにも、あんな風に『力』があつたら——)

襲い掛かる脅威を、退けるための力——

降り注ぐ火の粉から、大切なものを護り抜く力——

それは、今のシンが何よりも欲していた、ひとつの答えであつた。

「……おれも……っ！」

あんな風に、戦いたい——

十四歳のシンは、そのとき秘かに、決意を固めるのであつた。

——それから間もなくして、すべての敵機を撃退した“アカツキ”は、ファクトリーに帰投した。

出迎えには、多くの者が上がって来た。

「冷や冷やしました、調整中の“アカツキ”で出てっちゃんんですから」

「世話をかけた。——しかし、やはりコクピッドの中は息苦しいな」

「はは、ミナ様はモビルスーツが不得手ですか」

操縦が上手いことと、好みかどうかは別問題であつた。

まったく、惜しいことですな。

何処からか、そんな野次の声が上がっていた。

「これは——新たな世界を望む者、全員の勝利だ」

そのとき人の間を割って、シンが寄って行った。

ミナはその姿を認め、声を発する。

「なにか、思い詰めた顔をしているな——どうした？」

「あのつ……！ ……その、お願いがあるんです——」

シンは、真つ直ぐにミナの顔を見上げ、云った。

「オレに『護る力』を——モビルスーツの操縦を、教えてくれませんか!？」

「……！ シン……！」

「あなたみたいに、強くなりたいんだ……！ もう二度と、大切なものを失わないように

——ぜんぶ、守れるように！」

目の前で失われた、母と父と、そして、最愛の妹の命——。

——マユ……。

助けられなかった後悔が、今も、シンの胸の中に深く、荒波のように渦巻いていた。

「だから、お願いします——！」

腰を折り、シンは深々と、頭を下げた。

ミナは、そんな彼に鷹揚と微笑んだ。頭を下げたシン自身は気付かなかつた——が、その微笑みは、まるで慈愛に満ちた母親のような笑みであったとは、そのとき現場に居合わせた者の多くが口を揃えて証言するところである。

「それがお前の信念なら、私は、それを尊重するまでだ」

云いながら、彼女はシンの頬を抱き、顔を上げさせる。

「よかろう——。私の力は出来なれど、教えられることは教えてやろう」

コーデインイターの特務部隊を単独で撃退しておいて、いったい、どのあたりが不出来なのだろうか。

とは、M1パイロット達が揃いも揃って感じたことである。

「余の力——おまえに託す」

一人称が代わり、その言葉には、一層の重みが増した。

温和な雰囲気を一掃したミナは、改めて、シン自身の真摯な希求に対し、同様に真摯に返した。

「新たな世界のために。踊れ——みずからの曲で」

「……！ はい……っ！」

未来を創るのは、運命ではない——

新たな自分の信念に従って、まだ幼い少年は、みずからの道を進み始めた。

『アプリリウス・ラブソディ』

透き通った少女の呼びかけが、街角のスクリーンから流れている。

通行人達はその声に足を止め、困惑と同情——人によつては怨嗟——の混じった目で、その少女の姿を見遣った。

↑——わたくし達は、どこへ行きたくつたのでしょうか？ 何が欲しかったのでしょうか

……？↓

非戦を訴える、ラクス・クラインである。

彼女の声は、透き通るように人々の胸を透過しては打ち、人心に影響を与えてゆく。啓発の言葉は、多くの者の心を揺さぶつた。

〈戦場で、今日もまた多くの血が流れ、多くの命が散つて行きます。犠牲の上に成り立つ今、わたくし私達はいつまで、こんな悲しみの中で生きてゆかねばならないのでしょうか？〉

平和の歌姫の姿は、ゲリラ放送を通じて“プラント”全域に発信されることになった。

かくした放送に後押しされるような形で、国内では、厭戦気分の機運が高まっていた。

へわたくし達が欲したものは、本当にこのような未来だったのでしょうか？ 撃つては撃たれ、撃たれては撃ち返す——けれどどうか、この果てない憎しみの連鎖を断ち切り、争いの日々を終わらせる道を探しましょう。

しかしパトリック・ザラは、決してラクスの訴求を認めることはなかった。

そもそも、かくして「プラント」市民の厭戦気分が高まり始めたのは、数週間前の「オペレーション・スピッドブレイク」失敗、ならびに「フリーダム」などのフラッグシップ機の喪失など、ザラ政権の度重なる失態に起因するものである。地上では多くの若人の命が喪われ、遺族の多くは耐え難い悲しみに暮れた。挙句、地上で戦線を維持できなくなったザフトは、ついに地球軍の宇宙への進出まで許したという。地球軍がMSの開発と運用に成功したことで今までの戦局の優位性も崩壊し、戦況的な劣勢は、火を見るより明らかだ。

人の口が立てられない以上、厭戦の機運は、高まる一方であった。

——だが、それを云うなら「スピッドブレイク」の情報で地球軍に漏洩したのは誰だ？

——最重要機密である「フリーダム」を、敵国に売り渡したのは誰だ？

パトリックは、一連の責任がすべてラクス・クラインにあると唱え、巧みな情報操作を行い、国民達の厭戦気分を反転させるよう奔った。彼は断固として、こう云い張る。

「ラクス・クラインの言葉に惑わされてはなりません！ 彼女は地球軍と通じ、軍の最重要機密を明け渡した叛逆者なのです！」

一国の頂点に立つ者として、小娘ひとりの戯言のために、地位を脅かされるわけには行かないのだから。

「戦いなど、誰も望みません！ だが、それではなぜ、このような事態となったのでしょうか！ 思い出していたきたい！ みずからが生み出したものでありながら、進化した我々の才能を妬んだナチュラルが、コーデイネイターに対して行つて来た、迫害と弾圧の数々を！」

パトリックは、さらに言い募つた。

「そこからの独立を願い、自治領を求めた我らに、答えとして行われた—— ユニウス・セブン」への核攻撃を！」

合計、24万3721名もの人々が犠牲になった。

聖バレンタイン、最悪のカラストロフ。

「憎しみの連鎖を断ち切る—— 素晴らしい理想です！ ですが、それを実現するためにどうすればいいのだと、彼女は仰るでしょう？ 敵を憎まず、許しなさいと？ 憎しみは憎しみしか呼ばぬから—— 敵を憎まず、愛しなさいと？ それも大切なことでしょう

——

しかし、パトリックのその言葉は、反語だった。否定の意味を強めるための、いつと
きの肯定——政治家の話術。

「——ですが、それが誰に云えますか!？」 無念の果てに散って行つた英霊達——その墓
標の前で、遺族達の前で、面と向かつて云えるのですか!？」

愛する家族を殺された者がいる。

だが敵を、微笑んで許しなさい。

だが敵を、微笑んで慈しみなさい。

だが敵を、微笑んで愛しなさい。

生きとし生けるもののために、憎しみを、優しく包み込みなさい。

聖女のように——?」

「へそんなもの、誰に出来る生き方でもありません! この戦争、我々は何としても勝利せ
ねばならぬのです! 敗北すれば、なお暗い未来しか待つていないのだから!」

理想と現実、違う。

声高に叫ぶパトリックに対して、ラクスはしかし、柔らかな声の中に凜とした色を含
み、明かす。

「地球の人々とわたくし達は同胞です。コーデイネイターは、決して進化した種など
はないのです。第三世代コーデイネイターの出生率は、年々低下するばかり……わたく

し達の存在を定義づける遺伝子操作そのものが、他ならぬ、わたくし達の未来を摘み取っているのです。

民衆に、動揺が奔る。

だが、気付いていた者は気付いていたようだ。

〈既に未来を作れぬわたくし達の、どこが進化した種と云うのでしょうか？〉

パトリックは、嘲笑と憤慨を交えて返す。

〈そのための婚姻制度！　そういう彼女こそ、わたしの息子——アスラン・ザラと子を成す立場にあつたことを忘れてはなりません！　我々の希望を一身に請け負っていないがら、それを裏切つた彼女の言葉に、決して惑わされてはなりません！〉

対の遺伝子を持つ者同士が、比翼連理の契りを結び、次世代の子を産む——その大役を期待されていた最初の希望が、他ならぬラクス・クラインだ。

聖クリスマス・イヴの夜、大々的に開かれた婚約発表にて、ザラとクライン、互いの家族が一同に会し、ラクスが星の名を持つ少女と初めて出会つた、あのとき——アスランとラクスの存在が大きく報道されるほど、ふたりの婚約はコーディネイター達にとつて大いなる未来への希望として謳われ、そして注目された。遺伝子の相性によつて弾かれ、子を残せないと分かつた途端に引き裂かれた男女は大勢いた。そのような者達を納得させるために、アスランとラクスはいち早く婚姻し、子を成さねばならなかつた——

そんなアスランの許から勝手に離れていったラクスに対して、酷い裏切りだ、と声高に叫ぶ者も多いのは厳然たる事実なのだ。

コーディネイターが受けた遺伝子操作によって、受精の成立しない遺伝子同士の配合は数多くあつた。世代が進むにつれ、コーディネイターの遺伝子の型は複雑になり、実際に「プラント」は、第三世代コーディネイターの出生率の低下を抑止することが出来ていない。

これを誤魔化す『象徴』としての、アスランとラクスの婚約——

だが、結局のところ、ラクスはこれを信じていなかったのだろう。仮にアスランと自分が子を成せたとしても、他の者達は——？ と。

「へ惑わすつもりなどありません。ただわたくし達の未来とは、わたくし達自身の、自由な意志が築くべきものと説くだけです」

半世紀後、自分達の子が担う未来において——

——そもそも望まぬ者同士の間にも生まれた子ども達が、いつたい、どれだけの愛を受けて育つていけるだろう？

たしかにラクスは、アスラン・ザラに対しては個人的な好感を寄せていた。優しく、誠実そうな人であると。勿論、それはあくまで以前の彼に対する印象の話だが——ラクス自身、彼に対して寄せていた好意的な感情を否定しているわけではないのだ。

しかし、結ばれるにしても、そこに制度が絡むのと、自由意思に基づいた結末であるのとは、意味合いが違い過ぎるのではないか？ 結局、婚姻統制を敷いて改善できる程度など、たかが知れているのだ。

「人の未来を創るのは、運命であつてはならぬのです！」

婚姻統制をはじめとした未来に待つてゐるのは、個人の自由が約束されない世界だ。

自由恋愛を、決して許さない——

人々の意志を度外視し、絶対的な法案によつて塗り固められた確定的な未来に、どれだけの幸福がある？

「いくら婚姻統制を敷いたとしても、コーデイナーのみの未来が永続することは、決してあり得ません。自然^{ナチュラル}への回帰もまた、わたくし達には必要なことなのです」

「よしんば問題があつたとしても、いずれは我々の叡智が、必ずや解決する！」

「争いをやめ、融和の道を捜しましょう——求めたものは何だったのでしようか？ 幸福とは何なのでしようか？ 愛する人々を失つてなお、戦い続けるこの日々の未来に、それは間違いなく待つものなのでしようか？」

——そんなある日、パトリックの執務室に一報が入つた。派遣していた特殊部隊が、遂に潜伏していたシーゲル・クラインを発見し、これを射殺したと——という。

パトリックは、ある折から常々疎ましく思いながらも、好悪反する感情を寄せていた

男の死を悼むように臉を閉じる。彼等は第一世代コーディネイターとして、輝かしい時代と、それでいて、苦渋の時代を共に乗り越えて来た盟友だったから。

アスランやラクス——第二世代のコーディネイター達は、みずからの才能と能力に無頓着だ。子どもの頃から周りは皆コーディネイターで、誰かひとりが格別に優れているわけではない環境に身を置いて育つたことから、自分達がどれほどに優れた種であるかを自覚し、自負しきれていない。だが、第一世代のパトリック達は違う。彼らはナチュラルの中に生まれ、その嫉妬と羨望を一身に浴びながら生き長らえた。そのため自分達の優位性を確固として自覚しており、ナチュラルから迫害を受けてなお、みずからを優れた種として自負し、一方で、ナチュラルを愚かで劣つた種として蔑視することにより、真に排斥されるべき者がどちらであるのか——決して見失うことなく、ここまでやつてこれたのだ。

だが、シーゲルとパトリックの袂を分かつたのは、まさに今、ラクス・クラインが唱えたことが原因にある。

優れたコーディネイターですら、完璧な一個の種族として永続することはあり得ない。その可能性——いや危険性が発覚した途端に、シーゲルはナチュラルへの回帰を唱え、パトリックはこれを断固として拒絶した。

『よしんば問題があったとしても、いずれは我々の叡智が、必ずや解決する——』

と、そう云い張って。

「まだ、娘の方が残っている——」

なんとしても、ラクス・クラインを闇に葬らなければ——。

パトリックは胸の奥に、そう静かに誓っていた。

ラクスが放送を終える。

彼女達が拠点としているのは、アプリリウス郊外に位置する、云ってしまえばみすぼらしい廃屋の中だった。中にはクライン派の随伴者と、マーチン・ダコスタの姿がある。

今の放送に思うところがあつたのか、彼は不意に、声を漏らした。

「——『未来を創るのは、運命であつてはならない』か」

それは、先の放送でラクスが発した言葉であつた。

ラクスは、きよろりとして怪訝そうな顔を浮かべる。

「はい？」

「いえ、恐悅なのですが……ラクス様が、ああしてご自分の意見を呈されるのは、すこし、珍しいことのように思ひまして」

ラクスには、自覚がないのだろう。

わたくしは、そういう人間でしたでしょうか？ と云いたげな表情を浮かべている。ダコスタは頬をかく。

「その、なんといいいますか——ラクス様は常々、民衆に対して、今ある現実への疑問を投げかけてばかりで」

ご自分の意見を、きちんと述べられたことが少ないように感じていたのです。

付け足されたその言葉に、ラクスは、驚いた顔をした。

「そう、でしょうか」

確かに彼女は、民衆に対して指導者を妄信するのではなく、自分自身で苦悩するよう呼び掛けて来た。——それで本当に道は正しいのか？ 他に道はないのか？ 考えなさい、と——確かにそれは、彼女が行って来た訴求活動であろう。

——だが、悪く云えば、それは民衆を迷子にさせる行為だった。

民衆をこれまで信じて来た道から隔離させ、彼等を路頭に迷わせるに等しい行為だった。

何が正しいのか改めて考えなさい、と云われても、道に迷った民衆はおそらく、口を揃えてこう云うだろう。

——では、どうすれば良いのだ？ と。

ダコスタは少し不安に思っていたらしいが、しかし、ラクスはたった今、はつきりと

婚姻統制による未来制度を否定した。自分の意見を伝え、その言葉で民衆の心を変えようと演説した。——こういう道はどうですか？ この道を進むべきではありませんかと。

確かにそれは、曲がりなりにもラクスの中に生まれた変化だった。

「……自覚がありませんでしたわ……」

ラクスは、素直に驚いたようであった。

あらあら、と云つて頬に両手を当てている。

『種を撒き。だが、種が育つには水を、光を、栄養を与える者が必要だ』——以前、彼女が仰っていましたよね」

今ある現実に対して、疑問を投げかけるだけでは、民衆は決して動かない。

民もまた、迷える人間達であるからだ。

——何が間違つていて、何が正しいかなんて、みんな分からないんだよ

——だから、人の言葉を聞くの。人に頼ろうとするの

それは、良い悪い、と云う問題ではなかった。

それが、人の世の在り方なのだ。今までも、そして、これからも——

民衆の上には指導者が在って、指導者が指した方向に、民衆は盲目になつて進んでゆく。それは先日、地球軍によって陥落したオーブの政治体制にも云えたことであるが、

現「プラント」にも同様に云えたことであろう。

ラクスはそこに、疑問の種を植え付けて回った。——本当にそれで良いのか？ と。が、種が育つには、これを育てる者が必要で、そこにはラクス自身が位置づかねばならないのだろう。何も与えず「勝手に花開け」など云つたとて、そんなことは不可能なのだから。

「手酷い喩え方なのでしようがね——民衆つてのは、植物と同じなんですよ。種を植えたって、指導者が水を与えるまで、決して育たない——花開かない。懇切丁寧に世話してやらないと、描いた通りに育たなかったり、枯れてしまうことだってある……」

ダコスタが感慨深げに云った。

それもまた、種を撒いた者の責任なのだろう。ラクスは自分の変化を自覚しながらも、前を向いた。

廃屋の中に、クライン派の男——同志たる諜報員が入って来た。

ダコスタはその姿を認め、問う。

「——何か新しい話は？」

トレンチコートにサングラスをかけている諜報員の男は、外に出て掴んで来たであろう情報を明かした。

「地上についてだが、各地のマスドライバーを巡る戦乱に一応の決着がついたようだ。オーブにある“カグヤ”とビクトリアの“ハギリス”が共に地球軍の侵攻を受け、オーブのものは壊滅、ビクトリアのものは奪還された。……月基地には、地球軍がどんどん上がって来ているぞ」

「オーブが？」

男の報告に、ラクスの反芻がかぶさる。

諜報員の男は一礼し、先を続けた。

「オーブは“種”として二隻の戦艦を宇宙へ送り出し、その直後“カグヤ”とファクトリーを跡形なく自壊させ、連合に降伏しました。戦災に遭った、避難民の行方までは分かりませんが——」

「そう、ですか……」

話に上がった、二隻の戦艦——

其処にどのような志を持った者達が乗っているのか、彼等が何を託されて宇宙に上がったのか、ラクスは既に、掴んでいるようであった。

おそらくは其処に、自分と同じ、融和による平和を望んだ者達がいることも——

「——では？」

「ええ、予定より早いのですが……動かれた方が良くかと」

「時なのでしょね。わたくし達も、動かねばならない——」

静かに誓い、そうして、彼女達は行動を開始した。

ラクス・クラインが放送し続けるゲリラ演説により、国内はいつそうの混乱状態にあつた。

この事態を重く見た。パトリックは、アプリリウス市にある自分の執務室に、息子のアスランを招集していた。すでに、宇宙軍の戦力増強に乗り出していたザフトは、地上に展開していた部隊の殆どをL5 プラントに宙域に駐屯させていた。そこには勿論ラウやイザークの姿もあつて、アスランもまた、これに便乗して本国に帰還していたのだ。

「アプリリウス・ワン」の執務室——

招集指示のあつたアスランはそこで、ラクスの放送を聞かされ、見せられ、愕然とした。

「……」

——彼女が、本当にラクス・クラインなのか？

その一念がまず、アスランの胸を支配する。そこには自分の恋人であり、婚約者であつたはずの少女の面影はなかつた。無邪気どころか、無慈悲な聖女のような——まるで、本当の別人に憑依された雰囲気さえ感じられる。

アスランは堪らなくなり、デスクを挟んで相對する父に叫ぶ。

「しかし、俄かには信じられません！ 彼女が “フリーダム” の強奪を手引きした——な——」

“スピッドブレイク” 発動後、長らく地球での任務に当たつていたアスランには、“プラント” 本國で起きていた一連の事件を把握する術がなく、情報を得るのが人よりも遅れていた。

だからこそ、このときのアスランには父に打ち明けられた事実の全てが、まるで嘘のように思えた。

報告された重要事項は、大まかには四つある。その中には世間一般への公表が憚られる機密情報もあつて、これを伝えられたアスランが、如何にパトリックに信任されているかが伺える内容となつてゐる。

——ひとつ、ZGMF^{ジャ}—X09A^スがロールアウトした直後、ラクス・クラインの手引きによつてZGMF^リ—X10A^ムの奪取が行われたこと。

——ふたつ、逃亡したラクス・クラインの追跡にはステラを遣わせ、アラスカで大破

したGAT-X404の代替機としてZGMF-X08Aを授与させたこと。

——みつつ、ステラの監視役に特殊部隊とZGMF-X11Aを就けたのだが、ラク・クラインとの接触を果たしたはずの彼らは、他ならぬステラに叩き潰されて帰って来たこと。

——よつつ、特殊部隊が不在になった隙を突いて、地球連合軍の手によつて実働実験中の軍事施設でZGMF-X12Aが強奪されたこと。

歯車が狂い過ぎている——と、全てを知ったアスランは感じた。

目の前にいる父は、そこに追い打ちをかけるように現れたクライン派の暗躍によつても、ひどく忍耐力をすり減らしているように見えた。

——なぜ、こんなことになっている？

——なぜ、あらゆる結果が父を裏切るような真似をする？

アスランは憤りを隠せない。

「オマエがどう感じようが、これは事実なのだ。それに、オマエが提出した地球での活動報告に目を通せば、否が応でも真相は見えて来る」

それまで方々に怒鳴り散らして来たのだらう——父の声は、ひどく掠れている。

アスランはそんな父に対し、ひどく気づかわしげな視線を送った。パトリックは、アスランが地球にて記録した報告書に目を通していた。

「かのオーブの地で、三機ものファーストステージシリーズを見かけた、だと？」

書類の内容を反芻するように、パトリックが声を言葉を漏らす。

文面に記載されてあることは、大まかに四つだ。

——ひとつ、奪取された直後のZGMF-X10Aは第一に“JOSHUA”へ舞い降り、その後は足つきと共にオーブ連合首長国へ逃れたこと。

——ふたつ、そのZGMF-X10Aを奪い去ったのはコーディネイターであり、アスランがインド洋で討ち果たしたはずのGAT-X105のパイロットであったこと。

——みつつ、“フリーダム” 追討のためオーブ連合首長国を訪れた際、そこには既にZGMF-X08Aがいて、当機はオーブ守備軍の一員として地球連合軍と戦闘行為を行っていたこと。

——よつつ、同様にオーブの地でZGMF-X12Aの反応を検知し、装甲が一新されていた当該機体は、地球軍に所属していたこと。

全ての報告に目を通し、パトリックは重い嘆息を吐く。ついで、嘲るような声を溢した。

「バケモノ共めが、本性を表しおったか……」

情報の共有を終えた。パトリックは、何かに納得した風であった。

「私が迂闊だった——なぜ、こんなにも簡単なことに気が付かなかったのか」

「父上……?」

アスランは胡乱げに、パトリックの表情を伺う。

「アレが生きていたときから、まずは疑ってかかるべきだった! ——初めからアレは、こうすることが目的だったのだな……?」

その独白は、娘を娘とも呼ぼうとしない、無愛想な云い方をしていた。

アスランは、父が何を云っているのかが理解できず、茫然と立ち尽くし、その独白の意味を探る。

「ち、父上? 何をおっしゃっているのです——」

途端、パトリックは何かを吹っ切ったかのように、割り切ったかのように、顔を上げた。

そうしてアスランの目を正面から見据え、短く告げた。

「よいかアスラン、"グレイドル"を奪取して逃亡した『金の髪の少女』……"アレ"はすでに私の娘ではない! そして、オマエの妹でもないのだ」

場に沈黙が流れる……いや、応答するべきアスランがしばし、身動きを取ることを忘れた。

「は?」と云わんばかりに呆然と口を開き、アスランは立ち尽くす。パトリックの言葉の意味を把握するまで、多少の時間を要した。

「アレは初めから、我々を貶めるために送り込まれた偽物まがいものだったのだ」

告げられたアスランの中では、なおも時が止まっている。

だが、そんな彼に斟酌することもなく、パトリックは冷酷とも云える口調で、淡々と推測のみを述べていく。

「我々を油断させるために遣わされた大西洋連邦の間諜スパイ——不埒なナチュラル共に洗脳され、コーディネイターを貶めるために造られた地球連合の強化人間……！ 初めからそう認知していれば、いつたい、誰があのような紛い物を信じたろうか」

「まっ、待つてください、父上」

「私の知っている娘は、とうに失われていたのだろう！ ——忌々しき、あの血のバレンティンでな！ いま、ステラの形をして動いているアレは、愚かなナチュラル共に、そしてラクス・クラインに踊らされた偽物なのだ！」

それは、パトリックなりに導き出した結論であったのだろう。

冷静に考えれば、不可解な点はいくつも存在していた。血のバレンティンを切片として、戦争が始まると同時にひよっこりと姿を現した少女。何の因果か、それこそ地球軍が“G”兵器を開発していた始まりの地——“ヘリオポリス”の中に。そんな彼女はザフトによる“デイフェンド”の強奪を阻止し、パイロットとして地球軍艦の戦闘員となり、多くのザフト兵と戦い、しかし、彼女の生存を認めたラウ・ル・クルーゼによつ

て拿捕された。だが、本当はその時点で彼女の素性を疑うべきだったのではないか。（地球軍の人間であったラクス・クラインを渡すために単機でやって来るなど！ 捕まえて下さい、と云っているようなものではないか）

あの時点で「アークエンジェル」には、ラクス・クラインの身柄を引き渡すことにメリットは存在しなかったというのに。

いま考えれば、明け透けすぎる罫。

にも関わらず、パトリックやアスランは拿捕したステラを『生還を果たした実の娘』と信じた。その果てに「ナチュラルに洗脳されていた」という事実に対し、あろうことか同情を働かせてしまった。本来ならば最大限に警戒すべき事実を、彼等はさっぱり等閑視してしまったのだ。

——なぜか？ いや、それは云うまでもない。

それはステラが、彼らにとって『家族』だからだ。

奇跡的な娘の生還に、喜ばぬ家族がいるのか？ 身内に対して甘くなる人間の心理を突く巧妙な罫として、ステラは実際にザフトの懐まで忍び込んだ。ザフトに入隊し、いつとき彼等の信頼を勝ち取る振りをして——だが「クレイドル」という最強のMSを与えられた途端、敵勢力へ寝返り、自分達——他ならぬ『家族』に対して反旗を翻した。

パトリックは、嘆くように吐き捨てる。

「最愛の家族を、平気で裏切る娘とは何だ？ 本当に我らを愛しているなら、どうして我らが不利に陥ることをやってのける？ ——なぜ我らではなく、クライン風情の味方をする!？」

こうして全てを悟ったとき、パトリックは、とめどない憤怒に駆られた。

答えは、簡単だ。

例の紛い物にとつて、自分達はもはや『家族』などではない——単なる『敵』でしかなかったのだ。だから容赦なく、自分達を裏切ることが出来たのだ。

——ならば、こちらと同じように認識するまでだ！

あの娘は、もはや『家族』などではない——単なる『敵』だ。

無垢で無邪気で、純真だったあの頃の娘は、もう二度と戻っては来ない。

「あの娘は既に、死んだものと思え！」

これまで自分達が接して来たものは、ナチュラルによって改造され、改悪された紛い物。敵勢力が造り出した、娘とそっくりの形をした幻影。

最愛の家族を象り、生来の無邪気な娘との思い出を愚弄する——おぞましきバケモノに、これ以上、事態を引つ掻き回されるわけにはいかない。

「子供でも分かる図式だったのだ！ 我々は良いように踊らされていた、敵の策略にな

！」

「た、確かにステラは我々の許を離れて行つてしまいました……！　しかし、だからと云つて……！」

アスランは云いながら、父の強引な論理を、反転できる言葉を搜した。

あとになって思えば、父が次に何を云い出すのか、甚だ嫌な予感がして怯えていたのだろう。

「アイツはナチュラルに騙されているだけなんです、本心じゃない！」

だがそれは、結局は感情に身を任せて放たれた言葉だった。

「国家機密である『クレイドル』を異邦に持ち去つた。この時点で『フリーダム』と同罪なのだ、何か酌量の余地があるのか？」

「あつ……くつ……！」

「『フリーダム』同様、オマエには『クレイドル』の撃破、および、パイロットの抹殺』を命じる！　——これは最高評議会議長からの勅令だ！」

云われ、アスランは遂に、視界が眩むのを感じた。

「で、すが」

相手は、家族の一員なのですよ——

喉元に突つかかった言葉は、決して声にはならない。

全てを見通しているからこそ、パトリックは、アスランに言い聞かせる。

「そういう身内への甘さが、結果的にこうして我らの首を絞めているのだ。わかるのだよ、アスラン……!」

「え……あ……っ!」

「オマエは賢くなつた、私が期待していた通りにな……! ならば判るだろう! アレは既に、我らが愛していたかつての娘ではないことが……! 今のアレは、ナチュラル共に支配された、まったくの別物だということが!」

畳みかけるように紡がれる声に、アスランは混乱した。

——ステラは、敵?

——アイツは、裏切者……?

——アイツは、偽物……?

久方に再会した、あのときから——?

「し、しかし……!」

それでも、と、云わずには居られない。

——この手で触れて来た感触は、そう、本物だった……!

再会した時から、アスランはステラのことを偽物だと疑つたことなど一度もなかった。ときおり自分の知らない凶暴な彼女が表に出て、その都度困惑することはあつたか

も知れないが、そのすべてはナチュラルのせいだと認知していた。

たしかに、ビクトリアでの戦い以後は、いやに彼女を遠ざけ、素っ気なく接してしまつた憶えもある。いま思えば、あのときから彼女にもつと優しく接していれば、こんなことにはならなかつたのだろうか？ 彼女を孤独にせず、頼れる家族として、ずっと傍にいてやれば——あるいは？

——本当にもう、間に合わないことなのか？

——そこまで考え、いや……と、アスランは胸に決意を抱く。

——まだ、きつと、間に合うのではないか。

そう思ったからこそ、アスランは次の瞬間、口を開いた。真つ直ぐにパトリックを見据えて告げる。

「お願いします、父上！ オレに、オレにもう一度だけ機会チャンスを下さい！」

その言葉を聞き止め、パトリックは間違ひなく呆れた顔をアスランに返した。それは一種の失望が混ざつたような表情だつた。

鋭い眼で睥睨され、アスランが一瞬、その眼光に怯む。だが、それでも堪え忍び、先を続けた。

「オレがアイツを、ステラを説得して見せます！ —— プラント〃に連れ戻してみせます！」

納得できず、食い下がるアスラン。

だがパトリックは、厳にして答えた。

「駄目だ！ そのような許可は出せん」

拒絶され、いよいよ眩暈がしそうになる。

だが、アスランはそれでも退かなかつた。厳格な一言であしらおうとするパトリックに対し、アスランは見苦しく、それでいて懸命に、食い下がった。

「——オレが、医学者になります！」

その瞬間。思いがけない言葉が吐き出され、空気の流れが、びたりと止まった。一拍置いて、その意味を掴みかねたのか、流石のパトリックも啞然とした表情を浮かべる。

医者とは一体、どういう意味だ？ そう云わんばかりの——

それは、アスランが、初めて自分の志を父に打ち明けた瞬間だ。

父としては、意味不明ではあるにせよ、そのような息子の発言に意表を突かれる形となり、先程と打って代わって真意の説明を求めた。

「戦争が終わったら、医療に関する術を学びます。自分にできることを、やります」

「それが、医学だと……？」

「野蛮なナチュラル達が生み出した、強化人間の病気や洗脳や、すべてを取り払えるような……！ アイツを人間に戻せるような——そういう医学者を志します！」

パトリックはそこで、アスランが何を云いたいのかを察した。

つまりは『自分が医者になるから、彼女を説得する機会をくれ』と——そう云いたいのである。

地球軍の洗脳を受けた彼女が脅威に見えてしまうなら、その洗脳を除去できる医学者が実在すれば、全ての弊害は消え失せる。

それはアスランの抱いた、未来に向けた——ひとつの決意であった。

——本来、何をさせても優秀であるはずの天才、アスラン・ザラはしかし、これと云つてみずからの将来に向けて展望があるわけではなかった。

パトリックは、そんな息子が蒙昧なままで育つて来てしまったことを、みずからの落ち度として語つたこともあるほどだ。だが現実問題、パトリックを始めとする多くの大人に将来を期待されていながら、当のアスランは将来へ向けた積極性に誰よりも欠けていたのだ。そもそも彼が今年になって迎えた十六歳は、すでに「プラント」では成人としてみなされ、文官議員であるイザークをはじめ、周りの者はすでに何かしらの職業に

立派に着いている者も多いというのに。

——だが、強いていうならアスランは幼少の頃から、機械を弄るのが好きだったか？ ハロやトリイと云った自作ロボットの数々について、パトリックは友人であり、工学エンジニアでもあるユーリ・アマルフィに話したこともあり、ユーリの方が関心を示してくれていたほどだ。

いっそのこと、ユーリの所でエンジニアの修行をさせようかとも考えたこともあるのだが、アスランにとって機械工学はあくまでも趣味であり、職業として憧れを持っているわけでもないらしい。

（アスランにとつては、生まれて初めてのことなのではないか？ みずからの口から、何かの職業に就きたい、と云い出したのは……？）

語ったのは突拍子もない、医学者としての展望だった。

父として、パトリックはアスランの言葉を慎重に吟味する義務があった。医学者として要求されるのは、非常に高い水準での知能と知識——レベルが高すぎて、世間一般に「宇宙人」などと大袈裟に評されるほどの頭脳だ。

——だが、あるいは、アスランならば？

息子の才能に自信と確信を持っているパトリックが、不意にそう感じてしまったのも、また事実だ。

それは曲がりなりにも、戦争の中で自分の才覚と能力を自覚した、アスランの中に生まれた変化だった。

アスランはそうして、父に面と向かつて訴えた。

「だから、一度でいいんです。オレに機会を下さい……！」

示されたのは嘆願。渋った表情を浮かべるパトリックの中では、今のアスランほど『理想の息子』という表現が当てはまる者はいないだろう。誰よりも優秀で、そんな自身の能力を、父に次いで誰よりも認識している――

思い描いた通りに育つてくれた、このときの息子の夢を、パトリックは否定できなかった。

「ステラの説得に、失敗したときは」

「そのときは――オレが撃ちます」

「……そうか……」

二言は、ないな？

確認するパトリックに、アスランは、決意を持って頷いた。

ふたりの間に、沈黙が流れる。

目を見合い、互いに心の底を訴え合う。永遠とも一瞬とも取れる時間の後、先に目を逸らしたのは、パトリックの方だった。

「……ならば良い、許可しよう」

負けたのは、パトリックの方だった。

「数日前のことだ。地上のオーブから宇宙に上がった艦艇が二隻、確認されている。観測隊の話では、その後、それらはL4に向かったものとされているが——」

オーブで目撃したという「クレイドル」は、そこに潜伏している可能性が高い。

パトリックは改めて、アスランの目を見て告げた。

「アスラン、おまえには、その追撃の任に当たってもらおう……」

その声が震えているように聞こえたのは、気のせいだろうか。

「就航を待つ最新鋭艦——『ジャステイス』の専用運用艦と、ナスカ級二隻を護衛として手配する。二時間後には、L4に向けて発つてもらおうぞ……」

「……ありがとうございます、父上……」

「礼には、及ばん……」

それは、そうだろう。パトリックがアスランに与えた任務は、彼の家族を——娘を、場合によっては抹殺する内容のもの。

——動揺を押し殺しているのは、どうやら、父も同じようだ……。

そう思い、アスランは小さく、哀しい笑みを浮かべた。

(どうして、こんなことになってしまっただ……ッ)

アスランは、ひとり瞑想した。

ステラが万が一、自分の云うことを聞いてくれなかった場合——「プラント」に戻って来てくれなかった場合。

そのときは『オレが討つ』——

この一念に対して、父に誓ったように、アスランに二言は許されない。彼女がテロリストとして「プラント」の前に立ちはだかるのなら、自分は、彼女を抹殺するのが使命だ。

決意は固めた。

自分が腹に決めた覚悟はもう、揺るぎはしない。たぶん、きっと、恐らくは——。

——だが、オレは『力』を……！

——こんなことをするために『力』を手に入れたわけじゃない……！

その矛盾が、今のアスランを迷わせた。

妹を守るために手に入れた力——。

その力で、妹を殺しに向かおうとしている自分が今、ここにいる。

——オレは、やはりおかしいのだろうか……？

——オレは、間違っているのだろうか……？

(戦うことに迷うのは、きつと久しぶりだ)

いつからだろう？

いつから自分は、何の迷いもなく戦うだけの人間になっていたのだろうか？ よく思い出せない。

が、そんなアスランの迷いを断ち切るかのように、パトリックはアスランの肩に手を置いた。それは、ひどく優しい手だった。

「……頼むぞ、アスラン……」

「父上……？」

その手の、あまりの優しさに……いや弱さに、アスランは意表を突かれた表情をする。パトリックは、視線を落としながら、小さく願うようにして云った。

「お前まで、私の許を離れてくれるな……」

ハツとして、アスランは父を見返した。

それはアスランが初めて見るかもしれない——弱気な父の、衰弱した声だった。

「もう私には、お前しか居ないのだ……」

このときパトリックは、あるいは、アスランまでもが自分の傍を離れて行ってしまったことを、危惧していたのではないだろうか？ そうなってしまうことを、酷く畏れている。

たのではないだろうか……？

戦争で、パトリックは妻を殺され、娘を奪われた。

復讐のため、ようやく手にしたと思つた地位——議長の座。戦争を終わらせ、コーデインイターの安寧の未来を築くことが出来ると思つた、ほんの矢先のこと。

現実、まるでそんな彼を打ちのめすかのように、彼にとつて不幸な方向に転落して行つた。——アラスカ攻略戦の失敗、*「フリーダム」*の奪取、*「テストメント」*の強奪、*「クレイドル」*の造反、ビクトリアの陥落——巧妙に逃げ回り、人心を惑わそうとするクライン派の暗躍——それらがパトリック・ザラの忍耐力を揺らし、彼の精神を擦り減らして行つた。

今の彼に頼れるのは信じられるのは、理想の息子に他ならない、アスランしかいなかったのかも知れない。アスランにだけは、自分の傍に残っていて欲しいという——父親となつた者であれば誰もが抱く感情を、このときのパトリックもまた、抱いていたのかも知れない。

「父上……っ」

「レノアを殺され、ステラはああも変わってしまった——！　こんな忌々しい戦争は、今度こそ終わらせねばならんだ……っ」

改めて、アスランは実感する。

そうだ、父はずっと前から、本気で戦争を早期終結させようと、身を粉にして狂奔して来た。

——そのために、こんなにも頑張っていらっしゃるではないか……。

なのに、それを理解しようとしないう連中がいる。

父の努力を嘲るかのように、裏切るような真似をするテロリスト達がいる……！

アスランは胸の奥に、静かに誓う。

——そういう奴等が、父を苦しめているのだ！

再び自身の中に翳し込んで来た迷いを、断ち切って見せる。

(迷いなど)——『力』を殺すだけだ)

誰が裏切ろうと、誰が邪魔をしよう。

(オレはこの人の——父上の味方だ……)

なぜ、とは聞かない。答えなど、初めから決まっている。

自分とこの人は、血の繋がった親子なのだから。

それから、アスランは出発の準備を整え、"アプリリウス"の宇宙船格納デッキに移

動した。

そこには、今か今かと就航を待つ、一隻の新造艦が現存していた。

淡紅色とも、薄桃色とも取れるボディに、優美な白い翼が印象的な外観をしている宇宙艦だ。両側部には「ミーティア」と呼ばれる特殊武装を内蔵し、外観上は、ザフトらしいナスカ級の流れを汲んでいるのか、あちらの無骨な船体を華やかに、そして物柔らかい女性的なデザインに改変したような外貌をしている。

どうやらこれが、父の云っていた「ジャステイス」の専用運用艦だろう。

(「エターナル」か)

新造艦の名称を呟きながら、アスランは感慨深げに、みずからの乗機——「ジャステイス」を、その艦内に移送させた。

どうにも船内は、核エンジンの整備に必要な専用設備や機材を搭載しているらしく、そういう意味では「ジャステイス」の専用運用艦というより、すべての核ジェネレータ搭載機の運用艦、と云った方が適切なのかも知れない。もつとも、現在ザフトの手許に残っている核エンジン搭載機など、それこそ「ジャステイス」くらいのものだ。特殊部隊がもう一機の核エンジン搭載機——ZGMF-X11Aとやらを所持しているらしいが、そちらは規格が巨大すぎて、この艦には搭載できないらしい。

他愛もないことを考えながら、アスランは艦内に降り立つ。

格納庫がだだっ広い印象を受けるのは、その通りに空間が広いからなのか、それとも、整備士の人間が少ないからなのか。出航前だというのに、嫌に人気が少ない気がした。が、アスランはこれと云って気にしなかった。

キャットウォークの向こう側から、ひとりの男が歩いて来る。顔に痛ましい疵の入った、隻腕の男だ。

「ようこそ少年、議長から話は聞いているよ。私はアンドリユー・バルトフェルド——この艦の艦長に新任された者だ、よろしくな」

後末がやや皮肉めいたように聞こえたが、アスランはそんなことが気にならないほど、驚いていた。

無理もない。目の前に居る男は、元リビア砂漠に駐屯していたザフト地上軍の中でも、名将与名高い人物だったのだから。

『砂漠の虎』……!? あなたが……』

「初めまして、になるな。キミのお父上には生きる場をもう一度与えてもらったクチだね、艦長として、宇宙でも気張らせてもらおうとするよ」

生還したという噂は聞いていたが、まさか、そんな大物が“エターナル”の艦長を務めていようとは。

ともあれ、アスランは名高きザフトの名将与共に、これから戦場を駆けられることを

誇りに思った。

下手に新米な人物が艦長だったところで、困るのは、その管轄にあるアスラン自身なのだ。その点『砂漠の虎』と名を馳せたこの男なら——嫌に陽気な口調はともかく——パトリックが見越したように、信頼は置けるはずだ。

「……? やけに搭乗員が少ないように見えるのですが、気のせいでしょうか?」

「? この艦は最新鋭艦だが、一方では実験艦としての意味合いも強くってね」

「はあ」

「操艦機構がオートメーション化されている分、少人数での運航が可能になっているんだ」

もってもらしい説明だが、それはアスランが訊ねた質問に対する適切な返答になっているのだろうか?

不意に思ったが、これと云って不満もなかったため、深くは詮索しなかった。アスランの頭は、これから赴くL4コロニー群でのことで、一杯一杯だったのである。

よって——アスランは、気付かなかったのだろう。

自分が、とんでもない場所にみずから足を踏み入れてしまったことに。

結論から云えば「エターナル」の搭乗員が少ないように見えるのは、アスランの単なる気のせいではなかった。

實際、降ろされて^{……}いるのだ——何人もの、ザフトの正規兵は。

時間を少し戻して、それは、アスランが“エターナル”に乗船する数十分ほど前のこと。

クライン派による偽装と護衛を得て、目立つ桃色の髪を隠したラクスが、先に、この艦を訪れていた。

「——アスランが？」

パトリック・ザラから直々に、この“エターナル”の就航命令が下された。

そのときラクスは、この艦にアスランが乗船することを知った。

ダコスタが説明する。

「ザラ議長の密命を受け、L4へ向かったオーブ艦の行方を追跡するようです。我々もL4に向かうため好都合ですが、彼は……果たして信用できますか？」

そう、ラクス達もまた、この“エターナル”を強奪し、L4に向かったオーブの二隻と合流する算段であったのである。

だが、その艦にアスランが搭乗するとなると、当然、ラクスは真つ先に身を隠す必要がある。アスランが彼女と志を同じくしている人物であるのなら、隠れる必要もないだ

ろうが——

「——ザラ議長の命令を受けて、ですか……」

最大限に懸念すべき問題は、そこにある。

仮にアスランがパトリックの信任を得ている人材とするならば、いくらラクスという元婚約者でも、彼がこれに気を許すとは思えない。何より、ラクスは現在、真つ向からパトリック・ザラと対立している立場にあるのだから。

「念のため、ラクス様はL4に到着するまで姿をお隠しになられていた方が良いかと思われます。いくら婚約者とは云え……彼はパトリックの息子です。彼が『ジャスティス』で艦を出撃してから、すべてを明かしましょう」

「なんだか、アスランに申し訳ないですわね……」

「生き残るためです。あなたは、こんな所で捕まっつていい御方じゃないんです」

幸い、この艦は『ジャスティス』しか搭載しないため、このさき『エターナル』艦内において、異分子はアスランひとりでしかないのだ。

当然、新造艦である『エターナル』の護衛には、ザラの息がかかったナスカ級二隻が随伴するが、そちらはなんとか振り切ることが出来るだろう。

そんな時、アンドリユー・バルトフェルドがやって来た。ラクスはその姿を認め、小さく微笑んだ。傍らに居たダコスタが口を開く。

「首尾の方は？」

男は、飄々とした口調で返した。

「ああ、『最終準備』の内容が分からないようなニブい子達には、わるいが艦を降りて貰ったよ？　こちらら過酷な旅に出ようとしてるんでねえ、物分かりのわるい連中を乗せておくほどの余裕は、僕等にはないだろう？」

冗談ほく紡がれた表現に、ラクスは小さく笑う。

「降りてつた子達は、今頃、僕が就航記念に奢つたモカでぐっすりさ。二時間は目を覚まさないよ」

こうして新造艦“エターナル”は——アスラン・ザラを除く——クライン派の手によつて占拠された。

何も知らないアスランは、これから起こる未来に向けて僅かな希望を馳せ、この最新鋭艦——“エターナル”出航の瞬間を待っていた。

——そのときは、想像より早くやって来た。

予定より数分早かったが、まるで何かに急いたかのように、艦橋ではバルトフェルドが声を発した。

へでは本艦は、これよりL4へ出航する。——準備はいいかなあ？

最後の陽気な一言は余計だ、とは、搭乗員の誰もが思ったことであろう。

すると、格納デッキのメインゲートが開き、艦船前方に、星々の海が露になった。司令部が“エターナル”の出向を認めたのだろう。

駆動音が高まり、噴射口から、一応にガスが噴き出し始めた。

へ“エターナル”——発進する！

揚々とした号令と共に、艦に強い加速がかかり、淡紅色の戦艦は、一気に宇宙空間へと飛び出して行った。

向かうのは、L4——

オーブから飛び立った“アークエンジェル”と“クサナギ”が向かった、廃棄コロニー群である。

L4宙域は、地球を回る軌道上で、月を挟んで“プラント”の対極に位置している。

そのため“アプリリウス・ワン”から目的地までへの到着には相応の時間を要し、それも、数十分という僅かな時間で辿り着けるようなポイントではなかった。

おおまかに考えても、二時間程度はかかる計算だ。

が、その内の四〇分もの間、アスランはひとり、パイロットアラートの中でうずうずと歩き回っていた。何をしているわけでもない、表記した通り、ただ歩き回っているのだ——同じ場所を、何度でも。

仮にもこの場に、誰かしらの同席者がいれば「いい加減に落ち着きなよ」と二〇分を超えた辺りで制止の声のひとつでも流石に掛けてくれるのだろうが、現在、この艦にモビルスーツパイロットはアスランしか搭乗しておらず、必然的に彼を止める人間はいないし、アラートに入って来るような人物もいなかった。唯一、この場に縁のありそうな『砂漠の虎』だが、彼はいまは艦長なのだ、こんな場所に入って来られるはずもない。

アラートの中には、せいぜいドリンクの自販機しか設備されておらず、誰がどう見ても、退屈で億劫な場所である。

かれこれ、アスランは四〇分もの時間をここで費やしているが、そんな彼の状態を一言で云えば、とにかく落ち着きがない。ビクトリアから最近にかけては、特に冷静、時には冷酷だった彼は、戦地であれば一時間どころか、十時間でも隠密に待機していられるだけの忍耐力を持ち合わせているはずだった。そういった軍事教育も、アカデミーを首席にて卒業した彼は、充分に受けているはずだった。どんなにアスランを嫌っている者でも、たとえイザークであっても、彼に対してせっかちな奴だとか、落ち着きがないなどと云う陰口は叩いたことがなかったほどだ。

が、そんなアスラン・ザラが、何と云うわけでもなく同じ場所をぐるぐると歩き回り、これほどまでに焦心しているとは、相当なストレスに精神が侵されている証拠なのだろう。

……だからだろうか？ アスランは“エターナル”の総搭乗員数が少ないという、冷静に考えれば致命的な違和感にも氣を立てることはなかったし、この“エターナル”が、後方に後続する護衛艦——ナスカ級の二隻から、妙に距離を取って航行していても、“エターナル”の足は速いのだな、という程度にしか考えなかった。が、ストレスに侵されても無理はない——。

事情を知った者は恐らく、口を揃えて、そう云うことになるのだろう。彼が目指す先には妹がいて、アスランは彼女を、万が一にも抹殺しなければならぬのだ。

何を云おうか、どう説得しようか——と妹の前では本人も驚くほど急に口下手になるアスランは、この時間をずっと考え回っていた。仮にも、ステラの説得に失敗すれば、自分には彼女に銃を向けねばならないのだ、誰だって必死にもなるだろう。

『もう私には、お前しか居ないのだ……』

今もまだ、父の痛ましい声が脳裏に焼き付いている。

そう——自分は決して、父を裏切るわけには行かない。

最後に頼られた自分が裏切れば、父がどれほど悲しむだろうか？ どれだけ傷つくか

ろうか？ そう思うと忍びなくて、アスランは気が気ではなかった。

——本当はステラに銃を向けたくなどない……！

——だが、戦わなければ、父上に申し訳が立たないじゃないか……！

なぜ、どうして。こんなことになってしまったのだろう？

ステラもパトリックも、アスランにとっては等しく、大切な『家族』なのに。

——なのに何故、どちらかを選択しなければならぬ……？

彼を襲ったのは、払っても払っても消えない、執拗な迷いだった。

父か、それとも、妹か。

余人には計り知れないストレスの板挟みに合いながら、冷静なはずのアスランはこの

とき、明らかに失調していた。

「ステラ——っ」

——俺が手を伸ばせば、お前はいつたい、どんな対応をするんだ……？

凄まじい不安に駆られながら、アスランはそのまま、L4を目指した。

第四篇

『強さの意味を、知りたくて』 A

マユ・アスカは、オーブに暮らしていたコーディネイターである。

年齢は十二歳。一般的な庶民家庭に生まれ、裕福ではないにせよ、これと云った不由のない家庭環境で育った。家族構成は、父、母のほか、年のふたつ離れた兄がいる。

彼女の両親は、諸侯国で誕生した第一世代コーディネイターだ。世界中で高まりつつあった戦争の機運が嫌気が差した彼らは、ナチユラルとコーディネイターを差別化しないオーブへと樂園を求め、こうして移住生活を送ることを選んだのだ。

オーブでの日々は穏やかだった。数日前に、地球軍が攻め込んで来るまでは――

「――」
霞んだ視界が開け、マユ・アスカは、朧気に目を覚ました。知らない天井が目映る。

「……ここは、どこ……?」

声は……出なかった。喉が潰れているわけではなく、全身にまとわりついた倦怠感が彼女にそれを許さなかった。脊髄を始めとする心身のあちこちが、大脳と違ってまだ休

眠状態にあるのだろう——微かな意識だけが回復した彼女は、とてもみずからの身体を起き上がらせることができないうる。

——空、は……？

マユは、自分が何を考えているのかが分からなかった。だが、此処に至るまでに残った彼女の最後の記憶は、空が——『黒い空』が自分の頭上に落ちて来た記憶だ。蒼穹の代わりに暗黒に染まった『空』が、だんだんと自分の視界に大きくなって来て——そして。

——生きてる……。

——わたし、生きてる……？

うつらうつらと、顔を傾ける。医療ベッドの上に眠った自分の傍らに、オーブの制服の上白衣を着用したひとりの女医が座っている。デスクの上でカルテか何かを見ているのか、その横顔は真剣だ。そのためか、目を覚ましたこちらに気付いた様子はない。それは、オーブ所属の軍医だ。きつと、自分を助けてくれたのだろう。

——お母さんはお父さんは……お兄ちゃん……。

心配なことは数多くあった。が、彼女はまず、自分が生きている、ということに安心感と幸福感を憶えてしまったのだろう。ほっとした温かな気持ち胸の中に溢れると、彼女はふたたび、抗えない睡魔に支配された。

——生きているなら、まだ、明日がある……。

それが、どれほどの幸福か。幸せの価値を感じながら、彼女はふたたび目を瞑り、まどろみの中に落ちて行つた。

それはオーブの棄民——マユ・アスカが、意識を取り戻した瞬間だった。

『“クサナギ”も“アークエンジェル”も当面物資に不安はないが、無限ではない。特に水は、すぐに問題になる』

レドニル・キサカの指摘を受け、宇宙に上がった“アークエンジェル”と“クサナギ”は、L4宙域航路への指針を取っていた。

L4に位置するコロニー群は、開戦の頃から破損し、続々と破棄されているものが多い。したがって、今となつては宇宙軍の手が殆んど及ばない閑散宙域となっており、当面の水不足を賄うためには格好の場所と云えた。中でも稼働しているコロニーはいくつか点在するようで、実際、地球連合軍と“プラント”間の戦争に辟易した者達が共存するコロニーも存在しているとの噂だ。自給自足を貫ける住処としては、充分な環境を持ち合わせていると云える。

彼らはそうしてL4宙域に向かい、繫留地として、ひとまず無人のコロニー「メンデル」を定めた。

コロニー「メンデル」――

その正体は、遺伝子研究者が『禁断の聖域』とも呼び習わした聖地である。が、結局のところ「メンデル」を繫留地に選んだマリユード達は、おおかた「かつてバイオハザードを引き起こして破棄されたコロニー」という程度にしか認知していなかったのではないだろうか？

停泊し、二隻が様々な準備を整えている内に、日付が変わった。ステラは「アークエンジエル」居住区の自室で、深い眠りに就いていた。目を覚ましたのは翌朝――正確には日を跨いでから数時間後に、ルームマイクから、友人の声が聞こえたときだった。

「ステラ、起きてる？ 朝早いけど、起きる時間だよ」

云いながら、ミリアリアは自分が妙なことを云っている、と思った。四方を暗礁と深淵に包まれた宇宙空間では、朝という時間を視覚的に認知することが出来ない。――でも、他にどういえばいいんだろう？ どうにも適切な表現に困ったらしいが、咄嗟に出してしまったものは仕方がない。

ミリアリアの一言が、枕元の音声機から響き、ベッドの上で眠っていたステラは目を覚ました。まだ重たい眸を空け、うとうと、とした様子で顔を上げた。

「……………」

ステラはそこで、自分が布団もかけずに熟睡していたことに気が付いた。どうやら昨夜にかけて「クサナギ」のドッキング作業など、もろもろの準備を手伝っていたため、部屋に戻るなり倒れ込むように眠ってしまったらしい。

しかし、それも無理もないことだった。そもそも彼女は「アプリリウス・ワン」を出発してからこつち、まともに休息した憶えがない。ラクスとの邂逅、「リジエネレイト」との戦闘、大気圏への降下、「フリーダム」との邂逅、キラとの痴話……いや重大な喧嘩、第三波にも及ぶオーブ防衛戦——

——ほんのちよつとの間なのに、色んなことがあった。

床に足を下ろし、ステラはサイドテーブルの蛍光灯まで手を伸ばす。電灯をオンにすれば、薄暗い部屋の中、ほとんど半裸の自分の姿が等身大鏡に浮かび上がった。少女っぽい純白のスリッパの上、ボタンのはだけた薄紅色の軍服をジャケツトであるかのように羽織っている。

一言で云えば、無防備な恰好だった。いくら疲れが堪ったとは云え、制服を羽織ったままで眠ってしまうとは彼女も思わなかったのだろう。いけないあと考えつつ、うとうと立ち上がる。

覚束無い足取りで歩を進め、ミリアリアが待っているであろうドアのロックを開錠し

た。ウイン、と音をたて、自動開閉式のドアが開く。部屋の外にはミリアリアが——そして、彼女の後ろにはキラとトールも立っていた。彼らは三人組だった。

「!？」

キラとトールは、ドアから出て来たステラの半裸姿に、飛び跳ねた。

——起こしに来てくれたんだ……？ まだ眠そうなステラは、片目を擦りながら、うつとりとしてキラとトールの姿を認める。

が、彼らはそのまま凄い勢いでそっぽを向いてしまった。そのふたつの横顔は忽ちに真つ赤に紅潮していき、ステラは意味が分からなかった。

「ちよ……ッ！」

一拍遅れて、ミリアリアが声を上げる。

後方の二名をギロツ！ と睥睨し、ふたりがそっぽを向いているのを確認すると、たった今部屋から出て来たステラの肩を掴み、その身体を室内に押し戻した。そしてまた、ウイン、とドアが閉まる。

「……ミリアリア？」

きよろりと見上げて来る双眸は、たった今、自分がどれだけの邪心を男達の中に植え付けたのか微塵にも自覚がないらしい。ミリアリアは詰め寄って、そんな彼女を思わず叱咤していた。

「だ、だめじゃないステラ、そんな恰好で出て来ちゃー！」
「…………え？ でも起きる時間って」

寝乱れた姿の少女は、どうやら、ミリアリアの起床を求めた声にひたすら純朴に答え
たかつただけのようだ。

あまりの純粹っぷりに、ミリアリアは、うつ、と声を漏らして怯む。

が、すぐに少女の寝癖を整えてやり、

「いいから、部屋から出る時は、まず着替えるの！ あなたは女の子なんだから！」

そしていい？ 男はみんな野獣なの！

云われたステラは、いまいち意味が分かっていない様子だったが、云われたことには
こくり、と頷いて見せた。てくてくと踵を返すと、改めて正装に着替え始めた。見届け
ながらミリアリアは、もう、とばかりに額に手を当てていた。

——まさか、こんな格好で部屋の外に出て来るなんて……。

いや、確かにルームカムを鳴らしたのはミリアリアで、ステラも他に同伴者がいるな
んて想像してなかったかも知れない。でも、それにしたってアウターの下に下着姿で出
て来るなんて、根本的な貞操観念に欠けてない？

(この子は、そそっかしいわ……)

まるで母親のように、思う。

ミリアリアはそのとき、そつと胸にひとつの決意をした。

部屋の外で待機していたキラとトールは、顔の熱が引くのを待ちながら、互いに沈黙を貫いていた。

——まさか、朝一にあんなものを見てしまうとは……。

決して今に始まったことではないが、ステラには、いつも驚かされる。そんなときキラは、傍らのトールがひどく意地の悪い顔を浮かべているのに気付いてしまった。ニヤニヤと口元を緩ませながらこちらを向いて来るので、触らぬ神に祟りなし、と自分に云い聞かせ、キラは、あえてトールを無視するように顔を背けた。

「なあ」

が、こつちを向いてくれないことに痺れを切らしたのか、遂にはトールの方から声を掛けて来た。キラは畜生、と思いつつも、そんなトールから逃れることは許されなかった。なぜなら彼らは親友だった。——親友つて何だろう？

「キラつてさ」

そんなトールに、何を問われるかまでは分からなかったが、どうせ碌でもないことだろうという確信はあった。キラは観念したように、トールの方を向く。なに、と云わん

ばかりの懨然とした顔をできるだけ装っていたのだが、

「ステラと一緒に風呂とか入ったことあんの」

「ぶふっ」

そして、やっぱり碌でもないことだった。トールは、思ったことは口にするタイプだった。キラは噎せ返り、一気に嘔き出した。

「な、んで」

「いや、ステラってなんか……ああいうところ抜けてる、っていうか、ぜんぜん気にしない所がある、っていうか」

「ゲホッ、ゴホッ」

「も、勿論、小さい頃の話だぜ!? でもホラ、気になったんだよ!」

トールはひとり、納得したように頷いている。

「四歳の頃からの幼馴染みなら、いくらキラがヘタレ……奥手だろうと、そりやあ一回くらいは」

「いま何て言おうとしたの、ねえ」

ただ咽ているのか、咳払いなのかもわからないような、雑な咳を吐き出した後、キラは呆れるようにトールを睨んだ。

「いやでもさ。ステラが今もあの調子なら、今だって誘えば一緒に入れるかも——」

「——入れませんッ」

声を発したのは、ミリアリアだった。

部屋のドアが開き、彼女は外の——自分達の——会話をすっかり聞いていたのだろう、その声には凄まじい怒気が混じっている。主にツールに対しての。

見れば、彼女の後に続いているステラは、すっかりいつもの服装に戻っていた。あ……と尾を引くような、惜しむ声が思わず漏れかけたが、漏らした瞬間にミリアリアに殴られそうな気がしたので、慌てて口元を引き締めた。ミリアリアは激したように云う。

「——今後！ この子のそういう方面の教育は私が担当することになりましたので、そのところ、お二人はちゃあんとご理解くださいっ」

ヘンなこと考えたって、ぜったい阻止してやるんだからね。

付け足された言葉には、溢れ出る女子としての軽蔑が混じっていた。ツールは胡乱げに問う。

「誰が決めたの？」

「わたしよ！」

ええっ、とツールは悲鳴を挙げた。

あまり正直なものどうか、とキラは思った。

「いやけどさ、ミリイにも——いや、ミリイなら、わかるだろ……う？」

トールは急に真剣な顔つきになって、まるで開祖にでもなったかのような口調で大らかに説く。

ミリアリアの心の底から呆れたジト目に気付いていないのだろう、哀れだ。

「俺とキラは、いつまでもステラには純粹でいて欲しいなあ、と思ってるわけでき——」
「ちよつ、トール、僕まで巻き込まないで——」

キラは慌てて抗議したが、肝心の声は小さかった。

それは、なまじトールの意見に賛同している証拠かも知れなかった。

「女の子の『ありのまま』を受け入れてあげること、男としては、大事なことだと思うんだよな……!?!」

それはとても良い言葉であり、もつともらしく聞こえたのだが、そういう綺麗な言葉は、もつと大切な場面に取っておくべきだと思う。

トールってこういうとき、大概に損をしているよな、とキラは感じた。

「ステラには余計なことは教えない方がいいよ——そう！ステラは、いつまでも純粹なままでいてくれた方が絶対に」

「イチバン不純なこと考えてるヤツが、なあに偉そうに云ってんだか」

男ってやつぱサイテー。

冷徹に吐き捨てると、ミリアリアはぶんすかと音が立ってそうな足取りで、ずかずかと歩いて行つてしまった。

「あつ、ミリイ！」

開祖から一転、彼女を入信させることに失敗したツールは、浮気がばれて弁明する夫のように、情けない動作でその後を追つて行つた。

場に取り残され、事態を呑み込めていないステラが、キラに問う。

「——お風呂、一緒に入りたいの？」

「——いや、いいよ……いいんだよ、ステラ」

それから、ステラには「クサナギ」内のコンテナの積み下ろし作業が任されていた。オーブから飛び立って来た「クサナギ」は、本来の就航予定日より早い出航を迎えることになったためか、本調子とは云えない状態にあった。情報処理能力に長けたキラは、艦橋での調整作業に追われており、午前中のステラは、格納庫での仕事が宛てられた。

午後にはそんな彼等と持ち場を交代する予定だが、格納庫の中には、ムウの乗る

「イービス」や、他にも稼働しているM1「アストレイ」が数機として確認できる。

「少佐！ そんなことはわたし達がやりますっ」

通信機から、快活なアサギの声が聞こえる。彼女にとつてムウは『エンデュミオン』の鷹』であり、雑用を任せられる人物ではないのだろう。が、ムウの方はのんびりと返す。

「いいんだよ、これも訓練のひとつつてね。——きみ達だって、宇宙でのシミュレーション経験はあるんだろ？」

「そうよ」

そこに、マリユーが割り込んでやる。

「モビルスーツの操縦にかけては、あなた達の方がずうっと先輩なんだから、うーんとコキ使つてやればいいのよ」

取り付く余地のないきつい言葉に、ムウは尻込みした。

「あ、あの、艦長さん……。まさか、まだ根に持つていらつしやるんで？」
「なんのことか 大概 心当たりがありませんわ」

云うと、ぷつり、としてマリユーからの通信が切断される。

——切れちまった……。

ふたつの意味で突つ込みながら、ムウはやれやれと云わんばかりに呟く。

へくう、モテる男はつらいのねへ

へ自分で云わないでください、そーゆーことへ

釘を刺したアサギは、冷めたジト目を浮かべていた。

その傍らには、コンテナを抱えた「クレイドル」の姿もあり、作業中のステラにもまた、他のM1からの声が掛かった。ジュリ・ウー・ニエンである。

へ——あなたも無理しなくっていいのよ、わたしが代わってあげるからつ。昨日からずつと作業で、疲れてるでしょう？へ

いざという時、それは自分よりも「クレイドル」の方が遥かに戦力になる、という気遣いから放たれた言葉であった。

共有した話では、このステラという少女は、宇宙戦においても比類ない戦闘力と気転を持つているらしい。デブリを加速のための足場に利用するなど——それは彼女がかつての搭乗機の特性から身に着けた技術であったが——おおよそ、ルーキーであるM1隊に真似できるような御業ではない。

が、ステラの返答を待たずして、その対岸からもう一機のM1が寄って来た。その機体は、コンテナを抱える「クレイドル」に肩を置いた。マユラ・ラバツツである。

へねえねえつ、あのキラつていう男のコ、あなたの彼氏なのつ？へ

へカレ、シ……？へ

それはステラが、初めて耳にする単語だった。
ジュリが呆れたように云う。

〈もおマユラ！ いまは作業中よ、公私混同も甚だしいわよーっ〉

〈あんつ、いいじゃないの。あんたは彼氏がいるんだから！〉

〈そ、そんなんじゃないけどっ！〉

どうなの、どうなの。

期待して訊ねて来るマユラに、ステラは対応が困る。

〈あの繊細な顔立ちとか、守ってあげたくなくなるような感じとか！ 結構わたしの好み

かも〜〉

〈もう、マユラの悪い癖が……〉

〈ね、ね？ 要らないんなら譲ってよお〉

キラは物じゃない、という突っ込みが頭に浮かんだが、いったいマユラは、男をどう
いう目で見ているのだろう、とジュリは思った。

ステラは、彼氏と云う意味は分からなかったが、ステラなりに云えることを云った。

〈……でもキラは、なんか、けっこう頼りないから——ちゃんと守ってあげられる人じゃ
なきや、認めない——〉

それは、弟を狙う女の子に対して、姉貴が云うような台詞だった。

マユラの云った「守ってあげたくなる感じ」という評価に対しては、ステラも、確かに賛同できる。キラはときおり危なかしくて、実際、ステラが今まで何度も助けて守つて来て——逆に守られたこともあるけれど——そんなキラを守るのは、あるいは今は自分だけだ、という自惚れではない感覚が彼女に内在しているのもまた事実だった。実際そこには、ルーキーに過ぎない今のマユラでは“フリーダム”を守ることが出来ないという、私情を抜いた冷静な判断も相まっている。

云われたマユラは、打ちひしがれたような悲鳴を挙げた。

〈あくんっ。じゃ、もっといっぱい訓練して、強くなつてやるんだから——〉

云いながら、あくせくと作業に戻つて行くマユラ機を、ジュリは笑つて見送つた。

動機は不純だが、結果的にそれが彼女の努力に——強さに繋がるなら、それは良いことではないだろうか？ ジュリは思わず感嘆の声を漏らした。

〈上手なのね——〉

〈えっ？〉

〈……ううん、何でもないわ〉

そうして少女達は、午前の作業を終えた。

作業を終え、パイロット控室に上がったステラは、そこで、当番を交代するキラと出会った。

「おつかれさま、疲れてない?」

「だいじょうぶ」

キラは薄く笑うと、そのとき同室のドアが開き、カガリ・ユラ・アスハ——というらしい——が入室して来た。

「キラ……」

漂うような憂いを帯びた表情は、とても深刻そうだ。

カガリはキラの傍までやって来ると、硬い声で彼を呼ぶ。

「ちよつと、いいか……?」

「あ、うん? いいけど……」

躊躇いがちな声に、ステラはなんだか、重たいものを直感した。

ステラはキラとすれ違うようにして、

「じゃ、いくね」

とだけ残して、気を利かせて部屋の出口に足を向けた。キラは戸惑いがちに、うん、とだけ返すと、ステラはそのまま慣性に従って控室の出口へ向かった。

が、それでも少し気になったので、ステラはちらりとキラ達の方に視線を向けた。す

ると、視線の先のカガリは一枚の写真を取り出し、キラに何かを打ち明けている風であった。女性と、その腕に抱かれた双子の赤子の写真だ。カガリがキラに持ちかけた話というのは、どうやらその写真が一枚噛んでいるらしい。

（——写真……？）

退室したステラは、その言葉に思う所があるようで、彼女もまた自身の胸ポケットから一枚の写真を取り出した。精悍な体格の男性と、そっくりな容貌をした少年が手繋いでいる写真だ。

と——そこへ、その写真を目撃した当の人物が通りかかった。ステラと同じように午前の当番を終えた、ムウ・ラ・フラガである。

「——ちようど良かった。その写真のこと、ちよつと訊きたかったんだ」

思えば、この写真について詳しく話す前に、ステラはオーブからの離脱作戦に向かつてしまった。

ムウは改めて話があったようで、まるでカガリと同じように——それでいてムウにしては珍しい——深刻な顔つきで寄って来た。

「それなんだが……。いったい、どこで？」

「貰ったんだよ、ザフトに居たときに。ラウ・ル・クルーゼって、ザフトの人に」
そのときムウの顔色が変わったように見えたのは、気のせいだったろうか。

ステラは、出来るだけ相手にちゃんと伝わるよう、頑張つて口数を増やした。

「大切にしていた写真なんだつて、ラウは云つてた。この写真はね、ラウが、アル・ダ・フラグつて人と一緒に映つてる写真、で」

云いながらステラは、自分がいま何を口走つたのか、反芻してしまつた。

「——フラガ？」

確かめるように、目の前に立つまつたく同じ姓をした男を見上げる。

ムウは気まずそうに、だが、重たい声音で呟いた。

「ああ。アル・ダ・フラガは——その写真に写っている男は、おれの親父だよ」

「え……!?!」

「だが、なぜアイツと、親父が……ツ？」

写真の中の親子——だろうか？——は、非常に仲睦まじげな瞬間の様子をシャッターを切られている。といつても、手を繋ぐなど初めから互いの信頼関係がなければ成り立たない行為だが、ムウが気に掛かっているのは、それよりもつと記憶の奥深い所にある記憶ゆえだ。

写真の中の少年は、ステラの話では、恐らくラウ・ル・クルーゼその人だろう。見た限り、おおよそ少年期の頃に見えるが、それは、他ならぬムウ自身が父に育児放棄されていた時期と的確に重なる齡付近でもあつた。少年期のムウは、ある日を境に父からの

愛情を一切として受けなくなり、そして、ある日を境に再び寵愛を受けることになった。まるで何事もなかったかのように。

——そのことと、何か関係があるのか……？

感傷に浸るムウを現実呼び覚ましたのは、ステラの声だった。

「お父さんにも等しい人だったって、云ってた、よ」

「……………」

「それで、ぜんぶ」

「そうか……」

ムウは不完全燃焼を起こしながらも、だが、すぐにいつもの彼らしい振る舞いを取り戻した。

うだうだ考えたところでしょうがない、とでも考えたのだろう。

「ありがとな、話、聞かせてくれて」

「うん……」

そう云つて、踵を返して遠ざかってゆくムウを、ステラは首を傾げながら見送った。

——ラウとムウが似ていると感じるのは、何か原因があるのだろうか……？

漠然とそんなことを考えるが、しかし、彼女は忙しい身分だった。ムウと入れ替わるようにして、今度はニコルが向こう側からやって来たのである。

「マユさんが目を覚ましました、医務室に」

「……………！ わかった」

そうして彼女は——「クサナギ」の医務室へと向かった。

本国からの指令を受けて「アプリリウス・ワン」を出航した「エターナル」——ならびにナスカ級「ヘルダーリン」「ボイジンガー」二隻は、予定よりも少し早くL4宙域の界限に差し掛かっていた。もつとも、それは「エターナル」の船足が速かったことに起因するのだが、作戦をこなす上では弊害とはなり得ないだろう。

〈……………静かだな〉

通信機から、バルトフェルドの声が聞こえる。

既にアスランは「ジャステイス」のコックピット内で、発進待機の状態にあった。オーブ所属艦二隻の潜伏先として、パトリックはこのL4宙域を目星として付けた訳だが、それと云つても、明確な確証があるわけではなかった。あくまで観測隊が予測した経路から割り出した座標であり、結局は、正確な敵の位置など判るはずもない。

つまりL4宙域に侵入してからは、索敵作業は最終的に、彼等自身で手探りで行う必要があったのだ。

へホントのホントに、こんなところに連中が居るのかねえ？ おじさん不安になって来ちゃったよ——もう後戻りは出来ないってのに」

どこか含みのある云い方だが、作戦の失敗は絶対に許されない、という意味だろう。名将らしい職業意識の高さだ。アスランは心中で感服するが、察し物の『砂漠の虎』も慣れない宇宙空間で気が滅入っているのか、いささか後ろ向きな発言を溢していた。その言葉の本当の意味を知らないアスランは、部下として、バルトフェルドを励ますような声をかけた。

「L4には、まだ稼働しているコロニーがいくつかあります。だいぶ前ですが、不審な一団がここを根城にしているという情報があつて、宇宙軍は調査したことあるんです」

駐屯部隊として、ずっと地上^{リビア}に滞在していた艦長では、御存知なくても仕方ありませんよ。

アスランの言葉は、軍人として優しかった。

「住人は既にいませんが、設備だけが生きているコロニーもまだ多くあるはずだ。テロリストが根城にするには、格好の餌場であると自分は考えます」

へそりゃあ、心強い情報だ。そんな風に裏付けながら云って貰えると、ますます希望が持てるよ」

バルトフェルドは、感嘆した。

「なかなかどうして、きみはその年でちゃんとした軍人をやっているね、よくモノを知っている」

「いえ……」

「優秀な部下を持って、ボクは幸せ者だよ。ザラ議長閣下も鼻が高かろう」

何か思案するような沈黙の後、バルトフェルドは云った。

「だが、要するにボクらはその『稼働しているコロニー』とやらを虱潰しに調査して行く他ないな」

結論に至るのは案外、早かった。

結局、ここから先は手探りなのだ。仕方がない。バルトフェルドは旗艦「エターナル」の艦長として、随伴する「ヘルダーリン」と「ボイジンガー」に通信回線を開いた。

「あー、では本艦隊はこれより、現L4宙域に潜伏中とされる、テロリスト船団の搜索任務に移行する」

その指示に対し、随伴艦からの異論はない。

が、バルトフェルドはその先を続けた。

「――なお？ 旗艦である本艦は高速巡航艦であるため、ナスカ級とは別行動とさせて貰うよ」

たしかに、在来MSの機動力を超越している「ジャスティス」等の最新鋭機の専用母

艦として、“エターナル”はこれまで最高速度を持つていたナスカ級戦艦すらも凌駕する速度を持っている。

逆を云えば、在来の戦艦と連帯行動を取る限りは、どうしても速度において突出しがちになる、ということだ。ゆえに“エターナル”は、ここからはあえて単独行動をしようという。もつともらしく聞こえるが、しかし、それは本能的な確な判断なのだろうか？ 当然、そうして疑問に思う者が“ヘルダーリン”の中にいたようで、その艦長が抗議の声を挙げた。

が、バルトフェルドはのんびりと続ける、

「本艦は“ジャステイス”を護衛に就けている。——問題はない」

たしかに、アスラン・ザラが操る“ジャステイス”は、パイロットの華々しいまでの多大なる戦功とその絶対的な強さがザフト軍の中で独り歩きして、かたや「勝利の代名詞」として謳われる伝説的存在となりつつある。

地上におけるパナマ侵攻戦では、地球軍が開発した新兵器“エクソリア”をたつたひとりで撃破し、その直掩機である“ネメシスダガー”を撃滅し、作戦を勝利に導いた。パイロットであるアスランは“イージス”を犠牲に“ストライク”の不敗神話に終止符を打った英雄であり、最高評議会議長バトリック・ザラの息子。疑う余地のない猛勇と、輝かしいまでの功績によって、その名は宇宙軍である“ヘルダーリン”“ボイジン

ガー”の中にもあまねく浸透していた。

そのような“赤色の英雄”を——単機ではあるにせよ——“エターナル”は当艦の護衛に就けると云っているのだ。それだけでは心許ない、と思う者もいるだろうが、それは彼の実績と猛勇を知らない部外者が吐く言葉である。

へでは、後で落ち合おう。——念のため、キミにも出撃して貰おうかな？

アスランは云われ、俯いていた顔を上げた。

へ索敵範囲を広げる。きみは出撃後、周囲になにか異変があつたら知らせてくれ

いくら“エターナル”といえど、単独で索敵を行うにも限界はある。

その点、核ジェネレータで動く“ジャステイス”は、もはや機体のバッテリーを気にする必要がない。半永久的なスタンドアローンが実現になっている以上、いつまでも艦内に収容されている意義はなかった。

「了解——“ジャステイス”出る」

そうして“エターナル”はナスカ級二隻の許を離れ、高速で飛び去ってゆく。

その護衛として、アスラン・ザラひとりだけを付けながら。

(待っている……)

誰に云っているわけでも、ない。

それでもアスランは、まだ見ぬ者達に向けて、そう決意して宇宙へと飛び出して行っ

た。

「——『ジャステイス』の発進を確認。彼は行ったか……」

「——お疲れ様です、バルトフェルド艦長」

が、このときのアスランは知らなかった。彼は兵としては天才的に有能だったが、将としては、いまだ致命的なものに欠けていた。

アスランが出撃すると同時に、艦橋の中にひとりの少女が姿を現す。涼やかな笑みと共にやって来た少女——桃色の髪を一本に束ね、戦国の将を思わせる陣羽織を思わせる服に身を包んでいる。バルトフェルドは改めて、確固として意志の固まった彼女の姿を認め、にやりと笑った。

「いえいえ、狭い室内に閉じ込めるような真似をして、申し訳ない」

「ふふ、ピンクちゃんと戯れておりましたので、決して退屈ではありませんでしたわ」

涼しげに微笑む少女の腕には、桃色の球形ロボット——ハロがすっぽりと収まっている。

バルトフェルドはそれを見て、苦めに笑った。

「そのピンクちゃんもまた、彼に貰ったものでありませんか？ 彼はとても好い少年だ、

いささか真面目がすぎるほどにな」

「彼ともまた、共に手を取り合いたいと、切に願うものですが」

一瞬、表情に陰りを浮かべた少女は、あるいは、今まで婚約者として慕って来た少年の覚悟を決断を、既に見通している風であった。

が、すぐに切り替えたように、その愛らしい顔を上げた。

「では、参りましょう——」

完全に独立した“エターナル”の中——

永久の平和の歌姫、ラクス・クラインが——指揮官席に着座した。

マユ・アスカが目を覚ました。

と云つても、それは正確に数えれば三度目のことで、ニコルの表現には大袈裟があつた。が、なんにせよ、まともに面会ができるまで意識が回復したのは今回が初のことであつたため、そう認識するのが必定であろう。そんな“クサナギ”の医務室では、既に医療ベッドを起き上がらせ、意識の回復したマユが上半身を起こした状態にあつた。

既に、これまでに至るまでの経緯は、船医であるオーブの女医の方から明かされたのだと云う。オーブが連合に降伏したこと。家族とは離れ離れになつてしまったこと。そうして今、宇宙に上がって来てしまったこと——

戦災に巻き込まれ、命すら危ぶまれた十二歳の少女にとって、並べられた真実は重たすぎる現実だった。

ここから先は担当の女医が配慮したのか、マユに対してマユの両親と兄は総じて「行方不明」という言葉で濁され——いつまで誤魔化せるものか不安は残るが——それを明かさされたとき、マユはひとえに泣き続けたらしい。泣き疲れたのか、そこで再び眠りに就いてしまった彼女だが、今日の午後になつて、もう一度、穏やかに目を覚ました。ゆえに、これが三度目だ。ニコルがステラを呼びに来たのは、そんな彼女の心理状態が、ひとまずは落ち着いてからだだったのだ。

入室すると、そこには、足が動かなくなつた現実を受け止めた幼気な少女が、車椅子に乗っている姿が映つた。

「あ……」

その痛ましい姿に、ステラは思わず目を背けた。あれは、自分が彼女を守れなかった結果だと、まるで自分を責めるように。

医療用の包帯がまだ額を覆っているが、足以外の容態は徐々に回復しているらしい。マユは入室して来た人物の姿を認め、正直云つて、自分よりもわずかに年上の——彼女の兄と年齢が変わらないような——ステラの姿に、ぼんやりとした対応を示した。

「このひと、が……？」

女医に確認を求め、尋ねられた方は、こくりと頷いた。

ステラは、女医がマユに何を云ったのか、この時点では何も知らなかった。マユは車椅子を動かし、不慣れな動き、遅い動きで、ゆつくりとステラの方に向かって来ようとした。それを認めたステラは、恐がりながら、怯えながらも彼女の方に寄って行った。

——このひと、が……？

その言葉の先を想像すると、ステラは、恐ろしくて堪らなかった。

ステラは確かに、今まですべてを「善かれ」と思い、マユのために行動して来た。だが、ひよつとしたらマユは、こうして宇宙になんて上がって来なくなかったかも知れない。地球に残って、シンを捜したかったかも知れない。

——そう、ぜんぶ、ステラの勝手だった。

改めてこうして、目の前で出会って、そのことで、もしかしたら恨まれているかも知れない——と、ステラは感じていたのは、事実だったのだ。

だが、すべては杞憂だったのかも知れない。

マユ・アスカは、ステラが想像しているより、か弱い女の子ではなかったのかも知れない。もつとずつと、強い少女だったのかも知れない。彼女はステラの姿を目の前に認めると、

「——ありがとう、お姉ちゃん——」

そう云って、小さく微笑んだ。

ステラは、言葉が出ない自分を、その瞬間に自覚した。

「……………え……………」

マユは、柔らかな面持ちをしている。

ぜんぶ、聞かせてもらったんです、と続けた。

「お姉ちゃんが、わたしを助けてくれたって——あの“白いロボット”に乗ってたの、お姉ちゃんなんだって——。教えてもらいました」

その幼稚な表現は、少女が本当に戦争とは無縁の世界で暮らして来た現実を、赤裸々に語っているようだった。

マユもまた、自分を戦火から護り抜いてくれた“グレイドル”のことを憶えていたのだろう。そのパイロットが彼女であることを、女医やニコルの方から聞かされたようだった。その後“ネメシスダガー”が墜落して来たことについては、誰の責任でもない、ということが分かっているようでもある。

「わたしたちを助けてくれて、ありがとうございました」

家族に対する配慮も含めた、暖かな言葉だった。

——この人がいなきや、マユもお兄ちゃんも、みんな助からなかったんだ……。

今のマユには、真実の側面が判っていた。

「ステラは、口を手で覆っていた。その目には大粒の涙が浮かんでいる。

『ありがとう』——

その一言に、すべてが報われた気分になって、今まで胸の奥に貯め込んでいたものが弾けたのだろう、溢れ出したのだろう。ステラはその場に膝を折り、崩れた。すると自然と視線の高さが一致するようになり、彼女は震えた声で、

「ごめん、ね……」

それでも、救い切ることなど、できなかつた。

後悔し、震えた声で言葉を紡いだ。

「ごめんね、ごめんね——っ」

彼女自身の脚のことか、それとも、救い切れなかつた家族達のことか——？　だが、真実は理解したつもりでいたから、マユはふるふるとかぶりを横に振つた。

金の髪色をした年上のその少女は、自分達を救ってくれた恩人は、やっぱり綺麗な人であつてくれたのだと、自然とマユはそのときに感じ、嬉しかった。容姿的な意味などではなく——涙に濡れたすみれ色の双眸は、自分達を兇暴な戦火から護り抜いた人とは思えないほどに儂くて、無垢で綺麗な、それ自体が輝きを宿した宝石みたいだ。今にも壊れてしまいそうな眸が自分を映し、マユは自然に、やさしい人なんだ、と分かつた気

になって、どうしてか、自分もまた泣き出したような思いに駆られた。

でも、さっきまで自分は、たくさん泣いたのだ。

もう、十分だ。

この人はきつと、こんなにも壊れやすそうなのに、それなのに頑張つて、必死になつて、自分達を守ろうとしてくれた。

それが判るから、マユは自分の涙を隠して、それでも目尻に雫は浮かんで、目の前の「お姉ちゃん」の頭を胸に寄せた。

「ありがとう、ステラお姉ちゃん」

云うと、ステラは幼い子供のように、小さな声を挙げて泣いた。

——頑張ったんだ……そうだよね……？

それは、その場に居合わせた誰もが、少女の中の優しさを労った瞬間だった。

『強さの意味を、知りたくて』 B

レーダーに映し出された熱紋に、CIC座席に当直していたサイはハッと息を呑んだ。昨夜にかけて、L4宙域——コロニー“メンデル”周辺——に張り巡らせたセンサーが、反応を示したからだ。

ここL4は、彼らが羽根を休めている“メンデル”の他にも、多くの廃棄コロニーが障害として漂流している宙域だ。デブリ帯はそれによって通信波が届きにくいという欠点があるのだが、裏を返せば船団が潜伏するには格好のスポットであり、周辺の巡らされた熱紋センサーは、彼らにとつての死角を極力補完するために設置されたものだった。

——まさか、こんなにも早く役立つとは思わなかったけど……!!

サイは口内に思惟するが、すぐに口を開いてその旨を報せた。

「大型の熱紋を確認！ 戦艦クラスのものと思われれます」

「まさか、もうこの場所が発見されたの……!?!」

「いえ……。まだ、こちらの位置は特定されていないと思われれますが」

気休めで云っているわけではなかったが、サイは推察して続ける。

「この動き……? 敵艦、ここ一帯の宙域を走査している模様です」

「——数は?」

「現時点で確認できるのは、一隻。ライブラリ照合……データ、有りません」

つまりは、新造艦ということか。

「どうしますか、艦長」

指示を仰がれ、マリユーは考えを巡らせる。敵艦の目標が自分達の走査だと仮定すれば、如何にデブリの電波障害があろうとも自分達が発見されるのは時間の問題だ。

——今すぐに準備を整え、離脱するか、あるいは奇襲の一手に出してみるか……?

しかし、現在の「クサナギ」は調整中でもあり、とてもではないが戦闘行動に及べるような状態にはない。今後の補給口も定まっていない今、焦りに駆られて闇雲な行動に出るべきではないというのも事実なのだ。

——どうすれば……!」

思索していると、サイの方でさらなる報告を続けた。

「正体不明艦より、モビルスーツの出撃を確認しました! 当該MSは、L4のコロニー群を調査して回っている模様。……なんだ? 一機なのか?」

「モビルスーツの機種は判る? どの陣営の機体なのか判れば、敵の目的もおのずと

見えてくるわ」

「待つてください、いま……」

「できるだけ急いで」

「——！これは」

それは「アークエンジェル」のクルー達が、既にアラスカで一度は相まみえたもの。当時、新たな「翼」を携え戦場に舞い戻ったキラ・ヤマトが、あろうことか衝突し苦戦を強いられた存在でもある。

それは、ザフトが満を持して最前線へ投入した最強の機種。つまりはマリユー達にとつて、最悪にして最凶の一角。

「——ザフト所属、ZGMF-X09Aです！」

一同の表情が凍り付いた。

「クサナギ」の艦内にアラートが鳴り響き、全搭乗員に第一戦闘配備コンデイションレゾドの発令される。

——とは云うものの、確認されたザフト艦はたったの一隻だ。

既存のデータにない、淡紅色に彩られた鮮やかな戦艦。おそらくは「フリーダム」と

“クレイドル”の追跡——そして“それら”を保有するオーブ残党軍の追撃——に現れた部隊だと思われるが、勿論、頭数で見れば二隻で構成された“クサナギ”側の方が有利である。

こうした数の論理によって、浅はかにも危機感を覚え損ねる者も“クサナギ”艦内には現れたのだが、それは束の間の安堵……いや油断でしかない。

——敵は、ザフトのZGMF-X09Aなのだ。

オーブ出身者で構成された“クサナギ”の搭乗員は、その名を聞いたところでピンと来ない様子であったが、それはまあ、無理もないことである。

しかしながら、一方で“アークエンジェル”の搭乗員は違っていた。

ZGMF-X09A “ジャステイス”——これを操る者は、かつて“イージス”に乗り“ストライク”をたつたひとりで撃破したザフトのトップガンだ。新たに“フリーダム”を手にしたキラとも互角以上に渡り合い、その正体は、ザフトの指導者たるパトリック・ザラの息子。であれば必然、それは“クレイドル”を操るステラ・ルーシエとも血を分けた兄妹であるということだ。

この理解を行えば、その存在がどれほどの脅威で、どれだけ危険な敵対者であるのかは想像に難くない。キラとステラはそれぞれのパイロットスーツに着替え、これを迎えるためにモビルスーツ・デツキへと向かっていた。

「アスランが、来たんだ」

「——うんっ」

ふたりは各々の搭乗機に乗り込み、シートを固定しOSを立ち上げる。その作業の傍ら、キラはマリューへ通信を繋いだ。

「僕とステラで出ます！　　“アークエンジェル”と“クサナギ”は、ここを動かさないで下さい！」

キラが云い、マリューが通信先からへお願いね」と返す。

へまた、前みたいなことにはならないように——

キラが意表を突かれたようにハツとするが、太平洋上の戦闘——キラが“イージス”に敗れた時のことを云っているのだろう。警句するマリューの目には、やはり女性らしい動揺と不安の色が浮かんでいる。

それは彼女がキラの力を信用していないだとか、そういった問題ではないのだ。キラは既に、事実として一度“彼”に敗れていて、単純に部が——相手が悪いのではないかと彼女なりに当時の恐怖を憶えてしまっていた。

当時と違い、今回はステラもまた出撃してくれる。である以上、同じ轍を踏む危険性はない——と考えるのはマリューの願望でしかないのだが、仮にも二人が“ジャステイス”の突破を許した場合、敵は、自分達を撃滅するのに余りある存在だ。

「話が出来るようなら、説得します。……僕もまだ、信じていたいんです」
キラは胸に誓っている。

——もう一度。いや、何度だって呼びかけよう。

アスランとまた、手を取り合える日が来るのなら——。

〈——ステラも〉

通信に入ってくる少女の声を、キラは真摯に聞き留める。

〈アスランと、話がしたい〉

キラは意を決したように、云った。

「行こう、アスランを止めなきゃ」

〈うん……！〉

オペレータのアナウンスと共に、ハッチが開く。

キラは瞬かない星海を真っ直ぐに見据え、決意を込めて言を発した。

「キラ・ヤマト、フリーダム”行きます！”」

飛び出してゆく「フリーダム」の後に、白銀の「クレイドル」が続く。

二機はデブリの中をかき分けながら、反応の探知された——廃棄コロニーの方へ飛び出して行った。

廃棄コロニーのシャフトを抜けると、そこには人工の大地が広がっている。

コロニー特有の環境維持システムが長らくダウンした結果として作り出される、鄙びた土地。赤褐色の噴煙がそこら中に立ち込め、コロニー内に、既に酸素はないだろう。当然、人間はおろか、何かしの生物の営みさえ希望を持ってない廃墟。

アスランはかくして、L4に浮かぶ廃棄コロニーを走査していった。数度として梯渡りを繰り返しながら、戦争によって壊滅したコロニーの実態を目の当たりにして行く。

「……も、違うか」

アスランは「ジャステイス」を次のコロニーに向かわせる。

調査ポイントはまだいくつか残っているが、移動する際には母艦への報告が必要だが、そうしてアスランが呼びかけたとき、「エターナル」からの応答はなかった。通信機からはノイズだけが耳障りに響いている。

「『エターナル』、聞こえているのか？ バルトフェルド艦長？」

デブリ帯の影響か。あるいは、単純に距離の問題——知らず知らずに前のめりになり、母艦との通信圏内から逸脱しまったのか？

——いつの間にか？ 困ったな……。

アスランは慌てて機体を転進させる。今の“エターナル”を守れるのは自分だけなのだ、その自分が彼らから離れてしまつては元も子もないではないか。自分にしては迂闊なミスだと感じ、頭を冷やす。

やはり、どうにも、ここ数時間の自分は冷静ではない。それもこれも、不安が先行しているからなのか？ 自問した所で、答えなど出なかつたが。

(それにしても……)

名将と名高き『砂漠の虎』も、随分と思ひ切つた采配をする。二隻の随伴艦——ナスカ級から離脱して“エターナル”だけで単艦行動をしよう、とは。

ある意味でそれは、非常に無謀な作戦のようでもある。用兵学上、戦艦一隻に対して最低でも四機以上の直掩は不可欠とされている。にも関わらず、彼はナスカ級から“ジン”の一機も借用せず、自分ひとりにて全ての護衛を任せただ。

——尋常ではない。常識に則っていない。

——それは、何か策あつてのことだろうか？

彼が単純に、自分の腕を信用してくれているというのなら悪い気はしない。だが、間違ひなくそう簡単な行動ではないのだろう。

漠然と考えていると、そのときコンピュータ上に、ふたつの光点が浮かび上がった。そしてそれは、アスランがこのとき、何よりも探し求めていた識別反応だった。

「これは……！」

咄嗟に機体を反応のあつた方角に相對させる。レーダーだけではない、肉眼でもはっきりと二つの光点が観測できる。

燐光を散らせながら飛來する、青と白の翼。

あれは。

あれらのモビルスーツは――

「フリーダム」！……「グレイドル」

会心の笑みは浮かばない。

本人は無自覚だが、そのとき、アスランの表情は困惑と動揺に歪んだ。

その理由は、通信機から交渉を求める懇願の声が響いたからだだった。

↑――話をしよう、アスラン！ 僕達は、きみと戦いたくないんだ！

深紅の機体を認め、ステラはぐつと息を呑む。オーブ沖での邂逅が最後ということもあつて、申し訳ささも感じているのだろう、彼女の唇はぎゅつと噛みしめられており、表情もまた真剣だ。

現在、アスランだけが向かい合うように対岸の位置にいるのだが、キラもステラも銃を構え、いきなり交戦状態に入るような真似はしなかった。

そして、今回ばかりはアスランもそれを好都合だと感じた。

彼もまた、今回ばかりはキラ達と対話したいことがあったからだ。

〈——オレは〉

躊躇いがちな声が、スピーカーから伝わる。

通信の影響で混じったノイズのせいか、その声は、どこか震えているようにもステラには聞こえた。

〈オマエ達が奪取したザフトの最重要機密。 “フリーダム” および “クレイドル” の奪還、あるいは破壊の命令を本国に受け、ここまで来た〉

「……………」

ステラは、その言葉の中に嘘が混じっていると思った。

——本国の命令ではない。

——それはきつと、父親パトリックから出た命令であるはず。

ステラには判る。なぜなら一字一句として違わない任務内容のそれは、本来、ザフトに所属していた頃のステラが請け負っていたものであったからだ。

〈——だが〉

キラとステラは顔を上げ、通信先に映る青年の顔を見る。

その顔にはぎこちなさと、これまでの勢いが衰えたような、躊躇いの色があった。

「『テロリストを説得することが出来たなら、任務内容は、その限りではない』——これは、オレ個人の勝手な判断だが……」

少なくとも事前にパトリックの承諾は取っており、全てが虚言というわけではない。

敵対勢力のテロリストらを説得することができれば——殊に「クレイドル」のパイロットについては——抹殺の指令は絶対ではない、ということ。

たしかに、現在の「ブランド」においてステラ・ルーシエは間違いなく国家反逆罪の大戦犯だ。しかし、アスランが彼女を説得することができた暁には、パトリックは最高評議会議長としての職権を大いに濫用してでも、彼女に掛けられた軍法会議の結末を彼の望むがままの結末に終着させてくれるだろう。

「アスラン……」

アスランは、ステラたちを説得しに来た。

その一方で、ステラ達もアスランを説得しに来た。

互いが平行線上に立っていることを悟り、ステラは暗に自分達の行く末を見たような気がして、うつすらと眩暈を憶えた。口に出しては、何も云わなかったが。

「じゃあ、アスランは……。ステラ達と戦いに来たわけじゃ、ないんだね？」

へやめさせに来たんだ、もう、こんなことは！　そしてこれが、きっと最後の機会になる。それは、家族としての忠告ではなかった。

軍人としての、警告。

「ひとつ、聞かせて」

警告を受けたステラであるが、そんな彼女は純然とアスランに向き合い、こんなことを問う。

「アスランは『敵』を憎んで、『敵』を殺して、それで……満足？」

〈……………〉

「与えられた『敵』を、ぜんぶ滅ぼすまで戦って——それで満足……？」

ステラがそう訊ねたのは、今のアスランの戦う姿が、かつての自分に重なって見えたからだ。敵を滅ぼすまで戦い、満足していたのは、過去のステラそのものだ——ユーラシア西側の三都市を巡り、ただ与えられた敵を殺して回って、愉悦になって、自分がやったことを勝手に正当化して——

その結末に襲って来たのは、耐え難いまでの後悔と苦痛と虚無感だった。盲目になって戦い続けた者を襲う虚しさを、彼女はよく知っている。

だから彼女は呼びかける、それで本当に満足なのか——？　本当のアスランは、そのような残虐な行為に満足……いや満悦できる人間ではないと知っているから、あえて問

いかけるのだ。

だが、問いかけた先に返って来た返答は、あくまでも淡泊なものである。

〈——満足だ〉

アスランはステラよりも自分に言い聞かせるようにゆつくりと、低い声で云った。

〈そうすることで、大切なものを守れるのなら——いや、違うな〉

モニターに映るキラの目が陰ったように映る。

アスランは決然として、云った。

〈——そうしなければ、大切なものは守れないのだから〉

結局のところ、戦争の中でアスランが導き出した答えなど、その程度のことではかない。与えられた「敵」に温情を抱いて、いったい何になるのか？ 敵の核攻撃で母を葬られ、妹を犯され、その後のビクトリアでは、もう再び妹を喪いそうになった。

——これほどの無念を抱いて、それでも成長しない自分とは何だ？

どこまで愚かなミスを繰り返せば、自分は前に進めるようになるのだ？

——そうして“力”を欲したとき、自分の才覚は能力は、その求めに真摯に応えてくれた。

渴望していた“力”を手に入れるために、必要な儀式はひどく簡単なものだった。敵への温情を切り捨てた途端、自分は見違えるほどの力を手に入れた。

——嗚呼、その過程で色々な理想を諦めたことは決して否定しない。

だが、理想では現実には勝てない。

大切なものを護るための“力”を、現実には自分には手に入れたのだ。あの父が認めてくれるほどの——それは妹も、親友すらも超越した圧倒的な“理想の強さ”だ。

「——それが、オレの正義だ！」

捻くれたわけでも、気が触れたわけでもない。ザフトの軍服に袖を通したそのときから、彼の理想は変わってなどいない。

——努め、鍛え上げ、手にした力で、家族や恋人、友人達を護り抜く。

その結果として『敵』を滅ぼすことになろうと、奴らこそが自分達の平穩を脅かす存在なら、それは仕方のないことではないか。

——潰すか。壊すか。

復讐の連鎖を終わらせるのに、これ以上に正解など存在しないはずなのだ。

だが、この思いを、キラ達は理解してくれない——何故？ ステラだって地球軍に命を奪われかけているのに、自分以上に奴等のことを憎んでいて当然の立場にあるのに、まるで他に道があるかのように訴えて来る。他に答えがあるかのように説いて来る——

なぜ……？

「わかるけど……。きみの云うことも、わかるけど」

躊躇いがちに、キラが返す。

「たしかに、今の地球軍は間違っていると思う……」

オーブへ攻め入ったときのように。

意に介さない相手を武力で脅すようなやり方しか知らない地球連合軍が、今のキラには正しいと思えないのだ。

「でも、だからって今の『プラント』は正しいの？ ナチュラルを滅ぼすための戦争が、キミは本当に正しいって云うの？」

〈公明正大な戦争などあるものか！ いったって、理不尽が伴うのが戦争だ〉

アスランにしてみれば、理不尽な『ユニウスセブン』への核攻撃も、地球軍にとって
は当然の鉄槌なのだ。

——蒼き清浄なる世界のため？

——何が？

そういう認識の食い違いが根底にある以上、理不尽には、理不尽を返すしかない。
〈戦わなければ、守れないものがある……！ 　　そういうオマエ達だって、オーブという国
を守るために戦ったのだろう？〉

まもる——それは、死なないこと。暖かいこと。

優しい人が、優しく教えてくれた言葉。だからステラは、たしかに、ずっと『まもる』

ために戦つて来た。

「——だが今は、そのオーブすら追われ、そんな状態で、そんな者達のために、そうまでして何を守ろうつて云うんだ!」

自決したオーブの施政者。

本人達は高潔に逝つたつもりだろうが、実際は今を生きる若者——残された者らに対し、多大な負債を押し付けて逃げたのだ。

「薄っぺらいオーブの理想とやらを追つたところで、守れるものなど何もないだろう!」
 「それどころか綺麗事のために、現実にごぼれ落ちて行くものの方が多いいじゃないか。
 理念のために殺された、捨てられた、オーブの棄民達のように。」

——そんなのは、沢山だ……!」

反対にアスランは、目の前にある命を護り抜くことで精いっぱいなのだ。同時にそれが、施政家ではない——兵士に過ぎない、いち個人にできる限界だ。だから彼は世界全体を動かす力を持った父の下、剣となって戦う。

父はオーブの施政者とは違う。最後の最期まで、平和な世界を望み——そのために、命を削つて頑張っている……!

「——だからふたりとも、オレと来い!」

その瞬間——「ジャステイス」は、腕を伸ばした。

その動作に、アスランの渾身の叫びが呼応する。

「一度しか云わない、云えないんだ！ オレと一緒に『プラント』へ来い！」

「どうして、きみは……っ！」

アスランは既に、一方の側からしか戦争を見れなくなっている。対峙する相手を知りもせず、一方的にナチュラルを「敵」と断じてしまう見地にいる。

おそらく、それはアスランが今まで、誰ひとりとして生身のナチュラルと触れ合うことなく——戦争の中で「敵を倒した」という事実のみが、周囲のコーデイネイター達に認められてしまった増長の結末であったのかも知れない。

しかし、確かにそういう見地に立てば、敵とも味方ともつかぬ自分達は間違いなく異分子として目に映るだろう……キラ達もまた、信じるもののために戦っているにも関わらず。

——世界はまた、ナチュラルとコーデイネイターが際限なく争う様相となるだろう、そんなもので良いか？

——きみ達の、未来は……？

アスランの云う通り、ウズミ・ナラ・アスハは志半ばにして斃れた。

それが最善の選択だったかはともかく、アスランがパトリック・ザラの志に従うように、キラ達もまたウズミ・ナラ・アスハの掲げた理想に共感するから、今は剣を取って

いる。

世界を二色に色分け、割り切ってしまったらおしまいだ。

「戦わなきゃ、守れないものがある——確かにそうだよ、アスラン」

〈キラ……っ！〉

「でも、だから僕は戦っているんだ！ 戦ってでも、守らなきゃいけないものがあるってことを、知っているから！」

守りたい世界がある——

コーデインイターもナチュラルも関係ない。自分達は、同じ世界に生きる生命——ヒトだ。

ヒトとヒトとが争い合い、憎しみ合う世界を止めたい——そのために自分は、戦うと決めたのだから。

「アスラン。なんで、ステラがこっちに来たのか——アスランに、ちゃんと云えてなかったね」

決然と叫ぶキラに続いて、ステラもまた、口を開いた。

「それはね。今のアスランが、間違ってるって思ったから……！ 一緒にいたら、何も云えないと思ったから……！」

〈な……っ〉

「それが、ステラがやらなきやいけない……ことだと思つたから」

宵闇の星々が、夜明けの太陽を支えるように輝くように——

レノア・ザラは、いつの日か、ナチュラルとコーデイネイターが等しく、誰もが星のように輝ける時代が来ることを祈っていた。そういう世界に、息子と娘を住まわせてあげたいと思つていた。

——だから母は、ステラに『星』の名をくれた。

そんな母の願いに応えるためにも、ステラは、ナチュラルを滅ぼす世界に心中することはできない。

今のアスランに、同調することも——

「今のアスランは間違つてる！——天国のお母さんだつて、そう思つてるはずだから！！」

変わり果てた父の願いに従うのが、アスランの正義なら——

変わらない母の祈りに応えるのが、ステラの役目だと、信じているから。

説得に、失敗したのか——

それは、アスランが口内にぼそりと呟いた一言だった。死別した母親のことまで持ち出され、逆に諭されたアスランは、ひとえに沈黙している。

そのときアスランの表情は、云い知れぬ虚無の感情に囚われて、いつそのこと少年のようであった。ぽかんと開いた口元は軍人らしい厳格さの欠片もなく、緊張とは無縁の彼方にある。純粋な不審を湛えた面輪は、ステラの発言が、一遍ほどにも理解できなかったようですらある。

「……何が、天国の母上だ……？」

母が望んでいた？ ナチュラルと共に生きる世界を？

そんなはずがないのだ——

その母は、ナチュラル達の害意によつて殺されたのだから。

「勝手なことを、云う……」

そのとき脳裏に、ふと、父の声が聞こえたような気がした。

父が云っていたように、目の前にいる少女はもはや、自分達の知っている妹などではない。
ない。

——おれの妹なら、おれの云うことには従つてくれるはず……。

——おれの知っている妹は、もう本当に死んでしまった……？

目に映るのは、自分を油断させるために現れた、裏切り者。

コーディネイターを貶めるために造られた強化人間。
妹とそっくりの形をした、紛い物——

（——偽物が、よくも……!!）

失意を通り越した諦念が、アスランを支配する。落胆する彼が顔を上げたその瞬間、意志に答えるように「ジャステイス」の機体は勢いよく轉身し、コロニーの脱出シャフトへと飛び去る。

これを認めたキラとステラの顔色が変わった。

「まずい——」

察し物のアスランは、もはや冷徹だった。如何に「ジャステイス」と云えど、性能上同列にある「フリーダム」と「クレイドル」を相手にするのは困難だという判断だろうか——説得を諦めた彼は、既に本来の任務に移っている。母艦と合流し、その火力を味方につけるつもりなのだ。

——止めなきや！

この一念が、ふたりを突き動かす。そうして「フリーダム」と「クレイドル」は、シャフトから飛び出して行った「ジャステイス」の後を追った。

シャフトを飛び出し、宇宙空間へ飛び出した。『ジャスティス』は、即座に母艦——
 エターナル”へ進路を取った。

そのすぐ後方には『フリーダム』と『クレイドル』が追撃し、アスランはこれを振り切るようにして航行する。目の前に淡紅色の『エターナル』の姿を見つけ、通信回線を開く。

「『エターナル』！ 応答しろ『エターナル』！ ——ええいッ！」

が、いくら呼び掛けても、妨害電波のせいか、母艦との通信回線は繋がらない。

アスランは痺れを切らし、後退しつつ、機体を反転させた。抜き打ちに『ルプス・ビームライフル』を構え、自機を追って来た二機のモビルスーツへ銃口を絞る。光条が放たれ、二機は散開した後、放たれたビームライフルを回避した。

「アスランきみはッ！ 妹に銃を向けたのか!?」

「オレにそうさせたのは、おまえ達なんだ——ッ！」

激高した『フリーダム』が、両肩越しに『バラエーナ』を撃ち放つ。

アスランはコロニーの破片を盾にするようにして、この砲火を回避した。が、そうして機体を巡らせた先に『クレイドル』が先回りし——眼前に白銀のMSが肉迫し、アスランは正面にシールドを翳し、このMSの衝突を真っ向から受け止めた。

真つ向からの衝突が二機を勢いよく弾き飛ばし、衝撃にアスランは呻いた。

「ステラ——おまえは死んだんだよ！ 一年前に！ ダメじゃないかツ——死んだヤツが出てきたら！」

アスランの言葉は、まるで自分に云い聞かせているようでもあった。

〈死人は！ 死人は、喋らない……でしょ!?〉

「ちイツ！」

苛立ちを吐き出しながら、次の瞬間 “ジャステイス” が “クレイドル” の腹部を蹴り飛ばす。弾き飛ばされた “クレイドル” だが、その勢いを後方の隕石を踏み込み潰すと、ふたたび、猛烈な加速と共に再接近を仕掛けた。

「!?’

虚を突かれた “ジャステイス” だが、やはり反応は早い。今度は取り付かせず、上方に逃れることで突進を回避する。そうして飛び去った先に、遠方からビームライフルが散らされる—— “フリーダム” だ。

「くツ、キラか……！」

しかし、端から当てる気のない——コクピッドを狙おうともしない——子ども騙しの射線などに怯むアスランではない。悔るなど云わんばかりに、アスランは激昂しつつ “フリーダム” へ逆撃を仕掛ける。すかさず “バツセルブーメラン” を握り持ち、これを

短刃として激突させた。

「撃ちたくないんだ、アスラン！」

「やる気のないやつが、戦場に出てくる！」

「僕は軍人じゃない、キミと違って——それでも、守りたいものがあるんだ！」

「賢しらに云う！ それは、お互い様だと云ったはずだ！」

両掌から二基のブーメランが投げ放たれ、スラスタフリーダムハイマツト蒼き翼の高機動力をもつて、これらの刃をひらりと躲す。

次の瞬間、二機は——二人は、どちらともなくビーム・サーベルを抜き放っていた。苛立ち、憤り、分かり合えない悔しさをぶつけるように、打ちかかつては、互いの機体を斬りつけ合う。シールドに光刃が干渉し、炎熱の裂光が瞬く。

「撃ちたくないと言いながら、何だ。おまえは——ッ!？」

暗黒の真空中に、赤と青の閃光が煌めき合い、交錯した。

戦闘を続けながら、彼等は複雑なデブリベルトの中を抜け、ようやく開けた宇宙空間に脱した。

通信が回復したのか、アスランは期を見たように二機の追撃を逃れ、母艦の方へ飛び抜けてゆく。慌てて「ジャステイス」を追うが、キラ達はコロニーの影に淡紅色の正体不明艦がいるのを認め、ハッと息を呑む。

——見たこともない艦だ、ザフトの新造艦……?!?

艦影を認め、アスランが叫ぶ。

「——「エターナル」！　「ミーティア」の射出を要請する！　オレが二機を討つ！」
アスランの云った言葉の意味が、キラとステラには、まるで分からなかった。

——「ミーティア」……?!

——何かしらの、「ジャステイス」の追加装備だろうか？

そう推察したキラの考えは正しく、このときのアスランは、単機では「フリーダム」と「クレイドル」の双方を相手取るのは不可能だと判断を下していたらしい。だからこそ、これまでは敵機に取り付くような戦い方——彼が最も得意とするであろう接近戦——はせず、電波の障害となつていようである。デブリ帯を抜けるまで、及び腰の戦闘に徹していたのだ。

——もしそれが、自分達を上回れるだけの追加装備を待ち受けた判断だったとしたら……?!

アスランの云う「ミーティア」とは、全長99・46メートルにも及ぶ「ジャステイ

ス”の強化武装。パーツのことである。この強化パーツと接合したモビルスーツは、本来単機では望み得ない推力と火力を得、さながら“機動弾薬庫”とでも称すべき戦艦じみたステータスを付与される。

ザフトの最新鋭艦“エターナル”には、こうした追加パーツが二基として両舷側部に用意されていて、これこそが、このときのアスランが何よりも“エターナル”との合流を急いだ最大の理由だった。

——“ミーティア”を確保した暁には、あの二機が相手でも存分に戦える……！

アスランはそのように確信をしつつ、母艦への通信を試みた。しかし、なかなか“ミーティア”が射出される様子はない。

件の“ミーティア”であるが、これは、厳密に云えば“ジャスティス”専用の武装というわけではないのだ。当然に“クレイドル”や“フリーダム”といった“ジャスティス”の兄弟機達とも適合する規格を有し、そうであるなら、このときの“エターナル”が闇雲に“ミーティア”を射出したとて、理由も簡単に想像することができた。

迂闊にも“ミーティア”を射出し、これをキラカステラかに接収してしまったら——？ 既に幾つもの最重要機密を奪取されているザフトにとって、テロリスト達に今以上に機密を報せたくないという判断も理解はできる——が、しかし、今はそのように悠長なことは云つてゐる場合ではない筈だ。

今ここで「ミーティア」を使わなければ、自分はおそらく、キラとステラに勝てない！ 戦いに勝てなければ、「エターナル」は直掩機もなく、彼らによつて直接砲火に晒される！ そうなつては、本末転倒ではないか。

「聞こえているのか」「エターナル」！ バルトフェルド艦長!?」

へはいはい。こちらでも確認したよ、「クレイドル」と「フリーダム」だな?」

苛立ちを募らせてアスランが詰問するが、バルトフェルドの声色には、微かに喜びが含まれているような気があつた。よくぞ標的を発見してくれた、とても云いたげな。

……いや、そうではない。確かに自分は標的を発見し、予定通りにこれとの交戦状態に入ったのだ。

——だが、どうしてそんなに、嬉しそうなのか？

事態が掴めないアスランであるが、そのときになつて、嫌な予感がしたのは事実だつた。これまで忘却の彼方に置き去りにしてきた猜疑と検分、思考の波が一気に押し寄せ、違和感と危機感が頭の中へ雪崩れ込む。

おそれを持った目で振り返れば、不可解な点は多くあつた。原因不明の「エターナル」の人手不足、ナスカ級を避けるかのような「エターナル」の単独行動、もう後戻りできないと溢した艦長の含みある発言——なぜ、今までこれだけの不審な点に気付けなかつたのか？ アスランは疑心に駆られ、不意に何もアクションを見せない「エターナ

ル”に対し、警戒の意味を込めてビームライフル“ルプス”を構えた。

アスランが銃を構える——と、それを認めた“エターナル”が、ようやくリアクションを起こした。次のときには“ジャステイス”のコックピットに、身に覚えのない警報音が響き、彼は愕然とした。それは、戦艦の測的レーザーが照射されたことを示す警報だった。

「……!? ロックされた!？」

へコックピットは、避けて下さいね——

出し抜けに、嫌に聞き覚えのある声があつさりと耳に飛び込んで来て——アスランの頭は思考は停止する。

次の瞬間“エターナル”から連装レールガンが放たれ、アスランはハッと現実に引き戻され、あろうことか、自機に向けて容赦なく飛来する電磁砲を紙一重で回避した。咄嗟の回避運動に、機体制御を損ね、深紅の機体は吹き飛ばされるように宇宙空間に投げ出された。

「ど、どういうことだ!？」

すぐに態勢を立て直し、アスランは語気を荒くして問いたです。

「こちらは味方だ! 何をやっている!?! それに今——」

気のせいかな?

気のせいであつて欲しいが、不謹慎なことを云えば、“エターナル”からラクスの声が聞こえたような気がするが——!?

——幻聴だ……疲れているんだ……!

アスランは切に願つたが、現実、そんな彼の期待を裏切つた。

へこちらは“エターナル”! ——ラクス・クラインですへ

全チャンネルへ向けて、通信回線が開かれた。

アスランは、全身の力が抜けていくのを感じる。彼の背後で“クレイドル”と“フリーダム”もまた、その回線から飛び込んで来た声に、呆気に駆られた。

「ラクス……!?!」

ステラは唾然とし、目下に認めた新造艦——その艦橋に据える、義姉とも呼ぶべき者の存在を認めた。どうして、という言葉は声にはならなかつた。

察しのいいアスランは、その声ですべてを悟り、そして、頭をもたげた。——“エターナル”にいるラクス、原因の不透明な搭乗員の不足——“ジャステイス”の専用運用艦……そのすべてが結びつき、アスランは打ちひしがれる。

へ——アスランへ

ラクスの声は、透き通るようにアスランを胸を打ち、その心に呼びかける。

へわたくしがこうして“エターナル”に搭乗していること——あなたに銃を向けたこと

——まことに不本意と思われませんが、聡明な貴方であれば、すべてを理解するところでしよう。

ラクスの手引きによつて、キラに譲渡された“フリーダム”——

ラクスの説得によつて、ステラが持ち去つた“クレイドル”——

そして、その二機の専用運用母艦である“エターナル”を、他ならぬラクス自身が、こうして持ち出した——？

すべては、この日を見越してのことだった？ クライン派は、ここまで軍内部に入り込んでいたのか？

「全て計画通りだと——そういうことですか。ラクス、バルトフェルド艦長……!？」

そう、すべては仕組まれていたことだったのだろう。

今この瞬間、この場にいる異端分子は、確実に自分だけだ。キラも、ステラも、ラクスも、今や父の敵となつて立ちはだかる敵——だが、この場において、アスランの意志に賛同してくれる者は誰ひとりとしていない。

孤独に包囲され——“ジャステイス”は文字通り、行き場を失つた迷子のように、宇宙空間に漂つた。

〈願う未来の違いから、わたくし達はザラ議長と敵対する者となつてしまいました。ですがわたくしは、決して貴方との戦闘を望みません〉

「……………!?!」

「へどうか、怒りを鎮め、剣を降ろして下さい。そして、願わくばもう一度、わたくし達が真に戦わねばならぬものは何なのか、考えてみて下さい——」

アスランは、動揺した。

やがて、本当に「エターナル」の中にラクスを認めた「フリーダム」と「クレイドル」が、淡紅色の「エターナル」の横に就いた。

もはや「エターナル」は、完全にテロリストの側に占領されてしまった……………!

——おかしい。

並べられた事実が、アスランを混乱させた。

何もかも、歯車が狂っている。こんなはずじゃなかった……………こんなはずじゃ……………!

口内で反芻しながら、困惑するアスランに、凜とした声が降りかかる。

「平和を叫びながら、その手に銃を取る——わたくし達の選んだものもまた、あしき道なのかも知れません……………。けれど、どうか——この果てない争いを断ち切る力を、あなたの力を、貸してはいただけませんか……………?」

そこには、いつも和やかに話しかけ、浮世離れしたかつての婚約者の面影はなかった。整然と言葉を紡ぎ、人の心を揺さぶるような、あの女はいつたい、誰なんだ……………!?

——キラとステラは、これにやられたのか……………!

だが、自分は騙されれない。騙されてなるものか。自分まで騙されてしまったら、残された父はどうなる——？

——もう私には、おまえしか居ないのだ……。

衰弱した父の面影が、不意に脳裏を過ぎる。

そうだ。今の父の信頼を裏切ることなど、自分には出来はしない。父の期待に背くようなことは出来ない！ たとえ婚約者や妹と道を違えようと——だが、そいつらこそが、父をあままで衰弱させたテロリストではないか！

そのとき、心を見透かすような声が聞こえ、アスランはさらに不快感を募らせる。

「アスランが信じて戦うものは何ですか？ 頂いた勲章ですか？ お父様の命令ですか？」

「……………！ ツ……………！」

「敵だと云うのなら、わたくしを撃ちますか。——ザフトのアスラン・ザラ」
躊躇ってはいけない。それは弱さだ。

——迷いなど、自分の力を殺すだけ……………！

だが、アスランが掲げた剣の先には婚約者がいて、親友がいて、妹がいる。

本来なら、自分自身が守ってやらなければならなかったはずの者達がいる。

——どうしてだ……!?!

アスランには分らない。

そのとき、三人の声が重なった。

『アスラン——ッ!』

目の前には、親友と、妹と、婚約者が立ちほだかる。

——なんだ? なんなんだ?

——これは……!?!

なぜみんな、おれを裏切るような真似をする……!?!
なぜ、父を裏切るような真似をする——!?!

「みんなで」

ヘルメットの気密シールドを解除し、痛む額に手を当てる。

「みんなで、オレを否定するのか!?!」

裏切られた痛みが、怒りを加速させる。

そのとき通信機から、ステラの声が響いた。

〈アスラン！〉

「——！ 喋るな!!」

アスランの中で、何かが弾ける。

途端に頭が冴え渡り、魂が、思考が——靈障に当たられたように澄み渡る。視界が途端にクリアになり、これまでの自分の振る舞いがすべて嘘のように、全身が鋭敏に動き始める。

悩むこと、迷うことを放棄した“ジャステイス”は、次の瞬間ライフルを掲げ、裏切りの代償を支払わせるべく、淡紅色の“エターナル”艦橋へと銃口を突き付けた。

〈アスラン——!?!〉

〈わたくしを撃ちますか、アスラン・ザラ——!?!〉

驚愕か、諦念か。通信先の少女達がそれぞれに反応を示すが、既にアスランには聞こえなかった。

が、そうしてライフルが射撃されるよりも前に、翼を広げた“フリーダム”が“ジャステイス”の前面に躍り出る。

キラの中で、何かが弾けた。

〈アスラン！〉

それより、眼前から雷光の如く迫る“フリーダム”を、アスランは真正面から堂々と

迎え撃つ。キラの振り抜いた一太刀を最低限の動作でいなし、至近に迫った相手に対しアンビテックス・トラス・ハルバード柄の部分をつな結させた両刀で斬りかかる逆撃を行ったのだ。

しかし、高機動空戦モードの“フリーダム”は常人にはあり得ない反応をみせ、やはりアスランが振るつた一閃を最低限の動きで避け、一度距離を開いてはまたしても雷光の如く突撃を仕掛けてくる。

（——だから、どうした!!）

だからアスランもみずからを颯風とし、全速力で“ジャステイス”を翔けさせた。互いに持てる全速力のまま、二機はデブリの間を巧妙に縫いながら——蒼と紅——閃光とスラストの尾を散らす激突を繰り返す。

〈本当のキミは、こんなことは望んでない！ 以前のキミなら、きつと僕達と一緒に歩んでくれるはずだ!〉

「オマエに何が判るんだ！ オマエ達に裏切られた、オレの何が!」

〈判るさ！ 優しかったアスランなら、ステラやラクスに銃を向けることなんて絶対に望まない!〉

「今のオレが、アスラン・ザラだ!」

その攻防は、時間にして一瞬。しかし、そのような中においても二人の技量には優劣

——否、力の序列というものが存在したらしい。

驚くべきことに、繰り返された衝突の中、アスランはキラの反応速度を超越してみせた。その結果として、次の瞬間には「ジャステイス」が「フリーダム」の腹部を真正面から蹴り捉えている。

衝撃に突き飛ばされた「フリーダム」は自身が発揮していたスピードが仇となり、これに巻き込まれる形で盛大に吹っ飛ばされた。青い翼が小惑星群の向こう側に消えていき、それを見た——見てしまったバルトフェルドの顔色が変わる。

追撃を振り切り、間髪置かず、バルトフェルドの眼前に深紅の機体が差し迫った。自由の翼を振り切った「正義の審官」——掲げた銃口を、「エターナル」の艦橋に向けている。

(もう、本当に終わらせる！)

——やられる！

然しものバルトフェルドも、このときばかりは立ち上がり、みずからの死を悟ったという。

噂には聞いていたし、覚悟だとしていた。ただ、まさか今のアスラン・ザラの「力が、今のキラ・ヤマトをも超越する『高み』」にまで至っていると、想像だにしていなかっただけ。

ライフルの銃口が絞られ、迸る光の一射を目の当たりにして、バルトフェルドは後方

のラクスに叫んだ。せめて、彼女だけでも逃がさなければ！　もつとも、今になって対応したところで、何の意味もなかったが。

「——いえ」

だが視線の先のラクスは、怯懦も未練もなく、凜として坐したままだった。

そして、艦橋を直撃するはずだった“ジャステイス”のビームは、しかし、突如として目の前に割り込んだ。何か”によって遮られた。

「——!?!」

遮ったものは、しかし、モビルスーツではない。

小惑星が偶然にも割り込んできたのか？　いや違う、それはデブリなどではなく、たしかに後端部のスラスタを点火させながら、その表面部に燦然と輝く光の粒子を放散させるもの。

星色。その星色^{ビーム}の粒子^{シルド}の盾^ドこそが、ライフルの一撃を弾き飛ばしたのだ。

「盾だと……!?!」

バルトフェルドは驚きに隻眼をむき、また、意表を突かれたのはアスランも同じだったらしい。“ジャステイス”は速やかに位置を変え、今度は別射線から探るようビームを斉射する。

二条、三条と繰り返された砲火だが、それらの光条はまたしても“エターナル”へ届

く前、直進すべき射線の途中で消し飛んだ。啞然とする彼らの視線の先で踊り舞っているのは、白銀にして二基の盾——それらがまさか、生き物のように意志をもって射線上へと滑り込んだというのか。

(信じていました——っ！)

この場において、その「盾」の正体を知っているのはラクスのみ——

「——なんだ……!?!」

ステラの中で、何かが弾けていた。

彼女が投げ放った二基のシールド——エンドラム・アルマドロー光の鎧——こそが、勝利を確信した //

ジャステイス”のビームを遮ってみせたのだ。

——分離式統合制御高速機動ネットワーク、通称ドラグーン・システム。

ステラの駆る「クレイドル」を構築する代表的な特殊武装であり、二基の防盾を機体から隔離して運用することで、文字通りに『攻防一体』の超性能を付与するもの。

「あれが、あクレイドルのの本来の力です」

「まさか……!」

バルトフェルドは思わず感嘆の声を漏らす。

ドラグーン・システム。その存在について、彼は執務室でパトリック・ザラが熱弁するのを話半分に聞かされたことがあった。

——本人や機体とは掛け離れた場所で、人為によって遠隔操作される武装。

云つてしまえば、パイロット経験に自負のあるバルトフェルドでさえ耳を疑う内容だった。もしもソレが本当に実用化されたなら、しかし、間違いなく自分の手には余るもので、だとすれば、使いこなせる兵士など早々に存在しないはずだとさえ考えていた。

——まさか、本当に使い手が存在したのか……!?

ところで、ドラグーン・ユニットの欠点のひとつに、大気圏内において機能不全に陥るといふものがある。これは地球の重力によって内蔵のスラスターだけでは自律航行能力を獲得できないためであるが、つまりは武装として、大気圏内では実質的に封印されるということだ。

ことに「クレイドル」が搭載するそれは「盾」であり、それ相応に重量を誇る。このことから誘導兵器として大気圏内で使用するのはやはり不可能だったのだが、だからこそ、このときアスランの——いや、ラクスを除く全員の意表を突く形になったのだ。

「ちいっ——!」

アスランは舌を打ちながら、掲げたライフルの銃口を「クレイドル」本体にシフトさせた。再びビームを射かけるも、敵の機体はまるで糸を操るかのよう腕を手繰り、それによって使役した「盾」をビームの射線上に介入させ、アスランの砲火を受け止める。

そればかりか、防御から間もなく、それらの“盾”は先端の砲門からビーム・キャノンを掃射する逆攻撃を行ってきた。

アスランは四方から浴びせかけられたビームをかわし、その対処に追われた。しかしながら、視線の先の“クレイドル”は泰然と佇んだままだ。相手はいまだ何の攻撃行動すら見せておらず、一方で“ジャステイス”が射かける砲火だけが、ことごとく無効化されてゆく。

一方的。この一方的すぎる戦闘の有り様が、アスランの恥辱心をカツと沸騰させる。

「クレイドル——ッ!!」

だから、役に立たないと判断したビームライフルを格納し、次の瞬間にアスランは両刀を出力させた。

的確に散らされるビームキャノンの合間を縫いながら、そうして彼は、一気に“クレイドル”本体に躍りかかる。

——やれる!

誘導兵器がなんだという? 如何に画期的な兵装だろうと、所詮は盾だ。つまり、シールドを手放している“クレイドル”は今とても無防備な状態にある。

そして、肝心の“クレイドル”本体が依然として何の動きも見せないのは何故だ?

パイロットが端末の誘導操作にかかりきりで、機体の操作にまで手が回っていないから

ではないのか？

だからこそ、アスランはそれまで無防備だった。『クレイドル』本体への突撃を敢行したのだ。光の両刀を回しながら格闘戦に臨み、しかしながら一方の『クレイドル』もまた、突然に光の双剣を抜き放ち、威風堂々たる逆撃に挑む！

「――！」

そのとき横合いからドラグーンが斉射したビームのひとつが、アスランの航路を僅かに狂わせた。些細なズレ、微妙な拍子の遅れ、『ジャステイス』が小さく態勢を崩すが、それで怯む彼ではない。

両刀と双剣、似て非なる四つの刃が一瞬間の間に剣戟し、深紅と白銀、ふたつの機影が須臾のうちに交錯する。

次の瞬間、両刀を振り抜いた『ジャステイス』の右腕が、半ばから切り裂かれて宙に舞った。アスランの見せた一瞬の隙に付け入るように、ステラが背後へと駆け抜けざま双剣を一閃させたのだ。

そしてそれは、今まで絶対と信じ疑わなかったアスランの技量をも超越した早業だった。

アスランは愕然として、断ち切られた腕先を見つめる。

――超えた、と、思ったのに……!?

自分は既に、妹さえ凌駕する『強さ』を手にしたはずだったのに……！

『ルーシエと呼ばれた少女』

戦いは終わった。

アスランはステラに挑み、そして敗れた。結論から云えば、それは実に彼らしい挑み方であり、同時に彼らしい負け方でもあったのだろう。

立ちはだかる障害を、実力でもって押しつける。これまでと何ら変わらない武断と強硬の姿勢をもってアスランは事態の收拾に努めた。そして、いつもと違って結果にのみ裏切られたのだ。

——負けたのか、オレが……？

このときのアスランはしかし、不思議と屈辱や無力感を抱くことはなかったという。抱いたとすれば、それはやはり疑問——何故、自分が敗れたのかという。

そもそも、アスラン・ザラは決して弱い戦士ではない。それどころか、コーディネイターの中でも頭抜けた能力を持つ戦闘の鬼才であって、戦場で“力”を奮うことに関して云えば、おおよそ彼の右に出る者はいない程度には他と隔絶した実力を持っている。

にも関わらず、アスランは今回、ステラには敗れた。キラですら疵ひとつ付けることの敵わなかった。『ジャステイス』に、彼女は決定的な損害を与えてみせたのだ。

——その敗因は何だったのか？

みずからの妹に敗れたという現実は、かえって彼を冷静にさせた。結論から云えば、アスランは致命的な勘違いをしていたのだろう。それは今回、彼を負かしたステラの境遇について——

『地球連合の生体操作によって、ステラは戦闘能力を人為的に強化されているんだ』

——「強化人間」

その言葉を耳にしたとき、多くの者はこれを字義どおりに解釈し、おおよそ『凡人より強かに調整された人間』を連想する。誤りではないし、実際に強化人間の大半がそのケースであることを考えれば、それはやはり間違った解釈というわけではない。

——ステラは強化人間で、その力は不正な手段^{ドールピニング}によって培われたものだ。

——だから彼女がオレより優れていたとしても、それは仕方のないことではないか。

士官学校における正当なカリキュラム、文字どおり血の滲むような研鑽と努力によって培^{ドールピニング}われたアスランの能力は正道であつて、一方で、不正と無法に手を染めて押し上げられたステラの能力は邪道である。

——その二人の能力値は、やはり、天秤に掛けられるものではない。

勿論、その言い分は正しい。ステラがこれまで、兵士として何の努力もしてこなかったかのように嘯くことを除けば、であるが。

それは当時のアスランにとって正当な言い訳であり、けれどもビクトリアにおいて“力”に目醒めた後の彼は、そんなステラさえも凌駕する“力”を手に入れた。

そのときのアスランは、たしかに一度、ステラを越える“力”を手にしたのだ。

だからこそ、彼は今回、自分がステラに負けるとは夢にも思わなかったし、自分が勝利する未来を信じて疑っていなかったのだ。それが自己過信であったかはともかく、負けると思つて戦いに挑む奴はいないし、勝てる信じ、勝たなくてはならないと誓つて戦いを仕掛けたのは事実だ。

ただでさえ、ステラは尋常のコーディネイターを圧倒する能力を持つ。元はコーディネイターを殲滅するための兵士だったと云うのだから、ある意味それも当然なのだろう。さりとて、アスランなら——彼ならば、決して抑えられない相手ではなかった。……その筈だったのだが……

(これがアイツの、本当の“力”だとしても——?)

かつて、大西洋連邦は強化人間を自軍の指揮下に置くために、いくつかの細工を施していた。

——ひとつは最適化装置による定期的な記憶操作。

——ふたつは洗脳と暗示による精神支配。

こうした技術を用いることによって、彼らは『ステラ』が持つ本来の自我を抑え込もうとした。つまり、生来の『ザラ』とは異なる別の人格——『ルーシェ』の人格——を定期的に用意することで、彼女の本来の人格が目醒めることを防いでいたのだ。

齡十四歳にもなる彼女が、いまだ幼子のような精神性であり続けたのも、おそらくはこの精神支配の弊害であるのだろう。彼女の自我が順当に成育し、発達に伴い、ひとりで本来の自我が目醒めるような事態を非道な研究者達は恐れていた。

だから定期的に彼女の記憶を空白の状態に差し戻し、その精神が発達することを意図的に禁じていたのだ。

逆に云えば——『死』という単語を耳にしたとき、彼女が著しく恐慌状態に陥つたのは、それまで暗示によって抑圧されていた『ザラ』の人格が、半ば目を醒ましかけていた証拠なのではないか。これは推論とも云えない妄想の類だが、だからこそ研究者達は、その言葉を彼女に対する『ブロックワード』として、彼女の前では二度と使わせぬように心掛けたのだ。

勿論、それだけでは、ステラに薬物が投与されていた説明にはならない。

そもそも、何故コーデイネイターである彼女に薬物が投与されていたのか？ アスランとしても、それは常々疑問に思っていたことだった。

大西洋連邦が得意にしているらしい生体強化とは、本来、後天的に高度な能力の開花を見込むことのできないナチュラルを純粹に「強化」するためのものだ。つまり、生まれる前から遺伝子調整によつて強化されているコーデイネイターに対し、それを施す理由というのは余りないのである。

にも関わらず、彼女には薬物が投与されていた。

それは、精神操作だけでは彼女の自我を抑え切ることができなかったからではないか？ コーデイネイターの高度な自然免疫力は、洗脳や暗示に強い耐性を持つ。だからこそ彼らは、あえて依存性の強い薬物を彼女に投薬することで、彼女を肉体的にも支配下に置こうと考えた。つまりは何が云いたいのか——

——精神操作と薬物投与。これらはステラにとつて「拘束具」だった。

精神と肉体——

それぞれに不可逆的な枷と鎧を取り付け、大西洋連邦は意図的に彼女を「弱体化」させた。そうでなければ、屈強なコーデイネイターである彼女の自我を支配し、指揮下に置くことができなかつたから。

要するに、ステラは元から強いのであつて——精神的に成長した面はあるにせよ——（以前までが、弱すぎた——のか？）

少なくとも、その可能性の方が高いように、アスランには思える。そしてそれこそが、

おおよそキラやアスランとは決定的に異なる、ステラの経緯でもある。

キラやアスランは、戦場を重ねるごとに戦い方を学習し、パイロットとして卓抜としていった。それこそが「正常」であり「普通」でもあるのだが、ステラの場合はそうではない。彼女は戦場を重ねるごとに戦い方を思い出し、本来なら発揮できていた筈の力を、戦場を重ねるにつれて取り戻していったに過ぎないのだ。

(ならば今、あいつを縛り付けるモノは何もない——)

精神操作と薬物投与、本来不可逆であるはずの制約から奇跡的に解放された今のステラは、ある意味で全ての封印が解かれたような状態にある。数々の制約や抑制、それらによつて拘束されていたであろう「力」が全て解き放たれ、文字どおり全力で戦うことが出来るようになったのである。

ビクトリアにおいて、アスランは当時ハンデを背負っていたステラを越えたに過ぎず、そうとも知らずに今になって戦いを挑み、強かな逆撃を被る形になったのだ。

「……………」

言葉が、出なかった。

戦いにおいてアスランが臆病になることは久しいが、このときばかりは慄然とした表情を隠せなかったという。今まで愛して来たであろう目の前にいる少女のことが、恐ろしく見えて堪らなかったのだ。それは、初めて敗北という体験をした今の彼だからこ

そ、知覚できる感覚だったのかも知れない。

「アスラン——っ！」

戦慄していたアスランの頭に、キラの呼びかけが被さった。

——これ以上、戦い合う必要はない。

放たれる言葉には、懇願にも似た響きが含まれていた。

「もう終わらせよう、こんなことは——」

キラ達から見たこのときの「ジャステイス」は、単に右腕が損壊しただけだ。抵抗しようと思えば、それでも見苦しく抵抗することはできるはずだ。それでも茫然としているのは、アスランの中で、何かが折れてしまった証拠ではないのか……？

ステラはぐつと息を呑みながら、そんな彼からの応答を待った。彼が今、何を考えているかなど、所詮は通信越しに察知できるようなことではなかったのだから。

「共に手を取り合い、道を捜しましょう……アスラン？」

何もかも手遅れになる前に、彼の目を覚まさせなければならぬ。ラクスの言葉は、祈りのように、優しく差し出された手だった。アスランは辛うじて、返す。

「ラクス——あなたが云った通りだった……」

肯定され、ラクスはほつと、表情を綻ばせる。しかし、その手が取り返されることはない。ラクスが意図した言葉は、アスランには伝わらなかった。伝えたいものは、伝わ

るものとイコールではなかった。

「あなたも仰つた通り、オレはザフトのアスラン・ザラです！ 自分の意志でザフトに志願した——！ ならば、最後まで「ブランド」と共に戦う！」

今、明確に分かつた。なまじ迷いを知らず、その身に強大な力を秘めた者ほど、敵にして厄介な存在は他にない。

それは自分自身に当てて良い評価であつたが、今の彼にとつては、目の前にいる妹こそがそうだつた。このとき、彼は自分のことをすっかり棚に上げて物を云つていたので、自覚がないのは、それだけ動揺が先行していたからだろう。

——こいつらを野放しにしたら、ザフトは敗戦する……！

予感ではない、確信だ。

仮にも、自分が父を裏切るような真似をすれば、戦局は一気にザフトの不利に傾いてしまう。テロリスト達が望んだ結末を迎え入れてしまう！ 義務感や使命感から、だからこそアスランは叫ぶ。

「道を違えた以上、無理に手を取り合う必要はない！ 許せないんだツ——強化人間だなんだつて、もつともらしいこと云つて！ 人体を引つ掻き回して！ そんなみつともないナチュラル共と、どうして手を取り合える!?!」

キラ達にとって、アスランは一步、遠い。

その一步は小さいが、手を伸ばしても届かないだけの距離があった。

「オマエ達を越えなければ、おれは前に進めないッ……！」

まだ、足りない。

まだ、自分には足りない力がある。

——もつと、力を……！

——もつと、強い力を……！

求め、願ひ、望み、もはや何のために力を欲したのかすら忘却し、アスランは声高に叫ぶ。

自己完結して、暗澹な思念ばかり増幅させていく今の彼は、ぐるぐると車を回すハツカネズミのようだった。どんなに必死に走っても、考えても、何処へも行き着けはしないのに。

途端、アスランは機体を転進させる。その動作を見て、ステラが声を挙げた。

「アスランッ！」

「聞けないな！　次は、こゝろは行かない——！」

言葉では分かり合えず、云い捨て、深紅の閃光が戦域から飛び去ってゆく。

ステラはそれを追おうとしたが、しかし、キラに手で制されてしまった。彼女は啞然として「フリーダム」を見た。

「あれが、アスランの生き方なんだ……。僕等は、それを否定できない……」

否定してはならない。人の生き方を、同じ人が否定することは許されない。少なくともそれは、融和による平和を望んだ、自分達が行うべき所業ではなかった。

「アスランは一步、遠いよね——」

悲しげに、寂しげにそう云ったキラの言葉に、ラクスが言葉以上の反応を示す。ステラにはその意味の全てを理解することはできなかつたが、遠い——その形容の仕方は、なんとなくステラにも分かる気がした。

「——でも、よくあのアスランに勝てたね……?」

一瞬にして一度。本当に一度の交錯だけで、ステラとアスランとの決着はついた。たったの一度で格付けを済ませようとする事自体がナンセンスであり、別に感心しているわけでもないことは彼の口調から明らかだったが、キラは単純に意外に思えたのだろう。ステラに訊ねていた。

「勝つたんじやないよ」

ステラは飛び去っていく深紅の機体を最後まで見届けながら、たんとして云う。

アスランは、なんだか色々和小難しそうなことを考えていたようであるが、この結末がなぜ齎されたのか、ステラには単純明快にして、よく分かつていた。

「アスランが、目を瞑ってただけ」

無感情に発されたステラの言葉の意味が、そのときのキラには分からなかった。

随伴艦を裏切った“エターナル”は、そうしてL4の港に着けるようにして着艦した。

港施設に、三隻から降り立った者達が会合する。

「初めまして——というのも変かな？ アンドリュー・バルトフェルドだ」

「マリュー・ラミアスです。しかし……驚きましたわ」

「お互い様さ」

薄く笑った男は、隻眼を巡らすと、傍らに立ち尽くしているキラを見た。

複雑な表情を見せるキラは、視線を合わせるのを躊躇しているようだった。そう、彼等は以前、リビアにて死闘を繰り広げた間柄だったのだ。

「いよう、少年。助かったよ」

「僕は……どうやって、あなたに」

気さくに挨拶するバルトフェルドに対し、キラは躊躇いがちに顔を上げる。

バルトフェルドは喉をならし、改めて問うように云った。

「……償いたいと思うかね？」

「ええ……あなたには、僕を撃つ理由がある——」

「分からないな……。今は戦争をしているんだ。そんな理由、誰にだってあるし。誰にだってない」

公明正大な戦争など存在しない。戦争には、いつだって理不尽が伴うのだ。

不意にアスランの言葉が、キラの脳裏に過ぎった。

「撃つては撃たれ、撃たれては撃ち返す——そういう連鎖を終わらせたいからここに来たんだ。きみも、ボクもな——違うか？」

「……はい」

肩を叩くバルトフェルドに、キラは泣き笑いのような頷きを返した。

大人達が情報を交換し始めると、その場からすこしばかり離れた場所に、キラはラクスの姿を認めた。アラスカの作戦が始まる前から、彼女とは久しい。

キラは何気なく彼女の方へと寄って行き、ラクスもキラの姿を認め、可愛らしくにっこりと笑った。キラは穏やかな笑顔を返され、自分も柔和に微笑む。

「……まさか、あの人にまた会えるなんて思わなかった」

「ええ、生還なされたことが奇跡のように謳われておりました。ですが、あの方がこうして同じ道を選んでくださったこと、わたくし達にとっては喜ばしいことですわ」

元々、マーチン・ダコスタはクラインよりのザフト兵であり、副官として、シンパに引き入れられないかと何度か探りを入れたことがあったらしい。

「なんでも、『一度は失われた命だから、オマケの分は思いっきり好きなことをやろう』——そう仰られたとも、聞きました」

「……バルトフェルドさんらしい」

少しずつ、自分達の志に賛同してくれる者が増えていく。

そう考えると、キラの胸に、明るい希望が差し込んだ。同じ地平の上に立ち、これら共に戦場を駆けてゆく。少しずつであつても、段々と自分達が望み、目指した場所へ近づいて行っている気がした。

——アスラン……。

分かり合える可能性が、人にはある。ナチュラルもコーデインイターも関係ない。互いに手を取り合い、同じ場所に向かって進むだけの足が、自分達はあるのだ。

アスランはしかし、可能性を拒絶した。

惑うようにキラが沈鬱な表情を浮かべると、ラクス表情にもまた、深い陰りが落ち

た。

「……ラクス？」

氣遣つてキラが訊ねると、ラクスはふと、顔を上げて微笑みを浮かべようとした。神聖な微笑みを返そうとして、しかし、失敗した。震えた声が先に漏れてしまったのである。

キラは勞しげな表情になって、ラクスは観念したように、云つた。

「父が、死にました……」

キラは思わず、返す言葉を失つた。

そう、彼女もまたカガリと同じように、道半ばで愛する父親を失つたのだ。

「『プラント』の市民は知りません……誰も……。わたくしたちも、どうやって死んだのかさえ」

「ああ、ラクス……」

ラクスは氣丈に振る舞おうとしたが、堪えきれずに大きな涙を目に溜め、泣き出した。

キラが傷ついたとき、彼を収容し、癒したのはラクスだった。

「……………」

キラはそんな彼女に恩返しをするように、そつと胸を貸す。ラクスはキラの胸で泣きじやくり、したたかに震えていた。

それは聖女などではない——たつたひとりの、まわりと何も変わらない——儂い少女の弱さだった。きつと今まで、斃れた父に代わって、みんなを率いて来たに違いない。そんな彼女の涙だから、キラは黙って受け止めた。かつて彼女が、傷ついた自分にしてくれたように、その髪を撫でながら。

キラ・ヤマトは、心の優しい少年だった。

優しいがゆえに、少年は、泣き晴らすまで震え続ける少女の身体を、黙って受け止めることしか出来なかった。これを突き放す勇気も度胸も、持ち合わせていなかったのは事実だった。

「ステラはすこし離れた場所で、そんな二人の様子を目撃していた。」

このとき彼女は、泣き崩れたラクスを見るのが、おおよそ初めてのことに思えてしまった。あんな表情のラクスを、ステラは事実、これまで見たことがなかったのだ。

きつと、彼女が誰にも——おそらくはアスランさえ——これまで見せたことのない、泣き姿であろう。にも関わらず、ラクスはキラに対して、あるがままの姿を晒け出していた。

それがステラには、少し意外に思えた。

(仲、いいんだ)

嫌というわけではなかった。

ただ、自分が慕っている者同士が仲睦まじいというのだから、それに越したことはないだろう。間違いない。

そういうキラも、ラクスには胸を貸し、優しく対応している。ああ、キラらしいな、とステラは漠然と思つて、ついで、トールが云つていた言葉が脳裏に浮かんだ。

『女の子のありのままを受け入れてあげるのも、男としては、大事なことだと思ふんだよな……!?!』

あのとき、トールが何を云おうとしていたのか、ステラにはよく意味が分からなかった。

しかしキラは今、トール曰く「大事なこと」というのを、ラクスにしてあげているような気がした。ありのままに泣いている女の子を、彼は優しく受け入れてあげているのだから。

——あのふたり……。

ステラは、しかし、その先を思惟しないようにした。

と云うのも、咄嗟に、なんとなく気まづいような、なんとなく面白くないような感覚が襲つて来たのである。

何故だかは、全然わからない。

けれど、そのとき「場を離れよう」という心が彼女の中に働いていたのは、否定しようのない事実であった。

ステラはそのとき、一步として身を引いていた。

更衣室で衣類を着替えた彼女は、制服に身を改めたあと、「クサナギ」の展望室へ向かっていた。

訪れた先で、ひとりの先約を見つけた。車椅子に乗り、やって来た「エターナル」を見つめている、マユ・アスカである。

負傷しておきながら、同伴者もつけずに展望室を好むなんて、まるで昔の自分を見ているようだ、錯覚がステラに流れた。彼女は背後から寄って行き、そんなマユの右脇に位置づいた。

「……………どうしたの?」

「あつ、ステラお姉ちゃん」

マユはびっくりしたように目をぱちちりと開け、ついで、小さく笑った。

「あのピンク色の艦が入って来るところ、見てたんだ」

円らな眸が、ステラを映したあと、ゆっくりと展望室の直面向けられた。

視線の先には、たった今、来航した“エターナル”の船体がある。

「あの艦、お姉ちゃんが守ったんだよね？」

「……みてたの？」

「うん、映像で」

意外そうにステラが訊ねると、マユは可愛らしく小さく笑った。

「すごいなあ」

何と云うわけでもなく、マユの口から、言葉が零れていた。

それはある種、ステラを神格化でもしているような言い分だった。

「守れる力があって。みんな、お姉ちゃんが守っちゃうんだ」

「まもる……」

が、ステラは自分を人間として扱って欲しいのが実際のところだった。

それゆえ、敢えて釘を刺すような叱責を云ってしまった。

「でも、ステラは何でもできるわけじゃない。自分のお兄ちゃんすら、説得できなかつた子どもだよ」

それは、ステラ自身の迷いだった。

『まもる』

ふと、自分を根底から変えてくれた、その言葉を教えてくれたのが誰であるのか、いま、この子に云つても信じてはもらえないのだろう。

ステラは不意に、そんなことを思った。

「お兄ちゃんが、いるの?」

「ふたつ、年上の」

「そうなんだ、マユと同じだね」

「……シン?」

「え、どうして、名前知って——」

すると、マユは「むむ?」と覗き込むような顔をして、ステラの顔を眇め始めた。彼女は車椅子に座っているため、上目遣いで見つめられた形になったのだが、ステラはひとえに呆けた表情をし、頭には疑問符を浮かべている。

——なに?

そう云いたげな視線を返すが、一方でマユは、金糸を紡いだように輝くステラのガリーボブの髪を注視していた。肩上で切り揃えられ、決してロングとは云い難いヘアスタイルに思うところがあるのか、思案顔を浮かべている。

ややおいて、マユは私服のポケットのからおもむろにヘアゴムを取り出した。本人は至って真剣そうな顔で、それをステラへと差し出した。とある要求と共に。

「ちよつと、ポニーにしてっ！」

唐突に、訳の分からない要求を突き付けられ、ステラは物も云えずに絶句した。マユはいきなり、髪型を変えてくれ、と云い出したのだ。

なんだか良からぬことを企んでいるのではと思ひ、ステラはなんとなく、殆どなんとなく、

「やだ」

とだけ、答えた。

それは、間が悪いという問題でもあつた。

今の彼女は、こと自身の髪型ヘアスタイルについて繊細ナイーブであつたのだ。

確かに、最近の彼女は自分の髪型を変えてみたい——より正確を期すれば、もっと女の子っぽく、ラクスのように御淑やかな印象のあるロングヘアヘアにしてみたい——と以前から願望を持っていた。そういう意味では、マユはロングヘアヘアでありながら、どちらかと利発的なイメージが先に立っているが、なんにせよ、丁寧に結われた編み込みが年齢相応に可愛いと思う。

が、しかし、今のステラには、ヘアアレンジできるだけの髪の長さがなかった。

不思議と質量を感じさせないふんわりとした金髪は、どちらかというときミアムロングであり、アレンジのレパートリーは限定されている。いつそポニーテールに束ねよ

うものなら、ボーイッシュではないにしろ、厭が応にも男の子みたいな風貌になつてしまふのだ。それは女の子として、ステラとしても嬉しくない所であり、今の彼女に悩ましい部分であつた。

初めてロングヘアにしたいと思つたきっかけは……何だつたらうか、よく思い出せないが。

「んー、じゃあふたつ編みでも良いの！ やつてあげるから、すこし屈んで欲しいな」
「いったい何故、そこまでステラの髪型にこだわるんだらう？ ステラは怪訝に思いながらも、それなら……と姿勢を屈めた。

マユは、やはり女の子だ、無駄のない手際でステラの髪をまとめ、ツイントールを作つて見せた。

「できた」

云うと、マユはまるで、自分で創作した芸術品でも見るようにステラの顔を眺めた。

そして、思いついたように云う。

「……ステラお姉ちゃん、前にわたしと会つたことあるでしょ」

ぎくっ。

ステラは、おどおどと狼狽えた。

(分かり易っ)

突っ込みながら、マユは内心で苦笑する。

髪型が変わって、確信したのだろう。

「たしかずつと前、オーブで……」

「会ってない」

「いや会ったよ！ あのととき男装してた——」

「会ってないもん」

「……………」

マユは、何も云わなくなった。

——いや、会ってるよね……。

オノゴロの繁華街の中で、確かに出会った記憶がある。記憶違いでなければ、猫みたいにシンに抱き着いたのが彼女であったような気がするが……。

「…………お兄ちゃん、おともだちだったんだ？」

マユはなんとなく察して、そう云った。

ステラは、沈黙した。

「…………どうしてるかな……」

「——シンは」

ふたたび、展望台に視線を戻したマユに、ステラは云った。

「シンは、きつと『プラント』に……ザフトに行ったんだと思う」

ステラは、適当なことは云わなかった。

少なくとも、未来の自分がザフトに所属した彼と出会っていることを知っているからだ。ニコルの話では、彼をオーブの軍人に押し付けたときにも『プラント』への移住を強く奨めたと云っていたし、よほどのことがない限りは、おそらく彼は『プラント』へ出向し、ザフトに入隊するはずだ。

「だからきつと——『プラント』に行けば……」

どの道、マユの足を治療するためには、根本的に『プラント』における高度な医療技術が必要となる。並行して『プラント』内でシンを捜せば、おそらくそれが、マユにとって最良の選択になるだろう。

もつとも、戦時下では『プラント』へ移住することなど不可能に近いため、どれもこれも、戦争が終わってからの話になるだろうが。

「じゃあ、そのついでにマユもザフトって所に入ったら、お姉ちゃんみたいに強くなれるかな」

聞き捨てならない言葉を拾い、ステラは慌てた。

——いま、なんて……!?!

愕然とするステラの反応を見て、マユは悪戯っぽく返した。

「じょうだんつ。今は、それどころじゃあないよね？」

「……生意気っ」

「えへへ」

しかし、マユはひっそり、口には出さず胸の内でも云った。

——でもね。お姉ちゃんに憧れているのは、ホントだよ……

口だけを動かしたその眩きは、当の本人には、聞こえなかった。

軌道衛星上にある“アメノミハシラ”ファクトリー内部で、とある戦闘訓練——模擬戦が行われていた。

この訓練を監督するため、視察ブースの中にはロンド・ミナの姿があり、彼女の目下、透明な強化ガラスの向こう側にはゴールドフレーム“天”^{アマツ}と量産型のM1A“アストレイ”がそれぞれに構えながら立っている。二機共に実戦で用いるような本格的な武装は持たず、今は槍を握っているのだが、それと云っても先端が丸められた借物である。

「始まったな」

ミナが眩き、実際に模擬戦が始まると、M1A“アストレイ”の方が先に地を蹴り、勢いよく“天”へ飛び掛かった。

——戦いは、先に動いた方が負ける？

そのような陳腐な言葉を反故にするくらいに氣勢と気概を抱えているMIA “アストレイ”の動きは、端的に云えば我武者羅だ。

——機先を制した者こそが、戦いには勝つ！

そういつた気迫さえ伺える “アストレイ”を視ながら、ミナはその一本筋の通った姿勢に好感を抱いていた。

「思い切りが良い——」

ミナは腕を組みながら、たつたいま気迫と共に勢いよく動き出し、しかし、一瞬の内に “天”に蹴倒され、返り討ちに遭ったMIAを見届けた。

同じく模擬戦を眺めていた技術スタッフの男が、嘆息つきながら云った。

「結果は惨敗みたいですね？」

「あれほどの気迫と勇氣は、あの者の生まれ持ったものだろう。あればかりは、後天的にはどうにもできん。大事な素質だよ」

——二度目の模擬戦が始まると、今度のMIAは防戦に徹したが、構えた盾を弾かれ、 “天”が突き出した槍により即座に一本を取られてしまった。三度目もまた再開されたが、MIAはやはり一瞬にして敗れ去った。

だが、全くの劣勢でありながら、MIAから気迫の類が消えていく気配はない。何度

でも立ち上がり、執拗に喰らい付いてゆくまでの獰猛さがあった。

そうして訓練を観戦していたミナの耳に、MS同士のスピーカーからかきまじいやり取りが響いた。

〈子どもには過ぎた玩具だ。おもちゃ大人しく降りて、無様に雑用でもこなしているといい、棄民の少年〉

〈もう一度！ もう一度だ！〉

〈初めから無理があつたのだよ、この私とデュエットを踊ろうなどとは〉

そうして、模擬戦は何度でも続く――

このとき、ゴールドフレーム“天”にはロンド・ギナが搭乗し、驚くべきことに、もう一方のMIA“アストレイ”には、シン・アスカが搭乗していた。

シンには、MSを操縦する才能があつたのだ。

様々な鼻肩目を抜きにしても、そうしたシンの能力は凄まじい伸び代を持っていた。有志であり、同じ時期にMSの操縦訓練を受けさせ始めた者達が、今なお操縦に四苦八苦している中で、シンだけは既に、MSを手足のように使ってしまう早熟さがあつたのである。

その原石とも云うべき才能を、早い段階から見抜いたミナは、みずから直々にシンの教導役を請け負い、今回は模擬戦と称し、実弟のギナと対戦させていた。

だがギナという男は、ミナという女ほどに親切ではない——
〈そおれ、踊らなければ風穴が空くぞ！〉

風穴が空くはずもない先端の丸い槍でど突かれ、またもシンの機体が敗れ去る。

——大人げないとは、こう云った場面のために使うべき言葉だろう。

流星に思うところがあるのか、またも技術スタッフが声を漏らした。

「幾らなんでも、相手が悪すぎやしませんか？　ギナ様に比べ、シンはMSを操縦できる
ようになったばかりの素人なのに」

「いや、よいのだ。あれで」

ミナは、ざっぱりとして云い切った。

「繊細な部分は私のみずから鑢に掛けるさ。だが、もう暫くはギナを使って粗削りした
方が、あの原石は美しく輝きそうだ。私の勤がそう告げている」

「いやあ」

ミナという女性が先見の明に優れていることはスタッフの男も承知しており、彼女の
言葉に疑いを掛けるのも心外なのだが、そのやり方は本当に合っているのか？

ふたたび視線を訓練場に戻してみるも、やはり、碌に見られたものではない。そこに
は少しばかり高揚しているゴールドフレーム“天”に、完膚なきまでに叩きのめされて
いる“アストレイ”の、全くもって情けない姿と惨状が拡がっているだけ。

とういか、ギナは既に槍をおいてシンに殴りかかっており、果たしてその光景は、本当にミナが設けたかった正当で公平な教導訓練なのか？ スタッフの目には、ごく個人的で一方的な、ギナによる憂き晴らしの現場にしか見えないのだが……？

〈丁度いいサンドバックだ！〉

〈操縦教える気あんのかあんたはーーツ!!?〉

ものの見事にボコボコにされている機体の中で、シンの絶叫が木霊した。

『壊れゆく心、癒えゆく心』A

L C A M—O I X B “ドミニオン”とは、大西洋連邦が開発したアークエンジェル級二番艦に相当する“アークエンジェル”の姉妹艦である。

大天使の名を持つアークエンジェル、それよりも上位天使に相当する主天使に当たるドミニオンとは、黒色を基調とした塗装や多少の仕様変更を除いて、ほぼ“アークエンジェル”と同等の機能を持つ。

姉妹艦である“アークエンジェル”は、もともと『不沈艦』とまで崇められた戦艦なのだ、その有用性を汲んだ二番艦が製造されるのは、これまでの実績を鑑みれば正当な流れであった。

地球連合軍司令部は、この艦の艦長に、かつて“アークエンジェル”の副長を務めていた、ナタル・バジールを抜擢した。

それは結果として皮肉な人事であったが、そもそもその門出や素養、そして経歴——どれをとっても、司令部はナタル以上に適任な人材を居ないと断じていた。

こうして中尉階級からの異例の大抜擢を受けたナタルは、華々しく“ドミニオン”艦

長へと就任したのだった。

とはいえ、ナタルにとつて“ドミニオン”は小慣れた戦艦と云える一方、クルーの違いななど様々な相違点から不可思議な寂寥感を抱かさせられる場所でもあったようだ。見慣れた戦艦、けれども見慣れぬクルーに囲まれる艦内は、異邦を訪れたときの孤独感とよく似ていた。

そして、“ドミニオン”への同じような人事異動があつたとすれば、軍医のハリー・マーカットと、フレイ・アルスター二等兵も似たようなものだろう。

厳密には、フレイはこのとき二等兵ではなく、すでに少尉の階級を与えられていた。モビルスーツ・パイロットとして抜擢されるためには、最低でも少尉以上の階級が必要とされたためである。

しかし、ナタルは良くも悪くも堅実な性格であり、そのような野戦任官めいた抜擢は好ましく思えないのだろう。そのためか、フレイのことを二等兵と呼ぶ癖が抜けていなかった。

“ドミニオン”に赴任したナタルの許に、フレイとハリーの人事異動が知らされたのは、つい先ほどのことだった。

時間を戻して数時間前、彼女の許に月艦隊司令部から将校が訪れ、ひとつの連絡を入れた。

『国防連合産業理事、ムルタ・アズラエル氏が、例の新型部隊のオブザーバーとして“ドミニオン”に御同乗なされる。頼んだぞ』

腫れ物を当てつけられた気分であつたが、実際、そう解釈して間違いではないのだから。

第三次ビクトリア攻防戦に勝利し、マスドライバーを入手したアズラエルは、みずから宇宙に上がって戦いにきた。目的は定かではないが、そんな男が連れて来たのは、不気味な研究者達と、不愛想にして礼節のない三名の少年達だつた。どうにも後者は上層部が秘密裏に開発を進めていた『ブーステッドマン』——つまるところの“人間兵器”らしいのだが、いずれの少年もその素性は謎に包まれ、ただ『戦うだけの人間』として不親切に扱われていた。

そんな中に、見知つた顔を見つけたときは、ナタルも驚いた。

少年達とは別の種類の強化人間——ナタルにしてみれば、何がどう違うのかもよく分からないが——の中に、『プロト・エクステンデッド』もとい『リビングデッド』と呼ばれている、フレイ・アルスターその人を見つけたのである。

「あの三名の少年と、フレイ・アルスターはパイロットではなく、装備なのですか？」

「人間というより、モビルスーツの部品扱いみたいなものです。仕方がない」

「いったい、何があったのです？」

ナタルは「ドミニオン」艦内の医務室を訪れていた。またもアークエンジェル級の医務官を務めることになった、ハリー・マーカットに詳しく事情を聴こうとしたのだ。

「その……強化人間というものを、自分はよく知らないもので。アルスター二等へ——あつ少尉が、そのような生体改造の被験者になった、などと急に云われましても、俄には信じられません」

元よりナタルは、代々続く軍人家系の生まれである。

そのため、軍内部のことには人より詳しいという自信と自負を持っていたし、軍そのものに対する忠義も信頼も厚かった。しかし、そんな自分が全く知らない内情があったことを知らされ、ナタルの話し方には言葉を噛むほどの動揺と、それと同程度の躊躇があった。

無知であったことを恥じている風な物言いだが、そんな彼女がおかしく思え、ハリーは気軽な口調で見間違いと返した。

「強化人間なんて存在を知ってるのは、軍の中でもほんの一部でしょう。性質上、迂闊に公にできるものではありませんからね」

付け足されたその言葉に、ナタルは顎に指を当てた。

「では、今のアルスターは、ステラ・ルーシエと同じような強化人間——ということですか？」

「同じ、という部分が厳密には違います。たしかに近い性質を持つてゐることは事実ですが……『アークエンジェル』にいた頃、フレイは僕のコンピューターから、他ならぬ彼女の生体データを持ち出したことがあつた」

おそらくフレイは、データを盗掘することによつて、ステラと同等にして同質の“力”を有するエクステンデットにならうとした。それが彼女の、当初の計画であつたことに疑いようはないだろう。

「けれど、所詮は僕個人の能力では、その『エクステンデット』を完全に再現することはできなかつた」

結論から云えば、フレイは完成された『エクステンデット』に生まれ変わることができなかつた。それはひとえに現代の技術不足が招いた結果であり、ハリー個人の能力による限界というものだった。

「僕は、彼女が求めていた強化人間エクステンデットとは違う——全くの亜種を造り出してしまつたのです」

アズラエルはハリーを恫喝し、新薬を急造させた。勿論、ハリーは乗り気ではなかつたし、断れるものなら断りたかつたが、人質を盾にされれば従わざるを得なかつたし、何

より彼には、医学者としての矜持があった。新薬の出来如何によつては、大勢の人間の人生が狂わされてしまう以上、彼は事業には全力を注いだ。それが本懐であったかどうかは別にせよ、少なくとも、与えられた仕事に対して「責務は果たした」と胸を張つて云える程度には。

しかし、あくまでもハリー・マーカットという個々のレベルで製作された『それ』が、本来の完成された薬品であるはずなかつた。

「——それは完成された新薬を開発しきれなかつた、僕の落ち度と云えるでしょう」
「……パイロットの養成訓練も受けていない子どもが、モビルスーツを操れるようになったのです。貴方が開発した薬品は、つまるところ、意図していたものと副作用が異なつた、というだけで、現実に効果があつたのでは？」

ナタルには分かるし、だからこそ冷徹で客観的観点から意見を呈す。

たしかに大西洋連邦が抱えていた新星たる精鋭パイロット達——前期GATシリーズのパイロットとして予定されていた者達——ですらモビルスーツの操縦を満足に行えなかつた以前の惨状を思えば、子どもでさえモビルスーツに対応できるようになるハリーの新薬は、まさに夢のような……画期的な発明であると述べる事が可能だろう。けれど、ハリーはあくまでも個人的な主観の上に立ち、それでも、と続けた。

「フレイの立場からしてみれば、その副作用つてのが何より厄介なのです。彼女に脳疾

患が見つかったことが知れば、アズラエルは黙ってない」

薬物投与の副産物として、フレイは脳に疾患を患った。

ナルコレプシー。日中において突然、耐え難い眠気に襲われる睡眠発作の一種だ。彼女の場合は、薬物により脳細胞が活性化を繰り返した結果、脳髄そのものが委縮し、突発的に睡眠発作を起こしてしまうものと診断されている。

「彼女は『レムレース』を預かっている身です。軍略的に重要な機体を授かっている以上、体調不良は言い訳にはならない。……健康面で個人的な問題が浮上すれば、更迭されたって文句は云えないでしょう？ そうなれば彼女は、二度と表舞台へは戻って来れなくなります」

それは夢のような新薬が招き出した、心ない弊害と云える。

薬物さえあれば、人間に才能は必要ない。つまるところ、たとえどんなに優秀な人間であっても、すぐに『交換』ができるということ。

「まあ、ブーステッドマン達に比べれば禁断症状も少ないし、精神的にも彼女の方が安定していることは事実です。だがタイミングが悪ければ、戦闘中に睡眠発作が起こる危険性だって考えられる……」

第三次ビクトリア攻防戦において、フレイは戦闘終了後になって唐突に睡眠発作を引き起こしている。当時は——どういうわけか——オルガがひとりで医務室に連れて

きてくれたので、大騒ぎになる前に彼女を治療することができたが。

「意識すら失うほどの睡眠発作が、仮にも、戦闘中に発症してしまっただら？」

フレイの抱えた脳疾患は、モビルスーツ・パイロットとしては、あまりにも致命的なペナルティである。

この事実がアズラエルの耳に入れば、彼は真つ先に最重要機密「レムレース」のパイロット交代をせがむだろう。そうなれば、有効性の見込めない『リビングデッド』の開発事業は即刻中断され、その第一被検体であるフレイは、容赦なくモビルスーツパイロットを降板――

――いや、強化人間（かれらものさし）の尺度で云うところの『廃棄処分』の宣告を受けることとなるだろう。

不吉な懸念を口走っているとき、医務室のドアが、おもむろに開いた。ドアの向こう側に立っていたのは、他でもない、フレイ・アルスターだった。

「フレイ……!?!」

ハリーは、思わず立ち上がった。

――今の話、聞かれたか……?」

気まづげな表情を浮かべたが、どうやら、内容までは聞こえなかつたらしい。

フレイは室内にナタルの姿を認めると、軽く礼をした。そのまま、ずかずかとハリー

の方へ歩いて行く。

「アルスター……」

ナタルは、久しく見るフレイの姿に、ただ唾然とした。彼女はまず、切れ長に尖ったフレイの双眸に対して、攻撃的な変化を認めた。

しかし、それが霞んで見えてしまうほど、少女の目元にはくつきりと隈が浮かんでいゝる。おそらくは睡眠習慣が、彼女の中で完全に狂っている証拠なのだろう。

変わり果てたフレイには、以前のような、容姿に対する積極性が完璧に欠落していた。それは非常に悪い意味で、彼女の中から人間らしさ——少女らしさ——が、失われつつある証拠のように思えた。

(これが、強化人間の末路なのか)

無論、彼女の中にも、まだ年頃の乙女らしさが辛うじて残っているのか、部屋を出る前、目元にコンシーラーを塗って来たようではある。だが目元だけが殊に厚塗りになった化粧は、むしろ部分的な違和感を増幅させ、患部を悪目立ちさせているようにも見える。

——化粧は、ただ塗れば良いという問題ではない……。

女性としてナタルはそう感じたが、それに気付けない時点で、やはり今のフレイは尋常ではなかった。

彼女はハリーの前に立ち、ぼそり、と云う。

「アズラエルには云った？」

自分に見つかったナルコレプシーのことを云っているのだろう。

ハリーはかぶりを振り、静かに返す。

「云つてない。云えば、きみが危ないだろう」

「同情ね。まあいいけど」

使えないと断じられた強化人間の末路など、想像するに簡単だ。

ハリーは云うついで、白衣のポケットから錠剤の入ったひとつの薬瓶を取り出した。手を差し出し、その薬瓶を手渡す。

「頼まれていた薬だ。『中枢神経刺激薬』——呑めば、摂取後向こう一時間は、睡眠発作を抑えられる」

医学界では、モダフィニルと呼ばれる物質を体内に摂取させることにより、睡眠発作を抑制する効能が認められている。ハリーの云った中枢神経刺激薬は、別名「モディオダールR錠」とも呼ばれ、ナルコレプシー治療の第一選択薬となっている薬剤だった。

「出撃前に摂取すれば、戦闘中に昏睡するような事態は未然に防げるはずだ」

ハリーはーはついで、不吉なことを付け足す。

「と云つても、身体を騙すための薬だから……効果切れれば副作用はある。騙し騙し

だが、何も処方しないよりアズラエルの目だつて誤魔化せる——だから渡すんだ、いいね？」

「……ありがとう、いろいろと……」

「フレイ……」

戦闘中、フレイが睡眠発作を起こすことは、すなわち、死に直結する死活問題である。これを克服するために、せめて戦闘時には睡眠発作が起こらぬよう、ハリーは、中枢神経刺激薬を処方した。

今のハリーに出来ることと云えば、その程度だ。

フレイは薬瓶を受け取ると、そのまま踵を返して退室しようとする——寝る間も惜しい、と云わんばかりに。あまりの惨状を見かねたナタルが、そんな彼女を呼び止めた。

「そこまでして、戦うのか——」

「これが今の、わたしが生きる意味ですから……」

フレイは日に日に、自分が摂取する薬物の量が、異常に増えていることを自覚していた。

生体強化に始まり、覚醒剤、睡眠薬、そして神経刺激薬——これらを一日に何度も服用している彼女は、明らかに健康状態をみずから害しているはずだ。かと云つて彼女は、この習慣をやめようとは決して思わなかったし、思えなかった。驚くべきことに、彼

女はすっかり自堕落な生活に慣れてしまっていたのである。

——戦うことをやめてしまったら、強化人間のわたしに、何が残る？

云われ、言葉も返せないナタルを後目に、フレイはそのまま退室してゆく。

もの寂しい背姿を見送り、ハリーが深く、嘆息ついた。

「レムレース」から降りない限り、彼女の病状が改善することはあり得ない。それどころか、悪化して行くばかりだと云うのに」

「生きた人間の魂を吸い取るモビルスーツとは？ ——レムレース」、まさに亡霊ですよ」

ハリーはさらに、皮肉げに付け足した。

「そんな『亡霊』を操るのが、リビングゲデッド——生きる屍とは、笑えない冗談だ」

一方、コロニー「メンデル」港内では多くのメンバーが顔を合わせ、今後の方針についてを検討していた。

その場に居合わせるのは、当の三船を率いている人物——「アークエンジェル」からはマリューにムウ、「クサナギ」からはキサカにカガリ、「エターナル」からはバルト

フェルド、ラクスとキラ、そしてステラといった顔触れが並んでいる。

「当面の問題は、やはり月だと思われます。現在、ビクトリア基地を奪還した地球連合は、マスドライバーから次々と部隊を月基地に送り込んでいると聞いています」

「おそらく、本拠地はプロレマイオスでしょうね」

マリューは眉を擡めた。

「それにしても、宇宙への戦力移転なんて……。地球軍は“プラント”を、総攻撃するつもりなのかしら？」

「だろうな。ザフト——いや、パトリック・ザラも、既にそれを見越して動いているはずだ」

そのパトリック・ザラから、直々の登用を受けたバルトフェルドが云う。

もともと、地上部隊所属だったバルトフェルドが“エターナル”の艦長に抜擢されたのも、ザフトが“スピッドブレイク”以後の弱体化から、地上に戦線を維持することが難しくなったからである。

ザフトにおいて『砂漠の虎』の名を知らない者はおらず、適性はどうかであれ、そんな英雄を“エターナル”艦長に担ぎ上げることと全軍の戦意高揚を促そうとしたのだろう。

「地球連合の総攻撃に備え、ザフトもまた“ボアズ”や“ヤキン・ドゥーエ”に戦力を結

集させている」

それは予言ではない、断言だ。

「始まってしまふのか……？ 地球軍とザフト——いや、ナチュラルとコーディネイターの、全面戦争が……」

カガリが不安げに、沈鬱な表情で問う。

——もう、事態はそこまで急進してしまっているのか？

バルトフェルドは、やむを得ない、と云った風に続ける。

「元々、地球には『プラント』と決着を付けたがつている連中が沢山いるからな。そいつが軍人であれ、無辜であれ……今や口を揃えて唱えているだろう？ あー、『蒼き清浄なる世界のために』ってね」

「よせよ……」

ムウが嘆息まじりに苦言を呈すが、バルトフェルドは「ボクが云ってるわけじゃないよ」と大袈裟に肩を竦めた。

「ただ、地上でザフト軍を率いていた身としては、単純に実感なんだよ。ブルーコスモスが唱えるお題目、環境保護を隠れ蓑にした原理主義者の思想つてのは、すでに軍上層部だけの主義主張に留まらない、無辜に広がったひとつの民意の形なんだってことがな」

そう云えば——と、キラは思い出す。初めてリビア砂漠、バナデーヤでバルトフェ

ルドと出会ったときも、ブルーコスモスの思想に啓蒙されたテロリスト達が、彼の自治する街に向かって攻撃を仕掛けていた。

——宇宙のバケモノは出て行け！ 蒼き清浄なる世界のために！

と、嘆くように連呼して。その意味でバルトフェルドは、民間人すらそうして唱えている地球の実状をよく知っているのだろう。

「なんでコーディネイターを討つことが、蒼き清浄なる世界のためになるんだろうねえ？　そもそも、蒼き清浄なる世界ってのが何なのかは知らんが」

「……………」

「当然『プラント』としては、そんな理由で討たれるなんて真つびら御免だろう。——トップは防戦に出て、抗うさ」

「ブルーコスモス、厄介なもんだよ……………ったく」

「形も拠点も、実際のところ、実体すら存在しない——思想だからかな」

指導者はあるだろうが、指導者を倒したところで、思想が消えるわけではない。それは、個々人ひとりひとりの心の奥に、根強く息づくものだから。

「——大体、この『メンデル』に起こったバイオハザードだって、かつてブルーコスモスの関与が疑われているだろう？」

「そうなのですか？」

マリユーが驚いたように、メンバーの顔を見遣る。

それにはキサカが答えた。

「数年前、ここで起こった事故は結構な騒ぎになったからな。かつて『メンデル』は『遺伝子工学における聖地』とも呼ばれ、より先進的なコーディネイターを生み出すための大掛かりな研究が執り行われていた場所だとも噂されていた」

「へえ……」

キラは何となく、そんな話を聞いていた。

ついで、バルトフェルドが云う。

「遺伝子改変を忌み嫌うブルーコスモスにしちゃあ、黙って見過ごすわけにはいかない場所だったってことか。……ま、だからといって遺伝子以外の部分を乱暴にいじくり回すことが、反面正義とも思えんが」

「――」

「これはボクが、まだリビアにいた頃の話だが――バイオフィードバックを用いた洗脳教育や違法薬物を用いた『戦うためだけに造られた人間』ってのを、ブルーコスモスの連中は好んで育てていると聞いた」

一同の目が、数人を除いて、とある一カ所に集結した。

無論、内容が内容だけに、流し目ではあつたが……。

「コーデインイターという存在が、いくら連中にとつてバケモノのように見えていようとき……反対にボクらから見りゃ、そうやって敵を殺すためだけに造られた強化人間ってヤツの方が、よっぽど薄気味悪いバケモノに思えるがね」

「バルトフェルド艦長」

そのときラクスは、妙な剣幕で咳払いをしたという。バルトフェルドはあつけらかなとして、自分が何か失言でもしたのか、と云うような不審を湛えた表情を返す。

が、無理もないことだろう。バルトフェルドはこのとき、彼が云うところの「薄気味悪いバケモノ」が、この場に居合わせることを知らないのだから。

「……地球軍は、ロドニアに研究所を造って、そこで、たくさんの強化人間を造ってるんだ」

一同の視線が、臍気に声を発したステラの方に向けられる。

そこには痛ましげな視線であつたり、なんでそんなことを知っているんだ、と云わんばかりに驚愕とした視線もあつた。

「コーデインイターの力に対抗できるように、薬で肉体を強化されて、それでも性能が低いと分かつた素体は、同じ強化人間の手で淘汰たうたされていくの」

生きるか死ぬかは、彼らの成績と性能が決定づけること。仲間——いや、仲間と呼ぶことすら許されない同僚達を殺し、また、それにいつ殺されるかも分からない極限の精

神の中で麻痺した心は、相手を殺すことでしか生き抜く術を知らないという、歪んだ彼らの闘争心のみを着実に作り上げていく。

狂気に染まった蠱毒こどくの中で生き残り、優れた者だけが、施設から出され、実際の戦場に出ることになるのだ。

「だから、薄気味悪いつて云うのは、ほんとだよ……」

顔を伏せ、俯いた少女の様子から、バルトフェルドは事態を察した。

先のはまず紛れもなく、バルトフェルドの失言であつたのだと。

「一度でも投薬を受けちゃつた人は、もう後戻りできない。投薬を受け続けないと、身体が衰弱して、あとあと、なんにも考えられなくなつて——」

「——もういい」

なかば強引に、キラが話を終えさせた。

「もういいよ、ステラ」

マリユーが、俯いて云つた。

「……ひどい時代よね」

「ああ……」

それでも、とキラは続けた。

「でも、だから僕達は諦めちゃいけないんだと思います。——こうして、違う立場の人達

が、同じ地平ぼしよに集まれたことは、絶対に偶然なんかじゃない……」

連合から脱走して来た「アークエンジェル」、ザフトから脱走して来た「エターナル」、オーブから送り出された「クサナギ」――

そして、地球軍が抱えた深い闇を知るステラを筆頭に、方々の世界を知る者達が、同じ世界を夢見て集結している。

これは、マリューの云うようなひどい世界の中でも、輝こうと思つた者達が、懸命に迷い、そうして生き抜いた結果――その必然なのだ。

「そのことを、僕達は忘れちゃいけないんだと思います」

「創りたいと思いますわね――そうでない時代を……」

希望を捨ててはいられない。

新たな世界のために、場に居合わせる一同は、その言葉に強く頷いた。

キラが「アークエンジェル」内の通路を渡っていると、背後から、声がかかった。

それは、ステラの声だった。

「――キラっ」

シューズを使った彼女は、慣性で移動していたキラよりも早く追いついて来て、彼の

目前までやって来ると、装置から手を離した。

慣性のまま、思ったより早いスピードで飛び込んで来る少女の身体を、キラは慌てて受け止めた。

「おっ、と……。どうしたの？」

「あのっ、さつきは——」

——さつき？

キラは目を巡らせながら、そのことを考える。

ステラはついで、咲いたばかりの花弁のような、柔らかな笑顔を浮かべた。

「——ありがとう……っ」

その笑顔は、それまで沈鬱そうだった陰間に差し込んだ、曙光のように眩しく輝いていた。

——ああ……。

鷹揚と云われ、キラは咄嗟に思い出す。さつき、自分がステラの言葉を遮ったときのことを云っているのだろう。

ステラが強化人間のことを語るとき、あのとき彼女は、完全に昔の自分を虐げているように思えた。それは確信ではなく、単なる憶測に過ぎないが——説明という名の自傷行為を行っている彼女が、あまりにも居た堪れなくて、痛ましく思えて、キラは、ほと

んど強引に話を遮っていたのだ。

それゆえに、キラとしては恩着せがましいことをしたつもりではなかった。ただ純粹に彼女のことを想っただけに、これと云って意識していなかったのだろう。

が、ステラにとつてはひどく救われた行為であったようだ。そのことを感謝され、キラは小さく、横にかぶりを振った。

そう、キラにとつては「どういたしまして」と返すようなことではなかったのである。「でも……」

しかし、曙光に雲間が指し、ふたたびステラの表情に陰りが落ちた。

キラはしごく怪訝そうに、その顔を覗き返す。

「あの人が云つてたこと、ほんとのことだから——。ステラ、薄気味悪いよね……? キラもやっぱり、そう思つてるよね……?」

「ステラ……」

バルトフェルドも、悪意があつて云つたわけではないのだろう。そもそも彼は、ステラとの面識がなかったため気を遣う意味が見い出せなかったのだろうが、ある意味では、彼の云つていることも正しい。

遺伝子操作は、より良き未来を望んだ人間が行つた行為だつたはずだ。科学にせよ、医療にせよ、宇宙開拓にせよ、あらゆる分野でコーデイネイター達が頭角を現し、世界

は前進して行った。しかし、ナチュラルはそれを妬むようになり、いつしか彼等の異能に対抗するべく、戦うためだけの強化人間を造り出してしまった。

——戦時以外では、まるで何の役にも立たない、狂気の産物を……。

確かに常識的な見方をすれば、そんなものを量産している地球軍……いやブルーコスモスの方が、遙かに狂っているように見えるだろう。

ゆえに強化人間は、客観視すると確かに薄気味の悪い存在なのかも知れない。しかしキラは、おずおずと上目遣いで見上げて来る少女に対し、優しく返した。

「思つてないよ——僕にとって、ステラはステラだ。何も周りと変わらない」

「でも……」

「適当に云つてるわけじゃない。僕は昔から君を知つてるから、そう思うし、そう思えるんだ——きみはずっと、僕の知つているステラだよ」

宇宙に上がる前は、ステラの変化に戸惑つたこともあつた。そんな小さなことから、勝手に当たつて、喧嘩したこともあつた。

しかし、それすらも乗り越えて、キラは改めて、そう思う。——彼女はきつと、本質的には、何も変わつてなどいないのだ、と。

「どんな生まれ方をしたのか、どんな育てられ方をしたのか——それはきつと重要じゃない。そこから、どう生きているかが大切なんじゃないかな——」

そして今のステラは、間違いなく、前を向いて歩いている。

そう思うから、キラはそつと、受け止めたステラの両肩に手を置いてあげた。

「だから——ねっ?」

そつと笑いかけ、ステラは

「……! うんっ……!」

嬉しそうに、小さく頷いた。

——その激励で、心が落ち着いたのだろう。

一拍置いた後、肩に置かれたキラの手を、彼女は自身の髪に触れさせた。キラは突然の誘導に対し、小首を傾げる。

「?」

「あの……。そのっ」

ステラは珍しく、もじもじとしているようにも見えた。

それは滅多に見られることはない、彼女の年頃、それ相応の恥じたような挙動であった。

「ステラの、髪……」

「髪?」

「最近、すごく、悩んで……。そのっ、長い方が、みんな可愛いつて思うのかな、つて

——
そして、云っていることも、年頃の少女らしい内容だった。

それは非常に良い意味で——彼女の中から人間らしき——少女らしき——が再生されつつある証拠のように思えた。

しかしステラにとっては、重大な問題だったのだろう。

何がきっかけだったのか、本人も憶えていないが、彼女は最近、本格的に自分の髪型について迷うようになっていた。

ラクスやマユや、マリユと云った、彼女の周囲の女性は、多くが落ち着いたイメージのあるロングヘアをしている。その点ステラは、自分の金髪が肩上で切り揃えられていることに、つい違和感を憶えてしまったのだろう。

勿論、ロドニアの研究所に入所していた頃は、長髪など訓練に邪魔かつ鬱陶しいものでしかなかっただろうし、自分の容姿など、そもそも気にかける必要がなかった。それ以前の幼少期にしても、母レノアの真似をしてミディアムヘアにまとめていた傾向がある。

——でも、もう十四歳だし……。

すこし大人っぽくなってみたい、と思うのも仕方がないことだろう。

その点、ミリアリアは彼女より二歳年上でありながら、短めの髪型をしている。が、彼

女は自他共に認めるほど元気な性格で、むしろ今の髪型が最も似合っている印象がある。本人自身が気に入っているように。

一方、ステラは自分が間違っても元気な性格だとは思っていないし、あまり短い髪型は似合っていないのではないかと迷うようになっていたのである。

もつとも、彼女の中ではそれ以前に、ラクスに対する憧れが強かったのだろう。年頃の女の子らしく、一部は嫉妬でもあるのかも知れないが、ラクスの美しいロングヘアが童話の中に登場するお姫様を連想させ、純粹に素敵だと感じていたのだ。

それは思春期らしい、乙女の相談事であった。

それを男子であるキラに相談するあたりは、まだ抜けている部分があるのか、それとも、キラを個人的に信用しているのか——

「そのままでも充分いいと思うけど……急にどうしたの?」

「でもラクスとか、髪が長いから——キラは、そういう女の子の方が好きなのかな……つて」

——それとも、キラ自身に答えて貰わねば、意味がなかったのか。

「うん? ラクス?」

が、キラは答えるべきことには気づかず、しごく不思議そうな顔を浮かべた。

もつと反応すべき所があったのにも関わらず、なぜそこでラクスの名前が出て来るの

か、キラには意味が分からなかったのである。

「ステラは、ラクスマみたくになりたいの?」

そのときステラは、何かを諦め、先を続けた。

「お姫様みたいで、素敵だなあ……って」

「うーん。けど、ステラはラクスとは違うだろ? 君は君だ——きつき云ったことと、

きつと同じだよ」

「……?」

「誰かに憧れることは良いと思う。でも、だからって重ねるのは、きつといけないことだと僕は思うよ」

その言葉には、なぜか、含みがあった。

（——人と重ねて、僕はあの子を傷つけた……）

キラは、聞こえないように、そう云っていた。

ステラは、突然陰りの落ちたキラの顔を、覗き込むようにした。

「キラ?」

「……あ、うん? だから君は君で、君がやりたいようにすればいいと僕は思うんだ。今のままでも、きみは充分っていうか」

そう云って、キラは気を持ち直したように、にこりと笑う。

しかし、と思つてキラは顔を伏せた。

思い切つて好意を伝えようとしたのに、慌てて訂正してしまう当たり、やっぱり自分は度胸がないと思う。

——こんなことじゃ、トールに散々云われても仕方がないじゃないか……。

もつとも、ステラに「好き」と伝えたとところで、それを彼女がどういう意味で取るのかは、目に見えているような気もするが……。

一方で、ステラはしかし、キラに純粹に云われて、嬉しくなった。

結局、キラはラクスみたいな女の子が好きなのだろうか？ 答えを聞くことは出来なかつたけれど、キラはどこまでもキラらしくて、悪く云えば朴念仁だつたけれど、一方で彼は、価値観を押し付けるようなことはしなかつたのだ。

——『ありのままがいい』つて、そう云つてくれた……。

きつとキラは、ラクスにも、自分にも、誰にでも優しいのだろう。

——ありのままの女の子を受け入れる、そういう優しさを持つてるんだ……。

ステラは改めて幼馴染みの長所を見つげながら、その場から踵を返して行つた。

(まだしばらくは、この髪型までいいや——)

不思議とステラの中には、そう思える気持ちが残っていた。
悩みごとが、ひとつ晴れたような気がした。

『壊れゆく心、癒えゆく心』 B

ムルタ・アズラエルは、地球連合軍内において、非常に高い発言力を持った人物である。

彼はもともと、国防産業連合の理事を務め、デトロイトに本拠を置く大手軍需産業の経営者を兼任している。この上、ブルーコスモスの盟主を担っている人物でもあり、主義者達の頂点に君臨する人間でもあった。

このブルーコスモスの支援母体として「ロゴス」なる名称の組織が実在しているが――、この組織の実態について、ここでの言及は避ける。

そもそも、ブルーコスモスはあくまで「自然環境保護」を訴えた結社であり、大元の形は現在のような反コーデイナー運動を訴求する過激組織ではなかった。が、そういった主義結社が現在の体制のように変遷したのは、戦争の中で過剰に肥大化して行った異種^{コーデイナー}族への憎悪――その結末と云って良い。

あるいは、盟主ムルタ・アズラエルの、抜本的なコーデイナー嫌いが根底にある

のかも知れない。

これはアズラエルの幼少時代の話になるが、ひよんなことから同世代の少年と喧嘩を起こした彼は、同年代のコーデイネイターにどうしても敵わず、軽くあしらわれた経緯を持つ。殴つてやりたいと思つた相手に、拳を届けることもできず、あまつさえ反撃ばかり被つた彼は、顔を真つ赤に泣き腫らした後、屋敷に戻り、駄々を捏ねるようみずからの母親を糾弾していた。

『どうしてボクを、コーデイネイターにしてくれなかつたの!?!』

アズラエルは、幼少の頃から聡い男児だつた。成績が高く、周囲よりも優秀な優等生。勿論、それは遺伝でも過信でもなければ、努力ゆえの賜物だつた。ゆえに彼は——すこし増長がかつた性格があつたにせよ——自分の能力には自信と自負、そして自覚を持つていたし、そうであることに誇りさえ持つていた。

そんな彼でさえ、コーデイネイターの同級生には叶わなかつたのだ。悔しくて、腹立たしくて、まだ幼かつた当時の彼は、みずからの出自について母親を糾弾した。アズラエルの母は、そうして泣き叫ぶ彼の頬を引っ叩いた。

『けがらわしい!』

——と、ヒステリックを起こして。

遺伝子操作を忌み嫌い、コーデイネイターを蛇蝎だかつの如く嫌悪した家系に生まれたこと

も、彼自身が抱えたコンプレックスを増長させる要因となっていたのである。幼少期のその一件が、彼がコーディネイターを逆恨みするようになった最大の原因だった。

とはいえ、成人し、次第に経営者として頭角を現して行った彼は——「すべてのコーディネイターを殲滅すべき」——などという極端な発想に帰着したわけでもなかった。

無論、地球に害を為した「プラント」のコーディネイターに対しては、過剰な嫌悪感を顕す節はある。

が、一方で有能な人材を拒絶するほど蒙昧ではなく、彼は自身が経営する事業の中にコーディネイターの登用を認める柔軟性は持ち合わせていたのである。

『元はブルーコスモス内でも、穏健派の立場にあったのでは？』

「ロゴス」幹部、アズラエルと同僚のロード・ジブリール氏はこう陳述し、氏は全コーディネイターの徹底的な撲滅を望む自身の価値観との対比を取り上げ、アズラエルの姿勢を痛烈に批判していたほどだ。

もつとも、結果として戦争が起きた今、アズラエルはブルーコスモス盟主と「ロゴス」の代表を兼任するようになり、利益を度外視したコーディネイターの排除を実行するようになってきている。今回、彼が宇宙へみずから上がって来たのも、前線に立つて軍を指揮するためであり、その最終目標がザフト——ひいては「プラント」の壊滅であることに間違いはなかった。

(そう、問題なのは「プラント」——宇宙のコーディネイターなんだ……)

名が表す通り、結局「プラント」は「工場」「植民地」の意味から逸脱してはならない。そう断じるのが、アズラエルの感覚である。

大元を迎えれば、複数の国家が資本を出資して建造したもの——それが「プラント」であり、あくまでも「理事国による国营工場地帯」としての意味合いを超えたものではない。

にも関わらず、宇宙に派遣された作業員——コーディネイターは、これをいつしか自分達の祖国のように謳い出した。

理事国は「プラント」に自治権を認めてないにせよ、独自に力を増幅していく宇宙のコーディネイターに対し、いつか脅威を感じ取ったのだろう。調子に乗った作業員達の食料源を絶つため、農業拠点であった「ユニウスセブン」へ報復の核ミサイルを放てば、連中は黒衣の宣言と地球への徹底抗戦を明言し「プラント」を奪取、地球に対して独立戦争を仕掛けて来た。

——『「プラント」は我等コーディネイターの国である』……？ 馬鹿馬鹿しい。

いつ、誰が、そのようなことを認めたというのだろうか？ 宇宙のコーディネイターは『けがらわしい』存在なのだから、徹底的に思い知らせてやらなければ……。

感傷に浸っていたアズラエルの耳に、ナタルの声が響いた。

「間もなくL4です。——しかし、本当に意味があるのでしょうか……」
「アークエンジェル” 追撃の任などに”

いま “ドミニオン” は、脱走艦 “アークエンジェル” の追撃のために、二隻の随伴艦を連れてL4へ向かっていた。

かつての母艦を撃つこと——そこに、個人的な躊躇がないと云えば嘘になるだろう。

しかしナタルは、あくまでも口実を付け加えて続けた。

「何の根拠も無しに、L4へ向かうと云うのは……」

「ボクの情報は確かですヨ。——それが根拠だ。別になんの確証もないわけじゃない」

「しかし、それは “プラント” からもたらされた情報なのでしょう？ 迂闊に信じるベ

きものでは……」

ナタルの懸念は、それだけではない。

「それに、既に “レムレース” が我々の手にある以上、あなたが気にかけていた例の二機を追う必要もない。我々はもうNジャマーを無効化する術を手にしたのでありましよう？」

「そうですヨ？ けどね、そんな危険なモンが目的も定かじやないような組織の中で大事に飼育されていることの方が、ボクにはよっぽど大問題に見えるんデス」

第三次ビクトリア侵攻戦において、“レムレース” は “デストロイ” の陽電子リフレ

クターを容易に切り裂いて見せた。それは、「エクソリア」が「フリーダム」と「ジャステイス」に撃破されたときの光景とよく似ていた。

オーブにはそもそも、ザフトからの技術が多く入っているようだし、例の二機が「レムレース」の兄弟機である可能性は非常に高い。

「あのオーブが自国を滅ぼしてまで宇宙に逃がした『虎の子の軍勢』——野放しにしてちやあ、あとあと面倒になるんじゃないかって、ボクの勘が云ってるんです」

気に掛かる禍根は、そうそうに摘み取っておいた方が良い。それは彼なりの判断であつたが、云い方にはナタルに対する戦闘屋への見下しがあつた。

そのとき、オペレーターの声が上がる。

「コロニー『メンデル』港内に戦艦の艦影を確認しました。数、三隻です！　うち一隻を『アークエンジェル』と確認しました」

「——さ、それじゃあ、ちやっちやと始めちゃいましょう。敵を撃たなきや、戦争は終わりませんかからネ？」

ナタルはいちいち鼻につく上官への不満を押し殺し、命じた。

「総員、第一戦闘配備！　本艦はこれより、戦闘態勢に入る——」

戦いの火蓋が、開かれる。

“メンデル”への爆撃が確認され、“アークエンジェル”は第一戦闘配備を発令した。

「またもザフトからの行軍が迫って来たのかと思えば、港外に確認された艦影は、“アークエンジェル”と寸分違わぬ戦艦であった。木馬のようなデザインをした黒い宇宙艦——これを見て、ノイマンが思わず声を挙げた。

「“黒いアークエンジェル”——同型艦か？」

「敵艦からの通信です。——これは」

「ミリアリアの報告と同時に、モニターが切り替わり、敵艦の艦長が映り込んだ。

そこに映っていた、かつての副長の姿に、一同は言葉を失った。

「へこちらは地球連合軍宇宙戦艦“ドミニオン”——“アークエンジェル”聞こえるか？」

「その通信は、あまねく“エターナル”のモバイルスーツ・デッキまで広報されていた。

「既にコクピッドへと乗り込んでいたキラは、思わず声を挙げる。

「この声、ナタルさん……!?!」

「連合……っ!」

ステラは茫洋として、事実をひとり反芻した。——オーブへ攻め込んで来た奴等が、
またも宇宙まで追っかけて来たのだろうか？

ひとりで詮索していると、ナタルの声が通信機から滔々と紡がれた。

〈本艦は反乱艦である貴艦らに対し、即時の無条件降伏を要求する！ 速やかに武装を
解除し、投降せよ。この命令に従わない場合は、貴艦を撃破する——〉

それは冷徹にして事務的な、ナタルらしい口調であった。

バルトフェルドが通信越しに嘆息つき、それをステラは「クレイドル」から聞き届け
ていた。

〈連合にしちゃ、こちらの潜伏先を掴むのが早かったな……ザフトが来るかと思つたが、
よもや連合の艦隊とはね〉

人気者は辛いね、と軽薄に付け足す。

なおもステラの耳には、マリューとナタルの通信が響く。

〈——お久しぶりです、ラミアス艦長。このような形でお会いすることになって、残念で
す……〉

〈……そうね〉

〈アラスカでのことは、自分も聞いています。ですが、どうかこのまま降伏し、軍上層部
ともう一度、話を！ わたしも及ばずながら、弁護致します〉

ナタルも、きつとマリユー達に同情しているのだろう。それは憐憫という類のもではなく、純粹に心から共感を憶えているのだ。

ゆえに、便宜を図ると申告するナタルであったが、マリユーからの返答は硬い。

へありがとう、ナタル。でも、アラスカの事だけじゃないの。私達は地球軍そのものに対して、疑念があるのよ。——よって降伏、復隊はあり得ません」

〈ラミアス艦長——〉

交渉が決裂し、ステラは出撃の準備を整えた。

脇から、キラの声がかかる。

「——敵は例の四機だ。落ち着いて行こう、ステラ」

「うん……」

事態が急変したのは、そのときだった。

通信先から、かすかに笑い上げる男の声が響いたのだ。

へふふ、ははっ……！ どうするものかと聞いていけば、呆れますね、艦長サン？

それは、聞き慣れない男の声だった。

キラとステラはそれぞれにハッと顔を上げ、通信機から響いて来る、誇らしげな声に

耳を傾けた。

(——誰、だ……?)

立場上、今のナタルは“黒いアークエンジェル”改め“ドミニオン”の艦長なのだ。その艦長よりも上の立場に在って、苦言を呈すような真似を出来る人間……? そんなことが許される人間……?

キラは咄嗟に、男の正体を悟った気になった。

ウズミが云っていたように、今の連合はブルーコスモスの傀儡なのだ。——だとすれば、この声は? この男は……!

へ云って分かれれば、この世に戦争なんてなくなります。わからないから敵になるンでしよう? <

すらすらと言葉が出て来る辺り、男は本気でそう考えているのだろう。

さらに男は、女性達に対する嘲りを隠そうともせず、云い捨てる。

へそして敵は…… 撃 た ね ば ——ッ! <

強調しつつ、手を上げる。

それは、狼煙を上げる合図だった。

へ“カラミティ” “フオビドウン” “レイダー” “レムレース” 出撃です。不沈艦”

アークエンジェル” ——今日こそ沈めて差し上げる……! <

〈アズラエル理事ツ……！〉

それきり、敵方からの通信は切れた。ついで“ドミニオン”から、例の四機が飛び出して来た。

二隻の随伴艦——ドレイク級からは数多の“ストライクダガー”が出撃し、切つて開かれた会戦の合図に、応えるように“アークエンジェル”からも“ストライク”“イー
ジス”“ブリッツ”が出撃する。

キラもまた出撃準備を整えながら、反芻した。

「ムルタ・アズラエル……？ ブルーコスモスの盟主……ッ!？」

艦橋で会議をしたとき、話を持ち上がった主義結社——その実質上の盟主たる男が、あの“黒いアークエンジェル”に乗っているのだ。

——ブルーコスモス……！

思わずキラは、咄嗟にステラをモニター越しに見つめ、それをすぐに後悔した。彼はブルーコスモスという単語から、思わずステラの出生を連想してしまったのだ。ステラが地球軍によって操られていた傀儡くわいなら、これを操る傀儡師は、他ならぬブルーコスモスということになる。

「見つけた——」

通信越しの少女は、無意識に、無自覚に、そう溢していた。

次の瞬間、ギリツと齒を喰い縛り、その面持ちに、云い知れぬ怒気を滲ませた。
「ステラを、捕まえたやつらッ……」

すべての元凶を——彼女は今、漸くにして見つけたのだ。

血のバレンタインをきつかけに、ブルーコスモスが自己を誘拐したこと。その上で生体強化と精神操作を施し、記憶すら奪い取つて、戦うための駒として来たこと。そして、連中の首魁がいま、こうして目の前にやって来たこと。

どうやら当の本人も、とうに気付いていたようである。

「——ハッチ開けてッ！」

普段は無口で無邪気なことが多い彼女が、怒気を結晶化させたような口調と表情を浮かべ、艦橋に向けて怒鳴つた。余裕の色が吹き飛び、その瞬間、ステラは文字通り、人格が一変していた。

そんなステラの直情的すぎる変化に気付いたのは、これを向けられたアズラエルでも、そのとばつちりを喰らつたバルトフェルドでもなかった。

彼女を脇から見守っていた、キラである。

咄嗟に急かされ、バルトフェルドも驚いたのだろう。一瞬呆けた表情を浮かべたのち、すぐに指示通りにカタバルトを開放させた。

星の海が眼前に広がるのを捉えた途端、ステラは失調したように、

「『クレイドル』出すー」

そう云って、即座に飛び出して行ってしまった。

星屑の戦場に飛び出した『鋼鉄の守り手』は、ヴェールを剥いだように鉄塊色から鮮やかな白銀へ色づき、フレームに鮮やかなシアンブルーが輝く。一拍置いて両腕のドラグーンシールドが離脱され、本体を取り巻く使徒のようにぐるぐると自律飛行を開始した。

ブルーコスモス——その名は聞いたことがある。

特殊部隊『ファントムペイン』と同様に、『ロゴス』が支援母体となっている組織だ。その実質的な指導者が、あの『黒いアークエンジェル』に乗っているのだ。

——そいつ等のせいで、わたしはみんなを……ベルリンのみんなをッ！

そこに直接アズラエルの手が及んでいたかどうかは、定かではない。

だが、ブルーコスモスの存在そのものが、彼女の運命を狂わせたのは事実である。

真つ白な雪原を、一刻で真つ黒な焦土に豹変させる『デストロイ』——忌むべき破壊者を造り出し、これにみずからを搭乗させ、遣わせた。

——何百万もの無辜の人々を、ステラに殺させた……！

勿論、すべての責任が連中にあるなんて思っていない。

実際に引き金を引いていたのはステラ自身であり、多くは自分自身の責任だったのか

も知れない。

——ステラの心が、弱いせいだった……!

だが無辜を撃てと——そう命じたのは誰だ? 散々、ステラを利用して来たのは誰だ?

? 実際にとりガーを引き、罪もない人間を撃ってしまった事実は、彼女の中から薄れることも、消えゆくこともない——たとえ、歴史の上から消えようと。計り知れない悔いと痛みは、今また彼女の胸の奥に渦巻いて、小さな心を食い破ろうとしていた。

「う、ううツ——!」

自分が獣のような唸り声を挙げていることを、このとき、彼女は自覚していた。

——云って分かれれば、この世に戦争などなくなりません。分からないから敵になるンでしよう?

達観したような口調が、小さな獣の逆鱗に触れる。

——じゃあ「分からないから」と云って、自分達がしたことは何なのだ?

敵に対しては報復を。——そう謳い上げた結果に“ロゴス”は何をした?

言葉を聞かないから、相手が分からないから、手を取り合えないからと——彼等はその結果、ユーラシア西側を一方的に壊滅させ、戦争を吹っ掛けたのだ。それ以前には“ユニウスセブン”への核攻撃をして……!

云っていることがどれだけ正しく聞こえようと、ステラはもう、そんな言葉には二度

と騙されない。

遺伝子操作が間違っていると声高に叫び、にも関わらず、未来を望んだ子ども達を棄漬けにし、異物を埋め込み、戦い方のみ教え込み——死んだ後すら葬ってやることもせず、保存液に付けて並べることが正しいのか？ ロドニアの研究所でやっているように。そんなはずがない……！

——死を捌く商人に、どこに真実がある……!?

研究所という名の監獄に閉ざされた数多の仲間たち——

実験という名の地獄の中で、死んで逝った者達の残念や無念が、身体に乗り移ったような錯覚を憶える。

「オマエ達は、人に、やっちゃいけないことをして来たッ……!」

胸の奥から湧き上がる感情——それは彼女が、かつて「アルテミス」で覗かせた「それ」とよく似ていた。

感動ではない、衝動。

感情ではない、激情。

敢えて云うなら、凶暴な残虐性、とでも云うのだろうか？ 普段の彼女から想像もつかないほど、それはドス黒く、真つ黒な情緒だ。

——やっと思つつけた……！

——本気で『殺してやりたい』って、純粹にそう思えるやつッ！

このときのステラは、復讐の相手を見つけたのだろう——目隠しの自分を操り、同じ強化人間の隣人達を虐げ続けた悪者達の長——『ブルーコスモスの盟主』という肩書きを持つ生き仇を。

激情が噴火し、怒りに沸騰した溶岩が、激流となつて溢れ出す。

ステラは内に秘めた感情を爆発させ、野獸——そう、殆ど野獸のような咆哮とどろきを上げていた。それは通信越しに聞く誰もが、耳を疑うような肉声だった。理性ではなく、野性トビが矢面に立った声。キラは咄嗟に戦慄すら憶え、急いで“フリーダム”を起動させた。

(違う、違うよステラ——！ それは純粹な気持ちなんかじゃないッ……！)

今のステラからは、常軌を逸したものを感ずる。

少女の内面に巢食っていた“闇”が、一気に矢面に顕現したかのような——。

それはまるで、別人格がステラの意識を乗っ取つたような豹変で。いや、この際どちらが本当のステラなのか分からなくなつてしまひそうでもある。

鮮やかにチャンネルが切り替わり、怒気や狂気、そして殺気エクスステンデッドが、彼女を別人格に回帰

させていた。

キラは思わず、これを不気味だと感じてしまひ、すぐに後悔した。

——ばか野郎っ！

自己を叱咤し、慌ててかぶりを振りる。

『——ステラ、薄気味悪いよね……キラもやっぱり、そう思ってるよね……』

キラは数分前に、ステラの言葉を否定した。ならば自分には、彼女の言葉を『否定し続ける義務』がある。

本当のあの子を、僕たちは知っている……！

「だから僕たちは、きつと、その言葉を否定し続けて行かなきゃならないんだ！」

ステラを、薄気味悪い存在なんかにしちゃだめだ。

義務感に突き動かされたキラの耳に、ラクスから通信が入る。

〈キラっ——！〉

「わかってる、あの子を止めなきゃ！ キラ・ヤマト—— “フリーダム” 行きます！」
ラクスも同じことを感じていたのか、託すようにキラへ呼びかける。

そうして “フリーダム” もまた出撃し、突貫して行った “グレイドル” の後を追った。

激しく逆上し、ステラは編隊を離れ、単機で敵部隊の中心へ突っ込んで行った。

彼女の後方に、支援機の姿はない。単独で、彼女はひとえに “ドミニオン” を見据え、

その艦内にいるであろう標的に殺意を定めた。

「ああいうヤツがみんなをツ、みんなをおかしくするんだ……だからッ！」

へックレイドル”！ 前に出過ぎだ！ 後退して連携を——>

「うるさいッ！」

誰の声に警告されたのかも分からない。

いまのステラには、余計なことに気を遣う余裕などなかった。

——初めから強化人間なんてものが存在しなければ、アスランもフレイも、あんなに変わっちゃうことはなかったんだ！

そう思うからこそ、ステラは単身で”ドミニオン”まで突っ込んで行こうとした。

当然、突出した”クレイドル”に無数の”ストライクダガー”が襲い掛かる。編隊に向けて”クレイドル”は矢のように飛び込んで行き、敵部隊からのビームの驟雨を浴びることとなった。

「——邪魔だああッ！」

驟雨の中を駆け抜けながら、みずから応戦する。

二挺のリンクス・ビームライフルを応射しつつ、一拍遅れて、浮遊する二基の”エンドラム・アルマドラー”が本体に追従した。

白銀に反射するドラグーンシールドは、それ自体が意志を持った生物のように、滑ら

かに「ダガー」隊を撃滅してゆく。多くの「ストライクダガー」は、迂闊にも単独で迫つて来た「クレイドル」に注意を向けたままだ。よもや、背後から自機を狙うビーム砲塔が存在するなど、予想だにしない。四方からビーム砲を浴びせられ、常人は何が起こつたのかも把握できずに被弾し、撃破されてゆく。

発射と同時に目標物を捉えるビーム砲塔は、宇宙空間において、驚異的な武装だ。

見たこともない兵装に凝然とし、「ダガー」隊は一方的に虐げられてゆく。

宙を自在に飛び回る「エンドラム・アルマドローラ」は、一般兵達の視覚が追いつく機動力ではなかった。まして目が追いついたところで、これを狙い撃つことなど出来はない。あるいは狙撃したところで、表面部にビームシールドを展開する以上、傷ひとつ付けることも出来ないのが関の山だ。

撃墜したいなら、ビームシールドの及ばない背面部を正確に狙撃するか、接近してビームサーベルを直接叩き込むしかない。もつとも、目標物が高速で動き回る以上、どちらも化け物でもなければ無理な選択肢であろうが。

このとき「エンドラム・アルマドローラ」は、展開することに射撃精度を増していた。これはドラグーン・システムの使用者が、兵装の扱いに小慣れて行つた証拠でもあった。全方向からの間断のない砲火に、「ダガー」の編隊は乱されつつあった。攪乱され、翻弄され、あろうことか、たった一機のモビルスーツを仕留めることすら出来ない。

「ステラ——！」

そこへ、遅れて高機動スラスターを展開した「フリーダム」が追いついた。

キラは咄嗟に全砲門を開き、敵部隊への大出力砲撃を撃ち放つ。無数の火線は、正確無比に「ダガー」隊のメインカメラ、マニユピレータへ、敵部隊各個の戦闘力だけを穩便に奪つてゆく。居た堪れない思いを巡らせながら、キラは武装を失つて撤退しようとした一機の「ダガー」を見送つた。

為す術を喪い、大人しく後退してゆく機影——しかし「ソイツ」は、次の瞬間、自律運動を重ねる「エンドラム・アルマドロー」によつて撃墜された。先端からビームジャベリンを発心したビットによつて、コクピッドを貫かれたのである。内部の者は灼熱の刃に貫かれ、宇宙の藻屑と化する。

「逃げ惑う者を……!?!」

キラは、自然とそう云つていた。

露骨に云えば、酷薄が過ぎる追撃だった。愕然として、通信先に叫ぶ。

「ステラ！ 戦う意志がない者を、撃たなくていいんだ！」

「邪魔だと云つた！ 目障りなんだッ！」

人を人とも思わぬ云い方に、キラは寒気を憶える。

そう、今のステラにとっては、ただ障害物をどけている認識でしかないのだろう。進

路を塞いだ雑魚の群れを掃除しているだけ、と云つてもいい。

「落ち着いて……！……！ 今のきみは冷静じゃないんだ！」

「云つたでしょ、わたしはこういう人間なんだ……！ 戦うためだけに、あいつらに育てられて——！」

一人称がすり替わっていることに気付き、キラは啞然とする。

こうした少女の二面性に気付いてやれなかつたキラは、たしかに、すこし迂闊な発言をしたのだろう。その事実が一瞬、彼を心理的に怯ませた。

「でも、だからわたしは、アイツを討たなきゃいけないんだ！」

もう二度と、自分のような存在が生まれてこないように——。

そう信じ、みずからが魔道に堕ちようとした少女を、キラは引つ張り上げるように呼び掛ける。

「それは嘘だよ！ きみは——」

「地獄に墜ちる人間なんだから……！」

容赦なしに人殺しを繰り返す自分は、地獄に墜ちるに値する人間だと、ステラはそう自負していた。

何がコーデイネイターだ。何が強化人間だ。

偉そうな風に呼ばれたって、結局、出来ることは人を殺す程度のことなのだ。

「——違うッ！ 本当のきみは、そんな人間じゃない！」

「だから、薄気味悪いって云ったの！ わたしはそういう子！」

「戦争の中じゃ、誰だってそう思うさ……！ だからこんなこと、もう終わらせなきゃいけないんだろ……!!？」

「……!!？」

ステラが、すこし怯んだ。

——と、そのとき、二機の脇からひとすじのビーム砲が飛んで来た。

ふたりは突発的にそれを回避し、散開する。

途端、キラの目に、オーブ沖で対峙した四機の“G”が映り込む。おおかた“ドミニオン”から出撃して来たものだろう。

「——キラ！ こっちは任せろ！」

キラの耳に、トールの応えが飛び込んで来る。後方では、いまだ多くの“ダガー”隊が跋扈し、これを“ストライク”や“ブリッツ”が封じている。

——ぼく達の相手は、あの四機だ……！

キラは気を引き締め直し、“クレイドル”に向けて云う。

「今は冷静になって……！ 自分を見失っちゃ、だめだよ」

「……わかった……」

そうして二機は、迫り来る「レムレース」達と相対した。

高機動型「テンペスト・ストライカー」を装備した「レムレース」の中、フレイは目当ての「白銀」を見つけ、薄く笑った。

その機体を捉えた途端、哀れよね、と自虐的な笑みを浮かべる。

(あなたの苦しみが、今なら、すこし分かる気がするわ——)

集中したいと願っても、意識を保つことすらままならない今——フレイは、強化人間が持つ特有の欠陥に苦しんでいた。

出撃前に、いくつもの投薬を済ませて来た彼女であるが、どだい、度重なる薬物投与によって支えられた生体が、いつまでも尋常でいられるはずがないのである。

うら若き乙女の身体に施されたのは、強烈なGに耐え得るだけの生体強化。血管を収縮させ、遠心力で押し下げられる血流を引き締める強化筋肉は、脳に血を安定させるために機能している。覚醒剤による認識力の拡大と共に、神経の伝達系は著しく増強され、そうした恩恵の反動か？ 薬物の効能が切れた途端、彼女は糸の切れた傀儡のように、力無く地に臥せってしまうのだ。

——この哀れな道を、彼女もまた、同じように通ったの……？

自身の容姿に対する無関心であったり、戦闘に集中することもできない意識の散漫――

今のフレイは、奇妙なほど、かつてのステラと置かれた立場が似通い始めていた。……だからだろうか？ フレイは今、こうして目の前に映り込む「クレイドル」に対し、ある種の憧憬あこがれすら抱くようになっていた。

——なんて綺麗な、モビルスーツ。

神聖なまでの「白銀」クレイドル——神々しさを抱くほどの。

碧聖色へきせいに澄んだ双眼。いつさいの穢れを知らず、この世の悪と罪を浄化しに顕現したような女神を連想させる。純粹に濾過され、培養されたような、透過的な輝きを放つモビルスーツ。

——それに比べて、こっちは何……？

邪悪なまでの「暗黒」レムレウス——禍々しさを憶えるほどの。

紅魔色こうまに怒れる双眼。怒りも悲しみも憎しみも、むしろ、すべてが混じり合って黒いような悪神を連想させる。何色に穢れても目立たないが、それはその分だけ、穢れきつた兇悪であることを意味していた。

フレイはこのとき、知らないのだ——ステラもまた、かつては「黒いモビルスーツ」を乗り継いで来たことを。

知らないからこそ、その白色の輝きが眩しい……いや、恋しいのだ。

そして同時に、忌々しい——自分がどれだけ欲しても、それは決して、手に入れることが出来ないものだから。

一度でも、投薬を甘受してしまった彼女だから。もう二度と、後戻りはできない彼女だから——。

↑——おい、大丈夫かよ、オマエ↓

感傷に浸っていたフレイを、オルガの声が現実呼び戻した。

睡眠病のことを云っているのだろう——が、まさか彼は、自分を心配してくれているのだろうか？ フレイはそう思った瞬間、なぜだか妙に、気味が悪く感じた。掛けられた一言に気分を害し、フレイは慥然として返す。

「必要ないわ——そういうの。慣れ合いなんて、わたし達には不要でしょう？」

関心も、興味も、自分達には不要なものだ。

強化人間には、情欲も睡眠欲も必要ない——ただひとつ、戦闘欲だけを残していれば良いのだから。

↑……そうか。そうだなっ↓

オルガは啓発されたように、フハッ、と嗤った。

そう、自分達には『慣れ合い』なんて必要ない。

虫唾が走るような、表面上の付き合い——それがどれだけ不毛なことか、フレイはとうに知っていた。

——表面うわべだけ取り繕つくろつて、そうして、自分はコーデイネイターに抱かれたことだつてあるのだから……。

忌々しい過去が脳裏を過ぎり、振り払うようにフレイは意識を切り替えた。

そうして、みずからの反存在とも云える“白銀”のモビルスーツを見据える。

「あまり長くは持たないからね……。今度こそ沈めてあげるわ、“クレイドル”……っ
！」

そうしてフレイは、ひとえに“クレイドル”へ襲い掛かつて行った。

“ドミニオン”を旗艦とする連合軍艦隊より、モビルスーツ大隊が出撃。

これに対し、三隻（“アークエンジェル”“クサナギ”“エターナル”）同盟は、モビルスーツ一個小隊と云える戦力で善戦していた。

オーブより積載された“クサナギ”のM1部隊が出撃する他には、すべて、専用機が出撃している。太平洋上にて大破した“ストライク”の予備パーツを流用し、この模造機である“ストライク・ルージュ”も完成に漕ぎ着け、これにはオーブの姫、カガリ・ユ

ラ・アスハが搭乗した。

したがって、出撃した機動兵器は

〃ストライク〃

〃ヴィオライーゼス〃

〃ブリッツ〃

〃ストライクルージュ〃

〃フリーダム〃

〃クレイドル〃となり、以上の六機の活躍により、戦況は見事に拮抗した。

連合側の〃ストライクダガー〃大隊の多くは〃クレイドル〃や〃フリーダム〃に撃滅、あるいは撃退され、残された戦力を、ムウを筆頭としたツールやニコルによって削られている状況にあった。

暗黒の亡霊〃レムレース〃には〃クレイドル〃が当たり、これを〃カラミティ〃が援護する形になっている。

一方で〃レイダー〃と〃フォビドウン〃は獲物を見つけたように、蒼い翼のモビルスーツ——〃フリーダム〃の機影を認めた。

「アレ、壊しちゃって良いんだよね……？」

「そーゆーことでしょ？ バラバラにしてやるよおっ！」

シヤニとクロトが、それぞれに勢いよく「フリーダム」へ襲い掛かる。甲羅のような装甲を背負った「フォビドゥン」が、胸部より誘導プラスチック砲を撃ち掛けると、蒼い翼は、すんでのところまで飛びずさった。

キラはついで、ビームサーベルを抜き放ち、矢継ぎ早に吐き出されるビームをかわしながら「フォビドゥン」へ急接近する。すると「レイダー」が猛烈な速度で飛び来たり、頭部ビーム砲を放つて来た。キラは慌てて機体を旋回させ、進路を阻まれた「フリーダム」へ、すかさず「フォビドゥン」が誘導ビーム砲が放とうとする。

が、次の瞬間、脇から飛来した「ヴィオライージス」の掩護射撃に行動を阻まれた。シヤニは鬱陶しく思いながらも、迫つて来る赤紫色の可変機に照準を絞った。

そうして四機は、激しく撃ち合いを重ねて行つた。

(——上手くないな……)

一連の戦況を眺め、ナタルが不意に、そう溢すのにも無理もなかった。

ブースデットマン三名と、リビングデッドのフレイ——。

ナタルは旗艦の艦長として、部隊の指揮官として、最強の戦力と期待される彼等を総じて「強化人間部隊」と呼び習わすことにしていたが、ナタルはそんな彼等に対し、量産機部隊を率い、オーブ軍残党の各個撃破に出撃させたはずだった。はずだった、というのは、彼等が与えられた責務を蔑ろにしたり、放棄したという意味ではない。現在、彼

等が戦場にありながら、単独行動を行っていたということである。

今回がアズラエルないし、強化人間達との初めての共同作戦とは云え、ナタルは迂闊にも判断ミスをしていた。

強化人間は、戦士としては一流であったが、兵士としては無能にも近しかった。

彼等自身はそんな他人の評価など気にすることもないだろうが、彼等はあくまで、自己本位での戦闘を好む傾向があったのである。周囲の用兵を軽んじ、味方との連動を怠るほどには。

三隻同盟——つまり、ナタルによつて『敵』に相当するテロリスト船団の機動兵力は、おおむね六機のモビルスーツ部隊だ。

“クレイドル”と“フリーダム”を除けば、その他のモビルスーツ強化人間にとつて敵ではなく、むしろ圧倒できる相手でもあったはずだ。しかし、それはあくまで強化人間ほどの実力者の場合であつて、ストライクダガー凡兵にとつては充分な脅威に映るはずだった。

強化人間ほど勇猛でも獍猛でもない“ダガー”隊は、現に“クレイドル”に撃滅され、辛うじて生き残つた戦力も、もはや“イージス”や“ブリッツ”を前に風潰しにされ始めている。強化人間達が行うような、戦闘力と機動力に物を云わせる「力押し」という名の強硬策を、彼等は能力的に実現できなかったのである。

拳句の果てに編隊は瓦解し、秩序をなくした素人達は、精神的にも逃げ惑うことしか

出来なくなつていた。こうなる事態を本来は阻止すべきだった強化人間たちは、みずからに課せられた責務を全うできなかった。というより、全うしようともしていなかったのかも知れない。

「ケツ、役に立たねえ連中だなー」

眼前の敵よりも、次々に敗走して行く味方を罵りながら、オルガは「クレイドル」が抜き放つたラケルタ・ビームサーベルを回避して見せた。

彼はかくして、次々と「ストライクダガー」を撃砕した「クレイドル」と渡り合つて見せている。それはオルガが戦士として如何に優れているかの証明であつたが、戦場において何を最優先とするのか認識できていない、兵士としての致命的な弱点でもあつた。何が云いたいのかと云うと、彼等ブーステッドマンは、戦場において非常に無秩序であつたのだ。

そうして強化人間部隊に見捨てられた一般兵達は、数々の攻勢を弾き返して生存する能力を持ち合わせておらず、散々に打ちのめされた挙句に敗走してゆく。

が、それを不味いと判断できる人格が、辛うじて残つていたのはフレイであつた。

軍事教育も真つ当に受けて来ていない彼女ではあるが、量産機部隊が壊滅すれば、それまで視野の外にいた「ストライク」や「ブリッツ」が、援護のためこちらに向かつてくると安直に判断していたのである。ブーステッドマンの連中は、目の前の『強敵』と

の闘争を愉しもうとするあまり、この事実を蔑ろにしている。

(味方の潰走を防ぐしかない、けど、どうやって?)

そのとき、フレイの上方より、出所の知れないビーム砲が襲い掛かった。

コクピッド内にアラートが響き、音を知覚するとほぼ同時、反射的に機体を操り、脳天より降り注いだ光条をかわす。フレイは何が起きたのかも分からず、ビームが飛来した上方を見遣ったが、視線の先には何も映らなかつた。

胡乱げに思索していると、今度はまったく別の方角からビームが放たれ、回避すると同時に、フレイは自律飛行するビットのようなシールドを捉えた。

漆黒の宇宙空間においては、奇妙に目立つ白銀の兵装——“クレイドル”の特殊装備だろうか? ——が、命を吹き込まれたように飛び回っている。自機に対して四方から砲撃を浴びせかける“それ”は、おおよそ“クレイドル”本体とはまったくの別運動ができるようで、この武装による攪乱は、脅威的な実用性を誇っているように見えた。

「宇宙でしか使えない兵装ってわけね」

次の刹那には脳内が閃き、フレイはひとり、会心の笑みを浮かべていた。

ステラ・ルーシエもまた、生来より持ち合わせていたものか、強靱な肉体を駆使し高

速の戦闘を繰り広げていた。

余人には、目に余る戦闘——。

砲撃戦を取柄とする「カラミティ」からの掩護射撃を警戒しつつ、漆黒の空間において、何度も「レムレース」と衝突しては、交錯していた。そうしている間にも、ドラグーン・システムへの指令は怠らず、「カラミティ」を牽制する目的で、二基のビットを操縦していた。

が、一方で何度も激突を繰り返すうち、彼女は「レムレース」の動きに、目が慣れ始めていることを自覚していた。

いくら生体強化を施されようと、根本的な操縦の経験値までが底上げされるわけではないらしい。素人臭い「レムレース」の直線的な動きは、オーブで対峙した時から、大して進歩していないように見える。

——それどころか、時折、急に動きが鈍くなる……？

このとき彼女は、不思議とそう直感していた。

あくまでも一瞬——本当に一瞬の出来事だが、時折、突如として「レムレース」の拳動に鋭さが失われる瞬間があった。それはステラが「モンドゴメリ」——いや、正確にはフレイ・アルスターの父親を救えなかつた時の現象と、よく似ている気がした。

当時のステラは強化人間エクステンデッドの『後遺症』を患い、結果的に、先遣隊を壊滅させてしまつ

たのである。それと同じように、今のフレイにも、不自然な弱体化が垣間見える。おそらくフレイも今、強化人間が特有する欠陥症状に苦しめられているに違いないのだ。

居た堪れなくなり、ステラは確信したように叫ぶ。

「だから云った！ 戦えば戦うだけ、あなたは自分を苦しめるって！」

それみたことか、という口調ではないにせよ、言葉には、あからさまな憐憫が含まれていた。

二基の“エンドラム・アルマドロー”を召喚し、ステラはこれを“レムレース”へ使役した。二挺のドラグーンシールドが弾かれたように動き出し、自動砲台として律動するそれが、一心に“レムレース”を取り囲む。

——可哀相だけど……ッ！

片方のドラグーンがビームジャバリンを出力し、勢いよく“レムレース”へ飛び込んで行く。暗黒の機体は半身になってこれを回避したが、態勢を崩したそこへ、もう一基のドラグーンがビーム砲を撃ち放った。

“レムレース”は“トリケロス”を睨み、射撃を受け止めたが、ステラは一発目のビームジャバリンを反転させ、一気に手許まで手繰り寄せた。

白色にして灼熱の光刃が、まるで無防備な“レムレース”の背後から襲い掛かる。

——これで終わり！

口内に叫び、ステラは勝利を確信する。
だが、

次の瞬間——血色に似た燐光が、周辺に迸った。

“レムレース”の特異な形状をしたVアンテナ、前方に突き出した黄金の触角——そこから“真紅の波動”が吹き荒んだのである。

ステラの中で、まるで時間が止まったかのように——目に映る景色が硬直した。彼女が使役した“エンドラム・アルマドロー”が、二基とも行動を停止したのだ。

不審に思ったステラは慌てて、攻撃指令を再送信する。が、ドラグーンシールドは微動だにしない。

力無く漂流するドラグーン端末を証拠として、現実には裏付けられた怪奇現象に、ステラはひたすら困惑した。

「な、に……」

呆然としてみると、視界に映る“レムレース”の右腕が、ゆらり、と持ち上がる。黒き亡霊の紅眼が、嗤うように揺れた。

——と、右掌の五指全体が、ゆったりと押し広げられた。

まるで何かを操るように蠢き出すと、次の瞬間、静止していた“エンドラム・アルマドロー”が一斉にバーニアを噴かし、その砲口を“クレイドル”に

——ステラ自身に固定した。

「!?」

刹那のことだった。

それまで漂流物と化していた「エンドラム・アルマドローラ」が、明確な敵意と共に、白銀の「クレイドル」に向けてビーム砲を吐き出したのである。

弾かれたように動き出した二基の特殊兵装——ステラは複数の、それでいて、二方から容赦なく浴びせかけられる射線を、愕然として、そして悄然としながら回避した。

それは、子鳥より唾を吐き返された、親鳥に似た挙動だった。

(乗っ取られたッ!?)

慌ててステラは、ドラグーン・シールドの制御権を奪い返そうとキーボードを叩く。が、それから一刻も立たぬ内に、シールド端末ピッドの位置を想像できない自分に愕然とした。

己の空間認識能力を持ってなお、ドラグーン端末が、何処に在るのかが分からない。先に放出された「真紅の波動」が、ドラグーンへの通信を完全に遮断シャットアウトしていたのだ。

——さっきの「波動」に、システムを『汚染』ジャックされた……!?

我をなくした使徒達が、光の矢を放ち、敵は内にあり、と云わんばかりの逆撃を仕掛けて来る。

ステラは四方から迫る光条に対し、激しい動揺を湛えるように光波防御帯を展開した。姑息な防御手段だ。しかし全方位に出力された光の球体が、あらゆる角度からの砲火を遮断する。

「どうしたの……！ わたしが分からないの——ッ!？」

動揺を隠せず、ステラは喚いた。

だが、すかさず対抗用実槍を抜き放った「レムレース」が、光波防御帯を引き裂き、堅牢な「光の繭」を破り捨ててしまった。

繭の中から「親鳥」が姿を現し、「小鳥」の嘴が、ふたたび親鳥を啄んでゆく。

「今度こそ終わりよ、「クレイドル」——ッ!！」

光の帯が斬り裂かれ、ステラはふたたび自機の武装——「エンドラム・アルマドロー」による、無数の砲撃に曝されることになった。

フレイの口元に、下剋上を成し遂げた逆者の笑みが浮かんでいた。

「レムレース」が搭載する『パチルスウエポンシステム』は、量子コンピュータに対して、特殊なコンピュータ・ウイルスを送信する、極めて独創的な兵器である。

このウイルスの送信は、真空中のコロイド粒子を媒介に行われ、「レムレース」

の持つ前方に突き出したツインアンテナは、これらの粒子の発心装置としての役割を持つている。汚染物質とはいえ、性質的には「ミラージュコロイド」と同質の微粒子を放出するため、無重力空間でしか発動することはできないが、結果としてウイルスに感染した機体——正確には量子コンピュータ——の操作系統を、自在に強奪できるようになっていた。

『C. E. マドキ 71、どこの国にも、量子コンピュータが普及してますからねーっ』

モルゲンレーテの技術者が溢した言葉である。

云い換えれば、当世において『パチルスウエボンシステム』は、あらゆるコンピュータをハッキング可能な有用性を持っていたのである。

どだい「テストAMENT」との連携運用が想定されていた姉妹機——「クレイドル」への影響は少ないようだが、限度はあった。恐らくは「クレイドル」本体に、あらかじめ血清ワクチンが投与されていたのだろう。が、本体と分離する「エンドラム・アルマドラー」には効果が薄く、結果的にステラは、みずからの分離式兵装を

『乗っ取られる』

という、失態を犯してしまったのである。

制御権を強奪された二基のドラグーン・シールドは、それと対極的な輝きを放つ「レムレース」の兵装となって、今度は「イージス」の方へと飛び立って行った。

ステラは愕然として、通信越しに叫ぶ。

「いけない！ ムウ、よけてっ！」

しかし、既に遅かった。

敵機との激しい交戦状態にあった“イージス”であるが、よもや、味方の武装に狙撃されるとは予想しなかったのだろう。この場合、予想している方がどうかと思うが、察し物のムウも“クレイドル”の武装が相手では警戒心も抱けず、放たれたビーム砲に左腕を撃ち抜かれてしまった。それでもコクピットを免れたのは、彼自身が、咄嗟に反応して見せた賜物であった。

被弾した“イージス”より、短い悲鳴が聞こえ、ステラはぐつと歯を食い縛る。

〈なんだッ……!?!〉

〈うわっ!?!〉

次の瞬間には、カガリの悲鳴も聞こえた。どうやら“ルージュ”もまた、ムウと同じように僚機の攻撃に被弾したのだろう。

ステラはすぐさま後退し、彼等の護衛に向かおうとした。

が、進路には“カラミティ”が立ち塞がり、ありつただけの火力をぶつけて来る。

「あは？ アイツ、もう終わりじゃん？」

被弾した“イージス”を見据えながら、シヤニが、人が遠ざかるような冷笑を浮かべ

た。

左腕を肩口からもぎ取られた“イージス”は、既にシールドを失っている。防御手段が皆無に等しければ、もはや、シヤニの敵ではなかった。

——今まで散々、振り回してくれたな……！ 旧式のくせに……！

思惟した言葉を口にするほど、饒舌な彼ではなかったが、珍しく昂った気概と共に、シヤニは“イージス”へ襲い掛かった。

胸部“フレスベルグ”を乱射し、ある折を以て屈折する高エネルギー砲が、変形もままならない“イージス”を着実に追い詰めていく。隻腕の状態の“イージス”では、変形しても重心移動が困難になる弊害があった。いくら熟練のモビルアーマー乗りといえど、ムウはモビルスーツ形態での後退に専念していた。

が、周到に散らされた射線が、いつしか、ムウの退路を完全に閉鎖していた。

行き場を失った“イージス”が目にしたのは、胸部に光を臨界させる“フオビドウン”の姿だ。鎌を背負ったその姿は、まさに“死神”と諷するに相応しい風采をしていた。

(やられる——！)

そう危惧した瞬間、何か“イージス”の前に、矢のように飛び込んで来た。

“フオビドウン”と同じく、甲羅のようなバックパックを背負った——“ストライク

“だ。装備しているのは、粗悪品として扱われた“フオートレス・ストライカー”を、オーブが、改めて修復した代物である。

トールは、ムウをシールドで庇った後、ビームサーベルを引き抜いて“フォビドウン”へ突進を仕掛けた。

旧式とは思えない、圧倒的な加速——シヤニは見慣れない装備を背負った“ストライク”へ、真つ向からレールガンとビーム砲を立て続けに撃ち込む。その火力に“ストライク”のシールドは耐えきれずに破壊され、機体は、もろに砲撃を浴びて爆散したように見えた。

爆発の明光が“イージス”を照らし、ムウは悄然とした。

「馬鹿野郎ッ……!?!」

——おれの代わりに、身代わりになって……!?!

悲嘆したムウであるが、次の瞬間には、爆風の中から“ストライク”が飛び出していた。

多くの者の虚を突くように、そのまま“ストライク”は、“フォビドウン”へ猪突しゆく。——その腕に、籠手型の光波防御帯を敷設しながら。

「!」

そう、アンチビームシールド実体盾は爆散したが、“フオートレスストライカー”を装備した“ストライ

クは、元より前腕部に籠手型のビームシールドを内備していたのである。

トールは腕部に光波防御帯を展開し、敵の火力砲を防いで見せたのだ。これは余談になるが、今まで実体盾を掲げていたのは、バッテリーを節約するための必要措置に過ぎず、あるいは、決して器用ではないルーキートール・ゲーニヒの技量を鑑みてのことである。

「やああつー！」

爆発の中から躍り出た「ストライク」は、一気にビームサーベルを構え、「フオビドウン」のkokピッドを貫こうとした。

しかし、あまりに慣れない突貫行為だったためか、トールの中で、緊張が手許を逸はやらせた。「ストライク」が繰り出した剣戟は、敵機の大鎌を叩き斬るに終わり、トールはそのまま、敵機の後退を許してしまったのだ。

「あーあ、やっちゃったー……」

気が抜けたように喚きながら、シヤニは「フオビドウン」を後退させてゆく。

トールは荒れた息を整えながら、深呼吸した。そうして背後を振り返り、隻腕の「イージス」を見つめる。

「少佐、無事ですかつ」

「……無茶しやがる、このバカ！」

「でも、やれることはやれましたよー！」

仕留め損ねたけど。

と、落胆するトールであったが、確かに今の一撃は、ムウから見ても見事と云う他になかった。

「それより、*グレイドル*の武装——ありやあ、乗っ取られたのか……!?!」

これ以上、味方に甚大な被害が出る前に何とかしなければ。

そう判断したムウに対して、トールは指摘する。

「*イージス*は補給に戻ってください! その状態じゃ、思うように動けないでしょう!?!」

「しかしだなっ……!?!」

「——ここは僕達で抑えます! 少佐とカガリは撤退してください!」

キラの声が通信機から飛び込んで来て、ムウはハッと顔を上げた。

バツ! と凄まじい音が響くと、次の瞬間、キラは信じがたい挙動を見せた。

視界に映った*フリーダム*が二刀のビームサーベルを構え、高速で飛び回る*エンドラム・アルマドロー*のスラスター部分だけを、正確に切り込んだのである。推進装置を破壊された自律兵装は、もはや自力航行が不可能となり、宇宙を漂流するだけのデブリと化した。

まさに神業としか云いようのない御業だった。高速で飛び回るビットに追いつき、僚

機の損傷を極力まで減らすため、最低限スタスターだけを破損させるなど。

（「レムレース」、やる……!）

キラは敵機の機転に対し、慄然とした。

おおよそ敵機は、量産機部隊を壊滅させてしまうこちらの戦力を減らすため、ステラの兵装を強奪したのだ。その上で自律兵装を操り、現にこちらの戦力を二機も滅殺した。モビルスーツ大隊を撃滅した報復、と云わんばかりに。

——復讐の亡霊？　なんてヤツだ……!

後退した「フオビドゥン」の抜け目を通り、キラは慌てて「グレイドル」の掩護に向かった。

背後から「レイダー」が執拗に追いかけて来たが、そのままキラは、ステラとの合流を果たした。

「——ステラ！」

「キラ……!?!」

ステラの声は、強い動揺が混じっていた。無理もない。得体の知れない現象によって、みずからの武装を乗っ取られたのだ。未知なる恐怖が彼女の身体を支配していた。

そのとき、ステラはキラの名を呼んでいた。

それが、通信越しに「レムレース」まで届くとは、想像していなかったが。

↑——キラ………？↓

キラの耳に、聞き覚えのある声が飛び込んで来た。

通信越しに、ステラ？——いや、違う。声質は似ているが、それは間違いなく……
 “レムレース”からの通信だった。

「え……フレ、イ……？」

あり得ない。そんなはずがない。

キラは呆然と、胸が引き裂かれるような感覚に囚われた。

——フレイ……地球にいるはずの彼女が、どうして“あんなモノ”に……!?

薄明りの室内、互いに一糸纏わぬ姿で、掌と身体を重ねた。そしてキラは、そこで聞いた“声”すらも——とある人物と重ねていた。

——僕が……彼女を傷つけた……。

そのことに気付いたとき、果てしない後悔が彼の胸に立ち込め、ふたりは破局を迎えたのだ。それも、あくまでキラから押し付けるような、一方的な形で。

へうそ………っ、キラが乗ってたなんて……！↓

次の瞬間、“フリーダム”の通信機に、赤髪の少女の姿が映し出された。

ふわりと広がった長い髪を、照明が炎のように赤く透かしている。毛先はすこし粗末

に乱れ、目元には不健康な隈が浮かんでいるように見えた。が、それは間違いなく、かつて行為を共にしたフレイ・アルスターその人の姿だった。

——傷つけて……温もりに縋るばかりで……!

モニター越しのフレイの目から、涙がこぼれた。それは、喜びの涙だった。

——キラが、いま“フリーダム”に乗っている! キラが生きている……!?!
事実を反芻した途端、フレイの中に、歡喜の情が沸き上がって来た。

「キラ……?」

そこへ、ステラが訝しげに声を発した。

通信越しに映るキラが、激しく動揺しているように見えたのだ。

——あのふたりに、何があつたの……?」

ザフトに移っていたステラには、何も分からない。しかし今のキラは全身の血の気が引いたような表情をしていた。

それほどのショックが、キラの心を襲っていたのだ。

「——僕が傷つけた……! 僕が守ってあげなさいけない人なんだ!」

後悔がキラを押し流し、過去の痛みを抉り出す。

“ヘリオポリス”のキャンパスで、大輪の花のように可憐に咲き誇っていたフレイ。暖かくて、優しい世界に暮らしていたあの少女が、今、あんな邪悪なモビルスーツに

乗っている！ 肉体的にも、あらゆる不調が見える——あれだけ美貌にこだわっていた彼女が、今は、やつれ切った顔をしているのだから……！

——『守って』あげなきや、いけない人……？

そんなキラの声に、ステラは何か、胸が詰まるような想いを抱いた。

重苦しい感情がステラの胸を灼き、左胸の辺りを強く抉り付けた。

へキラ……本当に、キラなのね……？

フレイは、まるで元の彼女に戻ったように、儂げな表情で声で、キラへと呼びかける。ステラはそれを、ただ見ていることしか出来なかつた。

——あのフレイが、キラと再会して、元に戻り始めている……？

それは、ステラ自身にも体験があつた——狂気に駆られた自分を、シンが救い出してくれた時だ。

だとしたら、フレイにとってキラは、ステラから見たシンのような存在なのだろうか？ キラもまた、彼女には云い知れない思いを抱いているようだし……。

他人には、まるで踏み込めない『領域』がそこにあつて——ステラはただ、傍観していることしか出来ない。

へ……助けてっ……

フレイは、そう云っていた。

ステラとキラは、ハツとして顔を上げた。

〈強化人間にされて……苦しいの……辛い……！　もうこんなの、耐えられないの……！〉

「フレイ……！」

〈お願い、キラ……わたしを助けて……。守って……！〉

フレイの眸から、涙がこぼれている。

傷つけてごめんね。知らなくて。何も知らなくて、何も見ようとしなくて……あなたをたくさん傷つけて。

謝りたいの。だからわたしを助けて——と。

懇願にも似た響きを持ったフレイの声は、キラの胸の奥深くまで、するりと浸透して行った。

「フレイ……ッ！」

キラの胸に、悔恨が突き刺さる。

待つて、今、そっちに行くから——。

まるで贖罪のように、キラは我を失って「フリーダム」の指を伸ばす。鷹揚と「レムレス」へ接近して行く。

——以前にも、こんなことがあった。

——守るべきものを守れなかったこと……でも、今度こそ守って見せる。僕は、フレイも守らなきやいけない。

その強迫観念から来る気概が、このときのキラを、完全に洗脳していた。

「——待つて、キラッ！」

静止を呼びかけたステラの声も、キラの耳には届かない。

いや、正確には届いていたが、このときのキラには、ステラの声は、フレイのそれにしかな聞こえなかった。

そのまま「フリーダム」は「レムレース」へと近づいて行き——

「フレイ……！」

そうしてフレイは、会心の笑顔を浮かべた。

「——甘いよねえ、キラ！」

黒き亡霊の紅眼が、再度、嗤うように揺れた。

狂暴な掌返しと共に、右腕から抜き放たれたビームサーベルが、蒼翼の天使——「フリーダム」へと振り抜かれた。

『黒塗られた思い出の画』

「さて、どうしたものかな」

そんな声を発したのは、ラウ・ル・クルーゼだった。

現在、彼が指揮する“ヴェサリウス”は、オーブ残党と地球軍が戦闘を繰り広げている宙域から、コロニーを挟んで反対側の港付近を泳いでいた。随伴艦に“ボイジンガー”と“ヘルダーリン”をこさえ、特務隊からの報告を受けし4まで来航したのだ。

そしてそれは、ザフト宇宙軍から脱走した“エターナル”の抜け穴に、まんま“ヴェサリウス”が代入された編隊でもあった。

ラウはモニターに映し出された光学映像を見据えている。映像の中には、彼にとつても因縁浅からぬ“アークエンジェル”や、これと型を同じくする黒いアークエンジェルが映し出されていた。

「オーブ残党と地球軍の間で、既に戦端が開かれていようとはな」

「消耗戦をしているのでありましよう？　オーブ残党は分かりませんが、なぜ連合軍と“エターナル”が交戦状態に？」

アデスは、不審げに溢す。地球軍とクライン派は協定関係にあるはずなのか？ パトリック・ザラによる情報操作を信じているアデスには状況が掴めなかったが、傍らのラウは訳知り顔を浮かべており、涼しげな口調で続けた。

「なんであれ、こども状況が分からぬのでは、手の打ちようがない」

「我々の任務は、元より『エターナル』の追討です。これを地球軍が代わりにやっつけている——というなら、我々がわざわざ出向く必要はないでしょう」

自軍の損害を最小限に抑えるのが、指揮官の務めだ。戦闘が始まれば否が応にも損害は出るし、そういう意味では地球軍の黒い新造艦^{アンノウン}が代わりに『アークエンジェル』一派の掃討に当たっているこの状況は、アデスにとつては好都合だと云えた。

——勝ち残るのは地球軍か、それともオーブの残党か？

畢竟、結果などは重要ではないのだ。自分達は漁夫の利を得る形で、勝ち残り、疲弊した方を叩き潰せば良いだけなのだから。出撃前はこんなにも簡単な仕事になるとは考えてもいなかったアデスであったが、勝てば官軍とはよく云ったものであろう。

「……なかなか面白くない趣向だな、それは」

「は——？」

——戦争は、面白がるものではないような？

アデスは不意にそんなことを思惟するが、ラウはひとりごちた後、何喰わぬ顔で続け

ていた。

「いや、情報収集のためにも、モビルスーツを出撃させる。コロニー内部からの情報調査に当たろう。——わたしも『アレ』を出す」

「隊長が、みずからでありますか？」

アデスは、クルーゼが何を考えているのかが分からなかった。

いや、特別それは今に始まったことではなかったが、今回ばかりは彼の思案に軍略的に首を傾げてしまったのである。

「コロニー『メンデル』——。巧く立ち回れば、色々なことに片が付く」

云いながら、艦橋に背を向けて飛び立ってゆく。

何か婉曲的な云い方に疑問を憶えながらも、アデスは傍らの者達に云い付ける。

「……？ イザーク、ディアツカ、何が起こるか分からん。隊長に随伴してくれ」

「了解！」

そうして二人もまた、パイロットロッカーまで向かって行った。

「しかし、信じられるか？」

その言葉はディアツカから、イザークに対して唐突に放たれた。

このときイザークは、誰かどう見ても不機嫌と分かる表情を浮かべていた。声を掛けて来たディアツカの方を見ようともしない。というのは、あくまで隣人を無視しているわけではない。この場合は、ただ無然としていると形容した方が正しい。彼はちらりとディアツカを一瞥し、なにが、と云わんばかりの視線を返す。

「アスランが持ち帰って来た情報だよ。ほら、『エターナル』……いや、ラクス嬢の造反——それに」

イザークの小鼻が、びくりと震えた。

「『クレイドル』——ステラの脱走って話さ」

「——ふんッ」

「報告じゃあ、あいつはアスランのことまで退けたらしいじゃん？」

ディアツカが受け取った報告通り通り、ステラは『クレイドル』をザフトから持ち出し、アスランの駆る『ジャステイス』を撃退した。返り撃ちに逢い、右腕を破損しながらも生き延びた『ジャステイス』は、補給が整えたあと、すぐに反撃に出ようと考へたらしい。しかし、運用母艦エターナルをテロリストに接収されてしまった以上、即時の再出撃など不可能な相談だった。残されたナスカ級では『ジャステイス』の整備に必要な資材や設備、あらゆる物資を持ち合わせていなかったからだ。

だから今、彼らの隣にはアスランはいない。補給を行えない彼は、L4宙域から「ヤキン・ドゥーエ」への蜻蛉帰りを余儀なくさせられたのだ。この結果、代替として派兵されたのがディアツカ達が搭乗する「ヴェサリウス」だった。帰投したアスランから真実を打ち明けられたとき、ディアツカ達は云い知れぬ衝撃を受けた。だからこそ、ディアツカは上手く事態を呑み込めていない。

「はじめから、ステラは、こうやってザフトから離れるつもりだったつてのかよ……」
「知ったことかつ！　なんであれ、やつはオレ達を——「プラント」を裏切ったのだツ！　」

イザークは、語気を強めて怒鳴り散らした。

——そうだ、あの女はザフトを……オレ達の期待を裏切った……ツ！

思い込みにも近い、そんな言葉を咀嚼すればするほど、イザークの中で苛立ちばかりが膨張してゆく。

(オレの信用まで、振り切つて……！)

歯噛みしつつ、苦しげに漏らした言葉は、ディアツカには届かない。が、イザークの表情には激しい怒りが浮かんでいた。

信頼していた者に「裏切られた」と感じる痛みが、彼の中で憤りに転嫁されているのだ。

「次に会うときは、あの女は敵さ！」

「けど、敵うのかよ……!?」

「ディアツカにしては珍しく、真面目な懸念を口にする。

イザークは、無然として答えた。

「敵うかどうかは問題じゃない——オレ達がやらなきゃならんだ！」

この発言には、理由があつた。

「アスランのことだ……あの愚か者め！ 相手が相手と知って、情けをかけたに違いない……！」

イザークの中では、そもそも「アスランが敗北した」という事実、そのものが未だに信じられないのである。かねてよりアスランのことを蹴落とすべきライバルとして見ていたイザークであるが、現実にはアスランの敗北を知らされたとき、湧き出て来たのは歓喜の思いではなかつた。云い知れぬ痛恨と敗北感。今までの鬱憤を晴らし、それ見たことか！——などという恨み節など微塵にも出て来ない。むしろ受け入れがたい喪失感のようなものに、殴られるようにして全身を襲われたのだ。

アスランの前に現れた、新たな敵性勢力——それは「エターナル」と「クレイドル」だ。これは、アスランの婚約者と妹が主導している。

（あの連中に刃を向けることが、アスランに出来るはずがない……！）

このときイザークは、アスラン・ザラという好敵手ライバルに対して、奇妙な、それでいて不可思議な信頼の感情を抱いた。アスランに対し、過剰なまでに対抗心を燃やして来たイザークだが、アスランの人柄なら理解しているつもりだ——意見の衝突こそあれ、ヤツも結局は「プランド」を守りたい」という信念の下に戦っていたに違いない、という思いも。そういう意味で、自分達は同志であり、仲間であることに変わりはないのだ。

……………だからだろうか？ そんな仲間をコケにされ、イザークを突き動かすのは、今までとは明らかに異なる義憤だ。

今回、アスランが敗北した相手は、ラクス・クラインとステラ・ルーシエ——アスランにとって、刃を向けることが最も躊躇われる人間達。卑劣なクライン派は、そんな彼女達を矢面に立てることで、アスランを精神的に衰弱させたに違いない。

「——でなければ！ あのアスランが、負けると思うか……………!？」
「……………そりゃあ」

ディアツカはそこから先を云わなかったが、イザークはさらに先を続ける。

「アスランの前に、女どもを盾にして、後ろで笑っている連中をオレは許さない……………！
アイツをコケにした連中を、オレは絶対に許さない……………！」

徹底的に弱みに付け込み、最強の「ジャステイス」を撃退し、愉悦になつてゐる連中がいると考えるだけで、イザークは腸が煮えくり返すような思いに駆られた。

それは同僚を辱められたことに対する悔恨であり、同僚を侮られたことに対する激情であつた。

「アイツに撃てない相手なら、オレたちが撃つしかないのさ……ッ！」

「イザーク……」

「ザラ議長を裏切り、世界を混乱させるクライン派……！　これ以上、野放しにしてはおけんだろう……!?!」

そのために「ヴェサリウス」はL4にやつて来た。何が起ころうと、どんな人間が敵に回ろうと自分達は軍人であり、ザラ政権の下「プラント」のために戦わなければならぬ。

——そこにあの少女^{ステラ}が立ちはだかるのなら、オレ達はアスランに代わつて、彼女を撃たなければならぬ……！

自分達とは志を違えた者——『敵』への憎悪を掻き立てながら、イザークは云い放つ。

「行くぞディアッカ。おれ達で——おれ達が『敵を討つ』！」

「……ああッ！」

そうして二人は、パイロットアラートへ向かつて行つた。

“レムレース”より抜き放たれた無遠慮な斬撃は、その瞬間、容赦なく“フリーダム”を焼き切ろうとしていた。

振り抜かれた亡霊の黒腕——すっかり虚を突かれたキラ・ヤマトは動揺の隙を突かれ、対応のひとつも取れなかった。目の前で行われた掌返しに対し、ただ唾然とするこ
としかできなかったのである。

「もっ……」

動けたのは“クレイドル”彼女は機体に急加速を掛け、たった今行われようとしている殺戮の現場へと飛び込んだのだ。

茫然自失としていたキラを庇って、ステラは矢のように彼らの間に割り込んだ。咄嗟に“フリーダム”を突き飛ばし——後方へ投げ飛ばしたと云っても良い——結果として“クレイドル”は“レムレース”の斬撃を背に受けた。長身レールガンが翼状スラストアゴごとが削り取られ、一対の羽翼が激しく誘爆する。

〈!?!〉

不幸中の幸いというべきか、そうして二機の間には咲いた爆炎は、二機を隔てる“壁”

として機能した。これによって「クレイドル」は、更に追撃を行おうとした「レムレース」から免れることができた。

けれど、やはり爆発の衝撃を直に受けた「クレイドル」の中で、ステラは背後からの強い激震を受け、頭を前面の機器に強く打ち付けてしまった。

「あぐツ——」

〈——邪魔をして！〉

このときフレイの心は、不思議と渴く一方だった。

コーデイネイターと呼ばれる異能の天才達を、あろうことか自分の力で追い込んでいる現実。ましてその相手は、みずからの父の死に責を負うべき二名なのだ。そんな彼等を二人同時に相手取っている時点で、今の彼女はかつて望んだ下剋上を完璧なまでに成し遂げているはずだった。

しかし、それでもなお、彼女の中で欲望や衝動が潤うことはない。——癒えることは、あり得ない。

〈やっぱりあんたが先ね、白いの！〉

渴いて、渴いて仕方がない。餓えた心を満たすためにも、フレイは「クレイドル」を徹底的に撃砕しなければならなかった。

そのとき「レムレース」が、しゃにむにビームライフルを撃ち放つ。

ステラは血が滲み出した額から手を離し、慌ててスロツトルに手を掛け、後退した。しかし、ひと呼吸おいて「レムレース」はビームサーヴァーを抜き放ち、死神のように急迫して来た。黒き刃が「グレイドル」に突き立てられた瞬間——「レムレース」の掌を、脇から入った「フリーダム」が掴み止めた。キラだ。
 へなんで、フレイ……!? こんなのおかしいよ!〜

「フリーダム」に攻撃の意志はなかった。彼は「レムレース」の腕を掴み止めることで、彼女の攻撃を中断させようとしたのだ。

このときのキラは、混乱していた。自分の眼前で、よもやステラとフレイ——本来ならば戦う「力」すら持たなかったはずの少女達が、いがみ合い、罵り合いながら戦っていることが信じられなかったのだ。激しい動揺に駆られるまま、鼻先の「レムレース」に叫ぶ。

↑——『助けて』って、キミは今そう云ったじゃないか!?!
 どうして。

なぜ。

なんで?

——なんでフレイが「こんなモノ」に乗っている!?!

返答を求めるよりも先に、しかし「レムレース」が腕を振り払い、「フリーダム」を

突き飛ばした。キラは唾然として、唇を震わせる。

〈云ったでしょう、わたしはもう、地球軍の強化人間になったの——〉

通信先からは、フレイの低く、乾いた声が紡がれた

〈何故だか分かる？ キラ——〉

〈——えっ……？〉

〈あなたたち、コーデイネイターを殺すため！ もう私には、後戻りなんて利かないのよ！〉

それは、かつてステラが放った言葉と同じ。

少女達の発言は、奇妙なまでに合致していた。

〈わたしが助かるためには——あなたのようなコーデイネイターを滅ぼすことでしか、あり得ない〉

そのとき、フレイは、自分が間違ったことを云っていることに気付いた。

〈いいえ、助かるなんて絶対にありえない話だつて判つてる……！ わたしがすこしでも楽になるためには、そうやって戦い続ける他にないのよ……！〉

〈フレイ……!?!〉

〈パイロットなんだもの。実績がなければ、わたしは薬さえ与えて貰えなくなるわ……

！ そうなれば、わたしははずれ、もっとずっと人間として壊れていく〉

モニターに映るフレイは、無骨で、悪趣味なデザインのパイロット・スーツに身を包んでいる。それは人為的に肉体を強化された『強化人間』にのみ与えられる防護服だ——尋常ならざる生体が、尋常ならざるモビルスーツの操縦を行うために開発されたもの。

——まるで、鎧だ……！

可憐であつたはずの少女を、モビルスーツという名の牢獄に縛り付けるための“枷”——自力では取り外すことの出来ない拘束具の中に、いま、フレイが囚われている！

双眸は切れ長に変貌し、氷柱つららのように鋭利で、それでいて冷たい敵意を滲ませている目元には、少女の内に巢食う闇を顕したような黒隈くまが浮かんでいる。

(あれが、本当にフレイなのか……!?)

似ても似つかない——いや、変わり果ててしまったフレイの姿に、キラは唾然とするしかない。

〈わたしの命は、コーディネイターを殺した数だけ安定しているのよ——〉
 〈——そんなのは、安定って云わない……!〉

〈だからわたしは、生き残るためなら何だつてする！ さつきみたいに、あなたのヒロインを気取つて、油断させることだつて、平気だね……!〉
 にべもない、毒のような言葉を吹っ掛けられ、困惑に駆られるキラ。

しかし、フレイは次いで、何かに気付いたように自嘲気味に嗤った。

「……ああ、違った。キラにとつての『お姫様』は、わたしじゃなくて——そっちだったかしら……?」

「——フレイ!!」

糾弾されるが、フレイは悪びれた様子もない。

かつてのキラは、フレイの「声」にステラを重ねて、夜床で情事を交わした。柔らかな肌と温もりに縋ることで、孤独感から解放されようとした——それは精神的に追い詰められていたキラの極限状態が犯してしまった過失であったのだが、結局のところ、フレイとステラの「声」は似ているらしい。皮肉を込めて喘ぎ声でも出してあげれば、あの少年は心のどこかで歓ぶのではないか? とも思ったが、そんなことをやっても自分が惨めになるだけなので、思いついてもフレイは行動には移さなかった。

「フレイ、おかしいよ、こんなの! おかしいよ……!」

こんなにも毒気に犯されている少女を、キラは知らなかった。彼の知っているフレイ・アルスターは、キャンパスの中で、大輪の花のように咲いていた華やかな少女だ。

フレイは背部から「ネフェルテム303」を放ち、これを認めた「フリーダム」も反撃のように「バラエーナ」を撃ち掛けた。二方から同色の——赤色の裂光が真空中で激突する。が、破壊力では「レムレース」が「フリーダム」を上回っていた。

キラは射線上から退避し、砲撃を回避することに専念した。

↑——それでも、僕は……！——↓

——傷つけたことを、ずっと後悔していた。

いつか謝らなければいけないと、ちゃんと詫びねばならないと思っていた。

ようやく出会えたと思つたら、まさか、こんな形で……！

〈きみを、助けたかつたんだ——〉

〈だつたら、わたしのために殺されてくれる、キラ!?〉

——そうすれば、わたしの気は少しでも軽くなるのでしょうか？

紡がれた言葉に、キラはどうしようもない絶望感を味わつた。

〈そんなにわたしが大切なら、あんな女、初めからいなければ良かったじゃないツ……！〉

フレイは「クレイドル」を見据え、その中にいるであろう少女のことを睥睨した。

——あの女さえ、いなければ……？

キラはそんな言葉を突きつけられ、動揺する。

——ステラがいなければ、どうだというのだ？

自分達は、もつと別の形で、分かり合えていたのだろうか。

〈本当に目障りだったのよ、コーディネイターのくせに〉

コーディネイターの顔立ちが端正なのは、当然ではないか。
コーディネイターの女の子が可憐なのは、当然ではないか。

コーディネイターが優秀なのは、当然ではないか。

なのに、世の中は努力に励む自分達ナチュラルに見向きもせず、ただ、当然のように高い能力を持つて生まれたコーディネイター達を優先し、格差を生み続ける。

——キラだつて結局は、ステラの方を選んだじゃない……！

フレイがどれだけ美貌の維持に努力しようと、どれだけ勉強に励もうと、遺伝子操作という一言の下で、それらはすべてコーディネイター達によつて霞んでしまう。

——だから、コーディネイターは化け物なのだ……！

普通の人間が、まるで歯が立たない存在なのだから。

へだから、わたし自身の力で！ あなた達を超えてかなきゃいけない……！

せめて、モビルスーツ戦だけでも——

へでないよ、自分が惨めで、惨めで……仕方がないのよ——ツ！

ビームライフルを撃し、“クレイドル”へと撃ち掛ける。キラはハツとして、慌ててその射線上に踊り出た。

が、するりと脱して行つた“レムレース”は、サーベルを抜き放つて“クレイドル”へと猪突した。

「あんな娘ひとりのために、みんなが……わたしもッ！」

「ステラは、あなたを傷つけたくなんてない……！　あなたから大切なものを奪う気なんてなかった——」

「まやかさないでッ！」

どんな弁明をしたところで、陽の目を浴びる者がいる裏で、日陰に堕ちゆく者が生まれたことに変わりはないのだ。

いまさら、生温い声で同情されて、何になる？

「同情？　違うわ、あなたの『それ』は憐れみでしょ？　あなた達はいつもいつも、そうやって高い所から、わたし達を見下して——！」

「あなたは勢いだけで突っ走って、周りを見ようとしなかった——」

結果ばかりを急いでしまうから、意識が追いつかず、自分で自分からなくなる。最終的に、自分は何がしたかったのかすら、よく思い出せなくなる。

「あなたには、他にもあつたはずなのにっ」

「馬鹿にして……!?!　強化人間が云うこと……強化人間が——」

吐き捨てながら、フレイは「ネフェルテム」を照準しようとした。が、結果的に彼女は、目の前の「クレイドル」を撃破することは出来なかったのだろう。

次の瞬間——彼女の脳裏に、ぶちり、と何かが千切れるような切断音が響いた。

↑ ツ!?

ついで、フレイの脳に、耐え難い激痛が襲いかかった。

ビリビリッ！ と電撃のような衝撃が、少女の全身を迸る。筋肉が痙攣を引き起こし、フレイは悲鳴という名の大絶叫を上げた。

断末魔は悲鳴は、決して長くは続かなかつた。フレイがぐくりと頭を落とした直後、途端に「レムレース」は、糸の切れた傀儡のようにへたり込んだ。

それは、演技などではなかつた——ステラには、それがよく分かるような気がした。

〈フレイ……ッ!〉

通信を傍受していた「カラミテイ」の中、オルガが血相を変える。

「あんの馬鹿女ツ、興奮しすぎだツ！」

実戦による高い運動性とストレス——何より、実戦において得られる快感や興奮は、薬の効能時間を短縮させる弊害を持っている。

モニターに映るフレイは、がっくりとうなだれ、全身をびくびくと痙攣させている。

目の焦点も合っていないし、どう見ても『時間切れ』だ。

(てことは、オレ達もそろそろかよ……ッ！)

即座に判断し、オルガは通信越しに叫ぶ。

「クロトおツ！」

↑——『時間切れ』って？ ああもうッ、仕方ないよねえ！

「レムレース」を回収する！ シヤニにもそう云つとけ！」

オルガが通信に気を取られている——次の瞬間だった。彼の視界に、バツと行動を開始した「クレイドル」が映り込む。破損した翼を広げ、白い機体は一気に「レムレース」の腕を掴み、その機体を鹵獲しようとした。

キラは意外に思つて声をあげた。

へステラ……!?!

「黒いモバイルスーツ」に乗ってるから、強化人間はおかしくなっちゃうんだよ……

！ だから降ろすの、このひと！」

勿論、強化人間をモバイルスーツから引き剥がしたところで、それは根本的な解決にはならない。

かつてステラ自身がそうであったように、強化人間の肉体を蝕んだ薬物は、定期的な措置や投与をなくして、尋常な生体を維持できなくさせているのだ。フレイのこの場で拿捕した所で、イコール、彼女を救えたことには万が一にもなり得ない。

——でも、だからって見捨てておけない……！

結局、ステラが今やろうとしていることは、シンと同じような結末を招いてしまうだけかも知れない。

強化人間を救おうとして、救えなくて——結局は連合に身柄を返上することでしか、彼女を助ける方法はないのかも知れない。

——それでも、取引を持ち出すことくらいはできる……。

戦争のない、暖かな世界へ彼女を返してあげて——と。

「——ステラッ！」

キラは声を荒げた次の瞬間、*“クレイドル”*に三方からのビーム砲が飛来した。

鹵獲された*“レムレース”*を取り返しに来た——*“カラミティ”**“レイダー”**“フォビドゥン”*である。

「おねがい、邪魔しないで！　あなた達も強化人間ならッ——！」

だが、連合軍機とは通信回線が繋がらない以上、言葉が届くはずもなく——*“クレイドル”*は三機によって取り囲まれた。

痺れを切らした*“フリーダム”*が*“クレイドル”*を空域から搔つ攫い、*“レムレース”*は置き去りになる。

「——キラッ！」

「キミがやられたら、元も子もないよ……ッ」

「そう、だけどッ……！」

忸怩たる思いで振り返れば、自失している*“レムレース”*は*“カラミティ”*に腕を掴

まれ、そのまま“ドミニオン”へ撤退していく。

モビルスーツ部隊の潰走と、強化人間部隊の撤退により、やむを得ず“ドミニオン”は信号弾を打ち上げ、戦域から離脱——いや後退して行く。

〈……………〉

キラは、顔を上げることが出来なかった。

負い目や後悔から、モニターを見遣ることができなかった。

「おい、フラガとアマルファイからの連絡は？」

バルトフェルドが発した一声に、帰投中の一同は目を瞬かせた。

彼が何を云っているのか把握できていないのは、前線に出ていたマリュー達も同じよう、説明を求めた。キラは辺りを見回した——が、そう云われてみれば、撤退したはずの“イージス”や、もう一機の“ブリッツ”の機影が見当たらない。

なんでも、先ほどの戦闘中、ムウはシャフトを向けてコロニー内部へと転進していったらしい。

『『ザフトがいる』——そう云っていたんですか？ ムウは？』

「ああ、厄介なタイミングだ。護衛に、アマルフイも後に続いて行ったが……」
キラは心配そうに声をもらした。

「ムウさん、＼イージス＼は隻腕の状態なのに……」

「いや、ケーニヒの＼ストライク＼を借りて行った。機体は万全だが……ただの偵察なら、戻ってくる頃だと思うのだがね」

不安な沈黙が、一同に落ちる。

これを破ったのは、キラだった。

「僕が行きます。みんなは今のうちに、補給と整備を——＼ドミニオン＼もまだ、完全に引き上げたわけじゃないと思います」

そこにザフト軍が現れたというのなら、事態は再び、切迫する。両翼から挟まれた形になれば、自分達は退路を失う。それだけは避けなくてはならない。

キラはじつとこちらを見つめているステラを見つけ、声をかけた。

「ステラはここに残って。……もし＼ドミニオン＼が来たら、お願い——」
「うん……」

自分で、自分が無茶なお願いをしているとキラは自覚していた。強化人間の三名と、フレイが乗っていた四機の＼G＼部隊を前に、ステラがひとりで対抗するのは至難だろう。

だからこそ、願わくば、完全に“ドミニオン”が撤退していることを願うのだが……。
「……フレイってひとは」

ステラが、云った。

キラはそれを今、聞かれたくなかった。

「キラの、たいせつなひと？」

「……………」

一間の沈黙の後、静かに返した。

「うん……僕が傷つけた。僕が守ってあげなきゃ、いけない人だった——」

「——そう。わかった」

そうして、ふたりは別れた。

飛び立ち、コロニー“メンデル”内へ飛び去っていく“フリーダム”を、ステラは静かに見届けていた。

ムウとニコルがシャフトを抜けたとき、眼下には人工の大地が広がった。

かつてバイオハザードを引き起こし、以降は廃棄コロニーとして扱われた“メンデル”であるが、今や住民はおらず、徹底的な殺菌——X洗浄が行われただけに、微生物さ

え住まない赤茶けた大地がひろがっている。

地上には『学術都市』として繁栄していた建造物が、放置された当時のままに残されており、かつての繁栄の名残として明確に残っていた。

が、ムウには都市の名残を惜しんでいる暇はなかった。

彼が予見した通り、コロニー内部を横切る三つの光点を観測したからだ。

「——来たか、ラウ・ル・クルーゼ……！」

「——！……あの二機は……ッ！」

ニコルの声に、強い動揺が混じった。

「ブリッツ」のレーダーに観測された敵機は、合計で三機だ。一機はまるで照合データが見当たらない「正体不明機」——おそらく「新^{アソノウシ}型」だろうが、他の二機は違う。

——敵機というより「ブリッツ」は完全に、「それら」を僚機として判断している……？

そう、現れたのはGAT-X102「デュエル」と、GAT-X103「バスター」であつたのである。

それまで、ニコルが同僚として戦っていた者達の搭乗機だ。

「イザーク、ディアッカ……ッ！」

ニコルにとって、ザフトを離反したときから避けては通れなかった戦闘が、いま始ま

ろうとしていた。

「新型か？ ラウ・ル・クルーゼ！」

一方で、ムウが操る「エールストライク」は、見慣れない「正体不明機」と対峙していた。それでも搭乗者がラウドと判ったのは、ムウ自身の直感である。

——妙に、ずんぐりした機体だ……！

ザフトの量産機という割には、他のどの機種とも異なる外見を持つていて、共通点をまるで感じさせない。

全体がツートンカラーに彩られ、基調としているのはラウ・ル・クルーゼのパーソナルカラーたるホワイトである。が、サブカラーには青（ブルーカラー）が用いられ、頭部には四ツ目、それでいて、紅く輝くセンサーが覗く。

——ヤツの専用機、というわけでもあるまいし……！

頭部には、まるで「仮面」のような装着があった。トールハンマーを引つ提げた「振り子」のような羽が、ことに特徴的な不気味な機体だった。

「ほう？ 今度は貴様が「ソレ」のパイロットか——ムウ・ラ・フラガー！」

ラウドが搭乗しているのは、ザフトが正式採用した新型——NMS—X07PO「ゲルフィニート」というモビルスーツだ。

より正確に云えば、その模造機（デッドコピー）——ZGMF—500「ベルゴラ」と呼称される。

元々の「ゲルフィニート」は、地球に拠点を構えるアクタイオン・インダストリー社が、ザフトに提供した新造モビルスーツだ。ザフトの次期主力量産機を決定するコンペイジョン軍部競走会において、ZGMF-600「ゲイツ」との正式採用を争い、汎用性の低さから不採用となった経緯を持つ。

が、そういった汎用性の低さを補うために、当機が備えていた特殊性に目を付けたパトリック・ザラの意向により、僅かながらにザフトの技術部で量産されることになる。

今回はその試作機——「ベルゴラ」が、ラウ個人に与えられたのだ。

(仮面野郎に、仮面をつけた機体つてのは、薄気味が悪いもんだな……！)

「ここで貴様に討たれるのなら、それもまたとも思えるがね——ムウ！」
そうして、「メンデル」内での戦闘が始まった。

『ベルゴラ』

ZGF M—500 “ベルゴラ”——異教に伝わる悪神を連想させるモビルスーツ。

見たところ、その機体はビームライフルを一挺、掌の先には“デイフェンド”に似たビームクロウの発心装置を備えている。ひと通りのビーム兵器を装備しているようだが、それはザフトの機種において初めての試みのように思える——少なくとも、ムウにとっては。

（ここで貴様と、こうして戦えるとはなあっ！）

そんな“ベルゴラ”を操るのは、ムウにとつて宿敵ラウ・ル・クルーゼだ。

放たれるビームライフルの火線を避けながら、ムウは敵機に向かって反撃の“イーゲルシユテルン”を応射する。

（あの新型、どういうんだ!?!）

ひと通り交戦した中で、ムウは敵の“ベルゴラ”という機体が——最新鋭機であるに——は——あまり高性能な機体ではないように感じられていた。正確なことは判らないし、特性についても未解明だが、総合スペックで云えば“M—1アストレイ”程度しか

持っていないようにも見受けられたのだ。しかし、

——あの異様な風袋は、絶対に飾りじやない……！

予感ではない確信が、ムウの頭をもたげる。

とりわけ気になるのは、その異質な「ベルゴラ」の頭部だろうか？ 地球軍機のゴグルアイでもなければ、ザフト機のモノアイでもない。ましてや「G」の象徴でもある角付きのツインアイでもない——仮面を付けたような頭部は、四つ目と紅球のセンサーアイが覗いている。

——見覚えのない機種つてのは、なかなかどうして。

不審であり、これが「ジン」や「デイン」に似た機体であれば、ムウもここまで慎重にはならなかっただろう。得体が知れないという意味において、目の前の「ベルゴラ」は明らかに異様にして不気味であり、かつてムウが対峙してきた何れの機種よりも面妖であつたという。

（戦闘能力は大したことない……！ だがその代わりに、何かおかしな特殊兵装でも積んであるんじゃないか……!?）

ムウはこのとき、敵機の正体をひどく警戒していた。

また、それを操るパイロットのことも——

へわたしも嬉しいよ、ムウ……！

「くツ、ラウ・ル・クルーゼー！」

そうして二機は中空で交錯し、しばし白兵戦を繰り広げた。

迫り来る光点をレーダーが捉えたとき、モニターには馴染み深い「ブリッツ」の熱紋が確認された。大西洋上の孤島で『MIA』となった、行方知れずの同僚の搭乗機だ。イザークの脳裏に、まだ自分達よりも年下の、どこか少女めいた顔立ちの少年の姿が浮かぶ。

「よくも、ニコルの機体でえ……！」

「ナチュラルめ！ アイツをどうしたってんだよ!？」

怒りに駆られた「バスター」が94ミリ収束火線ライフルを撃ち放つ。

対して、当のニコルが操る「ブリッツ」は即座にこれを回避したが、そうして牽制された先へ「デュエル」が回り込み、ビームサーベルを抜き放つて肉薄する。くつと息を詰まらせながら、ニコルは否応なく「トリケロス」を構え、振り抜かれた光刃をシールドで受け止める。ニコルは勢いに任せ「デュエル」を突き飛ばし、ふたたび二機からの距離を取った。

——さすが、見事な連携だ！

ニコルは不意に感心してしまうが、おそらくイザークもディアツカも、その息の合った連携を無意識の内にやっているのだから、余計に大したものである。ニコルは内心で舌を巻きながら、それでも、今は後退することしかできない。

——戦闘能力を抑えた代わりに、特殊兵装を搭載しているMSというのは、そう珍しい話ではない。

もともとニコルの愛機であるGAT-X207とて、その名が冠する通り「電撃的な侵攻」に特化した機種として設計され、その例によって、純粋な戦闘力が他のシリーズ機と比して見劣りがちである。

砲戦における「バスター」、白兵戦における「デュエル」——各戦闘分野の王者達と同シリーズに君臨する中、彼の「ブリッツ」はどちらかと云えば戦闘ではなく工作の方面に特化している。それは東洋において忍者とでも呼べそうな電撃的な隠密特性であって、「ブリッツ」そのものの武装の少なさも相まって、彼の機体は戦闘力で他のシリーズ機に優位性を譲っているのである。

そんなニコルが現在対峙している敵は、他ならぬ「デュエル」と「バスター」という各戦闘の王者達。それを操るパイロット二名については最早言及する必要もないだろうが、二対一の状況であれば、なおのことニコルは闇雲な戦いを続けるわけにはいかな

かった。正々堂々——あるいは「正面衝突」という騎士道的戦術は、今の彼と「ブリッツ」が最も行つてはならない行動のひとつだったから。

（フラガ少佐はあの「新型」で手一杯。なら、今の「ブリッツ」にできることは、陽動くらいか……!?!）

だからこそニコルは、発想を逆転させた。もとより絡め手を得手とする「ブリッツ」の特性を活かすなら、今やらなければならぬことは正面衝突ではなく、できる限りの足止め。尋常な戦闘ではなく、及び腰に徹しての陽動だ。みずからが囷になることで、イザーク達をできるだけ「ストライク」から引き剥がす——戦う目的をひとつに絞らなければ、曖昧な立ち回りを許してくれるイザーク達ではないだろう。

（時間稼ぎに、徹するんだ……!）

そうしてニコルは二機の注意を引くようにして、絶妙に相手の行動を阻害するポイントにレーザライフルを撃ち掛ける。照準先の二機は、左右にぱつと散開し、次の瞬間には、竿にかかった魚のように「ブリッツ」への追撃を敢行する。

——来た!

この瞬間から、ニコルは牽制射撃に徹した。逃げ腰というのは一見すると情けない姿のように映るが、この場にあつては正しい戦法であり、立派な戦術でもあつた。しかし、そんな「ブリッツ」が撃つては逃げ、逃げては撃ち——その臆病ともとれる戦い方に付

き合わされ、イザークは不快感を募らせつつある。

「イザーク、ディアツカ……!」

自分よりも年上の同期達の名を呟きながら、ニコルは歯噛みする。

そうして囹役に徹したニコルであったが、状況はそう上手くは運ばなかった。ニコルは次第に、二機の見事な連携と突撃の前に、ジリジリと窮地に追い込まれ始めたのである。

(オーブと共に戦うと決めたときから、覚悟はしていたけど)

まさか、こんなにも早くイザークやディアツカと対峙する日が来るなんて。

ニコルはこのとき、迷っていた。

「僕は……『敵』を増やしたいわけじゃないんだ!」

消沈したのち、決然と顔を上げる。ニコルは咄嗟に通信回線を開き、通信先にいる者達へと呼びかけた。

「——イザーク! ディアツカッ!」

周波数帯は、以前と同じだったらしい。ニコルの声が届けば、二機はぴたりと動きを止めた。スピーカーから息を詰まらせたような音がしたのち、驚愕の声が上がる。

「——ニコル……!?!」

「おいおい、嘘だろ……!?!」

同時に、モニターとカメラがオンになり、頭上に同僚達の顔が浮かぶ。

ふたりは唾然とした表情を浮かべている。……当然だ。戦闘中行方不明となった自分が、ひよつこりと「ストライク」と共に現れたのだから。今の自分は、裏切り者、と揶揄されても仕様の無い立場にある。

——あの二人のことだ、どんな罵声や糾弾を飛ばして来るだろう……？

緊張に身を強張らせていたニコルだが、スピーカーから飛んで来たのは、意外な——そう、本当に意外に思えるほどの温かな声だった。

〈ニコル……本当に、貴様なのか——!?!〉

〈なんで……? なんてお前が「ストライク」と一緒にいるんだよ? ずっと心配してたんだぜ!〉

普段の皮肉屋らしく振る舞うことを忘れているのか、それとも、あの頃から改心しているのか、ディアツカらしくない発言を間に受けるニコル。すこしだけ呆気にとられたのち、顔を上げて返す。

「すいません……。でも、僕はこうして生きてます、生きて戦ってます」

生存していたかつての同僚に、イザーク達は、激しく動揺した。

へどういうことだよ、ニコル……？ オマエは、オレたちザフトを裏切ったっていうのか！？」

ディアツカが問い、通信先のニコルは、堪えたような表情を浮かべている。だが、それにしても真つ直ぐに、目を逸らさずにこちらを見つめ返す双眸が、ああ、ニコルらしいな、とイザークは思う。

——この少年は、いつだってそうだ。

抜けているように見えて、実際の能力は自分達に次いで優秀だった。だが、そのことを鼻に掛けたりはせず、どこまでもお人好し——

いつも、何かと尖りがちな自分達の角を、滑らかに削ぎ落としてくれるような存在。今になって思えば、ことあるごとに隊の中で不和が生じそうになったとき、間を取り持つてくれていたのはニコルだった。何事にも真摯に向き合わんとするその双眸は、間違ひなく本物のニコルであると、イザークは不思議と確信してしまった。

「あなた達から見れば、そういうことになってしまふのかもしれない。でも、ぼくは『プラント』を裏切ったつもりはないんです」

「まやかすんじゃない、ニコル！ オレたちザフトは、今も『プラント』を守るために戦っている！ それに歯向かうということが、どういうことか……分らない貴様ではないだろう！？」

「オマエだつて『プラント』を守るために、ザフトに志願したんだろうが?」
 デイアツカの云う通りだ。

——なのになぜ、そんな少年^{ヤツ}が、オレたちの『敵』になる?

イザークには、ニコルの考えていることが理解できない。

(——どいつもこいつも、こぞつてザフトを、オレたちを裏切るのか……!?)

まるで、今のザフトが間違っている、とでも訴えんばかりに。

(いいや、オレたちが間違っているはずがない……!)

強いて反芻することで、イザークは自分が間違っていないということを確認した。ザラ議長や、それに恭順する母であるエザリアたち——そして前線で戦う自分たちは、間違ひなく『プラント』国民の自由と正義を勝ち取ろうと戦っている。

——この信念が、間違いであるはずがない。

そう信じているからこそ、イザークには、これに背任するニコルの立場が理解できない。
 い。

「生きていてくれたことは嬉しい! だが、ことと次第によつては、貴様でも許さんぞ!」

「イザーク……」

ニコルはこうして生きていたのに、本隊に復帰しなかった。それだけで脱走の罪に相

当する。しかし、そのみならずオーブ軍の残党などと行動を共にしているのだ。そこまで来れば、もはや裏切り者と呼ばずに、なんと呼ばばいい？

「バルトフェルド隊長にラクス・クライン——！　そして、ステラまでもがザフトを裏切った！　それに次いで、なぜだニコル？　なぜ、お前まで……!?」

イザークは、何も知らなかったし、分からなかった。

ザフトを去って行った彼らが何を考え、その胸にどんな意志を秘めていたのかを。

「脱走した彼らは、いつたい、何を考えているというのだ……!?　目立った共通点もないはずの貴様たちが、なぜ——」

「共通点なら、あります。僕達は、この無益な戦争を終わらせようと……いえ、やめさせようと考えてるんです」

「なに……?」

戦争をやめさせる——？

それは、どこか奇異な表現だ。戦争を終わらせる、という表現と似ているようで、明確に違う。どちらも終着点こそ同じだが、前者は第三者の立場にあつてこそ云える言葉。

「僕もラクス嬢も……そしてステラさんも、誰も『プラント』を敵に回したつもりはありません。でも——だからと云つてナチュラルを敵に回す気も……もうありません」

これはニコルの話だが、ナチュラルを敵と信じ込むには、彼はすこし、ナチュラルのことを知りすぎた。

「ただ軍の命令に従って、ナチュラルを全滅させるまで戦うこと——そんなのが『おかしい』と思ったんです……！　だから僕は、もう一度銃を取ろうと思った——この『ブリッツ』に乗ろうと思った」

「全滅、だと……？」

「撃てとばかり教えられて来た『敵』というのが、本当は、僕達と同じ人間だつてことに気付いたんです……！　地球のみなさんと、僕達コーデイネイターと、いったい、何がどう違うつて云うんでしょう……！？」

云われ、イザークは絶句する。

——ナチュラルを全滅？

——自分達は、そんなことのために戦っていたというのか？

云われてみればと、すこしだけ懐古する。

たしかに、今までの自分は何も考えずに地球軍を撃ち、それと引き換えに『プラント』を守護して来た。

——正当防衛だ。

敵を討たなければ祖国を守れないと信じていたから、イザークはそうして来ただけ

だ。何も初めから、ナチュラルを殺したかったわけではない。

しかしニコルは、その発想自体が間違っていたのだと諭す。

「ナチュラルと殺し合いを続けることが、本当に、僕達コーディネイターのためになるんでしょうか!？」 僕には、とてもそうは思えない——だから、本当の「プラント」のためになることをやりたい、と思ったんです」

「だから、敢えて本国と敵対する道を選んだっていうのか……!？」

「ナチュラルもコーディネイターも、きつと手を取り合えます! 地球も宇宙も関係ない……僕達はそれを知っているんです——だからっ!」

言葉の先は、しかし、割り込んだ通信によって遮られた。

↑——クライン派は、こゝも狡猾な手を使うか↓

割り込んで来た、男の声——いやに久しく、その声を聞く気がしたニコルであった。

はつと顔を上げ、ニコルは通信回線に割り込んで来た声の主——

例の、ザフトの新型機の方を見据えた。

「クルーゼ隊長……! いえ、クルーゼさん」

悪意の声を発したのは、ニコル・アマルファイにとって、かつての上官——

ラウ・ル・クルーゼ、その人のものだった。

ラウ・ル・クルーゼは、中空において“ストライク”と交戦しながらも、イザーク達の通信を傍受していたようであった。

口元に冷笑を浮かべ、底の見えない表情で紡ぐ。

〈久し振りだな、ニコル。わたしも部隊長として、きみが生きていてくれて嬉しいよ〉
「いえ……僕はもう、ザフトに戻る気はありません。あなたの指揮下に戻ることも、あなたを『隊長』と呼ぶことも、もうないと思います……」

〈それがきみの選択か。……ふむ、役に立たないだけなら、まだ可愛げもあったというものだが——〉

対峙した途端、露骨に愚弄され、ニコルは一瞬堪えた表情を作る。

〈造反となると、にべもない〉

だが、ニコルは取り合わずに“ベルゴラ”を睥睨した。

スピーカーからは、まるで流暢な言葉が紡がれる。

〈さて。判つていると思うが、ニコルの言葉にほだされてはならんよ、イザーク、ディ
アッカ。今のニコルは、既にクライン派の手によって錯乱しているようだ〉

「!？」

〈なんです……!?!〉

「アスランを仕留めた巧妙な手口さ。動揺した相手の不意を突く——アスランの仇を討ちに來たキミ等まで、それに騙されてどうする？」

云われ、イザークはハツとする。

そうだ。隊長の云う通り、あのアスランでさえ、ステラを相手にして本気を出せず、そうして敗れたのだ。それと同様に、自分達もまたニコルを前にして、かくも当惑してしまっていた。

——動揺の隙を突いて強敵を下すのは、クライン派の十八番だったじゃないか……！
初めから奴等は、こちらを動揺させることが目的だったというのか？

——なんて卑劣で、狡猾な連中だ……！

クルーゼ隊長に指摘されるまで、まんまと自分達は、敵の罠に嵌る所だった。自分達に対する手札カードにニコルに使ってくるなどと夢にも思わなかったが……誰もかそう考えるからこそ、奴等はニコルを使ったのだろう。

そのことを、改めて思い知らされたイザークであった。

「ぼ、僕は錯乱なんて！」

慌てたニコルに、ムウからの通信が飛び込んで来る。

「ニコル、あの野郎に何を云ったって無駄だ！ 取り合いやしない」

「少佐……!!」

回頭した「ストライク」が「ベルゴラ」を黙らせようとビームライフルを撃ち掛けるが、目標は良いリアクションを見せ、これを余裕をもって回避してしまう。

人間の持つ可能性を——いやそれよりも前に、人間そのものを否定してしまうのが、あの男——ラウ・ル・クルーゼだ。

そんな相手に何を訴求した所で、文字通り、話にはならない。

〈ニコル——きみがこれまで何を考え、何を知ったかは、私は知るところではない。だが、きみのような子どもが、この世界の真実を知った気であるようななら、それは違うな……！〉

それは単な、若気の至りだ、とラウは云う。

若者の思考と視野と見識の狭さに裏付けられた、とんでもない勘違いだと。

〈この世界はね、ニコル——箱庭ではないのだよ……！〉

「……!？」

〈世界はクラインの歌ほど優しくも、甘くも、美しくもない——きみが考えているほど簡単ではないのだよ……殊にこの時代はなあ！〉

「あの野郎つ、何を——ッ！」

ムウが弾幕を張り、ラウを牽制する。

しかしスピーカーからは、なおも嘲じる声が響いた。

へ分からぬというのなら、わたしがきみに教えてあげよう——！　これは上官からの温情と思いたまえ……！

次の瞬間——これまで引つ提げられていた“ベルゴラ”の“羽”が、孔雀のように広がった。

そこから、赤色の粒子が無量に散りばめられ、赤色光せきしきくわうの奔流となつて“ストライク”へ襲い掛かる。

敢えておかしな表現をすれば——“真紅の波動”だ。

ムウは咄嗟のことで、慌ててアンチビームシールドを構えた。

しかし、光の奔流は“ストライク”を呑み込み、機体を蝕むように蠢いたあと、何とかわけでもなく、次の瞬間に消え失せてしまった。

「……!?!」

ムウは何が起きたのか、敵が何を発動したのかの判らず、機体を動かさそうとした。

——だが、不可能だった。

気付いたときには、“ストライク”のOSから応答がなくなっていたのである。何を操作しても、機体がムウの意志に即応しない。ムウは眉を顰め、スピーカーに向けて叫ぶ。

「何をした……!?!」

へニコル、きみはこう云っていたね——『ナチュラルもコーデイネイターも手を取り合える、地球も宇宙も関係ない』……！ 残念だが、それは嘘だ！

「……えっ」

「互いが互いに、手を取り合えぬと断じた愚か者共が、この戦争を始めたのさ……！ ナチュラルとコーデイネイターが相容れることなど、あり得ないとな！」

次の瞬間、それまでシステムダウンを起こしていた「ストライク」が、唐突に再起動した。

その精悍な頭部——黄金のVアンテナを張り出したツインアイに、明光が宿る。

が、その双眼は当来 of アクアブルーではなく、何かに侵されたような警報色アラートレッドが灯っていた。

——ギリリリッ！

奇妙なほど軋んだ駆動音と共に、覚束ない動作の「ストライク」が、勢いよく起き上がる。再起動したかと思うと、途端に「ストライク」は、右手に握ったビームライフルを突き立てた。

ただし、ライフルの照準先は「ベルゴラ」ではない——

「!？」

——「ブリッッ」だ。

『逃げろッ!!』

そのとき誰かに、そう怒鳴られたような気がした。

ニコルは反射的に、機体を後転させ、"ストライク"より放たれた光条を回避した。見間違いではない——確かに"ストライク"が、自分に向けて攻撃を仕掛けて来たのである。

ニコルは、混乱した。

「少佐!? いったい、何をー」

訳が分からず、ビームライフルを放ってくる"ストライク"に制止を呼びかける。

へ……………ツツ

しかし、ムウからの応答はなく、スピーカーやモニターからは、耳障りな雑音ノイズが響いて来るだけだ。

——通信回線を、敵に遮断されてしまったのだろうか？

考える暇も、ない。

眼下にあつた"ストライク"は、まるで何かに取り憑かれたように、しゃにむにビームライフルを撃ち放って来るのだから。

(OSの暴走——!?)

その言葉がニコルの脳裏に浮かぶまで、そう時間は掛からない。

——まるで、野獣のような挙動だ。

とても正規のパイロットが——ムウが、自分の意志で機体を駆動させているとは思えない。

イザーク達は呆然と滞空しており、どういうわけか「ベルゴラ」の動きも見紛うほど鈍くなっている。もつとも、そのおかげでニコルは「ストライク」から繰り出される砲火だけに専念することができたのだが。

唯一、ラウだけが何かを心得ているかのように、滔々と言葉を紡いだ。

〈所詮はムウもまた、ナチュラルのひとり、ということかな〉

「クルーゼさん——!?!」

〈その身で思い知るといい、ニコル。これが戦争の構図だよ……! ナチュラルとコー
ダイネイターが際限なく殺し合うのさ、いまのきみ達のようにな——!〉

「ストライク」が、ビームサーベルを抜き放ち、獣のように「ブリッツ」に対して突撃を仕掛けて来た。

相手が「ストライク」である以上、ニコルは無暗に、反撃することもできなかった。

回避と防御に徹することしか出来ず、慌てて「ストライク」から距離を開こうとする。しかし、それ以上の加速を見せた「ストライク」が、何の躊躇もなくビームサーベルを振り抜いて来た。「ブリッツ」はかろうじて「トリケロス」で光刃を受け止めた

が、反撃できない以上、彼はジリ貧になる一方だった。

「愚か者達の結末だよ、もはや止める術などない！」

嘲じる声が通信機より響き、ニコルくつと息を詰まらせる。

——フラガ少佐が、ぼくに本気で攻撃を仕掛けて来ているのか……？

本当に、クルーゼの云う通りなのだろうか？

——ナチュラルである彼が、コーデイネイターである自分を殺すために、本気で？

そこまで考え、ニコルはふるふると、首を横に振った。

（違う。こんなものは幻術まやかしだ！）

冷静に考えれば、判断できないことはない。

つい先刻の戦闘でも、「クレイドル」のドラグーンが「レムレース」に「乗っ取られる」という異例の事態が起きていた。大体、ムウがこうして「ストライク」で出撃しているのも、そうして虚を突かれた「イーゼス」が被弾してしまった結果ではないか。

もともと「レムレース」は、ザフトにあった新型機テストタイプだったのだ。

そこに搭載されたウィルスシステムの雛型が「ベルゴラ」に搭載されていたとて、何も不自然なことはない。とうに「ベルゴラ」に実装していた機能を、最新鋭の「テストメント」に流用しただけなのだから。

（コンピュータの制御権を強奪する？ そんなハッキングプログラムが、現実に存在

するのなら……!」

今もまた、あのときと同様の作用が働いているのではないか？

だとすれば——

「僕は騙されません！ これはフラガ少佐の意志じゃない—— “ストライク” の制御を、あなたが奪っているんでしよう!？」

数刻前に “ベルゴラ” から放たれた “真紅の波動” ——

これが “ストライク” を呑み込んだ直後、搭乗者であるムウとの通信は途切れ、 “ストライク” は突如として暴走を始めた。

この点から、おそらくザフト新型の “ベルゴラ” には、 “ミラージュコロイド” 技術を応用した『ある種のコンピュータウイルス送信装置』が搭載されているのだらうと、ニコルは推察した。

通称『バチルスウエポンシステム』——

正式名称はニコルの知った所ではないが、コロイド粒子を媒介に敵の電子機器にコンピュータウイルスを送信し、これに感染した量子コンピュータのコントロールを奪う、一種のハッキングシステムのことだ。

“レムレース”や“ベルゴラ”は、あらかじめウイルスに汚染されたコロイド状の微粒子——以下“汚染型コロイド”と呼ぶ——を広域に散布することで、敵機を自在に制御下に置くことが可能だ。

おそらく“ストライク”を暴走させたのち、肝心の“ベルゴラ”の挙動が鈍くなったのも、ラウが“ストライク”を遠隔操作しているがゆえの弊害だろう。

勿論、今のラウは、制御権を奪った敵機を、^{ストライク}忽ちに自爆させることも決して不可能ではないはずだ。

が、彼が未だにこれをしていないのは、制御下に置いた宿敵^{ムウ}を見物し、見下し、弄んでいくからなのかも知れない。

ところで、“ミラージュコロイド”は大気中では無色透明であり、肉眼で確認することは出来ない。

一方では電磁波を完全に遮断する性質を持つため、視覚的のみならず、レーダー等の電磁機器でも捕捉することが出来ない。“ミラージュコロイド・ステルス”を展開した“ブリッツ”が無色透明に変化するのも、この性質による恩恵である。

しかし『パチルスウエボンシステム』を通してコンピューターウイルスを含有した“汚染型コロイド”は、太陽光が差し込むと内部分子の衝突散乱によって赤色の透過光が加わり、美しい赤色に「発光した」ように見えるという。

つまり“汚染型コロイド”は、決して無色透明ではない——透き通った赤色だ。

そのため、ウイルスの送信機能が作動したとき、“レムレース”や“ベルゴラ”から「真紅の波動が拡がった」ように見えたのは、赤色の透過光が加わったコロイド粒子が機体を軸に同心円を描いて波状に広がる現象を肉眼で確認できたからである。背景や周囲一帯が暗黒に包まれている宇宙空間においては、殊に人間の目は、この発光現象を明瞭に知覚することができるのだろう。

“レムレース”によつて武装端末が奪取されたように、一方で“ベルゴラ”は、モビルスーツの機体制御そのものに乗っ取つてしまう強力なウイルス送信システムを搭載している。

そう悟つたニコルは堪らなくなつて、通信機に向かつて叫んだ。

「同じ人間じゃないですか！ 殺し合いをさせるなんて、酷すぎます！」

叫ぶが、クルーゼが取り合う様子はない。

ヘラクス・クラインにカガリ・ユラ・アスハ——それにきみ……！ 生まれながらの幸福の中で育つて来た、キミ達のような子どもには、救えるものなどありはしないさッ！ 〽
良家という名の温室の中——

平和という名の『箱庭』の中で、世界を知らずに育つた世代の、無知蒙昧な子どもたち——

その見識の狭さから、彼らは世界を愛する理想こそ皆の理想だと錯覚している。現実と理想は違うにも関わらず、現実を捨てて理想に走る。

箱庭の中で育てられたお坊ちゃんはお姫様は、この広大な世界を、自分達の箱庭だとしても勘違いしているのだろう。

〈その身を以て学ぶといい……！ きみたち風情に出来ることは、何ひとつありはしないということ——〉

次の瞬間、ふたたび「ベルゴラ」の「羽」が広がった。

それを見て、ニコルはぎよつと目を見開く。

(……あれは！)

機体内部から、ふたたび「真紅の波動」——汚染された「ミラージュコロイド」が放出される。それが赤色の真空波のように、勢いよく「ブリッツ」まで飛来した。

——「ブリッツ」の制御まで、乗っ取るつもりなのかっ!?

「ストライク」と「ブリッツ」のコントロールを奪い、ムウと自分を殺し合わせる——そうして彼は、自分に無力感を突きつけようとしているのだ。

どれだけ綺麗に叫ぼうが、結局、コーデインイターの自分にできることは、ナチュラルを滅ぼすことくらいだということ——。

〈存分に殺し合うがいい、それが望みならっ!〉

それが誰に向けた言葉であったのかは、ニコルには分からなかったが。その瞬間、放出された「ミラー・ジュ・ユコロイド真紅の波動」が——「ブリッツ」を呑み込んだ。

戦況は、ラウが圧倒していた。

今しがた「ブリッツ」もまた、「ベルゴラ」の展開した「バチルスウエポン」に呑み込まれた。大体、コズミック・イラ71——現代においては、殆どの機器は量子コンピュータで構成されている。モビルスーツとて例外ではなく、であれば、量子コンピュータに入り込む「バチルスウエポン」は、当戦場において究極的に恐ろしいハッキングシステムなのである。

「ニコルのやつめ……」

イザークは歯噛みして、ウイルスに呑まれたであろう「ブリッツ」を見届けた。

ところで、ラウの放った「バチルスウエポンウイルス」は、「デュエル」や「バスター」に対しては、完全に無影響である。

と云うのも『バチルスウエポンシステム』は、コロイド粒子を媒介にコンピュータウイルスを無差別に散布する機能だ。下手をすれば、同宙域にある僚機すらもウイルスに感染させてしまう弱点があった。

これを克服するために、ザフトは自軍の識別コードを持つモビルスーツに対し、あらかじめ『抗体』^{ワクチン}を投与していた。

パナマ攻略戦において、ザフトは制圧用に使用した「グングニール」の対策として、すべての出撃機に対EMPシステムを装備させていた。これと同様に「ベルゴラ」のウイルスが無効になるよう、すべてのザフト所属機にはあらかじめ抗体が投与されていたのだ。

そういう意味では「ブリッツ」もまた、かつてはザフトに所属していた。しかし、結局は「ベルゴラ」が開発されるよりも前にザフトを離脱していた事実関係から、これには何の対応措置も施されていないのだ。であるならば、所詮「ブリッツ」には、このウイルスに対抗する術はない。

〈裏切り者の粛清だ〉

そう云いながら、ラウは「ブリッツ」をコントロールしようとした。

しかし、結果的にそれは出来なかった。

結論から云うと、このとき「ブリッツ」は、奇跡的にウイルスに感染していなかったのだから――。

〈なに……？〉

「はは、引つかかりましたね？」

云うと「ブリッツ」はビームサーベルを突き立て、反応の鈍った「ストライク」のラスターを削ぎ、これを破損させた。

推力を失った「ストライク」は、為す術なく、煙の尾を引きながら、地表に落下していく。

次の瞬間には「ランサーダート」を翳し、これを「ベルゴラ」に向けて続々と射出した。ラウは珍しく目をぎよつと見開いた。驚愕したのである。

「感染していない——!?」

「へなっ、どういうことだ!?!」

ラウやディアツカが、愕然と声を挙げる。

「ブリッツ」では、「汚染型ミラージユコロイド」の干渉を防ぐことは不可能なはずだ。

——なのに、何故……!?!

イザークも目をむいて思惟するが、ニコルは不敵そうに笑った。

「忘れてませんか? この「ブリッツ」には、初めから「ミラージユコロイド」の発心装置が搭載されています!」

そう、そもそも「ブリッツ」は、みずから放出した「ミラージユコロイド」を磁気で安定させ、機体周囲に纏うことが可能だ。

云い換えれば、正常にして清浄な「ミラージコロイド」を用いて、これを重鎧よろいのように纏うことが出来る。

「この『鎧』がある以上、そちらのウイルスは、この『ブリッツ』には届きませんよ！」
 「『ブリッツ』に搭載された『ミラージコロイド』は、全長にして18Mもある巨体ブリッツを、索敵レーダーからも見事に消失させてしまうのだ。これを云い換えれば、その分だけ、コロイド粒子は限なく機体を覆っているということでもある。

——それだけ堅固に張り巡らされた『ミラージコロイド』を展開すれば、敵機から放たれた『汚染型コロイド』の干渉だって、防ぎ止めることが出来るんじゃないか……？

漠然とした思案ではあったが、結果として、ニコルは賭けに勝利した。

赤色に透過した『汚染型コロイド』は、『ブリッツ』に届くよりも前に『見えない壁』に遮られていた。正常にして清浄な、無色透明の『ミラージコロイド』の障壁である。

「二か八かで試してみました、うまく行きました！」

「——はっ！ ウイルスを潜り抜けたとは云え、この戦力差、きみはどうするといふのだね？」

「僕は、ひとりではありません！」

〈!〉

次の瞬間、上空に何かがきらりと光った。これを認めた「ベルゴラ」が上空を振り返ろうとしたが、時すでに遅く、放たれた光条によってビームライフルを撃ち落とされていった。

飛来する「青い翼」は——見覚えがある。

ラウは憎々しげに、その名を呼ぶ。

へ「フリーダム」——!〉

気付いた時には「ベルゴラ」の頭部が宙に舞い、すべての武装を削ぎ落されている。

大した性能が約束されていない「ベルゴラ」では「フリーダム」に太刀打ちすることもできず、ラウは歯噛みする。

小さく毒づき、彼は悪あがきと知りながら『バチルスウエボンシステム』を放出した。

コロイド粒子が散布され、鮮やかな赤色光の奔流が生まれる。「ベルゴラ」の放つコンピュータウイルスが、みるみる内に迫って来る「フリーダム」を真っ直ぐに呑み込んだ。

「?」

が、「フリーダム」はウイルスの干渉を受け付けず、むしろ「汚染型コロイド」を綺麗に跳ね返してしまった。

ついで、キラの思惟どおり抜刀し、すれ違いざま「ベルゴラ」の両脚を切り落とした。一瞬で大破した機体はそのまま、「ストライク」と同様に赤茶けた大地の上に転がり落ちた。

〈隊長ツ！〉

イザークが後を追おうとするが、その進路上には「ブリッツ」が立ちほだかる。

「話を聞いてください、イザーク、ディアツカ！」

〈……………〉

そうしてザフトの少年達は、再び正面から対峙した。

一方で、地上に墜落していたムウは、完全にOSのダウンした「ストライク」を放棄し、無理矢理コクピッドをこじ開けると、傍らに墜落して来た「ベルゴラ」に接近した。その手には、セーフティを外した拳銃が握られている。

——あの仮面野郎、いのように扱ってくれた！

まさか、機体制御を乗っ取られるとは、想像にもしていなかった。

気を利かせてくれたニコルが、「ストライク」のスラスタだけを破損させてくれたから、今のムウは無事にして無傷だ。しかし下手をしていけば、ムウはニコルを手掛

けていたし、ニコルはムウを手に掛けていたのだ。

——仲間同士で殺し合う？ 悪い冗談だろ……。

考えていると、墜落した「ベルゴラ」のハッチが開き、ザフトの制服を着た金髪の男が飛び出して来た。

ムウはハツとして、拳銃を構えた。

「どこへ行くー！」

慌てて銃を撃ち掛けるが、向こうも同様に応射して来たため、ムウは物陰に身を隠し、凶弾をやり過ぎす。

「今日こそつけるかね、決着を!？」

「何をー！」

一発、二発——

三発と、まだ銃声が鳴り響いた。

「——ならば来たまえ！ 引導を渡してやるよ、この私かなー！」

ラウは挑発しながらも、巨大な円筒状の建物へと駆け込んで行く。

ムウは銃声が鳴り止んだのを確認してから身を乗り出し、その後を追って行った。

ここはコロニー——「メンデル」——遺伝子研究の、聖地である。

『メンデルス・オラトリオ』A

“メンデル”の中で男達の邂逅が果たされている頃、ステラは“クレイドル”を“クサナギ”に帰投させた。そうする理由はいくつかあったのだが、彼女自身が怪我をしていた、というのが主な理由である。

額からの流血。そういえば、キラを庇って“レムレース”の攻撃を受けた際、前頭部を強打したことを思い出す。

——多くの人にとって、血はきつと恐怖を呼び起こすものであるのだろう。

それはステラの個人的な感覚だが、少なくとも、彼女が昔から赤い色を心理的に苦手としていたのは事実だ。

また、現在の“クサナギ”艦内には、僅かながらにオーブからの避難民——つまり市民もまた同乗している。ただでさえ不安を抱えている彼等に余計な恐怖を与えまいと、ステラは人目を忍びながら医務室へ向かった。その道中では、こそこそと周囲の様子を伺いながら廊下を渡る彼女を目撃した者もいて、

「なにしているのかな、あれ」

「さ、さあ」

アサギとジユリは遠目に見つめながら、困惑の声を挙げたという。

このときのステラは、殊にマユにだけは「見つかりたくない」と思慮していたのだが、結果的に彼女は向かう先が悪かったのだろう。医務室のドアを開けると、室内には先客がいて、それこそがマユ・アスカ当人であった。

「！ お姉ちゃん！」

ガーゼを当てているが、ステラの流血に気付いたらしい。マユは血相を変えて、ステラへと寄っていく。

マユは現在、船内を車椅子で移動しているため、これを後方から押す補助員が随伴するのが常である。いつも誰かが傍らにるのが当然なのだが、このときの担当はマユ・ラバッツであったようだ。同じパイロットとして心配になったのか、マユラもまたステラに駆け寄り、容態を訊ねる。

「怪我したの？ だいじょうぶ？」

「あたま打っちゃった」

「あら。小さくて、かわいいおでこ」

額の小さな傷をみせるように前髪をあげたステラであったが、マユラから返された感想はまったくの別方向を向いていた。

二人に遅れて、医務室の当直であつたらう男性の医務官が歩み寄ってくる。彼はステラの傷の具合を認め、軽い口調で云つてみせた。

「すこし切れているが、針で縫うほどのものではないよ。今すぐ手当てをして、安静にしていれば放つておいても治る。——大したことないよ」

「……」

付け足された一言に、むっ、とマユラが不機嫌な顔をした。ステラではなく。

手当てを終え、ピンで留めていた前髪を降ろし、癖がつかぬように手ぐしで透かすステラ。すると、マユラが「はいこれ」と手鏡を差し出してくれた。

彼女なりの気遣いだろうか？ 手鏡をぼうつとして受け取つたステラは、茫洋としながら鏡面を覗く——と、眉下まで伸びた前髪のおかげで、額に浮かんだ傷跡はすっかり隠れてしまつていた。傍から見れば、額を怪我しているなどとは、気付けないほどに。

しかし——

「傷が残つたら、やだな」

医務室を出て行つてからも、ステラは不意に、そんな発言を溢していた。

「これって贅沢？」

常に危険と隣合わせにあるモビルスーツパイロットが、小さな傷のひとつも残したくない——そう思うのは、贅沢だろうか？

傍らを歩くマユラと、彼女に車椅子を押されているマユは、呆然として発言の主を見つめ返している。特にマユラは、心得たと云わんばかりに納得した様子で、

「そんなことないわ、女の子なんでもん。誰だってそう思つて当然よ」

不思議と、そのように共感していた。

ふんすかと音が鳴りそうな口調で続ける。

「ほんと失礼しちゃうわ、あの先生！ なあにが『大したことない』よ！」

——乙女の顔に傷がついたって、それだけで一大事だつてーの！

幸い、ステラの傷は浅く、医学的に云えば「大したことのない傷」であるのは間違いない。が、理屈と感情とはまた別なのである。額の様子を気に懸けたステラに、マユは自然と訊ねていた。

「やっぱり、気になる？」

「うーん、すこしだけ……」

「だつたら、わたしの部屋においてよ。下手なことはできないけど、ファンデで誤魔化してあげることくらいならできるわ」

「ふあん、で……？」

「クリームとか、乳液のことよ。あなたの肌に合うかは、使つてみないと分からないけど……」

気が付くと、ステラ達は誘致されるままにマユラの部屋へとやって来ていて、中に入ってから、すこし驚いた。

そこは士官の個室であり、軍艦の一室だ——あくまでも華美な装飾が許されているわけではない。

が、質素に調度されたドレッサー上にずらりと並んだ美容液や化粧品の数々に、彼女達は思わず圧倒されたのである。ステラはマユラの云う「メイク」というものを——言葉自体は知っていたとは云え——実践したことがなかったため、メイクってこんなに苦労が必要なんだ、と新鮮に感じた。

同時に、これだけの化粧品を揃えたり、使ったりしているのであろうマユラがさながら医学者であるかのように見え、一瞬尊敬の眼差しを向けた。

「傷跡部分あたりの皮膚は、とつても敏感になってるからねえ。直塗りすると、かえって炎症を悪化させちゃうのよ」

当人はまるで気にしたことはないのだが、ステラは世間的に「美白」と呼ばれるだけの綺麗な肌をしている。マユラから見れば色素が薄く、羨ましいほどに染みや荒れがない。

雪のように、とまでは云わないにせよ、滑らかな素肌が、まるでシルクのようなものである。ここに鮮烈な金糸を紡いだような金髪をしているのだから、羨ましいを通り越し

て、いつそ嫉妬したいぐらいである。

こういう肌質の女の子には、濃い化粧は御法度だろう。ナチュラル仕上がりのガリーメイク——甘っぱいアイラインとグロス程度で十分な気がした。

もつとも、今回の目的は傷口を隠すことが前提であつて、本格的にメイクを施すわけではない。マユラの云つたとおり、傷口の周辺は相当敏感になつているため、下手なメイクを施すと皮膚の状態を悪化させる危険があつた。

「そういうときは、じゃじゃーん！　これ、ファンデーションテープ」
「？」

「これを付けてから、パウダーファンデで境目を馴染ませると、傷が目立たなくなるの。同時に絆創膏の役割も果たすから、傷の治りも早くなるしね」

「なんか、お医者さんみたいだね」

美容を改善するという意味では、その形容の仕方は、あながち間違つてはいなかったが。

云いながら、マユラは柔らかなパフを使い、ステラの額にぽんぽんとタッチした。テープと素肌との境目をゆつくりと馴染ませ——これを甘受したステラが改めて鏡を見れば、傷口の部分が魔法みたいに素肌に馴染んで隠れてしまつていた。

前髪を上げてても、患部が悪目立ちしない。

ステラは、感動した。

「——わ、すごい」

「もしかして、メイクとかやったことないの?」

「特別な式があるときに、お母さんがやってくれた——それくらい」

それつまり自分じゃやったことないって意味じゃないの。

マユラは察して、額を抱えた。世の中つて不公平。自分は毎夜毎夜と美容液を使っているというのに、この娘はこれが「素」^{すつぴん}なんて……。

確かに「ブランド」国防委員長の娘なら、パーティや式典に幼いながらも出席する機会は多かつたのだろうが——。

そんなとき、傍らにいたマユが「はいっ」と云いながら勢いよく手を挙げた。

「マユにも、お化粧おしえて!」

いつかは役に立てようと云わんばかりに挙手した少女であるが、マユラはジト目を浮かべ、意地悪な顔をした。

「だーめ、あなたにはまだ早いわよ」

純真無垢なる要求を一蹴したのは、自分とステラの間にあつた『差』を思い知り、腹が立っていたからかも知れない。

要するに八つ当たりである。マユラはシンデレラを虐げ続けた継母にでもなつたか

のように、マユに対しては強気になって高笑った。

「十一歳は、おこちゃま十一歳らしくしてなさ〜い？ これはお姉さん達の特権なんです〜」

「……むッ」

ぱちん、と化粧ポーチを閉ざして見せたマユラに対し、マユはぷくと頬を膨らませる。
一蹴されて機嫌を損ねたのか、反撃とばかりに云い返す。

「ふん、じゃあ別にいいもんね。お化粧ができたって、カレシができなきや意味ないもん」

「うぐッ」

女の戦争が始まった。

マユラの胸に、正論という名の槍が突き刺さる。

「よく考えたら、お化粧に釣られる男の子なんて求めたって、しょーがない。マユは将来、もっと素敵なる人を捕まえるもん〜」

「こ、小悪魔みたいな顔して！ でも云ってること正しいから、悔しい……!?!」

この娘は将来、なんだかんだで大物をつり上げそうな気がする。

不思議とマユラは、そう感じた。

「最近の女のコって、すすんでるね」

「ませてるのよ。ていうか、それを云うならあなたはむしろ遅れすぎ」

冷ややかに、そう突っ込んだマユラであった。

「男のハートを射留めるにも、お化粧くらい知っておいて損はないよ？　お顔は乙女の武器なんですから。ね？」

——ああ、そういう意味だったんだ。

ステラは初めて、マユラの発言の意図を理解した。

——男の、ハート？

茫洋と反芻しながらも、ステラは不意に、明日の方向に視線を投げかける。

——彼が戻って来ないのは、やはり、戦闘か何かに巻き込まれているからだろうか？

「……キラ、だいじょうぶかな」

眩きを聞いた者は、誰もいなかった。

巨大な金属のパイプから、いくつものボルトが付き出しているらしい外観をした建築物は、どうやら廃棄された研究施設らしい。

ムウと、彼が追うザフトの敵将は、その施設の中に駆けて行った。

場を任せてほしい、と云われ、キラはニコルを取り残してムウの後を追った。施設前

に「フリーダム」を降りたせ、エントランスに駆け込む。中に入れば円形のホールに人影はなく、すべての照明は落ちているが、何も見えないわけではなかった。中央にシャフトのような円柱が聳え、これを螺旋をモチーフとした二層階段が取り巻いている。

しんと静まり返った空気の中、出し抜けに銃声が響いた。キラは慌てて緊張し、拳銃を握る手に力を込めた。

「ここが何だか知ってるかね、ムウ!」

「知るか! バカヤロウ!」

「——罪だな、きみが知らないというのは!」

云い争う声の上階から聞こえ、片方がムウのものであると確認したキラは、彼の声が響いた方角を頼りに階段を昇って行く。

——よく考えたら、実際に銃なんて、これまで扱ったことがない……!

MSに乗れば、それこそどのような射撃も正確無比に行う力があるキラも、生身の白兵戦となれば話は別である。こうした場面で、自分はいったいどれほどの役に立てるのだろうか? と冷静に考えるが、来てしまったからには、のこのこ引き返すわけにもいかないだろう。

——見様見真似でも、ムウの掩護くらいにはなれるはずだ。

キラは物陰に隠れているムウの姿を発見し、声を挙げた。

「ムウさん！」

「キラ……!!? おまえ、何で来たんだ!?!」

「あのまま外で待つてるなんて、できませんよ!」

そのとき、遠方から声が響いた。

「キラ・ヤマト——生きていたのかね?」

自分が知るはずもない相手から呼びかけられ、キラは啞然とする。

「キミまで来てくれるとは、嬉しい限りだ! キラ・ヤマトくん——」

「な……ッ」

「そうか、きみが『フリーダム』のパイロットか! あの『ジャステイス』を退けたと
いうのにも、そういうことなら合点がいく——」

キラには、その男が何を云っているのか——

そもそも、その男が誰で、何者であるかすら分からなかった。

——なぜ、僕のことを知っている?

——彼は、アスランのことを知っているのか?

——合点が行くとは、どういう意味だろう?

それはまるで、キラがアスランを退けたことが、当然とでも云うような台詞で。

このときの彼には、分からないことが多すぎた。

「さあ、遠慮せず来たまえ！ 始まりの場所へ」

口振りから、彼はただ闇雲に逃げ場所を選んだわけではない、ということが想像できる。とは云え、この「メンデル」は無人の廃棄コロニーだ。ラウとて、施設内の構造すべてを把握しているわけではないのだろう。

だが一方で、ムウたちはこの施設のことを何も知らない。見たところ何かの研究施設らしいが、内部の構造は勿論、この場所でどんな研究が行われていたのかも、彼等は知らないのだ。

その点、ラウはこの施設のことを知っており、地の利を活かした動きが出来る。持っている情報量の違いが、形勢の差となって現れていた。

「チツ……」

状況が気に入らず、ムウは軽く舌打ちをする。

人数的には自分達が有利とは云え、正規の軍事教育を受けていないキラは、モビルスーツ戦はともかく、白兵戦では「宛てにならない」……いや、この状況下では、むしろ「足手まとい」と判断した方が、キラにとつても親切である。幻惑的なラウの発言も相まって、いちいち動揺を示してしまうキラは、このとき、戦力として数えられるような存在ではなかったのだから。

——キラじゃなくて、ステラがいりや、少しは状況は変わったろうか？

不意にそんなことを考えてから、ムウは失笑した。

——いや、少しどころの話じゃない。

彼女がいれば、状況は少しどころか、大いに変わっていたに違いない。

モビルスーツ戦どころか、銃撃戦・白兵戦ですら抜群に脅威的なのがステラ・ルーシエという少女である。『ヘリオポリス』においてはクルーゼ隊の面々ほか、コーディネーターの特殊部隊を単独で尻ぎ倒し、彼等から『デیفエンド』を守り抜いたほどの実力者。戦闘屋と云えば蔑称になるが、ステラほど『完成された兵士』が傍に居れば、クルーゼひとりを相手取るこの状況に対し、一抹の不安も不利もなかったはず——いや、さすがにこれは失言が過ぎるか。

元より彼女は、みずから望んで『そう』なったわけではないし、そうであるのなら、元は地球軍に帰属していたムウが彼女に『それ』を求めては最悪だろう。ムウはステラの実力や能力に対し、兼ねてより一定の評価と信頼を抱いていたが、都合が良いときに都合の良い駒としての能力を彼女に求めるのは、あまりに虫の好すぎる話だ。

——そうだ、あの少女はもう絶対に、戦うだけの強化人間なんかじゃない。

自分で云って情けない、なにが『完成された兵士』だろう？ そんな野蛮な理想を実現しようとして、地球軍の上層部は彼女に何をした？ 純真無垢な少女の肉体を弄び、

犯してしまった蛮行への贖罪のように——自分のような大人には、彼女の健やかな成長を見守って行く義務があるのだ。純粋な少女としての人生を取り戻そうとしている、彼女の成長を——

なにより、こう考えるのは傍らにいる少年に対しても大変な失礼でもある。曲がりなりに、彼は自分を心配してやって来てくれたのだ。

ムウは両の手でみずからの頬を叩き、自分自分を強く戒めてみせた。

「えっ、どうしました？」

「なんも。どうにも情けないことを考えた男を、懲らしたただけだ」

飄々とした返答に、キラは釈然としない顔を浮かべたが、ムウはすぐに表情を引き締めた。

「それよりお前、撃つ気あるならセーフティ外しとけ」

云うと、キラは今になって気付いたように、拳銃の安全弁を取り外した。

施設内部を進むにつれて、周囲の不気味さは一層として増していった。周囲を見回すキラの目には、様々な実験機器が並んでいる——おそらく冷却層の羅列だろうが、部屋の床には得体の知れない青光りする液体が湛えられ、装置の上には何かをモニタリングするためのモニターがずらりと並んでいた。

いずれも、施設が破棄された今でも生きているのか、それとも、ラウ・ル・クルーゼ

その人がシステムを再起動させ、自分達に見せつけているのか——装置には得体の知れない文字や数値が流れ出て、正体もよくわからない胎児のような画像が映し出されている。

いや、胎児のような、ではない——実際に、胎児なのだ。

ハツとしてキラが周囲を見渡せば、無数のガラス瓶の中には、胎児の標本が浮んでいた。牢の中に閉じ込めてある、というよりは、まるで美術館に飾ってあるかのように、当たり前前に。

「……!?!」

咄嗟に事態を悟ったキラは、猛烈な嫌悪感に襲われた。

ムウもまた、悄然として目をむいている。

「なんだ、ここは……!?!」

「懐かしいかね、キラ君？ 君はここを知っているはずだ——」

「——!?! 野郎、おちよくつて……!?!」

扉は半分開いており、ふたりは周到に警戒しながら、小室の中を覗いた。

プレートには、

『P l o f , U l e n H i b i k i M . D . P h . D . 』

と記載されてあるが、おそらくこの小室の持ち主の名前だろう。

そしてまた、数発の銃声が響いた。

キラは咄嗟に首を竦め、応射したムウが室内へと一気に飛び込む。ソファの物陰まで突つ切つたムウが、闇の中へと銃弾を発砲するが、まるで跳弾のように飛来した銃弾が、彼の右腕を掠めた。

短く悲鳴を挙げたムウに声を上げ、キラは一気に室内へ飛び込んで行く。

「大丈夫ですか!？」

「ぐッ……!」

激痛に悶え、蹲るムウの肩から夥おびただしいほどの血液が滲み出す。キラはまるで見慣れない生身の傷に、我を亡くして混乱しそうだった。それでも彼の自我を冷静の範疇に留めていたのは、

——この人を、守らなければ。

そう思惟した正義感と義務感が、幸いにもキラの心に働いていたからだろう。

「殺しはしないさ……!」

含み嗤う声と共に、小さく、しかし、確実な足音が近づいて来る。

「せつかく、グッ……」までおいで願ったんだ——

キラはぎこちなく銃を構えるが、相手は戦意に欠けた銃口には、何の脅威も感じていないらしい。泰然としながら不気味な仮面をつけた男が、奥の暗がりから姿を現した。

——あれが、ラウ・ル・クルーゼ……！

ついで男は何かを手に取り、床を滑らせるように「それ」を放って寄越した。

「——すべてを知ってもらうまでは、ね……」

硬質な音を上げ転がって来たのは、ひとつの写真立てだ——その中に納まっている写真に、キラは思わず息を飲む。慈愛に満ちた表情を浮かべた、ひとりの女性——幸福いっぱい広げられたその腕の中に、茶髪と金髪の赤子がすっぽりと収まった写真。

——なぜ、あの写真がここに……？

それは先日、カガリが自分に見せて来た写真だ。彼女が明かした話からすると、自分とカガリはどうにも、兄妹の関係にあるというが——。

動揺するキラの姿を愉しんでか、仮面の男はさらに、分厚いファイルを投げてよこして来た。ばらりと散らばった研究資料の中からは、数枚の写真がこぼれ落ちる。精悍な体格をした男性——その息子と思いき少年が、肩車をしてもらい、楽しんでいる写真。そして、更にもうひとつ——それとはまた別の少年が、男性と手を繋いだ写真。

「おやじ——」

ムウは、もはや驚くことはしない。

彼の中では、この時すでに、可能性は結びつき始めていた。彼の父——アルダ・フラガと、ラウ・ル・クルーゼの浅からぬ仲のこと。ステラから齎された情報を基に考えれ

ば、あるいは——？

銃口を突きつけられてなお、意に介さず、ラウはねっとりとした口調でほだす。

「きみも、知りたいだろう？」

闇の中から溶け出るように、演説の言葉が続く。

それはまるで、独唱のように——

「人の飽くなき欲望の果て、進歩の名の許に狂気の夢を追った——愚か者達の話を」

嘲じる声が、一切の淀みもなく紡がれた。

「——きみもまた、その息子なのだから」

キラの身体が、恐怖と緊張——そして、何よりも強烈な不安によって強張った。

——僕は、この場所を知っている……？

——僕が、息子……？

しかし、この男はいつたい、何を云いたい？ 何を云っているのだろうか？

「ここは禁断の『聖域』——神を気取った愚か者達の夢の跡……」

謳い上げるように云いながら、嗤った彼は、まるでこの『聖域』を懐かしんでいるよ

うでもあった。

「きみは知っているのかな？ 今の自分の両親が、本当の親ではないということ——」

「……えっ？」

「——だろうな。知っていれば、そんな風に育つはずがない」

ラウの言葉に、一瞬の羨望が混じった——

「何の陰もない——そんな、普通の子どもに……」

——ように聞こえたのは、気のせいだろうか。

「——てつきり死んだものと思っていたよ。あの双子——特にきみは。その産みの親であるユーレン・ヒビキ博士と共に、当時ブルーコスモスの最大の標的とされていたのだから」

キラには、いよいよ彼が紡ぐ言葉の意味が分からない。

——狙われていた？ 僕が？

しかし、狙う道理がないではないか。何の変哲もない、こんなにも平凡の子どもを。

ブルーコスモス——

彼等に狙いを付けられた者達が、一体どんな目に遭うのかを、キラはよく知っているつもりだ。だからこそ、自分もまたその標的になっていたことを知り、云い知れぬ恐怖と戦慄が身の内を駆け巡った。

——下手をすれば、僕はブルーコスモスに殺されていた？

しかし、なぜ？

「だが、きみは生き延び、成長し、戦火の中に身を置いてなお生存し続けている——何故

かな……!?!」

興奮しつつ咎められ、キラは慄然とする。

「それでは私のような者でも信じたくなつてしまふじゃないか！　彼等が見た、狂気の夢を！」

「ぼくが……!?!　僕がなんだつて云うんです?!?　あなたは何を云つてるんだ?!?」
 たまりかね、激しく問いただす。

彼の言葉を聞いていると、まるで自分が、存在してはならぬ者のように聞こえ——怖いのだ。自分自身ですら分からない、「別の自分」を——まるで彼は、知り尽くしているようで。

震えるキラに笑みを返し、ラウは答えた。

「きみは人類の夢——『最高のコーディネイター』」

脚色され、賛美された表現とは裏腹に、ラウは残酷な補語ばかりを足してゆく。

「——そんな願いの許に開発された、ヒビキ博士の人工子宮——それによつて生み出された彼の息子。失敗に終わったときようだった——数多の犠牲の果てに創り上げられた、唯一の成功体」

残忍という言葉を、全うに体現した表情——

張り付けられた仮面が、薄く嗤った。

「それが、きみだ」

キラはただ茫然として、その言葉を咀嚼してしまった。

人工子宮？　ここに至るまでに見た冷却槽——では、あれが？　あんなものが、自分を生み出したと云うのか？

そして、不気味なまでに棚に整理されていた、無数の胎児たちの標本——あれがきょうだい？　まるで観賞物のように並べられ、うち捨てられて——

——あのうちのひとつが、自分だったかも知れない……!?

途端に、目の前がぐるぐる回り始める。

人類の夢——成功体——人体実験——

無数の犠牲と、容赦なき淘汰の中で造り上げられた人間——僕が……!?

『性能が低い素体は、次々と淘汰されていく……』

今になって、ステラの言葉——それが指していた『重み』を思い知る。

彼女が送られたロドニアにおける連合軍の研究施設と、この「メンデル」は同類だ。

ただ違うのは、後天的な薬物による肉體改造ではなく——この場所は、先天的な遺伝子調整によつて至高の人間を造り出しているということ。

——この研究所の中で、唯一の成功体として生み出されたのが、僕……!?

キラには、しかし、まるで受け入れられない。

受け止めることもできない。

性能が低い、失敗作と見なされた素体は、標本となって飾られていく——保存液の中で、まるで観賞用の動物であるかのように！

「そん、なツ」

「アスランから名を聞いたときは、思いもしなかったがな……まさか、きみが彼だとは」
ラウはそこで、思い出したように云った。

「——そうか？　そういうことなら、きみは『彼女』——ステラ・ルーシエともまた、幼少から付き合いがあったということか」

突然、大切に想う幼馴染の名を持ち出され、キラは啞然とした。

ラウは実に愉快そうに、懐古して言葉を紡いだ。「ザラ」ではなく、あえて「ルーシエ」と呼んだのも、かつて彼女が連合の強化人間エクステンデットであったことを強調するためだろう。

「期せずして、戦闘における高度な能力を身に付けたアスランの妹——あの娘むすめの出生について、きみは他人事ひとごとと考えていたのだろうか」

「……えっ」

「ステラ・ルーシエ——彼女もまた、人の狂気の結実だ。愚か者達の研究に踊らされ、淘汰の末に研究所を輩出された地球軍における『究極の戦士』——数多の犠牲の上に創り上げられた、戦うためだけの狂戦士——」

「……ほぎくなッ！」

それまで、キラの出生に秘められた真実に唾然としていたムウであったが、ステラのことを持ち出され、それが癩に障ったようだ。

激しながら、まだ被弾していない左腕で銃を撃ち放つ。

「——！」

ラウは銃弾をかわし、同様に激しながら、声を荒げた。

「彼女もまた、私と同じ『成り損ない』ではあつたがな……！」

「ふざけんな、この野郎！」

ムウが撃つよりも前に、ラウが発砲した。

弾丸が周囲にまき散らされ、彼等は物陰に隠れ込むことしか出来ない。

「ぐっ……ぐっそッ」

ムウは小さく毒づきながら、カートリッジを交換する。

——云わせて置けば、好き勝手に……！」

強く歯噛みして、彼はこのとき、苛立っていた。

ヤツがいつたい、彼女の何を知っているというのだ？ 確かに、ザフトにいた頃は、彼

女はクルーゼの指揮下に入っていたと云われている。ステラ本人もそれを否定しよう

とはしなかった。

しかし、戦い続けるだけが、今の彼女のすべてではないのだ——。
しかし、

（『私と同じ』だ……!? あいつ、何が云いたい——!?）

ラウが、自分以外の誰か関心らしき感情を抱くなんて、奇妙な感じがした。

キラであれ、ステラであれ、ラウはそんな少年達の出生や生い立ちに、いったい、何を感じているのだろうか？

—— 思えば、おかしいと思っていた。

ラウはそもそも、どうしてアル・ダ・フラガと共に写っている写真を、ステラに渡していたのだろうか？

アルとラウがどういった関係かはまだ不明だが、なんであれ、ひよっとするとラウは、彼女に親近感のようなものを感じていたのだろうか？

今のラウの口調には、なにかを引きずったような感覚がある。無意識に『仲間』を欲し、そして、これを貶めんとする何かが——。

—— だが生憎、敵将の機微に配慮できるだけ、このときのムウには余裕がなかった。

撃ち抜かれた右腕からは出血が続いている上、肝心のキラも、衝撃の事実を突きつけられたためか茫然自失としている。もはや自分の身を護ることすら頭に入っていない

様子だ。

(このままじゃ、やばい……ッ)

“メンデル” 内での対決は、なおも続こうとしていた。

『メンデルス・オラトリオ』 B

「——『ぼくは、ぼくの秘密を今明かそう………』」

ラウ・ル・クルーゼ——

彼の嘲笑に満ちた独唱は、破棄された一室の中で、邪気を纏って高らかに響く。

コロニー「メンデル」において、男達の戦いは続いていた。

「——ぼくは、人の自然ナチュラそのままに生まれた者ではない』………」

誰もが一度は耳にしたことがある台詞——

史上初のデザイナー・ベビーとして生を受けた、ジョージ・グレンの有名な一節。

「受精卵の段階で、人為的な遺伝子操作を受けて誕生した者——人類最初のコーディネイター、ジョージ・グレン………」

声を紡ぐ男をから隠れつつ、ムウは傍らにいるキラの肩を揺さぶった。

キラは先程から、完全に自失してしまっている——無理もない。みずからの出生について、最も残酷な形で暴露されたのだ。そうでなくても、知りたくもなかったはずの事実だというのに。

「遺伝子操作による恵まれた能力を以て、時代を牽引する者、よりよき世界を『調停する者』であれと——ヤツが善かれと思つて唱えた夢想論は、皮肉にもナチュラルとは異名の『調整された者』を大量に生み出し、人類の文明そのものを崩壊させた」

「キラ、しつかりしろ！ おい……！」

「——っ」

「そうしてヤツが齎した混乱は、その後、どこまで闇を広げたと思う？ あれから人は何を始めてしまったか、知っているかね？」

みずからの子息には、最高の才覚と素質を——

ジョージ・グレンが木屋へ旅立つと同時に行った全世界に対する情報啓示は、それ以降の時代、爆発的に広がったコーディネイター・ブームの引金となり、現在に至るナチュラルとコーディネイターの格差社会——その温床となつた。

彼が後世に残したのは、あらゆる容姿、あらゆる才能が、資本次第で自分達のものとなる革新的技術——より正確を期すれば、彼等の子息達の、といふべきか。

「金さえあれば、子供らの容姿……いや未来すら予約できる遺伝子操作技術の流行——」

キラ達が立っている場所は、当にそうした遺伝子操作が行われていた研究所だった。

——眸はブルーがいいなあ、髪はブロンドで……

——子どもには、才能を受け継がせたいんだ……

——優れた能力は、生まれ来る子どもへの贈り物ですよ……

施設に飛び変わった過去の声が、ムウの耳には、一帯の空気から身に響くように感じられた。

「しかし。これもまた、上手くいくばかりではなく——」

——流産しただと？ 何をやっていったんだ！ せっかく高い金を出して、遺伝子操作したものを……

——妊娠中の栄養摂取には特に気を付けて下さい。日々の過ごし方も、すべて指示どおりに……

——完璧な保証などできませんよ？ 母体は生身なんだし、それは当然、胎児の成育状況にも影響を……

——目の色が違うわ！ こんな、わたしが望んだ子じゃあ……

「高い金を出して買った『夢』だ……！ 誰だつて叶えたい、誰だつて壊したくなくなる——？」

——最大の不確定要素は、妊娠中の母体なんだ！ それさえ解消できれば……

「——嗚呼、だから挑むのか……！」

母体の不完全性を唱えた、男の名はユーレン・ヒビキ——

この部屋の主にして、あらゆる意味において「キラ・ヤマト」というコーディネイター

を生み出した、遺伝子工学の権威。ラウは彼の思想を嘲じ、叫ぶ。

「それが『夢』と望まれて、叶えるために——!？」

あたたかな母体ではなく、命のない機械から子を産み出すこと——

これこそが「完璧な遺伝子操作の手段である」と謳い上げたヒビキ氏は、数限りない生体の臨床実験を繰り返した。その過程で、いくつもの赤子の命を溝ドブに捨てながら。

「すべては、より完璧な人間を造り出すため。では、完璧な人間とはなんだね？」

——完璧になれば、人は幸せになれるのか？

母親の温かな胎内ではなく、無機質な冷却槽から生み出された者が、みずからの出自を幸福と感じるだろうか？ 屍の山から生まれた命が、失われて逝った無数の命と引き合うものか？

飽くなく続いた臨床実験——この恐慌的な倫理観を疑問視する者も、当然のように現われた。

その内のひとり、ヴィア・ヒビキ——

キラに見せられた写真に写る、慈愛に満ちた表情をした女性工学者。ヒビキの姓から自明であるように「キラ・ヤマト」が宿った子宮——その提供者。

——もうやめましょう……!?! わたしたちが駄目駄目にしているのは物じゃない、命なのよ……

——わかつている！ だからこそ、完成させなければならぬんだ！ たとえ、どれだけの犠牲を払おうと……

個より公——

何時の世も研究者という人種は、将来あるべき公共の利益のために、個を犠牲とした実験と開発を推進した。

「人は何を手に入れたのだ……！ その手に！ その『夢』の果てに——!？」

——あの子を返して！ もうひとりの、わたしの……

——わたしの子だ！ 最高の技術で、最高のコーデイナーとするんだ……

——それは誰のため!? あなたのためでしょう……

「すべてにおいて完璧ならば、人はおのずと幸福になれるのか？ ——本当にそうかな、

キラ・ヤマトくん……!？」

不気味なほどに高揚しながら、ラウは唯一の成功体、人類の素晴らしき結果へと問いかける。

「聞くな、キラ！」

「いいや、きみには答える義務がある！ ——誰もがきみのようになりたいと願ひ、求めたのだよ……! その結果に生み出された『なり損ない』が、私や私の分身たち——そしてステラ・ルーシェなのだからな！」

——最高のコーディネイター、それがこの子の幸せなの……

——より良き未来をと！ 人類はそうして前に進んで来たんだ！ それは、そこにこそ幸福があるからだ……

「知りたがり……欲しがり……やがてそれが何のためだったかも忘れ……命を大事と云いながら弄び、殺し合うッ！」

その結果に生まれた格差と差別、偏見——

コーディネイターの異能に対抗するべく造り出された、連合の強化人間たち——

そして、ただ「できる」という理由だけで造り出された、レイと名乗った少年ラウ自身の分身たち——

「——最高だな、人は……ッ！」

核弾頭、〃ニートロンジャマー〃 G〃兵器、〃エクソリア〃、〃サイクロプス〃、

〃グングニール〃——

アラスカ、パナマ、ビクトリア——

兵器や戦火は一方的に拡大し、それでいて、戦火の中で散って行った命の数だけ、異種族への憎悪は深まるばかり——

「そうして妬み、憎み、殺し合うのさ……！」

——奴等がいるから、世界は混乱するのだよ！

——我々はもはや、ナチュラルとは違う、新たなひとつの種なのです！

——コーデイネイターなんて、みんな居なくなっちゃえばいいのよ！

——気が変わった。滅ぼさなければ、戦争は終わらないだろう！

「——ならば存分に殺し合うがいい！ それが望みならッ！」

「何をッ！ 貴様ごときが偉そうに——」

「——私にはあるのだよ！ この宇宙で僅かながらに！」

ラウの放った銃弾が、大きな照明器具を叩き落す。

ゴゴウッ！ 凄まじい金属音と共に、噴煙が立ち込める。その音を聞いて、ようやく

キラは我に帰った。物陰から叫び合うを続ける二人の様子を垣間見る。

「——すべての人類を裁く権利がなあ！」

そう、施設メンデルが誇った最先端医療技術は、遺伝子操作ばかりに向けられたわけではな
かった。

——人間の複製クローですか？ 不可能ではありませんが、違法です……

——法など変わる。所詮は人が作り出したシステムだ……

——しかし……

——苦勞の末に手に入れた技術、使わんでどうする？

それは、とある男の傲慢な囁き。

——欲しいのだろうか？ 研究資金が……？

ラウは想像した男の言葉に嘲笑を浮かべ、先を続けた。

「憶えていないかな、ムウ。私ときみは遠い過去——まだ戦場で出会う前、一度だけ会ったことがある」

「——なんだと……?」

身に覚えのない所を突かれ、ムウの表情に動揺が奔る。

ラウは口元に切り裂かれたような笑みを奔らせ、

「私は、己の死すら金で買えると思いがった愚か者——」

浮かべた嘲笑は、どこか寂しげな——

「貴様の父、アル・ダ・フラガの——『出来損ない』のクローンなのだから……!」

自己に対する、自嘲だった。

場に衝撃が流れ、ムウたちは、返す言葉を失った。

クローン——それはつまり、ラウがアル・ダ・フラガの遺伝子から造られた、同一の遺伝子を持った人間だということだ。

そもそも、人間に対するクローニングは、ことコズミック・イラにおいても倫理観か

ら禁じられた開発事業である。少なくともムウ達は、それによって生み出された人間など存在するはずがないと思っていたが、事實はそうではないらしい。

打ち明けた側のラウの口調は淡々としている。

「きみも小耳にくらいは挟んだことがあるだろう？ きみの生まれたフラガ家一族は、代々、投資や商売に不思議な『勘』を持っていたこと——フラガ家に就いた者に、損はない、と云われるほどの伝説となっていたこと」

冷静になれば、可笑しな話ではあった。

人間の勘ほど、不確定にして曖昧なものはない。技術職人が培ったものであれば話は別だが、こと投資や商売において、絶対を確約させるほどの能力が人間にあるはずがない。それこそ、未来が見える者でない限りは——。

しかし不思議なことに、フラガの家系には『それ』があった。

「そうしてフラガ家に受け継がれて来た莫大な資産——だが、アルはこれを託す者に、ムウ——きみが相応しくないと断じていた」

「なっ……」

「きみは聞きたくない話であろうがね。——だから、私が造られた」

幼少のムウに対し残念な視線を向けていたアルは、今後の自己財産を託す者には「自分」以外に相応しい存在はないという結論を導き出した。だからこそ、彼は有能なヒビ

キ博士に取り入り、みずからのクローンを製造するようけしかけたのだ。アルとは違う方法であつたにせよ——ヒビキもまた優秀な後継者を望む者であつたから、彼等の中には呼び合うものがあつたのかも知れないが。

莫大な研究資金を提供する代わりに、アルはユーレンにみずからのクローニングを依頼した。

そうして生まれたのが、ラウ・ラ・フラガ——現在はラウ・ル・クルーゼと名乗る、目の前に佇む男である。

「だがクローニングといつても、一寸違わずアル・ダ・フラガその人を複製できるわけではない」

クローニングによって生み出された生体は、生まれた当時は勿論赤子の状態であつて、これより後の人格形成や心身発達に至つては、もろに後天的な影響を受容する。そのため複製元であるアル・ダ・フラガとは全く別の人生経験を足踏みすることになり、この事実こそが、オリジナルとクローンの間に明確な『差』^{ちがい}を形成する原因になつてゆく。無論、それを承知していたアルは、ラウに対して厳格な教育を徹底した。彼に人間としての自由を許さず、みずから認められる理想的な跡取りに育て上げるべく、徹底的に躰けたのだ。

「アル・ダ・フラガとして生み出され、アル・ダ・フラガとして育てられ、アル・ダ・フ

ラガとして弄ばれた。——しかし、私はラウだ、そうだろうか？ 私も小さい頃は色々あつてね、アル・ダ・フラガその人に対して憎しみを憶えるのに、そう時間は必要なかったよ」

ムウは何かを口にしようとして、しかし、言葉が口から出てこないでいると、さらに解き明かすようにラウが語りを続けた。

「ひとつ目的のために生み出されたクローンとは、もはや人権が無いに等しいものさ。幼少の頃から大人の都合を一方的に押し付けられた経験は、私のこの歪んだ精神の温床ともなっている」

生まれながらの奴隷を作ってしまった——これが、クローニングに伴う人権問題のひとつとされていた。

だがラウは、どうにも自分が歪な思考の持ち主であることは自覚があつたらしい。あの意味、無理もない——それほど傲慢な育て親を持てば、幼少期から強いられ続けた教育も、並大抵のものではなかつたはずだ。

アルはかねてよりムウの母と対立し、息子をのびのび育てんとする彼女の教育方針をひどく嫌悪していた。であるなら、彼はラウに全く別の教育を施したはずだ。それがどういったものだったのかは、想像するに忍びないが。

「ああ、ひどいじゃないかムウ……！ きみがもう少し賢く育っていれば、この私も生ま

れずに済んだと云うものを」

「じゃあ、オマエが親父を……!」

『未来を見通せる男』? ——ハッ! 伝説のように持て囃はなされた男が、己の死期すら見通せぬとは、いい笑い話じゃないか」

——放火事件が、あつたのだ。

真夜中の出来事であつたが、ムウが暮らしていた屋敷は全焼し、フラガ家の莫大な財産も大半が消炭に帰した。そして火事によつてムウの母親も、父アル・ダ・フラガも焼死した。

沖の暗いのに白帆が見える——それは資産家として莫大な栄華を築いた男の、あまりに呆気ない最期だ。そのあと、ムウは親戚の家に引き取られたが、以降、ラウが何処で何をしていたのかは想像が付かない。しかし、出生だけを見ればナチュラルに過ぎない彼が、ザフトの中でコーディネイター然として振る舞うまでには、壮絶な人生があつたはずだ。

そういう意味では、彼がその壮絶な人生の中で培つた『努力』たらんものは、コーディネイターに施された遺伝子操作より優れた能力に結び付く、ということの証明にならないだろうか? 人間の能力を決めるのは決して遺伝子の優劣ではなく、その者の努力であるのだと——彼の経歴そのものが、昨今に広まつた遺伝子操作へのアンチテーゼであ

るといふのに、そのことに、当の本人は気付かなかつたのだろうか？

「間もなく最後の扉が開く——『テストメント』が連合に渡つた今、奴等は喜んで核の火を使うだろう」

その言葉に、ようやくになってキラが我を取り戻した。

——『テストメント』？

それは、『フリーダム』が『レムレース』から発信される識別信号の中から見つけた名称だ。ラウの言葉が正しいのなら、フレイが乗っていたあのモビルスーツは、元々はザフトにあつたファーストステージの一機だということのか？ それも、Nジャマーキャンセラーを搭載した——？

ひよつとして、この男が地球軍に機体の秘匿場所をリークしていたのではないだろうか？ 想像したとき、恐慌に近い危惧が、キラの胃を締め付けた。

「そして、この世界は終わる……この果てなき欲望の世界は——」

限らない憎悪を込めて、ヒトのエゴによって生み出された男が叫ぶ。

「そこであがく思い上がった者達——その思いのままにな——」

「おまえには——いや、おまえにも……！ 自分がないんだ。もしかしたら過去も、未来

も——」

憎悪。そう、今のラウには、憎悪しかない——自分に不条理な生を強要した者への。

だが、ムウはこのとき、目の前にいる宿敵のことを、もはや宿敵と思えずにいた。

初めて戦場で邂逅した時から、出会う度に感じていた奇妙な感覚——それはラウの説明からも明かされた通り、フラガ家に伝わる奇妙な直感力が為せる業だったのだろう。ラウもまたアル・ダ・フラガと染色体を同じくするクローンであり、ムウはそんなアルの息子だ。血族を同じものとするからこそ、彼等は感覚的に呼び合っていたのだ。

——宿命のライバルなんじゃないの？ と、今までは漠然とそう思っていた。

軽口を叩いたような表現ではあったが、少なくともムウ自身がラウとの関係を、そのように捉えていたのは事実だ。

ライバル。それはどちらかが敗れるまで——どちらかが、どちらかをより完璧に下すまで、永遠に続く対立関係。

——しかし、おれ達がライバルでなどあったものか……！

ラウはムウの父親によって不条理な生を負わされ、その遠因は、何も知らずに呑気な幼少期を過ごした自分であったことを知ったのだ。この事実に気付いたとき、ムウの中に沸いたのは、そんな「宿敵」に対する敵愾心などではなかった。第三者としての無責任な同情ではなかったにしろ、むしろ父の非礼を詫びたくなるような、そんな居た堪れない罪悪感だった。

その悔恨ゆえに、ムウの口調に変化が産まれたことを、傍らのキラは感じ取っていた。

「だから他人が信じられないんだろ!? その仮面は、人と分かり合うことを拒絶した心の鎧だから」

「ムウさん……?」

我に帰ったキラが、茫洋とムウを見上げる。

ムウは、怒鳴っていた。

「仮面をつけて、仮面の中に自分ってやつを閉じ込めて——そうやって諦めてんだよ、おまえも……!」

「——」

仮面をつけた男の表情が、僅かに歪んだ。

その言葉はある人物からの受け売りだったが、それだけに説得性があつたらしい。どうやら仮面ラウル・クルーゼの男の凶星を突くだけの真実性はあつたようだ。

——この男は、憎しみに身をやつ窺すこと以外に、自分を自分として生かす方法を知らない……。

幸福な環境で育つたムウに対し、その代償として、ラウは不幸な環境を強要された。

ならば、ムウがしなければならぬことは、憎しみに身を窺す以外に生き方を知らないラウを「咎める」ことではない——他の生き方を彼が知ることができるように、彼に「教える」こと「導いて」やることではないのか?

ラウ・ル・クルーゼが装着する仮面の意味が、このときのムウには少し、不思議と分かるような気がしていた。

「仮面を外して、明るく世界を見ろよ！　そうすりや、景色だって今と違うように見えるはずだ！」

「ヒトのエゴから生まれた身に、信じられるものなどありはしないさ……！　なぜ外す

？　外した先に、何を信じる——」

「——それを知るために、だろうが！」

——だが、生憎この時のムウは、ラウが仮面を装着する理由を知らなかったのだ。なぜ、彼が仮面を付け続けなければならなかったのか、その理由をムウは知らなかったのだから。

『世界を裁く』——そんな権利も義務も、あなたには、ないと思います」

放たれたキラの言葉に、ムウが驚いた顔をした。

が、構わずにキラは先を続けた。

「あなたはステラを知っているんでしょ?!　僕がどんな形で生まれたのか——それを今まで知らなかった僕は、確かにあなたのような人から見れば、腹立たしい存在だったのかも知れない……」

立ち直った少年は、再び物陰から顔を覗かせ、仮面の男と対峙した。

もとより繊細な顔立ちが、今は恐怖によって崩れそうなまでに震えている。しかし、それでもキラは真つ直ぐに云った。

「それでもステラは……！ ステラだつて酷いことをされていたんです、きつと、あなたと同じように……！」

前にラウ本人が云っていた。ラウやステラは結局は“なり損ない”であり、同類なのだ。

そんな戯言に対し、物は云いようです、と一蹴しなかつたのは、このときキラがひどく慎重だったからであろう。ラウの言葉は表面上を捉えれば間違ひではなかつたし、彼や彼女が、自分のような『最高の能力者』『人類の夢』を求め、あるいは、対抗しようとしたために生まれた『失敗作』であるのなら——どうして自分が、彼等のことを否定できようか。軽蔑できようか。

だからこそキラは、こう云った。

「あの娘だつてこの世界を憎んでもおかしくないのに……！ そんな女の子が戦争を終わらせようと頑張つてるのに……あなたは何をやってるんです！」

真つ当に約束されていたはずの人生——過去や未来——を踏みにじられたのは、ラウだけではないはずだ。

キラはそのことを、知っているつもりだ。

「あの娘が必死になつて戦つてるんだ！　なのに、あなたはっ——！」
今はあえて、語弊を恐れずに云う。

キラはこのとき、ステラの存在を借りていた。みずからの影と云える男に対し、キラはみずから語り掛ける言葉を持つていなかったのだ。

「世界を呪うためじゃない——！　ぼくらの生まれ来たこの世界を、呪うために生きようとしてるんだ！」

しかしラウはまた、嘲るように嗤った。

「だから戦争を終わらせる？　そうして君は……君たちは、そんな世界でどうしようと云うんだね？」

「……!?!」

「呪わず祝う、それもいい。——だが世界は、歌のように優しくはない！」

金色の髪が揺れ、そこから汗がしたり落ちた。

言葉には、異常なまでの感情の昂りがある。

「きみたちもまた、ヒトの欲望エゴより生み出された〃まがいもの〃——真実を知り、常軌を逸したその異能ちからを示してしまつたきみたちはもう、平和みんなのところの中へは戻れない。——きみたちはもう、昔のようにには戻れない」

言葉に、キラの眸が揺れた。その通りだと思つたからだ。

戦闘用の特化されていたステラはともかく、平和な世界において「優秀」どまりであったキラは、殊戦場においては比類なき能力に目覚め、それこそ「天才」と云われても不思議ではないほどの才覚を發揮した。そしてキラは、そんな自分の能力を、たったいまラウの言葉によって自覚した。その奇跡的な才能が、いつたい何から生まれたものなのか、自分が産まれた意味は何なのかを、このときキラははつきりと自認したのだ。

それを再確認させるかのように、ラウはせせら笑う。

「そうさ。最高のコーデイネイター、それがきみだ……！」

誰もが羨み、

誰もが嫉む——。

「最強の力を以て生まれ、その鬼才を畏怖されるべききみに、平和の中に居場所はない。弾き出され……押し潰され……いつか、きみは私と同じ絶望を味わうことになる——」

「——それでも……！　守りたい世界が、あるんだ……！」

力だけが、僕のすべてじゃない。

そう云おうとしたキラであったが、なぜだか、それは叫べなかった。喉が張り付いたように塞がって、言葉を吐くための空気すら通らなかつたからだ。

——それは、彼の言葉に動揺しているからだろうか……？

結局のところ、最高のコーデイネイターとして生み出された自分にできることは、モ

ビルスーツに乗って戦うこと以外に、ないのではないか？ ラウの言葉に反論できなかったのは、このときキラが動揺の末、そう思惟してしまったからだろう。

学生時代は、カレッジの中でも特に目立つわけでもなく。

憧れの女の子に話しかける度胸もないような、奥手で、冴えない——この上なく平素な少年。

——それが、戦場を駆けさせればどうだろう？ モビルスーツを操らせればどうなった？

その圧倒的な能力ゆえに疎まれ、心無い言葉をぶつけられ、利用され、傷つけられた。同時に傷つけもしただろう。

ひよつとしたら自分にあるのは『力』だけで、それ以外には、本当に何も無いのだろうか？ 自分はひよつとしたら、戦うことでしか本領を發揮できないような人間なのではないか？ 現に今も、戦うことで戦争をやめさせようとしている——そんな自分には……。

——と、そのとき忽ちに、コロニーに爆撃音が響いた。

彼等の立つ施設も、轟音と共に強かに振動した。棚に並んだ薬瓶が、実験器具が、壁に掛かったモニターが次々と落下していく。外からの爆撃だ——どうやら、中断していた戦闘が再開されたらしい。

ムウは咄嗟に、この会合の時間が終了したことを悟る。よもや、こうしてクルーゼが潜入しているコロニーに爆撃を仕掛けるザフト兵はいるまい。だとすれば、この爆撃は「ドミニオン」が齎したということだ。

——まずい………！

唐突に、現実に取り戻されたような錯覚に陥る。

——これでは、混戦状態だ。

戦力的に見ても、戦局的に見ても、最も不利なのは自分達なのだ。連合とザフトに挟まれた状態にあり、なおかつムウたちは今、そのザフトの敵将と生身で対峙している。こいつをどうにかしなければ……！　そう恐慌するムウであったが、一方でラウは冷ややかに嗤い、言葉を発した。

「……はっ！　守りたい世界か——」

ラウは、キラの中に何かを見出したように、キラに何か言い残したことがあるかのよう、口淀む。

しかし、結局は何も言わないまま、こう続けた。

「ならば高みの見物と行こうじゃないか、キラくん」

「………!?!」

「きみがどこまでやれるのか——この私と、この宇宙を覆う憎しみの渦を、どこまで止め

られるのかをな！」

男の言葉は、唐突に突きつけられた挑戦状。

その物言いに、キラはハツとして眉を顰めた。

「きみの生き様とやらを、この私に見せてくれ……！」

「……もしかして、あなたは」

が、キラの言葉を遮るように、クルーゼは高らかに云う。

「——きみが人類の夢と云うのなら、人類くらい救ってみせろ、スーパーコーディネイター——」

挑み、試すように云いながら、クルーゼは踵を返す。

ムウは目をむいて、しゃにむに叫んだ。

「まて……っ……」

あいつを、止めなければ……。

だがムウは、柱の影のところではゆるめき、地にもたれ込んだ。その顔色は蒼白で、被弾した箇所の出血がひどいものになっていた。

ラウは逃げ出したようより、自分達を見過ごしたように見えた。キラはその理由を呆然と考えながらも、遠ざかっていく男の哄笑を聞いていた。その声は高らかに建物内に響き渡り、この廃墟に木霊する悪霊の声のように思えた。

そして、コロニー“メンデル”の軍港では――

↑――“ドミニオン”来ます！ グリーンブラボー！

ミリアリアの声によつて、爆撃を正体を知らされたラクス達は、すぐさま戦闘態勢に入った。

その中で、バルトフェルドが憎々しげに云う。

「やはり、見逃してはくれんか。摘める芽はここで摘んでおこうというわけだな、ブルーコスモスの盟主め」

「“ストライク” “ブリッツ” “フリーダム”からの連絡は？」

おっとりとした、しかし、確かに緊張を含んだ声でラクスが問う。

状況が状況だ。彼女の中にも、僅かながらに焦りがあつた。

「まだ何もありませんねえ。――チツ、いったい、どうなってるんだ……」

「後方には、ナスカ級が三隻迫っています。退路はありません、迎え撃つしか」

「分かっちゃいますがね……。しかし、あの三機がいらないんじゃないやあ、こつちの戦力なんて高が知れているでしょう。出撃できるモビルスーツだつて――」

どの機体も、先の戦闘での消耗を引きずった状態だ。

それは無論「ドミニオン」側のモビルスーツ部隊も同じことだろうが、仕掛けて来たということとは、それなりの応急処置は済んでいるということだ。熱紋も既に確認されており、敵艦からは例の新型の「G」が四機、既に出撃しているようだ。

「仕方がない。——「クレイドル」は出せるな?」

バルトフェルドは格納庫へと通信を繋ぎ、既にパイロットスーツに着替え、発進待機中のステラに呼びかけた。モニターに写る少女はこくとだけ頷くが、ラクスは歯噛みして抗議の声を挙げた。

「それは無茶です、バルトフェルド艦長。相手は四機……たった一機^{ひとり}で、抑え込める相手ではありません」

三隻同盟の戦力は、今に乏しい。

頭数で云えば、戦力の大多数を占めているM1部隊は、しかし、過半数がルーキーで構成しており、例の部隊に対応するだけの實力を持ち合わせていない。それはツールやカガリにおいても同様であり、であるなら、出撃するに適切な人物は、現在はステラしか残されていないということになる。だが、

——四機を相手に、たった一機で行って、何ができる……?」

ラクスの推察は正しい。

だが、いくら推察が正しかろうと、それは判断として正しいということではなかった。

バルトフェルドは、隻眼の奥に鋭い光を宿して云った。

「だからと云つて、総力戦に挑めば無用の犠牲者が増える。今後のためにも、それは芳しくないでしょう。勿論、艦は少しでも前に出て、『グレイドル』のサポートに回ります。——ボクだつて昔はモビルスーツ乗りだ、四機をまとめて相手取ることが、どれだけ無理難題であるかは充分に分かっているつもりですよ」

云われ、ラクスは口を噤んだ。

戦場においては、ラクスよりも、バルトフェルドの言葉の方が重いのだ。以前、ラクスはステラに助けられたことがあるが、あのときもまた、彼女はステラの指示を仰ぐことで命を拾っている。『エターナル』の指揮官席に座るラクスには、確かに艦の指揮権こそ持っていたが、彼女の判断は常に戦場において正しいものではなく、時と場合によつては、元軍人であるバルトフェルドの意見が实际的に優先されることがある。

「しかし、全滅だけは避けなきゃならぬでしょう」

そんなとき、通信先のステラが声を溢した。

「——だいじょうぶ」

物柔らかな声に、ラクスの目が押し広げられる。

やがてラクスは、今にも消え入りそうな儂げな表情になった。モニター越しのステラの表情から、彼女の意志を悟ったからだ。陰った眸で少女を見つめ返し、心配そうに見

上げる。このときのラクスのそれは、毅然とした指導者としての面持ちではなく——みずからの妹を戦場に送り出すことしか出来ない者の、不安と悲哀の混じり合った表情だった。

そんな彼女を労わり返すように、ステラは小さく笑って返した。

〈できるだけ、やってみるから——〉

「ごめんなさい。いつも、いつも……」

みずからの妹と呼べる少女に対し、戦うことしか要求できない自分。

そんな自分を、申し訳なく思った。

「では……お願いします」

〈うん〉

そう云ってハッチが開き、そこから「グレイドル」が飛び立って行く。

ラクスは澄んだ瞳に雫を湛えながら、次の瞬間には、切り替えたように毅然として云った。

「——「グレイドル」の掩護を……！ キラ達が戻って来るまで、なんとしても、この場

を切り抜けましょう」

そうして再び、戦いが始まった。

『スクラップド・プリンセス』A

オルガ・サブナックは、読書を好む青年である。

彼の正体は「生体CPU」と呼称される、大西洋連邦——あるいはそれを隠れ蓑にした巨大なネットワーク——が抱える虎の子の鉄砲玉だ。あるいは強化人間とも云うべき、ブーステッドマン——

端正な顔立ちに、訓練で鍛え上げた女性受けの良い精悍な体格。その出自や経歴など個人情報の一切は抹消されているが、ひと口に「どこにでもいる青年」と形容するには、いささかの遠慮がある。青年の容姿や、身に纏う雰囲気には、どこか高貴さを漂わせるものがあるからだ。

個人情報という訳ではないが、個体データとして強化インプラント：ステージ「2」と表記され、彼の同僚であるクロトやシャニに比して、精神が安定的に保たれている点特徴的である。

そして、やはり趣味が読書であるからか、平時においては物静かな印象が先に立つ青年だ。彼は主にジュブナイル小説を好み、これを静かに読みつくすことが、彼にとって

は密かな日常の愉しみであるらしい。

「本を読んでいる最中の彼は、涙を流し泣いていた。おそらくは、空想の世界に対しても感情移入ができる『豊かさ』を持った人間なんだ」

これは「ドミニオン」の船医であるハリー・マーカット氏による証言である。

言葉を選ばずに云えば、彼らブーステッドマンは凶暴であり、粗野なイメージが先行しがちであり、そんなオルガが「泣いていた」とする証言は、表面的にしか彼らを知らない者達にとっては眉に唾を付けたくなるような話として受け取られる。

だが実際、ハリーの証言に嘘偽りはなかった。そればかりか、一部の人間にとってはどうやら珍しがるような話でもないらしいのだ。オルガが自分の時間を費やす中で、読み通した小説に感動し涙している場面を目撃したことがあるのは、じつに、ハリーだけではなかったから――

――例えばクロト・ブエルやシャニ・アンドラス、彼らは既に知っていた様子だ。

さりとて、彼らとて自分以外の人間に注意を払うほどデリケートなタイプではない。むしろ不干渉主義とでもいうのか、オルガと同じように暇さえあれば自分の世界に閉じ籠ることを優先するタイプだったのは事実だ。

だからこそ、彼らは小説の物語に感動し、思わず涙しているオルガを外野から冷やかしたり、茶化したりするようなことは滅多ではなかった。裏を返せば、オルガ自身もそ

れをよく判っているから近場に彼らがいても読書できるのだし、そうして小説の世界に没入することができていたのだろう。

つまり、オルガはハリーが目撃した一度だけでなく、かねてより様々な小説——その中で描かれるストーリーや登場人物、云ってしまえば虚構に過ぎない空想の産物——にも感動できる、ハリーに云わずと云わすところの「感受性」を十分に残した人間だと見ることが出来る。

——なるほど、豊かな人間なのだ……？

ブーステッドマンという凶悪な肩書き、そして一度は実際に突き飛ばされたという恐怖体験から、これまでは敬遠してもいたのだが、このことを知ったハリーは、ひとえに感動したという。

それからというものの、オルガという青年が隠し持つ繊細な一面を認めてからのハリーは、ふいに彼のことを観察するようになっていった。それが個人的な感心から来る行動なのか、医学者としての関心から来る衝動なのかは、本人にも分からなかったが。

——サブナックっていうのも、きつと偽名だな。

——本当の名前は、なんて云うのだろう。

かつて、ステラ・ルーシエという娘に出会っているハリーには判る。強化人間というものは大抵、なんらかの形で地球軍に保護されたり、連れ去られたりした子供達の末路

だ。前者はともかく、後者はいざ告発に遭ったとき身元を特定されたくない事情を抱えているため、持って生まれたファミリー・ネームを抹消されているのが大半だ。かつてステラが、みずからを「ルーシエ」と疑うことなく名乗ったのも、そういう措置の結末だったのだから。

そもそも、サブナックというのはソロモンの悪神を冠する不吉な名称であり、これを彼に与えた研究者が如何に残念な発想をしているのかが伺い知れるところである。ハリーも同じ研究者として、ロマンの無さを痛烈に批判したいところだ。

——しかし、そんなに読書をして……

——小説を通して、彼はいったい何を学び、何を思っているんだろう……？
ひとりの大人として、ハリーはオルガに対し、そんな興味を抱いたそうだ。

意識が戻ると、目を開けた先に、真っ白で綺麗な天井が映った。

——ああ、またこの景色。

朦朧と云い含みながら、フレイ・アルスターは「ドミニオン」の医務室で目を醒ましていた。

——どうにも、また眠ってしまったらしい。

最後に残っている記憶は、真つ黒な宙域戦闘の真つただ中だと云うのに。

気が付けば真つ白な医務室で目を醒ましたのだから、どうやら自分はまた、戦闘中に発作を起こしてしまつたらしい——それも、得体の知れない激痛を伴つた。

(まつたく……)

口を尖らせながら、碌な制御も利かない自身の肉体に、憤りを通り越して呆れてしまふフレイ。

進水式を終えたばかりの“ドミニオン”の医務室には、一点の汚れもない潔白の天井が広がっていた。無骨な医療用機材を除けば、室内はいつそ白づくめである。このとき彼女には、そんな室内があまりに眩しく、鬱陶しく映つた。

「おや、目が覚めたかい」

目を細めながら、のろりと体を起こしたフレイに声を掛けたのは、傍らのハリーだ。フレイは眠たげに目を擦り、寝癖は適当にほぐしながら彼に問う。

「——アズラエルは？」

尋ねられたハリーは、一瞬呆れた顔をした。

しかし、まずは問われた質問に答えてやった。

「彼なら、自室と艦橋を行ったり来たりしていて、医務室には一度も来ていない」といふか、起きてからの第一声がそれかい？

と、ハリーはしごく呆れた顔で付け足す。フレイは彼から視線を外しながら言う。

「不安なのよ……もし、あの男に病状が知られたらつて考えると」

「最近のきみと来たら、そればかりだな」

無理もない話ではあるが、耳に痛い言葉を返され、フレイは黙った。何もかも凶星であるためハリーの言葉は否定できない彼女であるが、反論することのできたので、不機嫌そうに云い返す。

「それを云うなら、もともとはあなたが処方した薬が大して役に立たなかったせいよ。なんでわたしが医務室こんなどこにいなきやいけないの？」

毒々しさを湛えたフレイの双眸には、みずからの主治医に対する不信感がある。

——中枢神経刺激薬は、睡眠発作を抑える薬じゃなかったの？

対症療法として効き目があるからと説得されて、これを摂取したのだ。にも拘わらず、現実に睡眠発作は起こった。まるで無意味とばかりの現実だ。

フレイが云いたいことも分からないでもないハリーは、独自の考察を返す。

「戦闘中に興奮しすぎたんだらう。摂取したモディオオダールだが、さつきは本来の効能の半分も持たなかったようだよ」

「ふうん……」

「薬物療法も、完璧ではないってことさ」

——じゃあ、どうすればいいっていうのよ……。

思い悩みながら、フレイが不意に視線を上げると、なぜかハリーがこちらをじつと睥睨しているのに気が付いた。ぴたりと視線が合い、しかもいじらしげにニヤついている。あまりに鬱陶しかったので、フレイは「なに」と云つて、彼に発言を許してやった。

「ちなみに、きみを医務室まで運んで来てくれたのは、サブナック少尉だ」

「あつそ」

「——まだだよ？」

「……………」

言葉の中に、何か恣意的な強調を感じ取ったフレイは、鬱陶しげにハリーを睨む。

「……ねえその情報、別に欲しくないわ」

「僕はおしゃべりなんだ、知ってるだろう？」

「うそよ」

「ひどいな。嘘じゃないよ、少なくとも半分は」

「そうね、云いたいことはそれだけじゃない、って顔してる」

目は口ほどにものを云うと伝わるが、その通りだと思つたフレイは、困つたように傍らの機材に頬杖を付き、返す。

「——随分と推してゐるのね、あいつのこと？」

「ばれたか」

ハリーは両の掌を上げ、肩を竦めて見せた。

それは、欧米人らしい仕草だった。

「精神病治療の前例でね——『他人との対話の機会を増やし、幸福を感じる機会を多く与えることで、病気を治した』というのがあるんだよ」

何を云われているのか分からず、フレイは目を点にした。

「……ちよつと待って?」

「きみも年頃の女の子であることには変わりはないんだし、いつそロマンスのひとつでもやらせておけば、病気の改善に繋がるんじゃないかと思うんだよ」

「待って」

「これは僕が独自に考案してみた、新しい医学療法さ。サイコセラピー心理療法ならぬ、ロマンスセラピー恋愛療法」

「聞こえてる?」

本当に饒舌だ、言葉を介在させる余地もない。

つまりハリーは、いち医学者としてフレイにオルガ・サブナックとの交流を望んでいるのである。それはあくまで治療の一環としての仲介であり、実際に効果があるかどうかは定かではない。試行錯誤と云えば聞こえはいいが、そのじつ、ハリーはフレイに「恋させようとしている」らしい。

——研究者って、これだ。

そんなことのためにオルガ・サブナツクを斡旋しているのかと思うと、この男が悪徳業者に見える。どうにも人間の感情を軽んじているというか。まず、ロマンスという言葉に「やらせておけば」って表現を用いること自体、人としてまずどうかと思うが。

「恋すれば人は幸せになるだなんて、その発想自体が偏見じゃない？」

「まあ偏見に近いことは僕も認めるが、倫理的にはあながち間違った発想でもないんだよ」

ひと口に「幸福」と云つても千差万別であり——

これは一概に「こう」として云い切れる性質のものでもないのだが、少なくとも、自己実現という一転的な幸福において恋愛が最も手っ取り早い方法のひとつであることは事実だった。何故なら自分が自分であるだけで、相手が自分の存在を認めてくれるから。

「医療だって科学だよ。いつだって実験と観測の連続で成り立っている」

非情なことを誇らしげに説かれても特に感嘆できないフレイは、ひたすら呆れていた。なかば諦めの視線を向けながら咎める。

「どいつもこいつも医学者って人種は、人様を実験動物ほどにしか見てないのね」

「個より公って云うからね、否定はしない。けど、今回は割と真面目に云ってるんだ」

ハリーは、決して軽率にこんなことを云っているわけではない。その証拠に、弁解した。

「云うけどね、きみに施せる対症療法なら僕はもう十全にやっている。それでもきみを襲う病魔は抑えられない——とすれば、きみ自身の心に障害があると思うんだ」

——というか、それ以外に考えられない。

付け足され、フレイは不機嫌な顔をした。

「なによ。わたしの心が病んでる、とでも云いたげね」

「云いたげ、じゃない云ってるんだ。きみはまず、その歪んだ心の方をどうにかするべきだ」

こういう率直な物言いはフレイは嫌いじゃなかったが、何食わぬ顔で云われると、それはそれで腹が立った。

「表面的な症状を抑える薬物療法と違って、心理療法つてのは患者の精神負担^{ストレス}そのものに働きかける内面的な治療法だ。僕が今までやって来た医療措置とは一線を画すから、きみにも効果が望めるかも知れないよ？」

要するにハリーは、薬物療法を用いても睡眠病が改善されないフレイに対し、今度は心理療法を用いてみようと考えたのである。

その結果、フレイに「異性とロマンスを推奨する」という無神経にも程がある

恋愛^{キユー}輪^{ビツ}旋^ド行^ド動^ドに及んだわけだが、それもこれも患者の病状を改善させようと考えた結果であつて、一概に彼を糾弾できる性質ではないらしい。何故なら彼はそれを冗談で云つてゐるわけではないのだから。

「花の十六歳が、いつまでも戦場に出ずっぱりなんて、やつぱり健康じゃないと思うんだ。ここはひとつ、年齢相応に恋でもすれば、健全な女の子に戻れるんじゃないかな」「要するにそれ、わたしに発情しろつてことじゃない」

「……きみは、もうちよつと他に言い方があるだろ……」

「ないわね、発想に品がないもの」

「胸のときめきは、ティーンエイジャーの特権つて云うじゃないか」

「なにそれ、バカみたい」

フレイは、この愛すべき主治医を悉く一蹴した。

「じゃあ訊くが、ときにきみは、何をしたときに精神的な充足を得るんだい？」

「コーディネイターをやつつけたとき？」

「云うと思つた。ほら、碌でもない」

ハリーは、呆れた。

「きみがそんなんだから、他にいい方法が見つからなかつたんだつてこと、わかつてくれ」

「……。わたしは、恋愛ごっこは嫌いなもの」

その言葉には、含みがあった。

ハリーは、心外と云わんばかりに返す。

「ごっこじゃないさ！ きみには本気で恋してもらわないと意味がない！」

「あなた今、とつてもアホくさいこと云つてるつて自覚ある？ だいたい、わたしにだつ

て自由があるわ」

「そりやそうだ。だから僕は、推してみただけだ」

薬物によつて肉体を拘束されていようと、少なくともフレイは、ひとりの女としての尊厳くらいは約束してもらつてゐるつもりだ。少なくとも精神面まで、外野の研究者に強制される筋合いはない。

——人間の色恋なんて、強制しようと思つて出来るものじゃあるまいし……。

そもそも、精神的なストレスを除去しにかかるのが、心理療法なのだろう？ であるなら、心理的に負担のかかる相手を伴侶に選んでは本末転倒ではないか。いったい何が悲しくて、強化人間の男なんかと——

「——負担がかかる？ 本当にそうかな」

「……えっ」

フレイは、虚を突かれた表情を浮かべた。

ハリーは眼鏡のレンズを吹きながら、淡々として云った。

「彼は善い少年だと思っただけ、僕は。——きみが知らなすぎるってだけで」

言葉には、云い知れぬ含みがあった。

フレイは茶化すように「……こないだ突き飛ばされていた奴の台詞とは思えないわね」と不愛想に返したが「あのときは、あのときだ」と、同様にはぐらかされてしまった。

「きみはもう少しだけ、周囲の人間にも気を配ってみたらどうだろう」

唐突に提案され、フレイは眉を擡める。そんな云い方をされると、まるで自分が独り善がりに生きていくようではないか。咄嗟に心外だと云い返そうとしたが、なぜだか、上手く出来なかった。

ハリーは視線を落としながら続けた。

「今は席を外しているが、彼はきみを医務室に運んで来たあと、きみが眠っている間もずっとこの部屋にいたよ」

想像もしていなかったその言葉に、フレイは感動しようとして、

「——まあ八割は読書に耽っていたから、別にきみを看病してたわけじゃないし、要するに自分の時間を医務室で勝手に潰してただけなだけどさ」

できなかつた。

「部外者って分かったならその時点で追い出しなさいよ、バカじゃないの?」

「医務室の監督者は僕だから、来客をどうしようかと、僕の勝手だ」

「仮にも男女よ?」

患者が眠っている手前、部外者が医務室に居座るのを黙認したハリーも、それはそれでどうかと思うのだ。

「あの男、本なんて読むのね」

「……。それも、あとで確認して来るといい」

もつと云えば、あの男はどうして、医務室なんかで本を読もうと思ったのだろうか?

フレイは怪訝に思ったが、考えるより前に、ハリーが先を続けた。

「きみはきみが思っている以上に、周りの人達に助けられてるんだよ」

フレイ・アルスターは、元は良家の令嬢で、云ってしまえば「温室育ちのお嬢様」である。

露骨に云えば「傍若無人」——その恵まれた出生ゆえに、己がどれだけ周りの人間に助けられているのか、どれだけ周りに支えられて生きているのか——こうした事実を咀嚼する能力に、あまりにも欠けていた内面がある。

このときハリーは、そんな彼女の欠点を指摘したに過ぎない。

「烏溝がましい云い方になるが、ぼくは勿論のこと。バジール艦長だって、きみの病氣

をアズラエルに報告してないだろう」

それを云われると、フレイには返す言葉がなかった。

「ぶっちゃけ、軍規違反もいいところだ」

云われてみれば、確かにその通りである。ナタルはフレイが疾患を抱えている事実を把握しておくながら、そのことをアズラエルに報告していない。

それはムルタ・アズラエルという人物が「ドミニオン」艦内においてどれほど煙たがられているのかを暗に証明しているのだが、問題はそこではなく、少なくとも情報の秘匿は軍人として重大な軍規違反に相当するということだ。それほどに危険な橋を、あのナタル・バジルールともあろう人物が渡るものだろうか？

「バジルール艦長はきみの身を按じているからこそ、この事実を秘匿してくれているんだ」

「軍規違反……！ ああ、バジルール中尉が——」

「今は少佐な」

本人の前で粗相はしてくれな、と言いたげなハリーであったが、フレイはナタル・バジルールという人物に対し、かねてより冷淡で堅苦しいイメージしか抱いていなかった。

だが、その事実を踏まえて考えると、実は非常に思いやりのある、温かな人物である

ようにも思える。

「オルガくんに至つても同じさ。彼が昏睡したきみを『レムレース』から穩便に運び出してくれるから、今もまだ騒ぎにならずに済んでいる」

逆に云えば、彼がいなければ、とつくのとうにアズラエルには勘付かれていたはずだ。「感謝という可笑しいが——すこしは彼等の心遣いに、きみ自身、気付いてあげるべきじゃないかな？」

「……………」

云われ、初めて気付く。ハリーの云う通り、今までの自分は、どれほど独り善がりであつたのか——と。

周りから向けられた温情に気付くこともなく、自分ひとりで生きているのだと錯覚していた。周りの協力がなければ、自分はもう、この場所には居なかつたかも知れないのに——。

フレイはこのとき、周囲の人間への認識を改めていた。

そうして話題が上がつたオルガ・サブナツクは、現在『ドミニオン』の艦長室に呼びつけられていた。

会話の主は、ナタル・バジルールである。

彼女はいつになく冷然として、デスクを挟んで前に立つオルガに向けて云った。

「——きみは彼女……フレイ・アルスターに、優しく出来る人間ではないはずだ」

唐突に呼び出されたかと思えば、開口一番、そんな説教じみたことを云われ、オルガは眉を顰めた。数刻前まで、オルガは医務室で読書に耽っていた。そんなときにナタルから艦長室まで呼びつけられたわけであるが、如何せんタイミングが悪かった。

今回、オルガが読んでいた小説は青年向けのSFファンタジーだったのだが、主人公がすでに死別したと思われたたヒロインと再会し、物語が新章へ動き出そうとしている——！ そのような佳境において呼び出しを受けたものだから、はやく続きが読みたくて、このときの彼はえげつなく不機嫌であった。……だからだろうか？ ナタルから突拍子もない言葉を掛けられ、

「ああん？」

オルガは上官に対しては大変な粗相に当たる横暴な態度を、当たり前のように取ってしまった。

——そんな説教のために、オレの楽しみを奪うんじやねえ。

そう云わんばかりの悪態、しかし、それでも理性が介在する余地はあったらしい？ 慌てて口を塞いだ彼を見て、ナタルは啞然とした後、わずかに苦笑した。

「いや、艦長室に呼び出してにおいて何なのだがな。これは別に、上官としてきみに訊いていることじゃないんだ」

「じゃあ、なんなんだよ」

今だけは上官ではないと判った途端、オルガの中から敬語という作法が消え失せた。単純である。この少年は意外にも扱い易いのかも知れないな、とナタルは思った。

「アルスターが抱えている『疾患』のことは、きみは、もう知っているんだろう？」

「……あー、あの医者のおっさんが、なんか云つてたからな」

「どうして、アズラエル理事に報告しない？」

オルガは、眉を顰めた。人に云える立場かよ、と思つたのである。

「きみ達ブーステッドマンと、アルスターは違うのだろうか？」

「ああ、違う種類の——人間だ」

気を悪くしないで聞いてくれると嬉しい。

ナタルは断りをおいてから云つた。

「つまり、きみ達は旧式の強化人間で、一方のアルスターは、新開発された別種の強化人間というわけだ」

「ごつくり云うな、あんた」

オルガが云えば「性格なんだ」と返つて来た。

ナタルは思案顔で続ける。

「分らないな……。彼女が抱えた疾患は深刻だ、ことモバイルスーツ・パイロットとしては、あまりにも」

ナルコレプシー
睡眠病——

それは日中において本人の意志とは関係なく、唐突に睡眠状態に陥ってしまう脳疾患だ。仮にも人体が電気で動いているものだとすると、日常的に「停電」が起こる欠陥に等しい。それは戦闘中であつても例外ではなく、日常生活においてはモバイル・スーツの操縦はおろか、車の運転免許取得にすら致命的とされているほどの疾患なのだ。

「それを理事に報告すれば、旧式のきみたちは、アルスターに立場を脅かされることもないのだろうか？」

「にべもない言い方だが、それこそがナタルであり、出任せを云っているわけでもないのだ。」

いつの時代も、画期的な新製品が開発されれば、旧式は型落ちとして破棄される宿命にある。それは強化人間にも当てはまるケースであり、新型の『エクステンデット』が開発されつつある今、大西洋連邦が『ブーステッドマン』達に拘り続ける意味はそう多くない。

「旧型が返り咲くために必要なことは、新型が使い物にならないことを立証する、その程

度だろうか……」

だとすれば、なおのことナタルには『リビングデッド』と揶揄されているフレイの病状を、オルガがアズラエルに報告しない理由が分からないのだ。

——フレイのことを貶めれば。

——新型の強化人間は「欠陥品」だと声高に叫べば、オルガは自分の存在意義を取り戻すこともできるのに。

他でもない、オルガ自身がその辺りのことを理解しているはずなのに、彼がやっているのは、むしろその逆だ。フレイの抱えた脳疾患を監督者、つまりはアズラエルにひた隠し、彼女の身を案じ、護ってやってしまっている。

だからこそナタルは、オルガに対して容赦なく訊ねた。

「アルスターに優しくする意味が、いったい、きみのどこにあるというんだ？」

無情なこと——

この上ない発言に、オルガは思わず、不敵に笑った。

「あんだ、あの女の味方なのか、敵なのか——分かんねえな」

「私は事実確認がしたいんだ。偉そうに云ってはいるが、私も理事に真実を隠している手前、どちらかと問われれば味方さ」

「そういう割には、えげつねーことを訊く」

オルガははぐらかすように目を泳がせた後、しばし考え込む振りをして云った。

「いろいろ考えて、割り切ったことだ」

「？」

「あんたに云つても、分からねえだろうけどな」

そう、この艦長には判らない。

——自分たち、強化人間の内情なんて。

オルガは臆することのない、それどころか挑戦的な笑みを浮かべて云った。

「あんたから見ての通り、オレは連合のブーステッドマンだ。こうなる前のことは、もう、よく覚えてやしねえ」

「ン……」

「戦つて、相手をぶつ壊して、そうやって生きて来た。逆に云えば、それ以外には生き方を知らねえし、生き抜くこともできねえ」

——殺されるくらいなら、殺す方がマシだ。

座右の銘というほど殊勝なものでもないが、それを信条に生きることが精いっぱいであることは確かだ。いつだって他人より自分、仲間よりも自分だ。そのような考え方を勝手だと云いたいなら、好きにすればいいとオルガは思う。オルガはあくまでも自分の価値観に従って生きており、その行動概念はどこまでも自己本位、自分勝手なものに過

ぎない。

どだい、戦争の発端となるのは国家や宗教の対立、あるいは主義や主張の違いなどであるが、彼にとってはどーでもいいことなのだ。自分はただ戦争の中でしか生きる術を知らず、敵である者を滅ぼすことでしか生きられない。彼は社会や思想などを背負って戦ったことがなく、大義や正義とやらを信じて戦ったことも一度もない。おおよそ国家や家柄の理想を背負って立つナタルとは、対極の位置にあると云って良い。

「生き残ることに執着して、必死だったんだ」

「だったら余計だ、何故……」

だから、戦って。戦って。戦って——

敵を倒して、壊して、殺して——そうして生き抜こうとした。

そんなときに、どこの馬の骨とも知れない女が現れた。そいつは自分達よりも優れたモビルスーツを与えられていたのだ。

そのとき、オルガは悔しかった。なぜだと思った。自分達はまだやれるのに——まだ戦えるのに。

オルガは生きること執着していたのだが、しかしふと、考えたことがある——
「けど、この戦争が終わったら、オレたちはどうなんだ？」

——それは、終戦後の自分達のこと。

「戦って生き残る。戦争が終わるまで勝ち残る。——けどよ、そうやって本当に戦争が終わっちゃったら、オレたちはもう用済みだろ」

地球軍は、強化人間を元に戻す方法を知らない——そうした真実に気付いたときだったのだ、オルガの中で、何か音が立てて崩れ去ったのは。

戦わなくても、待っているのは死。しかし、戦って生き残っても、待っているのは死ではないか——？

「だからもう、いいんじゃないやねえかって——いつからかそう思った」

ナタルは、絶句した。

その言葉には、疲弊があつた。 齢十七歳の少年が抱くには、あまりにも早すぎる。

「他人を蹴落としてまで生きようとする意味が、オレの中から消え失せただけだ」

「……それは、ある種の自殺願望じゃないのか？」

「さあな、別に死にたいわけじゃあねえよ、オレは。まだまだ、壊し足りないしな……」
しかし、ナタルはこのとき、ほんのすこしオルガの疲弊の意味を知ったような気がした。

——この少年が戦うのは、もしかしたら、生きるためじゃない……？

そう思えてしまうほどに、オルガの声には疲弊が混じっているように聞こえた。戦場で破壊の限りを尽くし、戦績を上げる。しかしそれは、見方を変えれば敵からの憎しみ

をかう行為でもある。

そういう意味では、彼が戦い続けるのは、生き抜くためというよりは、むしろ――

我ながらしやべり過ぎたか、と思いつながら、オルガは艦長室を後にしていた。

――さて、どうしようか。

このとき、読みかけていたジユブナイル小説の続きも気になったオルガであるが、呼び出しを受ける前のような意欲は、何故か吹き飛んでしまっていた。あれだけ続きを読みたかったはずなのに。

――そもそも、この読書の趣味は、一体いつから始めたものだったろうか？

廊下を歩きながら、ひとり考え直す。艦長に伝えた通り、オルガはもはや強化人間になるよりも前の自分を、はつきり思い出すことが出来ないでいた。

しかし、自分は決して、昔から読書が好きだったわけではないと思うのだ。小説を読む習慣がついたのは、それこそ強化人間になった後からだったようにも思える。

たとえば、戦闘待機中のアラートで、クロトが携帯ゲームに、シャニがデスメタル音楽に没頭していたことで、

『オレにも何か、時間を忘れていられるような趣味があればいい』

ほんの些細な思いつきと、ちよつとした興味から始まった趣味と習慣。それが、オルガにとっては読書だったに過ぎない。もつとも、小説を読むことは別に苦ではないし、面白いという感情も確かに内在している。

中でもオルガはジュブナイル小説を嗜好しているのだが、どうしてそのジャンルが好きなのかも、今ではなんとなく自覚していた。ジュブナイル——最近ではライトノベルとも云うのだろうか？ 結局は空想物に過ぎない世界を描いた『夢物語』——それが本当に面白いと感じる、その理由も……。

——考えながら歩いていると、廊下の反対側にひとりの人影が見えた。

燃え盛る炎のような紅い色の髪、上品に結われたハーフアップポニーと、空を宿したような色の瞳。幼さを残しながらも、大人になりかけた美麗な顔つき。

フレイ・アルスターだ。真っ白なキャミソールの上に桃色の軍服を羽織り、前がはだけたその様は「だらしが無い」と云えようが、それを云うなら鬱陶しい両袖を切り落としている自分とて同じだろうと思つて、やめた。

——起きたのかよ、やつと。

何と云うわけでもなく、オルガはそう思惟した。

前のはだけた軍服の下に覗く、キャミソールに浮かんだ膨らみに目のやり場が困る。

實際、廊下を歩く「ドミニオン」の士官達は彼女を二度見したり、盗み見たりしているようでもある。

——だが、アイツは今までずっと、医務室で眠っていたのだ。

そのときから、彼女はパイロットスーツを脱がされたキャミソール姿であつたので、あの恰好は周囲を挑発しているというより、単純に粗末なだけだろう。煽られるだけ馬鹿だよな、とオルガは理知的に自分を納得させた。

「——あれ、おまえ」

互いの距離が縮まって、オルガは無意識にそう云っていた。別に話しかけるつもりではなかったのに、フレイに声を発していたのだ。

フレイはオルガの方を、——相変わらず愛想がねえな、と思ってしまうような——素気ない表情で見返して来た。

「なにか？」

「ああ、いや。……なんでもねえ」

「……」

——綺麗だと、思ったのだ。

勿論、口には出さなかつたが。

（——て、これじゃあ周りの馬鹿共と同じじゃねえか）

猿のように盛った士官達アホどもと同じようなことしか考えられなかった自分に、オルガは額を抱えてしまった。

——そう云えば、以前コイツを問い詰めたとき、コイツは自分で自分を美人だつて驕つたような台詞を吐いていた。

まあ実際、この女は確かに美人だと思ふし、自他共に認めるだけのことはある。もつとも最近では疲労や睡眠不足によつて台無しになつていた感が強いし、本人も実質的に、そういった方面の体調管理はおざなりにしていたようではある。

だが、このときのフレイには『それ』がなかった。

男のオルガには詳しいことは分からないが、このときフレイは、それまで諦めたように放棄していたメイクを施しているらしい。ナチュラルめに整えられた睫毛が目元を引き立たせ、淡い桃色のアイラインが、目元をより魅惑的に造形しているように見えた。オルガは読書をする割に婉曲的な表現が自分では出来なかつたので、直接的にそれがエロいと感じていた。

そしてそれは、魅せ方をよく知っている女の顔付きだとも思った。

——いったい、何があつた？

オルガは不審に思つたが、フレイはついで、こんなことを云つて来た。

「……「レムレース」から降ろしてくれたんですつてね」

「ン？ ああ、気まぐれだ」

フレイは、視線を逸らした。

俯きがちに、恥じたように云う――

「その、ありがとう」

――他人に素直に感謝することなんて、滅多なことではなかったからだ。

医務室を出て来る前、ハリーに指摘されたために、フレイはこうして感謝の念を述べたのだ――が、相手がオルガ・サブナックであることを考えると、どうにもあの男の恣意が働いているように思え、気まづかったが。

オルガはしかし、心底意外だったのだろう――フレイに対して「あ？」と吐き捨てた。「慣れ合いは、しないんじゃないのかよ」

「別に、感謝くらいしたっていいでしょう。気が変わったのよ」

「はっ。可愛くねえ女」

オルガは、笑った。

「呼び止めて悪かったな」

もとより、廊下の向こう側からやって来たフレイは、オルガが来た道の方向に用があつたに違いない。

が、フレイは黙ったまま、足を動かさそうとしなかった。

その双眸には不貞腐れたような、それでいて何かを訴えるような色が浮かんでいた。怒った、といえれば正確ではないが、怒ったような目でオルガを見上げ、その視線の意味を、彼は咄嗟に分かった気になってしまった。

——こいつ……。

が、その先はあえて考えず、一拍置いて、静かに溢す。

「じゃあ——寄つてくか？」

発言に下心がなかったと云えば、それは嘘になるだろう。

オルガは別に、この女のことが好きでもなければ、相手だつて自分のことを好きではないという自覚はある。しかし、少なくとも嫌われてはいない、という自惚れのような気持ちはあつたのは確かだ。

先の視線の中からは、それを確信できた。

もつとも、オルガもフレイに対して「好き」だとか、そんな高尚な情緒を抱いたことはないし、あくまで成熟しかけの女の肉体を弄べるなら「まんざらではない」という限りなく低俗的な欲望を抱いたに過ぎないのだ。

——後から思えば、こんなものは賭けでしかなかった。

——仮に予想と期待が外れたとして、落ち込むだけ無駄なことだ。

オルガは自分にそう言い聞かせながら、自室へと足を向けた。

フレイもまた、何も云わずに、男の後に続いた。

『スクラップド・プリンセス』B

男性士官の個室に、女性を連れ込むことは軍規違反である。

だが、日常的な慣習として罰せられることはあり得なかった。結局のところ、最低限度「五」つの規範さえ守れているなら、男女の行為も黙認されるのが実情である。

実戦中でないこと。個室であること。予備役でないこと。就寝時および起床時に指定のベッドにいないこと。

もつとも、これらを憶えているかも怪しまれるオルガ・サブナックに与えられた士官室は、居住区の一角にあった。

ところで、オルガ達の配属された“ドミニオン”は、かのアークエンジェル級二番艦として建造された同型艦である。アラスカまで“アークエンジェル”に乗艦していたフレイにとつて、この“ドミニオン”は見知った——いや、すっかり慣れた構造になっていたおり、つい先日この艦に配属されたばかりのオルガ達より、彼女の方が艦内に詳しいという奇妙な事情があった。

とはいえ、流石のオルガも自分に貸し与えられた士官室の場所くらいは把握していた

ようだ。彼らは互いに無言のまま、連れ添いながら男の自室を屈指歩いていた。廊下を歩く中では、とりわけ言葉を交わすわけでもない二人。ただ最初に一言だけ、オルガの方から「前くらい閉めろよ」と、胸元のはだけた軍服姿を指摘されただけである。

——強欲な男。

体格に恵まれた年上、青年の背姿を見つめながら、人を小馬鹿にでもしたようにフレイは胸中でそう云った。

フレイはステラと違って社会的な暗黙の常識にも通じているし、女性としての自覚、そしてそれに伴う異性への危機感も充分に備え持っているタイプである。

だからこそ思うのだが、女を自室に誘うことに成功していながら、今さら周りの男を牽制しようだなんて考えは、強欲であろう。こいつは存外に独占欲の強いタイプなのかも知れない——そんな風に考えたフレイだが、よくよく考えれば意外でもないだろう。

——男なんて大概、そんなものよね。

なお、この発言にはフレイの異性に対する価値観が如実に現れており、結局のところ、男を盛りのついた獣程度にししか認知していないため、彼女が男女の行為というものに——「意志疎通の機会」「愛情表現の場」と云った心理的解放感オカズムの含まれる解釈とは程遠い——ひどく無情な印象しか持っていないことが伺い知れる。

「——入れよ」

ややあつてから、オルガがぶつきらぼうに口を開いた。

フレイはようやく彼の部屋に着いたのだと理解して、それまで俯いていた顔を上げた。上げたのだが、オルガの部屋を確認した彼女はそこで、

「――！」

思わず、絶句していた。

案内されたその部屋が、キラ・ヤマトの部屋だったから――

「なッ……」

勿論、それは正しい表現ではない。正しくはオルガ・サブナツクの自室であつて、それ以外であるはずはないのだ。少なくとも「ドミニオン」の艦内においては――。

けれど、要するにその部屋は、「アークエンジェル」におけるキラの部屋と、まったく同じ区画、まったく同じ場所に構えられていた一室だったのだ。衛生管理用にシャワー室などが完備され、軍艦らしく殺風景ではあるものの、下級士官のそれよりは遙かに好待遇だと云える個室。少尉以上の階級を持つ者のみが借りることを認可された、快適な一室だ。

その場所を、フレイよく知っていた。彼女は「アークエンジェル」にいた頃は、大半の時間をここで過ごしたのだ、ひとつしかないベッドの上で。ひとりの少年と、ほとんど同棲するような形で。

「ツ……」

呼び起こされたその記憶は、今となつては確かな痛みを以て、彼女の脳裏と肉体を駆け抜ける。

初めて「女」を喪つた場所。後悔の涙と血を流したその場所で、フレイは再び男を誘惑しようとしている。その事実には気付いたとき、フレイは同じことを繰り返そうとしている自分が、どうしようもなく愚かな女であることに気付かされた気がした。

——なぜ。よりにもよつて、この部屋なの……？

それはひとえに、偶然としか云いようがなかった。

それは「ドミニオン」と「アークエンジェル」が、同型艦であつたから。

それはキラとオルガが、同じパイロットであつたから。

巡り合わせとしか云いよう偶然の結果、しかし、彼女はたしかに「そこ」に招かれていた。

そして実際に招き入れられた室内は——やはり同じ構造だつた。

ただ、たとえ同じ造りの部屋だつたとしても、それでもそこはキラ・ヤマトの——いや「アークエンジェル」の部屋とは異なる雰囲気があつた。それはおそらく、個室に至るところに配置されている読みかけの書籍のためだろう。

室内には数々の小説——ときに哲学書もあるようだ——が抽斗や本棚に丁寧そうに

保管され、そのような内装だけは、記憶の中とは大いに違った。それらが差を演出してくれた——とでも云うべきか、室内に持ち込まれたオルガの私物の数々は、フレイにとって、新鮮さと落ち着きを与えてくれるアイテムのように思えた。

——この男、こんなに多読するんだ。

ハリーからは事前に読書趣味について聞かされていたが、まさか、ここまでとは思わなかったフレイ。意外に感じながら、彼女は卓上の書の一冊を興味本位で手に取った。分厚い本だ、シリーズ本だろうか？ 眺めていると、後方の持ち主がそれに気付いたように云う。

「それ、北欧じゃあ有名な幻想譚小説ファンタジーでな」

「——え？」

「落ちこぼれの主人公が、ある日から裏側の世界に隠されていた魔法学校に入る物語なんだ。最終的には悪の魔法使いと戦うっていう——」

意気揚々と語った声は、日頃と違って無邪気に聞こえた。

「——まあ開戦の頃から、発行が途切れたって聞いたけどよ」

「……そう……」

著者の身に何かが起きたのか、それとも、開戦してそれどころではなくなってしまうのか——いずれにせよ、シリーズの続編を楽しみにしていた者にとっては残念な話で

はあるのだろうか。

「……こういう本、好きなのね」

「笑えよ。自分でも幼稚だと思ってるんだ」

「そんなことないわ。上手く云えないけど、こういう御伽話って、窮屈な現実じゃ得られない想像をくれるもの」

ファンタジーらしい詩的な云い方をすれば——「夢」とでも云うのだろうか。童話とは一種の夢物語であり、フレイも幼い頃は父によく読み聞かせをせがんだものだ。

たとえばシンデレラ、性悪な親戚達から不当に扱われていた少女を、素敵な王子様が見つけ出し、救い出してくれる物語。

「御伽話に喩えると、私は眠れる森の美女ってところね？」

云われたオルガだが、呆れ半分と云った顔で嘆息ついた。

「美女ってオマエな、自分で云うもんじゃねえよ。そういうの」

「あら。わたしでは不服？」

くるりと振り返り、不敵に微笑んだ女。自信に満ちたその挑発的な表情が、オルガからはやけにいらしく、色っぽく見えた。薄暗めに灯した照明のせいか？ いや違う。

(……ああ、このための化粧——)

燃えるような紅髪から、いや体中から——甘く、柔らかで煽るような香りが鼻先を掠

める。

こういうとき、オルガは女というものが卑怯に思える。自分を魅せる手段がある。それに誘惑され魅了されるということは、男としては手玉に取られるのと同義であつて、あまり気分の良いものではないはずだが、彼の中では理性より欲求の方が勝つたらしい。

男は沸き立つ欲求と衝動に駆られるまま、背後から包むような形で女の身体を後ろから抱いた。

「——いや、そんなことなかった」

短く訂正しながら、首から上だけでこちらを覗き返す女の小顔に唇に落とす。

それは、確かめるといふより、ほとんど口を塞ぐような、ぶつけるかのような——
「……。鼻が当たったわ」

当の女から返つてきたのは、ムードなんてものは微塵もない、評定するような一言だった。

——馴れてねえんだ、うるせえな。

云おうとしたが、今度は相手の方から口を塞がれたために、反論のひとつも云えなかつた。言い訳ぐらいさせて欲しかつたのが本音であるが、不思議なことに、段々どーでも良くなつていった。

「——オレが読書に耽つてるのは、多分、自分の人生の中で得られそうもなかった。答えが欲しかったから、なんじゃねえか」

おそらくそれは、なかなか格好をつけた台詞である。そこまで気取ったつもりも無いが、青臭すぎる発言だとは本人も理解していて、他人に打ち明けようとも思つたことはなかつたはずだ。

けれど、彼は現実として口にしたし、言葉に対して明確にフレイの反応を求めてもいた。彼はときに哲学書に目を通すこともあつて、その中に、こんな格言を見つけたこともあるそうだ。

『空想と虚構の産物に耽るのは、己の人生の中で満足を得られなかつた負け組がやることだ』

再構築戦争が始まるより前の時代の、偉人かもよく分からない男が遺した言葉らしい。的を得ているのかは不明だが、少なくとも、辛辣な意見だとしてオルガの胸を打つたことは確かだ。彼が読書を始めた時期が、まさに大西洋連邦のブーステッドマンになつた直後——すなわち、己の人生に取り返しがつかなくなつた後のことだったから。

『おとぎ話は、窮屈な現実じゃ得られない想像をくれる』

それはフレイのように表現を裏返せば、前向きな言葉にも変わる。

——想像をくれる。あるいは、刺激を求めるといふ表現も正しいかも知れない。

空想の産物、幻想の世界に感情移入、もしくは自己投影をすることで、退屈な人生の中に別角度からの“刺激”を求めようとする——閉塞された室内に新しい“風”を取り入れようとする——そして、己の人生の中で得られそうもなかった“答え”を見つけようとする——

「——本を読むのが面白えて感じた理由は、それなんじゃねえかって思うんだ」

オルガは恥じることもなく、このときやつとの思いで吐露していた。

だがフレイの方は一瞬で、それも見透かしたような口調で返した。

「現状に、不満があるのね」

なぜ判ったのか、そう云わんばかりの驚き顔を見せたオルガであったが、フレイから見れば、すぐに分かることであつたらしい。言葉よりも雄弁なものは往々にして存在する、ということか。

「——まぼろし幻想の世界に逃げているのよ。今ここにある現実の世界が、あまりにどーしようもないから」

云われたオルガは、心当たりがないわけではなかったが、納得してはいけない気もし

た。

「そういうことに、なんのか……?」

「少なくとも、捉え方によっては」

上手く誤魔化した云い方をされたが、確かにそうかも知れない、と思った。

「……失望したな」

「こんな生活を続けていたら、誰だって嫌になるわよ」

指摘されたオルガであるが、そんな彼も、一度だけ同僚のクロト・ブエルに云われたことがある。それは相変わらずオルガが読書に耽っているときのこと、本当にたった一度だけのことだったのだが、

『——おまえ、涙腺もろくね?』

クロトにしてみれば、シンプルに感想を放ったまでのことなんだろう。別に咎めていなくても、茶化しているわけでもないことは彼の口調から明らかだったが、それでも彼なりに思う部分はあったらしい。けれど、指摘するだけ指摘して、彼は次の瞬間には興味をなくしたようにゲームのプレイに戻っていった。

相変わらず身勝手なヤツ——そのときは恨み言を抱えたオルガだが、確かにクロトの指摘は間違ったものではないのだろう。実際に自分は、ときに——というよりしよっちゆう創作のキャラクターらに感情移入してしまい、その感動的な展開如何で涙してし

まうことがあるのだから。

——ああそうだ。でも、多分アイツは違うんだろう。

仮にも物静かにひとり読書に耽っているクロトの姿など全く想像もつかないが、それでもきつと、アイツは自分のように創作物にぼろぼろ泣くような性格ではない筈だ。だとすれば、アイツと自分の“差”は何なのか。どうしてオレはこうなのか——

——それは、その分だけ「自分がない」……ということなのだろうか？

現実の世界においては、ただ破滅を待つだけの哀れな強化人間——そんな自分を嘆いている自分。創作のキャラクター達に自己投影をすること、夢物語に恋い焦がれることで、心だけでも救われようとしている自分は、きつと誰よりも“弱い”人間なのではないか——？

「……………」

それはそれで悔しいものだ、と考えながらも、オルガは次の瞬間にはそんな自分を認めるのをやめてしまった。逡巡を断ち、現実に戻り立つ。それは、いま考えるべきことではない、と思っただからだ。

——この女の云う通り、幻想に逃げる必要はない……。

——少なくとも、今だけは……。

だからこそオルガは、目の前の光景へと目を向けた。いま、目下に横たわるのは豊か

な女の肢体。その背にゆっくりと腕を回す。下着を外せば、豊かに膨らんだ熟れかけの双丘が晒された。照明の落とされた室内では見えるものも見えなかったが、触れれば押し返してくるような、しっとりとした質量だけは明確に感じられる。

「知ってるか。胸の上に手を乗せて眠ると、悪夢を見やすくなるんだ」

「男ってどうしてこう、自分の知識をひけらかしたがるの？」

「まあ聞けよ、要するに、胸にかかった重みがそうさせるんだそうだ」

フレイは、艶っぽく笑った。

つまりは彼が何を云いたいのか、判ったような気がしたから。

「オマエがよく魔うまされてるのは、病気のせいなんかじゃなくて、ひよつとしたらこいつのせいなんじゃねえか？」

「それは大変。だつたら削り落とさなきゃ」

「ダメだ、勿体ねえ」

常夜灯のみに照らされた男が、さも満足げに笑った。

渴きとは対極の水気を含んだ舌が、豊かな双丘を舐め上げる。経験がないわけではないが、その感触はどうにも不得手なものであつて、フレイは身をよじりながら込み上げる不快感を押し殺す。硬く食い縛った唇から血が滲んだが、この暗闇では気づかれることもないだろう。今の彼女は性行為というものにおおよそ快楽や安心などを得られる

状態ではないのだが――

「ファンタジーの世界を羨むことはよくあった。仲間と旅したり、冒険したりつてのは、オレ達にとっては無縁なことだからな――ましてや、平和なんてものも」

「私も昔は童話を読んで、よくよく憧れたもの、ね」

――何かを話していないと、この男を突き飛ばしてしまいたいようなほどに。

「愛しのお姫様のため、白馬に乗って颯爽と現れる王子様――なんて現実にいるはずがないのに」

「オレ達にも別の生き方が出来たなら、それはそれで、楽しかったんだろ」

そのとき、フレイが初めて虚を突かれた表情をした。

――別の生き方……？

その言葉から、不意に同郷の学生らの姿が脳裏を過ぎる。

――もし、今も彼らと一緒にいたら、私はどうしているのだろうか？

フレイは今更ながらにして、自分の捨てたモノの大きさを思い知る。友人らとの友情、婚約者からの愛情――覚悟はしていたし、未練はないはずだった。なのに全てを失った今になって、思い知らされた気がした。

――他にも、選択肢はあつたはずなのに。

しかし、そう思う度、どうしようもなく惨めにもなる。

——わたしはもう、この道を選んできました。

強化人間に身を貶め、コーディネイターを滅ぼす道を。その終着点に待つものが身の破滅であったとしても、結局のところ、もう二度と後戻りは出来ない。

「……どうした?」

次の瞬間だった。緊張故よそよそしく、動揺故たどたどしい男の行為に痺れを切らしたように、フレイが馬乗りの形になって彼を押し倒したのは。

ハリーは云っていた。精神的な充足を得られれば、睡眠病は克服できるかも知れない。自己実現において、最も手っ取り早い方法は恋愛だとも。青少年らしい健全で健康な付き合い方は今の自分には出来ずとも、別に構わない。

「抱いてよ、激しく。精いっぱい、わたしを愛して」

結局のところ、天涯孤独の彼女にとつては誰と関係を持つかが不都合はないのである。男が慰めを欲し、女が関係を求めているのなら、たとえ始まりどれほどに低俗的なものであったとしても、結局は合意の上であつて、問題視する必要もない。

愛だの恋だの自覚する前に関係を急げば、何故この男を選んだのか、という質問には答えられなくなつてゆく。だが強いて云うなら、オルガもまた連合の強化人間で、フレイと同類だった。

——惨めで、哀れで、戦うことしかできない……。

そういう意味では、フレイはオルガのことが嫌いではなかった。好きになれるかどうかは、全くの別問題であったとしても。

「……云つたな……？」

挑発と愛撫、それらによつて女の肢肉を貪らんとばかりに熱に滾つた男の身体を、このときのフレイは自分から激しく求めた。

果たして、それはいったい何故なのだろう。そもそもフレイ・アルスターは、人格的にも知性的にも決して劣悪な人間ではない。ある折を気に、すっかり彼女は本来の生き方を忘れてしまったのか？ だから彼女は、女としては劣悪な発想から抜け出すことが出来なかつたし、意中の男を自分の許に繋ぎ止めておく切欠づくりのため、みずから体を差し出すことも厭わないうようになってしまつていた。

——誰のせい？

いや、それは考えるまでもないことだ。

——本当は、家族ババを救つて欲しかつた……！

そのときフレイの脳裏を過ぎつたのは、この部屋の主の顔だつた。繊細で、柔和で、眸の奥に慎み深さと優しさを宿した少年の。

何でもできるコーディネイターでありながら、その異能つぷりを周囲に悟られまいと、必死になつて身を縮めて生きていた——少なくとも、フレイにはそう見えた——少

年。情けなくて、ただ、それと同じ程度には優しい彼。一方的に自分を捨てて、だというのに、そのことを悔やむように謝っても来てくれた。

——謝られるくらいなら、最後まで憎ませて欲しかった！

自分を歪めた張本人。歪み切った彼女の人生は、きつと彼から始まっていた。

「……………」

その瞬間、オルガは無言でふたりの態勢を入れ替え、今度はみずからが上を取る姿勢に移った。そうしてゆっくり腰を前へと浮かせたため、フレイは妖艶に薄く笑み、己の中に男の熱を迎え入れようとした。

暗闇の中では互いの顔を伺い知ることとは出来ない。が、それでもオルガはフレイの表情を正面から捉えて離さず、その瞳が何を映しているのか——彼女がいま求めているものは何なのか、その正体をみずからで確かめようとした。

……………だからだろうか？　だからこそ彼は、そのときのフレイが覗かせた明確な違和感に気が付いた。

「違うな」

ふたりがひとつになるよりも前、その言葉の方が先に放たれていた。

既に柳腰を浮かせ、貫かれる準備を終えていたフレイ。だが一方でオルガは首を振り、はつきりとそう断言した。どこか興醒めした風な表情、彼は見透かしたようにそつとのフレイの頬に触れる。

「お前が見てるのは、オレじゃない——」

「えっ——？」

「お前、オレに誰見てんだ？」

首を振り、はつきりと宣告される。

フレイの中で、時が止まった——ような気がした。何を云われているのかも、彼女には理解できなかった。オルガは淡々として続ける。

「お前には、オレの姿が見えていない。オマエが、求めて、いるのは、絶対にオレじゃない——もつと他の男、別の野郎だ」

「なっ、なによ、そんなこと」

悄然とするフレイには、このとき一切の自覚がなかった。

だが、一方でオルガは思い当たったように青い翼を広げたモビルスーツのことを思い出していた。

「——『キラ』……とか云ったか？ 前にお前が、戦場で叫んだ男の名前」

凶星であったのかどうか、目を見開き、フレイは愕然とする。

——キラ……!?

なぜ、ここでキラの名前が出て来る?

「この部屋に入る前から、妙だと思つたんだ。前はたしか『アークエンジェル』にいたんだよな……お前」

「え、ええ……」

「オレを、そいつの代わりにでもするつもりか?」

「はあ……!?!」

指摘され、そのときようやくとフレイは自らの過ちに気が付いた。

——わたし、さっきは何を……!?!

フレイは無意識の内、この部屋の持ち主に此処にはいないひとり……の少年の面輪を連想していた。この部屋の持ち主は、間違いなくオルガ・サブナックであつたと云うのに。自分でも信じられない、あり得ないと思つたのだが、かと云つて、云われたままで引き下がる彼女ではない。

「で、でも、だつたらどうだつていうの? 女にここまでさせておいて、引き下がるつもり? 男のくせに」

「そうだな。お前と同じだ、気が変わった」

無然として云い捨て、オルガは既に萎れた漲りを仕舞い、そそくさと寝具の上から飛

び降りた。辺りに乱雑にうち捨てられていた衣類を身に着け始め、熱い沼に埋められていたような先程までが嘘のような冷然とした面持ちに戻っていた。

そして時間を同じくして、部屋の中、ひいては艦内中に放送が鳴り響いた。どうやら「ドミニオン」は、これよりコロニー「メンデル」に出立するとのことだ。オーブ本土から脱出を図った残党の掃討作戦のため、パイロット各員にはアラートで待機命令が下され、遅かれ早かれ、オルガ達の個人的な休息は終わりを迎えることとなったのだ。

「へへ。なんだよ、どの道こうなつてたんじゃねえか」

命令違反など本来鼻にもかけない人種だろうに、それでも彼は、今回ばかりは諾々として待機命令に従うつもりらしかった。

数秒違えばみずからのものになっていたかも知れない女を背後に残し、それでも未練など何も感じさせない、どこか清々しい表情でそう笑つてのけた彼に対して、しかし、ベットの上的女はそうは思わなかったらしい。

「なによ………！ なんなのよ、それはっ」

整った爪が食い込むほどに拳を握り、シーツを捲し上げる少女は、その瞳の中に強い怒りを湛えていた。

「結局はアンタだつて、慰めてくれる器が欲しかつただけでしょう!？」

かつての経験と照らし合わせながら、フレイは激情のままにオルガを怒鳴りつけてい

た。オルガにしては随分な云われようだが、否定できることでもなかったのでムツとして押し黙る。けれど、云われっぱなしというのも彼の癩に障ったらしく、どこか挑発的に笑い顔を返していた。

「だから云つただろ、気が変わった」

フレイの発言をまず否定しなかったのは、オルガがたしかに、彼女のことを性欲の捌け口ほどにしか見ていなかったからだ。その点に関しては疑いようなないことで、だからこそ素直に否定しなかったに過ぎない。

——けれど、今は違う。

最初こそ、そういった低俗的な認識であつたかも知れない。だが、自分を通して他の男を夢見られたことに、云い知れぬ憤りを憶えたのは事実だつたのだ。

——手を出さなかっただけ、マシと思え。

それはどこまでも自分本位、自分勝手な考え方のようにも思えるが、今さらこの男にそれを指摘したところで全くの無駄というものだろう。

「空っぽの器じゃない、オレはお前っていう女が欲しくなつた」

「な……………」

力づくで体だけ奪つても、心までは奪えない。瞳に映る姿まででは変えられない。

みなぎる覚悟は、覇氣や自信となつて、オルガを奮い立たせていた。

皮肉なことに、フレイは今はすっかりと目の前の男が認識できていた。先程までの迪々しきは一体何処へいったのか？ 緊張や動揺とは無縁の地にある、戦意や闘気に満ち溢れてゆく男らしい精悍な背姿は、このときのフレイから見てもやけに逞しく——いやに恰好よく見えた。

（重ねていた？ わたしが——!?!）

みずからの肩を抱き、憔悴するフレイには分からない、分かりたくない。

自分が、このオルガ・サブナックにキラ・ヤマトを重ねていたと云うのか？ ただ、似た声をしていた」という——たったそれだけの理由で自分を抱き、何度も重ねた行為の中で実際は別の女を夢見ていた——あの少年と同じように……？

——私は彼と全く同じ。

——彼と同等の、全く同じ過ちを犯した……？

そうして理解した途端に襲い来る、猛烈な嫌悪感。それによって絶句しているフレイに向かって、オルガは堂々として云い放った。

「お前を惑わすあの『元凶』——『フリーダム』とかいう機体キヤッをぶつ潰す」

簡単だ。そう云わんばかりの男の表情に、捕食者特有のギラリとした眼光が宿るのを、フレイは認めてしまった。圧倒され、声も出せずにいる彼女を尻目に、男は歓喜したように続ける。

「フハツ、こんなオレにも、生き残る意味が出来たってことかよ——」
「……やめてよ……っ」

「その『キラ』って野郎の首を手土産にしてやる。『カラミティ』で出撃して、あの『フリーダム』をぶつ潰す——『キラ』ってヤツからお前を奪い取ってやる」

フレイは、震えた。

まさか、こんなことになると思っていなかったのだ。

「だからフレイ——帰ったらお前は、オレの女になれ」

「——やめてったらっ！」

その瞬間、フレイはショーターテーブルの上の書籍を数冊として鷲掴み、男に向かって乱雑に投げつけた。その痼癩は、本を大切にしていたオルガを激高させるための彼女なりの挑発だった。

が、当の本人は眉ひとつ然として動かさず、投げつけられた書冊を同じく乱暴な手付きで跳ね除けた。勢い余って引き裂けたページが宙を舞い、ぐしやぐしやになって地に落ちた本の束。だが、それすらも見届けて尚、彼は拾おうとはしなかった。

(な、んで、怒らないのよ)

どうしようもない無力感に吞まれたフレイであったが、結論から云えば、オルガは既に「本」に対する一切の興味を失っていたのだ。それは彼が、小説を通して幻想の世界

に「逃げる」必要がなくなつたからであり、現実の世界——彼の目の前に、彼自身もつと「手に入れたい」と欲望するものを見つけたから。

しかし、だからと云つて、数多くの物語を読んできた彼になら、判つてゐる筈ではないのか？

『歸つてきたら——』

『この戦いが終わつたら——』

そんな立派な口上を述べた勇者達が、直後にどんな運命を辿るのか。あくまで空想の中の可能性、テンプレートのようなものに過ぎないが、それが迂闊にも、想像が及ばないオルガではないはずだ。

「自分の命を賭けてでも、オレはお前が欲しい。だからオレは「フリーダム」と戦う、そして、ヤツからお前を奪い取る」

決然として覚悟を誓つた男の声に、一切の後いや迷いはなかつた。

キラさえ消えれば、フレイの瞳に映るのは自分だけになる。確証があるわけではないが、その程度の甲斐性ならオルガは絶対的に持つていた。だからこそ、彼女を振り向かせるために「フリーダム」が——キラが決定的に邪魔だつた。

「やめて……！ お願いだから、そんなこと云わないで！」

「フレイ——」

「——アンタだって同じくせに！ この部屋で、わたしに優しくしないでよ！」

シートを握る少女の手に力が籠る。身体は震え、自分がどうやら泣いているらしいことに気が付いてなお、溢れ出る涙を止める術をこのときのフレイは持たなかった。

遠い過去、この忌まわしき「少尉の部屋」に大切なものを忘れてきたフレイにとって、目の前の男はあまりに残酷であった。そして同時に、立派でありすぎた。

(引けねえな、ここだけは)

オルガは事情など知らない。詮索するつもりもない。キラという男と、フレイの間に何があったのかなど、知りたいとも思わない。

——だが、こいつをここまで苦しめた男を、オレは決して許さない。

そいつを殺せば、きつとフレイは解放される筈だ。そうすれば、彼女の目に映る姿だつて変えられる——いつか、自分のことを正面から見ってくれるようになる。単純な思考であるようにも思えるが、過去に苦しんでいる彼女に諦めをつかせる切欠になるかも知れないのは事実だった。

——だからこそ、余計な手助けは必要ない。

覚悟を胸に、男は強く云った。

「——フリーダムは、オレが潰す……！」

そうしてオルガは背を向けて、みずからの部屋から出て行った。

残された部屋のベッドの上で、フレイは呆然としてへたり込むしかなかった。

——オルガと、キラ……？

待ち受ける現実、それは男同士の決闘か。いや違うのだろうか——少なくともオルガは、そのような表現で誤魔化したりはしない。彼はどこまでもキラとの殺し合いを求めており、その果てに自分が勝ち残り、自らの手でキラを討つ結末を願っている。

——でも、私のせいじゃない……！

——ふたりの対決なんて、私が望んだことなんかじゃ……！

いつもらしく責任の転嫁を始めようとしても、これから始まるうとしている現実はいえられない。そしてこの場合、フレイはオルガの勝利を望むべきなのだろう。

しかし、それは「フリーダム」が撃墜され、蹂躪されるということでもある。在りし日のキラ、あの繊細で穏やかだった少年の表情が、絶望に彩られた中で殺されるということだ。

——でも、彼はコーディネイターなのよ……。

だから当然の報いだ、と云いたくて、しかしフレイには出来なかった。何故なのかは分からない。だが、フレイはキラが殺される未来を想像したくはなかったし、だからこそオルガの勝利を望むことは出来なかった。しかし、だからと云って、フレイはオルガに敗れて欲しいわけでもなかったのだ。

「ああ、もうっ……!」

噛み合わない歯車が、フレイを混乱させた。

——オルガが勝てばいい……!

——でも、キラは……!

自分に云つて聞かせるには、フレイの中では、大き過ぎる不安が邪魔をしていた。

——そうして出撃した“レムレース”の中、あれから時間を置いたフレイは酷くやつれた表情になっていた。少なくとも、やさぐれた、と評しても許される程度には表情は感情の起伏を失っており、要するに彼女はひどく精神的に疲れていたのだろう。

そんな彼女の傍らには“レイダー”と“フォビドゥン”の機影があり、後衛型であるはずの“カラミティ”すらも今回ばかりは前へ前へと出て来ていた。

彼女を含めた“G”の四機を迎撃するために、コロニー“メンデル”から飛来したオーブ残党のMSは——こちらを舐めているとしか云いようがないのだが——白銀の“クレイドル”一機のみだ。

〈あれえ、一機?〉

「オイオイオイ、どこ行つたんだよ!」
 「フリーダム」はア!?!」

このとき「カラミティ」は後衛機でありながら前衛を務める彼女達より突出がちであり、それを諷めようものなら砲を構えてぶつ放してきそうなほどに激高していた。

やはりフレイはオルガという男がいまいち理解できない。こんな男のどこに、静謐な読書趣味なんてものがあつたのか?

「なーに張り切っちゃつてんの、オルガのヤツ?」

「さあ?」

間延びした口調で軽口を叩き合うクロト達であつたが、それもこれも、全ては「クレイドル」が単機でやつて来たせいだろう。オルガは兎も角、彼らの中には実戦らしい緊張感など既に微塵も存在せず、敵がたつた一機であるのを認めた途端にやる気というものを失つたらしい。

それについてはフレイも同感であり——二機なら判る。でも、どうして一機?

常識的に考えて、四対一で自分達が負ける筈はない。戦う前から結果の見えている戦いに、どのように緊張感を持てば良いというのか。もはや彼らにとつて、目の前の「クレイドル」などは四人で掛かつて全力を出すにも値しない雑魚同然の存在だった。

「ちえ、詰まんねえ。適当にちやちやつと仕留めちやおうかねー」

クロトがそう余裕がちに前に出ると、仕留めるのは俺だと云わんばかりにシヤニもま

た前に出た。目標にしていた「フリーダム」が見当たらず、オルガもまた——渋々といった感じではあったが——定石通りの後方支援に回った。

多勢に無勢——「クレイドル」との戦闘が始まった。

その結果は云うまでもなく、フレイ達が圧倒的だ。四機の「G」から容赦なく浴びせられる数々の射線、その対応に迫られ、まるで進退もままならない「クレイドル」の顔面を、フレイは面白がるように迫撃して蹴り飛ばした。ステラの機体は姿勢制御もできないまま、回転しながら撥ね飛ばされる。

「一方的に虐げられる気分はどう？ 金髪のお姫様？」

人を小馬鹿にしたような口調と、無力な小動物でも見下すような視線。その両方がえげつない表情を形づくり、通信先の「お姫様」に対して、フレイは威圧的な嘲笑を浮かべて崩さなかった。

「ザフトの艦隊がコロニーの裏側から迫ってるそうよ。キラがこの場に駆けつけようと、駆けつけまいと——どっちにしろ、あなた達はおしまいね」
「キラは来てくれる。絶対に帰って来る……！」

キラへの信頼感が、ステラにそう云わせたらしい。しかし、男女が互いに信頼している風な口振りは、今のフレイの癪に障った。

「大した自信、それとも確信かしら？ 『愛しの王子様が私を助けに来てくれる』——

「はっ、聞いてるだけで虫唾が奔^{はし}る物言いね」

〈愛しの……………？ え？〉

「純情ぶっちゃって、生娘は可愛くて良いわね」

皮肉を返すフレイは、このとき自覚的に発言を選んでおり、お姫様をいたぶる悪女として振る舞うことをそれなりに愉しんでもいたようだった。無知で無力な女の子を虐げる優越感、こればかりは悪女でなければ味わえぬものであるからだ。

「この際だから教えてあげましょうか。キラはね、誰かを助けられるような人ではないわ……………だって彼は、彼は私を」

あんたの代わりに、抱いたのだから。

〈……………？〉

フレイはしかし、それを口にするこゝただけは明確に躊躇った。

——私は今、いったい何を口走ろうとした……………？

目の前には穢れというものを知らない少女がいて、そんな彼女に面と向かって自身と彼との濃密な性体験を暴露してやるのも「吝かではない」程度には意地の悪い考えを巡らせたのは事実だが、それを口にするこゝで傷つき、後悔するだろうはむしろ自分の方であり、そうであるならそれほど虚しい言質もないだろう、と同時に思ってしまった。

「……まあいいわ。あんたがキラをどう思おうと勝手だけど、あんたはここでおしまいよ。その機体クレイドルの首でも引つ提げて返してあげれば、後でキラの悲痛な顔が拝めそうなのね」

ステラという存在に、フレイは少々意固地だった。彼女の中で膨れ上がった羨望と嫉妬、彼女にしては殆どを身の内に押し殺すことができたと思っっているらしいが、実際は駄々洩れであり、その内の大半はステラによって気取られていた。

この場合はステラの方が単純に目敏かっただけなのかも知れないが、彼女はフレイの胸の内に、自分が抱えているものと同種の光を感じ取っていたのだ。それが具体的に何なのかは、ステラには理解が及ばないものだったが。

「……あなたも、キラのことが好きなの？」

唐突な質問が投げかけられ、フレイは呆然とした。返す答えが見つからなかったものがあるが、その問いに答えを返すべきかをまず迷ったのだ。

そして、その問いをみずから放り投げたステラ自身また、このとき自分が何を口走ったのかを正確に理解できていないようだった。

それからはあまりに無様な沈黙が少女達の間流れ、しかし、これを破るようにそのときになって話題の中核が現れる。蒼き翼が戦場にはためき、コロニー「メンデル」から「フリーダム」が飛んで来たのだ。

「——ステラっ!」

翼部ビーム砲「バラエーナ」が放射され、この一射が「レイダー」と「フォビドウン」を牽制する。

キラはどうやら「クレイドル」を目掛けて真っ直ぐに駆けつけようとしたらしい。しかし、結果的にそれは不可能だった。その進路を、当然ながら嬉々として阻む者が現れたから。

「——「フリーダム」アアアアッ!」

「なッ——!?!」

最後衛に位置していたはずの「カラミティ」が、全砲門を「フリーダム」に向けて撃ち放った。純粹な総合火力であれば「フリーダム」をも凌駕しようという「カラミティ」の砲撃が、収束された光の奔流となってキラへと襲い掛かる。

キラはすかさず飛びずさることで光の嵐を回避したが、間髪おかず「カラミティ」は突撃を敢行する。

「今日こそテメエをぶっ潰してやるよ!」 「フリーダム」ア!」

「なんだ、こいつッ——!?!」

少年達の、戦いが始まった。

『少年達の決別』

——ヒトは何を手にいれたのだ！ その手に！ その“夢”の果てに——！
己を戒めるために身に付けたであろう仮面——

これによって己を隠し、己を殺して生きることを選んだ男。
彼の言葉が、脳裏から焼き付いて離れない。

——全てにおいて完璧ならば、人はおのずと幸福になれるのか？

——キラ・ヤマトくん、きみには答える義務がある！

義務？ いったい、何の？

——僕が、最高のコーデイナーだから……？

だから僕は、生まれた時から無条件に幸福だったとでも云うのか？

——誰もがきみのようになりたいと願い、求めたのだよ……！

人が求めた“夢”の果て。

数多の犠牲の上に生まれ出た、唯一無二の成功体。

それが、キラ・ヤマトという名の自分。

—— だけど僕は、本当に幸せだったのだろうか？

仮り初めの平和の中、居住先である“ヘリオポリス”が崩壊したことは、確かに不幸と云わざるを得ない。だがそれはあくまで切欠に過ぎず、モビルスーツに乗ったときから、自分の運命は変わってしまった気がしていた。

戦場に身を置くことで、はじめて発掘された才覚——

戦場においてこそ……いや、戦場においてのみ真価を発揮する異能——

無論、それだけの素養があつたからこそ、これまで自分自身や友人達を護り抜くことが出来た。だが現実には、いつだって“力”が伴う苦悩に苛まれていたのだ。その圧倒的な能力のために疎まれ、利用され、傷つけられてきたように。

キラ・ヤマトの繊細な心に、あまりに釣り合わない凶暴な力——

本当は戦いたくない。しかし戦うことでしか友達を、そして自分すら守れない現実が彼を困窮させてゆく。

強いられたまま戦い続け、勝利することを繰り返す内に、彼は不思議と頼られる存在になつていった。そのとき周りの人間が彼に寄せたものは、確かに絶大なる期待と信頼だった。だがそれは、結局のところキラ・ヤマト個人ではなく、コーデイナーとしての彼——その類稀まれなる戦闘力——に向けられたものに過ぎなかつたのだ。

—— 戦つてくれるだろ？ 大丈夫、やれるさ、キラなら……

——私達を守ってね。だってあなた、コーデインイターじゃない……

戦うことでしか己の存在意義を見出せない無情な現実が、元より繊細な彼を激しく疲弊させた。人を殺すことでしか自衛する方法を知らず、何度も何度も繰り返し返さざるを得ない絶望と、その度に激しく傷ついてゆく自尊心。後世においては「天才故の葛藤」という一言で片付けられてしまうキラの心理であるが、本人にしてみれば深刻な問題であることに変わりはないし、本人がもつとも動揺していた現実なのだ。

——僕は、何のために此処にいる……？

そうして崩れかけた心を繋ぎ止めるために、少年の少年的な生理はひとりの少女に慰めを求め、それはまた別の——結果的にややこしい——問題へと発展していった。

(僕は、欲しくなかった)

本当はもつと純粹に、ひとりの人間として周りに扱われたかった。

もつと違う自分——力だけが全てではない自分があると信じたくて、それを認めてくれる誰かを、心の底から探していたのだ。自分の弱さや、もつと人間らしい所を見つけてくれる誰かを。

——より多くの人を殺せる才能なんて、最悪だ！

開き直って鬼のような人間に変わってしまうことが厭で、今までは可能な限り敵機の戦闘力だけを奪うよう留意した。

けれど、だからと云って対峙して来た人すべてを生かして来たわけではない。そういう意味では、自分の力が他者から憎しみを買っていることに変わりはないのだ。

持てる力が強大すぎるがゆえに、恨みも辛みも、憧れも嫉みも一身に浴びてゆく中では、彼——ラウ・ル・クルーゼが云ったことは、決して間違いではないのかも知れない。

——真実を知り、常軌を逸したその異能ちからを示してしまった君達はもう、平和みんなのところの中へは戻れない！ 弾き出され……押し潰され……いつか、私と同じ絶望を味わうことになる！

何が、最高のコーデイネイター？

何が、人類の素晴らしき結果？

——そんなもの、僕は欲しくなかった。

「後方のナスカ級、進攻を開始しました！ “メンデル” に向け、進軍を開始しています

！」

恐れていた事態がサイの口から告げられる。

バルトフェルドが状況を判じて続ける。

「ザフトの目標はあくまで本艦だろう。『エターナル』には『フリーダム』や『クレイドル』の整備に必要な機材が全て揃っているからな」

現状、三隻同盟が整える布陣——つまりはMS部隊において、『フリーダム』と『クレイドル』の二機は希望である。この際だからハッキリ云うが、この二機がいなければ——仮にどちらかが欠けたとしても——今後の彼らの展望は絶望的であり、それを予感し、確信できる程度には二機の存在は圧倒的な戦力比を占めている。勿論それは、専任のパイロット達の存在も含めてだ。

だからこそ、その二機を今後も万全状態で送り出すために、これ以降は絶対的に『エターナル』が不可欠になるのである。

こうした運用上の弱点をザフトは理解していて当然で、だからこそ彼らは『エターナル』を最優先で墜としに掛かるだろう。一騎当千の怪物、馬鹿正直に『フリーダム』と『クレイドル』との決闘を執り行う必要はない。その母艦さえ沈めてしまえば、二機の整備と補給はすぐにも立ち行かなくなるのだから。

「モビルスーツ来ます！ 熱紋照合、『ジン』十二、『デュエル』、『バスター』！
マーク十八デルター！」

「へクルーゼ隊か……！」

「已むを得まい、とバルトフェルドは号を飛ばす。

へ「エターナル」と「クサナギ」で迎撃に出る！
 「アークエンジェル」は「ドミニオン」をー！
 「わかりました！」

既に「ブリッツ」と「ストライク」は出撃し、港の後方で迎撃態勢に入っていた。一方「クサナギ」からもM1部隊が防衛線を展開しているようだが、しかし、今回ばかりは状況が悪い。

(アマルファイはともかく、ルーキー達にコーディネイターの相手が務まるとは思えんが……！)

今回のステージにおいて、敵は地球連合だけではない。バルトフェルドは実感しているが、ザフト、つまりコーディネイターの部隊というのは言葉以上に脅威的な集団だ。

ナチュラルから見れば、それは誰もが頭抜けた能力を持った兵士であって、これまでにオーブが経験したであろう戦いとは——同族^{ナチュラル}相手に繰り広げてきた地球連合との戦闘とは——明らかにステージが違っている。

「——けツ、ごちやごちやだぜ」

クロトは他人事のように吐き捨てるが、確かに戦況は混乱していた。

コロニー「メンデル」を係留地に定める三隻同盟を挟み込むように、地球軍の「ドミニオン」とザフトのナスカ級三隻が進軍を開始している。入り乱れる、と云えば正確で

はないが、少なくとも三陣営が同じ宙域に介在していることは事実だ。

現在、クロトはザフトと戦う意味はなく——だからこそ、彼は馴染みの二機を相手にしていた。どういうわけかオルガが「フリーダム」の方へ突っ込んで行ったため、クロトとシヤニは残された「クレイドル」を相手にしている状態だ。

——後衛の「カラミテイ」が、前に突っ込むな、バーカ！

同僚を胸中で罵りながら、しかし、クロトはオルガの援護には向かわなかった。それもこれも「レムレース」がその役割を買って出たためであり、そうしたフレイの申し出に対して、オルガはこうも云っていた。

『「フリーダム」はオレの獲物だ。フレイ、オマエは手エ出すんじゃねえー！』

——オルガは果たして、いつからあの女を名前で呼ぶようになったのだろうか？

そのときばかりはクロトも疑問に思ったが、秒でどーでもよくなつたため、改めて「クレイドル」の方に武装を構え直す。子供っぽく無邪気に嗤いながら、シヤニに向けて楽しんで云った。

「「アレ」やるよ？　白いの」

「あーはん？」

「どっちが先に仕留めるか、ゲームでもしようぜ！」

「オレがやっちゃうけど、いいの？」

一匹の白兎を前に、舌なめずりをする猛獣の如く、クロトとシャニは余裕の笑みを浮かべ合いながら「クレイドル」を挟撃してかかった。

「ゲームと来れば、ボクは負けないヨ！」

「じゃあ競争だねー」

落とした『ホシ』を競う。彼らはまるでテレビゲームの感覚で、それより戦闘行為を開始した。

飛び来たる二機の機影を認め、ステラはくつと歯噛みする。あの「G」に搭乗しているパイロット達は、おそらくステラにとって先達に当たる生体CPUなのだろう。エクステンデッドが完成するより前に、実戦投入されていた者達——

——それが、どんな調整が施された生体なのかは知らない。

しかし、こと戦闘力において、彼らのそれはエクステンデッドを凌駕しているように思えた。いや、所詮は強さ比べなど無意味であり、いま重要なのは、ステラが「レイダー」と「フォビドウン」を前に追いやられているという事実であり、現実だった。

（——追い込まれる！）

それは、自分を表したただけではない。すぐにでも後退しないと、M1部隊が後方の「ジン」に撃滅される怖れだけである。

だが現状、彼女に現場を振り切るだけの力はなく、彼女はそれを、ひたすら歯がゆく

思った。

「バルトフェルド艦長」

しばらく黙って戦闘の様子を見守っていたラクスが口を開き、バルトフェルドが振り返った。

「『グサナギ』と共に、すべての火線を『ヴェサリウス』に集中してください。あの艦を突破し、現宙域を離脱しましょう」

一瞬、怪訝そうな表情を浮かべたバルトフェルドであるが、よくよく考えてみれば、喰えぬ作戦ではない。

勿論、方角としては単艦である『ドミニオン』の方へ突破した方が容易いだろう。だが、そうすれば後方のザフト艦からの追撃は免れず、結局は『ドミニオン』を突破した先で、ザフトによる延長戦に持ち込まれる可能性が高い。

だからこそ、仮にナスカ級方面へ突っ切ることができれば、いくら『ドミニオン』とてナスカ級を踏み越えて追撃に出ようなどとは思わないだろう。

「今は状況回避が先です。このまま総力戦に持ち込まれれば、我々に活路はありません」

——何より、無用な戦闘行為は私達の本意ではありません。

毅然としてラク스가云い、バルトフェルドは承諾したように不敵に笑った。

「了解。——その作戦、いただきましょう」

獣の如き咆哮を挙げながら、オルガ・サブナックは「フリーダム」へ砲火を撃ち放つ。「フリーダム」はぎりぎりの所で全ての火線を捌いてみせが、そこへ「レムレース」が援護のビームを一射した。結局はシールドで防がれたようだが、オルガは咄嗟に立ち、そんな僚機に向けて声を放った。

「手エ出すなって云っただろ!？」

これは、男の喧嘩だ。

これはオルガなりの、己の生きる意味を見出すための決闘なのだ。

——これまでオレは、ずっと諦めていた……!

壊して、殺して、その結果、自分がどうなるうとも構わない——今まではただ、漠然とそんなことを考えながら生きていた。どのみち本当に戦争が終わってしまえば自分達は破棄されるのだ。だったら、生きている間くらいは、精いっぱい愉しんでいたいじゃないか。

——どれだけ殺れるか、それとも、いつ殺られるのか？

攻防の中で相手を制圧し、徹底的に破壊してやる優越感。命を賭した駆け引きにおいて勝利する瞬間は、他では得られない快感と興奮を自分に与えてくれた。

けれど、そのような攻防の過程において、仮に自分が打ち負けて殺されようとも、それはそれで後悔はない気もしていた。——だって仕方がないだろう？ 他にやりたいことも、行きたい場所もないのだから。

——それは、ある種の自殺願望じゃないのか？

バジルールって女艦長の言葉が、ふいに脳裏に蘇る。

——ああ、そうとも……。

苦痛も恐怖も、もう嫌だ。いつからか、全てを終わりにしたいと思うようになっていた。この窮屈な現実世界から、逃れたいと思うようになっていた。

——死つう境地に、救いを求めてたんだ……！

現実の一切に絶望していた青年の心理は、空想によつて描かれる世界への熱望となつて、彼の中で読書の趣味へ結びついていった。オルガが小説を通して幻想世界に焦がれていたのは、その分だけ、自分を救つてはくれない現実世界に幻滅していたからだろう。

——そんなときに、ようやく欲しいものができた！

だからもう、本も、死も必要ない。この“フリーダム”をぶつ潰せば、アイツは、オレのこのことを見てくれるようになるだろうか……？

思考と共に、オルガは「カラミティ」を急速前進させ、左腕の二連装衝角砲を「フリーダム」の胴体まで叩き付けていた。PS装甲が物理攻撃を無効化するが、それは衝撃までもを吸収するわけではない。強かにど突かれた「フリーダム」は、衝撃で後方に撥ね飛ばされる。

「…キラ——ッ!?!」

その様子を遠巻きに目撃していたステラが、悲鳴にも近い声を挙げる。すぐさま「クレイドル」を転進させ救援に向かおうとするも、これに覆いかぶさるようにして「レイド」の鉄球が飛来する。

ステラは慌ててシールドを掲げ、鉄球を弾き返す——が、間髪置かず「フォビドゥン」の熱プラスマ砲が放射された。彼らにとつてはゲームに過ぎず、撃墜数の得点を奪い取ることだけに熱中した青年達の猛攻は、競い合うかのような苛烈さを以て、少女の進路を妨害し続けた。

(どうしたの……!?! なんてっ——!)

遠目に見る「フリーダム」は、しかし、明らかに本来の機体性能を發揮し切れていなかった。それどころか、注意散漫といった様子で戦闘を続けており、そのそそっかしさ、危なっかしさというのは、明確にステラが心配になるほどであった。

——しっかりして!

継るような思いで、ステラはキラに呼びかけようとした——が、そうして接続させたモニターの向こう側、映り込んだキラの顔を見、ステラは絶句していた。

青白く、血の気を喪った顔。誰のものであるのか、べつとりとして血液が付着しているヘルメット。その気密の向こう側に覗き見える少年の様相は、異常なほどの発汗を引き起こしながら苦しげに肩で息をしていた。どういう理由か、痛ましすぎる幼馴染の姿が、そこに映り込んだのだ。

(コロニーの中で、なにが……っ)

それでも、自分のために戦い続けるだけの覇気だけは辛うじて残っていてくれたらしい。そこでようやく、「フリーダム」はビームサーベルを抜き放ち、敵対する「カラミティ」が不得手とするであろう格闘戦を仕掛けに向かう。

焦りが一瞬、オルガを支配する。

その瞬間に加速した「フリーダム」の光刃が突き上げ、オルガは一瞬のうちに右腕にグリップしていたバズーカ砲と、両肩から張り出した長射程ビーム砲を削ぎ取られていた。

〈オルガ!?!〉

「ちィッ!」

武装だけを奪おうなんて、どうかしているとオルガは思う。

こっちは死にもの狂いで戦いを挑み、望んでいるのだ。それなのに——!

「逃げんじやねえよ——ッ」

——戦い……いや、男同士の殺し合いから逃げるな!

彼にとつては顔も知らない『キラ』に対し、オルガは激昂して叫ぶ。

——あの女^{フレイ}からも、手前はそうやって逃げたのか!?

「——この軟弱者がアツ!」

武装を削り落とし、すぐさま後退しようとする「フリーダム」を、彼は逃さなかつた。敵機が離脱するより前に、上方へ飛び立とうとするその右脚を掴み止めたのである。

——引きずり落としてやる!

力任せ。ほとんど力任せに腕を引き、「フリーダム」を思惟通りに引きずり落ろす。『キラ』とやらも、この行動には虚を突かれたのだろう——退こうと思つて出来ず、一瞬完全に無防備になつた。オルガはすかさず胸部^ス複列位相^{キュ}エネルギー砲^ラを臨界させ、鼻先の標的にターゲツトした。

——馬鹿な! この距離で、何考えて!?

キラは驚愕する。まさか、接近戦の手段に乏しい「カラミティ」で、自分のことを至近距離に引き留めてくるなど予期しなかつたのだ。それだけに留まらず、敵はあろうことか「スキュラ」を臨界させ、零距离で砲を撃ち放とうとしている。

勿論、正気の沙汰ではない。下手をすれば、自分すら吹っ飛ばぞ——！

「じよ、冗談じゃない！」

キラは敵パイロットの蛮勇に慄然とするしかない。慌ててビームシールドを展開、それと同時に撃ち放たれた高エネルギー収束砲を、殆ど零距离で受け止めた。

しかし、流石に距離が近すぎる。砲圧を消し切れず、エネルギー放射はシールド表面で拡散しながら、“フリーダム”の右足や各部、それを掴み取る“カラミティ”の左腕を融解させてゆく。

このままじゃ押し切られる——！ そう判じたキラは、咄嗟にシールドを引くのではなく、敵機の胸部へ叩き付けていた。

刹那、胸部砲口が爆発し、一拍置いて凄まじい閃光が迸る。二機の機体は爆圧と衝撃に弾き飛ばされ、“カラミティ”は“スキュラ”を破損、“フリーダム”は握っていたシールドを吹き飛ばされた。

しかし、オルガはなおも噛みつくような追撃を敢行した。残された唯一の武装、“ケーファーツヴァイ”を乱射して、執拗なまでにキラへ迫ったのである。

「も、もう嫌だ！ 下がれよ！」

それはキラの、あまりにも哀しい叫びだ。当然のように、その言葉は届かない。

——なんで、そこまでして挑んで来る!?

勝負の結果は、もう出たも同然なのに——と、そこまで考えたとき、ずきりと胸が痛む。僕はやつぱり、この戦いにも勝ってしまった——いや、勝ててしまった、というベキか？ おそらくは、ラウが云っていた『最高のコーデイナー』とやらの、その天才的な能力のために……。

——もう、やめてくれ！

相手が退かないのなら、退くしかない状況を作り出す。

そうした望みに賭け、キラは意を決し「カラミティ」へ突撃した。すれ違いざま「カラミティ」の右前腕ケイブアール！ ツッ ヴァイのシールドを断ち切り、これによつて全ての武装を失った「カラミティ」は、いくら何でも撤退を優先する筈だった。優先する筈、だったのだ。

しかし、決して——そのとき「カラミティ」は退こうとはしなかった。

いきなりのこと。全武装を失った「カラミティ」は、しかし、突如として「フリーダム」の右腕に掴みかかった。ビームサーベルをグリップしている「フリーダム」の右手首を、強引に折り下したのだ。柄を握る掌があらぬ方角を向き、刀身状に固定された光の刃が、そのとき危うく「フリーダム」のコクピッドを掠める。

「……いつ——っ!？」

まさかとは思うが、自決させようというのか。

抗い、もがき、見苦しくもジタバタと暴れ回ったキラは、咄嗟に「カラミティ」を蹴

り飛ばしたが、それでも敵機は手を離そうとはしなかった。

「オルガ……ッ！」

それは彼に残された、実に最後の手段である。

仮にもビームサーベルを「フリーダム」から奪ったところで、規格が合わなければそれが通電することはあり得ない。だからこそ、彼はそれを奪おうとはせず、あえて「フリーダム」に握らせたままにしていることを強いるのだ。

息を呑むフレイの目の前で、二機のモビルスーツはそれぞれに暴れ出す。

もはや二機は武装を無視した取っ組み合いになり、あまりにも鬼気迫る「カラミティ」の暴走に、このときのキラは完全に気圧されていた。繊細な心が、執拗にして獰猛なる野心に圧倒されようとしていた。

「うッ、うわア——!？」

悲鳴を上げたのと、キラの心が折れたのは、ほとんど同時だった。

その瞬間、出力で勝っているはずの「フリーダム」が力負けを引き起こし、「カラミティ」に折り下ったサーベルが、そのままキラのいるコクピッド目掛けて振り抜かれる！ そのとき——

——キラの中で、何かが弾けた。

兵器として研ぎ澄まされたキラの反射神経は、しかし、己の刃が己に降りかかること

を決して許さなかった。

刹那のこと、それまで意識が持て余していた「フリーダム」の左腕が、腰部にマウントされていた「もうひとつの光刃」を正確に引き抜いていた。そこからキラ・ヤマトの反射的——余人から見れば『神速』と云つても過言ではない——スピードで繰り出された抜剣が光の弧を描き、その斬撃を以て、キラはみずからの乗機である「フリーダム」の右腕を斬り捨てた。

切断された「フリーダム」の右腕は同時に電炉線が遮断され、瞬時にビームの発心が止まる。これにより「カラミティ」が繰り出した斬撃は空を切り、パイロットは断ち切られた「フリーダム」の右腕と、その掌に握られたビームサーベルだったものを握り締めながら、愕然とした。

その一瞬が、最大の命取りである。立ち尽くす「カラミティ」の急所——コクピッドを過たず、キラは左手の光刃で斬り抜いた。それは窮地に追い詰められた鼠が、本能的に發揮する動きや力と、よく似ていた。

紅蓮の炎が溢れ出して、青碧色の「カラミティ」を包み込む。

前面からとてつもない熱が襲い掛かり、自分自身の肉体が、迫り来る気体と同化して

行った。

——あ……？

何かを思惟することもなく、オルガは熱の中で、身体が溶けてゆく感覚に陥る。
ミンチより酷く、粉々になるような感覚だ——

——オレ、死ぬのか？

やつと、欲しいものを見つけたのに。

まだ、これからだと思つたのに。

——これが、オレの『性能』げんかいだつたつてことかよ……

顔も知らない『キラ』——キラ・ヤマト。

あいつは、俺よりも凄じ『性能』を持つていた？

だから俺は、負けたのか。

——だから俺は、ここで死ぬのか。

悔しさ。

哀しさ。

しかし不思議と、オルガの中では、それ以上に安らぎが溢れた。

——やつと、逝ける……？

それは、本人が決して口に出したことのない切望。

——やっと、苦痛から解放されるのか。

戦うことを強いられ続ける、人生という名の不幸から。

——もしも来世つてものがあらんなら、魔法の国に……。

行つてみたいと、そう思う。

願わくば。そう、願わくば小説の中に夢見た穏やかな世界へ。

戦争だらけの世界（こんなせう）ではなく——もつと、希望に溢れた世界へ。

そうすれば、オレはもつと、マシな人間に生まれ変わるんじゃないか——？

——あなたも、わたしを置いていくの。

最後の最後に、女の声が聞こえた気がした。

答えようとしたが、意識が熱の中に消え、何も考えられなくなつていった。

「——オルガああアッ!？」

僚機であつた「カラミテイ」が爆散し、クロトが狂おしく声を挙げた。

別段、彼の死に情を寄せたわけじゃない。ただ、彼にとつては自分達三人がやられるなんて未来を、想像にもしていなかつただけ。

「うわー、綺麗なひかりい」

シヤニに至つては、何が起きたかすら正確に理解していない様子であり、フレイもまた、一見すると花火のようにさえ見えてしまう爆発を前に、言葉を噤んでいた。

——不思議と、悲しくはなかった。

——寂しくも、なかった。

むしろフレイも、クロトと同じように何も感じていない、と云つて良かった。ああして、自分の目の前で散つていった男に向けて、絞り出せた言葉と云えば、精々、

(馬鹿な男……)

呆れにも似た、哀れみの一言でしかなかったのだから。

——戦うことしか、できないくせに。

最後の最後に、戦うことをアイツは望んだ……。

「ほんつと、馬鹿みたい」

フレイはそつと瞼を閉じる。視界が暗がりにも包まれたその瞬間——体の中で何かが目まぐるしく昇華されていく感覚に陥る。頭の前からあらゆる神経が刺激され、しかし、それは薬物による弊害などではない——神経のひとつひとつが過敏になった感覚は、苦痛を伴う薬物のそれとは明らかに違う反応のように思える。

すつと眸を開いたとき、見える景色が違つて見えた気がした。彼女はいつもより凄惨

な目つきで、決闘における勝者となった“フリーダム”を睨む。

——彼らの戦いに、水を差そうと思えば不可能ではなかった。

勝ち残った男を選ぼうなんて、傲慢な考えを持っていただけでもない。それでも、フレイが二人の殺し合いに割って入ろうとしなかったのは、やはり彼女自身が、心のどこかでキラとオルガの決着を望んでいたからなのだろう。

勿論、立場から言えばオルガに勝って欲しかったわけであるが、結果的に彼は敗北した。死に急ぎが本当に死んでしまったという解釈も間違いではないのだが、それでもフレイは、彼には勝って欲しかったのだ。

——涙すら出ないのは、どうしてだろう……？

通信先のキラは、フレイとは対照的に瞳の色を取り戻していた。憑いていた悪霊でも祓われた事後のように、その顔は繊細なキラらしい顔つきに戻り、そして、その繊細さゆえの昏い恐怖で塗られていた。

「殺したかった、わけじゃない……っ」

その独白は今さらなものであり、何を云ったところで最早言い訳にしかならないのだろう。ただそれでも、このときのキラには、彼を殺したという自覚が本当になかった。気付いたときには“フリーダム”の振るったサーベルが“カラミティ”の急所を捉えていた。何時の間にか“カラミティ”が視界の中から消えていた——その程度にしか、

キラは事態を正しく認識しかできていなかった。

「あなたがいけないのよ」

悠然として、フレイはキラにビームライフルの銃口を向けた。……何故だろう？ そのとき不思議と、撃てば「フリーダム」がどこに逃げるのか、彼の呼吸が見えるような気がした。

——穏やかなキラ。

——優しいキラ。

戦うことを厭い、戦えてしまう自分を嫌悪しているキラ。

だからこそ今、苦しんでいるキラ……。

「全部あなたが、そんな『力』を持つているから……！ 持つて、しまっているから」

——だから、あなたは戦わなければならなかった。

戦うことを厭いながら、周りに利用されなければならなかった。

——だからあなたは、あの男と殺し合わなければならなかった！

「だから私も、あなたを利用してしまった——」

今なら分かる。

——とても素直に、あなたが見える。

今なら、理解してあげられる——

「本当のあなたはそんなにも優しいのに、そのことに気付かないまま、傷つけて、戦わせて！」

フレイ・アルスターにとって、キラ・ヤマトはナチュラルもコーデイネイターも関係なく、ひとりの人間として好意を抱ける人間のはずだった。

しかし、それをするには、彼が持つ強大な力が、あまりにも邪魔をしていた。

〈僕だって、欲しくなかったんだ……！　こんな、こんな力……！〉

「あなたがそんな風だから、あなたには敵ばかり増えるのだから、わかってよ！」

そしてあなたは今、オルガを殺した。

——だから、私はあなたを許さない。

だからこそ私は、今からこうして、あなたの敵になる！

「もつと、違う形で出会えていれば良かった！　あなたとは、もつと違う形で知り合いたかった！」

トリガーに引いた指に、力が籠る。

「——そうすれば、わたしはあなたを」

好きに、なれたかも知れないのに。

最後の呟きは言葉にならず、次の瞬間には“レムレース”からレーザーライフルが乱射されていた。放たれた赤色の光条が“フリーダム”を捉えんと襲い掛かる。既に

シールドを失ったキラにこの砲火を防御する手段はなく、彼はこのとき、回避運動を取ることすらできなかつた。

だからこそ——ステラの中で、何かが弾けた。

目は据わり、表情という表情を失った瞬間のステラは、咄嗟に二挺のビームシールドを全霊で擲なげはなつた。勢いよく、パージされた“盾”は各スラスターを全開にし、その内の一基が“フリーダム”の眼前に過たず滑り込む。

キラの鼻先に舞い降りた“盾”は、次の瞬間にキラを飲み込むはずだったビームを正確に跳ね返す。それと同時に、もう一挺のシールドが“レムレース”本体にビーム砲を放ち、フレイは対処のためにキラへの攻撃を中断するしかない。

「ええい……っ—」

そのときになって、脇目から“レイダー”が“クレイドル”に突撃を敢行した。僚機をやられた報復か、ありつたけの熱線が乱射されるが、ステラは背部MMI—M12リニアキャノンを切り離し、これは無造作な射線に対する有効な囷となつた。

砲身が射抜かれると同時に爆散し、この煙幕に目を奪われた“レイダー”の死角から“クレイドル”は逆に迫ってみせる。ビームジャベリンを一閃させ、右腕を斬り落とされた“レイダー”は、やむを得ず後退してゆく。

それすら確認しないまま、ゲシユマイディツヒ・パンツァー “クレイドル” は電磁砲を “フォビドゥン” に斉射。エネルギー偏向装甲はあくまでビーム兵器を歪曲させる装甲であり、実体弾まで屈折させる能力は持ち合わせていない。シャニは光速で去来する電磁砲を受け止めたが、そうして防いだ衝撃ごと後方に押し飛ばされた。

かくして二機を振り切った “クレイドル” は、直ちに “フリーダム” の援護に向かう。ドラグーンに翻弄されつつあつた “レムレース” に更なるライフルを撃ち放ち、可能な限り “フリーダム” から引き剥がしたのだ。

「キラさがつて！」

ステラにも、分かつているつもりだ。

——キラにはできない……っ！

心が一度でも受け入れてしまった相手——フレイ・アルスターと戦うことなんて……

！

「突破するぞ！ ——ラミアス艦長！」

へわかりました！ キラくん達にも打電します！

“エターナル”と“クサナギ”が連携し、“メンデル”後方のザフト艦——中でも“ヴェサリウス”に向けて艦砲を一斉発射している。そのうちの一射が“ヴェサリウス”の右舷に直撃し、姿勢制御を失った“ヴェサリウス”は瞬く間に編隊から脱落してゆく。こうして空いた抜け穴へと“エターナル”と“クサナギ”が最大戦速で駆け抜けていく。

「あとは“アークエンジェル”だ！ どうした!？」

へ“フリーダム”の着艦を確認！ でもまだ——“クレイドル”が！

ステラに後退を促されたキラは、自失しながらも“アークエンジェル”甲板へ着艦していた。

残るモビルスーツは、“クレイドル”のみ——

「サブナック少尉……!」

モビルスーツの爆発は、“ドミニオン”からも悠に確認できていた。突如としてGAT-X131のシグナルが消失し、^{ロスト}ナタルはぎゅつと拳を握り締めた。

——また、ひとりの少年を失った……。

そんな彼女の逡巡を踏みにじるように、無神経な言葉が傍らから響く。

「ちッ、最期まで役立たずなッ」

アズラエルである。

確かに上層部の人間にとってみれば、生体CPUはあくまで「モビルスーツの部品」で過ぎず、そこに彼等を人間として扱うだけの認識はない。それゆえに、成果の上げられない素体は単純に云えば粗悪品でしかなく、まして、勝手に突っ込んで撃破されるなど言語同断なのだろう。

しかし、それでも故人を愚弄するようなアズラエルの発言に、ナタルは反感を憶えずにはいられない。アレ——いや、彼にもひとつの人格があり、そこにも数々の苦悩があったはずなのに。アズラエルは、毛ほども理解しようとしなのだから。

もつとも、オルガを人間として認識していないのだから、ある意味では、それも当たり前のことではあったが。

「『グアークエンジンジェル』、戦線を離脱していきます！——このまま突っ込めば、本艦がザフト艦隊と鉢合わせになります！」

ナタルは即決して応う。

「ここでザフトとやり合っても何にもならない。信号弾撃て！ こちらも現宙域から離脱する」

そのとき、オペレータが声を挙げた。

「『フオビドウン』『レイダー』の帰投を確認！　しかし——『レムレース』が！」
「なに？」

目を眇めて見れば、いまだ暗黒色の機体は、白銀のモビルスーツと戦っているようでもあった。

残るモビルスーツは、『レムレース』のみ——

「——ちよこまかと動いて！」

キラを逃がすことに成功していた『クレイドル』だったが、今は『レムレース』に捕捉され、宙域を離脱中の『アークエンジェル』や『エターナル』に向かえずにいる。その『レムレース』もまた、戦況が動転したため——あるいは『カラミティ』を目の前で喪つたため？　——母艦である『ドミニオン』の撤退の信号弾に気付けずにいた。

戦いにのめり込んでゆくフレイであったが、しかし、それはステラも同様だったのかも知れない。沈着冷静に二基のドラグーン・シールドを制御し、さらには護衛すべき『フリーダム』を離脱させた彼女の手腕には凄まじいものがあつたが、冷静な頭に反して気持ちは『レムレース』との『決着』を望んでおり、それはステラ本人もこのとき自覚

している感情と高揚であった。

次の瞬間、ステラはみずからに向け突貫して来た“レムレース”のビーム・サーヴァーを真正面から受け止めていた。叩き込まれた斬撃は、軌道こそ読み易いものの、遥かに重い一撃だ。そこから二撃、三撃と連続して叩き込まれた刃であったが、やはり、純粋なパワーで云えば“レムレース”が上を往く。次を浴びれば態勢を崩される！

——咄嗟に予見したステラは機体を後退させ、またも両腕から“エンドラム・アルマドローラ”を射出した。

そう来ると思った——！ フレイは据わった目つきで、射出された二基のドラグーンをせせら笑う。

「嗤えー！ “レムレース”」

暗号のような言葉が呟かれ、それと同時に“レムレース”の紅眼が明滅し、さながら嗤ったようだった。次の瞬間には“レムレース”の「角」に当たるツインアンテナから“バチルスウエポンウイルス”が散布され、真紅色に色づいた汚染粒子が“クレイドル”を飲み込まんと、大きな波濤となった。

——ドラグーンが奪われる!?

ステラは瞬時に二基のドラグーンを手許まで引き戻し、防衛策として機体の『全方位防御帯』——“アリュミューレ・リユミエール”を機体周辺に展開した。放散された光

波粒子が“クレイドル”を取り囲み、繭となって外部からの干渉——真紅色の汚染粒子の浸食を喰い止める。

——と、そのように思われたときだった。あらゆる物質の干渉を跳ね返す“アリュミュール・リュミエール”が、一刻おいて真紅に染まつたのは。

「え——!?!」

その瞬間、聞き捨てならない駆動音を“クレイドル”が内側から響かせた。異常を察知したステラの目の前で、展開された全方位防衛帯が、翡翠色から真紅色に変色してゆく。

あえて可笑しな表現を用いるなら、このときの“クレイドル”は、全身が赤く発光して見えた。フレイから見てもそれは、敵の機体が全身に炎を纏ったかのようにすらあつたのだ。

「な、なに……? どうしたの“クレイドル”——!?!」

しかし、そうして真紅の“炎”を纏い始めた“クレイドル”の中、ステラは手許に計器類に叩き出されている数々のパロメータ——それら「異常」とも云える暴走した値に戦慄するしかない。

(一)、壊れる——!?!)

パイロットであるステラが正しくそう予感してしまう程に、このときの“クレイドル

“はおかしくなっていた、暴走していたのだ。駆動系が自壊寸前の激音を轟かせ、機体のステータスはどこもかしこも事故としか思えない異常値を導き出している——!?”

ステラはその末恐ろしい感覚が、実働実験中のMSに乗っているときのそれに近いものであるように思えた。何がどこでおかしくなっていて、どういった事故を招くかも分からない——胃がきりきりと締め上げられるような不安感と恐怖感は、テストパイロットを拜命された者達が日頃から苛まれている恐怖感覚だ。

——何の、イレギュラーなの!?”

疑念に思った次の瞬間には、完全に“クレイドル”は狂っていた。本来青色であるはずの双眼は既に真っ赤であり、半月状の六枚の羽根もまた、爆炎を放出しているかの如く真紅にはためき、揺らめいている。

フレイは目前で巻き起こった突然変異に驚愕しつつも、できるだけ冷静に対応を行うとした。左腕の“トリケロス”からタクティカルランサーダートを抜き放ち、敵機が全身に纏う『真紅の光波防御帯』を掻き消そうとしたのだ。

——そしてそれは、全く無意味な行動だった。

接近を仕掛けたその瞬間、槍を構えた“レムレース”の腕が、半ばから断ち切られ、爆散したからだ。

「!?’

——近づいただけで……!?

「攻性のビームシールド……!? そんなの」

検証するようにビームライフルを応射したが、砲火はすべて、赤色の防御帯に弾き飛ばされてしまった。

「——くッ」

そこであろうやく、さすがに分が悪いと判断したのだろう。

それきり「レムレース」は猛撃を中断し、大人しく「ドミニオン」に撤退して行った。

（何なのあの機体……! 今まで、あんな力を隠してたの……?）

フレイの憶測は完全に見当違いだったのだが、そうして「レムレース」が現場から離脱すると、不思議と「クレイドル」の防御帯も翡翠色に戻って往った——白銀のメインカラーに、穏やかなシアンブルーが駆け抜けた鮮やかなカラーリングだ。

——なん、だつたんだろう……?

極限の中で、未知なる反応を起こした「クレイドル」を、ステラは疑わしく思った。

本当に、今のは一体何だったのだろうか? と——。

「……「アークエンジェル」、今から帰投する——」

その声に答えたのは、ミリアリアだ。

「良かった、無事だったのね。ザフト艦に気を付けて、帰って来るんだよ」

「……………うん」

そう云った、矢先のことである。

突如として、ステラの耳に警告音が鳴り響く。ステラが瞬時に機体を後転させると、それまで彼女がいた空間に、数発のビームが撃ち込まれた。数発の光条が空間を薙ぎ、
(新手?)

思惟した彼女は、すぐにビームライフルを構えた。

確認された反応は——ふたつだ。

熱紋照合を行えば、そこには、見慣れたような反応が映し出された。ステラは、きゅつと歯噛みした。

「……………いー」

遠方より現れた敵機は二機。

G A T—X 1 0 1 “デュエル”と、G A T—X 1 0 2 “バスター”——ザフトの部隊だ。

既に“ヴェサリウス”は突破されたというのに、仕掛けて来たというのか？

「イザーク、ディアツカ……………！」

「見つけたぞオ、クレイドル”——！」

大人しく、とはいかないようだ。

ステラは“アークエンジェル”への帰還を断念し、ひとまずは、迎撃の姿勢を取った。

『ワールドエンド・トリガー』

——きつと以前にも、こんな状況ことがあつたような……？

漠然と思い返しながら、ステラは遠方から飛び来たる二機のモビルスーツを認めていた。彼女にとつては懐かしくも思える「デュエル」に「バスター」——そしてそれは間違いなく、イザークとディアツカだ。

彼らは既にこちらを捉えているらしく——むしろ自分をターゲットにしていたのか？ ——躊躇も遠慮もなく、それぞれの銃口をこちらに向けている。ステラはひっそりと二挺のシールドを分離させ、これを宇宙の闇の中に手放すように泳がせていった。

〈見つけたぞ、グレイドル！ ステラだな……！〉

「イザーク」

へよくもおめおめと——！ オレたちザフトを裏切ってくれたなア！

裏切り。己の立場をそのように形容され、ステラはぎゅつとして胸が締め付けられる。

嗚呼、確かにイザークにとっては、目の前の現実——「グレイドル」を奪取したステラがザフトから離反したこと——こそが全てであるのだろう。

けれども、ステラの方にも言い分というものがあり、ありながらも、やはりそれを言語化できずに口籠っている、状況を見かねた彼なりの助け舟か、ディアツカが茶化するように二人の間に立ち入ってきた。

「——なあ、前にも同じような状況があつたよな？」

「ディアツカ」

「へ忘れたのか？ オレやイザーク——あのときはニコルもいたか？ ——が寄つて集つて、地球軍にいた『^オディフ^マエンド^エ』をとつ捕まえたときだよ」

敵に向けるものとは思えない、どこか気安さすら感じる口調でディアツカが云い募る。

「へあれから随分と状況は変わったが——まあ、なんだ。悪いことは云わねえ、反抗なんてやめて、こつちに戻つてこいよ」

女に手を上げるのは趣味じゃないんだ、と付け加えたディアツカらしい常套句であったが、性について無頓着なステラ——そもそも女性としての自覚が完全に足りていない彼女に対し、性差別的な脅し文句はほとほと無意味であつたことだろう。

「へ——でない、今回もまた、力づくでわからせることになるんだぜ？」

〈今度ばかりは容赦はせんぞ！ アスランを破つて、いい気になっていたようだが〉

云いながら「デュエル」はビームライフルを構えた。威嚇ではなく、確実にトリガーを引こうとしている。

〈オレ達がやられるわけには、行かんのだあ！〉

アスランの同僚としての矜持が、イザークにそう云わせていた。

次の瞬間、「デュエル」のビームライフルが火を噴いた。「クレイドル」が放たれた光条をかわずと、「ディアツカは「おいおい」と云いながらも、ポッドから無数のミサイルを解き放とうとする。

と、そのとき突発的な衝撃が「デュエル」と「バスター」を襲った。こつそりと周辺を泳いでいたドラグーンが、彼らの死角からビームキャノンを発砲したのだ。

——「クレイドル」は何の動きも見せていない！ なのに、なんだ!?

機体を立て直そうと思ったとき、ビームに撃たれた「デュエル」にはビームサーベルしか武装が残されておらず、すべての遠距離武装を破壊されていた。「バスター」も実体弾兵装だけが残された。

〈なあ!?!〉

「ごめんね……!」

そうして「クレイドル」は、二機からの追撃を振り切つて「アークエンジェル」への

合流を果たした。

L4宙域からの離脱後、*“アークエンジェル”*の医務室では、ムウが負傷箇所点滴を打たれて横たわっていた。傍らにはマリユートの姿もあり、彼女の手許には、数冊のファイルが重ねられている。

その書冊の数々は、ムウやキラが*“メンデル”*を立ち去る際、ヒビキ博士のオフィスから拝借したデータの品々だ。マリユートは目の前に横たわる恋人の額をそつと撫でながら、鷹揚として云う。

「キラくん、倒れたそうよ。*“エターナル”*に着艦して、すぐ……」
「……無理もないな」

ムウは痛みを滲ませた表情で云った。キラは知りたくもなかった自身の出生——ただでさえ残酷な真実の数々について、最も衝撃的な形で突きつけられる形となったのだ。

目の前に立ち並んだ数々の培養槽、成形を終えるよりも前に朽ち果てた幾多のきょうだいたち。煽情的な言葉の数々により明かされたキラ自身の才覚——ラウ・ル・クルー

ぜ曰く「在ってはならない力」——によつて、その直後に“カラミティ”を撃破している。

——撃破？ いや、人間をひとり、殺したのだ。

本当に、この短時間の間に色々なことが起きた……起こり過ぎたと、ムウも思う。マリューが膝元の資料——正確にいえば、ムウの幼少期の写真——に安らかな目を通してると、医務室のドアが開いた。部屋を訪れた人物に気付いて、マリューはすこし驚きに目を開く。

「あら」

訪れたのは、パイロットスーツから士官服に身を改めたステラだった。小動物のように入口のドアに肩を寄せ、恐る々る、といった風に部屋の中を伺っている。

……いや正しく云えば、マリューを伺っているのだろう。

なにせ以前、マリューは彼女に対し、ちよつとした嫉妬心を向けたことがある。そのときは冗談のつもりで立ち振る舞っていたのだが、どうにもステラには伝わらなかつたらしい。素直な子だ、自分へ向けられた感情をそっくりそのまま自分の中に受信してしまふタイプなのだろう。

「どついで、いらつしやいっ」

母親が娘をなだめるように告げ、マリューは今まで自分が坐していた——パイプ椅子

だが——席をステラに譲ってあげた。部屋の隅に畳まれていた別の座席を新たに持ち出し、わざわざ自分の方がそちらに座り直す所作は、彼女なりの心遣いである。恋人のささやかな気配りに微笑しながら、ムウはしかし、ステラという来客が現れたことについては驚いていた。

「キラについててやらなくていいのか？ あいつ、今——」

「——ラクスト、カガリって人が、一緒みたいだから」

「……。そうか」

珍しく被せるように放たれたからか、ムウはそれ以上を詮索しない。

ステラとしても、そのふたりがいるのなら「キラも大丈夫」と考えたのは事実である。これはステラが先日になって知ったことだが、カガリという人物は、なんとキラと姉弟きょうだいの関係にあるらしいからだ。ステラはカガリと親しいわけではなかいのだが、少なくともきょうだいきょうだいが傍に寄り添うことは「いいこと」に思える。現在のステラやマユの置かれてある境遇を考えれば、絶対だ。

「ムウ、コロニーの中で、ラウに会ったの？」

どこかで小耳に挟んだのだろう。ステラが訊ね、ムウは「いま、その話をしてた」と答えた。ステラは改めてマリユウの隣に座り、ムウは真実を説き明かす。

「ラウ・ル・クルーゼ。アイツは、オレの親父——アル・ダ・フラガの……成り損ないの、

クローンだった」

「……………」

「オレの親父つてさ、傲慢で、横暴で、疑り深くて。——オレがガキの頃に死んだけど、そんな印象しか、なくなつて」

苦々しい表情で語るムウの傍ら、マリユーが手許の資料をステラに手渡した。それは、ヒビキ博士による日々の憶え書きだった。

——ラウ・ラ・フラガが“失敗作”として破棄されたことについても、そこには綴られてあつた。

コロニーの中で、ラウ・ル・クルーゼを名乗る男の話した以上の真実が、そこには書き下されてあつたのだ。

「生物の遺伝子には、生き長らえるにつれ擦り減つてゆく、テロメアという要素がある。——まあ手短かに云やあ、人間の寿命つてところなんだろうが……」

生きることと老いることは、切り離すことのできない自然の理だ。生体の老化が進むほど、遺伝子の中で摩耗したテロメアは再生能力を失い、死滅してゆく——

ユーレン・ヒビキ氏は明晰な頭脳を持つ優れた学者であつたようだが、結局のところ、テロメアが抱えている『寿命の問題』については克服することができず、アルにアル自身のクローニング依頼されたとき、アルと同じ寿命しか残されていない複製人間を生み

出すことしかできなかった。

そのとき、すでにアルは高齢と云える年齢であり、生み出された複製人間は、そんな彼と同じ寿命しか残されていない状態でこの世に産み落とされた。

——そうして、生まれたのがラウ・ラ・フラガ。

ラウ・ル・クルーゼは、一方的に捨てられたのだ。

とんだ手違いだった——と、アルの愛情はふたたび自身の子であるムウへ注がれることになり、ラウは失敗作——“成り損ない”の研究素体として、生命の尊厳そのものを否定された。孤独から守ってくれるものもなく、まして、人並みに生き長らえることすらできない——そんな不幸を、彼は唐突に背負わされて生きるしかなかった。

「じゃあ、この写真は？」

ステラは内ポケットから、ラウ自身に託された写真を取り出した。そこには、親子のような男性と男児が——ぎこちなく——手を繋いだ姿が映っている。

写っているのが幼少期のラウだとすれば、この写真が撮影された当時は、まだ、彼はアルに愛されていた時期だったということになる。

ふいに脳裏に、彼の言葉が思い浮かぶ。

——こんなわたしにも、平穏な時代はあったのだよ。しかしまあ、しよせん個人の安寧などは、意図もたやすく蹂躪されるものだ。

彼は次いで、こんなことも云っていた。

——きみになら、わかってもらえるはずだ……と。

ムウは沈黙してその言葉を聞き、マリユーも少し驚いた顔になる。

「——あいつは、きみに自分を重ねていたんだろう」

老化を抑制する薬を服用し続けなければ、生き長らえることも出来ないラウ。

一定の措置を受け続けなければ、身体機能を維持することすら叶わなかったステラ。

ステラ自身は、奇跡的に中毒症状から脱することが出来たとは云え、少なくとも、二者の立場は酷似していた。まして、穏やかに続いていた日々を、他人の都合によつて唐突に破壊されたという意味でも、また。

ムウは思い偲びながらも、先を続ける。

「あいつは確かに、自分のような存在を生み出したこの世界を憎んでいる。でもそれはどこか、本心じゃない」

ラウはきつと、ずっと『賭け』を続けて来たのではないだろうか？

彼の中では、常に人類を滅ぼしたい自分と、そうしたくない自分が共存していたのではないか？ どのような手段を使ってZGMF^テ—X^ス12^タAの機密情報を、そして「スピッドブレイク」の侵攻目標を地球軍に漏らしていたのかは、ムウ達の知る所ではない。だが彼は、コロニーの中ではこうも云っていたのだ。

——きみが人類の夢と云うのなら、人類くらい救ってみせろ、スーパーコーディネイター！

それは、キラという完成作に向けた、失敗作としての彼の嫉妬ではなかった。

そう、嫉妬というより、それはむしろ——

自分を止めて欲しい、と心のどこかで願っているかのような——ラウの個人的な恣意のままではなく、人智を超えたところにこそ、世界の行く末を委ねている風でもあった。「あいつの中じゃ、まだどこか、世界に対して未練があるんだよ。たぶん、きつと」

未練。

その言葉に、ステラはハツとする。ラウの言葉を思い出したからだ。

——その写真が、わたしがこの世に残した唯一の未練だ。私自身、いまだ断ち切れずにいる鎖。

——是非ともきみに、それを断ち切ってもらいたい。

ムウはそれを聞き、やつぱり、と云った風な沈鬱な表情になる。

気を悪くしないで聞いてくれ、と云った。

「アラスカに出向く前のきみに、写真を託したのは……きみごとその写真を抹消するためだった」

ラウはみずからの映し鏡とも云えるステラを、託した写真ごとアラスカの地に葬ろう

と考えていた。

ステラ本人に云えば、これは気分を害すような話だ。しかし、写真のことをわざわざ「賤別」と諷したのも、おそらく「スピッドブレイク」が失敗に終わること——アラスカが爆死地になることを、ラウはあらかじめ見越していたためだ。ある意味それも当然の話ではある。地球軍にザフトの侵攻先をリークしていたのは、他ならぬラウ自身なのだから。

「だが、きみは奇跡的にアラスカから生き残り、その写真もまだ、そこにあるままだ」

ラウの云い方を借りれば「鎖はまだ、繋がれたまま」——

アラスカの戦場で、ステラが生還する可能性など、壊滅的を通り越して絶望的だった。そういう意味では、ラウにとって遥かに分の良い『賭け』だったはずだ。

それでもステラが「サイクロプス」から逃れることが出来たのは、当時の彼女が「フリーダム」に只ならぬトラウマを抱いていたこと、キラの再臨を察知した「ジャスティス」が加勢に現れたこと、そして、そんなアスランに伴ってディアツカがステラを戦場から連れ去ったこと——

ラウの知らない偶然と、人智を超えた、この世界の奇跡が重なり合った結果に過ぎない。

「あいつの『賭け』は、そう……唯一、きみに勝てなかった。きみにだけは、敵わなかつ

「ただ」

「……」

如何なる賭け——勝率はコインを投げるのに等しい賭け——に勝ち続けて来たラウであつても、唯一、ステラにだけは勝てなかつた。

ステラとの『賭け』にだけ、彼は負けたのだ。

「その写真が残っている以上、あいつはまだ戻れる。あいつの暴走は、まだ止められるはずだ——」

そう信じたい、とムウは続けた。

忌々しいと云つていたはずのアル・ダ・フラガとの写真を、ラウが丁寧に保管していた理由は何だ？ それを考えたとき、やはり、彼の中では思い出の日々に未練があるからだということを悟る。

彼にはまだ、かろうじて過去が残っているのだろう——世界に対しての、哀しい未練が。

ムウは改めて体を起こし、マリユーが立ち上がつて身体を支えた。

真つ直ぐに、ステラに向かつて云う。

「おれと一緒に、クルーゼを——あいつを止めてくれないか。きみになら、それが出来る
と俺は思つてる」

「ムウ……」

「きみは『光』だ。一度は闇に沈んでなお、燦然と輝く光——世界の闇しか知らずに生きた、あいつを救える——そんな光……」

立場は同じ。心なき者達の魔の手によって、深淵なる闇の中に突き落とされた者達——

そこから這い上がった、立ち直った者——『星』のように浮かび上がって来たのが、仮にもステラであるのなら……

（あいつにだって、出来ないはずがないんだ……）

ステラはしばし沈黙した後、できるだけだけの答えを返した。

「うん——がんばろう？ ムウ」

「！ 頼むな。……ありがとう」

「ふふ……」

マリユもかすかに微笑み、そんなふたりを見守った。

——そう、自分達は、絶対に止めなければならぬ。

すべてが手遅れに、なる前に——。

“ドミニオン”の医務室でもまた、ベッドの上に横たわる人物がいた。
フレイ・アルスター。

恒例の睡眠発作によつて今は眠っている彼女の傍らには、ハリーと、ナタルの姿もある。

「オルガ・サブナック中尉の戦死は、書面上『損失』という単語で扱われました。……彼等はやはり、どこまで行つてもモビルスーツの部品扱いなのですな」

「医学者の僕が云うのも烏滸がましいですが、好い青年を失いました」

「いえ。マーカット軍医は、その……自分から見ても、とても血の通つた人間であるように思えます」

励ましの言葉を云おうとするが、どうにも、そういうのはナタルには不得手らしい。

しかし、云っていることは本心だ。

——人間を「役立たず」としか罵りそやすことしかしない、どこぞの盟主や研究者達に比べれば……。

同じ医学者とはいえ、ブーステッドマンのような強化人間を無責任に作り出す悪徳業者がいる中で、ハリーのように真つ常に医術研究を進めている医学者がいるのも確かだ。そのような二者を同等の単語で、一概に「医学者」と呼び捨ててしまうには、かなりの抵抗があるナタルである。

珍しく口淀んだ様子のナタルに、ハリーは訊ねる。

「——この艦は、ドミニオンこれからどうするんですか？」

確認したのは、今後の艦の動向についてだ。

オーブ残党——正確に云えば、彼等の古母艦である“アークエンジェル”の追撃に失敗した今、彼等は引き続き搜索を続けるのだろうか？ それとも——？

その答えは、ナタルの口から紡がれる。

「“エルビス作戦”が直に始まります。本艦には月基地への引き上げ命令が出ているので——司令部もどうやら、準備に取り掛かるものかと」

「……そうですか……」

意味された言葉を推察して、ハリーも暗澹たる思いになる。

「戦争の舞台が宇宙空間に変遷したことで、司令部はモビルスーツ開発より、新種のモビルアーマーの開発を進めているそうです。抜けた“カラミティ”分の戦力が、本艦に賄われることはないでしょう」

「それに乗るのも、また、強化人間ですね」

「いったい、いつまで続くのでしょうか……」

確かに地球軍は、宇宙空間において、ことモビルアーマーの操縦ノウハウに長けている節がある。元は“メビウス”によって宇宙軍の戦力の殆どを賄っていたのだから、そ

れも当然の話ではあったが。

逆に云えば、いくら「ストライク・ダガー」のような高性能モビルスーツを量産したところで、人型機動兵器の操縦に関しては、ザフトの方に一日の長があるということだ。その事実から導き出して「ならいっそ、強力なモビルアーマーを作ってしまったえ」という理論は、ナタルにも分からなくもないが……。

「巨大人型機動兵器だつて、宇宙に降りやあ只のマットですしね」

地上においては、絶大な火力ゆえに、鈍重ですらあった「エクソリア」――

その運動性能では、宇宙に適応し切れないことは、火を見るより明らかである。装備がいくら強力だろうが、宇宙においては機動力がなければ生き長らえることは出来ないのだ。これを考慮した結果、数多のモビルアーマーを造り出そうとする流れは、ある意味当然なのかも知れない。

そうして物議を続けていると、す……つとベッドの上の少女が目を醒ました。それはハリーが気付き、「お目覚めかな」と溢す。

「……悪い夢をみた……」

目覚めたばかりのフレイは、臃げな口調と頭で思う。

――胸が重いと、悪夢を見やすいつて云うのは、本当にあいつの云う通りかも知れない……。

そう、あいつ。あいつだ。悪い夢の中に出て来たのは、あいつ……。

「サブナック少尉が、討たれる夢——。『フリーダム』に……キラに殺されるのよ——」
「……………」

ナタルとハリーは、返せる言葉を探した。

それは夢などではないと云い切るだけの図々しさが、今のふたりは持ち合わせていなかっただけである。

「……………どうしてかしら」

仰向けに転がって、真白い天井を見上げたフレイからは、渴いた声が続いた。

「涙のひとつも、出て来ない……」

「フレイ……」

そのとき、改めてハリーは悟る。

彼女はようやく、それが夢でないことを自覚したのだ。いやもしかしたら、起きた時から気付いていたのかも知れない——自分とナタルとの間にかわされた、会話によって。

「仲間が殺されたってことなのに……。パパのときみたいに、奪われたってことなのに」

「……………アルスター」

そのとき、ナタルが改めて口を開く。

「私が思うに、サブナック少尉はその……きみを生かそうとしていたんじゃないんだろ
うか」

先刻の記憶が、鮮明にナタルの脳裏には残っている。

フレイについて訊ねたとき、オルガは確かに、こう云っていた。

——きみ達ブーステッドマンと、アルスターは違うのだろうか？

——ああ、違う種類の——人間だ。

あのとき、彼はどうして「違う種類の強化人間」と云わなかったのか。ナタルはその真意について考えたとき、オルガとフレイとの間にあつた、決定的な差に気付いた。それは「生きていたい」という願望があるか、そうでないか。

——生に対する執着が、あるかないかではないのだろうか？

睡眠発作から目覚める度、フレイはアズラエルの動向を気にしてしまうくらいがある。それは、自分の欠陥について知られることで、廃棄処分にされる事態を危ぶむ心が働いているからだ。つまり彼女は、みずからの死を徹底的に恐怖していたのだが、一方でオルガは違っていた。彼の心の中には、ある種の自殺願望が見え隠れしていたから。

オルガ・サブナックは、もしかしたら、フレイ・アルスターという人間の本质を見抜いていたのかも知れない。戦うことしかできない自分と違うこと。本当は戦いに向いていない、戦ってはいけない、そして、こんなことで人生を棒に振ってはならない人間

だということ、いつからか理解してしまったのかも知れない。

「フリーダム」と一騎打ちを望んだのも、おそらくは」

「つまり彼は、きみに、自分と同じ道を歩んで欲しくなかった——と？」

故人は常に美化されるものであり、いくらかの脚色はあるのかも知れないが、ナタルは少なくともそう感取している。強化インプラントステージにおいて、危険料である「3」や「2」の領域に達しているシャニやクロトと異なつて、フレイはまだ、強化人間になつてからも日が浅い。まだ、取り返しのつく人間なのだろう——きつと、おそらく。しかし、云われたフレイは物言いたげな表情だ。

「嬉しくないわね。そんなこと、死んでから云われたつて——あいつは死んじやつたんだから、私にはどうにもできないでしょう!？」

「アルスター……」

「でも、それがきつと現実なんだよ……」

諭すような口調で、ハリーが先を続ける。

「フレイ。きみはきつと、オルガくんの分まで生き伸びなきやいけなくなつたんだよ」

「そんなの、無責任が云うことよ!」

「いいや、違う! 彼の死は、きみのためにあつたんだ! 彼の死に意味を与えるのは、

「これからのきみ次第なんだよ!」

「……………」

フレイは、口を噤む。

「オルガくんを失ってなお、この先、戦いはますます激化する。アズラエルは、何も知らずにきみを『兵器』として扱き下ろすだろう……………！ でも、だからと云つて、最後まで諦めてはだめだ」

「ハリー・ルイ・マーカット……………」

「強化人間の治療法なら、ボクがなんとかするから……………！ だからせめて、この戦争が終わるまでは、絶対に諦めるんじゃない！」

華奢な肩を掴み、必死に訴えかけるハリーに、ナタルはすこし驚いた表情を見せた。

（この戦争が終わるまで、か——）

改めて、目の前の崩れかけの少女を見て、思う。

——そう、戦争を、終わらせなければならぬ……………。

それが、軍人である自分の務めであり、義務でもある。たとえどんな手段を使おうとも、戦争に勝たなければならぬ——その結果「プラント」の人間を滅ぼすことになったとしても。

目の前にいる少女を救うためには、

（この戦争に勝ち、終わらせねばならないのだ……………）

きらり——

そのとき少女の頬を、綺麗な輝きが伝い落ちたように見えた。

同じく、オーブ残党——正確に云えば脱走艦である“エターナル”の追撃に失敗したザフト艦隊もまた、このとき本国へと帰還していた。月基地に本拠を置く地球軍と打って代わって、“プラント”の宇宙軍の主な拠点はふたつある。ひとつは“ボアズ”と呼ばれる防衛用軍事要塞であり、もうひとつは“ヤキン・ドゥーエ”——“プラント”最終防衛ラインに位置する難攻不落の要塞だ。

“アプリリウス”の執務室の中に、パトリック・ザラの姿があった。

周囲には数々の補佐官の姿もあり、ラウ・ル・クルーゼが入室しては、結果を報告していた。

「またも撃ち損じたか、鬱陶しい小娘共の艦を？」

一度目は“エターナル”の造反によって、二度目は総力戦の果てに撃退される——

にべもなく吐き捨てられた言葉に、動揺する補佐官は少なくない。まさか、新造艦である“エターナル”がクライン派によって占領されていたなどと、誰が予想できただろう？ パトリックもまた、報告を聞いたときは驚いた。当然ながら、アスランひとりで

は「エターナル」や「フリーダム」まして「グレイドル」を相手取ることも叶わず、無残に撤退して来たのだが、パトリックは彼を責めることはしなかった。

怒りの矛先は、アスランではなく——目障りな小娘達に向いたからだ。

「まあ良い、放っておけ。たった三隻ごときで、一体なにができるというのだ」

高を括つて笑い下すパトリックを、クルーゼは妙に白けた視線で見遣る。

「しかし、ラクス・クラインまでが、あれらの勢力に加勢したとなると——」

「フンツ、狸の娘は狐か！ おおかた、自作自演の茶番劇でも起こすつもりなのであろう？」

そもそもラクス・クラインは、核の力を異邦に売り渡した売国奴である。

それが今更、地球軍とは別の組織に加担しているということは、

「わざわざ「プラント」の危機を作り出し、第三勢力として絶体絶命のところを駆け、みずから国家の危機を救う英雄とならんとする魂胆なのだろう」

——それで「プラント」の政界にでも、返り咲こうというのだろうか？

「はっ、とんだヒーロー気取りの集団だ」

少女を見下した云い方に、くすくす、と含みのある嘲笑が場に溢れ、パトリックも満悦そうにせせら笑う。

すでに、この執務室に居合わせているのはザラを支持する強硬派の議員だけだ。中に

はクライン派を蛇蝎の如く嫌悪する者も多く、場にかわされる言動の多くは、クライン派を過剰なまでに貶めるものになっていた。

そんなとき、執務室のドアが開く。そこから現れたのは赤服——アスラン・ザラだった。

「おや、アスラン・ザラ」

声を挙げたのは、レイ・ユウキだ。

続いてラウも声を発す。

「久しぶりだな、アスラン」

「クルーゼ隊長！ お久しぶりです」

「やめたまえ。私はもう、きみの隊長ではないのだから」

苦笑したラウであるが、アスランが来たことで、すべての役者が揃ったらしい。

パトリックは改めて立ち上がり、みなに向けて言葉を放つ。

「——ラクス・クラインおよび「エターナル」の追討を断念したのは、他でもない。調子に乗ったナチュラル共が、続々と月基地に向けて物資を運び出している」

議員たちの目に、動揺の色が浮かぶ。

「我々、ザフト宇宙軍は、これより来たるであろう月艦隊からの攻撃に備え「ボアズ」と「ヤキン」の防衛態勢を整える。——たかが小娘一匹の艦に構っている余裕など、なく

なつたということだ」

「議長、それは」

「分かっていると思うが、Nジャマーキャンセラーは既にナチュラル共の手中にある！
火星圏との連携を強め、"ボアズ"には"ベルゴラ"部隊を編成する、報道管制も怠るな」

パトリックから、きびきびとして複数の指示が飛ぶ。

だが、その中にはアスランにとって難解な指示もあり、一部の議員のみに精通した内情もあるようだった。

「——いいな?」

発された指示に、一同の応えが重なる。

すると同時に、弾かれたようにすべての議員たちが慌ただしく行動を開始し、方々の部署に散つてゆく。場に残されたのはラウと、アスランだけだ。

アスランは改めてパトリックまで歩み寄り、気まづげな表情で云つた。

「申し訳ありません、父上。おれがあのととき……早急に"エターナル"を討てていれば

——」

「——もうよい。あれは私の落ち度だった、おまえが気に病む筋ではない」

そもそも、アンドリユー・バルトフェルドがクライン派に寝返っていたと判っていたいれ

ば、誰があんな男を“エターナル”艦長などに任命するのか。

みずから信じる道を突き進むたびに、パトリックは何者かの裏切りにあつて来た。クライン父娘、バルトフェルド、そして、信じていたはずの愛娘——その全員が、まるで自分が間違っているとしても訴えかけるように。だが、パトリックは考えを曲げない。自分が間違っているのではなく、彼らこそが間違つた存在なのだ。

パトリックは嘆息つき、息子に対して、適当な話題を振つた。

「有能な医学者になりたいと云つていたな。その夢は、今回の一件で少しでも揺らいだか？」

「いえ。……自分に出来ることは、それくらいしかない気がします……」

「……そうか」

クルーゼには、何の話か分からなかったが、改めてパトリックは目の色を変える。

「Nジャマーキャンセラーが渡つた今、奴らは喜んで核の火を使うだろう」

「……」

核。

それは、ザラの名を受け継いだ者達にとつて、切つても切れない因縁の名前だ。

自分達の家族を崩壊させた、最大の原因なのだから。

「撃つて来るぞ——核ミサイルを」

パトリックは鋭い目で云い、

「最悪の場合は『ジエネシス』を使う」

「まさか……父上！」

「今より始まる——」

アスランは、緊張したように息をのむ。

「——これは、戦争だ!!」

ナチュラルとコーデイネイター——

地球と『プラント』——

民族対立による全面戦争——

その究極の局面が、今、始まろうとしていた。

(さあ。時代の闇を止めてみせろ、キラ・ヤマト。そして)

ラウはひとり、ほくそ笑む。

(足掻いてみせろ、ステラ・ルーシエ)

閑篇

『思い出の刻に』

L4宙域におけるコロニー“メンデル”での戦闘から、半月程が経過しようとしていた。

この間に、地球軍は「エルビス作戦」を発動し、月基地の軍備増強を開始。作戦の目的は他でもない、L5宙域に浮かぶ“プラント”群の壊滅、そしてその防衛要塞たる“ヤキン・ドゥーエ”と“ボアズ”双方の攻略だ。

最終決戦の時は近い——と、誰もがそう認識していた。

環境汚染や食糧問題、なおかつエネルギー問題と、地球側にとっていまだ課題は多く、厭戦気分から生まれる終戦への期待感、プロレマイオス基地を一層の活気に溢れさせていた。オーブ残党軍を取り逃がした“ドミニオン”であっても例外ではなく、彼らは月基地へと戻り、来たる“プラント”総攻撃への準備を整えている。

GAT-X444——内密にはRGX-00とも呼ばれる——“レムレース”に内

蔵されたNジャマーキャンセラーによって、地球の復興はいくらかと進んだが、ブルーコスモスは地上の再開発より、核兵器の導入を強く所望していた。

『撃たなきや勝てないでしょ、この戦争？ 核は持つてりや嬉しい蒐集品コレクションじやない——兵器なんです。だったら使わなきや！ 高い金出して造つたのは、使うためでしょ？』

いずれも戦争の早期終結……いや決着を望んだアズラエルの意向であり、これによって月基地では夥しいほどの量の核ミサイルが開発されていた。

また、Nジャマーキャンセラーを応用した新型機も開発も並行して進められていた。フレイは月基地の中を歩き回りながら、その内の一機を見つけることになる。

新型はモビルアーマーだ。中央部のコア・ユニットを基軸として、六つのパーツが合体することで完成する機種だが、なかなかに興味の悪い見目をしている。学生時代、興味もなかった理科の実習で覗いた顕微鏡の先にある細菌のような形状だ。

(どうしてこう、地球軍って趣味が悪いの)

そもそもモビルスーツのネーミングから察するものだが、地球軍はこと“G”兵器の見て呉れに関しても、とても体裁を気にしているとは思えない悪人面の様相に傾倒している気がする。

——せめてもっと、大衆受けのいい機種なんかは作れないのだろうか？

——それとも、自分達を悪者と開き直つて箔でもつけたいのだろうか？

考えた所で意味もないことを、つらつらと考えていたときである。工廠を歩いていたフレイの後ろから、ひとりの男が声を掛けて来た。

「——フレイ・アルスター中尉ですね？」

振り向いた先には、作業服の繋ぎに身を包んだ若年らしい男が立っていた。中尉というのは、この半月の間に、フレイ・アルスターに与えられた誉のことである。

半月前、地球軍は“エルビス作戦”を発動すると同時に、昇進や勲章の大盤振る舞いを行うようになっていた。エルビスは意識すると『希望』——恐らくは終戦に近いことを示唆した名称なのだろうが——文字通り英雄や勇者、エースパイロットと云う名の『希望』を大量生産することで、悲惨な現実から兵士や市民の目を背けさせようとしたのである。

が、結局のところ、そんなものは無駄でしかない。特に活躍した記憶もないのに少尉から中尉に昇格されたフレイにしたところで、傷つき、斃れて行つた『お仲間』のことを考えると、授けられた徽章などは、せいぜい形を整えた金属の塊程度にしか見えないのだから。

「良かった。丁度あなたを探していたところなんです」

軍組織というものは、女性の人口の方が圧倒的に少なく、ましてフレイのように高め

の雰囲気纏った女性士官は、こういった何気ない基地生活の中で男性士官に性的に云い寄られることが少なくない。

実際、フレイは月基地に帰投してからというもの、基地内部の至る所で不埒なる身の程知らずに数々のセクハラを受け、その度に相手に手を出したことを悔やむくらいの日には遭わせて来た。一度だけ本当に強姦されそうになったこともあり、そのときは生体CPUらしい怪力を総動員させて事なきを得たのだが、いま思い出しても身の毛がよだつし、やはり思い出したくもない記憶であることに違いはないのだ。

であるから、こいつもまた、そういうのが目的の輩なんだろうか？ 咄嗟にフレイは身構えたが、彼はどうにも技術者らしく、彼女が搭乗する「レムレース」の担当者だったらしい。

「新しい「レムレース」の追加装備が完成したので、是非とも中尉にご覧入れようと」

「……ああ」

なんだ、そんなことか。

フレイは身構えをほどこき、興味を失って答えた。

「後で説明書を渡してくれればいいわ。別に興味ない」

「そんなこと云わずに。さ、こちらです」

技術者という人種は、頑なである。

勿論、消費者に対し技術屋が必死で作品に訴求するときは、それほどに作品の出来が良いということの裏付けだ。その意味で考えれば、担当メカニックらしい彼が鼻息を荒くして自分に詰め寄って来ることは、決して悪いことではない。

だがどだい、フレイは兵器というものに関心のない人種である。

機動兵器に浪漫を憶えるような少年的な感性も持っていないし、あくまで一人のパイロットとして、フレイは「使えるもの」であれば何でも良いのである。……いや、強いて云うなら確かに美しいデザインをしたMSであつて欲しいと思う。実際にMSを操るのがフレイ自身である以上、見た目にセンスのいいモビルスーツに乗っていたいではないか。

——これでさつき見たMAみたいに悪趣味なデザインだったら、この男を一発殴つても許されるだろうか？

フレイが案内された工廠区画には、まるでスケールの違う巨影が聳え立っていた。

いや、よく見ればそれは影などではない。不吉に黒光りする装甲を持つ、この世に悪魔を顕現させたかのような機動兵器だ。あまりにも巨大な——巨大すぎて、全貌を見ることすら能わない巨大な機動要塞。フレイは思わず天を仰ぎ見るかのように——ソレ”の全貌を見届けようとした。

「“エクソリア”に、似てるわ」

「『エクソリア』が、似てるんです」

フレイの眩きを聞き咎めた技術者の男が、軽く苦笑して続ける。

「もともと『エクソリア』の発想母体は、こいつですからね」

「へえ？」

「こいつはGFAS—X1『デストロイ』——およそ一年前にビクトリアにて回収された『黒鉄の巨人』そのものです」

噂には聞いたことがある——『黒鉄の巨人』それは確か、ザフトに渡った『ディフェンド』によって制圧された要塞の名称だったはずだ。実際、フレイも一度は攻略している。

——あれが、元はモビルスーツだったというの？

技術スタッフの解説の声は続いた。

「いったい、誰がこんなモノを造り出したのか、なんでそんなモノがビクトリアで発見されたのか——？ 詳細はまるで謎に包まれています、こいつには、非常に稀有な技術的価値が認められていた」

まるで未来世界において造り出された兵器であるかのように、現時点では決して成し得ない画期的な技術が組み込まれていたのだと男は云う。

「——この追加装備は、そんな『デストロイ』の人型部分に用いられていたパーツを、

我々が直接流用して造り上げたモノなんです。ですから、サイズはダンチですよ」

「レムレース」の三倍以上は大きいわ……。こんなのがバックパックと云えるの?」

「他のストライカーパックと同様に、レムレース」の背部アタッチメントと接合させて運用する代物ですよ。その意味で追加装備と呼ばれているのですが、確かに……規格で云えば外殻と云った方が正しいかも知れませんか?」

ビクトリアにおいて、地球連合軍に回収されたGFAS—XI「デストロイ」——

カブトガニを思わせる外観をしたフライト・ユニット——すなわち「円盤」は、これを発見・回収した南アフリカ統一機構に手柄として譲渡され、ビクトリア基地の防衛砲台として運用されていた現実がある。

が、それでも残された半身——「人型」の部分に関しては、地球軍本部に持ち去られた後、こうして極秘裏に応用開発が進んでいたらしい。大西洋連応はこれを独自に転用し、人型部分を「レムレース」の強化武装——いや、技術者が示唆した通り「レムレース」の外殻として運用させるに至った。

「レムレース」をコア・ユニットとして組み込むことで起動——そこで初めて、こいつは『戦略装機動型兵装要塞』として機能し、モビルスーツ大隊をも駆逐する殲滅力を発揮します」

「拠点制圧用の、大型武装プラットフォーム……?」

「機動兵器の恐竜化と、マルチプルアサルトストライカー換装システムの統合を極致まで突き詰めた、人型機動兵器の究極ですよ！」

鼻息を荒くして、男はさも満足げに語る。

機体の全容を見上げながら、そこでフレイは、あることに気付いた。

「……足はついてないの？」

「あんなの飾りです。お嬢様には分からないのですか」

「分からないわね、美しくない」

元々の「デストロイ」は四肢を持つ人型だが、今は脚部が廃止され、代わりに腰下にかけてリアスカート型の高機動スラスタターが増設されていた。

おそらく、機体が誇る圧倒的な重量を宇宙空間に適応させるために、わざと二足を取り外したのだ。無重力空間における機動性を飛躍的に上昇させるためには、シフトウルムブースターを着脱できるスラスタターの配備が必至だったのだろうが、分かっているも、足が無いことに対する違和感は隠せないフレイであった。

と云つても、足がないこと以外にも「エクソリア」との差異なら多く確認できる。技術者の方も全容については言及しなかったが、大体の見当は付く。おおかた地球連合軍が「エルビス」のため満を持して造り出した「究極の決戦兵器」と云った所であろう。

「では、次です」

まだあるの？ フレイは胡乱げな面持ちで男について行く。進んだ先には、また別の追加装備が用意されていた。

こちらは先程のように巨大な外殻ではなく、あくまで“レムレース”の規格に準じた追加装備だ。迫撃戦に特化した“フエゴ・ストライカー”がカマキリの腕を伸ばしたような外観と比喻できるなら、こちらはモズクガニの脚が伸びたような外観と比喻できる。カニで云う“脚”の部分がすべて砲門なのだとすると、おおかた、砲撃戦に特化した追加装備だろうか？

「こちらは中・遠距離に対応したバックパックになります。先程のハル・ユニットと違い、友軍機との連携を前提に開発された代物で、こちら我々が不眠不休で設計した傑作ですよ」

「ごくりごりさま」

フレイは、あえて感情を込めずに云った。

傑作というのなら、なぜ甲虫類や甲殻類をモチーフとした外観にするのだ？ やっぱりこいつら趣味が悪すぎる。

「名称はまだ決まってませんが、『暴風』、『灼熱』に続いて『豪雪』——“ニクス・ストライカー”なんて候補が挙がっているんです。内蔵砲から吐き出す複数の火線が、さながら“吹雪”のように激しいことが由縁ですね。

でも——せつかくですし、どうでしょう？ 直接これを操縦される中尉の方から、何か名前の方に希望がありますか？」

中尉になると、そんな権限もあるのかしら？ 不意にそんなことを思ったが、この場合、シンプルにこの男が気を利かせてくれただけだろう。

フレイは無数の砲門を搭載したその外観から、あるものを連想し、顎に手を当てた。

「……砲撃戦に特化した装備……」

「はい、そうです」

「じゃあ……『災厄』——とか」

「——えっ?」

「『カラミティ・ストライカー』」

技術者の男は、絶句した。

「『カラミティ』って、いやいや！ そりゃあ、後期GATシリーズを預かっていながら撃墜された『能無し』の代名詞じゃないですか！」

半月前、最新鋭MSであるGAT-X131^{カラミティ}が撃破されたことで、頭の固い上層部の間では様々な議論が飛び交ったらしい。大西洋連邦にとって、後期GATシリーズは最大戦力であると同時に、前線の兵達にとつて旗頭となるべき強大な存在だった。しかし、その内の一機が損失したとなると、いったい「責任は誰にあるのか？」という糾弾

の押し付け合いが始まったのである。

そうした上層部の苦言は、「機体性能に問題があったのではないかね？」という老人めいた責任転換となつて、GAT-X131を設計した技術者達に向けられた。

しかし、後期GATシリーズを開発した技術者達は、自分達が造り出した作品に対しては絶対的なプライドを譲らないため、これに徹底的に抗議した。技術者という人種は、己の作品に吝嗇^{ケチ}つけられるのをこの上なく嫌うのだ。彼等はそこで責任逃れをするように「パイロットが無能だったのだ」と豪語し、その結果、搭乗者である青年が貶められる結末になった。死人が反論できないのを良いことに、議論はこうして終着点を迎えたのである。

——という話を、フレイはこの半月の間に風の噂で耳にしていたのだが、やはりそれが、彼女にとつては腹立たしい陰口であることは間違いない。思い出しては頭に來たのでわずかに眉を顰めるが、技術者はフレイの機微を察するはずもなく、無遠慮に続けた。

「文字どおり厄い名前を、なんでわざわざ付けなきやならんのです！」

「……。いいの、わたしはそれが良い」

技術者の男は、なおも渋面だ。「しかしですね——」と口籠るが、

「中尉の権限、ということにしておいて下さい」

不遜な男とはもはや取り合う気も失せたのか、フレイは半ば強引に立場を借りて押し通す。

すると男は渋々と頷いて見せた——が、その顔には「提案しなきゃよかった」とありありと書いてあるように見えた。画竜点睛を欠く——とはよく云つたものだが、最後の命題しあげの段階で、作品を他人に貶められたことが技術屋魂にかなり堪えたのだろう。まあ、正直どーでも良いのだが。

こうして「レムレース」に与えられた砲撃用装備は「カラミティ・ストライカー」と命名されることになる。形を整えたこの金属の塊も、思つたよりは使えるのだな、とフレイは思つた。

三隻同盟はこの半月間、息を潜めては行動する機会を伺っていた。

ジャンク屋ギルドや「ターミナル」と云つたアスハ、あるいはクラインのネームバリューが持つコネクションを利用し、必要な補給を受けては、水場——あるいは休息地を求めて、廃棄コロニーを転々とする日々。

同じ場所に長く留まることは出来ない彼等は、いわば根無し草の旅団となつていた。

数知れぬデブリが漂う空間に、彼等はいた。その中では模擬演習のようなものが執り

行われており、複数のモビルスーツが出動していた。

「デブリに気を付けてくださいね、あまり加速するとぶつかりますよ!」

「このくらい平気さ、あんまりバカにするな!」

ニコルとカガリ——「ブリッツ」と「ストライクルージュ」である。

主にルーキーであるカガリの戦闘訓練のためにニコルが付随している絵面であるが、その周囲にはM1小隊の姿もある。「ルーージュ」は加速してデブリの中を掻き分け、惑星に接触する寸前になって急制動を掛け、方向転換を行った。

一歩間違えば激突しているところだ——いつも以上のじやじや馬ぶりに、監督者のニコルは冷や汗が絶えない。

「あ、危なっかしいですよ!」

「大丈夫さ! じゃあ次は模擬戦だな! おーい、アサギー!」

——そうして、彼等は演習を続けた。

時間が経ち、みなが帰投したとき、パイロットロッカーから出たニコルの許へ、とある来客が現れた。利発そうにカットされた短めの黒髪は、たしかM1パイロットのマユラ・ラバツツ——といったらるか?——だ。

彼女は右手にドリンクボトルを握り、ベストに着替えたニコルに差し出してくれた。

「ニコルくん、おつかれさま! カガリ様の指導係は疲れるでしょう?」

母国の姫君を出汁ダシにしながら、マユラはドリンクを手渡す。

気の利いた人なのだな？　と思ひながら、ニコルはきよとんとしてそれを受け取つた。

「あ、すいませんわざわぎ。お気を遣つてもらつて」

「いいのいいの、これも日頃からお世話になつているお礼つてことで」

ニコルに対して、マユラは年上としての余裕を浮かべながら云つた。
しかし、

「ん？　僕、マユラさんに何かしてあげられましたっけ」

特に心当たりのないニコルであつたので、首を傾げられてしまった。

マユラは慌てて話題を変える。

「そ、そんなことより！　ニコルくんって『ブランド』生まれよね？」

「あ、はい？　そうですけど」

「その……『ブランド』には婚姻統制制度つていうのがあるんでしよう？　あのラクスつていうお姫さまも、もう婚約者が決まつているのだとか」

ラクスの年齢は十六歳で、マユラよりも年下である。

そんなラクスが既に国政によつて定められた婚約者がいると知り、マユラには、どうしてもニコルに尋ねたいことがあつたらしい。

「それで、そのお……」

「？」

「ニコルくんにも、もう心に決めた人とか、もう決まった人とかいるのかな、なんて……聞いてみたり……そのつ。え、えへへ」

——年上としての余裕は、いったい何処に行つたのだろうか。

あたしのほかあつ！ マユラは口下手な自分を叱責しながら、照れ隠しのように舌を出して笑つてしまった。試しに頬を触つてみたら、異常なほど発熱していた。赤くなつてるに違いない、こんなんじや明け透けすぎる！

しかし、問われたニコルは真剣に考えている様子だった。どうにも思い当たる節はないらしい。

「えーつと……？ いや……特にいないんじやないですかね？」

それは、なぜか他人事のような言い方だった。

「僕の両親はすこし過保護なところがありますし、僕がザフトに入るのも、いい顔をしなかつたような人達なので——婚約はまだですね……。そういう相手とかは、慎重に選ぶうとするタイプなんだと思つてます」

「あつ、じゃあ、いないんだ？」

「はい、いないですねっ」

マユラは、心の中でガッツポーズをした。

しかし、そのとき反対側の通路からジュリがダツシユしてやって来た。すれ違いざま、ガシツ！ とマユラの首にヘッドロックを決め込むと、さながら誘拐の要領で彼女を遠くまで連れ去る。それはニコルから見ても、とてもナチュラルとは思えない身体能力の高さだった。

ダダダダツ！ 嵐のような足音が過ぎ去り、ひとり場に取り残されたニコルは、きよとんとする。

「——えっと、何だったんだろう？」

一方、連れ去られたマユラは廊下の影に連れ込まれ、そこにはアサギが待機していた。痛い痛い、ギブギブ、とマユラが抗議の声を挙げると、組まれた腕が外される。

ジュリは怒っていた。

「ちよつとマユラ、あんた見境ないにも程があるわよお！ キラクんの次はなに、今度はニコルくん!？」

「人聞き悪いこと云わないでよつ！ 誰もキラくんに手なんて出してないじゃない——まだ！」

「ニコルくんかあ、確かに優良物件かもね〜」

アサギが妙に感心したように云った。

ジュリは額を抱え、呆れた様子で云った。

「アサギまで……。なんか、ニコルくんのあの純粋な感じが心配になって来た」
「ふふん、甘いわね、ジュリ」

マユラは意地の悪い笑みを浮かべ、ちっちっち、と舌を鳴らした。
「いったい、何様だろうこの女、とジュリは思った。

「ニコルくんは確かに、わたしたちより年下。でもね、それはつまり、今の内からわたし好みに教育していけば、あら不思議☆数年後には目も疑うほどの完璧彼氏の出来上がり——」

「——まるで源氏物語！ 性別は逆だけど」

「その通り！ 家柄よし、ルックスよし、性格よし、運動神経よし！ あんないい物件、そうはない！」

女という生き物は、こと男の社会的地位ステータスに着目すると計算高いのである。

他愛ないガールズトークは、しばらく続いた。

「ニコルくんの純粋な感じもいい。でもなあ、キラくんのあの繊細な感じも捨てがたい……！ なんかこう、守ってあげたくなる感じ——」

「——？ 僕がどうかしました？」

そのとき、当の本人が廊下の影からやって来た。

キラだ。その目はきよとんとしており、マユラ達は飛び跳ねるほど驚いた。

「うへ!? な、なんでもないの! あ、あはは……」

「マユラつたら……」

「?」

ジュリが睨むような目でマユラを見たが、よく見ると、キラの背中にはマユ・アスカがおんぶされていた。

「あら? 見ない組み合わせね」

それは思わず口をついで出た、ジュリの本音だった。

キラは気付いたように返した。

「ああ。車椅子の調子が悪いみたいなんで、僕が代わりに」

「へえ、たくましいんだ?」

「……むっ」

いつの間に知り合ったのだろうか? とアサギは思うが、改めてキラとマユ——ふたりの顔が並んでいると、柔和な顔立ちがよく似ていると思つた。お互いに茶色がかつた髪色という類似点もあつて、なんだかお似合いの一对であるようにも見えたのである。

そんなマユは一方、ジト目を浮かべてマユラを睨んでいた。

「さてはマユラお姉ちゃん、まーた男の子絡みで、よからぬことを企んでたでしょっ」

「べ、べつつに〜?」

マユは、そんな彼女に釘を刺すように務めた。

「キラさんを狙ってるようなら、あのね、だめだよっ！ キラさんは、ステラお姉ちゃんのことが好きなんだから！」

「え、違うツ!!」

唐突に公開処刑され、キラは慌てた。

マユは反論を受け、元から円らな瞳をさらに丸くする。

「え、違うの?」

「あつ、やっぱり違わない——じゃなくて！ だからって別にどうってわけじゃないから……か、勘弁してよっ！」

違う、とキラは思う。

確かにステラのことは好きだが、それは幼馴染みの親愛の情の延長線上であるものであって、これと云う見返りを求めているわけじゃない。いきなり告白とかして関係が激変して相手に負担とか迷惑かけてしまうのが嫌なだけで、そうなるまで築き上げて来た友情とか愛情みたいな綺麗な思い出が悉く黒歴史に崩れて行ってしまうような気がして怖いとか、そうじゃなくて。

——その気になれば僕にだって「好き」とかそれぐらいの言葉は云えるんだ！ たぶ

ん、いや絶対……！

そもそもステラのことだから好意を好意として受け取ってくれなさそうだとか致命的な不安はあるけど、そもそも人間関係が変な風に破綻してしまつては良くないと思つているだけで、だからこそ実行に移してないだけなんだ。自分が奥手とか臆病とか、断じてそういうんじゃないから。相手に気を遣つてるだけだから。

そんな風に思惟しているキラに対し、アサギとマユラはひどく心配そうなジト目を返すだけだったが。

「ステラお姉ちゃんの彼氏になる人は、マユが認めた人じゃなきゃだめだからね！」
未婚の母の娘みたいな発言であるが、本人は至つて真剣らしい。

——これは、難儀な審査官ジャッジマンが現れたな？

ジュリはなんとなく、目の前にいる少年を不憫に思つた。

そうしてキラは、マユを負つたまま彼女の運搬係のような状態が続いた。

訪れた先は格納庫であり、そこでは、ツールが相変わらずシユミレーターに居座つて訓練を積んでいるようだった。軽く会釈をかわした後、マユが呆然と顔を上げていることに気付いたキラは、ふいに尋ねた。

「どうしたの?」

「あれって、キラさんの “もびるすーつ” だよな?」

示唆された先には、蒼い羽を畳んだ “フリーダム” の姿がある。

次いでマユは、視線を反対方向に投げ掛けた。

「それで、あつちがステラお姉ちゃんの——」

「そう。ZGMF-X08A——ステラの機体だ」

ディアクティブモードにて正立する “クレイドル” は、マユの目に、すこしだけ冷ややかな印象を与えた。機体の鋼鉄色が、そうさせたのである。

マユは主に稼働中の “クレイドル” しか見たことがなく、そのとき機体は、鏡を磨き上げたような白銀と鮮やかなシアンブルーによって彩られていた。色の剥がれた “クレイドル” は、まるで灰色のヴェールを掛けられたように静かに立ち、当然だが、動く気配はない。マユはそうして機体を見上げながら、しみじみと溢す。

「ステラお姉ちゃんね。——あれに乗って、わたしを助けてくれたんだ」

その声は決して大きくはなかったが、みずからを背負っている少年の耳には、よく聞こえる音量だった。

「オーブに、地球軍が攻めて来たとき」

キラ・ヤマトが、こうしてマユ・アスカと会話するようになったのは、ここ数日の話

である。

これまでのマユへの認識と云えば、せいぜい「オーブの避難民の女の子」という程度でしかなかったキラであるが、その中でもマユは、ステラがとりわけて気に入っている——というより、気に懸けている女の子であったので、こうしてキラとも自然な交流が生まれたのだ。

「流れ弾に巻き込まれそうになったわたし達を、ステラお姉ちゃんが見つつけ出してくれた。——そのときはまだ面識もなかったはずなのに、すごいよね」

「……ステラらしいね……」

「わたし、お姉ちゃんみたいな女の子になりたいな。強くて……優しくて……可愛くて……不器用だけど、一生懸命だつて分かるんだ」

「でもステラは、きつと否定すると思う——『わたしみたいになっちゃだめ』ってさ」
「それでもいいの。わたしがそうしたいだけ」

そのとき、不意に「クレイドル」のkokopittoに人影が見えた。と云つても、その空間に縁のある人間などふたりといない——それはステラだった。

最近、彼女はよく「クレイドル」の確認作業するようになった。

——半月前の戦闘において、搭乗者^{ステラ}ですら把握できない「クレイドル」の発光現象が確認された。

ステラは当時の戦闘データをエリカ・シモンズ技術主任に解析して貰っているらしいのだが、いまだに明確な解答は返って来ないらしく、であるから、今回もまた例によってOSのチェック作業を自主的に行っていたのだろう。

キヤットウオークの上に身を乗り出したステラが、下方のキラ達に気付いた。マユがぱつと晴れた笑顔で手を振ると、ステラも胸の前で小さく手を振り返して来た。その顔には花弁のように柔らかい微笑みが浮かんでいる。キラはそれが可愛いと愚直に思ったが、口に出そうとは思わなかった。

「——い〜？」

さり気なく提案し、マユはそれに、大きく頷いた。

リフトを使ってコクピットまで登ったキラは、背中におぶったマユの身体をお姫様抱っこし、コクピットの中に座すステラに引き渡してあげた。『クレイドル』のコクピット——内部は決して広い空間ではなかったが、マユはちよこんとステラの膝の上に乗る、周囲の機材に目を輝かせている。キラは黙って、それを見守った。

「うわ〜、スイッチがいっぱい〜」

「勝手に触っちゃだめだよ」

オモチャを与えられた子供のようにはしゃいでいるマユに、ステラは小さく云った。が、当の本人は夢中になっていて、あまり効果がないようだった。

「あのバリアーみたいなの使うボタンはどれ〜?」

「それは……こつち」

ステラもまた、妹のように懐いて来る少女に対し、まんざらでもないようだった。

三隻同盟と云つても、資源は決して無限ではない。

勿論、オーブから出向する際に可能な限りの資材——特に水——は多く貯蓄して来たが、だからと云つて楽観視できるものでもなかった。「戦争を止める」という——それがいつになるのかも、あるいは何を以て終着点とするのか分からない旅を続けている以上、彼等は決して、今ある資源を無駄に消耗できなかつたのである。

——食いつぱぐれて全滅、なんてことになりや、笑い話にすらならん。

大体、半月前にL4に指針を取つたのも、元はと云えばL4宙域群にある廃棄コロニーを水場として活用するため、あるいは、そこにある水を余分に調達するためであり、結果的にその目論見は、到着と共に間を置かずして現れた“エターナル”の追撃部隊や“ドミニオン”によつて阻害されていた。

「——というわけで、今から、L4にとんぼ返りするのか?」

「ええ、あそこの水は、わたしたちに貴重な資源になります。前は色々とゴタゴタして、調達^そどころじゃありませんでしたもの」

艦橋で会話する、ムウとマリユである。

この半月の間、各地を転々としていた三隻同盟であるが、どこを回つても、L4の廃棄コロニー群ほど潤沢かつ健全な水場を探し当てることが出来ずにいた。そのため、こうして再び進路をL4に向けたのである。

勿論、彼等がいつとき根城にしていた事実があり、L4にはザフトか連合の軍艦が潜伏しているのではないかと。という懸念は心配されていた。しかし地球軍が「エルビス」を発動し、ザフトとの全面戦争の姿勢を整えつつある今、ザフトとしても「エターナル」追撃などに避ける人員はない。云い換えれば、両軍とも「三隻同盟に構っている暇などない」ということだろうが、ムウ達にとつて、そんな兆候は却つて好都合である。「前に見た感じ、中でも「メンデル」は安全牌だな。コロニーそのものが洗浄されている恩恵なのか、空気が正常だった」

「ん……」

「施設自体も放棄されたときのまま手付かずだし、ここ半月間に減った分の飲水を賄うには、たしかに格好の餌場になるか」

そのとき、開かれていた通信回線から、ラクスの声が飛び込んで来る。

〈連合、あるいはザフトが三隻同盟を警戒して、中に潜伏していないとも限りません。念のため偵察を出しますが、心積もりをしていた方がよろしいのかと〉

「でつかい戦争を控えてるつてのに、あんな辺境でドンパチやったつてさあ」

〈それが必要なことだと判断されているのなら、彼等はおのずと、そうして来るはずです〉

「会戦しないことを願うがね」

「——『メンデル』に行くつて、本当ですか？」

そのとき、通信に入り込んで来る者がいた。発信源は『グレイドル』からだが、声の主はキラ・ヤマトである。

マリューは驚いて目を開く。「キラくん？ どうして『グレイドル』から？」と訊ねると、へあつ、たまたま居合わせただけです」と返つて来た。

〈そんなことより〉

「え、ええ。……まあ、そうね。今はL4に向かっているわ」

マリューが口籠つたのには、理由があつた。彼女は出来るだけ『メンデル』の名を、キラの前で使いたくなくなつたのである。遺伝子操作の聖域——本当の意味での彼の生まれ故郷である『メンデル』の名を。

だが、マリューの配慮とは裏腹に、キラは思い切つたことを口にした。

「ラクス、その『メンデル』の偵察任務だけど——僕に行かせてもらえないかな？」

「——えっ」

「キラ……？」

マリューは、驚きに目をむいた。

それはまた、ラクスやムウも同様のようで、心外に思つて、ムウは声を挙げた。

「けどキラ、おまえ——」

「わかつてます。出来ることなら『メンデル』は、二度と行きたくない場所だと思つてた」

「だつたら……！」

「でも、正直まだ、整理が付いてなくて……。改めて『メンデル』について、知りたいんです」

確かに、以前『メンデル』を訪れたときは、クルーゼとの対戦——銃撃戦が主だった。

その過程でキラは己の出生の秘密について知ることになったのだが、ラウのひどく煽情的にして恐慌的な物言いが相まって、あのときキラは焦燥や恐怖によつて動揺するばかり。そこには落ち着きという言葉がまるで存在せず、ただ流されるままに憔悴していた彼がいた。

——だからこそ今度は、もつと冷静に、あの場所を訪れたい。

しかし、ムウはなおも洩面を浮かべたままだ。それもこれも、無理もない話である。もとより繊細なキラは、己の出生にまつわる衝撃的な真実を知り、ひどく傷ついたことと変わりはない。こうして半月間の時流がキラの傷を癒し、本人もようやく立ち直ろうとしている今になって——彼を再び“メンデル”に差し向けることは、決して上策ではないように思えてしまう。

しかし、キラは決然と告げる。

「あそこが僕の生まれ故郷なら。ちゃんと向き合わなきゃいけないなって思うんです、僕も」

「……そこまで云うなら引き留めはしない。でもなキラ、ひとつだけ条件がある」

〈条件?〉

「あの施設に入るつもりなら、ステラを『護衛』につけろ。——おまえひとりじゃ危なっかしい」

云われたステラは、すこし驚いたような顔をした。

キラは言葉を嚙んだが、ムウはどこか含みのある口調で云い付けた。

「銃を撃つのにセーフティも外してないようなトーションローを、ひとりで行動させるわけには行かないんだよ」

「あつ、そう云われると、確かにそうですね……」

「ステラも、悪いがそういうことだ。頼りない幼馴染みだが、よろしく頼むぜ？」

すこしだけ癪な云い方だったが、反論できるような内容でもなかったので、キラは苦笑していた。実際、生身で銃を握らせればステラに及ぶ者などそうはいないし、一方では銃の扱い方すらあやふやなキラでは、当然ながら足許にも及ばないのだ。

ステラはしかし、まるで気にしてないように淡と答えた。

「へわかった。キラは、ステラがまもるから」

その言葉は真剣だが、その内容だけに、キラの男心を深く抉り取った。

——女の子に護られる男って、ほんと情けない……。

もつともこれは、嘆いたところどころでどうにかなる問題でもなかったが。

「——意地が悪いわムウ、あんな云い方」

「えっ?」

通信を切った後、傍らのマリユーは嘆息ついてムウを咎めた。

「銃の腕前なんて、大した問題じゃないでしょう? 本当に大事なのは、あの娘ならキラくんを支えてやれるってこと——」

ムウは、苦笑した。

「あのふたり、なんだか似てるもの。立場とか、その……生まれとか?」

銃の安全弁セイフンが云々という、ムウの言葉が単に装飾された屁理屈であったことを、既に

マリユールは見抜いていた。

いくら明晰さを取り戻した状態とは云え、改めて「メンデル」の中を拝見したとき、キラは必ず傷つくだろう——本人はあくまで平気を装うのだろうが、心の中ではやはり、受け止め切れる衝撃ではない。

うち捨てられ、鑑賞物のように並べられた赤子^{きょうだい}達の標本——

その内のどれかが、キラ・ヤマトその人であつたかも知れないという事実——

十六歳の青少年には酷薄が過ぎる現実を、分かち合つてやれる人間はふたりといない。だからこそムウは、ステラを『護衛』としてキラの傍らに置くように云い付けたのだ——声に出せる性質の話ではないにせよ、それと似たような境遇に身を置き、単なる同情ではない——共感から来る本当の理解を示してやれるステラだからこそ。

見当てたような言葉に、ムウは肩を竦めて笑った。

「まったく、お察しの通りで」

「乗り越えてくれるといいわね。キラくん……」

「できるさ。あいつはもう、ひとりじゃない」

傍らにある、仲間がいるのだから。

「——それじゃ、すこし出て来ますね」

数十分後、既に発進準備を整えたキラが通信越しに云う。

すでにL4宙域の界限に差し掛かった頃、索敵も兼ねて「フリーダム」と「グレイドル」が動こうとしていたのである。

「キラ・ヤマト——「フリーダム」行きます！」

「「グレイドル」——えと、行つてきますっ」

発進というより、単なる遠足に出掛けに行くような少女の号令に、マリユはぶつと噴き出して笑った。

そうして彼等は、コロニー「メンデル」——ふたたび聖域へと発進して行つた。

『幼馴染の分水嶺』

コロニー「メンデル」から持ち帰った資料の中に、キラ・ヤマトが「とあるノート」を見つけたのは、この半月間のこと。

彼らが研究所から持ち帰ったレポートの中には、たとえばラウ・ル・クルーゼの出生について記された抄録もあって、キラやムウはこれを拝見したことで「ラウ・ラ・フラガ」その人が、クローニングによってテロメアの問題に苦しんでいる真実を把握できた。——では、その資料を記したのは、いったい誰だったのか？

資料の中には勿論、みずからの手でラウを作り出したヒビキ博士の学術書も含まれていた。だが、ありとあらゆる真実を、素人には解読困難な学術書それよりも、はるかに分かりやすく記述していた手記もあった。

その手記を書き残した人物は、ラウの肉体に起きていた異変をいち早く察知し、彼に与えられた『運命』を記録した男。ラウが製造された「メンデル」に籍を置いた、DNA解析分野における医学的権威。それでいて、ラウ自身の数少ない知己のひとり——そ

のような人物が残した手記を拝見して、キラは感銘を受けた。

——いま、これを読んでいる「きみ」は、どんな世界を幸せだと思う？

それは学術的なレポートというよりも、日々の憶え書きのように麗筆で連ねられ、今のキラにも理解しやすい、むしろ反応しやすい内容となっていた。

(どんな世界……？ それはもちろん、家族とか友達とか、みんなと一緒に……静かに穏やかなに暮らせる世界があるのなら、それが一番、幸せなんじゃないかな)

顔も知らない、まして、どんな人物なのかも分からない——

それでもキラは、このノートを通じて男性と会話しているような気分になったという。ステラにも、ムウにも云わず、このノートをこっそり自室に持ち込んだキラは、まるで食い入るように、この帳にひとり目を通していたのだ。

撃たれては撃ち返し、撃つては撃ち返される限らない応酬。その連鎖を断ち切ることで、誰もが手を取り合って暮らせる世界が来るのなら——おそらくは「それ」が、キラが思い付くことのできるより善い世界の在り方であるののように思える。

——だが昨今において、コーデイネイターとナチュラルの溝は深まるばかりだ。

——本当に愚かなことだとは思わないか？ 人が、同じ人を差別するなんて。

たしかに、キラもそう思う。ラウは云った——この世界、および今という戦争の時代は、人々の差別が繰り返された結末であり、もはや止める術はないのだと。

しかし、それでもキラは護りたい世界があると云った。世界の破滅を渴望していたラウとは対照的に、キラはこの世界を護りたい。呪うのではなく、祝いたい。ナチュラルとコーデイネイターが、互いに手を取り合つて暮らしていける世界を見届けたい。

そして、筆者このおとこの男性は——「それ」を実現じざんさせる方法を知つていた。

ただ戦争を止めるだけでは、根本的な解決にはならない。だからこそ、誰か、あるいは何かが、戦後の世界を徹底的に管理し、統制し、指導する必要がある。そしてその男は、未来から永劫に戦争を根絶させる方法や、世界をひとつの方向に席卷する方法まで提唱している。ナチュラルもコーデイネイターも憎み合うことなく、むしろ相互に尊び合う世界を。

「——」

男の唱えた方策プランを読んだ、このとき——

今のキラには「それ」が酷く斬新で、また魅力的な方法であるようにすら思えた。

——いつか人は、このような不幸から解放される。偏見、差別、妬み、憎しみ……そんな生身の衝動から自由になり、より幸福な世界で生きられるようになる。

——人と人が互いに敬意を払い、己の持てる才能を捧げ、共に未来を切り開いてゆく世界。誰も、誰かを虐げたり、憎んだりしない……争いや貧困は過去のものとなり、人々は愛し合つて生きる。すべてにおいて平等な、平和で穏やかな世界へ。

まるで童心に溢れた少年のように、希望に溢れた表現がそこには綴られている。所詮は理想論だろうと、心なき者らが口を揃えて揶揄するであろう夢物語を、全く以て真剣に説いている。

筆者は科学者だ。定石のない理想主義イデアリズムを厭い、どこまでも現実主義リアリズムを探究する職業人種。だからこそ公式的に世界の不幸を受け止めながら、それでも諦めず熱心に語る言葉には、無責任な妄想のみではない——平和を望む確かな情熱が感じられた。

——そんな時代を、いつか私は築きたい。

そしてこれは、書末に残された男の名。

——私はギルバート・デュランダル。

——私は決して諦めない。

会つてみたいと思った。

心から平和を切望する、このギルバート・デュランダルという男と、いつの日か。

コロニー「メンデル」——

多くの遺伝子学者が口を揃えている所の「禁断の聖域」を、キラ達は訪れていた。L

4 宙域周辺に敵影はなく、すでに偵察を終えていたキラ達は、そうして「フリーダム」と「クレイドル」をコロニー内に降り立たせ、周囲の探索に向かった。

すべては、水場を確保するための偵察である。今回ステラはキラの護衛として、基本的には彼に付き従うままに行動していた。そんな彼女を先導するキラであったが、彼はまず、使える資源を探しに行くより前に、

「行きたい場所があるんだ」

そう告げて、ひとつの施設に足を向けた。辿り着いた先は、巨大なボルトが天に突き向かうようなシンボルが特徴的な、奇妙な外観の研究所だった。そこは遺伝子改変にまつわる特別な研究機関——このコロニーが「聖地」と呼ばれる所以となった不可侵の聖域。もともと、人の往来のなくなつた今は、単に廃墟と云つた方が正しいか。

照明は全て落ちていた。ホールは吹き抜けになつていて、天井から差す光によつて微かに周囲の様子が見て取れる。そんな薄闇に呑まれた暗がり——施設内の闇の中へと、キラは無言で、まるで魂ごと吸い寄せられるように入つていこうとする。

宵の中に消えいってしまいそうなキラであったが、そんな彼がまるで遠くへ行つてしまふように思え、ステラはすぐに後を追おうとした。だが、彼女はふとエントランスに差し掛かったところで、その足を止めた。背後から差し込んだコロニーの光が、自身の影を造り出し——真つ直ぐに伸びた己の影は、施設内部の暗闇に喰われてゆく。

——なに、ここ。

研究所を前にして、ステラは奇妙な——そして不気味な——既視感を憶えた。施設の中はしんとして静寂に包まれ、しかし、その静けさの中に、不気味な質量を感じる。まるで、手を伸ばせば押し返して来るような——

深淵の奥深く、闇の中から吹き抜けて来る風——いや、匂い？——を知覚すると、彼女の心臓はドクリと異常音を発し、昂り、激しく脈動し始める。それは、防腐水溶液ホルマルインの鼻を突く臭いだ。風に混じったかすかな刺激臭が、彼女の中の遠い記憶を呼び覚まし、彼女を無意識に怯懦させる。

——ロドニアの研究所と、同じ……！

云い知れぬ興奮がステラの全身を支配する。忽ちに熱を帯びた細胞が、目前の施設へ立ち入ることに猛烈な拒絶反応を示しているかのようだ。

そうして唐突に歩みを止めた彼女を不審に思っただか——キラはようやく我を取り戻し、駆け足気味にステラの許まで寄り戻った。

「どうしたの？ 何か、あった？」

「(ハハ)……！ すごく、いやな感じがする——」

キラは、ハツとした。

ステラの表情が、云い知れぬ恐怖に歪んでいるのを認めたからだ。

——まだ入り口……でもステラは、この奥にある『モノ』を直感的に感じ取っているのか……!?

この「聖域」を一度だけ訪れたことあるキラには、この先に待ち受けるものが何なのか全てが分かっている。ラウ・ル・クルーゼ——その人によつて開かれた真実の「扉」——その向こう側にあつたものは、

保護性の防腐液を湛えた、数々の培養槽——

鈍く輝く、無影灯を備えた手術台——

ガラスケースの中、鑑賞物のように並べられた胎児達——

結局のところ、この遺伝子研究所にしたところで、残虐非道な人体実験の場であることに変わりはなかつたのである。

(そんな所に、ステラを連れて来るべきじゃなかつた……!?)

今になって、キラは己の浅慮を呪つた。彼女の古傷を抉り出すような場所に、他ならぬ彼女を連れて来るなんて、いったい自分は何を考えていたのだろうか？

——いや、むしろ何も考えていなかったのだ。

何の配慮も出来ないから、そいつを無神経と云うのだ。途端に申し訳なくなつたキラは、肩を抱き憔悴するステラに、できるだけ穏やかな口調で告げた。

「ごめん。じゃ、此処ですこし待つて。奥には、僕ひとりで行つて来るから——」

——すぐに戻るよ。

妹をあやすような笑顔を浮かべたキラは、そう云い残して施設の闇の中へ赴こうとし、ほとんど咄嗟にステラがその腕を掴み、引き留めていた。

「ん……う？」

引き留められた腕に少女の掌を感じながら、キラはステラへと振り向いた。華奢な腕、震えた掌でキラの腕を掴んだ少女は、自分自身が取った行動の意味が理解できていないようであった。

それは、無意識に伸びた手だったのか……？ ステラは呆然としながら、自身の手とキラの腕を交互に見つめている。震えた声、懇願するような面持ちで云う。

「ご、ごめん。でも——この研究所は、だめ……」

——だめ？

ステラが思いのほか強い力で掴んで来たことに、キラは困惑していた。ただ引き留めることを目的とするに於ては、少し痛いと思えるくらいの力強さ。怒り、怯え——複雑な感情をその円らかな瞳に宿すステラだが、その手はまず間違いなく、闇の中に導かれようとするキラを行かせまいと、この場所に引き留めようとしていた。

「進むと、キラまで変わっちゃう——そんな気がする……」

まるで未来を予知したような口振りに、やはりキラは困惑したという。彼としては半

信半疑な様子だが、不思議とこのときのステラには、直感と確信があった。

(キラまで変わっちゃう、気がする——ビクトリアの、アスランと同じみたいに……)

隠し通すことが出来ないぐらい、ステラは不安そうな表情をしていた。それでも、キラはそんな彼女に対し首を横に振った。彼は腕を掴むステラの手をやさしく解いてあげる。

「ごめんね。でもこれは、僕のためなんだ。行かせて欲しい」

短い言葉の中には、云い知れぬ含みがあった。人には誰しも目的というものがあり、他人に何を云われようと譲りたくない部分もあるということか。少なくとも、キラにとって今回はそのケースだった。

否定というより、拒絶されたような感覚になったステラは失意の表情を浮かべ返したが、それでも彼女は次にぎゅつとキラの腕に身を寄せた。それは引き留めようとしているのではなく、不安を誤魔化すようにすり寄る動作だった。

——だったらせめて、おいていかないで。

念を押しながら、夢いまでに美しいすみれ色の双眸が、そのように訴えた。キラはしばし考えたが、やがて観念したように頷く。

「わかった。じゃ、一緒に行くこう」

ぎゅつ、とキラの腕に胸を寄せる少女に対し、雑念も邪念もなく、キラは真つ直ぐに

施設の奥を見据えた。

その足を進めると、腕にしがみつくようにしていたステラもまた、堪えながらに歩を進めた。それは、どちらが護衛なのか分からなくなる絵面になっていたが、言及したところで、特に意味はなかった。

施設を進むにつれて、ステラはこの研究所が、己の出所したロドニアの研究所と、等にして同質のものであると確信し始めていた。遠い日の記憶が彼女の脳裏に走り出し、とうの昔に置いて来た感情が頭をもたげ、ステラを中から食い破ろうとする。

悪夢のような研究所での毎日から、ステラは懸命に自分を切り離す。ステラはすり寄ったキラにすべてを委ねるように、その腕に力を籠めた。急に強まった力に気付き、キラは優しく囁く。

「苦しかったら、戻ってもいいんだよ」

すっかり竦み、肩を小さくしているステラは、それでも震えた声で返した。

「いっしょに、いさせて」

「……そうっ？」

キラを一人で行かせてしまふと、もう二度とキラが帰って戻って来ないような——あるいは、闇に揉まれて別人のように変わり果てて帰って来るような——

いずれにせよ、キラがもう手の届かない所へ行ってしまうような気がした。云い知れぬ不安が頭を過ぎって、離れなかつたのだ。

——ヒトが変わるのなんて、一瞬だ。

ふと目を離れた隙に、別人みたいになつて帰つて来た男を、ステラはひとり知つてゐる。

しばらくして、二人が進む先に無機質な広い空間が現れた。そこに覗くのは、無数のガラスケースと、その中にうづくまる物体？——いや、それらは赤子になるよりも前に成形を終えて朽ちていった胎児達の姿だつた。

「あれが、僕のために生み出されたきようだい」

明かされた言葉に、ステラは目をむいて驚く。

——不気味だ。

屍が保存液に浸されているという点では、ロドニアの研究所と大して変わりはないが、ステラはできるだけ凝視しないように務めた。

「——『最高のコーデイネイター』って、何なんだろうね。やっぱり、戦うための人間——
——ってことなのかな」

「えっ……っ？」

傑出した身体能力と反射神経は、戦場において非常に強力な武器になる。だからこそスーパーコーディネイターとして生み出された自分は、戦場でしか本領を発揮できない人間なのか。他の分野では、まるで役に立たない天才——そもそも、そんな人間を本当に天才と云つてもいいのだろうか？

「唐突に『人類の夢』なんて云われたつてさ。……それで得てきたものと云われても、戦つたり、人を殺したりする才能くらいでしょ？」

そうでないなら、では、救いたい人間ひとり救うこともできない『人類の夢』とは何なのだろう？ 救いたかったフレイを救い出すこともできず、あまつさえ彼女の目の前で「カラミティ」を撃破した自分。そうすることしかできず——むしろ、そうすること
で余計に彼女を苦しめた自分が、本当に『人類の夢』などと呼ばれるべき人間なのか？

「ラウ・ル・クルーゼが云つたとおり——「力」だけが、僕のすべてなのかな」
無力感を独語するように紡がれた言葉に、ステラは返す言葉を必死で捜した。

「……でも、ステラは」

「ん……っ？」

「昔のキラを知ってるよ。戦うだけが全部じゃないキラだつて、知ってる——」

元よりキラは、心の優しい男の子だった。ナチュラルだとか、コーディネイターだと

か微妙な話を抜きにしても、好感の持てる少年なのだ。少なくとも、ステラにとっては、
——生まれがどんなだつて、関係ない……。

いくら強大な力を持つていようが、そこだけは変わらない——いや、変わらないでいて欲しいとステラは切に願っている部分がある。

「どう生まれたか、じゃなくて——どう生きるかが大切なんだつて、前にキラが、ステラに云つてくれた」

「……！　そう、だっけ」

「キラは、ずっと昔から、やさしい男の子だよ！　だから、その……」

どこにでもいるようで、そのじつは、どこにでもない優しきを持つている男の子——ステラにとってキラはそういった人物であり、普通の男の子だと信じていた彼が、実はステラ以上に、ヒトの欲望によって生み出されていた。

——そんな真実を聞かされたときは、ステラも驚いた。

しかし、かつて敵対した「フリーダム」が当代最強の怪物であつたことを思い出せば、動揺すると同時に、不思議と納得してしまつた自分がいたのも事実ではある。

（最高のコーディネイター。それが、本当のキラ——キラ・ヤマト）

そう、今はまだ優しく、穏やかなキラ。

——でも……。

いずれ力に溺れ、迷いや悩みを断ち切るようになったキラという人間が、どれほど強大な存在に——どれほど手の付けられない存在になってゆくのかも、ステラは知っていた気がする。戦場にあつては誰ひとり敵わず、本当の意味で『最強』の名を欲しいがままにしているキラの未来を、彼女はたしかに記憶したことがある——気がする。

(できるなら——ずっと、今のキラのまままでいて欲しい、な……)

それが叶うのであれば、ステラはキラにはずっと今のままでいてほしい。

それは嘘偽りのない彼女の本心であつたが、口内で思惟するだけで、言葉には出来なかつた。それが結局は、ステラ個人のわがままに過ぎなかつたから。

弱くて儂くて、ときに頼りないような少年であつても、ステラはそういう人間味のあつるキラの方が好きなのだつた。

分水嶺ぶんすいれいという言葉がある。

それは物事の方向性が決まる分岐点。人生に当て嵌めて云えば——「運命の分かれ目」とでも云うのだろうか？ その者の行方、未来を左右する大切な局面を“山稜”で喻えた言葉である。

雨水は複数の水系に分かれ、そして流れ出す。

ひとつの水系を流れ出した雨水は、分水嶺を越えて他の道に渡ることはできない。道中、ふたつの水路が合流しない限り。

人間に喩えてもそれは同様であり、人生には常に複数の分岐点が存在し、その者が望み選んだ方向に人生の時間は流れてゆく。逆に云えば、分水嶺において一度でも進む道を誤れば、人生はもう後戻りできないし、他にあり得たはずの未来に渡ることもできなくなってしまう。道中、奇跡でも起こらない限り。

そういう意味では、分水嶺とは「複数の未来から、たったひとつを取捨選択する人生のターニングポイント」——とも云える。

たとえば、アスラン・ザラの分水嶺は、ビクトリアだったとステラは考えている。

そもそも、アスランがその穏やかだった人格を一変させることになった最大の原因は、ビクトリアにおいて、彼自身が戦士としての己の資質に気付いたことにある。キラと同様、確かにアスランはMSを操縦させれば右に出る者はいないほどの実力を持っており、しかしその性格は、戦争には不向きと云えるほどに優しく、甘い。

だからこそ彼は、そんな本来の自分を切り捨てることによつて戦士としての未来を選び取り、その他の未来を諦めた。ステラにとつて優しい、家族としての未来を。

(アスランは自分の力に気付いてから、暗くなった)

——自身に秘められた才能や資質に気付いたときが、分水嶺であるのなら。

こうして最高のコーデインイターとして——天才としての資質に気付いたキラもまた、ひとつの分水嶺に立っていることになる。その者の生き方を根本から変えかねない人生最大のターニングポイントを、キラは、ステラを前にして目の当たりにしていることになる。

(遺伝子研究所こに感じた気持ちのわるさは、たぶん——不安)

ここは、ヒビキ博士が狂気の夢を追った聖域だ。そんな遺伝子研究所を訪れることによつて、キラはこうして、極めて天才的な自分の可能性に気付いてしまった。

アスランは当時、みずから『戦士』として改める決断を行ったのだが——ひよつとして、キラまでもがみずから『天才』に改めてしまうのではないか？ その無情の決断のために、今までの穏やかで優しい人格を一変させてしまうのではないか？ そのような危惧が、ステラの中に渦巻いて離れなかったのだ。

(そんなの、やだな……っ)

もはや疑う必要もないほどに、ステラは、キラに対して一定以上の好意と信頼を寄せている。

しかし、それも結局のところ、キラがあくまで平穏でやさしい男の子として——彼女の親友としてあつてくれる限りの関係でしかない。そこに絶対はないし、キラに対して

申し訳ないとも思うのだが——たとえば力に溺れ、力に驕った『天才的なキラ』が彼女の目の前に現れたとき、ステラは、そんな風になり果てた彼をこれまでのように信じ、好くことはできないだろう。

——なぜなら、それはステラの恐怖の対象物だから。

かと云つて、キラ自身がみずから望んでそうなったなら、それを恋人でもない今のステラに止める権利はないし、結局は彼女の都合でしかないのである。

だからこそ言葉にはしなかつたが、ステラがこうして恐怖や不安を抑えて彼に同伴したのは、キラにそんな風に「変わつてほしくない」——と心のどこかで願つていたからだ。分水嶺に少年ひとりを送り込むことで、人格が一変してしまふ事態を防ぎたかつたからだ。

ここまで束の間の思慮の後、キラは場所を移し、とあるオフィスまで足を進めた。訪れた先にはヒビキ博士のオフィスと同じように、無数の研究資料が保管されている。見渡す限り書冊に溢れた光景に、ステラは少し目が回るような気分になる。

「僕が『メンデル』に来ようと思つた理由はさ。自分の能力とか、未来とかに、ちゃんと向き合わなきゃいけない……って思つたからなんだ」

たしかに、そのようなことをムウに云つていた記憶がある。

するとキラは、オフィスの中をごそごそと物色し始めた。これが誰のオフィスである

のかステラには判らなかつたが、キラはいま、何か探し物をしているようでもある。

「僕には『スーパーコーデイネイターとしての未来もある』なんて唐突に云われても、実感が無いんだ」

「……分かる話かも……」

「僕は『これからどうやって、どんな風に生きて行けばいいんだろう?』——そう悩んでたときに、ひとつのノートを見つけた」

ステラは、小首を傾げた。

「そのノートは、僕にこう云うんだ——『分からないのなら知ればいい。初めから人は、迷うことなく、正しい道を進んでいけばいいんだ』って」

人生の分水嶺において、己が進むべき道が、キラには分からなかつた。

——このまま何も聞かなかつた振りをして、昔みたいに平凡な子どもに戻るべきなのか?」

それとも、

——最高のコーデイネイターとして、世界のために、この奇跡的な能力を捧げるべきなのか?」

結論の出ない自問自答に、キラは他人の力を借りようとした。

「僕は——僕の人生の『正解』が知りたかつた」

己の出生を知りたいま、これからの自分は、どう在るべきなのか——？

そういつた「正解」を知ろうとしたがために、キラはこうして「メンデル」を再び訪れる気になった。このコロニーの中にある、とある男の研究室へ辿り着くために。

「——あつた。これが、僕の探し物」

ステラはキラに歩み寄り、屈み込んだ彼の手許まで、一気に視線を落とした。

キラの手には、色褪せた数冊のレポートやノートが取られていた。おそらく、この「メンデル」に籍を置いていた遺伝子科学者が残していったものだろう。

——いつたい、キラは何に興味を持ったの？

疑念に思つたステラは膝を折り、キラと視線の高さを揃えた。そうしてキラが回収した資料の表紙に目を遣る。

と、表紙のタイトルには、こう書かれてあつた。

——Be 我advocated 運命”Destiny 提唱Plan す”

著者の名は『Gilbert Durandal』——
ステラにとつて、どこかで聞いたことのあるような名の男が記した、ひとつの学術書であつた。

キラの求めた資料を回収したふたりは、間違つても居心地が良いとは云えない研究所を出た後、近場の建物に入っていた。

表看板の文字は薄れ、何の店までかは特定できなかったが、中を見るにテーブル席とカウンターの席が立ち並んでいたことから、そこが軽飲食店であることはすぐに理解できる。人気の失せた廃棄コロニーとは云え、慎重に資源を漁って見れば、立ち並ぶボトルやドリンク類の中には、いちおう口に入れても問題ない程度の代物はあるようだ。

適当な調査を終えた後、とりあえずカウンターに腰かけたステラであるが、そんな彼女は、なぜか椅子の上だと云うのに膝を抱えて体育座りをしている。

——パイロットスーツで良かった……。

あれが軍服だったら——と思うと、すこし安堵のような、すこし惜しむような気持ちも同時に流れて来たキラであるが、それはそれで可愛い姿勢であったので、特別触れようとはしなかった。

キラはステラから距離をおいてテーブル席に坐し、机上に先程の資料を広げている。

「有史以来、人類はずっと争いを続けて来た——権利を主張し、利権を求め——それもこれも、根底には『自分達の生活をよくしよう』っていうエゴがあった」

達観したように語るキラは、すこし、遠い存在になつて見えるように見えた。

自分に与えられた能力を知り、前進したと云えば、決して間違いではないが——なん

となく面白くなくて、ステラは不機嫌な顔をしていた。

そんなステラの表情の変化に、キラはまるで気が付いていない。

「そういう意味じゃ、戦争は、人をよりよく活かすための必要悪だったのかも知れない。人々が互いに傷つけ合いながら、そうしてこの世界は出来上がって来た——」

「……」

「——でも、それをもう、終わらせられる時代が来るかも知れないんだ」

それは彼が先ほど云った、戦争を引き起こす最大の原因を取り除くこと——
つまり、人間のエゴ、そのものを刈り取ってしまう世界を提唱すること。

「この資料を書き残した科学者は、すくなくとも、そんな世界を築く方法を知ってるんだ」

「それが、ですてにー・ぷらん？」

「そ。—— デステイニー・プラン」

ステラの発音がえげつなく悪かったのは、それが、彼女が初めて耳にした言葉だからであろう。

「ヒトの根幹——遺伝子にまで手を伸ばして来た、それは僕たちコーディネイターが生まれた世界、コズミック・イラの究極の形。生まれついで遺伝子によつて人の役割を決め、適性ある方向に人類すべてを、それぞれ導いてあげる『人類最高の救済システム』

だ——て、ここに書いてある」

難しい話をされて、余計に不機嫌になったステラは、とりあえず目の前に陳列されてあつたボトルに手を伸ばした。

何のボトルなのかは知つたことではないが、口にしてみたら意外とおいしかった。

「遺伝子を解析することに始まつて、人の特性を知り、それに従つた能力主義の社会秩序を構築する。そうすれば、すべての人間は分相応の範囲に収まつて、今の僕みたいになれるやこれやと迷うことも、悩むこともなくなる」

「……………」

「間違つてしまふくらいなら、初めから正しい道を——然るべき相応の軌条を進めばいい。この科学者は、そういう世界を謡つてゐる。人間に与えられた『運命』そのままに——ヒトが世界のために、能力を捧げて生きていく世界を」

それは、徹底的な管理と統制が織り成す社会。ヒトが生まれた時から決められた人生を歩み、疑問を持つことすらありえない、許されない世界。

人は、自分に与えられたそれ以外、それ以上を知らず——望まず、欲しがらず——そうして絶対的に「奪われぬ」法規を造り出すことによつて、人間同士の対立を永遠に抑止する。

誰にも、何者にも脅かされない、絶対秩序に統制された理想郷の実現——

「そこにあるのは、きつと、ひろい意味での安寧じゃないかな」

「……キラは、世界にそうなってほしいの？」

「遺伝子操作や遺伝子解析だつて、人類がその長い歴史の中で大切に育んで来た、科学技術の結晶でしょ？ 科学で平和な世界を席卷する——『人類の叡智が人類を救う』つて話なら、それつて素敵なことじゃない？」

戦争を終えても、またどこか、いつか他の戦争が起こるなら、ただの歴史の繰り返しだ。しかし人類は、そうやって繰り返し返された争いの歴史の中で、科学という名の能力を高め——確実に前進して来た。傷つけ合いながらも発展して来た。

——それもこれも、いつか戦いの歴史を終わらせるために。

そうして大器晩成した科学力こそが、この世界に安寧と平穏を齎すのなら、それは人類が文明の発展の先に行き着いた、ひとつの究極の結末ではないか。

「ラウ・ル・クルーゼつて人に云われたんだ——『きみが人類の夢ならば、人類くらい救つてみせろ』つて」

ラウに云われた言葉が、すくなくとも、キラの中には影響していた。

——人類を救うのは、人類の力に他ならない。

——究極の人類の救済システム、それが「デステイニー・プラン」

遺伝子操作によって管理された世界を実現させるためには、ならば、遺伝子操作に

よって天才として生み出された自分がその役割を全うすべきではないだろうか？ キラは「メンデル」を訪れることによって、新しい道標を得た気がしたのである。

「スーパーコーディネイターとして僕にできることと云えば、今の世界に対して、そんな在り方を呼びかけることなんじゃないかなって思ったんだ」

「……………」

「ステラは、どう思う？」

このとき、ステラはキラの訴えた世界の様相を想像していた。

——遺伝子によって、完全に役割を統制された世界……？

たしかに、そんな世界が実現すれば、人々の対立はなくなるだろう。だがそれは、人々から自由意思を完全に剥奪するのと同義ではないのか？ 悩むこと、迷うことはたしかに不必要、無意味になる。だが、それというのは、つまり——

「ステラは、やだなあ」

ステラは、ぼわーっとして云う。

が、考えなしに見えて、その発言は物事の本質を捉えた。

「だって役割のままに生きてたら、ステラは、キラの敵だったから」

それまで感動していた風なキラの表情だったが、その一言をもって凍り付いた。

嘘ではなかった。ステラは、生体CPUとして生きていた頃は実際に「デストロイ」

で「フリーダム」と戦ったし、仮にもパトリック・ザラの指示に従っていれば、その先「グレイドル」で「フリーダム」と戦っていたはずだ。

ステラが本当に、与えられた役割に従うだけの傀儡であつたなら、何度もキラと交戦し、互いに傷つけ合っていたはずだから。

「まよつて、これでいいのかなつて、なやんで——だからステラは、キラのところに来たの」

——自分の意志に従つて、行動する。

それは、かつての彼女ではあり得なかつた行為だつた。

勿論、所詮は一回の兵士に過ぎない彼女には、何が正しいのかを神のように見極めることなど出来なかつたが、だからこそ、みずからが後悔しない行動に務めて来たのだ。結果的に父親を裏切り、ザフトからはテロリストと罵られて今、周囲から響聲を買う決断をしてしまったということなのだろうが——それでも彼女は、自分にできる最善を尽くして来たつもりだ。

そこには、少なくとも未練はないし、後悔もない。

だが、キラの云う「運命」に従つた世界というのは、その最善、ないし人生の『正解』を他人から強制されるといふことではないのだろうか？ 本人の自由意思とは無関係に、物言わぬ遺伝子を解析することに始まつて、人格や個性を無視して個人を決定づけ

てしまうのが、その世界ではないのか？

——仮にもキラが、ヒトが役割のままに生きた世界を「正しい」と感じているんなら……。

ステラがこうして、キラの隣に居ること——それ自体が、そもそもの誤りということになってしまふ。だからこそステラは、率直に訊ねていた。

「ステラがキラのところに来たの、めーわくだった？」

問われたキラは、啞然とする。

——迷惑？ そんなはず、ないじゃないか……！

むしろ嬉しかった——彼女が自分の意思で、自分の許に来てくれたこと。自分を助けてくれたこと。それは紛れもないキラの本心であったが、だからこそ彼は、こう返した。

「そ、そんなことない——！……？ だったらぼく、なんか、矛盾してるね」

「うん」

ヒトが与えられた役割に収まる程度の存在ならば、そもそも、二人が同じ地平に立つことなんてありえないのだから。

「あれ……。なんか、分からなくなってきたぞ……？」

それまで運命によって制定された世界が、彼としては正しいと信じて疑わなかったの
だろう。

ステラという別角度からの刺激を受けたのが影響したのか、今のキラはそんな世界が不自由のようにさえ思え、頭を抱えて混乱し始めた。

——いや実際、不自由なんだ……？

そこは自由のない世界——運命によって強制された世界なのだから。

——なら僕は、何が云いたかったんだっけ……!?

結局、キラは孤独の中で考え続けて、最良の答えが導き出せるほどに余裕のある正確をしていなかったのだろう。今回、ステラが傍にいろくれたことは、彼にとって非常に幸運な出来事だったかもしれない。延々とひとりで暗澹と考え続けていたら、もしかしたら、進む道を間違っていたかも知れない——“メンデル”という、彼にとっての最大の分水嶺の中で。

「だからキラは、天才なんかじゃなくなっちゃっていいんだよ」

ステラはぼけーつとしながら、本心からそう云った。

「天才ぶる必要^{ひつよ}だつて、ないし……」

「えっ……？」

「キラは、ちよつと頼りないくらいがちようどいい」

「ひ、ひどいい」

そもそも、似合わない話ではないか——ともステラは思ってしまう。

優しくて、穏やかで、泣き虫で、そういう彼を昔から知っているステラにしてみれば、そんな彼が急に人類の上に立つ天才になろうとしても、違和感のある話だし、それはそれで似合っていないと思える。

——そう考えると、今日はやけに頭の回転が速かった。

ステラは何故かこのとき、云いたいことをつらつらと発言していた。

「……。だいたい、そうやってきとつた感じのキラ、ステラすきじゃない」

「え？ そう？」

「うんつ、キラは今のままでいいの！ 今のままがいい！」

言葉には、異常なほどの感情の昂りがあった。

——ステラが、やけに饒舌だ……？

咄嗟に懷疑したキラは、次の瞬間、ステラの頬が真っ赤に紅潮していることに気付いた。

「——？ ステラ？」

キラは、思わず立ち上がった。ステラの傍らに、妙な酒瓶が置いてあることに気付いたからだ。

呂律が回っていないから、薄々感じ取ってはいたが、

「——もしかして、きみ」

「……。ふえ？」

「お酒呑んだでしょ!? 未成年が！」

指摘され、ステラはとろんとした目で、カクテルの瓶に視線を戻す。キラは慌てて力ウンター席まで駆けつけた。

そんなキラに視線を戻し、目を合わせたステラは、にへらと明け透けに笑った。

「あゝ。おさけ？」

「いやいや、ひとりで半分開けてるし」

慣れない液体を胃に通したせいかしやつくりが止まらず、忽ちにひつくひつくと喉を鳴らし始めたステラを、キラは慌てて云い咎めた。

「でもこれおいしいよお？」

「おいしいよ、じゃなくて！ ああもうっ、何やってるのさっ」

人が真剣に悩んでるときに！

——だが、よく考えると、落ち度はこちらにあったのだろう。

そもそも自分は、彼女を不気味な研究所を連れ回したばかりか、その後も深刻な話に一方的に付き合わせた。

これでは気を発散させようとして彼女が酒瓶を手にしてしまっても、彼女ならばやりかねない。

——いやステラのことだから、単純にカクテルとジュースを間違つて口に放り込んだ可能性が高い気もするけど……

この際、どっちでもいい。判っていることはひとつだ。

——もしかしなくても、これは確実に酔っている。

ステラはどうにも、お酒を飲むと無防備になるタイプらしい。

——しらふ素面でも無防備？ それはいま言及することじゃない！

普段臆病に見えるほどの寡黙さはなりを潜め、ステラはふわふわと昂揚しているようだった。なおもカクテルを口に含もうとするステラの手を、キラは慌てて掴み止めた。

「ちよつ、だめだつてっ」

「やだ」

それでも、縋るようにステラはボトルを離そうとしない。

「わがまま云わないでさ。ほら、いい子だから——ね？」

「やだ〜！」

「——ああ、まったく〜！」

出来心に従順な稚児から着火装置ライタを取り上げる父親のように、キラはすこしばかり必死になってボトルを奪おうとした。ぐいつ、と強引気味にボトルを引っ張り上げるが、しかし、ステラは竿に釣られた魚のように、それと一緒に引っ付いて来た。

カウンター席から態勢を崩したステラは、そのままボトルを取り上げたキラにぐつたりと倒れ込み、

「うわ」

抱き留めようとしたキラも、自分の体重をまるで支えようとしないう少女の身体を支えきれず、そのまま床に倒れ込んでしまった。

——ガシャアーンツ

テーブル席に後頭部から突っ込んだキラは、木製の調度品をぶちまけながら仰向けに倒れた。手に握っていたはずのボトルが傍らに転げ、瓶口から内容液が床一面に拡がってゆく。

「痛った」

——女の子ひとりも支えきれないのか、ぼくは？

恥ずかしいというか、格好悪いの一言である。唐突だったのもあるが、慣れないことをすると失敗するとは、いったい誰が云った？ キラはちよつと頼りなくらいがちようどいい？ 何もこんなときまでステラの云った通りにならなくてはいいいじゃないか。一方のステラは、キラの胸に頭を埋め、なんかを訴えているようでもある。顔を上げないのは、恥ずかしがっているからではないのだろう。

これもひとつの抱擁の形であったが、抱き合っているとは云えない状態ではあった。

アルコールのおかげで体温が上がり、少し汗ばんだ身体が、キラへと凭れかかる。直に触れるステラの体温に、キラの鼓動は速くなった。

「……大丈夫？ どうしたの？」

「キラが変わつちやうのも、ぜんぶ、やだ……」

キラの動きが、止まった。潤んだ瞳に、頬を紅潮させながら、甘い声でそんなこと言われても、困った。

——やたらと甘い匂いがするけど、きつとこぼれたお酒のせいだ、そうに違いない。ぐったりと体重を預けて来る少女は、キラの胸元で泣くように云った。

「こわいひとに、なって欲しくないの……キラには」

「ステラ……」

「キラにはそのままでもいい——もう、失いたくない……」

アスランのように、別人みたいになって欲しくない。

酔っているからか、このときステラは、云いたいことを云っているようだった。

「むかしに戻りたい……むかしみたいに、キラとアスランと——みんなといつしよに……」

普段から我慢していた何かが、栓が外れて溢れ出てきているようだった。

「——ねえ、なれるよね……？」

「…………どうだろう…………戻りたい、よね…………」

共感を示すことは出来ても、賛同はしてやれない。

キラには、ステラに苦笑することしか出来ない。ステラの言葉をはつきり肯定してあげる事が、今の彼には出来なかった。

「ス、ステラ…………とりあえず、離れよつか!？」

これ以上は、色々と駄目だ。

自戒しながらキラは慌てて告げるが、

「…………ステラ?！」

返答は、まるで返つて来なかった。それどころか、もたれかかる重みは増すばかりだ。

耳を澄ますと、同時に規則正しい息遣いが聞こえて来た。気疲れか、それとも酔い潰れか、そのまますうと眠りについてしまったようだ。

「え、うそ？」

キラはひたすら、途方に暮れた。——いったいぼくらは、何をやっているんだろう……………?

“クレイドル”を抱えて“エターナル”に戻った後、キラはステラを彼女の自室まで送り届けた。

薄闇の部屋の中——わずかな光を照り返す金髪と、その下に覗く色白の肌が、すこし紅潮して、やけに色つぽく見えた。彼女をベッドに寝かしつけた後、しばらくその寝姿を見守っていたキラであつたが、しばらくすると、室内にラクスがやって来た。

「ラクス」

「コロニーの中は、だいじょうぶでしたか？」

「ああ、うん」

返事を返すと、キラはふたたび視線をステラへと戻した。

ラクスもまたキラの隣までやって来て、同じように視線を揃える。しばしの沈黙の後、キラは思い切つて、傍らのラクスに打ち明けていた。

遺伝子操作によつて制定された、運命的な世界のことを。

「——遺伝子が“王”として君臨する世界、ですか？」

「コロニーの中に資料を見つけたんだ、これなんだけど」

示された資料を見、ラクスは目を見開いて、驚いた顔をした。

まさかキラから、そんな言葉を耳にするとは思わなかつたのだ。

「しかし、与えられた役割のままに人間が生きる世界なんて——傲慢ではありませんの

「？」

「やっぱり、ラクスもそう思うかな？」

「ええ、どうしても、そう思えてしまいますわね……」

ラクスは、云った。

「夢を見ること、未来を望むこと——それはわたくし達すべての命に与えられた権利だと、わたくしはそう思います」

望みのすべてを摘み取れば、確かに戦争は二度と起こらないだろう。

——しかし、そんな世界が、本当に自分達の望んだ世界だろうか？

戦争を止めたいと思っているのは本心だ。

が、だからと云って、すべての人間を遺伝子によつて管理・統制する——？ 逆に云えば、それは制度にそぐわない者は淘汰されたり、矯正されてしまうことではないか？

ラクスが懸念に思っていると、キラが先を続けた。

「ステラが云ってたんだ——『もし役割のままに生きていたら、ステラはキラの敵になっていた』って。」

それを云われて、よく分からなくなつた。『自由』と『運命』——ふたつがあれば、ヒトの未来は、どっちが創るべきなんだろうって？

ラクスの中で、答えは既に決まっていたのだろう。

ラクスはこのとき、ステラを支持して発言した。

「人生に——『正解』なんて言葉は存在しませんわ、きつと」

それはキラの想像を、真つ向から否定する言葉。

「すべての人は——ときに間違い、悩み、遠回りして道を選ぶ。

間違つてやり直すことは、同じ到着点ぼしよに至るにしても、間違わず真つ直ぐに進むこと

とは違うでしょう？ 迷い悩むことは、決して無駄でも、不幸でもなく——ただただ、そ

の者の糧となる人生の賜物なのです」

重要なのは分水嶺を越えること。そしてその先に待ち受ける目標地点ゴールにいち早く辿

り着くこと——ではない。

重要なのは目標地点に辿り着くまでに、どんな道を巡つたか、どのように進んで来た

のかであつて、

「挫折も、迂回も、迷走も——その人に大切なことだと思います」

キラは、うちひしがれた気分になる。

「——だからばくも、これから迷つて、悩んで行かないか……」

「それは、ステラがすでに通つた道でしょう？ 何が正しいのか、何と戦わなければなら

ぬのか——それは決して他人に答えを求めるものではなく、みずから決める」

結果、ステラはザフトか連合、どちらかの立場に立つて戦うことを辞め、両者の間に

立つことを決断した。

ラクスと同じように。

「自由の中で、自分に何ができるのか——それは、キラがこれからの人生で探していくものだと思います」

「——そうだね、その通りだ」

ステラに、ラクスに云われて、キラは気付いた。

今のキラには、スーパーコーデイネイター以外の未来を選ぶこともできるのだ。

——選択する自由が許される世界、だからこそ。

たとえば、運命によつて定められた世界では、確かに戦争は起こらないかも知れない。しかしそれ以前に、そこは、気になる異性に好意を持つことすら許されない世界でもあるのだ。

そうなれば、人は何のために生きているのだろうか？ 自由意思では何一つ得られず、勝ち取れず、求められない世界には——確かに安寧はあれど、いったい、どんな幸福があるのだろうか？

「……ぼくはちよつと、どうかしてたのかも知れない……」

こうしてキラは、自身の分水嶺を越えて行つた。

重たい頭をもたげ、ステラはしばらくしてから目を醒ました。

室内はうす暗く、ぼーっとしていた彼女だが、頭が覚醒するにつれて状況を把握しはじめた。

「う、ん？」

「起きた？」

キラの声だ。キラが傍らにいて、ずっと見てくれていたらしい。

「あれ？ ステラ、なんでここに……」

「ああ、憶えてないんだ？ 途中できみ、眠っちゃって」

「……どうして？」

まるつきり記憶が抜けているのだろう。

キラは苦笑したが、ステラは頭を起こそうとして、まだ少しくらくらくしていることに気が付いた。

よろめきかけた上体をキラが支えてくれると「まだ寝てていいよ」と告げられた。言葉に甘えて、ふたたび横になることにする。

頭がやけに重い——こんな感覚、久しぶりだ。

「ありがと、ステラ」

ステラは、きよとんとしてキラを見返す。

キラは、しみじみと云った。

「きみと話せて、すこし、自分と向き合えた。——ぼくは何も、背伸びしてまで『スーパーコーディネイター』である必要なんてないんだって」

「……うん……？」

「いままで通り——きみの『親友』のままでもいいんだって、そう思えたんだ」

もしかしたら、心から「デステイニー・プラン」に賛同していたかも知れない自分。

そんな考え方を変えてくれたのが、ステラだったのだろう。ステラ個人としては、キラが遠くなってしまうような現象を防ぎたかっただけにせよ。

「これからも、よろしくね」

云うと、キラはそつと立ち上がり——

横になったステラの額に、そつと唇を落とした。

「!？」

ステラは、一瞬何が起きたのかが分からずに、ぼーつとした。

が、キラはすこし照れたように頬をかいたあと、「じゃ、じゃあ……っ」と震えがちに云い残して、そのまま部屋を出て行ってしまふ。

——バツ

ステラは布団をひっくり返して、その中に蹲る。ベッドの上——身をよじり、ごろごろともんどり打ったその音は、部屋の外に出て行ったキラの耳にもよく響いていた。

『影に沈んだ黄金の意志』

宇宙に浮かぶオーブの軌道ステーション「アメノミハシラ」にて――

謁見の間と思しき広間に構えられた玉座に、ロンド・ミナは腰かけていた。傍らにはロンド・ギナの姿があり、彼らは今、サハク家の今後について閣議しているようだった。そんな中、ギナは手許のタブレットに目を通しながらミナに報せる。

「赤道連合と、スカンジナビア王国が悲鳴を挙げている」

いずれも、元は中立を保持していた国家のことだ。現在は大西洋連邦の支配力に屈し、その占領下に置かれた「属国」としての扱いを受けている国々だ。オーブと同様に、悲鳴を挙げている、というのは比喩であったが、事態を正確に表した言葉でもある。

ギナの告げた二か国――赤道連合とスカンジナビア王国は、大西洋連邦の占領下に入ったことで、過酷な搾取を受けるようになった。半月ほど前、地球軍の上層部が「エルビス作戦」を発動したためだ。

作戦の発動により、地球では「この戦争に一気に片を付けてしまおう」という機運が高まり、月基地の飛躍的な軍備増強に乗り出したのである。その弊害として、大西洋連

邦は支配下にある国々に対しても、余剰の物資ないし人材の提供を催告。こうした無心に耐えかねた赤道連合とスカンジナビア王国が、経済的に困窮している現実があるようだ。

紡がれたギナの報告に対し、ミナは全てを見通していたかのように云う。

「このままでは、二ヶ国が潰れるのも時間の問題か？　密かに支援し、力を貸すべきであろうな——」

「しかしこの情勢下だ。下手に動けばザフト、連合の双方を刺激することになりかねん」この「アメノミハシラ」は、現在、ひどく微妙な立ち位置に置かれている。戦役中に崩壊した「ヘリオポリス」と同様に、立場としては「宇宙のオーブ領」という形で間違ではないのだが、その実態は、アスハ政権を逸脱した「独立しかけのオーブ」と云った方が正しく、指導者ロンド・ミン・サハクにより、現在は独自の立場を取るようになった。

ロンド・ギナ・サハクとムルタ・アズラエルは事実上の盟友関係にあり、大西洋連邦は比較的「アメノミハシラ」に友好的な見方を示し、だが、「プラント」の方は決してそうではない。地上での戦力を消耗したザフトは、隙あらば「アメノミハシラ」に蓄えられた豊富な軍事力を接収せんとこの地を虎視眈々と狙っているのが実状だ。以前ZGMF-X11Aを筆頭とするザフトの特殊部隊が「アメノミハシラ」に侵攻した

ように。

結局のところ、この場所が「一大軍事拠点」ということに変わりはないため、下手な動きを見せれば、連合とザフト——双方に目を付けられようとは、火を見るより明らかだった。

「いま、迂闊に目立つような真似をすれば、我らの計画に支障を来たす」

「だが、赤道連合もスカンジナビア王国も、元は数少ない友好国だ。あれらが大西洋連邦に呑み込まれては、今後に響く」

「それでもあるが——」

節の利いた姉弟ふたりの会話を、シン・アスカは箒ふたりを握りながら聞いていた。エプロン姿で清掃係を仰せつかっていたためだ。

労働役として勤めている今のシンには、ミナ達は何について談議しているのか分からなかった。もつとも、分かる必要もないとは思うのだが、彼は黙々と清掃作業に戻っている。

「本土のセイランを介して、すぐに話を着けよう。閣僚の成り上がりとは云え、あやつらも十分に利用価値はある」

「セイランは傀儡か？」

「彼等には五大氏族の地位を譲った、要求に『No』とは云わせんよ」

「なるほどな」

恩義とは、売れるときに売っておくものだ。

ミナは見透かしたように付け足した。

「地上の復興も同様だ。あくまでサハクが主導に立ち、不在のアスハに取って代わる」

——— そうして、シンには掴めない閣議は続いたが、ある折を以て終結したらしい。ギナが謁見の間から出て行こうとするそのときになって、彼の先鋭な眸が清掃作業を行っていたシンとばったりと合った。

ギナはシンの姿を下から上まで一瞥し、一拍置いて声高に笑う。

「エプロン姿で清掃係か、シン・アスカ！ 下賤なお主には似合いの仕事だな!」

「イヤな性格してますね、アンタも！ 次に模擬戦やるときは、今度こそ打ち負かしてやるから、憶えておけよ!」

「ほお、下剋上と云うわけだな？ それでこそ男というものだ!」

もとより、野心や野望と云った、荒々しい言葉がギナは好きだった。

そういう野心は嫌いではないぞ！ と付け足した。

「やれるものならやってみろ！ いくつかのようにボコボコにしてやろう」

そうしてギナは、妙に上機嫌に笑いながら立ち去って行く。一方のシンはむすつとして背姿を目で追うが、そのとき、箒を握るシンに気付いたミナがおもむろに声を発した。

「——精が出るな、シン」

「ミナさん！」

ギナに対して挑戦的であつたシンは、しかし、ミナに対して飼いなされた子犬のよ
うに快哉とした表情になつた。シンにとつて、常に親身で考えてくれる「姉」のよ
うな存在がミナであるのなら、何かあるごとに突つかかつていじつてくるギナは、さながら
意地の悪い「兄」なのだ。

「ここでの生活には、慣れたか？」

「はいっ、すごく気に入ってます！——オレだけじゃなくて、みんなそう思ってます
よ。地上にいた頃よりも、なんていうか、活気に満ちてるんです」

「それは、何よりだよ」

「お二人で、なに話してたんですか？ その、差し支えなければ」

ん？ とミナは喉を鳴らした。だが特に隠すような内容でもなかったのか、彼女は憚
ることなく即答する。

「オーブ本土の情勢について、少しな——」

「情勢……？ 地上は今、どうなってるんですか？」

「オーブ本島についてだが……サハク家が地上を離れている今、セイランの人間が筆頭
に立つて国の復興を進めている」

「——ああ」

そのときシンの表情が、ころりと変わった。

「逃げ出したアスハの代わりに、ですか」

明らかな愚弄の混じった少年の言葉に、ミナは反感を憶える——

——わけでもなく、かすかに苦笑した。

このときシンの顔に浮かんでいたのは、無垢や無邪気とは対極にある、赤黒い感情だった。まだ年端もいかぬ十四歳——年齢の割にはあまりにも露骨すぎる、侮蔑や憤怒——総じて怨嗟とでも呼べそうなもの。ミナは怒れる瞳を宥めるように、どこか上滑りな口調で返した。

「気持ちには分かるが、そう無碍に云ってやるな……う？」

「聞けませんね……」

シンは、唾棄した。

「だいたい、おかしな話なんですよ。なんだってアスハの後継者達は、この『アメノミハシラ』を尋ねて来ないんです？　ここだって同じオーブ領なのに」

アスハの後継者達がL4宙域から行方を晦ましたとされるこの半月の間、件の三隻同盟と呼ばれる中立船団が『アメノミハシラ』を訊ねて来たことは一度もなかった。

——中でも『クサナギ』なんて、純製のオーブ所有艦じゃなかったのか？

にも関わらず、アスハの後継者達が「アメノミハシラ」に寄港して来ない理由は何なのか？ 身を置く拠点にすら窮乏しているはずの彼らが、このステーションを頼つて来ないのは何故なのか？ シンは誰もが当然のように考えるであろう、率直な疑念を口にしたに過ぎない。

「ミナさんの方から『来るな』って断つてんですか？」

「心外だな。余を鬼か何かとでも思つてるのか、おまえは」

え、いやつ、そんなことないですけど。

シンは慌てて訂正した。

「いくら政敵とは云え、アスハとて同じオーブの民だ、情誼はある。連中が頭のひとつでも下げて来るのなら、それ相応の誠意を以て支援してやるつもりだよ」

それは、ミナが狭量なのではない。

それが、人の世の筋の通し方、ということだ。

「頭のひとつも下げて来ない乞食に対して、逆におまえは財産を分け与える気になるか？ —— 無償で」

「なりませんね」

「そうか。では、そういうことだな」

シンは、納得した。

そう云えば「アスハの顔を立てるべきだろう！」とアスハ家を妄信する連中は癩癩するだろうが、そのような戯言や妄言に付き合つてやるほどに、サハク家は人が好くないのである。

「未来に対して大志があれば、いつときの恥など忍んでこそその物種だ。それを許せないアスハの方が、サハクを頼つて来ないだけさ」

かねてよりアスハ家とサハク家は犬猿の中にあり、その間柄は壊滅的、絶望的とされていた。他の五大氏族がアスハに心酔する中で、サハク家だけはアスハ家に対して痛烈に批判的、否定的な姿勢を貫いて来たのだ。それもこれも、国家を運営するに当たつての意見の食い違いが根本的な原因にある。

よほど食料に自信があるからサハクを頼つて来ないのか、それとも、単純にアスハのプライドがそれを許さないのか？ 今のシンには真相を知る術はなかったが、そもそも流浪の彼らが食糧不足で自滅するなら、それはそれで不都合もないような気がした。

「政治家らしい、頑固で馬鹿な考え方ですね。あいつらを疑おうともしなかったおれは、もつと大馬鹿野郎だったんですけど」

シンは、自分を理解した気になった。

「いけませんか、こんなこと云つちや？ でもね、おれはアスハに夢想家じゃなくて、為政者をして欲しかったんですよ。お偉いさんの勝手に理念を押し通すつて決めたなら、

せめて最後まで国に残って、責任を果たすのが筋ってもんじゃないんですか」

国に残ることもせず、後世のことを不肖な輩に押し付けて死んで逝った国の指導者？

——あいつは一体、何がしたかったんだ！

シンには、それが今になっても理解できなかった。それどころか、

「なのにアイツらは、国が一番大変なときに逃げ出した——国民を放おれたちつておいて！ お

かしくないですか!？」

一方で娘は宇宙に逃げ、オーブ民には直接関係のない戦争に加担しようとしている。

——そういう意味じゃ、父も娘も、揃って責任放棄したつてことじゃないか。

ミナは、静かに返す。

「だからこそ、我々が動かねばならぬのだろう?」

「ミナさんが指導者に代わるべきです! オーブはアスハの御遊戯場じゃないんだ、何

にもできないようなヤツが、上に立つべきじゃありません!」

「だが、オーブは平和を謳う国。それを築くべきは、絶対的な指導者でも王でもない——

そこに暮らす人々だよ」

それは、シンに気付かされたことでもある。

『指導者は誰で、アスハだサハクだ』——そのような些事で騒ぐよりも前に、オーブの

民は穏やかに暮らせる生活が欲しいのさ。そうであろう?」

「分かるような気がします、でも……っ！」

「だから余は、彼らのために “アメノミハシラ” ——アスハ政権の “姥捨て山” を、今は整備している」

国を追われ、棄民となった者達が求めているものは、有力な「指導者」——ではなく、穏やかに暮らせる「生活」に他ならない。指導者というものは利益のための副産物に過ぎず、自分の生活さえ取り戻せるのなら、云ってしまえばリーダーなんて国民的には誰でもいいのだ。

シンは、そうしたミナの発言が、本当に分かる気がした。

そもそもオーブ国民は、地球と宇宙間で昂る戦争の機運と、実際の地上の戦災を嫌って、オーブに定住の地を求めた移住民が、比率としては非常に多いのだ。そういった意味で、国民の過半が心より求めていたものはアスハ家の独裁やオーブの理念などではなく、現実としてのオーブ国内での平和なる生活。

「アスハ政権の最大の失策は、そうして国民が求めたものを勝手に履き違えたことにある」

であるなら、サハクはアスハのことを反面教師とするしかない。

いま現在も増え続けるオーブからの避難民の収容先として、この “アメノミハシラ” は十分に機能していた。

当然、軌道ステーションである以上は、難民の收容人数に限界がある。しかし、諸々の問題は殆んどが解決に向けて動き出しているようで、最近では防衛力の増強も進み、周辺宙域に太陽光発電パネルを設置することにより、オーブ民に有利な、とある特殊な戦闘を可能にする環境も出来上がっているらしい。

「——おれ達はじゃあ、これから、どう動くんです?」

「しばらくは表立っての行動を避け、行き場を失ったオーブの避難民達の收容を続ける。当面はアスハ政権の『姥捨て山』として、歴史の『影』に潜ませてもらおう」

「姥捨て山……」

オーブの『影の軍神』——

ロンド・ミナ・サハクが何故そのように呼ばれるようになったのか、このときシンには、僅かに垣間見えたような気がした。この女性は、常に歴史の影に身を潜め行動する機会を伺っていたのだろう。世界に対して、裏から手を回しながら——。

「いまは力を蓄え——時が来れば立ち上がる。そのときは、オーブの真まことの力を以て、世界に我らの存在を示すのだ」

決然と告げたミナは、シンを見据えて真つ直ぐに云う。

「そのときは——そなたも共に、戦つてくれるな?」

「! 勿論ですつ!」

そのためにシンは、いま、力をつけているのだから。

——おれは機会を手に入れた。

自分が必要としてくれる人を、この「アメノミハシラ」——いや、もうひとつのオーブの中に見つけたのだ。

「強くなれ、シン。——その鬼才、サハクのため、オーブのために役立てよ」

まるで何かを見抜いたかのように、ミナは決然とシンに告ぐ。

——この女性の期待に、応えなくては。

シンはぎゅつと拳を握り、心にそう誓った。

（未来を創るのは、運命なんかじゃない——）

光と影——

地上と宇宙——

アスハとサハク——

ふたつに分裂したオーブ政権が相容れることは、ないようで。

彼等が再会できるのは、また、遠い未来の話——。

玉座の間を出た後のシンは、清掃用のエプロンを脱いで、ラフなブルゾンに身を改めていた。

そうして彼は、「持ち場」として任された第八ブロックに入って行く——すると工具箱を片手に、大勢の機械工達の弟子のように働き始めた。以前はフォークリフトの運搬係にしか過ぎなかつたシンであるが、今はこうして、直接的にMS整備等の作業に参加するようになっていたのだ。

シン・アスカは、みずからMSの整備や開発の場に携わることによつて、モビルスーツパイロットとして、そして、それ以上にメカニクとしても、機動兵器に対する『理解』を深めようとしていた。

座学の知識はあれど、整備の大半を技術者に任せつきりになってしまふ正規軍の操縦士と違い、シンは出来るだけ臨機応変な実践知識を求めた。

彼の中の向上心が、彼にそうさせた。その甲斐あつて、座学では得るのが難しい一現場の知識を深め、専門知識の伊呂波を承つた後は、火花やオイルをその身に浴びながらも、泥臭い努力をしていたのだつた。

——そうしてシンが機械工の作業を手伝っている中で、男性技師が声高に叫んだことがあつた。

「しっかし、この『アカツキ』の追加装備——いったい誰が使うんだア!」

彼等がこのとき製造していたのは、アカツキ島より輸入して来たORB-01の背部
 装備だった。

既に万能型の追加装備がひとつ完成している最中、新たな追加装備を開発するよう
 に、ミナからの指示があつたらしい。

「“オオワシ”はもう別に完成してんだぜ？ あれがありや、特に困ることもないだろ
 うに？」

しかし肝心の技術者達は、それが誰のための武装なのか、いまだに伝えられていない
 ようで。

「オーブの理念を体現した“黄金の護り神”——という割には、随分と攻撃的な見た目
 になつちまつたな、おい」

「そりや、おれたち技術屋の落ち度だろうがよ」

「違えねえっ！」

オーブに在住していた、コーディネイターの技術者達である。

彼等は外観に不満げなその言葉とは裏腹に、性能に関しては満を持しているようだつ
 た。

「……………！」

シンは改めて、新たな追加装備を装着した“アカツキ”を見上げ、息を呑んだ。

現在——“アカツキ”の背部には、“ストライク”のI. W. S. Pに相当する統合兵装システムが実験的に装備されていた。全射程距離オールレンジに対応した武装を満載し、その分だけ消費電力は甚大だが、“フォートレス・ストレイカー”に試験的に搭載された新型大容量バッテリーを採用することにより、それらの電力問題を克服している。

性能について詳しい言及は避けるが、一方の外観は、大振りな翼状スラスターを広げたようなものになっていた。シンにとつては、ちようど妹を奪つたと思われる“白銀の破壊神”と似たような翼を生やしていたのである。

少年ほい感動が駆られ、シンはそんな“翼”が格好いいと感じたが、ある折に、率直な疑念を口にした。

「この『翼』って、何なんです？ 飾りですか？」

技術者の男は、心外そうに返す。

「飾りじゃねえよ。あれは『禍ノ生太刀』——歴とした武装だ！」

「マガノ、イクタチ……？」

「そうさ。翅スラスター翼の内部から“特殊なコロイド粒子”を放散させ、このコロイドに触れた敵機のバッテリーを強制放電させる——ちよつとしたコンピュータウイルスの発生装置だな」

シンはそこで、またも“白銀の破壊神”のことを思い出した。

あの機体もまた、翹翼の内部から翡翠色の「光波粒子」を飛ばすことにより、堅牢なビームバリアのようなものを展開していた覚えがある。——最近のモビルスーツは、そういう粒子の応用が進んでいるのだろうか？

「相手の電力をだだ漏れにすれば、大抵のモビルスーツは戦う前に撤退しなきゃいけなくなる」

『戦わずして勝ち残る』——そんな理想を実現させる代物だよ」

「コンセプトが、オーブっぽいですね」

「そうさ。この「アカツキ」は、どこまで行つてもオーブの理念の体現者なんだ」

男性技師は、背後に聳立する「黄金の護り神」を振り向きながら、さも満足げに、惚れ惚れとして語った。

——黄金は、オーブにおいて特別な意味を持つカラーリングである。

「アカツキ」は全身が黄金に彩られているわけであるが、これもまた、虚栄心から来る単なる虚飾ではない。「八咫ノ鏡」ヤタノカガミと呼称される黄金のフレームは、ナノスケールのビーム回折格子層と、超微細プラズマ臨界制御層から成る鏡面装甲になっており、受けたビーム兵器をそのまま相手に跳ね返すことができる——防御に重きを置いた、オーブの理念を体現した装甲となっているのだから。

「コロイド粒子を介して疑似的に敵機と連結しているから、強制放電させた相手の電力

を自機じぶんに還元・吸収させることも可能だ」

「だからこそ、状況によつては野蛮な核動力機と渡り合うことだつて出来るんだぜ？
稼働時間を気にせずにな」

オーブはその理念の都合上、核エネルギーを機動兵器に搭載することを禁忌としていた。

だが、連合やザフトが続々と核動力機を実戦に投入する中で、それらと渡り合える機体が必要だった。だからこそ、敵機と交戦する以上、実質的に稼働時間に制約のない——この追加装備が発案された。

「ハバキリ羽々斬——それがこのバックパックの名前だ」

神話において、それは災禍の大蛇を切り捨てたとされる「聖剣」をモチーフとした名だ。

「オーブは、これからも戦うさ。おれたち自身の、生活を護るためにな」
男はしたり顔で、そう云つた。

余暇が出来る、シンはモビルスーツのシミュレータに座り込むようになった。それはもはや日課というより、習慣とでも云うべきもので、訓練をしなければ一日は

終わらないと云った風でもある。もつとも、この「アメモミハシラ」の中には戦災を被ったことを機に、シンと同じように『護る力』を求めようになつた難民も多く、日中においてはシュミレータはさながらゲームセンターのような賑わいを見せるのだつた。

シンはどちらかと云うと静かに没頭していた性格であつたのか、多くの人間が眠りに就いてから、こうして装置に座り込むようになっていた。昼は機動兵器についての見識を広げ、雑用として働き、夜はこうして訓練に勤しむ——とても心に傷を負つた少年のスケジュールとは思えないが、それもこれも、目的があつてのことだつた。

「……………」

数々の火線がシンを目掛けて飛来する。

が、その悉くをシンは裁きつつ、自機が出せる性能の限界——それ寸前の火力と機動性を以て反撃を行つていく。舞台は濃霧に包まれ、視界は決して良好ではなかつたが、シンは直感——そう、ほとんど直感に従つて照準を付けていく。

が、G A T—X 1 3 1 の戦闘データが敵として登場したところで、シンは正確無比な狙撃——その直撃を受け、敗北してしまつた。回避行動を取つたが、出がかりが遅すぎたのである。

「——くそッ……………」

荒々しく、ヘルメットを取り払う。

「こんなんじや、全然だめだ——」

このままでは、勝てない——。

——誰に？

その答えは、シンの中ではすでに決まっていた。

「『アイツ』に、勝てるようにならなきゃいけないんだ……おれは！」

自分の前から、母を、父を。

——妹を、奪って行った『破壊神』……！

神々しく、綺麗な白銀に彩られた仇敵を、いつか撃ち斃すためにも。

(アイツはおれが討つんだ——！　いつかこの手で、絶対にツ！)

すべては、妹の仇を討つために——。

歴史の影に潜んだ鬼子は、そうして、力を蓄えつつある。

『安息の終わり』

決戦に備えたザフト軍は、「ボアズ」と「ヤキン・ドゥーエ」——それぞれの宇宙要塞に戦力を配置していた。

前者——「ボアズ」はL5宙域の外縁に建設された軍事要塞である。

後者——「ヤキン・ドゥーエ」はL5宙域に浮かんだ「プラント」の最終防衛ラインを形成する拠点であり、こうした二段構えの防衛線によって、ザフトは月基地からの攻撃に備えて準備をしていた。

この半月の間にザフトが行ったのは、新型の「ゲイツ」等モビルスーツの大量生産と、優れた攪乱性能を誇る「ベルゴラ」部隊の編成だった。「ジン」や「シグー」等の従来の機種に当てられていた軍資金を可能な限り新型MSの開発費へ回し、戦果の多いエースパイロットには惜しむことなく進呈する。地球連合軍と比した場合、圧倒的寡兵であるザフト兵——その各個戦力の底上げを図ったのである。

——だが、高性能モビルスーツは「与えておけば良い」というものではない。

既に旧式かたおちとなりつつある「ジン」に至っても、昨今に至る機動兵器の雛型だ。そうい

う意味では「ジン」の操縦系は基礎に忠実に再現されており、単純ではないにせよ、そうした簡単さが体に馴染んだザフト兵は少なくない。それが上の都合で「ゲイツ」等の新型MSに一新されれば、新鮮味だろうが抵抗感だろうが、パイロットが当惑するのは仕方ないことだ。だからこそ新たな操縦系を身体に馴染ませるため、ザフトもMS訓練は怠らない。乗機に対して思い入れがないというのは、言葉にすると簡単だが、事実になると重たいのである。

そして、多くのザフト兵が搭乗機を取り換えたことにより、ザフトは大規模な人事異動も行った。

たとえばザフトにおいて様々な意味で有力と謳われていたクルーゼ隊であるが、これは隊員のイザーク・ジュールを隊長に昇格させる形でジュール隊として新たに発足。部隊長のポストにあったラウル・クルーゼは評議会直属の特務隊に配属され、イザークの補佐役であり副隊長にはディアッカ・エルスマンが据えられた。彼らの下にはシホ・ハーネンフースやアイザック・マウほか、数々の新鋭パイロットが軍籍を置いている。そうして新発足したジュール隊であるが、彼等は「ヤキン・ドゥーエ」に配属され、このとき付近の宙域でMSの操縦訓練を行っている最中だった。訓練の指揮を取り持つのは、他でもないイザークだ。

「——反応が鈍いッ！ そんなことでは、前線に出て行ったところで撃墜^やれるだけだぞ、

馬鹿者！」

「デュエル」を駆りながらも、イザーク・ジュールが怒鳴り声を挙げる。「ゲイツ」や「シグ」の派生機を操縦している新兵達は、モビルスーツの性能に頼るばかりだ。それは機体乗りこなすというより、機体性能に振り回されているようでもある。鋭敏な機体性能に、新兵らしくすつかり当惑していたに違いない。

「モビルスーツはただの器だ！ その価値を引き出せるかどうかは、すべて貴様らの腕にかかっている！ 性能に甘ったれるな！」

たとえば、ひとつの碗があつたとする。

——「ゲイツ」という名の高価な碗に対し、新兵達は一滴の水でしかない。

一粒の水滴に器を満たす力がないように、今の新兵達では「ゲイツ」が持つ本来の性能を發揮できるはずもなかった。彼らは優れたモビルスーツの本領を發揮し、これを扱いきなす——自分自身の力とするだけの実力が、いまだ養われていないからだ。

〈手厳しいねエ、ジュール隊長？〉

傍らのディアツカ・エルスマンは、相も変わらず斜に構えている。

「我々は物量で劣るのだぞ——ひとりひとりが自覚を持たねば、「プラント」は守り切れん……！」

攻めるのではなく、国を守るための戦い。

今のイザークの中では、どちらかと云うとその念の方が強かった。

「——お？ 回避指令？」

そんなときだった、ディアツカが気の抜けた声を挙げた。同時にイザークの手許のコソールにも「ヤキン」管制室から「場を退くよう」指示が届く。それはディアツカの云うように、回避指令だった。

——なんだ、訓練中だと云うのに……？

イザークは眉を顰めつつも、隊員たちに現宙域から避難するよう打電する。そうして彼等は一旦訓練を取りやめ、その場から退いた。しばらくすると、遠方から一隻の宇宙船がやって来た。大型艦だ——所属は不明だが、貨物船の一種らしい。この宇宙船が宙域を横切るために、どうやら、イザーク達は邪魔だったようである。

「なんだありや、宇宙船？ ——「ヤキン」に入って行くな……」

見慣れない宇宙船が、要塞の宇宙港に入って行く。彼等はそれを見届けながら、怪訝に思った。

——やがて基地に戻り、制服に着替え終えたジュール隊は、このとき「ヤキン」内の廊下を歩いているところだ。

「「ヤキン」に入港した得体の知れん艦船。あれはいつたい、何だったんだ？」

「さあ？」

所属の分からない艦船を目撃し、心が落ち着かない部分があるのだろう。イザークは思い出したように云ったが、ディアツカは答えることが出来ない。

「——御存知ないですか？ あれ火星圏からやって来た、外来の宇宙船ですよ」

そんなとき、言葉を発したのは、部下のアイザック・マウという士官だった。

緑服の少年であるが、優しげな顔立ちをしている。知識が豊富なこともあつて、ジュール隊では生真面目な性格が印象的だ。

「火星圏？」

ディアツカは鳩に豆鉄砲喰らったような表情で云う。

ええ、とアイザックは答えた。

「火星圏にも『マーズコロニー』群と呼ばれる、人類の大規模なコミュニティが存在しているんです」

C・E70年代初期に確立した、人類の新しい住処——それが火星圏にある『マーズコロニー』だ。

地球圏から見れば、それは文字通り、遙か彼方の話ではある。だからこそディアツカには実感が湧かないのだろうが、イザークは違った。

「聞いたことがある。確かレアメタル採掘のために、火星圏に渡った人間達がいるのだろっ？」

「そうですね——レアメタルは、地球圏じゃあなかなか採取できない貴重な資源ベイスマテリアルですからね」

「火星出身の探掘屋サウナが、この『ヤキン』に何の用だつて云うんだよ?」

異邦人を小馬鹿にしたような口調で、ディアツカは問う。

アイザックは解説するように云った。

「『プラント』と『マーズコロニー』群は友好関係にあるので、定期的に宇宙便が行き来してゐるんです。さつき見かけたのは、その使節団だつたんじやないでしょうか?」

アイザックの推察は正しい。実際、火星圏で暮らす人々は『プラント』に友好的な見方を示す者が多く、広い意味で理解者が多いそうだ。

——火星圏に暮らす人々は、その大半が、コーディネイターである。

加えて『マーズコロニー』自体が様々な意味で『プラント』と似ているために、火星圏は実質上の「親『プラント』共同体」として存続しているのも事実だ。双方は軍部での繋がりもまた深く、火星圏に暮らす者達は、貿易を介してザフトに『ベイスマテリアル軍事力の源になる物資』を輸入することも少なくない。

「直接的にザフトに軍事提供を行つてしまうと、連合から露骨に敵視されます。ですから彼等は、モビルスーツの製造に必要な物資なんかを、あくまで『貿易』という形で、ザフトに提供してくれるんです」

「苦肉の策カモフラージュというわけだな……？ 要するにそいつらは、ザフトおれたちのスポンサーとか」

ディアツカは皮肉げに溢す。

「わざわざ火星圏で暮らす連中がいるなんて、ご苦労なこつた」

「仕方ありませんよ……彼等の肩身も狭いのです。『プラント』のコーディネイターと同じように」

そもそも宇宙開拓とは、ナチュラルが始めた宇宙事業だった。人類がその長い歴史の中で、夢見続けて来たものがある——それはテラフォーミングを終着点とする人類の「より新たな生活区の開拓」——すなわち「フロンティアの拡大」である。

たとえば『プラント』も、元は宇宙開拓事業が実現したひとつの入植地であるように、フロンティアの前進を掲げたナチュラルは、やがて火星圏に『マーズコロニー』をも建設した。

——人類は映画のように、その生活圏を拡げて行っているかのように思われた。

だが、こうした宇宙開拓を推し進められてゆく中、全てのことのことが順風満帆に運ばれるわけではなかった。地球圏にある『プラント』と違って、一方の『マーズコロニー』は地球から遠く離れた宇宙上にあつたことで、非常に過酷な環境に置かれていることが発覚したのである。太陽から遠いために差し込む光の少ない極寒の世界と、与圧服を用い

ても息苦しいほどの低気圧——その他にも多様に存在する遠因が折り重なって、火星圏を人間が暮らすにはいまだ厳しい環境に仕立て上げていた。

その結果として、宇宙開拓を進めたナチュラルの事業者は、ひとつの結論を導き出した。

『ナチュラルでは、火星圏の環境に適應していくのは難しい』

不可能というわけではない、あくまで難しいの範疇であつたにせよ、ナチュラルの事業者は同胞の受難を嫌って、代わりにコーデイナーを開拓使として派遣し、彼等を火星圏で労働させた。これが、現在に至る火星圏の入植地——“マーズコロニー”が生み出された起源である。

「少ない人員で苛酷な環境に対応していくために、火星圏の開拓には、より洗練されたコーデイナーが必要になりました。そのため火星圏では、必要な職種あちらに合わせて遺伝子調整したコーデイナーが造られていると聞きます」

定められた役割のままに、生まれたときから職業を決められた者達。リーダーの資質を持つ者はリーダーとして、戦士としての資質を持つ者は戦士として生まれ、育ち、そして死んで逝く——それは人類の、新しい進化の形。

火星生息者——“マーシャン”と俗称される——コーデイナーの新分類だ。

「与えられた役割のために、ひらすら機能的に生きるコーデイナーか——」

イザークはひとりごちるが、たしかに、コーディネイターが初めて造り出された動機を考えれば、それは理解できないものでもない。

——力を、知恵を、美しさを……すべてを追及した結果として、人類が作り出したコーディネイター。

この地球圏においても、コーディネイターは結局、その人生の大半を生前の遺伝子操作に左右されている部分が多い。コーディネイターとして生を受けたイザークとしては認めがたい点ではあるが、自分達の能力や美貌がナチュラルより優れているのは、一般的に「本人が凄い」というよりも、むしろ自分達の「遺伝子調整が凄まじい」という解釈だつて可能なのだ。

——無論、中には本当に努力をしているコーディネイターがいることも、無視してはいけない要点だ。

——しかし、それが誰に分かる？

少なくとも地球軍はそう感じていないから、自分達のことを『宇宙のバケモノ』と見境なく罵り下すのだし、そういう意味では「優れた遺伝子」^{イコール}「優れた力」という発想も、決して間違つた解釈ではないのかも知れない。遺伝子の優劣こそが、その者の人生に明確な「答え」を示すものでもある——という発想も。

——きつと、そんな考え方を極端に推し進めたのが、火星圏のコーディネイター達だ。

遺伝子——人々が生まれ持った能力・特性によって、彼等の生き方を制定してしまう社会。より完璧にして完全な「適材適所」の社会システムを法規制することにより、より少ない人員で効率的に火星圏を開拓していくための必然——人間を遺伝子に記された特性に従って振り分け、役立て、運用してゆく世界。役に立たないと思われる人間を一切として排除した、ある種の優性思想の極地。どこまでも効率的な社会を、運命によって定めてしまう在り方——

そんな社会を想像して、アイザックは云う。

「隊長なんかは素晴らしいお力をお持ちですし、きっと『戦士』に向いてるんじゃないでしょうか、はは……」

このときアイザックは、部下としておべっかを使ったに違いない。

が、これはあまりに無神経な発言だった。

「——おれは戦いたくて戦っているのではない！」

二度と薄っぺらい言葉を吐くな、愚か者！ とイザークは怒鳴った。

「ひい！ すいませんっ！」

今でこそ義勇兵の隊長をやっているが、そもそもイザークには「文官議員」という、みずから望み、そして手に入れた職業があるのだ。

にも拘わらず、力を持っているから？ 他人より少しばかり上手にモビルスーツを扱

えるから？——そんな断片的な特徴を根柢に「戦士に向いている」なんて、偏見の押しつけじゃないか。イザークとしては、そうして無責任に他人に生き方を指示されたり、もしくは強制されたりするのは、まっぴら御免である。

——だいたい、人間の自由意思を奪い取る社会に、どれだけの価値があるというのだ……。

そういう意味ではイザークは、火星圏の在り方に共感を示すのが出来ないのかも知れなかつた。たとえそこで暮らす者達が、彼と同じコーデイネイターであつたとしても。

そんなときに突然、デイアツカが茶々を入れる。

「まっ、そんな隊長殿でも残念ながら士官学校アカデミーは次席での卒業だぜ？ 次席で『戦士』になれるつてンなら、アイザックの云う『戦士っぽいやつ』は、こいつの上にもまだいるな」

——アスラン主席がな、とデイアツカが笑い、イザークは鼻を鳴らした。

「ふんツ、それはそれで、気に入らん話だ」

「そうそう。——『戦士』と云えば、アイツの方が似合つてる気がするぜ」

デイアツカはひとりの同期の姿を思い浮かべながら、茶化すように云つた。

——そうだ。パナマ侵攻戦の折なんかは、特にアイツは鬼のような働きを見せた。

一切の慈悲もなく、徹底的に敵を——ナチュラルを屠る鬼。次々と“ダガー”をねじ

伏せ、畏怖された。『エクソリア』を単独で撃破した英雄。大義のために戦い、それ以外のことはまったく気に留めない、まさに『戦士』と形容するに相応しい姿だったと、ディアツカは漠然と思う。だがイザークの反応は違った。しばし沈黙した後、無然として返す。

「……だが、それでもないぞ、最近のアイツは」

「——へ？」

「知らんなら、ついてこい」

イザークは踵を返し、ディアツカを引き連れ、とある場所に向かった。

ディアツカがイザークに連れられた先は、『ヤキン・ドゥーエ』基地内の自習室だった。

本国との間に定期便が運航しているこの基地に務める兵士達は、限られた範囲であれば本国から私物を調達することが許されている。ザフトは義勇軍であるため階級は存在しないが、特務隊の人間ともなれば待遇は違う。徽章を多く身に付けた人間ほど優遇されるのは軍組織において基本構造であり、そのため「彼」は、この『ヤキン』内に様々な書籍——参考書を取り寄せていたのだった。

「医学書……?」

ディアツカは、その「彼」がデスクの上に積み上げている参考書を見て、そう溢した。
——アスラン・ザラである。

自習室の中にはアスラン・ザラの姿があり、彼はいま、まるで受験生にでもなったかのように勉強に勤しんでいた。ディアツカは目をむいて驚く。

「おお? どういうことだよこりや、アスラン?」

「——ディアツカ? どうしてここに?」

来客に気付いたアスランが、デスクから離れて顔を上げる。その表情はきよとんとし
ており、心底意外がっている——いや、ある意味それも当然の反応かも知れない。不真
面目を人間にしたようなディアツカが、自習室なんて空間に足を運んで来ていれば—
—。

互いに怪訝な顔をするふたりの間に立ち、イザークがフォローに回った。

「半月前から何があったのか、こうして医学書の多読に耽るようになったな、アスラン。
暇があれば、此処を訪れているのだろう?」

そしてまた、アスランは啞然としてイザークを見遣る。

「知ってたのか?」

アスランは、周りに悟られないようにして自習室に通っていた。医術についての本を

読み漁り始めたなど——パトリック・ザラを除けば——まだ誰にも打ち明けたことがない事実であるようだ。

にも関わらず、イザークは以前から知っていた口振りで、だからこそアスランは驚いていた。どうして知っているんだ、と問いかけられたイザークはと云うと、

「たつ、たまたま見かけただけだ！」

慌てたように、慥然として答えたが。

「いつも利口そうにお高く止まっていた貴様が、今度は何に興味を持ったのか、半月前から確かめていただけだっ」

敵情視察だ！ とでも云いたげなイザークであった。

「それが、医学？」

例によつて強情が働き始めた隊長様は放っておいて、いったい、どういう風の吹き回しだろうか？ もとより、アスランが興味を持っていたのは「人体医学」——というよりは「機械工学」だったはずだ。それこそステラやラクス嬢にプレゼントしたとされる「ハロ」とかいう自作ロボットの数々を見れば分かるように。そんな機械オタクにどういう心変わりがあつて、今度は医学に手を伸ばそうと思つたのか？

「機械をいじくり回すだけじゃ物足りなくなつて、今度は人間をいじくり回そうって魂胆か」

「ディアツカ」

「冗談だろ、相変わらず冷めた目は怖えなおまえ」

ところで、ディアツカの父——タッド・エルスマンは最高評議会議員にして、プラントにおける医学界の権威でもある。そのため、彼の息子であるディアツカ自身も将来は医学に精通する研究者になる予定なのだ。だが当の本人の不真面目な性格もあり、今はディアツカ自身、父親の要求に応えられるほどの勉強は進んでいない状態だ。その点、同僚のアスランが自分よりも早く医学の勉強をし始めた現実を目の当たりにして、このときの彼は少なからず焦ったはずだ。

「勘弁してくれよ。おまえが将来同業者になるんじや、おれの仕事が減っちゃうだろ」

ディアツカは呪うように言ったが、アスランは真摯に答えた。

「なら、今からでも頑張ればいいさ。その不真面目を直せばいいんだ」

「おまえってホント、いつからか無自覚に黒くなったよな」

「そうか?」

きよとんととしてアスランが云うが、だからこそ無自覚というのだ。——もともと妙に間の抜けたヤツではあったが、無自覚な上に毒舌って、全くいい性格になりやがった……。

ディアツカが内心で皮肉るが、一拍置いて、アスランは苦笑した。

「いや、心配しなくても、おれがきみの同業者になることはないよ」
 「どういうことだ？」

行動と発言に矛盾を感じ、ディアツカが改めて問いただと、アスランは一冊の医学書を示唆した。

ディアツカはそこに視線を落とし、絶句する。無理もない——このときアスランが身に付けていたのは、こと「プラント」においては、まるで需要のない医療知識だったのだから。

「——『薬物医学』……？ おまえ、なんでそんな——」

コーディネイターの台頭により、やはり「プラント」は様々な医療分野が発展している。たとえば基礎医学、臨床医学、生化学、分子生物学、応用生体工学は、地球の医療研究機関の技術水準と比して数世代先を往つていてとまで云われている。しかし、そうして優れた分野もあれば、反対に大きく遅れを取っている医療分野も存在するのだ。

その内のひとつが薬物医学だ。生まれつき健やかな肉体を持つて誕生するコーディネイターの多くは、肉体が備えた自然免疫力がナチュラルの比ではない。そのため、地球に暮らす人々に比べて風邪や病気に強いという特徴がある。その結果として薬品に頼る症例が少なく、その分だけ医療の発展が遅れている。つまりはアスランの云う通り、将来的にディアツカが関心を持つはずのない研究——露骨な云い方をすれば「プラ

ント”においては利益が上がらない——云わば廃れた医療なのだ。

父親の体面もあり、将来を期待されているアスランなら、間違つても選ぶべき進路ではないが——

「——なるほどな……」

しかし、これについては思う所があるのか、イザークは感心したように喉を鳴らす。アスランは、打ち明けるように云う。

「父上の前で “誓い” を立てた。——もしおれがあいつを説得できなかつたら、そのときは……おれが医学者になると」

「あいつ——」

それが誰のことを差した指示語なのかは、イザークが改めて問うまでもなかつた。

「おれは、地球軍の違法薬物に侵された強化人間を、救い出す方法が知りたい」

薬物依存と洗脳教育により、本来あるべき人生から外れ、泥沼の畦道にまで叩き落された悲劇の者ら——それが、地球連合軍が造り出した強化人間だ。

少なくともアスランはそう考えているのだが、正味、強化人間になつてしまった本人達には罪はないのだ。彼らはただ野蛮な地球軍に利用され、鉄砲玉として酷使されている駒に過ぎないのだから。

「彼らを救うだけの医療知識。身に付けていけば、いつかは役に立つんじゃないか——」

言葉には、云い知れぬ覚悟と同等に、後悔から来る悲嘆が混じっているように聞こえた。

このときアスランは、ザフトに所属する者が、誰ひとりとして考えようともしない職業を想像していた。

「『誓い』というより、これは『報い』だ——妹を最後まで守ってやれなかった、オレの贖罪だ」

戦うこと、敵を滅ぼすことに感^かめて、アスランは以前から、ステラの感情や動向をまともに気に留めてやらなかった。そうして彼が目を離している隙に、ステラはクライン派というテロリスト集団に騙されて、敵軍に渡ってしまった。

——妹は、悪者に騙されやすい『病気』なんだ……!!

確かに『メンデル』では説得を呼びかけ、しかし、何を云っても、何を伝えても自分の許に帰って来てくれなかった彼女は、もはや末期とは云えないか？ 和解するどころか、あまつさえ『ジャスティス』を撃砕し、自分に向けて刃すら振るって来たステラ——こんなことでは、彼女を救い出す方法なんてあるはずがないのだ。

「妹はもう手遅れだ。だが他の強化人間なら、まだ間に合う……おれや父上のような思いをする人間が、これからの未来に二度と生まれないように——」

「だから薬物医学の勉強を……? 将来は、医学者の道を進むのか」

「妹は救えなくても——他に救える命なら、まだ未来そこにあるはずだ」

少なくとも、親愛なる妹と袂を分かち——生き方を違えたときされる現実が、このとき、彼の中に変化を生んでいたのだろう。

このときアスランは、人を「殺す」ことではなく、むしろ人を「救う」ことよって、前に進む方法を知ったのかもしれない。

「——ふんつ、終戦後の話をそこまで思い描けるとは、随分とお気楽だな」

イザークは感銘を受けたことを隠すように、ぶつきらぼうに云い捨てる。

「その志は立派だ、褒めてやろう。——だがな、勉強かまに感じて今度は訓練をおざなりにしたら、おれは許さんからな」

「そうだな。肝に銘じておくよ……」

「貴様は確かに利口だが、決して器用ではないんだ。一度に複数おおくのことができると思うな」

そう、終戦後の想像を膨らませている余裕など、今のザフトにはない。

全面戦争が始まれば——生きるか死ぬか——“プラント”が生き残るか滅びるか——その瀬戸際に立たされるのだ。終戦後のことを考えるのは、すべてが終わってからにすべきかも知れない。

早い話が、遠回しに「死ぬんじゃないぞ」と云われたような気がしたアスランであつ

た。

「……………」

互いに高め合う好敵手としても、互いに助け合う仲間としても、おれは良い同期を持ったのだな、と彼は改めて、胸に思った。

遠く離れ、意見を違えた者同士とは云え、キラ・ヤマトもまた、このときアスランと同じような話題について話していた。

そんな彼はいま、「エターナル」に用意された自室にいた。

「強化人間は、きつと助けられる——」

その言葉は、キラの自室を訪れていた、ステラに向けて放たれたものである。

彼女はキラが普段から就寝しているベッドの上に腰かけており、キラはそこから離れ、自身のデスクの椅子に座っていた。

「前にきみは云ったよね——『地球軍は、強化人間を元に戻す方法を知らない』って」

ステラは、こくり、と頷いた。実際、その通りなのだ。この世界にはまだ、強化人間に身を貶めた人間を回復させるほどの医療技術が存在しない。それはステラが、その体験を以て一番よく思い知っている真実であろう。

キラは伏し目がちに考えながらも、先を続ける。

「でもそれは……逆に捉えちゃえば『地球軍だから、強化人間を元に戻せない』ってことなのかも」

そしてこれは、すこしばかりナチュラルを見下した云い方になる。だがキラは今、敢えて躊躇せず端的に続けた。

「ナチュラルの彼らには、彼らにできる『限界』がある——」

差別的表現の混じった灰色の発言だが、悪意を以て云ったわけではない、残念ながら、それがひとつの真理であるということだ。時代背景を考えれば明らかであるように、元々はそういった『限界』を突破するために人類はコーデイネイターなる新人類を造り出したのだ。

「^{ナチュラル}地球軍が単体で治療法を捜そうとするから、いつまで経っても結論が出ないんじゃないか？」

アラスカで異動になった^{ハリールイ・マーカット}ナチュラルの元軍医も、有能な医学者であったようだが、結局は強化人間を治療する方法が分からなかったように——もはやナチュラル単体では解決できない領域^{レベル}まで、この問題は掘り下げられているのかも知れなかった。

「だったら、コーデイネイターの知恵^{ちから}を借りてみたらどうかかな」

生来より、高い素養と能力を以て生まれ来るコーデイネイターたち。

勿論「プラント」の叡智を以てすれば解決可能な問題なのか？と云うと、「それはまた違う」とステラは答えるはずだ。なぜなら「プラント」の薬物医学は需要の面で大きく停頓しており、はつきり云って、この分野に限って云えば地球軍所属の医学者の方が精通している。碩学な「プラント」の医学権威をとりあえず頭数揃えたからと云って、重度の薬物中毒に侵された強化人間を治療できるわけではないのだ。

そこには大前提として、より豊富な専門知識を持ったナチュラルの——いや、地球軍所属の医学者が同席する必要がある。

「そういう意味じゃ、強化人間を救うために必要なのは、地球軍とザフト、ナチュラルとコーディネイターの『協力』だ」

キラがそう云ったのには、理由がある。

「大西洋連邦が持つている『知識』と、ザフトが持つている『知能』——どちらか一方でも欠けちゃったら、この問題は永遠に解決しないよ、きつと」

連合単体では問題を解決することはできないが、「プラント」単体でもそれは不可能だ。しかし、相互に不足しているふたつが、将来、ひとつになれば——？

——きつと、今はまだ編み出されていない『強化人間を助け出す方法』だって、見つかるんじゃないか？

現実問題、地球では「プラント」ほど高度な機材は整っていないが、対照的に「プラ

ント”では地球ほど秘奥なデータは揃っていない。設備と資料、いわんや知能と知識が合わされば、医療の世界にも、きつと不可能なんてないはずだと——キラは思う。

「——そこに、フレイを助け出す『希望』がある」

彼らが話し合っていたのは、どうやらR G X—00のパイロットについてだったらしい。

『強化人間は、戦争が終われば始末される』——フレイはそう云ってた」

うん……と、ステラは消沈がちに肯定した。

それはフレイの発言の意味が、少なくとも、ステラに理解できてしまったからだ——強化人間は、平和が訪れた記念日こそが、その命日になる。

「でも、ぼくはそう思わない。もし本当に戦争が終わって、ナチュラルとコーディネーターが歩み寄れる日が繰れば——地球と“プラント”の医療が融合するような日が来れば、彼女達は、きつと助けられると思うからだ」

それはステラにとって、まったくの別角度からの意見であった。

「この分野に碩学な地球の医学者と、あらゆる分野で博識な“プラント”の医学者——ふたつが手を取り合って事業を進めれば、きつと“毒”に犯された強化人間の体質を改善する方法だって、見つかるはずだよ」

「……考えたことなかった……」

だが、咀嚼して見れば間違つた予想ではない。

現実に「ミネルバ」にいたコーディネイターの軍医は捕虜となつたステラを治療する方法を知らなかつたのだが、仮にあの場に地球軍の研究者が同席していたら、結果はどうなつていただろう？ ナチュラルの研究者が、コーディネイターの医者に適切な対処法を教え、二者が協力していれば——あるいは本当に、強化人間を治療する方法だつて見つかるかもしれない。

「戦争を終わらせようと戦うことは、強化人間かを助けることでもあると思うよ」

「……………」

ステラは、押し黙つた。

——問題は、そこまで善良な研究者が、地球軍の中に本当にいるのか？ ということだろう。

少なくとも、ステラは地球軍の研究者に「ひとでなし」の印象しか抱いていないし、彼らのことを血の通つた人間とは思えない。本当に良識のある人間なら、そもそも強化人間なんて造らないと思うからだ。

「……………あつ」

そんなとき、眼鏡をかけたひとりの軍医の姿が浮かんだのは、偶然であつたらうか。

——が、そんなときである。

“エターナル”艦内に放送が響いて、ステラは艦の格納庫に呼び出された。話を興を折られた気分ではあったが、彼女はそつとベッドから立ち上がり、会釈を交わしてキラの部屋から出て行つた。

呼び出された格納庫、エリカ・シモンズ技術主任の姿があつた。

嫌でも目立つ金髪をした少女を見掛け、エリカは手を振つて彼女を招く。慣性を使つて降りてゆくステラに、エリカから報告があるようだ。

「——頼まれていた解析作業だけど、分かっている範囲で報告するわね？」

それは、半月前に“クレイドル”が起こした『真紅の発光現象』についての連絡だ。

ステラはかねてより技術主任であるエリカに頼んで、その解析を依頼していたのである。ステラは傍らに聳立する白銀の巨人——“クレイドル”を一度仰ぎ見、そして頷いた。エリカはふつと微笑み、手元のチェックボードを起動する。そこには“クレイドル”の詳細データが映し出され、つらつらとデータを目で追いながら、説明を始めた。

「あなたの乗る機体——ZGMF^ク—^レIX^イ08^ドAは、たしか、ファーストステージシリーズの第一機として開発された経緯があるのよね？」

「うん……。そう聞いた」

「ということとは、ザフトの技術者が『容量キャパもよく分らないまま過剰的・実験的に様々な武装を突っ込もうとしたモビルスーツ』——という解釈も、可能なわけよね」

ざつくりと云われるが、間違いではない。

ザフトは数ヶ月前まで「相転移装甲フェイズシフト」やモビルスーツ用小型熱量兵器「ビームライフル」及び「ビームサーベル」等の技術開発分野において、すっかり地球軍に遅れを取っていた現実がある。それは明晰さを自負するザフトの——コーデインイターの——技術屋にとつて忘れがたい屈辱であり、その結果はわつかえりが、連合が開発して見せた「G」兵器——これを遥かに上回る過剰性能なザフト製「G」兵器——即ちファーストステージシリーズを製造させる遠因のひとつになった。

ZGMF-X08A「グレイドル」は、そうして開発された第一番目の「G」兵器だ。

だが実際のところ、「グレイドル」の正体は核動力モビルスーツ製造過程における『黎明機』

としての位置づけにあり、開発期終盤における突然の仕様変更や、第一世代型ドラグーン・システムの実装による搭乗者選出の遅延、結果的に工廠に凍結・封印されていた事実、等々、その経歴はひどく迷走している。

「逆に云えば、「グレイドル」でやつちやつちった轍踏トツみたくないから、その後継機には安定

した「フリーダム」や「ジャスティス」を開発した、ということなのだけれど——」

もとより、最高評議会より過剰な活躍を見込まれたモビルスーツ——それが「クレイドル」だ。ザフトの技術者達が出来心でありつただけの装備を詰め込んでいても、あまり不思議はない。

「詳しいことはまだ完全には解明できていないのだけれど——」

ボードを進めつつ、続ける。

「端的に云つて、あなたが確認した『真紅の発光現象』は、おそらく「クレイドル」の武装のひとつ——光波発生装置から放散された「光波粒子」——その化学反応によるものよ」

化学反応？ ステラは思わず反芻していた。

彼女は難しい説明が好きではなかったが、自身の搭乗機のこととなれば、一切の妥協はしなかった。

「本来『発光現象を引き起こす』なんて、そのようなスペックは「クレイドル」に内蔵されていなかった——つまり、あれは不可測の事態だったの」

機体が獣の如く吼えるような、そして異常に軋むような駆動音を立てながら、先月「クレイドル」は発光現象を引き起こしている。確かにあれは、本来あるべき性能を超越したオーバースペックが発動していたようにも思える。

一歩間違えば「グレイドル」そのものが自壊してもおかしくなかったんじゃないか——と、今更ながらステラは恐々として思い偲ぶほどに。

が、気になったのか、ステラは訊ねる。

アリユミューレ・リユミューレ

「でも、普段は防御にししか使えないような光波防御帯が、赤く染まって、急に攻撃に使えるようになったよ……?」

シモンズ曰く「化学反応」を引き起こした「グレイドル」は、光波発生装置から赤い燐光を放散させた。その微細な粒子に触れた「レムレース」は、その右腕を斬られたかのように爆散させ、黒き亡霊は「グレイドル」に近づくことすら叶わなかった。

それはちょうど、通常なら磁場応用によって刀剣状に固定されるはずのビームサーベルを、変幻自在に流動させたようでもあった。

「ここからは推測だけど——そのとき「ミラージユコロイド」が力場に作用していたんじゃないかしら」

様々な現象を引き起こす、それはこの世界における未解明の物質の名だ。

「モルゲンレーテにいた頃、聞いたことがある」

「うん……?」

「『スクリーミング・ニンバス』と呼ばれる、『ミラージユコロイド』を応用したビーム

「フィールドが実在するってこと」

ステラは、きよとんとした。

「フィールドの色は真紅——」アリユミューレ・リュミエールを『守性』のビームフィールドとするのなら、「スクリーミング・ニンバス」は『攻性』のビームフィールド——その破壊力は通常の熱量攻撃を遙かに凌ぎ、ちょうどビームサーベルをシールド面状に形成したような波長になる」

だからこそ「レムレース」は、「クレイドル」に接近しただけで被弾した。

説明を受けたステラは、もとより円らかな瞳をさらに丸くしながら、訊ね返した。

「「クレイドル」の光波防御帯が、大気中の「ミラージコロイド」と反応して——
化けたってこと？」

「「レムレース」の放出したコロイド粒子に、勝手に反応したのね——これで辻褄が合うでしょう？」

確かに、あのとき「クレイドル」が赤い発光現象を引き起こしたのは、対峙した「レムレース」が「バチルスウエポンウィルス」を放出した直後のことだ。そして「レムレース」が宙域を離脱すると同時に、発光現象は収まった憶えもある。

「——「スクリーミング・ニンバス」は、いわば「アリユミューレ・リュミエール」の上位派生」

ビームサーベルに無力化される「シユナイドシユツツ」とは別の派生を遂げた、もうひとつの光波防御帯の発展の形。

「攻性のフィールドを展開しながらも、相手方からの攻撃を遮断する守性のフィールドとしての性能も兼ね備えている——つまり、光波防御帯より遙かに強靱なビームフィールドを発生させられる秘法なのよ」

あのときフレイは、「レムレース」から汚染型コロイド粒子を放出することによつて「クレイドル」を攪乱しようと考えたはずだ。

が、ステラはこれに対抗して光波防御帯を展開——

対立した二機から、それぞれに放散されたコロイド粒子と光波粒子が大気中で衝突し、ある種の融合反応を示した。その結果、翡翠色であるはずの光波防御帯は真紅色に染色され、偶発的な科学反応を起こした「アリユミユール・リユミエール」は、そのまま「スクリーミング・ニンバス」——攻性のビームフィールドへ変質を遂げた。

詳しいことはいまだに不明だが、エリカが技術屋として解析した結果は、そういうことらしい。

「云い換えれば「スクリーミング・ニンバス」は、対「レムレース」戦においてのみ発動できる「クレイドル」の『奥の手』——とも云えるのだけれど……」

エリカは、冗談っぽくそう云った。

「グレイドル」単体では「スクリーミング・ニンバス」は発動できないし、使用するには「レムレース」の放つコロイド粒子が必要不可欠なことを伝えたかったのだろう。

「でも、そうもいかないわね……。気を付けて欲しいことがあるから」

「うん……?」

「あなたも知つての通り——「デイフエンド」や「グレイドル」に搭載された「アリユミューレ・リユミエール」は、使用するのに、多大な負荷を発生させる代物」

数日前に起きた余談だ。

ユーラシア連邦が開発したMSが、光波防御帯を展開しながら無理に武装を使おうとして、ジェネレーターが耐えきれず自爆したという事例が確認されたらしい。光波防御帯「アリユミューレ・リユミエール」とは、それほどまでにモバイルスーツに甚大な負荷を掛ける。

「変幻した「スクリーミング・ニンバス」に関しても、それは同じ。ましてや本来の性能スペックに組み込まれていないイレギュラーなのだから、「グレイドル」が単体で発動していいようなものじゃあないのよ」

以前、偶発的に発動させてしまったとき——「グレイドル」は機体が異常なほど軋む音を立てていた。いつもとは明らかに異なる——不吉な——駆動音を響かせながら、機体全体が激震していたのだ。

(じゃあ、あれは「クレイドル」が、限界以上の性能を引き出そうとしていたから……?)

自然発生した負荷に対し、機体性能が追いついていかなかったのだろう。

これはステラの知ったことではないが、後年、実際に「スクリーミング・ニンバス」が武装として実装された「ドムトルーパー」というモビルスーツに關しても、三機以上の出力を合わせて、初めて発動可能となる。いくら核動力機とはいえ、おおよそ「クレイドル」単体で発動して良いものではなかったのだ。

「悪戯いたずらに使おうとすれば、「クレイドル」そのものが自壊してしまう危険性がある。——たとえ窮余の一策だとしても、もう二度と使っちゃだめ」

「わかった……」

エリカは、念を押して云った。

「「レムレース」のコロイド粒子と「クレイドル」の光波粒子がぶつかり合えば、嫌でも自然発生してしまう——それが「スクリーミング・ニンバス」よ。そうなれば、いくら「クレイドル」だって、負荷に耐えきれず自爆してしまうかも知れない」

その言葉に、嘘はなかった。

実際、このときステラだって気付いていた。——以前のようなオーバースペックを引き出し続けていたら、まず機体が持たないだろうと。

「『レムレース』には『クレイドル』を暴走させる力がある……。できるなら、あの『亡霊』とは二度と戦って欲しくないのだけれけど」

「それは……。聞けないよ?」

「……そうでしょうね……」

GAT-X444『レムレース』に乗っているのは、何から何まで、ステラの過去を象徴する人物である。

黒い装甲、『デストロイ』より生まれた負のモビルスーツ、それに乗る明日を知らない強化人間——まさに『亡霊』だ。

「ステラは、戦わなきゃいけないんだ。——この戦争が終われば、あのひとたちを、みんな助けられるかもしれないから」

それは先刻、キラに云われて気付いたことでもある。

——いつか、ナチュラルとコーディネイターが歩み寄れる日が来る……。

そうなれば、もう二度とステラのように、特有の禁断症状に命を脅かされる者のいない世界が訪れるかもしれないのだから。

「だからステラは、戦うよ」

——たとえ、どんな敵とでも……。

この戦争を、一日でも早く終わらせられるように。

地球も「プラント」も——みんなが幸せに生きられる世界を願っているから。誰も
が夜空の「星」のように、等しく燦然と輝ける世界を祈っているから。

「……………」

ステラは改めて「クレイドル」を見上げた。

そして、ぎゅつと唇をかみしめ、みずからの乗機に告げる。

（最後までがんばろう……「クレイドル」——）

決戦の時は、きつと近い。

『零時の鐘が鳴るときに』

C・E・71 8月16日――

地球連合軍艦隊と、ザフト宇宙防衛部隊による「ボアズ」攻略戦が始まった。

戦端は既に――開かれている。

月基地から出動した地球軍艦隊から、無数の「ストライク・ダガー」が吐き出され、迎え撃つは、精鋭なるザフトの「ゲイツ」部隊だ。地球軍艦からは「メビウス」のような簡易モビルアーマーも出撃するが、地球軍が「兵の量」で押し込むのに対して、ザフトは「兵の質」を以て善戦した。

「この「ボアズ」――抜けるものなら抜いてみる……！」

「ボアズ」司令官の男は、物怖じることなく、厳然と指令室の座に君臨する。

「人類の更なる発展を願ひ、生まれ、これを妬んだナチュラル共の云われなき弾圧から逃れよう」と！ 桃源郷を求めた数多のコーディネイター達――「プラント」は彼らの安住の地！ この「ボアズ」は――仙境を護る「大砦」である！」

この要塞が破られれば、残る砦は「ヤキン・ドゥーエ」のみ——

通信を聞く前線のザフト兵の指揮は、これらの一喝によつて著しく精神を昂らせてゆく。気分高揚を引き起こしたザフトのモビルスーツ部隊は、瞬く間に奮戦し、次々と技量に劣る「ダガー」や「メビウス」を撃滅させ始めた。

「ここから成長を遂げてゆく我らコーデインイターにとつて——「プラント」は揺籃ゆりかごぞ！　そこで安らかに、健やかに暮らす同胞達——我らの『家族』と『未来』を守り抜くために！　勇敢なる「ボアズ」守備軍の諸君、いま一度奮い立つのだ！」

包囲網を突破したザフト部隊は、一気に後方に控えた地球軍艦隊まで攻め込み、ドレイク級やアガムノン級を次々と轟沈させてゆく。

無論これを「ダガー」隊が見逃すはずもなく、この応酬を以て、戦況は完全に混戦状態に陥つた。

「「ユニウスセブン」を撃たれた悪夢を思い出せ！　自由と正義の名の許に、野蛮なるナチユラル共を撃滅せよ！　——「プラント」のために!!」

発破を受け、合唱が始まる——。

前線で力を奮う無数のザフト兵が——「「プラント」のために！」と——復唱し、応えに団結した彼らは、獅子奮迅の活躍を見せ始める。折に運よく防衛部隊を突破した「ダガー」も確認されたようだが、要塞に取り付くより前に「ボアズ」の対空砲に晒され

て散った。全体的に戦況は、ザフト軍に傾きつつある。

——所詮はこの程度か！ 思い上がったナチュラル共め！

司令官は、したり顔で鼻を鳴らす。

が、彼の言葉を聞いていたのは、どうやらザフトだけではなかったらしい。侵攻を開始した地球軍の中にも、この発破を耳にしていた士官がいた。元はザフトが造ったMSに搭乗していたがゆえに。

「——地球に生まれ、地球を駄目にした社会のゴミが、奇麗事ぬかしてさ……っ！」

透き通った声に不釣り合いな、淀み切った侮蔑の声——まだ年端もいかぬ、十六歳の少女には似つかわない発言だ。

人知れず漏れたそれに呼応するように、要塞の司令部に据えるオペレーター達が、方々から声を挙げ始める。

「インディゴ一三、マーク六六ブラボーに、地球軍の新たな艦影を確認！」

「なに……？」

〈熱紋照合——アークエンジェル級、一！ クルーゼ隊より報告のあった、黒の主天使〉
“と思われまます！ ——その後方にアガメムノン級、四”

暗黒の天使——“ドミニオン”が戦闘宙域に接近しつつあった。

その特徴的な右舷——

大きく張り出した両脚を思わせる“ドミニオン”の発進口ハッチが開き、内部から紅眼を覗かせる“亡霊”が機影を現す。その双眼ツインアイは赫々と照り、激しい憤怒に据わっているようにさえ見えた――

(なにか桃源郷よ……！ 掃き溜めの間違いでしょ)

まるで、搭乗者の心を感じし、これを体現しているかのよう――

“レムレース”に乗り込んだフレイ・アルスターは、無骨なデザインのメットを気密すると共に、眼前に拡がった戦闘宙域に視線を投げかける。発進口の先に拡がるのは、漆黒にして真空の常闇――その中にいくつもの炎の華が、イルミネーションのように幻想的に咲き誇る。どれもこれも、ひとつひとつが命の散る光輝。音も熱も伝えない宇宙空間で炎が舞う時、その許では確実に命が消えている。

ザフトと地球連合軍による全面戦争は、もう既に始まっている。これまでの如何なる戦闘より、苛烈さを極めた此度の戦は、最終決戦を目前にした演目としては丁度いい余興となるろう。

「こちらフレイ・アルスター、出撃でて道を開けます」

〈期待しています。――サ、ちゃちゃつと片付けてくださいヨ〉

通信越しのアズラエルが、鼻白んで告げた。

わずかに機体が浮き、両脚がカタパルトにリフトすると、機体背部に新たなる追加装

備が装着された。

〈機体モジュールを選択。GAT-X444スタンバイ——発進、よろし〉

「レムレース”は——カラミティ・ストライカー”で出ます！」

号を発すると同時に、カタパルトから勢いよく鉄塊色の“レムレース”が射出されてゆく。背部に多脚の節足動物を思わせる砲撃武装——“カラミティ・ストライカー”を装備しながら。

機体にかかるGの直後、機体は深淵なる宇宙に勢いよく飛び立ってゆく。

〈続いてGAT-X252……〉

VPS装甲がオンになり、忽ちに通電した灰色の“レムレース”は、ヴェールを剥いだかのように——青緑とオレンジ——ツートーンに色づいてゆく。

従来のPS装甲と異なり、VPS装甲はバッテリーをより効率的に運用するために、装備や状況に応じた装甲へのエネルギー配分を行う。その副産物として「装甲の色が変化する」という現象が挙げられるが、砲撃戦用に電圧調整を行った“レムレース”は、このとき喪われた“災厄の王子”^{GAT-X151}を彷彿とさせるカラーリングに染まっていた。もともと、結局は搭乗者の趣味に合わせて任意で変更されることもあるため、カラーリングに深い意味や理由などを求めても仕方がないのだが。

飛び立った“レムレース”に付き従うように“レイダー”と“フォビドゥン”が後

続し、フレイは一気にバーニアを噴かせる。ペダルを踏み込む、その手応えは重い。

（——重い……ッ）

デンプレスト・ストライカー

機動型装備の扱いに慣れたためか胸内で唾棄するが、今回の任務は、あくまでも殲滅

——むしろそういった役割を果たすには、機動性に劣る分だけ、この大火力カラミティ・ストライカー装備は打つて付けだ。

すると、新手と思しき“ドミニオン”の熱源を捉えたザフト軍が、真つ向から彼女達の許へ突貫して来た。——“ジン”“シグ”“ゲイツ”——機種を数えるだけでも飽き足らないほどの迎撃部隊だ。

へうはーっ、いっぱいいるねエー！

「アレゼーんぶ墜としていいんだよね、目移りするーっ」

正面からぶつかって来るモビルスーツ群に対し、“レイダー”と“フォビドゥン”が一気に前に踊り出る。それぞれに格闘武装——鋼爪アフラマスタと首鎌ニースヘクを以て迎え撃つ。その機動力と反応速度はコーディネイターのそれを凌駕し、向かって来たザフト部隊は、しかし、これと云う反撃も出来ないまま返り討ちに遭ってゆく。

「あんまり適当に暴れると、私の砲火に当たるわよ」

敵部隊を攪乱する“レイダー”と“フォビドゥン”の後方、無数の砲門を開き、待ち構える“レムレース”の機影があつた。

——これはまさに、褒められた連携だ。

中・遠距離からの砲撃に特化した今の“レムレース”は、敵機の接近を許してはならない。この補助をするため、“レイダー”や“フオビドウン”が前方に躍り出て、敵部隊を攪乱しているのだから。

だが、後方から見て“レイダー”は思ったより弾けた動きをし、あろうことか敵陣のど真ん中に突出気味だ。それはコーディネイターを撃滅する『ゲーム』を彼なりに楽しんでる結果であつて、フレイとしても異論はないのだが、あまり無暗矢鱈に動かれると、それはそれで困惑した。後方から掩護射撃を行う彼女の照準作業に心労が祟るからである。

適当に動き回る“レイダー”を誤射し、巻き添えようものなら、撃ったフレイとしては後味が悪いではないか——いくらクロトに過失があつたとしても。そう思つて親切に忠告を出してやるが、クロトからの返事は、にべもない。

へうはは？ オマエが当てるつもりでも当たんねーよ、ばあか〜

「はあっ!?!」

へボクらは散々、オルガの後方支援に狙われて来てんだぜ？ オマエの砲火になんか、今

さら当たるか！ ド素人め〜

いったい、何の話をしているのか？ オルガの射撃の腕は、彼らを誤まつて狙撃する

ほどに悪かったとでもいうのか？ フレイには詳しく分からなかったが、ひとつだけ理解したことがある。

——わたしは今、あいつに小馬鹿にされたんだ。

フレイは花卉のように柔らかかそうな唇の片端を、ひく付いたようにつり上げた。

「あつたま来た、そんなにスリルが欲しいならあげるわよ。懲り懲りするくらいにね！」

次の瞬間 “カラミティ・ストライカー” ——

そこに構えられた、10箇所を超えるあらゆる砲門が、同時に火を噴いた。

背部から大きく張り出した高エネルギー位相砲 “アウフプラール・クアットロ” や、

両脇から突き出したマスターアームから伸びる、3連装高エネルギー長射程インパルス

砲 “プルフランス” が一斉に光の矢を放ち——螺旋を描くように束ねられた光条は、やが

て “光の矢” から “光の渦” へとその姿を変えた。

膨大な熱量を宿した光渦は、僅かに機体を掠めただけの “ゲイツ” や “シグ” を

続々と飲み込んでゆく。宇宙の常闇を切り裂いて進むそれは、一陣の激流——色彩の洪

水だ。

〈眩しいっ〉

突き抜ける光の奔流を飾るかのように、咲き誇る無数の炎の華——

そして減衰することを知らない “レムレース” の一斉砲撃は、フルバースト距離を開いて見るシャ

二の隻眼に眩しかった。——「アレ」が直進した方角にいるクロトから見れば、更に眩しく、そして恐ろしくもあるだろうに。

〈ひよえっ——〉

たとえ通信機から間の抜けた男児クロトの声が聞こえようと、知ったことではないのである。

爆発が収まる——。

光の渦が虚空へ過ぎ去っていくと、その軌跡に生氣あるものは何ひとつ残されていない。ただ駆逐された鉄の塊が無残に蔓延っているだけだ。モビルスーツが四肢を持ち、なまじ人間の形を模している分、それらが哀れもない姿で転がる様は、死屍累々と云えないにせよ、地獄絵図と呼ぶに相応しいおぞましきがある。

生き残ったものといえ、唯一、人面鳥ハービーを思わせるMA形態に変形した「レイダー」だけであろう。

〈なんつー火力してんだっ、聞いてねーしっ〉

「初めて実戦で使う装備だもの。性能なんて私だつて知らないし」

〈マジで殺す気か！〉

が、コーディネイターでも反応できなかった一斉射撃フルバーストをかわすとは、やはりクロトは相当な手練れである。

もつとも、操縦技術に長けているのはクロトだけではない。シャニは勿論であるが、最近のフレイにしても、それは同様である。

オーブ解放戦におけるフレイ・アルスターの初陣から、数ヶ月が経った今——彼女の『技量』は、彼女の『体力』と反比例して向上傾向にあった。

数ヶ月に渡って体内に蓄積した覚醒剤は、確実に彼女の健康を害しているが、一方でこれだけの期間を戦い抜き、もしくは訓練し続けた彼女は、また確実に戦闘力を高めつつあった。早い話が「実戦に慣れた」ということで、素人らしい直線的な挙動が以前と比べ明らかに減っている。彼女はいちパイロットとして、力を養いつつある——出撃前に投与された薬物効果^{ドーピング}が云々というよりも前に、彼女自身の健全な采配や経験によって。

だからこそ照準を付けられたクロトが、その正確さにここまで取り乱したのである。

↑——道は開いたようですな↓

アズラエルの許に、サザーランドの無味乾燥な声が飛んで来た。

不仲でありながらも、宙域を猛進し始めた“G”部隊によって、ザフト軍の編隊に乱れが生じ始めたのだ。アズラエルは鼻白んで返す。

「最新のモビルアーマーを出すまでもありませんネ。この戦闘——ぼくらの勝利で決まりです」

〈では——平和の使者、^{ピースメイカー}発進〉

連絡と共に「ワシントン」を旗艦とする艦隊が、巨大ミサイルを抱えるように装備した「メビウス」を一斉に発進させた。

世界から異分子を撲滅し、より良き平和を創建するための使節団——「ピースメイカー」隊である。

積載された大型の弾頭を確認し、勘のいいザフト兵がこれを撃ち棄てようと「メビウス」に猛然と肉迫してゆく。が、脇から放たれた「フォビドゥン」のレールガンに貫かれ、悉く撃墜された。暴虐なる「G」兵器は、さながら羊飼いとなって、狼の手から爆弾を運ぶ子羊達を護り抜いてゆく。これを期にザフト軍は「メビウス」に接近するこゝとが出来なくなり、守備隊の瓦解は目前——こうした兆候は「ボアズ」司令部にて即座に観測された。

〈守備軍の編隊に乱れあり！ その後方、地球軍艦隊よりモビルアーマー部隊の攻撃を確認！〉

〈偵察型「ジン」より入電——モビルアーマー全機、大型のミサイルを積載している模様！〉

「おのれナチュラル共……ッ！ 仕掛けてきおつたか！」

「ボアズ」司令部は、そうして迫り来る「メビウス」が『何を積んでいるのか』——

このとき、既に把握していたに違いない。

「ベルゴラ」部隊発進せよ！ 奴等が持ち出した禁断の『核』——奪い取って、奴等の身にくれてやれッ！」

“ボアズ”に構えられた秘匿ゲートから、青色の機体が飛んでゆく。

ZGMF—500 “ベルゴラ”——幾つものハンマーを肩口から引つ提げたような、特徴的な風采をしたモビルスーツ部隊だ。数にして、一〇を越えるだろうか？ 独特の

編隊を組んだ “ベルゴラ” 小隊が、おもむろに “ボアズ” 前面の戦闘宙域へ躍り出る。

「ああん？」

見慣れないモビルスーツ部隊を目の当たりにして、クロトは眉を蹙めた。

それに似た動揺を表情に顕したのは、着々と “ボアズ” 近辺に斬り込んでいたフレイにしても同様だ。もつと云えば、後方で彼らを指揮するナタルやアズラエルもまた、存ぜぬ「敵」の登場に、困惑の陰を表情に落とすようだが。

地球連合軍は “ベルゴラ” の存在をこれまで知らず、モノアイでも、ツインアイでも、ましてやゴーグルアイでもない——四ツ目紅球のセンサーアイを光らせたマスクタイ

プの「正体不明機」に目を見張る。

「なに?」

見慣れない新型モビルスーツ——

かといって、直接攻撃を仕掛けて来る様子もない、要するに不気味な「特殊部隊」の出現に、シャニが不機嫌そうに舌を打つ。

——なにがしてーの、あいつら……?」

そんなことを思惟していた、次の瞬間である。

突如として「ベルゴラ」の羽——正確には「バチルスウエポンウイルス」の発心装置が、孔雀のように拮げられた。十数機にも数えられる「ベルゴラ」が全機、指揮官が搭乘しているであろうホワイトカラーの特機を中軸に、円形の編隊を展開し始めたのである。

「フォーメーション・ガグンヴォール展開——」

「全機、配置につけ——」

編隊を組むことにより、「ベルゴラ」小隊は、より膨大な量の「ミラージコロイド」を放散させてゆく。

やがて真空中に蔓延するコロイド粒子を圧縮——および「反転」させることにより、広域に対して無量の「汚染型コロイド」を放出させた。ウイルス汚染による赤色の透過

光の加わった、人間の目にも捉えられる微粒子だ。

「バチルスウエポンウイルス」散布完了！ ナチュラル共に、ひと泡吹かせてやれ！」
 やがて「ボアズ」前面、戦闘宙域の到るところにまで「バチルスウエポンウイルス赤色の粒子」が放散され、
 「レイダー」に「フォビドゥン」——および「レムレース」——その後方の「メビウス」にまで襲い掛かる。

真紅の波動が——三機の「G」と「ピースメイカー」隊を呑み込んだ。

ザフトのMS部隊ならば、こぞって返り討ちにできるクロト達も、相手が質量を持たない微細な粒子となれば、抵抗する術など持ち合わせていない。かくしてウイルスに感染した量子コンピュータは、揃ってOSを強制終了させられてゆく。

「……………!?!」

そうして唐突に訪れる、不気味な静けさ——

フレイが胡乱げな顔を浮かべていると、ややあって、機体前方——システムがダウンし、ぴたりと行動を停止していた「レイダー」が、唐突に次の行動を起こした。

グギギ、と尋常ではない駆動音と共に機体を翻し、腕に引っ提げた鉄球を「ミヨルニヨルレムレース」に投げつけて来たのである。思いがけない報復を受けそうになり、フレイはぎよつとする。

「あ、あんた何すんのよ！ 仕返しのもり!?!」

慌てて機体を駆ったフレイは、鉄球を回避し、すぐさま抗議の声を挙げる。

これはフレイ・アルスターの持論だが、女は男を試している生き物だが、その反対は駄目に決まっている。たとえどんな理由があろうとも、男は女に手を挙げちゃいけないのだ。

だが「レイダー」の双眼は赤かった。

へちげツ——な、なんだこりゃあ!?!」

通信機からは、若干のノイズと共に、慌てふためいたクロトのわめき声が返って来る。どうやら、今の一撃は彼の意味に反したものだっらしい。

OSを強制終了させられた後、機体の制御権をまんまと敵方に奪われたのか？　こうなってしまうては無力な少年は、手綱が千切れて暴れ出した己の愛馬——いや「人面鳥」に当惑するだけだ。

「つ……!?!」

「レイダー」が相手では碌に反撃することも出来ず、フレイが唾然としてみると、背後からは「フォビドゥン」が大鎌を翳し、まるで「死神」のように襲い掛かって来た。

こちらも「レイダー」同様に双眼が赤く、これはウイルスに侵食された証拠でもある。当の操縦者も「あーごめん」と口では云っているものの、まるで誠意の感じられないシャニの態度には、肩から脱力してしまう。

「なんだよこのポンコツ、急に云うこときかねー」

「ばーかばーか！　なんでテムエの機体は正常なんだよつ、コロヤロー！」

「——!？」

クロトの云う通りである。鉄球を投げつけられたとき、大鎌を振り抜かれたとき、フレイはそれらの攻撃を回避した……いや、回避することが出来ていた。

当たり前の話だが、フレイの意志に、機体が即応したのだ。

だが、今の「レイダー」や「フォビドゥン」では「それ」ができない——

「がちやがちやと操縦桿を振り回しても、搭乗者の意志に即さない「レイダー」と「フォビドゥン」に、フレイはひとつの確信をした。

後方に待機する「ドミニオン」艦内でも、一連の『異変』は感知されていた。

突如として現れたザフトの新型部隊——それらが放った真紅の波動——これに呑まれると同時に、突如として同士討ちを始めた「G」部隊——

一連の戦況を眺めながら、アズラエルが何かを理解したかのように、憎々しげな顔を
作る。

「——アイツら、まあた仲間割れなんかし腐って……。懲りないねえ、ほんとうに」

あと一步で“ボアズ”を陥とせると云うのに、仲間割れなんてしている場合じゃないでしょう？

そう云いたげなアズラエルである。——さっさと、あの不気味なMS部隊を撃破しちゃえばいいものを……。

作戦さえ大人しく遂行してくれるなら、その存在価値は充分だと云うのに、つつい関係ないところで不利益を招いてしまうのが、馬鹿な強化人間の悪いところだ。

しかし、飄々と懸念しているアズラエルの予想を裏切るかのように、そのとき“ドミニオン”のオペレーターが声を挙げた。

「“ピースメイカー”隊、転進します」

「——え？」

「こ、こちらに向かってくるか——!?!」

アズラエルが、慌てて顔を上げる——

と、見事なUターンを決め込んだ“メビウス”の大群が、一目散に“ドミニオン”に向かつて逆行して来ているのが目に入った。思わず立ち上がる。

「な、何考えてるんですか!?! まだ核は“ボアズ”に撃ち込んだじゃないのに——」

その顔面は、一瞬にして血走った蒼白である。

「——どおして帰ってくるの?」

呆気に駆られた言葉を他所に、艦長席に坐すナタルが、すぐに指示を飛ばす。

「『メビウス』の挙動がおかしい——。武器システムに火を入れる、迎撃準備！」

「はっ!?! しかし、あれは我が軍の!」

「宇宙の藻屑になりたいか!?!」

核を持ったまま、蜻蛉^{とんぼ}帰りを決め込もうとしている『ピースメイカー』隊——

（あの大群——彼ら全員が、揃って命令無視だとも……!?!）

そんなはずがない——

そう思う軍人としての心が、ナタルにひとつの決断をさせていた。彼女はこのとき、云い知れぬ不吉な兆候を感じていたに違いない。

冷徹な声を飛ばしたナタルの目に、迷いはなかった。

「冗談じゃないわ! 揃いも揃ってコンピュータウイルスにやられたってことでしょ、つまり……!?!」

僚機——『レイダー』と『フォビドゥン』から繰り出される反逆の砲火を牽制しつつ、フレイは強かに毒づいた。

おそらくザフトの新型——『ベルゴラ』が標準装備しているのは、『レムレース』に

搭載されているものと同じ『パチルスウエポンシステム』だ。無重力空間に対して“汚染型コロイド粒子”を広域散布することにより、これに感染した量子コンピュータを強制的にダウンさせ、再起動後、この制御権を完全に強奪するハッキング兵器としての機能を併せ持つ。

畢竟、ザフトはこの作用を使い、核弾頭を抱えた“メビウス”を、まんま“ドミニオン”——ひいては地球軍艦隊にぶつけようとしているのだ。

だから敵は、こつちが“ピースメイカー”隊を実際に発進させるまで、あの得体の知れない特殊部隊を穴蔵に隠して前線まえに出して来なかつた！

(仕掛けに乗せられた……ッ！)

コンピュータウイルスに侵食され、行動の自由を奪われたのは“レイダー”“フォビドゥン”“メビウス”を始めとする地球軍の機種だけだ。一方でザフトが開発したモビルスーツ——“ゲイツ”や“ジン”——には一切としてウイルスは影響しておらず、むしろ“G”が沈静化したことを機に、奴等は勢いを取り戻しているようでもある。方々では、現実に“ダガー”隊が押され始めている。

——戦いの流れは変わった。

パナマ攻略戦でザフトが用いた“グングニール”へのEMP対策と同様に、ザフトが開発したモビルスーツには、あらかじめ“パチルスウエポンウイルス”に対する

抗体投与対策が施されていたに違いない。

（そしてそのウイルスは、この“レムレース”にも効果がない）

理由など知らない。

だが現実には“レムレース”は、こうしてザフトのコンピュータウイルスを完全に無効化している。おおかた“レムレース”そのものがウイルスを宿した“病原体”なことから、同じウイルスには感染しない——とか？ 事情はともかく、そういう原理が働いているに違いない。

——『毒を以て毒を制す』とは、よく云ったものである。

思慮している間も惜しい。フレイはちらりと周囲を一瞥し、いいように操られ暴れ回る僚機達と、それに振り回された挙句、喚き散らすことしかできない『お仲間』に深い嘆息を吐く——“ドミニオン”に逆行している連合の兵士達も同じだ、まったくもって情けない！

「いざつてとき、男つて頼り甲斐ないんだから……！」

フレイは剣呑な顔を上げ、その視線を前方に展開する“ベルゴラ”小隊に固定する。

——あんな少数のモビルスーツ部隊で、数一〇を超える地球軍の量子コンピュータを一斉にハッキングするなんて、困難なはず……！

“ベルゴラ”の魔の手に掛かった“レイダー”も“フォビドゥン”も、すっかり機体

の制御権を奪われてしまっている。が、それらは実際のところ、撃つて来る砲撃こそ強力だが、かと云つて脅威ではなかった。

少なくとも、二機の“G”は遠隔操作によつて操られた“傀儡”として存在するが、これを操っているのはクロトでもシヤニでもないし、そうである以上、直接的にフレイが苦戦する理由にはならない。無鉄砲、それでいて無秩序に暴れ回るだけの機械人形を相手に、フレイが手こずる理由など存在しないのだ。

その証拠に、改めて直線的に大鎌を振り上げ、短絡的に突貫して来た“フォビドウン”の一撃を容易く回避したフレイは、“レムレース”にその背中を踏みつけさせた。バーニアの性能が低い分、跳躍の反動で加速し、“ベルゴラ”までの距離を詰めたのである。

「オレを踏み台にしたー?」

「黙つててー!」

踏みつけられたシヤニから抗議の声が聞こえたが、知ったことではない。

フレイは再度すべての砲門を開き、すべての銃口を“ベルゴラ”に固定した。マルチロックオンシステムが、遺憾なくその真価を発揮する——コンソール上に半自動的に幾つもの光点が浮かび上がり、フレイは胸の奥から込み上げる情動に突き動かされるがまま、トリガーに手を掛ける。

「隊長、ウイルスを無効化したモビルスーツが！」

「……なにツ？」

「悪魔のような“G”が、こちらを狙っています——!?!」

ウイルスを放散したことで、すっかり安心……いや慢心していたのか。それとも、奪った“メビウス”等の遠隔操作に気を取られていたのか。

いずれにせよ、機体のコクピットに警報が鳴り響くまで、ザフトの特殊部隊は“レムレース”の接近に気付くことが出来なかったらしい。そして——気付いた時には何もかも遅かったことを、彼らはきつと、最後まで理解できなかつた。

指先を訪れた血のめぐりと昂りが、彼女にトリガーを引かせていた。

「うッ」

次の瞬間、遠方より放たれた砲火が、一斉にすべての“ベルゴラ”を貫く!

「さ、最悪だーッ!?!」

断末魔と共に、すべての機体は無慈悲なる光の矢に切り裂かれ、拉げ、そして爆散する。

“ボアズ”守備軍が誇る、虎の子の軍勢——“ベルゴラ”

彼等は意外なほど呆気なく、その活躍の瞬間を終えたのだ。

最期の叫びが示した通り『^{ガラム・テイ}災厄』の名を携えて現れた、たった一機の“^{レムレース}亡霊”——

元々はザフトが造り、ウイルスへの抗体が射ち込まれていた“テストメント”の逆襲によつて。

傀儡は、傀儡師の糸が切れればその支配から逃れるもの。

“ベルゴラ”というコントロールの中枢を失った地球軍部隊は、システムを復旧させ、操られた機械人形から、再び搭乗者の意思を第一に動き出す従順な機動兵器へと実相を変えた。

「素晴らしい働きだ、フレイ・アルスター中尉……！」

常日頃は乾き切っているサザーランドの初老の声も、このときばかりは感激と称賛に潤っていた。

彼は即座に通信機をオンにし、声高に命じる。

「“ピースメイカー”隊に告ぐ！ 全機は“レムレース”の後続に付き、一気に“ボアズ”を攻め落とせ！」

「はっ！」

紡がれた将校の言葉を信じて、地球軍の兵士が昂然と動き出す。

戦の流れが、再び変わる――。

すべての「メビウス」は「ドミニオン」を避けて通り過ぎた後、ふたたび転進——。またも華麗なUターンを決めた後、一齐に「ボアズ」に向けての指針を取った。そしてまた、彼等の『護衛』として「G」兵器の暴虐が始まる。

「おつ応戦しろ、ザフト軍！」

ザフトはこれらの猛攻撃に対し徹底抗戦——だが、勢いづいた地球軍を真つ向から抑え込むだけの地力も、小細工を使つて打ち破るだけの搦め手も、もはや残されていなかった。そればかりか、切り札でもあつた「ベルゴラ」部隊の壊滅により、全軍の指揮は低下する一方。

打開策は見出せず、前線の兵士達を、激しい動揺と混乱が襲う。もはや最奥の椅子の上で、偉そうにふんぞり返るだけの司令官の発破などでは奮起できない彼らは、既に烏合の衆と化していた。そしてそれは「前線に明確な指揮官が存在しない」という、ザフトが徹頭徹尾貫いた放任主義が招いた惨禍でもあつたろう。

「——何が『プラント』のために」だ！ この戦いは、蒼き清浄なる世界のために！」
「覚悟しろコーデインイター共！ おれたちを散々コケにしやがってッ」

往つたり来たり、を強いられた「ピースメイカー」隊の、それは心の叫びだ。

もしも、あと一步「レムレース」の対応が遅れていれば、彼らは上官が乗る母艦を破壊していたかも知れないし、もしくは、その母艦に撃ち落とされていたかも知れないの

だから。

いずれにせよ、この局面にあつて、ナチュラル同胞同士で殺し合うなんて論外だ。——奴らコー
 デイネイターは、そうやって戸惑う自分達の姿を見て、けらけらと笑つていたに違いな
 い！

「オマエたちは、いつだって高みからナチュラルを俯瞰して、見下すことしかないんだ
 ！」

「くたばれ、宇宙ソラのバケモノ！」

口々に叫び、士官たちは、それまで大切に抱えて来たミサイルを“ボアズ”へと撃ち
 込んだ。

最初のミサイルが着弾する——。

凄まじいエネルギーが炸裂し、着弾点を一瞬にして蒸発させる。それは一瞬にしてす
 べてを消し飛ばす、狂気の力。冷え切った鋼鉄の要塞は、一瞬にして灼熱が渦巻く煉獄
 へとその姿を変え、着弾点から迸る閃光は、やがて内部のモビルスーツや戦艦を薙ぎ払
 い、防護壁を吹き飛ばした後、司令部に据えるコーデイネイター達を消し飛ばした。

難攻不落と称された宇宙要塞“ボアズ”は、一瞬にして崩壊——“それ”があつた場
 所には、砕かれた無数の岩くれと、ねじくれた金属片だけが漂つた。ザフトは大打撃な
 らびに壊滅的な損害を受け、荒れ狂う風圧にも似た、ナチュラル達の罵声の錯綜は止ん

だ。狂乱の反動であるかのように、不気味なほど静かな宇宙ができ上がる。

この戦闘において、地球軍は改めて、ここに解き放たれた『核』という名の力の凄まじさを、然とその目に灼き付ける。

かくして「ボアズ」侵攻戦は——より完全にして完璧な、地球軍の勝利に終わった。

そうして激烈な死闘が繰り広げられた事実など、知りもしない三隻同盟は、このとき辺境のデブリ帯に身を寄せていた。

正確には身を隠していたのだが、その付近には、一隻の輸送艇が停泊している。

これと云う活動拠点もなく、諸事情あつて「アメノミハシラ」を頼ろうとしない彼らは、補給の大半を、こうしてジャンク屋ギルドに依存していた。ザフトや連合——どちらの軍にも属さず、独自の立場を貫くジャンク屋は、こういう時代だからこそ逞しく活動していた。補給を縁に、彼らが三隻同盟に齎してくれる情報は多岐に渡り、そのニュースの一報を受け取ったニコル・アマルフィは、血相を変えて「アークエンジェル」の艦橋に向かつていた。

そして辿り着くと、そこでは、既にマリューやムウといった人物達が顔を揃えて居た。

「——月艦隊が『ボアズ』へ侵攻したって……!」

ニコルが思わず問うと、モニターの先に映るカガリが答えた。

「ああ、彼らの話ではそろそろか——もしかしたら既に、つてことらしいが」

カガリは、憤然として続ける。

「もしそれが本当なら、一大事だ……! 早く駆けつけて止めないと——!」

実直すぎるほど正義感に溢れたその言葉を遮って、『エターナル』から通信が入る。

「いや、もう手遅れだ——。こっちの筋で手に入れた情報によると、『ボアズ』はもう

陥ちた」

「え……?」

「事態は既に、最悪の方向に動き始めたようです」

ラクスの声が響き、ニコル達は、一斉に顔色を失ってゆく。

「——地球軍が、核兵器を使ったのです」

難攻不落とまで云われた『ボアズ』要塞——それが落とされたということとは、並々な

らぬ戦術兵器が展開されたのだらうとはニコルも予期していた。

「が、よもやそれが、かつて『プラント』のひとつを焼き払った核だとは——。

「あんま、驚きやしないがね。『JOSH—A』の後だし……」

ムウが、自嘲気味に溢す。

——自軍の利益のためなら、虐殺すら厭わないのが地球軍だ。

それは既に“JOSHUA”に設置された“サイクロプス”が実証した真実であり、彼等は彼等の『敵』——コーデイネイターを滅ぼすために、自軍の拠点や兵士さえ斬り捨てることも厭わない集団なのだ。

そういう意味では、今回、地球軍が攻め入った“ボアズ”なんて敵軍の拠点でしかない、核を手にした彼等が虐殺をためらう理由など、特に存在しないだろう。彼等にとつて、コーデイネイターは結局、同じ人間ですらない——宇宙のバケモノなのだから。

「わたしたちも、動く潮時ですね……？」

↑——はい↓

この一か月、彼らはきっかけを待っていた。逃げ回り、隠れるだけでは目指す目標にはたどり着けない。が、確かに彼らには休憩の時間が必要だった。

〈全艦、発進準備！ 各科員は、至急持ち場につけ——！〉

その安息も、終わりの瞬間を迎えたのだった。

第一要塞である“ボアズ” 攻略を終えた地球軍艦隊は、補給のため“ボアズ”が浮か

んでいた宙域を離れ、L5宙域の界限に停頓していた。と云うのも『ボアズ』宙域周辺は、核ミサイルを放った後だ——残留汚染が蔓延している危険性が高く、それを考慮した結果の移動である。

『ドミニオン』格納庫に降り立ったフレイは、暑苦しいメットを脱ぎ、ルーズアツプに束ねていたバレットを取った。燃えるような赤い髪が下ろされ、それは汗のためかいつもより重量感を増やしたが、それでも、ふわりとして無重力の中で滑らかに浮いて流れた。

機体から降り立ったフレイの周りには、妙な人集りができていた。

若い——と云ってもフレイよりは年上だが——士官のみならず、技術スタッフまでもが、一斉に彼女の許に押し寄せて来たのである。フレイは訳が分からず、思わず後ずさった。

「中尉、ご活躍は耳にしました！ 素晴らしい戦果を挙げられたそうで！」

「いやア、『ボアズ』の『攻略戦』に勝てたのは、あなたのおかげですよ！」

「今度、良かったらお茶でもどうですか！」

「てめ、抜け駆けはずりーぞ！」

後半にかけて下心が段々と露骨になっていたようだが、周囲から向けられる信頼と興奮の眼差しに、フレイは目を白黒させた。ややあつてから、全員が自分を褒めたたえて

いるということに気付いたフレイは、彼らの高揚が乗り移ったかのように不敵に笑う。

——みんなの『関心』が、やっとわたしに戻って来た……！

まず第一に、その言葉が頭をよぎった。

それを自覚することが、まるで自慰行為をするかのように、彼女の自尊心を満悦に癒してゆく。

——わたしの許に集まって来たこの人達は、ちゃんとわたしを見てくれるのだ——決してあの娘ではなく……！

「連合の、勝利の女神おれたちってやつだよなあー！」

平穏な「ヘリオポリス」では、学園の「高嶺アイドルの花」みたいに褒めそやされ——

しかし「アークエンジェル」に乗った頃から、誰からも相手にしてもらえず、誰にも相手にされなかったような自分が、この「ドミニオン」ではどうだ？　こうして賛辞を貰い、ふたたび返り咲けたじやないか！

軍人の癖にコーデイナーを滅ぼす度胸もないような、日和見主義の「アークエンジェル」で、誰も彼もが口を開けば「ステラ」「ステラ」——あんな「太陽」が持ち上げられたせいで、自分はいつだって「日陰」に隠れていなければならなかった！

——でも、見て……！　やっぱりわたしは正しかった！　やっぱりわたしは、評価されるべき人間なんだ！

周りの士官達の心からの笑顔が、ようやく、そのことに気付かせてくれる。

御伽の国の「シンデレラ」みたいに、不当に扱われていた女の子を、ちゃんと理解してくれる人は、この世界にもちゃんといふのだ。そう、わたしは正しい——でなければ、彼らがこうして、自分を褒めてくれるはずがないのだから！

歓声、笑顔、優待、お世辞——

周囲から一身に降り注がれる愛情——

そのすべてを、もう一度、独り占めしたい——

一度はその味を知り尽くし、かつ、父親という最大の愛情の提供者を喪っていたフレイトにとって「周囲からの再評価」——それは彼女自身、このときもつとも欲していた、禁断の味だった。

それからしばらくして、各々の士官たちが持ち場に戻ると、ようやくフレイは喧騒から解放された。

人混みが解散した後、フレイの視線の先に立っていたのは、ブーステッドマンのふたり組だった。遠巻きにこちらを観察していたのだろうか？ シヤニは相変わらずイヤホンを耳に当てて音楽を聴いているが、クロトの方は、さも物言いたげな表情でこちら

を見つめてゐる。

これだけ長い時間を、彼らが待つてゐるなんて珍しい？ —— フレイは、珍妙な顔を
してふたりに寄つていく。

「あら、なにかあつて？」

周囲からの再評価で、もみくちやにされた後のフレイは、このとき上機嫌だった。

対照的に、クロトは沈んだ表情をしていたが。

「てめーに随分と活躍されちまつたから、ボクたちに対する評価が下がつて来てんだヨ」
どうにも、強化人間が常に身の内に孕んでいる『内情』について、文句があるらしい。

—— ああ、確か前にも、そんなこと……。

フレイは、漠然と思慮する。

—— 新型のフレイわたしが活躍すればするだけ、旧式のクロトかれらは、その立場を危ぶめられて
ゆく……。

前にひとりの青年が云つていた内容と同じことを、此処に来てクロトも、ようやく言
及する気になつたらしい。もつとも、フレイの中では既に一度交わしたことのある応酬やりとり
だったので、既視感を憶えた途端、取り合う気など失せてしまつたが——。

適当にあしらおうと考へていると、クロトは唐突に、彼女に向けて人差し指を突き出
して来た。「人のこと指ささないでくれる？」と教えておいたが、まったく聞いてくれな

かった。

「というわけで、てめーも次回から『ゲーム』に参加な！」

「はあ？」

「この三人の中で『誰がイチバン撃墜数を挙げられるか』——次の戦闘で白黒つけようぜ！」

そのきかん気に満ち溢れた物言いに、フレイは唾然としたが、やがて不思議と納得してしまった。——なるほど、以前そのことで喧嘩と苦情を吹っ掛けて来たナイーブな彼と違って、クロトはどこまでも挑戦的、いつまでも挑発的な性格をしている。

——クロト・ブエルは、色々と開き直った考えた方をしている。

強化人間である自己に対し、これと云う違和感も、さしたる不満も感じていない——いや、感じることを諦めてしまった彼の発言には、

『誰がイチバン強い強化人間なのか、実際の戦績で決めよーぜ！』

という、大らかな魂胆が見え隠れしていた。

それはなんともゲーム好きな、彼らしい幼稚な提案ではあったが。

(……わたしは『ド素人』なんじゃなかったのかしら……?)

戦闘中、クロトに云われた形容詞だ。

そんな自分に、彼が改めて『堂々の勝負』を吹っ掛けて来るといふことは、彼なりに

自分のことを認めてくれた、ということなのか？

——こいつはわたしを『ド素人』と罵った前言を撤回したくて、照れ隠しみたいに『ゲーム』を吹っ掛けて来たんじゃないか？

そんな風に都合よく捉えてしまうわたしの心は、いま、きつと自惚れているに違いな
い。フレイは思わず緩みそうになるはしたない口元を手で隠し、ひとりごちた。

(アイツの代わりに、ようやくなれた)

なににせよ、この瞬間を以て、クロト・ブエルのフレイに対する認識が変わったこと
に間違いはない。

RPGで云えば、クロトにとってフレイは、既にシヤニと同じステージに立つ『戦友』
であり、同時に、獲得した経験値を競い合う『好敵手』ライバルですらある。何が云いたいのか
と云うと、フレイは『ぼつと出のモブキャラ』とされていた彼の認識から、見事に昇格
を果たしていたのだ。

「全力で勝ちに行くから、覚悟しておいてよね！」

「数で競うの？ ……大物を仕留めた方がすごくね？」

「戦いは数ツ！」

「いや、質だシツね」

唐突に言い争いを始めたクロトとシヤニの様子を、呆れた顔で見守っていたフレイで

あるが、ややあつてから、遠方から白衣を着た男性医師が近づいて来た。

「——フレイツ！」

ハリー・ルイ・マーカットである。彼は駆け足で寄つて来て、フレイに耳打ちする。

「フレイ！ 戦闘から帰つたら、すぐに医務室に戻るよう云つてあつただろう!? どうしてすぐに戻つて来ないんだ!？」

「周りにもみくちやにされて……。心配しなくても、今から行くところだつたんです——」

云い終わる前にハリーはフレイに詰め寄り、怒つた様子で耳打ちする。

（この一か月間で、きみは薬の摂取量が異常に増えているんだぞ！ 万が一にも薬の効果が切れて、大衆の面前でナルコレプシーを発症したら、そのときは庇いきれないと云つたはずだ！）

ナルコレプシーの発作は、突発的に起こる。

仮にも発作が起こつて、フレイが昏睡状態に陥れば、周囲の者は激しく動揺し、その噂は艦内に流れることになる。それだけは避けなくてはならない。

（……わかつてますよッ）

毒々しく、体の不自由を嘆くように吐き捨てる。

ただ、これまで特に関わりをもつてこなかった仲間達との会話が、思ったより楽し

かっただけなのに——

今の自分には、彼らと素直に談笑に浸る自由すら約束されていないのだ。

「すぐに医務室に戻るぞ！——そろそろ薬の効果が切れる頃だ。アズラエルに見られ
てはまずい……」

「……はい……」

「いやー、お見事でしたヨ」

そのときだ。

パチパチ、という芝居がかった拍手と共に、格納庫に、ムルタ・アズラエルが姿を現
したのは。

「アズ……!?!」

「先の戦闘、お疲れ様でした、アルスター嬢。サザーランド大佐もベタ褒めの活躍でした
ので、ボクの方からも労いの言葉を贈ろうと思いましたがネ？」

アズラエルの登場に、傍らのクロトとシヤニが、言い争いを辞めた。

クロト達はその立場上、アズラエルを嫌厭している。彼と目を合わせないようにそつ
ぽを向いてしまったのは、高評価を承ったフレイと対照的に、自分達への低評価が降る
ことで、みずからが『廃棄処分』にされる事態を恐れる心理ゆえだろう。

そうして不快に思われているアズラエルであるが、本人はまったく意に介さなかった

らしい。ずかずかとフレイの近くまで、泰然と歩み寄ってくる。

「だからこうして、わざわざ格納庫まで足を運んだわけですが」

「……！」

「うっかり耳にしようとはねエ……『ボクに見られちゃまずいもの』って、何なんデス？

ハリーさん？」

目つきが、変わった。

急激に温度の冷えた、目の底の凍てついた表情。アズラエルはそれ自体が刃物のよう
な、鋭い目つきでハリーを見、次に咎めるようにフレイを睨む。フレイは蛇に睨まれた
ように、びくりと震えた。

それが「見据える」というより、いちビジネスマンとして、商品の品質を「見定める」
ような無機質な視線だったからだ。

「——！」

ハリーは、庇うようにフレイの前に出る。

が、一触即発の空気が流れ出し、それまで穏やかだった場の雰囲気を一変させた。

周囲にいる技術スタッフの多くが「なんだ……？」と違和感を口にしたが、やがて言
葉のひとつも言えなくなるほど、場の空気は沈鬱になってゆく。

「まさか、このボクに『隠しごと』——なんかしてませんよネ？」

「……勿論、だ」

ハリーは、決然と云い返す。

「ふーん？　でも、本当かなア……？」

「あなたは、わたしまで疑うのか」

「当然でしょ？　あなたには前科があるんです——地球軍の不利になることを承知の

上で、エクステンデッドのデータを破棄しようとした、立派な前科がネ」

相も変わらず、粘着質な口調で咎めて来る上司に、フレイは恐怖を感じていた。

「あなたを黙って見過ごしてたら、今度はボクが不利益を被るんじゃないか、ってヒヤヒヤしますよ」

結局、フレイもまた、アズラエルから目を背け「我関せず」の態度を貫くブーステツドマンの二人と同類なのだ。己の不利益を被ることが怖い——罪を承知で、自分を庇ってくれた青年とは違って……。

場の膠着が続き、これという尻尾も掴めなかつたらしい。アズラエルは咎める気が失せたのか、それとも興味を失ったのか、

「——まあいいでしょう」

と、投げやりな態度に変わった。

「どのみち『ボアズ』が陥ちた今、次の攻撃目標は『プラント』本国です。それで直に

決着だ」

白けた口調で、続けた。

「これでようやく終わるヨ？ この戦争も、キミたち強化人間のお役目もサ？」

「アズラエル！」

「ナニを怒っているんデス？ 強化人間を治療する方法なら、医学者が頑張ればイイでしよ？ そこから先はボクの管轄外だし」

なんて無神経な言葉を使うのだろう。

が、彼の云っていることは、紛れもない事実だ。

戦争が終わってしまえば、アズラエルはもう強化人間を製造する事業に出資する必要がなくなり、この分野から手を引いて、ただの企業経営者に成り下がる。

——強化人間を作るだけ作っておいて、彼らが役割を果たしたら、後は朽ちるまで放置する……！

そんな身勝手の齷寄せを食らうのは、医学界の——自分たちのような研究者なのだ。

「ボクを責めるのはお門違いですヨ。恨むなら、彼らを救えない現代医療を恨めばイイ」

「それは理屈だ！」

「でも、正しいものの見方。現実です」

この人は、初めから私たちを助けるつもりなんてなかったんだ。

フレイは事実を事実として突きつけられ、目眩を感じた。理解はしているつもりだったのだ——アラスカに配備された強化人間が、切り捨てられたことを目の当たりにしたときから。

そしてその目眩とは——決して錯覚ではなかった。

頭の中で、ぷつり、と何かが途切れる音がした。

次の瞬間——途端に意識が朦朧とし、頭が痛み出す。視界が霞みがかつたように暗転し、急速に暗黒に包まれてゆく。全身に力が入らない。体はよろめき、次第に前に傾いていくのが分かる。

疑いようがない。これは、ナルコレプシーの発作だ。

(うそ)

——よりによって、このタイミングで……。

微睡みに堕ちてゆく意識に、歯止めを掛けようとしたフレイだが、当人の意志でどうにかできる難病ではないのだ。

フレイはその場に膝を付き、意識を失って、ぐったりと倒れ込んだ。その唇から規則正しい寝息と、その脛から儂げな一筋の雫を零して——。

「フレイ!?!」

化狐の尻尾を掴んだアズラエルは、カツと目を開き、血走った目で改めて問い詰める。

「さア！　これは一体どういうことか、ご説明願いましょうか、ハリー・ルイ・マーカッ
ト！」

「……ッ!？」

「そこに転がった『粗悪品』の欠陥を——今まで監督者に黙っていたことですよねエ
!？」

悪霊にでも憑かれたような、特有のぎらつきを宿したその顔は、まさに悪鬼の形相だ。
場に居合わせるクロトとシャニは、それぞれ、底知れぬ恐怖に顔を歪める。意識を
失ったフレイに向けて、アズラエルが浮かべた表情——それが自分たち強化人間を
『廃棄品』と見定めた時に見せる、文字通り「ゴミを見るような目」だったからだ。

シャニは人知れず、声を漏らす。

「あいつ、ヤバイんじゃないか——？」

——次の戦闘で、誰がイチバンつえーのか、決着つけようって約束したばかりじゃな
いか！

——なのに、なぜ。どうして……？

「なんで、こうなんだよ」

周囲からの期待、それに伴う溢れんばかりの愛情——

悪魔の力に身を染めた、魔女の魔法にかけられた少女は——しばしの間、それらの幸

福の味を堪能したのだ。

——しかしその『夢物語』は、今ここに終わりを告げる。

零時の鐘は鳴り響き、御伽の国の“シンデレラ”は、浅はかな現実に戻らなければならぬ——

その瞬間が、今ここにやって来たのだから。

終篇

『少女の戦争』

ザフト高速艦 “エターナル” の艦首側部に備えられた武装プラットフォーム “
 M・E・T・E・O・R” は、ファーストステージシリーズの搭載する『マルチロック
 オンシステム』を、効率的に稼働させるための追加武装だ。MSへの装着時には機体の
 稼働時間、推力、火力、飛行性能——それぞれを飛躍的に向上させるため、ストライカー
 パックと類似した特徴を誇る。何より、核動力MSである “フリーダム” 等の機種と
 ドッキングさせることにより、半永久的に補給される電力を活かした、怪物的な殲滅力・
 機動力を有する「機動弾薬庫」へ化けることが可能だ。

そこに内蔵された武装は多種多様に渡り、数えはじめれば切りがない。十重^{とえ}二十重^{はたえ}に
 備えられた火線砲や対艦ミサイル——両舷に伸びるアーム部からは長大な刃渡りの
 ビームを出力可能な、MA-X200ビームソードを搭載している。開発者一同が思い
 描いた浪漫を詰め込んだような巨大補助兵装であるのだが、勿論、その超性能ゆえの弊

害がある。

それは、パイロットが初見ではとても扱えるはずもない、操縦の複雑化である。

元より“ミーティア”は、本来モビルスーツには望み得ない戦艦じみた推力や火力を補填させる代物だ。この性能を發揮しようとすれば、たったひとりの搭乗者に対して高度な空間認識力と複雑なシステムを制御する卓抜した情報処理能力が要求される。それはナチュラルや生体CPUはおろか、並のコーディネイターであつても捌き切れるような兵装ではない。

“エターナル”が両舷部に装填している“ミーティア”は二基であり、本来ナンバー01が“フリーダム”に、ナンバー02が“ジャスティス”に授与される予定だったが、現在は“クレイドル”に後者が配備された。

そうして新たな力を託される形となったステラだが、彼女たちはこの空白の一ヶ月の間に、新兵器“ミーティア”の慣熟運用を行った。

そもそも、多重砲撃形態フルバーストモードの実装によつて計五門もの火器を一斉放射できる“フリーダム”は別として、一方の“クレイドル”は搭載する火器の大半が手持ちで扱う武器のため、それ単体ではマルチロックオンシステムを有効活用する機会に恵まれていないのだ。

勿論、それも地上のみの話であり、無重力帯の恩恵を受ける宇宙空間において“クレ

イドル”はドラグーンを使用できるため運用上の問題は解決するのだが、いずれにせよ問題点として挙げられることは、

『これまでステラがマルチロツクオンシステムをまともに使った記憶がない』

ことの一点であり、それだけを云えば“フリーダム”に乗るキラの方が、実際にマルチロツクオンシステムを扱い慣れ、新兵器と融合することで高度化してしまう火器管制システムに至っても、いち早く順応できるはずだった。

現実にキラ自身もそう予期していた中で、しかし、そこで番狂わせが起こった。

『超大型機動戦略兵器』——という、ニツチでピーキーこの上ないはずの“ミーティア”に対し、ステラの方はあっさり順応してみたのだ。それこそ二時間ほど試用運転を行おうものなら、これを手足のように扱ってしまふほどだった。

それはステラの方が早熟でキラの方が晩熟だったとか、そういう問題では決してなかったし、むしろスーパーコーデイネイターであるキラの方が、そういった適合能力には大きく優れているはずではないのか——だが実際はステラの方が対応するのが早かったし、大型の火器管制システムに至っても、彼女はまるで、かつて使ったことがあるかのように使いこなしてしまった。

幼馴染みの女の子にあっさりとは抜かれたことで、キラが少年として男子として、スーパーコーデイネイターとして、様々な方面の自信を打ち砕かれたのは云うまでもない。

——ボクは、やっぱスーパーコーディネイターなんかじゃなくていいや……。

キラにそう戒心させるほどステラは早熟だったわけであるが、訓練を始めてから四日ほど経てば、ふたりは遜色なく“ミーティア”を扱いこなすようになっていた。

扱えるだけでも化け物だというのに、きつとキラにも意地があつたのだろう——とかムウ・フラガは適当に解説を飛ばしていたが、結果的にふたりが技量を高め合い、生存率を上げるなら、それはそれで微笑ましい話ではないか。実際に高め合ったものが、微笑ましい能力であつたかどうかは、置いておくとしても。

地球軍の動きを察知した三隻同盟は、いよいよ動き出そうとしていた。

すでに“ボアズ”陥落の報せを受け取つた今、止まっていた時計は動き出している。これまでは身を潜めてばかりだった“エターナル”は動き出し、L5界限に浮かぶ“ヤキン・ドゥーエ”の航路へ指針を取っていた。

白と水色のパイロットスーツに着替え終え、アラートに控えていたキラは、傍らに立ち、ガラス越しにメタリックグレー状態の“クレイドル”を見据えているステラに声をかける。

「地球軍の次の攻撃目標は、間違いなく“プラント”だ。核ミサイルのひとつでも、仮に

「プラント」へ落ちてしまったら……きつともう、この戦争は止まらない」

かつて、すでに一度は撃ち込まれた核——

血のバレンタインをきっかけに地上と宇宙間の対立は決定的となり、戦争が始まった。そして「ユニウスセブン」が崩壊した折、人生を狂わされた者が今、キラの目の前にいる。

——もう二度と、核なんて撃たせちゃダメなんだ。

気づかわしげな視線を送るキラであつたが、ステラの方は振り返ることなく、その代わり、表情ひとつ変えずに発する。

「物量戦になっちゃえば、ザフトの頭数じゃあ地球軍の艦隊には敵わない……。それは地球軍も分かっているはずだから、きつと大軍を使って「ヤキン」に攻め込んでいくとおもう」

「……うん」

「だから核攻撃隊は、その裏を突いて一気に「プラント」に迫っていくはず——」

元より核弾頭は、取り扱いを誤れば友軍すら誘爆させかねない巨大な質量爆弾だ。下手に動かせば、かえて自軍に大損害を招きかねないことから、これを恐れて地球軍は核攻撃隊とMS大隊を別行動にさせるだろう。

そうなれば、MSの役割はおのずと限られ、おそらく陽動……いや「足止め」の任に

就かされるはずだ。

——物量で勝る地球軍だからこそ、それは可能な戦術展開だ。

連合は戦力の大半を以て“ヤキン”の防衛軍を抑え込み、その隙を突いて核攻撃隊を“プラント”へと遣わせる。そうして物量に物を云わせてザフトの身動きを封じてしまえば、核を撃たれた彼らはやがて、帰る家を失う——そうなれば戦闘継続は無意味となり、心の折れた者から順に崩れてゆく。そこに追い打ちをかけるように、一気にコーダイネイターを撃滅してしまおう、という算段になっているはずだ。

もつとも、これはあくまでもステラの予想に過ぎないのだが、非常に建設的な概要ではあった。まるで連合のすべてを看破しているようなステラを、キラはあつけらかんとして見返す。

「地球軍の動きが、わかるの?」

きよとんとしてキラが云うのに対し、ステラは、くるりと振り返った。

「ちよつと考えたら、自然にこうなった」

「そ、そう……」

「地球軍の上層部えらいひとつてね——ザフトに容赦ないんだ。根絶やしにしなきゃ、気が済まないんだよ」

ステラの口から出たとは思えない、思いたくない根絶やしという言葉には、流石のキ

ラも褒められない感情を抱いた。だが声を発した当人はまるで気にしていないらしく、ステラは無機質にそう云うと、また格納庫にある「グレイドル」に目を戻してしまつた。

そのときキラは、ステラのことを無意識——ほぼ無意識に少しばかり敬遠してしまつた。それもこれも、彼女が妙に張り詰めて、本来の彼女らしさを損なっているように見えたためだ。

「……………」

戦術家としての才覚を見え隠れさせたステラであるが、そんな彼女が、キラには段々と「戦争に馴染んでいる」ように思えたのだろう。キラは心配になり、思わず尋ねたが、

「なんだか、張り詰めてない？　だいじょうぶ？」

「なにに？」

「……………いや」

云い淀むキラにとって、こういつた状況のステラは正直可愛くなかつたし、はつきり云つて気に入らなかつただろう。本来のステラは、軍人ではないにも関わらず、時おり彼女が、そこらの軍人よりも遥かに立派な人間に見えることがあつた。

けれど、実際にはその類まれなる純粹さから多くの人々に愛され、ある意味でアイドル

ルらしいはずの彼女が、どうして今、こんな無情の戦争に関与していかねばならないのか——？

身近だったはずの存在が、急に手の届かない所へ行ってしまうような——寂寥感にも似た感情を、このときキラがステラへ抱いたのは事実だった。

——そんな立派な人にならなくたって、いいのに。

——ただ、いつまでも純粹なままでいてくれたら。

もつとも、今になってキラの口から言及したところで、意味はないだろう。

このような幼馴染みの願望に反して、ステラの方は“ミーティア”に適応したり、敵軍の作戦を考察したり——より洗練された形でパイロットの頭角を現しているのも事実なのだ。

——本当はもつと温かくて、やさしい世界にいさせてあげたら。

今までに幾度となく味わって来た気持ちであり、本心を云えば、キラは今すぐ彼女を連れて穏やかな世界に帰りたい。まるで世捨て人のように、静けさと穏やかさに保管された世界で、静謐な暮らしを一緒に送っていければいい——

さながら幼少の頃を再現するかのようには、恐れのない温かな場所で共に生きて行ければいいとさえ、本気で考えているのだ。

——けれど結局、そんなものは願望どころか妄想でしかない。

ステラはこれから始まる戦争から逃げ出したり、現実から目を背けたりはしないだろう。これから撃たれようとしている「ブランド」は、かつて撃たれた「ユニウスセブン」の分身だ——撃ち墜とされれば泣く者が、絶望に苛まれる者が生まれる。

であるならば、彼女は決して逃げ出さない。外野の人間が、どれほどの声を挙げて止めようと——

——逃げない想いは、きつとアスランも一緒だろう。

今はキラに背を向けるステラであつたが、その決然とした表情はアラートのガラス越しに反射し、後方にあるキラからも伺い知ることができていた。

きつとアスランも今は「ブランド」を護るために必死になり、ステラもまた必死なのだということを、その表情を見れば痛感する。地球軍の暴挙を止める——ふたりはそれを、第一の正義と考えているはずだ。

未来に進むためには、逃げ出してはならない。せめてこの戦争を終わらせることで、自由を勝ち取る必要があるのだ。

だからこそ、キラはこのとき立ち上がり——

「帰ってこよう——」

「えっ?」

ステラの横に、位置取った。

視線を揃え、彼はみずからの乗機「フリーダム」を見下ろす。そして同じように決然と、云った。

「戦争を終わらせて——みんなのところに、一緒に帰ろう」

最後の一言はキラ自身の願望であり、切望だった。

これから二人に待ち受けているもの、それは後世において「第二次「ヤキン・ドウエ」攻防戦」と呼称される、戦役最期の大規模戦闘である。連合とザフト、双方共に壊滅的な被害を出す結果に収まる修羅の戦であるが、そのような将来の事実を、このときの彼らが知る由もない。さらには「レムレース」や「ジャステイス」と云った——彼らが今度こそ決着を付けなければならない人間達との対決が待ち受けていることも、ふたりはまだ、漠然としてしか思い描けていないのだ。

そして、そうであるからこそ、ステラはこのとき、ようやくはにかみ、太陽のように笑った。

「——うんっ、かえろう……!」

これまでに起こった、何もかも——

全ての出来事に決着を付けることを信じて疑わないキラ達であつたが——そこに意外な結末が待っていること、彼らが予想もしない方向に事態が転じていくことを、彼らはまだ、知る由もない。

地球軍大艦隊を率いた「ドミニオン」は、間もなく「プラント」に攻め込もうという段階にある。既にほとんどの艦船が補給を終えているのだが、生憎、旗艦である「ドミニオン」艦内において幾ばかりかの「揉めごと」が発生したらしく、現在は一時的に停頓しているのが現状だ。

が、どうやらその「揉めごと」も、解決の一途を辿つたらしい。

その証拠に、いざこざの当事者であるムルタ・アズラエルが、自室にて上機嫌でシャワーを浴びていた。彼は身に付いた汚れを落とし切り、髪の毛をドライヤーで乾かした後、悠長に自身のデスクに坐す。その時間を見計らったかのように通信機が鳴り響き、
「へわたしです」という初老の男性の声が入って来た。それはサザーランドからの通信だった。

「——ああ、次の核攻撃目標は「プラント」本国ですよ。変更はナシ」

まだ上気した身体を火照らせながら、アズラエルは身に付いた汚れを拭き取った直後でもあり、このとき、得てして清々しい気分だったに違いない。

「これでようやく終わるよ、この戦争もサ……」

このときアズラエルは、みずからが核を用いたことによって「相手からも同様の報復を喰らうのではないか?」と懸念するだけの想像力が、完全に欠落していた。先にNジャマーキャンセラーを開発したのはザフトなのだから、撃てば撃ち返されるのは自明だろうに——すっかり核は自軍の兵器と考えていたらしい。

人間は都合の良い時に都合のいい理解だけを優先する生き物なのだが、おそらく『ポアズ』崩壊という鮮烈な逆転劇を見たことで、すっかり気分が有頂天になっていたに違いない。

へハリー・ルイ・マーカットとフレイ・アルスターの処遇については、いかがなされましたか?」

アズラエルは、眉を顰めた。

「おやア? 珍しいですねエ、あなたが罪人の足跡を探ろうなんて」

その一言で、処遇については明言されたも同然だ。

元より、ウィリアム・サザーランドという地球軍将校は、アラスカにおいて死刑囚^{ジエイク・リーパー}の命を全く危惧しなかった人物である。結論だけ云えば「人でなし」であり、そんな男が、果たして何に興味があつて二名の動向を探ろうとしているのか。

「云わずとも判るのではないですか——? 彼らは『戦略的に重大な過失を、共謀して隠していた』わけだ。それも、単純な保身のために」

格納庫を訪れたアズラエルが、昏睡状態に陥ったフレイの疾患を目の当たりにしてから、時はそう経っていない。

半刻ほど前の話になるが——「それ」を今まで黙秘していたフレイと、その共謀者であり彼女の主治医を務めていたハリーには、正式に処罰が下されることになった。

「——その咎で、今は別々の営倉に入れられてますヨ」

現在は営倉入り——

後の処分については、追々^{おいおい}「プラント」を滅ぼした後にでも決める予定だ。

〈では、アルスター中尉については——いよいよ廃棄処分というわけですか？〉

「執拗ですね、気になるんですか？ あの娘のことが？」

〈はっは〉

その乾いた笑い声は、凶星の証だ。

〈まあ廃棄処分になるくらいなら、いつそのこと戦後のために飼ってみるのも悪くないかな、と思いましてね〉

「おやおや……」

〈軍人を生業^{なりわい}にして一筋の人生だった。妻子も持たずにここまで過^{すご}して来たものですから〉

しがない退役軍人の老後の世話のひとつでも憶えるのなら、まだ使い道があるという

もの。よくよく考えれば、あれほど男好みに実った雌もそうおらぬだろうと、結局は体よく調教された愛玩動物にでもしようという。

が、アズラエルは内心、職業軍人という名の戦闘屋——彼らのこうした汚らわしい部分が大嫌いであった。少なくともシャワーを浴びた後にしたい会話ではなかったし、やはりサザーランドという男は下衆であると内心で再確認する。もつとも、声に出して指摘したところで、この老人は傷つくような器ではないだろうが。

「また酔狂なことを仰りますネ。しかし、今のこんな御時世だ……形のいいものならコーデイネイターを連れれば飽くこともないでしょう？」

アズラエルはすっかり興冷めしたように取り合つたのだが、サザーランドは熱弁している。

〈養殖で仕入れた人工の刺身より、わたしは天然ものが好きでしてな〉

「上手いこといいますね」

〈天然ものの方が、締まりがあつて極上なのですよ〉

繰り返すようだが、ふたりが話しているのは刺身の食感についてであつて、それ以外のことであるはずがない。

にも拘らず、アズラエルは表現しがたいほど不機嫌な表情をしていた。勿論、音声のみの会話であるため、いくら露骨に表情を変えようと、それが相手に伝わるはずもない

のだが。

「人の手がかかった、まがいもの」は嫌いなワケだ……まあ古風ってことなんでしよう、あなたは……」

〈古き時代の、老い^ほ耄れの趣味ですよ——はっは〉

来る年波を自虐気味に持ち出すと、サザーランドの乾いた笑い声が聞こえた。

それからしばらく褒められたものではない会話が続いたが、しばらくして愛想を尽かしたアズラエルは、途端に話を区切り、改めて先を続けた。

「——まあでも、アナタのご期待には、添えないかもしれませんネ」

フレイ・アルスターには、まだ働いてもらう必要がある。

それはサザーランドの個人的な性癖に付き合っただけでやるのが不愉快なものもあつたが、理由はもつと他にある。アズラエルがそう云えば、落胆でもなければ焦燥でもない、無味乾燥な声が返って来た。

〈ほお？ それはまた、どういった理由で？〉

アズラエルは、遠い眼をした。

「さっきの戦闘——あの娘^{むすめ}がいなきやあ、地球^{こつち}軍が危なかつたことは確かだ……。どの

みち次の総攻撃で色々と片付くんだし、彼女には『もう一戦くらいチャンスを与えてもいいんじゃないか』——そう思うんですヨ」

へふうむ、たしかに……」

「今からロドニアに連絡取つて、補充要員を連れてくるンじゃ、かえつて手間でしょう？」

そんな時間は、今のボクらにはないんだからサ——。

アズラエルの云っていることは正しく、新しい強化人間を補充するにも、研究所への手続きに始まり、相応の時間と時間が掛かるのだ。既に「ボアズ」を落とす、いざ「プラント」本国へ迫ろうと云うこの時期に、たったひとりの補充要員のために裂く時間など、彼らは待ち合わせていない。

「かと云つて「レムレース」抜きで、アルスター抜きで作戦に当たるのも、いろいろと心配だ。アレは曲がりなりにも、ボクらの切り札なんだからサ」

些細でもなければ微妙でもない、確たる戦力の比率を「レムレース」は占めている。

勿論、月基地からは新型のモビルアーマーも遺憾なく投入されるわけであるが、特殊兵装を使ってくる「ベルゴラ」が出て来れば「レムレース」が唯一の対抗策だ。それこそ「レムレース」がない限り、地球軍が返り討ちに遭う可能性だって、充分に考えられるのだ。

「あの娘には、戦争が終わるまで働いてもらいますヨ——今はチョット懲らしめるために、営倉にぶち込んであるだけで」

「ナルホド……。あの娘を買っていたのは、どうやらわたしだけではないううだ……」

「ボクはさア——こう見えて、あの娘と同類なんだ」

アズラエルは、唐突に自分を語った。

「アズラエル財団の御曹司、跡取りとして生まれたボクは——小さい頃から特に不自由なく暮らして来た『お坊ちゃん』だ。でもそれは、あの娘だつて同じだ——事務次官のお父上の手厚い保護の下、何不自由ない生活を送っていた典型的な『お嬢さま』……」

その評価は、決して間違つたものではない。

「頼るものは親のコネ——自分が不利になればすべて他人のせい——世間知らずを自慢するみたいに手前勝手なワガママやプライドを吹聴し、自分がどんだけ偉いんだつて勘違いしてつけ上がった人間を、ボクはこの眼でたくさん見て来た」

アズラエルが生業とするビジネスの世界では、そういつた人間は「ありがち」だ。

たとえば「二代目」——彼等の親たる「先代」が、必死の思いで築き上げて来た栄光と地位を、能力もないくせに当たり前に世襲すること破産させる愚者達の代名詞。

「でもボクは違う。親の威光なんかじゃなく、自分の力で這い上がつて来たんだ——ここまで」

ムルタ・アズラエルもまた、アズラエル財団の御曹司であり、先代から伝えられて来た『富』を引き継ぐ立場にあつた。

そして彼は——実際に成功を収めた。

古くから栄えて来たアズラエル財団を支えるばかりか、国防産業連合理事、さらには大手軍需産業の経営者まで務め、ブルーコスモスの盟主に選ばれて然るべき男になつた。そしてそれは、決して運や偶然の結末などではない——たとえどんなにアズラエルを嫌っている人間でも、彼のことを経営者として無能と糾弾することはあり得ない。それほどまでに、彼が若くして実績を収めたのは、本人の泥臭い努力や明晰さがあつたらだ。その過程で確立した排他的な倫理観や、歪いびつな人格はともかくとして。

「——だからこそ、ボクは彼女のような人間が大つ嫌いだった」

そんな負の感情の根底にあるものは、おそらく、本質を同じくする者による同族嫌悪だろう。フレイは父、ジョージ・アルスターが生前に確立させた連合内での地位や利権を、ある折を以て「自分のもの」として断定し、これを得意そうに振り回した。亡き父がブルーコスモスの内でも発言力を持った人物だったために、フレイはその既成事実を後ろ盾にサザーランドに取り入つたのだが、それがきつと、アズラエルには当面容認できない「甘つたれた行動」と判受されたのだろう。

恵まれた家系という意味では、両者はきつと出発点こそ同じだったであろうが、その

子息が対極の立場、価値観にあるからこそ相容れず、アズラエルはこれに一方的な嫌悪感を示したのだ。

「そんな理事が、なぜ彼女に『最新鋭機』を？」

それは、ある意味で当然の疑念だろう。

——なぜアズラエルは、個人的に嫌っている人間に対して、わざわざ最新のモビルスーツを与えるような真似したのか？

サザールランドにとって見れば、不可解でしかないはずだ。

「ボクは彼女のよう(アイツ)に甘ったれた人間が嫌いだが、一つだけ認めていた美点がある。——それは自分の身体を薬物実験に提供したこと、みずから戦うことを拒まなかったことだ」

この戦時下において、性根の腐った人間はごまんといる。それこそ平時は慇懃で高尚な夢想家や慈善家を装いながら、戦時になれば自分だけ真つ先に安全な場所に隠れ、他人を戦場に向かわせ、それを遠くから眺めているような臆病者——

アズラエルが思うに、現在のブルーコスモス幹部——またの名を『ロゴス』とも呼ばれる思想家は、殆んどがそういった人種である。みずからは絶対に傷つかない安全な場所において、他人の犠牲によってのみ、己の利益と安泰を確保している。実際に宇宙へ上がり、みずから前線で指揮を執るアズラエルとは対極の位置にあつて、だからこそ彼は、

そうした度胸も覚悟もない輩のことを心の底から嫌悪していた。

——けれど、フレイは違う。

たしかに彼女は父親の威光に縋り、それによつてサザーランドに取り入るような卑屈な手段を使ったが、そうして提供された『未承認の薬物実験』エクスステンデッドのデータに対しては、躊躇いなく自分の肉体を差し出した。いまだ安全性が認可されていない危険な薬物に対して、ほかの人間を臨床実験モルモットに強いるような人間であればアズラエルは見放していただろうが——フレイは、それをしなかつた。危険を承知で、みずからを実験に差し出したのだ。

「彼女が修羅に堕ちたのは、最愛の『パパ』つてやつを殺したコーデイネイターへの復讐——」

高い能力を誇るコーデイネイターと渡り合うために、たとえ不正薬物の恩恵を借りても、彼女は自分の力で戦う決心をしていた。

戦うべきときに逃げ出さなかつたその姿勢は、たとえ根底にあるのが復讐心だつたとしても、十分に「偉い」と云えるだけの行動だつたはずだ。

「良家に生まれてなお、修羅に堕ち——自分の身を削つてでもコーデイネイターを潰そうとしたあの娘の『執念』——宇宙に住まう奴らへの強い敵愾心を、ボクは買ったんだ。意志うらみが強けりゃ、嫌々で働いてるブーステッドマンの連中よりは使えると思つたし——だから彼女を採用した」

だが運命は、どこまでも彼女に残酷だった。

「——まっ、その結果がこれなんだから、些いささかガツカリしましたけどねエ」

ハリーによつて試験的に開発され、彼女に投与された『エクステンデット』の薬物――

しかしそれは、強化人間には致命的な副作用を孕んだ“失敗作”でしかなかった。度重なる薬物摂取によつて、被検体であるフレイは脳の萎縮が進み、もはや薬剤なしでは意識を保つことすら難しい『リビングデッド』――“死んだように眠る女”とされたのだ。

「次の総攻撃で、この戦争は終わる。そしてそれが、彼女にとつて最後のチャンスだ――

へええ……！」

「コーディネイターを滅ぼした末に果てられるなら、それはそれで本望でしょう？ あゝ、あるいは生き延びたとすれば、その後のことは、大佐の好きになさって下さいヨ……」

戦うことだけを強いられた、連合の強化人間――

狂戦士バベルセルクとは、生きている限り戦い続けねばならないのだから。

話に上がったフレイが眠りから覚め、目を醒ましたとき――

そこには、いつものような医務室ではない――殺風景で、鉄格子に閉ざされた懲罰房の景色が広がっていた。

密閉され、息が詰まるような冷気に湛えられた空間。そこで臆気に目を醒ました彼女であったが、瞼を開けてからは、不思議と当惑しなかつた。ただ考えたことがあるとすれば、ひとつだけ――

――来るときが、来ちゃったんだな。

他人行儀なことに、そんな風に漠然と思慮しただけだった。

「……………」

鉄格子の向こう側に、数人の研究者の姿がある。彼らは廃棄品を見るような、それだけで化け物でも見るかのような目でこちらを睥睨していた。フレイはその目をよく知っている――それは、自分がかつてコーディネイターを見るときに浮かべている目と、本質的には同じものだったから。

――手と足に、それぞれ枷が装着されている？

なるほど。生体強化によって尋常ならざる力を手に入れた素体が、房の中で暴れ回ることを彼らは恐れているのだ――いつそ期待に込めて暴れてやろうかとも思ったが、生

憎、全身に力が入らない。フレイにはもはや、気力も体力も残されていなかった。独房に入れられたことで遂に糸が切れてしまったのか——それとも、ただの薬物不足で意識を保つていけないのか——彼女は無気力に、拘束されたまま床に寝そべっているだけ。

仄暗い空間の中、起き上がることも出来ない今の己の状態は、傍から見ればさぞみすぼらしい大罪人？ あるいは、この空間にお似合いな襪褌雑巾にでも見えていることだろう。

「……………ふっ……………ふふ……………」

もう、誰も助けてはくれない。

——これはきつと、今まで散々、わがままに振る舞って来た罰なんだ。

そう思うと、乾き切った笑い声が口から洩れるばかりだった。

「あは……………あははははは……………！」

自分がこれからどうなるのか——想像するには容易いが、想像したくなかったので、やめた。

——どれだけ泣き叫んでも、もう誰も助けてはくれない。

これは今まで利己的に生きて来た罰。どこまでも利他的に生きようとした彼女と違い、本当に助けて欲しいときに、自分には手を差し伸べてくれる人間がない。

この後営倉の中で、フレイはしばし、本当の孤独の味を噛みしめることになる。いつ破滅を宣告されるかも分からない——底知れぬ恐怖と、絶望に苛まれながら。

一方の「プラント」では、地球軍の進撃に備えて最終調整を行っていた。エザリア・ジュールが声高に演説を行っている。

「——ナチュラルどもの野蛮な核など！ もう、ただの一発とて我らの頭上に落とさせてはならない！」

核を再び使われ、ザフト兵達にとって強烈な恐怖感を植え付けられた。

巧妙な情報操作によって、機密が漏れたのは「ラクス・クラインのせい」と刷り込まれている彼らであったが、今は誰のせいなのかを咎めるより、ひらすらナチュラルに對する憎悪に掻き立てられていた。

「血のバレンタインの折——核で報復しなかった我らの想いを、ナチュラルどもは再び裏切ったのだ！ もはや、ヤツらを許すことはできない！」

そう、許すわけにはいかない——！ アスラン・ザラもまた、憤然として思う。

Nジヤマーキャンセラーを先に開発したのはザフトだと云うのに、ナチュラルどもは、まるで我が物顔で核兵器を使って来た。撃てば撃ち返されるといふのは自明だろう

に、ナチュラルどもの頭には、そんなことすら理解できないのだろうか……？

いや、むしろ理解されない方が好都合なのかも知れない。何しろザフトは、核ミサイルよりも遙かに強力な『兵器』を、極秘裏に開発しているのだから——。

〈怒りに駆られるも、悲しみに呉れるも、憎しみに餓えるもよし！ ザフトの勇敢なる兵士達よ、鋭気を養え！ 今度こそヤツらに思い知らせてやるのだ。この世界の新たな担い手が、誰なのかということ——！〉

そんな演説が響く中、アスランは“ヤキン・ドゥーエ”要塞の中にいた。

評議員達が集うパトリックの執務室に招集され、彼もまた、その席に同席していたのだ。パトリックは張り詰めた表情を浮かべ、一同に向けて云う。

「わたしの想いは、エザリアの演説通りだ……。核を使い報復しなかった我らの想いを、ナチュラルどもは平然と裏切った——もはや、力には力を持ちうるしかあるまい……！！」

大きな力には、より大きな力で対抗する。地球軍がなりふり構わず虐殺を行うのなら、こちらにも相応の犠牲を与えてやるまでではないか。Nジャマーによる大量殺戮が解禁された今、手段を選んでなどいられない。

「これだけは忘れてはならん！ 奴らが、奴らの方こそ、先に撃つて来たのだ……ッ！」
平穏な“ユニウスセブン”を——コーデイネイターの“ゆりかご”を——私の妻と

娘を……！！

地球は奴らに与えてやったにも関わらず、奴らは「プラント」まで奪い取ろうと云うのか？ 傲慢で滑稽この上ない旧時代の人間が、優れた種である自分達に逆らうこと——それ自体が無知蒙昧だというのに！

「天罰を与える日が来た……！！ 天より叡智を授かりし我々コーディネイターに弓引く思い上がったナチュラルどもに、今度こそ正義の鉄槌を下す刻限ときぎが！」

アスランはハツとして、その言葉に感銘する。

ジャステイス正義——それは自分に託された『剣』だ。

自分こそが、父の理想を叶える戦士になるのだ。

「——『ジェネシス』を使うぞ!!」

禁断の殺戮兵器が、今ここに解禁されたのだ。

そして「アークエンジェル」「クサナギ」「エターナル」の三隻も、既にL5に界限に姿を現す。モビルスーツは既に発進準備を整え、搭乗者達も、ひとえに出撃の瞬間を待って息を詰めている。

トール・ケーニヒは「ストライク」に――

ムウ・ラ・フラガは「ヴィオリージュス」に――

ニコル・アマルフィは「ブリッツ」に――

カガリ・ユラ・アスハは「ストライクルージュ」に――

民間から、地球軍から、ザフトから、そしてオーブから、四者四様に元々の帰属すら異なるはずの者達が、今、ひとつの方向を目指して戦おうとしている。泥沼と化した戦争を止める――ただ、それだけの一心で。

へ――核を、たとえひとつでも「プラント」に落としてはなりません……！

ラクスは語る。血のバレンタインの折、彼女にとつて妹のように接して来た少女の命が喪われたと聞いたとき――

あのとき、自分と世界の接点を断ち切られたかのような絶望感を味わった。何が「平和の歌姫」か――偶像のように持て囃され、しかし、自分には平和を謳う力も、戦争を食い止めんとする思いもなかった。ただ与えられた役割を甘んじて演じ、空虚に祈っているだけの巫女でしかなかった。あの頃はまだ――

へ撃たれる云われなき人々の上に、その光の刃が突き刺されば……！ それはまた、果てない涙と憎しみを呼ぶでしょう

だからこそ今、奮い立たなければならぬ。たとえ第三勢力と呼ばれようと、テロリ

ストと呼ばれようと、すべてが手遅れになる前に。

「平和を謳いながら、その手に銃を取る。それもまた、悪しき選択なのかも知れません。でも、どうか今——この果てない戦いの連鎖を、断ち切る力を……！」

淡紅色の戦艦から、砲台のカバーが外れ「ミーティア」が射出される。それらはまるで、天使の羽根のようだ——先んじてカタパルトから出撃していた「フリーダム」と「クレイドル」のそれぞれの背囊へと、自動操縦で変形しながら近づいてゆく。両機のバーニアスラスタターが持ち上がり、アタツチメントが凹部に接続される。元より白銀の「クレイドル」は、さながら同色の鎧を羽織るのような変貌を遂げた。

（これがステラの、新しい——）

この世に悪魔を顕現させたかのような、禍々しい機動要塞——「デストロイ」に乗り込んだときと、決定的に違う。確かな想いを胸に、ステラは眼前に拡がる常闇の宇宙空間を見据えた。

万人を魅了させる花火も——

恐怖を植え付ける業火も——

どちらも元を辿れば同等の焔であるように、大切なものを護り抜くための力は、使い方をひとたび誤れば人を灼く力と化す。「ミーティア」も「デストロイ」も、その身に秘めたのは同質にして同等の火力であるのだが、彼女はもう間違えない。間違いたくは

ない。だから——！

「ステラ・ルーシエ、*“グレイドル”* 出る！」

天使の翼と融合した *“フリーダム”* もまた、歌姫の祈りを受け、凄まじい加速と共に宇宙空間に飛び出した。

二機は並走して飛び出し、一気に戦場の舞台を目指す。

「行くよ、ステラ！ もう終わらせよう、こんなことは！」

「うん……っ！」

第二次 *“ヤキン・ドゥーエ”* 攻防戦が、始まろうとしていた。

『プライマリー・ウエーブ』A

C. E. 71年8月21日――

ブルーコスモスの盟主、ムルタ・アズラエルを主導者とする地球連合軍艦隊が、“プラント” 本国への進撃を開始した。第一波戦力として“ドミニオン” ほか“ドゥーリットル” を旗艦とする主要戦艦二五〇隻、および補助艦艇一〇〇隻、積載される機動兵器はMA含む三〇〇〇を凌ぐ大艦隊が出撃。

なお、月基地にはこれに匹敵する相当数の第二波戦力が温蔵されており、連合軍は二段構えの措置を取って決戦に臨んでいた。

決戦には決戦なりの準備が必要だ。過剰戦力は却って遊兵を量産させてしまうという戦略的な見方もあるが、然るべき激闘が予想される以上、戦力はすこしでも保険をかけて置いた方が良く、という判断がそこには働いていた。

かくして空前絶後の大艦隊を用意した地球軍に対し、ザフトが実戦に投入した戦力は前線戦闘要員八〇〇名、前線支援要員（核ミサイル迎撃部隊を含む）が四〇〇名ほどの防衛部隊。火力、武装から云えば決して貧弱ではないが、数字で見れば遥かに劣る。そ

れでも「オペレーション・スピッドブレイク」で被った大打撃以来、急激な失速の目立っていたザフトとしては、急場をかき集めたにしてはなかなか上出来な戦力と動員数かも知れなかった。

プラント最終防衛ライン——「ヤキン・ドゥーエ」宙域においては、既に戦闘が始まっている。

核攻撃隊——「ピースメイカー」という秘蔵戦力を持ち合わせる地球軍は、憂慮のない快進撃を進めていた。

畢竟、戦場において雌雄を決するのは「勢い」である——現時点でこの勢いを掌握している地球軍の猛攻は、止まらない。

対して、ザフトは「デュエル」や「バスター」等、結集させていた既存のMS戦力を遺憾なく実戦投入していた。ザフトそのものが創設二年の若い組織とはいえ、昨年の第一次ヤキン・ドゥーエ攻防戦やグリマルデイ戦線、少なからず場数を踏んで生き抜いた宇宙軍のベテランも点在しており、これに若手のパイロットが足並み揃えて出撃している。

前代未聞と述懐しても相違ない戦力を準備したザフトではあるが、如何せん、やはり地球連合が誇る頭数には匹敵できなかつたらしい。兵士各個の技量はともかく、兵団全体の物量では明らかにザフトが劣っており——絶対多数と人海戦術に物を云わせて

突つ込んで来る地球軍の勢いに押され、守備隊の最終防衛ラインは、刻々と後退しつつあつた。

そんなとき――

「アスラン・ザラ、〃ジャステイス〃出る！」

正義の剣が〃ヤキン・ドゥーエ〃より飛び立つた。バーニアの蒼い燐光の尾を引きながら、深紅の機体は常闇を疾駆する。

アスランが防衛ラインまで飛び入ったとき、彼は目の前に映る〃ダガー〃の……もはや部隊ではなく、大軍と称するべき物量の軍団を見回した。

操縦桿を握る手に、力が籠る。軍団の中から一機の〃ダガー〃がサーベルを抜き放ち、果敢にも〃ジャステイス〃に躍りかかつて来た。だがアスランは泰然として、その場から動かない。

「――」

次の瞬間、挑んで来た〃ダガー〃は返り討ちにされていた。そいつは〃ジャステイス〃に一閃を振るつたつもりで、逆に光刃でコクピッドを貫き返されたのである。

高熱を帯びた光の刃は、鉄の装甲を融解させ、中にいた操縦者を瞬間的に焼却する。駆動系が落ち、〃ダガー〃のゴーグルアイから命の灯が消える――と、〃ジャステイス〃は〃それ〃を足蹴にし、残骸を〃ダガー〃隊の許へ帰してやった。それは操縦者であ

るアスラン・ザラの挑発であり——恫喝。

——ピリッ……

物云わぬ『ジャステイス』の『G』フェイス——その翡翠色のツインアイが、ゴウと輝いた。その明光は、敵のモビルスーツ大隊を煽り、挑発した。

破竹の勢いで進んでいた『ダガー』隊に、緊張と動揺が奔る。

「ヤツは——パナマ防衛戦で暴れたという、ザフトの紅い特機じゃないか!」

「流石、最後の砦——『伝説』のご搭乗か……!」

伝説。そう持て囃す彼らの間で流れていたのは、パナマにおいて怪物エな巨大兵器リを単機撃破し、地球軍に大打撃を与えたとされる『深紅の審官』《ジャステイス》の伝説だった。

これまでに相手にして来た量産機ジンヤシグとは、明らかに異なる威圧感。触れば切れる抜き身刀のような鋭さが、鈍く赫耀と輝くその機体から放散されている。

——コイツは、格が違うぞ……!?

全身に張り巡らされた、幾多もの刃を振り翳す処刑人。古における魔女狩りの歴史を繰り返す差別主義者レイシストでありながら、絶対正義ジャステイスの名を冠する鮮血色の審問官。幾重にも返り血を浴びてその色に染まったような『ジャステイス』は、このとき、さぞ悪魔的なプレッシャーを放っていたに違いない。

「しかし、だから何だというのだ！ 相手は単機だ、取り囲んで応戦しろ！」

「ダガー」隊の小隊長が語気を荒くして叫ぶ。

ナチュラルである彼らにとって、元よりザフト兵のひとりひとりには格上の強敵だ。それは科学的な意味で自然な問題であり、そんな敵に対して、何も尋常の決闘を挑む必要はないのだ。彼らはあくまで、彼ららしい「数に物を云わせた戦い方」を徹底すれば良いのだから。

そこから地球軍のMS部隊は、中距離から連携し「ジャステイス」への一斉砲撃を仕掛けた。一見すると逃げ場のない苛烈な波状攻撃。無数の光条が「ジャステイス」に襲いかかるも、敵はビームシールドで光条を弾き、あるいは悉くを回避した。

動揺に駆られた「ダガー」隊を尻目に、次の瞬間「ジャステイス」は颯風のように「ダガー」隊の間を駆け抜けた。赤い閃光が戦場を突き抜け、駆け抜けざま、ビームハルバードがあらゆる敵機を穿つ。すれ違いながら続々と相手を切り裂くその様は、無造作にして無慈悲なる通り魔と云った風であった。

「なッなんなんだよオ、アイツはあッ!？」

圧倒的物量で包囲し、潰走させる人海戦術。

戦術として間違っていないが、結論から云えば、彼らは戦う相手を間違えたのだろう。人海戦術にだって限界はあるし、弱点はある。たとえば「ジャステイス」のように「数

の暴力」が通用しないデタラメな相手に進路を阻まれた場合だ。

多勢に無勢、その圧倒的優位性から生まれる「戦術」が通用しなかったとき、連合軍の兵士達は、どれほど「戦闘」をすることができのたろう？

「見物だな、地球連合軍」

このときのアスランを突き動かすのは、正義の怒り——義憤と呼ぶべきもの。

それからは一方的な戦闘が展開されるようになり、間違いなく、たった一機の「ジャステイス」の介入によって連合連合軍の勢いが削がれ始めた。

（——それが、オレの役割なんだ！）

そもそもザフトにおける「G」——ファーストステージシリーズは、コンセプトとして単機で戦局を覆すことも想定した最強のMSとして完成している。

そして今現在、これの専任パイロットであるアスラン・ザラの鬼気迫る目的意識や戦闘能力と噛み合って、この一角を担う「ジャステイス」は当初のコンセプトを十全に果たしつつあった。

そもそも、単機によって大群を圧倒する、などという戦術理論は、少数精鋭主義の究極であり、用兵思想としては華麗である。華麗であるがゆえに万人が憧れがちだが、そんなものが実現するのはフィクションの世界だけであり、実際の用兵学上で取り扱われることは非常に稀である。

にも関わらず、パトリック・ザラはZGMF-X08Aを始めとする最新鋭MSに過度ともいえる期待と熱望を寄せ、最新鋭ワンオフ機の開発と製造を急進した。

おそらく、彼はZGMF-X08A、ZGMF-X09A、ZGMF-X10A——三機の特徴を活かした「最強のMS部隊」を編成し、それぞれの連携運用と八面六臂の活躍による地球軍の一蹴作戦を構想していたに違いない。

発想としてはザフト特有のモビルスーツ偏重主義に通ずるものがあつて、それなりに批判もあつたようだが、今となつては見当違いな理論でもなかつたかも知れない。

現に、アスランは「ジャステイス」単機で戦況を変えつつあり、そんなパトリックの理想を体現しはじめていた。パトリックが提唱し続けた少数精鋭理論が決して間違いではなかつたことを、彼の息子はこのとき、その実力を以て証明してみせていた。

(この「ヤキン」を抜かれれば、「プラント」まで進路を阻むものは何もない)

今回の「プラント」防衛戦——最大の目的は、ザフト兵の多くが「プラント」への「核攻撃の阻止」と話すはずだ。

けれど、実際の「プラント」は数基の反射ミラーを破壊されるだけで人が暮らしていたための環境を維持できなくなってしまう。それが真空の直中に築かれた「プラント」最大の弱点であり——その反射ミラーとは、強力なビーム兵器を撃ち込まれるだけで壊れかねない造りになっているのだ。

頑丈ではあるが、無敵ではない。そしてそうである以上、自分達が喰い止める相手は、何も核攻撃隊だけではない。『プラント』に向かおうとする地球軍のモビルスーツ、その全てであるべきなのだ。

——たとえ一機でも、撃ち漏らすわけにはいかない！

だがアスランはこのとき、それを無理難題だとは思わなかった。思えなかった、という方が正確かも知れないが、あまり難しく考える必要はないと判断したのである。（向かつて来る地球軍を、全滅させる）

——とどのつまり、それだけのこと。

元より敵を倒すのが、自分たち軍人の務めだ。

かえって作戦が分かりやすくなった思えば、特に困惑する余地もない。

「出会った以上は、逃さない——！」

——出会った『敵』はすべて倒す……！！

戦場を駆ける『ジャスティス』は、連合軍のモビルスーツ部隊を撃滅して回った。

熱病に冒されたような激しい戦闘が展開される一方、それら狂乱の宴とは、まったく

雰囲気のかげ離れた空間があった。それは閑散とした“ドミニオン”艦内の営倉である。

注射器を持ったひとりの男性士官が、その中に入っていく。

そいつは営倉に入るや否や、牢の中でぐったりと臥せっていた無防備な少女の右腕――その滑らかな素肌に、液状の刺激剤を射ち込んだ。これにより強制的に意識を呼び起こされたのか、微睡みまどろの中からうつつすりらと目を覚ました少女を、男は強引に引つ立てる。

「出る、アズラエル理事が呼びだす」

フレイ・アルスター。

彼女は投獄のため、クリップの類である髪留めを看守に没収されていた。それにより、いつも上品さを漂わせるハーファップの総髪まどめがみが、このときばかりはストレートに解かれている。上衣もまた、薄手のタンクトップが一枚だ。解放的な白日の下で見れば、挑発的でも浮ついた形容の仕方はあつただろう素朴な格好も、牢獄の中……それも薄い暗闇の中で見てしまえば、みすぼらしさを強調させるだけだった。

そんな彼女の営倉を訪れた男は、次に少女を縛る手足の枷を外し、鉄檻を開き、扉の向こうに少女を誘導した。やけに偽悪的な面差しを浮かべ、

「良かったな。まだ貴様には、名誉挽回のチャンスがあるというわけだ」

咄嗟に放たれたそれは、そいつなりの激励だつたらうか？ 虐待的な目覚ましで叩き起こされたこともあって、フレイは眉根を寄せながら、そいつの言葉を意図的に無視した。

応じてやる必要もなかった、といった方が正しい。そもそもフレイは名誉が欲しくて戦っているわけではないのだから、そいつの言葉は見当違いも甚だしいのだ。

天涯孤独にして、これ以上は失うものすら持ち合わせていない今の自分が、どうして名誉を欲すると思うのか？ 名前も知られていないような、背景がお似合いわたしのモブ人間に知った風な口を利かされると腹が立つのは、彼女が狭量だからだろうか。

「外に、出るのかい？」

男に連れられ、退出しようとしたそのとき、声が聞こえた。

フレイは歩を止め、聞き慣れたその声の方を振り向く。視線の先に、幽閉された主治医の姿がある。沈黙が数拍として流れた後、フレイは随伴した士官に問う。

「……彼は出られないの？」

「あの男には前科がある、貴様と同等に扱うわけにはいかない」

云われ、フレイは押し黙ってしまった。

なるほど。二度に渡って上を出し抜こうとしたハリーは、厳罰に処されて然るべきというわけか。放たれた言葉を受け流すように、フレイはみずからの主治医の方を見直

す。

「あなたとは……。ここでお別れつてことに、なるのかしら」

「知つてたさ。いつかこんな日が来るつてことは。実際のところ、とつくの昔に覚悟していたんだ。——キミの睡眠病やまいが発覚した、あのときからね」

「……そう……」

フレイは気鬱そうに視線を落とす。合わせる顔がないと云うのは、こういうときのために用いる言葉だった。

「ごめんなさい……。わたしのせいで、あなたまで巻き込んで」

その言葉を耳にして、ハリーに驚きがなかったといえば嘘になる。

まったくもつて、らしくない。フレイにしては素直すぎる——というのはあまりにデリカシーに欠けるのだろうが、彼女がみずから何かを謝るのは、事実として初めてのことであったから。

「気に病まなくていい。僕は、キミのためなら死んでもいいと思つてるんだ」

「……なにそれ。くさい台詞」

「そうだね。でも、少なくとも今は本気でそう思つてる」

「やめてよ……」

間違わなくとも、それはハリーなりの、遠回しな告白だった。

それを受け止めてしまったフレイは、凶らずも返答に詰まる。いや、男性に告白されるのは初めてではない——というか、彼女の場合は両手で数えても足りないくらいに経験があるわけだが、不思議と自惚れる気持ちも、またかと辟易する気持ちも、このときは微塵にも沸いてこなかった。

——どうして、このタイミングで。

けれど、今になってハリーが心の裡を明かしたのには、相応の理由があるようだ。あるようなのだが、フレイはその理由を聞き糺そうとはしなかった。

正直なところ、訊ねる気にならなかったのもあるし、わざわざ口に出させるようなものでもないと思ったのだ。内心でどう感じようと、どのみち受け入れるわけにはいかないものであり、拒絶する相手にそれを訊ねることがどれ程に酷であるのか、フレイの方にも常識や節度というものはある。

「えっ、……と……何なのよ？ ていうか、君のためなら死んでいいとか……。こつ恥ずかしくって、奥さんにも云えたことないでしょ」

云えばハリーは、なんとも表現しがたい怪訝な顔を返す。

「？ まあ、そうなるかな」

「そういう綺麗な言葉は、場所を選ばなきゃ……。もつと大切な人達のために取っておかないといけないものじゃないの……？」

どうかしている、とても云いたげに彼女は主治医を見咎める。

そもそも、ハリーの家族——妻と、娘がひとりいるのだと前に云っていた——はオーブで暮らしていたと聞く。過去形を用いたのは、以前の話だからだ。少なからずオーブは一度戦災に吞まれた国であり、小規模な島国とはいえ、戦争に巻き込まれたの後に言う人探しとは、これでいて難しい。

——話によると、避難船に乗ったまではいいが、それ以降の消息が掴めていないらしい？

最近では宇宙に浮かぶとされる“理想郷”とやらに助けを求める民間人が急増していて、その大半が祖国（ふるさと）を追われたオーブの棄民であるとの噂が流れている。フレイも何度か耳にしたことがあり、勿論、あくまで噂話でしかないが——仮に真実なら、決して表舞台に出て来ないその“理想郷”とやらに、ハリーの家族達の足跡を辿る何かしらの手掛かりがあるようにも思える。

つまりは何が云いたいのか、目の前にいる男は歴とした妻帯者であり、愛娘を抱える一家の大黒柱なのだ。今頃は家族の無事を祈っているべき者が、自分のような子供——しかも往きずりの女に生身の告白をしているようでは、男として——父親としての株が大暴落にも程がある。

「娘さんが可哀想でしょ」

最愛の父を持つ一人娘の気持ちであれば、フレイにもよく理解できる。

少なくとも彼女であれば、最愛の父親がどこぞの若い女と不貞行為を働いていれば、そんな現実には絶対に耐えられない。浮気が発覚した暁には泣いていじける確信があるし、ひいては非行に走り、反抗を繰り返し、父親の足を引っ張るくらいには盛大にグレてやろうとさえ思ってしまう。

だからこそ、彼女は目の前にいる「父親」が、典型的な吊り橋効果に煽られたように自分に不貞発言を行ったのが許せなかった。……そう、確かに許せなかったのだが。

——悪い気は、しなかった。

そんなフレイの胸中には、今までに憶えたこともない昂揚が湧き立ったのは事実だった。自分で云うのも烏滸がましいし、胸を張って云えることでもないのだが、フレイは理想が高い方であり、少なくとも生前は自身の父親の御眼鏡に適うような一定の水準^{ハド}に恋人に求めていたのは確かだ。

であるから、これと云って華のない男性からの申し入れなら即座に断つて来たし、中でも「一目惚れ」を理由に交際を始めることは何よりのタブーだった。幼い頃から父親の影響かコーデイナーに対する偏見が強かった彼女は、云ってしまえば整形次第でどうにでもなる異性の外見より、人格や器量にこそ美徳を見出すようになっていた。そして、これは決して間違った価値観ではないという自負もある。

どれほどの美形と持て囃されようが、よく知りもしない内と恋愛関係になるなんてことはあり得ず、学生時代はそれで何度取り巻きに「勿体ない！」と詰られたかも憶えていない。だからこそ、理知的で柔和なサイ・アーガイルと婚約が決まつてからは、彼ほどに「いい男性」はいないと、本気で考えてもいたのだが。

——あれから、本当に色々あつた。

サイとの婚約を一方的に破棄し、以降はふたりの男と関係を持つてきたフレイであるが、今回まつたく別方向からの告白を受け、意外にもたじろいでいた。今回の相手はよりによつて所帯を持った男であり、背信的と分かつているにも関わらず——「まんざらでもない」と述懐しても許される程度の感情を抱いてしまったのは、事実だったのだ。

——きつとこれが、妻帯者と判つていながら男に不倫を働かせる、しようもない往きずり女の本音なのだろう。

そのように判読すると、不思議と納得の行つたフレイであるが、反面自分がさらにどうしようもない女に堕ちて行くような感じがして、そんな自分があります嫌になつた。

(でも、彼は自分の命を賭けてでも、私によくしてくれた)

ここから先はフレイの完全な偏見だが、そこらへんの見目^{ガッ}だけ優れた薄っぺらなコーデインイターと違つて、ハリーには確かに中身があつた。ここでの中身というのは、人

間性というか、暖かみと呼ぶべきものだ。

——見返りを求めず、善意によって、自分のような厄介者にも優しく接してしてくれた。

きつと他人を見下すことしか出来ないコーディネイターには、そんなことはできないのだろう——フレイは本気でそう信じており、だからこそ、そんなハリーに告白を受けたことが、彼女の心に嬉しかったのだ。

「誤解しないで欲しいんだが、僕はきみが想像しているような、善良な人間ではないよ？」

気付かぬうちに、熱望の眼差しを送っていたらしい。そんなフレイの感謝の想いは、しかし、当の本人に謝絶されて返される。

「えっ?」

「僕がきみを見捨てておけなかったのは、確かに、きみを助けたいと思っていたからだ——でも」

嘘は云っていない。ハリーはこれまで、フレイのためにあらゆる善意を払って行動していた。フレイを医務室に匿ったり、予防薬を処方したり——

それらは彼にして対価を得られない慈善活動であったため、ハリーはフレイのために自己犠牲を働いたようにも映るだろう。実際にフレイはそう信じ——「どうしてこの人

は、こんなにも私のために善くしてくれているのか?」——同時に疑念に抱えていたから、そんな彼を営倉送りにしたこの現実を、彼女なりに後悔もしたらしい。

だが、ハリーから云わせれば、その認識は完全に間違つたものでもあるようだ。

「誰かために何かをやつてあげるつてき、まったくもつて気持ちがいい行為だつたよ」

「……?」

「傲慢な人間の性かな。自分以外の人間に手を差し伸べると、ある種の陶醉感を味わつてしまえるのだから」

陶醉感——あるいは優越感、とでもいうべきか。人間は「善かれ」と願つて自分以外——特に弱者の手助けをするが、ハリーに云わせれば、そこには大抵とてつもなくナチュラルに相手を見下す心理が働いているという。

弱者に対して同情し、不憫な者達を恵まれた立場から憐むだけの上から目線——
 にも関わらず、人間はその「他人を見下した感情」を、ある折をもつて正義感と錯覚する。この子には自分がついてなきやだめなんだ、この子は自分が護つてやらなきやだめなんだ——と。

「それが自分に自惚れているだけの安っぽい充足感で、相手を格下と見なしているがゆえの優越感だつてことにも、気付かずに」

フレイには、発言の意味が推量できなかつた。

「だから正義を貫くというのは、実は悪役を演じるより遥かに簡単なことに思える。何よりも、自分に酔っているだけでいいのであれば」

「……何を……？」

「きみは、僕が正義を貫いた人間だと勘違いしているようだ。でも違う——僕がきみの手助けをしていたのは、正義感からでも、善意からでもないんだよ」

大抵の人間は善意に見返りを求め、払った厚意に相応の対価を欲している。人助けを率先して行い——けれども何の感謝もされなかった場合、大抵の人間はこれに不満に抱くだろう。それでも不満に思わない、心が平穩でいられる者は、無償で善意を提供できる。『善良な自分』とやたらに誇りを持つていたい自己陶醉者だろうか？

どれだけ美しい言葉で飾り繕ったところで、そうそう人間の本质など変わらない。そしてそれは、ハリーとて例外ではない。かく云う彼もまた、フレイのために善意を払い、そのじつ対価を受け取っていた。そしてその『対価』とは、目に見えるものではない——

「僕がきみの手助けをしていたのは、僕自身の罪の意識から逃れるため——。弱い者を救い続けることで『善良と思われる自分』に、ただただ酔っていたかったからだ」

ハリー・マーカットは、かねてよりフレイ・アルスターを『リビングデッド』として中途半端にしてしまった過去に強い責任を感じていた。

だからこそ、以降の彼は医務室にフレイを匿い、恋愛対象としてオルガ・サブナツクを紹介してみたり、——まあ後者については只のお節介だったが——何よりも積極的にフレイの面倒を見るようになっていた。今になって思えば、それらは彼の個人的な、彼のための贖罪だったのではないか。

「負い目があるから、僕はきみに優しくできた。たつたそれだけのことなんだよ」
告白は告白であつたのだろう。

さりとて、ハリーの口から明かされたものは『愛』のそれではない——
ただの『罪』——罪の告白に過ぎなかつたのだ。

「きみの理想像とは程遠い、俗物であるはずだ」

他ならぬフレイを「救う」ことで得られる奇妙な陶酔感は、ハリーの中に根付いた罪悪感を良い感じに払拭してくれた。

フレイのたれに行動しているように見せかけて、彼は本当は、自分のために行動して
いたに過ぎなかつたのだ。

「偽善だつた、すべて。——自己満足と云つてもいい」

病のために追い詰められた少女を、懸命に庇い続けた——

そうすることで自分は最悪の人間ではないのだと、単純に思い込んでいたかつたのだ。そもそも彼女を病気にさせたのは、他ならぬ自分であることを棚に上げながら。

「善意の裏側で見返りを求め、みずから掘った穴を埋めることで恩を売る詐欺師。こんなにも不純な人間が、自己犠牲など出来るものか。すべては、僕の勝手な欺瞞に過ぎなかったんだよ」

「どうして、そんなこと云うの？ わたしはあなたに、本当に感謝してるのに——」

「云わずにはいられなかった。こんな人間に、誰かから感謝される謂れはない。最後まで、他ならぬきみに僕を嫌悪し、糾弾して欲しかった」

フレイはこれから「外に出る」らしいが、そうなれば、もう二度と自分達が会う機会はないだろう。そのことについては、ハリーがもつともよく理解していたつもりだ。きつとこれが、今生の別れとなることも——。

ハリーは、漠然とした関係のまま、フレイと離別するのが癪だった。

——そうだろう？ 僕は彼女に、嫌われるべき人間なのだから……。

だからこそ彼は、今になって己の罪を打ち明け、きつちりとフレイに嫌われたかった。既に幸先短い受刑者なのだから——しっかりケジメをつけた上で、彼女との今生の別れがしたかった。

が、当のフレイからの返事は、彼の想像をゆうに超えていたようで。

「……………いやよ……………」

「えっ……………？」

「いやだって云つたの！ 卑怯じゃない、そうやってわたしから逃げるなんて——だいたい、それだって先生の自己満足じゃない！」

口を尖らせたその拒絶の仕方は、実に、フレイらしかった。

ここでハリーのことを否定すれば糾弾すれば、納得するのは誰だ？ 彼ひとりじゃないか。結局、彼は今だって自己満足のために、敢えてわたしに嫌われようとしている——

——自分が「気楽になりたいから」と。

「だったら、意地でも嫌ってやらないわ」

嫌がらせみたいに、感謝してやる。

——好きで、い続けてやる……。

それがこのとき、フレイの出した結論だった。

「たとえ罪滅ぼしでも、自己満足のためでも……『あなたはわたしに優しくしてくれた』

——その事実は変わらない。それにわたしは、そんな先生に助けられていたんです」

「いや、しかし……」

「だから嫌って欲しいなんて——そんな馬鹿、二度と云わないで」

それは、フレイの本心だった。

ナタルからの温情にしても、オルガからの愛情にしても、ハリーを通して気付かされたことが多くある。育てられたことが多くある。年齢こそ父と娘ほどに離れてはいた

が、このとき確かに、フレイは彼に対する親愛を抱いていたのかも知れない。

——この瞬間で、お別れではあるけれど……。

これからフレイは、おそらく出撃になる。最後の戦いに向けて。

「——そろそろ、良いか」

それまで黙っていた地球軍士官の男が、切り出すように云った。

語りたことは語り尽くしたのか、フレイは小さく頷き、改めてハリーに背を向けた。

「……。医務室の棚の中に、薬が置いてある。もしぼくが捕まったら——そのときのために用意していた、最後の薬だ」

使う日が来ないことを願っていた、それほどまでに強力な薬物。

睡眠病から肉体を騙し、フレイの戦闘力を極限まで引き出すための指定薬物。ドーピング

「効果は二時間。今まで服用していたよりも、遥かに強力な覚醒剤だ」

「……そう……」

ありがとう——とは、云わなかった。

大切なものを捨て去ってでも、フレイは戦場に赴かねばならないのだ。

「もう何も云うことはない、これが、ぼくからの最後の指示だ」

そうして彼は、きっぱり告げた。

「——心のままに、戦って来い」

月基地より出動した地球軍艦隊の中には、超大型の空母と思しき艦艇がある。

それは、ドレイク級やネルソン級よりも悠に巨大。それでいて、モビルスーツはおろか、大型のモビルアーマーすらも多く収容できることから「移動基地」と云った風であった。

艦隊の最後方に構えている「それ」は、新たにサンクシア級——「ナルデール」と名称される超弩級戦艦である。

「ナルデール」は艦内に複数のリニアカタパルトを搭載し、次の瞬間、カタパルトから大型のモビルアーマーを次々に吐き出した。

数にして五機。大西洋連邦が極秘に開発した新型MA、TSX^{ベル}MA^ラ717^デである。

上下合わせて六つのパーツと中央のコアから構成された独特のボディは、顕微鏡を覗いた先にある細胞のような形状をしている。そんな「ベルグランデ」最大の特徴は、Nジャーマーキャンセラー併設型核反応炉を用いることで漸く実用可能となる地球連合で初めてのドラゴン・システムを搭載していることだ。系列的には「ガンバレル」を発展応用させたものであり、事実上は「メビウス・ゼロ」の派生機に相当するものだが、当

然ながらパイロットには高い空間認識能力を持った強化人間——それも一機につき三名程を必要としていた。

パイロットの素性については、ここでは詳しく言及するものではない。説明できることがあるとすれば——“ペルグランデ”を操っているのは、ある特殊な生体手術を施された強化人間達——ということだろうか？

“ペルグランデ” 出撃完了。新型モビルアーマーの力、存分に見せつけてやれ！
 “前方” “ドミニオン” より、“カラミティレムレース” の出撃を確認

オペレータの声と共に、強力な火力支援装備を装着した“レムレース”が前線の“ダガー”隊と合流。数秒後には会敵し、ザフト軍との交戦状態に入った。

“続いて” “ピースメイカー” 隊発進します！ 目標はプラント群

折を以て、アガメムノン級より“メビウス”の大群が発進してゆく。

既に最前線で戦闘を行っていたプラント防衛部隊——イザーク・ジュールにディアツカ・エルスマンらは、早くも襲来するそれら“メビウス”の軍勢に気が付いた。

「あれは、核か!？」

「くそッ、やらせるかよ!」

血相を変え、二人は“メビウス”の群れに追い縋ろうとする。だが彼らの前にすぐさま“フォビドウン”と“レイダー”が立ち塞がる。

地球軍なんぞに！——イザークはよもや地球軍兵士に後塵を喫するとは思わず、即座に「レイダー」を出し抜こうとしたが、逆に出し抜かれ——背後を取られ、鉄球ミヨルニールの直撃をその身に受けていた。凄まじい衝撃に突き飛ばされたが、それは致命傷とはならなかった。さりとて、それは「デュエル」のPS装甲だからこそであったが……。

一方で「バスター」も「フォビドゥン」へビームを応射し、しかし「ゲシユマイ デイツヒ・パンツァー」に防がれ、軌道を曲げられ、実弾やミサイルを放つもTP装甲に弾かれた。そしてこの他に攻撃手段を持ち得ない「バスター」は、結局のところ「フォビドゥン」に対しては本当に無力であった。

「——ウウ！ アスランツ！」

背に腹は代えられず、イザークは同僚の手を求めた。

自分達を助けて欲しいのではない。ただ「プラント」に向かう「メビウス」を止めて欲しかった。その応えに気付いたように、深紅の機体は矢の如く「メビウス」の群れへ飛んでいく。

「あのミサイルを落とすぞ！ もう二度と「プラント」をやらせるわけには——！」

迎撃部隊が、アスランの号により展開していく。

——オレが力を求めたのは、このときのためだ！

今度こそナチュラルの思い通りにはさせない——その思いで核攻撃隊への距離を詰

めるアスランであつたが、そのときコクピッド内にアラートが響き、彼は咄嗟に機体に急制動を掛けさせた。

その判断は正しかった。一拍置いて、彼の鼻先を光の奔流が薙ぎ払う。凄まじい火力、その色彩の洪水とも云える砲火の濁流に思わず目をむいた。

——この火力、は……!?!

ハツとして視線を上げ、そこに見憶えのある敵モビルスーツを認める。全身を墨汁で塗り潰されたように黒々しく、禍々しい風采。深紅の審官と全く同じ、赤黒い面妖を浮かべた暗黒の亡霊。

「『レムレース』……!」

深淵の闇に包まれた宇宙空間では、暗黒色の機体などそうすぐに判別がつくものではない。しかし、アスランはしっかりとその視覚に捉えていた。まるで幻影のように質量に欠け、それでいて強烈な存在感を放つ亡霊の影を。

（——それだけじゃない!）

砲撃戦装備の『レムレース』を捉えた直後、アスランは四方から電波のように飛び交う殺気を肌を感じ取った。嫌な予感に突き動かされるように、彼はフットペダルを強く踏み込み、『ジャステイス』を様々な方向に回頭させる。

と、一拍置いて光の網が『ジャステイス』に襲いかかった。

「な、なんだッ!？」

最初は何に襲われているのか理解が追いつかなかった。全方位から、しかし何も無い空間から放たれているようにしか思えないビームは、確実にアスランを漁るすくもように襲って来たのだ。

——いや、見覚えならある。

それは「クレイドル」が扱っていたものと同じ、遠隔操作の誘導砲塔システム。だとすれば、それは周囲一带に張り巡らされた、ドラグーンによる波状攻撃だ。

アスランは辛うじてすべての火線を捌き、狂気を感じる方へと顔を向けた。そこには見慣れない大型モビルアーマーの影がある——どうやら「アレ」が、ドラグーンの使い手らしい。

「クツ……!？」

立ちはだかるは「レムレース」および「ペルグランデ」——
地球軍の誇る絶対戦力に阻まれて、アスランは身動きを封じられた。

「どうせ最期なのよ。終末くらい、私と一緒に踊りましょう、アスラン・ザラー！」
「くそッ、またキミか——!？」

深紅の「ジャステイス」と暗黒の「レムレース」が、ふたたび戦場で激突した。
核攻撃隊は、着々と「プラント」に迫っている。

『プライマリー・ウェーブ』 B

光の激流の中を、深紅の閃光がかい潜っている。

黒き災厄の亡霊から放たれる大火力の連続砲撃を凌ぎ、鮮血色の審官が抜き打ちにバツセルブローメランを投げ放った。多彩なサブウェポンを駆使し、トリツキーな戦法で相手を牽制——そうして隙が出来たところを、一気に叩く！

と、そのように意図していたアスランであるが、“レムレース”は鮮やかにブローメンをかわし、更なる砲撃を仕掛けてきた。甲殻類の鋏脚を思わせるマスターアームから長射程インパルス砲が撃ち込まれ、アスランは少し大袈裟に思える程の距離を取って回避した。

「ちいッー！」

敵機の砲火は想像以上に凄まじい。何が凄まじいのかと云えば、間違いなく一発一発の火力だ。同じ砲撃戦を主体とする“フリーダム”と比べれば——パイロットの技量差からか——照準は甘く、拙い。回避してみせることなど造作もない射線なのだ。一

方で破壊力では「レムレース」の方が格段に上を往っていて、僅かに掠めただけでも機体が損傷しかねないパワーだ。

尖鋭ではない——が、ひとつひとつが強烈な砲撃。

おそらくビクトリアで見た「黒鉄の要塞」の力を流用しているのだろう。ほんの僅かな油断でさえ致命的となりかねない色彩の洪水に威圧感を憶えてしまい、アスランは自身が本領を発揮できる格闘戦に転じることができずにいた。

それもそのはずで、このとき「レムレース」はその圧倒的な火力で弾幕を張り、相手の接近を許さない遠距離戦法に徹していた。

そもそも決闘機としての特性の強い「ジャステイス」が迫撃を得意とし、これに尋常な白兵戦を挑むのが自殺行為に等しいことを、フレイはオーブ解放戦線の折に学習していた。元よりパイロット経験の浅い彼女は格闘戦が不得手でもあり、性能的にも中・近距離での戦闘では「ジャステイス」の方に明らかな分がある。

こうした判断を行ってしまえば、彼女は基本的に遠距離からの一方的な砲撃に努めるだけで良かった。いま背負っているのは後衛用の火力支援装備であり、敵が格闘戦の覇者であるなら、わざわざ相手の土俵に立つてやる必要もない。

——順調に「ジャステイス」を追い詰めることができている！

気持ちがいそいそ、僅かに油断した瞬間だった。大火力の砲撃を連射していたためか、フレ

イは砲身の反動を抑えきることができずに一瞬機体を硬直させてしまった。敵はその一瞬を見逃さない——出し抜けに急加速を仕掛け、ビームの両刀で躍りかかる！

「セアツ！」

加速性において「ジャステイス」の右に出る機体はない。

が、そうしてアスランが肉薄するより前に、巨大な「ペルグランデ」が彼の前に立ちはだかった。

「——!?!」

不気味なボディがアスランの視界に大映しになり、それと同時に四方から強烈な殺気が襲う。次の瞬間、周辺のドラグーンからビームガンが繰り出され、網状に展開された攻撃にアスランは制動を掛け、機体を絶え間なく捻らせる。

——邪魔するな！

苛立ちを露にビームライフルや「フォルティス」ビーム砲を応射したが、六つのパーツから構成される「ペルグランデ」は、その細菌状の大型ボディを分離させ、あらゆる弾体を避けてしまった。

(ど、どういうやつなんだッ)

意表を突かれた所へ、さらに多方面からドラグーンのビームガンが繰り出される。光の網は「ジャステイス」を錐揉むように四方から砲火を浴びせ、アスランは青褪めなが

ら、藁にもすがる思いで光条の間を縫っていく。

だが、そうして逃げ込んだ先に体勢を立て直した「レムレース」が待ち構えていた。背中から張り出した四門の位相砲を過たず照準され、アスランは思わず短い悲鳴を上げた。しかし身体は反応していたらしく、機体はそれをシールドで防いだ。

とはいえ、すべてを受け止めることはできず、「ジャステイス」は防ぎ止めた衝撃ごと後方に激しく撥ね飛ばされた。

「ええいッ！ こんな戦闘をしている場合ではないというのに！」

——こうしている間にも、核攻撃隊はみるみる内に「プラント」に迫っている！

強かに毒づいたアスランの視線は、先程からちらちらと「プラント」に進撃する「メビウス」——宝物ほうもつのように核ミサイルを抱えた——に向けられている。注意力の散漫を言い訳にするつもりはないが、今は真つ向勝負などに感かまじている場合ではないのだ。

だからこそ、このときアスランは「レムレース」か「ペルグランデ」に一打でも与え、なんとか敵機を振り切ろうと画策しているも、そのような短絡的な作戦を許すフレイではない。嫌がらせのような足止めを喰らっているアスランには、「プラント」に向かう「メビウス」が遠く映って仕方がなかった。

——誰か！ 誰か「アレ」を止めてくれ……！

咄嗟にみずからの同期達の姿が脳裏を過ぎるが、しかし、それは期待すべきではない。

現在イザークとディアツカは「レイダー」と「フォビドゥン」に足止めされ、ただでさえ性能差のある「G」を相手にするので手一杯だ。

であるなら、頼りになるのは量産機の防衛部隊——いやそれも無理だ。仮に迎撃部隊が核ミサイルの対処に向かったところで、この怪物的なモビルアーマーがいつまでもそれを許すはずがない。いま自分の目の前にいる一機コイツを除けば「ペルグランデ」は残り四機も確認されているのだ、ドラグーンの全方位攻撃に対応できるパイロットでなければ、ことごとく撃滅されるのが関の山だ。

間に合わないのか——!? アスランが立ち悩んでいると、そのとき突然「ジャスティス」の通信機に、聞き慣れぬ男の声が入って来た。

「——「ジャスティス」のパイロット、アスラン・ザラだな？ 特務隊からの指令である、『貴様は直ちに現宙域から離脱しろ』」

「なッ——」

アスランは突然の指令に自分の耳を疑った。正体不明の人物からの——それも、全く理解できない指令内容に。

——撤退？ 「プラント」が滅ぶかも知れないこの瀬戸際で、いったい何を云っているんだ？

兵士各個の明晰さ、能力値の高さ故に明確な指揮系統が存在しないザフトでは、しか

し、厳密には特務隊が持っている指揮権こそが——現場レベルの——最高権力に当たっている。仮にも“そこ”から指令があつた場合、傘下にある者は如何なる場合もこれを優先——少なくとも尊重する義務がある。

だからアスランには、いま出された指令に従う義務があつた。さりとて、あまりに指令が状況に則さないものであることは確かだ。いま自分が撤退すれば、いったい誰が核ミサイルを防ぐのか？ 納得できず、彼は通信先を明らかにする。

(ZGMF—X—11A……)

形式番号からすれば、指令元は“ジャステイス”の兄弟機であるようだ。であるならアスランと同じ特務隊の一員ということか。人的資質と相応の実力を兼ね備えた、評議会に認可された者であるならば——

〈死にたくなければ命令に従うことだ、いいな〉

「どうするんです？」

それでも答えを得なければ、アスランは従えなかつた。

〈貴様の機体じゃ巻き込まれるって云つてんの、黙つて従いなさいよ！〉

——仕方がない……っ！

意味が繋がらなかつたことは確かだが、そうして“ジャステイス”は身を翻し、戦線を離脱するために飛び立った。

横槍からビームクローウを抜き放って介入してきた量産型“ゲイツ”を即座に叩き落した後、フレイは慌てて視線を“ジャステイス”へ戻した。だが、気付いた頃には真紅の機体ははるか遠くへ去っている。

「逃げた……?!? アスラン・ザラ?!?」

戦線を離脱してゆく“ジャステイス”に気付き、当惑の声を挙げる。飛び去った方が“プラント”側であれば追撃する必要もあつたのだが、違った。彼が消えたのは“ヤキン・ドゥーエ”要塞の方角だ。

「……?」

同時に、そのとき彼女は“ジャステイス”とはまた違う機種——それも特機らしきもの——を捉えていた。そいつは“ジャステイス”と同じように戦線を離脱し、要塞の方角へ逃げ帰ってゆく。

見慣れない大型機、巨大なモビルアーマーだ。形状的にはそう——かつてのアスラン・ザラが搭乗していた“イーゼス”のような……。

しかし、他のザフト機については撤退する様子はない。現に“デュエル”も“バス

ター”もクロトとシャニとの交戦を続けており、離脱したのは本当に“ジャステイス”と件の一機だけのようだ。その不可解な、それでいて見事な引き際のためか、二機が撤退したことに気付いたのはほんの一握り、フレイを含めた極少数のようでもある。

——何か、作戦でもあるの？

敵前逃亡を許すフレイではなかったが、今回ばかりは敵の数が多すぎるか。アスラ・ザラたつた一人に固執する意味は——まあ彼女にはあるのだが——そこまであるわけでもない。

——彼とは、いずれ……。

流石に現時点で敵の本丸を落とせる余力はないし、何より“カラミティ・ストライカー”では、攻め込むにあたつて分が悪い。

フレイは、それ以上を考えないことにした。また後で、“ヤキン”に攻め込めばいいと思つたのである。

(もう、あんなところにいるんだ)

“ピースメイカー”隊は滞りなく進軍し、そのような感想をフレイに抱かせる程度には、余裕の進撃を行っているらしい。

迎撃に出ているザフトの防衛部隊は、その悉くが与えられた役目を果たす前に“ペルグランデ”に撃滅されていた。ドラグーンに対応できない者達が、四機もの“ペルグラ

ンデ”に囲まれ、まともに生存できるはずがないからだ。

フレイの表情に、失笑が浮かぶ。いくらコーデイナーと云つても、大西洋連邦の造り出した『強化人間』を前にしては赤子も同然ということか？　このような事態を打破できる存在と云えば、それこそザフトにおいてはアスラン・ザラくらいであつたろうが——肝心の彼が自分の前から逃げ出した今、万に一つもザフトに逆転することはできない。

——何がコーデイナー、何が新たな世界の導き手。

結局ヤツらは、今まで散々見下して来たナチュラルに敗れて終わるのだろう、最愛の郷土を失つた果てに。

それまでの間——と、フレイは“ゲイツ”や“ジン”が攻防を繰り広げている宙域に目を向けた。あいつらを倒して、時間を潰すとしよう。“レムレース”の紅眼が嗤うように煌めき、黒き災厄の亡霊は、そうして戦場を移ろい始めた。

そんなフレイの予想には忠実に、核攻撃隊は着々と“プラント”への距離を縮めつつ

あった。

一方でその後方、激しい戦闘が繰り広げられる渦中では――

「くそオツ、こいつらアア！」

イザークが慌てて機体を返し、急ぎ「メビウス」に追い縋ろうとしていた。

だが、その前に「レイダー」が立ち塞がり、ことごとく行く手を塞いで来る。背後から鉄球を投げつけられ、イザークは機体を旋回させることでこれを回避。同時に胃がねじくれるようなGが体に負荷をかけ、血流が頭から足に流れ込んだ。

そうして反転した状態から、憎々しげに「アサルトシユラウド」のミサイルを放ったが、敵は鉄球を振り回し、それによって浮かんだ『面』をシールド代わりに砲火を防いだ。

「いい加減にツ……！」

――気に喰わない。何もかもがイザークの気に喰わない。

散々なまでにイザークに突つかかって来る黒の「G」――「レイダー」であるが、どうやらそいつ自身は、はじめから自分の『足止め』などを行う予定ではなかったらしい。あわよくばさっさと「デュエル」を撃墜し、次々と獲物を――『点数』を稼ぎに行く予定だったのだろう。

なのに目の前の「デュエル」が抵抗を続けるものだから、そいつの挙動は次第に乱暴

になっていった。攻撃のひとつひとつに含まれていた鋭さが失われ、ほとんど力押しのように、性能差に物を云わせて突っ込んでくるようになった。おそらくパイロットがじりじりと苛立ち、痲癩でも起こしているのだ。

——なんと愚直で、幼稚なヤツだ！

そのような相手に、今なお自分が侮られていることが気に喰わない。そして何より気に喰わないのは、そんな相手をいつまで経っても返り討ちに出来ない自分——あろうことか、振り切ることさえも出来ない自分だ。

↑——核が……ッ!?!>

そうしてイザークが手間取っていると、そのとき通信先のディアツカが、悲鳴にも似た叫びを挙げていた。

ハツとして顔を上げれば、先頭を切る「メビウス」が、ついに核ミサイルを発射していた。それまで大事に抱えていた爆弾を、理路整然と並ぶ「プラント」に向けて解き放ったのである。

「ああッ……!?!」

その瞬間のイザークは、我を忘れた。

そこから自分がどう動いたのかも憶えていない——だが、ひたすらミサイルを止めなければ！ その一念で動いていたことは確かだった。

気が付いたときには、あれだけ苦難していたはずの「レイダー」を振り切り、
背後からの威圧感から解き放たれた彼は、前方のミサイルにのみ集中していた。

「——あのミサイルを落とせ！ プラント」をやらせるなアアッ！」

胃が潰れるほどのGが体にのし掛かるのも構わず、スピードを上げ、ビームライフルをの射程距離まで辿り着こうとする。だが、あまりにも遠すぎる。

既に同一方向に加速しているミサイルには、とても追いつけるはずもなく——

「ボクらの、勝ちだ……ッ」

ムルタ・アズラエルが、勝利の福音に笑った。

そしてその音は、
「プラント」へ絶望をもらたす無慈悲なる死の神の跫音だった。

だが次の瞬間、絶望を祓う者達が、戦場に駆け付けた。

それは彗星の如く、遙か彼方より去来する“蒼”と“皓”の輝き——

天使の羽にも思える白銀の追加兵装を背に、流星の名を冠す“ミーティア”を力を得た第三勢力の戦士達。それらは圧倒的な速度で、背後から“デュエル”すらも追い越して“プラント”へ——瞬く間に核ミサイルへの距離を縮めていく。

イザークはその内の一機を見遣り、失調したように叫んだ。

「“クレイドル”だと——!? まさか!」

そこから先が、言葉として吐き出されることはなかった。

現れたのは、自由の翼——

そして、世界の揺籃を見守るべくして生み出された、白銀の護り神。

「あれは……ッ!」

現れた同族——いや怨敵に反応するかのよう“レムレース”の紅眼が輝き、フレイもまた、見憶えのある二機の来訪を認めた。

そうして戦場に駆け付けた二機“モビルスーツ”——“クレイドル”と“フリーダム”から、次の瞬間、多数のビームと無数のミサイルが放たれた。

放たれた無数の光条は、それ自体が豪雨のように、核ミサイルに襲い掛かる。

一斉に解き放たれた光条と噴弾が、至るところの核ミサイルを、次々と叩き落とす。

直撃を受けた核ミサイルは、鮮烈な閃光と共に怒濤の大爆発を引き起こし、周囲のミサイルに誘爆し、爆光の輪を広げていく。常闇の海に咲き誇る光の華は、連鎖的に繋がって、それ自身が核弾頭を撃ち落とす。光の壁へ実態を変えた。

啞然とする声も、疑心する声も、激震の余波に遮られて聞こえない。

モニターを白く灼き尽くした光がひとまず収まったとき、*「プラント」*は傷ひとつ付かずに現存していた。突然に現われた二機が、イザークの故郷を護ってくれたのだ。途方もない安堵の念が彼の中に湧き立ち始め、立場すら忘れ、自分の故郷を救ってくれた者達に感謝の念すら抱いた。

——護って、くれたのか……!?

戸惑いながらも安堵していると、通信回線に新たなる声が聞こえた。

〈地球軍は、ただちに攻撃を中止してください!〉

それは涼やかな声——ラクス・クラインの声だった。

イザークが茫洋として振り返ると、そこには*「エターナル」*と、それに随伴する*「アークエンジェル」*の艦影があった。さらにもう一隻——名前は知らないがおそらくオーブ艦だろう——の艦影もあって、合計で三隻の戦艦が、この戦場に参入していた。

——あれらが、聞きしに勝る三隻同盟だというのか。

↑——あなたがたは何を撃とうとしているのか、本当にお分かりですか!?↑

どこまでも澄み渡る、歌姫の声が、戦場に木霊した。

「何なんデス、コレは？」

アズラエルは呆然として、首を傾げながらそう溢した。

突如としてやってきた得体の知れない二機のモビルスーツ。それらに大切な財産である核ミサイルを全て叩き落された。目の前で自軍の兵器を壊滅されられたことに怒りがないと云えば？であり、しかしながら、このときは怒気よりも呆気の方が勝つたらしい。

質問の先にはナタルの姿があつて、しかし、解答を求められたナタルもまた、事態を把握することができていないようだった。

「グアークエンジンジェル……！」

ただ、かつての母艦の中にいるであろう女性。マリユール・ラミアスのことを思い起こし、すこしだけ胸が熱くなったのは事実だった。

——ああ。やはり、彼女達は来た。

あるいはナタルには、彼らがここに駆け付けられることが分かっていたのかも知れない。

こんなことは許されない、許してはならないのだと、彼女なら、きつとそう叫ぶはずだから。

へもう一度云います。地球軍は、直ちに攻撃を停止してください！

だが実際のところ、ナタルは一介の将校に過ぎないのだ。彼女は所詮、上からの命令に唯々諾々と従うだけの駒。指揮権もなければ拒否権もなく、彼女は結局、脇下に構えるアズラエルからの指令を待つ他になかった。

「あー。もう、ダメダメです」

アズラエルは、呼び掛けの主の少女——彼に云わせれば小娘か——であると認めた途端、一気に取り合う気を失くしていた。

戦場で持論を押し付けたいならば、それなりの『顔』を用意すべきだろう。

たしかに『プラント』において、ラクス・クラインの名を知らぬ者はいないだろう。だが、それは地球における知名度とは決して等号で結ばれない。実際アズラエルは彼女の存在を知らず、そうである以上、一介の少女風情の言葉を彼がまともに取り合う筈がないのである。

「思春期の連中の考えることなんて、イチイチ相手にしてられませんヨ。もう結構ですから、攻撃を再開してください」

ナタルは首をもたげ、嘆息ついた。

「残った核兵器、まだいくらあるでしょ？　なんであれ、邪魔をするならあの船団も敵だ……消えてもらいましょう、《プラント》と共にね」

「なに？　ラクス・クラインが？」

要塞の管制室に詰めていたパトリック・ザラと、その補佐官であるレイ・ユウキの許にも、戦況はもたらされていた。地球軍の核ミサイルを迎撃し、《プラント》を救った者達が、反逆者であるクラインを筆頭とした一派であることも――。

「ラクスさま……！」

レイ・ユウキは、その報告に胸を熱くした。

やはり彼女は、《プラント》を裏切ったわけではなかったのだ。本気で裏切るつもりなら、どうして命を賭けて戦場にやって来るだろう？　どうして《プラント》を護り抜いただろう？

だがパトリックは、その報告を鼻で笑い飛ばした。

「フンッ、小賢しいことを」

英雄でも気取るつもりか？　――パトリックはこれを、クライン派の自作自演の茶番

劇だと推察したのである。

わざわざ「プラント」の危機を造り出し、絶体絶命のところを駆けつけて、みずから国を救う？

「如何にも子供が考えそうな脚本ではないか。見え透いた演出だな、ラクス・クライン」
そうして、みなが騙されたように国を救った救世主を感謝し、賛美し、いい具合に英雄を気取った後は、シーゲルの代わりに政界にでも進出しようというのか？

——そうはさせるか、小娘め……！

傲岸に鼻白むパトリックであるが、背後からレイの諫言が聞こえた。

「お言葉ですが……。彼女達がいなければ、今頃は——」

——「プラント」は、宇宙の塵になっていたので？

次の瞬間、パトリックの目つきが変わった。

が、パトリックより後方に控えるレイは、その一瞬の……それでいて、急激な温度の変化に気付かない。

「我々の部隊で応撃できなかつたことを、彼等は代わりにやってくれたものではありませんか……！」

レイはこのとき、かなり率直に具申ししていた。するとパトリックは座席から立ち上がり、物言いたげな表情のままレイの許まで歩いてゆくと、拳を握って彼の頬を殴り飛ば

していた。そのときぶん殴られたレイが地に吹っ飛ぶにも構わず、パトリックは激しい怒気を露に云った。

「見損なうな！——あのような小娘の『演出』などなくとも、我々だけで『プラント』は護り切れた！」

その証拠に——と、パトリックは再び前方のモニターに目を向ける。そこには一隻のナスカ級が映されていて、それも、見慣れない新装備を装着していた。艦首前方には、細長いブレード状の電磁波放射装置を連ねた長大な突起——たとえば、ヘリのローターを幾重にも連ねたような形状の装備を付けている。

そう——『アレ』こそが対抗策だ。

地球軍が核攻撃を行つてくると事前に分かっていたからこそ、開発した新兵器——地球圏では滅多に採取できず、したがって稀少価値の高いレアメタルを、惜しむことなく投資することで造り上げた。

（何のために、火星圏との連携を強めたと思っているのだ……！）

パトリックは、胸の内ですう云った。

そして、傍らのオペレータに確認を促す。

「——X09AとX11Aは？」

ジャステイス
リジエネレイト

「議長閣下の御命令に従い、すでに戦線から離脱しています」

「上出来だな——。では、始めるぞ」

パトリックは、指示を飛ばした。

「“ニュートロンスタンピーダー”、発射！」

忌々しき、核攻撃隊——そして、裏切り者の“クレイドル”——
すべてをまとめて、葬り去ってやろうではないか——！

停戦の呼びかけも虚しく、地球連合軍による核攻撃は再開された。

“ミーティア”の大火力砲撃により、その全てが叩き落されたと思われた核ミサイルであったが、中には“ペルグランデ”がカバーに回ったためか、いくらか撃ち漏らしが残っていたようだ。ミサイルを抱えた残存の“メビウス”は問答無用で核攻撃を再開——ふたたび“プラント”に向けて猛進を始めた。

核攻撃の第二波が、始まった。

「くそっ！　まだ続けるっていうのか！」

キラは歯噛みしながら機体を前進させ、もう一度“メビウス”の後を追う。

と、これを取り巻く“ペルグランデ”がさせじと迎撃に飛び来たり、キラのフォロー

に回る形で「クレイドル」もまた、敵軍との交戦状態に突入する。

「……？」

そのときだった。

ステラは近傍のプラント最終防衛ラインに、不自然に孤立している一隻のナスカ級を認めた。

そのナスカ級は、見慣れない——いや、ステラにとって何処かで見覚えのあるような砲塔を艦首に装備していた。張り出した幾つもの突起、リーダーアンテナのような形状をした、白く巨大な砲塔。

「——」

それを見たステラの表情が凍った。

その砲塔が『何の照射装置であるのか』——咄嗟に思い出してしまったがために。

「だっ、ダメだ！ キラ下がって——ッ!!」

砲塔の名は「ニュートロンスタンピーダー」——

以前、ステラが帰属していた地球連合が「プラント」への核攻撃に乗り出した際、進撃中だった当時の核攻撃隊を一網打尽にした独自のカウンター兵器。

だが、そんな情報を知るはずもないキラは、突然ステラが怒鳴った声に当惑した。

「へえ……ッ!？」

「急いで——!!」

云うが早いか、既に「クレイドル」は転進して後退を始めていた。ステラにしては尋常でない剣幕に、流石のキラも並々ならぬ危機感を憶えて慌てて機体を翻す。

その一方で、標的の逃げた「ベルグランデ」部隊は再び「メビウス」の護衛へと戻ってゆく。

「ステラ!? いったい、何が——」

キラの問いかけは、最後まで紡がれなかった。

次の瞬間、件のナスカ級から白い光が迸ったのだ。照射と同時に光に吞まれた核ミサイルと「ベルグランデ」が内部から爆光を放って四散する。

その爆光の熱量、質量ともに——間違いなく、核爆発のそれである。

やがて照射された光は、おのずと延長線上にある戦闘宙域を飲み込んだ。地球軍の「ダガー」を——ひいては友軍であるはずの「ジン」や「ゲイツ」さえ光の奔流はひと呑みにし、しかし、それらの機体は奔流に吞まれてもなお、通常どおりに動作を続けていた。地球軍機については明らかに身構えている者が多かったにも関わらず、何ひとつ光の影響を受けなかったのだ。

「まさか、核だけを狙った新兵器か——!?!」

明らかかな異変を目の当たりにしたナタルが、ふと口にする。彼女は判断するまでもな

く血相を変えて叫んでいた。

「アルスター、逃げろ——ッ！」

当の射線上にあつて、誰より真つ先に回避行動を取るべきだったフレイは、しかし対応が遅れていた。

(「こういうこと、だったの……!?)

あの光の奔流は、どういう作用か核だけを暴発させる効果を持つ。密かに「ジャステイス」が撤退した意図は、この一撃から免れるため——？ 核動力炉を搭載したファーストステージシリーズでは、「ベルグランデ」のように餌食となってしまうから？

——間に合わない！

光に吞まれる！ フレイがそう危惧した、次の瞬間だった。

背後から突き飛ばされるような衝撃に襲われ、「レムレース」は何者かに光の射程圏外まで運び出されていた。背後を振り向けば、それはモビルアーマーに変形した「レイダー」だった。鉤爪の部分で「レムレース」をひっ捕らえ、そのまま全速力で射線上から退避したのだろう。バッテリー駆動の「レイダー」であれば、光の中でも自由に行動ができる。

「間一髪……！ よくやった、ブエル少尉——」

へうるっせー。あんたの指示じやなきややってねー

ナタルは、安堵のため息を漏らした。

(だが、"ペルグランデ"が……！)

エルビス作戦の旗頭として、地球軍が満を持して投入した虎の子のモビルアーマー。それは合計で五機もの数が開発されたが、たった先程のナスカ級の一撃で、その内の四機が失われた。

不幸中の幸いは、作戦当初より"レムレース"の直掩を任されていた一機だけが、ナスカ級から距離があったために、退避行動が間に合ったことだろうか。

(新兵器が、こころも次々と……っ)

ナタルはこの戦闘の激しさを、この戦争の行く末を、ひたすら不吉に思い偲んだ。決戦はまだ、始まったばかりだというのに――

同じころ"ヤキン"の管制室では、パトリックが満足げに一連の光景を目の当たりにしていた。

だが、その後方にある議員や将校らの表情は、彼とは対照に困惑の中にある。エザリ

ア・ジュールが、事態を図りかねたようにパトリックに尋ねる。

「か、閣下……！ あ、あの兵器は……？」

「ニュートロン・スタンピーダー。すべての核を、強制的に起爆させる装置だ」

パトリックは、全てを明かした。

核分裂とは、そもそも核物質内部にある中性子が高速運動することによって巻き起こる。スタンピーダーはこの運動を意図的に暴走させ、制御不能に陥れることで、外部から強制的に核爆弾の暴発を促すことが可能となるのだ。

その影響を受けるのは核の弾頭だろうが核の動力だろうが関係なく、原則として、核が積まれたものであれば、このスタンピーダーの一射の影響を免れることは不可能だ。

だからこそ、パトリックは前もってZGMF-X09AとZGMF-X11Aを戦線から撤退させた。口元に笑みを浮かべるパトリックの耳に、オペレーターの殊勝な報告が入って来る。

「核ミサイルの全基撃破を確認しました。それと……」

「なんだ？」

「思わぬ報告なのですが、スタンピーダーの射線上にあった地球軍の大型モビルアーマーが計四機、先の一撃により爆散した模様です」

「スタンピーダーは量子フレネルを蒸発させ、ブレイカーが作動。現在、システムは機能

を停止しています」

パトリックは鼻をならし、声を発する。

「まあいい。……敵勢力に渡ったZGMF—X08AとZGMF—X10A、ならびにZGMF—X12Aは？」

「強烈なノイズのため、特定不能です」

「この次いでだ、全軍に回避命令を出せ」

皮肉な笑みを浮かべ、続ける。

「次は『ジエネシス』の発射準備に入る。全艦射線上から回避、部隊を下がらせろ」

「了解。『ジエネシス』は、これより発射シークエンスに突入します」

〈照準用ミラー展開、起動電圧確保、『ミラージユコロイド』解除〉

次の瞬間、それ自体がひとつの要塞のような、巨大な建造物が宇宙空間に浮かび上がった。

それは人の生き死にを指針する——運命の『羅針盤』のようにも思えた。フェイズシフトが展開され、青と銀に彩られたそれは『ジエネシス』——創世の名を冠す、第二の光の発心装置。

「思い知るがいい、ナチュラルども」

ザフト全軍の撤退を確認したのち、パトリックは厳かに叫ぶ。

「この一撃が、我らコーディネイターの創世の光とならんことを！」
祈りを乗せて放たれる“それ”は、果たして希望の光なのか。
そこに希望は存在するのか。

「——発射！」

次の瞬間、創世の光が撃ち放たれる。

そう。戦いはまだ、始まったばかりだ。

『ブライマリー・ウエーブ』C

戦いは素手で行うものではない。武器を持ち、遙か古来は鈍器や刃物を掲げて行われた。その後、投石器や火縄銃、鉄砲等が次々に編み出され、距離を置いた戦法が時代に倣って主流となっていく。やがて科学が発達し、弾道ミサイルが開発されるようになる。次第に人間同士の戦争は——相手に接触する機会すら持たない——遠隔的な衝突へとその陣容を変えていった。

西暦の終わりには、まるでテレビゲームの感覚で、モニター越しに『敵』を制する時代が到来していた。

もつとも、再構築戦争以後のコズミック・イラでは、『プラント』が開発したNジャマーの影響によつて、ミサイル等の誘導兵器の一切が用を果たさなくなり、大半の遠隔兵器が使用不可となった。これにより地球と『プラント』間で巻き起こる戦争は、主に機動兵器を用いた武力衝突に推移することになる。そこで久しく戦争は、ふたたび人と人が衝突する有様に戻るようになった。

——この意味で、Nジャマーは曲がりなりにも戦争を会戦形式に引き戻し、半ば一方

的な大量虐殺の時代を終わらせた封印物としての一面を持つ。

だがそれも、束の間の回帰に過ぎなかったらしい。Nジャマーを無効化するNジャマー・キャンセラーが解禁された今、再び遠隔兵器を用いた大量殺戮の様相に逆回帰してしまうのは、ある意味で避けようのないことだったのかも知れない。

より良いものを望むのは、逃れようのない人の性。であるなら、より強力な兵器も求めることも、また自明。地球連合軍が此度、核ミサイルの使用に躊躇しなかったことが、何よりの証左である。

—— だったらザフトも、核ミサイルを撃ち返すのだろうか？

このときステラの抱いた予想は、結論から云うと外れていた。さりとして核に匹敵するもの——核の恩恵を得たものを実戦投入した段階で、それは中らずとも遠からずな予測と云えたのかも知れない。

そして、次の瞬間——

ステラはみずからの父、パトリック・ザラの凶暴にして強大な悪意を、唐突に目の当たりにすることになる。

“ヤキン・ドゥーエ” 後方より、突如として顕現した “ジェネシス” ——
それ自体がひとつの要塞然として現れた得体の知れない巨大構造物に、ステラ達は目を張った。

〈なんだ、あれ?!〉

傍らの “フリーダム” から疑念の声が響くのと、それはほぼ同時だった。筒状になった “ジェネシス” のミラー基底部が、音を立てて発振し始めた。

へ——下がれ “クレイドル”! “ジェネシス” が撃たれる——

どういうつもりか。イザークが声を荒げるのも、ステラはしつかりと聞いていた。

次の瞬間 “ジェネシス” のカートリッジ内部で、巨大な光が輝いた。発された閃光? いや爆光は装置前面に備えられた円錐型の一次反射ミラーを通して、収斂されて一本の筋になる。やがて光が臨界まで達すると、耳を劈くような表現しがたい照射音と共に、長大なレーザーが “ジェネシス” から照射された。

それは宇宙空間を風ぐように切り裂き、真っ直ぐに地球軍艦隊が行軍する宙域へ伸びていく——

「なっ——」

野太い? 重い? そのような表現では云い尽くせないほどの “圧” がそこにある。熱量と質量が渦巻き、射線上にあつた地球軍艦艇は次の瞬間、わずかな光渦に晒された

だけで振じくれ、破裂し、一斉に砕け散っていく。

このとき艦隊が焼き払われてゆくのに気付いて、かろうじて反応した者もいた。たとえばそれは、艦隊後方に位置するドレイク級の艦長——とある地球軍将官だった。

「かわせ——」

もつとも、そんな指示が何になつたというのだろうか？ どれだけ素早く反応しようと、対応が取れるわけではない。光速のレーザーを正面に捉えたときは、自分の肉体が消し飛んでいるときだ。

地球軍艦隊はその破壊的なレーザー光線によつてひと飲みにされ、将官の意識も光芒の中に消える。あまりにも一瞬、彼等は最後まで自分の死に気付くこともできなかつた。

「機関全速、回避——」

白と黒 “アークエンジェル” と “ドミニオン” ——マリユとナタルの怒号が重なり合つた。ふたりの声が響いたのは、ふたりがレーザーの射線から外れたところにいたからだ。

強烈な閃光が地球軍艦隊の戦列を貫き、しかし、彼女達は “それ” をまともに直視することも確認することもしなかつたのは、艦長としての責任感と、人としての恐怖感のために真っ先に操舵士へと号を飛ばしていたからだ。

それでも、CIC席に座っているミリアリアは違った。艦の操舵には関連していない彼女は、みずからの真横を蛇のように貫いたレーザーの光を愕然として目の当たりにしていた。

艦隊が呑み込まれていると云うのに、爆発は起きていない。あまりにも高熱、高濃度のエネルギー輻射が、爆発を起こす前に対象を消し滅ぼしているのだ。もつとも、この状況でそこまで冷静な理解ができるほど、彼女の神経は凶太くはなかったが。

スタンピーダーの一射から退避していた「クレイドル」の中、ステラは愕然としている。

「あ……ああ……っ！」

戦艦が。

モビルスーツが。

消えていく。

次々と！

「ひ、ひと……が、とっ、溶けていく——」

ステラには、分かった。その感覚について、正確な言及は避ける。

だが強いて云うなら、それらは彼女の中の共感力が人並み外れた結果だった。

「……………っ！」

そもそも宇宙空間では、レーザーの光条など視えるものではない。人間の目は、そこまで発達した造りになっていない。どんなに微細なものであれ、確かにそこに存在する“物体”に光が跳ね返ることで、人間は初めて「そこに何かがある」ことを知覚できる。だから科学的に正確なことを云おうとすると、レーザーの筋が輝いて見えたのは、その宙域が如何に汚れているかの証明だ。宇宙を切り裂いた“ジエネシス”のレーザーは、爆発ひとつ起こさない代わりに、無数の人間達を宇宙の塵に変えていたのである。

——あの光は、『死』の象徴……！

爆発は起こらない。ゆえに決して派手ではない。が、それよりも遥かに豪快で、残酷な光。

——アアアアアアアアツ！

一拍置いて、死に逝った人々の雄叫びのような、耳を劈く断末魔がステラの中に流れ込んで来る。

「……………!?!」

いや、それは表現としては適切ではない。実際のところ、ステラは無数の悲鳴の幻聴を聴いているに過ぎず、それらの断末魔は、現実として響いているものではない。

それでも、大勢の人間が破滅してゆくその光景は、彼女の中の最悪の記憶とよく似ていた。誰よりも『死』という言葉に鋭敏な少女の生理は、一瞬にして散って行つ

た者達の無念と憎悪を、被害妄想のように自分の中に受信してしまった。

「うっ……っ……っ……」

途端に猛烈な気持ち悪さに襲われ、嘔吐感すら込み上げて来る。

ステラはこの光を照射した者。パトリック・ザラの強烈な悪意を思い知る。もつとも近く……もつとも遠い存在。あれは父の中に蜷局ヒカガリ巻いた、黒き憎しみの渦——

照射力の減衰により「ジェネシス」の光が鎮まった頃、地球軍は艦隊の半数以上を喪失していた。

慄然とする暇もない。辛うじて生き残った随伴艦から、ナタルの許に絶望と憔悴に塗れた通信が寄せられて来たのは、それから程なくしてからだ。

〈バジール中佐、これは……っ〉

〈我々は、どうすればいいのだ……〉

悄然として——しかし出来るだけ動揺を面に出さないように務めながら——ナタルは状況把握に務めた。

見たところ、現状の地球軍艦隊は、元あつた頭数の半分にも満たない壊滅状態にある。そして聞いたところによると、旗艦、およびそれに準ずる艦も一様に先の光芒に巻き込

まれたらしい。帰るべき母艦を見失った兵の数は計り知れず、すでに帰投先のシグナルを確認できなくなつた者達が混乱し始めている。

ナタルは絶望したい気持ちを抑え、出来るだけ毅然として云い放つ。

「モビルスーツ隊には浮足立つなと伝えろ！ 残存艦の把握急げ！ 各科員は真摯に己の役割を果たせ！」

その鋭い声に、にわか仕立ての“ドミニオン”クルーも勇気と鋭気を総動員して持ち場に戻る。だが、殊に通信管制官だけは、八方塞がりと言わんばかりの悲壮な表情を浮かべていた。

「旗艦“ワシントン”はどうなっているか!？」

そこに早速、ナタルから催促が求められたのは、ひとえに不運としか言いようがないわけ。

「はっ！ ……いついえ、電磁波の乱れの影響か、宙域全体に強烈なノイズが発生している！ 確認が取れません！」

「環境のせいにするな！」

「……。んな無茶な！」

泣きごとを云つて楽になりたいのは、きつとナタルだって同じだった。

「信号弾撃て！ 残存の部隊は現宙域を離脱する！ このような混乱を続けていては、

地球軍は敗北する——」

いくら数で勝つていようとも、戦いはそう簡単ではない。

ナタルのそれは予感ではない、ほとんどが確信だった。

「——『レムレース』を呼び戻せ！」

「流石ですな、ザラ議長閣下」

称賛の言葉を口にしたのは、ラウ・ル・クルーゼである。彼はこのとき『ヤキン・ドゥーエ』管制室、パトリック・ザラの後方に控え、慇懃とも云える口調で続けた。

「『ジェネシス』の威力、これほどのものとは……」

パトリックは憮然としてラウの方を振り返る。

言葉だけ聞けば感嘆している風に聞こえた——ような気がしたが、振り返ってみれば、さして感動した様子もない平常時の表情。代わり映えのない仮面だけがそこにあった。

「——いやはや、素晴らしい」

しかし、それは要するに伝わらなかつただけだろう。実際にラウは『ジェネシス』の

威力に感動していたし、心にもない嘘を云つてもいけないのだから。

「戦争は、勝つて終わらねば意味がなからう。『ジェネシス』はそのための力だ」

鼻白むパトリックは、この『ジェネシス』の軍事転用を命じた張本人でもある。

本来、このレーザー砲は宇宙開拓のためのライトクラフトを搭載した施設だった。砲塔は宇宙船加速用の推進レーザーを照射するためのマズルに過ぎず、それがほんの少しの改良を加えるだけで、こうしてナチュラルを討ち滅ぼす強力な兵器になつてくれるとは……？

誇らしげにシートを腰を掛け直したパトリックの背姿を見送りながら、ラウはひっそりと嗤った。

（人類が夢見た施設、死の兵器に造り変えて満悦か）

まったくもって、人類はどこまで行けば気が済むのだろうか？ と、ラウは他人行儀に考える。

このときの彼には、彼自身が人類の一員としての自覚や、それに伴う正義感や使命感などが欠片も存在していなかった。そしてそれは単純に「目の前の男と同類と思われたくない」などという安っぽい自尊心や嫌悪感が、そうさせているわけではなかった。

生まれつき監禁まがいの生活を強いられ、人目に付かぬ闇の中で飼い殺しにされ、人並みの幸福すら与えられていなかったラウには「自分が人類社会の一員である」と感じ

る心が、そもそも存在していなかった。

とはいえ、それでも人の身体を持って生まれた自覚程度は残っていたようで、このとき目の前のパトリックに呆れる程度の感情は抱けていたようである。

「……………」

ラウがそうして微妙な冷笑を浮かべていると、傍らにいるレイ・ユウキがこちらを覗き込んでいるような表情をしていたので、ようやく気が付いたラウは、慌てて口元を引き締めた。

見られただろうか？ 我ながら、今のはらしくないミスではないか——と、小さく後悔する。

しかし改めて考えれば、さしたる問題ではないだろう。いや、問題にならない——と云った方が正しいか。なんせユウキは、先ほどパトリックの逆鱗に触れたばかりだ。こうして管制室に居残っているのが不思議なくらいの人間が何を云ったところで、あの頑固者の耳には届かないだろう。かすかに優越感を漂わせながら一息つくくと、時を同じくしてオペレーターが声を発した。

「地球軍、撤退を開始しました」

先の「ジェネシス」の一射で、指揮系統が完全に麻痺したか——？

ラウがこのように確信するまで、二秒と掛からない。パトリックは目の色を変えて、

立ち上がる。

「逃してはならん。既に防衛戦は終わった、ここから先は掃討戦だ——この機に乗じて、ヤツらを叩き潰すのだ！」

その一言に、案の定——と云っては何だが——ユウキは苦い顔になる。そもそも「掃討戦」という言葉自体に、ユウキとしては好感が抱けないのである。

ことに「ジェネシス」の威力を見せつけられ、地球軍は戦力の大半を喪つて、完全に動揺——ないし戦意を喪失しているに違いない。というより、だからこそその撤退なのではないのか？ にも関わらず、そのような者達を追つて討つという行為が、卑怯であると同時に、ひどく残酷なものであるように感じてしまうのだ。

(だが、わたしは……)

ちらり、とパトリックの背姿を見遣る。

だが、ユウキはすっかり指導者への恐怖に委縮して、具申することも、何も出来ずにいた。腹の内を明かすなら、自分の隣に立っている仮面男の、底知れぬ胡散臭さも通報してやりたいところではあるが。

(フ……………)

結局は何も云えないユウキの無力な姿を見て、ラウが小動物でも見下すような残忍な表情を浮かべたが、気付いた者はひとりもいなかった。

そして、パトリックはやや皮肉げな表情を浮かべた後、直近のオペレーターに命じた。

「全軍に通信回線を繋げ——無線PTDX9000Aだ」

オペレーターは、動揺した。

「は？ それは二ヶ月前に廃止された軍用回線ですか？」

「構わん、繋げ」

——何をする気だ？

おおよそレイ・ユウキには、理解が及ばなかった。

「——我らが勇敢なるザフト兵の諸君」

L5全域に、ステラにとって聞いて久しい男の声が響く。それはザフトの識別番号を持つ機種に向け、一斉に発信された“ヤキン・ドゥーエ”からの軍事通信だ。

……だからだろうか？ このとき“フリーダム”や“クレイドル”は、その通信をさも当然であるかのように傍受していた。キラは思いがけずに啞然とする。

「ザフトの通信が、僕達にまで聞こえている」

元より軍用回線などは、機密保持のために一定の周期で更新されるべきとする規定が

設けられる。それも最重要機密等が何らかの形で外部に漏洩した場合には、即座に変更されて然るべきであり、そうであるなら「フリーダム」や「グレイドル」を奪取されたザフトは、その時点をもって、あらゆる軍内部のパスワードや通信コードを変更していなければ不自然なのだ。

にも関わらず、現実には「フリーダム」——キラはパトリックからの声明を受け取ってしまった。これはザフトの共有回線が「以前とまったく同じ周波で使われている」ということの証明だ。あろうことか敵性勢力に向けて通信を垂れ流すなど、迂闊などという言葉で片付く問題ではない。

へ——傲慢なるナチュラル共の暴挙を、これ以上許してはならない！

なおも平然と紡がれるパトリックの声明を耳にしながら、ステラはそこで妙な違和感を憶え、そして次の瞬間には違和感の正体に気付いていた。

(違う、これは)

口内に判読し、彼女は、その先を口にする。

「聞こえるんじゃない、聞かせてるんだ」

先の「ジェネシス」の一射、アレがこれから発射されることを、どうにもイザークは事前に掴んでいた風だった。彼がそれをわざわざステラに教えてくれたのはどういふつもりか分からない点ではあるのだが、ここで重要なのは発射予告を彼が知って、対し

てステラは知らなかったということ。

云うまでもなく、イザークのGAT-X102は地球連合が開発したもので、ザフトのものではない。むしろザフトが開発したのはステラのZGMF-X08Aの方であり、それでも彼女に連絡が来なかったということは、やはりザフトは現在の軍用回線を改めているはずなのだ。

だとすれば——いま使われている回線、ステラ達も利用できてしまう回線とは、それが更新されるより以前のもの。まだ「フリーダム」と「クレイドル」が、ザフトから持ち出される前のものということ。

「挑発してる、ってこと？　でも、誰を——」

「……………」

「——まさか」

キラは、絶句していた。

それは、父親のすることではない、と思ったからだ。

「——『プラント』に向けて放たれた核！　これはもはや、戦争ではない！」

ステラの予想は、おそらく間違っていない。

パトリックが声高に叫ぶ、この放送が「クレイドル」と「フリーダム」——いや、それだけでなく「レムレース」にさえ——うっかり聞かれることを前提としたメッセー

ジであつたなら——

——それは同時に、彼が齎す『宣戦布告』になる。

↑——虐殺だ!!↑

「プラント」は決して地球上のナチュラルを許さない——

三隻同盟とは決して歩み寄らない——

それはパトリックの意志を、直接的に訴えた演説でもあつたのだ。

「ふざけんな……ッ！」

果然として、その通信を聴き受けていたフレイが、その柔らかな唇を噛んだ。

——それを云うなら、オマエ達がやったことは何なのよ！

唇からは、出血した。

「あの男は……ッ！」

パトリックは試している。現実に行われた「スタンピーダー」と「ジェネシス」の二連射——これらの猛威から「クレイドル」が生き延びている可能性は、極めて低い。

それでも、ご丁寧な「クレイドル」に聞こえる旧回線で声明を発したのは、生きているステラを挑発するためか。

↑——そのような行為を平然と行うナチュラルどもを、世界に混乱を貶めるテロリスト共を！ 我らは決して許すことは出来ない！ この世の誰にも、我らコーデイネイター

の歩みを妨げる資格などないのだ!!

誰にも、止められはしない。

誰にも、邪魔はさせない。

「勇敢なるザフト兵の諸君、反撃を開始せよ！ 逃げ惑うナチュラルどもを叩き潰し、戦場に混乱を巻き起こす『エターナル』を撃墜するのだ！」

その言葉は、野心と自信に満ちていた。

——貴様もまた抵抗するならすばしい！ この私を止められるものならな……！
ステラには、暴走する父の言葉がそのように聞こえて、仕方がなかった。

ザフト軍モビルスーツ部隊が、猛反撃を開始した。パトリック・ザラの煽情的で攻撃的な声明は、義勇兵達の心を昂揚させていた。生物が内に秘める狂暴性が目覚めたように、やがてザフト兵は、戦意を喪い撤退している『ダガー』や『メビウス』に襲い掛かる。

そこに、躊躇いはない。帰るべき巣穴を失い、逃げまどう野兎を啄んでゆく——荒鷲のような猛猛さがあるだけだ。

故郷を撃たれかけた——その跳ねつ返りが、彼らを暴れさせていた。大体、地球軍が

本拠を構える月にはまだ、うんざりするほどの大艦隊と核ミサイルが用意されているはずなのだ。ならばここで、敵戦力を削っておくに越したことはないではないか。

「——こういうときに数を減らす！」

へうわあア!?」

「——ええいッ、よくも再び核などッ！」

進退もままならない「ストライクダガー」を重斬刀で切り刻む二機の「ジン」——その目を疑うような光景を目撃し、キラの瞳孔は絞られた。彼は咄嗟に「ミーティア」をパージする。ほとんど使命感に突き動かされるように「フリーダム」を奔らせ、キラは今にも虐殺劇が始まろうとしている凄惨な舞台に向かった。

——月艦隊は、もう戦意を喪失しているんだ！ だから撤退しているのに！

しかしザフトは、これを見逃すつもりがないらしい。機関部の損傷のせいか、航行速度の鈍い地球軍艦も、ちらほらと散見される。思ったように加速できない艦に対して、ザフトのMS部隊は容赦なく襲い掛かっていた。

「やめろっ！ 戦闘する意志のない者を！」

叫びながら、キラは逃げ惑う「ダガー」の後に入り、ザフト機の前に立ちはだかった。

凡人には真似できない鮮やかな掃射によって、「ジン」や「ゲイツ」の頭部メインカメラや武装を撃ち落としてゆく。

「やめろオ！」

こんな一方的な戦いは、卑怯だ！

そう願って呼びかけるが、次の瞬間、そんなキラの許にビームブーメランが飛んで来た。キラは反応し、機体を反転させて、光の刃をかわす。だが間髪置かず、中距離からフォルティス・ビーム砲が放たれて来たため、慌ててシールドで受け止めた。

(容赦がない、この正確さは……!?)

その牽制に気を取られている内に、キラの背後を「ジン」や「ゲイツ」が通過してゆく。キラは別方向に注意を引かれるあまり、彼らの突破を許してしまったのだった。

——くそ……！

ギリ、と歯を食いしばる。——と、そんな彼の前に一機のモビルスーツが参入した。それは返り血を浴びたような真っ赤な色をしていて、見紛うはずもなかった。

それは「ジャステイス」だった。

「アスラン……！」

「そんなことをして、ヒーローにでもなったつもりか！」

ここに来て、自由の翼と正義の剣が、ふたたび激突する。

「——戦争は、ヒーローごっこじゃない！」

親友の言葉が、キラの胸に突き刺さる。

——だったら正義は、いったいどこにあるっていうんだ……!!

あるいは、アスランの云う『正義』こそが、この世の理だというのか？ 敵と定められた者を弾圧し、平和のためと云いながら、そいつらを生贄に強いるような正しさ——しかし、そんなものが本当に「正しさ」と云えるのだろうか？

あいにくだが、そんなもの、キラは信じたくなかった。

「——キラ！ アスラン！」

視線の先で、まともな対話もなく親友と兄が衝突し始めたのを認めて、ステラは急ぎ駆け付けようとした。キラとアスランが戦ってしまっているのなら、ステラは、キラの方が心配で仕方がないのだ。

だが、それでもそのとき彼女の頭に、一抹の不安が過ぎつたのは事実だった。それと違うのは、ステラがキラの力を「認めていない」とか「信じていない」とか、そういうことではない。今回ばかりは「相手が悪すぎる」——ということだ。『フリーダム』と『ジャスティス』が正面から戦えば、迫撃戦に特化した後者の方が優位がちになり、それ以前に、現実としてキラは「あのアスラン」に勝てた試しがないのだ——『ストライク』のときも、『フリーダム』のときも。

——アスランを、止めないと！

すぐに“エターナル”に連絡し、ステラはラクスにミーティア01一号機の回収を依頼した。“ミーティア”には“ドラグーン”システムを応用した発信器が内蔵してあるため、一度指令を送れば、母艦エターナルの位置を探知し帰還するまでの工程を、殆どオートマチックでやつてくれるのだ。

しかし、そんな矢先のことだった。“クレイドル”のコクピットに、突然けたたましいアラートが鳴り響いた。ハツとして顔を上げると、自分の浮かんでいる空域を、出所不明のビームが遠雷の如く迸った。咄嗟に反応し、飛びずさることで回避する。と、一拍置いて“クレイドル”の軍用回線に鼓膜を揺るがすほどの割声が轟いた。

〈見つけたぜエ、 “クレイドル”！〉

「!?」

〈——と！ 金髪のお嬢ちゃんンッ!!〉

うるさすぎる割声と共に、暗澹色の“イーゼス”？ ——いや、それと酷似したモビルアーマーが矢のように突撃して来た。

そいつは爆発的な最高速度トップスピードに乗って、機首先端の四本爪ビームクローに突き立てて来ている!? ステラは“ミーティア”ごと機敏に旋回することで、その鉤爪による突進を回避した。

「あれは……!」

自身の脇下を、通り魔のようにすれ違つて行つたモビルアーマーを見届け、ステラはくつと息を詰める。そいつは“ミーティア”にも匹敵する全長を誇る大型機だったのだ。通常規格のMSに比して二回り、三回りも巨大で、暗澹色のツートンカラーに彩られた巨体は、得体の知れない妖怪のようですらある。

やがてそいつは重心移動による華麗なUターンを決め、再び“クレイドル”に突進。よく見ればステラには見覚えがあつた。“インパルス”みたいな再生機能と、“イージス”みたいな変形機構を持つ、その敵の名は——！

「……………」

——名前が、出て来なかつた。

ステラは、困つた。

「……ここで会つたが百年目エー！ 今日こそテメエを殺戮するぜ、ステラ・ルーシエええ！」

「——オマエー！ 邪魔だツ！」

いつか見た漆黒の寄生獣が、ステラの前に立ちはだかつた。

ザフトのMS部隊が、鬼にでも取り憑かれたかのように怒濤の勢いを以て“エターナ

ル”に迫って来る。いくら最新鋭とは云え、”エターナル”は直掩の機動兵器もなしに生き残れるような戦艦ではない。

したがって”エターナル”の護衛には、他の二隻から派遣された”ブリッツ”やM1隊が赴任していた。

”ブリッツ”を駆るニコルは”グレイブニール”を射出し、アンカーの打突が迫って来た”ジン”の装甲を貫き、敵を行動不能に陥れる。だが、間髪置かず明後日の方角から”ゲイツ”が飛び来たり、そいつは2連装ビーム・クローを発心させながら、勢いよく”ブリッツ”に躍りかかる。

「くッ、これでは罅が明かない！」

敵機のクローを”トリケロス”で受け止めながら、ニコルは内心”ゲイツ”のパワーとスピードに舌を巻いていた。あらゆる”G”兵器の長所を併合して開発されただけあって、この最新鋭の機種は”ブリッツ”に負けずとも劣らぬ戦闘力だ。

いや、純粋な戦闘用MSとして特化している分、既に”ゲイツ”の性能は”ブリッツ”をも上回っているのかも知れないが……。

〈ニコルくん！〉

そのときだ。脇から澄き通った女性の声がして、ニコルはハッとす。

それと同時に、低出力のビームの掩護射撃が飛んで来た。運が良かったのか、その光

線は「ゲイツ」の左腕を肩口から挽ぎ飛ばし、これによりクロウを失った「ゲイツ」はやむを得ず後退してゆく。

マユラの「M1」だ。

「すいません、助かりました！」

「もう！ 切りがないよ！」

同時に、艦尾の方のジュリ機からも悲鳴のような愚痴が聞こえて来る。

「フリーダム」や「クレイドル」ならともかく、押し寄せるコーデイネイターのMS部隊を、いつまでも自分達だけで払いのけるには無理がある。

それは決して弱音ではない。物量差もあれば、あくまで状況を鑑みた結論だ。ついに業を煮やしたニコルは、母艦に通信を繋いだ。

「バルトフェルド艦長、撤退を！ このままじゃ追い込まれます！ ザラ議長は僕達と歩み寄る気がないんだ——さっきの放送が証拠です！」

ニコルが思うに、パトリック・ザラがわざわざ古い回線で声明を出したのは『未必の故意』に他ならない。

それと云うのも、三隻同盟にうっかり声明を聞かれるならそれで良し。たとえ聞かれていなくても、本来の目的であろうザフト全軍に発破をかけることが出来るのだから、さして不都合もない。

結果的に「ブリッツ」や「エターナル」が放送を傍受してしまったために、すべてはパトリックの計算通りになった。まったく巧妙な演説だったと——内心で焦りを憶えながら、ニコルは続ける。

「月艦隊は撤退を始めています、このまま膠着状態が続けば、こちらが包囲されますよ——」

「たしかにな……。ちい、こちらも一時撤退するぞ、ラミアス艦長！」

バルトフェルドが鋭く呈し、通信先のマリューは、硬く唇を結び、頷いた。

「モビルスーツ全機、呼び戻せ！　「フリーダム」と「クレイドル」は!?」

「…………… あれは……………」

指揮官席に坐すラクスは、何かに気付いていたようだ。

バルトフェルドは胡乱げに、彼女が見ている方向に顔を向ける。まず視界に映ったものは、主君から切り離されたものの、自律的に「エターナル」に帰還している「ミーティア01」——そして、その彼方には交戦中の「クレイドル」と「フリーダム」の機影があつた。

「……………」

中でもバルトフェルドの目に留まったのは、あの「フリーダム」に対し互角か、それ以上に苛烈な立ち回りを見せている深紅のモビルスーツ——「ジャスティス」だった。

その機影にハツとして、バルトフェルドは隻眼を見開く。

「——なるほど、ザラ少年か……!」

元よりアンドリユー・バルトフェルドと云う男は、真面目な少年が好物である。

——やけに搭乗員が少ないように見えるのですが、気のせいでしょうか?

不器用なほど生真面目で、抜けているのかそうでないのかもよく分からない、そんな少年の顔と声が脳裏に浮かぶ。

父親に似ているのどうかさえ、まだまだ分からないような少年だった。……しかし、だからだろうか? だからこそ、バルトフェルドは彼のが気に入っていたと云うのに。

「心苦しいね、まったく。どうにも情が湧いてしまう相手、っていうのは」

「それだけではありません。問題なのは、もう一機——」

「ン?」

ラクスの涼やかな視線は、既に元婚約者ジャステイスから、もう一方のザフト機に向けられていた。

それは漆黒色をしていて、宇宙に混じって上手く判別がつかない。が——交戦中の「クレイドル」よりも遥かに巨大、拳句に「クレイドル」が「ミーティア」を装備して、ようやく対抗できるような全長を誇っていた。文字通り、化物のようなモビルスーツだったのである。

幾度となく戦場を踏んで来たバルトフェルドは、しかし、その規格外さに流石に驚いた。

「なんだ、アレは……!?!」

生憎“エターナル”からは、例のザフト機の全長を測定することは困難だった。ましてやバルトフェルドは隻眼で、深視力にはハンデがある。しかし、そいつの巨大さは一目瞭然だ。明らかに“クレイドル”の二倍……いや三倍? の大きさがあつたからだ。

このときバルトフェルドを驚かせたのは、一種のカルチャーショックのようなものだろう。

ずっと地上部隊としてリビアに駐屯していた彼にとつて、ザフト宇宙軍の発想は想像を絶していた。——なんなんだ、あのゲテモノは……!?!

「ZGMF—X—11A “リジエネレイト”——あれはアッシュ・グレイ隊長の機体です」
 どうでもいい情報を憶えるのが苦手なステラと違って、ラクスの方はしっかりと憶えていたようだった。

「ああもバカデカイ機動兵器を造れるようになるとはな…… “ミーティア”も大概だが、ちよつと前線を離れてた間に、時代は進歩したモンだ」

「なに呑気なこと云つてんですかつ、隊長!」

「今は艦長と呼べ? ダコスタくん」

妙にゆったり感心しているバルトフェルドに向け、ダコスタが青褪めながら横槍を入れた。

ダコスタは彼の性格らしく、ごもつともな正論を叫ぶ。

「どつちもザフトの特務隊員ですよ！ あんな連中に追いかけて回されちゃ、命がいくらあつたつて足りませんよ！」

「そりやそうだ」

「どうするんです!?!」

「どうするもこーするも、〃フリーダム〃と〃クレイドル〃が戻れん以上、迂闊に母艦が引くわけには行かんだろうが」

既に〃アークエンジェル〃と〃クサナギ〃は転進して、宙域を離脱する体勢を整えていた。

だが肝心の〃エターナル〃は、ザフトのエースに膠着されている。〃フリーダム〃と〃クレイドル〃を回収しなければ、迂闊に後退できない。それが文字通り、母艦が果たすべき役割であり——勝手な都合で破ってしまえば、パイロット達との信頼関係にも悪影響を及ぼす。

へ——ううん、いいよ。先に行つて

しかし、そのパイロットから率先して指示があつた場合は、その限りではない。

必要なのは「合意」——だからこそ、そのとき入った凜とした声が、バルトフェルドたちの苦渋の表情を消し飛ばした。だがラクスは身を乗り出して、不安に耐えかねたように発した。

「ですが、あなたに付きまとうアツシユ・グレイ隊長は……！」

〈なんとかする〉

ステラは短く、それ以上を云わなかった。

拡げられた“クレイドル”の双腕から、二基の“エンドラム・アルマドール”が鮮やかに飛び立つ。

鋭角的な軌道を描きながら目まぐるしく旋回するドラグーンシールドは、瞬く間に巨大な“リジエネレイト”を包囲しては、間断なくビームを浴びせかけ始めた。獲物を漁る鉄網が如く、周囲に間断なく巡らされていくそれは——“クレイドル”が放つ光の“糸”だ。

その威嚇的な“糸”をかわし、隙間へと逃げ込んでいくアツシユであるが、そうして追いやられた先に“ミーティア”の大火力砲を撃ち込まれるものだから、アツシユとしては堪ったものではない。

——なら、鬱陶しいドラグーンを叩き落せばいいじゃないか。

誰もがそう思うだろう。事実アツシユとしては、そのような結論を出すまでに時間は掛からなかった。

だが、それが愚か者の発想であることに気付くのも、彼としてはまた驚くほど一瞬の出来事だったのだ。

「お、オレは幻覚でも見てるのかア!？」

繰り出されるドラグーン攻撃を懸命にかわすものの、アツシユは内心で驚きを隠せない。

——以前「クレイドル」と交戦したとき、ヤツの「ドラグーンシールド盾」はもつと拙く、ずっと

単調な動きをしていた!

しかし今、ドラグーンは当時とはるかに違う——なんとというか、生物的で滑らかな動き——予想もつかない鋭敏な動きをするようになっていた。

何よりそこから繰り出される射撃精度が、前回の比ではなかった。

「くウウツ！」

あのとき、任務を遂行できなかつたアツシユの屈辱は、凄まじいものだった。

抹殺目標だったラクス・クラインを取り逃がすばかりか、ステラという——巷でアイドルでもやっていればいような——少女に銃撃戦でもMS戦でも撃退され、拳句の果

てには、それが原因で「テストメント」すら強奪されてしまったのだから。

——あの小娘は、疫病神なんだよ！

だからこそ「クレイドル」を倒すため、アツシユはすっかり埃を被っていたシユミレータまで起動して、戦闘の研鑽を重ねた。軍のデータベースを呼び起こし、特務隊の権限を活かして、「クレイドル」の武装から何から、徹底的に調べ上げて来たのだった。

——そう、データベースを活かして……？

「ン？」

そこでアツシユは、あることに閃いた。

すると、にやり、と人の悪い笑みを浮かべ、直ちに強襲形態に変形する。

ステラ曰く「ゲルズゲー」のような半人半虫の様相に変態したのだが、すぐに加速して「クレイドル」への格闘戦を仕掛けに行く。

「そうさ、その遠隔兵器はマニュアル操作だ！」

「!？」

「こう近づけば、四方からの攻撃は無理だな!？」

読みとしては、悪くなかった。

「接近戦だッ！」

「来るなら……っ!？」

だが、相手を選ぶべきだった。

息巻いたところまでは良かったが、肝心の「クレイドル」は格闘兵装として、「ミーティア」の両アーム部より長大な光の聖剣を発振したのだ。

そしてそれは、既に大型の「リジエネレイト」の全長を凌ぐ、超大型のビームソードだった。

「接近戦^{インファイト}って云つただろおツ?!」

次の瞬間、超大型のロングビームサーベルが、迫りに迫つた「リジエネレイト」の右腕と左脚を、中距離^{ミドルレンジ}から切り飛ばした。

ステラのそれは、どう鼻屑目に見ても接近戦^{インファイト}ではなかった。

「ぬおおおツ!」

怯んだ一瞬の隙を突き、鮮やかに「クレイドル」は転進し、離脱してゆく。

再生可能なはずの「リジエネレイト」は、再生する暇もなく、敵の撤退を許したのだ。

母艦が宙域を離脱するのを認めてから、キラは焦っていた。

ステラが云つた——『自分達が重荷になるくらいなら、先に「エターナル」を離脱さ

せるべきだ」という意見には、キラも本心から賛成していた。

だが、それもこれも、結果的に自分達がザフトの追撃を振り切ることが出来なければ、何の意味もない作戦だ。

と云うのも、結局“フリーダム”か“クレイドル”のどちらかが、ザフトの追撃部隊を撒くことが出来なければ、ストーキングされた末にまた戦闘になつてしまう。万が一そんなことになつたら、それこそ“エターナル”を先に行かせた意味がない。

だからキラがやらなければならないことは、なんとしても目の前の“ジャステイス”を振り切ること。

もつとも、それを簡単に許してくれるような相手ではないことは、十分に承知している。

自慢ではないが、彼とは長い付き合いだ。幼い頃は優秀で、優秀であるがゆえに完璧を求めていたアスランが、ここに来て自分を逃がしてくれるはずがないのである。

打ち負かすか——とにかくどうにかしなければ、執拗に追っかけてくることも明らかだ。

「アスラン……ッ！」

「キラ……ッ！」

睨み合い——ふたりが動こうとした、次の瞬間だった。

ふたりの頭上から、無数のミサイルが「ジャステイス」目掛けて飛んで来た。「なに!!?」

が、察し物の「ジャステイス」はすぐさま反応して見せる。即座に後退しつつ、正確無比なビームライフルを応射し、ミサイルすべてを被弾する前に叩き落とす。

次の瞬間、アスランは見た。他ならぬ彼が叩き落したミサイル——その噴煙の中から、雲を突き破るように「白い矢」が飛んで来るのを。

それは本来、アスランが授与するはずだった「ミーティア02」——右アーム部から長大なビームサーベルを発振しているのは、間違いない——「クレイドル」だ!

躊躇いが一瞬だけアスランの脳裏に奔るが、通信機から響いて来た声に、現実を引き戻される。

戦場に割って来たステラは、警告も兼ねて、高い声色で叫んだ。

「——長いよっ!」

「クレイドル」が繰り出した、突き立てて来た光の刃は、簡単だった。

アスランはすこし余裕をもって、安直に立てられたその「突き」をかわす。

だが、ロングビームサーベルは、長かった。

「ウツ、長い!!?」

想像を絶していたのか、アスランは意表を突かれると態勢を崩し、無重力に流されて

しまった。

その隙に「グレイドル」は、かつらさうような形で「フリーダム」の手を掴み、「ミーティア」の加速力に物を云わせて戦線を離脱して行った。

「……しまった！」

アスランはそこで、自分が獲物を逃がしたのだと云うことに、ようやく気が付いた。

だが、追ったところで機動性が違い過ぎると言うことくらい、すぐに判った。

——まさか「グレイドル」が「フリーダム」を助けに来るなんて……！

だが、別に悔しくはない。あれは妹の形をした別人なのだ。キラは昔からお人好しだから、その「別人」が持っている「違和感」に気付いていないだけなのだ。

——そうさ、あれは断じてオレの妹ではない……！

アスランは自分にそう云い聞かせることで、ひとまず自分を納得させた。

やむを得ず撤退していく地球軍艦隊に混じって、「レムレース」も戦線を離脱していた。

「ドミニオン」までの距離は、まだ遠い——だが、このときフレイは母艦に急ごう、とは考えられなかった。

冷や汗が鬱陶しく、乱暴にメットを取り払った髪は乱れている。青褪めた表情には、放心した雰囲気があった。

——何だったの……さっきの兵器は……。

何が「ジェネシス」——何が創世？

あいにくフレイには、それが地球の終焉を約束したものにしか思えなかった。

——アレ、絶対に破壊しなくちゃ……！

母艦へ急ぐ気にならないのは、きつと——

目的地が、違うだろう？

魔女のようなもうひとりの自分——本能が、そう叫んでいたからだ。

残された時間は僅かだ。

一刻一秒が惜しい彼女は、躊躇うことも迷うこともなく、意を固めて顔を上げた。そのまま通信機に手を伸ばし、母艦に連絡を入れる。

「ドミニオン」管制——「レムレース」は、月に戻ります」

オペレータは、その唐突な物言いに動揺していた。

「——テンペスト」モジュールを用意して、補給はいらない」

機動性に優れる「テンペストストライカー」なら、月基地までそう時間は必要としないだろう。

どのみち、もう二度と使わない装備だ。
そう云ってフレイは、通信を切る。

「——このままには、しないわ……」

独白のように溢したあと、怒りに血走った眼光が、その端正な表情に浮かぶ。
それは、悪鬼にでも憑り憑かれたような、憤怒の形相——

まるで「破壊者」の悪意が、そのときフレイに乗り移ったかのようにだった。

『過ぎ去りし日々』

パトリック・ザラという男の人生は、常にコーデイネイター達の革新と共にあった。

——これは、今より50年も前のこと。

C. E. 15、コズミック・イラ “最大の事件”と云つても過言ではないジョージ・グレンの告白。「ボクは、ボクの秘密を今明かそう——……」木星に旅立つ前に行われた大々的な発表によつて、世界中に衝撃が走った。コーデイネイターの是非をめぐつて、波紋が広がり、世界を動揺と熱狂が包み込んだのだ。

当時、世界の最高権力を握っていた国際連合——現在の地球連合の前身——は、世界中に遍く拡がった混乱の鎮圧と抑止を目的として、翌年には「人類の遺伝子改変に関する議定書」を採択。ジョージ・グレンの不在を好都合として、以降のコーデイネイターの製造を国際的に禁止する法案を決定させた。

しかしながら、法的に禁じたからと云つて、一度ばら撒かれたされたデータに歯止めを掛けることは叶わなかつたらしい。人間の胎児に対する遺伝子操作は表面上は非法とされたが、それでも内密にコーデイネイターを生み出そうとする資産家達は後を絶

たなかった。彼らは、己の子を第二のジョージ・グレン——すなわち「類稀なる天才」に為そうと考えたのだ。

——みずからの子ども達には、優れた才能を持たせたいじゃないか！

——それが出来る、と、ジョージ・グレンが教えてくれた！

——遺伝子操作をして、何が悪い!?

独善的とも云える機会主義者達のエゴを受けて、パトリック・ザラは遺伝子操作が違法化されてから実に7年後のC・E・23年、大西洋連邦で誕生した。

そしてそれは、壮絶な人生の始まりでもあった。

優れた知的才能、運動能力を有するコーディネイターとして生を受けた。パトリックであったが、当時の国際法が遺伝子操改変を違法視している以上、彼は周りに「コーディネイターであること」を悟られてはならなかった。当時の世間は特に神経質であり、「コーディネイターの精製を行っていたシカゴの病院が焼き討ちにされ、医師や看護師、患者までもが虐殺される事件が起こるような世相だった。コーディネイターであることが露見すれば、凄まじい非難——いや、最悪弾劾ジエフサイドの対象とされる時代だったのだ。

自分や両親に危害が加わらぬよう、彼は幼少の頃から発揮できる力を抑え、持っている才能を隠し、ひいては波風を立てぬよう自分すら殺して生きて来た。なまじ賢く知能発達が早かっただけに、その頃にはもう、徒競走かけっこがあれば手を抜いて一位を譲るような

精神だった——齡二桁にもまだ満たない、物心ついたばかりの少年が。

幼少期は「我慢」という二文字で、塗りつぶされたような日々の連続だった。

そこに転機が訪れたのは、ジョージ・グレンが『エイデンズロー実績』を持って帰って来た頃だったか？ 革命的な彼の活躍を受けて、以降はコーディネイターを寛大視する機運が高まったのは。

——我々もつと遠くへ行ける！ さらに高みを目指せる！

——我らの行く道は、果てしなく広がっているのだ！

今になって思えば、あれほど勝手な言い草と騒ぎようはなかつたらう。それまで蛇蝎の如く嫌悪しておきながら、結局は英雄のように囃し立て、コーディネイターを称え始めたのだから。

かくして、遺伝子操作を肯定視する機運が高まり、国際連合は著しく失墜。やがて悪意のように膨らみ上がる民意に押し負けるような形で、C. E. 30年頃には遺伝子操作が合法化されるようになった。

そこでようやく……「我慢」の日々が終わった。

だが結論から云うと、それが更なる悲劇を招くことになる。

遺伝子操作が合法化された途端だった。パトリックのように極秘裏に生誕していたコーディネイターたち——すなわち、彼と同じ「我慢」をして来た同世代の同胞達が、

その出生を肯定されるや否や、世界各地で学術・スポーツ・芸術、あらゆる分野で唐突に名乗りを上げ始めた。

——それはそれは、猛烈な勢いで。

——世界各地で機を待ち望んでいた群雄達が、一齐に「歓喜」の叫びを挙げているかのようなだった。

やがてC・E・40年頃に突入すると、あらゆる分野でコーデイネイター達のはつきり台頭するようになる。そこには本来、悪意などないはずだった。しかし現実には、ナチュラルとの間にある「人間としての差」を残酷なまでに明らかにして行ったのである。

親の代の「経済力」の差が、子の代で「能力」の差を形成した。

そしてその能力の差は、その者が長じるにつれ経済力の差に帰結して、最悪の循環を作り出す。

やがて貧困と屈辱の輪廻から、自分達は永遠に脱却できないのだと悟ったナチュラルたちは、次第にコーデイネイター達への嫉妬を表面化させていく。歪な精神に裏付けられた反コーデイネイター感情は悪化を始め、各地で反コーデイネイター運動が過激化。ジョージ・グレンが己が^{おの}人生を悲観視したナチュラルの少年に暗殺された大事件を皮切りに、コーデイネイターを対象としたテロ行為が世界中で横行するようになった。

そしてその反感の「牙」は、いつ自分に向くのかも分からなかった。

しかし、では？ どうしろと云うのだ？

——どうすれば、良かったのだ？

この頃、まだ二十歳を過ぎたばかりだったパトリックには、分からなかった。ただ、理不尽が現実にあっただけだった。

——誰が望んで、コーデイネイターにしてくれと頼んだ？

わたしは、なりたくてコーデイネイターになつたわけではない。彼らより特別になりたかつたわけでもない。わたしをコーデイネイターにしたのは、わたしの両親ではないか。

なのに何故、わたしが非難され——迫害され——弾圧されなくてはならない？

——そんな当たり前のことすら理解できないのか、ナチュラルという連中は！
些細で、微妙な。

そのちつぽけな疑問が、全ての始まりだったのかも知れない。

そういう意味では、当時の地上にはコーデイネイターの楽園など存在しなかった。

むしろ、野獣が蠢く密林に丸腰で放り出されたような体感だったと、多くのコーデイネイターは後日になって語っている。

C・E・50年代頃になって、パトリック・ザラは黄道同盟Zodiac Treaty（現在のザフトの前身）という組織の創設責任者として活動していた。

レノア・ザラと出会い婚姻したのも、シーゲル・クラインと意気投合し、コーディネイターの諸権利を獲得するよう結託したのも、この頃だった。

『地球で暮らしている限り、今のわたしたちは肩身が狭すぎる——』

三十代にして、パトリックは大西洋連邦に邸宅を構えていた。

その穏やかな庭の上で、あるときに漏らしたそれは、単なる弱音などではない。おそらくは、凄惨な時代背景から生まれる疲弊——それが彼に、そう云わせていた。余人には、底知れぬものだ。

『……どうしたの?』

訊ね返して来たのは、お腹にひとりの赤子を宿している女性。

この頃、記念すべき第一子を身籠ったばかりの——レノア・ザラだった。

彼女は庭園の先で、白く塗装された木彫りの椅子ガイデンチェアに座っていた。テーブルの上には惣菜が特集された料理本が置いてあり、お腹だけは冷えぬよう気品あるポンチョを纏っている。この頃のレノアは、パトリックと違ってまだ三十代に達しておらず、それでも、三十路に近いことは確かな年齢だった。

だと云うのに、きよとんとして訊き返して来る彼女の表情は、年齢不相応にあどけなかつた。育ちの良さが伺えるというべきか、純真ですらあつたのだ。

そんな彼女に、パトリックは滅多なことでは疲弊を見せることはない。しかし、彼女の雰囲気はどこか心を癒される気分になつたのは確かだ。彼は、神妙な面持ちで続けた。

『こんど、宇宙しふに新しい居住区ができるんだが——』

それはパトリックが、かねてより建設に携わつて来た新天地。

現在で云う、他ならぬ「プラント」のこと。彼は『いや……』と一度否定したあと『できるのではないな……わたしたちが築くんだ』と付け足した。

『今ある邸宅を売つて、そこに移り住もう——レノア』

『え……?』

パトリックがそう云つたのには、理由があつた。

簡単に云えば、今の地上が危険すぎる、ということ。このときのパトリックは、彼女に不安を与えぬように、この旨をそれとなく伝えた。

世界各地でコーディネイターを狙つたテロが横行し、次々とコーディネイターが弾圧されている地上には、もはや、安全と呼べる場所は約束されていなかったのである。

『「プラント」なら、少なくとも、そういつた危険からは逃れられる』

宇宙の現場を見て来ているパトリックには分かった。

「L5に浮かんだ『プラント』は、少なくともコーディネイター達の楽園だ。旧来の人種より、宇宙での生活に適応を示した新人類が、率先して開発した研究施設・開拓工場。この頃はまだ、地上の理事国から過酷な搾取を受ける立場にあつたが、それでもいい。それでも、身の回りに『敵』がないことだけは確かだつた。

『——何よりそれが、お腹の子のためになると思う』

云われ、レノアはハツとした。それが、亭主の仏頂面から出たとは思えない言葉だつたからだ。

たしかに、パトリックは黄道同盟の創設責任者として、これから矢面に立つことが多くなる。それは見方を変えれば、人々の反感を買いやすい人物になつてゆくということ。だからこそ、地上に住居を構えていてはテロリスト達に狙われる危険性が高まり、それはパトリックとしても、気が気ではない。加えて云えば、彼は仕事で家を空けることが多く、レノアひとり子育ての苦勞を背負わせてしまう形にもなるのだ。

——だつたらせめて、もつと快適で、何より安全な暮らしを。

願いから伝わる彼の気持ちは、このとき、痛いほど伝わつて来たレノアだつた。

しばし、考えるような仕草を見せた後だ。一拍置いて、彼女は慈しむようにみずから腹部に手を当て、にこやかに新しい命に微笑みかける。

『ききましたー？ お父様は、あなたのことが心配でしょうがないんですって！』

パトリックは、困った。

『茶化すんじゃない。わたしは本当におまえたたちのことを思ってたな——』

『あはは、似合わない台詞』

『むう……！』

『ふふふ。わかつてる。ありがとう——』

彼女は浅く嘆息ついて、納得したように続けた。

『でも、たしかにそうよね……』

——レノアの身の回りでも、実際に事件は起こっていた。

ナチュラルの集団に強姦された女性が、重ねられた暴行が原因で、死んだのだという。それは、レノアの同級生だった。犯罪の証拠は明然と残っていたが、警察機関は、あろうことか証拠不十分でこれを事故死として扱った。もっとも、ジョージ・グレンの暗殺犯が神経衰弱を理由に無罪にされた前例があるから、さして意外なことでもなかったが。

そう、そんな結末は別に意外ではないのだ。ただ、レノアとしては堪ったものではないだけで。

その事件は、ほんの一部ではあるが、密かにナチュラルとコーデイネイター両者の関

係を暗示していたのだろう。人種間での紛争というものは、他のどの争いよりも悲惨で、理不尽だということを。

『その……。シーゲルの所にも、こんど、娘さんが生まれるそうさ』

『あつ！』

『うちのことも話したら、アイツには《お前もか！ はっは、手が早いな！》なんて笑われたが』

なんとも微妙ないじり方だが、当のレノアはまるで意に介さなかつたのだろう。

それを聞いた彼女は、ぱつととして微笑む。

『クライン夫人から聞いたわ！ 予定日は離れているのだけれど、なんだか、この子と同年になりそうなの！』

『あ、ああ……。シーゲル達も、これを期に宇宙へ移り住むそうだから、何も不安に思うことはない』

それは、妊婦となった妻に対する、パトリックなりの心遣いだったのかも知れない。

彼はそこで、テーブルの上に置いてある料理本に気付いた。それを一瞥したのち、気を利かせたように云う。

『“プラント”には農業研究施設もある。子どもの成長が落ち着いたら、おまえも本業の農学博士に戻るんだ』

『あらー！ それじゃ、子ども達にロールキャベツを作つてあげることできるわね？』
『そうだな。赤子を抱えての移住は大変だと思ふが、わかってくれ』

そうして、彼らは彼らを生んだ地球から、移住する計画を進めるようになった。

それからしばらくして、実際に宇宙行きのシャトルに乗り込む日が訪れた。元あつた邸宅を売りに出し、既に「プラント」には新居の屋敷を手配してあつた。

シャトルの出立時刻になって、予定どおり指定席に着いていたパトリックは、通路側のシートに坐し、窓側をレノアに譲っている状態だつた。

—— シャトルが、離陸を始めた。

みるみる高度を挙げたところで、そいつは第一ブースターを切り離す。引力圏から切り抜けるために、最終加速に入るのだ。それまでとは明らかに違うGがかかったが、耐えられないものではない。

そのときだつた。

『わたしは、諦めないからな』

レノアは、急に隣から漏らされた声に振り向いた。すると声を発したパトリックと、

目が合ったように感じた。

しかし、それは違っていた。

彼はレノアではなく、シャトルの船窓から、地球を見下ろしていたのだ。

レノアもまた、同じように窓の外に目をむける。眼下に映った蒼い惑星は、まだ、丸く見えなかった。

『いま、こうして「プラント」に移り住む——地球を離れるということは、ある意味で逃げることなのかも知れない……』

周囲からの弾圧に怯え、同胞達が穏やかに暮らす楽園を目指して、住居を移りかえる。その行為は、一種の現実逃避ですらある。

だが、そうではないのだ——と、パトリックは自分に云い聞かせるように紡いだ。

『それでも、わたしは諦めない。いつか、この理不尽な世界を変えて見せる』

『パトリック……』

母なる蒼き惑星、地球——

そこに別れを告げながら、パトリックは決意を胸に、こう語った。

『いつか、ナチュラルとコーディネイターが共存できる日が来る。いつの日か、彼らが私達のことを理解してくれる日が来るはずだ』

その頃はまだ、信じていた。

『今はまだ、混沌とした闇の世界。だがわたしは、そこに大いなる光が昇る瞬間を見たい。暖かな光に照らされ、ナチユラルとコーデイネイターが共存できる世界——この手でわたしは、そんな時代を築きたい』

レノアは、やがて慈愛に満ちた表情に変わった。

すくすくと育ちつつある、お腹の新たな生命を撫で下ろした。

『だから《アスラン》——夜明けの名を？』

混沌とした世界に、太陽が昇る日が来ることを祈つて。

名付けられた、それは父親の切なる祈り。

『ああ——。いつかその子を、そんな世界に住まわせてやりたいな』

自分には、それが出来るのだと——

その頃はまだ——信じていた。

レノアの中に第二子が宿ったと、知らされたのは、それから数年が経つてからだ。

確かそれは、パトリックが「プラント」の中で、本格的に黄道同盟の党勢を拡大させていた頃だったろうか？

シャトルの中の決意も虚しく、現実には、その頃のパトリックに厳しかった。

「プラント」を所有する理事国——大西洋連邦を筆頭とする——は、宇宙資源によつて生み出される富を独占し、これを所有しない他の国々との格差を広げようと、「プラント」に対し無理難題とも云える重税を課していたのだ。

当然、こうした独善的な無心とも云える搾取に対し、反発を示す「プラント」の住民は数知れず、幾度となく両者は交渉の席を設けて来た。しかし結局、理事国側が一切の譲歩を見せないことで、すべてが決裂に終わり——果て、両者の緊張は徐々に高まつて行つた。ひいては、この状況に絶望し、方々で「プラント」の独立を求める声も上がり始めていたのである。

ナチュラルとは、歩み寄れないのか？——それはパトリックが、絶望に沈んでいた頃に届いた、嬉しい一報だった。

〈名前のこと、なんだけど——〉

この頃、多忙を極めていたパトリックは、屋敷に戻ることすら出来ずにいた。

だからこのときは、アプリリウスの議場の中で、電波通信を使って会話をしていた。
〈この子には、わたしが付けてもいいかしら〉

宿つたのが女の子だということは、早くから分かっていた。

電話越しに聞こえるレノアの声は、ひどく楽しげで、へ実は、ずっと前から考えていたのよ？と嬉々として語っていた。緊張した日々の中で強張つたパトリックの表情筋

も、このときばかりは、かすかに緩んだ。

「光がひとつで足らないのなら。たくさんあったら、もつと綺麗だと思うの」
パトリックは、ハツとした。

その言葉は、不思議と、胸に染み込んだ。

希望に近づけずにいる自分に、その言葉は、救いを与えてくれるような気がしたから。
「夜明けの空に、太陽がひとつじゃ寂しいわ。だから、それを支える無数の星があればいい」

誰もが平等に、等しく輝ける日が来ることを祈って。

名付けられた、それは母親の切なる願い。

「だからこの子には星の名を。——《ステラ》とつけようと思うの」

異論など、あるはずもなかった。

ふたりでひとつ。それは、素晴らしい名前だと思った。

——どんな闇にも立ち向かえるよう、光を放ち輝いた者であれ……。

そうした願いが込められた名前なら。

きつと、強い子になると思った。

「わたしたちは三人で！ ずっとあなたを応援しているから！ ——だから諦めずに、頑張ってくださいね」

涙が、こぼれた。

△元氣を出して。いつか世界が平和になったら——今度は親子四人で、幸せに暮らしましよう?△

C・E・70年 “血のバレンティン” ——

レノア・ザラが、帰らぬ人となった。

『あ……あああ……ッ!』

漏れたのは、パトリックの絶望の声か。

娘のステラもまた、この事件で行方不明になった。こちらは、生存だけは分かっていた——ブルーコスモスの幹部が「金の髪の少女を抱えていた」という情報を掴んだ、そのときから。

それで分かった。

核攻撃の首謀者が、ブルーコスモスであること。すなわち、ナチュラルであつたことを。

それまで、できるだけ抱かないようにして来た感情が、自分の中で爆発した瞬間だつ

た。

『ナチュラル、どもめ……………ツ!!!』

何かが、壊れた音がした。

『う、ううツ……………!』

いったい自分は、今まで何を求めていたのだろうか？

話の通じないナチュラル達と幾度となく交渉の席を設けて、それが何になつたらう？
なぜ、自分より劣る彼等の機嫌を取つて、媚び続けなければならなかつたのだろうか？

——これが、奴等が出した“答え”か……………! —

それまで隠して来たはずの敵意と憎悪は急加速的に沸騰し、やがて頂点に達する。

己の人生を振り返ると、おのずと浮かび上がつて来る真実があつた。地上における謂れなき迫害の日々。宇宙に逃れてからも、理事国の横暴に耐え続ける屈辱。そして今回の“血のバレンタイン”——

自分達 は、いつ だつて 虐げ らて 来た の だ ——
自らより劣るナチュラルどもの手によつて！

夢や希望は、祈りや願いは、夢想と消えた。

誰よりも自分の近くで、自分を支えてくれた者は殺された！

野蛮なナチュラルどもの、愚かな横暴によって。

『銃を取れ、アスラン……！ もはや、ナチュラル共を許すわけには行かない……！』

『ち、父上……っ』

『すべて終わらせてやるのだ！ ナチュラルどもを滅ぼしてな……！』

全ては、ここから始まった。

——わたしは、何かを間違っているのだろうか？

不意に、そんな疑問が頭に浮かんだ。

パトリックは「ヤキン・ドゥーエ」の管制室に詰めながら、そんなことを考えていた。遙か昔に忘れて来た、かつて夢を抱いていたころの自分が、何かを囁きかけて来るようだった。

——あの頃に比べ、多くの同志が、私の許から離れて行った……。

盟友であったシーゲル・クライン、その娘で、時には面倒も見たラクス・クライン。

恩に着せ、英雄として仕立て上げた名将、アンドリユー・バルトフェルド。

そして——最愛の娘だったはずの、ステラ。

（——『どんな闇にも立ち向かえるよう、光を放ち輝いた者であれ』——か……）
もし……もし、だ。

レノアの“祈り”がまだ、生きているとするのなら、いま、あの子が直面している『闇』
というものは、他ならぬ自分のことではないだろうか？

——実際、命を賭して、あの娘はわたしを止めに来るだろう……。

だが、それは何故だ？ やはり、彼女が愚かなナチュラル共に洗脳された強化人間だからか？ 自分のことを、既に親とも思っていない殺人兵器だからか？

——もし、わたしが間違っているのだとしたら……。

——わたし自身が、時代の闇になっているのだとしたら……!?

想像し、耐え難い不安に襲われた、そのときだった。

猶予をもって考える暇を与えぬように、背後から一つの声がかかった。

「——我らの勝ちですな、ザラ議長閣下」

声の主は、ラウ・ル・クルーゼである。

それは、いつもパトリックの耳元でささやき、その背を悪意の方向に押して来た、暗い誘惑の声。

「“プラント”は直にあなたのものだ。月基地に“ジェネシス”の第二射を撃ち込め

ば、すべてのことに片が付きましょう」

「……」

「何も躊躇うことなどありません、先に撃つて来たのは彼等なのですから？——思い知らせてやるのが、よろしいかと」

「……そうか。そうだったな……」

「そうだ。わたしは決して、間違つてなどいない。

迷いを、振り払う。

彼の云う通り、ヤツらが先に撃つて来たのだ——「ユニウスセブン」を……我らの樂園を……私の妻を。そしてあまつさえ、大量の核を用いて今回は「プラント」を壊滅させようとした虐殺者達に、みずからが犯した行為を思い知らせる瞬間が、ようやく訪れたのだ。大切な人を奪われるということが、どういふことか——その思い、ヤツらにも味合わせてやらなければ。

パトリックは深く嘆息ついた後、オペレーター達に声を張った。

「……ミラーブロックの換装、急がせろっ！」

もう二度と、迷わない。

二射目を撃つて、すべてを終わらせよう。

ナチュラルどもに思い知らせてやるのだ。この世界の真の導き手が、誰なのかという

ことを。

「月基地！ プトレマイオス・クレーターを撃ち滅ぼし、この戦争に片を付けるぞッ!!」

今度こそ、暗い時代に幕引きを。

今度こそ、闇の世界に夜明けを。

わたしには、夜明けの名を持つ——最愛の息子がっている。

ちっほけな光——星の輝きなど、もう必要ない。

太陽が昇れば、星はおのずと消えるのだ。

最後まで、戦い抜いてやろうではないか。

神に代わって、わたしたちが、ナチュラルに罰を与えてやるのだ。

『エンパシー』

“ジエネシス”の猛威に退けられ、“プラント”への第一波攻撃を中断した地球軍艦隊は、ザフトの追撃を振り切ったのち、デブリの物陰に滞留していた。

が、こうして終結した艦隊の頭数は、月基地を発った時の半分にも満たない。そればかりか、損傷の酷い艦も多く、負傷者も数え始めれば切りがないのが現状だった。

「——ああそう！ そうだよ！ ったく、冗談じゃない！」

こうした絶望的な状況に痲痺を起こし、先ほどから“ドミニオン”艦橋ではアズラエルが血走った表情で月基地との連絡を取り合っている。

「これは今までノタクタやつてた、アンタたち上層部トッブの怠慢だよッ!!」

アズラエルは、今ある惨状の責任を、すべて上層部に擦り付けているわけではなかった。

Nジャマーによって封印されていたはずの大量殺戮——それを先に破ったのは、現実
に地球軍である。そもそも彼らは、核兵器などに手を伸ばすべきではなかったのではな

いだろうか？ 大きな力を用いれば、相応の力で対抗されるのは必然だ。一方が手段を
択ばなければ、相手だって同様の報復をしてくることは、冷静になれば自明だったはず
なのに。

——そして実際に核攻撃を提案したのは、他ならぬアズラエルだ。

悪戯に“プラント”の危機を煽り、彼らは思わぬ反撃を喰らった——それはきつと、
いまアズラエル自身も落ち度として自覚しているだろうと、ナタルは思う。

しかし、だから云って、すべての責任が彼にあるわけではない。だからナタルは何も
云わないし、何も云えなかった。

「なんで今まで、あんな“デカブツ”に気付かなかった!? ——ああそうさつ、ヤツらは
“ミラージュコロイド”ステルスを使っていたんだ！」

あれほどの質量兵器を、月基地から捕捉されずに“ヤキン・ドゥーエ”後方に配置す
ることはまず不可能だ。第一、観測隊がそれを許さない。

しかし、可視光線を歪め、センサーから発される磁気を吸収する作用を持った“ミ
ラージュコロイド”ステルスを応用すれば、熱源そのものを電子計器の上から抹消する
ことも出来る。

ユーラシアの要塞“アルテミス”陥落の折に、その実用性は立証されていた。だから
こそ地球軍は、今まで、例の巨大兵器の存在を察知することさえ出来なかったのだろう。

「そして『それ』を連中に売つ払つたのは、他でもないアンタ達だろうがっ！」
 ナタルの耳に、手痛い言葉だった。

アズラエルが表舞台に出て来るより、遥かに前のことである。中立のコロニー『ヘリオポリス』で開発された『G』の中に、例の『ミラージュコロイド』ステルスを搭載した機体があつた。当時地球連合軍第八艦隊に所属していたナタルは、その警護ないし監視の役割もかねて『ヘリオポリス』に居合わせていたのだが、間違いなく、技術の流出源はそこだろう。

アズラエルの云う通り——ザフトにGAT-X207^ブ_{リッ}を奪取されてしまった——それはナタルたち軍部の責任で、そう云う意味では、ザフトに反撃の兵器を与えたのはナタルであるも同然だったのだ。唐突に思い知らされ、理不尽な罪悪感がナタルを襲つた。

「艦長、チャールルより救援要請です」

ちらりと、クルーのひとりが見遣る。

機関部に損傷を受けたらしい『チャールル』が、修理が追いつかずに困窮している現実があるようだ。

「……わかつたッ。すぐに向かうと返信しろ、位置は——？」

ナタルが云いかけると、通信席から怒声が割り込んで来た。

「おいつ！　ふざけたこと云ってんじやない！」

「……!?!」

「救援だア!?　なんでこの艦ふねがそんなコトすんだよツ!？」

ナタルには、逆にその発言の意味が理解できなかった。

現状、無傷の艦は決して多くない——ただ連絡を入れて来ないだけで、実際のところ“チャーチル”以外にも救いを求めている艦が点在しているのは明らかだ。

ナタルにはむしろ、彼らを助けてはいけない理由が思い当たらなかつた。あるいは、彼は友軍を見捨てておけ、とでも云いたいのだろうか？　猜疑して返答を待っている、憤懣な表情で怒鳴りつけられた。

「無事な艦はすぐにでも再度の総攻撃そうこうげきに出るんだ！　救援そんなコトより補給と整備を急げよツ
！」

ナタルは、絶句した。いや彼女だけではない、他のクルーの大半が、その言葉に愕然とする。

——何を云っているんだ、この男は……!?!
堪らなくなつて、反論する。

「そんな！　無茶です！　現状、我が軍がどれだけのダメージを受けているか——理事にだって、お分かりのはずでしょう……!?!」

全体の半数を失い、さらには満足に動ける艦も多くない。「G」だけは三機とも生存しているようだが、虎の子の「ペルグランデ」も、もはや一機しか残っていない。物量戦すらも見越せぬとなれば、ここで再度の総攻撃に出向くなど、自殺行為に等しい。

「ここは一旦基地に引き上げ、陣容を立て直すなりして、出直すところです！」

これ以上の犠牲を払うのは、賢明ではない。

それとも、彼はあの巨大兵器に突っ込んで行って、全軍で心中でもしたいのだろうか？

「あの兵器のパワーチャージサイクルが分からない以上、上層部に掛け合って、なにか停戦——和解の手段などを講じるなど、時間稼ぎを優先して——」

「——和解？ 停戦……!!? キミはいったい何を云ってるんだ!？」

アズラエルは目をひんむいて、語気も荒く問いただす。

その目は血走っていて、アズラエルは逆に諭すような口調で怒鳴った。

「誰が! いっ! プラント」を『国家』として認めたってんだ!？」

「……………!!?」

「ヤツらは宇宙の工場プラントを勝手に乗っ取ったテロリストなんだぞ! そんな連中と、なんぞ交渉なんてすんだよ!？」

喚き立てる論調は、幼稚な子どもそのもの——だが正鵠を射た言葉だっただけに、反

論することも出来ない。

自分達の主義主張が通らないから、武断を以て言い分を押し通そうとする行為。

それらを総じて——テロリズムと呼ぶのだ。

が、そもそも喉元に銃突き付けられていなければ、テロリスト達の要求など誰が真摯に受け止めるだろう？ あの遠隔兵器がなければ、どうして「プラント」の要求を呑む必要があるだろう？

目の前の武力に怯え、あつてはならない主張を許容してしまうことは、テロに屈するも同じ。その先には自由も正義も、勝利もない、ただ虐げられる屈辱の日々が待っているだけだ。

「——ヤツらの『力』に屈服しろと、キミは今そう云ってるんだぞ！ 状況が分かってないのはキミの方じゃないかっ！」

「だいたい『プラント』は主権国家ではないのだから、対等の立場で和解を講ずるなどありえない——それがアズラエルの考えだ。地球側が一度でも下手に出れば、思い上がったコーディネイターはますます調子に乗り始めるだろう。それは実質的に、地球軍の敗北を意味するも同義だ。」

——ヤツらは、昔からそうだった……！

——税を軽くしろと文句を云って来たり、独立させるとごねて来たり、まだまだ地球

の資源に頼らなければ自立などできないくせに！　まるで恩知らずな連中だった！

アズラエルは尊大な口調になって、さらに先を続けた。

「テロつてのはなア、銃”を持ちだしや相手が何でも云うこと聞くと思つてる連中のことなんだよ！　——だから余計に！　あそこに”あんな銃”残しておくわけには行かないんだッ！」

L5に浮かんだ”アレ”は、巨大な銃だ。

喉元に突きつけられれば、多くの者が恐怖に怯え、相手の便宜を図ろうとする——”プラント”との和解や交渉などという発言を溢した、ナタルのように。

——その弱気の姿勢こそが、テロリスト達を増長させるんだ……！！

自分達は正しいのだと——間違っていないのだと。

銃がなければ何も出来ないような連中が、そうして盛大に勘違いを引き起こす。

他ならぬ受け手の人間の弱腰が、武力主義者を錯覚させているのだ。

——だから”銃”さえなくなれば、多くの者が目を醒ます！

アズラエルは、弱った人間の盲点を説いているに過ぎない。

これは一種の駆け引きであり、ビジネス界で名を馳せた彼が最も得意とし、熟知している分野。だからこそ弱腰の姿勢は決して晒さず、直ちに総攻撃に乗り出さなくてはならない。どいつもこいつも分かっていない——！　アズラエルは戦闘屋への侮蔑を露

わに、シートに座った。

「月本部から、すぐに増援も補給も来る！ 確かに『ペルグランデ』は沈んだが、こつちには、まだ最後のカードだつて残つてるんだ！」

云われ、ナタルはハツとした。

そう云えば『レイダー』と『フォビドウン』は帰投したが、『レムレース』が月基地に向かつていた。そのことを、不意に思い出したのである。

アズラエルはパネルを操作し、シユミレータを起動した。あの巨大兵器の照準ミラーが現れ、射線が何通りにも調整される。

「なにが『ナチュラルどもの野蛮な核』だ！ あそこからも悠に地球を撃てる、あのとんでもない兵器の方が、はるかに野蛮じゃないか……！」

ナタルはようやく、彼の取り乱しように理解した。

彼女自身、まさか『プラント』が地球を撃つとは思っていなかったのである。……いや、それは正しい表現ではない。無意識のうちに、そんな恐ろしい可能性は頭から排除していたのだ。

宇宙に上がったコーデイネイター達にとつても、地球は母なる大地であり、貴重な食料の供給源である。だがもし、彼らが完全に自給自足の道を確認しているとすれば――

？

思慮していると、背後の方で先ほど救援を求めていた「チャーチル」が、唐突に爆発した。こうして論議を醸している内に、救援が間に合わなかつたのである。だがアズラエルはそちらを一瞥することもなく、真つ直ぐにナタルを睨んだ。

「ヤツらにあんなモノ造る時間与えたのは、オマエたち軍なんだからな！ 無茶でもなんでも、絶対に破壊してもらおう——「アレ」と「プラント」を……！」

やがてその鋭い視線は、「プラント」に向けられた。

「地球が撃たれる前に——！」

ナタルは両手を堅く握りしめた。

そう、地球を撃たせるわけには行かない。故郷を守るためなら、彼女達軍人は、弾除けにでも捨て石にでも、何にでもならなければならないのだ。

そうして話に上がっている「ジエネシス」は、連射が効かない。

元の機構が宇宙船推進用システムであつたことを考えれば、そもそも連射などする必要もないことから、ある意味では当然だが。

大量破壊兵器に改良——人によつては改悪と揶揄する者も多い——された“ジエネシス”には、大まかにふたつのミラーが存在している。

中でも内部ジエネレータからの核爆光を受け止める円錐型の第一反射ミラーは、“ジエネシス”がレーザーを発射する度に、膨大な熱量を浴びる。したがって、強烈なエネルギーに発振する基部が融解してしまい、その都度に交換する必要性があるのだ。そしてミラーの交換作業そのものには、数時間の準備期間が必須となる。

逆に云えば“ジエネシス”の全身にフェイズソフト装甲が採用されているのは、その『準備期間』に対応する暇を稼ぐため——。現に、外部からの攻撃に耐えうる強靱な装甲を持った“ジエネシス”は、文字通り難攻不落の要塞として顕現している。

実際に“ジエネシス”の開発作業に従事したザフトの製作者も「こいつは間違つても兵器にしちやいけねえ」と無責任に豪語しているほどで、それでいて理由を尋ねようものなら「攻略のしようがねえからだ」と返つて来るのだから救いようがない。

それほどまでに“ジエネシス”とは、人が人として造つてはならない破壊兵器だった。

地球軍艦隊と同様に、三隻同盟もまたデブリ帯の影に身を潜めていた。

損害は、ほとんどないと云って良い。もともと第三勢力として、ザフトと地球軍の横合いから介入する形を取っていたために、ザフトからの執拗な追撃もなかったのである。無事に「フリーダム」と「クレイドル」が帰投したことで、誰もが生還したことにほつと一息をつく。

が、悠長に喜んではいられないのは確かだ。

こちらも地球軍同様、ザフトの開発した新型兵器の威力をむぎむぎと見せつけられ、混乱の最中にいた。

あれだけの戦闘が起こった後だ。連合とザフト——どちらが先に次の行動を起こすかは、まだ検討も付かない。

だが、それでも「エターナル」の艦橋には多くの者達が集結していた。ラクスやバルトフェルドを始め、トールやニコル、マリユールやムウ——とにかく皆の姿がある。艦橋前面のモニターは「クサナギ」と通信が繋がっており、エリカ・シモンズの顔が、そこから覗き返して来ていた。

「発射されたのは^{ガンマ}γ線です。線源には核爆発を用い、発生したエネルギーを直接コピーレント化したもので、つまりあれは、巨大なγ線レーザー砲なんです」

観測上で知り得たデータから、例の兵器の正体や事実関係を照らし出していたのだ。

誰もが深刻な表情でその解説に聞き入っている——と、そのとき彼らの後方、艦橋のドアが開き、ステラが遅れて室内に入つて来た。

——すこし、体調を崩していたらしい。

気付いたキラが、そつと手を差し出す。すこし血色が悪いように見えたステラは、覺束ない動作でその手を掴み、慣性のままに過ぎて行こうとする身体を床に付けた。

「大丈夫？」

「うん……」

尋ねると、ステラは頷いた。

一方、なおもエリカの説明は続いている。

「地球に向けられれば、強力なエネルギー輻射は地上全土を焼き払い、あらゆる生物を一掃してしまふでしょう」

ステラは、顔を上げた。

「撃つて来ると思いますか？ 地球を？」

マリューが不安げに尋ねる。まさか、とは、誰もが思った。

現状「プラント」は豊富な宇宙資源を仕入れているが、食糧物資に限っては無尽蔵ではない。ただでさえ農業プラントであつた「ユニウスセブン」が壊滅した折、彼らは大きな食料源を失っている。そういう意味においても、地球で生成される食糧は彼らに

とって大切な財産なのだ。数ある懸念はひとまず脇に置いておくとして、いくら地球軍を牽制するためとは云え、*「プラント」*が本当に地球を撃つものだろうか？

もつとも、ニュートロンジャマーの影響で地上各地が食糧危機に陥っている現状があるのも事実だが、それもこれも、戦争に勝ってしまったえば問題にはならないということか？

問いには、バルトフェルドが答える。

「分からん、だがもう撃たれちまったんだ……*「アレ」*も、核も。どちらも、躊躇わんだろう」

硬質な声で、続ける。

「人は慣れるんだ、戦い……殺し合いにな」

「そんな……」

「戦場で初めて人を撃ったとき、ぼくは恐怖に震えたよ。でも『すぐ慣れる』と云われて

——嗚呼、確かにすぐ慣れた」

「——*「アレ」*のボタンも、核のボタンも同じ——と？」

「……。何か違うのか？」

きよとんとして、逆に訊ね返されたのが、マリユーの心に痛かった。

——分かっているのは、ボタンひとつで大量の人間が殺せる時代がふたたびやって来

た、という事実。

こんな時代に回帰するくらいなら、いつそNジャマーキャンセラーなど開発されるべきではなかったと思うのは、不謹慎だろうか？

だが、仕方がない。それは本来、枯渇しつつある地上のエネルギー問題を立ち行かす救世の産物であったはずなのに、人はあまつさえ、虐殺のための道具として優先的に使用したのだ。——その結果がどうなつたろう？ 人類は地上で凍死し餓死する無数の人間の放つたまま、天上で練り広げられる戦争を泥沼化させただけではないか。

そんなときラクスは、透き通つた声で溢す。

「どうして、そんなに簡単に人が殺せてしまうのでしょうか？」

直接、戦場で戦つたことのないラクスには、その理由は実感の湧かないものだ。

だからこそ、抽象的ではあるが、彼女は問う。

「兵器が争いを生むのでしょうか——？ それとも、人の心が？」

「みんな自分が可愛いのです。敵を撃つことへの躊躇いなんかは、気付いたところには、とつとつに意味を失つてる」

「いくら迷いがあろうと。自分が撃たれる恐怖には、人は勝てませんもんね」

それは酷く現実的な答えで、暗い声音で、ムウやニコルが答えていた。

「遠くから人を殺しているよね……。相手の痛みが、いつの間にか分からなくなるんだ」

そう発言したのは、ステラだった。

耳を奪われたように、ほとんど円形に並んでいた一同が、数歩分、後方に立っていたステラを見遣る。

ステラは、一斉に己に向けられた視線の数々が、ちよつとだけ怖いと思った。しかし、よく考ええると怖くはなかった。並んだ顔並みは、いずれもが、気心の知れた者達のそれだったからだ。

だから少しだけ尻込みしたが、なおも続ける。

「何も感じない……感じようとする心まで、失っていつちやうんだ」

その言葉に、真つ先に対応を取ったのはバルトフェルドだった。

彼は悪意はなく、しかし、問いただすように言葉を返す。

「どういう、ことかな」

「バルトフェルドさん！」

キラが抗議の声を挙げるが、ステラは意に介さずに続けた。

「みんなには、ずっと黙って来たけど……。ステラもね、前はそういう人間だった」

「!？」

「みんなに会う前に、大勢たぐさんの人間ひとを殺して来てるんだ」

みなまでは云わないし、云ったところで信じてはもらえない——いや、仮に信じ

て貰えたとして、議題が脱線していくだけだと思つたステラは、虚飾なく事実だけを淡直に述べた。

語弊を招かず、真摯に云つたのだ。

——ずっと何かを黙っている……何かを隠しているってことは、嘘を吐いていることと、同じになるのかな。

ステラは、漠然とそのように思惟した。

みんなが知ってるのは、ステラが連合の強化人間エカステンデットだつたつていう『事実』だけで。そこで実際に何をしていたのか……『経歴』までは、打ち明けたことがない。

——それは、彼らへの裏切りに等しいのだろうか。

実際のところ夢のような逸話だが、ステラはかつてGFASデ—X1ロイに乗つて暴れ回り、恣意的な破壊と虐殺行為を重ねているのだ。それは彼女が、当時のことを初めて他人に仄めかした瞬間であり、傍らに立つキラも、そのことに思わず啞然とする。

(ずっと、他人ひとには打ち明けようとしなかった過去のことなのに……)

思い返せば、キラも何度か、彼女の経歴については訊ねたことはある。

それこそ「ヘリオポリス」で再会した直後などは、興味——と云つては何だが、心配に思つていた配慮などから、数回に渡つて問うたことがあるのだ。

しかしいづれも、ステラ本人が打ち明けたがらなかつた雰囲気があつたため、そして

何より、キラ自身が女の子のパーソナルな部分にずかずか踏み入る度胸がなかったために、気を遣って有耶無耶にしていた。ステラとしては、その頃から目ざとく聞いて来なかった彼らの謙虚さに感謝こそしていたのだが、そんな彼女がいま、自分の経歴について率先して語っている。キラとしては、驚くのにも無理はなかった。

「あのときステラは、人の気持ちが理解できなかった。ステラのせいで死んでいくみんなの気持ちなんて汲み取れなかったし、これっぽちも分からなかったんだ」

一方的に撃たれる者達の、無念や憎悪——それらの感情が、当時のステラには分からなかった。

ただ「自分が死にたくないから」——そのようちっぽけな一念の見返りに、万単位の民間人を踏み潰した彼女は、誰が弁明しようと虐殺者であったのだ、かつては。

「遠くから人を殺している、その実感が湧かなくなるんだよ——多分、お父さんもブルーコスモスも、今はそういう状態になってるんだとおもう……」

相手に触れる機会すら持たなかった人間は、自分のせいで害を被る相手の気持ちが見えられない。ひろい例で、肉を食すとき挨拶を云えない子どもが増えているのは、包丁で全身を断たれゆく牛鶏の恐怖と苦痛が想像できないからだ。

相手の立場に立って考える思想を失った人間は、自分の都合だけで善悪を判断するように落ちぶれていく。

「でも、もうあんなのは繰り返したくない。繰り返すわけには行かない」

「ステラ……」

「——『アレ』が撃たれたとき、悲鳴が聞こえたの。たぶん……みんなの」

その言葉に、誰よりも反応したのはバルトフェルドだった。

「だからもう、絶対に撃たせちゃダメだ——」

「そうよね……」

そうなってしまうては、全てが遅いのだから。

会議が終わると、それぞれが持ち場に戻って行った。

運営する艦の違う者達は小型艇で自分達の艦に戻って行ったし、同じ『エターナル』に所属する中でも、ステラはまた体調を崩して自室の方に向かつてしまった。その顔は青白く、キラとしては心配だったが、艦橋を出て行くところまでバルトフェルドに呼び止められたため、付き添いにはラクスに行ってもらった。

「あの娘は、体調を崩したと云ってたな」

「えっ?」

「原因は何だ？——さっき云つてた『悲鳴が聞こえた』ってやつか？」
キラは呆然として、曖昧に答える。

「分かりません。でも、たぶん……。驚きました、ずっと前からあの娘は……。なんていうか、ずっとパーソナルな部分を隠して来たところがあつたから」

キラは感慨深そうに続けた。

あんな風に自分の昔話について語るなんて、滅多なことじゃなかつたんです。

「ああして過去のことを打ち明けてくれたのは、きつと、みんなのことを信頼してのことだと思ふんです」

「そんなことより、気になる。——『ジエネシス』が戦線を貫いたとき『悲鳴が聞こえた』っていうのは、なかなかどうして異なることだ」

——まさか、連合軍と通信回線が繋がってオープンにされいたわけでもあるまい？

たしかにバルトフェルド達も、ステラと同じように『ジエネシス』によつて大勢の間が消えていくのを目撃している。

だが、それでもステラと違うのは、彼らはその光景を『見ていた』だけだ。一方でステラは、現実にもみんなの『悲鳴が聞こえた』と云っている。

「普通の人間は、そういう能力は持つてないだろう？」

「……何が、云いたいんですか？」

「ボクはこう見えて、本業は広告心理学者でね。ついでに訊くが、きみは『共感力者』^{エンパシー}という言葉を知ってるか？」

キラは質問に答えられず、その沈黙がそのまま解答として受け取られた。

「ならばサイコパス——『無共感力者』という言葉は？」

「分かります。いわゆる、本当に自分のことしか考えられない人達のことですよ……？」

「ああそうだ。先天的に脳に障害を持っていて、自分の周りにいる人間がテレビゲームのキャラクターほどにししか認識できないと云われている——だから周りの人間に感情移入することが出来ず、ひたすら利己主義に生きている者達のことを指している」

他人への善意、温情、共感、同情——

それら「相手を思いやる感情」は、突き詰めれば人間が潜在的に持っている愛情心理に起因する。

が、端的に云って無共感力者^{サイコパス}というのは、その「愛情」を微塵にも持つて生まれて来なかつた人間のこと。そもそもその共感回路が損傷・欠落しているから、人生の中で自分以外の人間に共感したり、感情移入することが出来ず、何事も個人的な委屈凌ぎの感覚で行動するため、愉快ならば他人を蹴落とすことも躊躇らわないと云われている。

「——その対極にあるのが、エンパスだ。共感力や感受性が高すぎて、周囲の人間に起き

ていることすらも『自分のこと』のように置き換え、感知してしまう体質を持った者達」それを抱えた人間を「患者」と呼ぶほど、深刻な病気ではない。ただ、一般人より周辺に渦巻く感情エネルギーを敏感に察知してしまつて、ことあるごとに過敏に共鳴してしまふだけだ。

サイコパスと違うのは、こちらは殆んど後天的に覚醒するケースが多く、人柄、ひいては出身国の文化柄などにも諸な影響を受ける。中でも情緒が不安定だったり、感情の起伏に乏しい人格の持ち主に散見されていて、一説では「自分の感情が安定しないだけ、他人の感情を敏感に受信してしまふ」とも云われている。

「いち心理学者として云わせてもらえば、戦争の中じゃ、誰もが知らん内に利己主義者になつて行くんだ——『死にたくない』『相手を倒さなきゃ生きていけない』つてな。そこには相手を尊重する心なんて存在しない——以前ボクはきみを狂戦士と呼んだが、あの頃のきみは正にそうだっただろう？」

云われ、キラはハツとする。たしかに初めてモビルスーツに乗つたとき、キラは怖くて堪らなかつた。自分が撃たれることも、相手を撃つてしまふことも。

だが、いつの間にかトリガーを引く自分に慣れ、照準の向こうにいるのが自分と同じ人間だということも忘れて行つた。バルトフェルドに狂戦士と云われるまでは。

「あの娘はたぶん、オレやオマエよりずっと前に『それ』を経験して来たんだろう」

——みんなに会う前に、大勢たक्सんの人間ひとを殺して来てるんだ……

多分ステラが云っていたように、彼女は地球連合軍の使い捨ての鉄砲玉として、大勢の人間を殺した経験があるのだろう。おそらくは「死にたくないから」という、利己的な一心で。

そういう意味では、かつてのステラもまた、撃たれる者達の気持ちなど全く顧みない無共感力者サイコパスですらあったのだ。

「そして当時のことに、底知れぬ後悔を抱いた」

それはステラにとって、事実だった。

「やがて贖罪のように、二度と同じ過ちを繰り返したくないと罪の意識に苛まれるようになった。今度ばかりは、一方的に撃たれる者達の「痛み」の分かる人間でいたい——そう願うように、なっていたんじゃないか？」

「じゃあ……！ その「痛み」が分かるっていうのは」

「たぶん、あの娘が戦場で聞いたついでという悲鳴だろう。「ジエネシス」に消された者達の無念や憎悪——心の「痛み」を、あの娘は自分の中に受信しちまったんだ」

彼女の中に根ざしていた罪の意識が、彼女の共感力エンバシーを異常発達させたのではないか？

というのが、バルトフェルドの見解である。

「自分とは無関係な他人の感情で体調を崩す——それは共感力者エンバシー特有の症状だ」

元より感情の起伏の少ない彼女なら、それは充分にあり得る症例だったらしい。

「そんな……ッ、じゃあ、どうすればいいんですか」

「エンパスはその特性上、一概に病気としては扱われない。なんせその実態は、単に人より敏感で——云ってしまえば人より優しいっていうだけだからな。そして病気ではない以上、治療法だつて明確に存在しない」

キラは、啞然とした。

バルトフェルドは、苦笑した。

「そんな顔するなよ……ボクは別に、きみを追い詰めるつもりで云ったわけじゃないよ」
「え？」

「つまりだ。共感力者^{エンパス}つていうのは、人間の悪意なんかを体が勝手に受信するから体調を崩すんだ。おまえだつて、ザラザラした感覚が流れ込んで来たら気持ち悪いだろう」
なんとなく、分かる気がしたキラであつたが、十全に理解することまでは出来なかつた。

だが、バルトフェルドはそれでいいと答えた。

「外部から治療してやるのは不可能だが、中和してやることならできる。要は気分転換させればいいのさ」

「気分転換？」

「そうだ。悪意とかマイナスの感情を受信して体調を崩すなら——善意とか、もつと暖かい感情を向けてやればいいんだ。そうしたら気も紛れるし、回復も早くなる」

意地悪で云ったわけではなく、それはバルトフェルドの本気だった。

「——というわけで、おまえの出番だ。まあ……なんだ、チャンスだと思つて接してやれよ」

「かつ、からかうつもりで云つてたんですか!? そんなことしませんよ、僕は!」

「しかしなア、何にだつて『理解者』つていうのは必要だ。ボクはあの娘と大した交流がある方じゃないが、心理学者で、察してしまつたのだから、誰かには伝えといた方がいいと思つた、それがおまえだつたつてことだ」

釈然としないキラではあつたが、一通り筋が通つていただけに、的確な抗議の声も上がらなかつた。

とは云え、それでも心配なことに変わりはなかつたため、キラは“エターナル”の廊下を渡つてステラに与えられた自室を目指した。

インターカムを鳴らし、許諾を貰つてから中に入ると、ベッドの上うつ伏せになつ

たステラと、それを見守るように座っているラクスの姿があった。

「大丈夫？」

キラが問うと、ラクスは首を横に振った。

ステラの体調不良の原因が、分からないのだと云う。特別な日でもないらしく、だからラクスとしても、対処の仕方が分からない。とりあえずは優しく背中を叩いたり、さすってやることしか出来なかった。

「すこし、仮眠を取っていただけますわ」

布団の中に包まったステラは、キラやラクスから見て顔が見えない状態にあった。ほとんど枕に顔をうずめているのもあるが、何より、うつ伏せであるために覗けないのである。

もつとも、女の子の寝顔を覗こうとするほどキラは凶々しくないし、ステラだつて見られたくもないだろうが。

「また、いつ出撃になるかも分からないからと」

「……無理させてるんだね……」

「キラも一緒です。あなたも少し、お休みになられては……?」

「いや、ぼくは大丈夫。なんていうか、ステラに助けられてばかりだったし」

先の戦闘でも、そうだった。

アスランと真つ向勝負の中であつて、なかなか振り切れずにいたものを、キラは「グレイドル」に手引きしてもらつたのだから。

——思い返せば、いつだつてそうだ。

それこそ「ヘリオポリス」から始まつて、今まで、何度助けられて来ただろうか？

——心の中では、いつだつてステラを頼りにして来た。

そして今、少しでも恩返しできるかも知れないときがある。次元は低いかも知れないが、体調を崩した彼女の力になつてやれる時が来たのだ。

「できるなら、看つてやりたいかなつて」

「ふふふ、珍しく、お兄さんみたいですね」

「ええ？ 珍しく？」

「そうですわ？ きつとステラから見れば、キラはきつと弟のように思えていたはずですよ」

——なんていうか、そそっかしいところとか？

ラクスはふんわりと告げた。

「こんなこと云つちやいけないんだろうけど、それって、もしかしたら経験の差……なのかな」

バルトフェルドの言葉が、脳裏に過ぎる。

——あの娘はたぶん、オレやオマエよりずっと前に『それ』を経験して来たんだ……。年齢に見合わぬ壮絶な経験をしているから、だから平凡な人生を送って来たキラよりも、落ち着いた振る舞いが取れるのではないだろうか？ ——そう思うのは彼女に対して失礼かも知れないが、キラは何となく、そのように納得してしまう。

(本当に、いったい、どんな経験をして来たんだろう——)

キラが漠然と思慮していると、ふわり、とラクスが立ち上がった。

何かに気付いたのか、それとも何かを思い出したのか——唐突な動作だった。彼女はキラに向かって薄く微笑んで、ドアの方に向かってしまう。それは退室しようとする動作だった。

「えっ、出ていくの?」

キラは、目をぎよつとさせた。

ラクスはまだ艦橋でやることがあるのだそうだが、詳しくは云って来なかった。

女性の個室に男を放り込んだまま去るなんて、迂闊ではないだろうか？ 男のキラがそう思ってしまうのは、おかしいのだろうか。

「ひとつだけ云っておきますわね？ ステラは、わたくしにとって妹も同然の存在おかたです

——

にこり、と天使のように笑って、

——ゴゴゴッ

その後方に、黒い般若像が見えた。

「手を出せばどうなるのかは、察してくださいませわね……？」

「え、は、はい……もちろんっ」

ラクスはぱつと笑って、その部屋を出て行った。

——それから数十秒として、身動きを取ることを忘れていたキラであったが、ふとベッドの方に視線を戻す。当然と云えば当然だが、ステラはまだ眠っていて、かけられた布団は寝息によって規則正しく上下している。

はあ、と嘆息ついた後、キラはわずかに視線を周囲に巡らせた。すると、すぐに気付いた。安易式のドレッサーの上には、珍しく化粧水やグロスが置いてあったのだ。

(へえ)

どこで買ったんだろう？　こういうのに興味あったんだ。

つらつらと感心しながらグロスの方を手に取ってみた。じつと眺めていると、どこからともなくこんな考えが過ってしまう。

(別に、いらなさそうだけだな)

真つ先にそう考えてしまうのは、きつと避けられない男の性だろう。そしてそれは到底、女性には理解してもらえない感覚ですらある。

——たしかに、最近のステラは変わった。

自分の容姿にも、多少なりとも関心を持つようになっていて、それはおそらく、周囲との交流の甲斐あつてのことだろう。今はキラとしても、それは素直に嬉しい変化だと思つている。

——でも化粧なんてしなくたって、今のままで充分だと思ふけどなあ。

キラは、ステラの容姿への関心を否定したいわけではない。

が、女性が化粧に手を伸ばすことで、表情に癖のようなものがついてしまうのが勿体ないと感じてしまう心理があつた。それは自然体が印象的な女性であればあるほどに、より強く働く生理ですらある。

——最近、髪を伸ばしたいつて云つてたのも、たしか……。

詮索しながら、キラはベッドの方に目を向けた。

すると、今度はきよろりとした円らかな瞳とぱっちり目が合った。

「……………」

キラはしばし、言葉を失つた。

「——うわあ!?! おつ、起きてたの!」

云つてから、キラはしかし、別に慌てる必要もないじゃないか、と自分を叱咤した。

別に下着を漁つていたところを本人に発見されたわけでもないのだ、ここは男らしく

「堂々としておくべきではないか。」

「ね、眠れなかったの?」

「うんっ……」

「そ、そう」

云つてからキラは、しかし、

(ん?)

と、頭にひとつの疑問符を浮かべた。

ステラはいま「眠れなかった」と云つた。——それはつまり「初めから起きていた」ということではないのか? 仮にそうだとしたら、ラクスが部屋から出て行くときも既にステラは起きていて、起きていながらキラがひとり部屋に残るのを待っていた——いやこれは考えすぎか? なんであれ、キラには彼女が何故そんなことをしたのか、意味がよく分からなかった。

……いや、正直に云えば意味なんてひとつしかない気がしたのだが、それを考えると自惚れのような気持ち胸の奥から爆発しそうになったため、謙虚でいたい彼は、それ以上を考えないようにした。

ステラは布団の中で、ころりと寝返りうって、仰向けになった。顔だけをキラの方に向け、彼が手に持っているグロスに視線を遣る。

「それ、M1の人達がくれた」

「ああ、道理で……。お裾分けだったんだね」

「ひとりでやると、口だけオバケみたいになつちやうから……。まだ、うまくできないけど」

「そっか」

キラはいそいそと歩き、近くから椅子を引つ張り出して来た。

脚を立てると、そこにゆっくりと腰かけ、感慨深そうに続ける。

「ステラも挑戦するようになったんだね、こーういの」

云うと、彼女は両手で布団を持ち上げて、丁寧に口を隠した。

それは巢に隠れようとする小動物の仕草によく似ていて、キラはなんとも神聖な気持ちになる。が、ステラは布越しに口を当てたせいも、もごもご籠った声色で云った。

「た、大切なときに、役に立つんだって……。云われて」

「! ……あ、ああ」

空気が一変して、極めてプライベートな領域に突っ込んでしまった気がしたキラである。

だがよく見ると、さつきまで血色が悪かったステラの顔色が、青白いどころか真っ赤になっていた。それが良いか悪いかは今は脇に置いておくとして、とりあえず「血が

「通った」という意味では、彼女の体調は回復しつつあるようだった。

——小動物を見ると、意地悪がしたくなるのは、人間の性格が悪いからだろうか。

「顔真つ赤だよ。熱もあつた？」

「……………ばか……………」

ぼふり。

小動物はいよいよ布団をかぶって、キラの前からいなくなってしまった。

「ま、参ったな」

キラは、ひどく実直な狼狽え方をしてしまった。

——こんな所でそんな対応をされると、あの……どうしようもなくなるといふか。

たった一文で“こそあど”をコンプリートするほど慌て出したキラであったが、当初は全くそんなつもりではなかった。ただバルトフェルドに教えてもらったように、ステラの気が紛れるのなら、その手伝いがしたかっただけで。

——ステラもステラで、弱っているせいかな、いつもより余計に可愛く見える気がするし！

自分自身の容姿に関心を持つということは、自分自身の性別にも関心を持つということになるのだろうか？ 過去の彼女からは想像もつかない対応を取られ、動揺すると同時に、底知れぬ高揚が溢れて来た。

「——でも！ とりあえずいまは、眠った方がいいよっ」

それでも、キラは努めて看護人に徹した。

そう簡単に、手など伸ばすべきではないと云う自戒があったらしい。

「さつきだつて忙しかったんだし、これからも大変になると思うからさ」

「……………」

「今はゆっくり休んで、ちゃんと備えるべき——つて、いうか……」

気が付くと、ちいさな瞳が、布団の中から覗き返して来ていた。

どこか熱望を宿した双眸。宝石のような輝きにうっとりするように、キラの語末は、段々と切れ切れになつて行つた。

——あつ、だめだ。

誰に云つたわけでもなく、次の瞬間には、キラの心はそう云つていた。

ステラは布団の中からこつそりと腕を伸ばし、キラが手に持つているグロスを取り返そうとした——が、キラの方が行動が早かつた。ぐいつと意地悪のように手を上に挙げたキラに邪魔されて、奪い返せなかつた。

「——いらなくない？」

「い、いる……っ！ せつかく、おしえてもらった……っ！」

なおもいとけなく、一生懸命に奪い返そうとして来るステラ。

が、いくら彼女でも、間に合わないことはあるようで――

「まっ、まっ……！」

「だめ」

「あう……あふっ……」

聞かぬうち、キラはそつと彼女に唇を落とした。

安らぎの感情が伝搬するように――ステラの中から、次第に“痛み”の感情が消えて行つた。

月基地 “プトレマイオス・クレーター” の中心部に、暗黒の “レムレース” は降り立つた。

基地内部は騒然としていて、ザフトが秘蔵していた “ジェネシス” の話で持ち切りだ。

「次の照準はどこになる!? ——あの照準ミラーなら、この月基地だって悠に撃てるぞ！」

「地球を撃つて来るかも知れないんだぞ！ 発射される前に全艦出して、あれを叩き潰

すしかない！」

「全艦!? 莫迦な! みすみす全艦出してみろ、戦後のための予備戦力はどうなる!?!」

「待ってたつてどーせ死ぬんだよ! 奴らが月基地を狙わない保証がどこにあるってんだ!」

「くそウ! コーディネイターの糞野郎どもめッ!」

フレイは角面のコクピッドから顔を覗かせ、方々を見渡してみたが、基地内部でも指揮系統の混乱は甚だしい。

そんなときである。

左上のキャットから、ひとつのワイヤー・リフトが伸びて来た。そいつは真っ直ぐに「レムレース」のコクピッド——顔を覗かせたフレイの真横に吸い付き、前に「レムレース」の整備を担当していた男性技師が、ワイヤーを頼りにこちらに向かって来た。

「アルスター中尉、お早いお着きで!」

フレイは、即答した。

「——「アレ」を出したいの、でも、どこのシャフトも慌ただしくって! どこから行ける?」

「第四シャフトから抜けられます。ですがその前に「レムレース」の最終調整をします

から、一〇分ほど機体をお借りしても？」

「!? だめよっ!」

それを聞いた途端、フレイは真横に引つ付いた男のワイヤー・リフトを引きちぎった。そのあとグリップを適当に投げ捨てたため、漂着地点を失った男性技師は、慣性のままあらぬ方向に吹っ飛んでいく。

「なんてことするのおっ!」

やがて近隣の「ダガー」に激突して止まったが、そんな彼を顧みず、フレイは忙しくコクピッドを閉じる。

第四シャフトから抜けられる——それだけ聞けば、彼女は充分だったのだ。

「時間がないの——わたしには」

もつとも、月基地に長居するつもりはない、という意味もある——

フレイはこのときすでに、あるいは「ジェネシス」の第二射目標を察知していたのかも知れなかった。「レムレース」を駆動させ、彼女はすぐに移動を開始した。

——云われた通り第四シャフトから格納庫の方まで抜けた先に、フレイは見た。

そこにあつたのは、彼女が搭乗している「レムレース」より、数倍として巨大な質量を誇っている巨大な外殻。もはや「ストライカーパック」と云うより、それ自体がひとつの機動要塞のような「ハルユニット」——その前に浮遊する「レムレース」が、まる

でミニチュアのようにすら思えてしまう。

腰下にかけて脚部を廃止し、大気圏外での高機動戦を想定したりアスカートの下に、一対のシユツルム・ブースターを完備。全身各所に悪魔の吐息とも云える大火力砲を満載。最も特徴的な胸部には、モビルスーツが一体、すっぽりと格納——いや埋め込めるような不自然なスペースが確保されていて、頭部は後期GATシリーズを踏襲したかのような禍々しい“G”フェイスをしている。

これこそが、地球連合軍が総力を挙げて開発した“レムレース”の専用追加パーツであった。

武装プラットフォームとしての役割を果たすこれは、心臓部に“レムレース”を据えることによって初めて起動し、奇しくもザフトが開発した“ミーティア”と類似した特徴を持つ。もつとも、天使の翼を連想させる“ミーティア”と異なつて、こちらはこの世に悪魔そのものを顕現させたかのような邪悪さを放っていた。

「——『デストロイ』……か」

死の商人によつて、開発された負の遺産——

破壊の巨人が、ふたたび、目を醒まそうとしていた。

『それぞれの選択』

部屋から出たキラを待っていたのは「鬼」——いや、そのような表現をひとりの少女に用いるのもどうかと思うが、まさに鬼のような気圏を纏ったラクス・クラインであった。

気分が異様に昂揚していたのか、このときのキラは数分前までの記憶が抜けているような気さえしていた。自分でも驚くほど意識が熱を帯びていて、それはまるで、熱い沼底に頭から放り込まれたような感覚だった。心臓の脈動さえ、いちいち煩く感じ取れる。

それは、部屋を後にしてほんの少し廊下を渡った先のことだった。通路の壁にラクスが佇んでいて、キラは啞然とした次第である。そしてその隣には、車椅子に乗ったマユ・アスカの姿もあつた。

「マユちゃん、＼クサナギ＼にいたんじや」

「大詰めなんだって！　心細いから主治医せんせいに云つて、こつちに連れて来てもらったの」
何かやましいことでもあつたのか、キラは早速ラクスではなくマユの方に話題を振つ

たのだが、そんな小細工で逃げられるほど、女の勘は甘くないのである。

「——キラ」

ラクスは、凜とした声音で問いかける。

「はっ、はい……」

不思議とそれは、地鳴りに似た響きを持つていように聞こえた。……いや結局のところ、そんなものは焦燥していたキラの幻聴に過ぎないのだが、畏怖の念から彼がびつと背を正したのは事実だった。

このときのラクスは、にこやかな笑みとは裏腹に、その背後には莊嚴な般若でも控えているのではないかと思えるほどに目が笑っていなかった。そう「目が笑っていない」とは、こういうときのために用いるべき言葉だった。

「わたくしはちゃあんと仰いましたわ？ 『手を出せばどうなるのかは、察してくださいますね』と——」

「も、もちろん……」

ラクスは、その端正な唇を動かし、

「——覚悟があつて行動したからには、あの子をちゃんと護つてあげてくださいね」
糾弾されるかと思つたが、キラは拍子抜けしたように、呆然とする。

「え……ラクスっ？」

漏れ出したキラの声には明らかな動揺の色が浮かんでおり、傍らのマユは、唇を真一文字にして黙っていた。今は真摯に、ラクスの言葉を聞き届けていたのである。

ラクスはキラの正面に対峙できる位置まで寄り、凜として続けた。

「これだけは忘れないでください、あの子の行く先には——大きな『敵』が多すぎます」

云われ、キラはハツとする。

「今のあの子には思い出もあります、みずからを生んでくれたお父様と、血を分けたお兄様との思い出が——」

「……—」

「でも、そんな彼らと袂たもとを分かとうというのです。内心どれほどの思いを胸に秘めているのか、想像すると忍びありません」

他ならぬ家族と対峙してまで、平和のために戦おうと云うのだ——内心、どれだけ血を吐く思いを噛みしめているのかは分からない。

そのとおりだ——と、キラもまた、気付かされるような思いになる。

「道を違えた家族かれらに代わって、わたくしたちが支えてあげるべきですわ」

「……うん。確かに——」

「戦が終わったあとのことは、きつとわたくしが何とかします。——だからあなたは、ス

テラを大切にしてあげてください。そうすれば、おのずと道は開けていくと信じています」

分かりました？ とラクスは首を傾げた。キラは唇を堅く結び、こく、と頷いた。

ふたりの間に、沈黙が流れた。マユはじつとしてふたりを見つめていると、ラクスは僅かに嘆息ついた。

「——はあ」

それがちよつと大きなため息に思えたのは、気のせいだろうか。

ラクスは次の瞬間には、にこり、と笑っていた。爪先をくいつと伸ばし、キラの頭を手を伸ばす。

「……分かれれば、よろしい！ いい子ですわ〜？」

よしよし、わしやわしや、とラクスはちよつと背伸びしてキラの頭を撫で出した。

キラは思いも寄らぬ柔和な手の感触に、抵抗した。

「ああっ！ 恥ずかしいからっ、や、やめてよ」

「なんだか大切な弟が出来たようで、うれしくってつい〜」

「ラ、ラクス！」

仮にもマユという女の子の前で、情けない姿は曝したくないではないか。

キラは苦笑すると、わずかに顔を紅潮させてその場を立ち去って行った。その背姿を

見送ったマユは息をついて、ラクスの横顔を見上げる。その目は、いつもの明るい光を宿していないように見えた。

「……ラクスお姉ちゃん？」

「……いいの……」

声が沈んでいるように聞こえたが、

「あ……？ いいのですわっ」

それが錯覚だったと思わされるほど、次の顔は、にこりと笑っていた。

なまじそれが営業用アイドルの笑顔であると分かってしまっただけ、マユはそれを心苦しく思うしかなかった。しかし、だからと云って何が出来るわけでもないのだ。せいぜい女として、キラさんの罪は重いのだな、という風な消化不良を起こすのが精いっぱいだった。

「——あつ、ステラお姉ちゃん」

廊下の向こう側、部屋から出て来たステラの姿を認める。

病的に失調していた顔色は、すっかり血の気を帯びて良くなっているようだった。——しかし、ひらひらのスカートはともかく、切り開かれた制服の肩口がくしやりと擦よっているのは何故だろう？ かなり身を振まっていた痕跡だと思われるが、何にせよ、そいつはミラーで自分の姿を碌に確認して来なかった証拠であり、そういうところは相変わらずだとマユは思った。

ふわり、と浮いてこちらへとやって来るステラ。失調しているどころか、どこか上気したその赤い顔が、同性から見ても偉く可愛らしく映った。

「具合なおつたから。看病してくれて、ありがとうラクス」
次の瞬間だ。

ラクスは、ステラをぎゅつと抱きしめた。

そのまま頭を撫でる。短くうめき声上がるのにも、構っていない様子だ。

「まあ可愛らしい！ お部屋に飾っておきたいくらいですわあ〜！」

「うう〜っ！」

「あ、あはは……」

そんなふたりを眺めながら、マユはこんなことを考える。

（何もかも『立派なお姉ちゃん』であろうとし過ぎるんだ……）

マユは、自分の肩から急速に力が抜けていく感じがした。

（………いたいな……）

彼女は、自分の性格を把握した気になった。

オーブで暮らしていた頃から、家庭の中では父から母から、誰より兄から掌中の珠の如く愛でられていた自分は、すっかり妹として扱われることに慣れてしまっていた。大切にされ、優遇され——だからこうして舞台裏で兄や姉が我慢をしている姿を見てしま

うと、なんだか無情な現実を思い知らされた気分になるのだ。

——甘えて来たんだな、わたし。

そんなことを痛感して、マユはすこし、自戒した。

今よりもっとしつかりとした、強い女の子になりたいと思った。

月基地はどこもかしこも慌ただしく、アズラエルの要請によって、補給部隊が出動の準備を始めていた。先遣した第一戦闘部隊は現在、デブリ帯に身を潜めているらしく、これより出立する第二戦闘部隊が月を発進後、改めて「ジエネシス」に攻め込む手筈になっっている。

例によって調整作業を終えた「レムレース」が目の前にあつて、整備技師の男は、うんざりとした口調で云った。

「ひどい女ですよ……」

「どうした？」

隣に立つ、この現場の技術主任である。

若い方の男は、ノート型のディスプレイを畳みながら云う。

「担当メカニックが総出しても一時間はかかる整備作業、たった一〇分でやれちゃって吠えてたんです。まあ流石に無理なので三〇分で折れてもらいましたけど……これだから世間知らずのお嬢様はイヤなんだ！」

議題が上がっているのはフレイ・アルスターのことであって、何でも、フレイは「時間がない」と怒鳴ることで「レムレース」の整備を急ピッチで技術者達にやらせた事実があるらしい。当初は「整備なんていらぬ！」と素人丸出しの無茶まで云っていたのだが、新型装備を装着すると、やはりそうも行かない。このために、フレイは妥協して三〇分間だけ機体を技術者達に預けることになったのである。

——若い方の男が嘆いているのは、そのフレイの人遣いの粗さであった。黙っていれば美少女なのに。だが隣に立つ中年の主任は、けらけらと笑いながら云う。

「可愛いじゃねえか」

「はあ？ どうしてそういうことになるんです？ 確かに黙ってりや可愛いんでしょうけど」

「俺は好きだぜ、ああいう娘っ子」

若い技術士は、げんなりして云った。

「変わった趣味ですね……」

「見るからに嫌な女つてのが分かった方がいんだよ、自分に正直な好きさ。そういう

やつに限って、本質的には可愛いかつたりすんだぜ？」

分かるような気もしたが、納得してはいけない気もした。

若い方の男は、困惑して返す。

「そういうもんですかね？」

「本当に嫌な女つてのは、てめーの本性が分からない、男に隠すのが上手いようなヤツさ」

「……ああ！ 分かります、でもそれ主任の体験談でしょ？」

「持論と云え、ばか野郎」

やがて彼らの目の前で、巨大なバケモノを拘束していた点検用のケーブルが次々と外されてゆく。それはさながら、枷に繋がれていた悪魔が解放された光景でもあったのだが、技術屋達は繊細ではないから、せいぜい自分達の作品が世に出て行く程度にしか認識しなかった。

次の瞬間、リアスカートに装着された二基のシュトウルム・ブースターが一気に点火する。

——ゴゴウツ

重苦しい駆動音、そして凄まじい噴煙と共に、宇宙に飛び出してゆく“ソイツ”は、圧倒的な全長に見合わせぬ、滑らかで素早い動きをしている。なまじ戦艦に匹敵する規格を

持っているから、やがて軒並み艦隊の中に混りつつ、月基地を出発して行った。

男達は陽気だ。本来なら二〇分は要する「ソイツ」と「レムレース」の整備工程を、たった半分の時間で成し遂げてしまった。その「新記録」というのが技術屋の矜持に嬉しく、彼らはさも満足げに笑い、お互いを称え合いながら、遠くまで巣立って行く「破壊者」の背を見送った。

リング状に建設されたザフトの軍事ステーションもまた、同様に慌ただしさに包まれていた。その原因は他でもない——先の戦闘において、ようやくその姿を現したザフトの新型兵器——「ジェネシス」である。

圧倒的な破壊力を以て、地球軍艦隊を一掃してしまった禁断の力——
その存在を肯定的に捉える者もいれば、勿論、否定的に捉える者もいた。

「ジェネシス」を肯定する者——その中には、戦争が「プラント」の勝利に終わることを勝手に見越し、戦後の話まで嬉々として持ち出し始める集団が出て来るような不始末だ。彼らの軽挙妄動が伝搬しているのか、基地全体が異常な高揚に包まれており、非常に悪い意味で、誰もが浮足立っている印象が目立つ。

一方で「ジェネシス」を否定的に捉える者——たとえばイザーク・ジュールなどは、

母親がザラ急進派であったとしても、先の大量殺戮に疑念を憶えずにはいられなかった。ずかずかと乱暴な足取りで廊下を歩いていると、背後からひとつの手が伸びて来て、そんな彼の腕を掴み止める。

「おい、ちよつと待てよイザーク！」

「止めるなディアツカ！ いくら母上と云えども、黙ってはおれん！」

乱雑にその腕を振り払い、振り返る。

そこには動揺しているディアツカ・エルスマンの姿があつた。

「いったいなんなんだ、あの『ジエネシス』というのは——！ あれでは、地球軍が『ポアズ』にしたことと同じだぞ！ おれたちはナチュラルどもの血が欲しかったわけじゃない！」

「気持ちに分かるけどさ。おれたちが騒いだところで、どうにかなる問題でもないだろ……？ これはザフト全軍の問題なんだぜ？」

いくらイザークが角を立ててエザリアを問い詰めたところで、何ができるといふわけでもない。

それでも、イザークは食い下がりに続けた。廊下の先に、複数の側近と話し合いながら歩いているエザリアの姿を認めたのである。ディアツカの腕を振りほどき、ずかずかと歩いて行く。

「——母上！」

「イザーク！ まあ、奇遇ね……っ！」

偶然だと思つたのか、我が子の姿を認め、母はぱつとして笑顔になつた。彼女は側近達を先に行かせ、みずからはその場に残留、久しく親子の時間を設けようと云うのだから。

「……！」

イザークは、肝心の云いたいことが山ほどありすぎて、何から云い出せば良いのかもごもごと口籠つた。苦情を云いたかつた相手は、他ならぬ自身の母親——いつものように粗暴な声音で怒鳴り散らすわけにもいかず、慣れない言葉選びに、戸惑つたと云つてもいい。

その躊躇いは、イザークの落ち度である。

だから実際に口を開いたのは、エザリアの方が先だつた。彼女はどこか氣負つた表情の我が子を見て、慈しむように云つたのだ。

「ずっと前線で戦い続けて、疲れているのでしょうか？ ひどい顔をしているわ」

「……えっ？ あつ、いえ……」

「でも、それももうじき終わりよ。間もなく『ジエネシス』の第二射が行われます」

「——!？」

それを聞いて、イザークは身体を強張らせる。

「評議会は、また撃つつもりなのですか——『アレ』を!」

「次の攻撃目標は地球軍艦隊ではないわ、ナチュラルどもの本拠地——月基地よ。地球軍へのトドメの一撃——これで奴等も、せいぜい思い知ることでしょう」

もしかしくなくても、エザリアの口調にはナチュラルに対する遠慮や罪悪感など芥子粒ほどにも含まれていなかった。むしろ当然の報復だと云わんばかりのその声音に、イザークは愕然とする。

「貴方も連戦で疲れていることと思うけれど、これでようやく戦争が終わります」

「母上……っ!」

「今まで軍人として、御苦労だったわね。——ディアツカも」

畳み掛けるように話し続けるエザリアは、イザークの肩越しにディアツカに向かっても小さく笑いかける。すると秘め事をしているかのように、彼女はそっとイザークの耳元に口を寄せた。

「——貴方の隊は後方に回しました」

囁かれ、イザークは、この期に及んで母が何を云っているのか分からなかった。

「——は……?」

「今度の戦闘では、出番がないことを祈っているわ」

自分の隊を後方に回す——それは、他の兵を身代わりに前線に送り込むということか。そのような権限が、いち評議会議員に過ぎない母にあったのか？ いや、あるはずはない。

だから、みずからのエゴでジュール隊を後方に配置したエザリアの行為は、職権の乱用だとイザークは分かってしまった。が、そのことについて声を挙げて抗議した者がいなかったのだとも、同時に理解してしまった。たとえばディアツカの父であるタッド・エルスマンにしても、息子が所属するジュール隊が後方に配置されるなら、それに越したことはないと考えるからだ。

それは人の親が持つ傲慢な習性であり、今のイザークに非難できる性質のものではなかった。

「貴方達の仕事は、戦後の方が多くなるのよ」

まさか、みずからの母もまた、戦後の話で浮足立っている愚か者のひとりとは、思いたくなかった。

所在なげに呆然とするイザーク。そのときエザリアの側近が「遅れます」と脇から声掛けし、彼女は心得たように会釈した。

「それではイザーク、ディアツカも」

悪戯っぽく片目を瞑り、彼女はそのまま踵を返し、彼らの前から去っていく。

結局のところ、イザークは何ひとつ、自分から発言することができなかつたのである。しかし、そのまま引き下がるわけには行かないと考え、彼は覚悟を決めたように声を挙げた。

「ま、待つてください、母上！」

今の会話は何だったのか、イザークは、ただ一方的に母親の都合を押し付けられただけだ。そんな母は要するに、自分にこう告げたかつたのであろう——

『——貴方には議員としての将来があるのだから、もう、軍人として戦場に赴く必要はな
くつてよ』

与えられた命令は、最愛^{エザリア}の母が用意してくれたイザークの人生の筋道だ。出発駅から分水嶺まで、何から何まで親が指し示した軌条だ。たしかに、親が望むように生きるのが子の役割なのかも知れない。

——だがそれでも、オレにだつて意思がある！

その意思が云うのだ——「ジェネシス」はもう二度と使うべきではないと。

戦争だからと云つて、あんな虐殺を行つてまで、勝利を欲するのは狂気沙汰でしかないのだと。

——だから……！

力を込めて腕を伸ばす。話はまだ終わっていない。

そうしてイザークは、立ち去る母の腕を掴み止めようとして——出来なかった。彼の手が届くよりも前に、横合いからひとつ別の手が伸び、彼は逆に掴み止められたのだ。グツと思いのほか強い力で握られたことで、イザークが苦悶の声を挙げた。

伸びた手の先を確認すれば、そこには怜悯な表情を浮かべた同僚が立っていた。

「アスラン!?!」

「よせ、イザーク」

掛けられた言葉は短い。……短いが、地鳴りにも似て、重かった。

エザリアは、イザークが大声で自分を呼んだことに気付いていた。だから怪訝そうに振り向いたのだが、目の前にはアスランが背を向けて立っていて、彼女はまるで状況が呑み込めない。

「あら、アスラン、どうかしましたか? ……何か、イザークとあつて?」

胡乱げな顔をするエザリアに対し、アスランはにこりと笑った。

それは、驚くほど爽やかな好青年の笑顔だった。まるで似合っていないとイザークが感じたのは、彼の感覚がおかしいからだろうか?

「いえ、何でもありません。お進みください」

「そ、そう?」

その対応は、上流にして貴族的だ。優しく紳士に女性をエスコートする、御伽の国の

王子様でもあるようだ。それによってエザリアは年甲斐もなく感動してしまふ——前からアスランのことは知っているが、最近は随分と印象が変わったように思える——随分と素敵な好青年と相成ったものである。

——ザラ議長閣下も、鼻が高かろう……！

しかし、そんな彼がイザークと睨み合っていたのは何故なのか？ 困惑はしながらも、あまり時間を無駄にはできない。彼女は改めて前を向き、しかしながら彼らに優しく言葉を残す。

「まったく、貴方達は士官学校から相変わらずね。反りが合わないというか、同じ極のマグネットとでもいふべきか」

——同じ性質を持っているはずなのに、決してくつつこうとはしないと云うか。

「もうじき戦争が終わるのでから、最後くらいはちゃんと仲良くしなさいな？」

「恐縮です——僕も、そのつもりでここにいます」

その張り付けたようなアスランの笑顔が、イザークには腹が立って仕方がなかった。

エザリアは満足げに微笑むと、側近と共に立ち去って行ってしまった。母親が現場にいなくなり、イザークは首輪の外れた狂犬のようにアスランを睨み上げる。

「アスラン、貴様……っ！」

だが仮面が外れたのは、アスランも同じようだ。

「頭を冷やせ、イザーク」

八方美人が消え、慄くほど鋭い目がイザークを睨んだ。

「あそこで彼女を問い詰めて、何かが変わると思つたのか？ きみが今やろうとしていたことは、軍全体の士気を乱す。……迷惑だ！」

「なんだと……!?!」

「戦争に勝つためには『力』が必要だつた……。だから『ジエネシス』は造られた！
全ては『プラント』を守るために行われたことだ。彼らは間違っていない！」

二人の応酬を見ていることしかできなかつたディアツカは、不思議とこの光景に既視感を憶えた。しかし、記憶の正確な再現ではない。どちらかと云うと以前はアスランが感情に身を任せる方で、イザークが斜に構えてそれを宥める方だつた。

——立場、逆転してねーか……!?!

かつての繊細で、何かにつけては迷っていたアスランが今、あろうことかイザークを理屈で黙らせている。軍のために規律のために——どちらかと云えば、それを説くのはイザークの方であつたような気がしたが？

「間違いではなかつた、だと？ きさま、本気で云っているのか!?!」

正気で云っているのか、と本当は尋ねたかつたのだが、このときのイザークは慎重に表現を選んでいた。それは、同僚に対する配慮だ。

「ここは軍隊だ！ きみたちのために将兵の規律を乱されては、戦争にならないだろ!？」

以前から薄々とは勘付いてはいたが、明確な手応えが感じられずにいたことがある。それは今イザークに、鋼鉄のような冷たい視線を向けているアスランについてだ。

——昔から、利口なヤツではあった。

云われてみれば、の話だが、たしかにビクトリアを期に（何かアスランの雰囲気が変わった？）という感覚はあつたし、デイアツカと話題になったこともあつた。その違和感ともするべき不審感は、アラスカやパナマ——アスランと共に戦場を推移するにつれ、段々とイザークの中で膨らんで行つた。

そしてここに来て、イザークはようやく——その感覚の正体に気が付いてしまった。今更と思われるかも知れないが、ずっとアスランと同じ方向を向いて来たイザークには、己の「隣」に立つ彼を観察する機会などなかった。ステラやニコルのように、彼と「正面」から対峙することがなかっただけ、イザークは今になって、その青年の変貌に気が付いてしまった。

（——こいつ、考えることを辞めたのか……!?!）

父がやったことは正しい。父の云う通りにしていけば間違ふことはあり得ない——親の都合のために働き、親の理想のために戦う。確かにそういう見地に立てば、十

チュラル根絶を目指すザラ議長にとって、今のこの青年ほど『理想の戦士』と呼ぶに相応しい存在はいないだろう。生まれる前から親に開^{プログラムング}発され、調^{コーディネート}整の限りを尽くされた子供。親が描いた設計図どおりに生きる、それはコーディネイターだから出来る、ある種の究極の生き方かも知れない。

——だが、それはあまりにも人間的じゃない……！

——まるで機械だ……！

敵に、こちらを睨むアスランの目には、何の感情も浮かんでいない。

美しい緑の目の中には、苦悩も躊躇いも、そして戸惑いもない——

「おれたちは勝つために戦争をしているんだ！ そんなことも忘れたのか、イザーク!」
——ひとつ感情を挙げるなら、アスランは驚いていた。なぜイザークが、こうも自分に突つかかかって来るのかを、彼はまいち理解できていなかったのだ。

だからこそその「頭を冷やせ」なのだろうが、それがまるで、上から憐憫されているように、なおさらイザークは苛立つ。だがアスランはさらに云い募る。

「命令の是非を問うのは兵士^{オレたち}の仕事じゃない。オレたちは「ブランド」の指示に従って、敵を斃す剣になっていればいいだけだ」

ダイヤツカはハツとする。

それはジブラルタル基地で、前にアスランがイザークに放ったことと、全く同じ科白

だったのだ。だが、あの当時とは明らかに云い方が違う、その言葉が持つ、一字一句の重みも――。

「アスラン……ッ！」

悔しいが、イザークは口で云って勝てる相手、勝てる状況ではないことを自覚していた。アスランの云ったことは間違いなく正論であって、同じザフトの軍人である限り、それ以上の正解など存在しないのだ。

「きみは『プラント』を守るためにザフトに志願したんだろう？　ならば、なぜ分からない……!？」

曲がりなりに、過酷なアカデミーから苦楽を共にして来た仲間だ。ザフトに志願した理由くらいであれば、このような蟠りわだかまが出来上がる前に、明かし合ったこともある。が、イザークは目をむいて反論する。

「そんなこと、貴様に云われたらいいよ終わりだな！　貴様こそ、何のためにザフトに志願したのか忘れたのか!？」

何を云っているんだ、と云わんばかりの顔をして、アスランはきっぱりと答えた。

「――『プラント』を守るためだ!」

「茶化すな!」

「……!?!　なんだッ!?!」

次の瞬間のアスランは、ひんしゆく 聳^{びんしゆく} 蹙^{しゆく} していた。

イザークは畳みかけるように続ける。

「力が欲しかったからだろう！——そしてその力は、何のために欲した！」

「……………!?!」

アスランは、動揺した。

その言葉に叩き起こされるかのように、捨てたはずの過去から、自分の声が聞こえる。

——力が欲しい…………。もう二度と失わないために。大切なものを守れる力が欲しい

……………!

それはアスラン・ザラの原点にして、誓いの言葉。

イザークは見透かしたように云い返す。

「貴様の力は家族を——妹を守るための力じゃなかったのか？」

それは今のアスランに、拷問のような質問に思えた。

イザークの脳裏には、アスランが初めて、ステラのことを打ち明けてくれた瞬間のこと

とが、克明に残っている。

——ずっと行方が分からなくて……………やつとこのことで再会したと思つたら、既に「デイ

フエンド」に乗っていた……………

——何度も投降を呼びかけて、でも、聴かなくて……………

あのときの人間臭くて、情けなくて、でも優しく、憎めなかったアスラン・ザラは、一体どこへ行ってしまったのだ？ イザークはそんなことを考えながらも、呵責する。

「その妹すら見放した貴様に、説教される憶えなどない！」

「なに……ッ!？」

「ああ、そうさ……! オレの母上や貴様の父が “ジエネシス” を撃とうとするのなら、アイツは必ず! それを阻止しに現れるだろう……!」

以前 “メンデル” でニコルに遭ったとき、彼は自分達にこう云っていた。

この無益な戦争を終わらせる……いや、やめさせようと行動しているだと――。

そのために、実際に彼らは核攻撃も阻止してくれた。だから同様に、破壊と殺戮しか生み出さない “ジエネシス” に関しても、止めに現れるはずだ。

「――それに関しては、おれも同感だね」

「ディアツカもその場に居合わせていたからか、不意にアスランに促す。

「^{あいつら}連中と今のザフト、どっちが正しいかなんて云わねえよ、正義なんて、立場でころころ変わるんだからな」

「ディアツカ……!?!」

「でもよアスラン、あいつらの云っていることだって一理あるんだぜ? 十全に間違っているわけじゃない――だったら、少しでも連中の話を聞いてやる価値はあるんじゃないや」

ねえの？」

地球軍による核攻撃と、ザフトによる「ジェネシス」の発射――

もはや戦争は、年若いディアツカの知るような様相とは違う、まるで礼節を失った殺戮の応酬に発展している。このまま続けば、それこそどちらかが完全に滅んでしまうのではないかと、危惧できるほどに。

それを止めようとしているのが、彼らであり、三隻同盟――

であるのなら、ステラやニコルの云うことだって、もう少し真剣に聞いてやつてもいいのではないかと、とディアツカは思ったのだ。彼は懐古するようにして云った。

「ザラ隊が発足したときから、おれたち三人って、あいつらのことまったく気に懸けてなかったじゃん。部隊から二人も離反者が出たんなら、そいつらときつちりケジメつけんのも、おれたちの仕事なんじゃねえの？」

アスランは、反論した。

「あ、あれはテロリストに騙されたまがい物だ……！ おれの妹は死んだんだよ！ 一年前に！」

「半年前のアスラン・ザラは――おれの知っているヤツは、そんなことは云ってなかったがな……」

イザークが、素っ気なく云った。

ディアツカは肩を竦めて云う。

「正直、生みの親に齒向かうなんて簡単じゃねーと思うよ。おれたちみたいなコーディネイターは、特にさ」

自分の人生に才能に、いたるところに親の恣意が働いているのが、コーディネイターだ。

——おれたちの遺伝子、優れた才能の大半は、親が決めているようなもの。

だからこそ、親に従って生きていくことが、ある意味では一番「簡単」な道なのかもしれない。だが、

「それでもステラは、父親や兄貴オマエと対峙する道を選んだ。そこにどんな想いがあるのかおれたちは知らねえ——だが、きちんと聞いてやる価値はある」

「……………」

「おまえ頑固だけどき。父親と娘を結び付けられるのは、それこそ、オマエくらいのもんだろ」

アスランは、その言葉を拒絶するように、彼らに対して背を向けた。

イザークはトドメのように、二云う。

「“ジエネシス”が撃たれるとき、奴等は必ず現れる——」

それは予感ではない。

イザークの中の、確信だ。

「そのとき貴様は本当は何をすべきなのか——自分の胸に聞いて、もう一度よく考えろ！ アスラン！」

「……………余計な、お世話だ……………」

逃げるように立ち去っていく背中が、やがて小さくなって、角で曲がって見えなくなった。

月基地から、補給と増援を乗せた艦隊が来る——

その動きを早急に動きを察知した「ドミニオン」の中で、バジールは郷愁の思いか、不思議なことに営倉を訪れていた。そこには、奇妙な縁で「ヘリオポリス」から行動を共にして来た軍医、ハリー・ルイ・マーカットがいるのだ。

ナタルは中にある小さな椅子に腰かけて、闇の中に隠れるようにしている男に呟く。

「本当に、このままで良いのでしょうか」

十全に立て直しも測れぬまま、継ぎ接ぎで構成されたような艦隊と共に、再度の総攻撃に挑む——

ハッキリと言いつけると、ナタルにはその行動が正気の沙汰とは思えない。だが、やらなければならないことも事実ではあるのだ。軍の最高指導者が「プラント」との停戦を認めない以上、最後まで地球軍は彼に従つてもがき続けるしかない。その下で働く自分達には初めから拒否権などないのだから、今は「それ」は問題ではない——ナタルが云いたいのは、そういうことではない。

彼女はふと、こんなことを思つてしまうのだ。

「今この状況にあつたら……ラミアス艦長なら、どうするのでしょうかね……」

営倉を訪れたのは、他でもない、共通の話題を話せるのがハリーだけだったからだ。闇の中から聞こえる声は、乾いた声で笑つていた。

「バジルー中尉から、まさかご相談される日が来るなんて思いませんでしたね……」

このときハリーは、大変な粗相を犯していた。

今のナタルは「ドミニオン」の艦長であり——既に中尉ではなく、少佐の階級を与えられているからだ。

むしろ中尉というのは、彼女が「アークエンジェル」に配属されていた頃の階級なのだ。ハリーとしては、あの頃から頭を更新せず中尉と吐いてしまったのだろうか、不思議とナタルは、そのことを指摘する気になれなかった。——むしろ中尉と呼ばれ続けても構わないと、甘えている自分がいたのだった。

(なぜだかな……)

地球軍では、何事も階級が重視される。

エリートを目指していたナタル自身、かくも若くして少佐という榮譽を授かったときは、並々ならぬ喜びと誇りを抱いたものだ。それこそ、これほどの艦の艦長に抜擢されたときなどは、自負を持って奮起していた。

にも関わらず、そのとき抱いた決意や希望が、もはや思い出すことも困難なほど薄れてしまっている自分がある。あれから月日はそれほど経っていないのに、むしろ中尉だった時代に逆戻りしたいとさえ感じている自分がいて、そんな自分が情けないと本気で思っている節があるのだ。

……だからだろうか？ 至って不本意だったとは思うが、中尉と呼ばれたとき、ナタルは奇妙な安心感のようなものを憶えてしまった。郷愁感、と云つてもいい。すべての責任を放棄して、当時はどうにも反りの合わないと感じていたマリュー・ラミアスの副官に戻るなら、それはそれで悪くないとさえ感じてしまったのである。

「地球軍への忠誠心が、揺らいで来ているのですか？」

胸中を見透かしたような問いかけに、ナタルはぎよつとして顔を上げた。

何故、わかるのです？ ハリーの指摘に、彼女はそう返そうとする——しかし、その言葉は口に出してはいけない気がして、慌てて彼女は口を噤んだ。

ナタル・バジルールという女性は、代々続く大西洋連邦の軍人家系の生まれだ。幼い頃からエリートになるべくして教育され、だからこそ、親の代から尽忠して来た組織に対し「大義が薄れて来た」などと、いつときの気の迷いで表明できる立場ではなかったのである。

だがハリーには、既に見抜かれているようで、

「カマかけただけですよ。今の反応で分かりました」

結果的に、ナタルは自身の身振りや反応で、ハリーの問いに頷いてしまっていたらしい。

それは以前の鉄のような物腰をした彼女なら、絶対にしなかつたであろう愚直なミスだった。

ナタルには、咎めるようにしてこう吐き捨てるのが精いっぱいだった。

「……無神経ですね」

「は、フレイにも同じこと云われました」

悪びれもなく、男は笑った。医者や医者でも、カウンセラーには向いていない男だ——この性格でよくアルスターの面倒が見切れたものだ、ナタルは今更ながら感心してしまう。

やがてナタルは観念したように、それでいて営倉という誰も訪れない空間をいいこと

に、肩の荷を下ろしたように吐露していた

「でも、そうですね……。幼いことから信じて来た夢が、一気に崩れてしまったような気持ちです」

発端は何だったか——「*グ*デイフエンド」のパイロットだった少女が、地球軍によつて薬物漬けにされていたと、他でもないハリーに明かされたとき？

そして最大の決め手は、アラスカの防衛戦——？

ナタル、ムウ、ハリー、フレイ——特別と云つては何だが——四名を除いた他のアーケンジェルクルーは、上層部の都合によつてアラスカに取り残され、彼らのために生贄に捧げられた。それを免れた彼らに対して与えられたのが、あろうことか『脱走罪』や『敵前逃亡罪』の適用であつたこと。要するに口封じのために彼らを抹殺しようとするのだから、そのときには既に、ナタルの中に迷いが差し込み始めていたのかも知れない。

ナタルの中では、一連の出来事をどうしても「裏切り」と感じてしまう部分があつたのだ。

『戦つて生き残る。戦争が終わるまで勝ち残る——けどよ、そうやって本当に戦争が終わつちまったら、俺たちはもう用済みだろ……。』

生きることには疲弊した、少年達との交流も——？

薬物によって人生を狂わされて来た者達を、懲り懲りするほどに見て来た。

だから生理的に受け付けられないという意味では、正直なところ、ナタルは地球連合軍のやって来たことに対して怒りを憶えているのだ。だが、実際にその感情を表明したり、体現したりすることはなかった。出来なかった、と云っても良い。彼女には子々孫々に受け継がれて来たバジルの家柄を守る義務があり、だからこそ親の理想に恥じ入るような真似は出来なかった。自分さえ我慢すれば、家の名誉と理想を護ることが出来る。それは本来、彼女の本望であるはずだった。

——なのに今になって、我慢を貫く気力すら失って来ている……。

よりによって、アズラエルなどという素人に全軍の指揮権をみすみす明け渡した軍部の人間——フレイ達が使えなくなるまで戦わせ続ける鬼畜の研究者達——その果てにいま、地球が減じるかも知れない現実。

その何もかもが、ナタルには耐えられなかった。

地球が撃たれようというときに、家柄など守っている場合ではないと考えているのだろう。ハリーは何となく、その気持ちから分からないでもない気がした。誰しも人には護りたいものがあって、その優先順位を決めるのは当人でしかあり得ない。だからこそ彼女はきつと、その葛藤に苦しんでいるのだろう——と。

「理想を欲し、名誉を守る。確かにいいことだ。でもそれだけでは、地上は守れない。

……わかつているのでしょうか？」

地球連合は、何のために存在しているのだろうか？ 始めから「プラント」と戦うことが目的ではなかったにしろ、その前身である国際連合は、地上の安寧を守るためにあつたものではないのか？ 再構築戦争が起こつた後、地球全土の混乱の鎮圧し、国際的な平和と安全を維持するために。

それがいつしか共同体同士の利権闘争に塗れ、睨み合ったがのち、強力なスポンサーを求めた大西洋連邦はブルーコスモスなどという結社の台頭を許してしまった。今の地球連合は地上のことなど後回しで——如何に戦後、強力な国力を残せるかだけで行動しているようにも見える。

少なくとも、ハリーの目にはそう見える。

——そのときだった。艦隊の合流の手筈が整つたのか、ナタルに艦橋から呼び出しがかかる。

彼女はやがて立ち上がり、ハリーに会釈をかわす。その目はまだ、迷いに満ちているようだった。

「わたしたちはずっと、得体の知れない「何か」に——踊らされていたのかも知れませ
ん」

ハリーは、ナタルが去る前に、漠然として云つた。

彼女は首をそちらに向け、立ち止まる。

「Nジャマーキャンセラーの入手から、此処に至るまで——思えば、上手くことが運び過ぎている」

「え……？」

「まるで誰かが裏から、この戦争を継続させようとしているみたいだ」

リックされていた「スピードブレイク」の攻撃目標——

これによりザフトは戦力の大半を失って、それと時を同じくして、大西洋連邦に「テスタメント」というニュートロンジャマーキャンセラーの情報が齎された。

「Nジャマーキャンセラーなんて「プラント」にしてみれば戦後交渉の最大のカードでしょう？ 国力では明らかに劣る彼らが、地球圏を丸め込むための」

「……たしかに……」

「それをアズラエルは分かっていた。だから喜んで核攻撃を仕掛けたんだ——その結果「プラント」に思わぬ反撃を喰らって、いまは危機に瀕している」

その言葉は、ナタルを驚かせた。

「……何が、云いたいんです……？」

「アズラエルはもしかしたら、地球軍全軍を動かしているつもりで——実は誰かに動かされているだけなのかも知れません」

ハリーはなんとなく、そう思った。

ややおいて「まあ、世迷言だと思つてください」と付け足すと、ナタルは少し考えるような仕草を見せたのち、営倉から出て行つた。ひとり取り残されたハリーは、漠然として思う。

（本当に、このままでいいのか——か？）

そう云つたナタルの目は、ひどく印象的だつた。

（女が何かを相談するときつて、だいたい覚悟が決まつてるんだよな……）

地球軍艦隊は「ヤキン・ドゥーエ」を指し、接近しつつある。

その動きを察知したバルトフェルドが、徐に号令を飛ばした。

「全艦、発進準備！」

三隻に号令が響き渡り、各科員が弾かれたように、それぞれの持ち場に戻つて行く。

その中でトール・ケーニヒは「アークエンジェル」のパイロットロッカーにあつて、

ニコル・アマルフィと共に、着替えを終えて格納庫へ向かつている最中だつた。

「ついに、始まりましたね」

ニコルがぎこちなく緊張した面持ちで云う。

——これが、最後の戦いになるかも知れない……。

なんとなくそう思うが、ツールはそんなニコルを励ますように返す。

「そんな辛気くさい顔するなよなあ。みんなでことに当たれば、怖いもんなって何もないさー」

赤信号、みんなで渡れば怖くないだろ？

慰めに使うには、それは最低の比喩だとニコルは真っ先に思ったが、あえて指摘はしなかった。そもそも赤信号は渡ってはいけないのだが、どこか砕けた感じがして、実にツールらしいと思っただからだ。

ツールは、相変わらず陽気だ。それは、無責任という意味ではない。彼は彼なりに覚悟を持ってこの決戦の望もうとしているのだし、それを判っているから、ニコルもまた純粹に救われる気分になる。

——そう、ぼくにだって、こうして分かり合える人がいるんだ……。

誰に云ったわけでもない。

だが、ニコルは反芻するように、ナチュラルに生まれたツールと会話を交わし続けた。コーディネイターだから、ナチュラルだからという区別など必要ないことで——自分出来るのだから、みんなにだって出来るはずだと、心から信じて。

待機中の「ブリッツ」に飛び乗り、シートを固定する。出撃準備を整えると、出し抜

けにM1隊から通信が入って来た。

「ニコルくん、頑張ろうね！」

「アストレイは艦の護りに徹するから、前のことは任せたわよ〜」

「今度こそ終わらせなきゃね！」

上からマユラ、アサギ、ジュリの順番だった。

一斉に口を利かれたため、誰が何を云っているのか判別するのは難しかったが、耳の良いニコルは、そのすべての言葉をしっかりと聴き取っていた。それもこれも、幼少の頃からピアノで培った聴覚の賜物だろうか。

戦いが終わったら、またピアノが弾きたいなど、そのとき不意に思う。訪れたことのない北欧の音楽史・音楽理論などについても、詳しく勉強してみたい。彼はすぐに、彼女達に微笑んで返した。

「みなさんも、くれぐれも気を付けて！」

ニコルは、験担ぎのように云った。

「ゆつくり時間ができたら、地球各地を回ってみたいんです。——よければ、みなさんに案内してもらいたいですから」

ですから、必ず生きて帰りましょう。

ごく自然なお誘いに、きゃーっ、とかしましい声が響いて来て、ニコルは僅かに苦笑

する。女の子というものは、驚くほど現金だなと思ったが、いつまでも浮ついてはいられない。

——ここから先は、気を引き締めなければ……。

その頃、同じように「ストライク」に乗り込んでいたツールは、その「ブリッツ」から響いて来る、ニコルたち会話をにニヤニヤしながら聞いていた。

——デートへの誘い方が、絶妙オチコラルすぎる……！

ゆめゆめ自覚はないのだろうが、無自覚だからこそその破壊力。なかなか巧妙なテクニクだと関心しつつ、そんなツールの目の前には、画面越しにミリアリアの姿が映っていた。みずからのガールフレンド——しかし、彼女の方はM1隊と違って、ひどく淡々と事務作業をこなしていた。

その証拠に、このときツールに対しても、

「ストライカーパックは「ソード」「ランチャー」「エール」——それと「フォートレス」と、四種類あるよ」

ひどく事務的な内容で、話しかけてくるばかりだ。

ツールはやけに神妙な顔つきになって、画面越しにミリアリアの姿を見つめていた。

「——どれにする？ どれもマードックさんの親切で、念入りに整備されてるけど」

「そうだなあ。ミリイは、どれがいいと思う？」

「……。はあ？」

「ミリアリアは、虚を突かれたでは云い切れない、鳩が豆鉄砲喰らったような顔になった。」

「何云つてんの、と云わんばかりだ。」

「それもそうだろう——いま選んでいるのは、ツールが扱う『ストライク』の外ストライカーパックの套」

「だ。操縦者本人の采配で決める事項を、なぜ、操縦者でもないミリアリアに尋ねる必要があつたのか？ 彼女はひたすら疑問に思ったが、ツールは、しんみりとして続けた。」

「今はこうやって、機体の装備の話しかできないけどさ——」

「……？」

「いつかなんて云うのかなあ——結婚式のドレスを選ぶとかなつたら、ミリイとこういう会話するのかなーと思って」

「たとえば、気に入った外套スーツが四種類あつたとして——」

「自分の中では、どれを選びたいか覚悟が決まっていたとしても、そこには当然のように、想い人の意見も取り入れた方がいいのではないかと、ツールは思うのだ。」

「が、ミリアリアには上手く伝わらなかつたらしい。彼女はひたすら呆れた顔で、ちよつと怒つた口調で云つた。」

「へもお何云つてるの、早く決めてよ！ こっちは忙しいんだから——」

「い、いや！　だからさー！　いつかミリイと、そういう会話ができるようになればいいなっていう、たとえ話であって——」

↑——知らない！　ばか！↓

ぶつり、と通信が切られてしまった。

機体のモジュールくらい自分で選べ、という意味だろうか。すっかり置き去りにされたトールは、嘆息ついでから、迷うことなく選択画面を操作して「フォートレス・ストライカー」を決定した。

——どのみち、どれを選ぶのか決意は固まっていたんだ。

大容量の内蔵バッテリー。無重力帯における高い推進力と、堅牢な防御力を有するフォートレス・ストライカー
この装備こそ、決戦では役に立つ——「ソード」や「ランチャー」では重すぎて戦況に対応しきれないし、万が一バッテリーが切れた際にも「エール」は保険として残して置いた方がいい。

——と、そのときだった。

突然、モジュールが収納してある機棚が動き出し、その中から「フォートレス・ストライカー」と「エール・ストライカー」——二種類のモジュールが現れた。

トールはハツとすると同時に、モニターからの通信が復活する。

↑——うそよ……ごめん……↓

照れ隠しのように、ミリアリアの懨然とした顔が、そこにあった。

トールは、苦笑した。

「へわたしだって、トールには帰って来て欲しいし……そのどっちかが、わたしは良いと思う」

「ああ、そう思う……！」

「トールが無事に帰って来れるように、ずっとここで祈ってるから」

今度は兵器じゃなくて、一緒に暮らせるアパートの話とか、できるといいね。

優しく云われ、トールは「ああー」と、笑って答えた。——この子と付き合えてよかったと、心から思った。

——同じ頃、本来ならば艦橋にいななければならないマリューは、格納庫を訪れていた。

既に「ギージス」のハッチが閉じていて、一拍遅れてそのことに気付いた彼女であるが、その存在に気付いたのだろう、次の瞬間にはハッチが開いて、ヘルメットを取ったムウが中から出て来た。

マリューは一心に彼の許を目指した。

「——間に合わないかと思つた」

「何にだよ、バカ……！」

ムウは云いながら、こつん、と包めた掌をマリユ一の額に当てた。

「大事な局面になる——。少し、集中していただけさ」

それが、人より早く「イージス」に乗り込んだ理由だ。

マリユ一は不安げに訊ねる。

「ラウ・ル・クルーゼと、決着を着けるつもり？」

「ああ、そうだな……」

ムウには、既に分かっていた。

——この戦争をここまで泥沼の状態に導いたのが、誰であるのか……。

思えば、ヤツの裏工作はずっと前から始まっていた。「スピッドブレイク」の情報を地球軍にリークしたのはラウであり、それによって、ザフトの勝利に終わるはずだった戦争は長引いた。同様に「テストアメント」の隠し場所を大西洋連邦にリークすることで、地球軍にNジャマーキャンセラーが渡るよう仕向けた。

そうしてアズラエルが、喜んで核攻撃を仕掛ければ、それは「プラント」の過激派を煽ることとなって、結果的に「ジェネシス」の起動に繋がった。仮に「ジェネシス」が起動せず、地球軍が地上の復興を優先していたとしても、「ジェネシス」の存在をちらつかせれば、地球軍は死にも狂いで戦いを仕掛けるしなくなる。地球を撃たれる前に。

両軍が両軍とも、互いを滅ぼすまで終わらない——このような状況を招いたのは、他ならぬラウだ。

彼がすべてに手を回して、戦争が長引くように画策していたのだ。

「あいつを止めなきやいけない、絶対に」

「……あなたは、帰って来る?」

マリューは、彼がもう二度と手の届かない所へ行ってしまう気がして、不安になった。

だが、ムウは、宥めるようにマリューの髪をすき、優しく返す。

「ああ。おれはすぐに戻って来る——勝利と共にね」

不可能を可能にする男は、既に覚悟を固めている。

彼はマリューの身体を抱き寄せ、そつとキスを落とした。マリューも委ねるように応じる。安らかな時間が流れたが、それは二人だけの世界である。下の方からそれを目撃してしまったマードックは、(人前でイチャイチャしなすつて!)と唾棄するのが精いっぱいであった。

「少佐あ、一応『ゼロ』の整備の方もとききましたんで、よろしくお願いしますよお」

マードックは、技術屋だから、空気は読まなかった。

「ええ? ああ、やってくれたの?」

マリューから唇を離れたムウは、きよとんとして云う。

よく見ると、格納庫の片隅にマントのかかったMAの機影がある——“メビウス・ゼロ”だ。もともと無重力帯専用の運用機のため、地上に降下してからはまったく出番がなかったが、まだ保存されていたらしい。

「こだわりですよ」

「なるほどねえ」

戦力の比が決定的に少ない三隻同盟だから、どんな小さいことでもやっておきたいというのが、マードックの意地であり、願いでもあった。可能性があることはする——だから、前時代的な“メビウス・ゼロ”に関しても、それまで大破していたままの“ガンバレル”を、補修する必要があると考えたのである。

ムウは不敵に笑って、「ありがとさん」とだけ云った。

“エターナル”のパイロットロッカーを抜け、アラートまで抜ける廊下は、上手側がガラス張りになっていて、窓外には宇宙の星の海が広がっている。鑑賞目的まがいの、ただの宇宙探索船であれば、ここ以上に展望室に相応しい一角はないだろう。

ステラ・ルーシエはドリンクを片手に、格納庫まで向かっている最中だった。

彼女が着用しているのは、桃色のパイロット・スーツである。

それは以前から「アークエンジェル」のロッカーに置いてあった代物で、ぱつと見ると「デストロイ」に乗っていた頃のそれと似ているかも知れない。勿論、強化人間用にデザインされたあれほどに無骨ではないし、もつと柔らかい印象をしている。ザフトに居た頃の真つ赤なパイロット・スーツも持つてはいるが、一度雨に濡れてから洗濯したつきり使っていない。使う気にならない、と云った方が正しいかも知れない——そのことについては、ステラ自身も理由がよく分からなかったが。

そのパイロット・スーツと、同じデザインをしたものを着用した人が、隣にいた。白と水色を基調にした——キラ・ヤマトである。

「正念場だ」

キラは、感覚としてそのように判断していたのだろう。

長かった戦争に、ある意味で決着がつこうとしている。状況は既に「プラント」が滅びるか、それとも地球軍が滅びるのか——？ いずれにせよ、どちらが先に滅びるステージに突入している。核が「プラント」に撃ち込まれるのが先か、それともミラーの交換を終えた「ジェネシス」が地球を撃つのが先か——？

それを止めることが、ひとまずは、多くの命を救うことになる。

「——」

キラはゆつくりと、隣にいるステラの方を見た。

彼女はちよつと口を尖らせながらドリンクを飲んでいるが、緊張で乾いた唇を潤すための作業だろうか？ ストローを咥えながら、きよとん、としてこちらを見返して来るその顔は、星の輝きに照らされて色々と反則だと思つたが、やがてエレベータの前まで差し掛かった。

そのエレベータを待つ間、キラの胸に奇妙な感慨が押し寄せた。—— “ヘリオポリスの崩壊から、色々あつたけど……”

思い返せば、自分はいつだつてこの少女に守られ、導かれて来たようにも思える。そう思うと、不思議と神聖な気持ちになつて、扉が開く前に、彼はこう云つていた。

「ステラのことは、ぼくが『まもる』よ」

云われたステラは、驚いた顔をした。

「だから、絶対に帰つて来よう」

もう二度と、失いたくはない。

少なからずキラは、一度だけステラのことを守れずに、離れたことがあるのだ。あのときのような気持ちになるのは、二度と御免だと心から思っている。

なかなかエレベータが来ないこともあつて、キラはそつとステラの腰に手を回した。優しく額に唇を落とそうとしたのだが、それはどうにも、当のステラによつて拒絶され

てしまった。両手で顔の前を塞がれたのである。

「ふっ、ふわふわしちゃう、から……」

その顔は驚くほど真つ赤に染まっていて、キラは苦笑してしまふ。

もし、出撃前にそういうことをされてしまうと、気持ち引つ張られたり、何かに奔つてしまふのではないかと、ステラは不安に思ったのだ。

何が云いたいのかと云うと、今までの自分と、違つてしまふ。

その「違う」という僅かな感覚が、墮落に繋がつて、命取りになるかも知れないと危惧したのだ。験担ぎと云えば聞こえは良いのだろうが、戦場での墮落は死を導く。その判断が付かないから、ステラはあえて断つたのだ。

——やらなきやいけないとが、たくさんあるから。

だからステラは、キラに対して一言だけ告げた。

「信じてるから……。まもつて」

せめてもの云われたことに、応じてあげるのが、誠意だと思つた。

キラは、笑つて頷いてくれた。

“ヤキン・ドゥーエ”を背にしたザフト軍防衛部隊が、蜂の巣を叩いたように大量で

出て来る。『ジエネシス』を抑えんとする地球軍艦隊のMS部隊と、最前線で交戦状態に入った。

「両軍、戦闘を開始しました！」

機体に飛び乗ったステラは、管制官からのその報告を聞く。

OSを立ち上げ、すっかり手に馴染んだコクピッドに身を埋める。メツトの機密を終えると、改めて深く息を吐いた。艦内に揺れが奔る。ラクスの指示で『エターナル』が航行を始めたのだろう。自分達の行先は、他でもない——決戦の地だ。

——これが、『ヤキン・ドゥーエ』戦役……。

ステラが考えていると、モニターに『エターナル』の艦橋から通信が繋がった。それはどういいうわけか、マユ・アスカの姿だった。

「ステラお姉ちゃん、がんばってね！」

「うん、ありがとう」

ステラは、にこ、と笑って頷く。

次いで、反対側のモニターにはムウの姿が映る。

「パトリック・ザラを——親父さんを止められるのは、おまえだけだ。おまえの進む道は、おれたちが切り開いてやるから、とにかく、前だけ向いて進むんだ！」

「ムウ……！」

「——モビルスーツ隊、発進してください！」

発進指令が出て、続々とモビルスーツ部隊が発進してゆく。それぞれに、決然とした号を発しながら。

「トール・ケーニヒ、"ストライク" 出ます！」

白亜の戦士が、

「ニコル・アマルファイ、"ブリッツ" 出撃します！」

漆黒の潜行者が、

「ムウ・ラ・フラガ、"ヴィオライージス" 出るぞ！」

赤紫の指揮官機が、

「カガリ・ユラ・アスハ、"ストライクルージュ" 行くぞ！」

それぞれに旅立って行く。

そして"エターナル"においても、それは同様だ。

「キラ・ヤマト、"フリーダム" 行きます！」

自由の翼が、燦然と輝く星の海に向けて飛び立って行く。

そして——

「ステラ・ルーシエ、"クレイドル" 出る！」

漆黒の闇に飛び立っていく"クレイドル"は、鮮やかな銀白に通電し、翼を広げて最

後の戦に望んだ。

「——来るか」

ラウ・ル・クルーゼは“ヤキン”内の格納庫にあって、何か予感のようなものを感じ取っていた。

彼の目の前には、暗灰色に彩られた、一機の新型機がある。

大きな光背のような背面ユニットを背負い、その円周にいくもの砲塔が突き出している。胸部からそこに伸びる電子ケーブルはあろうことか剥き出しになっていて、どこか未完成といった風な印象を受ける。

無論、未完成機であるわけがない。その機体は、やや鈍重な印象をしているが、精悍だ。“クレイドル”の流れを汲んだドラグーン・システム搭載機であり、直系の後継機に当たる。元々は格闘戦仕様の機体として完成するはずだったものを、パイロットの能力を鑑みて仕様変更したために、後付けのケーブルが剥き出しになっているのである。

「隊長、みずからご出撃なさるのですか？」

「アスランか」

それと共にあるのは、ZGMF—X09A “ジャスティス”とZGMF—X11A “

リジエネレイト”である。

中でもアスランが、珍しく白色のパイロット・スーツに身を改めたラウを見つけ、驚いたように声を掛けて来た。

「第七宙域の守りが薄い。加勢するよう、ザラ議長からの通達でね」

「はあ」

「きみも祖国のため、大義のために戦うのかな……？」

アスランは、彼が何を云い出したのか分からなかった。

「……は、そのつもりでありますか？」

「いや、いい。それでいいんだ、きみは」

ラウはゆめゆめ、嘘は云っていないかった。

「この『プロヴィデンス』も初めて実戦に出るのだ。きみの脚を引っ張らぬよう、気張らせてもらおうよ」

「そんな……」

アスランは、謙遜して応えた。

やがて三機に、それぞれ発進命令が出る。まずは巨大なハッチが開き、そこから漆黒の『リジエネレイト』が飛び立って行った。

——今日が人類にとって最後の日だ……。

——止められるものなら、止めてみるがいい、最高のコーディネイター。
ラウはひっそりと嗤って、野心を隠しつつ、勢いよく飛び出して行った。

「ラウ・ル・クルーゼだ。——プロヴィデンス”出るぞ!”」

「アスラン・ザラ、”ジャステイス”出る!”」

——鳴り響くのは、決戦の合図。

『セカンドアリー・ウエーブ』A

地球軍とザフト軍が、ふたたび戦闘を開始した。

地球軍側の狙いはひとつ。『ヤキン・ドゥーエ』後方に据える大型ガンマ線レーザー砲——『ジエネシス』の破壊である。

死に物狂い、といった勢いで進軍する彼らは、軍事拠点であるプトレマイオス・クレター、そして彼らの生まれ故郷^地を人質に取られている状態にある。友人・家族・恋人……さまざまな思いを寄せる者達が『ジエネシス』の射線上に立たされている以上、地球軍各員は飛ぶ鳥を落とす勢いで攻め込む他になかった。

対するザフト守備軍も、踏みとどまって応撃。打って変わって、彼らにとつて『ジエネシス』は勝利の鍵——希望の代名詞だ。これを破られれば、地球との交渉権を大いに失うことになるばかりか、核攻撃による洗礼を以て、逆に『プラント』が壊滅の危機に陥ることになる。

当たり前だが、どちらの軍も敗戦などしたくないし、故郷だって失いたくないのだ——強迫観念に逼迫された者達には、もはや善悪を問うている余裕はない。正義も悪も存

在しない、同情も容赦も必要ない、ただ自分達の大切な故郷を「守るため」に「殺し合う」戦争が始まったのだ。

出撃後、即座に“ミーティア”を受け取った“クレイドル”の中、ステラはデイスプレーを拡大し、実際にはまだ遠くにある戦場と、そこで繰り広げられる大規模な艦対戦の様子を目撃していた。

異常な空気であることは、すぐにわかった。

ステラが初めて経験した戦争は“ユニウス戦役”であつたが——それと比較しても、空気が違い過ぎている、とステラには思えてしまった。

当時と比して、現在はMSの性能水準では低次元にあるはずだ。けれども、常軌を逸し、電撃が肌を灼くようなビリビリとした感覚が、目の前の“ヤキン・ドゥーエ戦役”にはある。出来ることなら、飛び込みたくないな、と思つてしまうくらいには。

“ドミニオン”が、その渦中にいた。戦艦がみずから戦場を横切るなど、尋常ではない。が、直ちに“ジェネシス”に到達したい彼らは、二機の“G”を直掩につけながら戦場を邁進していた。弾幕を張り、群がる敵にゴットフリートを照準。撃ち放った野太い光条が、戦線の“ジン”を貫いた。

そのときである。彼らの目指す「ジェネシス」に、不気味な光が宿ったのは。

月基地より出立したフレイが、月艦隊の戦列を離れていく。随伴艦よりへどこに？と
いう疑問が紡がれたが、聞かずにそのまま離脱していく。

次の瞬間だった。艦のセンサーが前方に膨大な熱量を捉え、ほとんど同時に艦隊は「
それ」に飲み込まれていた。

「……………」

増援のために出立した月艦隊は、一瞬にして壊滅した。

フレイはどこか冷めた目でそれを見遣り、次第に、何かを決したような面持ちになっ
た。彼女はそのまま、レーザーが飛来した方角に指針を取った。

発射された「ジェネシス」のレーザーは、月基地を壊滅させた。

着弾地点には巨大な茸雲が噴き上がり、それは前線にある「ドミニオン」からも視認
することができた。レーザーは幾つかの光芒を撒き散らした後、確実に何万という数の
地球軍兵士達を焼き尽くしたのだ。

けれど、このときのナタルの頭には一人のことしか思い浮かばなかった。

——アルスターは……!?

彼女自身、なぜそのようなことを考えたのかは分からない。指揮官である彼女が目を見るべきは月基地の被害であるにも関わらず——たったひとりの少女の命運こそが、このときの彼女の頭を支配していた。

「支援隊より入電！ 『先の砲撃により、我、艦隊の半数を喪失』——!？」

「それすら狙つての砲撃……」

——艦隊の中には、フレイもいたはずだ……。

この瞬間から、アズラエルは絶句して完全に黙り込んでしまった。

無理もない。彼の云つていた「最後の手札^{カード}」というのも、つまりは戦場に到達する前に今の一射に灼かれたのだ。そうでなくとも地球軍は月艦隊の半数以上を失い、まともな増援を見込むことすら不可能となった。

地球連合軍は、負けたのだ。

三隻同盟が、戦場に飛び込んだ。

その目的は“ジェネシス”を抑えるため。彼らもまた“ドミニオン”と目的こそ同

じだったものの、相容れることはついにできなかったようで、そんな「ドミニオン」から繰り出される砲火をかわしつつ、マリューは叫ぶ。

「月基地を失つては、地球軍はもう退くしかないわ！ ナタル——！」
退くしかない、退くべきなのだ、とマリューは断じる。

月からの増援を失った地球軍に、どう転じたところで戦勝の二文字はあり得ない。潔く敗戦を認め、撤退するべきだ。少なくとも抗戦の意思がないことを明らかにすれば、このうえ「ジエネシス」を発射される道理はない。

しかし、そんな彼女の呼びかけとは裏腹に、月基地を撃たれた地球軍は更なる憎しみに駆られたように戦闘に没して行った。現にアズラエルもまた——

「——核攻撃隊を出せ！ 目標は「プラント」群だ、あの忌々しい砂時計、一基残らず叩き落とすんだアツ！」

CIC席を奪い取って逆上し、冷静さもなく声を荒げるばかりだった。月基地を撃たれた腹癒せに、コーディネイター達の大切な故郷を奪おうと云うのだろう。そうしたところで、こちらが失ったものは二度と返ってこないというのに——

「「G」に道を開かせろ！ コーディネイターどもに思い知らせてやるんだア！」
「アズラエル理事！ それでは、地球に対する脅威の排除にはなりません！」

子供っぽい感情論に振り回されるのでは、軍人として堪ったものではない。ナタルは

立ち上がり、振り返ってアズラエルを怒鳴りつけていた。

——当初の目的すら忘れてしまったのか、この男は!?

「ジェネシス」を破壊しない限り、地球は根本的に脅かされたままだ。そのうえ「プ
ラント」に核攻撃など仕掛けようものなら、逆上したコーディネイター達の憎悪と殺意
を煽るだけだ。そうして下手に挑発しようものなら、相手だつて何をしてくるかわから
ない——まさかとは思うが、地球だつて撃たれるかも知れないというのに!

「ああッ、ああッ、ああッ! もうッ! なんでそうそう、イチイチうるさいんだよ、あ
んたはッ!」

いや、分からないのではない——?

この男は、そもそも真実を分かってうとしないし、分かりたくないのだろう。自分が敗
北したというその事実を、受け入れたくないから。

「命令しているのはボクなんだよ! キミたちはそれに従うのが仕事だろ!」 なのに何
で、あんたはイチイチ、逆らうんだよ!」

「ここは戦場です! 目先の都合しか捉えられないようでは、死にます!」

アズラエルは胸ポケットから拳銃を持ち出して喚き出したが、ナタルは慄然とするの
を隠して、毅然として応じる。

撃てるものなら、撃つてみればいいのだ。ナタルはこのとき、不思議と目の前の凶器

が怖くなかったという。

「ドゥーリツトル」より入電！ ピースメイカー隊、発進準備完了とのことですが……」

すっかり竦み上がったオペレータが、ナタルの顔色を伺いながらおずおずと声を発する。その人はナタルほど状況を割り切ってもいなければ、アズラエルの掲げた拳銃が怖くて堪らなかつたらしい。

「発進させろ！——いくら『あんな兵器』を振り翳そうが、『プラント』を落とせば戦争は終わる！ だいたい、コーデイネイターすべてが地球に対する脅威なんだぞ！ ボクらはそれを撃ちに来てるんだ！」

「アズラエル理事……っ！」

「わかつたらアンタもちやあんと自分の仕事しろよ！ 前へ出ろ！——『ドゥーリツトル』を撃たせるな！ あの裏切り者の艦を、今度こそ沈めてみせろ!!」

「ドミニオン」の艦橋の中は、息苦しく、異常な空気に包まれていた。

特にナタルと違って、にわか仕立てのクルー達は、直属の上官と監視員オプザーバーによる分裂騒ぎに、ひどく精神をすり減らしているようでもあった。

「もう、やだよ——」

どこからともなく、心の折れた女性士官の悲鳴が聞こえた気がして、彼らに責を負う

ナタルは、ぎりつと唇を噛み締めた。

「——地球軍艦隊、転進します！」

ミリアリアの声にハツとして、マリユーは“ドミニオン”および地球軍艦隊が突如として進路を変えたのを認めた。“ジエネシス”から転進した艦船は、一目散に“プラント”を目指し行軍を始めたのだ。

いち早く意図を悟ったバルトフェルドが、危惧した口調で云う。

「くそッ！ 狙いは“プラント”か!？」

魂胆は判っている。とうとう“ジエネシス”に攻めあぐねた艦隊は、月基地を撃たれた腹癒せに“プラント”を攻撃しようとするのだろう。

先の“ニュートロン・スタンピーダー”を警戒してか、核ミサイルを抱えた“メビウス”の戦隊は、大きく間隔を取って航行している。

「あの部隊は!？」

「やらせるもんか……っ!」

核攻撃隊に気付いた“フリーダム”と“クレイドル”が、天馬のように核攻撃隊の追撃に向かう。そんな僚機達の動向に気付いた“ブリッツ”や“ルージュ”もまた、二機

の後に続いた。

それと時を同じくして、核攻撃隊の動きを察知したザフト軍も続々と守備隊を発進させてゆく。イザークが率いるジュール隊もまた、その編成の中にいた。

「来るぞ、散開！」

へやつら、編隊の間隔を開けてやがる！

「ミサイルの見落しは絶対に許されんぞ！ 一基でも撃ち漏らせば、帰る家を失うと思え！」

号令と共に、全ての「プラント」守備隊が核攻撃隊の迎撃に出向いてゆく。だが、例によって核攻撃隊の護衛を仰せつかる「レイダー」や「フォビドゥン」——それでも一機だけ現存する「ペルグランデ」と衝突することとなり、次々に防衛網に穴を開けられていった。

そうしてザフトが苦戦を強いられる最中、やはり現場へと駆けつけた「フリーダム」と「クレイドル」が、ふたたび「ミーンティア」の総火力を吐き出して核ミサイルを片端から叩き落とす。またも最終防衛ラインに光の防壁が形成される光景を目の当たりにしたイザークは、思わず熱狂の視線を投げかけていた。

——やはり、あいつら……！

だが、それと云つても全てのミサイルを撃墜できたわけではない。先の戦闘での失態

を活かし、核攻撃隊は友軍同士の誘爆を防ぐために隊列に間隔を空けた航行陣形を保っているのだ。

そうして現実に撃ち漏れていた核ミサイルを、しかし、後続する「ブリッツ」や「ルージュ」が手当たり次第に撃ち墜としてゆく。イザークとディアツカは地球軍の「G」に掛かりきりだったが、そいつらは「クレイドル」の機影を認めた途端、そちらに向かって行ってしまうた。

「へんなんか……なんだ？」

目の前で「フオビドウン」が転進し、それを見送ったディアツカが疑念の声を挙げた。

「連合の「G」だが、一機足りないぜ？ もう一機の黒いヤツ——「レムレース」は!?」
「哨戒機の報告を待つ！ おれたちは今ここで、できることをやるだけだ！」

ジュール隊は、ふたたび迫り来る核の第二波に備えた。

「クレイドル」の中で、ステラは自分達が思いのほかプラント最終防衛ラインに近づいていることに驚きながら、ここまでの侵攻を許したザフト守備軍は、戦力的にひどく

摩耗しているのだな、という事実には気付かされていた。挙句に、間隔を空けた核攻撃隊の波状攻撃——これでは、ザフトがギリ貧になるのも無理はない。

「『ジエネシス』なんて……！　どんな強い武器を振りかざしたって、肝心の『プラント』を守れないんじゃない……！」

真つ向から踊り掛かってくる『ストライクダガー』に、このときステラは手心を込めていた。迎撃のために掃射したビームライフルの射線を、わざとコクピッドから数尺ずらしたのだ。それはキラやカガリ達の戦い方を見習った故の手心であり、敵機の戦闘力や機動力のみを奪おうとした行動だった。

そうして彼女の撃ち放ったビームは、狙い通りに『ダガー』の肩間接部分にのみ直撃する。が、そこから誘爆を起こした爆炎は、瞬く間に敵機のコックピットを飲み込んだ。目の前に命の火球が咲き、ステラは思わず掌を叩きつけていた。けれど、落ち込む間も怒っている間もなく、感覚的な「上」の方向に淀んだ思惟を察知する。バーニアの燐光をちらつかせながら猛スピードで飛来する機影は、大西洋連邦の『フォビドゥン』だ。

「キラ、……をおねがい！」

ステラは思い切って『フリーダム』に言い残す。

通信先で核ミサイルを応撃していたキラは、ハツとして顔を上げた。そうして視線を

向けた先に、突撃してくる「フォビドゥン」の機影を認める。

いまだに無数の核ミサイルが「プラント」の防衛ラインを縦断しようとしている。ここであれらの機体に足止めを食らってはいけません、ミサイルの迎撃が間に合わない。

「——わかった！」

そうしたキラの返事を聞くが早いか、そのとき「クレイドル」は既に「ミーティア」を母艦まで送り返し、みずからが砲を買って出るように別の宙域まで離脱していった。その陽動に引つかかった……というより、差し出された挑発を「フォビドゥン」はあえて買ったような勢いで後を追っていく。

場に残された「フリーダム」は、ひとまず次なる防衛ラインまで機体を進撃させ、やがてはプラント最終防衛ラインまで辿り着く。

——と、そこに核攻撃隊を迎撃中の深紅の機体を発見した。ミサイルを撃ち落とすのは、冷徹にして正確な射撃。キラと同じく、宙域中に次々と巨大な火球を咲かせている機体は、鮮血色に染まったボディに、赤黒いサブフライトシステムを背負った「ジャステイス」だ。

「アスラン！」

「……!? キラか！」

「——右だ！」

キラは叫びながら、今にもアスランのすぐ脇を通り過ぎようとしている核ミサイルを示唆した。その言葉に弾かれてミサイルに気付いたアスランはすぐに機体を回頭、間髪おかずライフルを照射してミサイルを撃ち落とした。

——そうか……！ アスランはそもそも「プラント」が護りたくて……！

苦し紛れに、通信機にアスランの声が響く。

「何しに来た!？」

「アスラン、今は「プラント」を守ることに先決だ！」

「……！」

「やるしかないさ……！」

云い争うことから始めていたふたりであったが、そんな彼らの許に、遠方から地球軍が誇る虎の子のMA——「ペルグランデ」が飛来した。

そいつはキラとアスランの前で分裂し、分裂した破片そのものを砲塔とし、切り刻むようなビームのシャワーを「フリーダム」と「ジャステイス」に浴びせかける。

「「ペルグランデ」——!？」

無線化された「ドラグーン」による多重攻撃——

しかしアスランは、放たれた四方からの砲火を瞬時にすべて捌いてみせていた。一方でキラは「ミーティア」の右舷テールノズルへの直撃を許していた。被弾によりスラ

スターが暴発し、片肺となった“フリーダム”が独楽みたいに回転する。

「うわっ……!」

凄まじい遠心力が、キラの身体を横殴りにする。

元より“ミーティア”は大型のモジュールということもあって、白兵戦に用いるには不向きだ。繰り出す推力こそ絶大であるが、小回りが利かない分、定点攻撃も波状攻撃も卒なくこなすドラグーンが相手では、あまりに分が悪い。

(まさか、キラがこの場に現れるとは……)

四方から浴びせられるビーム攻撃を素早くいなしながら、アスランは思考している。

——この“ペルグランデ”は、どうして自分達の前に現れた?

敵のMAの目的は、元より核ミサイルの守護と護衛。そこから考えれば、ヤツのターゲットは“フリーダム”——いや“ミーティア”だろう。核ミサイルをこれ以上不発で終わらせたくない地球軍にとって、防衛爆撃さながらの大火力砲撃を殆ど無制限に行う“ミーティア”は、何よりも最優先で封殺しておきたい存在のはずだから。

要するに、自分達の前に現れた“ペルグランデ”の攻撃標的は、結局のところ“フリーダム”であって、決して“ジャステイス”ではないのだ。

だとすれば、アスランにとって目の前のMAと律儀に戦ってやる意味はない。この場に留まり、大人しく“ペルグランデ”と交戦する意義など何処にもないのである。この

宙域から“ジャステイス”が離脱すれば、残された“ペルグランデ”は十中八九“フリーダム”ヘターゲットを絞るだろう。追撃を免れた自分は何の憂慮もなく、核ミサイルの迎撃にのみ専念できる――

(しかし……)

それだけを考えれば好都合に思えるが、それだけを考えないのが、今のアスランでもある。

彼にしてみれば不本意な話だが、襲い来る“メビウス”の大群を相手にするなら、アスランよりキラのMSの方が百人力を有しているのだ。そのうえキラが“ミーティア”を装備しているのなら、その絶大な迎撃能力は千人力に及ぶものとなるだろう。

「……………」

こうして、あらゆることを冷徹に考えたとき、アスランがやるべきことはキラとの言い争いを続けることや、キラひとりに“ペルグランデ”を押し付けることではなかった。

キラのことはあえて泳がせた方がアスランにとっては利があつて、あるいはこれが危機に瀕したのなら、助けてやるのが最善策だ。キラもまた、今は“プラント”を守り抜く戦士になってくれるのだと、彼の力を信用する――

——信用？ 違う、利用したいだけなんだ……。

少なくとも『核の脅威から“プラント”を守る』という一点的な意味では、奇しくもザフト守備軍と、三隻同盟の利害は一致している。

迷っている時間はないらしい。数秒で覚悟を決めたアスランは、右肩の“バツセルブーメラン”を抜き放ち、それを分離している。“ペルグランデ”のドラグーンユニットに投げつけた。それを見た後方のキラから驚きの声上がる。

「アスラン……!?!」

キラには、まるで“ジャステイス”が自分を庇ったように見えていた。

動揺半分、もう半分は、歓喜した表情を浮かべている。

「“プラント”を守るためだ! ……蹴散らすぞ!」

「……! うんっ!」

無垢に笑ったキラを見て、ずきり、とアスランの胸が、音を立てて痛んだ。

——なんて顔して、笑うんだ。

頼りないキラ。それを放っておけなくて、いつも助けていた自分。その都度に、心の底から喜んだキラ——。

今この瞬間が、その再現であるかのようで。

まるで自分達が、遙か昔に置いて来た幼少期に戻ったみたいで。

——懐かしくて、苦しかった。

迫り来る連合の“ペルグランデ”は、ふたりにとつて共通の敵だ。この瞬間から“フリーダム”と“ジャステイス”が、共闘を始めた。

右腕の“トリケロス”からレーザーライフルを連射し、ニコルは最後と思しき核ミサイルを撃ち落としていた。一息つき、ゆつくりと周りを見渡せば、核ミサイルらしき噴進弾は、ニコルやその他の大勢が死力を尽くした結果として撃滅されたい。

第一波、第二波と続いて、またしても“プラント”への核攻撃を阻止することができたのだ。その事実が何より、ニコルとしては誇らしいことだった。

——これで、大体の片はついたか……!?

ミサイルを撃ち放ち、それ以上の役割も戦闘力も持たなくなつた“メビウス”の軍勢が、いそいそと地球軍艦隊の方へ帰投してゆく。

合理的に判断すれば、ニコルはそれを追撃すべきだった。

撤退したそれらが再出撃してくる可能性が少しでも残っている以上、彼は“メビウス”を追いかけてでも撃滅しておくのが正解のはずだった。

しかし、このときの彼は選ばなかつたし、選ばなかつた。単に“気が進まない”とい

う個人的な感情の下“メビウス”を追撃しなかったのは、云ってしまえば彼の甘えであり、優しきであり、矛盾でもあったのだろう。

「必要な機体は補給を！ “ドミニオン”を抑える……他は“ジエネシス”へ！」

だから、マリューからの指令を受けてもなお、ニコルは後ろ髪を曳かれる思いでその場から動けなかった。傍らにいる“ルージユ”からはへわたしは“アークエンジェル”の方に向かうぞ！と告げられたが、それでいてなお、彼は“プラント”から目が離せない。

（いま、僕がここを離れても大丈夫なのか……!?）

ザフトの守備隊——かつては共に戦った同胞達を信頼していないというわけではない。

しかし、彼らは現実には、一度は地球軍の防衛網突破を許している。核ミサイルへの対処として、キラとステラがいなければ完遂できていたかどうか——。

そんな状況だからこそ、守備隊に宛てる戦力はひとりでも多い方が絶対に良い筈で、だからこそニコルは、いま“プラント”の防衛線から離れることができずにいた。

——誰か、信頼できる人がいれば……！

そんなことを考えていた、そのときだった。

暗闇の向こう側から見憶えのある二機のMSが現れ、ニコルはハツとして息を呑む。

見まがうはずもなく、それは「デュエル」と「バスター」だった。

「イザーク！ ディアツカ！」

イザークもまた、正面に見えてきた「ブリッツ」の存在を認めていた——かどうかは定かではないが、この状況では認識して当然だろう——かたやィアツカは斜に構えながら、みずからの部隊長を横目に、どこか愉快げな面持ちで閉口する。

——さて。どうすんだ、我らが部隊長殿は？

このときのィアツカは、ニコルとぼったり遭遇したことに驚きなど感じていなかった。なんとなくだが、彼がこの場へ駆け付けてくる予感がしていたからだ。

そして、だからこそ一つの不都合が生じる。今のィアツカ達は、そんなニコルを敵として撃破するよう指令を受けていること。ザフトに仇なす敵性勢力——その片翼を担うニコル・アマルフイという少年を、自分達は決して見逃すわけにはいかないということだ。

しかし、

「イザーク！ 何度でも言います！ ボクはあなた達とは——」

先に口を開いたのはニコルだった。

戦う気はない——とでも、彼らしく続けようとしたのだろうか？

その先をィアツカは聞き届けることはできなかつたが、それは傍らの部隊長殿が、その先を言わせな

かったからだ。

「——『ミラージユコロイド』ステルスというものは、無色透明になるのだよな!」

突然。それは本当に突然のイザークの発言。質問というより、確認の意味で放たれた言葉であり、割り込まれたニコルは困惑を露わにする。

しかし、ディアツカはすぐに謎の発言の意図に気づいたらしい。調子を合わせたように、おちやらけた様子で返していた。

「あー、そうだなあ? もしそんなモノを使われちゃあ、ここの哨戒を任されてるオレたちが、たまたまうっかり眼前の『敵』を見落とすちまう——なんてことがあつても、仕方かねえよなあ?」

白々しすぎるイザークの態度と、やけに説明的なディアツカの云い回し。ここままでやられて、ようやくニコルは相手方の意図に気付き……そして、そのことを意外に思った。

だから彼は、慌てて『ブリッツ』の光学迷彩のスイッチに手を伸ばす。

展開されたガス状の霧が『ブリッツ』を覆い隠し、次の瞬間、漆黒の宇宙の闇から『ブリッツ』という機体が消えた——少なくとも、視覚的には。辺りをぶんぶん見回しながら、『デュエル』がのそのそと近寄ってくる。

「この辺りに何か居たような気がしたが、ディアツカ! 何か見たか!」

「……。いや、何にも?」

「そうか！」

(イザーク……)

イザークは、快哉として叫んだ。

「ならばオレたちは、地球軍の侵攻を喰い止めるだけだな！——まったくクライン派め！　『ジエネシス』を落とそうなどと考えていたら、タダでは済まさんからな！」

「まあ、それぞれにやるべき仕事がある——ってことだろう？」

含みのある会話を交わしながら、二人は何事もなかったかのように防衛ラインの哨戒と防衛の任務に戻ってゆく。

ニコルは、終始啞然としてしまっていた。明らかに自分の存在に気付いていたろうに、それでも彼らは自分を見逃し、自分にチャンスを与えてくれたのだ。あのイザークが、よもや自分に期待をかけてくれていているらしいのだ。

「——『ジエネシス』のことは任せた」って。そう受け取りましたよ、イザーク」

件のレーザー砲による地球軍の大量殺戮には、イザークなりに思う所があったのかも知れない。明確に言質は取れなくとも、やはり彼らは長い付き合いだった。みなまで云わずとも、云わんとしていることはなんとなく判ってしまうのだ。

「……強情なんだからっ」

そうしてニコルは、故郷の一切を彼らに任せて機体を飛び立たせる。防衛線を離脱し

た「エターナル」に後続し、仲間と共に「ジェネシス」へ向かったのだ。

できる限りの自重をしていたニコルであったが、次の瞬間、やはり嘖き出し、口元に大きな笑みが零れた。

「プラント」の最終防衛ラインは、ステラにとって息苦しい空間だった。

核ミサイルを手にした影響か、地球軍は他人の人生を歪めようとする害意と悪意に満ちているし、応撃するザフト守備軍も激情に駆られ、狂気だけが奔流のように渦巻く空間だった。だから彼女はわざと「フオビドウン」を誘い出し、軍本部を迂回したのち、大きく開けた宙域までこれを誘導した。

「オマエエー！ 今日こそはアツ！」

大鎌を構えた「フオビドウン」が、及び腰の「クレイドル」に急接近をかける。

屈曲する熱プラズマ砲「フレズベルグ」を撃ちかけるが、それは射線の途中において「クレイドル」のドラグーン・シールドに真っ向から遮断され、目標の「クレイドル」本体まで届くことはない。時間と空間——あらゆる射線と行動のタイミングを読み尽くされているかのような支配感が、シャニの気分を逆撫でする。

「あの白い悪魔を叩き墜とせ！ 砲火を集中させろ！」

後方にある「ドゥーリットル」艦橋、ウィリアム・サザーランドが号を飛ばし、次の瞬間「クレイドル」目掛けて無数のホーミングミサイルが撃ち放たれた。

魚群のように飛び迫るミサイルの数々を、ステラは頭部機関を乱射しながら迎撃し、しかし、その内の数基だけは爆散させずに残しておいた。次に、彼女は機体のスラスターを全開にし、いきなりの急加速を掛ける。後背の翼が青色の燐光を散らし、翼を広げた「クレイドル」が「フォビドゥン」に迫撃を仕掛けた。

ビームジャベリンを構えながら突撃してくる「クレイドル」を、このときシャニは迎撃とうとして、できなかつた。突如、彼の目の前で謎の爆発が巻き起こり、爆炎と煙幕が彼の視界を覆ったからだ。ドラグーンが撃ち掛けたビーム砲が、先に残っていたミサイルを横合いから撃墜し、意図的にシャニの鼻先で爆破させたのだ。

その爆光は「フォビドゥン」に対する目暗ましとなり、次の瞬間、煙幕の中から飛び出してきた「クレイドル」の光刃が、過たず「フォビドゥン」の大盾を切り裂き、これを奪い取っていた。

「くあ……ッ！」

「怯えているのね……？ あなたも、怖いのを隠すために戦ってるんだ……！」

「なんなんだ、おまえッ！」

「やめようよ……！！ 怖いのを嫌って戦うんじゃ、死に急ぐだけだから！」

怖いものを追い払う——

怖いものをやつつける——

そんな思いに脅かされたまま、盲目に戦い続けた者の末路を、彼女はよく知っていた。

「そんなことを繰り返していたら、いつか——」

「オレたちはマトモじゃねえ！ 強化人間はマトモになつたヤツから死ぬんだ——オル

ガみてえになア！」

オレはアイツみたいにはならない、シャニはそう思っている。

——オレは、騒がしいのが好きなんだ……！

——オレは、賑やかなのが好きなんだ……！

同僚や上官とも特に交流を持たず、そればかりか「ドミニオン」艦内ではいつもヘツドフオンを着用し音楽（じぶんひとりのせかい）の世界に閉じ籠っていたシャニ・アンドラス。そんな彼の「生活」とも呼べない日々を振り返れば、賑やかなのが好き、という発言は矛盾しているように思えるかも知れない。だが、彼は本当に、賑やかなことが好きだったのだ。

——たとえば戦場で、モビルスーツの爆発が、たくさんあるのは好きだ。

だって、綺麗な花が、たくさん咲いているから。

だって、みんなの「声」が、たくさん聞こえるから。

自分の中が、すごく賑やかになるから！

「……!? その『声』って……!」

その感覚に、思うところがある――

だからステラは、目をむいて驚いた。

「静かになるのは怖えよなあ、耐えられねえよなあ?　ひとりぼっちだもんなあ?　――

――だからオレはもつと壊して、もつと殺すんだぜ?　もつと『声』が聴きたいからな――

!」

一ヶ月前に戦死したオルガ・サブナツクは、若者向け小説ジュブナイルを読むことを趣味にしていた。

しかし、そうした彼の読書習慣は、それぞれ彼の同僚に当たるクロト・ブエルが携帯ゲームに、一方のシャニ・アンドラスがデスメタル音楽に没頭していたから、そんな二人に倣って始めたようなものでもあったのだ。

――では、なぜシャニ・アンドラスはデスメタル音楽を嗜好していたのか?

デスメタルというのは『死』や『死体』さらには『地獄』など、世辞にも上品とは云い難い不吉なテーマを扱ったスラッシュシメタルを起源としている。そこから派生したデスメタルは、圧迫感のある楽器演奏と、ヴォーカルの強烈なシャウトが印象的な音楽ジャンルのひとつとして確立している。

極度にデイスティションを効かせたヴォーカルは、それはそれは恐惶的な声音をして

おり、さながら獣が獲物を威嚇する唸り声、あるいは人間が朽ち果てる際の断末魔に似ているとされる。このようなダミ声を業界では文字通り『死声』デスボイスと呼ぶほどで、シヤニは、その死声が好きだった。

戦場でモビルスーツを撃墜したとき、シヤニはその死声に似た人間の“声”を聴くことができた。

それは人々による最期の絶叫であり、悲鳴であり、慟哭だ。消魂しく、耳を劈く人々の断末魔は、それこそが音楽となつて壊れかけのシヤニを解放してくれた——「自分ひとりではない」のだということ、救済のように彼に教えてくれたのだ。

だからシヤニは、その救済を求めて殺すのだ——たくさんの敵を。壊し、殺して、もつと大きな——もつと多くの断末魔デスメタル音楽を、自分の中に響かせていたいから！

「そんなのは——！」

戦闘が終われば悲鳴は途切れ、彼の『音楽』は止まってしまう。だからシヤニは、戦場から戻った後はヘッドフォンを着用し、それによつて断末魔デスメタル音楽を代用し続けた。

他人の放つ負の感情を、叫びながら朽ちていく戦死者達の慟哭を、当然のように自己の中に受信しているシヤニ・アンドラスは、紛うことなき共感力者エンパスだった。先の戦闘においてソレによつて体調を崩したステラとは対極に、シヤニにとつてはソレこそが音楽だったのだ。

「そんなのは、音楽っていわないっ！」

「テメーの『声』を聴かせろよお！」

告解と共に突っ込んでくる『フォビドゥン』の攻撃は苛烈を極め、高出力ビーム砲を乱射しながら肉薄してくる猛撃に、いよいよステラが手詰まりを感じ始める。また、ふたたび後方の『ドゥーリットル』による対空砲火が激化して、放たれた火線が『クレイドル』の行動範囲を狭めに掛かった。

「ミサイル斉射！ フェイズシフトだろうが何だろうが、コックピットに全弾叩き込め！」

サザーランドの指示により、またも無数のミサイル群が射出された。全弾が『クレイドル』を直指して急速に近づく！

そのときだった。突如として、そのミサイルが悉く撃墜され始めたのは。

ステラは何もしていない——が、突如として空域に形成されたビームカーテンが、すべてのミサイルを正確に撃ち落したのだ。

「——!?!」

その瞬間を、ステラはしっかり目撃していた。無数の砲塔らしき武装端末が飛び交い、それらのビームカーテンを形成したことを。蜂の子のように生物的に動き回るそれらは、目まぐるしく錯綜しながら一目散にこちらに飛び来たる。

(なんて数……っ!?)

彼女の判断は早かった。なおも迫撃してきた「フオビドウン」を蹴飛ばして強引に距離を作ると、すぐさま機体を翻す回避動作に入ったのだ。

衝撃にどつかれたシヤニは呻きながらも、さらに逆上したように「クレイドル」への突撃を敢行しようとする。

が、そうするより前に、彼の機体に凄まじい衝撃が襲った。「クレイドル」に突然逃げられたと思いきや、被弾を示すワーニングランプが点滅したのだ。どこからか発射されたビーム攻撃に、バックパックが直撃を受けたらしい。レールガンエックツァーを砲身ごと破壊され、しかし、それは明らかに「クレイドル」による砲撃ではない。

「な、なんだ——!?!」

ミサイルを撃ち落とされたサザーランドが、困惑の声を挙げる。そして、そのとき彼が見ていた艦橋窓に、光背のような大型ユニットを背負った黒銀色のMSくろがねが映し出された。蒼い輝きを放ったツインアイが、死神のように冷たい色をしている。

いつの間に接近を許したのか? 「対空砲火! 何やって——」サザーランドの叫びは、そこまでだった。眼前の黒銀色のMSが、肩口まである大型のビームライフルを艦橋めがけて発射したのだ。サザーランドの肉体は、艦橋に流れ込んできた光の奔流に焼却されて終わった。「ユーキディウム」——審判の名を冠する大型ビームライフルに

よつて。

「ああ？ ジヤマすんなよお！」

一方で、自身の戦闘に割つて入られたシャニもまた黙つてはいない。見たことのない機種だが、どうやら「クレイドル」と同系統のモビルスーツ、ザフトの新型らしい。

——テメエの命も刈り取つてやる！

激情のままに、それきり「フオビドウン」は「クレイドル」から標的を切り替え、大鎌を掲げて黒銀色の新型に突つ込んでいく。光背のようなバツクパツクを背負った威容は観音菩薩か、神仏そのもののようにも見える。

「——いけないつ！」

突如として繰り出されたビームの網を避けきることと精いっぱいだったステラが、咄嗟に声を荒げる。

何かが、彼女にそう叫ばせていた。

「——ア？」

死神。それを象徴する大鎌を抱える「フオビドウン」であるが、彼がそれを一振りするよりも前に決着はついていた。パイロットの知覚外、完璧な死角から発射されたビームが、過たず「フオビドウン」の全身を貫いたからだ。

ドラグーン。しかし「クレイドル」が繰り出していたそれらとは、明らかに

練度が違う——

すでに「ゲシユマイディツヒ・パンツァー」を奪われていた「フオビドウン」はビームを偏向させることも防御することも叶わず、次の瞬間には二桁を凌ぐビームの直撃を許していた。頭部を、左足を、右腕をと次々に部位をもぎとられ、転がされ、枯草色の死神はそれ自体がただの鉄塊へと姿形を貶められてゆく。

——何が、起きてんだ？

身を灼くような炎熱が体を押し包んで来ても、シャニには何も分からない。結局、最後まで彼には何も分からなかった。ただひとつ、耳が、聴覚が働かなくなったことを除いては。

「なにも、聴こえねえ——」

必死に手を伸ばした「クレイドル」の鼻先で、「フオビドウン」が爆砕して散った。爆発の衝撃が「クレイドル」を大きく吹き飛ばし、減衰をかけたステラの前に、もう再び「黒銀」が降臨する。後光を思わせる大型の背囊に、頭部ツインアンテナに見慣れない『仮面』——「メンデル」で報告にあつた「ベルゴラ」のものか。

「……………っ！」

何よりも、その機体から放散される邪悪な気配に、ステラは毅然として背筋を正す。

——そう、ステラは「それ」を知っていた。

鉄の仮面で己を偽り隠した男——ネオと同じ。嘘で塗り固めた人生の中、他者を信じず、自身さえ信じることでできなかつた者だけが抱く、子供のように純粋な悪意。

それは。それを抱える、あの人は——

「——ラウ・ラ・フラガ……!」

「キミは私の獲物だよ、ステラ・ザラ……!」

黒銀の『プロヴィデンス』が、白銀の『クレイドル』の前に顕現した。

『プラント』の最終防衛ラインでは、なおも地球軍とザフト軍の戦闘が続いていた。その戦闘の最中、クロト・ブエルはリーダー上から『フォビドゥン』のシグナルが消えたことに気付いた。

「——シャニ……!?!」

まさか、オルガに続いて、シャニまでやられたっていうのか？

——そんな強いヤツが、この空域にはいるってことかよ？

まったくもって、最期まで面白くないヤツだ。最後の戦闘くらいは、お互いに撃墜した『ホシ』の数を競い合おうって、約束していたじゃないか。

——なのに、なんでアイツの方が先にやられちゃうんだよ！

戦争なんて、ただの『ゲーム』だ。楽しまなければ大損で、だからボクは、もつと強いヤツと戦いたい。もつと強いヤツと戦って倒せば、もつと楽しいに決まっているのだから！

「フンッ、もう核攻撃隊のお守りなんて、懲り懲りだね！」

咄嗟に機体をM A形態に変形させ、鋼鉄の猛禽がザフト軍本部よりさらに向こう側の空域へと飛び立っていく。この瞬間、クロト・ブエルは“ドミニオン”の指揮下から離れ、与えられた任務を完全に放棄した。

だが、別に構いやしない。なんだかんだ、この戦闘に勝ち星などないことをクロトはすでに悟っていた。であるなら、廃棄処分されるより前に、もつと暴れたいじゃないか。人生だつて『ゲーム』なのだ。楽しまなければ、意味がない。

——シヤニがやられた空域に行けば、もつと強いヤツらと戦えるかなあ？

最後までいい、目いっぱい楽しんでませてもらおうじゃん——？

そのように胸を躍らせながら、“レイダー”が戦線を離れていく。その独断を感じした“ドミニオン”艦内に、オペレータの声が上がる。

「G A T—X 2 5 2、シグナルロスト！ G A T—X 3 7 0、戦線を離脱していきます

……!？」

「あああッ！ 何なんだよお、アイツらはア！」

癩癩を起こしたアズラエルは、なおも抵抗を続けるように管制官を怒鳴りつける。

「核母艦はどうなってるんだ!?! —— “ドゥーリットル” は? “ドリスミラー” は!?!」

「ど、どちらもシグナルロストです」

何もかも、アズラエルの筋書きから外れていく。おかしい——こんなはずじゃなかった! 一気に “プラント” を攻め落とせば、それで戦争に勝てるはずだったのに、なぜ、誰もボクの言うとおりに行動してくれないんだ!?!

そんなアズラエルの許に、たったひとつの吉報が舞い降りる。それは唯一残された核母艦 “コーネリアス” からの通信だった。

「本艦が “プラント” 本国へ特攻を仕掛けます! ——核攻撃隊はぎりぎりまで温存し、あの忌々しい砂時計、すべて破壊して見せます!」

「ああやれよッ! いいかッ、絶対に成功させろよ! 絶対にだ!」

一連の通信を聞き、ナタルは愕然とする。己の命を賭けて神風に臨もうとしている勇者達に対し、それが見送る側の人間の発言であっていいのだろうか。

「——蒼き清浄なる世界のために!」

それきり通信は切れ、核攻撃隊を積んだ “コーネリアス” が全速前進をかける。ザフ

ト守備軍は意表を突かれ、それに対応することが出来ない。もしくは、すべての「ダガー」隊が身命を賭して「コーネリアス」を守るのだ。

——最終防衛線を突破される！
ファイナルライフエンサー

そのときになって、付近で「ペルグランデ」と交戦していたアスランも、例の「コーネリアス」の尋常ではない加速に気付いた。いち早く敵艦の意図を悟ったアスランは、すぐさま声を挙げる。

「特攻する気か!? ——「フリーダム」!」

アスランは「コーネリアス」を示唆しながら叫ぶ。

キラは遅れてその艦影に気付き、アスランの意図を瞬時に悟る。

「「ミーティア」なら追いつける!」

「でも「ペルグランデ」は!?」

「行くんだ!」

くつと喉を鳴らし、キラは決死の想いで「フリーダム」の機首を転じ、その場を離脱する。案の定「ペルグランデ」が「フリーダム」を行かせまいとドラグリーンを彼の許まで殺到させようとする。

だが、その追撃をアスランが許さなかった。

彼は瞬時に意識の中で何かを弾けさせ、機体を急加速させていた。背を向ける「フ

リーダム」を庇うように前に踊り出ると、「ペルグランデ」のドラグーンに接敵し、ハルバードで切り捨てる。次いで「バツセルブーメラン」を投擲、更に「フアトウム―00」を発進させ――次々と繰り出される審官の暗器（サブウェポン）が、ドラグーンユニットの悉くを叩き落していく。

「邪魔するな……！」

人間業とは思えないあまりの武技に動転したのか、僅かに調子を崩した「ペルグランデ」の一瞬の間を見逃さない。

アスランは間髪置かず「ペルグランデ」に取り付き、すかさず刃を突き立て、敵機の心臓（コクピット）を貫いた！

そのとき、ぱつくりと開いた裂傷口。その奥部に、アスランは三名のパイロットを見た――気がした。

「!？」

それは、あまりにもおぞましい――

物理的に「脳」を繋がれた三名の強化人間が、そこに居たのだ。特別な空間認識能力を持たないナチュラルが、高度なドラグーン・システムを運用するために――

「ちィッ！」

――気味の悪いものを見た！

呪詛のような光景を睨に焼き付けられ、アスランは毒を吐くように舌打ったあと、突き立てたハルバードを全力で捻じった。次の瞬間には、最強のモビルアーマーと目された“ペルグランデ”が、爆炎の中に包まれた。

一方、既にファイナルデیفエンサーを突破した“コーネリアス”に、全速力の“フリーダム”が追いついた。両アーム部より高エネルギー収束火線砲を発射し、渦巻く光条が“コーネリアス”の艦尾スラスターを貫破する。衝撃の余波で艦内は停電を引き起こし、艦橋まで突き上げるような衝撃に苛まれる。が、それでも“コーネリアス”の艦長は諦めない。

「核攻撃隊、はっし——」

ズゴウツ！ さらに戦艦を、すさまじい衝撃が襲う。“ミーティア”の発射管から放たれた無数のミサイルが、一拍遅れて“コーネリアス”の船体に直撃したのだ。

管制官が、上ずった口調で続ける。

「だ、駄目です！ ハッチ開きません！」

「核攻撃隊、出撃できません——！」

黒焦げになった外装が、動作不良を起こしたか、すべてハッチが開かず“メビウス”が発進できないのだ。

そして“コーネリアス”は、メインスラスターの破損で、前進を掛けることも出来ない

い。

「で、出来ぬなら出来ぬでいいのだ！ 核弾頭の安全弁を外させろ！ 残った移動オプションで『プラント』に特攻すれば、数基くらいは巻き込めよう！？」

安全装置を外した核弾頭は、ほんの少しの衝撃が砲身に伝わった時点で、爆発するよう設計されている。であるなら、このまま『コーネリアス』が『プラント』に体当たりをしかければ、自動的に爆発する上、それによつて周辺の『プラント』くらいは壊滅させることが出来るはずだった。

ふたたび、なけなしの推力を振り絞つて特攻を開始した『コーネリアス』を見て、キラは愕然とする。再度、片肺になったテールノズルから燐光を散らし、一気に『コーネリアス』に迫る。

「なんでそんなことに、命を賭けるッ！」

——諦めろよ！

敵艦の執念を警戒したキラが、サブスラスターを潰そうと『クスイファイアス』レール砲を放った。電磁砲が直撃する——次の瞬間だった。艦内に大きな衝撃が走り、その反動を受け取った核弾頭のひとつが、内部で核爆発を引き起こした。

凄まじいエネルギーが連鎖的に炸裂し、中にいる人間達を骨片ひとつ残さずに蒸発させた。キラの目の前で、『コーネリアス』は壮絶な撃沈を遂げたのだった。

「『コーネリアス』轟沈——『プラント』、いまだに健在……」

最後の艦が沈むのを、ナタルはひどく冷めた目で見ていた。アズラエルは「あああ」と今にも泣きそうな声をあげているが、もはや気にかける気力すら残っていない。

——我々は負けたのだ、これで、間違いようもなく……。

ナタルはいっすすつきりした心境になる。そもそも、『プラント』への攻撃に意味などなかったのだ。あくまで自分の敗北を受け入れられないアズラエルが『勝つこと』にこだわった——それゆえのエゴ。こんなことなら、核攻撃隊を『ジエネシス』に向かわせていた方が、幾分マシだったろう。

——地球連合軍は、負けたのだ。

この戦争に、完全に。

これにより勝利を確信したザフト兵達は、いよいよ悠長な気分になっていた。イザークが以前懸念していた「戦後の話で浮き足立っている者達」というのも、戦場に出れば兵士としての勤めを果たすが、やはり核攻撃を完全に阻止できたことで、自軍の勝利を確信して気楽になっていたのだ。

——實際、まだ『敵』は残っている。

それは三隻同盟であり、残された地球軍艦隊だ。だが、既に逆転の希望を潰され、士気が低下している地球軍など、彼等にとつては敵ではなかった。あるいは三隻同盟についても、その殆どが「ジエネシス」の方角に向かったために、所詮は「プラント」守備軍に關係するところではなかった。

……だからだろうか？ 「核攻撃の阻止」という大任を果たした「プラント」守備軍は、かなり自由に宇宙に散らばり、地球軍に対する掃討戦を始めていた。それは明確な指揮系統の存在しないザフトだからこそ、できる強みでもあり、不幸でもあった。

「地球軍の^{おもちゃ}人形どもを殲滅するぜエー！」
「ひやはは！ これで終わりだなア、ナチュラルどもオツ！」

「ジン」や「ゲイツ」が、血に飢えた獣のように「ダガー」隊に襲い掛かる。彼は勝利の美酒に酔い痴れたように、殺戮という名の快楽を求めたのだ。

——これで、おれたちの勝ちだなア!?

今までの溜飲を下げるように、ザフト機の攻撃は止むことを知らない。ライフルに撃たれ、貫かれ、踏みにじられていくのは、逃げ惑う地球軍のモビルスーツ部隊だ。

「……待て！ 大型の反応がある?」

地球軍艦隊の奥までやって来ていた「ゲイツ」の部隊——

赤服を着た隊長がそう云い放ち、その一言に制動をかけられた小隊が、暴動とも云える行動を止めた。気が付けば彼らは、随分と「プラント」から離れた宙域まで、誘われるようにやって来てしまったらしい。ビーコン上には、たしかに奇妙な熱紋の光点が浮かんでいる。

そしてそれは、冷静に考えれば、あまりにも巨大な光点だ。しかし、すっかり高揚し上機嫌になっているザフト兵達は、

「遅参した地球軍の新型つてとこころでしょ?」

「こゝで叩き潰してやりやいいんですよ、そんなもん」

と、余裕を浮かべて笑い合つた。

しかし、笑いごとでは済まないことだつてある——

その反応は、息つく間もなく彼等の許へ急速に接近し、高速艦よりも遥かに早いスピードを男達に見せつける。それがあまりにも尋常ではないから、隊長の男は真つ青になつた。ハツとして顔を上げると——「それ」は最早、肉眼で確認できる位置にあつた。

「なんだ、あれは」

結論から云えば、彼等は逃げるべきだつた。目の前にそれが現れた時点で、彼等は逃げ出す以外の選択肢を選んではいけなかつた。

そして、他の選択肢を選んだ結果、彼等の運命は決まった。

被弾？ 損傷？ そんな軽微な表現などを、遙かに超越し——『破壊』という名の凶暴な力を、その身で味わうこととなったのだ。

彼等の目前に現れたのは——超大型の“黒鉄の巨人”

そしてそれが、彼等が現世で見た最後の光景になった。

『セカンドリー・ウェーブ』B

勢いの衰えた地球軍艦隊の間隙を縫いながら、*「デュエル」*と*「バスター」*はそれぞれに地球軍艦を無力化させていった。

戦争における殺人を悪と断じることができず、悪は悪でも必要悪とされてしまうのは、結局のところ戦争における法を定めたのも人間だからであろう。だからこそ、このときイザークが敵を迎撃するために戦艦を撃墜したり、踊りかかってくるMS部隊を撃滅したりすることは、決して悪行ではない。

だがイザークには、人殺しが最善だとも思えずにいた。

無論、戦場においては自分の命を賭けているのだ。その中で敵に手心を加えるような真似ができるのは、心や技量に相当な余裕を持つている連中だけだとも思う。それゆえにイザークには、自分にはできるはずもないな、という自覚があつて、向かってくる*「ストライクダガー」*は撃破した。

そこに生まれる矛盾こそ、良心を苦しめる戦争の嫌な部分だと思つた。

イザークとディアツカが戦場を駆け回っていると、彼らはそこで艦隊の深部に据える超大型戦艦を発見した。

戦艦というよりも移動基地と評して良いだろう外観をしているその艦影は、地球軍勢力のサンクシア級“ナルデール”——超弩級の大型空母だ。これを無力化しようと企むなら、とても“デュエル”と“バスター”だけでは火力不足だ。イザークは周囲のレーダーを確認してから、付近の僚機に声を掛ける。

「スカレット隊、空母を墜とす！ 手を貸せ！」

話に上がったスカレット隊の隊長は、赤服に身を包むエースパイロットだ。数ヶ月前にザフトで行われた宇宙軍再編成の折、イザークと共に隊長格に昇格したザフトレットドで、精進に伴ってGAT-X401^{デイトフェン}を受領している。

これはアラスカにて大破した機体をレストアしたもので、かつてはステラが搭乗していたモビルスーツだ。今は両肩の大楯を廃し、“デュエル”と同系の“アサルドシユラウド”を装備することで基礎戦闘能力の向上を図っている。そんなスカレット隊を構成する部隊員は“ゲイツ”や“シグーアサルト”などを乗り回す実力派揃いで、総火力で見ても申し分ない戦力になるだろう。

「仕掛けるぞー！」

イザーク達は合図を交わしたあと、一気に“ナルデール”へと押し迫った。

まず機動力のある“デュエル”が対空砲火の間を縫って接近、“バスター”は支援砲撃によるサポートに回った。じきにイザークの視界が巨大な空母の船体で埋め尽くされる頃になると、緩慢に散ったスカールレット隊からの援護射撃が激しくなり、“ナルデール”は無力化され失速の一途を辿った。

が、ありつただけの火力を撃ち込んでなお、“ナルデール”の装甲を破るのは困難だった。

(機能不全にするだけで良いのだが。——む?)

そのとき、手許のリーダーに巨大な光点が浮かび上がった。大型機の反応か、スカールレット隊の“シグーアサルト”が、確認のために戦線を離れてゆく。

怪訝がるイザークであったが、反応は彼のいる地点から“ナルデール”の向こう側に浮かんでおり、目視することができなかつた。

息を吐く暇もない、次の瞬間だった。“デュエル”の直上を巨大な“光”——熱線が貫いたのは。

それは、一条のビームの奔流だった。“デュエル”や“バスター”がありつただけの砲火を叩き込んでなお焦がすことしかできなかつた“ナルデール”の甲板を、その一線は一撃で突き破ってみせていた。ハツとしてイザークがセンサーに目を向けたとき、哨戒へ向かった“シグーアサルト”のシグナルは消えていた。

「なんだ!？」

次の瞬間、〃ナルデール〃の船体側面に、人間らしきのある鋼鉄の五指が添えられた。そこから重く顔面を覗かせたのは、巨人だった。おかしな表現かも知れないが、それ以外に形容の仕方が見つからない巨人だったのだ。

「モビルスーツ、だというのか……!？」

〃デュエル〃と同じようなG〃フェイス――

しかし、全長にして〃デュエル〃の三倍、四倍近くはある。

〈おいおいおい、なんだあれ……っ!〉

「戦う!?! ――い、いや逃げろ!」

それは、イザークらしくない判断だった。だが、結論から云えば正しい判断だった。隊長としての使命感、あるいは本能が彼にそう叫ばせたらしく、彼は自分がそのような命令を発した自覚すら持っていなかった。

だがその頃になると、巨人に〃デュエル〃や〃バスター〃は捕捉されていて、巨大な両腕――シールドらしき装甲を携えた――が飛び出す。自律航行を行う巨大両腕〃シウトウムルム・ファウスト〃――どこか〃クレイドル〃の防盾に似た兵装だが、その五指に内臓されたスプリッド・ビームガンが火を放ち、対応の遅れた〃バスター〃の半身を薙ぎ払った。

「ディアツカ!？」

叫びを上げたイザークの許にも、次の瞬間、眩しいほどの光渦が押し寄せる。反射的に対ビームシールドを掲げ、自分に向かって降り注ぐ光の洪水を受け止める。

——それがどうした。

シールドは肩口から吹き飛ばされ、イザークは勢いのまま“ナルテール”の壁面に叩き付けられた。

やがて彼らの視界を、目の前の宇宙を、光の洪水が横風ぎにする。礫のような体勢にされた“デュエル”も、その徹底的で破壊的な洪水の餌食となる。天災を前にしては、人は平伏するしかない。

「戦うんじゃない! 逃げろ——ッ!」

被弾した装甲が砕け、飛び散った小さな破片が剥き出しのコックピット内で脇腹に突き刺さる。激痛を堪えながらも状況把握に務めたイザークの目には、敵機の巨大な“G”フェイスの下、胸部周辺に格納されている別の“G”の機体に向けられた。

（——“レムレース”!?)

答え合わせのように、イザークの目は“黒鉄の亡霊”を捉えた。かの機体がこれまで一向に姿をみせなかったのは、この装備を受け取っていたからだともいうのか。

「クツソオ——!」

——やられる！

敵機がとどめを刺しにくると思われたその瞬間、しかし、脚の無い巨人は奇妙な動きを見せた。ふと、何かに気付いたようにスカートを翻し、まったく別の方角に飛び立ったのだ。

「……!?!」

敵の注意が逸れ、結果的に云えば、それによってイザークは命を拾った。しかし「巨人」の飛び立った先には「デイフェンド」の機影がある。すでに撤退を始めていた「デイフェンド」だが、イザークが目を向けたときには二基の巨腕ドラグーンによって物理的に挟み込まれていた。

次の瞬間、左右から迫る両の手に叩きつけられ、「デイフェンド」は無慈悲にも叩き潰された。

PS装甲が物理的に機体を守ったものの、守ったものはそれだけだ。まさしく蚊を叩き潰すかのような手軽さで、パイロットは戦死し、乗り手を失ったモビルスーツはぐったりと人形のようになる。

しかし、何を思ったか「巨人」はそこに胸ヒールムから伸びる光刃サイベルを突き刺しはじめた。巨人の胸部に収納されたコアユニット——すなわち「レムレース」が「トリケロス」からレーザーソードを、左腕からビームサーヴァーを振り回し、斬撃に切り刻まれた「デイ

フエンド”は無残な姿へと貶められてゆく。

(な、なんなんだよ……っ!?)

なまじ黒鉄色をして、どこか似た風采をしている二機であったから、その光景は、親が子を間引くものに酷似して見え、イザークの恐怖感覚を煽り立てたという。

しかし、ある折を以て斬撃が止まる。その頃には、もはや“デイフエンド”は串刺しにされ、殆ど人型の原型を留めていなかった。

イザークの動揺は、それだけで終わらない。破壊衝動を収めたその敵は、興味を失つたように、今度は“ヤキン・ドゥーエ”の方に転進したのだ。驚くべきことに、その巨軀を宇宙の闇に溶かし、消滅させていきながら。

(消えた——!?)

その現象が、先に見送った戦友の機体光学迷彩ではないことは明らかだ。あれはバーニアやエンジンの熱量までは隠匿できず、ブースターを点火させながら姿を消した今の現象には説明がつかないからだ。

要するに、たった今イザークの前を嵐のように横切っていったのは、何ひとつ得体の知れない怪物だということ。

——そんな怪物が、“ヤキン・ドゥーエ”に向かって行った!

恐慌と危惧が、イザークの胃を締め付ける——司令部が危ない!

イザークはすぐに「バスター」へと通信を試みる。しかし、応答はない。気絶でもしているのか、一命こそ取り留めているようだが、すぐにでも手当てをしなければならぬらしい。

すぐさま救助のために「デュエル」を寄せようとするが、意志に反して機体のスラストは破壊され、意図する方へ動くことすらままならない。

——何もかも、あの怪物のせいだ！

——「アレ」はいつたい、何が目的だった？

個人的に「ディフェンド」に怨恨でもあったのか？ この空域にあるモノを悉く破壊し、荒廃させ、あいつは場を後にしていったのだ！

それでいて不可解なのは、徹底的な破壊行動に及んだ割に、敵の生存確認はまともに行わなかった。文字どおりに轢き倒されたイザークとディアツカは現に命を拾っており、あれはみずからが手に掛けた者達の安否——その後の動向など関心の外とでも云うように、荒らした空域に興味をなくして離脱していった。「お前達など敵ではない」と吐き捨てんばかりに、己以外を明らかに軽んじた振る舞いをしやがった。

「なんなんだ、あいつは……！——くっそおおおつ！！」

敵意はあつても、ザフトの撃破や殲滅などは、必ずしも目的ではない。

そればかりか「ナルゲール」まで平気で沈めた「黒鉄の巨人」は、ただ己の破壊衝動

を満たすために戦場を回っているようにも見えた——

——なぜなら「破壊」こそが、その機動兵器の生み出された意味だから。イザークはまだ、そのことを知らない。

知っているのは、この世界にひとりだけなのだ。

「ヤキン・ドゥーエ」司令部にて——

戦闘の様相が、オペレータの声を通して告げられる。

「第十三宙域、スカーレット隊全滅！ ジュール隊との交信途絶！」

その報告を聞き、パトリックは鼻白んだ顔になる。

「情けないヤツらだ、この程度の戦力に遅れを取るなど！」

リーダー上には、既に氣勢の削がれた地球軍艦隊の反応しか映っていないというのに！

そのようなナチュラルの部隊に後塵を喫するなど、あつてはならないことだ——ザフトの勝利は確定したも同然で、そのときになつて撃滅するなど、最も詰まらない死に方ではないか。

「エザリアには報せるな！　上に立つ者が焦れば、士気に関わる！」

それにしても——と、パトリックは数々のモニターで戦場の様子を眺めながら、考える。地球軍の抵抗には、思った以上に鬱陶しいものがある。月基地を撃たれ、宇宙での足がかりの拠点を失った連中に、既に希望などないはずなのに。

——アスランからの報告に寄れば、既に「核攻撃隊は壊滅した」とのことだ。

反撃する手立てを失った地球軍には、もはや逆転の二文字は有り得ない。この戦争は、既に「プラント」の勝利で決まったも同然だ。

まったく、あの息子は期待どおりのいい仕事をしてくれる——パトリックは、ひそかにほくそ笑む。

まあ、いい。地球軍が身の程を弁えず、さらに攻撃を仕掛けて来るのなら、徹底的に迎え撃つて痛めつけるだけだ。そのためにも、必要なことは——

「ミラーブロック換装、急がせろ！」

——いつでも地球を撃てるように、「ジェネシス」の手配を進めること。

パトリックは本気だった。さすがの地球軍も、地球を撃たれば戦意を喪失するしかない搾取と無心を要求し続けて来た、理事国の代表格。

たかが一国、されど一国。大西洋連邦が滅びれば、経済・軍事、あらゆる面で世界の

均衡が崩壊する。以降は弾圧や恐慌を畏れ、「プラント」に恭順の意を示す国も増えるだろう——そうなれば、ついにコーディネイターが世界を主導する時代がやって来る。

——もう少しだ、レノア……！

——わたしが追い求めて来た、平和な世界が実現するまで……！

そのために、ナチュラル共には生贄になつてもらおう。云わばこの行為は、必要悪と云うべきものだ！

そうして、ミラーブロックの換装作業が着々と進められる中、それに気付いた敵艦の一隻が、愚かにも通信回線を開いて呼びかけて来た。こちらに向かつて来ている「エターナル」だ。

「ザフトは直ちに『ジェネシス』を停止しなさい！」

——ラクス・クライン！

大勢のオペレータ達が、その声にハツとして顔を上げる。

パトリックは、それを不快に思った。

「核を撃たれ、その痛みと悲しみを知るわたくしたちが、それでも同じことをしようとするのですか!?!」

涼やかで、しかし、ザフト兵達の胸の内を厳しく叩きつけるような声が紡がれる。

兵士達は、戦慄する。

〈同じように罪なき人々や子供を、撃てば癒やされるのですか! ——まだ犠牲が欲しいのですか!〉

たしかに、月基地を壊滅させた今、もはや「ジエネシス」が狙えるポイントなどは限定される。

——地球だ。

仮に地球を撃つことになれば、それは間違いない。「ユニウスセブン」崩壊の折の犠牲者か、それ以上の数の死者を生み出す結末となるだろう。

——本当に、それで良いのか……?」

良心の呵責が、兵士達を苛む。混乱のためか作業の手も止まる。それによりミラーブルック交換作業が遅延して、パトリックは苛立ちに声を荒げた。

「何をしている! 裏切り者の言葉になど、耳を傾けるでない!」

——このように見え透いた煽情に惑わされるなど、なんと脆弱なことか!

「貴様らの信じる『プラントの歌姫』とは何だ!』 プラント」のために歌い、プラント」のために泣く——その任すら放棄したあのような小娘の言葉に、どれだけの価値がある!」

パトリックは苛立ちを露わに立ち上がり、場にいる全員を叱咤する。

「間もなく戦争が終わるのだ! ——むしろ、我らの平和を阻害せんとしているのはヤ

ツらの方ではないかッ！」

強引な論理で喚き立てる。

そのときだった。後方に詰めるレイ・ユウキが、二度目の具申を口にしたのは。

「議長、既にお分かりでしょう……!? この戦い、もはや我らの勝利です！ ならば、ラクス嬢の云う通りでもあります！ もう、これ以上の犠牲は——」

ユウキの具申は、そこまでだった。

振り向いたパトリックが、レイに向かつて無言で拳銃のトリガーを引いたのである。銃声を聞いた兵士達が、一齐に蒼腿め、竦み上がる。

それから二発、三発と銃声は鳴り響き、すべての凶弾はレイ・ユウキの心の臓を貫き、彼を即死させた。兵士達は恐怖に満ちた目で、たつたいま躊躇いもなく自軍の指揮官を撃ち殺した男を見上げる。

「——『敵』はすべて滅ぼすと云った！ これは、そのための戦争だッ!!」

片付けておけ！ と、高らかに拳銃を上げたパトリック。

その瞬間から、司令部はまるで中世の独裁を思わせる現場となった。暴君に反骨の意を示す者は「かくなれ」と——処刑の現場をむざむざ見せ付けられた兵士達は、急ぎミラーブロックの換装作業を再開する。

——同じ目に遭わされるくらいなら、地球を撃ってしまった方がマシだ……！

地球を狙う三つ目のミラーブロックは、着々と「ジェネシス」に向けて移動を開始する。

パトリック・ザラは、止まらない。

「くそッ、聞く耳持たずか、パトリック・ザラ……！」

そんな司令部の様子を知るはずもないバルトフェルドが、強かに毒づく。指揮官席に坐すラクスが説得を試みてなお、遠くにある「ジェネシス」のミラーブロックは一向に停止しない。

このとき「エターナル」は、「クサナギ」と共に「ジェネシス」を目指していた。しかし、その前に聳え立つ「ヤキン・ドゥーエ」からザフト機が飛来し、妨害の放火に晒され、思うように前進することができずにいる。

バルトフェルドがクルー全員に号を飛ばす。

「矛先が地球に向いたら終わりだぞ！　ここが正念場だ、なんとしても持ち堪えさせろ！」

「……………！」

そんな「エターナル」の艦橋の中、マユ・アスカは上段の管制席に座っている。

勿論、座っているだけで、何か特別な仕事をしていないわけではない。もとより「エターナル」はザフトを出立する際に正規搭乗員を半数ほど追い出し、おのずと空席がある状態なのだ。彼女は訳あって、そこに座っているに過ぎない。

そのとき「エターナル」の主砲を浴びた「シグー」が、エンジン部から炎を噴き出し、後方に流れて行くのが艦橋窓から分かった。すれ違いざまその機体が爆発し、命の火球を見たマユ・アスカは、目を伏せた。

「——怖いですか？」

隣にいる、ラクスがそう訊ねて来る。

マユは、その鷹揚としたラクスの声に、内心ちよつと驚いた。先ほど「やきんどうーえ」とかいうザフトの要塞に呼びかけていた時の声色と、随分なギャップを感じたからだ。

今のラクスは、凜とした戦乙女というよりも、純粋な姉のように自分に接してくれていた。

「ノーマルスーツを持ってきていただきましようか。そうしたら……」
「ううん、大丈夫です。……でも、怖いのは本当です」

付け加えられた部分は、マユの素直さだと思つて、ラクスはちよつとだけ笑いかけた。マユは、震えた声で続ける。

それは、十二歳らしい少女の声音だった。

「わたし、戦争なんて知らない世界に暮らしてたんです。だからこういう光景なんて、ゲームとかテレビの中だけのモノだと思つてて……でも、全然そんなことなくつて。実際に、みんなが一生懸命に戦つてて——」

何十、何百という命が、彼女達の前で散つていく。

命を守るために、命を散らすこと——それは果たして矛盾なのか？

——そこに、矛盾は存在するのか？

互いに同じ種でありながら、お互いを憎み、殺すことしか出来ない——それが今の人間。

そして例に漏れず、マユ・アスカもまた、その人間のひとりだ。オーブという仮初の平和の中で暮らして来た彼女だからと云つて、決して例外であるはずはない。

——人間は争い、戦うもの。

いつか、そして、いつの世も、人類は戦争は繰り返して来た。

オーブの民は、そのことに関係ない振りをして、真実から目を背けて生きて来たのかも知れない——胸に痛感したマユは顔を上げ、ラクスの方を向いた。

「わたしも、ちゃんと知らなきやいけな
いと思ふから！……ここに居させてください！」
戦争というものを「観戦したい」という意味ではない。

戦争というものを「実感しておく必要がある」と考えたのだ。

結果的には同じような行為かも知れないが、マユ自身、それを同じだと思いたくなかったし、決定的に違っているとも思った。

(……強い娘です……)

ラクスは落ち着かせるように笑いかけながら、そう思う。

そのとき「エターナル」と「クサナギ」を援護しているM1の一機が、「ゲイツ」のビームクロウの直撃を許して爆散した。それがアサギ・コードウエルの乗っていた機体であるのだと、気付いた者は少なかつた。

「『ジエネシス』が……!?!」

ステラは「プロヴィデンス」との交戦下にあつて、再度ミラーブロックが交換作業を始めたのを、忸怩たる思いで見っていた。

——次はどこを撃つ？ 地球……!?!

彼女はすぐにでも「ジエネシス」へ飛び立ちたい気になるが、目の前の黒銀色のMSがそれを許さない。

「くっ……！」

混沌とする戦場にあつて、そのとき「クレイドル」が二基のドラグーンシールドを解き放つた。それを見越した「プロヴィデンス」の光背からも、同じ数のドラグーンユニットが分離される。それぞれに武装を施した誘導端末は、互いの操縦者の意志を受けて宇宙空間を錯綜し、激しくビーム砲を撃ち合いながら交錯した。

ラウが操るドラグーンは、ステラが操るドラグーンシールドをつけ狙つた。

そこでラウは、所詮は「盾」にしか過ぎないと思われた「クレイドル」のドラグーンが、その質量の大きさにも関わらず小回りの効く「プロヴィデンス」のドラグーンに有効に対処し続けるのを目撃した。シールドは何次元にも巧みな回頭を繰り返しながら、立体的に砲塔を捻り、ビームの反撃を飛ばすのだ。

しかし、そんな反撃にもみずからのドラグーンを対応させるのが、ラウである。フラガ家より受け継いだ高度な空間認識能力——しかし、それほどの「才」をひた隠しにして来たラウがこれ見よがしに撃ち返す逆撃に、一方のステラもまた対応してみせていた。だから結局の所、ラウはステラに感心するしかなかった。

「このドラグーンを使いこなすとは、やはりキミは異質な存在だな」

敵として最大の賛辞を受けたステラであつたが、そのじつ焦燥している。さながら黒い太陽でも背負っているかのような「プロヴィデンス」後背の大型武装プラット

フォーム——

——そこから突き出している砲塔、あれ全部ドラグーンなの……!?

動揺は——悟られぬよう顔や声には出さなかったが、砲塔と思しき「プロヴィデンス」の誘導兵装は数にして一〇を越えている。この全てを彼が制御できるのであれば、とてもステラと「クレイドル」の能力で対処し続けるのは不可能だからだ。これにより、ステラは二基のドラグーンシールドを手許まで引き戻した。

「クルーゼ隊長、なんでドラグーンを有効に使わないんです!？」

これは付近のザフト友軍機からの通信だ。先ほどから「プロヴィデンス」と「クレイドル」の戦闘が、ビームサーベルを用いた迫撃戦であることに言及したものである。

「——困んでしまえば——」

「「クレイドル」には光波防衛帯が装備されている。使ったところで意味はないさ」

そう云ったラウの言葉は、嘘ではない。

ラウがパトリック・ザラから託されたZGMF-X13Aであるが、この機体は「プロヴィデンス」に向けて差し迫る『幾多の脅威』——たとえば、地球軍が放つ無数の核ミサイルは好例だろう——の迎撃を行う拠点防衛用MSとして、プラント最終防衛ラインでの運用を想定したコンセプトに仕上がっている。これにより兄弟機であるZGMF-X10Aと似て異なる多重砲撃、多数の「ドラグーン」を駆使した複数の攻

撃目標に対する有機的な『全方位同時攻撃』を得手としている。

しかし、本機の属するファーストステージシリーズの中には、この超越的な攻撃性能を完璧に無力化する兵装を搭載したMSが一機だけ存在する。あらゆる角度からの砲火を無条件で跳ね返す、鉄壁の『全方位光波防御帯』を自在に発動できるZGMF-X08Aだ。

勿論、これらの二機は元は同じザフトの機体であり、敵対関係になど陥るはずもなかったが、現実としてこの力関係が成立する以上、ラウは特別“クレイドル”に対してのみ“プロヴィデンス”の強みを捨てた白兵戦を行う必要があったのだ。

とはいえ所詮は詭弁であり、実際はラウがドラグーンを使わない……使おうと思わない理由なら幾つも存在していたのだが、

(部外者には分かるまい——)

そもそも聞くところによると、設計段階での“クレイドル”は本来ドラグーンを搭載する予定ではなかったそうだ。奇しくもそれは“プロヴィデンス”も同じであり、この二機は“プラント”国防委員が唐突に行った仕様変更によってドラグーン兵装が増設された経緯を持つ。

いずれも“フリーダム”や“ジャステイス”に匹敵する程の『攻撃性の獲得』を目的としたアップデートだったらしいが、結局、この二機はパトリック・ザラという国防委

員を前に踊らされた機体、本来は白兵戦運用を想定した格闘戦重視の機種だった筈なのだ。だからこそ、

——ここはむしろ“本来の姿”で、堂々と衝突してみるのも一興ではなからうか？

挑戦心のようなものが、ラウを掻き立てる。彼は大型ビームサーベルで押し迫り、
“クレイドル”はビームシールドを掲げて翳された刃を受け止めた。

「ラウ、なんでこんなことするの!？」

へキラ・ヤマトから、話は聞いたかな……!？」

「あなたが“テストメント”なんて地球軍に渡すから、みんなおかしくなったんだ!」
大西洋連邦は核攻撃に乗り出し、フレイ・アルスターはその搭乗者となった。

結局のところ、そんなものはステラの都合でしかなかったが、戦況を混乱させているのはラウなのだ。ブルーコスモスの盟主である、ムルタ・アズラエルすらも傀儡にして、距離を開いた“クレイドル”が、素早く二挺のビームライフルを斉射する。常闇を切り裂くビームを、しかし“プロヴィデンス”は素早く回避してみせた。通信機からは男の興奮した声が高らかに響き渡る。

「残念なことだ、きみになら理解してもらえらと思ったのだが……!」

「えっ……?」

へきみになれば分かるだろう? この世界が命を賭けて護るに値しないこと、どれだけ

の闇を抱えて今に至ってしまったのか——

たしかに、その話はステラにとって実感を持って理解できてしまう。それまでは知りもしなかった戦争の時代に、突如として放り込まれた彼女は、地球で、宇宙で、じつに多くのことを学んだ。

——そしてそれらは必ずしも、良いことばかりではなかった。

金を持って余した資産家が、研究者達の技術とプライドを弄び、人工的に天才を製造しようとして依頼する大欲非道。優れた才能に嫉妬した者達が、その異能に対抗せんと強化人間という破滅した存在を量産する本末転倒。それぞれの過程において、容赦なく淘汰されていく数々の失敗作——すなわち、ラウの分身達と、ステラの同僚達。

——こんな世界のどこに、救える余地があるというのか？

このときステラは、ラウの言葉の中に底冷えした暗黒の情念を感じ取っていた。余人には底知れない強烈な負の感情が、“プロヴィデンス”から伝播して来るような感覚。精神的な恐怖感が、ステラの身体を絡め取ってゆく——彼女の古傷を抉り出すような、扇情的な言葉の数々によって。

〈所詮、私もきみも、闇の中に生き、闇の中で飼われていた人間の紛い物だ〉

「なにを……!」

〈本質的に似ているのだよ——そうではないかな? 他者の奴隷として虐げられ、他人

の都合と目的のために酷使され続けた過去の日々——」

ステラがラウ・ル・クルーゼと初めて出会ったときから感じていた既視感。そして会う度に感じていた「この男がネオ・ロアノークと似ている」という奇妙な感覚。

今になって、ステラはその正体をようやく思い知る。納得などできないし、認めるわけにもいかないが、ステラとラウはよく似ていた。容姿的な意味でも能力的な意味でもなく、人に人として辱められた根幹の部分において、あまりにも。

ステラがラウに向けていた、違和感と忌避感。その正体は、実は本質を同じくする者達による同族嫌悪に他ならない。ラウの闇はステラの闇と同等にして同質であり、だからこそ、彼は声高に彼女の心を暴くことが出来る、次のようにして。

「——その先にあつたのは、人の尊厳を踏み躪られた汚物のような末路だ——」
「ツ………！」

「今このきみになら思い出すことも出来るのだろう。その身体に刻み込まれた、数々の陵辱の記憶を！」

熱病に魘される患者のように、ラウは興奮した口調で現実を突き付けた。

「忌々しい陵辱の記憶——？」 過去から伸びる忌々しい記憶が、恐怖となつてステラの身体を慄かせ、震わせた。隠しきれない少女の動揺と戦慄、これを認めたラウが確信したように、高らかに哄笑する。

〈だからこそ、私ときみは似た者同士なのさ〉

複製人間と強化人間——

互いに人間の欲望によって生み出された、人間の紛い物。キラ・ヤマトという唯一の成功作——その高みまで到達すること能わなかった、でき損ないの失敗作同士。

——本質的な部分で、ふたりは似通いすぎていた。

過去の記録も、屈辱を受けた記憶さえも。今や世界を破壊しようと画策する男と、今は世界を守護しようと狂奔する女——違うのは結末だけであつて、本来ならば鏡合わせのような異性。しかし同族である以上、いずれ、いつかは同じ絶望の壁にぶち当たることになる……!—

「いやつ、聞きたくない……!—」

〈光の中に祝福されて生きて来たキラ・ヤマトとは、およそ対極にある私達——だが、何故かな!? 何故きみはあの少年と共にいて、彼と共に戦っている……!?!〉

白銀の「クレイドル」と、黒銀の「プロヴィデンス」——

人と神——光と闇を象徴する二機の機影が、激しく交錯しながら斬り結ぶ。

〈きみには才能があるのだよ……!— 時代の闇に囚われたこの私と同じ——みずから成り損ないに貶めたこの世界に、復讐する才能と権利がな!—〉

ステラは、ハツとする。

そうだ。ステラは、みずから望んで殺人者になったわけじゃない。なろうとしていたわけでもない。ただロゴスの——「ファントムペイン」の下した命に従属を強いられる意志なき奴隷として、大量の無辜を葬った虐殺の罪を背負わされただけだ。

ならば、誰が悪かった？

——誰を、恨めば良かった？

ロゴスを？

——それとも、世界を？

あるいは、自分を？ ステラには分からない。

——ラウは、その答えを知っている？

再び「クレイドル」がビームジャベリンを抜き放つて「プロヴィデンス」に突撃する。しかし、直前ほどの鋭さは既に損なわれていたらしい。ラウはこれを難なく受け止め、接触ゆえに間近になったスピーカーから、より明瞭な男の声が響き渡った。

へもし、この世界を怨む心が少しでもあるのなら、私と共に来るがいい！ 暖かな夢に包まれた子供——人類の最高位に立つキラ・ヤマト！ 彼はきみと真逆の存在で、元来、相容れるはずがないのだから！

指し伸ばされた手は、悪魔からのものか。

へきみが望むこと、私なら叶えてやる……！

私がかきみの友となり、父となり、母とな

り……！ きみの道標となつてやることもできる！

ステラが、望むこと……？

彼女は、呆然として動きを止める。

——この世界に、復讐すること……？

母を奪い、みずからまで貶めた、この歪んだ世界を破滅させる……？

暴走する父でもなく、あるいは道を違えた兄妹でも、今はまだ頼りない親友でもなく——ラウはステラにとって、それら以上の存在になれるというのだ。

動揺するステラに、さらに畳み掛けるような言葉が続く。

〈同族は同族と共にいるべきだ。だからきみは、この私が連れて行く——〉

自分喪失に陥り、無力感と虚無感から全ての動作を停止した「グレイドル」へ、悪魔のように忍び寄る「プロヴィデンス」——その腕を、囁くように伸ばしながら。

互いの腕が、結ばれようとしている？ ——その瞬間だった。

〈——聞くな！ ステラ！！〉

——その声はネオ？ いや、違う！

その瞬間、ステラはムウの駆る「イージス」が、一陣の矢のように飛来するのを見た。四脚のモバイルアーマー形態から「スキュラ」が放たれ、赤色の熱線が「プロヴィデンス」を大きく後退させた。

↑——ムウカー！

みずからの宿敵の気配を感じ取っただろう次の瞬間、ラウはこれまでに一貫していた容赦という二文字を手放していた。『プロヴィデンス』のドラグーンを全て分離し、これらを全て飛来した『イージス』へと使役させたのだ。

ステラは、幾多のドラグーン砲塔が一斉に火を放ち、それらが有機的に『イージス』を付け狙う光景を目の当たりにした。だがムウはMA形態の機体を操り、MA特有の加速力や重心移動をフル活用し、すべての光条の間を縫っていく。

それは、とてもパイロットがナチュラルであるとは信じられない程の、ひどく鋭敏な動きだった。

やがて『イージス』はMS形態に変形し、右腕からビームサーベルを出力しながら『プロヴィデンス』に肉迫する。迎え撃つ黒銀色の機体と、赤紫色の機体が幾度となく切り結び合う。

↑——それが望みか、貴様の！

↑そうさムウ！ 私としても大変遺憾だが、この肉体にはもう先がないのでね

ムウとラウが、罵り合いながら目の前で交錯した。男達の戦いを目の前にして、ステラは次の行動を起こせなかった。それが何故なのか、ステラにも分からなかった。

↑これが私の夢、そして人類が重ねて来た業！ ならばそれを継ぎ、この私が朽ちてな

お、世に業を齎す後継者が必要だ！

〈後継者だと……!? ふざけるな!〉

〈既に遅いさ、ムウ！ 私達は結果だよ！ だから知る——〉

ラウは「イージス」のサーベルを跳ね除け、打って変わって攻勢に出る。大型ビームサーベルで切りかかるが、ムウは辛うじてシールドで一太刀を防ぐ。

〈——みずから育てた闇に喰われて、人は滅ぶとなア!〉

が、出力の差に物を云わせるような形で、ラウは「イージス」を弾き飛ばした。弾かれた「イージス」が体勢を崩し、ラウは勝ち誇り、揶揄するように続ける。

〈——そんなものでは!〉

判っていたことだが、二機の性能に差があり過ぎるのだ。

間を置かず「プロヴィデンス」から無数の特殊武装が切り離され、鳥籠のように「イージス」を取り囲み始める。

——退路を絶たれた!?

ふたりの攻防を見ていることしかできなかつたステラが、ハツとして息を呑む。彼女は直感的に、ムウに「逃げ場がないこと」を予断していた。

——避けるなんて、不可能だ!

その予断は束の間に現実となる。次の瞬間、絡み合うような無数のビームが「イージ

ス“目がけて収束された。

「ムウ——っ！」

悲鳴にも似た叫びが、ステラから漏れる。

だが——

「——うおりやアアッ！」

気合の入ったムウの声と同時に、驚くべきことに“イージス”はMA形態に変形し、全ての砲火の間を縫って飛び、それをかわして見せた。人を象るモビルスーツでは到底実現しえない運動性能、MA形態へ変形できる“イージス”だけが持つ爆発的な加速力と重心移動、そして複雑高度な操縦技術を要する戦闘機のAMBAC運動——

その一瞬の間に、ありとあらゆるMAの操縦技術が手本のような精巧さを以て披露された。ステラはそのとき、みずからが御業の見本市にでも駆り出されたかのような気分を晒され、少女がそうして息を呑んでいる間に、ムウは脱出不可能と思われた“鳥籠”からの脱出を完璧に成功させた。それはまず間違いない、ムウ自身の『モビルアーマー乗り』として培った勘のなせる神業であった。

「やられてばっかじゃ、不可能を可能にするなんて嘯うそぶいてらんないんだよ！」

不可能を可能にする——

ムウはいつもの如く飄軽な口振りに戻り、力強く云い返した。

——ことをなす前に観念したステラと、最後まで諦めなかったムウでは、予断する未来は違う。

そのことを思い知らされ、ステラは平手で叩き起こされたような思いになる。

(すごい……！　ムウ、カッコいい……っ！)

ステラは頼れる男の参入に、しばし恍惚とした。

そして、心強い味方がやって来たことで、ひとまずは安堵していた。

味方を得た「クレイドル」が、恐怖から立ち直り、戦闘を再開した。心強い「イージス」の加勢を受けたことで、ステラは奮起し、もう再び「プロヴィデンス」と真つ向から対峙したのだ。

だが、そうと決まれば「プロヴィデンス」もまた容赦を捨て、ザフトが誇る最強の機動兵器としての「力」を存分に発揮する悪魔となる——

次の瞬間、ラウは計一一基にも及ぶ誘導兵装を惜しむことなく解き放ち、たった一機でありながら計四〇以上の砲門を備える「プロヴィデンス」の超然的な機体性能を引き出してみせた。

こうしたラウの超人的な能力により統制されたドラグーンが演出する、光の“雨”を以てラウは“クレイドル”と“イージス”に同時に襲いかかった。

天災にも匹敵する、無慈悲なる光の“雨”——

しかし、ムウは持ち前の感覚と操縦技術でこれらを捌き、ステラの方は光波防御帯の“傘”を展開、すべての“雨”を弾き飛ばしてゆく。

しかし、甘えた立ち回りは許さない——ラウは次の瞬間“プロヴィデンス”の防盾から漆黒の実体剣を伸縮させた。ステラはその刃を認め、表情を変えた。取り出された刃の正体は、ラクスを襲ったZGMF-X11Aも隠し持っていたラミネート製の暗器、光波防御帯を引き裂くためだけに導入された実体刃だ。

——その刃は、受けるわけにはいかない……！

ステラはモノフェーズ化された光波防御帯の内側から、ライフルや電磁砲を撃ち放ち、ありとあらゆる手段を用いて“プロヴィデンス”を牽制した。横槍のように伸びて来るムウの援護もあって、ラウの接近を許さない中距離攻撃を徹底し続けた。

「あなたが無理強いをされて、虐げられて来たってこと……わかるんだ……！」

その戦闘の中で、ステラは恐怖から立ち直って呼びかける。

「闇の中で生かされるって——つらくて、さみしくて、かなしくて……！ でも、世界がステラや、あなたを不幸にしたからって、平和に暮らしてるみんなのことまで不幸にし

ようつて考えは、きつといけないことなんだよ！」

云いながら、みずからの父にも云える言葉だと、ステラは思った。自分が不幸を見たからと云つて、誰も彼もを道連れにして良いということにはならない。

「それにあなたは、やつぱりキラのこと何も知らない！」

へなに……？」

「たしかに、キラはスーパーコーディネイターなのかも知れないよ。でもね、ステラたちとぜんぜん真逆の、やさしくてあつたかい世界にいたの！——だからキラは、スーパーコーディネイターになんてなれないんだよ！」

ステラは確信を胸に、力強く云い切つてみせた。

ステラにとつて、キラは掛け替えのない親友だ。そんな彼は人類の最高位に立つべき人間でもなければ、狂科学者達の誤つた理想像を体现する「キラ・ヒビキ」でもない。今を生きている彼は、平凡な家庭で幸せに生まれ育つた「キラ・ヤマト」でしかないのだ。

——明るい世界で、幸せに暮らして来た優しい男の子……！

少なくとも、ステラにとつてはそうであり、そのような人生を歩んで来たからこそ、今のキラ・ヤマトというひとりの人間がいる。確かに資質や素養——総じて才覚の点で云えば、彼ほどの天才は当世に存在しないのかも知れない。けれど、それでも——

——キラは、ヤマトだ。

——ヒビキの狂氣ユメの息子じやない。

今のキラは、正直なところ頼りになる兄貴分とも云い難いが、ステラはそれでいいとさえ思っている。それは彼が蔭りのない人生を真つ当かつ健全に歩んで来た証拠であつて、誰に咎められる性質のものではない。ましてやラウやステラのように、過酷な闇に直面していれば良かったのだと、一概に断じてしまつていいものでもないのだ。

たしかにラウの云う通り、ステラとキラの間には絶対的な不理解がある。運命の理不尽によつて、人の悪意の井戸の底に突き落とされた女と、光の中で愛されながら育てられた男と。この闇の深さと昏さを理解し得るのは、同じく闇の中で飼ひ殺しにされて来たラウを置いて他ならない。

だが、理解を示さずに済めばそれに越した事はないものだ。どう考えたところで、人として幸福な人生を歩んで来たのはキラの方であり、それを知らずに済んでいる時点で、やはり彼はこの上なく幸せ者であると述懐するに値する。

キラ自身、己の生まれた意味を知らず、知らぬがゆえにそう育たず、生きず——たしかにそれは、みずからの運命に縛られているラウからすれば、妬ましい話であつたかも知れない。

(それでも、ステラはラウとは違う)

みずからとラウを分かつ、決定的な違い——

キラ・ヤマトを少年として捉えているステラと違って、ラウにはそれが出来なかった。小さい頃から親友であったから、ステラはキラをひとりの少年として認めてあげることができた。

キラの弱さを理解してやれたステラと違って、ラウは強さでしか彼を推量できなかった。スーパーコーディネイターである真実などついではしかなかったのに対し、ラウにとってはそれがすべてだったのだ。

「ステラの知っているキラは……！ ステラに優しくしてくれたキラは、絶対に力だけが全てなんかじゃない！ ——間違ってるのは、ラウの方だ！」

だがラウは、それに嘲るように言葉を返す。

〈力強い言葉だが、本当にそう云い切れるのかな？〉

「——！」

〈私がここでキミを殺せば、あの少年は怒り狂って『力』を手にするだろう！ それはスーパーコーディネイターとしての覚醒だ！ 全ての人類の上に立つ、超然とした狂戦士のな！〉

その言葉を受け、ムウはハツとする。

（まさか、それが目的なのか……!?）

〈是非とも目に入れてみたいものだよ。力に溺れ、変わり果てた、キラ・ヤマトという存

在を——！

ムウが危惧した、次の瞬間だった。着々と距離を詰めつつあった「プロヴィデンス」の対ビームコーティンブレイドが、ついに「クレイドル」を捉えた。

宵闇に振り抜かれた漆黒刃が、鉄壁であるはずの光波防御帯を薄氷のように叩き割る！

瞬間、少女を守っていた「傘」が消え、これと同時に——殆ど同時に「プロヴィデンス」が支配する光の「雨」が、重吹きつけるようにステラへと襲い掛かる！

「くっそ……！」

恐慌し、ムウは慌てて「イージス」の機首を転じさせた。

——無理だ！

「プロヴィデンス」が——ラウ・ル・クルーゼが支配する「雨」は、実際にそこへ野晒しにされて初めて、その完成度が理解できる代物だ。超越した空間認識能力によって統制された全方位同時攻撃は伊達ではなく、これまでもそこらの波状攻撃であれば凌いで来たであろうステラにとつても、おおよそ経験したことのないであろう密度と完成度を誇る。なぜなら、ラウが秘めている遙か高次元的な空間認識能力は、奇しくもムウ自身も備え持っているフラガ家に伝わる奇跡的な能力に起因するものだから。

光波防御帯が掻き消され、そこから「数秒」を懸命に生き延びたステラは、実はそれ

でもよく対処した方なのだ。

これが分かるからこそ、ムウは全速力で“イーゼス”を翔けさせ、横合いから“クレイドル”を引つ手繰るように鉤爪で捕らえた。四脚のアームを使って“クレイドル”をホールドし、その速力のまま宙域を横風ぐようにして疾駆していく。

それは“イーゼス”にのみ許された、特殊な誘拐行為だ。

「!? なに!？」

殴りつけるような重力と衝撃、装甲同士が衝突する鈍い音。ムウが取った突発的な行動は、恐れよりも困惑を以ってステラに迎えられた。ムウが何を意図して自分を誘拐したのか、咄嗟に理解できなかったから。

そのときステラは、自分はまだ大丈夫——と云おうとして、出来なかった。自分が次に逃げようとしていた空域に、無数の“ドラグーン”が罫を敷いていたのを認めてしまったから。

「!？」

まったく逃れようのない多重砲火が撃ち込まれ、仮にも“そこ”へ逃げ込んでいたら、自分は——？

ムウには“あれ”が予見^みえていたのか？ ムウはステラを縛ったまま離さず、“プロヴィデンス”が解き放つ数多の光条を縫ってかわし、彼女をドラグーンの射程圏外まで

脱出させた。

「ムウ、あ、ありがとう……!」

「クルーゼの狙いが分かった……! ヤツはきみを、本気で殺すつもりなんだ!」

普段に比べて荒めの口調で語り掛けて来るムウの言葉は、ステラにとって実感だった。

ムウが助けしてくれなければ、ステラはさつき、確実に死んでいた——いや、殺されていた、という。

「ヤツはきみを殺し、"クレイドル"の首を手土産に、キラを待つつもりなのさ! ——
だったら、ヤツの筋書き通りになんて行かせるか!」

それは、ムウの意地である。

ムウは彼女に対し、新たな指示を行う。

「いいか、よく聞け! クルーゼの相手はおれがする——きみはここを離脱して、いち早く"ヤキン・ドゥーエ"に向かうんだ!」

(……あくまでわたしの邪魔をするのか、ムウ……!)

ラウはその通信を傍受しながら、僅かに毒づいた。

「こんなところで、あんな野郎に足止め食らってる場合じゃない!」

「でも……っ!」

「パトリック・ザラを止められるのは、キミだけなんだぜ？ いいな？ これは後生の頼みだ！」

やるべき仕事がある、それぞれにある。

ムウがこの空域に駆け付けたのは、宿敵であるラウとの決着をつけるため。そしてステラが第一に為すことは、いまだ「ジェネシス」で虐殺を行おうとしているパトリック・ザラを止めることなのだ。

「行けッ！」

叱咤と共に、ステラは己がやるべきことを自覚する。

——確かに、ここにいたらムウの迷惑になる……！

それは予感ではなく、確信だ。

「——わかった！」

指示のまま、ステラは転進する——ひとまずは「エターナル」と合流しに向かったのだ。

場に残された「プロヴィデンス」は、意外にも大人しくそれを見送った。しかし、代償はある。彼はここに来て、ムウと本気で向き合ったのだ。

「貴様はどこまでも鬱陶しいな、ムウ・ラ・フラガ！」

ラウの語調には、明らかな怒気が混じっている。

それに対し、ムウは、

「しゃらくせえ！ 行くぞこの野郎！」

勢いのある罵声と共に、ビームライフルを発射した。

「プロヴィデンス」と「ヴィオライージス」が、戦闘を再開した。

無事でいて——！ ステラは背に置いてきたムウに、ひたすらそのように願ひ、祈った。

クロト・ブエルは宙域を彷徨いながら、手当たり次第に『敵』と思われるものを撃滅して回っていた。

先程から、持ち場に戻るよう「ドミニオン」から——正確にはアズラエルから——の指示が耳障りで、きゃんきゃん喚く声があまりに鬱陶しかったため、クロトは「レイダー」の通信機まで壊してしまった。

拳で殴っただけで、電子機器といえど簡単に割れるのだな、とクロトは思う。勿論、殴った拳の方も割れたのだが、特に痛みはない。それが強化人間だ。

——もう誰の命令も受けない、自由にやらせてもらうよ……！

明らかな命令違反、ともすれば造反と取られて文句の云えない独断。

——きつと帰還しても、もう二度と快樂劑ヤクリフエフタンは貰えない。

クロトにとって薬物の供給が途絶えることは、身の破滅を意味している。だが別に構わない。オルガもシャニもいなくなった今、どのみち自分にも「限界」が近づいているということだ。あの女と同じように——。

「さて、強いヤツはどこに居るのかなあ〜？」

その愉快げな口調は、親から解放され、家出を楽しむ無邪気な子供——そのものだった。

「んん？」

そして、彼は真つ先に遊び相手を見つけた。

そいつが「フオビドウンフオビドウン」を撃墜した張本人であるかどうかは分からない——だが、真つ向から競い合い、戦い合う分には手応えのある敵だ。

なにせ、今までずっと追っかけていながら、たつたの一度も撃滅できたことのない相手なのだから。

——アイツと遊んだら、もつともつと楽しいだろうなあ。

MA形態レイに変形し、心躍らせながら、クロトは獲物に向かつて加速を掛けた。

あろうことか鋼鉄レイの猛禽ダの下を、背を見せながら飛ぶ花鳥あとり——かねてより狙い続けて来た「クレイドル」に向かつて。

コクピッド内にアラートが鳴り響くのと、それは殆ど同時のことだった。突然、背後から見慣れた“鉄球”が飛んで来たのは。

ステラは“プロヴィデンス”との交戦の直後で、すこし気が抜けていたのか、それともラウの放った言葉の余韻に動揺していたか、今の今まで敵の接近に気付くことが出来なかった。襲い掛かって来たのは地球軍所属の“レイダー”だ。間一髪のところでもり出された鉄球を回避し、ステラは歯噛みする。

——こんなところで、油を売ってる暇はない……！

そんなステラの焦燥など、察するはずもないクロト。いや、察したところで退くはずもないクロトは、声高に叫んだ。

「撃滅ッ！」

口部に備えられた“ツォーン”を臨界させる。

だが結論から云って、彼が“クレイドル”を撃滅することはなかった。横合いから伸びて来た“フリーダム”の脚が、その“レイダー”を蹴り飛ばしたのだ。

蹴り飛ばされた“レイダー”はそのまま勢いよく吹っ飛び、彼方でエネルギー砲を不発に終わらせていた。

「——キラっ!」

ステラは、歓喜の声を上げる。さっきまで期せずして話題の中核にあつた少年が、自分を助けに来てくれた。

——キラが、キラが守ってくれたっ!

ステラは、心から安堵する。彼が約束を守ってくれたのだ!

へあれはボクが引き受ける、ステラは行って!〜

「うん!」

へまた後で——必ず!〜

「!——うんっ!」

場をキラに託し、ステラは再び「ヤキン・ドゥーエ」を目指す。

だが、それを良^{よし}としない者が当然のようにいるのだ。「テメエ、なんだコノヤローツ!」と叫び、雪辱心から標的を切り替えたクロトはいい。こちらは思考が大いに単純であつたが、問題なのは、

「なっ、なんだと!?!」

アスランもまた、要塞に飛び立つてゆく「クレイドル」の姿を認めてしまったことだろう。核攻撃の阻止、ならびに「プラント」の防衛という任務を果たした彼は、キラと同様に持ち場を離れ、この空域までやって来ていたのだ。

「“ヤキン”の方へ向かう？ 父上をどうするつもりだ、ステラ!?”

時間にして数秒。アスランは即座に判断し、みずからに次の任務を課したのだ。

「——行かせるわけには!?”

父親を止めるため、飛び立っていく“グレイドル”——その妹を止めるため、アスランは“ジャステイス”を駆り、懸命にその後を追った。

『セカンドリー・ウェーブ』C

C. E. 71年現在において、ミラージュコロイドは未解明の物質である。

しかし、これを応用した軍事技術は多岐に渡り、最も代表的な例であればビーム・サーベルが挙げられるが、これについてはここでの言及は避ける。

例えば、地球軍が開発した“ブリッツ”——そこに搭載されたミラージュコロイドステルスも、その派生技術のひとつだ。あらゆる電磁波を吸収するガス状の粒子を定着させ、その驚異的な透過率を用いて完璧な光学迷彩を形づくる。

加えて、ザフトが開発した“ベルゴラ”——そこに搭載されたミラージュコロイドウイルスは、コロイド粒子を媒介にコンピューターウイルスを送信し、あらゆる電子機器の制御を自在に奪取する作用を持つ。

その他、オーブが開発した“アカツキ”——その新兵装である“ハバキリ”に關しても、このミラージュコロイドウイルスを応用した技術が使われている。コンピューターウイルスが関与するところまではザフトのものと同質だが、オーブのそれは敵機のバッテリーを強制放電させ、パワーを喪失させる作用を持つ。

そして最後に、モルゲンレーテの技術士であるエリカ・シモンズは、一ヶ月前に「クレイドル」が観測した「スクリーミングニンバス」に関しても、同様にミラージュコロイドの作用が関与していると指摘している。

つまりは何が云いたいのか、各勢力でミラージュコロイドを応用した「技術の競争」が行われているのが、この世界の軍事情情なのである。

しかし、最初にミラージュコロイドを軍事転用して見せた地球連合軍にとって、競合他社に技術力を出し抜かれるのは、面白いことではない。

地球連合軍——ナチュラルの開発部にも、技術屋としての意地がある。ザフトやオーブ——コーデインイターが台頭する組織がそれぞれ「ミラージュコロイド」の応用した画期的な技術を独自開発する中、地球軍もそれらに劣らぬ新技術を生み出そうと、必死になつて開発を進めた。

そのような技術者達の努力の果て、開発された連合軍独自の新技术が、第一に「ゲシユマイディツヒ・パンツァー」であり、第二に最終兵器たるGFAS—X1Eデストロイ・レムリスに増設された『ナイトメア・システム』だった。後者のシステムは「ベルゴラ」や「レムレーズ」に搭載されたバチルスウェポンの発展型で、コロイド粒子を触媒としてコンピュータウイルスを送り込む機能を持つ。前身と異なる点は、その際に映像・音声問わずウイルスが改変した偽装情報を送り込むことにより、自機の存在を消し去る一種のステルス

システムとしての機能が追加されていることだ。

「モビルスーツカメラの映像やセンサーのデータは、全て量子コンピュータを通して処理される。だから処理の段階で好きなようにデータを改竄してしまえば、半永久的に姿を隠し続けることも理論上は可能になるんだ——たとえばそれが、40メートルを悠に越える『巨人』であつたとしてもな」

アズラエル財団から『デストロイ』の改修を承り、実際に『レムレース』の外殻化（ハルユニット）を押し進めたアドウカーフ・メカノインダリストリー社の技術科長はそのように語り、このシステムの存在こそが、全高およそ40mを越える『デストロイ・レムレース』が、その質量や規格にも関わらず、センサーにすら探知できない完全迷彩を成している理由だつた。

第七宙域において、ラウとムウが、なおも激しく戦闘を続けている。

ラウが放つドラグーン・ユニットは、展開するごとにその射撃精度を増している。おおかた『プロヴィデンス』は新型機であり、ラウはまともに慣らし運転もせず実戦に挑んで来たのだらう——操縦する過程でドラグーンの扱いに慣れ始めている今のラウは、

ムウにとって非常に厄介になりつつある。ドラグーンを駆使した攻撃が激しく、MS形態に戻る隙がないのだ。

だが、撃たれてばかりいるわけでもない。このときムウは、ラウと同じように、みずからの搭乗機の性能を、最大限にまで引き出して応戦していた。

ムウの操る“イージス”は、コズミック・イラ史において初めて戦術レベルにまで高められた可変機構を搭載したMSでもある。その実体は、MSに搭載された変形機構なるものが、実際の戦場においては一体どれほど有効であるのか？ —— 大西洋連邦が半ば実験と観測のために試作した試供品サンプルと云つても過言ではない。その弊害であるからか、MA形態で使用できる武装は正式発展型の“レイダー”ほどに豊富ではなく、四本の鉤爪から繰り出す打撃と斬撃、射撃においては複列位相スエネルギー砲キュラのみに頼るしかなかった。そしてMS形態に戻る暇がない以上、ムウはその“スキュラ”の射撃を駆使しつつ、相手のドラグーンを撃ち落とす必要を迫られていた。

「頼むぜえ、相棒——！」

戦闘機らしきとは程遠い異形に変形を遂げる“イージス”のMA形態は、これを目撃した多くの余人やメカニック達にゲテモノ的との酷い云われようをして来たが、奇矯な変態を遂げる分、それほどの強みも有していることも、忘れてはならない要件である。

たとえば、MA形態においてコックピットを覆った四本の鉤爪——MS形態において

四肢に相当する部分——は機体の推進装置もかねており、巡行形態時においては四基のスラスタが全て後方に集中するため最高の加速力と機動性能を当機に齎す。また、これらの手脚は独自に開閉させることで重心移動にも利用でき、MA本来の旋回性能の低さや、難度の高いAMBAC運動をカバ―出来るようにもなっている。その上、逆噴射による減速機能も搭載し、奇しくも戦闘機パイロットを生業とする者であれば、垂涎するような機能を満載していると云えた。

だからこそ、ムウはこの「イージス」が大好きである。持ち前のMA乗りとしての経験と技術を総動員し、ムウは「プロヴィデンス」から放たれるビームカーテンを次々に回避していった。

「モビルアーマーでこうも食い下がる！」

巧みに姿勢制御を行いながら、ムウは高エネルギー砲「スキュラ」を放つ。赤い光条を掠めたラウのドラグリーンが、一基、融解して溶けた。

——これで二基目！

正確に照準をつけずとも、ある程度は巻き込めるのが位相砲の良いところだ。もちろん、乱射してはエネルギーが持たないが。

「ムウめ……！」

一方の「プロヴィデンス」には、決定的な弱点があった。それは「ドラグリーンが破壊

された際の、本体の戦闘力の低さ」である。

一見する限り、確かに「プロヴィデンス」はその無数のドラグーンを駆使することで制圧戦も白兵戦も卒なくこなし、文字通り『無双』の立ち回りをすることが可能だ。しかし、これは無重力空間に限定される話であつて、一方の機動兵器としての完成度は「他^たのどの機動兵器よりも低い」と述べざるを得ない。

たとえば、大気圏内での戦闘。重力下での「プロヴィデンス」は、最大の強みであるドラグーンを分離できないため攻撃手段の大半を封じられ、桁違いなまでに弱体化する。どの程度まで弱くなるのかと云うと、残る武装が重量と規格のため取り回しに難のある大型ビームライフル^{ユキ}、およびシールドと一体化しこれまた取り回しに難が出る大型ビームサーベル、そして気休めの機関砲^{バルカン}と三種類にまで落ちぶれるのだ。

さらに致命的なことを云えば、後付けの背部ユニットは機体の重量を大幅に——「フリーダム」や「ジャステイス」の総重量に比べ20tも——増加させており、この弊害により「プロヴィデンス」は重力下で単独飛行ができず、それほどに機動性も低くなっている。そしてドラグーンが封印されたり破壊されたりした場合、光背そのものが完全にデッドウェイトと化してしまうなど、意外にも弱点が枚挙できるのだ。

何が云いたいのかと、後付けによる違法建築で開発された「プロヴィデンス」は完成度として最低であり、ムウに云わせれば、ドラグーンを失えば失うほど「大したことな

い機体」に劣化していくということ。

ムウはこの仕組みをよくも看破したようだ——伊達に「メビウス・ゼロ」のパイロットはやっていなかったということか？——ドラグーンを確実に削り「プロヴィデンス」の戦闘力を奪おうとしている魂胆が目に見え、ラウは冷笑を浮かべる。

「ハ！しかし、そうでなくては貴様は面白くない！」

「なにをツ！」

「貴様をこの手で直々に下すことにこそ、わたしの愉悦があるのだよ！——情けない姿の貴様を討ったところで、わたしの気は晴れぬのでな！」

付け足された言葉には、含みがあつて、ムウはそれを不審に思った。

「情けない姿、だと？」

「憶えてないかな、ムウ！かつて聖域で刃を交えたとき、わたしがきみに何をしたのか

——

——聖域？コロニー「メンデル」での戦闘のことを云っているのか？

ムウが逡巡する間もなく、突然「プロヴィデンス」の「G」フェイスに変化が起こつた。それまで額部分に張られていた「プロヴィデンス」のバイザー——「G」フェイスのアンテナであり「角」に当たる部分——がせり降り、その顔部を覆い隠してしまつたのだ。その変貌は、さながら「プロヴィデンス」が『仮面』を装着した、といった風

であり、パイロットであるラウ・ル・クルーゼその人をオマージュしているかのようにも見えた。

——狙撃？ いや、精密射撃用のスコープか？

いや、どれも違う。ムウはその『仮面』のようなバイザーに確かな見覚えがあった。地球軍のゴーグルアイでも、ザフトのモノアイでも、ましてや“G”を象徴するツインアイでもない。四つ眼と紅球のセンサーアイが蠢くそれは、かつて“メンデル”で交戦した“ベルゴラ”のものだ。まさか——？

「まさか、“ベルゴラ”の機能を!？」

〈察しがいい。今のわたしはその気になれば、その“イージス”の制御を乗っ取ること
も可能だ〉

ラウは、勝ち誇るように告げる。

それでも、その『パチルスウェボンステムウイルスの発心装置』を使用しないのは、ラウの墮落である、とムウは思った。

(あくまでオレと決着ケツをつけることにこだわるのか、クルーゼ！)

(相手はムウだ。この手で下すことにこそ、本当の意味がある！)

幼い頃の教育——とも呼べない洗脳と刷り込み——のせいか、どうにもラウ・ル・クルーゼという男は、ムウ・ラ・フラガという男に対して強烈な対抗心を隠せない人格と

相成ってしまったらしい。

ラウが歩んだ軌跡、それは地獄のような日々の連続だ。ムウが幸福な人生を踏みしめる分だけ、ラウは不幸の沼へ突き落とされて来た。暖かな友人や召し使いに囲まれて、母親の手厚い保護の下、ぬくぬくと暮らしていたムウ——薄暗い部屋に独りぶち込まれ、父親の虐待的な教鞭の下、寒々とした世界に閉ざされたラウ——まるで対照実験に用いられた、哀れで可愛い二匹のモルモットであるかのように。

（ムウもまた、キラ・ヤマトと同じ、光に包まれて生きた男——）

そのような男に、ラウは敗けるわけには行かないのだ。

そのこだわり——矜持こそが、ラウを堂々と戦わせている。ウイルスの発心装置など使わないし、ここに至っては必要ないのだ。己の実力でムウを撃破し、みずからという呪われた存在を作り出した、フラガの一族へ復讐を果たすためには。

〈我ながら、アコギなことと思うがね！〉

「馬鹿にしやがる……!? そうやってオマエは、いつも他人を見下して……!」
〈それが定めさ! 私こそ神の意志だ! ——強欲で、罪深き! この愚かな人類世界を裁く、破壊の使徒なのだよ!〉

放たれるドラゴンの射撃精度が、みるみる向上してゆく。

——この、殺気の檻からは逃れられない!

ビームの閃光の一発が、ついに“イージス”の右脚部、ひとつのクローアームを捉えた。脚部が爆発し、これによりモビルアーマー形態が著しく機能不全に陥り、ムウはやむを得ず機体の変形を解くしかない。

(しかし、生身の感情を持ち過ぎていて！ 所詮はヤツも人間だ！)

感情がなければ、とつくに自分は殺されているはずだ——そうではないか？

口内に毒づきながら、ムウはマニピレーターに握られたビームライフルを二射する。ふたつの光条は真つ直ぐに伸び、直感のままに“プロヴィデンス”のドラグーンをそれぞれに撃ち落とした。

——残りは、七基ななつか……!?

しかしムウは、にわかになが気が遠くなっている自分を自覚してしまった。

クロト・ブエルは、小さい頃から飛行機やロケットなどの“空飛ぶモノ”が好きだった。比較的裕福な家庭で幼少期を過ごした彼は、しかし、両親が不慮の交通事故で死んだから、叔母方の親戚の家に預けられることになった。

が、殆ど押し付けられるような形の居候であったから、親戚達はクロトの扱いにほと

ほと困つたらしく、数か所ある親戚の家を転々とたらい回しにされた末、気付いた頃には大西洋連邦の施設に入れられていた。要するに厄介払いをされたのだが、そんな自分が可哀想などとは考えなかつた。もともと親戚達に対しては何の恩赦も感じていなかったし、どこへたらい回しにされようと、両親がいない日常にさして幸福はないだろうと達観していたためか、預けられた先がロドニアのラボだろうが何だろうが、それはそれで構わないと彼は諦めていたのだ。

——ただ流されるまま、何についても冷めた、諦めた目で人生を流して来た。

強化人間となるためのインプラント手術を受けさせられてからも、そんな日常は変わらなかつた。

それでも、唯一クロトが興味を持ったものがある、モビルスーツの操縦だ。小さい頃、母親に買ってもらったシューティングゲームが現実に体験できるかのようで、訓練であつたにせよ、彼はそれを楽しみながら取り組むようになって行つた。

——そんなある日のことだつた。転属の話が舞い込んで来たのは。

なんでも、別の研究所出身の二人と共に、新型のモビルスーツ部隊に配属されることが決まつたらしい。それまで唯一熱心に打ち込んで来たモビルスーツ戦の成績が買われたのだろうか？ まあ、どーでも良かったが。

同僚になる二人と、顔合わせをした。片方はジャカジャカ大音量でデスメタルばかり

聴いていて、如何にも根暗そうなヤツ。もうひとりとは、なんていうか……意外と繊細そうなヤツだった、それはすぐに分かった。

それと同時に軍内部で少尉の階級が与えられ、ある程度の自由が許されるようになった。クロトはすぐにゲームソフトを購入し、戦闘前に待機を命じられたときなどは、シヤニが音楽、オルガが読書に没頭する傍ら、もっぱらゲームのプレイングに耽った。所有しているゲームソフトは、大半がシューティングゲームだった。

中でも、アーケード形式で展開される『インベーター』には「ド」が付くほどにハマったものだ。外宇宙から襲来する侵略者を迎え撃つため、ヒーローが戦闘機に飛び乗っては幾つもの戦場を攻略してゆく——そんなアルゴリズム要素に溢れたゲームが、当時の少年心に堪らなかつた。

しかし現実には、そんな少年心を、簡単に斬って捨てた。

あるとき、クロトにも専用のモビルスーツが与えられることになったのだ。一般的な量産機とは違う、特別で強力なモビルスーツだ。そのモビルスーツは、確かに自力で空を飛べたり、沢山の銃火器を撃てたりするから、すこぶるクロト好みの機体であった。

——でも、そのモビルスーツは「レイダー」と呼ばれていた。

よりにもよって、侵略者の名を冠すモビルスーツだったのだ。

戦闘機らしきとは無縁にある異形と、赤黒い猛禽然とした「レイダー」は、クロトの

中で、間違つてもヒーローが乗り込む機体であるようには見えなかった。

——オレ、悪役かよ。

だが、それでも別に構わないと思つてしまつたのは、やはりクロト・ブエルという少年の人生に、こだわりがなかつたからだろう。

「——抹殺！」

不穏な単語を口にするようになったのも、悪役としての自分に箔をつけ、自分に酔うためでもあつた。

このとき、クロトが飛ばした鉄球「ミヨルニヨル」を、しかし「青い羽のヤツ」はくると回つて回避した。反撃にビームライフルの連射が飛んで来て、クロトはMA形態になつて幾条かの閃光を回避した。

「フリーダム——フリーダム」ねえ？」

クロトは機体を駆りながら、ひとりごちる。

——前にオルガが、アイツのことをそう呼んでたっけ？

それが敵機の名前なんだろう。この機体が「レイダー」と呼ばれるように、相手の機体には「フリーダム」というハイセンスな名が付けられているのだ。

それは大西洋連邦の、宇宙探索用のロケットにも名付けられた名前で、小さい頃に資料図鑑で見たことがある。

フリーダム。その言葉が意味するものは『自由』——すなわち、希望の代名詞だ。万人の希望の象徴。まさにヒーローに名づけられるに相応しい。

「なんか、ムカツクなあ」

ボクは悪役で、アイツは正義のヒーローだっていうのか？

どうして？ ボクだって、ヒーローになりたかった。ヒーローになるための努力をしたわけではないにしろ、それでもボクはただ施設に預けられた孤児の身だ。ボクには、この面白くもなんともない人生に対する拒否権なんてなかった。

——なのになぜ、いつの間にかボクが悪役扱いをされなくてはならない？

気に入らない。何もかも気に入らない。

いつそのこと、ヒーローをぶっ潰して、ダークヒーローに徹してやるのも悪くない。そのためには、

「ボクがオマエを瞬殺してやるよ。滅殺！」

クロトは吼え、果敢にも「フリーダム」への突撃を敢行した。

しかし、γグリフエプタンの効果が、もう間もなく途切れようとしている——彼はまだ、そのことに気づかない。

「どのみちわたしの勝ちだな、ムウ！——再三『ジェネシス』が発射されれば、『ヤキン』は自爆を始める！——何もかも共に消し飛ぶ！」

通信先から告げられたその言葉に、ムウは絶句した。

——まさか！ そんな!?

その瞬間のムウの脳裏に、ステラの顔が浮かぬ。彼女の父——パトリック・ザラまでも道連れにしようと言うのか、この男は？

「すべてわたしの思い描いた通りさ！——間もなく終末の閃光が放たれる——そのとき人類は、神意がどこにあるかを知ることとなる！」

「おまえ……ッ！」

「へもはや止める術はない！——地は焼かれ、涙と悲鳴は新たなる戦いの狼煙となる！」

それは、ムウが思っていた以上に用意周到、それでいて、最悪のシナリオだった。

かねてより戦争の継続を目論んでいたラウにとって、地球が『ジェネシス』によって壊滅的な被害を受けるだけでは事足りない。それでは『プラント』の勝利に終わり、ラウ自身の本懐を果たしたことはないからだ。

——ヤツが狙っているのは、地球と宇宙……双方に暮らす人類の壊滅。

だからこそ『ジェネシス』の三射目と共に『ヤキン・ドゥーエ』が自爆するよう、彼は裏で暗躍していたのだ——おそらく、そのことをパトリック・ザラは知らない。地球

がレーザー攻撃により壊滅的なダメージを受けると共に、一大拠点である「ヤキン・ドゥーエ」すら消し飛ばす。

戦争をここまで導いたブルークコスモスの盟主と、ザフトの首脳もそれぞれに討ち取り——そうなれば、ふたたび地球と「プラント」間で巻き起こる混乱には収集がつかなくなり、戦乱は激化。人類はさらに泥沼の戦争状態へ突入することになる！

彼は共倒れを狙っているのだ——ムウは焦燥を露に、叫ぶ。

「「ヤキン」には……！」「ヤキン」には、ステラが向かった！」

へ父親と共に消し飛ぶ宿命さだめさ……！ わたしの掌の上で、ザラの親子は実によく踊ってくれた——しかし、これが戦争だ！ 知りながらも突き進んだ道だろう!?」

「受けた不幸を、賢しらに世界に押し付けるな！ それが大人のやることか!」

しかし、刻一刻と射撃精度を増していくラウのドラグーンが、次に「イージス」のビーム・ライフルを捉えた。目の前で銃身が爆発し、ムウを一瞬の焦りが襲う。焦燥と危惧が彼の操縦をはやらせ、ラウはその隙を見逃さなかった。

次の瞬間、再び放たれた鳥籠ビーム・カプテンの攻撃が、全方位から「イージス」を襲った。ムウは自分を取り囲まれていることに、動揺して気づけなかったのだ。数多の火線に晒されたとき、慌てて機体をひねるが、もう遅い。

閃光は「イージス」の左脚や左腕に直撃し、機体は中破して行く。

ムウは抵抗が出来なかった。コクピッドを掠めたビームが鉄の破片を撒き散らし、ムウの腹部に突き刺さる。

「くあ——ッ！」

一拍おいて、焼け付くような激痛が襲って来る。

——しかし、負けるわけには……！

ムウはその一念だった。機体の損傷に構わず、彼は転進し、スラストを全開に場を離脱した。強烈なGがかかり、慣性のせいで身体の穴から血塊が噴き出したが、構わずに加速し続けた。

(……逃がさんよ……)

ラウはひとりそう云いながら、ひそかに「イージス」の後を追跡した。フラガの血を継ぐ一族への、復讐はまだ終わっていないのだ。

一方、第八宙域——

「フリーダム」が「レイダー」と交戦している最中、キラは唐突に「敵機の動きが鈍った」ことを知覚していた。機関ビーム砲による銃撃が止み、だらり、と敵機のマニユ

ピレーターが投げ出されたのである。

それから数秒の沈黙のあとも、敵機は完全に、戦闘行動を停止してしまつたかのように映る。

——操縦者に、何かあつたのか？

キラはそれを不審に思うが、見るうちに、今度は我を失つたように突進を仕掛けて来た。完全に虚を突かれた“フリーダム”の腰が、接触した“レイダー”の小脇に抱きかかえられる。それは、まるで助けを求めて“フリーダム”に縋り付いて来ているようでもあつたが……？

「じよ、冗談じゃない！ なんだっていうの!？」

キラは“フリーダム”の upper body を前傾させ、空手のように“レイダー”の顔面を拳で殴つた。衝撃で二機が離れ、今度の敵は、口部エネルギー砲ツォーを無秩序に乱射し始めた。

しかし、愚鈍な射線だ。難なくそれらを往なしながら、キラはハツとする。

——強化人間は、投薬を受け続けないと、身体が衰弱して、あとあと何にも考えられなくなつて……

ステラの言葉が、脳裏を過ぎつたのだ。

いま、目の前にいる彼も、その強化人間のひとりなのか——？ 居た堪れない思いになり、キラは“レイダー”に通信を繋ごうとした。なんとか回線までは発見したもの

の、しかし、

↑ハ——アハ——ハッ………!!?<

不気味な笑い声が、そこから響いて来るだけだった。

大量のノイズを交じらせて、妙な哄笑が響いている。あちらの通信機が壊れている？

——いや違う、壊れているのは通信機だけではない。

——人間の方が、壊れている………!

〈ぼ、ぼくハ——〉

だが、あまりに無鉄砲にエネルギーを消費し過ぎたのだろう。口部“ツォーン”はエネルギー切れを引き起こし、機関砲も弾切れを起こした。

後期GATシリーズはTP装甲を用いているため、フェイズソフトダウンこそ視認できなかったものの、中の装甲はとっくにエネルギーダウンを起こしているだろうと、すぐに分かった。

次の瞬間、またも“レイダー”は“フリーダム”目がけて突進して来た。

キラには、その動きが嫌なほど見覚えがある。すべての武装を損なってなお自分を殺そうとした“カラミティ”——そのパイロットだ。あのときの『彼』と同じ気迫と覚悟を、キラは“レイダー”の中に見つけてしまった。

「や、やめろよ！ こいつ、取り付いて………！ まさか、自爆しようって云うんじゃない——」

〈ウフフ——ぼくハ、ぼくハねえ……ッ!?!〉

「!?!——ちくしょうッ!?!」

敵が接近するよりも前に、「フリーダム」の砲門が火を噴いた。

すべての砲撃・光条は虚空を切り裂き、「レイダー」の頭部や脚部を撃ち抜いた。衝撃に押し戻され、慣性で漂っていく「レイダー」であるが、

〈じッ『自由』ニ……!?!〉

「!?!」

〈ジユウにッ……!?! なッりたがッ——〉

次の瞬間「レイダー」が爆散した。跡形もなく。

この瞬間、世界に一片もの生きた証を残すこともなく、ブーステッドマンの三人は全滅したのだ。

「自由……!?! 彼は……!?!」

キラは、やるせない思いになる。

(どうして——強化人間なんて……ッ!?!)

GAT-X370のシグナルが消えたことを、「ドミニオン」の中では感知していた。

なおも「アークエンジェル」との交戦下にあつて、オペレーターが告げる。

「ブルー三二七、マーク五ニアルファに「アークエンジェル」！ 接近して来ます！」
 接近してくる白亜の艦を見遣つたナタル。

——もう、これ以上の戦闘は無意味だ……。

諦観しながら考えているそのとき、ナタルにとつて、妙に見慣れたモビルスーツが艦橋窓から見えた。中破したGAT-X303だ。オーブは「アレ」を回収し、改修していたのか？ だとしたら、さしずめ搭乗者はムウ・ラ・フラガあたりだろう。

——フラガ少佐……！

艦橋窓から見えた「イージス」は、黒煙を噴き出しながら「アークエンジェル」へ向かつていた。『エンデュミオンの鷹』と呼ばれるほどのエースパイロットが、いったい誰にやられたというのだ——？

当然、その機影を認めた「アークエンジェル」が、ムウを收容しようとし抜けに左舷ハッチを開放する——「ドミニオン」との戦闘中にも関わらず。

(ラミアス艦長、迂闊だ！)

ナタルは軍人としてそう叫ぶ。

と、同時にアズラエルもそれに気付いたらしい。目敏い男だ。今まで茫然自失としていた彼は、即座に砲術長に詰め寄って喚き立てた。

「いまだ撃てえっ！——「ローエングリン」照準！」

だが、砲術長の動きはもたついていて、それがアズラエルの痛癢を買ったらしい。「撃てよやあ！早く「アイツ」を沈めろお！」

血走った目で激昂するアズラエルであるが、皮肉なことに、砲術長の男性士官は年齢だけで云えばアズラエルよりも年長者だった。にわか仕立ての新米クルー達の中でも、ベテランの威光を放つ珍しい人物でもあった。

彼は耳元でがなり立てられ、ついに痺れを切らしたのか、立ち上がってアズラエルの身体を突き飛ばした。

我慢ならん！ 男の顔には、そう書いてあった。

逞しい二の腕に飛ばされたアズラエルのひよろつとした瘦躯は、モニターパネルにぶつかって慣性のままに弾き飛ばされた。

「もう……！もう、やめましよう、艦長！」

男は、そう云って席を立ち、ナタルはハツとする。

対してアズラエルは、痛みをこらえて頭に疑問符を連続させていた。

「おまえ、何をッ！」

「我らの軍は！ もう、負けたのです！ これ以上、戦う意義などありません」
「なツ……!?」

絶句するアズラエルを尻目に、艦橋のクルー達が一齐にどよめき始める。いや、それは単なるどよめきなどではない——もはや全員が、これ以上の戦闘行為を続けることを無意味だと理解していたのだ。

——気付いていないのは、アズラエルひとりだけで。

砲術長の男が云いだしたのをきっかけに、続々とクルー達が、持ち場の席からダンと立ち上がり始めた。彼らはナタルの許におずおずと集まって、それぞれに思っていることを口にしていく。

「そ、そのとおりですよ……！ もうこれ以上、地球軍ほくたちが戦う意味なんてない——」

「そもそも、こんな事態になったのがおかしいんだ……！ 両軍共に、互いに殲滅しなきゃいけない前提で、戦争が進むなんて」

「負けた戦いに意地を張って、やめられる戦いに欲をかい、いま降参すれば助かる命が多くあるのに！ 軍隊が意地張って地上を焼くんじゃ、ぼくらが馬鹿やつてるだけじゃないですか！」

「——バジール艦長だって、そう思っているんでしょ！ 我々に構わず、思ってることを云ってください！」

問われたナタルも、気が付いたときには立ち上がっていた。

ゆつくりと周りの新米達を一瞥して周り、最後に砲術長の男と目が合った。その目は、確かに彼女に降参を促していた。

「……そうか、そうだな」

ぼそりと、しかし、場にいる全員に聞こえる声で、ナタルが云った。

「——降伏しよう。この戦争は、地球連合軍の負けだ」

「バジール艦長……！」

「現時点で、本艦『ドミニオン』は地球軍の旗艦である！ 本艦が白旗を揚げれば、まだ、間に合うかも知れない——」

そうだと、ナタルは思う。

もつと前に、この判断を下すべきだったのだ。兵団全体の戦力を鑑みても、兵士各個の気力を省みても、今の地球軍に『ジェネシス』を抑えることなど不可能だった。

——そんなこと、出撃前から判っていたことだろうに……！

この場において降参するということは、結果的に、この戦闘で散って行つた兵士達を犬死させたことを認めることになる。

——だが、わたしも彼らも、軍人だ。

最優先するべきは、地上に住まう民間人のこと。であるなら、これ以上『ジェネシス

“を撃たせないためにも、降伏をするしかない。

もっと早くにするべきだった決断を、目の前のイカれた男に邪魔されてしまった。何より腹立たしいのは、自分の弱い心が、そんな男の言いなりになってしまっていたことだった。

しかし、

「ないないない……！　あり得ないイッ！」

アズラエルは、駄々っ子のように喚いた。

ふたたび拳銃を手を取って、それを真つ先に砲術長の男に向ける。

「ボクは勝つんだッ！　そうさ、いつだって！　——おまえらは、ただボクの命令に従ってりゃいいんだよ！」

「地球連合軍は、地上の民間人を守るために存在しているのです！　たとえあなたが指揮官だろうと、それに違反することは出来ません！」

「ボクだって民間人さ！　だったら、ボクの云うことを聞けよ!」

「自分の都合で、指揮官と民間人を使い分け腐って！」

この期に及んで、よく舌が回る男だと、ナタルは思う。

そのときだった。

「おまえらあああッ！」

激高したアズラエルは拳銃を構え、血走った目でナタル達を睨んだ。

その瞬間、トリガーが曳かれる——！

「ッ……………」

パアンツ！ と、一発の銃声が響く。

それによつて撃たれたのは、意外にもアズラエルの方だった。

場にいる全員が、一瞬愕然とする。狙われた男性士官は、頭を抱えて震えている。銃弾の衝撃に飛ばされたアズラエルは、拳銃を握っていた右手を碎かれ、悶絶していた。

「バ、バジルール中佐!」

ハツとして我に帰つたとき、拳銃を構えていたのは、ナタル・バジルールであった。

クルーのひとりが一驚して名を挙げる。が、ナタルは彼女らしく冷徹に、そして潔く云つた。

「この艦の艦長は、わたしだ……。艦内で銃を振り回すような男を、みすみす見逃しておくわけには行かない——」

ナタルの覚悟は、既に決まっていたのだ。

——アズラエルの性格を考えれば、停戦を申し出せばごねることくらい分かつていた。銃を持ち出し、無理にでも艦を従わせようとするくらいのことくらい。

だからナタルは、密かに右足のホルスターに、拳銃を忍ばせておいたのだ。

副長の男が、唾然としている。銃を撃ったナタルの手が、カタカタと震えているのを認めたからだ。士官学校をエリートで卒業したであろう、それはナタルらしくない風景？

——しかし、この状況下では、それは不謹慎な発想か。

「総員、退艦だ——『ドミニオン』は、もうお終いだ」

それは、母艦の終焉を意味する号令だった。

クルーは悲痛な表情を浮かべるが、彼らも軍人だ——ある意味では、いつかこうなる心の準備くらいは出来ていたのかも知れない。大体、軍に何ら関係のない『VIP』アズラエル風情が艦橋に銃を持ち出した時点で、この艦はとつくのとうに終わっていたのである。

ナタルはクルーのひとりひとり目に目を配り、すこし息を呑んだ。みな半人前なのに、よく付いてきてくれた。だが、その感慨した表情に不安を覚えたのか、副長の男がこんなことを云い出す。

「艦長、は……？」

ナタルは、きつぱりと答えた。

「責めは負う——だから、お前達に退艦を命じているんだ」

すべては、自分の甘さが導いてしまった事態だと、ナタルは分かっていた。

ハーメルンの笛吹きのように、利権によって地球軍をここまで誤った方向に導き、追いつめたアズラエル——そしてそれを分かっているながら黙認し続けた自分も、同様に罪

を受けるべき人間だということを。

「しかし……！」

「私は『ドミニオン』の艦長だ！ そう云っただろう！ ……わかるな」

云えば、くつと歯を食いしばって、男は敬礼をした。

次々と艦橋から出て行く背姿を追う中で、ナタルはハツとして、その青年を「待て！」呼び止める。ついでホルスターに下げていた鍵を投げ、青年はそれを見事に受け取った。

「独房の彼も、一緒に連れていってくれ」

「は……っ！」

「すまないが。みなを頼む」

ぎこちなく微笑んで見たが、やはり、こういうのは自分の柄ではないな——と、ナタルはひどく自嘲気味に思った。

——まったく、どうにかしている……！

士官学校をエリートとして出、非の打ちどころのない経歴を誇って、こும்早く『ドミニオン』の艦長に抜擢されるまでに至ったというのに、いつの間にか予定外の畦道に足脚を踏み入れてしまっていた自分がいる。しかも道の先にあつたのは、奈落だ——いつたい、どこで間違えたというのだろうか？

「お、まえッ、ボクにこんなことをしてッ！ どうなるか分かってるんだろうな……!?!」
「地球が撃たれようというときに、他に何を畏れようと云うのです……?！」

ナタルは、自分でも驚くほど冷めた声音で返す。

仰向けに倒れたアズラエルの、手元の銃を蹴り飛ばしながら。

「ボクは『ブルーコスモス』の盟主だ！ オマエたちみたいな戦闘屋より、ずっと気高い人間なんだぞ！」

ナタルは、怒鳴って返した。

「人が人の上に立って生きることが、そんなに当然のことですか……!?!」

「ああ……ああそうさッ、人間は平等じゃない！ ナチユラルとコーデイネイターが平等でないように、愚民は一握りの価値ある者のために、生命を捧げるよう世界つてのは出来てるんだ！」

「ならば、理解してもらいたげるはずだ！」

「何が!?!」

「あなたというたった一人のために、大勢の人間の生命が救われることもある。あなたの上に立つことで救われる人間が、ここには大勢いるのです！」

地球軍さえ降伏してしまえば、少なくとも地上は守れる。

たとえその先に、どれほどの屈辱が待っていようと、地上を守ることこそが、自分達

の果たす役目なのだ。

「いい加減認めなさい。我々はもう負けたんだ」

それきり、アズラエルからの反論は途絶えた。

ナタルは妙にやり切った思いになって、男が沈黙したのを認めたのち、ゆっくりと移動を始めた。

（信号弾を撃てば、この戦いの幕が閉じる——）

ナタルがおもむろに艦長席から移ると、次に、信号弾の操作を行おうとした。彼女が全ての責任を負う形でブリッジに残ったのは、最終的には信号弾の打ち上げ作業を行う人間が、必ずひとりが必要になると判断したからでもある。

信号弾——すなわち、撤退の合図だ。

——どうか……！ この戦争を、もうおしまいにしてくれ……！

曲がりなりに「ドミニオン」は、地球連合軍の旗艦だ。当艦に戦闘継続の意志がないことを明らかにすれば、ザフト側も、何らかの処置を取るだろう。

それは殆どがナタル個人の願望でしかなかったが、少なくとも、停戦への一步となるのではないか？ 彼女は切なる祈りを込めて、信号弾を打ち上げるスイッチを押した。そして結論から云えば、信号弾が打ち上がることはなかった。

「……？」

動作不良？ そんな、まさか。

純粹な不審顔になり、もう一度だけスイッチを押し直すが、やはり光弾が打ち上がることはない。いや違う、それどころか一方では「ローエングリン」のチャージが始まっている……？

——なんだ？

全搭乗員が艦橋から出て行つたというのに、どういうわけか「ドミニオン」の姿勢制御は勝手に始まつており、右舷蹄部の砲門が開き始めているのだ。その瞬間になって、ナタルは云い知れぬ不審感と、何より底知れぬ怖気に囚われた。

「なんだ……!?」「ドミニオン」が、勝手に動いている——!?」

まるで何者かに、糸で操られているかのように——

みるみると戦艦の姿勢制御が、オートで行われてゆく。右舷に輝く陽電子破城砲ローエングリンの破滅光が、今に臨界に達しようとしている。その照準先は——間違いなく「アークエンジェル」だ。

ナタルは事態を一瞬で悟り、強かに叫ぶ。

「——よせッ!?!」

しかし、それが誰に向けた怒号なのか、ナタルには分からなかった。

「ドミニオン」より脱出艇！ 艦を放棄するようです！」

サイからの報告に、マリューは肩の力が抜けた。どうやらナタルも、これ以上の戦闘行為は無益と判断したのか？ —— 傷ついた艦を放棄することを選んだらしい。

脱出艇は四基ほどあり、全搭乗員を収容するには十分な数だ。完全に「ドミニオン」は破棄されたと思ひ込んだマリューは、安堵して救援の指示を出そうとする。だが、

「艦長ッ！」

サイの上ずった声の原因を、マリューも見た。「ドミニオン」の陽電子砲が臨界し、虎視眈々とこちらを狙っていたのだ。

マリューは、すっかり警戒心を解いていた。なぜなら、

——そんな馬鹿な！ いま撃てば、脱出艇もろとも巻き込むかも知れないのに！

危惧する声を、出している余裕もない。みるみる「ローエングリン」の砲口に、光の粒子が収束してゆく。次の瞬間には陽電子砲の光は臨界に達し、凄まじいエネルギー砲が放たれた。

放たれた烈光の矢は空間を切り裂くように、無防備な「アークエンジェル」に正面から邁進した。マリューはすっかり蒼褪め、叫ぶ。

「回避ーッ!?!」

「ダメです、間に合いません——ッ!」

ノイマンが舵を切るが、手遅れだ。

——直撃する!?!

そう思った、矢先のことだった。

〈——オレがやる!〉

盾を翳した「イージス」が、マリユータちの前に割って入った。

不可能を可能にして見せる——そう訴えかけんばかりの背を恋人に向け、ムウはみずからを「アークエンジェル」の盾にしようとしたのだ。

——機体も、パイロットも、もう既にボロボロなのに!

迫り来る白い光は、もう眼前に迫っている。

にも拘らず、マリユータは耐えられず魂の底から叫ぶように云った。

「だめ、ムウやめて——ッ!」

〈——そうだ! その機体じゃ無茶だ!〉

そのとき誰かの通信が重なって、次の瞬間、ムウの「イージス」は何者かに大きく突き飛ばされていた。

中破した「イージス」は「ローエンダリン」の射線上から大きく流れ、

↑——な……ッ!?!

ムウは、事態が飲み込めずに困惑した。

が、動揺したのはマリューも同じだった。やがてダンと後方のミリアリアが立ち上がったのを認めて、マリューは一瞬にして事態を悟る。

“イーゼス”の代わりに『盾』になったその機体は、

「ストライク——!?!」

ミリアリアが気付いた瞬間には、黒鉄の装備を背負った“ストライク”が“アークエンジン”と“ドミニオン”の間に割って入っていたのだ。

——トール!?!

籠手型の光波防御帯を、最大出力で展開した“ストライク”が、陽電子砲を“イーゼス”の代わりに受け止めたのである。凄まじい一射を受け止める機体に護られ、“アークエンジン”クルーは唾然とした。中でもミリアリアは、絶叫していた。

「そんなッ、トール——!?! トールッ!?!」

〈大丈夫! おれ見てたんだ——!〉

多少のノイズが混じった音声通信。しかし、その声は明瞭に、途切れることなく、力強く紡がれていた。

——護れる、の……!?!

モニターに映るトールは、できるだけ格好よく笑おうとしていた。しかし、不安のせいかその表情はぼろぼろに歪んでいて、ミリアリアは心が痛くなる。彼は今たつたひとりで、凄まじい砲火を受け止めているのだ。自分のため——そして、みんなのために！（アラスカでステラは——「デイフェンド」は破城砲を跳ね返した……！ だったら、この装備にだって出来るはずなんだ！）

当時の出来事を、誰よりも間近で見ているのはトールだった——「デイフェンド」の防御性能が、巨人の放った「スーパースキュラ」を間一髪のところまで跳ね返した決定的瞬間を。

——だったら「フォートレス・ストライカー」にだって、それだけの性能はあるはずだ！

トールは、決して闇雲に陽電子砲の射線に飛び込んだわけではない。

結局のところ、彼は「ストライク」という恵まれた機体を預かっているが、その実態はムウが余暇を縫って教育した叩き上げのルーキーでしかない。充分な訓練を受け、さらば場数を踏んだ歴戦の猛者が一同に交錯する第二次「ヤキン・ドゥーエ」攻防戦には、はつきり云ってルーキー風情の活躍の場はないし、おそらくは誰より本人が、そのことを一番よく理解していたのではないか。

秀でた操縦センスも、場数を踏んで初めて養われる経験値も、結論から云って、トール

ルはすべてが不足していた。だからこそ、自分に出来ることは何なのか？　パイロットが未熟な分は、機体性能に胸を借りるしかないじゃないか。

「イージス」じゃ絶対に出来ないこと、コイツならやれる！」

おれならできる、とは云わない。これは自分の力ではなく——あくまで「ストライク」の力なのだから！

自信を確信に——予感を事実にも、変えなければならぬ。

何としても、トールはここで「ローエン格林」を食い止めなければならなかった。さもなければみんなが——ミリアリアが死んでしまう！　トールは虹色に散る光を受け止めながら、懸命に叫んだ。

「やってやる！　おれだって、やってやるんだっ！」

次の瞬間、陽電子砲の虹色の輝きが、鮮烈に弾け飛んだ。

——陽電子砲の光が消えたとき、白亜の^{アーケエンジェル}大天使は、なんと元通りの姿で現存し続

けていた。それを見たナタルは、一言で云って安堵してしまう。艦橋の前に飛び出した

「ストライク」が、奇跡的に「ローエン格林」を消し飛ばしてくれたのである。

しかし、事態はそう簡単ではないことを、ナタルは同時に悟っていた。

たった今「ドミニオン」は、下手を打てば「アークエンジェル」そのものを撃沈させかねない陽電子を放った——それも、みずから吐き出した脱出艇すら、巻き込みかかない砲撃を。直面したマリュー達が、この艦に敵意を向けるのは当然のことだ。

——だが、なぜだ？ なぜ勝手に「ローエン格林」が発射された……!?

ナタルは動揺しつつも、船体を翻そうと舵を切る。しかし、その作業には意味がない。既に駆動系が何者かによって支配され、「ドミニオン」は完全にコントロールを失っていたのだ。

聡明なナタルは、おそらくそれが「ボアズ」侵攻戦のときに見たコンピュータ・ウィルスが関与しているのだらうと一瞬にして看破したが、実際に真相を確かめる術はなかった。

——そのときである。

突然「ドミニオン」の艦橋窓——いやナタルの目の前に、グワツと正体不明の「G」が映った。

それは暗灰色の機体で、四つ眼の紅いセンサーアイが、こちらを覗いた際にカツとして光った。それは、いかにも艦橋の中を見せてもらった、というような動作だった。

「何の機体!？」

すると同時に、艦橋のモニターが接続され、男の哄笑が響いて来た。

「——ここまでかな、アズラエル……！」

光背を背負ったモビルスーツが、肩掛け式の大型ビームライフルを艦橋へ向けた。それは勿論、ナタルも含めて——。

男の声を聞いたアズラエルは、逃げようとした。

「きみはいい道化を演じてくれた。しかし、いささか役者不足が過ぎたようだ！」

「——クル……ッ！」

「さよならだッ！」

「プロヴィデンス」の審判^{ユキケイウム}が、「ドミニオン」の艦橋を貫いた。

一発の光条が「ドミニオン」の艦橋を潰し、四方から浴びせられるドラグーン攻撃が「ドミニオン」そのものを瓦解させてゆく。

やがて機関部にもぐりこんだ一発のビームが、推進剤に引火し、忽ち到大爆発を引き起こす。その瞬間、「アークエンジェル」と容れ物を同じくする黒衣^{ドミニオン}の主天使^{ニオン}が、跡形も無く爆発した。戦艦だったものの瓦礫が宙を漂い、マリユールは愕然とするしかない。

「ナタル——!?!」

「クソッ、クルーゼか！」

みずからの戦友が指揮していた艦——

ムウにとつても好悪相反していた“ドミニオン”——その艦をたつた今葬つた男を、ムウは憎々しげに唾棄する。このときの彼は、みずからの影とも云える男が“ドミニオン”に何をしたのか、完全に読み取っていた。

「アイツだ、アイツが陽電子砲を発射させた——！」

“プロヴィデンス”に搭載された『パチルスウエポンシステム』は、“ベルゴラ”のそれと同型だ。

であるなら、多少の手間は必要であるにせよ“ドミニオン”の中枢システムを奪取してしまえば、戦艦ひとつを支配下に置くことも不可能ではない。おそらくラウはそれを利用し、“アークエンジェル”を陽電子砲で破壊しようと考えたのだ。

結果的にその目論見は失敗に終わったが、同時に“ブルーコスモス”の盟主を葬る必要もあつたから、彼は片付けるように“ドミニオン”を撃沈させたのだ。

ラウはせせら笑つて、挑戦的な笑みを浮かべる。

「浅からぬ因縁だったがね。そろそろキミたちにも沈んでもらおうか、足つきー」

（ヤツが来る!? クツ、このままじゃ——）

天帝の名を冠する黒銀の機体が、一目散に“アークエンジェル”へ迫り来る。

だが“アークエンジェル”は火器の多くに損傷を受け、推力が低下して回避運動もま

まならない状態だ。本来であればこれを護衛すべき「イージス」は中破しており、残された「ストライク」もまた――

「トール、トール大丈夫ツ!？」

へも、もうエネルギーがッ……!」

ミリアリアが涙声で呼びかけるも、「ストライク」は既にPS装甲の脱落を引き起こしていた。先の陽電子砲を受け止めた際、余剰エネルギーを全て使い果たしてしまったのだらう。機体を覆っていた色彩が脱落し、「ストライク」には、もはや敵機を迎撃するだけのエネルギーが残されていない。一方の「イージス」もまた、損傷が激しすぎる。

そんなとき、護衛に駆け付けて来てくれたのだらう――明後日の方角から「ストライクルージュ」が、数機のM1を連れて駆け付けていた。

ムウはカガリが率いるその部隊の増援を認めた。

「……!？」

ムウがハツと目を開く――そして、同時に直感していた。

――無理だ!

そんな彼の叫びに対し、通信機からはカガリの威勢のいい声が響く。

「わたしに任せろ!」

「よせ!」

そう叫んだのには理由があつて、直感的にムウが予見した未来……いや危惧した未来は、束の間に現実のものになる。

被弾の著しい「アークエンジェル」に敵を近づけまいと、「ルージュ」が牽制のビームを放つ。しかし、安直な射線はあつさりとして「プロヴィデンス」に回避され、続いてM1小隊の放つ無造作な援護射撃も、どれひとつ「プロヴィデンス」を捉えることが出来ないで終わる。

——気のない射撃では、ヤツは止められない！

それと同時に「プロヴィデンス」の光背から七基ものドラグーンが解き放たれる。生き物のように錯綜する砲塔は、瞬く間に指揮官機と思しき「ルージュ」を取り囲んでいた。それに嫌な気配を感じ取つたのだろう……護衛していたM1の一機が、慌てて「ルージュ」をその場から突き飛ばす。

「えっ——ジュリ!?!」

同時にドラグーンが一齐に火を噴き、四方から放たれる無数の光条が、そのM1——ジュリ・ウー・ニエンの乗つていた機体——の全身を貫いた。身代わりになつた彼女には、悲鳴を上げる暇すら残されず、彼女の機体は炎の塊に転じて散つた。

それでも「プロヴィデンス」の展開する全方位攻撃は、終わらない。

間断なく浴びせかけられる「光の雨」を前にして、他のM1も懸命に「ルージュ」を

護ろうと身を盾にした。カガリは全力でそれを拒否したが、実際に盾となつてしまったM1の一機が、首をはねられ、右肩を撃ち落され、両足を薙ぎ払われ、無残な姿に転じていく。カガリはそれを、悲壮な表情で見届けることしか出来なかつた。

「マ、マユラあツ！」

〈生きてカガリ様……！ あなたは、オーブに必要なツ——〉

マユラ機が、爆散して散つた。

「くっそおお！ おまええっ！」

カガリの中で——何かが弾けた。

怒りと悲しみで頭は沸騰しそうなのに、周囲の何もかもが手に取るように理解できる——気がする。自分を生かすために、その儂い命を散らしてしまった二人の少女達。この仇だけは絶対に討つてやりたいと、カガリはもうふたたび“プロヴィデンス”に銃口を固定、みずからを神と称する天帝に挑みかけた。

それがどうした。

カガリがビームライフルを前方へ突き出す——と、それを予見したドラグーンの一射が彼女の死角から降り注ぎ、彼女のライフルを直上から貫いた。銃身が爆破され、爆炎と噴煙に吞まれたカガリはやむを得ず“ルージュ”を後退させる。

「!？」

しかし次の瞬間には噴煙の中から飛び出して来た「プロヴィデンス」に虚を衝かれ、大型ビームサーベルで両腕を切り裂かれていた。

体勢を立て直すには距離を詰められ過ぎている。次に頭部を、そして両足を切り捨てられ、抵抗という抵抗もできないまま、一瞬にして「ルージュ」はコクピッドだけが斬り残された。

「オーブの姫とは……?」

ラウは、案山子になった相手の恐怖を味わうかのように、鷹揚として云った。

——せっかく、救ってもらった命だろうに……!?

しかしその背後から、中破した「イージス」がラウに体当たりを繰り返した。衝撃に突き飛ばされた「プロヴィデンス」は、それによって「ルージュ」にトドメをさせなかった。

「クルーゼエエエツ!」

「ハ! ムウ、貴様もそんな状態で何が出来る!」

挑発的な台詞と共に、ラウから反撃の「ユーキデイウム」が放たれる。その圧倒的な熱量を宿す火線は、元より五体不満足の「イージス」の右肩を撃ち抜き、爆発の衝撃にムウは呻いた。

——ダメか……!?

しかし突然、闇を切り裂く一条の光が「プロヴィデンス」に放たれた。ムウは弾かれたように顔を上げ、蒼い羽を広げた一機のモビルスーツが飛来するのを認めた。

「キラ——っ!？」

「フリーダム」は一直線に「プロヴィデンス」を目指し、これに気付いたらウもドラグーンの攻撃対象を「フリーダム」に切り替えた。一斉に浴びせかけられるビームを「フリーダム」は目まぐるしく回避し、反撃と云わんばかりに「プロヴィデンス」に撃ち返す。

それを操る少年の目は、既に光を失っていた。

「——あなたは……あなただけはッ!」

大切なものを奪われた怒りが、キラを『SEED』に覚醒させていた。

ラウは待ち侘びた相手の参入に、会心の笑みを浮かべる。キラにとつて『最も大切な想い人』を屠ることは出来なかったが、まあいい。仲間達を傷つけたことで、これだけでも充分な起爆剤にはなっているだろうと、密かに満悦そうに笑ったのだ。

「来るがいい……この私を止めてみせろ、スーパーコーディネーター人類の夢!」

次の瞬間「フリーダム」と「プロヴィデンス」が、凄まじい速さで交錯した。

一方の「ジエネシス」が見える空域では、なおも「エターナル」と「クサナギ」が懸命に「ジエネシス」を目指していた。

たった二隻でありながら、これまで「ヤキン・ドゥーエ」から繰り出される迎撃の数々やザフト守備軍からの猛攻を耐え凌ぐことが出来たのは、ひとえに奇跡だと思えるほどの僥倖だった。そんな折、ようやく彼らにとつて待ちに待った瞬間が訪れる。

「——「ジエネシス」、射程圏内に入ります！」

その一言を待っていた。ようやくだ——と、感傷に浸る暇はない。

ダコスタの報告を聞き取ったバルトフェルドは、勢いよく号を飛ばしていた。

「撃てー！」

的の大きさから云つて外すわけもないのだが、「エターナル」の主砲、およびミサイル発射管のすべてが、一方の「クサナギ」の「ローエン格林」が一斉射された。直撃すれば、要塞の岩盤であっても抉り取れるほどの火力だ。

撃ち放った火線とミサイル——後者については軌道上の迎撃で撃墜されてしまったが、それでも「ジエネシス」に届いた砲火はあった。

しかし、本当に届いたただけだ——。

実際に「ジエネシス」まで着弾した陽電子破城砲は、しかし、その名と違つて弾き返されて終わってしまったのだ。あまりに巨大なミラー基部に対して「ローエン格林

“では傷ひとつ付けることも叶わず、兵器に使う表現としては微妙だが、蚊に刺された程度にも効いていない。他に何か弱点があるならば希望もあるが、それを筒抜けにするほどコーディネイターの技術者集団は甘くない。これを見届けたクルー達に、否が応でも動揺が奔った。

「そんなッ……!」

「せっかく、ここまで来たのに!」

「それでも撃て! 撃つしかないんだ!」

そうは云いながらも、胆力で自信のあったバルトフェルドですら、このときは流石に気が滅入ったという。もつとも有効打と思われた陽電子破城砲すら通用せず、ミサイルの数にも限りがある。それでも彼らにできることは、やはり“ジェネシス”に向けて抵抗の射撃を繰り返すことでしかない。

だが、今の一撃で新たなデータを採取したエリカ・シモンズ——“クサナギ”から、希望を潰すような演算結果が導き出された。

〈無駄よ! 防御力、耐久力、どちらも桁外れだわ……この二隻の火力では到底、動きを止めることなんて出来ないわ!〉

その報告に動揺するあまり、“エターナル”と“クサナギ”は、艦へのモビルスーツ小隊の接近を許してしまった。

激しい銃火に晒され、恐ろしほどの被弾の衝撃が、艦橋を突き抜ける。

「クソ……ッ！」

が、それも束の間のこと。

そのとき、間髪置かず「エターナル」に急接近していた「ジン」と云ったMS部隊は、次々と多角的に放たれたビームに貫かれ、爆砕し始めたのだ。

「なんだ!？」

一見すると、何もない空間から放たれたように思われる数々の砲火——？

しかし、それらの発射源は、燐光を散らしながら自律飛行するドラグーン・シールドだ。艦橋窓から飛び交う二基の「盾」の参入を認めて、マユがぱつと太陽のように微笑んだ。

「グレイドル——!？」 ステラお姉ちゃん!」

それから一間も置かぬ内に、周囲に展開するザフト部隊は「グレイドル」に撃滅された。ドラグーンシールドに注意を曳かれたMSは、次々と「グレイドル」本体が撃ち放つ二挺リンクスのライフルの掃射の餌食となって、光の狂暴が、ザフト機を続々に鉄塊に変えていく。

尖鋭化された「G」の動きは、鬼神や怪物の類に憑り依とり依つられたようですらあった。激昂したザフト機が標的を「グレイドル」に絞り集中砲火を浴びせるものの、どれひとつ

“グレイドル”を捉え切れなくて終わる。

「ええいつ、邪魔ー！」

絶叫し、ステラは周囲に展開するザフト機を片付けていく。

——みんな、みんないなくなる……！

断末魔の閃光が咲き誇る度、ステラはどうしようもない喪失感と虚無感を味わう。彼女には何としても戦線を切り抜ける必要があつて、そうする意味も同様にあつたのだ。

——パトリック・ザラを止めなきゃ……！

一刻も早く父を止めること。ステラの頭の中にはこのことしかなく、それを為すためには、一秒でも早く戦線を切り抜ける必要があつた。そしてそのためにも、襲い掛かってくるモビルスーツは撃滅せねばならなかつた。

しかし根本的な話、ステラはなぜ、ザフトがこうも躍起になつて“ジェネシス”を護ろうとするのかが理解できなかった。

「こいつら、ステラに戦うことばかり上手にさせるー！」

ステラは、怒っていた。

周囲のモビルスーツ部隊を撃滅した後、ラクスに向けて云う。

「外から破壊できないなら、“ヤキン”に突入して管制を潰す！」

ラクスは、弾かれたように顔を上げた。その顔には不安が浮かんでいる。

だが構わない。ステラは決然とした表情のまま、最大速で戦域を突っ切って「ヤキン・ドゥーエ」に飛び立って行った。

あまりに速く、しばらく残ったバーニアの青い航跡を見守りながら、ラクスは何も云わなかったが、一方でバルトフェルドは違っていた。

「正気か!？」

視界いっぱい広がるような巨大要塞に、たったひとりで侵入する——？

それは、明らかに常軌を逸した盲動だ。奇行と云ってもいい。それを即決してみせたステラは、バルトフェルドが指摘するまでもなく、おかしくなっていた。しかし、そうまでしても「ヤキン」の管制室にたどり着かねばならないという強迫観念に後押しされているのだ。常識に囚われたためバルトフェルドは思わず非難していたが、その気持ちだけは、分らないでもない気がした。

結局、バルトフェルドは彼女を信用する他になかった。彼女はもう、飛び去ってしまったのだ。

「ヤツに上陸戦はできるのか!？」

「大丈夫です、信じる他にありません!」

生身での戦闘ともなれば、頼れるのは自分の腕だけだ——!

ラクスが唇を噛み締めて云う。

バルトフェルドはすぐさま通信回線を開き、付近の僚機に命じる。

「アマルフイ、*“クレイドル”*の援護を！ 女の子をひとりで死に行かせるな！」
〈そう思います！ 後続します！〉

指示を受け取った*“ブリッツ”*が、弾かれたように*“クレイドル”*の後を追う。

—— たったふたつで基地を制圧するなど、無謀かも知れない……！

しかし、出来る、出来ないの話ではなかった。彼らは何としても、*“ジエネシス”*を停止させなければならぬのだから。

淡紅色の母艦を置き去りに飛び立った二機を見て、アスランはぎよつとした。視線の先に捉えていた*“クレイドル”*が、ニコルの*“ブリッツ”*と共に*“ヤキン・ドゥーエ”*の岩肌の上陸を試みているのを認めたのだ。

着岸した機体は乗り手を失ったことで完全に動きを停止し、コクピッドからは銃を手にした二名のパイロットが、まるで正当な訓練を受けているかのよう*“ヤキン”*内部の坑道へ滑り込んでゆく。片方はザフトの赤いパイロットスーツ。もう一方は、連合製の角ばった桃色のパイロットスーツだ。

「ニコル……？ それにステラか!？」

アスランの脳裏にビクトリア制圧時の記憶が鮮明に蘇る。ステラは当時もまた、単独で基地内部へ侵入を試み、内部で待ち構えていた多くの敵兵を圧倒して回った。モビルスーツ戦は云うまでもないものだが、彼女はむしろ生身での肉弾戦の方が優秀であることを、アスランは知っていた。知っていたからこそ――

「グレイドル」を乗り捨ててでも、管制を潰そうというのか！ いや、父上に会う？
――ええいステラ、これ以上やらせるわけにはツ！」

柄になく独言を連発する程に、アスランもおかしくなっていた。彼は直ちに「ジャステイス」を同じく「ヤキン」の荒廃した岩肌に降り立たせ、コックピットを解放して飛び出した。

そのとき既に無人であった「グレイドル」と「ブリッツ」を破壊しておかなかったのは、パイロットを追うことに視野狭窄に陥ったアスランの迂闊さであった。

「ステラを止めるのか……！ しかし、オレだって士官学校アカデミーは首席のはずだ……ツ！」
思わず口にしたそれが、いつたい誰に対する言い訳であるのか。

このときのアスランには分からなかった。

『セカンドリー・ウェーブ』D

“ヤキン・ドゥーエ”内部は、人員と情報が錯綜した混乱状況にあった。格納ブロックでは損傷したモビルスーツが続々と係留され、整備、あるいはコックピットから負傷兵が降ろされ、応急手当が始まっている。

ステラとニコルは、これらの混乱に乗り、要塞内へと潜入していた。

坑道の内側に掘削された“ヤキン”の通路は、各種メンテナンス用に広がる隔壁ブロックになっている。微かな照明だけが照らす空間だが、僅かな光が差し込んでいれば、ステラには充分だった。

半重力帯に設定された廊下は、生身での移動が容易である。とはいえそれは、運動が容易であることを意味しない。すこしでも体重の操作を誤れば無防備になる瞬間を断続的に生み続け、こればかりは人間の意思でどうにかなる問題ではないからだ。

けれど、そういつた不便さも意に介さず、ステラとニコルは瞬く間に“ヤキン”の奥へと滑り込んでゆく。それは訓練を徹底して経験した兵士だからこそ発揮できる、洗練された無駄の無さだ。

「ステラさん、アスランが追って来ます！」

云つてから、これほどに最悪な報告はないだろうとニコルは思った。

訓練生時代から、アスラン・ザラという男はあらゆる戦技科目——「MS戦」「射撃」「ナイフ」「情報」——で首位を総嘗めにした怪物だった。ニコル自身は次席のイザークに次ぐ卒業であり、1位と3位、数字で見れば僅差に思えるが、ここにある兵士としての総合的な格差は大きい。ニコルがアスランより優れていた分野などは、せいぜい「爆弾処理」くらいのものであるからだ。

そのような過去を思い出してしまえば、このときのニコルが気後れしてしまったのも無理のない話だった。アスランを迎え撃つ自信などなく、相手取ることを畏怖したと云つてもいい。

「ニコルは前に。殿しんがりはステラに任せて」

しかし、そもそも色眼鏡を掛けることを知らないステラには、そのような偏見や前情報はどうでもいいらしい。彼女はニコルの声音の中に弱気を見抜き、勇ましくもそう云つた。

「すいません、心強いです」

「ステラもだよ」

ある折を以て、要塞内部に敵侵入の報せが広まったらしい。前方の通路から、武装し

たザフト兵がドツと迎撃に現れた。

硬質な光に薄暗く照らされただけの空間では、施錠銃のスコープなど充てになるものでもない。無造作にばら撒かれた銃弾を、ふたりはT字路の角に身を潜めてやり過ごした。隙を見てニコルが前方へ反撃の銃弾を放ち、後方へステラが牽制の射撃を仕掛ける。

「——ぐあッ」

「ちッ——」

進路前方のザフト兵は肩を撃ち抜かれて後退する一方、後方のアスランは即座に壁を蹴りつけ、物陰に飛び込んで銃弾をやり過ごす。

そんなアスランが隠れた側、後方の暗闇からステラ達に逆撃が発砲される。ステラは咄嗟にニコルの襟を掴んで物陰に隠れ、これから逃れた。

幾つもの跳弾が暗闇を照らし、間髪おかず、ステラは相手の一発火炎が閃いた方角に幾発か銃撃を放った。アスランもまた、咄嗟にこれを避けてみせた。

（正確……！）

（無比な……！）

それは、たったいま撃ち合った兄妹の感想である。アスランは即座に拳銃の弾倉を交換し、ふたたび物陰から銃を構える。

しかし、そのとき既に銃口の先には気配がない。

——さらに奥へ……!?

横つ飛びしたアスランは、追うように暗闇の中を突つ切つた。頃合いの柱に身を寄せると、気配を察して牽制の射撃が飛んでくる。

(ニコルが進路を確保し、ステラが追跡を喰い止めているのか？ この人数差では、父上の許へ簡単に辿り着かれてしまう……!)

アスランは、自分自身を叱咤した。

「くッ……!」

まともな援護は見込めない。この「ヤキン・ドゥーエ」は軍拠点であり要塞でもあるが、連戦による疲弊と人材不足が統制を緩くしている上、そうその腕利きが警護に就いているわけではないのだ。

要塞内にいる人員は、殆どが管制官であり技術者であり、たとえば『赤』と認められた能力の持ち主であれば、とつくにモビルスーツパイロットとして戦場に駆り出されるだろう。

勿論、中にはレイ・ユウキのような指揮官級の有力な将兵も居るだろうが、たった二名の侵入者のために、わざわざ彼等が下に降りて来ることもない。

——しかし、その「たった二名の侵入者」というのが、尋常ではないんだ。

それは例によって、アスランが追撃に及んでも蹴散らすことができずにいる二人なのだから。

「オレはいつたい、何をやっている……ッ！」

現状、アスランは思うように侵入者達へ距離を詰められず、攻めあぐねていた。

原因は分かっている。それは先行する敵兵の牽制射撃が、アスランにとつて絶妙に厄介なポイントを撃ち込んで来るからだ。正しく云えば、ステラの放つ銃弾の悉くが、逐一アスランの進路を阻み、彼に膠着状態を強いる。後方から敵の背を追う立場でありながら、アスランは常に狙撃に遭うような閉塞感や圧迫感を憶えてしまい、これによって思うように敵陣へ切り込むことができない。

しかし、だからと云って、アスランが自分を罵る必要はないのだろう。

アスランを相手に膠着状態を強いる——これを実現できるのが、ステラという兵士の能力なのだ。それが可能なのは、彼女だからであり、相手取るのが彼女でさえなければ、アスランは僅かな隙から倏忽と距離を詰めていったに違いない。あるいは今頃、ナイフを抜き放つて引導を渡してもおかしくない程度には。

（しかし、そんなのは妄想だ！）

なぜなら相手が、ステラであるから。

そうしている間にも、彼女達の前方に、また新たなザフト兵達が立ちはだかる。ステ

ラがアスランを喰い止めている間は、ニコルが一方的にそれを蹴散らして行つた。

「——ごめんなさあいつ！」

ニコルの放つた銃撃が、ザフト兵達の肩を撃ち抜く。

負傷した兵達は、怯んだあと尻餅をついた。

「口先だけは謝つて！ あいつ何なのっ!？」

アスランは、絶叫していた。

「——下がるんだ！ きみたちで勝てる相手じゃない！」

「そうするよ！……もつと早く云えよ！」

そうしてふたりの侵入者達は、なおも要塞の奥深くへ侵入して行つた。

ひとえに、パトリック・ザラのいる管制室を目指して。

大天使の艦前方で、翼を広げた“フリーダム”と“プロヴィデンス”が激闘を繰り広げている。容赦なく浴びせかけられる光の雨を前にして、キラは辛うじて全ての車線を捌いてゆく。

ラウ・ル・クルーゼという男の思惟を受けて飛び回る誘導砲台の群れが“フリーダム

“を押し込み、光弾が四方に噴き出される。同時に “プロヴィデンス” 本体からも間断なくビームが斉射され、核エンジンから生み出される莫大にして半永久的なエネルギーは、一切の余すところなく嵐のように “フリーダム” に襲い掛かる。

戦闘の様子を見ていることしかできない——あるいは見入ってしまったているミリアリアが心配の声を挙げ、マリユールが厳然と指示を出す。

「“フリーダム” を援護して、生きている武器システムを使うのよ！」

ぎよつと目を見開いたのは、ノイマンだ。

「そんな、無茶です！ 下手に敵のモビルスーツを刺激したら、この艦にすつ飛んで来ますよ！」

「ひとりでは戦わせられないわ……！」

「艦隊戦じゃないんですよ！」

「やるの！」

目の前で交わされる至高のモビルスーツ同士の戦闘を目撃しつつ、このときにマリユールが憶えたのは熱望や期待ではなく、ひとえに焦燥だった。

—— “フリーダム” が、一方的に圧されている……！

キラをひとりで戦わせ続ける選択が、明確に過失と考えるほどの形勢。言葉にはしなくとも、傍らのサイ・アーガイルもまた同じように危惧していたらしい。

友情による身内鼻眞。憧憬による美化。多少の色眼鏡が含まれているとしても、少なくともサイにとつて、キラはモビルスーツを操縦させれば最強の友人である。

しかし、そんなキラの放ったビームでさえ、敵機をまともに捉えることはできていない。対して多重的・多角的に放たれるドラグリーンによるビームカーテンに、常にキラは翻弄され続けた。

……とはいえ、そうしてドラグリーンが漁る光の“雨”を避けることだけでも、サイの目には充分に神業に思えてしまうものなのだ。現実にもそのような芸当ができるのは、おおよそキラとムウくらいのものであるのだろうか。

「『イージス』と『ストライク』の回収は？」

「完了してます！ ムウさんは医務室へ」

報告を聞き、不覚にもマリユは安堵した。だが気を抜いてなど入られない。彼女はすぐに視線を前方に戻し、毅然として命じた。

「『バリアント』 『ゴットフリート』 照準、敵モビルスーツ！」

そうして後方に控えた『アークエンジェル』が、『フリーダム』へ援護の砲火を放つ。

——と、放たれた『ゴットフリート』の一撃が、奇しくも『プロヴィデンス』のドラグリーンに直撃した。それはひとえに、幸運だったと云えた。

〈足つきめ〉

舌を打ったラウは、牽制のためドラグーンを二基ほど「アークエンジェル」に遣わせる。それを見たキラはぎよつとして、これを阻害するようなビームライフルを撃ち放った。しかしビームはぬらりとしてドラグーンに回避され、出し抜けに「アークエンジェル」へと押し迫る！

「小型ユニット、接近！」

「対空砲火、撃ち落として！」

マリューの叫びは、全ては聞こえなかった。突き抜ける被弾の衝撃が、艦を揺らしたからだ。

——ラミネート装甲がなければ、とつくに沈められていた……！

格納庫をも、激震は襲う。中に控えていたツールやマードック達が鉄骨に擦り寄って、衝撃から身を護った。

「うわわ……！ マードックさん、「ストライク」はまだ出せないんですか!？」

ツールが見上げる先には、バッテリーが尽きた「フォートレス・ストライカー」を外し、人の形で直立する「ストライク」の姿がある。見たところ目立った外傷はないが、いまはメカニックが総動員して整備作業を行っている最中だ。

キャットウォークの上から、マードックは怒鳴る。

「左腕の動作不全だよ！ 肩のアタッチメントがバカにやってやがんだ」
「なんでです！」

「無茶な使い方したんだろ！」

陽電子破城砲を受け止めた影響だろう。

衝撃を真つ向から受け止めたため、肩の部分がイカれているのだ。

「フラガ少佐だつて医務室で治療してるし……！ できるだけ急いでください！」

「おうよ！」

（キラ、がんばれ……！）

戦闘が繰り広げられているであろう方角を見遣りながら、ツールは祈るようにそう云った。

——もうすぐ、みんなで駆け付けるから……！

——それまで、何としても持ち応えてくれよ……！？

そんなとき、上から違う怒声がかかった。

「おいこら、メットの気密シールドはしとけ！ 船体にいつ穴が空いてもおかしくないんだ！」

キラが負けるようなら、みんな死ぬかも知れない——

誰に云ったわけでもないが、ツールは不意に、そんなことを思った。

幾億もの星辰が背景になって、背景に溶けるような黒銀色に鈍く輝く飛行物体を捉えるのは容易なことではない。

現実の戦場は、アニメや映画のように注目する対象がズームアップされるような仕組みにはなっておらず、パイロットはあらゆる対象を目視する必要を迫られる。

が、いくらスーパーコーデイネイターと云つても、人間を超えるほどの眼力の類を持つてゐるわけではない。勿論、常人より遙かに優れた洞察力や深視力を秘めていることに変わりはないが、それを本人の意志によつて自在に使えるかどうかは別問題である。

何が云いたいのかと云うと、宵闇の中で蜂の子のように飛び回るドラグーンを見つけ、これをことごとく撃ち落とすことができるほど、キラ・ヤマトの能力はバケモノ染みていないのである——このときは、まだ。

(早くこの人を倒さないと、みんな殺される!)

その焦燥は、キラの邪念である。

視線の先の“プロヴィデンス”が、一旦、光背までドラグーンを呼び戻す。光背から突き出した砲塔にムラが出て、如何せん不恰好な姿になっている——“イービス”に減らされたドラグーンと、奇跡的に“アークエンジェル”が破壊したドラグーンを除い

て、残る砲塔は六基と云つたところか……？ ふたたび放たれたドラグーンをひとつ、キラは「フリーダム」から光の奔流を飛ばすことで撃墜した。

〈厄介なヤツだよ、きみは！〉

「——あなたこそつ……！」

〈知れば誰もが望むだろう！ キミのようになりたいと——キミのようでありたいと！〉

「そんなこと！」

〈ゆえに許されない、キミという存在を！〉

接近を掛けようとしたキラの進路を、ビームの驟雨が切り刻む。射出されたドラグーンが「フリーダム」を押し包むようにビームを浴びせかけ、キラは必死に攻撃を往なす。だが回避した先に「プロヴィデンス」が待ち受けていて、キラはシールドを掲げて「ユーキデイウム」の一射を防ぎ止めた。

「云うほど、ぼくは出来た人間じゃありませんよ！」

自虐的なことを云えば、ドラグーンすら撃ち落とせなただのパイロットだ。……いやもつと云えば、ただの民間人だったのだ。

「なのにあなたは、ぼくがまるで、最高の人間であるかのように云う！」

〈真実だよ、キラくん！ きみこそスーパーコーデイネイター、人類が永きに渡って夢見

続けた欲望の結実なのさ！」

「そんなの、捻くれた大人の理屈だ！ あなたたちは自分を卑下して、他人をやっかんでばかりで——！」

顔を上げ、反論を飛ばす。

「悲観主義に溺れてばかりで、他人を恨んだり、妬んだりすることしかやろうとしない！」

「へー！ なぜ悪い？ この救われようのない人生を与えられたわたしには、そうするだけの資格がある！」

「それしか知らないあなたが！」

「知らぬさ。所詮ひとは、己の知ることしか知らぬ！」

「だから！ あなたは不幸だと云うんだ——！」

キラの放ったビームの一射が、ドラグーンを貫かんとする。

が、ユニットは機敏に身を翻し、その一射を回避した。

「人間の価値は、遺伝子や才能なんかじゃ決められないんだ……！ 現にあなたはチユラルなのに、それだけ“優れた力”を持っている……ムウさんと同じだ！」

才能に溢れ、才能に優れた人間こそが、最高の人間？

そんなことはないのだ。人間には、みずからに課せられた運命から脱却する力があ

る。分相應の人生から逃れようと、あがきもぐだけだけの力がある。

——『努力』だ。

しかし、それを証明しているのは誰だろうか。他ならぬラウ・ル・クルーゼではないか？ ナチュラルでありながらザフトに入隊し、周囲のコーデイネイターと何ら遜色のない働きを見せ続け、いつしかトップガンとして実力を認められるようになった。

——彼自身が、その壮絶な人生の中で勝ち取り、体現して見せたこと……！

——つまり彼の人生には、死に物狂いの『努力』があつたんじゃないのか……？

たしかに、コーデイネイターはナチュラルに比して半分の努力で一人前になつてしまふケースが多い。そういう見地に立てば、特別なコーデイネイターであるキラは、誰よりも早熟な人間であるかも知れない——けれど彼の場合は、云うほどに努力や経験を重ねていない。こと戦闘技術に関して云えば、キラは何倍も努力の足りていない人間なのだ、泥臭い精進と研鑽を重ねエースパイロットになつたラウ・ル・クルーゼと比べれば、火を見るよりも明らかに。

「だからあなたは、僕よりも強いでしょう！」

〈なに……!!?〉

ラウは、不覚にも一驚してしまった。

——失敗作が、成功体よりも強いと云うのか……!!?

しかし、キラの指摘は、おそらく事実だった。それを恥ずかしげもなく云えるのが、今のキラであった。

「たしかに僕も、戦いの中にのめり込んでいった時期があります。この才能を開花させるために、力を奮うことばかり上手になっていった——」

キラの戦闘技術が圧倒的に高まっていたのは、フレイ・アルスターと歪な恋仲になったときだ。

その才能を利用しようとした彼女に唆され、愛撫されることで、キラは『戦士』として覚醒していった。あの頃の「ストライク」は『覚醒した鬼神』としか表現の仕様がなく、元民間人の少年が操っているとは想像できない程に凶暴な存在だった。リビアに降下後、ザフトの名将『砂漠の虎』——アンドリュー・バルトフェルドを単独で下し、以降は『紅海の鯨』の異名を取るマルコ・モラシムまでも単機で撃破する。

それは生まれながらの天才……いや、生まれる前から天才としての人生を確約された、スーパーコーディネイターだから紡ぐことの出来た常勝の伝説。数多のザフト兵、同胞であるはずのコーディネイター達にまで畏怖された不敗神話。

「そうさ！ 戦闘の鬼才、至高の天才であり続けることが、キミの運命なんだよ。キラくん！」

「いや、違う！ 今の僕は、天才である必要がないんだ！」

——だからキラは、天才なんかじゃなくなつていいんだよ。

コロニー「メンデル」——みずからの分水嶺で、少女はキラにそう伝えてくれた。自分は無理をして天才ぶる必要はないのだと、彼女はそう教えてくれたのだ。

〈……！ 必要ならあるだろう……？〉

ラウは静かに動揺し、僅かに調子の外れた声音で怒鳴り返す。

〈きみが天才でなければ、わたしは倒せぬ！ きみは誰ひとり、護れぬ——！〉

叫びながら、ラウはこのとき、キラの言動に明確な違和感に抱いていたという。何故なら、このときのラウは『スーパードコーデイナーと戦っている』という手応えを——それによって本来得られるはずの熱狂と興奮を——殆ど実感できなかつたというのだから。

意地になり、必死になり、ラウは再び光背からドラグーンを分離して使役する。解き放たれたビーム砲塔が次の瞬間「フリーダム」の片翼を吹き飛ばし、これに対して反撃に出た「フリーダム」がビームを撃ち掛けるも、銃火はあっさりと空を切った。ラウの対応速度が、ここに来てキラ・ヤマトの反応速度を越え始めていたのだ。

(鈍いな!?)

だから感覚的な話をする、このときのラウはキラと戦つていても何も愉しくなかつた。互いを殺し合う行為に享樂を求めるのも不健全な話かも知れないが、ラウにとつて

は重要な意味を持つていた。失敗作として破棄された素体が、人類の夢たらん唯一の成
功体に立ち向かうことには、それなりの意義もあつたらしい。

——弱者を黜り、蹂躪したいわけではなく。

——狂乱し、覚醒した最強の個体と正面から滅ぼし合いたいだけ……！

だというのに、嘆かわしくも目の前の個体からはラウがこれまで「プロヴィデンス」
で一方的に叩き潰してきた凡庸の者達と同じ迫力しか感じられない。

まったくもって役者が足りないし、彼がラウに大して抱えている隔意や敵意は本物だ
ろうが、それは人一人を絶対に滅ぼすという覚悟——殺意と同列であることを意味しな
い。

機体性能はともかくとして、キラ・ヤマトは以前より明らかに腕が落ちていた。パイ
ロットとして、スーパーコーディネイターとして、今の彼は墮落していた。

(何故だ!?)

それからしばらく、ラウは『スーパーコーディネイターと戦っている』という高揚や
興奮を、まるで体感できずにいた。むしろ、ムウの方が善戦していたのではないか？

本気でそう考えるほどに、キラとの戦闘に物足りなさを抱懐し続けた。

勿論、本人の名誉のためにひとつだけ断っておくが、それでもキラ・ヤマトは充分に
「強い」と云えるだけの力量を持ち合わせている。ファーストステージのうち「フリー

ダム”は特に凡人の手に余るMS——これを手足のように駆使できる時点で、やはりキラ・ヤマトは天才の名に恥じない少年と云えた。

しかし、そのような事実は、この場でキラとの闘争を愉しみたいと欲望するラウにとつては何の慰めにもならない。現に“フリーダム”は“プロヴィデンス”に翻弄され、そうでもなければ、MS同士の交戦下に邪魔者から横合いの援護射撃が飛んで来ようものか？

——キラ・ヤマトの『SEED』は、既に発現している……！

であるなら、自分を圧倒するような、それこそ天才的な操縦を見せてくれなくてはおかしい。世界を壊そうとする自分を殺してでも、世界を護り抜く強大な力を發揮してくれないと不自然なのだ。

にも関わらず、ラウは“ユーキデイウム”を鋭角的に放った。それは“フリーダム”の右足に直撃してしまった。

〈……………!?!〉

——わたしは、勝ってしまうかも知れないな……？

ラウは、動揺した。不思議とそこに、喜びの感情はなかった。

彼にとつては皮肉なことに、これはもしかしくなくとも、ムウと戦っているときの方が戦いになっていた。

(起爆剤が、足りなかったか)

ラウとキラはその先も決着をつけないうまま、互いに砲火を交わし合っていた。

いまいち享楽を感じ得ない、刹那にも思える長い時間の中で、ラウは不思議と、そのように直感した。無論、それはフラガ家に伝わる直感力ではなく、単純にそう思っただけだ。ぼっそり呟いただけに、キラには聞こえなかったようだが。

——しかし、どうということだろう？

キラ・ヤマトにとつて親愛なる仲間達——“イージス”に“ルージユ”そして“アークエンジェル”——は、既に充分に痛めつけている。これを目撃したキラ自身も、激怒しているはずだ。

にも関わらず、彼はまだ『戦士』として覚醒していないように思える。——連中を痛めつけるだけでは、まだ足りなかったというのか？

(ステラのせいかな？ やはり彼女を事前に殺しておくべきだった——そういうことか)

そんなとき、気を抜いていたらしい。遠方の“フリーダム”のハイマツトフルバースト一斉砲撃が、ラウのドラグーンを複数基まとめて叩き落とし、横合いから伸びた“アークエンジェル”からの援護射撃が、さらにドラグーンの数を減らした。

頭上の通信機からは、なおも逞しい反論の言葉が響いて来る。

「今のぼくには、力だけが全てじゃないことを認めてくれる人が、大切な人たちがいるんだ……！」

「ステラ・ザラのことか……!?!」

「それが融和なんです！ 人間って、偏見とか、先入観とか、立場や思想の違いから、互いを誤解することから始めてしまうんだ！ でも、ナチュラルもコーデイネイターも関係ない——そういうのをぜんぶ乗り越えていけば、分かり合うことだって出来るんです！」

その瞬間、キラの放ったライフルが、シールドを持つ「プロヴィデンス」の左腕と、頭部を貫いた。

「叶わぬ夢や希望を未来に託すのは、人間の怠惰がなさしめる宿業だ！ いつかは——やがていつかはと、そんな甘い毒に踊らされ、いったいどれほどの時を戦い続けて来た!?!」

機体を損傷してなお、ラウは愉悦に満ちた声で叫ぶのをやめない。

「人間は戦うことしかできないって云いたいんでしよう!! 今はそうだ——でも、違う！ 人間はいつか、そんな時代だって終わらせて行ける！」

勇ましい言葉だが、それが叶うなら時代はとづくに平和になっている。

「それをやれと云っている！ 人類の叡智が生み出したものなら、人類くらい救ってみせろ！」

〈ぼくは普通の人間だ！ どこもみんなと変わらない——ステラと一緒に、真つ当に生きていく！〉

極めて人間的な発言は、しかし、ラウにとつては到底容認できるものではなかった。

「ひとりで云う、それは色ボケというものだ！」

云つてからラウは、それこそがキラの墮落であることに気が付いた。

「——そんなでは、このわたしを止められはせぬ！」

次の瞬間 “プロヴィデンス” の放った “ユーキディウム” が、残された “フリーダム” のライフルを撃ち抜いた。この時点で “フリーダム” は、“プロヴィデンス” に対抗できうる全ての武装を失った。

(こゝ、この程度なのか……!?)

ラウは、有効な武装を失った “フリーダム” を見遣り、相手のパイロットセンスに慄然とした。

——勝ってしまったのか？ わたしは、キラ・ヤマト 人類の夢に……!?

自分でも意外なくらい、それはラウにとつて、シヨックな事実であった。

しかし——

「——いいや、キラ！　それでいい！」
その瞬間。

通信機から、第三者の声が響き渡った。

ハツとして巡らせた目に、朱色の機影が映る。一機のモビルアーマーが、こちらに向かって猪突して来ていた。

尖锐な胴体に、上下左右合わせて四基の誘導兵器を携える——

ラウはその見憶えのある……いや、見るだけで懐かしんでしまうような機影を認め、声を荒げた。

「——『メビウス・ゼロ』だど!?」

ラウは動揺した。まさか、今になって前時代のモビルアーマーが整備され、あろうことか『それ』が出撃して来るなどは、夢にも想定していなかったからである。

——あの機モビルアーマー体を操る男と云えば、それは……！

負傷させたはずが、治療を終えて来たというのか？　その動揺が、致命的な対応の遅れに繋がったらしい。突進して来る『ゼロ』の主武装——単装リニアガンの一射が、次の瞬間『プロヴィデンス』の主武装である大型ビームユキライフルを横合いから貫き、忽ち

に爆散させた。

へムウめッ！　しかし——！

ラウは丸腰の“フリーダム”から、標的を“ゼロ”に切り替えた。

——しかし、今さら“メビウス”など前時代兵器で、何ができるといふのだ……！？

“プロヴィデンス”の全身にはP S装甲が採用されている。それに対し“ゼロ”の武装は、リニアガンを始めガンバレルまで全てが実弾兵器だ。

たしかに“ユーキディウム”を破壊できたことはムウにとって僥倖だったかも知れない——が、そのような旧式では、まともに戦うことなど不可能だ。

残されたドラグーンを“ゼロ”へ遣わすラウ。しかし、そんな彼の目論見は潰え、そのドラグーンはさらなる遠方から伸びて来たビームによって撃ち落とされた。

「——キラー！」

「と、ツール!？」

“フリーダム”の通信機に、キラにとって親友の声が木霊する。

それは、ムウと同時に再出撃した“ストライク”だ。背部に四基の赤い翼——“エール・ストライカー”を装着し、こちらに飛来している。

〈次々と——！　なに!?!〉

睨んだ先の“ゼロ”が、四基のガンバレルを一斉に解き放った。

一方の「プロヴィデンス」は最後のドラグーンを叩き落とされ、全ての武装を失っている。動くものがあるとすれば、残された右腕くらいだろうが、これにしたって何ができると云うわけでもない。

——「アークエンジェル」に続き、「ゼロ」や「ストライク」までもが邪魔をする！
朱色いボディの「ゼロ」の母体から——視認できるかどうかとも怪しいような——細長く、それでいて頑丈なワイヤーが際限なく伸縮する。有線の先にある筒状の誘導兵器が、文字通り、四方から「プロヴィデンス」を付け狙う！

へハッ！ 扱い慣れたものだな、ムウ！ しかし、実体弾ごときに何ができるといふのだ……！
▽

だからラウは、周辺を飛び交うガンバレルを無視することにした。

——キラ・ヤマトを守るために、こんな……！

マリューやムウ、それにツール達は、必ずしもラウの邪魔をすることが目的ではない。ただ彼らは、キラ・ヤマトを守り、支えようとしているに過ぎない。今は結果としてラウを妨害しているのであって、それもこれも、キラ・ヤマトという少年が頼りなく、戦士として情けないがゆえの連携……！

この体たらく、流石のラウも毒づかずにはいられない。

〈揃いも揃って邪魔をする——！……なんだッ!?〉

丸腰の「プロヴィデンス」が、後退しようとスラストを噴かせたところ、何か衝撃のようなものが機体を揺らした。

ラウはすぐにその正体を探ったが、一拍置いて、シウルシウルと何かが機体に絡まるような音を知覚し、それと同時に全てを悟る。

〈これは、ガンバレルの誘導線!?〉

ラウはてつきり、「メビウス・ゼロ」がガンバレルを用いて攻撃を仕掛けて来るものだと思定していた。

しかし、ガンバレルには「プロヴィデンス」の装甲を突き破るだけの威力がないから、彼はその兵装を脅威だと思えず、真実これを無視していたのだ。

（——それが傲りだクルーゼー！ 機体性能に、頼り過ぎた……！）

ムウが操る「ゼロ」のガンバレルは、有線誘導式である。この誘導兵器を母機へ繋げているのが、強靱なワイヤーであり、いつの間に「プロヴィデンス」の全身に巻き付けられていたものだ。

ムウ・ラ・フラガの、空間認識力の為せる業であろう。

誘導兵器による「攻撃」だけが全てではない、全身に巻き付いたワイヤーは幾重にも絡まり合い、それ自体が強固に結ばれた「拘束具」になって変わった。右腕まで封じ込まれた「プロヴィデンス」には、これを引き千切るだけのパワーが残されていない。

次の瞬間、ガグンツ！ と急激に引き上げられるような衝撃が「プロヴィデンス」を襲う。身体に強烈なGがかかり、ラウは呻いた。

へぬおオツ!?!」

拘束された「プロヴィデンス」を、「ゼロ」がワイヤーごと引つ張り上げる。

どだい、一機のモビルアーマーではモビルスーツを引きずり回すパワーが足りないが、ワイヤーを牽引するのは「ゼロ」だけではない——「ストライク」もガンバレルを抱え持つて「ゼロ」に協力しているのだ。

そこに自然な動作で「フリーダム」が合流し、三機はそれぞれの力を合わせ、捕縛した「プロヴィデンス」を連れ去ってゆく——まるでどこかへ、誘導するかのよう。

ムウは怪我を押して、通信機まで手を伸ばす。

「マリュー、陽電子砲発射準備！」

へムウツ、貴様……!?!」

「ここで終わりだ、クルーゼ！ オマエは殺し過ぎた——」

少なからず、ムウの中にも、ナタル・バジールへの甲いの気持ちはあつたのだろう。

ラウが「ドミニオン」の陽電子砲を発射させ、恋人ごと「アークエンジェル」を撃墜しようとしたことも。その果てに、彼が「ドミニオン」を撃沈させたことも、ムウにとつては到底、許しがたい行為だった。

（——ならば、陽電子砲はオマエが喰らえ……！）

みずからの影とも云える男の処刑執行書に、ムウはハツキリとサインを施した。徐に“アークエンジェル”の右舷蹄部の砲門が開き、ラウが利用した“ドミニオン”のそれと、まったく形状を同じくする陽電子砲がその砲口を覗かせる。

射線上まで“プロヴィデンス”を運び出した“ストライク”と“フリーダム”は、握るワイヤーのひとつひとつを“ゼロ”と連携し三角形に押し広げ、中央部に据える“プロヴィデンス”を完全に封印して見せた。

へムウ、いいのね……!?」

「終わらせてやってくれ、マリユ……！」

不完全な自己を産み出した世界を呪うことでしか、生きる希望を見出せなかった哀れな男——。

その壮絶な人生には、どこまでも深い闇が付きまとい、負の感情で塗り固められていた。この男は遂に、自分自身すら愛することが出来ず、自分さえも恨んでしまっていた。なぜならその「自分」という者が、彼を暗黒の中に生み出した最悪の男と、同一の存在であったから。

生れ落ちる前から己を縛り付けていた運命から脱却しようとしても、テロメアという名の絶望がそれを許さず、彼はとうとう、世界を道連れにすることを決めた。

信任、信頼、信用……その言葉をとうに捨て、彼は生まれてから今日——この日に至るまで、たったひとりで戦い、たったひとりで、抗い続けた。

「だからおまえは、勝てなかつたんだ——」

陽電子砲の光が、臨界に達する。

ムウが——トールが——マリユウが——キラが、ぐつとして息を呑み、砲口から迸る閃光が、一直線に『プロヴィデンス』へと押し迫る！

迫り来る白熱光を目の当たりにしながら、ラウは夢想した。

「これが、わたしの——ッ」

次の瞬間——黒鉄の『プロヴィデンス』が、陽電子砲に呑み込まれた。黒い装甲が溶けて細かい泡に覆われ、機体は忽ちに炎を上げて爆散してゆく。

白い光に包まれる中で、死を確信しながら、ラウ・ル・クルーゼ——世界の破滅を望んでいた男は、奇妙な満足感に包まれて散って行った。

友人、仲間——

それら温かな者達に囲まれたキラ・ヤマトの戦いは、このときに、終わったのだった。

——ステラとニコルが“ヤキン”の中を突き進み、如何ほどの時間が経つたろうか？ 『外部侵入者』の報せが入り、にわかには慌しくなった要塞内は、よりいっそう混乱した状態に陥っていた。

ステラにとってみれば、武装したザフト兵が遥かに多く押し寄せてくるわけで、多勢に無勢の状況が悪化したわけである。が、時間と共に通路内に充満する噴煙は濃くなつて来ていた。視界が悪くなっている、という意味だ。それが、唯一の幸いなことであつた。

アスランはなおも、そんなふたりを後方から狙撃し続けていた。ステラ達が追手を振り切つて前に進むのを認めると、彼もまた慌ててその後を追う——そんなときだった。

「——手榴弾!？」

金属片の筒のような形状をしたものが、アスランの視線の先で炸裂した。

突風が狭い通路内を突き抜け、アスランは反射的にガードをしたが、爆発の余波で後方まで吹き飛ばされる。

噴煙が一带に立ち込める。アスランは慌てて爆発地点まで身体を戻したが、今の衝撃で、完全に敵を見失ってしまった。

「どっへ……!？」

一方で追撃を撒いたニコル達は、背後への気配りを減らした分、注意を前方に向けて

進軍していた。

非常灯の緑がかった光の下、あらゆる障害物バリケードを利用して前へ前へと進むニコル達は、やがて壁面にひとつのパネルを見つけた。それを認めたニコルが、確信して云う。

「司令室まではもう少し、この先です！」

そうしてステラの顔を覗き込んだニコルであるが、バイザー越しに見るステラの顔色は青かった。

——無理もない。

彼女は、人より他人の感情に敏感なのだ。生身での銃撃戦を繰り返せば、それだけ相手の「痛み」を直に受け取ってしまう体質をしている。ニコルは不安げに訊ねた。

「大丈夫ですか？」

「なんで、アスランと撃ち合ってるんだらうって……」

「……それは」

云いかけて、云い終える前にニコルの口は止まった。ニコルの視界の隅に、キラリと光るモノが入ったからだ。

背を向けるステラは気付いていない。ニコルがぎよつとしてそちらを見ると、そこにはさつき撃ち斃したはずの兵士の身体があった。

その光りは間違いない、銃口の照り返しだった。

「——!?! 危ないッ!」

絶叫と共に、ステラも敵の存在に気付いた。だが遅い——その頃には銃声が二発として高らかに鳴り響き、ニコルは咄嗟に、ステラの身体を突き飛ばした。

発砲音——と、衝撃!

押しつけられたステラの目の前で、ニコルの身体を二発の銃弾が貫いた。

「——ニコル!?!」

気を抜いていたらしいステラの表情は、それを認めたきり、小鳥のようであった表情から一転した。山猫のように猛々しい形相となり、そして激情に支配されるまま稲妻のように敵に銃を翳し、撃つて来た兵士を射斃す。

「う、ぐっ……!」

「ニコル、ニコル……!?!」

周囲を一瞥したあと、ステラは周囲に別の敵の追手がいないことをすぐに確認した。束の間の安全を確かめた後、すぐにニコルの許へ駆け戻る。

——被弾箇所は、右の脇腹。そして……左肩だ。

灼け付くような激痛がニコルを襲い、負傷した彼はその場に倒れ込んでいた。そんな彼をステラは半ば引きずるような形で遮蔽の影に移動させる。ひとまずは、敵の視界をやり過ごせる場所まで移動させたのだ。

——でも、いつまでもじつとなんてしてられない……！

物陰とはいえ、所詮は通路だ。安全な場所ではない以上、同じ所に停頓してはいずれ敵兵に発見され、包囲される。そもそもアスランだっているのだ——彼の追撃から本気で逃れようと思うなら、ニコルをここではない、もつと安全な場所へ——そこでまで考え、ステラは己の浅慮を呪う。敵の要塞ヤキン・ドゥーエの中枢部まで侵入しておいて、いったい、どこに安全な場所があるというのか？

「だめだめだめ、立って！ 動かなきゃやられちゃうー！」

だから彼女は、みずからの身代わりとなってくれた少年の傷を労わるのではなく、むしろ叱つても奮い立たせようとした。そうするしか、他にしている余裕がなかったのだ。

「だ、だめだ……！ 僕は……っ、ここまでみたいです……！」

ニコルの心は、気力は、このとき既に折れていた。生身に受けた銃撃は、少年の身体を二箇所として食い破るだけでなく、精神までも撃ち砕いたらしい。

——でも兵士なら、それなりの修練を受けたはずじゃ……！

ステラはそう訴えんばかりの泣き顔を浮かべる。しかし、この場にあつては見当違いな信頼だった。むしろ彼は、兵士として状況判断が早かつたとも云えるのだから。

被弾箇所を思えば、それは決して致命傷ではない。早急に手当てが必要なことには変

わりないが、しかし、そんなことをしている余裕はない。だからこそ、ニコルは次のように言い切った。

「僕は失敗した——」

「——！」

簡潔的に述べられたその言葉が、何を意味しているのか、ステラもまたよく知っていた。

「でも、貴方は……！」

「いつ、いやだ……！」

「貴方は！ まだ……終わってない……！」

目指して来た司令部は、既に目と鼻の先にあつた。血を流し、血の気の失せた青色の顔で、それでもニコルはステラを見上げ、懸命にして云いつける。

「僕に構わず、貴方は先を急ぐんだ……！ 司令室は——あなたのお父パトリック・ザラさんは、もう、すぐそこにいるんだから……っ！」

見上げた先のステラは、大きな眸に目に大粒の涙を溜めていた。

心外そうに、顔をふるふると横に振るばかりだ。

「でも——でも……っ！」

「いいから行くんだ！ それが、貴方の任務でしょう!？」

柄にもなくニコルが怒鳴ったのは、そうする必要があると判断したからだろう。

——この戦争を、やめさせるんだ……！

束の間の沈黙が流れる。

ニコルが口内に叫んだ祈りが、通じるかのように、やがてステラが、意を決したように立ち上がった。バイザー越しには、彼女は涙を拭うことも出来ないだろうが、ステラはまたも、顔を横に振った。

しかし、それは拒絶を意味するものではない——目に貯まった水滴を振り払い、決意を固めるための宣誓だ。

彼女は負傷し、遮蔽物に倒れかけたニコルを見下ろし、云う。

「——後でかならず、助けに来る！」

掛けられたのは、力強い言葉。

ニコルは全身から響いて来る痛みを押して、微かに笑った。

「ステラ、まだニコルのピアノ、聴いてないから……！」

云うと、彼女はその場にニコルを置いて、司令部まで駆け抜けて行った。

——桃色のパイロット・スーツが、遠ざかっていく……。

たくましいお嬢さんだと思って、フツとニコルは気弱に笑った。ただひとり敵陣の真ん中に、その孤立した身を置きながら——。

それから暫くして、ニコルの朦朧とした視界に、赤いパイロットスーツの人物が映った。銃撃戦の影響で、既に廊下の電灯は落ちているが、うつすらと差し込む光に照らされただけでも、その姿はニコルの目にははつきりと映っていた。そいつは向こうの廊下から駆け寄るように、みるみる大きくなってゆく。

やがて、ニコルの目の前で立ち止まった。

——アスランだ。

顔を上げると、やはりそこには黒い髪——端正な顔立ち——見慣れた同僚の、中性的な顔立ちがあった。

「撃たれたのか」

ニコルが負傷した箇所を、発見したのだろう——

「——死ぬのか」

アスランの無機質な声が、頭上から降りかかる。

「どうでしょう……。でも、ここで倒れても、悔いはないですね……」

「同情はしないな。当然の報いだと思うべきだ、ニコル——」

久しく……。いや懐かしく思えるほどの、アスランと会話を交わした瞬間だった。

——あなたは、変わらないな……。

ニコルは咄嗟に、そんなことを思った。すると、ガチャリ、とヘルメットに音がして、アスランが拳銃をこちらに向けているのを認めた。

「死ぬ前に答えるんだ、なぜこんな真似をした？ 元はザフトとして戦っていたきみが、なぜ今は、おれ達の邪魔をする——!？」

ニコルは、顔を上げて答えた。

額に銃口を突きつけられていながら、その表情には、怯えがない。

「アスランは知っているんですか。あなたの名前——『アスラン』という名に込められた、言葉の意味を」

「なに……？」

「あなたに次いで生を受けたステラさん——彼女の名にも意味があつて、願いを込められて名付けられたということを」

アスランは、ニコルが何を云っているのかが理解できなかつた。

——名前？

そんなこと、考えたこともない。自分はザフトのアスラン・ザラであり、それ以上でもそれ以下でもないのだ……いや、待てよ。

「両親がくれた名だ、恩義でもある。しかし、その父上に逆らっているステラに、大義が

あるとは思えないが」

ザラの名を継ぐパトリックの息子と娘——

であるなら、自分や彼女が、父のために戦うのは当然のことではないか？

ニコルは、弱々しく云った。

「あの娘は、あなた達を裏切ったんじゃないよ。あなた達が間違った方向に進まないよう——支えようと思って、頑張っているだけだ」

「この世界を席卷できるのは、父上だけだ！ おれたちのようなコーディネイターが主導する世界——それだけの“力”も、現に持つていらつしやる……！」

創世の“ジエネシス”はまさに、その理想を実現させる結実だ。

「それを間違っていると言うのか、きみは……!？」

「武力で脅して、ナチュラルを黙らせることが正義ですか。彼等だって、同じ人間でしよ
うに……!？」

「なにッ……」

「あなたは“太陽”なんだ！ 分け隔てなく世界を照らす、光のはずなんだ！」

「ニコル、いったい何を云ってるんだ……!？」

前に太平洋上で、輸送機が墜落したとき——ステラは云っていた。

——“暁”はね……『アスラン』って意味を持つてるんだって。

混沌とした闇の世界に、大いなる光が昇る。夜を照らす太陽は、世界を導く光。

そんな祈りを込めて、パトリック・ザラはアスランに夜明けの名を与えたのだと。

「あなたがやるべきことは、ナチュラルを虐げることじゃないはず。盲目的になつてゐるのは、あなたの方だ！」

しかし、では、どうしろと云うのだ？ ニコルの言葉を受け、アスランは懷疑する。

——ナチュラルなんて、妹を苦しめ、母を殺した蛮族ではないか……。

むしろ、それを『人間』と呼ぶ方がどうかしている。連中は知性的にも劣悪で、聡明なコーディネイターと比較するまでもない野蛮人ではないか……！

ニコルは、その認識が間違つてゐると指摘する。

「しかし、おれの知つてゐるナチュラルに、まともなヤツなどひとりもない！」

「あなたにナチュラルの友人ともだちなんていないでしょ！」

「うッ……!?!」

「よく知りもしないまま、ただ一方的に相手を傷つける——それはあなたから大切なお母様を取り上げた連中と、まるで同じことをしてゐるんだって、どうして分からないんですか……!?!」

アスランの表情に、またも苦渋の色が浮かんだ。

その一言が、決定打だったらしい。アスランはそれきり、反論できる言葉を失つてし

まった。

その様子を受けて、かつてのアスランの姿見出したのか、ニコルはおもむろに言葉を続けた。

「あの娘はそれを知っているから、お父さんに会いに行つたんだ……！　今から追いかけて、あなたは彼女を、また撃ちに行きますか……!?!」

「ニコル……ッ！」

「仕方のないことだつてぜんぶ諦めて、彼女が『守ろう』としているもの、すべて取り上げるんですか！」

たじろぐアスランからは、どこか、ひどく頼りない印象を受ける。

そう、その姿はニコルもよく知っている。常にどこか沈鬱な表情を湛え、不誠実を許すことのできない不器用な部分——初めて士官学校で彼と出会ったときのそれと、まったく同じだったからだ。

「お……おれはっ……!?!」

——間違いなく、このときのアスランは迷っていた。

しかし、それも束の間、遠くからダンダンと云う忙しない足音が響き出す。

!?!

廊下の向こう側から、武装したザフト兵が跋渉して来ていた。

緑服の警備兵だ。彼らは赤服を着たアスランの存在に気付き、徐にこちらまで駆け寄つて来る。

「アスラン・ザラ、何故ここに!?!」という第一声にに対し、アスランは答えた。

「……。負傷者だ!」

そう云つて、ニコルを指差したアスラン。彼がそれまで握っていたはずの拳銃は、既にホルスターの中に隠されていた。

——えっ……!?!

ニコルは、ただ唾然とした。だが緑服の兵士達は、アスランの指示を受けると、すぐに救急キットから医療品を取り出し、ニコルの前に膝を折つて座り込んだ。

いまいち事態が呑み込めないニコルであつたが、一拍遅れて、すべてに納得する。

なるほど、元からザフトの赤いパイロット・スーツを着用しているニコルは、傍から見れば、同じ赤服であるアスランの相棒——すなわち、ザフト兵でしかない。情報が混乱している中で、このスーツは、絶好の隠れ蓑として機能していたのだ。

それはニコルはまったく意識していなかつた点である。にも関わらず、アスランは気付いていたらしい。こういう抜け目のないところが、最近の彼らしいところである。

しかし、それにしつて、

——助けて、くれるなんて……。

呆然とするニコルを尻目に、彼は云う。

「手当てを頼む。おれは、引き続き侵入者を追う……」

その声は、聴くからに元気がなかった。

もつとも、緑服の兵士は、疑うことなく「おうよ」とだけ答えたが。念を押すようにして、ニコルが問う。

「アスラン、どうするつもりで……!」

「……理解はできても、納得できないこともある。——おれにだって」

冷たく踵を返し、続ける。

「でも、確かに。話してみなきや、分からないこともある——」

ステラが向かった先は、要塞の司令室——パトリック・ザラの控える場所だ。

父と娘が対話するつもりであるのなら、兄がそこに同席することもまた、ひとつの義務ではなからうか? そんな使命感に突き動かされ、アスランはその場を後にした。

負傷したニコルは、なおも緑服のザフト兵達に治療されている。

(あのアスラン、昔みたいいな表情をしてた……)

——今の彼なら、きつと『大丈夫』だ。

ニコルは不思議と、そう思った。

「けどよ、なんかおかしいな？」

ニコルの怪我を手当てしながら、ザフト兵のひとりが、呑気な口調でそう云った。相方のもうひとりが、怪訝そうに尋ねる。

「なにがだよ？」

「ほら、報告じゃあ『侵入者は二名ふたりいる』って話だったろ？」

ニコルはその悠長な会話を聞いて、ビクリと身体を強張らせた。ザフト兵達は、手よりもむしろ口の方がよく動かしていたのだが、どちらかと云えば、早く手を動かして欲しいと切に願うニコルである。

——もし、ここでバレたら……？

そう思うと、逃げ出す必要だつてあるのだ。

そんな恐怖がニコルの身体を硬直させるが、相方のザフト兵の方は、軽薄そうに返した。

「なに云つてんだよ、その通りじゃねーか」

「そうなのか？」

なにか、変じゃないか？

という男の懐疑に、ニコルは心拍数を加速させるばかりだ。しかし、相方は事務的に、

淡々と返答した。

「侵入者は薄紅色のパイロット・スーツを着ている。地球連合製のヤツだ！」
ステラのことだろうと、ニコルは推理する。

だが男は、彼が予期もしなかったことを、あつけらかなとして続けた。

「——そいつが二人いるんだよ！」

その瞬間、時が止まった。ニコルが凝然として、その言葉に凍り付く。

——えっ……ふたり!?

反射的——ほとんど反射的に、彼は声を荒げていた。

「待ってください!?! その話——」

要塞の内部に侵入したのは、自分と、そしてステラの二人だ——間違いない!

しかし、彼らの話している『侵入者』の片割れは、明らかに自分のことを形容していない。ザフトのパイロット・スーツを着用した侵入者について、彼らはまるで言及していないのだ。

——ボクは、数えられていない……?!

——ならいつたい、彼らは誰の話をしているんだ……!?

指揮系統が麻痺し、基地内での情報共有が遅れている証拠だ。思わず、ニコルはガバツと身を乗り出した。

そんな彼に真っ直ぐに飛んで来たのは、「おいこら、怪我人が動くな！」という、温かな叱責の一言だった。

『シャウト・トゥ・ザ・ワールド』A

戦況は、ザフト軍の優勢へと傾きつつある。

地球軍は“ドミニオン”や“ドゥーリットル”と云った旗艦を失い、全軍の指揮権を握っていたムルタ・アズラエル氏の戦死も、情報系統が瓦解した今は伝達されることはない。

客観的に見れば、地球軍は撤退すべきであった。エルビス作戦における当来の目標である「核攻撃隊による“プラント”総攻撃」が頓挫した時点で、彼らはそれ以外の選択肢を選んではならなかった。

この判断をし損ねた時点で、余計な被害が増え、戦力は疲弊していくばかり。だが、撤退を指示する者もないから、彼らは最終的な目標も——そのために何をすべきなのかも——よく分からないまま、取っ散らかってザフト軍を迎撃することしか出来ないでいた。

そしてこれは、大西洋連邦に所属する地球軍艦の艦橋で交わされた会話である。

「——『核攻撃隊が全滅した』と連絡が入ったら、今度はアズラエル氏との交信まで途絶した!」

先刻から、艦橋には救援を求める通信が引つ切り無しにかかって来ている。

艦長の男は焦りのあまり、ぐしやり、と粗野な仕草で戦闘帽を脱ぎ捨てる。反対の手は、さつきから喧しいアームレストと一体型の通信器を塗り取っている。

「さつきから云ってるでしょ! ちよい前から『ドミニオン』がどこにも見当たらないんだよ——『ドミニオン』が!」

通信機からはへだれか、誰か救援を——!と、悲鳴ばかりが響いている。

「我が軍の兵士どもはみな取っ散らかって、編隊を整えることもままならない! それで調子づいたザフトがそこら中を跋扈してるんだ! 戦況はズタズタだ!」

「——! ……命令を——ツ!」

「ええツ!? 聞こえない!」

「……………ツ!」

「『プリンストン』のシグナルロスト! 撃沈を確認しました!」

「まったく!」

受話器を叩きつけ、回線を閉ざす。

艦橋窓からは、次々と撃沈させられてゆく艦影が映るばかりだ。対してザフト軍艦隊

——ナスカ級などは、続々とこちらに押し寄せて来ているらしい。

——前線が作れない……！

地球軍にとつて敵地攻略のために必要不可欠なライン——「ジエネシス」および「ヤキン・ドゥーエ」へ攻め込むための『足場』——が、一向に作れない。戦況は壊滅的で、勝算は絶望的と云つていい。そんなとき、オペレータが声を挙げた。

「ユーラシア所属艦、および第十七艦隊が戦線を離脱していきます！」

ぎよつとして向けた視線の先に、たしかに、後退を始めている艦隊が映る。

——目立った損傷を受けている……わけでもない。

管制官のひとり、失調したように云い咎める。

「ユーラシアのヤツら……！ 混乱に乗じて、ザフトを大西洋連邦おれたちに押し付ける気か！」

「分かるな……！ これ以上国力を削ぎたくないんだ、経済的な都合でさ！」

「勝てるかどうかとも怪しいのに、もう戦後の心配かよ！」

副長が問う。

「地球連合軍と云うのは、こういうときこそ団結し合うものじゃないんですか!？」

「団結？ 馬鹿な、そんなもの今さら出来るはずあるまい……！」

思うに、彼らが帰属する「地球連合軍」という組織名称は、欺瞞である。

たしかにユーラシア連邦は、連合軍加盟国の中でも、とりわけ大きな発言力を持った

共同体であつた。国家戦力に限つた話、それこそ大西洋連邦と肩を並べたほどだ。ここで過去形を用いているのには理由があつて、そんなユーラシア連邦であるが、ある折を持つて大きな失墜を経験している。

アラスカ——“J O S H — A” 防衛戦だ。

大西洋連邦が仕組んだ“サイクロプス”が原因で、ユーラシア連邦は国家戦力の七割以上を滅殺されることになり、当然それ以降は窮乏に喘ぐ羽目になつた。白々しい大西洋連邦はかの悲劇を「ザフト側の破壊兵器使用によるもの」と対外的に報じたが、愚直に信じたのは買収されたマスメディアと、これに踊らされた世論くらしいものでしかない。要するにユーラシア連邦は、盟友であつたはずの大西洋連邦に人柱にされたばかりか、国力の窮乏をいいことに従属まで強いられたのだ。

このような関係を、どこをどう見れば“友”と呼べるのか？ どうして結束し、団結などできようか？ その事実を踏まえれば、こうして腹癒せのように戦線を放棄し、ユーラシア連邦が一切の責任を大西洋連邦に丸投げしても不思議ではないのだ。

「なにが地球連合軍だ！ 一枚岩になれないのは、連合軍だからじゃないか！」

戦争を通し、組織の中には内輪揉めの醜悪な部分だけが露骨に表面化して行つたから、こうした最終局面において、都合よく統率など取れるはずもないのである。

（こゝも混戦が続けば、誰だつて逃げたくもなる。……組織まで瓦解している！）

艦長の男は口内に唾棄すると、クルー達に命じた。

「もういい！ 我々も撤退するぞ！」

その命令は、統率力の無さが招いた弊害である。

艦橋の中が、どつとする。艦長は操舵士に回頭を命じ、クルー全員に撤退を促した。

「こんな貧乏くじを、いつまでも……！」

「ですが、それでは『ジエネシス』を排除できません！ 地球が根本的に脅かされたままです！」

「云いたいことは分かるがな？ 核もない、指揮官もない、拳銃の果てには前線すら作れない——こんな状況でどうして勝てるか!？」

半ば逆切れのような形で痲癩を起こす艦長だが、云っていることは間違っていない。

用兵戦術を噛んでいなくとも、明らかに勝算がないことは判るだろうが！ 男はそう云わんばかりの形相だ。もはや奇跡でも起きない限り——いや、戦場では神頼みを行った者から先に死ぬ。であるなら、現実的に戦場を見て、撤退^そを遂行するしかないのだ。

だからこそ彼らは、こつそりと戦線を離脱した。

その独断的な行動が、さらに地球軍の戦列に穴を空け、艦隊の破滅を招くことになるのだが、このときの彼らは知る由もなかった。

やがて脆くなった戦列を突破したザフト機——『ゲイツ』の一機が、後退する彼らの

艦影を見つめる。艦橋に向けてライフルが放たれ、その艦は進退もままならず、戦場に置き去りにして来た者達と同じ末路を辿った。

“プロヴィデンス”を討ち取った“アークエンジェル”は、束の間の安堵と休息の中にいた。

また、口惜しくも地球軍旗艦である“ドミニオン”が撃沈したことで、地球軍全体の指揮系統が麻痺し、今や敵前逃亡を行う艦も続出している。大義を優先し“アークエンジェル”に挑むよりは、自分達の命を優先したいという判断だろう。

こうして“アークエンジェル”は、まったく予期していない——そしてそれ以上に嬉しいことはない——誰とも戦わずにいられる時間を持つことができていた。

艦蹄部、左舷発進口が開き、

“ゼロ”

“フリーダム”

“ストライク”の順で、モビルスーツが帰投する。中破した“フリーダム”の右脇には“ルージユ”の残骸コクレットが抱えられ、パイロットはいずれもが生還を果たしていた。

そんな中、トールが操る「ストライク」が、ドッグへと着艦した。両腕には、一隻の救命艇を抱えられている。

「——「ドミニオン」からの脱出艇、回収しました！」

トールの声だ。拡声器を通じ、格納庫一帯に響き渡る。

既に「フリーダム」から降りていたキラは、カガリと共に、そちらに足を向けた。マードックが返す。

「ラミアス艦長からの指示かい！」

「そうです！」

「ようしわかった！ 降ろしていいぞーっ」

と、そのとき整備士のひとりが慌ただしそうに格納庫に駆け戻って来た。

——両手には、ライフルを握っている……？

そう思えば、そのライフルの片方を、近隣にいたキラに押し付けて来た。

「えっ？」

キラの頭に疑問符が浮かぶ。

「念のためだ、持っとけ！」

「でも、僕に銃なんて……」

「構えてりゃいいの！」

物凄い剣幕に、思わず目を瞑ってしまったキラである。

——しかし、なるほど。

いくら救命艇とは云え、中に危険人物が潜んでいないとは限らない。警戒するに越したことはないし、ましてや敵艦ドミニオンからの脱出艇となれば、この艦アークエンジェルに恨みを持つ者も少なからずいるだろう。

だからこそ、武装兵が同席することに意味がある。

片膝をついた「ストライク」が、脱出艇を横たわらせた。船艇のハッチが開き、キラは格好だけ銃を構えて、出口を狙った。安全弁セーフティだけは外していた。

すると、まず最初に出て来たのは、両手を挙げ、投降サインを示す中年の男性だった。

「ハリーさん!？」

キラは、思わず声を上げた。最初に出て来たのは、元「アークエンジェル」の軍医だったのだ。

それを見たマードックが——いや、誰もが驚いた。それを見るや「銃を降ろしていい」と指示が飛び、警戒が色は薄まってゆく。信頼できる男だからだ。

「まさか、きみたちが回収してくれるなんて。……ありがとう、我々にはもう、抗戦の意志はない」

「ハリーさん、よく……!？」

「ああ、随分と懐かしい顔が」

救命艇の中から、次々と投降兵達が下ろされてゆく。するとそこへ、ムウ・ラ・フラガが顔を覗かせた。

「——『ドミニオン』に配属されていたので？」

その男の顔を見て、ハリーがぎよつと目を開く。

「フラガ少佐？ なぜ『アークエンジェル』に？ カリフォルニアへ異動になったのは……」

「……あー」

懐かしい頃の話だな、とムウは思った。

「こつちにも、色々とありましてね」

「色々か……そうですね、わたしはロドニアまで飛ばされました。それからは御覧のとおり——『ドミニオン』への転属だ」

「ロドニアって、まさか——」

「散々な研究を、そこで。拒否権はない」

「……。察します」

ムウは、気を利かせていった。

「積もる話もありますが、それは追々に。ひとまず収容者は食堂に集めます。マーカッ

ト医官も、今はゆっくり休んだらどうですかね」

「ありがとう。そうさせてもらえると、みな助かるよ」

軽く会釈を交わす二人であるが、脇から、マードックが入って来た。

「お取込み中、失礼しますぜーっ」

突然の割り込みに、「ん？」とムウが怪訝な顔を作った、次の瞬間――

ドツ！ と複数の整備士達が現場に駆け付け、彼らは一斉にムウを取り囲んだ。その内のひとりが、ムウを背中から羽交い絞めした。ぎよつとするムウであるが、屈強な力に縛られ、抜け出すことができない。

「え？ ちよちよちよ、何すんのっ！」

「ラミアス艦長からですね――『フラガ少佐が返って来たら、医務室に縛り付けておけ！』と云われたらしいんで、命令に従っているまでです」

「なんでだよ!？」

「ゆっくり休むのは少佐だって同じってことですよ。怪我人でしょ？」

それを聞いたハリーの目の色が変わる――「怪我人？ そうなのか？」と問い、「そうですねよ!」とマードックが云った。

ムウは、そんなことしてる場合じゃない、と云わんばかりに屁理屈を云った。

「いまこの艦に、船医なんていないでしょーが。放せつて!」

「ベッドに縛り付けておくだけでも、治療にはなりませんぜ」

「粗療治つて云わない？　そういうの……」

「船医ならいるじゃないか。目の前に」

「……えっ？」

「この艦の医務室、もともと誰の担当だったと思ってるんだ。……もちろん勝手は出来ないから、ラミアス艦長からの許可が下りれば、の話だが」

そう云えば、マードックは簡潔に「下りるでしょうなア」とぼやいた。

理由は訊かなかった。

「——なら、医務室に連行だ」

「うべっ」

屈強な整備士にヘッドロックされ、ムウが医務室まで連れ去られてゆく。

それとは別の船員のひとり、監視、兼、付き添いという形で、ハリー・ルイ・マーカット医師に同行した。

それからややあつて、"アークエンジェル"艦内に放送が響き渡る。

これは、マリユールからの命令である。

〈本艦はこれより、"エターナル" および "クサナギ" との合流に向かいます〉
急ピッチで補修作業を終えた艦が、"ジエネシス" に向かった者達の許へ駆けつけようとするのだ。

〈激しい戦闘の直後ではあるけれど、今なお戦っている仲間を見捨てるわけにはいきません！ 各科員とも疲れていると思うが、鋭気を持って持ち場に戻れ——っ！〉

厳粛な指令を受け、全乗員が弾かれたように動き出す。

そんな中で、しかし、キラは歯噛みしていた。

——ラクスやステラは、まだ向こう側で戦ってるんだ……！

それなのに——

そんな感情、悔恨がキラを苛む。

たった今マリューは「持ち場に戻れ」と云った、しかし今のキラには、その「持ち場」がないのだ。

持ち場であるはずの"フリーダム" は中破——いや、これを望む角度次第では大破——としており、とても再出撃ができるような状態にはない。武装の大半は"プロヴィデンス" との戦闘で破壊され、四肢という四肢も、いまや右腕しか残されていない。両脚は膝上で碎け散ってるから、格納庫に乗り上げるのも、殆ど座礁したような形であった。

——モビルスーツがなければ、ぼくは、なんて無力なんだ……！

さつき持たされたライフルの件も含め、結局キラ・ヤマトという少年は、モビルスーツがなければ一般人でしかない。

何もできない菌痒さに、迷い、焦るキラ。

そんな彼の耳に、とある声が響いた。

「キラー！」

トール・ケーニヒである。

“ストライク”から降りて来たトールが、脇から声を掛けて来てくれた。

その顔には何かを見通すような——それでいて、柔らかな表情が浮かんでいる。

「悩んでばっかいないで、相談しろって！ おまえのことだから……出て行きたいんだろ？」

どこへ——

という、補語をトールは口にしなかった。それは、彼なりの気遣いである。

キラは俯きがちに返す。

「……でも、ぼくにはもう、モビルスーツが」

「そんなことだろうと思つたよ。だからさ——“ストライク”、貸してやるよ！」

晴れ晴れしいほかに、トールは、きつぱりとそう云つた。

キラの目が、見開かれる。

「え……!?!」

「正直、おれが『ゴイツ』で出て行っても、二度も生き残る自信なんてないし」

だからと云って、トールは、キラに『ストライク』を押し付けているのではない。

あくまでも、親友の機微を汲み取った、その結果である。

「機体の使い勝手は……まあ違うところもあるだろうけど——心配ないよな? だって

元はおまえの搭乗機だし」

トールはいつもながら飄々として、そして、どこか緊張の和らぐような口調で続けた。

「あつ、でも型落ちだからって文句云うなよ? 『フリーダム』をお釈迦にしたのは、お

まえの責任でもあるんだからな!」

「トール、ありがとう……!」

このときのキラは、百万の味方を得たような心持ちでいた。

だからこそ、ふたりは親友なのである。

「でも、本当に気をつける。質を落とすっていうのは、思ってるより簡単じゃないぜ」

たしかに『フリーダム』を手にしたとき、キラは、その機体の総出力に舌を巻いた。

単純計算で云って、それまで乗っていた『ストライク』の四倍以上の性能があったからだ。

——そんな当時と、今は真逆の状況にある。

キラは従来の「フリーダム」より、遥かに性能の低いモビルスーツに乘ろうとしているわけだ。「ストライク」より高性能なザフト機は、次々と戦場に台頭している——少しでも過信や傲慢があれば、それが一瞬でキラの命を奪うだろう。

念を押すトールの叱咤に、キラは声を張って答えた。

「——なんとかする……！」

シートに着座したキラは、凄まじい速度でキーボードを叩き始めた。トールのため——語弊を恐れずに云えば、ナチュラルのために簡易的に設定されていたOSを、独^{キラ}自用に書き換え始める。

——初めて「ストライク」に乗ったときも、こうだった……！

奇妙な郷愁感が、キラを押し包む。トールは改めて、キラのその指捌きに惚れ惚れとし、畏敬の表情を見せた。脇からは、事態を把握したマードックが顔を覗かせる。

「モビルスーツが出払っちゃ「アークエンジェル」だつて持たねえ！ 坊主^{ぼいず}には露払い——というか、艦を牽引してもらう形になるが、それでもいいか!?」

「わかりました！ ——みんなで「ジェネシス」へ！」

マードックが、サインを作った。

その意を受けたトールが、ゲートを開放していく。深淵に包まれた星の海が、視界に大映しになる。キラは改めて、どこか懐かしい「ストライク」のシートに身を埋めた。

へそいつあバッテリー駆動だ！ それだけは忘れんな！

へ——キラ機、 “ストライク” 発進、どうぞー！

ミリアリアからの号令が呼ぶ。

赤い翼を広げた “エル・ストライク” が、矢のように飛び立つ——

「キラ・ヤマト—— “ストライク” 行きますー！」

彼方には “ヤキン・ドゥーエ” と “ジエネシス” という、ザフトの二大拠点映る。

それらがまだ小さく見えるのは、距離が遠いからだ——しかし、その周辺でははつきりと、ビームや爆発の光芒が明滅を繰り返している。それだけは、はつきりと見える。

——ステラたちは、無事なのか……!?

出撃後の “ストライク” は “アークエンジェル” を牽引する。

その中でキラは、今もなお戦い続ける、仲間達の安全を祈願した。

“ヤキン・ドゥーエ” の司令室では、着々と “ジエネシス” ミラーブロックの換装作業が進められている。

パトリックは司令席に坐し、階下に据える管制官たちを厳然と怒鳴りつけていた。

「急げ、もうじきすべてが終わるのだぞー！」

そんなパトリックの後方には、何やら赤い水滴が浮遊し、無重力に漂っている。

それは、先ほど射殺されたレイ・ユウキの残滓——鮮血である。凶弾を受けた遺体は既に、管制室から放り出されたものの、飛び散った体液までは回収できず、こうして宙を漂っているのだ。衛生的に非常に問題がある光景だが、パトリックは構おうとすらしない。

パトリックの血に飢えた目は、もはや前方——「ジエネシス」の照準シミュレータしか映してないのだから。

〈照準入力を開始します。目標、北米大陸東岸地区——大西洋連邦首都、ワシントン〉
「射線上の全部隊を下がらせる。軍本部のエザリアに通達——！」

——これで終わりだ、ナチュラルども……！

パトリックが溜飲を下げるそのとき、別の方角から、別の報告が上がる。

〈——「エターナル」接近！〉

「!? ……小娘風情が……！」

〈ラクスさま……〉

——さま？

パトリックは、テロリストに対し尊称を用いたその管制官を、愚かに思った。その管制官は、戦後あとで首を飛ばそう——そんなことを考えながらも、彼は苛立ちを露わに怒鳴

る。

「あんな小娘やナチュラルどもの艦、さっさと叩き落さんか……！」

パトリックは云つてから、いや……と思う。

「だがもう遅い。こちらの準備も完了する…… “ジエネシス” を止めることなど不可能だ！」

管制官たちが、作業を完遂させようと最終シークエンスに突入していく。

ミラーブロックの交換作業が終わり、照準がワシントンにポイントされる。そこに住む何億の命に何の懸念も持たず、みずからの勝利に固執した男は、厳然と命じた。

「みな、しかと見届けよ！ この一撃により、大西洋連邦は滅び——最大の指導者を失つたナチュラルどもが、我らの足元に屈服する時代がやって来る！」

ラウ・ル・クルーゼが生きていれば、間違ひなく嘲弄を漏らしたであろう宣言——

——そんなことはさせぬよ、と。彼ならば、そう云つただろうか。

草葉の陰で嘲笑する男の掌の上で、パトリックは最後まで何も知らず、何も疑わず、己の勝利に酔いながら続けるのだ——第三射目そのボタンを押したとき、みずからまで吹き飛ぶことに気付かずに。

「コーディネイターが地球圏を支配する時代が訪れる！ 創世の光は我らと共にある——

——変革に怯え、後れを取るな！」

発射装置が、押される――

そのときだった。

「――まってっ!!」

透き通って、儂げな――ひどく少女めいた“声”が、司令部に木霊した。

――若い、女……!?!?

大勢の管制官達も、その声を聴いた。

それは、少女であるにしては、尋常な叫び方ではなかった。……だからだろうか？

人員と音声が混濁する管制室の中でも、明瞭に聴き取ることができた。

もうひとつ理由がある。それは、オペレータ特有の無機質で事務的な発声ではなかつ

た。内から湧き出した感情にを吐き出し、腹の底から紡がれた絶叫だった。

だから、パトリックにも聞こえたし、彼を猜疑させていた。……いや、それだけでは

なかったのかも知れない。パトリックはその声を聴き、明らかに戸惑っていた。

それは、彼の記憶にもまだ新しい少女の“声”であつたから――

「侵入者だ!」

誰かが叫び、これを皮きりに、司令部全体が次のアクションを起こす。ある者は立ち

上がり、ある者は逃げ出し、ある者は銃を構え出す――

いずれにせよ、その時点を以て、すべての発射^{シエック}作業が中断されていた。管制官達はみ

ずからの座席と持ち場を離れた。作業よりも身を護ることを優先した——それは人間として、当たり前前の対応であつたが。

「なんだ………っ!？」

パトリックも、立ち上がつていた。その姿勢から、侵入者を見下ろす。その者のパイザーには硬質な光が反射して、顔までは見えなかつたが。

——桃色のパイロット・スーツを着ている？ 地球連合軍の兵士か？

それに………どういふことだろう？ その傍らには、赤いパイロット・スーツを着たザフト兵まで随伴している。

(あれでは、まるでザフト兵が案内したようではないか……い！)

いくつかの憶測を並べていると、侵入者が動きを見せた。重たげなメットを脱いで、その素顔を晒したのである。気密されたメットの中から、ゆるやかな金髪がふわりと浮かび——うす暗い室内で、その金色は、嫌でも際立つて見えた。

パトリックが、ハッとして息を呑む。

そんな彼に関わらず、武装兵達はどつとして銃を構えた。それは、兵士として原則的な行動だつた。

「撃つな！」

だから、パトリックは武装兵達にそう叫んだ。

が、彼はなぜ、自分がそのような命令を出したのか、よく理解できていなかった。

「——そつちの者は……!?!」

なし崩しに次の指示を出すと、敵の傍らにいる随伴員もメットを脱いだ。

ザフト製のメットの下から、黒い髪と、端正な顔立ちが現れる。そこから現れたのは、パトリックが何よりも大事に重宝している息子——アスラン・ザラだった。

そうして並んでいる、ふたりの姿が識別できると、

(……よくも、来られたものだ……!)

賞賛もある——が、どちらかと云えば、それは皮肉である。

パトリックが見据える階下には、ステラとアスランが——

彼にとって、血を分けて生んだふたりの家族が立っていた。

話は、数分前まで遡る——

後に置いて来たニコルから、未来を託されたような形であったアスランであるが、ステラを追いかける中で、やはり自分の中に疑念があった。

(ニコルには、ああ云ったが……!)

——やはり大西洋連邦を討つことでしか、救われない未来もあるのではないか？

アスランの心の中には、そういった疑念が根強くある。

そもそも話のはじめ、パトリック・ザラを代表とする現「プラント」政権は、目的こそ「『ジエネシス』を嵩に地球圏を掌握すること」であるものの、地球の経済が立ち行かなくなるほどに「それ」を乱用した無差別攻撃行うつもりはない。

なぜなら、現在「プラント」は食糧問題など経済的な部分では地球を依存している傾向にある。食糧源が絶たれることは「プラント」としても絶対に避けなければならず、地球がその環境を維持できないほどに汚染されてしまえば、「プラント」までが窮地に立たされることになる。

その意味では、まだ「プラント」が独立可能になるまで、環境が整備されていないのである。

この理解を行えば、かつて放たれた「ナチュラルを根絶すれば世界は平和になる」というパトリック・ザラの発言は、微妙である。ナチュラルを全滅したのであれば、地球を取り潰せばいい——が、そこまでやってしまうと「プラント」まで道連れになる。すべてのナチュラルを根絶させることは、時代的に不可能なのである。

——それでも、旧弊に取り憑かれた大西洋連邦の野蛮人どもは、撃ち滅ぼす道理がある……！

時代が成熟していないのなら、新たな時代に進めて行かなければならない。そうでは

ないか？　なのに、世界が変わってしまふことを頑なに拒絶する者達がいる。

——大西洋連邦だ。

彼らは大国の威光を嵩に地球圏を支配し、さらには宇宙に上がった「プラント」から豊富な資源を無心する、まるで節操のない連中だ。みずからの古巣と利権を守るためなら、変革を求める声の一切を黙殺し、友軍すら平気で裏切り、人間を狂気の産物へと貶める——「ユニウスセブン」を破壊し、アラスカを爆破し、若者を薬漬けにするような。

——やつらは旧弊のために、腐っていると云つていい。

そんな連中に母を殺され、妹を辱められた。アスランとしては、彼らを生かしておくわけには行かないのだ。

たしかに、平和的解決を望んでいたニコルの言い分も分からないわけではない——が、実際に平和的な解決に臨むのは、大西洋連邦を吹き飛ばしてからでも良いではないか。

「——待てつ、ステラ！」

前を行くステラを、後方から追うアスラン——

そんなアスランが呼びかけると同時に、一発の銃弾が飛んでくる。牽制だ、さすがに直撃コースではないものの、ステラが冷静さを欠いていることの証明にはなる。

——あいつは、父上と対話したい……！

結局のところ、ステラの目的はザフトの指導者との交渉なのだろう。であるなら、彼女は三隻同盟に派遣された『使者』だ——かねてより「『ジエネシス』の停止」を訴求していた三隻同盟が、直接交渉をするため「ヤキン・ドゥーエ」に送り込んだ。

——勿論、ここに至ってそれが許されるかと云うと、そうではない。

要塞内に駐屯するザフト兵を攻撃することを前提に、あるいは、攻撃せざるを得ない状況下で『使者』を送り込むことは、平和的交渉術として明らかに過失があるからだ。

(和平の使者なら槍は持たない——これは鉄則のはず！)

少なくともアスランにはそう思えるのだが、彼はステラを咎めなかった。

結局、ステラのような一介の兵士にできることは「上の命令に従う」——あるいは「戦う」ことではないのだから。

アスランは物陰に跳び込み、叫ぶ。

「——聞くんだ！」

論せば、銃撃が止む。

アスランは物陰から、相手に届くように大声で続けた。

「次の『ジエネシス』の照準はワシントン、大西洋連邦の拠点だ！　そこが吹き飛ばせば、戦争は終わる！」

可能な限り、聞き心地よい言葉で叫ぶ。

「それに……大西洋連邦が滅びることは、きみにとっても本意になるはずだ！」
「本意……!?!」

「きみを辱めた連中を、まとめて始末できるんだ！ そうなれば、きみたちが護っていたオーブも、連合の支配から脱することだってできる——」

アスランは、自分の舌がよく回っていることに、感動していた。

「——平和を考えるのは、それからだっていいじゃないか！」

大西洋連邦が滅びれば、旧来の世界のバランスが崩壊する。

そもそも三隻同盟というのは、大半がオーブからの脱国者ではなかったか？ かの国を属国として支配している大西洋連邦が滅びれば、彼らはふたたび、国家の主権を奪い戻すこともできる。

云いながら、アスランは本当にそう思った。彼らにとっても、メリットになるのである。

「きみはいま、その邪魔をしているんだ……！ きみたちのおかげで、地球を牛耳るナチュラルどもを肅正できない！」

「ワシントン撃つたら、大勢の人が死ぬ！ 戦争だからって、民間人まで虐殺していいと思うの……!?!」

そのことは、ステラが誰よりも深く理解していた。

それだけは絶対に侵してはならない、人としての掟であるはずなのだ——
「それをやったら……!」 それを、やったら……!」

ステラの脳裏に、とある「荒野」が映像として浮かび上がる。

……いや、元々は荒野などではなかった。立ち並ぶ街並みも、もともとは廃墟などではなかった。

そこは白雪に覆われた、古の都市——

たとえば、古から優れた彫刻文化を持っていて、先代より紡がれて来た伝統産物を、人々が保守しながら穏やかに暮らしていた街だった。

その真つ白な雪原が、気付いた頃には、真つ黒な焦土と化していた。その凄惨な光景を造り出したのが誰であるのか、彼女はよく……痛いほどに知っていた。

「ザフトだって、大西洋連邦と一緒にになる——!」

ステラは、血を吐くような思いで叫んだ。

——虐殺っていうのは、人が人としてやっちゃいけないことなんだ!

かつて民間人を踏み潰して回ったステラにとって、それは、もつとも人類に繰り返させてはいけない歴史上の過ち。

「——では、どうしろと云うんだ?」

ナチュラルに対する期待も希望も、全てを絶やした今のアスランには、ステラの発言

が分からない。

「『プラント』で暮らす人々には、ヤツらの核攻撃に怯えながら、それでも遅しく生きていってくれ、とても伝えろと云うのか!？」

「ちがう!」

「母上は、殺されたんだぞ!」

レノア・ザラ——彼女こそ、歴とした民間人だった。

プラントの農業博士で、キャベツを好んで栽培していた。軍組織になど一切関与せず、平和に暮らしていたのだ——そんな女性を殺したのは、大西洋連邦だ。

奴等こそが、先に禁忌を破つたのだ!

「ヤツらには報いを受けさせる! ……でなければ、死んで行つた者達が浮かばれない!」

「アスラン……!」

「目を醒ませステラ! きみだって、被害者じゃないか……ッ!」

それでも、ステラは答えた。

「そう、被害者……! でも、だから同じことを繰り返さないようにやってるんだ……!」

蹂躪された『デストロイ』——

そのコックピットが砕け散り、無数の鋼鉄片が、身体中に突き刺さった当時の感触を憶えている——劇的な痛みが走り、やがて何も感じなくなっていくた、当時の感触を。

今になって思えば、あのとき身体に突き刺さった破片のひとつひとつが、彼女自身が都市を潰して歩くうち、散々にしてかき集めた無辜の復讐と憎悪の念であつたのではないか。

「何の罪もない人達を殺したら、反感を集めるだけだ！ それでいつか、自分達が殺される！」

——涙と悲鳴が、新しい戦いの狼煙になる……！

ステラは、純粹にそう思った。

「戦争をしているときは、みんな、そういうことに気付けないで！ ……でも、だつて仕方ないよね。みんな生きるために必死なんだもの、誰だつて『死』ぬのが怖いんだもの！ ……だけどね、それでも誰かが教えてあげなきゃいけない。そういう見方ができる誰かが、みんなに教えてあげなきゃいけない——それはステラがやる！」

たとえ、人柱になつても——。

ステラはこのとき、相手と論争をしながらも、そのじつ相手を振り切ろうと確実に算段を立てていた。抜かりがないのである。進行方向に改めて視線を向けると、薄暗い廊下を突つ切つた先に、中枢へ繋がる昇降機を見つけた——ステラはハッと息を呑んだ。

——エレベーター……!!

おそらく、司令部へ繋がっているものだ。距離は目測にして……三〇メートルと云ったところか？ 彼女の脚力なら数秒で走り抜けられるだろう——が、なまじ直線距離^{コース}のため、狙撃されたら厄介だ。銃弾をやり過ぎす場所がない。

——迂回している時間なんてない……!!

だからこそ、ステラは壁に身を寄せていた姿勢から、僅かに腰を浮かせた。アスランに気取られないよう、物音や気配を消したのだ。

その消音術のせいで、アスランは彼女の挙動を察知できなかつた。

「誰もがきみのように純粋^{したたか}であると思うな！ 憎しみだつて、生きる力だ！ その者を支える力だ！」

「誰かが、やめさせなきやダメなんだ！」

その瞬間、バツ、と気配が動く感触がして、

「なにっ!？」

アスランは慌てて、物陰から飛び出した。中枢に繋がる昇降機が、彼の目にも映る。

——エレベーターへ……!!?

駆け抜ける少女に、彼は慌てて銃撃を放つ——が、捉えることができない。照準が甘いのではない、相手の脚が早いのだ、まるで疾風だ。

そうしている内に、ステラはエレベーターまで駆け抜けてしまった。間髪おかず操作盤を押し、自動ドアを閉じてゆく。アスランはこれを追いながら銃を斉射したが、悉くが、防弾扉に弾き返される。

「——ええいッ！」

銃を降ろしたアスランは、その腕まで大きく振って、全速力で廊下を駆け抜けた。

「へああッ！」

ただ走っているだけなのに、稲妻のような速さだ。そして彼は、今にも閉じようとしている扉を目掛け、殆ど飛び込むような形でダイブした。

運が良かったのか、アスランは電撃のように、籠室の中に侵入していた。

それに驚いたステラが拳銃を構え、トリガーを引く。

が、ステラの拳銃は、何の動作もしなかった。

「!? ジャムった！」

瞬時に銃身を投げ捨て、ステラはホルスターから短刀を抜き放った。尖鋭な刃を、みずからの顎先に翳す。

対するアスランは体勢を立て直したあと、拳銃を掲げ、これをステラの額に突きつける——！

「——ッ！」

「沈黙が流れ、やがて戸が閉まり——

短刀と拳銃、互いに凶器を構えた兄妹。

ふたりを乗せたエレベーターは、管制室まで上昇を始めた。

籠室の中は非常に狭く、逃げ場はない。

どちらかが動けば、どちらかが穿たれるであろう究極の局面。武器だけを見れば、銃を手にしているアスランの方が有利であった。

(しかし、これはステラの勝ちだ……！)

少なくとも、アスランはそう思った。

——ステラは、拳銃を捨てた……！

それが、理由である。

もとより——「なぜ彼女は拳銃を捨てなければならなかったのか」を考えれば、自分の置かれた条件は公平^{フェア}ではない。現在地に至るまでに幾多のザフト兵を迎撃したステラの拳銃は、いつ排莢不良^{ジャム}を引き起こしても不思議ではなかったからだ。

(おれの方が、はるかに恵まれた環境にいた。と云うのに……)

ここに至るまで、ステラは「常に複数」の敵を相手取る必要を迫られたが、アスランは「たつたひとり」を警戒するだけで良かった。迷路のような「ヤキン・ドゥーエ」を「手探りで進んだ」ステラと違い、アスランは彼女を「追いかけるだけ」で良かった。

この過程で奪われた、ふたりの体力差は大きい。つまり、ステラは集中力や精神力を比にならないほど摩耗しているはずであり——その証拠に、このとき喘ぐように息急ぎ切っていた。アスランは大して疲れていなかった。

その不公平さが、アスランを迷わせた。

肩で大きく息づいているステラを見て、アスランはトリガーを引く気になれなかった。そこまで凶々しくなれなかったのだ。

(結局おれは、こころも疲弊したステラを、互角の形勢に持ち込むことしかできなかった……っ！)

しかし、アスランが落ち込む必要はないのだ。

ステラは元より特殊部隊の出身だから、こうして互角に渡り合えただけで、アスランは充分に特別なのである。しかし、ピクトリアから散々「妹を越えた」と豪語していた身としては、やはり耐え難い結末だったらしい。

——もし、ステラが疲れていなければ。

——もし、アイツの拳銃が正常に動作していたら。

状況が違えば、いずれせよ自分はやられていたはずだ——確信めいたそういう自覚が、彼のプライドを撃砕する。物理的には勝敗は決していないが、アスランはこのとき既に、精神的に敗北者だった。

アスランはこの時点で、みずからの敗北を認めていたのだ。

「父上に会って、どうするつもりだ……？」

だからこそ、相手の真意を問う。

どのみちエレベータは管制室に向かっている、扉が開けば、そこには父パトリック・ザラの姿がある。

「もう終わりにしてもらおう。これ以上、人が死ぬことに意味なんてない」

ふたりは睨み合うだけで、動かない。

かたや額に銃口を向けられ、かたや喉元に刃を翳されている。

「もう、たくさんの人が死んだ……今だって——！ 戦いはもうザフトが勝ったようなものなのに、どうしてまだ『ジエネシス』を使う必要があるの……？ なんて、まだ殺そうとするの……？」

アスランは、沈鬱な表情で答えた。

「……『誰もがきみのようではない』——と、云つたらう」

ウイー……。

エレベーターが上昇する機械音だけが、静かに響く。

「きみと違つて、状況も判断できないナチュラル共は、自分達が敗戦したとも気付かず無秩序な抵抗を続けている——それを鎮めるためには、ヤツらの本拠地を撃ち、いよいよトドメを刺してやらなきや示しが付かない」

「方法は他にあるよ……。地球軍にはもう、戦う力が残つてないんだ。みんながみんな、わけが分からないまま戦つてる——」

——みずから育てた闇に喰われて、人は滅ぶ。

ラウはそう云つた。しかし、本当にそうなのだろうか？

ステラは、気付いたように云つた。

「エレベーターは上がっているのに、こうしている間にも、アスランはトリガーを引かないでいる。ステラを殺そうと思えば、とつくに殺せてるはずなのに——それつて、自分の中にやましい部分があるつて、考えてる証拠だよね」

凶星を突かれ、アスランは、目に見えて動揺を示した。

「そうやって悩んでいるのは、アスランがまだ、自分の正義を見つけられてないつてことだしよ……?」

みずからの正義——？　なんだと云うのだ——アスランは、懷疑した。

——正義……「ジャステイス」……?」

それは、アスランが手にした力だ。非力な彼の手足となり、ナチュラルを肅正する処刑代行人。彼の信じる正義を体现し、ナチュラルに制裁を加えてくれる、鮮血色の裁判官。

——だが、本当に“それ”が、おれの信じたかった理想なのだろうか……？

絶対正義の名の許に、いつかナチュラルを滅ぼした世界を築き上げることが？　そこに障害として立ちちはだかるなら、最愛の妹すら平気で断罪してしまうことが……？

——いや、違う……。それは父上の理想であつて、おれの理想ではない。

本当は、譲りたくなかつた部分がある。

父上にだつて、迎合したくなかつた部分もある。

——おれは、できるなら妹を……！　ステラを守つてやりたかつた……！

かつて、アスランの望みはひとつだつた。ただ父と母と、妹と——家族全員で、平和な世界に暮らすこと。

なのになら、なぜ、どうして——？　こんなにも遠い場所に、来てしまったのか

……？

「ずっと云いたかつた——アスランはずつと自分で考えることをやめて、お父さんの云うことを鵜呑みにして——」

「——原因はきみだ……!!?　大切な妹が、みつともない野蛮人どもに辱められたと知れ

ば、誰だつて鬼になる。……それが家族つてもものだ！」

「他人の目線で考えるんじゃないやなくて、自分が何をしたいのか、それを云つてよ……」

アスランは、ついに、自分の感情を吐き出した。

「おれは……おれは、どんなことがあつても、きみの家族だ……っ！ だから、できることとなら、きみの手助けをしてやりたかつた。ずつと前から、きみを守つてやりたかつたさ、キラのように——！ しかし、戦争の中で個人的な感情を吐き出すことは、考えているより簡単なことじゃない……わかるか？ それは軍人が為すべきことではないからだ！ おれにはきみを助ける義務があつて、しかし、父上のために戦わなきゃならぬ使命があつた！ なのに肝心のきみと来たら、いつの間に父上と袂たもとを分かつてさ……！ 残されたおれはどうすれば良い？ きみたちはおれに、どうしろつていうんだ！——ここまで云えば、おれが迷うのも分かるだろ!!」

長き——とても長きに渡つて封じ込めていた、みずからの本音。

移動中のエレベーター——

その叫びを聞いたのは、ステラだけ。

「すこしでいい、時間が欲しいの……！ ステラには、あの人と話をする時間が必要なんだ……！」

ステラは、刃を降ろした。

アスランが、たじろぐ。

「し、しかし……っ！ 父上は、おれよりも遥かに頑固だ。今さらきみが現れて、何を云ったところで——」

あるいはアスランには、未来が想像できてしまうのだ。

畢竟、パトリック・ザラが息子のことを理解しているように、アスランもまた、どれだけ父親のことを理解しているだろうか？ 互いの性格についてよく知るアスランだからこそ、今さらステラが介入したところで、父の意向が変わるとは思えない——。

が、それはステラ自身も、微妙に理解しているのかも知れなかった。

なぜならステラは、このとき何も云わなかった。アスランが喋るのに対し、彼女は一言も言葉を返さなかったのである。その沈黙が、彼女の覚悟を物語っているように——

「——。五分だ……」

アスランは、そう云っていた。

「おれが隣にいれば、父上もいきなり銃を向けることはないだろう。——ただし、五分だけだ……」

パトリックに対する信頼が、アスランにそう云わせていたらしい。もつとも結果から云えば、アスランがいなくとも、パトリックは銃を撃たなかったのだが。

「その間に、まともに交渉が出来なかった場合は……」

「……投降する……。ステラを人質にでもして、みんなを止めるといいよ——」

この潔さこそが、彼女の正義なのかも知れないな——

アスランは不意に、そんなことを思った。

(……おれはいつたい、何をやってる。本当に、これでいいのか……?)

五分だけ、ステラの味方になると決めたアスランであるが——

そんな彼の中には、いまだに、自分に対する強い迷いが根付いていた。

——だが、現実を待つてはくれない。そうしている内に、二人を乗せた昇降機が、目的の階層まで辿り着いていた。到着の電子音が鳴り響き、グワアと、ワイヤーが引き延ばされる音が聞こえ出した。

(きた——つ)

ぐっとして息を呑む。

次の瞬間、重たい扉が開いた。

『シャウト・トゥ・ザ・ワールド』B

地球連合軍の敗北は、ほとんど確定していた。明確な決着が付いたわけではないにせよ、地球軍はザフトが導入した「ジエネシス」の掃射によって、その主力隊ならびに基地に壊滅的な打撃を受けたのだ。すでに陣容は戦線を維持することも困難な窮地に立たされ——しかし、それでも彼らは必死に戦い続けている。

それはやはり、ムルタ・アズラエルの遺した命令があるからだ。

『——あの忌々しい砂時計を、一基残らず叩き落すんだ！』

目的はひとつ——

——彼らの故郷、地球を『まもる』ため。

ムルタ・アズラエルはこのとき既に戦死しているが、彼は「核を以て『プラント』を壊滅させること」が「地球を守ること」に繋がると信じて、しかし、そのために必要な戦力が足りていないにも関わらず、土壇場での総攻撃を強行した。

その愚行は、これまでの数ヶ月に渡る準備期間を要した地球軍の『エルビス作戦』——そのすべてを失敗に終わらせてしまった。

「……いや」

——失敗と云うだけで済むならば、猶予はまだ、残されてもいただろう……。

戦場を縦断しながら、フレイ・アルスターはひとりごちる。

——地球軍は、最後まで核攻撃の姿勢を貫き、これを崩さなかった。

今となつては結果論だが、そのことが、ザフト司令部の危機感をいたずらに煽つたのではないか？ 故郷を失う不安に駆られ、今度の「ジェネシス」は地球にまで向けられたのだ——本来、そこは照準の向けられる予定のなかつた地点。大西洋連邦の故郷である、ワシントン。

(引き金を引いていいのは、撃たれる覚悟のできている者だけ、か)

退路を断られた大西洋連邦が躍起になるのも、道理と云える状況。

すでに地球軍には戦場をひっくり返すほどの力など残されていないが、それでもどうか勢いづきたいと欲望するのが、前線で戦っている兵士達だ。

フレイ・アルスターもまた、その内のひとりであった。混迷を極める戦場の中、彼女はしかし、嘘のような静けさに包まれて戦域の様子を俯瞰していた。

(「ドミニオン」は……沈んだ……?)

手許のレーザー・センサーに視線を落とす、みずからの母艦を探すフレイ。

だが、目当ての「ドミニオン」のシグナルは確認できなかった。反応があるのは周辺

に入り乱れて戦闘しているMS部隊——そして、その中に“レイダー”や“フォビドゥン”の熱紋はない。

——消えていく、みんな死んでいくんだ……。

声を漏らしたその唇は、ほんのすこしだが震えていた。それが恐怖による震えなのか、嘲弄によるものなのかは、おそらく本人にも分からない。……分からなかったが、隣人や戦友の死を想って、自分でも意外なほどの虚無感を憶えたのは事実だった。

ぎゅつと胃が締まる感覚に囚われながら、少女の顔に浮かんだのは、しかし——狂喜の感情だ。

「大丈夫よ、もうすぐわたしも、そっちに行く番だから」

近隣の地球軍機の数々——“ストライクダガー”やその母艦——が、ザフトのMS部隊に退路を断たれ、次々に蹂躪されゆく光景が視界に飛び込んで来る。

そのような激戦区を中心にあつて、しかし、フレイが冗談みたいに標的にされていないのは、彼女が自分の機体から特殊なコンピュータウイルスを送信し、敵機種の索敵能力を意のままに改変しているからだだった。

地球軍機は必死で抵抗し、だが結局は散るしかない同胞達の最期を、フレイは眩しいものを見るような目で見送り続けた。

「……………」

鮮やかな光芒をまき散らしながら、軍艦やモビルスーツが四散し爆発していく。それを見るたび、フレイは改めて「戦争」というものの悲惨さを知る。まるでテレビゲームのように、あつけない光景がそこにある。

そんな彼女にとつて何よりも心外なことは、戦場という異常空間の中に、元は民間で暮らしていた己自身が所属していること。戦争などとは無縁の箱庭に暮らしていたはずが、いつの間自分に自分は、かくも巨大な兵器の中にいる。所詮モビルスーツなんてものは、ことごとく鋼鉄でできた棺桶だろうが――

(地球軍は、勝てない)

地球軍は勝てないだろう……。

そして、勝てないには勝てないなりの原因や理由があるものだ。そうではないか？

少なくとも、はじめから負けると思つて戦いに臨む馬鹿はいないし、勝てると思つて勝たなくてはならないと心に誓つた兵士の数は多かつた。地球軍は、そうして抱いた勇敢さごとく、粉々に撃砕されて負けるのだ。

(でも、わたしは違う。わたしには……『理由』がない)

今、なかば反則のような手段を使つて敵陣の中央を邁進しているフレイには、このまま大人しく負けてやる道理はない。完膚なきほどに撃砕されつつある地球連合軍――これと運命を共にする殉国心、あるいはそれに近い地球軍そのものへの忠誠心を、さ

らさら持つていけないのと同じように。

(わたしは強化人間。リビングデッド ……使い捨ての、鉄砲玉)

生きながらにして、死んでいるも同然の人間。一度でも敵陣深くに切り込めば、もう二度と生還する必要のない「それ」——

さいわいというべきか、フレイが月基地に帰還したことで手に入れた新兵装は、はっきり云つて友軍との協調性に欠いたものだった。全高四〇メートルに達しようという巨大な全軀からだを、大火力の砲門で鍛よろつた超大型の巨人。

——通称、デストロイ・ストライカー。

それがひとたび砲火を放てば、その火は凶暴さのあまり友軍をも巻き込む災禍を招くだろう。自制や自重と云つた言葉から対極にあつて、遭遇した者すべてを破滅させる破壊者の亡霊。誤射を恐れる友軍は、これに命を狙われた敵対者と、まったく同じ量の恐怖を憶えることになるだろう。

——この兵器は、友軍と連携して扱えるものではない。

あらゆる戦術データを凝縮させ、究極の「単機による拠点強襲用ユニット」として完成した兵装。これを手にした者は、初めから単独ひとりで行動すべきであり、パイロットには地球連合という組織から独立した行動が求められる。

そういう意味では、彼女はみずからの信念に殉情じゆんじやうすること最適解なのだろう。気の

赴くままに行動し、感情の流れ付くままに戦闘する。

——従うべき命令はない。

——あつたとしても、もう誰も伝えてはくれない。

アズラエルも、バジールも死んだ。上官を喪つた今の彼女は、みずからの胆力と信義によつて立つている。『戦場のはぐれ者』——

「コーディネイターなんか、地球は絶対に撃たせない」

誰かが生命を賭してでも、ザフトのレーザー兵器を止めなければならぬ。

にも関わらず、地球軍艦隊はまともに進軍できていない。指揮系統がズタズタになっている分、心理的にも物理的にも散り散りになり腐っているのが現状だ。だったら——

「わたしが……！ やるわよ……」

呟き、フレイはみずからの機体を、ある方角に飛び立たせた。いつもより遥かに重たいフットペダルを力いっぱい踏み込めば、『レムレース』とは比較にならない強烈なGが全身にのしかかる。巨大な機体が加速して、鎖骨が折れるのではないか……？ そう思うような加重がスーツ越しの肉体を襲った。尋常な生体であればその時点で身体が潰れていただろうが、フレイはまるで気付かないし、気にならなかった。

——それからの彼女は、ゆえあつて『ヤキン・ドゥーエ』に取りついた。

禍々しい機体から降り、試掘口から単独で侵入する。その先に拡がった通路は薄暗

く、照明も落ちている。女性用にデザインされた薄紅色のパイロット・スーツが嫌に悪目立ちするが、贅沢は云つていられなかつた。

そして、彼女が選んだ侵入ルートは、想像していたよりずっと警備が手薄な状態にあつた。(やつた……！ ついてる……！) 彼女は拳を握り、ほんの少し歓喜した。哨戒に当たつていないはずのザフト兵は出払つていて、こことは対照的に、隔壁ブロック向こう側——別の方角からは激しい銃撃戦の音が聞こえた。他にも侵入者がいるのだろうか、考えたところで無意味なことだ、フレイにとつては都合なのだから。

彼女はひとえに、要塞の最奥部——「ヤキン・ドゥーエ」の司令室を目指した。

「ただでなんか、負けてやらないんだから——！」

薄紅色の侵入者——

フレイ・アルスターは、プライドが高いのだ。

友軍艦との合流ため、「ヤキン・ドゥーエ」に向け進攻する「アークエンジェル」——

嫌でも目立つその白亜の巨大艦に、力を持って余していたザフト守備軍が迫つていた。あたかも羽虫の軍勢のように数の暴力で襲いかかる「ジン」や「デイン」の大軍を認

め、マリユールの表情に戦慄が浮かぶ。

「ザフトはまだ、どれだけの余力を残しているの……!?」

マリユール自身余所のことを云えた立場ではないが、戦力の頭数で比すザフトは、圧倒的少数の側にある。地球軍との全面衝突の最中ともなれば、疲弊も相まって、なおさらに弱体化しているはずではないのか……?」

だが、そんな願望を裏切るようにして、彼女らが指針する先には、いまだ多くのザフト機の反応が待ち構えている。大半は地球軍残党の掃討に向かっているようだが、それでも「アークエンジェル」が単艦で突破しようとするには、やはり無謀な光景であることに変わりない。

——正念場ね……!」

マリユールはきゅつと唇を結び、思わず浮き上がりかけた柳腰を艦長席シートのに預け直した。

ここから先は茨道——しかし、よくよく考えてもみれば、そんなものは今に踏み始めたわけではない。幸か不幸か、度胸や悪運の強さだけは「ヘリオポリス」から今に駆け、この艦のクルー全員の内に養われた無類の強みではないか。

「敵モビルスーツ、接近!」

「弾幕を張って! 取りつかせるなっ!」

そうして「アークエンジェル」に砲火を浴びせかけて来た「ティン」——

しかし次の瞬間、そいつは横合いから伸びて来た光条にメインカメラを吹き飛ばされていた。何が起きたのか——!? “デイン”のパイロットはデイスプレーをサブモニターに切り替え始めた。が、その僅かな間にも、周囲を取り巻いていた“ジン”が次々と武装を撃ち落とされていく。

改めて画面が切り替わったとき、彼らは赤・青・白に彩られた機影を認め、ハツとして息を飲む。大天使の裏側から現れ、たつたいま次元の異なる強さを顕示したその機体は、ザフトにおいて名を知らぬ者のいない——

〈GAT-X105 “ストライク”——!?〉

過言なき“鬼神”として——あまねく畏怖された機影を認め、ザフト兵達は血色を失う。

〈じよ、常勝の伝説……!〉

〈アスラン・ザラでなきや、倒せないやつだ!〉

伝説には常に曲解と脚色が付き纏うものであるが、言葉どおり伝説的に名を馳せた“ストライク”は、例によって無駄のない動きで宇宙空間を演舞していた。周囲の“ジン”や“デイン”を——遂には“そいつ”よりも高性能と評されていた新鋭機の“ゲイツ”までもを——片っ端から撃ち抜き、放たれた光条は吸い寄せられるようにモビルスーツ部隊の武装のみを貫いてゆく。ものの数秒を数える内に、赤い翼を広げたそいつ

は小隊規模のコーデイネイター達を無力化させたのだ。

——逸話に恥じぬ、獅子奮迅の活躍……!?

損傷したMS部隊は、伝説に物怖じしたように後退し始める。しかし、それでもマリュー達に息をつく暇はない。入れ替わるように新たな部隊が「アークエンジェル」と「ストライク」に臨み迫る——まるで大天使と鬼神に挑む、無謀の勇者を自称するかのよう。

「ザフトったら、きりがないっ……!」

〈無茶だけは、しないでね……!〉

「わかってる。……わかってるけど……!」

ミリアリアから声援を受ける、キラの中には焦燥があった。

現状、孤立無援の「アークエンジェル」をカバーできるのは、それこそキラの「ストライク」だけだ。そう聞けば、ずっとそうして来たではないか? となるが、周辺では艦隊同士の大乱戦が繰り広げられており、今回ばかりは明らかにステージが違うのだ。それに加えて、これまでの航路のように、目標地点まで逃げ切つていけばそれで勝つたことになっていた戦とも異なり、今回ばかりは目標地点へと接近するほどに、ザフト守備軍の抵抗が激しさを増す。

たしかに、母艦を守りつつ敵部隊を片手間に撃退していけるのは、やはりキラ・ヤマ

トの高度なセンスの為せる業だろう。

しかし、そうして鋭気に満たされていくパイロットとは対極的に、機体のバッテリーは減っていく一方なのだ。その消耗は尋常ではない——少なくともエネルギー残量を一瞥したキラに、次のような反応をさせるほどには。

(エネルギーはあと半分……！ ……もう半分ッ……!?)

思わずゲージを二度見したのは、それだけ驚きが大きかったからに違いない。

そう、危惧すべきは機体のエネルギー配分——“フリーダム”に乗っている時は気にする必要のなかっただけに、刻一刻と消耗していくバッテリー値に、キラは確実に焦らされていた。

それでも、終着駅の“ヤキン・ドゥーエ”は、いまだ遠くで彼らのことを待っていた。

フレイ・アルスターが要塞内で耳にした銃撃音——それはステラ・ルーシエやニコル・アマルフィが、ザフト哨戒兵と撃ち合っているときのもの。彼女の侵入経路に警備兵の姿が見えなかったのは、その大半が同時刻、ステラやニコルの迎撃に出払っていたからだった。

やがて数分の時間が経ち、ステラだけが、アスランを説き伏せて要塞の司令部に辿り

着いている。このとき司令部では、ステラがパトリック・ザラと対峙していた。

「どういうことだ、アスラン!？」

純粋な不審を湛えた面持ちで、パトリックはアスランを問い詰めていた。

「なぜ侵入者を、ここに招いた!？」

パトリックの目は、息子に対して向けられるものとは思えない冷ややかな色を漂わせていた。

それを見たとき、アスランはようやく父ではなく——ひとりの人物として、パトリックという男の『底』を見た気がした。パトリックはこの時点で、アスランのことを裏切り者として睨んでいた。

——父上にとって、思い通りに動かない者は、すべてが『敵』ということだろうか……？

敵愾心に満ちたパトリックに睨まれたとき、アスランは、そのあまりの呆気なさに呆然とした。みずからの父は、こうも簡単に息子を敵と断じてしまうものだろうか？

……いや、考えてもみれば、父には昔からそういうところがあったではないか——盟友だったシーゲル・クラインを、意を違えた途端に暗殺するよう指示するような部分か。

「父上……」

今のアスランを傍から見れば、さしずめ「敵兵を手引きした裏切り者」——

しかし、それでもアスランには、パトリックを堂々と否定できぬ理由があった。

「ザフト兵も一緒か……？ あれは、アスラン・ザラだ……！」

「どうなってるんだ！ まさか、あのアスラン・ザラまでもが、クライン派に懐柔されて……！」

「隣に立っている、地球軍の兵士は何者だ？ 若い女だよ！」

ステラ・ルーシエの、明らかにザフト製ではない服装を見、誰かがそう云った。

「いや、あれは地球軍の兵士じゃないぞ……！」

「地球軍じゃない？ なら、なんでピンク色だ？」

ピンク色というのは、ステラの着用するパイロット・スーツの基調を差している。ザフトでは見られない規定色であるから、そう糾弾されるのは無理のないことである。

遠慮を知らずに陰口を叩き合う管制官達の声は、パトリックにも筒抜けしている。パトリックは怒りを顔に昇らせ、苛立たしげに怒鳴った。

「アスラン……ッ！ よもや貴様まで、この私を裏切るのか!？」

怒りによってか。それとも、悲しみによってか……？

強かに震えた父の声に、アスランは静かに返す。

「敵勢力の士官を手引きしたことについては、釈明する言葉がありません。ですが、おれはおれなりに、考えて行動に移したつもりです……！」

「なんだと?」

「ステラをこの場へ連れて来たのは、改めて、父上との話し合いの席を設けるため」

——話し合い? 何の?」

思案しながら、パトリックは意表を突かれたような面持ちになり、そのときになってようやく、ステラを見た。

「その者は、三隻同盟からの大使だとしても云うのか?」

「そういうことに、なりません」

(……。アレが大使になるのか?)

パトリックは純然とそう思い、次いで、嘲るような笑みを口元に奔らせた。

——ラクス・クラインならともかく、あれを送り込むとは……!」

——三隻同盟とやらは、よほど人手が足りないらしい!

そのときパトリックは、アスランの真意に気付き「……そうか!」と声を漏らした。

「父上と対話し、それでなおナチュラルとの融和など不可能と知れば、諦めも付くだろうと——」

それを聞いたステラは啞然とし、

「父上とおれとで、改めて説得すれば、思い直すと考えました……」

「アスラン……!?!」

激しい非難の目を浮かべ、本音を明かしたみずからの兄妹きょうだいを睥睨した。

アスランはステラと目を合わせようとせず。その代わり、胸の内でもう云った。

(父上を説得するなど、不可能なんだ……。分からせるには、こうするしかなかった……。！)

そもそも話のはじめ、ステラが真つ当な交渉術を持っているとはアスランには考えられなかった。生来より舌足らずな彼女が、政界で鎬を削るパトリックに如何ほどの口火を切つて出られるだろう？ 交渉におけるイチシアチブを掌握できるのは政治家であるはずだから、アスランは、あえてステラを泳がせたに過ぎなかった。

「——え？ 娘さん？ ザラ議長閣下の？」

「まあ、なんて可愛らしい！」

「やめないか！ 緊急事態だぞ！」

「元はザフトにいた子だろ？ 今はクライイン派か！」

「家族の同意すら取れない人間が、議長かよ……！」

管制官達の与太話は、それからも続いていた。

管制官達にとって驚きだったのは、嚴重な警備に守られている「ヤキン・ドゥーエ」

要塞を、まだ年端もいかない少女が、その力で侵入し突破したということ——
当初は内通者^{スパイ}に手引きされたのだろうと疑ったが、仮に手引きがあつたとすれば、明らかに悪目立ちするピンク色のパイロット・スーツを着ているのは非合理的だ。そして、手引きの可能性のあるアスラン・ザラに関しても、彼が内通者であつたとは言動的にやはり考えにくい。

彼らが緊迫した指令室で固唾を飲んでいると、階上のパトリックが、改めて侵入者の少女を詰問し始めた。

「——それで、貴様は！ どうしようと言うのだ？」

問い質され、少女は力強く答える。

「やめさせに来た……！ これ以上、*「ジェネシス」*は撃たせない——撃つちやいけな
い——」

透き通り、それでいて芯のある言葉に、一同は弾かれたように顔を上げる。
ステラと敵対しているはずの、大勢のザフト兵がその言葉に耳を打たれた。

(……隊長と同じことを……！)

管制官達の間を、明らかな動揺の波が奔る。

レイ・ユウキが具申したこと、同じ言葉を少女は説いていた。その透き通つた一声は、まるで、管制官達がそれまで押し殺して来た本音を、ひとりでに代弁しているかの

ようだ。

——たしかに、そうだ……！

このまま、パトリックの指示通り “ジェネシス” を撃てば、地球で暮らす多くの生き物が死滅するだろう。

それで犠牲になるのは、この凄惨なる戦争に責を負うべき大西洋連邦の軍人や政治家だけ——ではない。平和で穏やかに暮らしている無関係の民間人—— “ユニウスებ” で暮らしていた者達と同じような——も、必然的に道連れさせる行為だ。

——虐殺は、必要悪なんかじゃない……！

——無辜を撃つても許される、理由になんてならない……！

パトリックへの恐怖に竦み、まるで意見できずにいた管制官達——レイ・ユウキの二の舞にだけはなりたくない、みずからの本音を包み隠して来た。そんな彼らだからこそ、ようやく現れた想いの代弁者に、弾かれたように視線を集中させた。

それに気づいたステラも、ハッと周りを一瞥した。武器を持たない管制官の多くが、好奇——いや、まるで熱望するかのような視線を投げかけて来ている。

——このひとたち……！

何かを確信したステラの傍ら、パトリックが言葉を挟む。

「はっ……！ 命乞いでも願ひ出すかと思えば、そんなことか」

父の口から放たれた、放たれたとは思いたくない言葉を受け、ステラは慄然とした表情を隠せない。

——そんなこと……？

地上に暮らす、何億の無辜の命が懸かっていること。

——それが、彼にとつては「そんなこと」でしかないというのか？

はるか高い位置にあつて、あたかも他者を見下すようこちらを俯瞰するパトリックの目は、軽侮の色を漂わせていた。当人は至つて本気で口走っているのだと、分からされたステラは愕然とするしかない。

「手遅れだ！ 既にこちらの準備は整っている、誰が何を云おうが『ジェネシス』を止めることはできない！」

パトリックは、高圧的な態度で云うが、

(いや、嘘が混じつて……。まだ照準入力が終わつてないんだから！)

オペレータのひとり、揚げ足を取るように胸中で弁解する。

パトリックの云う通り、ミラーブロックの換装は終わつて、確かに『ジェネシス』はいつでも発射できる状態にある。それでも、実はまだ、照準入力完了してはいないのだ。仮にいま『ジェネシス』を放つたとして、的の大きさから地球へ射撃することは可能だろうが、それは敵陣営の首都を狙撃したいと欲望しているパトリックの本懐ではない。

(管制官がいなきや、議長はワシントンを撃つことだつて出来ないんだぜ……?)

言葉どおり、すべての発射シークエンスを完了させるには、大勢のオペレータの連携が急務だ。そのオペレータの多くが、持ち場を離れてしまっている今、作業を進められないのは仕方のないことではないか？ しかし流石は政治家というべきか、それを悟らせないようにするのが、パトリック・ザラであつた。

——何もかも、あの娘が現れたせいだ……！

本音を云えば、早急にステラを取り押さえてしまいたいパトリック。だが、彼は真つ向からステラを見下し、堂々に語り始めた。

『戦争は勝つて終わらねば意味がない』——そして最後に勝ち残るのは、この私だ……

！ やはり私だつたのだ！

傲岸にも響く言葉の中には、

しかし、パトリックが抱き続けた“不安”の感情が見え隠れしていた。

「なのに貴様ら裏切り者どもは、この私を見放した——」

後ろめたさを隠すような荒々しい声で、パトリックは怒鳴り紡ぐ。

「——見るがいい！ やはり私は正しかった！ 最後に笑うのは、この私だ！」

是が非でも“勝者”になるために——みずから脚本を描き、舞台を創り、演出まで八面六臂を監督したパトリック。

そんな彼だが、自由気ままに暴れ出した演技者の群れには苦戦した。ラクスやステラは、その最たる例だ——定められた役割を演じないばかりか、舞台の中で勝手に右往左往し、彼の正本をかき乱す——監督者にして見れば、実に滑稽で、腹立たしい存在。その裏切り者達に、見せつけてやりたいのだ——本当に正しかったのは、初めから自分であるのだと。

ステラに知らしめてやりたいのだ——戦争に勝つのは自分であり、だからこそ自分は、偉大なる父親であるのだと。

「私はこの戦争に勝ち、みずからの正しさを証明して見せる……！ 我々を理解しようとしないうちナチュラル共に、真の正義が何たるかを、思い知らせてやるのだ！」

勝者になった者にこそ、善悪を塗り替える権利がある——

パトリックの過去は、ナチュラルに差別された屈辱の累積だ。人種差別のために泣く生活を送り、実務的で優れた才能を持つているにも関わらず、ナチュラルは彼の才能を軽んじ、疎んだ。であるなら、同じ境遇に流れ着いたコーディネイター同士で結託し、新たな事業を自分達で立ち上げたいと思うのも、当然の流れだ。

その結果、パトリックがリーダーとなり造り出したのが「プラント」であつたとして

も——

——コーディネイターは、宇宙の悪魔です……。

やはりナチュラルは、これを嫉み、憎んだ。

鬱屈とした雪辱の中で生きて来た彼だからこそ、勝つことに意味を求めている。そのような妄言を二度と吐けぬよう、ナチュラル共を徹底的に虐げるために。善悪を塗り替えることで、コーディネイターの正当性を明らかにするために。

しかし、ステラは云った。

「ちがうよ。あなたはみんなに、裏切られたんじゃない——」

パトリックが微妙に表情を変化させたが、口に出しては何も云わなかった。

やがてステラが顔を上げ、真つ向から云いつける。

「人を脅かしてばかりだから、敵をいっばい作っただけだ……い——」

そのときパトリックが、云い知れぬほど不機嫌な顔になったというのは、後日になって現場に同席したオペレータが口を揃えて語ったこと。

それはパトリックにとって、自分自身、気付いていたかも知らない核心。少女は男の心に言葉の槍を突き立て、その内を抉り出す。それで、パトリックは顔に憤怒の色を昇らせた。当人にとって凶星であつたかはともかく、云われたことがよほど悔しかつたらしく——

「戦うばかりの傀儡が、何を云うか……い——」

唾棄する声は、しかし、確実に調子が外れていた。

罵られたステラだが、彼女は「そうだね……」と口語で返す。

敬語を使わないのは、父娘の力関係ではなく、パトリックと対等に渡り合うため。そして、それこそ今まで誰もが敬遠し続けた行いであることに、アスランは気付いてしまった。

「ステラだって、戦うことしかできなかった。でも今は、操り人形なんかじゃないよ……」

彼女には、何のために「力」を奮うのか——今になって、覚悟があるのだ。

——壊すためでも、やっつけるためでもない。

——守らなきゃ、ぜんぶ……!」

奇しくもそれは、かつてステラの発言と、対極にある言葉。

「ステラ知ってるんだ……いや、知ったんだ。昔のあなたは、そんなじやなかったってこと」

何気なく呟かれた言葉は、しかし、激昂していたパトリックを鎮めるのに相当な効果を発揮したらしい。意表を突かれるパトリックに、ステラは続けた。

「ずっと昔のあなたが、みんなで平和に暮らせる世界を望んでたってことも」

ただ事実だけを突きつけるように、抑揚のない声で返す。

「聞いたよ、アスランには『夜明け』の意味があるって——」

「……………え？」

「それを名前にくれたのは、きつとアスランに“光”になって欲しかったからだって」

——“光”……………!?

アスランは、怪訝な顔をした。自分に与えられた名前の由来など、気にしたことがないのだ。

——おれは“光”？ 夜明けの光？

「ナチュラルとコーデイネイターが歪み合う世界に、あなたは“太陽”が昇る瞬間を願ってた」

「どこで、それを……………！」

「父上……………!？」

「大きな光は、みんなを照らすから……………！ いつか、暖かくて優しい世界を実現したいから……………！ みんなが平和に、共存していける未来を夢見て、あなたはアスランに“夜明け”の名を与えたんだ」

過去からのレノアの声が、ステラの背を後押しする。

——ナチュラルとコーデイネイターが歪み合う世界に、いつしか太陽が昇る瞬間を願って。

闇を照らす大いなる光が昇る——暁の名を、パトリックはアスランに与えたのだ。

(父上が、ナチュラルとの共存を願つてた……!?)

アスランの表情に、深刻な動揺が奔る。

ステラはなおも、まっすぐに続けた。

「だったら——!」

「それが何だというのだ! 昔は昔だ——誰から吹き込まれたかは知らんが、ナチュラルはレノアを殺した!」

「……………!」

「なのに『ナチュラルと共に生きて行け』だと? それが母親を殺された者の云うことか!?!」

言葉の通じない相手——それが今の、パトリック・ザラであった。

かつて、シーゲル・クラインはこんなことを説いた。新約聖書の第一章——すなわち、最古の人類が最古の書物の冒頭に『初めに言葉ありき』という教えを記したこと。どういう意味かとメディアに問われたとき、彼はみずからの解釈でこう語つた——「言葉がなければ、我々ヒトは物事を理解し共感し合うことができない」と。

であるなら、その言葉すら拒絶する人間には、誰が何を云つても無駄であるということ。パトリックはたとえ肉親であつても、娘の云うことに耳を傾けはしないのだ。そしてまた、みずからと意見を違える者にも——。

「私は覇道を最後まで貫き通す——撃たねばならぬのだ！ 撃たれる前に！」

不明瞭な言葉で荒々しく喚き、パトリックはついに胸元から拳銃を引き抜いた。それを認めたステラは反射的に身体を強張らせ、アスランはぎよつとした。

——父上……!?

はるか高い位置から、みずからが愛したはずの少女に銃口を向けたパトリック。司令室はふたたび恐怖の感情に蔓延した、管制官達は慄き竦んだ目で、今にも実の娘を撃とうとしている男を見上げている。

「それでも『ジエネシス』を止めたいと云うのなら——ッ！」

血走った眼光に、赤い煌めきが奔った。その目に浮かんだ一瞬の感情の昂りを——距離を置いた位置にありながら、ステラは見逃さなかった。

——パアンツ！

その瞬間、重苦しい銃声が響く。誰が発砲したのか誰何すいかする必要はなかった、ステラは瞬発的に地を蹴って横に跳び、階上から撃ち込まれた凶弾をかわしていた。

「——父上っ!？」

発砲したのはパトリックだ。

アスランは凝然とその場に立ち尽くす。——まさか、本気で撃ったのか!? 狭い司令室の中、ステラを……!?

唐突な発砲音に、司令室はパニックに陥った。パトリックが少女に向けて銃撃を放ったのだ、一步でも間違えば、流れ弾がザフト兵に当たっていたかも知れないのに！

アスランは血の気の失せた顔になって、瞬間的にパトリックを仰いだ。暴走する父の目は狂気に据わっていた。その目の褪めたような色を見て、アスランの中で何かが音を立って崩れていく。

「うわああああっ!!」——管制官らが思いどろくに絶叫し、持ち場から立ち上がる。理不尽な死の恐怖から、出口に向かつて無秩序に逃げ惑い始めた彼らの雑踏と、整然と立ち並び続けたコンピュータの物陰にステラは身を潜めた。姿を隠した。

(……………っ！)

その掌にはホルスターから引き抜いた拳銃が握られている、デスクの下から彼女は密かに、銃口を階上の男に向けた。その男は、つきりステラを狙い続けていると思つたが、まったく別の方向を見ていた。

ステラの人差し指には、力が入らない。トリガーを引く気にはなれない。拳銃のグリップを握つてしまつてからは、一度たりとも臆病になつたことのない彼女であるが——

——もつと前に気付いて、止めなくちゃいけなかつた……！

ナチュラルが悪いわけでも、コーデイネイターが悪いわけでもない——この戦争を通

して、ステラは気付いたつもりだ。この戦争には、本来、人種という尺度ものさしを使ってはならなかったことも。

心ない一部の者達が勝手に始めた戦争に、巻き込まれた人達がいる。犠牲になった者達がいる。そうして散っていった無辜の無念を偲び、怒りと悲しみに暮れた人々——そうした怨嗟から凶器と兵器を手に取って、戦争に加担して行ってしまった者達。そこに自ずと付帯した、宇宙と地上の隔たり——「ナチュラルだから」「コーディネイターだから」という修飾語が話を戦争を、結果的にややこしくさせた。自分とは異なる者を一括りの上つ面な言葉でまとめて、相手のことを分かった気になって、それが大きな誤解を孕んでいることにも気付かずに——。

パトリック・ザラは、そうした時代の闇に囚われた大人のひとりだった。

(終わらせなきや、いけない……っ)

だからステラは、改めて銃を構える。

アスランは必死になって、ステラを捜した。恐怖に駆られ、持ち場を放棄し、我先にとエレベーター方面に駆け出し始めた人波に、何度も両肩をぶつけられながら——それでも彼は、たったひとりの少女の行方を追った。「ステラ！ どこだっ、どこに——!?」そうして叫び見つけた先で——彼女をどうしてやりたいのか？ おそらく分かってなどいないのに。

アスランは最後まで——父と妹——どちらの味方にもなつてやれなかった。
「……………!?!」

一拍置いた、次の瞬間——
無慈悲なる銃声が、指令室に響き渡つた。

“アークエンジェル”の医務室では、ムウが医療用ベッドに横たわり、怪我の治療を受けていた。

点滴に繋がれたムウは、とても“ゼロ”で再出撃できるような状態にはなく——そもそも先の出撃自体が許容できない容態だったのだと、軍医のハリー・ルイ・マーカットに叱責を受けていた。一応の監視役として入口のドアに身を寄せていたマードックは、なんとなく居た堪れない気持ちでふたりの応酬を聞いていたが、最終的に分かつたことは、そうしてハリーが叱るのは、あくまで彼が医者という肩書を持っているからに過ぎないから。

つまり、形式的に怒っているに過ぎないのだ。ラウ・ル・クルーゼと決着をつけるため——キラ・ヤマトを助けるために無理を押ししたのだと分かれば、ハリーはそれ以上を口に出して云わなかった。それが彼の答えだった。

「ロドニアでは、ひどい医療現場を見ました」

麻醉こそ射っているものの、施術者が傷口を縫合する片手間に患者に話しかけるのは、手術の世界ではよくある話らしい。

脇腹の裂傷を治療しつつ、ハリーはみずからの辿った経緯をムウ達に語っていた。アラスカで転属になったあと、強化人間を育成する医療研究所に叩き込まれたこと。程なく「ドミニオン」への異動が決まったこと――

「――じゃあ、「ドミニオン」に乗ってた「G」のパイロットっていうのは」

あらゆる経緯を語ったあと、仰向けのムウは、顔だけを相手に向けて問うていた。

「ええ、強化人間でした。全員がナチュラルで、しかも……まだ若い」

「……道理で……」

少なからず例の「G」部隊と交戦経験のあるムウは、納得してしまう。

そんなとき、マードックが唸るようにして云った。

「しかし、アルスターの嬢ちゃんかねえ……」

感心した風な口調だが、そうではない、無精ひげを蓄えた繊細さとかけ離れた顔つきには、「信じられない」といった風な文字が浮かんでいる。すべての経緯を打ち明ける中で、フレイ・アルスターの動向についても、ハリーは明かしていたのである。

他でもない「アークエンジェル」の医務室から強化人間の生体データサンプルを抜き取った

あと、フレイはみずからの肉体を地球軍の実験に提供した——その結果は成功したとは云い難いものの、結果的に「G」のパイロットとして選定されるに至ったこと。

「彼女にはもう後がない。帰る場所もなければ、迎え入れてくれる人もない——」

そうは云うが、勿論ハリーは彼女のことを個人的に好いている。彼女が戦場から生還した暁には、保護者として、主治医として——彼女の面倒を見てやる覚悟があるのだ。

しかし、事実「ドミニオン」が撃沈してしまったことから、おそらく彼女は、隣人がすべて戦死したと考えるはずだ。

その先に待ち受けるのは、孤独だろう——帰るべき場所を完全に失ったと思い切つてしまえば、彼女はもう、おそらく二度と迷わない。生に縋ることさえも諦めるだろう。

「戦闘が始まってから、一時間ちよつと。薬の効果が、そろそろ切れ始める頃合いだ……」

ハリーは腕時計を見遣りながら、気づかわしげに云う。タイムリミットは刻々と迫っている——「薬が切れると、どうなるんで？」マードックが問えば、抑揚のない声で「自力で意識を保つことが困難になって、そのまま闇に堕ちていく」と返された、マードックは啞然とした。

——フレイ……。

ハリーは明後日の方向に視線を投げ、漏らすような声音で云う。

に安らかな顔になる。

「な……ッ」

——「いったい、何が起きた……?」

パトリックは力なく、そのまま背後の椅子に倒れ掛かる。けれども椅子は男の体を支えきれず、本人もまた、みずからを立ち上がらせる氣力を削がれていたことで、床にずり落ちてゆく。

指令室はしばし静まり返っていた。誰もが時間を止められたように、凍り付けにされたように、たった今いま、銃声と共に倒れて見えなくなつた男の方向を仰いでいた。

だからこそ、そのときのアスランは、ステラを見つけることができた。視線の先に捉えたステラは、たしかに拳銃を構えていたが、銃口の先からは硝煙が立ち昇っていない。何より彼女自身、啞然とした表情をしていたから、アスランは彼女が撃つたものではないのだと理解できた。まあ、だからこそ煮え切らない思いにも駆られたのだが。

ぎゅつと歯噛みして、地を蹴つたアスラン。急ぎパトリックの許に駆け付ける。

「だれ、が……!」

床に仰臥した父の姿に震撼しながら、アスランは慌ててその体を抱えるように寄つた。

——「誰が……! どうして、こんなことに……!」

はつきり、このときのアスランは錯乱していた。「父を撃つたのはステラかも知れない」——そんな最悪の可能性だけは否定されていたこのとき、アスランには現実を招いたのが誰であるのか、まるで想像が及ばない。

——管制官の誰かが!? それとも、やはりステラが……!?

しかし犯人捜しをしようにも、抱え上げた父の喉元からヒューヒューとあまりにも嫌な音が漏れていたから、それどころではなかった。

「……………」

呆然とするステラは、そのときまったく別の方向に眸を向けていた。天井に近い壁面に開けられた吹き抜けの窓——そこに自分と同じようなパイロット・スーツに身を包んだ人物が立っていたのを認めたから。

その者の掌には、たしかに硝煙を吐き出している拳銃が握られて——無骨なデザインの耐重用スーツは、かつて彼女自身が着用した強化人間専用のそれを彷彿とさせ、ステラと同じ薄紅色のパイロット・スーツは、かの人物が女性兵であり、かつ地球軍に帰属していた者であることの証明だ。

彼女は眼下に斃れたパトリックと、そこに駆け付けたアスランのことを眺めているようだった。だが、背を向けているアスランはこれに気づいていない。

ふと、ステラは彼女と、目が合ったような気がした。

いや、気のせいではない、間違ひなく彼女は意識的にステラを見下ろし、そして笑いかけて来ていた。口の裂けたような不気味な笑み——歪み。バイザーに硬質な光が反射して表情を汲み取ることはできないが、それでも彼女は笑っていた。嘲るように嗤っていた。

——父親を奪われた気分はどう……？

ステラには、その声が距離を跨いで、確かに聞こえたような気がした。

吹き抜けに立つ彼女は、それきり身を翻すようにしてその姿を晦ましていく。ステラはついに、彼女を追うことが出来なかった。しかし、

(——あれは……っ！)

それが誰であつたのかは、しっかりと咀嚼していた。

——あれはいつたい、次はどこに向かつた……？

胸の奥から湧き出すのは、彼女を止めなければ、という義憤。

それでもステラは、だからと云つて、父親を無視するほどに無感情ではなかつた。彼女が気が付いたときには、指令室は人々の怯え切つた声で溢れかえっていた。

「ザラ議長がっ……！」

「ど、どうすればいいっ……！」

「も、もう嫌だ……！」

「持ち場に戻れ！ 戦闘中だぞ——ええいつ！」

咎める声には何の意味もないし、咎めた者まで指令室から逃げ出し始める不始末。恐怖に駆られた人々は我先にエレベータに乗り込み始め、その場にザラの名を持つ者だけを取り残していく。

ステラは、遅れながらも地を蹴ってアスランと——そしてパトリックの許まで寄って行った。胸にじわりとした風穴を開けた父の姿が、ひどく痛々しく映った。

パトリックはまだ、絶息していなかった。近寄って来た小さな身体に気付いたか、彼はそちらに顔を向ける。そしてその人は、驚くほどに剣気のない顔をしていた。

「わたし……は………間違つて、いたのだなッ………う！」

ステラは驚く。それは質問というよりも、確認の意味で放たれた言葉のよう。

パトリックの顔に浮かんでいたのは、政治家でも、指導者でもない——ひとりの父親のそれだった。少なくとも、ステラにはそう見えた。

「地球軍兵の……顔を見た………！ まだ若い……おまえたちほどの年頃のッ………」

何も知らないアスランは「え……!?」と驚愕する。ステラは微妙に表情を変化させたが、口に出しては何も云わなかった。

おおよそ、パトリックは撃たれる直前——きつとあの少女の姿を捉えていたのだろう。捉えた上で、撃ち負けたのか、それとも迷ったのか……？ いずれにせよ、パトリッ

クは敵兵の——ナチュラルの銃弾をその身に受け、今に至っている。

「あれが……浮かべていたのは……！ わたしと、同じ目だった……ッ」

同じ目——？ アスランは訝しむ。

だが、パトリックには分かっていた。

それは、憎しみに囚われた者の目——『敵』と定めた者を憎むことでしか、生きる指針を見出せない愚者の目。自分はあるなにも恐ろしい形相をしているのかと、そのとき初めて知ったのだ。それが対応の遅れに繋がったものというのは余談に過ぎないが——パトリックにとって何より苦しかったことは、自分もあれも、結局は同じ目をする。人間“だったという真実。

あれ、という指示語が何を誰を差しているのか——

理解できていないアスランには、父の言葉は分からない。だが、ステラには痛いほど分かる。……だからだろうか？ このときパトリックはアスランではなく、真摯にステラに顔を向けていた。

「おまえは……こうして撃ち合うだけの世界を、やめさせようとしたのだな……」

「……遅いよ……お父さん……っ！」

パトリックから見て、大粒の涙を貯めて泣きじやくる少女は、透き通るように儚げに見えた。

——こんなにも純粹で、無垢に育つた愛娘の言葉を、なぜ信じてやれなかったのか？
——撃たれた者は、撃つた者を憎む……。

それはある種、当たり前前の感情だ。抑圧しようとして、封印しようとして、できるよ
うなものではない。ナチュラルもコーディネイターも、それは当たり前前に持ち合わせる
感情だから、ステラはやめさせようとした。

それでもパトリックはナチュラルを虐げようとしたから、ナチュラルに撃たれた。こ
れを因果応報と形容するのが正しいかはともかく、少なからずパトリックは、その言葉
が今の自分に似合っているような気がした。

ひたむきで強かな娘の願いを聞き受けてやれるほどに、自分という男は強くも優しく
もなかった、純粹でも、綺麗でもなかった。娘の言葉を受け入れたとき、自分の来し方
に誤りがあったのではないかと、気づくことが怖かった。それはきつと、弱さだったの
だ。

「ああ……すまない……ッ」

「父上……っ！」

今この瞬間にしたところで、パトリックは彼女達に看取られるだけで、ふたりを抱き
しめてやる事が出来なかった。身体が動かないとか、そういうこと以前に、その資格
が自分にはない気がしたから。

「……………これでわたしも、覇道を諦められる……………。ようやく……………レノアの所へいける……………」
云つてから、しかし、それは無理か……………と彼は自嘲気味に考える。生きている間、自分は多くを殺し過ぎ、また死なせ過ぎた。天国に旅立つた妻と違い、自分が向かうべき場所はきつと——

次の瞬間には喉から血が溢れ、目に見えて体力を失つていく。ステラ達はそれでも父親を——いや、父親と呼ばれる資格すらない自分のことを、叫ぶように呼びかけ続けてくれた。

——守るべき家族は、まだここにあったのに……………。

憎しみに囚われ、何も見えなくなつていった。都合の悪いことから目を背け、耳を塞ぎ、力で押し除け——その果てに、信頼も友情も愛情も——すべてを切り捨ててしまった。もう一片の柔軟性と積極性があれば、気が付けたはずの幸福。それすらもパトリックは、みずからの手で投げ捨ててしまつていた。

身体から力が抜けていく。視界が霞み、真つ暗に閉ざされていく。

パトリックは、みずからの死期を悟つた。

——ああ、まだ……………。

——まだ話したいことは、たくさんあるというのに……………。

しかし、何かを云える立場ではないと分かつていたから、彼はみずからの言葉では喋

らない。

「……美しく……!! ！ しあわせに、生きろ……っ」

レノアなら——

天国からおまえたちを見守っているレノアなら——

きつとそう云つただらうと——

母親の言葉を云い残し、パトリックは目を閉じる。痙攣を起こしていた身体がゆつたりと弛緩し、それきり男の意識は、もう二度と現世うつしよに浮かび上がることはない。

「——・父上ええええええええええええっ!!!」

すべては「ユニウス・セブン」から始まった。

憎しみに身を窺すことでしか、生きる希望を見いだせなかった男——

パトリック・ザラはこの瞬間、息を引き取った。

『ファイナル・ウェーブ』A

命令が下されれば、従うのが軍人の責任だ。そこに拒否権はなく、あったとしても、それは個人的な判断の許で行使していいものではない。受け取った命令が如何にその者の信義に反するものであっても、命令である以上は従う。

だからこそ、評議会や軍本部からの指令や判断を常に“正しい”と信じていることが、自身に課せられた使命であるとアスランは考えた。迷いのある状態で戦う者と、正しいと信じる旗の下で戦う者の間には、明確な“差”が出るはずだ。軍人は私心を捨てて国家の利益のために戦う——であるなら、アスランのような兵士は、必然的に後者になる必要があつた。

——戦士としての“力”を、失いたくなかつた。

悩むこと、迷うことを放棄した瞬間、アスランは絶大な戦闘力を獲得した。それは友を超越し、当時の妹を守り抜いた戦士としての“力”——

そしてその“力”たるものが、彼にとつてはあまりに気持ちのよいものであつたら、彼は一度でも手に入れた“それ”を段々と手放せなくなつていった。暴力的で、そ

の禁断の心地よさを、みずからの手で捨てることができなくなっていた。

戦場に身を置きながら、常に悩み、迷い、場当たり的で曖昧だった以前の自分に突き動かされるまま行動するだけで、何を信じて戦っているのか分からない——そんな昔の自分に戻ってしまうことを、アスランは何よりも恐れていた。しかし——

『わたし、は……間違つて、いたのだなッ……』

息を引き取る直前になって、パトリック・ザラは己の人生——その来し方に誤りがあつたことを、みずから認めてしまった。

——誰よりも、ナチュラルへの復讐心に燃えていたはずなのに……。

最後の最後で、振り上げた手を引つ込める決心がついたらしいパトリック。そんな彼は今、アスランの腕の中、どこか安らいだ風に永劫の眠りに就いている。ステラに見守られながら。

思うにそれは、どう見ても志半ばで斃れた者の表情ではなかった。

(でも、だったら！ 遺されたおれはどうすればいいんですか、父上……！)

——いったい、今までおれがやって来たことは何なのだ？

母を奪い、妹を辱め、たつたいま、父もを撃ち殺したというナチュラル達——連中を滅ぼすことが正義と信じ、身を粉にして戦つて来た。

——なのにそれが過ちだったとしたら、これから先、おれは何を信じて生きればい

?

父上はたしかに、満ち足りた表情で逝つたのだろう。しかし、それに取り残された自分分は——？

「おれは、どうすればいいんだ……っ」

枯れた声で、絞り出すような声を吐くアスラン。その目には、弱々しくも確かな光が宿っていた。

そんなアスランに宿つた、小さな目の輝き——生氣とも呼べる光——を見て、

——アスランが、帰つて来た。

ステラは、胸内でそう云っていた。

ビクトリアの指令室で、光を失くしたアスラン。その彼が光を取り戻したのは、奇しくも「ヤキン・ドゥーエ」の指令室だった。硬質なライトに照らされ、周囲のコンピュータが機械音を鳴らし続けるこの空間は、ステラの中に名状しがたい物懐かしさを齎していた。

「おれが今までやって来たことは、いつたい、何だつたんだ……」

「アスラン……」

以前、ステラはアスランのことを「仮面をつけたネオと一緒」という表現で指摘したことがある。アスランは自分の感情を押し殺し、他人の言葉や理屈でみずからを着飾つ

ていた節があった。それはステラに対し一切の本音を語らなかつたネオ・ロアノークの性格とよく似ていたし、今になって思えば、あながち間違つた表現ではなかつたのかも知れない。

少なくともステラには、理屈を武器として振り回すアスランが、次第に自分を見失いつつあるように見えていた。

仮面の下を覗いてみたら、実は空つぽの人間——ネオと同じ。たとえば、彼の中で急加速的に発達していったナチュラルへの攻撃性と加虐性も、結局は何もない自分を埋め合わせるための虚勢。自信のなさを誤魔化すための虚像。アスランはそうした虚像を、本当の自分だと言い張っていただけに過ぎない。

攻撃的でなければ、彼は彼自身のアイデンティティを保てず、加虐的でなければ、アスラン・ザラという人間は本当に空つぽになつてしまう。自分のことすら騙し続けて来た生き方を、間接的とはいえ、パトリックに否定されてしまったのだ。

「教えてくれ、ステラ……！ おれはこれから、どうすればいい……！」
今にも血を吐きそうな面持ちで問うて来たアスランに、ステラは決して同情しなかつた。

それについては、人に尋ねて解答を得られるようなものではないと思つたのだ。だから彼女は、何も云わない。

「そうか——そうだよな……っ」

答えを出すのは、いつだつてアスラン自身でなければならぬ——

……そうではないか？ 闇雲に人の意見を求め、それに付和雷同するのでは、アスランはきつと同じことを繰り返す。だから彼女は何も云ってくれないのだし、沈黙こそが彼女の答えなのだ、アスランは理解してしまった。無人になつた指令室、ひとりの父親の遺骸を挟みながら、兄妹の間に気鬱な沈黙が流れてゆく。

——と、そのときだった。

二人の沈黙について、ふと、傍にあつたコンソールが喧しいアラートを発し始めた。ステラとアスランは突然の警報に耳を突かれ、機器に視線を向ける。互いに目を向けたとき、かしましく響き出したコンソールのディスプレイは赤と黄の警告色に発光していた。やがてその画面上に、

〈1248 second〉

黒い数字が大寫しになり、やがてカウントダウンを刻み出す。

まるで、何らかのタイムリミットを宣言するかのよう。

「——えっ……っ？」

ステラは、きよとんとした。

——1248秒……？

それが何を示すタイマーであるのか、俄かには想像の及ばないステラであった。

緑がかつたライトに、薄く照らされた「ヤキン・ドゥーエ」の通路――

ニコルは壁面にもたれ、彼の目から見て、気風の良さそうなザフトの武装兵ふたりに囲まれていた。囲まれていた、と云つても、囚われているわけでも、監視されているわけでもない。このときニコルは、そんなザフトの保安要員達に怪我の手当てを受けていて、どちらかと云えば、ニコルが彼らを付き添わせている状態なのだから。

それもこれも、ニコルが身に着けているパイロット・スーツの恩恵である。彼は赤色――^{レッド}かつザフト製のパイロット・スーツを着ていることを裏付けに、みずからをザフト兵と仮定し、保安要員達の注意を外に向けていた。自分に猜疑の目が向くのを遅らせていた、と云つてもいい。幸い、ザフトにおける『赤』はエリートを表す代名詞であり、その認識は保安要員達も共有するものだから、そう簡単にニコルを疑つてかかることはないのだ。

(パイロット・スーツって、着ているだけで所属を騙^{かた}れるんだな?)

パイロット上がりのためか、今まで防護服程度にしか認識する機会のなかったスー

ツ。しかし、云われてみれば身分証めいた使い方だつてできるはずだ——あくまで視覚的、一時的な効果しか見込めないものの。

なるほど、こういう邪な使い道もあるのかと感心すると同時に、今になって気付いたことを口惜しく思う。

(初めから気付いていたら、ステラさんにも『赤』を着せたらうに)

元はクルーゼ隊の一員だったステラも、ザフトのパイロットスーツを持っている。

——と云つても、本当にそう、持っているだけだ。

オーブに合流してからの彼女は、地球軍製の薄紅色ピンクのスーツを着用するようになり、ザフトレッドのスーツはロッカーに眠らせる状態が続いた。本人の名誉のために補足しておくが、勿論それはニコルが女子更衣室に忍び込んでステラのロッカーを勝手に覗き回つたわけではなく、あくまで本人の口から聞いた話であるのだが。

三隻同盟は正規軍ではないから、服装に関しては個人の自由が許されていたし、この陣営の服を着ていようと、そのことで指摘されるようなこともなかった。しかし今回に限つて云えば、ステラにはザフトのスーツを着用させるべきだったのではないか？しかし、それこそ今さらな話であろう。

結局のところ、ニコルはこれについても途中で考えるのをやめていた。考えたところで先立たぬ後悔だと思つたし、そもそも“ヤキン”に直接的な潜入工作を図るなど、段

取りの中に含まれていなかったからだ。

——数々の不便と不利の中で、それでも彼女は「ヤキン・ドゥーエ」の最奥まで辿り着いた。

いくら混乱に乗じたとはいえ、普通の人間には真似できないことだ。途中で足を挫かれた自分など良い例だろうが、今はただ、そんな彼女の無事を祈るしかない。

「おうし、応急処置は終わったぜ。……血も止まったろ？」

手当てをしてくれたザフト兵が云う。

ニコルはハッと現実に戻された。

「ああ！ ええ、ありがとうございます」

「立てるか？」

「立てます」

云われるままに、ニコルは立ち上がった。その拍子に、やはり銃撃を受けた脇腹と左肩に、灼けつくような痛みが走った。

しかし存外、耐えられないほどではない。無論、今はアドレナリンが体中を駆け巡っているはずだから、それで耐えられるだけだ。冷静になつたら悶えるほど痛いに違いない。

(あまり、無茶はしない方が良くもな)

ニコルはそんな風に自分を戒めた後、傍らで始まった保安要員達の会話に耳を傾けた。

「すつかり置いていかれちまった、状況がまるで分からん。地球軍の侵入者は、ちゃんと撃退できたろうか？」

違和感を与えないように、相槌を打ったりして、出来るだけ彼らの言葉に同調を示すニコル。

勿論、そんなものは振りだ。内心ではまったく真逆のことを考えている。

(ステラさん、お父上とうまく話ができたのだろうか)

そうしてニコルが心配に思っている矢先のことだった。状況を誰かに訊こうと歩いていると、薄暗い通路の向こうでガヤガヤと人声が響き始めた。なまじ視覚があてにならないだけに、聴覚は過敏にそれに反応していた。

——なんだ？ 作戦中だというのに？

すると遠くから、ひとりのザフト兵が駆け寄って来た。緑服に身を包む管制官と思いき人物だ。男は息を切らし、性急な様子で云う。

「おつ、おい、聞いたか!？」

「何が!？」

管制官の男は、原則的に着用を義務付けられている緑の軍帽グリーンガリーを、右手にむしり取って

いた。

それで、ニコルは真つ先に只事ではないことを察した。指令室から彼は——いや、大勢の話し声が聞こえたということは、彼らは——よほど急いで出て来たのだ。「何かあったんですか……!?!」ニコルが尋ねた先に、返つて来たのは想像を絶する言葉で、

「——ザラ議長が殺された!」

ニコルは耳を疑い、それは左右にいる現役のザフト兵達も同じだった。

「『ヤキン・ドゥーエ』はもう終わりだ! あんたらも、早くずらかった方がいい!」

「ちよ、ちよつと待てよ! ザラ議長が殺された、つて……敵兵に!」

「他にいるかよ!」

怒鳴り声に、思わず萎縮する保安要員達。

「地球軍の女に射殺されたんだ——薄紅色ピンクのな!」

(ステラさんが、パトリック・ザラを殺した……!?!)

云つてから、いや、そんなはずは……! とかぶりを振る。確証などないが、ニコル

はそうして告げられた事実を、信じたくなかったのだ。

ザフト兵は、一気に青ざめた表情になっていた。

「議長が死んだなんて……! ザラ派の連中が黙つてねえよ……!」

「おつ、おれ違うよ! あいつらほどじゃない……!」

突然のこと。ザフト兵達は、ニコルには不明瞭な言葉で騒ぎ出した。

ニコルがそれを疑うより早く、管制官はそそくさと港口方面に逃げ出してしまった。これ以上の面倒ごとは勘弁してくれ、と云わんばかりに。

混乱に飲まれた武装兵ふたりも、釣られたように及び腰になっている。

「……」

ニコルは煮え切らない思いに駆られ、地を蹴った。ザフト兵を突き放すようにして跳び、「どこ行くんだよ!」と怒鳴られた。

とは云え、追いかけられはしなかった。一拍置いて振り返ると、そこにはもう彼らの姿はなかった。管制官達と同じように港口へ逃げることを選んだらしい。だが、賢明な判断だとニコルも思った。

——何が、起きてるんだ……?」

ニコルは異変を感じ、何が起きているのか真実を確かめに向かった。目指すのは指令室——大きく出遅れたとはいえ、ステラ達がまだそこにいる可能性は充分にある。

そうして道を進む途中で、スピーカーから緊急放送が鳴り響いた。

「自爆装置起動。爆発まで残り十二〇〇秒です——総員、すみやかに施設内より退去してください」

無機質、無感情の女性めいた人工音声だ。

ニコルはぎよつとした。

「自爆装置!?!」

なぜ、そんなものが「ヤキン・ドゥーエ」に仕掛けられているのか？

……いや、それだけではない。時を重ねるように明かされたパトリック・ザラの訃報——これらの悲劇が同時発生しているのは、決して偶然ではあるまい。

「なんだ……!?! いったい何に巻き込まれてるんだ、アスラン達は……!」

ニコルが少し開けた通路に出た途端、今の警報を聞き、パニックになったザフト兵達
が人波になって押し寄せて来た。

誰も彼もが、我先に出口へ——港口へと、ニコルの目指す方向と真逆に向かって邁進
している。施設の奥を目指す身としては、さながら人波が自分めがけて突進して来るよ
うにも映った。

「うっ!」

ニコルは慌てて細い通路に跳び、大勢の士官達が嵐のように通り過ぎるのを待った。

——ステラか、アスランを捜さなければ……!

特にステラは、異邦の服装に身を纏っている。どこかに紛れていれば、すぐに見つか
るはずだ。

やがて辺りが静まると、ニコルは再び大きな通路に出て先を急いだ。みずからの怪我

などどこ吹く風と云った様子で、ひたすら指令室を目指して、走り出したのだった。

「『ジェネシス』の発射シークエンスに、『ヤキン』の自爆が連動している——」

指令室の中で、その事実^に気付いたアスランは、悄然とした。

さつきから要塞の全域に人工音声が流れ出し、無機質で女性めいたその声は、二〇分後に訪れるであろう『ヤキン・ドゥーエ』の自爆をひっきりなしに警告していた。ステラにとってすれば、その警報は一応、ありがたいもののようにも思える——この警報^{アラート}を聞けば、内部にいた者達は軒並み、危機を察して逃げ出すだろう。

——バンツ！

安堵した手前、それは後方にいたアスランがコンソールを乱暴に叩きつけた音だった。

「どういふことだ……！ 『地球を撃つて戦争を終わらせる』——それが父上の望みだつたはずなのに」

アスランの疑念はもつともだ。

——なぜ『ジェネシス』の発射と同時に、『ヤキン』を自爆させる必要があるのか

……？

キーボードを叩きながら、アスランは疑心に駆られる。ステラは瞬時に声を返していた。

「ちがうよアスラン……！ これは、このひとの望みじゃない……！」

このとき、ステラは素早くキーボードに指を奔らせ、要塞の自爆シークエンスを解除しようとして行錯誤を繰り返していた。が、そうして様々な工程を進める内、彼女は「ヤキン」と「ジェネシス」を繋ぐ不自然な連動に、ある男の悪意を嗅ぎ取りつつあった。

用意周到に計算し尽くされた自爆プログラムの配置——巧妙に暗号化されたパスワード——たった二〇分という時間の中でシークエンスを解除・中断させるのは、誰であつても不可能に思えるレベルで構築された。

今でこそ時限式で稼働している自爆装置は、しかし、そもそも「ジェネシス」の第三射に連動して起爆するように設定されていたこと。

それらあらゆる事実に気付いたとき、ステラの脳裏にはつきりとラウ・ル・クルーゼの嘲笑する顔が浮かんだ。それはきつと、偶然なんかではないはずだ。

「これは、戦争を終わらせたくない人の望み——」

裏でこつそりと、仕掛けられた罠。

「父上は、誰かに踊らされていた……？」

驚愕に駆られたアスランは、いよいよキーボードを叩く手を止めてしまった。

結論から云えば、パトリック・ザラという男は、悪意ある者に操られた傀儡に過ぎない。復讐心に突き動かされるまま彼が地球を撃つたとき、彼もまた、滅びるように第三者によって仕組まれていたのだ。

アスランはいよいよ、打ちのめされた気分になる。父が思い描いた世界——地球を撃ち、ナチュラルを封殺することで手に入れる平和——そんなもの、やはり幻想に過ぎなかったのだ。必死になって「ジエネシス」を止めに来たステラ達こそが、正しかった。

——おれもまた、間違っていたんだ……。

そのときになって、ようやく気付く。

自分達はただ戦争を望む者達の掌で転がされ、戦争をさせられていただけだということ。

「おれは、馬鹿だ……！　今まで、何にも……ッ！」

血を吐くように紡いだその声は、涙声のように震えていた。

「おれが父上の祈りだというのなら、もっと早く気付くべきだった——」

「アスラン……」

「戻れぬところにまで行ってしまわれる前に、おれが父上を止めなきやならなかったん

だ……!」

打ちひしがれるアスランを見つめ、ステラ達の間にも、どれほどの沈黙が流れたろうか？

……いや、正確にはそう時間は経っていない。自爆タイマーがカウントダウンを刻み続けている以上、彼女達の立つ場所だって、いつ崩落を始めるか分からないのだ、呑気に時間を費やすだけの暇は、今の彼らになかった。

ステラがハツと心づいたとき、アスランはどこか不思議な目を浮かべていた。とても近くを見ているようで——ずっと遠くを見ているような目。やがて口元がわずかに動き、

「後始末は、オレがつける——」

ぼそり、とそう云った。並々ならぬ覚悟が、彼の目に灯っているように見えた。

アスランは出し抜けに踵を返し、稲妻のように指令室から出て行ってしまった。

(アスラン……!?)

そのときのステラは、アスランが急いで部屋を出た理由が、なんとなく分かる気がした。

自爆装置が作動している要塞は、できるだけ急いで脱出する必要がある。広すぎるヤキン・ドゥーエ”の中でも、指令室は最奥に位置しており、ステラ達は悠長に構えて

などいられないのだ。

この規模の要塞であれば、要人を逃がすための隠し通路のひとつやふたつ用意されていて不思議はないが——その要人が夭逝した今、その在処はステラには分からない。大人しく、来た道を引き返すしかない。

一分一秒を争う事態の中で、それは巨大な焦りを生む要因になるだろう。それと加えて、アスランが部屋を出していくとき残した言葉——その不明瞭さが、ステラにとって気分の悪いもので。

——アスランは、夭逝した父を見ようともしなかった。

「——まさか」

ステラが彼の意図に気付いたのは、そのときだ。慌てて後を追おうとした、次の瞬間

——ゴゴウツ！

指令室が、激震に揺れた。

「ヤキン・ドゥーエ」から、戦艦や脱出艇が次々と離脱してゆく。近隣で戦闘を行っ

ていた「エターナル」や「クサナギ」からも、その様子は垣間見ることができた。

事態を図りかねたラクスとバルトフェルドは互いの顔を見合わせ、改めて視線を向けた。要塞の港口からは、艦艇だけでなく「ジン」等のモビルスーツも続々と飛び立っており、中にはワイヤー線のようなケーブルを握っている機体も確認できる。そのケーブルには、船外作業服を身に着けたザフト兵が何人もしがみ付いており、ザフト兵達の必死になって逃げる様が、ひしひしと伝わって来るようだった。

(何が起こってる……!?)

バルトフェルドは当然のように疑問に思うが、どうやら、状況を掴めていないのは彼だけではないらしい。

現に「ヤキン・ドゥーエ」を守備しているザフト兵達——彼らもまた、この不可解な事態に動揺していた。兵団全体の迎撃が甘くなり、隙を見てこれを突破した「アークエンジェル」が、程なく「エターナル」の後方に追いついて来ていた。

「バルトフェルド艦長、これはいつたい……!」
「ヤキン」は放棄されるのですか……!?

合流するや、マリューもまた同じような疑惑を抱く。

只事ならぬ事態だが、だからこそなのかも知れない、バルトフェルドは努めて軽く返す。

「分からん、だが、中で相当な騒ぎがおつ始まつてるらしい」
根拠がないわけではない。

“ヤキン・ドゥーエ”はザフト軍の指令塔として機能し、一方では、少なからず收容所としての役割も果たす軍事拠点だ。機動兵器はともかく、ああも巨大な要塞に收容できるのは人——この戦闘で傷ついた怪我人などを搬入する、ある種の野戦病院のような側面を持つていて不思議ではない。

にも関わらず、内部の人間が——傷病者も含めて——形振り構わず脱出し始めたとなれば、中ではほどの緊急事態が起こったと判断するのが妥当だろう。そういう考察を行つていたから、バルトフェルドはこのとき、剽軽な口調ほどに陽気な顔はしていなかった。

「アマルファイ達からの連絡もない……。こいつは只事じゃないぞ」

「ええ？ ニコルくんが、あの中へ？」

「ステラお姉ちゃんも一緒だよ！」

「ええっ!?!」

付け足されたマユの言葉に、たじろいだのは“ストライク”だった。

——今のはキラの声だったような気がするが、なんでアイツが“ストライク”に乗つてるんだ？

咄嗟のことでバルトフェルドが訝しむが、状況が状況だけに、声に出しては触れなかった。

「ひとつだけ確かなのは、ザフトは撤退を始めたということですよ」

ラクスが毅然とした表情で云う。

——それにしても、あまりに不自然だ……。

地球軍は月基地や核攻撃隊を失い、旗艦や空母まで次々に撃沈され、既に潰走寸前の状態。現実的に見れば、ザフトの勝利は確定したも同然ではないか。

にも関わらず、このタイミングで「ヤキン・ドゥーエ」を放棄する必要が何処にあるのか？ 懸念していたのはラクスも同じだったが、そんなとき、ダコスタが安堵を顔に浮かべて云った。

「『ジェネシス』の指令室は「ヤキン」の中にあるんですよ？ それを放棄されるつ

てことは、もう地球が撃たれる心配はないってことですよ！」

「……そう簡単なら、いいのだがね……」

状況が分からないから——

彼らは要塞の外で、仲間達からの連絡を待ち続けた。

闇に近いブロック、非常灯がほのかに道を照らす通路を、アスランは移動していた。『ヤキン』の中は常に半重力帯に設定されているはずだが、まるで無重力のように身体がふわふわと浮いてしまう。となれば、設備に何かしら故障が出ている証拠だろう。

要塞全体が揺れている——まるで、地震のような揺れだ。

暗くて視界も悪いが、少なくとも、辺りに動くものの気配はない。このブロックにいたザフト兵は、ほとんど脱出したのだろうか。各所から濃い目の噴煙が流れ出して来ているから、余計に見通しが悪くなっているようだ。

「アスランー！」

ステラの声が、背後から追って来る。

重力があれば、おそらく立っていることも出来ないであろう震動の中——自分を追いかけて来たらしい。

アスランは唇を噛み締め、振り返った。追いつかれる前に、あくまで端的に云った。「要塞全体の空気が薄くなって来ている……きみはニコルと共に脱出しろ！」

云うと、ステラはそこで止まった。その顔には、驚きと不安が同量入り交ざった色が浮かんでいる。

——ニコル……!?

当惑するステラを尻目に、アスランは諭すように続ける。

「あいつは無事だ！ あの服だからな……ザフト兵に手当てをさせていたんだ」

あの服というのは、ザフト製の赤いスーツのことだろう。

アスランが、ニコルを助けてくれた……？ その事実を知り、意外に思ったステラである。しかし、なるほどパイロット・スーツにはそういう使い方もあるのかと、感心する方が強かった。

「でも、アスランは……!?!」

「おれも脱出するさ……！ いや、そうじゃないな……」

「え……?」

「おれのこととは、気にしなくていい……」

ステラは、唾然とした。視線の先には、ひとつの感情や決意に凝り固まって、今までとは違った意味で冷静さを損なっていそうなアスランの顔があった。

——その目に宿った危険な色を、ステラが見落とすと思うのだろうか……？

案の定、彼女はその色に気付いてしまったから、表情を硬くした。まさかとは思う——が、アスランは。

「アスラン？ アスランはひよつとして——」

「きみはもう、おれなんかに関わらないでいいんだ！」

その先を見透かされるのが怖くて、アスランはステラの声を遮るように、言葉を被せた。

「おれだって、もう、きみに迷惑をかけたくない……」

本心だった。

紛れもない、それはアスランの本心だった。

アスランは伏し目がちに、言いようのない遠い目を浮かべている。

（おれは、嘘が下手だから）

自分は目が口ほどに物を云う気質だから、きつと今何を考えているのかステラには筒抜けしていることだろう。

そして、気付いているからこそ、彼女は自分を引き留めようとしている。アスランにとって、確かにそれはありがたいことだ。妹が家族揃って、戦いのない世界で生きていたいと思っていることも、父の最後の言葉に従い、自分を幸せにしたい——いかせたくないと思ってくれていることも、このときアスランは全部分かっていた。

分かった上で、アスランはそれを振り払うしかなかった。だって、そうして自分に向けられた温情すら、今の彼には地雷であり、屈辱を与えるものでしかなかったから。

「もうこれ以上、おれを惨めにさせないでくれ……」

ステラには、頼もしい仲間がいる。ニコルやラクス、そしてキラ——それは彼女と志

を同じくし、彼女と共に戦つてくれた同盟軍の仲間達。圧倒的寡兵でありながらもこの戦争に抗い、自分の代わりに彼女のことを支えてくれた——そんな彼らと共にいれば、きっとこの先も大丈夫だ。

——そいつらに比べて、おれはどうだったろうか……。

妹を守ると云いながら、ずっと彼女の足を引き、心労と迷惑を与え続けた。挙句、勝手な理屈と正義を振りかざし、大勢の人間を闇雲に討つて来た、殺して来た。今になつて気付いて、来た道を振り返つた先にあつたのは、みずから手をかけて積み重ねて来た死屍累々だ。無論、戦争という現実の中で戦うことを強いられるのは兵士の宿命だ。そんな中でも無益な殺生を厭い、兵士であろうとしたステラと違い、アスランはただの破壊者だった。そんな自分が、何より許せなかつた。

——おれのような「破壊者」は、アイツと共にいる資格はない……！

そしてもう、生きている価値も……！

「そんなこと……！」

ステラは、喉奥から言葉を紡ごうとして、出来なかつた。

再び、要塞が激震に揺れたのだ。

あまりの震動にふたりは態勢を崩し、アスランがハツと心づいたときには、通路の壁はメキメキと嫌な崩壊音を響かせた。その音は壁面から天井に向かって迸り、よく見る

と隔壁ブロックの表面に亀裂を走らせているようだ。

「……………」

それを目敏く見つけてしまったばかりに、アスランは捨て台詞のように、矢継ぎ早に云った。

「きみは純粋で、綺麗な心を持っている。戦争なんて忘れて、しあわせになるんだ！」

「アスラン……………!？」

「その資格が、きみにはある……………」

「……………!?! 待ってっ!」

静止の声も聞かず、アスランはステラに背中を向けて駆け出した。

後を追おうと、ステラもまた前に出る。足を踏み出すや、目の前で天井が崩壊した。大きめに砕かれた瓦礫の山がステラの進路に崩れ落ち、彼女は衝撃の余波に後退せざるを得なかった。

「……………!?!」

床に激突した岩塊は凄まじい衝撃を発生させ、辺り一帯を濃い煙で包み込んだ。立ち込める噴煙が晴れたとき、ステラが辿ろうとした道は瓦礫で封鎖されていた。捜し求める兄の背中、その岩塊山の向こう側。

——アスラン……………!」

ステラは息を呑み、失調する。これも自爆シークエンスの影響なのか——退路を塞がれた以上、別の経路から迂回して港口を目指すしかない。

——止めなきや……っ！

そうまでしても、ステラはこの要塞から脱出しなければならぬし、何より、アスランを止めなければという強迫観念に突き動かされていたのだ。

瞬時にその道を諦めた彼女は、別の脱出ルートを捜すため、急ぎ踵を返した。

要塞内の自爆シークエンスは、それからも続いていた。至るところで大きな震動と凄まじい爆風が襲って来る——まるで少女を追いかけるかのように。

衝撃を避けつつ脱出経路を捜しているとき、ステラは周辺の哨戒も怠らなかつた。安堵すべきかどうか微妙ではあるが、どのブロックにも人影はない——やはり、すべての兵士が既に脱出しているようだ。そのとき憶えた圧倒的な孤独感は、不覚にも少女心に辛かった。しかし一拍遅れて、いや……とも思う。それが最善ではないか——既に明確な退路すら把握できない今、逃げ遅れた者がいるとすれば、それはステラだけであるべきだ。

ニコルについても安否が気になるが、こちらはあまり懸念はしない。アスランが云つたように、付き添いの兵がいるなら、深く心配する必要もないはずだ、少なくとも、それだけは信じたかった。

薄闇の廊下を進んでいると、ひとつの鉄扉を発見した。開放しようとノブに手をかけてみたものの、あまりの硬さに舌を巻いた。力づくで開けようとするれば、ゴウンツ！と嫌に大きい衝撃音だけが響くのだ——何度か粘つて見たものの、どうやら鋼板そのものが歪んでいるらしく、それはドアではなくただの壁になっていた。

「あかない……っ」

すぐに諦め、別の道を捜そうとする。

——そのときだった。

彼女は廊下の向こう側、暗闇に飲まれた空間の奥に、不自然な発光が浮かび上がるのを見た。

——いや、違う。

それは「発光」などではない、正確には、砲口に浮かぶ「発火炎」——

ステラが見たのは、真つ暗闇の中を流れる一筋の光——

暴力的なまでにその輝きを増しながら、少女に向かって飛来する。

(えっ)

反射的——ほぼ反射的に、ステラは壁を蹴っていた。

彼女から見て「右」——通路が細くなっている小路へ飛び込んだのだ。

——次の瞬間、世界が閃く。

視界が真っ白に塗りつぶされると同時に、彼女の立っていた地点が衝撃をもって爆破されていた。左方向より襲い来る爆風と激震——軽すぎる少女の体はその爆圧に押し飛ばされ、岩肌と鉱床が？き出しになった壁の窪みに激突して跳ね返った。

強く悲鳴を上げ、彼女がそれでも庇つてたのは、ヘルメットのバイザーだ。こればかりは破損させるわけにいかないという咄嗟の判断だったのだが——その感覚は正しいと云えた。

(……………！?)

痛みを堪えつつ、すぐに体勢を立て直すステラ。兵士としての勘が告げているのか、それとも危機察知能力が刺激されたのか、その手は本人の意思と無関係にホルスターの拳銃に伸びていた。彼女の精神はこのとき、既に対人戦・銃撃戦の用意をしていたのである。本人としても、それはまったく自覚のないことだったが。

——今のは、爆発？

——いやちがう、爆破の光！

おそらく、バズーカの類——遠くでパッと閃光が瞬いたあと、ステラのすぐ傍で火柱

が炸裂した。彼女は咄嗟に右に跳んでいたが、一秒でも遅れていれば、朱色い光渦に飲み込まれていたかも知れない。

——狙われている……でも、誰に!?

次の瞬間、場に銃声が響き渡った。短機関銃サブマシンガンが連射される轟音——ステラが逃れた通路の壁面、怒濤の銃弾が撃ち込まれ、幾つもの跳弾が火花となつて散った。

その輝きは、断続的に闇を照らす。無数の弾丸が、みずからを狙つてのものだと判断するのに、彼女はそう時間を必要としなかったが……

「キサマかあ！ 地球軍の侵入者というのは!？」

中年？ ——少なくとも、少年や青年ではない——の、男達の割れるような声が響く。

ステラが物陰から声の方角を視認する——と、そこには武装したザフト兵が並んでいた。緑色のパイロット・スーツに身を包む——数にして、四人近くいるだろうか？

……いや、暗くて見えないだけで、正確にはもつといるかも知れない。そのうちのひとり、肩掛け式の長大な射出筒を抱えており、たつた今噴進弾を撃ち込んで来た者で間違いなかった。

ステラは、絶望感に息を呑んだ。崩落中の要塞でバズーカを使うなど、彼らはいったい何を考えて——というより、正気なのだろうか……!? 一歩でも間違えば、彼らまで生き埋めになるかも知れないのに……!

それに……。

(……………)

ようやく、ステラは自分の手許に視線を落とした。そこで彼女は、初めて自分が拳銃を握り締めていることに気が付いた。

——いつの間に……？

そして、拳銃を握った手——それを覆っている自分のパイロット・スーツが、薄紅色のカラーリング・デザインをしていることも、同時に自覚した。だからこそ、なぜ自分が狙われているのか——素朴な疑問の答えに辿り着いてしまった。

彼らは、まさか。

「薄紅色の地球軍兵がア！」

「よくも……！……よくもザラ議長をおツ！」

男達の正体は、何かを知り、何かを勘繰った極右派。

要塞が自爆するのにも構わず、この危険地帯に居残り続けた復讐の鬼。

パトリック・ザラを、心より信奉していた者——

「逃がしはせん、逃がしはせんぞお！」

いわゆる「ザラ派」——

指導者を殺されたと知り、怒りや悲しみを、憎しみに昇華することしか出来なかった

者。怨嗟に満ちた言葉を吐き捨て、凄まじい闘志を露に、ステラの前に立ちはだる。「貴様だけは、絶対に生きて返さん!!」

——たとえ己が身が亡ぶとも、その者だけは道連れに。

闇の中から現れた。パトリック・ザラの亡霊が、少女の行く手を阻むのだった。

『ファイナル・ウェーブ』B

(そうか……！)

薄暗い通路を駆けながら、ニコルはずっと、己がザフト兵らの温情によって助けられた理由を考えていた。

思い浮かぶだけでも、要因はいくつかある。

まず「ヤキン・ドゥーエ」内部の指揮系統が麻痺していたこと。そして、自分達の外に全く別の侵入者が紛れ込んでいたことだ。

『侵入者は薄紅色のパイロット・スーツを着ている。地球連合製のヤツだ！ そいつが二人いるんだよ！』

この情報の混濁が、警備兵達の足並みを狂わせた。

つまり、警備の者は地球軍の「薄紅色」を警戒するあまり、ザフトの「赤」を着ていたニコルを疑う必然がなかったのだ。

(情報が正しく伝わってない以上、彼らは目で見えるものしか信じない。ここにいるザフト兵は、服装でしか敵を判断できていない！)

すべての警戒の眼は「薄紅色」に――

つまりは「それ」を着用している、ステラにこそ向けられている。

「ステラさんが、危ない……！」

だからニコルは、みずからの怪我を圧してでも要塞の内部を巡っている。

と、闇の中を進んでいるときはるか遠方から銃声が聞こえた。単発ではない。銃弾がばら撒かれるような、凄まじい大音響だ。

――急がなければ……！

ニコルは身体を翻す。確かな不安と焦燥を胸に、すぐさま銃声のする方角へと向かった。

このとき、フレイ・アルスターもまた闇に包まれた要塞内を移動していた。

非常電源に切り替わった通路は、薄く蛍光パネルが照らしているが、それが落ちているブロックもあるから、まさに闇の中である。タン、タン、とステップの要領で地を蹴るだけで、フレイの身体はふわりと浮いて、重心を前に傾けていけば、みるみる身体が加速していった。彼女自身、重力の薄い感覚に慣れていないわけではないが、六メートル

ル以上はある直線距離を、弧を描くようにひとつ跳び出来る。戦艦の廊下などは全力で駆け抜けるような機会もなかったし、云うほど広くも長くもなかったため、加速できるという感覚そのものが、初心に面白い感じがした。それは半重力帯の恩恵だった。

そうして廊下を駆け抜けていると、近隣から声が上がった。不遇なことに、通路を歩いていたザフト兵と鉢合わせしたのである。だが、その兵士達はパイロットスーツは着ていない——ただの制服だ。管制官だろうか。

「何者だ!？」

「——薄紅色だッ！ 殺せー！」

隔壁プロックの向こう側に、二名ほどの男達。怒鳴り声と共に拳銃の発砲声が響き、撃たれた！ という本能的な恐怖から、フレイは身を竦めていた。

放たれた銃弾がフレイの左腕を掠め、微量の血液が噴き出す。だが痛くはない——？ 傷口からはたしかに出血しているのに、ひよつとして、痛覚が鈍化しているのだろうか？

この「痛くない感覚」が、かえってフレイを冷静にさせた。一般的な話、実戦経験のない素人は痛みを感じるとパニックを引き起こすものであるが、それとは裏腹に、彼女はすぐに拳銃を構え、逆撃の姿勢を取った。

(当たれ！)

そして、ほとんどマニュアル通りの対処法を行って銃撃を返す。鳴り響く、二発の銃声！ その直後、二名のザフト兵は射撃に斃れ、力なく地に伏せた。

——え……っ!?

軍人としての射撃訓練や教育を、全く受けていないわけではなかった。

だが、大西洋連邦内におけるフレイの待遇は、やはり特別だ。アズラエルの職権乱用により、彼女のような生体CPUは、正規試験を通過せずとも、モビルスーツ戦において一定以上の成績さえ残すことが出来るなら「少尉」としての階級を許される立場にあったのだ。

であるから、生身での格闘能力、あるいは射撃能力に関して云えば、彼女は付け焼刃の素人と同レベルだ。つまりは何が云いたいのか、たった今フレイが冷静に対処して敵兵を撃ち倒すことができたのは偶然であり、シンプルに運が良かっただけだ。それはおそらく、本人も認めるところであり、だからこそ彼女は今、驚いたのだ。

(ふたりだけ……！ よかった！)

大勢に囲まれようものなら、彼女にそれらを跳ね返す反撃力はあるはずもなかったが——いち早く、指令室から踵を返したのが正解だったらしい。彼女は特に追撃されるようなこともなく、まして障害に阻まれることもなく、それからは脱出経路を辿ることができた。

——と、そのとき下の階層から、男達の梟雄な声が響くのが耳に入った。

雄叫び。それと同時に機銃が斉射される音が響き、ザフトの追手が、今は全く別の方向に向いていることを把握した。彼女は途端に失笑とも、侮蔑とも取れる表情になり、

(薄紅色か——やっぱり、地球軍の女がやったってこと自体はバレてるのね)

実のところ、管制室に君臨してたパトリック・ザラ——彼を拳銃で射殺したのは、フレイである。

だが、そんな彼女も今はザフトの追手を免れて、悠々と脱出路に就いている。

(でも残念、薄紅色はもうひとりいるのよ)

——即席で閃いたにしては、なかなかに上出来な作戦ではなからうか。

フレイは、地球軍の薄紅色のスーツに身を包むステラ・ルーシェの姿を思い返した。どうしようもなく無力だった頃の自分に、強化人間としての人生を与えてくれた少女。フレイにとって彼女は、伝承に馳せる『反存在』ドッベルゲンガさながらの投影像だった。自分の影に出遭った者には絶対的な死期が迫っているとも伝えられているが、実際に玉響の命しか持たない生きる屍リビングデッドから見れば、あながち間違った逸話でもないのかも知れない。

このことを逆手に取って、フレイは、ステラのことをみずからの替え玉ダミーとして利用していた。とどのつまり、ステラを餌として活用していたのである。勿論、それはステラ

が「自分と似たような色のスーツを着ている」という知識があったから出来たことであり、だからこそ、フレイは運がいいのである。

——あの娘には、身代わりになつてもらわなくっちゃ……！

父親を戦争で亡くしたあの日から、フレイの中には「どんなものでも利用する」という気概があつた。みずからの目的を果たすためなら、友情も信頼も切り捨ててきたし、肉体や良心すら悪魔に売ることも厭わなかつた。

展望どおりに結果がついて来なかつたことも多々あれど、他人を踏み台にすることなど今に始めたわけでもない。彼女は自分にとって有利な結末以外は望んでいないし、求めてもないのだ。

そんな自分が、もとより優良な人間だとも考えていながつたようだが、個人として戦争を生き抜くために、彼女はそういう生き方を選ぶしかなかつたとも云える。

(コーデイネイターなんて云つたつて、超能力者^{エスパー}じゃない。とんだ間抜けな集団よ)

瞬かない星の海。

鎮まらない命の光。

出口が、見えた。

……！

(あの娘なら生き延びられるでしょう？ あの娘だつて、コーデイネイターじゃない

唾棄しながら、フレイは宇宙空間に身を躍らせた。なかば乗り捨てる形で岩肌に待機させていた「デストロイ」のкокピッドへ滑み、シートについた彼女は、改めて己の胸を撫で下ろす。

——敵軍の指導者は殺した。

暗殺に成功した今、彼女が考えることはひとつしかなかった。彼女や彼女の同胞達にとつて大切な故郷——母なる地球を守り抜くこと。

自然の中に生まれ出でた者としての矜持。まるで役に立ってくれない同胞達への苛立ちすらも糧に、彼女は誓う。コーデイネイターが造り出した大量殺戮兵器——「ジェネシス」による無差別攻撃を止めなければならぬ。アレが地球に向けて、死の光を放つ前に。

——破壊しなきゃ……。

——これは、そのための「力」だもの。

そのためならば、たとえ自分の命を擲つても構わない。

——どのみちこれは、そう長く持たないのだから。

彼女は密かに決意を固め、最大推力で「ジェネシス」へ飛び立っていった。

ニコルが駆け付けた先は、おおよそ人員が退避した後の空虚とは思えない——戦場だった。無数の銃火が飛び交い、廊下の向こう側から、情け容赦のない銃弾の雨が飛んでくるような。

その中でニコルがザフト兵ではなく、ステラ・ルーシエと先に合流できたのは、せめてもの幸いだっただろう。

「ステラさんっ！」

「——！ ニコル！」

物陰に潜み、敵を牽制しながら射撃戦を繰り返している少女を、ニコルは捉えた。

すぐ傍まで駆け寄ったニコルへ、少女は一驚したあとパツと晴れるような笑顔を見せた。が、その花の咲くような笑顔は戦場には似合っていないし、もつと別の場所で見かけたものだとなicolは思った。

「ニコル、無事だった……!?!」

「僕のこととは……!?! それより、これはいったいどういう状況じょうきょうです?」

ここに至るまで、ニコルはある程度の状況を把握したつもりだった。

喧しいほどの銃撃音を響かせているのは大勢のザフト兵で、ステラは一斉に命を狙われている。

「ザラ議長が撃たれたというのは！」

「ステラじゃない！……でも……っ」

「貴方が、狙われている——」

会話をしている間にも、ザフト兵からの攻撃は止まらなかった。敵の凶弾が床や壁に跳ね返れば、それが火花のように散って、闇を照らした。

接近を許していないか、ニコルと話す中でも、ステラは絶えず遮蔽物の陰から外の様子を伺っている。そんな彼女が手許で弾倉を交換しているのを見たものだから、ニコルは「あつ」と我に返ったようにして、手に握っていたものを差し出した。

「サブマシンガンです！ ハンドガンよりは役に立ちます——弾薬庫からくすねてきました」

差し出された短機関銃に、ステラはきよとんとした。それはニコルの配慮だった——ステラなら扱えるんじゃないか、という。

実際、その短機関銃はここまで弾薬の消耗が激しく、さらに拳銃しか持っていないなかったステラにとって、有難さこの上ないものであった。受け取ったステラがセツティングを行っている間、ニコルは彼女と場所を入れ替えるように外に牽制射撃を放った。その連射のいずれかが、運よくザフト兵に直撃し、ひとり撃ち斃す。

が、ザフト兵からの攻撃は止まらない。それどころか同志を撃たれ、更なる憎しみに

突き動かされたように乱射される銃火。集中する射線を、ニコルはやはり遮蔽物に身を隠してやり過ぎすしかなかった。——いつたい、何が彼らをここまで突き動かしているというのか……？ 考えたとき、ニコルは口内に云っていた。

（ザラ議長を撃つたのはこの娘じゃない——もうひとりの侵入者で、薄紅色のパイロット・スーツを着ている人間なんだ……！ なのに、ボクはさつき『ステラさんが議長を殺した』と考えた。この誤解の仕方は、この娘を狙う十分な動機になる）

ということは、ザフト兵には何を云ったところで無駄だろう。

ニコルは意を固め、毅然として云った。

「急いで脱出しましょう！ 手伝います、殿は任せて下さい！」

「それはダメ！」

迷いのない拒絶に、そのときのニコルは唾然としたという。

そう叫んだステラの剣幕はただならぬ気配があつたのだが、そんな彼女は軽く——本当に軽い感じで、淡泊に続けたのだ。

「ステラのことはいいいから、ニコルは先に脱出して！」

「なッ——」

ニコルは愕然とする。己の命を軽視するような発言を、どうしてこの娘は、こうも平然と吐けてしまうのだろうか——!?

怒りを持って反論しようとしたニコルの言葉を、ステラは封じる。彼女は先の発言の意図——どうしてもそうしなければならぬ理由を、信頼する彼に向けて続けた。

「アスランが——！」

「……………えっ……………？」

「ニコルには、アスランを止めて欲しいから！」

ハツとするニコルに向けて、懇願するように、縋るようにステラは云った。

——今のアスランは、何をしでかすか分からない……………。

その男の行方を見失ってしまったステラだから、ニコルに頼んでいる。

「アスランを捜して！」

頼ってるから、信じてるから——今の自分には出来ないことを、お願いしているだけ。

真つすぐな思いで己を信じてくれる少女に、しかし、ニコルはやはり洗面を返すことしかできない。

「でっ、でも……………！ あなたをひとり、この場所に残すことなんて……………！」

闇の奥から撃ち込まれている砲火は激しさを増している。刻一刻と、敵の軍勢が迫っているきているのだ。

——たったひとりで、相手にできるはずがない……………！

ニコルがそれでも顔を向けると、視線の先の少女は唇を一の字に縛って、震わせて

いた。恐怖心がないわけではないのだろう——それでもやらなきゃいけないと思ってるから、彼女は紡いだ。

「——おねがい！ はやく！」

その表情は、殺し文句だ——

明らかに恐怖を圧している表情加減に何も云えなくなったニコルは、黙然として頷くしかなかった。

「……分かり、ました……！」

決然と顔を上げ、踵を返す。ニコルはその場から駆け去り、少女は、その背をもの惜し気な目で見送った。

実際のところ、ステラにはニコルが武器を補給しに来てくれた——いや、そうではないか——助けに来てくれたという事実だけで十分だった。復讐の鬼ではなく、仲間の——人の声に触れることができただけで、少し落ち着いた気分になる。自分は一人じゃない。圧倒的な孤独感からそんな風に解放されるだけで、まだ、もうすこしくらいは戦っていける気がしたのだ。

昔のように恐怖感覚が消え失せたわけではないにしろ、こんなところで死ぬわけにはいかない。

銃火が激しさを増し、銃撃の反響を追うようにザフト兵の怒声が響いた。ステラは与

えられた短機関銃を利き手に提げた。

「往生オーツ！」

(倒す……！ 絶対にここから出てやるんだ……！)

次の瞬間、目の色が変わった。

絶対に希望は捨てない——

彼女はまだ、何も諦めてはいないのだから。

アスラン・ザラは、今にも要塞から脱出する手前にあつた。既に出口は視界に捉えており、そこから身を出せば、近隣に乗り捨てた“ジャステイス”が片膝立って待っているはずだ。

底知れぬ後悔——それが彼の頭と胸を、一色に埋め尽くしていた。

戦争の中で、敵を殺して、殺し続けて、その結果として父パトリックは死んだ。殺された。

——仕方が、なかったのかも知れないな……。

父が奪つて来たものは、大勢の人間の命。ナチュラルのものとは云え、奪われれば必

ず泣く者のいるそれ——母を奪われた自分達が、激しく慟哭したときのように。

次第に好戦的になってゆく父を正しいと疑わず、妄信し、そんな彼の提唱する戦争に加担して行った自分も、また彼と同罪だ。アスランが戦争の中で手に掛けて来たものは、彼にとつての父や母や、妹も同然の存在——自分ではない誰かにとつての家族、かけがえのない大切な命だった。

なのにそのことにも気付かず、本気で「ナチュラルなど滅んでしまえ」と思っていた。自分に都合のいい言葉に乗っかり、聞き心地良い理屈に浸るばかりで、真実から目を背けて来た。

——おれは、おれたちは間違っていた。

いま、じきに自爆しようとしている「ヤキン・ドゥーエ」——

それと同時に発射される手筈の「ジェネシス」——
ふたつの連動が起こってしまえば、それは地球も「プラント」も関係ない——ナチュラルもコーディネイターも隔たりない——この世界にとつて甚大な被害を齎す惨劇を生むだろう。

『大きな光は、みんなを照らすから……！　いつか、明るくて優しい世界を実現したいから……！　みんなが平和に共存していける世界を夢見て、あなたはアスランに「夜明け」の名前をあげたんだ！』

混沌とした闇の世界に、いつしか太陽が昇る瞬間を願ってた。

そんな父の祈りの形が、夜明けの意を持つ自分アスランであるのなら、最後くらい、その責務は全うしなければならぬ。既に亡き父の本当の願いに、全身全霊で応えてやりたい——
——せめて、最後くらいは。

たとえ生命を賭してでも——『世界』のことは守ってやらなきゃならない……！

核爆発——その膨大なエネルギーによって照射される「ジェネシス」のレーザーは、絶望と死の光。鮮烈なる核爆発のために、もう二度と悲しむ者が生まれて来ないように。自分たちのように苦しみ、運命を狂わされる家族を作らないために。そんな世界を、実現させてやるために……！

「オレはもう迷わない——」

そうだ。これが正しい結末——正しい選択だ。アスランはもう、来た道を振り返ることとはしなかった。

——ステラは無事に脱出できたろうか？ ……いや、アイツならきつと大丈夫だ……。

気掛かりではあるが、彼女と共に行動することは出来ない。傍にいれば、アイツはきつと自分を止めるだろう。無垢な心と、純真な言葉で。

それでまた、自分は悩むだろう。それでは駄目だ——自分はこの戦場で、今までして

来たことの罪を償わなければならないのだから。

——だから、これで良いんだ……！

出口から身を乗り出したアスランは、*“ヤキン”*の表面部に片膝立つ *“ジャステイス”*へと乗り込んでいった。

——本当の容赦を忘れた強化人間のことは、甘く見ちゃいけないと思う……。

独白だが、そんなことをステラは考えながら、このとき自身に襲いかかって来るザフト兵達を撃滅させていた。半重力という環境を最大限に活かした立体的な機動で、床を壁を——あまつさえ天井を蹴ることもあつたらうか？ 戦士でありながら軽業師のような動きで、次々にザラ派の男達を蹴倒してゆく。心底、ニコルを行かせて良かった、と思った。本当に容赦を忘れて暴れ狂う自分の姿など、知己に見せられたものではない、と思つたからだ。

獣のように荒い声を上げ、少女は女豹さながらの獰猛さと俊敏さでザフト兵を薙ぎ倒していく。頭を蹴り飛ばすか、連射を撃ち込むか、あるいは反利き手にグリップした短刀で斬り付けるか——

「ウツ、ウワア!？」

そんな彼女に圧倒されていくコーデイネイターの小集団は、そもそも自爆寸前の要塞にみずから残ることを選んでいる。交渉や弁明の通ずる相手ではないし、なまじ命を捨てる覚悟が出来ているから、何を云っても退いてくれないだろうことは明らかだ。

そこで問題になったのは、だからと云つて、ステラにも殺されてやる気がなかった、ということか？ ザフト兵が退けないのと同じように、ステラもまた自分の命は譲れないという闘志があつて、だからこそ、両者が衝突するのは必然と云えた。

そしてその結果、技量で劣るザフト兵が次々に敗残していくのも、また必然と云えた。しかし、それにだつて限界はある。

「おのれエー、小娘風情がーッ！」

ひとりを相手取る毎に、蓄積されていく緊張と疲労。戦闘における高揚や興奮にも打ち勝つてしまうほどの孤独感、閉塞感。違法薬物によつて精神を強化されていた頃ならば、感じることもなかったはずの恐怖心。様々な要因を含め——無数の不快感が邪魔をする。

だからこそ、ステラはこのとき純粋な狂戦士となり得ることが出来なかつた。あるいはそれは、尋常な人間となつた今日において、決して辿り着くことの出来ない境地なのかも知れないが。

「近寄るなーッ！」

叫び、射撃して、さらなるザフト兵を撃ち斃す。

いったい、残りは何人なのか？ 既に十人以上は倒したのか、それともまだ五人も倒していないのか？ それすらステラは判らなくなっていた。

だが、それでも数は減らしたはずだ。というより、そうでないと困るのだ。

「はア——はア——！」

「よくもオ……よくもザラ議長をオオッ！」

それでも、闇の奥から現れる刺客達——

——わたしじゃ、ない……！

叫びたいが、叫んだところでどうにかなる問題でもない気づいてしまえば、叫ぶ気にもならなかった。

「ザラ議長こそ我々コーディネイターを導く、唯一正しき御方だった！ それを、貴様ごときにイイーツ！」

「どいてっ！」

「グアハッ!?!」

片づけた——!?!

やがて周辺に動く者の気配を感じ取れなくなった暁に、ステラは機銃を降ろしていた。息を荒げ、やはり出口を捜そうと、歩き出した。

——何人、殺した……！ 何人、殺さなきゃならなかった……！！

——戦いたくなんて、なかったのに！

要塞全体の震動は、さらに強くなつて来ている。まるで地震だ——この場所が崩壊する前に、急ぎ脱出しなければならぬ。

ステラは後方に残した来た者達に若干の躊躇いを抱きながらも、それでも前に向かって歩き出した。後少し——後少しのはずだと、自分に云い聞かせながら。

しかし——

「——待てエツ！」

通路の影から、それは現れた。彼女の後方に位置している「十」字路——闇の奥深くに、その最後の男はずつと身を隠していたらしい。虎視眈々と、絶好の反撃の機会を伺うために。

ステラは、まるで気が付いていなかった。その男に、怒鳴られるまでは。

しまった、と云っている時間もない。急ぎ対応しようと振り返るも、遅すぎた。男の放った銃弾は少女の右腿を貫き、これを食い破っていた。

「アアウツ!!」

獣のような悲鳴を上げ、ステラはその場に倒れた。男はすかさず連射しようとするも、弾詰まりを起こしたのか、舌打ったあとナイフを抜き放つて少女に肉迫しようとし

た。

死の足音が近づく。男は愉悅を顔に浮かべながら、

「ハハッ！ ザラ議長の仇を！ ——ンッ?！」

そのとき十字路の「右」から、突風? ——いや、爆風だ。

近隣の自爆装置のひとつが爆発し、闇の奥から閃光、光！ 噴煙と衝撃波が突き抜けて来る。

「ウー！ ウツワ……!?!」

それは十字路の「央」に立つ男に伸びるように荒れ狂い、ステラの目の前で、ちっぽけなその人間を呑み込んだ。

「ギヤアアッ!」

男の姿は、爆煙に包まれて見えなくなつた。

紡がれていた断末魔も、聞こえなくなつた。息絶えたのか、ふたりの距離が開きすぎただけなのかは、知つたことではなかつた。

「——いッ……!」

ステラは傷口を抑え、溢れ出る血を止めようとした。が、それはただ血液の付着するスーツの表面積を増やしただけだった。

——止まない……!」

灼けるような痛みには耐え、ひとまず気密シートを張り付ける。治療にはならないが、応急処置にはなる、と考えたのだ。

それでも、ステラは立っしかなかった。立ち上がり、跛行しながら出口を捜す。

その道中、最初に仕掛けて来た男のランチャーが床に転がっているのを目に入れたものだから、これを拾い上げ、薄そうな隔壁に向かって構えた。

ランチャーが、放出される。爆撃が、ブロックの壁面を撃ち抜いた。

と、その反動で全身の筋肉が震えた。ブシュツ！ 圧力を逃がす場を捜し求めた体内の血流は、抜け穴になっている右腿に辿り着いて、傷口から大きく噴き出した。激痛が走った。

「うッ………！」

隔壁ブロックに風穴が開くと、そこは坑道に繋がっていた。

その坑道の先にあるのは、〃ヤキン・ドゥーエ〃の表面部^{いわはだ}だった。

ステラが辿り着けそうな岩肌からかなり南に寄ったところでは、〃グレイドル〃と〃ブリツツ〃が乗り捨てられている。

そのうちの黒い機体には、ニコルが辿り着いていた。そんな彼は、このときひとり

あつたから、内部でアスランを発見することが出来なかつたことを物語っていた。
「いつたい、どこへ？」

OSを起動させ、ディスプレイを見たニコルは、機械の手を借りて「ジャステイス」の行方を追つた。乗り捨てられているはずの岩肌に、既にその機影はない。

とすると、どこかに飛び立ってしまったのか……？

そのとき、コンピュータが反応を捉えていた。リフターを背負つた深紅の機体は、巨大なミラー、すなわち「ジェネシス」に向かつて離脱を始めていたのである。

ハツとしたニコルは、急ぎ「ブリッツ」を発進させた。咄嗟に「ミラージュコロイド」ステルスを展開させたのは、邪魔者に道を阻まれないようにするためだった。ニコルは懸命に「ジャステイス」の後を追う。このとき熱を噴かしていたから、光学迷彩が役に立っているとは云えないのだが、気休めにはなつた。

通信の届く範囲まで追いつくと、その光学迷彩を解いて、改めて回線を開く。

「アスラン！」

「ニコル!?! ——なぜきみが!」

アスランから明瞭な声が返つて来る。

ニコルは彼からの問答には付き合わず、自分達の都合を優先した。

「何をするつもりですか、アスラン!?!」

↑——決まっている！—— “ジェネシス” 内部で、 “ジャスティス” を核爆発させる……！ ↓

既に決めたことだ——

そう訴えんばかりの同僚の眼に、迷いはなかった。迷いはなかったからこそ、ニコルはその言葉に絶句した。

——アスランは、死ぬ気だ……！

深紅と漆黒の機体——

“ジャスティス” と “ブリッツ” は、それからも “ジェネシス” に向かって並進した。

爆撃の痕の目立つ “ヤキン・ドゥーエ” の表面を添うように流れ、ステラは “クレイドル” めがけて地を蹴った。慣性のまま “クレイドル” の角に飛びついた後、装甲に身体を回し、コクピッドまで転がり込む。

シートに着座し、ハッチを閉じて気密を行った。備え付けの医療具で傷口を手当てし、ヘルメットを乱雑に脱ぎ捨てると、金の髪が暴れたので手櫛ですいた。

「『ジャステイス』は……。『ブリッツ』は……!?」

手許のレーダーが、かろうじて『ブリッツ』の熱門を捉えている。

ニコルは『ジェネシス』の方角に向かったらしい。そこに、アスランがいるのだろうか？

ステラはすぐさまOSを立ち上げ、機体を発進させた。スラスターを点火させ、直ちに『ブリッツ』の後を追おうとしたのだが――

――ガシャアン！

突き上げるような衝撃――と、装甲同士が衝突し軋む音。

コックピット全体が激震し、ステラは愕然と驚きに目を開いた。背後から、何らかの強大な力に捕縛されたのだ。

慌てて振り返った先に、モビルアーマーらしき異形の鉤爪が映る。『イージス』と同形態のモビルアーマー。漆黒の闇色に彩られた巨大なる鋼鉄の獣――

へハツハツハ！ 金髪ちゃんめがア！

接触回線から響き渡る、不気味な男の哄笑――いつかの男だ！

――『リジエネイト』……！

しかし、今のステラは、それどころではない。

「キサマ……!!」

〈掴んだぞッ！〉

ステラは、怒った。直ちに両腕のドラグーンを解き放ち、自律するビーム砲による狙撃を行う。『リジエネレイト』はこれらのビーム攻撃を躲してみせたが、激しい回避運動のためにモビルアーマー形態を解くしかない。

それによつて捕縛から逃れた『クレイドル』は、しかし、次の瞬間には『リジエネレイト』に背を向けて『ジエネシス』の方角へ向かった。現れた闖入者を全力で無視するかのよう——オマエなど眼中にないとても云わんばかりに。

「!? どこ行くんだよオ、オラアーツ!」

アツシユは顔を紅潮させ、喚いた。即座に『リジエネレイト』を高速航行形態へ変態させ、鼻先に放たれるドラグーン攻撃にも構わず、バーニアを全開にする。

——逃げるのかよ! 逃がすものかよ!

ステラが何を意図して『ジエネシス』を目指そうとしているのか、そんなものはアツシユの知ったところではない。だが、自分という存在を無視した罪は決して消えない! 「ドラグーンを差し向けておけば、このオレが足止め喰らうとも思ったのかア!」

屈辱感に、アツシユは再び『クレイドル』への突撃を敢行した。

圧倒的巨軀でありながらも、速力において『クレイドル』を凌駕する『リジエネレイト』の高速巡航形態は、そうしてステラの後背に肉薄し、これを捕らえんと四脚を押し

開いた。

けれども、流石に同じ轍を踏むステラではない。彼女はすんでのところまで機体を反転させ、この零距离攻撃を回避した。

——こいつ、邪魔ばっかり！

以前にも同じことを考えただろうか？ やはり「リジエネレイト」には段階的な可変機構が備わり、速力の土俵において「クレイドル」が勝てる相手ではないらしい。

——倒さなきゃ、いけない……！

しかし、一度でもそう判断した場合、ステラは頭を切り替えるのが早い方だった。元よりステラは、かの男が生理的に嫌いなのだ。

「なんで、そんな顔ができる……！」

〈ああん？〉

「なんでそんなに、愉しそうに戦争ができるんだ！」

ステラは叫び、通信機からは愉悦に満ちた声が返る。

〈ああ、うれしいねエ！ オレはずっと待ちわびてたんだ、この手でテメエを引き裂ける、

この瞬間をよオ！〉

「ひとが死んでいく……！ いっぱい、死んでいくんだよっ！」

今、ステラ達が繰り広げているのは、あくまで個人同士の衝突に過ぎないのだろう。

しかし、その傍らでは艦隊戦が繰り広げられ、今も大勢の命が消えている。戦場を彩る爆発と光芒のひとつひとつが、人の命の最後の輝きによるものだ。ナチュラルもコイデイナーも関係ない——戦に敗れ、無念の想いで黄泉へ旅立ってゆく者達の断末魔の叫びだ。何十、何百と咲き誇るその光の中にいて、それでもこの男は、何ひとつ感じないというのか！

〈それがどうした！ より多くを殺すことが、オレの使命だと云った！ そのオレを躍起にさせたのは、テメエだろうがア！〉

その言葉を聞いた途端、ステラの中で、何かが弾けていた。肉体が爆発的に反応し、精神は暴力的に沸騰する——

白い機体は背の六枚の翼を広げ、バーニアを全開にする。白銀の“クレイドル”は一陣の疾風となり、全速力で“リジエネライト”に突貫する。その光景は、さながら白翅の天使が、邪悪な魔獣へ立ち向かう絵図にも見えるが——

「邪魔だと云ったんだ！ 戦場ではしゃぐヤツは！」

〈命は散るからこそ美しいんだろう？ —— ああん？ そうだろうがッ！〉

「命は光だ——！」

アツシユは愉悦に満ちた表情を浮かべながら、半人半虫のような強襲形態へ“リジエネライト”を変態させる。ようやく正面から突撃してきた“クレイドル”を迎撃し、次

の瞬間、おおよそ三倍ほどに全長差のある二機が、互いに剣戟を交わした。

けれども、そのとき「クレイドル」が振るつたふたつの斬撃は、ほとんど怒りに任せ
て繰り出された無造作なものだ。直情的で、短絡的——あまりに鋭気を損ない過ぎてい
る。このような攻撃を受けるアツシユではなく、ステラが繰り出した斬撃は、目標を捉
えられずに空を切った。

えげつない笑みを浮かべながら、アツシユが反撃の格闘戦に転じた。両腕に備えられ
たロング・ビームサーベルを躍らせ、この刃渡りに対して為す術のない「クレイドル」
の両腕が、肩口から切り裂かれて宙を舞う！

——はずだった。

繰り出された両掌の斬撃は、しかし、突如として空間に割り込んできたドラグーン・
シールドに阻まれていた。自律する「盾」は宙域に浮かびながら、それ単体で「リジエ
ネレイト」の斬撃をずらしてみせた。

両腕を封殺され、巨大な「リジエネレイト」の体躯が無防備に浮いた。その隙を逃さ
ず——反撃をやり過ぎした「クレイドル」が双剣で斬りかかる逆撃に転じる。二挺の
ビーム・ジャベリンを奔らせ、振り抜かれた刃が「リジエネレイト」の頭部を、腕部を、
脚部を次々と断ち、とどめに胸部を穿つ！

だが、アツシユの反応もまた早い。彼は咄嗟に原子炉閉鎖ボタンに手を伸ばし、核工

ンジンの誤爆を防いだ——が、それだけだ。全身を切り裂かれた“リジエネレイト”のボディは、文字通り手も足も出せずに、ステラを前に爆砕される。

(——!?)

しかし、パイロットは無事である。なぜなら“リジエネレイト”のコクピッドは、背囊のコア・ユニットに備えられているから。人型の交換パーツが爆散するが、この余波に巻き込まれるより前に、アツシユはコア・ユニットで戦線を離脱していた。

——くそッ、憶えてやがれ……!

一切の通信を切断しながら、アツシユは強かに毒づく。

これで終わりにはしない。機体は損ねてしまったが、なんてことはないのだ。このまま軍本部へ帰投し、新たな予備パーツとドッキングを行えば、自分は何度だって蘇ることができる。

(まだ戦える——まだ殺せる! 何度だって再生して、テメエの邪魔をしてやるからなア!)

怨恨と復讐に息を巻くアツシユであったが、結論から云うと、彼が生還することはあり得なかった。ステラがこのとき、既にコア・ユニットまでの距離を詰めていたから。

グワッ! として白い悪魔がアツシユの視界に大写しになり、アツシユは驚きと慄きに立ち上がる。まさか——!

〈生きてるから——『あした』があるから輝くんだ!〉

「なあ——ツ!？」

〈おまえは闇に帰れーツ!〉

——生き延びることも許さない。

そう訴えんばかりの激しさと冷たさを持った声が、アツシユの耳に突き通る。

振り抜いたビーム・ジャベリンが、コア・ユニットを貫いた。爆発の炎が内部でパツと明るく膨張し、ついで竜巻のように、誘爆の光は行き場を求めて狭い空間を駆け抜ける。息も出来ぬほどの高温に包まれ、アツシユは絶叫した。

（死ぬのかよお! おれア、ここで死ぬのかよおーツ!?)

——待つてくれ! まだなんだ! まだオレは、殺し足りない!

男の目に浮かんだのは、突如として訪れた『死』の感覚に対する、理不尽な激情だった。——まだあの小娘を、この手で引き裂けていないのに! なんでオレが死ななきやならないんだ!?

——オレはまだ、死にたくない……

「うッ! うアアアアアアアアッ!？」

コア・ユニットが爆散する。無数の破片が周囲に飛び散り、そのいずれもが、宇宙という名の闇に流れていく。

やがて目の前の光芒が消え、しかしながら、ステラの周りでは、相も変わらず同じような光が美しくも宇宙を照らし続けていた。

『ファイナル・ウエーブ』C

C. E. 71年8月15日――

プラント最終防衛ライン“ヤキン・ドゥーエ”宙域において繰り広げられた、地球軍とZ・A・F・T.による大規模戦闘。地球軍の指導者はブルーコスモスの盟主にして、実質的に地球連合全軍の指導権を握っていたマルチ・アズラエル氏。対するザフトは“プラント”最高評議会議長であるパトリック・ザラが全部隊の指揮を執っていた。

地球軍の核ミサイルと、ザフト軍の誇る巨大ガンマ線レーザー砲“ジエネシス”の使用によって、混沌と混乱へと陥る戦場。

三隻（“アークエンジェル”、“クサナギ”、“エターナル”）同盟を結んだ者達は、既に亡きオーブの獅子ウズミ・ナラ・アスハの遺志を継ぎ、第三勢力としてその戦闘に介入。当代において異例の戦闘力を発揮したMS“フリーダム”と“クレイドル”――それを駆るパイロット、キラ・ヤマトとステラ・ルーシェが出撃した。

人々が灰になって散る光輝、モビルスーツの爆発が鮮やかに彩る星屑の戦場。“ヤキン・ドゥーエ”と“ジエネシス”という巨大な二つの要塞を目の前に多くの砲火が飛び

交い、戦士の誰一人として緊張を解けぬ最終決戦は、かつての戦闘のどれよりも異様で邪悪な空気を醸し出していた。

その戦闘に——いや、この長かった戦争の歴史に、終局が近づいていた。

止め処ない戦火に巻き込まれ、失われた命は数知れない。生き残った者も、あるいは生かされた者も、誰もが戦争という無残の底で“分水嶺”に直面し、これ乗り越えて来た。

科学を求める研究者達の狂気ゆえに生み出され、苦悩しながらも、生まれた意味を捜す者——

母国の指導者に裏切られ、理想を捨て、現実を強く生きていくと心に決めた者——

麗しい未来を捨ててまで、器と魂を悪魔に売り払い、魔道に堕ちた者——

その中には、みずからが修羅と化すことで、強大な力を渴望した者もいる。

アスラン・ザラ——「ブランド」最高評議会議長を父に持ち、一方で、三隻同盟の最高戦力とも目される「グレイドル」のパイロットを妹に持つ、コーディネイターである。

血のバレンタインにおいて家族を失った悲しみから剣を取り、もう二度と同じ過ちを繰り返すまいと力を求めた。脆弱な自分を厭い、父のために狂奔し、結果として妹と道を違えてなお、信じる覇道を貫いた。

——ナチュラルを滅ぼせば戦争は終わると、信じていた。それが過ちであると気付かされたとき、彼を襲った心労と後悔は底知れぬものになった。

重ねて来た蛮行の数々に絶望した彼は、このとき『ヤキン・ドウエ』を飛び出して『ジエネシス』へ向かっていた。界限では激しい艦隊戦が行われ、幾多もの光条が漆黒の宇宙を切り刻む。

そんな空域を、深紅と漆黒のモビルスーツが、二機、直往していた。

「何をするつもりですか、アスラン!？」

ニコル・アマルフィとアスラン・ザラ。

始まりは同じ場所だった。士官学校の門を潜ったあの瞬間、二人は同じ場所——同じ世界を夢見て力を身に着け、苦楽を共にした。いつか戦争のない平和な時代を実現するため、自身らの力を役立てることを夢見て——。

あのときから、ニコルの中には変わらない、ひとつの確信がある。

少なくともアスランは、戦争によって家族を奪われ、そんなアスランが『戦争のない世界』を切望していたのは本心であり、そこに嘘偽りはないだろうという確信が。

——でも、今だけはアスランが分からない……! !

彼の目は何を映し、その心は何を為そうとしているのか。

懸命に通信回線を開いて問い質すが、アスランからの返答は想像を絶するものだった。

↑——『ジエネシス』の内部で、『ジャステイス』を核爆発させる↓

へ、と云うあまりにも人間的な、驚愕の声がニコルから漏れた。

——アスランを止めて!

己の身を盾にしても、要塞から自分を先に脱出させてくれたステラ。彼女があのと
き何を危惧し、何を懸念していたのか——そして自分に何を託したのかを、ニコルはそ
のとき、正確に悟ったという。

——アスランは、死ぬ気だ……! !

その危険な色を、誰よりも人の目を真つすぐに見る彼女は一瞬で見抜いた。ニコルは
即座にアスランに云った。

「だ、ダメだ! アスラン、それは! !」

↑外部から『ジエネシス』を破壊するのは不可能だ! 内部から爆散させるしかない——

↓

たしかに、アスランの云う通りだ。『ジエネシス』は、その規格と装甲の強度ゆえに

絶大な防御力を誇り、陽電子破城砲すらも易々と跳ね返すほどである。

そんなものを、どのように破壊するのか？ このことを考え出したとき、導き出せる答えなど、精々ひとつくらいしかない。

〈それが出来るのは「ジャステイス」だけだ！〉

核分裂融合炉を搭載した「ジャステイス」なら、原子炉の操作ひとつで、核弾頭の爆発に匹敵する規模の熱量を発生させることができる。

——その熱量を「ジェネシス」内部で炸裂させれば、確かに……。

つまりアスランは、自分の手で「ジェネシス」を破壊しようというのだ。みずからの愛機を自爆させると共に、今まで覇道を信じて疑って来なかつた自分自身に引導を渡すために。

「アスラン！」

息つく間もなく、アスランは「ジェネシス」に迫って行つた。まずは第一次反射ミラー、尖塔状になっている発射装置の基部に機体を巡らせ、内部に侵入できる経路を捜してゆく——と、円盤状に形成された第二次反射ミラーの裏手に、巨大な工業用ハッチがあつた。非戦闘時において、大型の整備艇などの出入りに使用される倉口だ。

作戦時には閉ざされているのが通例だが、どういうわけか、このときハッチはぱつくりと口を開けて、アスラン達のことを待っていた。

(……?)

開いたままで放置されていた工業用ハッチであるが、地球軍に爆撃されたり、こじ開けられたような形跡は見受けられない。少なくとも、外部からの攻撃で開いたものではないらしい。

とすると、この開き方は——内部から？ いや、そうだ——何らかの要請があつて、このハッチはあらかじめ開放されたままになつていたので。

この理解の仕方が、アスランの疑念を打ち払う。彼は巨大な顎口を開ける工業用ハッチに「ジャステイス」ごと飛び込み、中にあつた艦艇用の広大な港と、もつとも狭いシャフトの中へ機体を滑らしてゆく。いよいよ危険を感知したニコルが、後方から声を荒げるにも構わず。

「そんなことをしたら、あなたは！」

「きみは戻れ！ きみにはやつてもらいたいことがある——」

モニターに映り込むアスランは凝然として、その表情には、怯懦や動揺と云つた曇りは窺えない。

「きみには、これから先もステラを守ってもらいたい！」

「聞きません！ ボクには、あなたを止める責任がある！」

「駄目だ！」

ニコルの言葉を無視し、アスランは咄嗟に機体背囊の“フアトウム—〇〇”をパージする。慣性によって漂うだけの残骸。既にそれと化した“ジャステイス”のリフターは、全速力で航行していた“ブリッツ”と真正面から激突し、これの行く手を阻む。モビルスーツが一機、ようやく通れるほどの広さしかないシャフトの中で、そのリフターはニコルにとって重すぎる“壁”となった。

「アスラン——！」

“ブリッツ”との距離が離れていく——

それを認めたアスランは自嘲的に、すこしだけ無理に笑って見せる。

——そうだ、これでいい。

誰ひとり。ニコルすら巻き込んではいならない——“ジェネシス”は、自分ひとりで片づけるべきなんだ。

——だから、これでいい……。

まるで自分を云い含めるかのような口調。何度も口内に反芻しながら、アスランは“ジェネシス”の中枢部まで“ジャステイス”を邁進させていく。

そして結論から云えば、この行動が後のアスランを死ぬほど後悔させることになる——

指令塔を失ったザフト軍——

それと同様に、指導者を亡くした地球軍——

両軍による最後の戦いは、もはや、引き際を見損なつた者達の暴力の場と化していた。端的に云い表すならば、何もかもが八つ当たりで折りなされる戦闘。みずからと異なる者を排斥せんとする敵意——欲望のまま他者を虐げようという悪意——ブレーキを失つた人間の感情が増長し、この戦いを、より悲惨な様相へと貶めていた。

そんな混沌とした戦場にあつて、傷だらけの姿でなお、現存している三隻の戦艦がある——「アークエンジェル」「クサナギ」「エターナル」だ。彼らは何を以て戦いを終わらせることができるのか、どうしたらこの戦争を終わらせることができるのか——と、祈り、悩みながらも……懸命に戦い、生き残っていた。

そんな折、「エターナル」のオペレータが声を上げる。

「た、たつたいま、「クレイドル」の熱紋を確認しました！」「ジェネシス」に向かった模様！……えっ、何のために？」

混乱している戦況化にあつて、咄嗟の友軍機の行動を図りかねているオペレータであるが、それを聞いたバルトフェルドは問い質す。

「パイロットから連絡は?!」

「ありません！」

「どうなってる！ アマルファイ達からの連絡がなければ、こちらでも戦況が把握できない！」

そんなとき、ブリッジのモニターに映像が灯る。 “ストライク” からの通信だ。

〈僕が行きます！〉

「キラ……!?!」

モニターに映る少年は、どこか切迫したような面持ちで叫んでいる。

〈嫌な予感がするんです！ ぼくがステラを助けに行きます！〉

「馬鹿を云うな！」

バルトフェルドは、いきなり怒鳴った。

「今ここでオマエまで離れたら、三隻おれたちが持たない！」

〈でもっ！〉

バルトフェルドの言葉は、いま、彼らの置かれている状況を正しく捉えている。

現状、指針を失った地球軍とザフト、両軍からの攻撃は不思議と激しさを増している。統率もなく、見境もなく、ひたすら戦闘行動に明け暮れる烏合の『敵』を前にして、三隻がこうも僅かな戦力で生き残っていられるのは、やはり “ストライク” がいてくれるからだ。キラは限りあるバッテリーを最大限に節約しながら、両軍から繰り出される猛

攻から「エターナル」達を守ってくれた。

そんなキラが直掩から外れるとなれば、その穴はバルトフェルド達にとつて痛手どころではなくなる。勿論、それによつて直掩のMSが皆無になるわけではないが、M1隊の援護だけでは限界がある——これはそういう判断の下に発された言葉だ。「イージス」も「ルージユ」も大破した今、それは忌避するべき事態なのだ。

既に充分ジリ貧な状態まで追い詰められて、苛立っていたのもある。だが、バルトフェルドが怒鳴るのは当然と云えた。しかし、ラクスは云つた。

「いえ、許可します！ キラは「クレイドル」と「ブリッツ」の援護に向かつて下さい」
 「ラクス……!?!」

「……は私達だけで持ち堪えます、だから！」

凜とした言葉には、決死の覚悟がある。バルトフェルドは僅かに不服な顔を残したが、声に出しては何も続かなかつた、それはラクスを前に折れた証拠だつた。

ラクスはせき立てるようにキラに告げる。

「キラ、どうかあの子を……ステラを！ 守ってあげてください……！」

「……！ わかつた……！」

祈りの声を受け、キラは「ストライク」の機体を返した。

キラの向かつた先には、ある種「牢獄」のようにも見える——「ジェネシス」の巨影

があつた。

そのころアスランは「ジェネシス」の基部らしき空間に出ていた。「ブリッツ」の追尾を振り切つた彼は、「ジェネシス」の中枢——γ線レーザー砲のエネルギーを生み出す、巨大なカートリッジ内にやって来たのだ。

——ここが「ジェネシス」の中枢……。

そつと胸を撫で下ろし、縦にも横にも、想像よりも遥かに広大な「ジェネシス」内部を見渡す。なるほど、中から見ると「ジェネシス」はこんな構造になっているのか——と、どこか子供っぽい感慨がアスランの胸を裡を流れる。

——さあ、ついにここまでやって来た。

「ジェネシス」内部は、円筒上に拡がった下腹部と、円錐状に尖っている上腹部の二段構造になっている。

下腹部の基底——円筒の中央には「大樹」のような巨大な励起装置が聳え立ち、それが遮蔽物になって、円筒状というよりは円環状に近い構造になっている。周辺にはリフレクターを囲むような小柱が幾条と立ち並び、円環の壁面には、数か所として爆圧を逃がす「穴」が確保されている——大小それぞれ規格はあるが、たつた今アスランが飛び

出して来たのと同じシャフトである。

アスランが飛び出した場所は、ちょうど中枢の基底部に位置していた。裏手から侵入して来たのだから当然だが——中央の柱が視野を占めるせいで、空間的に狭窄な印象を受ける。

「十二分を切った」

手許の計器類に視線を落とし、呟く。視線の先では、たった今『12min』と記されたタイマーが、カウンントを刻んでいる。

“ヤキン・ドゥーエ”の自爆タイマーだ。アスランは、要塞が自爆するまでの制限時間を記録し、前もって“ジャステイス”の中に送信していたのだ。このタイマーが『0』^{ゼロ}を刻んだ瞬間、“ヤキン・ドゥーエ”は自爆し“ジェネシス”は死の光を放つ。アスランはいつぞ冷徹にも見える褪めた表情で、アーム部のボタンを押す。スライドされて来たテンキーに、今度は“ジャステイス”の自爆パスコードを入力し始めた。

——大丈夫。間違っていない。

みんなが離れてくれればいい……そんな願いのもと、アスランは“ジャステイス”の自爆タイマーを時限一杯に設定し、起動させた。“ジャステイス”の自爆は、ほとんど“ジェネシス”が発射されると同時のタイミングだ。これにより、外界への被害は最小限に抑えられるはずだ。

装置を起動させた以上、もう後戻りは出来ない。パスコードの入力を終えた途端、アスランは何もかも諦めたように全身の力を抜いた。

そんな彼の耳元、まさにそこへ、声が響くとは。

〈アスラン——！〉

「……！ ニコル……!?!」

アスランは愕然として、シャフトから飛び出して来た漆黒の機体を見遣る。

〈ダメだ！ アスラン！〉

「っ……!?!」

〈あなたは、いつもそうだ！ ひとりで突っ走って、周りが見えなくて……！〉

真摯な口調で怒鳴りつける——悪意からではなく、善意から。

——ニコルは、いつもそうだ……。

彼はいつも、人のためになることしかやろうとしない。しかし、今回ばかりはアスランも譲れない。

「ニコル、おれはキミに戻れと云った！ おれは最後まで、この世界の役に立ちたい

……！」

〈それは……あなたがアスランだからですか……?〉

「ああ——ああ、そうさ！ おれはアスラン・ザラだ。父上から光の名を……『暁』の名

を貰ったその息子だ！」

どこか失調したように、紡ぐ。

「なのにおれは、そんな両親の祈りにも気付かないで、この世界を真つ黒にした！ 引っかけ廻したんだ！ 戦争のない世界を望んでいながら、自分から戦争をして……！」

せめてもの償いに、もう終わらせたいんだ……。

懇願にも似た響きを持ったアスランの言葉に、ニコルの胸がずきりと痛む。しかし、アスランの性格をよく知るニコルなら、このような返答が来ることは想定内だったに違いない。

へアスラン、ステラさんは、以前こう云ってました——夜明けの太陽を支えるのが、星の役割だって！ だからアスランを支えてあげることが、自分がやるべきことなんだって！

！

↓

普段のニコルからは想像もつかない語気の強さに、アスランが気圧されていたのは事実だった。

へあの子は、どうすればあなたの『力』になってやれるのか悩んでた！ ザフトに居た頃から、そして、あなたと敵対してからも、ずっと——

因果なものだ。彼女のことをずっと近く見て来たニコルには、それがじつに分かる。ふたりで無人島に遭難したとき、ステラは心を許し、そして自分に打ち明けてくれた。

ステラという名が『星』の由来から来ていること——
アスランという名が『暁』の意味を持つていること——

だからこそステラは、アスランを止めようと自分を遣ったのだ。絶望したアスランがすべての責任を投げ、死に急ぐことは、きつと彼の為にならないと信じて。

「あなただを心配してくれていたんだ！ そんな彼女の気持ちまで振り切つて、他に何を償おうつて云うんです！」

「ニコル……！」

「帰らなきやいけないんですよ、みんなで！ 戦争のない世界が欲しいなら、そのために生きていかなきやならないんだ！」

それぞれの「夢」を——果たすためにも。

「未来のことを考えるのは、後からでもいい！ でも、考える時間を手に入れるためには、生き延びるしかないんです！ だったら、生きましょうよ！」

「っ……………!?!」

「これからのことは、それから考えましょうよっ！」

アスランの胸に、言葉の槍が突き刺さる。

「——罪を償うと云うのなら、世界のために生き抜いてみせろ！ 生きる方が、戦いだ、アスラン！」

「あなたには、彼女のところに帰る義務があるでしょうっ!」

ニコルが絶叫を上げた先、*“ジャステイス”* は完全に停止した。

二機の間には沈黙が流れ、やがて *“ブリッツ”* の通信機に、アスランの力ない声が入って来た。

〈お……おれは……〉

その声のか細さは、アスラン自身の迷い。

“ジャステイス” を自爆させること。それは本当にその場凌ぎの、平和のための悪足掻きでしかなかったのかも知れない。

——それでも、諦めたくなかった……。

誰かがやらなければ、地球は滅びてしまう。

そこに暮らしているナチュラルや、地上のコーデイネイターを道連れにして。

〈おれは、また過ちあやまを繰り返すかもしれない……。それでも……本当にそれでも〉

——良いというのか？

生きていても、良いというのか？

アスランの問いかけは、純粹に答えを求めてのものだった。自身の存在意義を見出すために、それを誰かに肯定して欲しくて、必死になっているようにも見えた。

「アスラン……!」

ニコルは、暖かな目を返す。

いいんですよと、心から応えようとした。

今度は、みんなが傍にいるのだから——と。

——その、瞬間だった。

ニコルの耳に、突如としてアラートが鳴り響いたのは。

——何が起きたのか、俄かには理解できなかった。ビーツ! という尋常ではない警報と共に、はるか上方より、幾多の閃光が降り注いで来たのだ。

勿論、それはアスランからの攻撃ではない。だからこそ反射的——ほとんど反射的に、ニコルは迫り来る光条の雨嵐に対応していた。

「艦砲射撃の“雨”——!?!」

口にしてから、ニコルが自分がおかしな発言をしていることを認識する。この狭い空間の中に、艦砲を備えたような大型艦がいるはずがないのだ。

だが、実際にそう勘繰っても仕方がないほどの熱量のビームが降って来ている？ 彼は「ブリッツ」の対ビームコーティングシールドを掲げさせ、それらの砲火を受け止めようとする。

それがどうした。次の瞬間、ビームの一射を受け止めた「ブリッツ」のシールドが爆散する。出力に耐え切れなかったのだろう。しかし、後悔している時間や悲鳴を上げている猶予などない——「雨」は止まない。

「うッ!?!」

三条、六条、九条——

嵐のように撃ち込まれ続ける大火力砲撃に、殺される！ と、生命の危機を悟ったニコル。しかし彼は、不思議と恐怖を実感していなかった。このときの彼は、何故？ 自分が攻撃されているのか？ もっと言えば、誰に攻撃されているのか？ 露程にも理解できていなかったから。

「あ——ッ!?!」

訳も分からないまま、無慈悲なる一射が、出し抜けに「ブリッツ」の胸を捉えようとしている。

——無理だ……っ！

何がとは云わない、だが、ニコルがそう直感するのは早かった。

「ニコル！」

次の瞬間「ブリッツ」を灼き尽くすはずだった白熱光は、しかし、矢のように割って入った「ジャステイス」のシールドに遮断されていた。驚くべきことに、アスランがニコルの盾——いや、傘になって躍り出てくれていたのだ。

「くア……ッ?!」

しかし、それも長く持たなかった。無理のある姿勢で「ブリッツ」を庇ったためか、打ちどころが悪かったらしい、「ジャステイス」のシールドは掲げた腕ごと根から飛んで、宙を舞った。

一拍置いて、凄まじい誘爆——「ジャステイス」は炎に呑み込まれた。

「……?! アスラン！」

即座にアスランの安否を確かめるニコル。「ジャステイス」が煙の中から姿を見せたとき、機体の半身はごっそりと奪われていた。

「ああッ……！」

残されているのは、頭部と、かろうじて右半身だけだった。

電流と炎熱を全身から垂れ漏らしながら、その悲惨なこと甚だしい様相は、さながら体液を散らして悶えている傷病者と云った風だ。リフターもなく、ついに半身まで奪われた貧弱な姿は、文字通り「死にかけの騎士」と云ったところか——？

「アスラン、ご無事で!」

「なんだ!?! どこからの攻撃……!?!」

雨が止み、アスランが愕然とながら四方を見回す——と、遙か上方に得体の知れない
 “黒鉄の巨人”の機影を認めてしまう。

なぜ、これまで気づかなかつたのか? 頭部に角のようなアンテナを伸ばした“G”
 タイプ——全長にして、おおよそ通常MSの数倍はある……!?!

「——なっ……」

戦艦やモビルスーツの類ではない。それ自体がひとつの要塞——? いや、モビル
 アーマーと呼ぶべきか? 脚部がなく、腰下にかけてリアスカートを伸ばした
 人ではない異形。

一瞥しただけで分かる、全身に強固な装甲と陽電子リフレクターを備えた鉄壁の防衛
 力。一方で、無数の重火器を満載した破壊のための兵器。ひと目見たときに、アスラン
 は不思議と“そいつ”に見覚えがある気がした。

(ビクトリアで見た——。ステラの云っていた“デストロイ”とか云う……!)

そのときアスランは、その大型機種胸部部分にあるモビルスーツが格納されている
 のを認めてしまった。疑いようもなく、そいつはGAT-X444 “レムレース”——
 暗黒色の“亡霊”が、取り込まれるような形で“要塞”と融合しているのだ。

——あの少女か……!?

敵の正体を把握するも、特に意味はない。次の瞬間、大型機の腹部に備えられた砲口に、光の粒子が収束し始めたのだ。

収斂する光の粒子はわずかに数秒で臨界に達し、三つ並んだ砲口から凄まじい白熱光を迸らせる。アスランは対応が遅れた。いや——対応したところで、半壊した「ジャステイス」では、それを避けることもままならなかった。何よりアスランの背後には「ブリッツ」がいて、彼は、自分だけ避けるわけにはいかなかった——
(やられる!?)

万事休す、アスランが一足先に、死を覚悟した瞬間。

結局、碌な死に方は出来ないだろうと思っていた——それは、やつぱりだった。こうも惨めな最期を迎えるとは思いたくなかったが、所詮は運命ということだろう。アスランは、諦めに目を瞑った。

やがて訪れたのは、奇妙な静寂——

いや、その静寂を理解できるだけ、アスランは僥倖だった。

硬く瞑っていた、瞼を開ける——

——と、アスランの眼前に、白銀の“守護天使”が滞空していた。

歪曲した翼の白銀しろがねの輝きが、アスランの視界を占めていた。

両掌の五指を押し開き、腕を大きく左右に張り出しているその機体——“クレイドル”だ。周辺に翡翠色の光波アリユミューレリコムエール防御帯を展開し、“ジャステイス”と“ブリッツ”を含めた三機を温かな光の中に包み込んでいる。まるで“ゆりかご”——そうして張られたビーム状の防御膜が、果たして“魔人”の砲撃を跳ね返したのだ。

「——“クレイドル”……！」

目の前に顕現したモビルスーツに、アスランも目を見開く。

へふたりとも、無事!？」

少女から発せられた問いかけに、ニコルは強く頷いて返した。

それを見て、ステラの表情がわずかに綻ぶ。

しかし、すぐにチャンネルを切り替えたように険しい目つきになり、彼女は前を向いた。突けば崩れてしまいそうな双眸が、轟然と滞空する“黒鉄の魔人”を捉える。

へ……“デストロイ”……！」

その声は聞きなれない怒りに滲んで、余人には測り知れない因縁の重たさがあるように感じられた。

ニコルはその唐突な少女の変化に戸惑うが、何が彼女をそうさせているのか、きつと

彼には永遠に謎でしかない。

〈ニコル、アスランを回収して!〉

「えっ!?!」

〈アスランは機体を捨てて「ブリッツ」に乗って! ——「ジェネシス」から脱出しなくちゃ……〉

このとき、ステラが何をどう考えていたのかは定かではない。だが、目の前の「敵」と戦うには、明らかに部が悪いと判断していたのは間違いないだろう。「ジャステイス」は大破し、一方の「ブリッツ」も戦闘力は無いに等しい。

——せめて、まだ動く「ブリッツ」で脱出するしかない……。

しかし、アスランは説明して返す。

「しかし……!」
「ジャステイス」の自爆装置はもう作動しているんだ、機体だけ置いてはいけない!」

〈だいじょうぶ。あれが狙ったのは「ジャステイス」じゃない——〉
その意味の繋がらない言葉に、アスランは戸惑った。

「えっ……?」

〈いや、いいんだ、そんなことは〉

付け足された言葉は、声になっていなかった。

わずかに唇が動くか動かないか。いずれにしろ、ステラが何を云おうとしたのかは、アスランには分からなかった。

「——急いで！」

「わっ、わかりました……！　アスラン、早く！」

「……わかった……！」

何はともあれ、この場合はステラの言葉に従うしかない。たしかにステラは発言が謎めいていたり、他人からすれば全く脈略がない、意味の繋がらないものに思える場面は少なくないが、もともとの無口な性格を考えれば、出任せな言葉を吐き散らすタイプではないとも分かつている。

意を決したアスランは「ジャステイス」を放棄し、コクピットから脱してニコルの「ブリッツ」に飛び移った。と、今度は「ブリッツ」に向かつて「デストロイ」のエネルギー砲が吐き出された。光渦はアスラン達の行動を阻害せんとばかりに突き進み、閃光がぱつと生身のアスランを真白く照らす。

「うっ!？」

が、やはり「クレイドル」がカバーに入り、砲火がアスラン達に届く前に、これをシールドで弾き飛ばす。そこでようやく、ステラが攻勢に転じる。「クレイドル」の両盾を解き放ち、放たれた二挺の砲塔が、自律運動しながらビームの反撃を飛ばしたのだ。

しかし、それらの反撃もまた、ことごとくが目標に届く前に虹色の膜に拡散させられ、陽電子リフレクターに弾かれてしまう。

逆撃とばかりに、今度は「デストロイ」の両腕が飛び出した。こちらも似たよう『飛び交う両盾』——「シユトウルム・ファウスト」だ。五指の先端に内蔵されたスプリッドガンが炎を噴き、「クレイドル」に錐揉むような巨大ビーム砲を浴びせかける。「クレイドル」は機体を上下反転させ、野太い十本条のビームを目まぐるしく回避していった。

「ステラさん!？」

苛烈を極めた攻防を目の当たりにし、ニコルが声を上げた。

↑——先行つて!↓

その叫びに従うままに、ニコルは「ブリッツ」をシャフトに向かわせる。

そのとき、ふたたび「シユトウルム・ファウスト」が「クレイドル」に砲火を放った。全方位防衛帯がこの一撃を弾き返すが、続けざま「デストロイ」顔面部部のエネルギー砲が臨界し、連続するように防衛帯へ覆い被さる。

しかし、だからどうしたというのだ。

少なくともステラは、その「デストロイ」機体スペック——その全容を掌握している。傲りでもなければ過信でもない、それが真実なのだ。

かつて“それ”の乗り手であった彼女は、“デストロイ”に搭載された武装の数、その威力、そして、その対策の取り方まで――

(わかっているんだ……！)

体勢を立て直し切れない“グレイドル”を、なおも巨大な“シュトウルム・ファウス”が追い詰める。

だが、ステラは怯えるというよりはむしろ、

〈その武器は……っ！〉

挑戦的な面持ちで、これを迎え撃つ。

そもそも、一見する“デストロイ”は鉄壁の盾に覆われた攻略不能の巨人であるように見受けられるが、そのじつ全身を防御している陽電子リフレクターはビームサーベルに無力という弱点があつて、なまじ機体が大型化された弊害により、機動力のあるMSなどに接近されると死角が増え、対応するにも時間が掛かる。

つまり、全体で見ると対近接防御能力にあまりに乏しく、弱点があまりにも弱点として機能してしまっている。的は大きく、動きも鈍い――初見の者なら見抜くのに時間が掛かるであろう欠陥だが、ステラには通じない。

――その武器は、近接戦に対応できない……！

だから距離を開くのではなく、ステラはむしろビームジャベリンを抜き放ち、果敢に

も逆突撃を仕掛けていた。

白銀の翼が燐光を散らし、巨大な“掌”に向かってステラは躍りかかる。

巨大な“シウトウルム・ファウスト”を両断しに掛かった！ 次の瞬間——“掌”が開くまでは。

〈えっ〉

わずか、数秒のことだった。

ステラの捉えた“掌”の中に、見たこともない紅色の結晶。まるで“シウトルウム・ファウスト”の掌底に、巨大な紅玉^{ルビー}が埋め込まれているかのような……？

破断兵器“フエブリス・フォルフェクス”——“フエゴ・ストライカー”に用いられた格闘戦武装を移植したものだ。特殊な反発材を圧縮して造られた掌底基部は、接触部位から直接振動を送り込む『共震破砕』を用いて、ありとあらゆる物体を破断する。このとき“紅玉”のように赤く輝いて見えたのは、基部そのものが振動により高熱化しているためだった、が……

いずれにせよ、ステラの想像には及ばないことだった。

〈!?!〉

——あんな武器、知らない……!?!

動揺がステラに隙を作らせ、その瞬間“クレイドル”は“シウトウルム・ファウスト

“の掌底に殴り飛ばされた。

強烈なる、殴打の直撃！ 咄嗟に展開した光波防御帯は役割をまるで果たさず、ステラは機体ごと勢いよく壁面に叩きつけられた。

「ステラ!？」

アスランとニコルが、ほとんど同時に悲痛な声を上げる。

——何故だ……!？

掌底との衝突を許したステラだが、彼女は確かに光波防御帯を展開した筈だ。それによつて打撃の勢いを殺し、衝撃を緩和できるはずだった。

しかし、彼女が展開していた光波防御帯は、例の掌底に詰め込まれた“紅玉”と接触した途端に破断され、薄氷のように叩き割られてしまった。為す術もなく、アリュミューレ・リュミエール”を打ち破られたステラは、しかし、その感触に嫌というほど心当たりがあった。

(ラミネート製……! あの“紅玉”も……!?)

共震破砕を引き起こす掌底基部の紅玉は、云うなればGAT-X370レイダーが装備していた破砕球の上位兵装である。

接触部位から直接的にMSの装甲を削り取る性質を持ち、これはビームを用いた攻撃と違い、純粹な物理攻撃に分類される。そして、これまでは『無敵の盾』と思われて来

た アリユミユール・リユミエール 全方位光波防御帯も、最近ではラミネート製の実体剣、よろしく特殊鋼材を含んだ物理攻撃に脆弱という弱点が明るみになっている。

だからこそ、光波防御帯は“掌”を前にして意図も容易く無効化され、薄氷のように叩き割られてしまった——

↑——逃げてッ！↓

云われて初めて、ニコルは気付いた。その頃には、すでに“デストロイ”の本体が“ブリッツ”をポイントしていることに。

そのときアスラン達は、敵“巨人”の口部エネルギー砲に皓い光が満ちていくのを認めた。ニコルは慌てて機体を後退させ、シャフトの中に逃げ込む。放射されたエネルギーの収束砲はシャフトの中に逃げ込んだ“ブリッツ”を捉えきれず、付近の壁に直撃し、これを一撃で崩落させた。

それが、ニコル達の不幸であった。幾多の瓦礫が、シャフトの出口を塞いだのだ。“ブリッツ”は進路——いや中枢への道を絶たれ、“クレイドル”が内部に取り残されてしまう。

「閉め出された!?!」

「そんな!」

ステラもまた同様に、そのことに気付いてしまった。

(出口が……！)

もつとも、そちらに気を取られている暇はない。

ステラが何かを察知して前方に目を戻したとき、今度は“シュトゥルム・ファウスト”が猛スピードで突撃して来ていた。メインモニターの中、急速に大きくなる“掌”に、彼女はぎよつと目をむいた。

〈うわっ!?!〉

慌てて機体を壁面から引き剥がし、バーニアを逆噴射させた。急下降していく“クレイドル”に対し、巨大なる“掌”はその下降スピードを追い切れず、勢いのまま壁面に激突。一拍おいて、これを爆砕した。

圧倒的なまでの破壊の力は、内壁に亀裂を迸らせ、たった一撃のもとに“ジェネシス”を激震させた。衝撃の余波により、粉々に砕かれた瓦礫がデブリとなつて四方に散る。少しでも反応が遅れていれば、あのデブリの中に自分がいたかも知れない……！

〈……………！〉

その様子を見届けたステラは、ゾツとするしかない。

桁違いに増幅されている“デストロイ”の破壊力だが——それに関して、ステラは“デストロイ”に比類ないパワーを供給している“源泉”の正体に気付く。

——コア・ユニットとして、胸部に格納されている“レムレース”だ。

なるほど、核動力炉を搭載したMSをまるごとバッテリーとして機能させることで、もとより凶悪な“デストロイ”にさらなるエネルギー供給を行っている。ニュートロエンジン、たしかにあれだけの力があれば“デストロイ”の総合火力を底上げし、欠点でもあつた電力制限の問題を克服することも可能だろう。

そのほかにも、本来の仕様にはなかつた対近接防御兵器の用意——これにより“デストロイ”本来の弱点であつた対近接戦闘の脆弱さをカバーしている。油断しながら迂闊に接近した暁には、胸部に格納された“レムレース”本体がビームサーヴァーを出力し、これによる迎撃を受けることになるだろう。

おおよそ“エクソリア”の戦闘データを基に対策が練られたのだろうか、機体全体に明らかな改造——いや改良を施され、武装の威力も、機体性能も、ひいては対処方法すらも……既にステラの知っている“それ”ではなくなつていたので。

(よくも、強くなつた……っ)

苦々しい笑みが口元に浮かび、その表情からは、余裕の色が消し飛んでいた。

反対に、新たな——それでいて強大な“力”を手に入れた“デストロイ”は、歓喜とさらなる破壊衝動に突き動かされるように猛威を奮い続けた。“レムレース”の恩恵であるマルチロックオンシステムを起動させ、今度は全方位に向かつて砲撃を乱れ放つ。だが当てずっぽうではない——そのいずれもが、照準通りに幾多のシャフトに直撃

し、出入り口のすべてを崩落させてゆく。

〈……………〉

幾多の出口を封鎖され、このとき「グレイドル」は完全に孤立した。

いや、孤立ではない——正確に云うと、内部にいるのは「デストロイ」と彼女……そして、自爆装置を作動させている「ジャステイス」の残骸^{ぬけがた}。

ステラは、もはや逃げることもしなかった。出口を封鎖されたその途端、相手から強烈な思惟を感じ取り、〈……………〉何かに納得したように呟く。彼女は「デストロイ」の巨影を見上げ、挑むようにして云った。

〈おまえも、決着をつけたいのね……………?〉

目の前に佇むは「黒鉄の魔人」——

彼女の言葉は、きつと正しかった。

黒く、それでいて鈍い煌めきを放つ「デストロイ」その機体は、

『貴様が……………我……………の中にいないのだ——』

何かを訴えかけるように、ステラのことを見下している気がした。

中枢部への道を絶たれ、ニコル達は焦っていた。

だが何が出来るというわけでもない、*“トリケロス”*を破壊された時点で*“ブリッツ”*には武装が残されていないのだから、瓦礫を除去したり、破壊したりすることは不可能である。

唯一、彼らにできることと云えば、瓦礫の向こう側で戦っているステラに呼びかけを行うくらいだった。

「ステラさん！」

しかし、呼びかけへの返答は非情だ。

へはやくー！ はやく、*“ジエネシス”*から脱出してー！

その言葉にはノイズが交じって、すべては聞こえない。磁場の乱れの影響だろうか。

——— いったい、中でどんな戦いが起こってる……？

少女の発言は「そこにいたって、どのみち何もできないでしょ？」という本質的な判断に基づいたもの。相変わらず舌足らずなために、突き放すような云い方になっているが、ニコルにはわかってしまう。

だが、ニコルが云いたいのは、そういうことではない……そういうことではないのだ。へこいつを倒して、すぐに追いつく。だから！

「駄目だ！」

そこに、おそらくニコルよりも焦っているだろうアスランの声が被さる。

「キミがここに残るといふなら、おれだつて！」

すべての責任は、自分にある——

少なくとも、アスランはそう思っている。

——もし、初めから“レムレース”の存在に気付いていれば。

——もし、工業ハッチが解放している時点で不審がついていれば。

その迂闊さの尻拭いをさせるように、ステラにばかり迷惑をかけている。そんなことは許されないし、許されていいはずがない！

だが、ステラは云つた。

〈そこにいたつて、できることは何もない！ だったら外に出て、ひとりでも多く、みんなを避難させて！〉

ステラの言葉は、やはり正しい。

〈生きて！——アスランは……っ！〉

まるで結末を知る者であるかのように、力強く云つた。

アスランは意表を突かれて、声も出ない。

〈だいたいしようぶ。ステラも、すぐに行くから〉

「そんな……っ！」

「生きて、必ずここを出るから……」

できなかったこと、やり残したことがたくさんある。

まだ約束を果たせていないのに、こんな状態でここを離れたくはない——。それを聞いて、ニコルはハツとした。

——平和になったら、聴かせて欲しいな……。

自分のピアノを聴いてみたいと、彼女は云ってくれたことがある。

アスランとステラ、二人の中にある決定的な違い。同じ「ジエネシス」内部にあつても、すべてを投げ出し、生きることを放棄したアスランと異なり、彼女には生きることが望む強さがある。

——そんな彼女が、望んだことなら……。

せめてニコルは、信じてやるしかないのだ。彼女が云う通り、他にできることは何ひとつないのだから。

「わかりました……ッ」

「ニコル!?!」

「あなたの言葉、信じます……!」

「……クツ……!」

アスランも、ややあつて決意を固めたいらしい。この場所を離れる決意を。

アスランは量子通信を使って、ひとつのタイマーを“クレイドル”に送信した。ステラの手許のコンソールがこれを受信し、彼女はハツとする。

それは“ジェネシス”が発射されるまでの制限時間を記した、カウントダウンのタイマーだった。

「制限時間は八分、それ以上は持たないぞ！」

「…………… わかった！」

「必ず……………必ず生きて帰って来るんだ、頼む……………」

そうして“ブリッツ”は、辛くもその場から機体を返すのだった。

それもこれも、仕方のない判断だった。彼らがすべきことは、“ジェネシス”内部で仲間の勝利を祈ることではなく、いち早く“ジェネシス”から脱出し、付近で戦闘を続ける者達を回避させることだから。

——“エターナル”と連絡を取らなくては……………!

シヤフトを逆戻りした彼らは、そうして瞬かない星の海——“ジェネシス”の外側へと抜け出した。

それから母艦の位置を特定しようとししばらく進んでいたところで、赤い羽を広げた“ストライク”との合流を果たす。

「ニコル！」

「キラさん……!?!」

通信画面越しにキラの顔が映り込むと、どうしてツールが乗っていないのか……?

ニコルは一抹の不安を憶えた。けれど、一方で「ストライク」そのものが万全な状態に見えたから、そんな不安は杞憂に終わった。

反対に、ニコルを映し出す「ストライク」のモニターを見、キラは意外な同席者に困惑していた。ニコルの「ブリッツ」のコックピッドの中に、アスランの姿が映っていたのだ。

「アスラン!? どうして、そこに!」

問いかけに対し、しかし、アスランは目を伏せて答えなかった。

「状況はどうなってるの!?! ——ステラは?」

ニコルは思わず口籠り、その表情の暗澹さ加減のために、キラは何かを察してしまった。

「まさか……!」

「ステラさんは、『ジエネシス』の中です。中にいた黒いモビルスーツと、戦っています

——!」

キラには、その「黒いモビルスーツ」というのが、なんとなく判断できる気がした。

真偽はともかく、おそらくはフレイ・アルスターの機体だろう。今の今まで、彼女を

まったく戦域で見かけなかったのは、もしかしたら、初めから戦闘する気がなかったからではないだろうか……？

しかし、そんなことを考えているときではない。真実を告げられ、キラの怒りはアスランに向けられた。

「アスラン!?! きみは、ステラだけを置いて——!?!」

「——置いて来たんじゃないっ!」

その糾弾の激しさに対し、アスランも同じ激しさを以て返した。

「あいつが、それを望んでくれた——」

「なっ……」

「あいつが、生きろと云ってくれたんだ……」

キラの表情が、凍りついた。

それから、麻痺したように行動停止した“ストライク”であったが、すぐに我を取り戻し、叫ぶ。

「……! 助けに行く!」

ステラを守ると、約束した——だからキラは、行かなければならなかった。

ニコルの静止を振り切っても、彼は“ストライク”を“ジエネシス”に向かわせた。ビームライフルを基部ハッチに向け射撃しようとして、それが不可能であることに

気が付いた。

そのときビームライフルの出力が、まったく上がらなかったのである。

「なんだ!？」

次の瞬間、機体のバッテリーがゼロを指し、*“ストライク”*のPS装甲が脱落した。機体は生気を失ったように脱色され、ビームサーベルはおろか、ビームライフルすらも使用できなくなった。

キラは青ざめたが、そのことを認めたくなかった。

認めてしまったら、絶望してしまう気がしたからだ。

「エネルギーダウン!?! ……そんなっ!」

結論から云えば、それは仕方のないことである。GAT-X105 *“ストライク”*は従来の性能しか持たぬ機動兵器であり、そんな機体を駆使し、彼は今までずっと戦い続けて来たのだから。

当然、無理をさせれば機体のバッテリーは死期は近づき、エネルギーダウンを引き起こす。

もはや、何ができるわけもなかった。エネルギーダウンを引き起こした状態では、戦闘行為など不可能なばかりか、自力で母艦に帰投するのも怪しまれる。

「どうして……」打ち震えた声で、キラはもつとも原始的な疑問を叫んだ。

「どうして、ボクは『フリーダム』に乗っていないんだあーッ!?」

やがて、すべての機能を停止させた『ストライク』——

今この瞬間を以て、キラ・ヤマトは決戦に立ち会わせる『資格』を失ったのだ。

時を同じくして、『ジエネシス』内部——

立ちほだかる『黒鉄の魔人』——その操り手である少女が語った。

「戦いの空気に吞まれて、人がおかしくなってるみたい。考えることは、みんな一緒ね——」

「やっぱり、あなたも機体を使って『ジエネシス』を破壊するつもりだったんだ」

そのために、『レムレース』はアスランが脱出したあと、『ジャステイス』を狙おうとしなかった。彼女が狙っていたのはアスラン・ザラであって、機体ではなかったのだ。

「もう後がない——そう云えば、あなたなら理解してくれるのかしら?」

「……………」

「自分の身を挺してでも、お兄さんを守り抜く——美しい話ね」

これと向き合う側の少女は、与太話には付き合わなかった。

右手にビームジャベリンを抜き放ち、戦闘態勢に臨んだのだ。

「御託はいいよ。決着をつけよう——」

「……そうね、話が早いわ……」

その瞬間、呼応するかのように「魔人」の胸部に格納された「レムレース」が、ビームサーヴァーを抜き放つ。

少女達の傍らには、自爆装置を作動させた「ジャステイス」の抜け殻がある。螺旋のように複雑に絡まり合った因縁が、いま、決着を付けようとしていた。

——運命を分かť、最後の決戦が始まる……。

そしてその戦いは、まるで「必要のないもの」だということ。それは人類の未来を賭けたものでもなければ、地球の存亡を賭けたものでもない。

ただ、個人が個人に決着をつけるため、挑み、開かれただけの。

まるで「小さな戦い」であるということ、ここに追記しておく。

制限時間は『八分間』——「クレイドル」と「デストロイ・レムレース」の、最後の戦いが始まった。

『星に願いを』 A

生物学上、すべての生命は自己愛を根源としており、それは人間にしても同様である。故に、他人の幸福のためなら自分が不幸になつてもいい、などという自己犠牲的な発想は、深層心理上は偽善であり欺瞞であるとされ、その実態は他人に評価されたい名譽欲の顕れ、もしくは自分を善人と信じ込んでいたい自己陶醉の一種ではないかと考えられている。

つまり、自己犠牲によつていくら自分を蔑ろにしようが、当人がそうすることで自尊心をくすぐつているのであれば、それは結局のところ他人への愛ではなく、自分への愛。要するに自己愛に帰結しているのではないか、とする見解が示されているのだ。

勿論、例外という例外は存在するのだろう。現実には本当に高潔な——少なくとも、世間一般にはそう看做されている——自己犠牲が古今東西、家族愛や殉愛などの様々な形で散見されているのも事実であるからだ。そして、それらの全ての行いが、欺瞞や偽善とは程遠い、勇敢で尊い英雄的行為として後世に讃えられてきたことも。

——では、そもそも前提が違つている人間がいたとしたら、その者はどちらに見解さ

れるのだろうか？

そもそも自己愛ではなく、徹底的な自己否定や自己嫌悪が根底にある人物の場合。端的に云えば、自分のことが大嫌いで、自分自身を許容することのできない人間。そのようなケースは当然に特殊であるし、改めて考えたと褒められた人格でもないのだが、そうした自己否定の上に生きている人間がいることも、また事実なのだ。

——たとえばそれは、ステラ・ルーシエという、特殊な出生をした少女。

彼女の中に息づいている自己嫌悪——その中で最も表面的だったのは、彼女が己の容姿にまったく関心を示さなかった一面だ。

嗚呼、陳腐な云い方をすれば、彼女は疑いなく美少女だった。柔らかな金髪に、華奢で小柄な体躯。これに幼子のような性格や物腰が相まって、さながら妖精めいた魅力を放つ。

にも関わらず、当人だけが、その可憐なる美貌に一切の自覚がない。増長とまでは云わないにせよ、生まれて此の方、自分が可愛いなどは想像を働かせたことのない無知と慎み深さがそこにはあつたのだ。かつてムウ・ラ・フラガが個人的に彼女と談話した際、このような苦言を呈したように——

——自分の容姿に無頓着なのは、そもそも自分に興味がないからじゃないのか？

遺伝子操作による先天的な疾患か。あるいは、精神操作による後天的な障害か。

いずれにせよ、ステラには自尊心というものが欠けていた。

一般的な生命であれば、最低限は持ち合わせていなければならない自らへの執着と関心——それは突き詰めれば生存本能にも派生するものだ——要するに自己愛の概念を、彼女の場合はどこかで摘み取られているかのようであった。

——とはいえ、ひとつだけ補足すれば、彼女は「完全に自分を愛せなくなった」わけではないのだろう。

どだい、最近の彼女には、明らかに少女らしい言動が増えていた。年齢相応の悩みを口にするようになり、たとえば「髪を伸ばしてみたい」という発言は、彼女の中に少しずつ自尊心が芽生え出していた何よりの証拠だった。

しかし、それでも彼女の中には、いまだに自分のことを「価値ある人間」と本気で考えられない傾向があつて——

『ステラも——“コレ”に乗って戦わないと……でない“こわいモノ”が来て、私達をころす』

C. E. 74年、起こりうるかも知れない未来——

大西洋連邦は西ユーラシア地方に侵攻を開始し、反連合軍感情の強いザフト駐留下の三都市を、文字どおりに壊滅させた。街も軍も、ひいてはそこで生活していた民間人さえも虐殺し、その最大の功労者、あるいは史上最悪の殺戮者として君臨したのが——他

ならぬステラだった。

『死ぬのはだめ、いや！こわい——』

破壊の名を司る——巨大機動兵器デストロイを操り、北欧に住まう万単位の間人を踏み潰したその事実？……いや感觸は、今でも彼女の心に蠢むくめき、息づいている。

なまじ純真であつたがために、今となつては激しく傷つき——彼女は、当時の自分を心の底から嫌悪した。死にたくないと思つて喚こゑいていた自分を引き裂いてやりたいと思つし、死ねば良かったのに……と本気で軽蔑した節さえあるのだ。

（自分が傷つきたくないからって、他人を傷つけていいってことにはならない）

正当防衛という言葉では容認できない……できるはずもない、ベルリンの大量虐殺。

だから彼女が何より許せないのは自分——ちつぽけなエゴを通して、釣り合いとして罪なき人々を地獄に送つた。

自分で自分を容認できない——そのような負の感情は、最終的に彼女の中で強烈な『自己否定』に結びついていたので。

（ステラのために、大切な誰かが死ぬ。そんなことになるくらいなら——）

——そんなことになるくらいなら、今度は、ステラの命を賭けよう。

壊すためではなく、守るために。

殺すためではなく、生かすために。

——私欲^{エゴ}なんて要らないから、みんなのために戦うんだ。

「ブリッツ” および ”ストライク” の回収、終わりました」

現在、”エターナル” は ”ジエネシス” 近傍を行軍していた。艦橋では、収容した二機のモビルスーツについて報告を進められている。ニコルの ”ブリッツ” と、キラの ”ストライク” である。

この二機は ”ジエネシス” 付近で救援信号を出していたところを発見され、今は ”エターナル” のドッグに回収された後だった。整備士らの報告によれば、収容時 ”ブリッツ” は中破し、かたや ”ストライク” はエネルギーダウンを引き起こした状態だったそうだが——

「——パイロットは、ふたりとも無事ですか？」

「アマルファイが銃撃を受けているらしい。だが手当ては終わっている、命に別状はないそうだ」

ラクスはひとまず安心したような表情で返す。

と、別の管制官から、今度は耳を疑うような報告が続いた。

「——なに？ アスラン・ザラが？」

バルトフェルドが神妙な面持ちで返す。収容した「ブリッツ」のкокピッドから、アスラン・ザラの身柄が確認されたというのだ。

この一報には流石のラクスも困惑を隠せなかったようで、驚くような顔を見せた。彼女はバルトフェルドと目を合わせ、一拍置いて口を開く。

「事情はあとで聞くことにしましょう。今は、状況把握が先です」

淡々とした判断だった。

アスランの経緯がどうであれ、ニコルの「ブリッツ」に同乗していた時点で、その人は敵意を持って「エターナル」に乗り込んできたわけではないのだろう。

「何が起きているのか、アマルフィに戦況を報告させる！」

「こちらニコル、報告します！ その前にあの……アスランは」

「ああ分かってる。オマエの顔を見たら、その意図は察した」

だから彼は、あくまでニコルに迅速な報告を促す。

「ザラ少年を拘束したくないと云うなら、オレたちはオマエの判断を信じてやる。だがな監視はつけるぞ、オマエだ！」

「わかってます、当然です！」

「戦況はどうなっている？」「ヤキン」は放棄されたのか？」「ジエネシス」は!？」

現状、"エターナル"……ラクス達には確認しなければならぬことが多すぎた。

今や全ザフト兵が蜘蛛の子を散らすように撤退しはじめている。"ヤキン・ドゥーエ"内部で、いったい何が起きたのか？ 結果として"ジエネシス"は放棄されたのか？

——そして"クレイドル"は今、どこで、何をしているのか？

答えを知るニコルは、順を追ってそれらを説き明かす。地球軍の手によつてパトリック・ザラが暗殺されたこと。最高指導者を失ったザフトの指揮系統は麻痺していること。さらに問題なのは——ザフトの管制や司令塔がダウンした今も、確実に"ジエネシス"の発射タイマーが進んでいること。

へ"ジエネシス"の最後の照準は大西洋連邦首都であり、猶予は数分と残されています。ん

事態は既に、最終局面を迎えているのだろう。ザフト軍にとつても、地球軍にとつても——。

そうしてニコルは、さらなる説明を続ける。

みずから投了を認めたアスランが、"ジエネシス"内部で搭乗機を核爆発させようとしたこと。ニコルはそんな彼を自爆の窮地から救い出そうとしたこと。けれど、ふたりとも"ジエネシス"内部に差し掛かったところで謎の大型地球軍機の襲撃を受け、敗走した。

そんな自分達を逃すために、ステラだけが「ジエネシス」内部に残ってしまったこと。

それを聞いたラクスが顔色をなくす。

「ジャステイス」は残り数分の猶予をもつて自爆し、「ジエネシス」ごと巻き込んだ核爆発を起こします！ 地球軍機の狙いは分かりませんが、ステラさん——彼女は知っているみたいだった……！」

ラクスは愕然と息を呑み、艦橋窓から「ジエネシス」を一望した。

——あの中に、ステラがいる……！

事態を把握したバルトフェルドは、苦々しげに吐き捨てる。

「地球軍機に「ジャステイス」を破壊されたら一貫のおしまいだな……！」
「クレイドル」も、戻れなくなるぞ……！」

すべてを明かされ、バルトフェルドは思わずラクスの方を振り返る。それから口を開いて「ボクらは、どうしますかね……!?」——喉元まで出掛かったその言葉は、バルトフェルドの迷いである。

艦の指針を決定するのはバルトフェルドの役割であり、彼自身もそれは重々に理解していた——つもりだった。

けれど、このときの彼は無意識にラクスという「支柱^{よすが}」に助言を求めた。年長者の

まったく情けない話であると、後になって本人が自白した点ではあるが。

「——」
だが振り返った先、ラクスはかたく唇を結び、窓外の「ジエネシス」を見つめていた。今にも涙が溢れそうな眸と、かたく組み合わされた両手を見れば、その心中は察す。

——ひとりの姉貴分として、純粹にステラのことが心配なのだ。

そこにいたのは、いまバルトフェルドが助言を求めべき「指導者」でも、カリスマ的求心力を持った「平和の歌姫」でもない。ただひたすらに、妹分の無事を祈る儂げな「少女」だ。その突けば崩れそうな表情を見、バルトフェルドはみずからの不甲斐なさを痛感する。

そうして彼は、迷いを祓うようにかぶりを振る。

と、バルトフェルドは迷いを喉奥に呑み込んだ。戦況を判断しつつ、あえて低く、冷徹な声で続けたのだ。

「——「ジエネシス」から距離を取る！」

一同がその指示を聞き、鋭く息を呑む。艦橋にいるすべてのクルーが、その号令が持つ意味を即座に理解したのだろう。それが如何に、無情な命令であるのかも——。

しかし、かと云って反対の声は挙がらない。かねてからバルトフェルドの冗談や軽口に振り回され、異議があつては遠慮なく申し続けて来た副官のマーチン・ダコスタでさ

え、このときばかりは隊長の判断を尊重し、口を噤んだのだ。その命令が、合理的であるからこそ。

だからバルトフェルドは、あくまで決然と続けるしかない。唯一の民間人であるマユ・アスカが今に泣き出しそうな表情になっても、それでも大人として艦長として、彼女が案じている者の身を見限らなければならぬ。彼女の目の前で。

「残存のMS部隊はどんな手を使ってでもいい、できるだけ多くの命をあの兵器から遠ざけろっ！ 爆発に巻き込まれる前に！」

月基地を穿ち、今度は、地球に向けて照準された「ジエネシス」――

それは、まもなく戦場の中心で大爆発を引き起こすという。破壊される最後の瞬間にも、それは沢山の「命」を道連れにしようとしている――バルトフェルド達は、そんな死の光に巻き込まれるわけには行かない。たとえ光の中心地に、仲間をひとり置き去りにするのだとしても。

――命は選ばなければならぬ……！

――助けられるものと、そうでないもの……！

苦渋の艦長命令に従い、やがて「エターナル」は現宙域から離脱することになる。だが、ラクスは片時も「ジエネシス」から目を背けることはない。かたく手を結び、祈りながら――

(ステラ……っ。必ず——…!!)

“ジエネシス”を止め——

生きて帰って来て——

——“ふたつ”を望むは、あまりにも傲慢か。

多くを望み過ぎること、欲しがり過ぎることこそ、人の業。

——“それ”こそが、この戦争の元凶だ。

分かっていても、しかし、ラクスは指を重ね切せきに祈るのだ。

今回だけでいい。

身の丈に大きすぎるこのふたつの願い、神様、どうか叶えてくださいと。

“ジエネシス”内部の戦いは続いている。かつて機動兵装要塞として西ヨーロッパ地方に降誕し、三都市を壊滅させた史上最悪の破壊兵器“デストロイ”——その凶悪な力を継承した“レムレース”が、ステラの操る“クレイドル”と激闘を繰り広げているのだ。

——その瞬間、砲火は吐き出された。

1580mm複列位相エネルギー砲——それは「デストロイ」の全身装甲をハル・ユニツトへ刷新する過程で、胸部から腹部に移植された「スーパースキュラ」の別称だ。腹部に三つ並べられた砲口に光が集い、臨界する。野太い光条が放たれ、閃光は一直線に「クレイドル」へ襲い掛かる。その一射を、「クレイドル」は回避した。

ステラは「クレイドル」に二挺のリンクス・ビームライフルを構えさせながら「デストロイ」の直下まで滑り込み、ビームを掃射して返す。連続する光の矢が巨大すぎるスカート部を捉えようというとき、陽電子リフレクター「シユナイドシユツツ」が展開された。虹色の障壁が「デストロイ」を覆い、砲火はすべて着弾寸前の空間で弾き返される。

「ちっ——」

不安と焦燥がステラを駆り立てる。与えられた猶予は少ない——ただでさえ「制限時間」は七分を切っているのに、ああも鉄壁の防御で跳ね返されては、決着をつけるどころではない。

余談ではあるが、このときステラはドラグーンを駆使し「ジャステイス」の残骸を離脱させており、砲火が飛び交う危険区域から、その「抜け殻」をできるだけ離れた地点へ隔離していた。それに、アスラン達が逃げる時間も十分に稼ぎ終えたところだ。彼女はやるべきことを果たした——だから今さら「デストロイ」との決着など求める必要

はないのではないか……？ となるが、そうではない。

——目の前の“敵”を棄て置いて、自分だけシャフトから脱出する？

違う。今のステラに、そのような選択肢はない。こうして彼女が対峙している黒鉄の巨大兵器こそ、彼女自身が過去の日に、あるいは未来の日に捨てかけて来た——彼女自身の悪虐と蛮行の記憶そのものだ。

——決着をつけなきゃ、ステラは『あした』に進めない。

それは結局、ステラ個人の感傷と欲望に過ぎないのかも知れない。しかし、彼女の中には“デストロイ”との決着を求める意味と覚悟が充分にあつて、それらの意志は生命を追い詰められてなお確固として、揺らがなかつたらしい。

（“デストロイ”は絶対に破壊する、“アレ”はこの世界に存在しちやいけない……っ！）

そんなパイロットの決意に応じるかのように、“クレイドル”は抜き打ちに“デストロイ”の背後まで回り込む。彼女は、相手が大型機であるがゆえの弱点を見越し、背後の死角から斬りかかろうと思考したのだ。

しかし、改造された“デストロイ”はそのような思考を許さない。大型機は全身各所のスラスターを噴射させ、巧みな制御で機体を捻ると、一瞬で“クレイドル”を正面で捉え直して見せた。

「!?」

巨体の割に、早すぎる方向転換。再び二機が対峙する――

死角をつけ狙った闇討ちが通じない――!? 完全に虚を突かれたステラの目に、自律誘導式のビーム砲の発進が映る。それ一基でモビルアーマーほどに巨大であろうドラグーン端末が、挟み込むように「クレイドル」に迫る。さらに「デストロイ」本体の方は、顔面部部のエネルギー砲を充填し始めていて、

「――!」

シユトゥルム・フアウスト

大型自律端末から浴びせかけられるビーム群を目まぐるしく回避しながら、ステラはしかし、自分が一方的に不利ではない、とも思った。

もとより――「デストロイ」が本質的に得意としているのは開けた戦域で行われる無差別攻撃である。その意味で云えば、今の「ジェネシス」内部という閉塞された空間や、少数のターゲットとの交戦を強いられる白兵戦というものは、基本的に「デストロイ」との相性が悪い。現在の環境は、そいつが秘める破滅的な性能を十全に引き出す条件を満たしていないのだ。そいつが今まで外宇宙でどれほどの無双劇を演じて来たのかは抜きにして、今だけは小回りの利く「クレイドル」に優位がある。

………だからだろうか？ このときステラは壁際をみずからの行動起点と定め、反

撃も回避も、全ての動作を内壁すれすれで行っていた。と云うのは、そうすることで壁面との接触を避けたい。『デストロイ』および『シュトゥルム・ファウスト』からの砲撃を、ある程度決まった射角・決まった距離から発生させるよう誘導できる。自分よりも遙かに巨大な相手に対し、みずからを壁際に寄せる選択は退路を狭めているようにも映るが、そのじつ相手の可動域をも大きく制限させる。とは云え、それは唯の一手でも下手を打てば雪隠詰めにされるリスクを伴う危険な賭け。しかし、常に四方から狙撃されるリスクに比べれば、いくらかマシだろうという判断も同時にあつたらしい。

『クレイドル』は主翼を展開、ステラはスラスターにホバリングをかけると、内壁を這うような滑空飛行に移った。

そこに、容赦のないスプリッドガンの追撃が集中する。『スーパースキュラ』とは比較しようがないが、それでも機械人形を一撃で焼却するには充分すぎる威力を持った砲撃。五本束の火線がさながら絨毯爆撃のような激しさを以て『クレイドル』に襲い掛かる。しかし、ステラは全てをはねのけ、あるいはかわし、ビーム群は空を切つて内壁へ着弾していく。その光景は、壁面に対しほぼ垂直の『光の杭』が打ち込まれている風に見えた。

降り注ぐ光の『杭』は無意味な破壊を繰り返し、砕け散った鋼鉄片を周辺に撒き散らす。だが、やはり肝心の『クレイドル』は捉えられない。痺れを切らした『デストロイ

“本体が口部のエネルギー砲を臨界させる。ステラは急制動をかけてその一射をかわし、すかさず壁を蹴って勢いよく飛翔する。

〈!?!〉

“デストロイ”はその急速な離脱行動に、自分のタイミングを盗まれた。呼吸を乱され、バランスを崩した巨体が見せる一瞬の隙――

ステラはこれを逃さない。ビームジャベリンを抜き放ち、間合いを見誤った片方の“巨大な前腕”を一断する！ 爆光が閃き、制御を失った“掌”は火山弾のように墜落、壁面に突っ込みながら大爆発を引き起こす。

へくっ……………いーっ

その悲鳴は、相手の少女のものだ。通信機から、短い悲鳴が聞こえた。

ステラはふと、その呻きにも似た声色に違和感を覚え、顔を上げた。回線に褪めた顔のパイロットが映った。バイザーの下に覗くその人……いや「彼女」の様相は、世辞にも美しいとは云い難い、病人のそれをしていた。

(……………!?!)

——けれど、可憐だったあの女性ひとは、ああも退廃的な顔付きであつたらうか？

そのときステラは、不審を訴えた表情になる。そこには、とても“ヤキン・ドワーエ”に潜入できたような健常者の姿はなかつたから。

——この数分の間に、何があつた？

直感的に異変を気取つた彼女は、

「あなたもう、薬効が切れてるんじゃないや……!?」

その指摘は、*“デストロイ”*のパイロットにとつて凶星であつた。

フレイ・アルスターの生体は、既に冥府に半身を浸している状態にあつた。

薬物の効能は途切れ、いつ糸が切れて斃れてもおかしくない傀儡でくのように、意識の大半が昏睡まどろみの中に沈んでいた。モビルスーツで云えば、それこそエネルギーダウン寸前の状態——そのような相手の病相を認めては、ステラは愕然とするしかない。

(あんな状態で、よく……っ！)

地球軍の強化人間が、適切な処置を受けられなかつたときの壮絶な苦しみを知つてい
るから、そう思えるのだ。血の気を失つて褪めた顔。既に半分しか開けられない双眸ひとみの
奥は、微妙に焦点が合っていないようにも見える——明らかに肉体に不調を来きたしてそう
な病人の姿が、そこにあつた。

しかしその病人は、幽霊みたいに口元で薄く嘲わらうのだ。

〈血色の悪さを云うなら、あなただって似たようなものじゃない……!〉

ステラは、またも不審を訴えた表情になる。

——ならば自分^{わたし}は、いったいどんな顔をしている……? ?

このときのステラもまた、他人を指摘することができないほどに血色が悪かったと云われている。モビルスーツで出撃して以来、幾度と連なつた名将達との戦闘——蓄積した疲労——何より“ヤキン・ドゥーエ”内部で右腿部に貫いた凶弾は、本人も予期しないほど彼女の精神と体力を摩耗させた。不思議と当人はそのような衰弱を憶えてはなかつたが、それはステラの意識が衰弱を憶えることを拒んでいたためであり、もしもこの場に医者がいれば、その者は直ちに彼女を“グレイドル”から引きずり降ろしたはずである。

フレイは不敵に笑み、挑むように続けた。

〈同情するわ。さぞ“ヤキン・ドゥーエ”のコーデイネイターが、躍起になつて追いかけて回したでしょうからね……!〉

「やっぱり、あなたが……!」

〈どうだった? 最愛のパパを、戦争に殺された気分は!?〉

絶叫するフレイは、しかし、感情的というわけではない。衝動のまま叫んでいるように見えて、そのじつ言葉を選んでから発言していた。パトリック・ザラを暗殺したのは

彼女自身であるにも関わらず、ここの表現を置き換えているのには、彼女なりの意図もあつたらしい。

——戦争に、殺された……？

責任転嫁とも取れそうない回しを咀嚼して、ステラはしかし（そうかも知れない……）と本当に思った。パトリック・ザラは射殺され、それは彼を父親に持つステラにとつて悲劇となつた。けれど一方で、彼に恨みを持った地球軍の見地に立てば、しごく真つ当な復讐劇ではないだろうか。

へわたしは気付いた——だったら、わたしのパパが殺されたのも同じだつてことに。わたしのパパ——ジョージ・アルスターだつて、ブルーコスモスの一員だつたんだからね。その名はステラも憶えている。彼女がザフトに捕まるより前、地球軍艦隊に同乗していた人物だ——ザフトの襲撃を受けた際、艦隊ごと「イージス」に沈められ命を落としたが。

へパパは大西洋連邦の外務次官で、自分の地位を嵩に、世界各国にコーディネイターの排斥運動を呼びかけていた。――……！

へだつたら当然、あなた達コーディネイターの反感だつて買っていたでしょう。――

今ならわかるとばかりに、どこか達観的に語るフレイもまた、あの頃のような無知な

子供ではない。

穩健派を自称していたジョージ・アルスターという男は、しかし、それこそパトリック・ザラと何が違っていただけだろうか。客観的に見れば、自分と異なる人種・人類は排斥し、弾圧するよう方々に運動を呼びかけていた二人の男達。それぞれの娘に当たるフレイヤステラは、いったい何を以て「彼らが違っていた」と云ってあげられるのか。

へ父親がそういう星の下に生きていたと思えば、もう、なんだかどーでもよくなつて……アンタを恨む氣にだつてならない」

表現としては曖昧だし、別にフレイが占星学をかじっているわけでもないのだが、個人的には「命運」のようなものだと思つてゐる。今となつては結論的な云い方しか出来ないが、コーディネイターを蛇蝎だかつの如く嫌悪した人間が、その反感からコーディネイターに抹殺されてしまうのは、ある意味で仕方のない、因果応報であつたようにも思える。

へことに、世界は反感そで戦争をしてゐるんだからね——

信じる正義の反対が、必ずしも悪とは限らない——

そんなフレイの戦争へ対する考え方は、自分の中にもどこか通ずるものがある氣がして、ステラは動揺するしかなかつた。

今はステラ自身、父親を殺したフレイ・アルスターその人を真つ向から憎む氣になれ

ないでいる。何よりそれが、ステラがフレイと同じ考え方をしている証拠のようにも思えた。

しかし、

「——でも。だったら……っ！」

——あなたは今、いったい何のために戦っているの……？

ステラは純粹に問いかける。抱いた思想が同じなら、どうして自分達が戦い合わねばならないのか……？

だが答えを聞くよりも先に、残りの“シュトゥルム・ファウスト”が“クレイドル”にビームを放つて来た。背後からの強襲だった。完全に虚を突かれ、わずかに反応の遅れた“クレイドル”だが、やはり間一髪で回避する。回頭しつつ応戦のビームを撃ち返すも、陽電子リフレクターに阻まれて終わった。

「最初は仇討ちのため、そして地球のために戦ってるつもりだった。でも気付いた——もう、そんな大義名分はどうだっていい」

フレイの意志を受けて飛び回る“シュトゥルム・ファウスト”の攻撃が、さらに苛烈さを増してゆく。五指から撃たれる砲火は“クレイドル”を確実に追い詰め、その機体を“スーパースキュラ”の射程圏まで誘導する。さながらサーチライトのように浴びせかけられる幾重もの火線を、それでもステラは複雑な動きで回避し続けた。

「初めからどうでも良かったのよ。わたしは今まで誰のためでもない、わたしのために戦っていたんだから……!」

愛する父親を目の前で殺されたこと。結局のところ、あのときの悲劇などフレイにとつて切片きつかけに過ぎず、全てではなかった。

「へわたしは、コーディネイターに負けたくなかった……!」

一部の者はコーディネイターを「自然の摂理に逆らった間違った存在」と揶揄している。しかし、フレイはそういった偏屈者達の発言が、特別間違っているものとは思わない。これを云えば、彼女もまたブルーコスモスの鳳児であるかのように受け取られるかも知れないが……

——そもそも病気でもない人間が、本当に遺伝子なんかいじって生まれて来る必要、ある……?」

「ナチュラルに比して圧倒的な能力を開花させ、モビルスーツすら、易々と乗りこなす——」

薬物なしでは機体を満足に動かすことすらままならなかったフレイ……いや、多く一般のナチュラルにとつて、おおよそコーディネイターとは隔絶された異次元の存在だ。知りたがり、欲しがり——そのような欲望の果て、多くのものを獲得しすぎた天才達。結局のところ、そんな連中に対抗心や嫉妬心を抱いても仕方がないのではないか?」

もそも同じ土俵にいないのだから、あるいは、挑戦したところで勝てるはずないのだから——

——でも、そうやって諦めてしまったら、自分が腐っていくような気がした。

結局、フレイがアズラエルに取り入った理由はそれなのだろう。自分を強化人間に改造するよう依頼したのは、肉体や良心を悪魔に売り払ってでも気高くありたかったからだ。生まれた時代が戦時下であったことは彼女の不幸だが、それでもコーディネーターに負けない自分でいたい。モビルスーツ・パイロットになることで、いつでも彼らを見返すことのできる強さと品格が欲しかった。

へわたしは後悔したくなかった……！ ナチュラルに生まれたことも、こんな最悪の時代に生まれて来てしまったことも！

「フレイ・アルスター……!?!」

へ恥じ入りたくなかった……！ わたしはわたしに、自信を持っていたから——！

たとえ目に入れても痛くない——傍目が評した溺愛という言葉以上に、自分のことを大切に育て、愛してくれた父親との思い出。そんな父の娘として、ナチュラルとして、幸せな家庭に生まれた事実。だからこそ遺伝子や遺伝子操作なんかに頼らず、彼女自身の決意と努力のみによって、気高くありたいという願い。

おそらくは彼女の矜持であり、プライド。それを抱くことは、人間として間違いか——？

へわたしには、捨てられない——ッ！

次の瞬間 “デストロイ” 口部の光が臨界し、吐き出された “ツォーン” MK—II が “クレイドル” を直撃コースに捉えた。閃光がぱつと “クレイドル” を照らし、光の奔流が流れ込む！

（!? ——しまったッ！）

動転していた——！ そんな言い訳を口の中で云う間に、光は “クレイドル” へ肉迫している。ステラはぎりぎりの所で “アリユミューレ・リュミエール” を展開し、間一髪のところまで敵のビーム砲を受けていた。

しかし、本当に受けたただけだ——

それは、受け止める、という行為とは決定的に違っていた。体勢の整っていない “クレイドル” の光波防御帯は、ビーム砲が内包する圧力まではカバーできない。機体は凄まじい熱量と質量に併呑され、出力差に負けるように後退、流されてゆく。

そんな “クレイドル” の後背面に “ジエネシス” の壁面が近づいてゆく——

へわたしはあなたに勝ちたいだけ……っ！ ナチュラルだつて、コーデインイターに負けないんだつてことを！ 劣った種なんかじゃないんだつてことを、証明したいだけ——

——！

(パワーが違い過ぎる——！ 押し返せない……ッ!?)

↑！——このまま一気に……ッ！

フレイは、この瞬間が最大の勝機だと思った。

だから、それまで分離させていた“右シフトウルトム・フアウストの前腕”をモビルスーツ本体に引き戻し結

合させ——そして、柱よりも太い黒鉄くろがねの剛腕かたまりを“クレイドル”目掛けて振り抜いたのだ。

「——ッ!?!」

急速に拡大する“掌底”を、ステラは瞳に映していた。巨大な“面”が猛スピードで突撃して来ることも。

なのに、彼女は抵抗ができなかった。抵抗を行うには、ビーム砲に弾き飛ばされた彼女と彼女のモビルスーツが、あまりにもバランスを崩してしまっていた。

ステラは口内に(まずい……ッ!)と云うことしか出来なかった。

その眩きはいよいよ正しく、次の瞬間“デストロイ”の掌底が“クレイドル”に叩き込まれた。圧倒的な巨腕と、超重量を持つて。

——「グレイドル」が壁面に叩きつけられるのと、「デストロイ」の掌底が叩き込まれたのは、ほとんど同時だった。

「がはッ——!?!」

規格外の巨体から繰り出された掌底打ちは、土俵上の力士が繰り出す堂々たる突っ張りに似て見えた。しかし、その一撃にはおおよそ競技的芸術性や品格など認めれるはずもない、ルール無しに裏付けられた凶悪性と残虐性があるだけだった。

壁面に対し、ほとんど垂直に叩き込まれた打撃攻撃。防ぐことも反らすこともできなかつた物理衝突が生み出すエネルギーの大きさは、尋常ではない。強烈な衝撃波はこれに直撃した機体のみならず、パイロットの骨組織や筋肉にまで振動を伝播させた。

シートに叩きつけられた操縦者。体内では一瞬の軋みを響かせたあと、負荷に耐えかねてそれらの碎ける不快音を轟かせた。逆流し吐き出される血液、意識は混濁し飛びかける——

大抵のモビルスーツであれば、機体はおろかパイロットも叩き潰されたであろう重厚な一撃。奇跡的に守られた装甲の中で、少女は辛うじて生を保っていた。この場合は彼女が自力で意識を繋ぎ止めた、と云った方が正しいかも知れないが、少なくとも、生き

ていることだけは確かだった。

「——ぐッ……………」

口元の血を乱暴に拭い去るステラ。体中が激しい熱を伴って傷の痛みや骨の軋みを訴えている——

いや違う、状況はそのこと以上に深刻だった。ステラは痛覚を振り切るように操縦桿を握り直してから「クレイドル」が微動だにしないことに気づく。

「……………!?!」

彼女の機体は、既に「デストロイ」の底掌に抑え付けられていた。「ジェネシス」の壁面に叩きつけるようにして、完全に捕縛されていたのだ。

当然に抵抗を試みても、結局は無駄である。彼女は掌底の隙間から「デストロイ」の顔部を睨みつけ返すことしか出来なかった。磔の「クレイドル」には、相手の巨腕を押し除けるほどのパワーが残されていなかった。

(これがオマエの望み……………ッ!?! 「デストロイ」——!?)

悪魔的な雰囲気を放ちながら、相反する異教の神を模したかのような頭部を持つ「破壊の化身」——

その紅眼が挑むように点灯し、これを視覚したステラを煽り立てた。かつて「デストロイ」の乗り手であった少女の意識は、目の前の巨人像と、そんなものを造り出してし

まった大人達の、悪意と殺意に胸倉を掴み上げられているような屈辱感を憶えた。

「ううッ……………」

いくら意識を繋ぎ止めたと云つても――

いくら心臓が動いていると云つても――

身動き取れないまま生け捕りにされていれば、ステラは、自分が生きている心地がしなかつた。

〈潰しちゃえば…………ツ！〉

勝利を確信し狂熱する少女と、敗死を覚悟し口を噛む少女。この時点でフレイはみずからの圧勝を信じていたし、ステラの方も活路がないほど追い詰められていたのは事実である。やがて「シュトウルム・ファウスト」掌底の破断兵器が通電し、小刻みに震動を始める――まさに絶体絶命、抜け出すことは不可能だ。

フエプリス・フォルフェクス
零距离破断――それは避けようのない、逸れようのない破滅の一撃。磔の「クレイ

ドル」は今に破断され、ステラという少女は今に力に撓られようとしている。回避も防衛も反撃も、一切の抵抗の余地もなく…………少女は「デストロイ」という超然とした破壊者を前に、完璧に敗れ去るはずだった。

〈これで、終わり――！〉

次の瞬間、フレイ・アルスターの意識が断絶しなければ。



病的で、興奮にも似た異常な感情の昂りのせいだろう——

糸は切れ、その一瞬だけ、傀儡でくは本当にただの人形になった。フレイ・アルスターはその瞬間、完全に意識を失って、コンソールに突っ伏して倒れたのだ。

それに連動するかのようにな、"デストロイ"も驚き目を開くステラの前で、あらゆる動作を停止させる。

「……!?!」

その停止のために"掌"に弛緩が生じたのは、ステラにとつて僥倖だった。彼女は反射的に弛緩から機体のビームジャベリンを発心させ、上体を捻ると、勢いよく破壊者の巨腕の五指を切りつけた。

高熱に灼かれ、大きく崩れた"掌"から脱出するのは造作ない。すかさず"クレイドル"を離脱させ、彼女は憎々しげに"シュトゥルム・ファウスト"を切り落とす。

残された"右腕"が炸裂し、爆発光を煌めかせる。

凄まじい衝撃と雷鳴さながらの音響が突き抜け、さらに、爆圧で"デストロイ"の機体が跳ね飛ばされるのを目撃した。

——と、"デストロイ"が生気を取り戻したようにもう一度動き始めた。すこぶる手荒いアラームに、パイロットが意識を回復させたのだ。

「!? ——わたし……ッ!」

赤子のような「クレイドル」を前に、圧倒的な力の差……いや性能の差を見せつけたフレイであつたが、より完璧な勝利を掴み取ろうとしたとき、彼女の意識は現世から弾かれた。目を覚ましたとき、彼女は得られたはずの勝利の瞬間を取り逃していたばかりか、追い詰めていたはずの獲物の逆攻撃に遭っていたのだ。

——思い通りに動けなければ、誰だつて腹が立つ……!

しかし、だからこそステラは口を開く。僅かばかり、憐憫の籠った表情を浮かべ、

「——わたしとあなたに、どんな違いがあるつていうの……ッ! 地球軍の狂つた研究アイツらに付き合わされて、苦しめられて来ただけだつていうのにつ」

説得の声は届かない、両腕を失った「デストロイ」は、なおも突き動かされたように腹部「スーパースキュラ」を充填し始めていた。

だから「クレイドル」も挑み続ける。後退しながらドラグーンを役使用する。

目にも止まらぬ速さで錯綜する二基の「エンドラム・アルマドール」——ビームスパイクがリフレクターを突破し、砲火を放つ寸前の「デストロイ」腹部を貫く。発射寸前「スーパースキュラ」が誘爆し、暴発したエネルギーの爆圧が、胸部コアユニット本体を突き上げる。

「勝負はついた! ——これ以上は——!」

手許のタイマーに視線を落とす。タイマーは四分を切っている。

しかし、

へえええええいッ！

「デストロイ」の背囊ランドセルから、二基の砲塔がせり出した。背囊は、ビクトリアで取り外された円盤フライトユニットの代替品である。

まだ武装を持つてゐる——！ 表情に怒りを落としたステラを前にして、しかし「デストロイ」は抵抗をやめない。胴体から下にかけて改造が施された大型リア・スカートの下部より、八基もの小型の特殊端末を放出したのだ。

——ドラグーン！ いや……っ!?

それら自律航行を行う小型の特殊端末は、蜘蛛の子が散るようにして「クレイドル」の周囲に展開した。だが、明確に攻撃行動を行うわけではない。いや、そもそも砲塔が存在しないのか？

けれど、その正体を読み込んでいる暇はない、ちょうど「デストロイ」が、背囊の大型熱プラズマ砲「マルドゥーク」を撃ち放ったためだ。放たれたプラズマ砲、その実態はGAT-X252フォオビドゥンに搭載された「プレスベルグ」を改良した誘導式のビーム砲だ。

ただしその弾体は、今までのようなビームの「奔流」ではない。それというよりは、むしろ——

「!?」

——“乱流”だ。

「拡散砲か……!」

細切れになつて拡散するビーム砲が、何条もの“光の雨”となつて降り注ぐ。

さながら散弾のように「面」破壊に特化したビーム砲の“雨”は、これをビームの“傘”で弾いた“クレイドル”を通り過ぎたあと、その射線上に待機していた“先の特殊端末”と接触した。

——と、その瞬間、本来直線を描いて進むことしかできないはずのビーム砲は、特殊な力場に捻じ曲げられたかのように軌道を変え、とどのつまり、屈曲した。

——まさか……っ!?

そうして軌道を曲げられたビームは、しかし、明後日の方向へ飛び去るでもなく、今度は屈曲した先に待ち受けていた“別の特殊端末”と接触し、もう一度、その軌道を変えた。そのようにして再三、再四と屈曲を繰り返し——それは単なる偶然だったのか、それとも計算された上の必然だったのか? ——真空中で幾度となく屈曲を繰り返した“雨”の一部は、やがて“クレイドル”の天まで戻り、ステラを目掛けてまたしても降り注いだ。

このとき天より注ぐ“雨”に気を取られ、回避行動を取ったステラであるが、実質的

に「マルドゥーク」が放ったビームは一条ではない。発射と同時に拡散する光条達は、限られた空間の中に跋扈した特殊端末と接触する度、不規律にして変則的な屈曲を繰り返す。だからこそ、天から降り注ぐ「雨」とは異なる「軌跡」を辿った一部のビーム砲が、ステラが回避した先、今度は左方向から肉迫していた。

「うわっ!!」

その一射は横槍のように「クレイドル」左手のビームライフルを奪い取り、吹っ飛ばしては通り過ぎて行つた。だが、直撃コースではない？ ステラは完全に無防備な状態にあつたのに――

だからこそ、ステラはそこで気付けたのかも知れない――たとえば「プロヴィデンス」が搭載し、ラウ・ル・クルーゼの高次元的能力で支配されていたドラグーン攻撃とは毛色が異なることを。その波状攻撃には統率性がなく、ともすれば人間の思惟さえ感じない。

であるなら、それらは単に無作為な、空間を覆い尽くすだけの光の包囲網でしかない。

――ビームを曲げる、あの端末は……っ！

おおよそ大西洋連邦が開発した、新型のリフレクター・ビットか。

漏斗状の端末内部に特殊な力場を発生させる「ゲシユマイディツヒ・パンツァー」を搭載し、本来なら直線でしか進むことのできないビームを自在に偏向させる。つまり、

ビットはひとつの中継点としての役割を果たし、放たれた“マルドゥーク”ビーム砲は、それを介して何度も屈折と屈曲を繰り返す——

(好き勝手に飛んだ先で、ビットはあらゆるビームを見境なく偏向させ、乱反射させる——無茶苦茶だ!!)

その推察は実際に正しく、水が流れるのと同じようにありのままの屈曲を繰り返した“マルドゥーク”は、画一的な軌道を辿つて、なんと“マルドゥーク”の発射主である“デストロイ”にまで降り注いでいた。勿論、“デストロイ”の全方位に配備された陽電子リフレクターがそれらの弾体を完璧に弾くため、主自身には蚊に刺されたほどのダメージも通らない。

だが、自分で放つた砲撃が——時として、そして一部とはいえ——自分にそのまま返つて来るなどと、欠陥兵器にも程がある……!!

暴走する“デストロイ”が息をするように“マルドゥーク”を撃ちまくる。もはや照準をつける必要性すら忘却してしまった風に。そうして怒濤の屈曲を繰り返すビームの数々は、やがてそれ自体が誰にも軌道の読めないイレギュラーへと変貌を遂げる。放たれたビームの大半が標的の大きな“デストロイ”に着弾するのと同じように、数多の光条が“クレイドル”を喰い破らんと凄まじい光量と圧力を持つて吹き荒ぶ。

——光の……“嵐”……!!

脚色でも誇張でもない——混然と吹き荒ぶ“嵐”にも似たその兵装を、仮にも“ジェネシス”の外で解禁していたら、どうなっていたらろう？

空間にあるもの全て根こそぎ死滅せんとする激しさを持った“光の嵐”は、確実にあらゆる標的を巻き込み、敵味方すべてを切り刻む天災的大破壊を引き起こしたに違いない。あるいはそれは——“デストロイ”が最も得意とする「無差別攻撃」と、その伝説級の殲滅力を体現していたのかも知れないが……

「……いつ——ツ!!」

いずれにせよ、ステラを逆上させるには充分すぎるものであった。

「まだ！　まだ壊し足りないのか——!?!」

光の“嵐”が“ジェネシス”内部を抉り、シャフトさえも次々に潰していく。

ステラが反撃のビームライフルを斉射しても、射線上へ割り込んで来るいずれかのビットはその弾体さえ屈曲させてしまい、決して目標へは届かない。それによりステラは格闘戦を行うことではしか“デストロイ”に対抗する手段がないことを悟るも、この“嵐”を掻い潜って接近するなど不可能だ。今は光波防御帯を展開し、苦しげに無尽蔵のビームを受け切ることでは精いっぱいなのだ。

「あながいけないのよ、あながわたしを混乱させた!」

「ウソだ！　本当に混乱させているのは、そのモビルスーツだ！　——“デストロイ”

だ！」

フレイは、どうしてステラがハル・ユニットの名称を知っているのか測りかねているようであったが、口に出しては何も云わなかった。

——兵器を通して望みを叶えるなんて、間違いだ……！

今のステラに分かることは、フレイ・アルスターの望みというものが、単純ではないにしろ、えてして純粹だったということ。

コーデイネイターという人種ばかりが優遇され注目される昨今、それでも自分の存在価値を曲がりなりにも証明しようとしたのが彼女であり、しかし、それを戦争を通してやろうとしたことが彼女の歪みだ。そういう意味では、結局のところ戦時下に生まれたこと、戦災に巻き込まれたことが彼女の不幸——拳句の果てに『デストロイ』という凶暴な力を手にしてしまったこともまた。

「あなたは本当は、戦う人じゃなかった」

他人事として云っているのではない、そんな彼女を、戦う人にしてしまった原因はステラにもあるのだから。

ステラはそれを知っていて、悟らせるように云った。

「そのモビルスーツから降りて！ ステラたちは初めから、殺し合う必要なんてなかった……！」

ことに今回の戦闘は、まるで必要のないものだと思っていたのだ。

生き残るために、共に手を取って「ジェネシス」から脱出できるのなら、それで——
 〈生き残る……？ いいえ、わたしには後がない——もう、帰るところなんてないんだからっ！〉

「生きていいんだよ……！ 戦いは終わる——もう、誰も傷つく必要はないんだよっ！」

しかし、声は届かない。砲身を冷却させた「デストロイ」が、ぎくしゃくともう一度動き出す。ステラの目の前で、ふたたび「マルドゥーク」のエネルギーチャージを始めたのだ。

一瞬だけ呆然としたステラであったが、対応は早い。

——やらせない、これ以上は！

ステラは判断をしなかった、二基の「エンドラム・アルマドール」を咄嗟に投げ放ち、直感の赴くまま、これらシールドを「デストロイ」まで突撃させたのだ。先端に発心するビームスパイクが「デストロイ」の背囊マルドゥークの砲身に飛び込み、砲塔を穿つ。速力を以てそのまま貫通するかと思われたドラグーンシールドは、しかし、膨大なエネルギーの誘爆に巻き込まれて二度と戻って来なかった。

「デストロイ」は、そうして全ての防盾を失ったステラに口部エネルギー砲ツォーを叩き込もうとした。だが、このとき既に加速し、躍りかかっている「クレイドル」の方が速い。

攻撃こそ最大の防御とばかりに、零距离までの接近を許した“ツォーン”の砲門は、間髪置かず突き立てられたビームジャベリンに破壊された。

へ“レムレース”——ツ！

すべての武装を潰されても、まだコア・ユニットが残っている——“デストロイ”は本体の“レムレース”から近接防衛機関砲や対空自動バルカン砲塔を狂ったように乱射させ、さらに熊手状の“トリケロス改”からレーザーライフルを撃ちまくる。

放射されたレーザーのひとつが、直上“クレイドル”右手のライフルを捉え、吹き飛ばす。

へもう引けないのよ——ツ！

「そんなの——ツ！」

叫びながら、ステラは光刃を直下“レムレース”頭部に突き立てようとしたが、それと同時にフレイは“クレイドル”を引き剥がそうと全霊をかける。

フレイは、頭部ツインアンテナより“バチルスウエボンシステム”を起動させた。真紅の波動が“レムレース”から滲み出るように放散され、粒子の衝撃波が“クレイドル”を直撃する。

「ウアッ！」

弾き飛ばされた“クレイドル”に汚染粒子が入り込み、眼の点灯が危険色に変異す

ると、今度は機体全体から激しく軋んだ音響……いや騒音が轟き始める。

——この、殺気の檻からは逃げられない……ッ!

しかし、ステラは激しくこれを拒絶。コロイド粒子を遮断しようと、今一度“アリユミューレ・リユミエール”に手を伸ばす。

〈あ——ッ!?!〉

次の瞬間、フレイは絶叫をしていた。謎の激震が“レムレース”を——ひいては“デストロイ”の巨体と重量を跳ね飛ばしたからだ。

それは、自分で放った衝撃波が倍になって返って来たようであった。

その震動に跳ね飛ばされた中で、フレイは“クレイドル”が発光しているのを見た。白銀のモビルスーツが、真紅色の輝きに包まれているのを目の当たりにしたのだ——
アリユミューレ・リユミエール
翡翠色の輝きではない。

〈アレは………ッ!?!〉

なおもフレイは、レーザーを連射し続ける。

が、その真紅の発光は“クレイドル”を中核に煌めいて、それ自体が“レムレース”に対する障壁として働いた。太陽から放散される散乱光にも似た“光の帯”——“レムレース”が放射するレーザーを完璧に跳ね返して見せている。

——これは、そうか………ッ!

汚染されたコロイド粒子の干渉を受け、はつきり「グレイドル」が暴走している状態にあることを、ステラは把握していた。……把握していたのだが、ステラは、この暴走をも自分のために利用しようとする。それは判断として異常であったが、それでもしなければ、勝てないと思っただらしい。

(終わりにする……！)

そう口内に云う。

動揺から一転――

ステラは既に、決断を終えた後の、固まった表情をした。

へなに……！　なんなのツ……！

周囲に交錯していたリフレクタービットの群れが、伝播する「光」に燃やし尽くされる。炎熱と太陽を取り巻く紅炎に絡め取られたかのように――「グレイドル」へ近づこうとした物質は、悉くが炎に吞まれ、消滅していく。

その光景は、ちょうどビームサーベルの刃が、くまなく結界状に展開されている風にも見えた。

いずれにせよ、フレイはその光景を唾然として目の当たりにするしかない。完全にこちらの攻撃が通用しなくなっている？――不思議と見覚えのある気がしたが、異常を

来たしたフレイの脳は、正常に当時の記憶を呼び起こすことができない。

「あなたを止める！——その闇の中から、わたしが拾い上げる！」
 燦めき、燃え上がるような「光」を纏い、ステラは「真紅の機体」を特攻させる。

疾風のように駆け、航路上にあるものを全て対消滅させながら「デストロイ」に迫る

へあつ——!!?

叫び声を上げなかったのは、その暇すらなかったからだろうか。

——やさしい人に、戻って……！

その瞬間——「デストロイ」と「クレイドル」の機影が、一瞬だけ交錯した。ステラは猪突して、その身ごと体当たりを仕掛けたのだ。

そして、「クレイドル」を取り巻く真紅色のエネルギーの波動は、驚異的な破壊力と強度を持って「デストロイ」の装甲を破って見せた。

この真紅のビームフィールドが、後の時代において「スクリーミング・ニンバス」と名称づけられること。フレイは知る由もなかったが、結局はそんな些細な知識の有無が、勝敗の決め手となったのだ。

風穴を開けた「デストロイ」が、崩壊する。

腹部から炎を噴き上げ、大人達の誤った理想から生み出された破壊の化身は、業火に巻かれて大爆発を引き起こした。

そして、その誤った理想に殉ずることなく、かたや「レムレース」は凄まじい衝撃と爆圧に跳ね上げられ、胸郭から押し出される形で真空中に放られた。

その機体は、炎に吞まれて半壊し、無力であった。

フレイ・アルスターは敗北し、その少女は、力なく宇宙を漂うだけになった。

『星に願いを』 B

「地球軍、ならびにザフト軍は、直ちに軍を退きなさい！」

ラクス・クラインの呼び声が、すべての戦場に響き渡る。

国際救難チャンネルを使うことで、彼女の声は「ヤキン・ドゥーエ」宙域の全体に広がっていた。その声明は、「間もなく「ヤキン・ドゥーエ」が自爆する」という情報を、あらゆる者らに届けている。

「もう、これ以上の犠牲は要りません！ 無暗^{むやみ}と戦うのをやめ、今は退がるのです！」

——予想もつかない未曾有の被害から、人々を救うために。

(これ以上の、犠牲はいらない……)

ラクスの言葉を口内に反芻しながら、隣にいたマユは何となく窓外を目を向けた。

しかし、その先には何があるわけでもなかった。瓦礫があり、爆発があり、MSがあり——それこそ地上で巻き起こっていた戦乱と、何ら変わりのない景色が拡がっていただけだ。

彼女が見る宇宙は、いつだって朽ちたMSや戦艦の破片と、戦争のための人工物で溢

れていた。見飽きた鉄塊、見慣れた残骸——しかし、いま彼女の目に映るものは、単にスペースデブリと吐き捨てていいものではない。それらは元は人が乗っていた方舟であり、まだ人肌ほどの暖かさを残しているものだから。

——あれは、死んで逝つた者達の棺桶だ。

そのように想像すれば、マユの宇宙は、名前も知らない戦死者達の棺桶で溢れていた。
(死に過ぎだ……)

マユ・アスカが、今「エターナル」に乗艦し、三隻同盟と行動を共にしているのは、云つてしまえば成り行きのようなものである。オーブが攻め入られた際、たまたまウズミが「クサナギ」を宇宙へ送ることを望み、たまたまその場にステラが居合わせ、たまたま彼女は宇宙へ上がる許可を得た。

勿論、当時の彼女は意識を失つた状態にあつたわけだが、客観的に見れば、彼女がこうしてラクスの隣に坐しているのは、彼女自身が環境や情勢に大人しく付き従つてやっているからだ。彼女は自由意思でそこにいるのではなく、結局のところ、時代の大きな波濤うねりのようなものに流されているに過ぎない。

——でも、今は違う。

——わたしは、後悔していない。

今、ようやくマユは確信し、きゅつと唇を結んだ顔を上げた。

ステラやラクス——自分にとって姉にも等しい少女達。自分を守り、そして救ってくれた大勢の仲間達——「三隻同盟」と呼ばれるこの同盟軍に参画する者達全員が、今は何のために戦っているのか、わかった気がするから。

武断思想を肯定し、武器を手に戦いに興じる思想を肯定しているのではない。戦うべきときには戦い、決して目を逸らしてはならない現実がある。それはステラやラクスが、戦ってでも守りたかったもの。

——私にも、やつと分かったよ。

マユ・アスカが、現在は「エターナル」に乗艦し、三隻同盟と行動を共にしているのは、たった今から彼女の意志によるものだ。

——この世界を支配するのは、コーディネイターかナチュラルか。

そのような色分けなど意味はなく、隔意によって人々を分かつことで、目の前の宇宙ができてしまうくらいなら——

「戦ってでも、守らなきゃいけないものがある」

自分の戦争を理解した気になった今になって、だからこそマユは、この場にはいない少女達に向かって言葉を発する。

——あなた達は、大切なことを教えてくれた。

信じたくもなければ、受け入れることも、とうていできない現実がある。

あまりにも、多くの命が失われた。

命の重さは、誰であっても平等だ。だからせめて、だったらせめて——まだ言葉を伝え、交わすことのできる彼女は。彼女にだけは、

「ありがとうと、おかえりなさいを伝えたいから」

大粒の涙を溜めた眸で、少女は指を重ねる。

「だから、必ず帰って来て。ステラおねえちゃん」

戦いが、終息する。ザフトと地球連合の両軍が、外の呼びかけによつて戦闘宙域から退き始めている頃、当の「ジェネシス」内部では、ステラが「レムレース」への通信を試みているところであつた。

少女たちの戦争もまた、今に終わりを迎えようとしていた。

金髪と紅髪の少女達の戦いは、「クレイドル」がスペック上のイレギュラーを引き起こした結果を以つて、ステラ側の勝利に終わった。一方の「レムレース」の中で、フレイは気力を失い、また、戦う力すらも失っていた。

旧「デストロイ」の鎧をまとつた「レムレース」のハル・ユニットは跡形もなく爆散

し、その胸郭から押し出される形になった“レムレース”は半壊の状態にある。下肢を失った暗黒の機体は、漏電や損傷の具合も凄まじいが、エンジンなどは生きているようだ。動こうと思えば動けるはずだが、いま“レムレース”がそれをしないのは、パイロットに、それだけの気力がないからだろう。ひよつとすると、フレイはとうに気を失っているのではないか？ そう考えたステラが“レムレース”へと機体を寄せようとした瞬間、通信機に、ようやくフレイが応答する。

「きつと、みんなにとつての憧れだったのよね——コーデインイターつて」

淡々と紡がれる呟きは、ステラに語り掛けているわけでも、問いかけるためのものでもない。

ステラは何を云うわけでもなく、ほとんど独白のように続けられるフレイの言葉を耳にする。

「人が、もつと賢く、美しくなろうと過た^{あやま}ず造り出した新人類——わたしはきつと、そんなあなた達に初めて会ったときから、嫉妬してたんだらうな」

嫉妬——？

聞き慣れない言葉を耳にして、ステラがさすがに面食らった。思わず「えっ……？」と声漏れたが、フレイは嘆息つきながらも滔々と続けている。

「だってさ、そうもなるでしょう……？ あなたつて女の子は、あんまりに可憐じゃな

い。この世のものとは、思えないくらいに——」

まるで妖精みたいだと、フレイは云った。

自分という存在を気取らず、幼子のように飾らない姿は姫君のような可憐さを際立たせる。成熟する前の幼さを残した顔立ち、柔和な物腰、あどけない仕草、蜂蜜に金粉を振り撒いたかのように輝く金の髪。

——それほどの魅力に対して、自覚がないのは、おそらく本人だけだ。

誰もが美少女と形容して違わない容貌、才気に溢れる明晰な頭脳と、羨ましいほどの身体能力。

贅沢なほど全てを持ち合わせ、ただそこに在るだけで他人の目を引く存在は、フレイにとって越えられない、あるいは越えてみたい壁になっていった。

「あなたみたいな女の子は、おとぎ話の中くらいで丁度よかったのよ」

くだらない行為と知りながら、それでもフレイは、自分とステラを比べてしまった。礼節や自制心を知らず、自己中心的でわがままな女を悪女と諷すなら、ステラはそれとは対極の位置にある。フレイが思うに、その姿はまさしく彼——オルガ・サブナックが嗜好していたジュブナイル小説に描かれているような、瑞気あるヒロイン像だ。

——純粹で、健気で、しかし、誰よりもたくましい。

それでいて危うさも同時に孕んでいるから、不思議と守ってあげたくなくなってしまふ存

在——キラのような。

男好きする設定と、多くの女が羨む美貌。ステラやキラの内面に共通しているのは、互いに栄華を、容姿を、才能を——人生をより豊かにするあらゆる材料を生まれたときから手にしておきながら、そのことにまったくの自覚がないという点である。そして、その無自覚さが当人の意志や性格とは裏腹に『敵』を作り続ける。

「コーディネイターは、人より幾つも優れているから、それだけで他人を辱める」

それはある種の体質のようなもので、あるいは、コーディネイター達の本質であるのではないか。

「そうか、だからなのね……？　だからわたしは、最後までコーディネイターが好きになれなかった」

結局のところ、戦争を通してフレイの中に現れた変化など、その程度なのである。

偏見や先入観、そして無知ゆえの無理解からコーディネイターを嫌っていた彼女は、以前からそうした悪感情を間違ったものとは考えなかったし、周囲の人間に隠そうともして来なかった。そして、戦争を通して世界を理解する内に、きっと彼女は本当に彼らのことが嫌いになっていった。

つまりは何が云いたいのか、フレイは世の中のことを学んだ上で、それでもコーディネイターが嫌いなままなのだ。

ナチュラルとコーデイネイターの共生と融和、相互理解による安寧を願うステラにとつて、告げられた事實は重すぎる現実であり、おおよそ24時間かけて、愛は地球を救わないのだと教えられたようなものでもあつた。

（目を瞑り耳を塞ぎ、あなた達なんて知らないままであつたら、きつとわたしは幸せでいられた）

フレイ・アルスターは、初めからこうも極端だつたわけではない。過去のことはいらないし、この先がどうなるかも判らないが、少なくとも“ヘリオポリス”で暮らしていた頃の彼女は、自他ともに認めた高嶺の花だつた。

——もし戦争など無縁の、穏やかな世界にいられたら……？

彼女はきつと、今でも大輪の花でいられたらう。同級の取り巻き達には持ち上げられ、カレツジのマドンナとでも囃されていられたはずだ。ナチュラルなのに可愛い自分は、他とは違つてある種の高い所に生まれた人間であるのだと、得意になつてもいられたはずだ。

「井の中の蛙は、海を知つてしまつたばつかりに、自分の小ささを思い知るのよ。——知らない方が、幸せだつたかも知れないのにね」

数多のコーデイネイター達が生まれ持つ、圧倒的な才能と美貌。そこから生まれる向き・不向きの格差に、ナチュラルはいつだつて直面させられる。ナチュラルである彼女

がどれほどの努力をし、才能や美貌とやらを磨き上げたところで——「あの子の方が凄
いよね」——コーディネイターは、一足飛びでそれより高みへ跳んでゆくのだ。

世の中というものは、持つ者よりも持たざる者の方が物事の有難みによく気付く。そ
ういう意味では、フレイのこれまでの痲癩でさえ、後世においては「ないものねだり」
の一言で片付けられてしまう簡単な心理だ。それが、深刻な悩みを抱える個人が、必死
になつて問題に——「運命」に挑んだ結末であるにも関わらず。

「勿論、わたしが今までどんな苦勞をして来たかなんて、あなたの知つたことじゃない」
その言葉は逆説的に、ステラが今ここに至るまで、どれほどの苦勞を越えて成長して
来たのか。

——ステラが紡いだ『この物語』を、フレイが露ほども知らずに来たことを意味して
いる。

だが所詮、そのような物語もフレイにとってはどーでもいいことであり、知つたこと
ではないのだ。

「わたしはあなたと苦勞比べをしたかつたわけじゃない。努力とか、苦惱とか、そういう
のぜんぶ越えた先にある戦いで——何が何でも、あなたに勝つてみたかつた」

「……………それだけのために……………」

「結果は……………ま、完敗したけどね。……………あーあ！ 一度は勝つたと思つたのにな」

殺し合いをした相手とは思えないほど——命のやり取りをした後とは思えないほどに、軽薄そうに話しているこのときのフレイを、ステラは不思議と恨んだりする気にはならなかった。

「それでも、あなたは本当に強かった……」

搭乗機のりものの話をしているわけではない。

再調整された“デストロイ”が以前を上回る機動兵器と化していたのにはステラも驚いたし、慄きもした。運用上の過失や欠陥はともかく、火力単体で見れば間違いなく“デストロイ”は最強の力を有する機動兵器であり、全身から吐き出す砲火は繊細さや尖鋭さとは対極にあつて、並大抵のMSであれば一撃で破壊できるパワーを持っている。

しかし、実際にそれを使いこなすのは、容易なことではない。確かに“デストロイ”に乗り込む者には、攻防一体の絶対的な性能が約束され、そのことに胡坐をかいても良いように見受けられる。技術を必要とせず、技巧を凝らさずとも、戦闘においては余り々つておつりが返つて来るほどのオーバースペック。それを確かに“デストロイ”は持っている……持つているのだが、実際にそれを制御し、なおかつ実戦の中で活かすには相応の業が必要だ。

そういう意味で、フレイは現実“デストロイ”を制御し、戦いの中では“クレイド

ル”を一度は捻じ伏せてみせた。たとえ不正薬物ドーピングの力を借りていようと、絶大な機体性能に溺れることのなかったその“力”は、モビルスーツ・パイロットとして敬意を払うに値する。

何より、戦うことしか出来ない強化人間、戦い続けることを宿命づけられた狂戦士に身を窺しながら、それでも最後まで自らの意志で戦いを“望んだ”少女の姿に、ステラは想像以上の刺激と感動を憶えたのだ。

「なにそれ……慰め？」

もつとも、それもこれも今になって云われたところで、フレイにとっては皮肉にしか聞こえないのであるが。

「ううん、本心」

短くステラが返し、それを空世辞と受け取ったフレイは、無言のまま苦笑い返すのだった。

「ほんとうだよー！」

ステラが怒った風に念押しすと、フレイがくく、と声を上げた。

そのムキになったような返し方に、彼女は笑うしかなかったのだ。まるで幼子のように態度が、やけに可愛く思えて。

「でも、そうね、今日ばかりは……素直に受け取ることにする」

「もう……」

「なんだか、嬉しいものね……」

遠い目を浮かべながら、フレイはこれまでの清算をするようなことを云う。

「わたしにとつて、あなたは出発地点スタートであり、目標地点ゴールでもあったからさ……」

不思議とフレイは、今の自分が素直になつていてことを自覚していた。普段は滅多に自分の思いなど他者に打ち明けない彼女であるが、果たしてそれは、彼女自身が今際にいるからか、それとも、聞き手の少女が話しやすい性格をしているからか——？

何にせよこのとき、とても素直に相手がみえる。そんな気がしていた。

（だとしたら、あれが本当の、私を負かし、私を懂れさせた女の子の姿なんだろうな……）

先に打ち明けたとおり、フレイにとつて、ステラは懂れだった。

そこには容姿的な意味合いも少しは含まれているかも知れないが、普段のフレイは自分の容姿にコンプレックスなど抱えてないし、むしろその土俵であればステラにも負けないくらい自信と自負を持っている。だから彼女が実際に恋い焦がれていた部分というものは、かつての何もできない彼女の姿と比べたとき——どうしても気高く映った——戦う力を持っていたステラの『戦士』としての側面が大きいのである。

戦場に出るステラは常に強大な戦士でありながら、そのじつ他人を守り、そして活かしている兵士でもあった。その姿こそ同性として同年代として、最もフレイの身近に存

在していた英傑像であり、この映り方が、ステラのことを越えてみたい壁であると彼女に考えさせた。

そのようにして打ち明けられ、しかし、どうにも自分のことを過大評価しているフレイを、ステラが肯定することは、最後までなかった。

「大袈裟だよ……みんなが、そうやってステラのこと誤解してる」

心より平和を願いながらも、結局は戦う以外の手段を知らないステラは、そんな自分が英傑然とした人間であるなどと考えたことがないのである。また、彼女自身は別に強さに振り切れた戦士であるわけもなく、キラやアスラン、ムウにラウなど——本来なら自分よりパイロットとして腕の立つ男達は大勢いて、ステラはそれを知っていたから、それをそのままフレイに云った。云ったのだが、わたしはそーいうこと云ってんじゃないのよ、と一蹴された。

相手の云うことが微妙に理解できないステラは小首を傾げるしかなかったが、フレイはそんな彼女の鈍さが妙に面白く思え、答え合わせのように告げてやっていた。

「それは、あなたがなまじッ力”を持ってしまったからよ。あなたはそのことに悩み……でもそのせいで、誰も本来のあなたを見ようとしなかった——わたしもね。それは、あなたがキラとそっくりに思える部分」

「え……？」

「私には分かる……気がする。今ならとても素直に、あなた達が見えるから」
説き明かすフレイもまた、これまでキラやステラを多く傷つけて来たのだろう——何も知らなくて、何も見ようとして来なかったから。

——強さにばかり憧れて、弱さについては見向きもして来なかったから。

だから、気付かなかった。こうして武器もなく目の当たりにするステラは、舌足らずで、愛らしい子どものようなものであることに。かねてよりフレイが抱いていた英傑像などは、結局のところ、戦場においてしか発揮されない幻想に過ぎないことに。……だからだろうか？ フレイは、口を次いでこのようなことを云っていた。

「もつと、違う形で出会えてたらさ——」

フレイが口にし、ステラはその先を想像し、驚きに目を開く。

——違う形で、出会えていたら……？

ステラはそのとき、その先にかすかに胸を膨らませ、爛々と輝く瞳をフレイに向けたのだった。

「——いや」

だが、あまりに燦々とした明星みたいな双眸に見つめられ、フレイは喉元までは出掛かっていた言葉の先を呑み込んでいた。

無垢すぎる眸を前にして、臆した。照れを隠したのである。その瞳の輝きっぷりに、

殆ど眩んだと云ってもいい。

「やっぱり、なんでもない……」

「……どうして？」

「えっ、なにが？」

口を噤めばそれで終わりだと思っていたフレイは、唐突に訊ね返され慌て出す。

「どうして、途中でやめちゃうの？ その言葉……前はキラにも云いかけてたこと、あったのに」

「!? 憶えてたの……!?」

「気になったから……! でも結局、その先は聞けてないまま」

確かにフレイは以前にも一度、その言葉を投げかけたことがある。

そのときはステラではなく、キラに向けて言葉を発していたのだが、そのときも結局、フレイは言葉を最後まで声には出してくれなかった。

「いや……」

「二回目だよ？ どうして途中でやめちゃうの？」

「だ、だから……」

「云ってよ!」

なんともこの場にあつては程度の低めなやり取りの末、フレイは「だから……!」と

観念したように口を開く。

「わたしたちは、友人にだつてなれたかも知れないね——つて」

ひとつだけ、フレイには矜持をもつて胸を張れることがある。

それは幸か不幸か、幼少期よりコーディネイターに対する偏見が強かつた影響で、人の外見ではなく、内面にこそ美德を見出す価値観と相成つたことだ。

フレイにとつて、好感が持てる人間というのは異性のみならず『内面を知つてこそ知己となれる者』——人種や性別、様々な垣根や柵しがらみを越え、心よりの理解と信頼を寄せられる人間のことを指す。その人数は戦争を通じた接触と対話の中で、ゆつくりと増えていき、ハリーやナタル、サイにオルガ——今となつてはキラもまたそうなのだ。

そしてその領域へ、いま、きつとステラは足を踏み入れた。勿論、本質的にはコーディネイターを苦手とする彼女だが、それとこれでは少しかだけ話も違つていたらしい。

「——ほんと、それだけのことよ……」

「なつてたよ……！ うん！ きつと、なつてた……！」

確かな感動を憶えながら、ステラが爛々として返事をする。

——ともだち……。

云われて初めて、ステラもまた、気付かされたような気分になる。

適当な表現が見つからなくて、これまでは分からないままだった。でも、きつとそう

なのだ——自分はただ、フレイトと話がしてみたかった。ずっと前から、キラと会話するときのように、何気ない会話を彼女としてみたかっただけなのだ。

——それはきつと、友達になりたかった、ってことなんだ。

「みんな、他の誰かを『知らない』ってところから始まるんだ。わたしもあなたのこと、よく『知らない』から……」

それはおそらく、この戦争の構図そのものでもあるのだろうと、ステラには思える。無知こそが憎しみの温床となり、争いを呼ぶものであるのなら——

「だから、もう一度やり直すことって、できないのかな……?」

疑いようもなく、ステラ達は戦場で幾度となく衝突して来た間柄にある。しかし今になって思えば、それは互いの想いを表現するのが、ステラもフレイトも、すこぶる下手くそだっただけではないのか。煎じ詰めれば、戦う以外の手段を知らなかったステラと、戦う以外に手段を持つとうとしなかったフレイト——それらは少女らしい意地や未熟さゆえ、彼女達がわざわざ遠回りをした結末に過ぎないのではないか。

「ステラも、もう一度、あなたを『知る』ところから始めたいから……!」

願うような言葉で、真つすぐな思いを告げるステラ。そんな彼女のやさしい言葉を、フレイトは温かな目を向けながらで聞き留めていた。

が、そんなフレイトは一瞬だけ、ふと何かに気付いたようにステラから視線を外した。

そして、そのあとすぐに、ステラを見つめ直したのだ。

「それも、悪くないかもね。……でも」

そこからステラに返つて来た言葉は、想像を絶するものだった。

「残念ながら、ここまでよ」

瞬間、ふたりの会話を絶つかのように「ジエネシス」が大震動が襲った。

ステラ達を襲った震動の正体——それは彼女達を閉ざしている「ジエネシス」が駆動を開始した影響によるものだ。励起場の内部にある幾多のミラーがエネルギーチャージを始め、それ自身が黄金色の輝きを放ち始める。

——しまった……！

ステラが急ぎ手許のタイマーに視線を戻すと、アスランが残した「ジャステイス」の自爆まで、そう猶予は残されていなかった。件のタイマーは「ジエネシス」が発射される寸前に『0』を刻む。示された時間内に脱出を果たさなければ、彼女達は「ジエネシス」と「ジャステイス」が巻き起こす核爆発に巻き込まれることになるだろう。

「ほら、無駄話はこのままでにして、早く出ていきなさい。ここはもう、長くは持たないわ」
全てを察し、フレイがそれまでの話を切るように云った。その突き放すような云い方

に、ステラは愕然とする。今の云いようでは、彼女は——まさか。

しかし、当のフレイは特に気に留めた素振りもなく、シートに身を預けたまま、無気力そうに宙を見上げている。

「最後の最後に、話せて楽しかったよ」

「そんな！ まさか——」

「——わたしは、ここに残る」

内部に残り、アスランが残した「ジャステイス」の自爆を見届けるといふ——

呆気なく吐き捨てられた言葉に対し、ステラが制止を求めるのに、そう時間は必要なかった。

「だっ、だめ！」

「わたしに残された僅かな時間、わたしの自由にさせてよ……」

広げた掌を見つめながら、みずからの死期が迫っていることをフレイは感じていた。この世に生まれ落ちてから、まだ十五年しか経っていない肉体だが、そんな彼女の意識と生体は、確実に限界の時を迎えつつある。

——いや違う、限界なんて、とっくの昔に迎えていたんだ。

これまでではただ、乱用された薬物が、そのことを誤魔化していただけ。重すぎる瞼と、深い闇に覆われた視界の中で、それでもフレイは皮肉っぽく笑いながら言葉を紡ぐ。

「それにもう、私には帰る場所も、待つ人もいないのだから」

それと同時にゴロゴロと音を立てながら、さらに「ジエネシス」を駆け巡る震動が大きき、周囲のミラーの黄金色の照り輝きも、また看過できないものとなってゆく。

だが、そんなことにも構わず、ステラはフレイに向かって叫び続けた。

「ここで命を投げ出したって、何にも変わらない……!」

「変わらない……? ええ、そうね。でも違うわ、変えることなんて出来ないのよ」

「強化人間の治療法が見つかっていないこと、気にしているの……?」

確かに、適切な医療処置を受けられないときの強化人間の苦しみは壮絶だ。あるいは殺してくれた方が安らかになれるのではないか——そう思うだけの生き地獄が待つているならば、そうなってしまいう前に、いつそのこと自分で自分を消してしまおうという考え。

経験があるステラにも、分からないものではなかったが……

「運命みたいなものよ。ナチュラルとコーディネイターの間には、生まれた時から、一生かかっても埋められない差があるでしょう、それと似て同じようなもの——」

あなたには、分からないだろうけどね——

不明瞭な喩えを以てフレイの発した一言は、まるで突き放す呪詛のように、重く暗い響きを持ってステラの耳に届けられる。それに対して、ステラは啞然としながら限られ

た言葉しか返すことが出来なかった。

「たしかに、ステラには分からない」

コーデインイターとして生を受けたステラに、ナチュラルであるフレイの気持ちは判らない。先天的に調整され、一方では持つていて当たり前とさえ思われてしまう麗容を持つステラには、それを持たない者の心情は判らない。連合の強化人間になどなりたくなかったステラには、みずから望んで強化人間に堕ちていった者の思いなど判らない。「分からないけど、それでも、あなたは伝えてくれた」

フレイ・アルスターが、端的に云えば「自分に嫉妬していた」という事実には、ステラは戸惑いを憶えるしかなかった。

世の中にはそうありたいと願ってもそうなれない者の方が多いのであり、結局のところ、ステラはそういった現実が孕んでいる当たり前の残酷さ、不公平さ、その中でもほんの一例を、目の前にある少女の裡に垣間見たに過ぎないのだ。そういったことについて、物事を知らなさすぎるステラは、直視したこともなければ、経験がないがゆえに、考えたことだつて一度もなかった。

だからこそ、明かされたフレイの心境に対して、ステラが一定以上に刺激を受けたことは間違いない。間違いないからこそ、ステラは今、自信を持つて続けられる。

「明かしてくれた！ 今まであなたが、ずっと苦しんで来たことを」

フレイだけではない——

——人は、自分の心に他人が踏み込んでくることを嫌う。

だから、その心の裡を他人に伝えるのは、苦悩を抱えた本人に他ならないのだ。

「ステラね。もう、あなたの『敵』になるの嫌なんだ……」

「……」

「あなたの『味方』でいたいんだ……！ だから、伝えてほしい、教えてほしい！ それで——それをするためには、やっぱりステラ達は、一緒に帰らなきゃだめなんだ」

——そうして言葉を発している間にも、着々とタイマーのカウントダウンは進んでいる。

「それにね、あなたはわたしにだけ『出ていけ』って云ったけど……それは、すつごく無責任だと思う！」

「……は……!?!」

流石にその発言を聞き咎めたフレイが、心外な表情になる。

ステラはそれにも構わず、周囲の景観を示唆しながら続けた。

「——だって、出口がどこにもないんだ？ “デストロイ”が！ 全部ぶつ壊しちゃつ

たから……」

ぶつ壊した、という表現はステラらしくもないように思えるが、彼女はそれだけ切羽

詰まつて事態を捉えており、嘘もまた吐いていないのだ。俄かには信じられないような内容であるが、ステラはすでに機体のメインカメラを操作し、周囲の景色を一望した直後だった。

そして「ジェネシス」内部に無数ほどあったはずのシャフトが、殆ど崩落していることに気が付いた。おそらくは先程まで繰り返し広げた激闘の余波のため、散々なまでに暴れ回った「破壊の巨人」がその冠名に従ったがゆえの光景だ。

勿論、正しく云えば「ジェネシス」内部に構えられたシャフトの内、数か所はただ入口が崩落しているように見えるだけで、その中にはまだ外へ繋がっている道も点在しているかも知れない。だが、そうして風潰しにシャフトを走査するだけの時間が、彼女達は決定的なまでに欠いている。

「冗談でしょ……」

「いったい、自分という女はどこまで他人の足を引っ張れば気が済むのだろう——？」

そのときフレイは、薬物が切れた弊害ではないにせよ、俄かに気が遠くなったという。絶望的な状況であることが明らかにされ、しかし、ステラは全くと云つていいほどに気後れた様子もなく続けた。

「ここから生きて帰るには、方法はひとつしかない。それには絶対、あなたの力が必要なんだ」

「どういふこと？ わたしの機体は、もう駄目よ」

ステラの思い描いている真意とやらが、フレイにはやはり掴めない。

核エンジンを採用している「レムレース」には稼働時間の制限はないが、それと云つても半壊状態に陥つた手前、漏電と損傷の具合から機体は著しくパワー・ダウンを引き起こしているのだ。ましてや有用な武装も全て失つた今、すでにズタズタのMSと、心身共にボロボロのパイロットに、ステラはいつたい何を期待するといふのか。

「考えがあるつていふなら、あなた一人でも……」

「できない。「クレイドル」の力だけじゃ、きつと——」

ステラは、次いでぼそりと言葉を漏らし、フレイは、それこそが答えだと知った。

「——前のとは、ちよつと規模が違いすぎる……」

前の——？

その言葉を推し量つたとき、フレイの思考は奇しくも遠い過去まで飛んでいった。崩落寸前の、封鎖された軍事施設からの脱出——？ それが困難と判断したとき、ステラという少女が何を為したのか。確か以前、本当にたつた一度だけ、今と似たようなシチュエーションがあつたはずだが。まさか……？

「ま、待つてよ！ あんた、まさか」

静止を求めようとしたそのとき、通信回線に、一抹のノイズが迸つた。

——ジエネシス”の最奥部で、電波が来ている……?!

じりじりとノイズ混じりに響く雑音の中で、確かにそのとき、誰かがこちらを呼んでいた。

このとき、外部から通信で呼び掛けを続けていたのは、三隻同盟軍の“アークエンジェル”と“エターナル”であった。

——繋がった!?

ぎりぎりの通信回線が“ジエネシス”の内と外——ステラとラクス達を結び付ける。ステラの頭上、通信機にはそれぞれ“アークエンジェル”と“エターナル”の艦橋の様子が浮かび上がり、見上げた先にはキラ達の儂げな顔が映し出され、ステラは驚いた。映像は切れ切りに歪み、ともに交わすことができるのは音声くらいのものだが、それでさえ、ともすればノイズに吞まれてしまいそうになる。

「みんな……!?!」

へステラ、無事なのね!?! 心配してたんだよ……!?!

キラやミリアリア達が、通信先で歓喜の声を挙げた。

そして、少なくとも「アークエンジェル」と「エターナル」が健在であることを確認し、ステラもまた鸚鵡返しのように「無事で良かった」と口にする。

しかし、本当に無事を喜ばれるべきはステラの方だと、少なくとも通信先のキラは考えていたに違いない。一方で「エターナル」にいるラクスは、普段のおっとりとした様子からはまるで想像できない、余裕のない表情で叫びかけた。

「ステラ！ まだ時間はあります！ 早くそこから脱出して下さい！」

必死になって訴えてくれる涼やかな声を聞き、その心遣いを有難く感じながら、ステラは気丈に返す。

「なに言ってるの……！ 脱出するよ！ ステラは、絶対にみんなのところに帰る！」

決意を露に言葉を紡いだステラであったが、実際のところは、殆どが強がりであった。

すでに「ジェネシス」からの退路は断たれ、不安と焦燥が、少女の小さな胸の内を食ひ荒らしていることは確かだったのだ。——本当は、絶対の自信なんてない……。

「っ……」

ただ、ラクス達を安心させてあげたい——

その思いで気丈に振る舞った表情が、僅かに不安でほつれ掛けそうになったとき、彼女はみずから「エターナル」に残してひとりの少女の面輪を見つけた。それは他でもない、彼女がオーブより命を賭して守って来た少女、マユ・アスカの儂げな面持ちだ。

「ステラおねえちゃん……!」

「……! マユ……!」

その名を呼んでやり、今にも泣き出しそうな顔つきになる少女が浮かべた双眸は、たくさんのきらきらを散りばめた宝石のようにして見えた。

ステラの言葉を待つてそうなマユに対し、ステラが何かを云おうとして、出来ないでいると、突然ふたりの間に割つて入るように男性の声が響き渡る。 “アークエンジェル” からの通信だ。

「——フレイ・アルスターは、そこにいるか!」

どことなく空気の読めていない割り込み方に微妙に表情を変化させたステラであったが、その男性の声が、どこかで聞き覚えのあるものであったことは確かだ。

そして思い出す。それは、少なからずステラも世話になったことのある人物であり、元 “アークエンジェル” に所属していた船医の声であることを。

「……!?! ハリー・マーカット……!」

白衣の姿を認め、ステラは目をむいて驚いた。そしてそれは、傍らのフレイも同様だった。

「驚愕するステラの姿をハリーもまた認め、彼は再会を言祝ぐような論調で云った。

「ああ!?! ステラ君、久しぶりだね!」

「えっ？ あつ、う、うん」

舌などが忙しない人は、苦手だ——

へいきなりで済まないんだが、きみは今、フレイと一緒にじゃないのか!？」

呼び掛けるハリーはこのとき、ミリアリアのC I C座席を拝借している。

いったい、どういった経緯で彼が「アークエンジェル」に戻ることになったのか——ステラの知るところではないが、別に知る必要もない要件だ。

ただステラは、そんなハリーの目的を汲み取って、みずからの通信回線を「レムレーズ」にまで中継させていた。唐突に会話を振られたフレイが「そんなっ」と抗議の声を漏らしたが、ステラはそれを気にしないように努力した。実際のところは、ハリーの相手をフレイに押し付けただけかも知れなかった。

「生きてたの……!？」

へああ、経緯なら、順を追って説明したいくらいだよ。でも、そんなに時間は残されてない……：そうなんだろう!？」

指摘され、そこで、またもフレイはタイムマーに目を戻す。そこに示しているタイムリミットを考える間もなく、ハリーは矢継ぎ早に言葉を紡いだ。

へフレイ、聞いてくれ！ 今の「アークエンジェル」には、キミの帰りを迎え入れる用意がある」

「えっ……っ？」

「……………」

出任せを云っているわけではない。それは現在「アークエンジェル」の捕虜として扱われて然るべきハリーが、方々に便宜を図って貰ったがゆえの功業なのだ。

たとえば今、ハリーがこうしてブリッジのCICシートを借用することが出来ているのも、全ては艦長であるマリユアの許可を得ているからだ。

そんなハリーの呼び掛けに対し、フレイは信じられない、と云った風な表情を浮かべ、やがては僅かに喜びかける。だが喜びかけたその瞬間、全身に冷水を掛けられたように身を硬くした。ハリーの坐すシートの後方、そこに同郷の学生達——ミリアリアやサイ達の姿を認めたからだ。それにより強い現実感が押し寄せ、生来の彼女の臆病な恐怖心を呼び起こす。

「……………」

モニターに映る同郷の者達は、どこか困惑を湛えた胡乱気な表情を隠せずにいる。薄情と思われるかも知れない——が、それはこれまでの彼等の境遇を鑑みれば、しごく正当な反応でもある。個人としてのフレイ・アルスターはともかく、彼ら「アークエンジェル」のクルーにとって『「レムレース」のパイロット』は、何人にも及ばぬ危険な存在でありすぎたから。

勿論、そうした人間の様々な感情や思惑を考慮したうえで、マリユーはハリーの勝手を許し、当のハリーはどちらかと云えば凶々しい性格の人間であったから、この際だからと艦長の許可に甘んじて、クルー達にはまるで遠慮のない発言を続けたのである。

〈誰に何を思われてもいい、きみだけは僕がまもる——！〉

嘘偽りのない真摯な言葉と、『まもる』と告げたその誓いに、感動を示したのはフレイではなくステラの方であった。彼らの間にどのような信頼関係が結ばれているのか——それもまたステラの想像の及ぶところではないのだが、いずれにせよ、己が身を粉にしてでも自分のことを守ろうとしてくれる人がいる。

——だとしたら、フレイはきつと、どこまでも「幸せ者」だ。

ステラは本気でそう思ったのだが、しかし、畳みかけるように紡がれるハリーの言葉を、フレイ自身は聞きたくなかった。

「——だから、フレイ、きみも帰って来い！」

聞いてしまったら、希望を抱いてしまうかも知れなかったから。

「……無理よ……。わたしの体は、もう……！」

云い訳のように、咄嗟に沸きかけた希望の種を摘み取るように、フレイは唾棄していた。

フレイ自身、今は手足の感覚も失われ、たとえば今は操縦桿を握っているが、これが

本当に握れているのか本人は判っていない状態だ。感覚の麻痺はおそらく末期症状のひとつだ。そんな人間が今さら戻って治療を受けたところで……いや、そもそもの治療法など、この世界にはまだ確立してはいないではないか！

しかし、ハリーは語気を強めて云う。

〈生きてさえいれば、可能性は幾らでもあるんだよ、フレイ〉

「ハリーっ……!?!」

〈——だから諦めるな！ みんなのところに、帰って来い!〉

ハリーが訴え、そうした彼の決意と熱意のほどは、他の者達の心さえもを動かしたらしい。そのとき「アークエンジェル」のクルー達の表情にも変化が現れ、フレイは、そのやさしげに変化した感情と思念を如実に受け取ってしまった。フレイにとっては元婚約者で、しかし、彼女の都合で一方的に棄ててしまったサイ・アーガイル——そんな彼の温かな表情も、そこにはあったのだ。

〈罪滅ぼしなんかじゃない、今度は本心から、きみを救ってみせる……! 救わせて欲しいんだ!〉

「そんな……そんなこと……いまさらっ!」

少女としての人生を捨て、戦士となるために擲った未来。

——振り返る過去に、未練なんてないはずだった。

強化人間という破滅した存在である以上、決して抱いてはならない希望。

自分にとって都合のいい未来を望んだところで、残酷な現実が、ただ待つているだけなのに。

——こんなオレにも、生き残る意味ができたってことかよ……。

戦場に散ったオルガ・サブナツクの端正な面立ちが、ふと、フレイの脳裏に浮かび上がる。逃げることも免れることも許されない死期を間近に予感しながら、それでも最期の日には生きることには希望を見出した彼の言葉を、自分はあのととき否定し、嘲笑ったことだろう。

けれど、間違っていたのは自分の方だった。今なら、彼が抱いた希望が——気持ちがよく分かるようだから。

——生きられるのなら……。

——生きていたい……。

願望にも似た切望がフレイの胸を締めつけるのは、それこそが、彼女がひた隠しにしていた本音と本心であつたから——

しかし、そんなことが今さら赦されるのか？ 散々他人を傷つけ、周りの人間に迷惑を掛けて来ておいて、それでも最後には、救われようとしている？ そんなもの、本当はただただ、烏滸がましいだけの話かも知れないのに。

「わたしはまた、あなた達に迷惑をかけるかも知れないのに……それなのに」
それでも、良いというのか？

それでも、生きて良いというのか？

「——人に迷惑をかけちゃいけないなんて、そんなこと、きつとないんだ」

許しを求めるような表情のフレイに、ステラがそつと言葉を返す。

「誰だつて、迷惑をかけながらでしか、生きていけないんだよ」

その中で、受けた恩を少しずつでいい、返していくこと。

——それが、つまりは生きるってことなんだろう。

云いながら、ステラも少しだけ、分かったような気がする。

「死なないんだよつて、生きていいんだよつて——やさしい言葉をくれた人に、死んでやることは恩返しじゃない」

報いるということとは、そういうことではない——

打ち明けると同時に、ずきりとステラの胸が痛む。それは、ステラ自身が「やさしいひと」にしてやれなかった恩返しでもあつたから。

「生きて帰ろう、みんなのために。——なによりも、あなたのために」

ステラは少なからず、自分だけが呼び掛けていた時とは違う、フレイの中に現れた良い変化を感じ取っていた。感じ取っていたから、次のように云つた。

「ステラ達なら、きつとできるよ」

その言葉の中には、自身へ対する信頼が含まれていたのだ。ひとりでは決して出来ないであろうこと。ふたりなら、あるいは成し遂げられるはずだという——

そこまで云われ、フレイは、その言葉を信じないわけには行かなかったのだ。

「わかった……わかったわよ……！ やればいいんでしよう!! 何をやるのかは、知らないけど……」

その瞬間、フレイは意を決した。発射寸前の“ジェネシス”からの脱出——

ステラの提示した作戦に、乗っかることを、決めたのだ。その返答を受け、ぱつとして微笑み、救われた気分になったのはハリーもだが、ステラもまた同じだった。

しかし——

フレイが云ったとおり、おそらく『これからステラが成そうとしていること』は、この場に繋がっている誰の想像にも及ばないことである。だからこそ、ステラは改めて、今度はみずからの言葉で話し始めた。

へだからね、大丈夫だよ。ステラ達は、ここから必ず、生きて戻る」

円らなるステラの双眸は、このとき“エターナル”の通信へ——その艦橋に坐す、ラ

クスとマユへ向けられていた。その間、ステラはひとときもラクス達から視線を外すことはなく、また、見つめられている者達もひとときたりともステラから目を逸らさない。ステラの表情から伺えた覚悟のほどに、不思議と吸い寄せられていたように。

しかし、そんな会話の中に、不審感と違和感を憶えたのはキラであった。

（——違う……）

モニターに映るステラは、発言の内容に反し何か具体的な行動を起しているように見えない。少なくとも「ジェネシス」の中枢から脱出を図るためには、モビルスーツを行動させる必要があるはずではないか。

にも拘わらず、ステラの手は宙で遊び、どれひとつとしてMSの操縦作業を行っていない……？

「もしかして、出られない、の……？」

その可能性にいち早く気付き、声を挙げたのもマユであった。

震えた声で、絶望感を隠した声で、少女はステラに問いかける。退路がないのか、それとも機体が動かないのか——そのことが物議を醸し、周囲の者達も途端に騒然とし始める。

そんな問い掛けに対し、ステラは曖昧に微笑んで返した。

〈信じて——〉

と、気丈に微笑むその表情は、マユの目には、とてもやさしく、つよく見えた。

そして、その言葉を愚直に信じるクルーの誰かが、きつと打開策があるんだ、と無責任に呟いた。すると、最初のひとりがそう云えば、確証もない割に周りの者達もその言葉を信じ、場の空気全体が、どこか安堵した雰囲気にも包まれていく。だが……

〈……………でも〉

そのとき続けられたステラの声音に、僅かな震えが混じった——

〈本当は、もしかしたら……、本当に、もしかしたらね——つ〉

——ように聞こえたのは、気のせいだろうか。

〈帰れないかも、知れない……つ〉

いや、気のせいなどではない……。

マユが見かけたモニターの中で——そのとき、ステラは泣いていた。

すみれ色の円らな目から溢れ出す涙が、みるみる雫として無重力に浮かんで、泡沫玉のように輝いていたから。

「……………えっ……………」

ただし、当の本人は自分がどうして泣いているのか、理解できていない様子でもあつ

た。

ただ体と声が震え出し、次第に視界がぼやけていった。身体が勝手に泣き出した、という程度にしか、おそらく本人は自分の体調について理解が及んでいなかったのではないか。

だが、余人が疑う必要もないほどに、はつきり衰弱し、臃氣で、弱気な声を発している少女の姿に、そのとき誰ひとりとして声を掛けてやることが出来なかった。いや違う、言葉にならなかったのだ。ただ、ひとりを除いては。

「……いやだ……っ！ いやだ！ そんなの——!!」

この場にあつては、聞きたくもなかった弱音と涙声。

今だけは見たくなかった少女の姿に、怒りとは異なる複雑な感情を爆發させ、マユは思わず座席から立ち上がる。しかし彼女は、そのとき自分の足が思いのままに動かないことを完全に忘れていた。気持ちだけがつのめり、体勢を崩してシートの前方に転げ落ちた少女の身体を、すぐ脇のラクスが駆け寄って抱き留めた。

「っ——！」

駆け寄りながらも、言葉にならない嗚咽が漏れているラクスにとつては、二度と見たくなかった悪夢に魅せられているかのようでもある。しかしステラは、自分の言葉で話し続けるのだ。

「——だからね！ そうなったときは、ラクスにお願いがあつたんだ」

「ステラ……！」

「マユのこと、よろしくおねがいます——」

畏まり、両手を身体の前で重ね合わせたステラは、モニターの向こう側で深々とお辞儀をしている。保護者として、知己として——マユのことを守つてやりたいというのは、淀みのないステラの願い。しかし、

——それは……！

殆ど——そう、殆どが遺言のようにも取れてしまえそうなメッセージを、ラクスは受け止めることは出来ても、受け入れることが出来なかつた。深々と頭を下げていたステラが次に頭を上げたとき、そこにあつたのは泣き笑いでも空笑いでもなく、自分が取つた突発的な行動を嘲るような、自嘲という名の嘲笑だつた。

「あはつ、ほんと、なに云つてるんだらう……！ ステラ、諦めてるわけじゃ、ないのに」

結局のところ、ステラはきつとそのときもまだ自分の気持ちに整理がついていなかったのではないか、とは彼女達のやり取りを怪我を押しつけてブリッジにやつて来ていたムウの言葉だが、かねてよりステラの弱点であり欠点に気付いていたムウは、これ以外に適切な表現を見つけることが出来なかつた。

——自分自身に無頓着で、これまで無関心であつたがゆえの無知……。

優しさと確かな共感力を持ち合わせ、どんなに他人を気持ち慮ることができる人でも、一方では自分の気持ちには疎く、よく分かっていることが多くということか。しかし、それと特別な例というわけではあるまい。この世において自分のことを正確に理解している人間など、ムウも含めていったいどれだけ居るといえるのか——

そして彼の表現どおり、自分がどうしてここまで動揺しているのか、ステラには、それが分からなかったのだ。

「ごめんね。最後まで、頼りになるお姉ちゃんでいられなくて……」
「ううんっ……！ ううんっ！ そんなことないっ！」

マユは、心の底からそう思っているのだ。

——どんな風でも、あなたは私の憧れ……。

——最強で、最愛のお姉ちゃんだったんだ……！

叫び、ステラの表情は、そのときすでにいつものそれに戻っている。さつきまでのあれが幻であったのか——と、そう錯覚させられるほどに、変哲のないいつもの少女がそこにいた。

へただいまを云いに行くから……！ だから、きつと待ってて！

涙を止めた夢いまでのすみれ色の眸に、もう一度だけ決意の火が灯る。

——そう、弱音を漏らしたのも、本当に、ただの気の迷い。

——本当に、それだけのことなんだ。

ステラは、自分にそう言つて聞かせることを怠らなかつた。

それから、外部との通信はいつの間にか途切れていた。

云いたかつたことを皆に伝えるのには、それはあまりに短すぎる時間のように感じられた。

「……」

溢れる涙の滴りを拭い、小さく鼻をすすつたステラを、すぐ隣にいるフレイは静かに見届けていた、見守つていた。そんな視線に気づいたステラが、どこか所在なげな表情になつて笑うのも——。

『ふたりで力を合わせれば脱出できる——』

自分にはそう伝えた張本人が、心の底では既に弱腰になつていたことを、ステラはどうにも恥じている様子だつた。だが、それについて別にどーにも思わないのが、今のフレイでもある。そもそもステラがいなければ、フレイは間違いなく自決の道を選び、彼女の未来は暗黒に閉ざされていたに等しいのだから。

——だからこそ、私の命は、未来は、今からはこの子のためにある……。

そのような決心をさせるほどには、先のやり取りはフレイの心をも突き動かしていたらしい。彼女は改めてMSごと「グレイドル」の方へ向き直り、どこまでも穏やかな口調で告げた。

「これから、何をすることにしても、わたしはあなたを信じるし、あなたのためになることをやる」

——この子のことを、守らなければ……。

義務感とも正義感とも異なる複雑な使命感が、フレイにそう云わせていた。

ステラにも、人並みの弱さがあることを知った。不安、焦燥、恐怖があることを知った。それが当たり前の現実であると理解するには、確かに、フレイはステラのことを知らなすぎた。知らなすぎたから、自分達はやはり知り合う必要があるのだと、フレイは本気で考えたのだ。

そして、それをするためには、ふたりで揃って生きて帰らねばならないことも。

「あなたがわたしに手を差し伸べてくれたように、わたしもあなたの助けになる」

——だから、泣かないでいい。

——もう、泣かないでいい。

「本当のわたしの想いが、あなたを『まもる』から——」

それとタイミングを同じくするように、ふたりの行く手を閉ざす「ジェネシス」は遂

にレーザーの発射シークエンスへ突入した。核動力が育む無尽蔵のエネルギーが増大しながら施設中を駆け巡り、じきに第一反射ミラーまで収束していく兵器的な胎動を感じる。

猶予は残されていない。ステラが設定したカウンタはこの時点で『1分』を切っており、数字が『0』を示したとき、過たず“ジャステイス”は核爆発を巻き起こす。

——それまでに、間に合わせなければならない。

だからステラは、改めてフレイの方を向き、ここからの作戦をフレイに打ち明けていた。

「——だから、やってみよう……！」

全てを明かされたフレイは、そのときばかりは表情を変化させたが、口に出しては何も云わなかった。結局のところ、何を求められようと、如何なる作戦であろうと、それが自分出来ることであるのなら——

——わたしは、その期待に応えるまでだ。

フレイはそうして、みずからの搭乗機に最後の仕事を行わせた。終末へのカウントダウンは、すでに始まっていたのだから。

確固たる意志を以て、フレイはそこで“レムレース”の頭部ツインアンテナより、真紅色に染め上げられたコロイド粒子を全て解放させた。

—— “バチルスウエポン・システム”

ツインアンテナより散布したコロイドの汚染粒子を介して、“レムレース”以外の量子コンピュータを浸食するための兵装。汚染作用のある“ミラージュコロイド”を自在に操る“レムレース”は、システムの出力調整次第では、閉塞された“ジェネシス”内部をコロイド粒子で満たすことができる。

「……ありがとう……っ！」

そうして揺らめく真紅のコロイドが“ジェネシス”の内部空間を満たした頃になって、ステラは“クレイドル”に六枚の両翼を広げさせ、全ての光波発生器から光波粒子を湧出させた。

—— “アリユミューレ・リュミエール”

リフレクターから放散した光波粒子を結び付け、本来“クレイドル”を取り囲む強固な全方位防御帯を展開する兵装。モルゲンレーテの観測技師でもあるエリカ・シモンズは、この光波粒子が“レムレース”のコロイド粒子と接触した際、とある“特殊なエネルギー・フィールド”に突然変異する可能性を説いていた。

—— “そしてその仮説は、今、少女達の目の前で立証された。”

ステラが“ジェネシス”から生還するために、フレイに伝えた方法はひとつ。

それは先の戦闘においても確認されたコロイド粒子と光波粒子の融合によって生み

出される「強大なエネルギー・フィールド」を以て、全ての衝撃と爆発を『耐え抜く』こと——

『——「レムレース」には、それほどに「クレイドル」の性能を昇華させる「力」がある』

シモンズ女史の考察どおり、昇華作用を齎すコロイド粒子を身に宿す「レムレース」は、現実には光波防御帯を発動する「クレイドル」にとつては「触媒」としての役割を果たすMSとなる。それはさしづめ「儀式」のようなものであり、その儀をより完璧な状況下で執り行うためには、パイロットであるフレイとステラの協力が必要不可欠だった。

そして——

科学的な根拠も確証もなく、実際には何が起こっているのか解説するのも烏滸がましい超常現象も、しかし、このときばかりは「それ」を待つ少女達の眼前で意図的に引き起こされた。真空中に散らされた光波粒子は、同じく真空中に蔓延する無量のコロイド粒子と融合し、より強固な「スクリーミング・ニンバス」と呼ばれる超大型の防護境界を作り出す。作り出された防護境界は従来の「アリユミューレ・リュミエール」に比して悠に巨大な力場を発生させ——力学的にはある種の「上位互換」と云えるほどの——守性と攻性を兼ね備えた強靱なエネルギー・フィールドになった。

同時に、カウンターが『10, 00 sec』を切る——
ほとんど爆風に近い激震が、
“ジエネシス”内部の真空を突き抜けたのが兆候だつた。

——来た……！

掴んで！ ステラが叫びを上げ、それを受けた“レムレース”が“クレイドル”の機体腰部に腕を回し抱きついた。

それを認めた後、ステラは“クレイドル”のマニピレータを伸長させ、機体の五指を押し開きながら両腕を左右に張り出した。同時に“クレイドル”の蒼眼が明灯し、駆動系が聖獣のような咆哮を打ち挙げる。

瞬間、白銀の機体を取り巻くエネルギー・フィールドは、翡翠色から真紅色に変異し、それからは不思議なことに、虹色に輝く燐光を散りばめた。鮮烈に色めく光輝は、さながら“ジエネシス”の中にオーロラの“帯”が現れた、といった風だ。施設中に巡らされた“帯”は七色——いや、それよりも多くの色彩に華やぎながら、やがては二機を押し包む極光の“繭”になる。

(綺麗——)

命を賭けた緊張の前にありながら、フレイはふと、口内にそう漏らしていた。

できなかつたこと、やり残したことがたくさんある。アスランやフレイ——さまざま

な人達とようやくまともに向き合えるようになるのに、こんな状態でここを離れたくはないと、ステラは切に思った。

——まもつて……！

閉ざされた“ジエネシス”内部空間を満たす、柔らかな煌めきと——光。

リフレクターから噴き上げた柔らかな光は、星の子を祝福するように“クレイドル”を——少女の揺籃ゆりかごを満たしてゆく。

「……………」

そのときステラは、あたかも自分が、星の光の海の中を泳いでいるかのような錯覚に囚われた。本物の水の海では、泳げもしない彼女だが、であるからこそ、その感覚は何よりも神秘的で、何倍にも幻想的に感じられる。

その海の中に、揺れて帯を打つさざなみを見つめる。その波は、さざめきながら紺碧色に、濃緑色に、鮮紅色に、やがては黄金色に……いや、人間の語彙力などでは、とても表現しきれ得ない千紫万紅に色めき、廻っている。

——強いて云うなら……“虹色”か？

いや、違う……それは、七色などではない。

それは、言葉にしてしまえばたった一つであり、本質的には無限にだって存在する色。これを観測する者の感性にしたがって、表現の仕方が、字義どおり十人十色に変わる

色。

虹色でもない “それ” は—— “星色” だ。

ひとつひとつがどれも異なる星の色——

しかし、どれもが等しく己を示す星の色——

星の名を持つ少女が顔を上げ、

カウンターに——『0』^{ゼロ}の文字が刻まれた。

来る——

そう覚悟した直後、息も出来ないほどの光が押し寄せ、カッとしてステラの視界を白く塗り潰した。乗り手を失い、それまで糸の切れた傀儡のようにじつと滞留していた “ジャステイス” の自爆——鮮紅の騎士が、その身を贄として引き起こした最期の核爆発だ。

一瞬にして発露した光渦が “ジェネシス” 中央基部のカートリッジを爆砕し、そこに充填されていたレーザーの照射エネルギーをも暴発させる。

瞬間、爆光と爆圧が “ジェネシス” を内側から膨れ上がらせた。

それによって生じた白熱光に併呑され、弾かれた “クレイドル” の機体が、展開した

エネルギー・フィールドごと凄まじい重圧に撥ね飛ばされる。

目を焼かれるような眩しさと、体験したこともない息苦しさを体感しながら、ステラは自分達を『まもる』ことに専念し続けた。

オープンになったままの通信回線から、フレイ・アルスターの悲鳴にも近い絶叫が聴こえた。モニターの向こう側、燃えるような赤い髪をした少女は、なまじ人の目に眩し過ぎる閃光にかたく目を瞑っている。

それは、死を望んでいた者の声ではない。生に縋り、それでも、心のどこかで生を欲する者の悲鳴だ。彼女もまた生きようとしているのだと、ステラは改めて実感する。

——まだ、しねない！

そう、自分達は生き抜かねばならない。帰るべき場所がある、待つてくれている人達がいる——

ステラが強く念じれば、星色の超大型防御帯がさらなる輝きを募り、大時化のように荒れ狂う「ジェネシス」の白熱光を押し返してゆく。けれど機動兵器としてのスペックは限界に達しようとしているらしい——「クレイドル」の駆動系は聞き捨てならぬノイズを轟かせ、次の瞬間、不吉な炸裂音と共に機体フレームに大きな亀裂が駆け巡った。一方では衝撃の圧力に耐えきれず、ステラ自身の鼻先でメットのバイザーが砕け散る。

——それが、どうした!!

それらを認めてなお、少女が譲歩することはない。たとえ「グレイドル」がオーバードで爆装しようとする!

「頑張って——ッ!」

無理は無理でも、今は押し通すしかない。選択肢など初めから与えられていない。心が何かを諦めた途端、自分達は焼き尽くされることになるだろう——無慈悲なる、この光渦の爆熱の中で。

だから彼女は決して怯まない。少女は持てる勇気を総動員しながら、悲鳴なのか怒号なのかさえ分からない、えも云われぬ叫びを挙げるしかなかったのだ。

——これで、よかったの?

極限状態の中、ステラは肉体と精神を引き剥がされるような感覚を憶えた。次に気が付いたとき、ステラはあたたかな星の光に運ばれるようにして、あやめもわかぬ空間に降り立っていた。

——靈的に映る、ぼんやりとした、賽の河原。

静謐な空間に流れる小川の向こう側に、黒髪の女性が立っていた。母——レノア・ザラだ。

生きて微笑む、久しき母の姿だった。その母の腕の中には、海色のハロもいた。

——ここは……？

ステラにとつては少なくとも、その空間に在る者達は、とうに喪われたはずの存在。しかし、だから分かったのかも知れない。

今、彼女が立っている場所が現世うつしよではないことに。

しかし、だとしたら、具体的には何処だと云うのか。

——詩的に云えば、幽世かくりよ……魂の終着所、と云ったところか？

小川を挟んで対岸にいる母は、どこか哀切をを交えたような声音で問う。

ステラは、これに微笑んで返す。これでよかつたんだと——これが、自分の選択なのだ。

同時に、今まで自分に機縁を与えてくれたのが母の——彼女の遺志であるのだと、かつての“光”を思い出し、理解したような気になる。あたたかな“星の光”——自分を慈しみ、自分を救ってくれるような——それはかつて、ステラがベルリンで朽ちてゆくときに顕れた“光”と、感覚を同じくするものだったから。

——ずいぶん、とおいところまできちやった。

純朴に、とても素直に言葉を返したステラに、レノアは安らかな微笑みを返した。我が子の成長を喜ぶみたい。

そこで漸く、ステラは今まで自分に与えられていた、奇跡的な時間の流れを思い知る。

これまでは何も知らず——ただ、夢みたいな時間を甘んじて享受していた自分。そんな己の来し方を振り返り、今になって、ステラは少しだけ後悔する。

行きたかった場所に、自分は辿りつけたのだろうか？ 勝ち取りたかった未来に、ステラは本当に手が届いたのだろうか？ と。

……いや、決して届いてなどいないのだろう。

世界は夢想していたよりも、はるかに厳しきで溢れていた。

未来はステラが期待していたよりも、はるかに難しい方向に流れてしまった。

——もつと、アスランといっぱい話ができていたら。

——もつと、早くにフレイや、他の強化人間の子達と話し合えていたら。

——もつともつと、みんなと一緒にいられたら。

恐れをもった目で振り返れば、やり残したことは多くある。

何が正しかったのか、どうすれば良かったのか、正解なんて分からない。それでも、ここで救えた命があるのなら——今の自分には、それで十分な気もしているのだが……

——まだ、こつちにきてはいけないわ、まだ……。

母の声は、少女に向かって優しく諭す。その川を渡るな、とでも云いたげに。

母は、多くを語らない。

死者は多くを語れない、といった方が正しいのかも知れないが、しばらくすると、ス

テラは最初に降り立った地点まで押し戻されて、再び、遠くにある母の姿を見つめていた。

やがて立っていた空間が、底抜けの闇に溶けていく。そのときステラは、星みたいに見える母の姿を見送るしかなかった。その星を追うように駆け出しても、蹴つて進める足場も消える——彼女の手は、決してそこには届かない。

——ごめんね……。

母の声が聞こえた後は、段々と何も見えなくなる。聴こえなくなる。

次第に自分の声も分からなくなり、「ねえ待って——」母を呼号したその声でさえ、音になつてはくれなかつた。

そしてステラは、ふたたび星の光に包まれた。

『星に願いを』 C

その瞬間、ラクス達の目の前で、すべてが爆発した。

“ジエネシス”から爆光が膨れ上がり、発生した白熱光に吞まれ、跡形もなく鋼鉄の砲城が消し飛んだ。それと時を同じくするように“ヤキン・ドゥーエ”の基部からも爆炎が発露し、岩礁と鋼鉄で造られた要塞もまた朽ちていく。

——僕達は、生き延びた。

——他にある、多くの命もまた。

キラには分からない。果たして、これが最善の結末だったのかどうか——

地球と“プラント”のどちらも、ついに撃たれなかった。結果的に見れば、大勢の命は救われた。世界は少なからず、地球圏全体を巻き込んだこの結末を歓喜こそすれ、後悔するなどあり得ない。

——それでも、個人として。

ちっぽけな感情すら抑え込めない、このときのキラにとっては、友を救いにいくこと

のできなかつた自分を呪うことしかできなかつた。

「ツ……………」

悔恨に、ぎゅつ、とキラは唇を噛む。

しかし、まさか。

いや、まさに。

そんなときだつたのだ。 “アークエンジェル” において、チャンドラが、むつとしてレーダーを覗き込んだのは。

〈……………〉

彼は自分の目を疑い、艦のレーダーに、見憶えのある熱源を発見する。〈あつ……………!〉
彼はすぐに重い沈黙を破り、その声を張り上げるようにして叫んだ。

〈ほ、報告！ “ジェネシス” 爆心地より、モビルスーツの熱紋を確認！〉

その声に、ある者はハツとして顔を上げ、ある者は瞳の奥に光を取り戻す。モニターを見つめたまま凍り付いていた者達が、息を吹き返す。最も対応が速かつたのはラクスだつた。傍らにある “エターナル” の管制官へ問いかける。

「照合は——?」

「いえ、磁場の乱れの影響か、こちらのレーダーでは何も——?」

核爆発に伴う電磁パルスの影響だろう。 “エターナル” のレーダーは一時的に機能

障害が発生していたが、一方の“アークエンジェル”は違うらしい……？

「——チャンドラさん！」

痺れを切らしたキラは、滅多になく“アークエンジェル”へ報告を急かす。

チャンドラは、真摯にその要求に応える。

〈数は、二機だ……！　そう、間違いない！〉

モビルスーツの機種までは即座に特定できない。

だが、今は他の者達までもが、必死になって解析を始めている。

——少なくとも、二機であることだけは判るんだ！

チャンドラの叫びに呼応して、今は何もできない“エターナル”の管制官が、そのとき倍率を切り替えた“ジェネシス”跡地の拡大映像をモニターに照らし出した。キラ達はすかさず映像に目を移し、

「あつ………!?!」

そこに——ちっぼけな“傘”を見つけた。

「あれは………っ!」

彼らは一瞬、自分の目を疑い——

——そして、すぐに信じた。

「ああっ………!」

もはや、機種の特定など必要ない。
あれは。

あんなことが、出来るのは——！

〈機種特定！ ZGMF-X08Aの熱紋を確認！——“クレイドル”は健在だ、無事なんだッ！〉

瞬間、どこからともなく歓声が上がった。

そう——“ジャステイス”が引き起こした核爆発と、それによって爆砕した“ジエネシス”が放つ強大な衝撃波に“クレイドル”は抗い、その全てを耐え抜いてみせたのだ。

俄かには信じられない話ではあるが、モニターに映し出された“クレイドル”は、衝撃によって四肢や頭部を失いながらも虹色みたいにめくるめく光波防御帯を展開させ続けている。光波の盾が、傘が、繭が——！ “ジエネシス”の爆発から、搭乗者を護り抜いたのだ、確実に、疑う余地もなく——！

「ステラ——!?!」

急ぎ通信を繋げたキラであったが、応答はない。

モニターを見る限りでは“クレイドル”は微動だにしておらず、中にいる少女達は、揃って気を失っているのだろう。それによりキラの足先が格納庫を向いたのが先か、事

態を察したニコルが「キラさん！」と呼びかけるのが先だったか、キラは既に弾かれたように踵を返し、艦橋を飛び出していった。そのあとに遅れず、ニコルもまた艦橋を飛び出して行こうとする。

「——アスランも！」

「わ、わかった……っ！」

艦橋から三人の少年がいなくなり、場に残されたマユは花開くように微笑む。ほっと胸を撫で降ろし、安堵のため息を漏らした。

バルトフェルドも肩から力を抜き、クルー達が、優しく互いの肩を叩きかわすのを見た。

「ステラお姉ちゃん……！」

「アークエンジェル」でも同様の安堵が広がって、ツールやミリアリア、サイ達は互いに顔を見合わせ、小さく笑顔を交わし合う。

——無事で良かった……。

——本当に……。

あやまたず「エターナル」のゲートが解放され、十全には動かないはずの「ブリッツ」と「ストライク」が、損傷も気にせず飛び出していた。

——さつきまで、戦艦やモビルスーツが激しく撃ち合っていた場所だとは思えない……。

そのときアスランは、漠然とそう思った。あらゆる人と機動兵器を退けさせた漆黒の宇宙が、あまりにも清閑とした世界であったから。

目の前に広がる星の海は今、不気味なほどの静寂に包まれている。今まで我が物顔でエリアを占有していた二つのザフトの巨大要塞——それらもまた、ほとんど同時に消失してしまった。

ニコルもまた「ブリッツ」の機体を泳がせながら、畏怖の籠った目で、一帯を見渡していた。数知れぬデブリが蔓延る凄惨な戦闘の傷跡、既に用をなさぬ鉄塊として漂う、数多の戦艦にモビルスーツ……。

その中に、命を使い果たしてしまった人間が幾ほどにいたのだろうか……？ 自分を含めたすべての「戦う人々」によつて演出された、無残で空虚な破壊の痕跡が、彼等に耐え難い喪失感を憶えさせる。あるいはそれは、痛みを伴う実感だ。——どうして、この景色を未然に防げなかったのだろうか？ という。

暗い目ですべてを見遣っているときに、宙域全体にひとつ、声が響き始めた。すべて

の人々に希望を訴えかけるような——明瞭な声が。

〈宙域のザフト軍、ならびに地球軍に告げます〉

聴き覚えのある声であるが、誰だったか。アスランは茫洋と記憶を辿りながら、やがては特定の女性を思い起こす。

——アイリーン・カナバー……？

現プラント最高評議会議員にして、クライン派の筆頭として名を連ねた女性。

しかし、彼女は反逆者一派に加担した咎で検挙され、エザリア・ジュールを先鋒とする急進派の議員達に幽閉されているはずでは……？

〈現在「プラント」は、地球軍および「プラント」理事国との停戦協定に向け、準備を始めています〉

アナウンスは停戦を求める声明として、所属を問わず全宙域に向けて発信されている。敵味方に関わらず全ての者が声明を聴き届け、ある者は当惑し、ある者は憤慨し、そしてある者達は安堵の深い溜め息を漏らす。

〈それに伴い「プラント」臨時最高評議会は、現宙域におけるすべての戦闘行為の停止を、地球軍に申し入れます——〉

——臨時最高評議会？

聞かない単語に事態を呑み込めずにいたアスランに、訳知り顔のニコルが全てを明か

した。ニコルは知っていたのだ、現パトリック政権による検挙を免れ、水面下で密かに行動していたクライン派が、幽閉されていたカナーバ以下旧プラント穏健派の脱獄の手引きを行ったことを。これにより勢力を吹き返したクライン派は、大規模なクーデターという形で「プラント」最高評議會を奪い返し、パトリック・ザラを失った急進派の残党を拘束し、さらにはザフト司令部を制圧したという顛末を。

もともと、パトリックを失った今のザフトに指導者代行を務められるスケールの人間はいなかった。ほとんど虎の威を借りていたエザリア・ジュールも指導力と求心力を失って、カナーバが「プラント」の総統者になり代わったのだ。だとすれば、このアナウンスはアイリーン・カナーバ——正しくは「プラント」臨時代表によって発せられる停戦勧告、と云ったところだろう。

「僕達のザフトは、振り上げた拳を、下ろすことに決めたんです」

「……勇敢な、選択だな……」

僅かに嘲じながら、今のアスランには、そう云って返すのが、精いっぱいであった。「全ては、オレ達の弱い心のせいだ……」

「アスラン……?」

「みずからの過ちあやまを認めるのは、与えられた『敵』と戦うこと以上に、勇気がいる……」
己の過ちから目を背け、碌に知りもせず、また碌に知ろうともしなかった百万のナ

チユラルに罪を押し付け、あれは悪だと決めつけて、迷いを忘れ、戦い続けたアスラン。
 ——自分の“弱さ”を認めたくなくて、それを隠すためだけに、必死になつて“力”を求めた。

——だけど、そのじつ自分は、手に入れた“強さ”を証明するためには戦つていた。ただで、心の底では、単に力をぶつける矛先が欲しかっただけなのかも知れない……。

家族を守る力ならば手に入れた。だからもう無力な子供ではないのだと、腹癒せのよう周囲に当たり散らし、数えきれないほどの敵を叩き潰し——そのような子供じみた独り善がりを繰り返す内、最後には、その家族にすら見放されていたというのに。

「オレや……オレの父は、それを認めたくなかった。認めようとしなかった」
 いつか誰かに投げかけられた言葉が、思考の底に忍び上がる。

『殺されたから殺して、殺したから殺されて、それでホントに、最後は平和になるのかよ——!?!』

あのとき、何を思っていたのか、自分はその者に対して「なる」と断言していた。

断言していたのだが、果たしてあれは高言に過ぎなかったのか？ 世界のパワーバランスが殆ど一方的な形態にまで落ち着けば、世界は平和になると考えていた。恨みや辛みで意趣返しされるのが世界の争乱を招くなら、意趣返しする力そのものまでを奪つ

てしまえばいいと考えていたから……。

——そして、そうして世界を支配するのは、自分達コーディネイターが席卷する「プラント」国家であると、本気で考えていたから……。

耐えられない、後悔と罪悪感。

そこから表情に暗い影を落とすアスランのそれを、次の瞬間、閃光がぱつと照らした。ちかちかと明滅を繰り返しながら、やがて彼らの目の前で閃光は数と輝きを増してゆき、やがては美しい花火のように宙域全体を色付け始める。

——なんだ、彗星……っ？

いや、違う。それは、地球軍艦隊から発せられる帰還を促す信号弾だ。

打ち上げられた一発の瞬光と、それに呼応するようにザフト軍艦隊からも同様の光弾が打ち放たれ、無数の光が一带を照らし出している。

光の点——と、点。いつしかそれらが繋がり合って、より大きな輝きの線になる。

それは互いの存在を知ろうともせず、互いを拒絶していたナチュラルとコーディネイターを結びつける線。互いの手を取り合わせるための紐のようにして見えた。

そして、それらの輝きが導き出す答えは、ひとつだった。

「戦争が、終わる——!?!」

「——前を向きましょう、アスラン」

立ち直るように告げられたその言葉に、アスランはハツとする。

ニコルは周囲の星や光の海を見つめながら、淀みなく続けた。

「何度だつてやり直せるんだ、僕達は。少なくとも、そんな明日を生きることが許されたのですから」

「……ああつ……」

「帰りましょう、みんなまで——」

かくして「ヤキン・ドゥーエ」戦役は、事実上の終戦を迎えることとなる。

こののち、地球と「プラント」の間で講和条約が締結され、その実態は両軍の損害過多による「戦争継続の不能」による行動停止に近いものであったが、何であれ、この講和条約の締結により、それまで続いてきたひとつの戦争が、完全に幕を引いたこと——

——それだけは、確かなこととなったのだ。

星色に撃ち上がり、輝く信号弾に満ち溢れる宙——それら光の喧騒の中に、置いていかれたように、ぽつり、と浮かび上がった二機のモビルスーツ。

その片割れは、ニコルやキラ達が無事を祈つてやまなかつた白銀色の「クレイドル」——損傷により四肢を失い、頭部さえ焼け落ちた片翼の様相は、墮天した天使、と云つ

た風であつたが。

そして、それとは違う、もう一機のモビルスーツの熱紋。ニコルは接近するにつれ、その「黒い塊」の全貌を明らかにしていった。

——「レムレース」……。

ニコルは、このとき「レムレース」については考えないようにしていた。いや、正しくは「自分が考えるべきことではない」と判じ、意図的に思考の外に出すようにしていたのだ。

——それで、なければ……。

禍根がないわけではなかった。——あの「レムレース」は、「ジェネシス」内部にて自分達へ攻撃を仕掛け、それによってステラを「ジェネシス」内部に閉じ込めるといふ、ある意味では因果を作った存在なのだから。

全てに納得していたニコルではないものの、しかし、最終的には当のステラが「レムレース」の救済をも望んでいたように思えたから、それについては、部外者に過ぎない自分の考えることではない、と判断したのである。

——様々なことを考えている内に、ニコルは星の海を漕ぎ、目的地まで辿り着いた。

キラ、アスラン、ニコル——各々がコックピットから飛び出し、ぐったりと停顿して

いる「クレイドル」胸部装甲に張り付いた。白銀色の機体フレームには看過できない亀裂が奔つてたが、それでも「クレイドル」は最後まで瓦解せず、核爆発の衝撃に耐え抜いたという。

ニコルは沈黙を貫くふたりに対して、切り出すようにして云った。

「ボクは「レムレース」の様子を確認して来ます」

「ニコル……?」

「キラさんとアスランは、こちらで「クレイドル」の確認をお願いします」

役割分担を申し出たのは、ニコルなりの気遣いであつたのだろうか？

いや、厳密には違うのだろう……。それが自分の担うべき役割なのだと、このときの

ニコルは本気で考えていた。それが何故なのか、本人にもよく分からなかったが。

「……わかった。すまない」

アスランの謝意を背に受けて、ニコルは改めて「黒い鋼鉄の塊」——にしか見えな
い、現在はひどくボロボロに朽ちている「レムレース」の上体装甲にまで身体を回して
た。

間近で見ても、感嘆したのは歴戦の損傷により摩耗した「レムレース」のPS装甲材
だ。しかし、それとは反して全くの衰えを感じさせないのは、コックピット周辺の機構
であつた。

ぎつちりと密閉されているコックピットハッチを発見し、しかし、それはとても人力で開くような雰囲気ではなさそうだ。であるなら、外付けのキー端末に直接アクセスを掛け、外部からロックを解除するしかない。

「……………」

解錠作業を始めたニコルがふと視線を巡らすと、一方のキラとアスランは、そのとき既に「クレイドル」の胸郭コックピットまで辿り着いていた。ふたりは、協力と云うのも微妙ではあるが、今は二人揃って力を合わせ、白銀色のハッチをこじ開けようとしていた。

「いたって原始的な人力——？ 聡明なふたりが、この状況で人力を行使しようと結論付けたのは、外部のロック端末が破損していたためか？ はたまた、ハッチ自体がそれほどに傷つき、緩んでいたためか？ 遠目に確認しただけのニコルからは、想像が及ぶところではなかった。」

「いずれにせよ、そうした工程の違いのために、ニコルが黒いハッチを開くのと、キラ達が白いハッチをこじ開けるのは、ほとんど同じタイミングになった。」

ニコルは、そうして開いた「レムレース」のコックピットの奥、シートに横たわるパイロットを見つけた。無骨なデザインが施された、地球軍の女性用薄紅色のノーマルスーツ——ステラが着用しているものと同じ。

上体で固定されたシート・ベルトが、その者の胸部を、まるで窮屈そうに圧迫している。

女性——いや、自分とそう年齢の変わらなさそうその少女の姿は、不自然なほどに質量が欠けて見えた。透明感があるというよりは、存在感がなさすぎるようにも感じられたのだ。

あるいは死んでいるのではないか？ ニコルがそう錯覚するほどに生気を失っている少女は、

——死んだように、眠っている……？

それ以上に形容の仕方がないほどに、意識を失って昏睡していた。ニコルはそんな少女にそつと近寄ると、頭こぶに垂れていたヘルメットをゆっくりと外した。

手に取ったヘルメットは、バイザー部分が割れていた。割れた破片で切ったのか、少女の素肌、額や頬には点々と血筋が浮かび、ニコルにとって何より印象的だったのは、その少女を少女たらしめている麗しく長い髪が、血の色と見紛うほどに、見事な深紅色をしていたことだった。

「あのとときの、女の子」

動揺を口に出すニコルであったが、今はいい。どこか安らかな寝息を立てているその人物が、ひとまず呼吸をしていること——生きていること、それだけは確かめられたの

だ。

そうである以上、不安など、あつてないようなものである。ニコルは急ぎ踵を返し、黒いコックピットを離れて「グレイドル」に跳んだ。

「アスラン、キラさん！ あちらは無事でした！ そちらは——」

だが声を掛けた先、キラとアスランがそれぞれに硬直している姿を見て、不審感に囚われた。

確認は済んだのか——？ 咄嗟に訝しんだニコルが、二人にそれぞれ呼びかけても、対応や反応はなかった。ともすれば肩を揺すつても、彼らはまるで氷漬けのように動かなかった。その表情も固定され、人らしい輝きを失った瞳からは感情の流れを読み取ることすら許されない。

「いったい、何が——？」

痺れを切らしたニコルが押し押ししのけるように二人を避けて「グレイドル」——そのハツチの奥へ足を踏み入れた。その奥で、ニコル自身が目の当たりにしたもの——

「——えっ」

ゆらり、ゆらり。

ふわり、ふわりと。

風そよぐように揺蕩たゆたいながら、シート・ベルトが——

——“それ”だけが、やさしく踊っている。
彼らが“グレイドル”のコックピットを覗いたとき、
探し求める少女の姿は、そこになかった。

星の名を持つ金髪の少女は、そこに居なかった。

『星に願いを』 D

地球圏全体を巻き込んだ戦争は、指導者を喪った「プラント」が停戦勧告を申し入れたことにより終戦を迎えた。調印式は「ユニウスセブン」で行われ、そこで結ばれた条約は、以後「ユニウス条約」と呼ばれることになる。

様々な問題は多く残されているものの、これにより地球各国と「プラント」は、今後の相互理解努力と平和を誓って、世界は安定へと歩み始めるはずだった。

少なくとも、その予定のはずだった。

一台の白塗りのリムジンカーが、豪雨に見舞われた沿岸道路を走っている。

車種はキャデラック。ランクにすると、ハイエンドカスタムクラスの超高級VIPリムジン。乗り込む者の財力を嫌味なほど見せつける車種であるのだが、そのリムジンが停泊した場所は、それほどの高級感に見合うような屋敷でもなければ、華美なオフィスでもない、ユーラシア辺境に位置する医療施設だ。

到着した車内から、一人の男が姿を現す。白い顔、それとそう色質の変わらない銀色の短髪。唇を青めかす独特の化粧も施しているだろうか。軍事関係者と医療従事者が

多く居合わせるその空間において、彼はひとときわ異彩を放っている。

「どういうことだね、これは？」

みずからが呼びつけられた事に対し、彼は明らかに機嫌を損ねているらしい。

「この時期に、私をこんな所へ呼びつけるとは——いったい、どういう了見なんだね？
どこの、誰に、何の権限があつて、この私を呼びつけることができた？」

三流の演技者のように芝居がかつた紳士的な論調と、裏腹な周囲の者達を見境なく罵り見下すような言葉と視線。

「私はただでさえ忙しい身なのだよ。戦場にのこのこ出て行つて犬死にした前代表が死に、その引き継ぎもまだ残っているのだからね」

男の名は、ロード・ジブリアル。

戦役中に没したムルタ・アズラエルの配下にあつたブルーコスモスの幹部で、他にも九名ほどいる幹部の中でも最年少にありながら、アズラエル亡き今、事実上の次期代表となつた男である。

「——嗚呼、そう云えば、これにて世界は戦争が終わつた、と。それによつて世界に平和が訪れた、などと民衆は声を揃えて謳っているようじゃあないか？ あの無様で馬鹿げた岩塊の上で調印式を行った愚か者達には、何にも真実が見えていない」

平和への道のりを進みはじめた現在の世界の様相について、貶めること、蔑むことに、

男は一切の抵抗を憶えないようだった。

前任者の莫大な事業の引き継ぎ作業に追われ、ここ数日の忙しさに辟易していたのか。それとも、自身の介入する余地なく戦争が終結したことに憤りを憶えているのか——己の理想していた結末とは程遠い地点に戦乱が着地したことに対してか、いつもより饒舌な口調には、隠し切れないほどの毒が含まれていた。

「……………」

もつとも、八つ当たりめいたそのような毒を吐き付けられたところで、周囲の者達が、そのことについて不愉快な顔をしたり、諫めることなどない。

なにしろ、このロード・ジブリールという男は、今やブルーコスモス——その支援母体とまで云われる“ロゴス”——の代表にも就任している人物なのだ。男の采配次第では、みずからの家族と共に首を括ることになりかねない傘下の者達にとつて、彼は常に見上げるべき存在であり、神にも等しい存在として崇めなければならぬものでもある。

そして、その神にも等しい存在として崇められていた男は、決して宇宙のコーディネイター達を認めることはない。他ならぬ彼の頭上に住まい、はるか天上より世界を見下す——少なくとも、彼はそう思っている——バケモノ達の存在を、絶対に。

「我々はあの協定に同意したわけではない！ 期を見ては再び軍備を整え、なんとして

も、あの宇宙に巣食う者共を肅清しなければならぬ」

信者を煽る教祖のように語り出した男を、そのとき宥めたのは、場に居合わせていた初老の男だった。

「——だからこそ、だよ」

ジブリールの言葉にそう返した男もまた、仕立ての良い高級服に身を包む者であった。周りにいる軍事関係者や医療従事者らが身にまとう機能性を重視した衣類とはかけ離れ、見るからにジブリールと系統を同じくする人種、世界を裏から牛耳って来たグローバル・カンパニー“ロゴス”幹部の一人である。名前は……名乗るほどのものでもなかった。

「ジブリール。キミはまたいずれ、戦争をする気にいるのだろうか？」

「戦争？ 違いますよ、駆除するだけです。人間とも呼べないあのバケモノ共をね」

「しかし、そのためには準備が必要だ」

男の云う通り、ついこの間“ヤキン・ドゥーエ戦役”が終戦を迎え、戦争によって地球軍が被った損害は計り知れぬものだ。だからこそ、彼らの掲げる大いなる目的のためには、それ相応の準備が必要となる。

「その準備のために、我々にとつて有力な“手駒”を手に入れた」

「何を、馬鹿な」

「その駒をキミに値踏みしてもらうために、わざわざこの場所に呼んだのだ」

と、奇妙な自信に溢れた声音で云われ、そのとき、ようやくジブリールから不機嫌な表情が消え失せた。確信めいて告げられ、それでもなおジブリールは胡乱げな面持ちで、周囲の医療関係者に連れられるように施設の奥部へ導かれていく。

長い長い廊下を歩いて渡る中では、誰ひとり言葉を会話の応酬をするでもなく、彼等の中には退屈な時間が流れた。特別に馴れ合う必要もないということか——しかし、そのとき暇を持て余したのか、男がジブリールに世間話を切り出していった。

「……ときにジブリール。キミは特殊な装置を用いて他人の記憶を改竄するのが得意であつたな。たしか、偽りの記憶を植え付けるのだつたか？」

世間話と云いながら、世間的には公に出来ない性質の発言であつたが、男はまるで憚ることなく切り出していった。が、その内容に動揺を示した者も居なかつたところを見るに、その場にいる誰もが既に把握していた事実であるらしい。

「人間きの悪いことを仰られますな。私はただ、その者にとつて不必要と思われる記憶を、私自身の親切心から除去してやっているに過ぎません」

「——人の記憶を勝手に入れ違えておいて、親切心だど？」

すらすらと言葉が出て来るあたり、この男は本気でそう思っているのだろう。慈善家を気取るように慇懃な口調で紡がれる言葉を、幹部の男は特に驚きも嘆きもなく、無味

乾燥な様子で聞いていた。

「何の価値もない者共の人生を、より有意義にしてやっているのみです。——この私のために働かせることでね」

物は云いようだな——と、突き放すことこそしなかったが、そのとき男は心中で呆れ、枯れ木のような表情の奥には非難の感情も幾つか見え隠れしていたに違いない。どのような言葉で取り繕おうと、ジブリールが自分にとつて従順な手駒を生み出すために、有能と思われる者達に重度の洗脳措置——すなわち『精神操作』を行っているのは事実だったのだ。だが、当のジブリールは全くと云つていいほど悪びれた様子もなく続ける。

「その結果、まあ確かに……記憶を違えた素体は別人のように変わり果てますがね」
改めて考えれば、当然の話である。

人格を形成している要因のひとつは、生まれてから身につけて来た知恵や経験——より大きな言葉で云つたところの『記憶』に他ならない。概念的な云い方になるが、それを他人によつて取り違えられるということは、つまりは“魂”を入れ替えられるのと同義であり、他者によつて『記憶』を入れ替えられた人間は、生来の人格を忘れ、すっかり別の人間として生きてゆくことになるのだ。

欠点としては、植え付けられた偽りの人格がその者の知識や知性にまで影響を及ぼし

てしまうことにあるが、一方の肉体に対しては無害なため、これは過酷な戦闘訓練を修了した兵士など、彼等の価値観で云うところの“人間兵器”にこそ用いるのが相応しい技術とされた。

たとえば、敵国のエース・パイロットを捕縛したのち、拷問を経てその者の記憶を違えてしまえば、それだけでジブリールの命令に忠実に従うエースの腕を持った手駒が完成する。より少ない手間と費用で“完成された兵士”を量産——ないし奪取できるなら、こんなにもコストパフォーマンスに優れた技術は他にはあり得ないのだ。

「——なんだ」

やがて彼らは、医療施設のごく限られた人間しか立ち入ることを許されない空間まで辿り着いていた。立ち並んだ医療器具の山々、無影灯を備えた手術台——見るに、そこは集中治療室と云った風な空間であった。

「此度の終戦に際して、我々の仲間が宇宙にて二体の素体を回収することに成功した」

男は不敵に笑いながら、その室内に並べられた、ふたつの医療用ベッドを示しながら口を開く。

「ひとつは男、もうひとつは女。いや、少女というべきかな」

訂正するように付け加えられた男の言葉を、ジブリールは珍しく大人しく聞いていた。いや、判断していたのだろう。男の意図する提案が、将来的に、本当に自分の役に

立つのかどうかを。

彼らの目前にはふたつの素体、即ちふたりの人間が横たわっていた。どちらも全身をくまなく包帯に覆われ、損傷の激しさはまるで重傷病者だ。それぞれには特殊な薬剤が打ち込まれ、男の方は微かに意識があるようだが、かと云つて問答が出来るような状態にはない。

一方の少女の素体に至つては意識すら失つており、生氣に欠けた人形のようにも見えない。いったい、どこでこのようなものを回収したのか？　そもそも、このようなものが、本当に役に立つのか？

「それぞれの素性を調べたところ、面白い事実が次々に明らかになつた」

幹部の男はふたつあるベッドの内、男性の素体が横たわっているベッドを示しながら続ける。

ジブリールが改めて一步として前へ進み出ると、そのとき微かに意識があつて、重たげに瞼を動かした素体の男性ところりと目が合った。

亜麻色に近い金色に淡く輝く、強く波打った金髪。爛々と静かに燃えるような青い瞳。巻き付けられた包帯の下に覗いている顔部には、どういふわけか軍人然とした精悍な体軀には不釣り合いなほど数々の深い皺が奔っている。どことなく老人めいた顔立ち、ジブリールが若い頃に「ニュースで見かけた」とある伝説の投資家”のそれと、不

思議とそっくりであるように見えたが……？

「男の方は、キミも聞いたことくらいはあるのだろうか？　かの伝説的な投資家一党、フラ

ガ家の血を引く者であることが判明した」

突如として、心の内を突き当てたような言葉への驚きに、見開かれる目。

その言葉を理解したジブリールの顔色が、一瞬にして変わった。

「……！　まさか、『エンデュミオンの鷹』？」

「いいや、残念ながらその本人ではない」

続きを聞いたジブリールは僅かに肩透かしを食らった面持ちになるが、だからと云って落胆することはしなかった。何故なら男の言葉には、更に続きがあったから。

「だが、DNAで云えばその父親に当たる男だ。……色々と問題は抱えているがな」

男の云う問題というのが、ジブリールには分からなかった。分からなかったが、フラガの血を継ぐ者が、その影響で、類稀なる能力を継承していることだけは知っていた。

——何でも、彼らの血脈は先祖代々『少し先の未来が予知できる』だとか？

当然、ジブリールはこのような迷信や都市伝説を真に受けるように信心深くはないのだが、現実にフラガ家歴代当主が「奇跡的な投資勘」を持ち合わせ、それを駆使して何代にも渡って莫大な栄華を築き続けて来たという伝説を、ジブリールはそれこそ上流階級の界限に住まう者として耳にしたことがあった。

しかし、そんなフラガの一族は原因不明の火災事故に巻き込まれ、跡取りであった一人の少年を除き全員が他界したと聞いている。多くの資産家からも崇め奉られた伝説の投資家、名をアル・ダ・フラガ——すでに高齢と云える年齢だったその人も、氏が築いた莫大な資産を道連れにする形で、この世から焼失したはずではないのか？

それとも、真実はそうでないのか……？ 断絶したはずの血脈。しかし、目の前にいる男が、本当に伝説の一族の血を引く者であるとしたら——？

「使える——使えるぞ、それは」

無意識——ほぼ無意識に、感嘆がジブリールの口から零れていた。『未来が見える』というその奇跡的な能力、仮にも配下に置くことができるなら——。

その瞬間、それまで不信を湛えていたジブリールの目の奥が、打算へと置き換わった。どこまでも下卑た笑みを、切り裂けたように青い唇に浮かべたのだ。

「その力、是非とも我ら “ロゴス” の役に立てて貰おうではないか。……ああ、記憶の処理はこちらで行う。最新の精神操作を行い、全ての過去を除去すればよいのだ。偽りの人格を植え付け、偽りの “名” を名乗らせる——」

「その “名” は、なんとする」

男が訊ね、ジブリールは咄嗟に返した。

名前は、そうだな。

「この男には、以後『ネオ・ロアノーク』と名乗らせよ」

新しい玩具を手に入れた稚児のように錆びついていた興味を輝かせるジブリールは、そうしてもうひとつの医療用ベッドの方を向き直した。このとき既に取らぬ狸の皮算用を始めている切れ長の目つきが、とうに意識を失っている少女の方に向けられ、こっちの方は？——そう訊ねようとして、訊ねる前に男の人の悪い笑みを目撃したジブリールは、鏡写しのように人の悪い笑みを浮かべ返す。

「いや、訊かずとも既に信用しているよ。キミのことだ、こちらも相当『役に立つ』素体であるのだろうか？」

男の一件ですっかり気を好くしたのか、ジブリールはもう一つの片割れがどのような素性であろうと、既に少女のことを『採用』するつもりでいた。

どのみち、ジブリールが在庫ストックしている偽りの人格データは多岐に渡っている。たとえば、先に云っていた『ネオ・ロアノーク』というのは成人男性用に調整された偽りの人格であるのだが、その他にも女性用に調整された人格データなども保有しているのである。それらを選別し、少女の人格を「上書き」してしまえば——

——たとえば少女の正体がどうであろうと、問題ではない……！

下卑た笑みを浮かべるジブリールに対し、幹部の男はよくぞ聞いてくれた、と云わんばかりに、このときばかりは嬉しそうに口を開いた。口を開いたとき、涎よだが垂れたのは、

男がそれほど興奮していたからか――

「説明すれば長くなるが、いいだろう」

そうして、男は語り出した。回収した少女の素性について。

とある「プラント」要人の愛娘にして、驚異的な戦闘能力を持つ兵士。何よりも終戦の立役者であり、大戦中、伝説的な活躍をした「グレイドル」のパイロットについて――

目の前に横たわる、『ステラ』と呼ばれた少女について。

男は、ひとえに語り出した。

戦後篇

『ニユー・オーダー』A

戦後処理として最初に為されたのは、"ヤキン・ドゥーエ" 宙域における未帰還者の搜索と救助活動だった。両陣営による停戦合意が果たされたことで、多くの人々が軍属などの垣根を越えて、遭難者達の搜索を始めたのだ。

「パトリック・ザラ議長閣下を失ったことで、今の"プラント"には臨時最高評議会が擁立され、臨時代表の座にはアイリーン・カナ儿バ氏が就くことになりました」

近況について語るのは、ニコル・アマルフィだ。

荒れ果てた"ヤキン・ドゥーエ" 戦場跡を愛機ブリッツで跋行しながら、搜索活動に参加している者のひとりである。

「今後、事態がどのように収束していくかは分かりません。ですが、代表はラクス・クラインの政界への参画を強く希望し、それによって、彼女を乗せた"エターナル"は"プラント" 首脳陣との直接会談のため、ザフト軍本部へと向かいました」

カナ儿バはこれを要請したときの、ラクスの表情は複雑そうだったと云う。だが、結

果的にラクスはその要請を承諾し、ザフト軍本部へと向かった。

唇を硬く結び、戦場跡地における未帰還者の捜索——ラクスが切に生存を願う少女の安否確認——を他の者達に“お願い”し、彼女はその場を後にした。せざるを得なかったのだ。

「——待つてくれニコル。……地球軍は、本当にカナバ女史の停戦勧告に応えたのか？」

今は“ブリッツ”のココピッドに坐すニコルであるが、そんな彼が話しかけている相手は、イザークとディアツカだった。

ふたりは今シートの両隣に位置しているが、それもこれも、数刻前にニコルが中破した彼らの機体の残骸——“デュエル”と“バスター”——を発見したからだだった。偶然とはいえ、それはニコルにとつて幸運な出来事だった。彼はふたりの身柄を回収し、みずからの機体に鷹揚と招き入れたのである。

イザークらの疑問に対して、ニコルは順序立てて説明していった。数ある情報を比べればその重要性に密度の差はあるが、何よりも優先して伝えるべきは、自分達が関与し、あるいは、ほとんど巻き込まれる形にもなっていたこの戦争の行末についてだ。

『戦争が終わった』つて——そりゃあ……！——

ディアツカが驚きに声を挙げる。自分達が何かをするまでもなく、そして、何もでき

ないままでいた間に、この戦争が終結したという。

そのことを明かされ、動揺や焦りを隠せなかったイザークであったが、ひとまずは戦争が終わったという単語に対して高揚し、歓喜しかける。身の内に抱えている憤りや無力感よりも、まずは全体の結末を喜ぶべきだと考えた。

「アスランも無事に、今は『アークエンジェル』の中にいます」

「……そうか！ アイツも、無事に生き残って——！」

「——でも」

彼らにとっては喜ばしい現実——

しかし、そこに至るまでに多くを犠牲にしたことは事実であり、ニコルは、それについても隠さずに打ち明けた。程度で云えば中破している——半壊した機体ブリッツを動かしてまで、この搜索活動に参加している、その理由についても。

「ステラさんが、まだ、見つかっていません」

その言が発せられると同時に、場にあつたはずの歓喜の情が消える。打ち明けられた言葉に、イザークとディアツカがそれぞれに眉を蹙めた。

そうしてニコルは、恐々としてふたりの表情に注意を向けた。顔を向けた先に浮かんでいたのは、言葉の意味を図りかねて訊き返さんとしている、あるいは、信じられない、と云わんばかりに啞然としたそれぞれの面輪があつた。

そしてそこには——不可思議というしかない——ステラに対する彼らなりの信頼の形があった。けれども……

「な、んだ……それは」

その信頼感——ともしれば一方的で勝手なる思い込みは、先のニコルの一言に切り捨てられた。具体的な根拠があったわけではない。ただ——「あのステラなら無事だろう」と、漠然とそう考えていただけ。

イザークはしばし、言葉を失う。

——運の強い少女だと、心のどこかでそう考えていた。

実際に彼女のこれまでの道程を思えば、悪運が強い、というのは間違った表現ではない——いや、悪運だけで片付くような話ではないのか。

ステラという少女が、懸命に戦争を生き抜き、それと同時に何かと戦っている姿は、これまでイザークも目にしてきた。そんな彼女は、どのような厄災に巻き込まれてもなお、帰ってくる強かきを持つていたのだ。そのことはイザークも認めていて、そして、だからこそ信じてもいたのだ。

——そんなステラが、まだ見つからない。

——まだ、帰って来ていない……？

ステラの情報について言及するたびに、ニコルはこうした——曖昧な——表現を使い

続けた。

それは、ニコルもまた心のどこかで信じているからだ。げんに“クレイドル”は“アークエンジェル”に回収され、見つからなかったのは本当にパイロットだけでしかない。そして機体の損傷具合から見ても、希望を捨てるには早計すぎると考えられたから、ニコルはこう続ける。

「きつと生きてる。生きて、帰って来てくれるはずなんだ」

忸怩たる思いを抱きながら、しかし結論から云えば、ニコルの搜索活動がそこから良い結末に転じることはなかった。

あらゆる手を尽くしても、いずれの搜索隊に心当たりがないかと通信を繋いでも、すべての苦労は徒労に終わり。

やがて、すべての搜索が打ち切られることになったのだ。

搜索活動が打ち切られるその瞬間は、意外に早くやって来た。それは時にして、ニコルがイザーク達を回収できてから、間もなくであった。

そして、搜索の打ち切りが意味しているのは、結局のところ――

『ステラ・ルーシエは、ついに戻らなかつた』

——という、ニコル達にとつては重たい現実。

勿論、先の戦闘で命を散らし、戻らなかつた命は他にも多くある。何も彼らだけが特別なのではない——分かつていても、*“アークエンジェル”*のデツキに帰投したニコルの耳に飛び込んで来たのは、悲痛に叫ぶミリアリアの声だった。

「どうして……？　ねえ、どうして——っ？」

ラダーから視線を降ろした先、遠巻きにミリアリアやツール、サイやキラの姿がある。中でもミリアリアはすっかり取り乱した様子で、同級の少年達に訴えていた。

「モビルスーツはあそこに在るのに！　どうしてステラが——あの娘が帰つて来ないのよお……っ」

「ミリィ……」

氣遣わしげに、ツールがミリアリアの肩を抱く。

——戦争はもう、終わったのに……！

自分達は命を繋ぎ、激動の戦乱をここまで戦い抜いた。なのに、ステラは戻らなかつた。果たしてその命は、よりもよつて終戦のタイミングで喪われなければならなかつたものなのか。

（ただ『戦争を終わらせたい』って、人として謳つていただけじゃない——！）

それだけの純粋な想いから、好きでもない戦乱に身を投じて来た金髪の少女は、終戦という理想、夢見た現実を前にして消えた。世界はこれから平穏を迎えるだろうに、その日々を誰よりも享受すべき少女は、ついに戻らなかつた。

「どうして……どうしてよお……っ」

ミリアリアはその場に頹れ、傍らのキラは座礁した「クレイドル」の機体骸を見上げる。

頭部を失い、四肢を失い、両翼を失い、焼け焦げた胴体だけが、唯一として残された「守護天使」——肝心のパイロットを連れ帰らなかつた「それ」は、様々な思いをキラに抱かせた。

「僕のせいだ」

そんな残骸に何かを詰まらせ、ようやくの思いで言葉を発したキラを、ツールはハツとして見た。

そして、同時に激しく不安になったという。——親友の表情が、名状しがたい不穏な色と感情に支配されていたからだ。

「僕が、助けに行つてやれなかつたから」

キラの言葉は、土壇場で「ストライク」が行動不能になったことに言及していた。

たしかに、キラは「ジェネシス」のハッチを目の前にして「ストライク」のバツテ

リーを切らしてしまい、ステラの救援に向かつてやることが出来なかった。そのことで責任を感じ、思い詰めた風な彼の肩に、サイがそつと優しい手を置いてやる。

「自分ばかり責めるなよ、キラ……。これは、おまえひとりで思い詰めることじゃないさ……」

「サイ……」

「でも、悔しいよ……。おれも。この状況は、まるで『アルテミス』のときの再現みたいで……っ」

「……えっ?」

キラには、サイのその発言の意味が分からなかった。

真意を問うように、サイの顔を覗き込むキラであったが、そこに浮かんでいたのは恍惚と——それゆえの憤懣のような色であり、それはキラにとって、想定もしていなかった色でもあった。

「ステラもステラだ……。っ! まさか『ジェネシス』の爆発に、耐え抜くことを選ぶだなんて——!」

——他にも何か、やりようがあったんじゃないのか?

叫んだサイの論調には、そう訴えんとする気配があるようにキラには感じられた。

だが、ことが起こった後になってから騒ぎ立てる行為などは全く無価値である。

また、サイ自身も、物事の是非を結果論で評するような論調は好まざるものであつたはずだ。……であれば、彼もまた動揺しているのだろうか？

理知的な彼らしくない言動ではあるが、このときばかりはそのような考え方に行き着いてしまつたらしい。

（他にやりようがあつた——？ いや、違う、方法なんてなかつたんだ……）

ステラは、想像力や判断力を欠いたわけでは決してないのだろう。

たしかに、対人関係や日常生活を送る上では奇跡的に鈍感な節もあつた彼女であるが、それらは要するに彼女の中の経験不足に起因するものであり、そもそも彼女に学習能力がなかつた、というような性質の話ではない。

そんな彼女が、たしかに以前は「アルテミス」で無茶な脱出劇を演じ、今回もまた——前回とは明らかに規模の違う——「ジュネシス」にて同じ無茶を繰り返した。

サイの云う通りに『退路を探す』とか『助けを呼ぶ』とか、方法は他にも考えられたその中で、それでも彼女はリスクを払つて『耐え抜く』という決断を下した。

そしてそれは、そうせざるを得ない状況まで、彼女自身が追い詰められていたからに他ならないのではないか。そして彼女をそこまで追い詰めたのは、他ならぬ自分達が彼女のそばにいなかったから。

——彼女にとって、頼れる拠り所が他にいなかったからだ。

(何が、いけなかった……?)

ふたたび、キラは自分自身を詰問する。

——何を間違えたのか？ 何を違えていけば、ステラを救うことができたのか？

サイのくれた慰めすらも意に介さぬほどに、このときのキラには『自分はステラを救えたはずだ』という確信があつた。

だが結果だけを見れば、彼はそれを成し遂げられなかつた失敗者だつた。少なくとも、本人の中では。

——なんで……!?

自問し続け、おそれと後悔の目で己の来し方を振り返る。

そのときキラは、ひとつの違和感と、それでいて最も重大な要因に気付くのである。

「……………ッ」

ふと、キラはデツキに格納された“ストライク”を見上げていた。

目立った損傷があるわけでもなく、精悍な様子で仁王立つそのモビルスーツ。殆ど万全に近い状態でありながら、今はバッテリーを尽かして暗灰色に覆われている。“それは、以前のキラの搭乗機だつたもの。”

しかしそのバッテリー切れは、数えて見れば何度目のことになるのだろうか？ 先ほど行方不明者の搜索活動が行われた際にも、キラは“それ”に乗って誰より真つ先に“ヤ

キン・ドゥーエ” 宙域跡を見て回った。そうしている内にまたしてもエネルギーダウンに直面することになり、今の”ストライク” は念のための補給を受けているところだ。

——あのとき……！

キラがステラを救えなかった最大の要因——

それは、そんな風にエネルギーダウンを引き起こしてしまうモビルスーツに搭乗していたこと。すなわち、バッテリー駆動の”ストライク”などを借用していたこと。

(もし僕が”ストライク”じゃなく、ちゃんと”フリーダム”に乗っていたら——)

そこまで考え、やがて彼の向けたおそれと後悔の目は、それよりもさらに前の過去を猜り出す。

そもそも、キラが”ストライク”を借用することになったのは、キラ自身がラウ・ルクレーゼとの激闘の中で”フリーダム”を大破させてしまったのが原因にある。

あのとき男の遺した口跡が、今になっては確かな痛みと実感を伴ってキラの脳裏を過ぎるのだ。

——きみが天才でなければ、わたしは倒せぬ！ きみは誰ひとり、護れぬ……！

声高に叫ぶ男に対し、あのときは堂々と云い返した——「自分はもう、天才である必要がない」のだと。力だけが全てではない自分の存在を認めてくれる少女が傍らにいてくれる限り、自分はもう、彼の謳うような生き方や戦い方に目醒める必要がないのだと。

でも、あるいは彼の云う通りだったんじゃないのか……？

(僕があのと『力』を持っていたら……！ 僕が、あの人の云うような『天才』であつたら、"フリーダム"を失うことはなかったんだ……！)

結局、ラウの圧倒的な操縦センスを前に、力及ばず"フリーダム"を大破させてしまったキラ。

マリユウやムウや、ツールたち——幾多の仲間達との連携と援護、協力を得ることで、何とかキラは危機から脱することができた。でも、そんなもの本来は必要なかったんじゃないのか……？

——本来ボクは、たとえひとりでてもあの男に勝てたはずなんだ……！

至高の天才であれたなら、拓けたはずの"未来"^{みち}——

そうすれば、キラは"フリーダム"を保持したまま、最終的には"ジェネシス"内部に飛び込んでいけただろう。

牢獄の中に囚われた姫君を救い出し、さながらヒーローのように、窮地に瀕したステラを連れ帰ることもできただろう。少女の存在にうつつを抜かし、腑抜けた今よりもつとずっと、強さと『力』に振り切れた天才であつたなら——。

——だからキラは、天才なんかじゃなくなつていいんだよ。かつてステラがみずからに告げてくれた、救いの言葉。

それが脳内では呪詛のように何度も何度も繰り返され、今のキラを苦しめる。皮肉にも。

(何が、天才である必要がない——だ)

——力だけが、僕の全てじゃない……。

そんな自分の在り方を心から信じてくれていた少女は、ついに帰らぬ人となった。あまりにも未熟で、愚かだった自分の至らなさのために。

ならばもし、力だけが全てであれたら——？

純然たるスーパードーデインイター、僕こそが超常とした天才であれたなら——！

「僕は、ステラを守ってあげられたんだ……」

僕には絶対できたはずだ……。

——だって僕は、スーパードーデインイターなんだから……。

キラの中で渦巻くその赤黒い感情は、ぐるぐると蜷局を巻いて、彼の心を支配していった。

『ニュー・オーダー』B

深宇宙探査開発機構 “D・S・S・D” とは、火星軌道以遠領域の探査、および開拓を目的に設立された宇宙開発機関である。

人類の活動領域、新たな惑星入植地の発見と開拓を意味する『フロンティアの前進』を理念に掲げ、あらゆる国家・体制・宗教・民族を超越した、中立の英才機関として発足している。

第二次 “ヤキン・ドゥーエ” 攻防戦後、停戦を迎えてから、約八か月ほどが経過し、伝説のMS “フリーダム” のパイロットであったキラ・ヤマトは、そのD・S・S・Dに所属する研究員の一人となっていた。

さまざまな経緯については後述する形となるのだが、そのような前進的な機関で働くこと——それはある種の夢のある話であるように思えて、しかし、そこに辿り着くまでにキラ・ヤマトが歩んだ道のりは、決して平坦なものではなかったということを、先に記述しておく。

「D・S・S・Dの第一級管制官の資格試験って、この地球圏で、最も難しい試験だって

云われているんでしよう？」

とある女性研究員はそう話す。

話しかけられた方の男性は、都市伝説のような内容を返していた。

「ああ、どれだけ優秀なコーディネイターでも、合格するには最低でも『二年』——ナチュラルが受けようものなら、その三倍の『六年』は掛かる難易度だって、もっぱらの噂だぜ？」

「そんな超難関の試験にさ、たったの半年で受かった人がいるんだって！　それが彼、キラ・ヤマト！」

話に参加したのは、また別の女性研究員だ。

「——俗に云う、類稀なる天才ってヤツ？」

嬌声か、それとも罵声か。

称賛と皮肉が同量だけ混じったような声音で、女性は語った。

「天才か。——イヤな言葉だね、少なくとも、オレたちみたいな凡人からすれば」

男性研究員は、自嘲したように話した。

「うん、たしかに、凄い話だとは思う。ドラマみたいでカッコいいとも思う！　——けど、そういう人って、同じ職場で働きたいとは思わないんだよね……これって偏屈？」

「いや、おかしくはないさ、その感じ方は……」

一般的なナチュラルで『六年』——コーディネイターであれば『二年』は最低でも必要とされる難関試験を、たったの『半年』で突破した人間がいるとなれば、その名は轟き、それこそD・S・S・Dの中で大きな評判を呼び込むことは避けられない。

稀代の天才、キラ・ヤマト——

時代の寵児と云つても過言ではない明晰な頭脳を持った、齡十六の少年。彼はその奇跡的な能力のみならず、繊細で甘いマスクをした外見からも多くの女性の支持を集め、そうしていつか、周囲の人間は歴史の偉人になぞらえて彼のことを「第二のジョージ・グレン」——『奇蹟の人』と呼ぶようになっていった。

云つてしまえば、彼という人間はヒーロー中のヒーローだった。持て囃され、弄ばれ、それはまるで道化のように、香具師であるかのように。しかし——

「オレなんて、あの試験に合格するためにもう四年も掛けているんだぜ？　なのに、アイツは半年……本当にひとつ飛びさ。ふざけた話だよ——血反吐を吐いて努力しているオレの四年間は、いったい何なんだろうな……」

「彼、やつぱりコーディネイターなんですよ？」

「当たり前さ！　ナチュラルが半年でクリアなんてできるかよ！」

「結局、世の中遺伝子つてことなのかな。やだやだ、身の程を思い知らされるみたいでさ

——」

最初がどうであつたかはともかく、羨望が嫉妬に変わる瞬間は一瞬であり、人間という社会的動物は、外部から来た余所者を手放して賞賛し続けていられるほど利他的にはできていないらしい。

オーブ国内に構えられたD・S・S・Dの研究所、同じ研究室に勤めていながら、彼らはすぐ傍らにキラがいようと構わず、このような雑談を日常的に続けていたという。いや、彼らにとつては陰口のもりなのだろうか？ 低俗であること甚だしく、憚らぬ悪意に満ちた言葉の数々は、それでもキラの耳に自然と届き、ただの陰口が露骨な悪口に変わつてゆくのに、そう長い時間は掛からなかつた。

キラは、その悪口を聞こえないように努力した。さらなる勉学を重ね、学会に自分の能力を認めさせ、地上を離れて宇宙のトロヤステーションで働けるほどの見識を身に着けたのだ。それまで耳障りに響いていた罵詈雑言という名の雑音、彼のいつときの煩悶は、所詮は他人への嫉妬に時間を浪費する凡人達を地上に置き去りにすることで簡単に解決した。

キラは学んだ。彼らの言葉に耳を傾ける必要などなかつた。彼らのような凡人などは所詮、キラよりも先に生まれただけの、才能のない連中であつたから――

「——周りはいっただって好き勝手云うものよ。少なくとも、あなたの持っている“力”は、この世界においては貴重な財産だわ」

同じくD・S・S・D技術開発センター所属の女性技術者、セレーネ・マクグリフはそう語り、キラに向けて激励の言葉を送った。彼女は博識なるコーデイネイターの女性であり、ナチュラルとコーデイネイターの間で巻き起こる確執や戦争については、無関心な立場を貫いていた。

セレーネは、キラにとつて尊敬に値する人物だった。みずからが一度決めた目標は最後までやり通さなければ気が済まず、そのためなら如何なる努力も惜しまない。沸き立つ探求心と欲望に忠実とも云える彼女の姿勢は、云わば胸をすくように単純明快でもあったらしい。

「人間の持つ能力や才能が、世界にとつての“財産”である——と、セレーネさんも、やはりそう考えますか？」

そんな彼女の許で部下として勤務していた間、キラはふと、オフの際に口をついで訊ねていた。

セレーネは少し思案したあと、微笑んで答えた。

「原理主義的な質問ね……？　上手な言葉を選び出すのはとても難しいけれど、そうね——あなたも、先の大戦では徴兵された経験があると云っていたわね」

「ええ、まあ……。地球軍の士官として、パイロットをしていた時期はあります」

すべてを語り尽くしたわけではないが、触りだけは打ち明けたことがある。大戦を終わらせた伝説のMSのパイロットであったキラであるが、その名は主にクライン派によつて情報統制が敷かれ、世間一般には公表されていないのだ。

セレーネは淡々と、あくまでも持論に過ぎない内容の言葉を送った。

「私から云えるのは、あなたのように素敵な才能を持った人が、あのくだらない戦争の中で散るようなことにならなくて、良かったということだけ。わたしは私の強い性格だつてよく云われるけど……。そんなんだから、そもそも世界をよくするだとか、他人の立場に則つて考えたりするの、苦手なのよ」

それはつとめてセレーネらしい返答であり、キラの苦笑を誘った。

「私は、私の夢や目標のことを考えて生きるので精いっぱい。要するに自己本位なのよ。私にはあなたの才能に嫉妬している暇なんてないし、それどころか今、あなたという優秀な部下と一緒に仕事ができる毎日が、楽しくって仕方がないの」

キラとセレーネはこのとき、フロンティアの開拓に必要不可欠と云われた「ヴォワチユール・リユミエール」の開発計画に勤しんでいた。それは一般に『惑星間航行用推進システム』とも名付けられた技術で、光パルスの研究と実験を主目的にしている。太陽風から受けた熱量をエネルギーに変換する技術は「ソーラーセイル」と呼ばれるの

だが、一方で「ヴォワチュール・リュミエール」は太陽風のみならず、レーザーや荷電粒子さえもエネルギーに変換することが出来るのだ。

セレーネが云いたいのは、キラがこの「ヴォワチュール・リュミエール」の研究開発チームに参画するようになってから、途端に光明が見え始めたということ。すなわち、研究が大きく飛躍するきっかけを与えてくれたのが、他ならぬ彼であり、本当にたった半年で身に着けたとは思えないほどの彼の明晰さを称賛する言葉であった。

「——それが、私の答えよ。あなたに贈れる、その全てなんだと思う」

セレーネ・マクグリフはそう語り、キラに向け、激励の言葉を送った。

D・S・S・D技術開発センター保安副部長、エドモンド・デククロは、かつて『伝説の鬼車長』の異名を持つ地球連合陸軍の軍人だった。第二次「ヤキン・ドウエ」攻防戦の終結と同時に退役し、D・S・S・Dに天下り就職した経歴を持ち、そんな彼と、キラは個人的な対談の機会を持ったことがあった。

南米フォルタレザ郊外、D・S・S・D技術開発センターにて、その対談は行われた。

コーディネイターでさえ最低二年は必要とされる第一級管制官試験を、わずか半年の独学で通過してしまった『奇蹟の人』——第二のジョージ・グレンとの呼び声も高いキ

ラ・ヤマト氏と、エドモンド・デユクロ氏による個人対談。

「——エドモンドさんは、どうして停戦後、このD. S. S. Dに？」

戦中は伝説として名を馳せた人物が、その富や名声、一切の地位を捨てて、丸裸の挑戦者として新たな新天地に赴く——

聞き心地のよい美談のようであるが、エドモンドの三十六という年齢を考えれば、それは踏み切るには相当の覚悟と勇気がいる決断であることは確かだ。キラは以前からエドモンドという人物に相応に興味を持っていて、戦争で活躍した人間が新天地に活路を求めたという意味では、彼自身の境遇とも通ずるものがあつたらしく、キラは純粹な関心から、エドモンドに訊ねていた。

人格者として知られるエドモンドは、キラの質問に対しても真摯に、そして朗らかに笑いかけながら答えていた。

「あんまり明確な答えがあるわけじゃないんだ。とりあえず、上を見ておこうかなって」
「上……？」

「ほら、横を見ると、誰かに嫉妬して自分も欲しくなるだろ？ 下を見ると、今の自分で助けてあげられる人が居て、彼らに必要とされてりや気持ちはいいけど……もし、自分より弱いものが居なかつたらって思う。そのとき、自分は何をやるんだらうってね」

その話は、キラにとって実感のように思えた。

横を見たとき、人間はそこに自分と並走する他者の存在を見つめる。それは理解者であり、好敵手と云える存在だ。競い合い、高め合い、自分自身を切磋琢磨する原動力となりうるもの。だが、それは両者の力関係が均衡に保たれている場合の話であつて、程度が過ぎて置き去りにされた者の中では、それまで気高かつたはずの競争心は劣悪な対抗心へと変貌し、嫉妬という邪悪な心根に精神を蝕まれる原因ともなり得る。

「それに、下ばかり向いているのも傲岸だと思ふんだ。優越感てのは、そりや気持ちのいいものだろうが、それはつまり、自分より弱い者達を見下している感情と一緒だろ？　そういう偏屈な考え方ができてしまう場所に居続けるのも、いかなもんかと思ふしね」

正義感とは形を変えた優越感であり、自分に酔つているだけの陶醉感にもなり得るもの。社会的地位という座椅子にふんぞり返り、弱者を見下すことに満足し、そこで停頓してしまつた人間には進歩がない、可能性がない、成長もまた——

「——だから、とりあえず『上』を向いてる自分を確保しておこうと思つたのさ」

エドモンドはおおよそ、保身や出世と云つた権力闘争には関心がないのだろう。

だからこそ、富や名誉を捨てることに一切の躊躇を憶えず、この新天地にやつて来た。そのおおらかとも云える人柄は、期待通り……いや期待以上のものがあつたらしく、キラはつられるように朗らかな笑みを返し、この対談そのものが極めて良好な空気感の中

で続けられていった。

「上」といやあ、お前さんは、まだ地球圏から出た経験はないんだったか？」

「ええ、このD・S・S・Dに入局したのも、つい最近のことですから……」

「それで今は第一級管制官か！　はは、本当にとんでもないヤツだよ、お前さんは」

「お気を害されたなら、謝ります」

「いや、いいんだ。オレが云いたかったのは、お前さんも「上」の世界に憧れた人間のひとりなんだろう？　つてことさ」

「えっ……？」

「見てれば分かるよ」

エドモンドはキラの目を見ながら、真つすぐに力強く云った。

「お前さんは、何かに苦しみ、そこから必死に脱却しようともがいているように見える。抜け出し難い泥沼のような場所から、上へ上へと這い上がろうとする「力」を感じるんだ。それはまさに、向上心の塊のような男だよ」

凶星であつたのかどうか、キラはハツとして、指摘された自分に実感を憶えたという。

エドモンドは笑いかけながら、朗らかに云った。

「それは宇宙の持つ「力」ってやつさ。お前さんも、宇宙に惹かれてこの局へ入った——違うか？」

もつと先へ……もつと遠くへ……。

人類史上、そんな願いの許に生み出されたコーディネイター。実際にコーディネイターであるキラが可能性の拡がる宇宙へと魅力を感じるのは、ある意味で自然なことだとエドモンドは云う。

だが、動機とするには、それはキラの中では少しだけ違っていろいろらしい。彼は自分なりの解釈で、エドモンドへ伝える。

「僕がこの局を選んだのは、大層な理由からじゃないんです。僕が民間の中で頑張ろうとすると、その……必死に努力している人達を、バカにしてしまう、みたいで」

出る杭は打たれる、とはよく云ったものであり、キラが何かを努力すればするほど、心ない人々は口を揃えて彼のことを「卑怯者」と糾弾した。天才であるから、自分達とは違うから――

「昔からなんですよね、それ。以前は中立のコロニーで暮らしてましたから、ゼミの友達なんかには、よく、自分の能力を隠して生きてきました」

自嘲するキラの目は、必ずしも笑ってはいなかったが、語られた内容そのものは事実だった。

オーブで暮らしていた頃でさえ、かつてのキラはゼミの仲間らに対し、自分の能力をひた隠しにして生きてきた。自分の力をあえて誇示するようなことはして来なかった

のだ。学力にしろ、運動能力にしろ……それはキラ自身も知らず知らずのうちに身につけていた処世術であつたのかも知れない。

なお、この両氏による対談はD・S・S・Dによつて録画され、トロヤステーションの衛星を介して全世界に配信されていた。視聴者たる市民達の中には、戦後オーブの間企業で働いているサイ・アーガイルの姿もあつて、彼はオノゴロの街角に設置されたテレビから流れる当配信に見入りながら、あまりに複雑な表情を浮かべたという。

「キラ……」

かつてキラと同じ工業カレッジに通い、彼と同じゼミの学生だつたサイ。キラ達よりも一歳年上だつたこともあつて、自然と彼らのまとめ役になることが多かつたサイであるが、その日々の中で薄々と感じ取つていたキラに対する違和感の正体が、いま、目の前のテレビを通して明かされている。

明らかに誰よりも優秀だつた割に、そのことに驕るでもなく、従順で大人しかつたキラ。いや、実際は大人しく見せていただけで、心の裡では、やはり自分を殺して生きていた――

リビア砂漠では、ひとりの女性を巡つて暴力沙汰になつたこともあつた。あのときはキラに腕を捻り上げられたこともあつたが、あのとき彼の見せた一辺の凶暴性――「僕に敵うはずがない」と豪語してみせた傲岸さと不遜さ――こそが、あるいは彼の本質的

な内面だったのではないか？

少なくとも、テレビの中に映っている今のキラは、日常の中でサイ達に見せていた謙虚さという仮面を脱ぎ捨て、あらゆる柵から解放されたように清々しく、心晴れやかな面持ちにも見える。仮面を脱ぎ捨てたという表現がいよいよ比喻とは思えないほどに、サイが知っている彼とは別人のようできえあつたのだ。

——本当に、遠い世界の人になつてしまつたんだな……。

サイは寂しいような表情になるが、そこからはまた、テレビの中で対談が続けられた。「なるほど。それで、それを窮屈に感じたお前さんは、戦後は自分自身を偽らずに活躍できる場所を欲したと——」

理に叶つた話だと、話を聞いたエドモンドは思った。

このD・S・S・Dは、あらゆる国家・体制・宗教・民族の垣根を超え、超難関試験によつて優秀な人材のみを登用している。地球圏において最も有能な人材が集結する機関と云つても過言ではなく、他人の目を憚らず、キラが自身の才能を發揮するには理想的——現実はどうでもなかつたようだが——な環境と云えるだろう。

エドモンドは確信づきながら話した。

「それはやつぱり、宇宙に惹かれてる、つていうんだよ。不幸な話、正真正銘の天才であるお前さんには、お前さんの『横』に立てる人間が居なかつたんだ、違うか？」

本人がそれを望んだかどうかはともかく、キラの正体はスーパーコーデイネイターだ。最高の技術を用い、最高の美貌と能力を持ち合わせた人間として造り上げられた、至高の天才。

そんなキラの傍らには、元より理解者や好敵手など存在するはずがない。なぜなら、存在できるはずがないから。キラとはつまり唯一無二の天才であり、彼の土俵に上がって来られる人間など、当世に存在するはずはないのだから。

——生まれる前から、天才としての人生を確約されたキラ・ヤマト。

それに対して、たとえば生まれながらの天才であるアスラン・ザラを比較したらどうだろうか？ アスランの才覚と素養は凡百から頭抜けたものであり、仮に『戦士』としての土俵でキラと争えば、それについては互角に近い激闘を目撃することも可能かもしれない。コーデイネイターとしての性能ではキラの方に軍配が上がるはずだが、実力や経験、ありとあらゆる術でもって、アスランはその軍配を覆すだけの能力を持っている。

だが、他の土俵ではどうだろう？ 戦士ではなく、策謀家、芸術家、音楽家——ありとあらゆる分野の総合力において、キラは極限まで高められた能力を発揮できる異常生命体として設計されており、その意味において、彼はやはり真正正銘の天才なのだ。

——そう、キラの「横」には何も無い、彼と肩を並べていられる隣人など存在しない。

彼にあるのは、ただ彼の「下」に跋扈する本質的に彼よりも劣っている者達と、彼の「上」に無限に広がる人気のない深淵なる宇宙のみ。だから彼が他の人間と同じように希望を求めようとすれば、それはおのずと後者であり、後者以外にはなり得ないのだ。エドモンドは云うが、しかし、以前はそうではなかった。そうではない道を進んでいけるはずなのだ、キラ自身も信じていた。

「いたんですよ。本当なら……」

「え？」

「天才じゃない僕のことと認めてくれて——すぐ隣に寄り添っていてくれた子が、いたんです……」

子どものように純粹に笑いかけ、妖精めいた無垢な笑みを向けてくれた金の髪の少女。

——だからキラは、天才なんかじゃなくなっちゃっていいんだよ。

救いの言葉は今となっては呪いとなつて、今のキラを苦しめ続ける。

「——でも、もういません」

「それが、お前さんの苦しみか……？」

「……………」

言葉を嚙むキラの沈黙は、エドモンドに答えとして受け取られた。戦争によつて心に

負った傷は、取り繕ったような慰めの言葉で癒えるようなものではなく、エドモンドはそれを知っていたから、ただ事実を差し出すようにして云った。

「先頭を走る者は、いつだって孤独だよ。それは受け入れなきやならない、世の理ってやっだ」

論され、頷くキラに、エドモンドは言い募る。

「天才はいつの時代も世間から爪弾きにされる。先駆者たる者は、いつだって周囲の無知と無理解と戦わなければならない。かつて、かのジョージ・グレンが、そうであったようにな」

それは、すでに歴史が証明していた。

「だが、かと云って希望がないわけではないんだ。ジョージ・グレンが夢を追い「エヴィデンス」を持ち帰ったように——もつと先へ……もつと遠くへ……そんな風に望みをもち続けていれば、いずれは世界そのものに変革を齎すこともまた、不可能なことじゃない」

それもまた、歴史が証明した事象だった。

「今のお前さんには、この地球圏が狭すぎて感じられるんだろう？　せつかくD・S・

S・Dに入局したんだ、機会は無限大にある——チャンスがあれば、もつと“上”を

……地球圏を脱し別の世界を見に行くのも、いい経験になるかも知れないぜ」

——別の世界？ とキラは反芻した。

エドモンドはまたも差し出すようにして続けた。

「たとえば、直近だと火星圏とかな」

「火星圏、マーズコロニー群ですか？」

「当然、知識としては予習済みか」

その通りだ、とエドモンドは続けた。

「火星の社会構造は独特でな。今のお前さんのように、自分が持つている能力に苦しめられる人間が誰ひとりとして存在しない、ある意味で平和な世界だよ」

エドモンドは説き明かした。共同体としては「ブランド」の形態と通ずるものがあるが、火星圏の入植のために建設されたマーズコロニー「オーストレール」は、より少ない人員と、火星の苛酷な環境に対応するために、必要とされる職種に合わせて遺伝子調整されたメンバーが日々コミュニティのために機能的な生活を送っているという。「遺伝子の特性によって人間を振り分け、役に立たないと思われる人間を一切排除した、ある種の優生学の極致だ」

無能も有能も、凡人も天才も、分け隔てなく平等に生きている世界。

キラのように飛び抜けた才能を持つ者が弾圧されることはあり得ず、その逆もまた然り、特別に秀でた能力を持たない凡人が糾弾されることもあり得ない。そこで暮らす者

はみなが対等であり、対等であるがゆえに、確執も戦争も起こらない。

「それって——！」

「ああ——『運命』が、全てを支配する世界だよ」

人間は先天的に持って生まれた遺伝子の中に、性別、能力、個性、人生を後天的に左右する様々な情報を秘めている。現代において、人々の遺伝子の中にある塩基配列に書き込まれたデータは、DNAの解析技術によつて『ほぼ完璧』と述懐できるレベルで解明され、実際にコーデイネイターたる新人類は、この遺伝子工学技術を応用することで造り出されているのだ。

火星に暮らす人々は、この技術を応用して人々の職業適性を診断し、その者の人生そのものに『役割』を与えようという革新的な社会秩序を確立させたのだ。

それは云わば、人生における『正解』とも云えるものであり、たとえば戦士の才能を持つ者は戦士として生き、歌姫の才能を持つ者は歌姫として生きる。選択肢など初めから与えられていない方が、挫折や失敗、人生における無用の苦悩は生まれえない。人生の中に分水嶺など存在しなければ、人間はどこまでも幸福な人生だけを歩んでいくことができる——

「『デステイニー・プラン』……！」

無意識の内に、キラはかつて、みずからが一度夢見たその単語を口にしていった。エド

モンドの打ち明けた話は、かつてキラがコロニー“メンデル”の中、とある男の研究室で発見し、密かに持ち去ったノートの中に記述されていた社会構想と、よく似た内容についてを言及していたのだ。

エドモンドは聞き当たりのない……おそらくは公表されたこともないであろうその単語を理解できず、微妙な顔を浮かべたが、しかし、そのとき対談を画面の向こう側で見ていた視聴者のうち、約一名ほど、切れ長の黒い長髪の男性が感嘆の声を漏らしたという。

「僕は、その世界に興味があつたんです！」

「なら、実際に火星圏へ行き、その曇りのない目で見学して来るといい！」

激励のつもりで、エドモンドは無垢な少年のように輝かしい目を浮かべ始めていたキラの背を押し、そそのかした。

火星で暮らす人々は、自分とは異なる能力を持つ者の欠点を粗探しするではなく、これを美点として謳い合うのだという。そうすることで、本来であれば理解し合えない者同士も、相互に尊び合うことが可能になるのだと。

「それが火星のコーディネイター、マーシヤンだ。彼らは地球人をテラナーと呼ぶ……そこに希望があるのかどうか、この世界に変革が齎せるのかどうか？ キラ・ヤマト——お前さんのその明晰な頭脳で見聞きし、考えて来るといい！」

与えられた力を知り、役割を割り振られ、みずからの才能を活かせる場所でのみ機能する世界。

——悩み、苦しむこともなく、人生の『正解』そのままに生きる。

それは、今のキラが何よりも欲していた、彼の人生の道標だった。

「行けよ、高みへ。もっと『上』の世界へ」

——お前さんの目指す新天地は、きつと『そこ』にある。

エドモンド・デユクロはそう語り、キラの火星圏への旅立ちを後押しした。

南米フォルタレザ郊外、D・S・S・D技術開発センターにて行われたこの対談は、トロヤステーションを介する中継によって全世界に放送された。

かの大戦ではキラと共に最後まで戦った、ムウ・ラ・フラガもまた、この放送を目の当たりにした者のひとりだった。

「馬鹿野郎……っ！　なんで、そんなつちまうんだよ!？」

ムウは放送を見ながら、苛立たしげに強い息を吐いた。

先の放送の中で、キラが晴れ晴れとした表情で口にした言葉の数々は、彼の人生の隣

人を徹底的に傷つける内容のものであった。彼が自虐的、自嘲的に語っていた過去は、つまりは彼のことをそれまで不当に扱っていた者達へ対する怨嗟であり、言葉の形を取った有毒の瘴気に他ならなかった。

「キラくん、本当にどうしちゃったの……!?!」

傍らのマリユもまた、放送を見ていた。

その大きな瞳は信じられない、といった驚愕で見開かれ、まるで別人のように変わり果てた——しかし、無垢なる少年のように目を輝かせた——テレビの中のキラの表情を見つめている。

「以前までは、こうじゃなかったのに……」

「ああ……」

今となつては成功者であるようにテレビの中で持て囃されているキラであるが、これ以前までの彼は、云わば真逆の、世捨て人という名の廃人だった。

そもそのキラは、戦後直後から地球に住まう宗教家、マルキオ導師の許に身を寄せていたのである。マルキオは自身の伝道所に多くの孤児を生活させており、キラはそんな彼の許で、母のカリダと共に安穩とした静謐な戦後の日々を送ることを選んでいた。

しかし、その果てでキラが送っていた生活は、それはそれは凄惨なものだった。

まるで人との交わりを避けるように、人気のない白い浜辺に座り込んで、誰が好き

だったという海を一日中見つめていた。何日も何日も同じことを繰り返し、まるで誰かが海の中から帰って来ることを待ち望んでいるかのような、ひたすら無為に時を過ごす毎日を送っていたのだ。

それが、かの大戦で負った傷を癒やすために必要な休息であることはムウにも理解できたが、理解できたからといって、納得がいったわけではない。少なくともムウには、それは齡十六歳の少年が、選んでいい毎日ではないと感じられた。

ムウの身の回りにはいる女性達は当時、この問題について消極的な意見を呈していた。ほとんど廃人と云っていいキラの現状を認めた上で、その支援と介護に回ることを選んでしまったカリダはもちろん、今はムウの傍らにいる恋人のマリユでさえ、今の彼には休息が必要なのではないかと、傍観すべきとする立場を示していたのだ。

——だが、あれが休息と云えるのか？

——日がな年中、寂しげに浜辺に座り込んで、茫然とただ海を見つめるだけの退廃的な生活が？

ラクス・クラインはいまは「プラント」で頑張っている。カガリ・ユラ・アスハもオーブの復興のために尽力していると聞く——それなのに、彼だけは取り残されたように、出口の見えない混迷の中にいた。

このままではいけない——と、ムウは、そのやり方が正しかったとは云わないが、キ

ラの胸倉を掴み上げてでも彼を叱った。あの大战で死んで逝った者達が、今のお前を見て喜ぶのか——と。

傷を癒やすために必要なのは「休息」ではない。いや、そうすることも必要な場合もあるが、少なくとも、キラが選んだものは違う。彼が日常的に行っている行為は、浮かび上がった傷の周りを激しく撫でまわし、その回復をみずからで遅らせているだけの自傷行為に他ならない。

傷を癒やすために必要なのは「行動」であり、不躰な云い方ではあるが、気を紛らわせることではないのだ。時間が忘れさせてくれるまで何かに没頭し、その結果をもって英霊に報いることでしか、自分を赦したり、救ったりする方法はないのだと、ムウはキラに教えた。

キラはハツとして、その言葉をたしかに真つ向から受け止め、廃人とも云えるそれまでの生活に、みずからの手で終止符を打つことを決めた——だが、

「その結果が、これかよ……」

いざ、キラが本気を出して行動をした結果、彼は社会の中で、心ない人々による激しい差別に直面することになった。才なき者は才ある者を妬み、激しく嫉妬し、これを寄つて集つて弾圧した。

その弾圧から逃れるために、キラはさらなる行動を重ねた。さらなる高みへと自身を

向上させ、程もなくして頂いただへと上り詰めすぎた彼は「才能のない者は切り捨てればいい」という、彼にとつては正当な解決方法を導き出すに至つたのだ。

「今のあいつは、天才としての自分を過剰に求めてる——」

「キラは奇しくも、それを実現させるだけの能力を現実にかけていますから……」

ムウの傍らに、このときはツールもいた。

変わり果てた親友の表情を見て、愕然としていたのはツールとて同じだった。

「持つている……いや、ずつと持つてたんだ。でも、知らなかつた、あのときは」

「あのとき自分が天才じゃなかつたから、あいつはステラを救つてやれなかつたと思ひ込んでいるんだ……!」

善かれと思つて施したムウの叱咤は、結果的には罪だったのか。疲弊した少年の傷を理解せず、そんな彼を強引に奮い立たせ、すでに壊れかけていた彼を俗悪な社会の下に解き放つてしまった。繊細だったはずの少年の心を、強大な悪意から身を守るための狂暴な野心へと変貌させてしまった。

「情けねえよ。なんだつて、こんなことになつちまつたんだ——」

このときのムウは、その奇跡的な直感力から、この先でキラが何をしようとしているのかを判然と思ひ描き、想像することができたという。

おおよそキラの目論見は、実際に火星で執り行われているという『運命』に則つた社

会秩序を、この地球圏にも導入することにある。差別や偏見などによって不当に扱われる者を排除し、秩序にそぐわない者は淘汰、矯正させてしまおうという算段であるが、ムウとしてはおぞましい限りだった、そのような世界のどこに、自分達が求め続けた「自由」があるというのか？

少年は、いや人間とは、この半年という短期間でこうも変わってしまったのか？ 社会の中で浴びせられた無理解による罵声の数々は、少年の心をこうも捻じ曲げ、歪めてしまふものなのか？

——いや、違う！

ムウは気付いた。これは、たったの半年間で起こったキラの心境の変化などではない。

キラ自身が対談の中で述べていたように、これはキラ・ヤマトの人生——そのはるか昔から鬱積していた恥辱。自分という天才を侮辱し続けて来た者らに対する、明らかに叛逆なのだ。

「——これは、キラによる復讐だ」

これまで彼の尊厳を踏みにじり、その存在と価値を軽んじてきた者達——
ラウ・ル・クルーゼの告発によって明らかにされてしまった、ムウも含めた、彼よりもはるかに劣っている全人類に対する。

「そんなッ……!」

無気力な廃人に落ちぶれていたことで、ムウは気付かなかつた。キラの抱えた心の闇を——その絶望の深さと昏さを。

キラはいま、全世界へと、はつきりと憎悪を叫んだ。

望みもしない“力”を自分に与えたこの世界の身勝手さと、それによつて自分を苦しめ続けた理不尽な現実、人々、運命——その全てに対する復讐の念をもつて、彼は声高に叫んだのだ。

『この地球圏に、僕の居場所はない』——と。

キラはこの不完全な世界が破壊されることを望んでいる。奇しくもそれは、彼自身が闇の中へ葬つたラウ・ル・クルーゼと同じように。

それでもラウと決定的に違っているのは、そうして破壊された世界を、キラはみずからの手で設計し直すことを渴望していることだろう。この世の創造主たる神として、遺伝子こそが王となつて君臨する世界、その最高位に立つ、最高の遺伝子を持つたコーデインイターとして。

「なにが、第二のジョージ・グレンだ」

人々は、類稀なる天才をヒーローとして崇め、弄び、讃えるだろう。

歴史は繰り返す——

その称号が、いよいよ比喩ではなくなつて来ていることに気付かないまま。

「ふざけている場合じゃない……」

この世を大いなる混沌の中に導き入れた、かの原初の天才と同じように、キラ・ヤマトという次世代の天才は、スーパーコーディネーターまたしても世に大いなる混沌を齎す怪物になりかけているのに。

誰もそのことに気付かない。テレビの画面の向こう側で、ただ面白がつて、ただ珍しがっているだけで。

——あいつを、止めなければ……！

責任感か、使命感か、ムウは決然と考える。

しかし、今の自分達に何ができよう？ もはや、キラの居場所も分からない自分達に。あるいはキラは、もう二度と手の届かない、はるか『高み』へ行つてしまっているかも知れないのに——？

キラはみずからの秘書に車を運転させ、海沿いの道を辿っていた。

じつに有意義だったと思える南米郊外フォルタレザでの対談を終えて、彼は多忙なス

ケジュールの中で、なんとかオーブへの寄り道をする時間を作っていたのだ。辺りはすっかり夜の闇に解け、海沿いの街灯のない道路では、夜空に星明りが美しく輝いている。

『だからキラは、天才なんかじゃなかったっていいんだよ』

燦然と輝く星々の瞬きを見上げながら、キラの脳裏にふと、ひとつの聲が浮かび上がった。

「違う」

それは、星の名を持つ少女が自身に伝えてくれた言葉――

なぜ、今になって思い出すのか？ キラはわずかに自嘲しながら、独語のように小さく云った。

「違うよ、ステラ」

天才じゃなかったから、僕はきみを救ってあげられなかった。

闇の中に生まれ、みずからを殺して生きた、仮面の男はこう謳った。

『真実を知り、常軌を逸したその異能ちからを示してしまった君達みんなのところはもう、平和の中へは戻れない！ 弾き出され……押し潰され……いつか、私と同じ絶望を味わうことになる！』

すべては彼の云う通りだった。

「僕は、天才じゃなきゃいけないかったんだ」

彼こそが、他の誰よりも正しかったのだ。

「きみのためにも——そうだろ？ ステラ……」

その問いかけに、答えを与えてくれる者はもういない。

ステラは、キラが殺したのだ。本来であれば救えたはずの命を、彼が見殺しにしてしまった。

その表現には決定的な誤りがあつたが、結果として助けることが出来なかつたのは事実であつたから、彼の考え方がこの表現から動くことはあり得ない。

「僕はきみの墓標と、この『力』に誓つたんだ。もう二度と、同じ過ちを繰り返さないつて」

叶わぬ夢に絶望するくらいなら、初めから正しい道を。

そうすれば、僕は君と会うこともなかつた。

そうすれば、こんなにも苦しい思いをせずに済んだのだ。

「僕は天才として生まれたから、なるよ——これからは、誰にも越えられない天才に」
挫折も迷走も、苦悩も失敗も必要ない。

——自由な意思、希望？

そんなものは戯言だ——

「もう、誰にも僕を越えさせない。誰も僕には追い付けない」

——全ての答えは、遺伝子の中に刻まれているから。

「僕はなるんだ。人類の夢に——最高のコーディネイターに」

そのために、やらなきゃならないことがもうひとつだけある……。

車はそのまま海沿いを走り、かつてキラが生活を送っていたマルキオの伝道所に辿り着いた。

『名を捨てたい』——と。

最初、カリダ・ヤマトは、みずからの息子が何を云っているのか理解するのにはばしの時間を要したという。

深夜頃になって、キラが久しく空けていた旧家——このマルキオの伝道所に帰ることを知らされていたカリダは、マルキオの子ども達を寝かしつけたあと、妙な予感に騒ぎ出している胸を押さえて、キラの帰りを待っていた。このとき、キラが久々に地球に戻ってきていることを知り、その姉に当たるカガリもまた、時間を見つけて伝道所へとやって来ていた。

玄関のドアが開いて、迎えに上がる。しかしキラは、用意されていたテーブルのイス

に座るでもなく、カリダに向けてそう云い放つたのだ。

「おまえ、どういう、ことだ……?」

言葉によつて受けた衝撃が大きかったのは、むしろカガリの方だったかも知れない。

キラはあくまで淡淡として、感情の抑揚すら伺えない平坦な声音で話を続けた。

「カガリ、僕は、コーディネイターなんだ」

「は……!?!」

「——きみと違つて、僕はコーディネイターなんだよ」

そのときカガリの手は、キラの頬を打っていた。

殴られた頬にひりひりと灼けつくような痛みを感じながら、キラはぶたれた頬をさすりつつ、どこか諦念した様子でカガリに訴えかける。

「暴力に訴えるのはやめてよカガリ。仮にも政治家になつたんだろう」

「おまえ……!?!」

「それとも本気でケンカしたいのか、きみじやあ僕には勝てないよ」

やれやれとまでは云わなかつたにせよ、あまりにも自然、さも当然であるかのように、相手を見下すその論調——

現実感のない声で発された断言は、果たして高言だったのか。キラは自身がぶたれたことには何ら衝撃を受けていないような、あまりに熱のない佇まいのまま、言葉を続け

た。

「……社会見学といったところか。表現としては稚拙だけど、僕は火星に行く。きつとそこに、僕の探し求める理想郷があるから」

こんな所に、長居するつもりはない——

はつきりとする宣告するキラの姿は、カリダから見てもひどく遠く見えた。テレビに映るキラの言動に妙な危機感を憶えたときから、薄々と感じ取ってはいたが、それでもカリダは胸騒ぎがただの杞憂として終わらなかつたことを知り、悲壮な表情になる。

「今日はその門出を前に、お別れを云いに来たんだ。カガリ、そして母さ——カリダ・ヤマトさん」

わざわざ云い直した辺りは、彼の中にもまだ幾ばくかの動揺と良心が残っていたからだと、カリダは信じたかった。信じたところで、このあとに起こることを思えば、それは何の慰めにもならなかつたが。

「僕が『キラ・ヤマト』を名乗るのも、今日で最後にしたいんだ。あの放送を見てくれたっていうのなら、きつと理解して頂けるはずだ——僕はもう、自分を偽って生きることがしたくない」

表情という表情を失った男の揺れない目、光を失った目に、カガリはゾツとしていた。

「偽るだど……? 何が偽りだ! キラおまえ、何を云ってるんだ!」

「偽善であり、欺瞞だよ、キラ・ヤマトという名前そのものが。だって僕は、ヒビキ博士の息子なんだよ？」 平凡な庶民の家庭の、ヤマト家の子どもじゃな——」

云い終わる前に、またしてもカガリはキラを殴っていた。キラは、そうされて当然の言葉をたつたいま口にしていた。カリダという女性の慈しみを、優しさを、これまでの想いのすべてを、踏みにじる発言をしていたのだ。

「おまえ——ッ!?!」

批難というには失望の混じり過ぎた目を、カガリはキラに——みずからの『弟』に向けた。

そう、たしかにキラはヒビキ氏の息子——

キラの母親はカリダではない。いやそれどころか、キラに母と呼べるような人物はそもそも存在しない。コロニー「メンデル」に打ち捨てられていた無機質な培養槽から生み出され、朽ち果てた無数の『失敗作』の犠牲の上に生を受けてしまったキラには、彼にとつての『姉』であるらしいカガリの母親、ヴィア・ヒビキすら、そう呼ぶには値しないのだから。

それはラウ・ル・クルーゼによって告発された最悪の真実。しかし、キラにとつては残酷すぎる事実をひた隠しにして来たのも、カリダの子を思う家族としての親心からだ。仮に本当の親子ではなくとも、カリダはキラを我が子のように愛し、彼を守るため

にやさしい嘘をつき続けて来た！

——それなのに……！

キラの中にも恩があつて、情もあるはずだった——にも関わらず、そのような言葉がキラの口からこぼれ落ちるとは思いたくなかつた。カガリがそう感じているくらいであれば、カリダが受けた衝撃は言葉以上のものであつたらう。

「やめてつて、云つたよね」

警告はしていた、とばかりに、殴られ損をし続けるキラではなかつた。二度にも渡つて天才を殴つたその腕を悔やませるように、次の瞬間、キラは逆手でカガリの腕を捻り上げていたのだ。性別の差か、はたは姉に対する温情か、程度は軽いが、カガリが苦悶の声を挙げるには十分な痛み。

目の前で行われた姉弟による暴力劇を目の当たりにして、カリダが思わず、数歩としてあとずさる。その拍子に、テーブルの上に置いてあつた菓子箱が床へと落ちた。最愛の息子が帰ることを事前に知らされていた母親が、我が子のためにと用意したケーキが入っていた、大切な箱が——。

落ちた箱は跡形もなくひしゃげ、それはまるで、カリダの心そのものが潰れていく様だつた。悲鳴を挙げなかつたのは、失意と絶望が全てに勝つたからか——

「ヒビキ博士が与えてくれたこの『力』で、僕は世界のために役立つてみせる。今まで

誰にも成しえなかつたことを、僕はやり遂げてみせる」

もつと先へ……もつと遠くへ……もつと高みへ……！

言葉の意味はともかくとして、キラの気迫と剣幕に、このときのカガリは圧倒されていた。ここまで歪んだ決意があるのかと、彼女はただ驚くことしか出来なかつたのだ。

それと同時に、もはや自分達ではこの男を止められないと、カガリはそのとき、そのことを本質的に理解してしまつたという。もはやこの男には、誰の言葉も通じない――

キラは誰の意も介さない。なぜなら彼が敬虔けいけんと信じているものは、彼自身に役割と運命を記し与えた、彼の中の最高ヒレキの遺伝子だけだから。

「なんで、なんで、こんな……！」

戦中、彼が恋い焦がれるほど慕つていたステラという名の少女ですら、今の彼を止めることは不可能であると、そうカガリが確信してしまえるほどに、彼の抱えた心の闇は深かつた。

あるいは現実はどうなのか？ もしもこの場にステラがいたら、この男をこの場に踏み留めることもできたのではないか？ 大切な少女を目の前で喪つてしまつた絶望が、彼の理想と輝かしいはずの未来に暗い歪みを生じさせ、彼女を救えなかつた不完全な自分と、そんな自分を育ててしまつた不完全な世界への憎悪をかき立てたのだとしたら――

？

力なくその場にへたり込み、カリダは悲鳴にも似た嗚咽を混じらせた声で、そのか細く、あまりに頼りない手を弱々しく伸ばした。

「まって、キラ……！ おねがい、いかないで……」

「今までありがとう、カリダさん。あなたに背を向けてこそ、僕はこの道を歩めるんだ」
みずからの分水嶺で、それは彼がみずから選り取った『道』——

——頼りないヤマト姓への離別おわかれを。

——情けない過去の自分への決別さよならを。

背徳者が貫く霸道、背に徳があればこそ——

「今まで僕を育ててくれて、愛してくれてありがとう」

でも、もう大丈夫だから——

青年は自分にとつて親愛なる者達を切り捨てて、彼女達に背を向けた。押し潰され、ぐしやぐしやに砕け散ったケーキ、母の心に気付くこともなく、決して手の届かぬところへ去つて行くその男に向かつて、カガリは呆然と、次のように訊ねることしか出来なかつたという。

「おまえは、誰だ……？」

「僕はキラだよ。キラ・ヒビキ——」

偽りの仮面を脱ぎ捨てて。

偽りの名前も切り捨てて。

人類の最高位に君臨する男は、確信と自負、天才としての矜持をもって解答する。

「人類の夢、最高のコーデイネイターを造り出した天才科学者、ユーレン・ヒビキ——」

人は何を手に入れたのだろう——

——その手に、その夢の果てに……？

「——その彼の、狂気ゆめの息子だよ」

人類のすべてに失望し、混じり気のない憎悪と狂気に据わった目。

夢見る少女を裏切るような、夢を忘れた少年が——

——変わり果てた『弟』の姿が、そこにはあつた。

『オーブの夜叉』

宇宙のオーブ領 “アメノミハシラ” ——

半年ほど前、それは第二次 “ヤキン・ドウエ” 攻防戦が終結し、戦争が終わったという事実を、シン・アスカが知ったときのことだった。

「——ミナさん、聞きましたか!？」

どたどたと騒々しい足音と共に、ロンド・ミナ・サハクの私室にシンが飛び込んでくる。

和の意匠が凝らされた雅な空間。荒々しく襖を開け、焦りか驚きか、様々な感情が宿った目でシンは室内を探り、その目は指導者であるミナの姿を探し求めた。

「戦争が終わった、って! —— 『ザフトと地球連合が停戦協定に合意した』 って、ファクトリーの連中みんなが云ってたんです!」

ミナは少しだけ思案顔になった。その話をファクトリーで耳にしたということは、話をしていたのはメカニックやパイロットの者達だろうか? このときシンは息を切らしており、そうであるなら工場区を抜けてからミナの私室ここにやって来るまで、本

当に全力疾走をしたのだろう。

ミナは肩で大きく息をしているシンの様子を見ながら、話の内容によつては狭い廊下は走るな、ノックもなく人の私室に入るな——と、公人としての礼節マナーをもう一度叩き込んでやろうかと思つたが、今回ばかりは内容が内容だったので、それは次の機会に免じてやることにした。

ミナは特に感動した様子ではなかつたが、早耳だな、とラボの者達の地獄耳っぷりには感嘆した風に漏らす。それを聞いたシンの顔色が確信に変わった。

「じゃあ、本当なんですわ……！」

「ああ、そうだ。この戦争、ひとまずの決着はついたらしい」

「戦争が、終わった……」

結論から云えば、宇宙のオーブ領に相当する「アメノミハシラ」が、大戦中、これに関与したことはなかつたと述懐している。戦中「アメノミハシラ」のファクトリーを接収せんと襲撃してきた、アツシユ・グレイ率いるザフトのMS部隊と交戦した一件を除いては。

結局のところ、あくまで中立独自の立場を貫き、宇宙のオーブ領という『天空』から戦争を傍観していた立場にあれば、件の戦争が終わったことによる実感や恩恵などは特別にあるわけではない。だが、それでもシンは現実として「戦争が終わった」——「世

界に平和が訪れた」という事実には深い安堵を憶えたい。ある意味それは彼にとって正当な反応であり、ミナとしても意外なものではなかった。

「どちらが勝ったわけでもない。結果は地球連合とザフト、双方の痛み分けた」

件の戦争の当事者ではないからこそ、ミナはあくまで客観的な観点から、一連の結末を次のように表現する。

「いや、アスハの後継者達のひとり勝ち——と云うべきかな」

アスハ——

その単語を耳にして、シンの顔色が変わった。

「アスハの後継者達は、あの苛酷な戦乱の中で目的を果たした。戦争をやめさせるといふ、彼ら独自の目標をな」

——そういう意味では、勝者はアスハだけであったのかもしれない。

「考えようによつては、最も損失と禍根の少ない結末に落ち着いたのも事実だろうな」

少なくとも地球軍とザフト、どちらかがどちらかを滅ぼすまで、戦争が続くことはなかったのだから。

「——それじゃあ、アスハは英雄つてことですか？」

シンに問われ、ミナは淡淡と「世界にとつてはそうだろう」と返す。

「それで、アスハはまた国家元首として、オーブの主権を握るんですか」

「おそろくはな」

現行のオーブに根付いた氏族制度は、その体制を是とするものだ。

けれど、次いで放たれたミナの言葉は、シンの期待に応えるものでもあった。

「だが、それでは困るのだよ」

平然と、ミナは云つてのける。

目の上のたん瘤、というほどではないにせよ、かのウズミ・ナラ・アスハというオーブ最大の傑物が居なくなった穴を、同じくアスハの人間に建て直されては「困る」というのが、ミナの感覚だ。

——たとえば大西洋連邦は、この大戦の中で強すぎる実権を握った。

開戦時までではそれと同等の力を持っていたユーラシア連邦は弱体化し、今後の地球連合は、おおよそ大西洋連邦の一強、殆ど一極支配と云つていい体制になるだろう。

（大西洋連邦に対抗できる力を持った主権国家は今の地上に存在せず、それはオーブ解放戦以来、属国として扱われている地上のオーブとて、決して例外ではない）

現実として一度は属国として占領された以上、遠からぬ未来、またしてもオーブは大西洋連邦に従属を強いられる事態に陥るかも知れない。ウズミが生きているのならまだしも、それを跳ねのけるだけの政治的手腕が、今のカガリにはない。

ある意味それは仕方のない話であるのだが、それでもオーブの保守派は彼女が「ウズ

ミの子だから」という何の説得力もない血族主義を優先し、彼女を国家元首に持ち上げるだろう。なぜなら、それこそがオーブが旧くより国家総出で護り抜いて来た伝統であり、慣例だから。

(そうしてアスハの人間が、ふたたび国家元首の座を占有することになれば、オーブの命運は定められたものとなるだろう……)

一部の特権氏族による時代錯誤も甚だしい独裁国家が擁立されれば、オーブは大西洋連邦のような強大国に滅ぼされるよりも前に、遅かれ早かれ自滅の道を辿ることになる。

たとえば目の前にいる、シン・アスカのような少年――

本来であればオーブの未来を担うはずだった若者達の手によって、内側から割られる形で。

――それでは、困るのだ……。

内憂外患とまでは云わないにせよ、オーブが悪しき伝統と体制に習い、アスハの名を妄信する道を突き進む限り、この先の政争を勝ち抜いていくことは不可能だ。

オーブという『国』の本質は、領土にも理念にも、アスハという特権氏族にもない。全ては国民のために存在するものであり、戦災を嫌って移り住んで来たオーブの民に平和と安寧を約束するためには、もう二度と、オーブを戦火の中に飛び込ませてはならない

のだ。

「そのために、すでに手は打ってある」

「セイラン家、ですか」

宇宙で戦争が続いている間も、セイランの人間は筆頭に立つてオーブ本土の復興を推し進めていた。ミナとギナは幾度となくそれを支援し、実際にセイランとも何度にも渡って会談を行っていたのをシンは知っていた。

たしか、ウナト・エマ・セイランと、ユウナ・ロマ・セイランとか云つたらうか——
？ 第一印象としてはあまり好感触ではなかったが、ミナはそのとき珍しく柳眉を逆立て、端整な唇を歪めては狂気を孕んだ不愉快な表情になった。

「あのタヌキ共め、我々が『力』を譲ってやったというに、内々に大西洋連邦との癒着を持とうとしておった。だから、一から躡け直してやったのだ」

サハクにとって、すでにセイランは首輪を付けさせた飼犬のようなものであり、オーブ国内での地位と権力という餌を与えてやれば、すんなりと云うことを聞くのだからある意味で扱いやすいものだという。さすがに首輪を切つて大西洋連邦の許に逃げようとした際は喉元に刃を突き付けて躡け直したようであるが、それだけに効果は絶大であつたらしい。今では完璧に調教された忠犬、彼らは決してサハクに逆らえない。逆らうくらいなら従っていた方が楽で豊かな人生を送れるのだと、概ねはそのような状況

を理解させられたから。

「……………」

具体的な話は聞かなかったし、聞かない方が自分のためだともシンは思ったのだが、滅多に見ることのないミナの「黒い」一面を目の当たりにして、シンは戦慄を憶えたという。

黒いというより、闇のオーラそのものと云った感じで、自分などの手に負えるものではないことは一目で分かったから、触れることを意図的に避けたとも云える。元来、空虚な理想論や薄っぺらい綺麗事は嫌いだと豪語するシンでさえ、踏み込むことを躊躇する深みがそこにはあった。

「セイランの利用価値は、サハクがアスハよりも「下」の位置に居続けたとき、はじめて効果を発揮する保険として存在している。こればかり保守派の動向次第だが、いずれはユウナ・ロマ・セイランないし、別の人間が高い位置に上り詰めたとき、手に入れた権力を持ってサハクの立場を優位なものにする手筈で用意してあるのだ。五大氏族の地位を捨てたのも、未来を思えば氏族姓など必要ないと判じたからに過ぎない」

別の人間——既に彼女がセイラン以外にも多くの閣僚を抱き込んでいることを知り、シンは啞然とした表情を返すばかりだった。

このときミナの中では、既に今後の算段が建てられていたに違いない。戦後における

身の振り方、彼女のオーブが執るべき指針。彼女の中では、既に誰を切り捨て、何を残し、どのようにこれからの政争を勝ち抜いていくかの戦略が綿密に練られ始めていたのだ。

ミナは、決して負ける戦いはしない。必ず勝ると判った上で、初めて勝負を挑む。自身が勝つための条件を整え、舞台を整え、それが出来ないうちは絶対に自身が表に立つことをしない。それがオーブの『影の軍神』——ロンド・ミナ・サハクという女性だった。

「今後はすこし忙しくなる。我もすこし『アメノミハシラココ』を空けることになる」

あるいは彼女は、ずっと戦争が終わる「この瞬間」を待っていたのかも知れない——不思議とそのとき、シンはそう感じたという。歩き出した彼女は、すれ違いざまに「留守を頼むぞ」と云って、ぼんとしてシンの肩に優しく手を置いた。

「え、どこへ？」

ミナは、その質問には答えてくれなかった。

ミナは大いなる襖に手をかけ、もう一度だけシンの方を振り向き、告げた。

「良いかシン。これだけは憶えておくのだ」

「えっ……？」

「この戦争は決して終わったのではない。ゆめゆめ、浮かれることなかれ」
祈るようにして吐き出されたその言葉の意味が、このときのシンには、よく理解できなかつた。

その意味が分かつたのは、それから半年ほどが経過してからだつた。

ロンド・ミナとロンド・ギナ——“アメノミハシラ”を守護する二人がこれを留守にしている間に、その一報は唐突に告げられた。宇宙軍に所属する、オーブの若手パイロットは真つ青な顔をしていった。

「——ユーラシア連邦のモビルスーツ部隊が、この“アメノミハシラ”に進軍してきたぞ！」

ユーラシア連邦による“アメノミハシラ”への電撃強襲作戦——

頭数にして三〇、主に“ストライクダガー”と“I05ダガー”で混成された大規模部隊が、すでに四方から取り囲むように“アメノミハシラ”に迫っているというのだ。

「ギナ様も、ミナ様もいないのに……!?!」

当然、無抵抗での陥落を許す。『アメノミハシラ』ではなかったが、オーブ解放戦以来、フアクトリーで働く叩き上げの志願兵達にとつては、初めて経験する実戦となるだろう。

そもそも戦争は終わったはずだし、なぜ平和な時代に襲撃を仕掛けられなければならないのか？ 彼らは予期、想定すらしていなかったこの事態に、すっかりとパニックを起こしてしまっていた。

ただ、ひとりを除いては。

「落ち着け！ オレたちは、オレたちでできることを果たせばいい！ この『アメノミハシラ』を護るんだ！」

彼らの中では最年少の部類にあるはずのシン、その者が発揮したリーダーシップが、動揺する周囲の者達を奮起させる。

「演習どおりにやればいい、打って出る！」

云いながら、シンはすでにパイロット・ロツカーへ駆け出している。

オーブ正式採用のパイロットスーツに身を改め、その色は彼の目と同じ、血を薄めたような赤色をしていた。オーブではナチュラル用を意味する赤それよりも濃く、強い色だ。四面四角なヘルメットの気密を行いながら、彼は次の瞬間には、ミナから託されたモビルスーツへと飛び乗っていた。

「くそツ、こういうことかよ……!」

ゲートが開放されるのを待つ間、シンの脳裏にミナが残した言葉が蘇る。

『地球連合に帰属するユーラシア連邦は、戦時中、ザフトのレーザー攻撃によつて月面のファクトリーを失つた。傷を癒すのに手段を選んではいられない……損なつた軍事力は、早急に補いたはずだ』

現在、地球連合内で一強となつている大西洋連邦と肩を並べるためには、権威の獲得が急務である。それはすなわち、かつての国力と栄光を取り戻したいと欲望するユーラシア連邦の思惑でもある。

『——だからこそ、ヤツらはこの『アメノミハシラ』に手を伸ばす』

『どういふことですか？ だって、もう戦争は終わつたんでしょ!?!』

『だからだよ』

にべもない返答に、シンは絶句した。

『地球と『プラント』は今、また新たな戦争に入るための準備に取り掛かっている。かの戦争で疲弊したユーラシア連邦としては、オーブの軍事力は喉から手が出るほど欲しいのさ!』

『じゃあ、何のための停戦協定だったんですか……!?!』

『利害の一致、と云つておこうか。『ヤキン・ドゥーエ』であれ以上の消耗戦を続けて

も、最悪両軍が共倒れする危険性があつた。だから今はお互いに仲の良い体ていを演じつつ、深手を直すことに専念しているのだ』

戦争は“終わった”のではない——

そうしたミナの発言は正鵠を射ており、戦争がただ“中断させられた”に過ぎないことを悟り、シンは深い落胆と失望に駆られた。

『たしかにアスハの後継者達は、英雄的な働きをもって件の大戦を終わらせた。だがな、あれは何かを解決させたわけでは決してない』

ミナは魔女のように語り、ただ事実のみを連ねるようにして云つた。

『——戦争の根を学べ、シン』

戦争の根——？

シンには分からなかつた。戦争には明確な悪者が存在していて、そいつらを駆除してしまえばいいと思つていた。フィクションのように悪逆非道の限りを尽くす連中がいて、いつか自分の得た“力”をもって諸悪の根源を駆逐してやればいい、そうすれば戦争が終わつて、世界は平和になる。そう考へていたのに、現実はどうなのか……？

『今のそなたになら、それができるはずだ』

ミナの先見の明は、すでにシンの中で絶対的なものとなりつつあつた。現にユーラシア連邦は彼女の予見どおり“アメノミハシラ”に侵攻を掛けて来た。行為そのものは

非道と云つて差し支えないだろうが、見方を変えれば、ユーラシア連邦もまた戦争が残した何かによつて苦しみ、その苦しみから逃れるために行動せざるを得なかつた者達なのだ。

だからこそ、同情の余地がないわけではない。だが、だからと云つて、シンは自分の信じる道を譲つてやるわけにも行かない――

「思い知らせてやるさ……！」

云つてしまえば、彼らは喧嘩を売る相手を間違えた。ロンド・サハクが統治する「影のオーブ」――そこにちよつかいを出したことを、絶対に後悔させてやる！

シンは決意を胸にしなが、解放されたゲートに向けて目を上げた。

ミナもギナも不在の今、彼らに代わつて、自分が必ず「ここ」を守る。彼にとつての第二の故郷、祖国を――自由のために戦う『天空』のオーブを！

「シン・アスカ――「アカツキ」行きますー！」

混迷の闇を祓う、オーブの曙光――

飛び出したモビルスーツは、じきに「アメノミハシラ」に迫る三〇機ものモビルスーツ部隊と相對する。シンに率いられるように、ファクトリー内で開発されていたMIA「アストレイ」も演習どおりの防衛網を張り、睨み合つた兩陣營のモビルスーツ隊に、強かな緊張が走つた。

「なんでこんなことを……!」

ロンド・サハクを師と仰ぎ――

――彼等の許で学んだことで、オレは“力”を手に入れた。

相対した地球軍のMS部隊、その中に坐す敵パイロット達に向け、少年は声高に激情を叫ぶ。

「――また戦争がしたいのか!? あんた達は!」

次の瞬間――

シンの中で、何かが弾けていた。

「なかなかどうして、思い切った決断をしたな」

大西洋連邦領内、カリフォルニア湾の人目のつかない海岸に、ロンド・ギナはいた。

特注の黒いリムジンの後部座席にて待ち人をしていたのだが、同じく隣にはロンド・

ミナの姿もある。ギナはそんなミナに向かって、挑むように口を開いた。

「ORB―01 “アカツキ”―― “アレ” はウズミの忘れ形見とはいえ、我らにとつて

は非常に有用なモビルスーツだ。それを、みすみすあの小僧に貸し与えるとは」

オーブにとって、黄金色は特別な意味を持ったカラーリングだ。それを全身に張り巡らせた「アカツキ」が、オーブにとって特別なフラッグシップ機であることは疑いようがないが、やはり金ぴかというだけあって、いささかアレは目立ち過ぎる外見をしている。

その目立ち方は、歴史の『影』に潜むことを本懐とするサハク家において、微妙に方針に反するものである。そのことから、現在はチョコバムアーマーの役割も果たす黒い「鎧」で偽装されていた。

その鎧は、さながら東洋における甲冑といった感じで、それを纏った「アカツキ」の外観は「武者もののふ」然として攻撃的、ずんぐりとした重厚な達磨型に仕上がっていたのだ。

このとき、既に「アミノミハシラ」がユーラシア連邦によって襲撃を受けたという報告は、ギナの手許の端末にも入って来ていた。その結果であるが――

「……フンッ」

シンをはじめとする、叩き上げのオーブ宇宙軍の活躍によって、ユーラシア連邦は大敗を喫した。敵は「アミノミハシラ」に迫ることもできず、大人しく撤退したという。そうしてギナは、手許の端末に目を落とす。そこでは録画された戦闘の様子、その一

部始終が映像として記録されていた。

——やるではないか。

オーブ宇宙軍が——と陳述したが、実際のところ、シン・アスカの独壇場だ。

甲冑を纏ったことで「アカツキ」は段違いに機動力が低下しているにも関わらず、稲妻の如き電光石火の機動で敵モビルスーツ部隊を圧倒している。多勢に無勢をもろともせず、ギナとしては敵機の武装やメインカメラ——戦闘力や機動力のみを奪っているその戦い方が僅かに気に入らなかつたが、これはミナの教えであろうか。

なんであれ、陳腐な言葉で云う『スーパーエース級』な働きを見せている「アカツキ」の姿が、ありありとその映像には記録されていた。フンツ、と鼻を鳴らしたギナは、てつきりミナも同じ映像を見ているのだと思つて、彼女の端末を覗き込んだ。双子の姉は、テレビを見ていた。

「む。なんだ、何を見ている?」

「……ん?」

問いかけの声でようやく気がついたように、ミナはハツとしてギナの方を向いた。

「ああ、すまぬ。何か云つてたのか? 気が付かなかつた」

よほど熱心に、考え事でもしていたのだろうか?

ギナは呆れたような口調で云つた。

「いよいよ双子としての自信がなくなってきたぞ、ミナよ。我にはそなたが何を考えているのか、最近分らん」

ロンド・サハク姉弟は、ただの双子というわけではない。極めて政治的な能力に特化して生み出された、コーデイネイターの双子なのだ。男女の姉弟であるにも関わらず容姿が瓜二つであるのも、政治的な都合によつて片方が「損失」した場合でも「代替が利く」ことを目的に遺伝子調整されており、この意味で、彼らは情報の共有——意志の疎通——は常日頃から怠らない。

だからこそ彼らは今まで、隠し事も、秘め事もなく潤滑にやつて来られたわけであるが——

最近のギナは、ことシン・アスカの扱いに関してだけは、ミナの方針がよく分からなかった。

——シン・アスカ。

少年というには、性格はきかん気で生意気。

小僧と呼んでやるのが、ギナとしてはお似合いの糞餓鬼だ。用心の意味でギナの方でも彼の経歴を洗いざらい調べたが、生まれも育ちも特別なものは何もない、ただの在野の少年だった。

——果たしてミナは、どこであんな野良犬を拾ってきたのか？

けれども、ミナは彼に特別な「アカツキ」まで貸し与え、自分達が留守にしている「アメノミハシラ」の警護までも任せている。それを少年に対する全幅の信頼と云わず、他に何と云えるのだろうか。

そして、今頃は冷や冷やとした母親のような心持ちで少年の晴れ舞台の映像を確認しているかと思えば、全く違う民放のテレビ番組に見入っていた。これでは、ギナがそのように漏らしても仕方がなかったのだ。

「シンのことは、心配しておらんよ。あの者のことだ、巧くやるさ」

信頼感が、ミナにそう云わせたらしい。本当に一片の憂慮もない顔をして、あつげらかんとして云う彼女に、ギナは鼻白みながら返した。

「ま、実際その通りではあるな。あの狂犬め、最近より一層と「力」をつけた印象がある。……小癩な話、今の私でもあそこまで暴れられるかは分かん」

「若いのか」

「あやつが私に模擬戦を申し付けて来る度、辟易としていたのだ。結果はいずれも私の勝利だが、刃を交える度、一挙手一投足、私から全ての御業を盗んでいくようで……着々と喉元に迫りつつある刃に、気味の悪ささえ憶え始めていた……」

「想像以上の成長速度だったよ。もとがまつさらな分、吸収も早かった。——精神的にもな」

「戦いの中で浮かべる、あの者の飢えた眼光、怒れる瞳、鋭い観察眼——」
「——嫌いではなからう？」

「ああ、嫌いではない——」

双子ならではの息のあつた会話。

粗忽な口調に反し、うっとりとした表情でギナが話しているのを見て、ミナは声を挙げて笑ったという。対するギナは拳を握りしめながら、突き上げるようにして郷土愛を謳い上げた。

「オーブに生まれし男児は、明確に野心を持たなければならん！——その意味で云えば、あの小僧の目は美しい」

野心というほどではないにせよ、反骨心の塊のような少年ではあることは確かだ。

——何者にも屈服せず、従属しない“自由”を求める強い気質が、あの少年の中にはある。

男たるもの、そうでなくては詰まらない。それはギナも認める、彼なりの美点ではあるらしい。

「だが、実戦で使うにはいささか時期尚早ではないかと疑っていたのだ」

「いつまでも鞘の中に仕舞っていては、砥げる刃も砥げられぬ、ということさ」

「ユーラシア連邦が動員したモビルスーツの数は三〇。おおよそ戦後では最大規模の軍

事作戦と云えるだろう」

「そうだな」

「それをほとんど、単騎で覆す馬鹿になるとは思わなんだ……」

「それも、そうだな」

返答に、ギナは高らかに笑った。ミナも一拍遅れて、堪え切れずに笑った。

こみ上げてくるものを堪える必要は、どこにもなかった。

「オーブに生まれた『夜叉』だよ、あれは」

異教に伝わる鬼神に喩えて賛美したミナに対し、もう既に上機嫌になっていくらしく、ギナはおどけた口調で返した。

「……それで？ その『夜叉』を育て上げた張本人は、神話の一篇も見守らずに何を見とおったのだ」

これさ、とミナは自身の端末を手渡し、ギナはそこに目を落とすとした。

映し出されていたのは相も変わらず民放番組の録画映像であるようだが、実際の内容はD・S・S・Dによって配信された技術開発センターでの対談の模様だ。対面する形で設けられた二つの座椅子に、大柄な男性と、もうひとり——どこか静謐な雰囲気纏った少年の姿が映っている。

映像を見たギナは確信し、次のように喩えた。

「——『怪物』^{もののけ}か」

「噂の天才、スーパーコーデイネイター」

既に仔細まで聞き知っているような口振りで、ミナは続けた。

先ほどと打って変わって、剣呑な顔をして。

「この映像の収録時にはヤマトの姓を名乗っていたようだが……どうやら、動き始めたらしい」

「なんだと？　では、ヒビキの名を？」

「限界を越えた人類の夢。狂気の獣は鎖を断って檻から飛び出す——か」

事態の深刻さに気付いたか、ギナは鋭さを持った視線を投げかけて来る。

ミナは僅かに苦笑しながら、どこか願うような口調で明かした。

「ギナよ、私は試してみたいんだ。獣の牙に、私の刃がどこまで届くのか——」

その言葉の意味を即座に察知して、ギナは驚愕した面持ちで云った。

「——まさか、シン・アスカがヤツへの対抗馬^{カウンター}となり得ると？」

「科学的な論拠に基づいて云えば、まず不可能だな。覚醒したスーパーコーデイネイターと正面からやり合えば、百回やっても百回我らが負けるだろう」

自分達が鍛え上げた『刃』に対する、先程までの熱賛はどこへ行つたのか？

予感ではなく、確信——このときミナがあつさりと吐き出した言葉は、高言ではなく

断言だった。ある意味それは最も現実的な見方であり、たとえどんなに優れた人間であつても、それよりも優れるように作られた生命体に打ち勝つことなど不可能なのだ。

「だから信じてみたいんだよ。我々の打ち勝てる、百一回目の好機チャンスをな」

それは遺伝子という定められた「運命」に、可能性という名の「自由」が打ち勝つ瞬間を意味していた。

「人の思いは時として枷になり、力にもなる。人間は遺伝子の枠組みにも囚われず、進化していけるものだと思っているよ」

「このエドモンドという男の話、初耳だな……。火星圏、遺伝子による人間の支配、か」「遺伝子こそが『王』となつて君臨する世界。だが、支配による世界統治など烏滸がましい、人類の未来などは、王政の上意下達で決められるものではないはずだ」

人間は遺伝子に役割を与えられ、これに永遠と従わされる王の奴隷ではない。

人間をはじめとして、すべての生命には等しく成長し、努力する力がある。その力を信じることなく、夢を見ることもなく、ただ機能的な世界再編のために唯々諾々と従うよう強制するのは、この世界に生きている生命に対する冒険に他ならないのだ。

「おそらく……いや、いずれは『自由』のために剣を取らねばならないときが来る。そのときは」

「あの小僧なら、あるいは、か——？」

何となくではあるが、ミナはそのように漠然と語り尽くし、ギナは一拍置いて真剣に考え始めたという。現実的に考えれば、ミナの見立ては間違っていない。この対談の中で、問題の天才は明らかに『遺伝子による世界統治』に強い関心を示しており、そのために生来の名前まで捨てたというではないか。

いつになるかは分からないが、それはおおよそ遠からぬ未来、彼自身が火星を訪問し見聞した知略を以て、地球圏に同様の支配体制を築かんとする瞬間が訪れる。世界全体を巻き込む程度のことなら、実際の彼の能力なら造作もないことだろうし……。

——これまでの世界は崩壊し、時代は新たな統治社会へと傾いていくのか……？

そこまで考えて、ギナは考えるのをやめた。保留にしたというよりは、思考を中断せざるを得なかったのだ。

彼らが待機していた車両のすぐ傍らに、そのとき湾岸を沿ってやって来た。もう一台の車両が、停車したためである。

「——来たか」

待ちわびることたつぷり二十分。

どうやら、与太話ができるほど二人を待たせていた取引相手が到着したらしい。

「……………」

元より、彼らは様々な商談のために地上に降りて来ていて、この人気のない寂れた地

点での待ち合わせも、その数ある商談の内のひとつだった。

もつとも、今回については正規の手順に則つたものではなく、いわゆる非公式の裏取引と云つたところだ。取引相手の方も、現在は地球連合に軍籍を置く人間だと聞いており、自分達も相手方も、この繋がりが明るみに出れば祖国の法に触れることになるだろう。

ミナは——彼女にしては非常にうっかりなのだが——そのときになって慌てて書類を取り出し、取引相手の名を確認した。商談を前に準備不足も甚だしいが、それだけD・S・S・Dの録画映像が衝撃的だったのだろう。

しかし、さして支障はない。どだい交渉や商談などは主にギナが担当し、彼は戦中、かのムルタ・アズラエルやデュエイン・ハルバートンとも非公式に裏取引をしていたほどののだ。ミナは慌てて書類に目を通し、その内容に僅かに眉を顰めた。

「今回の商談相手は——見慣れぬ名だな」

「で、あろうな」

「……信用できるのか？」

ミナは問いかけ、対するギナは人の悪い笑みを浮かべた。だが特別なことではない、裏取引の望む際の弟は、いつだって人を遠ざける笑みを浮かべるものだ。

「見慣れぬだけさ、我らにとっては、古くからの付き合いのある男だよ」

「……………？」

「まあ、何かとな」

含みのある口調でギナが嗤いかけ、ミナは、やはり記憶に憶えないその者の名を読み上げた。

「ネオ・ロアノーク……………」

——こんな男、以前まで存在していただろうか……………？

『ネオ・ロアノーク』

『ネオ・ロアノーク』

C, E, 四二年、十一月二十九日生まれ。大西洋連邦ノースルバ出身。血液型O型。
ブラッドタイプ

C, E, 六十年、大西洋連邦に入隊。現在の階級は大佐にして、先だつて第八一独立機動群——通称「フアントムペイン」内の「ロアノーク隊」部隊長に着任。

——特別に吹聴できるような、輝かしい経歴があるわけではない。

寂れた街の、うだつの上がないナチュラルの親元に生まれ、父親は原因不明、治療不能と云われた難病を患つて、彼が物心つく前に死んだ。残された母は家計を支えるための労働に明け暮れ、職場で新たに男を作つて、いつの間にか彼の前から居なくなつた。取り残された彼は、地元の悪友らと輝かしい将来についてを揚々と語り合い、生きていくために、その悪友らと軍に入った。戦乱の中でその悪友らさえ喪い、やがて生前の父が患つていたとされる原因不明の難病を、みずからもまた抱えていたことを報される。

深い失意の中で、けれども何とか終戦までは戦い抜いて、凡百の人間には持ちないと

まで云われる特殊な空間認識能力を駆使し、いつしか大西洋連邦のトップガン、エースパイロットとして活躍。

第二次「ヤキン・ドゥーエ」攻防戦では、全身に深い傷と軽度の記憶障害を患いながらも命からがら生き延びた。それらの功績を讃えられ、現在では大西洋連邦きつての英雄とも称されている。

（まがい物であるにしては、随分と手の込んだ記憶だな）

切り裂かれたように口許を歪め、心の中で自嘲したその男——ネオ・ロアノークは、顔の上半分を異様な黒いマスクで覆っていた。

一般士官とは異なる漆黒の軍服に身を包み、肩まで伸びた波打つ金髪、すらりと引き締まった精悍な体躯。だが、マスクの下から覗いている僅かな生身の部分には、おおよそ若々しい佇まいや年齢には見合わない、老人めいた深い皺が少しばかり悪目立ちしている。

それこそが、彼の父親を死に至らしめたという原因不明の難病だ。どういいうわけか常人よりも老化が早く、細胞が分裂する度、熱を伴った激痛が全身を苛むという。定期的に襲ってくる苦痛を和らげるためには、処方された専用の錠剤を摂取する必要があるが

——その錠剤が、鍵だった。

かつての記憶と同じことを繰り返すのが切っ掛けであるのなら——

彼にとつては錠剤を口に運ぶ動作、飲み込む習慣こそが“それ”だった。かつて何度も経験して来た激痛は、皮肉としか云いようがない幻肢痛phantom limb painを彼に与えた。

何の薬か、知っている風だった銀髪の男、ロード・ジブリールはピルケースを自分の手渡してくる際「苦しくなったら飲むといい」としか伝えてこなかったし、最初は半信半疑だった。

しかし、それから程なく唐突に軋み出した身体に驚き、獣のように苦悶しながら、ネオは慌てて云われたとおりにピルケースから錠剤を取り出し、それを荒々しい手つきで口に運んだ。

だから『そのとき』が訪れるのは、驚くほどに早かったのだ。

その瞬間、頭の中を覆っていた雲が切られたように、彼はすべてを思い出した。

激痛にのた打ち回り、床に飛び散ったのは涙か涎か、口元から漏れ出した渴きは笑い声か泣き声か。識別できない獣じみた声で哭きながら、男は己を支配していた記憶の全てが、ただの空虚な紛い物であることを悟った。そして、己が『ラウ・ラ・フラガ』として生を受けた、でき損ないの失敗作であることに——

(これもまた、運命のいたずらと。キミならばそう口にするのかな、ギルバート)
真正面から陽電子砲に灼かれ、細胞のひとつひとつまで消し飛ばされたと思っ
た。

なのに自分は——今もここにいる。

ロード・ジブリールに鹵獲され、偽りの記憶を植え付けられ、しかしながらその技術の不完全さ故に、あまりに短い夢から醒めさせられた今、神はいつたい、己に何を為せというのか。

——古い先短い己の人生に、誰が、いつたい何を求めている。

ネオを苦しめているのは、治療不能の難病などではない。生まれた時から短く定められた、テロメア遺伝子の急速な短縮化によるものだ。

難病によって死んだ父などは架空の存在であり、頭の中に残されたのは、治療不能という点だけが嘘偽りのない無慈悲な現実——

と、それを知って一方的に己を捨てた本当の生みの親。一度だけ父と呼んでみた、傲岸なる男の顔——それは彼にとって忘れようもないものだ、なぜならそれは、他ならぬ彼自身の顔だから。

そのときから、ネオ・ロアノークはラウだった。

彼の雇い主であるロード・ジブリールは、この事実気づいてすらいない。それはラウ自身、今は与えられた役割を演じることに興じているからでもある。が、どのみち無理な話であろう。

——人間には『器』というものがある。

——そして、あのような小物は少しばかりの恭順の意を示し、欲する結果を目の前に差し出してやればすぐに満たされてしまう。

アズラエルの後釜に就き、ブルーコスモスの最上位に位置しているという圧倒的な優越感がそうさせているのか、ジブリールは自分とつて都合の悪いシナリオを思い描く危機管理能力というものが欠如していた。彼の中では鹵獲した兵士に対する精神操作は“完璧”と云えるレベルで完成していて——ある意味それも否定はしないが——やり世の中には“完璧”などという言葉は存在しないということなのか……？

(いや……)

ラウはひとりほくそ笑む。結局のところ、ジブリールがその『器』たらぬだけで、世の中には完全なる“完璧”とて確かに存在するはずなのだ。

そうして彼は、目の前の大きなデイスプレイに目を向けた。

そこに流れているのは、先日 D・S・S・D にて行われた著名人同士の対談の模様で

あったが、例えばそう……その配信の中にははつきりと映っているではないか。

——キラ・ヤマト。

——全てにおいて“完璧”な、究極のコーディネイター。

人類の夢にして、狂科学者達の理想の息子——

戦場において、疑うなく最強であるはずの成功体は、しかし、先の大戦ではまともに“力”を発揮することなく、あろうことか失敗作に過ぎない自分を前に敗残した。結果としてラウは、彼のことを守ろうと奮起した者達の団結の力に敗れ去る形になった。

『今の僕には、力だけが全てじゃないことを認めてくれる人が、大切な人たちがいるんだ！』

最高の能力を有しながら、それでもなお“力”に溺れることなく、か弱き者らと協調し合う『道』を叫んだ、あのときの純粋な少年の言葉が脳裏に蘇る。

光の中に祝福されて生まれてきた人間には、やはりそういう生き方もあるのかと、あのときは教えられたような気分だった。しかし——

(見違えたものだな……?)

あれから一体、何があったのか。配信の中の少年……いや青年は、ある意味でラウが最も期待していた変貌を遂げていた。かつて彼自身のみならずから放った言葉を全力で裏切るかのように、ただひたすらに“力”を欲し、最高の能力を追い求めていたのだ。

——人類のためと謳いながら、身近な人間を傷つける矛盾。

その根底にあるものは、あくまでも純粋な向上心だろう。他意はなく、邪気もなく、だがそれは、必ずしも“善”であることを意味しない。

純粋な向上心によって夢を追いかけ、その過程で結果的に“悪”となつた人類は往々に存在する。

崇高な理念の下、身勝手な正義を掲げ、幾多もの生命を冒涇した狂気——知りたがり、欲しがり、やがてそれが何のためだつたかも忘れ、命を大事と云いながら弄んだ彼の父、ユーレン・ヒビキがその典型であるように。

(所詮、子は親に似るといふことか——)

みずからの息子だけでは飽き足らず、今後の人類全体を遺伝子という檻に閉じ込め、飼い殺しにすることを望んでいる天才は、ラウ自身がこの世に置き残した最高傑作と云えるだろう。

これまでに自分が積み重ねて来た数々の暗躍と工作が、最終的に今の彼を作り上げることを帮助したのなら、それこそが彼——「ラウ・ル・クルーゼ」にとつての救いだつた。

「最高だな、人は——」

あまりの興奮に、思考は、口をついで声となつていた。

光の中に生を受け、人類の夢とまで謳われたはずの存在が、賤しくも自分と同じレベルの魔道に堕ちたのだ。その瞬間を目の当たりにできた彼は、嘲笑をこらい切れずにはいられない。果たして、何が彼の未来を、あそこまで歪めたというのだろうか……？

「ネオ、そのニヤついた笑い方」

そのとき、脇からぱつと女性の声が降りそそいだ。

それによって、ほとんど歪んでいると聞いていいレベルで捻じ曲がっていた口元を指摘されたネオは、慌てて口元を引き締めた。ほとんど反射だが、母親に怒られた子どもみたいに姿勢まで正したという。

(そうだった——)

ネオは珍しく、半ば焦ったように思い出す。彼は現在“J. P. ジョーンズ”の艦橋に坐しているのだが、そんな彼のすぐ隣には、華やかな金髪がぱつと目を惹く印象的な少女がいたからだ。

傍目に見れば、どう見ても不気味な風貌の男に対し、しかしながらその少女は、どこ

か気安さすら感じ取れる口調で話す。

「きもちわるいって、前にも怒ったよ」

「……手厳しいな。きみは私に、相変わらず」

「告げ口するのも何だけど、アウルもステイングも、みんな云ってるからね」

すみれ色の無垢な眸を半目にし、少女はジト目でネオをなじった。

「反省した？」

「……。そうだな。たしかに私が悪かった。次からは気をつけるとしよう」

「よろしい」

どこかの貴族の令嬢然としているが、そこまで気取ったものではない。華やかさを隠しきれないその金髪の容姿は、おおよそ軍艦という無機質で冷たい空間には似合わない柔らかなさを持っている。

故郷に妻や恋人を置いて来た男達でさえ目を奪われるほどの色香を振り撒く少女は、しかし、そう見えて優秀な軍人であり、云わばネオ・ロアノークの右腕のような存在だ。こう見えて、彼らの付き合いは長いのだった。

「——なに観てたの？」

そうして彼女は人目を憚る様子もなく、ネオの腕にぎゅつとして胸を寄せた。腕に触れる柔らかな感触と、きらきらとした少女の上目遣いを同時に浴びながら、それでもネ

才は肅々として答える。

「人類の夢に纏わる、面白い映像をね」

「ふうん……?」

嘘ではない——が、脈略のない表現で煙に撒こうとしているものだと受け取られたようだ。

少女はまたもジト目でネオを睨んだ後、今度は確かめるように前方の大型ディスプレイへと目を向けた。身を乗り出すように録画映像にかじりつき、今度は短いスカートと小さなお尻をこちらに向けはじめた少女の軽拳を、やはりネオは咎めるでもなく、真顔のままに見守った。

「キラ、ヤマト……?」

人物映像のテロップに写し出されたその名を呟く少女は、まるで検分をしているようでもあったという。

おおよそ彼女と同世代か、少し年上くらいの年若さ。褐色の髪、全体的に線が細く、顔つきはまだ幼さを残している世界的な有名人らしいが、結局のところ、彼女には分からなかったらしい。

「彼を知らないのかね? キミともあろうものが」

ネオは、どこか面白がるようにして少女に訊ねる。

だが、言葉の意味を測りかね、金の髪の少女は「えっ……？」と戸惑いを露わにするばかりだ。そこからしばらく少女は懐疑的な様子だったが、やがては首を横に振る。

「ううん、知らない」

知るはずがない——

そうハツキリと否定を口にした少女にネオは冷笑を叩きつけ、そこに返ってくるのは、やはり困惑を湛えた表情だけ。

「……なに……？」

「いいや——」

そのときネオは、このデイスプレイの向こう側、変わり果てた青年が魔道に堕ちたその理由、動機、絶望の正体を何となく——いや確実に掴んだという。

あるいは神は、この絶望の深さと昏さを己に見せるために、己を蘇らせてくれたのではないか？

とうの昔に神を捨てたラウにさえ、そう信じさせてしまう程に、そのとき彼の前に広がっていた光景は、あまりに無様で、あまりにどうしようもないものだったという——「キミが気にすることではないよ、ステラ」

ねぎらうように、ネオは少女の名を呼んだ。

——現在、地球連合の非正規特殊部隊“ファントムペイン”所属、中尉階級にし

て、先だつて「ロアノーク隊」の副長に着任した少女。

第二次「ヤキン・ドウエ」攻防戦の折、ロード・ジブリールに鹵獲され、精神操作によつて偽りの記憶を植え付けられた地球連合の「人間兵器」——

狂人達の理想の下に造り出され、ディスプレイに映された唯一スーパードイネイターの成功作、その高みまで上り詰めること能わなかった、でき損ないの「失敗作」——

——ステラ・ルーシエ。

そんな彼女は、これまでに培つて来た過去すべて——戦闘能力以外——を非道な研究員らに取り上げられ、残酷なまでにいとけない口調で続けた。

「このひと、なんだか……怖いね」

「怖い？」

「うん……っ」

「それは……意外な感想だな？　この世の女性の多くは、既に彼の虜になっているというのに——」

「……………」

「キミは、違うのか」

嘘ではない。奇跡の天才、キラ・ヤマトは世界最高水準の知性を持ちながら、その繊細そうで甘いマスクから現在は世界的な女性人気を獲得しはじめている。なんでも

「守ってあげたくない」だとか「放っておくと壊れてしまいそう」だとか——いずれにせよ、世の女性達から熱烈なラブコールを浴びている人物であるのは事実なのだ。

けれども一方で、ステラが抱いた印象はだいぶ違っているらしい。

「守ってあげたくない、どこころの話じゃないと思うけど……」

「なぜ？」

「だってこの人は、誰の助けだって必要としてなさそうだ」

ミーハーさとは掛け離れた視点からの感想に、ネオは返す言葉を失った。おおよそステラは論理的とは程遠い人物だというのに、その割に本質を見逃さない目を、このように光らせている場合がある。

果たして、何が彼女にそう感じさせたか、それまでは分からなかった。

だが、少なくとも世間一般のラブコールからは大きくかけ離れた印象を、この時点でステラが抱いていたことだけは事実だ。そしてそれは——あえて言葉を選ばずに云えば——明確な拒否の感情、得体の知れぬものに向けられた畏怖の念でもあったのだろう。

「わからないけど、どこかで。……なんだろう……」

底知れぬ静謐さを湛えた青年を前に、釈然としない少女の反応を見て取って、やはり精神操作が「完璧」とは程遠い技術であることを実感したネオであったが、それ以上の

問答は無用だろうと、彼は手許のリモコンでディスプレイの電源をオフにした。

いきなり暗転した画面にステラは不完全燃焼を起こし、不服げで悶々とした表情を返してきた。だが、そのときにはもう黒い仮面は明後日の方角を向いている。

「そう感じるのも無理はないさ。云ってしまえば、彼は火星人だからね」

「火星人!?!」

ネオは適当にはぐらかし始めた。要するに飽きたのだが、デタラメと云うには真実味を持ちすぎた冗談だった。

けれども、火星人という単語は、夢見る少女の興味を逸らすには充分すぎたらしい。ステラはそれきり「火星人の話を聞かせて!」と、子どものように目を輝かせてネオに迫った。その容姿の美しさにも関わらず、ころころと笑ったり驚いたりする少女の表情の変化、そればかりはネオも眺めていて飽きることはない。

「……………」

彼自身、すべての記憶を思い出しながら、今はネオ・ロアノークであることに甘んじている理由が「それ」なのだ。

ラウがステラを部下にするのは初めてではない。けれども当時、ラウはアラスカの死地に彼女を送り込み、暗に「死んでこい」と命じたのだ。ラウにとって、彼女の役目はそこで終わるはずだった。

けれども、何の因果かステラは「フリーダム」を前に落ち延び、その後は世界を滅ぼさんと画策するラウの悲願、その野望の前に何度も立ち塞がった。人類の夢にして他ならぬ、あの「フリーダム」と共に。

だからこそ、今は嘲笑を堪えずにはいられない……。

——気高くも美しかった戦乙女を、いま掌の上で転がしているという事実。

生殺与奪の権利を握っているとまでは云わないが、少なくとも、一匹の愛玩動物として手許で飼っているような気分ではある。

無知な少女を弄ぶ支配感と優越感は、男にとつては極上の悦楽だ。低俗的で下卑た性癖と云われればそれまでだが、実際はそう単純すぎるものでもない。

ネオはステラを、みずからの野望を阻止した敵対者として疎ましく思っていた部分もあるのだが、その実その裏では、同じ不幸に体面した同族として慈しく、愛しく想っていた部分もあるのだから。

「中尉、アウル・ニーダが演習に付き合って欲しいとごねてます！」

「ステイングとやらせてなよ」

「中尉じゃないと嫌だそうです！」

「「ダガー」は鈍いからイヤ……」

「それは……っ、アクタイオン社のプロジェクトを待つしか」

「いま火星人の話で忙しいの！」

「か、火星人……？」

たつたいま艦橋に駆け込んで来た兵士スタツフは、ルーシエ中尉が何を云っているのか全く理解できない愕然とした顔を浮かべながら、ともあれ要望が通らなかつたことを要請者に連絡しに悲壮な顔をしてまた艦橋を出て行つた。

(どうしてこの娘は、こゝも無垢なままであれるのだろうか……？)

ネオ・ロアノークとしての第二の人生を与えられてからというもの、ラウはステラという少女の人格像に疑問を持つようになっていった。ジブリールをはじめとする大勢の大人達に辱められ、記憶まで取り上げられ、どうして彼女はその無垢な心根を保ち続けていられるのだろうか。

——知りたかつた。

かつての彼には眩しすぎた“光”——その輝きを一度は鬱陶しく思い、惨劇^{アラスカ}の大地に放り投げたこともあつた。

——けれど、今は違う。

人間として不完全も甚だしく、薄汚れ、老人めいた醜い皺の走つた男の体にも、彼女はやさしく触れてくれる。そのやさしさの正体は何なのか。彼女を傍に置いておけば、いつか自分のような人間にも、それが理解できる日が来るのではないか……？

（私は、ヒトの中に温かみを、希望を見出そうとしているのか……う）

あまり面白い考えではなかったが、今さら否定しても仕方がなかった。

ラウ・ル・クルーゼとして一度は命運の尽きた身だからこそ、二度目の生はネオ・ロアノークとして、以前と違った生き方をしてもいいのではないか。魔道に堕ちた人生の中では得られそうもなかった希望の光を、今度はきつと、どこかに信じてみても良いのではないか――

生まれたときから飼育小屋で虐待され、期待外れと分かった途端に、一方的に捨てられた男の人生。未来には時間も残されず、希望を持つことすら許されず、魔道に堕ちるしかなかった自分の生涯には、もう二度と“光”など差し込まないものだと思っていた。

それがどうだ？ 死の淵から甦った自分の隣には、あたたかな“光”を振りまく存在がいて、その星の光は、誰の頭上にも平等に降りそそぎ、ささくれた心に癒しと救いを与えてくれる。暗闇のどん底で苦しんでいた自分にも、彼女はやさしい“光”をくれる

（生きるつもりもなかったが、もう、これなしでは生きていける気もしない――）

ステラのことを心の底から“手に入れたい”と思う気持ちは、性欲か、我欲か。しかし、そんな彼女をこの薄汚れた暗闇の世界から“解放してやりたい”と思う保護欲、お

およそ自分には似つかわしくない神聖な気持ちも、同時に存在していることは確かだつた。

まさか、自分をその気にさせる存在に巡り合えるとは予想だにしていなかったラウであるが、だからこそ、彼はステラを傍に置いておきたかった。そしてそのためには、可哀想な少女に向けて残酷な「嘘」を積み重ねる必要があつた。たとえステラの振りまく「光」を、心の底から欲している青年が、映像の向こう側、自分以外にも存在していたとしても――

——この光は、渡さない。

それはラウにとって、ようやく手にした希望の光。

短すぎる彼の生涯、仄暗い曇天の中に見つけ出した、たったひとつの明星なのだから。「私なきみの友となり、父となり、母となろう――」

かつてのステラに放つた言葉を、もう一度だけ繰り返し返す。

——私はネオ・ロアノーク。

第二の人生、限られた余生、せいぜい愉しませて貰うことにしよう。

『ロドニア事変』

時を少し遡り。

ロアノーク隊がまだ、隊長と副長のふたりだけであつた頃――

――戦後において、ひとつの事件があつた。

マルマラ海からゲリホル半島を越えると、いくつもの島が散らばるエーゲ海に出る。ボスポラス海峡を抜けてからしばらく北方に伸びる山脈へ進むと、その人里から離れた場所に、開けた巨大な施設が見えてくる。

大西洋連邦による強化人間の実験・成育施設――『ロドニアのラボ』である。

そしてそれは、本当にある日突然のことだった。

何者かの告発を受けたロドニアのラボは、非戦派の“ターミナル”と思しき非政府組織を筆頭とする、世界中の各機関の協力コミュニティによつて踏査され、内部を武装制圧されたのち、接收された。

つまるところ、封鎖へと追い込まれた。

ラボ内には大西洋連邦に雇われた医療研究員や武装兵のほか、非常に多くの少年少女

達が匿われ——素性を迎れば、後者の殆どは国際的な許可もなく攫われてきた孤児だという——“ターミナル”は生存が確認されていた後者の全員を保護。一方で、彼らに対し非人道的・非倫理的な実験と教育を幾度となく繰り返した前者を一斉検挙し、国際正義の名の下に断罪した。

これはかつてのコロナー“メンデル”の封鎖事件にも似た大々的なニュースとして地球連合・“プラント”を問わず騒がれ、世間はこれを『ロドニア事変』と呼んだ。

ラボは現在、当来の所有者である大西洋連邦の手が届かぬよう、他の共同体ネイションによつて厳しく管理・監視され、ほとんど手付かずのまま放棄された施設内では、精密な検査と処理、そして取り調べが行われているという。

第八十一独立機動群——『仮面の英雄』ネオ・ロアノークが、そんなロドニアに程近いスエズ基地に降り立ったのは、その事変が巻き起こってから、わずか二日後のことであつた。

ネオは現在、事情聴取のためにスエズ基地の中にいた。現在は、二名のスタッフから何が起こったのか、事情聴取を行っているところだ。

スタッフのひとりには、嘆息交じりに説明を続けている。

「この事件を受けて、本部の方も非常に慌てているようです」

「まさか、たった一夜にして、ロドニアのラボが制圧されるなんて——」

困惑を露わにした様子で、スタッフ達は続ける。

「緊急事態により施設は放棄されたので、ラボ内には様々な資料や情報が、ほとんど手付かずのまま残っている模様です」

「——それはまた」

適当に頷く仮面の下で、ネオは興味なさげに事情を聞いていた。

「いくらでも対処の方法はあったはずなのです。あの夜、敵に踏み込まれると判った時点で——」

「——実際、ラボ内にはそういう動きもあつたようです。自爆装置を作動させようとした、その形跡も」

その覚悟のほどに、ネオは微妙に感心する。

だがたしかに、ロドニアのラボは、そこまでしなければならぬ性質の施設だろう。ネオ自身も話に聞いた限りで、実際に施設内を歩いたことはない。……ないのだが、ネオにとっては容易に想像が及ぶものでもある。施設内には、さぞ気味の悪い物体が鑑賞物のように立て並べられていたことだろう。

「解せんな。なぜ、ラボはそれをしなかった？」

みずからの生まれ故郷と照らし合わせるように、ネオはやつと話に食いついた。自爆による証拠隠滅を図ろうとした形跡があるというのに、ラボは現在もまだ、十全の状態で残されたままではないか。

「ゲリラの闖入者が現れたためだと、報告に上がっています」

「闖入者？」

「ええ。その者は生身で施設内に潜入し、たったひとりで内部を制圧して回ったのと」と

踏査を受けると判明した時点で、研究員の中にも現状に危機感を持った者が当然いた。彼が証拠隠滅を図ろうとしたところに、その人間は現れた。

「内部を制圧したのは、サングラスをかけた黒髪の男だったそうです」

「サングラスだと？」

深夜の薄暗い研究所の内か。

「ええ、まるで悪魔のような強さだったと聞き及びます。研究所の武装スタッフが多勢に無勢で抵抗に当たりましたが、それに対して、本当にたった一人で渡り合っていたかどうか」

聞かされるのは、俄かには信じがたい話だ。

たったの一人で、大勢を圧倒するなど——？

「……………」

けれども、ネオとしては残念なことに、その手の奇行ができてしまいそんな人間に一人心当たりがあった。

——黒髪。中性的な美しい容姿に、細身の体躯。

その後も続けられた目撃証言や現場記録と照らし合わせていけば、事情聴取の時間は既に、ネオにとっては答え合わせの時間でしかなかった。

「大佐は今回、ロアノーク隊の隊員補充のために、こちらまで足を運ばれたのですよね？」

「ああ。その予定の、はずだったがね」

「こんなことを云うのもなんですが、大佐達の到着がもう数日早ければ——と、そんな風に考えてしまいます。無論これは、我々の無責任な云いがかりなのでしょうが……」

スタッフのひとり、苦々しい表情でそう溢した。

今回、ネオがロドニアに程近いスエズ基地にまで足を延ばした理由は、平たく云えばロアノーク隊の新入隊員の歓迎だ。性能試験を終え、出荷を控えた優秀なパイロット達がじきに施設を出るといふ報せがあり、ネオとステラは、そのためにロドニアにまで足を運んだのだ。

「もしも数日予定が早まり、ルーシエ中尉が現場にいてくれたら……と思うと、悔やしいのです」

「そうですよ。中尉がいれば、きつとそのサングラスの男を返り討ちにすることも出来たでしょうに！」

「……まあ、キミらがそう漏らしたくなるのも、分からないでもないがね」

スタツフ達がそのように漏らすのは、生身の白兵戦において、ステラもまた鬼神のような強さを発揮する人材だからだ。

大西洋連邦や、ロアノーク隊に限った話ではない。少なくとも、現況の地球連合においてステラより「強い」と云える人材は間違いなく居ない。その悪魔のような強さの男と、鬼神のような強さの女を衝突させた結末を、彼らは期待しているらしい。

ネオの個人的な感覚としては、その二人だけは絶対に鉢合わすべきではないとも思うのだが……気に入らなかつたのはそれだけではない。彼は半ば呆れたような声音で云った。

「とはいえ私の目には、キミたちが単に最強決定戦を行いたがつているだけのようにも見える」

「そりゃあ、そうですよ。終わらない強さ議論に決着を求めるのは、世の男の性分つてものです」

そういうもの……ではあるのか。

その辺りの、正常な男達の感性は、いまいちネオには理解できなかった。

「勿論、我々は中尉が最強であると信じてますよ。こう見えて、彼女のファンなのです

！」

「中尉を応援するのは、半ば我々の使命のようなものですね！」

「いきり立つのは結構だが。それを上官である私に伝えて、どうしろというのが分からん」

話が脱線し、事情聴取という名の与太話は、それからしばらく続いた。

「——しかし、奴等はいつたい、何が目的だったのでしょうか？」

純粹な不審顔で、スタツフが吐露する。

そもそもロドニアに大規模な研究所があるという機密を、敵はいつたいどこから掴んだのか？ 施設はエーゲ海北方にある山脈の麓にあり、木々が青々としてその所在を覆い隠す閑散地に構えられている。一般市民からの通報で素性が露見するような構造ではなく、そのために内部告発者か、あるいは事情に精通する外部の人間の仕業だと考え

られるが……。

ネオは考えながらも、事情を聴く中で、彼が気になった一点についてを掘り下げる。「研究所ラボに関する、あらゆるデータが奪い去られた——と云ったな」

「それは、そうなりますね」

ロドニアの研究所には、進退窮まった際に用いるための自爆手段も用意されていた。されていたにも関わらず、施設は一方的に制圧され、占拠され、接收されてしまった。

それは当時の現場スタッフ達の対応に不手際があつたというより、敵側の根回しがあまりに周到で、何よりサンングラスの男が規格外すぎたということもあるのだろう。まあ、それは良いとしてだ。

「大佐、それが何かありましたか?」

「分からないか? 強化人間を作り出す術すべを理解できれば、それは強化人間を元もとに戻す方法も、おのずと見えてくるということだ」

陳腐な云い方だが、毒は薬にもなる。毒の深さを知ってこそ、医学は発展しうる。

おそらく、強化人間の製造事業も同じだ。どこからか拾ってきた少年少女の健康な生体を、研究者達は毒をもって改造してきた。その過程でどのような毒が使用され、どのような改造を施されたのかを掌握することが、対抗薬を作り出すための第一歩、そして最大の近道となるだろう。

「おまけに、施設内にいた被検体こどもたちのほとんどが、今回の事件で国際機関に保護された」

——辻褄が合うとは思わないか？

ネオは冷淡に問いかけた。

「ヤツらは強化人間を治療し、元の健康状態へ戻そうとしている——と？」

「しかし大佐、動機はなんですか？」

スタッフたちは困惑した面持ちで互いに目を合わせている。

こう言つては何だが、ロドニアの研究所へ『入所』させられる子供の殆どは孤児だ。戦災で親を失つたり、子育てに飽いた傲慢な大人夫婦が施設へ養子に出したケースもある。そのような孤児達を、所詮は第三者に過ぎない機関がどうして血眼になって解放しようとするのか？

「まあ一言で云えば、民意だろうな」

民意？ スタッフは怪訝そうに反芻した。

「大西洋連邦が保有する強化人間は、先の大戦中、その存在が明るみにされた。当時の『プラント』代表、パトリック・ザラ議長閣下の御息女が、そうであったと世間的に報道されたからな」

当事の立会人であったかのように話すネオに向け、スタッフは「よくそんなこと知つてますね」と感嘆の声を漏らす。

政治家の子が、公人として名を公表されている事例は少なくはない。こと プラント
“においてはアスラン・ザラ、女性であればラクス・クラインがその典型例だろうが――
ザラ家に生まれた第二息女については、亡き母君の意向を汲み取る形で姿や名前までは公表されていないのだ。

幸せであつたはずのザラの家庭を襲つた事実。ただそれだけが、世間に向けて公表された。

「嗚呼、それが “プラント” 国内に反地球連合運動を引き起こすための
政権側の誘導政策として利用されたことは疑いない。――というより、それが正確な見
立てなのだろう」

「はあ……」

「しかしながら、一度白日の下に曝された真実をなかつたことにはできない。パトリック・ザラがそのとき暴露してみせた地球連合の闇――放送内容の衝撃は、国内に留まることを知らず、当然のように “プラント” 国外にまで波及した」

当時のザラ政権は、放送内容について、ほとんど嘘を織り混ぜる必要がなかつた。

誘拐された少女の境遇について、ほとんどありのままを語るだけで良かった。この辺りは、妙な小細工をしなかつたことが人心掌握において良い方向に働いた。

「つまるるところ、当時まだ十一歳だった少女を襲つた『悲劇』は、地球側に住まう者達の

良心にまで強く影響を及ぼしたのだ。戦争が終わり、今は時流も味方している。地球連合われわれの為に非道は明るみにされ、無辜達の間で「罪なき強化人間を救おう」とする潮流が生まれ始めたとしても——そのための慈善活動キャンペインが国際的に支持されたとしても、私には何の驚きもない」

正義面した大衆の、その気高くも人間的な行いを、今はラウですら否定できそうになり。

「まあその活動家達の中に、彼がいるというのは少々意外——いや、そうでもないか」

独語のように、ネオは呟いた。

——改めて考えれば、らしい動機ではあるのだろう。

あれの父親もそうだったが、どうやらあの家系の男達は愛に生きるきらいがあるようだ。家族愛というのも、立派な愛の形のひとつではあるし。

(先の大戦中とは方向性が異なるような気もするが……成程)

なんだかんだ云って、彼の方も戦後は元気に暴れ回っているということか。

「大佐は……そのサングラスの男に、心当たりがお有りですか?」

「いや、気のせいだろう。忘れてくれ」

不審そうにスタッフが訊ねるが、ネオは飽きたようにして適当に取り繕った。

それでもスタッフ達からは不審の表情が消えなかったが、仮に覗き込んでみたところで、黒い仮面がその下の表情を読ませぬように、面の皮を覆い隠すだけだった。

「——話が途中で折れてしまいましたね。報告を続けます」

場の空気を仕切り直すように、スタッフが咳払いを入れた。

「たったひとりの男の暗躍により、ロドニアの研究所が国際機関に接收されたのは、やはり大西洋連邦にとつては非常に手痛い損失となります」

「だろいな。——それによる実害は？」

そこで頭を切り替えたように、ネオは軍人らしくきびきびと問うた。

ロドニアの研究所は、何といつても強化人間の『生産工場』として最大規模を誇る場所なのだ。これが開戦を待たずして早々に失われたとあれば——

——その異変の波は、方々にさまざまな影響を齎すことになるだろう。

問われたスタッフもまた、それまでの気安さを控えて質問に応じる。関係各所に思いを馳せれば、事態が如何に深刻なものであるかが彼らにも想像がつく。

「まずは新型の強化人間——『エクステンデット』シリーズの廃止ですね」

廃止。正確には企画頓挫というべきだろうが――

ロドニアにおいて、先日まで急進的に行われていた製造事業の最たるがそれである。先の大戦において、導入された『ブーステッドマン』シリーズは、インプラントと薬物投与によって凄まじい戦闘能力を獲得するに至っていた。けれども、あれらは度重なる薬物投与により恐怖感覚だけでなく、通常の判断能力や思考能力までもが破壊され、信頼性という面では非常に難のある代物だった。ジョージ・アルスターの愛娘が被検体となり、戦争中盤で追加導入された新型強化人間にしても、戦闘能力の獲得はまだしも薬物投与により深刻な脳疾患と睡眠障害を抱えることが判明し、大戦後期においてはほとんど『リビングデッド』と蔑称される未成品に終わってしまった。

その後、試行錯誤の末に開発が進められていたのが、スタッフが明かした『エクステンデッド』シリーズだ。みずから思考し、判断する能力のある軍事情動のエキスパート。定期的に「ゆりかご」にて最適化措置を施すことで、ストレスなどの精神的負荷から解放された彼らは、戦場において、常に最高のパフォーマンスを遂行可能な最凶の戦士となる。

「……はずでした」

「――まあ、残念だったな」

そんな地球軍における最凶の戦士達は、ロアノーク隊に配属されることが決まってい

た。

決まっていたからこそ、ネオも関係資料——まあ取扱説明書のようなものだと思っ
ている——には目を通したことがあるのだが。

「とはいえ規格書を見た限り、私は禁^{プロクワート}句なる仕様には心底眉を顰めたよ。正直なところ、使い物になるとは期待していなかった」

「ズバツと云いますね」

「『母』『夢』『死』……どれも日常の中で突発的に使われておかしくない単語だ。それでいちいち暴走させているのは、軍隊はできんと思うが？」

特に最後に関しては、戦場にこそゴロゴロ転がっているものだろうに。

「まあ、これが既に持つ側の人間の余裕、怠慢であるというのも頭では判っているつもりだ」

「はい……？」

「奇しくも、キミたちが先に信じてくれた通りだな。我がロアノーク隊には既に最強の戦士がいて——その安心感で、私は今も焦らずに済んでいる」

「——ああ」

「アレがいなければ、今頃の私は猫の手も足りていたかつたはずで——まったくもって、頼もしい副長だな」

云つてしまえば、ネオは初めから他の隊員に期待などしていなかった。言葉を選ばずに云えば、凡百のパイロットなど——既にネオも自身がその内の一人だと自認している——は世界的に見れば、既に有象無象でしかないと実感しているからだ。

——野心を胸に、火星圏へと旅立つた彼。

——嚴重な研究所を、たったひとりで内部制圧してみせた彼。

——そしてネオの下で今、驚くべき速度で成長を遂げている彼女。

「いったい誰が、彼らと同じ強さの次元で戦えるというのか？ 才気の差とでも云つておこうか、すこしだけ嫌気が差しそうになるのを堪え、ネオは一度わざとらしくため息をついた。

「とはいえ、隊長わたしと副長ステラの二人だけではロアノーク隊は立ち行かん。エクステンデット計画は頓挫したが、それでも残った優秀な人材を隊員として補充せよというのが、我が崇高な雇い主のオーダーでもある」

どこか皮肉を含めた様子で、ネオは続けた。

それに対して、スタッフは恐々とした様子で提案した。

「どう考えても、次善の域を越えませんが。そういうことであれば、元々ロアノーク隊に配属される予定だった者達を寄越しませうか」

「……ステイング・オークレート、アウル・ニードを、か？」

それぞれの資料を見た。記憶する限りでは、刃物のように鋭い目をした緑髪の少年と、一見すると女の子と見紛うような可愛らしい顔つきをした少年だったはずだ。

「しかし彼らは——」

「ええ、たしかに。ロドニアの研究所の閉鎖に伴い、彼らは強化人間でこそなくなりましたが、それでも受けてきた軍事教育や訓練課程において、優秀な成績を収めてきた事実には変わりはありませんよ」

成程、改めて考えれば、スタツフの云う通りではある。

研究所が封鎖されたからといって、幼少から施設に入っていた——何より淘汰されずに済んでいる——彼らが、現在に至るまで養つてきた能力が消えるわけではないのだ。

「そりゃ、規格書に記されてあった通りの要求値は保証できかねます。けれど、生半可な兵士よりは腕が経ちますし、それについては我々が、全力で性能を保証いたします」

「成程。そういうことであれば、私が断る理由もないな」

ネオは諾々として承認する。前世での部下達は命令違反常習者ばかりの曲者揃いだったが、此度こそは、そうでないことを祈りばかりだ。

「——というか、その二人は例の機関に保護されなかったのか？」

「幸か不幸か、その日はちょうど別所にて、出所前の検査を行っていたものですから」

そういうこともあるのか、と納得するネオであったが、顎に手を当て思案する。

そう遠くない内、ロアノーク隊はL4のコロニーで極秘作戦がスケジュールされている。そこは「アーモリーワン」と呼ばれるコロニーであるが、ここでザフトが新造戦艦の進水式に伴った大々的な軍事式典を執り行う予定なのだ。大西洋連邦はこの華々しくも厄介な式典に目をつけており、そのためネオには極秘作戦の指揮を執るよう通達があつた。

「……………」

だが、当初の想定より大規模な作戦になりそうであるから、今はネオも人手を欲している。その作戦を円滑に遂行するためには、最低でも、もう一人は頭数が欲しいところなのだ。

——ステイング、アウル……。

だからネオは、興味本位で次のようにスタッフを訊ねた。

「残されている人員は、それだけか」

「——。それが——」

そのとき、スタッフの顔色が変わった。

気まずさを湛えたような顔で、スタッフはその後、ネオを別場所へと案内していった。

——ステイング・オークレー。

推定年齢16歳。黄緑の髪に黄色の眸を持つ少年。常に沈着冷静で、面倒見の良い性格。戦闘能力も同輩の間では極めて高く、軍事作戦遂行の上で必要な資質をすべて持ち合わせていることから、研究所内でも非常に高い完成度を誇る人物と評されている。

——アウル・ニーダ。

推定年齢15歳。水色の髪に水色の眸を持つ少年。やんちゃな性格で、負けず嫌いなステイングの弟分であるが、こちらも軍事行動中は高い戦闘能力を発揮する。嫉妬深い子どもっぽい部分もあり、過去には金の髪の年上女性に強い憧れを抱いていたことがあるらしい。

「ナイフや重火器を扱った実戦訓練。シミュレーションでの戦闘訓練を行い、厳正なる審査の許で、我々はパイロット候補を選出してきました」

ネオは案内されるままに廊下を歩きながら、前を行くスタッフの話を聞いている。

「先の二名はその中でも特に優秀な成績を収めてきた人材なのですが……実は研究所が接收されたその日、もうひとり、難を逃れた者がいると判ったのです」

「……ではその者を、隊の三人目として迎え入れて良いのか？」

「いえいえ……っ！　こう云つては何ですが、アレはいわゆる、でき損ないでして——」
 “でき損ない”——

それはネオにとつては決して看過できない物言いでもあったが、今は脇に置いておくべきだった。スタッフ達は悪びれもなく続ける。

「同輩達の中では、成績も芳しくない『落ちこぼれ』ですよ。研究所ラボが襲われた日に至つては、恐怖心から物陰にじつとして隠れていたようなのです」

そうして震えながら物陰に隠れ続けていた結果、彼らを保護しにきた“ターミナル”にも発見されることなく、最終的に大西洋連邦のスタッフの許に流れついたらしい。それが本人にとつて、幸運だったのか不運だったのかは、ネオとしても評定するに困るものであったが。

「正直、大佐の御眼鏡に叶うような人材ではありません」

「……そのようだな」

酷なようであるが、その会話をもって、その三人目へのネオの興味は失われていた。

他者からの評価というのは、往々にして正しい。人選の上で軽んじていい情報ではなく、スタッフ達から一般に無能とされる『お荷物』を抱えてやっていけるほどに、“フアントムペイン”は甘くはない。ネオ・ロアノークという男とて、そこまで慈悲深くはないのだ。

「——ところで、先の話にも上がった中尉は今、どこに？」

ステラのことだろうか。たしかに、ネオと同じタイミングでスエズを訪れたにしては、先程から一向に姿が見えない。茫々として単独行動しがちな困った副長であるが、まさか、基地の外にまで出かけに行つたわけではあるまい。

「吸い込まれるように建物の中へと入つていったのは記憶しているが……私の方も放任主義でね。散策活動なら好きにすればいいと、その辺りはすべて本人に任せている」「せつかくなのでお会いしたいなあ。あとサインもraitたいんですよね」

まるでアイドルだな、とネオは僅かに苦笑するが、適当に廊下を歩いた先で、ひとつ自動ドアが開いた。

「——あつ」

ドアの奥からぱつちりと見返してくるのは、ネオにとつては見慣れた瞳。すみれ色の宝石のように輝く、生気に溢れた円らな双眸だった。ステラである。

「ネオっ！」

親を見つけた子どものように、雲を切る太陽のようにパツとして浮かぶ無垢の笑顔は、何度見ても、誰が見ても、それを役得と思わせるほどに美しいものであつたという。けれども、そんなネオにとつても見慣れなかつたのは、視線の先のステラが、まるで妹であるかのようにも見える、得体の知れない少女の手を引いていたことだった。

「……そちらは？」

探るように、ネオはステラに訊ねる。

先ほど「落ちこぼれ」について話していた、周囲のスタッフ二名の唾然としている表情を見るに、まさかとは思うが。

「ネオ！ ステラね、この娘このことが気に入ったの！ 連れてかえりたい！」

まさかとは、思っただが。

「メーテル・リンク。……例の、落ちこぼれです」

苦虫でも噛み潰したかのような表情で、スタッフがネオに説く。それが、少女の名前なのだ。

——メーテル・リンク。

推定年齢14歳。赤い瞳に、ステラと同じ金の髪をした少女。引っ込み思案で競争嫌いな性格のためか、研究所での試験成績もすこぶる悪い。けれども、どういうわけか自身が『廃棄処分』とされないギリギリのラインで、常にそれらを通してきた強運の持ち主でもあるという。

そんな少女の容貌は、ネオをして前大戦時のステラを思わせた。戦後の歳月を経て、今は金の髪を腰上あたりまで伸ばしているステラだが、その髪はまるで金の絹糸を紡いだようでもある。一方で、メーテルのミディアムボブの金の髪は強くウェーブがかつて

いて、蜂蜜に金粉を振りまいたようでもある。おそらく天然の髪質なのだろうが、透き通った白い肌、無口そうで気弱そうな物腰も相まって、その姿は本当に部屋の片隅に飾られた洋人形のようなものである。

どうしたものか——ネオは些か困った風に思慮に耽ろうとした。が、そのとき場の気温が急激に冷めたのを取って感じ、弾かれたように視線を上げる。視線の先、それまで嬉々として輝いていたステラから、ふつとしてすべての感情が消えている。

「おちこぼ——」

次に聞こえたのは、息を詰まらせた男の悲鳴。

「ひ」

目は据わり、半ば虚ろとなったステラの軽蔑の眼差しは、たったいま、彼女がぎゅつとして手を握る少女を心なく罵倒したスタッフへと向けられていた。半ば比喻とは思えない程に、それだけで人を殺せそうな眼差しの奥底は、本当に冷酷な色をしていたという。

サインを欲しがっていたはずのスタッフは背筋を伸ばして——というより、竦み上がって次の言を発せない状態になっていた。ステラもまたそれ以降、その人間に視線のひとつも向けなかった。

やれやれ——ネオもまた観念したように、スタッフ達を割るようにステラの前に歩み

出る。

「副長のキミが『必要だ』と判断したのなら——私はそれを尊重するまでだ」
掌返しだった。

あまりに見事な掌返し。後頭部にやはり糾弾の視線をふたつほど感じたが、それで怯むネオではない。改めて膝を折り、もう既に決まったようなものの、手を差し伸べながら、背の低い三人目の新隊員へと話しかける。

「第八十一独立機動群、ネオ・ロアノーク大佐だ」

「めっ、メーテル・リンクっていいます……!」

人見知りで上ずって、緊張で裏返りかけた声。

おどおどとしながら不安そうに手を握る少女が見上げた先には、既に、別人のように温かな微笑みを湛えているステラの姿がある。

その温かさに励まされるようにして、新たに出会った少女は、勇気を持って言葉を続けた。

「あの、その……よろしく、おねがいます……っ!」

「メーテル・リンク——歓迎しよう。今日からキミが、我がロアノーク隊の末っ子だ」

「わ……、わあっ!」

我ながら、心底らしくないことを云っている——

ネオも胸中で、思わず自嘲するほどの物言いだ。自分達は間違いなく戦争をしに向かうのであって、家族ごっこがしたかったわけではないはずだ。

(……しかし)

ネオは少しだけ、伺うようにしてステラへと目を配る。

——末っ子。

その家族らしい柔らかな表現を一番に喜んでいたのは、やはり長女たる彼女であったのだ。

「が、がんばります……っ！」

まさか己が、栄えある「フアントムペイン」の一員になれるとは考えもしていなかった。

新参者の少女の表情は、そういった感情の昂ぶりで紅潮し、それに耐え切れなくなつたように、ステラは腕を広げてぎゅっとメーテルの体を抱きしめた。ぬいぐるみでも抱き上げるかのような勢いで。

「ん〜かわいい！ お持ち帰りい〜っ！」

「わ、わあ……っ!？」

いちやつき始めた少女達を脇目にして、ネオはスタッフ達を振り返る。気まずさなど微塵にも感じさせない面の皮の厚さだが、そもそも仮面をつけた男には、そんなものな

ど存在しないのかも知れなかった。

「そういうことだ。ステイング・オークレーとアウル・ニーダも貰っていく。異存はないな？」

夢見心地というには、汗の止まらぬ恐慌の表情で凍てつかされているスタッフ達。彼らはネオの問いかけに頷くだけで、いまだにまともな言を発することができないらしい。

ステラはそんな彼らなど既にもいないものと判じており、抱き上げたメーテルの体を離れたあと、今度はぎゅつとネオの手を取った。

「ねえネオ、ステイングとアウルも迎えにいこう！ ステラ、みんなに会えるの楽しみなんだ！」

まるで以前から彼らを知っているような口振りだが、おそらくは御愛嬌だろう。

ぐいと強引に腕を引っ張られ、苦笑しながら、ネオはステラに率いられてゆく。

「メーテルも！ おいで！」

だが振り返った先、赤目の少女が後に続いてないことに気付いて、ステラは呼びかけた。呼びかけられた少女は、いまだ凍てついたスタッフ達の前で立ち尽くしていた。

「……………」

茫然とするこのときのメーテルには、わかっていた。

己の後方で植物みたいになつてゐるスタツフラが評したように、散々ラボの内で『落ちこぼれ』と虐げられてきた己などが、本来なら非正規特殊部隊フアントムベインの一員になれるはずはないのだと。その器では、決してないのだと。

けれども、それでも構わない。そんなの気にしない、と――

——『守つてあげる』と、彼女ステラは云つた。

今日がおおよそ初対面であるはずなのに、それでも彼女は伝えてくれた。

——まもる……？

研究所ラボの内の意地悪な同輩達も、突如として研究所を襲つた大人達も、その人間のすべてがメーテルには恐かつた。だから、あの夜もじつとして物陰に隠れたのだ。見知らぬ大人に仲間達が連れ去られるのも、そこで自分が見つかつてしまうことも、彼女にとつては恐かつたからだ。

——でも今は、こわくない……？

まもるから。

まもる——それは、あたたかいこと。こわくないこと。

——あの女性ひとが、まもつてくれるから……。

こちらを覗き込む、寶石みたいに輝く眸。やさしく抱きしめてくれる腕。心地よい感触に、顔を埋めた胸の柔らかさ。

その人間らしい営みのぬくもりを、メートルは生まれてはじめて、彼女に教えてもらったから。

——だから今は、こわくない……! !

少女は勇気をもつて、その一步を踏み出した。

臆病な己を叱咤して、少女は叫ぶ。

「ありがとう! ステラお姉ちゃん——っ!」

「! ——うんっ!」

その呼び名に少しだけ頬を染め、それでも満足げに、ステラもまた満面の笑みを返していた。メートルはぱつと開いた花弁のように笑顔を浮かべ、その場を駆け出すと、まるで妹みたいにステラの許へと駆け寄っていった。

そうして、新たにロアノーク隊は発足することになる。ステラとメートルがスエズ基地内部においてどのような出会い、どのような会話を重ねたのか。それはまた、別の話である。

『黒い地母神』

作戦の概要が伝えられたのは、特殊戦闘艦「ガーデイ・ルー」のブリーフィングでのことだった。戦略パネル上には、L4宙域に浮かぶひとつの工業「プラント」の見取り図が浮かんでいる。

工業用コロニー「アーモリー・ワン」――

そこは現在、ザフトによる軍拡整備が盛んに行われている場所だ。艦長のイアン・リーをはじめ、ブリーフィングには新たに発足した「ファントムペイン」の面々が参加している。仮面の男ネオ・ロアノークが、彼らに対し解かりやすく状況を説明を続けた。「アーモリー・ワン」は先の大戦後、ザフトによって新たに建設されたコロニーだ。所在するL4は「プラント」本国からは遠く離れた位置にある中立地帯だが、彼らはそんな場所でも軍拡を進めている。――いつそ堂々としていて、清々しいものだがな」

皮肉を口にしながら、ネオはそれまで手にしていた写真をピンと弾いて宙に飛ばした。無重力に漂った写真の数々は、ふわふわと慣性に従って、まるで狙ったかのようにイアン、ステイング、アウル、そしてメーテルの手許へとすっぽりとして収まった。

渡された写真にそれぞれが目を落とす。写されているのは何れも不明瞭な画像だが、果たして誰が撮影したのか、どれも移動式クローラーに横たわる機動兵器らしきものの影だ。

「十中八九、ザフトによる新型の“G”兵器と見える」

“G”——

その単語に、アウルとステイングがそれぞれ目を見合わせた。

まあ、彼らが知らなくとも無理もない。“G”は前大戦時において“ヘリオポリス”で初めて開発が進められたワンオフの機体群であり、その戦略的汎用性の高さ故に評価され、後のザフトにおいても開発が推進された、角付きにして双眼のモビルスーツのこどだったから。

「事前調査によれば、どの機種も局所戦闘用の可変機構を有し——陸戦、水中戦、空中戦——各々の得意分野において、驚異的な戦闘力を発揮できるよう設計された単機能特化型ということだが……」

それは裏を返せば、はじめからそれぞれの連携運用を視野に入れていないということでもある。

「いずれにせよ、平時における“プラント”防衛部隊としての体裁を保ってはいかないな」
それこそが弱点であり、口実ともなる。

——政治においては、つけ入る隙を与えた方が「悪い」のだ。
その理を、ネオ・ロアノークはよく知っていた。

「たしかに。あらゆる地球環境に対応してみせる電撃的な新型モビルスーツ群の開発など、これから地球に攻め込みます、とザフトがみずから喧伝しているようなものですな」
納得といった風に、艦長のイアンが鼻を鳴らした。

「ザフトの新型『G』兵器、あそこから運び出される前に奪取する」
作戦概要を告げられ、面々の表情が引き締まる。

成程、潜入工作とはたしかに、その中でも最も大きな「お仕事」だ。これほどまでに胸が躍る大仕事はないだろうと、ステイングにアウルは勝気な様子で微笑みを交わした。一方で、メーテルは緊張しきった顔を浮かべており、ネオはそんな彼女に向けていった。

「そしてメーテル、きみは残れ」

「えっ……?」

「きみは今回、この『ガーディ・ルー』に留守番だ」

役不足とまではいわない。だが彼女の能力では、潜入工作はいささか荷が克ち過ぎる。

それは部隊の長たるネオなりの判断であり、けれども、それについてはすぐさまステ

ラがフォローに入った。ひとりだけの待機命令に愕然としているメートルに、ステラは鷹揚と話しかけたのだ。

「仲間外れにしてるわけじゃないよ。ただ、メートルには別の仕事をおねがしたいの」「別の、おしごと……?」

「うん」

そこから先は、隊長に代わってステラが個人的に概要を伝えた。

要するに、部隊全員が最前線に赴くことが作戦なのではないのだ。後方支援要員というのは往々にして必要であり、今回はメートルがその役回りが回ってきたということ。ましてや部隊戦力が潜入工作に割られている以上、コロニーの外に待機し、その受け皿となる人員は不可欠だ。

「ナイトメアシステムって、知ってる?」

「う、うん。たしか、前の戦争のときにも使われた、ジャミングに使われる技術だよな?」
「そ」

コロイド粒子を媒介としてウイルスを散布し、ジャミングにより量子コンピュータの働きを阻害する。前大戦時にはザフトの「ベルゴラ」を雛型に、大西洋連邦の「レムレース」や「デストロイ」にも搭載された、悪魔の情報改竄装置。先の「G」兵器の存在についてもそうだったが、メートルは前大戦を知らなくとも、それについての学習に

は必死で取り組んできた。彼女は努力家なのだ。

「メーテルには、ステラの機体を貸してあげる」

「——！」

「だから『ソレ』を使って、みんなが帰ってくるまでの時間を稼いで欲しいの」

それを聞いた、メーテルの目の色が変わる。

今ここにおいては言及しないが、一時とはいえ、ステラが自身のモバイルスーツを貸与してくれるというのだ。その選択は彼女なりの信頼の顕れであって、後方支援とは名ばかり留守番——『置いてきぼり』と考えていたメーテルにとっては、何より嬉しいサプライズでもあった。

「だいじょうぶ、メーテルならできるよ」

「……うんっ！」

寄せられた期待に応えてみせる。

意気込んだメーテルの笑顔が、ぱっとステラ表情を照らした。

——そうして作戦は始まった。

砂時計によく喩えられる『プラント』の支点到宇宙港は造られ、ステラ、ステイング、

アウルの名は装いを新たに、偽造IDを使って「プラント」内へと入り込んだ。

式典を控えてか、宇宙港は稀に見る賑わいと活気に満ち溢れていた。ステラ達は押し寄せる人波を避けて高速エレベータに乗り込み、人々の居住区のある「プラント」の底部まで一気に移動。

透明なシャフトを通して、眼下には青い海が広がっていた。太陽のない空、それでも日差しを受けて輝く海に、緑の島々が散らばっている。どこか地中海を思わせる人工の大自然を目の当たりにしながら、ステイングとアウルは生まれて初めて見る絶景に感嘆の声を挙げ、ステラはどこか遠い目をして、この風景を見下ろした。

——市内に潜入したら、特定のポイントに向かってくれ。そこに工員ニンゲンを手配する。港を出たステラ達だが、次の段取りはどうだったか？ 彼女の頭の中では、フリーイングルームで聞いたネオの声が鮮明に記憶されている。

——特定のポイント……。

たしか、繁華街に建てられた巨大なビルビルボードが目印のはずだ。ステラ達三人はその大きな看板の前に立つ。手配された工員と合流するまで、少しの時間の余裕ができた。

その束の間の待機時間の中で、アウルは云った。

「……なあ、ステラ」

ぶつきらぼうに——しかしどこか平静を装うように——両手を頭の後ろに組みながら、アウルは茫洋と佇んでいるステラへと話しかけた。

アウルは地球の生まれだ。コロニーを訪れるのはこれが初めてで、しかしながら、そのときびゅうと一陣の風が彼らの間を吹き抜けた。地球の自然とは程遠いこの環境で、それがどういった原理で生み出されているものなのかを、アウルは知らない。

吹き抜けた風により、隣に立つステラの髪が揺れる。金の絹糸のような長い髪が風に踊り、その美しさはこれを見る者の——ことにアウルの視線を奪った。

女の子らしい甘い匂いが、鼻先をくすぐる。人形のように長い睫毛。きめ細やかに整った少女の横顔は、しかし、幼さを残しすぎるといっわけではなく、人としての格の違いを悟らせるほどに伶俐に映る。おおよそ美少女然とした可憐な容姿に見合わない、不可思議なまでの落ち着きと色香。人生における壮絶な経験の差が、アウルにそれを感ぜさせるのか。年齢でいえば、己とそう変わらないはずのくせに——？

「……………」

たしかに、パイロットとしての腕前において、これまでアウルはステラに勝てた試しがない。

——というか、勝てる気がしない。

ロドニアにいた頃は、他の誰にも負けなかった。いま自分の隣に立つステイングを除いて、全員がザコだった。メーテルもだ。そんな競うにも値しないザコばかりをいたぶり続ける日々の中、アウルは己がパイロットとして「強い」のだと自負していた。

その自負を——その慢心を——真正面から打ち砕いたのが、視線の先の少女だった。ロアノーク隊に配属された後、隊員同士が「ダガー」に乗り、互いに模擬戦を行ったことがあった。アウルはいつものように片手間で遊びながら、ステラ・ルーシエの実力とやらを測るつもりで戦闘に臨んだ。

——なんで、コイツが副長なんだ？

——オレらとあんま、変わんないじゃん？

隊長の方はいい。あのヘンな仮面の意味は分からないし、モビルスーツに乗っているところも滅多に見かけないが、なんだかんだ云って、アレの立てる作戦はいつだって面白い。

だが、副長の方はどうだ？ 着任してみれば、自分とそう変わらない見目の女が自分達の上に立つと云われた。負けず嫌いのアウルは、その序列を当然のように拒絶した。

強者こそが上に立つ。それがロドニアのラボの掟だ。歪ながらも徹底された実力主義の中で生きてきた彼らには、力を以て上位者に挑む権利が与えられて然るべきだつ

た。

——コイツに勝つたら、副長の座はオレのものだ！

サーベルを握つて斬りかかり、次の瞬間、視界からふつと敵の姿が消えた。世界がぐるりと回転し、自分が機体ごと転がされているのだと気付いた頃には、相手の刃にコクピッドを抑えられていた。

——なに、された？ おれ……今……っ？

分からなかった。自分が何をされ、何で負けたのかも——。

あれを完敗と云わずに、他に何と呼べばいいのか。それほどに一方的な形勢をもつて、アウルはステラに負けてきたのだ。傲りは単なる傲りでしかなく、そのときをもつて、ロアノーク隊の序列は不動のものとなった。

——この女は、どんな人生を歩んできた……？

少女の横顔に恍惚としながら、アウルはそんなことを考える。自分と彼女の間には、ひとえに畏敬の念さえ抱くほどの実力と経験の違いがある。それは差であり、溝であり、アウルはどうかしてその溝を——彼女との距離を詰めてみたかった。

アウルはステラが知りたかったのだ。その容姿の麗しさだけで云えば、もつと別の人生が開けたはず女——なのにどうして、彼女は今“フアントムペイン”なんかをやっているのか。純粋な興味というには、それはそう、極めて少年的な生理のひとつだった。

「なに？」

「あ……いやっ……」

円らなる無垢の目に見つめ返され、アウルは思わずたじろぐ。

話に水を向けたのは、自分だというのに。

「おまえ、昔はもつと、その髪短かったんだってな」

「……？」

果たしてそれは、アウルが本当にこの場で訊ねたかったことなのか。訊かれたステラはきよとんとし、一方でアウルもまた、自分が何を意図してその質問を口走ったのか理解していなかった。

「ねっ、ネオから聞いたんだっ」

「——あ」

云われて初めて気づいたとでもいうように、ステラは風になびく自身の長髪に触れた。腰上あたりまで伸びた、流麗で柔らかに波打った長髪。誰であるのかは知ったことじゃないが、ちょうど今、頭上の電子看板に流れ始めた広告に映る、桃色の髪の歌姫のような。

「そう、みたいだね。たしか、ネオがそう云ってた気がする」

「あ……？」

「よく憶えてないの。むかしのこと」

電子看板をステラもまた見上げながら、遠い目をしてそう云った。

(なんだよ、そりゃ)

ステラでさえ知らない、彼女自身の過去。しかし今の口振りでは、ネオはそれを知っている。

——でも、オレは知らない……。

顔を伏せ、もやもやと燦るアウルの中で、小さな不満の火が灯る。

そのとき一台のバギーが、ちょうど彼らの目の前に停車した。運転席にはザフトの軍服姿の男が座っており、そいつはステラの視線を受けると、何かを確かめるように小さく頷いた。彼こそが、ステラ達が合流を待っていた作員か。

ステラの方はバギーの空いていた前方座席、つまりは助手席に上がるが、そのとき偶然に市内を歩いてきた黒髪の少女と目が合ったような気がした。一方でアウルとステリングは後部座席へ乗り込み、風を切って走り出したバギーの中で、アウルは無然として声を漏らす。

「……ちえつ、おもしろくねえ」

「何か云ったか？ アウル」

小さな不満を耳にして、ステリングが顔を覗き込んでくる。

彼はアウルにとって、兄貴も同然の存在だ。戦友にして、同時にライバルだとも思っているが、やはり、こういうところで視野が広く、面倒見のいいところは素直に尊敬している。

そうだ、尊敬だ。しかしながら、今ばかりはお節介であって、今だけは放っておいて欲しかった。アウルは憤懣やるかたなく、口を尖らせてステイングに云った。

「……なんでもねーよっ！」

「なに怒ってんだ？　ヘンなやつだな」

甘えたように不貞腐れるアウルを、ステイングは困惑しつつも苦笑しながら見守った。

——指定のポイントで車に同乗した後、工場まで案内して貰え。

作戦のすべては、ネオの目論んだ通りにことが進む。

彼が手配してくれた作業員というのも、時間ぴつたり指定の場所までやってきてくれた。げんにステラは、彼の指示のままに動いているだけで良かった。

——キミたちはVIPとして、工場内を立ち入ることを許されることになる。

入口の検問所ゲイトに差し掛かったところ、男はIDを見せ、来賓を案内する係官であるか

のように振る舞った。彼が本当にザフトの軍人なのか、それともステラ達のように偽の身分を名乗っているものなのかは知らない。だが、おおよそステラ達は来賓として相應しい洒落た洋服に身を包み、検問のザフト兵はいかにも納得といった風にバギーの通過をパスしてくれた。

——式典を後日に控え、工廠内はVIPの見学客だらけだ。同伴の係官さえいけば、君達の素性を疑う者など現れない。

広大な敷地内は雑然としている。巨大なモビルスーツ「ジン」や「ガズウート」が入り乱れて動き回り、式典のための盛大な準備に取り掛かっているようだ。

見れば、視線の先の至るところで民間人の姿も混じっている。いずれも係官を引き連れた地元のセレブリティといったところか——彼等は誰しも興奮した口調で軍艦の必要性を語り合い、自国の持つ技術力の高さに鼻を鳴らしている。傍目に見れば、ステラ達もその内のひと集団のように見られているのだろう。

——それを利用する。

やがてバギーは、巨大な格納庫の前で停車した。

作業員の男によってキースリットに鍵が通され、重厚なハッチがおもむろに開かれてゆく。用意されたバッグからさまざまな武器が取り出され、ステイングとアウルが不敵な笑みで銃を受け取ると、慣れた手付きで弾倉を装填。ステラの方はナイフを鞘から抜

き放ち、真白く輝く刃の先を見た途端、その双眸から人間的な光が消えた。

四人は風のように忍び込み、改めて格納庫内部の様子を確認する。仄暗く無機質な空間の奥に、モビルスーツ運搬用のクローラーが四台ほど並んでいるのが見て取れた。

——目標は四機。

——これを迅速に奪取しろ。

次の瞬間、作業員を含めた四人が一斉に物陰から飛び出した。

かん高い銃声が、天井にこだまする。

ステイングが無造作にばらまいた銃撃を喰らって、クローラーの周辺にいたザフト兵達が次々になぎ倒される。アウルもまた宙で側転しながら、己を誰何する敵兵に向けて銃口を絞った。

完全にして、完璧なる奇襲。不意を突かれたザフト兵だが、流石はコーディネイターといったところか、それらの立て直しは早かった。敵を認めて迎撃姿勢を取り、その中には、ザフトにおけるエースを意味する赤の服を着用した者もいた。

「アウル、上だ！」

弾丸を振りまいて周囲を牽制しながらも、ステイングが無造作にアウルへ注意を飛ばす。クローラーの上から、自分達をつけ狙うザフト兵達が見えたのだ。

呼び声を受けたアウルは、しかし、それを一顧だにせず肩越しに銃を向けることで撃

墜しようとした。散らされた弾丸は正しく兵士達を次々に撃ち落としたが、一瞥すらしなかつたことが、結果的に撃ち漏れたザフト兵のひとりへ反撃の隙を与える。

「あのバカ……！」

反撃の銃声が鳴り響き、放たれた弾丸は工作員の男を貫いた。

男はドウとしてその場に斃れ、今度の敵はアウルにまで銃口を向けた。

だがソイツは、慌てて追撃に飛びかかったステラによって片付けられた。

「——ちッ、四機目は失敗か……！」

ステイングが舌を打つ。

——計画が狂った！

本来であれば、四機目のモバイルスーツは先の工作員が奪取する手筈になっていた。頭数がひとつ欠けた以上、たったの三人で、この場にある四機を持つて帰ることなど不可能だ。

——やはり、部外者は信用できない。

こんなことになるくらいなら、メーテルを連れてくるべきだったか……？

「どうする、ステラ!？」

いまだに残る数人のザフト兵を相手にしながら、ステイングはみずからのリーダーに問う。

彼もまたアウル同様、彼女こそが上位者だとその実力を認めているのだ。

「任務が先。奪えないのであれば、その機体は破壊する」

淡泊に云いながらも、ステラの方はこのとき単騎で何十人もを相手にし、ほとんどの方に暴れ回っていたという。

それらの騒乱から数分もしない内に、格納庫内は静寂に包まれた。動く者がいなくなったのを確認した後、ステラは気を失ったように足元へ銃火器を投げ捨て、ステイングとアウルもそれに倣った。一拍置いてクロウラー上へ飛び上がり、ステラはそこに横たわっている暗灰色の巨大な機体に目を落とした。

「この機体」

彼女が何かを云いかけた、次の瞬間である。ステラ達が駆け込んできた現に開放中のハッチから、黒い髪の少女が現れたのは。

ステラ達の後を追ってきたのか？ その人物は格納庫内の惨状を目の当たりにして唾然とした表情を浮かべたが、顔を上げると真つすぐにステラの方を向いた。その口は大きく動いている——何かを必死に呼び掛けている風だが、距離が離れてステラには聞こえなかった。

「——ああ？」

「なんだ、オイ——？」

ステイングとアウルが、それぞれに当惑の表情を浮かべる。

——アイツも撃ち漏らしか？ だが……。

戸惑いながら、ふたりはステラへ目を向ける。けれども、彼女にとっては任務が先だ。現れた少女を無視し、すでにステラは機体のコクピッドへと飛び降りている。

コクピッドの中ではOSが起動し、手許のモニタがぱつとして明るくなる。束の間の待機時間、一拍置いてモニター越しに先の少女を目で追ったものの、その姿はもうどこにもない。

時間が迫り、手許に流れるOS名——

[G]eneration

[U]nrestricted

[N]etwork

[D]rive

[A]ssault

[M]odule

。

そして、ステラは次に映った機体名称に目を留めた。

「——『ガイア』……?」

全てのチェック作業を終え、機体の電源が灯る。

三機のモビルスーツはクローラーごと起き上がり、電源ケーブルがはじけ飛ぶ。巨神を思わせるその堂々たる威容が立ち上がったそのときになって、基地内にけたたましい警報が鳴り始めた。瀕死の兵士が力を振り絞って警報ボタンを押したらしいが、今さらもう遅い。

三機の『G』は揺らめくようにフェイズシフトを展開させ、傍らの機体群はモスグリンとネイビーブルー。ステラの乗ったモビルスーツは、そうして黒色に彩られた。

——せつかくの式典だ。おまつり

——ザフトの新型『G』兵器、その出来栄えを、彼ら自身に味わっていただくこう。

飄逸たる口調の下に、残忍な微笑みが浮かべた男——すべては彼の指示通り。

作戦は、万全を期して遂行されなければならない。

それこそが第八十一独立機動群——『ファントムペイン』というものだ。

運命篇

『震える瞳』 A

「ねえ、マユ」

問いかけるのは、透き通った少女の声。

「マユはどうして、ザフトに入ろうと思ったの？」

生まれ故郷は、海の王冠にもよく喻えられる滄海の島国、オーブ連合首長国。

彼女は——彼女たちは、そこで生まれ、そこに育った他人だった。

紆余曲折を経て、はるか宇宙の彼方——この「プラント」で出会うまでは。

ザフト義勇軍、士官学校——

C. E. 68年以降に常設化された「プラント」における兵士の養育機関。

二年に渡る軍事カリキュラムが叩き込まれる場所において、少女達は出会った。

「憧れの人がいたの。強くて、優しく、可愛くて——」

その人の背を追って、少女は「力」を手に入れた。

「——でも、いなくなっちゃったんだ」

——だから、あの人が帰ってくるまでは。

あの人の代わりに、私がみんなを『まもる』って決めたんだ。

マユ・アスカ。

——C・E59年、1月19日生まれ。

2年前のオーブ解放戦線の折、ニコル・アマルフィによって救助され、以降は三隻同盟と活動を共にする。

停戦後は「フェブラリウス」へ移住し、負傷していた両脚の治療に専念。「プラント」が誇る高度な医療手術を経て、現在に至るまでに両脚は完全に快復している。

戦後の混乱期にも関わらず、彼女の手術が迅速に行われたのは異例の待遇だった。本来であれば他国民の彼女が、こうも早くに「プラント」の医療福祉を受け取ることができたのは、ひとえに彼女の身元引受人、ラクス・クラインの存在が大きく関与していたという。

マユは、ラクスにとって妹も同然であるステラが、これまた妹分として大切に面倒を見ていた少女だった。三名の少女達は「ヤキン・ドゥーエ」戦役の中で親しくなり、それぞれに二歳ずつ年の離れた少女達の間柄は、これを傍目に見ていた者達から「三姉妹的」と形容されるものでもあったらしい。

実際、彼女達の間立っていたステラの行方が分からなくなつて以来、ラクスはマユを妹の妹のように世話し、対するマユもまた、ラクスのことを姉のように慕うようになっていった。そんなラクスは現在「プラント」の要職に就いており、マユに対して各方面でさまざまな便宜を図つたのは事実だった。

そのことへの恩返しもあつてか、マユは怪我の快方後、オーブ連合首長国へは戻らなかつた。生まれも育ちもオーブである彼女にとって、新天地に他ならない「プラント」に定住することを決めたのだ。

当時において、彼女の身の周りにはオーブ出身者で「プラント」に行き場を求めた人の例というのは想像以上に溢れていた。オーブを追われたコーディネイター達の一部が、そののち「プラント」に流れついていたからだ。そんな同郷の人々の流れに沿つて、彼女がザフトの士官学校アカデミーに入校したのは、程なくしてのことである。

そしてそれは、ステラのように人々を守る『盾』になりたいという願い——

——そして、このとき既に政治の世界で戦つていたラクスの『剣』になりたいという

望みから織り出された、マユなりの決断だった。

誰に似たのか、マユはその従順で大人しそうな容姿に見合わず、案外に強情、そして行動派だった。誰かの陰に隠れていた時から、想像もつかないほどに。実の兄や姉貴分——要するに年長者達の監視と保護の目から外れた途端に、彼女はひとりでに歩を進めていくタイプだったのだ。

自分が一度やると決めたことは最後までやらなければ気が済まず、己に足りない部分は、他人の力を臆面なく借りてでも補おうとする気概。幸いにも、彼女の場合は友人に恵まれたこともある。

とはいえ、やはり士官学校という巣窟は、彼女にとって生半可なものではなかったのだろう。

“コーデイネイターの集う『ブランド』はその社会構造上、どうしても選良主義エリートに傾倒すると云われる。しかしながら、その言はやはり正しい。どの年代にも、やはり規格外の——少なくとも、マユのような立場の者からすれば——優等生というものは居るものだ。

その筆頭が、成績優秀者上位10名は堅実と云われたアグネス・ギーベンラート、レイ・ザ・バレル、ルナマリア・ホーク——そして、マユ自身のルームメイトだ。流石に歴代最優秀修了者を越えるほどの逸材は現れなかったらしいが、遺伝子操作に裏付けら

れた「生まれながらの天才達」と競い合わねばならない学び舎は、井の中で育ってきた彼女にとって決して生易しいものではなかった。

けれども、二年の歳月を経て——結論から云えば、マユ・アスカは『赤』を授かるに至った。

受領した機種はZGMF—1000「ザクウオーリア」——

訳あつて彼女は月軌道に配置され、後方の月防衛を任務とするナスカ級戦艦への配属が決まったのだつた。

マユはルームメイトのアトラ・デンソンと街に出ていた。彼女はマユのひとつ年上の少女で、つい先日、配属先が決定されたばかりのザフトレットだ。

白皙の肌、ふわりとした金の髪をした彼女の容姿は、マユにとって親近感ある印象を受ける美少女であるが、そう見えてアカデミーでは一、二を争うほどの優等生だつた。アカデミー在学中は、マユもルームメイトという友誼を盾に散々と個人訓練に付き合つてもらつた、それほどの仲でもある。

「ねえ、マユ」

シヨーウインドウが立ち並ぶ繁華街を歩きながら、シヨツピングならではの軽い足取り、軽い口調で少女達は話を交わした。——そして、その会話もまた。

「マユはどうして、ザフトに入ろうと思ったの？」

マユにとつても、アトラにとつても、それは今さらのような話に思えた。

しかし、改めて思い直せば、たしかにはつきりと伝えたことはなかったらしい。

「そういうアトラは、どうしてザフトに入ったの？」

「私？」

マユの動機を聞いた後、アトラは返ってきた己の問いに困惑を示した。

「私は……。前の戦争をニュースで見て、何かしなきゃいけないな、自分も——つて、そ

う思っただけで」

いいだけ日用品を買い貯めたマイバッグを提げながら、少女は遠い目をして云う。

「漠然と考えて……。それでザフトに入ったの。マユほど前向きで、立派な動機じゃないと思うよ」

「でも、アトラは立派に務めているでしょ？ 最新鋭艦の、最新鋭機まで任されて」

マユは純粋な尊敬の念を込めた目で、自身の隣のルームメイトを——自慢の友人を見

遣る。

純粋な瞳で見つめられ、アトラはたじろぐしかなかった。きらきらとした輝きのマユ

の眸には、不安や憂慮といった負の感情は欠片ほども見当たらない。ただ、今後の友人が歩むであろう栄えある輝かしい将来を心待ちにしている期待感だけが、その目には宿されていた。

「今度の式典だつて、アトラのモビルスーツが主役中の主役だつて聞いてるよ！ 名前は——えつと……なんだっけ」

「——『インパルス』」

それが、アトラが任された機種の名だった。

数日後に控えられた軍事式典は、何と云つても『プラント』全土が注目する新型MS群の完成披露と、新造戦艦の進水式が目的なのだ。中でもアトラが受領した『インパルス』は、現在に至るまでザフトが培ってきた実践的技術が全て盛り込まれた画期的なモビルスーツらしく、プログラムされた演目の中でも主役を担うことが決定していた。

「あ、大通りに出た」

雑談を交わしていたふたりは、やがて商店街の路地から大通りに出た。

日陰から一転し、太陽のない空がふたりを照らす。眩しさに目を細めながら、慣れない様子で辺りをきよるきよと見渡したマユに対し、アトラは苦笑しながら、そんな彼女を導くように云った。

「行きたがつてた洋菓子店パティスリーは、右に曲がつて三ブロック先」

「案内、たすかるーっ」

ここしばらくコロニーに駐屯していたアトラの傍ら、マユは「アーモリー・ワン」を訪れるのが初めてだ。彼女は友人の晴れ舞台を見届けるために休暇を利用して、現在はその観光客だ。今日はたまたま非番だったアトラを連れ出し、繁華街のおすすめの店を案内して貰っている最中だった。

メイン通りは人で行き交っており、稀に見る盛大な賑わいを見せていた。普段に比べて礼装に身を纏った人の数が多いのは、おおかた、式典のために誘致されたセレブリティが紛れ込んでいるからか。

「……さっきの話だけど」

雑踏を縫うようにして、ストリートを再び歩き始めながら、アトラは小さく呟いた。

「本当に、私なんかインパルスのパイロットが主役でいいのかな」

——主役中の主役。アトラ当人に云わせれば、柄ではないのだ。

軍事式典の様子は「プラント」全土に同時中継される予定だし、少なくとも、全「プラント」国民からの熱狂的な期待と注目に堪えられるほどに、アトラの心臓は大きくな

い。不安を隠しきれない様子で、アトラはマユに問いかける。

「ね、ね、マユは今回の人事、どう思った？」

アトラ自身の見立て——というより、今となつては願望に近いものだろうが——では、マユ・アスカもまた件の新造戦艦に配属されるのが筋だと思われていた。そしてその見立てとは、彼女が身を纏う制服の色を見れば身内鼻負な評価というわけでもないだろう。

にも拘わらず、マユはアトラと違つて後方に配属された。他の同期生の中にも能力に反して同様の人事となつた者もいて——まあその人に關しては両親が“プラント”政府の高官であることが関与していそうだが——アトラは全体的に、今回の異動命令に對して様々に思うところがあるのだ。

「貴方に伝えたことがあるか憶えてないけど。私もね、本当は設計局志望で」
赤服らしからぬ心中を吐露するアトラであつたが。

結論から云えば、その一連の話を、この場でマユが聞き届けることはあり得なかつた。

「——マユ？」
「うそだ——」

漏れ出た呟き。震えた声を耳にして、アトラはハツとした。

マユの表情が、云い知れぬ驚きに見開かれているのを認めたからだ。

「いつたい、なにが」

異変を感じ取つたアトラもまた、見開かれたマユの視線の先を追つた。喧騒に溢れる

メインストリート、その象徴たらん巨大なビルボードが立つている高層アパートの下に、一台のバギーが停車している。

そこに、金の髪の美しい女性の姿があった。どこか浮世離れした、神秘的な容姿。それが身を装う藍色に染まったホルターネックとヴェールのドレスは凝ったデザインで、世界の裏側で竜巻をも引き起こす蝶のような艶やかさを女性の中から引き出している。

それは蛹でも、熟れかけの美少女でもない。静かで、柔和で、伶俐に大人びた麗容は正しく美女だった。しかしながら、それを純然たる美女と云つてのけるには——アトラが思うに、その女性には潭然とした深みがあつて、ありすぎた。

「——」

不自然なまでに“力”を覆い隠そうとしている怪物の気配に身の毛が弥立つ。アトラは一瞬で恐怖さえ感じ取り、実に失礼ながら——真に初対面ながら——それはおおよそ“魔女”といつてのけるのが正解に思えるような女性であつたという。マユはその“魔女”の姿を認めた途端、その顔色を変えたのだ。マユのこんな表情を見るのは、アトラもじつに初めてだった。

「あつ、マユー！」

——止めるのが遅かった。

後にアトラはそう語るが、すかさず発進したバギーの後を追うように、マユはその両

脚で駆け出していたという。

「待つて！ どこ行くの、マユ——！」

制止を求める親友の声も、このときのマユには聞こえていなかった。

——うそだ。

それはきつと、本当に彼女が云いたかった第一声ではなかったはずだ。

ずつと心待ちにしていた——ずつと「帰つてくる」と信じていた者の艶姿。

決して嘘などではなく、絶対だとさえ、信じてのに。

(ステテラお姉ちゃん！)

走り去らんとするバギーを、マユは必死に追いかけた。日用品を買い貯めたマイバッグすら放り投げてでも。

人違いかと、疑う余裕などなかった。彼女の中にあつたのは確信で——しかしながら、どういうわけか、現実には彼女の望み通りにはならなかった。たしかに一度、目が合ったというのに、金の髪の女性はまるで他人でも見るような目で自分から視線を外してしまつたのだ。

(私のこと、忘れちゃったの……っ!?)

——確かめなくちゃ。

その思いだけで、マユは突っ走った。自身の行動力を頼りにバギーを追い、工廠区画に入り込み、そこで兵士達の返り血を浴び、まさしく魔女然としたステラの姿を目の当たりにした。

「——ステラお姉ちゃん!」

叫んだ先で見返してきたのは、よく知るすみれ色の眸ではなかった。それぞれ緑色と青色をした髪少年達が胡乱げな顔で自分を見返し、最後にようやく、金の髪の彼女と目が合った。

その目の色が、マユはとても好きだった。けれどもマユにとつて疑いなく憧れの人
は、猜疑と不審の混じった目でマユの顔を見返した後、割り切ったように彼女から視線
を外し、目下に横たわる機動兵器のコクピッドに飛び込んでいってしまった。

「……………」

それだけに、ようやくマユは辺りを見回して状況を確認する。

格納庫内部は累々としてザフト兵達の死体が積み重なっている。モビルスーツを整
備していたメカニックに加え、赤いパイロットスーツを着用している者は、まさか正規
で搭乗員を予定されていた者だろうか? アトラと同じような?

このような破壊活動が、ザフト内部の反乱分子によるクーデターではないことだけは確かだ。少なくとも、ザフト内部に彼女はいないから。だとすれば、彼女達は敵国から送り込まれた刺客——目的はおおよそ、このハンガーに秘されてある強力なモビルスーツの強奪か。

「どんな事情があるか知らないけど……！　どんな事情があるか知らないけど！」

ひとり眩きながら、マユの身体はそれまでとは別の方向を向いていた。ステラを含めた異邦からの作業員三名——それが取りこぼしたと思われる、眼前に横たわる四機目のモビルスーツだ。

「話すつもりがないって言うなら、こっちから話をしにいくから！」

急ぎクローラーに飛び乗った彼女を待っていたのは、暗灰色の装甲に覆われた巨人。明確に「ザク」系統ではなく、双角と双眼を覗かせる異教の神を模したような力の化身だ。おおよそ「アーモリー・ワン」で開発された、ザフトの虎の子の新型モビルスーツ——自分とは縁のなかつた、スペシャル特別なワンオフ機。

——アトラに託された機種の系譜の、その四機目だろうか。

だが正直、そのような背景など知ったことではなかつた。機密を守るだとか、奪取を防ぐだとか、彼女はそこまで冷徹に思考を巡らせたわけではない。

——ただ、あの人もう一度会わなくちゃ。

そのために、これこそが最も手っ取り速い手段だから。こう見えてマユ・アスカは、思い切りが良い側の人間なのだ。

躊躇なく新型のコクピッドに転がり込んだマユは、急ぎモビルスーツのシステムの立ち上げにかかった。

この工程で、出遅れるわけにはいかなかった。なにせ、隣に並んだモビルスーツ群は既に敵の手に堕ちており、準備が整い次第、こちらを撃ってくる危険があったから。

「量子触媒、反応スタート、パワーフロー良好。全兵装アクティブ、オールウェポンズフリー。システム、戦闘ステータスで起動——」

計器類に光が灯り、ブウンという駆動音が徐々に高まってくる。モニターがパツと明るくなり、マユの視界に外の風景が映し出された。

だが、やはりマユは、このとき僅かに出遅れていたのだろう。隣に並んだ三機のモビルスーツは、クローラーごと少しづつ起き上がり始めていた。能力の差か、最も奥に据えている黒い機体に関しては、既にクローラーから切り離されて完全に立ち上がっていたほどだ。

流石だね——と、無意識の感嘆がマユの胸にこみ上げるが、正直に云って、そのような状況ではない。マユが乗り込んだ機体はその重厚な身体を起こすよりも前に、隣の二機——モスグリーンとネイビーブルー——が完全に機体を立ち上げさせてしまった。

——いけない！

OSが映し出す『G・U・N・D・A・M』の赤い文字列も目に留めないまま、マユはフットペダルを強く踏み込んでいた。モスグリーンの機体が、臥せていたマユの機体にビームライフルを構えたからだ。よって彼女は機体のスラスターを噴射させ、まだ覚醒しきっていない新型機を急発進させた。

(ごめんなさい！)

——誰も巻き込まれないで！

仰向けの機体はスラスターを全開にし、型を抜くようにクローラーから勢いよく飛び出した。背囊に繋がれていたケーブルがバチンと弾け飛び、やがて機体は建物の壁に脳天から突っ込み、衝突と同時に重厚な壁面をぶち抜いた。

同時にクローラーが撃ち抜かれ、響き渡る警報。マユは外に出た勢いそのまま機体を姿勢制御させ、躍動する鋼鉄の機体は上体を跳ね上がらせる。太陽のない空の下、その新機は力強く“アーモリー・ワン”の大地へと着地してみせた。

「この機体……！」

想像以上のパワーとスピードだ、やはり新型は「ザク」とは違う！

背に三枚ほどの翼を広げ、それが揚力を発生させる装置として作用しているのか？

重心制御が極めて容易、まさしく自重を失ったかのような得も云われぬ浮遊感を感じる。この機体構造は、おおよそ前大戦時にマユが間近で見た「フリーダム」の流れを汲んでいるのか。……いや、

「ZGMF-X69S “アリアドネ”——？」

可変相転移装甲をオンにした矢先、その機体はヴェールを剥ぐように美しい白銀色に彩られた。

——『とりわけて潔らかで聖い娘』

ギリシア神話に登場する大女神の名に違わず、女性的で艶やかなその威容は、まさしく前大戦時にザフトが開発した「クレイドル」——彼女にとって、憧れの機体を継承した新型機であった。

へちィ！ 仕留め損ねた！

苛立つステイングの声がステラの耳に聞こえてくる。奪取に失敗した四機目の“G”を処分しようとしたところ、それが思わぬ姿勢、不格好な体勢ながら、あろうことが奇跡の脱出を図ってみせたのだ。

パイロットは誰か。——あの場にまだ、仕留め損ねたザフト兵がいたのか？

——それとも、たまたま街で目があった、あの黒髪の少女だろうか……？

だが、ステラはそこで考えるのをやめた。元より多少のイレギュラーは想定済みだ。すべては作戦通りに、ネオの指示のままに為さなければならぬ。

「まずは格納庫^{ハンガー}を潰す。モビルスーツが出てくるよ」

淡泊な調子でステラが云い、“ガイア”の背後につける“アビス”——それに乗り込んだアウルが、陽気な調子で「わかったぜ」と応えた。

「ステイング、そいつを任せてもいい？」

「云われなくとも、こいつア俺が——！」

どうにも頭に血が上ったらしい。そうなってしまえば、普段の冷徹さに見合わず野生化するのがステイングの数少ない悪いところだ。彼は雄叫びを上げながら、手にした乗機——“カオス”でもって、取りこぼした白銀の四機目に突撃していった。

「アウル、あなたは右」

「任された、っと！」

朗らかにアウルが応え、次の瞬間「アビス」が甲羅のような両肩部シールドに内蔵された三連想ビーム砲を撃ち放った。放たれた幾重の光条は格納庫内部に並んでいた無人の「ジン」を貫き、誘爆を起こして建物ごと吹っ飛ばす。

一方、ステラは左方へと「ガイア」を駆っている。地を蹴って飛び上がった先で鮮やかに機体を変形させ、四足歩行型のモビルアーマー形態へ変態を遂げる。すかさず背部からビーム砲を放ち、撃ち込まれたビームはやはり別の格納庫を貫き、工廠一帯を火の海に変えた。

「へへえ、「バクウ」みたいな機体じゃん！ おもしろー構造だなー！
「でも飛べないよ」

この一瞬で、ステラは奪取した新型の性能を把握したというのか。

アウルは感心しながら、奇襲の衝撃から立ち直り、徐々に反撃態勢を取り始めたザフトのモビルスーツ群を迎え撃つ。空中から「デイン」が翼を開いて押し迫り、地上からは戦車形態の「ガズウート」が砲撃を浴びせかけてくる。簡単に「G」の奪取を許してしまうザフトは間抜けの集団と思っていたが、この対応の速さは悪い意味で想定外だ。

（さすがは軍事工廠、敵さんの拠点のど真ん中ってわけだ！）

物量戦に持ち込まれれば、さすがにアウル達に不利がある。しかしながら、ふっと視

線を巡らせた先のステラの機体は、相も変わらずザフトのモビルスーツ部隊に対して一騎当千の働きを見せていた。その鬼神のような活躍がなければ、自分達は今もこうして、悠長に事を構えていることはできないのだろう。

アウルは刺激されたように、そうかと不敵に笑う。

——ここが何処であろうと、相手が誰であろうと、自分達の為すことは変わらない。

業炎で朱色く照り返された「アビス」の中、アウルは確信し、副長に倣って機体を前進させる。発砲してきた「デイン」の悉くを地上から狙い撃ち、撃ち抜かれた機体は拉げ、炎の華を空中に咲かせてみせた。

——目の前に現れた障害は、実力をもって排除するだけだ。

「「カオス」、「ガイア」……「アビス」!？」

マユの手許のコンソールが、奪取された機体名を映し出している。いずれも、この「アリアドネ」と同じくギリシア神話に登場する神々の名だ。やはりこれらは同じ系列にある機種らしく、マユは驚愕に目を開きながら、真正面から突撃してきたモスグリー——「カオス」の対応に迫られていた。

このとき「カオス」はビームサーベルを出力し、しゃにむに躍りかかって来ていた。マユは素早く「アリアドネ」の武装を探り、腰部のサイドスカートから、ビームジャベリンを抜き放つてこれに応戦した。

「邪魔しないで！」

このときのマユの目には、ひとえに「ガイア」しか映っていないのだ。だが、そうした余所見は、さらに「カオス」のパイロットを逆上させることになる。まるで自分など眼中にないと云わんばかりに軽視されていることが、敵パイロットにとつては気に入らないのか。

後退しながら、マユは敵機のサーベルをシールドで受け、反撃にビームジャベリンを横風ぎに振るつた。レーザーの刃が白く長い弧を描く。柄の部分が伸縮し、間合いが調節可能な「アリアドネ」のビームジャベリンは、「カオス」のビームサーベルよりも長いリーチを誇るのだ。

敵機はその長大な対近接防御を前に後退したが、飛び去ると同時に背部に備えられた筒状の兵装ポットを開放。その内部から数十ものミサイルを「アリアドネ」めがけて一斉に撃ち放つた。

「ハの——っ！」

またしても、マユは素早く武装を探る。と、閃いたように両肩上部からせり出して

た「ハイドラ」ガトリング・ビーム砲を使用した。敵機破壊のための決定打とはなり難い火器だが、面攻撃に用いるには最適であり、高速連射されたエネルギー弾は、狙い通りに空中に放たれたミサイルを全基として叩き落とす。

マユは段々と「アリアドネ」の性能を掴み始めた。迎撃や牽制に特化した機体性能、敵機との間合いを調節するための槍——どうやら「アリアドネ」は近距離よりも中距離戦、防衛や遊撃に適するように設計された機種であるらしい。

対するステイングは、敵機の動きを見て段々と冷静さを取り戻しつつあった。当初はただ運が良いだけのパイロットだと思っていたが、なかなかどうして見当違いだったようだ。自分の力不足だけではないのだろうか——コイツは決して、侮ってはならない相手だ。

「くそッ、慣熟運転もままならねえつてのに……!」

敵国から奪取した特殊な新型機を、一見で扱いこなすような芸当ができるのは、ひと握りの人間だけだ。そしてステイングには、その内のひとりに含まれる自負があつたのだが、なかなかどうして、手に入れた「カオス」は特殊が過ぎていた。

——たとえば「カオス」の両膝、および爪先から出力されるビームクロウは、使いたい時がいまいち理解できない。そもそもモビルスーツの体の一部に、サーベルを多数内蔵する設計者はどうにかしている。これを十全にして自然と使いこなすことができる

のは、格闘戦の覇者か、あるいは変態に違いない。

極めつけは、背部に備えられた筒状の兵装ポッドだ。先の大戦中開発されたドラグーン・システムが導入されているこのユニットは、機体本体から分離して運用することで、それ自体を独立させた個別攻撃を行うことが可能だ。だが正直なところ、現時点の스팅グでは扱いかねる兵装であり、訓練を重ねれば使いこなせる自信があるが、少なくとも、奪取した直後の今では無理である。

「失望は、させたくねえんだよ——！」

それもこれも、ロドニアの研究所が閉鎖された所為なのか？

——あの研究機関が、最後まで自分達を『強化』してくれていたら……。

己はもつと、それすらも使いこなせる最強のパイロットになれていたんじゃないのか？

「オマエは、俺がア！」

違う。機関の力も、他人の力も必要ない。

——俺は俺の「力」だけで、アイツにも並ぶ『最強』になってやる！

悔しさを胸に、もう再び「カオス」は「アリアドネ」に突進を仕掛けた。固執するよ
うに両足の爪先からビームクロウを出力させ、振り上げた足で相手を蹴りつけんと躍り
かかる。

一方で、思わぬ部位から出力されたビーム刃に虚を突かれたマユであったが、彼女は咄嗟に蹴撃の角度を見切り、身を屈めて斬撃を躲した。それも束の間、蹴撃のために片足を振り上げ、重心が不安定な隙を晒す。カオスを見咎めた。

——今だ！

斬撃を躲した着地の足で踏み切り、マユは「カオス」へ逆に突っ込んだ。「アリアドネ」のシオルダータックルをともに受けた「カオス」はそのまま吹っ飛ばされ、尻もちをついて無防備に倒れ込んだ。

「追撃するならー！」

みずからに云い聞かせるように、マユは握り直したビームジャベリンの穂先を、既に死に体となっている「カオス」に向けた。

——追撃するなら、今しかない！

新型の機動兵器を奪い、それを使って軍事工廠を火の海とする、明確な挑発行為。必然性から考えれば、やはり地球連合軍の仕業と考えるのが自然だろう。だが、世界がようやく手にした平和を脅かそうとする彼らの行いを、マユはやはり、黙って見過ごすわけにはいかなかったのだ。

へ——ステイング——

けれども、そのとき脇から「アビス」が現れ、煙の中から強烈な「カリドウス」複相

ビーム砲が「アリアドネ」めがけて放たれた。死角からの攻撃にマユは虚を突かれ、その赤色の奔流を辛うじてシールドで受け止める——が、流石に「アビス」は砲戦仕様の機体らしい、その最大火力は凄まじいものだ。

「——！ オラあ！」

機を見た「カオス」がその隙に立ち上がり、ビーム砲を受けている「アリアドネ」にもう一度だけキックをかました。その衝撃で「アリアドネ」はシールドごと弾き飛ばされ、今度は大きく吹き飛ばされる。その勢いのまま、機体は傍らの建物に叩きつけられた。

「ああうっ！」

悲鳴を上げたマユの視界に、今度はビームサーベルを揚々と抜き放って迫る「カオス」の機影が映る。だが「アリアドネ」はシールドもなく、機体は建物にめり込んで、今すぐに制御は取れないままだ。

——やられる!?

少女がそれを確信した途端、迫りくる「カオス」の背面を一発のミサイルが強襲した。炸裂する衝撃を受けて機体は怯み、棒立ちになった機体のすぐ脇を、戦闘機と思いき青い機体がすり抜けた。

「なんだ——!?!」

「あれ、は……!?!」

それに遅れて、上空には数種類のユニットが飛来している。

闖入した戦闘機は再び上空へ舞い上がると、それらとの相対速度を合わせつつ、巧妙としか云いようなない特有の接合作業ドッキングを開始した。

後方ユニットが接続されると、内部からスライドして両足が現れ、前方ユニット内部に折りたたまれていた四本角を持つ頭部が次に現れる。最後に無人機が運んできた赤色の武装が、モビルスーツへと変貌を遂げた機体の背部に、さながらバックパックのように装着される。

一連のドッキングが完了すると同時に、鉄塊色だった機体は、やはりヴェールを剥ぐように——赤と白——鮮やかに色づいた。

やがて「それ」は、背面に背負った長大な二本の対艦刀を抜き放ちながら、地上へと

満身創痍の「アリアドネ」の眼前へと、これを庇うように降り立った。焼き焦げた空のない大地に、燃え立つような色の機体の参入を認め、マユは自身の身体が震えるのを感じたという。

「インパルス……!」

手許のコンソールが全自動で叩き出した文字列を見て、マユは安堵の息を漏らす。

ZGMF-X56S “インパルス”——

身の丈ほどにあらうという長大な刃渡りの剣——聖剣の名を持つ “エクスカリバー” を柄の部分で連結させ、それは、機体の頭上で大きく振りかぶる。

「何でこんなことを……!」

そのパイロット——

全 “プラント” 国民の期待を一身に請け負う “運命” を課せられた少女——
アトラ・デensonは、震える瞳で、ひとえに激情を叫ぶ。

「また戦争がしたいの!? 貴方たちはっ!?!」

『震える瞳』 B

“アーモリー・ワン”の戦闘区域から程近い工廠内のドッグに、淡いグレイの戦艦が係留されている。進水式を控えたザフトの新造戦艦——“ミネルバ”である。

そのデザインは、これまでのザフト宇宙艦——たとえばナスカ級やエターナル級とは一線を画しており、どちらかと云えば、第二次“ヤキン・ドゥーエ”攻防戦を生き残った地球軍強襲艦アークエンジェル級を参考とした、直線系の意匠となっている。

その“ミネルバ”艦内は今、すっかりその話題で持ち切りなのであるが、軍工廠区に秘匿されていたセカンドステージシリーズ——何者かによつて奪取されたという“カオス”“ガイア”“アビス”——は何を隠そう、式典の後にはこの艦へと配属される予定だった。

現在、その艦長席に坐すのはザフトの白服を着用するタリア・グラデイス。その傍らには、黒服に身を包む副長のアーサー・トラインの姿がある。アーサーは管制席からマイクを伸ばしながら、事件の渦中に舞い降りた“インパルス”へと号を飛ばしていた。

「アトラ、目的は理解しているな!? 命令は捕獲だぞ!」

“インパルス”が戦闘に介入した様子を見て、彼なりに危惧を抱いたのだろう。対艦刀を容赦なく振るってみせたアトラの気配に、つまりは作戦内容の誤認を疑ったらしい。

「分かっているんだろうな!? あれは我が軍の——」
へわかつてます! でも、できるかどうかは分かりませんよーん

号を飛ばされた方のアトラは、昂然と抗議の声を挙げた。

これは演習ではないのだ。おおよそ手加減ができるような状況にはないのだと、そのくらいは理解して欲しいものだ。

「アーサー、今はそんなお喋りをしている場合じゃないでしょう!」

ぴしやりと発されたタリアの叱責に、云い返そうとしていたアーサーが言葉を飲み込む気配が伝わってくる。流石は艦長、とアトラも小さく感謝する。副長には悪いが、戦場における余計な雑音は、遮っておくに越したことはないものだ。

タリアはアーサーから通信回線を奪うような形で呼びかける。

「アトラ、現場の状況を教えて頂戴。状況を見る限り、奪取されたのは“カオス” “ガイア” “アビス”の三機だけ——と判断していいのね?」

その推察は、おおよそ正しい。刺客の手に堕ちた新型モビルスーツは、たしかにその三機だけだろう。でなければ、同じ格納庫の壁を突破してその姿を現した“アリアドネ

“が、これら三機と敵対し、交戦している意味が分からない。

——しかし、いったい誰が……？

正規の手続きを経て“アリアドネ”の専任パイロットに選ばれた者の安否も気になるところだ。そいつは間違いなく将来の“ミネルバ”を担うクルーであって、タリアは一縷の望みにつけ、通信回線を開く。その凜然とした態度のまま、堂々と“アリアドネ”に呼びかけていた。

「ZGMF-X69Sのパイロット！ 聞こえる？」

そのとき唾然としていたマユの耳に、凜とした女性の声が聞こえたという。

「こちらは“ミネルバ”艦長、タリア・グラデイスよ。——あなた誰？ ザフトの人間なの？」

↑——あつ

タリアの耳に返ってきたのは、少女の声だった。

——しかし、それは少なくとも、タリアが待ち望んでいた者の声ではない……。

つまるどころ、“アリアドネ”をはじめとする“カオス”“ガイア”“アビス”に搭乗する予定だった正規パイロット達は、機体奪取の際、何らかのアクシデントに巻き込まれたと考えるべきか。

——少なくとも、生きていることを期待するだけ無駄だろう。

冷たいようであるが、そう判じることにしたタリアの耳に、通信機からは自身を照会するよう呼びかける声が返された。

〈こちら、認識番号三〇〇一八、マユ・アスカです！〉

〈——マユ!?〉

タリアは管制席に坐す赤髪のおペレーター少女に照会を急かせた。

だが、その返答が寄越されると同時に、予期せぬ方向から驚きの声が挙がっていた。その発信源は“インパルス”で間違いなく、普段は物静かなアトラがここまでの反応を示すとは——“アリアドネ”に乗る少女とは、いったい何者なのだ？

〈マユ、そんなところにいたの！——“アリアドネ”の中に!?〉

〈う、うんっ！ピンチだったから……アトラのおかげで助かつちやっただ！〉

〈良かった……っ！でも、なんで私を置いて一人で行っちゃったの!?あれから、ずーっと探してたんだから！〉

〈ご、ごめんってば、アトラ〉

黄色い嬌声、かましい少女達の上ずった会話が通信機越しに耳に飛び込み、タリアの堪忍袋の緒も切れる。

——まったく、女の子というのは！

このようなことで怒りっぽくなる自分の年齢にも嫌気が差すが、タリアは元々、気が

長い方ではないのだ——

「貴方達、兵士なら状況報告を優先なさい！　ここは軍隊で、女学校じゃないのよ！」

——だから、飛ばした怒号と叱責は、元々の性分によるものだ。決して僻みではない、決して。

横面を殴りつけるような叱責に「へすいません！」とアトラとマユの謝罪が重なった。この通信が初対面のマユはともかくとして、タリアの叱責に対しては、アトラもまた頭が上がらないらしい。

「彼女は私の友人で、アカデミーからの同期生なんです！」

——だから、信頼できるということか？

その弁明で、タリアは思考を巡らせる。納得できる部分もあるが、腑に落ちない点もやはりあるものだ。それは「リアドネ」のコクピッドに坐すマユが、どこからどう見ても私服姿だということ。少なくとも、自軍の工廠ザフトに私服で入ってくる馬鹿はまずいない。だとすれば、彼女はどこから入り込み、どうやって「リアドネ」を敵の手から守ったのか。

——まったく！

思考を巡らせてみたが、考えるほどに嫌になる。私服の人間が簡単に立ち入れる程度の警備なら、敵国に送り込まれた作業者らがぞろぞろと工廠区に入り込むことなど、造

作もなかったということだ。

——兎にも角にも、"アリアドネ"のパイロットが、信頼の置ける人物であればいい……！

それが分かつただけでも、状況を把握したいタリアとしては、大きな前進と云えた。「いいわ。——兎に角、目的は可能な限りの捕獲よ。無理だと判つたら、三機の撃墜も許可します」

「えええっ?! 艦長!?!」

傍らでアーサーが驚愕の声を挙げる。本部の意向と違うとでも言いたげだが、所詮は現場にいない人間の指示だ。

ザフトの基礎は現場主義で、頭でつかちの命令に諾々と従う謂れはない。だからタリアは副長を無視して、"アリアドネ"のパイロットへと呼びかけた。

「マユ・アスカ! 貴方もパイロットなら、できる限りアトラを援護なさい! 貴方達が友人というならなおのこと、友人を助けるつもりでね」

へわ、分かりましたっ!

それきりタリアは通信を切る。ひとまず工廠区の方は、アトラとマユと呼ばれる少女達に任せることにしたのだ。

だが息をついている暇はない。彼女はすぐに呆然と抜けた顔をしている部下へ呼び

かける。

「アーサー、強奪部隊なら外に母艦がいるはずよ！ そちらはどうなっているの!？」

「はっ、はい！ すぐに確認します！」

三機の新型モビルスーツを奪った連中の背後に、何らかの組織があるならば——コロニーの外には、奪取した機体を運び去るための艦が用意されているはずだ。

それによって、アーサーは弾かれたように司令部への照会にかかった。叱つてやれば動きはいい青年なのだが、そこに至るまでの自主性と判断力に欠けるのは減点だ。

「軍港は既に壊滅状態——つて、えええつ!？」

連絡を受けたアーサーが、またも声を荒げる。だが、タリアもそれを聞いて思わず立ち上がっていた。その報告は、それだけの衝撃をもたらしたのだ。

——「アーモリーワン」周辺の哨戒に当たっていたナスカ級からの報告によれば、軍港に隣接する司令部でも、敵母艦の存在を予想して二隻のナスカ級を哨戒に出したというのだ。

だが、その哨戒艦の一隻「アルジャーノン」は、任務の最中、突如として何もない空間から現れた所属不明艦の主砲に撃ち抜かれて爆沈したという。これを受けて司令部は直ちに戦闘配備に移行し、港口からローラシア級を多数発進させようとした。だが、そのとき既に港口に潜伏していた「ダガーL」——これは間違いな

く地球軍の所有機だ——の奇襲を受け、大破させられた戦艦ごと、港は、ひいては司令部までもが、その誘爆の余波に巻き込まれ壊滅状態に陥ったという。

「何も無い場所から、いきなり? ——まさか戦艦に“ミラージコロイド”を……?」

「そんなつ! 条約違反じゃないですか!」

「……。コロニーに攻め入り、混乱に乗じて新型を奪取することが『合法』だとは、何処にも記されていないわ」

協定を一つ破るも、二つ破るも同じということか。

苦い顔でタリアは呟き、その意味を理解したのだろう……アーサーは恐々として、いつもより遥かに情けない顔になった。情報収集に当たっていた艦橋のスタッフ達が次々に報告を続ける。

「ダメです! 司令部からの応答、ありません」

「工廠内に有毒ガス発生! エスバスからロナール地区まで、レベル四の退避勧告が発令されています!」

思わず耳を塞ぎたくなるほどに気が滅入る報告の数々。

だが一軍の指揮官として、タリアは受けて立つに他はない。

「軍港を先に潰されたのでは、こちらも思うように追討戦力を出せない。……二手三手先を見た、敵ながら見事な作戦ね」

けれども、このときばかりは齒噛みしながら、敵に称賛の言葉を送るしかなかったという。

——これほどの作戦を立案できる宿将が、地球軍にいたるといふのか……？

寡兵を率いる一軍の将として、タリアもまたその伝説はよく耳にし、よく学んだものだ。先の大戦中、トップガンとして数々の戦功を上げ、世界樹攻防戦やグリマルデイ戦線ではネビュラ勲章を授かった凄腕の俊傑。前線を退いて以降は、指揮官として容赦なき作戦の数々を立案・遂行してきたという、ザフト創設きつて以来の名将。

——ラウ・ル・クルーゼ。

さながら敵の将は、そんな『英雄』の再来のようではないか。

特務艦「ガーディ・ルー」の艦橋にて、イアン・リーの発破の許、主砲が四条の火を放った。パツと目を射る一瞬の輝きと共に、二隻目のナスカ級「マルコーニ」が爆沈する。

「随分と温ぬるくなったものだな、ザフトも」

どこか郷愁感すら滲ませる口調で、仮面の『英雄』ネオ・ロアノークが、薄く笑って

吐き捨てた。

「所謂、平和ボケというやつですかね？」

その言葉には、傍らのイアンが頷いて同意を示す。

「無理もないか。人は戦争を忘れる。忘れたがる——それが人情というものかな？」

殊に、二年前はふたつの人類が絶滅を賭けて殺し合うところまでいったのだ。そこから宙に肉片と血痕が飛び散っていたような凄惨な日々など、真つ当な倫理観を持っている者達であれば意識的に忘れたがるのも無理もないことだろう。

——しかし、だからこそ。

ネオはせせら笑うように嘆じ、そうこうしている間にも、彼らの視線の先で交戦中の「ダガーL」が「ゲイツR」を落とした。その爆発が尾を引いて、艦橋窓からむつつりとしたイアンの顔を照らし返す。彼はそのまま時計を確認した後、尋ねる。

「——彼らは？ ……失敗ですかね？」

ロアノーク隊の副長が率いる、コロニーに潜入した別動隊のことであろう。予定ではもうじき合流を果たす計画になっている。

だが、それらはいまだに影も形も見えない。内部で何らかのイレギュラーが発生したと考えるべきか、そもそもイアンが口にした通りになったのか——

僅かに急いだ様子で、彼はみずからの上官に判断を煽った。

「港を潰したと云つても、あれは軍事工廠です、長引けばこちらが持ちませんよ」
「分かつている。だが、作戦とは勝算があつてこそ為すものさ。それがなければ、私とてこのような無茶を、彼女に任せたりはせんよ」

ネオは気を悪くした様子もないが、そのときイアンの懸念を裏付けるように管制官が報告を飛ばした。

「左舷後方より『ゲイツ』！ 新たに三！」

司令部、および軍港の機能を麻痺させることには成功した。たしかに新たに攻撃して来る艦影はないが、かといつてモビルスーツまで封じ込めることは不可能だ。

軍略的に考えれば、予定通り、時間通りに事が進まなかつた時点で次善策に切り替えるべきだったのだ。ただでさえ『アーモリー・ワン』は敵の軍事拠点であり、そのような場所への長居はそれだけでリスクを高める。その上、封鎖した港も予想より早く復旧しないとも限らない。

「『ダガーL』隊の活動時間エネルギも気になり始める刻限です。メートルを出撃だしますか？」
「アレは今回後方支援担当だ。戦闘行動は許可してない」

軍港を潰した結果、他の『プラント』から増援を寄越されても困る。そのため彼女は現在、通信妨害の任を請け負っていた。ネオは僅かに思慮した後、意味深長な様子で呟いた。

「これでも存外に肩入れしているような気もするが……まあ、いいだろう」

——肩入れ？

イアンは意味が分からず、怪訝な表情を返す。その物言いでは、この上官は最初から部下達の手助けを行う気がなかったかのようだ。

ときおり、そうなのだ。この黒い仮面を付けた男は、まるで第三者の視点から、そこそ神のような視点から物を観て、物を評すきらいがある。この作戦の行末を、ひいてはこの世界の均衡を、一種の命運のようなものに委ね、愉しんでいるかのような……。

呆然と見返すイアンに、ネオは滑らかな動作で立ち上がり、告げた。

「——私が出る」

突如として目の前に現れた「インパルス」を、ステイング達は哑然として見つめた。

「なんだ、こいつはッ!？」

気を吞まれている隙もなく、彼らはその機体との交戦状態に突入した。敵機が振るう長大なレーザー刀を喰らえばひとたまりもない。可能な限りの格闘戦は避けつつ、アウルとステイングは各個に迎撃に応じた。

「アレも新型か!? ——あんな機体の情報は!」

気を揉むステイングであったが、通信機からは別の方向を気にするアウルの声が飛んでくる。

「ステイング、そろそろお迎えの時間だ! ——バス行っちゃうぜ!」

目の前の敵との戦いに興じるのも部が悪いと判断したのか、アウルの頭からは、本来の任務内容がちらついて離れないらしい。

「どっかで切り上げないと!」

「わかってる! ——だが——」

奇襲をもつていつときは優勢に転がった形勢が、ここに来て覆され始めているのをステイングも肌身感じていた。

四機目^{アドネ}の新型を奪い損ねて以降、彼らにとつては良くないアクシデントが起り続けている。それを建て直すためには、作戦を本来の軌条に乗せなくてはならないのだが――

「どつちにしろ、こいつらを振り切らないと始まらねえだろう!」

ザフトの量産機の物量に取り囲まれ、今はステラの方も手が回らないはずだ。

共に白を基調とした「リアドネ」に「インパルス」——この二機だけは、自分とアウルで痛撃を与えなくてはならないのだ。

ステイングは叫び、アウルもまたその言に理があると判断したのでろう。むつつりとして押し黙り、そうして“カオス”と“アビス”は武器を構え直し、二対二——同系の四機の“G”が、戦場に対峙した。

数回に渡る剣戟を交えた中で、“インパルス”の中、アトラは確信していた。

——このパイロット達は、見かけほどに大した腕ではない……！

勿論、それは傲りでも、嘲りでもない。みずからの技量に対する真摯な理解に裏付けられた、アトラなりの状況整理である。

敵が大胆な作戦に臨んできたことから気を揉んでいたが、実際に刃を交えてみれば、伝わってくる感触はあるものだ。——私は、この程度に遅れは取らない。

「この強奪犯たち……！ マユが血相を変えて飛び出していったことと、何か関係があるの？」

アトラにとって最も気がかりなのは、繁華街における親友が取った不審な行動だった。まさか彼女が今回の事件に関与しているなどは更々考えてもいないが、いったい、マユに何があったのか？ 彼女は何を思っただけを飛び出し、どうして今は“アリア

ドネ”の中にいるのか？

タリアと同じく当然の論理をもって、アトラはマユを猜疑する。そうでなくとも、アトラは走り去ったマユを捜していたところに“ミネルバ”から緊急召集を受け、出撃を求められた身なのだ。今回の事情を知る権利があつた。

へたつ、たまたまだよ……！ たまたま人違いで人を追っかけてたら、たまたま此処に辿り着いて、それで——

一方で凶星を突かれた方のマユはドキリとして、非常に苦しそうにそんな言葉を返したという。

——云えなかつた。

憧れの人物かも知れない人が、件の“ガイア”に乗っているかも知れないなんてことは。親友にも。

「……………」

そんな気配では、明らかになかつたが。

しかしアトラは、この場においてはそれ以上を問わなかつた。

「兎に角、ここままでやられて、大人しく見逃すわけにはいかないよ！」
へわつ、わかっている！

「私が切り込む！ マユは援護をお願い！」

そこから二人の少女達は——“アリアドネ”と“インパルス”は、それは見事な連携を紡いだという。

流石は、アカデミーでルームメイト同士だっただけのことはある。演習を共に乗り越えた仲として、ふたりは阿吽の呼吸で協力し、場の鎮圧に当たった。

形勢は、アトラ達に優位があった。

敵の目的が新型の『奪取』にある以上、敵は可能な限り、組み合つての戦闘を望まない。い。

したがって、及び腰。どうしたって及び腰で戦闘行為を展開してくる敵に対し、アトラは容赦をしなかった。隙を見ては倏忽と相手の懐に飛び込み、自身のモジュールが最大限脅威を発揮できる格闘戦を最後まで強い続けたのだ。

アトラ・デンソンは、どちらかと云えば、理詰めで戦いを行う側の人間だ。

目の前の現実や困難を、直感や肉体的突破法で強引に押し潰していくストロングスタイルではない。地べたを這いずり回るように収獲した膨大な知識と、丁寧に積み上げた彼女なりの状況整理によって、可能な限り一歩ずつ、丹念に優位性を確保していくタイ

プ——より論理的ロジカルに重きを置いた、文学系の気質の持ち主なのだ。

だから彼女は、改めて敵に課せられた条件を整理する。

敵側が短期決戦を望むのは、軍工廠のシステム復旧を恐れてのことであり、なればなおのこと、アトラ達は時間稼ぎや足止め^{（一）}に徹するだけで構わない。相手が嫌がる戦闘を強い、相手の目的をよく把握して、その行動を逐一妨害するだけで良かった。

「もらつた!」

このとき「アリアドネ」と「インパルス」は連携し、もはや客観視する必要もなく、相手の二機を圧倒し始めていた。

組み合つての格闘戦を強要し、技量でもって純粹に相手を上回り、尻もちをついて倒れ込んだ「アビス」を前に、アトラは勝利を確信したという。

「!?!」

けれども、次の瞬間だった。

唐突に友軍のザフト機——「ガズウート」が、彼女の鼻先に降つて落ちてきたのは。
「な」

戦車のような機体が、天から落ちてくる——

重装甲たる「ソレ」を投げてこちらに寄越したのは、燃え立つ大地の上、そのツイーンアイを蒼く明滅させた「ガイア」だった。墜落してきた「ガズウート」のパイロット

は既に事切れているのか、呼びかけてみても応答はない。

「『ガイア』……ッ！」

これによつて『アビス』は命を拾い、次の瞬間、仲間を傷つけられた報復のように、最後の『ガイア』がいよいよ正面を切つて突撃してきた。その機影の背後には、それが今まで散々蹴散らしてきたであろうザフト機——だったモノ——が無数に打ち棄てられている。

「——！」

突撃してくる『ガイア』の両掌には、それぞれ発心したビームサーベルが握られている。本来の仕様なら左腕ラッチに装着されているビームシールドは取り外され、今はすっかり背部マウントラッチの飾り物だ。

二刀流。それは防御面の一切を放棄したと宣言するに等しい、じつに攻撃的——野性的な戦闘スタイルの顕れだ。おおよそ、常人の思いつきで実現できるものではない。

だからアトラはみずからも我流とし、対艦刀を柄アンビテクストラス・モードで連結させた両刀形態としながら、堂々と正面から迎え撃つ。二機はどちらからともなく刃をもって激突し、その剣戟を交わし合つた。超高速の格闘戦が繰り広げられ、凄まじい火花が打ち合つてはパツと散る。

（——強い！）

アトラは舌を巻く。同伴の二機カオスやアビスとは、やはり比べ物にならない技量だ。
「でも、貰った!」

アトラは己が、後れを取っているとは感じなかった。相手の間隙を縫うように、ビームの両刀を勢いよく降り下ろす。

——次の瞬間、ありえない方向に“ガイア”は飛んだ。

敵の機影がすつと視界からいなくなり……いや、すれ違うようにして跳躍していたのだ。アトラが反応した時には、振り下げた対艦刀は半ばから叩き折られている。

「!?!」

“ガイア”はその変形機構を利用しながら、すれ違いざまに背翼グリフオンのビームブレイドを使用したのだ。ビームの刃先エッジを180°回転させ、刃が反転した瞬間にタイミングを合わせ、叩き下ろされた“エクスカリバー”の峰——実体剣の部分——へするりとビームの刃を奔らせていた。

——あり得ない! アトラは愕然とする。

“ガイア”特有の変形構造への理解度も然ることながら、モビルスーツの体の一部に備え付けられたビームエッジを、こうも洗練された形で使いこなす人間がいるなんて! (しまった!)

感嘆に気を抜かれ、アトラが見せた一瞬の隙。息もつかせぬ間に背後で敵の変形は終

わっている。棒立ちになった「インパルス」の背部を、獣型の「ガイア」は馬がするようには後ろ脚で蹴り飛ばした。吹き飛ばされた「インパルス」は受け身も取れずに地面へ転がされ、衝撃に揺れたアトラが振り返った先、「アリアドネ」もまた同様に痛撃を被って弾き飛ばされたのが目に入った。

そうして一矢を報いた後、「ガイア」は再び人型に変形。「カオス」と「アビス」を率いて上空へ飛び立っていく。このまま逃げるつもりか——!?

「あれが、あの魔女の人か……?」

その毒づきは、マユには聞かせなかつた。

またも刃を交えて、アトラは確信したという。

「あれだけは、強さの次元が違い過ぎる」

だが、アトラの中に畏怖はない。彼女は魔女に怯える村人になるつもりはない。

——みずからの搭乗機のりものに、理解があるのはお互い様だ。

すぐさま顔を上げ、彼女は仕切り直すようにみずからの母艦へと呼び掛けた。

「「ミネルバ」! フォースシルエットを! ——このまま追います!」

損傷した装備は、取り換えてしまえばいい。

アトラの愛機は——「インパルス」は、その戦法を可能にする。

高機動戦用のフォースシルエットは、現在のソードシルエット装着時と同じ仕組みで“インパルス”の背面にマウントされる。それ自体で航行能力を搭載したモジュールが“ミネルバ”から射出されると、これもまたドラグーン・システムの応用によって“インパルス”めがけたドッキング作業を開始した。

“インパルス”は特殊な装甲を採用し、装着する背面モジュールによって機体の色に変化が現れる特徴を持っている。この変色現象は、装着するモジュールごとに消費電力が異なるためで、電力調整の最適化が行われた結果として、フォースシルエットを装着した“インパルス”は青、赤、白へと変貌を遂げるのだ。赤い四枚の翼を広げたその姿は、前大戦をして高機動戦用^{エィル}“ストライク”のようでもある。

「逃がすか！」

退却を狙って上空に逃げていく三機を、アトラはすぐさま追撃に入った。痛撃を喰らったことで出遅れたが、その遅れを取り戻そうとするように、マユの“アリアドネ”もバーニアを全開にして後続している。

と、合流を果たしたのは“アリアドネ”だけではなかった。

航路の途中で友軍機から通信が入り、横合いから、それぞれ白と赤の“ザク”が編隊

に加わる。アトラはそれを認め、思わず頬を緩めた。いずれも彼女の同僚で、マユもよく知るアカデミーの同期生だ。白い“ザクフアントム”はレイ・ザ・バレルの、赤い“ザクウォーリア”はルナマリア・ホークの専用機だ。

「レイ！ ルナマリア！」

切れ者のレイは、いつものように無駄のない動きでビーム突撃銃をコントロールし、一方のルナマリアは、威勢のいい啖呵を切りながらビーム突撃銃を撃ちまくる。彼らもまた、この“アーモリー・ワン”に混沌を齎した敵に対しては怒り、相当に熱くなっているようだった。

これを合わせて、計四機から放たれるビームに、しかし、奪取された三機は翻弄されることはなかった。最後尾の“ガイア”が殿を務める形で“カオス”と“アビス”を先行させ、当の二機は、持てる最大火力を収斂させ、高々度にある“プラント”の自己修復ガラスをぶち抜いてみせる。融け落ちた内壁は宇宙空間への玄関と化し、彼らは躊躇いなく漆黒の宇宙へと逃げていく。

↑——待ってっ！

宇宙空間は、深く、暗い。一度でも見失ってしまえば、その後を追うことは難しい。であるからか、このとき“アリアドネ”のマユが声を荒げるのをレイは聞き留めた。それは敵に制止を求める声に聞こえなくもなかったが……いずれにしても、待てと云わ

れて待つ敵はいないだろう。

本音を云えば、あれらに待つて欲しかったのは、レイとて同様なのだ。

——この微妙な情勢下に、なぜ敵はこのような挑発行為を……？

思慮に耽る時間もなく、たちまちに「アリアドネ」は、三機を追つて宇宙へ飛び出していく。感化されたように「インパルス」も後続し、不用意だ、とレイが注意を飛ばそうとしたそのとき、奇妙な感覚が彼の五感を襲つた。

「——っ?」

まるで全方位から、監視されているかのような——？

己以上に、己のことをよく知る存在。それをもつて、みずからを丸裸にされるかのような不快感がレイの全身を——細胞の全てを蝕む。

「なんだっ……!?!」

不可思議な圧迫感に押し包まれた、次の瞬間、へあぶないっ!〜とアトラが叫ぶのが聞こえた。漆黒の宇宙へ勇み出た「アリアドネ」の死角から、唐突にビーム砲が放たれたのだ。

完璧にマユの虚を突いたその一射は、しかし、すかさず射線に割つて入つた「インパルス」のシールドによつて弾き返される。だが、間髪おかず違う角度から更にビームが撃ち込まれ、こちらは「アリアドネ」の右肩部を掠めるだけに終わった。仮にアトラが

カバーに入っていないければ、*“アリアドネ”*は確実に撃破されていただろう。

↑——どこから!?

これにはルナマリアも戸惑っているようだ。ぱつと視線を巡らせ索敵を行うが、辺りに敵影、または砲台らしきものの影はない。

だが、レイには既に、その攻撃の正体が掴めていた。

彼はすぐさま赤い*“ザク”*のフォローに回り、一方で*“アリアドネ”*のカバーはアトラに任せていた。警戒を色濃くするレイの視界の片隅に、やはり、特殊兵装らしきもの取り巻いた一陣の機影が映る。雪のような白銀に彩られた、矢のような形状の機体——
 〈モビルアーマー!〉

アトラもやはり気付いたらしい。

前時代を象徴する旧式的な響きを持った言葉だが、現れた*“ソレ”*はその限りではない。四基の特殊兵装が機体を取り巻き、そのポッドは展開すると独自に動き回り、縦横無尽、矢継ぎ早に無数のビームを放つ。

「孤立するな! 連携して応戦——後ろにも目をつけるんだ!」
 柄にもなく、レイが叫んだ。

この敵を前に孤立すれば終わる——五感よりも深いところで、直感がそう告げていたから。

「——この敵は、普通とは違う！」

TS—MA4F “エグザス”——地球連合が開発したモビルアーマーにして、前大戦時に『エンデュミオンの鷹』が操縦した、伝説の“メビウス・ゼロ”の後継機。

搭乗者のパーソナルカラーであるシルバークレーに塗装が施された本機は、鮫のような機体下部にリニアガンを装備し、兵装ポッドもビーム兵器に取り換えられるなど、前身機よりも全体的な攻撃力強化が施されている。

「さあ——お手通り拝見といこうか、ザフトの後輩達よ」

飛来する機影と、その搭乗者——

仮面の『英雄』ネオ・ロアノークが、酷く愉快げに吐き捨てた。

『黒い守護神』

“アーモリー・ワン”から程近い宙域、小惑星の影に、とある一機のモビルスーツが待機していた。それは、不吉に黒光りする装甲を持つ、赤黒い面妖を浮かべた機体だった。

全身を墨汁で塗り潰されたように黒々しく、禍々しい風采。嚇々と照る紅眼を覗かせ、その怒りの色は、先の大戦中に名を馳せた“亡霊”の眼の色とよく似ていた。

紅蓮に鈍く輝く六^{セクスタブルアンテナ}本角は、まるで怒り猛る獅子^{ライオン}が蓄えた鬣^{たてがみ}のよう。あまねく“G”

と呼称される機体の顎部には、示し合わせたように突起物があるものだが——その突起は独特の二又で、やはりこれも、長く鋭い蛮獣の歯牙のようだ。臀部にはひとつの翼——^{サメ}鯨の背鰭^{せのれ}のようなウイングが伸長し、軟体な尻尾——いや、幾つもの体節を持つ^{サンリ}蠍の終体のようですらある。

さまざまな獣の外見を無理に融合させたような不気味な風采は、^{アンナチュラル}不自然の中に生み出された或る種の芸術、^{アーティ}摂理^{テイ}に抗^フった人造の遺物^トそのものといった邪悪な雰囲気^グを全身から醸し出していた。

その機体の名は、G A T-X 4 4 4 E “フオボスIIレムレース” ——
 アクタイオン・プロジェクト——

アクタイオン・インダストリー社をリーダーカンパニーとする、エースパイロットへ
 供与する高性能モビルスーツ『再生』計画である。その一環として復元・カスタマイズ
 された本機は、要請元の“フアントムペイン”が保有する“レムレース”の後継機だっ
 た。

しかしながら、その機体には先代機のような白兵戦用の基本武装は携行されてはいな
 い。

——戦闘用の機種ではないのか？

たしかに“レムレース”は、コンピュータウイルスの発心装置を搭載し、白兵戦だ
 けでなく、電撃戦や情報戦にも精通する多機能性を有していたが。

——いや、違う。

後継機たる“ソレ”は、はつきり云えば迫撃型決戦用MSだ。

運動性の確保、すなわち軽量化のために手持ち武器を携行しないだけで、その両前腕
 部には、独自の構造をした対ビームシールドが二基装填されている。

そしてその“盾”こそが——本機が誇る、最大の武装でもある。

攻盾複合システム“メフェイストフェレス”——

光を拒む者の意で、前身たる「トリケロス」改をさらに発展させた中型の剛銃だ。

シールド先端にビーム砲としても使用可能なビームスパイクを二門、後端に本体のブースターを兼任する三基のスラスターを内蔵し、防盾独自の自律航行能力と、有線式の遠隔誘導機能を搭載する。こうした二挺の攻盾を運用することで、本機は脅威的な戦闘力を発揮する蛮獣と化す。

——だが、それは。

その特徴は、先の大戦で活躍した「レムレース」に似ているというよりは、むしろ――

メーテル・リンクは副長から専用機を借り受け、現在は小惑星の影から「アーモリー・ワン」帯宇宙域にジャミング波を送信しているところだった。

待機していた「フォボス・レムレース」——以降は「レムレース」と呼称する——の臀部から伸びた終体には、やはりコンピュータ・ウイルスの発心装置が内蔵されていたのだ。

これはナイトメアシステムと呼ばれ、これが広範囲に散布するウイルスによって周囲

の通信状況を遮断。レーダーの機能を著しく低下させた上で、メーテルは「プラント」内部に潜入した別動隊や「ガーティ・ルー」も含めた全体のバックアップを行っていたのだ。

「ステラお姉ちゃん……」

そのコクピッドの中、メーテルは呟く。

己がやるべきことはやった。ただ隠れながらウイルスをばら蒔くだけの簡単な持ち場だったわけであるが、それでも彼女が託された仕事だった。

やり切ることができたメーテルは嬉しかったが、定刻になっても仲間達が帰ってこないから、彼女は心配そうな面持ちで待っていた。

「……？」

段取りされていた「プラント」の様子を伺ううち、その一角からビームが放たれた。

外壁に穿たれた穴から、緑と青のモビルスーツが飛び出し、ついで黒い一機が連なるように続いている。奪取する予定にあつた新型モビルスーツ——みんなだ！

「わあ……っ！」

ぱつと笑顔を浮かべたメーテルだが、見るや、予定にないモビルスーツ隊も同様に穴から飛び出してきた。ザフトの追撃部隊らしい。

義務感に駆られて飛び込もうとしたところを、後方から飛来したモビルアーマーに制

される——ネオだ。

「メーテル、彼らと合流し、きみは“ガーディ・ルー”へ帰投しろ」

「う、うんっ……!」

「へステラから、キミには大きな手土産がある、ということだしな——」

——てみやげ？

きよんとするメーテルには、何のことは分からない。

幼子を愛でるような声、意味深長に茶化しながらネオが云うが、それきり彼の“エグザス”はザフトのモビルスーツ部隊の方へ突っ込んでいった。

「……よしっ」

——ぜんぶ、云われたとおりにしなきゃ!

メーテルは慣れない機体を翻すと、そのまま指定された合流地点へ向かった。

可能な限り、急いだ方が良いのだろうか？ そんなことを不安に思ったが、かと云って機体を最大加速させるわけにもいかない。まるで小さな洋人形のようなメーテルの体は、このモビルスーツの怪物的な加速とGに、耐えられるようにはできていないのだから。

「あいつら！ 何を勝手な！」

“ミネルバ”艦内から戦闘の様子を見ていたアーサーが、またも声を挙げた。状況制圧に遣わせたモビルスーツが、四機も揃って“プラント”の外へ飛び出していったのだ。

——まだ、敵母艦の位置も割り出していないというのに！

アーサーは頭を抱える。先頭を切ったのは“アリアドネ”か？ あれが我を失って敵を追いかけたから、全員がなし崩し的にその後が続いてしまったのだ。

——そもそも“アリアドネ”のパイロットは、いったい何者なんだ？

マユ・アスカ——

そう名乗る私服姿の少女だったが、正式に“ミネルバ”に配属された者の中に、その名は記されていないなかった。アーサーはオペレーター少女、メイリン・ホークに呼びかける。

「メイリン！ たしか、キミも今期のアカデミー卒業生だったな！ ——あのマユ・アスカについて、何か知っているのか？」

「え？ あ、はい。たしかにアカデミーでは一緒にしたけど」

「なら話は早いな！ あのマユ・アスカは、いったい、どこの隊の所属なんだ？」

「知りませんよー。アカデミー卒業後の進路は、みんなバラバラなんですからー」

メイリンからはやる気のない返事が返ってきた。

タリアが聞き咎めるようにして口を挟む。

「アーサー、それを知って何をしようというの?」

「当然、先方に苦言のひとつでも呈するんですよ!」

アーサーは憤然として云った。

マユが最新鋭の“アリアドネ”は守ったのは大きな手柄だ。だが、それでも彼女は“アリアドネ”の正規パイロットではないのだ。現在のように軍の重要機密を我が物然として乗り回す道理はなく、軍人として、もつと他に対応があつたはずだとアーサーは考える。

「つまりは第一に“ミネルバ”へ機体を返上し、レイのような然るべきパイロットへ譲渡するだとか

——」

「今は緊急事態エマージェンシーなのよ、そうそう形式通りに事が運ぶものですか!」

馬鹿を云わないで頂戴、とタリアに呆れながら一蹴され、アーサーはまたも口を噤んだ。

たとえ野戦任官めいていたとしても、現場対応を求められる戦場において、アドリブというのは大切だ。序列や規則に従って物事を進めたいというアーサーの心情も慮る

ことはできるが、ザフトの将兵としては、もう少し臨機応変な判断を下せないものか。「……でも、たしかに彼女の配属先は気になるところね。私達も、知っておくべきかもしれないわ」

タリアはしばし考えた後、そのように小さく漏らす。

勿論、それはアーサーの考えに乗ったからではない。このままいけば、凶らずも「ミネルバ」はマユ・アスカの命を預かる立場になりそうだからだ。

「メイリン、私からもお願い。マユ・アスカの所属部隊についての照会と……それから『彼女の身柄を一旦こちらで預からせてもらう』との入電も」

「あ、はい。——それが、こちらの方でも調べたんですが……彼女の配属先はトライスター隊、およびナスカ級戦艦「アルジャーノン」となっています」

メイリンが素早く情報を引き出し、それを聞き届けたアーサーの愕然とした。

件の「アルジャーノン」とは、先刻「所属不明艦」に撃ち抜かれて爆沈したとの報告の上があった戦艦なのだ。つまりはマユ・アスカの新兵としての配属先は、現時点でこの世から消失している。

「やれやれ……」

——前途多難ね。

そのときタリアが漏らした眩きは、ザフトの今後を憂いてのものか、それとも、少女個人の運命に向けられたものだったのか。

「＼アリアドネ＼——それに、＼インパルス＼まで、失うわけにはいかないわ」

おおよそ轟沈した＼アルジャーノン＼への手向けにもならないが、その新隊員だったというマユ・アスカまで、その後追いをさせるわけにはいくまい。

そうでなくとも、以上の二機は奪取された機体群と同じザフトの軍事機密だ。港を潰され他艦の増援が見込めない限り、自分達が援護に向かうしかない。

「——＼ミネルバ＼ 発進させます！」

決断も素早く、タリアは毅然として命じた。

進水式を前にして、女神の名を持つ巨艦は出航のときを迎えたのだ。

〈本艦はこれより発進します！ 各員、所定の作業に就いてください——〉

それから少女のアナウンスに周囲がざわめき、艦内の通路でもまたどよめきの声があった。

その例に漏れず、随員を伴った一人の男性が、感嘆したように声を挙げた。

「出撃？———そうか、タリア」

三十代くらいの黒い長髪の男性。白い端正な顔つきに、目は鋭い刃物のように切れ長で、知的な光を宿している。柔和な顔立ちだが、強い存在感を放つその男性——

名をギルバート・デュランダル——現在における、プラント最高評議会議長だ。

彼は進水式と軍事式典に出席するため、当の「アーモリー・ワン」を訪問中だった。式典には各方面の評議員や政府高官のみならず、他国からの誘致した名士や政治家なども出席する予定で、彼はその上で各所との会談の機会を設けるために、此度は軍工廠を訪れていたのだ。そこで今回のアクシデントに巻き込まれ、シエルターに避難するようとの随員からの勧めを蹴って「ミネルバ」にやって来た。

そして現在は、知己であるタリア・グラデイスが指揮を執る艦橋へと向かつてる最中だ。

——これから、始まるのだな。

どこか含みのある表情で、デュランダルはひとえに艦橋を目指した。

運命の歯車が動き出す——

そのことを胸に、強く実感しながら。

白いモバイルアーマーとの会敵戦は、拍子抜けするくらい早々に切り上げられた。

その理由は間違いなく、進水式前の「ミネルバ」が、その予定を切り上げてまで出航してきたことにあった。華々しく星の海を漕いでくるスチールグレーの艦影を認め

途端、敵のモビルアーマーは部が悪いと判断したのか、その機種を転じて撤退してしまつた。

——いや、あるいは端から戦闘するつもりがなかったのかもしれない。

無瑕疵に輝く「ザク」の中、若々と鋭気を養いながら、レイ・ザ・バレルはそう感じていた。

いくらドラグーンに似た「ガンバレル」を四基装備するモビルアーマーといつても、流石に四対一では分が悪い。いや、仮にもこちらが雑兵なら問題にならないが、レイもアトラも、どちらも全方位同時攻撃に対応できる能力を持ったパイロットだった。

実際、敵が撤退を判断した頃には、敵が保有する「ガンバレル」は残り二基となつていた。レイとアトラの二人が、それぞれ交戦中に一基ずつを撃ち落としたのだ。

——だから敵は、要するに潮時というものを知っていたのだろう。

——しかし……。

交戦中、レイが何度も抱えた違和感は何だったのだろう——？

レイの肉体を構築する細胞や遺伝子、そのすべてに直接的に響きかけてくるような戦慄と不快感。まるで以前から「彼」のことを知っているかのような……

——いや、それだけではない。

最も強烈な違和感とは、敵が戦闘中、たびたび見せた不用意な「隙」のことだった。

敵は凄腕のエースパイロットだ。おおよそ特別と云われる空間認識能力を、非常に高度なレベルで駆使できる神懸かり的技量。その素性は前大戦の生き残りに違いなく、戦場を何度も潜り抜けてきた歴戦の猛者が、しかし、ふとしたときに無防備な隙を晒すことがあった。

その原因は何だったのか。

集中心力、あるいは持久力の欠乏。それはパイロットの失調によるものか？ 天才的なパフォーマンズで知られた世界的アスリートが、加齢や病気によるスタミナ不足に悩まされているときのような変調が、そこにはあったように感じられたのだ。

「……………」

結論を出すには微妙すぎるレイの思考を中断させたのは、通信機から聞こえてきたマユの声だった。

「レイ、ありがとう。また、何度も助けられちゃった」

先の戦闘で、レイは何度もマユを庇ったのだ。

実際はアカデミー時代から面倒を見ていた間柄であるわけだが、繋がれた通信に反応し、レイは普段の様子からは外れた、柔らかな口調で返していた。

「構わない。……久しぶりだな、マユ・アスカ」

アカデミーから親交があり、その一言が、彼らの関係性を物語る。

すると、ルナマリアの赤い“ザク”もまた通信に入ってきた。もともと利発な性格のルナマリアは、年上ということもあって、アカデミーにおけるマユの姉貴分のような存在だ。

「けどホント、びつくりしちゃったわよ！ まさか貴方が、その機体に乗ってるとはねー」

ZGMF-X69S “アリアドネ”――

セカンドステージシリーズの連携と統率を指示すべく、開発されたという指揮官機だ。

大型センサーユニット搭載した頭部は、“ジャステイス”に酷似しているが、背部の複合可変翼は“フリーダム”を参考にした設計になっている。しかしながら、白銀の守護天使を連想させる全体的に毒のないカラーリング・デザインは“クレイドル”の後継を思わせるなど、先の大戦で活躍したファーストステージシリーズの外見や特性を折衷的に採り入れた機体でもある。

ルナマリアは興味津々といった表情で訊ねる。

「どういう経緯でそーなったのかは後で聞けけど、新型に乗ってみた感想はどう？」

「やっぱり“ザク”とは違う？」

「うん、“ザク”とはだいたい違うよー！」

マユはぱつとして答えた。

“アリアドネ”は連携部隊の後衛に据わることが前提となっていて、宇宙空間での防衛や遊撃に本領を置く中距離戦闘用の万能機となっている。

接近してくる敵に対しては可変延伸式のMA—M80 “デファイアント”ビームジャベリンで距離を稼ぎつつ、同シリーズ共通規格のMA—BAR72ビームライフルで迎撃を行う。また背部コネクタは“インパルス”のシルエットと似て非なる『ウイザード・システム』を採用し——これは“ザクウオーリア”や“バクウハウンド”といったザフト現行の量産機とも互換性がある——現在は高出力のテレスコピックバルル延伸式ビーム砲と、MMI—M826 “ハイドラ”ガトリングビーム砲を搭載した専用独自の遊撃戦装備を装着していた。

ここからは余談であるが、向かい合った赤い“ザク”は長砲身のM1500 “オルトロス”高エネルギー長射程ビーム砲を積んだ砲戦装備で、レイの白い“ザク”は大型のブースターとミサイルポッドの高機動戦装備である。

「まず、機体がすごく軽いの！ 柔軟な動きができるし、操縦系も、ザフト仕様のモノを採用している筈なんだけど……なんていうか、簡単なんだ！」

「簡単……？」

「誰にでも操縦しやすいつていうか、良心的なんだよね。だから私も戸惑わずに扱えた

ところがあって——もしかしてセカンドステージシリーズって、どれもそういう設計なのかな……?」

天に問うようにマユが呟き、聞き咎めたのはアトラだった。

「それはきつと——“アリアドネ”独自の仕様だと思う」

彼女は“インパルス”の専属パイロットとして、他者よりも同シリーズを観察してきた者として解答する。

「他の機体はどれも可変機構を搭載してるから、“アリアドネ”ほど操作系を簡略化することはできないし——“インパルス”に関しては……自分で云うのもなんだけど、合
体だとか分離だとか換装だとか、機能が色々ありすぎて滅茶苦茶だからね」

同シリーズ内における特色として、何を隠そう“アリアドネ”は人型機動兵器として極めて^{スタンダード}な設計になっている点が挙げられる。同型機が誇る多彩さや多様さに逆行するように、その機体は変形機構も持たなければ、複雑怪奇な合体・分離・換装機構も積んでいない。

——悪く云えば地味であり、良く云えばファーストステージシリーズの正当な系譜だ。

中でも『原点回帰』をコンセプトに仕上げられた“アリアドネ”は、実際にマユが云ったような操縦系の簡略化、そして機体性能の普遍化に重きを置いているのだ。他の同型

機と明確に毛色が異なるのは、開発主査を務めた人間が違うからだが——

『誰にでも扱える高性能MS』——それが、*“アリアドネ”*の開発主査が求めた意向コンセプトだつて聞いているよ」

アトラが説き明かし、マユは感嘆して頷いた。

戦後に締結されたユニウス条約によつて、各国が保有できるモビルスーツの総数には厳しい制限が設けられた。この条約との兼ね合いのために、各陣営は戦後にかけて『一騎当千』の強力なモビルスーツ開発に勤しんだはずで、モビルスーツ単体の高性能化——そしてそれが伴う否応なき操縦系の煩雑化——を首肯する昨今において、この潮流に真つ向から喧嘩を売る*“アリアドネ”*の設計思想は、いつそ挑戦的とすら云えるだろう。

「雑談はそこまでだ」

話を切り上げるように、レイが云った。

見れば、出航してきた*“ミネルバ”*から信号弾が打ち上げられている。
ルナマリアが付け足すように続いた。

「——*“ミネルバ”*から通信が入ったわ。マユ、貴方も機体アリアドネを持って着艦するように、つて」

「えっ……?」

「なんとなく、そうなる気はしてたけど……まあ、乗りかかった舟、つてことじゃない？」
その意味ありげな言葉に、マユはやはり困惑した。

自分には「アルジャーノン」という正式な配属先があり、つい先日、艦長や隊の先輩方に着任の挨拶を済ませたばかりなのだ。それに背を向け、ひとりだけ新造戦艦に着艦するというのは――？

「歓迎するよ、マユ」

云われ、マユはそれを発したみずからの親友へ目を向けた。

メインカメラのモニター越しに、並び立つ「インパルス」のツインアイが、歓迎の光を明滅させている。

「グラデイス隊——「ミネルバ」へようこそ」

云いながらも、アトラは肩を竦めている。

それは前途多難としか云いようのない、マユ・アスカの新たな赴任先だった。

出陣した「ミネルバ」はモビルスーツを回収し、敵母艦と思しき「ガーティ・ルー」の追跡に入った。

追われる立場となった「ガーティ・ルー」は機関最大で宙域を離脱し、それと時を同じくして、格納庫に「エグザス」が着艦した。そのホワイトグレーの機体がセーフティネットに突っ込んだのを、ちようど「アビス」から降りていたアウルが目留めた。

「えっ、ネオが出撃したのかよ!？」

心底意外そうな反応を寄越したのは、これまでアウルやステイングは、ネオがパイロットとして戦場に出たのを見たことがなかったからだ。

「……マジで?」

「なるほど、道理で敵部隊ヤローどもの追手がなかったわけだ……」

ステイングは納得したりといった様子だ。宇宙に出た途端に追撃部隊が来なくなつたのは、どうにも我々が隊長が囹役を買って出てくれたかららしい。

——肝心なときこそ、出張ってくれる隊長様か。

ステイングは好感を持つ。そのような上官の方が、よっぽど頼りになるというものだ。少なくとも、安全圏から偉そうに指示するだけで、自分では何もできない無能な指揮官よりは。

「——なあ。ところで、ネオの姿を見たか?」

「いいや? まだ機体あの中だ。何やってんだよ、ネオのやつ」

セーフティネットに突っ込んだまま、「エグザス」の中から人が出てくる気配はな

い。中で艦長イアンと連絡を取り合っているにしても、直接ブリッジに上がった方が手取り早いというものだろう。——まさかとは思うが、どこか怪我でもしたのか？

アウルが動こうとした矢先、着艦するなり何処かへ姿を晦ましていたステラが、視界を横切って「エグザス」の方に降りていくのが見えた。その掌中には錠剤箱ピルケースのようなものが握られている。

それを認めたのか、今まで微動だにしていなかった「エグザス」のハッチが突然に開き、聞き間違いだと思うが、中から獣のように早まった人間の息遣いが聞こえた。だが、ステラが錠剤をもってコクピッドに入っていくなり、その慟哭も徐々に鎮まっていく。

しばらく経ってから、ようやくネオが「エグザス」から姿を現した。いつものように端然とした佇まい——良かった、いつものネオだ。

「——ネオっ！」

同じく着艦していたメーテルが、機体から降りてネオの胸に飛び込んだ。

黒い仮面が少女を見下ろす。その口元には悠然としたいつもの笑みが浮かんでいる。

「初めての仕事はどうだったかな、メーテル」

「うん、ちゃんとできた！ 云われたとおりに、やれたよ！」

褒めてといわんばかりにネオにくつつくメーテルであったが、ネオの方が一步身を引くと、メーテルは次にステラの胸に飛び込んだ。受け止めた慣性で、ステラの身体が宙

に浮いた。

ふわふわと漂い始めた少女達を見上げながら、ネオはそれぞれに降りてきたアウルとステイングの姿を認める。隊員が揃い、彼は仕切り直すように云った。

「みな、ゴ苦勞だった。色々とアクションはあつたがね、どうやら作戦は成功——と
いったところかな？」

仮面が見つめる先には、ディアクティブモード暗灰色に染まつた三機の強奪機体がある——
「カオス」に「ガイア」それに「アビス」だ

例のユニウス条約の縛りに則って、モビルスーツ一機に対して複数機分の戦闘力を持たせる試み。これによって開発された三機は、じつに強力なモビルスーツだ。現在は「ガーティ・ルー」のメカニクスらが総出で情報解析に当たっているが、それさえ終わってしまえば、後はそれがそのまま地球軍の戦力に加わるも同然だ。これらを奪取することでザフトの——「プラント」の力を削ぐ。それがネオの今回の目論見だった。

「でも、まだ追撃があると思う」

云ったのはステラだ。

結っていた金の長髪をほだきながら、その眸は真つすぐにネオを見つめている。

勘というほどでもないが、要するに彼女もまた軍人だ。その判断には、ネオも同意する。

「そうだな。ザフトも、まだそこまで寝ぼけてはいるまい」

「追ってくるとしたら、あの例の新型艦かよ?」

アウルが訊ね、ネオは頷く。

「港を潰されたことで、他に艦がないと危機感を持ったのだろう。まさか進水式前の船出になるとは——私もそうだが、彼らも想像していなかったと思うがね」

「なら、あのヘンな『合体ヤロー』も一緒かな?」

「ああ。あの白い『取りこぼし』もな……」

アウルが嘲るように云い、ステイングははまだ、自分達が仕留めた損ねた四機目の白い機体に執心だ。メーテルは話についていけないのか、周りを見ておろおろとしている。

「なににせよ、このまま大人しく見過ごしてくれるとは思わんよ」

「……………」

「期待の新造艦『ミネルバ』——遅かれ早かれ、我々がまた相まみえることが判り切っている艦だ。であれば、早い内に潰してしまいうのも得策かもしれない」

含んだ様子で飄々と告げられたそれは、要するに敵艦の撃墜許可——

——というよりも、それを含めた、敵部隊の殲滅を許可する命令だった。

「総力戦といこうか」

冷酷な笑み、常軌を逸した歪みを口元に湛えながら、ネオはそのように形容する。現在の「ガーティ・ルー」が積載する戦力と、追撃の「ミネルバ」が保有する戦力、その全てでもって、早急に決着をつけてしまおうという算段だ。

指示を聞き取ったアウルとステイングが、それぞれに嬉しそうな顔を浮かべる。また強力なモビルスーツに乗って、戦えることにわくわくしているのだろう。

そんな彼らを尻目に、ネオはおもむろに、みずからの副官を見つめた。ロアノーク隊の中で、最たる強さを誇る少女を。

「——できるかな？」

試すようにネオが問い、すみれ色の眸を持つ少女は、

「ネオが、そう望むなら」

意志なき機械人形のように、無機質な仮面を見据え、答えた。

そうして「ガーティ・ルー」は目指していたポイントに到達した。デブリベルト――

宇宙開発が始まって以来、廃棄された宇宙ゴミや、小惑星の類が地球の引力に惹かれて辿り着く場所だ。

艦窓からは、彼らにとって母なる大地の地球も見える。パイロット・スーツを着用し、みずからの機体のコクピッドで待機していたステラの耳に、同じく待機中の隊員達の談話が聞こえてきた。

へまさか、^{デブリベルト}宇宙塵帯での戦闘になるとはね

やれやれと云った風にアウルが呟く。

ステイングが付け足すように云った。

へ電波状況も悪くなる。つまりはオレ達も、距離を開けば互いに通信も取り合うのも難しくなるってことだ——大丈夫か？　メーテル

へう、うんっ……いっ

緊張に震えたメーテルの声が聞こえ、ステラはわずかに苦笑したという。

メーテルは現在、機体を乗り換えたステラの代わりに“ガイア”を任されることになったのだ。今はそのコクピッドの中で、期待と不安の板挟みになっているところだ。オープンにされている通信回線の中では、アウルがいきり立っている。

へおいメーテル！　せつかくステラが奪^とってきた機体、壊すんじゃないぞー！

へだっ、だいじょうぶ！　お姉ちゃんがくれた機体、ぜつたいに、指一本も、触れさせな

いからー！

「いや、誰もそこまでは求めてねーけど……」

会話を苦笑しながら、ステイングも入ってくる。

「何かあつても庇つてやれないぜ、つて、アウルはそう云いたいんだらう？」

「ちげーよ！ こいつはどん臭いんだから、足を引つ張るな、つて云おうと思つてき！」

「アウル、何かあつても庇つてやれないからね」

「へう、うるせえぞステラ!? こっちは大丈夫だ！」

「どうかな」

コロニー内での戦闘のことを蒸し返されれば、アウルとしても立つ瀬がないらしい。

そんなとき、思い出したように、ステラの許にステイングからの通信が繋がった。今度のそれは個人回線だ。何か、アウルやメーテルには聞かれない話だろうか。

「そーいや、ステラ。あのドッグの中で、おまえを追っかけてきた女ヤツ——」

「……！」

「知り合いか？ ありや、どう見ても顔見知りつて感じだったが」

街中で目が合い、それから自分達を追いかけてきていた黒髪の少女のことだろう。

云われ、ステラは思い出したように思慮した。

たしかに、あの少女の目的は、明確にステラであったような気配がある。ステイングやアウルには目もくれず、“ガイア”に乗り込む前のステラに、その人物は何かを懸命に呼びかけていたのだから。

「……いや……」

知らない。知る筈がない。

——ザフトにいた、あんな少女のことなんて……。

少なくとも——『彼女』^{ルイシェ}の人生には存在しなかつた人だから。

「……………」

あの少女のことは、憶えてないわけではないし、忘れ去つたわけでもない。

ただ、思い返そうとすれば、切り裂くような痛みが胸をざわつかせるのだ。

不思議と後ろめたい気持ちにさせられ、まるで、大切な何かを忘れ去り——裏切つて

しまっているかのような——？

〈すまねえ、ヘンなこと訊いたな〉

云い知れぬ戦慄で少女の顔が歪んだのを認めたのだろう。

気を利かせるようにステイングは引き下がり、時を同じくして、艦内にアラートが鳴

り響いた。どうやら追跡してきた“ミネルバ”の熱紋を捕捉したらしい。

〈時間らしい。——出撃ようぜ、ステラ〉

モスグリーンに彩られた「カオス」が先頭を切り、やがて鋼鉄でできた木馬のような「ガートエイ・ルー」の右舷ハッチが開放される。

機体の両脚がカタパルトに固定され、右舷から「カオス」と「アビスが」——左舷からは「ガイア」が、それぞれ勢いよく発進していく。

「ステイング・オークレー、カオス」——出るぜ！」

「アウル・ニード、アビス」——出るよ！」

「メーテル・リンク、ガイア」——行きます！」

緑、青、黒の機体が次々に吐き出された。

最後に、左舷ハッチ内部から紅眼を覗かせた「亡霊」が、遂にその機影を現す。

その双眼は赫々として、まるで誰かが戦争の火を消し忘れてしまっているかのよう^{ツインアイ}に、鮮烈な種火色に染まっていた。

——それこそが、ステラの新たな剣だった。

ステラ・ルーシエの専用機として、徹底的にパイロットの戦闘データやオーダーに従ったカスタマイズが繰り返された強化再生機^{モビルアーミー}——

セカンドステージシリーズと同様の高速巡航形態への可変機構が追加され、モビルスーツ単機には本来望み得ない戦略性を一身に請け負った、一騎当千のワンオフ機。

禍々しく、不吉に黒光りする異形の怪物。前大戦をして、かの

フリーダム、ジャステイス、クレイドル
 ファーストステージシリーズとも互角以上に渡り合ったという『伝説』の機体は、しか
 し、相も変わらず、この世に召喚された悪鬼か悪魔のような邪悪な相を覗かせている。
 両腕前部に装填された二基のシールドクロウは独特の形状で、ワタリガニの鋏のよ
 う。胸郭には「スキュラ」と思しき強力なビーム砲が内蔵され、その特徴は、先の大戦
 で運用された後期GATシリーズ——「災厄」^{カラミティ}、「侵略」^{レイダー}、「禁忌」^{フォビドゥン}——の流れを汲ん
 でいるのか？ あるいは戦場に荒廃をもたらした黒鉄の巨人——「破壊」^{デストロイ}の系譜だろ
 うか。いずれにしても——

「ステラ・ルーシエ、レムレース」——発進する」

より一層と禍々しさを増大させた「フォボスレムレース」——
 恐ろしきを冠する「暗黒の亡霊」が、次の瞬間、宵闇の宇宙へと吐き出された。

『アスカという少女』

平和の歌姫こと、ラクス・クラインは先の大戦後、活動拠点を「プラント」へ移した。最高評議会議長の座こそ、中道派のギルバート・デュランダル氏に譲ったものの、これは言葉のとおり、本当にラクスが議長席を「譲った」ことで発足した、プラント新政権である。

戦中におけるザラ政権の暴走を食い止め、泥沼化する戦争を終結に導いた「調停者」として、ラクスの存在は「プラント」における救国の姫君と目されるようになっていた。

そんな彼女が次期代表の座に就くことを望んだ国民の声は、非常に大きなものであったが、ラクス自身はこれらの声援を受け流す形で、代表の座をデュランダルに明け渡すことを望んだ。

この決断には相応の理由があった。

それはラクスの亡き父、シーゲル・クラインの存在だ。

シーゲル・クラインは前大戦中、地球連合への徹底抗戦を宣する「黒衣の独立宣言」を

行った。つまりは『武力による地球への宣戦布告』を行った人物でもあり、その名を聞き知る者は多い。独立宣言の過程で行われた軍事行動——地球全土へのNジャマー散布——は地球側に大勢の死者を出し、そのような惨禍を招いた『クライン』の名を持つ彼女が、もうふたたび「プランド」側の代表に立つことで、地球連合に無用の悪感情を植え付けるのではないかと、トラス自身が強い危惧を示したのだ。

救国の姫君として「プランド」国民からの支持が篤いことと、地球側が彼女の存在をどう見るかは全く関わりのない部分であり、そうした彼女の意向を議会側が了承した結果、彼女の代わりに、ギルバート・デユランダルを擁立した新政権が発足する運びとなった。

期待の新造戦艦“ミネルバ”——

その慣れないモビルスーツ・デツキに機体を着艦させ、ラダーから降りたマユを待っていたのは、アカデミーを共に過ごした同期達の姿だった。

「おつ、噂は本当だったな？ 聞いたぜ、強奪犯から“アリアドネ”を守ったんだってな

！」

「久しぶりー！ マユー！」

浅黒い肌のヨウラン・ケントに、オレンジ色のメッシュユが前髪に入ったヴィーノ・デユブレ。どちらも技術スタッフの作業着を着ているが、この「ミネルバ」に配属されたメカニックだ。

「ほんとだね、みんな元気でやってた？」

思わぬ形での再会に、苦笑いが多少混じってしまふ。

だが友人達と出会えたことは、マユにとっては素直に嬉しい誤算でもある。

「つか、なんで私服？」

「あつ、あはは……」

街中を歩いているときは気にならないものだが、やはり軍艦という無機質な空間に、ウサギのキャラクターが刺繍されたパーカー姿はどう見ても浮いていた。

——ホント、どうしよう。

いま考えるべきことではないかも知れないが、ザフトの赤服は色の重みを考えれば、早々に替えが用意されているものではないのだ。それとも最新鋭の「ミネルバ」であれば、後で融通できるだろうか。

「……………」

マユは見慣れない艦内を見渡す。モビルスーツ・デッキは勿論、ナスカ級とは随分と

勝手が違う。カタパルト前の中央部には四階層になったデツキがあつて、そこから「インパルス」のコアスプレンドーやシルエツト、上肢に下肢が順々に発進するのだろうか？　またしても余談だが、それら全ての整備を任せられるヨウランとヴィーノは、本当によくやっていると思う。

と、そのデツキの方角から、ちようど機体のパイロットが漂いながらやつてきた。アトラがその場に合流し、ヴィーノ達は雑談を再開させた。

「しかし、本当にとんでもないことになったよな」

「ああ、信じられないっつーか、マジで嘘みてえ！」

「なんでいきなり、こんなことになるんだよオ」

ふたりとも憂鬱そうな表情を見せている。進水式もまだなのに、いきなりの実戦で、クルー達が戸惑うの当然といったところだろう。

「まさか、これでこのまま、戦争になっちゃったりは……しないよね？」

「……と、思うけどね」

不安げな様子でヴィーノが訊ね、ヨウランは肩を竦めた。実戦すら初めての新兵に、戦争が起きるかを判断できるほどの経験や知識はない。

だからこそ彼は、自らの同期生の中で、最も論理に趣向する者を見つめた。

「アトラはどう思うっ？」

「……まず、明かすべきは『ボギーワン』の所属かな」
アトラは苦笑しく答えた。

「アレがどの国の、もしくはどの共同体ネイションから派兵されたのかわつていう問題を明らかにしない限り、推論を立てることも出来ないでしょ？ 根無し草の宇宙海賊ギャラクシーか、それとも——みんなが薄々感じているように——地球連合か。もつとも、他にも色々と考えられるしね」

けれども同時に、実感としてはこうも思ってしまうのだ。

「でも、とてもゲリラの集団とは思えないよね……」

大掛かりにして周到な計画。『ダガー』をはじめとする投入された機動兵器の種類、そして数——

——何より、あの『ガイア』が誇った強さ……。

あれほどの人材を抱えられる組織があるとすれば、おおよそ、それは。

「地球連合軍、つてこと……?」

恐々としてマユが訊ね返し、その質問に対して、アトラは賢しくも直接的な言及を避けた。軍人としての迂闊な言動が、今後の火種になることを恐れたからだ。

場に沈黙が落ちる。そんなときだった、彼らのいるモビルスーツデッキに、物々しい随員を引き連れた人物が姿を表したのは。

「……………」

随員の先頭を歩くのはレイ・ザ・バレルだ。その存在を、マユが真つ先に目に留める。そんな彼の後方に位置していたのは、黒い長髪に、すらりとした白皙の体軀、不思議と人を引き付ける存在感を放つ――

「え——デュランダル議長!？」

アトラの咄嗟の声に気付いたのだろう、キャットウオークの上にはいたデュランダルは、こちらへ気付いたように人の好い笑みを浮かべた。

「やあ、アトラ。久しぶりだね」

——議長が何故、この「ミネルバ」に？

見下ろすように話しかけられ、アトラを取り巻くマユたちは更に驚いた。まさか自分達の同僚が、かのギルバート・デュランダル氏と面識を持つているとは思わなかったからだ。

親しげな挨拶もそうだし——いったい、いつの間に……………」

「アトラ、デュランダル議長とお会いしたことがあったの?」

「あ、うん。まあ、前にね……………」

言い淀むアトラに、マユは怪訝な顔を返す。デュランダルは相変わらず、人の良い笑みを浮かべている。

「積もる話もあると思うが、君達とは後ほど時間を作ろうと思つていたところだ。後で艦橋ブリッジに上がつて来てくれるかな？」

「あつ、はい。……了解しました！」

そう云い残すと、彼は満足気に笑い、レイに先導されてデッキを立ち去つていった。その背をマユは呆然として見送る。

——ギルバート・デュランダル議長。

マユもまた、当然に彼のことを知つていた。戦後の「プラント」において、カナバ政権が退陣したのち、最高評議会議長に就任した人物。ナチュラルとの融和政策をはじめとする穏健派の思想を継承しつつも、急進派にさえ理解を示す中道派。国家の軍事需要の必要性を説くがために、今回のセカンドステージシリーズの開発も主導した——だが、何にせよ、マユにとっては初めてお見かけする人物だった。

デュランダルに指示されたように、アトラはマユと共に「ミネルバ」のブリッジに向かった。艦長からの指示によつても、マユは事情聴取のために呼び出されたというのもある。

その道中の廊下を渡る中で、マユがアトラに尋ねていた。

「議長とお会いしたのって、いつ頃の話？」

要は雑談の延長だ。純粋な興味から、彼女は訊ねていた。

「んー。アカデミーを卒業して、すぐだったかな」

少なくとも在学中でないのなら、マユがルームメイトとして知らなくとも無理はない。
い。

そこでアトラは、思い出したように云った。

「あ、そうそう。それこそ、街中でしてた話の続きになるんだけど」

「……？ そんな話してたっけ」

「誰かさんが聞いてくれずにどっか行ったんだよ！」

珍しく怒られた。

「実は私ね、アカデミー卒業後は設計局への就職を希望してたの」

「——え、そうだったのっ!？」

エースパイロットの代名詞とも云える、ザフトレッドらしからぬ発言だ。

マユは意外に思い、目を丸くさせた。そんなアトラがなぜ、今は「ミネルバ」でパイロットをやっているのか、繋がらなかつたから。

アトラは遠い目を浮かべている。

「私ね、昔から裏方気質というか、自分ではパイロットよりも技術士官の方が向いてる

な—って思ってるの。モビルスーツに使われてる技術とかプログラムとか、研究したりするのすごく好きだし」

それはマユにとって、親友の意外な一面、というほどではない。

彼女達はアカデミー時代からルームメイトなのだ。その辺りの、性格や気質の片鱗は知っていて当然だった。

「何より『プラント』の工廠部には、私の憧れの技術士官の方がいるんだ」

名をハインラインというらしい。

かの『フリーダム』と『ジャステイス』の生みの親の一人だが、憧れを胸に進路を決したのはマユも同じだ。マユは親友が抱える純然たる思いに共感することができた。

「だから進路希望調査の段階で『設計局』って書いたんだけど——その翌日だったかな、デュランダル議長がわざわざ会いに来てくれたのは」

最初は何事かと思ったほどだ。ある日突然、目の前に爆音を上げながらヘリコプターが舞い降り、そのタラップから長身痩躯の色男——デュランダルが微笑みを湛えて現れたのだ。あまりにも怖すぎるし、あの衝撃は忘れようと思っても無理だろう。

「へー、それで？」

「新規開発中の最新鋭機——『インパルス』のテストパイロットになってくれないか、って云われたの」

そういうことも……あるのだろうか？

優秀なテストパイロットなら、当てもザフト内にいたはずだ。それを差し置いて、わざわざアカデミーを卒業したばかりの新兵を起用するほどの事情があったのか。それとも、技術士官を目指していた彼女の希望や能力を買ったことだったのか。

「私なんかは過度じゃないかってくらいの待遇で、それはもう凄い熱量でプレゼンテーションして頂いたの。『テストパイロットとして“グインパルス”に最も近い場所で携わる経験は、今後設計局で働く上で必ず役に立つ』——みたいな」

まあ間違いではない。あのMSほど機動兵器として手のかかるものではなく、裏を返せば、そこにはプラント最新の技術の粋がこれでもかとううほどに満載されている。

その道の研究員を志す者であれば、興味をそそられないはずはない。

——そう。あくまで研究員として、だ。

パイロットやメカニック。特に無数の機体や関連パーツの修繕作業に追われるであろう後者としては、あの機体には絶対に関わりたくないとも思う。……ヴィーノとヨウランは良く我慢しているものだ、私なら早々にキレている。

「そのときは、一理あるなあって思ったの。だから私、テストパイロットを引き受けて」

「じゃあ、もともと“グインパルス”のパイロットは、テスト期間中だけって契約だったん

だ？」

アトラは頷いた。

けれども、現状はそうなっていない。

「気付いたら試用期間を満了した後も、パイロットを続けさせられていた——と」

「そして、いつの間にか正規搭乗員みたいな扱いになつてた」

「……どういう人事？」

「議長に聞いてよ、もうっ」

前言は撤回だろう。

アトラは既にキレていた。

艦橋に案内されたマユを待っていたのは、ギルバート・デュランダルとの邂逅と、それ以前に軍法に則った査問会だった。査問会といつても、裁判のように大々的なものではない。事実確認と個人的な事情聴取に近いが、主査を務めたのは艦長のタリア・グラデイスだ。

マユにとって初めてお会いするその人は、栗色の髪をした果断とした女性であり、同

性としては憧れを抱くに十分な人物でもあつたらう。が、それに対面で尋問されている間は、はつきり云つて生きた心地がしなかつた。まるで一挙手一投足を観察される草食動物、下手な言動を見せれば即座に首元に喰いついてくるであろう糾弾の姿勢は、女豹のごとき鋭さを目に光らせていたからである。

「敵の目的にいち早く気づき、これを阻止しに向かつた貴方の行動は——結果的に見れば正しいとはいへ、そこに至るまでに不可解な点が多すぎます」

追及されたのは経緯についてだ。私服姿で堂々と自軍の工廠内に立ち入つたマユの行動は、やはり軍法（うんぽう）云状に違反するものであつたらしく、他にも様々な点が様々に抵触していた。これについて、マユはくどくど——というのは割と失礼だが——ひと通りの叱責を受ける破目になつていた。

それでいてなお、タリアの尋問は終わらない。事情聴取という名の尋問、つるし上げられるかのように高圧的に放たれる質問の数々に、マユはひたすらに戸惑つていた。

「それをこの場で解き明かしたいというのは、軍法に則れば当然のことではなくつて？」
「えつと、その……」

そこに助け舟を出したというのは、意外なことにギルバート・デュランダルであつた。「——報告はそのくらいで構わんよ、タリア」

マユとタリアはそれぞれに驚いて、その端正な顔を見た。

鋭い顔立ちではあるが、今は穏やかなその表情には、何かしらの底意があるように見える。彼はその滑らか過ぎる弁舌でもって先を続けた。

「彼女の判断は正しかったさ。もし敵が、目当てのモビルスーツを奪取できないのだと判断したのなら、その機体は先んじて破壊しておくのが賢明だ。あとあと、彼らにとつての脅威となるだけなのだからね」

いや、とデュランダルは口籠る。

「むしろ、相手はその脅威をよく分かっているからこそ、こうも大胆な作戦に挑んできた——とも云えるのではないかな？」

その言葉に、タリアは納得半分といった風に返す。

「だから、敵はその火種を先んじて奪い、自らの戦力としようとした——」
「ああ。そしてその結果として、彼女は損なわれるはずだった機体をひとつ守ってくれたのだ。その働きは我が国の兵士として存分に称えられるべきで、間違つてもキミに責められるものではないよ」

その言葉に、責めてなどいない、とタリアは心外な様子で抗議の声をあげた。

が、デュランダルは苦笑してやり過ぎた。タリアのこれは、元々の性格なのだ。

「……わかりました。議長がそう仰るのであれば、これ以上の査問は無用と判断します」
査問の打ち切り。その言葉にマユはやはり救われたといった安堵の表情を浮かべ、や

はり、それを見過ごすタリアではない。

けれども、やはり一^{デユ}国の施^ラ政^ダの長^ルがそれ以上を求めているのだ。そんな彼の手前、タリアはもう何も云わなかった。代わりに大きく溜め息を吐いたが、その程度は許して欲しいものだ。

「ZGMF—X69S “アリアドネ”——でしたっけね」

改めて場を仕切り直すように、タリアは議題を変えた。

「なにせよ、あの機体が “ミネルバ” に戻ってきたのは不幸中の幸いでしたわ。正規パイロットの件は……悔やまれますけれど」

だが、後ろばかり向いてもいられない。

——今後の展望を考える。

そうしながら、タリアは云った。

「こうなってしまった以上、あの機体はレイに与えましょう」

タリアはあえてマユには目を向けず、つとめて事務的に告げた。

どんな反応を返されるのであれ、単純に、目を向けたくなかったからだ。

「そうしましょう！」

そんな気遣いもいざ知らず、アーサーは我が意を得たりといった様子だ。

——まあ、そうだろう。

事前にアーサーが云っていた通り、現況の「ミネルバ」において、あの機体を与えられるべきはレイ・ザ・バレルにおいて他にない。パイロットとしての技量、人格面での落ち着き、判断力——レイは指揮官としては適任で、逆に彼をその座から押しつけるほどの人材はいないのだ。

タリアはたつぷりと間を開けて、ややあつてからマユの様子を見た。その顔には納得が半分と——やはり落胆の色が滲んでいた。だから、目を向けたくなかつたのだ。

「本艦はこれより『ボギーワン』の追討に向かいます。成り行きとはいえ、今後は貴方にも『ミネルバ』隊の一戦力としての活躍を期待します」

即席の補充戦闘員、ということか。

アトラ、ルナマリア、レイの三人は、それぞれの反応でマユを見ている。ひとりは喜び、ひとりは感心し、ひとりはやはり冷静に黙っている。タリアはそれを横目に続けた。「貴方のモビルスーツは『ザク』でお願い。あいにく余つてる機体がないから、レイの機体になると思うわ。——『ザク』は使えて？」

「は、はいっ」

マユは敬礼して応じ、それも束の間、レイとぱちりと目が合った。

レイはいつものポーカーフェイスで、マユから『アリアドネ』を貰い受けたことに優越感など微塵も感じさせない様子だ。みずからの上官に能力を全面的に評価され、誉れ

や誇らしさもあつたらうに。

自分の前では決して喜ぼうとしない、その気遣い——

——そこが彼の優しいところだし、単純に恰好いいところだと思う。

とはいえ、彼の場合は本当に無感情なだけかもしれない。

そう考えると、マユは不覚にも笑ってしまった。

「後でデツキに上がって、機体の調整をしておいて頂戴。ルナマリア、案内してあげなさい」

「——いや」

きびきびと果断に続けられるその流れに横槍を入れたのは、デュランダルだった。

誰もがタリアの判断に納得する中で、しかし、彼だけはどこか不服そうだ。というより、今は子どものようにいたずらっぽいや顔を浮かべている。

「思い出したよ、マユ・アスカくん」

唐突に名前を呼ばれ、マユは戸惑ったという。

今や「プラント」で一番に偉い人が、まさか自分の名前を知っているとは思わなかったからだ。

「キミはたしか、オーブから移住してきた子だったね？」

「議長つ……？　ご存知だったんですか？」

問いを返したのはアトラだ。彼女はさすが、議長の前でも緊張した素振りもないが、マユと同じくそのことを意外に思う驚きは伝わってくる。

——いつたい、なぜ？

マユには分らない。彼女は人として目立つ性分でもなければ、この国においては頼れる人脈も、誇れる地位も持たない異国民なのだ。議長がわざわざ名を憶えるほどではなく、身ひとつで挑んだ士官学校アカデミーにしても——成績上位者一〇位以内ではあるにせよ——注目株というほどではなかったはずだ。

「いや、キミの名はよく耳にしているよ。なにしろ、あのラクス・クラインが懇意にしている少女、ということだからね」

云われてみれば、やっぱり——とマユは納得した。

頼れる人脈という意味で云えば、彼女にはラクスという身元引受人がいた。戦後において、政治の世界に身を置く姉貴分。掛け替えのない、前大戦からの友人——個人的には対等の関係であったと思うし、甘えるつもりもなかったが、戦後において各方面で世話になったことはたしかだ。

「——ええっ!？」

次の瞬間、艦橋の至る所から素つ頓狂な声が挙がった。各方面にアンテナを伸ばしまくるのが生き甲斐のメイリンはしょうがないとマユも思うが、それにしたって盗み聞き

しているクルーの何と多いことか。

「ラクス・クラインって、あのラクス・クライン……!?!」

「どういう繋がりで!?!」

「おいマユ、なんで今まで云わなかった!?! —— 『あのラクス様と友達だ』 って!」

「とうか、ラクス様と友達って……何者?」

議長を無視して押し寄せる出歯亀な質問の嵐と、みずから爆弾を放り投げておきながら、その炎上つぷりを愉しんでいるかのようなデュランダル。タリアの方は驚きもあるだろうが、艦橋で行われるこの混乱には額を抱えていた。どこか余所でやってくれ——と顔に書いてある。

「だ、だから云わなかったんだよおっ」

主に同期達に揉みくちやにされながら、マユは必死で弁明した。

一方でメイリンはひとり管制席持ち場に戻って軍のデータバンクを漁り始めているし、待て待て、人の経歴や個人情報を読みざらい抜き出すとするんじゃない。

「云つたら云つたで、みんなの見方も変わっちゃうし! 何より、ラクスお姉ちゃんにこれ以上迷惑かけたくなかったから……!」

甘え続ける訳にもいかない、という心情もあるのだろう。

しかし、マユの唐突な「お姉ちゃん」呼称に「萌える……」とか言い出した男の声が

どこからか聞こえた気がする。——気のせいかな？　気のせいでないなら、今すぐ手を挙げて出てきて欲しい。

こっちは昔から真面目にやっているのだ。お前と違って。

「——いやいや、すまないね」

爆弾を落とした張本人、デユランダルは悪びれた様子もなく、喧騒を割るように言葉を発した。

「私自身、彼女とは何かと討議を交わすことも多い身だ。今は『プラント』で多忙を極める彼女に、こうも頼もしい友人がいると思うと……年長者^{オトナ}としては嬉しく思えてね。それでつい、はしゃいでしまった」

その言葉はどこか空々しさを含んでいたようにも聞こえたが、このときのマユが気にする点ではない。お国で最も偉い人に謝られていることの方が、庶民派感覚の彼女にとっては大それたことだ。

「きみの立場を難しいものにするつもりはなかったんだ。悪かったね」

「い、いえ！　そんなことは！」

マユは慌てて取りなした。

懇意にしている、とはいうものの、ラクスが戦後に公人となってからは、ほとんど会ってすらいないのだ。その活躍は、映像でしか見届けることがない……。

逡巡するマユに向け、デュランダルはなおも続けた。

「——そんなキミが、期せずして『アリアドネ』と巡り会った」

本題は『アリアドネ』のパイロット選出の件だったか。

独白のようにデュランダルは呟いたのち、タリアアを見た。

「タリアア、私が許可しよう。彼女に乗ってもらおうじゃないか——『アリアドネ』に」

「議長!？」

「——議長権限の特例として」

唐突な職権乱用に危ぶむ声を挙げかけたタリアアの声を、またもデュランダルは遮って云った。

——果たしてそれは、どういう意図で云っているのだ？

やはり、煮ても焼いても食えない男だ。デュランダルはまるで、みずからの権能を愉しんでいるかのようですらある。その切れ長の瞳が、今度は笑みを含んでレイに向けられる。

「いいかな、レイ?」

「はい、問題ありません議長」

目を向けられた瞬間である。まるで事前に示し合わせてでもいたかのように、レイは即答した。

「私も『ザク』の方が操縦に慣れていきますし、アトラが云うには『アリアドネ』は誰にでも易しく作られた機体——であるなら、私が『アレ』に固執する意味はありません」
 本当に何か思うところがないのかと。

思わず訊ねてみたくなるほどに、レイは華麗な転身でデュランダルを支持する側に回った。タリアはむつとして云い返そうとする。

「でも……」

「——心配せずとも、彼女は優秀です。安心して、機体を任せて良い人材だと思います」
 「っ……」

全く予想だにしていなかった、レイから手放しの賞賛。これを受けてマユの顔がみるみる真っ赤に染まっていく。

本当によく分からないことだらけだ。いつも最低限の会話——「ああ」とか「いや」とか「さあ」とか——しか行わないレイが、まさか自分に、こんなことを云ってくれるなんて。

——そしてそれを艦長に伝え、私を庇ってくれるなんて！

狐につままれたような思いを抱きつつ、この瞬間のマユにとって、レイは白馬の騎士よりはるかに恰好よく見えたという。

「……はあ」

デュランダル、レイ、タリア、マユ——

それぞれが思惑と当惑を持って目を合わせる中で、最初に目を逸らし、折れたのはタリアの方だった。

「承知しました。では、議長権限の特例とやらに従うことにしましょう」

「え……っ」

「マス・アスカ。貴方を正式に、ZGMF^ア—X69S^{ドネ}のパイロットに任命します」

デュランダルはそれを聞いて、柔和な笑顔でマユを見た。

初めてお会いするのに失礼な話だとマユは思ったが、しかし本当に、このときの議長は愉しんでいるかのようにだった。

——でも、いったい何を……？

マユの頭を、なぜか一瞬、奇妙な不安がよぎった。

「議長」

それから艦橋を後にしたデュランダルに、背後から声が掛かった。タリアだ。彼女は手許にデータの資料のようなものを持っている。

「誠に僭越ながら、アカデミーで働いている私の知り合いに、詳しく教えて頂きましたわ。あの、マユ・アスカという子について」

「ほう？」

量子通信を使えば、この位置からでも「プラント」本国と交信を図ることは可能だ。

議題はやはり、先刻の人事の件——

タリアとしては、根に持っているわけではないだろう。それでも彼女は、やはり「ミネルバ」の艦長なのだ。見知らぬクルーがひとり増えた以上、その人物については、詳しく人となりを把握しておく義務がある。

デュランダルは感心したように歩を止め、タリアの方を振り向いた。立ち話でするような内容でもないだろう——と、タリアは「こちらへ」とみずからの艦長室に彼を呼び込んだ。

「あのレイや、アトラが口を揃えて『優秀だ』と褒めちぎるものだから、どれほどの逸材^もかと思いましたが……なかなかどうして」

表向きは引き下がった彼女だが、やはり、腑に落ちない部分はあるらしい。

二人はいささか、個人的な付き合いも長い方だ。この程度の雑談なら許されるだろう。

「正直に申し上げて、あの子に過度な期待を寄せるのは酷かと存じます」

棘のある言い方だが、デュランダルには応えた様子もない。一応、話を聞く気はあるようだが。

タリアは取り寄せた資料をデスクの棚から引き出しつつ、続けた。

「アカデミーでの卒業順位は七位だったそうです。まあ、同期にはアトラやレイが在籍していた訳ですから、一概に下位とまでは云いませんが……いずれにせよ、ザフトレットを与えられる順位としてもギリギリです」

「意外だね、タリア？　まさかキミが、数字や外聞だけで物事を判断する人間だったなんて」

その返答には、からかうような響きがある。勿論それは、本気の発言ではなかった。

挑戦的な口振りからするに、彼は単純に、タリアを試しているのだろう。

「いいえ、議長。仰る通り、私はこの目で見たものしか信じない性分ウケテですよ」

そして、だからこそ。

「卒業成績が全てとは云いません。ただ、あの子は何だか不安定そうだ、ということをお伝えしたいのです」

タリアの知り合い——アカデミーで働く教官によれば、在学中のマユ・アスカは、勤勉で、真摯で、思い切りもいい、仲間思いの努力家の気質だったという。

特別なりーダーシップやカリスマ性があるわけではないが、それでも人と場の調停者コーディネーター

としては重宝されたらしく、骨の髄まで実力主義のザフトにおいては物珍しい資質だろう。

「緑服か、管制官あたりが進路として妥当と思われるところを、努力をもつて乗り越えた女の子」

明確に目標とするパイロットでもいたのかも知れないと、教官は述べていた。

けれども、実際に見た「アーモリー・ワン」内部での戦闘記録を見るに、その評価は覆されているのではないかとタリアは疑っている。特に「ガイア」と戦ったときの、彼女の動きは酷かった。思い切りが良いという評価が全くの出鱈目と思えるほどに、戦意と覇気に欠けていた。気分によつて操縦技術にムラが出るようでは、それは良いパイロットとは云えないだろう。

「総合的に判断すれば、レイどころか、ルナマリアの方が間違はなく、「力」はあるでしょう。それらすべてを考慮して、人事部は彼女の配属先を「期待の最新鋭艦」にしなかつた。——答えはもう、とつくの昔に出ているように思います」

「——そうだな。実際のところ、私も最初はそう思ったよ」

返ってきたのは、簡潔な同意。

タリアは内心で意外がる。ここまであつさり肯定されるとは、思つてもいなかつたからだ。何かにつけてはぐらかされるのがオチだと思つていたし、逆に彼は彼なりに、今

回の件に深謀遠慮を働かせたのではないかとさえ疑つてもいたのに。

——ギルバート・デュランダルは、一説には「ミネルバ」の人事に関して、相当に恣意的な介入を行ったという噂がある。実際、プラントの最高評議会議長ともなれば、軍の人事部にもある程度の顔が効くのだろうし、その全てが間違いだとも思われないが。

要するに、彼は期待の新造戦艦ネに対し、最高のパイロットと、最高の管制官——そして願わくば最高の艦長——を集結させようと個人的に働きかけたというのだ。彼自身のバックボーンである、DNAの解析技術を活かして。

そしてその結果、マユ・アスカは選ばれなかった。如何に本人が努力家であろうとも、これは厳然たる事実として判断しても良いのだろう。

「でしたら……」

「キミは、彼女が乗り込んだ機体、ZGMF-X69S『アリアドネ』について——どう思う?」

明確に云い淀んだタリアに、デュランダルは唐突、ほとんど唐突に他の話題を提した。いつもみたいに煙に巻かれたと感じたタリアだが、問いに対しては答えていた。

「どう思う、とは?」 あれは、議長が開発を主導なさった試作モビルスーツ群の一機でしよう?」

「ふむ……」

「我が軍にとつて期待の旗印となる——いや、あの機体にはたしか、変形機構がついていませんでしたわね？」

ともすれば“インパルス”のような合体・分離機構も有していない。

——同型機の中で、明確に毛色の違う機種。

その疑念に確信ついたように、デユランダルは嬉しそうに答えた。

「あの機体は——あの機体だけはね、タリア。私が開発を主導したものではないんだよ」
「……？ では、誰が」

「——ラクス・クラインだ」

タリアは、目をむいて驚いた。

デユランダルは遠い目をして続けた。

「私に代わり、ラクス・クラインが唯一設計と開発を主導したMS——“アリアドネ”」
「——」

「偶然とはいえ、そんな機体に、彼女の友人であるミュ・アスカが乗り込んだ。——私はね、これに何か、運命めいた因果を感じてならないんだ」

嗚呼、とタリアは頷き、彼女はようやく全てを理解する。

——“運命”……。

誰よりも敬虔深く、この男がその言葉を信じていることをタリアは知っていた。個人的に、彼ら二人が恋人として別れの道を選んだ、その直後から。

「そう。……だから先程から、随分と愉しそうですね。貴方は」

「ああ。だからだろうか……？ 私は、彼女に期待してしまっただ。あのマユ・アスカという少女に課せられた——数奇なる運命にね」

人が生まれながらに持つ、先天性の遺伝子が導く人生の解。

——その因果律でさえ抑え込めない不可思議な“力”に導かれ、彼女は“ミネルバ”へ乗り込んできた。

長年の研究の末、デュランダルが否定した——否定せざるを得なかった——後天性の努力の少女が、夢を忘れた彼を前に、どこまで高みに迫るのか。

「オーブの新星、マユ・アスカ」

だからこそ、デュランダルは問いかける。

「どうか私に、夢の続きを見せてくれ」

今回の一件で、マユを含めることとなった“ミネルバ”のモビルスーツパイロット達

は、既に各々の機体のコクピッドの中で待機していた。

それもこれも、追撃中の「ボギーワン」の熱紋を捕捉したためである。接敵にはまだ時間が掛かるとのことだが、与えられた「アリアドネ」の中、マユはあることを後悔している。

「アトラ……私、やらかしちやっただかもしれない」

沈んだ声、蒼白な様子で呟かれたマユからの通信に、同じくコアスプレnderの中で待機していたアトラは、怪訝顔を返していた。

——やらかした？

思い返してみても、何について言及しているのかが分からない。いったい彼女は、何を悔やんでいるというのか。

「千載一遇のチャンス、逃しちやっただかもしれない……っ」

「議長との問答のこと、気にしてるの？」

アトラは嘆息を交え、慰めた。

「議長もどういいう判断をなされたか分からないけど——憧れのレイから「アリアドネ」も貰えて、結果的に良かったじゃない？」

「っ……………」

「そりゃ、デユランダル議長は偉い人なんだから緊張するのも当然だし……大丈夫だよ、

議長はあれで——

「違うのぉっ」

泣き声のようなその響きは、実に女の子らしいものであったというが、このときのアトラを切迫した表情にさせるには十分なものだった。だが、

「せっかくレイの『ザク』に乗れそうだったのに！ 合法的にレイの専用機に身を埋めるチャンスだったのにつ——」

——それを不意にしちやった！

半ば泣き叫ぶように、マユは云った。親友にしか見せないであろう、非常にうち砕けた様子で。

——ああ、パイロットの選出の件か。

アトラは呆れながら、親友の悲嘆の意味を理解する。たしかに『アリアドネ』をレイに譲った場合、代わりにマユが白い『ザク』を預かるような話になってたな。

「ぐ、合法的……？？」

欲求が勝れば、軍法は軽んじても良いとも思ってるのか。

マユの発言には、たとえ許されずともいつかは試してやろうという気迫がある。軍規違反でしこたま怒られ、さつきは死にそうな顔になっていたことを彼女はもう忘れてらしい。

「アリアドネ」を貰えたことも嬉しいけど、アリアドネ」を貰えたことも嬉しいけど！ ほんと一回で良かったんだよお」

「あんたつて子は……っ」

アトラは額を抑えた。この発言の意味を、マユは今も理解していないらしい。

それを理解させるように、そのとき通信にルナマリアが割り込んできた――

〈ほんと、あんたつて子は話題に事欠かないわよね〉

——いや、割り込めていた。

ルナマリアは呆れたような、面白がるような顔を浮かべている。

〈——通信。部隊回線で丸ごと聞かせる淑女がどこにいるわけ？〉

「えっ」

〈聞こえてるわよ、全部。——勿論彼にもね〉

マユは慌てて回線を確認した。ルナマリアが通信に割り込めたということは、現在の回線は「ミネルバ」に所属するMS間で共有されているものなのか。当の通信コードは今さつきアトラから個人的に教わったもので、アトラ個人と繋がっているものだと思っていた。

悲鳴をあげたマユを置き去りに、ルナマリアは試すように同僚に問うてみる。

〈どうします？ 白いお馬の王子様？〉

レイは決まって、こう答えた。

〈……さあ〉

けれども――

いつもは淡泊に響くその応答が、微妙な羞恥で震えたように聞こえたのは、気のせいではなかったのだろう。

――やがて“ミネルバ”のカタパルトから、複数の“ゲイツR”が射出されていく。いずれのパイロットも正規クルーではないが、マユと似たような経緯で“ミネルバ”に辿り着いた者達だ。

発進していく彼らの背を見届けたのち、メイリンの管制は続いた。

へ“ザクウォーリア”、カタパルト・エンゲージン

束の間、砲戦仕様の赤い“ザク”が発進する。続けて白い“ザク”と、四層のデッキから“ゴアスプレnder”と、それらに付随するパーツもまた。

「ルナマリア・ホーク、”ザク”――出るわよ！」

「レイ・ザ・バレル、”ザク”――発進する！」

「アトラ・デンソン、”ゴアスプレnder”――出ます！」

そうして最後、彼女の順が回ってきた。不安と羞恥から立ち直り、マユは決然と前を見る。

開かれたハッチ、その向こう側の深い闇——と、浮かぶ星。瞬く星々の輝きを見つめながら、マユは独語する。

「……ステラお姉ちゃん……」

正体不明艦 “ボギーワン” ——

——その艦ふねの中に、貴方はいますか？

貴方の背を追って、私はここまでやって来た。

貴方は私の憧れ——

大切な仲間もできた、力だつて手に入れた。

——人いち倍、がんばってきたんだよ……。

今までの全ては、きつと、この日のために。

「マユ・アスカ、 “アリアドネ” ——行きます！」

淑やかで聖い娘——

白銀に輝く大女神が、漆黒の宇宙に飛び立った。